新たな未来を求めて

イーヴァルディ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新たな未来を求めて

【Ｎコード】
Ｎ６４０９Ｐ

【作者名】
イーヴァルディ

【あらすじ】
第一章　狭間の鬼
これは始まりの物語。永劫に続く戦いの序章。その中で海道周は何を知り、何を見るのか。それは、普通の人生を捨てた少年少女の物語。

第二章　学園都市
世界を知り、戦うことを決めた海道周。彼の活躍の場は東京特区学園都市に移る。そこで、何を見て、何を力と成すのか。それは、海

道周の過去を断ち切る戦いの物語。

プロローグ（前書き）

プロローグを投入します。ここに出てくる彼と彼女達は『新たな未来を求めて』に出てくる主人公達のほんの数文字の紹介です。意味がわからないと思いますが、今現在、これが投稿された時ですら、この内の３人しか出ていません。他のメンバーは、気長に２０３０年くらいまで待っていただければ絶対に出ると思います。私がいなくならない限り。気長に読んでいただければ嬉しいです。

プロローグ

一人の子供は絶望に染まり、一人の子供は天才を夢見て、一人の子供は家族に捨てられ、一人の子供は将来を強要され、一人の子供は世界に裏切られ、一人の子供は記憶を失い、一人の子供は世界に生まれた。

それは、未来に抗う物語。

それは、未来の記述を書きかえる物語。

それは、普通ではない人生を歩む者達の物語。

それは、未来を夢見る若者達の物語。

これは、雷光の願いから続く戦いの物語。

ただ、ただ未来を求めて、星語りが語る未来を変えるために、彼と彼女達は動き始める。

絶望の少年は英知の結晶を手に、夢見た少年は家族と共に、捨てられた少年は翼を手に、強要された少女は始まりの炎を片手に、裏切られた少年は絆の糸を胸に、忘れた少年は蒼穹(そら)を羽ばたく翼と共に、生まれた少年は大切な仲間と共に、彼と彼女達は動き始める。

全てはそう、

新たな未来を求めて

第一話　呼び出し（前書き）

ネット上に文章を出すのは初めてなので、おそらく駄文になるかと思いますが、長さだけはおかしな長さを誇るかと。
構想だと第一章だけで１２００分オーバー。
構想だと外伝含め全九章。１００００分を目標に頑張ります。いつ終わるかわかりませんが。

第一話　呼び出し

「周、お前はどうするよ？」

急に話しかけられたオレはキョトンとしながら話しかけてきた奴の顔を見た。

簡単に言うなら軽そうな感じの顔だ。中学生になったばかりの少年が外見を気にしていたらこうなったという感じの。

ただ、こいつの胸の中にある信念は決して軽くはない。軽くはないのだが、いろんな意味で軽いんだよな。こいつ。

「どうするって？　ああ、あれか」

オレはこいつが言おうとしていたことに気づき、机の中から一枚の紙を取り出した。そこに書かれているのは新規正規部隊の申請書。すでに項目のほとんどは埋まっている。

「新部隊のことだろ。今は評議会の爺共を説得している最中だ。あいつらは保身にかけては人一倍動くからな。ちょっとくらいは融通聞かせろってての」

「確かに。んで、どうするつもりだ？　このままだと通らないのは今までの経験でわかっているだろ。孝治に回すか？」

「そんなことわかっている。今のままじゃ駄目ってことも。孝治に回したとしても、味方に出来るのは三割が限度だ。無理がある。」

オレは小さく溜息をつきながら一枚の紙を見つめる。

オレ達にとって幸いだったのは部隊を作るための登録をする機関とオレ達が所属する機関、『ＧＦ』の最高意志決定機関は別物であるということ。どうして違うかを説明するなら、最高意志決定機関である評議会は人一倍に保身に熱心だからだ。

例えば、『ＧＦ』のとある部隊が犯罪を犯したとしても、評議会が認めていない部隊だとすれば『ＧＦ』にとってはその部隊は『ＧＦ』のものではないと答えることが出来る。

つまり、登録機関が勝手に承認したからと言えるのだ。それを今回は逆手に取った。つまり、登録は全て済ませてある。

「これには『ＧＦ』の主要上層部の推薦を全て受けているとは言え、評議会の承認を得られないならただの紙となる。それは悠聖、お前もよく知っているだろ」

「ああ。あいつらの頭の硬さに何度キレそうになったか」

目の前の奴、白川悠聖が軽く肩をすくめながら答える。まあ、こいつにとって苦々しい記憶しかないだろうな。実際に、オレ達の中で評議会と喧嘩を繰り広げた唯一の奴だし。

「面倒な話を変えるか。周。この術式なんだが見てくれないか？お前なら何かとアドバイスしてくれるだろ」

悠聖はそう言いながら手のひらをオレに向ける。すると、手のひらから円の形をした幾何学模様のあるものを作り出した。簡単に言うなら魔術陣。魔術を扱うための術式だ。この魔術陣にはたくさんの

魔術文字が描かれている。別に理解しなくても魔術の使用には何ら意味を成さないけど、理解している方が便利なときだってある。

オレはその魔術陣を見た。魔術文字を読み解いてこれが何かを理解する。

「新しい召喚術式か？　形を見る限り風属性？」

召喚術式用の魔術陣だから文字が多いということだ。

「正解。まあ、まだ改良の余地があるけどな。これでも『万世術士』と呼ばれる男だから、天空属性を除く全ての属性精霊と契約しないと」

現時点で七体の精霊と契約していることが驚きに値するけどな。

「ご苦労なこった。まあ、お前らしくていいかもな。ところで、新部隊の役職は何がいい？」

「一般兵。出来れば後方支援」

「言うと思ったよ。まあ、お前のポジションはよくてバック。悪くてセンターだな。フロントに出るほどの速度はないし。お前はな」

オレは小さく溜息をつきながら構想を考える。副隊長はあの二人にするとして、問題は隊員の確保だな。今のところは二人しか確保出来ない。いろんな意味で問題だ。

亜紗を呼び寄せることが出来たら楽にはなりそうだけど。

「前途多難すぎて頭が痛くなってくる」

「まあ、そう言うなって。おっ、周、通信が来てるぞ」

オレが机の上にあった通信機を見ると、確かにそこには通信が来ていることを知らせる光が点滅していた。オレは通信機に演算装置であるデバイスを繋げて回線を開く。

「寿司四人前大至急」

『立場逆じゃね？』

どうやら通信先の相手はよく似たことを言うつもりだったらしい。先手必勝と言うことでオレの勝ちでいいだろう。

「で、何か用か？　『ＧＦ』の最高幹部である『ＧＦ』総長海道時雨殿？」

『呼び出しって言っても、どうせお前らは来るしな。じゃ、一時間後に連れてこれるだけの新部隊の隊員を連れて部屋に来てくれ。話の中身はそこで話すとするから。まあ、驚くだろうな』

時雨はそう言うと通信を切った。驚くと言うからには絶対に何かある。本音を言って行きたくはないが、あれでも一応は上司だ。

オレは小さく溜息をつきながら机に突っ伏した。少しくらいは楽にしていいだろう。

「厄介事の類に賭ける」

オレがにやりと笑みを浮かべて悠聖に向かって親指を立てる。今回も先手必勝。

「いきなり本命を取るなよ。なら、オレは依頼で。賭け内容は周が決めてくれ。どうせ、オレが決めたらヌルい内容になるだろうし」

その言葉にオレは笑みを浮かべて頷いた。

「お前が副隊長になるかどうか」

「えっ？」

悠聖が固まり、そして、真っ青になる。オレに任す方が悪いからだけどな。

「じゃ、孝治を探しに行こうぜ」

第二話　合流

一時間後。時雨が指定してきた時間にオレ達は素直に奴の部屋に行くつもりだった。そう、つもりだった。何故つもりだったかを説明するなら、

「孝治はどこに行った？」

悠聖が今呟いた言葉に全ての意味が入っている。そう、いないのだ。心当たりのあるところをひたすら回っても見つからない。考えうる限りの場所を探した。今向かっている場所を除いて。

花畑孝治。

オレや悠聖の親友で頼れる男だ。よく一緒に任務に行くが悠聖が暴走するのを食い止めてくれる。同年代だけど。

若干老け顔で言動がおっさん臭く、好きなものがするめで世界トッププクラスの実力者。１００位以内には入ってくるだろう。確実に。

何度も何度も同年代と言うが、孝治はまさに天才と呼ぶべき部類の中でもトッププクラスに入る。いや、同年代の中では二番目の天才だと言うべきか。一番の天才は、うん、想像をはるかに超えている存在だ。身近な存在でもあるけど。

もちろん、オレが戦えば勝てることは無い。代わりに負けることもない。実力が同じというわけでもない。特徴や弱点を知っていなくてもオレならなんとかなると言われたことがあったっけ。

そんな孝治がいない。つまり、時雨の部屋に行けない。孝治は重要な役目だから絶対につれて行きたいのに。もうひとりの重要な役目の人はすでに連絡を入れている。

「ったく、どこにいるんだか。周は心当たりは無いか？」

「そうだな」

孝治がよく行く場所。

体育館裏。校舎裏。路地裏。天井裏。

「変なところしか思いつかん」

全部裏がつく場所だけど、あいつならよくそこにいる。

「わかる気がする。外に出ていたらお手上げだよな。アルネウラに探させるか？」

「絶対拒否すると思うぞ。というか、お前はいつも精霊は友達と言っているだろうが。そんなことに使うな。とりあえず、最後の心当たりである屋上に向かう。いなかったらそれから考えればいいさ」

「行き当たりばったりかよ。まあ、オレ達の年代の行動力から考えて・・・、すまん。オレ達の財力を考えたら全く当てにならん」

まあ、同年代の中でも稼いでいる額はトップレベルだしな。特にオレや孝治は。

オレがさっきから屋上に向かって歩いている理由は二つある。

一つは悠聖と話した内容にあること。孝治が外に出ているならお手上げだが、頑張って見つければいい。

もう一つはとある理由からだ。悠聖が見たなら羨ましいと言いそうだけど。

オレ達は階段を登りきり、オレが屋上のドアに手を出そうとした瞬間、動きを止めた。凄まじく嫌な予感がする。例えるなら、どう見ても色がおかしい料理を目の前にした気分。

悠聖はオレのそんな動きに気づかずドアを開けて屋上に出る。呑気にも鼻歌を歌いながら。

オレがとった行動はただ一つ。後ろに下がり、防御魔術を展開しながら両手を合わせて目を瞑る。

まさにご冥福をお祈りしますというポーズ。何故なら、爆発音と共に悠聖が吹き飛ぶ瞬間が見なくても頭の中に浮かぶからだ。

期待は外さないというか、爆発音と共に目を開けると熱風と共に悠聖はいなくなっていた。あいつのことだから防御魔術を展開しただろうけど。間に合っていなくても大丈夫だろ。

「相変わらずの火力だな。さすが、地獄の名がつく異名を持つだけのことはある。」

オレは防御魔術を展開したまま屋上に出た。屋上にはボロボロになって転がる悠聖の姿がある。

防御魔術が間に合わなかったか。

槍を構える見知った少女とその後ろで困った顔をしている見た目は青年だけど、実際は少年。鎮圧用魔術かと思ったら砲撃魔術だったか。防御魔術していなかったら巻き添えくらっていたな。

少年の方が花畑孝治で少女の方が中村光だ。

中村の方はオレの幼なじみでもある。物心がついたころからの付き合いだ。髪の毛は肩くらいまであり、まっすぐなストレート。まあ、背は小さいけど。

花畑孝治は外見を見れば社会人くらいか。背は高く、しっかりとした体つき。髪の毛は天然パーマ気味だけど。

「逢瀬は部屋の中にしろと言わなかったか？」

中村が槍を構える。一応、いくつかの防御魔術をストックして準備しておこう。

「余計なお世話や！　なんで海道もこんな場所に来るん？　とりあえず、ぶっ飛ばしていい？」

「勘弁してくれ。孝治を探しに来たんだよ。まあ、お前もいるなら手間が省けたけど」

孝治と中村がどうしてこの場所にいるかの方が疑問だ。まあ、想像はつくけど。

「うちにも用があるん？」

「オレ達は呼ばれている。時雨にな。新部隊メンバーは呼べるだけ呼べとさ。現在の構想じゃ六人だし」

「そうか。ところで、そのボロ雑巾はどうする？」

オレは孝治が指差すボロ雑巾を見た。地味に孝治は怒っているな。いつもならこのバカか、間抜けか、悠聖としか呼ばないのに。

「すぐ復活するだろ。ところで、中村は本当に相変わらずだよな。相変わらず背が小さいよな」

オレは小さく小さく笑みを浮かべながら中村を見た。中村の身長は同年代でもかなり低い。身長が高めの孝治と一緒にいたら一度、孝治が補導されかけたこともあるくらいだ。中村はムッと槍を構える。

「ここでやるん？」

「おいおい、ここがどこだかわかって言っているのか？」

オレはあくまで挑発をするように言う。まあ、あくまで挑発をするように言いながらここで戦うことの危険性をほのめかしているだけだけど。ここで戦えばオレよりも強い奴が数人飛んでくるからな。文字通りに飛んでくるし。

中村は小さく溜息をついて槍を下ろした。

「わかっとる。このまま時雨さんのとこに行くん？」

「そうなるな。じゃ、行くか」

オレは地面に転がるボロ雑巾の首根っこを掴んで引きずって歩き出す。時々どこかにぶつかっているが気にしない。バカは頑丈だと言うのが相場だ。

向かう先は嫌な予感しかしない『ＧＦ』の総長の部屋。多分、音姉は怒っているだろうな。

第三話　依頼（前書き）

戦闘と書いたのに戦闘が入る予定はまだまだありません。

第三話　依頼

ボロ雑巾から復活した悠聖が新しい服に着替えるのを待ってから、オレ達は『ＧＦ』の総長室に向かっていた。誰もがしっかり服装を整えている。一応、重要そうな話だしな。

孝治は前を見ながら横に歩くオレにだけ聞こえるような小さな声で、しかも唇を動かさずに話しかけてくる。内緒の話をする時や、噂をする時には便利だ。

「周。呼び出しの理由は？」

オレはそれに対して同じように答える。孝治のを真似していたらいつの間にかできるようになったんだよな。

「さあ？　連れて来いと言われただけだし。まあ、重要そうな話ってことは確かだな。オレ達が驚く話らしいけど」

「了解した」

孝治は目だけで頷く。こういう会話の仕方は本当に便利だからな。まばたきだけで会話をするという技術をどこかの小説で読んだことはあるが、あんなもの覚えるのが面倒な上にまばたきの回数が多くなることで悟られることがある。ちょっとした合図には使えるけど。

総長室の前に立ったオレはすぐさまドアをノックしようとして、ドアが勝手に開いた。ちなみに、自動ドアじゃない

「遅い」

部屋から顔を出してきたのは、やはりよく見知った顔だった。というか、気配で気付かないで欲しい。

「悪い悪い。本当ならもう少し早く来るつもりだったけど孝治達が見つからなくて」

「それだったら仕方ないか。孝治くんはどこにいるかわたしもよくわからないし。ただ、もうすぐ弟くん探しに行こうとたけど」

白百合音姫。それが彼女の名前だ。

名門の一族でもある白百合家の長女でオレの義理の姉。そして、オレの一つ年上ながら世界最強の一角と言われるほどの天才の中の天才。実際に『ＧＦ』が主催した全年齢対象のトーナメントで優勝したことがある。

トレードマークは髪をポニーテールに括っている大きなリボン。ちなみにオレ特製。最初は作るのにはかなり苦労した。今はすぐに作れるけど。

「探すのに手間取ったからな。時間がたっても仕方ないか」

オレはそう言って総長室に入った瞬間、しゃがみ込んだ。もちろん、嫌な予感がしたからだけど。結果は、

「ぐほっ」

背後に立っていた悠聖の顔面に灰皿が直撃した。ちなみに、灰皿の中身は何もない。

お店とかにあるような小さなものじゃない。人殺しができそうなくらいに大きなものだ。まあ、悠聖なら死なないだろうけど。物理防御だけはかなり高い。殴られ慣れているから。

「いきなりの挨拶がそれか」

オレは小さく溜息をつきながら前に座っている男を見た。

オレとよく似た顔つきで、髪の毛は寝癖がひどいように見えるが、それがデフォルト。跳ねまくっているのが普通だ。もちろん、オレもだけど。

多分、オレとそいつの二人を見知らぬ人が見たなら必ず兄弟だと間違うだろう。それぐらいにオレと時雨の顔は似ている。血が繋がっているから仕方ないけど。だが、オレと時雨は兄弟という関係ではない。親子でもない。

オレ達は全員が総長室の中に入った。

「で、何の用だ？　オレ達を新部隊の案件で呼び出すということはかなり重要なことなんだろ？」

「まあ、重要と言えば重要だけど、２３分の遅刻だ。音姫は予定の２０分前には来たぞ。時間にはルーズになるな」

「文句なら孝治と中村に言え。場所がわからなかったんだ。で、用事はなんなんだ？」

「落ち着け。そこまで急いだとしても人生ろくなことがないぞ。急

がば回れ。まあ、単刀直入に言うが、依頼だ」

単刀直入に言うこと自体が急がば回れと反するような気がするがオレだけだろうか。

「イエス」

灰皿がぶち当たっていた悠聖が小さくガッツポーズを取る。いつの間に復活したか知らないけれど、オレはそれを背後で気配として確認しながら首を傾げた。もちろん、前にいる時雨が投擲体勢に入ったから。

「ごっ」

悠聖の顔面に灰皿がぶち当たる。自業自得なので何も言わない。

「で、依頼はなんなんだ？」

オレは何事もなかったかのように時雨に尋ねた。

「いつものことやから気にしてないと思うけど、ここ、総長室やんな」

中村が言いたい内容はわからないこともない。ただ、灰皿を投げつけられたのが悠聖だからとしか言えない。

オレは小さくため息をつく。

「黙秘で。で、依頼は？」

「案件のランクで言うならAは確定」

ランクAということは戦闘ランクA以上のメンバーで固めていないと任務の達成が難しいということだ。ここにいる全員は戦闘ランクA以上だから大丈夫だけど。

「ランクAね。依頼主は？」

「今回の依頼主は二人いるんだ。一人は『GF』の評議会」

その言葉にオレ達の顔色が変わった。驚愕という表現が一番近いだろう。かすかに疑心暗鬼も入っているからだけど。

前にも言ったように、評議会の爺共は保身にかけては人一倍熱心である。それなのに評議会がオレ達に依頼するのは、その依頼がかなりの厄介事であるとも言える。しかも、オレ達に依頼するということは隊の設立を許可するということ。

オレの推測を言うなら、オレ達のような未成年にしか出来ないような任務。これだけ見ると一部の団体が凄まじくうるさそうだ。

「で、もう一人が、アル」

時雨がそう言うと総長室のもう一つの入り口である倉庫（実際はほとんどゴミ庫）のドアが開いた。

そこにいるのは、手に大きな本を持つ少女だった。多分、魔術を使うための補助として使える魔術書の類だろうけど。髪の毛は長く膝くらいまである。身長は、オレと同じくらいか。

オレは時雨に「誰？」と話しかけようとした瞬間、音姉がその少女に近づいた。

「アルちゃん、大丈夫だった？」

「誰がアルちゃんじゃ。我にはアル・アジフという名がある。その名で呼べといつも言っておるじゃろう。そなたには何度説明したらわかるのじゃ」

「だって、アルちゃん可愛いから」

そう言って音姉がアル・アジフを抱きしめる。アル・アジフは懸命に暴れて音姉から離れた。

それを見ているオレ達は完全に固まっていた。音姉の私生活を知るオレからすれば固まることは無いが、他の三人は完全に予想外だろう。あの音姉が誰かを抱きしめるなんて。音姉って自分が可愛いと思った人には平気でするからな。

だけど、それだけではオレが固まっている理由にはならない。何故、オレが固まっているかと言うと、

「アル・アジフ？　あの、『ＥＳ』の最高幹部の」

「ふむ、そなたらとは初めてじゃな。我はアル・アジフ。『ＥＳ』の幹部の一人にして穏健派代表じゃ。よろしく頼むぞ」

『ＥＳ』。

この名前は『ＧＦ』と同じくらいに有名だ。

『ＧＦ』が南アメリカ大陸、ヨーロッパ大陸、ユーラシア大陸の東側を主な範囲としているが、『ＥＳ』はアフリカ大陸と『ＧＦ』の地域以外のユーラシア大陸を主な活動領域としている。

だけど、有名なのはそれだけじゃない。ある事件を起こした一派がいるから

「まさか、『ＥＳ』穏健派代表様から直々に依頼だとはな。で内容は？」

「それは、時雨に話してもらおうかの。我は一度時雨に話しておるし、ちゃんと依頼内容が伝わるかどうか見ておらんと」

どうやらアル・アジフは時雨の性格をよく知っているらしい。時雨は基本的にめんどくさがりだ。

時雨はすごく嫌そうな顔になる。

「わかった。だけど、補足は頼むからな。面倒だし」

「わかっておる」

時雨は小さく溜息をついて口を開いた。

「初任務としては重いくらいだけどな。まあ、聞いてくれ」

第三話　依頼（後書き）

この世界の地図はユーラシア大陸とヨーロッパ大陸で分かれています。二つの間にある海はチェルノブイリ海峡と呼ばれています。

第四話　依頼の中身（前書き）

設定とかはおいおい書いていく予定です。

第四話　依頼の中身

「評議会と『ＥＳ』からの依頼。はっきり言うならお前達以外に適任者がいないんだ。理由としては、事件が発生した地区の市長が正規部隊と地域部隊の介入を拒否しているから」

『ＧＦ』にとって正規部隊は数が少ない。だけど、その戦闘能力はかなりの高さを誇っていると言える。それ以外にも地域部隊もたくさんいるので数には困らないけど。

二つの違いは国を越えて活動できるかどうか。活動で気うなら正規部隊だ。

そんな正規部隊の介入を考えるほど大きな事件。心当たりがあるのは、

「狭間市か？」

「そうだ」

二ヶ月前、狭間市でとても大きな事件が発生した。狭間市にいる『ＧＦ』の地域部隊メンバーが全員失踪した。１８才から４７才までの計２３名が一夜、いや、一昼夜にして失踪したのだ。

原因はまだわかっておらず、事件とされたのは、『ＧＦ』狭間市本部にかすかにあった真新しい血痕だけ。目撃者すらいない。噂では完全にお手上げ状態らしい。

「狭間市市長は新しい『ＧＦ』が来るまで『ＥＳ』から傭兵の依頼

をした。『ＥＳ』はアル達が依頼を受けて『ＧＦ』に変わって警備をしている」

「なら、問題はないとちゃうん？」

確かに『ＥＳ』は頼れる組織だ。『ＧＦ』に並ぶ一般メンバーの熟練度。そして、穏健派だからこその安心感。アル・アジフがいるなら直属部隊もいると考えると下手な正規部隊よりはるかにましだろう。

だけど、中村は深く考えていない。『ＥＳ』が傭兵として警備に当たって何も無かったなら、オレ達がそのことで呼ばれることはまずない。アル・アジフからの依頼があることはない。

なら、どうして呼ばれるか。狭間市で何かがあったとしか思えない。

「それでも何かあったんだな」

「ああ。簡単に言うなら、『ＥＳ』から失踪者が出た」

予期していた答えにオレは頷いた。そういう事態にならなければ『ＥＳ』で十分なはずだ。

「ただ、今回はどうして人が失踪したかがわかった」

「孝治、時雨総長の言いたいことがわからないけど、お前はわかるか？　周はわかっていそうだけど」

「安心しろ。理由がわかれば失踪ではない。そのことに関してならボロ雑巾の意見に賛成だ」

後ろの二人の会話に大いに賛成だ。ただ、この場でボロ雑巾とか言わないで欲しい。

失踪と言うのは行方が分からなくなることだ。厳密な意味で言うなら正解になるのだが、『GF』メンバーも同じ理由と考えられるなら失踪と言うより事件の意味合いが強くなることを二人はわかっているのだろう。

オレはとりあえず候補を一つ上げてみた。

「魔物か？」

オレは考えの中にあった一つの候補を尋ねていた。

オレ達が住むこの世界とは違う世界である魔界に存在する魔物。それは人を襲うものもいれば人と仲良くなるものもいる。オレは前者の魔物かと尋ねた。

「そんな楽な敵ならどれだけ簡単だっただろうな」

その言葉にオレの表情が固まるのがわかった。魔物は時には厄介な敵となる。

正規の手段で来ない魔物は大抵の場合は傷ついているが、召喚された場合は無傷の魔物が来ることがある。それで滅んだ街は少なくない。

「アル・アジフが見た限り、鬼が人を喰らったそうだ」

「ありえない」

オレは思わずそう答えていた。

鬼というのは空想の産物でしかない。実際に、そういう存在の目撃例は皆無であり、存在していないものとされている。実際に、桃太郎とかの童話で出てくる鬼は海賊という説の方が今は強いくらいだ。伝承の中にしかいない存在。それが鬼だ。人を喰らうのは鬼なら納得できるとしても存在が納得できない。だけど、時雨の目は本気。つまり、

「実在するのか？」

オレは少し呆れたように尋ねた。

「オレだって眉唾ものだ。慧海やギル、他の幹部の見解も同じ。ただ、アルですら逃す手練れということだ」

その言葉にオレは眉をひそめた。

「アル・アジフですら捕まえられない？　アル・アジフは最強の魔術師じゃないのか？」

オレはアル・アジフを見た。

アル・アジフの名前は『ＧＦ』の中ではとても有名だ。簡単に言うなら『ＧＦ』幹部級の実力者。幹部級は天才ばかりと考えてもらえばわかりやすいだろう。そして、魔術師単体なら世界最強とも言われている。

そんな実力者が逃がすほどの鬼。オレ達からすればかなり荷が重いとしか感じれない。

「そうじゃ。我が全力を発揮しても捕まえることが出来なかった。奴はそれほどまでに強い。いや、厄介と言うべきかの。真正面からぶつかり合ってはいないからわからぬが」

そんな存在を野放しにはできない『ＧＦ』としては正規部隊を出して鎮圧に乗り出したいところだが、市長が拒否するので向かえない。だから、オレ達というわけか。

「だから、オレ達を学生『ＧＦ』の最大戦力として送るわけか」

「理解が早くて助かる」

『ＧＦ』には学生が加入する学生『ＧＦ』があり、任務の際には学生『ＧＦ』を任務先の学校に転入させるだけで簡単に移動出来る。さらには向こうは拒めないという荒技を時雨は使おうしている。

確かにそれなら可能だ。だから、オレ達の新部隊か。正規部隊に学生『ＧＦ』が入っていることはあるが、正規部隊全員が学生『ＧＦ』ということはない。聞いたこともない。

「よく評議会が依頼してきたな」

「仕方ないだろ。このままじゃ事件は悪化する一方だ。なら、天才達を集めたお前の新部隊構想に乗った方が利益が出る。最悪、部隊は送ったが敵が強すぎて全滅したで収まるからな」

確かにそうだな。オレが隊長として作る新部隊は学生『ＧＦ』としては完全なオーバースペック。だからこそ、今回の依頼を出した。オーバースペックだからこそ、失敗したとしても害はほとんど少ない。何人かの首が飛ぶ可能性はあるが。

「ところで、海道、新部隊って何？　今まで聞かんかったけど」

中村が純粋な疑問をぶつけてくる。それに対してオレは小さく溜息をついた。孝治にはちゃんと伝えるように前に話していたはずだ。特に、部隊設立を決定した時は特に。

「孝治？」

「すまん。忘れていた」

「だろうね」

オレはまた小さく溜息をつきながら振り返った。

姿勢を正し小さく息を吸う。

「今日これより現時刻を持って『ＧＦ』移動課第一部隊第７６移動隊の設立を完全宣言する。部隊メンバーは隊長に海道周。副隊長に花畑孝治、白百合音姫。隊員に白川悠聖、中村光。隊長以下全員は異動届を前部隊に提出すること」

新しい部隊を設立する宣言。

評議会からの依頼が来るということは部隊として認可されたことであり、『ＧＦ』の上層部の推薦をもらっている以上、各部隊はオレ

達の異動は止められない。だから、この場で宣言する。ちょうど時雨もいるしな。

「周、いや、周隊長。質問があるけど」

「すまん。オレが理解出来る言語で頼む」

「お前はオレを何だと思っているんだ。まあ、いいけど」

いいのかよとつっこみたい自分を抑えつけて耳を傾ける。

「オレが聞きたいのは『ＧＦ』移動課第一部隊第７６移動隊という名前なんだが、移動課に移動隊ってなんだ？　そんな話はされたことはないけど」

悠聖の言葉に音姉が微かに目を細まる。

「私も。弟くん、もしかして」

「忘れたわけじゃないから」

オレは必死に弁解する。こういうことは音姉は厳しい。ちゃんと説明しないと伝わらないことはよく知っているから。

「移動課だけど、簡単に言うなら世界を自由に飛び回って任務をこなす部隊の所属場所だ。移動隊自体が今までに無い発想だったからな」

オレが慌てて弁明していると、後ろの方から時雨とアル・アジフの会話が聞こえる。

「確かにそうじゃな。部隊を送るには緊急の時を除いて時間がかかる。それを縮小するのが移動隊か。よく考えておるの」

「発案はオレね。周達の才能は承知しているから認可出来た。まあ、今回の依頼を出せるただ一つの部隊」

「確かににそうじゃな。世界でもトップクラスの実力者である音姫と孝治の二人を入れた部隊。これなら我らと共に行動ができる」

「やっぱりお前たちもいるのか。一応言っておくけど」

「わかっておる」

オレはそんな言葉を背後で聞きながら小さくため息をついた。

まあ、この二人の会話には大人の事情というもんがあるのだろうし、オレ達の様なまだ大人じゃない面々が話に入っても事態をややこしくするだけだろう。

「弟くん、移動隊を作ることはいいとして由姫ちゃんはどうするつもり？　これ以上、忙しくなったら」

「わかってる。今日帰ったら話すつもり。他に質問はないか？」

オレがみんなに尋ねると、孝治が静かに手を挙げた。

「アル・アジフに尋ねる。鬼の単純な戦闘能力は？」

「そうじゃな、速度と魔力共に世界でもトップクラスとして通用す

るじゃろうが、一つ気になることがあるのじゃ」

アル・アジフはそう言いながら不安そうな顔で言葉を続ける。

「奴は本気を出していないように思える。まだ、力が完全ではないと思うのじゃ」

本気じゃない？　アル・アジフを相手に？

孝治が何か考えるように下を向いて、そして、オレを見てくる。

「力が完全ではない、か。周、お前の見解を聞かせてくれ」

オレは本気で嫌そうな顔をして抗議する。

「なんでオレなんだよ」

「俺では思いつかない可能性をお前は思いつく」

オレは小さくため息をついた。まあ、孝治もいろいろと思いつくけど、オレが思いつく回数と比べたら圧倒的に少ないのは自分がよくわかっているからだろうな。

とりあえず、今までの情報を並べよう。

・狭間市において『ＧＦ』のメンバー２３名が失踪。『ＥＳ』のメンバーも失踪
・失踪した理由はおそらく鬼が喰べたから
・アル・アジフ一人では鬼を捕まえることはできない
・鬼の単純な戦闘能力は現時点でアル・アジフと同レベル

・鬼は本気を出していない可能性がある

それらから導き出せる考えは、

「完全に復活していない？」

何かと端折って結論を出したら音姉が首を傾げてくる。ですよねー。

「弟くん、説明をお願い」

「あ、ああ。オレの考えだけど、その鬼は狭間に地に封印されていたものじゃないかと推測したんだ。もちろん、遥か昔から」

そう考えれば本気を出していない理由が理解できる。

「根拠はなんじゃ？」

「オレ達、いや、時雨や慧海ですら把握していない事柄だから。鬼が人を喰らうのは復活のための行為。そう考えれば違和感なく繋げられる」

もし把握しているなら時雨達はもっと早くに行動しているはずだ。でも、オレが知る限り後手に回っているようにしか思えない。そして、鬼が存在するとするなら復活のために人を喰らい力を溜める。これなら全てが繋がってくる。

オレがそういうと時雨は少し考え込んだ。状況を整理しているのだろう。多分、自分の考えとどれくらい同じであるかどうかを。オレが気づいたことをこいつらが気づいていないことはない。

アル・アジフは少し驚いたようにオレを見ている。まあ、子供がここまで推測することに驚いているのだろうけど。

「やはり、そうくるか」

「時雨も同じ考えなんだな」

多分、自分でも納得できない部分が多かったのだろう。

「ああ。オレ達も同じ考えだ。問題はいろいろあると思うが今のところはそれが最有力候補か。周、狭間市に行ってもらえるか？　このままだと大変なことになりそうな気がする」

「第７６移動隊としての初任務の依頼、受けた。みんなもそれでって、一人寝ていないか？」

オレは振り返ってから呆れたように中村を見た。

立ったまま寝ている。しかも、全く体が動いていない。まるで、ベッドの上でぐっすり眠っているような感じだ。話がかなり退屈だったのだろう。

まあ、中村らしいと言えばらしいけど。

「だけど、周隊長。オレ達だけで大丈夫か？　せめて後、四、五人は連れて行きたいと思うけど？」

「そりゃな。でも、心当たりがないんだよな。時雨、誰か推薦してくれ」

「お前らにレベルについて来れる奴らの方が大人を含めても少ない」ですよねー。

まあ、心当たりがないってことはないけど、あいつはある任務に出ているからな。

「ところで、亜紗の任務はどうなっているんだ?」

「ちょっと待ってろ」

時雨がデバイスを?げた機器にを操作する。そして、小さく頷いた。

「大丈夫だ。一週間ほど前に長期任務は終わってある。今はニューヨークで部隊内で出来た友達と遊んでいるらしい」

「男か?」

「女だ」

オレは安心したように息を吐いた。本気で良かったと思っている自分がいる。

時雨がオレを見ながらニヤニヤしている。

「いいのかよ」

「何が?」

時雨がさらににやりと笑みを浮かべる。

「三角か、うおっ」

オレは床に落ちていた灰皿を勢いよく時雨に投げつけた。もちろん、身体強化魔術を全力展開して。だけど、時雨はそれをよける。

灰皿は時雨の背後の壁にぶつかり粉砕した。

「ちっ」

「殺す気か？」

「お前がこの程度で死ぬわけがない」

もちろん本気で言っている。時雨は小さくため息をついて椅子にしっかり座った。

「わかった。亜紗には、こちらからメールを送っておく。これでお前の面々は六人か？」

「そうなるな」

六人というのもかなり不安なんだけど。だって、『ＧＦ』の一番少ない正規部隊で八人。対するここは六人。

オレの中には他の候補が見つからない。

「周、一人心当たりがある」

「本当か？」

孝治はしっかり頷いた。ただし、不安そうな顔で。

なんでいやな予感しかしないんだろう。

「佐野浩平。腕だけは確かだ」

「腕だけかよ」

不安しか残らないが、まあ、メンバーが増えることにはいいだろう。これで七人。正直に言うなら後三人は欲しいところだな。

まあ、無いものをねだっても意味はないからあきらめる。

「まあ、候補はオレの方で見ておく。お前たちは依頼の詳細を見ていてくれ」

時雨は机に上にあった書類を一枚、オレに向かって差し出してくる。オレはそれを受け取った。今回の依頼の詳細が書かれている書類だ。そこそこの分厚さを誇っている。ページは大体２００ページくらい。普通だな。

「話はこれで終わりだよな。じゃ」

オレはそう言って部屋から出ようとする。すると、時雨がオレに向かって何か投げてきた。

オレは軽く体を反らしてギリギリで避けて飛んできたものを手に取った。

「記憶媒体？」

「詳しい事柄はそっちだ。みんなで仲良く見ろよ」

「わかってる」

オレは小さく笑ってみんなと総長室から出て行った。そして、小さくため息をつく。

「さて、どうなることやら」

第五話　鬼（前書き）

ようやく戦闘映像が入ります。あくまで映像なので中身はかなり薄いかと。

第五話　鬼

記憶媒体を専用のプレイヤーに差し込む。そして、投射装置につなげる。だけど、記憶媒体はこれだけで中の記憶を見れるものではない。ポケットから取り出したペンダントを机の上に置く。

デバイスと呼ばれる演算機器だ。

他の演算装置と違って演算能力が桁違いに高く魔術の補助にも使われるくらいに優秀なものだ。それらを総称してデバイスと呼ぶ。別名魔術器である。

記憶媒体のほとんどが余りの情報量にほとんどの機器で再生できない。だが、デバイスを介入させることでそれを可能とする。演算を肩代わりさせることで可能になるのだ。機器が欠陥品という見方はあるが、それは技術が追い付いていないだけである。

ペンダントに端子を付けてそれを投射装置に繋げた。

「再生するぞ」

オレはそういうとすぐに記憶媒体の中身を再生する。写真のスライドか、それとも映像か。

「これは、映像かな？」

投射装置からスクリーンに流れた映像は大きく動いている。まるで空を飛びまわってるかのような感じだ。わかるのは揺れ動く空。そして、金色の人型の何か。大きさは大きい大人よりも大きいだろう。

特に腕が大きい。

「こいつか」

孝治の言葉で全員に緊張が走る。

そこにいるのは確かに金色の体を持つ鬼だった。その口元は赤く染まっている。まるで、血によって濡れているかのように。

「喰らったということはこういうことだな。だが、どいつが撮った？　こんな高度に鮮明なものを」

「多分、アル・アジフだろうな。確か、記憶媒体に映像を記憶できる魔術をアル・アジフが使えると聞いたことがある。噂だから確証はないけど、この速度をぶれないように撮るのは普通の機器では不可能だ」

映像が動く。鬼に一気に肉薄したかと思うとそのまま急に飛び出した光の剣が鬼とぶつかった。鬼はそれを右腕で受け止めている。光属性の形成系統の魔術。確かフォトンソードだったと思う。

『そなたは何者じゃ！』

アル・アジフの声が響く。だが、鬼は答えることなくそのまま後ろに跳ぶ。その距離は極めて長い。

『逃がすか！』

アル・アジフはすかさずいくつかの直線的に進む魔術を放った。映像から読み取る限り、水属性のアクアブラスト、炎属性のフレイム

ランス、雷属性のサンダーバードを同時に放っている。しかし、当たらない。動くスピードがかなり速い。

「直線的な攻撃は当たらないか。光なら」

「うちなら何とかとらえれると思う。面攻撃なら」

孝治と中村の会話を耳にしつつ映像を食い入るように見る。

アル・アジフはこのままではらちが明かないと判断したのか魔術を放ちつつ一気に距離を詰めていく。放つ魔術も広範囲に攻撃が届くものに変っていた。

相手の行動によって動きを大きく変える。簡単なようで難しい。特に魔術は戦闘前に必ず魔術をいくつかストックするので戦闘スタイルは戦闘中に変えにくい。それをアル・アジフは簡単に行っている。

これが、世界トップクラスの実力。発動タイミングから考えてかなりの発動速度だ。

「おいおい、鬼さんは空も飛べんのかよ。対処できんのか？」

鬼の空を飛ぶ速度は速いように見えるが実際には空を飛んでいない。それに気付いているのはオレと音姉だけだろう。

「違うよ」

音姉が小さく首を横に振る。他の顔を見ると全員が不思議そうな顔をしていた。

「飛ぶではなく、跳ぶだな。飛翔しているんじゃなくて跳躍しているだけだ」

映像をよく見ると、鬼は時折地面を蹴るような動きをとる。それに気付ける人は少ないと思うが。実際に新しく気づけたのは孝治ぐらいだ。

「筋肉が微かに動いているな」

「微かにって、見えねえよ」

これはよく注視しなければわからない。筋肉がミリ単位で動いている。

アル・アジフも負けじと空に飛びあがり鬼を追いかけて高速の空中戦闘。それなのに映像がぶれないのは魔術の能力が高いからだろう。羨ましい限りだ。

いくつかの魔術を併用しつつ鬼を追い詰めていく。そう、この時は完全にアル・アジフの方が優勢だ。

「アルちゃんが捕まえられなかったんだよね」

「らしいな。これを見る限りそういうことはありえな、なっ」

オレは次の瞬間に完全に絶句していた。

鬼が振り返ったと思った瞬間、映像が勢いよく揺れたのだ。まるで、大地震を受けたかのような揺れと共にアル・アジフが地上に落下する。なんとか衝突するのは避けたみたいで地面が見えるが、すでに

空には鬼の姿がなかった。

そして、映像が終わる。その中、誰もが無言だった。

最後の瞬間、アル・アジフが落とされた瞬間、振動が起きたということはあの魔術しか存在しない。

「ダウンバーストやんな」

中村の言葉に全員が頷く。

対暴徒鎮圧用魔術（ダウンバースト）

空中で受けて意識があることが奇跡なくらいだ。正直に言って、まともに受けたなら気絶するのが普通。それほどの威力がある。無音かつ音速で叩きつけられる攻撃。範囲２０ｍ以内しか効果がないのが問題だが、それを抜きにすれば最大威力の魔術。

「まさか、相手がダウンバーストを使えるとはな。周は使えるな？」

「ああ。ただ、空中では使えない。下手をすれば自分が墜ちる」

ダウンバーストには弊害が多い。一番の弊害は術者自身も衝撃を受けるという点だ。だが、鬼がそれを平然と使った。もしかしたら切羽詰まっていたかもしれないがああいう状況で使えることがわかれば十分な収穫だ。

「アルちゃんが頑張って残したんだね」

「そうだな。逃す可能性があったから魔術で戦闘を撮影していた。

これを知らなかったらやられていたな」

確実に二人は墜ちる。そう断言できた。

「事態は深刻じゃね？　周隊長もそう考えているだろ？」

「深刻通り越して最悪だけどな。孝治、悠聖、出来れば明後日には狭間市に入るぞ」

オレの言葉に孝治と悠聖が嫌な顔をせずに答える。

「急だな。だが、悪くない」

「賛成だ。でも、全員じゃないのか？　オレ達の戦力でいけるのかよ」

「音姉も中村も女の子だから準備に時間がかかるだろ」

「なるほど。あっ」

何かを思い出したかのように苦々しい顔になる悠聖。オレもその顔を見て思い出した。

「七葉（なのは）はどうするよ」

「オレに聞くな」

家族への説得をオレに尋ねられても困るんだが。

悠聖は小さくため息をついてぶつぶつ何かをつぶやき始めた。多分、

七葉をどうするか考えているのだろう。オレは小さくため息をついた。

「ともかく、ちゃんと家族にはいうことだな。オレと音姉はこのまま書類の作成に入るから。集合時間はま連絡する。じゃ、解散だ」

第五話　鬼（後書き）

この物語の魔術に関してですが、
炎、水、風、大地、雷、氷、闇、光、物理、天空、
の全部で十の属性があります。
基本的に体内で合成される魔力を使って使用。並列発動も可能。ちなみに、魔法ではないので詠唱は任意。
この中でわかりにくいであろう物理と天空について。

物理は一言で言って錬金術。某兄弟の物語を参考にしていただければわかりやすいと思います。

天空は治癒とか全体身体強化など補助的な役割から特殊な攻撃まで使える万能タイプ。目立つのは唯一の治癒魔術のある属性で、それ以外はただの器用貧乏。名前は中二ですが勘弁を。

作中において、飛ぶと跳ぶがありましたが、前者は文字通り飛翔。リリカルなのはを思い浮かべてくれればわかりやすいと思います。
後者は魔術ではなく魔力を固めて足場を作りだしたものを蹴って跳ぶタイプです。壁キックみたいなものかなと思っています。

第六話　帰宅

「ただいま」

オレと音姉は疲れた顔をしながら夜遅く、家に戻った。疲れた理由は簡単だ。部隊の出動には様々な書類提出を必要とする。それの作成には手間と時間がかかる。だから、遅くなった。

オレと音姉は二人で書類を作成して提出を終わらしたからだ。時刻は現在１０時くらいか。

「疲れた通り越してバテた」

「弟くん、１日で書類全て作ったからね」

全員分の異動願いと任務受諾の書類。新部隊のメンバーの履歴書をまとめたり、報告書を書いたり、正直どれだけ書類を作ったかわからない。

「明後日には狭間市に入るんだから早めに仕事をしないといけないし。さて、由姫は」

オレがリビングのドアを開けると、ソファーの上で少女が横になって眠っている。

多分、オレ達を待っていたんだろうな。

「由姫」

「んぁ。お兄ちゃん？」

オレが由姫に声をかけると由姫はゆっくり体を起こした。眠そうな目を擦りながら起き上がる。音姉と比べても髪は短い。後ろで結んでいるが、紐を解けば肩近くまで長さがある。

「由姫ちゃん、ただいま」

「お姉ちゃんも。お帰りなさい」

由姫は本当に眠そうに迎えてくれる。オレは小さく溜息をつきながら由姫の横に座った。

「眠いなら寝たらどうだ？」

「ご飯、一緒に食べようと思って。カレー、だから」

そう言って立ち上がろうとする由姫。だけど、立ち上がろうとした由姫の肩を音姉は押して由姫をソファーに座らせた。

「お姉ちゃんがするから。弟くんは由姫ちゃんをお願いね」

「了解」

音姉はそう言って台所に向かった。まあ、オレは座ってしまっているし。

「ごめんなさい」

「謝るな。謝るのはオレ達の方だし。それにしても、三人一緒にご

飯を食べるのは久しぶりだな。いつ以来だ？」

「四ヶ月ぶり」

由姫の言葉にオレの胸が痛む。オレも音姉も、義理の両親も仕事が忙しく、由姫にあまり構ってやれない。

「だから、久しぶりにお兄ちゃんとお姉ちゃんと一緒にご飯が食べたかった」

オレは無言で由姫の頭を撫でてやった。由姫は嬉しそうに猫のように目を細める。

いつも辛い思いをさせてしまっている。これからもずっと。オレ達が戦い続ける限り。

「由姫、ごめん。でも、また辛い思いをさせるんだ。次の任務はかなり長期になりそうで」

「長期？　お兄ちゃんはどれくらい家を空けるの？」

由姫は少し悲しそうに尋ねてくる。でも、これがオレ達の日常だ。

「短くて半年。長くて１年」

「えっ？」

オレの言葉に由姫は絶句した。

今までそんなに家を開けたことは無かった。あったとしても２ヶ月

ほど。だが、今回は最低半年。それがオレと音姉で出した最低ラインだった。例え、1ヶ月程度であってもその後を見るために3ヶ月は様子を見ないといけない。

だが、一年以上任務を続けることは出来ない。それは任務の失敗を意味する。

「今回は音姉も一緒に行く。だから」

「嫌。嫌だよ」

由姫がそう言うのはわかっていた。わかっていたからこそ、オレは言葉を考える。

「お兄ちゃんとそんなに長い間離れ離れになるなんて、嫌。私も、一緒に」

「由姫。お前は、オレ達と一緒の世界に来たら駄目なんだ。お前だけがオレ達の希望だから」

あの日、オレ達は戦うことを選んだから。

「お前は普通の人生を送ってくれ。オレ達が過ごせなかった分も」

普通の人生を、誰もが笑える生き方を捨ててオレ達は剣を取った。

「お前だけは、幸せになって欲しいんだ。普通の人生を歩んで欲しい」

だから、由姫だけは普通の人生を歩んで欲しい。普通の女の子とし

て暮らして欲しい。

「お兄ちゃん」

オレ達は戦っているから。みんなを守るために。あの日の再現をさせないために。

「だから」

「違うよ」

由姫が優しく言ってくる。

「確かに、お兄ちゃんの言う幸せは普通の幸せだと思う。それは私にとっての幸せじゃない。幸せと言うのは自分で決めること。それは、私の幸せはお兄ちゃんやお姉ちゃんと一緒に暮らす。上限があるのはわかっているけど、大人になるまで一緒にいたい。それが、私の一番の幸せ」

「でもな」

それは、オレ達の世界に体を入れること。首を突っ込むだけでは済まない。

「じゃあ、入隊試験をすればいいんじゃない？」

カレーの美味しそうな匂いと共に音姉が台所からやって来る。その手にはカレーの入った三つの皿。音姉は普通の動作で皿を机の上に置いた。だけど、カレーは揺れない。まるで、模型のように。しかい、視覚や嗅覚が模型ではないことを表している。

こんな芸当は出来ないだろうな。出来るとしても・・・いないや。

「弟くんは第７６移動隊の隊長さんなんだから、由姫ちゃんに入隊試験をさせることが出来るよ。それをして、由姫ちゃんが落ちたなら、由姫ちゃんは何も言わないと思うし」

「うん。それなら、私は諦める」

入隊試験という考えは確かにありだけど、音姉はあの鬼の力を見ていたはずだよな。それを知って言っていると思うけど。まあ、由姫がオレに勝てるわけがないな。

オレは小さく溜息をついた。

「わかった。明日、朝一で近くの演習場を借りて入隊試験をする。内容は実力を見る。音姉も立ち会ってくれるか？」

「うん。それくらいならお姉ちゃんに任せなさい」

実力を見るなら由姫は落ちるしかないはずだ。

白百合の中で才能が無い普通の女の子として生まれた由姫。だからこそ、オレは普通に生きて欲しい。

「由姫ちゃん、頑張ってね」

「お姉ちゃん、入隊試験ということは本気を出した方がいい？」

「ほ、本気？」

音姉の顔が引きつっている。多分、音姉も由姫に諦めさせるために提案したに違いない。確実に。オレだってそう考えている。でも、由姫の言動からは不安を感じる。

オレは食卓の席につきながら冷や汗をかくのがわかった。嫌な予感がする。オレの鋭い感覚が警鐘を鳴らしている。

オレは小さく溜息をつきながらカレーを口に運んだ。

第六話　帰宅（後書き）

白百合家について

音姫と由姫の家系で昔から続く名門。剣術だけの戦いなら世界最強の剣術を代々伝えている。
実は白百合家の子供は剣術の才能以外に他の才能一つある。もちろん、音姫もあるが、由姫は剣術の才能はない。

海道家について

周や時雨の家系で新しい部類に入る。『ＧＦ』において親族が上層部の大多数を占める。
基本的に魔術が得意な者が多く、世界でもトップクラスの実力者を多く排出する。ただし、周はちょっと違う。

第七話　入隊試験（前書き）

映像じゃない戦闘入ります。内容は薄いけど。

第七話　入隊試験

朝。日が登り、近くのマンションの端から微かに太陽の光がオレの立つ演習場に差し込んでくる。

オレは腰に剣を差したまま小さく息を吸い込んだ。

「レヴァンティン、準備はいいか？」

オレは剣に語りかける。普通なら剣は答えない。でも、

『大丈夫です。私はいつでも可能です』

オレの身につける剣から声が返ってくる。

レヴァンティン。

それがオレの所持する武器の名前だ。世界最高峰の演算能力を持つデバイスであり、オレの最高のパートナー。

『私の心配をするよりマスター自身の心配をした方がいいのでは？』

「まあな」

確かに心配している。由姫とどれだけ手加減して戦えるかどうか。

『マスターの剣技は不殺の剣技ですが、素人相手に使えば殺しかねません』

「わかっている。由姫には諦めてもらわないといけないんだ。だから、全力で手加減しながらいく」

オレはそう言いながら振り返った。そこにいるのはナックルを身につけた由姫と、とても困ったような顔でいる音姉の姿。今の言葉は聞こえていないだろう。

レヴァンティンのことを知られるわけにはいかないから。だけど、どうしてかわからない。どうしてか、嫌な予感しかしない。オレの第六感が訴えてくる。本気を出した方がいいと。

「お兄ちゃん、準備はいい？」

「それはこっちのセリフだ。試験官はオレと音姉だからな。お前は試験を受ける側」

「そっか。お兄ちゃん、私はいつでもいけるよ」

オレは小さく溜息をついてレヴァンティンの柄に手を乗せる。どういう風に攻めて行くか考える。

「由姫、本気で来い」

「はい」

音姉は小さく溜息をつきながら手を上に上げた。

「よーい」

由姫が身構える。

ちょっと待て。その構えってもしかして、

「スタート！」

その瞬間、由姫が一気に加速した。

一歩目からトップスピード。二歩目はさらに加速する。瞬間的に距離を詰めて動く。この動きはあの武術しかない。

オレはレヴァンティンを鞘から勢いよく抜きつつ後ろに下がった。

レヴァンティンとナックルがぶつかり合い、互いに弾かれる。だけど、由姫はそのまま弾かれた力の動きを纏って回転する。まるで、オレの弾いた時の力をそのまま攻撃に転換しているような攻撃。

戦闘中の動きを全て攻撃に変える技術。

レヴァンティンをすぐさま返してナックルを撃ち落とした。距離を取るのは危険だが、この状況では距離を取るしかない。

「まさか、八陣八叉だとはな」

八陣八叉流。

究極の武術と言われる格闘技の最終形態で、軍隊が使うような格闘術をさらに強くしたようなもの。その特徴は容赦ない攻撃と崩せない防御。つまり、攻守揃ったもの。ただの攻守が揃ったものじゃない。下手に攻撃をすれば返り討ちにあうしかない武術。戦う時は相手の攻撃から崩さないといけない。

レヴァンティンを構えつつ、オレは背中に汗をかくのを感じていた。由姫は強い。それだけはわかる。

さっきの行動は攻撃を弾かれた瞬間には行動に移っていた。よほど慣れていないと出来ない。そして、その攻撃に弾かれた時の力を乗せていた。

由姫が足に力を入れる。その瞬間、由姫は動いた。正面から距離を詰める。

オレは小手調べに剣を素直に振る。対する由姫はレヴァンティンを肘で打った。そのまま顔に甲が迫るのを回避しつつ、由姫の蹴りを受け止める。

受け止めた体勢のまま蹴りを放つと由姫はしゃがみ込んで蹴りを避けた。

オレはすぐさま受け止めた由姫の足に手をついて飛び上がると、足払いがオレのいた場所を薙いだ。

着地した瞬間に距離を詰めながらレヴァンティンを振る。だが、レヴァンティンはナックルに受け止められた。そのまま押し込んで力を拮抗させる。

「まさか、ここまで強いとはな。どこで強くなった?」

「お兄ちゃんと同じ世界に行きたくて。お兄ちゃんとお姉ちゃんに内緒で教えてもらっていたから」

「なるほど、な！」

オレは力を一瞬だけ弱めて由姫が微かにこちら側に動いた瞬間、肩から体当たりを強行した。

「きゃっ」

さすがにこの行動は予想外だったのか、由姫はまともに食らってその場に尻餅をつく。

「今のは」

「チェックメイト」

レヴァンティンの刃先が由姫の目の前に到達する。

鍔迫り合いに持ち込んだ後、一瞬だけ気を緩めて体当たりをかける方法は案外上手く行く。問題点があるなら、相手が槍を使っていると使えない。後は、相手が自分よりも遥かに大きい時に使ったら失敗する可能性がある。隙がない相手ならの話だが。

「私の負け？」

「ああ。由姫の負けだ」

オレはレヴァンティンを鞘に収めた。正直に言って予想外だ。由姫の強さは特に。最後の技はオレのオリジナルだからな。拮抗している時に力を緩めて体当たりは使えるが肩を痛める危険があるからだけど。

「負けたんだ」

「弟くん、ご苦労様」

音姉が近づいてくる。その顔には笑顔が浮かんでいた。あまりに予想外だったから驚いていると思っていたけれど、音姉もオレと同じ考えということがわかる。

「お兄ちゃん、私、大人しく待っているから。だから」

「何を勘違いしているんだ？」

オレはニヤリと笑みを浮かべた。やっぱり勘違いしていたか。

「合格だ。由姫。音姉も文句ないよな」

「うん。驚いちゃった。由姫ちゃんがこんなにも強くなっているなんて。弟くんは焦っていたよね」

「ああ。手加減する隙が無かった」

本当は手加減をして由姫を気絶させるつもりだった。だけど、実戦で使うような技術をいくつか使うことになってしまった。その実力は十二分に任務についていける。

オレ達からすれば逆の結果になったが、由姫の成長はオレ達からすれば嬉しかった。ずっと、由姫を守らないといけないと思っていたのに。

「本当は、由姫には戦って欲しくはない。だけど、由姫の思いは無

駄にしたくない。だから、入隊試験に合格だ。それに、実戦経験を積めばさらに強くなれるだろうな」

「そうだね。まだまだ動きは甘いけど、由姫ちゃんなら大丈夫」

「本当に？」

由姫は未だに信じられないみたいだ。おそらく、勝つことが前提条件だと思っていたのだろう。というか、『ＧＦ』の正規部隊に所属するオレに勝つことがどれだけ難しいかわかっているのだろうか。オレに勝てるなら実戦で普通に通用する。

「お兄ちゃんやお姉ちゃんと一緒にいれるの？」

「まあ、義父さんや義母さんが許可してくれるならだけどな。許可が取れなければ駄目だ」

一応オレ達は未成年なのだから親の許可は絶対だ。オレや音姉の場合はかなり特殊だけど。実際に、入隊試験に合格しても、親の許可が取れないから入隊出来なかった人も存在する。

「うん。お父さんとお母さんに連絡してくる」

由姫はそう言うと全速力で演習場から出て行った。よっぽど嬉しかったんだろうな。でも、走る速度がオレの最速よりも速いようにしか見えない。

「これから大変だね」

「そりゃな。心配事の類が増えた」

オレは小さく溜息をついた。

これで、オレ達の第７６移動隊は全部で八人。後二人は欲しいところだ。

「それにしても、弟くんの剣技は鈍ってなかった？」

ギクッ。

最近、忙しかったからな。ヤバいかも。

「鈍っていたよね。お姉ちゃんが直々に鍛え直してあげるから」

「あのさ、明日から狭間市に向かうから厳しい訓練は」

「大丈夫大丈夫」

音姉は顔を笑わせながらいつの間にか取り出した刀の柄に手を置いている。大丈夫という割には目は笑っていないのも怖い。

「すぐ終わるから」

二分三十秒。

音姉相手に耐えきれた時間はたったそれだけだった。

これでも十二分に持った方だと思う。

第七話　入隊試験（後書き）

八陣八叉流について

防御の武術である八陣流と攻撃の武術である八叉流が合体したもの。
極めたら冗談抜きで世界最強のおまけがつく。
使い手によっては神殺拳とも呼ばれている。

第八話　レヴァンティン（前書き）

主人公たちの現在の年齢って実は珍しいのではないかと思っています。

第八話　レヴァンティン

『由姫が合格か』

「ああ。正直に言えば予想外の結果だ」

入隊試験の後、音姉によって手合わせによって絶対的な力の差を見せつけられ、絶望を植え付けられてすぐに、オレはレヴァンティンを使って通信機器によって孝治と連絡を取っていた。

「実力的には文句ない。今なら、悠聖と戦うとして互角まで持っていけると思う。まあ、シンクロしていなければの話だけど」

悠聖がシンクロ、特にアルネウラとシンクロをしていたらオレですら勝ち目がないのに。まあ、タイプが違うからでもあるけど。

『お前が言うなら確かか。しかし、わからないものだ』

何か嫌な予感がする。

『昔は、由姫はオレが守ると、後ろをついて来た由姫に言っていたが、入隊させるとは』

「その話は止めてくれ」

いつの話だっただろうか。多分、三年か四年前。

とある事件でオレの力不足から被害者を出し、もっと強くならなければと再認識した時。由姫だけはオレが守ると誓った時。そして、

由姫への依存を止めると決めた時。

「由姫の実力は十分だ。オレが守らなくても、いや、違うな」

由姫の実力は確かに十分。だけど、今のままでは十二分に足手まとい。それはメンバーを見ればオレもそうなるだろう。

「オレも由姫も互いに守り合って一人前だ」

『俺はお前が十分に一人前だと思うが？』

「メンバーを考えてくれ」

副隊長に同年代の実力第一位と二位。隊員に地獄の攻撃者（ヘルズアタッカー）の異名を持つ中村。そして、殲滅姫（マーダープリンセス）の異名を持つ亜紗。二人共、その異名に恥じない能力を持っている。

その中にいるオレは完全に名前が霞んむ。

『はぁ、最強の器用貧乏（オールラウンダー）の異名を持つのにそんなことを言うのか』

最強の器用貧乏（オールラウンダー）。それがオレの異名らしい。

完全に他称なのでどうしてこうなったかわからないが、オレからすれば完全に迷惑だ。器用貧乏の時点で強さは微妙だと言われているようなものだし。実際に強さは微妙だけど。それに最強がつくと言うことはただの凄い何でも屋にしかならない。そう考えると不名誉だ。

そう考えていたのが波動で出ていたらしく、孝治はため息をついた。

『お前が自分の異名に首を傾げるのはわかる。だが、俺達の隊長はお前以外に適任者はいない』

「そういうものか？　まあ、お前がそう言うなら受け取っておくさ」

オレは軽く肩をすくめながら言った。

自分の実力は理解しているつもりだが、こいつらの話だと誇張されているようにしか聞こえない。おかげでわけのわからない異名をもらうわけだ。

『では、明日は』

「予定通りにオレ達三人で先に向かう。書類は全て終わらしたからな。そっちの準備は大丈夫か？」

『誰に聞いている？』

「特殊部隊隊長のお前だよ。答えは分かっているけど、一応確認だ。音姉や中村は3日後に狭間市入り。亜紗は今のところ不明ってところか」

オレは小さくため息をつきながら話を続ける。

「で、そっちの準備は？」

『万端だ。あっちの方も解除を終わらせている』

「了解。じゃ、また明日」

『了解した』

孝治との通信を切ってオレは小さくため息をついた。

金色の鬼と戦うためには装備を完全にしないといけない。アル・アジフの映像を見る限り音姉や孝治だけでは勝てない。

「レヴァンティン。お前の限定解除は何段階まで？」

『二段階。いえ、三段階ですね。それ以上は許可できません。力に呑みこまれます。ですが、マスターはもしかして』

「今回の任務は違反がばれる覚悟で挑まないとな。想定できる相手の戦力はかなりの高さだ。正直に言ってオレ達のような子供が行くような任務じゃない。何が何でも使って生き残るしかない」

『でしょうね。任務のランクは余裕でＡＡランク以上。戦闘能力の段階でＡランク以上しかいないマスターの部隊でも難しいと思っています。ですが、なぜ、正規部隊の学生『ＧＦ』が行かなければならないのですか？　正規部隊ではない地域部隊の学生『ＧＦ』なら任務に出ることは可能なはずですが。戦闘ランクという問題は放っておいて』

確かにそうだ。狭間市が拒否したのは正規部隊であって地域部隊ではない。正規部隊と地域部隊の違いは大きな戦乱に海外で動員できるかできないかの差なので、日本の中では区別はほとんどないと考えてもいい。すでに、地域部隊の学生『ＧＦ』が送られている可能だってあったはずだ。

だが、時雨はオレ達の動員を決定した。確かにオレ達の方が動きやすいけど、違和感なく戦力を送るなら地域部隊の方がいい。オレ達が動けば否応なく話題になるのに。まるで、

『まるで、ここで何かがあることを宣伝するようですね』

「そうなるよな。一体どういうことだ？　時雨は何の目的でオレ達を送る？」

話題が集まれば人が集まるのは必然だ。そこに鬼が現れたなら大惨事になる。混乱の中でダウンバーストを使われたなら対処する方法がない。

オレは小さくため息をついた。

あまりに情報が少ない。ここまで情報が少ないなら答えを出すことは難しい。だけど、推測は立てられる。

「学生でなければいけない理由。学校に何かあるのか？」

『確かに考えれますね。ですが、マスター達の通う学校が分散すればそれこそひどいことになると思いますが』

「だよな。でも、オレ達を送る理由は学生であることだけだろ？何か関係性があると思うんだけどな」

『一応、調べましょうか？』

レヴァンティンはデバイスの中でも世界最高峰の演算能力を持つ。演算能力を持つの上に、他のデバイスに侵入することができる。も

ちろん、『ＧＦ』が使っている情報整理デバイスの対しても可能だ。情報を抜き出せるかは別として。

「相変わらずお前の性能はデバイス離れしているよな」

『造作もないことですから』

レヴァンティンを手に入れたのは約三年前。とある任務の最中に孝治と身を潜めるために遺跡に入ったからだ。遺跡と言っても石造りの遺跡ではなく、今の技術では再現不可能な純鉄によって作られた遺跡で、その最深部にレヴァンティンが眠っていた。

時代の最先端であるデバイスのさらに上を行くデバイス。ペンダントの形をしながらも、その情報処理能力は据え置き型のデバイスを凌駕できる。対抗できるのは集積デバイスと呼ばれるいくつかのデバイスを集めたものだけ。

レヴァンティンが話せることはオレとレヴァンティンの秘密にしている。もちろん、一緒にいた孝治さえ知らない。

「ばれないように頼む。今回、何も知らないところで何かが動いいえいる気がする」

オレはそう言って小さくため息をついた瞬間、背中を何かが走った。殺気ではない。だが、一瞬のうちに誰かが近くに現れたような感覚。

オレがゆっくり振り返ると、そこには一人の女性がいた。

「やあ、初めまして。君と話がしたくてね」

第八話　レヴァンティン（後書き）

この世界の技術について

純鉄は製作不可能で、鉄は最大で７０％の不純物を含むもの。製鉄技術他、鉱物に関する技術は著しく低い。
その理由としては材料の枯渇と魔力製品の方が安くて簡単かつ一部を除いて丈夫であるから。
暮らしの風景は皆さんの暮らしと見た目は変わらず、通信を媒介するものは全て魔術に置き換わっている。
ちなみに、石油や石炭、核などはこの時代には存在しない。

第九話　海道正（前書き）

いつになったら舞台が狭間市に入るのやら

第九話　海道正

「君は、真実を知りたくないかい？」

唐突に女性からそんな言葉をかけれらた。女性の服装はどこにでもいるような感じで、年齢に合った若い女性の服装だ。そして、顔立ちは、写真の中のお袋に似ている。

「誰だ？」

オレはレヴァンティンを構えた。柄の上に手を置いて抜刀の態勢に入る。いつでも攻撃できるように。

女性はそんなオレの姿を見て肩をすくめた。

「僕は今は敵ではないと言っておくよ」

「今は？」

「そうだね。将来に僕は君と戦う可能性だってある。それほどまでに未来は無限の可能性があるからね」

未来は無限の可能性があるというのはわかるが、女性の顔から判断するに、この人はそのいくつかの未来を知っているような感じだ。今は、という発言にも何らかの意図を感じる。ただ、敵意はない。

オレはレヴァンティンから手を離した。そうでもしないと話が進まないだろう。

「おや、信頼してくれるのかい？」

「信頼はしない。ただ、敵意のない奴にあの態勢のままでいるのは辛いだけだ」

だけど、魔術のストックは気付かれないように開始する。

見えないように魔術を発動させ待機状態のまま停止させる。やるのは結構簡単だが、気付かれないようにストックしておくのは難しい。ストックする魔術は派手に音が鳴るものだ。

「お前は何を知っている？」

「一応、君より年上のはずなんだけどね。とりあえず、自己紹介するよ、海道周君。僕は海道正。海道の性だけど、君の海道家とは関わりあいのない人物だよ」

「人物？」

関わりあいのないというなら一般人だけでいいはずだ。なのに、この人は人物と答えた。されにはオレの海道家か。つまり、

「隠したいのか？」

「察しが良くて助かるよ。僕は今回の事件の真相も知っている。ただ、詳細は知らない」

真相を知るのに詳細は知らないとはどういうことだ？　まるで、結果だけを初めから知っているように言っている。

「僕はその真相を君が知りたいなら」

「いらない」

オレは答えた。真相だけ知っても何の価値もない。

その人は少し意外そうな顔で話を続ける。

「おや、真相を知りたくないのかい？」

「結果は聞きたくない。重要なのは過程だ」

「ほう。今までのヒントの中でそこまでたどり着いたんだね」

やはりわざとか。露骨に矛盾する言葉にして話をしたい内容をほのめかすことをこの人はしている。聞いてもらいたいじゃない。オレに悟ってもらいたいから。

オレは女性をにらみつけた。

「名前も怪しいな。それに、何故かお前を見ているとお袋を思い出す」

「へえ、君のお袋さんは六年ほど前に死んだのではないのかい？」

オレの心が一瞬だけ動揺するのがわかった。だけど、この事実なら調べればよく分かることだ。オレの親父とお袋は良くも悪くも有名人過ぎた。

オレはレヴァンティンの柄に手を置いて睨みつける。。

「答えをはぐらかしたいのか？」

「いや、僕の記憶では写真はないはずでね」

「家にたくさんあるけど？」

少し不思議に思ってきょとんとしながら真顔で聞き返すと、ここでようやく女性が驚いたような顔になった。そして、すぐに笑みを浮かべる。

「新しい未来か」

「何が言いたい？」

声が小さくて分かりにくかったが、未来という単語だけは聞きとることができた。

どういうことだ？　女性が真相をしていることに何か関係があるのか？

だけど、女性はすでに真顔に戻っている。その表情からはさっきの言葉の真意はわからない。

「いや、何でもないよ、どうやら、君は結果を知りたくないみたいだね。だったら、僕はもう行くよ」

「ちょっと待て」

最後に聞きたいことが一つだけできた。これだけは聞いておこう。

「未来は同じでも中身を変えることはできるか？」

「答えはイエスだよ。海道周をよろしくね。レヴァンティン」

そして、女性の姿が忽然と消えた。まるで、最初からそこにいなかったかのように。

でも、なんで、レヴァンティンのことを知っているんだ？

『マスター、知り合いではないですよね？』

「レヴァンティンこそ。記憶は鈍っていないのか？」

それに、オレはレヴァンティンのことを誰にも話したことがない。それは、家族にだってそうだ。

『愚問です。詳しくは答えたくないので言いませんが、私の製作者及び、今までの使用者の中で彼女と似た外見は誰一人としていません。それに、私が前回握られたのは約二千年前なので時代的にありえないかと』

でも、彼女はレヴァンティンのことを知っている。そして、これから起こる結果も知っている。

「未来からの旅人？」

考えられる答えは一つだけだ。ただ、それはあまりにも突拍子もない話だ。

「レヴァンティンはどう思う？」

だけど、レヴァンティンからの回答はない。

「レヴァンティン？」

『すみません。少し考え事をしていました』

「お前が考え込むなんて珍しいな」

レヴァンティンは基本的にあまり考え込まない。すぐに今まで経験から話すことが出来るのかここまで沈黙が長かったのは聞いたことがない。

「未来からの旅人という線は？」

『そのような魔術は魔法を含めて聞いたことがありません』

レヴァンティンの記憶は『ＧＦ』の集積デバイスよりも昔の情報があるということを今日初めて知ったけど、まさか、魔法まで網羅していたなんて。

「魔法って四千年ほど前に消えたって聞いたけど？」

『それは間違いです』

レヴァンティンは少し怒ってように言ってくる。

『魔法は今でも現存します。ただし、使い勝手が悪いため、使うものがいないだけです』

つまり、どこかの家系が一子相伝しているというわけか。納得した。

「今は考えても仕方ないか。レヴァンティン、帰ろう」

『そうですね。でも、あの人の発言からすると』

「口に出さずに思考の中で」

『了解です』

レヴァンティンが話すのを止める。

おそらく、レヴァンティンなら答えを知っているに違いない。でも、無理には尋ねない。レヴァンティンが答えるわけがないし、それに、あの人とはまた会うような予感しかしなうからだ。

オレはレヴァンティンをペンダントに戻してポケットにしまった。

そして、思考の中で会話をする。

『あの人の発言からすると、何かの事件が発生するものと思えます』

同感だ。だけど、それがオレ達にとってどうなるかはまだ分からないか。ややこしいな。探りを入れれるか？

『やってみます。ただ、相手にデバイスがなければ不可能です。又は、私と同じレベルのデバイスか』

つまり、レヴァンティンの作られた技術であるオーバーテクノロジーが使われたデバイス。そんなもの聞いたことがないけれど。

わかった。出来るだけ頼むな。わからなくてもいいから。

『了解です。では、これで』

オレは小さくため息をついた。ため息をついて、

「何が待っているんだろうな」

その問いに応える者は誰もいない。

第九話　海道正（後書き）

デバイスについて（一部）

基本的な能力は本文で語っていますが、最後の方にあるレヴァンティンが剣からペンダントに戻ることについて。
デバイスは持ち主の魔術をサポートするように作られており、そのサポートの一つとして持ち主の武器を異空間から召喚する能力がある。もちろん、魔力を使用するが持ち運びに便利なので誰もが利用する。
ただし、欠点として大きくなればなるほど呼び出す際に必要な魔力は多くなるため手頃なサイズが多い剣、槍、杖が武器となる。

第十話　プロフィール（前書き）

最初に重要な設定の一部があります。全ては公開していませんが。
各キャラのプロフィールを公開。
由姫は次の機会に語られますが、生年月日は新暦１０２３年３月３１日なので周と同い年です。

第十話　プロフィール

ニューニューヨークにある『ＧＦ』本部総長室。

そこで一人の青年がコーヒーを片手に記憶デバイスと向かい合っていた。青年のもう一方の手はキーボードの上を走っている。

「ったく、時雨の奴、仕事を全部押し付けて日本支部に行きやがって。総長を押し付けたのはオレだけど、いくつか仕事をこなしてから行けっつの。これで、終わり」

青年がキーボードを打ち終えて、そのまま残っていたコーヒーを飲みほした。

そして、ため息を一つ吐く。

窓の外の景色はすでに真っ暗で、未だに再建が進み終わっていないニューニューヨークの建設現場は見えない。

主要な施設のいくつかはニューヨーク跡地から移動し、残ったのはここを忘れないようにするモニュメント建設と『ＧＦ』本部の移転計画だった。

多くの人の力を借りてニューニューヨークは復興を始めている。だけど、そこにニューヨークの元住人の姿は一人もいない。

「抜け殻のような感じだな。ここも。この街も。誰もがこの町で何があったかを知らない。知っているのは五人、いや、六人だけか」

青年の言葉は深い悲しみと共にあった。

青年はここに来るといつも思い出す。世界最強の魔術師の少女が泣いて懺悔したことを。両親を失い、妹が意識不明になり、自分が事件の原因だと知って全てを、自分すらも否定した少年を。その少年の姿を見て、戦うことを決意した今なお血の涙を流し続けている二人の少女のことを。

青年はこぶしを握り締める。

「考えても仕方のないこととわかっていても、考えるしかないんだよな。ったく、吹っ切れる方がどうにかするっつうの」

青年は知っている。この地で何があったかを。

「もう、六年以上なんだよな。オレ達が求める未来、奴らが求める未来。目的は同じでも過程が違う。どうすれば、新たな未来を切り開いていけるんだ」

青年はまるで未来を知っているかのように話す。だが、青年はまだ答えを出しきれていないようだ。

青年は机の上におかれている写真立てを見た。その中には周達の姿がある。

周を真ん中に左に由姫、右ににっこり笑う少女。その後ろに音姫、悠聖。さらにその後ろには孝治と光が映っている。みんな笑っている。周の右にいる少女に負けないくらいに笑っている。

時雨は前のクリスマスの時に撮った写真を大事に写真立てに入れて

いるようだ。

「それにしても、こいつらを任務につかすのかよ。由姫は行かないとしても、こいつらの年代じゃトップ１０に入る奴らばかりをメンバーにするとはな。評議会の若造を恐れないのは時雨だからというべきか」

青年は楽しそうに笑った。そして、キーボードの上で指を走らせる。

「暗証番号クリア。データ照会完了。さて、ここいら一年でどこまで強くなったかな。まずは、悠聖からだな」

記憶デバイスの中から周達の情報を呼び出す。

まず、画面に映し出されたのは悠聖の情報だった。

・白川悠聖（シラカワユウセイ）
・新暦１０２２年６月２０日生
・魔術素質：無
・得意魔術：召喚魔術
備考：すでに光属性の最上位精霊であるセイバー・ルカと闇属性最上位精霊であるディアボルガと契約。風属性と天空属性を除いて契約中。
・戦闘ランク：Ａ
・異名：『万世術師』

「こいつには驚かされたよな。膨大な魔力を所持するのに属性魔術が使用できない欠点があったから。まあ、召喚魔術が天才の領域だからな。風属性を除いてすべてと契約か。水と雷と契約したんだな。さて、次は」

青年はキーボードを打つ。

・白百合音姫（シラユリオトヒメ）
・新暦１０２１年２月３日生
・魔術素質：光
・得意魔術：収束魔術
・戦闘ランク：Ｓ
備考：世界五指に入る強さ
・異名：『歌姫』
備考：レアスキル『歌姫』の持ち主

「音姫の強さはけた違いだからな。啓二の奴も見事に育てたものだよな。去年だけでＡＡからＳに上昇か。まあ、時雨を倒したから当り前か。次っと」

・花畑孝治（ハナハタタカハル）
・新暦１０２２年４月８日生
・魔術素質：闇
・得意魔術：移動魔術
備考：レアスキル『影渡り』の持ち主
・戦闘ランク：ＡＡ
・異名：『夜王』

「こいつの異名はいつの間に決まったんだ？　まあ、孝治は夜になれば最強だしな。下手したら音姫に勝てる。次は、亜紗か」

・田中亜紗（タナカアシャ）
・生年月日不明
・魔術素質：風

・得意魔術：機動魔術
・戦闘ランク：ＡＡ
・異名：『殲滅姫（マーダープリンセス）』

「おっ、いつの間にかＡＡに昇格しているな。まあ、亜紗の実力はＡＡＡクラスだけど、年齢的に仕方ないか。というか、姫よりマスコットの方が正しくないか？」

青年はぼやきながら次のデータを取り出す。

・中村光（ナカムラヒカリ）
・新暦１０２２年８月３０日生
・魔術素質：炎
・得意魔術：投影魔術
備考：レアスキル『物質投影』の持ち主
・戦闘ランク：Ａ
・異名：『地獄の攻撃者（ヘルズアタッカー）』
備考：最大攻撃範囲は半径２ｋｍ

「戦闘能力は相変わらず高いのにＡランクのままか。まあ、こいつなりにゆっくりしているんだろうな。で、最後は」

・海道周（カイドウシュウ）
・新暦１０２２年４月１日生
・魔術素質：全て
・得意魔術：無
備考：苦手魔術は存在せず、全てが得意ともいえる。
・戦闘ランク：不明
備考：実績的にはＡだが隠しているレアスキルが存在すると言われ、本当の戦闘ランクは未だに設定されておらず。

・異名：『最強（オールラウンダー）の器用貧乏』

「相変わらず対抗策があまりよくわからないデータだよな。これだけ見て対抗する手段を考えろというほうが無理か」

しかし、青年は知っている。周が器用貧乏だからこういう状態にいるということではないことを。周の本当の実力を。

「まあ、今のままでいいか。今回の事件はかなりヤバそうだから、周も異名の名に恥じない実力を見してくれるさ」

青年は知らない。その異名が周自身の首をかしげさせていることを。

第十話　プロフィール（後書き）

ようやく、次から狭間市に舞台が移ります。

第十一話　狭間市へ（前書き）

まだ狭間市に入らないｏｒｚ
次こそ舞台は狭間市になります。戦闘は薄いのを除けばほとんどありません。

第十一話　狭間市へ

「なあ、一つ聞いていいよね。むしろ聞かせて欲しいんだけど」

オレ達が狭間市に向かう道中の電車の中。その中でオレ達を前に一人の少年が話しかけてきた。

佐野浩平。

孝治が推薦した人物で腕だけは確からしい。一応、実績などを送ってもらえるよう、時雨に頼んでいるので明日か明後日くらいには連絡が来るだろう。

あまり特徴の無い人物だ。同い年の普通の顔を思い浮かべろと言われればすぐに出てくるような顔。

「電車の中では静かにしろ」

孝治が目を瞑ったまま言う。ちなみに孝治だけでなくオレや悠聖も目をほとんど瞑っている。何故なら、

「周囲の民家に迷惑だ」

「迷惑なのは電車の音じゃね？　というか、俺はこいつらのことを名前しか知らないから質問したっていいよな」

まあ、確かに迷惑なのは声よりも電車の音だろう。確実に。

「浩平。今、何時か考えろ」

孝治が話してくれるから休息がとれる。どちらかというと、休息というより脳を休める時間というべきか。

「今は朝の五時でこの車両には俺達しか乗っていないからいいだろ？　というか、眠いのはみんな同じだろ？」

「はあ、狙撃手（スナイパー）のお前と一緒にすんなって」

オレはそこでようやく発言する。その言葉に浩平は大いに驚いていた。

「知っていたのか？」

自分が狙撃手であることを浩平は一言もしゃべっていない。知っているのは孝治だけだが、孝治はむやみやたらに個人情報を漏えいするようなことはしない。だから、驚いている。

「狙撃手は独特の休息の仕方をとるからな。実際、知り合いが何人かいる。そのやり方とお前のやり方は似ていた」

独特の休憩の仕方といっても、そのほとんどが呼吸法だ。狙撃手の呼吸は一般人と比べて長い。長いと言っても大きく吸って大きく吐くというわけじゃない。吐いてから吸うまでの時間が長いということだ。言うなら常に通常の息のペースが深呼吸というわけだ。

後は、立ったまま寝ることができたりもする。どこでもどんな体勢でも休めるのが狙撃手だ。

「オレ達は普通のメンバーだから疲れているんだよ」

「だけどよ、孝治もこんな時間から任務出るのはあっただろ？」

「周と俺は準備があった」

ちなみに、オレの準備は由姫の第７６移動隊への入隊を決定した旨を時雨に伝えたり、『ＧＦ』について由姫に説明したりと、正直に言うなら寝た時間はかなり短かった。それでも動ける自分を褒めてやりたい。孝治は副隊長だからいろいろ書類をやってもらったしな。

まあ、必要なことだから苦にはならなかったけど。

「なんか俺だけ不真面目って感じだよな。同い年最強の男子三人がこの場にいるからどんな奴らかなと思えば、俺と同じガキなんだな」

「幻想でも抱いていたのか？　そりゃ残念。オレ達はそこまで大人になりきれんしな。ただ、同じじゃないと思うぜ」

悠聖の言葉にオレ達は頷いた。

「お前はまだ普通の人生に足をかけている状態だ。でも、オレ達は向こうの方に足を出している」

「どういうことだ？」

「オレ達が戦い始めた理由は過去にある。ただ、それだけだ」

オレがそう言うと浩平は理解したの静かに頷いてくれた。

浩平はがどういう理由で戦っているかわからないが、オレ達のよう

に暗い過去はないはずだ。オレ達のように、あの事件で大事なものを失ったことはないはずだ。

過去に縛られ、普通の人生を歩むことを放棄したのがオレ達だから。

「でもよ、お互いを知るのは大事だと思うぜ。だから、俺の名前は佐野浩平。ポジションは狙撃手。一応戦闘ランクはＢＢ。趣味は幼女かんさ」

オレ達は同時に通信機器にデバイスを付けた。ちなみに、所要時間は約１秒。

「冗談。冗談だってば。本気にしないでくれよ。まあ、趣味は女性観察っちゅうかそんな感じ」

「お前を誘ったことを後悔している」

孝治の悩みはわかるけど、それは本人の前で言うのはダメだと思うぞ。とりあえず、危険人物であることをメールで時雨に送っておこう。

「俺が自己紹介したんだから三人も頼むよ」

オレは小さく溜息をつきながら口を開く。

「海道周。プロフィールは秘密」

「白川悠聖。右に同じ」

「花畑孝治。右に同じ」

語りたくないというより、語る時間があるなら休む時間にあてると言うべきか。まあ、浩平は完全に呆然と口を開けているけど。完全に予想外なのだろう。普通はそうなるな。

でも、オレ達の中ではこの時この瞬間、こいつの扱いが決まったような気がする。まあ、何があっても同じ扱いになる気しかしないけど。

「そりゃねえだろ。というか、俺の扱いってこんなもの？」

「大丈夫だ。問題ない」

孝治が頷きながら答えるのをオレ達は吹きそうになりながら見ていた。普通なら問題ありだが、孝治の言うように大丈夫だろう。浩平は肩を落として座り込む。

「はあ、言う立場が違うくね？」

「まあ、貴重ならキャラだと言っておこう」

「オレからすればボケ役が卒業出来たことに感謝する」

悠聖はニヤリと笑みを浮かべた。確かに今まで悠聖はボケ役だったよな。体を張ったボケをしていた。ただ、その大半が無意識だけど。

多分、こいつのボケ役から外れるのは当分先になりそうだ。

「浩平。オレ達の第７６移動隊に歓迎するよ。孝治の推薦では腕は確かのようだし」

「腕だけは確かだと言っただろう」

フッと笑みを浮かべる孝治の横で悠聖はうんうんと頷いている。確かに腕は確かみたいだ。狙撃手という肩書は普通じゃ手に入らない。よっぽど戦場を駆け抜けてきたのだろう。

オレは小さく息を吐いて窓の外を見た。だんだん明るくなってきた明けの空を背景に風景を見る。

風景の中に移るのは田んぼや畑などの田園風景に、透かし離れた場所にある集合型の都市。そろそろ狭間市の駅だ。

「みんな、降りる準備をしろよ」

「周隊長、そろそろか？」

「ああ」

オレは窓の外にある集合型の都市を指差した。

「あそこが、今回の任務場所である狭間市だ」

第十一話　狭間市へ（後書き）

所要男メンバー四人の見分け方ですが、オレが周と悠聖。俺が孝治と浩平です。前者の方が性格は固く、後者の方が緩い設定です。

ちなみに、一番固いのが孝治で、柔らかいのは浩平という具合です。

第十二話　狭間市　入り口

駅に降り立つとそこには人の姿は反対側ホームにしかなかった。まあ、当たり前だが。

「狭間市ってくらいだから都会をイメージしてたんだけどよ、ぶっちゃけ田舎と変わらないな」

「で、浩平の出身地はどこなんだ？」

オレは軽く呆れながら溜息をついた。孝治から資料はいってないのか？　狭間市の人口は大体五万人だが、そのほとんどが集合型の都市内部にいる。そのため、駅周辺の風景と都市の風景はかなり違う。

「淡路村（人口四千人）」

「田舎と一緒にするな」

孝治も呆れたように話す。その気持ちはよくわかる。一番知っているのは孝治だろうけど。

「確か、狭間市は集合型の都市だったよな。学園都市のような大規模じゃないけど、一定地区に住宅から病院まで一つにしたのだっけ？　オレはそう記憶しているが？」

「ああ。集合型の都市は珍しいからな。狭間市の場合は駅付近には何もないというさらなる珍しさがある。ただ、街に入れば立派な施設が多い。まあ、理由はあるけどな」

「理由？」

悠聖が首を傾げる。まあ、この理由はちょっと深いところを調べないと出て来ない。ちなみに、配布していた資料にも載っていない。

「狭間市は実験なんだよ。国公認の。時々現れる魔物に対して被害を少なくするために三十年計画で実験を行っている場所」

「初耳だが？」

「オレだって昨日初めて知った。日本政府も他の国も魔物の被害に悩まされているからな。まあ、学園都市も同じ理由で作られたけど」

東京特区学園都市。

世界でも最大規模の面積を誇り、京浜工業地帯も範囲に含むため普通の学生から専門職の学生まで様々な学生がたくさんいる。

さらには学校の数も全国区より多く、技術も最先端が豊富に使用されており、学園都市に来たがる学生は後を絶たない。

「学園都市は『ＧＦ』がどこまで動けるか、という実験ではなかったか？」

「孝治の言うことは少し違うぜ。周隊長から聞いた話だと、学生『ＧＦ』がどこまで動けるか、じゃなかったか？」

「ちなみにどっちも正解な」

学園都市にはたくさんの学生『ＧＦ』がいる。世界でも珍しい地域

部隊の大半が学生『ＧＦ』という場所だ。おかげで、本来の区切りである地域部隊と学生『ＧＦ』の区別が存在しない。

「学園都市か。一度行ってみたいんだよな。今回の任務終わったら推薦くんね？」

「ああ、浩平は知らないんだな。オレ達、第７６移動隊のホームグラウンドは東京特区学園都市だ」

「マ・ジ・で！　だったら、このまま俺様が活躍したら学園都市行けんの？　ひゃっほう！　青春を謳歌するぜ！」

浩平のテンションが高いことにはひくが、青春を謳歌って、お前はまだオレ達ど同年代なのに悲しくならないか？

あまりのテンションに全員がひいているがオレは小さく溜息をついて話しかけた。

「お前は青春を謳歌していないのか？」

「当たり前だろ。村の中学生以上は初体験済ませたというのにオレだけまだ済ませていないんだぜ」

初体験を済ませたってなんのことだ？

「何が？」

オレは意味がわからず浩平に尋ねた瞬間、浩平がキョトンとした顔になった。そして、孝治を見る。

「我が同士よ。まさか」

「周は純粋だ」

こいつらの会話が意味わからないけれど、まあ、いいか。

「そろそろ駅を出るぞ。明らかに変な目で見られてる」

「周隊長、それは多分オレ達の年齢からだと思う」

悠聖が軽く呆れ場がら周囲を見渡している。周囲からあるのは好奇の視線。確かに、この面々じゃ仕方ないよな。どう見ても子供だし。

「それもそうか」

オレが小さく笑いながら駅の改札から出た瞬間、高校生らしい集団が一人の中学生の少女を囲んでいた。

オレは目を疑う。目を疑ってポケットに手をつっ込んでいた。

「孝治、今何時だ?」

「俺の記憶が間違いでなければ朝の6時2分」

孝治はポケットから時計を取り出しながら答える。おそらく、オレと同じことを思ったのだろう。

「だよな。で、そんな時間帯から見るからに不良そうな高校生っぽい奴らが中学生の女の子を囲んでいるなんてありえるか?」

ちなみに、オレの中だとありえない。不良の活動時間帯は夜中のはずだが、こんなに朝早くからなんてオレの常識に当てはまらない。

「驚くことはそこかよ」

悠聖が呆れたような声を出すが、オレには聞こえていない。。

「ありえない。だが、周よ。よく中学生だとわかったな。あの女子は高校生と間違えても」

「服装」

あの服装はオレ達の通う中学校の女子の制服だ。どうして春休みである今に着ているかわからないが、中学生であることには変わりはない。

「ほう。あれが」

何故か感心したように孝治が言う。その言葉にオレ達は孝治から一歩離れた。

孝治の額に汗が浮かんでいるのは間違いではないだろう。

「孝治、お前、周隊長もひくような趣味があるんだな」

「趣味ではない。性癖だ」

開き直りやがった。だけど、額には大粒の汗を流している。多分、孝治の中では自分へのフォローのつもりだろうが、さらに悪化しているとしか思えないけど。

まさか、こんなところで、

「ねえねえ、何してんの？」

いつの間にか浩平が向こうの集団に近づいて話しかけていた。あの空気の中で動けるなんて浩平は大物か空気が読めない男か、それとも、オレ達の同じような人物か。

「あん？　ガキがなんの用だ？」

浩平がなぜこの行動を起こしたかはわからないけど、おそらく同類だろう。オレ達と同じ信念を持つ。

「面白そうなことをしているからさ。女の子を囲んで」

「お前も参加するか？　今からこいつを私刑（リンチ）することを」

「一人に対して八人？」

浩平が軽くこぶしを握り締める。それは高校生からは見えないけど、オレ達からはばっちり見えていた。

「こいつは嫌われものだからな。私刑にしたところで感謝こそすれ嫌われは、ごばっ」

話している最中の不良の顔面に浩平の見事な回し蹴りが直撃していた。案外接近戦も鍛えているみたいだ。

浩平は出会ってからゆるい性格を見せているが、その信念は本物と

いうことか。まあ、それなら一緒に任務はやりやすい。

「女の子は大事にしなけりゃダメだろ？」

「ひ、英雄！　よく、ぐほっ」

「加勢するぜ」

そこに悠聖が飛び込んだ。悠聖も大分我慢していたようだが限界だったようだ。ちなみにオレと孝治は動いていない。オレ達も動けば確実に処刑になる。

「てめえら。こんなことをしてタダで済むと思って」

「思ってねえよ」

浩平が悠聖と背中を合わせる。

「でもな、俺はお前らのやり方が気にくわない。女の子を私刑だ？　いと高く気高き至高の存在たる女の子になんて言い草だ！　女の子は優しく扱えとは言わないけどよ、乱暴に扱っていいわけがない！」

オレも孝治も背中を合わせている悠聖も浩平の言葉に頷いている。

「乱暴にしていいのはベッドの上だけ。それこそジャスティス！　それ以外は俺様が認めないって、悠聖？　何で離れるの？」

いつの間にやら悠聖がオレ達の横に戻っている。凄い早さだ。軽く一歩後ろに下がったオレですら見えなかった。

ただ、気持ちは大いにわかる。

「オレは浩平と一緒に戦うくらいならお前と敵対する」

「ちょｗｗｗ」

「女の子は如何なる時も大切に扱う。だが、壊れ物を触る感覚じゃない。例えベッドの上だろうが愛を持って扱う。それこそジャスティス！」

なんか今日は意外な性格が見えてきたよな。こいつらが変態になっていく。

「ならば、愛があれば乱暴はいいのか？」

孝治の一言で悠聖の額に汗が流れ始めた。確かにそうなるよな。地味に矛盾する。

「えっとー、えっとー、周にパス」

「何気に酷いな。そんなどうでもいい話は止めてくれ。で、あんたらは何をしているんだ？」

オレは軽く肩をすくめながら尋ねた。もちろん、少女を取り囲む奴らに対して。

奴らの顔色が変わる。多分、今まで完全に存在を無視されていたと思われているのだろう。実際に部妙な漫才をしていたような気分だし。

「ガキ共、無視してたんじゃねえよ。ガキは大人しく家の中で」

「オレが尋ねているのは何をしていれかだ。まあ、先に手を出した馬鹿を擁護する気にはならないが、恥ずかしくないのか？」

「恥ずかしい？　はっ、こいつを私刑にするのはこの狭間市じゃ正しいの行為。俺達は正義の味方、ぼげらっ」

オレはそいつの股関に落ちていた石を蹴り飛ばしていた。その場にいた全員が少し気まずい気持ちになる。

頭を狙うつもりが蹴りミスった。気を取り直して。

「私刑をすることが正しい？　正義の味方？　そんなの正義ですらない。誰かを悲しませる奴に、正義を語る資格なんてない！　お前らのやっていることはただの暴力だ！」

「ガキの分際で！」

オレの言葉にキレたのか、一人が殴りかかってくる。動きはかなり滑らかだ。多分、武術の経験がある。でも、オレはそいつを片手で後方に投げ飛ばしていた。

孝治は体を横にずらしてぶつかることを回避する。

「警告だ。これ以上するなら、オレは容赦しない。どうする？」

ある意味相手を下に見下す言葉。だからこそ効果はある。

「ふざけんな！」

向かってくる残りの面々。

オレは地面を蹴った。

勢いを乗せたまま一番前の奴に肘を鳩尾に叩き込み吹き飛ばす。それだけで後ろにいた奴らも巻き込んだ。残るは二人。

迫り来る拳を簡単に避けて足を払って片手で後ろに投げ飛ばし、もう一人を甲で殴り飛ばす。

「ひゅー、圧倒的だね～」

浩平が予想通りとでも言いたいように満足そうな顔で口笛を吹く。

オレは小さく溜息をついた。

「これくらい、元の正規部隊なら普通だ。それより、大丈夫か？」

オレは少女に話しかけた。少女は俯いたまま何も答えない。

何かされたのか？

「大丈夫か？」

「余計なことをしないで」

顔を上げた少女は泣いていた。泣いて、そう言ってきた。

その言葉にオレは驚いて話そうとしていたことを忘れてしまう。

「私は、あのまま私刑にあいたかったのに、どうして止めるのよ」

第十三話　昔話（前書き）

いつになったら周達の年齢をカミングアウト出来るのやら。

第十三話　昔話

「私は、あのまま私刑にあいたかったのに、どうして止めるのよ」

その言葉にオレ達は顔を見合わせた。

「こんな、私なんて、死ねばいいのに」

泣きながら言う少女の言葉に、オレはとある光景を思い出していた。

暗い洞窟の片隅で膝を抱えて座っている光景を。

「あのな、お前に何があったか知らないし、教えて欲しいとは思わないけど、軽々しく死にたいとか言うな」

「あなたにはわからない。私の気持ちなんて」

「何をしておるのじゃ？」

オレはその声を聞いて小さく溜息をつきながら振り返った。

「よう、アル・アジフ」

「そなたらか。女の子を囲んで何をやっておる？」

確かに今の状況はどう見てもオレ達がこの子を囲んでいるようにしか見えないけどな。死屍累々の人達を除けば。

「まるで、女の子を守ったのに泣かれたとでも言いたそうじゃな」

「見てたのかよ」

オレは小さく溜息をつきながらアル・アジフに浩平を紹介しようと浩平の方を見たつもりだった。

だけど、そこに浩平の姿はない。

「孝治、浩平は？」

「あいつなら」

孝治がアル・アジフの後方を指差した。

オレもアル・アジフもそっちの方を向くと、そこにはオレ達よりも年下に見える女の子の前で片膝をついている浩平の姿が。

「君、可愛いね。名前は何て言うんだい？」

あっ、アル・アジフが一歩後ろに下がった。

「誰じゃ？」

「佐野浩平。第７６移動隊の隊員」

「すまん」

孝治が頭を下げる。

その気持ちはよくわかる。

浩平に話しかけられている少女は浩平を見て、いや、睨みつけていた。もちろん、無言で。警戒する気持ちはわからないでもない。

そして、浩平が小さく笑った（そんな気配がした）瞬間、少女の爪先が上がり、浩平の顎を蹴り飛ばした。

少女は落ちてきた浩平を回し蹴りでオレに向かって蹴り飛ばす。

「コンボが繋がった」

オレはそう言いながら孝治に向かって蹴り飛ばした。孝治は踵落としでフィニッシュを決める。

「こいつが悪いから気にするな」

「いや、こちらにも非がある。クロノス・ガイア。こちらに来るのじゃ」

アル・アジフが少女の名前を呼んだ瞬間、オレ達の顔色が変わった。

クロノス・ガイアという二つ名はかなり有名だ。

何故なら、『ＥＳ』内でアル・アジフに匹敵する魔術師につけられる名前で、全クロノス・ガイアは世界最強と言われる人物と引き分ける強さを誇った。

この少女も同じくらいの強さと考えるべきか。

「クロノス・ガイアは琴美についてやってくれ。我は周達を案内す

る」

クロノス・ガイアはコクリと頷いて女の子の方に駆け寄る。

「知り合いか？」

「そうじゃ。次の春祭りの巫女に選ばれた者じゃ」

「巫女ということは都築の家系か」

孝治が女の子を見ながら言う。

都築は狭間市において昔からの土地の名士だ。今では市長を世襲できるくらいに狭間市での信頼は高いらしい。春祭りの巫女に選ばれるのも都築に連なる家系の女性である。

ちなみにこの内容は時雨から渡された資料の中に書かれてあった。

「いや、違うのじゃ。彼女は白鳥琴美。都築の家系とは関係のない少女じゃ」

「どういうことなんだ？」

オレは何となく想像しながらアル・アジフに尋ねた。

「最近では巫女は都築の家から出すことが難しくてな、魔力の高い女性を出すことに変わっておった。じゃが、今年は市長が節目の年だから巫女は孫の都にやらすように働きかけての」

「節目の年ということは、春祭りが第何回目かということか」

孝治が納得したように頷いた。確かにそういう通りなら都築の家から出したいのはわかる。なのに、あの子がなったのか。

だが、アル・アジフの顔はどこか険しい。

「そこまで根回しをして選ばれたのが琴美じゃ」

「ちょっと待った。根回しをしてあの子がなるのはおかしくないか？　周隊長もそう思うだろ？」

「確かに。アル・アジフ、何か理由があるのか？」

「わからぬ」

アル・アジフは首を横に振った。どうやらその原因が未だにわかっていないらしい。

「巫女の選ばれ方は単純に魔力の高いか低いかじゃ。前の検査でも都の方が遥かに高かったと聞いておる」

「私は」

女の子が口を開いた。まるで、何かに懺悔するかのように。

「私は呪われた子なのよ。だから、私が巫女になった。もう、都に合わせる顔がないわ」

その言葉にはどこか悲しみが混じっていた。アル・アジフが女の子を見つめる。

「琴美。都はそなたを心配しておる。じゃから」

「私には、都の期待は背負えない」

彼女の言葉にオレは由姫の姿を重ねていた。

由姫と彼女は似ても似つかない。だが、とある部分だけが共通している。

「どうしてそう思うんだ？」

「だって、私にそんな大役は出来ない。都の方が舞は上手くて作法もあるけど、私は下手だし、運動神経が悪い上に都よりも可愛くない。だから」

「なあ、聞いてくれよ」

由姫似ているからこそ、オレはこの話が出来る。

「とある二人の姉妹の話だ。一人は天才と呼ばれて世界最強の一角になった。一人は才能がなく親族から出涸らしと呼ばれていたんだ」

それは今は仲がいい二人の姉妹の話。オレにとても近い二人の話。

「その妹はいつも人がたくさんいる姉を疎ましく思い笑うことがなくなった。姉はみんなの期待からさらに力を伸ばした。期待に押し潰されそうになりながら」

まだ、年端も行かない子供に押し付けられた失望と期待。それを二

人は背負っていた。本来なら背負うはずの無いものを。

「そんな時に一人の男の子が養子として家に来た。妹と同い年の男の子だ。でも、その男の子はとある事件から全てを拒絶していた。何事にも無関心で、表情を変えない。姉はそんな弟の扱いに困り果て、妹はそんな兄にべったりだった」

どれだけ拒絶されても構ってきた。どれだけ逃げても追いかけてきた。どれだけ怒っても笑っていた。

「そんなある日、男の子は家を出た。幸せな暮らしを感じて、また、巻き込みたくないから。姉妹は大人と一緒に探した。そして、いつの間にか妹もいなくなった。姉がようやく二人を見つけた時、二人は笑い合っていた」

オレは自嘲気味に笑う。それを思い出しているから。

「どれだけ才能があっても、どれだけ天才だとしても、男の子を救ったのは姉じゃない。妹だ。人それぞれ出来ることは限られている。誰しもが最初は出来ない。でも、頑張って努力して出来るようになろうとするのが普通じゃないのか？　話の中の姉は弟の扱いがわからず何もしなかった。対する妹は何かしようとした。お前は、どうしたい？　別に逃げるなというわけじゃない。逃げたっていい。怖いなら辞退してもいい。だけど、何もせずにいるのは違うと思う。まあ、オレの考えだけど」

オレはそう言いながら笑った。彼女はキョトンとしながら話を聞いている。

話がわかりにくかったか？

すると、アル・アジフが小さく頷いた。まるで、話の全てを納得したかのように。

「そなたも苦労しておるの」

「やっぱりわかった？」

あの話で出てきた弟はオレだ。姉妹は由姫と音姉。もちろん、実話を元にしている。

「天才である音姫の苦労。そして、才能のない由姫の苦労。そなた、よほど二人が大事のようじゃな」

その言葉にオレは頷いた。あの日がなければ今のオレはここにいないだろう。もしかしたら、オレがもういない可能性だってあった。

「まな。由姫はオレを救ってくれた。あの日、生きることを諦めようとしたオレに生きる希望をくれた。音姉は強くなろうとしたオレを手伝ってくれた。人が出来ることは限られている。オレやアル・アジフだってそうだ。自分より綺麗な人がいる。舞が上手い人がいる。運動神経がいい人がいる。別にいいじゃないか」

オレは両手を広げて笑みを浮かべた。

「オレよりも強い人ならいくらでもいる。オレは、オレ達はそんな中でも戦ってきた。辛い時や悲しい時も。でも、オレには守りたい人がいた。だから、戦えた。オレにとっては由姫や音姉だ。何かをしたいという気持ちは、隠さなくていいから」

「私は、巫女になっていいの？」

その言葉にオレは笑みを浮かべて返す。

「やりたいなら、やれよ。お前をよく知っている友達なら賛成してくれる」

オレの言葉に彼女は頷いてくれた。このまま立ち直ってくれるのなら嬉しい。死にたいなんて思わなくなってくることを祈る。

「さて、アル・アジフ。このまま狭間市を案内してくれるか？　まあ、オレ達の向かう先までだけどな」

オレの言葉にアル・アジフは少し考えた。どうやらこの後の予定を思い出しているらしい。

「そうじゃな。琴美はどうする？」

「一緒に案内するわ。土地に詳しい人がいた方がいいでしょ」

「よろしくな。オレの名前は海道周だ」

「白鳥琴美よ。周、ありがとうね」

琴美はそう言ってにっこり笑った。その笑顔にオレはドキッとしたというのは言うまでもないだろう。

第十四話　海道周の伝説（前書き）

作中で時々溜息とため息の二種類があるかもしれませんが、前者は携帯で作った時、後者はパソコンで作った時の変換の違いです。

第十四話　海道周の伝説

「それにしても、あなたが海道周なのね」

狭間市の中心部に向かってオレ達は歩いていた。もちろん、アル・アジフ達や琴美も一緒に歩いている。ただし、浩平だけはいない。

あの場に放置してきたからだけど。まあ、あいつなら大丈夫だろう。

「オレを知っているのか？」

自分ではそこまで有名だという自覚はないけど。

「都から聞いていたもの。新しく来る『ＧＦ』の部隊の隊長の話。噂では聞いていたけど、都があそこまで詳しいなんて」

「オレってそんなに有名人？」

「そなたの伝説は中高生に大人気じゃからな」

アル・アジフが呆れたように応えてくる。

いや、伝説って。

「噂だと、三千の敵を一人であしらって、流れ弾を何気ない動作で避けて、大規模殲滅魔術を打ち消したり、二十の魔術ストックを連射して相手を投降させたり」

「我はあらゆる攻撃を回避するという噂も聞いたの」

全てはオレが知っているから答えられるけど、全て事実。実際にやったことがあるものばかり。確かに、同年代がそこまで凄い伝説を残しているなら語りたくなるよな。

やったと言っても公式には残っていないから戦場で生き残った人達が漏らした噂がそこまで広がっているのだろう。

「都は持っているデバイスがオーバーテクノロジーだと語っていたわね」

あまりのことに一瞬だけ動きを止めていた。本当に一瞬。瞬き一回。もちろん、その動作をアル・アジフは気付いている。

「その話どこから？」

「さあ？　私は都から聞いただけだから。おかしいくらいに都は詳しいのよね。あんたのプロフィールを網羅しているとも言っていたし」

まだ会ったことないのにストーカーの気配しかない。というか、個人情報は結構厳しく管理されているのにな。どこかに抜け道があるというわけか。

琴美は呆れたように小さくため息をついた。

「ちょっと怖いくらいだけど。それで、あなたの伝説は本当なの？」

「周隊長の答えは黙秘だぜ。答えたくないといつも言うんだけどな。周隊長は確実にレアスキルを隠している」

「レアスキル？」

その言葉に琴美が首をかしげた。まあ、一般人には馴染みの無い言葉だし。

「琴美には関係ないからの。レアスキルとは個人所有スキルの中で珍しいもののことを言うのじゃ。個人スキルＡランク以上じゃな。そこの花畑孝治がレアスキル持ちじゃ」

オレ以外のみんなが振り返る。でも、孝治はそこにいないことは分かっている。何故なら、孝治はすでに道路を挟んで向こう側にある木にもたれかかっているのだから。

気づけたのは視界に映っていたからだけど。

「あれ？　いないわよ」

「あそこだ」

オレが孝治の方を指さすと、そこでは孝治がオレ達に向かって手を振っていた。

あれが孝治の持つレアスキル、『影渡り』だ。影から影へ移動できる能力。ただし、制限も多いためランクはＡ。能力的を見れば文句がないほどのＳランクレアスキルだけど。

「それを周が持っているということ？」

「『ＧＦ』データベースにすら載っていないけどな。周隊長の伝説

の中で、大規模殲滅魔術を打ち消したとあるが、あれは確実にレアスキルの類に決まっている」

「ふむ、確かにそうじゃな。しかし、そんな能力はあまりに桁違いではないかの？」

というか、大規模殲滅魔術を打ち消したことは一度もない。打ち消したことは。

「というか、オレはそんな能力持っていない。伝説は誇張した表現なんだろ。だったら、どうせ中規模魔術を打ち消したことが大きくなっただけだ」

「中規模魔術を打ち消しただけでもすごいことよね？」

琴美が言いたいのはよくわかる。

魔術での中規模は半径５１ｍ以上から１００ｍ以下までの範囲を攻撃できる魔術のことだ。大規模は１０１ｍ以上。殲滅がつくと半径２５０ｍ以上の攻撃かつ、半径５０ｍ以内の被害が極めて大きい魔術をさす。そんなものを打ち消すにはどれだけ疲れるか。

「理論としては可能じゃ。相手の魔術と同等の魔力を直接ぶつければ打ち消せる。難易度は高いがの」

「それなら一応可能だった。大規模は無理だ。魔力が足らん」

実際に、中規模魔術をその方法で打ち消したことはある。もう、したくはないけど。

「確かに、お前が大規模魔術を打ち消したことはないな」

「そうそう」

「敵から『どうして大規模殲滅魔術が効かない。『GF』は化け物か！』と言われたことはある」

背中に汗が流れる言葉だった。

発動した相手からすれば絶望の攻撃だっただろうな。本気で。

「まあ、今あげたそなたの伝説は本当に一部じゃからな。現役女子中学生の琴美がよく知っておるじゃろ」

「そうね。たった一人で敵の本拠地に乗り込んで全滅させたとか。不殺の剣で屍の山を築いたとか。魔人六人を相手に勝ったとか。『GF』総長を負かしたことがあるとか」

「全部歪曲した事実だけどな」

ちなみに最初のは一人ではなく亜紗、孝治、音姉の四人で全滅させたこと。次は屍の山ではなく戦闘不能になった人の道。魔人は音姉がほとんど一人で倒したことがオレになっている。最後は亜紗と二人がかりだ。

まあ、全部オレが関与しているから噂話としては十分な種をばらまいてはいるか。

「他にもいろいろあるけど、信憑性があるのはこれだけね。他は文字通り伝説のように誇張されたものばかり」

興味はあるけど聞きたくはない。レヴァンティンに言えば確実に教えてくれるだろうけど。

「その年から相変わらず大きなことをしているの。しかし、実力はあまりないと聞くが？」

「オレは器用貧乏なんだよ。孝治や悠聖の様な一芸特化じゃなくて様々な分野を伸ばしているからな。なんでもできるけど強くはないというわけ」

それがオレの異名の理由だろうな。

まさに全てをこなす器用貧乏。だからこそ、あらゆる場面での対応を可能とするオールラウンダー。そして、あらゆる状況でも、あらゆるポジションでも力を発揮できる。

オレ自身が思う理想の形を体現しようとしているだけなのだから。まだまだ道のりは遠いけど。

「あらゆる戦場に対応した戦い方の出来るタイプか。そなたが行く道は茨の道じゃな」

「茨の道だとしても、オレの立ち位置で一番合っているのがこれだ。第７６移動隊でも、亜沙と音姉がフロント。孝治と悠聖がセンター。中村と浩平がバック。オレはオール。これが一番なんだよ」

ちなみに由姫はまだ決めていない。ちょっと聞きたいこと、いや、試したいことがあるから。

悠聖はオレの考えたポジションに疑問でもあるかのように首を傾げた。

「不満があるのか？」

「不満というわけじゃねえけど、周隊長の剣技って音姫さんクラスって聞いたことがあるんだよな」

「確かに。剣技だけならオレは勝てん」

孝治も賛同するように頷いた。

確かに、剣技だけなら孝治には勝てる。というか、孝治とは相性が悪いだけだ。

「確か、海道周の剣技は世界最強クラスという噂もあったわね。事実なの？」

そういう噂すらあるのかよ。慧海に負けるわ時雨に負けるわ、レノアさんやギルバートさんにもぼろ負けするのに世界最強クラスって何の冗談だ？

「嘘に決まっているだろ。音姉と同じレベルって、音姉のは次元を越えているぞ」

次元というか、あの剣技は人間として数えるべきじゃない。音姉は冗談抜きにして世界最強の剣技を使える。

「確かにの。我が全ての力を出し切って勝率は五分じゃからな。音姫の剣技のみで」

「音姉ってそんなに強いの？」

剣技だけで最強の魔術師と五分だとは。まあ、音姉の場合はその力を底上げするレアスキルを持っているけど。底上げというより、戦場を自分に有利に作り替えるレアスキルというべきか。

「周の伝説は色々あるけど、一番多いのが剣技なのよね。白百合流を極めているとか、御影流の免許皆伝。他には、剣技だけで第一特務の内輪もめを止めたとか」

「誇張されすぎだろ。御影流は習ってすらないぞ」

オレの伝説ってある意味すごいよな。まだ、オレは生きているのに。

「生きた伝説か。そなたも我らの仲間入りじゃな」

「中高生の中で生きた伝説なんてなりたくないからな」

オレは小さく溜息をついて空を見上げた。

夜が明けたばかりだからか微かに星空が見える。それを見ながら小さく息を吐いた。

第十五話　都築都（前書き）

ヒロインの一人が登場しますが、思いっきり暴走もします。今の話ではメインではありません。

第十五話　都築都

「ここがメインストリートよ」

オレ達がようやく狭間市の中央についた時、琴美が誇らしげに自分の街のメインストリートを指した。

確かに現代的な見事な建築物が道を作っている。まだ閉まっているので店名しかわからないが、様々な店があるようだ。

人口から考えても豪華だ。

「悪くはないな。ここなら色々遊べそうだし。周隊長もそう思うだろ？」

「遊ぶ？　遊ぶ隙があるなら勉強したらどうだ？」

オレがそう返すと悠聖は小さく溜息をついた。

何かマズいことを言っただろうか？

「アル・アジフさん、どういうこと？」

「我に聞くな」

横でも琴美とアル・アジフがひそひそと会話をしている。おかしいことを言ったつもりはないんだけどな。

オレは小さく息を吐いて歩き出した。

「さっさと『GF』の詰め所に向かおう。地域部隊が今いなくても、朝六時から学生『GF』は受付開始だしな」

「そうだな。もうすぐ七時だ。普通なら開いているだろう。白鳥、詰め所はどこにある？」

「よくよく考えてみると、私の方が年上よね。どうして敬語すら使われないの？」

「我を見て不思議に思わぬか？」

アル・アジフの年齢は不詳だが、確実にオレらより生きているのは確か。だけど、評議会に対して爺というオレらがそんなことをするわけがない。

まあ、それでよく変な目で見られるけど。

「まあ、いいわ。詰め所なら」

「琴美！」

急に女の子の大きな声が聞こえた。

オレ達が一斉に振り返ると、そこには駆け寄ってくる少女の姿が。

そして、少女は琴美に抱きついた。

「心配したのです。どこに行っていたのですか？」

「ちょっと、駅前にね。都、私、巫女を頑張ってみるから」

「頑張ってください。私も手伝いますから」

そこでようやく二人が離れた。

「この方た」

少女の言葉が『た』で止まる。視線は完全にオレに釘付けだ。

「巫女を辞退しようか考えていた私を説得してくれたの。その代わりに街の案内を」

「サインください！」

いつの間にか取り出した色紙とペンを差し出してくる少女。しかも、正座になっているし。早技にもほどがある。

「サインって、オレはジャニーズかよ」

「海道周様自身をそんな腐った集団と同じにしないでください。あなた様は桁が違います」

この子、日本の人口の十分の一を敵に回しそうな言葉を平然と吐いたよな。そんな度胸はオレにはない。

むしろ聞きたいのは様付けだけどな。

「そこまでして欲しいものかよ。というか、見ただけでよくわかったよな」

「それはもう。花畑孝治、白川悠聖と並ぶ海道周様の三人は至高のメンバーです。花畑孝治は少し無愛想ながら優しく、白川悠聖は告白されても傷つけないように優しく断り、周様は太陽のように笑います。そんな三人を見分けられないという失態は、この都築都がするわけがありません」

あなたが何を言いたいのか理解することが出来ません。

ジャニーズを追いかける女の子達ってこんな感じなんだ。

「私は、私は幸せ者です。生きている間に周様と出会うことが出来るなんて」

「なあ、周隊長」

「頼むから何も言わないでくれ」

オレは小さく溜息をついていた。

「えっと、君は誰？」

「自己紹介がまだでしたね。私は都築都。市長都築春夫の孫です。周様はやはり『ＧＦ』の正規部隊として来たのですね？」

「そこまで話が回っているのか。オレ達第７６移動隊は今日から夏休み終わりまでの約半年間、ここに駐在することになった。よろしく頼む」

オレが握手しようと手を出すと、都築都はその手を両手で掴んできた。

「よろしくお願いします」

「都は本当に嬉しそうね」

「当たり前です。周様が目の前にいるのですよ。あの憧れの周様が。それにしても、何故、周様達が来たのですか？」

「わからないんだよな。アル・アジフは何か知らないか？」

アル・アジフも知らないだろうけど、とりあえずオレは尋ねてみることにした。

すると、アル・アジフはキョトンとして、

「移動隊という初めての部隊だからではないかの？」

「んな単純な理由で世論から批判を浴びそうな部隊を出すか？　ただでさえ、オレ達は学生なんだぜ。いくら音姉や孝治が強いと言っても限度が」

「一番強いのはあなた」

唐突に、本当に前触れもなくクロノス・ガイアが口を開いた。こんな声をしていたんだ。一瞬、クロノス・ガイアが言ったのかわからなかったぞ。

クロノス・ガイアはいつの間にか一冊の本を取り出している。

「あなたの本気に、ギルバート・Ｒ・フェルデ以外は勝てない」

「どうしてそう思う？」

「私はあなたの本気の真実を語っただけ。これは事実」

クロノス・ガイアの言葉にオレは思わず身構えてしまう。

「クロノス・ガイア、止めるのじゃ。そなたは周より年上じゃろ。挑発するのは止めるのじゃ」

「年上？」

悠聖が信じられないようなものを見る目で言った。ちなみにオレはあまりの言葉に呆然として何も言えないでいる。孝治にいたっては呼吸をすることを忘れている。

「何歳？」

「今年で１４」

「四年後合法ろ、ふべらっ」

今しがた、オレ達に追いついてきた浩平が孝治と悠聖によって頭を挟まれるように回し蹴りを喰らっていた。というか、よく死なないよな。二人とも手加減していないのか？

「ちっ、丈夫な奴だ」

「孝治。オレは本気で蹴っているんだけど、頭蓋骨にひびが入る感触すらないんだけど」

浩平の物理防御力が極めて高いということね。

「周様、私も今、１４歳です」

「オレより年上なら様は止めてくれ」

「お断りします！」

そんなに力強く言うなんて。見た目が清楚なだけにギャップがある意味すごいんだよな。

「周様は周様です。これは何物にも代えがたいものなのでお聞きすることはできません。周様以上の御方などおられるのでしょうか。いや、この世のどこにも存在しません」

「なあ、孝治。助けてくれ」

「無理だ」

答えは予想していたけど即答されるのは堪えるよな。手を握られたままずっとこういう言葉を言われ続けるのは結構きつい。

というか、オレは手に握力すら入れていないのに掴まれたままだ。誰かどうにかしてくれ。

第十五話　都築都（後書き）

暴走させすぎましたが、まあ、こんなキャラです。

第十六話　狭間市『ＧＦ』駐在所（前書き）

ここでようやく主人公達の年齢が判明します。この年齢から始まる主人公は珍しくないですか？

第十六話　狭間市『ＧＦ』駐在所

「ここです」

都が案内してくれたのは無人の建物だった。

「周隊長。オレの中の知識を再確認したいんだが」

「どうぞ」

「学生『ＧＦ』は必ず一人は駐在所にいなければならない」

「ただし、二十二時から翌朝六時までと授業中はその限りではない」

「駐在所を空ける時は必ず入口に張り紙等の案内が必要」

「緊急時は張り紙がなくてもよい。ただし、そんな緊急時が起きるのは大地震など大規模震災及び大規模戦闘中の時。その際は周囲にいる『ＧＦ』のデバイスにも連絡が来る」

オレはそう言いながらレヴァンティンを取り出した。

「そんな連絡は来ていない」

「だよな」

悠聖も同じようにデバイスを取り出して確認する。

「考えられる可能性はただ一つ」

オレの言葉に孝治と悠聖も頷きあった。

『サボり』

三人の声が重なる。

オレは小さくため息をつきながら駐在所の入り口を開けようと手をかけた。

だけど、入り口は開かない。

「施錠はしっかりされているだけマシか。ったく」

オレはポケットからカードキーを取り出し、入り口横にある認証機にかけた。すぐに施錠が外れる。

入り口を開けて中に入ると、そこは少しほこり臭かった。長い間誰も入っていない。

「孝治と悠聖だけ入ってきてくれ。換気するのに時間がかかる」

「そこまでか？　ふむ、どれだけサボっているのだ？」

「さあ？」

近くの机の上を触るとうっすらほこりが積もっている。

地域部隊の『ＧＦ』全員がいなくなったのはこの場所ではないはずなので、いなくなってからずっと誰も入らなかったとしてもこの積

もり様は酷い。

「周隊長。電気、つかないんだが」

悠聖がスイッチをぱちぱち鳴らしまくっているが電気がつく様子すらない。つまり、電気が通っていない。

「周、この様子だと三ヶ月はここに入った痕跡はないな」

「やっぱり？」

いなくなったのは約一ヶ月前。つまり、ここには『ＧＦ』がほとんどいなかったということになる。

カードキーが有効だったことや、室内の資料から考えてみても、ここが駐在所であることは確かだ。ちゃんとここの隊長の記録も今、発見したし。

それを捲ってみると。

「見るのが嫌になる内容だな」

中身はどうすれば不正をできるかという会議について書かれてあった。

オレは小さくため息をついたまま記録をもとの場所に置く。

「孝治、悠聖、他に異常は？」

オレは窓を開けながら尋ねた。

もうすぐ春だから暖かくなってきたけど、やっぱりまだ寒い空気が流れ込んでくる。

「無しだ」

「同じく。電気がつかないところ以外はなにもないかな。あっ、水道もか」

インフラ整備が壊滅か。

「みんなにお茶は出せないな。併設されている宿舎の方を見てきてくれないか？　オレは説明してくる」

「了解」

悠聖がすぐ横にあった宿舎への入り口を開けて中に入っていく。ちなみに孝治は移動済みだ。電気つかないから暗闇が多いし。

オレは小さくため息をつきながら外に出た。

「琴美、都、ここの学生『ＧＦ』はどうなっているんだ？」

「学生『ＧＦ』？　さあ？　都なら詳しいんじゃないの？」

「はい。見回りなどの活動はしていましたが最近はあまり見かけませんね。春休みなのだから思っていますが」

「そう言えば、今って春休みなんだよな」

『ＧＦ』の仕事をしていたら季節を完全に忘れてしまう。

「つうか、学生だろうが『ＧＦ』は休みでも仕事があるだろ。それなのにサボりなんて。羨ま、違った、けしからん」

「浩平が何を言いたいのかはわかった」

むしろ、いつの間に復活したんだ？　気配すらなかったぞ。

「誰か知り合いでもいたら紹介して」

「都に琴美？　何してるの？」

オレが話している最中に二人の知り合いであろう少女が二人に話しかけていた。二人は顔を見合わせて同時に少女の肩をがしっと掴む。

「な、何？」

「周、彼女が学生『ＧＦ』の一人よ」

「もしかして、正規部隊来るのが今日？　それにしても小さいような。小学校中学年？」

「今年で中学生になるが？」

オレは思わずレヴァンティンを取り出しながら答える。もちろんまだ剣は呼び出さない。まだ。

「中学生で正規部隊なんてありえないよね。都もそう思うでしょ？」

「千春さん。悪いことは言いません。今すぐ謝った方がいいと思います」

「へっ？」

「オレの名前は海道周。狭間市に半年間駐在する第７６移動隊隊長。学生『ＧＦ』なら、この中の惨状を説明できるよな？」

オレは笑みを浮かべながら、ただし、目は全く笑わずにゆっくり少女に近づく。

少女は額に汗を流していた。そして、助けを求めるように都達の方を向く。

「えっと、本物？」

「本物です」

「でも、でもだよ。正規部隊が来るのは明後日だって聞いていたんだけど」

「全員集合するのはな。オレ達は先遣隊だ。で、説明を」

「掃除忘れていました！」

少女が勢いよくその場に土下座した。まあ、回答は予測していたけど。

「それだけじゃないだろ。ここ最近、この場所が使われていない理由は？」

「知らないよ」

その言葉にオレは思わず駐在所の方を見ていた。

「地域部隊の人がね、『ここには来なくてもいいように事務処理するから』って言ってたよ。だから、ボク達は今日、みんなだ掃除するように」

急に浩平が間に入ってきてオレの方を思いっきり掴んだ。

「周！　今の言葉聞いたか？　自分のことを僕と言いましたぞ。なんということだ。まさに清楚の一言で表すことができる女の子だけでなく、あの有名な属性のひと、めぎゃ」

オレは無言で膝を勢い良く上げた。もちろん、直撃する場所は男にしか分からない痛みを感じる場所。

浩平がその場に崩れ落ちる。

「周隊長ー！　宿舎の方は誰かが使った痕跡がって、何やってんだ？」

「大方、浩平が暴走したのだろう」

「なーる。で、話を戻すが」

なんというか、オレらはこいつがいる状態を日常として認識し始めているみたいだ。そういう能力を浩平が持つと考えたら凄いのだが、素直には褒められない。

「宿舎の方だけは昨日か一昨日に誰か侵入したな。一応、証拠隠滅はしたみたいだけど、不自然にほこりが積もっていた」

「不自然ってどれくらい？」

「駐在所の厚さより０．２ｍｍほど厚かった」

「それがわかるお前の頭がオレからすれば不自然だ」

０．２ｍｍの厚さの違いってほとんどわからない。

まあ、人の上限が０．１ｍｍだと考えるとわかるような気もするが、それを積もっているほこりでするなら無理だと言うしかない。

「ところで、そこの新しい女の子は？」

「ボクの名前は雨宮千春。狭間市の学生『ＧＦ』の一員だよ。千春って呼んでくれていいから」

「ふむ、浩平が暴走した理由がわかった」

「あいつならな」

二人が一瞬で浩平の暴走の原因を悟ったから後で説明する手間が省けたけど、これはこれでないよな。

「オレから紹介する。花畑孝治と白川悠聖。どちらも同じ第７６移動隊の部隊員だ」

「つまり、周は千春から話を来たのか？」

「ああ。千春から聞いている。一応、いろいろ尋ねたいことがあるから会議室に・・・、綺麗じゃないだろうな。千春、どこか『ＧＦ』の予備会議室はないか？」

「あるにはあるけど、ここから遠いよ」

「十分。都も琴美も一緒に来てくれるか？」

「周様のためなら火の中水の中どこまでもお付き合いします」

「都のこれがなければいいのに」

琴美が小さくため息をつく。言いたいことはよくわかるけど、それは言わない方がいいと思う。いろいろな理由で。

オレは駐在所の認証機にカードキーを通して鍵をかけた。

「さて、案内してくれるか？」

「うん、でも、小さいからね」

「大丈夫だ」

どれだけ小さいと言ってもここにいるのは全員大人の体型をしていないメンバーばかり。入るに決まっている。

この時のオレはそう思っていた。

第十六話　狭間市『ＧＦ』駐在所（後書き）

学生『ＧＦ』＝バイトと考えてくだされればありがたいです。

第十七話　異変

オレ達が案内された場所は集会所だった。簡単に言うなら避難場所として使えそうな集会所。

「ここなら大きいと思うが？」

孝治が不思議そうに尋ねる。

すると、千春は申し訳なさそうに、

「集会所じゃなくて、あっち」

指さしたのは集会所の横にある小さな物置小屋。

オレ達が完全に無言になるのは仕方のない話かもしれない。

明らかに子供四人が座って話し合えるぐらいのスペースしかないよな。ちなみにオレ達は大きな荷物を持っている。この上に座るという選択肢も一応あるけど。

「だから言ったんだよ。小さいって」

「予想外」

クロノス・ガイアがオレ達の気持ちを代弁してくれる。

千春はポケットから鍵を取り出すと物置のドアを開けた。物置の中は駐在所とは比べ物にならないほど綺麗だ。ちなみに椅子は三つだ

け。

「今から椅子取りゲームの開始を宣言しますかって、冗談、冗談だってば」

ふざけたことを言い出した浩平にオレ達が体をひねる動作をするとあわてて土下座をしている。そこまでするならオレは許すけど。

「順当に考えてレディファーストだ。一応、都、琴美、クロノス・ガイアでいいんじゃないか？」

「なぜ我が入らぬ」

「お前は魔術書に乗れるだろ」

「それもそうじゃな」

アル・アジフは持っていた本を手放した。すると、その本は空中に浮かび、アル・アジフはそこに飛び乗る。

アル・アジフしかできない飛行の市仕方だ。

「どうしてボクが入っていないのか説明してくれるよね？」

「駐在所」

「それを言われると何も反論できなくなるけどね」

千春は少し怒ったように物置の中に入った。ちなみに五人入った状態で後二人くらいしか入らない。

「オレと、孝治の二人が入るとして、悠聖と浩平は外から覗いてくれるか？」

「いや、オレ達は軽く街を回ってくる。もしものときはデバイスに連絡してくれ。浩平、行くぞ」

「しゃあないか。御嬢様方。また、お会い」

オレは静かに物置のドアを閉めた。それと同時にアル・アジフが照明魔術を使用する。普通の電気と変わらない明るさの光が生まれた。

「まあ、聞きたいのはいくつかあるけど、まずは先の事件。『ＧＦ』の失踪を知っているかどうかだな」

「その話は有名よ。狭間市の市民が全員知っている可能性もあるわね。知っている中身も話した方がいい？」

「いや、そこまではいらないな。そこまで広がっているなら十分だ。それを踏まえて尋ねる。この狭間市でこの一ヶ月に何かの変死体がなかったか？　もちろん、噂でもいい」

「それについてなら我が答えよう。我が把握しているだけで八件の動物の変死体が見つかっておる。その半分はただの病気じゃが、それ以外は明らかにおかしな殺され方じゃ」

「その話なら聞いたことがあります。夜な夜な徘徊する大きな斧を持った少年が動物の頭を砕き中身を貪り喰らっているともありました」

大きな斧の時点でかなり非現実的なんだよな。前にも言ったかもしれないが、デバイスで取り出すことができるものは、大きさによって必要魔力が変わる。それなのに斧を使うのはかなりのデメリットになる。

まあ、昔には折りたたみにすればいいんじゃないのかって試したバカもいるみたいだけど、戦場で組み立てる手間が命取りだ。

「確かに、頭は何かに砕かれておったが貪り喰らうまではいっておらぬ。ただ、それが普通に起きるかどうかで考えたらありえぬのじゃ」

「確かにな。変死体なんてそう簡単にできるわけがないし。他に聞きたいのはいつの間にかいないのどこかが壊れているとかないか？」

「それならボクが知っているよ。一応、それらしい場所は四ヶ所。ただ、そのうち一つはすさまじい怪力で破壊したって感じなんだよね」

「すさまじい怪力？」

オレが思い浮かべるすさまじい怪力は重さ数百キロの何かを持ち上げて投げる何かの姿だった。

「推定2トンの石かな。それが民家にぶつかったんだ」

「行ったことあるわ。あの石をどうやって持ってきたのかがわからなかったけど」

2トンか。そんな重さを持ち上げられるのは一人くらいしか知らな

い。

オレは小さくため息をついた。

「後、そんなおかしな事件は一ヶ月行こう前からあったかどうか？」

「ありません。一ヶ月ほど前から急に増えたものです。それは市長の孫である私が証明します」

とりあえず、いろいろと聞きたいことは聞いた。もちろん、事件に関係のあるようなことだけだが。

「孝治、どう思う？」

「関連性が大いにあるとしか言えない。だが、悲観視するほどではない」

「どういうことかな？」

「そこまで深刻じゃないってことだけだ。危ないのは、偶然にエンカウントするなら危ない。どうにかして対策を練らないとな」

「そうじゃな。『ＥＳ』もいるとはいえ、我とクロノス・ガイアしか一対一は戦えぬからの」

置いていかれている三人を除いて、オレ達は話を続ける。

「そうなると、オレ達の重要性が増すのか。孝治なら何分くらい持ちこたえられそうだ？」

「俺で二分が限度だ。ただ、向こうの実力はよくわからないから断言はできん」

「一番いいのはどうにかして封印することじゃな。クロノス・ガイアはどう思う？」

「一度、私のトレーサーをつける。それで後を追える」

「つまり、誰かがエンカウントしないとだめか。オレが囮になってひきつけることは可能かな？」

「あのー」

そんな中、都が恐る恐る手を挙げた。

「周様達は敵が何なのか知っているのですか？」

オレがアル・アジフの顔を見ると、アル・アジフは小さくうなずいた。

「ああ。オレ達が追っているのは金色の鬼だ」

「鬼。まさか、狭間の鬼」

「狭間の鬼？」

オレがたずね返した瞬間、ポケットの中に入れていたレヴァンティンが震えた。どうやら通信が来たようだ。

「何か用か？」

レヴァンティンを取り出しながら通信機器も付けて通信をつなぐ。

『周！　エンカウントだ！』

聞こえてきたのは悠聖の言葉。

『金色の鬼が現れた！』

第十八話　エンカウント（前書き）

戦闘入ります。

第十八話　エンカウント

「俺達は追い出される運命なのね。悠聖、なにしてるんだ？」

浩平は悠聖が地面に描いている魔術陣について尋ねた。

悠聖達は集会所から少しばかり離れた場所にある広大な広場に来ていた。ここら辺は近くに住宅地がなく、訓練するにはもってこいの場所かもしれない。

「オレ達が来た理由を思い出せ。これはそいつに対する探査術式だ」

「精霊を使えばいいんじゃないのか？」

浩平の言葉に悠聖は小さくため息をついた。

「そんなに大量にぽんぽん呼んで探して来いとはできない。お前は小説の読みすぎだ。そもそも、精霊召喚は簡単に使うものじゃないぜ。オレ達術師と精霊との一対一での契約で決まる。小説みたいに下級をぽんぽん呼び寄せて使うことなんてできない。精霊が至高の存在だからな。よし、完成だ」

「そういうものかね。で、それは発動しているのか？」

浩平は地面に浮かびあがった地図を指さす。

「多分」

「じゃあ、この動いている赤い点は？」

浩平が指さした先には赤い点が急速に動いていた。
悠聖と浩平が顔を合わせ合う。何故なら、その点はこちらにまっすぐ向かっているから。
「エンカウントまで推測二十秒」
「これが北だよな。つまり、ええい」
浩平はポケットに入れていたデバイスを取り出した。
「我が求めに応じよ、フレヴァング！」
浩平の言葉と共に、浩平の手の中にライフルが現れた。それを赤い点が向かってくる方向に向ける。
「目標確認。金色の鬼。こいつか？」
「多分。オレは周隊長に連絡する。それまでは頼んだ」
すばやく通信機器にデバイスを？げながら周にコールする。
「先制攻撃をしかけるぜ」
その言葉と共に浩平の握るライフル、フレヴァングからいくつかの光が放たれた。だが、浩平の眼にも映る金色の鬼はそれを簡単に回避しようと体を横にずらし、額に光が直撃した。
金色の鬼は態勢を崩してそのまま悠聖達とは広場で点対象の位置に

落下する。

『何か用か？』

「周！　エンカウントだ！　金色の鬼が現れた！」

『場所は？』

「そこから北北西に２００ｍほどだ。浩平の援護に入る」

通信機器を外し、デバイスを身につける。

悠聖のデバイスは珍しく指輪型だ。ただ、その指輪には様々な機能が備わっている。

「防護服α。リロード」

悠聖は武器をデバイスから召喚しない代わりに戦闘用の服を召喚し身につける能力にしている。αはある意味万能型の防護服だ。

悠聖が手を横に掲げる。

「聖なる刻印を纏いし者。光の道を指し示せ。光の剣聖『セイバー・ルカ』！」

金色の鬼が動く。目にもとまらぬ速さで浩平との距離を詰める。浩平はそれを見てにやりと笑みを浮かべた。

「追い詰めるぜ」

そして、引き金に三度、指がかかる。

放たれた三つの弾丸は鬼に向かい、鬼は跳びあがって避けようとした。だが、鬼の下を抜けようとした弾丸が爆発し、鬼が体勢を崩す。

「ぶった切れ！　ルカ！」

鬼の体を巨大な剣がとらえ地面に叩きつけた。

いつの間にか浩平の横には、八枚の純白の翼を持ち、宙に浮かぶ籠手には巨大な剣を、両手には左右対称の剣を持った女性がそこにはいた。

光属性最上級精霊『セイバー・ルカ』。

精霊の中で最強の剣士でもある。

「ナイスタイミング」

「オレを誰だと思っている。だが、油断するなよ」

悠聖達は鬼が落下した場所を睨みつける。

アル・アジフから逃げ切った奴が今の程度の攻撃で沈むわけがない。

二人の共通の見解だった。

ルカが三本の剣を構える。

「浩平！」

「任せろ！」

浩平はフレヴァングを宙に投げる。だが、浩平の手にはいつの間にか拳銃が握られている。もちろん両手に。

「ビリヤード劇場の始まりだ！」

そう言うと浩平は両手の拳銃を一気に放ち始めた。

放つ弾はそれぞれ速さや大きさが違い、それらが地面を跳ねて鬼の行動を抑制するようにトンネルを作りだす。そんな中で鬼はルカに向かって走る。

そんな中で悠聖は新たな召喚を開始していた。

「遥か深淵より来る者。我が呼び声に答えよ。闇の帝王『ディアボルガ』！」

悠聖の背後に現れたのは闇の帝王。体を包めるまでに大きな一対の翼に緋色の巨大な体。そして、手には大きな錫杖。

闇属性最上級精霊『ディアボルガ』

その姿を見た鬼が一瞬だけ動きを強張らせる。

「もらった！」

その瞬間に浩平が動いた。両手の拳銃を乱射して落下してきたフレヴァングを両手の拳銃を手放して捕まえ、引き金を引く。

放たれた弾は一直線に鬼に向かい。鬼はそれから身を守ろうと両腕を前にやった瞬間、背後から飛んできた弾が直撃した。僅かに空いた腕の隙間からフレヴァングが放った球が通り抜け、鬼に突き刺さると同時に、様々な角度から弾が飛来した。

これが、浩平が化け物揃いの第７６移動隊に推薦された理由だった。

天性のテクニックを使用して様々な速度の弾を弾かせながら目標に同時に着弾させる技術。あらゆる障害物までも利用し、自ら撃った弾の方向性を変える。まさにそれはビリヤードを興じる少年そのものだった。

鬼がその場に落下する。

「ディアボルガ。叩き込め」

『承知』

ディアボルガが錫杖を掲げる。

シャランと音が鳴り響くと同時にディアボルガの頭上に魔術陣が浮かび上がった。それは、鬼の上空に浮かびあがる魔術陣と同じもの。

『失せよ！』

そして、巨大な光の塊が鬼に向かって落下した。

土煙が周囲を覆い、爆風が悠聖達の髪を撫でる。

「悠聖、さすがにこれは倒しただろ」

『来るぞ！』

その言葉を出したのはディアボルガだった。

ルカが後ろに下がりながら巨大な剣を横薙ぎに振る。しかし、その剣は途中で止まった。

土煙が晴れると、そこにはルカの剣を受け止める鬼の姿があった。

鬼が加速する。

ルカの双剣をぎりぎりで避けてそのまま術者である悠聖の元に、

「させると思うか？」

鋼の煌めきが鬼を直撃し、鬼を吹き飛ばした。

「待たせたな」

レヴァンティンを振り切った体勢にいる周と柄に単三電池の様なものを繋いだ黒い剣を担ぐ孝治が乱入する。

「ここからのフロントはオレ達だ！」

第十九話　周と孝治（前書き）

周は技で、孝治は力で挑みます。

第十九話　周と孝治

「ここからのフロントはオレ達だ！」

オレはレヴァンティンを向けながら鬼に向かって宣言した。

「遅いぞ、周隊長」

「悪い。みんなに説明したら遅れた。悠聖、浩平、援護は頼むぞ」

オレと孝治が同時に地面を蹴る。鬼はすでに体勢を整えている。

オレはレヴァンティンを鞘に戻した。

高速の抜刀術だけがこのオレの剣技の真髄ではない。ただ、抜刀術はかなりう強力で、先ほど鬼を吹き飛ばしたのも抜刀術だ。

オレが使う抜刀術を含む剣技は、

「白百合流紫電一閃！」

白百合家にしか伝わらない唯一の剣術。

鬼はギリギリでレヴァンティンの切っ先を回避する。そのまま隙の多いオレに向かって手を伸ばす。

「逆閃」

そこに、まるで巻き戻したかのような動きでレヴァンティンが返っ

た。鬼はどうすることもできずまともにレヴァンティンの一撃で腕を叩き落とされる。

オレはすぐさま鞘に戻したレヴァンティンを抜き放つ。

「連閃」

勢い良く切り上げたレヴァンティンを両手で柄を握り切り下ろす。

白百合流の神髄がこれだ。ただの抜刀術ではない。抜刀術の後の連撃こそが白百合流の神髄である。

鬼はどうすることもできず、勢いよく後ろに弾かれた。その体にはうっすらと切り傷がある。

鬼は完全にオレを睨みつけている。そう、一緒に飛びかかった孝治を忘れて。

黒い斬撃が鬼の右腕を切り落とした。

「もらった」

そのまま背後に現れた孝治が鬼の胴を薙ごうとする。だが、黒い剣は胴に当たった瞬間に弾かれた。

鬼が振り返りながら左腕を振るうが、そこに孝治の姿はない。

「あいつは硬いぞ。バッテリー三本全消費だ」

オレの背後で孝治が黒い剣についた単三電池の様なものを外しなが

ら情報を伝えてくれる。オレはその情報を聞いてにやりと笑みを浮かべた。

「十分」

オレは地面を駆ける。

最悪、自分の隠している能力を出すことになるが、この敵を相手ならそれは大丈夫だ。いや、多分、隠し事をして勝てる相手じゃない。

鬼は自分の右腕を拾うとそのまま付け根に当てた。たったそれだけの動作で腕がくっつく。

オレはすかさずここに来るまでにストックしていた魔術をいくつか放った。

氷の槍と雷撃。

鬼は氷の槍を弾こうと腕を振るうが、氷の槍に雷撃が移った瞬間、氷の槍が爆発した。

かなりの高等なテクニックだが、水、又は氷の魔術に熱量を急激に与え水蒸気爆発を引き起こす技。

予期せぬ攻撃に鬼は大きく後ろに下がる。だが、水蒸気の間を抜けてオレの体が鬼の懐に飛び込んだ。鬼が対応できる状況じゃない。

そのまま叩き込むのは肘。勢いよく叩き込んだ肘は鬼の体をくの字に曲げるに十分な威力を誇った。もちろん、空中に浮かんでいる。

そのまま鬼の横に移動し、わき腹にもう一度肘を上から叩き込む。

鬼は地面にぶつかって大きく跳ねた。

そこに黒い斬撃が直撃する。

鬼の体を上半身と下半身に分けて吹き飛ばした。

「やはり硬いか」

孝治が単三電池の様なものを交換しながら小さくつぶやく。

オレはレヴァンティンを鞘に収めたまま腰を落とした。

「そんなに硬いのか？　殴った感想を言うなら人と変わらないけど？」

「剣に対して、いや、魔力が宿る者に対して硬いのだろう。だが、そんなに気を抜いていていいのか？」

「誰に物を言っている。そっちこそ大丈夫か？」

「愚問だ」

鬼がゆっくり体を起こす。近くに転がっている自分の下半身をくっつけてゆっくり立ち上がった。

そして、鬼の口が開き、

「右！」

「左！」

オレと孝治が同時に跳ぶ方向を口にしながら横に跳んだ。

それと同時にオレ達がいた場所を魔力の塊が通り過ぎる。巻き込まれたら大怪我では済まない。何故なら、向かった先にあった山の先が消滅したのだから。

「おいおい。いきなりラスボス級の攻撃か？」

「任務の相手はあいつだ。ラスボスと見なせばいい」

そんな中でもオレ達は軽口を叩き合っていた。

多分、ダウンバーストに指向性を持たせた攻撃。くらえば死ななくても気絶は確実にする。

「悠聖、浩平、援護の準備は出来たか？」

「我らの準備を含めて出来ておる」

何故かそこにアル・アジフもいるみたいだ。物置から出る時に都達を頼むと言ったのに。多分、連れて来たな。

「じゃ、各自頼んだ！」

「そこでその命令はないじゃろ！」

「了解！」

「悠聖、そなたも普通に返事をするのではない！」

まあ、これがオレ達のコンビネーションだし。

オレが地面を蹴ると同時に孝治が後ろに下がった。孝治の手には黒い剣ではなく弓が握られている。ちなみに、黒い剣は腰の鞘に収まっている。

オレ達三人が一緒にいる時によくするシフトだ。

オレ一人が前に出て、他の二人が後方からありったけの後方支援を行う。

オレはレヴァンティンを勢いよく鞘から走らせた。

鬼は口を開く。しかも、直線状にはオレがいる。

だけど、オレは笑っていた。レヴァンティンをしっかり握りしめる。

「レヴァンティン！」

『了解です！』

そして、鬼の口から魔力の塊が放たれて、消え去った。

オレに当たる寸前に消えたのだ。鬼はあまりのことに動きを止めて固まっている。

当り前だ。鬼からすれば絶対の威力だと思っていたのだろうが、そ

れが何の前触れもなしに消え去ったのだ。固まるのも無理はない。だが。ここは戦場。その動きの停止が命取りになる。

オレは一気に近づくと肘をまず叩き込んでからレヴァンティンを大きく上に切り上げた。

鬼の体が浮き上がり、そこに大量の後方支援が迫りくる。

オレはすかさず横に跳びながらストックしていた残りの魔術を全て放った。

本当ならここで追撃に入りたかったが背筋を覆う寒気が全力でそれを否定してきた。

結果、七色の暴風とでも表現したらいいのだろうか、わけのわからない量の魔術が鬼に直撃していた。

あのまま追撃したら確実にあれを使わないと死んでいたと断言できるほどの魔術の量。

すさまじい爆発と共にオレの体が爆風に吹き飛ばされた。

土煙を避けるように後ろに下がりつつ、レヴァンティンを構えながら鬼の出方を待つ。

「これならさすがに無理だろ」

そこに黒い閃光が土煙の中に突き刺さった。孝治の弓での援護だ。

でも、どうしてだろう。いやな予感しかしない。鬼に対してではな

く孝治に対して。

「全てを吹き飛ばす」

その言葉が聞こえた瞬間、オレは孝治の横に全力でダッシュしていた。

「ストップ！　お前、その技を使うつもりか？」

「倒したかわからないからな」

「焦土にはするな」

孝治は弓と黒い剣が一緒に握られていた。本音を言うなら止めて欲しい。

「わかった」

「逃げられた」

孝治が納得すると同時にクロノス・ガイアが小さくつぶやいた。

クロノス・ガイアが作り出す地図には何も記されていない。

「とりあえず、窮地は脱したというべきか？」

腰が抜けたのか浩平がその場に座り込んでいる。それを見たクロノス・ガイアがクスッと笑みを浮かべた。

「だらしない」

「仕方ないだろ。あそこまで強い奴と会ったことないんだから」

「でも、凄い技術だった」

「ありがとさん。周、悪いけど、ちょっと休ませてくれないか？」

「まあ、いいさ」

約一名ほどいろいろ聞きたいことがあるという目でオレを見てきているし。

オレが休むことを許可すると、孝治や悠聖もその場に座り込んだ。
クロノス・ガイアも座っている。立っているのはアル・アジフだけ。

「向こうに行こうか」

「そうじゃな。説明してほしい事柄がいくつかあるからの」

第十九話　周と孝治（後書き）

孝治の持つ剣の単三電池の様なものは中身が魔力の電池です。
剣自体にあるとある能力を使用するためには膨大な魔力を必要とするため、それをサポートするために使っています。

第二十話　アル・アジフ（前書き）

よく考えると、作中時間がまだ三日しか経っていない。時間を進めたいけど話す内容が多いからですね。

第二十話　アル・アジフ

「こんなところでいいじゃろ」

アル・アジフは唐突に止まった。

オレ達が立ち止まったのはさっきの広場から歩いて三分ほどの場所にある空き地だ。

オレは小さく溜息をついた。

「あの場所から離れて大丈夫か？」

「クロノス・ガイアの術式はこの世界に相手がいる限り通じるものじゃ。じゃから、当分は安泰ということになるの」

アル・アジフと同レベルというクロノス・ガイアならそういうことは出来そうだ。

オレは本題について尋ねることにした。

「聞きたいことはわかっている。こいつだろ？」

オレはポケットからレヴァンティンを取り出した。見た目は普通のデバイスと同じだから違っていたとしても言い訳が聞く。

「そうじゃ。我はそなたが持つレヴァンティンについて尋ねたい。それをどこで手に入れたのじゃ？」

「とある遺跡だ。まあ、世界的に有名な場所」

「アルタミラか」

アルタミラ。

その地名はオーバーテクノロジーの集積地としてかなりの知名度を誇る。

発掘される遺跡のほとんどが今の技術では作ることの出来ないコンクリートなるもので出来上がっており、その中には鉄の棒が入っていたりする。

その中で発掘される技術は今の技術を遥かに上回るほとだ。

『GF』でも時雨の前の総長が総長を止めて解析を手伝うほど重要性がかなり高い。

「レヴァンティンはその中で調査されていなかった遺跡の中から見つけた。まあ、地下にあった場所だけどな」

アルタミラは地上部分と地下部分に分かれている。そもそも、地形が円を描くように二重構造になっているのだ。

オレが調べた限り、元々は地上と地下の二つがあり、何らかの攻撃で中心がえぐり取られたと考えている。

「ふむ、そこにあったのか」

アル・アジフは小さく呟いた。

「我もレヴァンティンを探しておっての、崩落危険地帯を除いて網羅したはずじゃが」

「オレ達はその崩落危険地帯に入っていたからな。捕獲すべき相手がそこに入ったから」

「その最中に見つけ出したというわけか。しかし、レヴァンティンがそなたに応じるとはの」

『あなたこそ、まさか表に出ているとは思ってもいませんでしたよ』

売り言葉に買い言葉なのか、アル・アジフの言葉にレヴァンティンが答えた。

アル・アジフが驚かないということは、レヴァンティンが話すことを知っていたというわけか。

『自動書記型魔術書アル・アジフ。名前の由来はネクロノミコンの原典から。全ての魔術書の原典となる意味を込めて。私の知るあなたは表に出てくることはなかった』

「緊急事態じゃからな。そうしなければ我も彼女も死んでいた」

「お前らは何の話をしているんだ?」

全く何を言っているのかわからない。わかったのがアル・アジフが魔術書の原典になるように作られたことくらいだ。

アル・アジフが小さく溜息をつく。

「レヴァンティン、そなた、周をマスターに選んだか」

『はい。マスターの目標に私の力は必要ですから。それにしても、私がいることによく気づきましたね』

「鬼の攻撃を相殺したじゃろ。まさか、レヴァンティンを持っているとは見るまで想像すらしなかったぞ」

あの鬼が放った魔力が消え去った時、オレはレヴァンティンの力を使っていた。

レヴァンティンというデバイスから空気中にある魔力の流れを一瞬で感知し、魔力が一切通らない空間を作り出す能力。

それがレヴァンティンの持つ力の一つ『相殺』だ。

こつはあるものの、上手く使えばかなり有効な能力となる。ただし、そこに魔術がぶつかれば魔力が分散し魔術は減衰するが、それだけでは消し去ることが出来ず、同じように空間を作り出さないといけない。

おかげで、使用する魔力＝対象の魔力という公式が成り立つため、複数人が同時に戦っている最中に使えば簡単に魔力が枯渇する。

「本当なら、レヴァンティンを回収するところじゃが、そなたなら上手く扱えそうじゃな」

「回収って、アル・アジフは何か集めているのか？」

オレの言葉にアル・アジフははっきりと、そして、真剣な表情で頷

いていた。

「この世に存在するオーバーテクノロジーの中で最高峰に存在する六つの武器を我は集めておる」

「六つの武器？」

「そうじゃ。我、アル・アジフ。そなたのレヴァンティン。他に、隼丸、デュランダル、運命、七天。その六つじゃ」

「漢字が多いな。しかも、デュランダルって聖剣の名前じゃなかったっけ？」

六つの内半分が日本産ということを考えると、どうしてアルタミラにオーバーテクノロジーが集まっているのか不思議になるな。

「この中でそなたのレヴァンティンとデュランダルは特別じゃからな。我からは話さぬ。レヴァンティンに聞くがよい」

『ちなみに私は答えません』

その答えはわかっていました。

「それにしても、アル・アジフもオーバーテクノロジーなんだな」

「我は魔術書の原典じゃからな。あらゆる魔術を自動書記するもの。一度見た魔術なら条件が無い限り使用可能じゃ。それだけでも十分オーバーテクノロジーじゃろ」

確かに、その能力は極めて凶悪だ。頑張って作り出した魔術が一度

放つだけで簡単にコピーされるなんて悪夢以外の何者でもない。

「我は六つの武器を集め、来るべき戦いまで所持する。そう決めておるのじゃ。じゃが、レヴァンティンはそなたが持つべき力。我は諦めた」

「何か手伝えることはあるか？」

「大丈夫じゃ。我は悠久の時を生きる物。一人で十分」

「聞く限りだと、お前やレヴァンティン級のオーバーテクノロジーなんだろ。だったら早く集めた方がいい。だから、手伝うぜ」

オレの言葉にキョトンとしたアル・アジフだが、すぐに小さく笑って、

「おかしな奴じゃな」

「よく言われるよ」

オレも笑みを浮かべた。

第二十一話　クロノス・ガイア（前書き）

浩平が暴走するより孝治が暴走します。

第二十一話　クロノス・ガイア

周とアル・アジフが向こうに行った後、浩平はすぐさまクロノス・ガイアに話しかけていた。

「魔術すごいな。あっ、俺の名前は佐野浩平だ。君は？」

「クロノス・ガイア。浩平の銃は特別？」

「フレヴァングのことか？　特別ってわけじゃないぜ。ライフルと二丁拳銃の組み合わせだし」

「あれはむしろ天才だろ。周隊長にも負けないレベルだったぜ」

「ありがとよ」

浩平のあの銃撃は銃を扱う天才だけで言い表すことが出来ないことを孝治は知っている。

敵の行動を抑制し、強力な一撃を叩き込む。放った弾丸を他の弾丸で軌道を変えて相手を狙う。

ビリヤードのごとくターゲットを狙い打つ。そこに介入するのは次元の違う空間把握能力。

だからこそ、孝治は浩平を推薦したのだ。天才の中で埋もれない才能がある浩平を。

「でも、これじゃ駄目なんだよな。ビリヤードだけじゃなくてミラ

ーもしないと」

「ビリヤード？　ミラー？」

クロノス・ガイアは浩平が言ったセリフに首を傾げながら尋ね返した。

「ビリヤードは放った弾と弾を打ち合って軌道を変える技。ミラーは弾と弾を真っ正面からぶつけ合って反射させる技。そうしないと、俺はあいつを倒せない」

浩平が自分の拳を握りしめる。

鬼に対して扱ったビリヤードだけでも十分な能力を持っているのに、浩平はさらなる力を得ようとしている。

彼をそこまで駆り立てる原因があるのだろうが、浩平はそれ以上口を開かない。

「でも、誇っていい」

クロノス・ガイアは握りしめられた浩平の手に自分の手を合わせた。

「浩平の力は十分に通用する。私が断言する」

「ありがとう」

浩平は優しく笑みを浮かべた。

「へぇ〜、浩平ってそんな表情出来るんだな」

悠聖がニヤリと笑みを浮かべながら言った。すると、浩平がムスッとする。

「悠聖？　お前は俺を何だと思っているんだよ」

「エロガキ」

まるでいたずら小僧のごとくニヤリと笑みを浮かべる悠聖。

「ガキはお前もだろが」

そんな悠聖に対して浩平は詰め寄っていた。

「オレはガキだがエロじゃない」

「中学生の男子は全員エロガキだと俺は断言する。なあ、孝治」

「俺に振るな」

急に話を振られた孝治は別の方向を向いている。

そんな孝治を見た浩平はニヤリと笑みを浮かべた。

「制服フ」

「チェストォ！」

孝治の回し蹴りが浩平の顔面を捉えて吹き飛ばした。だが、浩平はピンピンしている。

「危ないだろが！」

「ちっ、殺し損ねた」

孝治は腰の鞘から黒い剣を抜く。

「今、この場で消し去る」

「待った。俺が悪かった。だから、その斬撃だけは止めてくれ！」

浩平は瞬間で土下座する。すると、そんな様子を見ていたクロノス・ガイアがクスクス笑い出した。

「面白い」

「コントではないが。命拾いしたな」

孝治が剣を鞘に収めて離れる。

浩平は小さく息を吐いた。

「そんなに面白いものじゃないだろ？」

「私からすれば十分。感性の違い」

「そういうものかね」

浩平はその場に寝転がった。

「クロノス・ガイアの本名は何なんだ？」

「秘密」

クロノス・ガイアは唇に指を当てつつ答える。その顔には笑みが浮かんでいる。

「そっか。でも、大変だよな。俺達と一つしか変わらないのに『ＥＳ』の幹部の一人って」

「アルがいたから。私はアルと一緒の部隊であることを呑んでもらってクロノス・ガイアの名前をもらった。だから、私は頑張る。アルのために」

「自分のためには頑張らないのか？」

「自分のため？」

不思議そうに首を傾げるクロノス・ガイアに浩平は頷いた。

「周とかそういうのが明確だと思うぜ。一緒にいる期間は短いけど、あいつはみんなのために隊長をやっているというより、自分のために隊長をやっているって感じだな」

「意味がわからない」

「周は俺達よりも苦労しているってことだよ。まあ、全部俺の推測なんだけどな」

ニコッと笑みを浮かべた浩平の顔をクロノス・ガイアが触った。

「私は、あなたが羨ましい」
どこか悲しみを含ませてクロノス・ガイアは言う。
「私は、あなたみたいに笑えない。自分がどれだけ人を不幸にしているか知っているから」
浩平は何も言わない。言えないではなく言わない。今、この場で口を挟むべきではないと気づいているから。
「クロノス・ガイアの候補は、私が『ＥＳ』に保護されるまでにたくさんいた。誰もがクロノス・ガイアの名前を得るために死に物狂いで練習していた」
クロノス・ガイアは自分だどうしてこんなことを言っているかわからなかった。
駅ではあまりのキモさに蹴り飛ばしたもした。だけど、真剣に話を聞いてくれる彼はどこか安心感があった。
「私の能力が知れ渡った時、魔術の訓練すらしていなかった私はクロノス・ガイアの候補に挙がった。今まで頑張っていた候補生全員を押しのけて」
クロノス・ガイアが涙を流す。
「私は、クロノス・ガイアになれて、アルの手伝いが出来て嬉しいけど、たくさんの人を不幸にした。クロノス・ガイアになるために頑張っていた人を全員落とした。クロノス・ガイアになってからも、たくさんの人を殺した。私は、あなたが、羨ましい」

涙は止まらず感情が流れ出るのも止まらない。

「その年でその強さは明らかに過去に何かあったに違いないのに、どうして笑えるの？　無邪気に笑えるの？　私にはわからない。私には」

「クロノス・ガイア」

浩平はそれだけ言うと起き上がり、クロノス・ガイアの頭に手を置いて頭を撫でた。

「確かに、俺だって辛いことがあった。不幸にした人もいるかもしれない。でも、俺は辛いことがあったから笑っていたいんだ。今、俺は幸せに生きているってことを伝えたいから」

「幸せを、伝える？」

「そう。端から見れば、頭がおかしい奴とか立場を理解していない奴とか言われるけど、それが俺だから。自分が自分であることを隠したくない。俺は俺で生きている。こんなバカでも必死に生きている。ただ、それだけだから」

自分でもバカだとわかっているからこそ、浩平は笑う。時には能天気だと言われようがバカなことはする。

浩平にとってそれが不器用な自己主張でもあるから。自分というのを教えるための自己主張。

「クロノス・ガイアも頑張ってみたらどうだ？　それに、お前が笑

う姿は今よりもっと可愛いぜ」

その瞬間、クロノス・ガイアの顔が真っ赤に染まった。自分の中ではポンと音が鳴った気もする。

そんな自分に気づいたクロノス・ガイアは慌てて浩平から視線を逸らした。

「自分らしく生きろ。他人を気にしすぎるな。俺が思う自分の生き方だ。クロノス・ガイアは俺のように生きろとは言わないけど、もっと柔らかくなってもいいと思うぜ」

「リース」

「えっ？」

「私の名前。リース・リンリーエル。これから、二人の時は、そう呼んで」

浩平が周囲を見渡してみると、いつの間にか孝治の悠聖の姿が見当たらない。逃げたというより空気を読んだか。

「わかった。よろしくな、リース」

第二十二話　夜（前書き）

今回は短めに。話というより幕間という感じです。

第二十二話　夜

風呂上がりのアル・アジフは借りている自分の部屋の中で小説を読もうとしたところ、部屋に入ってきたリースに話しかけられた。

アル・アジフは小説を机の上に置く。

「なんじゃ、リース。そなたから話しかけるとは珍しいの？」

「聞きたいことがあるこら」

リースはそう言うとアル・アジフの横に座った。

「恋ってどういう感情？」

その瞬間、アル・アジフの思考が完全に固まったことを自分で理解していた。

今までの経験から言って、リースが恋していたとは言い難い。いや、恋することをしようとしなかったと言ってもいい。そんなリースが恋について聞いてくるとは。

「リース、考え直すのじゃ。そなたは確実に間違っている」

「最初はそうだと思った。出会いから私はあまりのキモさに全力で蹴ったけど、鬼との戦いで少し見直した。でも、その人は行動と裏腹に暗い過去を持っているってわかった。だから、どうして笑って

いるのかと尋ねたら、自分らしく生きているからと言われた」

アル・アジフはこんなリースを始めて見た。一人でここまで長く話しているところもだが、頬を赤く染めてもじもじしながら言っている姿も。ただ、相手の姿を思い浮かべると相手を殺したくなってくる。

「私は、自分らしく、生きてみたい。どんなことが自分らしくかはわからないけど、そう思えたから」

「都、いるのじゃろ？」

「バレてました？」

アル・アジフが都の名前を呼ぶと、都は部屋のドアを開けて都が中に入ってきた。

「リースに教えたのはそなたじゃな」

「リースの感情は恋、とは断言出来ませんが、好意だと私は思っています。アル・アジフさんはリースの好意を止めようとしますか？」

「我はそんなことをするつもりはない。じゃが、相手が相手じゃ」

アル・アジフはそう言いながら魔術書をパラパラ捲る。

リースは小さく溜息をついた。

「私はもっと浩平と話したい。でも、恋というのがわからない。だから、教えて欲しい」

「都」

「私は恋というより好意が正しいと思います。周様の事は大好きで大好き大好きですが、今の周様に恋することは、周様の邪魔でしかありません。ですから、今はまだ恋に昇華させません」

アル・アジフは額に汗が流れるのがわかった。

都の考えがよくわからないからでもあるが、好意から恋に昇華させることを簡単に出来るように言われたからだ。

都は不思議そうに首を傾げた。

「アル・アジフさんはもしかして、恋を知らないのですか？」

「うっ、わ、悪かったの。我はまだ恋を知らぬ。これで満足か？満足じゃろ」

「開き直らないでください。それに、まだ機会はあります。周様はどうでしょうか」

「そもそも、我は『ＥＳ』の幹部じゃ。いくら穏健派と言えど、『ＧＦ』のメンバーと恋になってはならぬ」

『ＥＳ』という組織においてアル・アジフの名前はかなり大きい。

周達が始めて会った時、名前を聞いてから穏健派と聞くまで身構えていたのはそれによるところが大きい。

『ＥＳ』と言えばアル・アジフとアリエル・ロワソの二人の幹部が有名であり、この二人が『ＥＳ』を動かしていると言われているくらいだ。

もちろん、その話はある意味事実である。

アル・アジフは穏健派代表。アリエル・ロワソは過激派代表だから。

「身分の立場は確かに難しい。でも、私は諦めない」

「大丈夫じゃ。そなたがもし、恋に落ちるようなことになっても、我が守る。しかし、リースが恋するとはの」

「確かにそうですね。最初にこの話をされた時はかなり驚きました。でも、リースがその話をする時は本当に恥ずかしそうで、初々しさが出てましたよ」

「恥ずかしい」

リースが顔を真っ赤にしながら二人に背中を向ける。

「アル・アジフさん、周様の明日のご予定は何かお聞きになられていますか？」

「掃除すると言っておったの。今日はもう疲れたらしい。軟弱者じゃ」

口ではそう言っているが、実際はアル・アジフはそう思っていない。

周達はまだ中学生になったばかりなのだ。それなのに朝早くから来

て、そして、鬼と戦った。

疲れるのは当たり前だ。

「リースも都も早くねる方がいいぞ。明日は駐在所に向かうのじゃろ？」

「そうですね。アル・アジフさん、リース、お休みなさい」

都が深々と礼をして部屋から出て行く。

リースもすぐに立ち上がった。

「お休み」

「お休みじゃ」

リースが隣の部屋に向かう。

アル・アジフは小説を開いて続きを読むことにした。明日を楽しみにしながら。

第二十二話　夜（後書き）

次から白百合姉妹達が復帰します。名前だけ出ていた新キャラも登場です。

第二十三話　到着（前書き）

この話で第一章前半の主要な味方メンバーが出揃います。

第二十三話　到着

夜が明けたばかりの朝。そんな狭間市の駅に五人の少女が降り立った。

「ようやく着いたね、みんな」

先頭にいた音姫が後ろの四人に話しかける。ちなみに二人ほどまだ眠そうだ。

四人の中でスケッチブックを抱えた少女がスケッチブックを開けた。

『周さんはどこにいるの？』

スケッチブックにはそう書かれている。

「亜紗ちゃん、気が早いよ。ここから少し歩かないといけないし」

少女はコクリと頷いた。

彼女が田中亜沙。殲滅姫（マーダープリンセス）の異名を持つ少女だ。ただ、見た目は可愛い女の子で姫には見えない。

「案内ぐらい寄越せばいいのに。孝治も海道も何してんねん」

大きな荷物を背負いつつ、光が小さくボヤいた。

「仕方ないよ。弟くん達は鬼と戦ったらしいから。白百合流の連撃を使ったって言ってたから、多分、弟くんが動けないと思う」

「どういうこたなん？　音姫？」

ちなみに中村よりも音姫の方が年上だが、中村はそんなこと関係なしに普通に話しかける。音姫も気にしない。

「白百合の連撃は体に負担が大きいの。私みたいに子供の頃から体を作ってきた人を別にして、弟くんみたいに一閃だけ習って他を応用して覚えた人は一週間くらい筋肉を痛めることがあるの。弟くんは素振りを欠かしていないから筋肉痛だと思うけど」

『白百合流は全てを真似出来ない。周さんはそれを練習していた。でも、筋肉痛ということは一閃から逆閃と連閃を使ったと思う』

スケッチブックが開いた瞬間にはそういう文字が描かれている。ちなみにこれも魔術だ。

音姫が小さく溜息をついた。

「弟くんは自分の腕を壊す気だったのかな？」

「そんなにすごい連撃なん？」

その言葉に頷いたのは由姫だった。

「はい。一閃で相手の防御を崩し、逆閃で飛び込んできた相手を切り裂いて、連閃で仕留める、一番強力な連撃です。ふわぁ、眠い」

「私も。ムニャムニャ」

由姫ともう一人は本当に眠そうだった。

「一番強力、ね。うちの焦土とどちらがすごいん？」

「光ちゃんのとは桁が違うから。光ちゃんは広域攻撃で、白百合流は単体攻撃。比べられないから」

『比べるものが間違っている』

「そやけど。うちと同じ戦い方でうちより強い人がいたらいいんやけどな。そうやったら、うちの異名が無くなるのに」

光の年齢であの異名は恥ずかしいだろう。ただ、それに恥じない戦い方は普通にするけど。

音姫はクスッと笑って狭間市の中央に視線を向けると、そこから二人がこっちに歩いて来るのがわかった。

一人は知っている顔だ。

『クロノス・ガイア？』

答えたのは亜紗だった。

リースはこちらに気づいたのか、てとてとと小走りでこっちに向かってくる。ちなみに後ろから追いかけるのは浩平だ。

そして、リースはそのまま亜紗に抱きついた。

「久しぶり」

『久しぶり。元気だった？』

「あれ？　亜紗ちゃんはクロちゃんと知り合い？」

リースは不機嫌そうな顔で頷いた。

「クロちゃんは止めて」

「いいじゃない。アルちゃんもアルちゃんだから」

音姫には相手が嫌がるこっは関係ないようだ。相手からすればかなり迷惑であるが。

「えっと、白百合音姫さんですよね。俺は佐野浩平。周達に変わって来たんですけど、四人じゃないんっすか？」

確かに音姫達の集団は五人だ。音姫、光、亜紗、由姫、そして、もう一人。

「あっ、うん。七葉（なのは）ちゃん。悠聖君に届け物があるから一緒に来たみたい」

「届け物？」

「これだよ」

七葉はそう言うとお守りを取り出した。

「悠兄の大事なものだから。悠兄が忘れたことを見た瞬間驚いたね。

冬華さんからのプレゼントを忘れるなんて」

「何！　悠聖の奴に女がいるのか！　羨ましい。本当に羨ましい。俺にはまだ」

道端で膝を抱えて泣き出した浩平の肩をリースはポンと叩く。

「私がいる」

その言葉に浩平は一瞬固まって、

「いや、あのですね。私にはそんなストレートな愛情表現は慣れていないって、お二人方はどうして武器を構えてられるのでしょうか」

音姫と亜紗の二人がいつの間にか取り出した刀を身につけて、同じ姿で抜刀の準備に入っている。

それはあまりにも怖かった。

「クロちゃんに何をしたのかな？　浩平君？」

亜紗はスケッチブックを開かない。手が離れるから。

「何もしてない。本当に何もしていない。リ、クロノス・ガイアの話を聞いただけでそれ以外のことは何も」

「浩平は優しかった」

リースはそう言いながら頬を染めた瞬間、浩平の体に糸が巻きついて拘束した。

「ちょｗｗｗ」

糸を操っているのは七葉だ。持っている槍の先端がほどけて糸になっている。

正確には糸ではなく頸線（けいせん）と呼ぶ。

扱うものは少ないが、空間把握に長けたものならかなりの威力を発揮する武器だ。ただし、七葉の場合はカッコ良さそうだからと言って選んだ。

「ここはこの人を拘束しておけばいいんだよね」

「便乗すべきではないと思うんですけど」

「由姫、言ったらあかんで」

傍観しているのは由姫と光の二人だけ。むしろ、周囲の目を気にしているのが正しい。

「クロちゃんに何をしたか吐いてもらうからね」

音姫がゆっくり近づく。その顔は笑っているが目は笑っていないどころか怒っている。さらには体中からオーラも出ているような気もする。

亜紗はゆっくり音姫から離れた。

「あのですね、私はまだ何もしていないと」

「問答無用！」

音姫が刀を振り上げるのを見て浩平は小さくため息をつき、そして、ここに送った張本人を恨むことにした。

「周の野郎！　呪ってやる！」

この後、そのことについても音姫に言われる浩平だった。

第二十四話　集合

「くちゅ」

オレは駐在所の掃除中に小さなくしゃみを漏らしていた。それと同時に腕の筋肉が痛みを上げる。

「オレの体もやわだよな。もう少し鍛えないと」

「そういう暇があるならボク達の手伝いをして欲しいな」

今、駐在所の中にはオレ以外にこの地区の学生『ＧＦ』が集合していた。もちろん、朝早くから。

いろいろ事情を聞いた結果、朝早くからの掃除の手伝いで、今までのサボっていた分は帳消しということにして手伝ってもらっている。

「お前らのしでかしたことの尻拭いだ。地域『ＧＦ』がいなくなってから頑張って掃除していればよかったものを」

「そうだけどね、そうだけどね！　ところで、他の三人はどこに行ったのかな？」

「孝治と悠聖は買い物に行ってもらっている。浩平は他のメンバーを案内させるために行かせた。クロノス・ガイアと一緒に」

「ふーん」

千春が窓の掃除をしながら頷く。ちなみにオレは机の中身をきれい

にしている。

最初は他のところを掃除してと言われたが、中から出てくるものがゴミの山（時々賞味期限が年月単位で過ぎた食べ物）のため、オレが片付けることになったのだ。

「よし、終わり。そっちはどうかな？」

「玄関掃除はもうすぐ終わります」

「了解だよ。じゃ、終わったら物置の方を手伝ってあげてね。私は周君と机を片付けるから」

そう言うと千春はオレと一緒に机の中身を片付けだす。

「それにしても、いっぱいあるね。ゴミが」

「綺麗に整頓された資料すら見つからないしな。ここの『ＧＦ』は何をしていたんだか」

「知りたい？　何をしていたか」

オレの動いている手が止まった。でも、千春からすれば十分だったのだろう。

「帳簿はもう見た？」

「ああ。あの不正ノートな」

千春から聞く話と帳簿の内容に明らかな違いばかりが見受けられた。

正直に言うなら嫌になるくらいに。

「ここの地域『ＧＦ』は正直に言って評判は良くなかった。素行が悪くて不正が多かった。賄賂さえ渡せば犯罪を見過ごされるくらい」

オレは机の中身を片付ける動作を続ける。話に集中しながら。

「他の『ＧＦ』がどんなことをしているか分からないけど、『ＧＦ』憲章を読む限りその行為は犯罪そのものというものもあった。ここはそこまで大きくない街だから警察の力も貧弱で、『ＧＦ』の力に抑えてけられていたんだよ」

「じゃ、オレ達を見る目も冷たいだろうな」

「ううん。それは大丈夫だよ。都が頑張ったから。アル・アジフさんから周君達が来るって聞いて、街中に話をした。もちろん、周君自身の知名度も高かったからね。今じゃ、前の『ＧＦ』を恨む人はいても、今の第７６移動隊を恨む人は皆無じゃないかな？」

「そっか」

それは安心した。

『ＧＦ』は国際的に大きな組織だけど、国家機関ではないため地域の結びつきが大事になってくる。もちろん、国家との結びつきが一番だが地域との結びつきなしで『ＧＦ』が活動することは難しい。

「じゃあ、全員集まってからオレ達だけで地域巡回に出ればいいかな。その時の案内はお前らに任せる」

「やっぱり？　まあ、ボク達の方が詳しいから妥当だけどね。うわっ、新暦１０３０年が賞味期限のパンがある」

「危険だから止めてくれ。ったく、ちょっとは掃除しろよな。前の地域『ＧＦ』」

「あはは。でも、もういないんだよね。その人達」

オレの手が少しだけ止まった。

「周君達はいなくならないよね？」

「夏になるまではな。オレ達のホームグラウンドはここじゃない」

「わかっているよ。そんなこと、わかってる。ボクはただ、誰かが死ぬのは嫌だから」

「大丈夫だ」

オレはそう断言した。

「どういうわけか知らないけれど、オレは最強の器用貧乏（オールラウンダー）っていう変てこな異名を持つんだ。どうにかするさ」

「最強の、器用貧乏だからオールラウンダー。最強の器用貧乏でおかしいと思うけどね」

「それはオレも思っている。そんな大層な名前を付けられても、オレができるのは精々器用貧乏な戦い方だけだ。正直、首を傾げたくなるけどな」

「でも、それに応じた強さが認められている証拠じゃないかな？ボクはそう思うよ」

「勘弁してくれ。おっ、来たか」

オレは玄関の外を見て立ち上がった。

そこには音姉達の姿がある。浩平とクロノス・ガイアの姿はないけれど。

「案内なしで来れたのか？」

オレは入り口を開けながら音姉に尋ねた。

「うん。由姫ちゃんの特殊スキルで」

「ね、姉さん！」

おっ、由姫が外出用の言い方になっている。家ではお姉ちゃんなのに、外では姉さんだ。ちなみにオレは兄さんになる。

「そうそう。由姫の『海道がどこにいるか一発でわかるサーチ』を使えば簡単やったわ」

「光さんも言わないでください」

「そうそう。凄い的中率だったよね。私はそう思っているよ」

「そうか。で」

オレは七葉の肩を掴んだ。

「どうしてお前がいる？」

「悠兄に届け物。周兄、悠兄はどこにいるかな？」

「買い物だ。ったく、悠聖の野郎、忘れ物をするなよ」

オレは小さくため息をつきながら頭をかいた。七葉の性格から考えると厄介なことになる。

「兄さん、大丈夫ですか？」

「何が？」

「腕を上げる動作がコンマ二秒ほど遅いので」

由姫が思っていたより人間離れした能力を持っているような気しかしない。

『多分、筋肉痛。音姫さんが言っていたようにだけど』

「よっ、亜紗。元気だったか？」

オレが亜紗に話しかけると、亜紗はスケッチブックをしまってオレの胸に飛び込んできた。もちろん、由姫が不機嫌になる。

亜紗はこくりと頷いて返してくれる。

「ふむ、到着か」

そこに孝治と悠聖が買い物袋を持って到着した。中身は全て食材だ。

「七葉！　お前、なんでこんな場所にいるんだ!?」

「悠兄、忘れ物」

悠聖の眼の前にお守りが垂らされた。悠聖は大事にそのお守りを受け取る。

「これ、どこで」

「机と壁の隙間。悠兄の部屋を掃除してたら見つかったんだよ。冬華さんからのプレゼントなんだから大事にしないと」

「うん。悪い」

そういや聞いたことがあるな。悠聖には遠くに転向した一人の幼馴染がいるって。初恋の少女だとも言っていた。

後は、浩平が来れば全員集合か。

「じゃ、七葉以外は宿舎の方に」

「どうして私以外？」

「お前は帰れ！　これは兄として命令する！」

悠聖が七葉の前に出てオレの代わりに理由を説明する。

「お前は第７６移動隊じゃないし、母さんや父さんから許可をもらっていないだろ。だから」

「実力さえあれば大丈夫だよね」

七葉が笑った。まるで、猫の様な猛獣の眼をして。

こいつはいつもそうだ。オレ達が集まるならどうやってでも長くいようとする。それが、自分を傷つけることになっても。

オレは小さくため息をついた。

「叔父さんと叔母さんの許可は？」

「周兄と音姫さんが許可してくれて、悠兄が面倒を見てくれるなら。音姫さんの許可はもらったし、私は悠兄の迷惑にならないように頑張るから」

「死ぬかもしれないんだぞ」

「覚悟の上だよ」

オレはまた小さくため息をつく。

「許可する」

「周隊長！　こいつは」

「オレはお前が七葉のことを大事にしていることも知っている。だ

けど、七葉の覚悟は本物だ。第７６移動隊をやる覚悟としては十分。
そうだろ？　音姉」

「そうだね。弟くんの言う通りだけど」

音姉が目を少しだけ細くしながら言う。

「その状態で言っても説得力はないかな」

音姉の言葉でようやく亜紗がオレから離れた。名残惜しそうに。

「わかった。七葉、その代わり無茶なことはするなよ。お前はオレ達と違って学年が一つ下なんだから、何かあったらオレを呼べ」

「わかった。ありがとうね、周兄。由姫、行こ」

「そうですね。私達は先に宿舎に向かいます」

そういう由姫と七葉の背中を見送ってオレは小さくため息をついた。

「ガンバ」

中村が背中を叩きながら言ってくる。

「それしかないだろ」

オレはもう一回ため息をつくことにした。

第二十五話　対策会議（前書き）

鬼についていろいろわかり始めます。第一章前半の重要なポイント。
ただし、物語全体の中でもこの話は前の方に位置しますが。

第二十五話　対策会議

狭間市『ＧＦ』駐在所には様々な部屋がある。もちろん、トレーニングルームや隊長室などの平凡なものから取り調べ室や勾留室など存在価値のわからないものまである。そもそも、勾留するのは警察の仕事であり、『ＧＦ』の仕事ではないのだが。

そんな中の一つ、会議室において、第７６移動隊代表にオレと孝治に音姉。『ＥＳ』代表アル・アジフとクロノス・ガイア。そして、狭間市代表の都が集まっていた。もちろん、これからのことを話すためだ。

「とりあえず、最初に今回の事件を整理する。ことの発端は約一ヶ月前。狭間市『ＧＦ』地域部隊全員が失踪。最初は謎に事件として警察が捜査に乗り出すが原因は解明できず、市長の昔のつてから『ＥＳ』に護衛依頼があった。そうだよな？」

アル・アジフは無言で頷く。無言でいてくれるから話は進めやすい。

「『ＥＳ』到着から三日後、『ＥＳ』メンバーの三人が失踪。現場ではアル・アジフが人を喰らう金色の鬼と遭遇し戦闘。しかし、逃げられる。それからいくらか日にちは経ち、一昨日にオレ達第７６移動隊と鬼が遭遇し戦闘になるが、鬼に逃げられる。何か質問は？」

真っ先に手を挙げたのは音姉だった。

嫌な予感しかしなけれど、オレは音姉を当てる。

「鬼が使った体術又は武術の種類を」

「わかるか」

こういう質問が来ることは予想していたけど回答は考えることができない。音姉は不満そうな顔をしているが、アル・アジフは小さくため息をつくだけだった。

「音姫、それがわかれば勝てると思うのか？」

「勝つ確率を上げることはできるかな。あの映像を見る限り、空戦能力が高くてスピードもある。正直に言って難しい相手だと思うよ」

「その意見には俺も賛成だ。あの時は飛ばなかったが飛ばれていたら危なかった」

孝治の言うように、あの時に空に飛ばれたら、孝治と精霊以外に飛べないオレ達はかなりの窮地に立たされていたに違いない。なら、どうして飛ばなかったのか？

その答えは簡単だろう。

「今の空戦戦力が第７６移動隊が孝治と中村の二人だけだからな。『ＥＳ』は？」

「満足に飛べるのが我とクロノス・ガイアだけじゃ。ただし、空戦となるとそちらには劣る」

「こっちは上手いこと分かれているからな。まあ、一応戦力の開示はしておくべきか？」

「いや、我らはそなたらを知っておる。『ＥＳ』じゃからな」

「ごもっともで」

第７６移動隊は空戦戦力が２に、準空戦戦力が２だ。飛行ができるのは孝治と中村だけで、跳ぶことができるのはオレと音姉。

『ＧＦ』の対抗組織とでもいうべき『ＥＳ』からすれば、そういう情報は常日頃から集めているのだろう。まあ、オレ達は良くも悪くも有名人だけど。

「『ＥＳ』側は空戦戦力が２．準空戦戦力は８じゃが、あやつにはダウンバーストがある」

対暴徒鎮圧用魔術（ダウンバースト）の威力は極めて高い。準空戦は確実に地面に落とされると言ってもいい。空戦も五分の確率で地面に落ちる。

放たれたら一巻の終わり。

「あの、少しよろしいでしょうか」

そんな中、話にほとんどついていけないであろう都が手を上げる。もちろん、この会議に出席している以上、発言権は普通にある。

「重力魔術は利用できないのでしょうか？」

「面白い考えだな。周はどう思う？」

「確かにありだけど、重力魔術はコントロールが難しい。アル・アジフとクロノス・ガイアは？」

「無理じゃな。一定範囲に重力を叩きつけるならともかく、個人個人に叩きつけるとなるとレアスキルの部類に入るぞ。クロノス・ガイアはどうじゃ？」

「相手が動かないなら有効」

つまり、相手が動くなら不可能ということだ。オレが知る重力魔術も二人が言ったような制限のあるものが多い。つまり、戦場では使えない。

「難しいのですね」

「いい戦にはいっているんだけどな。そう言えば、クロノス・ガイアの探査術式はこの世界にいる限り有効だと言っていたよな？」

「そう。もし、他の世界に出ても、戻ってきたなら有効」

「レベルが高い普通のやり方なら不可能だな」

孝治が冷静に答えるが視線はオレを見ている。今の時間をくれただけで十分な方法は見つかった。

「一応、オレが考える対策を三つあげる。現実的非現実的を除いてだ。疑問があるなら対策を一つ言い終わるごとに聞いてくれ」

全員が無言で頷いた。

「一つ目が結界を張り続ける方法。常に狭間市を守るように結界魔術を展開し続ける。欠点としては、維持がかなり苦労することと、

鬼相手に通用するかわからないこと。そして、鬼の被害が別の町に及ぶ可能性があること」

「確かにそれも考えたが、難しいの。そなたらにはわからぬと思うが、この狭間市は魔力が溜まりやすい地形になっておるのじゃ。そんな場所で結界を作れば暴走する危険がある」

「聞いたことはあります。この土地は魔力の恩恵を受ける土地だと代々言われてきましたから」

まあ、オレが上げた欠点以外にもいくつかの欠点があるのだが、アル・アジフの言葉と都の話を考えてこの案は没か。

「二つ目。応援を要請する。もちろん、第一特務の連中だ。欠点を言うなら世界の勢力バランスが崩れる。第７６移動隊の存在意義がなくなるってところか？」

「反対だ。そこまで強大な兵を連れれば鬼が何をするかわからない」

「そうじゃな。今でさえ、我らとそなたらがいる上に第一特務が来たなら戦争でも起きる可能性があるの」

つまり没。

まあ、今までの二つの案は非現実的な部類に入ることだけど。

「じゃあ、最後に。対策と言うより提案だな。鬼と戦うための訓練をしつつ、その時期まで普通に暮らす」

「弟くん、ちょっと待って。それは対策とは言わないよ。提案と最

初につけていたけど」

「わかってる。アル・アジフに聞きたいけど、鬼に喰われたメンバーの素行は？」

「素行？　少し荒れておったの。それが何か」

アル・アジフの言葉に何かに気づいたように都が手を挙げた。狭間市の地域部隊の素行の悪さを知るものならオレがこういう提案をした理由がわかる。

「鬼が狙うのは素行が悪い人。いえ、悪事を働く人というですね」

「オレもそう思っている」

「周、説明を頼む」

この場で分かっているのがオレと都だけだからオレは頷いた。

「オレ達の前任の地域部隊は素行の悪さで有名だったんだ。狭間市からすれば薄気味悪いけどいなくなって良かったって感じだな。オレの考えから言って、金色の鬼は狭間市の守り神。いろいろあって聞くのを忘れていたけど、都はオレ達が鬼に会う前に『狭間の鬼』って言っていたのを思い出してな。この地について説明してくれるか？」

「はい。私が知っていることならいくらでも。ただし、最初に言っておきます。金色の鬼はおそらく狭間の鬼のことですが、それは守り神ではありません」

そこで都は言葉を切った。

まあ、オレの予想だから外れることはあるけど。

「崇り神です」

その言葉にオレ達は呆然とするしかなかった。

第二十五話　対策会議（後書き）

第一特務について

『ＧＦ』の最強部隊。通称『ケルベロス』
音姫を除く世界で五指に入る強さのメンバーが入っており、第一特務だけで国連と真正面から戦えるほど。

第二十六話　狭間（前書き）

第一章のタイトルの表の理由が明らかになります。狭間である理由です。

第二十六話　狭間

「本当は忘れていて欲しかったのですけど、思い出してしまった以上、隠すことはできません」

未だに呆然としているオレ達を見ながら都は話を続ける。

「狭間の鬼は狭間市に代々伝わる伝承の中に出て来る破壊神のことです。過去に四度世界を滅ぼしたと言われています」

「四度も？」

オレは思わず呟いていた。

オーバーテクノロジーの存在からわかるように、文明は何回か滅亡している。何回滅亡しているかわからないが、複数回滅亡しているのは確かなようだ。

学者の見解としては三度と言われている。

「破壊神は狭間市に封印され、今尚、封印は破られておりません。ですが、封印が弱まっているのは確かだと思います」

「何かの儀式をまだしていないからかの？」

「はい。春祭りに行われる巫女の踊りです。それにより、封印は頑固なものとなります」

「鬼が現れたのは封印の力が弱まったため。人を補食するのは力を得るため。でも、どうして手当たり次第じゃない？」

「それは、わかりません」

祟り神であり破壊神。なのに殺す人を選ぶということは、まるで、自分が人を統括する存在とでも言いたいような感じだ。

オレは小さく溜息をついた。

「だが、周の言う通りだとしても、何故、悠聖達を襲った？」

「それの方が簡単だ。祟り神だろうが破壊神だろうが、同じような魔力存在とは相性が悪い。悠聖は精霊を召喚するからな。鬼からすれば天敵だった、そう考えられるだろ。あの時に狙っていたのは悠聖だしな」

一瞬だけ浩平の技術を見ていたが、鬼からすれば浩平の方が危険なはずだった。なのに、鬼は真っ先に悠聖を狙った。

単純に頭数を減らす目的の可能性もあるが、都から聞いた話を考えるとこれが妥当だ。

「確かにの。それなら納得は行くが、我が気になるのはどうしてこの地にそれほど強大なものが封印出来るかどうかじゃ。東京特区学園都市のように、学園都市全体が魔術陣を描くならわかるが、この地はそこまでのものはない」

「確かにね。私が感じるレベルで言うなら、魔力が安定していることを除いて疑問には思わないけど。弟くんは何かある？」

オレは首を横に振った。

狭間の鬼がどういう存在かわかれば対策のしようはあると思うが、今の状況では難しい。

「全くわからん。世界を四度滅ぼした、ね。そのことに関してアル・アジフは何か知らないか？」

「ふむ。我も聞いたことがあるくらいじゃが、百年ほど前に神と戦ったという話ならある」

その話ならオレも聞いたことがある。だけど、それは別の地に封印されていた邪神であって、この狭間市とは関係がない。

いや、待てよ。

「狭間か」

「何かわかったのか？」

アル・アジフが思わず身を乗り出してしまったのか、机に手を置いて顔を近づけてくる。

オレが呟いた言葉に音姉も頷いた。

「確かにありだね」

「音姫も何かわかったのか？」

「狭間だよ。鬼が封印されているのは空間と空間の狭間。一番不安定だけど安定している場所」

そう考えれば鬼がこの地にいることが理解出来る。

「周様、不安定なのに安定というのはどういうことでしょうか？」

「境界線だな。二つの物事の間にある境界はいつ変わるかわからない不安定なものだ。例えば、オレと都の距離。だけど、この間は確実に存在する安定したもの。その理論のまま規模を大きくした場合、その狭間を利用した術式結界は強力な作用を持つ。例え、破壊神と言われた相手にも」

「狭間は不安定ながら絶対の存在。絶対だからこそ、強力な結界になる。弟くん、鬼を封印出来る理由はわかったけど、根本的な解決にはなってないような気もするよ」

そうなんだよな。いくら封印する方法がわかったと言っても、鬼をどうにかする方法はわからない。

他に情報は無いのだろうか。

「鬼を倒すしかないのか？」

「鬼を倒すか。我らの戦力でそれが可能か不可能か考えればすぐわかるじゃろ」

軽く肩をすくめるアル・アジフ。

相手はアル・アジフですら追いつめることの出来ない相手。さらには再生能力も極めて高い。

オレは鬼と戦う手段として速攻を選んだが、二度目は通用するかわからない。

「方法はあるよ」

唐突にそう言ったのは音姉だった。

「白百合流の奥義『鬼払い』。どこまで通用するかわからないけどやってみる価値はある」

「ちょっと待った。もしかして、溜めが必要か？」

白百合流は連撃が真髄の剣技だが、一部の技は発動前に溜めが必要だ。

オレが使えるものでも水払いと埃斬り。どちらも威力は絶大だが、溜めをする時間が長い。

「うん。時間にして約五分。溜め終わった瞬間に放つ必要があるし、使えるのは一日に一回だけ。弟くんに教える方法があるけど、不完全にしかならないと思う。『歌』も載せて完全にするから」

「つまり、音姉にしか出来ないか。倒した後の封印術式を考えると、ギリギリだな」

オレは小さく頷いた。

「アル・アジフ。狭間の力を集める手段はあるか？」

「あるにはあるが、そなた、載せるつもりか？」

「ああ。今の残りのメンバーの中で、最速の攻撃が可能なのは亜紗

だ。それについて行くために力を載せる。二人で挟み込むようにすれば地面に縫い付けるはずだ」

「空を飛んだとしても、俺と光で飛んだ瞬間に抑えつければいい。もちろん、浩平もだ」

「アル・アジフとクロノス・ガイアは遠距離からひたすらオレ達を援護。音姉を守るために残る全員をつける」

これなら鬼と戦うことは理論上は可能だ。完全な総力戦になるが。ただ、ダウンバーストを放たれたら終わる。

ある意味綱渡りに等しい行為だろう。だけど、今の状況下ではそれをするしかない。

「危険な鬼を倒すべきというわけか」

「いや、倒すじゃなくて封印する。少しの間」

「何じゃと？」

オレはみんなに見えるように魔術陣を作り出した。

「オレは自分の推測が間違っていないと思っている。鬼は祟り神だけど守り神だと。戦う前に意志疎通が可能か判断し、戦うのはそれからだ。狭間に封印する以上、不用意な封印は避けたいが、この狭間に干渉できる術式なら鬼を一時的に封印出来る」

「その術式、神話の術式じゃな」

「まあな。不完全だから1%ほどしか使えないけど、封印するには十分だ」

アル・アジフは考えるように腕を組んだ。

理論的には可能だとアル・アジフも気づいているのだろう。だが、それには危険が伴う。だけど、野放しにしてこれ以上被害を出すことが危険だ。

「そうじゃな。我も賛成しよう。じゃが、狭間の力を掌握するために時間がかかる。悠聖には術式を使用せぬように言っておくのじゃぞ」

今のところ、鬼が寄ってくる原因は悠聖だ。悠聖の術式に鬼が寄ってくることを悠聖自身も気づいているだろう。

オレは頷いて小さく笑みを浮かべた。

「頼りにしているぜ。アル・アジフ」

オレの言葉にアル・アジフは恥ずかしそうに顔を逸らした。

第二十七話　意志と行動

これからの方針は決まった。

アル・アジフが狭間に干渉するための時間が必要だ。それまでの間に作戦を練らないといけない。もちろん、オレと亜紗のコンビネーションに関してではなく、援護射撃について。

そう、作戦を練らないといけないのにオレ達は、

「1のダブルで終わりだよ」

「また、俺が大貧民かよ。お前ら強すぎるぜ」

第76移動隊全員で大富豪を興じていた。地域によっては大貧民と言うところもあるらしいが、オレは大富豪と呼ぶ。

「つか、ありえないだろ。13戦連続で大富豪と大貧民が同じって」

ちなみにルールには都落ちという一位陥落システムがあるのだが、今の大富豪は強すぎた。

『そう？』

不思議そうに首を傾げながらスケッチブックを開く亜紗。そう、亜沙がずっと大富豪なのだ。オレは富豪か平民をぶらぶらしている。

「亜紗さんは運が良すぎます。兄さんが神がかり的な手札になったと思えば9のサルベージを最大限まで活用して圧倒しましたし」

ちなみに、オレ達がやっている大富豪は全ての札に効力がある。ローカルルールをひっくるめた大富豪とでも言った方がいいか。

9のサルベージは出した枚数だけ使った札から回収する効果。さっきはそれを使って圧倒された。

「そもそも、九人でやるようなものじゃねえだろが。これ」

全て大貧民の浩平が小さく溜息をつきながら言う。

人数が多ければ多いほどトランプで遊べるものは少なくなる。七並べではいきなり3ターンで三人がパスを使い切り破綻する結果になったし、ババ抜きは二十分ほど時間がかかった。

「むか。浩平から『夜と言えばトランプだろ』って言い出したんだよ。我慢すること。私は疲れたから降りるけど」

「言ってることと行為が違いませんかね！　ったく、周、どうする？」

「何がだよ」

「これからだよ。そのための対策会議に出ていたんだろ」

「ここで振るのかよ」

対策会議が終わり、宿舎に戻ったオレ達を待っていたのはトランプで遊ぶこいつらで、話をする間もなく本気を出してプレイしたのだ。

結局、話すのが遅くなった。

「方向性としては鬼を封印する方向で行くことになった。作戦を言うなら、動きを止めたところに音姉が斬る作戦だ。ウノでもしないか？」

「賛成。でも、動きを止める役目は兄さんと誰ですか？」

「オレは確定なのか？」

「そりゃそうだろ。周隊長の実力はよく知っているからな。最強の器用貧乏さん」

まあ、変な説明をしなくて済む分ありがたいけど。

「オレと亜紗。孝治と中村が空中から鬼が飛ぶことを防いで他はアル・アジフ達の守り」

『わかった』

亜紗がすぐに頷いてくれる。

オレは由姫が取り出したウノを受け取りながら頷き返す。

「危険な役目だぞ」

『百も承知。それに、私が頑張らないと周さんが傷つく可能性があるなら尚更』

「亜紗ちゃん、弟くんの代わりに怪我をするのは止めてね」

音姉の言葉に亜紗は頷いた。

そう。こいつには前科がある。二年ほど前にオレを庇って大怪我をしたのだ。その時は処置を誤れば死ぬ可能性の高い怪我をオレが戦場において治療することになった。

そのことはオレも亜紗も覚えている。

『今の周さんは強い。本当に』

「止めてくれ。オレが強いのは先手必勝とバランスの高さだけだ。総合的には弱い」

『私が強いと思うのはメンタルの方』

亜紗がスケッチブックを捲りながらにっこり笑う。

『どんなに過酷な状況でも、笑って助けてくれる。私には到底真似出来ない』

「常に笑ってるって変な奴だよな」

かなり不気味だ。

というか、オレはそんな役回りなのか？

『周さんの強さはメンタルの強さ。剣技の腕は私より劣っていても、メンタルの強さに勝てない』

「オレはそんな風に振る舞っていないけど」

「それが弟くんのすごいところだよ。弟くんの本当の強さはみんな知っているから」

「そうだな。周の一番の強さは剣技の腕でも魔術の技術でもない。俺達を惹きつけるまでの意志の強さ」

音姉も孝治も次々に誉めてくれるがあまり信じることが出来ない。人を信じれないという意味ではないが、自分の実力は前々から疑問視していたからでもある。

本気を出せない今ならそこまで人を惹きつけることは出来ないのではないかと。

「後は、行動力かな。周兄って時々、すごい行動力をするし」

「確かに。前にあったろ。アルタミラで犯罪者を追いかけていた時、周隊長は時雨総長がたじろいだ高さから飛び降りたこと」

そう言えば、そんなことあったような気がする。確か、あの後にレヴァンティンを見つけたんだよな。

あの時は必死だったから、怖いとは思わなかったけど。

『周さんの強さは意志と行動力。それがあるから、私は周さんを守りながら守ってもらえる』

「オレの強さね。家系を見る限り納得出来ない強さだな」

家系を見ると、自分の圧倒的な力で相手を抑えつけて勝つ奴らしか見当たらない。

オレってやっぱり特別なんだよな。

「兄さんは剣技も十分に強いと思いますよ。双剣の型なんてかなりの連撃が出来ていますし」

「双剣？」

音姉が不思議そうに首を傾げた。

当たり前だ。双剣なんて白百合流には存在しないし、オレが戦場で使っている姿を誰も見たことはない。

「これも周の隠し事の一つか」

孝治はたったそれだけで納得したようだ。納得しない人もいるけど。

「弟くんって確か、いろいろな武器の造形について勉強していたよね」

音姉が唐突にそう言った。

確かにオレは武器の造形について勉強している。とある理由から。

オレは悟られないように一応勉強する理由として公言している内容を言うことにした。

「デバイスの調整ができれば楽になるだろ？　それが理由だ」

「うん。弟くんはそれもあって勉強していると思うけど、本当は新しいデバイスの使い方を見つけたんじゃないかって」

「どんな方法だよ」

「さあ」

そこで音姉は肩をすくめた。オレも肩をすくめて返す。

「双剣を練習する理由は左でも武器が扱えるようにだ。別に他意はない」

「それが弟くんのいいところだよね」

その言葉に部屋にいた全員が笑いながら頷く。

オレは小さく息を吐いて自分の手を見つめた。

「意志と行動、ね」

それがオレの強さなら、オレが認められ始めている証拠なのかもしれない。

オレは小さく笑みを浮かべて、こぶしを握り締めた。

第二十七話　意志と行動（後書き）

設定を作っている自分でも思いますが、周は秘密が多いですね。

第二十八話　亜紗

程よい大きさの月の光が差す広場で一人の少女は踊っていた。いや、踊るように握っている刀を振っていた。剣舞とでも言うのだろうか。少女が動くたびに空気は揺れて大気が動く。そして、動き自体が洗練されているから見る者を惹きつける。

唐突に少女は動きを止めた。刀を鞘に収める音と共に世界が元に戻ったような錯覚に陥る。

オレはそんな少女の動きを見終わって、拍手をしながら少女に近づいた。

「腕を上げたか？」

月明かりに照らされた少女は慌てて近くにあったスケッチブックを開いた。

『いつから見ていた？』

「最初から。それにしても、オレに気づかないとは感覚が鈍ったか？」

『周さんが凄くなっただけ。孝治さんに教えてもらった？』

「まあな。でも、それだけじゃないけど。ちょっといいか？」

オレはそう言いながら近くのベンチを指さした。戦闘の傷跡はかなり残っているが、ベンチだけはそこにある。

亜紗は小さく頷いてベンチに向かって歩く。

オレが先にベンチに座ると亜紗はオレに引っ付くように座ってきた。

『寒いから』

スケッチブックにはそう書かれている。

でも、本当は違うだろうな。

「オレ達がいない間、大丈夫だったか？」

『うん。体に異常は無いよ』

亜沙はスケッチブックを持たない手で力こぶを作った。だけど、すぐに表情を沈ませる。

『でも、アリエル・ロワソの行方はまだわからない』

アリエル・ロワソ。

おそらく、第７６移動隊全員に関わってくる名前であり、オレ達の最大の敵とも言える。

『ＥＳ』の過激派筆頭で、アル・アジフと並ぶ『ＥＳ』の顔だ。最大の特徴は最高の天才にして最狂の科学者。

「仕方ないだろ。世界が懸賞金をかけてまで捜している奴だ。簡単に見つかるようならもう捕まっている。それに、見つけたとしても、

真っ正面から戦えるのは音姉くらいだろ」

アリエル・ロワソは天才の中の天才と言ってもよく、今の音姉と互角以上に戦えるらしい。実際に音姉はそう語っていた。

悔しいことに、オレ達じゃ勝負にならない。

『でも、いろんなわかったことがあった』

「だろうな。どうだった？　世界は？」

『広かった』

亜紗は目を輝かせながらスケッチブックを捲る。

『本当に広かった。私がちっぽけな一人ということがわかった。世界を知れば、自分がまだ強くなれることがわかった。周さんも、体験した？』

「まあな。日本の中じゃ同年代どころか、全世代を含めて上位に入るオレでも、世界に出ればただの子供だ。その中で、世界を見て、現実を知り、未来への道を作る。オレはそう感じたな」

亜紗は嬉しそうに頷きながらスケッチブックを捲っていく。

『周さんが私を送り出した最大の理由が、本当の世界を知るためだよね？』

「まあな。オレやお前は、いつかアリエル・ロワソを捕まえないといけない。それがわかっていても、世界を知っておくことは必要だ。

オレ達が生きるためにも」

『周さんは、アリエル・ロワソがいなかったらどうなっているか考えたことはある？』

「ない、と言ったら嘘になる」

アリエル・ロワソはオレ達がこの世界に進む原因を作り出した。その元凶がいなかったらどうなるかなんてよく考えることだ。

考えても過去が変わるわけじゃない。

「でも、オレ達は今を生きているだろ。だったら、もしもを考えすぎずにアリエル・ロワソとの戦いを考える」

『前向き。羨ましい』

「オレだからな。まあ、時々、自分の前向きさに嫌になるけど。あの事件で、失ったものが一番大きいオレが頑張るしかないだろ」

『でも、周さんが傷つくのは』

「わかってる」

オレは笑って亜紗の頭を撫でてやった。亜紗は嬉しそうに笑みを浮かべる。

本当は、もしもが実現して欲しかった。もしも、アリエル・ロワソがおらず、あの事件が発生しなかったら、みんな普通の幸せを手に入れたに違いない。

オレ達が普通の人生を捨てて戦うことを選んだのとは真逆の生き方をしていたはずだ。

それを、オレがいたから巻き込んだ。だから、もしもを考える。

『周さん？』

そんなオレの目に心配した顔の亜沙とオレの名が書かれたスケッチブックが入ってきた。

オレは首を横に振る。

「悪い。考え事をしていた」

『怖い顔だった。これからのこと？』

「ああ」

嘘でも言っておくべきだろう。

「鬼が動かないと決まったわけじゃないけど、動きにくいとは思える。今まで大きなことが無かったからな。動いた場合はクロノス・ガイアから連絡が来るけど、それまでは普通に暮らせるだろう」

『普通。少しの間だけ戦わなくていい？』

亜紗は嬉しそうに尋ねてくる。

亜紗は今まで戦ってばかりだった。おそらく、オレ達と離れてから

一年ほど。

亜紗を成長させるために離したけど、成功と失敗は五分だな。

「ああ。訓練はあるけどな。その間に腕を鈍らせない程度。前線ほどキツくはないものさ。オレは全員分の転校手続きやら書類が大量にありすぎて大変なんだよ」

『頑張って』

「手伝う気すらないか。まあ、遊べばいいさ。亜紗は何をする予定だ？」

『アルさんに会いに行く』

亜紗はにっこり笑ってスケッチブックを見せてきた。知り合いだったのか？

『アルさんと会うのは五年ぶりだから早く会いたいな』

「五年ぶりってことは、オレと出会うちょっと前？」

『うん。周さんに出会う前、その前に私はアルさんに助けてもらって保護されてたの。でも、それを過激派の人に見つかって戦いになって、アルさんは私を逃がしてくれた。そして、出会ったの。周さんに』

あの日、オレは戦いが起きているという通報から一人でその場所に向かっていた。そして、その道中で出会ったのだ。みすぼらしい服装で刀を握って戦っている同じ年くらいの少女を。

オレは不意を突いて少女を襲っていた集団から助けた。だけど、逃げる際に足をやられて少し離れた洞窟の中で一夜を明かした。

その時に、少女が自分と同じであることを知り、少女の名前も知った。

それからだ。それから、オレと亜紗は同じ部隊で一年前まで行動していた。

『私は、自分が幸せだと思う。研究所にいた頃は実験ばかりで嫌になることがあった。でも、今は周さんと一緒にいられる。ただそれだけで十分』

「オレの場合は研究所の記憶がないから何とも言えないんだよな。でも、今、はっきり言えるのは今の暮らしは悪くない。みんなで一緒に任務をして、一緒の宿舎で夜を明かす。こういうの、今までなかったからな」

オレ達の繋がりはオレを中心に出来上がっていた。オレがみんなを出会わせ今に至る。

「そろそろ、戻るか」

『うん。明日から何をしようかな?』

「気楽に過ごせばいいさ」

オレはそう言って満天の夜空を見上げた。

第二十九話　プロフィール2（前書き）

少しだけ大事な内容をカミングアウト。
正の正体を想像していただければ嬉しいです。

第二十九話　プロフィール2

ニューニューヨークにある『ＧＦ』本部総長室。

そこで一人の青年がコーヒーを片手に記憶デバイスと向かい合っていた。青年のもう一方の手はキーボードの上を走っている

デジャヴを感じるが彼はその動作をしている。

「ふむふむ、全員合流したか。時雨もこれで一安心だろうな。まあ、周と由姫の裏技があれば狭間の鬼なんて三人で戦えるんだけどな。まあ、あいつらはそのことを知らないからいいか」

青年が見ているのは記憶デバイス上に送られてきた一通のメールだ。

膨大な添付データの存在を示すランプが光っているが青年は気にしない。添付データを空けていなくても青年はその内容を知っているから。

だけど、それをしてしまえば青年自身が疑われかねないので、青年は添付データを開ける。

「やっぱりの内容か。新しいプロフィールね。っと、内容が違う？」

青年は首を傾げた。だけど、すぐに首を戻す。

「入隊人数が一人多い？　七葉が入ったのか。あの、不確定要素が？　まあ、いいか。新しく来たのは、由姫、佐野浩平、七葉プロフールか。オレの知っているものとデータが少しずつ違っているから

面倒だけど、まあ、中身を見ているか」

・白百合由姫（シラユリユキ）
・新暦１０２３年３月３１日生
・魔術素質：不明
・得意魔術：不明
・戦闘ランク：不明
・異名：無

「やっぱり、不明だらけだな。まあ、今の時点ではそうなるか。第７６移動隊で二人目の不明キャラということにしておこう」

ちなみに一人目は周のことだ。

・佐野浩平（サノコウヘイ）
・新暦１０２２年１２月１２日生
・魔術素質：水
・得意魔術：狙撃魔術
・戦闘ランク：ＢＢ
・異名：無

「この二人は変わらないか。まあ、周達六人のデータがかなり大きく違っているだけだし、あまり差異はないか」

・白川七葉（シラカワナノハ）
・新暦１０２３年５月１日生
・魔術素質：風
・得意魔術：伝達系魔術
・戦闘ランク：Ｂ
・異名：無

「ふーん。こういう能力か。伝達系が得意なのに雷属性じゃないのが面白いな。でも、どうして違ってくる？　示された未来と。まるで、誰かが介入しているような感じだな。いや、介入しているというべきか。お前もそうだろ？」

青年が振り返りながら尋ねる。すると、そこには、いつの間に入ってきたのか海道正の姿があった。

「おや、気付かれてしまったか。さすが、『ＧＦ』第一特務隊長善知鳥慧海というべきか」

「さすがって、オレはそこまで見くびられているのか？　だとしたら心外だな。オレはそこまで鈍くもないし弱くもない。で、何の用だ？」

正が小さく笑みを浮かべた瞬間、正の視界から慧海の姿が消えていた。そして、押し当てられる無骨なまでのただの剣。

「後、お前が知るオレと今のオレは違う」

「君は僕と同じだと思っていたけど？」

「違うな。お前とオレは見ているものが違う。オレが見ているのは今からの未来だ。お前が見ているのは過去。違うか？」

正の目が若干細くなる。

慧海はふっと笑みを浮かべて剣を引いた。

「まあ、いいさ。オレはお前が周と接触していることを知っている。止めはしないさ。ただ、あいつは強いぞ」

「君は、僕をどこまで知っているんだい？」

「そうだな。ほとんど知らないというべきか。オレもお前も、世界の終わりを知るから動いている。でも、あいつなら、周ならその未来を回避する能力はある」

そして、慧海はパチンと剣を鞘に収めた。

「誰が介入したか知らないけど、あいつの強さは上がっている。まあ、オレには及ばないさ。一生な」

「なら、君が未来を回避すればいいんじゃないかな？」

その言葉に慧海は肩をすくめた。その動作に正も頷く。

二人は知っているからこそあまり動かない。非常に大事な時にならない限り。

「でも、あいつを舐めていると、お前は公開するぞ。オレがつけた最強（オールラウンダー）の器用貧乏。その意味を知ると思うけどな」

慧海が言い終わると同時に正の姿が消えた。そして、残される一枚の紙。

慧海はその紙を拾い上げた。そして、書かれている内容を見つめる。

・善知鳥（ウトウ）慧海（エカイ）

・生年月日不明
・魔術素質：大地
・得意魔術：操作系魔術
・戦闘ランク：S
・異名：『無敵』

第三十話　狭間の日常　白百合音姫の場合（前書き）

今回はいつもより長いです。
実力も能力も反則的な音姫を中心とした一日を描きました。

第三十話　狭間の日常　白百合音姫の場合

音姫の朝は早い。朝の五時には起床して早朝トレーニングをする。

毎朝２５ｋｍもの道のりを一時間かけて走る。もちろん、距離は感覚を頼りにしているし、速度は白百合流を知っているからこ魔術なしでの速度だ。オリンピックに出れば確実に記録を塗り替えれるが音姫にはそんなことは興味がない。

軽いランニングが終われば素振り。もちろん、白百合流の剣技の練習だ。

白百合流の神髄は抜刀からの連撃。一撃で決めるのではなく、確実に倒すための剣技。一瞬の判断で決まる戦いではなく、絶対的な練習量と実力の差が勝敗を決する要素になるのが白百合流だ。

周の場合は基本的な初歩である抜刀『紫電一閃』と抜刀返し『紫電逆閃』、燕返し『紫電連閃』の技と、要所要所で使えるいくつかの奥義を取得しているにすぎない。

対する音姫は白百合流のほとんどをマスターしている。マスターしていないのは極一部、一生かかっても習得できない可能性がある奥義だけ。

音姫は周達が鬼と戦った広場で刀を鞘に収めた体勢のまま動きを止めている。髪の毛をポニーテールに括っていたリボンは取り外している。

その唇は絶え間なく動き、何かを唱えているようだが、それは人の

耳に聞こえる大きさではなく、ただ、音姫の中だけでサイクルしている言葉だった。

そして、急に風が吹いて目の前に一枚の木の葉が舞った瞬間、音姫が動く。

一歩を踏み出しながら抜刀したと思った瞬間、音姫の体が三歩ほど前に進んでいた。刀を上から降り下ろした姿のまま動きを止めている。

音姫は静かに刀を鞘に収める。

「まだまだかな。でも、だいぶ調子はいいかも。さて、弟くんの朝ごはんを食べに行こうっと」

鼻歌交じりに音姫は歩きだす。十三分割された木の葉を気にせずに。

「ただいま」

音姫が宿舎に戻ると、宿舎の食堂にはまだ誰も揃っていなかった。ただ、調理場には動く人の姿がある。

音姫は食堂に入りつつ調理場にいる人に話しかけた。

「弟くん、亜紗ちゃん、みんなは?」

「まだ寝てるだろ。ちなみに孝治は先に食った。夜勤明けだしな」

「そっか。ところで、今日の朝ごはんは何かな？」

「ご飯一膳と目玉焼き一個」

周の言葉に音姫が固まる。

小さく首を横に振った音姫は歩きだし無言で厨房を覗くと、そこには黒焦げたものが大量にあった。確実に朝ご飯になるものだった食材の残骸。

『ごめんなさい』

亜紗が申し訳なさそうにスケッチブックを見せながら頭を下げる。

「弟くんが失敗したかと思った」

「いつの話だよ。まあ、今日は諦めてくれ。これはオレが食べるから」

『食べれるの？』

「物理魔術で形質変化させれば食えるものになるはず。多分」

周はおもいっきり亜紗から視線を反らしたまま答える。ただ、いくら物理魔術で形質変化させても黒く焦げた塊はそれ以上にはならないと思う。

『私も食べる』

「ダメだ。これは野郎共の仕事だ。多分、悠聖はそれを知っていて降りてこないけど」

「ちなみに、孝治くんは何を食べたの？」

「某国の軍専用保存食」

音姫も食べたことがあるが、あれは生きるために食べると考えなければ食えたようなものではなかった。その後にファーストフード店に行ったのは音姫だけの秘密である。

少しだけ気まずい空気が流れた後、周は魔術陣を展開した。物理魔術を使用する気だ。

「成功することを祈って」

周が魔術を発動させる。すると、そこには黒いものがなかった。

これで良かったと思える人はこの言葉を見た人だけだろう。何故なら、そこには食材をごちゃ混ぜしてミキサーにかけたようなものが存在していたからだ。

「弟くん」

「はい」

「朝ご飯どうする？」

「軍専用保存食」

「私のあげようか？」

「遠慮する」

周は大きく肩を落とした。

ちなみに、その後、浩平の叫び声が聞こえてきたが、それは別の話である。

「弾膜が弱い！」

音姫は浩平がビリヤードで音姫を狙った弾丸を全て切り払い、刀を鞘に収めた。

浩平はすかさずフレヴァングを構えるが、その喉元にいつの間にか接近している音姫の刀が添えられていた。

「浩平くんは接近戦されないように銃撃の腕を磨かないとだめだね」

「音姫さんの速度がおかしいと思います」

今の音姫の速度は浩平には見えなかった。おそらく、この中で反応できるのは周、由姫、亜紗、孝治の四人くらいだろう。

音姫は小さく息を吐いて刀を鞘に戻す。

「ふう。いい準備運動になった」

「今のが、準備運動？」

あまりのことに愕然とする浩平の肩に孝治の手が添えられた。まるで、諦めろとでも言うように。

ちなみに、浩平は手加減したつもりはない。金色の鬼に放ったような逃げ道をほとんど塞ぐビリヤードをしただけだ。ただ、相手が悪かった。

「弟くん、久しぶりに亜紗ちゃんとコンビを組んで私と模擬戦しない？」

「はあ、もうすぐお昼だろ。オレ達はメニューを終わらしている。まあ、いいけど。亜紗」

『いつでも行ける』

亜紗はそう言いながら持っていたスケッチブックを見学に来ていたリースに渡した。リースはそれをしっかり受け取って小さく頷く。

周はため息をつきながら音姫の正面に立った。

「勝負は動きを止めて武器を突きつけたら終わり。こちらは二人のハンデとして、どちらかがそうされたら終わり、だったよな」

「うん。でも、久しぶりだね。二人と戦うのは」

周がレヴァンティンの柄に手を置く。亜紗は静かに刀を抜いた。

「ああ。オレは亜紗がどこまで成長したかは確認していない。亜紗、手加減するなよ」

亜紗は静かに頷いた。

そして、三人の間に少し冷たい風が流れる。その瞬間、三人は同時に動き出した。いや、周と亜紗の動きに音姫が合わせたと言った方が正しい。周と亜紗は完全に同じタイミングで地面を蹴っている。

二人の内、前に出るのは周だった。

音姫が覚えている記憶とは違う。一年前は亜紗が前に出ていた。だけど、今回は周が前。

音姫と周の二人が同時に動いた。紫電一閃がお互いの刃を滑り、空を断つ。そこに亜紗が飛び込んでくる。

音姫は冷静に体を捻りながら高速で回転する。亜紗の刀を紙一重で見切り、回転した勢いのまま刀を振り下ろす。

白百合流姿返し『雲散霧消』。

亜紗は刀を振った瞬間に後ろに下がったため当たらない。だが、振り終わった音姫は刀を返していた。

白百合流燕返し『雲散霧消・鎧斬り』。

紫電逆閃を放とうとした周のレヴァンティンと目前でぶつかり、レヴァンティンごと周の腕を上に弾く。そこに亜紗が飛び込んできた。懐に入ったまま鞘に収めた刀を振り抜こうとする。だけど、その刀は途中で地面に叩きつけられた。

白百合流姿返し『雲散霧消・兜割り』。

雲散霧消とよく似た技だが、雲散霧消が体を回転しながらその勢いで放つのに対し、これは純粋に力任せに上から下に叩きつける技。

すぐに刀を翻した音姫は亜紗の喉に刀を当てた。

「チェックメイト、かな」

「音姉、大人げない」

周が小さくため息をつく。

雲散霧消も雲散霧消・鎧斬り、雲散霧消・兜割りも全て回転や力のベクトルを操作した純粋な力業であり、このように力業だけで攻めても勝てる剣技が白百合流である。

「強くなったね。本当に。亜紗ちゃんは速度が上がってるよ」

音姫からすれば本当に進歩していた。周も亜紗も。

「一年前のオレ達とは違うからな。まあ、負けたけど」

周はそう言ってレヴァンティンを鞘に収めた。

「なあ、孝治、次元が違うような気がするが」

「あれが、世界トッププレベルだ」

浩平と七葉、そして、リースは完全に音姫達の動きの呆然としていた。

昼ご飯が終わり、音姫は何をしているかというと、周や孝治と一緒に第７６移動隊の勉強を見ていた。それを語るには昼ご飯後の七葉の言葉だった。

「周兄、宿題見てよ」

その言葉に周が小さくため息をつく。

「悠聖に頼め」

「悠兄は馬鹿だから無理」

食後のお茶を飲んでいた浩平がそのお茶を噴き出した。

「けほっ、くっくっ。悠聖、ダサいな」

「てめえ、七葉、こいつに宿題やらせろ！」

「任せろ任せろ。この俺様が全ての問題を解いてやる。どれどれ？」

七葉が持ってきた宿題を浩平は見て青くなる。わからないということらしい。

七葉の宿題を由姫が後ろから覗きこんだ。

「分数の計算式ですね。これくらいなら私ができますよ」

「ねえ、弟くん、めんなの勉強がどれくらい出来るか見た方がいいと思うけど」

その様子を傍観していた音姫が周にそう提案をした。そう、全てはここから始まった。

全員の学力を図った結果が、全員語学と社会以外に関しては年齢に達していない理解度ということが分かった。

一番ましなのが由姫で、大体ちょっと劣っているくらい。酷いのが悠聖と浩平だろう。割り算すらできていない。

「弟くん、どうやったらここまで勉強が出来ない人が出来るのかな？」

「オレに聞くな？　暇があれば勉強すればいいだけの話なのに」

「弟くんは勉強しすぎだと思う。もう少し、気楽にいけばいいのに」

「そうか？　普通だと思うけど」

音姫は小さくため息をついた。そして、みんなの勉強している様子を見る。みんな勉強している。ほとんどが算数を。

「これから毎日した方がいいね」

その言葉に勉強している全員の手が止まった。

「もちろん、学校が始まるまでに」

みんなの額に汗が流れる。それに気づいた音姫は刀を取り出した。

「わかった？」

『イエッサー！』

みんなの返事が真剣になるのは仕方のないことだと思う。

大量の犠牲者を出した勉強会が終わり、音姫は一人で外に出ていた。もちろん、みんなの晩ご飯の食材を買いに行くためだ。本当なら二入上で行った方がいいのだが、屍が大量に出来上がり、それらを蘇生させるために周と孝治は残ったからでもある。

本当の理由は買う量が少ないだけだった。

音姫と通行人がすれ違うたびに通行人は音姫の方を見る。

この辺りでは見かけない顔であるということと、音姫が普通に綺麗だから振り返っているだけである。

第７６移動隊では気にする者はほとんどおらず、浩平以外は全く話をしない。特に周は鈍いとかの次元を超越しているため自宅でも話にすらならない。だから、ある意味無防備でもある。

「あっ、アルちゃんだ」

「その呼び名は止めんか」

アル・アジフを見つけた音姫が声を上げると、アル・アジフが小さくため息をついていた。

音姫がアル・アジフに近づく。

「クロちゃんと一緒じゃないんだね」

「我はクロノス・ガイアといつも一緒にはおらぬ。それより、クロノス・ガイアを知らぬか？　そろそろ晩ご飯じゃからの、呼びに行こうと思って」

「浩平くんのところじゃないの？」

「我もそう思っておる。しかし、あのクロノス・ガイアが男にべったりとはの」

「私も驚いている」

音姫もアル・アジフもリースがどういう人物かは知っている。特に、音姫はリースと仲良くなるまでかなり時間がかかったほどだ。なのに、浩平とは一日で仲良くなったと音姫はリースの口から聞いている。

「おそらく、周が誰かに恋した時、そなたは我と同じセリフを言うじゃろうな」

「弟くんが誰かに恋をする、か。一番考えられないことかも。弟くんは誰かに恋されるタイプだから」

「そうなのか？　よくわからぬが。あれは鈍感すぎるじゃろ」

「鈍感というより、恋を知らないというべきかな。誰かを好きになる感情がわからないと思う」

それが周らしいかもしれないが。

「そうかの。音姫は今から買い物か？」

「うん」

「では、我も手伝おう。どうせ、クロノス・ガイアはあの男から離れたくないじゃろう」

「だね」

音姫とアル・アジフはクスッと笑いあって、同じ方向に歩きだした。

「今日も一日が終わりか」

音姫は宿舎にある自分の部屋の窓から月を見つめつつ小さく息を吐いた。

机の上に広がっているキーボードを操作して展開していた画面を消し、一日の日記を終わらせる。

時刻はすでに十一時。宿舎で起きているのは半分くらいだ。

「後、何日あるかわからないけど、鬼払いを完成させないと」

白百合流姿返し奥義『鬼払い』。

音姫はまだこの技を完成させていない。この技自体が最低三十年と言われるくらいに難易度が高い。だけど、音姫は限定的ながらその技を使える。一番の問題は、

「威力が落ちた鬼払いで鬼を倒せるかどうか。弟くんと亜紗ちゃんなら五分は食い止められると思うけど、私が失敗したら」

音姫は不安なのだ。白百合流を習い始めてから天才だと言われ続け、史上最年少で白百合流の免許皆伝まで漕ぎ着けた。後は、奥義のいくつかを習得することで史上二人目の白百合流の完全制覇を成し遂げる。

そんな音姫でも不安はある。お年頃の女の子でもあるが、音姫は肝心な時に役に立たない。

あの日、周が家からいなくなったときでも、周の心が壊れていても、音姫は助けることができなかった。助けたのは全て由姫だ。だから、

「鬼は、私が払うから。絶対に。歌姫の名にかけて」

夜はだんだん深まっていく。

第三十話　狭間の日常　白百合音姫の場合（後書き）

こんな感じで日常が続きます。
次は都の番です。

第三十一話　狭間の日常　都築都の場合

都の朝は早い。朝の六時には起床して朝ご飯の準備に取りかかる。これが学校のある日なら昼ご飯のお弁当を作ってからだが、最近は朝ご飯の準備をしなければ間に合わない。何故なら、都の家にはアル・アジフ達が泊まっているからだ。

泊まっているのは三人。ここに来た『ＥＳ』のメンバーの中で女性であるアル・アジフとクロノス・ガイア。そして、アル・アジフが保護者の少年が一人。

他の『ＥＳ』メンバーは近くの公民館を借りて暮らしている。

『ＥＳ』が来るまでは都は一人で広大な屋敷に住んでいた。普通に第７６移動隊全員が暮らせる大きさだが、『ＥＳ』は三十人ほど来ているから無理だった。

ちなみに、都の両親は祖父は市役所に近い街の中央に住んでいる。都が落ち着いて暮らしたいと駄々をこねて一人暮らしをしていたのだ。

都が朝ご飯の準備をしていると誰かが台所に入ってくる音がした。

「都さん、手伝いに来ました」

都が振り返ると、そこには少年が一人立っていた。周よりも小さい。おそらく、十歳前後だ。

「ありがとうございます。悠人はお味噌汁を作って貰えますか？

材料は用意してあるので」

「うん。わかった」

悠人は台所の隅に置かれていた足踏み台を持ってきてそこの上に乗りお味噌汁を作っていく。その手際はかなりいい。

「お味噌汁を作り終わったらお皿を用意してもらえますか？　いつもの量で」

「うん。後ちょっとで出来るから。よし、都さん。火をかけたまま置いておきます」

「ありがとうございます」

悠人は台から降りてお皿の準備を始める。

その間に都は卵焼きを作り終わり、冷蔵庫の中から納豆やお茶を取り出した。そのまま手際よく準備を済ませていく。

準備が終わったところで、眠たそうに目をこするアル・アジフと半分寝ているリースがやってきた。

悠人が料理の手際がいい理由がこれだ。二人は朝に弱い。

「では、食べましょうか」

都は自分の席についた。

朝ご飯が終わり、都が後片付けを終わらしたところ、家のチャイムが鳴り響いた。

都は少し駆け足で玄関に向かいドアを開ける。

「よっ」

玄関にいたのは周と浩平に亜紗だった。

「周様と変態さん。とそちらの方は？」

都はまだ亜紗と出会っていない。

「田中亜紗だ。オレと亜紗はアル・アジフに用事があってな。おい、変態。何も言わないのか？」

「反論しようと思ったら、男は全員変態ということに気づいた」

「アル・アジフはどこにいる？」

「スルーすんな！？」

浩平が叫ぶが都は全く気にせずに後ろを見た。

「少し待ってもらえますか。今、呼んで来ますから」

「大丈夫じゃ」

都が奥に向かおうとした時、ちょうど奥からアル・アジフが現れた。後ろにはリースの姿がある。

都がパラッと何かが捲れる音と共に振り返ると、目に涙を溜めた亜紗がスケッチブックを捲っていた。

『久しぶり』

ただ、そう書かれたスケッチブックを見て、都は周を見る。

「周様、今から出かけませんか？」

「今から？　了解。浩平は？」

「リ、クロノス・ガイアと散歩だ。昨日約束していてな。明日ちゃんと訓練に復帰するから、頼む」

浩平が真剣な表情で頭を下げる。それを見た周は小さく苦笑した。実は、周達は本来朝ご飯を食べた後にやる定期訓練をサボってここに来ている。

「仕方ないな。クロノス・ガイア、浩平を頼むぜ」

リースは頷くと靴を履いて浩平の手を取った。そして、浩平を引っ張って外に出て行く。

その姿を見た亜紗は呆然としながらスケッチブックを開けた。

『あの、クロノス・ガイアが』

「いい方向には変わっておる。まあ、不満じゃが」

「浩平は悪い奴じゃないぞ。馬鹿で変態かつ紳士だ」

「周様。確かに悪い人ではありませんが、変態で紳士は合わないのでは？」

都の疑問に周は苦笑する。そして、都に向かって周は手を出した。

「まあ、悪い奴じゃないってことを言いたかったからな。都、行こうぜ」

「そうですね。亜紗さん、ゆっくりしていってください」

『ありがとう』

都は靴を履いて周と一緒に外に出た。

狭間市の中央にはたくさんの店がある。学校も近いため食べる場所には事欠かない。今は春休み中なので学生が帰省する数も多く、閉まっている店もあるが、その中のとある一軒に都と周は入って行った。

デカ盛り専門店『豚の腹』。
紹介したのは意外なことに都だ。周は最初店を間違えたかと思ってもう一度聞いていたけど。
周はその店に入ってから店内を見渡した。
「へぇ、なかなかいい店だな」
「私のオススメですから。ちなみにオススメはトンカツ定食です」
ちなみに料金は１２００円。高いように見えるがデカ盛りなので結局は安くなる。
都と周は二人並んでカウンター席に座った。
「いらっしゃい。都ちゃんは彼氏連れかい？」
座ると共にカウンターの向こう側にいる店主らしき人が都に話しかける。都が笑って返すと店主の顔がだらしなく笑った。
「違います。海道周様です。新しくやって来た『ＧＦ』の隊長です」
その言葉に店主の顔つきが変わる。
「ほう。お前が？」
「第７６移動隊隊長海道周です」

「小さいのに隊長とは。よし、注文は何にする？　今ならちょっとサービスするぜ」

「では、私はいつものトンカツ定食を」

周はメニューを見て、そして、小さく頷いた。

「男のチャレンジメニューを」

その言葉に店の空気が変わる。

都は知っている。男のチャレンジメニューは究極のメニューであることを。そして、挑戦した人が食べ過ぎで倒れたことがあることを。

「周様、それは」

「オレは並みの量じゃギブアップしないぜ」

ニヤリと笑みを浮かべながら周は店主に言う。

店主もニヤリと笑みを浮かべ返した。

「サービスしてやるよ」

男のチャレンジメニュー。￥３０００。※トンカツ定食、ハンバーグ定食の二つを二人前ずつ入れたもの。一人で三十分以内に完食した方はタダです。

「周様はどういう胃袋をしているのですか？」

周は男のチャレンジメニューを食べた。チャレンジメニューというよりむちゃくちゃなものだったが。

トンカツ定食もハンバーグ定食も、他の定食屋と比べて二～三倍ほど入っている。それが合計四個。さらにはサービスでご飯が倍だった。つまり、わけのわからない量を食べたというわけだ。

「いやー、食べた食べた。ありがとうな。紹介してくれて」

「もう、いいです。周様はこれからどうしますか？」

「そうだな。もうちょっとぶらぶらしないとな。夕方くらいまで」

「そうですね。あれ？　琴美？」

都は行こうとした道にいた琴美を見つけた。周と顔を見合わせて琴美に近づく。

「琴美？」

「都、に周？　デート？」

「違います」

都は真っ赤な顔をして否定をするが、この場合はデートが正しいと

思える。街をぶらぶらして昼ご飯を食べてまた街をぶらぶら。
都はそれに気づいているがデートとは言わない。
「そう。ちなみに私は暇だから街を回っているだけよ」
「なら、私達と一緒に回りませんか？」
「そうね、と言いたいところだけど、後一時間したら神社に戻らないといけないのよ。舞の練習があるから」
琴美は楽しそうにそう言う。それを見た周は小さく笑った。
「止めないで良かっただろ」
「頑張って良かったわ。練習は辛いけど。都、暇なら今から私に舞を教えてくれないかしら？」
「周様、いいですか？」
「都の好きにしたらいいさ」
「ありがとうございます。琴美、行きましょう。場所は神社でいいですね」
神社の境内で都は錫杖を手に舞っていた。

静かに、だけど、優雅に、前後左右に動いていく。その動きは子供の頃から練習していたというのがよくわかる動きだった。

その様子を琴美と周は見ている。

時々、錫杖をシャランと鳴らしながら都は動く。そして、錫杖で地面を叩くと同時に舞は終わった。

「さすが都ね」

「昔から練習していましたから。周様、どうでした？」

「舞というより錬舞かと思った」

舞いながら戦う技術。それが錬舞だ。だけど、都は首を横に振る。

「そこまで早くありません」

「私からすれば十分に早いから」

「琴美は少し気が早いのです。琴美がやって下さい」

都はそう言って錫杖を琴美に渡した。琴美は錫杖を受け取って都が踊っていた場所に向かう。

小さく息を吸い、動き出す琴美。

優雅さはあまりなく、静かというより激しさが目立ち、錫杖がよくシャランと音を立てる。だけど、舞に対する思いは本物で真剣にや

っていることだけはよく伝わってくる。

シャランと音を立て錫杖が動く。まだ、ぎこちない部分は多いが、十分なレベルの舞だった。

そして、舞が終わる。

都と周は琴美に向かって拍手をしていた。

「私はそこまで上手くはないわよ」

「確かに、春祭りでする分には不十分ですが、琴美の今の全力は素晴らしいものでした。周様もそう思いましたよね？」

「ああ。ただ、琴美は錫杖を鳴らすことを気にしすぎていないか？　だから、静かを鳴らす部分で動きを早くしてどんどん速度が上がっていく。むしろ、ゆっくり動かしたらどうだ？　動作と動作の間に間を開けるとか」

都は周のアドバイスをポカンとしながら聞いていた。

それは全て都が言おうとしたアドバイスの内容であったからだ。琴美は真剣にそれを聞いている。

都は少しだけ、下に俯いた。

「周様はさすがですね」

周囲を夕焼けが包む中、神社からの帰り道で都は周に話しかけた。

「私が言おうとしたこと全てが言われました」

あの後も周にアドバイスを全て言われた。

「さすがです」

「まあ、オレの錬舞の知識からアドバイスしただけだしな。それに、細かいところを都は見ていただろ」

「ですが」

周は都に向かって笑いかけた。

「オレにしか出来ないことがあるように、都にしか出来ないこともある。あまりくよくよするな」

「そういうものですか？」

「そういうものだ」

都は小さく溜息をついた。それから周を見る。

「羨ましいです。その考え方が」

「都は都らしくいけばいいさ。オレの考え方なんてなかなか出来な

い」

都はそれを聞いて小さく頷いた。

周は確かに凄いけど、それは周だからこそだ。都が真似をしてもそれは違うものになる。

「周様は、今が楽しいですか？」

「楽しい」

周は即答していた。迷うことなく。

「今までこういう風に過ごしたことはなかったからな。ありがとう」

周の言葉に都の顔は真っ赤に染まった。

「あうあう」

「どうかしたか？」

「い、いえ。何も」

都は慌てて下を向く。そして、嬉しそうに笑みを浮かべた。

月を見ながら都は今まで書いていた今日の日記を閉じた。そして、

日記を机の奥底にしまう。

「明日は、用事もありませんし、周様達の様子を身に行きましょうか」

周に会うことを考えただけで顔がにやける。

都は自分のこの感情に気づいていた。

「もう、好意だけでは我慢は無理ですね」

周が憧れの相手から真剣に恋する相手に変わったことを。

「周様」

夜はだんだん深まっていく。

第三十一話　狭間の日常　都築都の場合（後書き）

次はクロノス・ガイアことリースです。

第三十二話　狭間の日常　リース・リンリーエルの場合（前書き）

あくまで普通の日常ではなく鬼と戦うまでの間の日常を書いたものです。書いていたら普通の日常じゃなくなったので補足を。

第三十二話　狭間の日常　リース・リンリーエルの場合

リースの朝はいつもなら遅い。『ＥＳ』穏健派のアジトではいつも十時を越えなければ起きないほどだ。だけど、今日も起こされる。

布団から落とされて。

「アル」

「不満があるなら早く起きるのじゃ。もう七時を越えたところじゃ」

「わかった」

アル・アジフは眠そうに目をこすりながらリースを布団の上から叩き落として起こしていた。

でも、リースは不満を口にしない。朝早く起きないと昼まで部屋にいるから。

眠い気持ちを押さえながら、リースは食卓に向かおうとする。だけど、リースは机の上に置いていた開いたままの本を思い出し、すぐに本を閉じた。

その本に書かれている文字はリース以外、人間には読むことの出来ない文字。

「また、勉強しておったのか？」

「違う。探していた。鬼との戦いに使えるものを」

リースは浩平と悠聖が戦っていた現場に周より早く到着していた。
だから、鬼の速度を見ていたのだ。
リースが使うタイプでは通用しにくいことに。
「我が狭間の力を利用する方法を探しておる。そこまで詰めなくても」
「足手まといになりたくないから」
「そなたほどの実力があれば十分じゃと思うんじゃがの。そうじゃ、周に見てもらえばいいのではないか？」
「海道周に？」
リースはどうしてそこで海道周の名前が出てくるかわからなかった。
でも、アル・アジフは確かな確信を持って頷いている。
「あやつなら、そなたの実力を見極めれる。そう思っておるのじゃ」
「私の実力を」
その言葉にリースはゆっくりと、だけど確かに頷いていた。

「オレと模擬戦をしてくれ？」

第７６移動隊の訓練が始まってから毎日行っていたリースは訓練が始まってから初めて口を出した。

周にいきなり模擬戦をして欲しいと言ったのだ。

周は驚いたような顔をして瞬き、浩平を見た。

「浩平じゃなくて？」

「そう」

「なんでまた」

「私の実力を見て欲しい。私が覚えている限りではあなたが一番妥当」

リースの表情は真剣で周はため息をつきながらも頷いた。

「わかった。魔術師と相手だとやりにくいんだよな。こっちにいる魔術師はほとんど両様だし」

確かに、リースの目から見ても純粋な魔術師は存在していないように見える。ただ、周と孝治は有名な魔術師でもある。

リースは浩平を見た。浩平は手を振ってくれる。

「本気で行く」

「本気って。まっ、いっか。音姉、結界を頼める？」

「うん。クロちゃんとの模擬戦なら弟くんはあれを使うよね？」

その言葉にリースは少しだけ目を細めた。

「ああ。さて、すぐでいいよな」

「準備運動は？」

「戦場ではいきなりエンカウントすることがある。そうだろ？」

「わかった」

リースは頷いて周から距離をとるように歩く。周はレヴァンティンを鞘から抜いた。

「合図は音姉が頼む。さて、やりますか」

リースは身構えた。周が最後の言葉と共に大量の魔術を展開したのを感じ取ったからだ。一つ一つは大したことのないレベルだが、それがリースの眼には二十の数だけ展開されていた。

リースの額に汗が流れる。

「どうした？　いきなり疲れたか？」

「大丈夫」

「じゃ、行くよ」

その言葉と共に音姫がリボンを解いた。そして、一言だけ。

「結」

たったそれだけで結界が展開されたことにリースは気付いた。

「二人共、準備はいい？」

リースは自分の考えが甘かったことを知る。第７６移動隊はちゃんとした魔術師がいないように見えるがそれは違う。魔術も使え、近接戦闘も可能なメンバーばかりということだ。

周がさっき言った両様ということか。

「スタート！」

その瞬間、リースの周囲に大量の本が舞っていた。周はレヴァンティンを振り、魔術を放つ。種類は炎。

対するリースは舞う本を一つ掴み、開く。開くと同時に残る全ての本が消える。ページを触り、一気に開いた瞬間、リースの周囲に文字が舞う。

「エルセル・ディオ・グイン・ラルフ」

周ですら聞いたことのない言葉がリースの口から洩れると同時に凄まじい量の水流が魔術陣とよく似たものから放たれた。魔術陣とは違う、文字だけの陣から。

周はすかさず横に飛びながらストックしていた全ての魔術を打ち切る。

「魔法、いや、竜言語魔法か」

「そう」

人が読める文字ではない。だが、その文字を理解した時、自然に干渉可能な魔法が使える。

周は小さく笑った。

「へえ、クロノス・ガイア。『ＥＳ』の中でも最も不明な点が多い幹部だとは知っていたけど、そういう理由か」

「共同で戦う以上、懐は明かしておく」

「まあ、浩平は知っていたようだけどな」

リースが竜言語魔法を放った瞬間に、その場にいた誰もが驚いていたように見えた。だが、驚いていないのは浩平だけ。リースは頷く。

「浩平には隠したくない」

「お熱いことで。じゃ、本気で行きますか」

周がそう言った瞬間、リースの視界から周が消えた。

背後に気配を感じるとともにリースが後ろに向かって腕を振る。その腕と連動するように一直線に水が立ち上った。

ちょうど直線状にいた周は横に避ける。

リースはまた本を取り出して開く。

「エルセル・ディオ・グイン・ラルフ」

「弱点はそれか」

周が一気に距離を詰める。だが、リースの方が早い。

リースが選択したのは炎の魔術。しかも、特大の炎が渦を巻いて相手に迫る魔法。

この距離では避けられない。リースがそう確信した瞬間、放たれた炎が消滅した。いや、周によって握るつぶされた。周が握るレヴァンティンには炎が立ち上っている。

術者殺し（マナシンク）。

噂でしか効かない世界トップクラスの人が扱う魔術に対する最大の天敵。

簡単に言うなら相手の魔力を掌握して自分のものとして扱う技だ。

リースは慌てて防御魔法を展開する。だが、その魔法はレヴァンティンによって簡単に切り裂かれた。

炎が消えたレヴァンティンがリースの目前に突きつけられる。

「チェックメイト。まあ、相手が悪かったというべきか」

周はレヴァンティンを戻しながらそう言った。

「いや、頑張ったと思うぜ。まじで。周だって時々焦っていただろ。俺も見ていたけどあいつがあそこまで焦っていたのは初めてだ。予想外だったって顔」

「もういい」

模擬戦が終わり、その後の訓練で周からアドバイスをもらった後の帰り道、リースは浩平と一緒に都の家に向かっていた。

浩平は必死でリースを元気づけようとするが、リースは俯いたまま同じ言葉を繰り返している。

リースが周から指摘されたことは二つ。

一つは魔法の切り替えに時間がかかること。属性を切り替える場合はいちいち魔法書を取り直さないといけず、それに時間がかかる。特に接近戦に持ち込まれていたなら致命傷。

もう一つが魔法を放つための詠唱だ。

エルセル・ディオ・グイン・ラルフ。

竜言語魔法の言葉で直訳すれば、『私は力の使用を望む』。
本来の意味は誰にもわからない。リースにさえ。

「私は、欠陥品だ」

「リース？」

「みんなからクロノス・ガイアの名前を奪って、みんなを不幸にして。それでも私の実力はなくて。私は、クロノス・ガイアとして欠陥品だ」

今までは竜言語魔法という魔術とは体系の違うもので戦っていた。
それだけで優位に立てた。強い気でいられた。

でも、違った。

世界の上位に食い込むことすらできない。弱点を抱えた欠陥品。

「こんなのなら、私は、戦わない方がいい」

「そうかもしれないな」

浩平の言葉にリースは顔を上げた。

「リースみたいな女の子は戦わない方がいいと思う。お前は幸せに暮らしていいはずだ」

「浩平は？」

「俺か？　俺は戦う。これでも狙撃の天才だからな。第７６移動隊という天才の巣窟の中じゃ埋もれるけど、俺は戦う力があるから戦うんだ」

リースは俯いた。そんな浩平がリースには羨ましい。

「力があるから戦う。じゃ、どうして力を手に入れようとしたの？　私には」

「そうだな。リースには守りたいものがあるか？」

浩平の言葉にリースは頷いた。

リースのはたくさんある。リースを拾ってくれたアル・アジフ。リースと幼馴染の悠人。アジトの近くにいる友達。『ＥＳ』の仲間。そして、浩平。

「俺は昔、守れなかったんだ。幼馴染だけどな。その子が虐められていて、自分が虐められるのが怖くて逃げた」

「その子は？」

「元気に暮らしている。俺が逃げたことを攻めようとしなくて。俺は思ったんだ。強くなろうって。守りたい人を守れる強さを手に入れようって。自分が安心できるように」

「自分のために」

「ああ。周も孝治も悠聖も同じだろうな。みんな、自分の力に不安

なんだ。だから、強くなろうとする。安心しようとする。今を生きているから。俺が俺でいるために。まあ、力はいまいちだけどな」

その言葉にリースは慌てて首を横に振った。

浩平の技術は一級品だ。そのセンスは相手を動くルートを限定させる。そして、限定させて狙い撃つ。時位は動くことさえもできない。

「ちょっと待てよ」

浩平も同じように考えていたのかリースの方をむく。リースは頷いた。

「私と浩平が居力すれば」

「結構鉄壁になるよな？　よし、周に報告しに行ってくる」

「ちょっと待って」

走りだそうとして浩平の腕をリースが掴んだ。

「送ってから」

「あっ、悪い」

「ううん。私も気持ちはわかるから」

そう言ってリースは浩平に向かって笑みを浮かべた。

「ふむ、確かにそれもありじゃな」

リースが家に着いた瞬間、家にいたアル・アジフにそのことについて尋ねてみた。

「リースの弱点を周はよく理解しているようじゃし、向こうは承認するじゃろうな」

「だから、私は第７６移動隊に移りたい」

「しかし、それは無しじゃ。そなたもわかっておるじゃろ。自分の名前の意味を」

「だったら」

リースはいつになく真剣で、アル・アジフが知るリースとは違うような感覚があった。

「だったら、私がその名前で戦わないといけない理由を教えて。私は、クロノス・ガイアだけど、リース・リンリーエルだから。自分らしく生きたらだめなの？」

「そなた」

「私はクロノス・ガイアだということは分かっている。でも、私が生きたいようにしたらダメなの？」

リースの言葉にアル・アジフは小さくため息をついた。

「そなた、『ＥＳ』を辞めるというのじゃな」

「うん。『ＥＳ』の居場所は本当に居心地がいい。こんな私でも楽しく暮らせる。でも、私は、幸せに暮らしたい」

「そうか。じゃが、一つだけ言っておく」

アル・アジフは手元に魔術書を呼び出した。リースの体がびくっとなる。

「第７６移動隊にそなたを貸し出す。期限は無期限。我の融和策の一つとして皆には説明する」

「アル」

「そなたがクロノス・ガイアであることを辞めることは許さぬ。たくさんの人がクロノス・ガイアを目指したのは知っているじゃろ」

リースは頷いた。そんなことはリースが一番知っている。竜言語魔法が使えるからいつの間にかクロノス・ガイア候補筆頭に押し上げられた。

クロノス・ガイアに選ばれた日はみんなが泣いている場面を見た。強くあらねばと思った。

「私はまだまだ強くなれる」

「そうじゃな。いつか、我ら『ＥＳ』と『ＧＦ』が肩を並べられる時が来るように我は頑張ろう。そなたは『ＧＦ』から知識を学び、強くなるのじゃぞ」

「うん。でも、一ついい？」

リースは疑問に思ったことを口にした。

「会えなくなるわけじゃないと思う」

「そうじゃな。いつでも帰ってきてもよいぞ」

「うん」

空に月が昇る頃、リースは荷づくりの準備をしていた。明日朝一番に向こうの宿舎に行くからだ。ちなみに周は快く承諾してくれた。第７６移動隊としても純粋な魔術師は欲しかったのだろう。

リースは窓から空を見上げた。

「私は強くなる。誰かのためじゃなくて、自分のために。自分が守りたいから」

自分がのせいで候補から落とした人達のためにではなく、自分のために強くなる。

リースは小さく笑みを浮かべながら布団に飛び込んだ。

夜はだんだん深まっていく。

第三十二話　狭間の日常　リース・リンリーエルの場合（後書き）

次は亜紗の番です。

第三十三話　狭間の日常　田中亜紗の場合

亜紗の朝は早い。毎朝四時に起きる。起きて犯罪テクを使い周の部屋に潜り込む。何かいろいろと間違っているが周と一緒にいる時は毎日そうしている。

もちろん、今日の朝も。

入り口の鍵をピッキングで開けてからゆっくり音を立てないようにドアを開ける。そして、部屋の中を覗き込み、

「いい加減にしろ」

首根っこを周によって掴まれた。そして、猫のように持ちあげられる。

『起きてた？』

「今日はクロノス・ガイアが来るだろ。だからだよ」

『朝四時だけど？』

「そのセリフをそのまま返すからな。で、廊下の向こうにいる由姫も出てこい」

その言葉と共に周が亜紗を離した。亜紗は慌てて廊下の方を見るが、そこに由姫の姿はない。顔を戻すとそこにはガチャっと閉まるドアがあった。ついでにチェーンもかけられる音がする。

亜紗は不満そうにドアを叩いた。

『これから時雨にいろいろ書類を送らないと駄目なんだよ。駐在所の方にみんないるからそっちに迎え』

亜紗は周の言ったみんなという言葉に首をかしげつつ駐在所に向かって歩き出した。

宿舎からの直通のドアを開けると、そこには周の言ったようにみんないた。周を除く全員が。

「あれ？　亜紗ちゃん、起きたんだ。うるさかった？」

一番近くにいた音姫が亜紗に話しかける。ちなみに、みんな駐在所でいろいろな仕事をしていた。

孝治と悠聖は顔を寄せ合いキーボードに手を走らせている。由姫は必死に手書きで書類を書いていた。光と七葉は書類を持って相談している。浩平は記憶デバイスと向かい合って眉をひそめていた。

『緊急の仕事？』

「クロちゃんの移動の書類作成。いろいろな場所に連絡しないといけないからみんなで総出でね。亜紗ちゃんは早くに寝たみたいだから伝えなかったけど」

『手伝うのに』

「弟くんが亜紗ちゃんは四時頃に起きると言っていたから大丈夫だって。浩平くんと代わってくれる？　まだ眠れていないらしいから」

亜紗はこくりと頷いて浩平にかけ寄った。浩平は小さくため息をつく。

「やっぱり難しいな。送らなくちゃいけない部署が多すぎだぜ」

『代わる』

亜紗が浩平に見えるようにスケッチブックを差し出した。

それを見た浩平は驚いたような顔になって、

「亜紗ちゃんって俺より馬鹿じゃなかったのか？」

亜紗は無言で右ストレートを浩平の顔面に叩きこんだ。

部隊の移動にはたくさんの書類を必要とする。事後承諾は可能だが手続きがかなり面倒だ。だけど、今回は『ＥＳ』からのメンバーの貸し出しということで処理をしている。もちろん、手続きはさらに面倒になる。

お互いの隊長の証明書はもちろんのこと、トップの承認書や戦闘ランクＳ以上の承認書、さらには第７６移動隊の上司である時雨の承認が必要などかなりの作業を必要とする。

一応、関係する部隊や部署にもその旨の連絡をしなければならず、リースを部隊に迎え入れるためにみんなは書類の作成や、書類の送付などを行っていた。

『もし、全ての作業が終わっても、大丈夫かな？』

そんな中、亜紗の隣で作業を始めた音姫に亜紗はスケッチブックを見せた。

「大丈夫とはいかないと思う。『ＥＳ』に良い感情を抱かない人はたくさんいるし、『ＧＦ』と『ＥＳ』が協力することに否定的な人もいる。世論もうるさいと思う。だけど、クロちゃんはここに来てもいいと思う」

『どうして？』

「クロちゃん自身が望んだから。今まで、クロちゃんは期待されて戦っていたから。重圧や嫉妬、いろいろなものを背負って機械のように戦っていた。亜紗ちゃんも知っているよね。クロちゃんがあまり感情を表に出さないことを」

それは亜紗はよく知っている。

亜紗が初めてリースと出会ったのは周に助けられて一年後ほど。その時は。クロノス・ガイアの名前はもらっていなかったただの一般人。襲われそうだった彼女を亜紗が救ったのが始まりだった。

そこからお互いに文通を始め、時々は二人出会うようになった。でも、リースは驚くほど感情を表に出さない。昔の亜紗自信と同じように。

「それなのに、浩平くんと出会ってからはよく笑うようになったって、アルちゃんは嬉しそうだった。私が弟くんに対することと一緒で、アルちゃんもあまり出来ていなかったから」

『私は、周さんが最初からいてくれた。周さんが私に感情を戻してくれた。だから、周さんの隣に立とうと思った。周さんを助けたいから。周さんと一緒にいたいから。でも、難しい』

「そうだね。由姫ちゃんがいるし」

亜紗の一番の問題だ。

周はシスコンであり、由姫はブラコン。そこに亜紗が入ってくる。泥沼の三角関係と言ったところか。

「亜紗ちゃんは亜紗ちゃんで弟くんに思いを告げればいいと思うよ。弟くんは鈍感だけど」

『鈍感で済ませたらダメだと思う。私の推測だけど、周さんは恋することを恐れているんじゃないかな？』

「理由は、わかるよ。多分、そうかもしれない」

大好きだった両親と妹を周は巻き込んだ。それがわかっているからこそ、恋することを恐れている。

『多分、私や由姫じゃダメだと思う。よっぽどのことをしない限り。もしかしたら、都さんがどうにかするかも』

「ふふっ、亜紗ちゃん自身は何もしないの？」

『私は、今が幸せだから。今は由姫も恐れていると思う。周さんに思いを告げて、今の関係が壊れてしまうのも』

「私達はまだ大人じゃないから失うことを恐れる。そうじゃないかな？　何かを決めるということは何かを失うということ。でも、そんな決断を六歳の言葉はしないよね。普通は」

音姫はどこか寂しそうに呟いた。

亜紗は無言でキーボードを叩き、手を止める。

『できた』

「どれどれ？　うん。これなら大丈夫かな」

『良かった』

亜紗が時計を見るともうすぐ朝の六時だった。ちなみに駐在所で仕事をしていた面々は孝治と浩平を除いて机に突っ伏している。

「みんなお疲れだね。亜紗ちゃんは大丈夫？」

『大丈夫。毎朝四時に起きているから』

「ほどほどにね」

音姫は亜紗が朝早く起きて何をしているか知っている。でも、口には出さない。由姫がしている時もあるから。

「あっ、リースちゃんだ」

ガタッと音を立てながら浩平が立ち上がった。それを見た亜紗がクスッと笑う。

『私、周さんに行ってくる』

「それなら大丈夫。今、来たから」

音姫がそう言い終わると同時に周が駐在所に入ってくる。周が入ってくると同時に浩平が外に出た。

「死屍累々だな。作業は？」

『今、終わった。一応、確認して欲しい。後で』

亜紗はそう言って立ち上がり玄関に向かう。周も音姫もその後に続いた。

玄関を出ると、そこには向かい合う二人の姿が。

「浩平は、私のことが嫌い？」

「嫌いってわけじゃないけど、まだ早くないか？」

「大丈夫」

何があったかわからない。でも、亜紗はスケッチブックを開いた。

『修羅場？』

「みたいだな。大方、クロノス・ガイアが告白して、浩平がびびって答えを渋っているんだろ。浩平！」

周はニヤリと笑みを浮かべて浩平の名前を呼んだ。

「お前には似合わないと思うぜ」

「なっ。俺だってリ、クロノス・ガイアは俺にとっては勿体無いぐらい可愛いけどな、俺だって考えているんだ。どうやればこいつと一緒にいられるか。お前には言われたくないわ！」

「それがお前の本心か？　なら、それを伝えろよ。一緒にいたいって」

周がそう言った瞬間、浩平とリースの顔が真っ赤に染まった。これを見越して周は浩平を煽ったのだ。

「ったく、不器用なんだよ」

「お前もな」

「自覚してる」

孝治の言葉に周は肩をすくめて答える。

亜紗は振り返ることなく二人を見つめた。

「あのさ、こんな俺でいいか？　馬鹿だし、周や孝治よりもカッコ良くないし」

「私は、浩平がいい」

「そっか。こんな俺でいいなら、俺と付き合って下さい」

「うん。私こそ、お願いします」

あまりの初々しさに亜紗達は少しだけ赤くなりながら小さく拍手をする。

リースは笑みを浮かべて浩平に近づき、亜紗達の方を向いた。

「『ＥＳ』穏健派から来た、リース・リンリーエルです。えっと、よろしく、お願いします」

「第７６移動隊を代表して第７６移動隊隊長海道周が歓迎する。ようこそ、リース」

『これからよろしく』

「クロちゃんじゃなくてリースちゃんって呼ぶから」

「よろしく頼む」

リースはそんな亜紗達に笑みを浮かべながら頭を下げた。

「ふむ、無事にやっておるか」

その日の夕方、亜紗はアル・アジフのところにやって来ていた。

ちゃんと到着したということと、しっかりやっているということを教えるために。

『うん。リースは頑張ってる』

「まさか、リースがクロノス・ガイアと自己紹介しないとはの。まあ、あの外見じゃし、名乗らなければわからぬか」

『アルさんは大丈夫？　『ＥＳ』過激派への説明』

亜紗の心配する様子にアル・アジフは小さく笑みを浮かべた。

「我を誰だと思っておる。過激派には何も言わせんさ。竜言語魔法という体系の違うものを我に押し付けてきた以上、何も言わさぬ。それに、リースはそなたらといれば変わるからの。そなたと同じように」

『うん。変われるよ、絶対に。機械のような私を周さんは助けてくれた。面倒を見てくれた。リースも、浩平が必ず幸せにする』

「我の心配事はリースが不幸せになることじゃ。じゃが、あやつなら大丈夫じゃな」

『何か知ってるの？』

アル・アジフは小さく笑みを浮かべながら頷いた。

「我の知り合いにあやつの幼なじみがいるのじゃ。そやつから話は聞いておる。それにしても、リースに先を越されるとはの」

『アルさんは恋人がいない歴何年？』

アル・アジフは無言で亜紗の頭に拳骨を落とした。亜紗は落とされた場所を手で押さえる。

「自業自得じゃ。さて、亜紗、時間は大丈夫かの？」

『アルさんはリースがいなくなって寂しい？』

その言葉にアル・アジフは首を横に振った。

「我には悠人や都がおる。寂しくはないが、暇になったら来るようにリースに伝えてもらえぬか？」

その言葉に亜紗は笑って頷いた。

満月の月を見ながら亜紗は屋根の上に寝転がった。その横には周の姿がある。

「珍しいな。オレじゃなく亜紗が先に寝転がるなんて」

『星が綺麗だから』

「賛成だ」

周も寝転がる。

二人は星空を無言で見上げながら息を吐く。

『周さんは、今が好き？』

「ああ。今はまだ、みんなで楽しくいられる。これから何年みんなと一緒にいられるかわからないけど、オレは長くいたい」

『私も今が好き。でも、前に進みたい』

亜紗は体を起こした。周に言うために。

『周さん、私は』

「今は、まだだ」

亜紗の言葉を予想していたのか、周が亜沙の言葉を塞ぐ。

「自分でも気持ちが纏まらない。この感情がよくわからないんだ。だから、待ってくれないか？」

『わかった。でも、長くは待てない』

「助かる」

周は小さく息を吐いた。亜沙はそんな周の顔を真っ直ぐ見つめる。

「オレの顔を見て楽しいか？」

『うん。周さんの顔は可愛いから』

「なんじゃそりゃ」

夜はだんだん深まっていく。

第三十三話　狭間の日常　田中亜紗の場合（後書き）

次の狭間の日常は周視点に戻ります。

第三十四話　フュリアス　前編（前書き）

狭間の日常ですが、タイトルは違います。ちょっと長くなりそうなので前後に分けました。

第三十四話　フュリアス　前編

オレの朝は人間全体から見て平均的だと思う。あくまで平均的だ。いつも六時には目が覚める。年の割には早いかもしれないがこれがオレだ。

目が覚めて最初に飛び込んでくる光景が亜紗の顔だった。

「相変わらず寝顔を見るのが好きだよな」

『周さんの寝顔は可愛いから』

「はいはい。それは良かったな」

『本当なのに』

亜紗は不服そうに頬を膨らませる。というか、そんなことの為に毎回毎回犯罪テクニックを使って忍び込んでくるなよ。

オレは小さく溜息をつきながら起き上がった。

「亜紗、今日もか？」

『うん。料理、教えて』

「了解」

オレは腕を大きく伸ばすとそのまま亜紗を部屋の外に押しやった。

「着替えるから出とけ」

『手伝う』

「出てろ」

オレはドアを閉じて小さく溜息をついた。

狭間に来てから亜紗にオレは料理を教えている。料理がう上手くなりたいと言っていたが、実際は料理が出来るメンバーが少ないからだろうな。

第７６移動隊で料理が出来るのはオレと由姫、そして、浩平だ。浩平が意外に思うが、狙撃手（スナイパー）として単独行動は当たり前なので、保存食に頼らず自分で食べ物を調理する方法を身につけたらしい。ちなみにリースもそのことは驚いていた。

ついでに言うが、殺人料理を作るのが音姉と中村。この二人が厨房に入ることをオレ達は許していない。

朝ご飯の準備に亜紗は米を研いでいた。オレはそれを横から見ているだけだ。

最初は悲惨だった。米を研ぐように言ったら研磨石を取り出した瞬間にオレは大きなため息をついたほどだ。

今は普通に研いでいる。

米を研ぎ終わり、亜紗は炊飯器にセットをした後、エプロンで手を拭いた。

『どうだった？』

振り返りながらスケッチブックをオレに見せてくる。

「米を研ぐぐらい出来て当たり前だ。次は卵焼きでも」

「兄さん、亜紗さん、おはようございます」

作ろうかと言おうとしたら厨房に由姫が入ってきた。由姫にしては珍しく早起きだ。何かあったのか？

「どうかしたのか？」

「目が覚めたので兄さんのところに。手伝いましょうか？」

『私がやる』

かなり不満そうに由姫を睨みつける亜紗はスケッチブックを捲って見せてくる。オレは小さくため息をつきながら由姫を見た。

「亜紗の練習にならんだろ。というか、由姫の方が料理は上手いから亜紗は見てもらえ。オレはちょっくら時雨に定期連絡を入れる」

『わかった』

かなり不満そうな亜紗の頭を撫でてオレは厨房からでる。
ポケットからレヴァンティンを取り出して通信機器につなげた。
『いつもの時刻より二時間ほど早くないか？』
「暇になったんだよ」
オレは通信機器から聞こえてくる時雨の声に小さくため息をついた。
「昨日は異常なし。リースは上手くやってる」
『まさか、お前らがそんなことをするとはな。クロノス・ガイアを『ＧＦ』に引き込めたらかなり楽になるんだが』
「引き込んでどうする。リースはクロノス・ガイアの名前という重圧を背負っている。背負いながら戦っていたんだ。今更、その名前を捨てることはしない。アル・アジフはさせないだろうし」
『だろうな。一応、評議会からの回答を聞きたいか？』
「むしろ、予想したい」
『わかった』
オレは少しだけ考えながら小さく頷いて答えを出す。
「リースを人質としろ。『ＧＦ』本部に移送しろ。認められない場合は許可できない」

『正解。よくわかったな』

「あの利権目当ての爺共は自分達の安泰と『ＧＦ』の繁栄しか考えていないからな。『ＥＳ』自体を歯がゆく思っていそうだし」

『実際、歯がゆく思っているだろうな。純度の高い鉄を作るためには希少物質（レアメタル）の石油が必要だ。石油の産出はほとんどが中東だからな。手に入れようと思ったら中東の国と『ＥＳ』からの関税がかかる』

「自分達の楽園を守るための箱舟作成のために純度の鉄を集めているって噂は本当だったのか」

『いや、ちょっと違う』

時雨の声に少し真剣なものが混じる。こういう時は少し厄介な事案だ。特に、今の立場のオレからすれば。

時雨は少しだけ間を開けて言葉を発する。

『フュリアスという言葉を聞いたことはないか？』

「フュリアス？　英語で怒り狂うとかだよな。それがどうかしたのか？」

『不確定情報なんだが、評議会がフュリアスと呼ばれる人型機動兵器を開発しているらしいんだ』

「パワードスーツみたいなものか？」

よく災害現場で使われる常人の力を数倍にしたものが扱える強化装甲だ。防御力も上がるため、最初は戦場に投入することを考えて作られたのだが、あまりの機動性の悪さに没になった。だが、災害現場ではその力と、機密性の高さ、さらには、大きさの割には重さがほとんどないところに焦点が当てられめでたく採用となった。ちなみに、全世界でパワードスーツは消防隊の愛用の品となっている。

それを開発しているとでもいうのだろうか？

『いや、違う。そんな簡単なものじゃない。全長は２０ｍほどだ』

「理論的に作ることは可能だな。だけど、それを動かすのは・・・精神感応か」

精神感応は最近の医療現場で使われだしたもので、言葉の離せない患者との意思疎通が可能となる。だが、それは戦場ではすでに使われている技術。

それを上手く利用すれば手足のように動かすことができる。もちろん、これも理論上。

ただ、精神感応が一番発達しているのは軍事大国でも『ＧＦ』でもない。『ＥＳ』だ。

「『ＥＳ』の作った兵器を流用か？」

『可能性としては考えられるな。アル・アジフに尋ねてくれないか？　もちろん、尋ねるのはお前一人だ。答えは隠してもいい』

「わかった。ちょっくら聞いてみる」

オレは通信機器を外して小さく息を吐いた。

パワードスーツが戦場で使えなかった原因は機密性の高さから。機密性が高くなければ内部での魔術発動により棺桶になってしまう。精神感応を使おうにも、そのサイズのデバイスとなれば中途半端に大きくなる。

でも、元から大きいものなら話は違う。

理論上では２０ｍの人型兵器は作成可能だ。実際にアルタミラにある壁画などには巨大な人型の兵器が戦っている姿がある。過去には、今よりも鉱物が豊富に存在し、希少物質（レアメタル）も手に入れることが出来た時には作成が可能だったのだろう。でも、今では難しい。

魔力を鉄に込めることで作られる魔鉄を使えば量を作りだすことは可能だ。だが、魔力を物質に込めることで、魔力を使う攻撃からは弱くなる。それが自然の摂理。

そんなものを使えば簡単に落ちるはずだ。

精神感応を使うにしても、その技術はちゃんと確立していない。精神感応に適した人でない限り。

全ては机上の空論。でも、全ては理論上可能。

「アル・アジフに尋ねるしかないか」

「アルに何かある？」

オレは小さくため息をついた。

いつの間にか竜言語魔法の魔法書を開いたリースが後ろにいたからだ。

「話はきかせてもらった」

「おいおい。オレのセンサーには反応しなかったぞ」

「竜言語魔法には完全に姿を消す魔法がある。アルに何を尋ねるの？」

「その前に、浩平は？」

リースが首を横に振る。

オレが調べても近くには誰もいない。

「リースはフュリアスについて知っているか？」

「どこでそれを？」

やっぱりね。

リースからすればオレがどうして知っているのか理由がわからないのだろう。つまり、来たのはついさっき。

「時雨からだ。評議会の奴らがフュリアスの開発に乗り出しているらしい」

「『ＥＳ』じゃない？　評議会がどこで？　わかった。アルに聞いて欲しい。私の口から語れるのは少ない。原理が理解できていないから」

「ああ。オレはアル・アジフのところに向かう。みんなに連絡は頼むな」

「うん。朝ご飯は？」

「いらないと伝えてくれ。じゃ」

オレは歩きだした。アル・アジフのいる場所に向かって。

第三十四話　フュリアス　前編（後書き）

作中のフュリアスは人型機械兵器と書いていますがガンダムのようなものではありませんのであしからず。

第三十五話　フュリアス　後編

オレは小さくため息をついた。

「リースから連絡がいったのか？」

アル・アジフが滞在している都の家に行くと、玄関にアル・アジフの姿があった。アル・アジフはオレの言葉に頷く。

「リースから連絡が来た。そなた、フュリアスについて知りたいらしいな」

「ああ。本来ならそう急くような事態じゃないけど、内容が内容だ。オレに、いや、オレと亜紗に関係することがあるんだろ」

「そうじゃな。そなたは聞く権利がある。権利があるからこそ、我はそなたに話さねばならない」

「ゆっくりしたところで話がしたいな」

オレがそう言うと、アル・アジフは玄関を開けた。そこには不安そうな顔をした都と少し年下の少年の姿がある。

都はオレを見て頭を下げた。

「都、話した通りじゃ。我と周は今から大事な話をする。そなたと悠人は離れてもらえぬか？」

「先ほども言いましたが、お好きに使ってください。ただ、争い事

は」

「そんなに怖い顔をしているか？」

オレは小さく笑みを浮かべて尋ねた。

その言葉に都は頷く。

「初めて見る顔です。それが周様の真剣な表情なのですね。悠人、行きましょう」

「アルさん。僕もいなくて大丈夫？」

「実技はせぬからな。悠人は都と大人しくしているのじゃぞ」

「うん」

悠人は頷くとそのまま家の奥に都と一緒に入って言った。

「こっちじゃ」

オレはアル・アジフに案内されるままに都の家に入っていく。

オレが案内されたのは少し小さめの部屋だ。オレは入った瞬間に結界を展開する。だが、アル・アジフも展開していたことに気付いた。

「さて、話してもらおうか」

「せっかちじゃの。まあ、仕方のないことか。まずは結論から述べる。フュリアスは正確には戦闘目的に開発された魔科学時代の人型

兵器の名前じゃ」

「魔科学時代というと、人類の文明が一番栄えていた時の名前か」

「そうじゃ。科学と魔法が融合した姿。その技術力は今をはるかに上回る」

オレ達いる時代は新生時代と呼ばれているが、その前に三つほどの時代があったということは前にも述べたはずだ。

一つは話にも出てきた魔科学時代。純鉄を生成する技術があり、それを使った兵器が開発されていた。

一つは魔科学時代が終わった後の神威時代。文明が壊滅し、魔法が最盛期となった時代。神々によって世界は操作されていたらしい。

一つは神々が滅び、神々の欠片から作り出された武器、俗に言う神剣を持つ神剣使いが勢力を広げた神剣時代。

そして、この新生時代。

その中でも魔科学時代は世界を数十回滅ぼせる兵器が存在したらしい。魔術でも世界を九回滅ぼすことが最大なのに。

「フュリアスはその時代に開発された兵器じゃ。実物はほとんど残っておらぬ。残っておっても、魔法の力で隠されておると言った方がいいかの」

「存在はしているんだな」

「そうじゃ。魔科学時代のフュリアスは六機が最低でも現存しておる。列挙した方がいいかの？」

「いや、今はいい」

そんなことをしていたら日が暮れるかもしれない。

「そうじゃな。フュリアス自体はアルタミラですら破片が見つからぬ。ただ、一つだけ見つかったものがあった」

「もしかして、精神感応システム？」

「そうじゃ。十五年ほど前、アルタミラで『ＥＳ』の発掘隊がそれを発見した。そのシステムを開発すれば、パワードスーツが戦闘に利用できると考えられ解析が始まった。そして、十三年前に精神感応の原理が確立されたのじゃ」

「そして、十二年前の５月２２日。オレが『ＥＳ』に誘拐された」

これはオレが話を聞いただけであり、一週間には救出されたので記憶にすら残らない。だけど、実験された跡は見つかったらしい。

「そこで、オレは頭の中に小型のチップを埋め込まれたというわけか」

あまりに脳の奥深くに埋まっていたため取り出すことを不可能となったらしい。ただ、そのチップがかなり便利なもので最終手段として重宝している。

「そなたの恵まれた家系にアリエル・ロワソは惹かれたらしいの。

成功した実験体が少ない中でそなたはよく生き残った」

「多分、チップを埋め込んだのが生まれてすぐだからだろうな。精神感応の原理が成功したことを知ったアリエル・ロワソはそのままフュリアスの開発に乗り出したのか？」

「いや、フュリアスの開発に乗り出したのは我ら穏健派の方が早い」

「はあ？」

わけがわからない。あまり戦闘を好まない穏健派がどうしてフュリアスの開発に乗り出したのだろうか？

「そなたは知らぬか？　『ＥＳ』の過激派のトップ部隊が作戦中にパワードスーツ一機に全滅したということを」

「噂では聞いたことはあるな。まさか」

「そうじゃ。精神感応のないパワードスーツを動かしてまだ子供の少年は過激派のトップ部隊を殲滅した。我はもてる知識を使ってそのものに個人用のフュリアスを開発したのじゃ」

「その開発データが漏れたのか？」

「違う。人にはパワードスーツで世界でもトップレベルの実力者を倒せるとわかったのじゃ。どうなるかわかるの？」

「精神感応を利用したパワードスーツの開発。戦闘力を上げるために大きくした」

使えるとわかれば使いたくなるのが人間だ。そうして『ＥＳ』はフュリアスを作り出していったのだろう。

「穏健派にフュリアスは一つしか存在せぬ。じゃが、過激派にはいくつも存在するようじゃ。まあ、パイロットと機体は我らが圧勝しているがの」

「それを評議会は利用しようとしているのか。ややこしいな。頭がこんがらがるというわけじゃないけど、フュリアスがどういう原理かがつかめない」

「精神感応を体全体に行わせ機体と搭乗者をリンクさせるのじゃ。リンクさせる理論は魔力を通すバイパスを全体に通して動きやすくさせる。バッテリーは積みこむが、今じゃ限界は四時間ほどじゃな」

「短期決戦用か。駆動系とかも魔力か？」

「そこは機械と併用じゃ。これを表現するのには苦労したの」

オレの中でフュリアスの形が組みあがっていく。でも、一つ腑に落ちない点がある。

「遠隔操作にしないのか？」

「確かに、それも考えたがの、余計に難しくなるのじゃ。多少の危険は覚悟で登場した方がよい」

「精神感応の原理を使えば出来るだろ？　上手くやれば複数同時に操作できる」

「理論的には可能じゃな。それにしても、周はフュリアスに興味があるようじゃな」

オレはアル・アジフの言葉に頷いた。

「ロマンが無いか？」

「ロマンか。そなたの本質はまだ年頃というわけじゃな」

「まあ、わざと大人びていると見せる部分はあるな」

オレのせいであいつは両親を失った。なのに、あいつはオレの分も頑張ると言って戦っている。だから、オレも戦うことにしたから。

「自分は強くあらねばならない。そう思っている。でも、それは事件の原因となった義務じゃない。オレ自身のためだ。みんなはオレのために強くあろうとしている。なら、オレは自分が満足するように、みんなを守るために強くなりたい。人間ちょっとエゴな方がいいさ」

「自分のためにか。誰もが自分のために戦っている」

「そう。誰かの幸せを追求するのも、誰かを守りたいと思うのも自己満足のためだ。違うか？」

「そうじゃな。そなたは本当に中学生か？」

オレはその言葉に小さく笑って首を横に振った。

「まだ、小学生だよ。それに、オレは普通の人生を歩んでいない。

普通の人生を諦めたオレにとっては誉め言葉だな」

「よほどの覚悟じゃな。周、他に聞きたいことはあるかの？」

「いや、ないな。フュリアスについては聞きたいことは聞けたし。現状じゃ、フュリアスは脅威にはならない。ただし、五年後ぐらいはわからないけど」

フュリアスにはまだまだ問題点が多い。穏健派のフュリアスは搭乗者の技能が極めて高いだけだろう。過激派が扱う分には問題視する必要はない。

だけど、フュリアスにも使い道はある。一応、時雨にも開発の打診をするか。

「周よ、リースはどうしておる？」

「楽しそうだな。浩平とべったりだ。まあ、寝る時も一緒にいようとして音姉が摘みだしたけど。甘えん坊なんだな」

「リースは純粋じゃからな。ちなみに、我ら『ＥＳ』穏健派は今回の件に全員賛成じゃ」

「過激派はそうでもないのか」

考えれば簡単なことだ。過激派は『ＥＳ』だけの治安を主張し、穏健派は『ＧＦ』と協力した治安を主張する。

『ＥＳ』が基本的に動くということに変わりはないが、最終的な部分が異なっている。

そんな過激派に今回のことは全くもって寝耳に水だろう。

「不思議なことに、過激派は半数が賛成じゃ。リースの幼さは過激派が問題視したことじゃからな。成長することを祈ってか、『ＧＦ』に行くことを祈ってか」

「リースならこっちには来ないだろ。あいつは、アル・アジフ達が好きみたいだからな」

「そうだといいが」

アル・アジフは小さく溜息をついた。

第三十五話　フュリアス　後編（後書き）

中途半端なところで終わりますが、周の狭間の日常に戻ります。

第三十六話　狭間の日常　海道周の場合　前編（前書き）

狭間の日常は二つに分かれます。

第三十六話　狭間の日常　海道周の場合　前編

「さて、オレは帰るとしますか」

オレは結界を切りつつ立ち上がった。

「もう帰るのか？」

アル・アジフも結界を止めて立ち上がる。

「ああ。話すことは話したし。フュリアスについて聞きたいことは聞いた。まあ、アル・アジフが隠したいことも」

「何がじゃ？」

「そう簡単に精神感応は出来ないってこと」

あくまで理論上は可能なだけだ。

アル・アジフは小さく溜息をついた。

「これからは、そなたに隠し事は出来ぬな。それより、朝ご飯を食べておらんのじゃろ」

「どうしてって、リースか」

「そうじゃ。都に言ってそなたの分も用意してもらっておる。共に食べぬか？　悠人も紹介したいしな」

悠人というと、都と一緒にいたあの少年か。見た目はただの頼りない少年だけど。

オレは少し考えて頷いた。

「わかった。っていうか、ここは都の家だろ。都は・・・、大丈夫か」

あそこまでオレに熱狂的だから大丈夫だと思うけど、どうしてああなったのだろうか。

オレはレヴァンティンを取り出して通信機器に繋げる。電話ではなくメールを音姉に向けて。

「都の家で厄介になるから。訓練には合流する」

オレはレヴァンティンから通信機器を外した。

「今のはレヴァンティンがメールに直したのか？」

「まあな。でも、最新型のデバイスならこれくらい出来るはずだ」

「ふむ、我らも新型にしないとな」

アル・アジフはそう言いながら愛用のデバイスを取り出した。

それを見たオレは純粋に驚く。

「旧型かよ」

「それほど古いのか？」

「まあな」

オレはそう言いながらポケットからデバイスを一つ取り出した。それをアル・アジフに投げる。

アル・アジフはデバイスを受け取ってよく見た。

「これは？」

「多目的デバイスの試作型。まあ、失敗作だけど」

「処理速度が追いつかぬのか？」

「まあな。マルチにしすぎて器用貧乏になったタイプだな」

通信から記憶まであらゆることが可能になった、と言えば響きはいいが、結局は処理速度に問題があり、今流通している新型の方が便利となっている。

「まあ、将来は多目的デバイスが主流になるだろうな。レヴァンティンも本来は多目的デバイスだし」

「そうじゃな。今の段階で多目的デバイスとしての性能を発揮すればいろいろ疑われる事態になるからの。それにしても、この型が古いとは。中東では一番人気じゃぞ」

まあ、最新型のデバイスは余計な機能をいろいろつけているからな。第７６移動隊のメンバーはこのタイプを禁止している。

理由は音姉と孝治にしか言ってないけど。

「オレらもその一個上。現役型のデバイスだな。ちゃんとお金を払ってくれるなら、注文するけど」

「いや、愛着があるからの。普通の武器を取り出す分には今ので十分じゃ。しかし、そなたが仲介してもいいのじゃろうか」

「リースがこっちに来ているんだ。親愛の証として仲介すれば大丈夫」

オレはそう考えているから大丈夫だと思っている。

「そうだ。アル・アジフってデバイスについて詳しいか？」

「人並み以上にはの。何かあるのか？」

「ちょっと、試したいことがあるんだ。もし、一つのデバイスからいくつかの形態を取りたい場合はアル・アジフならどうする？」

これはかなり難しい問題だ。

デバイスは基本的に一つの形態しか取れない。複数の武器を使う場合は複数のデバイスを使うのが普通だ。最新型の一部は二つほど武器を取り出せる。

「デバイス自体の改良かの」

「武器をパーツに分けることは不可能か？」

「ほう、面白いことを考えるの」

「オレの戦闘スタイルから考えて、対抗の仕方を増やせばいいと思ってな。まあ、難しいけど」

パーツに分けた場合は絶対的な処理速度と正確さを必要とする。レヴァンティンなら理論上は可能になるが、実際に試してみても成功は難しい。

「基本的なパーツに骨格を組み込めば、簡易武器程度なら可能じゃな」

「やっぱり、簡易武器レベルか。出来れば、高能力の武器を作り出せたらいいんだけどな」

オレが小さくため息をつくのと、扉が開くのは同時だった。部屋の中に朝ご飯をお盆に載せた都が入ってくる。

「結界が切れたので入りましたけど、よかったですか？」

「ああ。ありがとうな。オレの分の朝ご飯まで用意してくれて」

「いえ、これくらいは簡単です。座ってもらえますか？」

都の言葉にオレ達はその場に座り込んだ。都は朝ご飯をオレ達の前に並べる。

人数は三人分。

「悠人はどこじゃ？」

「悠人なら出かけました。訓練をすると言ってましたけど」

「ふむ、あれか。まあ、いいとするか。周、また今度でいいかの？」

「別にいいぜ。さあ、朝ご飯を食べようぜ」

「そうですね。本当なら、周様の要望を聞いてからお作りしたかったのですか、時間がかかりすぎてしまいますのでこういう食事になりました」

普通の朝食だ。本当に普通の。

ご飯に卵焼き、納豆や魚までである。

「ちなみに、レパートリーは？」

「和英中米印ですね」

「そのレパートリーはある意味おかしいだろ」

オレは思わずため息をつくしかなかった。それを合図に全員が手を合わせ、いただきますと言う。

味は比較的普通だ。うん、普通。不可ではなく、可の料理。

「お味はどうでしょうか？」

「普通においしいな」

「よかった」

都が笑みを浮かべて胸をなでおろした。そんな都にアル・アジフが口を開く。

「都は前口上を決めたのかの？」

「いえ。今まで魔術で前口上は使っていなかったので」

魔術に前口上があれば使いやすいからな。

魔術は意志の力だ。

魔法と違って自分の意思で放つ部分が大きい。だから、魔術の前口上は魔法のものと大きく性質を異なる。

リースを例で言うなら、エルセル・ディオ・グイン・ラルフという言葉がそれに当たる。この場合はこれを言わなければ竜言語魔法を発動することはできない。もちろん、短縮することは不可能。

対して、魔術は発動しようとする意志の力で威力が変わる。ストックするのも意志一つで発動できる状態においておくものだ。前口上はその意志の力を上げるために使う。もちろん、使わなくてもいい。

「魔術はイメージが基本じゃ。練習するなら前口上を言えば良い。周もそうじゃろ？」

「オレは前口上を使わないからな。使うとしても、本当に限定的な部分くらいになるか」

使う場合は大規模治癒魔術のような精密な操作を必要とする魔術に関しては前口上を使おうと思っている。ただ、まだ使ったことはない。

その言葉にアル・アジフは肩を落とした。

「昔は『我が名において命ず』という言葉が流行っておったのに」

「確か、『我が雷神の名の下に、力の発動を認可する』っていうやつもいたよな」

オレが知っている奴だけど。

「前口上は基本的に自分を落ち着かせるための言葉じゃ。我はその有用性を主張するが」

「別に前口上を否定するわけじゃない。だけど、前口上は逃げ道に使ったらダメなんだ。魔術というのはイメージの姿。自然の力に干渉して力を借り受ける技術。それが出来なければ一流の道は遠い」

魔術と魔法は相反するもの。だからこそ、魔術の利点を伸ばすためにイメージトレーニングは欠かせない。

ちなみに、オレの場合は逆立ち腕立てを二十回する間に事前に決めたことを考える、という訓練だ。孝治ぐらいしか賛成してくれないけど。

「周様はどういうイメージで魔術を使っているのですか？」

「オレは自然に語りかけるような感覚だな。自然に感謝しながらその力を借りようとする。あくまで、掌握しようとしないのがオレのポイントかな」

「掌握しない、ですね。周様、私も第７６移動隊の訓練に参加してもよろしいですか？」

「別にいいけど、どうして？」

断る理由はない。むしろ、断る理由を見つける方が難しい。

『ＧＦ』にとって、民間人の訓練の参加は歓迎することだからだ。ただ、大抵が3日で終わる。

都は自分の胸に手を置いた。

「強くなりたいのです」

「何故？」

「親友を守りたいから」

都が守りたいのは、おそらく琴美のことだろう。オレ達がここに来た時のようなことが起きないとは限らない。

その理由なら、余計に拒否することが出来ない。

「わかった。ただし、キツいぞ」

「必ずついていきます」

オレは頷きながら、心の中で都が何時間持つか考えていた。

「す、みま、せん」

オレの目の前にはバテた都の姿があった。

ちなみに、中村やリースのような後衛組もほとんどがかなりバテている。オレ達前衛組はまだまだ大丈夫だ。

「まあ、今回の練習メニューが前線で戦う時のやつだから。想定は長期戦闘」

「部隊だからよ、そんなことはさ、あると思うけどよ、なんで、お前らピンピンしてんのよ」

浩平は不思議そうにオレ達を見ていた。

こういうレベルは前衛組なら当たり前のようにするからな。特に前にいた部隊だと普通にこういう訓練をしていた。

音姉や孝治に亜紗も同じだろう。

「オレからすれば周隊長よりアル・アジフがピンピンしているのが不思議だけどな」

後衛組で唯一ピンピンしている悠聖がアル・アジフを見ながら言う。

悠聖の場合は召喚時間を稼ぐためにいつも命懸けで逃げているからだろうな。

「我か？　我はこれでも『ＥＳ』の穏健派トップじゃぞ。それなりに修羅場はくくっておる」

「だよな。つーか、浩平は体力ねえな」

「体力バカのお前に言われたくねえよ！　後衛なのになんでそんなに体力があるんだよ！」

「逃げるから」

悠聖の解答に浩平がポカンとする。

「召喚時間を稼ぐために全力で逃げるからな。ルカを召喚出来れば一気に有利になれる」

「反則だろ。周、オレって弱いのか？」

「弱くはない。ただ、ここの面々は化け物揃いだからな。そうだ。チーム戦しないか？　悠聖以外の全員で」

オレはいいことを思いついたという風に声をあげてみせた。

理由としては、リースにオレ達の実力を知って欲しいという気持ちがある。

「弟くんの意見には賛成だけど、チームはどうするの？」

「オレ、音姉、七葉、都に由姫。向こうは孝治、亜紗、中村、浩平、リース。これならバランスがいいだろ」

名前を呼ばれることを想定していなかった都が驚いたように声をあげる。

「私もですか？」

「ああ。世界のレベルの中でどこまで戦えるか。試したくないか？」

都は少し考えた後、ゆっくり頷いた。

「結界はオレと音姉、アル・アジフの三人で張る。戦闘は気絶させない程度に。出来るよな」

オレの言葉に全員が頷く。

オレはレヴァンティンを取り出した。

「さあ、始めよう」

第三十六話　狭間の日常　海道周の場合　前編（後書き）

次、狭間の日常ではありません。
あまり活躍していない孝治、光に七葉の強さが出ます。

第三十七話　チーム戦（前書き）

光の異名の由来と音姫と孝治の力の片鱗があります。周はあくまで器用貧乏。一芸特化にはなかなか勝てません。

第三十七話　チーム戦

基本的に大人数又はチーム戦では開始直後から広域に攻撃可能な魔術が放たれやすい。

何故なら、開始直後は敵はまとまっていることが多いからだ。さらに、味方と混戦していない。

ゲリラ戦のようなものでは通用しないが、戦争時でもよく見られる光景だった。

そう、オレ達がやるチーム戦でも。

オレはレヴァンティンを地面に突き刺して大規模魔術を放つための補助として魔術陣を展開する。

対する相手は中村が赤い翼を作り出して空に飛び上がった。

『炎熱蝶々』。

中村が持つSランクに位置するレアスキルだ。飛行能力ととある能力の二つがある。

中村がオレ達に槍を向ける。槍の名前はレーヴァテイン。オレのレヴァンティンと読み方が違うだけの武器。だが、その本質は同じ。

「投影発動。能力解放」

中村の周囲に中村が持つレーヴァテインと同じ槍が何百と現れる。

レヴァンティンもレーヴァテインもある魔法を封じ込めている。それは、世界を力を持った魔法だ。

レーヴァテインはその力を解放し、絶大な爆発力を作り上げることが可能だ。

それを大量にコピー出来るレアスキル、『物質投影』で増やす。もちろん、威力は桁違い。たったこれだけで戦闘が終わることもある。

だから、オレは魔術を展開する。

属性は水に炎。

鬼に使ったものとよく似ている。だが、出力という点では大きく異なる。

「斉射！」

中村が一斉にコピーしたレーヴァテインをオレ達に向かって放った。

オレはすかさず魔術を放つ。

魔術によってかき集めた水に膨大な熱量を通し、一瞬で水蒸気爆発を起こす。

オレ達はすでに展開していた防御魔術で水蒸気爆発の余波を受け流す。対する放たれたレーヴァテインのコピーは軌道を変えて地面に突き刺さる。突き刺さった瞬間、凄まじい爆発が起きた。

「し、死にませんよね」

都が引きつった声を出す。

ちなみに、魔力の攻撃なので、体内の魔力を根こそぎ消耗して昏倒はするだろうが口には出さない。

何故なら、浩平が水蒸気の合間を抜いて突っ込んできていたからだ。

孝治の持つ『影渡り』はかなりの制限を受ける。その一つが太陽だ。太陽の光がある内は前準備を必要とする。

移動する先が見えるという欠点と共に。だから、孝治は飛び込んできた。

オレが地面からレヴァンティンを抜いた瞬間、由姫が一気に飛び出した。音姉と七葉は二人で迂回ルートを通っている。

オレは都の方を振り返った。

「都、準備はいいな？」

「何が、ですか？」

「来るぞ」

由姫が孝治の黒い剣を受け流し、そのまま肘を叩き込もうとした瞬間、何かが閃いた。由姫はすかさず体を沈み込ませ、孝治の横から振られた刀をギリギリで避ける。

そこには、驚いた表情の亜紗。

孝治と亜紗は同時に下がった。

「音姫さんに俺達を当てないとはな」

「お前らの厄介な援護メンバーを倒すためだよ。浩平の腕ならお前らの援護を普通にするだろ」

「違いない」

レヴァンティンを構えながら由姫に並ぶ。

「兄さん。孝治さんと戦ってもいいですか？」

「いや、別にいいけど。戦えるのか？」

「都さんは兄さんの援護をお願いします。試したいことがあるので」

由姫はそう言いながらニヤリと笑みを浮かべた。

オレの背筋に寒気が走る。おそらく、孝治にも。

「周様、いきましょう」

都がいつの間にか片手銃とナイフを構える。ナイフはかなり高価で珍しい帯電能力を持つライトニングナイフだ。

オレはレヴァンティンを握っている右手から左手に持ち替えた。

「亜紗、手加減はしない」

その言葉と共に身体能力を向上させる魔術を複数展開する。

亜紗は頷いて刀を構えた。

「いくぞ！」

オレは地面を蹴る。

由姫の肘が黒い剣でガードした孝治を吹き飛ばした。孝治が吹き飛んでいる間にも由姫は距離を詰める。

孝治からすれば何度か戦ったことのあるナックルとの戦い。だが、孝治の知る相手とはレベルが違う。

剣を振っても全て弾かれ、カウンターが飛び込んでくる。かといって防御に回っても、その防御力を上回る攻撃が飛んでくる。

孝治は大きく後ろに下がった。

「強いな」

「ありがとうございます」

由姫は攻撃の手を緩めない。

距離を詰めずに地面にナックルを叩きつける。そして、畳返しのように地面が裏返った。

孝治はすかさず後ろに下がった。だが、畳は追いかけてくる。

「っつ」

孝治は黒い剣で両断する。だが、前に由姫の姿はない。

背筋が凍るような、力が集まった感覚が孝治の視線を空に向ける。

そこには、両手に凄まじいまでの魔力を凝縮した由姫の姿があった。

「はあぁっ！」

気合いを入れながら由姫が拳を振り下ろした。

「リース！　音姫さんは頼んだぜ」

浩平はそう言いながらフレヴァングを呼び出した。

相手は二人。音姫と七葉。音姫が前に出ている。

「まずは、七葉ちゃんを落とす。リースと光ちゃんの三人なら、音姫さんを倒せるはずだ」

浩平はそう言いながらフレヴァングの引き金を引いた。だが、放たれた弾丸は浩平が描いた軌道から若干ズレる。

音姫と七葉はお互いに反対方向に飛んだ。

「わかった」

リースが魔法書を手に取る。対する音姫は真っ直ぐ突っ込んでくる。

浩平はフレヴァングを二丁拳銃に変えて一気に引き金を引いた。

だが、全ての弾丸が思い描く軌道を描かない。

「なっ」

二丁拳銃からフレヴァングに変えて、引き金をおもいっきり引く。

すると、ピンという音が鳴り、七葉は弾丸をギリギリで避けた。

「頸線か」

頸線は魔力を通した線だ。糸というには強度が違う。その強度は浩平が溜め打ちをしてようやく切れるほど。

浩平はフレヴァングの設定を変える。

フレヴァングの側面についているセーフティを外し、七葉に銃口を向ける。

「これを使うのは久しぶりだな」

そして、浩平が引き金を引いた瞬間、極太のレーザーとでも言うべき大きさの弾丸が放たれた。

七葉はそれを見た瞬間、笑みを浮かべる。

そして、弾丸が消えた。

浩平が驚くのは刹那。変わりにフレヴァングから二丁拳銃に変えて引き金を連射する。しかし、弾丸はかすることすらしない。

「これで、終わりだよ」

七葉の攻撃範囲内に入った浩平に向けて、いつの間にか作り出した槍を振り上げた。だが、槍は振り下ろせない。

何故なら、七葉の頬を弾丸がかすったから。

浩平はニヤリと笑みを浮かべて二丁拳銃を真っ正面から七葉に向ける。

「惜しかったな。頸線から武器を作り出さなければ見抜けたとは思うぜ」

頸線の特徴として、頸線を練って編むことで様々な武器を作り出すことが出来る。ただ、形が難しければ難しいほど難易度は跳ね上がる。

七葉が使っているのは装飾もない普通の槍。

「弾かれた弾丸を弾いて当ててきた？」

「正解。ぶっつけ本番だったから失敗するか心配だったけど、成功だな」

「うん。私達の作戦も成功だからね」

七葉がそう言いながら槍を戻した瞬間、浩平の首筋にひんやり冷たい鉄の感触があった。

「七葉ちゃん、足止めご苦労様」

「音姉すごいね。私が全速力で浩平君のところに向かう時間とリースさんを倒す時間が同じだって」

「浩平、ごめんなさい」

浩平が視線だけそちらに向けると、服についた砂を払っているリースの姿があった。

視線を上空に向ければ光がレーヴァテインを音姫に向けている。

「ほう、黒か」

浩平がそう呟いた瞬間、浩平に向かってレーヴァテインのコピーが放たれた。

レヴァンティンが亜紗の刀とぶつかり合う。

「周さん、強くなった」

「お前は速すぎだ」

レヴァンティンで迫り来る刀を叩き落とす。時には右手で、時には左手で。

都は時々片手銃から弾丸を放っているが、亜紗には全く当たらない。涙目になっているような気がする。

そろそろ戦場も変わって来ただろう。おそらく、音姉と中村、由姫と孝治、オレ達と亜紗という構図になっているはずだ。

オレは後ろに下がった。

「都、拘束魔術は？」

「バインド程度しか」

「当たらないか」

バインドは発動から拘束まで一秒の時間を必要とする。素人なら当たるかもしれないが、戦場ではそんなものは当たらない。

当てようと思えば何百人が同時に使って面を拘束するぐらいしか方

法がない。

亜紗は静かに刀を鞘に収めた。オレの額に汗が流れる。

「周様と同じ白百合流ですか？」

「いや、違う。白百合流は白百合家にしか継承されない。あれは白楽天流。白百合流の原型だ」

白楽天流。

使い手を選ぶと言われる究極クラスの武術。はっきり言うなら白百合流の一撃特化。

白百合流は確実に相手を倒すものだが、白楽天流は一撃で相手を倒していく型。

オレはレヴァンティンを鞘に収めた。

「都、やられた場合は頼む」

「周様が、ですか？」

「ただではやられない」

はっきり言うなら勝てる気はしない。よくて相討ち。タイミングを間違えたなら一方的にやられる。

オレは足に力を込めて地面を蹴った。

由姫の拳が地面を砕いた。だが、当たったという感触はない。

勘を頼りに振り返りながらナックルを振ると、黒い剣とナックルがぶつかり合い互いに弾かれた。

「今のが試したいことか？」

孝治が一気に攻勢に出る。

巧みに黒い剣を振り回し、動揺している由姫をだんだん追い込んでいく。だが、由姫も負けてはいない。追い込まれながらもカウンターを放っていく。

「いえ、違います」

由姫はナックルで黒い剣を上に弾きながら足で地面を強く蹴った。

孝治はすかさず後ろに下がって地面に向かって黒い剣を振り下ろす。黒い剣が地面に突き刺さったところが爆砕した。

「これでもないな。試したいこととは何だ？」

「準備は出来ました」

由姫が静かに身構える。孝治も静かに身構える。

だが、孝治が冷静にいられたのはこの瞬間までだった。

孝治の体が浮かび上がる。何の攻撃も受けていないのに。まるで、地球の重力が少しだけ休んだように。

孝治の懐に由姫は飛び込んだ。孝治はとっさに黒い剣で由姫の攻撃をガードしようとするが、懐にいたはずの由姫はすでにいない。

体を捻りながら黒い剣を背後に向かって振る。だが、黒い剣は孝治の手から弾かれた。

「終わりです！」

由姫が拳を振り下ろす。そして、拳はまた地面を砕いた。

「えっ？」

「今のが試したいことか。さすがに全力でいかなければ回避は出来なかったな」

いつの間にか、由姫の知らない間に孝治は移動していた。その背中に漆黒の翼を形取らせながら。

属性翼。

それぞれの魔術属性を極めてものしか使えない最上級魔術だ。これを持つものはエリートとして扱われる。

「『影渡り』ですね」

「ああ。前準備を終わらせていた。危なくやられるところだった」

「私からすれば、大人しく倒れて欲しかったんですけどね。さすがは同い年で最強といわれる人です」

孝治が黒い剣を担ぐ。この動作は、孝治がある技を放つ前にすることだ。

由姫は身構えた。

「耐えきれ」

その言葉と共に孝治が黒い剣を振り下ろした。

光がレーヴァテインを大量にコピーしながら放ちつつ、音姫から逃げるように距離を取る。対する音姫は空中に作り出した魔力の足場を蹴りながら距離を詰めていく。

「やっぱり反則やで」

光は小さくぼやいた。

音姫の速度は光より若干速い。だが、光は不規則に軌道を変えているのに少しも離せない。

「しゃあない。セット」

レーヴァテインをコピーし音姫に向ける。だが、レーヴァテインのコピーは吹き飛ばされた。

「なっ」

「動揺したね」

音姫が一気に加速する。光はとっさにコピーを数千と作り出した。でも、これだけじゃ確実に足りない。

音姫の方を向き直り、背中の『炎熱蝶々』を音姫に向ける。すると、『炎熱蝶々』が炎の球を作り出した。

『炎熱蝶々』がただの属性翼とは違う点がこれだ。『物質投影』と組み合わせてあたかも地獄のような破壊力を生み出せる。それが光の異名の由来だった。

さらには音姫を取り囲むようにレーヴァテインのコピーを作り出す。

「能力解放！」

音姫がいた場所に巨大な爆発が発生した。光はもろにその爆発を受けて吹き飛ばされる。

考えられる単体防御ですら守ることが不可能な攻撃。レーヴァテインに封じられた力を解放し、集中的に叩きつける技。

光は小さく息を吐いた。

「これなら、さすがの音姫さんも」

煙が晴れる。そこには、刀を振り上げた姿の音姫がいた。傷一つなく、服すら汚れていない。ただ、髪の毛を括っていたリボンは腕に巻いている。

「手加減なしやん」

「ふふっ、さすがに今のはこうしないと受け止められなかったな。上達したね」

「手加減なしの一撃やったんやけどな」

光がレーヴァテインを構えようとする。だが、この時になってようやく体が拘束されていることに気づいた。見えない鎖に縛られているかのように。

「悪いけど、封じさせてもらったよ。悪あがきはほどほどにしないと」

「いつの間に」

「これで終わらせるから」

そして、音姫は刀を振り下ろした。たったそれだけで光は気絶する。

白百合流衣斬り『風迅一閃』。

狙った対象を遮蔽物の有無関係なく気絶させる音姫の十八番でもある技だった。

孝治が黒い剣を振り下ろす。たったそれだけで由姫がいた場所が大きく削れた。

由姫はとっさに横に飛び退いていたから平気だが、不可視の刃から放たれた衝撃波は確実に由姫の体を叩いている。

「反則ですよ」

「大丈夫だ。違反はしていない。まさか、ここまで強いとはな。俺を第二段階にシフトさせるとは」

「第二段階って、どこのラスボスですか？」

由姫は身構える。だが、いつでも回避出来るようにしながら。

孝治は少しだけ笑みを浮かべて黒い剣を構えた。

「臆しているのか？」

「当たり前だと思いますが？」

不可視の刃がどこまで伸びるかわからないが、見た限りでは二十ｍ

ほど。その距離を由姫が詰めようとしてもコンマ二秒はかかる。

由姫は足に力を込めた。

「お前は二つの失策を犯した」

由姫は警戒しているのか何も話さない。

「一つは早々にオレを沈めなかったことだ。前準備を済ませなければ勝ち目は無かった。そして、もう一つは」

由姫の視界から孝治が消えた。

「距離を取ったことだ」

後ろから黒い剣が顔の横に飛び出している。

気配すら無かった。これが『影渡り』。

「私の負けですね」

「さて、俺達の負けも確定したようだな」

「そうですね」

孝治と由姫は同時に空を見上げた。

そこにいるのは括った髪を解いた音姫がゆっくり地上に向かって降りてきているからだ。背中には光が背負われている。

「後は、周か」

孝治が振り返った瞬間、視界にありえない光景が広がっていた。

そこには、都の連続攻撃に圧倒される亜紗の姿があった。

都の前で周がゆっくり倒れた。対する亜紗は片膝をついて何とか立っている。

都の目には、亜紗が一回刀を振るだけで七つの閃きがまたたいたような気がしたからだ。

亜紗がよろめきながら立ち上がる。まだ、都は生き残っている。

都はライトニングナイフを構えた。

おそらく、周は亜紗の足にダメージを与えたのだろう。攻撃するなら今しかない。

都は地面を蹴った。

まずやることは距離を詰めること。距離を詰めながら三つの魔術をストックする。

対する亜紗はその場にたったまま刀を構える。だが、立つのは辛そ

うだ。

そんな亜紗に向かって都は片手銃の引き金を引いた。だが、ただ引くだけじゃない。一回カチッと音がなるまで引いた後、すぐ魔術を発動させた。

ストックした魔術ではなく、雷属性の基本的な魔術で体の部位の一部を磁石とする魔術だ。

磁石にしたのは引き金を引いた指。その指を勢いよく引き金から放した。だが、引き金は磁石に引かれて追随する。

片手銃の銃口から放たれたのは散弾だった。

亜紗はとっさに防御魔術を展開する。だが、その瞬間に都はストックしていた魔術を発動させた。

二人の間に一瞬だけスパークが走る。

それを真っすぐ見てしまったのは亜紗だけだ。都はすでに目を瞑っている。

一瞬の視界の途絶と共に散弾が亜紗の防御魔術を叩いた。亜紗は閉じた目を開ける。そこには、迫り来るライトニングナイフがあった。

亜紗がライトニングナイフを叩き落とそうとした瞬間、ライトニングナイフから強烈な放電が起きた。

放電は亜紗に通じ、亜紗は微かな痛みで眉をひそめる。だが、それは亜紗にとって致命的だった。

亜紗の鳩尾に杖の先が入った。

亜紗の体がくの字に曲がる。杖を握っていた都はそのまま体を回転させて横から亜紗に杖を叩きつけた。

亜紗の体がよろめく。そこに都はストックしていた魔術を発動させる。

二十もの雷の剣を作るサンダーソード。

四つの雷の槍を放つ蒼槍。

その二つを亜紗に放ったのだ。回避出来る距離じゃない。だが、亜紗は都の杖を掴み引っ張った。

都は亜紗に引っ張られ、自らが放った魔術の直撃に巻き込まれたのだった。

第三十七話　チーム戦（後書き）

次は狭間の日常に戻ります。

第三十八話　狭間の日常　海道周の場合　後編

オレが倒れていたのは五分ほど。正確には気絶していたのが正しいだろう。

オレが目を開けると心配した顔で覗き込む由姫と亜紗がいた。

オレはゆっくり目を瞑る。

「結果は？」

「姉さんの一人勝ちです。兄さん、大丈夫ですか？」

「何がだ？」

オレはゆっくり起き上がった。周囲を見渡しても場所は動いていない。あの瞬間、亜紗の攻撃はほとんどが直撃していた。

右腕に二発、左腕に一発、右足に二発、胸に一発、頭に一発。

頭の衝撃で気絶したのだろう。まあ、やることはやったと思う。

「兄さんが泣いているから」

「泣いている？」

オレは顔に手を当てた。確かに涙を流している。でも、どうして涙を流しているかわからない。

「何で、泣いているんだ？」

『何か怖い夢でも見た？』

「記憶にない」

本当に記憶にない。倒れた時から今まで一瞬だったはずだ。はずなのに、何かが引っかかる。

オレは首を傾げながら涙の後を拭いた。

「うし。音姉、孝治、どうだった？」

「リースちゃんが思っていたより強かったかな。浩平くんは臨機応変に対応出来る能力はあるし、七葉ちゃんの技術もかなり高いよ。スカウトしても良かったんじゃないかなとお姉ちゃんは思うよ」

七葉の場合はやむを得ず第７６移動隊に入れたから音姉もそう言ったのだろう。

「光は相変わらずだ。由姫はまだまだ未熟だが」

「反省しています」

どうやら最後は圧倒されたらしい。まあ、経験の差がかなり大きいからな。

「驚いたことは都のことかな。亜紗ちゃんを圧倒したし」

「はぁ？」

その時のオレの顔はさぞ間抜けだったに違いない。それほどまでにオレは驚いていた。

「ちょっと待て。確かに亜紗の足を止めた感触はあったけど、亜紗の剣技で一般人が圧倒出来るわけないだろ？」

一応、五分と五分の戦いにまで持ち込めるようにはした。距離を取りつつ魔術を放てば何とかなると思って。

「都の魔術素質が雷属性でね、それを使って戦っていたから。後、杖術も一般人としてはなかなかのレベルだったかな」

音姉が一般人としてという時は大抵戦場では使えないということだ。だが、亜紗を圧倒出来るなら十分な実力ではないかと思ってしまう。

考えられるとしたら、都が握っていたライトニングナイフと片手銃か。

「都は？」

「あそこ」

音姉が指差した方向を見ると、そこにはベンチの上で寝かされている都と中村がいる。地べたには浩平が転がされている。

あいつは絶対に何かしたな。

「亜紗から見て都はどうだった？」

『必死に戦っていた。訓練すれば強くなると思う。ただ、私達のレベルに到達する確率は五割』

三年ほどパートナーとして組んでいたからオレが聞きたいことは言わなくても聞かせてくれる。

オレがこう聞いた場合は確実に第７６移動隊に入れて使えるか意見も聞きたいという風に亜紗は記憶しているからでもある。

「そっか。まあ、さすがに無理だろな。さて、音姉、後は任せた。オレは都を送るから」

「わかった。浩平くんの処遇は？」

オレがリースの方を見ると、リースは怒っていた。いや、実際には怒っているように見せようとしているが、むしろ可愛くなっている状況か。

まあ、怒っていることは気配からわかる。姿からは全くわからないけど。

「好きにして」

「わかった。的にするね」

それはそれでかなり酷いと思う。

「一ついいかの」

都を背負いながら帰る道の最中、横で歩いているアル・アジフは口を開いた。

「いいぞ」

「ああいう訓練はよくするのか？」

「第７６移動隊に入ってから初めてだな。まあ、『ＧＦ』じゃ度々やっているよ」

「『ＧＦ』のデバイスの設定じゃな」

『ＧＦ』のデバイスと『ＥＳ』のデバイスでは同じものを使っていても設定は大きく違う。

『ＧＦ』のデバイスは警察が持っているのと同じもので、デバイスを介した武器や攻撃は相手の魔力にダメージを与えて昏倒させるというシステムだ。

ゲームで例えるなら、ＨＰではなくＭＰに直接攻撃するタイプだ。ＭＰ＝気力と考えて欲しい。

対する『ＥＳ』の設定は名ばかりの自衛隊や国連軍が持つ殺すことが可能なタイプだ。ただ、このタイプは一般に流れることはまずない。

『ＥＳ』が自ら開発したデバイスや、元々殺すことを想定して作らなければこの設定は出来ないからだ。

ただ、今の『ＥＳ』において、穏健派は昏倒させるタイプ。過激派は殺すことが可能なタイプと分かれだしている。まだ、昏倒させるタイプはそこまで普及はしていない。どっちが使い易いかと言えば格段に後者になるからだ。

「こっちのタイプは大規模戦闘が可能だからな。誰がシステムを開発したんだか」

「使えるに越したことはないじゃろ。それに、『ＧＦ』の理念にも関わってくる」

『『ＧＦ』は決して人殺しをしてはいけない。『ＧＦ』は決して武力だけで制圧してはいけない。『ＧＦ』は決して自分の身を安く犠牲にしてはいけない。『ＧＦ』は決して人を見捨ててはいけない』

これが『ＧＦ』の理念だ。

誰も殺さず、力だけで押さえつけない。さらには自分の身すら危険から回避するように言われ、尚且つ守るべきを人達を見捨てない。

簡単には達成出来ない。

「それが、『ＧＦ』の力じゃろうな」

「『ＧＦ』も最初はたった十人から始まった。アル・アジフなら知っているよな」

「善知鳥慧海、ギルバート・F・ルーンバイト、レイ・ラクナール、フィーナ・ラクナール、里宮テオロ、里宮朱雀、里宮綺羅、白百合姫路、白百合雪羽、クロハ・F・ルーンバイトの十人じゃ」

「誰が全員言えって言った」

まさか、本当に全員言うとは思わなかった。

日本人が多いが、里宮と白百合ならみんな納得する。

白百合は言うまでもなく音姉や由姫の家。

里宮は八陣八叉流の開祖で全ての情報を握ると言われている家だ。

ちなみに、戦争寸前だった二国が里宮家が仲介に入るだけで仲良く手を握ったという話もある。

「どんなけ数が少なくても、理念があれば大きく出来る。その最たる例じゃないか？」

「理念か。我らの理念はなんじゃろな」

「さあ。それは自分で考えろ」

「それもそうじゃな」

アル・アジフが笑い出し、オレも笑う。

オレ達は都の家につくまで笑い合っていた。

「今日も一日が終わりか」

オレは屋根の上から曇り空を見上げていた。生憎のところ今日は雲っていて星空は全く見えない。もちろん、月も見えない。

オレは小さく溜息をついた。

ここに来て一週間以上過ぎた。もうすぐ４月になり、オレ達の中学校生活が始まる。まあ、授業は簡単だと思うが。

本音を言うなら鬼と話がしたい。それで決着がつけばいいし、無理なら悪いが一時的に封印をさせてもらう。

ただ、オレの勘が嫌な予感を告げている。

「とりあえず、時雨からアリシアさんとレノアさんの応援を頼むしかないか。とりあえず、最悪の想定を考えておかないと」

考えられる最悪の想定が当たった場合は、オレはレヴァンティンを全力で使わないといけない。そして、第７６移動隊が本気にならないといけない。

オレは体を起こした。

「さて、寝るとしますか」

オレは腕を伸ばしながら部屋に戻ろうとする。

夜はだんだん深まっていく。

第三十八話　狭間の日常　海道周の場合　後編（後書き）

日本の警察について

現実のような体制ではなく、何らかの事件を地域の『ＧＦ』や大きな『ＧＦ』に連絡する係。もちろん、武器の携帯が可能で先制攻撃も可能である。ただし、不真面目な人の割合が多い。

第三十九話　増える不明

昼。

第７６移動隊の訓練が終わり、オレは一人で神社に向かっていた。
神社に向かう道は周囲に田んぼが多く、田舎という風景だ。背後を見たらビルがいくつも見えるけど。

理由は単純。暇だから。

本来なら勉強する時間だが、音姉がオレを外に出したのだ。見回りという名目の休憩だろう。

「あれ？　周君だ」

その言葉にオレは振り向いた。

振り向いた先には千春と三人の少女がいる。全員槍を持っているということは学生『ＧＦ』か。

「見回りか？」

「うん。ボク達でちょっとね。さすがに正規部隊がいるのに何もしないわけにはいかないから」

「そうなるな。まあ、オレ達も昼間はあまり熱心じゃないけど」

「十分だよ。周君も見回り？」

オレは頷きながら親指で後方にある神社を指さした。

「見回りついでに神社に向かおうとな。琴美が巫女をやるように背中を押したのがオレだから、様子は見ないとな」

「ふーん。責任感あるんだね。私達はこのまま見回りを続けるよ。後で学生『ＧＦ』の事務が向かうと思うけど、しっかり返答を期限内にお願いね」

「何かの案件か？」

オレは首をかしげると千春は首を横に振る。

「そんなに大層なものじゃないよ。見回りに関すること。さすがに、ボク達も動いておかないと」

「そうだな。考えておくわ」

オレは千春に手を振って歩き出した。

千春も手を振ってオレが向かう道とは違う道を通る。

「学生『ＧＦ』も動き出して良かったというべきかな？」

『でしょうね。それにしても、いい場所ですね』

首にかけているレヴァンティンが長閑に声を上げた。

「一応言っておくが、オレ達は見回りをしている最中だ」

『サボっていると思いますが？』

それを言われるとどうしようもない。

『私は、生まれてから日本の田園風景はここに来るまで見たことなかったからですけどね』

「意外だな。オレよりずっと長生きだから知っているんじゃないか？」

『私は生まれて戦争が終わってからずっとアルタミラにいましたから』

つまり、オレが見つけるまであの場所にいたということか。

一体、どれほど昔からいるのだろうか。

『戦争の時は世界が荒廃していましたし、人類も滅亡の瀬戸際でした』

「もしかして、魔科学時代か？」

オーバーテクノロジーの質から考えて、レヴァンティンが作られたのは魔科学時代と考えるのが妥当であったが、レヴァンティンの能力から考えて神剣とも考えられる。

レヴァンティンは少しだけ間を開けた。

『そうです。魔科学時代の末期に私は作られました。理由は、今はまだ話せません』

「そっか。無理には尋ねないさ。さて」

オレは神社の階段を見上げた。

階段の数は約１５０。微かに後ろに下がり地面を蹴る。

一歩で進む数は１５。そのまま一気に駆け上がり、十歩目で一番上まで登った。

神社の境内では琴美が舞を舞っている。そばで見ているのは都だ。

オレは音を立てずに移動する。まあ、空中に魔力で足場を作り出してその上を歩くという作業だけど、これがかなり疲れる。まあ、訓練の方が疲れるけど。

オレが都の横に到着するのと琴美が舞い終わるのは同時だった。

琴美が静かに頭を下げる。

「だいぶ上手くなっています。後、一ヶ月はしっかり練習すれば完璧ですよ」

「ありがとう。ところで」

琴美がオレを指さしてくる。

「あなたはいつの間にいたのかしら？」

「えっ？　わっ、周様。いつの間に」

「さっき」

気配は殺していないけど、音は立てていないから二人は気付かなかったのだろう。それに、舞に集中していたし。

オレは琴美に向かって拍手をする。

「上手くなったな。動きはまだぎこちないけど」

「難しいのよ。あなたがやる？」

「都、手とり足とり教えてくれるか？」

「それなら、周様は二週間でマスターできます」

「冗談じゃなさそうなところが怖いわね」

琴美はクスッと笑った。都も同じように笑う。

「あれから何かないのか？　妨害と言うか嫌がらせ」

「いたって健康よ。都がみんなを必死に説き伏せたみたいで、来る人来る人、都の代わりに舞を成功させてと言ってくるのよ。少し、嫌になるわよ」

「ごめんなさい」

「謝らないで。都のおかげで私はここで踊れるのだから。周はどうしてここに？」

「見回りついでに様子見」

簡単に言うならサボりだけど。

「ふーん。そう。都、少し休憩にして良い？」

「はい。琴美にレモンの蜂蜜漬けを持ってきました」

「ありがとう」

都と琴美は仲良く境内の階段に座った。オレは立ったままだ。

「これです」

「いただきます。あっ、おいしい」

「たくさん作っていますから。周様もどうです？」

「オレは一応見回りだからな。見回り中は遠慮する。暇がある日はたくさん作って訓練の後に持ってきてくれよ」

「周、都は毎日するわよ」

「だろうな」

オレは笑みを浮かべる。

都のことだ。最近、よく偵察に来ているアル・アジフと一緒に来るに違いない。

アル・アジフはリースが心配なだけだろうけど。アル・アジフからしたら娘みたいなものだし。

「それにしても、ここは長閑だよな」

「周様の家は騒がしいのですか？」

「オレの家、というより白百合の家は学園都市内部にあるからな。騒がしいと言えば騒がしい」

「学園都市ですか。私は高校生になったら学園都市にいけるように親を説得しています」

「ここじゃダメなのか？」

狭間市はある意味プチ学園都市だ。プチと言うには小さすぎるが。

「私が勉強したいのは魔術学。特に地質学魔術科です」

「地味なところを選ぶな」

地質学魔術科は地質に対して影響のある魔術を研究し、将来の農業に役立てようという学科だ。ただ、建設業に使用される割合の方が多い。魔術は自然の力を借りるだけだから自然に作用することは難しいというのが見解だ。

「オレは法律方面かな。世界の法律を知っておけば、いざこざの対処がしやすくなるし」

「周は『GF』一色なのね」

「まな。オレの人生は『GF』で自分が満足できるまで戦い続けること。一般人の暮らしなんて程遠いけどな。でも、力がある以上、オレがやらないといけないんだ」

「力がある以上か。都はどうするつもりなの？　あなた、能力はあるでしょ」

「私は、今はこの街で暮らしていきたいです。学園都市に出るのも勉強するためで、勉強が終われればここに戻ってきます。琴美は、ここにいるんですか？」

「そうなるわね。私は、ここしか行く場所がないから」

琴美は少し悲しそうに言った。

オレは首を傾げそうになるが、傾げることなく琴美の言葉を反芻する。どういうことだろうか。

オレは琴美にそのことを尋ねようとして、動きを止めた。

誰かいる。いや、誰か隠れている。

「悪い。用事が出来た。ちょっくら行ってくるわ」

オレはそう言うと地面を蹴った。

そのまま階段を十段飛ばしで駆け下りて横手の茂みに入る。そのまま身を隠しつつ上に登っていく。

気配は動いていない。だが、こちらを見ているのは確かだ。
境内を回り込むように移動し、神社の裏手に出た。そこにいたのは金色の鬼。
「いきなりすぎね？」
オレはレヴァンティンを取り出し腰を落とす。
殺気はないがいつでも戦えるように。
『貴様は何故剣をとる』
その言葉が金色の鬼から言われたということをオレは一瞬だけ理解できなかった。だけど、レヴァンティンが微かに震えてオレは小さく頷く。
「守りたいものがあるから」
『我を攻撃しないか。近くに守りたいものがいるのだろ？』
「お前が攻撃出来たのなら攻撃している。オレが気づけたのはオレに気配を飛ばしたからだろ？」
『少年なのに理解するか。人間とは不思議なものだ』
「いくつか質問していいか？」
オレは構えを解きながら尋ねた。

鬼は少し驚いたように動きを止めて、そして、頷く。

「お前は崇り神と言われている存在か？」

『この地ではそう呼ばれている』

「お前は守り神か？」

『我はそうありたかった』

つまり、何かが歪めたということか。

「封印を強くするまで活動をやめてくれないか？」

『無理な要望だ。精霊がこの地に来ることがあれば我は全力であの者を殺す。だが、貴様らはそれに気づいたようだな』

「当り前だ。ったく、止めてくれないとなれば、一時的に封印するしかないか」

『貴様らが簡単に封印できる存在だと思うな』

「なら、これでどうだ？」

オレが魔術陣を展開すると鬼の顔色が変わった。

「知っているよな。過去、創生の時代に存在されたとされた究極魔法を分割し封じ込めた魔術陣。いや、魔法陣の方が正しいか？　これを使えばお前を封じることは可能だ。一時的にな」

『そうか。その剣、レヴァンティンか』

こいつはレヴァンティンを知っている。どういうことだ？

『また、我の前に立ちふさがるか。まさしく、勇者の剣だな』

『私のマスターは勇者ではありません。ですが、あなたが世界を滅ぼすというなら、私は全ての知識をマスターに公開します』

『安心しろ。我は世界を滅ぼすつもりはない。もっとも、完全に封印が解けた場合を除いてな』

鬼とレヴァンティンが知り合いだったのは驚いたが、レヴァンティンはそれ以上のことも知っているらしい。どうせ黙秘だろうけど。

「そっちからの質問は？」

オレは不敵に笑みを浮かべて見せた。あくまで余裕であることを見せるように。

『何故、貴様は戦う。普通の人生に戻り立たいとは思わないのか？』

「普通の人生？　はっ、全く魅力がないな。オレは自分の意思で戦う。それ以上の回答が必要か？」

『いいだろう。貴様を我の敵と認識する。三週間後を楽しみにするんだな』

「三週間後？　そんなに時間はかけるか。もうすぐ、お前を封印し

てやる。覚悟するんだな」

鬼がフッと笑みを浮かべて姿を消す。この場に静寂が戻った。

オレは体に入れていた力を抜いて大きく息を吐く。

「レヴァンティン」

『・・・なんですか？』

「何も聞かないさ。ただ、お前が話したくなれば聞かせてくれ」

『ありがとうございます』

オレはこぶしを握り締めた。

「一体、三週間後に何が起きるって言うんだ。それが起きる前に終わらせないと」

第三十九話　増える不明（後書き）

小説内の時間が三週間過ぎれば第一章の前半は終わります。今は前半の前編の最後に近づいている状況です。これから、物語は加速していく予定です。

第四十話　狭間の力

金色の鬼の存在。鬼とレヴァンティンと関係。世界の滅び。

その全てが繋がっているとオレは感じている。だが、結果は見えていてもそこに行く過程にわからない部分が多すぎる。不明な部分だけが増えていく。

「わからないな。というか、リースから何の連絡もなかったってことは、あいつは幻だったのか？」

『攻撃しなかった理由はそれしか考えられませんね。でも、竜言語魔法は私の目から見て優秀です。そんな抜け目があるかどうか怪しいところですが』

魔術よりも遥かに強力な竜言語魔法に抜け道がない方が普通だ。魔術はいくらでも抜け道が存在するからやりやすいけど。

オレは小さくため息をついた。

「こんなことを聞ける奴はいないだろうな。アル・アジフなら何か知ってそうだけど」

『お勧めはしませんね。確かに優秀ではありますけど』

アル・アジフはある意味知識の宝庫だ。アル・アジフに尋ねれば詳しいことはわかるだろう。だけど、それはフェアじゃない。多分、mアル・アジフは教えてくれない。

「さすがに、時雨達も今回の件が世界の滅亡について関わってくるなんて信じないだろうな」

『あまりに突拍子もないことですしね。ですが、わかっていることもありますよね』

「ああ。三週間後に何か動きがある。ありあえず、アル・アジフのところに向かうか」

『いえ、向かわなくてもいいでしょう』

その言葉にオレは周囲を見渡すと、魔術書の上に座ったまま飛んで移動するアル・アジフの姿があった。

オレはアル・アジフに向かって手を上げる。

「よっ」

「周か。ちょうどよかった。狭間の力の集め方がわかったところじゃ」

「そうか。で、どんな方法だ?」

「難しいのじゃが、ミトラーの法則を知っておるか?」

「魔力は全て均等である、だろ。いくら魔力を使用しても、この世界から魔力がなくなることはない。魔術に使用した魔力は魔術に転換され、別のものに変わるが、それに宿る魔力の値と使用した値が変わることはない」

アル・アジフは頷いた。というか、ミトラーの法則なんてマイナーすぎて合っているいか心配だったぞ。今まで言われていたことを証明しただけだからほとんどの人は興味がないし。

「しかし、それには穴がある。極一部のものは魔力が均等にならない。今回はそれを使う」

「そんなのあるなんて初耳なんだが」

「当り前じゃ。このことを公表でもしたら大変なことになるからの。魔力はこの世の全て。それが崩れるとなれば大暴動確実じゃ」

「もしかして、物の取り出しか？」

デバイスを使った物の取り出しは一般人もよく使うものだ。一般人のデバイスは『ＧＦ』のものと比べて戦闘用ではないため処理速度は遅いが、物を取り出す能力には長けている。ただそれだけだけど。大暴動が起きるということはみんなが普通に使っているものということだ。

「そうじゃ。それを局所的に集中して行う。かなり危険なものじゃな。力を与えた者の魔力を操作する力量とデバイスの処理速度がものを言う。そなたなら大丈夫じゃな」

アル・アジフはレヴァンティンを見ながら言った。

確かにレヴァンティンなら大丈夫だろう。それは断言できる。でも、魔力を操作する力量はかなり難しい。魔力の操作と魔術の操作は似ているようで大きく違うからだ。

魔術は意志によって作られる。だから、イメージさえしっかり持っていれば崩れることはない。

だが、魔力は違う。魔力は空気中に浮かぶもの。常に固定していなければ簡単に霧散してしまう。なにか固定する方法があればいいが。

「難しいな。まあ、それについては練習すればいいか。で、いつ作戦を始める？」

「そうじゃな。後三日で満月になる。その日ではどうじゃ？」

満月の日。

一般的に魔力が高くなると言われているが少し違う。魔力の元である魔力粒子が空気中にたくさん現れるから魔力が高くなるのだ。だが、それは両刃の剣。

「鬼も強くなるがの」

「それは仕方のないことだろ。オレ達が戦う以上、鬼は明らかにオレ達より格上だ。そいつに勝つために頑張るしかない」

「そうじゃな。しかし、本当なら応援を呼びたいところじゃが」

「止めた方がいいだろ。騒ぎが大きくなればなるほど、この街は狙い撃ちされる。ただでさえ世論がうるさいんだ。失敗したらオレの首が飛ぶだけでは済まない」

ネット上ではいろいろと言われている。だが、反対意見が多いのも

事実だ。反対意見のほとんどが年齢に関すること。

これをオレ達が乗り越えないと第７６移動隊は解散の危機にある。

「オレは力の限りを使い尽くして戦う。だれも犠牲になんかさせない。守るのはオレ達だ」

「そうじゃな。では、三日後の夜。集合時間と場所は？」

「現地集合だ。時間は七時。作戦開始は一時間後。絶対に決めるぞ」

「ああ」

オレ達は握手をした。

何が何でも成功させないといけない。それがオレ達の役割だから。

第四十一話　告知

「三日後の午後八時。金色の鬼の封印作業に入る」

オレは駐在所に全員を集めた。もちろん、学生『ＧＦ』を含めた全員を。

「作業するメンバーは第７６移動隊有志。学生『ＧＦ』の全員は街の混乱を防ぐために出動の準備をして待機して欲しい。何か質問は？」

「はい」

真っ先に手を挙げたのは音姉だった。

「第７６移動隊が有志の理由について説明をお願いします」

今回は記録も取っている公式の場だ。音姉はオレに敬語を使う。

「こんかいの任務は極めて厳しい任務。そのため、隊長である私、海道周を除いて有志の参加とする。命を賭ける覚悟があるなら来て欲しい。他には」

「はい」

次に挙げたのは千春だ。

「学生『ＧＦ』の待機の理由について説明をお願いします」

「今回の任務で街に被害が出るかどうかは予測できない。何らかの被害が出て混乱する可能性もあり、学生『ＧＦ』の諸君は待機をして欲しい。もちろん、準備と共に。何かが起きた時、街を守って欲しい。他に質問は？」

今度は誰も上げない。

今更敵の戦力を聞くのも野暮だし、参加表明するのも野暮だろう。オレの推測では第７６移動隊からは八人参加。そう考えている。

「では、解散する。学生『ＧＦ』には資料を配っているためそれを参考にして欲しい。今から第７６移動隊は緊急会議をするため速やかに立ち去ること」

『了解』

学生『ＧＦ』の声が重なり駐在所から出ていく。出て行くみんなの顔はどこか険しい。

オレは記録デバイスを外して小さくため息をついた。

「はあ、これは送らないからダメだとはいえ、話し方を変えるのはだるいな」

「そうかもね。弟くん、緊急会議の内容は？」

「参加するかしないか。自由に決めてくれ」

「なら、俺は参加しない」

真っ先に行ったのは孝治だった。オレ以外の全員が驚いた顔になる。

「理由は？」

「街を放っておくことはできない。それが理由だ」

「わかった。参加しないならここから出て行ってくれ」

「わかっている」

孝治はそのまま駐在所から出て行った。沈黙が部屋を覆う。

「他は？」

「弟くん、何も思わないの？」

音姉が肩を震わしている。

「孝治くんがいなければ作戦の成功率が下がることは弟くんが一番わかっているはずなのに、どうして引き留めようとしないの？」

「音姉、今は静かに」

「静かにしない。これだけは言わせて。今の弟くんじゃだれも付いてこない。だけど、私は弟くんを守るために参加する。その代わり、これが終わったら孝治くんと話をして。お願いだから」

音姉が肩を震わしている。よっぽどショックだったんだろう。

オレは他の全員を見渡した。

「他は？」

「兄さん。聞くだけ野暮ですよ。姉さんがここまで言うならみんな参加しますよ」

「そういうことだね。周兄は私達のことがわかってないよ」

由姫と七葉の二人が参加を表明したのを聞いてオレは思わずため息をついていた。ちなみに悠聖や浩平もため息をついている。中村とリースは呆れた顔だ。

「あれ？　私、何か変なことを言ったかな？　悠兄、何か言った？」

「変なことは言ってねえよ。ただ、こういうことは周隊長にパスで」

「パスするな。あのな、音姉も由姫も七葉も孝治がオレ達に本気でついて来ないと思ったか？」

「無駄だったのか」

その言葉と共に孝治が駐在所の中に入ってきた。三人は完全に目を丸くしている。

「つか、音姉、オレ達の企みに気づいておけよ」

「えっと、説明をお願い」

「孝治が参加しないことで由姫と七葉が参加しないことに出来れば一番だったけどな」

ある意味音姉の余計な言葉で無理になった。

音姉はようやく気付いたのか額に汗が流れている。

「いや、あのね、そのね、別にそういうわけじゃないけど。そ、そう、演技、は通じないよね」

みんな思いっきり頷いている。

オレは小さくため息をついた。

「由姫と七葉はまだ経験が浅い。だから、今回の任務は怪我をする可能性が高いからな。本当なら辞退して欲しかったけど」

「兄さんがいるから大丈夫です」

「周兄いるしね」

オレを頼りにされてもポジションにはオレは隣にいないんだけどな。最前線に出て戦っているから。

オレは小さくため息をついて机の上に置いていた資料を取った。

「今回の作戦資料。ポジションは決定な。孝治、悪かったな」

「いや、一度やりたかったからいい」

なんとなくその気持ちはわかるけど、本当なら音姉がやるはずだったんだよな。そこに孝治がオレがやると言いだした。おかげで成功

やら失敗やらわからない状態に。

「まあ、オレと亜紗が二人で押さえつける。孝治と中村は空中で飛ばないように牽制。飛んだら撃ち落とせ。他は音姉と悠聖の護衛及びオレ達の援護」

オレは全員の顔を見渡した。おそらく、由姫と七葉は不安になっているに違いない。戦う敵はオレ達よりも強い。それだけは確かなのだから。

「全員ゆっくり休んで三日後に備えること。じゃ、解散で」

第四十二話　不安

それにはもうすぐ満月となる月が浮かんでいる。空を見渡せば星空が多い。田舎ならではの光景だろう。

学園都市では見ることのできないもの。

「何か用か？」

オレは屋根の上に寝転がったまま上がってきた人物に声をかけた。

「音も立てていないのによく気付きいたね」

上がってきたのは由姫か。亜紗だと思ったいた。

「まあな。寒くないか？」

「大丈夫。服は着てきたから」

由姫がオレの横に寝転がる。そして、小さく息を吐いた。

「すごい。こんな場所があったなんて」

「オレのお気に入りだ。亜紗も度々来る」

「教えてくれてもよかったのに。お兄ちゃんのケチ」

「落ち着くからいいんだよ」

それからオレ達は無言で星空を見つめる。

自分の知識の中で、星座の名前と形を結び付けて作り出していく。多分、由姫も同じことをしているだろう。昔は二人で寝るまで星座の地図を見ていたのだから。

「お兄ちゃん」

「なんだ？」

「どうして昔の人は星を繋げるだけであんな絵を作り出したのかな？」

「んこと知らん」

星座の地図はどう考えてもあんな絵が星の光を繋げるだけで出来るわけがないので絵については全く信用してない。だれがこんなことを初めてのかも調べたことないし。

由姫は小さく息を吐いた。

「お兄ちゃん、大丈夫かな？」

「何がだ？」

「三日後」

由姫は不安なのだろう。初めて行う実戦。

オレのときだって前の日は眠れなかったくらいだ。興奮と緊張と不

安によって。

「私は、ちゃんとした役割が出来るのかなって思ってね。お姉ちゃんを守れるのかなとか」

「不安になる気持ちはわかる。でも、お前には力があるよ。ところで、ふと気になったけど、八陣八叉って誰に教えてもらっていたんだ？」

「里宮愛佳（まなか）師匠」

「なるほど」

どうりであそこまで強くなるわけだ。

里宮愛佳と言えば世界でもトップクラスに入る武術家で、近接戦闘なら音姉に唯一対抗できる存在らしい。まあ、音姉の化け物っぷりはよく知っているからその強さもわかる。

簡単に言うなら普通の定規で測るべきではないもの。

「私は、お兄ちゃんやお姉ちゃんの役に立ちたいから強くなった。それがお兄ちゃんの言う普通じゃない人生を歩むことになっても、大好きな人と一緒なら戦えるから」

「そっか」

おれは顔を赤くしながら答えた。義理の妹とはいえストレートに大好きと言われでもしたなら恥ずかしくなるだろう。

由姫はオレの方を見ずに話を続ける。

「今回は、その成果が試されると思うから。お兄ちゃんとお姉ちゃんの役に立てるかどうか」

「なあ、オレも音姉も由姫には感謝しているんだ。オレや音姉、仕事で忙しい義父さん達のいない間の家を守ってくれた。オレにとっては命の恩人だ。だから、本当なら戦って欲しくない。でも、オレ達のために戦うことは止めて欲しいんだ」

「どういうこと？」

「オレは自分が由姫やみんなを守りたいから戦う。自分を中心に考えているんだ。だから、戦うことはオレの我がままだ。エゴだ。みんな、自分の我がままで戦っているようなものだよ。こうしたいからああする。ああしたいからこうする。全ての行為は自分のエゴ。由姫はもっと自分の気持ちを前に出さないと」

オレの言葉に由姫は少し考え込んだ。

由姫の考えは足手まといになりたくないという気持ちが多いのだろう。常に不安と戦っている。だから、自分でこうするとは言わない。他人に求められているから、求められるように動く。あくまで自分では決めない。

確かにそれも一つの手だ。だけど、それだけではこの世界は生きていられない。

「お兄ちゃん。私はお兄ちゃんが好きです」

「えっ？」

突然の告白にオレの思考が真っ白になったような気がした。

「だから、私はお兄ちゃんを守りたい。好きだから。お姉ちゃんも家族として好きだから守りたい。自分で守る。だから、見てて。お兄ちゃんのお眼鏡に叶うような私じゃなくて、自分がしたいように守るから。だから、見てて」

「いや、そのさ、告白は無しだと思うんだけど。つか、明らかに死亡フラグだよな、これって」

「私は本気だから。でも、答えは今はいらないかな。私もお兄ちゃんも大きくなって成長したら返事をください」

「ったく、わかった。はあ、亜紗にもされているのにどうすんだよオレ」

その言葉に由姫が体を起こした。

「やっぱり、亜紗さんも。お兄ちゃん、私は負けないから」

「勝ち負けの問題じゃないだろ。ったく。オレらはまだ中学生になったばかりだぞ。恋愛とかはまだ早いだろ」

「いつの時代の人？」

由姫がいぶかしげにオレを見てくる。オレは小さくため息をついた。

「さあな」

「今の時代は中学生でもふつうにするよ。あれ」

「あれ？　なんだそりゃ？」

オレは真顔で由姫に尋ねた。すると、由姫は顔を真っ赤にする。

「それは、それは、お兄ちゃんの変態！」

「意味がわからんから！」

第四十三話　覚悟

オレは静かにレヴァンティンを地面に突き刺した。そして、掌を上に向ける。

することはただ一つ。膨大な量の魔力を掌で操ること。自分の中の魔力を使うためなかなか多用はできない訓練だ。だから、失敗は許されない。

自分の掌に魔力が集まっていく。霧散しないように凝縮させながら集めて行く。だが、上限もある。時折、魔力が粒子に返還されて散っていく。全体からみれば少ないが、この量で分散するようでは狭間の魔力を掌握するのは不可能だ。

オレはだんだん魔力を増やしていく。粒子に変わる魔力を制御しながら魔力を凝縮させる作業は骨が折れる作業だ。でも、この練習は欠かせない。

魔力を集めて凝縮させて小さくする。そこにさらに魔力を入れて凝縮する。その作業は正直に言って練習したくない。オレは凝縮した魔力を体内に戻した。

たったそれだけの作業なのに体から出る汗はなかなか収まらない。

オレは小さく息を吐いて近くにあったベンチに座った。

孝治と中村は空中戦の練習をしている。亜紗と音姉は打ち合いか。

オレはもう一回小さく息を吐いた。

「簡単には魔力の掌握はできないよな」

「だろうな」

元からベンチに座っている悠聖は小さくため息をついた。

「そもそも、魔力を集める方が難しい。本来、魔力は外に出て行くものだろ。それを凝縮させて力にするなんて自然の摂理を超えているんじゃないか？」

「だろうな。でも、それをやらないといけないんだ。それをしないと勝てるものも勝てない」

「あの時は圧倒していたじゃないか」

「白百合流の間合いがわからないところを攻めただけだ。次は上手くいくかわからない」

「オレは上手くいくと思うぜ。なんて言っても周隊長と亜紗だ。二人のコンビネーションは抜群だろ」

確かにオレにはとあるものがあり、それを使えば亜紗と言葉を交わさなくても話すことが出来る。

オレは自分のこぶしを握り締めた。

「悠聖。後二日は我慢してくれよ。それが終われば訓練に参加だ」

「休んでいられたのにな。おっ、由姫の動きがすごいな」

悠聖の言葉にオレは由姫の方を見た。確かにすごい。

天地関係なく駆け回り、敵の中心から確実に逃さないように動いている。中に入ったら部屋の中にいるような感じになるだろうな。魔力で壁を作り、そこを蹴って高速移動する。このレベルなら普通に準空戦になるだろうな。

由姫は大きく飛びあがって地面に着地した。今日の由姫は技のキレがいい。吹っ切れたみたいだ。

「周隊長は何かしたな」

「まな。応援したから、由姫は大丈夫だろ」

「言うね。でも、全員緊張しているよな」

悠聖の言葉にオレは頷いた。

肌でもわかるが空気がピリピリしている。

何度も任務に行ったことのあるオレや孝治でさえも緊張している。何故なら、今回はメンバーの実力が偏っているからだ。オレ達の前の部隊は全員が高い水準にあった。だから、他人の実力を信じて戦えた。だが、今回は未知数が二人いる。

オレは掌に魔力をためる。

「みんな事の重大さはよくわかっていると思う。だから、オレ達は負けられない」

「さようで。一番緊張しているのはお前だろうな」

「わかるか？」

「何年一緒にいると思う」

悠聖は小さく笑った。

「お前は何の緊張をする必要もない。失敗するとしても恐れるな。オレ達は何だ？　第７６移動隊だ。最年少の正規部隊だ。その部隊の隊長は誰だ？　お前だ。海道周だ。オレの知る周隊長はいつも自信に溢れた奴だぜ。安心しろ。このオレが証明してやる」

「お前の証明なんてあてにならんけどな」

オレは笑った。そして、頷いた。

「はん、お前に言われる時が来るとはな。でも、助かった」

「そうか。成功させようぜ」

「ああ」

オレは魔力を掌握する。だけど、今までのやり方とは違う。体内の魔力を一気に出して一瞬で凝縮させる。掌ではなく、体中に張り付かせるように。

「オレはオレだ。海道周だ。何弱気になっている。不安なのはみんな同じだ。オレがやらないでどうする。ったく、このオレとしたこ

とが」

「完全復活したようだな。じゃ、オレは散歩でもしてくる」

悠聖はそう言って立ち上がった。

オレは体内から湧き上がるような力を感じる。多分、魔力の溜め方はこういう感じでいいのだろう。

オレは大きく息を吐いた。

「さて、練習の再開でも」

「周、相談に乗ってくれよ」

その言葉にオレは頷きながら振り返った。浩平とリースが横に並んでいる。

「何の相談だ？」

「二人で合成魔術」

オレは浩平とリースを見比べた。そして、小さく息を吐いてベンチに座る。

「合成魔術について浩平は説明しろ」

「魔術と魔術を組み合わせて新しい魔術を作ること。そんなこと周が一番知っているだろ？」

「合成魔術は失敗した時の反動が大きいんだ。それを理解して言っているよな」

「当り前だ。それを前提に話をしている。俺達二人で合成魔術を使えるようになりたい」

「理論上は可能。魔術と魔術の組み合わせなら難しいけど、魔法と魔術ならやりやすい」

それは合成魔術とはいえないとは言えなかった。リースの目があまりに真剣で、浩平の目も真剣だからだ。

オレは小さくため息をついた。

「アル・アジフの方が詳しいだろ」

「アルは合成は詳しくない。だから聞いている」

「わかった。合成魔術の基本は意志と意志を組み合わせること。お前ら二人がやりたいと思うことがシンクロで来たらさらにやりやすい。複数人による魔術と魔術の合成なら成功例があるからいいけど、魔法と魔術なんて成功例があるかすらあやしいぞ」

オレはそう言いながら浩平を見た。浩平は頷く。

仕方ない。

「やるなら本格的だ。今から練習するぞ」

「望むところだ。お前を驚かしてやるからな」

オレは小さくため息をついた。だが、もし、この合成魔術が成功するならそれは大きなアドバンテージになるかもしれない。

「可能性があるなら全てやってやる。だから、覚悟していろよ、鬼の野郎」

第四十四話　始まりの昼

「うし」

オレは気合を入れるために自分の頬を叩いた。壁にかかっている時計はいつの間にか十二時を指している。もちろん、昼の十二時だ。

今日の八時に作戦は始まる。今回の任務の一番の山場になるであろうことをオレは感じている。

オレは息を吐いた。

「覚悟は決めた。後はやるだけだ」

とは言っても不安はたくさんある。後はやるだけだけど。

昨日までの訓練で魔力を使う練習はこなしてきた。自分の魔力だけだと上手くすることはできる。だが、狭間の力になると上手くできるかわからない。

「不安はたくさんあるんだけどな」

三日前からずっと不安はある。でも、その不安の中でもオレは平常心でいられる。今までの経験と、頼りになる仲間がいるのだから。

「さて、行きますか」

オレはドアを開けると、ノックしようとした体勢のまま固まっている由姫がいた。

「どうかしたのか？」

「お兄ちゃんの顔が見たくて」

「緊張しているのか？」

「緊張しない方がおかしいよ。私にとって初めての実戦だから。愛佳師匠に稽古をつけてもらったり、お姉ちゃんから動きを習っても、実戦は不安になるし。あっ」

オレは由姫の手を握った。見ただけでわかるほど由姫は震えている。恐怖でという意味ではないだろう。

オレも初めての時は音姉からこうされたっけ。

「大丈夫だ。オレ達と一緒なら確実に成功する」

「お兄ちゃん。うん、そうだね」

「ほうほう。私的な場面では由姫ちゃんはお兄ちゃんと呼ぶのですか。新しい属性開花、ほぶっ」

いつの間にか近づいてきた浩平に由姫は無言でこぶしを叩き込んだ。今のは確実に本気だな。

殴られた浩平はよろよろと後ずさる。あっ、リースが助走を付けて跳んだ。

「結構、くるな。べぎゃっ」

見事な空中回し蹴り。浩平の顔面を壁に叩きつける。

というか、ここまでされたら確実に血が出るはずなんだけどな、こいつはどうして出ないんだ？

浩平は顔に手を当てて壁から離れる。

「リース、今のは結構、ぐあっ」

今度はリースがアイアンクローで浩平の体を持ち上げた。もちろん、リースは空中に浮かんでいる。

そのままリースは無言で浩平を持ち上げたまま部屋に戻っていく。すごく、怖い。

「お兄ちゃんもああなりたくないなら女の子関係はしっかりした方がいいよ」

「お前なら軽々としそうで怖いよな。つか、浩平ならトロルの攻撃くらっても死ななさそう」

「トロルって魔物だよね。戦ったことはないけど」

「まあ、何度も潰し殺される仲間を見てきたからな。今回は関係ないのがいいけど」

あの映像はかなりショッキングだとは思う。

「由姫は大丈夫だな」

「大丈夫じゃないけど、大丈夫になるから」
「無理するなよ。さて、昼ご飯を食べに行きますか」
「うん」
オレは由姫の手を離して歩き出す。ただし、由姫は手を掴んだままだ。やっぱり怖いのだろう。
オレ達と違って戦いの中にいたわけじゃないから。
オレは由姫の手を握る。由姫は強く握ってくる。
オレ達がそのままの体勢で食堂につくと、すでにリース達を除く他の全員が集まっていた。
悠聖が口笛を吹く。
「ラブラブ、ぐはっ」
悠聖の横にいた音姉が浩平の顔面を刀の柄で殴った。
音姉の隣に亜紗がいるからだろうな。
「兄さん、もういいから」
「そうか？」
オレは由姫と手を離した。由姫は名残惜しそうに離れていく。

「弟くんはこっち」

音姉が指差したのはちょうど亜紗の正面だ。亜紗は不満そうな顔をしてオレを見ている。

『由姫と何かあった？』

「由姫の迷いを聞いただけだよな？」

オレはそう言って由姫に尋ねると、由姫は赤くなって俯いた。

そのまま何も答えない。ついでに斜め前からのプレッシャーがすごい。

「弟くん、由姫ちゃんに何をしたのかな？」

音姉は笑っている。本当に笑っている。目以外が。気配はむしろ殺気に近いけど。

「何もしてないから。本当に何もしてないから。由姫に聞けばわかる。だよな？」

「知りません」

由姫は顔を真っ赤にしたままそっぽを向く。

音姉はゆっくり立ち上がった。

「弟くん、外に出てくれる？　たっぷり訓練するから」

「音姉。思い出せ。今日の夜に何がある？」

「大丈夫。弟くんで鬼払いの練習をするだけだから」

それって確実に死ぬよな。

「なあ、由姫、どうにかしてくれ」

「兄さんがあっち方面を知らないのが悪いんです！」

あっち方面って何さ？

「ぷっ、ふふふっ、あははっ」

すると、音姉が笑い出した。それと同時に食堂にいたオレと由姫以外の全員が笑い出す。

オレだけがわけもわからずおろおろしている。

「何が何なんだよ」

「周兄らしいや。悠兄はかなりスケベなのにね」

「お前には言われたくないから。まあ、周隊長のそれは有名だからな」

「だから何が？」

「教えたら面白くないし」

悠聖がニヤニヤ笑みを浮かべながら言ってくる。オレは無言でレヴァンティンを取り出した。

背後から音姉が溜息をつく。たったそれだけでオレはレヴァンティンを直して正面に向き合った。

「いただきます」

そう言って朝ご飯兼昼ご飯を開始する。

本音を言って、体力は残せるだけ残したい。ただそれだけだ。

由姫もオレの横で食事を始める。

「明日も、みんなで食べようぜ」

オレは食事の手を休め、笑みを浮かべながらそう言った。

第四十五話　普通ではない人生（前書き）

周が普通の人生を捨てた理由を半分くらい書きました。

第四十五話　普通ではない人生

孝治が自らの剣にバッテリーを装着していく。

浩平はフレヴァングの整備をしている。

音姉と由姫は並んで正座。

誰もが落ち着きがなく、ただ時間を過ぎるように祈っている。

オレは小さく息を吐いた。

「緊張しているみたいだな、七葉」

「周兄。そりゃね」

七葉はベンチに座って自分の手を見ていた。その手は震えている。

「私はこんな実戦が初めてだから。死ぬかもしれない実戦は。周兄達はよく平気だよね」

「強くなろうとした」

オレは星空を見上げた。

満月の月とまばらな星。その光景を見ながらオレは言葉を続ける。

「だから、戦った。オレ達からすれば、こういう緊張感はモチベーションを上げる効果があるからな」

「周兄は大人だね」

「大人になろうとしただけだよ。オレも、孝治も。子供に見られたら上には上がれない。だから、必死で勉強して、必死で言葉遣いを直した。今更子供に見て欲しいとは言わないけど、オレ達は強くなろうと色々やったんだ。それが、オレ達の決意だ」

普通の人生を歩むことを止めたオレ達はずっと戦い続けている。別の道ならもっと幸せになれただろう。でも、オレ達はこの道を選んだ。

「多分、オレと七葉じゃ見ているものが違う。オレは立ち止まらない。自分のしたいことが達成出来るまで。オレは戦い続ける」

「周兄。疲れないの？　悠兄も頑張りすぎだよ。どうして、そこまで戦えるの？」

「義務と、罪悪感かな」

「えっ？」

オレはそれだけ言って七葉から離れた。

そう、オレが戦うのは義務と罪悪感。そこに無理やりエゴを入れ込ませているだけだ。

オレは、普通の人生を歩んだらダメだから。

「来たな」

オレが小さく呟くとアル・アジフが都を連れてやって来ていた。

二人はオレの前で止まる。

「準備は出来ておるな？」

時刻は七時になったところ。

「こっちは全員集まっている。準備は万端だ」

参加者は第７６移動隊から十名。『ＥＳ』からは一名。そして、

「すまぬ。都も見守ると言って聞かぬのじゃ」

一般人一名。

「周様、狭間市代表として結末を見届けさせてもらいます」

「琴美は？」

「千春が見ています。私達の中はかなりいいですから」

そう言って都は笑みを浮かべた。

オレは頷いて振り返る。振り返って第７６移動隊の面々を見渡す。

「これより一時間後、鬼の封印作業に入る。五十分間は自由行動。談笑するなり練習するなり好きにしていい。では、解散」

解散と言っても空気は変わらない。

孝治は確認したバッテリーを取り外し、浩平はフレヴァングを分解している。悠聖は座禅を組んで精神集中。音姉と由姫は正座をしながら目を瞑って瞑想だ。亜沙と中村は取り留めのない話をして、リースは静かに浩平の作業を見ている。七葉はベンチに座って目を瞑っていた。

「そなたは大丈夫そうじゃな」

「そりゃな。どれだけ実戦に参加していると思っているんだ。アル・アジフもだろ」

「そうじゃな。都は緊張しているようじゃが」

「当たり前です。でも、逃げられません。私は、見なければいけません。伝承を知る者として」

都の決意は高いようだ。

オレは微かにレヴァンティンを抜いてそのまま手を離して鞘に収めた。

「なら、オレから言う言葉は何もないな。みんなを守ってやってくれ」

「私ごときでは活躍なんと、いたっ」

オレは都の額にデコピンをしていた。

オレは小さく溜息をつく。

「亜紗とやった時を思い出せ。実力が足らなくても何か相手にとって大きなデメリットを与えれば、平等ぐらいに戦える。そうだろ」

「そなたがよくやる戦い方じゃな」

オレが相手の方が実力が上の時にやる手段が自らの行動で相手の隙を作り攻撃する手段だ。

鬼の時も鬼の意識をオレに向けさせて孝治が簡単に攻撃出来るタイミングを作り出した。音姉の時も今までとは違う戦い方で音姉から隙を作った。

器用貧乏だからこそのやり方だ。

「見守ってくれ。オレ達を」

「はい」

オレは笑みを浮かべて頷いた。

「周様はどうしてそこまで大人びているのですか？」

「そうだな。もし、都がテロに巻き込まれて家族を失ったらどうする？」

「・・・絶望すると思います」

「もし、幼なじみの家族も死んで、幼なじみだけが生き残り、絶望

した自分を見て戦うことを決意したならどうする？」

「・・・一緒に戦おうと思います」

「もし、幼なじみに才能があって、自分にはそれほど才能が無かったらどうする？」

「別の面で補おうとします。例えば、知識とか」

「そういうことだよ」

だから、大人になろうとした。だから、実年齢と精神年齢が合わないように努力した。

戦闘でサポート出来ないなら、他のところでサポートしなければダメだと思って。

「周様はやはりあの事件のことを今でも悔いているのですか？」

「ああ。だから、オレは戦いに身を投じた。今度はオレが止める番だから」

第四十五話　普通ではない人生（後書き）

次からは第一章前半前編最終局面です

第四十六話　最強の器用貧乏の理由

夜八時。

時間になった。

オレと亜紗は横に並んでお互いに武器を抜いている。

オレは右手にレヴァンティン、左手で亜紗の手を握っている。

二人で前衛を担当する時は戦う前に必ずこうしている。そして、こうしながら言葉を交わしていく。

『周さんは準備出来た？』

頭の中に直接響く亜紗の声。

『ああ』

オレも同じように言葉を返す。

『準備はいいな』

『うん』

オレは手を離した。

「悠聖、頼む」

オレは後方にいる悠聖に声をかけた。

悠聖を守るように他の全員は悠聖を囲んでいる。

悠聖は小さく息を吐いた。

「聖なる刻印を纏し者。光の道を指し示せ。光の剣聖『セイバー・ルカ』」

悠聖が静かにルカを召喚する。召喚したと同時にリースがぴくりと動いた。

「来る。六時の方向」

オレと亜紗は六時の方向を向いた。だけど、まだ見えない。

孝治と中村が飛び上がり、浩平とリースが動く。

オレは腰を落とし、亜紗は刀を抜いた。

「さあ、気合いいれていけよ！」

その言葉と共にオレは地面を蹴った。

金色の鬼が視界に入る。速い。真っ直ぐ悠聖を狙っている。悠聖はさらなる召喚の準備を進めているからだろう。

オレはレヴァンティンを鞘を上に向けた。レヴァンティンをしっかり握りしめ、鞘から抜き放ちながら勢いよく振り下ろす。

レヴァンティンの届く範囲にいなかった金色の鬼が地面に叩きつけられた。

白百合流焔斬り『砕破』。

衝撃を空から叩きつける方法だ。オレは一気に鬼との距離を詰めた。

「オレ達の招待状はどうだった？」

力任せに鬼を押さえ込む。

「熱烈だっただろ？」

『よほど死にたいみたいだな』

オレと鬼が離れる。そこに亜紗が飛びかかった。振り下ろしからの振り上げ。簡単に言うなら燕返し。だが、鬼は簡単に避ける。

「亜紗、行くぞ」

オレの言葉に亜紗は頷いた。だが、鬼は笑っている。

『我のフィールドに変えてやろう』

そして、鬼は足を地面に叩きつけた。

オレ達の周囲から紫の霧が噴き出す。毒とは思わなかった。あまりに露骨すぎるし、あの鬼が使うわけがない。だが、オレは体が重くなって膝をつく。

「これは、魔力粒子か」

オレは紫の霧をよく見ながら言った。

『そうだ。我が力が一番増すフィールド。貴様らには苦しい場所だがな。ハッハッハッ』

鬼は空を見上げながら高笑いしている。

確かに、魔力の濃い空間は普通にいても体の負担が増す。簡単に言うなら初めて吸ったタバコのようなものだ。誰もがタバコを美味しく吸えるわけではない。

慣れればどうってことはないが、慣れない状況では負担だけが増える。普通ならの話だ。そう、普通なら。

オレは一歩を踏み出した。

レヴァンティンを鞘に収め、鞘の中で魔力を凝縮させる。そのまま、力任せの居合い斬りを行った。

白百合流姿崩し『鬼斬り』。

レヴァンティンの刀身に魔力を纏わせ、切れ味を何倍にも増幅させる奥義だ。オレはそれを鬼に叩きつけた。

鬼の体を大きく斬り裂く。だが、傷はすぐに戻る。しかし、それ以上にダメージを与えたのは鬼の自信だろ。

『何故、動ける』

「オレは『最強の器用貧乏（オールラウンダー）』と呼ばれていてな、自分の中でどうしてこうなったか理由を考えてみたんだ。そして、思いついたのがこれだ」

レヴァンティンを鞘に収める。

「あらゆる環境に対し順応し１００％の力を出すことが出来る能力」

そのまま勢いよくレヴァンティンを振り抜いた。だが、鬼はそれを簡単に避ける。

やはり、今の速度じゃ勝てない。

鬼が距離を狭めてくるが、オレはすかさずレヴァンティンで地面をえぐりながら振り上げていた。

地面から削り飛ばされた土が鋭利な槍となり鬼を狙う。だが、土の槍は簡単に砕け、鬼の腕がオレを薙ぎ払った。

『それが貴様の本気か』

「ああ」

レヴァンティンをしっかり握りしめながら答える。やはり、オレの白百合流では効かないか。

だったら、

「アル・アジフ、準備はいいな」

「当たり前じゃ」

背後から凄まじい力を感じる。それをオレは受け取った。

手のひらに魔力を収束させるんじゃない。体中に魔力を行き渡らせる。そして、体中で魔力を掌握する。それが、限界以上の魔力を掌握する手段。

「だいぶ慣れてきたな。さあ、第二ラウンドと行くか」

オレはレヴァンティンを握りしめ、地面を蹴った。

速度が一気に上げて鬼に突撃する。鬼はレヴァンティンを腕で受け止めた。だが、その瞬間にオレは肩から鬼に突っ込んだ。そのまま腕を取り、足を払いつつ横に回転しながら力任せに投げ飛ばした。

八叉流『朧崩し』。

鬼は着地しながら目を見開く。

「かかってこいよ。器用貧乏だけが、オレの取り柄だ」

第四十七話　ＶＳ鬼

オレは自分を器用貧乏だと思っている。白百合流を主に使うが、状況によっては八陣八叉流だろうが白楽天流だろうがなんだって使う。

ただ、最強ではないはずだ。

オレの攻撃をかいくぐり足を払いながらレヴァンティンを鞘から抜き放つ。

鬼はすかさず飛び上がって回避をするが、そこに立ち直った亜紗が斬りかかった。

鬼は刀を弾いて後ろに下がる。

「亜紗、無事か？」

亜紗はこくりと頷いた。

オレはレヴァンティンを右手で構える。

「時間は後約三分。いけるな」

亜紗の頷きと共にオレ達は地面を蹴った。

亜紗が鬼の右から刀を振り上げて振り下ろす。オレは右手でレヴァンティンを下から斬り上げた。

この場合、前に出るか後ろに下がるかだが、鬼は空に飛び上がった。

「撃ち落とすで！」

中村の言葉に空を見上げ、亜紗の手を取りながら全力で地面を蹴る。

見上げた空には星空を背景に数万というレーヴァテインのコピーが浮かんでいたからだ。しかも、全てが全力全開。

「跪け！」

レーヴァテインが一気に放たれた。オレはすかさず亜紗も守るように防御魔術を展開する。

鬼を中心に太陽が出来上がった。

おそらく、デバイスを操作して魔力ダメージを与えるものではなく、物理ダメージを与えるものにしたのだろう。本来なら違反だが、こういう場合は黙認出来る。

レーヴァテインの爆発で鬼が地面に叩きつけられる。オレは防御魔術を切った。

「いくぞ」

亜紗と二人で地面を蹴る。

レヴァンティンを鞘に収めて鬼との距離を詰める。このまま紫電一閃を叩き込む。そう思った瞬間、鬼の口が開いた。

「っつ、まずい」

とっさにストックしていた防御魔術を多重に展開する。だが、鬼から放たれたダウンバーストはそんな防御を簡単に砕いた。

オレと亜紗が吹き飛ぶ。

ダウンバーストの攻撃範囲はさほど大きくはないが、避けるには距離が狭すぎた。

とっさに使用した覚醒魔術で気絶するのはなかったが、動くには二十秒ほど必要だ。

だが、鬼は待ってくれない。

鬼はオレの胴体を掴んだ。そのまま力を込める。

「あっく」

『貴様らは弱い。さあ、我が手で葬ってやる』

そのまま凄まじい力がオレの体に加わった。

防御魔術がほとんど意味をなさない。体が限界である悲鳴を上げている。このままじゃ、死ぬ。

「させない！」

そんな時、由姫の声が聞こえた気がした。

鬼の手が唐突に外れ、落下するオレは誰かに受け止められた。

「けほっ、けほっ。由姫、か？」

オレは由姫に抱っこされていた。由姫はオレを地面に置く。

「大丈夫だよ。お兄ちゃんは私が守るから」

「駄目だ。お前が叶うような相手じゃ、いつっ」

体が悲鳴を上げる。どこかにひびが入ったみたいだが、そんな掠り傷で止まっている暇はない。

「鬼の相手は、オレだ」

『そうか。貴様にとって大事なのはその人間か。なら、貴様の前で八つ裂きにしてやろう』

鬼が身構える。だが、由姫は笑みを浮かべていた。

「由姫、今すぐ下がれ。オレが」

「お兄ちゃんは私を信じれない？」

由姫が身構える。八陣の構えでも、八叉の構えでもない。これは、確か、

「私はお兄ちゃんを信じている。だから、私も信じて。里宮本家八陣八叉流継承者白百合由姫。行きます」

里宮本家八陣八叉流。

それは八陣八叉流の中でもかなり特別な名前だ。

八陣流と八叉流が合わさった八陣八叉の極意の全てを知る里宮家にのみ伝えられる八陣八叉流の最高峰。

里宮本家が本当に認めた弟子にしか習うことを許さないもの。

由姫はその構えをしていた。

『その構え。崩しの構えか』

鬼が驚いたように声を上げる。オレからすれば鬼が知っていることに驚いていた。

里宮本家八陣八叉流には四つの構えがある。その構えを基本に戦うのだが、崩しの構えはその中でも一番有名だ。

「お兄ちゃんには使えないけど、あなたなら使える」

肉を切らせて骨を断つというわけではないが、カウンターの一撃で勝負を決める構え。

わかる人が見ればわざと作られた隙は死の誘い。

『なら』

鬼がまたダウンバーストを放った。いや、放ったはずだった。

キーンというかん高い音が鳴り響きダウンバーストは発動しない。

オレはニヤリと笑みを浮かべたまま取り出した小さな鐘を鬼に向ける。

「ダウンバーストを使えるお前にオレは何の対抗もしていないと思ったか？」

『崩壊の鐘か』

「ああ。衝撃を全て打ち消す鐘。使用条件が厳しいからさっきは使えなかったけど、今回は成功だな」

『小癪な。だが、我を止めることは出来ない。貴様らでは我を倒せない』

「だろうな」

だから、オレはニヤリと笑みを浮かべた。

「後一分、付き合ってもらうぜ」

崩壊の鐘を戻しながらレヴァンティンを左手で握りしめて地面を蹴る。由姫も同じように地面を蹴った。

オレはダウンバーストを使おうとする。だが、そこに放たれた黒い矢が鬼を貫いた。

レヴァンティンが鬼の腕を斬り飛ばす。鬼はすかさず反撃をしてくるが、由姫がそれを受け流しながら肘を鬼に叩き込んだ。そのまま足を払って逆の肘を叩き込む。

鬼は勢いよく吹き飛ぶが、すぐに着地する。

「来るぞ」

オレの言葉と共に鬼がダウンバーストを収束させたらしきものを放ってきた。

由姫は腰を落とす。

「竜昇拳！」

そのままエネルギーの塊を空に殴り飛ばした。これぱっかりはオレも鬼も呆然としている。

鬼が放ったのはある意味魔力そのもの。それを殴り飛ばすなんて非常識にもほどがある。

「お兄ちゃん！」

一瞬後ろを振り返った由姫が叫んだ。

オレは由姫を抱えて左に跳ぶ。

オレ達の横を抜けるように音姉が走った。そのまま鬼に近づき、

「白百合流滅び斬り『鬼払い』！」

音姉の刀が振り切られ、二十もの剣閃が鬼の体を斬り裂いた。

「よし」

オレは思わずガッツポーズを取る。いや、取ってしまった。だから、気づかなかった。

「お兄ちゃん！」

由姫がオレの体を押し飛ばす。

どうして、と思う時間はなかった。

どこからか飛んできた光が由姫を直撃し、由姫を吹き飛ばしたから。

「由姫ーッ！」

第四十八話　乱入者

「由姫ーッ！」

オレの声が響く中、吹き飛ばされた由姫が地面にぶつかり、跳ねて転がった。

オレは由姫に慌てて近づこうとする。だが、背後から飛んできた攻撃に気づいて振り返りながらレヴァンティンで叩き落とす。

「あらら、叩き落とされちゃったよ。ボス、どうするよ」

そこにいたのは大小様々な姿をした面々。だが、見ただけでわかる。こいつらは魔物がいる魔界の住人だ。

「作戦遂行が先だ。邪魔をする奴らは潰せ」

一番真ん中にいる角が額に生えた以外は普通の男がオレを見ながら言う。あまりのプレッシャーに動けない。

時雨クラス、いや、慧海クラスか。

「そなたらは何者じゃ！」

アル・アジフが魔術書を広げる。オレは動けないが浩平とリースの二人が由姫に駆け寄るのがわかった。

「お初にお目にかかります。『ＥＳ』穏健派代表アル・アジフ殿。我は魔界の貴族派所属クラインと言います。此度は鬼の回収に参り

ました」

オレを睨みつけたままそいつはアル・アジフに言う。あいつは気づいている。今一番危険なのはオレ、いや、オレの近くにいる人だと。

「鬼の回収じゃと。そなた、何が目的じゃ」

「鬼の力と申しましょうか。この世に存在した神に匹敵する力。それを我らのために役立てもらうのですよ」

魔界とオレらがいる世界、通称人界、は仲が悪い。正確にはもう一つパラレルワールドというか並行世界というべき天界とも仲が悪い。だが、人界及び魔界、天界の行き来が本当に大変で、オレ達がほとんど話題にしないほど難しい。稀に魔物が暴れることはあるが、それは運良くきた魔物だ。

「この力でこの地を滅ぼし、空の世界も滅ぼし、我らが覇権を握る。素晴らしいではありませんか。低脳な人間共や家畜な羽虫共を殲滅出来る。なんと美しい」

人界から魔界に移動するには地下を、天界に移動するには空を使う。だから、魔界は天界を空の世界だと言う。

オレはレヴァンティンを握りしめた。

「さあ、失せろ。死にたくない人間は尻尾を巻いて逃げるんだな」

「てめえ」

「周」

オレの横に空から孝治が着地する。

「相手は俺らに任せろ。お前は由姫を」

「わかった」

オレは由姫に向かって駆けた。それに気づいた浩平が立ち上がりながらフレヴァングを肩に担ぐ。

「大丈夫だ。後は任せたぜ」

「ああ」

オレは由姫の横に急いでやって来た。多分、取り乱していたに違いない。いや、絶対だ。

もう、失うのは嫌だから。

「由姫？　大丈夫か？」

「お兄、ちゃん。無事？」

由姫が弱々しい声を上げてオレを見てくる。

「オレは無事だ。今から治癒魔術をかけてやるから」

「私は、大丈夫。っつ、だから、他の、人を」

「大丈夫だ。孝治が戦ってくれてる。あいつが負けるわけ」

「嘘」

由姫を挟んで反対側にいるリースが目を見開いて驚いている。

オレは振り返った。そこにはボロボロの孝治と中村の姿があった。

離れた場所には悠聖とアル・アジフが転がっている。

「嘘、だろ」

孝治が負けた？

今は夜だぞ。孝治の『影渡り』が最大限発揮される時間だぞ。なのに、どうして。

「弱い。惰弱な敵だ。さあ、処刑の」

「させるか！」

浩平がフレヴァングを構える。だが、引き金を引くことはなかった。

何故なら、浩平の影から現れた数人のクラインが浩平の体を一斉に殴ったからだ。

このスキルをオレは知っている。

「『影写し』」

「ほう、我の能力を知っているか。知っていたとしても我には勝てんな」

「っつ」

孝治はやられ、悠聖や中村、アル・アジフも動けない。亜沙はダウンバーストの余波から倒れたままだし、由姫は戦闘不能。都はアル・アジフに駆け寄り、リースは呆然としている。

「でも、あまり痛くないよな」

ただ、浩平はまだ動けていた。クラインが呆然と浩平を見る。

「バカな。我が魔力を込めた拳で気絶すらしないだと」

そんな威力の攻撃ならオレ達がよく浩平にしているものだ。だから、浩平には効かない。不気味だけど。

「周、動けるのはお前だけだろ。この状況を打開出来る手段は？」

「くっ」

思いつかない。孝治やアル・アジフがやられた相手にオレなんかが勝てる見込みはない。

オレが俯いた瞬間、ぶわっと凄まじい殺気が湧き上がった。

オレはそっちの方を向く。そこにはゆらりと立ち上がる音姉がいた。後ろには復活を始めている鬼の姿が。

キレたという領域を越えている。

「由姫ちゃんを、どうして傷つけたの？」

「我に質問するか。だが、答えてやろう。気まぐれだ。満足か？」

「うん」

音姉が頷く。頷いてオレに向かって何かを投げてきた。オレはそれを受け取る。

オレが音姉にプレゼントしたリボンだ。力を封じ込める能力をつけたリボン。つまり、音姉は自分で止めるつもりはないらしい。

音姉が顔を上げる。その顔には狂ったまでの笑顔があった。

「持っててね」

「人間。何を」

その瞬間にはクラインの懐に音姉が入っていた。

第四十八話　乱入者（後書き）

浩平の防御力はゲームでいうとカンストです。

第四十九話　鬼姫（前書き）

唐突に語られる内容がありますが、この話の後の幕間にて語られる内容に入っています。

第四十九話　鬼姫

音姉の刀が煌めいたと思った瞬間、クラインが殴り飛ばされていた。
そのまま追撃しようとするが、クライン以外にいた魔物達が道を塞ごうとする。

音姉ははっきりと言った。

「どけ！」

その言葉と共に道を塞ごうとした魔物が吹き飛んだ。まるで、言葉が実行されたように。

音姉は刀を振り上げる。

だが、その腕をクラインは掴んだ。

「人間の分際で！」

クラインはそのまま魔術をゼロ距離で叩きつけようとする。だが、音姉の姿が消えた。

「由姫ちゃんを傷つけた罪は思いよ」

「そうそう」

音姉はいつの間にか二人に増えていた。いや、もっと増えている。

いつの間にか音姉は三十人になっていた。

「私の禁忌に触れたからね」

「由姫ちゃんと弟くんは私が守らないといけないのに」

「あなた達は由姫ちゃんを傷つけた」

「弟くんを狙った」

三十人の音姉が口々に言葉を発する。

オレは額から汗が流れるのがわかった。

分かれた音姉は全てが実体を持っている。オレの感覚はそう判断していた。

「どれが本物だ！」

クラインが『影写し』の能力で全ての音姉の周囲に大量の自分の影の実体を作り出す。これ自体が神話レベルのスキルと言われ、極めて強力な効果だ。だが、その全てが音姉の刀によって斬り裂かれていた。

「どれが本物？」

「勘違いしているよ」

「うん、勘違い」

音姉全員が声を合わせる。

『全てが本物で全てが偽物。それがこの技だよ』

聞いたことがある。白百合流の究極奥義には自分と同じ分身を作り出す能力があると。それが、これか。

クラインは目を見開いて後ずさる。

「バカな。ありえぬ。ありえぬ。人間が神の境地に立つなど。鬼よ。こいつを滅ぼせ」

『我に命令するか。だが、いいだろう。この者はまさに鬼だ』

鬼が音姉にゆっくり近づく。オレは周囲を見ながらレヴァンティンを握りしめた。

「私が鬼？」

「面白いね。本当に」

「音姫？　歌姫？　どれが本物の私？」

「私は鬼姫だから」

分身が消え、音姉が動く。だが、鬼は全く動けなかった。

居合い斬りの後に体を回転させながら大上段から振り下ろす。そして、振り下ろした後は勢いよく斬り上げた。そのまま鬼の腹を蹴り飛ばす。

紫電一閃から雲散霧消。そして、雲散霧消・鎧斬り。次は多分、大上段からの大地を割る振り下ろし。白百合流山砕き『砕破剛刀』だ。

音姉は大上段から振り下ろした。刀は地面に突き刺さり、鬼ごと大地を割る。

白百合流山砕き『砕破剛刀』。

極めた人なら本当に山を砕くとされる技。だが、その衝撃に耐えられなかった刀が砕け散った。

だが、鬼の体も大きく裂けている。オレは地面を蹴った。

背後からクラインに迫る。

「人間風情が！」

だが、オレに気づいたクラインが振り返りながら魔術を放ってくる。

体に突き刺さる土の槍。だけど、オレは痛みをこらえて地面を蹴った。そのままレヴァンティンでクラインの体を斬りつける。いや、斬りつけるつもりだった。

レヴァンティンが止まる。何かに引っかかったように。

それと同時にオレの体に何かが巻きついた。

「頸線か」

「クラリーネめ。おいしい所だけを持っていったな。まあいい。貴様から死にたいようだな。」

音姉は砕けた刀を見ながら呆然としている。あの刀は確か音姉の爺さんの形見だったな。本来の武器を使わずに大事にしていた刀。

オレは息を吸い込んだ。音姉に立ち直ってもらわないと、オレ達は生き残れない。

「ったく、音姉！」

音姉の体がビクッと震える。

「第７６移動隊隊長海道周の名において、限定的な解除を許可する」

狭間市に向かう前に時雨から言われたことを思い出す。オレの許可があれば、音姉も亜紗も孝治も、限定的に本来の武器を使える。だから、今まで封印してきた音姉の本来の武器を使わせる。

「弟くん？」

「オレ達を守れ！　音姉の神剣で！」

この世にある神の力が宿った武器。それが神剣だ。神剣の持ち主は『ＧＦ』からマークされ、不用意に使わないように定められている。それほどまでに強く、強力だ。

音姉は頷いた。頷いて刀の柄を放す。

「神剣だと！」

クラインが驚いて音姉を見た。

当たり前だ。こんな子供が神剣を持つなんて奴らからしたら考えられないだろうな。

「弟くんに隠していたはずなんだけど」

「悪い。時雨から聞いた」

第７６移動隊の隊長になる以上秘密には出来ないとあの日言われた。

音姉が神剣を持っていることを。

「私は、弟くんにとって身近な姉でいたかったのにな」

「音姉はいつでも身近だよ」

「ありがとう」

音姉が歩く。だが、その手には新たな刀が握られていた。

普通の刀にしか見えない。見た目だけは。だが、その刀が持つ力に誰もが目を見開いていた。

「まさか、光輝」

音姉が刀を、光輝を構える。

「弟くんを離しなさい。離さないなら、手加減は出来ない」

さっきの音姉は鬼姫というべきくらい混乱していた。だが、今の音姉は落ち着いている。

「くっ、一旦引くぞ」

クラインの声と共に魔物達が一斉に飛び散った。

オレは頸線からの拘束を外され、レヴァンティンを下ろす。

「音姉」

オレは音姉にリボンを差し出した。

音姉は光輝を鞘に収めて髪をリボンで括る。

「弟くん、ごめんね」

「何がだ？」

「取り乱して。私、由姫ちゃんがやられて、それで」

「取り乱していたのはオレもだ。音姉だけの責任じゃない」

オレは振り返った。

孝治や亜紗がゆっくり起き上がっている。悠聖も立ち上がった。

「負けたな」

「うん。新たな敵も現れたね」

「魔界の奴らか。ったく、何だって言うんだ」

わからない。魔界の奴らがどうして金色の鬼を狙っているかが全くわからない。

鬼は魔界の奴らに回収された。奴らは一体何を企んでいる。

「本気、出さないとな」

オレは満月の空を見上げた。

第四十九話　鬼姫（後書き）

ようやく第一章前半前編が終わりました。これから後編に入ります。
見所は周の本気と音姫達が持つ神剣の力。
これからさらに長くなります。どこまで行くかわかりませんがともかく突っ走っていきます。

何か悪い点に気づいた人がいれば、教えてくだされればありがたいです。
物語をよくしいきたいのでご意見ご感想お待ちしております。
次は幕間が入ります。説明不十分だと思う世界と神剣についてです。

幕間１　世界について（前書き）

設定の公開。この世界についてです。魔界と天界との関係はそばにあるけど見えない世界の様なものです。

幕間1　世界について

昼が過ぎた頃、オレは家でゴロゴロしていた。横では由姫が嬉しそうにゴロゴロしている。

今日はちょうど任務も訓練もない空いた時間だったから家に一日中いることにした。

「お兄ちゃんは一日中家にいるんだよね？」

「ああ。今日は一日中ずっとのんびりしている。テレビでもつけるか」

オレはそう言いながらリモコンを操作してテレビをつけた。

やっている番組は普通のニュースだ。

『次のニュースです。政府の公式発表によると、魔物及び天魔による被害者の数が今年一年で千人に達することがわかりました』

「お兄ちゃん」

「なんだ？」

オレはテレビを消す。

「魔物と天魔はどう違うの？　白と黒？」

「んなわけないから。魔物や天魔は並行世界にある魔界と天界に住

んでいるんだ。魔界に住むのが魔物。天界に住むのが天魔ってふうにな」

「見分け方はあるの？」

「ない。そこまでオレも詳しいというわけじゃないけどな。まあ、魔界は地の世界。天界は空の世界と言われるから、空を飛びやすいのが天魔？」

実際に詳しくは知らない。魔物や天魔が出てくるのはかなり珍しく、出たとしても衰弱していることが多いからだ。

実際に戦った魔物もほとんどが衰弱していた。

「地の世界と空の世界？」

「魔界に行くためのゲートが地下にあり、天界に行くためのゲートが空にあるからだな。魔物や天魔が来るのはオレ達が使えるようなゲートじゃないから来る数が少ないんだ。ゲートが不安定だからな」

「国交があるの？」

「あるぞ」

オレの言葉に由姫は目を見開いて驚いていた。

「魔界と天界の国交はないけど、オレ達の世界と二つの世界の国交はある」

あるにはあるが、実際には魔界も天界も第一特務と戦いたくないか

ら国交を結んだようなものだ。

脅したと言われても驚かない。

「時雨からすれば、全面戦争にならないように努力しているからありがたいだろうな。最近は過激派の動きが活発になっているし」

「そういうものかな。でも、国交を結んでいるのにどうして魔物や天魔からの被害はないの？」

「法律を守らない奴なんてたくさんいるだろ。それと同じだ」

少し違うと思うけど口にはしない。

「ふーん。そうなんだ。でも、国交が結んであるのにどうしてニュースは知らせないのかな？」

「暴動が起きるだろ」

確実に暴動が起きる。国交を結んでいる以上、内政干渉だろうがなんだろうがこちらでは人が死んでいるのだ。だったら、戦争に発展してもおかしくない。実際にそういう主張をする奴らもいる。

やられるくらいなら滅ぼせばいいと。

「オレ達の役割は戦いを止めること。でも、いつかは公表しないといけないだろうな。それがいつになるかわからないけど」

「その時になったら、私はお兄ちゃんの背を追い越しているかな？」

今の身長があまり変わらないから言っているんだろうな。でも、オレは今から伸びる、はず。

「どうだろうな」

オレは小さく笑った。

幕間1　世界について（後書き）

次の幕間は神剣について。

幕間2　神剣について（前書き）

神剣について書きました。
光輝の能力の一つを書いています。光輝の文字をみればわかりますが隠していることはあります。いつ出せるかわかりませんが。

幕間2　神剣について

「まさか、音姉が神剣を持っていたとはな」

オレは狭間市に向かう前日の夜、時雨の部屋を訪れていた。そこで渡された時雨からの資料。そこには三人の持つ神剣について書かれていた。

「亜紗の矛神。孝治のリバースゼロ。そして、音姉の光輝か」

「ああ。光輝は白百合家に伝わるものだ。音姫からすれば秘密にしたかったみたいだが、第７６移動隊の隊長になる以上、隠せない。慧海の話だと、光輝の神剣としての力は一番異質だ。神剣の生まれた理由を知っているよな？」

「当たり前だ。神の力が宿った武器。力の断片だろ。神が神を砕き、神の力を自らの力として使えるように作った」

「まあ、大体合っている。その中でも光輝は最強クラスの神剣だ」

音姉の実力に最強クラスの神剣って、どこまで凄いんだか。

「最強クラスね。音姉の刀は十二分に名刀だ。確実に、白百合に伝わる宝刀。それと比べたら？」

「桁が違う。慧海と一般人が戦うようなものだ」

「そんなに？」

神剣には様々な能力がある。ただし、神剣とレヴァンティンや時雨の持つデバイス由来の武器は違う。

デバイスの別名が魔術器と呼ばれおり、魔術の力のあるものと解釈できる。バランスよく魔術を使うためだ。

だが、神剣は一芸特化。

名前のある神剣でも、冗談抜きで竜殺しの力があるものがある。その威力も折り紙つき。

神剣の大半が何故かわからないが日本語という面白い部分もある。

神剣の力は主に二つ。

一つは持ち主の呼び声等に応じて現れる能力。デバイスから取り出す力がかなり省ける。

もう一つが神の力。絶大な力を持つ神の力を使える。

だが、神剣と言えど、魔術器より劣るものは存在する。レヴァンティンと比べればほとんどが劣るだろう。

「光輝は持ち主を神格化させる能力があるんだ」

「神格化ということは、音姉の実力がワンランク上がるのか」

「簡単に言えばそうなる」

つまり、神の肉体を持つということだ。身体能力の底上げから様々

な恩恵まで多種に渡って手に入る。
確実に勝てなくなるな。

「土壇場でそんなことをしてみろ。戦況がひっくり返る」

「だろうな」

つまり、オレ達が負けかけた時に音姉の力を使えということか。でも、音姉はどうして隠したかったのだろうか。

「なあ、最悪、全員の力を最大限まで許していいのか？」

「それは駄目だ。音姫は大丈夫でも、亜紗と孝治の二人は危険が大きすぎる。どちらも特殊型の神剣だからな」

「つまり、音姉だけはいいのか」

「大丈夫だろう。一応、権限は与えておくが、最大限まで解放するにはオレの許可が必要だと思っていてくれ」

「わかったよ」

オレは頷いた。頷いて資料を見る。

「義理でも姉弟だろうが。音姉の馬鹿」

幕間２　神剣について（後書き）

幕間が終わり前半後編に入ります。
最初は事の顛末と貴族派について。

第五十話　報告書

『鬼の封印作業の顛末。

来たる日午後八時より鬼の封印作業のため戦闘を開始。対暴徒鎮圧用魔術をくらうも白百合音姫の攻撃により、鬼を撃破。だが、封印作業に入る寸前で別勢力の攻撃により白百合由姫が負傷。そのままメンバーの半数がやられ封印作業は失敗。別勢力は魔界の貴族派と名乗り、鬼を回収し逃走。第７６移動隊の被害は軽傷４、重傷１。『ＥＳ』からは軽傷１。作戦失敗の責は第７６移動隊隊長海道周にあり、他の人員には無いとする。

第７６移動隊隊長海道周』

時雨は静かに周から送られてきた報告書を机の上に置いた。部屋の中には慧海の他に銀髪の青年がいる。

時雨は小さく溜息をついた。

「まさか、別勢力が介入するとはな。ゲートの記録は？」

「残念ながらないよ。記録が改竄されたらお手上げだけどね」

銀髪の青年が肩をすくめる。

別世界に向かえるゲートには必ず記録が残る。その記録を操作出来るのはゲートの職員か、各勢力の上層部くらい。

「しかし、貴族派か。何が目的なんだ？」

「僕からは何とも。慧海は？」

「貴族派自体は魔界にある勢力の一つだ。魔王派、議会派に続く第三勢力。血の気が盛んらしいな。詳しくは知らん。つか、時雨宛てに手紙が来ていなかったか？」

「ああ。来てる」

時雨はそう言って机の上に置いてあった手紙を手に取った。すでに封は切ってある。

「貴族派からの脅迫状だ。増員したら人を殺す。簡潔に言えばこうなる」

「だけど、貴族派の言う通りにすれば世界が滅ぶと僕は思うよ。慧海や時雨だって気づいているんじゃないかな？　鬼の正体に」

「当たり前だ。慧海だってそうだろ。あいつが本当に封印されていた場所か。つか、慧海は知らなかったのか？」

慧海は首を横に振る。表情を見ても本当にわからなかったようだ。

「封印されたのは確実にはるか昔だ。オレが生まれるよりずっとな。だが、由々しき事態ではある」

「だな。幸運なのは周達がいるってことか。慧海から見て再戦したらどっちが勝つと思う？」

慧海は時雨から報告書を受け取った。

一枚目に書かれている大まかな筋書きを読まずに詳細なページに向かう。

「確率は半分だな。詳細を見る限り、亜紗と孝治の神剣は知られていない。音姫の神剣は対抗手段が難しい。この二つはかなりのプラスだ。だが、実力は貴族派の方が上。天才軍団だとしても、その差は歴然だ。後は、不確定要素の二人がどう動くか」

不確定要素というのはおそらく周と由姫のことだろう。慧海から見ればあまりに不明な部分が多すぎる。

慧海は小さく溜息をついた。

「周の実力がどこまで本気か、由姫がどこまで戦えるか。それが問題だな。というか、重傷の由姫は三日で退院出来るレベルなんだな」

「あの愛佳が育てたんだぜ。ぴんぴんしているだろうな。問題は」

「評議会だね」

『ＧＦ』の最高意思決定機関は確実に周の査問会を開く。そして、時雨達へ批判の矛先を変えるに違いない。

「ったく、奴らは人一倍頭が頑固なんだから、ちょっとくらいは柔らかくしろっていうんだ」

「まあ、少し頑固なくらいじゃ評議会では生きていけないと思うよ。慧海、慧海は貴族派について全く知らなかいの？」

「全くというほどじゃないけど、答えられる内容は少ないな。ただ、評議会の奴らに対して有効な手段にはならない」

肩をすくめて慧海は言う。

評議会による査問会はほとんどの可能性で降格処分が除名処分だ。もし、周がそうなったなら第７６移動隊は確実に崩壊する。

「有効な手段を見つけて、評議会による査問会で周をどこまで庇いきれるか。もし、庇いきれないなら第７６移動隊は確実に崩壊するな」

「そうだね。慧海の言うように確実に崩壊する。第７６移動隊で海道周の役割は司令塔。ブレインを無くした部隊ほど脆いものはない。時雨は何か秘策はある？」

「周が何とかすると思うんだよな。だけど、オレ達も調べないといけない。慧海。慧海は貴族派について当たってくれ」

「了解。ギルガメッシュに尋ねてみるさ」

「ギルバートは評議会の動向を頼む」

「いつも通りだね。了解したよ」

「オレは鬼についてまとめる。やるぞ」

時雨はそう言って立ち上がった。

周がどうなるかはわからない。だが、周は守らないといけない。

だが、立ち上がったと同時にドアがノックされた。そして、ドアが開く。

「失礼するぞ」

「アル・アジフ！？」

時雨は驚いて声を上げた。

アル・アジフは小さく息を吐く。

「急いでここに来たから疲れたわ。さて、『ＥＳ』穏健派より重大な情報じゃ」

「『ＥＳ』としてね。慧海とギルバートを外すか？」

「いや、大丈夫じゃ。我が言いたいのは、貴族派に『浸透』のクラリーネがおる」

「『浸透』のクラリーネだと。まさか、水帝になった」

慧海が驚いたように声を上げた。

「そうじゃ。魔界五将軍の一人が貴族派におる。真なる鬼を手に入れるためにの」

第五十一話　見舞い

オレは小さく息を吸って病室のドアをノックした。

「どうぞ」

由姫の声が聞こえ、オレは部屋の中に入る。

「元気か？」

「お兄ちゃん。うん、元気だよ」

病室内にいるのはベッドの上にいる由姫とベッドのそばで座っている音姉の二人。

オレは椅子をベッドの横に置いて座った。

「明後日には退院してもいいってさ。さっき、医者と話してきた」

「そうなんだ。良かった」

「ようやく落ち着いたんだね。弟くんがここに来れるくらい」

音姉の言葉にオレは肩をすくめる。

落ち着いたと言えば落ち着いたのだが、まだまだ落ち着いていない部分もたくさんある。

「狭間市内はかなり落ち着いたな。『ＥＳ』の方がゴタゴタしてい

ることを除いて」

「今、アルちゃんいないんだよね」

アル・アジフはあの日の夜、調べることが出来たと言って部隊副隊長に後を任してどこかに行った。

だから、現在はリースが一時的に『ＥＳ』に戻っている。

「アル・アジフさんがいないの？」

「ああ。クラリーネの名前に聞き覚えがあるって。確かに、レベルは高い」

レヴァンティンが簡単に受け止められるレベルの頸線。それが出来るのは一人しか知らないが、クラリーネではない。

七葉じゃ月とスッポンくらいに実力が違うだろう。

「そうなんだ。お兄ちゃん、ごめんね」

「あのな、あの時オレを庇ってくれなかったらもっと混乱していた。確実に誰かやられていた。庇ったことは怒るけど助かった。オレこそごめん。あの時、油断して」

「弟くんが油断なんて珍しいね。やっぱり、まだ子供なんだね」

「その点だと音姉も子供だろ」

オレは小さく溜息をついた。

あの時は完全に油断した。音姉の技が決まり勝ったと思った。後は鬼を封印するだけだと。

オレはまだまだ大人になりきれていない。

「音姉、刀は」

「修復不可能。でも、柄だけは今も持っているから」

「オレが油断しなければ」

「ううん。私だって取り乱していたから。あの場面で砕破剛刀は使うべきじゃなかったし」

「お姉ちゃんが？　敵はそんなに強いの？」

由姫の驚きは最もだ。音姉は戦闘中にはあまり動じない。それが音姉のすごいところだ。だけど、あの瞬間は違う人になっていた。オレの知らない音姉に。

「貴族派って言ってたな。魔界の一派。強さはかなりのレベルだ。『影写し』をどうにかしないと」

「だよね。私が対抗すれば大丈夫だけど」

確かに音姉なら大丈夫だろう。音姉の技術なら簡単にどうにかなる。どうにかなるけど、

「クラインだっけ。あいつに音姉を当てたとして、他はどうするか」

「誰か味方を呼ばないの？」

「それも考えたんだけど、こういう場合って確実に脅していると思うよ。上を」

音姉が言うことはオレも考えていた。

貴族派だろうが何だろうが、慧海が出て来たなら一瞬で全滅する可能性だってある。だから、確実に脅迫状でも送っているはずだ。

「だとしたら、私達だけで戦わないといけないということ？」

「いや、オレが抜ける可能性がある」

オレの言葉に音姉が俯いた。音姉と孝治にはすでにこのことを言っている。

「どうして？」

「更迭の可能性がある。明明後日、由姫が退院して次の日にオレは査問会に出る。時雨達がいろいろしてくれているけど、最悪の場合、オレはここには戻れない。後任は無理だから音姉が隊長に昇格かな」

「そんな。私はお兄ちゃんと一緒にいたいから戦うことにしたのに、また、一人になるの？　もう、嫌だよ。一人は。お兄ちゃんと一緒に」

「ただで負けるつもりはない。最悪、オレの隠している能力を知らせてどうにかする」

「弟くんはやっぱり何か隠しているんだね」

音姉がやっぱりという風な顔になる。対する由姫はキョトンとしていた。まあ、音姉ならわかるか。

音姉はオレからすれば剣技の師匠。だから、実力はよく知っている。なのに、戦功は釣り合わない。何かの能力を隠していると思われてもおかしくない。

「交渉は苦手だけど、オレが第７６移動隊に残れるように頑張るだから、信じてくれ」

「お兄ちゃん。うん。わかったよ。私はお兄ちゃんを信じているから。だから、絶対に戻ってきて。多分、今回の相手と戦えるのはお兄ちゃんだけだから」

「そうだね。私が無事で光輝を持っているとわかった以上、貴族派はほとんど手を出さないと思う。だから、猶予はあるかな」

「猶予か。後、二週間と二日」

鬼が言った言葉だ。あの日から考えて二週間と二日後に何かがある。オレはそう思っている。

一週間は貴族派がアクションを起こさないだろうな。

「あの時は不意を打たれてやられた。だけど、次はない」

「あの時は由姫ちゃんや亜紗ちゃんが負傷していたからね。でも、

私達はクライン一人にあしらわれた」

「クラインが誰と相手をするか考えないとな」

浩平が殴られる速度を見ていた以上、対抗出来るのは音姉と亜紗くらいだ。オレも反射神経でどうにか出来そうだがあまりにも不確定。

最悪、オレか亜紗が本気を出すしかない。

「お兄ちゃん、私じゃ、ダメかな？」

「ダメというか、速度が足りないだろ。確かに由姫はパワーもあるし速度もあるけど、クラインと対抗出来るほどじゃない」

「うん。でも、敵討ちがしたい。私がこうなった原因はあの人だから、一発殴りたいの。それに、愛佳師匠と比べれば十分に遅いと思うし」

『比べる人が間違っているから』

オレと音姉の声は見事にシンクロしていた。

第五十二話　病院の前にて（前書き）

ユニークが千人突破しました。読んでいただきありがとうございます。
今回は久しぶりに正を出してみました。未来を体験したなら、あなたはどうしますか？

第五十二話　病院の前にて

リースは一人でベンチに座っていた。

場所は病院の前。由姫が入院している病院の前だ。今は周と音姫が見舞いに行っている。音姫が行ってから周が向かったのもリースは見ていた。

だから、リースはベンチに座って竜言語で書かれた本を読む。そして、それを唐突に閉じた。

「周と話がしたい？」

前を通りかかった人物に話しかける。通りかかった人物は海道正。

「おや、君は確か」

「あなたが周と会ったことは知っている。結果を知っていることま」

「へぇ～、僕はそんな力知らないけど？」

「当たり前。浩平にすら言ってない」

リースは立ち上がった。立ち上がって竜言語の本を戻す。

「あなたと話がしたい」

「僕も、君と話したくなったよ。その木の影にいるお嬢さんもどうかな」

リースは驚いて振り返った。そこに七葉がいたからだ。リースには気配すら感じなかった。

リースの額に汗が流れる。

「やっぱり、ここに来たんだね。周兄と話をするには十分だしね」

「やっぱりということは、君もお仲間かな？」

「どうだろうね。海道正。でも、私は君を肯定しない」

「どういう理由かな？」

正の目が微かに細まる。たったそれだけで強烈な殺気が二人にだけぶつけられた。だが、リースはこの殺気を知っている。

「七葉が怒る理由はわかった」

「おや、どうやら気づかれたみたいだね。僕の正体に」

「言うつもりはない。でも、浩平に危害を加えるつもりなら知らせる」

正がニヤリと笑みを浮かべた。その笑みは似ている。ある人物と。

「リースさんもえぐいことをするね。それを教えたら正は確実に消え去るはずなのに」

「死なないはず。私が推測するあなたの武器は」

「言わなくてもいいよ。誰が聞いているかわからない」

正が降参という風に手をあげた。

七葉が小さく息を吐いて戦闘体勢を解く。周囲に展開していた頸線が槍となり虚空に戻る。

「多分、君が考えている内容は合っている。まさか、僕達と一緒の存在でない君がここまでわかるなんて」

「一緒の存在？　私達はあなたと違う。私達が知っているのは経験だけ。体験じゃない。正とは違うよ」

「そうだね」

正が笑った。まるで、自分を自嘲するように。

リースがベンチに座る。

「あなた、いや、あなた達の目的は、世界を変えること？」

「違うよ。世界をより良き世界にする。僕はそう思っている」

「私達は世界に介入すべきじゃない。世界は変わっているよ。常にね」

「そうだね。うん、あまりに変わりすぎていると思わないかい？」

その言葉に七葉は首を傾げた。

「僕が知る未来と結果が同じでも、過程が全く違う。面白いほどにね。だから、確かめたいんだよ」

正は笑みを浮かべた。

「この世に世界を動かす神がいるかどうか」

本当に世界を動かす神がいるならそれは人の出る幕じゃない。神によって都合よく人は踊らされているだけだ。

正はそれが知りたいわけではないと思う。

「正が出来るかわからないけど、私は無理だと思うよ。そんな力」

「この力がかい？」

リースは慌てて振り返った。いつの間にか正が七葉の後ろに立っていつの間にか抜いた剣を首筋に当てている。剣の柄はまるで時計のように一部の針が動いていた。

七葉が瞬間で頸線を張り巡らせようとする。だが、正の腕が動き、頸線は全て斬られた。

「僕には力がある。だから、僕は確かめてみせるよ」

その言葉と共に正が消えた。

七葉がその場にぺたんと座り込む。

「嘘。強く、なってる」

「無事？」

リースは慌てて七葉に駆け寄って立ち上がらせた。

少しだけ呆然としていた七葉は小さく頷く。

「リースさん、ありがとう。あのさ、私のこと、みんなに内緒にして欲しいな」

「大丈夫。秘密にする」

「ありがとう。私は自分の未来を知っているから、今を幸せに生きたい」

そして、七葉は笑った。

「死ぬまで幸せにね」

まるで、七葉はもうすぐ死ぬと自分で言っているようだった。

リースはその笑顔を見て首を横に振る。

「死ぬとわかっているなら運命に抗うべき。私はそう思う」

「そうだね。でも、抗えない運命もあるんだよ」

又は、抗うことの出来ない宿命というべきか。

七葉はベンチに座った。リースもベンチに座る。

「私は、無理を言って狭間市に来た。私の未来を試したいから」

「どういうこと？」

「知らない体験をして強くなる。私は、そう決めたんだよ。自分で」

「みんな、戦ってる」

「うん」

リースと七葉は空を見上げた。

誰もが戦っている。第７６移動隊の場合は大半が過去が理由だろう。

周は過去に苦しみ、孝治は過去に嘆き、悠聖は過去を悔い、音姫は過去を見つめ、光は過去に失った。

亜沙は今のため、由姫は未来のため戦っている。誰もが、自分の何かに呼応して戦っている。

「抗えない運命だとしても、悪あがきは嫌いじゃないから」

七葉はポツリと独り言を漏らした。

「私は強くなる。悠兄の妹として、周兄のいとことして胸を張れるように」

第五十三話　過去（前書き）

周の大きな過去話です。周が言った義務とは何か。その原因が書かれています。

第五十三話　過去

オレは屋敷の縁側に座っていた。隣には都がいる。

オレは由姫のお見舞いの後に直接都の家に向かった。都の家ではちょうどリースも悠人もいないらしく、のんびり縁側で話をしようということになったのだ。

話と言っても一つだけ。オレが狭間市を出ることに関してだ。

「そうですか。周様が査問会に」

「負けたのは事実だからな。『ＥＳ』と協力した以上、評議会の爺は結果が欲しかったようだし」

「結果は得られず敗北した」

「そうなるな。まあ、事実だから仕方ないけど」

都は不安そうな顔でオレを見てくる。

「周様が戻って来ない可能性はあるのですか？」

「ああ」

オレは隠すことなくそう言った。負けるつもりはないけど、最悪の可能性としては普通にある。

オレからすればあまり考えたくないけど。

「周様が隠している能力を使えば」

「都が何を知っているかはこの際には聞かない。でも、全てを公にすることは出来ない」

「何故ですか？」

都はおそらくオレがどうして隠しているかの理由を知っている。知っていて尋ねてくる。

オレは小さく溜息をついた。

「確かに、あの時にあの力を使えば勝っていた。オレはそう断言する。だけど、使わない方がいい」

「どうしてですか？」

「そのレアスキルは、化け物だろ」

「それは」

都は言葉を濁らせる。

オレの能力を知っているからこそ、都は反論出来ない。

「それに、オレの能力はあの事件を引き起こした原因なんだ」

「あの事件ですか？　一体どんな」

「史上最悪の犠牲者を出した世界同時多発テロ。それを隠れ蓑にオ

レの誘拐が目論まれた」

別名『赤のクリスマス』。

犠牲者は負傷者含め一億近く。主にアメリカや中国などの先進国やインド、ブラジルの新興国が狙われた。

先進国の中で一番被害の少なかったのは日本だが、それでも三百万人近くが亡くなっている。特に酷いのがアメリカの都市ニューヨーク。

今では復興がされ新しいニューヨークの意味でニューニューヨークと呼ばれているが、『赤のクリスマス』当時は生存者がたった五人だった。

「『赤のクリスマス』の理由がオレなんだ。オレがいたから『赤のクリスマス』が起きた。オレのレアスキルのせいで」

「周様」

「あの日、オレのレアスキルは使えなくなったとされているんだ。実際に使えない時期もあったからな。だから、今は見過ごされている。もし、レアスキルが残っているとわかったなら？」

また、『赤のクリスマス』が起きるかもしれない。みんなを不幸にするかもしれない。

「でも、もう隠せないな」

「誰かを守るためですか？」

「ああ。狭間市で知り合ったみんなを守るために、オレは使う。使えるかわからないけど」

オレはそう言って軽く肩をすくめた。

もし、あの場で出していたならあいつらもこの狭間市に来る可能性がある。その目を欺くためにさらに大きなテロが起きる可能性もある。

だから、オレは使えなかった。由姫がやられた時も。

「っつ」

いつの間にか力強く拳を握りしめていたらしく、その手から血が溢れていた。

「なあ、都。オレは強いのか？」

「周様は強いです。確かに第７６移動隊の中での強さならなんとも言えませんが、私は強いと」

「妹に守られて、音姉の力で生き延びた。オレは、弱いんだ。力なんてない。どうすればいいんだよ。どうすれば、みんなを守って戦えるんだ。誰か教えてくれよ」

自分一人なら生き残れる自信はある。だって、オレのレアスキルは生存に特化した能力だから。

でも、第７６移動隊のみんなを守るとなれば話は違う。みんなが生

き残れる可能性は難しいと思っている。まともにぶつかれば、誰かが死ぬ。

その時のオレはいつものオレじゃなかったと思う。いや、大人ぶって頑張っていた糸が切れたというべきか。都の前なのに泣いていた。自分のレアスキルではみんなを救えない。どうすれば救える。

「周様」

そうしていると、オレは都に抱きしめられていた。

「もう、いいんですよ」

「都？」

「そんなに頑張らなくても、原因となったから義務で戦わなくても」

「オレは」

「周様は戦うことはエゴだと言ってました。でも、周様が一番他人に捕らわれています」

「オレがいたから、たくさんの人が死んだ。怪我をした。オレがいたから」

「あなたがいなければ、たくさんの人が死んでいたと私は思います。周様の活躍は耳にしますから。村を救い、街を守り、民を助け、民族を救う。私よりも年下なのに、周様はたくさんの人を助けています。私が、いえ、みんな知っています。誰も殺さず、敵だったもの

と仲良くなる。あなたがいたから救われた人はたくさんいます」

「もう、たくさんなんだ。誰かが死ぬのは。誰かが、怪我をするのは。オレは、自分だけが、傷つけばいい」

そうすれば、傷つくのは自分だけで済む。

あの時も、自分だけが標的にされていれば良かった。そうしたら、誰かが傷つけられて心が痛むことはない。

オレだけが傷つけば。

もう、感情が止められない。必死で隠していた全てが溢れ出していた。

「みんなを守りたいのに、その力が欲しかったはずなのに、オレは由姫を見捨てたんだ」

オレがあの時油断しなければ、オレが白百合の家にいかなければ、オレが生まれてこなければ、

「違います」

「何が違うって言うんだ！　オレは、オレは、守れたはずなのに。なのに、なのに」

「周様は自分が生まれて来なかったら良かったとお考えですか？」

「当たり前だ。オレがいなければ」

都が離れる感触がする。オレが顔を上げた瞬間、頬に衝撃が走った。
叩かれた？
都がオレをゆっくり抱きしめる。
「周様は、周様の近くにいる人を見ていてはなかったのですか？
周様のそばにいた由姫さんや亜紗さんを見ていてはなかったのですか？　二人は周様と一緒で幸せそうでした。そんなことは私でもわかります。周様は、みんなを幸せに出来る。周様がいるから今がある。例え、あなたがあの事件の原因だとしても、私は常にあなたを見ています。見守っています。あなたがいたから私がいる。私の気持ちがある。もう、あなた一人の問題ではありません。確かに、周様にはたくさんの人が期待しています。最年少で正規部隊隊長。あの海道駿の息子。周様はその中で頑張っています。でも、一人で頑張らないでください。一人で背負わないでください。みんなに、分けてください。私は一緒にいます。一緒にいますから、私にも少し分けてください」
もう、涙で視界が無かった。
そんなこと言われた事が無かった。親父やお袋は茜とオレを見比べて、『ＧＦ』では時雨の背中を追っかけるように期待された。
だから、自分はただ力を求めていればいいのだと思った。体のいい理由で上書きしておけばいいと思った。
オレは、世界が怖かった。ただそれだけだったんだ。
オレは都の胸に顔をうずめた。

そして、泣く。自分でもどう泣いているかわからない。

今まで本当の自分を理解してくれたのはいなかった。

由姫や音姉はわかっていながら聞かなかったに違いない。家族だから、隠し通すことは難しい。

でも、都はそんなこと関係なく、オレの本心を理解してくれた。

初めてだった。そして、怒ってくれた。オレが偽っていることを。

だから、オレは泣く。

後悔と感謝を織り交ぜて。

オレは泣く。

都と会えて良かったと。

そして、オレはゆっくり落ち着いていった。

「寝ましたね」

都は膝の上で寝る周の頭を撫でていた。周はあの後泣き疲れたのか寝てしまっている。

こうして眠っている周は見る限り年相応だった。

「心配しなくていいですよ、亜紗さん」

『やっぱり気づかれていた』

亜紗がスケッチブックを出しながら物陰から出て来る。

「周様が泣き抱きついた時に殺気を当てられたら誰でもわかります」

『都。周さんをありがとう』

「いえいえ。私は卑怯者ですから。自分で見たわけではなく、リースさんからの話を聞いただけで、周様と共にいたわけではありません」

都は亜紗と違って活躍を見たわけではない。周の苦悩の姿を見たわけではない。ただ、出会った中での言動からそう考えただけだった。

「私は、本当に卑怯者です」

『誰かから話を聞いて感じることは悪くない。それに、周様を救ったのは都。私は、助けられたの助けることが出来なかった』

「誰もが誰も助けることは出来ません。周様はそれで苦悩していました。でも、亜紗さんには亜紗さんのやり方があります。私は、そこまで強くありませんから」

都の言葉には悲しみが含まれていた。まるで、力が欲しかったとで

も言うかのように。

亜紗は不思議そうに首を傾げながらスケッチブックを開く。

『私はそうは思わないけど。でも、都がそう思うなら別にいい。一つ聞きたいことがある』

「なんでしょうか」

『周様のことが好き？』

「はい」

都は即答していた。

その言葉に亜紗は頷く。

『だったら、今からライバル。私は、あなたには周様は渡さない』

「由姫さんには良さそうですね」

『由姫は周さんにとって大事な人。でも、ライバル。由姫には伝えておくから。後、今晩は周さんをお願い』

「わかりました」

亜紗が立ち去る。

それを見ながら都は周の頭を撫でた。

「私は戦闘で周様の力にはなれませんが、周様をお待ちしています。
周様がいつでも日常に戻れるように」

第五十三話　過去（後書き）

周が普通の人生を捨てた理由。大人であろうとした理由を書きました。周が混乱しているのも大人になりきれていないからです。勢いとノリで書いた文章ですが、ここの感想を書いていただければ嬉しいです。こういうことは第一章では三回ほど書く予定なで、今後の指針とさせていただきます。

後、間違えている部分やおかしな部分を教えてもらえたら嬉しいです。自分で探してもなかなか見つからないので。

第五十四話　査問会

ニューニューヨーク『ＧＦ』本部評議会室。そこの中央にオレはいた。

オレを取り囲むように机が円を描き、そこには年老いたご老体がたくさんいる。評議会の爺共だ。

一応、時雨と慧海の二人もいるが、進行させるのは評議会側だ。

「以下の内容におかしな部分はないな」

爺の一人がオレが査問会に呼ばれた原因を読み上げていた。簡単に言うならオレが書いた報告書の改造版だ。

「ありません」

オレは淡々と答えた。

何ら間違いはない。『ＥＳ』と手を組んだのはオレの判断だし、作戦に失敗したのは指揮官のミスだ。

評議会からすれば『ＥＳ』と組んで失敗したことが許せないと思うけど。

「『ＥＳ』と組んだ挙げ句、失敗。この責任をどうつもりかね？」

爺の一人がニヤリと笑みを浮かべる。

オレを攻めていることが時雨や慧海の復讐だと考えているようだ。
又聞きした話だから詳しくはわからないけど。

「責任は感じています。ですが、このまま狭間市を放っておけません」

「だから、お前は失敗している。責任を取り、潔く身を引いたらどうかね？」

「総長からの命令があるならそうしますが、ないなら引きません」

「餓鬼が」

向こうはこちらに聞こえないように言ったようだが、静かなこの場では逆に丸聞こえだ。

オレは子供だから気にしない。爺共からすれば五分の一ほども生きていないオレがこんな口だから嫌なのだろう。

「私はまだ戦えます」

あくまで挑発するようにオレは言う。おそらく、時雨や慧海は無表情の内側では笑いをこらえるのが大変だろう。

「貴様は負けたのだ！　いい加減に認めろ！　負けたものの責任の取り方は」

「どう負けたか説明をお願いします」

オレはこの瞬間を待っていた。

今言われたのは負けたということ。失敗したと負けたでは意味が違ってくる。

オレ達はただ、失敗しただけ。

「鬼を封印出来なかった。それが負けと言わずして何と言う！？」

「失敗はしました。しかし、鬼の封印は一歩手前まで成功しています。貴族派の介入が無ければ封印に成功していました」

そう。オレが油断した時に音姉は『鬼払い』を命中させていた。だから、介入が無ければ可能だったというのは事実だ。

「あー、発言いいか？」

そんな中、慧海の声が聞こえる。

慧海はゆっくり立ち上がった。

「一応、貴族派について調べた情報を教えようと思ってな。貴族派は魔王派、議会派に続く第三勢力。ただし、議会での権限はかなり低いな。気になる点は、メンバー構成が不明である点と、魔界五将軍の一人がいる」

その言葉にオレは耳を疑っていた。

魔界五将軍は魔界の中でも強さの桁が違う五人に与えられる称号だ。主に、五つの属性に分けられる。

「名前は『浸透』のクラリーネ。役割は水帝だ」

クラリーネという名前には聞き覚えがある。確か、レヴァンティンを受け止める硬度の頸線を操る敵。

「ただ、魔界五将軍の中では変わり者らしいな。ギルガメッシュに聞いた話だが、実際の実力はそれほど高くないらしい。ただ、精神攻撃がかなり得意らしい。対戦相手を狂わすくらい造作もないとか」

「そう聞くと、こんな子供では荷が重いな。援軍を最速で送ればいいではないか」

評議会側がその言葉で笑みを浮かべる。

多分、慧海も笑みを浮かべているのだろう。獰猛な獣の笑みを。

「精神攻撃で人は操られるだろうな。民間人も。それを突破するのか？」

民間人を殺そうとする貴族派を狙って最速で向かうのと、民間人が敵となった中、貴族派を倒すのでは難易度が変わってくる。

慧海は確実にこれを狙っていた。断言出来る。

「『ＧＦ』の民間人大虐殺。さぞ面白い記事になるだろうな」

「善知鳥慧海！　口を慎め！　ここは査問会だ！」

「査問会だか何だろうか知らないが、お前らがやろうとしていることは大惨事にしかならない！　自分達のプライドのためにそれを起

こそうとするなら、オレは全力で阻止するさ。周」

背中をぞわっと嫌な感覚が撫でた。

殺気というにはあまりに軽い。だが、確実に狙っている。

「受け止めろ」

オレはレヴァンティンを取り出す暇なく振り返りながら腕で顔を守った。

衝撃は、軽い。そういう風にしたからだ。だけど、慧海が振り切った剣によりオレと慧海の間は床が激しく粉砕されている。

「それが、お前のレアスキルか」

慧海がニヤリと笑みを浮かべた。

オレの体には薄い衣のようなものがかかり、攻撃の威力をほとんど吸収していた。

「慧海は相変わらず無茶するな。周、そのレアスキルはお前が生き残った理由だよな？　あの日、『赤のクリスマス』で」

オレはゆっくり頷いた。

「あの状況下ですら生き残ることが出来る防御力を持ったレアスキルか。余裕でSランク認定でいいよな」

「時雨の好きにしろ。おい、お前らが考える援軍より、周の方がよ

っぽど頼りになるぜ。それとも、そいつらと周が戦ってみるか？」

正直に言って使えるとは思わなかった。

こっちのレアスキルはあの日から発動出来なかったレアスキルで、発動していなかったら確実に死んでいた。

「くっ、わかった。お前らの好きにしろ。だが、責任はお前らで取れ」

爺共からすれば慧海の攻撃力は知っているはずだ。『無敵』の異名を持つ慧海の実力はまさに無敵。音姉で八回に一回しか勝てない。

本当の理由は別のところにもある。

「責任ってわかってるよ。そもそも、第７６移動隊が全滅したなら、オレも時雨も首を切る覚悟だ。だが、一つだけ言っておく」

慧海は爺共に向かって指差した。

「お前らが何を計画しているか知らないけどオレらを舐めるなよ。死にたくないならな」

これって、オレの査問会だよな？

第五十四話　査問会（後書き）

周の新しいレアスキルの名前は『天空の羽衣』。能力は限定的絶対防御。限定的です。

第五十五話　新たな力

音姉の持つ真新しい刀をオレの腕は弾いた。そのままレヴァンティンを振り切る。しかし、その場に音姉はいない。

「今のでも抜けないんだ」

音姉は感心したようにオレが纏う『天空の羽衣』を見ていた。

オレが持つレアスキル『天空の羽衣』。能力は限定的絶対防御。絶対防御という響きはいいが、絶対防御としては欠陥品である。

理由としては魔術は素通り。

絶対防御として発揮するのは通常の武器からの攻撃に対してのみで、魔術に対しては空気のように素通りする。つまり、乱戦では全く使えない。

だからと言って、ひたすら近接していてもいいというものじゃない。

音姉が地面を蹴る。

オレはレヴァンティンを構えた。あの動きから来るのは紫電一閃。

だから、オレはその動きを見切り音姉の紫電一閃を受け流した。

だが、音姉の体は回転している。

オレは素早くレヴァンティンで音姉が振り下ろした刀を弾いた。

白百合流の怖いところだ。例え受け流しても、その力すら利用して次の技を繋げる。

雲散霧消を終えた音姉は一歩を踏み出して刀で地面をえぐる。

オレはとっさに後ろに下がった。オレの『天空の羽衣』をかするように音姉の刀が振り上げられる。

白百合流姿返し『無常の太刀』。

ちなみに、まともに食らえばあらゆる防御魔術を砕かれる。もちろん、紙のようにスパッとだ。

オレはさらに後ろに下がった。この次に来るのはわかっている。

白百合流燕返し『無名の太刀』。

無常の太刀で倒せなかった相手を追い討ちとして叩きつける奥義。ちなみに、威力は無常の太刀よりも高い。

オレはどちらも回避して息を吐いた。

「音姉、本気だよな」

「練習かな。連撃の」

練習だけで一撃撃破が基本の技を放たないで欲しい。

音姉は刀を鞘に収めた。オレもレヴァンティンを鞘に収める。

「行くよ」

そして、音姉が地面を蹴る。

最初に来るのは紫電一閃。オレもまるで鏡の動きをするかのように紫電一閃を放った。

だけど、レヴァンティンが大きく弾かれる。

弾かれた技を利用して回転しながらの振り下ろしである雲散霧消を放つが、音姉が放った紫電逆閃とぶつかり、オレの体が少し後ろに下がった。正確には地面を滑った。

紫電逆閃でぶつかったレヴァンティンを握る手が痺れている。だが、音姉は止まらない。

音姉はそのまま無常の太刀を放ってきた。痺れる手で刀の軌道をそらすが、レヴァンティンは空に弾かれる。

オレは後ろに下がった。

『天空の羽衣』をかするように音姉の刀が動く。だが、無名の太刀ではない。

白百合流鞘戻し『楓残月』。

威力は低いが鞘に戻すための攻撃。

オレは後ろに下がった足を止め、一気に前に出ようとする。

音姉は腰をひねり、柄を握りしめた。

そして、鞘から刀が抜かれる。

その瞬間、二十もの剣閃がオレに襲いかかっていた。

音姉の横を駆け抜けようとしたオレに鬼払いが直撃する。だが、衝撃はほとんど『天空の羽衣』に吸収され、『天空の羽衣』が消えた。

そして、オレと音姉の動きも止まる。

オレは音姉の鳩尾に下から肘を叩き込み、浮き上がった瞬間に手を取って背負い投げた。

音姉が何が起きたかわからないとでもいうかのように呆然としながらオレを見ていた。

「これが『天空の羽衣』だ」

「そっか。ライフがあるんだ」

「その言い方はどうかと思うけどな」

オレは手を引いて音姉を起こした。

音姉の言うようにライフというかダメージ上限がある。どれくらいが上限かわからないが、一定ダメージを超えると副作用と共に消える。

オレは『天空の羽衣』を展開してみるが、効果は発動しない。

「消えたら使えなくなるみたいだ」

「どれくらい？」

「さあ。やったことないからな。まあ、効果は確認できた」

「力の消滅だね」

全ての運動エネルギーを消し去る副作用は地味に強い。自分が知っていれば対処出来るが、知らないなら対処することは難しい。急に動きが止まるからだ。

「チートじゃないかな」

「音姉に対しては有効だな。音姉に対しては」

音姉は魔術が使えないから音姉に対してはかなり使える。だが、魔術が出来るなら全く使えない。空気の壁と同じだ。まあ、それでも十分に強いけど。

アル・アジフやリースとの戦いだと確実に意味ないよな。

「弟くんに負けた。今まで一度も負けたことがなかったのに」

「相性が悪いから仕方ないと思う」

「新しい連撃を考えたのに」

「生身に使ったらダメだからな」

というか、いつの間にか鬼払いを簡単に使えるようになったんだ？

あの日まで五分の溜めが必要だと言っていたのに。

オレが小さく息を吐いてみんなの方を向くとぽかんとしながらみんな固まっていた。

「孝治、どうだった？」

「また、強くなったな」

「孝治。強いっていうレベルを超越してると思うんやけど」

中村が呆れたように言う。

まあ、物理攻撃に関しては絶対防御だからだけど。

「あれを破るにはどうすればいいかな？　悠兄はわかる？」

「さあ？　威力の高い攻撃を叩きつけまくるくらいか？」

「やべえな。周に勝てなくなった。リースは勝ち目あるか？」

「ある」

リースはおそらく『天空の羽衣』の特性についてよく知っているはずだから断言した。

アル・アジフは小さく笑っている。

「それが、そなたのレアスキルか」

「ああ。オレの新しい力だ」

「ふむ。これは強いの。リークする範囲は？」

「最後を除いて全て」

「兄さん、どういうことですか？」

由姫が不思議そうに首を傾げる。

「リークする、は確か、情報を流すということでしたよね。どうして隠すべきものを流すのですか？」

「簡単に言うなら意図的に情報を与えておくんだ。弱点を込みで。亜紗は気づいているよな」

亜紗は頷いてスケッチブックを開いた。

『相手はその弱点を攻めてくる。でも、周さんならその程度は乗り越えれるからあえて誘導する』

「誘導することで相手の行動を制限する。制限することで相手の攻める幅を少なく出来るからな」

「我らは新たな情報を売ることが出来る。そなたらは敵を誘導出来る。見事じゃな」

「アル・アジフこそ、よくオレの企みがわかったな」

オレは笑って、真剣な表情に戻した。

「また鬼は現れると思う。貴族派も来ると思う。今度はオレ達が勝つ。だから、力を貸してくれ」

オレは拳を突き出した。みんなも同じように拳を突き出す。

これは『ＧＦ』の第一特務がよくやることだ。みんなの意識を高めるためのやり方。

「みんなは強い。だけど、オレは弱い。でも、みんながいるからオレは頑張れる。守ろう、この街を」

『了解』

みんなの声が重なった。

第五十六話　準備　（前書き）

戦闘準備ではなく入学準備です

第五十六話　準備

明日。それは特別な日だ。そう、本当に特別な日。人生で一回しかない特別な、

中学校の入学式。

だから、オレ達はその準備をしていた。正確には制服の採寸など。

「なんでこんな切羽詰まった状態で採寸なのか説明を求める」

浩平はかなり不満そうだった。というか、お前もオレが昨日気付くまで忘れていたよな。

そう。遅れた理由は完全に忘れていたから。ちなみに、女子全員採寸はすませてあり、オレらが採寸するついでに制服を取りに来たのだ。

「どうせ、夏になったら学校が変わるんだろ。俺らがここのを買う理由はあるのか？」

「だから、学園都市でも使っている制服を作ってもらうんだ。忘れていたことはオレの責任だから何も言い返せないけどな」

「くっくっくっ、ついに周が俺より馬鹿になったか」

「周は元からだ。ただし、馬鹿と天才は紙一重というレベルだ」

「見方を変えれば天才になるのが周隊長の凄いところだな」

「あれ？　なんか四面楚歌じゃね？」

「大丈夫だ。問題ない」

「周！　問題しかねえだろが！」

浩平が喚いているがオレはそれを無視して採寸をする。そう、自分達で採寸する。

採寸したものはデバイスから業者に依頼が転送され、すぐに作り始めてくれるようにしている。

「で、明日には来んのか？　そこのとこだけはっきりしてくれよな。業者と言っても一日で作るのは可能だとしても、他に仕事があるだろ」

「来るぜ。頼んだ業者はＳＳだからな」

オレの回答に浩平は固まった。孝治や悠聖なら知っているだろうが浩平は知らない。

ＳＳは通称で株式会社エンターが展開する衣料品関連の言い方だ。エンターの中で里宮家と白百合家の二つが協力して設立した部門。だから、ＳＳと呼ばれている。

「どんな繋がりがあんだ？」

「ＳＳ部長に白百合雅也、オレの義理の父親がいるからだよ」

そのため、料金は少し高くなるが即日で作ってもらえるように依頼したのだ。ただ、受け取りに行かないとダメだが。

ちょうど、音姉と由姫が家に帰っているので、戻ってくる時に持って来てくれるようになっている。

「ＳＳだしな、不思議じゃねえな。つか、採寸は業者に頼めないのかよ」

「そんな金あるか」

正規部隊だから『ＧＦ』からの入金があるとは言え、そこから学費やら色々払わないといけない。おかげでお金は常にピンチだ。

一番の理由はデバイスのメンテナンスを業者に任しているからだけど。

戦闘で使うデバイスはその安全上、月一でメンテナンスに出さないといけない。料金は一回で一人１１万５０００円。もちろん税１５％込み。

業者は業者で登録料やらその他もろもろでかなりお金を必要とするから業者だけが儲かるシステムではない。

ちなみに、制服の依頼だけで会計は赤くなっている。後一人増えたら正規隊員が二桁になるから入金はかなり増える。今は無理だけど。

「そんなに金ピンチなのかよ。つか、俺らが注文する備品とかどうなってんだ？」

「給料から天引きに決まってるだろ。大体、この人数でここまで金を使う正規部隊は少ないぜ」

「だろうな。だが、問題ない」

「孝治は問題ないとか言うけどさ、周隊長はどう思ってるんだ？」

「部隊のお金に関してはマズいな」

お金に関してはかなりマズい。どれだけマズいか言ったらこのまま行くと赤が膨れ上がるくらいマズい。

まあ、オレのポケットマネーやら悠聖のポケットマネーやら使えば十年くらいは持つけど。

「まあ、今回中の任務じゃ問題にはしないさ。さて、採寸終了」

オレは全員分の採寸をレヴァンティンを繋げた記録デバイスに打ち込んだ。それをレヴァンティンで使って転送する。

これで、夜には来るだろう。

「さて、ちょっとやってみるか」

オレはレヴァンティンを外して手のひらに置いた。

「モード？」

オレがそう言いながらレヴァンティンを取り出した。だが、形は剣ではない。槍だ。

「よし。成功だな」

「あれ？　周隊長の武器って剣じゃなかったか？」

「モード？はな。基礎部分はそのままにしてパーツを取り出してから組み立てるように変えてみたんだ。おかげで、デバイス二個を繋げているけど」

オレは槍になったレヴァンティンを見せた。

槍の柄の部分にはレヴァンティンとただのデバイスが繋げられている。こうしないとこういうものは出来なかった。

レヴァンティンを戦闘特化。デバイスを構成特化。これでようやくこの理論が出来上がった。

「双剣を練習していたのはこういう理由か」

「そういうこと。まあ、モード？までしか無いけど。モード？」

レヴァンティンが槍から剣に戻る。

「周隊長は小手先に走るか。まあ、周隊長らしいな」

器用貧乏が入った異名を持つオレからすれば大量の武器形式を使える方が器用貧乏らしい。

オレはレヴァンティンをデバイスに戻した。もう一個のデバイスは収納している。

「あらゆる状況下でそれに合った戦い方をする。自分が出来る範囲で、みんなの力を借りて」

「変わったな」

孝治が笑みを浮かべながら言う。

「お前は今まで自分が頑張らないといけない。そう考えて切羽詰まっていた。あんまりわからなかったがな。だが、今ではみんなの力を借りてか。いつか、オレが抜かされる日が来るかもな」

「絶対に追い抜かしてやるよ。第７６移動隊隊長として、負けられん」

「期待している」

オレは笑みを浮かべた。

「さあ、訓練に行くぞ。今日は軽めに行くから安心しとけよ」

「周隊長の軽めは軽くないからな」

「あるある。手加減してくれよな。本当に」

「それが周だ」

オレは小さく溜息をついた。

「とっとと行くぞ」

第五十六話　準備（後書き）

学校始まります。

第五十七話　入学の日　前編（前書き）

学校生活スタート。ただし、一日目から波乱の幕開けです。

第五十七話　入学の日　前編

狭間市立狭間中学校。

そこがオレ達が入学する中学校の名前だ。音姉もここに編入する。

何故公立かと言うと、お金がないから。簡単な理由だ。

その入学式に参加するためオレ達はやって来ていた。

「なあ、周隊長」

「なんだ？」

「すっごく見られていないか？」

悠聖が周囲を見渡しながら言ってくる。確かに、オレ達はかなり異質だ。

入学する大半が親がいる。両親のどちらかだ。なのに、オレ達は固まっている。ある意味音姉が親代わりみたいだ。

「今更だろ。オレ達が入学すれば嫌でも目につくさ。でも、羨ましいな」

オレは親子を見ながらそう言った。義父さんや義母さんは仕事が忙しいから来れない。だから、オレ達はみんなでいる。

「考えても仕方ないし、行くか」

「周君！　こっちこっち！」

声のした方を見ると、そこにはぴょんぴょん飛び跳ねる千春がいた。
側には都や琴美がいる。

「よっ」

オレは三人に近づきながら片手を挙げた。

都は頭を下げて、琴美は小さく笑っている。千春はオレに駆け寄ってきた。

「入学おめでとうだね。ボク達は君達を歓迎するから」

「千春は何かの役職についているのか？」

「うん。入学式の警備担当だよ。ちなみに、生徒会長は都だからね」

「千春、止めてください。私はお祖父様がいるからなったようなものの言いふらすものではありません」

都はどこか恥ずかしそうに言う。

オレは小さく笑みを浮かべた。

「つまり、無理やりやらされていると」

「違います。自分で立候補しました」

「だったら、胸を張っていいだろ。というか胸を張れよ」

「はい。そうですね」

都は小さく頷いて笑った。うん、都は笑った方が可愛いや。

「で、琴美は？」

「別にどうでもいいという言い方ね」

「一緒にいるのはわかるけど、何か役職についているのか？」

「裏方よ。私は、この学校で嫌われているから」

ただ巫女に選ばれたという理由だけではないようだ。前からいじめられていると考えた方がいいか。

都は不思議そうに首を傾げた。

「皆さんは？」

「後ろにいないか？　いないな」

オレが振り返ればそこに誰もついて来ていなかった。変わりにアル・アジフ達と話している姿がある。

オレは小さく溜息をついた。

「ったく。まあ、音姉がいるから大丈夫か。まあ、異質な集団だけどよろしく頼むな」

「はい。入学式のプログラムは」

「まずはクラス分け。それからクラス単位で体育館に入場して入学式の開始。違うか？」

「はい。クラス表は、今張り出されてますね」

都が向いた先にある壁にちょうど先生らしき姿が紙を貼り付けていた。あれがクラス表なのか。

オレは小さく頷く。

「じゃ、オレは見てくるわ」

そう言ってクラス表に向かう。ちょうどたくさんの人がいるが、オレは誰ともぶつからないように上手くクラス表の前に出た。

クラス表は全部で五つ。三十人学級だから全部で百五十人か。

一組には、亜紗と中村の二人か。二組はオレと由姫。三組に孝治一人で、四組は悠聖一人か。上手くバラけたな。

オレは小さく息を吐いた。

「亜紗は大丈夫かな？　まあ、考えても仕方ないか」

「そうじゃな」

いつの間にかアル・アジフが隣にいた。明らかに異質な組み合わせ

にスペースが開く。

オレはまた小さく溜息をついた。

「つか、何でここにいるんだ？」

「そなたらを見に来たでは駄目かの。その様子じゃと、もう落ち着いたみたいじゃな」

「覗いていたのか？」

「ちょうど帰ったところじゃったからの。まあ、年相応だったと言っておこう」

「恥ずかしいな」

もちろん、そういう気持ちは口だけにしておく。本気で恥ずかしいと思うのは都だけだから。

オレは小さく息を吐いた。

「写真、撮ってもらえないか？　オレ達や都達を入れて」

オレはそう言いながらレヴァンティンを取り出した。

時雨や慧海、そして、お父さんお母さんに見せる写真を撮らないといけないから。

「みんな、写真撮ろうぜ」

だから、オレはみんなに駆け寄った。

一年二組。

オレと由姫が一緒に配属されたクラスだ。ちなみに、オレは海道周と名乗っているけど戸籍の上では白百合周だ。だから、席の順番は由姫の前で、一番後ろだった。戸籍も海道で通したかったけど、戸籍だけは白百合にしないと法律に引っかかる。

オレは席を座りながら溜息をつく。

明らかにオレを見る目が不審だ。どうしてかわからないけど。ただ、

「つか、なんでオレと由姫が同じなんだ？」

それだけは疑問に思っていた。どちらも白百合を名乗る以上、ちょっとややこしいことになるはずなのに。

「俺、篠宮和樹って言うんだ。お前の名前は？」

すると、前の席に座っていた男子が声をかけてきた。

とりあえず、応じないとな。

「白百合周ってことになっているけど、海道周って名乗らせてもら

うさ」

「白百合なのに海道？」

「おそらく、養子なのだろう」

篠宮の前に座る男子が立ち上がってよってくる。

「なーに、これくらい考えれば算数より簡単な式だ。養子になった子供は旧姓を名乗ってもなんらおかしくはない。ただ、戸籍は白百合なのだ」

「そうなるな。ちなみに、前にいる白百合由姫とは義理の妹だ」

「ほう、詳しく話を聞かせてもらうとしますか。佐々木、手伝え」

佐々木と呼ばれた男子は髪をかき上げた。

「いいだろう。この佐々木俊輔にかかれば捕虜の口を割ることなど造作ない」

「捕虜の口を割るっていつの間に捕虜になったんだ？」

「可愛い女の子を知る者がいる。なら、捕まえても文句はない」

「おおありだ」

オレは小さくため息をつくと、由姫の方を見た。由姫は由姫で近くにいた女子と話している。

これなら、上手くやっていけそうだな。

「ま、その話は置いておいて」

「ほう、和樹が女子に興味を持たないとは」

「聞きたいのは、お前はあの海道周なのか？　春休みに来た第７６移動隊のメンバーの」

その言葉に周囲が静かになり、視線が向かってくる。いつ来るかと思っていたが案外早かった。

オレは頷いた。

「ああ。第７６移動隊隊長海道周だ。まあ、こんな肩書きあるけど気にせずに」

「サインください」

いつの間にか篠宮が土下座をして色紙をオレに差し出していた。つか、座っていたよな？

オレは小さく溜息をついた。

「誰がやるか」

「プレミアつくだろ？　俺は絶対そう思う。だからよ、サインください」

「やらない。オレはまだあまり有名じゃないんだ。スーパースター

のようにサインは出来ない」

「そこをなんとか」

「あのな」

オレは小さく溜息をついた時、にわかに廊下が騒がしくなった。オレは廊下の方に視線を向ける。

普通は騒がしいと感じるだけだが、今回は嫌な予感しかしない。

由姫がこっちを向くが、オレはまばたきを三回すると由姫は何事もなかったかのように話に戻っていった。

「廊下が騒がしいな」

「どうせ、下小の奴らが騒いでいるんだろ」

「下小？」

「狭間市立坂下小学校のことだ。ここの半分は下小から入ってきた奴ら。俺や和樹は別のところだ」

集合型の街である以上、校区によってバラバラな場所から来るのはおかしくはない。ただ、その比率は均等にはならない。

下小の面々は廊下で仲良く談笑しているというわけだ。

「ただ、気をつけた方がいいぜ。下小の奴らからいい噂は聞かないからな」

「例えば？」

「小動物を殺し回っているとか、身体障害者が転校してきた１ヶ月後には転校したとか。やりすぎな感じが多い」

嫌な予感がする。

冷静になりながら耳に神経を集める。聞こえてくる方角は一組から。言葉は詳しくは聞こえない。

オレは席から立ち上がった。

「どうしたよ？」

「様子を見てくる」

「ただ騒いでいるだけだろ。放っておけって」

「もし、知り合いの障害者がいるなら？」

オレの言葉に篠宮と佐々木も立ち上がった。

「早く言えって。場所は？」

「一組だ」

「行こうぜ」

オレは早足で教室を出る。そして、一組を覗き込んだ。そこには、

囲まれている亜紗の姿。

オレが教室に入り込もうとすると、入り口を数人の男子が塞ぐ。

「人様のクラスに何の用だ?」

「ここは任せておけ」

佐々木がそう言ってオレの横を抜ける。どうやら説得してくれるようだ。

「愚民共が。この佐々木俊輔様の道を塞ごうとするとは愚かにもほどがある。貴様らに脳はあるのか?」

あまりの言葉に佐々木以外の周囲にいた全員が固まった。

「ないだろうな。小さなことのために他人の道を塞ぐなど底辺にいる下等な人間すらしない。そうか。お前らはただの虫けらか。だが、虫けらの分際で俺の前塞ぐなど百年早いわ」

「な、なんなんだよ、お前」

男子は明らかにうろたえていた。そして、微かに後ろに下がって道が開いた瞬間にオレは動いた。

体を捻り、その道に体を滑り込ませて教室の中に入る。すぐに近くの机に飛び乗って跳躍し天井に足をつけ、亜紗の横に向かって飛んだ。

そして、着地する。

『周さん』

亜紗がスケッチブックをオレに見せてくる。

「何の騒ぎか知らないが、興味本位で参加させてもらうぜ。とりあえず、何が起きているかは聞かせて欲しいな」

オレは亜紗の手を軽く握って離した。

興味本位ではなく、亜紗が心配だから参加したということを表すために。

「その女が一言も喋らないからだ」

「喋らないから囲んだ？」

「スケッチブックで会話しようとする憎たらしい奴はこのクラスに相応しくないからな」

オレは自分を落ち着かせるのが大変だった。ただ、亜紗のことを知らないだけだと言い聞かせる。

「ただ、こいつが話せないだけじゃないのか？　怪我とかで喉がやられたとか。オレの知り合いに戦いで斬られて小指がない人もいるしな」

「体に欠陥がある奴を俺達と同列に扱えって？　バカ言うなよ。人間ってのはな、五体満足で正常な奴のことを言うんだよ。そうだな、そいつはただの虫だ。虫がスケッチブックなんて持つわけないよな」

オレは頭の中で最後の一線が切れそうになっていた。ここでキレたら後悔はしないだろう。

だけど、最後の一線は切れなかった。何故なら、横開きのドアが倒れたからだ。教室側に向かって。

そこにいたのはドアを蹴倒した由姫の姿。

オレがキレるより先に由姫がキレたか。

由姫はオレ達に近づいてくる。

「その理論だと、あなた達はゴミですね」

どうしてみんな、喧嘩したがるんだろうか。

「人間を人間と見なさないのは人間ではありません。ただ、あなた達は服を着ているのでよく袋に包まれるゴミが似合ってますね。ゴミの皆さん」

由姫はにっこり笑みを浮かべながら言う。

この状態の由姫は本気で怖いんだよな。実力者にしかわからない殺気がびんびん出ているから。

どうして実力者にしかわからないかと言うと、額に汗をかいているのがオレと亜紗だけだからだ。

一番近くにいた男子が由姫に手を上げた。拳を握り振り上げる。そ

して、由姫を殴った。いや、その男子からすれば全力で殴ったつもりだろう。

由姫は体をそらして微かに拳が当たるだけで済む。そして、体がぶつかってきた男子を簡単に投げ飛ばした。男子は背中から床にぶつかる。

「汚いゴミを制服に着けないでくださいね。後、あなた達は近づかないでください。体がゴミ臭くなるので」

オレはもう溜息をつくしかなかった。

由姫は挑発はするが自分からは殴っていない。これならいくらでも弁解は出来る。

「言いたい放題言いやがって！」

数人の男子が由姫に飛びかかった。オレ達はその隙に亜紗を連れて包囲から出る。

包囲から出ると、服が乱れてすらいない由姫が立っていた。ちなみに飛びかかった男子は全員床に転がっている。

「くんくん、体がゴミ臭くなっちゃった」

まだするのか我が義妹よ。

「調子にのんな！」

すると、立ち上がった男子が椅子を持ち上げて由姫に向かって投げ

た。由姫は避けようとして、椅子との対角線上に倒れている男子がいることに気づく。

オレはレヴァンティンを取り出した瞬間、由姫は椅子を蹴り上げた。

バキッという音と共に椅子が天井に突き刺さる。

「正当防衛してもいいですよね？　椅子を投げるということは殺す気だったということですし」

「お、親父に言いつけるぞ！　俺の親父は市長の」

「知り合いですか？　それで？」

「えっ？」

「たかがそんな小物の子供に私が頭を下げるとでも？　甘く見ないでください。そんな奴に頭を下げるほど、私は自分の行動に後悔していませんから」

オレは小さく溜息をついた。

由姫の圧倒的な力でこれ以上は何も起きないだろう。だから、閉めにかからないと。

誰もが静かにオレの話を聞く。

「お前らは中学生になったんだろ。だったら少しは考えろよ」

「小学生のまま、無邪気に誰かをいじめても、ただ怒られるだけですむかもしれない。だけど、大人になってやればそれは問題だ。自

分が強いという気持ちを持ちたいのはわかるさ。だけど、それで誰かを不幸にしていいのか？　自分だけが幸せになっていいのか？　違うだろ。みんなで仲良く過ごす。みんなで思い出を作る。それが、学校だ。考えることを学び、人間関係を学び、小さな社会を知る。それがこの学校の役割だ。誰かを虐げる場所じゃない」

オレはそう言って紳士っぽく礼をする。

「ご静聴ありがとうございました。まあ、オレの自己紹介でもしておくわ。第７６移動隊隊長海道周。何か厄介なことがあるならいつでも相談に来てくれや」

もちろん、静寂があっという間に喧騒に変わったというのは誰もが思うだろう。

第五十七話　入学の日　前編（後書き）

このまま学校生活が続きます。一応、物語の分岐点までですね。

第五十八話　入学の日　中編（前書き）

前後の予定が前中後に分かれました。
自分の言いたいことを書いたらいつの間にか文字数が・・・

第五十八話　入学の日　中編

入学式。

それは、とある人にとっては新しい始まり。とある人にとっては長ったらしい話が続く式。とある人にとっては友達と会話をする場。

そして、オレにとっては、

「せめて事前に教えてくれよ」

オレは小さく溜息をついていた。

本来なら一組の一番の人が新入生を代表していろいろ話すことになるのだが、何故かオレが話すことになった。

「仕方ないわよ。言うはずだった男子は椅子を投げつけた人らしいし」

琴美は呆れたように言う。

あの騒動はかなりの騒ぎになった。

騒いだのは先生とオレのファン（自称）の面々。一体、何人の人からサインを求められただろう。

今は落ち着いた最初の頃の都がたくさんいる感じだった。

ただ、騒ぎの主導者というか、キレた由姫や殴りかかった男子達は

今でも説教されているだろう。

由姫は覚悟していたようでオレに、

『後で入学式の話をお願いね』

と言ってきたけど。

「あなたが入らなければもっと大変なことになったかもしれないけど」

「どういうことだ？」

「私達がそのクラスに向かっている最中にキレた音姫と出会って食い止めていたから」

そういうことね。納得しました。

姉妹揃ってキレていたとは。まあ、オレが気づかなかったら戦場になっていただろうな。

「で、オレだと」

「けじめだそうよ。あなたの噂は有名だから、校長が許可したみたい」

「はあ、わかった。やるだけやってみるさ」

「はい」

琴美は紙を差し出してくる。

だけど、オレは受け取らなかった。

「そんな形式ばかりにとらわれた原稿はいるか」

「そういうと思ったわ。でも、校長からの手紙よ」

オレはそれを受け取って開く。そして、そこに書かれている内容を一瞬で把握した。

「新入生代表だけど、第７６移動隊隊長として話せ、ね。父兄の方々は気にするなとも書いてあるな。つか、いいのか？」

「いいんじゃないの？　ここの校長って生徒からの人気は高いけどＰＴＡからの人気はすこぶる悪いって聞いているし」

よく校長を続けていられるよな。

「わかった。覚悟を決めるしかないか」

「都の挨拶が終わればあなたの番よ。期待しているわ」

「任せろ。さて」

オレは頭の中で文章を反芻する。

即席で作ったものがあるから決していい出来ではない。ただ、みんなに言いたいことを言う。

新入生代表であり、『ＧＦ』の正規部隊隊長として。

「周様」

都の声が聞こえ、オレは頷く。

『次は、新入生代表兼『ＧＦ』移動課第一部隊第７６移動隊隊長海道周からの言葉』

新入生代表がついていなければ第７６移動隊隊長としての祝辞になっただろうし、『ＧＦ』とかが無ければ新入生代表としての宣言とかになっただろうな。

オレは小さく息を吸って壇上に出た。

そして、マイクの前に立つ。

「今期に入学する一年二組の新入生兼『ＧＦ』移動課第一部隊第７６移動隊隊長海道周です。今回は代役としてこの場にいます。ですから、新入生として、そして、第７６移動隊隊長としての言葉を述べたいと思います」

最初に言うべき言葉とかは知らないから言わない。国語はほとんど勉強しないからな。だけど、第７６移動隊隊長としてもいるから幾らかは気は楽だ。

「この暖かな春の日差しを受け、私達新入生はこの狭間市立狭間中学校に入学します。これからは新しい学校生活を楽しみつつ将来の役に立てるよう日々努力しようと思っています」

即席で考えた新入生代表としての言葉。とりあえず、これくらいは言った方がいいだろう。

これからは第７６移動隊隊長としての言葉だ。

「皆さんは勉強することが将来何ら役に立たない。そうお考えの方も多いはずです。人によっては親に言われたからしぶしぶ勉強している方もいるでしょう。逆に、勉強することが好きな方もいるはずです。確かに、勉強は将来にとって直接的な意味を成さないものです」

その言葉に出席している親達が騒ぎ出す。直接的な意味を成さないという言葉は勉強を否定しているとも捉えれる。

「ですが、勉強するということは将来にそれを使うという意味ではなく、考え方を学ぶということです。小学生の頃、九九を習い始めた頃、皆さんは最初から九九がわかっていたわけではありません。ですが、九九を知ることで、今では自ら計算が出来るはずです。自分の頭の中で自分の考えで。それが、勉強の本当の意味だと思います」

勉強というものは日常的にするものだとオレは考えていた。だけど、それはオレが他を知らないだけだった。

知った今でも、自分のために勉強はしている。将来のために。

「知らないことを知ろうとするために勉強する。それが本来の勉強という意味です。今の日本では知識を詰め込むだけの教育が多いですが、自分達で考え、自分達から何かを学ぼうとする。それは、学校の勉強だけではありません。楽器について、スポーツについて、

社会について、外国について。知りたいことを見つける。それを在学中に出来れば、それこそ勝ち組です。でも、出来ない人は負け組ではありません。人生は長く、何があるかわからない。それは皆さん新入生と同じ私が思っています。第７６移動隊として何をするか、どこに行くか。でも、わからないからこそ、答えは必ず未来にある。そう確信しています」

自分はやりたいことを見つけた。何かに縛られてやるのではなく、自分から動くということを。

「私は外国に言った時、現地の皆さんと話がしたいと思い必死で勉強をしました。それはみんながどう考えているか知りたかったから。今では複数の言語を話せますが、それは必要だったからやったではなく、自分が学びたかったから。何かに熱中出来れば、自分がやりたいことが見つかると思っています。でも、誰もが挫折を味わう瞬間があるでしょう。全て成功する者はまずいません。私も失敗しました。でも、それを慰めてくれた人がいます。死にたいと思った時も救ってくれた人がいる。辛い戦いでもそばにいてくれた人がいる」

慰めてくれたのは都だ。オレは久しぶりに誰かの前で全力で泣いた。あの日から泣かないと決意していたのに。

救ってくれたのは由姫だ。オレを見つけてくれた。失意の底にいたオレを。

そばにいてくれたのは亜紗だ。どんなに辛い戦いでも、どんなに負け戦でも、そばにいてくれた。

「挫折をしても仲間が助けてくるます。友達が助けてくれます。それだけは断言します。人は一人で生きていけない。迷惑をかけあっ

て生きている。人生は勉強の連続です。その中で、味方を作り上げてください。小学校から中学校に上がり、知らない顔ぶれもたくさんいます。ですが、学校から社会に出ればそれは当たり前です。知らないから仲良くする。そして、友達になる。勉強してください。知り合いの作り方を。そして、知ってください。皆さんのやりたいことを。これを最後の言葉として締めくくろうと思います。ありがとうございました」

言いたいことは全て言った。だから、オレは深々と礼をした。

これがオレの思う勉強だ。途中で強引に話を変えた部分もあるがいいだろう。

そして、聞こえてくるたくさんの拍手。顔を上げると一部の父兄が冗談抜きのスタンディングオペレーションだった。

オレは軽くひきながら退場する。そこには目を輝かせた都とポカンとする琴美がいた。

「さすが周様です。輝いていました」

「あなた、即席で考えて今のことを」

「ただ、思っていたことを述べただけだ。つか、そこまで良かったのか？」

「はい。この演説を見たなら総理大臣は泣きながら土下座をして内閣を解散するでしょうし、大統領は歓迎して周様を次の候補とするでしょう。いえ、もしかしたら泣いて教えを請う可能性も」

久しぶりに出たよ。都の暴走。

オレは軽く肩をすくめて席に戻ろうとした。だけど、誰かがこちらに向かって来る音がする。来たのは男子教師。確か、一組の担任だ。

「貴様、なんだあの演説は？　間違ったことを押し付けるな！」

何かを言いかけた都をオレは手で押し止めた。

「何が間違いか説明をお願いします」

「はん。自分の間違いが気づかないとは子供だな。いいか、学校はそんな甘ったれた場所じゃない。友達を作ることは認めてやろう。大切なことだ。だがな、勉強するという意味を間違えている。お前らはただ大学に行くための知識を詰め込めばいい。そうしなければいい大学には入れない。わかるか？」

「人生の最終目標は大学だと思っているのですか？」

オレはあくまで挑発するように言う。

確かにその意見もある。大学に行くためには学問が必要だ。その知識が無ければ大学には入れない。

「愚問だな。いい大学に入らなければいい会社には入れない。親の威光で『ＧＦ』に入った奴にはわからないだろうがな」

また都が何かを言おうとするが、オレはまた止める。

「学問が出来るだけの大学卒業生なんてわんさかいるだろうな。そ

んな奴らに埋もれて就活をするならさぞ大変だろう。だけどな、そんな些細なことを気にしすぎるようなら、オレは賛成出来ない」

「何だと？」

「いい会社に入っただけではいい人生を歩めない。ただ、だらけて過ごす人生になるだろうな。だから、何をやりたいか知ること。知りたいことを知ること。それが大事なんだよ」

「貴様、教師に向かって」

「教師なら自分の考えを生徒に押し付けるな！　勉強の知識を教えるならまだしも、考えは唯一無二の自分だけのものだ。それは自分で作り出すもの。誰かが介入していいものじゃない！」

オレは真っ正面から教師と睨め合った。そして、時間が過ぎる。

教師は舌打ちをすると背中を向けて歩き出した。

「よく言うわね」

「初日からここまであるのかよ。明日から生き残れるのか？」

「周様」

都が心配した顔で尋ねてくる。

「いいのですか？　親の威光と言われて。周様は実力で」

「いいんだよ。実際に親父もお袋もすごい人だった。親父は天才っ

て言われていたほどだ。妹も。だから、オレは期待された。親の威光って言われても仕方ないさ」

「周様は自分の力で頑張っています。ですから」

「ありがとうな」

オレは都の頭を撫でてやる。

「ここに来て、お前と出会えて良かった。由姫や亜紗とは違うやり方でお前はオレのそばにいてくれた。だけど、自分の道を追求したらどうなんだ。オレはそれだけが心配で」

「私は周様が好きです。ですから、いつも見守っています。疲れた時に、帰って来てもいいように」

「都」

「由姫さんや亜紗さんには負けたくありません。でも、由姫さんや亜紗さんの場所を取りたくない。ただ、それだけですから」

都は優しい。優しいからこそ見守ってくれる。

それは本当に嬉しいし、都みたいな可愛い女の子に言われたら幸せな気持ちになる。

オレは笑みを浮かべて頷いた。

「後悔だけはするなよ。オレも、後悔しないようにするから」

「はい」

都が満面の笑みを浮かべる。

「コホン」

すると、近くからわざとらしい席が聞こえてきた。

「空気が熱いわね」

「ちゃ、茶化さないでください。周様、戻りましょう」

「はいはい」

オレは笑うのをこらえながら歩き出した。

第五十九話　入学の日　後編

「凄まじいことをしましたね」

入学式の出来事を簡潔に纏めて由姫に言ったところ、由姫は呆れながらも返事をした。

言ったのは入学式に新入生代表として壇上に立ったこと。そして、第７６移動隊隊長として話したこと。先生との言い争いは省いた。

「でも、お兄ちゃんらしいかな」

その言葉はオレにだけ聞こえるような声だった。周囲には他の生徒もいるしな。

オレは笑って由姫の頭を撫でてやった。

「お前があんなことをしなかったら見れたことだぜ」

「に、兄さん。皆さん見ていますよ」

「だろな。これからは気をつけろよ」

「はい」

オレは返事が聞こえて手を離した。すると、篠宮と佐々木が近づいてくる。

「痴話喧嘩は家でやれよ。つか、お前ってすごいな。あんなこと話

すなんてよ。俊輔のやつ、感激してたぜ」

「ふっ、当たり前だ。まさに俺が考えていた一部と同じこと。愚民には考えつかないことだと思っていたが、お前も天才の一人だとはな」

「オレはそこまで天才じゃないさ。ただ、みんなより器用に器用貧乏なだけだ」

「兄さん、それは言い方が間違えていますって」

器用に器用貧乏なだけっていうのは合っているような気がするけどな。

オレの戦闘能力は平均より高いが一芸特化の面々から見れば完全に埋もれる。だけど、全体で見ればバランスのとれた素材らしい。時雨から聞いた。器用貧乏っぷりに驚かれたけど。

だから、器用に器用貧乏であると表した。

「面白い言い方だな。だが、この佐々木俊輔には勝てまい。なに、俺は天才なだけだ」

「はいはい。んじゃ、席に座ろうぜ。先生が来た」

「だな」

オレはそう言って来た先生を見た。そこにいた人物を見てオレは完全に固まってしまう。

由姫は自分の席に戻ろうとして足を上げた姿のまま固まっている。

教室に入って来たのは女性の先生だ。ただ、若い。本当に若い。中学生と間違えても違和感がないくらい若い。実際の年齢はもうすぐお婆さんだけど。

問題としては、この人は担任ではないということ。確か、担任は福家という人だったはずだ。

なのに、入って来たのは違う人。オレ達が知っている、いや、由姫の方が知っている人だろう。てか、なんでここにいるの？

「皆さん、席に座ってくださいね」

「し、師匠が何故ここに？」

由姫の声は少しだけ裏返っていた。

由姫が師匠と呼ぶ人物は一人しかいない。里宮家の頂点に立ち裏社会最強と言われている人物。

里宮愛佳。

八陣八叉流を極めており、近接戦闘で戦えるのは音姉か、明らかなチート能力を持つ時雨に、『無敵』の異名を持つ慧海の三人だけ。

「師匠ではなく先生と呼びましょうね」

「は、はい。わかりました」

明らかに由姫は緊張して席につく。まあ、一番前の席だからかなり疲れるだろうな。

「担任の福家先生はご家族が事故に遭われたため早退しました。私は皆さんの副担任となりました里宮愛佳です。これから一年間よろしくお願いしますね。白百合兄妹とは知り合いですが、お二方とも私の年齢は秘密でお願いしますね」

オレ達はコクコク頷いていた。こんな場所で死にたくないから。

「皆さんはこれから同じ教室で勉強します。ですから、まずは皆さんの自己紹介から。最初は新入生代表だった白百合周君。その次は一番の人からお願いします」

オレは軽く息を吐いて立ち上がった。

「白百合周だけど、海道周で名乗っている。まあ、こっちの方が好きだから。趣味は読書。得意な科目は不明。小学校はほとんど登校していなかったからいろいろ迷惑をかけると思うけどよろしく頼む」

小学校はほとんど行っていないけど、大学に入学出来るレベルの学力はある。多分。

「質問がある人は」

オレがそう言った瞬間、クラスのほとんどが手を上げていた。むしろ、手を上げながら質問をしてくる。ええい、耳に神経を集中させる。

「全ての魔術が使えるの？」

「海道周の伝説は本当？」

「『ＧＦ』の最終兵器なの？」

「ハーレム作っているのか？」

とりあえず全てを聞いて要約したらこうなった。最後のはもちろん篠宮だ。

「んなにたくさん言われて聞こえるか。一応、魔術は全て使えない。最終兵器なんて聞いたことはない。伝説に関してはノーコメント。自己紹介が進まないから終わり」

オレはそう打ち切って椅子に座り込んだ。そして、出席番号が一番の人から立ち上がって自己紹介を始め出す。

オレは小さく息を吐いた。

「んで、ハーレムはどうよ」

「前を向け」

オレは溜息をつきながら篠宮に言う。だけど、篠宮は無視して話を続けてくる。

「答えてくれたっていいだろ。俺とお前の仲じゃないか」

「だから、他人が自己紹介してんだからそっちに注意を向けろ」

このままだと篠宮がかなりマズいことになるのでオレは無理やり篠宮に前を見させた。そして、篠宮が固まる。

教壇の前にはにっこり笑みを浮かべたまま殺気を篠宮にぶつけている愛佳先生がいるからだ。

ちなみに、自己紹介は淡々と進んでいる。

とりあえず、オレは自己紹介に耳を傾けることにした。死にたくないし。

「海道君ってすごいんだね」

HRが終わり今日の学校が終わったと思った瞬間、オレの周囲には人だかりが出来ていた。

まあ、オレに興味があったのはわからんでもないけど、

「そこまですごいとは思ってないけど」

「謙遜しすぎだって。海道周の伝説は本当に有名だから。若手で一番じゃないの？」

ちなみに、オレの周囲に来ているのはほとんどが女子で、由姫の周囲には男子が集まっている。

「音姉、三年に転入した白百合音姫が同年代、U－18の中で最強

だな。その次に隣のクラスにいる花畑孝治。三番目がドイツのアルト。オレは二十番目くらいだな」

「ドイツのアルトと言えば『鋼鉄騎士』のアルト・シュヴェッサーか」

「ああ。佐々木はよく知っているよな」

『鋼鉄騎士』の異名を持つアルトはオレの親友の一人だ。よく任務でオレ、孝治、アルト、亜紗、中村の五人で突入したこともある。年は今年で１８なのでオレ達からすれば頼れる兄貴みたいな感じだ。

「この佐々木俊輔に知らないことはない、と言いたいところだが、『ＧＦ』に関しては秘密が多くてな。それ以外なら負ける気はない」

「珍しいな。俊輔が知らないと答えるのは」

「和樹よ、知らないことを恥じるのはしない方がいい。本来、知らないのが当たり前だからな」

佐々木はそう言って笑みを浮かべる。その意見に関しては、オレは全面的に肯定しよう。

「でも、海道君って最強の何とかっていう異名があるよね。それは？」

「『最強の器用貧乏』と書いてオールラウンダーと読む。まあ、Ｕ－１８どころか世界を見てもトップレベルの器用貧乏ってこと」

まあ、そう言うとかなりかっこ悪いけど。

「あらゆる状況下で戦えるようにしているからな。全てを伸ばして強さを得る。昔に考えたオレのスタイルだ」

「あらゆる状況下ってことはアラスカとか？」

「もしかしたらサハラかもしれないよ」

「では、大穴を狙って海溝ではどうだ？」

「山の上とかじゃねえの？」

みんな思い思いの普通じゃない環境下を挙げていく。ちなみに、今挙がった場所はまだ優しい環境下だ。

世の中には致死量ギリギリまで充満した魔力粒子の海で戦闘しないといけない場所まである。それを思い出せば簡単だ。

「ちなみに、海底以外は普通の場所な。海溝だけは圧力の関係で生きていられない」

オレは肩をすくめながらそう答えた。すると、教室の入り口付近で人だかりの中を覗き込もうとぴょんぴょん跳ねている誰かを見つける。ちなみに、由姫はそれに気づいたのか立ち上がってこっちに来ていた。

オレも立ち上がる。

「じゃ、そろそろオレは帰るわ。待たせているみたいだからな」

オレはそう言って入り口を指差した。

立ち上がって気づいたのだが、いつの間にか孝治や悠聖達も集まっている。だからか、凄まじく廊下が騒がしい。

「兄さん、行きましょう」

由姫も人の間を抜けて横に来ていた。オレは由姫の言葉に頷いて歩き出す。

人だかりがモーゼのごとく割れた。

「待たせたか？」

廊下の前には同学年の第７６移動隊が全員集合していた。

悠聖は軽く肩をすくめている。

「オレらはさっき来たところさ。浩平は先に連れて行かれた」

誰がという言葉が入っていなくても浩平という名前を聞けば誰がやったか簡単に思いついた。

オレは小さく溜息をつく。

「じゃ、行きますか。一応、都やアル・アジフが入学祝いをするから早く駐在所に帰って来いって言ってたし。あっ、今日の訓練は無しだから」

「だと思ってた。つかさ、孝治がすごく不機嫌なんだよな」

悠聖の言葉に孝治を見ると、確かに不機嫌だった。確か、『ＧＦ』の若手実力者が集まったパーティの時、女性陣に囲まれていた時と同じ顔。

オレは孝治の肩に手を置いた。

「そんな状態で大丈夫か？」

「大丈夫だ。問題ない。が、さすがに辛い」

だろうな。

孝治は結構硬派な部分が多い。彼女を大事にしたいからだと思うけど、女子から質問攻めにあったら辛いだろうな。

オレは孝治の手を取るとそのまま中村の手も取った。

「手、繋いでおけよ」

「な、な、なんで？　なんでそんなことしやんなあかん？　恥ずかしいって」

「あのな、中村は孝治に他の女子が近寄って欲しいのか。孝治は女子が苦手だからな、しっかり引っ張ってやれよ」

「そ、それやったら仕方ない。孝治、いいやんな？」

「あ、ああ」

孝治も中村も顔を真っ赤にして手を繋ぐ。

うん。確か、付き合い出してそろそろ一年なのにいつまで初々しいんだか。見ていて全く飽きないけど。

ちなみに、孝治と中村が手を繋ぐと一部で悲鳴が上がっていた。

オレは歩き出す。

「さあ、行こうぜ」

これからのことを考えながら。

鬼が言った期限まで後一週間強。その一週間後には春祭りがある。逆に言うなら春祭りから一週間前に鬼は何らかのアクションを起こすということだ。

時雨や慧海には相談したが、やはり脅迫状が届いているらしく、『ＧＦ』からは誰も応援には行かせないと言っていた。アル・アジフも『ＥＳ』の方に脅迫状が届いたらしく、過激派代表のアリエル・ロワソと話をした結果、戦力は増強しないことになった。

責任逃れではなく、オレ達ならやると信じてくれたから。

『大丈夫？』

オレの目の前にスケッチブックが差し出される。

「大丈夫だ。これからのことを考えたらな」

『相手が行動を起こさないで時間が経った。多分、そろそろ仕掛けてくる』

「同感だ。『天空の羽衣』の情報がそろそろ渡っただろうしな。リースが常に索敵をしてくれているとは言え、貴族派に関してはノーマーク。一人になるのは得策じゃないしな」

『私は、都さんか琴美さんが狙われると思う。推測だけど』

確かにそれはありえる。特に琴美は春祭りの巫女だ。だから、狙われる可能性はある。

「そっちはオレがつく。亜紗、矛神の半使用を許可する。だから」

『わかった。任せて』

「悪いな。すぐに連絡取れるのはお前だけだから。危なくなったらすぐに逃げろよ」

『大丈夫。周さんが助けてくれるから』

オレはその文字に笑みを浮かべて頷いた。

本当に、これから何が起きるかわからない。だから、気を引き締めないと。

オレはそう思って小さく息を吐いた。

第五十九話　入学の日　後編（後書き）

矛神について

亜紗が持つ神剣で能力についてはまだ明かせませんが、読み方は自由です。ほこが（か）み、むじ（し）んと決まっていません。矛神が見つかった時にその文字だけが一緒にあったのが理由です。

第六十話　魔術（前書き）

魔術に関して少し詳しく説明します。
久しぶりに小説情報を見たらお気に入り登録がありました。こんな駄文小説にありがとうございます。この話から主に設定をたくさん語ろうと思います。授業の中でのものと、休憩中の二つで一つの説明です。

第六十話　魔術

オレは地面を蹴って向かって由姫にストックしていた魔術を放った。

属性は炎。だけど、由姫はそれを軽々と避ける。

今放ったのは直線上に向かう魔術。由姫に当たるわけがない。

オレは後ろに跳びながら目前に魔術陣を展開する。

近接戦闘中に魔術陣の展開は普通はしない。隙が出来るのと大した効果が見られないからだ。

だけど、オレはその魔術陣を腕に纏った。体を捻り、由姫に狙いをつけて拳を握りしめる。

「ブレイク」

この場だからこそ、魔術陣を纏って技名を叫ぶ。

「キャノン！」

拳に溜められたエネルギーが由姫に向かって放たれた。由姫はそれを軽々と受け流す。ですよね。

「由姫、受け流したらダメだろ」

「あははは、いつものクセで」

由姫はそう言いながら頭を書いた。ちなみに、少し離れた場所にいるクラスメートのみんなはポカンと口を開けている。

そう、これは訓練じゃない。魔術の授業だ。

知識に関しては小学校の間でやっていたらしい。由姫から聞いた。中学校から魔術の実技があり、その実技をやっていたのだ。

レベルはかなり高いけど。

「先生、どうでした？」

オレと由姫はクラスメートと一緒に見ていた魔術担当の先生に話しかけた。先生は真っ青になりながら頷く。

「レベルが高くて。さて、今のように魔術は戦闘で使われます。お二人の実力は桁違いなのであの魔術の中で生き残っていますが、皆さんはまだ実技は初めてのはずです。白百合君、魔術についての注意事項を上げてください」

「まずは魔術についての特性を知る。さっき放ったブレイクキャノンの射程範囲や威力などその全てを知る。次に、イメージをする。例えば放った炎のように、ちゃんとしたイメージがあるからこそ使えるものがある。最後に、不相応な魔術を使わない。巷を賑わしている医療事故の大半は、治癒魔術が上手く出来なかったことに起因している。自分が出来る範囲内でやること」

最初の魔術を知るというものはとても大事だ。オレが知る魔術の中には特殊な攻撃をするものがあり、その攻撃範囲をしっかり覚えていないと隙が出来やすい。

そして、イメージは言わずもがな。魔術にとって一番大事なものだろう。確固としたイメージがあって戦闘に利用出来る魔術は使える。学校教育では全くいらないけど。

最後のものは必ず守って欲しい。

治癒魔術は天空属性に位置する極めて難易度の高い魔術だ。難易度が高いから未熟な腕だと失敗しやすい。

そもそも、治癒魔術は体内の細胞を活性化させ、傷を塞ぐ能力を急激に上昇させるものだ。ただ、ちゃんと傷を塞ぐなら血の流れをよく知りながらしないといけない。つまり、医療の知識がいる。

「正解です。皆さんは魔術を使う素である魔力について習ったと思いますが、篠宮君、魔力について述べなさい」

「えっと、えっと、魔力粒子を体内に入れて組成されるのが魔力で、魔力は枯渇することがない？」

和樹はかなり迷いながら答える。由姫の話を聞く限り、小学校じゃあまり必要なさそうだしな。

「８０点ですね。魔力は魔術に使用する力の素。常に組成されるのと同時に放出しています。では、佐々木君、何故、魔力が放出されているか答えなさい」

「簡単だな。コップに水が入っているとしよう。その容量を超える水が注がれたなら、水は必ずコップから零れ落ちる。それが放出されている理由だ。ちなみに、これは体外で固定される魔力に含まれ

ない」

俊輔の説明はわかりやすい。オレも由姫も聞かれた時は答えるのに苦労した過去があるから簡単に言えるということが羨ましく感じてしまう。

オレは小さく息を吐いた。ただ、一ヶ所間違っている。

「俊輔、総魔力は自動防御分も含まれるから最後の一言はいらないぞ」

「なぬ。バカな。一年前に海道時雨殿が書かれた論文にそのような記述は」

「時雨の場合はその量がわけのわからないくらい多いんだよ。だから、時雨は別個にして魔術論理を書いている」

「ですが、佐々木君の言葉もあながち間違ってはいませんよ。実際に、魔術が完全に確立されたとされる七十年前から二十年ほど前までは佐々木君の意見が一般的でした。これについて皆さんの副担任である里宮先生に聞いた方がいいかもしれませんね」

愛佳さんがこの場にいたらこの先生はいろいろと大変なことになっただろうな。

「コップから水が溢れるように、魔力は常に皆さんから溢れています。溢れた魔力は魔力粒子に還元され、世界を回ります。そして、皆さんの体の中に戻り、動くエネルギーや魔力となります。魔術というものはこの世界を一生回し続けることが可能なエネルギーなのです」

一般的にはそう言われているが、オレはそれに関しては首を傾げることしかしない。

魔力粒子は体内を回りエネルギーともなる。そのエネルギーは動くことで消化される。だったら、そこで使われたエネルギーは魔力粒子に転換されるのだろうか？

オレが考えた結果が転換されないというものだった。

魔力粒子から魔力に転換され、エネルギーとなる。ここまではわかる。身体能力強化の魔術がある以上否定は出来ない。だが、使用したエネルギーから魔力に戻すことは不可能だ。

使用されたエネルギーは熱量となって体を動かす原動力となる。だが、それは消費されるものだ。消費された魔力はどこかから増えている。それがオレの考える答えだ。大学になったらこの論文をしようかと考えている。

「では、今から防御魔術について実践しましょう。イメージは盾又は壁です。防御魔術は身を守る際にはとても使えるものなのでしっかりやりましょう」

第六十一話　休憩（前書き）

魔術の補足です。

第六十一話　休憩

授業が終わり休み時間になった。だけど、休み時間になるなりみんながオレの席の周囲に集まってくる。もちろん由姫も。

「さすが『ＧＦ』の隊員だよな。防御魔術で四角錘を作り出して攻撃を受け流すなんて。由姫ちゃんも出来んの？」

「兄さんだけです」

オレ達はレベルが違うので軽く模擬戦をしていたのだ。オレはモード？の槍を使って由姫と戦っていた。その最中に、由姫の攻撃を防御魔術を四角錘のすることで受け流したのを休憩していたみんなに見られたというわけである。

四角錘に防御魔術を展開して先を相手に向けたらかなり使える魔術になる。まあ、疲れるけど。

「つまり、海道君のオリジナル？　すごいかも」

「オリジナルは結構珍しくないぜ。俊輔なら答えれるんじゃないか？」

「お前からの挑戦か。いいだろう。魔術はそもそも決まったものではない。イメージを力とするからな。つまり、イメージによって魔術が決まる。魔術の技名が少ないのはそれが理由だ。だから、能力にあるランク分けのように、規模や使い方で魔術書には表記されている。使い方を上手く変えることでオリジナルは簡単に出来上がるというわけだ。有名なオリジナル魔術を上げるのなら『ＧＦ』総長

の疾風迅雷（ミョルニル）や第一特務隊長の世界滅ぼす力（ラグナロク）だな」

俊輔は少し考え込む。そして、小さく頷いた。

「そうだな。では、問題だ。そのような表記のされ方では魔術は星の数ほどあるのではないかと思うかもしれないが、一定の同じパターンがある。それはどこかな？」

俊輔が何故か椅子の上に立ちながらみんなに質問する。

確かにこれは有効的だ。俊輔に聞いたのは俊輔なら理解しているだろうと思ったからである。ちなみにその質問は由姫に聞いたことがあるため由姫はオレの目を見て軽く頷いていた。

クラスメートはみんな考え込んでいる。この質問は案外難しい。魔術はイメージであるという部分があるからだ。つまり、どういう風にイメージを合わすかと考えている人もいるだろう。だけど、見方を変えれば簡単にわかる。

魔術は魔法と違って詠唱を必要としない。だけど、魔術は魔法と違ってとあるものを必要とする。

すると、一人の少女が手を挙げた。確か、委員長の人だ。名前はまだ覚えていない。

「魔術陣じゃないかな？　確か、魔術は瞬間発動でも魔術陣の作成を必要としているから、魔術陣に描かれている模様が関連しているとか」

「正解だ。さすがは委員長。俊輔、ありがとう」

オレの言葉に俊輔は頷いて椅子から降りた。

「魔術は魔術陣の展開を必要とする。それには少しでも時間がかかるため、魔術をすぐに発動できるように魔術陣を展開して発動限界で待機させるストックと言う手段があるから勘違いしやすいんだ。魔術陣の構成は難しいから覚えなくてもいいけど、もし、戦場に出た場合は魔術陣を見て相手の魔術を把握する手段が必要となる。まあ、ここにいたらあまり関係ないと思うけど」

「海道達の世界に跳びこむ人は少ないと思う。それに、私達はあまり魔術が得意じゃないクラスだし」

「そうなのか？」

オレは委員長の言葉に首を傾げそうになった。首を傾げる動作って子供っぽいからやりたくないんだけどね。

「うん。一組が魔術が得意な人が集まっていて、二組に魔術が苦手な人が集まる。一組は二組を見てああならないように勉強し、二組は一組を見てああなるように努力する。ほら、魔術って必須だから」

「そういうわけね」

オレと由姫が一緒になったのはそれが原因だろうな。

由姫は魔術が下手だ。対するオレは様々な魔術が出来る。だから、二組の力を底上げするためにオレがここに入った。由姫は元々二組に入る予定だったらしい。

亜紗も中村も第７６移動隊の中じゃかなりの腕前だからな。

「ってことはよ、由姫ちゃんって魔術が下手？」

「言わないでください」

由姫は思いっきり落ち込んでいた。まあ、仕方ないか。

「由姫というより白百合家が魔術の才能がないだけなんだ」

「魔術の才能がない。ふむ、つまり、魔術の才能がないからこその身体能力か」

「そういう見方も出来るな。まあ、詳しいことは誰もわからないけど」

白百合家は魔術が出来ないのは一部では有名だ。だが、それを補って余るほどの才が白百合家にはある。ちなみに、由姫は白百合家の中では魔術に関して歴代稀にみるレベルの実力者と言われている。世界レベルで見たら高校生レベルだけど。

「私は魔術が出来なくても出来ることはあると思っていますから。兄さんを支えることも」

「はあ、いいよな海道は。可愛い妹に可愛い隊員達に囲まれた生活。さらには天才。羨ましい」

「だな。周、俺達のその幸せを分けろ」

オレは小さくため息をついて騒ぎ出した男子達を睨みつけた。

「いいぜ。オレに勝てたならな」

『遠慮します！』

見事なまでの全員合唱。まあ、これで戦うと言われたら反応に困っていたけど。

オレは小さくため息をついた。

「そろそろ次に授業だから席に戻っておけよ。次、社会だっけ」

その言葉に全員が急いで席に戻りだす。それと同時に先生が教室の中に入ってきた。社会を担当するのは愛佳さんだ。由姫は少しだけ苦笑いしてから席に向かう。

オレは教科書を取り出した。

第六十一話　休憩（後書き）

次は歴史の話になります。長さは区切るつもりはないので今までより長くなります。善知鳥慧海と海道時雨の二人が活躍した歴史と『ＧＦ』、『ＥＳ』の成り立ちを語る予定ですので。

第六十二話　世界（前書き）

とても長くなりました。一万文字越えに。
慧海の物語である『ディバインナイツ』と時雨の物語（タイトル未定）は２０１２年又は２０１３年にどちらかを公開予定。要望が多ければこの第二章開始時に並行して書くかもしれません。
一応、世界の勢力についても書きました。多分、読みにくいとは思いますが一生懸命考えた世界設定（ほとんど上記の作品の紹介）です。

第六十二話　世界

「現在、世界の情勢は三つの勢力に分かれています」

愛佳さんが黒板に文字を書きながら言う。書きながらと言っても書く速度が凄まじく早いため普通の人には腕が動く様子は全く見えない。見えたとしてもいつもの腕が繋がっている様子だろう。ちなみに、オレの魔術強化なしの目では残像がいくつも見える。ほとんど繋がっているけどね。

その黒板に書かれた文字はまるで、印刷された文字のようにかなり整った文字で、それらを見たクラスメートはぽかんと口を開けている。開けていないのはオレと由姫の二人だけか。

「一つはこの教室にも所属している人のいる『ＧＦ』。主に南アメリカ大陸とヨーロッパ大陸。そして、ユーラシア大陸の東側が主な範囲ですね」

もう黒板は書き終わっているので愛佳さんはこっちを向いて話している。黒板に書かれているのは『ＧＦ』、国連、『ＥＳ』の三つだ。その内容まで要約されて書かれている。それを見たクラスメートは黒板の文字を慌てて写している。オレはそんなことをしなくてもわかっている（わかっていなければ問題だ）ので書かない。

『ＧＦ』がここまで地域が飛んでいるのは『ＥＳ』との協定に国連が絡んできたからだ。

「一つは国際連盟。これは世界各国が加盟していますが、主な範囲は北アメリカ大陸とオセアニア地域です」

日本や中国なども国際連盟に加盟しており、国連軍の戦闘能力は『ＧＦ』と『ＥＳ』過激派が全面戦争にならないための抑止力になっているとよく語られる。正確には、『ＧＦ』の第一特務が『ＥＳ』穏健派と国連が全面戦争にならないための抑止力となっているだけだ。

北アメリカに関してはお情けでもらえたものとしていろいろ皮肉られているけど。

「最後は『ＥＳ』。主にアフリカ大陸とユーラシア大陸の東を除く全域ですね。『ＧＦ』や国連の目がと度かな場所にいます」

アル・アジフ達が属している『ＥＳ』。アリエル・ロワソが率いる過激派とアル・アジフが率いる穏健派の二つに分かれており、傍目から見れば仲が悪いように見えるが実際は違うというのがややこしいところだ。何故か知らないが、過激派は国連と、穏健派は『ＧＦ』と仲がいい摩訶不思議な現象も起きている。だからと言って『ＧＦ』と国連が喧嘩しているというわけではないけど。

「皆さんは前期の間に現代社会、主に『ＧＦ』が誕生してからの世界について勉強します。では、教科書の第八章を開いてください」

教科書にはオーバーテクノロジーの存在など今の時代より前から書かれているかなり詳しい（ややこしい）教科書だ。というか、このレベルはある意味高校生が使っていてもおかしくない。いや、大学生と言うべきか。教科書をパラパラ捲ってみた内容でもかなり専門的な内容が多かった。

例えば、オーバーテクノロジーの産出で知られる地域は一般的にア

ルタミラ、北京郊外、アメリカ西海岸だが、他にもキャンベラ郊外、北アイルランド、日本などマイナーな場所まで書かれている。

オレは第八章を開けた。最初の見出しは第四次世界大戦だ。

「およそ百年前、ヨーロッパ大陸を中心に起きた戦争が第四次世界大戦です。では、白百合君は第四次世界大戦の始まった年月と終わって年月。始まった理由と終わった理由を答えてください」

教科書を見ればいいのではないかと思われるが、教科書に書かれている内容が真実とは限らない。特に、これは一般的に知られている内容から書かれているので世間に認識されている年月はこれが正しい。だが、実際は、

「新暦９１８年８月２７日に起きた中東事変から実質の第四次世界大戦は始まり、２５年１２月２５日に終結。中東事変は新しい術式理論が悪用される可能性があり、その技術を中東連合がヨーロッパ連合の研究所を強襲し技術を破壊したことから起きました。終結はヨーロッパ連合の策謀によって復活した『穿つ神』を白百合姫路と善知鳥慧海率いるガーディアンズフォースが倒したことで終結しました」

ちなみに、教科書には９２０年に始まったと書かれているが、中東事変により世界の情勢が一気に崩れたことから、実際は中東事変があった９１８年８月２７日となる。

愛佳さんはオレの答えに満足したのか頷いた。

「正解です。まずは中東事変からですね。白百合君が説明したように、中東連合が新しい術式理論を広げさせないために動いた事件で

す。その頃、世界の構図は今とは違っていました」

教室を見渡した愛佳さんが黒板を消す。どうやら誰も書いていないか確認したらしい。

愛佳さんが次に書いたのは凄まじくリアルな世界地図。ユーラシア大陸とヨーロッパ大陸の間にあるチェルノブイリ海峡の形までリアルに書かれていた。他にこだわっていそうな部分は、北アメリカにあるアラスカとグリーンランド。そして、オセアニア地域。さらにはというよりやはりというべきか日本だ。

離れてみれば誰が見ても世界地図だろう。地図帳に乗るようなレベルの。

「まずは私達がいる日本から。日本は隣国朝鮮国と日朝連合を。中国はロシアと中露連合。東南アジア及びオセアニア地域は豪州連合。他のアジアは中東連合という風に、地域によって同盟を組んでいました」

愛佳さんが地図の上に文字を黒板に書いていく。そして、連合の地域を丸で囲む。

連合の話はかなり有名だ。一番規模の小さかった日朝連合が最大の戦力を誇っていたという言葉と共に。最大の戦力と言ってもとある一族ととある少年で最大の戦力だけど。

「中東連合がヨーロッパ連合の研究所を襲撃した事件、中東事変は襲撃した日から二ヶ月ほどで解決したため、第四次世界大戦に組み込まれていない理由です。中東事変は中東連合対ヨーロッパ連合ではなく、民間自治組織対ヨーロッパ連合という構図でした。ここに

出てくるのが『ＧＦ』機動科第一特務隊長善知鳥慧海です」

「先生、質問はいいですか？」

手を挙げたのは委員長だ。質問内容については愛佳さんが気づいているのは確実たから口に出さない。委員長は立ち上がった。

「何故、百年前の人物が今も生きているんですか？」

その疑問に関してはたくさんの人が思っているだろう。『ＧＦ』の第一特務には年齢と外見が完全にあっていない人物が何人かいる。童顔と言うレベルではない。もちろん、愛佳さんもその一人だ。

「いい質問ですね。ですが、それはもう少し後になります。まずは都築を話しましょう。善知鳥慧海は単身でヨーロッパ連合の一軍を撃退するなど一躍有名人になります。そして、中東連合とヨーロッパ連合が和解した日、その仲介をしたのが善知鳥慧海です」

その話は慧海自身から何度も聞いたことがある。ヨーロッパ連合の一軍を単身撃退などありえない戦果があるが、実際はヨーロッパ連合の三つの軍隊をお手玉したのが事実だ。慧海は誰も殺さず撃退するという奇跡を起こしているが本人は当たり前と言っていた。まあ、あいつの実力と武器なら当たり前か。

慧海は自分自身をチート存在だと思っているし。実際に、第一特務の全員が善知鳥慧海は反則的なまでの強さを持っていると言う。一番怖いところは魔術もなしのデフォルトの強さで異名を勝ち取ったところだろうか。どうかんがえても化け物の一人です。

「一般的に知られている第四次世界大戦の始まりはヨーロッパ連合

と中露連合が手を組み、中東連合を攻撃した時から始まります。この第四次世界大戦の話は皆さん詳しいかもしれませんね」

おとぎ話のように語られる話の中でこんなものがある。

英雄だった少年が宿命を背負った少女を英雄にする物語。その過程では少女が生まれた酷い理由を突きつけられ一時は感情を失ったり、仲間がとある地域で離脱したりと、四苦八苦の旅でもある。そして、仲間達と共に世界の悪と神を殺す物語。

物語としての出来は事実だが王道を通っているようなもので、みんなに好かれやすい物語でもあった。ただ、戦力に関しては申し分ないほどのレベルだったけど。

子供の時によく聞いたものだ。実際にドラマ化や映画化、果てはアニメ化された作品。よくよく考えるとメディアミックスのされ方が凄い。最初は自費出版された物語なのにかなり売れたと言っていたっけ。

タイトルは『ディバインナイツ』。

異世界について語られている部分もあり、そこに出て来る神と戦う時に英雄達が名乗った部隊名からタイトルが出来ている。異世界に行くまでは実際にあったことなのでアニメ化以外は第四次世界大戦終結まで行われた。確か、それらが放送されたのが４年ほど前だったと思う。

「第四次世界大戦の始まりはヨーロッパ連合内部に溜まっていた中東連合に対する鬱憤と破壊神『穿つ神』をこの世に呼び出そうとしたのが原因です。ヨーロッパ連合と中露連合の電撃戦により中東連

合は1ヶ月足らずでサウジアラビア王国を除いて制圧されます。残ったサウジアラビア王国にアフリカ連合が協力、中露連合に豪州連合が協力し文字通りの世界大戦に発展します。さて、大戦の最中９２３年１１月２２日に起きた事件とはなんでしょうか」

黒板に文字を書きながら愛佳さんがクラスメートに尋ねる。オレは答えるのは遅らせてからと思っていたが、男子の一人が手を挙げた。

「中露連合及び豪州連合による日本占領だと思います」

「正解です。奇襲により後手に回った日本は三日ほどで制圧されます。朝鮮国は無条件降伏を呑み、ユーラシア大陸の全てがサウジアラビア王国の敵に回りました。事の重大性に気づいた北アメリカ連合は南アメリカ連合と同盟を結びアメリカ連合として世界大戦に参戦します。では、その一週間後に何が起きたか、さっき答えた人に言ってもらいましょう」

「えっと、日本解放っすか？」

「はい、そうです」

それだけを見ればかなり間抜けな話だ。島国とは言え、占領した国家をたった一週間で解放されるのは。ただ、これぱかりは中露連合や豪州連合に運が無かった。

「日本が占領されたその日、まだ抵抗していたのが私の祖先である里宮十三郎が当主の里宮家でした。ちょうどこの日、英雄だった少年の英雄になる少女が出会った日でもありました。では、白百合君、日本占領が起きた理由を答えてください」

来ると思っていた。

日本占領が起きた理由は諸説に様々なものがあり、教科書には理由は書かれていない。でも、本人の知り合いであるオレなら答えを知っているから答えられるとわかって聞いているのだろう。

「中露連合と豪州連合、いや、中露連合が日本を占領した理由は日本に存在する三つの神剣を保有したかったから」

豪州連合は中露連合の口車に乗せられただけであり、実際に、中露連合が倒れた瞬間に豪州連合は降伏している。

「神剣の名前を答えられますか？」

「英雄の証である杖『黎帝』。全てを焼き尽くす剣『蒼炎』。全てを浄化する結晶『清浄』の三つです」

この中で蒼炎と清浄の二つは見たことがある。清浄は保管されている姿を見ただけだけど。『蒼炎』は柄から刃の先まで青い炎と同じ色をしており、その剣が纏う炎は青い。見た目は幻想的だが術者殺(マナシ)しで纏(シンク)える炎と比べれば威力は段違いだ。話によれば、炎の白色化も可能らしい。

愛佳さんは満足したように頷いた。

「正解です。そのどれもが強力な神剣であり、特に黎帝は覇者のいない黎明期に帝王の証として中露連合は欲しました。それを持っていたのが、後に第四次世界大戦を終結に導いたガーディアンズフォースの一人、『光の英雄』こと白百合姫路です」

日本が占領されたその日、黎帝を手に入れるため動いていた部隊が白百合姫路を捕まえた。だが、そこに英雄だった慧海が現れ、彼女を助けた。そして、里宮家と協力して電撃戦を展開。各地の主要拠点を開放しながら開始からたった一日で日本を開放した。もちろん、増援が来るよりも早く。

「英雄だった少年、善知鳥慧海は里宮家と協力し日本を解放します。解放したその日にガーディアンズフォースが結成されました。それから戦いは二年間続き、９２５年１２月１日にヨーロッパ連合の企みが内部から暴露されガーディアンズフォースの下に世界各国の連合軍が集まります。旗印として白百合姫路が立ち、ヨーロッパ連合が復活させた破壊神『穿つ神』が２５日に倒され第四次世界大戦は終結します。犠牲者は民間人を含め９８００万人にも及び、史上類を見ない被害を出しました」

負傷者を含めればさらに数字は膨れ上がる。その犠牲者の半分近くは破壊神によるものだと誰が思うだろうか。実際に、『穿つ神』に殺された民間人の数は約４０００万人。ヨーロッパ連合のいくつもの国が滅びた。このことはあまりの事実として一般には伏せられている。

もし、世界を憎んだ集団がいるとしたなら、民間人を簡単に殺す手段としての神の復活が有効だと知らしめることになってしまうからだという。だけど、本当の意味は別の場所に隠れているんじゃないかなとオレは感じている。

「第四次世界大戦終結と共に世界は一つに纏まりました。ヨーロッパ連合は善知鳥慧海と共に戦ったマイザー・ハウゼンが盟主となり、敗戦処理を速やかに終わらせ経済を復活させます。そして、終結から一年後にガーディアンズフォースのメンバーの一部と新しいメン

バーが集まって『ＧＦ』が結成されます。この時の『ＧＦ』はまだ傭兵組織のようなもので今の『ＧＦ』とは違うものでした。ただ、その空白の一年間の間に彼らがどこで何をしていたか知る人はほとんどいません」

最初の『ＧＦ』は初期メンバーが十人だったからではあるが、当時はサウジアラビア王国からの援助を受けつつやっていたと聞いている。サウジアラビア王国から援助が受けられたのはサウジアラビア王国の女王の夫が中東事変で慧海と一緒に戦った人物だからでもあるけど。

ただ、戦争終結から『ＧＦ』の誕生までの一年間に何が起きたかは誰も答えることが出来ない。慧海に尋ねても教えてくれなかった。ただ、あることを教えてくれた。

「しかし、その『ＧＦ』のメンバーは半分が神の力を持っていることだけは確かでした。神の力、つまり不老の力。それが、今なお英雄が生きている理由です」

突拍子もない話かもしれないが事実だ。理由は分からないが、また表舞台に戻ってきた慧海達の一部が神の力を持っていたということ。それにより、不老の力を手に入れたこと。あくまで不死ではない。不老なだけだ。つまり、殺されたら死ぬ。便利な機能がたくさんあるみたいだけどね。

「その時の宗教家の熱狂は凄まじく、宗教戦争が発生しそうになったほどでした。しかし、信仰されている神の名はほとんどなく、この世界に存在したとされる神の力の欠片だったためにそこまでひどくはなりませんでした」

しかし、争いが起きたのは事実。特に中東ではかなり激しい戦いがあったが、サウジアラビア王国の英雄である女王の夫が食い止めたことで有名だ。あまり関与しなかった時雨はマイザーが起こりながら電話してきたと語っていたっけ。つくづく思うけど、世界って案外狭いよな。

「さて、話を『ＧＦ』の戻しましょう。今の『ＧＦ』は国防組織であり、東京特区学園都市を守る要ですが、その組織形態が確立したのは４５年前の出来事です。『ＥＳ』の母体組織も同じくらいの４６年前に成立しました。白百合さん、４８年前に何か覚えがありませんか？」

「えっ？　あっ、はい。４８年前に起きたのは確か、ハイゼンベルグ魔術学園事変ですよね？」

「そうです。では、第八章１７ページを開いてください。ハイゼンベルグ魔術学園は今なお存在する魔術師のための学園。今は大学となっていますが、昔は中高一貫校でした。当時は『ＧＦ』の勢力が未だに東アジアを出ていない時期で、教師として数名派遣されていました。そのハイゼンベルグ魔術学園事変で起きたのは太古に封印されたとされる魔神を復活させて従えようとした一部の過激派の動きでした。その動きに対抗したのが『ＧＦ』現総長の海道時雨。白百合君のお爺さんです」

その言葉にクラスメート全員がこちらを向いてきた。確実にこの話は次の休憩時間にされるだろうな。

「当時、世界各地にあった魔術学園の祭典である『ルーチェ・ディエバイト』。これは竜言語の言葉で『共演』と言う意味です。実際に、ハイゼンベルグ魔術学園の中ではその伝統が受け継がれていま

す。その代表メンバーだった彼は仲間達と共に過激派の対抗します。結果を言うなら、魔神の再封印には成功しましたが、人柱として三人の仲間を犠牲にしました」

どうして竜言語なのかという疑問は現在では誰も答えることが出来ないので置いておくとして、その時に復活した魔神は『穿つ神』が雑魚に見えるくらい桁違いに強かったとされている。

実際に、復活した場所が山と山に挟まれた盆地であったため被害はかなり少なかったが、そこに住んでいた民間人の約９割が死亡または行方不明という大惨事なった。戦闘を行った国連軍の損耗率が６１％とほぼ壊滅的なダメージを受けている。

そんな最中に魔神と戦ったのがハイゼンベルグ魔術学園の『ルーチェ・ディエバイト』の代表八名と『ＧＦ』の主力メンバー２３名が電撃戦を繰り広げ、なんとか魔神の再封印に成功したとなっている。ちなみに、電撃戦の部分以外は真実である。

実際は、簡潔に言って慧海の魔術で敵の群れを吹き飛ばして道を開けて伝説級の神剣を使って再封印しただけだけど。どう考えても電撃戦と言う緻密に計算されるべき作戦なんて欠片も見当たらない。

「あの、一ついいですか？」

すると、そんな中、和樹が恐る恐る手を上げる。なんかいやな予感がする。

「確か、その時の代表メンバーに里宮先生と同じ名前があったはずですが、その人とは知り合い」

パンっと愛佳さんが握りしめていたチョークが砕け散った。学校のチョークは市販のものと比べて使用時間を長くするため硬さは鉄と同じくらいとなっている。過去にはとある学校の先生がチョークを投げて生徒に全治二カ月の大怪我を負わせたというものがあった。もちろん、そのチョークは無傷。それを愛佳さんは簡単に握り潰した。

第７６移動隊で一番握力が強いであろう由姫ですら絶対に不可能な技だ。

「何か言いました？」

「何も言っておりません」

やはり命は欲しいのか和樹が椅子に座る。

今の反応でもわかるように愛佳さんはハイゼンベルグ魔術学園事変にかかわった当事者の一人だ。ハイゼンベルグ魔術学園において『最強無敵の姫（パーフェクトプリンセス）』と呼ばれ猫かぶりのレベルすらかなりのものだったらしい。つまり、今の愛佳さんの年齢は、

「白百合君」

その言葉と共に何かが頬の横を駆け抜けて後ろの壁にぶつかった。振り返ってみると、摩擦熱でドロドロに溶けたチョークが壁にへばりついている。背中に嫌な汗が凄まじい量出ている。砕いたチョークを握って固めて投げつけたのだと思うが、砕け散ったチョークを握り固めるという行為は不可能と言ってもいい行為である。機械を使えばその限りではないけど。

というか、愛佳さんの握力は一体どれくらいに達するのだろうか。興味はあるけど命が惜しいから聞くことが出来ない。聞いたら多分、『女の子に何を聞いているのかな？』と言われてアイアンクローされるのがおちだ。

「何か、失礼なことを思いました？」

「考えていません」

考えただけでこうなるのね。次考えたら確実に死ぬかな。チョークが飛んできても顔面が握りつぶしたトマトのようになるだろうな。

「その時の教訓から今の国連では一部の過激派の動きが止めることが難しいとされ、二年後、中東を中心に活動する組織『Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ　Ｓｅｒｖｉｃｅ』が結成されました。このことは次のページに書かれています。初期の頃は『ＧＦ』と同じ傭兵の組織でした。ですが、その一年後にハイゼンベルグ魔術学園を卒業した海道時雨が『ＧＦ』に入ることで、『ＧＦ』は格段に勢力を拡大します。理由としては、第四次世界大戦を止めた英雄の存在と、落ちこぼれの存在だった海道時雨のブレイブストーリーに皆が惹きつけられたのが正しいですね」

ハイゼンベルグ魔術学園に入学する前の時雨はかなり酷かったと聞いている。海道家からは勘当され二年間ほど紛争の続く地域をさまよったこともあるらしい。

だが、とある二人の傭兵少女との出会いから運命が激変し、いつの間にかハイゼンベルグ魔術学園に入ることになっていた。ハイゼンベルグ魔術学園でも落ちこぼれとして虐められていたが、とある魔術属性をひたすら極めることで代表の座を勝ち取ったという話だ。

確かに感動を呼ぶ。

その属性は、昔は誘導性の無さと威力が霧散しやすいという理由から忌避されていた雷属性で何度も先生から専攻属性を変えるように言われたらしい。今では身体能力上昇には必ず欠かせない魔術属性として重宝されている。その理論を組み立てたのも時雨だ。

身体強化魔術術式『ミョルニル』。

雷属性初とされるオリジナル魔術を時雨が習得することで落ちこぼれからあっという間にハイゼンベルグ魔術学園の四強の地位に昇りつめた事実もある。ミョルニル自体が反則的な性能を持つ魔術だからな。

簡単に言うなら神経の伝達速度を上限ぎりぎりまで高速化し、体が無意識にかけているリミッターを外す作業を強化することで１００の力を出せる。

時雨以外が真似したら廃人になりかねない魔術だ。別名チート魔術。弱点なんてものは存在しない。距離をとっても術式自体を砲撃として飛ばしてくるから実力で越えなければ勝ち目は全くない。ちなみに使用制限という敵にとってありがたいものすらない。

そんなこんなで魔神を封印できたとあいつは笑い話にしていたっけ。むしろ、そんな魔術が使えて勝てなかったったら勝ち目が全くないよな。

「『ＧＦ』の勢力拡大は一気に広まり、『Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ　Ｓｅｒｖｉｃｅ』の領域である中東と国連の本部がある北アメリカを除いて一気に拡大しました。それが『ＧＦ』の本格的な動き始めで

す。ですが、『Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ　Ｓｅｒｖｉｃｅ』とは仲が悪く度々衝突が起こり、４０年前に『ＧＦ』と『Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ　Ｓｅｒｖｉｃｅ』が大規模にぶつかりあいました。事の顛末は、皆さんは知っているようですね」

有名と言うか『Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ　Ｓｅｒｖｉｃｅ』の笑い話としてほとんどの人が知っているだろう。『ＧＦ』が出した部隊数は２０。動員人数は２５０人に対し、『Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ　Ｓｅｒｖｉｃｅ』は約５万人を動員。

結果は、開始５３秒で『Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ　Ｓｅｒｖｉｃｅ』の人員が全員気絶して終了という『ＧＦ』の強さだけが際立った戦いでもあった。大規模と言っても『Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ　Ｓｅｒｖｉｃｅ』の動員人数が大規模なだけで、『ＧＦ』にいたってはどこの地方組織かと尋ねたくなる数だ。まあ、そこに『ＧＦ』の三強が集まっていたから無理もないけど。

「この負けを契機に『Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ　Ｓｅｒｖｉｃｅ』は一度解体されます。ですが、最強の魔術師と呼ばれる『ＥＳ』現穏健派代表アル・アジフのよって『Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ　Ｓｅｒｖｉｃｅ』は新たな組織『ＥＳ』として生まれ変わりました。『ＥＳ』は『ＧＦ』と張り合いつつ勢力を伸ばし、今の形になったということです」

今の形になったのは約二十年ほど前。『ＧＦ』と『ＥＳ』が決めた協定に慌てて国連が参加したために今の形にまとまった。

まあ、本来なら中東及びアフリカ以外は『ＧＦ』担当だったのに国連が権威の喪失を恐れたため『ＧＦ』が譲歩するしかなかった。話によれば、国連代表が額を地面にこすりつけて伏し拝み奉ってきた

からしいけど。きっと憐れんだんだろうな。

『ＥＳ』も『Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ　Ｓｅｒｖｉｃｅ』から変わったことで民間人の信頼を勝ち取ったということもあるし、『Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ　Ｓｅｒｖｉｃｅ』が解体されたことは歴史的に見てよかったとされている。

「では、第八章の最初のページに戻ってください。今は『ＧＦ』と『ＥＳ』の成り立ちを語るために授業を先に進めましたが、最初に戻って第四次世界大戦の話をします。佐々木君、第四次世界大戦をしかけたヨーロッパ連合の表の理由として民間人に公表されたものを答えてください」

「そんなことは簡単だ。ヨーロッパ連合が新しい魔術術式の開発をやめていないことに気付いた中東連合が、魔術鉱石の輸出をストップしたから。実際にストップされていたのだから当時のヨーロッパ連合からすれば格好の標的だったのだろう。そのことに民衆も賛同し、中東連合はサウジアラビア王国を除いて制圧されたというわけだ。そもそも、当時言われていた中東の英雄がそのこ頃には不在だったからな。それが原因であろう」

確か、その日はイギリスにある大英博物館の資料室に籠もっていたっていう話を聞いた気がする。すぐに中東に向かったが、サウジアラビア王国を守るだけで精一杯だったとか。

「正解です。では、第四次世界大戦の詳しい話をしましょうか」

第六十三話　トップスリー

「周！　聞いてないぞ！」

愛佳さんの授業が終わった瞬間、前を向いていた和樹が振り返って尋ねてきた。わらわらと他の人も集まって来ている。

まあ、そうなるわな。

「何がだよ」

「お前が『ＧＦ』総長の孫だってことだよ。なんちゅう羨ましい家系に生まれているんだ。本当に羨ましいぜ」

「いやいや、そこまで羨ましいと連呼しなくていいだろ。それに、苦労の方が多いさ。海道という名前はある意味ブランドだ。だから、狙われることだってある」

海道だからこそ狙われたことがあった。

オレが白百合ではなく海道を名乗るのは名前のブランドと、今までのことを忘れないようにするためだ。

オレが狙われ『赤のクリスマス』が起きたことを。

「でも、総長の孫ってことは、海道君はお金持ち？」

「ちなみに、時雨からは金はもらっていない。今まで『ＧＦ』で働いていた給料で十分だからな」

「ふーん。ちなみに、海道はどれくらい貯金があるの？」

「３０００万ほどかな。最近５０００万ほど使ったし」

オレの言葉に質問してきた委員長だけでなく、クラスメート全員が固まっていた。何故か由姫まで。

「金持ちじゃん。周、いや、周様」

「キモイから止めてくれ。出費がかなり激しいんだよ。言っただろ、５０００万使ったって。戦いにはお金がいる無駄遣い出来ない」

「ちぇ。でも、周も苦労人なんだな」

「仕方ないよ。海道君だし。多分、私達にはわからない苦労一杯しているんだろうな。困ったことがあるなら私達を頼ってね」

「ありがとう」

オレはそう言って感謝した。今のクラスメートの女子の言葉には何人ものクラスメートが頷いている。

オレは守る存在だと思っていた。でも、守るべき人々がオレを守ろうとしてくれるのは本当に嬉しい。都の時だって泣いちゃったからな。思い出したら死にたくなるけど。

「ん？　何か騒がしいな」

俊輔の言葉に誰もが廊下の方を向いた。

確かに廊下が騒がしい。耳に神経を集中させると、騒ぎ声と共にカメラのシャッターを切る音がする。

うん。何が起きているか全くわからないや。

すると、誰かが教室の中を覗き込んでいた。千春だ。

すると、教室の中でどよめきが走る。オレは立ち上がって千春に近づいた。

「よっ。どうかしたのか？」

「周君を探していてね。あのさ、昼休みに生徒会室に来てくれないかな？　ボク達と一緒にご飯を食べようよ」

オレは少し考え込んだ。

昼ご飯はみんなで集まって食べないかと話していたのでどうしようかと。生徒会室と言っても全員が入るわけじゃないだろうからみんなで押しかけるのは無理だろうな。だったら、オレ一人で行くしかないか。

「わかった。千春達って事は他に誰かいるのか？」

「うん。ボクと都と琴美の三人。特に都が周君と食べたいって思っていたから。じゃね。昼休みに迎えに行くよ」

千春が手を振りながらスキップで廊下を走るでいいのだろうか。スキップって歩くと走るのどっちだ？

オレは小さく息を吐いて振り返った瞬間、クラスメートが近づいてきていた。もちろん、全員男子。

「な、なんだよ」

オレは思わず後ろに一歩下がってしまう。

なんというか、恋人同士を恨む男達のような顔をしている気しかしない。

「海道。お前は千春様と仲がいいのか？」

「はぁ？　千春様？」

何で様を付けるのだろうか。

「千春様と言えば都様、琴美様、千春様の狭間市美少女トップスリーに決まっているじゃないか。そんなことも知らないのか？」

いや、むしろ知っている方がおかしいと思う。だって、オレがここに来た日から1ヶ月も経ってないぞ。そんな話を知っていそうなのは浩平くらいだ。

「清楚かつ優しいお嬢様である都様。さらっとした長い黒髪と整った体型をした琴美様。天真爛漫な性格かつ可愛い千春様。お前ら三人がトップスリーと呼ばれるように、都様達もトップスリーって呼ばれてるんだよ」

「トップスリーって何さ？」

そんな話は完全に初耳だ。というか、示される三人はオレ、孝治、悠聖の三人だろうが、トップスリーと呼ばれる心当たりは・・・あった。

確か、オレと都が初めて会った日に都がオレ達のことを興奮しながら言っていたのを思い出す。確かにあの時はオレ達は三人でまとめられていた。あんな風なものだと考えれば気は少し楽になるか。

「どういう関係なんだ？」

男子が尋ねてくる。とりあえず、オレは肩をすくめた。

「千春は狭間市の学生『ＧＦ』だからな。いろいろ連絡取り合っているんだよ。都と琴美は普通に友達だ」

「う、羨ましすぎる。これが、生まれの差か」

男子達が一斉に膝をついた。

確かにそこは羨ましいと思う部分があるかもしれないが、生まれの差というのは違うと思う。

「生まれの差は気にしない方がいいぞ。オレが海道の名を使うのは戦うことを決意したからだしな。自分が感じるままに、守りたい者を守る力が欲しかったから」

「周は苦労しているんだな」

和樹の言葉にオレは鼻で笑った。

「もう、慣れたよ」

「弟くん、見つけた！」

オレが軽く肩をすくめた時、背後から声がかかった。

振り返ると案の定、音姉の姿がある。

「音姉、どうかしたのか？」

「ちょっと用事かな」

そして、音姉が近づいて来た。

「今日の朝、弟くん達と分かれてからクラリーネから接触があった」

その声はオレにしか聞こえないほど小さかった。さらには唇が全く動いていない。こういう場所では使い易い言い方だ

オレも同じように返す。

「内容は？」

「放課後、私と弟くんの二人で屋上に来ること。気配は全く見えなかったから魔術だと思う」

「了解」

音姉がオレの前に止まる。

「昼休みに都さん達とご飯一緒にするって聞いたから、私も大丈夫かなって」

「あー、悪い。いろいろ話したい内容があるから。音姉こそクラスメートと食べたら？」

「うん。それもいいんだけどね、学校が始まってから昼ご飯をあまり弟くんと食べていないなって」

確かに学校が始まってから音姉とは食べていない。クラスどころか学年自体が違うため、なかなか食べることは出来ない。

よく亜紗とか来るけど。

「じゃ、私はクラスに戻るよ。弟くん、由姫ちゃんの監視をお願いね」

「余計ですってば」

由姫が呆れたように溜息をつく。

オレはそれに笑って頷いた。

「わかってる。じゃ、また、放課後に」

「うん、放課後に」

音姉が言うと同時にチャイムが鳴り響いた。

次の授業は確か技術だな。

「さて、どんな授業になるのやら」

第六十四話　デバイスシステム（前書き）

デバイスについて軽く説明です。
全てが語るのは第一章後半の場面で語る予定です。

第六十四話　デバイスシステム

デバイスシステム。

レヴァンティンなど魔術器と呼ばれる科学に魔術を融合させた武器に使われるシステムだ。

本来、デバイスというものは身近にあり、召喚系のデバイスを除いて気軽に手に入れることが出来る。

召喚系。つまり、オレが持つレヴァンティンのようなものだ。武器を呼び出して手に入れることが出来るデバイス。収納魔術の刻印を刻まれているため、デバイスそれぞれ最大収納数が超えるまで収納出来る。

ただ、それは一般には流通しない。『ＧＦ』や国連軍など戦闘力を必要とする場所にしか流通しないのだ。

戦闘力を必要すると言ってもポジションによって能力は様々だ。一番新しいタイプは万能性を追求して器用貧乏になったもの。

レヴァンティンと一緒に使っているデバイスは『ＧＦ』から配布された万能性を追求したデバイスだが、レヴァンティンのデバイスシステムはあまりの万能性の高さにオーバーテクノロジーの力を実感する。

「ふわぁ」

オレは欠伸をした。

教壇の前では頭が禿げた先生が熱心にデバイスシステムについて持論を語っている。そう、持論だ。

デバイスシステム自体、未だにブラックボックスな部分が多い。理由は、デバイスシステムを制作する里宮家の会社が情報開示を拒んだからだ。

デバイスシステムの技術は里宮家が独占している。だから、そのブラックボックスの中身はわからない部分が多い。ただ、オレはその中身の中核以外全てを知っているけど。

「つまらん」

『言わない方がいいですよ』

レヴァンティンがオレにしか聞こえない声で話しかけてくる。オレの声が聞こえて来たのか和樹が振り返った。

「つまらんって面白いと思うんだけどな」

「持論自体の整合性が全く無いんだよ。あらゆるシステムは出力を追求しようとしたら処理速度が著しく低下する。対抗する手段としては出力補助を作り出して処理速度の減少を出来る限り防ぐやり方。先生の言っているやり方は処理速度を上げて作り出すというけど、そもそもデバイスの処理速度は元から決まっているんだ」

デバイスシステム自体ブラックボックスだが、一般的に知られて、いや、一般的には知られていないけど、一部ではデバイスの最高処理速度は約百兆桁の計算が可能なレベルだ。

集積デバイスはいくつものデバイスを並列で繋げることで処理速度のレベルを上げ、出力と処理速度を両立して十兆桁まで到達している。だが、今の出力をさらに上げた場合、処理速度の減少率が飛躍的に上昇するのだ。

「つかよ、出力と処理速度って同じようなものじゃねえの？」

「違う。出力は空気中の魔力粒子からエネルギーに変換する機能。処理速度はエネルギーから処理する機能。続ける動作だけど中身は全くの別物さ」

「ふーん。ややこしいな」

「デバイス自体が工業の分野で最先端かつややこしいものだからな。身近に溢れているものだけど、その中身は秘密の宝箱」

オレは軽く肩をすくめた。

今の最先端の遥か先を行くレヴァンティンがあるからこそ、デバイスに関してはいろいろと詳しい。そうでなければモード？なんて作り出せない。

あれはデバイスシステムの特徴を理解しなければ完成にはたどり着けないからだ。

「周は詳しいんだな」

「教えてくれる先生がいるからな。つか、ここの技術の先生はこれだけしか話さないのかよ」

「有名だぜ」

確かに有名になるよな。

聞く限りでは面白い話だし、一部を除けばちゃんと理論が出来上がっている。だが、オレからすればこれはデバイスシステム理論じゃない。

先生が言っているのを要約すれば、今のデバイスシステムを処理速度の観点を底上げすれば出力を上げても大丈夫ということだ。

そんな理論が通用するならレヴァンティンで達成出来る。

「処理速度の限界をどうにかするにはデバイス自体を大きくすればいい。確かにそれは賛成だ。理論上の数値は限界を越えるからな。ただ、理論上なだけだ。実際に出せた数値は出力を外部出力に頼って四兆程度。無理にもほどがある」

「じゃ、周ならどうするんだ？」

「オレが勉強しているのは開発じゃなくて新しい使用方法なんだよな。一応、新しい理論としては二重変化（デュアルシフト）かな」

「どういう理論なんだ？」

「二種類の武器を使い分けるやつだよ。剣と弓、槍と杖のようにパーツの交換で新しいものを作る」

レヴァンティンを使ってすらデバイスをもう一つ必要とした。レヴ

ァンティンを使わないならデバイスは三つは必要だろう。でも、戦場での利点は上がる。

「そこ！　私語をしない！」

「すみません」

オレは軽く謝った。

先生は少しだけ眉をひそめてオレを見る。

「授業がつまらないか？」

「デバイスについては勉強したことがありますから、少し疑問点がありまして」

「生意気な。言ってみろ」

オレはニヤリと笑みを浮かべて立ち上がった。

第六十四話　デバイスシステム（後書き）

一応時間軸の補足を。
設定公開の授業が始まってからまだ1日も経っていませんが、入学式からは日にちが経っています。周の和樹と俊輔の呼び方が変わっているのもそれが理由です。

第六十五話　昼休み（前書き）

前を急に切ったのは普通では理解できない内容に突入したからです。書こうと思えばかけたのですが、自分の中ではわかっても皆さんには理解できないわけのわからない文しかできなかったので。一応、没になった案はデバイスのフレーム部分の説明からシステムの基盤部分の接続の仕方。後、専門用語が飛び交うことに。自分の駄文なのに書けないことに恥ずかしくなってきますね。

第六十五話　昼休み

昼休み。オレは生徒会室で都達と一緒にお弁当を食べていた。その最中に都が口を開いたのだ。

「聞きましたよ」

「何がだ？」

「周様が技術の中村先生を泣かせたという話を」

「そう言えばクラスメートが話していたわね。何をしたの？」

琴美がサバ缶を突つきながら尋ねてくる。まあ、有名になることは覚悟で反論したからな。

「間違っている点を全て指摘して訂正しただけなんだけどな」

デバイスシステムの基本的な部分から。知っている人の限りなく少ない部分まで様々な知識を先生に言ったら先生が泣きながら教室を出て行った。それには誰もがポカンとしていたのにオレは苦笑していたけど。

「問題になりますよ」

「間違いを言って指摘しただけだ。これで問題になったらそれ自体が問題になる」

間違いを指摘して怒られるならだれも間違いを指摘しなくなる。ど

こぞの恐怖政治かと思ってしまうようなものだ。まあ、怒られるとしたら敬語を使っていなかった部分かな。

オレの言葉に都がため息をついた。

「一応、『ＧＦ』は狭間市が呼び寄せたことになりますから私に話が回ってくるんだす。これからのことを思うと今から疲れてきます」

「珍しいわね。都が弱音を吐くなんて」

「だって」

都は生徒会室のドアの方を向いた。そこには明らかに人の気配がある。というか、ドアの隙間から中を覗こうとしている。確かにこれは嫌だよな。

「周様や琴美、千春と一緒に楽しくお昼ご飯といきたかったのに無粋な邪魔ものがいるので」

「我慢した方がいいよ。ボク達はただでさえ男の子からの人気が高かいから。周君はさらに人気が高いけどね」

「トップスリーだっけ？　んな話聞いたことがないって。誰が広めたんだ？」

琴美と千春の二人が同時に都を指さし、都は恥ずかしそうに手を挙げている。

納得できるのは都の性格からだろうか？

「で、でも、悪気はないんですよ。ただ、周様の素晴らしさを伝えようとすれば、そういう風にした方がいいかなと思いまして。ですので後悔は全くしていません」

「してくれ」

オレは小さくため息をつきながら弁当を床に置いた。そして、魔術陣を瞬時に展開して魔術を発動させる。使う魔術は結界魔術。それに気付いた都と千春が弁当を置いてオレを見てくる。琴美も部屋の空気が変わったことが分かったのかサバ缶を置いた。

「こっから重要な話だ。放課後、貴族派と接触する」

このメンバーには貴族派について知っていることをいろいろ言っている。だから、そこまで動揺しないが驚いているような節はある。

オレは話を続ける。

「放課後の屋上でオレと音姉が接触する。出来れば屋上を立ち入り禁止にして欲しいけど」

「大丈夫です。屋上は元から立ち入り禁止です。屋上のカギは私が持っていますので」

それなら大丈夫だな。

「千春は何もしなくていい。ただ、学校内の警備は第７６移動隊が行うから学校外の方を頼めるか？」

「わかったよ。一応、みんなには知らせる？」

「いや、いい」

みんなに知らせた場合、噂が一気に広まることだってある。結界を使って話しているのはそのことをさせないためのものだ。展開した結界の数は三個。オレが同時に展開できる上限を展開している。だから、この部屋の中に他の人がいなければ広まることはない。

「私はどうすればいいのかしら？」

「琴美には都と一緒にいて欲しい。生徒会の仕事とかあるか？」

「はい。琴美に頼もうと思っていたものがあります。一応、生徒会役員以外に有志を募ろうとも思っていますけど」

「亜紗と中村を行かせる。一応、第７６移動隊でこのことを知っているのは音姉、孝治、悠聖の三人だけだ。放課後まで危険な状況に生徒をさらされたくないからな」

「一ついい？」

琴美が不思議そうに手を挙げた。

「もし、相手が襲いかかってきたとしたら二人で対処できるの？相手は複数人なんでしょ？」

「大丈夫。オレと音姉がいる以上、生徒には指一本触れさせない」

「大した自信ね。でも、頼もしいわ。でも、もし、大軍を使って攻めてきたなら？　さすがに二人では対処しきれないはずよ」

「それなら大丈夫」

オレはその言葉に笑って答えた。

「オレがいる」

「もう、呆れてものが言えないわ。でも、頼るしかない」

「うん。ボク達狭間市学生『ＧＦ』が束になってようやく一人倒せるか倒せないかってレベルの面々だからね。ボク達じゃ、力不足だよ」

千春は俯いた。確かに、力的な関係から言えばオレ達は学生『ＧＦ』と比べて遥かに強い。だけど、オレはそれがすべてを決めるとは思わない。

「オレ達の戦いがあるように千春達の戦いがある。オレ達は敵の大将と正面切って話し合うけど、千春達は他の人に普通の暮らしを守っていて欲しいんだ」

「普通の暮らし？」

「ああ。今はまだ安全であるというところ。オレ達が守りきれないところだ。オレ達はいつも戦っているという空気じゃないとだめだからな」

オレの言葉に千春は頷いた。

学園都市を除いて学生『ＧＦ』に主戦力として期待しているところ

はまずない。あるとしたら地域『ＧＦ』のメンバーが足りないところだ。まだ学生であり、人としての魔力が最大に達する２０歳にすら到達していない。だから、数えることはない。でも、戦力ではない地域の安全を見るメンバーとしては重宝されている。

オレ達第７６移動隊は地域を動き回りながら守るタイプなので、地域に密着して守る地域『ＧＦ』とはなりえない。

「放課後は出来るだけ普通に頼む。アル・アジフには一応知らせているけど、オレ達がいない穴を埋めるために市内を回るらしいから戦力にはならない。オレ達でどうにかするぞ」

「はい」

「そうね」

「了解」

都達の返事を聞いてオレは窓の外を見上げた。そして、小さく息を吐く。

「クライン。何の用事か知らないけど、容赦はしない」

第六十五話　昼休み（後書き）

放課後に戦闘が入ります。でも、まだ入りません。公開したい設定が後一つだけ残っているので。

第六十六話　デバイスと魔術（前書き）

『ＧＦ』と『ＥＳ』がデバイスを使う最大の理由です。書くの忘れていたのであえてここで書きました。

第六十六話　デバイスと魔術

「なあ、一ついいか？」

何故か机の上にぐったりしている和樹が生徒会室から戻ってきたオレに尋ねてきた。傍から見ればただの死体にしか見えなくもない。

「なんだ」

多分、オレと都達の関係でも来るんだろうな。

「なんで魔術の授業が二回もあるんだ？」

確かに、魔術の授業は二時間目にあった。実戦魔術の授業は。

「そっちか。論理魔術と実戦魔術は別物だ。論理魔術は属性の基礎から習いなおす。それが習っているか習っていないか関係なく」

「つかよ、小学校の頃やっているんだが」

「だったら、雷属性の特徴を言ってみろ」

「えっと、力が霧散しやすい。指向性の魔術に向かない。防御手段が少ない」

和樹は指を曲げて数えながら答える。それにオレは頷いた。

「そう。特徴を知っているのと知らないとでは防御魔術の発動で命にかかわることがある。実戦魔術の大半は防御魔術らしいから防御

魔術はそっちを極めた方がいいだろな。でも、知識を増やして対抗できるようにするのは論理魔術が必要だ」

「よくわからん」

「だろうな」

論理術式が必要であるとみんなに教えるにはたくさんの時間と理解が必要だ。実際に評議会の爺共の半分近くは論理術式がいらないのではないかと思っているくらいである。だけど、さっき言ったような防御魔術の応用や上位の魔術、簡単に言うなら魔力そのものを操作するなど、極めて暴走しやすいものを使う場合は論理魔術が不可欠となる。オレも時雨から必死に習ったからな。

和樹が小さくため息をついた。

「お前と都様達のことはみんな内心では納得しているよ。お前らが来る一ヶ月ほど前には嫌われ者だった地域『ＧＦ』が全員行方不明になったからな。空白期間は千春様が崩壊しかけた学生『ＧＦ』をまとめて。都様が『ＥＳ』の穏健派を呼び込んでくれた。最初はお前らのことを不審に思っている奴らも多かったけど、都様が必死に宣伝していたからな。この学校でお前らの関係に気づいていない奴はむしろ少ない」

「そうだな。最近いろいろありすぎて地域『ＧＦ』がいなくなったことを忘れていたよ」

地域『ＧＦ』全員が行方不明となった。あの日から頑張ってくれたんだな。

「論理魔術でも先生を泣かせるつもりか？」

「しねえよ。オレが論理魔術でうるさいのはデバイスと魔術の関係性だ」

「魔術補助のことか？」

デバイスは所持者が使用する魔術を補助することが出来る。それは特別仕様にしなければいけないが、基本的に魔術は相手の魔力に直接ダメージを与える手段なので、物を壊したい時はそういう風に補助をして転換しないといけない。

実際に正規部隊に配られるデバイスの大半はその機能が付いている。正規部隊自体がいついかなる時も動けるような部隊なので災害時には最速で現地に入るからだ。そして、負傷者の救助に当たるためそういう風になっている。

「魔術補助に関してはかなり使えるからな。最近増えている戦闘用じゃない個人所有用のデバイスにだってその機能は付いている。デバイス自体が二世代三世代前だからいいけど」

「そんなに古いのかよ。確かに、戦闘用や据え置き型と比べてはるかに劣ると言われているけど俺らからすれば画期的な開発だぜ。おかげで携帯電話が使えるからな」

「ちなみに、一世代前から携帯電話はデバイスのみで出来るようになっているから」

「技術の古さを感じさせるな」

デバイスで連絡取りあった方が確実だしな。携帯電話は混戦しやすい。ただ、電話とメール以外の機能はデバイスにはないけど。

「つか、なんでお前は煩いんだ？」

「オレの場合はいつもフル仕様だからな」

オレはそう言って自分の左腕を触った。あの日からオレの左手は・・・

「何かあったようだけどお前が話すまで聞かないさ。おっ、先生来た」

和樹が前を向く。オレはその間も左腕を触ったままだった。

今では傷の跡がほとんど分からないくらい治っているが、あの日、『赤のクリスマス』の日からオレの左腕には本来あるはずの神経が通っていない。

理由は、神経が本来ある部分が根こそぎ破壊され未だに再生していないからだ。その怪我で実際に助けれた命を助けることが出来なかった。だって、オレ一人助かったから。

「デバイスの補助があるからだよな」

オレはそう言って左手を動かす。

神経が通っていないなら使えないはずなのだが、そこはオレのレアスキルの力でカバーしている。

『強制結合』。

触れているものを無理やりくっつける能力。これにより、神経を強制的につなげて左手を動かしている。だから、常にレアスキルの発動が必要になるのだ。レヴァンティンはそれを補助してくれる。

それが、オレがデバイスの魔術補助に関して煩い理由だ。

「今の自分がいるのはデバイスの力があったからだけどな」

『マスターはさすがですよ。私がいない間は自分での処理だけでやっていましたし。それでかなり強い評価までいただいていましたよね』

レヴァンティンが小さな声で言ってくれる。

「そうだな。でも、お前がいたから助かっている。今日はよろしくな」

『はい、マスター』

第六十六話　デバイスと魔術（後書き）

ちょっとしたネタバレ

レヴァンティンが話せるのは皆さんご存じだと思いますが、初期製作の頃は話せなかったものです。オーバーテクノロジーだからというわけではありません。２０１２年夏公開予定の短編集を集めた物語である「始まりのクロニクル」で語る予定です。一応宣伝込みで。

第六十七話　放課後（前書き）

貴族派最強の人物が登場です。
今思えば戦闘入っているのに血が全く飛び散っていないんですよね。
Ｒ－１５には時期が来たらする予定です。今はまだその時期ではないので。

第六十七話　放課後

放課後の屋上。

そこは物々しい雰囲気が漂っていた。まだ戦闘していないにもかかわらず戦闘中の空気がある。

屋上の中央にはオレと音姉が背中合わせで立っている。音姉はトレードマークであるリボンを外して収納している。腰についているのはもちろん光輝。オレはレヴァンティンを抜き身のまま持っている。お互いに目をつぶりながら気配を探る。いつ来るのかわからないのでオレ達はいつでも動けるように準備している。

そして、オレ達は目を開けた。それと同時に屋上に見たことのある面々が数人着地する。

その中の一人であるクラインがオレ達の前に歩み寄る。オレ達は警戒を解かない。

「我らの招待を受けてくれてありがとう」

「見過ごせなかっただけだ」

オレはしっかりとレヴァンティンの柄を握りしめた。いつでも戦えるように。

「君達に言うことはただ一つ。我らのすることを傍観して欲しい」

「断る」

考える時間すらなかった。そんな要望は頷けない。相手には鬼がいるのだ。オレはレヴァンティンをクラインに向ける。

「お前らが何の目的で鬼を助けたかわからないけど、オレ達の目的は鬼の封印だ。見過ごせると思うか？」

『ＧＦ』としてではなく、自分自身の考えとしても見過ごせない。だから、レヴァンティンを向ける。

「そうか。我らと貴様らのやることは同じか」

「なんだと？」

その言葉にオレは驚いた。音姉も微かに動揺している。そんなオレらを見ていたクラインがにやりと笑みを浮かべた。

「我らの目的は鬼の力を奪い、そして、鬼を封印すること。それには儀式が必要なのだよ。我らの目的はただ一つ。一週間ほど後に狭間の巫女を生贄に捧げ、狭間の鬼を復活させる。そして、狭間の鬼の力で魔界がこの世界を支配するのだ。そうすればギルガメシュなぞ目にもくれずに我ら当主が世界を統べる偉大なる魔王になるであろう」

その言葉にオレ達は思わず固まってしまった。確かに鬼を封印するのは同じかもしれない。鬼の強さは奴らも危険視しているからだ。

でも、鬼が封印された後、その力を使って攻めてくる。世界大戦の比ではない犠牲者が出る可能性だってある。そんなこと、見過ごせない。

「い、生贄だと？　ふざけるな！　そんなことをして慧海や時雨が黙っていると思っているのか？　そんなことできると思っているのか？　目的は同じじゃない。お前らに鬼の力は使わせない。鬼を封印するのはオレ達だ」

音姉がオレの横に並び腰を落とす。

「出来るのかな？　我ら貴族派には貴様ら以上にたくさんの兵がいる。それらを相手に」

「舐めるな魔人」

クラインのような人型の魔物をオレ達は魔人と呼ぶ。実際に、動き方が似ているという理由もあるのだが、一番の理由は魔界に住む人と同じような存在だからだろう。

オレはにやりと笑みを浮かべた。

「たかが雑魚を集めただけでオレ達を倒せるとでも？　舐めるなよ。オレ達人間を舐めるな」

「そうか。ならば、痛めつけて聞かせないといけないようだな」

その言葉と共にオレは振り返りながらレヴァンティンを横薙ぎに振った。オレ達の影から現れたクラインを切り裂く。

そして、振り返りながらレヴァンティンを構える。

「音姉」

「うん。結」

たった一言で屋上に結界が展開される。クライン達は身構えた。

「そっちがそのつもりなら、こっちは全力で相対する。それが『GF』の流儀だ」

「戦うなら倒すが戦わないなら見逃す。貴様らが甘いと言われる理由だ。そうだな、ベリエ、アリエ。海道周の相手をしてやれ。他は白百合音姫だ」

相手がそれほどまでに音姉を警戒しているということか。オレはレヴァンティンの柄を握りしめながら音姉を見た。

音姉は軽く頷いてくれる。

「クライン様、殺しちゃっていいよね？」

オレの前に現れたのはサイドテールとツインテールの少女二人。顔は同じだから双子だろう。

「ベリエちゃん。殺すのは駄目だよぅ」

サイドテールがベリエでツインテールがアリエか。

「甘いぞ、アリエ。殺しても構わん。だが、二人以上になれば殺すな」

つまり、クライン達は音姉を倒すつもりだ。第７６移動隊最強の戦

力を今ここで再起不能にするのだろう。

オレはにやりと笑みを浮かべた。

「かかって来いよ。オレは強いぜ」

そして、ベリエとアリエが同時に地面を蹴った。持っている武器はナイフ。

左右に分かれての同時攻撃を狙っている。だから、オレは回転しながらレヴァンティンを振る。形を変えつつ。

「モード？！」

レヴァンティンが剣から槍に変わりそれを一気に振り切った。

双子が驚いた瞬間に二人の持っているナイフを弾き飛ばし、レヴァンティンを両手で握る。

「モード？」

間髪いれず、レヴァンティンを新たな形態にして双子に突きつけた。

双剣だ。右手と左手の両方にレヴァンティンの剣を分割したような剣を握り、それを双子の喉元に突きつけていた。

「チェックメイトだな。動いたら双剣を動かす。お互い相方の命も惜しいなら動かないでくれ」

「お前の負けだな」

ベリエがそう言った瞬間、嫌な予感を感じてオレは後ろに飛んだ。
オレがいた場所を槍が通り過ぎる。
「ちっ、避けられた」
「まさか、動いてくるとはな」
「あんたが誰も殺せないのは知っている。だから、私もアリエも安心して戦える。体が動く限りだけど」
「納得したよ」
それがオレの弱点か。でも、オレは双剣を剣に戻して鞘に収めた。
「だったら、次からは殺す」
たった一言でアリエがその場に座り込んだ。ベリエですら槍を握る手が震えている。今、下手に動けば死ぬことはわかっているのだろう。
白百合流黄泉送り『陽炎』。
オレが覚えている白百合流の中で一番の威力を持つものだ。この技の真価は習得した者は見ただけで威力が想像出来るような気迫が出る。
「どうした？　来ないのか？」

「くっ、アリエはそこにいて。私が、行く！」

ベリエが地面を蹴る。オレはレヴァンティンを鞘から抜いた。

普通の居合い抜きは斜めに斬るものだが、これは下方面に抜きながら一気に振り上げる。それは相手が完全に防御をしても浮き上がらせ、吹き飛ばす。又は、防御したものごと叩き斬る。

オレのレヴァンティンは空を切った。ベリエには当たらない。でも、槍の穂先だけは斬り飛ばしている。

ベリエはそのまま懐に手を入れようとした。でも、オレはそのままベリエに肩から体当たりをする。ベリエはまともにくらって吹き飛んだ。

「ベリエちゃん！」

アリエは立ち上がり槍を取り出してベリエに駆けつける。オレはそれを止めようとせず音姉の方を振り向いた。

そこにあったのはクラインを除く全員が山積みにされている光景だった。

クラインは完全に青ざめている。

「弟くん、終わった？」

「そういうことね」

オレの言葉に音姉が首を傾げた。傾げた音姉の髪は長い。腰に届く

か届かないくらいだ。ポニーテールにしているのはそれも理由だが、ポニーテールにしていない音姉は本気の音姉だ。

世界最強の剣士としての音姉。

「ば、バカな。強すぎる」

「クライン。お前の企みは終わりだ。ここで」

『クライン、下がれ』

その言葉が頭の中に直接響いてくる。

ありえない。ここは結界の中だ。結界の中である以上、外部から声を届かせるには術者以上の力量が必要になる。さらには音姉が作り出した結界はほとんど魔法に近いものだ。その頑固さは慧海ですら破壊できない。なのに、声が響く。

クラインを見るとクラインは片膝をついて頭を下げていた。

「余の好みに育ったではないか」

いつの間にか目の前に一人の女性が立っていた。

オレはこの女性を知っている。慧海や時雨から紹介された魔界の住人に面影を残す少女と似ている。

「エレノア、か？」

「余を覚えているのか？　嬉しいぞ。ほぼ七年ぶりか？」

七年ほど前、オレと妹はとあるパーティでエレノアと出会った。その頃のエレノアはこんな話し方をしていなかったはずだ。

オレは後ずさる。

嫌な予感がする。いや、嫌な予感しかしない。

「余はエレノア。魔界五将軍の一人『炎帝』にして貴族派代表エレノア」

エレノアは背中に『炎熱蝶々』を展開しながら言う。

この日、オレは最大の敵と出会った。

第六十七話　放課後（後書き）

新キャラ増殖。三人も増やしました。これで第一章前半部でのキャラは後三人です。アル・アジフとエレノア、一緒にいたら混じりそう。

第六十八話　エレノア

「周よ、茜は元気か？」

エレノアは『炎熱蝶々』をオレに向けながら尋ねてくる。

オレはレヴァンティンを構える。

「元気だ。病院に入院しているけどな。体はいたって正常さ」

オレは周囲に目を走らせる。

結界は完全に破壊されいるから下手をすれば周囲に被害が飛び散る。音姉も結界の再展開がしたいだろうが、エレノアから目を逸らせない。

「まさか、エレノアが貴族派代表だとはな。聞いてないぞ」

「余の存在は秘密にしてもらっていた。余は魔界五将軍なのでな。対策をとられかねん」

「だろうな。クラインが話した貴族派の目的、本当なのか？」

オレの額に汗が流れる。緊張で手が震えそうになる。今まで相対した中では時雨クラスの実力しか感じない。

攻めれば死ぬ。

「余は、いや、余達は強くあらねばならない。なら、犠牲は気にし

ない方がいい」

「っつ、変わったな」

あの頃は、あのパーティの中ではずっとオレ達の面倒を見てくれた。
オレと茜は人が多くて緊張しているからエレノア一緒にいてくれた。

エレノアはお姉ちゃんのようだった。

「オレの知っているエレノアは優しかった！　音姉と同じように！
何があんたを変えた！」

「現実を知った。周、余のものとなれ」

「何？」

オレは思わずレヴァンティンを下ろしていた。あまりのことに音姉もポカンとしている。

「世界を救う方法を余は知っている。共に世界を救おう。今なら、最小限の犠牲で済む」

「最小限の犠牲だと？」

「そうだ。人間の半分ほど死ぬで済む」

オレはエレノアにレヴァンティンを向ける。

「誰かを犠牲にする平和なんていらない」

「世界が滅びるとしても？」

「滅ぼさせない。エレノアが変わった理由がわかったよ。結局はオレと似ているんだな」

エレノアは世界を滅ぼさせないために力を手に入れようとしている。誰かが犠牲になったとしても。

オレも力を手に入れようとした。自分のせいで誰かが犠牲になるなら、自分が犠牲になればいい。力を手に入れるためなら何でもしようと思った。

「エレノアは優しいままだ。優しいままだからこそ、オレはお前を止める」

「何がわかる？　お前に余の何がわかる？　わかってたまるものか！」

エレノアの『炎熱蝶々』が赤く光った。その瞬間にオレはエレノアに向かって地面を蹴っていた。それと同時に屋上が結界に包まれる。音姉が張ってくれたか。

「レヴァンティン！」

エレノアが放った炎弾が全て消え去った。

オレはそのままレヴァンティンを振り切ろうとしてレヴァンティンが止まる。いや、体が一気に重くなり体の動きが止まった。そのままオレの体が地面に転がる。

「弟、くん」

音姉も片膝をついて苦しそうにしている。

何が、起きた。

「手荒なことはしたくはなかったが、仕方あるまい。魔界の空気は人間には毒と聞いたことはないか？」

「魔力、粒子が、濃いから」

「そうだ。余は限定的にその空間を作り上げただけだ」

簡単に言うがやることは難しい。実際に同じような魔力粒子の濃さにするならその魔力粒子を空間に固定しないといけない。

魔界の空気は遥かに魔力粒子が濃いため固定は大変だ。

エレノアがオレの体を仰向けにする。

「本当は、こんなことはしたくなかった。周が自ら来て欲しかった。でも、ごめんね」

エレノアの話し方はオレの知るエレノアに戻っていた。

オレは小さく息を吐く。

「そうか」

オレはそう答えてレヴァンティンを握りしめた。

エレノアがレヴァンティンを握りしめる音に気づいて一気に下がる。
オレは笑みを浮かべながら立ち上がった。

「バカな。魔界の空気に立っていられるというのか？」

エレノアが驚いたように口調を戻して言う。オレはレヴァンティンを鞘に収めた。

「慣れればこの魔力粒子の量はありがたいな。魔術が使いやすい」

「慣れただと。そうか、腐っても総長の孫が」

「腐ってもは余計だ」

正直に言って、ここにいたのがオレ以外だったなら確実にまだ動けない。魔力の濃さは普通の四倍ほど。この空気の中で動こうと思えば特殊な訓練が必要だ。あの日、鬼が作り出したフィールドでは二倍弱だったことを考えると明らかに体への負担が大きい。

だが、オレは違う。オレなら簡単に順応出来る。

「エレノア、オレはお前が何を知ったか知らない。でも、オレはこれだけは言わせてもらう」

レヴァンティンをしっかり握りしめたまま腰を落とす。空気中に漂う魔力粒子を魔力に変えつつ鞘に最大限まで入れていく。

「誰かを犠牲にして世界を救えたとしても、それは世界を救えたことにはならない。世界を救うということは、自分も仲間も知り合い

も誰もかも救うことだ。それが出来ないと思うなら、世界を救う資格なんてない」

「世界を救う資格がない？　力さえあれば世界は救える。それがわからないのか！」

「ああ、結局は全て力だよ。力は否定しない。力が無ければ世界は救えない。でもな、誰かを犠牲にすることが間違っているんだ！」

「もういい」

エレノアがオレに手のひらを向ける。

オレは横に跳ぼうとして後方に誰かいることに気づいた。

アリエとベリエの二人だ。このまま避けたら二人に直撃する。

「消えてなくなれ！」

エレノアの声はもう叫びだった。手のひらに魔力が収束する。対するオレは後ろに下がってアリエ達を守るようにレヴァンティンを握りしめた。

「いくぞ！」

オレが一歩を踏み出すと同時にエレノアが魔力の塊を放った。見ただけでわかる。当たれば即死。掠っても即死。まさに一撃必中の攻撃。

だから、オレはレヴァンティンを振り切った。

白百合姿崩し『鬼斬り』。

凄まじい魔力を収束させたレヴァンティンは魔力の塊に当たる瞬間に魔力を全て打ち消した。

レヴァンティンの使える相殺とよく似た原理だ。今回はレヴァンティンにまとった魔力でやっただけで成功率はかなり低い。

「無事か？」

オレは振り返りながら尋ねた。アリエは頷いている。

「どうして、助けたの？」

「誰かが死ぬところなんて見たくはないからな。まあ、無茶したけど」

今の余波を受けてレヴァンティンを握っていた腕の筋肉を微かに痛めていた。それだけで助かったのは幸運だ。レヴァンティンの刃はパーツ交換が必要だけど。

オレはレヴァンティンを左手に持ち帰る。

エレノアは少しだけ呆然とした後首を横に振った。

「興味が削がれた。クライン、後は任せる。アリエ、ベリエを連れて来い」

「あっ、はい」

アリエがベリエを軽々と持ち上げ、オレに会釈してからエレノアに駆け寄る。

オレはそれを見届けてからクラインの方を向き直った。

「エレノア様が行くまでに貴様を倒してやる」

「音姉は手を出さないでくれ」

「ごめんなさい。出したくても出せない状況かな」

音姉は少し青ざめた顔で片膝をついている。魔力は大分薄まったとは言えまだ慣れるほどの時間と量ではない。

「確か、貴様には絶対防御があるらしいな」

「ああ」

魔術には全く作用しない絶対防御なら持っている。

「使われたら邪魔だ。打ち消してやる」

そして、クラインが口を開いた瞬間、かん高い音が鳴り響いた。思わず耳を押さえようと両手を動かし、右耳だけを塞ぐ。そう、右耳だけを。

この事実に気づいた瞬間、クラインが何をしたかわかった。

オレの左手からはレヴァンティンが落ちている。もう一つ言うなら

左手が全く動かない。

クラインが口を閉じる。頭はがんがんするが動けないというほどじゃない。でも、両手が使えない。

「さあ、処刑の時間だ」

クラインが近づいてくる。クラインの手には装飾が多い片手剣。オレは右手でレヴァンティンを握りしめるが大した力が出ない。

このままじゃ、やられる。

「さあ、死ね」

そして、クラインが剣を振り上げた瞬間、クラインの体が横に飛んだ。自ら飛んだんじゃない。わき腹に何かを受けたのかくの字になりながら横に飛ぶ。

「お兄ちゃん！」

何故か屋上に由姫の姿があった。由姫はオレに駆け寄る。音姉の方には亜紗が向かっていた。

「どうしてここに」

「かん高い音が聞こえたので慌てて。教えてくれれば一緒に戦ったのに」

「向こうの要求だったからな」

屋上を見渡すと、いつの間にかエレノア達の姿は見当たらない。残っているのはクラインだけか。

由姫はクラインに向かって身構えた。

「お兄ちゃんは後ろに下がって。私はあいつを」

「よくも。よくも！　よくも！！」

クラインが立ち上がりながら地面を蹴る。目標は由姫だ。凄まじい速度で由姫に迫る。ついでに由姫の背後からもクラインが現れる。

対する由姫の動きは速かった。

迫り来るクラインに自ら距離を詰め、肘を鳩尾に叩き込む。現れたクラインの影は霧散し、クラインの体はくの字に折れ曲がった。

由姫はクラインの横に動き、クラインのわき腹に肘を上から叩き込む。

オレが鬼に放った時は鬼が地面を跳ねただけだったが、クラインは側頭部から地面に突き刺さっていた。

由姫が小さく息を吐く。その時、屋上に新たな敵というか音姉に倒されたはずの一人が着地した。手には鎌が握られている。

「今の内に拘束を」

振り返った由姫をオレは押し倒した。オレ達がいたところに鎌が通り過ぎる。

「ボスを回収するから」

鎌を持つ少年はそのまま屋上から跳んで逃げる。今のオレ達に追う能力はない。

「由姫、無事、か」

オレは思わず固まってしまった。

右手が由姫の胸の位置に置かれている。ちなみに由姫の顔は真っ赤で拳は握りしめられている。

「バカぁっ！」

由姫の拳を受けてオレの体は見事な放物線を描いていた。

第六十九話　昔話

「いっつ」

オレは痛みをこらえながら頬に治療薬を塗ってもらう。無味無臭かつ口に入っても大丈夫なものだ。

治療薬を塗ってくれている由姫は少しだけ頬を膨らませた。

「兄さんが悪いんです」

「助けたからチャラにしてくれよ。触ったことは謝るからさ」

オレが今いてるのは保健室だ。音姫はベッドで横になって眠っている。他にいるのは由姫と亜紗だけ。

さすがに、あそこまで魔力が濃い状況でオレのように慣れていなければ体への負担はかなり大きい。ましてや、音姉はまだ１４才だ。体はまだ成熟していない。

オレは小さく息を吐いた。

「というか、結界割れてからよくあの短時間で来れたよな」

というか、お前らには接触すること一言も話していなかったんだが。

すると、由姫はキョトンとした。

「結界張っていたんですか？」

「はぁ？」

オレは思わずそんなことを言っていた。結界張っていることは第７６移動隊なら気づいて欲しかった。

「兄さんが屋上にいることは気づいていたので何かあったら動けるように踊場待機していただけですよ」

結界に気づくどころか結界張っていてもオレに気づいているという事実に人間離れした能力を感じる。というか、踊場待機って何？

亜紗を見ると、亜紗はすぐにスケッチブックを開いた。

『結界が展開されたから様子を見に屋上に向かう途中で由姫と会った』

踊場待機の由姫と出会ったのか。こっちは普通だな。

『屋上で何があった？』

「オレと音姉の二人で来るように言われたんだよ。まさか、貴族派の代表がエレノアだとはな」

「誰ですか？」

由姫が不思議そうに首を傾げる。

「知り合い、と言ってもうろ覚えだけどな。七年ほど前に時雨が主催したパーティにオレと茜も参加したことがあるんだ。その席でエ

レノアと出会った」

『魔界の住人がいるってことは、魔界や天界の人達との友好パーティ？』

「正解」

あの日、初めて見るような人達にオレと茜の二人は隅っこの方で固まっていた。そんな中でエレノアは話しかけてきたのだ。あの時はもう少し少女という感じだった。

「エレノアはオレ達を連れてみんなに紹介してくれたんだ。親が親だからみんな集まって来るけど、エレノアとオレ達と同じくらいの少女二人の三人がオレ達を守りながら会話したんだ。それっきりの出会いだけど、音姉みたいに優しかったからな」

「兄さんの昔か。私と出会うよりも前の兄さんってどんな感じ？」

『私も興味がある』

「他人に聞いた方がいいから」

むしろ、あの時の自分がどんなのだったかよく覚えていない。まあ、仕方ないけど。一つだけ言えるのは、

「茜がオレにべったりだったくらいかな」

それだけは言える。茜はずっと、いや、あの『赤のクリスマス』までずっとオレにべったりだった。

オレがそれを言うと由姫と亜紗は同時に俯いた。

「兄さんは茜と連絡取ってる？」

「ああ。茜が寝る前には必ず連絡している。あいつ、本当はオレのことが妬ましいはずなのにな」

『私はそうは思わない』

亜紗はスケッチブックを突き出しながらそう言う。亜紗も由姫も茜と仲がいいからだろうな。でも、オレはそう思わない。

オレは小さく息を吐いた。

「茜は将来を有望視されていた。オレよりも才能があった。あいつは天才だった。でも、オレのせいで、あいつは病院にいないとダメになったんだ。オレは、あの事件を引き起こしたのにのうのうと生きている。恨まれて当然なのに」

「兄さん。例えばですよ。もし、私が兄さんのミスで大怪我をしたとします」

そんなことは考えたくない。大事な人が怪我をすることなんて考えたくない。

「でも、私は兄さんを恨みません。だって、兄さんは一生懸命頑張ってくれますから。それに、私は兄さんのことが好きですから」

『茜も同じだと思う。周さんのことが好きだから。たった一人の家族として好きだから恨まないと思う。茜は周さんが自分のために何

をしているか知っている。だから、茜は周さんに感謝している。私だって、周さんに感謝している』

「そっか」

オレは天井を見上げた。

由姫と亜紗の言葉に救われた気がする。『赤のクリスマス』のことは都とのことで吹っ切れた気でいた。でも、まだまだ吹っ切れていなかった。

『赤のクリスマス』でオレが失ったものは大きい。茜だって同じだ。でも、オレはこいつらがいるからやっていける。

オレは由姫と亜紗を抱き寄せて抱きしめた。

「ありがとう。お前らがそう言ってくれて嬉しいよ。二人がいてくれて良かった」

「兄さん」

『周さん』

オレはにっこり笑いながら二人を離した。

「音姉が起きるまで話でもしようぜ」

その頃、保健室の入口には都と千春の姿があった。

千春は呆れたように溜息をつく。

「都も入ればいいのに」

「今は入れませんよ。今はお二人の時間ですから」

都はそう言って笑う。千春はその笑みに首を傾げた。

「不安じゃないのかな？　二人に周君が盗られるかもしれないよ」

「最後に選ぶのは周様です。私は周様のことが大好きですから」

「すごい忠誠心だね。ボクは帰るとするよ。じゃね」

千春は歩き出す。そして、歩きながら首を傾げていた。

「どうして不安じゃなくて安心しているのかな？」

第七十話　三英雄（前書き）

慧海と時雨について書いたのでタイトルはこういう風にしました。
ギルバートが何故英雄なのかは、語れる日がいつ来るかわかりません。

第七十話　三英雄

慧海は前にあったドアをノックすることなく開けた。プレートには総長室と書かれている。

「時雨、貴族派のデータがまとまった」

部屋の中では時雨の他にギルバートの姿がある。二人は机を挟んで向かい合っていた。

慧海は机の上に資料を置く。

「ちょうどだね。僕達もちょうどデータが完成したところだよ」

「そうなのか？　これは時雨のだな」

慧海が椅子に座り時雨の作った資料を読む。対する時雨は慧海が作った資料を読んでいく。ギルバートはただ座っているだけだ。

そして、不意に時雨が顔を上げる。

「『炎帝』が貴族派代表か。いろいろとわかってきたな」

「ああ。昨日送られてきた周からの情報が役に立った。魔界五将軍の二人を擁立していれば、強いはずだ」

「だな。規模は末端兵合わせて約五万。実働部隊は一万か」

時雨が資料をパラパラと捲り、机の上に放り投げた。そのまま背中

を深く椅子に預ける。

一万という軍隊に対抗するにはそれに近い数を必要とする。だが、第７６移動隊は天才の集団だから多少数が少なくてもどうにかなる。ただ、メンバーが少なすぎる。

「勝率は五分だな。周の二重変化（デュアルシフト）がどこまで使えるか。慧海はデバイスシステムの開発者としてどう思う？」

「あいつらしい技術だよ。凡庸性や応用性も高い。器用貧乏でも上手く使えば強くなれる。一般にも使えるな。ただ」

慧海は軽く溜息をついた。

「新型デバイスを三つ使用っていくら金がかかることやら。試算だと一機につき二百万。メンテナンスは今までの三倍」

ちなみに、『ＧＦ』の新型デバイスは一機十万ほどだ。その値段から見て有効的な成果を上げることは期待出来ない。

時雨は小さく溜息をついた。

「まあ、最大の問題は貴族派じゃなくて狭間の鬼だけど。オレはあいつと同じ存在だと思っている」

「時雨もか？　オレもだ。多分、『穿つ神』が存在した理由の一つだろうな。貴族派がいなければ狭間市に突撃するけど」

「僕もかな。でも、問題は貴族派や狭間の鬼じゃないかもしれない」

ギルバートはポケットから取り出した資料のページを開けた。それを二人に見せる。その資料にあるのは音姫と周が持つレヴァンティン。
時雨はギルバートを見た。
「これは？」
「僕の方で個別に調べたものだけど、音姫と周が持つ武器。音姫は多分、二重人格」
「二重人格？　クロハみたいなものか？」
慧海の言葉にギルバートは首を横に振った。時雨は話がわからないという風に眉をひそめている。
「クロハは二重人格じゃなくて一人の中に二人が入っているだけ。音姫の場合は人格が二つある。これらの違いは言動と戦果」
その言葉に時雨はハッとして立ち上がり、本棚に近づいた。そして、本棚から一冊の本を取り出す。
それを見た慧海は納得したように頷いた。
「そういうことね」
「慧海も気づいたか？　音姫の戦果に二種類あることを。一つは敵を全員気絶させて終わらせるもの。もう一つが恐怖で抵抗させないこと」
「後者の時は同じ部隊にいた奴から別人だったって言われていたし

な。オレらは別に気にしなかったけど。凶暴化か」

音姫の剣技はこの中にいる全員がわかっている。わかっているからこそ、凶暴化した時の味方の被害がどうなるかは想像がつく。

時雨は捲っていた資料をパタンと閉じた。

「で、周の場合は？」

「この剣だけど、見た目は普通の剣だよね」

確かにレヴァンティンは見た目は普通の剣だ。周がそういう風に組み立てたからでもあるが。

だが、普通だからこそおかしな部分がある。

「周が持っているデバイスは旧型と新型の二つ。なのに、デバイスが三つ必要な二重変化（デュアルシフト）が可能なのか」

「言われてみれば確かにおかしいよな。二重変化（デュアルシフト）にデバイスが複数必要なのは処理効率を上げるため。その理論はデバイスシステムの開発したオレが証明出来る。でも、数の少なさは無理だ」

「周がオーバーテクノロジーを使っている可能性か？　慧海もそれなら可能だろ」

オーバーテクノロジーの恐ろしさを知っているからこその発言だ。

ギルバートは頷いた。

「そのオーバーテクノロジーがどんなものかわからないけど、ピンチになれば必ず使うはずだよ。そうなったら」

「何が起きるかわからないか。くそっ、手を出せないのが腹立たしい」

「時雨、落ち着け。今は周達を信じるしかない。周達が貴族派の面々を倒すことを。でも、最悪の事態になれば」

「オレ達が出る、か？　ギル、頼めるか？　この中で最速のお前なら何とか出来るはずだ」

ギルバートは軽く肩をすくめて立ち上がる。

「やってみるとするよ。貴族派が現在どれだけの規模を呼び寄せているかわからないけど、やってみる。別に倒してしまってもいいよね」

「好きにしろ。総長権限でいくらか守ってやる」

「頼むね。僕は、手加減出来ないから」

そう言ってギルバートは笑みを浮かべた。

第七十話　三英雄（後書き）

この物語を投稿してから今日で１ヶ月経ちました。これから戦いが激しくなります。途中からＲ－１５にする予定です。大体、九十話くらいでしょうか。

これからの話のちょっとネタバレ。

周が持つ限定的絶対防御が限定的絶対防御（笑）になります。期待していてください。

第七十一話　現在と未来

いろいろとわかってきた。壁に背中を預けながらオレはそう思っていた。空には月が上がり世界をほのかに照らしている。

最初は狭間市の地域『ＧＦ』メンバーが全員失踪。微かな血痕を残して全員が消えた。

次には『ＥＳ』メンバー数名が金色の鬼に喰われる事件が発生。アル・アジフが鬼を捕まえようとしたが捕まえることは出来なかった。

そして、オレ達が狭間市にやって来た。狭間市にやって来た初日に琴美や都、そして、千春と出会い、鬼と戦った。

狭間市に伝わる伝承の中で存在する狭間の鬼。それは祟り神であり破壊神であること。最初は時雨達が約５０年前に封印した破壊神だと思ったが、それとはなんら関係がなかった。そもそも場所が違う。狭間市に来てから鬼との二度目の戦いで貴族派が介入してきた。結果は敗北。あまりの不意打ちと状況の差により負けた。

そして、学校が始まり貴族派が接触してきた。貴族派の目的は鬼の力で世界を救うこと。世界は滅びる運命にあるらしい。

だけど、疑問点がいくつかある。

どうして都や琴美に貴族派は手を出さないのか？

琴美は二週間後の春祭りで封印を強化する舞を狭間の巫女として踊ることになっている。だったら、貴族派としては琴美を狙えばいい。

都だってそうだ。都は現時点では琴美よりもはるかに上手く舞を踊る。鬼も封印を強化されたくないはずなのに。

他の疑問点は狭間の鬼という存在。

確かに世界には神と呼ばれるものがいる。１００年ほど前に慧海が戦った『穿つ神』や、５０年ほど前に時雨が戦った破壊神など、歴史の紐を解いても数は少なくはないが存在する。

一番の疑問点は、何故未来を知っているかというところだ。

確かに正のように結果がわかっているように言うが、未来を知る力があるならエレノアはオレの仲間の仕方を探すはずだ。なのに、エレノアは別のやり方を取った。

未来の結果を知っていることと未来の過程を知ることは別物なのだろうか。

正も真相は知っていても詳細は知らないと言っていた。

オレは小さく溜息をつく。

「来たか」

オレはチラッと横を見た。そこにはオレと同じ体勢で止まっている正の姿がある。正が来ると思っていた。

「おや、僕が来ることをわかっていたのかい？　まるで未来視を持っているんだね」

「勘だよ勘。まあ、お前みたいに未来を知っているわけじゃない」

「僕だって未来はわからないよ。こういう話を知らないかい？　パラレルワールドという言葉を」

正が言いたいのは例えばオレがこのまま正と会話を切ったとする。その後の世界と今このまま正と話世界は微かに違ってくる。

同じ世界、同じ人物が違う行動をする可能性がある。それがパラレルワールドという話だ。

「あらゆる介入によって未来は変わる。確かに、僕はとある未来を知っている。でも、それが確定するかわからない」

「それが真相は知っているのに詳細がわからないということか」

「そうだよ。どうしてこの場所に『ＧＦ』、『ＥＳ』、貴族派が集まっている理由を知っている。多分、結果もね」

未来を知っているということはエレノア達と同じということか。なら、正の目的もよく似たものだろう。

オレは小さく息を吐いた。

「お前が求める未来は？」

「新しい未来を求めて」

それはまるで一度未来を過ごしたとでも言うかのような言葉。オレは微かに眉をひそめた。

だけど、言葉にはしない。多分、何も話してくれないし、話してくれたとしても嫌な予感がする。

「まあ、疑問点はいくつかあるけど、聞きたいことは一つあるな。未来を知るのは何人ぐらいいる？」

「そういう答えなら僕は答えられるよ。大体、１０００人から５００人。でも、それを隠している人が大半かな。気付かない人も多い。君が知りたいことはそれだけかな？　本当は」

「いらん」

オレは小さくため息をついて、レヴァンティンを正に向ける。正は小さく笑みを浮かべてオレを見ている。対するオレは真剣な表情で正を睨みつける。

「お前が何をしたいかわからない。だけどな、お前が自ら自分の意思で助けようとしないなら、オレはお前の力は借りたくない。お前がどんな未来を求めているかわからない。わからなくても、お前の本当の目的はオレを助けることじゃないはずだ。自分の望む未来に進ませるための駒。違うか？」

「君はやはり聡明だね。まだ、１３歳の子供には見えない。まるで、大人だ」

「オレはそうあろうとした」

レヴァンティンを鞘に収める。だが、今度は正が取り出した剣をオレに向けていた。その剣はレヴァンティンに似ている。

「そうあろうとして、潰される運命に会うと思わないのかい？」

「あるだろうな。でも、オレには支えてくれる人たちがいる。一人で戦っているわけじゃない。みんながいる。例え、オレが道に迷っても、行き先を失っても、道を間違っても支えてくれる人がいる。それだけだ」

「そうか。そうだね。君はそういう人だ。面白いよ。僕は決めたよ」

正はそう言ってオレに向かって剣を、いyた、剣からデバイスに戻したものを投げつけてきた。俺はそれを受け取る。

「ボク自ら作り出したデバイスだよ。君が持つレヴァンティンに似ているようにした」

「どうしてレヴァンティンを知っている？」

「オーバーテクノロジーには興味があってね。それは君が持っていて欲しい」

オレはデバイスを見つめ、そして、首を横に振った。

「いらん」

「君は、完成させたいのではないのかな？　二重強化を」

オレは正に向かってデバイスを投げつけた。正は薄く笑みを浮かべてデバイスを受け取る。

オレは正に背中を向けた。

「自分でやるさ。正、お前はどこまで介入するつもりだ？」

「今回は介入しないよ。とても面白いものが見れそうだからね。でも、もし、全面戦争になったのなら、僕は住民の避難所に向かおうとするよ」

「そうしてくれると助かる」

そのままオレは歩きだした。そんなオレに正は声をかける。

「君が進む道に幸あることを願うよ」

そして、正の気配が消える。移動したわけじゃない。移動したなら魔力粒子が動くため、むしろ動くがわかる。まるで、この世界から消えたように。

「レヴァンティン、どう思う？」

『今なんとも。ただ、なんとなく彼女の全容はわかってきました』

「ああ」

正は未来を知る一人。多分、里宮の誰かと同じなのだろう。

正が行動する理由は自分が望む新たな未来を求めて。それがどんな未来かわからないが、考えるだけで胸騒ぎがする。させてはいけないというように。

結果は答えることが出来るのだろうな。真相を知っていればオレ達が行動しやすくなる。戦い方を組み立てることが出来る。それを切り札に言ってきた。

『私から言えるのは、マスターが関わってはいけない人です』

「どういうことだ?」

『マスターと同じ匂いしかしません』

オレはその言葉に首をかしげながら次の目的地に向かって歩き出した。

第七十二話　過去と現在（前書き）

今までバラまいていた伏線を回収していきます。
『ＥＳ』穏健派代表が何故狭間市にいるのか。落ち着いて暮らしたいと言った都がどうしてアル・アジフ達と共同生活をしたのか。
少しだけおかしな部分があったところなので、気づいてくださったなら嬉しいです。
この話から前半の終わりに向けて物語を加速させます。

第七十二話　過去と現在

オレは前から疑問に思っていた。

何故、『ＥＳ』穏健派代表のアル・アジフが一部隊を連れて拠点のある中東ではなく、こんな『ＧＦ』の領地にいるのか。

何故、狭間市の市長は『ＧＦ』を拒み、『ＥＳ』を招き入れたのか。

オレはその理由を聞くために椅子に座った。机と向かい合っているのは狭間市市長都築春夫。そして、アル・アジフ。

「夜中に呼び出されるとは。『ＧＦ』は横暴な組織だな」

「そんな話をするために来たわけじゃない。今回はあなた達に聞きたいことがあって来た」

都築春夫が鼻で笑う。完全にオレをバカにしているな。

「敬語すら使えないのか。最近の若者は」

「オレが聞きたいのは二人に一つずつ。一つは狭間の鬼について。市長、あんたが頑なに『ＧＦ』に隠したいことを話して欲しい。一つはアル・アジフ、お前がここに来た理由だ」

「それは問題視することかの？」

アル・アジフが笑みを浮かべながら尋ね返してくる。それに対してオレは頷いた。

「アル・アジフは別で狭間の鬼に関して何かを知っているんだろ」

「理由は？」

「魔界が、魔界五将軍の一人が狭間の鬼の力を使おうとしている。そんなにすごい存在なら、何かある。違うか？」

「ふん、子供のくせに知恵が回る。だが、話すと思って」

「良かろう」

アル・アジフの言葉に都築春夫は目を見開いていた。アル・アジフはオレにだけわかるようにウインクする。

どうやらアル・アジフも都築春夫に話させたかったようだ。もしかしたら、アル・アジフ自体が狭間の鬼について詳しくないだけかもしれない。

「まずは我からじゃな。我が知る内容は多くはない。まずは狭間の鬼については知らぬことが多い。他地域の伝承にすら載らぬからの。ただ、狭間に封印された鬼の話は有名じゃ。そなたも知っておろう。約５０年前、海道時雨や善知鳥慧海が封印した神のことを」

「破壊神か。人柱を使ってようやく封印出来た存在。確かに、人柱を使わなければいけないほど強大な神は狭間の空間に封印する方が確実だな」

狭間というものは外部からの干渉が受けにくい。そこに存在するものを消し去るのは容易ではない。特に、自然界でのものは。時雨達

は世界と何かの狭間に破壊神を封印したと考えれば納得は行く。
狭間に道を開けるために人柱を使ったとも考えられる。それほどまでに狭間は強力だから。

「その破壊神は別名こう呼ばれていたのじゃ。『Ｄｅｓｔｒｏｙｅｒ』とな」

「聞いたことがないな。どこの話だ？」

「中東じゃな。特にインド周辺。ヒンドゥーの神々の力によって封印出来たとされる存在じゃ。文献を漁る限り、天下無双と言うべき力を持つ」

ヒンドゥー教は確かにたくさんの神々がいる。さすがに、日本の古来からある八百万神には及ばないけど。というか、日本はいたるところに神がいるとされるからな。確か、時雨が調べたところ、８００万どころか２０００万ほどいるらしいし。ごっちゃ混ぜを含むけど。

というか、『Ｄｅｓｔｒｏｙｅｒ』って英語なのに中東で広まるのね。摩訶不思議だよ。

「文献が誇張されていない表現だとするなら、この世界が滅んでもお釣りがくる」

「ちょっと待て。慧海達がいてもか？」

「そうじゃ。『Ｄｅｓｔｒｏｙｅｒ』は世界を四度滅ぼした存在じゃ。滅びの炎に焼かれても、創世の氷に閉じ込められても死なぬ存

在。過去に封印出来たのは５０年前を含め二回。倒せたのは一回だけじゃ」

「アル・アジフは知っているのか？　破壊神のことを」

「・・・文献じゃ」

アル・アジフがオレから視線を外す。その目には涙がかすかに見えていた。だから、オレは追求することを止める。

オレ達の会話を聞いていた都築春夫がまた鼻で笑った。

「くだらん。文献に左右されて。『ＥＳ』も落ちたものだな。私は帰らせてもらう」

「話はまだ終わっていない」

「私から話すことはない。くそっ。『ＧＦ』が来るとは思わなかった」

そして、都築春夫が出口のドアを開けた時、ドアの前には都の姿があった。都は都築春夫を睨みつけている。

「何故、都がここに」

「私が自分の家にいたらおかしいですか？　お祖父様。お祖父様は何も話さないつもりですか？」

「黙れ！　私に口出しするな！　化け物め！」

その言葉と共に都築春夫が都を押しのけて部屋から出て行く。都築春夫が都を見る目は都に恐怖しているようだった。

オレは立ち上がって都に近づく。

「都、平気か？」

「平気です。いつものことですから。本当は出るつもりなんてなかったのですけどね、お祖父様は必死に隠そうとしましたから。周様に私がここに暮らしている理由が知られようとも、私は理由を話すことにします」

「都は、やはり隔離されていたのか？」

オレは最近都の家によく行っているが（護衛のためだからな。それ以外には何もない）家族の姿を見たことがない。

都自身が駄々をこねたと言ったが、そうしなければならない理由があったということだろう。だって、大切な娘をこんな場所に一人にするわけがないから。様子見くらいは普通にするはずだ。同じ市内にいるのだから。

「私はお祖父様から嫌われています。お父様やお母様は私を愛してくれますが、時々見る目が変わります。だから、落ち着いて暮らしたいのです」

「それは、都が今年の巫女になるべきだと言われた理由が関係しているのか？」

琴美が巫女になったために最初はいろいろと揉めていた。ちょうど、

オレ達がここに来た時だったので、よく覚えている。

「はい。アル・アジフさんにも話していないのでちょうどいいかと思いまして。私は、お祖父様の言ったように化け物です」

都は今にも泣きそうな顔で言葉を続ける。

「私は人間ではありません。人間と鬼の間に生まれた忌み子です」

第七十三話　狭間の巫女（前書き）

狭間の鬼と狭間の巫女の関係です。

第七十三話　狭間の巫女

「私は人間ではありません。人間と鬼の間に生まれた忌み子です」

その言葉にオレは何も言えないでいた。どうやって慰めようかということではない。都が涙を目からこぼしながら言うからだ。

オレは巫女を抱きしめて背中を軽く叩いてやる。

「私は、人間じゃないんです。私は、私は」

「もういい」

「でも」

「今は落ち着け」

都は無言で頷いてくれる。そして、オレの肩に顔をうずめた。

せめて、オレの背がもう少し高かったらな。

「そなた、場違いなことを考えているじゃろ」

「全く。あの時と立場は逆だな」

あの時、オレは都に慰められた。張り詰めていた糸が切れたように感情を隠すことが出来ず、オレは都の前で子供らしく泣いていた。

でも、あの時は都に安心していたんだ。だから、今度はオレが都を

安心させたい。

「都は都だ。例え、お前の言うようなやつだとしても、オレと比べたら可愛いものだよ。オレは、たくさんの人が死ぬ原因を作ったから」

「周様は私を怖がらないのですか？　私は人ではないのに」

「まあな。オレの親友で刹那ってやつがいるんだ。まあ、魔界の魔王派の重鎮なんだけどな、そんな親友がいれば怖くなんてないさ」

「ありがとう、ございます」

都がゆっくりオレから離れた。都の目はまだ赤いけど、顔は元に戻っている。

「辛いかもしれないが、教えてくれないか？　狭間の鬼について。いや、狭間の巫女について」

「はい」

オレは都の手を引いて近くにあったソファーに座らせた。オレはその横に座る。ずっと、都の手を握ったまま。

「アル・アジフさんもいいですか？」

「我はいつでもいけるぞ」

「ありがとうございます。狭間の巫女というのは過去に遡れば生贄だったようです」

都はゆっくり話し出す。時折、オレの手をしっかり握りしめながら。

「ただ、それは口伝で伝わるような気が遠くなるほど昔からのようです。おそらく、人柱が有効だったからでしょう。その頃から狭間の巫女は存在しています」

「歴史は古いのか。確かに、人柱は有効だ。アル・アジフの言ってたように、狭間に簡単に干渉出来るほど」

オレは都の手を握り返しながら言う。アル・アジフはそんなオレ達を見ながら溜息をついた。

「我は邪魔者じゃな」

「そ、そそそ、そ、そういうわけではありませんけど、ですけど、このままずっと周様といたいというのは本音でして」

感情が完全にだだ漏れだ。

オレは小さく溜息をつきながらアル・アジフを見る。

「我慢してくれ。オレは『GF』代表として、アル・アジフは『ES』代表としてここにいる。都、話が終われば一緒にいてやるから続きを頼めるか？」

「はい」

都が頬を真っ赤に染めて言う。

「狭間の巫女は生贄であり、狭間の鬼が狭間の街にとって守り神であることを契約するための存在でした。ある意味封印ですね。しかし、いつからか、狭間の巫女は生贄ではなく儀式の担い手となり、今では春祭りの踊り子となっています」

「時が経つにつれて本来の役職からかけ離れていくのはよくあることじゃ。しかし、何故、そこまで変わったのかの？」

「そこまでははっきりわかりません。ですが、推移したのは確かのようです。そのためか、封印されてから二度ほど、封印が解けて復活したそうです。その時は世界から消えて、いつの間にか再封印されていたと語られています」

つまり、生贄ではなくなってから復活しだしたということか。

都の手が微かに震えているのに気づいてオレは小さく息を吐いた。

「アル・アジフが言うことと今まで都が言ったことを考えると、『Ｄｅｓｔｒｏｙｅｒ』は狭間の鬼だな。『Ｄｅｓｔｒｏｙｅｒ』って都は聞いていたか？」

ちょっと強引に話を変えると都はホッとしたように頷いてくれた。

「はい。狭間の鬼だと私は思います」

「狭間の鬼は世界を滅ぼす力を持つ存在。貴族派はその力で世界の滅びを救おうとする勢力。オレ達との違いは、犠牲者を出すことは考えないところ」

『ＧＦ』の考えは犠牲者を出さないことを考えて戦う。オレが、誰

かを犠牲にして世界を救えたとしても、世界を救ったことにはならない。ということと同じだ。だから、貴族派のやり方は容認出来ない。

「そうじゃな。我も同じ。だから、我はここに来た。狭間の鬼の力を使えば世界は動く。それをさせないために」

「ああ。今の状況なら、春祭りの儀式を成功させるくらいだな。それまで都と琴美は守らないと」

オレはそう言ってしっかり都の手を握る。

「本当なら、私が狭間の巫女として責務を全うしなければいけません。ですが、琴美の役目は奪いたくありません。琴美は昔から私を見ていました。私が狭間の巫女として責務を果たすために必死で練習しているのを。ですから、琴美も巫女になりたいと思っていたようです。私は、その夢を叶えてあげたい」

オレの手を握りながら都は言う。

このままいけば春祭りの開催自体が危ぶまれる可能性がある。そうなれば、都の願いは叶えられないかもしれない。

目下の問題が貴族派か。

「貴族派がどう来るかだな。アル・アジフ、『ＥＳ』は貴族派が大きく動いた場合は民間人の保護を頼めるか？　オレ達は貴族派と戦うから」

「そうじゃな。じゃが、周は意図的に都に尋ねないのじゃな」

オレの手を握る都の体が強張るのがわかった。オレは優しく都の手を握る。

「都はそろそろ落ち着いたようじゃ。我が質問させてもらう。狭間の巫女の現代の役目はなんじゃ？」

都がオレを見る。オレは頷いた。

「そばにいるよ」

「ありがとう、ございます。現代の役目は、鬼の血を引く子供を産むことです。私の体が成熟した時、鬼に身を捧げ、鬼の子供を授かります。これをするのは百年おきです」

「鬼の血じゃと？　それを継承するということは、間接的に狭間の力を手に入れようとすること。まさか、都築家の目的は」

「アル・アジフは何か知っているのか？」

まるで、狭間の巫女の理由をアル・アジフは知ったかのようだった。オレの疑問にアル・アジフは首を横に振る。

「我とて知らぬものがある。じゃが、都築家の目的は狭間の力を間接的に得ることだと我は思う。まだ、確信が持てぬのじゃ」

「わかった。無理には聞かない。都、狭間の巫女が鬼の子を身ごもる役目なら、春祭りの巫女が狭間の巫女と呼ばれる理由なんなんだ？　それに、百年おきのはずなのに、都が狭間の巫女と呼ばれる理由は？」

「最初のものは、伝承と混じったからだと思います。私が、狭間の巫女と呼ばれるのは信託があったからです」

それを言う都の言葉はどこか暗い。

「鬼の子を産む役目は狭間の鬼から知らされます。私が選ばれた時、お祖父様達、都築の皆様は私に恐怖を覚えました。今までとは違うことなので。そして、私は違うことだからこそ畏怖したのでしょう。私は、いつか狭間の鬼と交わり、子を成さねばなりません。今まではそれが当たり前だと思っていました。そうしなければ誰かが死ぬかもしれないと思いました。でも、今は」

都の涙がオレの甲で弾けた。

「今は嫌です。私は、周様が好きになってしまった。周様以外にはされたくないと思ってしまった。だから、怖いのです。私が、私が周様のことを好きになったばかりに、狭間の鬼が何か行動を起こすかもしれないことが」

「都。お主」

「私は、どうしたらいいのですか？　私は、どうしたら」

「ったく」

オレは都の手を離し、そのまま都を胸に抱きしめた。

「鬼は、オレが倒す」

「ですが、狭間の鬼は強大無比です。周様がいくら天才でも」

「不可能じゃない。あのな、オレは都と出会えて良かった。出会わなければ、いつかは潰れていたと思う。都がいたから、いろいろと吹っ切れるきっかけを手に入れた。だから、今度はオレが都を助ける番だ。絶対に守る。第７６移動隊隊長として。そして、オレとして。アル・アジフ、そういうことだから協力してくれよ」

アル・アジフは呆れたように溜息をついた。だが、その顔には笑みが浮かんでいる。

いつもは見た目とは違う性格だが、こういう時は年相応な状態になる。オレもこんな感じなのかな。

「無茶に近いが、それくらいがちょうどよい。我が配下は全てそなたの指揮下に入ろう。我はそなたといれば退屈はせぬ」

「周様もアル・アジフさんも私のために無謀な戦いを」

「違う」

オレは笑みを浮かべながら言う。

「自分のためだよ。自分がしたいからそうする。それに、狭間の鬼には貴族派が介入したとはいえ、負けたからな。リベンジしなけりゃ気がすまない」

「バカ」

初めて聞いたような気がする。都が誰かに対して敬語を使わずに言葉を言ったのを。それが一言であったとしても、オレには嬉しかっ

た。

「バカ。大バカです。でも、私を守ってください」

「ああ。守るよ」

オレには守りたい者がいる。由姫や亜紗もだ。都も当然入っている。

守りたいものがあるからこそ、強くなれる。

後一週間の内にどれだけ強くなれるか。あの理論を完成させないと。

「絶対に守ってみせる」

第七十三話　狭間の巫女（後書き）

周が天才と言われる理由がかなり出てきました。第７６移動隊の中で一番の異才として書いています。ただし、最強ではありません。

第七十四話　初めての夜（前書き）

周が都と一緒の家で過ごす、初めての夜、という意味です。サブタイトルが思いつかなかった。

作品をもう一つ新たに投稿しました。こちらは更新自体が極稀ですが、レヴァンティンなどオーバーテクノロジーが普通に開発された時代の話を書く予定です。

「新しい未来を求めて」とは違って一万文字を平均として載せていこうと思っているので気が向いたら読んでください。

第七十四話　初めての夜

「なあ」

オレは都に尋ねた。都は上目遣いでオレを見てくる。これって地味に凶悪だよな。

「何でしょうか？」

「いつまでこうしているんだ？」

オレは左腕に抱きついてきている都に向かって尋ねた。左腕の神経を最低限まで切っているからあまり気にはならないけど、ずっとこのままじゃないよな。

「今日は一緒にいてくれると言ってくれたので離しません」

「まあ、言ったからいいんだけど、左腕にずっと体をくっつけているだけでいいのか？」

オレがそう言うと、都は少しだけキョトンとした。そして、呆然としながら、

「周様は何も感じないのですか？」

「だから、何が？」

「天然にもほどがあります。私はこうしていたいのです」

少し拗ねたように都は言う。オレはわけもわからず首を傾げた。
だけど、都はオレの左腕を離さない。
「周様は、左腕に何かあるのですか？」
「どうしてそう思う？」
「私が触っても周様が反応しないこと。後は勘です」
都ならいいか。
オレは左腕に発動させていた『強制結合』を解いた。これで左腕は完全に動かせなくなる。
「オレは左腕に神経が通っていないんだ」
オレの言葉に都が息を呑んだ。
「どういうことですか？」
「『赤のクリスマス』その日にオレは利き腕の左腕に怪我をした。その怪我が神経を傷つけて、未だに再生されていない」
都がオレの左腕を触る。だけど、オレの左腕は何も感じない。
「あの時、オレは必死だった。生き残るために。大怪我をした茜と楓を救いたかったから。その最中に、瓦礫に腕を挟まれた」
よく左腕が切断されずに残ったというものだ。あの時はすでに『強

制結合』を覚えており、瓦礫によって押し潰された部分を強制的に結合させたっけ。痛みで気を失いそうだったけど。

「今は何ともないけど、普通なら意識を失ってもおかしくない状況にいたんだ。助かった時にはすでに左腕は動かせなかった。左腕が動かないことは誰にも言っていない」

「でも、どうして左腕が動かせるのですか？　違和感は触るまで気づきませんでしたけど」

「レアスキルの『強制結合』。強制的に繋げることが出来るんだ。それが、腕であれ神経であれ。まあ、ちゃんとくっつくまで時間がかかるはじなんだけどな」

でも、未だに左腕は動かない。

もしもの時を考えて右腕でも出来るように練習したから、今では右腕も使える。両利きと言ってもいいくらいに。

都がオレの左腕を取る。だけど、オレの左腕は反応しない。

「周様は悲しくないのですか？　自分の左腕が動かないことが」

「悲しくはないな。だって、『強制結合』でいくらでも動かせるから。まあ、打ち消されたら無理だけど」

「私も周様も、傷を負っているのですね。本当に深い部分に」

「今更だろ。でも、大丈夫だ」

オレは『強制結合』を使って左腕に神経を戻し、都の手を握った

「都、学園都市に来ないか？」

「私は最初から行くつもりです。勉強をするために」

「そうじゃなくて、第７６移動隊としてスカウトしたい。表の理由は、鬼の血を引く以上、何が起きるかわからない。それの研究。本当の理由は、お前も近くにいて欲しい」

オレの言葉に都の顔が真っ赤になる。これってある意味告白だよな。

「ま、守りたいだけだぞ。べ、別に告白ってわけじゃないから。ただ、由姫や亜紗と同じように、そばにいて欲しいだけで」

「ふふっ」

都はオレの言葉に微笑んだ。そして、微笑んだままオレに向かって体を寄せる。

「はい。お願いします」

「あう、恥ずかしい」

オレは思わず顔を逸らしてしまった。

自分で言ってなんだがとても恥ずかしい。それに、都は可愛いから恥ずかしいが数倍になってしまう。

対する都は意外そうな顔になっていた。

「周様の弱点ですね」

「なにがだよ」

「可愛いですよ」

「うう、失敗だ」

なんというか、都の前ではいつものオレが崩れてしまう気がする。いつもというより、本当のオレがさらけ出される感覚。でも、悪くはない。

ただ、凄まじく恥ずかしい。穴があったら入りたいのはこういうことか。

「でも、これが本来の周様なのですね」

「多分な」

もし、『赤のクリスマス』が起きなければこうなっていた可能性はある。ただ、普通の幸せを歩む道を進んでいたに違いない。

「でも、オレは後悔しない。この道はオレが選んだ道だ。だから、後悔はしない」

「羨ましいです。でも、私もそうなりたいですね」

「なれるさ。都ならな」

オレはそう言って海を浮かべた瞬間、突如としてチャイムが鳴り響いた。

オレと都は顔を見合わせて頷き合う。

誰が来たかはわからない。だから、都が出て、オレがレヴァンティンを構えておく。そういう風にアイコンタクトでなった。

都が玄関まで出てドアを開ける。

「えっ？　由姫さんに亜紗さん？」

都の言葉にオレはレヴァンティンを戻して顔を覗かせていた。

頭を下げていたのか、顔を上げた由姫はオレの顔を見て睨みつけてくる。オレ、何かした？

「兄さんがここに泊まると聞いたのでアル・アジフさん達の代わりに止まらせて欲しいと思いまして」

『アルさんは宿舎に泊まる。私達が代わりに来ただけ』

「あのな、ここは都の家だぞ。本人の許可なしで」

「いいですよ」

オレの言葉を遮って都が許可を出す。とりあえず、オレは大きく溜息をつくことにした。

都が許可する以上文句は言えないし、来た原因はある意味オレにも

あるし何も言えない。

「その代わり、周様についていろいろ教えくださいね。私は、周様のことがもっと知りたいので」

『朝まで教える』

「勘弁してくれ」

オレは小さく溜息をついた。

第七十五話　白鳥琴美（前書き）

琴美視点として書いたら微妙になったような気が。あまりに気にしないで読んでください。

第七十五話　白鳥琴美

私は常に孤独だった。

小学校の頃は友達はおらず常にいじめられていた。一人だったから標的にされたのだろう。

親は私を見ることなく暮らしていた。まるで、いないように扱われた。

そして、私は都と出会った。

出会ったのは中学校の時。ちょうど席が横になったからだった。当時から都は人気者で誰にも優しかった。だから、私に話しかけてきたのだと思った。

でも、違った。

都は小学校の頃の私を知っていた。いつも悲しそうに歩いていたのを見ていたらしい。だから、私と友達になりたいと言ってきた。

最初はためらった。いじめられた経験が頭の中にぐるぐる回ったからだ。だから、私はそこから逃げた。授業中なんて関係ない。

家には親はもういない。単身赴任だからと言って北海道に二人で向かったからだ。毎月お金は振り込まれるから生活には困らない。

家に閉じこもっていた私を都は毎日尋ねて来てくれた。最初はインターホン越しで会話をして、次は微かに開いたドア越しに。そして、

私は都を家に上げて一日中会話をした。

都は私を救ってくれた。だから、私も都を守りたい。そう思えるようになっていた。

「楽しそうね」

私の言葉に都は苦笑いを浮かべる。

私は休日を利用して春祭りの舞の練習を都の家ですることにしていた。春祭りが近いこともあり、集中する場所として都に頼んだからだ。だから、都の家に来た。

そして、都の家には周達の姿があった。

「そんなに楽しそうなことがあったなら私も呼んで欲しかった」

本心からそう言うと都はチラッと周を見た。確実に昨日何かあった。今の行動で確信できた。

「周様の意外な姿が見れました」

「だから、勘弁してくれ」

周が恥ずかしそうに顔を背ける。確かにこういう姿は知っている周と違って年相応に見える。ただ、後ろの二人がすごい殺気を飛ばし

ているような。

「由姫も都も勘弁してくれ」

周が溜息をつく。そんな周を見て私はクスッと笑った。

「いいわ。都、指導をお願いね。周達は観客としていてくれる？」

手に持つ錫杖を鳴らす。

手と腕の動きを合わせながらゆっくりと、だけどしっかり動かしていく。

周に言われたアドバイスを思い出し、都から教えてもらった全てを今いる観客全員に披露していく。

私が巫女に選ばれてから様々なことが起きた。もちろん、嬉しいことから悲しいことまで様々なことだ。それら全てを私はこの舞に思いとして込める。

間違わないように。でも、間違ったとしてもしっかりとした動きで舞を続けていく。堂々とした動きなら間違いは間違いじゃない。

そして、私は錫杖を鳴らし、動きを止めた。

自分の中では今までで一番出来たと思う。でも、都から見たらどう

だろうか。

私はそう思い都を見た。すると、都は泣いていた。

「都？」

私は都に駆け寄る。すると、都は私に抱きついてきた。

「琴美の舞を見ていたら、琴美の感情がよく分かって。私、私」

「都。ありがとう。感じてくれて」

「琴美は私に感謝していますけど、感謝するのは私なんです。私は、私として見てくれる人が欲しかった。だから、琴美に近づいたんです。私は、私は」

私は首を横に振った。そして、都の背中を優しくさすってやる。

「嬉しかった。どんな理由だとしても、私を救ってくれた。私はそれに感謝しているから」

気づけばいつの間にか周達の姿が無かった。どうやら出て行ったらしい。

私はそんな心遣いに感謝しながら都を抱きしめる。

「すごく上手かったですね」

由姫がオレに向かってさっきの感想を言った。それに関してはオレも同感だ。前に見た時よりもはるかに上手い。これなら、誰もが納得するような舞を春祭りに踊ってくれるだろう。

亜紗がスケッチブックを捲る。

『ところで、都さんと昨日何があったの？』

一瞬にして部屋の空気が変わる。空気を変えて欲しくは無かった。

オレは小さく溜息をつく。

「だけど、妙だな」

「話を変えないでください」

「そういうわけじゃない。確かに、琴美の舞はかなりのレベルだ。だけど、あまりにも感情が伝わりすぎている」

亜紗が首を傾げながらスケッチブックを捲る。

『それは私も思ったけど、彼女の実力じゃないかな？』

「琴美には悪いが、そこまでのレベルには到達していない。いや、人間の誰もがあそこまで観客全てを感情移入させれる能力を持っていない。確かに感動はするだろう。でも、琴美の思いがまるでさらけ出されたようなことはありえない」

もしかしたら、近くにいた魔術師が魔術を使ったという方が話がわ

かる。だけど、ずっと探知していたのに気づかないということはまずありえない。

オレの探知をすり抜けれるのは竜言語魔法ぐらいなのに。

「一体、何だって言うんだ」

第七十六話　再会

昼休み。オレは中庭で第７６移動隊のみんなと仲良く昼ご飯を食べていた。ちなみに由姫と音姉、そして、浩平の姿はない。

由姫と音姉はクラスメートと一緒に昼ご飯を食べているからだ。浩平はリースに連れて行かれた。

「相変わらず周隊長の飯は上手いよな。どうやったらここまでになんだ？」

「日々の練習だ。つか、悠聖もまだ作れるだろ」

「周隊長と比べたら雲泥の差なんだけどな。つか、白百合家って料理上手いよな」

オレも由姫も音姉も普通に料理が出来る。それは、義理の両親が仕事に忙しく、自分達で料理を作っていたからだ。

ちなみに、音姉はどこぞの宮廷料理かと思えるような見事かつ繊細な料理を作ることが得意で、由姫は普通の家庭にある料理。オレは野蛮人の料理と評価されたことがある。

まあ、三人の中では由姫が一番上手いけど。

「昔からやってるからだよ。それに、オレの得意料理は孝治と同じだ」

「確かに、それなら俺も得意だ。だが、食事当番をお前達に任して

良かったか疑問だな」

孝治がそう言いながら中村を見た。中村は瞬間よりも早く目をそらしている。孝治の言いたいことはわかるけど、ジェノサイドキラーに料理をさせない方がいいと思う。うん、絶対に。

オレの視線に気づいたのか中村がオレを睨みつけてくる。意味は絶対に言うなというところか。

「周、一度作らせたどうだ？」

「オレはまだ死にたくない」

ジェノサイドキラーの力を思い出しながら言う。

あの日、あの料理を食べたオレと由姫と時雨は腹痛で三日三晩の苦しみを受けた。その時から由姫の料理は格段に上手くなったけど。

「でも、料理下手なやつって萌えるよな？　孝治もそう思うだろ？」

「分かっているではないか、我が同士」

何故か無性にこの二人が殴りたくなったのはオレだけだろうか。

「お前ら分かってないな」

オレは小さく溜息をつく。

「想像してみろよ、生臭いカレーを。真っ黒に焦げたけど中身は赤い鶏肉を。明らかに色のおかしい野菜が並べられた食卓を」

臭いならまだわかる。焦げ臭いとかなら。でも、生臭いカレーは誰

が考えることが出来るだろうか。さらには真っ黒に焦げた中身が真っ赤な鶏肉。明らかに殺意しか考えられない。そして、色とりどりを通り越しておかしな色しかない野菜の盛り合わせ。

これが同時に出た時は本気で死ぬかと思った。

「食べなければ殴られて、食べたらお腹を壊す光景。まさに、ジェノサイドキラーに相応しい食卓」

「海道？」

中村がゆっくり立ち上がった。その手に握られているのはレーヴァテイン。

いつの間にかオレの周囲には誰もいない。というか、距離を取って昼ご飯を食べている。

オレはただ顔を引きつらせるしかなかった。

「中村、落ち着け」

「これが落ち着いていられると思う？　散々言ってくれたよな？」

「大丈夫だ。全て事実だし」

オレはレヴァンティンを呼び出さない。こんな場所でレヴァンティンでも呼び出したなら戦闘でもする気かになる。

『天空の羽衣』には中村が打ち出すコピーを受け止める能力はない。つまり、絶体絶命のピンチ。

「そうかそうか。なら、文句ないよな？」

中村がレーヴァテインをオレに向ける。

ここで使うならあれしかないよな。だから、腰を落として身構える。

「周！　助けてくれー！」

その時、唐突に和樹の声が響いた。オレは構えを解いて声のした方を向く。すると、そこにいるのは女子に追いかけられている和樹の姿。

和樹はオレに駆け寄って肩を持った。

「まじ助けてくれ。友達だろ？」

「違うだろ」

オレは即答で返した。

「泣くぞ！　ぐえっ」

そう叫んだ和樹の襟を追いついた女子が掴んで引っ張った。うん、追いかけてきた女子が全員クラスメートで殺気だっているのは面白いな。

「海道君ありがとう。とりあえず、篠宮は裁判にかけるから」

「冤罪だ冤罪！　周、助けてくれ」

「まあまあまあ。で、こいつが何をしたって」

助ける気が無かったオレの代わりに悠聖が和樹と女子をやんわり離した。そして、女子に尋ねる。

「女子更衣室に入った」

「有罪」

悠聖が動こうとした和樹の腕を捕まえる。決めるのが早いな。まあ、オレも有罪だとは思うけど。

「だから、冤罪だってば。周もなんか言ってくれ」

「はいはい、わかった。で、女子更衣室に入ったって言ってもどんなことが起きたんだ？」

「女子更衣室に篠宮の生徒手帳が落ちてた」

完全に確定だよな。

「盗まれたんだって。机の中に入れていたらいつの間にか無かった。本当だぞ」

「周隊長、とりあえず、裁判員裁判にでもかける？」

「中学生でやったら死刑が出るから。確かに盗まれたなら和樹は犯人じゃないよな。で、他に変わったことは？」

「入り口付近の一部の人のカバンの中身が漁られてた。無くなってはいないけど」

つまり、犯人の姿を見た人はいないのか。

「悪魔の証明かよ」

オレは溜息をつきながら呟いた。確かに、生徒手帳が盗まれたなら誰が犯人かわからなくなる。さらに言うなら和樹の言うことは嘘では無さそうだし。

「なんだそりゃ？」

「確か、存在しないものを証明することはできないってやつだな。周隊長が言いたいのは状況だけはあるけど肝心な証拠がないってとこだろ」

「ああ。確かに和樹を犯人とするのは簡単だ。だけど、状況があまりにも不自然だ。よく考えてみろよ。和樹が女子更衣室に入れる時間帯を」

さっきの授業は体育だった。オレは体育が終わった瞬間に中庭に来たので和樹がどういうルートで教室に戻ったかはわからない。

だが、授業が終わって和樹が女子更衣室に向かえる時間があったかどうかは難しい。

でも、不可能ではない。

「実現は不可能じゃない。ただ、簡単じゃない。つか、和樹の生徒

手帳が盗まれたなら教室の方も何か盗まれたんじゃないのか？」

「いや、俺のだけだ」

さっぱりわけがわからない。つまり、どういうことだ？

どうして生徒手帳だけを手に入れる必要があったのかわからない。

「ちょっと待ってろよ」

オレはしゃがみ込んで手のひらを地面に押し付けた。そして、魔術陣を展開する。

発動する魔術は探査魔術。探すものはこの学校の生徒ではない人物。

「見つけた」

オレは顔を上げた。そして、立ち上がる。なんとなしにやってみたら誰かが敷地内にいた。場所は近い。

「ちょっと行ってくる。少しの間だけ待ってくれないか」

魔術陣の展開を見ていた悠聖が頷きながら指輪をはめる。第７６移動隊のみんなはそれに気づくが、和樹達は気づかない。

「俺の冤罪を晴らしてくれよ」

「善処するよ」

オレは笑って走り出した。

今使った魔術は感度は高いが精度は低いもの。誰かがいたことはわかっても誰がいたかはわからない。

校舎の中に入り階段を駆け上がる。

一階を越えて二階を去りつつ三階に入る。そのまま屋上への階段を登る。そして、屋上の鍵を開けて外に出た。

そこにいたのは貴族派の双子であるベリエとアリエ。だけど、服装がドレス姿。見たことのあるドレス姿。

オレはそれを見て小さく笑った。

「そっか、あの時の」

ツインテールのアリエがにっこり笑った。

「うん。久しぶり。周お兄ちゃん」

それはあのパーティの時、エレノアと一緒にオレ達兄妹といてくれたあの時の双子だった。

第七十七話　宣言

サイドテールのベリエは頬を赤く染めたままそっぽを向いている。
対するアリエはにっこり笑って近づいてきた。
オレは屋上のドアの鍵を閉める。

「まさか、あの二人だとはな」

「周お兄ちゃんだと気づいたのはエレノアお姉ちゃんが言ってくれたからだよ。あっ、戦うつもりはないから」

「むしろ、戦いたくない。で、どうして女子更衣室に入ったんだ？」

オレが少し真剣になりながら尋ねる。アリエは視線を逸らす。

「ベリエちゃんが間違ったんだよぅ」

そう言った瞬間にベリエの顔がさらに真っ赤に染まった。間違ったなら仕方ない。でも、どうやってみんなに話そうか迷うな。

「ベリエちゃんがね、周お兄ちゃんの机の近くで地図が書いた手帳を見つけてね、それを頼りに更衣室に向かったら女子更衣室だったんだよぅ」

どうりで和樹の生徒手帳が盗まれたわけだ。

「わかった。なら、オレからは何も言わないさ。それで、どうしてここに」

「これよ」

いつの間にか近づいて来ていたベリエがオレに向かって手紙を差し出す。オレはそれを受け取った。

中身を開けて内容を読む。

「エレノアからの手紙？」

「そうよ。エレノアお姉様がこれを海道周に渡せって。後、内容を確認してもらったなら返事を私達に聞かせて欲しいって」

オレは小さく溜息をつきながら手紙をベリエに渡した。

「これはエレノア、貴族派代表魔界五将軍『炎帝』のエレノアが出したものか？」

「うん。エレノアお姉ちゃんが出した手紙だよぅ」

「読んでみろ」

オレの言葉にベリエが手紙の内容を見る。そして、固まった。アリエも同じように固まっている。

内容は簡単に言えばこうだ。

アリエとベリエを預かっていて欲しい。出来れば時雨に預けて欲しい。こんな内容だ。

「どうして、どうして、エレノアお姉様は」

「多分、お前らが大事だからじゃないか？　戦いが激しくなるから」

「絶対にない。エレノアお姉様が負けるわけが」

「ないとは言えないだろ」

最悪の状況になれば第一特務がやって来るのは確実だ。もし、慧海が来たなら確実に全滅する。おそらく、慧海は来ないけど。

それにベリエはオレ達を忘れている。

「オレ達も戦ったらただではすまない被害がそちらには出る。いや、オレ達が勝つ可能性もあるか」

「だったら、今ここで」

「ベリエちゃん！　戦いに来たわけじゃないんだよ！　私達が来たのは話に来ただけなんだから！」

ナイフを取り出したベリエの前に両手を広げたアリエが立ち塞がる。そして、ベリエは気まずそうにナイフを下ろした。

オレは二人に近づく。

「話がしたいって？」

「えっと、出来ればエレノアお姉ちゃんと周お兄ちゃんが戦って欲しくないから」

「悪い。それは無理だ。狭間の鬼の力は大きすぎる。それに約束したんだ。鬼はオレ達が倒すって」

都と約束したことだ。都を狭間の鬼から解放するために鬼を倒す。それは不可能に近いかもしれない。でも、

「無理。絶対に無理。私達ですら不可能という結論を出したのに、あんた達が倒せる可能性なんて」

「誰かを犠牲にして世界を救えたとしても、それは世界を救えたことにはならない。世界を救うということは、自分も仲間も知り合いも誰もかも救うことだ」

オレは自分の信念を口にする。その言葉にベリエもアリエも驚いていた。

「助けを求めてきているなら、オレは助ける。それがオレの決意だ。確かに、鬼は強いさ。それは戦ったことがあるからわかる。でも、不可能だと諦めたら終わりだ」

「無茶よ。絶対に無茶。死ぬつもり？　あんたが死ねば、茜はどうなるのよ！」

ベリエの言葉にオレはあの時のパーティを思い出していた。確か、ベリエには茜が懐いていたっけ。それでアリエが泣きそうになったのを覚えている。

ベリエはオレのことと、そして、茜のことを心配している。

「ありがとう。心配してくれて」

「べ、別にあんたのことなんて心配してないから。だけど、茜は今も病院でしょ？　家族はあなた一人でしょ？　死んだらどうするつもり？」

「死なないさ。それに、勝つ可能性があるならそれを全てする。あらゆる戦い方で勝ちを近づける。それがオレの器用貧乏だ」

ベリエは呆れたように溜息をついた。でも、その口元は少し笑っているように見える。

まるで、嬉しそうに。そして、楽しそうに。

「決めた。今からあんたは私のライバルよ」

「ベリエちゃん、前にボロ負けしたよね」

確かに圧勝だった。まあ、モード？の実戦初使用だったから隙をつけただけかもしれないけど。

「ううん。でも、私は強くなるから。アリエと一緒にあんたを倒せるように強くなる。あんたみたいな兄がいたら茜も心配だと思うし」

「お前ら連絡取り合ってないよな」

その言葉は茜に言われたことがあるぞ。

「じゃ、私も周お兄ちゃんより強くなる。でも、次の戦いを生き残らないと」

次の戦いというのはおそらく第７６移動隊との鬼を求めての戦い。

オレはにやりと笑みを浮かべる。

「オレ達が勝つからな」

「うう、ベリエちゃんどうしよう」

「絶対に負けないから」

アリエが心配そうにベリエを見て、ベリエは笑みを返してくる。

「じゃ、まだ時間あるし、いろいろ話をしようぜ」

「何か話すことがあるの？」

「私、周お兄ちゃんの今までの話が聞きたい」

オレは時計を確認しながら頷く。

とりあえず、午後の授業はサボるか。

第七十七話　宣言（後書き）

海道周の趣味は勉強。それが授業をさぼる理由。

第七十八話　始まり（前書き）

前半後編の終わりに向けて物語が加速します。

第七十八話　始まり

オレは小さくため息をつきながら書類をホッチキスで止めていく。同じ作業をしているのはオレと琴美、そして、千春の三人だ。都は別の作業をしている。

琴美が最後の書類をホッチキスで止め終わり、小さく息を吐いた。

「都、終わったわよ」

「ご苦労様です。こちらの書類ももうすぐ終わるので、みんなで一緒に帰りましょう。周様、手伝ってくださってありがとうございます」

「これくらい簡単だけどな。まあ、同じ作業が延々と続くのには疲れたけど」

オレの近くには山積みにされた書類がある。もちろん、ホッチキスで止めたものだ。ちなみに琴美や千春よりも数は多い。

オレは肩を回してレヴァンティンを通信機器につなげた。回線を繋げる相手は由姫だ。

「今から都達を送って帰るから。晩ご飯は遅くなると思う」

そう由姫のデバイスに送りつけてオレは通信機器をレヴァンティンから外す。

「周のデバイスっていつ見ても便利よね。携帯電話と同じだなんて」

「携帯が付属したものだからな。まあ、凡庸性は高いから使いやすいけど。千春のものはタイプは？」

「Ｄ－８型。旧式だからそんな機能はないよ。あっても困るだけだしね」

まあ、携帯の方がいちいち通信機器を繋げる手間が省けて便利という面白い機能がある。ただ、携帯の方が通信速度が遅いのでオレはデバイス式の方をとっている。

「二つの違いって何なの？　あまりよくわからないけど」

「デバイス式の場合は通信にラグがほとんど発生しないんだ。代わりに携帯電話は通信機器につなげることなく通信が出来る。ただし、通信にはラグが発生する。緊急時に扱う必要がある場合は確実にデバイスを使った方がいいな」

「そういうことね。だから周はデバイス式をとるのか。都、終わった？」

「はい」

書類を片付けた都が立ち上がる。待たせているのが申し訳ないのか駆け足で近付いてくる。

「帰りましょう」

「そうだな」

オレはカバンを持って先頭を歩きだした。その横に都が並ぶ。

このメンバーで帰る時はいつもこうだ。オレと都が先頭で、その後ろに琴美と千春が並ぶ。だから、この形はいつもの形だ。

教室から出ると学校は静かだった。まあ、放課後だし。人の声が全くしないのは驚いたけど。

「そう言えば、都って周君となにかあった？　なんか、いつもより距離が近いけど」

「そうか？　いつもと変わらないと思うけど」

確かに距離が少しだけ変わった。約１ｃｍほど。普通ならほとんど分からないけど。

「ついに都も周君に告白か。恋人が出来て羨ましいな」

「そ、そそ、そんなんじゃありません！　周様と恋人になったら手を繋いでいます！」

確かに都の言うことはもっともなんだけど、学校内で大声で言うようなことか？　まあ、放課後だから人の気配はほとんどない。というより完全に無しか。校内に残っている生徒は誰一人としていない。先生も。第７６移動隊も。

「なっ」

オレはようやく異変が起きていることに気付いた。

一応、亜紗と音姉にはいとくように伝言はしておいた。なのに、その二人がいない。音姉はまだわかるけど、亜紗がいない理由が全く見当たらない。

探索の範囲を広げると、最大範囲が敷地内のみに限定されていることに気付いた。

「やられた」

「周様、どうかしたのですか？」

「結界が張られている。気付かないうちに張られたのか？　それにしても、手際が良すぎる」

まるで、すでに幻術にかけられていたような感覚だ。完全に探知の能力を失っている最中に結界が張られたのだろう。出来るとすれば『水帝』のクラリーネ。

「みんな、固まっておいてくれよ。敵がどこにいるかわからない」

「そうね。私はあなたの指示に従うわ。千春、どうかしたの？」

琴美の言葉にオレは千春を見た。千春は少し前に立ち止まったのか距離を開けて佇んでいる。その表情は髪に隠れて見えない。だけど、千春は何かつぶやいている。

耳に真剣を集中させても何を話しているかわからない。でも、嫌な予感がする。

「周君」

千春が顔を上げた。その頬には涙が流れている。

「ごめんね」

その瞬間、頭がかき乱されるような感覚にオレは膝をついていた。

都も琴美もその場で膝をついているが千春だけが平然としている。

これは、千春が放ったのか？

おそらく、精神操作系の魔術。だけど、ここまで強力なのは初めてだ。慧海が使った時はここまでひどく感じることは無かった。意識すら落ちてしまいそうな痛み。でも、オレはとある言葉を思い出していた。

確か、千春が昼ご飯を一緒にしないかと提案してきた時、千春は都が思っていたからと言っていた。あの時は気にならなかったけど、もしかしたら、

「『水帝』のクラリーネか」

「うん。正解。ボクは魔界五将軍の一人『水帝』のクラリーネ。どこで気づいたのかな？」

「あくっ、お前が、昼ご飯を一緒に食べないか誘いに来た時、都が思っているって言ったことを思い出してな」

「うん。本当なら静かに都を連れて行くつもりだった。だけど、クラインが作戦を早めるから。ごめんね。周君」

千春が槍を取り出す。対するオレはレヴァンティンを取り出した。だけど、未だに体が慣れない。どうやらいくつかの精神操作系魔術を組み合わせているみたいだ。

「周、都を連れて、逃げて。他のメンバーと、合流して」

琴美がゆっくり立ち上がる。辛いはずなのに、親友を守るために。

「絶対に後で助ける」

「楽しみにしてるわ」

琴美が笑った瞬間、オレはレヴァンティンを強く握りしめた。それと同時にあらゆる力が消滅する。それは、千春の握る槍が頸線に戻ることも意味していた。

千春が目を見開く。その瞬間にオレと琴美は同時に走り出した。反対方向に。オレは都の手を掴んで立ち上がらせ、走り出す。琴美は千春に飛びかかって組み伏せる。

「琴美！　周様！　琴美が」

「琴美はオレ達を逃がすために命懸けでやっているんだ！　特に、お前を逃がすために！　文句は逃げ切ってから聞く！」

「でも、千春は」

「敵だ」

オレは一言で切って捨てた。

千春は敵だ。そう思い込まないと戦えない。琴美だって同じはずだ。あいつは敵だと。

「レヴァンティン、簡易術式一番から八番まで展開準備」

『結界破壊はどうしますか？』

レヴァンティンから聞こえてくる声に都は驚くが、オレの走るスピードが立ち止まる隙を与えない。

『亜紗！　亜紗！　聞こえるか！』

オレは精神感応を発動する。

精神感応は同じ能力を持つ人物なら結界関係なく半径３００ｋｍまで会話することが出来る。

『えっ？　周さん？　ここは、どこ？』

『精神操作だ。『水帝』が学校にいた！』

『わかった。すぐに向かう』

亜紗との精神感応を切ると同時にオレ達は中庭に出た。結界破壊魔術の展開には時間がかかる。それまでに追いつかれないかどうか。

「ようこそ、狭間の巫女。そして、海道周」

クラインの声が響き渡る。その声に向かってオレは上を見上げた。

屋上にいるのはおそらく貴族派の面々。数は五十。周囲からも貴族派の面々が出て来る。

オレはレヴァンティンを構えた。

「光栄だよ。まさか、ここまで油断するとは。やはり、子供だな」

クラインが笑みを浮かべる。

オレは校舎の壁に向かって走った。そして、都を背中に回して振り返る。

敵の数は３００ほど。クライン達がいることを考えるとオレ一人では荷が重い。だけど、戦えないわけじゃない。

「カーニバルの開始だ諸君。我ら貴族派の栄光への始まりだ！」

クラインの言葉に貴族派のメンバーが声を高らかに上げた。

亜紗がどこにいるかわからない。それに、みんなが集まって来るには時間がかかる。せめて、中村が空に上がっていれば。

「都」

「はい」

「じっとしてろよ。レヴァンティン、限定解除、いや、全体解除は何段階だ？」

『二段階まで。それ以上は危険です』

「十分だ」

オレはレヴァンティンを鞘に収めた。そして、腰を落とす。

「『ＧＦ』移動課第一部隊第７６移動隊隊長海道周。怪我したい奴からかかって来い。カーニバルだか何だか知らないが、都に指一本触れさせねえ！」

第七十九話　世界を滅ぼす力

レヴァンティンがオーガを受け止めた斧ごと吹き飛ばす。オレは一気に地面を駆けてトロルを蹴り飛ばした。向かって来たゴブリンとコボルトには戦闘中にストックしている風属性魔術で吹き飛ばす。

オレはレヴァンティンを鞘に収めながら都の前まで戻った。

「今、治癒します」

都が治癒魔術をかけてくれる。だけど、そんなものは気休めにしかならない。

貴族派の半分は倒したものの、体中に切り傷や擦り傷、そして、右足は確実に折れている。『強制結合』で無理やりくっつけているが痛みは打ち消せない。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ。くそっ。はぁっ、はぁっ。多すぎるぞ」

これが防衛戦でなければ戦い方はもっとある。でも、今回はヒットアンドアウェイを繰り返す防衛戦。常に走り回って戦う戦場なら休む時間は微かにあるが、休む隙がない。疲労だけが蓄積する。

「レヴァンティン、二番解放」

オレの体に魔力が戻る。その魔力を体力に転換して何とか体を休める。

「次は、どいつだ」

キマイラ飛びかかってくる。オレは鉤爪を避けてキマイラの顔面にレヴァンティンを叩きつけた。キマイラは地面を跳ねて転がる。次に来るのはグレムリン。

レヴァンティンでグレムリンの持つ槍を払いタックルで吹き飛ばす。

「レヴァンティン、三番か」

『下がってください！』

レヴァンティンの声が聞こえると同時に嫌な予感が体を覆い、オレは後ろに下がった。

オレがいた位置に大量の槍が突き刺さる。

「何が」

空を見上げるとそこには槍を持ったデーモンの姿があった。

はっきり言うならかなり不利な状況だ。でも、

「レヴァンティン、三番解放」

『マスター、大丈夫ですか？』

「大丈夫だ」

レヴァンティンを鞘に収める。これで地上だけでなく上空にも警戒しなければならない。戦闘効率は著しく減少する。でも、

「なあ、レヴァンティン。オレは今、自分の力を信じれる」

向かって来るミノタウロスの突進を受け止めて投げ飛ばす。

「あの日、たくさんのものを失った日、オレは自分の弱さを嘆いた」

メデューサとラミアをレヴァンティンで殴り飛ばす。

「そして、自分の殻に閉じこもった」

レヴァンティンを素早く鞘から抜き放ち、デーモンに向かって衝撃破を放つ。

白楽天流遠当て『燕閃』。

離れた距離を攻撃出来る技。

「そして、オレは由姫に救い出された。それから、オレは強くなることを誓った」

オーガの斧を受け止めきれず吹き飛ばされる。だけど、オレはすぐさま大地属性の魔術でまとめて貴族派を地面から放り投げた。

「今までオレは自分が生きていることが嫌いだった自分がいた」

あの事件を起こし、オレは普通に生きていた。天才海道駿の息子としてちやほやされた。

確かに、オレは他の人より何でも出来た。だけど、それは本当に良

かったかと思う自分がいたから強くなれた。

「この村に来て都と出会い、オレは変わった」

大人であろうとした自分が剥がれるのは嫌だった。でも、都の前では由姫や亜紗と同じように自分でいられた。

レヴァンティンを構える。

「レヴァンティン、限定解除。一気に決めるぞ」

『イエス、マスター。アクセルドライブ起動。バランサーシステム正常化。現世空間に浸食を開始します。２０秒間、持ってください』

「余裕」

オレは都を失いたくない。だから、レヴァンティンの力を使い切る。

「全てを巻き込む力となせ！」

魔術の詠唱を行いレヴァンティンに魔術陣を纏わせる。それは、オレのオリジナル。イメージの中から作り出した勇者の剣。

空気中にある魔力粒子がレヴァンティンに集まり剣と化す。

「呑み込め！」

オレはそれを横薙ぎに払った。

レヴァンティンを纏っていた魔力がエネルギーと化し、地上にいた

貴族派を呑み込む。

魔力が消え去った時、そこには倒れ伏す貴族派の姿しか無かった。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ。来いよ。オレはまだ戦えるぜ」

「だが、もう限界ではないか」

クライン達が降りて来る。それに対してオレはにやりと笑みを浮かべた。

「誰が限界だって？」

「減らず口を。では、我が殺してやろう」

「クライン、北欧神話って知っているか？」

オレはレヴァンティンを構えた。クラインからの回答はない。

「北欧神話。神々がいた頃の話だ。北欧で起きたラグナロクは世界を滅ぼしたと言われている。その中で、世界を9回滅ぼしたとされる力があるのを知らないか？」

「何の関係がある」

「魔科学時代に存在した最強の炎。その力、具現化させてもらう。レヴァンティン、限定解除」

オレの言葉と共にレヴァンティンが大きく形を変える。片手剣から両手剣に。そして、大きさは桁違いに大きく、黒かった。

「独立エネルギー機関と呼ばれるものを使った剣だ。お前らに受け止められるか？」

「たかが剣一本で勝てるとでも？　我らを甘く見すぎだ」

「なら、やってみるか？」

オレはレヴァンティンを構える。

世界を9回滅ぼすことが可能な炎を原動力に動くデバイス。それがレヴァンティンだ。だから、レヴァンティン内のエネルギーを使って不可能に近い技を扱える。

「一撃くらい、持ってくれるよな！」

レヴァンティンに紫電がほとばしる。こういう時に会話しなくても発動してくれるのはありがたい。

オレは地面を蹴った。一歩を踏み出し地面を踏みしめながらレヴァンティンを振り上げる。二歩目をしっかり踏みしめ、三歩目を振り上げ、レヴァンティンと共に振り下ろす。

純粋な斬撃。だけど、その斬撃はエネルギーの塊となってクライン達を呑み込んだ。

レヴァンティンが一部から蒸気を吹き出す。

「レヴァンティン、限定解除を解除」

レヴァンティンの形が戻った。だけど、レヴァンティンは未だに蒸気を出し続けている。おそらく、オーバーヒートした部分を冷やしているのだろう。

オレはレヴァンティンを鞘に収めた。

「ふぅ、これで、終わりだ」

「本当にそうかな？」

千春の、いや、クラリーネの声。それにオレは振り向いた。そこにいるのはクラリーネと、エレノア。

さすがにこれには頬が引きつる。

「千春！　琴美は」

「大丈夫だよ。殺してはいないから」

状況は最悪だ。

レヴァンティンは未だに冷却中な上にオレの体には疲労が溜まっている。今の時間でかなり回復したものの、相手が魔界五将軍の『炎帝』と『水帝』。不利すぎる。

「後、一人いればな」

「周兄、呼んだ？」

オレはその言葉に眉を潜めながら結界を探知する。結界はまだ展開

されている。

「なんでいるんだ？」

振り返ることなく尋ねる。

「私は結界魔術が得意なんだよ。つまり、破るのも得意。ただ、頑固だったから私一人分のスペースしか開けられなかったけどね」

あははと七葉が笑う。

確かに結界魔術が得意なら結界破壊魔術も得意になる。それを考えると、七葉が一人で来たのはよくわかる話だ。

「他のみんなは？」

「結界破壊魔術を試してる。でも、かなり頑固だよ。一番得意な私で少しの隙間しか開かなかった」

だから、一番小柄な七葉が来たのだろう。

「七葉、気合い入れていけよ。敵は魔界五将軍の二人だ」

「うわっ、いきなりボス戦。帰っていい？」

「殴るぞ」

七葉がオレの横に並んで槍を構える。相性は確実に最悪だ。

「準備は出来たかな？　だったら」

クラリーネの槍が頸線に解ける。

「『水帝』のクラリーネ」

対するエレノアは『炎熱蝶々』で空に飛び上がった。

「余は『炎帝』のエレノア」

「『ＧＦ』移動課第一部隊第７６移動隊隊長海道周」

レヴァンティンを鞘に収めて腰を落とす。

「同じく『ＧＦ』移動課第一部隊第７６移動隊隊員白川七葉」

七葉はクラリーネと同じように槍を頸線に解いた。

「行くぞ！」

その言葉と共にオレは地面を蹴る。

第八十話　周ＶＳ『炎帝』

オレが地面を蹴ると同時に七葉の頸線がエレノアとクラリーネに襲いかかる。だけど、その全てはクラリーネの頸線によって絡め取られた。魔力の量はクラリーネの方が上だから七葉の頸線は千切れる、はずだった。

だけど、お互いに頸線を引っ張り合って均衡する。

「周兄！　『炎帝』をお願い！」

「言われなくても！」

地面を蹴り飛び上がる。そのまま魔力で足場を作ってさらに飛び上がる。

エレノアはオレに向かって炎弾を放つ。『炎熱蝶々』がただの属性翼として違う点をやっぱり使ってくる。

それに対してオレはさらに足場を蹴った。迫り来る炎弾をレヴァンティンで何とか弾いていく。ここでようやくエレノアの顔に焦りが浮かんだ。

さすがにこの弾幕を突撃することには勇気がいる。でも、この弾幕の量なら耐えれる。さらに凄い奴を知っているから。

「死ぬ気か！？」

「死ぬ気ならこんなことはしない！」

足場を作り出して跳躍しレヴァンティンを一閃する。だけど、そこにエレノアの姿は無く距離を取られていた。

すかさず燕閃を放つがエレノアは簡単に避ける。このままじゃ埒が開かない。

「レヴァンティン、行けるか？」

『大丈夫です。ですが、モード？以降は使用しないでください』

「わかってる。モード？」

レヴァンティンが剣から槍に変わる。それをオレはエレノアに向けた。

「モード？カノン」

槍の穂先が割れ、そこから砲身が現れた。

モード？の最大の特徴が砲撃槍と呼ばれる槍と砲撃杖の合体したものである点だ。

砲撃槍はオレが考えた二重変化（デュアルシフト）の原型となるもので少なからず砲撃槍の使い手はいる。ただ、数は少ない。

エレノアはオレのレヴァンティンを見て虚空から杖を取り出した。

だけど、遅い。

レヴァンティンからエネルギーの塊が放たれる。放たれると割れた

穂先の間から蒸気が吹き出した。

砲撃槍の最大の弱点がこれだ。砲身に熱が籠もりやすく冷却を必要とする。だけど、威力は十分に高い。エレノアに当たった瞬間に爆発するから。

「レヴァンティン、チャージまでの時間は？」

穂先を戻し砲身を隠す。すぐさま足場を蹴って次の足場に飛び移った。

今までいた足場に炎弾が直撃する。

『約２０秒です』

「限定解除を行ったからな」

足場から足場に飛び移るのを止めて壁キックの応用で不規則に空中を飛び回る。エレノアが放つ炎弾はオレを狙って来るが、反射神経というより勘で全てを回避する。

エレノアは典型的な魔術師だ。だから、距離を詰めればこちらに分がある。

「かかった」

だが、距離を詰めたオレに対し、エレノアはにやりと笑みを浮かべた。

『マスター！』

レヴァンティンの声と感覚が最悪のアラームを叩き出す。そして、反応するより早く、オレの周囲に魔術陣が出来上がっていた。

浮遊機雷。

浮遊機雷の全てが一斉に爆発する。多重に展開した防御魔術は一瞬で砕け、とっさに展開した『天空の羽衣』に衝撃が叩きつけられる。

だが、魔術の衝撃破を受け止めることは出来ずダメージを受けた。その最中、突如として『天空の羽衣』が消え去った。

「なっ」

防御魔術の展開が間に合わず爆発による衝撃破が体を打つ。

『天空の羽衣』が消えたわけではない。だけど、まるで処理限界を超えたかのような消え方だった。

痛みのあまりに意識が飛びかける。だけど、オレは歯を食いしばって大きめに作り出した足場に背中から落下した。

体のいたるところが痛い。確実に何ヶ所か折れている。レヴァンティンが『強制結合』を操作していなければ確実に意識が飛んでいる。

どうして『天空の羽衣』が消えたかわからない。何か致命的な弱点があったというのか。

「かはっ」

痛みのあまり息を漏らす。だけど、オレはゆっくり起き上がった。

「どうして、立ち上がる？」

いつの間にか近づいてきていたエレノアがオレに杖を向ける。対するオレは槍から剣に戻してレヴァンティンを構えた。だが、手は震えている。

「負けられないんだ」

守ると誓ったから。都を救うと。

「倒れて、たまるか」

「お願いだから、立ち上がらないで」

エレノアはもう『炎帝』としての尊厳を取らず普通に話しかけてくる。これ以上立ち上がるなら倒さなければいけないと言うように。

「守りたいものがあるんだよ。レヴァンティン、四番から八番まで解放」

『これ以上はマスターの体が危険です！　引いてください』

「後悔したくないんだ」

レヴァンティンを握りしめる。

「オレは『赤のクリスマス』を引き起こした。そして、それを理由にオレは変わった。だけど、本当のオレを見てくれる人達がいる。

そいつらを守れなくて、強くなった意味なんてないんだ！」

レヴァンティンを鞘に戻す。

戦えたとしても後一撃。後一撃入れたら確実に無理だろ。だから、オレが一番練習したことを最後の一撃とするだけ。

「わかった。だったら、本気だから」

エレノアが杖を振り上げる。そして、展開される魔術陣。

オレは足場を蹴った。

「うあぁぁぁぁっ！！」

足場を蹴りレヴァンティンを鞘から解き放つ。

「紫電」

「プロミネンス」

オレとエレノアの声が重なる。

「一閃！」

「レーザー！」

オレの紫電一閃とエレノアのプロミネンスレーザーがぶつかり合い爆発する。その爆発を受けてオレの感覚はほとんど無かった。でも、オレは腕を動かす。

何回も練習した技。紫電一閃の後の技。

白百合流抜刀返し『紫電逆閃』。

レヴァンティンが何かを捉えた感覚がする。

「君の気持ち、届いたよ」

エレノアの優しい声と共にオレの意識は闇に落ちた。

第八十一話　七葉ＶＳ『水帝』

七葉は小さく笑みを浮かべながらクラリーネに語りかける。

「あまり強くないね」

クラリーネも笑みを浮かべながら言葉を返す。

「数にものを言わせるのは卑怯と言わないかな？」

二人の力は完全に均衡している。だが、操っている頸線の量は全く違う。

クラリーネは質は高いが量は少ない。七葉は質は普通だが量は多い。

これが均衡している理由だ。

「みんないつの間にか学校を出ていたって聞いたけど、あなたがやったのかな？」

「そうだよ。ボクがみんなを操った。近くに周君がいたからまずは周君から操ってね」

クラリーネがそう言った瞬間、七葉が操っていた頸線の質が高まったように感じた。

まるで、怒りに応じて強くなっているかのように。

「周兄に何をしたの？」

「ボクの精神操作魔術でボクの行為と結界の展開を悟られないようにしただけだよ。本当なら操っても良かったんだけどね、周君が持つデバイスにアクセス出来なかったから」

「そう。決めたよ」

七葉が全ての頸線を戻して槍にする。クラリーネも同じように槍にした。だけど、七葉が持つ槍からは何かのオーラが出ている。

七葉は槍を構えた。

「あなたは私が殺す。この場で」

「君に出来るのかな？」

クラリーネが笑みを浮かべた瞬間、七葉が頸線を動かした。槍を形取っていない分だが、その量ならクラリーネの槍で全て払える。

しかし、七葉の狙いはそこではなかった。

頸線を払ったクラリーネに向かって一直線に走る。そして、一直線に突く。

槍の本来の使い方。そのリーチを使った突き。対するクラリーネは七葉に槍を払った。だが、槍が頸線に解ける。

「なっ」

七葉はすくざま展開していた頸線で槍を作り出しクラリーネに向かって突く。クラリーネは自分の槍を手放して七葉の槍を捕まえた。

「惜しかったね」

そういうクラリーネ自体がかなり焦っていることは七葉には分かった。だから、にやりと笑みを浮かべる。

「何がかな？」

クラリーネが気づいた時にはすでに遅い。何故なら、すでにクラリーネの周囲に頸線から作り出された小さな槍が展開していた。

クラリーネの額に汗が流れる。七葉が槍を解いたのはクラリーネの槍を引き寄せるためとこの槍を展開するため。

「わざと、誘った」

「うん。上手くはまってくれてありがとう」

そして、七葉が一斉に槍を放つ。狙いはクラリーネ。避けきれる距離じゃない。だけど、槍はまるで自ら避けるように軌道を変えた。

「えっ？」

驚いた七葉の腕をクラリーネが掴む。

「特別にボクの異名を教えてあげるね」

そのままクラリーネは七葉の腕を引っ張った。

「『侵食』のクラリーネ」

そして、額を七葉とつける。

たったそれだけで七葉の体から力が抜けた。まるで、体が命令を受け付けなくなったように。

「な、にを」

「君の体の動きを乗っ取っただけ。ほとんど力がでないよね？」

そのままクラリーネは七葉の額に手を当てる。七葉は必死に逃れようとするが体に力が入らない。

「儀式が終わるまで、身動きの出来ない体になってもらうから」

「やめ、て」

つまり、一時的に精神を操作するということ。だけど、七葉は別の理由で抵抗していた。

「見たら、だめ。入って、きた、ら、だめ」

まるで思考の中に入ることを拒むように言う。クラリーネはそのまま七葉の精神に侵食する。

精神操作をした場合、相手の精神に入り込む方法を取れば、その相手を形取る精神風景と呼ばれる空間に入る。周の場合なら『赤のクリスマス』の時のニューヨーク。

そして、七葉は、

「ここは？」

何もない空間だった。まるで、世界が消し去られたように。

クラリーネの魔術は失敗していない。いや、むしろ成功したというべきだろう。でも、この光景は明らかにおかしい。

全てが存在しない。あるとしても箱の中を感じさせる空間。

「これが、あの子を形取る空間」

ほとんど話したことは無いが、見た限りでは明るい人物だったとクラリーネは記憶している。なのに、ここには何もない。これだと精神操作すら出来ない。

だが、クラリーネの頭に映像が急速に流れ込んできていた。

クラリーネは目を見開く。

何故なら、その光景は異形というべき黒い何かが逃げ惑う人を襲いかかっている光景。そして、街を破壊する黒い巨大な何か。

戦っている者の姿はない。逃げ惑う人々はほとんどがボロボロだ。

「何、これ」

クラリーネは後ずさった。こんな光景は見たことも聞いたこともない。いろいろな人の光景を見た中でも完全に異質。

精神風景というものは記憶に依存する。つまり、この光景は七葉が体験したもの。

「止めて」

クラリーネの頭の中にどんどん記憶が入ってくる。そして、見たものは、見知った武器が地面に突き刺さっている中で泣いている一人の少女。目の前には折れたレヴァンティンがある。

クラリーネはとっさに精神操作を止めて一歩後ずさった。

「あれは、何？」

「見た、んだ。あれが、今の私がここに、いる理由」

七葉がゆっくり立ち上がる。だけど、体に力が入らずそのまま倒れ込んだ。

「周兄、ごめん、ね」

七葉はそのまま眠るように意識を失った。

対するクラリーネは呆然と今の光景を考えていた。あれは、まるで。だけど、思考が現実に戻る。どうやら結界が突破されたらしい。

「くっ、クライン！」

クラリーネは慌てて倒れているクラインに駆け寄った。

第八十二話　敗北

亜紗は最速で地面を蹴った。

音姫が開けた結界の穴に最大出力を出した由姫の力が結界を無理やりこじ開けて、中に亜紗、孝治、悠聖が入る空間を作り出した。

「亜紗は先に行け。悠聖の召喚が終わったらすぐに向かう。外部と内部からの同時破壊魔術なら効くはずだ！」

孝治の言葉を背中に受けて亜紗は地面を蹴る。握っている刀を鞘から抜いて肩に担いだ。そのまま加速する。

亜紗の最速は第７６移動隊の中で最速。世界で見れば５０番内に入る速度だ。だけど、今はそれが遅い。

周が亜紗からの応答に答えなくなって少し時間が経っている。だから、亜紗は急ぐ。

校庭を見回して敵がいないことを確認した瞬間、結界が破壊されるのがわかった。亜紗はそのまま中庭に回り込む。

そこには周を抱きかかえるエレノアと七葉を壁に寝かす千春の姿が亜紗の目に映る。

亜紗は刀を構えた。

「動くでない」

エレノアが周に杖を向ける。周の体はボロボロで来ている制服はいたるところが破けていた。

周を人質に取られた以上、亜紗は動けない。

「そのまま刀を下ろしじっとしておれ。余は殺したくないからな」

エレノアの言葉に亜紗は素直に従う。そうしなければ周が傷つく可能性を考えると亜紗は何も出来ない。

エレノアは満足そうに頷いた。

「クラリーネ」

「わかっているよ」

亜紗は目を見開いていた。エレノアの声に反応したのまもちろん千春。クラリーネというのは『水帝』。つまり、都の近くにいた都の親友が敵だったということだからだ。

クラリーネはそのまま都に近づいて額に手を当てた。たったそれだけで都が崩れ落ち、クラリーネが抱きかかえる。

亜紗はスケッチブックを取り出した。

『都さんをどうするつもり？　天宮千春』

「ボクはもう天宮千春じゃないよ。『水帝』のクラリーネ。君達の敵だから。都は生贄に使う。狭間の鬼の生贄に」

亜紗は刀を握りしめた。周は一番誰かが犠牲になることを嫌う。だから、この場で止めないといけない。でも、その周が人質だ。

動きたいのに動けない。どうすれば、

「エレノア様、撤退準備が完了しました」

クラインの言葉と共にエレノア達の姿が闇に沈み始める。

「逃がすか！」

孝治の声が聞こえてくると同時に黒い閃光が空間を切り裂いた。それをエレノアは杖で弾く。その瞬間に亜紗は走る。

一歩目からトップスピード。そして、二歩目には限界を超える高速移動。距離にして１５の距離を亜紗は一瞬で駆け抜けた。

エレノアが反応するより早く抱きかかえられた周を奪い返し、離脱する。離脱すると同時に亜紗がいたところを頸線が砕いた。

「亜紗！　追撃だ！」

亜紗は周を起き走り出そうとした。だけど、すでにエレノアは胸の部分にまで闇に浸かっている。

「カーニバルを楽しんで」

その言葉と共にエレノア達の姿が消え去った。都と一緒に。

「周！　無事か！」

「七葉！　大丈夫か！」

孝治と悠聖が周と七葉に駆け寄る。

いたるところで破壊された痕跡があるということは周はたった一人で抵抗したのだろう。そして、負けた。

亜紗自身がいつの間にか精神操作されていたから。

「亜紗、大丈夫？」

光の声に亜紗はようやく自分が刀を握らない手のひらから血が出ているのがわかった。強く握りすぎて爪が皮膚に食い込んでしまったようだ。

亜紗はスケッチブックを片手で捲る。

「私のせい」

「それは違うと思うで。海道も音姫さんも完全に精神操作されていたみたいやから、亜紗一人のせいやない」

『でも、私が一番気づけたはずだった。私が気づいていたら、周さんは、あそこまでならなかった』

周の体はボロボロだ。ようやくやって来た由姫と音姫が慌てて周に駆け寄るのもわかる。

亜紗の目から涙が流れる。これは誰の目からもわかるほどの敗北。

周が起きたら一体何と言うだろうか。

「浩平か？　俺だ。今、どこにいる？」

由姫と音姫がやって来たことで周から離れた孝治がこの場に唯一いない浩平に連絡を取っていた。

『孝治か？　良かった。かなりヤバい事態だ』

「何かあったのか？」

浩平の声がいつもと違うことに気がついた孝治が浩平に尋ねる。

『学校から東にある山に魔物が出現！　数は大体６０００くらいか？　貴族派も今現れた。やべぇぞ。今、リースはアル・アジフに連絡してる。周は？』

孝治はチラッと周を見た。

由姫と音姫が必死に治癒をしているが意識が戻る様子はない。こういう時に孝治がすることは一つだけ。

「これより『ＧＦ』移動課第一部隊第７６移動隊副隊長花畑孝治は副隊長権限により隊長になる。浩平はリースと一緒に『ＥＳ』に合流。音姫さん、すぐに市役所に向かって避難命令。亜紗と由姫に悠聖は二人を病院に。俺と光は偵察に出る」

周が動けない以上、孝治が隊長として動くしかない。だが、今の状態では確実に全滅するのがおちだ。

「周、早くそろ。お前が起きるまで俺達は持っていてやるから」

その言葉と共に孝治は光と共に空に飛び上がった。

第八十二話　敗北（後書き）

次からが第一章前半終わりの戦いが始まっていきます。狭間市で最も長い1日と言われる戦いになる予定です。
意識を失った周と七葉。完全に動揺している亜紗。誘拐された都。誰もが平常心でいられない中、戦いが始まります。
由姫が決める決意の覚悟。亜紗と孝治の持つ神剣の力。ほとんど活躍していない悠聖と精霊達。アル・アジフの本気。未だにほとんど活躍していないメンバーからちょっとしたヒントを残してそのままにしている人物やすでに活躍しているメンバーまで総力戦で書いていく予定です。
ちなみに、一番活躍する予定なのは由姫と悠聖です。

第八十三話　由姫の決意（前書き）

決戦前日です。

第八十三話　由姫の決意

周が意識を失ってから1日が経った。

周の怪我はあまり酷くなく、魔力もほとんど残っているらしい。でも、激しく衝撃を受けたからか未だに意識が戻らない。医師の話によれば今日か明日には意識が戻る可能性が高いらしい。

「お姉ちゃん」

由姫は駐在所の事務机に座りながら資料を作成している音姫に話しかけた。

「お兄ちゃん、帰ってくるよね」

由姫が考えているのは4年ほど前のことだ。周が同じように任務中に意識を失った。状況としては似ているが、それが日本ではなく中東だったことから由姫は帰って来るまで心配で不眠症になったことがある。

音姫は小さく首を横に振った。

「戻って来たとしても間に合わないよ。任務には」

「作戦、決まったの？」

あれから住民の避難が無事に終わり、音姫と孝治がアル・アジフとこれからの作戦について話があった。

音姫は小さく頷いて書類をまとめる。

「弟くんみたいに上手い作戦は決まらなかったけど、方針は決まったよ。援軍を要請する」

「それは」

「わかってる。でも、住民が全員避難所にいる状況だから取れる案なの。住民を守ることは『ＥＳ』に任して、私達は貴族派の儀式場を攻める」

「お兄ちゃんは待たないの？　お兄ちゃんなら」

「多分、儀式は明日の夜行われる。結果がどうであれ、助けなければ都ちゃんが死ぬ可能性が高い。だったら、それより先に助ける。ただそれだけ」

由姫にはわかっていた。音姫ですら余裕がないことに。孝治や光はずっと偵察に行っているし、浩平とリースは『ＥＳ』で動いている。亜紗と悠聖はそれぞれ周と七葉の見舞い。

誰もが切羽詰まっている。多分、余裕が一番あるのは由姫だろう。

「最悪の場合、仲間を切り捨てるかもしれない」

「どういうこと？」

「鬼と対抗出来るのは私か孝治くん。だから、私達は確実に儀式場に到達する必要がある。もし、敵の数が多いなら、誰かを残す」

つまり、出来る限り敵を引きつける役目になる。この役目は死ぬ可能性がかなり高い。例え、それが天才であったとしても。

その言葉を聞いて由姫は口を開いていた。

「誰かを犠牲にして世界を救えたとしても、それは世界を救えたことにはならない。世界を救うということは、自分も仲間も知り合いも誰もかも救うこと」

それは周の信念。犠牲は認めない。誰も犠牲にさせないという周の意志。今ならその気持ちが由姫にはわかる。

「そんな勝ち方をしても勝ったとは言わない。都さんを救うなら、みんなで戻らないと。じゃないと、都さんが悲しむ」

「だったら」

由姫は初めて見ていた。音姫が泣いている姿を。

「だったら、どうしたらいいのよ！　私は弟くんみたいに上手く指揮が出来ない。戦うことしか出来ない。でも、どうやったら助けられるのよ！　理想ばかり夢見ても、弟くんみたいな実力が無ければ何も出来ない！　由姫ちゃんはそれがわかってない！　私だって、そんな作戦は取りたくない。仲間を見捨てたくない。だけど、ここで儀式を止めなかったら世界が危険にさらされる！　だったら、私が悪役になればいいだけなの！」

そして、ここまで取り乱している姿は初めてだった。精神が不安定になっている証拠だ。確かに、今回の任務は音姫の負担がかなり大きい。周が抜けたことでさらに大きくなった。だから、音姫もかな

り疲れている。不安定になるほど疲れている。

由姫は小さく頷いた。

「わかった。私が、その役になる」

「由姫、ちゃん？」

「お姉ちゃんがそんなに苦しむのは私が頼りないからだよね。私はこれでも愛佳師匠からの直伝だから。お兄ちゃんやお姉ちゃんにはまだまだ勝てないけど、八陣八叉流は対人戦よりも魔物と戦う方が強いんだよ」

由姫は聞いたことがある。八陣八叉流の始まりを。

八陣八叉流を作り出したのは里宮家ではあるが、里宮家は元々八陣流だけだったらしい。だけど、八叉流も極めた里宮家の人物が新しく八陣八叉流を作り出した。

今では八陣八叉流は武術の中で最強と言われているが、八陣流の時点で武術の中で最強と言われていただけだ。八叉流は異形と戦うために特化した攻撃武術。相手の攻撃ごと攻撃で叩き潰す力業。

「もし、そういう状況になったら、私を見捨てて。私はすぐに追いついてみせるから」

「駄目だよ。由姫ちゃんが死んじゃう。由姫ちゃんが死んだら弟くんはどうするつもり？」

「死なないよ」

由姫は断言する。そして、拳を握りしめた。

「私はね、ずっとお兄ちゃんとお姉ちゃんが羨ましかった。強くてかっこよくて、世界から天才と言われる二人が大好きだった。そして、二人の隣に近づきたいと思った。だから、愛佳師匠にお願いしたの。私を強くしてくださいって。するとね、愛佳師匠はこう返したの。強くなることは手段の一つじゃないって」

由姫はそれまで強くならなければ隣に立てないと思っていた。大好きな周の隣にいられないと思っていた。でも、愛佳の言葉で由姫は考え直す時間が出来た。

「私は、家族を守りたい。お兄ちゃんやお姉ちゃんの隣に立って戦うんじゃなくて、お兄ちゃんやお姉ちゃんを守りたい。家でも、戦場でも。だから、守らせて。お姉ちゃんを」

「辛いよ。その役目は本当に辛いよ。死ぬかもしれない。私や弟くんと会えなくなるかもしれない。それでもいいの？」

「大丈夫だよ。ヒーローは遅れてやってくるから」

そう言って由姫はにっこり笑った。そのヒーローが誰を指しているかはわかる。

「そっか。由姫ちゃんは私の知らない間にこんなにも強くなっていたんだ。だったら、私も頑張らないとね。由姫ちゃんを一人にしないように」

「大丈夫だよ。私達三人が集まれば最強なんだから」

その言葉に音姫が笑った時、駐在所のドアが開く音がした。そこに向かって二人が振り返ると、そこには愛佳と金髪の青年がいた。

由姫はすぐに駆け寄る。

「師匠、何か用事ですか？」

「はい。私達の守る場所を伝えに。私達は今から孤立している老人の皆さんの救出を開始します。それから避難所を守る予定です。それと」

愛佳が由姫にかけていたペンダントを渡した。由姫はそれを受け取って目を見開く。

「本当なら違反ですが、由姫に預けます。私の神剣を」

「『清浄』をですか？」

由姫はペンダントを握りしめた。そして、呼び出す。

由姫の右腕には籠手に近いナックルが身につけられていた。ただし、甲についているデバイスから奇妙な青い光が右腕全体を覆っている。

「私は手を出しません。相手がどんな手札を持っているか分からない以上、市民の皆さんを守ります。だから、使ってください」

清浄の力は由姫はよく知っている。５０年ほど前にも愛佳が使っていた神剣だ。その力は歴史上には残っていないが山を砕く力まである。実際に湖を割ったのを由姫は見ていた。

「ありがとうございます」

由姫は清浄をペンダントに戻して頭を深々と下げた。これがあれば由姫はさらに戦える。

「由姫、案件はもう一つありますよ」

そう言うと愛佳は横にズレた。

愛佳に隠れて見えなかったが、金髪の青年は箱を抱えている。

「お届けもんッスよ。啓ちゃん、白百合啓二からのお届けもんッス」

「お爺ちゃんから？」

由姫は箱を受け取って開けてみた。そこにあるのはナックルだ。ただし、清浄のような形とは違ってメリケンサックと言うべきか。特徴をつけるなら、赤色のデバイスがついている。

由姫は中に入っていた手紙を開いた。

「由姫へ。『ＧＦ』移動課第一部隊第７６移動隊に入隊おめでとう。愛佳師匠から話は聞いているから由姫がどれだけ強いかは知っている。だから、入隊祝いでこれを贈ろう。蔵の倉庫を掃除していたら見つけたものだから誰のものか分からないけど、使ってくれ。白百合啓二より。お爺ちゃん、どういうものか理解して贈って欲しかったな」

由姫は笑いながらナックルを取り出してはめてみた。ちょうど左手

用だったので右手に清浄、左手にもらったナックルを身につけて見る。

由姫は小さく頷いた。

「私なんかにはもったいないかも」

「私はいいと思うよ。愛佳さん、刹那さん、ありがとうございます」

音姫が二人に頭を下げる。由姫は音姫の言葉に首を傾げていた。

「お姉ちゃん、刹那さんって」

「俺のことッスね。初めまして。魔界魔王派魔界五将軍『雷帝』の刹那ッス。周とは親友をやってるッスよ」

魔界五将軍『雷帝』という言葉に耳を疑っていた。

「刹那さんは時雨さんの弟子なんだよ。弟くんとは親友で私も何回か話したことがあるの」

「そうじゃなくて、魔界五将軍が3人も？」

魔界に5人しかいない将軍が3人もいるのは明らかにおかしい。それほど狭間の鬼が重要視されているということだろう。

「ギルガメシュの親分は身内の争いに巻き込んだからって言ってたッスよ。俺からすればエレインもクラリーネも可愛いので戦いたくないんッスけど」

「ちょっとは戦ってくださいね」

愛佳がにっこり笑って言う。その笑みに刹那は微かに引いた。

「わ、わかっているッスよ。親分に怒られたくないッスから。後、リリーナ嬢にも」

由姫は頭を下げた。

「本当にありがとうございます」

「由姫、あなたは実戦経験を積めばはるかに強くなれます。その強さはあなたが求めているものではわかりませんが、戦いの中で見つかるものもあります。昔の私のように」

「はい」

由姫は頭を上げた。そして、両手を握りしめる。

「よろしくね、二人共」

第八十三話　由姫の決意（後書き）

次は亜紗の決意です。

第八十四話　亜紗の決意

狭間市立狭間病院。

狭間市の中央ではなく狭間市の中央から離れた公民館や市役所など、緊急時の避難所の近くにある病院。

その周囲には完全武装した『ＥＳ』の兵士や不安な表情で避難所に集まっている市民達がいる。

それらを見下ろすように病院の屋上には亜紗、アル・アジフ、浩平、リースの四人の姿があった。

「浩平。数は？」

リースに尋ねられた浩平はスコープのついたライフルから目を離した。

ちなみに、ここから山の方角には視界を散らす結界が作られており、いくらスコープなどで視界をよくしたところで人間離れした視力でなければ見えない。

「増えているな。奥の方に魔術陣が見える。悠聖のものに似ているから召喚魔術陣か？」

「着々と数を増やしておるようじゃな。数は一万と見るべきか」

「アル。さすがにヤバいと思う。他の穏健派への打診は？」

アル・アジフは首を横に振った。

「過激派が怪しい行動をおこしているらしい。誰も動けんそうじゃ。それに、第７６移動隊は援軍を要請した」

その言葉に亜紗がピクッと反応した。つまり、この地域に貴族派が押しかけて来るということ。

未だに目を覚まさない周が眠っている病院にも。

「数はまだわからぬが、今日本にいる時雨が部隊を率いるらしいの。明日には狭間市入りじゃ」

「ちっ、やべえぞ。このままだと援軍が来るより早く敵がここに押し寄せる。俺達第７６移動隊が突撃するとは言え、今の面々だとメンバーは６人。俺はお荷物だ」

それがわかっているから浩平は『ＥＳ』に身を置いている。

敵の中を駆け抜ける場合は立ち止まる隙はほとんどない。それに、浩平のポジションは後半からの射撃。リースがいるとはいえ無理だ。

「そうじゃな。我らも全力を尽くすとは言え、そなたらほど『ＥＳ』は戦力が整っておらぬ。この意味わかるの？」

「拠点防衛だろ？　あいにく、ここら俺が位置取る。この付近で一番大きい建物だしな」

そう言って浩平は方にライフルを担いだ。そのライフルを虚空に戻し、代わりにフレヴァングを取り出す。それを見ていたリースは小

さくため息をついた。

「動きはわかる？」

「結界内は無理だけど、結界外なら余裕だぜ。でもよ、相手の動きはおかしくないか？」

「ほう。そなたもわかったか」

「あのさ、俺がバカなのはデフォルトなのね」

浩平ががっかりしたように肩を落とした。そして、フレヴァングを山がある方向に向ける。

「今の貴族派がとるべき一番の作戦は攻めることだろ。ここを制圧して人質を作り出せば『ＧＦ』も『ＥＳ』も動けなくなる。そんな作戦は俺はいくらでも見てきた。それに、この病院には周もいる。人質にとれればどうにか」

「今の勢力バランスをわかっていない奴の発言だぞ。ほらよ」

いつの間にか屋上に上がってきていた悠聖が亜紗以外の全員にコーヒーの缶を投げた。浩平とリースが嫌そうな顔をして受け取るが悠聖は全く気にしない。亜紗には手渡しで渡す。

「あいつらはまだ警戒している」

「何をだよ」

「オレ達だよ。オレ達第７６移動隊。下手をすれば今の狭間市にい

る『ＥＳ』の数倍の戦闘能力を持ったオレ達を。実際に、全員がまだ本気出してないしな」

悠聖が片手でコーヒーの缶を開けて中身を呑む。悠聖の言葉に浩平は首をかしげていた。

わからないのも無理はない。『ＥＳ』にはアル・アジフとクロノス・ガイアという『ＥＳ』の中でも世界でもトップレベルの魔術師がいるからだ。それの数倍に匹敵する戦闘能力なんて普通は考えられない。音姫を除いて。

「オレも孝治も、音姫さんも亜紗も中村さんも、誰もが未だに全力で戦っていないんだろうな。特に、孝治は。あいつ、自分の力で一度凄まじい被害を出したことがある。周と同じだよ。あいつらは似ているんだ」

「しかし、実力を隠しているとはいえ、数倍というのは間違いではないかの？　よくて二倍。いや、三倍か」

「確かに、アル・アジフの言うとおりだ。普通ならな。だけど、オレも独自で調べていたんだ。どうしてここまでメンバーが集まっているか」

悠聖がポケットから資料を取り出す。それをアル・アジフは受け取った。

「これは、メンバーの家系か？」

「そう。オレを含める全員の家計だ。特に、周隊長と中村さんの家系図。聞いたことのある魔術師がごろごろしている。はっきり言う

なら、この二人の潜在能力は完全に未知数だ」

悠聖が作り出した家系図は確かに世界でも有名な魔術師の名前がたくさんあった。特に、周を中心とする家系。いとこに悠聖や七葉を含むが、その数は普通にしてはおかしい。

「まるで、わざとこうなったようじゃな。確証はないが」

「だろ。孝治は完全に突然変異だろうな。でも、偶然が一致しすぎている。もしかしたら、総長達はこのことが起きることをはるか過去から想定していたんじゃないか？」

「可能性としてはなくはないの。じゃが、そうなれば亜紗のことも理解していたはずじゃ」

アル・アジフの言葉に亜紗が肩を震わせた。全員が亜紗を見る。

「そなた、どうしたい？　このままここにいるつもりか？」

『私は、周さんのそばにいる』

亜紗がスケッチブックを見せる。それを見たアル・アジフは小さくため息をついて亜紗に一歩を踏み出した。そして、頬を勢いよく叩く。

「自惚れるな。そなた、今の自分がどれくらい足手まといかわかっておらぬじゃろ。そなたが今の周を守っても、自体が変わることはない。周はそんなことを望むと思っているのか？」

『私がしっかりしていなかったから周さんがあんなことになった。

周さんを守りたかったのに。守れないなら、こんな機械の体なんていらない。自分の力なんていらない』

「それは間違ってるよ」

「七葉！」

屋上に現れた、松葉杖をつく七葉に向かって悠聖が駆け寄った。七葉は悠聖に笑みを浮かべる。

「無事か？」

「大丈夫だよ。亜紗さん、千春さんじゃなかった。クラリーネの浸食術式は極めてすごいよ。人の心を覗き込み、そして書きかえる。『水帝』と呼ばれるだけのことはあるね」

その言葉にアル・アジフとリースが驚いたような顔になる。

魔術師だからこそわかることだが、他人の精神に入りこむのは案外簡単だ。だけど、それが書きかえるのなると難しいという言葉では言い表せなくなる。簡単に言って不可能を実現するようなものだ。

人の精神に作用するためにはその人の精神の波動を見つけないといけない。そして、その波動にシンクロしてようやく第一段階が終了。次には記憶を整理して違和感なく作ったり繋げないといけない。この動作はコンマ1秒単位でしなければならないのでほとんど無理だ。最後の動作が精神感情の整理。これはある意味禁断領域と言ってもよく、ここに侵入して操れる術者は世界を見ても一人もいない、はずだった。

「亜紗さんが責任を感じるのはわかるよ。でも、周兄はそんなことを望んでいない。周兄が望んでいるのは亜紗さんが自分らしく生きることだと思う。もし、亜紗さんが周兄のそばにいたいなら私は文句はいわない。誰にも文句は言わせない、でも、亜紗さんはどうしたいの？」

七葉は亜紗に近づいて亜紗の手を握った。亜紗は困惑したようにスケッチブックを捲る。

『私は』

「自分で決めて。私は自分で決めてここに来ている。実力がないのはわかるよ。でも、実力がなくても、自分がしたいことをやる。それを周兄は求めているんだと思う。亜紗さんはどうしたいの？」

その言葉に亜紗は顔を上げた。そして、頷く。何かを決意したように。

『周さんの居場所を守る。周さんが起きても、元の場所に戻れるように戦う。悠聖君、音姫さんに伝えて。私も突入部隊に入れてくれるように』

「ああ、そのことだけどよ」

悠聖は気まずそうに、

「音姫さんの中だと確定事項らしい。絶対に亜紗は戻ってくるって断言していた。それよりも、自分の足で伝えに行けよ。それが一番だろ」

『ありがとう』

亜紗はそのまま病院の屋上のフェンスを蹴って跳んだ。そのまま器用に建物の屋上に飛び乗って最短距離で駐在所に向かう。

「少し気になったんだけど、亜紗さんのスケッチブックってどうなっているの？　捲るたびに話したい内容が書かれているんだけど」

「あれか？　あれは周隊長が特別に作り出した魔術器の一種だぜ。亜紗の感情を読み取って文字にするもの。おかげで隠し事が出来ないとか言っていたっけ」

そう言って悠聖は笑った。だが、アル・アジフだけがそのことを聞いて背中に汗を流している。

アル・アジフはそれを作ったのが時雨や慧海など魔術器に詳しい面々だと思っていた。だけど、実際は全く違っている。あのタイプは軍事面では実用化されているが、それは完全なトップシークレットで子供に理解できる式ではない。だけど、それを作り出した。いや、軍用のものより高性能なものを。

周が本当に天才なのは戦闘ではなく機械工学ではないかと思いながら。

第八十四話　亜紗の決意（後書き）

次は囚われの姫である都のことです。

第八十五話　都の思い

山の中間部にある広い丘。そこに都は捕らわれていた。別に拘束されているわけじゃない。ただ、そこにいるだけだ。

都自身も周囲が貴族派の魔物が守っている上に、近くにエレノア達がいるため逃げられないとわかっている。

だから、都は正座したままずっと物事を考えていた。

「エレノア様。大人しいですね。明日生贄になるのに」

エレノアの横にいたクラインが都を話しかける。それを聞いたクラリーネは小さく溜息をついた。

「クライン、都は希望を捨てていないだけ」

「希望を？　『ＥＳ』は市民を守るために動くため第７６移動隊しかいない。だが、第７６移動隊の主力は」

「第７６移動隊は周君一人の部隊じゃない」

クラリーネが暇そうに槍を回しながら答える。

「第７６移動隊のブレインは確かに海道周だよ。でもね、海道周の実力は第７６移動隊の中で下から数えた方が早いから」

「バカな。海道周は人間の中で最強と言っていたのはクラリーネではないか！？　何故、それを」

「違います」

否定したのはクラリーネではなく都だった。都は目を開けてクラインを睨みつける。

「周様は確かに最強です。あらゆるポジション、あらゆる支援が可能なオールラウンダー。単体では弱くても、戦場で動けばあらゆる状況をかき乱し自由自在に動き回る最強の兵となりえます」

本来、普通はポジションが存在する。

フロントならフロント。バックならバックと普通は得意なポジションを維持したまま戦うはずだ。でも、周は違う。あらゆるポジションに入りあらゆる支援が可能。つまり、弱点がほとんど無いということ。

「だが、エレノア様には負けた。それをどう説明する」

「一芸特化には勝てません。周様が最も活躍出来る戦場は総攻撃時。チームが完全に攻撃をする場合です」

周の最大の弱点を上げるとするなら一芸特化との1対1は極めて難しいということ。だけど、引き分けにするのは得意でもある。

都はそれがわかっているから動かない。動き回って怪我をすれば周が悲しむことを知っている。

「ほう、巫女。お前は怖くないのか？　明日、お前は鬼から初めてを奪われ、子供を無理やり作らされる。それに怖くはないのか？」

「小物ですね」

都はクラインの顔を見ながら笑った。

「すでに覚悟しています。そして、周様に助け出されることも」

「き、貴様」

「クライン、だめ」

クラリーネはクラインの前に頸線を展開していた。クラインは舌打ちをして踏み出そうとした足を止める。

クラリーネは頸線を直した。

「あなた達も覚悟した方がいいと思います。千春が一番わかっていますよね。第７６移動隊の強さを」

「ボクは千春じゃなくてクラリーネだよ」

「いえ、あなたは千春でありクラリーネです」

都は真っ直ぐクラリーネの目を見つめた。

「第７６移動隊の主戦力は副隊長の二人。そして、部隊にいる異名持ち。その方々が戦線を支えます。周様が抜けたとしても、強さはほとんど落ちません」

「都は信じているんだね。でも、無理だよ。ボク達はすでにそれを

計算している。第７６移動隊の強さもわかっている。彼らに味方を見捨てる勇気があるなら、ここまで辿り着けるはずだよ」

その言葉に都は渋い顔になった。第７６移動隊は本当に仲がいい。だけど、それは仲間を見捨てにくいという意味と同じだから。

クラリーネは山の麓を見下ろす。

「ここに来た時は、誰かを見捨てた時。それほどに覚悟があるならボク達が全力を持って相対する。そして、叩き潰す」

「そうですか。わかりました。千春、一つだけ聞かせてください」

都はクラリーネではなく千春と呼んだ。

「琴美はどうなっていますか？」

「わからないよ。気絶させて校舎に置いてきたけど」

「なら、希望はあります」

都はにっこり微笑んだ。

「私達の勝ちです」

「なっ」

都の急な勝利宣言にその場にいた誰もが息を呑んだ。そして、クラリーネは都に駆け寄る。

「琴美がいるからどうっていうのよ。たった一人に何が出来ると思っているの？」

「千春は知りませんでしたね。琴美って薬草について詳しいのですよ」

そう言って都は頷く。

「それはもう、よく効く薬です。実際に、琴美の医薬は狭間市の医者すら手本にしますから」

「そ、そんなもので事態が好転するとでも」

「良薬は口に苦し」

その言葉に千春は首を横に振る。

そんなことで意識不明の周が起きるとは思っていないからだ。でも、都は信じている。

「私は友達を信じます。そして、周様を信じます。あなた方が自分達の力を信じるように、私は大切な人達を信じる。ただ、それだけです」

「信じるだけで何かが好転すると思ったら間違いだよ。そんなことで都が助かるなら、この世にはもっと助かっていい人達がいる。信じて救われるならボクは神だって人だって崇めてあげるよ。でも、現実はそうじゃない。何もかもが思い通りにはいかない。私達は儀式を成功させる。都には犠牲になってもらう。だから」

「誰かを犠牲にして世界を救えたとしても、それは世界を救えたことにはならない。世界を救うということは、自分も仲間も知り合いも誰もかも救うこと。周様の信念です。千春、あなたは自ら動かないのですか？」

クラリーネは音がなるくらいまで歯を噛み締めた。そして、都の首を掴む。

「何がわかる！　都に、ボクの何がわかるの！　ボクは、ボクは」

首を絞めたのは一瞬のこと。千春はその場に崩れ落ちた。

「世界を救うために、ボク達は戦っている。邪魔はさせない。エレノア、行ってきてもいい？」

「そなたが決めたなら余は何も言わない。だが、必ず帰ってくると約束するなら」

「約束するよ。琴美を殺してくる」

その言葉に都が立ち上がった。

「駄目です！　琴美はあなたの親友でも」

「うるさい！　僕はやらなくちゃ駄目なんだ」

クラリーネはそのまま走り出した。都はクラリーネを追いかけようとしだがクラインが道を塞ぐ。

「琴美、無事でいて」

第八十五話　都の思い（後書き）

決戦当日にはなかなか入りません。後二話ほど前日の話です。次は『ＥＳ』の隠し兵器が登場します。

第八十六話　真柴悠人

クラリーネは山の中を駆ける。

必死の探知で見つけた場所は街とは反対側にある山の中だった。おそらく、薬草を探しているのだろう。

クラリーネは市街地を迂回して走っている。何故なら、市街地には誰かわからないが強大な力を持つ者が走り回っているからだ。主に市街地と避難所を往復しているようだが、出会った場合はクラリーネの実力ではどうにもならない。

「都、ごめん」

クラリーネは胸の中で都に謝る。もう、千春に戻る気はないから。

「琴美は、いた」

クラリーネの頸線の一本が琴美を見つけた。そのままクラリーネは地面を蹴って琴美の場所に向かう。

「出会い頭で殺す。一撃で。痛みを感じさせないまま」

頸線から槍を作り出し琴美に向かって飛びかかろうとした瞬間、横手から魔力エネルギーの塊がクラリーネに向かって放たれた。

あまりの予想外の一撃にクラリーネはギリギリで受け止めるが弾かれてしまう。

そのままクラリーネは地面に転がった。

「誰！」

相手を確認する暇なく収束したエネルギーがクラリーネに迫る。クラリーネはそれを槍で受け止めた。

前にいるのはまだ子供だ。平均身長より低い周よりも小さい子供。完全に小学生。

その小学生が身につけているのは下半身が極めて大きなパワードスーツ。背中には翼のようなものがついている。ただし、クラリーネが知るサイズよりも五回りくらい小さい。

その手に握られているのは背中にパイプが繋がって円筒。そこから収束した魔力エネルギーをクラリーネは受け止めている。

「琴美さん！　急いでください！」

「わかったわ」

クラリーネが距離を取る。対する相手は動いてこない。

「君は、誰？」

「僕の名前は真柴悠人。『ＥＳ』穏健派アル・アジフさんの直属部隊」

「どういう意味？」

クラリーネが眉をひそめると悠人は首を傾げた。

「名乗るならこう言えって教えられたようにやったけど？」

悠人自身意味を理解していなかった。クラリーネは悠人に向かって槍を構える。

悠人を無視して琴美に攻撃しようとすればクラリーネはやられる。悠人は円筒からライフルに持ち替えているからだ。

受け止めた時の収束率から考えて頸線でそらすことは不可能。

「倒すしかないか。魔界五将軍の一人『水帝』。行くから」

クラリーネが地面を蹴る。悠人はすかさずライフルの引き金を引いた。だけど、クラリーネはそれを避けて槍を突く。腕を動かした悠人が槍を受け流した。

「もらった！」

クラリーネの手が悠人のかぶっているメットに触れる。

「ハッキング！？」

悠人はすかさず逆噴射を使ってクラリーネから無理やり距離を取った。クラリーネは逆噴射の勢いに弾かれる。

「単発だと当たらないなら」

その間に悠人はすごい速度でライフルの一部を操作する。クラリー

ネはその隙に一気に踏み込んだ。

精神操作は出来ない。だから、槍で殺す。

悠人がライフルを構える暇なく距離を詰め、槍を突く。クラリーネの知るパワードスーツなら絶対に避けられない攻撃。でも、悠人は避けた。

悠人が浮いたと思った瞬間、その場で回転する。よく見ると背中の翼からエネルギー粒子が溢れていた。悠人は片手で槍を掴みつつエネルギー粒子の方向性を変えてクラリーネを蹴りつける。蹴りつける際も太もも部分からエネルギー粒子が溢れて加速した蹴りだ。

クラリーネはとっさに腕で受け止めるが腕が折れる音と共に吹き飛ばされる。

「かはっ」

地面を転がりながらクラリーネは肺の中の息を吐いた。

完全に油断していた。相手のパワードスーツは今までに存在したパワードスーツとは桁が違う。理想に最も近い戦場で使えるパワードスーツ。

クラリーネは槍を頸線に戻してその頸線を槍に再度戻して手に持つ。

悠人はクラリーネにライフルを向けていた。

「本気、行くよ」

クラリーネが静かに槍を片手で構える。本気でいかなければやられる。相手が苦しむことを考えていたら駄目だ。

悠人は内心焦っていた。実は、悠人がこのパワードスーツを使うのは初めてだ。悠人が狭間市にアル・アジフと一緒に来たのは森林での戦闘時における新型パワードスーツの実験だったからでもある。

悠人は地面を蹴った。そして、クラリーネに向けてライフルの引き金を引く。クラリーネは頸線を一気に展開して飛び上がった。

ライフルから放たれたエネルギー弾が分裂する。まさにショットガンだ。

頸線にぶつかったエネルギー弾は軌道を変えて不規則に森の中を駆け回る。でも、それは悠人からすれば気にすることじゃない。

「シールド最大。ブレード展開」

悠人がすかさずパワードスーツの設定を変える。防御力を最大限まで高くして円筒を手に取る。すると、円筒から収束したエネルギーが形成された。

下半身のペダルを操作してパワードスーツの翼からエネルギー粒子を吐き出す。このパワードスーツが飛ぶ原理は力技なだけだ。

クラリーネは頸線を一気に悠人に放った。だけど、その頸線は悠人がパワードスーツを回転させた瞬間に全てが断ち切られる。

悠人は飛び交う散弾を身に受けながら肩からクラリーネにぶつかった。

クラリーネはそのまま吹き飛ばされて地面に転がる。
悠人はそれを見届けた後、円筒をしまって身を翻した。

「琴美さん？　琴美さん？」

「ここよ」

琴美の声に反応して悠人は琴美の場所に向かって飛んだ。地面に着地すると琴美が持っている籠の中にはたくさんの薬草が詰まれている。

「このまま家までお願い。薬が出来るのは多分明日の朝方になると思うわ」

「わかりました。しっかり掴まっていてくださいね」

悠人は琴美を抱きかかえると翼からエネルギー粒子を出して森の中に消えていった。その様子を見ていたクラリーネが小さく笑う。

「相性、最悪だったね」

頸線で弾けない攻撃。従来のパワードスーツではありえない機動力。精神操作に対する防御性能。頸線で貫けない装甲。

「完敗だね」

クラリーネはゆっくり立ち上がる。腕の骨は折れて肋の骨にもひびが入っているに違いない。それでも、戻らないと。

「約束、したから」

「あいにくだけど、それはさせないよ」

その声にクラリーネはゆっくり振り返った。そこにいるのは純白の服を着た青年。腰には日本の刀。純白の刀と漆黒の刀。

「どうして、ここに」

クラリーネは痛む体に力を入れて槍を構えた。

「『GF』機動科第一部隊第一特務副隊長、ギルバート・R・フェルデ」

ギルバートは純白の刀を抜く。

「さっきの情報を持ち帰らせるわけにはいかない。だから」

ギルバートが地面を蹴った。

「参る！」

第八十六話　真柴悠人（後書き）

『ＥＳ』の隠し兵器こと新型パワードスーツでした。ちなみに悠人しか使えません。
ブースターからスラスターまで全て足下についてあるペダルで操作。機体設定の変更は感応システムを使った制御。エネルギー媒体は全て魔力。
他の人が使えば微調整が出来ず木にぶつかって終わります。

第八十七話　アル・アジフの考え

アル・アジフの目の前には巨大なコンテナがある。大きさは大体２０ｍ弱ほどの大きさだ。

先ほど、ここまで輸送された。費用はかなりかかったがそれに応じた戦果は出るであろう。

「対魔物に使えるかどうかじゃな」

アル・アジフはコンテナを見上げながら言う。コンテナの中身はある意味データ採集のためだ。そうでなければこれほど強力なものは使わない。

「これが、第三世代型フュリアスですか？」

その言葉にアル・アジフは振り返った。そこにいるのは愛佳と刹那の二人組である。

愛佳達がアル・アジフの横に立ち止まる。

「そうじゃ。第三世代型フュリアス『ダークエルフ』。フュリアスの中で実戦配備する初号機じゃ」

「これが噂のフュリアスッスか。噂のパイロット君はどこッスか？」

「もう寝ておる」

そう言ってアル・アジフは空を見上げた。そこに輝いている月を愛

佳と刹那も見上げる。

アル・アジフは小さく息を吐いた。

「明日、じゃな」

「そうッスね。日本で起きる戦いの中ではかなり大規模な戦いになるッスよ。『ＧＦ』、『ＥＳ』、そして、魔界。三勢力が戦うのは初めてではないッスか？」

確かに歴史上この三勢力が同時に戦ったことはない。実際は『ＧＦ』と『ＥＳ』が出来たものの、それから魔界からの侵攻がないだけだ。魔界も勝てる勝算の無い戦いはやらない。

アル・アジフは小さく息を吐いた。

「本当なら、こんなものは使いたくなかったのじゃがの」

「そういうもんッスかね。まあ、身内が戦っているのでどうこうは言えませんが。でも、第三世代型。『ＥＳ』で極秘裏に試験がされている第二世代型を差し置いて実戦投入ッスか。ある意味凄いッスね」

アル・アジフからすればそのことの方が驚いてしまう。確かに、第二世代型フュリアスが完成していることは知る人は知る。だけど、試験が行われているのはとある地下にある訓練場であり、その事実を知る者は本当に一握りしかいない。

アル・アジフの視線に気づいた刹那が小さく笑みを浮かべた。

「自分の独自ルートッス。一応、これでも『雷帝』と呼ばれる身ですから」

そう言って刹那は肩をすくめた。

アル・アジフはまたため息をつく。

「おそらく、そなたが知るフュリアスとは機動性が桁違いじゃぞ。ただ、パイロットが本当に限られてくる」

「そうですね。精神感応システムに適応した人物で、かなりの反射神経を持つ人物。この街で適合するなら海道周ただ一人」

「悠人の場合は才能じゃ。機体動作から細かな作業まで間違うことなく手足のようにやりおる。それが、フュリアス、いや、パワードスーツを使っていてどれだけ難しいかも理解しておらぬ」

パワードスーツを使う場合、最大の弱点となるのがその機動性だ。防御力や攻撃力はけた違いに上がる可能性もあるが、機動性だけはどうにもならない。今のところ、試験運用がされているのは砂漠や草原など広大な面積を誇る場所。つまり、一番の防衛戦で重要となる街中での戦いでは細かな制御が出来ず使用できない。しかし、それは乗る人によって完全に化ける。

「我の考えでは、悠人は全て感覚で操っておる。それがなんであれ、天性の才能としか言えぬ。あの初期型パワードスーツで『ＥＳ』過激派主力部隊を全滅できるわけがない」

あの時の戦いをアル・アジフはしっかり見ていた。

はっきり言ってどこかの物語にあるチート主人公とでも言うべき機動性だった。そして、それを軽々と操ったのは乗ってから時間の経っていない子供。だから、アル・アジフは悠人専用のパワードスーツとフュリアスをオーバーテクノロジーを駆使して作り出した。

「我は悠人に希望を見つけたのじゃ。そなたらが周に希望を見つけたように、悠人なら、今の世界でたくさんの人を救う主人公になれる。我の勝手な妄想じゃがな。でも、周や悠人を見ていて思うのじゃ。我の役目はそろそろ終わりではないかと」

「アル・アジフは、やることを成し遂げたと思うのですか？」

「どうじゃろ。でも、我が夢見る世界は周の夢見る世界と似ておるはずじゃ。誰かを犠牲にして世界を救えたとしても、それは世界を救えたことにはならない。世界を救うということは、自分も仲間も知り合いも誰もかも救うこと。昔、我が出来なかったことを、周はしようとしている。そのために強くなっている。そなたらは知っておるか？　周の友好関係を」

二人は首を横に振った。それはそうだ。知っていたら驚くだろう。

「我が調べた限り、主要な国家の人物と知り合いじゃ。もちろん、『ＧＦ』内を通してや、それぞれの国家の若手実力者を通して絆を深めておる。周はやろうとしているのじゃ。不可能と思えるような夢を、それを現実のものにするために」

「子供の頃にある夢に似ていると言えば全て済みますが、彼が目指すスタイルは器用貧乏ではなく『完全無欠（オールラウンダー）の万能』とするなら現実味が出ていますね。でも、それは」

「難しい。本当に難しいことじゃ。でも、そんな未来を目指しても我は良いと思うのじゃ」

空を見上げるアル・アジフの顔がほんのり赤くなっていることに愛佳はクスッと笑った。

「もしかして、恋、したとか？」

その言葉にアル・アジフの顔が真っ赤に染まる。言った本人すらそんなことが起きるとは思っていなかったのか呆然としていた。

アル・アジフは落ち着かない動作で愛佳を見ている。

「そ、そんなことはないぞ。わ、我はまだ誰にも恋したことはない。だから違うのじゃ。そこ！　腹を抱えて笑うな！」

笑い転げている刹那に向かってアル・アジフは魔術書を開いた。

夜は深まっていく。決戦の日を待ち遠しいという風に。

第八十七話　アル・アジフの考え（後書き）

次から始まります。
新たな未来を求めての前半最終決戦です。

第八十八話　狭間市の長い一日　始まり（前書き）

前半の最終決戦が始まります。

第八十八話　狭間市の長い一日　始まり

エレノアはゆっくり立ち上がった。そして、周囲に控えている配下に向かって尋ねる。

「クラリーネは？」

「街とは反対側の方向でシグナルロスト。数人向かわせましたが同じように報告が途絶えました。一瞬でなくなったことから相手はかなりの実力かと」

「そうか。なら、仕方ない。今宵、余達は世界を統べるための行動を開始する。だが、『ＧＦ』は余達が送った分を無視して増援を送ってきた。これより、狭間の街に攻撃を加える。躊躇する必要はない。滅ぼし、壊しつくせ。指揮はクラインに任せる」

「はっ」

クラインが頭を下げながらにやりと笑みを浮かべる。

「結界を解け。そして、進軍しろ！」

『おぉーっ！！』

貴族派たちの声が狭間市に響いた。

浩平がライフルのスコープから目を離した。今、結界が消えて浩平の視界に都の姿が映る。

「リース、起きろ」

浩平はすばやく横にいたリースに声をかけた。リースはすぐに目を覚まして浩平の横から身を乗りださせた。確かに、リースの視力でも山の中間部が見えるようになっている。

浩平はライフルに特殊弾頭を詰め込むとそれを空に向かって打ち上げた。

特殊弾頭はひゅるひゅると高い音を上げて大きな音で爆発した。

「ついに始まったか。リース、気合い入れて行けよ。絶対に住民に被害は出させないからな」

「始まったか」

アル・アジフは病院の屋上から上がる特殊弾頭を見ながら呟いた。近くには『ＥＳ』のメンバーが半分近く集合している。隣にはパワードスーツを着込んだアル・アジフの姿。

アル・アジフは一回深呼吸をして面々の顔を見つめた。

「我ら『ＥＳ』はこれより『ＧＦ』と共同戦線をとる。今回の敵は利益に目をくらんだ『ＥＳ』過激派ではない。魔界の貴族派じゃ。我らは、狭間市の皆を守るために戦う。勝利条件は誰も死なないこと。死なせないこと。犠牲になることも許さぬ。それが、今回の勝利条件じゃ。我ら『ＥＳ』の力を『ＧＦ』に見せてやれ！」

「始まったね」

音姫は静かにそう言った。すでに第７６移動隊の突撃部隊は狭間市の中心にある広場前に集まっていた。ここから目的地まで一直線。実にわかりやすい。

音姫が身につけているのは光輝。最初から全力であることの証。

そして、第７６移動隊の突撃部隊全員はいつもと服装が違っていた。魔力によって編まれた服である戦闘服。孝治と悠聖以外が黒と白の戦闘服を身につけている。孝治は全て真っ黒で悠聖は真っ青だ。

「光、大丈夫か？」

孝治はそばにいる光に尋ねていた。光は小さく頷いてレーヴァテインを握りしめる。

「大丈夫や。今回の作戦はうちらがキーポイントやしな」

孝治と光の二人は空からの援護射撃と空の敵の清掃。最悪の場合、

光が囮になることが決まっている。

「ああ」

孝治はそう言って腰のポーチの中にあるエネルギー体の数を確認する。ポーチの中にあるのは単三電池の数は約１００。その内の３つを孝治は黒い剣の柄につけた。

「キーポイントね。というか、オレの活躍をみんな見ておけよ」

悠聖はにやりと笑みを浮かべる。実際に、悠聖がこの狭間市に来てからほとんど活躍していない。

確かに能力は強力はだが、使えば鬼を呼び寄せるため使えなかった。

『大丈夫。周さんも私もみんな実力は知っているから』

亜紗がスケッチブックを捲り、悠聖を慰める。だけど、首を傾げたのは由姫だった。

「悠聖さんは強いんですか？」

「そりゃ強い、はずだと思う。うん、自分でもわかんね」

そう言って悠聖は笑った。笑ってデバイスである指輪を見つめる。

「強い弱いの問題じゃない。自分の意志でやるかやらない」

悠聖は拳を握りしめながら言う。

「それだけだ。自分が後悔しない道なら、例え死んでも悔いはない。まあ、死ぬわけにはいかないよな」

そう言って悠聖が見るのは微かに見える病院の屋上。孝治は頷いた。

「行くぞ。周に顔向け出来ない戦果は作る気はない。第７６移動隊出撃」

その頃、周の病室内はすごいことになっていた。周の病室は個室であるため窓は完全に開いたままである。そこの近くでは病人が退避していた。

「うへっ、臭い」

周が眠るベッドの近くで鼻を摘みながら七葉が言う。七葉が言っているものは琴美の手の中に握られていた。

ほぼ黒に近いドロドロの液体。

琴美が配合した薬らしい。ただ、今回のは特別性。

「琴美さん、これ、周兄は死なないよね？」

その言葉に琴美は全力で顔を逸らした。

とりあえず、漢方やら独自の薬草やら家にあるありとあらゆりものを配合した上に、気つけ薬としての成分を入れて完成したもの。滋養強壮の効果があるものもバカみたいに入っているため時間が経てば即戦力として戦える可能性がある。ただ、

「それに、どうして2Lくらい作っているのかな？」

琴美の額に汗が流れていた。

量が凄まじい上に色が真っ黒で臭いがヤバい。これでマズくなければおかしいとしか思えない。

「体にはいいわよ。体には」

「ちなみに、材料は？」

「聞きたい」

「止めておきます」

多分、聞いたら七葉は全力で止めていただろう。何故なら、地味に毒まで入れてある。もちろん、致死量なんてほど遠いくらい少ない。

「都を助けるには起きてもらうしかないわ。だから、恨まれても構わない」

「ある意味叩き起こすより凶悪かも」

琴美はそれを別の容器に移し替えると、そのまま周の口の中に突っ込んだ。

周は無意識のまま喉を動かし、そして、吹き出した。

「ぶほっ」

シーツやら壁やらに黒い物体がへばりつく。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ。悪夢だ。悪夢を見てた」

「周兄！」

起き上がった周に七葉は飛びついた。周はわけもわからず七葉を受け止める。

「あがっ」

そして、痛みのあまり悶絶した。

診断はされていないが、周の体にはいたるところにひびが入っている。『強制結合』でくっつけているだけだが、痛みまでは隠せない。

「周兄？」

「すまん。離れてくれ」

脂汗をかきながら周は七葉をゆっくり離した。その時にようやく現状を理解する。

「状況は？」

「今さっき、貴族派の侵攻があったよ。みんなは貴族派の儀式場に突入している」

「音姉が援軍を要請したか。突撃ってことは貴族派の面々と鬼を倒すつもりだな。突撃する場所はおそらく中央から。空からの爆撃をしつつ囮を出して儀式場に到着。アル・アジフ達『ＥＳ』面々は市民の護衛。違うか？」

「あなた、本当に今まで寝ていたの？」

確かにそう言われかねん言葉だった。まるで、今まで全てを理解していたかのように。

「推測しただけだ」

「そう言えば、あなたの異名に『絶対必中の占い師』というものがあったわね」

「否定はしない」

ちなみに、それは裏業界で使われることで、意味は、海道周が相手にいるなら普通に戦え。そっちの方が被害が少ない。というものだ。簡単に言うなら状況がどうなるかを推測するのが得意ということになる。

「そうだとしたら、行かないとな」

「周兄、今まで意識が無かったんだよ。それなのに」

周は近くにあった薬の入った容器を掴む。

「効果は？」

「滋養強壮。痛み止め。気つけ」

「完璧」

周はそれを一気にあおった。もちろん、一瞬で青くなるのはご愛嬌。でも、周は必死に中身を飲みきり、そして、口を離した。

七葉も琴美もポカンとしてそれを見つめ、周は一回だけ吐き出しそうになりながらも息を整える。

「マズい。苦い。飲み物じゃねえ。薬でもねえ」

周の顔は真っ青だが周はレヴァンティンを掴んだ。レヴァンティンがそれに反応して剣を形取る。

「七葉は防衛に参加してくれ。クラインの『影写し』に対して最も効果的な武器は頸線だからな」

「うん。でも、周兄は大丈夫？」

周はレヴァンティンを腰に身につけた。

「戦闘服、リロード」

周の服装が変わる。色は青色。だけど、白い部分も多い。

「みんなが頑張っているのにオレだけ戦わないのは嫌だ。それに、都は待っている。オレ達を」

オレは息を吐いた。

「待ってろよ、狭間の鬼。お前はオレがぶっ潰す」

第八十九話　狭間市の長い一日　アル・アジフ

貴族派が進攻してくる。姿は様々であり人と同じ姿のものもちらほら見受けられる。

彼らが目指しているのは狭間市市民が避難している避難所区域。そこに行くまでには頑固なバリケードがいくつもあったが、貴族派はそれらを破壊していた。先頭に立って指揮しているのはクライン。

「ふっふっふっ、人間共め。我らよりも下等な存在でありながら反抗しおって。皆殺しだ。『ＥＳ』だろうが我の前には雑魚同然よ」

「ほう、それは自信過剰というものではないかの？」

クラインはその声に空を見上げた。そこには魔術書を開いているアル・アジフの姿がある。

「これはこれは、『ＥＳ』穏健派代表のアル・アジフ殿ではありませんか。大人しく『ＥＳ』を下げれば我らはあなたを敵とは思わないでしょう」

「こういう状況でそういうことを言うのか。そなたは哀れじゃな」

アル・アジフが腕を横に振る。

「我が名はアル・アジフ！　全ての魔術書の原典にして超越する力を持つ者！　市民には一歩も手は出させぬ。我がここでこの道は食い止める」

「あなたが止めたところで、他の者は別ルートを通っていきますよ。食い止めたところで何ら影響はない。デーモン隊、アル・アジフを落とせ。地上からも支援砲撃を」

空からアル・アジフに向かってデーモンが襲いかかる。それを見たアル・アジフは少しだけ笑ったようにクラインから見えた。

魔術師は接近戦に弱い。それは世界にいるあらゆるに共通する言葉だ。だけど、アル・アジフみたいな魔術書の原典がただ魔術を極める作業をするわけがない。

デーモンの槍を避けたアル・アジフはそのまま腕を振り切った。空中にいたデーモンが六体ほど同時に体の半ばから裂ける。アル・アジフの手から出ているのは光の刃。

「我がただの魔術師だと思ったか？　たわけめ。我はただの魔術師ではない。最強の魔術師。接近戦もお手の物じゃ」

「だが、限界はあるはずだ。息つく暇なく」

「わかっておらぬの」

アル・アジフは魔術を発動させた。たったそれだけでアル・アジフに襲いかかったデーモンが全ていなくなる。蒸発したと気づくには少しの時間がかかった。

「我を倒したければエルノアを出すのじゃな。我は、ただでは負けぬよ」

「くっ、人間風情が。闇に呑み込まれろ！」

クラインはいくつもの魔術を同時に展開しアル・アジフに放つ。アル・アジフは反射的に魔術を発動しようとした。だが、クラインの魔術属性は闇。速度は遅いが吸収能力がある。さらには他の貴族派も魔術を放ってきていた。

さすがにこれはアル・アジフも対抗しにくい。だから、アル・アジフは地上に降り立った。

クラインや貴族派の誰もが動きを止めてアル・アジフを見ている。

アル・アジフは静かに魔術書を開いた。

「我が呼び声に答えよ。我が剣よ」

アル・アジフが開いたページから一本の剣が現れる。アル・アジフはそれを引き抜いた。

剣の形は特徴的で刃が波立っている。言うならフランベルジュ。

「我が魔術によって打った剣じゃ。並大抵の攻撃で倒れるも思うなよ」

「な、なんとでも言うがいい。そんな剣一本でこの軍勢に勝てるとは思うな。我らにはまだ切り札が存在している」

「切り札か。我はすでに出しておるよ。『ＥＳ』穏健派の切り札を。さて、ここを通りたければ我を倒せ」

「いいだろう。全軍、突撃！」

クラインの号令と共にアル・アジフに向かって貴族派が殺到する。
最初に到達するのはヘルハウンドの群れ。

アル・アジフはしっかりフランベルジュを握りしめた。そして、地面を蹴る。

「纏え、炎！」

フランベルジュを炎が纏い、アル・アジフはそれを振り切った。ヘルハウンドの群れが一瞬で炎に包まれ、肉の焼ける臭いが周囲に漂う。でも、敵は止まらない。

一歩後ろにステップを取りながらアル・アジフはフランベルジュを振り上げた。

「纏え、雷！」

振り下ろすと共に作り出された雷が貴族派に襲いかかった。アル・アジフは地面を蹴る。

クラインは必死に『影写し』を使おうとしているが、アル・アジフの動きにクラインがついていって無かった。

『影写し』の弱点をアル・アジフがわかっているからこその行動。
だから、クラインは走り出す。アル・アジフを抜けて、貴族派を見捨てて。

「なっ、そなた！　くっ」

アル・アジフがそれに気づくがオーガが振った斧を受け流すのに集中する。確かに作戦としては悪くない。だけど、

「邪魔じゃ」

指揮官が見捨てた部隊ほど敵味方共に目障りなものはない。

アル・アジフは距離を取って魔術書を開いた。

「四天の輝き、蒼天の剣。汝は世界の剣なり」

迫り来る貴族派を相手にしっかり詠唱を終わらせたアル・アジフはフランベルジュを近くの地面に突き刺して手を掲げた。

「グラディウス！」

そして、凄まじく巨大な剣が貴族派の群れを両断した。衝撃波だけでも魔物は吹き飛ばされ、人型は四肢が砕ける。もちろん、直撃した場合は跡形もなく消え去っている。

アル・アジフはフランベルジュを抜いた。

今の攻撃で相手の戦力はかなり削れたがまだ多いことに変わりはない。だから、クラインを追いかけることは出来ない。

アル・アジフは小さく息を吐いた。

「これ以上、いかすわけにはいかないの」

アル・アジフの視線の先には上位の魔物がいるからだ。魔物は実力

や種族によって下位と上位に分けられる。アル・アジフの視線の先にいるのは翼竜やトロルといった一筋縄では倒せない敵。

本当ならアル・アジフも魔術を掃射して消し去りたい。でも、どれだけ長期戦になるかわからない以上、したくても出来ない。

「纏え、氷！」

群がってくる生き残りを全て凍らせて、アル・アジフは空に飛び上がった。アル・アジフに気づいた翼竜が速度を上げる。

翼竜は魔界最大の生物であるドラゴンが退化した存在だ。退化したと言っても数が集まればドラゴンを落とすことが出来る。

翼竜の数は１２。光がいればレーヴァテインコピーの斉射で消し去るだろうが、アル・アジフは魔力を使いたくないから出来ない。

「纏え、風！」

フランベルジュに風を纏わせてアル・アジフは翼竜に斬りかかった。だが、翼竜はその刃を簡単に避ける。しかし、その体に無数の傷がついた。もちろん翼にも。

その翼竜は飛ぶ力を失ってその場に落下する。下にトロルがいたら押し潰せたのだが、あいにくそこまで進攻していない。

翼竜を全て落とすより早くトロルがアル・アジフが守る地域を抜けたら厄介だ。

アル・アジフが魔術書を開いた瞬間、翼竜が何かに気づいたように

一斉に空に飛び上がった。だが、そのいくつかは無理やり軌道を変えられた弾丸によって翼を打ち抜かれ落下する。

「これは、浩平か！？」

『アル』

アル・アジフの前に画面が現れてリースの顔が映された。

「何かあったのか？」

『空の戦力は私達で引き受ける。だから、地上をお願い』

「しかし」

アル・アジフが見る限り空の戦力はかなり多い。確かに浩平はかなりの実力者だが、この数は狙撃手（スナイパー）が相手をする数ではない。

『お願い、信じて』

「了解じゃ」

アル・アジフはフランベルジュを握りしめて地上に降りた。次の相手はトロルの群れ。

「負ける気がしないの」

アル・アジフは笑みを浮かべていた。今頃、航空戦力は病院の屋上を目指しているに違いない。飛んでいる最中に撃ち落とされたなら確実に死ぬ。

でも、リースの言葉は自信に溢れていた。負ける気はないと。

「我の子供を信じずに勝てぬ戦いではない。それにしても、頼もしくなったの」

アル・アジフにとっては嬉しくもあり寂しくもあった。だから、ここは守りきる。

「いくぞ！」

アル・アジフは地面を蹴った。

第九十話　狭間市の長い一日　フレヴァング

浩平は静かにフレヴァングを下ろした。

「よし、狙い通りだ」

その顔に浮かんでいるのは笑み。横にいるリースが浮かべているのは呆れ顔。当たり前だ。狙撃手（スナイパー）は見つからないように射撃するから距離を取りながら射撃するのが基本だ。だけど、浩平はそれを全て断って敵をひきつけている。

リースと孝治以外が知ったなら無謀と言うだろう。もちろん、周でさえ。だけど、リースだけは絶対の信頼で浩平のそばにいた。

「大丈夫？」

でも、不安はある。そんなリースを見た浩平はリースの頭を撫でてやった。

「絶対とは言わない。でも、俺はお前がそばにいてくれれば負ける気はしない。それが、何千何万の敵だとしても」

浩平は絶対的な自信と共にリースは言う。リースはそれに頷く。浩平を信じているから。そして、浩平の実力を知りたいから。

「わかった。援護はする。作戦は？」

「こういう時って航空戦力の指揮官がいるはずなんだ。そいつをまず倒す。後は火力にものを言わせて殲滅だな」

「了承。浩平、しゃがんで」

浩平がしゃがんだ瞬間、凄まじい勢いで迫ってきていた翼竜にリースは純粋な魔力そのものを叩きつけていた。

翼竜の体がひしゃげて落下する。地上にいる『ＥＳ』の人達がトドメをさすだろう。

「エルセル・ディオ・グイン・ラルフ。浩平、来る！」

リースが一瞬で本を掴み開く。

「わかっているさ。わかっているから」

浩平はすぐさまフレヴァングを構えた。そして息を吸い込み、

「我が求めに応じよ、フレヴァング。そして、お前の力を解放しろ！」

リースの目には浩平が持つフレヴァングの力が数倍に膨れ上がったのを感じた。

リースの額に汗が流れる。ただのデバイスだと思っていたフレヴァングは神剣だった。力が数倍に膨れ上がることはありえない。それが神剣として力を封じていない限りの話だが。

確かに、デバイスを取り出す時にいちいち名前を呼び出す必要はないが、浩平は時々フレヴァングの名前を呼んでいた。

「リース、一緒に戦うぞ」

浩平がフレヴァングの引き金をひく。もちろん、一回だけじゃない。引き金をひく速度は限界ギリギリ。しかも、放ったエネルギー弾は正確に空を飛ぶ魔物を撃ち落としていく。

リースは開いた書物の魔法から対空魔法を発動させる。属性は風。能力は圧縮弾を放ち、当たった瞬間に暴風を局地的に発生させる魔法。

その魔法の威力は凶悪そのもので翼竜すらも一撃で地面に叩き落としていた。浩平はフレヴァングの引き金を引きながら頷く。

「さすがリースだな。俺もうかうかしてられんし」

「浩平の方がすごい。浩平は私よりも強いから」

「二人で一人前。それでいいだろ。ちょっと待て」

空に浮かび上がっていた魔物達が一斉に建物の影に隠れた。そして、隠れたまま動く気配がない。まるで、何かに道を空けたかのように。

あまりに空気がおかしい。浩平の目にはトロルと戦いながらもこちらを気にしているアル・アジフの姿がある。

「来る、かな」

浩平はフレヴァングを下ろして周囲を見渡す。浩平の目には何も映らない。なら、敵がいる場所は、

「上だ！」

浩平が上に向かってフレヴァングを構えるのと上空にいた何かが急降下してくるのは同じだった。

ここに突っ込まれたならかなりマズい。病院自体が崩壊すればたくさんの人が死ぬ。

「リース！」

「エルセル・ディオ・グイン・ラルフ」

リースは新たな本を手に取った。そして、魔法を発動させる。魔法の種類は支援魔法。効果は衝撃吸収。

浩平はリースの体を抱えて横に飛んだ。

凄まじい速度による衝撃波が浩平の背中を襲う。だけど、抱きかかえるリースだけは絶対に放さなかった。

「リース、無事か！」

「無事。浩平は？」

「俺をなんだと思っている」

浩平は振り返りながらフレヴァングを向ける。そこにいるのは天狗と烏を合わせたような烏天狗だった。

リースはその顔に見覚えがある。

「前『風帝』」

「ほう、お嬢ちゃんは知っておったか。その小童は知らないみたいだが」

「ほっとけ。つか、病院を破壊するつもりだったのか？」

「人間の命に何を躊躇う」

烏天狗は笑って答えていた。浩平の背中が総毛立つ。

「てめえみたいな奴がいるから！」

浩平はフレヴァングの引き金を引いた。いや、引いたはずだった。フレヴァングが烏天狗によって無理やり浩平の手からもぎ取られる。もちろん、浩平の指を変な方向に折って。

「あがっ」

「浩平！」

あまりの痛みに浩平が声を上げる。だが、それは一瞬。すかさずリースが治癒魔法をかけた。

「人間が吠えるでない。貴様のような人間は見たことがあるな」

「何を」

浩平が烏天狗を睨みつける。烏天狗は持っていたフレヴァングを後

ろに投げた。

「同じようにライフルを使った男だ。小娘一人守るために立ち向かって来た哀れな男。同じようにライフルをもぎ取ってから殺してやったわ。その時の小娘の腕の中にいた小童も、お前と同じ『こうへい』と言ったか」

その瞬間、浩平の感情はあらゆる憎悪に塗り替えられていた。浩平が烏天狗を睨みつける。

「お前か」

あの時、浩平だけが生き残った。

父親は死に、姉は殺された。その現場を見ていた浩平だけが生き残った。いや、興味を失ったというべきか。

浩平はそれから復讐を胸に秘めて戦っていた。それを誰にも話さないまま。リースにさえ。

「お前が、父さんと、お姉ちゃんを」

「ほう、あの時の小童か。面白いな。その目、気に入った。ここでは邪魔が多い。街の外れにある公園、いや、広場か？　そこで待っている」

その言葉と共に烏天狗が空に飛び上がる。

「待ちやがれ！」

浩平が叫ぶが烏天狗は止まらない。

それを見た浩平は屋上から出るため走り出そうとする。だけど、その手をリースが掴んだ。

「リース、離してくれ。オレは敵を討たなきゃいけないんだ」

「わかってる。でも、今は」

「あいつを倒さなければ、オレは」

リースは力任せに浩平の腕を引っ張った。浩平はあまりに予想外でそのまま引っ張られ、リースが浩平の頬に手を当てる。

そして、リースはキスをした。

ほんの一瞬、触れ合うようなキスに浩平の動きが完全に止まる。

「落ち着いた？」

「別の意味で緊張した」

「私も」

リースは顔を真っ赤にしながら浩平に抱きついた。

「敵は強い。一人で戦ったら勝てない。だから、私もいく」

「それは」

「あいつは浩平を傷つけた。十分」

リースが本を開く。そして、魔法を放った。

迫って来ていたグレムリンが白い炎に焼き尽くされる。本来、赤いはずの炎はリースの怒りによって温度を１０倍近くまで上がったのだ。

「二人で」

「わかった。それと、ごめん。隠してて」

この話は誰にもしたことがなかった。話したくなかったからバカなキャラを極めていた。不幸なことがほとんど無かった幸せな奴だと思わせるために。

だから、神剣を手に入れて力を蓄えていた。ようやく、敵を見つけた。

「その前に、仕事を片付けないとな」

浩平がフレヴァングに手を向けると、フレヴァングは浩平の手の中に収まった。

「でも、指が」

「フレヴァングには二つの力があるんだ。一つは射撃補助。もう一つが治癒」

浩平はフレヴァングの引き金に当てた指から痛みがひくのがわかっ

た。だから、浩平は本気をだす。

「これが、フレヴァングの本気だ」

リースは気配を感じて振り返った。そこにあるのは大量の銃。フレヴァングによって射撃補助として使える銃だった。

「一斉斉射。目標、隠れている航空戦力」

そして、引き金が引かれる。放たれた弾丸は一つにつき一発ずつ。だが、それらの弾丸はビリヤードのようにお互いを弾き合い、建物に使って跳弾し、一発で数体の魔物を貫いていた。

浩平がフレヴァングをしまう。

「すごい」

リースはあまりの光景に呆然とする。

「リース、行こう」

浩平がリースの手を引いて歩き出そうとした時、屋上のドアが開いた。そこから出てきた人物を見て浩平は目を見開く。

「周！　起きたのか！」

「ああ。悪いな。話は聞いた」

「あーあ、隠してたんだけどな。周、俺は行くぜ」

「むしろ、行け」

周は浩平に近寄るとその胸に拳を入れた。もちろん、軽く。

「この場はみんなに任せろ。オレは音姉達を助けに、お前は自分の過去を断ち切るために行け。隊長からの命令だ」

「助かる。リース、行こう」

「うん」

浩平とリースは走り出す。その光景を見ながら周は小さく溜息をついた。

「さて、オレも出るとしますか」

第九十話　狭間市の長い一日　フレヴァング（後書き）

フレヴァングは神剣だった。
フレヴァングが特別ということに気づいた方はどれだけいるでしょうか。ヒントがあったのは第十八話のエンカウントで浩平がフレヴァングを呼び出した時の言葉です。気づく方がすごいですが。
周も戦線復帰し、物語は進みます。次は人型機械兵器ＶＳドラゴン。
どうなることやら。

第九十一話　狭間市の長い一日　ダークエルフ

足下についてあるペダルを操作して悠人は背中から出るエネルギー粒子の量を調節した。

迫り来る刃を紙一重で回避して変わりにエネルギー弾を叩き込む。

「さすがに辛いかな」

パワードスーツのスラスターを微調整しながら悠人は動き回る。バリケードの外を。

一定の攻撃力ならパワードスーツの装甲が守ってくれるが、悠人の周囲にいるのはほとんどが上位の魔物。

アーマーリザードマンの攻撃がパワードスーツの装甲にかすった。

「マズいね」

悠人は飛び上がる。そのまま壁を蹴ってさらに飛び上がりつつライフルの設定を変える。

「これで、どうだ！」

ライフルの引き金をひくと散弾が吐き出された。地上にいた上位の魔物が散弾によって穴だらけにされる。

「装甲が９％損傷。エネルギーバイパスは二ヶ所か。出力２０％低下。仕方ない」

悠人はブースターを全開にして飛び上がる。そして、スラスターを展開してホバリングに移った。

「ムックさん、ムックさん」

『なんじゃ坊主？』

すぐさま通信を開いて悠人は機体の整備士に話しかける。

「ダークエルフの出撃は可能ですか？」

『大丈夫だ。後は坊主が乗るだけさ』

「ありがとうございます。今からそっちに向かいます」

機体を傾けてブースターを全開にする。パワードスーツは一気に加速して避難所区域があっという間に見えた。もちろん、避難所区域の中央にあるメンテナンスドックも。

悠人がホッと一息吐いた瞬間、何か嫌な予感が駆け抜ける。そして、悠人は振り返った。向こう側、山の麓近くで胸騒ぎがする。

パワードスーツの視界を拡大して悠人はその場所を見た。そこには、巨大な魔術陣。ただ、攻撃用のものじゃない。召喚用。

「アル・アジフさん！」

悠人はすかさずアル・アジフに通信を開き、見たデータを直接送りつけた。

『これは、くっ。悠人、ダークエルフで向かうのじゃ。おそらく、ドラゴンが来る！』

アル・アジフからの声に悠人はパワードスーツを加速させた。そのままメンテナンスドックに到着する。

「坊主、かなりやられたな」

「ごめんなさい。でも、今は緊急なんだ。すぐにダークエルフを出すから」

「おいおい、そこまで急がなくても」

だが、周囲のざわめき、いや、絶叫が整備士の声を遮った。二人がそっちを向くと、そこにいるのは高さ２０ｍほどにもなるドラゴンが二体いた。

悠人はスラスターを操作してメンテナンスドックに入り込む。

メンテナンスドックの中にあったのは体育座りに近い体勢で動きを止めている大きな人型の機械。フュリアスだ。

悠人はブースターを微かにつけて飛び上がり、ぽっかり開いた胸の部分に入り込んだ。

パワードスーツの足の部分が固定される。さらに、パワードスーツの一部が外れた。そして、コクピットが閉まり、悠人はレバーを握りしめる。

「ダークエルフ、発進するよ」

操作が今までとは違う。今までは足下にあるペダル二つによって操作していた。一つはブースターの操作ペダル。一つはスラスターの操作ペダル。だけど、ダークエルフはペダルは四つあるが、スラスターの操作のみ。凄まじく細かい操作が可能になる。

代わりに、ブースターを動かすのは右手のレバー。押したり引いたりすることで出力を上げることが出来る。
左手のレバーも動かすことが出来るが、これは少し種類が違う。

そうなると両手両足を動かすものは何なのかになるが、これは精神感応を最大まで使ったものにある。だから、ダークエルフのパイロットは頭で両手両足を動かしながらスラスターの操作やブースターの操作を行わないといけない。

ダークエルフが起き上がる。そして、自分の足で歩いた。

装甲は完全に真っ黒。背中には二つのメインブースターと四つのサブブースター。特徴的なのは腕にある巨大なデバイスと腰のベルト。ベルトにはいくつもの長方形がある。エネルギーバッテリーだ。

「最大稼働時間は2時間53分。前より2時間半伸びてる。腰のバッテリーかな。でも、ありがたいよ」

悠人は目を瞑った。そして、精神感応を完全にリンクさせる。

視界に映るのはこちらに向かって来るドラゴン。速度はそこそこ。
一体だけだ。もう一体は別の場所に向かって、あっ、頭が落ちた。
何が起きたかわからないけど、ドラゴンは一体だけ。

「いくよ」

悠人はダークエルフを飛び上がらせた。まずは普通にジャンプして、そして、ブースターの出力を上げる。街中で戦闘をすれば被害がかなり出る。なら、外れればいい。

ドラゴンがいる場所はまだ住宅地に入っていない。だから、悠人は虚空からライフルを取り出した。それだけで稼働時間が３０秒ほど減少する。二つなら１分の減少。

ダークエルフがライフルをドラゴンに向けて引き金を引く。だが、放たれたエネルギー弾はドラゴンの皮膚に弾かれた。でも、それで十分。

「こっちだよ」

ブースターを最大まで起動させてドラゴンを住宅地から離れさせるように動かす。ちょうど、最初に攻撃したダークエルフをドラゴンは狙っているようだった。

ドラゴンの口から開くと同時に魔術陣が展開される。ダークエルフは振り返りながらスラスターを使って着地した。

ドラゴンが魔術を放つ。様々な大きさの炎弾だ。ダークエルフは虚空から取り出した盾で炎弾を受け止めた。

「っつ、威力が高いね」

悠人は受け止めた衝撃に冷や汗をかきながら左のレバーを動かす。

そして、ライフルの引き金を引いた。

放たれたエネルギー弾がドラゴンの翼を貫く。ドラゴンはそのまま地面に落ちた。

「今の状況で最大威力の武器は、よし」

悠人は新たな武器を取り出す。ライフルと盾を戻し、取り出したのがガトリング砲。魔力の使用率が高く、期待するほどの戦果が見いだせないとしてぽんこつ扱いされた武器。

だが、ダークエルフが取り出したガトリング砲はたくさんのエネルギーバッテリーがついていた。だから、使える。しかし、ダークエルフはガトリング砲の引き金を引けなかった。

ドラゴンがまるでトカゲのようにダークエルフに飛びかかる。ダークエルフはガトリング砲を放り投げてドラゴンの体を受け止めた。

ダークエルフの大きさは１８ｍ級。ドラゴンと比べれば明らかに小さい。だから、のしかかりにはかなり不利だ。

さらにドラゴンはダークエルフの肩に噛みつこうとしている。悠人はなんとか食い止めているがこのままでは危ない。

「負けて、たまるか！」

ダークエルフがドラゴンの腹を蹴り上げた。もちろん、スラスター全開で。ドラゴンの体が浮かび上がり、ダークエルフは回し蹴りでさらにドラゴンを蹴り飛ばす。

そのまま後ろに下がって放り投げたガトリング砲を構えた。引き金を引く。

凄まじい勢いでエネルギー弾がドラゴンに叩き込まれていく。だが、2秒ほどでガトリング砲は止まった。エネルギー切れだ。

「うん。どう足掻いても使えないね」

ガトリング砲を提案したのは悠人だったため少し悲しい気分になっていた。でも、戦いはまだ終わっていない。

「早く避難所区域に戻らないと。他の大型が出た場合は」

悠人がダークエルフを歩かせ、避難所区域に向かって飛ぼうとした瞬間、激しい衝撃が悠人を襲った。前方には何もない。だから、後方のカメラを見ると、そこにいたのは体中傷だらけのドラゴンだった。

ドラゴンが勢いよく体当たりをしてダークエルフは吹き飛ばされる。

「くっ」

すかさず手をつき飛び上がって着地をした。だが、今の衝撃でブースターの一部が故障した可能性がある。

「あれで死なないのか。さすがドラゴンかな。でも、僕は負けるわけにはいかないんだ！」

飛びかかってきたドラゴンに対し、悠人はブースターを全開にしてドラゴンとぶつかった。凄まじい衝撃に悠人の体が揺さぶられる。

でも、ダークエルフはドラゴンを吹き飛ばしていた。

「これで」

虚空から武器を取り出す。巨大な剣。対戦艦用の剣だ。ダークエルフはそれを振り上げた。

「終わりだ！」

対艦剣がドラゴンの体を両断する。

悠人は乱れた息を整えていく。稼働時間は後2時間弱。ちょっとの間しか戦闘をしていないのに消費が激しい。

「これだと、３０分しか持たないね」

悠人は小さく笑って避難所区域に向かってダークエルフを飛ばした。

第九十一話　狭間市の長い一日　ダークエルフ（後書き）

ペダル４つなんて操作出来るわけがないと思いますが、悠人だけが使えます。それ以外のフュリアスはもっと優しい操作方法です。

第九十二話　最強の召喚術師

４人が並んで疾走する。その上から2人が並んで飛翔していた。

光は時折、レーヴァテインのコピーを放ちつつ、地上を走る４人に道を開ける。孝治は手に持つ弓で空にいる相手を叩き落としていた。

「お姉ちゃん、数が多くなってきたね」

由姫が小さくつぶやく。その言葉に音姫は頷いていた。すでに髪の毛を止めるリボンを外しているので長い髪の毛が後ろに流れている。

「このまま、行きたいけど、そうはいかないか」

前方には貴族派が作り出したように思えるバリケードが存在していた。それを見ながら音姫は光輝の柄に力を込める。

このまま白百合の剣技で破壊するつもりだ。だけど、それを悠聖が手で制した。

「オレに任せてください」

「でも」

「オレなら確実に行けます」

そう言って悠聖は召喚術式を展開する。召喚する属性は闇。ただし、ディアボルガを召喚する時間は今はない。

「限定召喚。ディアボルガ！」

すると、悠聖の手にディアボルガが持つ錫杖が握られていた。膨大な魔力を操ることが可能な錫杖が。

加速しながら地面を蹴り、悠聖が錫杖を振り上げる。

「吹き飛べ！」

そして、錫杖を振り下ろした瞬間、バリケードを中心に光の塊が落下した。そして、その光は炸裂すると周囲に衝撃波を撒き散らして吹き飛ばす。そのまま悠聖は一番乗りでバリケードがあった地点に乗り込んだ。

「聖なる刻印を纏いし者。光の道を指し示せ。光の剣聖『セイバー・ルカ』！」

周囲にいる魔物の数を確認しながら悠聖は召喚術式を展開した。呼び出すのはセイバー・ルカ。乱戦の中でも活躍できる剣士だ。そこに音姫達が到着する。

「凄い数だね」

その数を見た音姫が足を止めた。周囲にいるのは５００程度だろうか。確かに、このまま突破するにはあまりに数が多すぎる。

「防護服β　リロード」

悠聖はその中で笑みを浮かべながら新しい防護服に代えていた。

「ここは任せて先に」

「・・・。うん、わかった」

音姫が悩んだのは一瞬。そして、音姫は走り出す。その直線状の敵を焼き払うために光はレーヴァテインを構えた。

「吹き飛べ！」

大量のコピーが放たれて直線状にいた魔物が一斉に吹き飛ぶ。だけど、吹き飛んでいない魔物も多い。特に、人型は。

音姫は光輝を鞘から抜いた。それと同時に衝撃波が直線状にいる残った敵を吹き飛ばす。

白百合流薙ぎ払い『結閃（ゆいせん）』。

直線状の点と自分のいる位置を線で結び、その空間に敵を吹き飛ばす技。ただ、溜め時間が少しだけかかるため少々使いにくい。

タイミングによって開いた道を悠聖以外の五人が通り過ぎる。それを見ながら悠聖はにやりと笑みを浮かべていた。

「さーて、今まで散々活躍していなかったけどな、オレは強いぜ」

その言葉と共に悠聖は召喚術式を展開する。属性は炎。

「赤き力を統べる者。出でよ、灼熱の地獄より。イグニス！」

現れるのは炎を身にまとう魔人。赤い体と筋骨隆々の体を誇らしげ

にするように腕を組んでいる。

「純粋な欠片を示す者。来よ、清らかな水辺を映す鏡より。レクサス！」

一言で表すならマーメイド。その手に握られているのは琴。そして、宙に浮いている。

「大いなる証を刻む者。猛れ、母なる大地より。グラウ・ラゴス！」

巨大な岩が出現する。否、岩ではなくゴーレム。その手に握られているのは巨大なハンマー。

「封印の証を作る者。集え、儚き結晶より。アルネウス！」

今度はどこからどう見ても人だ。ただし、その手に握られているチャクラムの周囲では水分が凍結しているが。

「雷雲より生まれし者。響け、遥か彼方の空より。ライガ！」

それは紫電の塊。だが、その形はどう見ても鳥。サンダーバードとも言うべきか。

「遥か深遠より来る者。我が呼び声に答えよ。闇の帝王『ディアボルガ』！」

そして、悠聖は最後の精霊を召喚した。手に持つディアボルガの杖をディアボルガに返す。ディアボルガはそれを受け取った。

貴族派の誰もが動けないでいる。何故なら、精霊を操れるのは本来、

多くて４体と言われているからだ。むしろ、それ以上を操っている人が発見されていなかったというべきか。だが、悠聖が呼びだしたのは7体。もう、限界なんて遥かに超えている。

でも、悠聖はこれが普通だと思っている。何故なら、精霊は操るものではなく、一緒に戦う存在だから。言うならば、戦友。それが、今までの召喚術師とは一線を期す理由だった。

「みんな、勝利条件は敵の全撃破。そして、みんなと合流すること。頼むぜ、オレの相棒達」

理由ならもう一つある。

『ほう、我に対してそんなこと言うのか』

『じゃ、イグニス放っておいてみんなで頑張ろう。おーっ！』

『こら、アルネウス。我は頑張るとは言っておらん』

『堕弱』

『ライガちゃん、本人の前で本当のことを言わないように。傷つくからね』

『レクサス！　聞こえておるわ！』

『いい加減にしろ』

『いや、そのですね、ディアボルガ様。私めはそこまで戦いたくないとは言っていないのでして』

『なら、イグニスは一人で戦え。我らはみんなで戦う』

『そんな殺生な』

簡単に言うならこういうことだ。召喚できる精霊の個性があまりにも強すぎるため操ることが出来ない。そもそも操るつもりはなかったので苦にはならないが。ただ、すぐに独断専行する奴が一人いる。会話を見ていたらわかりそうだが。

「あのな、緊張感持てよ」

悠聖は小さくため息をついた。ちなみに貴族派は完全に呆然としている。さっきとは別の意味で。

「さあ、行くぞ」

第九十二話　最強の召喚術師（後書き）

次の話も悠聖の話です。

第九十三話　戦場への帰還（前書き）

視点が周に戻ります。すぐに変わりますが。一応、悠聖の話でもあります。一応ですが。

第九十三話　戦場への帰還

オレは地面を蹴っていた。

体が軽い。奥底から力が湧き上がってくるのがわかる。多分、あの薬の影響だろうな。

苦くて不味くて辛くて塩辛くてざらざらしていてねばねばしていて、そして、人間の感覚が麻痺してしまいかける匂いで、色はどう見ても不気味なまでの黒な上に、多分、毒草も入っている。だけど、飲み干そうと覚悟した瞬間には自分の感が否定しなかった。いつも、嫌な予感がすれば大変なことになるのでそれを頼りにしているが、今回はそれを確認できなかった。いや、これを呑んだ方がいいという風に。

「レヴァンティン、状況は？」

『すでに貴族派と『ＥＳ』が大規模な交戦中です。バリケードのおかげでいまだに破られていませんが、幹部クラスが来たならかなり危ないと思います。第７６移動隊は進軍中。すでに山にはまだ入っていません』

「そうか。でも、思っていたよりも貴族派の侵攻が遅いな。オレが考えていた６０％くらいか？」

『マスターが過大評価しすぎなのでは？』

レヴァンティンが呆れたように言う。そう言われても、クラリーネの能力を考えると抜かれていない方がおかしいくらいだ。もしかし

たら、クラリーネは儀式場の方にいるかもしれない。
それなら好都合。
「アル・アジフはどうやら悠人専用フュリアスを持ってきたらしいからな、多分、守りきれる」
『そう言えば言っていましたね。あのメンテナンスドッグにあるのがフュリアスだと。どうしてわかるんですか？』
「推測だよ。でも、オレはそう断言する。あの中にはオレ達と似たようなシステムが組み込まれている」
『そう言う理由ならわかります。私にはわからなくてもマスターにわかることはありますから。マスター、十時方向、白川悠聖の姿があります』
「了解」
オレは一気に地面を蹴った。そして、視界に悠聖の姿を入れる。
悠聖の形勢は不利だった。召喚できる全ての精霊を出して戦っているが、貴族派が使う弓に苦戦している。こんな時に風の精霊契約を行えていたら。
「光の5。大地の6。全てを浄化する力を成せ」
オレはポケットから鉱石を取り出した。
魔力鉱石。

純粋な魔力が結晶化したもので、その鉱石に魔術陣を刻みこむことで凄まじく強力な魔術を使える。ただし、戦果に見合えるコストではない。

オレはそれを思いっきり投げつけた。もちろん、貴族派の弓部隊に向かって。

大きな爆発と共にオレは着地して鞘からレヴァンティンを抜いた。そのまま悠聖と背中合わせになる。

「無事みたいだな」

「ったく、周隊長は来るのが遅い。でも、来なくても勝てていたぜ」

「そうか。なら、悠聖、今、風の精霊と契約しろ」

オレの言葉に悠聖がぽかんとなる。オレはその間に魔術をいくつかストックする。

「あい、今、戦闘中だぞ」

「戦闘中だからだ。出来るな」

悠聖は小さくため息をついた。そして、自分のデバイスである指輪を触る。

「出来る？　誰に言っているんだ？　時間は2分。頼めるか？」

オレは小さく肩をすくめる。そして、レヴァンティンを鞘に収めた。

「誰に言っているんだ？　さて」

そして、オレは地面を蹴った。一瞬でオーガの懐に入り込んでレヴァンティンを一閃して殴り飛ばす。そして、ストックしていた魔術で前方にいた魔物たちを薙ぎ払った。

「さて、かかってこいよ。お前らが来る勇気があるならな」

その言葉と共にオレは地面を蹴る。レヴァンティンを持ち、戦場を縦横無尽に駆け回る。それは敵からすればかなり厄介だ。だから、狙って何人かが来る。

「さて、どうするか」

地面を蹴りながら一番前にいたリザードマンを肩からタックルして吹き飛ばす。リザードマンはそのまま後ろにいた仲間を巻き込んで転がった。でも、残っている敵はいる。

「レヴァンティン、モード？」

すかさずレヴァンティンを槍に変えてオレ時は地面を蹴った。槍の柄を握り、迫ってきた刃を穂で払い、すかさず石突で殴り飛ばす。槍の使い方の基本はこれだ。初心者にとって槍は有効だが、上級者との戦いになると振り回せなければ扱えない。なんでも突けば解決するわけじゃないのだ。だから、オレは駆け回りながら槍を振り回す。

オーガの斧を簡単に受け流して石突でオーガのこめかみを殴り飛ばす。横に振られた斧は穂先を地面に突き刺して棒高跳びの要領で跳

び上がり、空中に壁を作り出してそれを蹴り、こめかみを殴り飛ばす。そのまま向かってきたコボルトを股の下からすくいあげて投げ飛ばした。うん、これは止めよう。

背後からの嫌な予感にオレが石突で背後を突くとちょうどそこにいたゴブリンの額とぶつかった。そのまま旋回して後ろからきている敵の群れを槍で薙ぎ払う。

「さすがに、数が多いな」

オレは軽く敵を薙ぎ払いながら小さくつぶやいた。そして、探していた目標を見つける。前方２０ｍに弓兵数は８。

「モード？カノン」

すかさず砲身を取り出して弓兵に向かって射撃した。弓兵がいる位置で放ったエネルギーが炸裂して弓兵が昏倒するのがわかる。

「モード？」

すぐさま槍を戻して背後から振り下ろされた斧を受け止めていた。体勢が悪い上に前からも何人か迫っている。

「しゃあない。モード？」

斧を受け流し、地面を蹴る。オレの手に握られているのは双剣。流れるような動きで迫ってきていた魔物を倒し、感覚を頼りに振り返りながら両手の双剣を一つにして振り切る。振り切った剣はオーガの斧を弾き飛ばしていた。

「まだやるか？」

オレの言葉にオーガが身をひるがえす。武器を取りに行ったのか逃げたのかわからないが、これで十分だ。

レヴァンティンを双剣から通常の剣に戻す。そして、小さく息を吐いた。

貴族派の動きは完全に止まり、悠聖に従う精霊達は悠聖を守るように布陣している。その中央で悠聖が一人の男を召喚していた。

エルフと言うべきか。特徴的な長い耳。ただ、その気配はただものじゃない。

「我、白川悠聖はそなたに願う。我に力を貸してほしい。その力でみんなを、大切な人達を守る力を貸してほしい」

『大切な人達ね。複数形なんだね』

「それだけ、守りたい人が多いということさ」

その言葉に悠聖は笑みを浮かべた。まるで、子供が浮かべるような笑み。まあ、悠聖は子供だけどな。

『気に入ったよ。僕の力を貸してあげよう』

「ありがとう。オレの友として一緒に戦ってくれ」

『友。うーん、良い響きだ。詩人の心を揺さぶるよ。僕の名前はエルフィン。よろしくね』

「ああ」

悠聖が笑みを浮かべてオレの方を向く。そして、拳を握り締め、親指を上に立てたままオレに腕を伸ばした。

「行け、周！　お前はお前の戦いがあるだろ。ここはオレに任せろ」

「帰ったら、お前の友達と一緒に祝宴でも開くぞ！」

オレは地面を蹴る。でも、道をふさぐ貴族派のメンバー。

『それはさせないよ』

すると、アルネウスの放ったチャクラムが前にいた魔物を薙ぎ払った。

『行けっ！　ここは我が、この炎の大公』

『前進』

『そうそう。行きなさい。我が友の親友よ』

『だから、この我を無視するな！』

オレは笑みを浮かべながら地面を蹴る。目標はみんなに追いつくこと。

「さて」

オレは小さく息を吐いた。そして、周囲にいる8人の精霊を見渡す。

「全員、準備はいいな」

『いいよー。さーて、友達に心配されないように頑張らないと』

『そうですね。行きましょう』

『肯定』

オレは腕を振り上げた。そして、振り下ろす。

「突撃」

第九十四話　全てを切り裂く矛の神（前書き）

亜紗の神剣である『矛神』が出ます。

第九十四話　全てを切り裂く矛の神

音姫達は走る。

すでに山の麓近くまで到達し、後は登るだけだ。だが、麓にはたくさんの魔物が集結している。

相手もわかっているのだろう。ここを抜かれたらかなりマズいということに。それは航空戦力を見るだけでわかる。

孝治は一度地上に降りた。

「どうする？」

「突破するしかない。でも、このままだったら追いつかれる」

音姫はチラッと由姫を見た。

音姫の作戦だとこういう状況で由姫を置いて突破することになるが、やはり、心の奥底では由姫を囮にすることには抵抗がある。

だから、由姫は頷いた。

「私を置いて行って」

「でも」

「お姉ちゃん。私言ったよね。だから、私を囮にして。それに」

由姫は身構えた。そして、地面を蹴る。

迫って来ていたトロルの懐に入り込み殴り飛ばした。そのまま横にいたトロルに清浄を叩きつけて吹き飛ばす。

「今、この場で囮になった方がいいのは私だから」

「わかった。由姫ちゃん、お願い。みんな、突撃するよ」

そして、音姫が地面を蹴ろうとした瞬間、近くの広場で何かが動いたのがわかった。

空を飛んでいた光がレーヴァテインを向ける。

「召喚陣や。サイズはかなり大きいで」

「このタイミングで、召喚陣!?　まさか、最初から」

「お姉ちゃん!」

由姫は迫ってくる魔物を殴り、そして、投げ飛ばしながら叫ぶ。足を払い、蹴り飛ばし、攻撃を受け流し、カウンターを叩き込む。

由姫は流れるような動きで道を開けていた。

「ここは私が食い止めるから、だから」

オーガの斧を片手で受け止める。

「戦って!」

「うん」

音姫は地面を蹴った。光輝を鞘に収めて軽やかなステップで由姫の横を駆け抜ける。そして、鞘から光輝を抜き放った。

その刃はいくつもの閃光となり群れを削り取る。そのままさらに一歩を踏み出して光輝を返した。

残った群れが衝撃波によって駆逐される。

「ヤバいな」

孝治は弓から黒の剣に持ち替えた。そして、飛び上がる。孝治の視線の先にいるのは二体のドラゴン。さすがに、光も無理だと悟ったのか孝治の横まで後退していた。

「どうする？」

一体は市街地に向かい、もう一体はこっちに向かってくる。孝治は黒い剣を振り上げようとした時、目の前にスケッチブックが舞った。

『任せて』

限界までそう書かれたスケッチブックが孝治の目に入り、孝治は地上を見た。

亜紗が刀を構えている。ただ、ただの刀ではない。いつも使っている刀は鞘に収まったままだし、その刀からは何とも言えない力が離れていてもわかった。

魔剣、というべきだろうか。見た目はただの刀だが。

亜紗は一歩を踏み出し、その刀をすくい上げるように振る。だが、そんな場所から届くわけがない。

奇妙なことが起きた。その光景を見た誰もがそう言うだろう。そして、あまりのことにドラゴンの方を見た誰もが言うだろう。

急にドラゴンの首がズレたのだ。まるで、元から斬られていたかのように。ドラゴンは血を撒き散らしながら倒れる。

誰もが固まっていた。

孝治は黒い剣を振り上げたままだし、光はレーヴァテインのコピーを展開したまま。

由姫は目の前にいるリザードマンを殴ろうと腰をひねったままで、近くにいる音姫は光輝を振り下ろそうとして固まっている。

それは貴族派の魔物達も同じだった。攻撃する手すら止まっている。

動いているのは亜紗だけ。亜紗は握っていた刀を鞘に収めると落ちてきたスケッチブックを掴み取った。

魔界最大の生物であるドラゴンが文字通り瞬殺された。それは、動きを止めるには十分。

そして、亜紗は動き出した。そのまま音姫の近くまで駆け寄ってさっき使った刀ではなく、いつも使っている刀で固まっていたゴブリ

ンを斬り裂いた。スケッチブックを音姫に見せる。

『今』

「あっ、うん。みんな！」

その言葉に孝治と光が動き出した。

二人は弓とレーヴァテインのコピーであっという間に道を開ける。

その道を音姫と亜紗は駆け抜けた。

「亜紗ちゃん、さっきのは？」

『矛盾の話を知ってる？』

矛盾。

それは中国に伝わる故事の一つだ。簡単に言うなら最強の矛と最強の盾を売っていた商人がどっちが勝つかという質問に答えられなかったという話。

それは音姫も知っている。最強の矛と最強の盾がぶつかり合えばどうなるかは知らないが。

『その矛の力。全てを斬り裂く矛の神』

「もしかして、矛神？」

その名前は音姫が特に聞いたことのある神剣だった。

刀の形状をする神剣の中で光輝と矛神は常に二強と言われるほど突出したものだ。その後にとある人物の持つ二本の刀が続く。

光輝は対象者を神格化させて身体能力を上昇させる刀。その威力は光輝を持つ音姫自身が一番よくわかっている。

対する矛神は身体能力を上昇させる効果は無いが、とある一点だけが極限まで高められた武器。

切断能力。

矛神の前に断ち切れぬものは同じ神剣の中でも強力なものしかないと言われ、『全てを斬り裂く矛の神』という異名すらある。ただ、その姿を見た物はいない。

噂だけが一人歩きする神剣。それが矛神だった。

確かに、噂通りならドラゴンの首を落とせたことは納得出来る。リーチの面を除いて。

『噂通りの力は持っていないけど、大型の敵相手には有効だから』

「亜紗ちゃんはどうして矛神で戦わないの？」

亜紗はすぐにスケッチブックを捲った。

『矛神の力が使えるのは1日に、というより２４時間以内に3回だけ。それ以上はただの脆い刀』

切断能力を極めて高めた結果、矛神は打ち合うことが出来ないよう

だ。でも、力を使えばそんなことは関係ない。

『狭間の鬼との戦いに残しておくから』

「わかった。亜紗ちゃんなら大丈夫。私と一緒に到着するよ」

そして、二人は同時に地面を蹴った。

第九十四話　全てを切り裂く矛の神（後書き）

矛盾の話はかなり短くしました。かなり有名なので知りたい方はネットへ。

第九十五話　聖剣の担い手

オレは地面を駆ける。

一時はドラゴンの出現に足を速めたが、あっという間に一体の首が落とされて、もう一体は黒い人型の何かとぶつかった。

あれが、フュリアスか。すごくスマートだし。

ちゃんとフュリアスはドラゴンを撃破して避難所区域に戻って行くのを横目で見ながらオレは地面を蹴る。

『マスター、ペースが少し速いですよ』

「やっぱりか？」

オレは周囲を見渡しながらレヴァンティンの言葉に頷いた。そのことは自分がよくわかっている。

いつもより走るペースは速い。いつもと同じ様に走ってはいるが、やはり、完全にオーバーペースか。でも、落とすわけにはいかない。

「不思議なんだよな。体の奥底から力が湧き上がって来るというか」

『あの薬を飲んだからでは？』

その意見に関しては全力で賛成だ。だからと言って、二度と飲みたくない。

だって、意識不明の人を起こし、一口飲めば一瞬で吐きたくなるほどの味で、毒まで入っている。誰が進んで飲みたいと思うか。

『調合の仕方を習ったらどうですか？』

「殺す気か？」

今はあの薬のおかげでここまでピンピンしているのだからかなり感謝している。いや、感謝はしている。帰ったら絶対に一言言ってやる。

「そろそろ麓か。オレの予想だと、バリケードか軍団が配置されてそうだな」

『つまり、誰かが戦っていると』

「多分な」

悠聖があの場で足止めしていたように誰かがその場で足止めしているはずだ。予想だと亜紗だろうが。

「出来れば、一緒に目的地まで行きたいけどな」

『確か、矛神ですね。神剣の中で一、二を争う切断能力を持つ』

「ああ。斬ることに関しては最強の神剣だ。あの力があるとないとじゃかなり変わってくる」

そう、いろいろと変わってくる。特に、狭間の鬼との戦いでは。ドラゴンの頭を落としたのは亜紗だろう。つまり、後二回しか使えな

い。

狭間の鬼に致命傷を与えることが出来るのは、孝治か亜紗か音姉か。
オレの場合はレヴァンティンの完全解除の条件が揃ったならがつく。

「聞こえた」

戦っている音がする。魔鉄と魔鉄がぶつかり合う音じゃない。吹き飛んでぶつかる音やら何かが勢いよく地面に叩きつけられる音。

明らかにおかしい。

「亜紗じゃない？」

もしかして、中村か？　それにしても音がおかしい。

そして、オレは目的地を視界に捉えた。

「なっ」

視界に入ったのは凄まじい攻撃力と立ち回りで敵を翻弄している由姫の姿があった。ただ、敵には完全に囲まれている。

八陣八叉流の技術を最大限発揮しているみたいだが、だんだん押し込められている。由姫の額にも汗が流れているし。

「ったく、あのバカ」

『マスター？』

オレはレヴァンティンの声を無視して地面を最速で蹴った。そのまま、レヴァンティンを握りしめて由姫を囲む敵の群れに飛び込む。

さすがにオレの存在は想定していなかったのか斬りかかった瞬間に包囲が一瞬で崩れた。そのまま由姫の近くまで走り寄った。

「このバカ！」

「うわっ、いきなり」

「いきなりじゃない！　死ぬ気か！」

由姫と背中を合わせながらレヴァンティンを構える。

「戦いの立ち回りは囲まれないように戦う。それを何回も教えたはずだ！」

八陣八叉流はある意味1対1の戦い。だから、囲まれないように戦えばかなりの確率で勝てる。でも、由姫はそれをしなかった。

「お姉ちゃん達が、ちゃんと行けるように。だから」

「それで自分を犠牲にしたってか？　ふざけるな！」

オレは斬りかかって来たアーマーリザードマンの剣を受け流して顎を蹴り上げた。そのまま空中の足場を踏みしめてアーマーリザードマンを蹴り飛ばす。

「言わせてもらうが」

「誰かを犠牲にして世界を救えたとしても、それは世界を救えたことにはならない。世界を救うということは、自分も仲間も知り合いも誰もかも救うこと。わかっているよ。でも、負ける気は全くないから」

オレは言われたい言葉を言われて小さく溜息をついた。後ろから迫ってきたリザードマンの剣を簡単に払ってレヴァンティンの腹で殴り飛ばし、背後から迫るオーガの斧を軽く飛んで避けた。

「そっか。でも、無謀だぞ」

振り返りながらオーガを蹴り飛ばし、トロルの拳をレヴァンティンで払う。手が若干痺れるが気にせずトロルの顔面を踏みつけて後ろに転かした。何体かの魔物が下敷きになる。

着地してさらにしゃがみ込みアーマーリザードマンの剣を避けて股を蹴り上げる。うん、これも止めよう。

悶絶するアーマーリザードマンを尻目にオレは空から迫って来ていたデーモンの槍を受け流した。いつの間にか空の兵力がこっちに向かって来ている。

「無謀でもいいよ」

由姫が真っ正面からトロルと拳をぶつけ合い、トロルを殴り飛ばした。

「それを可能にすればいいだけだから」

「むちゃくちゃだな。でも」

オレはにやりと笑みを浮かべた。

「悪くないな。モード？」

レヴァンティンの形を槍に変えて近づいてきたグレムリンを叩き落とす。そのまま横にいたキマイラを殴り飛ばした。

由姫は空中の敵に注意を向けているオレを守ろうと動いている。

オレからすれば由姫を見なくてもどう行動するかわかっている。こうすればああしてああするからこうする。

まるで、亜紗とシンクロしているような感覚。

「お兄ちゃん」

「なんだ」

オレ達は縦横無尽に駆け回りながら言葉を交わす。

時々、地上と空中の戦う敵を変えながら、なおかつ、パターン化しないように駆け回る。

殴り、突き、投げ、振り回す。

お互いがお互いの行動を予測して最適な行動を繰り返す。

「楽しいね」

「おいおい。戦いに酔ったか？」

時々あることだが、実戦をあまり経験していない場合に見られる。放置しておけば身の破滅しかない。

「ううん。わかるから。お兄ちゃんがどうやって戦っているかわかるから」

「奇遇だな。オレもだ」

多分、コンビネーションだけで言うなら亜紗よりも相性がいい。オレも由姫も音姉や亜紗みたいに特化した性能を持っているわけじゃない。特に由姫は発展途上だ。

二人で一人前。その言葉が頭に浮かぶ。

「このまま、ずっとお兄ちゃんと戦っていたい」

「ずっとは無理だ。目的を達成しないと」

「わかっているよ。でも、今は」

由姫が笑った気がした。もちろん、オレは由姫とほとんど背中合わせだ。でも、わかる。だから、オレも笑う。

「お兄ちゃんと一緒だと実感出来るから」

「同感だ」

オレと由姫は同時に前の敵を殴り飛ばした。それにしても、

「数が多いな」

「だね。でも、私はまだまだ」

「そろそろ着いたころか」

オレの予想では音姉達が儀式場に到着したはずだ。だから、早く向かわないと。

「そうだね。でも、どうする？」

由姫が周囲を見渡しながら言う。残っている数は大体５００ほど。勝てないわけじゃない。でも、数が多い。

オレや由姫は中村のように簡単に広域攻撃が出来るわけじゃない。時間や魔力を大量に使えば可能だが出来るだけ温存したい。

「援軍がいれば」

オレ達並みに強い奴がいればいいのに。

「呼んだかな？」

その言葉と共に敵の一角が崩れ落ちた。体中が斬り裂かれてだ。その中心にいるのはレヴァンティンとよく似た剣を持つ正。

「お前、どうして」

「避難所区域には知り合いが多くてね。苦手なんだよ。それに、も

うすぐ敗走するよ。避難所区域の魔物は。ここは僕に任せて」

「頼んだ」

「兄さん、即答はダメなのでは」

由姫が呆れたように言ってくる。まあ、由姫の言う通りだけど。

「それは僕も思ったよ」

「助けなければいけない人達がいる。だから、行くぞ」

オレは由姫の手を引っ張って走り出した。そして、前にいる魔物に向かって大技を放つ。

「どけっ！！」

「やれやれ、人使いが荒いよ」

正は小さく溜息をつきながら周と由姫の背中を見つめていた。そして、周囲を見渡す。

周囲にいるのは正を中心に出来た新たな包囲網。でも、その中で正は笑っている。

「たったこんな数で僕を止める気？　舐められたものだね」

正はレヴァンティンに似た剣を鞘に収めた。そして、虚空から剣を取り出す。時計の針がついた剣を。

「とりあえず、名乗らせてもらうよ。そして、この名前を聞いた以上、生かしては返さない」

正は静かに剣を構えた。

「『聖剣の担い手』海道」

最後の言葉は魔物達の絶叫によってかき消された。何故なら、言い終わると同時に包囲網にいた魔物が全て体中を斬り裂かれて断末魔の叫びを上げたからだ。

宣言通りに全ての魔物を殺した正は小さく笑っていた。

「僕は君に賭けをしたんだよ。君なら、あの夢に届くかもしれないからね。そうだろ。海道周。いや、『伝説の担い手』君」

第九十六話　狭間市の長い一日　白川七葉

クラインは笑みを浮かべている。ただの笑みじゃない。狂ったような笑み。まるで、精神が壊れた人間のように。

クラインの前にあるのは避難所区域の最終防衛ラインだ。頑固なバリケードと『ＥＳ』の面々。

普通なら破ることは出来ない。だが、クラインは普通じゃない。

「ふははははっ、我ら恐れ、そして、絶望しろ。我らの前にひれ伏せ。それが、貴様らの生きる道だ」

クラインが両手を広げ、まるで諭すように言う。だが、絶対死守をアル・アジフから命令されている『ＥＳ』の面々は反応せずに武器を構えている。妥当な判断だ。

『ＥＳ』の布陣は盾持ちのフロントと杖や弓、そして、銃を構えるバックの二重構造。これなら、並大抵の魔物は払える。でも、

「そうか。なら、死ね」

そして、彼らの影から大量のクラインが現れて彼らを殴りつけた。魔力の籠もった腕はそれだけで彼らを気絶させる。そう、あの時の第７６移動隊のように。

そこからクラインがやることはただ一つ。虐殺だ。ゆっくり歩み寄りながら魔術を展開する。確実に殺せるように。

「我らに刃向かうことが愚かだと知れ」

「だったら、そんなことを言う人の方が愚かだと言わせてもらうよ」

クラインはその声に振り返った。そこにいるのは槍を手に持つ七葉の姿。だが、クラインの目には周囲に浮かぶ頸線が見えていた。

「ほう。クラリーネと同じ武器か。使えない武器を選んだものだな」

「使えない？　違うよ。これは使い手によって大きく威力の変わる武器。あなたはただ勘違いしているだけ」

七葉はゆっくりクラインに向かって歩き出す。

あの日、クラリーネに負けてから七葉は考えていた。どうすれば勝てるのかと。でも、よく考えてみると頸線の使い方は様々であり、それを上手く使えるかどうかにかかってくる。

七葉がクラリーネに負けたのは戦闘経験と特殊能力。なら、自分が得意な点を伸ばせばいい。

そして、七葉が至った結論を実戦で証明するだけとなっていた。

「私は、あなたが嫌い。悠兄や孝治さんに怪我を負わせたあなたが嫌い。だから、この場で倒す」

「出来るのか？」

クラインはにやりと笑みを浮かべて『影写し』の力を使った。すぐに七葉が気絶してどう殺すかを考えながら。

だが、影から現れたクラインは剣によって貫かれていた。

剣には頸線が繋がっており、七葉が突き刺したのは一目瞭然だ。

七葉が伸ばした自分の得意分野がこれだった。大量の頸線による武器形成。

操る武器の数を多くすることで七葉はクラインに対抗する力を簡単に見つけたのだった。周はそれに気づいていた。どういう理由かわからないが。

「小娘の分際で」

「確かに私は小娘だよ。まだ子供だし、背は小さいし、胸はないし。でもね、私だってみんなの役に立ちたい。第７６移動隊の一員として活躍したい。そう思えるから」

「ふざけるな。ふざけるな！」

クラインが地面を蹴る。対する七葉も槍を握りしめて地面を蹴った。

槍の突きは基本中の基本。ただし、それは槍衾が出来上がっている時だけで、戦っている最中、特に１対１の戦いでは突きはデメリットにしかならない。

だけど、七葉は持っている槍を突いた。全力で。そして、最高速度で。でも、クラインはそれを回避する。七葉の最高速度はクラインからすれば十分に遅い。

七葉はそれを理解している。理解しているから手に持つ槍を頸線に解いた。

「なっ」

今まで笑っていたクラインの顔が驚愕に染まる。クラインの体はすでに七葉に向かって踏み出しているので止まることは出来ない。

七葉はそれを狙っていた。だから、新しく頸線が作り出した剣を振り切った。

クラインの顔に真一文字の傷跡が出来る。

槍を振り回した場合、どうしても柄の部分で殴ることになる。そうなるから七葉は剣に変えて振ったのだ。

「がぁぁぁっ！！」

クラインが顔を押さえて後ずさった。

七葉は頸線を纏め上げる。そして、巨大なハンマーを作り出してクラインを殴り飛ばした。

クラインは近くの建物にぶつかって動かなくなる。

「あう、疲れた」

そう言いながら七葉は壁にもたれかかってずるずる滑りながら座り込む。これでも昨日は1日近く意識不明のまま眠っていたのだから。

周のようにすぐに動けるわけがない。あれは薬のおかげかもしれないが。

「確かに、周兄の言うように弱点は私だったな。でも、自分でもよく勝てたよね」

七葉ははっきり言って勝つ見込みは無かった。第７６移動隊にいるとはいえ、実力によって入った他の面々と違い、七葉はわがままを貫いた（本人はそう思っている）だけで実力が無いのはよくわかっていた。

よくわかっていたからこそ、七葉は勝つことにこだわるのではなく負けないことにこだわったのだが、結果は圧勝。

七葉は小さく息を吐く。

「他の人なら負けていただろうな。私ももっと強くならないと。悠兄や周兄に近づけるように」

七葉はゆっくり立ち上がった。立ち上がった瞬間、ゾクッと嫌な感覚が体に突き刺さる。まるで、膨大な力を感じ取ったかのように。

七葉は慌てて儀式場のある方角を見た。そこにあるのは儀式場のある山とその周囲を包み込む闇のドーム。それはだんだん拡大している。

「くっ、結界展開！」

すかさず結界を展開する七葉。頸線で陣を作り出し、通常よりも頑固な頸線を作り出す。闇のドームが簡単に迫っていたから。

だが、闇のドームはその結界を呑み込み破壊した。耐える暇なく七葉の体が闇のドームに呑み込まれる。そして、目を開けると、

「そんな、嘘だよね」

信じられない光景が広がっていた。周囲は暗い。だが、この暗さは見たことがある。そして、空に浮かんでいるのは月。

「さっきまで昼だったのに。それに、今日は満月じゃないのに」

周達の下に向かいたい気持ちを押さえて七葉はアル・アジフを探すために避難所区域の方に向かう。

何か、嫌な予感がする。そうとしか考えられなかった。

第九十七話　過激派の援軍（前書き）

とある後書きを訂正しました。書いてたらミスっていたのに気づいたので。
新たなキャラが二人でます。ちなみに名前は既に出ていますが。

第九十七話　過激派の援軍

「ちょっと、多いね」

光は小さくつぶやきながらレーヴァテインをありったけコピーする。そして、群がってくる翼竜とグレムリンやらデーモン、そして、キマイラを一瞬にして吹き飛ばした。だけど、空中戦力の数はまだ２０分の１はいなくなっていない。どうやら、常に召喚されているようだ。

「そうだな」

孝治が弓を構えながら言う。だけど、弓ごときでは数を減らせるわけがない。

空中戦力には音姫と亜紗の二人も苦労していた。

「亜紗ちゃん、敵の範囲わかる？」

『半径２００ｍ。効果範囲より広い』

亜紗が左手でスケッチブックを捲って答える。右手では刀を振って向かってきた槍を切り払った。

「しゃあない。レーヴァテイン全開放」

光がレーヴァテインを振り上げる。すると、光の周囲に今の光が作り出すことが出来る最大限のレーヴァテインのコピーと炎弾。そして、ストックしていた全ての魔術を準備していた。

「行って。ここはうちが食い止める」

「だが、しかし」

「孝治行って！　うちは負けるつもりはない。でも、ここで行かなかったら海道の、周ちゃんの願いは叶えられへんのや！」

光は叫びながら全てを全方向に放った。凄まじい爆発と共に空中戦力の穴が出来る。特に前方。

「行けっ！」

「っつ、了解！」

黒い翼をはためかせ孝治は前方を駆け抜けた。その下を音姫と亜紗が駆け抜ける。

光はレーヴァテインを構えた。そして、過去の出来事を思い出す。

あれは、初めて孝治と出会った時、よく似たことが起きていた。絶望的な敵の数に生き残っている味方は約２０人。その中で戦闘出来るのは周、孝治、光の三人だった。光はみんなを逃がすために時間を稼ぎ、そして、大怪我をした。病院で話したことのない孝治にこっぴどく怒られたことを光は思い出す。

「あの時みたいにはせえへん。うちは『地獄の攻撃者（ヘルズアタッカー）』。全てを焼き尽くす地獄の死者。ここは通さへんで」

レーヴァテインの投影。それは普通の魔術を使うよりも火力が出る

上に威力も高い。だから、光はそれを使う。自分の名前の由来となった魔物の殲滅戦の時から。

「レーヴァテイン、いくで。投影発動。能力開放」

大量のレーヴァテインを並べる。

魔物達は孝治達を追わずに全てこっちに向かってきているのがうれしい。敵の数は目視で大体１５００ほど。一人が相手にする量じゃない。

「でも、ここはうちがやらんなあかん。レーヴァテイン、斉射」

そして、光はレーヴァテインを一気に放った。そのまま空を一気に動く。

砲撃手としての役割は安全な場所から確実にあたる攻撃を叩きつけること。それにより、絶対的なアドバンテージを得られる。砲撃手は基本的に攻撃力が高いからだ。でも、囲まれていたならどうするか。答えは簡単だ。ひたすら動き回って砲撃を加えて行く。

光は縦横無尽に飛びまわる。完全に囲まれて逃げ道を塞がれないように砲撃と炎弾を叩き込みながら。いままでの実戦経験を生かして。

でも、すぐに限界が来る。光はレーヴァテインを構えたまま止まった。

周囲は完全に囲まれており、逃げ道はない。この場で使うことはただ一つ。

「ははっ、孝治、約束破ってごめんな。投影発動。能力開放」

今すぐに作り出せる最大の投影を作り出す。そして、レーヴァテインを構えた。

「ただで死ぬつもりはないやから」

レーヴァテインが動く。

「この場にいる戦力を出来るだけ削ぎ取るのみ」

レーヴァテインのコピーが光を中心に球体を作り出す。そして、光は涙を流した。

「さようなら」

レーヴァテインが一斉に爆発する。その爆発は周囲にいた空中戦力を半分近く呑み込んだ。

自爆。

囲まれた時にする最終手段。自分の魔力を起爆剤にすることもあるが、それをすれば跡形も残らない。だから、光は全ての投影したレーヴァテインを爆発させることにした。巨大な球状の魔術陣を利用して。

これなら中にいる光は爆風によって死ぬ。そう、死ぬはずだった。だけど、光はまだ自分の意識があることに驚く。どうしてかわからない。それに、誰かに抱きしめられているような。

「バカ。光のバカ。久しぶりに会えると思ったのに、どうしてそんなことをするのよ」

聞いたことのある声。聞いたことのある久しぶりの声。この声は確か、あの日、『赤のクリスマス』以来聞くことの無くなった声。

「楓？」

「うん。うん。私だよ。木村楓だよ」

光が目を開けると、そこには目に涙をためた少女がいた。その手にあるのは砲撃杖と呼ばれる遠距離支援型の杖だ。砲撃も可能なため光は一度使用を考えたことがある。

懐かしい顔。でも、ちゃんと年をとってあの顔が同じ年月を過ごせばこうなるだろうという面影はあった。背中の半ばまで伸びた髪が懐かしい。

「楓、このままではマズイわよ」

そして、楓の近くにはもう一人いる。氷を纏う剣を持ち、背中に氷の属性翼を生やす少女と大人よりも大きそうな大きな狼が飛んでいる。

少女は後ろからしか見えないが、その髪はポニーテールに括っている。音姫よりかは短い。

「わかった。光、飛べる？」

「うん」

楓の言葉に光は頷いた。そして、楓が砲撃杖を構える。

「チャージに必要な時間は約２０秒。それまで守りきれる？」

「当り前よ。そっちの子は？」

少女が振り返りながら挑発的な笑みを浮かべた。その笑みに同じような笑みで返す。

「２０秒？　１０分でも１時間でも、楓と一緒なら守りきれる」

「頼もしいわね。フェンリル、自由に行動しなさい！」

少女の言葉に狼が動いた。そのまま魔物の群れに突っ込む。光はレーヴァテインの投影を開始する。

「光よ集え。全てを遍く照らす光。全ての始まりである光」

楓は詠唱を開始している。それに気付いた魔物達は一斉に楓を狙うように動こうとした。だけど、光がレーヴァテインの投影を今まで以上に作り出している。

「私の絶対制空権を作り出す」

「生命の母である光。星空をやさしく照らす光」

「レーヴァテイン、オーバードライブ」

タイミングが揃った。さっきは使用できなかったレーヴァテインの

最終形態。デバイスが持ち主の意志に応えようととした結果。誰かを守りたいという思いが力となっている。

「本当の地獄を見せてあげる」

そして、レーヴァテインが放たれた。

今までの破壊力とはケタ違いの爆発が魔物達に襲いかかる。それはレヴァンティンと同じ、世界を滅ぼす力の結晶。

「光は集いて槍となす。全てを無に帰す力となせ。光、冬華（とうか）、上がって！」

その言葉に二人は同時に上がった。そして、フェンリルも。

「コズミックバスター！」

それは、光の嵐。それは、全てを貫く光の槍。それは、膨大な熱量に指向性を持たせたもの。そして、凄まじい光が魔物達を焼き尽くした。

楓が砲撃杖を下す。

「ふう、これで、倒したかな」

「楓！」

光の声に楓は振り返った。振り返った先にいるのは一体のデーモン。その槍は目の前まで迫っている。

討ち漏らした。その考えが楓の中を駆け回り、デーモンの槍が吹き飛ばされた。地上からのエネルギーの塊によって。

「えっ？」

そして、驚く楓の目の前でデーモンが由姫によって殴り飛ばされた。そのまま由姫は落下する。

「お兄ちゃん、受け止めて。受け止めて！」

「了解」

レヴァンティンのモード？カノンをしまった周はそのまま跳び上がって由姫を抱きとめた。そのまま3人がいる空中まで登ってくる。

「助かった。隊員を助けてくれて。あんたらは？」

「『ＥＳ』過激派独立機動隊第４８部隊隊長長峰冬華よ。そっちの名前は知っているからいいわ。こっちは隊員の木村楓」

「お二人は日本人なんですね」

由姫が感心したように言う。でも、周は固まっていた。

「楓、なのか？」

「久しぶりだね。周君。そこの子は、茜ちゃんじゃないよね」

「ああ。白百合由姫。一応、義理の妹だけど」

由姫がそのことに口を開こうとした瞬間、周囲が闇に染まった。まるで、何かに呑み込まれたように。

「なっ」

周が周囲を見渡す。だが、楓と冬華の二人はいたって平然としていた。

「始まったね」

「ええ。狭間の夜が」

第九十八話　浩平の過去（前書き）

幕間を含めて１００個目の話です。ちょうど最終決戦の真ん中にあたります。
読んでくださっている方ありがとうございます。ご意見ご感想をお待ちしていますので気になる点がありましたら教えてくだされればありがたいです。
お気に入り登録も少しずつ増えているので頑張っていきたいと思います。

第九十八話　浩平の過去

「一つ、聞いていい？」

リースは浩平の横を飛翔しながら尋ねる。ちなみに、浩平は必死に走っていた。

「あの烏天狗との過去を教えて欲しい」

「ああ。あいつはな父さんとお姉ちゃんの仇なんだ。俺の目の前で二人を殺した仇」

だけど、リースは首を傾げていた。

二人だけでいた時に浩平もリースもお互いの身の回りの話をしていたからだ。

リースはアル・アジフが親みたいな感じであり悠人は弟みたいな感じで過ごしていると言っている。

対する浩平は家族４人で暮らしていると言っていた記憶がある。父親、母親、姉、そして、浩平。

「今の親父や姉貴はお袋が再婚したんだよ。まあ、周みたいに姉弟関係は仲良くはないが、普通には暮らしている。でも、俺はあの日を忘れない」

あの日、浩平の父親の仕事が休みでまだ幼かった浩平は姉と一緒にゲームで遊んでいた。

父親は『GF』の部隊長で忙しい中でも見守ってくれていたのを浩平は覚えている。だが、その日、来客があった。

父親は玄関に向かい、姉は音量を落とす。対する浩平は真剣にゲームをしていた。

だが、それは父親の悲鳴に遮られる。

腹から血を流した父親の姿が見えて、姉は浩平を抱きしめた。そこに現れたのが烏天狗。

烏天狗はライフルを構えた父親からライフルをもぎ取ると、そのまま父親の頭を掴み握り潰した。

浩平の視界の中で父親の頭が弾け、顔に血やそれ以外のものが付着する。あまりのことに声を上げることが出来ず、烏天狗はそのまま姉の首を掴み、千切った。

姉の悲鳴が聞こえなくなると共に体中に血がかかり真っ赤になる。浩平が声を出せるようになったのはそれからだった。

そして、烏天狗がいなくなってから浩平は助け出された。緊急出動でやって来た母親によって。

烏天狗があの日に何を話したか覚えていない。でも、父親と姉の断末魔の悲鳴は今でも浩平は覚えている。

「まあ、そういうところだ。父さんもお姉ちゃんも俺を守ってくれた。だから、俺は天国にいる二人に元気で生きていることを示した

かったから振る舞っていたんだ。リースに優しい言葉をかけたのも、自分のため。リースに優しくしていたのも復讐心を隠すため。俺って、最低だよな」

リースはその話に聞き覚えがあった。ちょうど、クロノス・ガイアの候補生になったころで、日本語の勉強中にその記事を読んだことがある。

悲惨な事件があり、浩平は復讐を誓った。その復讐心を隠して『GF』に入り強くなろうとした。それは、第７６移動隊の半数以上に共通すること。

周は『赤のクリスマス』を起こした原因として強くなってそんなことは起こさせないように強くなろうとした。

光は『赤のクリスマス』後の周を見て、自分を犠牲にしてでも強くなろうとした。

孝治は『赤のクリスマス』により家が苦しくなり、お金を稼ぐために強くなろうとした。

亜紗は周に助けられ、周と一緒に自分と同じ人を作らせないために強くなろうとした。

悠聖は『赤のクリスマス』で大事な人を失った。だから、失いたくないから強くなろうとした。

誰もが様々な理由で強くなろうとした。そして、強くなった。その手段や方法は違っていても、強くなろうとしたことはリースは否定しない。

「私はそれでも浩平と会えて良かった。浩平がいてくれて良かった。今の私は今までとは違う。浩平と共にいるから今の私がいる。私は、今の私が好き」

「リース。俺は、今の俺が嫌いだ。こんなにも心配してくれる人がいるのに、俺は騙していた。リースは本当のことを話してくれたのに、俺は黙っていた。最低だ」

「うん。でも、誰にも話したくないことはある。アルなら自分の恋心。悠人はもっと友達が欲しいこと。周は隠し事はしたくないこと。孝治は浩平みたいに明るくなりたいこと。誰にだってある。私はそれを否定しない。それは、人を形取る中で大事なものだから。私はそんな浩平を認める」

浩平は悔しかった。ここまでリースが言ってくれるのに、浩平はほとんど言ってやれない。

でも、言えることは一つだけある。

「ありがとう。ありがとう、リース。俺はお前と出会えて良かった。だから」

浩平がフレヴァングを握りしめる。ようやく目的地が見えてきたのだ。

二人は同時に広場に到着していた。そこの中央に位置しているのは烏天狗。その手にあるのは巨大な剣。

「よく来たな小童。それにお嬢ちゃんもか。また、同じことを繰り

返すつもりか？」

今回は誰も援軍には来ない。周達は儀式を止めるために戦っているし、アル・アジフ達は避難所区域を守るために必死で戦っている。

つまり、烏天狗の戦いでは浩平とリースの二人で倒さないといけない。でも、二人の気持ちは固まっていた。

「上から目線か。油断していると足下をすくわれるぜ。俺もリースもただの人間じゃない」

「ほう、神剣を持つからと言っていい気になるなよ。そのような力、我が剣である烏丸の前にはなんら役に立たん」

「勘違いしているようだな。たかがなまくら刀で俺のフレヴァングを止めれると思うなよ。俺は今までとは違う」

浩平はフレヴァングを構えた。

「お前をここで絶対に倒す。父さん、お姉ちゃん、見ていてくれ。リース、行くぞ！」

浩平がフレヴァングの引き金を引こうとした瞬間、広場が闇に包まれた。

「なっ」

「っつ、エルセル・ディオ・グイン・ラルフ」

リースがすかさず唱えて竜言語魔法を発動させる。辺りを照らす光

に闇は払われた。

烏天狗は微動だにせずに笑みを浮かべている。

「始まったか」

「何の話だ！」

浩平はフレヴァングの引き金を引こうとした。だが、それは烏天狗の言葉によって止まる。

「狭間の夜だ。この世界を闇に沈める儀式の始まりだ」

それは、淡く光る満月の月と共に宣言された。

第九十八話　浩平の過去（後書き）

これから少し残酷な表現が多くなるので付け加えました。
前半最終決戦の真ん中ということで、これからの話の見所を箇条書きにします。

・狭間の夜とは何か？
・狭間の鬼とは何か？
・音姫のレアスキル『歌姫』。
・孝治の神剣『リバースゼロ』。
・儀式の行方。

この五つではないかなと思っています。
千春の行方やどうして狭間市の長い一日なのかなど、未だに話していない部分はいくつかありますが。
これからも視点や時間軸が目まぐるしく変わっていきますが、しっかりとした内容を書いていこうと思っています。
ご意見ご感想をお待ちしております。駄文小説をよくするために協力してくだされば作者のやる気が上がります。

第九十九話　儀式の始まり

都は静かに座っていた。耳にははっきりと戦っている音が聞こえる。そして、こちらに向かって来ている音も。

「皆さん、私のために必死で戦っているのですね」

「そうだ」

都がポツリと呟いた言葉にエレノアが反応した。そして、都の前に移動する。

「そろそろ儀式を始める。準備はいいな」

「・・・。わかりました」

都は諦めたように頷いた。

都が聞いた限り、動員された貴族派の数は大体2万ほど。他の共闘する派閥からも借りているらしい。だから、普通なら辿り着けない。普通なら。

「儀式の準備を始める。準備を進めろ！」

「はっ」

エレノアの近くにいた魔物が声を上げ走り出そうとした。だけど、そのまま体が崩れ落ちる。

首が裂けたのだ。まるで、鋭い何かによって裂かれたように。

「なっ、もう到着したというのか」

「エレノアが想定した相手じゃないよ」

その声にエレノアは振り返る。都は目の前にいる人物を驚きと安心の表情で見ていた。

そこにいるのは槍を構えるクラリーネ。

「都、ごめん。今まで、本当にごめん。ボクは都を裏切った。だから、ごめん。でも、今からは守るから」

「どういう心境の変化か？」

エレノアが『炎熱蝶々』を背中に表しながら尋ねる。クラリーネ、いや、千春はしっかり槍を握りしめた。

「そうだね。ボクはよく考えたんだよ。昨日、こっぴどく負けて、都に会いたいと思った。琴美と話したいと思った。ボクのやりたかったことを見つけた。エレノア、ボクはエレノアのやり方をもう、容認しない」

「そなたは余の考えに賛成したのではないか？」

「うん。そうだよ。エレノアのやり方でも世界は救えると思う。だけど、世界の命運を変えようと頑張っているのはエレノアだけじゃない」

あの時にクラリーネとして戦った七葉も同じだった。未来を変えよ

うと動いている人物。そして、彼らも。

千春は周囲を見渡す。いつの間にか囲まれていた。頸線をかすかに展開しながら小さく息を吸う。

「誰もが新たな未来を求めて戦っている。それを知って、ボクはエレノアの考えに賛同しない。賛同出来ない。だから、都はボクが守る」

「この数に囲まれてか？　酔狂なことを。ならば、死ぬがいい」

『今しばし待て』

狭間の鬼の言葉に誰もが止まった。そして、都が反応する。

「この声は」

『ご苦労だったなエレノア。これで、ようやく、儀式が行える』

千春は絶え間なく周囲を見渡して狭間の鬼の姿を見つけようとした。だが、唐突に目の前に現れた。狭間の鬼が。

頸線が動くより早く、鬼の腕が千春を吹き飛ばす。

「千春！」

都は千春に駆け寄ろうとした。だが、その腕を鬼が掴む。

「巫女よ。儀式の時間だ」

無理やり鬼と向かい合う形にされた都は鬼の腕が振り上げられたのがわかった。そして、腕を振り下ろす。しかし、その腕は都に当たることなく外れた。

狭間の鬼が千春を睨む。

『邪魔を、するのか』

「やらせない。都は傷つけさせはしない」

「千春！　逃げて！」

千春の背中に嫌な予感が駆けずり回った。だから、千春に向かって叫ぶ。でも、それは遅い。

狭間の鬼が千春に向かって走る。千春は頸線を飛ばして鬼を狙う。でも、頸線は全て鬼の体に弾かれた。

「なっ」

『弱い』

狭間の鬼が千春の後ろに回り込み殴りつけた。千春は地面を転がって都の前で飛んで体を立たせる。そして、槍を構えようとして出来なかった。

千春の手から槍が落ちる。転がって都の膝に当たった。だが、都はその槍に目を向けない。

千春は信じられ目で下を見る。そこにあるのは自分の左胸が鬼の腕

によって貫かれている姿だった。体から急速に力が抜けて、口からは血が出る。

鬼の腕は千春の胸を的確に貫き、心臓を握り取っていた。その心臓を都の前で握り潰す。千春の血が都の体を濡らした。

千春の体から腕が引き抜かれ、千春は都に向かって倒れた。都は千春を抱きしめる。

「千春！　千春！！」

「ごめ、ん」

その言葉を最後に千春の体から力が抜けた。誰が見てもわかる。千春は死んだ。

「いや、いや。いやーーっ！！」

都は泣きながら千春の体を抱きしめた。だが、その体は鬼によって引き剥がされる。

「千春！！　千春！！」

『巫女よ、儀式を始めよう』

そして、鬼は腕を動かす。都の胸に手を当てて前に進ませた。だが、千春の時と違って血は出ていない上に貫通していない。まるで、何か別のものを狙っているかのように。

「あっ、くあっ」

苦悶の表情を浮かべる都を見ながら鬼が笑みを浮かべて都の胸から手を抜いた。その手にあるのは一本の杖。

杖の先にある3つの輪の中でコインのような綺麗な装飾がされたものが回っている。

『ようやくだ。ようやく手に入れた』

鬼が高らかに声を上げる。

その時、音姫達がその場に到着した。

「亜紗ちゃん、孝治くん！」

音姫の言葉に全員が動く。だが、鬼は笑ったままだ。

『儀式を始めよう』

そのまま、鬼が杖で地面を叩く。すると、周囲が闇に包まれた。そして、暗闇が広がる。ほのかな月の光に照らされる暗闇が。

「どうして、満月なの？」

空を見上げた音姫の声は震えている。それは、あまりにもおかしい現象だから。

今日は満月ではなく、さらには一瞬で夜になった。

『我が宣言の下に集え。我が下部達よ！』

その言葉と共に狭間の鬼の周囲で黒い異形が生まれだす。その異形は、様々な形をしていた。

この世界の動物、魔界の動物、そして、天界の動物。

『さあ、喰らいつくせ』

そして、異形は音姫達だけでなく、貴族派にも襲いかかった。

第百話　狭間市の総力戦（前書き）

百話目にして新キャラ投入。一応、前半最終決戦後に始まる後半に向けてのキャラ増加です。

第百話　狭間市の総力戦

一瞬にして夜が訪れた。

それは市役所横の公民館にいた和樹や俊輔もすぐに気づいていた。ちょうど、出口付近で話していた2人は慌てて外に出る。

そして、空を見上げて愕然とした。

「お、おい。どうして今が夜になっているんだよ。しかも、満月って。昨日の夜はまだ満月に近くなかったぞ」

「魔術。いや、自然に干渉出来る魔法か。それにしても、あまりに大規模だ。確実に狭間市の全てを覆っているだろうな」

「なんでそんなに冷静なんだ？」

和樹が呆れたように俊輔に尋ねる。俊輔は笑みを浮かべて空を見上げた。

「俺様だからだ」

避難所区域内の避難所から出て来る人がたくさんいる。誰もが夜になったことを困惑していた。それは『ＧＦ』や『ＥＳ』も同じ。

「周達は、戦っているのかな？」

「ふっ、あいつらが戦っていない方がおかしい。だが、今は俺達に出来ることをしなければいけないな」

俊輔が見ているのは唯一バリケードが開かれた場所だ。そこでは負傷者というより気絶した人達の救出が行われている。

だが、その向こう。その向こうから迫って来ている魔物の数々。

『ＧＦ』のメンバーがバリケードの上に登って射撃を行っているが進行は衰えない。

「俺達に何が出来るって言うんだ？　俺達は非力だ」

「ああ。非力だとしても、バリケードを組み直す手伝いが出来る」

俊輔は走り出した。その後を追うように和樹も走る。

「バリケードの組み直しを手伝おう」

俊輔はそう言って『ＥＳ』が行っている作業を手伝い始めた。

「なっ、民間人は」

「人手が足りないのだろ？　黙って手伝わせろ」

魔物の進行を止めるメンバーとバリケードを組み直すメンバーで分けていれば確実に人手が足りない。それがわかっているから『ＥＳ』の面々は俊輔の手伝いを黙認する。

それを見ていて和樹は小さく溜息をついた。

「仕方ない」

その言葉と共に和樹が手伝いを始める。
こういう光景がいたるところで見られ始めていた。

「術式結界じゃな。式は魔法」

七葉が避難所区域の中央にあるメンテナンスドックに戻ると近くで机の上に地図を広げるアル・アジフ、悠人、愛佳、刹那の姿があった。
どうやらちょうど集まっていたらしい。

「アル・アジフさん」

「七葉は無事のようじゃな。今、結界が展開された」

「やっぱり結界なんだね。私が作り出した結界が一瞬で喰われたからもしやと思ったけど」

結界の展開は結界展開時以上の魔力で破壊されるか、展開されたものより強い結界を作り出すことで破壊出来る。
ただ、後者は絶望的なまでの差がある場合、破砕という現象が発生する。傍目から見れば一瞬にして呑み込まれて消え去る現象だ。基本的には喰われると表現される。

「あの頸線を使った強化結界で破砕現象ですか。由々しき事態ですね」

愛佳の言う言葉はもっともだ。頸線を使った結界展開はかなり有名で、避難所区域全体を覆えるようなサイズを作り出すことを考えると七葉の実力はそこそこ高い。だが、それすらを破砕する結界。

「危険性は最大だと私は思います。そうじゃな。悠人、外部への連絡は？」

パワードスーツのシステムを使って通信を開いていたらしい悠人は首を横に振った。

七葉はハッと気づいてデバイスに通信機器を繋げる。

「周兄！？　周兄！？　だめだ、繋がらない」

「魔術波が遮断されているということかの？　刹那、魔界へは？」

「無理ッスよ。おそらく、元凶を破壊するまでどうにも出来ないッス」

つまり、この狭間市にいる戦力で元凶を倒さないといけない。

「最大の問題が、今のこの状況ですね」

愛佳はそう言いながら周囲を見渡した。そこにあるのはバリケードが崩壊しそうになってそれを『ＧＦ』、『ＥＳ』及び狭間市市民が必死に耐えている姿だった。

アル・アジフが魔術書を開く。

「何故じゃ。どうして、この状況に」

「報告します」

すると、その最中に『ＥＳ』メンバーの一人が駆け寄ってきた。

「黒い異形がバリケードに大量に突撃してきています。このままでは、バリケードが崩壊します」

「異形じゃと。魔物ではないのか？」

「「神の私兵」」

七葉と愛佳の言葉が重なる。七葉は愛かがそれを知っていることに驚き、愛佳は同じような意味で驚いていた。そして、愛佳が頷く。

「おそらく、狭間の鬼が完全に復活するようです。今いる異形はその鬼が作り出した私兵。私兵を倒しきれば、復活しない限り、増えません」

「了解じゃ」

アル・アジフはそのまま空に跳び上がった。そして、異形のいる場所を確認する。

異形の数はかなり多いらしく、バリケード周辺では黒い軍団となっていた。対するこちら側は市民がさらに手伝ってくれている。完全

な総力戦。

「我が名において、我が魔術書『アル・アジフ』に刻まれし全ての魔術に告げる」

そして、アル・アジフはその展開を打開するために全身全霊の魔術を使うことにした。今のアル・アジフが使える最大出力の魔術。いや、今のという表現はおかしいことになる。現在のアル・アジフに刻まれている魔術の中で最大最強の砲撃魔術。

「全ての力をここに集わせ、我が命に従え。我が名のもとに全てを浄化する力となせ」

アル・アジフの周囲にいくつもの魔術が展開する。それは、アル・アジフに刻まれた幾千幾万の魔術。それら全てがアル・アジフの作り出した一つの魔術に集結している。

指向性を持たせ、黒い異形を狙い撃つ。

「導きの魔術（アル・アジフ）」

異形が集中する場所に収束した魔術が叩きつけられる。それは焼きつく炎であり、体を痺れさせる電撃であり、精神を狂わす水でもあった。あらゆる魔術の混合魔術。それが、導きの魔術（アル・アジフ）

だが、そのまじゅつによる魔力損耗率は極めて高い。だから、空にいるアル・アジフは肩で大きく息をしていた。

「これで、どうじゃ」

バリケードの前にいた異形の大半は吹き飛び、そして、地面にひれ伏している。そこに『ＧＦ』、『ＥＳ』の両メンバーが異形に攻撃を加えていた。

「よし、このまま地上に、なっ」

疲れていたからアル・アジフは気付かなかった。アル・アジフに向かって飛んできた何か黒い物体を。だから、アル・アジフはまともに受けてしまう。肩を浅く切り裂かれたアル・アジフはそのまま体勢を崩して落下した。

魔力が思ったように使えない。このままだと、落下する。

そんな中、アル・アジフの脳裏には周の顔が思い浮かんでいた。アル・アジフよりもはるかに年下。だけど、誰よりも大人であろうとする子供。

そして、アル・アジフの体の落下が止まる。誰かに受け止められたようだ。

「周？」

「悪かったな。周じゃなくて」

そこにいたのは善知鳥慧海だった。

アル・アジフは慌てて魔力を練って空を飛ぶ。

「ち、ちちち、違うのじゃ。わ、わ、我はただ」

「あいつもプレイボーイだこと。本人無自覚だけどな。援軍に来たぜ」

「何故、そなたらが」

「オレだけじゃない」

そう言って慧海は地上を指さした。そこにいるのは大男と執事服を着た老人。そして、大きなハルバートを持った小さな少女。それ以外にもたくさんの援軍がいる。魔物と一緒に。

アル・アジフは目をぱちくりさせた。

「これは、どういうことじゃ？」

「援軍だよ。魔界に直接乗り込んで魔王派を動かした。援軍は、魔王達だ」

和樹達は呆然としながら目の前の様子を見るしかなかった。だって、今まで戦っていた面々である魔物が一緒に共闘しているからだ。

「なあ、俊輔、どういうこと？」

「俺に聞くな」

俊輔もこの様子にはため息をついているようだった。

今まで守っていた『ＧＦ』も『ＥＳ』も困惑している。でも、怪我した人の治療や戦闘を魔物達は率先してやっているので誰も文句を言わない。いや、言えない。

「くっ、みんな離れて！」

すると、バリケードの上に和樹達よりも小さいであろう少女が昇り、バリケード周囲にいる人達に叫んでいた。和樹と俊輔はその言葉に反応して、バリケード周囲にいる怪我人を二人で運ぶ。すると、バリケードが崩壊した。いや、崩壊させられたと言うべきか。

バリケードを崩壊させた張本人は鎌を持つ少年。

「どうして君がいるのかな？」

少年は幼い少女に尋ねた。少女は手に持つハルバートを構える。完全に体の大きさに合っていないけど。

「パパが動いたからだよ。パパはあなた達貴族派の動きには大変怒っていたけどね」

「ちっ、魔王が動いたか。だが、僕らはもう貴族派じゃない。魔神派だよ。エレノアやクラリーネの理想には飽きた。僕が、僕達がこの世界を統べる。それが、魔界の住人のやること」

「違う！　魔界の住人は人界の住人と仲良くする。パパやせっちゃんだって頑張っている。私だって仲良くなりたいもん。だから、殺させない。ここの人達は私達が守るからね」

少年は馬鹿にしたように鼻で笑った。

「下等生物がお前の様なガキの話を聞くとでも」

「俺はお前よりその子を信じたいぜ」

和樹がにやりと笑みを浮かべながら言う。その言葉に少年の眉がつり上がった。

「その子には意志がある。自分でそうしたいって意志がな。周みたいだ。だから、俺はその子を信じる。お前みたいな俺達を見下すような奴を信じる方が少ないんじゃないか？」

「下等生物の分際で。この場で皆殺しだ。魔王の娘と共に、その言葉を言った報いを受けろ」

少年が動く。対する少女も動いた。

鎌に合わせてハルバートを振る。少年の動きが洗練された動きだとするなら少女の動きは完全に力任せ。ただし、その力任せでも十分な威力を持っている。

その間にも『ＧＦ』と『ＥＳ』の立ち直る時間が出来上がる。

「もらった」

少年の鎌が少女のハルバートを空に上げた。そして、振り下ろそうと力を込める。だが、そんな少年の顔面に少女のこぶしが入った。

少年が地面を数回跳ねて建物に激突する。対する少女は空から降っ

てきたハルバートをつかんだ。

「えへっ、ありがとうね。お兄ちゃん」

そして、少女が和樹に向かって礼を言う。その和樹の顔は、言わなくてもわかるだろう。ちなみに、俊輔が無言でわき腹に肘を叩き込んでいた。

「さて、レイン・ラルフ。リリーナは降参して欲しいな。これ以上は無益な戦いになるし」

「黙れ。魔王の娘！　殺す。殺す。絶対に殺す！」

レイン・ラルフと呼ばれた少年が鎌を振り上げた。それを少女はハルバートで受け止める。

「やれ！」

だが、戦っているのは少女一人じゃない。少女の後ろから異形が迫る。避けられるような距離じゃない。

少女は振り返り、そして、向かってくる狼の異形を目に捉え、目を瞑った。

「させると思う？」

そこに入ってくる一つの影。背中のブースターを最大限まで稼働させて少女と異形の入り込み、悠人は異形の噛みつきをパワードスーツの右の腕の部分で受け止めた。

悠人は左手で円筒を手に取り、エネルギーの刃で体を両断する。

「無事？」

悠人は腕についた顔を払いながら少女に尋ねた。

「えっ？　あっ、うん。ありがとう」

「人間風情が！」

その隙にレイン・ラルフが少女を押しのけて悠人に鎌を振る。それは普通に避けられる距離でもなく、避けられる速度でもなかった。攻撃前から動いていなければ。

レイン・ラルフの鎌が空を切る。そして、レイン・ラルフの目の前に銃口が突き付けられた。

「倒れていて」

悠人は容赦なく引き金を引く。レイン・ラルフの額に至近距離でエネルギー弾が炸裂してレイン・ラルフは倒れた。

「大丈夫？」

悠人は倒れている少女を助け起こす。その少女の顔はほんのり赤かった。

「あ、ありがとうです」

「どういたしまして。ここはお願いするよ、僕は遊撃だから。じゃ」

「待って」

少女は行こうとした悠人に声を上げた。

「名前、聞いていいですか？」

「悠人。真柴悠人」

「悠人。私はリリーナ・エルベルム。魔王の娘です」

その言葉に悠人は笑みを浮かべた。

「うん。リリーナだね。また」

そう言って悠人が走り出す。ブースターを使わないのはエネルギーが少ないのか、はたまた・・・

「なあ、どうして俺はラブコメを見て涙を流して、ぶげらっ」

俊輔が無言で和樹を蹴り飛ばしていた。

だが、敵はまだまだ来る。異形の群れ。それに向かってリリーナはハルバートを構えた。

「ここは通さない。誰も、傷つけはさせない」

「おいおい。嬢ちゃんだけかっこいいとこ見せんじゃねえよ。ここは、俺達も参加させな」

そう言ってリリーナの横に並ぶ『ＧＦ』、『ＥＳ』メンバー。それを見たリリーナは少しきょとんとして、そして、笑みを浮かべた。

「はい。お願いします」

「どっせい！」

クマの形をした異形が拳でたたきつぶされる。

「ふむっ」

突っ込んできたサイの姿をする異形の突進を受け止めた。

「ふんぬらばっ！」

そのまま異形に向かって投げ飛ばす。

異形相手に素手で暴れ回っているのは筋骨隆々の男だった。

「がははは っ。そんなものか！　そんな力で人の街を脅かしていたのか？　非力な奴らめ。あっ、ここは俺が守るから皆さん別のところに行ってくださいね」

異形に話しかける時は自信満々な声で。バリケードを守る人たちに話しかけるのは敬語で。誰も反応することなくぽかんとしているしかない。

「さあ、かかってこい。ここはこの魔王、キルガメシュ・エルブレムが守りきる。それが魔王としての仕事。見よ、この肉体美を！」

その言葉に反応する人は二種類いた。

一つは魔王と言う言葉に驚いて完全にぽかんとする人。もう一つはポーズを決めた魔王に視線を合わせないようにする人達。

異形はポーズを決めている魔王ギルガメシュに突撃する。

「かかって来い！」

そして、ギルガメシュが身構えた瞬間、散弾が向かってきていた異形を一気に吹き飛ばした。

空気が完全に固まる。

「大丈夫ですか？」

空気を読まなかった悠人はスラスターを操作して地面に着地した。ギルガメシュはゆっくり振り返る。その顔は泣いていた。

「俺の出番」

「えっ？　いや、あの、その、すみません」

悠人はとりあえず謝ってブースターを全開にして飛び上がる。気まずい空気が流れる中、新たな異形が現れた。

「さあ、かかってくるがいい。このギルガメシュ。逃げも隠れもしないわ！」

第百一話　神の私兵（前書き）

音姫がチート化します。一応、弱点もありますが。

第百一話　神の私兵

エレノアの目の前で仲間が異形によって喰われた。数体の異形が一体の魔物に飛びかかるように動き、手を喰らい、足を喰らい、腹を喰らい、頭を喰らう。

魔物達は断末魔の悲鳴を上げる暇なく体中から血を噴き出し倒れて行く。地上に広がるのは血の海。

都は意識がないようで、目を見開いたまま動きを止めている。息はしているが、その眼に宿る光はない。

「狭間の鬼。どういうことだ？」

エレノアは杖を向けた。いや、杖を向けたはずだった。気付けば吹き飛ばされている。体中に痛みが走ったのは少し遅れてからだった。

『よくやってくれたよ。貴様らは本当に。貴様らの目的は最初からわかっていた。本当に感謝している。この状況を作り出し、我の復活のために儀式を完成させてくれたとはな』

「何故」

『我が欲したのは狭間の力である。この杖のみ。これさえあれば後は一人でも可能だ。この少女は一生心を失うがな』

鬼は都を見下ろしながらそう言う。

エレノアは悔しそうに唇をかみしめていた。そして、鬼を睨みつけ

る。

『さて、邪魔ものはいなくなった。ここで貴様を』

「邪魔者と言うのは私達のことかな？」

その言葉に鬼は振り返っていた。そこにいるのは異形をすべて切り捨てた音姫達の姿。鬼の目がすうっと細まる。

音姫は手に持つ光輝を構える。

「その杖、いったい何？」

『貴様らに教えるほどではない、が、特別に教えてやろう。狭間の巫女の心が結晶化した神剣だ。我が力を濃く引く者にしか現れないのでな、こうして待っていたら、ようやくだ。ようやく、この力を手に入れた。これで恐れる者は何もない。一人一軍（ワンマンアーミー）や四剣士、そして、善知鳥慧海と海道時雨達が来ても倒せる力だ』

一人一軍（ワンマンアーミー）を四剣士の名前は音姫は聞いたことがなかった。そんな異名聞いたことがないし、今の世界でそんな戦闘能力を持つものがいるのなら有名になるはずだ。

孝治が一歩前に出る。

「そうか。お前、破壊神か」

その名前は来たことがある。１００年ほど前にいた『穿つ神』や５０年ほど前の魔神などがそう呼ばれる。世界を滅ぼすために行動しているから。

『貴様らが我をどう呼ぼうが、貴様らには勝てぬさ。この杖を手に入れた以上、我は神の力を得た。後は、残りの工程を済ませ、神として完全復活するだけだ』

「そっか。神の力を得たんだね」

渋い表情の孝治の横で音姫は笑っていた。音姫の握る光輝は淡く輝いている。まるで、音姫と同じで喜んでいるように。

「千春ちゃん殺したのはあなた？」

『ああ。我の邪魔をしたのでな。それがどうかしたのか？』

「そっか」

音姫がゆらっ動いた瞬間、その場にいて音姫を見ていた全員が音姫の姿を見失った。神の力を得た鬼さえも。

鬼が周囲を見渡す。

「どこを見ているのかな？」

背後に現れた音姫の光輝が閃いて鬼の体を斬りつけた。鬼は振り返りながら腕を振る。その速度は神速というほどに速く、普通なら避けることは出来ない。だが、そこに音姫の姿は無かった。

代わりにあるのは背中に新たに出来る痛み。

音姫の今の速度は神すら超越している。

「何故だ。何故、その速度で動ける」

「教えてあげようか？」

音姫が立ち止まりながら光輝を鞘に収める。鞘からは溢れんばかりの光が漏れていた。

「最強の神剣である『光輝』。持ち主を神格化させる以上にね、最強の能力があるんだ」

音姫が鬼を睨みつける。

「神殺しの剣。光輝が光を放つ時、神に対して絶対的な威力を発揮する。いまのあなたは神だからね、十分だよ」

十分に神殺しとしての力が発揮される。

狭間の鬼は手に持つ杖を手放した。すると、光輝からの光が消える。どうやら、あの杖を持つ以上、神の力が発揮するが、手放せば発揮しないらしい。

『仕方あるまい。だが、貴様を殺すには十分だ』

「十分ね。今のお前は一人。対するこっちは四人だ」

孝治はエレノアを見ながら言った。エレノアは頷く。そして、鬼に向かって杖を構えた。

『たった四人で何が出来る』

「やってやるさ。リバースゼロ、起動」

孝治がそう言うと、孝治の周囲に漆黒の球体が浮かび上がった。合計で二つ。両肩の近くに浮いている。

孝治は黒い剣を構える。今までの戦いでエネルギー体は半分くらい消費している。でも、半分あっても鬼が相手なら不安だというのが本音だ。

「行くぞ」

孝治は一気に移動した。一瞬にして鬼の背後に回り込みながら手に持つ黒い剣を一閃する。しかし、黒い剣は鬼の体によって受け止められた。

鬼は振り返りながら腕を振る。しかし、そこに孝治の姿はない。

孝治はすでに距離を取っており、弓を構えて何本もの矢を放っていた。鬼はすかさず孝治との距離を詰める。だが、目の前から孝治の姿が消えた。いや、闇の中に沈み込んだ。

代わりに横から走り寄る2人の足音。

鬼はダウンバーストを放とうと力を込めた。だが、ダウンバーストは発動しない。

何故なら、鬼の喉が大きく裂かれたからだ。亜紗が矛神を虚空に戻しながら刀を振り切る。

刀は鬼の腕を浅く裂いた。音姫は腕を斬り落とす。

それでも鬼は死なない。鬼が腕を拾い上げ、くっつけようとした瞬間、背後から放たれた熱線が鬼の体を貫いていた。

『貴様ら。よくも』

「残念だな。はっきり言うが、俺達は本気だ。負ける理由はない」

『そうか。なら』

鬼が動いた。そして、杖を拾い上げる。

『一人一人倒せばいい』

孝治はとっさに闇の中を移動した。だが、現れた場所の目の前に鬼の姿がある。

「なっ」

『失せろ』

鬼の手が振られ、孝治は吹き飛ばされた。そのまま、空中に浮かぶエレノアと激突し、エレノアは何とか孝治を受け止める。

だが、鬼の動きはそれで終わらない。

鬼はいつの間にか二人の上にまで移動していたのだ。孝治がとっさに黒い剣で鬼が放った蹴りを受け止める。いや、受け止めたつもりだった。

凄まじい勢いで二人は木々を薙ぎ倒しながら転がり、動かなくなる。

『後、二人』

その瞬間に音姫は動いた。

光り輝く光輝を握りしめて狭間の鬼の近くまで行き、体が重くなる。
鬼が杖を手放したのだ。

この速度は、鬼も対応出来る速度。

鬼の蹴りが音姫に直撃しそうになった瞬間、

「【当たらない】」

音姫のその言葉と共に鬼の蹴りは音姫を通り抜けた。まるで、残像に攻撃したかのように。

『バカな』

音姫が光輝を振る。

光輝は確実に鬼の頭を割っていた。しかし、鬼はまだ生きている。

『何故だ。何故、当たらない。確実に捉えていた』

「【狭間の鬼には理解出来ない】【次は一撃で首を落とす】」

音姫が動く。対する鬼は考えることを止めて音姫に向かってダウン

バーストの塊を放った。しかし、それすらも音姫には当たらなかった。

まるで、世界から音姫が隔離されているかのように。

音姫の光輝が動く。鬼は後ろに下がった。これで光輝が当たらない、はずだった。

鬼の首が落ちる。鬼は視界がずれるのを驚愕した面持ちで見ながらすぐに首の再生を行った。

鬼払いによってバラバラにされた時でも死ななかったから不思議ではないが、鬼は完全に音姫という存在に恐怖していた。

もし、あれが亜紗の矛神による攻撃だと仮定するなら納得は行くが、それ以外の攻撃だと納得出来ない。

『なんだ。その力は』

「あなたには理解出来ないよ。だから、この場で」

音姫が光輝を握りしめ、鞘から抜こうとした瞬間、矢が音姫の足を貫いた。

「っく」

痛みをこらえて振り返ると、そこにいるのは貴族派に所属する魔物達。だが、その周囲には異形の姿がある。

『よく来たな』

「我ら神の命により参上しました。今しばらくお待ちください。必ずやこの者を殺しましょう」

魔物達が音姫を囲む。異形もだ。

音姫は足を貫かれ動けない状況。ここで襲われたらひとたまりもない。

「くっ」

『さあ。殺せ』

「それは待ってもらうぜ」

その声に音姫は振り返った。

そこにいるのは周と由姫に亜紗の姿だった。亜紗が来ないのは周と合流したから。

『貴様、あの時の』

「都に何をした」

周がゆっくり鬼に歩み寄る。鬼は杖を拾い上げて周に見せた。

『心を奪っただけだ。クラリーネと違って生きているさ。生きてはな』

生きてはいるが感情も何もない人形。

周は目を瞑った。

「そうかよ」

そして、周の目が開く。その目は日本人に多い黒の色では無かった。金色の目。まるで、獲物を狙う猫のような獰猛な目。

よく見てみると、亜紗の目もいつもと違う。いつもと違う赤い目。

「今からお前を倒す。このオレが。行くぞ、レヴァンティン」

『出来るならやってみろ』

鬼が神速の速さで周の背後に回り込み腕を振った、はずだった。だが、その腕は途中で止まっている。まるで、カメラで撮った写真のように。

「やってやるよ」

レヴァンティンが動き、鬼の指を斬り飛ばした。そして、杖を鬼から奪い取る。

「これからが本番だ」

第百二話　浩平とリース

「狭間の夜だと？　何なんだ、一体！」

浩平がフレヴァングを突きつけながら烏天狗に尋ねる。烏天狗は笑みを浮かべたまま一歩を踏み出した。

「小童。我よりも弱いくせに尋ねるか。身の程を知れ！」

その言葉と共に浩平達の周囲に大量の異形が出現した。

リースはとっさに周囲の異形の位置を確認して竜言語魔法を使おうとする。だが、それより早く浩平が動いた。

フレヴァングの補助による高速連射。

元々、浩平は障害物の無い空間ですら相手の行動を制御出来る技術の持ち主。だから、虚空から取り出した大量の銃による射撃なら、さらにすごいことが出来る。

周囲を囲う異形が消え去った。浩平によって撃ち抜かれて。

「ほう、小童。やるではないか。なら、もう一度そのライフルを奪い取ってやろう」

烏天狗がにやりと笑みを浮かべる。浩平やリースにとって烏天狗の速度は尋常じゃなく速い。浩平もリースも年齢にそぐわず第一線で活躍出来る実力者にも関わらずだ。

だから、浩平は最初から相手の攻撃を見切ることは止めている。だから、

「先手必勝！」

浩平はフレヴァングの力を使って烏天狗を封じ込める檻をビリヤードのように駆使して作り上げた。

リースはその隙に竜言語魔法を使おうとする。だけど、檻を作っていた弾丸が全て吹き飛ばされた。

「前『風帝』の名前はだてじゃないってか？」

浩平の額に汗が流れる。今の技は浩平が出来る最大限の拘束技だった。音姫クラスの剣技がなければ出られないと思っていたが、まさか、風によって吹き飛ばされるとは。

「素直に撃たないのが運の尽きだな。さあ、我の烏丸の餌食になれ」

そう言って烏天狗は烏丸を構えた。地面を蹴ろうとした烏天狗の足が止まる。何故なら、手に持つ烏丸が根本から急に折れたからだ。

それは、どこからか飛来してきた一発の弾丸。それは、烏天狗が作り出す風の壁を抜けた弾丸。それは、ビリヤードだけでは証明出来ない軌道。

「なっ。バカな。小童の弾丸は全て弾いたはずだ」

「ああ。俺だってあそこまで不規則になった弾丸は予測出来ないさ。でもな、たかが風の防御を張るだけで、あらゆる飛来物を防御出来

るわけがない。攻撃側が試行錯誤するさ。それが今の弾丸だ」

原理はいたって単純、凄まじく圧縮させた魔力で放った弾丸をはるか向こうにある民家に撃ち、それをリフレクトさせて烏天狗の前を通り過ぎるようにしただけだ。

ちなみに、烏丸を折るつもりは全く無かったので浩平自身が一番驚いていると言っても過言ではない。

「そうか。我が甘かったか。お前らのような立場を理解しない敵を相手に手加減していた我が甘かったか。そうだな」

そして、烏天狗の体から膨大な風が吹き荒れる。浩平はとっさにリースの手を掴んだ。

「何をするつもりだ!?」

「我が力を見せてやろう。そして、我が力の前には無力だとしれ」

そして、風が止む。だが、止んでいることがある意味おかしかった。何故なら、浩平とリースがいる場所は竜巻の中央。

浩平の額に汗が流れる。

空間自体が限定された場合、浩平の射撃は役に立たない。そう、このような場所では特に。

「速度は殺すが、小童の力を封じ込めるには十分だ。後はお嬢ちゃんの力だが、この場で使えるのかな?」

烏天狗がにやりと笑みを浮かべる。

リース自身が竜言語魔法の弱点についてよくわかっていた。

こんな狭い場所で使えば自爆しかねない。竜言語魔法は本来竜が使う魔法だ。つまり、竜が普通に動ける空間を想定している。この場所で使える竜言語魔法はほとんどない。

「我は貴様らをなぶり殺しにしてやろう。そうだな、まずはお嬢ちゃんからか。小童の目の前で大事な人をもう一度殺してやろう。今回はゆっくりとな。そして、絶望に打ちひしがれる小童を同じようにゆっくり殺してやる。光栄だろ？　光栄に思え」

「リース」

浩平はリースの手を握りしめた。そして、フレヴァングを空に向ける。

「何をするつもりだ」

「エルセル・ディオ・グイン・ラルフ」

リースは竜言語魔法の準備に入った。それが、今の烏天狗には理解出来ない。

「自棄になったか。自殺したいならすればいい」

「誰がするかよ。俺達は絶対に帰る。負けるわけにはいかないしな。それに、お前、あまり強くないだろ」

「なっ。小童の分際で我を愚弄するか。許さぬ。本当に許さぬ。貴様は精神を崩壊させてやろう。痛みでな。我は風の帝王。それくらいのことは造作もない」

烏天狗の言葉に浩平は呆れたように溜息をついた。

「なら、どうしてすぐに殺さない」

「何？」

「本当なら殺せるこの瞬間に、お前は俺達を殺していない。何故だか自分でわかっているか？　お前は自分で思っているほど強くないんだよ」

「貴様」

烏天狗の頭に血が登る。そして、烏天狗が動いた。今出せる最速で浩平に近づく。対する浩平はにやりと笑みを浮かべていた。

烏天狗は完全に忘れている。今、この場にリースがいることを。

リースが取った行動は簡単だ。全力で浩平の足を払った。それにより、掴みかかった烏天狗の体が巴投げのように後ろに転がった。

あまりに急に浩平の体勢が変わったので烏天狗は止まることが出来ず、浩平とぶつかったのだ。そのまま、烏天狗は立ち上がる。

目の前にあるのは竜巻の壁。完全に後一歩だった。だが、そんな烏天狗の後頭部を浩平の弾丸が直撃した。

烏天狗の頭が竜巻に巻き込まれ、烏天狗が吹き飛ばされる。
浩平は小さく溜息をついて地面に仰向けに寝転がり、空に向かって銃口を向けた。
「あいつがバカで助かったよ」
確かに烏天狗は強い。だが、あまりにも頭が悪い戦い方を烏天狗はしていた。だから、それを浩平は狙ったのだ。まあ、リースが足を払ったことに関しては打ち合わせをしていない。
「リース、やるぞ」
「うん。エルセル・ディオ・グイン・ラルフ」
リースが竜言語魔法を使う。
浩平とリースが準備に入った。それは、世界で初めての魔術と魔法の合作。それは、浩平とリースが編み出した究極の技法。
「フレヴァング、お前の力を全て集わせる。力を貸してくれ」
フレヴァングの銃口の先に魔力が溜まっていく。浩平の意志に応じてフレヴァングが反応してくれているのだ。リースはそれに竜言語魔法を乗せていく。乗せて、乗せて、乗せて、乗せる。
「浩平」
リースは浩平の横に寝転がって浩平の手に自分の手を添えた。

二人の視界の先にはこちらに気づいた烏天狗の姿がある。烏天狗はすぐさま二人に向かって加速した。妥当な判断だ。

だから、浩平は引き金を引く。引きながら、二人は二人で考えた技名を叫んでいた。

「「ラストバニッシャー！！」」

第百三話　改造人間

「狭間の夜？　一体なんなんだ？」

オレは楓と冬華に尋ねていた。急に変わった時間帯。そして、満月の空。

何が起きたかはオレ達には全くわからない。ただ、これが尋常じゃなくおかしな事態ということはわかる。

「あなた達は何も知らないの？」

冬華が驚いていた。多分、過激派が知っていたのに『ＧＦ』が知らないことに驚いたのだろう。特にオレは上層部と繋がりがあるし。

オレは素直に頷いた。

「狭間の夜は狭間の鬼が作り出した擬似的な儀式空間よ。この儀式空間の中で狭間の鬼は最後の儀式を行う」

「最後の儀式？」

「巫女を喰らうのよ。言葉通りの意味じゃなくて、えっと、その」

冬華が少し言いにくそうに頬を赤らめた。

何をするかわからないけど、都に危険が迫っているのは確かなようだ。オレは小さく息を吐いて儀式場を見た。

「行こう」

「ちょっと待った。海道、下見てみ」

その言葉にオレは地上を見た。そこにいるのはたくさんの黒い動物。魔物や天魔まで混じっている。

数は大体二百ほどか。

「どうするん？　このままやったら危ないで」

「中村は最後尾について砲撃を行いながら追いかけて来てくれ。オレ達は儀式場に向かう。楓と冬華は先導を」

「うん。行こう、冬華」

「はぁ。一応、私達の目的を忘れないようにね」

楓と冬華の二人が空を飛ぶ。オレはその後を追って地面を蹴った。地面を蹴りながら周囲を見渡す。

儀式空間の範囲は大体狭間市を丸々包み込むレベルだ。このサイズを作り出す狭間の鬼の総魔力量はオレの数倍から十数倍。桁がもう違う。

真っ正面から戦えば負けるのは確実か。だったら、みんなで戦えばいい。二人じゃ難しい。なら、三人ならどうだ。オレ、亜紗、音姉の三人ならどうにか出来る。

「お兄ちゃん」

「何だ？」

「勝てる、よね」

腕の中にいる由姫がオレの体に強く抱きついて来ている。体が震えているのは恐怖のためか。

「勝つ。絶対に。こんなところで負けてられるか。オレ達は都を救う。ただ、それだけをするんだからな」

「うん。でも、怖いよ。私は、私は」

「大丈夫だ。オレがいる。オレが守ってやるよ。だから、安心しろ」

「後ろでいちゃいちゃしないでくれる？」

冬華が呆れたように声を上げてきた。ちなみに、楓の顔は真っ赤に染まっている。

まあ、決戦前だと言うのにこういう状況はないよな。普通はだけど。

「見えてきた」

楓がポツリと呟く。確かに見えてきていた。儀式場と、それを塞ぐ魔物の群れが。

オレ達は動きを止める。この数はうかつに動くべきではない。

「これ以上先は我らの王のために行かせはせん」

声を高らかに上げたのは魔物の群れの中央にいるデーモン。これは食い止めるというより時間稼ぎか？

「エレノアに従っているならどけ。今からぶん殴りに行くからな」

「では、どかなくていいですな」

その言葉にオレは微かに眉をひそめて、そして、理解した。そういうことね。

オレは振り向いて抱えている由姫を中村に預ける。

「兄さん」

「エレノアも見捨てられたのか。仕方ない。知り合いとして助けに行かなくちゃな。中村、由姫を少しの間頼む」

オレはそのまま作り出した足場の上を歩く。そして、絶え間なく警戒している楓と冬華の横までやって来た。

オレは唇を動かさないまま話しかける。

「１０ｍほど後ろに下がれるか？」

二人はオレの言葉に微かに驚いて、そして、無言で後ろに下がった。

オレはそのまま歩く。歩いて、魔物達の前までやって来ていた。

「たった一人でやろうというのか？」

「たった一人？　違うさ」

オレは笑みを浮かべる。笑みを浮かべて、自分を変える呪文を目を瞑りながら唱える。

「ドライブ、リリース」

その言葉と共に目を開けると、魔物達が一斉に息を呑んだのがわかった。だって、今のオレの気配が変わっているのだから。

そのまま一歩を歩く。

感覚を最大限まで増長し、４人のいる位置を確認する。今の場所から１４ｍ２９ｃｍ。後少しか。

オレはさらに一歩を踏み出した。踏み出して、距離が１５ｍを超えていることを確認する。

「さて」

オレはにっこり笑ってレヴァンティンを鞘から少しだけ抜いた。

「墜ちろ」

レヴァンティンを鞘にパチンと入れる。すると、半径１５ｍ以内に飛んでいた全ての魔物が力を失って一気に落下した。

「今だ！」

オレは振り返りながら言う。そして、自分も地面を蹴っていた。

前にいる魔物は約２０ほど。今の剣技で一撃で落とせる技はない。

ただ、使ったことのない技なら。

オレはレヴァンティンを鞘から抜いて振り上げた。

白百合流じゃない。時雨の技を見て応用する複合剣技。ぶっつけ本番で理論を組み立てて実行する。

「破魔雷閃！」

レヴァンティンを纏った紫電の力が前方にいた魔物を飲み込んだ。

時雨の技であるミョルニル？の応用をした複合剣技。白百合流縦斬り『朱雀轟斬』と合体させてみたら上手く行くとは。

オレは地面を蹴った。後ろの４人はオレの後を追って追いかけてくれている。

新しいレパートリーが増えたな。今のところ、オレのオリジナルは複合魔術（いろいろな意味でむちゃくちゃ）とこの『破魔雷閃』。

「オリジナルか」

オレはそう言いながら儀式場を見るために飛び上がった。そこで見た光景は、リバースゼロを発動させている孝治がエレノアと一緒に吹き飛ばされて木々を薙ぎ倒していく。

敵は狭間の鬼。亜紗は動くことが出来ず音姉が動く。

亜紗！

オレは精神感応で亜紗に話しかけた。亜紗が振り返ると同時にオレは亜紗の近くに着地する。狭間の鬼は音姉との戦いに必死だ。どうやら、音姉は本気だな。

大丈夫か？

『うん。周さんは、もう大丈夫？』

あれを飲んだから大丈夫だよな？　うん、不安になってきた。

オレは無音で地面に着地した４人に唇を動かさずに話しかける。

ちょうど、音姉の足を矢が貫いたところだった。

「中村は孝治達を。楓と冬華は空から音姉を救出」

すぐさま３人が行動に移る。

「亜紗はブラストドライブモードに移行。由姫は覚悟を決めろ」

オレは耳に神経を行き渡らせる。

『さあ、殺せ』

「それは待ってもらうぜ」

オレは高らかに声を上げた。声を上げてから都とクラリーネに気づ

く。クラリーネは胸を貫かれて死んでいた。そして、クラリーネに手を伸ばすように倒れている都。

オレは頭の中で全ての理論が整合するのがわかった。

『貴様、あの時の』

「都に何をした」

オレは歩を進める。レヴァンティンを握りしめて。狭間の鬼は落ちていた杖を拾い上げる。

『心を奪っただけだ。クラリーネとは違って生きているさ。生きてはな』

オレは目を瞑った。

「そうかよ」

そして、ブラストドライブを解放する。

ドライブより一つ上のブラストドライブ。オレと亜紗だけが使えるモードだ。はっきり言ってこれはあまり使いたくなかった代物だ。

体への負担が大きいということと、とある副作用があるから。

「今からお前を倒す。このオレが。行くぞ、レヴァンティン」

『出来るならやってみろ』

鬼の姿が動く。そして、回り込んだ。だから、レヴァンティンを握りしめる。

レヴァンティンが力を発揮し、鬼が動きを止めるのがわかった。多分だが、握っている杖が理由か。

「やってやるよ」

オレは振り返りながらレヴァンティンを振り、鬼の指を斬り飛ばした。そして、杖を掴み取る。

「これからが本番だ」

そして、後ろに跳んだ。

「楓！　冬華！」

その言葉が聞こえるか聞こえないかというタイミングで光が魔物達を撃ち貫いていた。絶対に待ててなかったよな。

オレは右手に杖を持ったまま左手でレヴァンティンを構える。

「さて、これで6対1。いや、7対1か？」

『そのような戦力差は我には関係はない。ただ、その杖を奪い返せばいい。それだけだ』

オレは杖を握りしめる。

「一つ聞く。この杖は都の心か？」

『知れたことを。だが、貴様にその心を戻せると思っているのか？
その力を扱えるとでも』

杖を握っているだけでわかる。この力は極めて強大だ。言うなら、アル・アジフから借りた狭間の力よりも。これを制御するには苦労するに違いない。でも、

「わかっていないな。オレは今、ブラストドライブだ」

狭間の鬼が不思議そうに眉をひそめる。普通はそんなことを言われても理解出来ないだろうな。

オレは小さく息を吐く。

「由姫、亜紗！　時間稼ぎ頼むぜ！」

オレはそう言って都に向かって走った。そのまま都に駆け寄る。鬼が追って来ないのは二人が食い止めているから。

視界の隅では冬華が音姉を助けている。

「都、今、返すから」

そして、右手の杖の力を引き出す。膨大なエネルギーが膨らむと同時に視界が白一色に染まっていた。

空間が変わっている。隔離された？

『あなたは、何故、使えるのですか？』

そして、空間からの声がかかる。これは、一体、

「使える？　この杖のことか？」

『これは狭間の力を扱う神剣。選ばれた者以外の制御は不可能なはずです』

それはよく聞く話だ。強大な神剣はそれだけで使い手を選ぶ。選ばれた使い手でなければ神剣は力を貸さないか、使い手に牙を向く。

オレは迷うことなく答える。

「オレって、ただの人間じゃないんだよな。魔力素材を埋め込まれた改造人間。それがオレだ。この体も、骨格や神経は普通の組織じゃない」

生まれたばかりのオレが過激派に誘拐され、オレは実験動物のごとく改造された。それはもちろん、精神感応も関わってくる。

「だから、並大抵のことは耐えられる。それに、だからかもしれないけど、魔力の操作が上手いんだよな。魔力処理とも言うべきか？」

オレは軽く肩をすくめた。人とは違う処理速度。それをオレは持っている。

「だから、制御出来ているんじゃないか？　扱えるのは都、お前くらいだろ」

『周様、気づいていたのですか？』

「当たり前だ。オレが気づいていないと思ったか？　オレはお前のヒーローなんだぜ。都、戻すぞ」

『でも、千春は私を守って死んだ。私がいれば』

「なら、千春の分まで生きろ！」

オレは都の心に向かって直接叫んでいた。

「千春は魔界の住人、いや、『水帝』として悩んだはずだ！　お前を誘拐するかしないか！　でも、千春はお前を助けようとした。お前を守ろうとしたんだ！　その思い、無駄にするな！」

『でも、でも』

「オレが守ってやる！　狭間の鬼だろうが創造神だろうが何だろうが、オレが守ってやる！　絶対に死なない。だから、戻ってこい」

その瞬間、空間が震えたのがわかった。

『はい』

都の声が聞こえる。

そして、視界が元に戻った。目の前にいるのはオレと目を合わせる都の姿。

「無事だよな」

「はい。周様、あの」

「後で聞く。今は」

オレは振り返りながらレヴァンティンを構えた。

亜紗と由姫の2人が上手く立ち回っているが限界もある。それを見ながらオレは地面を蹴っていた。

「破魔雷閃！」

亜紗と由姫の2人が後ろに下がり、狭間の鬼が破魔雷閃の一撃を耐えきる。

『貴様！』

「お前を倒す。ただ、それだけだ！」

第百四話　契約の儀式

浩平とリースは全力を使い切っていた。そして、2人は荒い息をついている。

烏天狗に放った魔術と竜言語魔法の混合技は2人の体力を根こそぎ奪い取っていた。だが、威力は極めて高く、直撃した烏天狗の姿は見えない。

「これで、終わったんだよな」

「多分」

2人は大の字になりながら話し合う。空はまだ暗く、儀式は何も終わっていない。

だけど、浩平の、いや、2人の戦いは終わった。そう思えている。

「父さん、お姉ちゃん、俺、やったから。俺、やったから」

「浩平」

リースが浩平の手を握りしめ、そして、2人は同時に起き上がった。起き上がってようやく周囲の状況に気づく。

囲まれている。異形だけでなく、魔物にも。

「ヤバい、よな？」

「うん」

浩平は久しぶりにリースの額に汗が流れているのがわかった。

浩平はすぐさま起き上がってフレヴァングを構える。だが、ほとんど撃てないことに浩平は気づいていた。

ラストバニッシャーによる消費があまりにも高すぎて体中の魔力が枯渇している。それはリースも同じこと。

今攻められたら、2人は負ける。確実にだ。

「ちくしょう。こんなところで」

「浩平」

「負けたくないんだよ。せっかく、隠し事なくリースと付き合えると思ったのによ」

リースはうつむいた。

何のアクションも取らない2人に業を煮やしたのか、異形達が動く。2人を殺そうと殺到する。

浩平はフレヴァングの引き金を引こうとした。

だが、引き金を引くことはなかった。

氷を纏った2つのチャクラムが2人を回るように飛び交い、異形達を凍らせる。それと同時に紫電の閃きが凍らせた異形達を一瞬で砕

いていた。

「浩平！　リース！」

浩平がその声に振り向くと、精霊達と共に悠聖が走り寄って来ていた。ちなみに、浩平の頭上にはライガの姿がある。

異形と魔物は慌てて悠聖への防御布陣を引こうとするが、セイバー・ルカとエルフィンの2人の剣がその作りかけの防御布陣を一瞬で破壊する。

イグニスが灼熱の炎で残った敵を焼き払い、悠聖が2人の下に到着する。

「無事、みたいだな。間一髪か？」

「ああ。助かったぜ、悠聖」

「まだ助かっていないだろ」

悠聖は小さく溜息をつきながら周囲を見渡す。悠聖達が入り込んだのはいいものの、完全に囲まれているこの状況はどうしようもない。

悠聖は身構えた。

「周が起きているのは知っているな？」

「ああ。俺達に行けと、過去を断ち切るために」

「なら、お前がここにいることは何も言わないさ。ルカ、エルフィ

ン、イグニス、グラウは前に出て。ディアボルガ、アルネウラ、レクサスは援護。ライガは浩平とリースの護衛を頼む」

その言葉に精霊達は動き出す。ただ、アルネウラだけは2人に近づいていた。

『無事だよね。竜言語魔法の使い手に、竜の祝福を受けたあなたに一つだけ言いたいことがあるの』

アルネウラはそう言って2人に向かってウインクする。

『契約しても大丈夫だよ』

その言葉にリースの顔が真っ青に染まる。対する浩平はわけもわからずリースとアルネウラの顔を交互に見ていた。

アルネウラはにっこりと笑みを浮かべて、

『竜はあなた達を祝福している。だから、大丈夫。私が保証するから』

「あなたは？」

顔を真っ青にしたリースがアルネウラに尋ねる。まるで、今は存在しないとされる竜を知っているような口振り。

『友達にエンシェントドラゴンがいるだけのか弱い女の子。悠聖の友達の中では一番最弱かな』

アルネウラは笑ってから振り返る。その背中には笑っている気配は

ない。

「リース、教えてくれないか？　契約とは何だ？」

浩平が真剣な表情で尋ねる。リースは恥ずかしそうな身をよじって、

「き、キス」

「はい？」

2人の間に沈黙が流れる。

『ふはははっ。見たか！　これこそ我が炎の精霊で2番目である力！　雑魚は下がっていろ！　そして、我が力にひれ伏し崇めるがいい！』

『いいムードぶち壊しな声だすな！』

浩平とリースの心の声を代弁するような感じでアルネウラがイグニスに向かってチャクラムを投げつける。

イグニスはとっさにしゃがんでチャクラムを避けた。

『ちっ』

『アルネウラ！　仲間に投げ、ごばっ』

アルネウラを指差したイグニスの体にグラウ・ラゴスのハンマーが直撃して異形ごと吹き飛ばした。

どうやらグラウ・ラゴスはみんなの心を代弁したらしい。

「なんか、いろいろとすまん」

「俺達に謝られても。えっと、リース、キスすればいいのか？」

リースはこくりと頷いた。

「でも、死ぬ可能性はある。私と契約することは、竜言語魔法の力を借りることと同じ。浩平が竜に認められなかったら」

リースが言いにくそうに顔を逸らした。

アルネウラが戻ってきたチャクラムを受け止める。

『灼熱の、竜炎によって焼き尽くされるよ』

リースは非難がましい目でアルネウラを睨みつけた。

「ドラゴンの炎とどう違うんだ？」

『エンシェントドラゴンの体長は１００ｍほど。紛いもののザコとは比べられない。ただ、その炎は対象だけを白き炎で焼き尽くす』

つまり、一瞬で跡形も残らない。

「どうして」

リースは泣きそうになりながらアルネウラを見た。

『契約する、いや、彼女と一緒にいるということは死ぬ可能性と隣り合わせ。君は、彼女と一緒にいる勇気はあるのかな？』

「優しいんだな」

浩平の言葉にアルネウラはきょとんとした。

「リースなら絶対に俺には話さない。こいつは優しいからな」

浩平はそう言いながらリースの頭を撫でてやった。リースは浩平が好きだ。好きだからこそ離れたくない。でも、好きな人を殺したくない。

「だから、憎まれ役をやったんだろ？」

『あらら。悠聖、へらへらしているくせに頭の回転いいんだけど、どうすればいい？』

「バカなだけだろ。浩平、いや、何も言わない方がいいか。覚悟、決めたんだろ」

浩平は無言で頷いた。それを見た悠聖は笑みを浮かべながら頷く。

「みんな、浩平とリースを守りきるぞ。リース、時間は？」

「１０秒」

「１分守りきるぞ！」

あまりの短さに悠聖はそれ以上の時間を言った。

浩平がリースを真っ直ぐ見る。

「俺もお前も隠し事はバレる運命にあるんだな」

「うん。浩平、私は、浩平が死んで欲しくない。私は、浩平が大好きだから。だから」

「ああ。俺はリースが大好きだ。大好きだからこそ、契約したい。ずっと一緒にいるために」

浩平はリースに顔を近づけてキスをした。

リースはずっと一緒にいたいから、傷つけたくないから契約のことは誰にも話さなかった。

浩平はずっと一緒にいたいから、本当の意味でずっといたいから契約をする。

そして、浩平の視界は真っ白に染まった。

失敗したと思うより先に目の前にいる少女に視線が釘付けになる。可愛いというのと不釣り合いな巨大な斧を持っているからだ。

「君が、エンシェントドラゴン？」

「どこから？」

リースとよく似た抑揚の少ない声が聞こえる。でも、浩平の中では別の意見があった。

声はリースの方が可愛い。

「アルネウラから」

そう答えると少女は小さく溜息をついた。

「なら、仕方ない。どうして、竜言語魔法を求める？」

「リースと一緒にいたいから。リースと共に歩みたいから」

「理解できない。竜言語魔法は究極の魔法。それをそんな理由で」

「別にそれでもいいさ」

浩平はにっこり笑いながら言った。

「俺が出来るのは曲芸みたいな銃撃戦だけ。リースの時間を稼げればいい。というか、リースと契約したら、リースに何かいいことはあるのか？」

少女はまた溜息をついた。

「さらに強力な竜言語魔法を使える」

「良いことずくめだな。リースが強くなれば俺はもっと強くなる。リースに守られるんじゃない。リースを守れるように」

「その言葉に嘘は」

「ない」

少女の言葉を遮って浩平は言う。

それを聞いた少女は呆れたように、でも、満足したように笑みを浮かべた。

「蓮司みたい。ふふっ」

その少女の笑みはどことなくリースと似ているように浩平には思えた。

少女が浩平の目を真っ直ぐ見る。

「支えてあげて。私の祝福を受けた人を」

「言われなくても」

その言葉を最後に浩平の視界は戻った。そう、リースとキスをしている状況に。

二人は同時にゆっくりと離れる。

「今のが、キス」

浩平は呆然としながら右手で唇を触り、リースは嬉しそうに同じ右手で唇を触る。

「契約、完了」

その言葉に浩平はブレスレットが右手に身につけられているのを感じた。リースも右手に同じブレスレットがある。

「契約の指輪。腕輪だけど」

「これが。リース、一緒に戦おう」

「うん」

リースは笑って空に浮かび上がった。

第百四話　契約の儀式（後書き）

次々回、「リース最強伝説」、始まります。

第百五話　連携ＶＳ力

狭間の鬼の両腕がレヴァンティンを受け止めている。オレと鬼は完全に力が膠着しておりどちらも動きそうにない。

『白百合流ではなかったのか？』

「あいにくと、白百合流だけじゃないんでね」

お互いが同時に後ろに下がった瞬間、鬼目掛けて由姫が地面を蹴った。それに気づいた鬼はダウンバーストを放つ。

だが、その絶対無比の鎮圧技は由姫の右手によって打ち消された。レヴァンティンの相殺とは違う力の消され方。

「『『清浄』か！？』」

オレと鬼の声が重なった。その間にも由姫は鬼の懐に飛び込んでいる。

鬼はすかさず由姫に向かって右の拳を放つが、由姫はそれを軽々と左手で受け流し、右の肘を鳩尾に叩き込んだ。

鬼は微かに浮かび上がるが、左の拳を放つ。普通な当たる。だが、由姫は素早くその拳を肘で打って甲で頬を殴りつけた。ぶっちゃけありえない。

オレはレヴァンティンを鞘に収めて地面を蹴る。やる動作は紫電一閃からの紫電逆閃。

鬼に向かって一歩を踏み出しながらレヴァンティンを鞘から走らせる。鬼はとっさに右腕で防ごうとするが、紫電一閃は普通に腕を切り裂いて左胸から肩にかけて大きな傷を作り出す。そして、さらに一歩を踏み出して逆閃を放った。レヴァンティンは傷をさらに深くえぐり取る。

すぐさま距離を取りつつレヴァンティンをモード?に変える。変えながらモード?カノンを起動した。

鬼はその隙に体を修復する。だが、修復してすぐに後ろから迫った亜紗の刀が左腕を斬り落とした。

本来なここで鬼は振り返って攻撃するところだが、正面から由姫が迫って来ていたため振り返れない。

鬼は拳を振る。確実に当たるように横薙ぎに。だが、その拳は由姫によって上に打ち上げられた。由姫の拳が鬼の顎を捉える。

「消し炭になれ!」

モード?カノンの最大出力でオレは放った。

凄まじい衝撃と共に照準がブレそうになるが必死にこらえる。こらえた結果、エネルギーの塊は鬼にぶつかった瞬間に大爆発を起こした。

由姫がオレの横まで下がってくる。

「由姫、いつの間にそこまで強くなったんだ?」

「拳が相手なら愛佳師匠の方がはるかに強いから。力も、速度も」

まあ、あの人ならそれくらいはしそうだな。一応、戦場やら『ＧＦ』への参加やらはしていないからランキングには入っていないけど、裏社会を入れた場合、世界最強と言われている。

実際に、愛佳さんを怒らせた時雨が必死に土下座していたのを見たことはある。必死に土下座していたっけ。

「まあ、油断はするなよ」

「うん。お兄ちゃんこそ」

煙が晴れていく。晴れた先にいたのは無傷の金色の体。狭間の鬼の顔には笑みが浮かんでいた。

『完全復活していないとは言え、まさか、ここまでやられるとは。久しぶりだ。本当に久しぶりだ。そちらの人数は５人か。なら、本気を出していいよな』

鬼が一歩踏み出す。その踏み出しは魔力の圧力によって地面を砕いていた。

オレはモード？カノンからモード？である剣に戻す。嫌な予感がする。

『１分以内に何人立っていられるかな？』

オレは後ろに下がったはずだった。気づいた瞬間、狭間の鬼によっ

て頭を掴まれている。

『まず一人』

そして、地面に叩きつけられた。

寸前で『天空の羽衣』を展開していなかったら確実に死んでいたように思える衝撃。地面を跳ねながら、向こうにいた亜紗が蹴り飛ばされて木に激突するのが見えた。

『二人目』

鬼が飛び上がる。狙うのは楓か。

楓は砲撃杖を向けて光を放つ。だが、極太の光を鬼は簡単に避けて楓の上に回り込んだ。そして、拳を振り下ろす。

楓はとっさに砲撃杖で受け止めるが、砲撃杖は簡単に砕けて拳が楓に突き刺さり、楓はそのまま地面に叩きつけられた。

『後二人』

鬼が動く。次に狙うのはおそらく冬華だ。一番厄介な由姫は一番最後。だから、オレはレヴァンティンをモード?カノンに変えていた。

地面に寝転がったまま最低限の出力で鬼に向かってエネルギーの塊を放つ。

完全な不意打ち。一度倒したはずの敵からの射撃は避けにくい、はずだった。だが、オレはそれを簡単に避けてオレに向かって指向性

のダウンバーストを放つ。

オレはとっさにレヴァンティンでそれを相殺した。
だが、その隙に鬼は冬華に肉薄している。

冬華は氷を纏う刀を振る。だが、鬼はそれを側転で避けた。そこにフェンリルが体当たりを行うが、鬼は簡単にフェンリルを受け止める。受け止めて冬華をフェンリルで殴りつけた。

冬華の体が吹き飛び、フェンリルの体に鬼の拳が叩き込まれる。ここまでにかかった所要時間は大体２０弱。圧倒的すぎる。

立っているのはオレと由姫だけ。あの速度は見ることが出来なかった。まるで、動くという現象をすっぽかしたように。

「そうか」

オレはとあることに気づいた瞬間、嫌な予感が駆け巡った。場所は右斜め後ろ。

体をしゃがみ込ませ、回転しながら鞘に収まったレヴァンティンを引き抜く。

白百合流黄泉送り『陽炎』。

レヴァンティンが鞘から抜かれた瞬間に目の前に狭間の鬼が現れる。
その顔にあるのは驚愕。

レヴァンティンが狭間の鬼を真ん中から両断していた。

オレと由姫は同時に下がる。

鬼が使っていたのは孝治が持つ『影渡り』とよく似たものだろう。
名前をつけるなら『狭間渡り』。

空間と空間を点で結んで瞬間的に移動する。そうでなければオレと亜紗が気づかない理由がわからなくなる。

尋常じゃない動体視力を発揮している今のオレ達がわからないなんてありえないから。

『まさか、理解されるとは』

「兄さんは第六感はすごいですからね。それが理由ではありませんか？」

「否定はしない」
レヴァンティンを構えながら答える。

第六感がすごいのは今に始まったことじゃない。今に始まったことじゃないからあまり気にしなくはなっている。

『厄介だな。厄介な貴様から潰させてもらおうか』

「やれるものなら」

「やらせないよ」

ぞわっと背中が泡立ったような感覚。この感覚になるのは尋常じゃない殺気を感じた時だ。

オレは前に鬼がいることを忘れて振り返る。そこにいるのはゆらりと立ち上がった音姉の姿。都が近くにいるということは怪我の治癒を行っていたのか。

「やらせないよ」

音姉がもう一度同じことを言う。ただ、その気配はいつもと違う。言うならば、あの時、貴族派の介入によって由姫が大怪我をした時みたいな気配。

「音姉、いや、鬼姫と呼んだ方がいいか？」

「弟くん、覚えていてくれたんだ」

音姉、いや、鬼姫はにっこり笑ってオレの前まで来る。にっこり笑っているが発せられる殺気は尋常じゃないほど濃い。

「お姉ちゃん？」

「そうだよ。でも、今の私は由姫ちゃんや弟くんの姉であって姉じゃないよ。ふふふっ」

鬼姫はオレ達の間を抜ける。そして、光輝の柄に手を置いて走り出した。距離は少し。速度は最速。そのまま光輝を振り切る。だが、光輝の刃は狭間の鬼によって受け止められていた。

『剣筋が違う。貴様、誰だ？』

狭間の鬼ですら音姉の変化に驚いていた。

オレはレヴァンティンを握りしめて地面を蹴る。そのまま鬼の横から回り込んで斬りかかった。

いや、斬りかかったはずだった。迫って来たのは光輝。とっさにレヴァンティンで弾くが返ってきた刃にレヴァンティンが叩き落とされた。

「なっ」

「邪魔をするな」

鬼姫はオレに光輝を向ける。明らかに絶体絶命だ。どうしよう。

第百六話　竜言語魔法

空に浮かび上がったリースは目を閉じて手を横にやった。すると、リースの周囲に竜言語で書かれた魔法書が大量に浮かび上がる。その魔法書達はまるで喜んでいるようだった。

浩平はリースを見て笑みを浮かべる。

「やってしまえ」

「うん」

そして、リースはその中の一つを掴み取り、ページを開いて竜言語魔法を放った。

凄まじい紫電が敵の一角を焼き尽くし黒こげにする。だが、浩平と悠聖はリースを見ながら頬をひきつらせていた。

今、竜言語魔法に必要な詠唱がなかったのにリースは竜言語魔法を使っていた。それは、リースの最大の弱点を無くすことでもある。

「リース？　詠唱は？」

「そういえば」

当の本人も今更のように気づいたようだ。

驚いている3人を尻目にアルネウラがクスクスと笑っている。

『3人共、竜言語魔法を使う竜が詠唱を必要したと思っているのかな？　竜だって同じだよ。詠唱なんて必要のないようにすることだって出来るから』

「つまり、使えば威力があがる？」

『多分』

アルネウラも詳しくは知らないらしいが、アルネウラの知る竜言語魔法の使い手は詠唱を必要としないことはわかっているらしい。

リースは周囲に浮かぶ魔法書を見つめた。

クロノス・ガイアの名前を手に入れ、アル・アジフと一緒に戦うようになり、周から指摘されるまで竜言語魔法は最強だと思っていた。でも、大きな弱点を指摘され一時は竜言語魔法を使う自分に自信を無くしたのも確かだ。

でも、今なら思える。竜言語魔法は極めて強力なものであると。

「浩平」

「なんだ？」

浩平はフレヴァングを構えながら答える。どうやらほとんど枯渇していた魔力も戻ってきたらしい。対するリースは何故か魔力が漲っているが。

「本気出すから」

「えっ？」

浩平が振り返った瞬間、真っ青な顔になったアルネウラが叫んだ。

『みんな！　逃げて！』

竜言語魔法の力を知っているからこその発言。アルネウラが何を知っているかはわからないが、その必死の表情を見ればよくわかる。

『何をバカなことを。誰が敵前逃亡をって、あれ？』

イグニスが呆れたようにアルネウラに言うと、いつの間にかアルネウラを含めたイグニス以外の精霊が消えていた。アルネウラの言葉を完全に信じて。

イグニスも額から汗を流して消える。

魔物や異形が固まったのは一瞬。でも、すぐさま向かって来た。

リースは魔法書を開く。一つじゃない。周囲に浮かぶ全ての魔法書を開いた。

浩平はその場に這いつくばる。ちなみに悠聖はすでにその体勢だ。

「プライドねえのかよ」

「んなプライドは犬にでも食わしとけ」

意訳をするなら死にたくはないということだ。

「ですよね」

呑気に2人は会話をしているが、魔物や異形はすぐそこまで迫って来ていた。リースが準備していることに気づかない魔物や異形が。

そう、大半は逃げ出しているのだ。リースが開く全ての魔法書に。

「逃がさない」

リースの周囲に浮かぶ魔法書全てが展開する。それは巨大な一つの魔法陣だった。

あらゆる竜言語魔法の魔法書を一つの魔法陣に纏め上げる。それにより発生する竜言語魔法。その威力はアルネウラがよく知っていた。

そして、竜言語魔法が発動する。

閃光と耳が麻痺する音の爆発。あらゆる魔法（ほとんどが浩平達の知らないもの）が魔物を吹き飛ばして焼き尽くし、異形を斬り裂き押し潰す。それは逃げていた異形や魔物の同じ。

誰もが無言だった。浩平も悠聖もあまりの威力にぽかんとしているし、リースは自分で放った魔法の威力に呆然としていた。

「なあ、リース」

「うん、禁止する」

あまりの威力の高さに浩平が声を出すと、リースは浩平の横に座り込んだ。浩平は起き上がってリースの頭を撫でる。

『悠聖、私も撫でて』

そうしているといつの間にかアルネウラが悠聖の横に出現していた。
悠聖は小さく溜息をつく。

「仕方ないな。今回だけだぞ」

悠聖はそう言って頭を撫でてやろうと手を上げた瞬間、アルネウラに飛びついた。

アルネウラは呆然としたままそれを見つめ、そして、悠聖の背中にどこからか飛来した剣の刃が突き刺さった。

「くっ、がはっ」

悠聖の口から血が吐き出されてアルネウラの顔を濡らす。

『悠聖！　いや、いやーっ！！』

「誰が。なっ」

立ち上がった浩平の視線の先にぼろぼろな姿で立っている烏天狗がいた。それを見ながら浩平は静かにフレヴァングを構える。

「リース、悠聖を頼めるか？」

「わかった」

リースが立ち上がって浩平のお腹を軽くぐーで叩いた。

「必ず、帰ってきて」

「ああ。帰ったらデートしようぜ」

そして、浩平は走り出す。リースはその背中を見ながらぽつりと呟いた。

「それ、死亡フラグ」

だが、走り出した浩平には聞こえない。

浩平はまずフレヴァングの引き金を引きながら武器を取り出す。烏天狗の速度から考えてフレヴァング単体じゃ辛い。だから、二丁の拳銃を取り出す。フレヴァングを虚空に戻し、二丁拳銃を掴み取った。

対する烏天狗は浩平に向かって風の衝撃波を放つ。威力は人を殴り殺せる威力。だが、そんな威力には浩平は効かない。

浩平は真っ正面からそれを受けてかつ前に進む。普通なら出来ない。常日頃からそれ以上の威力を持つ技を受けているからこそ出来る曲芸。

「うおおおぉぉっ！！」

浩平は叫びながら拳銃の引き金を引いた。一撃目は烏天狗の足に。二撃目は烏天狗の手に。三撃目は烏天狗の翼に。そして、烏天狗の体を銃床で殴りつける。

烏天狗自体ももう戦えるような体じゃなかったらしい。そのままゆっくり横に倒れた。

浩平は二丁拳銃を戻してフレヴァングを烏天狗に向ける。

「終わりだ！」

そして、倒れた烏天狗に向かって引き金を引いた。

烏天狗の体が何回か痙攣し動かなくなる。浩平は烏天狗に背中を向けた。

「これで、終わりだ」

第百七話　鬼と鬼

オレは光輝の刃を見ながら息を呑んでいた。動けば死ぬ。音姉ではなく鬼姫によって。そして、動かなければ死ぬ。狭間の鬼によって。

叩き落とされたレヴァンティンを拾い上げる隙はないだろう。それほどイレギュラーな事態。

狭間の鬼すら動いていない。いや、動けない。誰かを攻撃すればその人物ごと叩き斬られそうだから。

今の音姉はそれほど殺気立っている。誰か押さえてくれれば。

「お姉ちゃん、どうして」

「由姫ちゃんが動けば由姫ちゃんを殺すよ。大丈夫、私が全てを終わらせるから」

「違う」

由姫は鬼姫を睨みつけた。そして、鬼姫に向かって地面を蹴る。鬼姫はまるで無視を払うような動作で光輝を振った。だが、それは由姫の右手によって弾かれる。

「目を覚まして！」

由姫の左腕が鬼姫の頬を殴りつけた。

その瞬間にオレはレヴァンティンを拾い上げて狭間の鬼に斬りかか

っていた。狭間の鬼はレヴァンティンを受け止める。

『熱烈だな』

「オレのラブレターは受け取ってくれないのか？」

にやりと笑みを浮かべてブラストドライブ状態の自分に鞭を打つ。明日が筋肉痛なのは確定だ。でも、いや、だからこそ、今ここで押し切る。

「お前を殺したいほど気にしているんでね！」

レヴァンティンで狭間の鬼を弾き飛ばす。そのまま懐に潜り込んで右の肘を鳩尾に叩き込んだ。だが、その肘は狭間の鬼によって受け止められる。オレはすかさず左手でレヴァンティンを振る。しかし、そのレヴァンティンも受け止められた。

『熱烈だな。昔もそう言われたさ。一人一軍（ワンマンアーミー）にな！』

ブラストドライブのオレがだんだん押される。

「仕方ない。オーバードライブ」

体中のリミッターを解除する。そして、狭間の鬼と力を拮抗させる。

『貴様！』

「今だ！」

オレはその瞬間、膨大な魔力を掌握し、それを使って巨大な魔術陣

を作り上げていた。元々はあの日に鬼を封印するために作り出したものの改良版。

狭間の儀式を逆手にとり、儀式場の魔力を一気に操る。

『まさか、貴様！　最初からこれを！』

「狙っていたさ。お前が動揺して、そして、ブラストドライブ以上のオレが接近戦に持ち込める環境を作れたらな！　これで」

終わりと言おうとした。だが、それより早く右肩、いや、右胸から肩までが大きく裂かれ、狭間の鬼の首に刀の刃が突き刺さる。

体の力が抜けて、オレはその場に倒れた。

一体、何が。

「駄目だよ、弟くん。私の獲物を横取りしたら」

「かはっ。っつ、レヴァンティン」

レヴァンティンが『強制結合』を無理やり発動して傷口を無理やり塞ぐ。今は、痛みのあまり使えないからありがたい。

『貴様、正気か！』

一番驚いているのは狭間の鬼だった。当たり前だ。あのまま行けば確実に封印出来た。だが、それを鬼姫に止められたから。

オレは由姫がいる方向に視線を向ける。そこにはおびただしい血を

流す由姫の姿があった。

「由姫！」

オレは痛みをこらえて立ち上がり由姫に駆け寄る。由姫の傷はかなり深く、このままだと助からない。

「動脈を傷つけてる。早めに処置をしないと助からない。くそっ、ここでするしかないか」

魔術陣を展開して周囲の魔力を掌握する。

狭間の儀式は儀式として最高の日時にするだけでなく、儀式を行うのに十分な魔力を展開する。魔力粒子ではないので状態異常に変化はないが、魔力が多いため戦闘能力は上がる。気づかない人は多いけど。

「落ち着け。落ち着けよ、オレ。何度勉強したと思っているんだ。落ち着いて、落ち着いてくれよ」

自分にそう言い聞かせる。音姉があそこまで暴走したのはオレのミスだ。だから、由姫はここで助ける。

最初に行うのは傷口の把握。傷が深い場所はわき腹と左腕。そして、左胸。危険なのは左胸とわき腹。

同時に治療するしかない。

初めての現場治癒。失敗すれば由姫が死ぬ。

「落ち着け。落ち着け」

震える手に叱咤をしつつ治癒を開始する。まずは主要な血管を繋げるように治癒する。これは『強制結合』を使って繋げるから苦にはならない。だが、それ以上は無理だ。確実にオレの傷が開く。

「落ち着いて、ここをこうして」

他の部分の治癒を並行しながらやっていく。

気の遠くなるような作業。一分一秒がとてつもなく長い。今、由姫の治癒を開始して何分経った？　由姫の脈は安定しているのか？

オレの息が乱れてくる。集中も乱れてくる。傷は大部分を繋げた。後は、塞ぐだけ。でも、オレの体から力が抜ける。

ブラストドライブからオーバードライブに移行していたオレの体が限界時間に達したらしい。後、少しなのに。

「ご苦労様」

ベリエの声が耳に響く。オレは体が受け止められているのがわかった。いつの間にかベリエがオレを受け止めてアリエが治癒を引き継いでいる。

「どうして」

「エレノアお姉様の命令で魔界に行っていたから。ご苦労様。後は私達が引き継ぐわ」

そう言ってベリエが別の人にオレを渡す。都だ。都は静かにオレを抱きしめる。

「都、まだ、終わっていない」

「はい。わかっています」

ベリエとアリエの二人が由姫の治癒を行う。やり方を見る限り、二人に任して大丈夫だ。

オレはゆっくり立ち上がる。そして、二人が戦っている方向を見た。そこにいる二人はまさに鬼神というのに相応しいだろう。ここで鬼を封印する方法はいくつかあるけど、オレは都に訪ねた。

「都、狭間の力をオレに乗せれるか？」

「狭間の力ですか？　えっと、やってみます」

「孝治。リバースゼロは？」

「大丈夫だ。問題がないくらいに溜まっている」

いつの間にか都の隣にいた孝治が答える。

オレは小さく笑みを浮かべた。

鬼姫と狭間の鬼との戦いは完全に不毛だ。狭間の鬼はいくらか斬っても再生するし、鬼姫に狭間の鬼の攻撃は当たらない。

鬼と鬼の戦いは確実に終わらない。

「都、孝治、頼む」

「はい」

「ああ」

二人の返事が聞こえる。オレはレヴァンティンを構えた。オーバードライブが切れたためブラストドライブすら使えない。でも、オレなら出来る。

「レヴァンティン、援護を頼む」

『それがマスターの命令ならば』

オレは小さく息を吸い込んだ。

「終わらせよう。この戦いを。狭間の戦いに終止符を！」

第百八話　約束ＶＳ使命

狭間の鬼は内心焦っていた。音姫、いや、鬼姫に何一つ攻撃が当たらず、そして、鬼姫の攻撃はこちらを確実に斬り刻んでいることを。

今まで、ここまで一方的な展開になったのは数は一回しかない。その時は完全復活した時の力よりも巨大だったため、相手が化け物すぎたと思っている。だが、今の相手も化け物じみていた。

神の力を手に入れれば力が底上げされ、手に入れなくてもかなわない。僥倖は敵味方関係なく攻撃するところくらい。

『哀れな』

狭間の鬼は呟く。そんな攻撃では狭間の鬼は倒せない。倒すにはさっきされかけた封印か、四剣の一本を持ち出すしかない。

その時、狭間の鬼は膨大な力を感じて振り返った。鬼姫も狭間の鬼から距離を取ってそっちを見ている。

そこには光の翼を背中に纏う周の姿があった。

狭間の儀式における儀式場の力と孝治の持つリバースゼロの力を受け止めているからだ。

そもそも、狭間の力は膨大であり、それを制御出来るのは難しい。あの時のように体に纏って扱うのは不可能だ。だったら、別のものを作り出せばいい。

それが周の出した理論だった。それを後押ししているのはおそらくリバースゼロだろう。

孝治の持つ神剣『リバースゼロ』。

その効果はいたって簡単だ。威力を吸収して力に変える。

リバースゼロを展開している最中のダメージは全てリバースゼロに蓄えられ、その力を誰かに移譲出来る。

リバースゼロを展開していた孝治はそれがバレないようにするために今まで隠れていた。周に力を移譲する瞬間まで。

リバースゼロに蓄えられた力は狭間の鬼の力。狭間の力を操れるものの力。そして、周には世界最高峰のデバイスであるレヴァンティンがいる。周自身も様々な能力を強化されている。つまり、条件が揃っていた。

周はゆっくり目を開く。その目は金色に染まっていた。ブラストドライブ以上になっていないのに。

「終わらせる」

周はレヴァンティンを握りしめる。

「狭間の戦いを終わらせる」

その言葉に孝治が頷く。

「誰も、もう、犠牲になんてするものか！」

周は地面を蹴った。力任せの加速。だけど、その力は狭間の鬼を凌駕している。

『面白い！』

狭間の鬼は初めてこの瞬間に負けると思っていた。

周は力だけじゃない。その気迫すら人が到達出来る限界に達していることに気づいたから。そして、鬼姫、いや、音姫も助けるつもりでいることを。

だから、狭間の鬼は今出せる全力で真っ正面からぶつかり合った。レヴァンティンと腕がぶつかり合う。

『その力、気迫、人間にしておくには惜しいな！』

「オレは一人じゃない。お前と違って孤独じゃないんだ！」

そこに鬼姫が飛び込んできた。光輝が周の首に迫り、『天空の羽衣』に絡み取られた。

鬼姫の顔が驚愕に染まる。

「ごめん」

周は謝り、鬼姫の鳩尾にレヴァンティンの柄を叩き込んだ。そして、若干浮いた鬼姫の体を蹴り飛ばす。

鬼姫は地面を転がり、光輝は地面に突き刺さった。

「これで、邪魔はないな」

『そうだな！』

狭間の鬼が狭間を渡る。だが、渡った先には周が完全に身構えていた。

レヴァンティンが鞘から走り、狭間の鬼の腕を斬り飛ばす。

純粋な紫電一閃。そして、周はすぐさまレヴァンティンを返した。

紫電逆閃だ。

狭間の鬼の体が大きく斬り裂かれるが、狭間の鬼は構わずダウンバーストを放った。それはあまりにも不意だったため、周はまともに直撃する。

だが、周は倒れない。ダウンバーストをまともに受けながらその目は一つも濁っていない。

周はレヴァンティンを斜め下から一気に振り切る。白百合流じゃない。ただの力任せの剣。だが、下手な攻撃よりも威力がある。

狭間の鬼はそれを受け流し、魔力の込めた腕で周の腹を殴りつけた。周の腹に拳が入り浮かび上がる。だが、周はそこで踏ん張って鬼のこめかみを踵で蹴りつけた。

狭間の鬼の体が斜めに傾いて、そのまま地面に足をついて踏ん張った。すぐさま周に向かって頭突きを放つ。周はそれをギリギリで避けて狭間の鬼の顎に膝を叩き込んだ。

そのままレヴァンティンの柄を叩きつける。

もう、技術なんてものは存在しない。お互いの精神を限界まで使い切る殴り合い。そこに介入する場所はない。

周が行おうとしている封印はすでに狭間の鬼がわかっている。わかってからこそ、確実に決めるタイミングが難しい。

だから、決定的な隙を作るためにひたすら攻める。

レヴァンティンを使った攻撃だけじゃない。手足だけでなく頭突きだろうが何だろうが隙を作るために使う。

自分の体が朽ち果てるまで。

「くっ」

狭間の鬼の腕が払われ周の手からレヴァンティンが弾かれる。狭間の鬼がすかさず周の鳩尾に拳を叩き込んだ。

周の体が吹き飛び地面を転がる。

『終わりだ』

そして、狭間の鬼はとどめをさすべく指向性のあるダウンバーストを放った。周は防御魔術を展開して、

「任せて！」

それをベリエが弾いていた。すかさずベリエが鬼がいる方向に向かってナイフを放つ。数は八つ。それらが鬼に当たることなく突き刺さった。

「結！」

ベリエが魔術陣を展開して結界を作り出す。

「はい、周お兄ちゃん」

周がゆっくり起き上がると同時にアリエが周にレヴァンティンを渡した。周はそれを受け取る。

狭間の鬼が結界を砕こうとしているが、全力を出してベリエが展開しているらしく、ひびは入るがなかなか壊れない。

「レヴァンティン、いけるか？」

『一撃なら。それが失敗すれば終わりですよ』

「構わない。アリエ、下がって。ベリエ！　後少しだけ頼む！　都！　全力で狭間の力を送ってくれ！」

周はレヴァンティンを振り上げた。

『アクセルドライブ起動。バランサーシステム正常化。現世空間浸食開始』

「これがオレの、全力全開だ！」

振り上げたレヴァンティンの形が変わる。片手剣から両手剣に。そして、大きく、黒く。だが、その黒さは眩いまでの光に変わる。

今まで翼として固定していた魔力を全てレヴァンティンに乗せたからだ。周は叫ぶ。

「ベリエ！　下がれ！」

「っつ、了解！」

ベリエは勢いよく下がり、結界が砕け散る。だけど、その時間だけ拘束出来ていれば十分だった。

『なんだと。バカな』

「くらいやがれ！」

そして、桁違いに圧縮された魔力の剣が狭間の鬼に直撃した。周はレヴァンティンを手放して地面を蹴る。

「うおおぉぉぉぉっ！！」

声を上げ、残った体力と魔力を振り絞り、周は前に進み、魔術陣を組み上げる。

そして、動けないでいる狭間の鬼に魔術陣を押し付けた。

「終わりだ！」

狭間に干渉して莫大な魔力を使って封印する術式が起動した。狭間

の鬼を魔力の縄が縛り上げる。
周はすかさず後ろに下がった。だが、狭間の鬼が周の足を掴む。
『逃がすか。道連れだ。貴様も、一緒に』
「させないよ」
光が一閃された。いや、光輝が狭間の鬼の腕を斬り裂いていた。すかさず、音姫が周の体を掴んで狭間の鬼から距離を取る。
『まさか、こんな』
鬼が腕を伸ばそうとする。だが、その腕は肩から地面に落ちた。
『役目を、我が役目を果たせぬまま、封印されてたまるか！』
膨大な魔力が狭間の鬼の中で膨れ上がる。それは、封印に使われた魔力をはるかに超える魔力。
「まじかよ」
周は小さくつぶやいた。周の体は限界だ。体力も魔力もほとんど枯渇している。もう一度封印するには狭間の鬼が完全に拘束された状態くらいだ。
だけど、まだ戦わないといけない。約束を守るために。
「頑固だな。俺も行こう」

周の隣に孝治が立った。リバースゼロを展開しながら。

「みんなで戦わないと勝てないよ」

それに同意するのは周を助けた音姫が。どうやら面の人格に戻ったらしい。

「そうそう。海道は昔から一人で頑張りすぎやねん」

光が『炎熱蝶々』を展開し、レーヴァテインを構える。

『私も頑張るから』

亜紗がぐっと拳を握りしめてスケッチブックを周に見せている。

「私達も手伝うからね、周君」

「楓は砲撃杖を壊されたじゃない。私が行くわ」

楓が新たな杖を取り出した。訓練とかで使う簡易杖だ。それを見ながら冬華が呆れたように声を出す。フェンリルは冬華の横についている。

「余達の不始末。手伝うぞ」

ほとんど無傷のエレノアが光の横に並んで杖を構える。いつでも射撃が出来る準備をして。

「周お兄ちゃん、この子は私達が見るから」

「だから、思いっきりやっちゃえ！」

アリエとベリエの言葉を背中に受けて、周はレヴァンティンを構えた。

「ああ。行くぞ、みんな！」

そして、全員が同時に動き出す。儀式の終わりに向かって。

第百八話　約束ＶＳ使命（後書き）

次で狭間の鬼との戦いが決着です。

第百九話　狭間の終わり（前書き）

戦いが終わります。

第百九話　狭間の終わり

息を整える。

今のオレに出来る最善の手段だ。体力も魔力ほとんど枯渇してリバースゼロからの供給ももう無い。

狭間の鬼を囲うようにオレ達はそれぞれ武器を構え、狭間の鬼の動向に注意を向けている。

『数に頼るか。愚かな』

鬼はオレ達を見ながら笑みを浮かべる。だった一人からなる王の笑み。それにオレは笑みで返した。

「別に数に頼ることが愚かじゃないさ。人は一人で生きてはいけない。誰かと助け合って生きている。オレはそれをするまで」

『それが愚かだと言うのだ。忘れたのか。貴様ら人間が我を生み出し、世界を破滅に導いたと！』

どういうことだ？　オレ達が狭間の鬼を生み出した？　意味が分からない。

オレはレヴァンティンをしっかり握りしめる。

『貴様らが文化を持ち、文明を作り上げ、世界の禁忌にすれたことが間違いなのだ！』

狭間の鬼が何を知っているのか分からない。でも、これだけはあいつに向かって言いたい。

「間違ってはいない！　誰もが小さな力しか持っていない。それはオレ達だってそうだ。あらゆる点において一長一短。誰もが十人十色を奏でる。それを作り上げたのが今の世界だ！」

『我は認めぬ。この世界を。滅亡するために進んでいる世界を我は認めぬ』

「滅亡だろうがなんだろうが、そんな未来があるならそれを変えるためにオレ達は戦う。新たな未来を求めて、戦い続ける。それが、永劫に続く戦いになろうが戦い続ける」

『不可能だ。不可能なことを言って満足か！？』

オレは狭間の鬼を指差した。

「やってしないことに不可能なんて言うんじゃねえ！　大体、この戦いだって第７６移動隊が圧倒的に不利だった。戦力差は明らかに貴族派が上。だけど、オレ達はここまで来てお前と戦っている」

最初はこちらに音姉や孝治がいるとしても向こうの方が上だった。オレはエレノアに負けるし。だけど、オレ達はここにいる。

『我を倒せるとでも？　勘違いするなよ。我は、貴様らのような人間とは違う』

「ああ、そうだろうな。だけど、絶対に勝つ。勝って狭間に終わりを告げる。都との約束を、今ここで果たす」

『ならば、我が使命において貴様らを滅ぼす』

「亜紗と音姉はフロント。孝治と冬華はセンター。中村、楓、エレノアはバック。オールはオレがやる。レヴァンティン、準備はいいな」

オレはレヴァンティンを握りしめる。

終わらせる。このくだらない連鎖を終わらせる。都を狭間の呪縛から解き放つ。

「行くぞ！」

その言葉と共に亜紗と音姉が走り出した。センターとバックが機能する今、二人の役割は完全な攻撃特化のスタイルとなる。さらには、二人の速度は第７６移動隊でトップ。

光輝と刀の軌跡が目まぐるしく動き、それに反応するような狭間の鬼が金色の体を動かす。

対するセンターの役割は前線の補助と敵を後衛に行かせないための壁の役割。孝治が弓を構えながら弦を引く。すると、孝治の魔力が矢の形となって現れる。

目まぐるしく動き回る二人を見ながら孝治は放つポイントを見定める。そして、孝治は矢を放つ。矢は一直線に鬼に向かい、亜紗に向かって腕を振り上げた鬼の腕を貫いた。

『くっ』

鬼が孝治を睨みつけた瞬間、光輝が頭半分を斬り裂く。すぐさま二人は下がった。

『厄介な』

「捉えた」

中村の声が周囲に響き渡る。その声に空を見上げると、そこには満天のレーヴァテインがあった。満天の星々とでも言うかのようにレーヴァテインが展開されている。

そして、レーヴァテインが一斉に放たれて狭間の鬼を火の海が包み込んだ。

「きりがないな」

オレは整った息を確認して小さく呟く。亜紗と音姉のコンビネーションは世界でもトップクラス。亜紗の速度に音姉がついていけるからであるが。

そこに介入するのは正確無比な孝治の矢の一撃。そして、火力で他を圧倒する中村。

センターの冬華とバックの楓、エレノアは全く入れないでいる。むしろ、オレが指示を出せない。

「どうすれば」

「周様」

都の言葉にオレが振り返った瞬間、都の顔が目の前に迫っていた。
そして、オレの顔と都の顔が触れ合う。正確に言うならキス。

オレはかすかに後ずさった。

驚いたからじゃない。キスによって何かが移譲されたことに気づいたから。しかも、この状況で移譲されるものと言えば、

「使ってください。私の心を」

「だけど」

渡されたのは都が持つ神剣の資格。神剣の力を最大限まで発揮出来る権利の証。

だか、それは都の心だ。都の心と神剣が一体化している。

「私は、あなたに使って欲しいのです。周様なら、私の心を預けることが出来ます。周様だけなら」

「だとしても、こんな力」

「もう、誰も犠牲にしたくないのです」

その言葉に、オレは都の頭を撫でていた。都が見ている先は千春がいるから、だから、オレは笑みを浮かべて言う。

「こういう時に隠している手段を使うべきだよな、レヴァンティン」

『はぁ、相変わらずマスターは。ぶっつけ本番ですか？』

「当たり前だろ。ぶっつけ本番だ」

オレは都から手を離してレヴァンティンをしっかり握りしめる。

「オレを誰だと思っている？　これでも、異名に最強が付く数少ない奴だ。だから、任せてみろ」

「わかりました。もし、勝てないなら」

「勝つ」

オレは断言して都に背中を向けた。

亜紗と音姉の速度に狭間の鬼がついて行っている。おそらく、目が慣れてきたのだろう。このままではいつか捉えられる。

「孝治、準備はいいか？

「行くのか？」

孝治が笑みを浮かべる。オレのことを知っているからこその笑み。何をしようとしているのかさえわかっているみたいにも思える。

レヴァンティンをしっかり握りしめる。

今日はよくレヴァンティンを握りしめる日だ。多分、緊張しているのだろう。今までで一番難しい任務。だけど、

「チェンジ！」

オレは息を吸って大きな声を出した瞬間、地面を蹴った。速度は最速。大量の魔術陣を重ね合わせながら。

これからやろうとしていることは一回しか通じない。むしろ、一回も通じない可能性だってある。やることはただ一つ。己の力を信じて度胸で飛び込むだけ。

亜紗と音姉が同時に後ろに飛んだ。対する狭間の鬼は向かって来るオレに向かって腕を振り上げる。

「これでもくらえ！」

大量の魔術陣を狭間の鬼に向ける。狭間の鬼は慌てて腕を前でクロスしながら後ろに飛んだ。

引っかかった。

魔術陣が消える。魔術が発動したからだ。だが、魔術は何も起きてはいない。鬼は己の失態を理解して手を下げた。目に映るのは耳を塞いでしゃがみ込むオレの姿。

魔術が、発動する。

眩しいだけの光を放つ魔術と気絶しかけないほどうるさい音を放つ魔術に、まともに立っていられないほどの衝撃波を放つ魔術を重ね合わせたオレのオリジナル。

「名付けて、『猫騙し』」

魔術が炸裂する。オレは目を瞑って耳を塞いでいたから大丈夫だが、至近距離で受けた狭間の鬼はそうはいかない。

うずくまる狭間の鬼を見下ろしながら、立ち上がったオレはレヴァンティンを振り上げる。

「ドライブセット」

『稼働限界時間は5秒です』

「十分だ。モード?」

レヴァンティンの形が変わる。ぶっつけ本番。パーツだけは組み込んでいたが使えるかどうかは完全に未知数。

握りしめるレヴァンティンの大きさは大体2mほど。両手で握りしめていても、魔術で強化した体は辛い。刃の幅は大きく、殴ってもかなり使えそうだ。

防御力の高い敵を相手にするための武器。オレはそれを振り下ろした。全力の一撃。鬼の体が当たり前のように真っ二つになる。

このままでは意味がない。オレは一歩を踏み出した。真っ二つになった鬼の体に腕を突き刺す。レヴァンティンが元のサイズとなった

『貴様』

そのまま鬼の体はくっついた。オレの腕を体に入れたまま。そして、オレの腕が目的のぶつを掴み取る。

「もらった！」

そのままレヴァンティンを振り切って腕を狭間の鬼から引っこ抜いた。鬼は盗られたものを奪い返そうと腕を伸ばすが横手からフェンリルが突撃してきて吹き飛ばされる。

「ようやく入れたわ」

「悔しかったのか？」

孝治が小さく笑みを浮かべながら言うと冬華が孝治を睨みつけた。その間にオレは下がった。

「ところで、何を手に入れたのかしら？」

「核晶だよ」

「核晶？」

狭間の鬼はオレを睨みつけたまま動こうとしない。核晶を握られている今、下手に動けば危ないからだ。

「魔力を保存する領域。つまり、今の鬼はオレ達と同じだ。一回も死ねない」

狭間の鬼が復活するのは膨大な魔力を持っているから。狭間から魔力を取り出して強制的に傷口を塞ぐ。確かにそれは脅威だ。

だが、それは直接魔術に使えるものじゃない。他人の魔力だろうが

なんだろうが、必ず核晶に魔力を保存しなければ自分の魔力にはならない。

つまり、核晶が無ければ魔術は使えない。あの驚異的な再生は無い。とある手段を除いて。

『貴様、何故核晶を知っている。核晶は人間にとっては存在しなければ生きてはいけないもの。それを知ることはまずありえないはずだ』

「だろうな」

核晶という言葉は医療現場ですら聞かない。知っているのは本当に極一部。時雨や慧海。そして、アリエル・ロワソなど。

裏社会ですら知らないだろう。

実際に、この場で知っているのはオレ一人。

「オレの大事な奴は、核晶が無いから苦しんでいる。だから、オレは知っているだけだ。核晶という存在を」

『そうか。なら、我からは何も言わない。しかし、核晶は返してもらうぞ。その力は我のものだ』

オレはレヴァンティンを構えた。核晶は破壊出来ない。いや、破壊しない方がいい。

魔力を集める保存領域が核晶だ。なら、それを破壊したならどうなるか。満杯まで入ったガスボンベに穴を空けて火を付けるようなも

のだ。

つまり、爆発する。

「なら、力づくで取り返せよ」

『貴様！』

狭間の鬼が地面を蹴る。オレはレヴァンティンを振り上げて、そして、誰かがオレと鬼の間に入った。

「やらせない」

体中、血だらけの由姫だ。傷口は塞がっているが、失った血の量は膨大なはずなのに。どうしてそこまで動けるんだ？

「お兄ちゃんはやらせない」

『そのナックルは、まさか』

狭間の鬼が慌てて後ろに下がった。オレ、いや、オレ達は慌てて由姫に駆け寄る。

「由姫！　どうして」

「お兄ちゃん。私も戦うから」

由姫は笑っていた。土気色になった元気の欠片も見えない表情で。

「ここで戦わなかったら、後悔するから」

「オレ達が必ず倒す。だから」

「違うよ」

由姫は小さく首を横に振った。そして、狭間の鬼に向かって左手のナックルを向ける。

「私が、私自身に。ようやく、見つけたから」

「何を」

「私が、白百合に生まれた意味」

白百合の中で由姫は一番異端の存在だった。剣術の才能が全くなく、5歳までに発現するとされる白百合の特殊能力を発現しない。

対する姉の音姉は歴代最強とも言われる剣術と特殊能力。姉妹が比べられるのは当たり前だった。

「まだ、苦しんでいたのか?」

「お兄ちゃんがいたから、私は大丈夫だった。確かに、私は今も苦しんでいる。でもね」

由姫がオレの手から核晶を弾く。狭間の鬼はそれを掴もうとして走り出した瞬間、由姫が動いた。

左手のナックルを鬼に向ける。

「これが、私の白百合としての特殊能力」

鬼が潰れた。これは比喩でもなんでもない。一瞬にして鬼の体がその場に押さえつけられたのだ。まるで、見えない手によって押さえつけられたように。その周囲にあるのは重力場。

「弟くん、これって」

「伝説のレアスキル。名前だけ、語り継がれたもの」

オレは呆然としながら答えた。

レアスキルに存在する伝説にしかないレアスキル。『一機軍勢（マスター）』と『神への重力（グラビタス）』。これは確実に『神への重力（グラビタス）』だろう。

『そうか。貴様らは白百合か。また、我の前に立ち塞がるか！』

「お兄ちゃんの前を塞ぐなら、私は容赦しない。お兄ちゃん、今」

オレは頷いてレヴァンティンを鬼に向けた。

「砲撃を全力全開！　亜紗と音姉はタイミングを計って」

くれと言おうとしたオレを遮って、楓とエレノアの二人が全力で魔術を叩き込んでいた。多分、今までひたすら溜め込んでいたんだろうな。

由姫の力によって押さえつけられた狭間の鬼はなすすべもなく攻撃が直撃する。それを見ながら近くにいる冬華が全力で笑みを浮かべていた。

「フェンリル、全力を出しなさい！」

フェンリルが口を開いた瞬間、氷のブレスが吐き出された。それは一直線に鬼に向かい、鬼の手前で落下する。

「えっ？　えっ？　どうして？」

重力が高まっている中で冷気を叩きつけても落ちるだけだ。それがわかっているから砲撃しろと言ったのに。

さて、まあ、準備はいいだろう。

「レヴァンティン、本気で行くぞ」

『援護しますよ』

「頼む。亜紗、矛神で鬼の体を両断してくれ。音姉はオレに歌を載せろ！」

オレは地面を蹴る。亜紗の矛神が鬼の体を斬り裂いた。今回の復活は遅い。

「【弟くんは自分で重力を設定出来る】」

音姉の言葉と共にオレは重力が高まっている空間に足を踏み入れ、普通に地面を蹴った。そして、魔術陣を展開する。

「これで、終わりだ！」

そして、術式を発動させた。狭間に干渉して相手を封印する術式。
だが、狭間の鬼がオレの体を掴む。

レヴァンティンをすかさず走らせて腕を斬り落とした。だが、もう一方の腕がオレのレヴァンティンを持つ左腕を掴む。

『逃がす、か。逃がして、たまるか』

「くっ」

すかさず鬼の顎を蹴り飛ばす。でも、腕は外れない。このままだと、オレも封印される。

どうにか、しないと。

「お兄ちゃん！　逃げて！」

由姫の叫び声が耳に響く。今、スキルを切れば危険だというのはわかっているからかスキルは切らない。

この重力があるからオレは腕が折られていないしな。

『貴様も、共に』

「誰が、お前と心中なんて、するか？」

顎を勢いよく蹴り飛ばす。鬼はのけぞるが手は離れない。

時間が、ない。

「アルネウラ！」

その瞬間、悠聖の声が響いた。それと同時に氷を纏うチャクラムが鬼の腕を斬り落とす。

オレは腕を振り払って後ろに跳ぶ。狭間の鬼な最後の力を振り絞ってオレに向かって飛びかかってくる。

だが、狭間の鬼の体をいくつかのエネルギーの弾丸が吹き飛ばした。

「ビンゴ！」

後ろに下がりながらそっちを向くと、浩平が片膝をつきながらフレヴァングを向けていた。

『バカな。バカな！』

鬼の体がねじれていく。封印が完全に始まった。

「終わりだ。狭間の鬼」

レヴァンティンを勢いよくパチンと収める。

そして、狭間の鬼の姿が完全に消え去った。それに応じて由姫がスキルを切る。

「ったく、もう、疲れたぞ」

オレはその場に座り込むと同時に空が変わった。まだ、太陽が頂点に達していない空。狭間の儀式が始まる前の空。

「オレ達の、勝ちだ」

この時、狭間の戦いは終わった。

第百九話　狭間の終わり（後書き）

次で前半が終結します。

第百十話　戦いの終結（前書き）

前半終わります。

第百十話　戦いの終結

戦いが終わった。

オレは小さく息を吐いてその場に寝転がる。はっきり言ってもう動きたくない。麓の方から歓声が聞こえてくるが、まあ、気にしなくていいだろう。

向こうも勝てたらしい。

「お疲れ様」

いつの間にか近寄ってきた楓が声をかけてきた。体を起こしてみると、ほとんど全員がその場に座り込んでいる。

立っているのは悠聖と冬華。つか、抱き合ってるし。

「そっか。冬華って悠聖の幼なじみか」

「みたいだね。私もびっくりした。本当なら、私達は動かないつもりだったけど、冬華が『悠聖を助けに行く』って言って」

「それで来たと」

どうりで過激派なのに参加してきたというわけだ。というか、独断で行動しても大丈夫なのかよ。

「それよりも、生きていたんだな」

「うん。アリエル・ロワソに助けられてね」

あの日、『赤のクリスマス』の日。オレと妹の茜、そして、幼なじみの中村と楓は一緒にいた。一緒にいて巻き込まれた。

一時は茜と中村とはぐれ、二人で身を寄せ合っていたが、オレは瓦礫の崩壊に巻き込まれ気絶した。それから楓とは会っていない。連絡すら取り合っていない。

だから、今日まで死んだと思っていた。

「生きていて良かった。だけど、あの事件は」

「ちゃんと知っているよ。アリエル・ロワソは私に復讐心を植え付けようとしたけど、最終的にアリエル・ロワソが悪いって結論になったから」

まあ、オレが狙われるようになったのはアリエル・ロワソ達がオレの体を改造したことが原因だからな。巡りに巡ってアリエル・ロワソが原因になるわけだ。

オレは小さく息を吐いて立ち上がった。そのまま由姫の場所に歩み寄る。

由姫はその場に座り込んでいる上、顔色は本当に危ない。病院に連れて行った方がいい。

「由姫、大丈夫か？」

「あははっ、頑張りすぎちゃった。でも、ようやく、私は白百合と

して胸を張れるよね」

オレは笑みを浮かべながら由姫の頭を撫でてやる。

「十分だ。音姉、由姫を頼む」

「うん。私が、やったから。私が由姫ちゃんをちゃんと見るよ」

由姫の横に寄り添う音姉にオレは笑みを浮かべて頷いて立ち上がった。

とりあえず、いちゃいちゃしている浩平とリースは無視して、孝治と中村は、寝てるみたいだな。静かにしておこう。

オレは抱き合っている悠聖と冬華に近づいた。

「ご苦労様。援軍助かったぜ」

オレがそう声をかけると二人は一瞬、いや、刹那で離れた。まばたきした瞬間には離れているってすごいよな。

「あ、当たり前よ。私達が強いなんて当たり前だからね」

ビシッとオレを指差しながら言う。顔が赤いのは仕方ないか。

「本当にびっくりした。ここに来たら冬華がいるからな。そうだ。麓に七葉がいるから会っていけよ」

「行く！」

即答だった。考える時間くらい作れよ。

「仲睦まじいことで。つかさ、フェンリルって精霊だよな」

オレの疑問に二人は頷いた。

「位は？」

「最上級」

悠聖の言葉にオレは固まった。まあ、最上級精霊がここに三体存在するなら誰だって驚くだろう。だけど、オレが驚いているのはそれだけじゃない。

オレは向こうを指差した。

「アルネウラは中級精霊って聞いているけど、どういうことだ？」

向こうではフェンリルをアルネウラが追いかけていた。最上級精霊を中級精霊が追いかけている。どういう構図だ？

フェンリルは狼でアルネウラは音姉より少し上って感じの外見だから、犬を追いかける少女と例えればわかりやすい。

「オレも驚いている。ディアボルガ、何か知っているか？」

『我が知っていることは、アルネウラが生まれた時によく世話をしていたのがフェンリルだと聞くが』

納得。

オレ達は同時に頷いていた。アルネウラがフェンリルに抱きついてもふもふしているのを見ながら。

「あのもふもふは気持ちいいのよね」

「羨ましいぜ。オレの精霊達なんて」

もふもふする場所がないよな。オレは小さく溜息をついて二人を見た。

「じゃあ、また。声をかける相手が二組ほど残っているからな」

オレはエレノアを指差した。ベリエとアリエがそばについている。

二人が頷くのを確認してオレは歩き出した。

「終わったな」

オレが声をかけるとエレノアはオレを見て、そして、頭を下げた。

「すまない。余達のせいでこんなことに」

「オレは気にしてねえよ。ただ、貴族派は解散か？」

エレノアは頷く。貴族派の戦力は大幅に減った。たくさんオレ達が殺した。だから、もう、貴族派は活動できない。そう思っている。

「余は一度魔界に帰り、貴族派の解散を宣言する。『炎帝』の役目も降りるしかない」

「さろうな。オレが知っている限りでも、『炎帝』としては十分な能力を持った奴らはたくさんいる」

千春の場合はレアスキルでもある『浸食』の力があったからこそ『水帝』になったのだろう。エレノアはおそらくその火力。魔界にはたくさんの実力者がいるから何かが秀でていなければなれない。

オレは小さくため息をついた。

「まあ、一度整理がついたら遊びに来いよ。『炎帝』としてじゃなくて、エレノアとして」

「いいの？」

「ああ。その代わり、正規の手段を使えよ。それくらいなら時雨が手回ししてくれるさ。さて」

オレは都に歩み寄る。都は千春の亡骸を抱きしめていた。

敵でありながら最後は都を救おうとした少女。多分、悩んだに違いない。『水帝』のクラリーネとしての自分と、都の親友としての自分。誰の言葉や行為によって触発されたかわからないが、最終的には都の味方になってくれた。

「都、千春を弔おう」

「周様」

「千春は最後まで苦しんだんだ。そして、最後は都の味方になった。

だから、弔おう」

都が涙を拭いて頷く。

「千春に家族は？」

「いません。一人暮らしです」

多分、魔界の頃から一人だったんだろうな。そして、一人のままこっちに来た。

「そっか。千春、オレはお前が都の味方になってくれてよかったと思っている。だから、静かに眠ってくれ。オレが、オレ達が、都を守るから」

空を見上げると太陽が次第に高く昇っていく。ほんの少しだけだけど。これが朝焼けだったらかっこいいなと思いつつ、オレは小さく息を吐いた。

「これで、終わりだ」

第百十話　戦いの終結（後書き）

これで前半が終わります。ですが、狭間市の長い一日はまだ終わっていません。
後半の始まりはこの続き、というより宴会から始まります。
後半は、
・狭間の鬼の存在
・フュリアス
・精霊
を中心に進めて行こうかと。つまり、視点がまた変わります。今度は悠聖視点と悠人視点が多くなる予定です。
他には学園編ですかね。途中で体育祭を挟む予定。
ここまで読んでくれた方々、ありがとうございます。
前半部分の感想をお待ちしております。どんな些細なことでもいいのでお願いします。

幕間　シンクロとユニゾン（前書き）

久しぶりの更新です。
現在、今までのを加筆修正中なので最新話はゆったり更新するつもりです。

幕間　シンクロとユニゾン

時雨は小さく溜息をついていた。

原因は目の前にある一枚のカード。このカードには絵柄しか書かれていない。ただ、問題点を上げるとするなら、これが半端じゃないほどの魔力を有していること。

時雨はまた溜息をついて部屋のドアの近くに立っている女性に話しかけた。

女性はきっちりスーツを着こなしており、髪は短く、メガネの形が印象的だ。冗談抜きでの瓶底のメガネ。

「フィルア。その方向は本当なのか？」

フィルア・ラカンル。

『ＧＦ』の総長である時雨の秘書で、まだ２０代半ばのエリートだ。

「はい。これは精霊召喚符と呼ばれていました」

時雨は精霊召喚符と呼ばれたものを手に取った。そして、呆れたように溜息をつく。

「シンクロではなくユニゾンをする精霊ね。オレの概念じゃないけど？」

精霊とするのはシンクロ。それは世界の常識だ。

シンクロは召喚者が精霊と同調を高めて一時的に一緒になることを言う。精霊を取り込み自らを精霊化させるのだ。もちろん、体の動作は召喚者がほとんど行う。

もちろん、力は強化される。ただ、その召喚者がシンクロ中に死んだとしても精霊が死ぬことはない。とある事例を除いて。

「さらには、召喚者が死ねば精霊も死ぬ、か。シンクロの最終形態ではあるまいし」

シンクロの最終形態がシンクロ率が完全であることだ。つまり、シンクロ中の召喚者が傷つけば精霊も傷つけ、死ねば死ぬ。

その代わりなのかわからないが、絶大な精霊の力を使いこなすことが出来る。普通のシンクロと比べものにならない。

「今のところ、確認が出来たのは3ヶ国。その内の一つは日本です」

「ったく、今日に狭間の事件が終わるというのに新たな事件かよ。被害者は？」

「すでに6人出ています。どれもが複数のユニゾンを起こしたことによる暴走です」

一体、このカードにどんな力があるかわからない。だが、複数のユニゾンを起こせる危険なものであることは確かだ。

シンクロは一体としか出来ない。

「被害は？」

「まるで、戦闘ランクの高い魔術師が暴れたようでした。暴走を止めるために、すでに１８名の殉職者が出ています」

あまりに被害が大きすぎる。出来るだけ早くにこのカードの出所を突き止めないといけない。

「それにしても、戦闘ランクの高い魔術師が暴れたよう、ね。ユニゾンの方が同調率は高いけど、シンクロには及ばないか」

時雨は知っている。本当のシンクロが出来る人を。それが起きた場合、そんな優しいものじゃ済まない。

一番被害が小さくて、半径２００ｍに氷山が出来上がったのを見たことがある。

本当のシンクロはよほどの実力者でない限り止められない。

「高位戦闘ランクの面々を各地にばらまくしかないか。フィルア、第一特務全員の書類を」

「第一特務をばらまくのですか？」

フィルアは大いに驚いていた。その気持ちはよくわかる。第一特務というのは『ＧＦ』の最終防衛ラインだからだ。

「ああ。出所がわからない以上、被害を少なくする方が先決だ。ただ、そんなレベルとなると犯人は絞れてくるけどな」

「わかりました。すぐに書類を用意します。では」

フィルアは時雨に向かって礼をするとそのまま部屋から出て行った。

時雨は小さく溜息をつきながら手にある精霊召喚符をよく見つめる。

時雨が見ているのは精霊召喚符に書かれてある魔術陣だ。

「このレベルなら世界でもトップクラスの魔術師か魔術器だな。はあ、これを詳しく調べるためには世界最強の精霊召喚士に尋ねた方がいいな」

時雨が小さく溜息をついて立ち上がった。

「ちょっくら出かけるか」

幕間　シンクロとユニゾン（後書き）

後半のキーワードです。
シンクロとユニゾンの二つが後編の話に関わってきます。
他にも狭間の鬼や『ＥＳ』など前編の話も関わってきます。

第百十一話　狭間市の長い一日　事後（前書き）

狭間市の一日はまだ終わりません。というか、まだ終われないだけですが。
加筆修正と共に話を進めて行きますので、矛盾する点が残っているかもしれませんが時期に修正されるはずです。たぶん。
では、第一章後編をお楽しみください。

第百十一話　狭間市の長い一日　事後

オレは千春の槍を拾い上げた。そして、オレと都で作った千春の墓に槍を置く。

簡単な埋葬だ。戦場で連れて帰れなくなった味方の遺体を埋葬する時と同じ方法。本当なら葬儀を上げるべきだろうが、千春の立場は微妙だからこの形に落ち着いた。

「第７６移動隊隊員全員、構え！」

オレは一歩後ろに下がってレヴァンティンを抜く。それに応じて後ろに並ぶ第７６移動隊の面々がそれぞれの武器を抜いた。

手を伸ばし、刃の先を空に向ける。

『ＧＦ』式のやり方だ。敬礼とよく似たもので、特に死者を弔う時によくする。

都は千春の墓をゆっくり撫でた。

「今は、これで我慢してください。千春は派手なものが嫌いだったので質素な墓を私達は作ります。私の、大切な、親友に」

都が涙を流す。それを見ながらオレは目を瞑った。思い出すのは千春との思い出。

『ＧＦ』の狭間市学生『ＧＦ』の一員としていろいろなことを教えてもらった。先任だった地域部隊から学校のことまで。

ずっと、苦悩していたのだろう。

「私は、あなたが助けに来てくれたことが、本当に、嬉しかった。だから、ゆっくり、休んでください。私の親友に、なってくれて、ありがとうございました」

魔界に住む者として、『水帝』のクラリーネとして任務を全うすべきか、学生『GF』として、都の親友としてみんなを守るべきか。

そして、最終的には都を助けようとした。

「構え、止め！」

オレ達は一斉に武器を収める。それと同時に都が立ち上がった。

「周様、ありがとうございます」

「大丈夫か？」

「はい。私は、私には、皆さんがいます。それに、泣いてばかりだと千春に怒られてしまいますから」

都はオレに近づいてきて、そして、オレの手を握ってくる。握ってようやく、オレは都の手が震えているのがわかった。

「私は、頑張りますから。千春の分も」

「頑張りすぎは駄目だぞ。さて、みんな、下りるか」

とりあえず、町まで行って、みんなに無事であることを知らせないと。特に琴美には言わないといけない。事の顛末を。

オレは都の手を握りしめて歩き出そうとした時、都の手を握る反対側の手をいつの間にか亜紗が掴んでいた。

今、亜紗と都の間で火花が散ったような。

『周さんに甘えるのは許すけど、周さんは渡さない』

「それはあなたが決めることではなく周様が決めることなのでは？周様はあなたの所有物ではありません」

『その言葉をそっくり返す』

火花が散りまくっている様子を見て、とりあえずオレは小さく溜息をつくことにした。そして、二人の手を離す。

「あのな、オレはお前らに喧嘩はして欲しくないからな」

「わかっております。周様はこの中で一番強く、そして、一番優しく、一番弱いお方ですから」

その言葉を言う都の顔は赤く、そして、力強く手を握ってくる。

「ん？　なあ、リース。強いと弱いは併用できないんじゃ」

浩平が不思議そうに首をかしげて問いかけるが、リースは呆れたようにため息をつくだけだ。まあ、この状況じゃね。

『なんか悔しい。私の方が周さんと一緒にいるのに』

「恋は戦いですよ」

亜紗の文字に都が挑発するように言う。オレを巡って争うことは嬉しくないことはない。ただ、オレを挟んで争うことは止めて欲しい。

オレが小さくため息をつくと、ゆっくりとした足取りで由姫が近づいてきた。その顔は少し青い。

それを見た都と亜紗の二人はオレからゆっくり離れた。

「兄さん」

「本当に心配したからな。ったく、無茶はするなよ。まあ、音姉なら仕方ないか」

「うん、だからね」

由姫がゆっくり近づいてくる。そして、

「抱っこして」

「『ちょっと待ったー！』」

都の大きな声と亜紗の大きな文字が耳と目に入ってくる。まあ、そうなるわな。

「あのな、オレは疲れて」

「「『そんなこと聞いていない！』」」

何故か知らないが無性に悲しくなってきた。どうしてだろうか。三人はそのまま言い争いを始める。内容がないようなので語るというか、聞くつもりは全くない。というか、放送禁止用語を並べてののしり合っているようにも聞こえる。まあ、全員中学生だし。

オレは小さくため息をついたまま三人から離れて孝治に近づく。

「災難だな」

「助けろとは言わないけど、あいつらよくやれるよな。オレなんてかなり疲れているのに」

「お前がか？」

孝治は純粋に驚いていた。でも、そんな反応をされると正直に言って傷つく。

「オレだって無敵じゃない。第一、あそこまで戦えたことが奇跡だからな。というか、封印術式の一回発動で普通は倒れるくらいの魔力消費なんだぞ」

「なら、何故倒れていない？」

孝治の純粋な疑問にオレの顔が青くなるのがわかった。簡単に言うなら、あの味を思い出したから。でも、あの味のおかげで勝てたと思うとかなり複雑だ。もう、絶対飲みたくない。

孝治は不思議そうに眉をひそめるが深くは聞いてこない。多分、こ

の顔を覚えているからだろう。とある人物が作り出した殺人料理を食べた時と同じような顔だから。

「苦労したのだな」

「わかってくれるか、相棒」

オレは背後を振り返る。そこで繰り広げられているのは何故かじゃんけんをしている三人の姿。多分、順番を決めているのだろう。

オレはまた小さくため息をついた。

「さっさと降りるぞ。時雨にも報告しないといけないからな。ちなみに、楓、中村、冬華の中で飛ぶ体力が残っている奴」

オレが尋ねるとだれも答えない。

まあ、そりゃそうだろうね。あの戦いの後でまともに動ける奴の数なんて限られてくる。特に、オレ達はまだ中学生。体力という点では人生の最高値に達していない。だから、そこまで動ける奴はおかしい。

例え、どれだけ鍛えている奴だとしてもだ。

「仕方ないか。由姫」

オレがそう呼ぶと、由姫が顔を輝かせて近づいてくる。他の二人に浮かぶのは完全な不満な顔。

「えっと、何？」

「ちょっとじっとしてろよ」

オレはそう言って由姫を抱き上げた。所謂、お姫様抱っこという状態だ。

「お、お兄ちゃん！？」

「恥ずかしいと思うけど我慢してくれ。本当なら、お前は病院に行かないといけないんだ。だから、少しくらいは兄を頼れ」

「うん。ありがとう」

由姫がしっかり抱きついてくる。ちなみに、亜紗と都はというと、固まっていた。完全に固まっていた。どれだけ固まっているかというと、彫像のように身動き一つしていない。

その二人に向かって中村が呆れたように言う。

「海道の言葉を聞いてなかったん？　由姫は入院するらしいで」

そのつもりだ。由姫はかなりの血を失った。だから、本音を言って今すぐ全速力で病院に向かいたいところだが、そんな体力は全く持ってない。だから、このまま抱きかかえて病院に向かう。

中村の言葉に正気に戻ったのか、二人はお互いに顔を向けあって小さく頷いた。何の取引をしているかわからないが嫌な予感しかしないのは確かだ。

とりあえず、オレは小さくため息をつきながら歩き出す。オレ達が

守った場所に向かって。

第百十二話　狭間市の長い一日　魔王派（前書き）

視点を変えてみました。

第百十二話　狭間市の長い一日　魔王派

僕は小さく息を吐いてパワードスーツを外した。僕の体にフィットしていたものが外れ、心地よい涼しさの風が体を撫でる。能力の関係上、ピッチリとしたものを着ないといけないからインナースーツがいつも汗でべちゃべちゃになる。もちろん、今回も。

僕はパワードスーツをハンガーにかけてロックする。そして、パスワードを設定してさらにロックした。

「お疲れじゃな」

ロックをかけて歩き出した僕にアル・アジフさんが声をかけてくる。

「アル・アジフさんもお疲れです。どうでしたか？　ダークエルフは」

「思った以上の性能を発揮したというべきかの。そなたは我らの想像をはるかに超える才能を持っておる。おかげでプログラムを組むのが大変なくらいじゃ」

アル・アジフさんはそれを本心から言っているのだろう。確かに、僕がパワードスーツ、そして、フュリアスの操作は尋常じゃない才能があると自負している。でも、今はその能力に技術が追い付いていない。

でも、僕はそれを不満に思わない。何故なら、それでもアル・アジフさんは僕のために一生懸命だから。僕のために頑張ってくれているから僕は耐えていられる。あのことから。

「シャワールームの方は開けてある。そなたが使うがよい。後、ギルガメシュがそなたのことを聞いてきたぞ。なにをしたのじゃ？」

「えっと、獲物を横取りした、かな？」

多分、そうなるはず。でも、あれは仕方のないことだから勘弁してほしいけど。

「そうか。では、我から言っておこう。そなたはゆっくり体を温めろ。汗で体が冷えているじゃろ」

「うん。ありがとう」

僕はアル・アジフさんに頭を下げてそのままシャワールームに入った。

シャワールームといってもそこまで大きなものじゃない。小さな脱衣所にシャワーを浴びるスペース。ただ、それだけしかない。でも、シャワーを浴びるだけなら十分だ。

着替えが用意されていることを確認して僕はインナースーツを脱いだ。そのまま蛇口をひねり、温かいシャワーを浴びる。火照った体と汗で冷えてきた体に温かいシャワーが降り注ぐ。それを僕は頭から受ける。

「フュリアスの初めての実戦」

僕はそう呟いて自分の手を見た。その手は震えている。初めてだからじゃない。おそらく、たくさん殺したから。

殺したのは魔物だと割り切ることだってできる。そう割り切って戦っている人だってたくさんいる。でも、僕は割り切ることが出来ない。殺した命は変わらないから。

「僕は、何がしたいんだろう」

よくわからない。でも、ただ、言われるがままに殺していいわけがない。それだけがわかる。殺したらいけないのに。僕は、どうすれば。

「考えても仕方ないよね。はあ、こういう風に悩むのは僕くらいかも」

僕は小さくため息をついてシャワーを止めた。

僕はよく年齢不相応な考えを持つと言われる。でも、それは出自を知ればだれもが納得してくれる。でも、

「僕は好きでこういう考えをしているわけじゃないんだけどな」

本当ならもっと子供のように扱って欲しい。でも、この能力がある以上、そんなものは無理だ。

「ふう。インナーはいつもの場所においておけばいいかな」

着替え終わった僕はシャワールームのドアを開けた。すると、そこには一人の女の子がいた。確か、戦場で見かけた顔だ。そばには体の大きさと見合っていない大きさのハルバートが置かれている。確

か、

「君は確か」

「リリーナです。リリーナ・エルベルム。あの時は助けていただいてありがとうです」

「僕は当たり前のことをしただけだよ。それと、あの後大丈夫だった？」

「はい。人の皆さんが助けてくれて」

リリーナはもじもじと言いにくそうに言う。僕はそのしぐさに少しく首をかしげながらも笑みを浮かべた。

「助けに来てくれてありがとう。おかげで僕達は助かったよ。本当にありがとう」

「私は、パパの付き添いだったから。小さな頃から人界に来たくて」

確か、リリーナは魔王の娘って言ってたっけ。でも、僕は正直に言ってそういうことを気にしない。だから、僕はリリーナに近づく。

「それでも、君は助けに来てくれた。だから、ありが」

「どこの虫けらじゃあああぁぁ！！！」

リリーナに近づいた瞬間、凄まじい怒声と共に誰かがこっちに向かってくる。あれは、確か、ギルガメシュと名乗っていた。もしかしたら、リリーナの関係者かもしれない。

でも、僕は本気で言って怖い。だって、怒りの形相で、しかも、全速力で大きな男の人が土煙のようなものを巻き上げながら向かってくるから。本気で言って逃げたい。でも、どうしてかわからないけど、リリーナの前で情けない姿をさらしたくなかった。

「死にさらせえええぇ！！！」

その声と共にギルガメシュさんが僕に向かって魔術を放ってきた。炎の槍だ。速度はかなり速く、防御は間に合わない。だから、僕はそれを掌で受け止めた。

「悠人！」

リリーナの声が聞こえる。僕はリリーナに笑みを浮かべながら炎の槍を握るつぶした。

「大丈夫だよ。だから」

僕はギルガメシュさんに向かって腕を振る。すると、炎の槍がギルガメシュさんを吹き飛ばした。やられた分はやり返す。それだけはちゃんとしないと。

僕は小さく息を吐いて自分の掌を見た。火傷はどこもしていない。でも、受け止めきれなかったからか、掌が微かに切れて血が流れていた。痛い。でも、これくらいの痛みは我慢しないと。

「悠人、血が出てるよ」

リリーナがポケットから取り出した綺麗なハンカチを僕の掌に当て

てくれる。リリーナは他に傷がないか確認してから治癒魔術を使ってくれた。

「どうして」

だから、僕は思わず尋ねていた。

「どうして、見ず知らずの人のそこまでするの？」

「えっ？」

「リリーナがそんなことをしても得なんて」

「私は、損得はよくわからないから。うん、大丈夫」

その言葉に掌を見ると、傷口は塞がっていた。綺麗に塞がっている。

僕はその掌を少しだけ見て、そして、握りしめた。

「ありがとう。もう、痛くないよ」

「よかった。後、ごめんなさい。パパが暴走して」

「そうなんだ。君のパ、パ？」

今、リリーナはなんて言いました？　自分のパパ？　つまり、僕が今、魔術を返したギルガメシュさんは魔王といいことだよね。

僕はぎこちなく振り返る。そこにいるのは無傷のままゆっくり立ち上がるギルガメシュさんの姿。その口からはそこまで寒くないのに

白い息が出ている。

すごく、嫌な予感しかしない。どうしよう。

「小僧、よくもやってくれたな。我の可愛い娘に手を付けただけでなく、我に喧嘩を売るとは」

「売った覚えないんだけど」

「問答無用！　貴様はここで死に」

「落ち着け」

呆れたような声と共にギルガメシュが上から叩き潰された。文字通りに力技で上から叩き潰されている。叩き潰した人はテレビでもよく見かける男性の顔。

その人は小さくため息をついた。

「確かに、親バカになるのは構わないけど、節度を守れ。第一、お前の娘からそこの男の子に近づいたということを忘れていないか？」

「そうだったのか？」

叩き潰されたギルガメシュさんはぴんぴんしたまま頭を捻っていた。

どうしてこの人がぴんぴんしているかわからないけど、俗に言うボケ防御と呼ばれるものなのかな？

「パパ！」

「リリーナ。そんな小僧から離れて我の元に」

「悠人は私の命の恩人なんだから仲良くなりたいの。邪魔をするパパなんて嫌い！」

その言葉はまるでエコーがかかったように周囲に響いていた。それと同時にギルガメシュさんの体が崩れ落ちる。どうしてだろうか。

「本当にごめん。悠人、私は迷惑？」

「迷惑じゃないけど、ちょっと驚いていて。僕に近づいてくるのは、僕の能力目当てが多いから」

「私はそんなのじゃない」

リリーナが僕の手を両手で握ってくる。そして、僕に顔を近づけてきた。

「私を助けてくれた悠人はかっこよかった。でも、その強さを手に入れるのはいろいろ苦労したと思う。悠人がどんな世界を歩いてきたかわからないけど、悠人のことを知りたくなった。だから」

「えっ、あっ、うん。ありがとう」

正直に言って恥ずかしい。リリーナは可愛いし女の子だから顔を近づけてくるとどうしても意識をしてしまう。これでも、僕はもうすぐ中学生だから。

僕は恥ずかしくなってリリーナから顔を反らした。そこに入ってき

た視界はにやにや笑みを浮かべているギルガメシュさんを叩き潰した人。なんか、無性に腹が立ってくる。

「あの、迷惑だった？」

「迷惑じゃないけど、驚いて。それにしても、どうして魔王がここに」

「慧海さん。あの男性の人が魔界に直々に乗り込んできて、『貴族派の他に変な勢力が動いている可能性があるからお前も体を動かせ』ってパパに言ったんだよ。パパは、『変な勢力だと？　そうか。期限は？』って答えて、『出来るだけ早く。明日には戦いが始まる。結界が展開されればオレ達は入れなくなる可能性だってあるんだ。貴族派は元々魔界の派閥だ。責任くらいは取れ』って返ってきて、『いいだろう。終わった暁にはその場で皆と共に宴会を開くがいいな』と返して、『周が許可したらな』ということで決まったよ」

とりあえず、リリーナの記憶能力はとても凄いということが分かった。リアルな会話を表現してくれなくてもよかったのに。

でも、どうして魔王達が来たのがわかった。自分達で魔界の不祥事をどうにかしようと思ったに違いない。どこにリリーナも付いてきたということか。

「うん。よくわかったよ。ありがとう。でも、宴会をするということは」

「うん。誰も被害者を出していないということだから盛大にするってパパは言っていたよ。悠人も参加するよね」

「うん。でも、どうしてだろう」

嫌な予感しかしない。最悪の事態が起きるという嫌な予感というわけではないけど、何らかの騒ぎが起きる気がする。でも、僕が出来るのはただ祈るだけ。

「宴会が平和に終わればいいのにね」

だから、僕は小さく言葉を漏らした。

第百十二話　狭間市の長い一日　魔王派（後書き）

悠人視点の物語はこんな感じです。これから悠人の活躍する場も多くなります。期待してください。

第百十三話　狭間市の長い一日　帰還

オレ達は戻ってきた。オレ達が守るべきだった狭間市の市街地に。

周囲は戦闘の傷跡というより、魔物と異形が暴れた後が多数見つかり、そして、魔物の死骸が散乱している。そのほとんどは喰い散らかされていた。

魔物に共食いというものはあるけれど、それを味方にするのは普通はない。つまり、異形によって喰われた。失踪者と同じように。狭間の鬼の力を得るために。

「いつ見ても、勝った気分でいられないな」

その光景を見ながらオレは小さく言葉を漏らした。その言葉が聞こえるのは由姫だけ。でも、由姫は何も言ってこない。なんとなくだがその気持ちがわかるのだろう。

オレの戦い方を知っている奴ならオレがそう言う理由がわかる。

例え、魔物であっても、どれだけ凶悪な相手であっても、そして、どれだけ心の底から憎いやつでも、オレとレヴァンティンは不殺を貫いてきた。そのことはかなり有名だ。

『ＧＦ』総長のお孫さんは甘ったれたガキとも言われているし。

オレはそれが間違っているとは思わない。どれだけ激しい戦いをしていても、殺すことはしたくない。

「これが偽善だとしても」

「それがあなたの考え？」

いつの間にか隣を歩いていた冬華が語りかけてくる。悠聖は孝治と話していた。

「何か言いたいことがあるのか？」

「別にないわよ。私は、アリエル・ロワソ様から海道周のことを詳しく聞いているから。あなたがどれだけの犠牲の上で生きているか。それを承知で言わさせてもらうわ」

そして、冬華は一歩だけオレに近づいてきた。

「それを私は尊敬する。例え、アリエル・ロワソ様の敵だとしても」

ある意味意外だったからオレは言葉を返すことを忘れていた。そして、冬華はオレから離れて悠聖に飛びつく。

「一体、何なんだ？」

「お兄ちゃんの考えが立派ってことじゃないかな？」

由姫が自分なりの解釈を話してくる。確かに、そう捉えることも可能だけど、多分、冬華が言いたいのは、

「いや、多分だけど違う」

オレの言葉に由姫は首をかしげた。まあ、これはオレの推測だから

由姫にはわからないと思うけど、多分、これであっている。

この世界はお前が思うほど甘くない。

冬華はそう言いたかったのだろう。アリエル・ロワソに近いからこそ言える言葉。

「違うけど、よくわからない」

今でも十分にこの世界は甘いとは思っていない。今でも紛争が絶えない。希少物質（レアメタル）である魔力鉱石を巡った争いは激しくなっている。魔力鉱石が巨万の富を出すとわかっているから。

それに、ここ数年の話になるが、異常気象が多いとも言われている。調べたこともないが、多くなっているのは確かなのだろう。これらは偶然か、はたまた、何か関係があるのか。

そこまでスケールを大きくしても仕方ないか。今のオレ達はちっぽけな力しかもっていないのだから。

「お兄ちゃんでもよくわからないんだ」

「オレを何だと思っているんだ？」

オレは軽く小さくため息をつきながら尋ねた。

「大人」

「せめて理由を聞かせてくれ」

大人といわれるのは嬉しいけど、まだまだ自分は子供だと思っている。大人になれるのはいつのことやら。

「そこの角を曲がると避難地区が見えてくるね。みんな無事だといいけど」

「話を逸らすな」

オレはまた小さくため息をついた。

そう言えば、最近ため息がかなり多いような。特技はため息にしておこうか。まあ、幸福が逃げて行くとは言うけどね。

「まあ、無事だろ。あそこにはアル・アジフ達がいるし」

虎の子のフュリアスだってあるはずだ。そこまで最悪に事態になることは普通はありえない。でも、『ＧＦ』地域部隊や『ＥＳ』に被害が出ている可能性だってある。

心配事はそれくらいだ。

「ん？　誰か来る？」

オレは微かに発動していた探査魔術に反応があったのがわかった。こういう状況だから、最後まで気を抜くことはしたくない。

数は三人。大きさは、オレよりも小柄が三人か。一人は七葉の感じが高いけど、残りの二人は誰だ？

そして、道を曲がると、そこには七葉、悠人、そして、悠人と同じ

年くらいの女の子がいた。その顔を見てオレの顔が引きつるのがわかる。どうしてこの場所にいるのかわからない。

「周兄！　みんな！」

「七葉！」

悠聖が走って七葉に向かい、七葉はこちらに向かって走ってくる。そして、二人はすれ違った。お約束というべきだろうか。

「よかった。心配したんだからね」

「まあ、やばかったけどな。全員。七葉、由姫を病院まで頼めるか？　由姫は歩けるか？」

オレは由姫を下ろした。由姫は名残惜しそうにオレを見て。そして、七葉と一緒に歩き出す。七葉はオレがどうしてこうするのかわかって言っているのだろう。

オレはそのまま悠聖の隣にいる女の子に近づいた。とりあえず、挨拶をしておかないと。

「よっ、魔王の娘」

「むっ、私にはリリーナって名前があるんだから」

「初対面のオレにお前が魔王の娘といったんだろ」

「私は自分の名前の後に言ったんだけどね」

オレ達の会話に七葉と悠人以外の面々が固まる。

魔王の娘ということは、ここに魔王がいるかもしれないとみんな思ったのだろう。もしかしたら、どうして魔王の娘と知り合いか考えている人もいるかもしれない。

オレは小さくため息をついてリリーナを見た。

「お前がいるってことは、ギルガメシュは？」

「パパならいるよ。今、宴会の準備をしているけど」

その言葉に後ろにいた面々の力が抜けるのがわかった。倒れるようにその場に座り込んでいる。そのほとんどが。立っているのはあそこから一言も話していない音姉くらいか。多分、由姫を傷つけたことを反省しているのだろう。

「宴会かよ。ったく、相変わらず魔王のやることは読めないな。悠人、被害は聞いているか？」

「えっ？　あっ、はい。怪我人は多数いるけど、死者は無し。危ないところをリリーナ達に助けてもらったから」

「そういうこと。一応、人を呼んだ方がいいかな？」

「頼めるか」

オレはその場に座り込んだ。誰も死んでいないということを聞いて体から力が抜ける。

後ちょっとだけど、そのちょっとが歩けない。立っているのは音姉くらいだ。

「悠人、お願いできる？　私は周と話をするから」

「周さんと？　うん、わかったよ」

悠人が小走りで避難地区の方に走っていく。

そう言えば、耳を澄ませてみると、確かに騒いでいる声は聞こえてくるな。疲れているから気づくのが遅れたか。まあ、死闘だったし仕方ないと思っておこう。

「とりあえず、魔王の娘として、今回のことは謝ります。ごめんなさい」

「魔王派が起こした不祥事じゃないだろ。魔界といっても一枚岩じゃないんだし」

「そう言ってくれると助かるかな。それと、援軍が遅れたことは」

「ストップ」

オレはリリーナの言葉を遮った。そのことに関してはオレから言うことがある。

「援軍、ありがとう。狭間市を守る『ＧＦ』最高責任者から感謝の礼を述べておく。助かったことには変わりないしな」

「そう言ってくれると嬉しいな。多分、パパも同じようなことを言

ってくると思うけど」

「わかった。同じ言葉を返しておく」

オレは小さく息を吐いて空を見上げた。空を見上げて太陽のあまりの高さにため息をつく。まだ、一日も終わっていないんだよな。オレの中だと、もう終わったように感じられていたし。

一度、夜を体験したから体内時計も少しおかいいような気もする。

「ご苦労様でした」

「ともかく、避難地区に向かわないと」

オレは立ちあがろうとした。でも、足に力が入らない。怪我をしたというより疲れすぎたとういうべきか。明日は確実に筋肉痛だな。

そうしていると、避難地区から何人もの人が向かってきた。先頭を走っているのはアル・アジフか。

そして、姿がだんだん大きくなり、

「周！　心配したぞ！」

アル・アジフがオレに飛び込んできた。オレは絶えることも出来ずそのまま背中を地面に当てる。ぶつけるではないのはアル・アジフが手を回していたから。

アル・アジフの不思議な行動に誰もが呆然と固まっていた。もちろん、オレも。

「はっ。いや、これは、その」

『アル・アジフさんも周さんのことが好きなんだ』

亜紗がスケッチブックをみんなに、特にオレによく見えるように見せてくる。その言葉にアル・アジフの顔が真っ赤に染まったのがわかった。そして、避難地区から走ってきた人達が理解したように頷いている。ともかく、疲れている体には重い。でも、そんなことは言えない。

脳裏にとある惨劇が思い浮かんだから。

「す、すまぬ。お、思わずやってしまった」

アル・アジフはゆっくりオレから離れた。その顔は真っ赤だ。面白いように真っ赤だ。

「ともかく、ただいま」

オレは避難地区を守ってくれたアル・アジフに向かって言った。

「お帰り」

アル・アジフは顔を真っ赤にしたまま、満面の笑みでオレの言葉を返してくれた。

第百十三話　狭間市の長い一日　帰還（後書き）

次から宴会が始まります。

第百十四話　狭間市の長い一日　宴会（前書き）

宴会パートを一気に書こうとしたら凄まじく長くなりました。一応、自己最長の長さに。
後編に向けての導入部分はこの話で終わります。

第百十四話　狭間市の長い一日　宴会

「それでは、狭間市の防衛成功を祝いまして、乾杯ー！」

「「「「乾杯ー！」」」」

そう言ってマイクを片手にグラスを上げるのは善知鳥慧海。というか、どうしてこの場所にいるかが未だにわからないけれど、どうしてこういう状況になっているかわからない。

避難地区中央の広間にまんべんなく敷かれたブルーシートといくつもの机。机の上にはいくつもの飲み物がある。もちろん、お酒も混じっていた。ただ、机での区別はある。

そこら辺に座って紙コップを当て合っているのはほとんどが狭間市市民。そして、魔物の姿も見当たる。はっきり言うならおかしな光景だ。

オレは小さくため息をついて、目の前に出された紙コップにオレンジジュースの入った紙コップを当てる。

「つか、なんで宴会？」

「さあ？」

音姉が不思議そうに首をかしげる。

オレ達が避難地区についた後、オレ達はすぐさま病院に直行した。もちろん、全員が怪我をしていたということもあるのだが、あの狭

間の鬼が作り出した儀式上の中心で戦っていて、どれだけ体に影響があるか簡易的に検査してもらったのだ。ちなみに、その検査にはアル・アジフも立ち寄っていた。

結果は異常なし。魔力が多くてもあまり異常は出ないらしい。限界を超えたらどうなるかわからないが。

ただ、由姫は即入院。オレも入院を勧められたが断った。これくらいで入院をしていたら任務をやってられない。

「音姉は久しぶりに喋ったし」

「仕方ないよ。私が暴走したから弟くんや由姫ちゃんを傷つけて、下手をしたら狭間の鬼を封印することが出来なくなったかもしれないのに。反省だよ。猛烈に反省だよ。猛省だよ」

どうやらあの時の記憶は完全に残っているらしい。どういう条件で鬼姫になるかわからないけど、音姉も苦労しているに違いない。

「ううん、ごめんね」

「まあ、過ぎたことを気にしても仕方ないさ。それにしても」

オレは周囲を見渡した。

この場にいる全員が飲んだり食べたり騒いだり、本気で自由気ままに宴会を楽しんでいる。この宴会がタダだからだろうな。宴会の主催者は慧海とギルガメシュの二人だし。

オレは小さくため息をついて立ち上がる。

「ちょっと回ってくる」

「あう。行ってらっしゃい」

音姉が目の前にある机にぐったりしながら答えてくれる。今は気が滅入っているみたいだから静かにしておこう。

オレは紙コップを持ったまま歩いて行く。最初に目指す場所は市長の場所だ。参加していたらの話になるが。

周囲を見渡しながらオレは市長を探す。だが、市長の姿は見当たらない。でも、都の姿は見つけることが出来た。オレは都に近づく。

「都」

「周様」

都は泣いていたらしく、その眼は真っ赤に染まっていた。

「泣いていたのか？」

「はい。琴美に千春のことを話したので。二人で泣いていました」

二人とも、千春が友達であるということを捨て切れなかったのだろう。だから、二人は泣いた。千春はそれを嬉しく思っているに違いない。

オレは都の頭を撫でた。

「そっか。千春のことは出来るだけ秘密で頼む。学生『ＧＦ』には裏切り者として通っているはずだから」

「はい」

都が少し悲しそうな顔になった。多分、千春のことをみんなに言えないことが悲しいに違いない。でも、千春は都を誘拐した。その事実は変わらない。

その事実はここにいるほとんどが知っている。

「ところで、市長は参加しているか？」

「いえ。お爺様はここに参加しておられません。一応、参加の打診はあったはずですが」

「そうか」

未だに市長が何をしようとしているのかよくわからない。ただ、よからぬ予感がするのは確かだ。その理由はオレには分からない。

まあ、今回の宴会中に何かのアクションをされることはないと思うけど。

「教えてくれてありがとう。じゃ、オレはいろいろ回ってくる。琴美と仲良くな」

「はい」

その返事を背中に受けてオレは歩きだした。

次に向かうのはアル・アジフのところかな。いろいろ頑張ってくれたらしいし。それに、あの抱きつきが少し気になっているのも事実だ。

オレが心配だったと言えばそれで済むが、なんというか、それ以上の感情があったような感じしかしない。だから、アル・アジフのところに向かおうとする。周囲を見渡し、人の群れからアル・アジフの姿を探す。

「アル・アジフは、いた」

向こう側に楓達と真剣な表情で話しているアル・アジフの姿があった。オレは少しだけ眉をひそめながらアル・アジフ達に近づいていく。

この面々の話ということは、『ＥＳ』関連の話か。

「そう言うことで良いかの？」

アル・アジフ達の声が聞こえてくる。何かの相談みたいだ。

「えっと、大丈夫だと思います。アリエル・ロワソもそれなら許可が出るかと。それにしても、思い切ったことを穏健派はするのですね」

楓が楽しそうに笑みを浮かべながら敬語でアル・アジフに話しかけている。やっぱり、『ＥＳ』関連の話か。

「フュリアスもそろそろ実戦配備をした方がいいからの。第一世代

は十分に救助活動に使えるはずじゃ」

フュリアスの援軍の要請か。しかも、第一世代。悠人の乗るものが第何世代かわからないが、第一世代ということはないだろう。

世の中にフュリアスが御披露目ということか。

「復興の話か？」

オレはなんとなくこうじゃないかと思って二人に尋ねながらさらに近づいた。

楓もアル・アジフも驚いたような顔でオレを見ている。

「街中もかなり被害が出ているしな、瓦礫の撤去や魔物の死骸の処理をフュリアスでやろうっていうんだろ」

「はあ。そなたは今来たはずなのにの。そうじゃな。一応、どこまで使えるかというテストにはなるはずじゃ。第一世代は特に、今では救助活動用として改良されているからの」

ふむふむ、戦闘用は第二世代以降か。

「困った時はお互い様だと思って。アリエル・ロワソもそれならフュリアスを出すことに納得すると思う。過激なマッドサイエンティストだけど、案外優しいし」

「全く想像出来ん」

『赤のクリスマス』の首謀者として、『ＧＦ』が指名手配している

というのに。

「敵には容赦がないだけで味方には優しいから。それに、過激派が未だに世界から駆逐されていないことを考えないと」

確かに、『赤のクリスマス』を起こした首謀者がいる派閥が未だに世界から駆逐されずに大きな顔があるということは何かあると考えられる。そういうことなら納得するな。

まあ、許せるか許せないかといったら許せないになるけど。

「まあ、過激派とはよく喧嘩するからの。その仲裁をアリエル・ロワソはよくするぞ」

なんというか、人物像がよくわからないことになってきた。それでもいいけど。

「フュリアスを運び入れるのは時雨に通したか？」

「通そうとしたのじゃが、『その話は周にしろ』と言われて取り合ってもらえなかった。ちょうど、そなたが来て助かったぞ」

「そういうことか。まあ、今の狭間市『ＧＦ』代表はオレだしな。時雨にメールで通達しておく。それにしても、第一世代か。救助用ってことは戦闘は難しいもなのか？」

一応それだけは聞いておかないと。

もし、戦闘を普通にこなせるものなら監視を付けておかないといけない。もしもの時を考えて。

「戦闘は難しいの。過激派の方はどうじゃ？」

「同じ。第一世代は戦闘用じゃなくて、試しに作ってみた感じが大きいから。穏健派のフュリアスよりかは速度はないと思うけど、パワーは負けていないと思うよ」

「ふむ、では、パイロットを悠人にして」

「それは無しでお願いします」

悠人の実力は凄まじいらしいな。確かに、俺でも絶対に苦戦するドラゴンを倒していたことから見ると、第一世代に乗っていても十分な実力は発揮しそうだな。

オレは小さくため息をついた。

「試しでも人殺しは十分に可能なレベルだろ。戦闘ランク換算では？」

「ＣＣランク」

アル・アジフが言った言葉をオレは一瞬理解できなかった。ＣＣランクというのは『ＧＦ』に入ることのできないランクだ。大体、一般人がＣＣＣランクだと考えてもらったらいい。

Ｃランクは戦闘が出来ない人。ＣＣランクは運動神経が悪い人。ＣＣＣランクは普通。学生『ＧＦ』に入る条件がＣＣＣランク以上。ただし、一年以内にＢランクに上がらなければ事務に回されるか止めさせられるかのどちらかだ。

ちなみに、一般人の入隊はBランク以上となっている。
第一世代のフュリアスはどうやら普通の隊員なら倒せるレベルらしい。

「ちなみに、悠人が乗っていた場合は？」

「Aランク」

変わりすぎだろ。

「この場合、悠人がおかしいだけだから。パワードスーツに乗っている悠人と一緒の任務に言ったことがあるけど、周君くらいの立ち回りをするから」

遠近両用ね。ある意味むちゃくちゃな能力の様だ。つか、ある意味チート。

オレは小さくため息をついた。

「音姉タイプか」

元からの天才。努力の天才ではなく、その元から持っている才能がとてつもなく高い天才の中の天才。それが悠人なのだろう。

はっきり言って嫉妬してしまう。

他人の手によって力を手に入れたオレからすれば。

「そうじゃな。音姫は自他共に認める天才じゃ。あの年でこの世界の頂点に手をかけておる。過去に何があったかわからぬが、そなたが支えればよいのじゃが」

「あのな、さすがのオレでも無理だ。由姫と亜紗に支え合っている状況だしな。誰か、音姉にもそんな人が出来ればいいけど」

「ここにいたら余計なお世話といわれそうじゃな」

確かにその可能性はある。音姉は何より他人の幸福を考えているから。

「音姫はそなたが大切じゃ。大切だからこそ、心配しておる」

「わかってる。それくらい、オレや由姫がな。そういやさ、アル・アジフはどうしてオレに抱きついてきたんだ？」

オレがここに帰って来た時のことを尋ねた瞬間、アル・アジフの顔が真っ赤に染まった。真っ赤に染まって、そして、オレに背中を向ける。

オレが不思議そうに首を傾げると楓が呆れたように溜息をついた。

「周君、それは聞いちゃ駄目だよ」

「そうなのか？」

「そういうものなの。アル・アジフさんは私が見ておくから周君は回ってきたらどう？　他にも回るよね」

「そりゃな。ギルガメシュのところに向かわないといけないし」

まだギルガメシュとはちゃんと会って話をしていないから話をしないといけない。応援に来てくれたことの感謝を特に。

オレは少しだけ考えて頷いた。

「じゃ、行ってくる。楓はいつ出るんだ？」

すると、楓は驚いたように少しだけ下がった。

「どうしてそれを？」

「もしかして、何も言わないまま出るつもりだったのか？」

その言葉に楓は頷いた。オレはそれに小さく溜息をつく。

「あのな、オレとお前は立場が違うけど、大事な幼なじみだ。挨拶くらいはさせろ」

「うん。わかった。明日の朝６時に出発する予定だから」

「そうか。中村と一緒に見送りに行くよ。じゃ、また」

オレは歩き出した。明日の６時を考えて予定を組み立てる。十分に大丈夫だ。

別れは辛いけど、もう会えなくなるというわけじゃない。だから、大丈夫だ。

「さてと、ギルガメシュはっと」

周囲を見渡しても人ごみでギルガメシュの姿はなかなか見当たらない。もしかしたら、座っているのかもしれない。

オレは小さく溜息をついて適当に歩き出した。

老若男女が騒いでいる。魔物と一緒に。まだ、子供は少し怖いみたいだが、大人は普通に会話しているところを見ると、味方になってくれたことが大きいみたいだ。

日常でこういう風景があったらいいのにな。

「周」

その言葉にオレは振り返った。そこにいるのは和樹と俊輔の姿。

「ご苦労様」

「ご苦労様だな」

オレは小さく息を吐いて頷いた。

「本当にそうだよ。大体、どこぞの第一線級任務かと思ったぜ」

ちなみに、今回のものはランクで表すなら普通にSランクになるだろう。『ES』と協力したとはいえ、Sランクの任務を被害なしで終わらすのは難しい。おかげで十分に設立が本決まりになりそうだ。

オレの息に和樹が苦笑する。

「まあ、守ってくれたからありがとうと言っておくよ。それにしても、よく体力が持つよな」

「オレでも不思議なくらい」

完全にオーバーペースで動いていたのに最後まで息が切れることはなかった。未だに体中に違和感がない。多分、明日は悲惨だろうな。

「ふむ、誰でも頑張ればそこまでいくと言うのか。和樹もやったらどうだ？」

「嫌だよ。俺はのうのうと生きたいんだ。普通に暮らしてな」

「それが一番だよ。普通に暮らし、普通に生きる。それを守るのがオレ達の役目だ」

オレ達が、普通の道から外れることを選んだオレ達がみんなを守る。みんなの普通の暮らしを守るために。『ＥＳ』も同じだ。みんなに安心して暮らしてもらうために動いている。

どれだけ苦しいことがあってもそれは決定したことだ。

「お前は普通の暮らしをしないのかよ」

「オレか？　まあ、したいとは思っているけどな」

したいとは思っているけど、オレはその権利がないと思う。今のオレがいるのはあいつのおかげなのだから。

「今の自分は力を付けなければならない。今よりももっと。大事な人を全て守りきれるように。『全て(オールラウンダー)を守る存在』になるために」

「周って『最強の器用貧乏(オールラウンダー)』じゃないのか？」

「まあ、文字はあっているけど」

そういう意味のオールラウンダーじゃない。まあ、説明しても理解されにくいとは思っている。でも、それがオレの進む道だ。諦めるつもりはさらさらない。

「ふむ、周も大変ということか。どこかに向かっているようだったが」

「ああ。ギルガメシュ、魔王のところにね。一応、挨拶しておかないと」

オレの言葉に俊輔が苦笑する。

「一応か。面白いように言う。なら、呼び止めと悪かった。俺達はあっちの方で学校単位で集まっている。暇があるなら来ると言い」

「お前はどうして偉そうなんだよ。まあ、周は暇ならでいいからな。俺達は来て欲しいけど」

「わかった。時間があれば行くさ」

オレは二人に手を振って歩き出した。

魔王達がどこにいるかがわかればいいんだけど。そう思いながらオレは周囲を見渡す。魔王は大きいからわかりやすいはずだが、身長が低いのが問題か。

オレは小さくため息をついた。

「どこにいんだよ、ギルガメシュの奴」

「魔王様をお捜しッスか？」

その言葉にオレは振り返った。そこにいるのはほんのり頬を赤く染めた刹那の姿がある。

酒を飲んでいたのか。絡み酒なら厄介だけど。

「ギルガメシュの奴が来ていること知っていたからお前が来ているのは納得するけど、酒を飲んでいるのか？」

「そうッス。あまりおいしくないものッスね」

ちなみに刹那はまだ１８歳だ。本来ならお酒を飲んでいいわけがないが、魔物は外見と年齢が一致しないことが多い。だから、それで押し切ったのだろう。

オレは小さくため息をついて周囲を見渡した。

「ギルガメシュの奴はどこにいる？」

オレの言葉に刹那は今までオレが進んでいた方角を指さした。

「あっちッス。ただ、気を付けた方がいいッスよ。魔王様はかなりの絡み酒ッスから」

「知ってる」

それはかなり有名だ。魔王がいる前では酒を飲ますなといわれているくらい。でも、今回は絶対に呑んでいるだろうな。誰が喰いとめてくれているか。慧海ならいいけど。

オレはまた小さくため息をつく。暴走していないことを祈って。

「じゃ、行ってくる。飲むならほどほどにな。倒れられても責任はとらんぞ」

「わかっているッス。後、一つだけ」

刹那が気持ちのいいくらい満面の笑みを浮かべる。

「勝利、おめでとうッス」

「ありがとう」

オレは刹那に背中を向けた。背中を向けて、

「勝利、なのかな。でも、本当の意味での勝利じゃない」

この戦いの真意が未だによくわかっていない。複数の組織が同時に動いていたから全体像が把握しにくいのだ。だから、勝利だとしても、何か抜けているような気がする。

まあ、狭間の鬼はしっかり封印したから大丈夫だと思うけど。

「気になるのかい？」

その言葉にオレは足を止めた。聞いたことのない女性の声に気配を探ってもその場所を見つけることが出来ない。完全に隠れているのか、それとも、

「気になると言えば？」

オレは目を閉じ口元に笑みを浮かべながら返した。

「気になっていると僕は理解するよ。そうだろうね。君、いや、君達は同じだ。同じようにこれからの日常を不安に思っている。日常が変わるのではなく、何かが起きると思って」

「どうしてそれがわかる？」

君達がオレと誰を指しているかわからないが、声の主はそれを理解している。他人の思考なのに。

すると、声の主は笑った。

「君は、君達は僕と同じだからね。だから、言わさせてもらうよ。君達は運命から逃れることは出来ない。それは決定した事実だからね」

運命ね。まるで、正みたいだ。未来を知っているかのような言葉。話し方は正に似ているが、正とは違うことはわかる。どうしてかはわからないけど。

「一つ言わさせてもらう」

オレは歩き出した。

「生きている人間を舐めるな」

そのまま人ごみの中に入る。さすがにここまで入れば言葉は聞こえて来ないだろう。

でも、今気づいたけど、周囲が騒がしい。煽るような言葉が多いから喧嘩でもやっているのか？

「その力、さすがだな」

人ごみを抜けた瞬間、上半身裸のギルガメシュが身構えていた。相手はイグニス。悠聖の精霊だ。

オレは思わずレヴァンティンをポケットから取り出した。

『我と同等か。だが、我の筋肉の方が上だ！』

「何を言う。貴様の筋肉は元からあるもの。我の筋肉は鍛えて手に入れたもの。どちらが強いか明白に決まっているであろう！　見よ、この肉体美を！」

『ほざけ！　我の方があるに決まっている。くらうがいい！』

「そうはいくか！」

ギルガメシュとイグニスが殴り合いを開始する。
それを見ていたオレは小さく溜息をついた。
「アホらし。とりあえず、イグニスがいるってことは、悠聖は」
人ごみの中に入ってすぐに抜ける。周囲を見渡すと、すぐに悠聖の姿を見つけることが出来た。
困惑した表情で七葉と冬華と一緒に人ごみを見ている。
「悠聖」
「周隊長。どうにかしてくれ」
「無理」
ギルガメシュはまともに戦えば勝てないし。
「別にいいんじゃないの？　好きなようにやらせれば。今まで精霊を出してなかったって言ってたし」
冬華が悠聖に諭すように言うが、表情から読み取れば諦めろということだろう。その気持ちはよくわかるけど。
悠聖は小さく溜息をついて振り返る。そこにいるのはくつろいでいる精霊達の姿。ちなみにフェンリルは人気者だ。悠人とリリーナがもふもふしている。
「まあ、いいんじゃないか？　別に迷惑をかけているってほどじゃ

ないだろ。それに、悠聖の精霊はほとんどが上級以上だ。大丈夫だろ」

『じゃ、私は大丈夫じゃないの？』

いつの間にかアルネウラが悠聖の背後に立っていた。そして、そのまま悠聖の腕を抱きかかえる。

それを見た冬華がムッとするのはお約束。

「お前の場合は悠聖が悲しむことはしないだろ」

『うん。だって、悠聖が大好きだから』

「それ言われると反応に困るんだよな。アルネウラはもう少し離れても」

『いや』

即答だった。

オレは小さく苦笑する。

「ほどほどにな。というか何が原因なんだ？」

『魔王さんがイグニスに喧嘩を売っただけ。それをイグニスが買ったから。私達のイメージが悪くなるよう』

『諦念』

『ライガ、そこでそれは止めた方がいいと思う。ただでさえ、巷のイメージが下がっているのに』

精霊のイメージが下がっている？　一体どういうことだ？

その言葉に冬華も疑わしそうに眉をひそめた。

「どういうこと？」

『あっ、うん。一応、とある筋からの話なんだけど、最近、精霊の還元率が高いらしくて。召喚された精霊はシンクロ率を最大限まで使用しているらしいし』

還元率が高いということは精霊が死ぬということだ。精霊は人とは構成している元素が違い、死んだ時は魔力粒子に還元されるとされる。実際の状況は見たことがないからどうこう言うわけじゃないけれど、そう言う話が多いのは事実だ。

ただ、シンクロ率を最大限という言葉に引っかかる。シンクロ率を最大限までできるのはこの世界でたった一人しか見つかっていない。それは、召喚師の腕が悪いというわけではなく、精霊が普通は拒否をするからだ。

シンクロ率が最大なら術者が死ねば精霊も死ぬ。誰だって死ぬことは怖い。でも、それを恐れず、術者とシンクロ率を最大にする精霊がこの世にはいる。

「シンクロ率が最大？　噂の最強の精霊召喚師じゃあるまいしそんなことは不可能のはずよ。私とフェンリルでも８０％が最大なのに」

「８０％でも充分じゃないか？　周隊長、この話を上に通しておけないか？　さすがに見逃せない」

「そうだな。シンクロ率最大ということは、あの圧倒的な力が使えるということか。さすがにそれは危険だしな。慧海がいれば」

「呼んだか？」

その言葉にオレは飛び上がってしまった。気配もなく、いつの間にかオレの背後に慧海が立っていたからでもある。

オレは抜きかけたレヴァンティンをポケットに戻した。

「ちょうどよかった。今、アルネウラから聞いたけど、シンクロ率が最大をする術者がいるらしい。それによって精霊が死んでいることも。その話を時雨達にも通しておいてくれないか？」

「シンクロ率が最大？　ああ、あれか。さすがに精霊界では噂は広まっているか。そうだな。明日、時間が取れるか？　この話は『ＧＦ』だけじゃなく、『ＥＳ』と魔界にも伝えていた方がいい。その時にその話をする」

どうやら慧海は最初から知っていたらしい。多分、それとなく伝えに来たのだろう。

オレは頷いた。その時に参加させるのはオレと孝治、悠聖の三人だな。悠聖はいろいろと意見を聞きたい時があるし。悠聖より悠聖の精霊達というべきか。

「了解だ。孝治と悠聖と行く。重要度は？」

「S。過激派の子も参加して欲しい。これは中東の平和にもかかってくる」

その言葉に冬華が頷く。

重要度Sは緘口令を敷くレベルの一歩手前。簡単に言うなら出来るだけ極秘扱いだ。それほどの重要度が高い。

悠聖が小さくため息をついた。

「周隊長。オレらって呪われてね」

「なはは。悠兄は我慢が足りないよ。私は参加しないけど、冬華さんは悠兄をお願いしますね。悠兄はこれでもサボり癖がついているから」

「くすっ。わかったわ。悠聖の手綱は私が握っておく。でも、明日朝六時に出発する予定だったから連絡を送っておかないと。泊まるところもどうしよう」

冬華が不安そうな顔になる。そして、悠聖がオレの顔を見てきた。

オレは小さなため息で返す。

「そこら辺は『GF』の宿舎を使えばいいさ。隊長のオレが許可を出す。冬華も悠聖といろいろ話したいだろ」

オレがそう言うと冬華の顔に笑顔が咲いた。

悠聖と一緒にいられることが嬉しいのだろう。悠聖と七葉も喜んで

いるしよしとしよう。

ただ、気になることはある。

慧海の話を聞く限り、明日の話は重要度Ｓで済まないような気しかしない。

オレはレヴァンティンを七回指で叩いた。

『どうかしましたか？』

レヴァンティンの声が頭の中に入ってくる。耳からではなく、直接頭から聞こえてくる。

精神感応を使った通信だ。疲れることには疲れるのだが、ドライブを使用していたので気は高まっている分疲れていても使用出来る。

オレはレヴァンティンに言葉を返した。

一応、通信を当たってこのことを調べてもらえるか？　出来る限りの情報を頼む。噂から何だっていい。

『わかりました。手当たり次第やってみます。でも、どこかで聞き覚えのある内容なのですが、マスターは知りませんか？』

知っていたら言わないから。

『ですよね。わかりました。明日の朝まで機能を落とすので気をつけてください』

レヴァンティンの会話を終了させる。思考速度で会話をするので時間がほぼ経たないのが利点だ。

まあ、疲れるけど。

「後は、ギルガメシュの奴と話をするだけか。どうやったら止められると思う？」

オレは人ごみを指差した。

声援が大きくなっているが気にしない。いや、気にしてはいけない。

『うーんと、悠聖、シンクロする？』

「この場にいる全員を殺す気か？　シンクロしなくても」

悠聖が向こうを指差す。正確にはリリーナを。

「魔王の娘に頼めば大丈夫だろ。つか、もふもふしているな」

フェンリルは大人気だった。ひたすらみんな（子供達）から抱きつかれてもふもふしている。その中にはリリーナや悠人もいる。

確かに気持ちよさそうだけど。委員長が物欲しそうに見ているのは見なかったことにしておこう。

「あの体を抱き枕にしたら最高よ」

フェンリルは氷の精霊で最上級のはずだよな。それなのに抱き枕というのは全く想像出来ない。

気持ちよさそうだけど。

「冬華さん」

七葉が満面の笑みになる。

「悠兄の方が最高だと思うよ」

その言葉に冬華の顔が真っ赤に染まった。真っ赤に染まって、そして、悠聖を見る。今度はさらに赤くなって顔を逸らした。

七葉の背中から黒い翼が見えるような気がする。

「な、七葉。何を言ってるんだよ」

悠聖は面白いくらいに動揺していた。こういう姿を見るのは楽しい。当事者には絶対になりたくないけれど。

「た、確かにオレは、冬華を抱き枕にしたらって、オレは何を」

七葉の手のひらの上ですごく踊っているよな。本当に面白いくらいに。

『ぶーぶー。私じゃ駄目なのかな?』

「えっと、その、あっと、あう」

アルネウラの言葉に悠聖が顔を真っ赤にして俯いた。オレは小さく苦笑する。

「それくらいにしておけよ。悠聖は明日にうんと働いてもらうからな」

「ったく、周隊長は人使いが荒いな。調べておくのは明日話されるであろう内容だよな」

オレは頷いた。

オレ達の今いる世界での情報は慧海が集めているはずだ。だが、精霊界からの情報を集めるなら、上級以上の精霊がいる悠聖が一番適任だ。

オレがすることはないから楽だけど。

「頼めるな」

「そういう時は命令くらいしろ。お前は第７６移動隊隊長なんだからさ」

「そうだな」

オレはもう一度苦笑で返した。

今まで命令される立場にあったからか命令することにはあまり慣れていない。慣れていたとしたらそれはそれですごいけど。

オレは悠聖を見る。

「頼んだ」

「任された。アルネウラ、頼めるか？」

『うん。ディアさんやルカっちに手伝ってもらっていいよね？』

アルネウラは本当に中級精霊なのか？　闇の精霊最上級のディアボルガや光の精霊最上級のセイバー・ルカをそんな呼び方をする精霊を初めて見たぞ。

「いいぞ。調べるのは二人が一番適任だからな」

『わかった。また後で』

アルネウラの姿が消える。それを確認した冬華がぴったりと悠聖にくっついた。腕を抱えて肩に頭を乗せている。

これはこれですごい光景だよな。

「周」

すると、唐突に名前を呼ばれた。

オレが振り返ると、そこにいたのは悠人とリリーナの姿。ただ、リリーナは悠人の肩を抱いている。

悠人は、震えていた。

さっきまでなんとも無かったはずなのに。

「どうかしたのか？」

「うん、悠人が急に震えだして。理由を聞いても向こうに怖い何かがあるとだけ言って」

リリーナがそう言いながら向こうを指差した。オレ達が戦った儀式場とは正反対の場所にある山。

オレは目を凝らしてみるが何も見つからない。

「怖い何かって、はっきり見えたのか？」

「違うよ」

悠人が小さな声で漏らした。

「違和感がある。風景に違和感が」

「違和感？」

目を凝らしても何もわからない。そこにあるのはただの山の風景だ。違和感なんて見つからない。

一体どういうことだ？

「悠聖、わかるか？」

「わかると思うか？　オレはお前より視力が悪いんだぜ。無理に決まっているだろ」

「ですよね」

オレは小さく溜息をついた。違和感が何かわからないけれど、オレ達の視力じゃ何もわからない。わからないが、このままにしてはおけない。

「望遠魔術を使うしかないか」

あれは目を著しく疲れさせる。やりすぎたら失明する可能性だってあるから使いたくはないのだが。

「違和感って木々の間の草木の色がドットくらいの大きさで微かにズレていることか？」

オレはその言葉に耳を疑った。何故なら、その言葉を言ったのが浩平だったからだ。浩平はリースと手を繋ぎながら近づいてくる。

悠人はゆっくり頷いた。

「少しだけ違和感があるから」

「確かに違和感はあるわな。周、どうした？　俺の顔を見て。ついに俺がイケメンに見えてきたか？」

「お前、視力いくらだ？」

「さあ？」

狙撃手（スナイパー）はスコープから覗くだけでなく、目視で確認しなければならないと聞いたことがある。だから、視力がかなり高い人物でなければならない。

オレは４．０近く視力はあるが、全くわからない。その程度じゃわからない違和感というわけか。

「これには関わらない方がいいな」

「周隊長にしては珍しいな。隊長自身が行きそうなのに」

普通ならそうしたい。でも、今の状況で行くわけにはいかない。今のオレ達は祝勝の宴会を行っているのだから。それなのに出撃するということは無駄に不安を煽るだけ。それに、今のオレが行ったら足手まといにしかならない。

今のオレを戦闘ランクにするならＢがせいぜいだろう。

「浩平の話を信じるなら、というか、信じたくないけど光学迷彩というべきものになるのか？　よくわからないけど」

「それってどこから知ったのよ。一応、アリエル・ロワソ様がそんなことを言っていたような気がするわ。それを使うことは禁止だって」

「確か、風景と同化してその姿をカモフラージュするだっけかな。そんなものを相手にしたら敵の戦力が計れない。だったら、手を出さない方がいい。ここの戦力は十分を通り越して戦力過多だしな」

最強の魔術師であるアル・アジフに『ＧＦ』最強の一角でもある『無敵』の名を持つ善知鳥慧海。さらには魔界のトップである魔王。そして、地域を守るにしては戦力過多である正規部隊（仮）の第７６移動隊。

真正面からぶつかればどれほどの被害が出るかわかったものじゃない。下手をすれば全滅することだってある。いや、こちらが下手をすれば相手を全滅させられないことがあるというべきか。

そんなものを相手に敵が向かってくることはない。

「相手の目的は偵察。それ以外は考えられない。それ以上のことがあるなら、おびき寄せるための囮か」

そうとしか考えられない。これは推測ではなく断言できる。

「一理あるわね。『ＥＳ』と『ＧＦ』に魔界を敵に回して生き延びれる組織なんて天界ぐらいしか思いつかないもの。その天界は今は融和政策を取っているらしいから来ることはない」

「天界のことは初耳だけど。まあ、周隊長が言うからには絶対だろ。今は、この宴会を楽しむ。それが一番」

「悠聖は気楽だよな。まあ、それがお前の強みか。あっ、リリーナ、魔王と話をさせてもらえるか？」

オレの言葉にリリーナは頷いた。そして、悠人の手をしっかり握って人ごみの方に体を向ける。そして、一言、小さな声で呟いた。

「パパ」

「呼んだかな？　我が娘よ」

一瞬で目の前にギルガメシュの姿があった。これには誰もがドン引

きしている。

今のリリーナが囁いた声はオレ達にギリギリ聞こえるような大きさだ。それなのにギルガメシュが聞こえたということは地獄耳であるということとしかない。

「周が話があるって」

「悪いな。お楽しみを邪魔して」

「貴様は我に喧嘩を売っているのか？」

そう言うつもりはなかったんだが。

「ともかく、援軍感謝した。狭間市『ＧＦ』代表として礼を述べる」

オレがそう言うとギルガメシュは気味の悪いものを見たかのように後ろに下がった。

そういう反応は何気に傷つく。

「き、貴様が素直に礼を述べるだと。何か悪いものでも食ったのか？」

「なんでそうなる！　ただ単に感謝の言葉を言っているだけだ！　実際に助かったことには変わりはないからな。ったく、人が素直に礼を述べてやったら」

「すまん。いつものお前を知っているからあまりのことに」

ドン引きしたと。

殴ってやろうかこいつ。

「魔王と話すあいつもの周はどんな感じよ」

「あははっ。それはパパの名誉のために聞かないであげて」

「悪魔だな」

「そこ黙れ」

オレは笑いながら言った悠聖を指さしながら言った。オレは小さくため息をつく。

「勘違いされるのも無理はないか。悠聖」

オレは小さく息を吐いてその場に膝をついた。

「後は頼んだ」

そして、そのまま前のめりに倒れる。

ブラストドライブ以上の弊害だ。その後に一定時間経ったら確実に倒れる。主に疲労によって。

オレは後のことを悠聖に任して意識を闇の中に投じた。

「お、おい。周隊長？」

悠聖は倒れた周を素早い動作で抱きかかえた。冬華が周の手首に指を当てる。

「脈は正常ね。呼吸もちゃんとしているということは寝ているのかしら」

「全く、人騒がせな」

悠聖が小さくため息をつきながらその場に周を寝かせる。ため息というより安心したというべきだろうか。

「ふむ、ブラストドライブの弊害か」

「ブラストドライブ？」

ギルガメシュの言葉にリースが不思議そうに首を傾げさせた。それに対してギルガメシュは少しだけ考えるそぶりをして小さく頷く。をれをリリーナが不安そうに見ていた。

それを見たギルガメシュがリリーナの頭をなでる。

「大丈夫だろう。こいつらに話しても。我らと周が出会った時のことだ。その頃はまだ、我が魔王ではなく、魔界全体が内紛状態にあった。その中で、人界からの使節団が行方不明となり、その救出のために周を含む第一特務のメンバーが魔界の中に入ってきた」

今の人界と魔界との間に友好があるのはその時からだと言っていい。使節団はあくまで友好のためのものであったが、その頃は政権が安定しておらず、ある意味橋渡しとしてしか機能されていなかった。どうすれば戦乱を止めることが出来るかという橋渡しにしか。

そもそも、内乱の発端は人界との戦力差にあったと言われている。

「その中で戦いで傷を負った我と我の妻、そして、リリーナを助けてくれたのが周だ」

「ちょっと待ってくれ。周隊長が助けに入ったのはわかるけど、魔界は人界よりも魔力粒子が遥かに濃いはずだろ。それなのに魔界の住人を退けることなんて」

悠聖の言うように人界の住人が魔界に行っても魔力粒子の濃さからまともな戦闘が期待できない。だから、第一特務が選ばれたのだ。

「それが出来たのはブラストドライブがあるからだ」

「それが周の能力ね。んな技聞いたことがないぞ。ドライブモードかオーバードライブモードしか」

「それはそうだろう。ブラストドライブが使えるのは世界広しと言えど周か亜紗のみ。そのため、その能力はよほどの事態にならない限り発揮されない」

「鬼との戦いのようにかしら？」

ギルガメシュは静かに頷く。

「ブラストドライブは魔力粒子の量に関係なく通常の魔力運用が可能な状態だ。いや、これは違うな。魔力粒子の量に関係なくドライブモードとオーバードライブモードの間ぐらいの戦闘能力を発揮する状態。その副作用が使用後の強制的な催眠。それが、ブラストドライブの弊害だ」

それが今の周の状態。あまりの力の発揮に体がついてこなくなったという表現が正しいか。

それを聞いた悠聖が小さくため息をつく。

「ったく。周のバカ野郎。ちょっと周隊長を宿舎まで運ぶ。浩平達は宴会を楽しめよ」

「わかった。周をよろしくな」

その言葉に悠聖は頷いて周を担ぎあげた。そして、小さな声を出す。

「それくらい話しておけ。仲間だろうが」

第百十四話　狭間市の長い一日　宴会（後書き）

狭間市の長い一日はこれにて終了です。
次からは後編の話に本格的に入っていきます。この話の後半に出てきた不穏な存在。それらがどう関わってくるのか。そして、未だに書ききれていない狭間の鬼の存在理由。
まとめていけるか不安ですが期待していてください。

第百十五話　新世界（前書き）

今までの分の加筆修正が全く進んでいませんが、物語を進めて行こうと思います。
この話は今までと話が大きく違うことを言いたいものです。

第百十五話　新世界

久しぶりに腕をそでに通す。この服を着るのは久しぶりだ。オレがまだ前の正規部隊にいた時以来か。

第７６移動隊ではこんな服を着る必要がないからな。『ＧＦ』の制服なんて。でも、そうは言っていられない。

オレ達が参加する会議は非公式とはいえ『ＧＦ』に『ＥＳ』。さらには魔界のトップまで参加する会議だからだ。そんな会議に普通の服で行けるわけがない。だから、オレは服をしっかり着る。

体の調子は最悪だ。全身が筋肉痛であり、右腕の筋肉の一部が抜く離れを起こしかけていた。もちろん、強制的に繋げたから大丈夫だ。

「ブラストドライブの影響だよな。オーバードライブの方がよかったかな。でも、あれは秘密兵器にしておきたいからな」

「お兄ちゃん、起きてる？」

オレがしっかり『ＧＦ』の制服を着終えると同時にドアが開き、そこから由姫が顔をのぞかせた。入院することになったのだが、朝一番で帰ってきた。まあ、しばらくすれば検査をするために病院に向かうらしいが。

その後ろには心配したのか目を真っ赤にしている亜紗の姿がある。

「大丈夫だ。亜紗は平気なのか？　お前もブラストドライブになっただろ」

『私は大丈夫。周さんと違って時間を計算して使用していたから。でも、周さんは無理をしていると思う。だから』

亜紗は知っている。オレと同じだから。だから、ブラストドライブの本当の危険性を。

オレは小さく頷いた。

「心配してくれてありがとうな。でも、オレはやらないといけない。今回はそれほど大事な会議だ。悠聖が一番頑張ってくれるけどな。二人はここの留守番を頼む」

「うん。だけど」

「無理はしない」

自分の体のことは自分が一番わかっている。それに、今のオレにはレヴァンティンがいる。こいつは些細なことでも気がつくからな。

オレは二人の頭を撫でて歩き出した。身に纏う銀白の衣装をしおっかりただし、オレを待っている四人の元に向かう。

「精霊界で起き始めた異変。もしかして、繋がっているのか？」

唐突に湧いた考えを小さな声で口にしながらオレは外に出るドアに手をかけた。

『今回の調べたことは精霊界代表として我、ディアボルガが話させてもらおう』

ディアボルガが手に資料を持ちながら話しだす。ただ、その光景はどこかシュールだった。

この会議に出席しているのは『ＧＦ』からオレ、孝治、悠聖、慧海。『ＥＳ』穏健派からアル・アジフ。過激派から楓と冬華。魔界からギルガメシュと刹那が参加している。

『今回の事件は精霊召喚符と呼ばれる我らの知らぬ力によって呼び出された複数の精霊が同時にシンクロして起こったものだ。小さなものも数えて約２００件ほど。死者は『ＧＦ』や『ＥＳ』側も合わせて４８名。精霊側は２３名だ』

精霊召喚符というものはレヴァンティンからいくつか聞いている。

精霊の召喚には自己流の魔術陣を必要とする。そして、現れるのは自分の技量にあった精霊のみだ。世界に精霊召喚師はたくさんいるけれど、その法則を捻じ曲げた者は今までいなかった。精霊召喚符が出るまでは。

精霊召喚符は自分の技量以上を精霊と召喚できる。それは今までの法則を捻じ曲げるもの。そんなものが存在していいかと尋ねられれば存在していいわけがない。そもそも、精霊との契約は神聖な儀式だ。そのようなものに頼るのはよくない。

『召喚時には強制的に呼び出されて強制的に契約させられる。これ

は契約候補だけでなく、精霊界の一般人も同様だ。我らも対策を練ろうとしたが、術式が難解すぎてわからなかった』

それには純粋な驚きを隠せない。精霊の魔術解析は常人離れしており、精霊召喚師相手には迂闊な魔術師用は解析されて対抗策を考えられやすいと言われている。その精霊が解析できなかった者。

術式が難解というのも気になる。どういうレベルで難解なのかだ。パターンさえわかればどうにかなるような気もするが。

『精霊後の召喚はシンクロではなくユニゾンを行うらしい。シンクロよりも融合率は高いみたいだな。だが、そのせいで精霊と術者が暴走する事件が発生している。我らが調べた結果はこれだけだ』

ディアボルガが姿を消す。用が済んだと言わんばかりだが、ディアボルガの体の大きさが座れる場所がないのも事実だ。実際に、ギルガメシュは椅子に座らず空気椅子をしている。

こっちの場合はただのバカなだけか。

シンクロとユニゾン。精霊を体内に取り込むという点では同じだが、ユニゾンは強制的に取り込んでいるようにしか聞こえない。シンクロは精霊側に主導権があるため、シンクロするかどうかは精霊側が決める。もちろん、術者の求めに応じてだが。それは信頼のおける術者しかしないものだ。

シンクロというのは自らを術者にさらけ出すことと同意であるから。

ｂｙ悠聖

ディアボルガの言葉を聞いていた慧海が頷いて立ち上がる。

「ディアボルガの報告にあったように、精霊召喚符となるものによる事件が多発している。出自は不明だ。悠聖、お前の意見を聞きたい」

「了解」

悠聖は立ち上がった。手にあるのはアルネウラに調べてもらった資料だな。

「今回の事件は私の見解から述べまして何らかの計画のもと成り立っているものだと考えます。理由は、事件の発生場所が固まっていること。事件が起きているのは現在、日本では関東、関西、九州の三ヶ所を中心とした場所。中国は上海、北京周辺。インドはハイゼンベルグ周辺。オーストラリアではシドニー周辺。イラクやイランでも確認されております。これらはアジアでしか発生していない。つまり、それらに関係があると私は考えています」

悠聖にしては珍しい会議中の話し方だ。この中では悠聖が一番下っ端であることには変わりないからな。まあ、妥当な判断だろう。

「そこから調べた結果、アルネウラに手伝ってもらい魔力孔を調べてみました。その結果がこれです」

基本的に人が集まるところには魔力が集まりやすい。正確に言えば、魔力が照射される魔力孔がある場所には人が集まりやすいというべきか。それに目を付けるのは正しい。

悠聖が投射装置に記憶媒体とデバイスを繋げる。そして、スクリーンに画像が映し出された。

精霊のみが見ることが出来ると言われる魔力孔。その映像が映っている。

見るからいただの穴のように見えるが、実際は異なっている。その全てが魔術によって形成された存在。目を凝らしてみると、穴の外壁が脈動しているのがわかる。魔力粒子の動きに作用して魔術が生まれ変わって言ってるのだ。生きているという表現もあながち間違いではない。

ただ、これはオレの知る魔力孔とは違うものだ。

オレの知る魔力孔は綺麗な孔というべきか、平らな場所にぽっかり円形の穴が開いているのだが、これはいびつな形になっている。

「このように形が変わっています。アルネウラが詳しく調べようとしましたが、精霊界とのパスが繋がっていないらしく、近づくことができませんでした」

精霊界とのパスが繋がっていない？

初めて聞く言葉だ。オレがただ知らないだけかもしれないが。

「初めて聞く言葉じゃな。周はどうじゃ？」

「オレもだ。悠聖、説明を」

「ああ」

悠聖がデバイスを操作する。どうやらそれを想定して資料を作り出

しているらしい。

「精霊界のパスとは精霊がその世界に通る道のこと。精霊界と世界を結ぶバイパスという表現が一番正しいです。これは、魔力孔を伝ったもので、パスが一度でも通れば精霊はその世界に行くことが出来ます」

つまり、形を変えた魔力孔はオレ達が認識する世界とは別の世界、精霊すらも把握していない世界につながっている可能性があるのか。それはそれで厄介だな。

「このパスが通っていないということは、今まで精霊が立ち入ったことのない世界に繋がる可能性があります。今はまだ魔力孔として機能していますが、このまま事件が大きくなればいつかはそうなるかと」

「わかった。座ってくれ」

一応、まとめ役を買って出た慧海の言葉に悠聖が座る。慧海は小さくため息をついていた。思っていたものよりも事態が深刻だとわかったのだろう。

厄介なことこの上ないけれど。

「『ＧＦ』が把握している内容は悠聖達が報告してくれた内容と比べても格段に劣っている。だが、最後の別世界とつながっている可能性について面白い情報と『ＥＳ』に尋ねたいことがある」

慧海はオレをちらっと見てきた。何かあるのか？

「まず一つ目。面白い情報のことだ。今朝、狭間市郊外の森の中で何か巨大な物体が動いた形跡があった。大きさは１０ｍは越えるだろう。足跡から判断して、魔物ではない。天魔でもない。痕跡としては枝がたくさん折れたり、いくつかの木々が倒れたくらい。状況から判断して昨日の戦闘途中の可能性が高い」

１０ｍを超える存在がこの狭間市にいるとするなら、それは魔物か天魔の二つに一つ。だが、それは違っている。つまり、何か別の大きさの存在。１０ｍ以上の大きさのもの。

オレが思いだしたのはドラゴンと戦う大きな黒い人型のもの。

「フュリアス」

「じゃな」

オレの言葉にアル・アジフが頷く。

「『ＥＳ』が昨日使っていた人型のもの。今の会話を聞く限りフュリアスか？　それは何なんだ？　時雨からはそれらしい話を聞いたことはないが」

「そうじゃな。人型の兵器。中に人が乗り込むことによって動かすことのできるものじゃ。『ＥＳ』が開発しているものじゃ。今のところ、一番進んでいるのが我ら穏健派の持つフュリアスじゃ」

あのドラゴンを倒したフュリアス。確かに、あのレベルが実用化されるなら脅威だ。まあ、パイロットは育成することは難しいけれど。

この場合は悠人が凄すぎるだけか。

「じゃが、我らの他のフュリアスや過激派のフュリアスではそのような痕跡だけでは済まぬはずじゃ。最先端のフュリアスは第三世代と我らは呼んでおる。それですら、試作されたのは一機のみ。それ以外は第二世代じゃ。第二世代は駆動時間が短く、体も大きい。移動すれば大きな痕跡を残すことになる」

第二世代がどんなものか見たことはないが、アル・アジフの話を聞く限り別のフュリアスということになる。ただ、そのフュリアスが存在するかどうかと尋ねられればオレはありえないと答えるだろう。アル・アジフも。

オレもアル・アジフもそんな痕跡で済ませれるなら第三世代以上だと言う。つまり、

「『ＥＳ』ではない別勢力のフュリアス」

「それしか考えられないよな。周、何か心当たりはないのか？」

オレは小さくため息をついた。

「あのな、オレが全てを知っているわけじゃないから。今言った言葉もそう判断できる材料があったからだ。実際、第三世代以上のフュリアスが運用できる組織なんてこの世界には存在しな」

オレはその言葉を止めた。急に頭の中で悠聖の報告が思い浮かんだからだ。

魔力孔の異常。別世界につながっている可能性。そして、『ＥＳ』以外のフュリアスの存在。最新型を超えるフュリアス。

それらを一本に繋げることが出来る。でも、非現実的だ。だが、それを仮定するなら、アル・アジフとの会話にあったオーバーテクノロジーとして部品すら見つからないフュリアスのその理由が出来上がる。

頭の中で展開される理論。

「どうかしたのか？」

横にいる孝治が不安そうに尋ねてきた。オレは小さく頷く。

「繋がった」

「はあ？」

「繋がったんだよ。今までの話が。慧海、時雨に連絡を頼む。別世界のフュリアスが入り込んでいる可能性がある」

「ちょっと待て。ちょっと待ってくれ」

慧海がわけがわからないという風にオレに向かって言う。実際にわけがわかっていないのだろう。この場にいる全員が。いや、アル・アジフ以外が。

「順序立てて説明してくれ」

「わかった。アル・アジフから聞いた話なんだが、この世界ではオーバーテクノロジーとして作られたフュリアスの部品が見つからないと聞いたことがある。それは、フュリアス自体が魔科学時代に作

られていた記録があるという話なんだが、それは時雨にしたことがあるから詳しい話は時雨から。その部品すら見つからないということにオレは一つの仮説を立てた」

オレは自信を持って言う。

「フュリアスの部品及びデータは別世界に移された」

「えっと、周君。全く話が理解できないけど」

「奇遇ね。私もよ。それが善知鳥慧海の話にどうつながるかがわからない。そんなフュリアスの始まりの話をされても」

二人の反応が普通だ。今の話では慧海の話につながらない。

「わかってる。その世界ではフュリアスの開発が続けられていた。それが第三世代以上のフュリアスが存在する理由だ」

「いきなりそっちからッスか。魔王様、どうしたッスか？」

「何でもない」

ギルガメシュがやたらオレを睨めつけているのが目に入ったのか刹那が不思議そうに尋ねた。ギルガメシュはオレを射殺さんばかりに睨みつけてきているけど。

とりあえず、これがオレの考えたことの一つ目。一番難しいであろう第三世代以上のフュリアスが存在する理由の推測。

「話を戻す。次は悠聖の報告だ。魔力孔の異常。それを精霊召喚符

をばらまくと言う方法で行われているけど、それの真相は別世界とのゲートを新たに作り出すこと。このゲートはかなり大きめだ。フユリアスの大群が簡単に出入りできるくらいに」

「おい、まさか、お前の言おうとしていることは」

「魔界、天界、精霊界以外に、この世界はもう一つの世界と極秘裏にゲートが繋がっている。そう考えるのが妥当だ。その世界は、フユリアスが発展している世界。その世界がここに乗り込むために精霊召喚符をばらまいている。手順が違うのは今まで築き上げてきた魔術文化が違うから」

ここの話がすべてつながった。精霊召喚符による事件や、精霊召喚符による魔力孔の異常。狭間市に現れた謎の巨大な存在。それらが全て一つにつなげることが出来る。強引ではなく、簡単に。

「精霊召喚符の原因は別世界からの工作。それを前提に作戦を組めるか？」

第百十五話　新世界（後書き）

精霊、フュリアスがこれからの物語の中心です。後、学園生活も。
派手に暴れさせていきます。

第百十六話　年長者（前書き）

周達よりも年上の面々による会話です。

第百十六話　年長者

「怖いな」

慧海が部屋から出て行く周達を見ながら小さくつぶやいた。部屋に残っているのはアル・アジフ、ギルガメシュ、刹那の四人。

それを聞いたアル・アジフがため息交じりに頷く。

「周の考え、じゃろ」

「ああ。まさか、繋げてくるとはな。オレ達の考えていた仮定が根本的から覆された」

慧海が考えていた内容はアリエル・ロワソが出した新たな戦略だった。だが、それは強引なこじつけが多く、作った本人ですらダメ出しをするほど理路整然としていない。だが、周の仮定はそれらを簡単につなげてしまった。

別の件だと思っていたことすら。

「我は第三世代以上のフュリアスが存在する理由は薄々気づいておった。じゃが、それは完全に瞥見だと思っていたからの。むしろ、魔界か天界にあるものだとばかり」

「それはないッス。魔界五将軍の一人として断言するッス。そんな兵力があるならもう使っているッスよ」

「じゃの。それらを繋げるとは。周とはいったい何者なのじゃ？

怖いくらいに頭がさえておる。戦闘中でも冷静だと聞くしの。あの年で、何を変えた?」

あの年であの考えはありえないとこの中にいる誰もが考えている。

確かに、第７６移動隊の皆は大人びている人が多く、年齢と同じであることを感じさせないことが多いが、周の場合は違う。周はあまりに大人びている。

「あれはあまりにも不安定すぎる。でも、周にとってはあれが普通かの」

「そうなるだろうな。でも、それをあいつは自覚している。自覚した上で行動している。不安定であることを承知しながらな。アル・アジフは知らないだろうけど、あいつは由姫や亜紗にかなり依存しているぜ」

由姫や亜紗が周に依存している割合が強いように、周も由姫や亜紗に依存している割合が強い。それは周が不安定であることの表れ。

「そうか」

「ふむ、アル・アジフは周のことが心配なんだな」

「当り前じゃ」

アル・アジフがムスッとしながら答える。それを見ていた刹那がクスッと笑った。

「いつかは周の心の拠り所になりたいと思っているんッスね」

その言葉に対し、アル・アジフの行動は素早かった。魔術書を開き、掌に炎を出現させる。

「焼き殺されたいのかの？」

「え、遠慮するッス」

アル・アジフは小さくため息をついて魔術書を閉じた。

「我に周がなびくことはない。我は常に一人。それは我が決めた約束。エリシアと決めた約束じゃ」

アル・アジフはそう小さくつぶやいて部屋から出て行った。その背中はまるでさみしがっている子供のようだった。外見が中学生くらいにしか見えないから余計なのかもしれない。

その背中を見ながら慧海が小さくため息をつく。

「悩みを持つうら若き乙女ってか。ところでさ、ギルガメシュは何で動かないんだ？」

慧海が不思議そうにギルガメシュを見る。ギルガメシュは顔を真っ赤にして空気椅子を継続していた。もう、二時間ほど。

「我は、我は昨日負けた。我が筋肉が負けた。故に、我は筋肉を鍛えなおす。それが我の宿命。我の役目だ」

「普通に魔王やってくれよ」

呆れたようにため息をつく慧海。その言葉に刹那が頷いていた。

「全くッスよ。周を睨んだのはそれが原因ッスね」

空気椅子で筋肉を鍛えていたから視線が睨みつけるようになったということである。ある意味すごいというべきか、バカというべきか。

「話は聞いていたよな？」

「話？　何のことだ？」

慧海は無言でギルガメシュの腹に拳を叩き込んだ。もちろん、手加減なしで。だが、慧海は殴った拳を見て顔をしかめる。

慧海の拳からは皮膚が破けて血がにじみ出ていた。

「硬いな。魔鉄を殴った感触だ」

「殴ったことがあるんッスね。慧海さんは近接で格闘は使わないと聞いているので無理ないッスよ。魔王様の腹筋は凄まじいッスから」

「だよな。オレなんて遠距離と中距離が得意だしな。近距離は苦手だ」

「近接戦闘部隊を片手で倒した人のセリフッスか？」

刹那は疑惑のまなざしを慧海に向ける。それと同時にギルガメシュはようやく立ち上がった。立ちあがって開口一番、

「で、会議は何なんだ？」

慧海が無言で腕を振る。たったそれだけでいつの間にか取り出された大剣の腹がギルガメシュの顔面を殴り飛ばしていた。これに関しては刹那は全く止めない。魔王の部下ではあるが、今のはギルガメシュが悪いからだ。

そして、そのまま体勢を崩したギルガメシュに上から力任せに大剣を叩きつける。ギルガメシュはその場に崩れ落ちた。

「相変わらず惚れ惚れする威力ッスね。さすが、『無敵』の名を持つ『ＧＦ』最強の一角。一番苦手な近接戦闘で魔王様を圧倒するなんて」

「圧倒というか、ギルガメシュは準備していなかっただろ。まあ、準備していたとしても、本気を出すほどじゃないけどな」

「それは本気を出せば辺り一面が焼け野原になるというべきッスよ」

刹那が呆れながらため息をつく。そして、魔王を見ながら一言、

「魔王様、よかったですね」

「よくはない。仕方ないな。この我の本気を開放して貴様との決着を」

「寝とけ」

大剣の柄が鳩尾に叩きこまれてギルガメシュはその場に倒れこんだ。

慧海が小さくため息をつく。

「ったく。こんな大変な時にな」

そして、ギルガメシュと刹那に背中を向けて歩き出す。

「さて、周。お前はどんな未来を描くつもりだ？」

その顔には笑みが浮かんでいた。獰猛なまでの笑みが。

第百十七話　若輩組（前書き）

だんだん男女比が凄いことになっていますね。一応、女性が多い理由を一つ。
女性の方が魔力操作が上手い。つまり、魔術のレベルが高いということが挙げられます。もちろん、力のぶつかり合いになれば勝つことは難しくなりますが。

第百十七話　若輩組

オレが考えだした結論。それは結局全面的に支持された。それ以外の考えがないということもあるが。

自分でも可笑しいと思うが、どうしてあそこまで結論付けたかわからない。どうして、全てを繋げることが出来たのか。

「はあ、悠聖のところは隊長さんに恵まれていていいわね」

「あれ？　冬華は部隊の隊長って言ってなかった？　オレの聞き間違い？」

悠聖が不思議そうに尋ねるが確かにそのようなことを言っていたとオレは記憶している。独立機動部隊だったような。

「そうよ。『ＥＳ』過激派独立機動隊第４８部隊。そこに所属しているのが私と楓とルネの三人。ルネは今里帰りしているから実質私達だけね。『ＥＳ』は『ＧＦ』と違って機動隊は部隊で区別するのではなく機動隊で一つの隊として、それの傘下にたくさんの少人数部隊が入っている方式なの。だから、第４８部隊の隊長は私でも、独立機動隊隊長が私達の上司」

「ややこしい。周はわかった？」

「つか、『ＧＦ』が特別なだけだぞ。それぞれの権限を上げるために部隊をそおそおのサイズで区切ってそれぞれに権限を渡している。上がうまく回しているからいいものの、『ＥＳ』がやったら崩壊ものだしな」

わかりやすく説明しないとな。

「『ＧＦ』の場合は正規部隊と地域部隊の二つにまず分かれる。正規部隊はそれぞれの部隊、第一特務から第７６移動隊まで分かれる。ちなみに、この時の第一特務は漢字表記な。メンバーの大半が何故か東アジアだから」

実力者ばかり集めたらこうなったらしい。まあ、中国が一番人口多いしね。

「地域部隊は評議会をトップに各国の『ＧＦ』代表から各区域代表。そして、各地域部隊隊長に繋がる。地域部隊の方は混乱を防ぐために最小限にしているけど、正規部隊の場合はややこしいからな。オレが総長に言えばすぐに意見が通る可能性がある。正規部隊の最大の利点だ」

「情報処理の高速化。伝達速度を上げることで迅速な行動を可能とする。確かに、『ＧＦ』っぽい感じはするかな。『ＧＦ』って災害の時はあらゆる国より早く準備を済ませてその国に許可を求めるみたいだし」

「まあな。でも、それはある意味諸刃の剣だ。権限を二つに分けるのと同じだから。そんなことをすれば内部分裂を誘発しかねない。だから、今の『ＧＦ』は評議会の権限を大きくしているんだ」

評議会の権限を大きくすることで地域の安定を図る。もし、どちらかが分裂を開始したとしても、評議会さえしっかりしていれば地域の安全は少しでも保証できるから。

まあ、そんな不測の事態には時雨達がさせ愛と思うけど。評議会だって無駄なことだと思っているからしないはずだ。

「ふーん。二つに部署を分けて、一つは高機動を売りにしたもの。一つは情報の高速化を図りつつも、地域の安全を考えたもの。確かに、過激派と穏健派で内乱中に近い『ＥＳ』がそんなことをすれば内部分裂が多発しそうね」

「そうだね。そのシステムを考えた人って誰なんだろ」

「アリエル・ロワソ」

オレの言葉に歩いていた面々の動きが完全に止まった。まあ、予想外すぎるよな。

「『ＧＦ』にいた頃はグラハム・イングラムだっけ。入隊当時から天才と騒がれて、中東を中心に活動していた人物。離反した理由は『ＧＦ』のやり方では中東を守ることが難しいと感じたから」

「ちょっと待った。周隊長、その話は本当なのか？」

「調べたらすぐに出てくるぞ。アリエル・ロワソは天才だ。それは自他共に認める事実。『赤のクリスマス』の首謀者として指名手配されていても、アリエル・ロワソが考えているのは世界平和。矛盾しているけどな」

オレの言葉に悠聖が信じられないという風に見てくる。この話は意外と有名なので悠聖も知っている者と思っていたが、知らなかったらしい。孝治は知っていたみたいだけど。

「んなバカな。あいつが、あの犯罪者がそんなことをするわけが」

「悠聖。一つだけ言わせて」

冬華が悠聖の言葉に割って入り、悠聖の目をまっすぐ見つめる。

「アリエル・ロワソ様は確かに『赤のクリスマス』の首謀者と口外している。でも、本来のアリエル・ロワソ様は優しいの。よく、地域の子供達と遊んでいるわ。無邪気に。悠聖から見れば犯罪者だけど、私達からすれば、優しい父親みたいな存在なのよ。だから、その」

「冬華。ったく、アリエル・ロワソと真正面から話してみたくなった。その話を聞いている限り、本当に首謀者かどうか怪しくなるけどな」

「悠聖の見解は正しい。アリエル・ロワソを知る者は揃ってありえないと言っている。俺達には理解できないが、アリエル・ロワソの同僚だった人もあいつが事件を起こしたことを信じられないと今でも語ってくれる。周は許せないだろうが、信じられないという気持ちはその話を聞いていれば嫌でも思いつく」

これもかなり有名な話だ。実際に、そういう証言が多数寄せられている。『ＧＦ』からも。アリエル・ロワソに救われた人達からも。

『赤のクリスマス』の実行犯が一人もつかまっておらず、アリエル・ロワソが首謀者だと自ら名乗り上げたから今の状況になっている。

だが、例え首謀者じゃなくても、オレはアリエル・ロワソを許すこ

とはできない。あいつはオレがぶっ飛ばす。ぶっ飛ばして話を聞く。それまで許すことはしない。

「えっと、冬華とアリエル・ロワソを擁護するみたいだけど、私はニュヨークのあの場にいた。そして、アリエル・ロワソに助けられたの。アリエル・ロワソは私に周君への復讐心を植え付けようとしたけど、もし、本当に首謀者なら、どうして私を助けたのか気にはなるかな」

「気まぐれじゃないのか？　まあ、直接会って話をしたらわかるかもしれねえっけどよ。ところで、冬華達はいつ帰るんだ？　一応、見送りくらいはしたいし」

「そのことなんだけど」

冬華がどこか恥ずかしそうに悠聖の腕を抱きかかえる。

「第７６移動隊がここを去るまでいていいって」

「「「はい？」」」

オレ達三人の言葉が完全にシンクロした。あまり驚かない孝治でさえも信じられないという風に驚いている。オレは小さく唸った。

どういうことだ？

「えっと、アリエル・ロワソからの直接的な命令で、『ＧＦ』と穏健派の動向が気になるから好きなだけそこにいていいって。後、ここにいる間はクロノス・ガイアと同じように第７６移動隊に入れって」

「うん。なんとなく話はわかった。わかったから」

オレは小さくため息をついた。

「アリエル・ロワソと会話させろ」

第百十七話　若輩組（後書き）

次回、周とアリエル・ロワソが初めて言葉を交わし合います。

第百十八話　アリエル・ロワソ

楓から通信機器を渡される。オレは少しだけ深呼吸をして通信機器を耳に当てた。

「アリエル・ロワソか？」

『いかにも。私はアリエル・ロワソ。近所のお兄さんと呼びたまえ』

耳に聞こえてきたのは流暢な日本語。

「呼べるか」

いきなりの言葉に少しだけ呆然としてしまったのは秘密だ。

『ふむ、この手のジョークは通じないか。では、改めて。蕎麦をの出前を頼む』

「住所を教えてくれればプレゼントと共に送ってやるよ」

もちろんプレゼントは嫌がらせ用の様々なものだ。爆弾は送りつけない。『ＧＦ』の正規部隊隊長として。

『そうか、では住所は』

「話を進めていいか？」

自分の中でもアリエル・ロワソにイラついているのがわかった。まあ、仕方ないだろう。こいつに冗談は全く通じない。

『ふむ、日本のパーティグッズには興味があったのだがね。いいだろう。聞きたいことは冬華くんと楓くんのことかな？』

「ああ。どういうつもえりだ。何を企んでいる？」

『企む？　人聞きが悪いな。企画していると言ってくれ』

「それ企んでいるからな！」

どうしてオレがアリエル・ロワソにつっこみを入れになといけないのだろう。自分が嫌になってくると言っても過言ではない。

『日本語とは難しいものだな。企画していることは簡単だ。君達の強さに興味はある』

「強さだと？」

『ああ。君達第７６移動隊は聞くところによれば鬼を倒したらしいじゃないか。アル・アジフすらてこずった鬼を。その強さの源を知りたい。もちろん、君の成長は私が一番喜んでいるよ』

強さの原因か。答えられるとしたら一つだけだな。

「原因はお前だ。『赤のクリスマス』それからオレ達は始まった。そして、強くなろうとした」

あの日にオレ達はたくさんのものを失った。失って、そして、強くなろうとした。もう、同じ悲劇を、自分達と同じような人達を作らないようにするために。

オレは小さく息を吐く。

「それに、オレの成長を喜ぶのは実験体としてだろ？　気持ち悪いからやめてくれ」

『それもあるが、私が喜んでいるのは君の本当の意味での成長だよ。君は私の予想をはるかに上回っている。これなら、私の目標を達成したものと同然だ』

「目標だと？」

アリエル・ロワソはまだ何かをするつもりか？　それなら、止めないと。絶対に止めないと。

もう、オレみたいな人間を作らせるわけにはいかない。

『そう。だが、今は話さない。君が本当の強さを得るまで。その時、君の前に私は現れよう。冬華くんと楓くんは頼んだよ。すでに、『ＧＦ』の上層部と評議会には書類を送らせてもらった』

「オレ達を監視するためか？」

『違うな。君が私のことを恨んでいるのはわかっている。だけど、彼女らも巻き込むのは止めてくれないか？　彼女達は私達の大切な家族だ。『ＥＳ』過激派という大きな家族の中の一員だ』

オレは小さくため息をついた。なんとなく、アリエル・ロワソの性格がわかってきた。

「そういうことね。アリエル・ロワソ、お前はオレがぶっ飛ばす。覚悟しておけ」

『君にならぶっ飛ばされてもいいかと思っているよ。もちろん、私を倒せたらね。ところで、話を戻そう』

話を戻す？　もう、話は終わったはずだけど。

『今から住所を言うから蕎麦とプレゼントを』

「そっちかよ！　なんか、調子狂わされる」

『よく言われるよ。では、二人のことを頼むよ』

そう言われると同時に通信が切れた。オレは小さくため息をつきながら通信機器を楓に返す。そして、一言、

「なんなんだよ、あいつ」

完全に翻弄されていたとしか思えない。いや、確実に翻弄されていた。向こうはおそらく素でやっていたのだろうけど。

あいつと会話をしていたら調子が狂う。

「あははは っ。アリエル・ロワソって独特だから。『ＥＳ』でもみんな振り回されているよ」

「オレが想像していたのはまさに代表みたいなやつだったんだけどな。想像のはるか斜め上を簡単に通り過ぎて行った」

「対外的にはそんな感じなんだけどね。アル・アジフにも。ただ、過激派内部だけはそういう感じ。後、子供と遊ぶときとか。本当に無邪気だから」

「無邪気ってレベルじゃねえぞ」

ドッと疲れた。オレは小さく息をつきながら近くにあったベンチに座る。

周囲を見渡せば、見つかるのは魔物や異形によって壊された建物の数々。瓦礫の撤去作業は始まっているみたいだが、数が少ないのと瓦礫が大きいものが多いからなかなか進まない。

「周隊長、アリエル・ロワソは何なんだ？」

「オレに聞くな。わからないの一言だな。ただ、いたずら好きで仲間を大切に思っていることだけは確かだ。なんというか、今までの像がいい意味で壊された」

「そういうものかね。冬華達はどうだったんだ？」

オレは小さく頷く。悠聖が一番聞きたかったことだろうしな。

「冬華達はオレ達がここにいる間、リースと同じ扱いになる。簡単に言うなら第７６移動隊に所属するということだな」

「よっし。やったな、冬華」

「これからよろしく」

悠聖と冬華が抱き合う。まあ、嬉しいのはわかるけど、場所をわきまえて欲しいという思いもある。まあ、人目が少ないから大丈夫だと思うけど。

すると、オレの横に楓が座ってきた。

「よろしくね、周君」

「ああ。そうだな。また、お前と一緒にいられて嬉しいよ」

そう、嬉しい。嬉しいのだか、帰った時のことを考えるとすごく胃が痛くなる。

「でも、みんなにどう説明しようか」

ただそれだけが気がかりだった。

第百十九話　主人公達（前書き）

視点が三人に変わりますが、これからの物語は主人公が三人で進んでいきます。

第百十九話　主人公達

オレは静かにレヴァンティンを鞘から抜き放つ。そのままゆっくりと大上段にレヴァンティンを移動させた。

息を吸い、呼吸を整える。呼吸を整えてレヴァンティンをしっかり握りしめる。

「風迅一閃！」

そして、勢いよくレヴァンティンを振り下ろした。レヴァンティンを振ったことによって現れる衝撃波は目の前にある瓦礫を越えて奥の瓦礫にひびを入れるはずだった。だが、目の前にある瓦礫が粉々に粉砕する。

オレは小さくため息をついてレヴァンティンを鞘に収めた。

「難しすぎだろ」

オレはため息をつきながら音姉に言う。音姉は不思議そうに首をかしげた。

「そうかな？」

すぐに光輝を振り上げて振り下ろす。同じ技。だが、それは瓦礫を飛び越えて奥の瓦礫にひびを入れていた。

白百合流の中でも対人制圧技。遠当てというものだろうか。音姉の十八番ではあるが、その難しさは白百合流の中でも上位に入る。

あるゆる障害物を飛び越えて目標に衝撃を与える技だ。目標を脳振とうで行動不能にするという表現が正しいか。音姉の場合は目標を気絶させる威力を持つ。オレの場合は見ての通り、障害物を砕くただの衝撃波。

「これくらい簡単だよ。ふわっと自分の中の魔力を練り上げてぶわっと解放する感じ」

「わからないから」

オレは呆れたようにため息をついた。

あれからもう三日経った。戦いが終わり、狭間市に平和が戻ってからすでに三日。避難地区以外の市街地では魔物や異形が暴れたためによる被害が出ており、今日から本格的に瓦礫の撤去作業となっている。

だが、大きな瓦礫が多く、撤去作業は難しいのが現状だ。

オレはというと、集めた瓦礫を使って個人訓練をしていた。別の言い方をするならリハビリだ。

ブラストドライブやオーバードライブ、そして、限界以上の戦闘はオレの体に大きなダメージを与えた。実際に戦闘能力がかなり激減している。未だに筋肉痛は治らないし、腕の握力もまだ戻っていない。だから、リハビリを兼ねて白百合流衣斬り『風迅一閃』の指導を音姉にしてもらっていた。

まあ、失敗するのが普通だけど。

「それにしても、あれが第一世代型フュリアスね」

オレは周囲で動いているずんぐりむっくりの機体を見ながら呆れたように息を吐いた。

一言で言うなら達磨に手足を生やした姿。

あの日に見た悠人の乗るフュリアスとは雲泥の差でもある。後、機動力も。だが、その力はさすがというべきか、瓦礫の撤去作業のペースが上がっているのは第一世代型フュリアスが参加しているからである。

一応、オレと音姉以外の面々は撤去作業を手伝っているけれど。

「弟くんはやっぱり気になる？」

「そりゃな。フュリアスは後に戦場の主役になる可能性のあるものだ。気にしないと言えば嘘になるけど、この第一世代を見ても参考になるかと言われれば否定はするよな」

動きがとてつもなく遅い上に、エネルギーケーブルを繋げていないとまともに行動出来ないらしい。弱点だらけではあるが、瓦礫の撤去作業中なら十分に欠点にならないものだ。

多分、それを考えて第一世代型は作られているのだろう。兵器への転用を難しくするために。

「今は、風迅一閃の練習をしないとな。案外使える技だからマスターしたい」

「そうだね。風迅一閃は使い手によってはどんなに強大な相手でも一撃で気絶させることが出来る。でも、弟くんの『天空の羽衣』を抜くことは難しいかな。やってみていい？」

「オレに気絶しろと？　まあ、大丈夫だろ。そんな技を使えるのは白百合家しかいないし」

「それもそうか。じゃあ、もうちょっと練習しよう」

オレは頷いてレヴァンティンを鞘から抜いた。

「右レバーをゆっくり前に倒して。そして、固定」

僕は第一世代型フュリアス『アイゼン』のコクピットの中にいた。そして、コクピットのシートに座っているのはリリーナ。リリーナは真剣な表情でレバーを握り締めている。僕はそのシートをしっかり握ってつかまっている。

一応、パワードスーツを着ているので激しい動きで怪我をすることはまずない。

「そのままゆっくり右足のペダルを踏み込んで。そう。それでアイゼンは一歩踏み出すから」

リリーナが僕の指示と同じようにペダルを踏む。すると、アイゼン

はゆっくりとした動作で一歩を踏み出した。

「すごい。動いた。悠人、これ、すごいね」

「まだまだ、序の口だよ。左手のグローブはちゃんと固定している？」

リリーナは左手につけているグローブを握り締めた。すると、アイゼンの左手が動き手を握り締める。これはグローブの動きに応じて腕を動かすものだ。ただ、両手を動かす場合は右手にグローブをはめる必要があるため少し面倒な作業になる。

「うん。どうすればいいの？」

「そのままグローブを動かして。ゆっくり前に。そうだよ。前にある瓦礫に手を伸ばして、そう。グローブの動きにアイゼンが動いているから、アイゼンの左手を見ながら腕を動かす。瓦礫に近づいたら手を開いて。そうだよ。そして、ゆっくり握って」

リリーナが左手の手を動かし瓦礫をつかむ。掴んだ瞬間にリリーナは驚いたように僕を見てきた。

「悠人、何も掴んでいないはずなのに、何かをつかんだように抵抗があるよ」

「左手のグローブとアイゼンの左腕はリンクしているからね。ものを掴む場合はそれなりの抵抗があるんだよ。そのまま瓦礫をしっかり握りしめて横のトラックに」

「うん」

リリーナが腕を動かす。そして、トラックの荷台に瓦礫を乗せた。
そして、リリーナが小さく息を吐く。

「悠人、フュリアスってすごいね」

僕はグローブと機体との接続を切りながら頷いた。

「そうだよ。アイゼンは災害時に活動するために作られたものなんだ。まだ、エネルギーケーブルに繋げていないと長時間の使用は無理だけど、いつかはケーブルなしで行動できるように製作中だって」

コクピットを開けると気持ちのいい空気が入り込んでくる。すでに、他にもいくつかのアイゼンが動いていて瓦礫の撤去作業をしていた。
僕はリリーナが来たのでフュリアスに一緒に乗せてあげたから。

「でも、悠人みたいに動かせなかったな」

「それは無理だよ。僕の場合は操作方法が違うから。精神感応と呼ばれるシステムで感覚をアイゼンと繋げて操作するから今みたいに細かな動作を必要としないし。でも、リリーナは操作がうまいと思うよ」

実際に、最初にフュリアスに乗った時、僕はここまでうまく操作できなかった。やり方を覚えてようやく出来たけど、リリーナの場合は僕よりも最初が出来ている。

その言葉にリリーナは嬉しそうに笑った。

「ありがとう。このまま悠人よりもうまくなりたいな」

「それは難しいと思う。それに、リリーナは、その、可愛いから、別に戦わなくても」

「あはっ。でも、私にも戦う理由があるから」

リリーナはシートから立ち上がった。そして、コクピットから顔だけ外に出す。

「守られている自分は嫌なの。私は、誰かを守りたいから」

「そう、なんだ。僕と同じだね」

あの日、僕がとある街にいた時、そこに過激派の部隊が攻めてきた。ちょうどその街には凶悪な殺人犯が匿われていたらしく、過激派は殺人犯をあぶり出すために街を攻撃した。

その時にアル・アジフさんの姿はなく、僕は穏健派のみんなからはぐれて一人で逃げていた。その時に見つけたのがパワードスーツ。どうしてかわからないけど数少ない子供用だった。ちょうど、僕にぴったりなサイズ。

運命のいたずらというべきだろうか。僕はどうしてかわからないけどそのパワードスーツに乗った。今まで、たくさんの人が僕を守って死んだ姿を見ていたから。穏健派の人も、市民も、そして、過激派が狙っていた殺人犯も。僕を逃がすために時間を稼いで死んだ。

だから、僕は戦った。近くにあったものを何でも利用して戦った。この手を血で濡らしてきた。血で、濡らした。たくさん、殺して。

「悠人！」

僕はその時に肩がゆすられるのがわかった。リリーナが僕の肩を揺らしている。

「大丈夫？　呼んでも掌しか見てなかったけど」

「うん。僕は大丈夫だよ。ごめん。少しだけ考え事をしていたから」

「よかった。なにかあったかと思って。アル・アジフさんが呼んでいるから降りよう」

そう言ってリリーナがコクピットから出ようとする。僕はその背中に問いかけた。

「どうして、そうして、他人を心配するの？　僕とリリーナは赤の他人なのに」

その問いかけにリリーナは笑った。

「悠人が心配だから。私の中で悠人は大切な人、私を助けてくれた人だから。もう、赤の他人じゃないよ」

「でも、僕は」

「それに、友達を心配しない人はいないよ。もう、私と悠とは知り合ったから」

そう言ってリリーナが僕に手を伸ばしてくる。まっすぐ、笑みを浮

かべながら。

僕はその手をゆっくりと、恐る恐る掴んだ。

今やってることを一言で言おう。

だるい。

今やりたいことを一言で言おう。

逃げたい。

『さすがにこの状況で逃げられるの？』

オレの思考を読み取ったアルネウラの言葉にオレは小さくため息をつく。

「無理」

目の前で繰り広げられているのは狭間市市民有志と共に第７６移動隊や『ＥＳ』の面々が瓦礫の撤去作業をしている姿。それだけを見れば悪くはない。悪くはないけど、その中に魔王やら精霊やらが和気あいあいと混じっている姿はシュールにしか見えない。

それに、今のオレは連続召喚で動く気力がない。

「国の作業班はもう少し遅れるみたいだな。『ＧＦ』と『ＥＳ』の援軍の方が早いってどうかと思うけど」

『仕方ないよ。大体、今回の事件は『ＧＦ』内部で解決しようという動きがあったから。応援要請が来て、日本政府が考えている最中に事件は解決。すぐさま作業班の選出に走って遅れているだけだと思う』

「日本はいつも後手後手だからな。というか、瓦礫が大きいから砕いて小さくするってむしろ汚していないか？」

『あははっ。でも、非力な人達にとってはそれが一番だと思うよ。私達みたいに誰もが力のある人というわけじゃないし』

「だよな」

オレは小さく息を吐いて立ち上がった。そして、周囲を見渡す。

一応、オレもアルネウラも力仕事には向いていないから安全の確認作業だ。でも、何だろう。この嫌な気配は。今、見まわしてから気づいた。

アルネウラが僕の袖を引っ張る。

『悠聖、これ』

「ああ。孝治、ちょっと頼む」

「悠聖？」

オレの言葉にちゃんと返事するより早くオレは走り出す。アルネウラの手を握って。

「場所はわかるか？」

『ちょっと待って』

アルネウラが目を閉じる。オレはその間に大体の方角に向かって走っていた。人の間を抜けて走る。

アルネウラがゆっくり目を開いた。

『こっち』

アルネウラの速度が上がる。オレも速度を上げた。

「なんだろ。何か、強制的に」

オレ隊が道を抜けた瞬間、そこにいたのは三人のクラスメイト。その中心にいるのは一人の黒髪の長い少女。

オレとアルネウラにはわかった。その少女が普通ではないことを。

「見ろよ。これを使えばこんなことも」

「何しているんだ？」

オレはアルネウラの手を離して近づいた。クラスメイトはオレを見て驚いている。

「し、白川。こ、これは」

「それをどこで手に入れた？」

オレはさらに近づく。そして、背中を向けようとした瞬間、その逃げ道をアルネウラが塞ぐ。

オレはデバイスを身につけながら三人に近づこうとした瞬間、

「ちっ。ゆ、ユニゾン！」

その瞬間、そのクラスメイトがポケットから何かの札を取り出した。そして、その札と少女が光り、一つに合体する。

これは、

「アルネウラ！」

『うん』

オレとアルネウラは手を合わせる。

「『シンクロ！』」

オレとアルネウラの体が重なり合う。オレの体とアルネウラの感覚が一体となり一つになる。これがシンクロだ。

「ばれた以上は」

いつの間にか手に持っている薙刀を振りかぶるクラスメイト。だけ

ど、オレはそれより早く懐に潜り込んでいた。そのまま手に持つチャクラムで薙刀を弾く。そのままチャクラムを投げて薙刀をさらに弾き、クラスメイトの胸に掌を叩き込んだ。

たったそれだけでクラスメイトと少女が分離した。抱き崩れる少女を抱きとめると同時にアルネウラが分離するのがわかる。そして、アルネウラは戻ってきたチャクラムをつかみ取る。

「これは」

オレは地面に落ちていた札を手に取った。奇妙な魔術陣が描かれた何か。見たこともないもの。だけど、嫌な気配はここから漂ってくる。

一体、これはなんだ？

「くそっ。それはお前には使えねえよ。それは俺専用だからな」

その言葉を聞いた瞬間、アルネウラがオレの持っている札を手に取った。そして、じっくり見つめる。

『術式が違うのかな？　でも、これって、精霊召喚符？』

その言葉にクラスメイトが過剰に反応する。もしかして、これが本当に精霊召喚符？

「この子はもしかして」

オレは胸に抱く気絶している少女を見た。この子もやはり精霊。

「ちょっと、話を聞かせてもらおうか」

第百二十話　歌姫

「これがね」

オレはそれを見つめた。悠聖が持ってきた札。それがこれだ。

術式を見る限り、知らない術式しか描かれていない。オレの知っているものと照らし合わせても類似性を見つけることは難しいだろう。悠聖の話によると召喚された少女は気絶しているらしく目を覚ましていないらしい。

話によれば強制的にシンクロ、じゃなくてユニゾンか。それをしたらしいからな。精霊側に負担があったのだろう。

「一応、ディアボルガにも見てもらったが知らない術式らしい。それに、解読が極めて困難だと言ってた。この世界の術式じゃないと言った方がいいんじゃないか。よくわかんねえけど」

「だろうな。詳しいことは慧海か時雨に頼んだ方がいいけど、これはかなり独特だ。お前のクラスメイトからの話は？」

「見知らぬおじいさんからもらったってよ。普通のお爺さんだったとも言ってた。後、俺が契約した精霊はどこか、とも言ってきたから家に帰した。一応、精霊の少女はアルネウラとルカに見てもらっている。監視はエルフィンね」

オレは小さくため息をついた。いろいろと厄介事の多い任務になっているような。

「妥当だな。音姉はどう思う？　この地域に魔力孔があるかどうかも」

「多分、あると思うよ。そもそも、狭間の鬼がここで儀式をするから魔力がなければおかしい話だとお思うし。でも、弟くんは不思議に思っているよね。これの出現を」

やっぱり見抜かれているか。オレはその言葉に頷いた。

「まあな。あまりに唐突だった。今までいろいろな場所で精霊召喚符がばらまかれていたみただけど、これを使って探知した限り、狭間市にあるのは一枚だけ。あまりにおかしいと思わないか？」

「いや、オレ達、周隊長と違ってそこまで探査得意じゃないから。でも、言われてみたらそうだよな。確かに、あまりに唐突。でも、偶然で片付けられないか？」

「そうなんだけどな」

でも、あまりに腑に落ちない。もし、この地の魔力孔を狙っているとするならもっとばらまくはずだ。普通はそうする。でも、どうして、たった一枚だけをばらまいたのか。そこが気になる。

魔力孔を狙ったのではなく、別のものを狙ったとしたら。でも、何を狙ったのかは分からない。

「一体、何だって言うんだよ」

「だよな。一応、オレは精霊の少女についておくよ。現場の方は孝治に任せたから大丈夫だろう」

「そもそもお前は現場指揮官じゃないからな。でも、よろしく頼む。何かあったら連絡してくれ。音姉が飛んで行くから」

「そこは弟くんの役目なのに」

音姉が呆れたようにため息をつく。仕方ないだろ。まだ、疲れというからいろいろ抜けきっていないのだから。それに、音姉の方が足速いし。

「じゃ、また」

悠聖が走り出す。悠聖は過去のとある事件で精霊に並々ならぬ感情を持っている。それは、大切な仲間として、そして、友達として。

オレはそれを考えながら精霊召喚符を見た。精霊の意志に関係なく呼び出すもの。それは精霊の意志を反する存在。そんなものは悠聖が嫌いなことだ。嫌いだからこそ、どうにかしてでもユニゾンの解除を行った。

「弟くん、どうするの？」

「訓練はちょっと中断でいいか？　今から見回りたいところが出来た」

「見回りたいところ？」

その言葉にオレは頷く。オレの考えが正しいなら、もしかしたら、

「オレの出した推論にも関係してくることかもしれないから」

狭間市郊外の山の中。正確に言うなら、狭間市郊外にあるフュリアスがいたと思われる痕跡の存在する山の中。そこをオレと音姉は警戒しながら歩いていた。

山といってもそこまで木々が密集しているわけではないので見通しは悪くはないが、嫌な感覚が肌を焼いている。これは見られているという感覚だ。

音姉もそれがわかるらしく、光輝の柄に手を置いたままだ。いきなり光輝というのはどうかと思うが、それほどまでにオレ達は警戒している。

「敵の姿はないけど、なんなんだこれは」

視線の多さに思わず冷や汗が流れる。ちょっと前に狭間の鬼との戦いが終わったというのに新たな敵かよ。嫌になってくる。

「弟くん、どういうことかわかる？　見られているのに姿や気配すらない。まるで」

「別世界から見られているってか？　信じたくないけどその意見には賛成する。オレの探索で姿捉えられないということはそういうことなのだろう。多分、オレ達の知らない能力かもしれない」

「私の力を使う？」

「だめだ。相手が何か分からない以上、こちらの奥の手はできるだけ封じておかないと。それにしても」

常時周囲を警戒しなければいけないのは神経を使う。一応、ここに来ることを孝治には伝えてあるからなにかがあれば慧海や時雨にも連絡がつくだろう。

一番の問題は、オレの体力というより肉体が持つかどうか。最悪はブラストドライブをするしかないか。

「どこから見ている。一体どこから」

オレは感覚で周囲を探る。オレの探り方はかなり独特だ。簡単に言うなら完全な力任せ。でも、その方法なら下手な探知よりも、魔力消費は少ないし、最高の探知よりも一定範囲以内なら確実に見つけ出すことが出来る。でも、これは、

まるで、自然に目が出来たような感覚だ。あらゆるところから視線が集まる。地面からも、木からも、空からも。

「一体、なんなんだ。ここは、何の中にオレ達はいるんだ」

その時、オレの感覚に何かが走ったのがわかった。森の中にいる動物達じゃない。この大きさは、人だ。人がいる。

「音姉、準備を」

「えっ？　うん」

音姉が光輝を握り締めたのを確認してオレは地面を蹴った。誰かが横切った場所の方に向かって大きく一歩を踏み出す。そして、今度は確実にとらえた。まるで、正面に移動するように動いている。

でも、オレの動きに合わせて動きを止めている。やはり、どこからか監視されている。

オレはさらに地面を蹴った。地面を蹴ってさらに近づく。すると、人の数が増えたのがわかった。数は四人。手に何か持っている。

札？

大きさは精霊召喚符程度。今の状況なら精霊召喚符と断定した方がいいだろう。

「数四。正面にいる」

「わかった。先制攻撃行くね」

光輝が鞘から抜かれる。たったそれだけで衝撃波がオレや木々を抜けて駆け抜けるのがわかった。風迅一閃だ。居合抜きからの風迅一閃が出来るなんて聞いたことがないけど、音姉なら出来そうだ。

でも、オレの感覚が新たに現れた壁によって防がれるのがわかった。純粋な魔力の壁。これだと風迅一閃が抜けることはできないらしい。

「失敗。近接戦闘に入るよ」

「うん」

オレ達はさらに地面を蹴る。すると、急に木々が開けた。いや、空間が変わった。

オレ達が立ち止まる。そこにいるのは四人じゃなく、十人の３０近いくらいの男女。

「弟くん」

「ああ。空間が変わった。術式が違うおかげで気付けなかった」

そういうことか。だから、周から見られていたというわけね。

「子供じゃんか。どうする？」

「殺すしかないだろう。見られた以上な」

相手が武器を構える。ただ、その武器はそれぞれが何らかの魔術属性を備えていた。つまり、

「精霊召喚符」

「ほお、小僧、知っているのか。知ってここに来たというなら、生かしてはおけんな」

全員が精霊召喚符を持っているということは、全員がユニゾンしているということ。それはそれでかなり厄介だ。戦闘能力は計り知れない。

でも、ちょうどいい。

「いい機会だ。音姉、殺さずに捕まえよう」

「そうだね。じゃあ」

オレ達が同時に前に出る。そして、同時にお互いに言う。

「「背中は任せた！」」

まずは最初の攻撃。魔力を収束した弾を相手に飛ばす。だが、それは魔力の壁に阻まれた。まるで、悠聖と戦っているみたいだ。悠聖と同じ精霊の力を使っている相手との戦い。なら、悠聖との戦いを思い出せ。あいつの戦い方を思い出せ。最強の精霊召喚師の戦闘能力を相手に規定しろ。

相手は、強い。

オレはすかさず魔術陣を展開する。だが、それを見た相手の一人である男が一気に距離を詰めてきた。手に持っているのは槍。でも、音姉が前に出る。

「揃って串刺しにさしてやるよ」

きらめく槍の穂先。槍は風を纏い、人知を超えた速度で迫りくる。

並みの人なら瞬間で串刺しだろう。それに、訓練していても避けることは難しいだろう。

でも、煌めく穂先は空を舞う。音姉の光輝によって斬り飛ばされて。そのまま音姉の拳が顎をとらえ上に殴り飛ばした。慣性の法則に従ったのか斜めに吹き飛んでオレ達の頭上を越えてオレの背後の地面

に突き刺さった。

その時には完全に魔術が完成している。というか、いくつもストックする時間が出来ていた。

「まずはこれ！」

放つのは雷。放射状に広がり無差別に範囲内にいるものにダメージを与えるサンダーウェブ。だが、それを察知していたのか相手の全員が動く。でも、それはわかっていた。

レヴァンティンを振り上げ、一気に振り下ろす。

「破魔雷閃！」

サンダーウェブで広がった雷も纏わせてオレ達を囲むように動こうとした相手に雷の刃を叩きつける。捉えれた数は四人。後、五人。

その時、誰かが後ろに回り込んでくるのがわかった。

「もらった！」

早い。

オレが反応するより早く、オレの後ろに誰かが潜り込んでくる。振り向く速度ですら間に合わない。でも、オレには音姉がついている。

何かが弾かれる音と共に、振り返ったオレと共に放たれた蹴りが相手を吹き飛ばした。オレは音姉に向かってウインクする。すると、音姉もウインクで返してくれた。

「余裕だな。貴様ら、よくも仲間を」

「あんたらが何者かわからない以上、容赦するわけにはいかないしな。事情を話してくれるなら聞いてはやるけど？」

「ほざけ。貴様らはもうすぐ死ぬ運命だ。何故なら」

その瞬間、人の数が膨れ上がった。数は百に届きかねない。

「弟くん」

「ちっ、最悪だ」

まさか、ここまで隠していたなんて。

誰もかれも世界のトッププレベルには及ばないが、連携しようとする速度や個人個人の実力から考えて、音姉がいたとしても苦しい戦いになる。勝てないことはないが。

音姉が本気を出さなければの話だけど。

「音姉、オレはドライブモードになる。音姉は」

「うん。なるね」

音姉がゆっくり髪をくくっているリボンを取った。そして、そのリボンをポケットに収める。

普通はそんな動作をしていたら狙われるものだが、この場にいる全

員が相当な実力者だからか誰も動くことが出来ない。何故なら、音姉の空気が大きく変わったから。

今までは、小さな隙の多い人物だと思われていただろう。ただ、その剣技からその隙すらおびき寄せる餌となっているけど。でも、今は隙一つ見つからない。近づけばたちどころにやられるような感覚。

まるで、この場の空間全てを支配する存在。

「弟くん、行くよ」

「ああ。ドライブ、リリース。派手に歌ってくれ」

「わかった」

そして、音姉が息を吸い込む。

「【動くな】」

たったそれだけの言葉にオレを除く全員の動きが完全に止まる。オレはストックしていた魔術を一気に放った。

いくつもの衝撃波が動きを止めた面々を吹き飛ばす。これで大体八割は吹き飛ばせた。残るは二十人近く。

これなら、十分だ。

「サンダーウェブ！」

さっきと同じ魔術は棒立ちになっている相手を感電させて気絶させ

る。これならいける。

オレはさらに地面を蹴った。敵の中でリーダーだと思われる老人にレヴァンティンを振るが、老人はレヴァンティンを剣で受け止める。

「そんな、まさか」

「いい加減諦めろ。お前達の負けは」

オレの言葉が止まる。老人の言葉に思わず言葉を止めてしまったのだ。その言葉は、

「どうして、歌姫様がここに」

「なっ」

オレは思わず老人から距離を取る。周囲を見渡せば、周囲を囲んでいる全員が動きを止めていた。もう、拘束はないはずなのに。口々に、「歌姫様」と言いながら。

あまりに不気味だ。一体、どういうことだ。

「この世界にも歌姫様がいるのか。撤退だ！　撤退！　歌姫様を傷つけるわけにはいかぬ！　撤退！」

その言葉に吹き飛ばされたはずの面々も動きだす。それをオレと音姉は呆然と見ていた。そして、周囲から敵がいなくなる。

「一体、なんだったのかな？」

「オレに聞くな」

でも、気になることは一つだけできた。

歌姫様。

老人達は確かに音姉のことをそう呼んだ。一体、どういうことだ？

第百二十一話　精霊の少女

ベッドの上で少女は静かに眠っている。

精霊ではあるが、その体の構成は精霊のように魔力を中心として組まれているわけではなく、人の構成とよく似たものである。それがレクサスの診断結果だった。

レクサスは非常に強力な水の精霊だから構成とか調べるのは得意だけど、その話を聞く限りいまだに信じられないんだよな。まあ、オレだけかも知らないけどな。

「つまり、人に近い精霊ってことか？」

『そうなるわね。私も精霊界で医者をやっていたけどここまでの精霊は見たことがないわ』

レクサスでもわからないとするなら誰に聞けばいいのだろう。ディアボルガは知らないと言っていたし、一体、この子は何なんだ？考えることは周の専門なんだけどな。

オレは小さくため息をつく。ややこしい事柄だ。

「考えるの放棄したい」

『あははっ。難しいことはわかるけどね。レクサス、人に近いってことは精霊特有の通信は不可能ってことかな？』

『そうなるわね。それに、この子のマスターは悠聖じゃないから私

達の話に応じてくれるかどうか』

どんどん幸先が不安になってくるのはオレだけだろうか。こういう時に周の存在が欲しい。

あいつなら、オレ達の想像の斜め上を行く答えを出してくれる時がある。時があるだけだけどな。

「そう言う問題じゃないとは思うけどね。ところで、この子はただ眠っているだけなのか？」

『そうね』

レクサスが少女の頬を撫でながら少しだけ考える。考えて小さく頷いた。

『おそらく疲労ね。召喚されたばかりによく見られる症状よ。ただ、この子の場合は構成が人に近いから空間にからだを溶けることが出来ず眠っているだけ』

そう言えば、こいつらも召喚した時には一日くらい休ませてと言ってその後の一日は何の応答にも応じてくれなかったっけ。つまり、召喚される時には疲れがたまるのか。いい話を聞いた。

一応、このこともいろいろ報告しておかないと。理不尽に精霊達が怒られないようにするために。

「疲労か。よかった。なにか重大な病気だったら大変だったよ」

『それなら私達が強制的に精霊界に帰すよ。あの時と違って、私達

は強くなっているから』

「そうだな。頼りにしているぜ。アルネウラ、レクサス」

この二人は契約した精霊の中で最初の三人のうちの二人。オレがこの道を歩む理由となった最初の精霊達。そして、大切な家族みたいな人達。

あの頃と違ってレクサスも、特にアルネウラが強くなっている。あの頃はまだ小さかったのに。

『ん？　悠聖、どうかしたの？』

「いや、昔を思い出してな。お前達と、フィネーマと頃のことを」

『懐かしいわね。あっ、アルネウラ。あなた、墓参りに行ったの？』

『明後日に行く予定だから。本当なら悠聖もつれて行きたいんだけどね』

アルネウラがオレの手を握ってくる。

オレが最初に契約したのはアルネウラだけど、すぐにレクサスとフィネーマとも契約した。二人共、アルネウラのことが心配だったらしい。レクサスは姉のような存在として。フィネーマは親友として。

そして、フィネーマは今はいない。もう、どこにも。

「オレは大丈夫だ。この指輪、フィネーマからのプレゼントだしな」

『むう、本当なら私が送るはずだったのに。フィネーマに先を越されたんだから』

このデバイスを設計してくれたのがフィネーマだ。そして、オレが初めて恋をした人物。フィネーマの最後のプレゼント。

「二人には感謝している。今のオレがいるのは二人のおかげだからな。あの日から立ち直れたのは」

『感謝しているなら私と付き合って』

「それは話が違うから」

オレは小さくため息をついた。アルネウラといれば退屈はしない。オレの口元に笑みが浮かんでいるのにレクサスが気づいているのかクスッと笑った。

「あれ？　ここは」

その声にオレ達が同時にベッドの方を見た。少女がゆっくり置き上がっている。そこにこやかな顔をしてアルネウラが近づいた。

『起きた？』

アルネウラを見た瞬間びくっとなって若干後ろに下がる少女。もちろん、アルネウラは笑顔が凍りついたまま固まっている。

それはそれ怖いんだけどな。

「怖い」

うん。少女の意見に全面的に賛成。オレは小さくため息をついて少女に近づいた。

「大丈夫、と言っても信用されないか。オレは白川悠聖。君は？」

確実におびえているけど、今は少しずつでいいから緊張を解かないと。

オレが少女に話しかけると少女は首を横に振った。まだオレ達をおびえているのか。

「言いたくないならそれでいいから」

「違うんです」

少女が首を横に振る。

「私、名前が思い出せないだけで」

「はい？」

オレは思わずアルネウラとレクサスを振り返っていた。でも、二人は首を横に振るだけ。こういうことは知らないらしい。

記憶喪失というものだろうか。

「自分が何なのか。どうして、あの場所にいたのかがわからなくて。私は何なんですか？」

「それは」

なんと言えばいいかわからない。でも、何か言わないといけない。だから、オレは少女の頭を優しくなでた。

少女が驚いたようにオレを見てくる。

「焦らないで。ゆっくりでいいから自分を思い出していこう」

「はい」

精霊の少女は記憶喪失だった。面倒はオレが見ないといけないだろうな。オレは笑みを浮かべて少女から離れる。

「あ、あの、皆さんは私のことを知っているのですか？　どうして、私を」

「うーん。ただ、心配なだけかな」

オレがそう言うとアルネウラとレクサスの小声が耳に入ってい来る。とりあえず、聞かなくてもいいよな。でも、問題なのはこれからどうするかということだ。

オレはアルネウラを見た。

「ちょっと周や冬華と連絡取りたいからこの子を任せるか？　一応、この子のことを説明していて欲しいんだけど」

『うん、わかった。不本意だけどここは任せ、あいたっ』

レクサスが呆れたようにアルネウラを叩くのを見ながらオレは苦笑しつつ部屋からでる。そのまま近くの裏口から外に出て通信機器とデバイスに端子を取りつける。

ほんとうなら、デバイスを差し込めばいい部分があるが、オレの場合はかなり特殊だからこうしないといけない。

数回のコールの後に周が通信にでる。

『はぁっ、はぁっ、どうかしたのか？』

「周隊長？　何かあったのか？」

『一戦やらかした』

その言葉にオレは思わず走り出そうとした。だけど、すんでで足を止める。この状況で助けを呼ばないということはもう終わったのか？

オレは小さくため息をついて口を開く。

「緊急通信ぐらい寄越してもよかったんじゃねえの？　まあ、周隊長が無事ならいいけど。あの子が目を覚ました。今、アルネウラとレクサスに任している」

『そうか。こっちはなかなか戻れそうにない』

「怪我をしたのか？」

周に限ってそんなことはないと思うけど、一応聞いておく。周と一緒にいたのは音姫さん。この二人のコンビネーションは残りの第7

6移動隊が束になっても勝ちを拾うことが難しいのに。

周が小さく違うとつぶやく。

『オレだって何が何だかわかっていないんだ。ただ、これは音姉にも関係してくるみたいで。今まで進んでいた道が迷宮のど真ん中だったとしか思えない状況だ』

「珍しいな。周隊長がそんなことを言うなんて」

『オレは別にそこまで見通しているわけじゃないって。だけど、何か嫌な予感がする。まるで、歯車がかみ合っているような』

「はあ？　それって、物事がわかっているってことか？」

『全てが一つにつながっている。そんな気がするんだ』

周の言葉にオレは言葉を失っていた。つまり、

『狭間の鬼の事件も、精霊召喚符も、そして、オレがさっき戦った敵も、何もかもが繋がっている。そんな気がするから』

第百二十二話　宝の地図

精神感応を最大まで接続した状態で一気にアイゼンを動かす。なめらかに機体を動かすように出力を調整しながら周囲に被害を出さないように動きを足のペダルで調節する。素早く機体を動かし、周囲にある瓦礫を抱えてトラックに乗せる。

魔力燃料の出力から考えてこれが限界かな。

僕は小さく息を吐いてアイゼンの動きを止めた。周囲はかなり片付いているから少し一服が出来る。

「感応解除。出力減少」

僕は出力を落として小さく息を吐いた。

ここら辺の瓦礫の撤去は終わったから、後は別の場所の手伝いだ。でも、少しくらいは休んでもいいよね。これはサボりじゃない。うん、サボりじゃない。

僕はコクピットを開けて外の空気を中に入れる。

コクピット内部は完全に隔離されている。それは、空気中の魔力粒子を通してコクピット内で魔量粒子が爆発するのを防ぐためだ。防がなければ確実に死ぬからね。

そんな事態にはまずならないと思うけど。まあ、ここにはどう考えても僕の操るフュリアス以上の動きをする人たちがいるし。白百合音姫さんとか特にそうだろう。

「よし。じゃ、次の場所に」

「すみません」

僕はその声に振り向いた。すると、道路の真ん中に女の子が立っている。僕と同じくらいの女の子だ。背中にリュックを背負ってこっちを見ている。さらさらした黒髪で、日本人だよね？　というか、ここ日本だから日本人か。日本語だったし。

「はい」

「あの、ここにアル・アジフさんはいますか？」

「アル・アジフさん？　いるよ。今はどこを走りまわっているかわからないけど、どこかに入る。連絡入れようか？」

「お願いします。結城の人が来たと言えばアル・アジフさんには伝わると思うので」

結城。その言葉に僕は思いつくことがあった。

結城財閥。

『ＥＳ』のフュリアス開発を援助してくれている一族。実際に、結城家の当主である結城修三とは会ったことがある。アル・アジフさんの名前を言うということは結城財閥の関係者かな。

「わかった」

僕はパワードスーツについている通信機器でアル・アジフさんとの回線を開く。回線はすぐに通じた。

『なにかあったか？』

心配するようなアル・アジフさんの声。僕は首を横に振った。

「アル・アジフさんにお客さんみたい。結城の人と言えば伝わると言っていたけど」

『結城財閥の関係者が来たのじゃな。了解じゃ。今すぐそっちに向かうからそなたはその者の相手を頼む』

「わかった」

僕は通信を切ってパワードスーツで地面まで降りる。第一世代型フュリアスの弱点が地面への降り方が少ないというところかな。

この降り方は僕くらいしかしない。

「アル・アジフさんはすぐに来るって」

「ありがとうございます。それにしても」

女の子はアイゼンを見上げた。

「ＩＦ計画の最初に作られたＩＦ１－０５『アイゼン』。災害救助用に設計されて、今回の件で初始動。どうですか？」

「反応は悪くないよ。でも、やっぱり駆動系が古いからか動きは鈍

いね。やっぱり、ガベージ社の駆動系を使わないと」

「ＩＦ計画ではＩＦ２－０３以降に組み込まれたやつですよね。最新型のＩＦ３Ｄ－０１ではその最新駆動系が組み込まれているとか」

「どうして君がダークエルフのことを知っているの？」

それを言ってから僕はしまったと思うのがわかった。ダークエルフの話は秘密にしておくようにアル・アジフさんに言わないように言われていたのを思い出したから。

結城家の関係者だとしても言わない方がよかったと思った。

すると、女の子はクスッと笑った。

「大丈夫ですよ。ダークエルフのことは私達が総力を結集して作り出されたものですから。私も関係しています。実際に、ダークエルフのＡＩは私の思考をもとに作られたんですよ」

「そうなの！？」

僕は思わず大きな声を出していた。確かに、ダークエルフの思考ＡＩは他のものと比べて高性能だったけど、まさか、実際の人を使っているなんて。

女の子は嬉しそうに笑った。

「ようやく出会えた。ダークエルフのマスターに」

「えっ？」

女の子が僕の手を掴む。そして、満面の笑みで、

「私に手伝ってください」

「悠人ー！　飲みも」

リリーナの声と共に何かが地面に落ちる音が響いた。そして、僕達はそっちを向く。すると、そこにはボトルを落としたリリーナの姿があった。どうしてかわからないけど、背中にリリーナの武器である鎌が見えるような気がする。

気がする出会って欲しい。

「悠人、そこの女は誰かな？」

ふつふつと湧き上がるリリーナの背中から見える異常なオーラ。それを見ていた僕と女の子は思わずすくみあがる。

どうして、リリーナはそんなにも怒っているのだろうか。

「リリーナがいない間に悠人を盗ろうだなんていい度胸だね」

「えっと、あの方は？」

「驚いているけど妙に冷静だよね。リリーナ、落ちついて、お願いだから」

「無理」

リリーナがゆっくり鎌を手に取る。僕の顔が引きつるのがわかった。

「話、聞かせてもらうから」

「はい」

僕は素直に頷くしか生き残る選択肢はなかった。

「ふーん。年の近い悠人に宝探しの手伝いをして欲しいってこと？」

「はい」

女の子が神妙に頷く。僕と女の子はどうしてかわからないけれど三人分ぐらいの距離を離されていた。どうしてかわからない。わからないけれど、

僕と女の子の間に鎌が突き刺さっているから何も聞けない。

「どうして宝探しなのよ。そんな子供みたいな」

「僕たち子供だよね」

リリーナが無言で鎌を手に取る。僕は全力で口を閉ざした。

「宝探しって何があるの？」

「えっと、これ」

女の子がリュックから紙を取り出した。そこに書かれているのは地図。

ただ、これは狭間市の地図だ。少しの違いはあるけれど大体あっている。だけど、山の中に通路見たいなものが描かれていた。まるで、地下通路。

それに、何か書かれてある。知っている文字じゃないけど、これは、

「アル・アジフさんの魔術書の文字と同じだ」

「そうなんですか？　よかった。アル・アジフさんなら解読できるかもしれないと父から言われて。何か重要なものだと思うんです。何か分かりませんけど」

「重要って、宝の地図は大体が」

「狭間研究所？」

僕は地図の一番上に書かれている文字を見た瞬間、その意味がわかってきた。どうしてかわからない。知らない文字のはずなのに。

僕が小さくつぶやいた瞬間、僕は二人が僕を見ているのがわかった。

「えっと、読めるんですか？」

「どうしてだろう。知らないはずなのに。知らないはずなのに読める」

僕はさらに読もうとするけど意味が全く分からない。でも、一番上の文字はわかった。

「リリーナ。それを探そう」

「えっ？　えっ？　でも、今はここの復旧を」

「復旧が終わったら。お願い。どうしてかわからないけど行かないといけない気がしたんだ」

僕は地図をしっかり見ながら言った。

「何があるかわからないけど、これからの嫌な感じと共に感じる」

僕は地図を手に取った。

「新たな、可能性を」

第百二十三話　復興へ

オレがレヴァンティンを構える。機能組み込んだばかりのプログラムを起動させる。

「レヴァンティン、モード？」

すると、レヴァンティンの形が変わった。剣から杖へ。砲撃杖ではなく単なる杖だ。

それを構えながら魔術を作用させる。物質を浮遊させてその目的の個所に塗りつける。これで損傷の小さな個所は大丈夫だ。

大きな損傷の個所は悠人達『ＥＳ』のフュリアスが直してくれている。過激派の面々が来てから一気に復旧が早くなった。

過激派の面々には昔戦ったことのある人もいたけど、そこまで好戦的な人は多くはなかった。まあ、腕試しと言われて模擬戦はしたけど。

ブラストドライブの弊害は完全に抜けたから今では全力で復興に力を入れている。

「よーす。頑張ってんな」

オレは小さくため息をつきながら和樹の方を振り返った。

「毎日来るよな。今日は俊輔もか」

ちょうど学校が終わった当たりの時間だからか和樹が毎日オレの様子を見に来る。すでに学校は始まっているが、復興がもうすぐ終わるのでオレは学校をサボって修復の手伝いをしているのだ。

オレはレヴァンティンを杖から剣に戻す。

「で、今日は何だ？　いつものプリントなら委員長が持ってくるだろ」

「そうなんだけどよ、もう、あの事件から一週間。もう、修復作業が終了するからよ、お前の様子を見に来た」

「ふむ、ほとんど元の町に戻ったということか」

俊輔が周囲を見渡しながら言う。それにオレは頷いた。

損傷した個所はほとんど直っている。大破した建物がなかったことが幸いだったのか、とてもスムーズに仕事が終わった。明日には終わるだろう。

「たった一週間でここまでやるとは。さすが、世界の勢力が集まったというわけか」

『ＧＦ』に『ＥＳ』。そして、魔界。それらが集まって一気に復興支援を行ったからか予想をはるかに超える速度でここまでやってきた。実際に、オレの推測では後二週間かかると思っていたけど。

確実にフュリアスの影響だろうな。アル・アジフも過激派幹部もデータがとれて一石二鳥だと言っていたし。

「オレも驚いているさ。まあ、みんなには感謝している」

「気にすんなって。それに、それはこっちのセリフだ。お前らがいなければこの街がもっと大変なことになっていたのはわかる。お前らがいたからここまでで済んだんだ。そうだ、一応、学校内では精霊召喚符は見つかっていないぜ」

学校内での精霊召喚符の捜索をしてもらっている。実際にこの狭間市で見つかった精霊召喚符は悠聖のクラスメイトしかいない。だから、警戒している。これ以上、犠牲者を出さないために。

人間も、精霊も。

「そうか。助かるな。オレがいないのにいろいろ手伝ってもらって」

「気にすんな、ってこれじゃループか。まあ、精霊召喚符の話はかなりネット上で有名だからな。個人デバイス持ちかネット環境持ちの人なら確実に知ってる。簡単に強くなる方法ってな。危険性は度外視で」

「そうなのか。まあ、人は信じたくないものは信じないからな。オレからすれば、そんな上手い話はないけどな」

そういう気持ちはわかる。実際に凶悪犯が出てきた時の護身用として魔術の訓練をする人たちもいる。だけど、魔術が人を殺すことのできるものであることを覚えておかないけない。それを知らなかったという理由で何人もの人が毎年死んでいる。

非殺傷の魔術が使えるのは戦闘用に作られたデバイスくらいだ。

「強くなりたいのはわかる。でも、その強さは力を知ることを知らなければならない。知らなかったら、待っているのは身の破滅だ」

「よく昔にある話だな。力を追い求めるあまり身の破滅をする。人は過去から学ばなければいけない」

「お前は過去から何も学ばないけどな。でもよ、過去から学ぶって大変だぜ」

「まあな」

オレはその言葉に苦笑した。そのことはよくわかっている。過去に何度それを思ったことか。

「過去から全部を学ぶ必要はないさ。学ぶべきことは数少ない。それよりも、今の自分がどれだけ考えていられるか。まあ、過去というより今をどれだけ一生懸命に考えて生きているか。それが一番大事になるな」

「お前が言うと重い言葉だよな。そうだ、周はいつ学校に来るんだ？　もうすぐ終わりだろ」

「明日、いや、明日は日曜だから明後日だな。明後日に行く。後は『ＥＳ』に引き継いでも大丈夫だろ。それに、新しい警備体制を考えないといけないし」

こいつらには精霊召喚符や歌姫と関係する敵と戦ったことは伏せている。話せば混乱することは確実だからだ。だから、話すわけにはいかない。

ただ、『ＧＦ』、『ＥＳ』に魔界と政府には伝えてあるけれど。

「新しい警備体制？　どうしてだ？」

「和樹、お前は周の苦悩がわかっていないな」

俊輔は和樹を鼻で笑った。鼻で笑って偉そうに胸を張る。

「小学校に魔界の姫であるリリーナ・エルベルムがいる。それに、あの結城財閥の御令嬢もいる」

結城財閥の御令嬢というのはアル・アジフを尋ねに来た女の子だ。最初会った時はかなり驚いたけど、この狭間市に無理やり引っ越してきたという形になった。そのため、悠人が通っている小学校に転校もしちゃっている。

そのクラスにリリーナも入ったのだからかなり大変だ。

小学校には学生『ＧＦ』は皆無で、よっぽど才能がなければ入れない。推薦をもらったりすれば別の話だけど。実際に悠人達が通っている狭間市立狭間小学校にいる学生『ＧＦ』は七葉一人だけ。運が良かったというべきか。

一人でもいればかなり安心できるけど。リリーナの方が強いが。

「結城財閥って、日本で一番お金持ちで有名な？」

「ああ。『ＥＳ』穏健派に出資しているという噂すらあるあの結城財閥だ。ただ、宝探しという言葉を聞いているが。そこのところはどうなんだ？」

「あー、あれね。うん、事実。結城家で見つかった宝の地図を探しに来たらしい。まあ、結城財閥の当主に話を聞いたけど、内向きな令嬢を部屋から出すために話をしたらはまったらしい。一応、浩平とリースと一緒にいることを条件に宝探しをさせている」

音沙汰は全くないけど。それに、令嬢が内向きな性格だったなんて思えない。すごく明るいしはきはきしているし、悠人の取り合いをリリーナとしているし。このことは言わないけど。

オレは小さくため息をついた。さらに一人増えたメンバーを考えてくると少し嫌になってくる。

悠聖から聞いた話では、記憶喪失の精霊。その時点で意味がわからない。後、精霊が使うはずの魔力通信が使えず、精霊特有の会話の仕方である魔力を震わせてオレ達に言葉を届かせる方法も知らないらしい。

言うならただの一般人。悠人とアルネウラにとても懐いているから問題はないけど。

「お前も苦労してるんだな。そうだ。お前って今日の春祭りに来るのか？　琴美様が休み時間に教室に尋ねに来たぞ」

「そう言えば今日か」

あの日から一週間。今日が、春祭りの日だ。最近忙しかったから考える暇がなかった。

「そうだな。行くよ。あの場所によってから」

オレはそう言って立ち上がった。立ち上がって空を見上げる。

「変わらない日常があればいいのにな」

第百二十三話　復興へ（後書き）

一応、本文の補足を。

魔術はデバイスによって非殺傷にできると書いていますが、デバイスによる強化によって簡単に人殺しが出来るまで強化することが可能なだけで、デバイス無しでは基本的に殺傷力は低いものです。

第百二十四話　雨宮千春

決戦のあった大地。そこにある傷跡はかなり深い。その傷跡の中にある一つの墓。その上には昨日までになかったものがある。

三種類の花。

一つはオレが置いた花だ。ギルガメシュが教えてくれた千春の好きなルキルスの花。

魔界にしか存在しない花の一種だ。永遠の安寧を花言葉としても持つ花で、魔界に咲いている場所が戦闘が一切おらない絶対平和区域にしか存在していない。だから、オレはそこから積んできた。

他の花は花屋に置いているような商品価値のあるものじゃない。でも、それは周囲の野原に咲く見知った花。おそらく、千春が好きな花。

「周様、後時間はどれほどありますか？」

オレはレヴァンティンを一回軽くたたいた。すると、レヴァンティンが今の時刻を表してくれる。

５時１３分。

後、７分くらいか。

「７分。これが一杯だ」

「ありがとうございます。今は、もう少しだけ」

「もう少し、ね」

オレは小さく息を吐きながら魔術陣を展開する。オレが引き延ばせる時間はほんの少しくらいか。でも、ほんの少しくらいなら引き延ばすことが出来る。

出来るかどうか問題だけど。

「空間固定」

レヴァンティンの能力を最大限まで利用して空間を把握する。空間の魔力を一部で固定して空間を新たに作り上げる。作り上げた魔力をさらに練って固定を完全にする。そして、空間を隔離する。

空間を隔離する作業は初めてだけど、ここはまだ魔力が濃く残っているのかスムーズに進めれた。

でも、ここまでスムーズに行ったのはある意味おかしい気もする。

「流動停止」

空間と空間の間の魔力の流れを停止させる。魔力を停止させるということは世界から隔離すること。世界から隔離することで時間の概念を破壊する。つまり、時間を止めることが出来る。ただし、とてつもなく魔力を喰われる。

「最大時間は２０分弱になったぞ。これなら大丈夫じゃないか？」

「どうして」

「お前ら、泣いたんだろ。だったら、千春に言ってやれよ今までのことを。恨みでも喜びでも何だっていい。寝ている千春に届くように」

「ありがとう、ございます」

都がオレに背中を向けながら答える。対する琴美は少しだけ肩を震わせた。

「千春、あなたが眠ってから一週間が経ちました。あなたと出会ったのは中学校に入ってから。ちょうど、この季節でしたね。最初、あなたは眩しかった」

オレは目を瞑りながら魔術の行使を行いつつ耳に神経を傾ける。

「私はこういう性格ですから友達も出来ず、一人でいました。でも、あなたはそんな私と話してくれた。私に世界を教えてくれた。私は、感謝しています。あなたとの出会いを。でも、私は、もっと、もっと千春と一緒にいたかった」

オレはまっすぐ都を見る。例え、涙を流している女の子でも、今の都からは目を離すべきではないと思ったから。ちゃんと、覚えておきたかったから。

「千春がいたから琴美と出会え、そして、私が出来た。私は、あなたとずっと一緒にいたかった。もっと、もっとたくさんのことを話したかった。ずっと、友達でいたかった。どうして、どうして、どうして」

都がその場に崩れ落ちる。琴美は優しくその肩を抱いた。そして、オレの方を振り返る。

顔を真っ赤にしながらもオレに泣き顔を見られないようにした姿のまま。

「都をお願いできる？」

「それくらい、任せろ」

オレは二人に近寄った。術式を破壊しないように魔術陣を維持したまま近づき、都を受け取る。都はオレの胸に顔をうずめた。

強力な空間魔術を展開したまま体を動かすのはかなり難しいが、今はそうは言ってられない。オレは優しく都を抱きしめた。

「きっと、オレと同じなんだよ」

「周様？」

オレは千春の墓をまっすぐ見つめる。

「守りたかった。ただ、その一心で都を守ろうとした。ただ、それだけだから」

「そうね。千春はそういう人物よ。いつも、私達を巻き込んだ。でも、それは私達の性格を知っているから」

琴美の頬に涙が流れるのを視界の隅でとらえた。

「都が人見知りが激しくて、自分のことに自信がなくて、私がみんなから嫌われていることを知っていたから。友達として、一緒にいてくれた」

オレは静かに目を瞑る。

「あなたがいない日常は退屈なのよ。私は、三人でいた時が楽しかった。例え、どれだけ酷いような日常が待っていようとも、千春がいろいろなことに巻き込んでくれたから、都が友達でいてくれたから、だから、私は、頑張れた」

これは琴美の感情の爆発。多分、生きていたならもっと言っていたに違いない。今まで言えないこと全てを思いに乗せて。

「でも、千春はもういない。いないから、私達は自分の足で歩いて行く、見ていなさい。私は、私達は歩いてみせる。あなたの力に頼らないで歩いてい見せる。だから、あなたは静かに眠って。今まで、ありがとう」

オレはゆっくり目を開けた。思っていたよりも限界時間が短いが、まあ、いいだろう。途中で動いたことを考えれば十分だ。

オレは空間の隔離を解く。すると、魔力を纏った風が体をなでるのがわかった。

「世界を守るために味方が行動しても、誰かを守ることを自分は優先される、か。人の価値は皆平等。救える者も救えない者もいる中で、千春は大よりも小を取った。世界よりも友達を、守りたかったから。つくづく思い知らされるな。この世界のことを」

オレは空を見上げる。刻々と秒針の針が進む世界。

「全てを救うにはそれ相応の力がいる。世界と、個人を救うには」

自分の夢は完全な夢物語だ。全てを守る存在になろうなんて完全な夢物語。個人ですら守ることは難しい。千春と同じように。でも、

「いつか、守って見せる。だから、見ていてくれ。オレ達の勇者」

後方から吹き付けた風がオレの頬を流れた涙を掬い取って空に弾けさせた。

第百二十四話　雨宮千春（後書き）

千春はこの作品の原型となった作品とは大きく異なるキャラとして書きました。原型の作品では末長く第７６移動隊に関わる人物として書いていましたが、周を成長させることにするとこういう結果になってしまったというわけです。

千春は世界を救うために一度友達を裏切り、でも、世界よりも友達の方が大事だととある人物に諭され、琴美の殺害を止めて都を助ける。周が目指す「全てを守る」ということが難しいことであることを周に悟らす。誰かを救うことは何か（誰か）を犠牲にすることである。それを再認識しつつ、周は自分の道を歩いていきます。

世界を救い、個人を救う。

周の最終目的でもあるもの。その道筋の一つとして、千春はこういうことになりました。この結果は周の中で大きなことの一つになります。世界がそこまで上手くいかないことの実例として。個人をとるか、それとも最大多数をとるか、それとも・・・。

次は春祭りです。その後は学校になりますが、出来るだけ面白くしていこうと思っています。この駄文小説で面白くできるかわかりませんが（笑）

第百二十五話　春祭り　前編（前書き）

話が長くなるので前編中編後編の三つに分けます。ちなみに、中編と後編の間には別の話が入る予定です。

第百二十五話　春祭り　前編

狭間市の春祭り。正式名称は鬼鎮めの儀式らしい。らしいというのは暇になって狭間市市立図書館でこのことを調べていたら見つかった文字だからだ。まあ、実際にやることを考えて当たっているけど。

その始まり。春祭りの開幕に都が巫女服姿で舞台に踊った。開幕の舞と呼ばれるものらしい。

最初から都が踊る予定だったのか、それとも、琴美が都に頼んだかわからないが、都の動きは慣れており舞台の上を綺麗に舞っている。その様子をオレは由姫や亜紗と一緒に見ていた。

「都さん、凄いですね」

由姫が感嘆の声を漏らす。確かに凄い。ちゃんと練習していたのがよくわかる。

横の亜紗が呆然と見ているくらいだ。でも、その表情を見る限り、オレも亜紗も同じことを思っているみたいだ。

「兄さん？」

「あれ、戦闘舞踏だな」

「戦闘舞踏？」

亜紗が由姫にスケッチブックを渡す。

『日本古来から存在する戦闘技法のひとつ。杖や扇子を武器として使い、細かなステップと大きな動作で敵を翻弄しながら戦う技法。その時は大抵巫女服やドレスなど戦闘に不向きなものでまるで踊るように戦う姿からそう名付けられた』

的確な説明だ。ただ、戦闘舞踏という言葉を知っている方がかなり珍しい。実際に戦闘舞踏がこの世から完全な形が見られなくなったのは５０年ほど前。今でも、少しかじった程度の人物なら存在するが、完全に戦闘舞踏のステップが出来る人はいないと思っていたのだが、まさか、ここにいるなんて。

時には大胆に、時には軽やかに手に持つ扇子と共に舞う都の姿は何の知識もなければただの巫女が踊るまいに見えるだろう。でも、敬語をしながらどこかで見ている音姉は気付いているはずだ。

亜紗が由姫からスケッチブックを返してもらいさらにスケッチブックを開く。

『あの時、あのチーム戦の時、私は都に圧倒された。それは周さんに動けないように打撃を加えられたからだけど、杖の動きは普通じゃない。足元を見ていなかったからわからなかったけど多分』

その時はオレに亜紗の大技を受けて気絶していたから何が起きていたかわからない。でも、それなら、

「後は都が受けてくれるかどうかだな」

「兄さん、もしかして」

「都を本気で第７６移動隊に誘う」

一週間前、鬼との戦いを終えてからずっと考えてきたことだ。

あの日、都は自らの意志でオレに狭間の力を乗せた。本来、狭間の力はなんの訓練をしていない者が扱うには余りにも強大すぎる。それはオレが体験したからわかる。

でも、都の武器、いや、都の心を介在とした力は確実にどこかの組織が狙う。もしかしたら、評議会が狙うかもしれない。

「学園都市に来ないかという誘いは出したけどな、事情は変わった。今からオレ達かアル・アジフのどちらかの庇護に入っておくべきだ。そうじゃなければ都が危ない」

「力を操られて操り人形になるか、力を制御できずに暴走するか、ですね」

由姫もよくわかっている。よくわかっているのは音姉のことを思い出しているからだろう。オレは頷きながら都の舞を見る。もう、終盤なのか動きは小さくゆっくりになっていた。そして、動きが完全に止まる。

頭を下げ、扇子を頭より上にあげながら一秒、二秒と時間が経つ。そして、大きな歓声が周囲を包みこんだ。もちろん、オレ達も拍手している。

「兄さん、回りましょう。ここの祭りは規模が大きいですから」

「まあ、確かに規模は大きめだよな。狭間市の祭りを一つにまとめものだし。ん、あれは」

オレは人ごみをかき分けて歩き出した。そこに見知った姿を見つけたからだ。

「よっ、悠人」

「周さん。周さんも春祭りに？」

悠人の横にいるのはリリーナと結城家の令嬢でもある結城鈴。まさに両手に花というべきかべったりと腕を抱きかかえられている。

「まあな。オレは見回りを兼ねての参加だけど」

「僕も『ＥＳ』の一員だから警備に参加するとアル・アジフさんに言ったんですけどね、「そなたにはエスコートすべき人がいるじゃろ」と言われてここにいることに」

「大丈夫だよ。暴漢が出た時は私がやっつけるから」

リリーナがそう言ってペンダント形のデバイスをみんなに見せる。ただ、リリーナの武器は巨大な鎌だからこんな場所で出せば場が混乱するだけだと思うが口には出さないでおく。

横にいる鈴は俯きながらぎゅっと悠人の腕にしがみついていた。

「ちゃんと、悠人と鈴を守るから」

「私も？　いいの？」

「うん。悠人も鈴も可愛いし。あっ、でも、悠人を渡す気はないか

ら」

「わ、私だって」

リリーナと鈴がにらみ合いを始めるけど、話を聞く限り、悠人の意志は全く関係のないみたいだ。悠人は苦笑しているだけだから大丈夫みたいだけど。

「悠人、あの屋台に行こうよ」

すると、唐突にリリーナが悠人の腕を引っ張って歩き出した。それにつられて悠人達が歩き出す。引っ張られていると言った方がいいか。悠人がオレに手を伸ばしているけど虫の方がいいな。馬に蹴られて死にたくない。

「兄さん、急にどこに行くんですか？　私も亜紗さんもはぐれかけましたよ」

『由姫がいればはぐれないけど』

亜紗がぐっと親指を立てながらスケッチブックを開いている。まあ、由姫は何故かオレの位置がわかるセンサーを持っているみたいだからな。

「悠人がいたからな。ちょっと挨拶を」

『そうなんだ。周さん、三人で屋台を回ろう。これ以上増えないように』

「増えないように？」

オレは亜紗の言葉に首をかしげた。誰がこの状況で増えるのだろうか。

都は今踊り終わったばかりだから着替えるのに時間がかかるだろうし、他に来そうなメンバーに心当たりはない。誰が来るのだろうか？

「周様！」

「早っ」

オレ達は驚きながら振り返っていた。一番驚いていたのは口に出していた由姫だろうか。

振り返ると、そこにいるのは正真正銘の都の姿。（巫女服ｖｅｒ）

着替えもしないならここまで来るのが早いのは当たり前か。

「一緒に回らせてください」

「まあ、いいけど」

そう言った瞬間、背中を何かが撫でた。この感触は知っている。殺気というよりも嫉妬という表現が一番近いだろう。

でも、オレは後悔しない。だって、ちょうど話をするにはいいタイミングだ。オレはレヴァンティンを指で七回叩いた。

『どうかしましたか？』

すかさず聞こえてくるレヴァンティンの声。

アル・アジフにメールを頼めるか？　都のことで話がしたいって。時間は今から一時間後。祭りの会場の近くならどこでもいいから場所はそっちが指定してくれって。

『わかりました』

すかさずレヴァンティンがメールを出してくれる。それを、レヴァンティンの微かな振動と共に感じていた。

「ああ、まあ、兄さんですし。それよりも、どこを回ります？　おススメは」

「もしかして、由姫は全部の場所を調べておいたのか？」

「えっ？　あっ、うん。初めてお給料で遊べるから」

そう言いながら由姫が屋台の方をちらちら見る。ちなみに、視線を追うと、そこにあるのは食べ物系の屋台だ。

そう言えば、由姫が第７６移動隊に入ってまともな休日をして遊んでいた記憶がないな。休日があってもほとんどオレと一緒にいたような気がするし。

それなら仕方ないか。

「もしかして、由姫さんは朝と昼を食べていないとか？」

都が不思議そうに尋ねる。まあ、大体は想像つくわな。

「ど、どどど、どうして、それを」

由姫は驚いたように少しだけ下がった。屋台は基本的に料金は高めだ。高い割にはそれほど量が入っておらず、そこまでおいしいというわけでもない。でも、雰囲気に酔えるからいいという話は聞くけど。

由姫の給料は確か、月給＋特別給＋臨時給＋少し前に出た戦勝ボーナスで１２０万ほどだったような。まあ、その半分はデバイスの調整やら保険やらで消え去っていると思うけど。

「まあ、由姫は昔からこういう祭りは好きだしな。それに、亜紗も気づいているぞ。もの欲しそうに屋台の方をちらちら見ているのを」

『ばればれ』

亜紗がクスッと笑いながらスケッチブックを開く。それを見た由姫は顔を真っ赤にしながらオレの手を取った。

「行こっ、お兄ちゃん」

「ったく、そうだな」

オレは小さく笑みをこぼしながら由姫の手をしっかり握りしめて歩き出した。

第百二十六話　春祭り　中編

オレは小さくため息をつきながらその場に座り込んでいた。ちなみに、都や亜紗もため息をつきながらベンチに座っている。ちなみに、オレは近くの段差だ。

どうしてため息をついているかというと、

「兄さん、食べないの？」

ベンチに座っているもう一人、由姫がその横にうず高く積んだ屋台で買った食べ物の山を見れば周囲を歩く人たちが苦笑しているのも納得できる。

あらゆる食べ物屋台で四人分を買い続けた結果だった。

もちろん、オレも亜紗もかなり食べる方だ。オレの場合は普通と構成が違う部分があるためエネルギー消費が激しい。だから、かなり食べないといけないのだが、

「あのな、オレ達の横にあるごみの山を見てそれを言えるのか？」

オレはそう言いながら横を見る。そこにあるのはゴミの山。ちなみに、備え付けられたゴミ箱に入らず溢れかえっているゴミの山だ。

もう、かなり食べている。でも、由姫の食欲は衰えていない。

「太るぞ」

「大丈夫です。そもそも、運動中に倒れないために食べているんだから」

明らかにそれはおかしいよな。普通、動くために食べるだよな。

「その理論はおかしいと思うのですが」

『八陣八叉に普通はありえない』

亜紗の言うとおりな部分もある。本来、フロントはかなりのカロリーを消費する。だから、フロント及びオールの食べる量は常人離れしている。というか、大食い選手権で勝つ自信があるくらい。

オレはフロントではなくオールだが、オールの方がカロリーを消費する。だから、フロント及びオールの食べる量は常人離れしている。というか、大食い選手権で勝つ自信があるくらい。

でも、由姫のはあまりにおかしい。理由に八陣八叉が絡んでいるしか考えられない。

「でも、私は師匠と比べてまだまだですよ。師匠ってすごい」

「私がなんですか？」

由姫の手が完全に止まった。ちなみに、オレ達も動きを止めている。

恐る恐る振り返った先には、にっこり笑みを浮かべた愛佳さんの姿があった。ただ、目は全く笑っていない。怖いとかもう通り越している。

「私が、なんですか？　大食漢の由姫さん？」

「い、いえいえ、なんでもありません。なんでも」

由姫が慌てたように応える。まあ、普通はそうなるわな。

「愛佳さんも祭りを楽しみに？」

「雰囲気を楽しみに来ました。皆さんは楽しくやっているようですね」

「まあな。こいつらといれば楽しいから。まあ、由姫の食べる量には呆れているけど。お前、いつもそんない食べていないじゃないか」

オレがそう言うと、亜紗が納得したようにスケッチブックを開いた。だけど、それがオレに見えるより早く由姫がスケッチブックを奪い取る。見えた文字は、

『だから、由姫は貧』

だった。その後にどんな文字が続いているのか全く想像できない。多分、貧しいだと思うけど、だから何なんだろう。

「な、ななな、なんてこと書いているんですか！？」

亜紗が不満そうにスケッチブックを取り戻す。

『事実。だって、由姫は』

そこまで見えた瞬間、また由姫がスケッチブックを奪い取った。何

が起きているんだ？

「それは亜紗さんもでしょ！」

『私はBもあるから。対する由姫は』

何というか、スケッチブックを巡って争いになっているよな。傍目から見ていても楽しいけど。横にいる都が胸を押さえているのはどうしてだ？

すると、愛佳さんがくすくす笑った。

「わ、私は三月生まれですから仕方ないのです」

『私も三月生まれだけど』

「そうなのか？」

今初めて知った事実。こいつの生まれは確かわからないのじゃなかったっけ。

『嘘』

スケッチブック一面にでかでかと書かれた文字。まあ、そうだろうと思ったけど。

「私だって、いつか、お姉ちゃんみたいに」

『音姫もあまりないような』

その瞬間、体に寒気が走った。寒気というより殺気といった方が正しいか。

確実に、音姉がここを見ている。亜紗の額に汗が流れるのがわかった。

「いいんです。兄さんはきっとロリコンですから」

「いきなり何の話だよ」

いきなり不名誉な名前をもらっていた。それに対しては全力で抗議しよう。

「だって、兄さんが好きという人物は全員」

「同い年か年上しかいないけどな！　何故、いきなりロリコンになるんだよ」

「じゃ、落とし神？」

「何が言いたい？」

由姫の言いたいことが全くわからない。というか、落とし神ってなんだ？

「まあまあ、由姫さんは悪気があって言っているんですよね？」

「あれ？　私がさらに悪者になってる？」

愛佳さん、そこは悪気がなかったというところですよ。どうして、

悪気があったということになっているのだか。まあ、否定はできないけど。

オレが小さくため息をついて屋台の方を見た。すると、人だかりが出来ている。あそこは確か、射的だよな。

「ちょっとここで待っていてくれ」

オレがそう言って立ち上がると、都が屋台の方を指さして首をかしげていた。どうやらオレより早くに気づいていたらしい。

オレは頷きで返す。

「すぐに戻ってきてくださいね」

都が朗らかに笑って送ってくれる。対する由姫と亜紗は同じように立ち上がろうとして、

「お前らはそこにいろ。多分、浩平だろうな」

射的で人だかりが出来ているということは、浩平絡みだろう。あそこには大きな猫のぬいぐるみがあったから、それを狙って浩平がやっているに違いない。

亜紗も欲しいと言っていたから、一緒に狙ってやるのも面白いかもな。

オレはそう思いながら人ごみの中に入った。そして、顔を出すと、

「おっちゃん、もう一回！」

「悠聖なんかに負けてられるか。俺もだ！」

「僕もです」

「リリーナも」

何故か浩平だけでなく、悠聖、悠人、リリーナの姿があった。オレは小さくため息をついてちょうど横にいたアルネウラに話しかける。

ちなみに、アルネウラはリースを抱きかかえていた。少しジタバタしているが見なかったことにしておこう。

「どういう状況？」

『最初は浩平がリースのために獲ってやると言って、すぐに、鈴が欲しいと言ったんだよ。そこで、悠人とリリーナの二人が参加して、優月も欲しいとねだってこういう状況』

「優月？」

オレは聞き慣れない名前に首をひねると、アルネウラはリースを抱えながら握っていたらしい手を挙げた。そこにいるのは精霊召喚符によって召喚された記憶喪失の少女。名前は優月になったのか。

鈴のそばには冬華がいる。まあ、こういう状況ならな。

「戦果は？」

『諭吉さんを飛ばしている』

つまり、狙っている獲物はいまでに獲れないのか。

四人が狙っているのは一番上にある大きな猫のぬいぐるみ。四人が同時に放ってもびくともしない。これは無理だろうな。

「しゃあない」

オレは小さくため息をついて四人に近づいた。

「あれ、取りたいんだろ？」

オレはすかさず作戦を考えて話しかける。その言葉に全員が頷いた。

「オレが見た限り、全員が協力すれば必ず取れる。まあ、違法すれすれだけどな。おっちゃん」

オレはお金を射的のおっちゃんに渡す。

「全員分の弾の補充とオレの分を浩平に。悪いが、オレ達であのぬいぐるみは取らせてもらう」

まあ、十二分に利益が出ていると思うけど。

「いいのかい？　あれは特別仕様ですぜ」

にやりと笑みを浮かべた。多分、後ろに棒があるんだろうな。だから、四人同時に頭を狙ってもびくともしない。でも、この作戦が成功すれば、取れるか、又は不正を暴くということになる。

「特別仕様はあれだけ？」

「あれがこの店の目玉でさ。作戦は成功するのですかい？」

オレは小さく笑みを浮かべて浩平に近づいた。

「浩平、狙えるか？」

「どこをだ？」

「止め具」

その言葉に浩平ははっとして目を走らせた。

頑丈に棚は作っているが、射撃の名人である浩平がここにいるのが運のつきだ。後、このオレがいるのもな。

「運よく、この射的用の銃はお前の連射に耐えられる設計のタイプだ。どうやら、射的のおっちゃんはかなり本格的らしい。それに、止め具が意図的に緩んでいる。元から狙われることが覚悟の上だろうな。でも、これにはたった一人で出来ないと知っている。普通は」

緩んでいると言っても少しだけだ。強烈な打撃を与えれば微かに相場が後ろに傾かせれるくらいの。でも、今回はそこを狙う。

おっちゃんは自信があるのだろう。そんなところをピンポイントに、連射して当てれる人がいるなんて思ってもいないはず。

「いいぜ」

浩平が笑みを浮かべた。そして、両手に射的用の銃を持って構える。すでに弾は装填済み。そして、他の三人は準備済み。

そして、浩平が引き金を引く。

屋台の中での浩平の十八番であるビリヤード。しかも、いくつもの商品を落としながらのビリヤード。でも、それは、複数の弾が同時にポイントにぶつかるマジックのようなもの。

台が微かに傾いた。でも、オレの予想を超える傾き。

「全員、猫の右側を狙え」

その言葉に三人が一気にぬいぐるみの右側に向かって弾を放つ。すると、今までびくともしなかったぬいぐるみが徐々に動き出した。

浩平が新たなお金を渡して弾を放ち始める。そして、みんなが見守る中、猫のぬいぐるみは、落ちた。

「「よっしゃぁぁ!!」」

悠聖と浩平の二人が同時にガッツポーズをする。悠人とリリーナはハイタッチを交わしていた。

射的のおっちゃんは頭をかいてから猫のぬいぐるみを棚から下ろす。

「はいよ。完敗だ。ところで、これは誰のものになるんだ?」

その言葉に誰もが固まった。まあ、そうなるわな。

すると、浩平が猫のぬいぐるみを手に取ると、一番近くにいた鈴にそのまま渡した。

「はいよ。悠人とリリーナが頑張って取った景品だぜ。お兄ちゃん達からもプレゼントだ」

「いいの？」

浩平がちらっと悠聖を見ると、諦めたようにため息をついていた。

「ああ。浩平、元からこのつもりだったんだろ」

「まあな。リースには悪いけど、悠人もリリーナも必死だったから」

「ったく、お前った奴は。周隊長は元から異論がないみたいだな」

「オレは作戦立案しただけだ。報酬は作戦に参加した者たちがもらうべき。そうだろ、アル・アジフ」

オレの言葉に全員が驚いて振り返っていた。確かに、そこにはアル・アジフがいる。そのアル・アジフだって驚いている。だって、オレは一度も振り返っていないのだから。

アル・アジフは小さく息を吐いた。

「そうじゃやな。そなたは相変わらず不思議じゃの。亜紗が欲しいと言っておったのではないか？」

「大丈夫だ。じゃ、オレは少しアル・アジフと話すことがあるから」

オレはそう言ってアル・アジフと共に人ごみから抜けた。そして、唇を動かさずアル・アジフにしか聞こえない様な大きさの声で話しかける。

「どこで話す？」

「都と三人でじゃ」

「了解」

オレは都をどう説得するかを考えて出し始めた。

第百二十七話　都の選択

少しな離れた位置にある路地裏。そこに、オレとアル・アジフ、そして、都はやってきていた。

近くには亜紗や由姫が控えているから危険を心配する必要は全くない。

「周様、お話とは何でしょうか」

都が不思議そうに首を傾げながら尋ねてくる。

オレは頷きでそれに返す。

「その前に、都はあの狭間の力を操る杖を取り出せるか？」

オレの質問に都は真剣な表情で頷いた。そして、目を閉じて手のひらを月が登る空に向ける。

その瞬間、周囲の気配が変わったのがわかった。まるで、別世界に来たかのような空気の重さ。濃厚な魔力粒子。

世界がひっぺ返されたような感覚。

オレは息を呑んだ。魔力粒子が収束し、都の手のひらで一本の杖となったから。

「まるで神剣じゃな」

アル・アジフが苦笑しながら言う。魔力粒子のみで構成される武器が神剣と言われている。ただ、事実かどうかわからないから、オレはあまり信じていない。

でも、アル・アジフは知っているようだった。

「神剣、なのか？　魔力粒子で構成される武器がありえないのはわかるけど」

魔力で構成される武器は存在する。簡単な例を挙げるなら、中村の投影だ。

あれは、レアスキルにより魔力を集結させて元のものをいくつも作り出す方法。でも、それは魔力だから出来る。

「そなたはまさに科学者じゃな。科学又は化学で証明できぬものには否定的。神剣というのは神の破片と言われておる。つまり、この世に存在する神は魔力粒子から生まれたもの。そう考えれば神剣は魔力粒子から出来たというわけじゃ」

「でも、神剣がオーバーテクノロジー、オレ達の知るオーバーテクノロジーよりも遥かに栄えた技術によって作られた可能性も否めないぜ。実際に、神剣に近い魔術器はいくらでも作られている」

レヴァンティンはオーバーテクノロジーの産物だから数えないとしても、時雨のデバイスであるバルディシュや慧海のデバイスである天地空は魔術器の範囲に入る。

どれも、今の技術から考えてもオーバーテクノロジーと言われてもおかしくない武器だ。

「じゃ、光輝の力やリバースゼロの力はどう説明するのじゃ？　神殺しの力や力の反転は、デバイス処理を遥かに越えておる」

「問題はそこだよな」

痛いところを突いてくる。光輝やリバースゼロはレヴァンティンですら処理することは出来ないらしい。確かに、神格化能力や力、というよりベクトルの操作と保存。

後者は操作なら可能だ。実際に、白百合流の剣技は平然と行っている。

紫電一閃から紫電逆閃。

居合い抜きから返しの刃。

そんなものを魔術でベクトルの操作をしなければ、威力が落ちるか腕がイかれるかのどちらかだ。

だから、白百合流は無意識にそれが出来るようにまず訓練する。

でも、保存は出来ない。力をその場に留めることは不可能だからだ。

でも、リバースゼロはそれを可能とする。

「ベクトルの操作をひたすら繰り返す演算機関。欲しい時に力のベクトルを引き出すことが出来るもの。そう考えたらどうだ？」

「ふむ、一理ありじゃな」

「あの」

オレ達の白熱した議論の中で都が話しかけてきた。

しまった。都には多分わからない話だっただろうな。

「私のことはどこにいったのですか？」

その言葉にオレとアル・アジフは同時にあっと小さな声を漏らしてた。完全に脱線、いや、忘れていた。

オレは首を横に振る。

「悪い。えっと、その杖が出せるんだよな。今でも狭間の力は引き出せるか？」

「えっと、やってみます」

都が目を瞑って杖に力を入れる。すると、杖から膨大な魔力が湧き上がってきた。

魔力粒子を体内で魔力に返還することなく、狭間の魔力粒子を魔力として放出している。それは、魔力スポットと呼ばれる大自然の神秘しか不可能なはずのもの。

それをこの杖は簡単に使うことが出来る。

「どうでしょうか」

都が目を開けた。多分、都から見たらオレ達の顔は相当険しいこと

になっているだろうな。

「ありがとう。アル・アジフ、やっぱり」

「そうじゃな。その力は野放しにしておくには危険じゃ」

その言葉に都が驚いてオレを見てくる。それはそうだろう。普通じゃわからない。

魔力はそのまま術者の力となる。魔力を放出した人以外の術者でも。意図的に魔力を放出できるあの杖の力を使えば天災に近い破壊を魔術でもたらすことが可能だ。

「都、今すぐ決めて欲しい」

「今すぐですか？」

「ああ。今すぐだ。今すぐ、第７６移動隊の庇護に入るか、『ＥＳ』穏健派の庇護に入るか。どちらかを選択しなければ、都はおそらく誘拐されてその力を悪用させられる」

そんな力があるならテロ組織は喉から手が出るほど欲しいに違いない。いや、喉からという表現も少し違うか。

命を投げ出しても手に入れたいと思う。そして、『ＧＦ』や『ＥＳ』は事件を未然に防ぐためにずっと監視をするか軟禁をするだろう。そうしなければたくさんの人が死ぬ可能性だってある。

「オレ達の庇護に入れば、万が一に誘拐されても『ＧＦ』が最大戦力で探し出す。もちろん、『ＥＳ』や国連の中心区域でも。『ＥＳ』

も同じだ。でも、どちらの庇護がなければ、全ての地域を探すことはできない。そこに逃げられたらお手上げになるからな」

「この力は悪だと、周様は言いたいのですか？」

「悪なんかじゃない。でも、使う人によっては悪になりえる。人々の脅威になる。だから、オレかアル・アジフの庇護下でその力を学んで欲しいんだ。力を知るつつ振ることは賢き者のすること。力を知らずに振ることは愚か者のすること。だから、選んで欲しい。オレか、アル・アジフか」

日本でも時々見かけるが、１００年ほど前にあったらしい日本の非武装地帯を復活させようというデモがある。でも、それは力を知らない人達の言葉だ。本当の意味で力を体験していない人達の。

世界を知っているオレやアル・アジフは都の力が悪用されれば世界がどうなるかは想像がつく。だから、オレは都に語りかける。

「オレはお前が、優しいお前が誰かに操られてその力を使うところを見たくない。でも、その力はお前自身が知らないといけないんだ。自分の力がどれだけのものか。己の限界を知らなければ本当の危険なんて見えてこない。それに、オレの個人的なことだけど」

オレは恥ずかしそうに言う。

「前に言ったようにそばにいて欲しい、と思っている。亜紗や由姫と同じように、守りたいと思っているから。だから、どうかなと」

すると、都がクスッと笑った。クスッと笑ってすぐに、まっすぐ、真剣な表情となってオレを見る。

「私は、周様と共にいます。私の力が千春を殺したようなものです。だから、もう、誰も大切な人を失いたくない。この力で守れるように」

「そうじゃな。都は周の下にいた方がよい。じゃが、問題は山積みじゃよ」

「わかってる」

オレは小さくため息をついた。

アル・アジフの庇護に入るよりも、オレ達の庇護に入る方が問題は多い。アル・アジフの場合は家出してアル・アジフに拾ってもらったとすれば全てが片付く。捜索願は出されるだろうけど。

でも、オレ達はちょっと問題が複雑になる。

「私に手伝えることは何のですか？」

「一応、方法としては四つあるけど、その内の三つは身内から捜索願を出されたら終わり。最後の一つが一番難易度高いんだよな」

というか、難しい通り越して不可能だ。

「簡単に列挙するなら、県内のどこかに逃げる。交番で保護してもらって家にいるのが嫌だと言えば済む。でも、捜索願が出されている場合はオレ達と接触すれば関与が疑われて終わり。他は県外と海外。県内と違う点は深刻性の高さ。裁判で争えば勝てる可能性が上がるだけ。でも、捜索願が出されたならオレ達と接触出来ない。三

つとも、4、5年くらい我慢してくれれば可能だ。そんな時間待てないだろうけどな」

はっきり言うなら親の承認をもらえばいいのだが、あの市長が都を手放すとは考えられない。もしかしたら、今でも何かの工作に走っているかもしれない。

「最後が、凄まじくややこしい上に早く済むけどほぼ不可能。その杖が神剣だと認定させて監視をつかせる。その場合、オレ達だろうな。そして、都の親族がその力を悪用するそぶりを見せたところで保護」

「それは、ちょっと」

都が最後に関しては否定する。まあ、最後のものは都の親族を犯罪者にすると言っているようなものだしな。そんなものは都が許さないはずだ。オレもやりたくないし。

そもそも、親族全てが何らかのアクションを起こすことを前提としているため、ひたすら監視しなければならい。そんなもの普通じゃやっていられない。

だから、難しいを通り越して不可能だ。

「しかし、どうにかせねばならぬぞ。どうにかせねばそなたがここから出て行く」

それまでに決着をつけないといけないのか。かなり難しい。

「私が説得しましょうか？」

「止めた方がいい。その場合。いや、待てよ。アル・アジフ、これ、使えないか？」

オレはとある案を思いついていた。上手く行けば都を手中に収めることが出来る。

「神剣認定を通してから都に話をしてもらう。この時、必ず市長側は何らかのアクションを起こすはずだ。そのタイミングでオレが監視することを宣言する」

「相手頼みじゃが、まあ、悪くはないの。そのまま話を進めれば第７６移動隊に置いておける可能性が高くなる。確かに悪くはない作戦じゃ」

「だろ。都はまず神剣認定を受けてくれるか？」

「はい。でも。周様は神剣を認めていないのでは？」

その言葉にオレは笑みを浮かべながら頷いた。

「困った時の神頼み」

第百二十八話　春祭り　後編

春祭りの終わり。それは、選ばれた巫女による魂鎮めの舞い。

『ＧＦ』に所属している人が見れば錬舞だと思えるような動き。手に持つ錫杖を流れるような動きで滑らかに動かしシャランと音を立てさせる。

足の動きは不規則に動いている用意見えながら巨大な魔術陣を描くように歩く。もともと、ここの地形や屋台の配置の仕方などを考えて、舞台を中心としたさらに巨大な魔術陣を描いている。その力をさらに巨大にするために巫女の舞によって確実なものにしようとしているのだろう。

その舞台で舞っているのは琴美。最初は罵声やら怒声が大きかったが、琴美が踊り始めた瞬間にそれら全てが収まった。

踊り始めると同時に響き渡る音。笛だ。笛の音だ。楽器はあまり詳しくないから何の笛かわからないが、笛の音が琴美の動きを導いている。

笛を吹いているのは、都。

舞台の裏側から観客に見えないように吹いている。でも、その音に誰もが「都様だ」と呟いていた。

琴美が動き出す。

大きな一歩を踏みしめるが、体の動きはまるで今まで動いていたか

のようななめらかさ。足の運びも凄まじく、体と動きを一体にしている。

動きを止める時の力加減、不幸を変える時の滑らかさ。そして、違和感なく動いている。

湧き出てくる疑問は一つ。これは舞なのか？　連動する動きを見続けているだけではないのか？

でも、努力した人ならわかる。この動きは並大抵の練習では身に付かない。おそらく、オレや都が見ていない時、関係者に指導を受けていない時も、ひたすら、熱心に、一生懸命練習していたに違いない。そうでなければ理解できないレベルの高さ。

優しく、温かさを感じさせる動きと共に、激しく、荒々しく動く。

その動きにその場にいる誰もが言葉を失っていた。

最初は都の笛が音を止めた。それは、都の力によって。でも、今はそんなもの関係ない。

琴美の舞いが琴美を嫌う全ての人を力づくでねじ伏せた。そう、力づくで。

何分経っただろうか。

オレはいつの間にか時の流れを忘れていた。いや、この場にいる誰もが忘れていただろう。

最初はどういう動きで魔術陣を描くかに興味があった。だが、都の

動きを見ているうちに魅了され、惹きつけられた。この場にいる誰もが。

隣にいる由姫や亜紗も口をぽかんと開いて固まっている。

琴美の動きが緩やかになる。この時、ようやく笛の音が静まりだしたことに気付いた。

二つの動きが重なっていたことにも気づく。

最初は都の笛が琴美を導いた。まるで、琴美を守るように。でも、途中から琴美の動きが都の笛の音と重なった。そして、全てを魅了する舞いとなっていた。

琴美の動きが止まる。笛の音も止まる。そして、その場にいる誰もが動きを止めていた。

だが、オレはその中で琴美が一筋の涙を流したのに気付いた。まるで、ありがとうと言っているように。そして、千春が見ていないことを悲しむように。

オレは拍手をする。

それにつられて周囲の人たちが拍手を始め、いつしか会場にいる誰もが拍手をしていた。

おそらく、踊っていたのが都ならこうまでいかなかっただろう。こうまで、舞いと笛の音が融合することによる圧倒的な力強さを見ることはできなかったはずだ。

心底心から思いあっているからこその舞い。誰もを魅了する舞い。
そして、封印を補強する舞い。

オレは小さく息を吐く。

いつ以来だろう。誰かの演技がここまで感動できたなんて。一体、
いつ以来か。

「兄さん、凄かったですね」

「ああ。さすが、あの二人というべきか」

オレは小さく笑った。笑って、二人の手を取る。

「さて、そろそろ帰るとしますか」

『二人に会って行かないの？』

オレは頷いた。今日は、今日だけは、春祭りが終わった今日だけは
あの二人だけにした方がいい。

「二人の間に入れるほど、オレ無粋じゃないしな」

そう言ってオレは空を見上げる。

この狭間市にはまだ不穏な空気が流れている。精霊召喚符も出し、
歌姫のこともそうだ。でも、少しの間は平穏な時間が過ぎて欲しい。
少しでもいいから。

「どう変わっていくかわからないけど、ずっと、平穏が続けばいい

のに」

オレはそうならないことを理解していた。自分の感が告げている。後、一ヶ月だろうか二ヶ月だろうかわからないが、また戦いが起きることを。告げているからこそ、オレは空に願う。

「どうか、あの二人に安らかな時間を、心の傷を癒す時間を今しばらく」

その声は誰にも届くことなく、空に霧散した。

第百二十八話　春祭り　後編（後書き）

次は日常ではなく幕間を入れる予定です。内容は優月のことと鈴のことになりそうです。

幕間　とある会話　その１（前書き）

今回は少し変更して書いてみました。幕間なので短いですが、全てリリーナと鈴の会話です。時期は春祭りの直前です。

幕間　とある会話　その1

「ねえ、鈴って悠人に惚れているのかな？」

「ふえっ？　り、リリーナさん。急になんですか？」

「どうしても」

「えっと、えっと、ううっ」

「やっぱりなんだ。悠人のどこに惚れたのかな？」

「えっと、最初、宝の地図を真剣に信じてくれて一緒に探してくれているところに惹かれて、一緒にいるうちにいつの間にか」

「あははっ。鈴の顔真っ赤。でも、悠人は渡さないよ。悠人は私の命の恩人なんだから」

「リリーナさんも悠人のことが？」

「そう。あの時、死んだと思った時に颯爽と助けに来てくれた。鎧を身にまとい、空に浮かんで私が苦戦していた相手を簡単に倒した。その時私は思ったの。王子様だって」

「ロマンチックですね。羨ましいです。私はそんなことありませんでしたから」

「きっと鈴にもあるよ。だから、悠人を私に頂戴」

「お断りします。私だって、悠人のことは、す、好きですから。絶対に手放したくありません」

「あははっ。それでこそ私のライバルだよ。でも、悠人は渡さない」

「私だってそうです。リリーナさんには負けません」

「リリーナ。さんは付けなくていいよ。いや、そんな困った顔しなくてもいいのに」

「でも、私は」

「私と鈴は友達だよ。ライバルだけど、友達。鈴があっという間に悠人に惹かれたように、私も悠人に惹かれている。でも、私は鈴のことも好き。近くにいてわかるけど、優しい子だから」

「えっ？　うん。よろしく、リリーナ」

幕間　とある会話　その２（前書き）

優月の名前が決まった時の話です。今回も会話のみ。
時期は優月を保護した夜のことです。

幕間　とある会話　その2

『むむむ』

「何唸っているんだよ。アルネウラらしくないな」

『私が唸っていたらダメというわけ？　どうせ、能天気な女ですよーだ』

「オレは天真爛漫だと思うけどな。なにか悩みごとがあるなら相談に乗るぜ」

『私は悠聖の悩みごとで悩んでいるだけだよ』

「ですよねー」

『悠聖が悩んでいる、あの女の子をどうするか。精霊というより人と言った方がいいかな。精霊として生活するより、悠聖と一緒に人として生活させた方がいいかもしれない』

「それには賛成だ。精霊のことはお前らに任せたらよかったけど、今は人だ。学力に問題がなければ学校にも連れて行くか。いや、あのクラスメイトが暴走するのは勘弁だな」

『そうだね。でも、それが一番だよ。今、あの子は精霊召喚符によるマスターとの絆よりも、悠聖との絆の方が強まっている。多分、今なら強引に』

「契約出来ると言いたいんだろ。お断りだ。アルネウラの考えもわ

かる。今でもオレのことを考えている。あの子を守ることに関してならアルネウラの意見が一番だ。オレの精霊として手元に置く。でも、オレは」

『悠人のその考えは大好きだよ。わかっているよ。だから、私は悠聖についていく。悠聖の最強の精霊として』

「お前には精霊としてついてきて欲しくないな」

『えっ？』

「お前は精霊としてじゃなくて、オレのそばにいて欲しい。何度も、助けられているからな」

『うん。ありがとう。そばにいるよ。私の大切な悠聖』

「頼む。まあ、問題は山積みのままだけど、とりあえず、この子の名前を付けないか？」

『この子の名前？　うーん、何かいい名前はある？』

「そうだな」

『急に空を見上げてどうしたの？』

「優月」

『えっ？』

「名前だよ。優月ってのはどうだ？　優しい月って書いて優月」

『良い名前だね。うん、私も賛成。明日、優月が起きたら提案してみようか』

「ああ。さて、これからどうするか。真剣に考えないといけないな」

幕間　とある会話　その２（後書き）

幕間はこれで終わり、次から日常が始まります。

第百二十九話　戻ってきた平穏（前書き）

日常パートでは周が少しずつ変わっていく様子が描けたらいいなと思っています。

第百二十九話　戻ってきた平穏

机の上をシャープペンシルが走る音が響き渡る。少し離れた窓から実戦魔術をしているのか、何かがぶつかり合う音が響いている。

その中で、オレはノートにボールペンを走らせていた。

黒板の内容はわかっている。第四次世界大戦後における世界情勢だ。

各地でインフレが発生し、治安が悪化。このことはかなり有名だから、ノートを書くようなものじゃない。その頃のことは慧海達に聞いているから大丈夫。

そうしていると、教壇の方からバキッとチョークが割れる音が鳴り響いた。オレは小さく溜息をついて前を見る。前にいるのは和樹だ。机の上で爆睡している和樹だ。時折いびきが聞こえてくるから遂に愛佳さんがキレたか。

「白百合君？　授業を聞いていますか？」

「あれ？　オレ？」

あまりのことに声を上げてしまった。

確かに授業は聞いていない。聞かずに内職をしていたけれど、まさか、寝ている和樹じゃなくてオレに矛先が向くとは。

「授業の内容を知っているからと言って、デバイスシステムの開発

は止めてくださいね」

「その場所から文字は見えませんよね！？」

確かに書いているのはデバイスシステムの開発に関することだ。ただ、注釈を全く書いていないから、普通は落書きと言われるはずなんだけどな。

オレが小さく溜息をつくと由姫が振り返ってクスッと笑うのがわかった。

オレは微かに笑みを浮かべる。

春祭りが終わって二週間が経った。その間に起きたことはほとんどない。あるとするなら都の持つ狭間の杖が神剣認定されたこと。

そして、神剣認定により第７６移動隊の監視下に置かれるようになったことくらいだろう。

市長の説得には八割方失敗したけど。

でも、それ以上は何も起こっていない。ただ平穏に時が過ぎている。静かに、ゆっくりと。

この感覚は初めてだ。今、この状況がこんなにも落ち着くなんて。オレが一番関わることの無かった戦いのない空間がここまで癒やされなんて思わなかった。

今までは戦いの中にいるとして緊張感を持っていた。ここに来てからもずっと。

でも、今は何もないのがわかる。確かに、たくさんの心配事はあるが、そこまで大変なものが多いというわけではない。でも、今はこの狭間市に『ＥＳ』過激派から応援が来ているため、そちらに授業中は任せている。

アル・アジフ達の『ＥＳ』穏健派と『ＥＳ』過激派。本来なら『ＧＦ』の地域に一緒にいることはないのだが、アル・アジフがいるからか仲良くしている。

「兄さん」

授業が終わりオレは小さく息を吐いた。それと同時に由姫から声がかかる。ちなみに和樹はまだ爆睡している。

「師匠に怒られていましたね」

「ああ。和樹の方が怒られると思っていたんだけどな。まあ、基礎理論は組み立てられたからいいけど」

「ほう、何か組み立てていたのか？」

俊輔が興味津々に尋ねてくる。俊輔って何事も学ぼうという姿勢があるからな。まあ、学校の授業ごときは俺のレベルではないと言っているけど。

オレはさっきの授業中に書いていたノートを広げた。そこにあるのは大雑把な術式といくつかの単語。これだけを見てわかる人がいるならオレは全力で驚くだろう。

愛佳さんは桁が違うから仕方ないけど。

「さっぱりわからんな」

「海道君、これ、落書き？」

クラスメイトからも散々な言われようだ。でも、意味のわかる人から見れば机上の空論を笑うか、目を見開くかのどちらか。

「デュアルドライブの理論だよ。デバイスを複数使ったやり方を確立できたから、今は限界を操作できるドライブの二重形態であるデュアルドライブが可能かどうかを考えていたんだ」

「だが、それでは危険性が増すのではないか？　ドライブモードですら慣れていなければ危険性があるというのに」

「そうなんだよな。今のところ、デバイスを大量に同時起動して操作するのが一番だとは思う。まあ、机上の空論に近いけどな」

オレは小さく息を吐いてノートを閉じた。そして、周囲を見る。やっぱり。いつの間にか休憩中にはオレの周囲を囲うよな。クラスメートの大半が。

オレの視線に気づいたのか由姫がクスッと笑った。

「久しぶりじゃないですか？　兄さんが『ＧＦ』に関することで内職しているのを。普通の学生って感じでいましたし」

「そうなのか？」

オレは言われてから気がついた。確かに、今まで、鬼と戦うまでは、授業中でも新しい術式や封印術式の改良などをしていた。でも、最近は普通に授業を受けている。時々、別の内職に走っているけど。それでも、今までと比べたら圧倒的に回数は少ない。

確かに、久しぶりだ。

「海道君が学校に慣れてきたからだと思う。二週間くらい前まで、海道君はピリピリしていたから」

「委員長も言うならそうなんだろうな。普通に馴染んできたのか」

あまり実感はない。実感はないが、悪くはない。普通の人生も。

「でも、また逆戻りするだろうけどな。でも、こういうのも悪くはないな」

オレは少しだけ笑みを浮かべる。そうしていると、何故か茜の顔が見たくなってきた。ゴールデンウィークの時に一度顔を出したとはいえ、今も元気にしているだろうか。

オレの表情を見ていた由姫がオレの頬を引っ張ってきた。オレは無言で睨みつける。

「あっ、ごめん。なんとなく、兄さんの頬を引っ張りたくなって」

「どんな表情をしていたんだよ。ちょっと茜のことを考えていただけだ」

「そっか。茜ちゃんのことを。兄さんはやっぱりシスコンですね」

由姫がからかうように笑みを浮かべる。というか、オレがシスコンということは周知の事実なはずだ。実際に由姫か亜紗がオレを巡って争っているという話が学校中を巡っているくらい。

事実だから全く否定できないけど。

「あーあ。海道君がシスコンじゃなかったら告白しているんだけどな」

「器量よし、性格よし、顔もよし。三拍子そろっているもんね。海道君達トップスリーは人気者だよ。ああ、私もこんな彼氏欲しいな」

「女の子からそう言われるのは嬉しいんだけど、外野、睨みつけるの止めてくれ」

女子に人気があるのはいいけど、男子からの嫉妬の視線が痛い。視線で人が殺せるなら何回殺されていることやら。

黙って殺されるつもりはないけど。

「羨ましすぎる。海道は、本当に。トップスリーの一人である都様から好意を向けられ、義理の妹や、妹キャラの子から常にアタックされている。さらには、美人の義理の姉がいて、部隊内では女の子が多い」

「神よ。何故、我らとここまで違うのですか！」

「何故、何故、貴様だけモテる。リア充は爆発して死ね」

「人は差別がなければ生きていけないものなのさ。海道を見る女の視線と俺達を見る視線を比べてみろ。まるで、両親の恨みだとでもいうかのような視線だ。ああ、視線で人が殺せるというのはこういうことなのだな」

「自殺してえ」

何だろ。オレがここにいることに罪悪感を感じ始めている。

「男子は何バカを言ってるんだか。あんたらと海道君は違うの。人間として」

「オレは超人か何かか？　戦場にいたからあまりわからないでもないけど」

「ちょっと違うと思います。兄さんは世間知らずですから」

そのことを言われてオレは小さく呻いた。

世間知らずであるということは自分が一番わかっている。だって、この学校に入るまで、学生は暇な時間にずっと勉強しているものだと思っていたからだ。第７６移動隊の面々の成績が悪いのは、両立出来ていないからだと思っていたが、暇な時間に勉強する学生の方が少ない。というか、このクラスにはいない。

大体が友達と遊ぶとかゲームとからしい。

「世間知らずだから見守ってあげたいと思うんですよ。多分ですけどね」

「白百合さんの言うように、海道君は世間知らずでもあるけど、みんなに対して平等だから。自分がしゃしゃり出るのではなく、みんなが頑張るように促しているから。頭がよくて、運動も出来るけど、悪いように思える場所が見当たらないというのもあると思う」

「あれ？　委員長は兄さんのことをよく見ているんですか？」

「た、たまたま。たまたまだからね」

由姫の言葉に委員長は必死に弁解している。あたふたとしている姿を見ると、何かの小動物を連想出来た。リスとかどうだろうか。

でも、どうして必死になっているかわからないけど、まあ、いいだろう。

「世間知らずなのは仕方ないだろ。オレは今まで、戦いの中にいたんだから。でも、今は、今だけでも」

オレは周囲を見渡した。周囲にいるのはクラスメートの姿。戦いを知らないような顔。でも、今はそれが落ちつく。

自分でも大きく変わった思う。戦いの中に身を置いていたから、それとも、

「ここにいれることがいいと思える自分がいることに感謝したいな」

「戦い、なんだね。でも、あまり戦っているような話題はないと思うけど」

委員長が不思議そうに首をかしげる。報道規制がかかるときもある

が、そんな大事件が起きることなんて本当に稀だ。だから、みんなの中では常に戦っているオレのイメージがないのだろう。

実際の中身を話せば思いっきり変わると思うけど。

「まあ、委員長の言うように表の世界じゃ抗争なんてないからな。一昔前の中国なんて、粛清の嵐があったのに報道されなかったように。『ＧＦ』正規部隊は基本的に凶悪犯やテロとの戦いになるな。中東には未だに先進国を恨む人達がいる。『ＥＳ』過激派内部にも。その人達を止める戦いが結構多いな。後は、『ルーチェ・ディエバイト』に向けての訓練」

「あれ？　その名前、どこかで聞いたことがあるけど、みんな、どこだったかわかる？」

委員長がクラスメートの顔を見るが、誰一人として首を縦に振らない。だが、委員長は俊輔ならわかると思ったのか、俊輔を見ていた。

俊輔は微かに目を細めて、

「確か、里宮先生の授業で習った、いや、聞いたはずだ。あの魔術学園において行われていた祭典。確か、チームが力を見せあうというものだったはずだ」

「『ルーチェ・ディエバイト』は『ＧＦ』内で行われているものだ。まあ、チームじゃなくて個人戦だけどな。あらゆる『ＧＦ』の地域部隊、正規部隊が一部隊につき一番強い一人を選出し、代表として各ブロックを戦う。そして、生き残った者達が決勝ラウンドで戦い合う。まあ、決勝はほとんど正規部隊なんだけどな。稀に、地域部隊からの天才が出てくる」

『ルーチェ・ディエバイト』の目的はそれだろう。力のあるものを取り入れるためのもの。正規部隊と言っても凄まじく強い人はそこまで多くない。だからこその『ルーチェ・ディエバイト』だ。

「『ルーチェ・ディエバイト』は成績さえ残せばあっという間に有名部隊の仲間入りになるからな。孝治、悠聖、アルトは『ルーチェ・ディエバイト』で好成績を残しているし」

みんなには言わないけど、孝治と悠聖にいたっては『ルーチェ・ディエバイト』優勝という凄まじい結果を残している。第一特務からは誰も出ていないから出来た芸当だが、実戦を目の当たりにしたオレから言わせてもらえば二人は他の参加者を完全に圧倒していた。

まあ、年齢の関係で全く周囲には漏れていないけど。

「ふーん。つまり、『GF』は昇進のために戦闘しているということ？」

「『ルーチェ・ディエバイト』に出るのは有名部隊に入ってもっとみんなを守る仕事に就きたいと思っている奴らが大半だからな。それに、有名部隊に入るということは、死ぬ可能性も上がるということだ。生半可な覚悟では出来ない」

「もうすぐ予選ですよね。兄さんは誰を出すつもりですか？」

「由姫」

オレの言葉に由姫は完全に固まった。そりゃそうだろ。余りにも不意打ち過ぎるから。

「由姫なら大丈夫だって。本当なら亜紗を出すつもりだったけど、お前がどこまで通用できるか見たくなった」

オレがそう言って笑うと同時にチャイムが鳴り響く。次の授業は確かＨＲだな。

「返事は一週間以内な」

「はあ、兄さんは全く。わかりました、考えておきます」

よし。これで懸念事項の一つは解消出来た。昨日まで完全に忘れていたからどうしようか迷っていたんだよな。まあ、由姫なら大丈夫だろ。

オレは心の奥でそう思いながら入ってくる担任を姿を見ていた。

第百三十話　ホームルーム

「今日は、皆さんに、決めて、もらいたいことが、あります。来月の、中旬にある、体育祭の、ことです」

担任の福家先生はかなりの高齢だ。多分、愛佳さんと同じくらいだろう。そのためか、言葉をよく区切る。

聞いていたらわかるが、イライラする人はかなりいるらしい。オレはあまり気にしないけど。

それにしても、体育祭か。小学校は運動会だっけ。由姫の応援をするためだけに行ったことはあるな。

「体育祭では、皆さんが、平等に、競技に出て、それなりに、頑張って、くれることを、祈って、います。では、後は、委員長に、任せましょう」

「はい」

福家先生が教壇の前から離れる。それと代わるように委員長が教壇の前に立った。そして、教壇の上に何枚もの資料を置く。

「えっと、最初は注意事項、かな。第７６移動隊所属メンバーが参加出来る競技は一つだけ。海道君はそれでいいかな？」

「異論はない。そもそも、いくらでも参加していいなら、このクラスは確実に勝つぞ」

単純に言うなら運動神経の違いというべきだろうか。

学校の運動会、体育祭は魔術が使える使えないで大きな差が開く。圧倒的なまでの差が。だから、運動会、体育祭では魔術の構成を禁止する結界を作る。

ただし、簡単に壊せられるので緊急時にも安心だ。

そうなると、加速術式やレアスキルは使えない。亜紗や孝治は普通に足の速い一般人になるだけだ。

だが、オレや由姫、音姉は違う。

白百合流にも八陣八叉流にも魔術に頼らない走法を訓練させられる。それは、魔力感知により動きを先回りされることのないようにするためだ。

だから、いくら魔術を禁止する結界が張られていても、いつもと変わらない速度が出せる。

「そんなにすごいのか？　周、お前の足ってどれくらい速い？」

「確か」

普通で考えた場合、９０ｋｍの距離を四時間かけて走り抜けたことがあるから、

「秒速６ｍほどか？」

「あんまり速くないぜ。俺で５０ｍ走は６秒後半だ」

「ちなみに、９０ｋｍの時の速度な」

その時は、その後すぐに戦闘に突入したことを考えて、最速は大体、

「秒速１２ｍ弱が最大かな。それ以上だと走破した後の戦闘が出来ない」

「もういいっす」

和樹が呆れたような声を出す。オレは理由がわからず首を傾げるだけだ。

「一応、種目を列挙するから、やりたいものを決めてね。期限は今週末」

そう言いながら委員長が黒板に体育祭の種目を書いている。

１００ｍ走。２００ｍ走。８００ｍ走。借り物競走。障害物競争。クラス対抗騎馬戦。クラス対抗男女混合２００ｍリレー。学年競技種目球入れ。クラス全員リレー。そして、クラス対抗８００ｍリレー。

２００ｍリレーと８００ｍリレーは中学校でやるような競技じゃないだろ。

「球入れとクラス全員リレーは強制参加。騎馬戦は男女合わせて１２名。借り物競走は男女それぞれ一人だけ。障害物競争は男女それぞれ２名ずつ。後は４名ずつ参加ですね。えっと、とりあえず、参加したい競技は」

「じゃ、クラス対抗８００ｍリレーで」

オレはすかさず手を挙げた。この長さは普通じゃ考えられない長さだ。だから、絶対に孝治や亜紗が参加する。つまり、並みの速さだと確実に勝てない。

だから、オレが出る。

「じゃ、私は騎馬戦でお願いします」

すると、由姫がすぐに名乗り上げた。でも、それは少し危険なような気がする。

肉弾戦なら第７６移動隊の中では由姫が最強だろう。それは、騎馬戦における状況でも同じ。鉢巻きを取るのか相手を崩すかわからないが、由姫なら鬼神のごとき戦果をあげられる。

「周がそれなら、委員長、俺も周と同じ８００リレーで頼む。周が入っている以上絶対負けられないしな」

「和樹が出るならこの俺も出よう。なに、心配するな。逃げ脚だけならこの天才である俺様は誰にも負けん」

「自慢することじゃないだろ。というか、このクラスに運動部の奴でこの二人より足の速い奴はいないのか？　こいつら、帰宅部だろ」

和樹も俊輔もどのクラブにも所属していない。だから、運動系クラブに入っている奴らならもっと足の速いやつらがいてもいいはずなのに。

オレがそう尋ねかけると、クラスの男子の大半が目を反らした。うん、なんとなくわかった。

「攻めているわけじゃないんだけどな。和樹と俊輔以外にだれが」

すると、いつの間にか名前が書かれていた。オレと和樹と俊輔と、鈴木花子。最後の誰だ？

「誰？」

「海道君、私、怒っていいよね？」

委員長がにっこり笑みを浮かべながらチョークを握り締めている。もしかして、委員長の名前？

「へぇー。委員長ってそんな名前だ、目がぁっ！」

和樹の顔面、正確には右目にチョークが直撃していた。寸前にまぶたが閉じられていたみたいだが、「目がぁっ、目がぁ～～！」とお決まりのセリフを吐きながら床をのたうちまわっている。もちろん、周囲の机は退去済みだ。

こういう時のチームワークの高さは恐れ入るよ。

「私がするけど、いいかな？」

委員長がクラスを見まわす。クラスからの反論はない。まあ、あんなものを見せられたら反論はないだろうな。

「委員長の足の速さは？」

「６秒４２」

その言葉を聞いてオレは目を疑った。彼女は今何て言った？

「周、教えておこう。委員長は陸上競技部に入っているが、その足の速さは小学校の頃で県下一だ。俺よりも速い」

それは純粋にすごい。つまり、このクラスの一般人では最速だろう。というか、中学一年で６秒４２って速すぎないか？

「こほん。他の競技に参加したい人は」

「騎馬戦」

「俺も」

「俺もだ」

「俺が参加する」

「俺がやるぜ」

「俺俺」

「僕も」

「俺」

「では、小生も」

騎馬戦に残った男子の大半が手を挙げた。あまりのことに委員長が固まっている。

そうしていると、のたうちまわっていたはずの和樹がいつの間にか椅子に座っていた。ちなみに、周囲の机の位置はオレを除いて戻っている。もしかして、日常茶飯事？

「多分、由姫ちゃん目当てだろうな。いつもは周のガードが堅すぎて近寄れないし」

「そうなのか？　でも、不運だろうな」

「どうしてだ？」

不思議そうに首をかしげた和樹にオレは少しだけ手招きした。和樹が顔を近づけてくる。

オレは和樹にだけ聞こえるような小声で呟いた。

「多分、由姫は騎馬戦の特訓をするぜ。軽く八陣八叉の基礎を」

和樹の目が点になる。そりゃそうだろ。誰がクラスメートに近接戦用の武術を体育祭の練習で教えると思うだろうか。

空手とか柔道とかそんなものは関係なくなってくる。八陣八叉の前ではあらゆる武術が格下だ。

「つまり、練習がきついと？」

「多分な。８００ｍリレーは入る練習で済むけど、騎馬戦の参加者は悲惨だろうな。おっ、じゃんけんで決まって行くな」

あっという間に騎馬戦参加メンバーが決まっていく。男子のみだが。

女子の方は由姫がいたら何とかなるだろう。これはマジで。

「結構簡単に決まりそうだな。ＨＲの時間を使うようなものか？まあ、早く帰れそうで何よりだけど。そうだ、周は何か予定があるか？」

もうすでに決まったからか、椅子の向きを完全にこちらに向けながら和樹が訪ねてくる。こんな時に愛佳さんがいたら和樹は悲惨なことになっていただろうな。

「予定？」

オレはレヴァンティンを少しだけ叩いた。すると、頭の中に今日の朝詰め込んできたスケジュールが現れる。一応、することはあるけど、夜に回せる量だな。

「何もないな」

オレがそう答えると和樹が後ろを振り向いた。

「俊輔、放課後に一緒に遊ばねえか？　周と一緒に」

「ほう。周と一緒か。なら、参加するしかないようだな。この天才である俺の」

「そういうわけで遊ぼうぜ」

俊輔の話が終わるよりも早く和樹が振り向いてくる。俊輔は未だに何か話しているようだが上手く聞こえない。

「了解。オレ一人だけどいいか？」

「全然大丈夫。本当なら由姫ちゃんとか期待したいけど、俺達はお前にゲームをさせたいからな。いつも負けている俺がお前に圧勝出来るものを」

そういうことか。まあ、いいけどね。

和樹の目的がオレに圧勝することなら対抗策はいくらでもある。それにしても、

「ゲームか。やるのは初めてだな。浩平がしていたのを見たことはあるが」

「ふっふっふっ、素人のお前が俺に勝てると思っているのか？　甘いな。甘すぎる。今日が命日だと知れ」

「お手柔らかに頼むよ」

オレは微笑しながら肩をすくめた。

第百三十一話　放課後の行動　宝探し（前書き）

狭間の日常のような感じで放課後の行動シリーズが始まります。ただし、今回は周、悠聖、悠人の三人だけです。

第百三十一話　放課後の行動　宝探し

僕は林の中を駆けていた。もちろん、何かあった時のために簡易型パワードスーツを身につけている。

簡易型パワードスーツはダークエルフに乗る時に着るパワードスーツと違って機動力はそこまで高くはない。

あくまで簡易型だからしいけど、原理はよくわかっていない。

僕はその簡易型パワードスーツを駆って林の中を駆ける。そして、林が開けた。

「遅いよ。２０秒の遅刻」

「リリーナ、悠人は急いで来たんだから」

「鈴は甘い。甘すぎるよ。甘椿みたいに甘いよ」

「「甘椿？」」

僕と鈴の声が重なる。そんな名前は聞いたことがないからだ。

「魔界にある料理の名前なんだけど、すごく甘いの。チョコレートよりも甘くて」

「そんな料理があるんだ。アル・アジフさんに尋ねたら何か教えてくれるかな？」

アル・アジフさんは本当に物知りだ。でも、尋ねたとしても、「まずは、自分で調べてみることじゃ」と言われそうだな。

もしくは、自ら料理を披露するか。最近は都さんに料理を教えてもらっているし。

「悠人が約束の時間に遅れたことは確かなんだから、ちゃんと罰は与えないといけないよ」

「えっ？　痛いのはやだよ」

僕はすかさず後ろに下がった。だけど、それが杞憂だとすぐにわかる。

だって、リリーナと鈴が目を合わせてクスッと笑い合ったから。

「悠人は本当に全部信じるね。あっ、悪いってことじゃないよ。そういうところは特に好きだな」

「むっ、鈴がどさくさに紛れて告白してる。私だって悠人のことが好きなんだからね。ところで、今日の探検場所なんだけど」

「待って。浩平さんかリースは？」

アル・アジフさんから何回も念押しされているが、宝探しに出かける時は、必ず浩平さんかリースさんを連れて行くように言われている。

それは、僕を心配してくれているのと、リリーナと鈴の安全を確保するためだ。

だから、今日みたいな日はおかしい。

「今日は浩平が長距離から監視してくれるらしいよ。リースは用事があるって言ってたから」

リリーナは浩平さんのことを呼び捨てにする。どうしてかわからないけど呼び捨てする度にイラつくのはどうしてだろう。

「そうなんだ。だから、僕に簡易型パワードスーツを」

「それもあるけどね。鈴と相談して、今日はあそこに向かおうと」

そう言ってリリーナが指差したのは近くにある山だった。あそこにはリリーナが跳んで見つけたものがある。

奇妙な洞窟だ。

場所が崖の上で、そこに辿り着くには崖を登るか降りるかしなければいけないらしい。しかも、上手く木が隠しているからリリーナが見つけたのは完全に偶然。

「多分、何かあると思うから。私は悠人やリリーナみたいに強くなくて、あそこまで辿り着けないし」

「二人が下に待機で僕が様子見だね。わかったよ。今なら少しの間だけ探検出来そうだしね」

「じゃ、行こっか」

僕達は歩き出した。今日、音楽の授業で習った歌を歌いながら。

崖の上にある洞窟。それは、完全にカモフラージュされていたものだった。

洞窟の入口近くにいくつもの木々が倒れているところを見ると、これらが倒れていなかったら見えなかったと思う。

これは偶然だろうか。それとも、

「気にしていても始まらないよね。さて」

僕はしっかり簡易型パワードスーツのヘルメットを被った。いつものパワードスーツにはないものだけど、これをつけていたら気密性は高くなるし、何より周辺の空気の構成がすぐにわかる。

危険性を出来るだけ減らすものだ。ただ、安全第一と書かれた文字だけは勘弁して欲しい。

僕はヘルメットに備え付けられているライトをつけた。バイザー越しに洞窟が照らされる。

一応、簡易銃を取り出して、僕は歩き出した。

ただの洞窟だと思うけど、人が来るような場所にないものだから何かが隠れていてもおかしくない。だから、僕は慎重に歩く。

パワードスーツがあるから不意の攻撃には耐えられると思うけど、僕が着るものはそれほど耐久が高くない。だから、警戒しておかないと。

洞窟の中は普通だった。変なところは一つもない。それに、それほど奥に続いていない。あっという間に最奥に辿り着いた。

「行き止まりかな」

僕は周囲を照らして何かないか探す。どうやら杞憂だったみたいだ。それならそれでいいけど。

僕は踵を返す。何もないとわかればここにいる理由はない。

僕はそう思いながら足を踏み出して、何かを踏んだ。スイッチのような何かを。

僕は嫌な予感がして周囲を見渡す。何も変化はない。でも、この足をどけたらどうなるか。

僕は小さくため息をついた。そして、すぐさま簡易型パワードスーツの出力を最大まで上げる。最大まで上げて、全力で地面を蹴った。

『侵入者を発見。セキュリティシステム起動』

「ちょっ、いきなり何なの!?」

僕は力の限り全力で出口を目指す。だが、出口に見えるのは上から閉まってくる扉。

僕は簡易銃を直して、保存されている最大威力の武器を取り出した。
その名も杭打ち機。

整備の人はパイルバンカーって言っているけど、僕からすればあまりかっこよくないので普通に杭打ち機と呼ぶ。

杭打ち機を簡易型パワードスーツの右腕の装着して腰を捻った。

「貫け！」

そのまま勢いよく杭打ち機を叩きつける。叩きつけると同時に簡易型パワードスーツのエネルギーの２０％を消費して杭打ち機が杭を一気に打ち出した。

閉まりかけた扉に大きくひびを入れ、もう一度杭を放つ。すると、扉が粉々に砕けて出口が見えた。

僕はすかさず外に出る。外に出たまま一気に走ってがけから滑り降りた。

驚く二人の顔を見ながら僕は地面に着地してそのまま腰を落とす。

「悠人、何かあったの？」

鈴がすぐに駆け寄ってくるが、リリーナは崖の上を警戒したように睨みつけている。その手にあるのはリリーナの持つ鎌。

僕は小さく息を吐いた。

「トラップに引っかかってね。死ぬかと思った」

「トラップ？　あっ、エネルギーが８０％減少している」

鈴が簡易型パワードスーツの残量エネルギーを確認する。話によれば簡単なメンテナンスなら鈴でもできるらしい。

「よかった。悠人が無事で」

「ごめん。心配掛けた」

「いいよ。リリーナ、今はここから離れよ。悠人も簡易型パワードスーツの残量エネルギーが少ないし」

すると、リリーナは険しそうな表情になった。そして、鎌を握り締める。

「ごめん。何か胸騒ぎがする。今、ここから離れると後悔するような気がして」

「後悔？　でも」

「行こう、鈴。一応、リースに連絡を」

「しなくていい」

その言葉に僕達は飛び上がって驚いていた。そこには呆れた表情のリースさんと浩平さんの姿がある。二人とも空を飛んでいた。

「あの洞窟は胡散臭いからな。まあ、俺達と一緒ならアル・アジフ

も許してくれるだろ。というか、俺は全力であそこに行きたいんだが」

「子供」

リースさんがぼそっと楽しそうに呟いた。多分、リースも行きたいと思っていたんだろうな。そうだ。今のうちにバッテリーを代えておこう。

「いいだろ別に。俺だって今は野山を駆け回りたい気分なんだ。宝探しなんて心躍るぜ」

「悠人達の宝探し」

「わかってるって。俺はそれに便乗させてもらっているだけだ。悠人、今から行くか？　それとも、代えのバッテリーを持ってきてもらってから行くか？」

僕は二人が話している間にバッテリーを代えている。だから、今すぐに行ける。

「僕は大丈夫。だから、みんなで行こう」

「そうだね。あっ、鈴は私か悠人かにちゃんとついていること。危険だと判断したらすぐに戻るからね」

「うん。足手まといにならないように頑張るから」

僕は崖の上を見上げた。あの洞窟には何かある。もしかしたら、今まで手がかりが全くなかった宝探しについてかもしれない。

何があるかわからないけど、僕には何かあるという奇妙な思いがあった。どうしてかわからない。でも、僕はそれを信じよう。今だけは。

第百三十二話　放課後の行動　秘密の地

確か、その時にセキュリティシステム起動と言っていたような気がする。セキュリティシステムということは侵入者を排除するシステムのことだろう。そうなると、危険性は跳ね上がる。

でも、浩平さんとリースの二人はそんなものをものともせずに洞窟の中に入って行った。もちろん、僕達はぽかんと口を開けて固まっている。

「どうしたんだ？　もしかして、びびったとか？」

浩平さんがにやりと笑みを浮かべながら振り返る。リースは浩平さんの手を握ったまま正面を睨みつけていた。

「怖くないのかな？　悠人がはだしで逃げ出した場所なのに」

「反論できないのが痛いよ」

確かに僕は即行で逃げた。あの時は何も感じなかったけど、改めて考えると命の危険を感じていたに違いない。だから、反論はしない。というか、出来ない。

「俺もリースも竜言語魔法が使える身だからな。ちょっとやそっとのことじゃ倒れない。それに、リースがいれば何だってできる」

「惚気？」

リリーナが微かに目を細めて浩平さんを睨みつけながら言う。

それに対して浩平さんはまた笑みを浮かべた。

「羨ましいか？」

対するリリーナの反応は鎌で浩平を殴りつけることだった。浩平さんが面白いくらいにバウンドする。地面と天井を二回ずつ跳ね返って、地面を五回跳ね上がった。そして、そのまま地面に倒れる。

だけど、数瞬した後には何事もなかったかのように浩平さんは起き上がって歩き出していた。

「むかっ、相変わらずの防御力。殺す気だったのに」

「まあまあだぜ。こんなもの、孝治と悠聖に前後から蹴りつけられるよりも痛くない」

「そう」

すると、リリーナはにっこり笑みを浮かべて蹴り上げた。本当に笑顔。笑顔のまま、浩平さんの股間を蹴り上げる。

僕はゾッとして思わずそこを押さえてしまう。

その後のことは言わずともわかるだろう。

洞窟の中は相変わらず何もない。僕は簡易型パワードスーツのヘルメットについているライトをつけながらみんなと一緒に周囲を見渡す。

扉が閉まった以外に何の変化もない。空気中の構成比率も変わったものが無かったから何も起きなかったということだろうか。

「行き止まり」

リースが小さく呟いた。その言葉に全員が前を向く。

確かに、そこにはただの壁があった。リースがその壁をペタペタ触る。その顔はどこか険しい。

「何も無さそうだな。悠人が必死に逃げて来たというのに」

「地面にあるスイッチを踏んだから。思わず慌てて」

「そりゃ逃げるな」

浩平さんは壁をペタペタ触りながら答えてくる。そして、小さく頷いた。

「何かあるな」

「浩平も？」

リースと浩平さんが顔を合わせて頷き合う。竜言語魔法が使える二人だからこそわかる何かがあるのだろう。

僕は少しだけ眉をひそめて振り返った。ちゃんと、二人がいる。

「何があるの？」

「空洞？　いや、空間か？　この奥に何か。もしかしたら、ここは入り口で、通路になっていたけど意図的に隠された可能性があるな」

「でも、どうしてこんな田舎の様な場所に」

僕は少しだけ首を捻った。もう少し交通の便がいい場所に作ればいいのに、どうしてこんな場所に作るかわからないからだ。でも、リリーナは僕の言葉に小さく頷いた。

「そうだね。でも、ここが狭間の地だからだと思うよ、狭間の鬼を封印するに足りる地形要素があるなら、魔術的観点から見ても十分にこの地に何かの研究所を作る可能性はないよりもある方が高いよ」

「結城の本家もこの近くから出来たけど、それでも狭間に関する話は結城の家に腐るほどあるから。この地図だって。もしかしたら、何かあるかもと思っていたら」

「案の定というわけね。リース、ここを抜くにはどうすればいいと思う？」

浩平さんがそう言った瞬間、リースが掌を壁に押し付けた。そして、その部分で何かのエネルギーが高まる警告音が鳴り響く。

嫌な予感しかしない。

「浩平」

「何だ？」

リースの言葉に浩平さんが普通に尋ねた。そして、浩平さんがリースに近づいた瞬間、僕は鈴を抱きしめて背中を向ける。

轟音。いや、爆音か。

何とか障壁魔術の発動は間に合った。リリーナも発動していたらしく、鈴が多少目を回しているくらいでそれ以外の場所にけがはない。

僕が振り返ると、そこには膨大な土煙と共に、向こうの空間が微かに目に入った。そして、ぴんぴんしている浩平さんの姿も。

「至近距離での爆発で生きているなんて、本当に生き物？」

リリーナが不思議そうに尋ねる。その言葉に浩平さんは親指を立ててにやりと笑みを浮かべた。

「これくらい、痛くはないけど痒いな」

相変わらず人間離れした防御力だ。

「リースは無事か？」

浩平さんが爆発を出したリースに尋ねた。多分、いくつもの防御魔法を展開していたんだろうな。むしろ、浩平さんの方が危険な気がするけど。

「無事。浩平、前」

リースの言葉に浩平さんが前を向く。そこには空間があった。ただの空間じゃない。何かの壁によって作られた空間。そこには何もない。

リースが警戒しながら浩平さんを前に出した。浩平さんがその空間に入る。

「何だこれ？　こんな物質見たことないな」

浩平さんが地面を触りながら不思議そうに言う。確かに、見た目から材質が何かは判断できないが、見たことの無い壁であり地面であるのは確かだ。

リースが恐る恐るその部屋に入る。そして、周囲を見渡した。

「全部同じ物質」

「だな。リリーナちゃんか鈴ちゃんはわからないか？」

僕達も安全そうなので部屋の中に入った。

感触から行って何かの金属だろう。でも、金属にしては滑りやすいような気がする。どんな材質かなんて全く分からない。

リリーナと鈴は同時にしゃがみ込んだ。そして、鈴が床を触って首を横に振る。でも、リリーナは違った。

「遺跡と同じ。魔界にある聖域の遺跡と同じだよ。材質とか、構成とか全く不明で、いつ建てられたのかもわからない聖域の遺跡と同

じ材質。触っているだけだから違うかもしれないけど、触っただけなら完全に同じ」

「魔界にある聖域の遺跡？　なんだそりゃ？」

「魔界の宗教の聖地。構成される金属からいつ作られたかまであらゆる点が不明なもの。この世に存在する最大のオーバーテクノロジーの建物だったもの」

リースが過去形で言うのはこの地があるからだろう。多分、この部屋だけじゃないはずだ。この部屋以外にもいくつかある。だから、リースは過去形にしたのだろう。

リースの説明で納得したのか、浩平さんは感心したように頷いていた。

僕は何気に天井を見上げる。見上げると同時にライトが天井を照らした。そこには、

「写真？」

僕は目を凝らした。そこにあるのは確かに写真だ。天井一面に張られた写真。絵ではない。

そして、そこに張られているものを見て僕は小さく息を呑んでいた。

「フュリアス」

そこに張られているのは確かにフュリアスの写真だった。でも、僕の知る全ての来たとはかけ離れている。

第三世代である僕のダークエルフが一番人に近い形だが、どうしても、足や胸の部分が少し大きい比率になる。でも、これは完全な人型。

大きくした人を真似て金属で作ってみたならこうなりそうだ。その背中にあるのは九枚の光の羽。いや、よく見るとその一機だけじゃない。その近くにあるのは四機のフュリアス。中央には黒い大きな何か。

うずくまっているからかわからないけど、形がよくわからない。他のフュリアスも一番大きなフュリアスと同じように人の形。そして、それぞれ武装が違う。たくさんの砲塔。いくつもの剣。たくさんの小型ブースターがついたもの。そして、武装がほとんどなく、手に持つ剣のみの機体。

「どうして、フュリアスが」

「もしかしたら、これは魔科学時代のものかもしれない」

リースが天井を見上げながらみんなに聞こえるように言う。

魔科学時代の名前は聞いたことがある。今のフュリアスの元となったものが魔科学時代に存在していたフュリアスであることも。そして、オーバーテクノロジーの時代であったことも。

それなら話はわかりやすい。これが魔科学時代の産物ならこの写真の大きさも納得できる。

「でも、どうしてこのような場所に魔科学時代の遺跡が」

鈴が不思議そうにつぶやいた。確かに、交通の便を考えるとって、この話はもうしたか。

「もしかしたら、ここが魔科学時代の研究所、アルタミラ、北京郊外、アメリカ西海岸と同じような場所じゃないかな？　もしそうなら、悠人の言うようなことを考えても、この場所のセキュリティが生きている証明にもなるし」

あれ？　話がうまくわからなくなった。よく考えよう。

この地はもしかしたら、研究所かもしれない。でも、どうして、その話になったのだろうか。あっ、そっか。僕がセキュリティシステム起動したと言う言葉を聞いたことをリリーナに話したからだ。だから、未だにセキュリティが生きているのはアルタミラのような魔科学時代の研究所であった可能性があるということね。うん、納得。

『侵入者を確認。セキュリティシステム起動』

うんうん。こんな感じで鳴っていたよね。あの時も。あれ？

「危ないよね」

僕がポツリと呟き、上を見上げた瞬間、僕達は同時に洞窟の外に走り出した。

だって、天井が落下してきたから。まるで、あの写真自体がトラップであったかのように。

僕達は全速力で洞窟を駆けて外に飛び出した。鈴はリリーナが抱え

ている。

飛びだしたと同時に凄まじい量の粉塵が洞窟から飛び出してくる。
そして、何かが崩れる音。どうやら洞窟も崩れたらしい。

僕達はそのまま勢いよく崖から飛び降りて、崖からも距離を取った。

そして、小さく息を吐く。

「トラップってあんなに酷いものだったっけ？」

僕が知る者には天井が落ちてきて踏みつぶすようなものが存在することを知らない。

「でも、宝探しっぽいな。天井が落ちてくるって」

対する浩平さんは目を輝かせていた。それに僕は小さくため息をつく。

アル・アジフさんにどう報告しよう。

第百三十二話　放課後の行動　秘密の地（後書き）

次に出すトラップはどうしよう

第百三十三話　放課後の行動　買い物（前書き）

今度は買い物風景。何か違和感があるなら作者が買い物に出掛けないから（笑）

第百三十三話　放課後の行動　買い物

女性が三人いればかしましいという話は聞いたことがあるが、それなら、女性が五人いたらどうなるか。

結果はとてもうるさい上に振り回される。

「なあ、孝治」

オレは小さく溜息をつきながら天井を見上げていた。隣の椅子に座る孝治は読書をしている。

タイトルは「老後の暮らし方」。早すぎじゃね？

「なんだ？」

「お前は何か買うもんねえのか？　ちなみにオレはねえから」

近くに男性用のコーナーはある。コーナーはあるのだが、如何せん、値段が高い。

ユクニロで十分なのに。

「ユクニロで十分だ」

「オレと同じか。つか、オレ達って同年代の中じゃダントツで稼いでいるのに節約思考ってどうよ」

服はユクニロ。文房具は百均。食料はスーパーの特売。

そう考えるとオレ達が稼いでいる意味があるのか疑問に思ってくる。
まあ、使い道がないのはオレくらいだけどな。

孝治も周隊長もそれぞれの理由でお金を使っている。それと比べたらオレは、

「節約思考は悪くない。悠聖の場合は俺や周より稼がなくてもいいとは言え、理由がある。そこまで自分を卑下にするな」

「わかっているけどよ、何というか、オレが『GF』に入っている理由と、お前らが入っている理由はちょっと違うからさ。本当なら、オレはお金を稼がなくていい。でも、フィネーマがいたからな」

あいつがいたから今のオレがいる。今のオレが。

「俺は出会ったことがないな。周はあると聞いていたが」

「まあな。フィネーマと契約していたのは孝治と知り合う前。ほんの少しの間だけだ。でも、そのほんの少しの間でも」

「悠兄、孝治さん、お待たせ」

オレはその言葉に言おうとした言葉を呑み込んで前を見た。そこには買い物袋を持った七葉と中村の姿がある。商品に隠れるようにして優月の頭が見える。

オレは周囲を見渡した。

「冬華とアルネウラは？」

「二人共、個人的な買い物をしているよ。あっ、優月。悠兄に見せてあげなぁ」

七葉がにこにこ笑いながら優月に近づく。優月は顔を真っ赤にして首を横に振っていた。

それを見た中村が苦笑する。

「気持ちはわからんでもないけどな。孝治だってよく似た光景は知っているやろ？」

「あの時のお前は可愛いかった」

その言葉に中村の顔が真っ赤に染まる。

恥ずかしがっているわけじゃない。怒りで顔を真っ赤にしているだけだ。

だって、孝治は未だに本を読んでいるのだから。

「孝治？　人と話す時は目を見て話せって習わんかった？」

「何を当たり前のことを。だが、今の俺は読書に忙しい」

「ほう」

中村が指をバキボキ鳴らす。こういう時だけ中村は格闘強いよな。戦闘中は出来ないのに。

すると、ようやく七葉が優月を引っ張り出した。その姿を見たオレ

は完全に固まる。

孝治も微かにそれを見て固まっていた。

そこには清楚なワンピースを着た優月の姿があった。元から雰囲気が清楚だったからか、イメージにぴったりな衣装でとても似合っている。

だから、オレは思わずかけてやる言葉を忘れていた。

優月の顔がさらに真っ赤に染まって七葉の後ろに隠れる。

「優月、悠兄にしっかり見せないと」

「ううっ、恥ずかしいよ」

「大丈夫だって。悠兄、感想を言ってあげなよ」

七葉がウインクしながら言ってくる。確かに、こういう時は言ってあげないとな。

「似合っているよ、優月」

「ほ、本当に？」

「うん。似合っていて、言葉を失うくらい綺麗だったから」

その言葉を聞いた七葉がクスッと笑みを浮かべて優月をオレの前に立たせた。オレも優月も顔が真っ赤だ。真っ赤だけど、オレは優月から目を離せない。

「冬華ちゃんやアルネウラちゃんから勧められたものもあったけど、私は、これが気に入ったから」

「似合ってる。本当に」

まるで、フィネーマを彷彿とさせるようだった。でも、オレはそれを口にしない。口にしたら何か崩れるような気がしたから。

孝治が本をポーチの中にしまう。

「素晴らしいな。ここまで調律のとれた組み合わせは少ない」

出た。孝治の悪い癖。

「元のイメージが清楚であり、それを狙って清楚なワンピースを着る選択肢は何ら間違っていない。だが、一番はそれを恥ずかしがるように大切な人に見せる瞬間か。その時に君の全てが融合し、誰をも魅了するような魅力を発揮する。そう、これこそが神から認めげばっ」

見事なストレートが孝治を吹き飛ばしていた。もちろん、放ったのは中村だ。あまりの高速さに周囲にいた人達が拍手する。もちろん、中村の顔は瞬間沸騰。

孝治は相変わらずこういう状況には自分なりの解説をする。いつも中村に殴られて最後まで聞いたことがないけど。

「孝治、うちの時は一度もしてくれたことなかったよな？」

「よく聞け。ベッドのうっ」

どうして女の子はここまで容赦なく股間を蹴り上げることが出来るのだろうか？

『ここは便乗すべきかな？』

「止めておきなさい」

「お帰り」

オレは今起きたことを忘れて戻ってきた冬華とアルネウラに話しかけた。

二人は優月を見て小さく頷いている。

「やっぱり似合っているわね。私達が言ったものは？」

冬華が不思議そうに尋ねると、七葉が持っていた買い物袋を掲げた。

それを見て二人は嬉しそうに笑みを浮かべる。

「着る服はいくつかあったらいいなと思って」

『買ってくれたんだ。ありがとう。ふふっ、これで三人でおしゃれ出来るね』

「おしゃれなんて子供のすることよ」

冬華が恥ずかしそうに言うと、アルネウラはクスッと笑った。

『化粧品買ってきたくせに？』

冬華の肩がピクリと動く。それを見たアルネウラは意地悪そうに笑みを浮かべた。

『何回も、何回も迷ってたよね？　どれが悠聖の好みに合うか』

「うがぁぁ！！」

冬華は神速の速さで刀を取り出して抜き放った。七葉が小さく溜息をつきながら槍を取り出して頸線に変えて冬華を拘束する。

冬華のスピードもすごかったけど、七葉のスピードはさらにすごかったな。

「冬華さん、みんな見てるよ？」

「ごめんなさい」

冬華は顔を真っ赤にして刀を戻した。アルネウラはクスクス笑っているが、オレは小さく溜息をついて拳を落とす。

『あうっ』

涙目になりながらアルネウラが視線で抗議してくるが、オレはまた溜息をついて拳を落とした。

「やりすぎだ」

『だって、可愛かったから』

アルネウラがそう言うと冬華がピクッと肩を震わせた。確実に怒っている。

だから、オレは苦笑しながら冬華に近づいた。

「大丈夫だって。冬華は普通に可愛いよ」

オレがそう言った瞬間、七葉と中村が呆れたように溜息をついた。だけど、その口元は苦笑している。

すると、誰かに袖を引っ張られる。

「私は？」

不安そうな顔をした優月。

あれ？　もしかして、選択肢間違った？

「可愛いけど」

『私は？』

来ると思いました。

「お前もな」

『扱いがぞんざいな気がするけど？』

「気のせいだ」

二人の苦笑はこういうことだったのか。オレは小さく溜息をついた。

「買い物が終わったなら外に出ようぜ。いい加減、ここは人目につく」

オレはそう言って歩き出した。この店での買い物は終わったはずだから、次はあっちの店か。

長丁場になるだろうな。

第百三十四話　放課後の行動　ゲーム（前書き）

久しぶりに戦闘を書いたら結構疲れますね、これ。

第百三十四話　放課後の行動　ゲーム

和樹が放った渾身の強打技をオレはカウンターで返していた。和樹が操るキャラクターが場外を吹き飛びライフも吹き飛ぶ。

戦闘が終わり、画面が変わった。結果はオレの勝利。

オレは和樹の家でゲームをしていた。国民的人気格闘対戦ゲームで、手軽な操作でやりやすい。やりやすいのだが、

「和樹、弱いな」

オレはポツリと呟いた。

説明書やキャラの操作方法と技を覚えて最初の対戦。和樹はオレが初めてだから手加減すると言っていたが、結果はオレの圧勝。

とりあえず、勘を頼りにひたすらカウンターと強打技を放っていたらいつの間にか勝っていた。

「ば、バカな。ありえん。全国トップクラスの腕前の俺が負けるだと」

「そうなのか？」

オレは少し驚いて和樹に尋ね返していた。だが、和樹は両手を床について落ち込んでいる。

「ああ。和樹はこのゲームで全国大会決勝まで勝ち進んでいる。そ

れほどこのゲームの達人だ。俺も手加減してもらわねば勝てん」

問いの答えを返してくれたのは俊輔だ。オレは少しだけ首を傾げる。

普通、初めてゲームをする人物が全国トップクラスに勝てるだろうか。ありえない。

「全国も対したことがないな」

「周の反応速度が反則なだけだ。こっちの強打技は全部カウンターで跳ね返されたぞ。なんなんだよ、それ」

「確かに、見事なカウンターだったな。あらゆる行動を先回りしたとしか思えん。周よ、どうやった？」

「どうやったって、感覚」

何となく、嫌な気分がしたからカウンターをしたら見事に決まったとしか言えない。

どういう原理か全くわからない。

「まあ、周だしな。俊輔も混じってやろうぜ。チームはランダムで」

「いいな。だが、そのチーム編成で大丈夫か？」

「大丈夫だ。問題ない。ＮＰＣのレベルを上げて、よし。もう一回だ」

オレ達が画面に向き直る。

オレが使うキャラクターは、刀を扱う亡国の王子。ドライブ状態に入れば二刀流にもなれる。絶対、ギルバートさんが元ネタだよな。

和樹が使うキャラクターは、黒いゴスロリ服を纏った鎌を持つ少女。さっきも使っていたので、瞬間移動とリーチのある攻撃が特徴がわかっている。多分、元ネタはレノアさん。

俊輔が使うキャラクターは、真っ黒な服装をした暗殺者。元ネタはわからないけど素早さそうだ。

ＮＰＣは何かの動物。でも、見たことのない動物だ。

そして、画面が変わる。チームはオレ、俊輔。和樹とＮＰＣ。

前方にはＮＰＣの姿がある。距離は人十人くらい。この距離ならあの技だな。

ルールは相手を二回倒せば勝ち。ライフを減らすか場外に吹き飛ばすか。

ステージは上下の二層に分かれていて、上は壁など障害物が多いが吹き飛ばしやすい。下は天井が低く吹き飛ばしにくいがライフは減らしやすい。

そして、戦闘が始まった。

スタートした瞬間に手元にあるコントローラーの×ボタンを押した。キャラクターが白い刀を振り上げる。すると、鋭く伸びた斬撃がＮＰＣを直撃し浮かせた。

そのまま横〇ボタンの強打技を叩き込む。

白い刀を鞘に戻し、黒い刀を抜き放って振り下ろす。どう考えても白百合流黄泉送り『陽炎』と同じ動きだが、ゲームだから気にしないでおこう。

ＮＰＣが面白いように吹き飛んでステージ端に近い壁にぶつかる。オレはすかさずキャラクターを動かして距離を詰めた。

小ジャンプで浮いているＮＰＣに合わせてキャラクターを動かし、〇ボタンを連打する。

キャラクターはＮＰＣを三回蹴りつけて着地した。そのまま上〇ボタンの強打技を叩き込む。

白い刀を上を向きながら振り上げ、そのまま元の軌道で振り下ろす。

もちろん、ＮＰＣは高く打ち上がった。

相手のライフは四分の三くらいで、状況から考えて場外に吹き飛ばした方が早い。

落下してきたＮＰＣにオレは飛んで横〇ボタンを押した。黒い刀がＮＰＣを微かに吹き飛ばし、横二連打でキャラクターを吹き飛ばした方角に動かす。そして、下△ボタンを押した。

キャラクターが黒い刀を振り上げたまま空中なのに飛び上がり、そのままＮＰＣを振り下ろしで斬りつける。地面に当たった瞬間、衝撃波がＮＰＣを場外に吹き飛ばした。

まずは一体。

オレは和樹と俊輔の位置を見た。二人が戦っているのは下の層だ。ただ、俊輔のライフが四分の一まで減っている。

このまま向かっても俊輔のライフが削られて終わるだけだろう。だから、オレはＲ１ボタンとＬ１ボタンに□ボタンを同時に押した。

キャラクターの体が動作と共に青い光を放つ。

これがドライブ状態だ。ゲーム中に一回しか使えない強力な状態で、攻撃力からリーチまで大きく変わる。

このキャラクターの場合は攻撃力と防御力が激減する代わりにおかしな射程のリーチを発揮する。

○ボタンを押すと、キャラクターが黒い刀を抜いて振り切った。そして、階層すら違う和樹のキャラクターのライフが微かに減少して空中で動きを止める。

そのままオレは×ボタンを連打した。白い刀を抜いて目の前にいる敵を滅多斬りにするように振りまくる。だけど、当たるのは和樹のキャラクター。

原作再現というより現実再現をしているようだが、再現度はいまいちだ。現実ならこの連撃一打目で確実に倒している。

×ボタンと○ボタンを三：一の割合で連打しながらオレは残りのドライブ時間とＮＰＣの位置を確認する。

復帰したＮＰＣはこっちに向かって来ている。そして、空中から雷球を放ってきた。変わりに放つのはカウンター。

雷球が直撃した瞬間にカウンターが発動し、返しの刃が放つ衝撃波がＮＰＣを吹き飛ばした。それと同時に○ボタン、×ボタン、□ボタン、△ボタン、Ｒ１ボタン、Ｌ１ボタンを同時に押す。

画面の動きが止まり一気に暗くなった。その中で残っているのはオレのキャラクターとＮＰＣ。

キャラクターが地面を蹴り、ＮＰＣの横を駆け抜けると同時に剣を振り抜いていた。白と黒が合わさった剣。そして、キャラクターが振り返り、大上段から剣を振り下ろすと、凄まじいエフェクトと共に衝撃波がＮＰＣのライフを鬼のように削り取る。

このキャラクターはドライブ状態でのカウンターダメージが通常の五倍で、カウンター後のボタン同時押しで秘奥義と呼ばれる最大の技が放てる。ただ、タイミングが難しくて放てないと聞いていたけど簡単に放てた。

画面が元に戻り、ＮＰＣが地面を転がる。

オレはすかさずキャラクターを動かして虫の息だったＮＰＣのライフを斬り裂いた。それと同時に俊輔のライフがゼロになる。

「後は和樹だけだな」

「マジかよ。なんつう瞬殺。確かにそいつは強キャラだけど、秘奥義の発動タイミングが難しすぎて、公式の動画にすら無かったのに」

「確かに、初めて秘奥義を見たな」

そんなに難しいものだったんだ。

「しかも、ライフが一つも減ってねえ。だが、ドライブを一回残している俺に勝てるかな？」

和樹がキャラクターを動かす。

強打技自体が横に大きく動くものだから凄まじい速度で上に上がってくる。だけど、オレの視線は画面ではなくボタンによるキャラクターの動きが乗っている本を見ていた。そして、一文の説明から何となくで連撃を考える。

和樹は強打技で突っ込んできた。おそらく、寸前で動きを止めて○ボタンからの連撃に入るつもりだろう。だから、オレはすかさず下○ボタンを押した。

キャラクターがしゃがみ込み、足下を斬りつける。やはりというべきか、目の前で止まった和樹を剣が斬り裂く。そのまま横二連打で和樹の背後に回り込み、×ボタンで斬り上げた。

そのまま横△ボタンを押し、黒い刀の二連撃が和樹のキャラクターを吹き飛ばす。吹き飛ばした瞬間に横二連打で技キャンセルと距離を詰め、×ボタンでさらに打ち上げた。

打ち上げたところで横○ボタンによる強打技で場外に飛ばす。

後一体。

「いやいやいや。何そのコンボ。大ダメージかつ吹き飛ばし属性のある△ボタン系列の技キャンセルと共に○ボタン強打の組み合わせだと。そんなコンボ見たことがないぜ」

「実際に、このキャラクターは唯一のカウンターと高い攻撃力にトップクラス速度を持つため使われいた。そのコンボは重量級が狙うコンボだな」

オレは戻ってきた和樹に斬りかかりながら答える。

「案外簡単だけど。×ボタンからの○ボタン強打が使いやすいから、それを応用して、×ボタン浮かし、△ボタン吹き飛ばし、技キャンセルと距離詰め、×ボタン浮かし、○ボタン強打の連撃は決めやすいし」

オレはそう言いながらさっきと同じ連撃を叩き込んだ。でも、○ボタン強打を空中の緊急回避で避けられる。

避けられたとしても同じように連撃を叩き込めるけど。

和樹のキャラクターが完全にオレのキャラクターにお手玉される。今度は○ボタン強打を壁にバウンドさせ、ひたすら同じ連撃を叩き込んだ。

ライフをあっという間に削り取り、戦闘が終わる。結果はオレ達のチームが勝利した。

「こんな感じだな」

「ふふっ、俺のプライドが砕け散った」

和樹がまた両手を床についていた。まあ、オレのキャラクターはライフが減ってすらいないし。

「和樹、今の画像は撮っていたか？」

少し呆然としていた俊輔がハッと我に返って和樹に尋ねた。和樹は落ち込んだ体のまま親指を立てる。

「当たり前だ。これをネットにうぷしたら結構行くんじゃね？」

「うぷ？」

オレは聞き慣れない言葉に尋ねていた。和樹が体を起こす。

「ネット上に動画を上げるんだよ。ちょっと待ってろ」

和樹がパソコンを立ち上げる。素早くキーボードに手を走らせているが何をしているかわからない。

あれよあれよと言う内に、和樹が満足そうにエンターキーを押していた。

「ふう、完成だ」

「ネット上に上げたのか？」

オレには仕組みがよくわからない。ネットを使うことがほとんどないからな。ほとんどレヴァンティンでやっているし。

「ふっふっふっ。反響が楽しみだな。加工すら一切ない連続コンボ。そして、秘奥義もある。小一時間すれば感想が来るだろ。周、もっとやろうぜ。あっ、ただし、別のキャラを使ってくれ」

「望むところだ」

オレはそう言いながら他のキャラクターを選び始める。

こういう風にみんなでゲームするのは悪くないな。

第百三十四話　放課後の行動　ゲーム（後書き）

時間を動かすために周、悠聖、悠人視点をぐるぐる回していきます。

第百三十五話　放課後の行動　市街

オレは孝治と一緒にベンチに座っていた。右手にあるのはクレープだ。待っているのが暇だったので二人で仲良く並んでクレープを食べている。

オレは空を見上げながら息を吐いた。

「平和だな」

その呟きは今までの狭間市と、今までのオレの人生の二つから言っている。

周や孝治ほどではないが、オレもかなり忙しい方だったと思う。常に戦いというのは無かったが、他の精霊使いと会ったりして精霊についての意見を交わすためによく動いていた。

だからかわからないが、本当に心休まる時間はほとんど無かったように思える。

だから、こういう状況にいるオレはそう言った。その言葉に孝治も賛同する。

「そうだな。こういう平和は悪くない。悪くないが、スルメが食べたくなってきたな」

「いやいやいや、クレープ食べながらスルメを食べたいってどういうことよ！？」

「無いか？　甘いものを食べていたらスルメが食べたくなることが」

「どこぞの酒のつまみだよ」

相変わらず、孝治の食べ物に関するこだわりがよくわからない。

孝治は本気で酒のつまみ関連が大好きだからな。実際にピーナッツやスルメをたくさん買い置きしているくらいに。

オレは基本的にこだわりはない。野菜には胡麻ドレッシング以外認めないことを除けば。浩平のマヨネーズ派とは相容れない存在だ。

周はそのままだけどな。

「ピーナッツの悪くない」

「ナッツにしとけ」

それならクレープに入るから大丈夫だ。

「そうだな。クレープを食べながらナッツの山を崩していく。ふっ、いいな」

「クレープに入れるっていう選択肢はないんですかね！？」

孝治の中ではクレープにナッツが入っているんじゃなくて、クレープとナッツが山のように入った皿を想像しているらしい。

相変わらずわからない。

「悠聖、諦めや。この孝治に何を言ってもあかんから」

いつの間にか中村がクレープを片手に戻ってきた。オレ達のクレープは普通にトッピングはほとんど無しだが、中村のクレープはトッピングを山のように乗せている。そう、入っているではなく山のように乗せている。入りきらなかった部分が。

オレはゴクリと唾を飲み込んだ。

「いくらしたんだ？」

「１３５０円やで」

ちなみに、オレ達のクレープは一番安い２５０円だ。五倍以上って、それはそれですごいけど。

「いただきます」

中村が孝治の横に座ってクレープにかぶりつく。かじりつくと言いたかった、見た目から不可能だ。

「光、他はどうした？」

孝治はカバンの中を漁ってスルメを取り出しながら中村に尋ねている。ちなみにオレは呆れて何も言えない。

まさか、マジでクレープと一緒にスルメを食べるとは。

中村が食べていたクレープを飲み込む。ただし、味わってからだから少し時間がかかった。

「新しい下着を見に行ったで。うちはお腹が好いたからクレープを食べに」

下着ということはそっちに向かうことは難しいか。というか、服買う前に下着を見に行けばいいのに。

オレは小さく溜息をつきながら立ち上がった。

「どこ行くん？」

「ちょっとそこら辺をな。そんなに時間はかかんねえよ」

そう言いながら歩き出す。

ここは比較的被害が少なかった場所だから痕跡はほとんど残っていない。

やっぱりと言うべきか、職業病と言うべきか、戦いの地を見るとどうしても戦っていた時を思い出してしまう。

多分、周達も同じだろう。

今はみんなで買い物だと言うのにな。

「平和ってのも慣れてないものだな」

「本当の意味での平和な世界は存在しないよ」

その言葉にオレは振り向いていた。クレープを片手にこちらに話し

かけてくる女性。トッピングにバナナが入っているということは周と同じ好みか。

女性はクレープをはむっとかじりつく。中村とは全く違って可愛らしさがあるな。

「平和というのはあらゆる争いの無い世界。競争すらも。この意味が君にはわかるかい？」

「当たり前だ。人間、ずっと競争の中で生きているからな。文字通りの戦争しかり、受験戦争しかり。出世だって競争だ。人より優れたことをしなければならない。この世から競争は取り除けない」

「そう。平和の意味を体現した世界は停滞する世界と同意義。でも、君達はその平和を何故求める？」

女性がオレに向かって何を言いたいかはわからない。わからないけれど、大切なことを伝えたいみたいだ。

オレは質問の答えを考える。でも、考えることなく答えは出来ていた。

「希望、だからじゃないか？」

「希望？」

女性がかすかに驚いた。予期しない答えだからだろう。

「今を戦っているから、平和な世界を夢見る。そこに進む希望があるから。それは望みでも将来への明るい見通しでもどちらでもいい。

今のオレ達がやっている意味がそこに存在すると思えるから」

「夢、とは違う。面白い回答だ。そういう回答がくるとは思っていなかったよ。おや、君の待ち人達が来たみたいだね」

その声に女性が向いている方向を向くと、七葉がこちらに駆け寄ってくるのがわかった。その後ろには冬華達がいる。

七葉はオレに近づくとそのまま通り越して女性の前に立った。

今気づいたが、戦闘態勢寸前だ。

「正、何しに来たの？」

その言葉に女性が軽く肩をすくめた。

「おや、君の関係者だったかい？　それは君にとって失礼なことをした」

この女性と七葉が知り合いだということはわかるが、七葉から出ている尋常じゃない怒りはなんだ？

殺気に近い何かのようにも見える。

七葉はズボンのポケットに入れかけていた手を下ろした。女性がクスッと笑みを浮かべる。

「どういうつもり？」

七葉が話しかける。だが、警戒は全く解いていない。視界の隅で孝

治がいつでも弓を取り出せるようにしているが、この距離なら間に合わない。

すると、女性はオレや七葉ではなく冬華達の方を向いた。

「白川悠聖」

唐突にオレの名前が呼ばれる。

「君は、選択を強いられた時、何を取るのかい？」

「選択？」

「そう。いつか君は選ばなければいけないとしたら、君はどうする？」

女性が薄く笑みを浮かべる。まるで、挑発するように。

「全てを助ける」

オレは迷うことなく答えていた。

多分、周も同じように即答しているだろう。例え、二兎を追いかけるようなものだとしても、捕まえられる力があればいける。

そう確信しているから。

「その答えが聞けて僕は満足だよ。では、また会おう。白川悠聖。そして、空に浮かぶ優しい月よ」

女性が背中を向けて歩き出す。だが、七葉は動かない。いや、動けないというべきか。

女性が背中を向けた瞬間に強烈な殺気が襲いかかってきたからだ。オレや孝治、冬華とアルネウラぐらいしか、今、この場から動けないだろう。

七葉には到底無理だ。冬華やアルネウラは優月がそばにいるから動けない。オレと孝治は状況を判断して動かない。

今動けば周囲にいる一般人にも危害が及ぶ可能性だってある。女性はそのまま路地裏に入って行っているから、このまま見ていた方がいいだろう。

女性が路地裏に消える。それと同時にオレと孝治は肩の力を抜いた。

「何かあったん？」

そんな中、中村一人だけが呑気にクレープを食べ続けていた。オレや孝治は完全に忘れていたというのに。

「何でもない」

孝治が小さく溜息をつきながらスルメを口に運ぶ。そして、よく噛んでからクレープにかぶりつく。

『優月、クレープ食べよ』

すると、オレ達の前を優月の手を引っ張るアルネウラが通り過ぎた。

「クレープ？」

『うん。おいしいから』

どうやら優月をオレ達から離してくれたらしい。

オレは小さく溜息をつく。

「七葉、あの人は？」

「知り合い。でも、味方じゃない」

七葉がオレに背中を向けたまま答える。あそこまで七葉が警戒している以上普通じゃないということはわかるけど。

すると、冬華が七葉の肩を優しく抱いた。

「悠聖、今は聞かないであげましょ。一番混乱しているのは七葉のはずよ」

「冬華さん」

「今は無理に言わなくてもいいわ。落ちついたら話して欲しいの。私も、悠聖も、あなたのことが心配だから」

すると、七葉が嬉しそうに笑った。嬉しそうに笑って、

「こんなお姉ちゃんがいたらな」

「なんだよ。オレっていう兄はダメなのか？」

そう尋ねてみると七葉は速攻で頷きやがった。兄としては少し、いや、かなりショックなんだが。

すると、七葉が意地悪く笑みを浮かべて、

「兄としてじゃなくて、従兄としてなら最高だよ」

その言葉にオレは微かに少しだけ下がってしまった。こいつ、まさか、

「そういう意味じゃないよ。そういう意味じゃないからね。でも、悠兄は優しすぎて、なんでも頼ってしまいそうだし。自分がダメになるくらい」

そう言うと七葉は歩きだした。オレと冬華は今の言葉に思わず顔を見合わせてしまう。

そして、冬華が不機嫌そうな顔になった。

「何よ、犯罪者」

「いやいやいや。何故に犯罪者？　オレは何もしてねえだろ」

「ふーん」

「冷たい目でオレを見ないでくれ」

冬華はそっぽを向くと歩き出した。いつの間にかオレの味方がそばにいなくなっているような。オレはい小さくため息をついて指輪型

のデバイスを見る。

左手の薬指にアクセサリーとしてよく付けているからか、婚約していると間違われる。でも、本当ならどれだけ良かったか。

「お前が懐かしいよ。フィネーマ」

第百三十五話　放課後の行動　市街（後書き）

悠聖と正の初めての出会い。全く予定に無かったことを書いてしまった。本当なら第二章で出会わす予定だったんですけどね。

第百三十六話　放課後の行動　新技（前書き）

周が新技について考える話です。

第百三十六話　放課後の行動　新技

オリジナル魔術の作り方は結構簡単だ。既存の魔術に少し改良を加えればいい。もちろん、相応の知識は必要だが。

だが、オリジナル剣技となると話は違ってくる。

世界中に何億という剣技（武器は剣のみではない）が存在する。白百合流や白楽天流など、レベルが極めて高いものから、基本的な剣道のような一般的なものまで様々だ。

普通に剣を動かすだけらならどれかに被る可能性が極めて高い。もちろん、アクロバティックな動きを加えたら被ることは無いだろう。

ただ、実用性も兼ね揃えた場合、オリジナル剣技はほぼ存在しないに等しい。

一応、オレが知るオリジナル剣技は８つ。もちろん、オレの『破魔雷閃』はそれに入る。

例を上げるなら、蒼炎が立ち上る剣を回転しながら振り回し、敵に叩きつける力技。よく似た技は存在するが、蒼炎が飛び散るのではなく、矢のように鋭く貫くため、他とは勝手が違う。

他には斬撃と共に周囲の時を止める氷属性最強の技など。

このように、魔術関連を組み合わせたならオリジナル剣技は作ることが出来る。ただし、かなり難しい。

オリジナル剣技は基本的に武器の特性を利用した技。一部例外はあるが、オリジナル剣技は基本がそれだ。それなんだが、

「どうして振り下ろした剣の動きに反して炎が相手に喰らいつくんだ？」

オレはどうしても疑問に残ることを口に出していた。手に持つコントローラーを動かしながら。

「いきなりどうしたんだよ」

和樹がオレの放った炎を回避して攻撃を叩き込んでくる。オレのキャラクターは大きく吹き飛んだ。

「いや、剣の動きと炎の動きが違うことに疑問を思ってな。こんな動きは現実で不可能だぞ」

「これ、ゲームだからな」

和樹が呆れたように言ってくるがオレは納得出来ない。

剣を地面に叩きつけて衝撃波を放つ剣技は存在する。かなりメジャーな技ではあるが、放つための隙が大きすぎるためほとんど使われない。

それの応用だと考えても、炎が襲いかかる方法がない。慧海なら可能かも知れないが、それこそ剣頼りになる。

キャラクター選択画面で新たにキャラを選びながらオレは唸る。

「魔術を一緒に使うのか？　破魔雷閃のように」

オレのオリジナルである破魔雷閃は魔術であり剣技。雷の上級に位置する『稲妻の斧』と白百合流燕返し『無名の太刀』を合成させたものだ。

言うのは簡単だけど、行うのは不可能に近い。レヴァンティンがあったから出来たが、並みのデバイスを使っていたなら確実に使用出来ない。例え、いくら用意したとしても。

そうなると、やる方法はかなり限定されてくるな。

「何が何やらさっぱりわからん」

「あのな」

和樹が呆れたように語りかけてくる。

「ゲームの現実性を証明しようとしながら鬼みたいなコンボ叩き込んでくるのを止めてくれ」

オレが操っているゴリラのキャラクターが和樹の配管工のおばさんを場外に吹き飛ばした。

今のコンボは言うほどではないのだが。

「そうか？　コンマ一秒以内にキャンセル移動させればやりやすいぞ」

「普通の人はコンマ一秒単位で操作出来ないんだよ！」

オレでもほんの数回操作をミスったことはあるけどな。でも、あんまり難しいものじゃないと思っていたけど。

試しにもう一回同じやり方をしてみる。

○ボタン二連打から下×ボタンで浮かしてキャンセル移動の後、横△ボタンで吹き飛ばした瞬間にキャンセル移動を行って横○ボタン強打を叩き込む。

普通に出来る。

「ふむ、公式ですらお目にかかれないコンボだな」

「後、個人動画にもな。こんなコンボは全国のつわものでもしないぜ。せめて、横△止まりだ」

「そうなのか？」

オレは驚きながらも指を素早く動かしていく。

掴みかの後ろ投げで下△ボタンの叩きつけ。すぐさま下○ボタン強打で水平に飛ばして壁バウンドを起こす。横△ボタンで再度吹き飛ばしてキャラクターをキャンセル移動で後ろに下がらせる。そして、とどめの上△ボタンによる吹き飛ばし。

和樹のキャラクターが星になった。

「・・・・・あのさ、そのコンボはおかしくね？」

「そうか？　壁バウンドは上手く使えばコンボが繋がるし、吹き飛ばしてもキャンセル移動で繋げるのはたやすいから」

「その言葉、全国出場した人全員倒してから言ってみたらどうだ？　全員キレると思うぞ」

オレは呆れたようにため息をついた。

「誰がそんなことをするか。そんな暇があるなら新技でも開発しておく」

「ほう。まだ新技を開発しようとするのか。今で十分な実力があるんじゃないのか？」

「まあな」

オレは頷きながらコントローラーを手放した。ゲームをしていたらとても目が疲れてくる。軽く肩を回して小さく息を吐いた。

「でも、オレが一番得意なのは多対多。大規模戦闘だ。でも、一対一になると、オレはまだまだの実力だからな。強くなるためには一対一で力をつけないと」

「新技ね。そうぽんぽんと出るものじゃないのか？　オリジナルは作りやすいとか言ったかったっけ」

「オリジナル魔術な。オレはオリジナル剣技を作り出したいんだよ。白百合にも限界がある」

すると、和樹が不思議そうに首をかしげた。

「でもよ、白百合流って世界最強の剣技だって聞くけどどうなってんだ？　白百合さえあれば十分じゃないのか？」

「それ、音姉の化け物じみた実力からだから。実際、白百合流は人をかなり選ぶ。極めたら最強だけど、その位置にいるのはたった一人だけ。実際の中身は並みの人間じゃ扱えない暴れ馬」

「それを周は使えるんだろ？　十分じゃね？」

「オレが使えるのは秘技レベル。そこまで強いものじゃねえよ。だから、上限がある。音姉みたいにほとんど全ての白百合流が使えれば話は変わってくるけどな」

白百合流は術技、秘技、双技の三つ。双技は基本的に白百合家直系にしか継承されない。だから、秘技までなのだが、双技までは実力者を完全に仕留めることは難しい。

だから、様々な剣技をがむしゃらに習得した。使える魔術を貪欲に吸収した。

強くなるために。でも、今では限界が見え始めている。

「だから、戦場で使える新しい技が欲しいんだ。出来れば、オリジナル剣技」

「ふーん。だったら、ゲームを参考にしたらどうだ？　ゲームの技なんて非現実性の塊だからよ、それを現実のものにできれば大きなメリットになるんじゃね？」

「そうだよな。でも、それが実戦に使えるか使えないかは大きく分かれる。実戦で使ってみないと使えるかは分からないからな」

オレはそう言って大きく息を吐いた。そのまま新しくキャラクターを選ぶ。

破魔雷閃はぶっつけ本番にしてはかなり強力なオリジナルだ。デメリットが少なく使いやすい奇跡のような存在。それと似たものを作らないといけない。やるとするなら、高速化か、攻撃範囲を大きくするか。

オレが選んだキャラクターはどこかの国の姫様のようだ。ただ、水のようなものを纏っている。和樹が選んだのは両手剣を持った剣士。和樹の得意キャラクターらしく、亡国の王子以外は勝率が負け越している。俊輔は配管工のおばさんだ。

ゲームが始まる。

オレはすかさず×ボタンを押した。

姫様が纏っている水が地面に吸い込まれ水柱と共に正面にいる和樹を狙う。

これは水属性剣技の基本技である水流剣。正面に水柱を直進させる基本的な技。でも、現実と同じようにゲームでも速度が遅くて和樹が楽々と攻撃を避ける。すると、和樹のキャラクターがいたところで周囲に水柱が立ち上った。

それを見てオレは手を止める。

「これ」

「どうかしたか？」

和樹がすかさず近寄ってくる。キャンセル移動を駆使してどんどん距離を詰めてくる。

「使える」

水流剣はオレも使えるが、よっぽど敵が密集していない限り当たらない。速度が遅すぎるからだ。術者が横一列になって放つなら別だが。

でも、これなら理論上は可能だ。理論上は。

使用するのに必要なものは膨大な演算能力。それこそ、レヴァンティンに匹敵するような、個人が所持できる限界処理をはるかに超えるデバイスの力があれば机上の空論は現実の現象となりえる。

「後で練習するかな」

オレはそう小さくつぶやきながら一方的に切られまくっているオレのキャラクターを見るのだった。

第百三十六話　放課後の行動　新技（後書き）

周の新たなオリジナル剣技はしばらくしたら出す予定です。ゲームとよく似た技になる予定。ただし、規模は段違いになるかと。

第百三十七話　放課後の行動　悠人の力（前書き）

悠人の力について少しずつ語っていく予定です。

第百三十七話　放課後の行動　悠人の力

僕達は小さくため息をついて公園のベンチにならんで座っていた。
理由は極めて簡単。

「疲れた」

浩平さんが小さく声を漏らす。

周囲の視線が痛いけれどあまり気にしてはいられない。だって、自分達の服装を考えれば当り前だと思うから。

「悠人、疲れた」

「私もだよー」

鈴とリリーナの二人が僕の肩に頭を乗せてくる。確かに、疲れた。簡易型とはいえパワードスーツを着込んでいるのに体の疲労、特に筋肉の疲労は限界というべきだろうか。ともかく、本当に疲れている。

あの後、あの謎の部屋が崩落した後に僕達は周囲をとことん探した。周囲にある洞窟をしらみつぶしに回り、奇妙な位置にある場所はくまなく探した。もちろん、崖の途中にある場所でも。

でも、結果は完全な無駄足。何も見つからなかった。見つかったのはあの崩落した部屋だけ。

探索を始めたのは大体三時くらいから。もう五時前だということを

考えるとたった二時間でここまで疲れたということだ。

「鈴の地図が完全に事実だということはわかったけど、これからどうしようか。手掛かりはなさそうだし」

「あの場所を掘り返してみるしかないんじゃないかな？　何か見つかるかも知れないしね」

「それは賛成なんだけど、リリーナ、どうやって掘り返すの？　悠人がフュリアスを使うとか？」

「あはは。それは無理だと思うよ。うん、無理だね」

リリーナが忘れていたという風に笑ってごまかしている。フュリアスはそう簡単に使っていいものじゃない。それに、この地にあるフュリアスはダークエルフのみだ。穏健派が抱える最高峰の技術が使われたフュリアスをみすみす見せるわけにはいかない。

「方法ならあると思うよ。アル・アジフさんと周さんに相談する。僕はそれが一番だと思う」

さすがにあの場所は普通におかしいと思う。材質が全くわからないこともあるけど、天井にあった写真。

五機のフュリアス。そして、真ん中の黒い大きな何か。

あれを見ていたら胸騒ぎがする嫌な予感というべきか。

「アル・アジフさんに相談しにいく？」

鈴がそう言うとリリーナがぶんぶん音がなるくらいに首を横に振った。

「今は中東にいるはずだよ。確か、楓と一緒にだったかな。『ES』の会議とか悠人が言っていたよね？」

「どうしてそんなに必死なのかな？」

「あはは。だって、悠人はアル・アジフのことが大好きだからよくひっついているし。だからね」

リリーナが満面の笑みを浮かべて手を握ってくる。本当なら抱きついてきそうだけど疲れているみたいだ。

鈴が何かに納得したように頷いた。

「わかるかも。えっと、マザコンって言うんだよね」

「ちょっと待って。どうして僕がマザコン扱い？　アル・アジフさんは保護者だよ、保護者」

「そうなの？」

鈴がすごく驚いたような顔になる。僕は小さく溜息をついてリリーナに助けを求めた。

「リリーナ、説明してあげてよ」

「悠人ってマザコンじゃなかったんだね」

「リリーナも！？」

どうやらこの場に味方はいないらしい。

「だったら、悠人の本当のお母さんは？」

鈴の何気ない一言に僕は体を強ばらせていた。リリーナの手を強く握ってしまう。

本当のお母さん。

あんな奴、思い出したくない。

「ごめん。少しの間だけ」

僕はそう言って立ち上がった。そして、歩き出す。

今はみんなから離れたかった。少しの間だけでも一人でいたかった。だから、僕は公園から出る。

そして、近くにあったフェンスにもたれかかった。

周囲に人の気配はない。街の中心から外れているからかもしれないけれど。

「最悪だ」

忘れようとしていたものを思い出してしまっていた。誰にも、アル・アジフさんにも話していないことを。

今でも僕を縛っているあの言葉。

「最悪。自分が、最悪だ。今頃、鈴は後悔しているだろうな。ははっ、僕は、もう、戻りたくないのに」

あの頃を思い出してしまうともう駄目だ。今の日常がどれだけ幸せだったかわかってしまうから。

比べようがないくらい幸せ。

「今は、忘れないと。忘れないと、みんなの前に出られない」

「悠人？」

その言葉に僕は振り向いていた。そこにいるのは都さんと琴美さん。そして、由姫さんと亜紗さん。

都さんが駆け寄ってくる。

「どうして泣いているのですか？」

その言葉で僕はようやく自分が泣いていることに気づいた。いつの間にか、頬に涙が流れている。

「これは」

でも、説明出来ない。説明したくない。絶対に話したくない。

「もしかして、工屋の奴にいじめられとか？」

「違います。違いますけど、今は」

今は一人にして欲しいと言おうとした。だけど、それより早く都さんが僕を優しく抱きしめてくれる。

まるで、母親のように。

「大丈夫ですよ。大丈夫です。ここに悠人を害する人はいません。いたとしても、私が、私達が守りますから」

「都、さん」

「大丈夫ですから」

僕は涙をこぼした。でも、声には出さない。だって、僕は男の子だから。

「ねえ、都」

すると、琴美さんの声が聞こえてきた。都さんが振り返る。

「都ってショタコン」

その言葉に都さんが一瞬固まってそして、

「そんなわけありません！　確かに、悠人は可愛いですし、弟の様ですけど、私が好きなのは周様で、私はショタコンではありません。決してです！」

すごく慌てて琴美さんに詰め寄る。都さんは周さんのことが好きだ

からこういう風に言われると怒るのだろう。怒っているようには見えないけど、多分、怒っている。多分。

僕はそれにクスッと笑ってしまった。都さんに詰め寄られている琴美さんが安心したように笑みを浮かべる。

「決して私はショタコンではありません。わかりましたか！？」

「都、そろそろ落ち着きなさい。みんな見ているわよ」

その言葉に都さんがハッとして周囲を見渡す。でも、周囲には誰もいない。それに気付いた都さんが琴美さんを睨みつけようとするが、その時には琴美さんは僕の手を取っていた。

「この人は危ないから近づいたらだめよ」

「琴美！」

その声を聞いた琴美さんが都さんの方を向いて固まった。僕も振り返ってみると、そこには杖を握った都さんの姿が。

周囲に魔力が渦巻いている。目に見えるくらいに濃密な魔力が。

「今日という今日こそは許しません！」

都さんが杖を振り上げる。

「落ちついてください」

すると、呆れたような声と共に由姫さんが都さんの足を払って体勢

を崩した。そして、そのままお姫様抱っこで都さんを抱える。もちろん、その時には杖を下ろしている。

亜紗さんも呆れたような表情でスケッチブックを開いて都さんにだけ見せた、。すると、都さんは杖を戻して由姫の手から離れ、その場に座り込む。完全に落ち込んでいるや。

「悠人、なんか大きな声したけど何かって、由姫ちゃんに都ちゃん達。どうしたんだ?」

「ここを通りかかったのよ。ちょうど、私の家がある方角だから。都達は用事があってね」

「用事?　周からは誰もなんの用事もないと言っていたけどな」

「私も知らないわよ。教えて欲しいと頼んでも教えてくれないし」

琴美さんが都さんをとてもからかっていたのはそういうことだったんだ。

「浩平、何かあった?」

続いてリースだけじゃなく、リリーナや鈴もやってくる。そして、ここにいる面々を見て少し驚いたように目を見開いていた。

「いつの間にやら大所帯だね。悠人、これからどうする?」

「リリーナ、せめて空気を読もうよ。悠人もなんか疲れているみたいだから。今日はこれくらいで」

「浩平」

そんな中、リースが浩平さんの袖を引っ張った。浩平さんがリースの方を向く。

「あそこ」

そして、リースが指さした方角にその場にいた全員が向いた。郵便局だ。すでに、シャッターが降りてしまっている。

僕は思わず時間を見た。今の時間は五時を過ぎたくらい。郵便局の受け付けは5時まで。つまり、シャッターが閉まっているのはなにもおかしくない。おかしくないのだが、ＡＴＭの入り口までもシャッターが閉まっているのは明らかにおかしい。ＡＴＭは7時までだったはず。

「鈴、後ろに」

僕は鈴を僕とリリーナの背中に隠した。前では浩平さんがいつも使っている拳銃を取り出している。

その場にいる誰もが郵便局の異常に気付いていた。そして、リースが魔術書を開く。

閃光。

郵便局の中にまばゆいまでの光が灯った。郵便局の中を強制的に照らし出す。そこにいるのは、覆面をかぶった。数人の人達。

「俺が前に出る。由姫ちゃんと亜紗ちゃんは後ろに回ってくれ」

浩平さんが走り出す。それに気付いた覆面の人たちが動き出した。ここから見る限り、正面から突破しようとしているようだ。

僕は簡易型パワードスーツのエネルギーバッテリーを交換する。いつでも攻撃できるように。

すると、入り口が爆発した。爆弾が仕掛けられていたのか、魔術によって爆発したかわからないけど、後者なら確か、どこかの犯罪組織の可能性があるはずだったと思う。

浩平さんが立ち止まる。そして、拳銃を連射した。放った弾は八つ。煙で当たったかどうかわからないが、音沙汰は全くない。

僕は身構えた。何があるかわからないけど、わからないからこそ、僕の力を使うつもりだいかないと。

煙が唐突に晴れる。それと同時に三人の覆面が現れた。現れたのは浩平さんの目に前。

「なっ。フレヴァング！」

浩平さんがすかさずライフルを手元に呼び出して覆面の攻撃を防ぎきった。だけど、覆面は力任せに浩平さんを吹き飛ばす。

「浩平！」

リースが大きな声で浩平さんの名前を呼びながら腕を横に振った。腕から放たれた衝撃波が覆面の一人を吹き飛ばす。でも、二人はリ

ースを飛び越えてこちらに向かってきた。狙いは完全に僕達。この中で一番幼い僕達だろう。

「前に出るから！」

その声と共にリリーナが鎌を取り出して前に出た。そのまま向かってきた覆面に向かって鎌を振る。だけど、その窯は簡単に避けられ、そして、僕と鈴に向かって魔術を放ってきた。

属性は氷。初歩の魔術でもあるアイスランス。多分、シャッターを爆発する際に奪った熱量を使って作り出したもの。数は八つ。狙いは僕と鈴の手足。

まるで、時間が遅くなったような感覚だった。僕の動きも遅い。遅いけど、全てが見えている。覆面の動きや魔術の動きも全て。

僕は右手を挙げた。向かってくる魔術に向かって。魔術をそのまま掌で受け、術式を解く。

全てのアイスランスがその場から消え去った。覆面に動揺が走るのがわかる。でも、動揺しているのは一人だけ。

「お返し！」

僕は一歩を踏み出した。踏み出してアイスランスを放つ。術式を展開することなく放った。

唐突に現れたアイスランスに驚きながらも覆面が飛び上がる。このまま僕達を飛び越えるか鈴の後ろに着地するつもりだろう。でも、逃がさない。

僕は散弾銃を取り出していた。そして、覆面に向かって引き金を引く。

いくもの魔力の散弾が覆面の体を打ち、そのまま体勢を崩させて地面に落ちた。リースが素早く捕縛魔術を放つ。

「鈴、大丈夫？」

僕は振り返って鈴を見た。鈴は信じられないようなものを見た眼をしながらゆっくり頷いた。鈴にとってこういう状況は初めてなのだろう。そして、今のことも。

「悠人もだよ！　真正面から戦って。二人に何かあったら私は」

「ありがとう。心配してくれて」

僕は素直に感謝の言葉を述べた。すると、リリーナは顔を真っ赤にしてそっぽを向く。

「私こそ、ごめん。何も出来なくて。二人を危険にさらして」

「リリーナがいてくれなかったら多分、勝てなかったよ」

「鈴は、大丈夫じゃないか。どこか落ちつける場所は」

「私の家はどうかしら？」

そう言えば、琴美さんの家はこの道を進んだところにあったはず。言ったことはないけど、都さんと一緒に通りかかったことはある。

「お願いします」

「都、ここは任せていい？　私達は家に行くから」

「はい。三人をよろしくお願いします」

「鈴、行こう」

僕は震える鈴の手を取った。多分、鈴は僕のあれを見ていた。魔術に必要なワンアクションをすっ飛ばしての発動を見ていたはずだ。でも、僕は聞かれたなら正直に話そうと思っている。鈴やリリーナなら、きっと、僕を受け入れてくれると思ったから。

僕は鈴の手をしっかり握りしめる。それは、鈴に「安心していいよ」と語りかける風ではなく、僕自身が不安であることの表れであるかのように。

第百三十七話　放課後の行動　悠人の力（後書き）

悠人がどうしてアル・アジフのところにいるのか。そのことを次の悠人視点の時に語ろうかと思っています。ついでに、悠人が見せた力のことも。

次の話から放課後の行動で別れていた面々が合流を開始します。

第百三十八話　緊急事態（前書き）

放課後の行動は終わりですが、話はまだまだ続いていきます。

第百三十八話　緊急事態

オレはレヴァンティンに送られてきたメールを見ながら小さくため息をついた。和樹や俊輔の前だから出力装置を使っているがここまで面倒なものだったとは。

「周、何かあったのか？」

和樹の疑問にオレは小さくため息をつきながら頷いていた。それだけで厄介なことだと二人にわかると思う。

「郵便局で強盗だとさ。ったく、せっかくのほぼ全員が休日だと言うのにそんな事件が起きるなんて」

「郵便局でか？　銀行じゃないんだな。どうしてだ？」

「さあ？　郵便局にもお金はあるさ。理由としてなら、銀行の近くに警察署があるから」

それしか考えられないんだけどな。

オレは小さく溜息をついて立ち上がる。名残惜しいことには名残惜しいが、今は諦めよう。

「現場に向かう。『ＥＳ』の方にも連絡がいっているから他の警戒も強まっていると思うけど、出来るだけ出歩かないように」

「承知した。周は無理するな。俺達を守ろうとする気概は知っているが、お前が怪我をすれば心配する奴がたくさんいる」

「そうだぜ。気楽に気楽に。何でも頑張ろうとするからよ。また、暇な日が出来たら遊ぼうぜ」

「ああ」

オレは窓を開けた。ちなみに靴はちゃんと収納しているから大丈夫だ。窓から出て近くの屋根に飛び移りながら靴をしっかり履く。

そして、屋根を蹴って走り出した。

「場所はあっちだな。レヴァンティン、音姉からの連絡はないよな？」

『はい。妨害もなくありませんでした』

今日の第７６移動隊として休暇が無いのは音姉一人だけだ。その分、何かあったら全員が緊急招集されるけど。

でも、音姉がいたのに異変に気づかなかったということは、それはそれでかなり大変な事態だ。

「音姉ですら見つけられなかった事件か。レヴァンティンはどう考える？」

『マスターはすでに意見がありますよね？』

「まあな」

すでに理由はいくつか考えてあるけど、一番可能性として高いのは、

「別世界の人物が起こした事件。世界が違いすぎて魔術構成が異なるものであるから。それなら納得出来る」

『そうですね。一番の可能性ならそれでしょう。それにしても、自然の力を借りようとする力を察知する結界ですか。しかも、狭間市を覆い尽くせる規模。にわかに信じがたい威力ですね』

「音姉だからこそだな。オレでも限界が半径２ｋｍ。それも、かなり不安定なもの。それと比べれば全然だ」

周囲を警戒しながらオレは目的地に向かって全力で駆ける。一応、戦力は十分ではあるらしいが、何か胸騒ぎがする。どうしてかわからない。あそこには浩平やリースもいるのに。

いつもの勘が告げている。オレの信頼できる勘が。

「レヴァンティン、さっきオレが送った新技案の発動は可能か？」

『可能ですよ。ですが、溜めの時間を考えて発動速度は約二秒。致命的ですね』

「そうか？　その時間を埋める方法があるとするなら？」

方法は考えてある。術式圧縮を利用すれば方法がないわけではない。でも、実戦で使えるかどうか。実戦で使えたらいいけど。

『確かに、方法はありますね。でも、それは』

「嫌な予感がするんだ。今の状況が悪化する可能性がある。だから」

オレは屋根を蹴る。とりあえず、現場に向かおう。話はそれからだ。
その瞬間、何か嫌な予感が背筋を貫いた。オレはすかさず横に跳ぶ。
『マスター！』
それと同時にレヴァンティンの声が響いた。そして、オレがいたところにいくつもの槍が突き刺さる。確実に、横に跳んでいなかったら突き刺さっていたな。
「誰だ！？」
オレは尋ねながらレヴァンティンを鞘から引き抜く。振り向いた先にいる、いや、いたのは、
赤いフュリアス。
「なっ」
音もなく空に跳び上がっている。そして、体は淡く透けている。
その姿はあの日に見た悠人のフュリアスであるダークエルフよりもスマートで、どこかの本に書かれていた人型の機械。
「どうやら、考えは正しかったみたいだな」
『ええ。これは確定ですよね。でも、どうするつもりですか？』
「どうする？」

オレはにやりと笑みを浮かべた。そして、レヴァンティンを鞘に収める。

「オレはどうこうしなくても」

そう言いながら指をパチンと鳴らした。

「孝治がやってくれる」

黒い閃光というべきか。オレは赤いフュリアスの右腕を肩から砕いた瞬間を見ていた。黒い一筋の閃光。それをオレは掴み取る。

その手にあるのは孝治の黒い剣。

「だから」

屋根を蹴り一気に距離を詰める。そして、コクピットがあるであろう部分に黒い剣を一閃した。だが、それより早く赤いフュリアスが飛び上がる。

完全な奇襲で動揺したはずだが、相手は冷静に対処していたようだ。オレは小さくため息をついて空中に足場を作り、その上に着地する。

魔力を固めただけのものだからすごく不安だけど。

「お前は何者だ？」

オレは答えが返っていないことを承知で尋ねた。返答はなく、代わりに赤いフュリアスが姿を消す。光学迷彩と呼ばれるもので消えた

のだろう。

オレは目を瞑って赤いフュリアスの位置を確認しながらため息をつく。どうやら撤退したらしい。

「周」

「助かった」

オレは声がかかった方向に黒い剣を投げた。孝治が黒い剣を取って鞘に戻す。

「危なかったな」

「ああ。ったく、あんな無音で飛ぶフュリアスなんて聞いたことがないぞ。ダークエルフは音が鳴りそうだし。どういう仕組みだ？」

ダークエルフの設計図を見せてもらったことがあるが、空を飛ぶためには大型ブースターが必要であり、それは結構大きな音を発するはずだ。そう考えると、今のはどういうものだろうか。

「わからない。だが、見たこともないフュリアスだったな。映像としては撮ってある。今は」

「招集場所に向かわないといけないか？　それよりも」

オレは下を指さした。そこにあるのは民家に落ちたフュリアスの腕。どうやら微塵の家屋だったらしく、下敷きなった人は見当たらない。

オレは小さくため息をついた。

「アル・アジフに連絡するか」

第百三十九話　歌姫と覆面達（前書き）

周の勘は当たります。

第百三十九話　歌姫と覆面達

「了解した。周隊長はそっちで待機だな。オレ達は現場についているからこっちを見ておく」

『悪いな。一応、指揮は任せたから』

「安心しろ。大丈夫だから。また」

オレは通信機器を切った。そして、デバイスからコードを外す。そんなオレを心配したような表情で優月と由姫が見てきていた。

「周隊長は来れないとさ。赤いフュリアスに襲われたらしい」

「兄さんが？　無事、ですよね」

由姫が心配したようにオレを見てくる。周からすれば由姫の方が心配だろうな。

オレはみんなに安心させるように笑みを浮かべた。

「大丈夫だ。孝治達と一緒にいるらしい。あの二人がコンビを組んだら最強だということは由姫が一番知っているんじゃないか？」

「そう、ですね」

でも、不安なのだろう。あの二人が一緒にいる場合の戦果をオレは知っているから何も言わない。実際に、最も凶悪な殺人集団と言われた面々をたった二人で全員捕えたり、世界最強とも言われている

アリエル・ロワソと偶然エンカウントした時なんてあと少しで捕えれそうな状況まで言ったことだってある。

それがあの二人の強さ。オレが全く入れない次元の強さ。ついでに中村もいるし。

『悠聖、周囲を確認してきたよ』

「周囲にそれらしい影は無し。一応、フェンリルが見回ってくれているわ」

オレが周囲の確認を頼んでいた冬華とアルネウラがその場に戻ってきた。アルネウラが周囲の空気を感じ取って首をかしげる。

『何かあったのかな？』

「赤いフュリアスが出たそうです。兄さんが交戦してここに来れないと」

「赤いフュリアス？　由姫、それは本当なの？」

そう言えば、冬華は『ＥＳ』の過激派だったな。最近、近くにいすぎてそんなことを感じる瞬間が全くなかった。

もしかしたら、それについて知っているかもしれない。

『冬華は何か知ってる？』

オレと同じことを思ったのか亜紗がスケッチブックを冬華に見せた。だが、冬華はゆっくり首を横に振る。

「私はあまりフュリアスについて詳しくはないわ。でも、赤いフュリアスは過激派の機体ではないはずよ。アリエル・ロワソ様に確認してみるわ」

そう言うや否や、冬華はデバイスを取り出して通信機器につなげた。すぐにアリエル・ロワソに尋ねるのだろう。もし、その期待が過激派のものならいろいろと大変な事態になるから。

オレは小さくため息をついて拘束している犯人達の顔を見た。

老若男女様々だが、ひときわ目立っているのは一人の少年。この中で唯一起きている眼鏡をかけた少年だ。年齢はオレと同じくらいで顔も髪型も一般的というか、少し根暗な印象がある。

オレは少年に近づいた。

「オレの言っていることはわかるな？」

「わかりますよ。確か、第７６移動隊でしたね」

「知っているのか？」

調べていたらわかることだろう。だから、オレは尋ねる。

「簡単な尋問だ。どうして郵便局を襲った？」

「答えなくてはいけませんか？」

「黙秘もありだけどな」

黙秘権は誰にでも存在する権利だ。この尋問はそこまで強制的なものじゃない。現行犯逮捕したから一応聞いているだけだ。こういうのも『ＧＦ』の仕事の内。

すると、少年は笑みを浮かべた。

「理由は二つあります」

「正直に話すのか？」

少年が正直に言おうとしていることに驚いていた。普通は黙っているはずだ。何かの目的があるのか？

「ええ。一つはお金。この世界で動くお金です」

嫌な予感がする。この世界という表現に。

「もうひとつが『歌姫』様です」

「お姉ちゃん！？　どういうこと！？」

由姫が刹那で少年に詰め寄って胸ぐらをつかみ、壁に押し付けた。その威力は凄まじく、壁にひびが入っている。

少年が苦しそうに息を漏らした。

「お姉ちゃんに何をするつもり？　答えて！」

「ストップ。ストップ。そんなことしたら話せないだろ」

オレはすぐさま二人を離した。でも、由姫は少年を睨みつけている。

少年は少しだけ咳き込んで笑みを浮かべた。

「この世界に歌姫様がいれば穢れてしまう。だから、無理矢理にでも連れて行くんですよ。僕達の世界にね」

その言葉を聞いたオレ達は同時に安堵の息を吐いた。それを見た少年は目をぱちくりさせている。

どうやら、本来の目的は音姫さんをさらうつもりだったらしい。でも、殺すと違ってさらうなら、どれくらいの数がいても大丈夫だろう。どんな敵がいても。

だって、音姫さんだし。

「よかった。お姉ちゃんの身に何かあったら危なかったけど」

「どうして安心しているんだ。お前達には仲間が」

オレはデバイスに通信機器を繋いで音姫さんに電話をかけた。すぐさま音姫さんが出る。

『悠聖君、何かあったの？』

「音姫さん、そっちに誰か向かいませんでした？」

『こっち？　ああ。百人ほどと赤いフュリアスが三機ほど向かってきたけど、全員撃退しておいたよ。それがどうかしたの？』

まるでコンビニに言ってお菓子を買ってきたとでも言うような口調だった。それを聞いて想像していたとはいえ呆れてため息をついてしまう。

「捕まえた犯人が音姫さんを狙っていると言っていたので」

『そうなんだ。じゃ、こう伝えておいて。私を捕まえたかったら一軍を連れてくること』

そして、通信が切れる。犯人の少年はぽかんとしたままだ。まあ、そうだろ。

この世のどこに一軍でかかってこいと挑発的な言葉を投げかける人がいるだろうか。いや、待てよ。確か、歴史上に実際そんなこと言った人がいたっけ。

「あんたらの目的が人目を引くことだとしても残念だったな。音姫さんは第７６移動隊で最強の戦力なんだぜ。お前らの力で勝てるわけないだろ」

「悠聖さん。言いすぎですよ」

由姫が呆れたようにため息をつく。何を言いすぎているのだろうか。

「最強は兄さんですが、あなた達の世界では勝てないというべきです」

「いやいやいやいや。由姫の方が言いすぎだよね？　オレのと比べると格段に言いすぎだよな！？」

周囲に同意を求めると頷いているのが半数だった。周ってそんない強かったっけ？

「だが、歌姫様をこのままにしてはおけない。我らの手でお救いしなければ」

「あのさ、お前らにとって歌姫はなんなんだ？」

『歌姫』と言われている音姫さん。その能力については全く知らないが、一部の人が言うには言霊らしい。よくわからないけど。

一言で世界を変えると力とも言われている。

こいつらにとって歌姫とはどういう存在なのか。そこが気になっていた。

「我らにとって歌姫様は世界の象徴。世界を動かす存在。二人の歌姫様によって世界は救われる」

「はあ？　新手の宗教勧誘？」

そうとしか思えない。急にそんなことを言われても理解できるわけがない。だが、少年は話を進める。

「世界を救うために、我らは歌姫様を手に入れなければならない。だから」

その瞬間、周囲にたくさんの気配が現れたのがわかった。誰もが身構える。オレは近くにいた優月の手をぎゅっと握った。

囲まれている。数は大体百くらいか。多分、こいつらを救出に着た面々だろう。

オレは小さく息を吐いた。

「仲間意識の強いことで。アルネウラ」

『ダメだよ。ここでシンクロしたらダメ』

オレが思っていたことを完全に否定するアルネウラ。でも、その表情は真剣でオレは何も言い返すことが出来なかった。この戦力ならそれでも可能だと思ったから。

「はあ。シンクロした方が私はいいと思うわ。でも、二人が納得するなら、私はそれでもいい」

いつの間にか冬華がオレの横までやってきていた。オレと優月を守るつもりなのだろう。精霊とシンクロしていないオレの強さは言うほどじゃない。それに、非戦闘員の優月もいる。

だから、オレは拳を握りしめる。

「この場を放棄すべきだな」

「賛成ね。相手の数を考えるとそれが妥当だわ。今戦えば誰かが怪我をするかもしれない。そして、周囲に被害が及ぶ」

近くに公園があるとはいえ、民家も近い。なのに戦ってしまったなら怪我人だけじゃないく、死人が出てもおかしくない。

最大の問題点は敵が見逃してくれるかどうか。

「由姫、亜紗。二人が先頭に立って公園への突破口を」

「むしろ、しんがりは私達ですよ」

左手にナックルを身につけながら由姫が少しだけ笑みを浮かべている。その横では頷いている亜紗の姿。どちらも本気だ。

確かに、足の速さから考えてそれが一番かもしれないけど。

「優月、絶対離れるなよ」

「うん」

オレの言葉に優月が手を握り締めてきて帰してくれる。それにオレは頷きながら冬華を見た。

「先頭をアルネウラと頼めるか？」

「悠聖、優月を傷つけたら承知しないわよ」

「当り前だ」

冬華の言葉にオレが即答すると、冬華は満足そうな顔をして頷いた。頷いてオレ達が同時に地面を蹴る。

優月の反応が遅れたが、オレがしっかり手を引っ張ったおかげでほとんど遅れることなくついてきている。そして、いや、やはりとい

うべきか。目の前を覆面の集団が塞いだ。

『退いて！』

アルネウラがすかさずチャクラムを投げつける。チャクラムは氷を撒き散らしながら突き進み、覆面の集団がそれをよけるように左右に跳びのいた。

「今だ！」

オレ達がその中を抜ける。でも、しんがりで遅れていた由姫と亜紗を囲むように覆面の集団が動き、そして、全員が上から叩き潰された。

オレ達が振り返りながら呆然としてしまう。文字通り、上から何かの手によって押し付けられて様な状況になっているからだ。その間を二人は悠々と抜けてくる。

よく見ると、叩き潰された面々は二人の前方にいる覆面だけで、横から現れた覆面達は近づいた人達が地面に倒れているだけだった。

相変わらずの強さ。特に由姫はここにきてから格段に強くなった。実戦を経験して一皮むけたからだろうか。

オレ達が公園内で由姫と亜紗と合流するのと、立っている覆面達が倒れている覆面の救出を始めるのは同時だった。オレ達はまだ身構えている。

『悠聖』

その中でアルネウラがオレの袖を引っ張ってきた。振り返ると、アルネウラが耳元で囁きかけてくる。

『空に何かいる。多分、フュリアス』

「だからシンクロを」

『うん』

シンクロをする瞬間はオレ達が完全に無防備になり動きが止まる。つまりはそこを狙われたなら確実に死ぬということだ。アルネウラはそれに気づいていたからシンクロを拒否したのだろう。

覆面達が撤退していく。あれから追撃が来ないのはよかった。あれ以上の追撃が来たなら優月が守れたのかわからない。

「なんなんだ？　この街で、何が起きているんだ？」

その言葉に応えてくれる人はここにはいなかった。

第百三十九話　歌姫と覆面達（後書き）

当たる理由はいつかけることになるのやら。

第百四十話　本当の自分

僕はソファーに座っていた。隣には鈴とリリーナがいる。そして、前にある卓袱台の反対側には都さんと琴美さんがいた。

僕達がいるのは琴美さんの家。まず、僕達が琴美さんの家に来てから都さんが来た。外にはリースと浩平さんがいる。

都さんは神妙な面持ちで僕を見ていた。鈴ではなく僕を。

「悠人。一つ聞きます。あれはなんだったのですか？」

鈴はもう立ち直っている。でも、体が少し震えていることを見ると、どれだけ怖かったかは想像出来る。

僕も、最初の戦いの後は、ただ震えていただけだから。

「あれ、とは？」

「私や鈴さんが見た無条件発動です。周様から魔術の発動について詳しく習ったことがあります。周様のレベルだと、魔術が発動する瞬間の魔術陣を見て反応すると教わりました。魔術には魔術陣の発動が必要です。周様のレベルなら陣の無い無条件発動が可能だそうですが」

その話についてはよくわからない。魔術は魔術陣がないと発動出来ないと思っているし、無条件発動なんて聞いたこともない。

でも、僕の力と比べれば些細なことだろう。

「悠人に聞きます。あの無条件発動はなんなのですか？　私の目には受け止めた魔術がそっくりそのまま跳ね返ったように見えました」

「そっくりそのまま跳ね返った。リフレクトの魔術だと思うけど、あの時みたいにタイムラグがあるのはおかしいはずだよ。リフレクトは当たった瞬間に跳ね返すから」

確かにそういう魔術があったはずだ。でも、そんな魔術は僕に使えるわけがない。僕は魔術をあまり使わないから。

「では、こう言いましょうか。受け止めた魔術を吸収し、放出した」

その言葉に僕はビクッと肩を揺らしていた。鈴はわからなかったみたいだけど、都さんには見えていたらしい。

魔力の流れから全てが。

「アブソーブ。吸収能力だね。伝説と言われる二大レアスキルの下にある究極の四大レアスキル。実用性の観点から最も使えるレアスキルに位置するもの。古の民が使っていたとされるレアスキルの一つだね。悠人にはそのレアスキルがあるということ？」

リリーナがギュッと僕の手を握ってくれる。どんなことがあっても味方でいると言ってくれるように。

僕はそれにゆっくり握り返しながら頷いた。

「今から見るものは絶対に他言無用にして欲しいんだ。それで頷いてくれるなら」

その言葉にみんなが頷く。僕は「ありがとう」と言いながら頷いた。

「見せるよ。僕の秘密を」

今まで閉まっていたカーテンを開ける。すると、明るい夕焼けが視界に飛び込んできた。

それを見て名残惜しく振り返ると、そこには信じられないとでも言いたそうな四人の姿。

僕はゆっくり元の位置に戻った。

「多分、この力が関係していると思うんだ。試したことはないけど、魔力を吸収し、大きくなっていることを考えると、僕はそう思う」

「悠人。悠人はどうして、それを隠していたの？　それがあれば悠人は」

鈴の疑問は最もだ。この能力は戦場でも破格の能力。ただでさえ、『アブソーブ』という桁違いな能力も合わせれば、訓練するだけでかなりの戦力になるだろう。

でも、僕はそれをしなかった。

「昔、言われたんだ。大事な人から。『化け物。近づくな』って」

その言葉に誰もが息を呑んだ。

おそらく、拒絶のされ方から考えて、最も酷い拒絶。

「周囲の人も僕を化け物扱いした。父に至っては、僕を実験体扱い。来る日も来る日も血を抜かれ、体を死なない程度にいじくり回された。その気持ちがわかる？　僕は否定された。大事な人から、そばにいたみんなから否定された。だから、この力を隠そうとした。『アブソーブ』の能力に気づいたのは偶然だよ。でも、僕はより一層、自分の体が化け物になったと思えた。リリーナや鈴にリース。みんなと一緒にいても、いつバレるかわからない恐怖の中にいた。でも、フュリアスの中だったら大丈夫だったな。どうしてかわからないけど」

僕は全てを語っていた。本当は怖いはずなのに、拒絶されると思っているはずなのに、僕は語っていた。

心の底ではみんななら受け入れてくれると思っているから。

「逃げ回ったよ。一人で。自分は化け物だから、化け物らしく荒らし回りながら。そんな時にアル・アジフさんと出会えた。そして、僕はアル・アジフさんについて行った。僕は自分が怖いんだ。自分は本当に化け物じゃないかって、自分がいつか化け物になって誰かを殺すんじゃないかって。自分が怖い。他人も怖い。僕は」

「違う。悠人は化け物じゃない！　人間！」

鈴が立ち上がった僕の肩に手を置いてきた。

「化け物なんかじゃないよ。悠人はみんなに優しくて、愛されいる。化け物なんかじゃない。悠人を化け物扱いする人がいるなら私は怒る。絶対に怒るから」

「でも、僕はみんなと違う。お母さ、大事な人からも化け物扱いされた。それは」

「人とは違うことを気にする必要があるのかな？」

リリーナが不思議そうに首を傾げていた。

「みんな違うと思うよ。私や、悠人や、鈴。都や琴美もだけど、全員違うはずだよ。私なんか、魔界じゃ珍しいハーフだからね。あっ、言ってなかったか。まあ、いいや。でも、私はそれを誇りに思っている。人とは違うことは普通だから。それに、悠人の能力は悠人自身にとってステータスで希少価値があるものだよ。そこまで卑下にしなくても大丈夫だよ」

すると、リリーナがどこか悲しそうな表情になる。まるで、自分自身にそのことを言い聞かせているかのように。でも、リリーナは僕の目から視線を外さない。

「悠人が化け物だなんて関係ない。悠人は悠人なんだから。でもね、私は少し怒っているんだよ」

その表情はどこか呆れていて怒っているようには見えない。それでも、バカにされているようにも感じない。

「悠人がそんなことを思って、私や鈴と接していたこと。私が、私達が悠人をそんな目で見るわけがない！　それに、悠人が何の相談

もしなかったこと！　私は悠人に助けられた。私は悠人を助けたい。だから、悠人も少しは私達に頼ってよ。一方的な関係なんて絶対に嫌だから」

「リリーナ」

「私は悠人が好き。優しくて、頼りになるけど、見た目以上に無理に大人びている悠人が好き。だから、悠人の支えになりたい。鈴だって同じ。私達は悠人のそばにいたらダメなの？」

「一つ、いいですか？」

そんな中、不思議そうな顔をした都さんが僕達を見てきていた。隣にいる琴美さんが驚いて都さんを見ている。

都さんは不思議そうに首を傾げた。

「それは、日常生活に影響が無いものですよね？」

「うん、そうだけど」

都さんは何が言いたいのだろう。

「例えば、私の力。神剣認定された武器があります。それは、制御を怠れば街を滅ぼしかねない力があります。琴美、引かないでください」

「いや、絶対に引くわよ。そんな力があるの？」

「はい。理論上の数値ですけど、最大出力で狭間市を焼け野原に出

来るそうです」

それはそれですごい。僕の力と比べれば、僕は本当にちっぽけに見えてくる。僕の能力はそこまで大規模じゃないし。

「今の話を聞いて、皆さんは私を化け物だと思いますか？」

「思わないよ」

僕はそう答えた。そんな力があったとしても、僕は都さんを化け物だと思えない。

「私達もです」

「えっ？」

僕はみんなの顔を見渡した。

「悠人がそのような力があっても、私達は化け物だと思いません。だって、悠人を知っているから。だから、怖がらないでください。人を、友達を。私達は受け入れます。悠人の全てを」

その言葉を聞いて僕は顔を下に向けた。みんなに顔を見られたくなかったから。でも、目を瞑っていても涙が溢れてくる。次から次へと。

涙は僕の握り締めた手の甲に落ち、横から伸びてきた二人の手が僕の手を握りしめた。

ようやく、僕は気づけた。本当の自分を語っていいのだと。本当の

自分でいていいのだと。

そばにいる二人の暖かさを感じながら、僕は赤ん坊のように声を上げて泣いた。

第百四十話　本当の自分（後書き）

能力の一部は一部隠させてもらいました。今後のキーワードになっていくので。

第百四十一話　暗躍する影（前書き）

久しぶりに一気に書けました。短めだけど。

第百四十一話　暗躍する影

ニューニューヨークにある『ＧＦ』本部執務室。そこには珍しい人達の姿があった。

一人は赤いゴスロリ服を着た小さな少女。身長が１４０もないくらいだ。その手に握られているのは棒状のデバイス。

レヴァンティンのようなアクセサリーではなく、棒の全てがデバイスとして成り立っている個人所有のデバイスでは最高クラスの演算能力があるだろう。

一人は黒いゴスロリ服を着た女性。身長は対象的で１７０はあるだろう。デバイスの形はネックレス。

一人は里宮愛佳。今日、狭間市で周に授業をしていたはずの里宮愛佳だった。

総長室の椅子に座っているのは時雨だ。

「その話は本当か？　アイシア」

アイシアと呼ばれ、赤いゴスロリ服の少女は頷いた。

「ああ。星喰いの真柴が動き出したみたいだ。さすがに中枢まで入りこめねえ。里宮以上にセキュリティーは頑丈だからな」

まるで、男みたいな口調。でも、その顔に浮かぶ笑みを見ていると口調にも納得出来る。

「あの一族が動くとはな。五年ぶりくらいか？　失踪した息子を捜すためになりふり構わずあらゆる暴力団を使った以来。この時期に来るのか。最悪だな。で、レノアが来た理由は？」

黒いゴスロリ服を着た女性が深刻そうな顔で頷いた。

「同じくらい最悪の事態よ。チェルノブイリ海峡にあるロシアの軍港が壊滅した。理由はわからないわ。私が向かった時には終わっていたもの」

その言葉にその場にいた全員が驚いていた。

チェルノブイリ海峡はヨーロッパ大陸とユーラシア大陸の間にある巨大な海峡。そこにはロシアが保有する数少ない不凍港がある。名前はヴァルフォミア港。

その土地にあった謎の名前を軍港の名前とした場所だった。四人にとってはすごい苦々しい土地でもある。

そこの軍事力はロシア随一とされ、豊富な戦力があったはずだ。世界でも珍しい軍艦も。

「その話は聞いたことがないぞ？」

「当たり前よ。発見してすぐに撤退しつつ最速で向かって来たもの。発見したのは大体２０分前」

それなら話が入って来ていないことには納得はする。納得はするのだが、撤退したことには納得出来ない。

「撤退した理由は？」

時雨が不思議そうに尋ねる。

「一つはロシア軍と鉢合わせにならないため。あまり対立はしたくないわ。そして、一番の理由が、巷で人気のフュリアスよ」

狭間市での復興に『ＥＳ』がフュリアスを使ったことで、フュリアスの存在が世界中に広まった。

最初の原型が日本で作り出されたという噂も広まっている。作ったのは職人の一部と熱狂的なオタクと呼ばれる人種であることも。それは今は関係はないが。

おかげで『ＧＦ』の上層部もてんやわんやの大騒ぎとなっている。その戦闘能力が未知数なのだらから。

時雨がギルバートから聞いた話だが、油断しなければドラゴンを圧倒出来たらしい。時雨はそれほどの戦闘能力があると思ってもいる。

実際は悠人の乗るダークエルフぐらいしか成し遂げられないが。

「戦場のいたるところで巨大な赤い腕や足が落ちていたの。おそらく、戦闘中に破壊されたものね。その話はロシアからあるはずよ」

「赤いフュリアスか？　で、愛佳は？」

「同じ議題、と言いたいところですが、さらに深まった話になります。赤いフュリアスについて」

愛佳の言葉に時雨達の顔が強張った。

「今日、第７６移動隊が謎の集団から襲撃を受けました」

「連絡は受けた。まだ、詳しい話は聞いていないが」

「撃退した中に音もたてずに空に飛ぶ赤いフュリアスを見たそうです。そして、破壊した一部のパーツを簡単に分析した結果を急いで持って来ました」

だから、愛佳はここにいる。周に頼まれてその結果を直接持ってきたからだった。

「腕のパーツだけですが、量産が容易なパーツが組み合わされており、魔力比の大きな魔鉄で構成されています。そして、アル・アジフとも連絡を取った結果、駆動系は完全に『ＥＳ』のフュリアスを遥かに上回るものだそうです」

「それはそれで問題だな」

赤いフュリアスの戦力自体が未知な上に、量産が可能で数すらわからない。ロシアでは胴体部分は確実に持ち帰ったに違いない。

そう考えると時雨の中で大きな不安が生まれてくる。

ドラゴンを簡単に倒せるレベル以上のフュリアスが大量生産されたなら、『ＧＦ』でもほとんどの部隊が壊滅する。

さらには、フュリアスを持つ唯一と言ってもいい組織『ＥＳ』以上

の駆動系。つまり、周が語った別世界の可能性がある。

「動き出した星喰い達に赤いフュリアス。さらに、狙われた第７６移動隊。一体、狭間市でまた何が起きているんだ？」

第百四十一話　暗躍する影（後書き）

『ＧＦ』上層部に届く不穏な報告。そして、新たなキャラが二人、ですが、このまま第二章までお蔵入りの予定です。土台はかなり出来上がってきたと思っています。

第百四十二話　組み合わせ（前書き）

ようやく周の新技が出ます。派手な技です。

第百四十二話　組み合わせ

オレ達は山の中を歩いていた。時間は太陽が空高く昇った平日の昼間。普通なら学校にいる時間だが、オレ、音姉、そして、由姫の三人は山の中にいた。

理由は簡単。昨日にあった郵便局襲撃事件。怪我人は出たが、死んだ人はいない。だが、相手集団の規模が規模だったからか、朝から日本政府が主導で調査をしている。

本来ならオレ達がする予定だったものだけどな。

代わりと言うわけではないが、オレ達は山に入っていた。あの日、オレと音姉が歌姫様と呼ぶ謎の集団に出会った場所に向かって。

「不気味だね」

由姫が小さく言葉を漏らす。見た目はただの山にしか見えない。空気もだ。でも、オレ達の中では確実におかしな山となっている。

理由はいくつかあるがその一つが、

「命を感じない」

「由姫、気付いていたのか？」

「うん。なんとなくだけどね」

この山は不気味なくらいに静まり返っている。そして、ざわめきが

ない。命の鼓動がないのだ。怖いくらいに。

普通なあるはずの虫の音だけじゃない。木々も何かから隠れているように音を出さない。

「お姉ちゃんは警戒しすぎだと思うけど」

ほんの微かな音に反応して音姉は注意を向けている。まあ、由姫は戦場の音姉をよく知らないからな。特に、敵地にいる音姉は。

オレからすればこれが音姉の普通だ。視覚や聴覚を使って周囲全体を警戒している。微かな音を頼りに敵の位置を見つけ出す。こういう山の中で音を隠すのはほぼ不可能だ。

オレの場合は触覚と第六感を使う。まあ、そんなことをするのはオレくらいだが。

「これくらいしないと戦場でかすり傷を負っちゃうよ。由姫ちゃんもしっかり警戒すること」

「警戒しなくてもかすり傷で済むって。お兄ちゃんじゃあるまいし」

「どういう意味だ？」

オレは音姉みたいにかすり傷では済まない。まあ、第六感が常時働くから警戒しない時間が存在しないけど。

「『天空の羽衣』。あれならなんでも守れない？」

「魔術以外はな。まあ、魔術を撃たれてもよけることは簡単だぜ。

例えば」

オレは飛んできた風の矢を軽く上体を反らすだけで避けた。

「こういう風にな」

「何で冷静？　今の攻撃だよね？」

由姫が慌てて身構える。対するオレは腰に差しているレヴァンティンを鞘から抜かない。

「今のはトラップだ。敵の攻撃じゃない」

「トラップも十分に攻撃だと思うけど。お兄ちゃん、魔術トラップがあるということは」

「いるな」

敵が近くに。

物理的トラップなら設置したままという可能性は高くなるが、魔術的トラップは設置してから一定時間以内でなければ発動しない。

つまり、この山のどこかに捜している奴らはいる。

「由姫ちゃん。ちゃんと警戒している？　弟くんとの会話ばっかりしていたらダメだよ。後、これはデートじゃないからね」

「誰もデートって言ってないよね？　お兄ちゃんと話していたら緊張が紛れるだけだよ。こういうことは初めてだから」

少人数での敵地への侵入はオレですらあまり経験がないんだけどな。孝治は三桁単位でやっているだろうけど。

「でも、こうして三人だけでいるのは久しぶりだよね。いつも他の誰かがいたから。お兄ちゃん、どうしてこの三人で任務なの？」

「理由としてなら、コンビネーションが高いメンバーかつ単体戦闘能力も高いメンバー。こうなったら、由姫か亜紗か音姉の三人になる。亜紗は斬り込む役目だから任務に適していないというわけ」

「私は殴り込むタイプだけど？」

「里宮本家八陣八叉流継承者のくせに？」

調べてみた限り、里宮本家八陣八叉流は里宮家の人物した習ったことがなかった。

理由としては、里宮家の子供は格闘か魔術のどちらかか秀でているという摩訶不思議な家系でもある。格闘の秀でているレベルは桁違いだけど。

そこに名を連ねる由姫。白百合家の中ではありえないくらいに剣術の才能がなかった。でも、由姫にあったのは格闘の才能。そのタイプは音姉の弱点をカバー出来るものでもある。

この二人が共に戦ったならどこまでの強さを発揮するかわからない。それを見たかったのが本音だ。

そして、養子とは言え、二人の家族であるオレが入れる余地がある

と信じて。

「確かに里宮本家八陣八叉流だけど、あまり使わないよ？」

「そう言えば、由姫ちゃんはかなり普通の八陣八叉を使っているよね。どうして？」

「愛佳さんから言われたんだろ。里宮本家八陣八叉流は特色が強い。相手の防御を崩す崩しの型。相手の攻撃をいなす降ろしの型。相手の速度を超える隼の型。相手の攻撃にカウンターを叩き込む受けの型。型を見られただけで弱点が丸わかりなんだ。よっぽど熟練しなければ型を取らずに体内で気を練るのは難しいしな」

オレがこれで合っているであろう考えを言うと、由姫は不思議そうに首を傾げた。

「なんとなく」

その答えにオレは思わずずっこけてしまう。

里宮本家八陣八叉流は冗談抜きに最強の武術とも言っていい。ただし、それぞれの型を取らずに攻撃出来るようになればだが。

多分、音姉でも勝負が一撃必倒になるはずだ。それほどまでに凶悪。それをなんとなくで使い分けるなんて。

「弟くんがこけるシーンを久しぶりに見たかも」

「悪かったな。こけるようなやつじゃなくて。ったく、そろそろみたいだな。気を引き締めておけよ」

オレの言葉に音姉の顔がわかる。オレの探査の仕方を知っているからこその反応だ。対する由姫は首を傾げている。

「お兄ちゃん、気配はないけど？」

「気配を隠す方法なんていくらでもあるさ。それに」

オレはレヴァンティンを鞘から引き抜く。

「いくら気配を消したところで『そこにいる』ということは隠せないだろ」

いくら気配を消してもその存在を隠すことは不可能だ。文字通り空気にならなければ出来ない。

だから、それを利用した探査の方法をオレは使っている。

「出て来いよ。数は、３８か」

オレの言葉と共に周囲から老若男女様々な人が現れた。もちろん、見たことのある面々ばかり。

あの時にオレと音姉が戦った奴らだ。

「兄さん、郵便局の襲撃犯がいます」

「そうなのか？」

オレはやっぱりという風に尋ねていた。

赤いフュリアスがいる以上、可能性としては十二分に考えられたからだ。

オレは小さく笑みを浮かべる。

「質問したいことが三つある」

「この状況でか？」

前にいる老人が驚いたように目を見開いた。完全に囲んでいると自負しているからだろう。

確かに、完全に囲まれている。でも、囲まれているだけだ。負けた状況ではない。

「一つは、お前らが住む世界のこと。一つは、お前らの目的。最後が、お前らにとって歌姫とは何か？」

「二つ目だけ教えてやろう。我らの目的は」

その瞬間、嫌な予感が背筋を貫いた。攻撃が来る。

「歌姫様の奪還」

幾重もの防御魔術を組み合わせて四角錘を形取り、嫌な予感がした方角に向かって多重に作り上げた。方角はここから見える唯一の山の頂上だ。

作り上げた瞬間、エネルギーの塊がいくつも防御魔術に直撃して周

囲に散る。

それと同時に周囲の敵も動き出す。

遠距離からの射撃と接近戦。確かに、状況としては最悪だ。

でも、そんな作戦をオレが考えなかったわけがない。

「行くぜ」

ストックしていた魔術を発生させる。周囲にある水を集結させて放つアクアシューター。ただし、命中は高くない。

放った瞬間に散弾のようにバラまくことになるからだ。だから、本来は水属性の専売特許である状態異常を付与した水をバラまく。

ただ、今回は全く違う。

水をバラまくが、それには状態異常付与はない。回避した人達もすぐに地面を蹴る。距離は十分だ。

「水牙天翔」

オレは鞘から抜いたレヴァンティンを地面に突き刺し一気に振り上げた。

前方に向かって水柱が突き進む。これだけ見たなら名前負けした攻撃だと思うだろう。だが、技はこれで終わりじゃない。

水柱が止まった瞬間、地上に巨大な魔術陣が出来上がっていた。水

柱はフェイクであり、水を使った魔術陣構成が本命。

魔術陣が膨大な水が吹き上がる。それは強力な水圧で向かって来ていた敵達を吹き飛ばしていた。

回避や防御もままならない攻撃。それを感じながらオレはレヴァンティンを鞘に収める。

「よし、新技完成」

だが、戦いは終わっていない。オレはレヴァンティンを握りしめたまま敵を睨みつけた。

第百四十二話　組み合わせ（後書き）

次回、フュリアスＶＳフュリアス
赤と黒と青がぶつかり合います。

第百四十三話　赤と黒と青（前書き）

本格的なフュリアスＶＳフュリアスはまだありません。

第百四十三話　赤と黒と青

山の山頂。そこには五機の赤いフュリアスがスナイパーライフルを伏せて構えていた。

一斉にスナイパーライフルの引き金を引いていたのだが、今なお浮かんでいる四角錘の物体がスナイパーライフルから放たれたエネルギーを受け流した。

目的の場所では戦闘が起きており、時折、大量の水が吹き出した紫電の閃光が迸っている。

援護をしたくても四角錘の物体が邪魔だった。

赤いフュリアスが起き上がる。数は二機。おそらく、三機は警戒したまま立ち上がらないだろう。でも、今はそれで十分。

僕はスナイパーライフルの引き金を引いた。

絶妙な角度から放たれたスナイパーライフルの弾丸は立ち上がった二機の赤いフュリアスを貫いた。

「よし」

僕はダークエルフで地面を駆ける。今のダークエルフは狭間の夜で使った装備ではなく、長期戦かつ高機動と電子戦を強化したタイプとなっている。

つまり、飛翔能力は全くない。

本当は今日にこの装備のデータを取るはずだったが、周さんが何かあった時のために待機して欲しいと言われ、上手くダークエルフを隠していた。

この装備の最大の特徴は相手のセンサーに反応されにくい追加装甲。

デバイスの力で片手にライフル。片手に盾を虚空から取り出しながら森の中を駆ける。

周さんからの作戦ではここからが時間との勝負らしい。山頂の敵を倒し、向かってくるフュリアスを第７６移動隊の援軍が来るまで出来る限り倒しておく。

僕は盾を構えた。盾にエネルギー弾が直撃して周囲に散る。いくらセンサーで見つかりにくいものでも目視で発見出来る。

僕はお返しとばかりにライフルの引き金を引いた。だけど、当たらない。予想通りだけどね。

「相手のスナイパーライフルはこちらより精密性は高いみたいだね。そうなると、射撃戦になれば不利か」

勘に従って盾を構える。構えた盾にエネルギー弾が直撃してエネルギーが周囲に飛び散った。

弾が放たれてからここに来るまで約１秒。あれをするには時間が足りない。

「仕方ないか」

僕は機体を動かす。最低限のスラスターを使って木々の間を掻き分けるように森の中を駆け回る。

時折襲いかかってくる嫌な予感は避けれるなら避け、無理なら盾で受け止める。もちろん、エネルギーはかなり持っていかれるが、あの武器の攻撃範囲にさえ近づければいい。

「ここだ！」

僕は一気にブースターの出力を最大限にまで押し上げた。ダークエルフが木々をなぎ倒しながら一気に前に出る。

今まで木々をなぎ倒さずに向かっていたからか敵が驚いて若干の空白が出来上がった。そのスキに両手の装備を収納して新たなものを取り出す。

前に受け身を取るように飛び込みながら持っていたものを全力で投げた。ダークエルフの手が地面についた瞬間に慣性とは逆に飛ぶ。

これには膨大な力がかかって部品が痛むのだが、今回は気にしてはいられない。

ダークエルフがいたところにスナイパーライフルのエネルギー弾が突き刺さる。でも、空中で爆発したものはない。

僕が着地すると同時に両手に盾を取り出して構えた。

それと同時に爆発が起きる。先ほど投げた手榴弾が爆発した音だ。

盾から顔を出すと、山頂では黒い煙が立ち上っている。

「なんとか倒せたね。それにしても、『ＥＳ』の機体じゃないかも」

あまりにもスナイパーライフルの速度が速すぎる。あの距離なら二秒ほどかかってもおかしくない。

そんな高性能なスナイパーライフルなんて『ＥＳ』には存在しない。存在したとしても、すぐに砲身が焼き切れる。

「一体どこの」

そう呟いた瞬間、僕はダークエルフの体を右に動かしていた。それと同時にダークエルフがいたところに突き刺さるいくつものエネルギー弾。

右に動かしながら左手の盾を構えた。だが、その盾に飛んできたエネルギー弾がぶつかった瞬間に弾が爆発する。

すかさず盾を蹴り飛ばして後ろに下がりながらライフルを掴み取った。そして、空中に浮かぶ機体を睨みつける。出力を真ん中程まで右のレバーで下げながら警戒を強める。

「青い、フュリアス」

空に浮かぶ三機のフュリアス。真ん中にいるフュリアスの装甲は青い。

赤いフュリアスは二機とも大型のブースターを背負っている。だが、青いフュリアスにはブースターは見当たらない。その代わりにあるのはまるで翼のように広がる四枚の板。これがブースターの代わり

なのだろう。

『ＥＳ』の技術では一番ありえないもの。それに、センサーに一切映らなかった。

『黒いフュリアスに警告します』

向こうからの言葉が入ってくる。フュリアス同士や本部との通信用の無線からだ。ここに本部の無線が存在しないから使ったことはないけど。

『これ以上の戦闘は無意味です。武器を捨てて投降してください。さもなくば、撃ち落とします』

聞こえてきたのは女性、いや、女の子というべきかな。声の感じからはあまり年齢に差がわからない。

「無警告で撃ってきたくせに？　生憎、今の僕は引けないからね」

周さんが戦っている以上、ここで引くのはダメだ。周さんにこの場を任されている以上、引けない。

『だから言ったんだよ、お姉ちゃん』

よく似た女の子の声と共に青いフュリアスの右手側にいる赤いフュリアスがゆっくり前に出た。そして、ライフルを構える。

『敵は殺せばいいんだよ！』

「っつ」

スラスター操作で飛んできたエネルギー弾をギリギリのところで回避する。狙いはコクピット。完全に殺す気だ。

『あはははは っ。旧世代型、しかも、二つ遅れの旧世代はこの私が撃ち落としてあげるよ！』

そのまま赤いフュリアスが突っ込んでくる。残る赤いフュリアスと青いフュリアスも散開した。

完全に囲まれたらマズい。僕はそう一瞬で判断してダークエルフを前に走らせた。

『なっ』

無線から驚いた声が聞こえる。でも、その声を聞いても僕は冷静だった。冷静に出力を最大限まで押し上げる。

あまり使わないが、ダブルブーストと呼ぶやり方で、凄まじい重圧を出す。だけど、意表をつくには十分。

赤いフュリアスが冷静にライフルを持つ右手の指が引き金を引くより早く、その手を取りながら引っ張った。そのまま腰の部分を蹴りつける。

何かが壊れる音と共に赤いフュリアスの右腕が千切れる。

すかさず右腕を振り上げながら対艦刀で赤いフュリアスの頭と左腕を斬り飛ばした。

そのまま赤いフュリアスの背後に回り込み蹴り飛ばしながら一気に距離を取る。

『ルナ！　よくも！』

警告をしてきた女の子の声と共に残った赤いフュリアスがライフルを振り上げる。だけど、それを青いフュリアスが手で制した。

『リマ、ストップ。相手を第三世代と思わない方がいい』

聞こえてくるのは男の人の声。青いフュリアスがライフルを構える。

『機体の差は歴然だけど、パイロットの桁が違う。多分、第六世代のギガッシュレベルの性能だよ』

第六世代。

その言葉に僕は驚きを隠せない。ダークエルフですら第三世代に入ったばかりだからだ。それすら越えるもの。

『だから、僕が行く。第三世代のパイロット君。卑怯だとは思うが、これも歌姫様を連れて行くため』

センサーにたくさんの反応がある。カメラをそちらに向けると、赤いフュリアスが２０ほどこちらに向かって来ていた。

一体どこにそんな数を隠すスペースが。

『卑怯だから名乗るよ。ルーイ・ガリウス。第七世代アストラルブレイズに乗るパイロット。君をここで討つ』

第百四十三話　赤と黒と青（後書き）

世代が違いすぎると思いますが、悠人がパイロットとして桁が違うだけです。
ちなみに、赤いフュリアスが第六世代型フュリアスのギガッシュです。

第百四十四話　それぞれの力（前書き）

まずは白百合家の個人個人が大暴れします。

第百四十四話　それぞれの力

オレの作り出した雷球がオレ達の死角に展開する。このまま放つことは可能だが、殺すつもりは全くないので停滞させる。

オレはすかさず前に出た。

「やっぱり、やりにくい魔術は使うものじゃないな」

「弟くんは雷魔術が苦手な方だったよね。でも、収束系は得意じゃなかった？」

「収束はな。雷魔術は基本的に静電気を集結させるものだ。それが苦手なだけ」

飛んでくる魔術をレヴァンティンで弾く。魔術の威力はあまり高くないから精霊召喚符は使われていないと見るべきか。

音姉もオレと背中を合わせながら光輝で魔術を弾く。

今、オレ達は完全に囲まれている。水牙天翔を使ってもいいが、正確に当てるためには半径１５m以内に入れないといけない。

それに、水牙天翔が最も有効に作用する範囲に入ってこなければ利点がほとんどいかせない。

「なかなか来ないね」

音姉の言葉にオレは頷いた。敵がやっているのはひたすら魔術を放

ってオレ達から距離を取っている。

まあ、このメンバーを見ればそれが一番有効な作戦だ。

音姉の場合、近づけば瞬殺。技を放つ隙を与えたら遠距離でも一撃。

由姫の場合、近づけば瞬殺。技を放ってもほとんどが地面に落ちる。

オレなら絶対に距離を取る。

オレも音姉も剣に宿した魔力（音姉は気合い）を放つ隙の少ない遠距離技がある。――別に魔術をぶっ放してもいいが、味方に当たれば大惨事だ。――そのため、これだけ離れられていても苦にならない。

時折存在する空白の時間にレヴァンティンを振ればいいからだ。

でも、八陣八叉流は違う。純粋な拳による戦い。つまり、

「兄さん、いつまで逃げればいいですか？」

由姫は一人で少し離れた場所から激しく動きながら話しかけてくる。

魔術を全て回避しながら。

「お前、楽しんでいないか？」

「バレた？　愛佳師匠のものと比べればかなり簡単だから」

あの人と比べたらダメだろと思いつつ飛んできた氷塊を払い上げる。

「破魔雷閃」

払い上げた勢いよくレヴァンティンを振り下ろした。雷の斬撃はちょうど先頭にいた老人を捉え昏倒させる。

「ったく、きりがないな」

空を向けば赤いフュリアスだけでなく青いフュリアスも飛び交っている。おそらく、悠人と戦っている。

オレはレヴァンティンを握りしめた。

久しぶりにオレの予想が外れた。でも、あんなに大量のフュリアスはどこに隠されていたのだろうか。

「由姫、準備はいいか？」

「いつでも」

オレは水牙天翔を放った。膨大な水が吹き上がり、一時的な壁を作り出す。

「オレと由姫のツートップで抜ける。目的地は山の向こう側」

オレが目星をつけた場所。フュリアスが隠せるスペースがあるならあそこだけだ。山を削り取った格納庫があるなら別だが。

「オレは探査を行いながら進むから出来る限り戦闘は由姫に任せることになる。出来るな？」

「お兄ちゃん、私を誰だと思っているの？」

由姫が身構える。クラウチングスタートのように前傾姿勢。だが、その秘めたる力は見るだけでわからない。

水牙天翔が終わり、水の壁が消え去った。

「里宮本家八陣八叉流継承者白百合由姫。行きます」

「名乗るのかよ！」

オレと由姫は同時に地面を蹴った。そのままオレはレヴァンティンを振り上げる。

「破魔雷閃！」

雷を纏う斬撃が前方にいた敵を殴り倒した。それと同時に由姫が前に出る。

「行かせるか！」

その言葉と共に前が塞がった。障壁魔術による頑固な壁を作り出してオレ達の道を塞ぐ一人の男。だが、そこに由姫は飛び込んだ。

由姫の誰もが驚く。驚いている中で、由姫は左の拳を障壁魔術に叩きつけた。すると、ガラスが割れるような音と共に障壁魔術が砕け散る。

驚く暇なく障壁魔術を展開した相手に由姫は肘を叩き込んだ。相手の男が木々をなぎ倒しながら吹き飛ぶ。

しばし起こる静寂。

障壁魔術は防御魔術よりも強力だが、防御魔術と違って、こちらの攻撃も通さない。その分、普通は壊れないものなのだが、由姫は一回殴っただけで破壊した。

生身で殴られたなら確実に絶命するであろう威力。

これが、里宮本家八陣八叉流継承者の力。

静寂の中でもオレ達は駆けて行く。このまま近くにあるはずの敵の本拠地を見つけてしまえばこちらの勝ちだ。このメンバーなら確実に戦える。敵が第一特務でないなら。

「どこだ。どこにある」

探査範囲を超広範囲にまで広げて異変のある場所を確認する。

「なっ」

見つけたオレは思わず絶句していた。本拠地を見つけたのではない。何かの砲身を構えているフュリアスがいるからだ。

大きさから考えて数少ない戦艦に搭載されている長射程用バスターカノン。それのフュリアスバージョンだろう。

「レヴァンティン、回線を開け！　悠人！」

オレは嫌な胸騒ぎを覚えて悠人との回線を開いた。ここに来る前に

回線用のリンクを繋げていたからかすんなり回線が開く。

『周さん？　何かありました？』

「方角は北北東。距離は3に長射程の砲を持つフュリアスが存在している。砲撃に気をつけろ！」

『北北東？　そんな、センサーには』

オレは嫌な気配を感じてしゃがみ込んだ。草陰から飛んできた魔術トラップを紙一重で回避する。

「センサーに頼るな。感じろ！」

無茶な注文かもしれないが、悠人ならできると信じていた。どうしてかわからない。でも、フュリアスに乗る悠人を見ていると、オレと同じ匂いがする。

オレは回線を閉じて探査を継続する。オレの探査のやり方は一味違う。オレが感じているのは魔力の流れ。空気の動き。それらを感じてオレは探す。

「ない？」

オレは一瞬だけ足を止めて、そして、走り出した。

「弟くん、どうかしたの？」

後ろから追いかけてくる音姉が不思議そうに首をかしげる。

「見つからないんだ。この数のフュリアスが隠せる地形を。一体、どこに」

その時、嫌な気配というよりも惹きつけられるような感じが体の中に走った。オレはレヴァンティンを握り締めてその方角を向く。そこには背中のまるで翼のように折り重なった機械の翼が大きく開いた青いフュリアス。

何かが来る。

「由姫！　下がれ！」

オレは機械の翼が開いた瞬間に由姫に叫んでいた。由姫は慌てて後ろに下がる。

蒼い閃光。

オレ達は慌てて手で顔を守った。だけど、強烈な閃光は目を瞑っていたとしても視界を少しの間だけ塞ぐ。それと同時に空気の流れが変わるのがわかった。

「この身に集え。蒼穹の思い」

魔術の威力を強化するために詠唱を行う。間に合え。

「一降りの星となりて、思いの全てをぶつけて見せる」

視界がほぼゼロの中魔術の詠唱を終える。視界があるなら巨大な光球が目の前にあるだろう。

「スターゲイザー・レイン」

頭の中に浮かぶ周囲の風景を元に狙いを付けてスターゲイザー・レインを放った。単発かつ指向性を持たせた天空属性最強の魔術『スターゲイザー』の劣化技。でも、その威力は全魔術でも指折り。

スターゲイザー・レインはオレが狙ったように青いフュリアスを貫く、ことはなかった。回避されたのではない。不自然に消え去ったのだ。

「なっ」

スターゲイザー・レインの威力を考えて相殺されたとは思えない。だけど、どうして当たらない。

視界が戻る。そこには空に浮かぶ青いフュリアス。そして、地上に倒れる黒いフュリアス。再起不能というわけではないらしく、ゆっくり起き上がっているが、装甲の一部は破損している。まるで、えぐり取られたかのように。

「一体何が」

『これ以上は動かないでください』

オレ達の視界がふさがっている間に赤いフュリアスが一機、オレ達にライフルをつきつけていた。その近くにも赤いフュリアスがいる。その斜め右上にも赤いフュリアスが二機だ。

声を出しているのはおそらくだが一番近くにいるフュリアス。女の子の声だが油断はできない。

さらには、後ろにも一機。完全に囲まれたか。

『これ以上の戦闘は無意味だと判断します。武器を捨てて投降してください』

オレはレヴァンティンを手の上で一回転させた。

赤いフュリアスのライフルが若干動くが、その銃口からエネルギー弾が放たれることはない。まあ、攻撃する行動ではないと思っているのだろう。

オレは頭の中で音姉に話しかけた。

音姉、聞こえてる？

『弟くん？　これは、精神感応？』

レヴァンティンの力で増幅したから。今は、オレの指示に従える？

『いつでも』

オレは小さく息を吐いてレヴァンティンを下に向けた。

レヴァンティンを地面に突き刺したら背後にいるフュリアスを撃破して。出来れば、パイロットを傷つけないように。オレは、前にいるフュリアスを倒す。

オレも音姉も気づいている。気づいていないのはてきだけだろう。だから、この作戦は取りやすい。

オレはレヴァンティンを地面に突き刺した。背後で音姉が駆ける音。
そして、オレはレヴァンティンを引き抜きながら地面を蹴る。

「ドライブ、リリース！」

魔力の全力を下半身につぎ込んで一気に加速を行う。対する赤いフュリアスは冷静だった。

『動かなければ撃たなかったのに』

その言葉と共にライフルからエネルギー弾が放たれる。並みの人間ならかすっただけで即死する力を持つ威力。それに、オレは真正面から突っ込んだ。握りしめたレヴァンティンを突き出して。

「不破（ふわ）！」

気合いの言葉と共にエネルギー弾がレヴァンティンに触れると、エネルギー弾が左右に割れた。そのまま地面を蹴って飛び上がる。

「破魔雷閃！」

雷の斬撃が赤いフュリアスのライフルを持つ右腕を切り落とした。
あまりのことに赤いフュリアスではないくオレが驚く。

対魔コーティングをしているものだと思っていたから斬撃の斬れ味ではなく打撃の威力を高めて放ったのだが、赤いフュリアスの腕は簡単に斬れた。まるで、豆腐に箸を入れたかのような感触で。

『なっ』

赤いフュリアスの乗り手が驚きの声を上げる。驚くということは反応が鈍るということ。オレはすかさずレヴァンティンをモード?カノンに持ち替えた。そのまま左腕の付け根に向かって瞬間最大出力で砲撃を放つ。

放った砲撃は簡単に赤いフュリアスを砕いて左腕の肩を粉砕した。

「対魔が極めて低いのか」

それでもなお逃げようとする赤いフュリアスのコクピットにオレはレヴァンティンを突き刺した。出来るだけパイロットを傷つけないようにコクピットのドアを切り裂く。

「動くな」

オレは中に向かってレヴァンティンを向けた。中にいるのは案の定少女。ただし、オレよりも多分だが年上。

「そんな。生身の人間がフュリアスを破壊できるなんて。あなたは人間ですか?」

「酷い言われようだな。へえ、フュリアスのコクピットってこんな感じになっているんだ」

オレは敵が目の前にいることも忘れて赤いフュリアスのコクピットを見渡した。

アル・アジフに外見だけ見せてもらったダークエルフと違って、コクピットは普通に座席がある。ダークエルフはパワードスーツをド

ッキングして使用するからな。こんなスペースはない。

「敵の前ですよ。私が襲いかかることも」

「殺しはしたくないんだ。だから、動かないでくれ。このスペースなら、傷つけない済む方法が難しいからな」

殴り飛ばしてもどこかに頭をぶつけるだけだ。威力が高ければ高いほど確実に致命傷となる可能性が高くなる。だから、かかってきて欲しくない。それをわかっているのかそのまま黙った。そして、何かのボタンを動かす。すると、オレと少女の中間にモニターが現れた。

まさかの立体モニターだと。

オレはそれを見ながら驚愕していた。未だに理論すら確立していないものをこのフュリアスは搭載している。なんという宝の山。

モニターの向こう側にいる少女は完全に絶句していた。何故なら、モニターに映っているのは大破という表現で済まないほど原形をとどめていない赤いフュリアスがいたから。

両手両足は吹き飛び、胴体のほとんどが深く切り刻まれ、倒れこんでいる上にパイロットらしき人を横たえる音姉の姿。ちなみに、服に乱れすらない。さすがだ。

少女が慌ててモニターの画面を変える。すると、そこには近くにいるフュリアスを映し出していた。それを見た少女が一息つく。確かに、まだ味方がいるというのは安心できるだろう。でも、そのフュリアスに跳びかかる影。

「由姫？」

オレは声に出していた。だって、フュリアスを相手に肉弾戦をしようとしているのだから。どう考えても無謀。

空中に足場を作り出し、全力でフュリアスを蹴りつける。多分、コクピットの部分をへこませて中の機器を破壊するつもりだろう。当たるまでそう思っていた。だが、モニターからフュリアスが消える。

「「えっ？」」

オレと少女の声が重なり、少女がモニターを変えた。そこに映るのは吹っ飛んだ赤いフュリアスが空中に滞空していたフュリアスに直撃して吹き飛んでいるところだった。もちろん、二機とも。

そのままフュリアスは弾丸のように飛んで山にぶつかる。

その光景にオレも少女も言葉がなかった。オレが正気に戻ったのは約二秒後。

「このフュリアスの重さって、何キロ？」

「確か、２トン」

確実に魔鉄を使っているのだろう。純鉄ならそんなに軽くできるわけがない。それに、こんなに全く死にかけになりながら破壊するという作業がないなんてありえない。でも、２トンのものを弾丸ライナーで蹴り飛ばす由姫。

どう考えても人間離れしているよな。

「えっと、降参してくれるよな？」

「降参させてください」

うん、そうなるわな。

第百四十四話　それぞれの力（後書き）

魔鉄は鉄に魔力を無理矢理結合させて巨大化させたものです。そのため、無駄に軽い。ただし、魔力の攻撃に対しては魔力の含有率によって紙よりも薄い盾になることがあります。周の攻撃で簡単に破壊出来たのは含有率が極めて高いから。

音姫はただ単に切れ味の高さ。由姫はただ単に力技です。

第百四十五話　ＦＢＤシステム（前書き）

最近、文字数にかなりバラつきがあるような気が……

第百四十五話　ＦＢＤシステム

蒼い閃光。

視界が焼かれると同時に攻撃が飛んでくるのがわかった。方向は青いフュリアス、アストラルブレイズから。

ほとんど無意識にダークエルフを動かす。だけど、そんな動作で回避出来るわけがなかった。

装甲が抉れるような感覚が襲う。今のは確実に当てないように撃たれた。

ダークエルフの体が地面に倒れる。それと同時にエネルギーの塊がアストラルブレイズに向かって放たれた。

だが、そのエネルギーがアストラルブレイズが作り出した謎の渦に入って消え去った。あの質量を消す能力があるということは、今のままじゃ、こちらの攻撃は当たらない。

『最後の警告だよ。これ以上の戦闘は無意味だ。死にたくないなら今すぐ降りてくれ』

「周さんに頼まれたんだ」

僕はダークエルフを起き上がらせる。右足の駆動系の一部が破損しているが大丈夫だ。まだ、使える。

「死ぬ可能性があるから出来るだけ参加するなと。周さんは周さん

達で解決しようとしている。でも、僕が、僕達がいるということを教えてあげないと」

駆動系の異常は右足だけ。それ以外は完全に無事だ。右足の駆動系もまだまだ大丈夫な状態でもある。

あれを使えるのはタイミング的に一回だけ。ダブルブーストを使った高速加速で距離を詰めてからにすべきだろう。

『哀れだな。そんなことのために自分の命を』

「ねえ、知ってる？　この機体は僕のために作られた機体なんだよ」

僕が扱うという前提で作られた機体。つまり、僕が最大限の力を発揮出来る機体でもある。

「他のフュリアスは僕の反応速度に全くついていかない。ダークエルフもタイムラグが微かにある」

『何がいいたい？』

翼のように広がる四枚の板が大きく展開した。何が起きるかわからないけど、やるなら今だ。

「最大限の力を爆発な加速で制御するシステム。本気で行くよ」

ダークエルフをダブルブーストで一気に最高速まで加速する。体中の骨が軋みを上げるが、ここで倒れたらシステムが使えない。

『速い』

青いフュリアスがライフルを構える。距離としては十分。引き金を引いた瞬間には放たれた弾丸が一瞬で到来するだろう。

だから、僕はシステムを作動させた。

「ＦＢＤシステム（フルバーストドライブシステム）！！」

ダークエルフの体から装甲が剥がれ落ちる。黒の装甲から白の装甲まで一瞬で変わった。

ＦＢＤシステム。

ダークエルフに存在する最終システム。

機体のフレームを守るために装着していた黒の装甲をパージしながら最大出力を出すシステム。

詳しいことはわからないけれど、黒の装甲による機体重量の低下によって、ダークエルフが反応する速度の誤差はコンマ単位まで激減する。

でも、このシステムの最大の弱点が装甲の薄さ。重さが１０００ｋｇにも満たない超軽量機体で、フレームの全てを魔力含有率が極めて高いものを使っている。

黒の装甲によって守られるものがない。つまり、一撃で落ちる。

そこにあるのは装甲の最大機動に対する耐久性のみ。攻撃を余波すら受けることなく回避するための機体。

精神感応の完全相互システムとも言うべきだろう。

ダークエルフを動かす。その速度は今までよりも明らかに速い。思った通りに、いや、思った以上に機体が動く。

若干な誤差はあるが、自分が信じる操縦技術と勘を頼りにアストラルブレイズとの差を詰めた。

『いい加減にしろ！』

アストラルブレイズがライフルを構える。だけど、それに僕がとっさに投げつけた投擲用のスラッシュダガーが突き刺さる。

対艦刀を手に取りアストラルブレイズに向かう。距離はほとんどない。

『数の差で負けているのに、どうして戦う！　死ぬ気か！？』

アストラルブレイズも対艦刀を取り出して激しく打ち合った。

「アストラルブレイズを、あなたを倒せば戦いは終わる」

『通信を聞いていただろ！　長距離支援のギガッシュがこちらに狙いをつけている！　死にたくないなら投降しろ！』

「出来ないよ！」

アストラルブレイズの持つ対艦刀を空に弾き飛ばした。

アストラルブレイズが空に飛び上がると同時に視界の隅で何かが吹き飛ぶのがわかった。

飛んでいるのは赤いフュリアス。それが空中に滞空していた赤いフュリアス二機にぶつかり、速度が減衰することなく山肌にぶつかった。

一体、何が。

『何が起きているんだ？　リマ、リマ。応答して』

アストラルブレイズがこちらを警戒したまま回線を開こうとする。こういう時はこちらの通信を切るべきなんだけどね。

『れでいいのか？　これで通信は繋がっている？』

聞こえてきたのは周さんの声。アストラルブレイズのパイロット、ルーイが開いたのは赤いフュリアスに乗っていたリマという人のはずだ。

『繋がっています。あっ、私から言いますね。ルーイ隊長、ごめんなさい。降参しました』

『降参？　何故だ？　周囲にフュリアスの姿は無いぞ？』

確かに、残っているフュリアスがダークエルフ、アストラルブレイズに赤いフュリアスが二機ほど。ただし、赤いフュリアスはほとんど戦闘が出来ない。

残りは墜ちたから、他にフュリアスはいないはずだ。

『えっと、心して聞いてください。私のギガッシュは両腕が破壊されコクピットのハッチが切り裂かれて開かれました。他のギガッシュは、みじん切りにされたものと、蹴り飛ばされて大破です』

「『はっ？』」

僕とルーイの声が重なる。蹴り飛ばされて大破？

『フュリアスの姿は見えないが？』

驚愕に染まったルーイの声。僕が言っても同じだろう。

『生身の人に蹴り飛ばされました。山肌で大破した三機がそれです』

僕もルーイも完全に開いた口が塞がらなかった。フュリアスを蹴り飛ばすのはフュリアスなら可能かもしれない。でも、生身は信じられない。

僕もルーイもお互いの機体の動きを完全に止めていた。止めていたから、僕達は気づくのが完全に遅れていた。

ここから北北東の地点で煙が立ち上っているのを。

第百四十五話　ＦＢＤシステム（後書き）

言うのを忘れていましたが、後半の前編終盤にさしかかっています。
後は、戦場を中東に移すだけで前編の終盤に入ります。

第百四十六話　精霊というもの

オレ達が目立つように行動する。奴らの目的である音姉と一緒に。
だから、頼むぞ。

オレは周隊長の言葉を思い出していた。

本来なら、孝治の方が絶対に適任なのだが、第７６移動隊隊長と副隊長が出ているため残った副隊長の孝治は狭間市の市街地内部にいなければならない。

その事は周隊長が孝治にも話していた。今回の任務で動員するのは第７６移動隊からは四人だけ。周隊長、音姫さん、由姫、そして、オレ。

『ＥＳ』からは悠人がフュリアスを使うらしい。まあ、オレが選ばれた理由はわかるけど。

オレは木の枝の陰から周囲を見渡した。周囲に敵の姿は見当たらない。

「いないな」

『少し待ってもらえるかな？』

オレの横にいるエルフィンが耳をすます。どうやら、風の音から近くの人を探しているらしい。

『近くにはいないよ。ただし、そう離れているわけじゃない』

「助かる。動物がいないということも気になるな。木々がオレ達を助けてくれるから助かっているけど」

『奇妙な空間が広がっている。僕はそう思うね』

「同感だ」

動物を追い払うための術式。一応、何も知らない七葉にあの森に行きたいか尋ねたら行きたくないと言った。それが、冬華と一緒でも。

オレは小さく息を吐いて木から木へと乗り移って行く。

こういう任務は得意だ。特に、オレがディアボルガ、セイバー・ルカと契約してからはよく行くようになった。

二人は精霊の中でもトップの座におり、木々や動物達などの感情が手に取るようにしてわかるからだ。今回は二人に無理を言ってここでの移動を説得してもらった。

本来なら木々が自発的に言うのだが、今回は誰もが首を縦に振らなかったらしい。一体、何があるっていうんだ？

オレは召喚したエルフィンを連れてさらに木々を跳び移っていく。

「誰か来る」

オレは小さくつぶやいてそのまま身を潜める。現れたのはパワードスーツを着た兵士が二人。悠人が身につけているようなかなり高性能なパワードスーツ。手にあるのは携帯用の小型エネルギーライフ

ルか。１００ｍの距離を一秒で到達できる優れもの。近くで撃たれたら回避は難しい。

「ったく、貧乏くじを引いたぜ。せっかくの大祭が始まるというのに辺境の見回りかよ。第７６移動隊も『ＥＳ』も別勢力のフュリアスと戦っているから来ないっつうの」

その言葉を聞いてオレは耳を疑った。

周から聞かされた話では、ここら辺にある可能性の高い基地を発見すること。その勢力は赤いフュリアスを使う勢力。そう聞かされている。でも、下にいる兵士の話だと、それ以外の勢力がいるということになる。

周が戦っているのは別勢力のフュリアスか。なら、こいつらもフュリアスを所持しているということになる。

「そうだな。でもよ、お前が名付けた大祭もここじゃ行われないものだ。俺達はお嬢の警備。お嬢があのフュリアスで出ることにより、大祭が始まる。そう考えると、大祭は俺達と共に始まらないか？」

「おお。名案だな。まあ、来るとしたら、どこかのフリーの傭兵か、別勢力の奴らだけだ。後、何分だ？」

「ちょうど６０分。楽な仕事だぜ」

二人の兵士が去っていく。後、６０分で何が起きるかわからない。でも、嫌な予感しかしない。これには周も気づいていないはずだ。

「エルフィン、声を周囲に漏らさないように」

『了解したよ』

オレはデバイスに通信機器を繋げた。さらに、もうひとつの通信機器を繋げる。連絡を付けるのは全部で四ヶ所。

「緊急連絡。緊急連絡。第７６移動隊副隊長花畑孝治、『ＧＦ』本部連絡室、『ＥＳ』穏健派代表アル・アジフ、『ＧＦ』日本本部連絡室。これより、一方的な緊急通信を行う。狭間市郊外に置いて謎の勢力を発見。敵の総数はわからないが、何らかのフュリアスが出る模様。後、大祭という言葉も聞いた。何らかのアクションが世界のどこかで行われる可能性がある。場所は狭間市ではない。繰り返す、狭間市ではない。ここ以外のどこかで」

「いたぞ！」

突如響き渡る声。オレは小さく舌打ちをして通信を切った。そのまま身構える。だけど、オレはまだ見つかっていなかった。パワードスーツを着た兵士がオレ達の下を走る。

オレは少しだけ呆然として木の枝を蹴った。木々はあまり音をたてないように踏ん張ってくれるがそれでも音は出てしまう。だが、下にいる兵士は気付かない。

「抵抗するな！」

「抵抗するな？　それはこっちのセリフだよ」

木々の間を抜けてちょうど開いた場所に出ると、そこには見知った顔がいた。手に持つ身不相応な鎌。そして、まだ小学生にも見える

小さな体。でも、その顔に浮かんでいるのはどこか小悪魔にも見える。

リリーナだ。どうしてここにいるかわからないが、二人の兵士と向かい合っているのは事実。

「ここの先に何か危険なものがあるよね？　私はそれを確認しに来たの？」

「どこから情報が漏れた。だが、お前の口を封じれば大丈夫だ。相手はたった一人」

「そう思うか？」

オレはそう声を上げながら勢いよく飛びかかった。兵士の視線がこちらに向くと同時にその顔に向かって飛び蹴りを叩き込む。まずは一人目。

「貴様！」

向けられるライフルを腕で押し上げてライフルが放つエネルギー弾を反らす。エネルギー弾は大空に消えて行った。

パワードスーツに肉弾戦は無理だ。無理だからこそ、オレは掌を押し付ける。

「吹き飛べ！」

兵士が木の葉の様に吹き飛んで木に激突した。動かないところを見ると気絶したのだろう。

オレは小さく息を吐いてデバイスを右手で触る。

「エルフィン、戻っていいよ」

『いつでも呼ばれる準備をしておくよ』

エルフィンが消える。それを確認しながらオレはリリーナに近づいた。

「すごーい。私でも2mほどしか殴り飛ばせなかっ、いったっ」

全力の拳骨をリリーナの頭上から落とす。リリーナはしゃがみ込んで涙目でオレを見上げてくる。破壊力は抜群だけど、オレには心に決めた人がいる。

「ここで何をしている？」

「何って、パパから不穏な動きがあるって聞いていたからちょうど一人だし探しに来ただけだよ。しかも、ビンゴ。絶対に何かあるよ」

「お前は待機だったはずだ。お前が気づつけば悠人と鈴が泣くぞ。というか、鈴は？」

悠人がいない以上、鈴の守りはリリーナが行うはずだ。七葉がいたとしても、リリーナよりかは弱いから確実に傍にいるはずなのに。

すると、リリーナは肩を落とした。

「鈴は家の用事。だから、一人の学校なんて寂しくて。だから、抜

け出してきちゃった。てへっ」

「てへっ、じゃないだろ。ったく」

オレは呆れたようにため息をついた。でも、それと同時に何かが向かってくるのがわかる。数は４。しかも、精霊だ。

「封印の証を作る者。集え、儚き結晶より。アルネウラ！」

オレはすぐさまアルネウラを呼び出した。相手が何か分からないが、オレの最大戦力を呼び出しておけば十分に片がつく。

そして、茂みの中から飛び出す影。その姿を見たオレとアルネウラは同時に目を見開いていた。

「へえ、君は精霊召喚士か。僕と同じだね」

四体の精霊を従えるオレよりも年下の少年。その手に握られているのは精霊召喚符。でも、オレ達が驚いたのはそこじゃない。四体の精霊の方だ。

生意気な子供の姿をした風属性最上級精霊フィンブルド。

水の集合体でまるでスライムのような水属性最上級精霊アーガイル。

炎を纏う一つ目の巨人の炎属性最上級精霊タイクーン。

姿はまるでモグラだが、周囲の大地が喚起してうごめいているところを見ると、大地属性最上級精霊グレイブか。

まさか、最上級精霊を四体呼び出せる奴がいるなんてな。

「ふーん。僕の精霊達を知っているようだね。力量差はわかるかな？　君じゃ僕に太刀打ちできない。久しぶりに同じ精霊召喚師を」

「同じ？　お前のような奴に精霊召喚師を名乗られるとは、精霊召喚師の名も廃れたものだな」

「何？」

オレはあくまで挑発するように言う。こいつの注意を完全にオレに向けるために。

「精霊との契約はお互いの同意が必要だ。お前の場合はその同意を取っていないんだろ。だったら、宝の持ち腐れだ。お前の精霊は気高き最上級精霊だというのに、術者がお粗末にも程遠い雑魚だなんてな」

隣にいるアルネウラはただ苦笑するだけだった。アルネウラもわかっているのだろう。相手の精霊召喚師としての力量を。

「貴様、もう一回言ってみろ？　この力量差の前で」

「黙れガキ」

自分も十分にガキだがこの場はそう言うのがいいだろう。

「力量差？　精霊とまともに契約していない奴にオレとアルネウラのコンビが負けるわけがないだろ」

『悠聖、そこは少し違うと思うよ』

アルネウラがオレにだけわかるようにウインクする。

『負けるわけがない、じゃなくて、そこのお子様が私達の足元にも及ぶわけがないというべきだよ』

それはかなり酷いな。

「そうか。そこまでして死にたいようだね。お望み通り、絶対的な威力の下の殺してあげるよ！　ユニゾン！」

「アルネウラ、行くぞ」

『うん』

オレとアルネウラは手を合わせた。

「『シンクロ！』」

オレ達の声が重なりアルネウラがオレの中に入ってくる感覚がある。そして、両手に握られているチャクラムの感覚。前にいるガキもユニゾンを済ませていた。

四属性の最上級精霊とのユニゾンを。

『さすがに力量差はかなり縮まっているかな？』

「余裕だな」

話しかけてくるアルネウラの言葉にオレは呆れたように返していた。その態度が癪に触ったのかガキが腕を振り上げる。その先には巨大な火の玉と氷の槍。同じタイミングで運用しない方がいいんだけどな。

「死ね」

その言葉と共に火の玉と氷の槍が放たれた。オレはそれを一瞥してゆっくり横に歩く。ガキの顔に笑みが浮かんだ。確実に殺せたと思っているのだろう。でも、向かってきた攻撃が止まると同時にガキの顔に驚愕の表情が走った。

オレとアルネウラは思わずクスッと笑ってしまう。

このガキは戦闘に関しては完全にド素人だから。どうして止まったか理解できていない以上、オレに勝つのは百年早い。

「な、何故、何故止まる。クソ精霊共が。僕に全ての力を預けることを渋りやがって。僕は最強の精霊召喚師だぞ！」

「最強？　聞いてて反吐が出る」

オレはチャクラムを構えた。

「最強の精霊召喚師ってのはな、シンクロ率１００％に達した召喚師に贈られる言葉だ！　精霊と心を交わし、思いを通じてようやく手に入れれる称号。過去に存在した最強の精霊召喚師はそうだった。お前のものはただのまやかしだ！」

「僕は四体の最上級精霊を従えているんだぞ。これが最強であって

他に何がある？」

「お前は勘違いしたただのガキだよ」

火の玉と氷の槍が動き出してオレの横を駆け抜けて行く。精霊は、そんない安いものじゃない。たかが一枚で契約できるような存在じゃない。

話をして、自分の夢を共に叶えてもらう仲間、いや、親友のような存在。それを、こいつは完全に勘違いしている。許せない。絶対に許せない。

「現時点での最強の精霊召喚師の実力、見せてやるよ」

オレはチャクラムを投げつけた。ガキは四つの防御を展開する。そのどれもがそれぞれ違った属性と頑固な防御力を持っていた。だけど、オレの前では完全に無力。

チャクラムは全ての防御を砕き、ガキが持っていた精霊召喚符を切り裂いた。

「死ねぇ！」

でも、性懲りもなく大量の魔術を放ってくるガキ。それに対してオレは残ったチャクラムを持った腕を横に振った。全ての攻撃が途中で止まる。

どれだけアルネウラよりも強力な精霊とユニゾンしていても、精霊とのコミュニケーションがなければ相手の弱点をもらえない。コミュニケーションを取っていたならオレはかなり苦しい戦いになった

だろう。

「僕は、僕は、負けられないんだ」

戻ってきたチャクラムを受け止めんがらガキの言葉に耳を傾ける。

「僕は、強くならないといけないんだ。強く、強くなって、僕をいじめていた奴らを見返さないといけないんだ。僕が強くなって」

「お前、やっぱりバカだな」

オレはその場で勢いよく飛び上がりつつ回転しながら両手のチャクラムを投げつけた。ガキが放ったあらゆる魔術を弾き飛ばしてガキを吹き飛ばす。

「そんな力を持ってどうするつもりだ！」

「どうするって、仕返しを」

オレはチャクラムを手に取りながら一気に前に出た。

『悠聖！　ダメ！』

アルネウラの声が聞こえるが、オレはそれを無視して歩を進める。

「仕返しをして全てが済むと思っているのか？　仕返しをすることで全ての関係が虐めの無かった時に戻るのか？」

「く、来るな！」

放たれた風の刃がオレの肩を浅く切り裂いた。でも、オレは堪えて前に進む。

「仕返しをすることで立場が逆転することがわからないのか？」

「逆転？」

「仕返しをすることで、お前はいじめられた側からいじめる側に逆転する。それを理解しているのか？」

「それの何が悪い！」

放たれるいくつもの魔術。それを限界の機動で出来る限り避ける。でも、全てを避け切ることはできない。いくつかは直撃して体に傷が増えて行く。

「いじめられたんだ。僕がいじめて何が」

「お前の力は、自分以外の全てを傷つけるために得た力か！？　違うだろ！　自分の身を守りたいから力を得ようとした。違うか！？」

「それは」

オレはガキの胸ぐらをつかんでそのまま壁に押し当てた。この距離で魔術を放たれたら確実に死ぬ。でも、これだけは言わせろ。

「精霊はな、お前が考えているようなちっぽけな存在じゃない。泣き、笑い、悲しみ、怒る。時には病気にもなる。風邪だって引くし普通に恋だってする。病気で死ぬことだってあるんだぞ。人となんら変わらない感情を持つ。なのに、お前は、精霊の言葉を聞こうと

しないのか？」

「精霊の言葉？」

「アルネウラ、シンクロ解除」

オレの隣にアルネウラが立つ。その表情には心配と期待混ざっていた。おそらく、オレがこのガキを救うことを信じて。

『私達はね、ううん。私は、自分のマスターである悠聖に恋をしている。悠聖は昔に遠いところに言った精霊を未だに思っているから付き合ってくれないけど、悠聖は私達を友達と見てくれる。優しくしてくれる。きっと、君がみんなと話そうとすれば、みんな答えてくれるよ』

「ユニゾン、解除」

ガキの言葉と共に四体の最上級精霊がオレ達の周囲に現れる。その眼に映るのは期待の色。

ガキ、いや、少年と言うべきか。少年は震える声で周囲の精霊に話しかけた。

「僕は、間違っていたのかな？」

『間違ってねえよ。そういう手段も一つだ。でも、俺達はそんな手段を望まないぜ』

そう答えたのは風の最上級精霊のフィンブルド。その顔はやっぱり生意気なガキが笑みを浮かべた表情だ。でも、それは照れ隠しだろ

うな。

『ワガ。マスター、タスケルコトガ、ワレラノシメイ』

タイクーンはそう言うが、本当は指名とか関係なく間違った道を歩もうとしているなら怒りたいと思っているのが実情だろう。イグニスからタイクーンの愚痴はよく聞くからな。

「悠聖さん、僕は、どうすれば」

「自分で考えろ。そして、自分で歩け。お前はもう一人じゃない。だから」

その瞬間、何かがオレの足を貫いていた。痛みのあまり立っていられずその場に膝をつく。

「おやおや。このようなところで君のような人物と出会うとは」

振り返った先にいるのは危険人物として噂が広がっている老人だった。

名は、真柴昭三。

周囲は完全に囲まれている。パワードスーツで武装した兵士達によって。

「残念ですよ。君のような天才をこの手で殺さなければならないとは。やりなさい」

一斉にオレに向かってエネルギー弾が放たれる。だが、そのエネル

ギー弾は全てが風によって弾かれた。

「悠聖さんを守って。いや、守る力を、僕に」

『御意！』

精霊達の声が重なる。その声を聞いただけでわかる。少年の精霊達は喜んでいる。この命令を。

「貴様、拾った恩を忘れたか？」

真柴昭三の声が周囲に響く。でも、少年の声はそれよりもさらに大きかった。

「僕は、僕の力は、自分を、誰かを、守るための力だ！」

その言葉にオレとアルネウラは顔を見合わせて笑みを浮かべあった。

「遥か深遠より来る者。我が呼び声に答えよ。闇の帝王『ディアボルガ』！　聖なる刻印を纏いし者。光の道を指し示せ。光の剣聖『セイバー・ルカ』！」

だから、オレは持てる力を使いきる。少年の精霊達と同じ最上級精霊。セイバー・ルカろディアボルガ。その二人をオレはその場に呼び出した。

「お前らがどういうつもりでここにいるかわからないけどな、オレ達を倒せると思うなよ！」

第百四十六話　精霊というもの（後書き）

悠聖は完全に途中からリリーナのことを忘れています。というか、自分も完全に忘れていた。

第百四十七話　蒼鉛の天使（前書き）

蒼鉛というのはビズマスのことです。

第百四十七話　蒼鉛の天使

リリーナは一人森の中を駆けていた。悠聖があの少年を相手にしている間に一人抜け出したのだ。

逃げるではなく、戦うために。

リリーナはみんなが心配してくれることもわかっている。悠人や鈴が絶対に心配知ることも。でも、だからこそリリーナはここで戦わないといけないと思っていたから。

リリーナは何かに導かれるように走る。目的地は決めていない。何かあるということは頭の隅にある勘が教えてくれた。それに導かれるようにリリーナの足は動く。

「何があるかわからないけど、私は」

茂みから飛び出した瞬間、目の前からパワードスーツを着た兵士がたくさん集まっていた。数は１０ほど。そこにリリーナは鎌を振り上げながら飛び込んだ。

力任せの鎌の一閃。でも、その威力は八人の兵士の胸をやすやすと切り裂いていた。

周囲に飛び散る血。その血がリリーナの顔に降り注ぐ。

「ひっ」

残った兵士が悲鳴を上げた。何故なら、血を浴びたリリーナの顔に

は笑みが浮かんでいたからだ。まるで、鬼のような笑みが。

残った兵士達の首が飛ぶ。リリーナが鎌を一閃したのだ。でも、その速さはいつものリリーナとは違う。

「ははっ、ははははっ、あはははっ」

リリーナは笑っていた。まるで、戦闘の高揚感を楽しむように。

「久しぶりだ。本当に久しぶりだ。あはははははっ」

リリーナの笑い声に釣られて兵士が向かってくる。その音を聞きながらリリーナは体の中の高揚を抑えられないでいた。

「思い出したよ。本当に、思い出しちゃった」

「動くな」

現れた兵士達がライフルを構える。だが、構えた瞬間に兵士の視界からはリリーナの姿が消えていた。

リリーナの位置はちょうど一番前の兵士の懐。リリーナの振る鎌が兵士の上半身と下半身を切断する。

「う、撃て！」

残った兵士がリリーナに向けてライフルの引き金を引こうとするが、それより早くリリーナの鎌が兵士達の首を刈り取った。パワードスーツの装甲がまるで紙のように切られている事実に、からくも命を長らえた兵士が一歩後ろに下がった。でも、逃げられたのはそこま

で。

兵士の体が鎌によって両断される。

「こんなところ、悠人や鈴に見られたら怖がられるかな」

自嘲気味にそう言いながらリリーナが口回りについた血を舐め取る。

魔王の娘の噂は魔界ではかなり有名だが、この世界である人界では全く噂がない。だから、ここにいる全員がリリーナの戦闘能力を知らない。魔界ならこんなに犠牲者は出なかっただろう。

リリーナが歩を進める。服は血で真っ赤になっており、その手に握る鎌は血が滴り落ちている。そして、その顔に浮かぶ狂気を含む満面の笑み。

すると、ちょうど森が開けた。そこにいるのは三機のギガッシュ。手に持っているのは巨大な砲である長射程用バスターカノン。それを見た瞬間、リリーナの中で何かが弾けた。

私は、この機体の使い方を知っている？

「動くな！」

その言葉と共に視線を周囲に向けると、いつの間にか囲まれていた。でも、今まで戦っていた兵士とは違う。パワードスーツを着ておらず、ただの作業着の上からライフルを構えている。

さっきとは雰囲気が違うな泣きもするが、リリーナは周囲を睨みつけた。

「お嬢ちゃんはどこから」

「怪我をしたくないなら下がって」

リリーナが血塗られた鎌を構えると、作業服の人たちが顔を見合わせた。そして、ライフルを下ろす。

「怪我をしているのかい？」

その質問にリリーナは一瞬だけきょとんとしてしまった。そして、すぐに首を横に振る。まさか、そんなことを言われるとは。今までそんなことを言われたことがなかった。

「違うよ。パワードスーツを着た人達と戦闘して」

「パワードスーツ？　そんな時代遅れなものを着ている奴なんて」

その言葉にリリーナはハッとする。もしかして、

「別の組織が周囲をうろついている？」

「お嬢ちゃん、どういうこと？」

「もしかしたらだけど、今、ここの森にいるのは私達だけじゃないかもしれない。でも、どうして」

「もしかして、この地にあると言われている遺跡が目的なのか？」

リリーナの言葉に反応した一人の言葉にリリーナは嫌な予感がやっ

てきた。それを振り払うかのようにリリーナは首を横に振る。

その時、地面が微かに揺れた。気付いた人もいれば気付かない人もいる揺れ。でも、リリーナにはちゃんとその振動が伝わっている。まるで、何かが滑りながら動くような感じ。

リリーナは慌てて周囲を見渡す。そして、変化のある地点を見つけた。ゆっくり動く山肌。まるで、山自体が起こっているように。だが、山肌は左右に分かれていた。そして、ちょうど出来上がった空間から巨大なエネルギー弾が飛び出してくる。

「くっ」

リリーナはすかさず防御魔術を展開した。近くにあったギガッシュが二機、エネルギー弾に貫かれて爆発する。それに吹き飛ばされる周囲にいた作業服の人達。至近距離の爆発だから、まず、助からない。

そして、何かの大きな振動がリリーナを襲う。恐る恐る前を見ると、そこには倒れこんだギガッシュの姿があった。爆発の衝撃で倒れたたった一機の生き残り。ちょうど、コクピットのハッチは開いており、そこの中には誰もいない。

意を決して、リリーナが鎌を手放しコクピットの中に乗り込んだ。すぐさま慣れた手つきでギガッシュを起動する。機動知る手順すら習ったことがないはずのリリーナが。

コクピットのハッチを閉めてカメラを開いた山肌の方に向ける。そこから現れたのは蒼鉛色のフュリアス。背中にあはアストラルブレイズにあるような機械の翼が何十も取り付けられており、それが拡

げられている姿はまるで蒼鉛色の天使。

懐かしい感覚にとらわれながら、リリーナはギガッシュを動かした。手に持つバスターカノンを蒼鉛のフュリアスに向けて引き金を引く。

極太のエネルギー弾は蒼鉛のフュリアスに直撃し、霧散した。

「無傷」

この距離からバスターカノンの射撃で破壊できないことにリリーナは愕然としていた。だけど、すかさずリリーナは引き金を引く。

頭の中でわかっていた。どうしていきなりギガッシュを操れているのか、そして、どうしてあの機体に立ち直らせる時間があってはならないと思うのかわからない。でも、頭の中ではそうした方がいいと警鐘が鳴らされている。

だから、リリーナはバスターカノンの引き金を引く。

何発ものエネルギー弾が蒼鉛のフュリアスを襲う。一撃一撃当たるごとに蒼鉛のフュリアスは後ろに下がっていく。このまま押し込むことが出来たなら、そう思った瞬間、蒼鉛のフュリアスの翼が一斉に翻った。正確には、翼である、ブースターの部分でもあるものが全て先をリリーナの乗るフュリアスに向けている。だが、それは砲でもあった。

リリーナはバスターカノンを手放して出力全開で横に跳ぶ。

閃光。

蒼鉛のフュリアスの攻撃はそう呼ぶに相応しかった。凄まじい量のエネルギー弾がリリーナがいた地点を焼き払う。あそこに突っ立っていたなら確実に死んでいた。

「さすがだね。生存率１００％のフュリアス」

リリーナが自分が知らないはずの言葉を口にする。

「イグジストアストラル」

第百四十七話　蒼鉛の天使（後書き）

次の話は本格的なフュリアスＶＳフュリアスにしようと思っています。

第百四十八話　共闘

僕は動きを止めているアストラルブレイズの背後に回り込んだ。そして、そのまま両手に取りだしたライフルをつきつける。

「これ以上、動かないで」

『どさくさに紛れたつもり？』

「そういうわけじゃない。でも、あなただって驚いているはずだ。今は、武器を収めて欲しい」

生身の人がフュリアスを殴り飛ばせれるのなら、アストラルブレイズも殴り飛ばされたって文句はない。というか、同じような末路をたどる可能性だってある。

それがルーイにもわかっているのか、ルーイはアストラルブレイズの両手を挙げた。

『確かにね。でも、負けたという意味では』

その瞬間、何かの閃光が煌めいた。僕は慌ててダークエルフをそっちの方向に向ける。

そこには、空を舞う木々。そして、抉り取られた森。

『あそこは、基地』

ルーイの声が耳に響く。つまり、あそこが北北東の地点なのだろう。

赤いフュリアスが待機していると思われる場所。そこで、何かが起こっている。

『悠人、聞こえるか？　様子見をそこの青いフュリアスと一緒に頼む。今の言葉から考えると、何かがあった可能性が高い。二人で行動しろ』

「了解。ルーイも大丈夫？」

『あ、ああ。今は仕方なくだぞ』

「うん」

僕はダークエルフで地面を蹴る。ＦＢＤシステムは継続したままだけど、限界稼働時間は推定で約１０分弱。だから、無駄な行動はできない。ＦＢＤシステムは諸刃の剣だから闇雲に突撃できない。

『ここは僕が前に出る』

そうしていると、ルーイの乗るアストラルブレイズが空を飛翔しつつ前に出た。

『悠人の装甲はほとんどないはずだ。だから、僕が敵を引きつける。悠人は隠れながら相手を一撃で』

「わかった」

そう返事をした時、近くの山はだから蒼鉛のフュリアスが出てきたように僕には見えた。アストラルブレイズの背中にある翼を作る板がアストラルブレイズの何倍もある。見た目は巨大な一枚の翼。

まるで、蒼鉛色の天使。

「あれが、敵」

蒼鉛のフュリアスが背中を動かす。まるで、背中の板が砲になったかのようにこちらに向いていた。そして、僕の背中に恐怖が走った。

ＦＢＤシステムを全開に地面を蹴る。前にではなく横に。アストラルブレイズはさらに高く飛翔した。

そして、起きる閃光の嵐。

「くあっ」

両手に盾を構えながら木々の間に入り込む。だけど、凄まじい量のエネルギー弾は周囲の木々を吹き飛ばし、盾を構えるダークエルフの体すらも徐々に下がらせる。

『くっそ。いい加減にしろ！』

大空を飛翔しながら回避するアストラルブレイズが手に持つライフルを三連射した。蒼鉛のフュリアスがライフルから放たれたエネルギー弾を回避するために動く。

その隙に僕は走り出した。一直線に。蒼鉛のフュリアスが作り出した道を一直線に駆け抜けて行く。

「相手の機動力はあまりないか」

アストラルブレイズが近づきながらライフルを放つが、蒼鉛のフュリアスはそれをことごとく回避する。でも、その動きはどこか遅い。まるで、機体に慣れていないかのような動き。そして、実戦に慣れていない。

蒼鉛のフュリアスがこちらに気付いた。気付いて背中の砲の一部をこちらに向ける。他の部分はまるでブースターの様にエネルギー残滓を吐きだしていた。

砲とブースター、いや、大量のスラスターだ。大量の砲であり小型スラスターでもある機体。そこ機体に僕は見覚えがあった。

「あの写真の機体」

すでに崩落した謎の遺跡で見つけた写真。そこに映ってあった機体と同じだ。小型のスラスターが大量にあるフュリアス。写真が写された角度から小型スラスターが大量に装着されているようにしか見えなかったけど、実際こうなっていれば納得する。

放たれるエネルギー弾を最低限の動きで回避する。そして、ライフルの引き金を引いた。

蒼鉛のフュリアスは避けようとする。だが、避けきれず、エネルギー弾が翼の一部に当たって弾けた。

「効いていない」

体勢を低くして一気に地面を蹴る。一瞬で最高速度に達したダークエルフは蒼鉛のフュリアスの懐に潜り込んでいた。

対艦刀を取り出して蒼鉛のフュリアスに叩きつける。

倒した。この瞬間の僕はそう思っていた。だけど、対艦刀が蒼鉛のフュリアスに当たった瞬間、その刀身が砕け散る。

「なっ」

すかさずスラスターを全開にして蒼鉛のフュリアスから距離を取った。蒼鉛のフュリアスは冷静に背中の砲を一つ、こちらに向ける。

「そこだ！」

取り出したライフルを砲の発射口に向かっては放った。これで、一つは潰せたはずだ。

だが、現実は無慈悲だった。跳ね上がった翼の砲は冷酷なまでにエネルギー弾を放ってきた。とっさに盾を構えるが、至近距離で受け止めたエネルギー弾に盾が弾き飛ばされる。

よろめくダークエルフ。そこに走りこむ蒼鉛のフュリアス。

『やらせないよ！』

その時、リリーナの声が響き渡った。それと同時に極太のエネルギー弾が蒼鉛のフュリアスの横手から直撃して蒼鉛のフュリアスを倒れこませる。

僕はダークエルフを後ろに下がらせた。

「リリーナ？」

『悠人、無事？』

センサーの反応した方に向くと、そこには赤いフュリアスが巨大な砲を構えていた。これに、リリーナが乗っている？

「どうして？」

『詮索は後だ！　来るぞ！』

ルーイの声に僕はダークエルフを横に跳ばせる。それと同時にダークエルフがいたところにエネルギー弾が突き刺さる。

『バスターカノンでもダメージが与えられないとは。どうすればダメージが』

『ダメージが与えられないわけじゃないよ』

起き上がる蒼鉛のフュリアスを見ながら僕はリリーナの声に耳を傾ける。

『フュリアス自体にダメージを負わすことは不可能だよ。それはわかっていると思うけど、全ての衝撃をゼロに出来るわけがない。パイロットを気絶させれる様な衝撃を与えれば』

『気絶して捕獲というわけか。ギガッシュに乗っているお嬢さんが何者か知らないけど、その案に乗った。悠人、決めれるか？』

僕はエネルギー残量を見る。少し無理をしたからか後5分ほどしか持たない。でも、5分ほどのエネルギーがあれば衝撃のある攻撃を

叩き込める。

「任せて」

『頼む。僕が引きつける！』

アストラルブレイズが両手のライフルを連射する。距離が近くて回避できないのか蒼鉛のフュリアスはひたすらエネルギー弾の直撃を受けていた。

僕はすかさず最終兵器を取り出す。二秒間ほどしか使えないガトリング砲。でも、衝撃を与えるならこれぐらいの威力があったら十分だ。

蒼鉛のフュリアスがこっちに気づいて砲を向けるが、リリーナの放つバスターカノンが蒼鉛のフュリアスを大きくのけぞらせた。

「喰らえ！」

ガトリングの引き金を引く。凄まじい量のエネルギー弾が叩き込まれて蒼鉛のフュリアスは倒れ込んだ。

「突撃するよ！」

ＦＢＤの力を発揮しながら一気に距離を詰める。距離を詰めている間に必要なものを取り出していた。散弾銃。至近距離で当てればガトリングに匹敵する威力を叩きだせるはずだ。

僕はダークエルフを蒼鉛のフュリアスに突っ込ませた。

「終わってくれ！」

そして、左のレバーを最大限まで倒して闇雲に散弾銃の引き金を引く。外れた散弾が大地を打ち、周囲に土煙が立ち上りだす。でも、僕は散弾銃の引き金を引く手を止めなかった。稼働時間が減っていくことを気にすることなく散弾銃を叩き込む。

いくら引き金を引いただろうか。いつの間にかコクピット内部にアラーとが鳴り響いていた。エネルギー切れだ。

僕はコクピットを開けてパワードスーツの推進力で跳び上がる。そのまま、近くにいるリリーナのギガッシュの方に飛び乗った。

「悠人、大丈夫？」

ギガッシュのコクピットが開く、血まみれのリリーナがこちらに向かってきた。

「リリーナ！　血まみれだけど」

「これ？　全部返り血だよ。戦闘があって。それより、イグジストアストラルは？」

「イグジストアストラル？」

リリーナは頷いて蒼鉛のフュリアスを指さした。あれ、イグジストアストラルと言うんだ。

イグジストアストラルは倒れたまま動かない。どうやら、完全に中のパイロットは気絶してくれたらしい。

「ほっ。よかった」

そう思った瞬間、イグジストアストラルが起き上がった。リリーナが僕の手を取って一緒にギガッシュの中に乗り込む。ダークエルフとは操作方法が違うみたいだ。

リリーナはすかさずバスターカノンをイグジストアストラルに向けた。だが、イグジストアストラルはこちらを見つめたまま微動だにしない。一体、何が。

『悠人、リリーナ』

そして、唐突に無線が入った。この声は、鈴？

『ごめんなさい』

泣きそうな鈴の声と主にイグジストアストラルが飛び上がる。僕はギガッシュのコクピットを開けてパワードスーツの力でイグジストアストラルくを追いかけようとする。でも、速度が段違いに違う。

「鈴、鈴ーー！」

僕は鈴の名を叫ぶが鈴は答えてくれない。

イグジストアストラルが米粒のように小さくなり、僕はその場に滞空した。どうしてあの場に鈴がいるのかわからない。鈴は今日、家の用事で狭間市にはいないはずなのに。

「鈴、どうして」

「乗れ」

僕がぼーっとしている間にいつの間にかアストラルブレイズが横まで来ていた。コクピットが開いてそこからヘルメットをかぶった人がこちらに手を伸ばしている。

僕は素直にアストラルブレイズのコクピットに乗り込んだ。

「今の奴は知り合いか？」

ルーイの言葉に僕は頷く。ルーイはゆっくりアストラルブレイズを地上に向かって降下させた。

「まんまとはめられたというべきか。僕達が。結城家の奴らめ」

「ルーイ、どういうこと？」

僕はその名前に目を見開いていた。どうして、鈴の家の名前が出てくるのか？

「ここに古のフュリアスが存在すると言われて僕達はいた。まさか、歌姫様までいるとは思わなかったけど、その情報をくれたのが結城家だ。オレ達はどうやらお前らからの隠れ蓑にするために僕達を利用したみたいだな。悠人、どうかしたのか？」

僕は思い出していた。どうして鈴がここに来たのか。そして、どうして、鈴が一人でここに来れたのか。最初から、このことのために、僕達を裏切るために。

「そんあ。嘘だよ。嘘と言って。お願いだから、鈴が僕達を騙していたなんて言わないで。嘘だ。嘘だよ」

信じられない。あれほどまでに優しい鈴が、僕達を騙すなんて、ありえない。誰か、誰か、嘘だと言ってくれよ。

第百四十八話　共闘（後書き）

一応、凄まじくわかりにくい伏線は忍ばせていたのですけどね。鈴がどうして狭間市に一人でいられるのか。遊びに来ているという感覚で書いていましたけど。

これから事態は急展開。周達が作り出した第７６移動隊の本領が発揮されていきます。

第百四十九話　手を取り合って

全てが氷解したというべきか。

オレは別世界から来たというルーイから今までの話を聞いていた。

場所は狭間市『ＧＦ』駐在所会議室。ルーイのそばにはリマと言うオレがレヴァンティンを突きつけた少女がいる。

第７６移動隊側からはオレ、孝治、亜紗の三人。『ＥＳ』穏健派からはアル・アジフの副官。

ルーイの話、そして、オレの考え。組み合わさったところに時雨から届いた緊急連絡。さらには、悠聖の報告。

全てを総合した結果、あらゆる全てが氷解した。

「なるほどね。結城家と真柴家の二つが共謀したのか。ルーイ達、えっと、歌姫の信仰があるから音界でいいか？」

「ご自由に。でも、僕はその名前でいいと思う」

「わかった。音界で見つけたゲートを通ってこっちに来たルーイ達が出会ったのが真柴昭三なんだな？」

最後の確認のためにルーイに尋ねる。ルーイはしっかり頷いた。

オレの隣にいる孝治がかなり険しい顔になっている。その気持ちはわからないでもない。

「まさか、真柴昭三が出て来るとはな」

「知り合いなのか？」

「死の商人、と言えばわかるよな？」

真柴昭三というのはまさに死の商人という言葉で全てを語り尽くせるとも言われている。

『ＧＦ』内部で危険人物とされている数少ない人だ。

「真柴昭三は商人。それも、戦争が起きれば起きるほどお金が転がり込んでくる軍事産業の商人だ。そして、真柴家自体がこう呼ばれている。『星喰い』とな」

監視が無ければ世界の全てを戦乱に呑み込む可能性がある。誰がつけたかわからないが、『ＧＦ』が牽制しなければ文字通りそうなるだろう。

「しかし、そんなことをするなら、敵対組織として捕まえれば」

ルーイが不思議そうに首を傾げるとリマが呆れたように溜息をついた。何もわかっていない奴が言うことだ。

「真柴家自体は軍事産業だけじゃなく、他のものもやっている。それに、軍事産業は無くてはならないものだ。そんな理由で捕まえれば経済自体が低下しかねない。それに、線引きが難しいんだよ。どのレベルがアウトで、どのレベルがセーフなのか」

死の商人と言っても、真柴昭三は天才的な商人というだけだ。軍事

産業という点においては。死の商人だからという理由で真柴昭三を捕まえれば、連鎖的に軍事産業関係者を捕まえなければならない。

つまり、政府公認の場所を除いて軍事産業が発達しなくなる。テクノロジーの大半は軍事産業が始まりであるということを考えると、技術の停滞が発生するのは必然だろう。

「まあ、問題は真柴以外にもあるけどな」

「我ら『ＥＳ』とフュリアスの技術開発を手伝っていた結城家か」

アル・アジフの副官が深刻そうな顔で言う。雰囲気でわかるけど、この副官は舐めてかかったら痛い目に合う。

オレは頷いた。

「そう。特に結城家の令嬢結城鈴の乗るフュリアス、イグジストアストラル。アル・アジフに聞いてみたけど、一機にして難攻不落の要塞。絶対的な防御力に３０にも及ぶ砲の一斉射撃。多分、結城家には他にもフュリアスがあるだろうから、正規部隊でも犠牲を覚悟しないとな」

「確かに、僕のアストラルブレイズの収束エネルギーライフルやギガッシュのバスターカノン、悠人のフュリアスによる対艦刀が全く通用しなかった。どうやって倒すか未だに不明だな」

「そういうことだ。イグジストアストラル一機で腕利き二人の猛攻を耐えた。これをどう対処するかだな」

楓と中村をぶつけるという作戦もあるが、撃ち落とされたなら一瞬

で終わる。フュリアスも頼りにならないとすれば、

「オレが行くしかないか」

「君が？　何かのフュリアスに乗るのか？」

「生憎、フュリアスの操作は出来ないさ。でも、防御力が一番高いのはオレだ。だったら、オレが出ればいい」

かなり危険だから全力で反対されるだろうな。でも、これぐらいの作戦した思い浮かばない。

本当なら悠人に任せたいところだが、悠人は完全に戦意喪失を起こしている。戦場に連れて行くのは危険だ。

「問題点があるとするなら、真柴や結城がどこに向かったか。それさえわかれば簡単だけど」

オレがそう言った瞬間、会議室の入り口が大きく開いた。そこにいるのは悠人。何かを決意した悠人だ。

オレは小さく笑みを浮かべながら悠人に言う。

「今は会議中だぜ」

「周さん。イグジストアストラルと、鈴と僕を戦わせて欲しい」

「理由は？」

わかってはいるが尋ねずにはいられない。だって、悠人がやろうと

することは死ぬ危険性が極めて高い。もし、鈴が本当に裏切っているなら。

「僕は鈴を信じている。鈴は僕を受け入れてくれた。だから、僕は自らの手で鈴を救う。いや、連れ戻したい」

「連れ戻す、ね。もし、鈴が拒否したら？」

「奪い取るよ」

その解答にオレはキョトンとした。まさか、悠人からそんな言葉が返ってくるなんて。

オレがここに来る前に見た悠人は完全に立ち直れないくらいにダメージを負っていたのに。予想外というべきか、良かったというべきか。

「わかった。孝治、準備は出来ているな？」

「ああ。だが、こういう形で発揮することになるとはな」

「全くだ」

本当ならもっと別の形でしたかったのだが、相手を考えると、評議会の爺達を納得させるにはおつりが来るレベルの敵。

「第７６移動隊全員に通達。移動隊権限により、あらゆる地域、国家への出動準備を」

「待て。それには国の、そうか」

アル・アジフの副官が納得したように頷いた。どうやら、どうして第７６移動隊と呼ばれるほぼ中学生で構成される部隊を作り出したかに気づいたらしい。

移動隊の設立理由をようやく果たせる。

「面倒な国の許可はいらない。そのための第７６移動隊だ。悠人を一時的に第７６移動隊に組み込むが大丈夫か？」

「ああ。アル・アジフ殿も許可するだろう。しかし、『ＧＦ』はとんでもない部隊を作り出したものだ。それなら、どんな場所でも強大な戦力を出せる」

それが移動隊の本領だ。犯罪者などを迅速な動きで逃がさないための追跡の効率化。それを考えた場合、国家間の移動に関してはそれぞれの国家の法を超える力が必要になる。

第７６移動隊はそれを体現するために作った。ほとんど中学生で構成したのは、他の手段での移動を効率化するため。そうでなければアルトを勧誘している。

「移動隊は第７６移動隊以外はいらないさ。時雨もそう思っている。悠人、ルーイ。『ＧＦ』、『ＥＳ』、音界が手を取り合って戦わないと辛い可能性がある。力を貸してくれるか？」

「僕は周さんについて行くよ。周さんと一緒なら、きっと鈴を救える」

「本音を言うと、未だに君達は信用出来ない。でも、悠人の思いは

僕達にもわかる。だから、僕、アストラルブレイズと、リマ、ギガッシュを君の戦力に加えて欲しい」

『ＧＦ』と『ＥＳ』、そして、新たに見つかった音界が手を取り合って戦う。前代未聞であり、ある意味ありえない。特に、音界とはさっきまで戦っていたからだ。

オレは自分の手を出した。その手の上に悠人とルーイが手を乗せる。

「オレ達の本気、見せようぜ」

「はい」

「ああ」

この時のオレはまだ知らなかった。これから起きる戦いの大きさを。

そして、敵の力を。

第百四十九話　手を取り合って（後書き）

亜紗が空気となっていますが、亜紗は護衛です。もしもの時のための護衛。

次は、どうして急に悠人がやって来たのか。周が見た悠人が違うのかを書こうかと。

第百五十話　最悪の想像（前書き）

自分の中では前回が少し微妙だったような気がして今回は力を入れて書きました。最初に考えていたものよりも大きく違ってしまいましたけど。

第百五十話　最悪の想像

オレは小さく息を吐いた。

場所は駐在所の外。すでに空には星が輝いている。その中でオレは小さく笑みを浮かべていた。

「まさか、あんたが悠人を元気づけるとはな」

オレは空を見上げながら言う。声は、近くにあるポストの反対側から聞こえてきた。

「元気づけたわけじゃないさ。ただ、まだ失っていないものを失ったかのように泣いている彼に腹が立ったのでね」

優しい感じの正の声がオレの耳に届く。腹が立ったのは本当に事実だろう。でも、正は見捨てられなかったんだな。

オレとよく似てるぜ。

「正、お前が何をやりたいのかわからない。お前は何のためにオレの前に現れるかわからないけど、悠人を助けたのは自分自身が驚いているんじゃないか？」

「正解だよ。彼は君が元気づけるべきだった。余計なお節介だと思ったよ。でもね、失ってもいないなら、その手に取り戻すことが出来る。人も笑顔も喜びも感情も」

そうだ。悠人はまだ鈴を失っていない。鈴は悠人の前から去っただ

けだ。それはオレが言おうとしていたこと。

でも、正にとっては口出ししなければ許せないレベルのもの。

「お前は、失ったんだな。まあ、おかげで悠人もかなり変わってくれたし、助かった。ありがとう」

「変わった？　僕にはあまりわからないけど」

そうだろうな。普通ならわからないと思う。でも、オレには悠人が変わったことがわかる。

「あいつはオレと同じだよ。失いたくないんだ。だから、覚悟を決めた。今まではどうして戦っているのかあやふやだったはずだ。でも、初めて悠人は自分の力でやりたいことを見つけ出した。そういうことだよ」

悠人自身も気づいていないだろう。でも、戦おうとすることは覚悟がいる。覚悟がいるからこそ、自分の力を信じないといけない。

覚悟を決めたから、自分の求める未来に向かって力づくでも向かおうとしている。悠人は優しいから今までしなかったことだ。

「あいつにはオレ達と同じように失って欲しくないしな」

「そうだよ。僕にとっても、過去に失ったものは大きい。でも、僕は君ほど手回しが早くないと思うよ」

「急に話を変えるな」

正も、オレと同じように大切なものを失ったんだな。

「鈴を救うことが君の目的じゃないのだろう？　君の目的はずばり」

「真柴、結城に評議会が繋がっているかどうか」

オレは正の言葉を先回りして言う。正の姿は見えないが頷いているだろう。

「そもそも、フュリアスというものは評議会の話と共にやって来たんだ。ルーイ達からは裏が取れてる。多分、いや、十中八九真柴か結城と繋がっている」

「そして、評議会の中を一掃するというわけか。実に上手く出来ていると思うよ。でも、そう上手く行くかな？」

「さあな」

それぱかりはオレにはわからない。出来れば、上手く行って欲しいとは思うけど。

すると、正が小さく笑った。微かな笑い声と共に何かに気づいたような声が加わる。

「君は役者に向いているね」

「何がだ？」

オレは微かに目を細める。

「すでに魔界への救援要請を独自に送り、アル・アジフに中東滞在を説いているのを一言も言わなかったことを思い出してね」

聞かれていたことは何ら不思議じゃない。むしろ、盗聴器があることをオレも孝治も気づいていた。おそらく、アル・アジフの副官も。

だが、それは音姉が設置したものだったから無視していたが、それに介入することは容易い。

それよりも、どうして正がオレのやっている行動に気づいていたのか不思議だ。全て、作業をレヴァンティンに任せたのに。

「それに、君が考えたシナリオの上で君は臨機応変に踊っている。違うかい？」

「違わないさ。まさか、気づかれるとはな」

会議室での内容は元から考えていた筋書き通りだった。悠人が来たのは完全に予想外だったが、スケールの大きさ示して音界の勢力を味方につけることには成功した。

つくづく思うけど、オレはろくな死に方をしないだろうな。

「監督でもあり、役者でもある。海道周、君はこの事件の幕をどう降ろすつもりかな？　君はそこまで決めているんだろ？」

「決めてないさ。オレが考えていたのは、敵だった勢力を味方にどうやってつけるかだけ。オレはそこまで未来は考えられない。でもな、目的地は大体わかってる」

真柴や結城が目指す場所。イグジストアストラルのデモンストレーションとして最も最適な場所。

そうなると、場所は一つしかない。

「フュリアスを持つ勢力がいる土地。中東だ」

「どうしてだい？　中東以外にも候補地は」

「多分、イグジストアストラルのデモンストレーションを行うはずだ。生身の人間相手なら、イグジストアストラルのデモンストレーションにはならない。ただの虐殺だ。だったら、何と戦えばいいか。フュリアスだ。そして、世界最高の戦力を持つ『ＧＦ』とすぐに戦う場所はかなり分が悪い。さすがに、イグジストアストラル一機で第一特務は倒せないからな。そうなると、『ＧＦ』以外の土地、『ＥＳ』の土地になる。『ＥＳ』の土地の中で一番世界を混乱させ、国連軍を動かせる地域と言えば」

「なるほど。アフリカは自然公園がたくさんあり、国連軍でさえ容易に軍は動かせない。だが、中東なら」

「『ＥＳ』過激派と仲のいい国連軍なら簡単に動ける。対する『ＧＦ』は簡単には動けない。そして、中東自体は魔力鉱石の世界最大産地。経済を混乱させるには十分だ」

中東で何かが起きるのはオレの中では確定事項だ。だから、中東にいるアル・アジフを説得した。

アル・アジフがいればアリエル・ロワソもいる中東の『ＥＳ』部隊

は並みも敵には屈しないはず。後は、オレ達の迅速な行動くらいか。

「しかし、真柴と結城にはメリットがないはずだよ。結局は全滅する。なのに」

「もしもの話だ。『ＥＳ』、国連がイグジストアストラルに敗北した時、残る勢力はどこだ？」

正が微かに驚いたのがわかった。オレが会議の筋書きを描いていた本当の理由に気づいたのだろう。

「『ＥＳ』は仲間意識が強い。穏健派と過激派の違いは穏健派が『ＧＦ』と、過激派が国連と仲がいいだけ。だから、『ＥＳ』が攻められたなら『ＥＳ』全勢力が戦う。それを撃退したなら『ＥＳ』は滅亡だ。組織として維持なんて出来ない。やって来る国連軍だって同じだ。中東が経済の中心なら、全力で向かってくる。それを返り討ちにすれば国連は崩壊。ようやく、世界最大戦力の組織が動く」

「それは君の想像だろ？　そんなことが」

「オレだって起きて欲しくはないさ。でもな、本当に起きたなら『赤のクリスマス』のような犠牲者だけじゃ済まない。だったら、誰もがオレが作り出したレールの上を走らせるようにすればいい。オレが恨まれようが、犠牲者を無くせるなら、オレは」

オレは空を見上げたまま拳を握りしめた。

「神だって殺してやる」

第百五十話　最悪の想像（後書き）

周は基本的に考え得る最も最悪なシナリオを元に作戦を組み立てるタイプです。なので、普通の作戦とかには普通の強さしか発揮出来ません。

第百五十一話　新たな剣（前書き）

最近、狭間の鬼に関することを書けていないことに気づきました。
後半の前編は最後の方しか関わり合いがありませんから完全に。

第百五十一話　新たな剣

イグジストアストラル。絶対防御の機体。

僕は空を見つめながら鈴の乗る機体を思った。散弾をいくら叩き込んで破壊することのできない装甲。そして、砲数の多い射撃。全てを回避したとしても、その防御力の前ではほとんどの武装が無意味。

追加パックを備え付けるという手もあるけど、あの防御力の前ではどんな攻撃も無意味。ＦＢＤシステムで接近してもそこまで。どうすれば。

「考え事？」

リリーナの声に僕は振り返った。服を着替えたリリーナが僕に近寄ってくる。その後ろにいるのはルーイとリマ。

「そうだね。鈴を、いや、イグジストアストラルをどうすればいか考えていて」

「イグジストアストラルは絶対防御の機体。その頑丈な防御力を抜くことはできないよ」

「そうだよね。あれ？　そう言えば、リリーナはどうしてイグジストアストラルを知っていたの？」

よく考えてみればそうだ。イグジストアストラルの情報はリリーナから聞いている。でも、こんな期待が元からあるなら言ってくれたらいいのに。

「笑わないで聞いてくれる？」

リリーナが僕の隣に座る。

「知っているから。私が、イグジストアストラルの戦闘能力と、後に登場する第七世代型のとあるフュリアスに乗ることを」

「知っている？　未来を知っているの？」

僕の疑問にリリーナは首を横に振る。未来を知っているというわけじゃないらしい。

「私が知っているのは、未来じゃない。そう、思う。もし、これが未来なら、絶対にいや」

リリーナはそう言って口を閉ざした。リリーナがどんな未来を知っているかわからないけど、僕は少し気になることが出来た。

「もしかして、ギガッシュを操れたのは」

「うん。ギガッシュの操作系統は第七世代と似ているから。癖は少し強いけど。だから、いきなりでも私は扱えた。コクピットに座ったらね、思い出した。操作の仕方や、戦場の動き方。生身じゃなくて、フュリアスで。まるで、経験したように。そう思ったら、いろいろなことが頭の中に出てきた。イグジストアストラルもその一つ」

リリーナの体が震えている。僕は、リリーナの肩をそっと抱き寄せた。

経験したことがないのに経験したようにわかるのは恐怖しかないはずだ。僕だってそうだ。僕の力も使ったことがなくても効果は頭の中で知っていた。その時の自分への恐怖は今でも覚えている。

「悠人、怖いよ。私が、私じゃなくなるような気がして。いつか、私じゃない誰かが私を乗っ取るんじゃないかって」

「リリーナ。僕からはこんなことしか言えないけど、聞いて」

リリーナが泣きそうになりながらこちらを向く。僕は笑みを浮かべてリリーナの頭を撫でた。

「僕は今のリリーナを知っている。優しくて、誰よりも他人を思って、でも、自分の中で何かを必死に隠しているリリーナを。だから、リリーナが変わったなら僕はリリーナを取り戻したい。そう、思えるから」

「悠人。うん、ありがとう。ありがとう」

リリーナが僕の胸に顔を当てる。それを受け入れながら僕はリリーナの背中を撫でてやった。優しく、でも、確かに。

「ルーイやリマは？」

「これからのことだ。僕達の残っているフュリアスは二機だけ。僕のアストラルブレイズと砲撃戦仕様のギガッシュ。リマは万能型のギガッシュが得意だからな。だから、リリーナにギガッシュを貸したいと思っている」

「どういうこと？」

確かにリリーナはギガッシュの操作に慣れていると言ってもいい。どんな理由であれ、所見のはずのギガッシュで普通に戦闘をこなしていたからだ。そうだとしても、ルーイ達がリリーナにギガッシュを貸し与える理由にはならない。

だから、僕は尋ねた。真意を探るために。

「結城家には僕達が技術提供をしている。だから、君の第三世代を超える機体、第四、第五世代が運用される可能性が高い。そうなると不慣れな機体で出れば落ちる確率が必然的に高くなってくる。さらに、幸運というべきか、リリーナは僕やリマよりも砲撃型の適性がある。むしろ、砲撃型の扱いを慣れているというべきか。だから、僕は危険を承知でリリーナに貸し出したいと思っている」

「危険だよ。リリーナが死ぬかもしれない。そんなことに僕が許可を出せるわけが」

「私は、乗る」

僕の胸の中でリリーナがはっきり声を出す。その声は決意に満ちた声。僕の反論を封じる声でもあった。

「危険なことでも私は乗りたい。鈴を助けたい。だから、乗らして。ギガッシュに」

「おっ、ちょうどいいところにいたな」

その声に僕達は同時に振り向いていた。完全に空気を読まずに浩平さんがやってくる。その後ろにいる男性は誰だろう？　どこかで見

たことがあるけど。

リリーナの顔を見ると、開いた口が塞がらなくなっていた。それほどに大物なのかな？

「浩平、こいつらが」

「はい。真柴悠人、リリーナ・エルベルム、ルーイ・ガリウス、リマ・エルロッティ。作戦参加予定のパイロット達です」

ルーイとリマが説明を求めるような眼で僕を見てくるが、僕も意味がわかっておらず首をかしげるだけだ。すると、男性がゆっくり近づいてきた。

そして、リリーナを見る。

「久しぶりだな。一年振りか？」

「どうして、ここにいるのさ？」

「いやー、アル・アジフに試作機の完成を見てもらおうと思ってな。『ＥＳ』がフュリアスを完成させていたから、どの勢力も我先にと開発をしているフュリアス。その、『ＧＦ』第一号を見せようかと思って」

その言葉と共に僕達の近くにトレーラーが止まった。大きさはかなり大きい。横倒しにしたダークエルフと装備一式を詰め込めるくらいの大きさだ。

男性が手を上げるのと同時にトレーラーの荷台が開く。そこにいた

のは四足歩行の機体。だけど、細部を見る限り変形でも可能な形だ。そして、その機体の側面には対艦剣がデフォルトで備え付けられている。

背中についているのはエネルギーライフルを大きくしたようなもの。

「ＧＦＦ－０１ソードウルフ。『ＥＳ』のフュリアスにある武器取り出し機能はさすがに作れなかったけど、機動性と攻撃力を重点的に高めた機体だ。スペック上の数値はまだ出せていないけど」

男性が書類をルーイに渡す。ルーイはその書類を見て目を見開いて驚いていた。

「最大出力と最大速度がアストラルブレイズよりも上？　この世界でも初期作品なのにこのスペックって」

「背中についているのはバスターカノンの小型版ですね。エネルギー収束率から考えてバスターカノンに匹敵する火力じゃないかと。ですが、この出力では機体の機動時間が極端に狭まる可能性があるのでは？」

「普通はな。ちょっと、新しい出力エンジンに最新のものを使用してみたんだ。ＳＫ２－Ｖ１高出力持続型ドライブ機関」

ＳＫの名を持つエンジンは世界的に有名だから僕も知っている。『ＧＦ』にいる誰かが設計するものだけど、特許を取得していてもその料金は極めて安く、ＳＫシリーズ自体も燃費がかなりいいため、出力エンジンのシェアで９０％ほどを独占している。

市場に出回っているのがＦ１３タイプだったいから、Ｖ１という新

式ということでもある。

「テストした時だけで4時間補給なしにテストの持続が可能だった。模擬戦闘込みでな」

「ありえない。フュリアスというよりこれは獣だ。完全に、獣だ」

「そう。あまりのスペックの高さに誰もが扱えなかったじゃじゃ馬だ。だから、アル・アジフに見せたかったんだけどな。無駄足だったな」

「私が使う」

リリーナがすくっと立ち上がった。そして、ソードウルフに近づく。

「ルーイ、リマ、申し出は嬉しいけど、私はこの機体を使いたい。この機体なら、鈴を救えると思うから」

「驚かされることばかりだ。第三世代の性能を第七世代と同等に引き上げれるパイロットがいるかと思ったら、第七世代を超える可能性のあるフュリアスが作られるとはな。僕はいい。リマ、徹夜になるぞ」

「いくらでも」

リリーナはトラックの荷台に飛び乗った。僕は慌てて立ち上がってリリーナに近づく。

「悠人、私はこの機体で悠人と一緒に戦うよ。いいかな?」

「それは僕が決めることじゃない。リリーナがそうしたいなら、僕はリリーナと共に闘うよ」

「そうだね。ありがとう」

リリーナが笑ったような気がした。ここからは表情は見えないけど、リリーナは笑っている。まるで、これからずっと付き添う相棒を見つけたかのように。

「よろしくね。私の新たな剣」

第百五十一話　新たな剣（後書き）

ソードウルフを持ってきた人物は時雨です。
ＧＦ－０１は『ＧＦ』が作ったフュリアスの一号機という意味です。ＳＫ２－Ｖ１はイニシャルＳＫの人が作った二世代目の出力エンジンです。Ｖのことは後に語る予定。

第百五十二話　第７６移動隊

「来た！」

駐在所の中でオレはレヴァンティンに繋げた通信機器に接続するイヤホンからの音声を聞きながらぐっとこぶしを握り締めた。

『イグジストアストラル及び黄土色のフュリアスの軍勢を発見』

『ＧＦ』からでも『ＥＳ』からでもない魔界からの、刹那からの連絡。やはり、闇に生きる者だからこそわかる通信網がある。

「場所は中東。。『ＥＳ』過激派の領域のど真ん中だな」

真柴、結城の動きを知るためにオレがあらゆる組織に手を回して捜索した結果、四日目にようやく見つかった。そこまで移動した手段がかなり気になるが、目的の相手を見つけた以上、こっちはなりふり構わず追いかけるだけ。

オレは小さく笑みを浮かべて周囲を見渡す。周囲にいるのは近くで作業をしている亜紗と椅子の上で正座をしてお茶を飲んでいるリースだけだ。

「亜紗、すぐに全員に集合命令を。リースは訓練中の悠人達を呼んできてくれ」

亜紗とリースが同時に頷いてそれぞれ動き出す。亜紗はデバイスを使って第７６移動隊全員にメールを、リースは正座した姿のまま浮かんでお茶を飲みながら駐在所から出て行った。

凄く何かが言いたくなってくるが今は気にしてはいられない。

オレはレヴァンティンを一回指先で叩いた。

『何か動きがあったのかの？』

すぐにイヤホンの中にアル・アジフの声が聞こえてくる。あらかじめ、アル・アジフとの通信をすぐにつなげるようにレヴァンティンに言っていたのだ。

オレはまだアル・アジフが無事であることを安心しながら今聞いた事実を言う。

「イグジストアストラルの位置を見つけた。場所はカヴィール砂漠東側。イグジストアストラルだけじゃなく、黄土色のフュリアスもいるらしい」

『カヴィール砂漠東側。過激派のラインじゃな。一応、穏健派のメンバーを準備しておく。過激派への連絡は』

「まだだ」

『了解じゃ。我からしておこう。そなたらも準備を整えて早く来るのじゃぞ』

アル・アジフとの通信が切れる。それを確認してからオレはイヤホンを外した。

カヴィール砂漠東側には何もない広大な砂漠が広がっている。その

ため、大規模戦闘を置こうなう土地としては十分な大きさがあり、オレも何回か言ったことがある。

あそこの特徴として時々、奇妙な魔力溜まりが出来上がる。その魔力溜まりに気づかず戦闘したなら自分の魔術で自爆という笑えない死に方をするときもある。制御が極めて難しくなるのだ。

理由はわからないが、故にカヴィール砂漠東側は死の砂漠として恐れられている。

『カヴィール砂漠東側ということは、魔術が一切使えないところ』

「ああ」

亜紗がスケッチブックを捲る。

『フュリアスを相手にその条件は辛い』

「だから、奴らはそれを狙ったんだろうな。フュリアスの対魔力はそれほど高くない。対魔力を上げようとしたなら希少物質（レアメタル）の使用量は極めて高くなる。だから、魔力に対して敏感なはずだ」

だから、カヴィール砂漠東側に位置している。『ＥＳ』もフュリアス部隊を動員してぶつける可能性があるだろう。それが奴らの目的の可能性だってある。

最大の問題点を挙げるとするなら、どうやってカヴィール砂漠東側についたかどうか。あそこは『ＥＳ』の本拠地の真っただ中だから、そこまで見つからずに移動する方法が皆無である。

「大規模な移動手段を持っているはずだから、行動範囲を上げておかないとな。イグジストアストラル単機で向かったなら大丈夫かもしれないけど」

「鈴が見つかったって本当!?」

オレがレヴァンティンを操作しようとした瞬間、入り口から悠人が飛び込んできた。その後ろにはリリーナの姿がある。二人共、全速力で走ってきたのか息を切らしていた。

というか、悠人とリリーナは新装備と新機体の練習をしているんじゃなかったのか？

「ああ。カヴィール砂漠東側でイグジストアストラルと黄土色のフュリアスの混合部隊を確認した。アル・アジフには連絡してあるから、今すぐ準備を整えて」

「この世界の航空空母の最大出力は？」

「はあ？」

思わずそう言ってしまった。別に、今は行ってきたルーイを邪険に扱うつもりなんてさらさらない。でも、航空空母って何だ？

「航空空母だ。もしかして、知らないのか？」

「空母というもの自体がこの世界にはないぞ。そもそも、飛行機も小型化できていないのにどうやって空母なんて作るんだよ。飛行機を乗せる空母を作ろうとしたらどれだけ巨大なものになるか」

「可能だ。僕達の世界、音界では航空空母が作られている。その機動性を考えていないと」

どうやら本当にあるらしい。航空空母となるものが本当にあるのかはさておき、あるなら第７６移動隊にも配備してもらうように話しかけないとって、

「だから、急にカヴィール砂漠東側に現れたんだ。もしかしたら、これは囮か？」

『どういうこと？』

亜紗のスケッチブックに書かれている文字を見ながらオレは考えをまとめる。そして、ルーイの方を向いた。

「航空空母の飛行理論は？」

「フュリアスにあるフロートシステムと同じだ。エネルギー転換による術式を開放し、重力に対する作用点を作り上げる。後は既存のエンジン装置さえあれば完成だ」

「魔術による重力の反作用。ホバリングを魔術に任していると言うのか？　いや、確かに理論上は可能な数値だ。そうなると、あれをこうして、これをああすれば」

頭の中で今聞いた話を総合的に考えていく。重力に対する逆作用、それを維持しながら出力エンジンを使ったとするなら、現行ＳＫシリーズの大型、旅客機用のものを複数並列に積み込めば、

「２５０ｍ級。最大出力を考えると、時速２００ｋｍ程度」

「それ以上のものは？」

「むしろ、出力が落ちる。理論上の最高数値だから大きさや出力は超えることはない」

そうなると、敵の移動圏内も大きく変わってくる。オレはレヴァンティンに機器をつないで数値を入力していく。そして、出てきた移動範囲は、

「アフリカ、エジプトまで入ってくるのか。この中で主要な基地と言えば」

オレは頭の中で地図を確認する。あそこらへんの地形は前にいた正規部隊で嫌ほど頭の中に詰め込ませられた。だから、地図帳を開かなくても大丈夫だ。

小さな『ＧＦ』基地が八つ、中規模の『ＧＦ』基地がアラブ首長国連邦に一つ。そして、『ＥＳ』穏健派の本拠地。

オレの中で何かが組み立って行くのがわかった。それと同時にレヴァンティンにメールが届く。

オレの考えの中でのメール内容と実際のメールの中身が違うことを期待しながら、オレはメールを開いた。

『『ＥＳ』過激派からの連絡。『ＧＦ』のい要請にあった勢力をカヴィール砂漠東側で発見』

おそらく、アル・アジフが連絡した者とは別ルートからの連絡だ。

そうでなければこれほど早くこんなメールは回ってこない。

オレは小さく舌打ちをした。そして、すぐさまアル・アジフとの回線を開くためにレヴァンティンを指先でつつく。

『どうかしたのか？』

不思議そうなアル・アジフの声。オレはその声に少し安心しながら全てが組み立った理論を話す。

「相手の狙いがわかった。相手の狙いは『ＥＳ』穏健派本拠地及び、周囲にある魔力鉱石の採掘所。相手は航空空母を持っている」

『理由は？』

「お前だ。アル・アジフ」

今、結城家が一番恐れているのはイグジストアストラルが撃破されることのはずだ。イグジストアストラルがいなければただのフュリアスの集まり。そうなれば、『ＥＳ』過激派のフュリアス部隊に全滅する可能性だってある。だから、狙うのはイグジストアストラルの弱点を知ってそうな人物。

そして、オレの考えていた最悪の想像を組み入れるなら、残る疑問も解決する。

『ＥＳ』穏健派の本拠地周辺には魔力鉱石採掘所は多い。『ＥＳ』穏健派によって庇護を得るという意味もあるが、そもそも魔力鉱石が出来やすい土地なのだ。そうなると、十分に国連も引き付ける。

『全てが外れた場合は？』

「今は信じてくれ。それしか言えない。根拠はオレの考えだけど、だけど、オレは」

『信じるぞ。そなたの言葉』

アル・アジフが嬉しそうに言う。

『我らは一週間持たせて見せよう。じゃから、そなたらはその力を使い、最速で向かってくるのじゃ』

「ああ。ありがとう」

『我はそなたを信じておる。それだけじゃ』

アル・アジフとの通信が切れる。オレは少しだけ笑みを浮かべて顔を上げると、そこには全員が揃っていた。誰もが今の話を聞いていたらしい。

アル・アジフは約束を守ってくれるはずだ。あいつは、世界最強の魔術師なのだから。

「第７６移動隊はこれより緊急出動に入る。場所は中東、イスラエル近郊にある『ＥＳ』穏健派本拠地。今回の任務では全員を連れて行くことにはここの治安を守れない。だから、白川悠聖、白川七葉、工屋浩平、リースの四人は残って欲しい」

「ちょっと待てよ。どうしてリースもなんだ。リースは『ＥＳ』穏健派のぐばっ」

詰め寄ってきた浩平の体をリースが人形のように上に放り投げて天井にぶつけた。浩平が落ちてくる。

この光景は久しぶりだなと思うけど、知らないルーイ達は完全に引いていた。当り前か。

「アルは周を信じた。だから、私も周を信じる。でも、アルを裏切ったなら」

「煮るなり焼くなり好きにしろ。悠聖と七葉もいいな？」

オレが二人に話しかけると、悠聖はニヤリを笑みを浮かべた。

「今回のヒーローはお前と悠人だろ。だったら、オレは大人しくお留守番だ。盛大に暴れてこい」

悠聖の笑みにオレも笑みを浮かべる。これで、出動できるな。

「出動メンバーは全員準備を開始。出発は一時間後。第７６移動隊の本領を発揮するぞ」

『了解！』

オレはそう宣言しながらも誰も見えないところでレヴァンティンを使ってメールやら報告書やらを大量に作り上げていた。たとえ、どれだけ移動に関する権限を持つ第７６移動隊であっても交通手段がなければ何にも出来ない。

オレは小さく息を吐いた。

「兄さん、疲れてます？」

『疲れているというより気苦労だと思う。周さん、今でも書類を作っているし』

どうやら亜紗には見抜かれていたらしい。五月とはいえまだまだ半袖になるには早いから長袖を身につけているというのに。

「でも、一つ気がかりなことがあるんですけど。どうして、浩平さんやリースさんを連れないんですか？　あの二人なら」

「勘、とだけしか言えないな」

本当なら悠聖と七葉の二人だけにするつもりだった。でも、どうしてかわからないけどいつの間にか浩平とリースもここに残すようにきめていたのだ。ある意味、フュリアスとの戦いでは最大の戦力になるはずの二人を。

それがオレにもわからない。

「もしかしたら、気になっているのかもしれないな。ヴァルフォミア港であったことが」

一昨日送られてきたメール。そこに書かれていたのは赤いフュリアスによるヴァルフォミア港襲撃事件。はっきり言わせてもらって、あまりにも不確定な要素だ。

ルーイ達が狭間市にいたのはイグジストアストラルが存在するとされていたから。だから、ここに陣取った。そして、元からいた勢力

であるオレ達と戦った。結局は結城家に出し抜かれた感じなったけど、そうなると、赤いフュリアスはどこから来たのか気になる。

今はロシアが解析しているらしく、『GF』からも研究者の一人として慧海が今日向かったことを聞いた。それがギガッシュのものであればルーイ達以外にも来ているということになるのだが、もし、ギガッシュ以外なら、

「一体、何が起きているっていうんだ」

オレは小さくつぶやいた。

第百五十二話　第７６移動隊（後書き）

次から後半前編終盤です。新型フュリアスであるソードウルフを加えた悠人達がどこまでイグジストアストラル達と熱く戦えるように書けるか不安ですが、とりあえず、終盤の内容でも少しだけ。

・フュリアスＶＳフュリアス
・『歌姫』の力
・狭間の鬼

の三本で行こうと思っています。内容は変わるかもしれませんが。そろそろ『歌姫』の力を正確に書こうかと。最後の狭間の鬼の項目には都を関わらせる予定です。空気扱いしていた理由はありますよ。

第百五十三話　中東の地

中東。

それはヨーロッパから見て名付けられた地名だ。ヨーロッパを中心とするならそういうことはよくわかる。日本でもそういう呼び方は定着しているが、一部の文献にはこういう文字が躍ってもいる。

世界の中心。

本当に古い文献しかないが、そこが始まりの土地であり、滅びの土地でもあると言われているからだ。

その中東にオレ達は降り立っていた。『ＧＦ』専用の旅客機を使って最速で中東に向かったオレ達は途中でインドに一回寄港したものの、敵の妨害を受けることなく到着できた。アル・アジフが持たせると言った一週間どころか二日も経たずに到着できた。

『マスター、緊急連絡が』

精神感応にレヴァンティンが語りかけてくる。オレは微かに頷いて内容を促した。

『カヴィール砂漠東側にフュリアスの姿なし、だそうです。今、『ＧＦ』、『ＥＳ』双方が力を合わせて捜索していますが』

もし、航空空母を使っているなら見つかるわけがない。航空空母は元々、ここの世界のものじゃないのだから。

『そうですね。それと、もう一つ。心して聞いてください』

オレは一回だけ深呼吸をした。

『アル・アジフとの連絡回線が途絶えました』

その言葉にオレは一瞬視界が真っ暗になったような気がした。でも、オレの体が倒れることを、意識を失うことを拒否する。見た目はほんの微かに揺れただけだろう。

オレは苦々しく息を吐いてもう一回深呼吸をした。

時間は？

『つい先ほど、ここに着いてしばらくしたらです。ここから目的地まで約６時間。最悪の場合は』

考えない。今はただ、全速力で向かうだけ。

「第７６移動隊集合って、誰もいないし」

オレがレヴァンティンと会話をしている間に全員がどこかに行っていた。いや、空港内部にある雑貨店か。何を買うつもりなのだろうか？

すると、由姫が真っ先に走って帰ってきた。その手に握られているのはここの詳しい地図。

「兄さん、通信が終わりましたか？」

「・・・気づいていたのか？」

「バレていないと思っているのは兄さんだけですよ。ここら辺の土地には疎いものですから、みんなで兄さんが通信を終わるまでに地図を買っておこうと。ちなみに、孝治さんは通訳です」

孝治って地味に語学は堪能だからな。オレは日本語と英語、それに、ドイツ語がペラペラだけど、孝治はそれを遥かに超える量の言語を簡単に話す。オレだってここの地域の人達とは少し片言だけど話せるけどな。

「通信の内容は？」

「嫌な内容ととてつもなく嫌な内容の二つがあるが？」

「アル・アジフさんとの連絡が途絶えたんですね」

多分、この場にいる誰もが覚悟していたことだろう。イグジストアストラルの戦闘能力は極めて高いというレベルを超えている。おそらく、アル・アジフですら勝負にならない。淡い期待はあったのだが。

もう少し早く気づいていたなら。

「兄さん、アル・アジフさんはきっと生きています。必ず、絶対に」

「どうしてそう思う？」

「女の勘です」

由姫は何かを隠しているように笑った。その笑みを見ながらオレも少しだけ笑みを浮かべる。

さて、これからどうするか考えないとな。最速で向かうにはあまりに遠すぎる。だけど、普通で言ったら間に合わないかもしれない。

地図を買って戻ってくる面々を見る。一番いい手段はこうするしかないな。

「弟くん、話は終わった？」

「気づいているならいいけど。緊急連絡だ。アル・アジフとの回線が切れた。理由は不明だ」

悠人の顔が少しだけ青くなる。でも、その悠人の手をリリーナが握りしめた。それに悠人が握り返す。

「これから、部隊を二つに分ける。一つはオレを部隊長とする部隊、一つは音姉を部隊長とする部隊。オレを部隊長とする部隊は最速で目的地に向かう」

「一ついいか？」

ここら辺りの地理にとても詳しい孝治が手を挙げる。

「最速で行くには距離がありすぎる。どうするつもりだ？」

「まあ、ソードウルフのスペックを見ていて気づいたんだけどな、ソードウルフはＳＫ２－Ｖ１を出力として使っているんだ。幸運なことにな」

「幸運なこと？」

孝治だけじゃなく悠人やリリーナまでも首を傾げている。リリーナはソードウルフのパイロットだから知っていなくてはおかしいのだが。

「可変機構。ソードウルフの出力エンジンには二つの機構がある。一つは最大出力を出すための直列機構。もう一つが最低限の機動性と残量エネルギーを回復するために空気中の魔力粒子をエネルギーに変える機関を使用する並列機構」

その言葉を聞いて悠人とルーイ、リマは目を見開いて驚いていた。出発するまで、リリーナがソードウルフに慣れる訓練を一緒にしていたのだから知っていてもおかしくないけどな。

まあ、そんな永久機関みたいな役割をフュリアスに搭載出来るサイズで実現出来るなんて思ってもいなかったけど。

「オレの部隊には亜紗、孝治、リリーナとソードウルフ。残りはトレーラーなどを使用して追いかけて欲しい」

「スペックだけを見て周さんはよく気づいたよね。どうして？」

悠人の質問にオレは当たり前のように答えた。

「ＳＫシリーズの製作者だから」

場一帯に沈黙が降りる。あれ？　オレは何か変なことを言った？

「ＳＫシリーズを、周さんが？」

「そうだけど、気づかなかったのか？　ＳＫはオレのイニシャルだ。まあ、特許料を極限まで低くしているけど」

『周さんは無駄に多才』

「無駄ってなんだよ」

さすがにそれは傷つく。理論上は可能だなと思ったことを設計図として考えたら出来上がっていくだけだというのに。

「亜紗さんの言う通りだと思います。兄さんが一番苦手なのは戦うことじゃありませんか？」

『言えてるかも』

「お前らな」

それは考えたことがあるけど、今は気にしないでおこう。

「実際に周は器用に器用貧乏だ。その中で飛び抜けているのが機器関連の開発というだけだしな」

孝治がいくつかのデバイスを中村に渡している。確か、中村専用デバイスとして制作の基礎設計を依頼された奴だな。半月前に。

システムとしては近距離戦闘補助用のものだったか。

「準備は出来た」

『私は大丈夫』

オレ達がリリーナを見る。リリーナは悠人と何かを話していた。話している内容はよくわからないけど、悠人の言葉にリリーナが頷いている。

そして、二人は離れた。

「大丈夫。私は大丈夫。あっ、そうだ。三人に聞きたいけど、乗り物酔いは大丈夫かな？」

第百五十三話　中東の地（後書き）

ソードウルフは四足歩行で走ります。その上に乗るということは大変ですよ。

第百五十四話　敵の敵は味方

『ＥＳ』穏健派本拠地。

岩山の中に造られた堅固な場所で、至る所に魔術師の砲撃台が隠されている。

過激派ほど全体的な戦闘能力は高くないものの、世界最強の魔術師であるアル・アジフや竜言語魔法を扱うリースがいるなど、魔術師としての戦闘能力ならあらゆる組織で最高クラスであろう。

今はリースがいないとしてもアル・アジフ一人でもかなり持つはずだった。

だけど、オレ達の前に見るも無惨な姿をさらしている。

全ての砲撃台が破壊され、入り口は見るも無惨に外から撃ち抜かれている。そして、そこらに散らばるたくさんの死体。

オレも亜紗も孝治も、そして、リリーナも人の死を見慣れているからか、それらを見ても動揺はしない。

「孝治とリリーナは周囲の警戒。オレと亜紗は中を捜す」

まだ生き残っている人だっているかもしれない。だから、オレは諦めずに捜す。この戦闘の音がしない穏健派本拠地から。

「わかった。もし、何かあった時は」

「デバイスに連絡してくれ。リリーナも無理はするなよ」

『うん』

オレと亜紗は同時にソードウルフから降りた。本当なら孝治に任せたいところだが、微かに酔ったらしく、しばらくは動けないだろう。

だから、オレ達で中を捜す。

「亜紗、精神感応で」

亜紗の頷きを確認して、オレは精神感応で亜紗に話しかけた。

こういう時は本当便利だからな。敵がどこに潜んでいるかわからないから声を出さずに会話できるのは。

地図はわかるか？

『わからない。でも、何重にも防護壁を作っていると思う。私はそう感じる』

賛成だ。まあ、一撃で撃ち抜かれないことを考えればそうなるけど。

オレ達は中に入った。その中は大きな空洞が空いている。それは、元から造られたものではなく、砲撃によるもの。

オレは小さく舌打ちをして歩く。周囲に見える死体を見ないようにしながら。

ここで防衛戦を張ろうとしたに違いない。でも、フュリアスの圧倒

的な火力でそれをすることなく息絶えたのだろう。

いつ見ても、人が死ぬのはなれないな。

『慣れない方がいい。私も、周さんも』

全くだ。

オレはレヴァンティンの柄に手を置く。そして、奥に向かって歩き出した。

魔力の流れに異変がないか注意深く周囲を確認しながら歩く。魔力の流れをわかっているなら目を瞑っていても正確に目的地まで着くことが出来る。

周囲の通路を歩く人は見当たらないようだ。どこかで息を潜めているのか、それとも、

その時、オレの感覚に誰かが触れた。一つ一つ部屋を探している最中に見つけたのだ。まだ、体は動いている。

誰かいる。そこに向かうぞ。

『うん』

亜紗の返事を聞いてオレは走り出した。道を曲がり、誰も来ないのか確認しながら足音を殺しながら走る。そして、目的の部屋までやってきた。

「誰かいるのか？」

オレは英語でそう尋ねながら覗き込むと、そこには体が血だらけだが、まだ動いている少年がいた。オレはすぐに少年に駆け寄って簡単な治療を行う。

そこまでひどい怪我じゃない。感染症の危険を取り除けば命は助けれるはずだ。

「おい、大丈夫か？」

「あな、たは」

少年が微かに目を見開いてオレに言葉を返してくる。現地の言葉ではなく英語で帰ってきたのは少し驚いたが。

「アル・アジフの知り合いだ」

「そうだ。アル・アジフさんが、うっ」

少年が起き上がろうとして痛みで顔をしかめる。オレは少年の体に治癒魔術を施しながら周囲の感覚を探る。

「無理をするな。怪我はかなりひどいぞ」

「僕のことは、いいから。アル・アジフさんが連れ去られた。悠人みたいなパワードスーツの部隊に」

パワードスーツ部隊ということは、相手のフュリアスの機構はダークエルフと似ているということか。つまり、衝撃には極端に弱そうだな。

オレは少年に睡眠魔術を施した。少年の体から力が抜けて寝息を立てる。

ここにいても安全だと思うが、出来れば誰かに預けたいところだけど。

『周さん、どうだった？』

大丈夫だ。怪我はしているがそこまで重症じゃない。そんなに時間は経っていないみたいだな。

その言葉と共にオレは小さく息を吐いて壁に手を当てた瞬間、手がめり込んだ。いや、壁の一部が動いた。そして、近くの壁がドアのように開く。

オレと亜紗は完全に言葉を失っていた。まさか、こんな古典的な秘密の入り口があるなんて。

『私が先に行く。多分、避難用のシェルターだと思うから』

そうだな。オレはこいつを抱いていく。前は任せた。

オレと亜紗は頷き合って隠し通路の中に身を投じた。隠し通路の大きさは大の大人が普通に歩けるくらいで、オレ達からすれば少し大きい。ただし、戦闘するようなスペースはない。

亜紗の場合は矛神があるからある程度戦えるだろうが。

魔力の流れが異常を感じる。どうやらたくさんの人がいるらしい。

そう思っていると、急に通路が大きくなった。いや、隠し通路の先にある部屋に到達したのだ。

そこは少し広めの部屋で、普通に戦闘だってできる大きさ。奥には通路がある。

『ここは？』

亜紗が不思議そうに周囲を見渡す。オレも周囲を見渡して脂汗が出るのがわかった。

亜紗、絶対に動くな。

亜紗の動きが完全に止まる。オレの言葉を守ってくれるのは嬉しい。今は本気で動いたらいけない。

魔力の動きがおかしかったのは人がいたからじゃない。強力な魔術陣が複数展開しているからだ。動けば即撃ち抜かれるような魔術陣が。

「最悪だな。もう少し早く気づいていれば」

どうすればここを切り抜ける？　どうすればここを突破できる？方法はないわけではないが、一人じゃないから無理がある。

「術式を止めろ」

その言葉に魔力の異常が止まった。そして、向こうの通路から一人の男が現れる。その顔を見てオレ達の顔がこわばった。

胸に刺繍のある白衣を着た男。腕に身に付けられているのは片手用のクロー。そして、顔はどこにでもいてそうな普通のヨーロッパ系の顔。ただし、白衣の胸の刺繍がＥＳと書かれている。

「アリエル・ロワソ」

オレの言葉と共に亜紗の手に力が入るのがわかった。

「亜紗！」

オレが大声で制す。

「目的を間違えるな！」

今のオレ達はアリエル・ロワソと戦いに来たのではない。アル・アジフを助けに来たのだ。

亜紗が刀を鞘に収める。

「どうやら、今来たばかりか。おみやげは何かな？」

「相手の情報だ。敵のフュリアスの情報。だから、何が起きたか教えろ。今のオレ達の共通の敵に対して」

「ふむ、敵の敵は味方というのか。いいだろう。だが、約束しろ。今回の任務中に過激派への攻撃は」

「そちらがしないならしない」

オレの言葉にアリエル・ロワソは頷く。そして、背中を向けて歩き

出した。

オレも歩を進めて亜紗の隣に立つ。

「亜紗、今は我慢してくれ。詳しく知るために」

第百五十五話　ソードウルフ（前書き）

対艦剣と対艦刀の違い。前者は切れ味が悪いが耐久性に優れている。後者は切れ味は良いが耐久性がない。イグジストアストラルに斬りかかって対艦刀が砕けましたが、対艦剣なら弾かれるか折れるだけで済みます。

第百五十五話　ソードウルフ

リリーナはコクピットの中で小さく息を吐いていた。先行して来たのはいいものの、敵の姿が全く見当たらない。

センサーを確認しても５ｋｍ以内に敵の反応がない。

「ここを襲った人達は退いたのかな？」

だから、孝治に話しかけた。孝治はソードウルフの影の中で弓を構えている。

『さあな。そればかりはわからない。周達が生き残りを見つけて話を聞いたなら別だが』

「だよね。それにしても、すごいよね、このソードウルフ」

リリーナは小さく息を吐いて右手に握っているレバーを押し込んだ。それと同時に標準装置がリリーナの片目を覆う。

ソードウルフのコクピットはギガッシュやアストラルブレイズと似ている。普通に座れる椅子に両足を置く場所の隣にあるペダル。

両の手は縦に伸びるレバーを握っている。そのレバーにはグリップがつけられており、一つ一つの指がある部分にセンサーがついている。

そのセンサーをリリーナが身につけている手袋を介入して指のマニピュレーターとして使う。

右手のグリップを押し込むことで射撃形態に出来るのだ。
そこら辺はギガッシュやアストラルブレイズにはないが。

「４ｋｍ先の目標も撃ち抜けそうだよ」

『たった４ｋｍか』

ソードウルフの外についている集音マイクが孝治の声を拾う。
リリーナは孝治が弓を構えながら小さく笑ったのがカメラから見て取れた。そして、弓の弦を引く。

一本の魔力によって編まれた弓が大気を切り裂き一直線空に消えていく。リリーナはそれを標準装置で追いかけ、そして、矢が炸裂した。

「えっ？」

標準装置に映る姿。それは、黄土色のフュリアス。

『やはり来たか』

「センサーに映っていないのに」

孝治が炸裂させたのはとある魔術による磁場変動だ。至近距離で爆発したならセンサーや通信機器などは使えなくなる。

だから、光学迷彩も解けたのだろう。

「イグジストアストラルの姿は」

『地上からもか』

孝治の言葉にリリーナはカメラを動かす。確かに、黄土色のフュリアスが来る反対側から土煙が立ち上っていた。味方ならいいが、敵なら。

リリーナは回線を開いた。

「黄土色のフュリアスに警告します。これ以上近づいたなら、撃ち落とします」

手が汗ばんでいくのをリリーナは感じる。

フュリアスに乗って戦う実戦は初めてだからだ。悠人やルーイと模擬戦をすることはあっても、実弾を使ったことはない。だが、

「あなた達を倒したら鈴はイグジストアストラルと来る。だから」

近づいてくる黄土色のフュリアスに向かって引き金を引いた。

「さっさと墜ちて！」

ソードウルフの背中につけられているバスターカノンがエネルギー弾を吐き出した。凄まじい速度でエネルギー弾が飛び、狙った黄土色のフュリアスの右腕を吹き飛ばす。

だが、黄土色のフュリアスは飛び続ける。こちらにまっすぐ向かい

ながら。

リリーナは小さく唇を噛んで引き金を引こうとした瞬間、視界の隅で孝治が振り返りながら矢を放つのがわかった。その矢の向かった先にカメラを向けた瞬間、そのカメラが爆発を映し出した。

「なっ」

リリーナはすばやくレバーを横に倒した。視界が一気に上昇する。

ソードウルフにはかなり特殊な機構が存在する。それは、今のソードウルフの変化を外で見ていたらわかるだろう。

ソードウルフが後ろ脚で立つ。それと同時に収納や変形していたパーツが組み合わさって獣のような足から普通のフュリアスの足に変わる。それは腕だってそうだ。

肩の部分に収納されていたパーツがせり出して組み合わさる。出来あがるのは普通のフュリアスの腕。

そして、ソードウルフは地面に立ちあがった。

『GF』が初めて作り上げた完全に特殊なフュリアス。それがソードウルフだ。可変機構を持つというのぼ凄いが、一番の特徴がコクピットの位置であろう。

本来、コクピットは胸の部分に入るが、ソードウルフは頭にコクピットがある。それが最大の特徴でもあり、最大の弱点でもあるのだが。

ソードウルフの変形が終わると同時にセンサーに大量の反応が映る。
それは、全てが黄土色のフュリアス。数は二十。

孝治が小さく舌打ちをした。

『最初から考えられていたというわけか。俺達が来るということを』

「どういうこと？」

リリーナは可動域が広がっているレバーを動かし、右手に側面に備え付けられていた対艦剣を掴み取る。

『奴らは基地の影に隠れていた。俺のレアスキルのやり方をついてな。俺の『影渡り』は昼間は二つの影が重なっている位置にしか移動できない。完全にそこを突かれた』

素早く量の足にあるペダルを踏み込んで黄土色のフュリアスが放つエネルギー弾を避けた。完全に囲まれているい以上、一つの行動が命取りになる。

リリーナはレバーを握り締める。そして、悠人やルーイから聞いたフュリアスを使う戦闘の仕方を思い出していた。

フュリアスは中距離戦闘に強いけど、近距離での戦闘や遠距離戦闘には特殊武装をしていない限り対抗しにくいよ。

そうだな。アストラルブレイズも中距離が一番戦いやすい。だが、フュリアスの一番のポイントは高価なところだ。特にこの世界ではな。接近すれば同士討ちを恐れるだろう。そこが狙い目だ。

「いくよ」

リリーナが小さくつぶやく。それに応えるようにソードウルフのエネルギーが跳ね上がった。

ソードウルフが地面を蹴る。脚力はスペック上ではアストラルブレイスの二倍近く。だが、そんなスペックを出せば中に乗っているパイロットが持たない。リリーナの体に凄まじい重力がかかる。急な加速による圧力。

だけど、リリーナはそれに耐える。魔界の住人は頑丈であるからと世間一般では言われているが、そのことはこの機体を慣れる時に悠人が否定していた。

リリーナは機体を信じて。機体はそれに応えてくれる。だって、鈴を元にしたＡＩが使われているから。

悠人の言葉を思い出すリリーナ。そして、ソードウルフと鈴をリリーナは信じている。だから、

「負けるわけにはいかない！」

距離を一気に詰めて黄土色のフュリアス一機の胸に対艦剣を突き刺した。パイロットは完全に絶命したはずだ。

素早くソードウルフを動かして対艦剣を引き抜く。まだ、敵のフュリアスは多い。

「次！」

大きく飛び上がりながら背中の武装を換装する。ソードウルフにデバイスから武器を取り出す機構は存在しないが、背中の装備を換装するシステムは備え付けられている。正確には備え付けたが正しい。

その装備は周の手によって設計図を書かれえて改造されたダークエルフ用のブースター。ブースターの出力を最大限まで上げて動きを一瞬止めた黄土色のフュリアス二機の間を駆け抜けた。

左の手でもう一本の対艦剣を引き抜きながら。

黄土色のフュリアス二機が胴体を真っ二つにされる。後、１７。

ソードウルフが振り返った瞬間、巨大な黒い剣によって黄土色のフュリアス二機が縦に両断されるところだった。そして、一息の間に放たれた矢が四機のフュリアスを貫く。

『俺を忘れられても困るな』

黒い剣を肩に担いだ孝治が笑みを浮かべる。ソードウルフが変形してから完全にその場にいたパイロットは孝治のことを忘れていた。そもそも、生身の人間にフュリアスが勝てるわけがないと思っていたのかもしれない。でも、結果はあっという間に六機落とされた。

黄土色のフュリアスが孝治を警戒した瞬間、横手から飛んできたエネルギー弾が三機のフュリアスを貫いた。

「私も忘れないでね」

リリーナが背中のブースターをバスターカノンに変えて前に向けていた。背中のバスターカノンはこういう風に前に向けて放つことが

出来る。だが、少しの準備を必要とするため、隙がなければ使用しないが。

リリーナは素早くバスターカノンを手放してレバーを立てた。

ソードウルフが変形する。四肢をもつ獣のフォルムになったソードウルフは地面を蹴った。

黄土色のフュリアスがソードウルフに向かってエネルギー弾を放つ。だが、リリーナは巧みな操作でその全てを避ける。避けて、そして、そのまま黄土色のフュリアスの間を駆け抜けた。対艦剣を横に広げて。

残るは三機。その内一機は隊長機なのか頭の部分の形が違っていた。放たれるエネルギー弾。それはソードウルフの動きを先取るように放たれていた。

リリーナは素早くレバーを横に倒す。ソードウルフの形が変わり、急激に空気抵抗が広がったことから動きが一気に遅くなる。だが、リリーナの体にかかる圧力も半端ない。

「くあぁっ」

体中の骨がきしみ、筋肉が悲鳴を上げる。でも、リリーナはレバーも意識も手放さない。

ソードウルフを振り向かせ、振り向き様に対艦剣を投げつけた。

隊長機ともう一機が同じ対艦剣によって串刺しにされる。だが、残

る一本は残ったフュリアスから外れていた。ソードウルフに狙いを付ける黄土色のフュリアス。だが、黒い閃光が駆け抜けて黄土色のフュリアスの機体が砕け散った。そう、バラバラに。

『俺を忘れているな』

孝治が笑みを浮かべながら弓を下ろす。そして、どこから取り出したのか、黒い剣を手で弄びながら鞘に収めた。

「鈴、来るのかな？」

リリーナは周囲を見渡す。だが、そこに敵の姿は見当たらない。最初に攻撃した黄土色のフュリアスも見当たらない。

『俺は周に連絡する。リリーナは周囲を警戒してくれ』

「了解だよ」

リリーナは小さく息を吐いてセンサーを見て目視で周囲を見渡す。敵の姿はやはり見当たらない。

第百五十五話　ソードウルフ（後書き）

そろそろ文字数が大台に達しそうです。第一章後半は四月中に完成させたいと思っていますが、どうなるかはわかりません。

第百五十六話　対面（前書き）

これでようやく５００００文字突破しました。我ながらなかなかいいペースではないかと。次は１０００００文字ですね。夏には入りたいところですが。

第百五十六話　対面

オレはアリエル・ロワソと向かい合っていた。アリエル・ロワソの隣には楓の姿がある。

「そういうことか。音界とはこれまた奇妙な集団だ。フュリアスを扱う世界か」

「ああ。音界の勢力は真柴、結城両家に騙されて動かされていた。今は第７６移動隊の中に組み込んでいるけどな」

「了解した。まさか、あの狭間の土地でそんなものが隠されていたとはな。異世界の勢力すら求めるフュリアス、イグジストアストラル。ここを襲ったのは」

「十中八九」

オレとアリエル・ロワソはここに来るまでの動きを話していた。こちらのフュリアス戦力も。

過激派はアリエル・ロワソ達が先行部隊としてここに来たらしい。住民からあった空飛ぶ箱の行き先がここら辺りだったから。来てみればオレ達が来た時と同じ状況。

ただし、過激派は隠しシェルターの位置を知っていたらしく、すぐさまここに向かったということだ。

「イグジストアストラルとは厄介なものだな。過激派のフュリアス部隊ですら全滅する可能性がある」

「可能性じゃなくて確実だろうな。こちら側のフュリアス部隊、ダークエルフ、ソードウルフ、アストラルブレイズ、ギガッシュが上手く動いたとしても、勝率は完全に五分。あんた達のフュリアスで勝てるかの方がありえない」

さらには向こうには黄土色のフュリアスがある。写真で見た限り、第五世代か第六世代に近い戦闘能力を持っている可能性があるとルーイは言っていた。パイロットの熟練度から考えても過激派のフュリアスでは荷が重い。

だからと言って、イグジストアストラルのみとの戦闘しか考えていないこちらでも荷は重い。

「今は共闘すべきだ。イグジストアストラルはオレ達が、黄土色のフュリアスを過激派が」

「ふむ、妥当だ。妥当だが、何故そこまでしてイグジストアストラルを狙う？　何か理由があるのか？」

「ああ」

オレはすぐに頷いた。隠していることがあったら確実に協力はしてくれないと思ったから。

「イグジストアストラルのパイロットは悠人やリリーナの友達が乗っている。二人はそのパイロットを力づくで連れ戻すと言った。なら、オレ達はできる限りのことをやっていることの手助けをするだけだ」

「本人の意思を関係なく行うのは君達の流儀に反するのではないのかね？」

そういう言葉が来ると思っていた。何故なら、『ＧＦ』は善意を押し付けて行うものやない。双方の同意の上でその地域を守る。それが『ＧＦ』だ。でも、

「オレ達はただの脇役だ。今の主役は悠人達。なら、悠人達を手伝うことに何の不思議がある？」

「そういうことか。結局は子供の我がまま、自己中心的な考え方というわけか」

「誰だってそうだ」

全ての行動は自己中心的に動く。自分に利点があるからこそ動く。

「あらゆる行動の全てが自己中心的だ。食べるのも、歩くのも、運動するのも、誰かを守りたいともうのも。オレはそれを否定しない。それが子供の考え方だとしても、自己中心的に考えられない大人なんて絶対になりたくない。他人のために自分が死ねるとか平気で言える奴みたいにな」

オレがそう言うとアリエル・ロワソがふっと笑ったような気がした。笑ったような気がしただけで本当に笑ったかどうかまではわからなかったが、空気が和らいだことだけはわかった。

亜紗の手が刀から外れる。オレ達が会話をしてからずっと自然に置いていたからな。

「そうだな。確かに、他人のためなら自分の命なんてくれてやるなんて最悪の人間が言う言葉だ。だから、私は私自身の意志で行動する。君達を援護しよう」

「援護？」

その言葉に楓が少し驚いていた。

「そうだ。どうやら、今回の主役は君達らしい。我ら『ＧＦ』過激派は君達を援護する。君達には相手勢力で最も厄介なフュリアスであるイグジストアストラル。そして、連れ去られたアル・アジフの救出を任せた」

アル・アジフの救出。つまり、悠人達にイグジストアストラルを負かしている間にオレ達はアル・アジフを救出しなければならないのか。最低限の援護が出来るメンバーを残したとしても、救出班は多くて五人か六人。

アル・アジフがつかまっている場所によってはかなり厳しくなる。

「アル・アジフはどこにいる？　どこで捕まっている？」

「空飛ぶ箱、だそうだ。こちらもよくわかっていないのでね。ただ、避難していた人達は外部モニターから空飛ぶ箱に連れ去られるアル・アジフを見たそうだ」

空飛ぶ箱ということは航空空母か。かなり厳しいな。準空戦が可能なメンバー以上じゃないと入らない。それでも、空戦可能な中村は建物内部でも戦闘は出来ない。つまり、行けるのは経った三人だけ。でも、孝治は残さないといけないから、実質二人。

最悪だ。でも、それしか方法がない。

「わかった。航空空母の位置がどこにあるかさえわかれば」

そう言った時、レヴァンティンが微かに震えた。どうやら孝治から通信が入ったらしい。

オレはすかさず通信機器に繋げて回線を開く。

「どうした？」

『黄土色のフュリアスからの襲撃を受けた。一応、撃退はしたが、５ｋｍ付近にいた一機だけを取り逃がした。場所はわからない』

「もしかして、電磁チャフ弾でも放ったのか？」

孝治の矢で最も便利なもの。相手の目的地にピンポイントで当てれば通信機器は完全に使えなくなる強力なもののはずだ。

『ああ』

だが、それでも姿を見失ったらしい。どれだけ戦闘が長かったのだろうか。それとも、

「わかった。こちらは生き残りと過激派と会った。全面協力を申し入れてきたから大丈夫だ。すぐにオレと亜紗は外に出るから警戒を強めてくれ」

『了解』

孝治との通信が切れる。オレはすぐに通信機器をしまった。

「アリエル・ロワソ。オレ達は今から地上に出る。そっちも治療などが終わったらすぐに上がってきてくれ」

「わかった。君に楓くんをつけておこう。過激派の中でもトップクラスの砲撃手だからね、頼りになるよ」

「助かる」

オレは歩き出した。その後ろを追いかけてくるように亜紗と楓が続く。

「周君、何を焦っているの？」

楓が不思議そうに首を傾げてくる。もちろん、この角度からは全く見えないのだが、首を傾げているのがよくわかった。

オレは小さくため息をつく。

「胸騒ぎが少しする。それだけだ」

「ふーん。えっ？　何々？　周さんの胸騒ぎはよく当たる？　そうなんだ」

途中の言葉は亜紗の言葉だろう。亜紗とは長い付き合いだからオレの胸騒ぎに関してはよく体験しているはずだ。その効果と共に。

オレは階段を上がりながらまたため息をつく。

「まあ、杞憂であって欲しいけどな」

「そうだね。でも、黄土色のフュリアスが急に消えるなんておかしいよね。どうすれば急に消えるのかな？」

「理由ならいくつか考えられる」

というか、すでに考えついているけど。

「一つは地上に降りた。その地点でいない上に黄土色だから気づかなかった可能性だってある。一つは光学迷彩を再起動させた。相手の機器は未知の部分が多いからな。電磁チャフがどこまで聞くかどうか。最後は航空空母に収納された。これだと孝治の『影渡り』に引っかからないことはおかしい。つまり、可能性として一番高いのは最初の奴だ」

「可能性として？　どうして？」

「完全じゃないんだよ。とある手段を持ちいたら孝治にも気付かれないことがある」

オレの動きが止まった。いや、強制的に止められたと言っていい。

亜紗も敏感に感じとったらしい。この感覚を表すなら、痒いところに手が届かず痒いままって感じだ。

でも、そこにあるのはわかっている。

オレは床を蹴った。全速力で。

一気に階段を駆け上がり隠し通路から飛び出して外に向かう。外に飛び出した瞬間、そこは影に覆われていた。オレの額に汗が流れるのがわかる。

「これが、航空空母か」

そこにあったのは巨大な船というべきか。下から見れば大きな箱。相手の旗艦との対面だった。

第百五十六話　対面（後書き）

次は空港で別れていた悠人達が合流します。ダークエルフの新装備がまだ完全に決まっていないのが不安ですが。

第百五十七話　イグジストアストラル（前書き）

これから平日に書き上げるペースが速くなります。授業中に書いていくので。

第百五十七話　イグジストアストラル

僕はダークエルフの各接続を確認する。この装備を使うのは初めてだからだ。模擬戦や訓練を含めて完全にぶっつけ本番の装備。

ダークエルフの元からあるＦＢＤシステムは近距離戦闘用のシステム。防御力を極限まで削り、機動力と出力を格段に上げることで極めて高い戦闘能力を発揮する。だが、それでは接近戦を長時間行うことが出来ない。だからこそのこの装備。

周さんが考えたＣＣＳシステム。接近戦用のシステム。本当ならダークエルフの設計思想に無かったものだが、イグジストアストラルとの戦闘で砲撃戦は確実に分が悪い。だから、接近戦仕様にしなければならない。

だから、今のダークエルフはダークエルフＣＣと言うべきかな。

小型スラスターを追加でかなりの数をつけ、肩には投擲用自立型のブーメラン。前の太ももには救助活動時に瓦礫を切り裂くために開発されたスラッシュナイフが内蔵されている。背中には翼のように広がる補助エンジンドライブ。これは、ＦＢＤシステム時にも使用することが出来る。

最大の特徴は背中につけられた二本の対艦刀だろう。ただ、形は少し対艦剣に近く、強度の高い対艦刀のようだ。

アストラルブレイズも周さんが設計した追加装備を身につけている。ギガッシュもだ。

周さんっていったい何者なのだろうか？

『緊張しているか？』

ダークエルフの隅々を点検していると、無線を通じて同じようにコクピット待機のルーイが話しかけてきた。

「うん。今回の装備は初めてだから」

『そうか。確かに、アストラルブレイズもこういう追加装備は初めてだ。ＳＬＲシステムＣＣＳシステムと言ったか。まさか、中距離戦に強いアストラルブレイズがあらゆる距離からの戦闘を可能とするとはな』

「ルーイには今回の作戦の中間だから。僕とリリーナがイグジストアストラルと相対している最中に他のフュリアスの相手もしければならないし」

『そうだな。でも、僕達は負けるわけにはいかない。アストラルブレイズもギガッシュも、この世界の中では最新の中の最新だ。それに、僕とリマは長年タッグを組んでいたから連携はばっちりだ』

「安心できるよ」

これで、後ろを気にすることなくイグジストアストラルを戦える。

リリーナのソードウルフもだけど、ダークエルフの出力機関は周さんが作り出したもの。その能力は長年使っているからわかるけど、どうして周さんはここまですごいのかな？

『しかし、新機体新武装を持ち出してもイグジストアストラルに勝てる可能性は五分。何か秘策はあるか？』

「ない。そんなものはないよ。イグジストアストラルとは真っ正面からぶつかり合うしかない。あの砲撃の中から接近して強力な一撃を叩き込む。それが出来るかどうか」

後は、鈴と話せるかどうかで思いっきり変わっていくはずだ。鈴と話して説得出来ればいいけど。

僕は小さく息を吐いた。よくよく考えてみると不可能に近いくらい難しいような気がする。

「周さんの作った武装を信じて僕は鈴を連れ戻す。上手く行くかどうかなんて考えない。作戦通りに出来なくてもどうにかする。ただ、それだけかな」

『そういう考え、僕は嫌いじゃないよ。アストラルブレイズで出来る限り抑えてみる。だけど、限界はあるよ』

わかっている。アストラルブレイズの特殊武装ならいくらか緩和出来るはずだ。でも、アストラルブレイズは他のフュリアスとの戦いもあるから援護は期待出来ない。

期待は出来なくてもイグジストアストラルをどうにかする最悪の作戦はある。

「後1時間ほどか」

今のトレーラーならどう頑張っても1時間はかかると見ていいだろ

う。アル・アジフさんが大丈夫か心配だけど。

『僕も最終点検に入』

その瞬間、ルーイの言葉を遮るようにセンサーに反応があった。僕もルーイも慌てて機体を起動させる。

ダークエルフの横たわっている体を起き上がらせたそこには、一機のフュリアスがいた。

蒼鉛のフュリアス、イグジストアストラル。

『これ以上、来ないで』

そして、僕の耳に泣きそうな声の鈴の言葉が聞こえてくる。

『もう、誰も殺したくないよ』

泣きそうではなく確実に泣いているのだろう。人を殺す行為は脳裏から焼き付いて離れないから。

『殺したくないから、来ないで』

「嫌だ」

だから、僕ははっきりと答えていた。こんな鈴は見ていられない。

「絶対に嫌だ。僕は鈴を助ける。誰が、何と言おうと」

『っつ、迷惑だよ。迷惑だから来ないで！』

「鈴が拒否しても、僕は無理やり連れて帰る！　僕は強情だよ。だから、どんな手段だって使う」

僕の頭の中には鈴との思い出があった。ほんの半月ほどでも楽しかった思い出。

初めて出来た同い年の友達。そんな友達が目の前で泣いているのに見捨てれるわけがない。

「僕には、僕達には君が必要だ！」

僕も鈴もリリーナも、多分、周さん達も何か欠けた人達だろう。僕は親からの愛を、リリーナは殺すことの躊躇いを、鈴は見捨てられることの怖さを。

「鈴が世界から見捨てられても、僕は鈴のことを信じ続ける！　だから、僕は！」

『悠人にはわからない！　絶対にわからないよ！　見捨てられる怖さを。最初から道具としてした見られていない悠人とは違う！　私は、見捨てられたくない。もう、一人は嫌だよ』

一瞬、過去を思い出すが、僕は首を横に振って振り払った。

「一人じゃない。僕がいる。リリーナもいる。鈴は一人なんかじゃない。だから」

僕は叫んだ。

「こっちに来い！　鈴！」

『行きたいよ。本当は何もかも捨てて悠人のところに行きたいよ！　でも、私は、家族に見捨てられるのはもう嫌なの！』

イグジストアストラルの背中の翼が跳ね上がり、こちらに砲を向ける。トレーラーの上とはいえすぐには動けない。

やられる、そう思った瞬間にまるで足を刈り取られたようにイグジストアストラルが横に倒れた。

『きゃっ』

カメラがイグジストアストラルの足元にいる人物を捉える。由姫さんだ。由姫さんが回し蹴りでイグジストアストラルの足を払ったようだ。

わけがわからないけどね。

『悠人！　今だ！』

トレーラーの荷台を蹴り、僕は対艦刀を手に取ろうとした。だが、それより早く僕の勘が告げる。

このまま突っ込まないようにスラスターを逆噴射させ後退する。それと同時にダークエルフが向かおうとした場所にエネルギー弾が通り抜けた。

極太のエネルギー弾ということはバスターカノンか。

『鈴さん。大祭が始まりますよ。今すぐ下がってください』

その女性の声を聞いた瞬間、僕の中で何かが沸騰したのがわかった。

対艦刀を掴み抜き放つ。

『でも』

『大丈夫です。食い止める手段はありますから』

周囲に黄土色のフュリアスが現れる。数は約３０。

『行きなさい。あなたの力は大祭に必要です』

『・・・・・はい』

イグジストアストラルがこちらに背中を向けて飛び立つ。僕はそれに手を伸ばさなかった。何故なら、バスターカノンを持つ黄土色のフュリアスを睨みつけていたから。

『無粋な乱入者さん。あなた達に大祭の参加資格はありません。ですから、ここで死になさい』

『残念ながら、それは出来ない相談だよ』

スピーカーから音姫さんの声が聞こえてくる。動こうとした僕を止めるように。

思考が少し冷静になる。冷静になってもかなり沸騰しているが。

『私達には向かう場所がある。道を塞ぐなら倒すまで』

『あなた達に出来ますか？　このフュリアス部隊を倒すことが』

その瞬間、視界の隅で黄土色のフュリアスが激しく動いたのがわかった。カメラがそちらを向く。そこには、吹き飛ばされた黄土色のフュリアスが、縦に並んでいた黄土色のフュリアスとぶつかりながら共に吹き飛ぶ姿だった。

誰もが動きを止めて無言になる。それほど非常識な光景。でも、どこかで見たことがある。

『一体、何が』

その言葉が聞こえた瞬間、ダークエルフの出力を最大にして一気に加速させる。

相手が気づいたバスターカノンの引き金に手がかかるが、とっさに放ったブーメランがバスターカノンの砲身を叩き、そらした。

バスターカノンからエネルギーの奔流が放たれるが、ダークエルフをかすることなく大空に消え去った。

すかさず対艦刀を振り払い、バスターカノンを半ばから断ち切る。

『くっ、小癪な』

微かに加わる焦りの声。その声を聞きながら僕は対艦刀を突き出そうとした。

『化け物のくせに』

その言葉に対艦刀の切っ先が外れる。黄土色のフュリアスの右腕を軽く削りながらダークエルフの腕が掴まれた。

『化け物の分際で私の前に現れるな！』

ダークエルフが激しく揺れる。どうやら蹴り飛ばされたらしい。でも、僕の中では完全に沸騰していた。理性という鎖が。

「あなたが、あなたがいるから、僕は！」

すぐさまスラスターで姿勢を戻し、両肩のブーメランを放った。ブーメランは黄土色のフュリアスを強く叩く。

「あなただけは、僕が殺す！」

『悠人！』

ルーイの声が聞こえたと思った瞬間、凄まじい衝撃と共にダークエルフが地面に倒れ込んだ。

『バカ野郎！　今の仕事はそれじゃないだろ！』

アストラルブレイズが僕の横に降り立ちながら肩に取り付けられたレールガンから収束エネルギー弾を前にいる黄土色のフュリアスに向かって放つ。

アストラルブレイズには肩に長距離射撃用のレールガンと腰に近接戦闘用の対艦刀。そして、背中に補助ブースターが身につけられて

いる。

『目的を間違えるな！』

「あいつだけは僕が殺さないとダメなんだ！」

わかっている。わかっていても、あの黄土色のフュリアスだけは僕が殺さないといけない。

『そうだとしても』

アストラルブレイズが周囲の黄土色のフュリアスに向かってエネルギー弾を放ちまくるが、相手は回避に専念しているためなかなか当たらない。

時折、不思議に吹き飛んで他の黄土色のフュリアスを巻き込みながら転がるが、完全に囲まれている。

『誰も死なせたくないなら、お前のやるべきことをしろ！』

『準備は整ったよ』

音姫さんの言葉に周囲を見渡した。そこにあるのは肩にレールガン、腰にバスターカノンを二本抱えたギガッシュと、宙に浮かぶ大量の槍。

『ここは私と光ちゃん、リマさんと食い止める。だから、三人はイグジストアストラルを追いかけて』

「でも」

『あなたが助けたい本当の人は誰？　復讐じゃなく、助けたい人を思い浮かべて！』

音姫さんの言葉に僕は鈴の顔を思い浮かべた。そして、周さんや鈴に言ったことを。

ダークエルフにエネルギー弾が向かってくる。だけど、それは音姫さんによって叩き落とされた。

『ルーイ、由姫さん、行こう！』

『ああ』

『はい』

由姫さんの声がルーイのコクピットから聞こえてくる。どうやらアストラルブレイズに乗せているみたいだ。

確かに、最高速度ならフュリアスが速い、けど、由姫さんはどうなんだろ？

『化け物のくせに逃げるのですか？』

その声に僕は立ち止まり、振り返る。

「あなたは僕が殺すよ。母さん」

それだけ言い、イグジストアストラルが向かった方向へと追いかけるように地面を蹴った。

背中のブースターを起動させて走りながら一気に加速する。

『悠人、今』

「うん。あの人は僕の実の母。でも、僕を化け物呼ばわりする人だよ」

『だから、あんな風になったんだな』

我を忘れて斬りかかってしまう。でも、今は鈴を連れ戻す。僕の復讐は後でもいい。

「いらない子と言われていたからね。だから」

『私や兄さんと同じですね』

由姫さんの言葉に僕は目を見張っていた。

『私は白百合の絞りカスと言われ続けていましたから。兄さんも海道の落ちこぼれだと。私も兄さんも、優秀すぎる姉や妹がいましたから』

由姫さんの場合は音姫さんだろう。でも、周さんに妹がいたのは初耳だ。家族全員が巻き込まれて失ったと聞いていたのに。

『兄さんは努力をして強くなり、私は強くなろうと八陣八叉の門を叩いた。悠人だってフュリアスのパイロットとしての才能があります。誰が何を言おうと、私を私として見てくれる人が大事なのではないでしょうか』

「自分を、自分として？」

『はい。自分を自分としてです。悠人にとってリリーナさんや鈴ですね。大切だからこそ、大事にしてください。兄さんのように、後悔しないために』

「はい」

今登っている小さな丘を越えれば穏健派の本拠地が見える。そこから１０分ほどまだかかるけど。

アストラルブレイズより先にダークエルフが丘に登った。そこには、黒い煙を上げている穏健派本拠地。そして、その上に浮いている箱。あれが、航空空母？

『悠人！　止まるな！』

僕の横をアストラルブレイズが駆け抜ける。それを追いかけて僕はダークエルフを駆る。

戦闘は未だに行われており、カメラにはリリーナのソードウルフが黄土色のフュリアス相対している。そして、イグジストアストラルは、

「鈴！」

僕は回線を開いて叫んでいた。航空空母の上にいるイグジストアストラルに向かって全力で。

『これ以上、近づくなら、撃ちます』

鈴の声がコクピットの中に響く。でも、その声は震えていた。

拡大したカメラにはこちらに全ての砲を向けるイグジストアストラルの姿。本当だったら近づきたくない。でも、今は、

「嫌だ！　僕は鈴がいないとダメなんだ。僕はリリーナや鈴と共に過ごしたい！　それが、僕の我がままだ！」

ＦＢＤシステムを起動させる。本当ならこの距離でするようなものじゃないけど、僕はＦＢＤシステムを使う。黒い装甲が外れ、白い装甲が現れる。

最大限の加速を使って一気に近づく。

『来ないで！』

イグジストアストラルから放たれるエネルギー弾。だけど、そのエネルギー弾はダークエルフが走り抜けた場所に突き刺さる。

明らかに鈴は狙っていない。だから、その隙に近づく。

『どうして近づくの？　どうしてそこまで私に関わるの？　もう、放っておいてよ！　私にあなたはいらない！』

「僕は言った！　これは我がままだと。だから、僕の我がままに鈴を巻き込むだけだ！」

ＦＢＤシステムによって機体が一気に加速する。アストラルブレイ

ズを置いてけぼりにする。

早く。誰よりも速く。早く。光よりも速く。

そう思った瞬間、ダークエルフが加速した、ような気がした。気づけば前に航空空母がいない。変わりにセンサーで背後に反応がある。

「なっ」

『えっ？』

ちょうど後ろにイグジストアストラルがいる。何が起きたかわからないけど、僕は素早く振り返った。

イグジストアストラルも振り返る。僕はコクピットを開いた。

「鈴！　聞いてくれ！」

僕はイグジストアストラルのコクピットがあるであろう場所に飛びついた。

「鈴の言うことはわかるよ。僕だってそうだった。親に見捨てられたくないから頑張った。結局は化け物扱いされたけど、でも、だからこそ、僕は僕を僕として見てくれる人を大切にする。アル・アジフさん、リリーナ、穏健派のみんな。周さんだってそうだ。鈴が、そこの組織は鈴を鈴として見るなら、僕は諦める。だから、答えて！　鈴がどうしたいのか。心の底からの、本当の願いを！」

『茶番だな』

鈴じゃない声と共に僕は嫌な予感がしてそこから飛び退いた。僕がいた場所にエネルギー弾が通り抜ける。

『イグジストアストラルを君達の組織に渡すわけにはいかないのだよ』

そして、僕の体にエネルギー弾が直撃する。

砕け散る装甲。体中に走る激痛。その中で、僕は手を伸ばしていた。イグジストアストラルに向かって、イグジストアストラルの中にいる鈴に向かって。

でも、視界が霞む。もう、ダメなのかな？

『悠人！』

落ちていた僕の体が止まった。そして、僕はゆっくり目を開けた。

そこにいたのは涙を流す鈴の姿。コクピットから出て来た鈴に僕は抱きしめられた。

「バカ、バカ、バカ！」

「鈴」

「私なんかのために悠人が死ぬなんて嫌だよ。嫌だからね！」

僕は笑っていた。まだ、戦いの途中だけど、鈴が僕の腕の中に戻ってきてくれた。

「大丈夫だよ。僕は死なない」

僕の指の動きに合わせてダークエルフが航空空母の上からこちらに向かってくる。

「だから、一緒に終わらせよう」

第百五十八話　敵の狙い

孝治が動く。弓の弦に中指をかけ、人差し指、薬指、小指を使って弾いていく。放たれる矢は貫通したり、爆発したり、散弾のように分裂したりと様々だ。

対するオレはレヴァンティンを握りしめ、一歩を踏み出しながら破魔雷閃を放った。

黄土色のフュリアスの右腕を斬り裂き、すかさず返した刃で両足を斬り裂く。

「キリがないな」

孝治が小さく呟いた。それにはオレも賛成だ。ソードウルフも頑張っているが、黄土色のフュリアスはまだまだやって来る。いつになったら航空空母に上がれるのやら。

オレはレヴァンティンで飛んできたエネルギー弾を弾きながら小さく溜息をついた。

「アル・アジフが上にいるってのに」

今すぐ飛んでいきたい。今すぐ飛んでアル・アジフを救出したい。だけど、ここに亜紗と孝治を残すことは危険だ。

何故なら、二人は同じようなタイプでありながら組み合わせとして最悪だからだ。

楓が一人で制空権を取ろうと頑張っているからまだ持っているが、イグジストアストラルが来た今、楓は航空空母の下を動き回って射撃している。

「俺達のことは構うな」

「そう言ってられるか」

レヴァンティンを鞘に収め、一気に抜き放つ。レヴァンティンは迫っていた対艦刀を斬り裂いていた。

すかさず前に踏み込みながら返しの刃を振る。だけど、レヴァンティンは虚空を薙いだ。

「奴らの動きは軽い。多分、駆動系にも反作用型の魔術を使用しているはずだ。その分、加速はかなり高い。オレがいなきゃ辛いだろ？　水牙天翔！」

地面から吹き出した水がフュリアスの姿勢を崩す。

姿勢を崩したフュリアスの四肢を孝治が放った矢が砕いた。

「だが、奴らの動きも気になる。周もじゃないか？」

「ああ」

レヴァンティンをモード？カノンに変えて砲撃を放つ。砲撃は黄土色のフュリアスの頭を吹き飛ばした。

「あまり近づいてこないな。フュリアスの弱点は向こうもわかって

いるはずなんだが。何か罠を張っているのか、それとも、何か策でもあるのか？」

オレはモード？の穂先でエネルギー弾を受け流す。黄土色のフュリアスはギガッシュほどではないが、対魔力はさほど高くない。だから、そこに付け入る隙もある。

「難しく考えすぎるな。お前はそれで失敗する」

「知ってるよ。失敗というより躓くだけだけどな」

それはよく知っている。自分自身のことだから最低限は把握していないといけない。

オレが失敗する場合は、考えすぎる時だ。相手が素直に攻撃してきた場合には失敗することがある。

ただ、なんとなくで布陣を変えて迎撃するから被害は少なくなるけど。

「それにしても」

モード？カノンによる射撃で向かってくるエネルギー弾を撃ち落としながら小さく呟く。

「時間稼ぎをして何をするつもりなんだ？　あいつらが握っている手札はあまり多くないはずだけど」

「そうだな。航空空母という前代未聞のものを使いながら、決定的な切り札はないはずなのに」

『茶番だな』

唐突にそんな声が聞こえてきた。オレはすかさず全方位に障壁魔術と防御魔術を多重に転換する。だが、攻撃が飛んでくることはなかった。

一体何の声だ？　どこかで聞いたことはあるけど。

『イグジストアストラルを君達の組織に渡すわけにはいかないのだよ』

この声は確か、

「結城家当主だな。でも、イグジストアストラルということはダークエルフがここについたのか？」

ソードウルフがバスターカノンを放ち、周囲のフュリアスを貫いていく。だが、数があまりに多い。

イグジストアストラルにはダークエルフのみじゃ辛いはずだ。悠人が説得してくれるなら話しは別だが。

「せめて、後一機いれば」

アストラルブレイズかギガッシュか、どちらかが来てくれればいい。

その瞬間、周囲にいた黄土色のフュリアスが一気に爆発した。完全に同時に放った攻撃で爆発している。ダークエルフではないから、何だ？

『無事、だな』

視線の先にはアストラルブレイズの姿があった。背中のレールガンをソードウルフを囲む黄土色のフュリアスに放ちながらコクピットが開く。

現れたのは由姫。由姫は地面を蹴ってオレ達の下に辿り着いた。どうやら先にルーイが乗るアストラルブレイズのみにある能力を使ってやって来たらしい。

「兄さん、無事、ですね」

「ああ。オレ達が負けるわけがないだろ」

孝治が弓を放ち、オレ達が会話する間を戦ってくれる。楓も由姫が合流したことに気づいたのか、戦っている範囲を少し広めた。

「アル・アジフさんは」

「あそこだ」

オレは航空空母を指差した。一人ならかなり難しいが、由姫と亜紗が一緒なら何とか出来る。作戦はかなり変わるけど、今はこの三人で行く。

オレは亜紗に精神感応で言葉を飛ばした。

アル・アジフを救出する。航空空母に乗り込むぞ。

視界の隅で亜紗が頷いた。離れていても届くからありがたいな。

孝治も周囲の全ての位置を確認している。どうやらオレのやることに気づいているらしい。

オレはレヴァンティンを握りしめた。

「由姫、上がるぞ」

「航空空母にですか？」

「ああ」

由姫は小さく目を瞑り、そして、ゆっくりと深呼吸を行った。

何かをしようとしているかわからないけど、今は航空空母に上がる手段を考えないと。空中にいる黄土色のフュリアスをどうにかしなければ的になるだけだ。

本当なら、音姉が来て欲しかったけど。

「行きます」

すると、唐突に由姫がそう言った瞬間、空中にいたあらゆる黄土色のフュリアスが落下した。

まるで、翼をもがれた鳥のように、ある機体は穏健派本拠地に激突し、ある機体は地面に落ちて地面にめり込んだ。

戦場で音が無くなったような錯覚になる。

「行きましょう、兄さん」

「無茶苦茶だろ。まあ、今はありがたいな。亜紗」

行くぞと繋げようとした瞬間、唐突に声が鳴り響いた。

『戦闘中の諸君、聞いてくれたまえ』

それは、結城家当主の声。

『我々は最強の魔術書を手に入れた』

嫌な予感が脳裏をよぎる。

『創世の時代より生まれた最初にして最高の魔術書。我々は神に等しい力を手に入れた』

レヴァンティンを握る手に力が籠もる。

『これ以上の戦闘は無意味だ。幸福し、武器を捨てろ』

それは一方的な勧告。武器を捨てなければ撃つという脅し。

こちらが行動する前に先を取られたか。

『アル・アジフさんをどこにやった！！』

でも、そんな中で声が上がるのをオレは聞いていた。悠人だ。悠人のダークエルフがＦＢＤシステムを作動させながら宙に浮かび叫ん

でいる。

『お前達がアル・アジフさんを捕まえているのは知っている！　アル・アジフさんをどうした！』

ダークエルフの横にいるのはイグジストアストラル。ほとんど戦闘せずに鈴を救うとはさすがだな。

『アル・アジフ？　ああ、あの少女か。あの少女なら今頃どうなっているのか私は知らない。だが、飢えた男達の中に放り投げたから、どうなっているか見物だが』

その言葉にオレの中で何かが切れた。

理性ではない。視界は完全に明瞭で思考は冷静だ。

キレたという表現も当てはまらない。でも、頭に浮かぶのは一つの術式。

「ふざけるな！」

レヴァンティンを振り上げて一閃した。オレが取った行動はそれだけ。衝撃を放つために放ったのだが、オレの視界はレヴァンティンが纏う巨大な魔力の刃を見ていた。

その刃が航空空母の底を大きく斬り裂く。

オレは地面を蹴った。そして、最速で魔力の階段を駆け上がる。

『抵抗したな』

航空空母の底の一部が動き、そこから備え付けられたエネルギー砲がこちらに砲身を向ける。

オレはそれらを全て確認しながらレヴァンティンを振り回した。

全てのエネルギー砲が斬り裂かれ、地に落ちる。

『バカな』

オレは航空空母の中に躍り出た。ちょうど目の前にいたのはパワードスーツを着た男が一人。

オレは力任せにパワードスーツを掴み、壁に叩きつけた。

「アル・アジフはどこだ？」

レヴァンティンでパワードスーツの胸を軽く突き刺しながら尋ねる。ちゃんと答えなければ殺すことを表しながら。

「あ、あそこ」

男が指差したのはすぐ近くの部屋。オレはレヴァンティンで力任せに殴り飛ばし、部屋のドアを蹴り破った。

部屋の中にいるのはたくさんの男と、アル・アジフ。アル・アジフはほとんど服を身につけていない状況で、胸の部分は腕で隠している。

「誰だ？」

振り向いた男の一人をオレは無言でぶっ飛ばした。拳ではなく、レヴァンティンで。

「なっ」

振り向いていた男達が絶句する。でも、すぐに行動しようと体は動こうとしている。だから、無言でサンダーウェブを大出力で放っていた。

下手をすれば死ぬ可能性だってある出力。でも、オレは容赦なく使用した。倒れなかったのはアル・アジフのそばにいた男くらいか。

男が口を開く。何語かよくわからない。何を言っているのかわからない。だから、オレはゆっくり踏み出した。

男が剣を抜こうとする。でも、それより早く、レヴァンティンが男の腕を激しく叩いていた。男が悲鳴を上げて腕を抱える。

感触的には確実に折った。だから、オレは男を殴り飛ばした。

「アル・アジフ、無事か？」

アル・アジフに振り返ってそう尋ねた瞬間、誰かが胸の中に飛び込んできた。アル・アジフだ、と思った時にはアル・アジフが泣いていた。でも、声は出さない。

まるで、子供のように。いつもの気丈なアル・アジフではなく、見た目相応の子供のように。声は出さなくても雰囲気でわかる。

オレは優しくアル・アジフの長い髪の毛と一緒に背中を撫でてやった。

「大丈夫。大丈夫だから。君は、オレが助けるよ」

アル・アジフが何回も頷く。

怖かっただろう。アル・アジフが持つ魔術書を失いただの少女としてたくさんの男の中に放り込まれたのは。何があったかわからない。でも、後ちょっとで暴行されたのに違いない。

「とりあえず、今はこれでも着てくれ」

オレは全身を覆うコートを取り出した。普段着や戦闘中に身につける戦闘着の上から着るコート。

極寒の地ではなく、標高の高いような涼しい場所などで使用する。

「後は魔術書を探さないとな」

オレは廊下に出ながらレヴァンティンを構えた。ちょうど、刀がレヴァンティンとぶつかり合う。

「兄さん、アル・アジフさんは?」

そこには追いかけてきた亜紗と由姫の姿があった。オレはレヴァンティンを握らない手で握っているアル・アジフの手をゆっくり引っ張ってこちらに引き寄せる。

現れたアル・アジフを見て亜紗はスケッチブックを渡した。どうし

てだろう？

アル・アジフがスケッチブックを捲る。

『ありがとうございます。今の私は話すことが出来ないのでこの方法て語らせてもらいます』

あれ？　アル・アジフと話し方が全く違うような。

『私はエリシア。エリシア・アルベルト。アル・アジフの中の人です』

第百五十八話　敵の狙い（後書き）

アル・アジフさんの中の人が登場。中の人はいないというわけはありません。

第百五十九話　空戦（前書き）

初めて文章とストーリーの評価を頂きました。ありがとうございます。
ノリと勢いで書き進めているので意外と高得点だと感じています。
気が向きましたら感想や評価をお願いします。

第百五十九話　空戦

航空空母から砲撃が放たれる。向かってくるエネルギー弾を僕と鈴はお互いにダークエルフＦＢＤモードとイグジストアストラルを駆って避けた。

ＦＢＤシステム作動中のダークエルフは空中でもかなりの機動力を確保できる。本来、エネルギー弾の防御に回す装甲のエネルギーを回さなくなるため、機動力に全エネルギーを傾けれるからだ。ただ、かすっただけでも落ちる可能性が高くなっているが。

「厄介、だよ」

僕は攻撃を避けながら取り出したエネルギーライフルで一つ一つの砲を破壊していく。周さんが航空空母に中に入っているからバスターカノンのような高威力の射撃が可能なあれを使用できない。

『悠人、私に任せて』

イグジストアストラルが全砲門を航空空母に向ける。そして、砲門から火が噴いた。

こちら側に向けられている砲門があっという間につぶれていく。多重ロックシステムがあるみたいだね。あれって便利だけどエネルギーをかなり食うからダークエルフには搭載できないんだよね。ただでさえ、第二世代よりも最大エネルギーキャパシティが低いのに。

『きりがないね』

鈴が呟いているのは航空空母から現れる黄土色のフュリアス達だ。一体何機いるのか不思議になるくらい出てくる。術式による規模拡張を行っていたとしても、考えられないくらい多い。

『呑気に話しているとは余裕だな』

呆れたようなルーイの声と共にアストラルブレイズが僕達の近くまで上がってくる。そして、肩のレールガンがちょうど発信した黄土色のフュリアスを貫いた。

僕は跳んできたエネルギー弾を避ける。

「余裕じゃないよ。今のダークエルフは一撃もかすれないから。回避を優先しないと」

『装甲が薄い超機動力型か。音界では考えられない設定だな。重火力か万能か』

イグジストアストラルの砲が向かってくるフュリアスを片っ端から撃ち落とす。

『悠人と青いフュリアスの人に聞いていいかな?』

攻撃が止んだすきに僕は新たな武器を取り出す。ダークエルフが所有する武器の中で最大の大きさの砲門を持つ高出力砲。ただし、完全な使い捨て。それの引き金を引いた。

膨大なエネルギー弾が飛び出す。全て散弾という形で。

距離を詰めてきていたフュリアスはもちろん、とっさに盾を構えた

フュリアスも散弾の雨に沈んでいく。

『どうしてそんなに喋りながら戦闘できるの？』

鈴の乗るイグジストアストラルにエネルギー弾が直撃するが、エネルギー弾は周囲に散るだけだ。だから、イグジストアストラルはまるで砲塔のようにほとんど動いていない。時々動いているけど。

対する僕のダークエルフやアストラルブレイズは絶え間なく動きながら攻撃を行っていた。僕のダークエルフの場合はＣＣＳについている追加エネルギーパックがなければ今頃落ちているだろうけど。

「戦場だとこれが基本だよ。立ち止まっていたらただの的だからね」

『第七世代といえども、エネルギー弾を食らえば撃墜するときだってある。避けるのは当たり前だ。僕も新人の頃はそれを叩き込まれた』

『あう、世界が違いすぎるよー』

まあ、そうだろうね。僕の場合はパワードスーツを身に付けた時の戦闘を元にしているから。ルーイの場合は本気でフュリアスの訓練しているし。

でも、出来る限り早く敵のフュリアスを倒さないと。

『悠人、行けるか？』

ルーイも同じ考えみたいだ。僕と同じように早く倒そうとしている。

「いつでも」

『行くぞ』

僕はダークエルフを一気に加速させた。そして、加速したアストラルブレイズと共に空を駆け抜ける。

フュリアスを使った高速飛翔戦闘なんてまずしない。エネルギーをかなり消費するからだ。でも、今は追加パックもつけているからやれるはず。

黄土色のフュリアスが僕達に狙いを付ける。このままでは制空権を完全にとられると思ったのだろう。でも、イグジストアストラルや地上にいるソードウルフ、そして、孝治さんに楓さんの射撃が確実に黄土色のフュリアスを削っていく。そして、僕達二人の行動も。

ほとんどアクロバットな行動で凄まじい機動と回避を行い攻撃を避ける。斬りかかってくるフュリアスに対してはルーイが攻撃を受け流した後、僕がエネルギー弾を中心に直撃させて落とす。

エネルギーライフルで攻撃してきた場合は僕が前に躍り出て牽制のエネルギー弾を放ちながら、アストラルブレイズが肩のレールガンで撃ち抜く。前衛と後衛の役割を交互にしながら敵に隙を見せない。なおかつ、敵のフュリアスを片っ端から撃ち落としていく。相手からすれば恐怖しかないだろう。それくらいに僕達の動きは神がかっていた。

僕はちらっとセンサーを見る。残るフュリアスは大体１００程度。このまま数分戦い続ければ勝てる勝負だ。でも、その数分を戦えばあの人と戦うエネルギーがほとんどなくなる。どうするべきか。

『悠人くん！　青いフュリアスの人！』

すると、楓さんからの通信が入った。それと同時にセンサーに一直線の赤いラインが引かれる。ほとんどの赤いフュリアスをそこに捉えたラインが。

『収束砲で撃ち抜くkら退避して！』

『収束砲！？　そんなことが可能なのか？』

「ルーイ、今は下がって！」

僕は聞いたことがある。『ＥＳ』の過激派に存在するとある砲撃手の話を。

過激派代表のアリエル・ロワソから砲撃の基礎を学び、周さんと同い年でありながら過激派で最強と言われる称号をもらった少女がいることを。

カメラに映った楓さんが持っている砲撃杖が淡く白い輝きを放つ。

この世に存在する神剣の中で、唯一、本物の神剣が過去にとある宗教で崇められたことがある。その神剣の名前は『カグラ』。アル・アジフさんから決して漢字に直してはいけないと言われている。

過激派の数少ない二つ名の持ち主、リュリエル・カグラの持ち物。

白い輝きが膨れ上がった。

『スターゲイザー・バスター！』

天空属性最強魔術である『スターゲイザー』の劣化派生技。ただし、その威力はけた違いに高い。多分、航空空母を一撃で落とせるくらいに。

光の暴風が黄土色のフュリアスを呑みこんだ。盾を構えた者も等しく一瞬で蒸発させる。スターゲイザー系列は光の収束を使う魔術。ただし、光属性じゃない。原理はよくわからないけど、巻き込まれたフュリアスは跡形もなく消え去っていた。

残ったフュリアスは後四機。いや、こちらに向かってくる一機を含めて後五機。

『悠人、行け！』

レールガンから放たれたエネルギー弾が一機のフュリアスを貫く。そのそばにいたフュリアスを地上からのソードウルフによる射撃によって翼をもがれ落下した。

『お前の決着をお前でつけろ！』

「ありがとう！」

僕は向かって来るフュリアスに向かってダークエルフを駆る。

『やはり、化け物はこの手で始末しなければならないようですね』

そして、聞こえてくる声。それを聞いても僕は冷静だった。冷静に対艦剣を取り出す。

「あなただけは、僕が倒す！」

出力を最大限まで上げて僕は実の母親が乗る黄土色のフュリアスに向かって飛びかかった。

第百五十九話　空戦（後書き）

アリエル・ロワソ、クロノス・ガイア、リュリエル・カグラなど過激派の一部につく二つ名、ほとんどその場において一瞬で考えます。クロノス・ガイアは神の名前からですが。

第百六十話　アルとエリシア（前書き）

長かった。本当に長かった。

第百六十話　アルとエリシア

『私の名前はエリシア。エリシア・アルベルト。アル・アジフの中の人です』

一瞬、アル・アジフ、いや、エリシアが何を言っているのがわからなかった。ただ、今、目の前にいるのがアル・アジフではないことには気づいている。

アル・アジフの体でありながら、アル・アジフではない精神。いや、もしかしたら、アル・アジフという精神がエリシアに宿っていただけかもしれない。そんな感じがする。

『やっぱり、困りますよね。今、こんなことを言っても。ですが、アルを、アル・アジフを助けてください。私を助けるためにアルは』

「いたぞ！」

「ちっ」

オレは舌打ちをしながら通路いっぱいに障壁魔術を展開した。これでこちらに向かってくることはないはずだ。

「アル・アジフはオレ達の仲間だ。救わないという選択肢はないさ。問題は」

障壁魔術を展開した方向にはパワードスーツを着た人達がいる。反対側の通路からも駆けてくる音。

多分、同じパワードスーツの人達だろう。

「四面楚歌だな。アル・アジフ、じゃなくて、エリシアは運動神経に自信はあるか？」

『ありません』

即答された。まあ、アル・アジフと体はほとんど同じだろう。

オレはレヴァンティンを握りしめた。

「切り抜けるしかないか。オレと亜紗が前に出る。由姫はエリシアの後ろにつきながら追いかけてきてくれ」

そう言うや否や、オレは地面を蹴った。亜紗も少し遅らせて地面を蹴る。

「紫電」

レヴァンティンをしっかり握りしめて廊下の角を曲がる。

「一閃！」

レヴァンティンがパワードスーツにぶつかり、パワードスーツを吹き飛ばした。すかさず地面を蹴ろうとする。

だけど、体は意思と反して勝手に戻っていた。取り出そうとした亜紗の体と一緒に。

轟音。いや、爆音か。オレがいた場所に何かが着弾して弾ける。す

かさず『天空の羽衣』を展開して防御するが、威力は極めて高かった。

『天空の羽衣』の使用量が一気に減少するのが感覚でわかる。爆発した瞬間に破片を撒き散らす弾みたいだ。

「完全に塞がれたな」

行ける場所はオレが開けた外に通じる道と、エリシアが捕らえられていた部屋だけ。

『私がトップを取る？』

亜紗がスケッチブックを見せてくるが、オレはすぐに首を横に振った。そんな危険な真似は出来ない。『天空の羽衣』でごり押すことも考えたが、威力が不明な上に、いくつも撃たれたなら無理だ。

「兄さんや私でも防御は不可能。一度退却します？　それだったら」

「いや、止めた方がいい。結城家当主が最強の魔術書を握っている以上、相手の準備が済む前に終わらせないと」

でも、向こうも簡単に通してはくれないだろう。どうすればいいか悩むところだ。

正面突破は難しい。相手の弾に直撃したらオレ以外なら良くて戦闘不能。悪くて死ぬ可能性だってある。

オレはレヴァンティンを握りしめた。前に進めないなら、

「横を抜けばいい」

そう言ってレヴァンティンで横の壁に斬りかかった。

振り上げからの振り下ろし。そして、剣を返しての一閃。ちょうど△の形に斬り裂き、足で蹴る。すると、△の形に壁が倒れた。

中にあるのは何らかの機械。オレは『天空の羽衣』を展開したまま中に入る。

「これはもしかして、出力装置か？」

オレは周囲を見渡しながら呟いた。周囲に存在しているのはオレが作り出したＳＫシリーズのものだ。どうやらこの部屋は動力部らしい。

周囲の魔力を感じ取ってみると、部屋がとても縦、いや、奥が深いということがわかる。

「兄さん、ここは？」

オレの後ろを追いかけて由姫や亜紗が入ってくる。もちろん、エリシアもだ。

『動力部だと思う。周さんが設計したものがあるから』

亜紗にＳＫシリーズを見せた記憶がないんだが。

『道を塞ぐ？』

「そうだな」

オレは斬り抜いた壁を持ち上げてはめ込んだ。そして、物理魔術を発動させる。斬った後は無くなり、残ったのは微かに薄くなった壁と床に散らばった破片。

「向こうも動力部に入ったのがわかっているはずだからどうするかだな。まあ、さっきみたいな攻撃はないだろうけど」

この航空空母は内部での戦闘も考えられているはずだ。そうでなければあんな威力の高いものを艦内で使用しない。それこそ、動力部のそばでは。

「じゃ、また抜きます？」

由姫がナックルを身につけている拳を握りしめるが、亜紗が首を横に振って否定した。抜いたところで敵とぶつかるのは目に見えている。

『動力部を破壊するということは？』

亜紗が首を傾げながらスケッチブックを捲ると、エリシアがスケッチブックを掴み、ページを捲った。

『止めた方がいいと思います。この高さでは地面に落ちた衝撃で皆さんが怪我をするはずです。それに、動力部を破壊するということは、この場に魔力が吹き荒れるということです。私以外はまず助かりません』

その文字にオレは疑問が出来上がった。確かに、この量の動力部と

なると一つが停止した瞬間に連鎖的に全てが停止する可能性だってある。そうなれば、魔力鉱石から放出される魔力粒子が放出される。

ＳＫシリーズはその魔力粒子を動力とするため、膨大な量であっても変換出来る機構にしている。

だが、一度破壊されれば放射能を垂れ流す物質のごとく、魔力粒子が大量に放出される。それが外ならともかく、このような部屋の中だと生物が住めるような魔力粒子の量じゃなくなる。もちろん、オレも不可能だ。

それなのにエリシアは私以外と言った。

「エリシアは人、いや、生物じゃないのか？」

オレは考えられる可能性の中で一番高い可能性を尋ねた。それにエリシアが頷く。

『私の今の名前はアルに名付けられたものです。本当の名前はＥＭ－ＥＬ－ＶＳ。エルブスと開発者から呼ばれた人工知能と機械の体です』

よく考えてみたら確かにそうだ。エリシアは話せない。しかも、亜紗が使うスケッチブックを使える。この時点で何らかの精神感応が無ければスケッチブックは使用出来ないと気づかなければならなかった。

そして、この世に存在するスケッチブックが扱える人はオレか亜紗。それなのに使えるのは何らかのアシストを行っていたということ。

「じゃ、アル・アジフさんは機械の人ですか？」

「違うだろうな。アル・アジフはおそらく、魔術書の人格。魔術書アル・アジフに封じ込め、いや、宿った人格じゃないか？」

『はい。その通りですが、どうしてそのことを？』

普通はそうなるだろう。そんなことに気づくなんてよっぽどのことが無ければありえない。

だけど、オレの身近にいる人達を考えたら何となく理解出来る。

「いや、慧海がいるのにアル・アジフが最強の魔術師と呼ばれているんだぜ。あのチートよりも強いってことだろ？」

そうなると、アル・アジフ自身が魔術の才能があり、天才の中の天才というレベルか、魔術書自体が特別なのかのどちらかになる。

もちろん、オレは後者を選んだ。くどいようだが、慧海は本当にチートの塊だ。最も苦手な接近戦以外では公式試合で未だに負けを記録していない。

というか、スターゲイザー・レインを無詠唱で文字通り雨のように降らせれるのは慧海しかいない。それよりも上なのがアル・アジフなのだから。

亜紗も由姫も納得したように頷いている。

『話を戻します。私は機械ですからちょっとしたことでは壊れません。だから、皆さんのやりたいようにやってください。私は知って

いる知識でサポートしますから』

エリシアは自分が死なないから盾にもなれると言いたそうだった。
でも、オレは首を横に振る。

「出来るかよ。お前が傷つけばアル・アジフが悲しむ。そんなことをさせると思っているのか？」

『私は死にません。データの塊です。コアが破壊されてもバックアップがあれば』

「そんなんじゃねえ！」

オレは怒鳴っていた。エリシアの体が強張るのをわかりながら、エリシアの肩を掴む。

「今のエリシアはお前だけだろ！　データの塊だとかバックアップだとか関係ない。オレ達の前にいるエリシアはお前だけだ。機械だろうがなんだろうが、オレ達の知るエリシアはお前だけなんだ！　だから、オレは、いや、オレ達はお前を守る。傷つけさせやしない」

『どうしてですか？　私にそこまで言うのですか？　私はマテリアルライザーのユニット。そして、アル・アジフのための体だけの存在』

「アル・アジフはお前をそんな風に見ていない」

それは断言する。確証はない。でも、アル・アジフならきっとエリシアを大事にする。

「お前とアル・アジフの間に何があるかわからない。でもな」

レヴァンティンを握りしめる。そして、その先を天井に向けた。

「たかがそんな理由で命を粗末にしていいわけがないだろ！」

『私は生物ではありません』

「生物じゃなくても、お前には命があるんだ！　それはお前自身にも否定させない！　自分で考え、自分で行動出来る。それが生きているということだ！」

『だったら私は何なのですか？　マテリアルライザーのユニットとして作られ、リズィと出会い、アル・アジフを最後に託された私は何なのですか？　機械の私には荷が重すぎます。こんなのだったら、生まれてこなければ良かった』

それはほとんど心の叫びだった。まるで、自分が生まれた理由を未だに悩んでいることを誇示するように。

『私は道具です。災厄の神と戦うためだけに生み出された使い捨ての道具。そんな道具にあなたは何を求めるのですか？』

「エリシアという存在」

エリシアは多分、アル・アジフの体でいることに不満はないのだろう。もしかしたら、何か約束したのかもしれない。

でも、エリシアは自分が生まれた理由が嫌いらしい。道具として生まれたことが嫌なのだから。だから、道具であることを強調する。

「確かに、エリシアは理由があって作られたんだと思う。でも、お前には道具として見なかった人を知っているんじゃないか？　多分、アル・アジフもだろ？　エリシアの心にあるのは自分を道具だと断言している自分だ。お前は道具なんかじゃない。人の手によって作られた命だ。それを誇れよ」

『誇れない。誇れないよ。私はアルに酷いことを誓わせたから。私の体を使うなら、あなたは自分の求める幸せを追求してはいけないって。私がいなければ、アルは幸せに』

亜紗が動いた。止めようとしたオレの動きより先に亜紗の手が動く。そして、エリシアの頬を亜紗は叩いた。

エリシアは呆然と叩かれた頬に手を当てる。当然だ。急に叩いたのだから。

すると、亜紗はスケッチブックを掴むとエリシアにだけ見えるようにスケッチブックを開いていた。その文字をみたエリシアがハッとする。そして、オレを見る。

亜紗は一体何を言ったのだろうか？

亜紗がエリシアにスケッチブックを返す。そして、エリシアがスケッチブックを捲った。

『あなたの言うことを信じます。だから、私のことを気にしないでアルを助けてあげてください。アルがいれば、アルさえいれば、私はいりません』

「あのな、自分のことをそんな風に言うなよ。アル・アジフはな、魔術書アル・アジフだけで完成するものじゃない。魔術書アル・アジフとエリシアの二人が揃ってアル・アジフという人が出来上がるんだ。だから、オレは大事な仲間を守る。エリシアがいくら死にたがっても死なせるかよ。オレは全てを守らないと気が済まない自己中心的な男なんだぜ」

エリシアは俯いた。俯いたままスケッチブックを開く。

『アルだけズルい』

その言葉の意味が全くわからなかったが、とりあえず、気にするよりも先にやらなければならないことが出来た。

誰かが動力部に入ってきたのだ。数はわからないが何人か入ってきている。多分、照明を消してから向かって来るだろう。動力部に被害を出さないために。

だけど、今のオレからすればかなり好都合だ。振り上げたままのレヴァンティンをゆっくり下ろす。そして、ニヤリと笑みを浮かべた。

「見つけた。亜紗、矛神の使用制限を解除するから、あの方角に向かって一辺が４ｍの正三角形を作れるか？」

亜紗は頷いて親指を立てた。そして、矛神を構える。

オレが指差した方角は動力部から斜め４５。右１３。前。これが最短距離だ。

亜紗が矛神を振る。たったそれだけで天井が微かにズレた。こちら

に向かって。

「由姫、頼む、って」

オレは由姫にその部分を殴り飛ばせと言おうとした。だけど、それより早く、由姫がその部分を蹴り飛ばした。ズレて落ちてきた部分が凄まじい速度で上昇する。そして、空が見えた。

正三角形の形に道の向こうに出来上がる青空が見えるまでの道が。

オレは完全に無言だった。何回か殴って上にあげる者だと思っていたのだが、まさか、蹴り一発で完全に吹き飛ばすとは。

由姫が床に着地する。それを見ながらオレはエリシアを抱え上げた。

「先頭は由姫。後ろを亜紗に頼む。行くぞ！」

オレ達は同時に地面を蹴った。そして、無理やり作り出した通路を駆け上がる。

４５。という急な角度だが、オレ達は止まることなく走り続ける。時折顔を覗かせる人を跳ね飛ばしながら駆け上がる。

速度は大体いつもの八割程度だから、感覚的にはそろそろだな。

オレは魔力の流れを確認しながら由姫に言った。

「由姫！　次の部屋で止まれ！」

「はい！」

由姫が次の部屋についた瞬間に姿を消す。正確にはオレの見える範囲から消えただけだけど。

オレと亜紗はすぐに由姫の後を追って部屋に入った。

真っ白な部屋。だけど、大きな窓、いや、スクリーンか。そこに外の風景が映しだされている。そして、そのスクリーンからの光を受けるように経っている姿。

「ようこそ。待っていたよ」

そこにいたのは一人の男。もちろん、オレの知っている男だ。その横に浮かんでいるのはアル・アジフが持っていた魔術書。

オレはエリシアを床に下ろしながらレヴァンティンを男に向けた。

「観念しろ。結城家当主」

「観念？　何を？　大人しくした方がいいのは君ではないか？　この魔術書を知っているなら」

そう言って結城家当主はアル・アジフを掴み、開いた。たったそれだけで炎の槍がエリシアに向かって放たれる。

オレは炎の槍をレヴァンティンで弾いた。

「知っているさ。でもな、お前はオレ達には勝てない」

「君にはつくづく驚かされるよ。この部屋に面白い手段で来る。さ

らには最強の魔術書を恐れない。とても、とても不愉快だ」

収束した熱の光線が吐き出される。光の速度ではないが、ギリギリ回避することの出来る上限の速度。

オレ達はそれを避けた。だけど、エリシアだけが反応出来ていない。

「ちっ、くそっ」

エリシアを狙われたら確実に死ぬ。だから、オレは前に出た。レヴァンティンを鞘に収めて前に出る。

紫電一閃は間に合わない。破魔雷閃は合わせられない。水牙天翔は使える状況ではない。なら、相手の攻撃を別の手段でねじ曲げるしかない。

「共に貫け」

結城家当主が手のひらをオレに向ける。正確にはオレとエリシアを一直線に結んだ場所から。

使って来る技は同じ。光属性の収束系レーザーだ。光の速度みたいな化け物加速ではないが、距離を詰めている状況では回避することが難しい。

放たれるレーザーをオレは真っ正面から睨みつけていた。これはタイミング次第で決まる。

全ての速度がスローモーションになる。速度が上がったのはオレの思考速度と鼓動の速さ。レーザーが確実にオレを貫こうと迫る。

それに対して、オレは魔術を発動させた。

防御魔術でも障壁魔術でもない。そもそも、どちらも光属性にはとことん弱い。光属性は熱量の変化を得る炎属性と違い、光そのものを収束する。だから、貫通力は桁違いに高い。

でも、そんな光属性に対して唯一利点を持つ属性がある。

光があるところには必ず闇がある。光が当たれば闇が生まれるということだ。絶対的に近い貫通力を誇る光属性に対し、闇属性は最強の切り札。光を反射しない能力を持つ。

オレの目の前に小さな黒い球体が出来上がる。それは、向かってきたレーザーとぶつかった、かのように見えた。だが、レーザーは全く違う方向に向かう。

「小癪な」

方向を反らしたというのに結城家当主の顔は変わらない。アル・アジフという絶対的な魔術書を持っているからだろう。

オレはレヴァンティンを握りしめた。こういう時に奥の手はかなり使えるからな。

床を蹴りながらさらに距離を詰める。結城家当主は静かに笑った。

「死ね」

放たれるは光の奔流。結城家当主は光属性が大好きみたいだ。ほと

んど光属性しか使っていない。でも、今はそれでいい。

「レヴァンティン！」

オレはレヴァンティンの力を使った。あらゆる力が消滅する。いや、レヴァンティンが作り出したフィールドによって相殺される。

相手が驚いている間に、オレは一歩を踏み出した。

「紫電」

一閃と叫びながらレヴァンティンを引き抜こうとした瞬間、オレの背中に何かが走った。オレはすかさず紫電一閃を破棄しながら後ろに下がる。

それと同時に突き刺さる拳。オレの体を微かに捉え、オレは大きく吹き飛ばされた。速度は確実にオレよりも上だ。

空中で姿勢を戻し、床を滑りながら着地する。レヴァンティンを握り締めてすぐに抜けるようにする。

だが、相手はその隙を見逃さない。視認出来る限界に近い速度で緑色の服が距離を詰めてくる。紫電一閃は間に合わない。

オレがもう一回、レヴァンティンの力を使おうとした。でも、それより早く拳が放たれる。当たる。そう思った瞬間、

「させない！」

相手の拳が由姫によって跳ね上げられ、がら空きの胴体にカウンタ

ーの一撃が突き刺さった。確か、八陣流『弾撃』だったはず。拳によって攻撃を受け流してカウンターを叩き込む。この速度となるとほとんど神業に等しいけど。

そこでようやくオレは相手の顔を見ることが出来た。だいたい３０くらいの男だ。ただ、その目は肉食獣のようにギラギラしている。服装は黒色。

オレに向かってきた時は緑色だったはずだ。でも、今は黒。一体どういうことだ？

「袋のねずみという言葉を知らないか？」

その言葉と共に部屋の中にパワードスーツの男達が入ってくる。手に持っているのはエネルギーライフルだけでなく、剣や槍など近距離戦にも対応出来る装備。

完全に囲まれたか。

「我が手中に最強の魔術書がある以上、勝てはしない」

「そうかよ」

オレはレヴァンティンを鞘から抜いた。そして、柄を両手で握る。

「こんな状況で過信するのは敗北フラグだぜ。だってな」

レヴァンティンが二つに分かれる。そして、オレは両の手にあるレヴァンティンのモード？をしっかり握りしめた。

「レフトアームズ、オーバードライブリリース」

実戦でするのは初めてだ。誰もいない場所でもやったことはない。やったのはレヴァンティンとの空想空間内での発動。モード？みたいにぶっつけ本番。ただし、あれは使う訓練はしていた。でも、これは、これだけは他のもので代用できない。

「ライトアームズ、オーバードライブリリース」

右と左。二つに分かれたレヴァンティンを使い、オーバードライブを二つ同時に発動させる。今は並列にだけど、

「デュアルオーバードライブリリース！」

その瞬間、オレを中心に魔力の嵐が吹き荒れた。二つのオーバードライブを直列で発動させることによる限界を超えた魔力運用。暴走する危険性をとことん詰め込んだ能力。

「アル・アジフを返してもらう。アル・アジフは、オレ達の大切な奴だ。だから、お前らなんかに利用させはしない！」

「先に奥の手を見せるのか？　まあいい。やれ」

オレは動いた。魔力を体に纏わせて地面を蹴る。本来ならいつもの加速しか出ない。でも、暴走覚悟で使用する膨大な魔力はいつも以上の化け物に近い加速を生み出す。

一歩進めば結城家当主のちょうど真ん中に踏み出し、二歩目で目の前に立つ。

全てのベクトルを強引に操作して、オレは結城家当主の腕にモード？から戻したレヴァンティンを叩きつけた。結城家当主がアル・アジフをとり落とす。

オレはそれを掴んだ瞬間、強烈な激痛が走った。まるで、アル・アジフがオレに触られることを拒否するかのように。まるで、所有者でないことを訴えているかのように。

オレを追いかけて緑色の服を着た男が迫ってくる。どうやら、緑色は高速戦闘に特化した形態の様だ。でも、今のオレからすれば十二分に遅い。

「邪魔をするな！」

床を踏みしめて全力の力で体を捻る。全てのベクトルを一点に集中する最大の打撃技。体中の魔力を全てベクトル操作に向け、最低限の動きだけを行い放つ拳。

「無法流」

男が服装を変える。緑から黒で。そして、速度が変わる。一気に遅くなった。多分、防御を行うための装甲。

でも、この技はあらゆる防御を貫く拳。捻った体を勢いよく戻す。全ての動きのベクトルを拳に集中させ、向かってきた男に叩きつけた。

骨を折る感触と共に男を吹き飛ばす。男は結城家当主と激突して吹き飛んだ。

「アル・アジフ、答えろ。お前はどうしたい？」

オレはアル・アジフに語りかける。答えてくれないとは考えない。でも、オレは必ず答えてくれると感じていた。だから、オレは語りかける。

「お前の望みを言ってみろ！　エリシアとの約束なんて関係なしに」

痛みがさらに強くなる。絶対に言いたくないと言う風に。でも、オレはそれでも諦めない。

「オレはお前が本当に願うなら、心の底から願うなら、お前の言うことに従う。でも、お前が本当に望んでいないことを言うならいくらでも追いついてやる。だから」

オレは子供だ。誰だって隠したいことだってある。でも、こんな子供だから、誰かを助け、全ての人を守りたいと言う不可能にも近い夢を言う。諦めることなんてしない。現実を知っても抗い続ける。この世界にも。そして、個人にも。

「だから、お前の本当の願いを言ってみろ！」

その瞬間、世界が変わった。球体の中に移動したような感覚。目の前にあるのはキーボードのみが存在する机。そして、魔術書。

『何故、そんなことを言う』

アル・アジフの声が聞こえる。それを聞いたオレは安心した。

「何故って？　当り前だからだよ。お前は結城家に利用されたいと

思っていないだろ？　多分、生き残った人達を助ける約束と共に従ったんだろ？　だから」

『我は、我がいなければこのようなことにならなかった。我が、我がアル・アジフでなければ』

「オレと同じだな」

アル・アジフはオレと同じだ。オレもそんなことを思ったことがある。『赤のクリスマス』を起こした原因として何度も何度も悔いた。でも、今は違う。

「だからかもしれない。こんなにもお前を放っておけないのは。オレと同じだし、それに、守りたいと思えるんだ。オレはいろいろな人に救ってもらった。だから、オレはお前を助けたい？　ダメか？」

『我はエリシアと約束したのじゃ。我は求めないと。エリシアを停止状態に追い込んで我が活動するために。じゃから』

「なら、これからは二人でアル・アジフになれよ」

オレはエリシアからも気持ちを聞いた。そして、アル・アジフからも聞いた。

エリシアは自分の生まれた理由がわからず、その理由を求めてくれそうなアル・アジフに全てを託した。少しの制限と共に。

アル・アジフはエリシアの体を使うことに罪悪感を覚えている。それこそ、自分を否定するくらいに。だから、オレは二人を助けることが出来る。

「アル・アジフはお前とエリシアの二人で一人だ。欠けたらアル・アジフじゃない。だから、二人で一人のアル・アジフで、オレ達と共に歩もうぜ。一緒にな」

『いいのか？　我は、我が望みを言わぬのは、その望みが大きすぎるからじゃ。我が我の望みを言えば、そならは叶えてくれるのじゃろ？』

まあ、話の流れ的にはそうなるわな。

「オレに叶えれるものならなんでもいいぜ」

その時、アル・アジフが涙を流したような気がした。悲しみの涙じゃない。嬉しさの涙。本当の願いをようやく言うことが出来るからだろう。

『我を、ずっとそなたのそばに居させてくれ』

「はい？」

思わず聞き返していた。だけど、聞き返すと同時に空間が元に戻る。

そこは完全な戦場。亜紗が駆け回り、由姫がエリシアを守りながら立ちまわっている戦場。どうやら本当に別の場所に行ったいたらしい。

「兄さん！　遅い！」

由姫がエリシアの背中をこちらに向かって押しながら叫ぶ。亜紗は

オレを見て不満そうに頬を膨らませると、そのままエネルギーライフルの一本を叩き斬った。

二人が同時に後ろに跳んでオレとエリシアを守るように布陣する。
この二人って案外相性いいんだな。

「エリシア」

オレはエリシアにアル・アジフを渡した。エリシアは目を瞑っている。多分、アル・アジフと話をしているのだろう。そして、エリシアは頷いた。

「エリシアも納得してくれたぞ。そなたとの約束を」

「よかった。後、最後の言葉をもう一度お願いできるか？」

聞き間違いであって欲しい。本当に聞き間違いであって欲しい。頼むから、聞き間違いで

「ずっと、そばにいさせてください。私と、アルの二人を」

その瞬間、全ての動きが止まった。いや、止められたというべきか。
前に立つ由姫と亜紗の背中から何かが見える。多分、阿修羅の姿。
オレの体すら完全に硬直できるくらいの殺気がこの部屋に満ちている。

二人はゆっくり振り返った。敵に背中を向けているが敵は行動しない。行動すれば殺されるとわかっているから。しかも、二人の表情は完全に無表情。怖いを通り越してヤバい。

「えっと、あのさ、落ちつこうぜ」

焼け石に水と分かっていながらオレは二人に言う。でも、二人の顔は全く動かない。いや、怒りに染まって動いているだけだ。

「兄さん？　そういうことか説明してくれますよね？」

『都だけじゃなく、アルさんまで？』

そのスケッチブックは質素な文字だけなのだが、どうして怒っていることが端的に伝わってくるのだろうか。

誰か、この場の空気を変えてくれ。

「茶番をありがとう。君達のおかげで計画を早めることが出来るよ」

結城家当主のその言葉に二人が振り返る。オレは少し安心しながらレヴァンティンを握り締めた。

「不思議に思ったことはないか？　どうしてここまでフュリアスを持っているのか？　どうやって隠せたのか？」

壮絶な笑みを浮かべ、結城家当主が宣言する。

「さあ、大祭の始まりだ。ここから世界は変革される。我らの手によって」

オレはスクリーンを見た。そこに映っているのはオレ達が乗る航空空母とは少し姿の違う航空空母。それが三隻ある。そして、周囲に

浮かぶ黄土色のフュリアスと赤いフュリアス、ギガッシュ。

「そういうことか」

ルーイ達とは別の勢力と手を結んでいた。精霊召喚符との関係性は全くなくなるが、多分、五機のフュリアスでは確実に耐えられないくらいの量。それがこいつらの目的。

そいつらをぶつけて最強のフュリアス乗りをこの場で倒す。

「そう、我々が世界に名を残すのだよ！」

第百六十話　アルとエリシア（後書き）

ついに、アル・アジフさんがヒロイン入り。
嫉妬の威力は肉食獣の群れの檻に入れられたウサギみたいな感じです。

第百六十一話　過去との決着

対艦刀が対艦剣によって受け止められる。そのまま僕は鍔迫り合いに持ち込んだ。

『小癪な。そんなことをしてどうするつもりですか？』

「こうするつもりだよ！」

ダークエルフが黄土色のフュリアスの足を払った。空中だから大きな効果は得られないが、僕も向こうも大きく体勢を崩した。

黄土色のフュリアスが大きく後ろに下がる。

『フュリアスを使った戦いでそんなことをするとは。世代が違うとはいえこのゲイルと同程度の性能。あなたは本当に化け物ですね。化け物め』

黄土色のフュリアスはゲイルというみたいだけど、今は全く関係がない。

「確かに僕は普通とは違う」

エネルギーライフルを構えゲイルに向かって引き金を引く。だけど、放ったエネルギー弾をゲイルは避けた。多分、隊長機だからカスタム機にしているんだ。他のゲイルと比べて完全に動きが違う。

対艦刀を右手に持ちながら左手のエネルギーライフルを連射する。

「でも、そんな僕を受け入れてくれる人達がいる。あなたが僕を受け入れなくても、僕は僕を僕として見てくれる人を大切にする。だから、そんな言葉で僕は惑わされない」

ゲイルが腕を振った。それと同時に何かがこちらに向かってくる。それを僕は対艦刀で斬り飛ばした。斬り飛ばしたものはアンカーのついた鞭だ。多分、これで敵の腕を捕えて破壊するつもりだったのだろう。

だけど、対艦刀を振った隙にゲイルはエネルギー弾を放ってきていた。避けきれずにエネルギーライフルを貫かれる。

『そうですか。ですが、そんな機体でこのゲイルを倒そうなんて、勘違いもはだはだしいですね！』

ゲイルが一気に距離を詰めてくる。僕は対艦刀を握り締めて距離を詰めた。

対艦刀と対艦剣がぶつかり合い、対艦刀にひびが入る。やはり、対艦剣とは相性が悪い。

『このまま潰れてしまいなさい！』

僕は対艦刀を手放した。そして、スラスターを吹かして後ろに下がる。新たに取り出すのはギガッシュのバスターカノンからアイデアをもらって周さんが作ったバスターライフル。

バスターカノンよりも小型だけど、大きなエネルギー弾が対艦刀を斬り裂いたゲイルに向かう。ゲイルは対艦剣でバスターライフルのエネルギー弾を受け止めるが、対艦剣に大きなひびが入った。

やはる、バスターライフルは近距離線でも頼りになる。だけど、エネルギー消費が激しい。設計上、中距離で使う武装だからバッテリーは搭載できない。搭載できないからこそ本体のエネルギーをかなり食う。

使うタイミングを考えておかないと。

僕はバスターライフルを戻してエネルギーライフルと盾を取り出した。ゲイルも対艦剣を捨てて盾とエネルギーライフルを掴んでいる。

『化け物はいい加減落ちろ！』

僕は左のレバーを引き絞りながらエネルギー弾を放つ。だけど、ゲイルが放ったエネルギー弾は僕のエネルギー弾を弾き、盾に直撃する。そして、貫通した。

ダークエルフの左足をかすめ大きく部品を撒き散らす。これで機動力のほとんどが潰された。ダークエルフの体が地面に倒れ込んだ。

『化け物にとって相応しいタイミングですね』

ゲイルが新たな対艦剣を取り出した。僕は左のレバーを最大限まで上げる。残量エネルギーを考えても、あの武器でとどめをさせなければやられる。

『さあ、大祭の始まりですよ』

その瞬間、ダークエルフの体を影が覆った。僕は思わず空を見上げる。そこにあったのは巨大な箱、いや、航空空母。確認できるだけ

で数は三隻。そして、周囲に浮かぶ大量のゲイルとギガッシュ。

「ギガッシュ！？　どうして！？」

『彼らは元から私たちの仲間なのですよ。あなた方に寝返った勢力とは別の仲間。ふふふっ。化け物を殺すのは私の役目です。ですから』

ゲイルの足に力がこもる。だから、僕は最後の手段を使うことにした。背中を下に向け、ＣＣＳの追加ブースターを地面に突き刺し支えとする。これで、上半身が斜めを向いた。

「ぎりぎりだけど、あなたを倒す！」

左の手に取りだすのはバスターライフル。右の手に取りだすのはバスターライフル。二つのバスターライフルを横に向けると、共に上の部分が開いた。その二つをしっかり合わせる。

二つのバスターライフルを合わせることにより、バスターカノン以上の破壊力を生み出すことが出来るバスターライフルの最終形態。さすがにバスターマグナムには勝てないけど。

ゲイルがこちらに向かって慌てて地面を蹴る。多分、ここで下がれば航空空母を撃ち抜かれると思ったのだろう。実際に、ここでさがったら撃とうと思っていた。だから、ゲイルは飛び込んでくる。

『死ね！　化け物め！』

振り下ろされる対艦剣。僕は、バスターライフルの引き金を同時に引いた。

吐きだされるエネルギーの塊。それはバスターカノンよりも高威力で、対艦刀を一瞬にして砕き、航空空母に突き刺さった。

「うわあああああっ！！」

そのままダークエルフの腕を動かして両のバスターライフルをも動かした。もちろん、放ち続けるエネルギー弾と共に。

エネルギー弾が航空空母を切り裂く。だが、バスターライフルをエネルギー弾が貫いた。僕はすばやくダークエルフを起き上がらせ、バスターライフルを投げ捨てる。

視界に映るのはエネルギーライフルを構えたゲイル。対艦剣を握っていた腕の内、右腕は根元から破壊され、残っているのは左腕だけ。

僕はブースターを最大限まで起動させた。ダークエルフの体が加速する。それに合わせてエネルギー弾を放つゲイル。

もう、エネルギーはほとんどない。だから、エネルギーライフルは使えない。使えるのは対艦刀のみ。対艦剣では攻撃するのにエネルギーを消費しすぎる。

『倒れろ、化け物！！』

コクピット内に響き渡る母親の声。それと同時に跳んでくるエネルギー弾。当たれば死ぬ。かすれば負ける。だから、取り出した対艦刀でエネルギー弾を弾いた。ゲイルは続いて何発ものエネルギー弾を放つ。

それを僕は最大限の動きで弾いていく。

後、２０。１８。１５。１１。

『来るな！　近寄るな！　化け物！』

９。７。４。ここだ。

『来るな！！』

「これで終わりだ！」

僕は対艦刀に全てのスピードを乗せて突き出した。ゲイルの放ったエネルギー弾がダークエルフの右腕を破壊するが、対艦刀がゲイルの体に突き刺さり、そして、貫く。コクピットの部分を。

「終わった」

僕が小さくつぶやくと同時に周囲が暗くなった気がした。僕が空を見上げると航空空母が墜ちてきている。そして、ダークエルフのエネルギーが切れた。

凄まじい衝撃と圧迫感に僕の意識はあっという間に闇に沈みこんだ。

第百六十一話　過去との決着（後書き）

フュリアスの使う武器の攻撃力は、
エネルギーライフル＜ガトリング砲（一秒間発射）＜対艦剣＜レールガン＜イグジストアストラルの背中の砲＜対艦刀＜バスターライフル＜バスターカノン（ソードウルフ装備）＜バスターカノン（通常）＜デュアルバスターライフル＜バスターマグナムです。一応、既出済みのものだけ書きました。エネルギー消費量も同じようなことになります。対艦刀や対艦剣のみ位置が変わりますが。
対艦刀＜対艦剣＜エネルギーライフル・・・
バスターマグナムは戦艦に取り付けられているもので発射するには２０分のチャージタイムが必要です。
ちなみに、バスターマグナムの威力＜＜＜＜（永久に超えられない壁）＜＜＜＜イグジストアストラルの装甲となっています。

第百六十二話　中村光（前書き）

周の幼馴染というレアポジションながらほとんど活躍していなかった人物を少しピックアップさせてみました。ただ、火力が上がってしまいましたけど。

第百六十二話　中村光

音姫の光輝がゲイルを斬り裂いた。その背後から狙うゲイルをリマのギガッシュが装備するレールガンが貫く。

そんな中、光は空高くに上がっていた。理由はいくつかあるが、最大の理由はとあるものを見つけたからだろう。

「やっぱりやな」

光が小さく呟き、レーヴァテインを構える。

光が見ているのは戦闘風景ではない。地面でもない。空中にある微かな揺らぎだ。

ほんの微かに空間が揺れているのを見つけたからだ。音姫に伝えて確認してみると、揺らぎをいくつも見つけた。

「孝治？」

光は孝治との通信を開く。すぐさま通信は繋がり孝治の声が聞こえた。

『何かあったのか？』

「うん。揺らぎがある。まるで、屈折がうまくできていないような」

光の言葉に孝治が微かに動揺したのが通信越しでもわかった。ただ、孝治は光の視線の先で普通に戦っている。

光は周囲を見渡した。光学迷彩のシステムを知っているからこそ、今の光は空に上がって周囲を見渡している。

周囲に確認だ来た揺らぎは八か所。いや、少し離れた個所を見れば十か所以上だ。

「レーヴァテイン、この周囲で戦闘している全員に通信回線を」

デバイスに指示を出しながら光自身もデバイスの操作を行う。通信機器を繋げて回線を開く。

『空中に敵勢力。数は不明。敵の位置は』

言葉を繋げようとした。だけど、それよりも早く光の体を襲う衝撃。吹き飛ばされそうになりながら光は必死に『炎熱蝶々』の力で姿勢を制御する。

光の体に直撃したのではない。光の体をかすったのだ。左腕に痛みがあるが利き腕は右なので戦闘にほとんど支障はない。

デバイスから通信機器を外し、レーヴァテインを構える。だけど、周囲に姿はない。

一体どこから。

そう思った瞬間、光の体をまた衝撃が襲った。今度は背中。でも、今度向かってきたものをはっきりと見ることが出来た。

フュリアスの放つエネルギー弾だ。つまり、周囲にフュリアスが姿

を隠している。光学迷彩中は攻撃と防御が出来ないとルーイから光は聞いているから瞬間的に姿を現しているのだろう。

せめて、光学迷彩を解くことが出来れば。

「あっ」

光は小さくつぶやいた。ルーイから言われた光学迷彩の注意点を思い出したからだ。

光学迷彩はリアルタイムに周囲の光景と違和感なく擬態することが出来るが、その時に起きる光の透過や屈折は反応しきれないもの、特に、雨や雪などが降っていれば使用できない。そして、とある現象が起きていても処理が追い付かず使用できなかったはず。

光はレーヴァテインを構える。その現象を起こすには膨大な熱量が必要だ。

「うちの本領、発揮と行こうか！」

作り出すは大量のレーヴァテインのコピー。

世の中には射撃型で世界に名を轟かす人もいる。有名なのはリュリエル・カグラや花畑孝治。そして、イギリスのエリオットだろう。

でも、射撃型でも、超高火力の弾膜を作り出しつつ一人で絨毯爆撃が出来るのは中村光ただ一人。それは、フュリアスに対して凄まじいメリットとなりえる。

「弾膜ならだれにも負けへん。ゲームにもな！」

全方位に放たれるレーヴァテイン。それと同時に何体かの盾持ちのゲイルが姿を現した。レーヴァテインがゲイルの持つ盾に直撃して炎を散らす。でも、受け止められることは気にしない。気にしなくてはいけないのは当たらないこと。

時折、『炎熱蝶々』による炎弾を撒き散らしながら周囲を確認する。そして、タイミングが揃った。

熱量操作を超広域で行う。簡単に言うなら、上空の層に冷たい空気を。自分より下の層に戦闘で発生した熱量を集中させる。膨大な爆発と炎弾の発射により出来あがっていた熱量を使用すれば、こんな魔術は簡単だった。

揺らぎがさらに大きくなる。蜃気楼の条件を満たしたのだ。この状況ではデバイス制御による光学迷彩はただの揺らぎのみの存在となる。つまり、ただの的。

ただ、揺らぎの数が余りに多すぎる。思っていた以上に敵の数がいる。通信を開こうにも隙が見当たらない。

すると、地上に極太の光線が駆け抜けていた。あのような技は見たことがないが、誰が放っているのかは光にはわかる。それと同時に敵に生まれる動揺。

この隙を逃してはいけない。

光は一気に加速した。『炎熱蝶々』の力を最大限まで利用して空を駆け回る。

大量のレーヴァテインコピーと炎弾を周囲に正確に撒き散らす。揺らぎを貫かれ、光学迷彩がなくなりながら落下するゲイルもいれば、光学迷彩を解いて避けようとするゲイルもいる。

光はそれら全てを確認しながら空中を駆け回る。だが、光の目からも他人の目から見てもだんだん囲まれているのがわかった。何機かのゲイルが撃ち落とされながらも、他のゲイルが次第に光を囲んでいる。もしかしたら、光の弱点に気付いたのかもしれない。でも、今はそれでもいい。

これからやろうとしているのは今までの弱点をどうにかするもの。周に作ってもらった特殊デバイスを取り出す。

素人の作品だからか容量一杯にまで一つの性能しか入れられていない。そかも、初期のデバイスの方が容量は大きいはずだ。でも、孝治と周の二人が考えた光専用のデバイス。

「『胡蝶炎舞』発動」

その瞬間、光の周囲に炎が舞った。いや、炎の蝶々が舞った。

周が考えたものが独自の移動で術者をサポートする特殊誘導弾。ただ、その数が半端ない。約２００。炎の蝶々が周囲を舞っている。ただし、光の背中で赤々と燃えている『炎熱蝶々』は少し弱まっているようにも見えるが。

囲まれたらどうしようもない近接が少し苦手な光のために周と孝治が開発したデバイス。『胡蝶炎舞』のために全ての機能を割いているが、その分、使い勝手はいい。

「ほな、行くで！」

蝶が舞った。光の周囲を飛んでいた炎の蝶々が空に舞ったのだ。そして、フュリアスに襲いかかる。本来なら周囲に纏わせて近接戦闘の補助に使うのだが、これにはこういう風な使い方もある。

蝶々がフュリアスに当たった瞬間、炎を撒き散らして爆発する。それは魔力のこもった爆発なのでフュリアスがあっという間に戦闘不能に陥って行く。

一つ一つの大した威力はなく、生身に対してはあまり威力を出さない。ちょっとした火傷を大量に作り出すということも起こせるが。ただ、魔術に対してとことん弱いフュリアスに関してなら違う。ちょっとした爆発でも一瞬にして部品が壊れ、戦闘不能に陥ることだってある。

大火力の魔術攻撃が可能なレーヴァテイン。魔力が尽きるまで無尽蔵に近い炎弾を作り出すことが可能な『炎熱蝶々』。小さな魔力爆発を行える『胡蝶炎舞』。

それらを従える光の姿は、まさにフュリアスキラーと言うに相応しい力だった。

光を囲んでいた包囲が徐々に綻びを出していく。圧倒的火力の前にゲイルが撃ち落とされているからだ。さらに、光は縦横無尽に飛びまわるため狙いを付けることが難しい。

だが、どれだけ有利に進んでいる戦場でも、戦局が一気に変わることがある。

光の動きが止まった。何故なら、光よりも下の空に航空空母が急に現れたからだ。数は3。そして、こちらにバスターカノンを向けているギガッシュの姿。その数２０。全ての砲の向きが光に向いている。

そして、光に向かってバスターカノンが放たれた。

避けられない。そして、防御することもできない。

膨大なエネルギーの塊は光を殺そうと襲いかかり、そして、黒い斬撃がすべてを呑みこんだ。

「無事だな」

その言葉を着た瞬間、死にかけたからか涙が出てくる。目の前にいる一番大好きな人の姿を見ながら、光は頷いた。

孝治が背中にある漆黒の翼を大きく広げ黒の剣を両手で握った。

「貴様らは形勢逆転だと思っているが勘違いするな」

孝治の声が響き渡る。

「そんな運命、この剣が断ち切って見せる！」

第百六十二話　中村光（後書き）

次回は孝治を活躍させようと思っています。音姫と同じ副隊長の孝治。言わさせてもらいますが、全てを開放した本気の孝治は準本気の音姫と同じ実力です。

第百六十三話　運命の担い手（前書き）

孝治のターン。戦闘能力はある意味無茶苦茶かと。

第百六十三話　運命の担い手

「そんな運命、この剣が断ち切って見せる！」

リバースゼロを孝治が展開する。何か嫌な予感と共に駆けつけてみれば、ちょうど、光がバスターカノンの一斉射撃を受けるところだった。だから、孝治は隠すことなく黒の剣の力で全てのバスターカノンを薙ぎ払ったのだ。

黒の剣の先が周囲に向けられる。

「光、行けるな？」

「うん。やけど、今の力は？」

「詮索は後だ。今は」

孝治が黒の剣を握り締めると同時に孝治が一気に加速した。すれ違いざまに黒の剣がゲイルを両断する。そんな孝治に狙いを付けるギガッシュのバスターカノン。

孝治をそれを一瞥して弓を取り出した。そして、黒の剣を矢の代わりに装填する。

「駆け抜けろ！」

黒の閃光が迸った。弓から放たれた黒の剣は衝撃波を撒き散らしながら航空空母の上にいたギガッシュ全てを呑みこみ弧を描きながら上昇する。そして、孝治が腕を横に振ると飛んで行ったはずの黒の

剣がその手の中に収まっていた。

「断ち切れ」

弓を直し、黒の剣を振り切る。たったそれだけで空に浮かぶゲイルやギガッシュごと航空空母を半ばまで断ち切った。それと同時に航空空母の後方を巨大なエネルギー弾が貫通する。

普通なら考えられないくらいの切れ味。それを孝治は普通に成し遂げている。

「ふう。さて」

その場で停滞した孝治はポーチからエネルギーバッテリーを取り出して黒の剣についていたエネルギーバッテリーを交換する。その間に好機と思ったのか、ゲイルやギガッシュがエネルギー弾を放つが、その全ての衝撃波はリバースゼロによって吸収されていた。

「さて」

落下する航空空母をしり目に孝治は黒の剣を振り上げる。狙いは他の航空空母。今の状況では航空空母を空に残しておけばいろいろと厄介になるはずだ。それに、制空権を取っていた方が確実に勝てる。

周達が乗っている航空空母はいいとして、他の航空空母は二機。一機は今落ちたから、狙う二機をすっ具に落とす。

「今から航空空母を落とす。地上にいる奴らは退避しろ」

すぐさま孝治は味方全員に一方的な通信を送る。その間の孝治を守

っているのは『胡蝶炎舞』を従えて『炎熱蝶々』によって空を駆け回る光。

光の凶悪な弾膜によってフュリアスの大半は攻撃が孝治に届いていない。もっとも、届いたとしてもリバースゼロによって吸収されるのだが。

ゲイルの一機が光の弾膜を抜けて対艦剣を手にしつつ飛びかかってくる。その体はもうボロボロだが、その心意気だけは評価してもいいだろう。

孝治は黒の剣を構えた。

「そうだな、ここに来たお前にだけ名乗ってやろう」

黒の剣を無造作に振る。たったそれだけでぶつかり合った対艦剣はスパッと心地よく斬れた。まるで、バターの様に。

「『運命の担い手』。それが俺の隠された本当の異名だ」

ゲイルの体を黒の剣が両断する。そして、地上をすぐに見て、小さく頷いていた。

「この剣の前に断ち切れぬものはない」

そして、無造作の一閃。今の孝治のはたったそれだけでよかった。たったそれだけで航空空母の一つが凄まじい衝撃と共にひしゃげ両断される。孝治はすぐさまバッテリーを交換した。そして、もう一閃。

残った航空空母が同じよう両断される。様々な部品、フュリアス、そして、人の姿を撒き散らしながら航空空母は落下する。

これが孝治の戦い方だった。周が不殺の戦い方なら、孝治は殲滅の戦い方。敵に対しては容赦はしない。もちろん、降参した相手なら何もしないが、味方が危険になる状況や、敵地での戦闘では人を殺すことに何のためらいもない。

バッテリーを交換しながら周囲を見渡すと、フュリアスの大半がそこに突っ立ったままだった。当り前だろう。今、空に上がっているのは孝治と光だけだと言うのに、その二人に空にあるフュリアスや航空空母の大半を墜とされた。それはフュリアスを扱っている彼らからすれば信じられないものだろう。

「まだやるか？　やるなら容赦はしない？」

孝治が周囲に聞こえるように言う。出来れば降参して欲しいところだが、相手がそんなことをするわけがなく、ゲイルがふたたびエネルギー弾を放ち、ギガッシュがそれぞれの装備にあったことをやり始める。

穏健派本拠地近くではイグジストアストラルやソードウルフ、アストラルブレイズが楓と共に闘っているが劣勢だ。あまりに戦力差がありすぎる。

「これが戦場か」

いつ見てもやりきれないものがある。孝治だって好きで人を殺しているわけではない。最大の被害を与えて相手を降参させる。それで味方の被害を少なくできるならいい。でも、周はどちらの被害もで

きるだけ少なく、相手を降参させるという無茶苦茶な方法を取る。

そんな周の顔を思い浮かべ、孝治は弓を構えた。

「相手の切り札を破壊しても、まだ終わらないか。終わってくれればありがたいものを。だが、今はそうは言ってられないな」

周囲に向かって矢を放ちながら孝治は小さくつぶやく。

地上にいるフュリアス部隊を一閃で斬り裂きながら突き進む音姫。それを援護するように肩のレールガンを放ちながら盾と対艦剣で強引に突き進むリマのギガッシュ。

いくつもの光のレーザーを放ちながら時折、『スターゲイザー』系列の収束砲を放ち跡形もなく十発させている楓。その傍で背中の砲台を全て跳ねあげてひたすら狙い撃ってをしている鈴のイグジストアストラル。

右肩のみとなったレールガンを撃ちながら両手のエネルギーライフルで地上と空中を縦横無尽に踊るルーイのアストラルブレイズ。変形を上手く利用しながら突撃と射撃を使い分けてみんなを援護しているリリーナのソードウルフ。

悠人の姿だけが見当たらない。どこに行ったのだろうか？　もしかしたら穏健派本拠地でバッテリー交換をしているのかもしれない。

今は勝っているとはいえ、相手の数が多い。いつ、フュリアスのエネルギーが切れるかわからない。

「仕方ないか。光、この場は任せていいか？」

「いいで。だいぶこの子にも慣れてきたからな」

そう言って光は新たなデバイスに触っている。それは光の戦闘の弱点を不安に思った孝治が周に相談して出来上がったもの。散々からかわれたが、この姿を見るだけで満足できる。これなら、少しは安心できる。

「無理はするな」

「わかってる。孝治こそ、あれを使うんやろ？」

「ああ。さすがに、今の状況ではあれを使わないと誰かがやられる可能性がある。そうなる前に、後悔しないように」

自分の手に握る黒い剣をしっかり握りしめる孝治。そんな孝治を見ながら光は頷き、そして、孝治を抱きしめた。

「大丈夫やで。うちは大丈夫や。だから、孝治の戦い、見せてやり！」

「ああ」

孝治が空を飛翔する。自分の最速を使って主戦場となりつつある穏健派本拠地近くに最速で向かう。すると、視界の中でアストラルブレイズの残ったレールガンがゲイルの対艦剣によって斬り飛ばされた。そのゲイルを人型のソードウルフが背後から斬り裂いてアストラルブレイズは後ろに下がる。

そこに押し寄せるギガッシュの群れ。ソードウルフはすばやく獣型

に変形して背中のバスターライフルをブースターに換装する。そして、一気に加速した。押し寄せてきたギガッシュの間を駆け抜ける。展開した対艦刀がギガッシュの群れを余すことなく切り裂いていた。すかさず人型に変形して後ろに下がるが、ブースターにエネルギー弾が直撃してそれをパージしている。

だんだん押されてきた。こちらの武装が破壊されるにつれてだんだん劣勢になって行く。このままでは音姫やリマが駆け付ける頃にはイグジストアストラルだけになっているかもしれない。

「調子は大丈夫か？」

孝治が握っている黒い剣に話しかける。すると、黒い剣の柄が微かに光ったような気がした。それを確認した孝治が満足そうに頷く。

「ならば、行こう」

孝治が大きく息を吸い込む。そして、黒の剣を額に付けた。

「我が剣『運命』よ。俺に力を貸せ」

黒い剣の柄が発行する。

運命。それは、アル・アジフが探しているオーバーテクノロジーの武器。

孝治は手に持つ運命を振り回した。たったそれだけで周囲にいた飛んでいるフュリアスの大半が爆発する。そう、爆発していた。

本来、フュリアスは爆発しない。魔力エネルギーを使用しているか

ら爆発する要素がないのだ。でも、爆発するときは、出力エンジンが予想外のエネルギーを扱うか受けるかのどちらか。今回は後者だった。

「戦いは、ここからだ」

第百六十三話　運命の担い手（後書き）

運命の性能は強力を通り越して凶悪です。

第百六十四話　剣の騎士（前書き）

このまま戦闘は続きます。大体、後１０～２０話ほどは。

第百六十四話　剣の騎士

「そう、我々が世界に名を残すのだよ！」

その言葉にオレは冷ややかな目で結城家当主を見ていた。確かに、フュリアス部隊に航空空母。今までの理論では考えられないくらいの編成だ。でも、こいつらは一般的なことを勘違いしている。

フュリアスはそこまで強いわけじゃない。確かに、音姉が相手なら多数のフュリアスを持って足止めは可能だろう。でも、こちらの戦力には空戦が可能な二人の仲間がいる。

孝治と中村。この二人ならよっぽどの事態でない限りやられない。だから、勘違いしているのだ。

ただ、悠人やリリーナ達が危険であることには変わりはない。オレ達はここから離れられそうにないから、せめて、アル・アジフだけでも下ろすことが出来れば。

「栄えある栄誉の瞬間に君達は立ち会えた。感謝したまえ。そして、そのまま、死ね」

「させるかよ！」

ストックしていた防御魔術を全方位に展開する。展開した防御魔術に雨あられとエネルギー弾が降り注いだ。

オレは小さくため息をつく。

「外の戦況はこちらが不利。孝治と中村の二人がいるとはいえ、さすがにこの量だと悠人達は対処しきれないだろ。どうすればいいか案を出してくれ」

「兄さんが久しぶりに他人に案を求めてる」

『珍しい』

オレは別に完璧人間というわけじゃないぞ。

「仕方ないだろ。今の状況でオレの切り札は対フュリアスじゃなくて対人専用だ。モード？カノンでひたすら撃ちまくるという選択肢もありだけどな」

オレは呆れたようにいながら外の戦況を映すスクリーンを見た。そこにあるのは巨大なエネルギー弾に下から貫かれて地面落下している航空空母の姿。

「さすがにそれは難しいだろ」

「いやいやいや、兄さんは今の光景を見て何の言葉も無しですか？」

『こんなことで驚いていたら由姫の精神は持たないと思う』

「まあ、確かに兄さんの無茶無理無謀はよくわかっていますけど」

そんなに無茶していることはないんだけどな。いつの間にか亜紗と由姫の二人の間には無茶無理無謀がオレだということが意識づいているらしい少し心外だ。

オレは小さくため息をついてアル・アジフを見た。アル・アジフは何か考え込んでいるように、いや、きっと二人で会話しているのだろう。この状況をどう乗り切ったらいいのかを。

「周」

そして、アル・アジフが口を開いた。その眼に映っているのは決意。オレはそれに笑みで答える。

「なんだ？」

「この状況を打開できる手段が一つ存在する。じゃが、その場合は亜紗と由姫が危険にさらされる可能性があるぞ」

多分、この場に残していくからだろう。確かに、二人にとってこの状況はあまりいいというわけじゃない。でも、この二人なら何とかできると妙な確信があった。

それよりも、今危険なのは地上だ。航空空母が二機ほど両断されて落下しているが、出ているフュリアスの数から考えて勝てるかどうかの瀬戸際。

「この二人なら大丈夫だ。亜紗は昔からオレが鍛えたし、由姫は第７６移動隊に入ってから力をさらにつけた。この状況でオレよりも頼りに出来る二人だ」

「そうか。な、了解じゃ」

アル・アジフが手を伸ばす。正確には、手の甲をオレに向けた。

「マテリアルライザーユニットエリシアより、海道周をパイロットとして登録します」

「パイロット？　フュリアスか？」

アル・アジフ、いや、今はエリシアか。エリシアは目を瞑って頷いた。

「マテリアルライザーは禁断の兵器（パイロットキラー）。アル・アジフに体を渡していた理由がこれです。マテリアルライザーは使われるべきではない。おそらく、彼らが私達を連れ去ったのは私がマテリアルライザーのユニットであったから」

話はあまり上手く理解できていない。そもそも、マテリアルライザー自体が聞いたことのない上にエリシアがちょくちょく話していただけのなので何かの兵器だと思っていた。でも、フュリアスだったとは。

結城家当主がアル・アジフを手に入れようとしたのがマテリアルライザーを手に入れるためなら今回の行動にいろいろと納得がいく。イグジストアストラルと、マテリアルライザーを手に入れることが出来ればフュリアス部隊の底上げになるだろう。

「だから、戦局を打開する手段として、もしかしたら、あなたが死ぬ可能性だってあります。だから、これはあなたに選択を任せます。私と共にマテリアルライザーとして出るか、それとも」

「契約する」

オレは片膝をついていた。そして、エリシアの手を取る。そして、

その甲に口づけをした。

「これはオレの覚悟だ。お前の願いをかなえるという言葉と、この場にいる全員を守る。そして、生きて戻る。それが、オレの大切な三人に言う誓いだ、だから、由姫、亜紗、絶対に死ぬなよ」

「兄さんは心配症ですね。私は姉さんと兄さんの妹ですよ。死ぬわけないじゃないですか」

『そう。私達は勝つ。だから、周さんも必ず』

「ああ」

オレはエリシアの目を見た。エリシアは頷いてオレの手に自分の手を合わせる。

そして、エリシアがオレを抱きしめてきた。耳元に口を寄せて一言、

「守ってください。私とアルとあなたを」

そして、周囲に光が満ちた。そして、周囲が変わる。そこにあるのはあの時にアル・アジフと話した場所。キーボードのみの机の前にはエリシアの姿がある。

前とは違うのは、周囲に見えているのが球体のような空間ではなく風景。これが、マテリアルライザー。

「準備はいいですか？」

エリシアの声と共にオレの目の前に映像、いや、立体映像が現れる。

これもマテリアルライザーにあるのか。羨ましい。

立体映像にはマテリアルライザーの全体像が映っていた。形は人型なのだが、一番スマートなアストラルブレイズよりもスマート。シルエットだけならほとんど平均的な男性の姿というべきだろう。

まるで、あらゆる攻撃を受けないようにする前提の下で作られたフュリアス。確実に装甲は薄い。

「マテリアルライザーの武装は一つだけです」

そこに映されたのは腰に映っている二本の剣。たったそれだけ。

「エリシア、マテリアルライザーはもしかして」

「イグジストアストラルが中距離からの単体要塞を目指したとするなら、マテリアルライザーは至近距離での戦闘で圧倒的優位に立てることを目指したフュリアスです。人が動ける動きならあらゆる動きが可能ですが、エネルギー弾に関しては、当たれば終わりです」

つまり、全ての攻撃を回避しろというわけね。要求が無茶苦茶だ。

『マテリアルライザーだと。ふん、そんな紙装甲などこの場で』

『兄さん！　行ってください！』

由姫が言葉と共に壁に向かって拳を放った。そして、壁に大きなひびが入る。相変わらずの攻撃力だ。

「ああ、助かる！」

オレはそこに跳び蹴りを放った。壁を砕き、そして、そのまま空中に躍り出る。

オレの動きに合わしてマテリアルライザーは動いてくれる。オレが走ればマテリアルライザーは走り、跳べば跳んだ。しかも、オレの位置は空間の真ん中から動いていない。

「エリシア、空を飛ぶ手段は？」

「ありません」

即答だった。即答で絶望的な内容を言われた。

だんだん迫ってくる地面。これは激突は避けられないな。

「出来るかどうかわからないけど」

オレは『天空の羽衣』を纏ってみた。範囲を広げてエリシアにも纏わせる。これで、威力がいくらか軽減すればいいけど。

そして、地面に落下する。その時の衝撃は一瞬だった。まるで、柔らかいクッションにぶつかった時のようなボスンという音。

「あれ？　衝撃がない」

「マテリアルライザーはパイロットの動きや能力も反映します。もちろん、魔術もです」

「教えてくれよ」

教えてくれていたならこういうぶっつけ本番のことはしなかったのに。オレは小さく息を吐いて二本の剣を引き抜く。すると、立体映像の中に剣の名前が現れた。

左の剣をライルダム。右の剣をレイルダム。確か、この名前は神威時代に存在していたとされる神の側近の双子の名前だったはずだ。というか、オーバーテクノロジーのはずのマテリアルライザーにどうしてその時代のものが？

考えているうちに、周囲にフュリアスが集まってくる。黄土色のフュリアスとギガッシュ。ここにいたらすぐにやられるな。

「考えても仕方ないか。今は」

マテリアルライザーが地面を蹴る。そして、周囲にいるフュリアスに向かって跳びかかった。

「叩き斬る！」

素早くライルダムで黄土色のフュリアスの頭を斬り飛ばした。そして、そのまま回転してレイルダムでギガッシュの胴体をコクピット部分を斬らないように斬り裂く。ギガッシュに関してはリマのものを見てわかっているからやりやすい。それにしても、

「これってすごいな」

両の手にある剣を振り回しながら、マテリアルライザーを上手く動かしていく。時には体操の様に側転やら地面に手をついて飛び上がったりなど（技名はよく知らない）を簡単にできる。しかも、相手

の振った対艦剣などに飛び乗ったりと、少しハチャメチャなことだってできる。

嫌な予感を感じ取ってその場から跳べば、マテリアルライザーがいた場所にエネルギー弾が突き刺さる。それを見ながらオレは小さく微笑んでいた。

マテリアルライザーの機動性はフュリアスの中では最高のものだろう。こちらの動きに合わせて全て動いている。まるで、オレの体の様に。そして、オレの体の様だからなのか、生身の時によく感じる嫌な予感も敏感だ。それに応じて行けば当たることはない。

マテリアルライザーの機動性を最大限まで生かして行動する。受け身やら宙返りやら側転やら様々なことをして行動する。その時には剣を投げ捨てたり蹴り飛ばしたり殴り飛ばしたりと、フュリアスでは考えられない行動で戦闘する。こんなのでいいのかな?

エネルギー弾を避けて迫ってきた対艦剣を紙一重で回避。飛んできたエネルギー弾に対して前にいたギガッシュの体を掴み盾にして乗り切る。もちろん、そのままでは隙が多いから素早く手放して宙返りをして後ろから迫っていた対艦刀を避けた。そのまま頭を斬り落として肩に足を乗せつつさらに宙返りを行う。

「反応も桁違いに高い。それに、まるで体が大きくなったみたいな感じだな。こういう戦い方が他のフュリアスで出来るなら戦局は大きく変われるかも。結城家当主が狙った理由もよくわかるな。エリシア、マテリアルライザーってオーバーテクノロジーだよな? どういう理屈で動いているんだ?」

放たれたバスターカノンの四連射を飛び上がって回避する。空から

対艦剣を持って迫ってきた黄土色のフュリアスには上手く対艦剣を握る手に足をかけて対艦剣の機動を逸らしながら、レイルダムで逸らした対艦剣を勢いよく叩きつけた。その反動でマテリアルライザーは体を起こし、黄土色のフュリアスは体勢を崩す。

背後まで回ったオレはどちらの剣も振り下ろして腕を両断した。

「それにしても、敵がわんさか向かってくるな。結城家当主がオレを狙えと言ったのか？　まあ、オレを倒せれば第７６移動隊は崩壊しかねないからな。作戦としてはいいけど」

向かってくるフュリアスの腕や頭を斬り飛ばし、飛んでくるエネルギー弾を余裕で避ける。いつの間にかフュリアスの大半がこちらに向かってきていることに気付いた。ソードウルフの方にはあまり向かっていないというより、足止めが可能な戦力しか残っていない。

このまま戦闘し続けていても辛くなるだけか。

「エリシア、マテリアルライザーを使って魔術は使用できるのか？
エリシア？」

エリシアの反応がないことを不思議に思ったオレは振り返ってみると、そこには必死にキーボードに手を走らせるエリシアの姿があった。

「どうかしたのか？」

オレは攻撃回避に全霊を注ぎつつエリシアに尋ねる。

「今、あなたに合わせてスペックを変えています。細かなところま

で。まさか、ここまで適合率の高い人がいたなんて」

「適合率？」

対艦刀を避けてカウンターの一撃で儀ギガッシュの頭を飛ばす。

「はい。マテリアルライザーだけが他の同時期に作られたフュリアスと違い、パイロットの適合率が高ければ高いほどいいとされました。そういうシステムだったので。むしろ、それが禁断の兵器（パイロットキラー）と呼ばれる所以でもありました」

だから、エリシアは最初にああいったのか。マテリアルライザーの適合率が高くないことには死ぬ可能性があると。だから、エリシアはアル・アジフに体を任せていた。もう、パイロットを死なせないように。

でも、そういうシステムがあってよかった。

「大丈夫だ。オレは死なない。だから」

マテリアルライザーを加速させる。全ての攻撃を紙一重で避けながらライルダムとレイルダムを振り回し、囲まれている戦線に強引に楔を打っていく。

そして、オレは周囲を見渡した。囲まれていると言ってもちょうど敵のど真ん中だ。試してみるのは十分。

「我が身に宿れ、灼熱の炎」

ライルダムの刀身に炎が宿った。

「我が身を包め、絶氷の力」

レイルダムの刀身を氷が包み込む。

マテリアルライザーで出来るかわからないけど、やるならこのタイミングしかない。

「全てを呑み込め！　炎舞氷壁！」

両の剣を勢いよく地面に突き刺した。そして、起きる地震。

始まったのは天変地異でも言うかのような炎の柱が地面から噴き出す。マテリアルライザーを中心に炎を描くように八か所。それを追いかけるようにマテリアルライザーを中心として氷の波がマテリアルライザーを囲んでいたフュリアスを砕き、そして、吹き飛ばしていく。

もちろん、そんな攻撃の中、生き残るフュリアスも多数いる。だが、生き残ったフュリアスを狙って空から炎の槍が降り注いだ。

衝撃、そして、轟音。技が終われば、マテリアルライザーの周囲に立っているフュリアスはよっぽど距離を取っていない限りいなかった。

放ったオレ自身も驚いているけどな。

オレはマテリアルライザーの剣を鞘に戻す。そして、レイルダムを握り締め、腰を落とした。

「さあ、終わらせよう。この戦いに終止符を！」

第百六十四話　剣の騎士（後書き）

マテリアルライザー単体が強いのではありません。マテリアルライザー＋周の組み合わせが化け物なだけです。

第百六十五話　戦場に響く想い（前書き）

どうしてこうなった

第百六十五話　戦場に響く想い

亜紗と由姫の二人が同時に動いた。由姫が前に出ながら亜紗が回り込むように動く。もちろん、敵もバカではないから回り込まれないように亜紗に数人向かい合う。その瞬間、亜紗が後ろに下がった。

その反応に思考が動くが、パワードスーツの動きが微かに遅くなる。

「やっぱり」

由姫は小さく呟きながら真っ正面からパワードスーツの群れに突っ込んだ。勢いそのものを乗せた正拳突き。もちろん、それは通常でもかなりの威力を発揮するが、相手はパワードスーツ。

例え、フュリアスが魔力攻撃に弱くても物理衝撃には強いようにパワードスーツも並みの攻撃には通用しない。

だが、それは普通の武術であることが前提だ。八陣八叉に普通は存在しない。

由姫の正拳突きがパワードスーツに当たった瞬間、まるでバネによって跳ね返ったようにパワードスーツが吹き飛んだ。

由姫が小さく息を吐く。

「タイミングが少し違う。思考の動きにパワードスーツの動きが追いついていない」

悠人の場合は反応した瞬間にスラスターを吹かして加速することで

思考の動きに無理やりパワードスーツをついて行かせている。だけど、そんな神業が出来るのは悠人ぐらいだろう。

亜紗も同じように考えていたらしく、由姫が後ろに下がると横まで移動してきた。

『私が相手を崩す。そこに由姫が飛び込んで』

「わかりました」

亜紗は矛神の斬撃を上限の三回利用している。だから、全てを斬り裂く斬撃は使えない。刀を使う性質上、パワードスーツ相手では折れる可能性だってある。対する由姫はいくらでも攻撃を使用出来る。しかも、その威力はフュリアスを吹き飛ばすほど。そうなると、攻撃の要は由姫だ。

亜紗が魔術を発動させる。発生させたのはいくつもの風の刃。パワードスーツ部隊は防御魔術をすかさず展開するが、その瞬間には亜紗が走り込んでいた。

風の刃と同じ速度、いや、それ以上早く刀を握りしめながら斬りかかる。それに反応することはパワードスーツには出来なかった。

亜紗の刀がパワードスーツ部隊に斬り裂いていく。正確に、パワードスーツ部隊に楔を打ち込んだ。

「下がってください！」

そこに由姫が弾丸のように飛び込んだ。ナックルを身につけた左腕を握りしめ、床を踏みしめながら斜めに振り下ろす。

パワードスーツにぶつかったナックルはパワードスーツを砕き、中にいた人の骨を折り吹き飛ばした。

何人かのパワードスーツが巻き込まれて転倒する。だが、由姫は止まらない。振り下ろした体勢のまま前に出て棒立ちとなっているパワードスーツの一人の胸に肘を叩き込んだ。パワードスーツが砕かれ破砕する。

普通ならここで止まるが、由姫は全く止まらなかった。周囲のパワードスーツ部隊の位置を確認した瞬間、素早くしゃがみ込んで足を払しながらその場で手をついて回転する。

払えた数は3。でも、たった三人だけでも今の由姫は十分だった。

由姫は一回転して手をついたまま逆立ちの体勢に入りつつ、足を勢いよく回した。回した足が足を払ったパワードスーツの人達を蹴り飛ばし、吹き飛ばす。たくさんのパワードスーツを巻き込みながら。

「ふっ」

由姫は小さく息を吐いて手に力を込めて腕の力だけで飛び上がり、床に着地する。

今の技は三つの攻撃を連続させたものだ。本来、八陣八叉の概念には連続攻撃というものはない。単発の威力が桁違いに高いから。だが、由姫は白百合の基本を知っている。連続攻撃の重要性を。

「イグジストアストラル、マテリアルライザーに加え、八陣八叉。どこまで私を貶したら気が済むのだ？」

結城家当主が顔を怒りに染めて歪めながら二人を睨みつけている。

結城家当主が怒っているのは外の様子を映したスクリーンだろう。そこに映っているのはマテリアルライザーで襲いかかってくるゲイルやギガッシュを簡単に返り討ちしている姿。

数が少なくなったからか、イグジストアストラルが前に出て、アストラルブレイズとソードウルフに楓が援護している姿も見える。そして、獅子奮迅の働きでフュリアス部隊を倒しつつ向かってくる音姫。その後ろから援護しているリマのギガッシュ。

「ようやく、イグジストアストラルとアル・アジフが手に入ったというのに。今まで育てた恩を忘れた娘が！」

「見捨てられて当然ですよ」

怒り狂っている結城家当主に向かって由姫が冷静に話しかける。

「あなたは自分の娘を娘として見ていなかった。イグジストアストラルのパイロットとして見ていた。でも、私達はイグジストアストラルのパイロットとして鈴は見ない。鈴は鈴だから。悠人は必ずそう言うから」

『人を、人の思いを簡単に踏みにじろうとするからこういう目に合う。自業自得』

結城家当主は二人の言葉に食ってかかった。

「貴様らもだ！　機械と素人の分際で我らの聖戦の邪魔をする貴様

ら！　この聖戦によって世界は救われるのだよ。世界は救われる。我々の手によって」

「誰かを犠牲にして世界を救えたとしても、それは世界を救えたことにはならない。世界を救うということは、自分も仲間も知り合いも誰もかも救うこと。あなたのその思いは間違っています。世界を救うために犠牲になっていい人がいるなら、あなた方のやろうとしていることはただの人殺し！　聖戦でも何でもない！　力で押さえつけるだけの戦いです！」

「で？」

結城家当主の言葉に由姫も亜紗も絶句した。まるで、由姫の言葉に、お前はバカか、とでも言うような言葉。

結城家当主が目を見開き、ニヤリと笑みを浮かべる。

「『ＧＦ』や『ＥＳ』だってそうだ。力の下に世界を守っている。その勢力と我々が交代するだけ。他に何の理由がある？　ちょっとした犠牲で世界を守れるなら、それはそれで得だよ得。特に、生きる意味を見いだせていない奴らを使えばな。社会のゴミを。世界のために死ぬんだ。そいつらもその方が幸せだろ？」

まるで、自分の言うことに何の疑いも持っていない言い方。周がどんな人も守らないといけないという考え方の真逆。

「ゴミが消えれば社会は回る。無駄なお金がなくなりスムーズな循環が行われる。普通の人が楽をしている人達を恨むこともなくなる。世界が平和になっていくんだ。何のおかしな点がある？　今のどの政策よりも素晴らしいじゃないか」

「あなたは、立場の低い人達を戦わせ、あなた達自身はそれを眺めているだけだと言うのですか？」

由姫の拳に力が籠もる。

「そうだよ。普通の人は普通の暮らしをする権利がある。ゴミはゴミのようになればいい。ここにいる皆は同士だよ。何もしないのに変革だけを叫び、過激な行動で普通の人達を殺すゴミを憎む人達。そして、普通の人になろうとする気高きゴミ達。我々が世界を手にすれば、君のような言葉が戦うことはない。素晴らしい世界」

「そんな腐ったような世界に何の価値があるんですか！」

由姫は知っている。ゴミのように扱われる辛さを。そして、何もしないんじゃない。何も出来ない悔しさを。

第７６移動隊の中でも一番劣等感を浴びていた由姫だから結城家当主の言葉に苛立ちを隠せなかった。

「何もしないんじゃない。力がないから何も出来ないから変革を叫ぶだけしか出来ない人もいる。過激な行動を取る人達だって、そうすれば世界が変わると信じているから行動する。確かに、テロ行為は許せない。でも、それを仕向けているのが世間でありあなた達ではないのですか！」

「ほざけ！　我々に何の罪が」

「あなた達は困っている人達に手を差し伸べましたか？　困っている人達を助けようと動きましたか？　どうして変革を訴えているか

考えたことはありますか？　ただ、見て見ぬ振りをして、彼らを追い詰めていたのがあなた達だと自覚しなさい！」

「小娘に何がわかる！　平和な日本でゴミが少ない日本にいて何がわかるというのだ！」

「私は白百合の絞りカスと言われた。白百合の中で異質な存在。困った時も助けてもらえず、恵まれた環境にいたお姉ちゃんを恨んだこともあった。でも、そんな私を助けてくれた人がいる。お兄ちゃんは私を助けたとは思っていないけど、私という存在はお兄ちゃんに助けられた。お兄ちゃんは、両親が死に、妹が意識不明の重体になり、自分のせいだとただ生きているだけだった。そんなお兄ちゃんを見て私は思ったから。私と似ている。そして、手を伸ばせば助けられるかもしれないって。私は、お兄ちゃんを助けて、助けられた。お兄ちゃんがいたから、お兄ちゃんの痛みを私が知ろうとしたから。だから、私はお兄ちゃんのそばにいる。お兄ちゃんが掲げる理想の『誰かを犠牲にして世界を救えたとしても、それは世界を救えたことにはならない。世界を救うということは、自分も仲間も知り合いも誰もかも救うことだ』を叶えたいから。この世に死んでいい命なんてない。ここにいるみんなだって死にたくないはず。だから、私は戦う。お兄ちゃんのように手加減は出来ない。けど、いつか、お兄ちゃんの理想に近づくと信じて」

言い切った由姫を待っていたのは静寂だった。誰も、亜紗も、結城家当主も、パワードスーツ部隊も誰も動かない。いや、動いていないのはここだけじゃない。スクリーンの中もだ。

ゲイルがエネルギーライフルをアストラルブレイズに突きつけたまま固まり、狙われているアストラルブレイズはエネルギーライフルを構えたまま動きを止めている。

ソードウルフやイグジストアストラルはどちらも砲を構えたまま停止しているし、ギガッシュはバスターカノンの引き金に指をかけたまま停止している。

マテリアルライザーに至っては対艦剣を避けたままの体勢で固まっていた。由姫が周囲を見渡している。

「もしかして、周囲に放送を流していました？」

由姫の言葉に結城家当主が頷いた。戦闘が止まっているのは由姫の言葉が全員の耳に入ったから。

由姫の顔が真っ赤に染まる。もちろん、恥ずかしさで。

「あうあうあう、亜紗さん、私何か変なことを言ってました？」

由姫が振り返りつつ涙目になりながら亜紗を見る。亜紗は小さく溜息をついてスケッチブックを開いた。

『内容は一部支離滅裂。何が言いたいかわからない時があった』

「あう」

由姫の涙が大きくなる。でも、亜紗は笑みを浮かべてさらにスケッチブックを捲った。

『でも、由姫の思いが伝わった。由姫がどれだけ周さんを思っているかも。そして、自分が経験したから誰をも救おうと目指す由姫の思いが』

「勢いで言った部分もありますし、それに、私なんて力はあまりありませんから」

『胸を張っていい。むしろ、胸を張らないと周さんの言葉が嘘になる。あれだけ言ったのだから、由姫は胸を張らないと』

「そう、ですね」

由姫は覚悟を決めて振り返り、結城家当主を睨みつけた。

「もう、降参してください。無益な戦いはもう」

「止まれないのだよ。君のような思いを受け取ったとしても、もう、我々は動き出している。ゲイルナイトを出せ！　イグジストアストラルとマテリアルライザーを一網打尽にしろ」

結城家当主が引きつった笑みを浮かべて由姫を見る。

「もう、止められないのだよ」

第百六十五話　戦場に響く想い（後書き）

最初はガチガチの戦闘話にするつもりが、いつの間にか由姫の一人劇場に。内容が話している内容が少し支離滅裂になるのはまだ子供だからです。

というか、最近主人公達の年齢を忘れてきているような気も。

第百六十六話　戦場を駆ける想い（前書き）

展開のノリはリリカルななのは二回目のラスボスをぼこった時の感じで。実際にそんな感じになってます。

第百六十六話　戦場を駆ける想い

由姫の言葉に戦闘が止まった戦場。一人の少女の想いが与えた影響。
それがどこまで影響を与えていたのか。その時には誰も答えることが出来なかった。

暗闇。今いる場所を表現するならそれしかないだろう。体中の骨が悲鳴を上げて、右腕から熱い痛みがこれでもかと主張している。
生きているのが不思議なくらいの状況だ。どうして生きているのだろうか。

ダークエルフの残存エネルギーはほとんど０。０でないのはあらゆるバッテリーは全てを消費することが出来ないから。それでも、ダークエルフを起動させるにはほど遠い。

「ケホッ、ケホッ」

息苦しさを感じて咳き込む。僕は力を振り絞って救難信号を出した。
誰か、気づいてくれればいいけど。

でも、これが中東の戦いが終わる始まりだとは今の僕には想像がつかなかった。

リリーナが固まったまま空に浮かぶ航空空母を見上げる。何故なら、リリーナの視界には巨大なフュリアスの姿があったからだ。名前はゲイルナイト。結城家の最終兵器。

全長は２００m近くあるだろうか。まるで、箱のように収納されていた体が変形させていく。その大きさはあまりに大きすぎた。

この中で一番大きいであろうソードウルフですら２２m。それの９倍近くの大きさ。

「あれが、最終兵器？」

リリーナは小さく呟きながらバスターカノンを構える。でも、あまりに距離がありすぎて放てない。もう少し近づかないと。

近くでエネルギーライフルを構えていたルーイのアストラルブレイズも同意見だった。だから、ルーイは総合的に判断して背中の翼を展開する。

「あんなものが暴れたら被害が大きくなるぞ。リリーナ、鈴。僕は前に出る。二人は援護してくれ」

その言葉にリリーナは眉をひそめた。当たらない攻撃をしても、下手をすればアストラルブレイズ自体に当たる可能性がある。

「危ないよ！　それに、前に出るなら私のソードウルフか、鈴のイグジストアストラルの方が」

『アストラルブレイズが一番安全だ』

通信越しに聞こえるルーイの声にリリーナは首を傾げてしまう。それは鈴も同じだった。でも、今はそんなことで悩んでいるような状況じゃない。

鈴は背中の砲門をゲイルナイトに向ける。

「わかりました。危険だと判断したら下がってください」

『鈴！』

ルーイを心配しているリリーナの声が聞こえてくる。でも、鈴はアストラルブレイズの能力を知っているからルーイに任せる。早く倒さなければ航空空母の下敷きになった悠人の救出が遅れるから。

アストラルブレイズが飛び上がる。背中の翼を最大限まで広げて、ルーイはゲイルナイトを睨みつけた。

ゲイルナイトはすでに箱から形を変えている。全長２００m以上。肩にはレールガン、いや、バスターカノンかバスターマグナムのどちらかが二つずつ両方についている。腕にはいくつものエネルギーライフルが取り付けられている。

「こんな機体を暴れさすわけにはいかない。あの日の、あの、ルブルクの悲劇を起こさせないために！」

アストラルブレイズの出力を最大限まで上昇させる。そして、エネルギーライフルではなく虎の子の兵器であるバスターライフルを取

り出す。

短期間に製造出来たのは三本だけ。二本はダークエルフが握っていた。

「当たれ！」

狙い撃つのは肩の砲。バスターカノンにしよバスターマグナムにしよ、当たった時の被害は桁違いに高い。だから、肩を狙ってバスターライフルの引き金を引く。

だが、バスターライフルから放たれたエネルギー弾はゲイルナイトの表面に現れた薄い幕に弾け散った。

「なっ」

思わずルーイが絶句する。

『ＡＥＦか。んな理論上ですら超大型出力エンジン使わなきゃ出来ないものを実用化しやがって。ルーイ！　バスターライフルを撃ちながら飛び回れ！』

周の言葉がルーイの耳に入る。だけど、ルーイはその言葉を頭の中で聞いていなかった。

ルーイの中で思い出しているのはとある光景。

「ふざけるな。ふざけんな！」

ルーイの怒りが爆発する。通信回線を開いたまま。

「お前らはルブルクの悲劇を繰り返すつもりかよ！　あれだけで何人の人が亡くなったと思っているんだ！」

バスターライフルの引き金を引きつつ空を飛び回る。

「まだお前らは人を殺すつもりかよ！　また、たくさんの人を虐殺するつもりか！　ルブルクのように！」

だが、ゲイルナイトはそんなアストラルブレイズを見向きすらしない。そして、肩からエネルギー弾が放たれた。

膨大な質量のエネルギー弾。避けることも、受け止めることも難しいバスターマグナムの弾。

「第五の力『悠遠』解放！」

そう叫んだ瞬間、アストラルブレイズの翼から蒼い閃光が放たれた。あまりの光に誰もが目を合わせられず逸らした。

そして、光が晴れた先には無傷のアストラルブレイズと、肩のバスターマグナムを破壊された巨大なフュリアスの姿があった。

ルーイは息を整えながら通信回線を見る。通信はあの時からずっと開いている。作戦は整った。

「ルブルクの悲劇は繰り返させない。胸に歌姫の加護を持つ者よ！
我、歌姫親衛隊隊長ルーイ・ガリウスに続け！」

ルーイが語りかけるのはルーイと同じ音界の住人、ギガッシュ達だ。

これで動かせることが出来るかはわからない。でも、今のルーイにこういうことしか出来なかった。

しかし、これが戦局を変える続きになるとはルーイはこの時点ではわからなかった。

ルーイの言葉にオレの手が汗ばむ。ルーイはたった一人で巨大なフユリアスと戦おうとしている。例え、力の差が歴然としていても。

由姫の想い。そして、ルーイの想い。この二つをこのままにしておくわけにはいかない。

「エリシア、これ以外に武装はないんだよな？」

「はい。何をするつもりですか？」

相手のバスターマグナムはまだ二つは生きている。最悪なら三つ。マテリアルライザーだと一撃で落ちる。なら、

「孝治、中村、援護を頼めるか？」

『援護か。お前はその機体で行くのか？』

「ああ。あの大きさだ。レヴァンティンじゃダメージを与えられない。それに、フュリアスがトドメを差した方がいい」

オレはマテリアルライザーで身構えた。そして、両の手にある剣を握りしめる。

全域への通信を開きながらオレは小さく息を吸い、口を開いた。

「二人の言葉を聞いた全員に伝える。今から、オレ達はあの巨大なフュリアスの破壊作業に入る。あれは、どんな形にしろ必要のないものだ。そんなものを暴れさすわけにはいかない。だから、邪魔をしないでくれ。オレ達はただ、犠牲者を一人もいないようにしたいだけなんだ！」

そして、マテリアルライザーで地面を蹴った。空中に作り出したいくつもの魔力を固めた足場を蹴ってさらに駆け上がる。

ＡＥＦ。アンチエネルギーフィールド。あらゆるエネルギーの攻撃を通さない空間を作り上げる。魔術の相殺と理論は似ている。

だから、オレは全員に語りかけていた。誰かがオレ達の言葉に心を動かせることを祈って。そして、通信が入ってきた。

『これよりギガッシュ射撃部隊は親衛隊隊長を援護する』

それは戦局が変わる始まりだった。

『これよりギガッシュ射撃部隊は親衛隊隊長を援護する』

その言葉を聞いて僕は少しホッとしていた。良かったと思えているからでもあるが、僕が抜けた穴がこれで塞がったはずだ。

外がどうなっているかよくわからないけど、後は救援を待つだけ。

すると、僕の顔に光が差し込んだ。この時にようやくハッチの部分が壊れていたことに気づく。

視界の先にいるのはリマのギガッシュ、ではなく、他のギガッシュとゲイル。その手に握られているのはスラッシュナイフ。

『無事か？』

そして、聞こえてくる男の人の声。

「はい」

僕は体に力を込めるがハッチは開かない。すると、スラッシュナイフが近づいてきてハッチが切り取られた。

「ありがとうございます」

僕は痛む腕を気にしつつ周囲を見渡す。周囲にいるのは安心したように息を吐く音姫さんとリマのギガッシュ。

そして、バスターカノンを持つギガッシュが空に砲を向けている。

「何が」

その先を向くと、そこには巨大なフュリアスとそれに向かって射撃

をするアストラルブレイズ。そして、巨大なフュリアスに向かってギガッシュがバスターカノンの引き金を引いている。

どういう状況かわからない。でも、あれを倒せば戦闘が終わる。そんな気がした。

せめて、ダークエルフさえ動けば。

「悠人君、動ける？」

駆けつけてきた音姫さんに尋ねられ僕は困惑混じりに頷く。

「えっ？　あっ、はい。パワードスーツに異常はなさそうなので可能なはずです。でも、今は何が起きているんですか？」

「由姫ちゃんやルーイ君、そして、弟くんの言葉にみんなが動いているの。敵も味方も、あの巨大なフュリアスに向かって。だから、私もかな」

音姫さんが髪の毛を括っていた大きなリボンを解いた。そして、息を吸い込む。

「【私の言葉はこの場にいる全員に届く】」

まるで、それは言霊。言葉が空気に溶け込むように力が広がっていく。

「戦場にいる全ての人に告げます。私はこの世界の歌姫、白百合音姫です」

「音姫さん、何を」

「これが歌姫の力です」

いつの間にか僕の横にはリマの姿があった。ギガッシュに乗っていなくても大丈夫なのだろう。

音姫さんが話を続ける。

「私達はあの巨大なフュリアスの破壊作業を行っています。それを見ている皆さんに尋ねます。【あれは本当に必要なものか考えてください】。そして、皆さんが決めてください。あの兵器の存在を。【誰かを守るための兵器でないなら破壊作業を手伝ってください】。それが私の願いです」

音姫さんの言葉を解説するようにリマが話す。

「歌姫の言葉は世界が肯定します。つまり、世界に肯定される歌姫の力は神をも超えるということです。つまり、言葉の間に隠された力の言葉を聞いている人は反抗することが出来ません」

「そんなことが出来るの？」

「はい。歌姫だからです。音界でも歌姫の信頼は絶対です。特に、今の歌姫様は民衆のために必死に頑張っています。だから、音界の住人は言葉に反抗出来ない」

それはまるで強制のようなものを。音姫さんは髪の毛をリボンで括った。もしかしたら、いつもはあのリボンで力を抑えているのかもしれない。

言葉によって相手を拘束出来る能力は極めて強いのだから。

「二人共、向かおう。弟くん達、みんなが戦っている場所に」

「「はい」」

僕とリマが頷いて同時に動き出す。

もしかしたら、音姫さんやリマが必死に僕を助けるために周囲に手伝ってもらったに違いない。そうでないならゲイルまで救出作業に駆けつけていない。

だから、僕はパワードスーツの力で加速する。

戦局は完全に変わったのだから。

「今のは音姫さんの声か」

「歌姫の言霊、やな」

孝治が空高くに上がりながらゲイルナイトを睨みつけている。その横にいるのは光の姿。

すでに、ほとんどのギガッシュやゲイルがゲイルナイトに向けて砲撃を行っている。今まで戦っていたはずの敵が今は共通の敵を倒そ

うとしている。彼らも、このゲイルナイトの存在価値がわからないのだろう。それは孝治も同じだった。ただ、ゲイルナイトの味方をしているゲイルもいる。何か理由があるのだろう。

周だって孝治と同じように言うはずだ。いや、孝治よりも論理的かもしれない。

フュリアスが存在することは孝治にとっては少し喜ばしいことだ。戦力が増えるからではなく、救助活動での行動範囲が上がる。孝治達の特殊能力持ちがひたすら動き回らなければならない場所ではなくなる。そして、たくさんの人がなくなる。

「だから、ここで倒す」

周囲に誰もいないことを確認する。この剣はほとんど知られない方がいい。そう孝治は感じているから。

「そう。今はみんなが総攻撃しているからＡＥＦを展開している相手は動けない。それに、あの巨大なフュリアスを守ろうとしている勢力も厄介やな」

このまま弾膜が薄くなり、ＡＥＦが消えた瞬間にバスターマグナムでも撃たれたら大惨事になる。だから、その前に破壊する。

「落とすのは任したで。うちはあくまで」

光がレーヴァテインを構える。そして、一本のレーヴァテインを投影した。弾膜を張れる光が投影した一本の槍。それは純粋なエネルギーの塊。

「レヴァンティンと系列を同じとするレーヴァテイン。今ここに全ての力を開放せよ。終焉の業火を持って全てを焼き尽くす力となせ！」

そして、投影されたレーヴァテインが放たれた。放たれたレーヴァテインはまっすぐゲイルナイトに向かい、そして、ＡＥＦを破砕しながら右肩を砕いた。その瞬間にマテリアルライザーが左腕に剣を突き刺しながら駆け下りる。

これで、両腕を破壊した。

「貴様の運命、見えた！」

孝治が弓に運命を矢の代わりとして装填する。そして、弦を引いた。狙いは巨大なフュリアスの胴体じゃない。背中に突き出している何か。ブースターかエンジン機関か。どちらでもいい。孝治はそれを打ち抜くのだから。

「これで終わりだ」

黒の閃光が一瞬にして駆け抜けた。その閃光が背中のパーツを粉々に砕く。再展開したＡＥＦと共に。

孝治は満足そうに少しだけ笑みを浮かべて掌を空に向けた。手の中に戻ってくる運命。

「後は。お前たちの仕事だ」

突然の高所からの砲撃にルーイは空を見上げていた。でも、そこに映っているのは人。やはり、この世界の人達はフュリアスの天敵が多い。そして、天才的なフュリアスのパイロットだっている。

それらを思い出し、ルーイは小さく笑った。

最初にここに来たのはイグジストアストラルの存在を調べに来たから。そして、悠人や周達と出会った。力を持ちながら戦おうとせず、守るために動く彼らにルーイは惹かれたと言っていい。だから、悠人達に力を貸すことにした。

「メリルも許してくれるよな。さあ、これで終わらせる」

『させるか！』

バスターライフルを構えたルーイに跳びかかるゲイル。だが、そのゲイルは横から跳んできた大量のエネルギー弾にハチの巣にされた。迫りくるゲイルの群れを阻むようにイグジストアストラルが道を塞ぐ。

『行って！　そして、あなたの役目を果たして！』

「すまん」

アストラルブレイズの背中を最大まで展開してエネルギーをバスターライフルに送り続ける。そして、チャージが最大になった。本来なら４０％の出力で撃つものだが、これくらいの余剰分はあってい

い。

『この機体は、我らの悲願を成就するためのものだ！』

ゲイルナイトとの射線上に盾を持つゲイルが飛び出してきた。このままでは破壊できない。

『何が悲願かな！？　人殺しの理由をそんなものに変えるのはダメだよ！』

そのゲイルに地上からソードウルフがバスターカノンでそのゲイルを狙い撃とうとする。

『小娘にはわからぬわ！　失った物の悲しみを。失った時の苦しさを！』

『あなた一人だけが幸せじゃないと思うな！』

バスターカノンがゲイルを貫く。そして、射線上に何の障害物もなくなっていた。

『誰だって、１２歳の子供でも、考えられないくらい不幸な生い立ちをした人がいる。でも！　その人は笑って楽しく暮らしているんだから！！』

矢継ぎ早に放たれたバスターカノンがゲイルナイトに残っていたバスターマグナムを貫いた。ルーイはみんなの援護に感謝しつつ、バスターライフルを両手で構える。

「もう、悲劇は繰り返させない」

そして、バスターライフルの引き金を引いた。

巨大なエネルギー弾がバスターライフルの砲身を内部から破壊しつつ吐きだされた。そして、ゲイルナイトの胴体部分を貫き、爆発する。

「周。後は君達の仕事だ」

ルーイは最後に残った航空空母を見上げながら満足そうに頷いた。

第百六十六話　戦場を駆ける想い（後書き）

次で中東の戦いは終わります。

第百六十七話　星喰いの行き先（前書き）

中東での戦闘が終了します。

第百六十七話　星喰いの行き先

オレはマテリアルライザーから降りた。というよりマテリアルライザーが消えたと言った方がいい。

そもそも、マテリアルライザーのコクピットへの入り方が意味不明に近い。どうすれば入り口の無い場所に入れるかわからない。ついでにいうなら、マテリアルライザーの大きさでオレが自由に両手を伸ばしながら伸び伸びと動ける空間があること事態がおかしい。

まあ、オーバーテクノロジーと言われたら終わりだけど。

巨大なフュリアスの腕をマテリアルライザーの剣から伸ばした魔力の剣で斬り裂いた後、オレは魔力の足場を蹴って結城家当主がいる航空空母に乗り込んだいた。

もう魔力の剣をマテリアルライザーで絶対使わない。絶対に。魔力が根こそぎ無くなる経験はもうしたくない。

航空空母の中には荒い息をつく由姫。手を振りながら駆け寄ってくる亜紗。ちなみに亜紗は疲れていない。さすがというべきか。

部屋に転がっているのはパワードスーツの群れ。そして、一人座り込んでいる結城家当主。

『大丈夫だった？』

「大丈夫だ。疲れたけど」

ここまで魔力が無くなったのは初めてだ。狭間の時はちょっと事情が違うけど、ここまで無くなったのは初めて。

「結城家当主。お前の負けだ。外でお前に味方をする人はいない。降参しろ」

「戦というのは数だと思っていた。だが、まさか、質だったとは」

まあ、戦力差は絶望的だったけど、こっちには孝治がいたからな。この世界の中でオレが一番信頼しているし。

「それが海道周の才能か」

結城家当主が笑った。その笑みは満足したような感じだった。

「私は負けだ」

「は？」

今、私、は、とは言わなかったか？　まるで、他のところで何かが起きているかのように。

ちょっと待て。よく考えろ。ルーイ達に話しかけたのは誰だ？

「結城家当主、真柴昭三はどこに行った？　真柴昭三はどこに」

「やはり、知らないか」

結城家当主の顔に浮かんでいるのは笑み。まるで、作戦が当たったことを喜んでいるような。

「狭間市だよ。昭三氏は狭間の地に向かったのだよ」

「なっ」

オレは完全に言葉を失っていた。そして、レヴァンティンを取り出して悠聖に通信を繋げようとする。だが、返ってきたのは雑音だった。

通信障害が狭間市で起きているということでもある。

「昭三氏の目的は我々と違う。だから、別れたのだよ。さて、海道周。君はどうするのかな？」

楽しんでいる。結城家当主は確実に楽しんでいる。オレが動揺している姿を。

ここでブレたら駄目だ。

「今から言っても間に合わない。オレ達はここで現状維持だ」

「周、正気か？　そなたの仲間が」

詰め寄ってきたアル・アジフに対し、亜紗が間を塞いだ。そして、アル・アジフにスケッチブックを見せる。

見なくても内容は想像出来た。

「今は、信じるしかない。悠聖と浩平の二人を」

第百六十七話　星喰いの行き先（後書き）

次からは狭間市が舞台です。中東で語られなかった精霊召喚符のことが中心です。

第百六十八話　星喰いの出現（前書き）

狭間市での戦いが始まります。

第百六十八話　星喰いの出現

「悠聖ー！」

オレはその言葉に振り返っていた。そして、手に持っている箒を壁に立てかける。そこにいたのは周のクラスメートである三人組。確か、

「俊輔に委員長とガキだっけ？」

「私は海道君の中だと委員長なんだね」

「ガキじゃね！　和樹だ！　ったく、周の奴、いい加減に教えやがって」

ガキじゃなかったのか。まあ、何でもいいんだけどな。

「周隊長ならまだまだ帰って来ないぜ。後三日はいないんじゃないかな」

「だと思ったよ。周と由姫ちゃんのプリント。お前も大変だな。一人で駐在所にいるって」

オレは小さく溜息をついて背後の建物を振り返る。春休みからのオレらの拠点でもあるこの場所。

まあ、一人で守っていくのは辛いけど浩平がいるから大丈夫だろうな。

駐在所の中から誰かが出て来る。

「やあ、優月ちゃん」

「ひゃっ」

和樹に声をかけられた優月がオレの背中に隠れた。オレ達の目が微かに鋭くなって和樹を睨みつける。

ちなみに、優月は泣きそうになりながらオレの服を震える手で掴んでいた。

まあ、とりあえずはいつものことでもしますか。

「ったく、優月はまだ人見知りなんだから止めてくれと言ってるだろ。正確にはどこかに消えろ」

「そうです、消えてください」

「うわっ、俊輔、俺、いじめられてるよな？」

「安心しろ。スキンシップだ」

「そうなんだ。スキンシップか。わーい、安心出来るように、思えるか！」

オレ達の会話に委員長がいつものように笑みを浮かべる。

「相変わらずかな。海道君がいなくなってからずっとやってるよね」

「楽しいよ？」

「優月ちゃん、人に消えろというのが楽しいと言わないで」

和樹が泣きそうになりながらうずくまっている。それを見て優月はオレの横でニコニコ笑っていた。

最近、優月はニコニコ笑うようになってきた。ここに来た時は記憶がないからか何もわからずあまり他人とは話さなかった。

和樹に話された時なんて号泣していたような気がする。もちろん、怖かったから。

でも、今では和樹の前でも笑っている。ちょっと前に買ったワンピースなんて大事に保管しているくらいだ。

ちなみに、今着ているのはジャージ。

「悠聖も大変だよな。周達がいないからって駐在所に缶詰めだなんて。後、学校行かなくて羨ましい」

「最後が本音だろ。これでも第７６移動隊だからな。行動範囲の広い浩平らならともかく、オレの能力は防衛用だ。それに」

オレは優月の頭に手を置いて撫でてやる。

「優月もいる。ディアボルガやルカに周囲は探索してもらっているから大丈夫だろ。多分、だけどさ。それに、オレは不器用だからこんなことしか出来ないし」

ディアボルガやルカの探索には全幅の信頼を持っている。だからこ

そ、オレは安心してここにいられる。
フュリアスのような巨大戦力が来ても先に防衛を整えるだけ。
オレが出来るのはそれだけ。

「立派だな。『ＧＦ』もそういう人材がたくさんいればいいがな。最近の『ＧＦ』は攻撃型が多いような気がするが」

「オレもさ。でも、オレは守ることの大切さをある奴から教えてもらった。だから、今はみんなの帰る場所にいる。それだけさ」

やっていることは前を掃いているだけだけどな。まあ、人がいないし仕方ないか。

オレが軽く肩をすくめると、誰かの声が響いてきた。振り返ってみると、そこにいたのは少年だ。精霊召喚符で四体の最上級精霊を召喚した少年。

「師匠！　お師匠様！」

あの日以来、オレのことを師匠と呼ぶようになった。実際に召喚術について教えているからだけどな。

名前は名山俊也。現在小学生六年生で七葉と同じクラスだった。七葉も俊也のことは知っていたらしく、影でいじめられていたかもと危惧していたらしい。

小学生のいじめって洒落にならないからな。

「お師匠様！　今日も召喚術について教えてください！」

「はいはい。毎日して欲しいなんて勤勉だよな、お前は」

「はい。今は精霊召喚符を通じてですけど、いつかはちゃんとした契約がしたいんです。お師匠様のような立派な精霊召喚師に」

オレが立派か。まあ、オレみたいな精霊召喚師を目指してくれるのは嬉しいし、ちゃんと契約をしたいという心意気は立派だ。

多分、精霊達も応援しているだろうな。

「いつの間にお前は弟子が出来たんだ？　しかも、名山のガキと」

「むっ、ガキっていいますけど、和樹さんも十分にガキですからね」

「んだと？　今日こそ決着つけてやる」

俊也と和樹の二人がお互いに睨みつけながら詰め寄っていく。

オレは呆れたように溜息をつきながら俊輔に近づいた。

「あの二人は何があったんだ？」

「お隣、だそうだ」

「なるほど」

つまり、幼なじみというわけね。周と幼なじみである二人とは全く違う関係性だよな。

よく考えてみたらオレと冬華も幼なじみと同じようなものか。まあ、仲いいけど。

「羨ましいな。私には幼なじみはいないから」

「ふむ、確か、委員長は県外からここに来ていたな。前の土地にもいなかったのか？」

「いたにはいたけど、『赤のクリスマス』で」

その言葉にオレの中に影がさす。『赤のクリスマス』。第７６移動隊のほぼ全員がそれにより人生を変えた。

一番変わったのは周と孝治だろうな。オレはあいつらほど深刻じゃないし。

「あの事件はかなり大規模だからな。たくさんの人が亡くなった。だが、今とあの時代は違う。『ＧＦ』と『ＥＳ』が必ず止めるだろう」

「ああ。あんな事件はもう起こさせない。オレ達みたいな言葉はもういない方がいいんだよ」

オレ達みたいに戦いの日常に飛び込むことなんて絶対にない方がいい。むう、オレ達は戻れないけど。

「それだと困るのですよ。それでは商売が成り立たない」

その言葉にオレは振り返った。そこにいる人物の顔を見て全身の毛が総毛立つ。一度この地で見つかったから別の地に移動したものだ

と思っていた。主に、中東に。

オレは身構える。この距離じゃ間に合わない。

「真柴、昭三」

真柴昭三の後ろには何人かの男女がいる。その中の一人にオレは見覚えがあった。

優月を精霊召喚符で呼び出したクラスメート。

「俊輔、委員長。優月と一緒に中に。俊也。お前もだ」

「はい」

オレの言葉に応じて全員が駐在所の中に入る。多分、俊也はフィンブルド達を呼び出してくれるだろう。

オレはここで食い止める。

「まさか、ここに来るとはな。狙いは優月か？」

「優月？　ああ、あの精霊ですか。そうです。あれは戦争の道具としては最高です。そして、最高の精霊」

「防護服γ」

オレは戦闘スタイルを近接格闘用に変える。この距離だと呼び出す前に攻撃を食らう。簡易召喚も準備していなかったし。

「聞いたことがありませんか？　全てを滅ぼす精霊王の話を」

オレは身構えながら何も答えない。答えられない。

「それがあの少女ですよ。世界を滅ぼすことが出来る」

「だとしても、オレは優月との関係を変えない。それに、オレは信じている」

「何をですか？」

オレはニヤリと笑みを浮かべて身構えていた格好を解いた。それと同時に相手も警戒を少し解く。

「オレの友と、大事な人を」

『すまない。遅れた』

その言葉と共にディアボルガとルカがオレを挟むように降り立った。相変わらずいいタイミングだ。

ルカは無言で剣を構えている。

「闇と光の最上級精霊。いいでしょう。穏便に行きたかったのですが仕方ありません」

オレは身構えた。これから起きることの覚悟を決めて。

「やりなさい」

オレも向こうも同時に動く。

中東から遠く離れた土地で小さく、とても大きな影響を持つ戦いが始まった。

第百六十八話　星喰いの出現（後書き）

次は久しぶりに出すあの方からの話で行こうかと思っています。

第百六十九話　狭間の杖（前書き）

最初に。都の持つ神剣はほぼトップに位置するレベルの神剣です。
そのことを覚えておいて読んでください。

第百六十九話　狭間の杖

都は狭間の夜の決戦地にいた。隣にいるのは琴美の姿。そして、都の手に握られているのが神剣認定された狭間の力が扱える杖。

あれから都は琴美と一緒に訓練を続けていた。第７６移動隊の庇護下に入ったとは言え、まだまだ実力の足りない都は基礎練習の後にここで毎日練習していたのだ。

狭間の力の使い方を。

周からは周自身がいない場所では練習しないように言われていたが、都はそれを無視して練習していた。そう、今日も。

「都」

琴美の言葉に都が小さく頷く。そして、手に持っている杖を回した。そのまま地面に突き刺す。

「完成ね」

「はい」

都の顔が輝く。そして、杖を地面から引き抜いた。

「これで、この杖の名前が決まりましたね」

その言葉に琴美がずっこける。まるで、思っていたことは完全に違うことを言われたような感じだった。

琴美が額に手を当ててゆっくり起き上がる。

「杖の名前じゃなくて、ようやく狭間の力を使えるようになった、でしょ。まあ、怒られそうだけど」

「そうですよね。周様なら確実に怒りますよね。確実に」

そう言いながら都は肩を落とす。そして、杖を空間の狭間にしまった。

丘から狭間の市街を見下ろす。そこに見えているのはいつも通りに見える平和な狭間市。だけど、今日は何だかトラックの往来が激しいような。少量の魔力鉱石を消費するトラックはかなり高いのに今日はたくさん狭間市に来ている。

それをみて都は嫌な予感に駆られていた。

「一体何が」

目を瞑って掌を市街に向ける都。そうすることで魔力を感じているのだ。

常に存在する狭間の空間の安定性が崩れた場合、何らかのエネルギーが発生する。基本的には風となって表れやすい。空間が揺れるのだ。その揺れ方を都は感じることが出来る。

「たくさんの人がトラックに？　引っ越し、というわけではありませんよね。向かっている先は中心部でしょうか。後、駐在所方面にも。一体何が」

「都！　逃げて！」

その言葉と共に都の体が前のめりになった。押されたのだ。そのまま受け身を取りつつ素早く立ち上がって振り返ると、そこには首元に剣を突き付けられた琴美の姿があった。その周囲にいるのはパワードスーツを着た男達。

「都築都ですね。この少女が殺されたくないなら大人しくしてください」

そのまま琴美の首筋に剣を近づける。もし、都が攻撃の素振りを見せたならすぐに殺すということ。でも、それを見ていた都は目を瞑っただけだった。

それを見ている男達が首を傾げた瞬間、都の手に杖が握られていた。

「なっ」

剣を握る男の顔が驚き、そして、剣を動かそうとした。だが、その剣は少しも動かない。いくら力を込めても、少しも。

「あなた達に宣告します。痛い目を見たくなければ琴美を話しなさい。もう一度言いましょうか？」

「こいつに突きつけられている剣が見えないのか？」

琴美に剣を突き付けている男が慌てて言う。だが、都は冷静にその男を見ていた。

「動かない剣にひるんでも意味はありません」

その言葉は男の隣から聞こえていた。男が振り向くと同時に杖の先がパワードスーツのヘルメットを砕き吹き飛ばす。そして、都は琴美の手を引いた。

「大丈夫ですよね？」

「ええ。今のは」

「狭間の固定です」

空間と空間の間に存在している狭間。その間で起きるエネルギーの変動をなくせばその場所からは何も動かなくなる。つまり、あらゆる攻撃が届かない。

いろいろと制限が多いのだが、その空間さえ固定すればあらゆるもの、それこそ、大津波でさえもお使用ことはなくなる。ただし、飛び越えた分とかは不可能だ。

「ちょうどよかったです。これでも第７６移動隊の端くれ。あなた達を拘束します」

「こっちが下手に出れば。死ね！」

パワードスーツ部隊が撮りだしたのはエネルギーライフル。だが、そこからエネルギー弾が吐きだされるより早く、駆け抜けたエネルギーがエネルギーライフルを貫いた。

我が目を疑う男達。何故なら、都の周囲に魔力を凝縮させた球体が

浮かんでいるからだ。色は白のようにも見える薄い紫。

魔術の名前で言うならフォトンランサー。純粋に自分の魔力を収束させて放つもので、飛ばしたり設置したりと様々な使い方が出来る。ただ、実力者だけならず、初心者まで誰も使わない魔術でもある。燃費が悪いのだ。

世界最高の魔力を有すると言われているアル・アジフですら戦場では使用しない。そのフォトンランサーが１０ほど都の周囲に浮かんでいた。

「抵抗は止めて大人しく武器を捨ててください。さもなくば」

「どうせハッタリだ！」

一人の男が槍を取り出して都に向かって走る。それを見た都は覚悟を決めるようにして目を瞑り、そして、フォトンランサーを一気に放った。

１０のフォトンランサーが放つのは純粋な魔力の弾。それが同時に一人の男に向かって放たれた。男は槍でいくつかを払うために振り回すが、槍がフォトンランサーの弾に当たった瞬間、その弾が爆発を起こした。そして。視界を塞がれた男の体にフォトンランサーが直撃する。

パワードスーツを砕かれ、体に滅多打ちにして吹っ飛ばされる。その場に降りる沈黙。そして、

「デバイス起動するの忘れてた」

そう言って都が慌ててデバイスを起動する。そして、その場にいた全員が叫んだ。

『遅いから！』

「あはははっ」

都が渇いた笑みを浮かべてさわやかな笑みを浮かべる。ちなみに、フォトンランサーに滅多打ちにされた男はビクンビクンと体を振るわせていた。

でも、都は乾いた笑みを浮かべたままフォトンランサーの数を増やす。１０から２０。２０から３０へ。

そして、全部で５０ものフォトンランサーを展開する。

「どうしますか？　私はここで全てを放ってもいいのですけど」

「くっ、撤退だ撤退」

パワードスーツを着た人達が都達に背中を向けて走り出す。それを見ながら都は小さくため息をついて杖を下ろした。

「琴美、駐在所に向かいましょう。今はあそこが一番安全だと思いますから」

「道中で会う可能性があるわよ。あなたの狭間を固定する力は多数を展開できないから襲われでもしたなら」

もしかしたら撤退しただけで周囲に隠れている可能性もある。それを考えていた琴美がそう言うと、都は大丈夫という風に笑った。

「瞬間移動（シュートジャンプ）を使います」

さっきまでいた地点と移動する地点を点で繋げ、その間を音速を超える速度で移動することを瞬間移動（ショートジャンプ）という。問題があるとするならそんな速度を出せる人は本当に限られているということくらいか。

「瞬間移動（ショートジャンプ）というより、あなたのものは瞬間転移の方が正しいんじゃないの？」

「移動はしていますよ」

琴美が呆れたようにため息をつく。都の技を体験したことがあるからこその言葉だった。

「行きましょう。出来れば、このことを早く白川君に伝えないと」

「そうね。今、周がいない以上、何かあれば助けを求めていた方が賢明よね。それにしても、嫌な空気ね」

琴美が周囲を見渡す。都も同じように周囲を見渡すが、そのような感じはまったくしない。

でも、琴美が嘘を言っているようには見えなかった。

「わかりました。掴まっていてください」

都の言葉に琴美が都の手を握る。そして、都は杖の力を発動させた。この場所と目的地の座標を繋ぎ、その間の狭間全ての存在を無とする。それをすることで莫大なエネルギーが生まれるが、それはむし

ろ瞬間移動（ショートジャンプ）をするための魔力として扱う。

二人の視界に映る風景が一瞬で変わる。映った光景は、駐在所の前に広がる風景ではなく、相手のひじ打ちによって吹き飛ばされる悠聖と一人無双をしているセイバー・ルカ。そして、駐在所の入り口を守っているディアボルガ。さらには彼らと戦っている勢力。

「くっ、さすがにキツイか。召喚時間さえ稼げれば」

「援護します」

都が飛び込んだ。悠聖は都の姿を確認して固まり、敵の放った魔術をもろに直撃した。だが、持ち前の頑丈さで大怪我は負っていない。

「いっつ。何で都さんが？　今は駐在所の中に」

「私も第７６移動隊です。私も戦えます」

都がフォトンランサーを展開する。その数を見た悠聖は少しだけ考えて頷いた。

「ああ。わかった。でも、このままじゃ危な、真柴昭三。何、笑っている」

悠聖が真柴昭三を睨みつけながら尋ねる。その真柴昭三は笑みを浮かべていた。まるで、自分の求めていたものが手に入ったかのように。

そして、真柴昭三の視線が都の方を向く。

「まさか、狭間の巫女までやってくるとは。このことこそ、飛んで火に入る夏の虫ですね。まさか、求めていたものの内二つも来るとは」

都は身構える。何か嫌な予感を感じて。

「さあ、戦いはここからですよ」

そして、駐在所の周囲からたくさんのパワードスーツを身に付けた人達が現れた。その手に握られているのはエネルギーライフル。そして、駐在所の入り口が開く。

それに悠聖は振り返っていた。そして、目を見開く。

「あの時のことを、何倍にも返してやるよ」

悠聖と同じクラスの仲間。だが、その手に握られているのは精霊召喚符とぐったりしている優月の姿。

「ユニゾン」

「貴様ーーーッ！！」

悠聖の叫びが周囲一帯に響き渡った。

第百六十九話　狭間の杖（後書き）

都はそこまで強くありません。神剣が桁違いに強いだけです。ただ、世界トッププレベルで通用する強さでもありません。

第百七十話　白川悠聖　前編（前書き）

長くなる予定なので三つに分けます。

第百七十話　白川悠聖　前編

「貴様ーーーッ！！」

オレの声が周囲に響き渡る。そして、オレは地面を蹴った。狙う相手は優月とユニゾンをした男。

こいつだけは、こいつだけは！

「力の差を思い知れ」

男はニヤリと笑みを浮かべ、手に持つ薙刀を振る。オレは回避することをせずに真っ直ぐ駆けた。

左肩に激しい痛み。だが、そんなものを気にしてはいられない。今はこいつを倒す。

一気に距離を詰めて速度を載せたまま男に肘を叩き込む。いや、叩き込んだつもりだった。だが、そこに姿はいない。

そして、背中に激しい痛み。この時、オレはようやく斬られたことに気づいた。左肩も。

体から力が抜けてその場に倒れ込む。

「ははははっ、ざまぁないよ。人のものを勝手に奪った挙げ句、奪い返されたらキレるって。人間として終わっているよ？」

「がっ」

傷口を激しく踏まれる。痛みのあまり口から声が漏れた。痛い。とても痛い。だけど、こんなものは我慢しないと。

「往生際が悪いね」

そして、お腹の部分を何かが貫通する感触。これは、薙刀か。

「さっさと死ねよ」

薙刀が引き抜かれてまた突き刺さる。痛みで視界が狭くなってきた。

『させるか！』

そこに聞こえてきたのはディアボルガの声。それと同時に薙刀が引き抜かれた。

『ルカ、下がれ！』

オレの近くに誰かが降り立つ。だが、オレはそこに顔を向ける力すらなかった。

オレは、こんな場所で死ぬのかよ。

「これ以上の戦闘は無意味ですよ。犠牲者を増やしたくないなら今すぐに」

「お断りします」

その言葉と共にオレの体を魔力が包み込んだ。魔力による強制的な

治癒速度上昇させる技。極めて保持魔力の多い周しか見たことがない。

まさか、都さんが使えるなんて。

オレは激痛が走る体をゆっくり起こした。そして、前を向く。

そこにあるのはフォトンランサーを５０ほど展開する都さんの背中だった。優月とユニゾンをしたクラスメートは真柴昭三の横にいる。

「まずは一つですね。狭間の巫女、都築都。この囲まれた状況でどうするつもりですか？」

フォトンランサーを展開しながら都さんはオレに魔力を送り続けている。こんなこと、普通は出来ない。

「私は第７６移動隊の隊員です。守ることが私の指名ですが、今回ばかりは許しません」

都さんの言葉には怒りが満ちていた。そして、都さんがデバイスを取り出す。

「デバイスの能力をオフにしました。どういうことかわかりますよね」

場の戦局が一気に変わった。今まで主導権を握っていたのが真柴昭三なら、今の都さんの行動で主導権が都さんに移った。

本職の『ＧＦ』ならまずしない行動。魔術の完全非殺傷設定の解除。つまり、フォトンランサーは一撃で人を殺せる凶器となった。

「正気ですか？」

真柴昭三の言葉もわかる。おそらく、周がこの場にいても同じことを言うだろう。『ＧＦ』は常に非殺傷設定でいなければならないのだから。

義務であって強制ではないからこそのやり方。

「正気です。どうしますか？」

「駐在所の中には人質が」

「悪いわね。人質って彼らのことかしら？」

その言葉にオレは安心しながら振り返ると、隣にフェンリルを従える冬華の姿があった。

駐在所の中には男達を拘束する七葉の姿も。

「悠聖、無事？」

「優月が連れ去られた」

冬華はオレのことを聞いてきたと思うが、オレはそれを無視して優月のことを言った。冬華が不満そうな口になるが小さく溜息をつく。

「わかったわ。真柴昭三。あなたはアリエル・ロワソ様から捕まえるように言われているわ」

「あの小僧め。私の誘いに乗らないとは、彼は世界を救うつもりはないのですかね？」

オレは息を整える。召喚するなら今だ。

「封印の証を作る者。集え、儚き結晶より。アルネウラ」

すかさずアルネウラを呼び出す。他の精霊も呼び出したいところだが、傷が深く、アルネウラぐらいしか呼び出せない。

オレは呼び出したアルネウラの体を借りて起き上がる。そして、アルネウラの体に寄りかかった。

『悠聖、無茶はしないでよ』

「悪い。真柴昭三。世界を救うというのはどういうことだ？」

「そのままの意味ですよ。世界を救う。そう、近い将来に迫る世界の滅亡から。私はあなた達と違って見ている世界が違うのですよ」

見ている世界が違う。そういう真柴昭三は自分のやることが全て正義とでも言うかのようだった。

そういうものは本当に虫酸が走る。自分の、自分達のやることにどれだけの人が犠牲になっても、こいつらは確実に知らないようにするはずだ。

それが精霊ならなおさら。

「そうか。お前が精霊召喚符をバラまいた張本人か」

「そうですよ。この世界を救うために、精霊達には犠牲になって」

「何が犠牲だ」

オレは拳を握りしめていた。

「精霊だって生きているんだぞ！」

「人からすればただの道具ですよ」

その言葉にフェンリルが唸りを上げる。ディアボルガやルカは何も言わないが、完全に怒っていた。

でも、オレやアルネウラとはほど遠い。

「ふざけるな！　精霊だって人間と同じく、喜び、怒り、哀しみ、笑い、恋をする。姿は違うくても生きているんだ！　誰かを犠牲にして救われる世界なんて糞くらえ！　世界が滅びるとしても、魔界、天界、精霊界、音界のどこにも、犠牲になっていいような人なんていないんだよ！」

昔に聞かされた周の夢。とある任務でオレ、周、孝治の三人だけで野宿した時に交わしあった夢。その中で周が語った夢がこれだ。

それの影響をオレも孝治も強く受けている。

「『誰かを犠牲にして世界を救えたとしても、それは世界を救えたことにはならない。世界を救うということは、自分も仲間も知り合いも誰もかも救うことだ』。オレはそう思っている。だから、お前

のやり方を認めるわけにはいかない」

「民衆がついて行きますか？　人間なら人間にメリットのあることをすればいいのですよ。あなたとは必ず相容れませんが。まあ、いいでしょう。今は精霊を確保出来ただけでよしとします。行きますよ」

真柴昭三が歩き出す。その後を追いかけるのは数人だけ。もちろん、クラスメートもだ。他の面々はこちらに武器を向けている。

オレは歯を強く噛み締めた。

またかよ。また、オレは、何も出来ずに終わるのかよ。また、フィネーマのことと同じになるのかよ。

また、大事な奴を失うのかよ。

オレは、オレは、

『今は我慢して』

オレの頭の中にアルネウラの声が聞こえる。その声はあの時と同じだった。

オレが突っ込む前にアルネウラが言った言葉と。

『今は、戦力で勝てない。それに、罠が確実にある。今向かうことは止めて。じゃないと、悠聖が』

オレはアルネウラの顔を見た。その目には涙が溜まっているけど、

その瞳に映る意志の光は強い。

オレは小さく頷いた。そして、周囲を見渡す。

囲まれてはいるものの、主導権を握っているのはこちらだ。都さんは撃たない。いや、撃てないのだろう。今、完全に囲まれているから。

「どうすれば」

都さんが小さく呟いた。確かに、この状況ではどうすればいいかわからないよな。

オレは空を見上げる。誰か助けが来ればいいけど。

真柴昭三が歩いている方角から車とトラックが現れた。その二台は真柴昭三の近くで止まり、真柴昭三達を中に入れる。

追いつけないというわけではないが、もし、ダミーを大量に作り上げているなら捜索は困難だ。

どうすればいい。とうすれば。

『今だよ！』

その瞬間、アルネウラが叫んだ。それと同時に降り注いだ光の柱が周囲にいたパワードスーツを着ていない男達に降り注ぐ。

都さんもフォトンランサーを放ち、見える角度にいるパワードスーツの男達にぶつけていく。

「一体誰が」

オレがそう呟くと同時に最後の一人がルカによって壁に叩きつけられた。オレは空を見上げる。

一体誰が援護を。

「悪い。遅れたぜ」

そこにはゆっくり降下してくる浩平とリースの姿があった。もしかしたら、アルネウラはこの二人に気づいていたのかもしれない。

二人が地面に降り立つ。

「ちょっとばかし周から用事を預かっていてよ。それを済ましていたら遅れた」

「用事？」

「これ」

リースが都さんに何かを渡す。あれは、デバイスか？　都さんはデバイスを持っているはずだけど。

「ＮＧＤ。Ｎｅｘｔ　Ｇｅｎｅｒａｔｉｏｎ　Ｄｅｖｉｃｅ。次世代型デバイスらしい。周が都さんのために設計した史上最高の集積デバイスさ」

「集積デバイスですか？　一つにしか見えませんが」

都さんの握るデバイスは確かに一つしか見えない。一体、どうして集積デバイスなのかわからない。

都さんが首を傾げると、ＮＧＤから光が放たれた。その光はまるで都さんの顔をスキャンするように動く。

「これは」

「周から詳しいことは聞いていないからな。都さんなら使えるって言っていたけどな」

浩平が不思議そうに首を傾げてからオレを見てくる。そして、フレヴァングを肩に担いだ。

その目は明らかにオレの言葉を待っている。

「みんな、力を貸して欲しい。優月を助けたいんだ。だから、力を」

「いいぜ。それに、真柴昭三が出てくるなんて俺らの中じゃ予想外だしな。リース、追えるよな？」

「大丈夫」

リースが手のひらを空に向ける。すると、周囲の地図が浮かび上がった。そこにあるのは一つの点。

「でも、罠が必ず待っている。それでも」

「当たり前だ」

そんなのはわかっている。でも、今を逃せば優月が戻ってこない、そんな気がするのだから。

何が何でも助けてみせる。そのためなら、何だって使う。

「仕方ないわね。向かうのは最大人数の七人。一直線に向かったとしてこの場所だと市街を出るまでに追いつきそうね」

「市街では手を出さねえよ。市街を出てからじゃなければ戦闘の被害が大きすぎるからな。追跡するしかないか」

市街で戦闘するわけにはいかない。もし、相手がフュリアスを使ってきたなら被害が一気に多くなる。たくさんの犠牲者が出る。

その時、都さんが手を挙げた。

「私が運びます。皆さんを目的地まで」

「運ぶ？　リース、瞬間移動（ショートジャンプ）の最大距離はどれくらいだったっけ」

「２ｋｍ」

それだと市街にしか入らない。市街外に出ることが極めて困難だ。

「都の場合は５ｋｍほど飛ばせるわよ」

琴美さんの何気ない言葉。だが、その言葉に誰もが驚いていた。一応、ギネスに登録されている瞬間移動（ショートジャンプ）の距離は６ｋｍ弱。それに匹敵する距離。しかも、一人でだ。

なのに、今の言い方だとこの人数で５ｋｍほど飛ばせることになる。
その時点で世界記録だ。

「５ｋｍ。わかった。少しだけ時間がある。今の内に準備を」

リースが全員の顔を見渡しながら言う。こちらがどんな行動を取って追いかけてくるかわからないからほとんど全方位に策を張っているはずだ。つまり、敵の真っただ中にいる。それをオレ達は気づいているからこそのリースの言葉。

都さんを除くオレ達は頷いていた。次は敵地だ。どこまで戦えるかわからない。敵地で戦うと言うのは全滅する危険性のある戦いだということだ。

すると、アルネウラがオレの服の袖を引っ張った。

『悠聖、少しだけ、いいかな？　私と、えっと、レクサスの二人で話したいことがあるから』

「わかった」

オレはアルネウラの手を強く握る。短時間だけだが、精霊界と人界を繋ぐ魔力孔の中。精霊と力でこの中で術者は会話することが出来る。

オレの前にいるのはアルネウラとレクサス。昔からオレと一緒にいる二人。

「話は何だ？」

『うん。悠聖に話したいの。ユニゾンがどういうものなのか。悠聖にだけ話したい。じゃないと、優月を助けることが出来ないから』

第百七十話　白川悠聖　前編（後書き）

次は中編。悠聖の過去、フィネーマとの話を入れて書いていきます。

第百七十一話　白川悠聖　中編（前書き）

悠聖編の中編です。とりあえず、悠聖の過去について簡単に書いています。悠聖とアルネウラ達の出会いは後に書く予定である短編になるかと。

第百七十一話　白川悠聖　中編

オレは一瞬、アルネウラが言ったことの意味がわからなかった。ユニゾンというものを知っている風に言っているが、そんな話は聞いたことがないから。

ディアボルガやルカすら知らなかったはずなのに。

『ユニゾンは強制的に行うもの。それは、精霊の意志に関係なく。でも、それはどうして生まれたんだと思うかな？』

「精霊を悪用するために生まれたとか？」

そういうことしか考えられない。他に何があるだろうか。

『違うよ。シンクロの最終形態、アルティメットシンクロ。全ての精霊に力を出すことが出来る能力。それは、悠聖とフィネーマだけ、愛する二人にだけしか発動できなかった究極形態』

オレは視線を逸らした。フィネーマとのシンクロ。小学生だったが、オレ達はれっきとした恋人だった。だからこそ出来たシンクロの最終形態。

元々病弱だったフィネーマをオレはよく呼び出していた。戦闘ではなく、いろいろな人に治療できるか尋ねて回るために。

名医と呼ばれる人や神の手を持つ人など様々な人から話を聞いた。そして、『ＧＦ』の幹部にも。オレがあの時にフィネーマのために行動していたのはフィネーマと一緒にいたかったから。最初に契約

したのはアルネウラだけど、最初に恋をしたのはフィネーマだったから。

『それに近づけるために開発されたのがユニゾン。それは、精霊から無理矢理力を引き出すもの』

「オレ達がやったからか？　シンクロの最終形態を」

『うん。それが、直接的な原因だよ。ユニゾンは精霊を強制的にするもの。それは、シンクロ時と比べて格段に力を引き出せる。精霊の命を燃やして』

そこでオレは一つの疑問が生まれた。どうして、そのことをアルネウラが詳しくしているのだろうか。何か研究でもしていたのだろうか。

すると、アルネウラがオレの考えていることがわかっていたのか少しだけ笑みを浮かべた。

『どうして私が詳しいのかって？』

その言葉にオレは頷いた。でも、今までの行動を考えると何らおかしなところはないように思える。だって、フェンリルすら遊ばれているような感じがあるし。

『聞いたら、悠聖でも戻れなくなる。人界でも一握りしか知らない事実だから。それを求めて狙われるかもしれない。これは、精霊界の暗部の中でも最も深いところだから』

アルネウラの存在がそういうものだと知らなかった。確かに、アル

ネウラはそんなに強いわけじゃない。他の精霊が全員それぞれの属性の精霊の中で五指に入ってくるレベルだ。そのなかでアルネウラの実力はごまんとたくさんいる中級精霊。

精霊の召喚は術者の実力に見合ったものだと聞いているから、時にはおかしいと思ったことはある。でも、オレはアルネウラに聞かなかったから。だって、

「聞く。いや、聞かせてくれ。オレが、いや、お前の術者として、そして、オレがお前を大切にしたいから、だから、聞かせて欲しい。お前を、いや、お前らだけをそんなところに置いておくわけにはいかないんだ。これからも、お前らに守られているんじゃない。オレが守りたいんだ」

『悠聖』

レクサスも、イグニスも、グラウ・ラゴスも、ライガも、エルフィンも、ディアボルガも、ルカも、全員がオレの中では大切な仲間。いや、大切な家族というべきか。白川家とは違う、第二の家族。

そして、アルネウラはずっとオレを見守ってくれていた。本当ならもっと甘えたい時だってあったかもしれない。オレとフィネーマが付き合いだした時も涙一つ見せずに笑顔で祝福していた。でも、アルネウラが後で泣いていたのをオレは見つけてしまった。

自分の命よりも、オレの幸せを取ろうとしている。アルネウラも、フィネーマも。だから、オレは自分の思いを告げる。

「オレは、お前が、アルネウラのことが好きだ。レクサス達のことが大切だ。家族みたいに思っている。だから、聞きたいんだ。お前

のことを、お前を縛っているもののことを」

『もう、戻れなくなるよ。周や孝治よりも、もっと深い闇を知ることになる。その闇を知れば、悠聖は選択しないといけない。自分が進むべき道を。そして、気づくと思うんだ。今の世界の流れが。どういう風な未来に向かって動いているのか』

「なら、いっそこと教えて欲しい。周が目指す未来に繋げられるかもしれないから」

周の望み。誰も犠牲にしないという望み。それを叶えることが出来れば、オレと七葉みたいな人が少なくなるはずだから。

そして、オレも周の手伝いを本格的に出来る。未来を知るなら、もしかしたら、

『わかった。でも、約束して。誰にも話さないで欲しいことを』

「誰にも？　周にも？」

『うん。知っている人が知らない人に教えれば、その二人に不幸が襲いかかる。そう言うことになっているから』

不幸が襲いかかる？　それだとまるで、オレ達の行動が誰かに監視されているみたいだ。でも、どういうシステムなのかわからないのだろう。

だったら、なおさら話せない。でも、話せなくても手助けが出来る。みんなを助けることが出来る。周や孝治には守られてばかりだったからな。

「いいぜ。オレが出来る精一杯のことをやってみる。そして、お前らと共にいたい。だから、頼む」

『うん。レクサス、みんなに伝えて。悠聖が私を知るってことを』

『わかったわ。悠聖。もし、あならがアルネウラを傷つけるなら、例えあなたでも私は許さないから』

その言葉は完全に本気だった。アルネウラを大切に思っているからこその言葉。だから、オレも同じ立場だから言葉を返す。

「アルネウラはオレを救ってくれたんだ。そんな子を傷つけたら、自己嫌悪で死にたくなるさ」

嘘いつわりのない言葉。そもそも、精神操作に長けた水属性の精霊に嘘はほとんど通じない。だから、オレの言葉が本当だとわかったのだろう。

レクサスは優しく微笑むとそのまま姿を消した。

『うん。まずは私の話から。私は精霊の中でもかなり特殊。精霊単体じゃ中級どころか下級くらいの実力しかないしね』

それはオレが知っている。そもそも、アルネウラの戦い方は防衛において力を発揮する。最初から、ディアボルガやルカの力を最大限に発揮させて戦うオレのやり方ではほとんどがオレの飛んでくる流れ弾の排除だけだ。

後は、オレとのシンクロを行うために。

だけど、信頼関係もあるのか、シンクロ時には極めて強い力を持つ。もしかしたら、アルティメットシンクロが出来るならフィネーマを軽く超えるかもしれない。

『私は精霊界の中での実験体。究極のシンクロをするために開発された存在だから』

「いきなりすぎて話についていけないんだけど」

『だよね。最初、シンクロとユニゾンの二つがあったんだよ。でも、シンクロの力を高めれれば危険性の高いユニゾンをしなくても強力な力を発揮できる。それが、私。そして、私がユニゾンを知る理由だよ。私とフィネーマは、精霊界のトップが恐れている未来を回避するための手段として生まれた』

だから、アルネウラは普通にフェンリルと戯れている。ディアボルガとも普通に話す。それは、アルネウラ自身がかなり特殊だから。

『シンクロを超えるようなシンクロが簡単に発動できるなら、人は今よりもさらに力を発揮できるようになる。普通の精霊の限界シンクロ率が６０％。それを超える８０％や９０％のシンクロ率を出来るようになればいい。そして、私とフィネーマは開発された。私はシンクロの力を極めて強く出来るように。フィネーマはシンクロ率のリミットを外し、普通の精霊としても活躍できるように』

オレが契約した二人は本当に特殊な精霊だったのだろう。でも、それほど特殊だったからこそ、オレとフィネーマは恋することが出来た。そして、アルネウラを大切に思えるようになった。

『その技術が出来上がれば、もしかしたら、世界が滅ぶという最悪の予言を回避することが出来る』

「滅ぶ？　この世界がか？　ちょっと待ってくれ。海道総長や善知鳥特務隊長達がいても？」

そんな戦力を持っている人界は戦力の数が極めて多い魔界や天界よりも遥かに強いと言われている。人界を滅ぼすなら、魔界と天界が手を結び、精霊界が全力で援助をしつつ、人界内部で大きな戦争が起きている状況とも言われているくらいだ。

それほどまでにこの世界は異質なまでに強い。

『うん。預言書にはそう言われているよ。私の友達のエンシェントドラゴンはそれを肯定している。今のままでは簡単に滅ぶって。だから、私達はその滅びを止めるために生まれた。まあ、悠聖の精霊に私達がなった時は一悶着あったけどね。でも、悠聖がフィネーマと付き合ってから流れは変わった』

周から聞いたことがあるが、精霊と恋人になるのは世界でも類を見ないらしい。やはり、精霊というのは使役するものだと思われており、本当に大切に扱うことは珍しい。

海道総長からも聞いたことがないと言われたくらいだ。

『シンクロを超えるシンクロ。アルティメットシンクロが生まれたから』

オレとフィネーマが付き合いだしてから最初の戦闘でオレとフィネーマはシンクロを行った。周は戦力的に行ってアルネウラとシンク

ロすべきと行ったが、オレはフィネーマといっそに戦いたかったから。そして、オレは伝説を作った。

戦闘区域のほぼ半分、半径１ｋｍほどを氷で埋めつくしたから。もちろん、人を氷漬けにしなかったが、その一発でこの戦闘が終わった。相手が降参するということで。

フィネーマの力を超えるシンクロにその日の夜、オレとフィネーマは愛し合いながら話し合った。そして、結論に達した。

本当に危険な時しかシンクロしないと。

『その力はまだ小学生なのに世界を滅ぼせる可能性を持つ力だった。もし、大人になった悠聖が使ったならどうなっていたか、想像できなかったみたいだよ』

確かに、人が魔術師として最高潮になるのは３０歳を超えたくらい。その時点で魔術師としての力は人生で最高になる。そして、徐々に減衰していく。それでも、２０以下の水準になることはまずない。

精霊召喚師の実力も同じだ。３０歳を超えたあたりで止まる。つまり、それまでは成長していくのだ。小学生の実力が低く、『ＧＦ』でもほんの一握りしかいない理由がそれだ。高校生となるとかなり増えてくる。

もし、今の状態でフィネーマとシンクロしたならどうなっていたか全く想像できない。

『だから、そのままにしておくことにした。そして、あの日』

あの日、オレはフィネーマを失った。その時はアルネウラとシンクロをしており、フィネーマは隣で戦っていた。だけど、一部の人が、小学生だったオレや周を快く思わない一部の人が意図的にオレ達を敵の真っただ中に置き去りにした。

オレも周も互いに自分が隠していたことを少しだけ話して危機を乗り越えようとした。でも、敵陣の真っただ中と罠、そして、味方からの敵陣への砲撃がオレ達の行く手を阻んだ。

精神的にも疲労困憊になったオレと周が足を止めた瞬間、最悪の罠が発動した。
大規模殲滅用対人地雷。

その威力はとっさに張った障壁魔術を一瞬で破砕した。この時、オレと周は確実に死んだと思っていた。実際に、孝治達は死んだと思っていたらしく、弔い合戦をしていたという。

でも、結果的にはオレ達は死ななかった。フィネーマが犠牲になることで。

氷魔術の究極形態である変化停止をオレ達全員の体に使ったのだ。

そもそも、氷魔術は氷を溶かさないで放ち、鋭さを保ったまま当てるもの。そして、変化を停止させることでエネルギーを消耗させ消すこと。

それの最終形態はあらゆるエネルギーから守る障壁となる。

フィネーマはそれをオレ達に使い、そして、消し飛んだ。跡形すらなく。

オレの目の前で、オレが助かることに安心した姿のまま。

爆発が止み、オレ達は生き残った。でも、オレはその場から動くことが出来なかった。アルネウラや周は同じように動かない。

アルネウラなんて泣きたかっただろうに、茫然自失としていたオレを守るために必死に戦った。

オレが動けたのはその4時間後。戦闘が終わり、オレ達の遺骸を捜しに来た孝治達がオレ達を見つけ、駆け寄ってきてからだ。

その時、オレはようやく涙を流すことが出来た。そして、大声で泣いた。アルネウラと一緒に。

フィネーマという大切な人を失ったのだから。

『あの日、精霊界では大きく論争が起きたよ。でも、それを鎮めたのが雷属性以外のトップ。全員が共通して計画の停止を求めた。だから、私はここにいられる』

アルネウラはフィネーマを失った悲しみと、もしかしたら、オレから離されるかもしれない恐怖の二つがあった。はずだ。なのに、アルネウラはオレのそばでずっとオレを励ましてくれた。

あの日から二ヶ月ほど、オレはずっと病院にいた。フィネーマを失った悲しみから心の一部が壊れたのか、生きる意味がわからず一日中ベッドの上にいた。

そんなオレのそばにずっといてくれたのがアルネウラだ。

『私は世界を救うために生まれた最初の実験体。でも、悠聖のそばにいる時だけはそんなことを感じなかった。悠聖だからかな。それをみんなに話したことがあったから。でも、私が悠聖のそばにいられる理由がもう一つあるんだ』

もしかしたら、フィネーマと同じようにリミットを解除でもしたのだろうか。

『悠聖が私を心の底から頼りにしてくれたおかげでシンクロ率が上限を越えることが出来た。シンクロ率というのは人と精霊との信頼の数値なんだよ。でも、いや、だからかな。ユニゾンが現れたのは。私とフィネーマの計画が凍結したから』

アルネウラはそこで話を切った。

多分、話してはいけないことは未来にある滅びについてのことだろう。精霊界で実際に不幸があったのかもしれない。

『これが、私が詳しい理由だよ。暗部の当事者だからこそ詳しいの。悠聖は、どう思った？　私のこと、変に思った？』

「はぁ」

オレは小さく溜息をついた。溜息をついてアルネウラに近づく。そして、アルネウラを優しく抱きしめた。

アルネウラの顔を見るとかなり驚いている。

「あのな、どうしてそんな大事で些細なことをもっと早く話してく

れなかったんだ」

『大事で些細って矛盾してないかな？』

「そんなことがあるなら教えて欲しい。オレが守りたいから。もう、守られるだけは嫌なんだ。アルネウラ、絶対に離さない。例え、お前が精霊界に連れ戻されるなら、オレはあらゆる手段を使って追いかけてやる。だから、オレのそばにいろ。例え、世界が滅ぶ預言があったとしても、オレはお前や周達と乗り越えてみせる。だから」

オレはアルネウラの顔を見た。アルネウラは小さく頷いて目を瞑る。

こんな状況ですることは一つだけだ。オレはゆっくり顔を近づけた。

「共に戦おう。未来から」

そして、優しく口づけをした。

第百七十一話　白川悠聖　中編（後書き）

次は戦闘、ではなく、悠聖がアルネウラと話している間の他の面々の会話です。

第百七十二話　星喰いを追って（前書き）

普通に書いていたらいつの間にか長くなってしまいました。

第百七十二話　星喰いを追って

浩平は静かにため息をついた。そして、駐在所の中を見渡す。

人質になっていた時に怪我をしたのか、和樹が七葉に手当てされていた。そして、委員長が都の隣で何かを話している。

リースは必死に真柴昭三の行方を追い、冬華、俊輔、琴美、俊也の四人は固まって何かを話している。

そんな中で浩平は一人でフレヴァングの簡易整備を行っていた。標準装置とフレヴァング専用の六発の特殊弾。

特殊弾と言っても豆粒ほどの大きさでフレヴァングの内部に存在する小型のリボルバーに装填し、フレヴァングの機能をつかさどるコアに向かって魔力を叩き込むもの。それにより、威力を大幅に上げることが出来る。

ただ、実戦じゃ使わない。使うのは本当に稀なとある状況だけだ。

浩平は特殊弾をリボルバーに戻し、カバーを付けた。そして、外に向けてフレヴァングを構える。

「はあ」

「浩平、大丈夫？」

リースがオレに話しかけてくる。竜言語魔法を使うために集中力を使っているはずなのに。

「大丈夫、ってわけじゃないな。俺っていつも孝治やらアルトさんやら一緒にいたからさ。悠聖の実力は疑問視してしないけど、この状況はヤバいからな」

瞬間移動（ショートジャンプ）で飛ぶとしても敵の真っただ中。そんな中での戦闘は浩平も体験したことがある。そう言う状況はたいてい一人だけだったから。

浩平の射撃は味方がいればいるほど使いにくい。

「射撃の精密性が今回のキーポイントのはずだからな。俺の射撃で真柴昭三を捕まえられればいいけど」

「もしかして」

「ああ」

浩平は自分の机の中から箱を取り出した。そして、その箱を開けると丸められたベルトが入っている。まるでガンマンの様な大量の弾が並んで付けられている。

そのベルトを取り出して浩平は腰に巻きつけた。

「特殊鉄鋼弾。対犯罪者用の物理弾をさらに特殊にしたもの」

ちなみに、ベルトに取り付けられている特殊鉄鋼弾の数は約３０ほど。ちなみに、値段はこれだけで一億ほどかかっている。もちろん、全財産を使って買ったもの、ではない。周と孝治がもしもの時に浩平に渡したのだ。もちろん、二人のポケットマネー＋部隊費。とは

言っても、鉄鋼弾のみの値段でそれなので、特殊鉄鋼弾となるといくらかかるかわからない。

だが、威力はけた違いに高い。簡単に言うなら、由姫の本気一撃ほどの威力。

だけど、一撃で人を殺す可能性だってある。だから、これを使うのは本当に凶悪犯のみ。

「もしもの時のためにって二週間ほど前にもらってな。今回はこれを使う」

「人を殺すことだってある。浩平は」

「ああ。でも、俺は殺さない。周だって言うだろ。誰かを犠牲にしてはいけない。それは敵も同じだ。でも、少々痛い目にはあってもらう。それが、俺のやり方だ」

浩平だって何も考えていないわけじゃない。むしろ、考えているからこそ、この場でこれを持っていく。それが最善だと判断したから。

リースは小さく頷いて特殊鉄鋼弾の一つを抜き、手に取った。そして、気づく。

「これ、オーダーメイド」

「どういうことだ？」

「鉄鋼弾の特殊弾と言っていたけど、これは最初から全てオーダーメイド。誰か職人の作品。誰かはわからない」

オーダーメイドということはバカにならないくらい高いものになる。この場合だと一体いくらするか想像すらつかない。それほどの値段。

「なら、大切に扱わないとな。リース、真柴昭三の位置は？」

「ちょっと待って」

リースが位置を探る。そして、頷いた。

「４ｋｍ地点近くで動きを止めている。場所は、市街から離れているから戦闘しても文句はない」

リースが見ている地図を浩平は見た。そして、真柴昭三のいる位置と、市街の位置を見比べて小さく頷く。

「近くに障害物は少ないが、山はさほど遠くない、か。こういう土地によく大規模殲滅用対人地雷はあるよな。狙撃手（スナイパー）も隠れやすい。注意しないと。リース、そろそろみんなを呼ぼう」

「わかった」

リースが歩き出す。その姿を見ながら浩平はフレヴァングを虚空に戻した。

「どこまでいけるかわからない。でも、やってみるしかない。周がいなくても、俺達がいるんだ」

七葉が小さく呆れながら腕にできた小さな傷口に消毒液を付けて包帯を巻く。

傷はそれほど深いわけではなく、でも、治療術の初歩では対処できないぐらいは深かった。だから、七葉が簡単な手当てをしたのだ。

地味にこの中で一番治癒魔術が上手い。とは言っても、『ＧＦ』地域部隊所属の治療兵に数えられる高校生程度だが。

「無茶したね。大人しく手を挙げていればよかったのに」

七葉が呆れたように言った。実際は呆れているのだが、和樹の耳にはそう聞こえていた。

「まあな。でもよ、優月ちゃんは悠聖に助けを求めていた。だから、その代わりになればって思って。結果は惨敗だったけど」

「そうだね。史上類を見ないレベルでの惨敗だね」

「そこまで言わなくても」

七葉が冬華と一緒に駐在所の入り口から入った時、そこでは和樹一人が倒れていた。まあ、怪我は大したことがなかったが。

相手の実力はさほど言うものではなく、七葉の実力でも簡単に捕縛出来でもいる。ちなみに、真柴一派は外にまとめて縛られている。一応、『ＥＳ』の人達に連絡しているので来たら厳重に拘束されるだろう。

「七葉ちゃんも行くのか？」

「うん。私はこれでも第７６移動隊の隊員なんだよ。一番弱いけど」

七葉が軽く笑いながら言う。でも、その言葉を聞いた和樹の中では一つの疑問が思い浮かんでいた。いつもの七葉と違う言葉に聞こえたから。そして、その疑問を七葉に尋ねる。

「どうして、そんなに悲しそうに言うんだ？」

その言葉に七葉の動きが止まる。そして、信じられないという風に和樹を見ていた。

そして、そのまま視線を逸らす。和樹に言いたいことを雄弁と語っているように。

それを見ていた和樹は小さくため息をついてポケットからとあるものを取り出す。

「持ってけ。俺のお守りだ」

和樹が七葉にお守りを渡した。それは古びたお守り。長年大事にされていたことがよくわかるお守りだった。ただ、お守りにしては少し重い。

「何があるか俺も知らないけどさ、悲しそうに言うなよ。心配しちゃうだろ。だから、お守りだ。絶対返せよ。いいな、絶対にな」

和樹が笑みを浮かべながら七葉にむかって指を突き出しながら言う。

それを見た七葉小さく笑った。ちょっと嬉しかったのか瞳の近くに何かが光った気がするが、和樹は何も言わなかった。

和樹にとって、七葉のこの笑顔が見れただけでも十分だったから。

「七葉。そろそろ時間」

そんな二人の間にリースが入ってきた。そして、リースは和樹の顔を見ずに七葉に向かって言っていた。

「うん。わかったよ。悠兄は？」

「呼んできてくれる？」

「はーい」

その言葉に七葉が頷いて駐在所の外に向かって行く。その姿を見送ったリースは小さく息を吐いた。

「望めば、叶うかも」

消えそうなほど小さな声。でも、その声は和樹の耳にしっかり届いていた。

「リースちゃんは一体」

「祈りは魔法の始まり。あなたが望む未来があるなら、それが可能な未来なら、願って。それが、魔法の始まりだから」

そして、リースは歩き出す。その言葉に和樹は意味を考えていた。

そして、望みをすぐに作る。

今の望み。それは、また、七葉の元気な笑顔が見れたいいなというものだったから。

「大丈夫、ですか？」

椅子に座ったまま深呼吸していた都に周達から委員長と呼ばれている少女が話しかけた。

ちなみに、名前は鈴木花子。

あまりに平凡すぎて誰からもそんな名前で呼ばれたことがない特殊な少女でもあった。というか、小学校の頃から委員長をずっとやっていたらしく、常に委員長をも呼ばれていた。

「周様のクラスの委員長さん、ですよね。えっと、何がですか？」

「都築さんが緊張してように見えたので」

「そう、ですね。私は初仕事ですから。第７６移動隊の庇護下に入って、第７６移動隊で仕事をすることが許可されてからの最初の任務」

最初の任務でかなりハードな仕事だった。

基本的に、『ＧＦ』に入ったばかりの任務初心者は簡単な仕事か大先輩に任務につれて行ってもらうかのどちらかになる。もちろん、そんな状況で実力を発揮しろというのも無理だ。

周や孝治、音姫だって最初の任務は緊張しすぎて思うような結果が出ていないというのも事実としてある。今では笑い話にしているが、最初の任務でここまでの規模だと緊張しない方がおかしい。

任務内容は真柴昭三の拘束。そして、優月を助け出すこと。

優月を助け出すことは悠聖がやるかもしれない。でも、真柴昭三という裏の実力者を相手にするということは、周達が最初に思っていた狭間の鬼の任務ランクであるランクＡクラス。

孝治や音姫のような化け物みたいな戦闘能力を持ったメンバーがいないため、かなり辛い任務になっている。

「私が皆さんの足手まといにならないか心配で」

「都築さんも普通ですよね。私、みんなの前で堂々と話す都築さんに憧れていたんです。どこか人間離れをした人だって」

その言葉に都の心に影が差す。自分の出生を知っているからこそ、人間離れをしたという言葉にとても敏感だったから。でも、次の委員長の言葉によってその影が晴れる。

「身近なんだなって思えました。都築さんもやっぱり普通なんだなって。あっ、失礼ですよね」

「いえ。そういう風に言われたのは初めてです。幾分か気が晴れま

した。ありがとうございます」

「い、いえいえ。わ、私なんかに礼を言わないでください。それに、ここで都築さんを励まさないと海道君に怒られるような気がしたんです」

その言葉に都はキョトンとした。どういう意味か全く分からなかったからだ。

「周様にですか？　周様はあまり怒らないと思うのですが」

「いえ。多分ですけど、海道君は内に溜めているんじゃないかと思っています。見ていたらわかるんです。海道君は由姫さん、亜紗さん、都築さんと話している時は本当に自分を出しているなって。それが少し羨ましくて。そう思っていたら、都築さんが緊張している姿に海道君ならどうするかって思って」

「あなたは、周様のことが好きなのですか？」

その言葉に委員長はまっすぐ頷いた。

「はい。友達として」

それは力強いまでの断言だった。そして、都に向かって笑みを浮かべる。

「海道君は私からすれば雲の上のような存在です。でも、そんな彼と共に歩もうとするなら彼と同じ高みにいなければなりません。でも、海道君はどこか普通を捨てているような感じです。だから、私は友達として海道君のことが好きです。普通を見せてあげたいから。

ずっと、海道君の中で生きているような自分を見せてあげたいから」

都は直感的に委員長の感情を悟っていた。

おそらく、委員長は異性として周のことが好きなはずだ。でも、周と共にいようとすれば、周と同じ高みかそれに近づかなければならない。それをすることは周にとって迷惑のかかることだから。

だから、別の方法で周の心の中で残り続けるような人になりたいと思った。都はそう解釈した。

「都築さんは違います。だから、絶対に帰ってきてください。じゃないと、私は本気で怒ります。海道君よりも怒ります。この世にいる誰よりも怒ります。都築さんは海道君の傍にいる権利を手に入れたのですから」

「わかりました。必ず帰ってきます。無傷というのは難しいかもしれませんが、必ず。私は怒られるのが嫌いなので」

「都。そろそろ」

話がちょうど区切りのいいところに来た時、リースが二人の間に入った。そして、都に語りかける。

「わかりました。えっと、お名前は」

「鈴木花子です」

「鈴木さん。また、後で」

「はい」

二人が笑顔で別れる。それを見ていたリースは小さく頷いた。

「あなたも、願って」

「えっ？」

「願いや望みは魔法の始まり。望みがあるから人が頑張れる。都もあなたとの約束があるから頑張れる。だから、願って。都の無事を」

「はい。わかりました」

リースが委員長から離れる。その後ろ姿を見ながら委員長は祈った。都の無事を。

「わかり、ました」

俊也の落ち込んだ声に冬華が安心したように息を吐く。ちなみに、近くにいる琴美や俊輔はただ黙って冬華の言葉を待っていた。

「ここでみんなを守れるのはあなたしかいないわ。悠聖も私も精霊召喚師としては高ランクだから心配しないで。それよりも、ここをまた獲られたら私達はちゃんと戦えないかもしれない」

多分、誰もが動揺しながら戦うことになるだろう。そうなれば全滅

するのは必須だ。だから、冬華は俊也を説得してついてこないように言ったのだ。

確かに、俊也の実力はかなり高い。ユニゾンを使わなくても最上級精霊が四体いるのは悠聖に次ぐ戦力だと思ってもいい。そして。精霊召喚師が一番活躍するフィールドが防衛戦だから。

「悠聖にも迷惑がかかる。こんなことを言うのは酷いかもしれないけど、悠聖の、悠聖達の目標のためにがまんしなさい。代わりに、必ずみんなで戻ってくるから」

「可能なのか？」

冬華の言葉に疑い深く俊輔が尋ねた。それに冬華は自信を持って頷く。

「私と悠聖は氷属性の精霊を持つ精霊召喚師の中で一、二を争う実力者よ。信じなさい。あー、でも、理由がいるかしら」

「氷属性の精霊は物質の変化に長けた精霊。温度変化、速度変化、空間変化と様々な応用が利き、一番の能力は時間変化まで出来る。ですよね、冬華さん」

「正解よ」

ちなみに、生身の人間でも頑張ればかなりのランクに行くが、時間変化だけは到達することが出来ない。周の空間隔離は氷属性ではなく天空属性の度合いが強いし。

悠聖が俊也と戦った時、あらゆる攻撃が届かなかったのはその能力

があるからでもある。都と違い、飛んでくる攻撃の動きを変化させて動きはしないがエネルギーは撒き散らすという風に設定したからだ。もし、このことを知っているなら対抗策がいくつも生まれるのだが。

あの時は俊也がそのことを精霊に効かなかったからなんの対策も出来ていなかった。

「私と悠聖なら攻撃の大半を防御できる。でも、限界があるわ。だから、ここにいて欲しいの。ちゃんと、安全だと私達に信じさせて」

「わかりました。僕の力は師匠にはまだまだですけど、みんなと一緒に守ります。守らせてください」

「冬華って相手の意志を丸めこむのが上手いわね」

その言葉を聞いた冬華が頬をぴくっと動かす。それに気付いた俊輔が俊也の手を取って少しだけ後ろに下がらせた。俊也はわけもわからず首を傾げている。

二人の間に飛び散る花火。

「私は、正論を述べたまでよ。足手まといを連れて行くほどの余裕はないわ」

「正論？　本音と言えばどうかしら？　彼を連れて行ったらカバーする余裕がないのでしょ？　だから、彼の意志を丸めこんだ」

「なにがいいたいのかしら？」

冬華の頬がさらに動く。それを見た琴美は余裕の笑顔で言い切った。

「チキン野郎ね」

空気が完全に固まる。俊也はそわそわしているし、俊輔は近くのいすに座って口笛を吹いている。そもそも、二人に力づくで止めると言う選択肢はない。

「この、私がチキン？」

「ええ。守れないから連れて行かないのでしょ？　守る自信がないから。『ＥＳ』と聞いて呆れるわ」

「言いたい放題言うわね。わかったわ。あなたは私の最大の天敵ね。今ここで」

「時間」

その瞬間、その言葉と共に冬華の視界が３６０度回転した。横を向くとリースが呆れたようにため息をついている。

どうやらリースが振り回したらしい。かなりの力加減がひつようなのに楽々としていた。

「わかったわ。後で覚えておきなさい」

冬華が有名な捨て台詞を吐いて外に向かって歩いていく。その姿を見ていた琴美が勝ち誇ったように笑みを浮かべる。

もちろん、それを見ているリースは呆れたようにため息をついてい

た。

「相変わらず」

「これくらい言っておいた方がいいのよ。絶対に帰ってきてくれるから」

「そう」

リースは琴美の行動がわかっていたからなにも言わない。琴美は小さく笑った。

「あなたも、無事でいなさいよ。都を泣かせたら承知しないんだから」

「大丈夫。私は生きて帰る。浩平と一緒に」

「ごちそうさま」

琴美はそう言ってリースの頭を撫でた。リースは嫌がることなくそれを受け入れる。

「必ずよ。約束しなさい。私と」

「約束する」

二人は小指を合わせた。そして、無言で何回か振ってから離す。二人にはそれで十分だった。

「ふう」

悠聖は小さく息を吐いた。そして、周囲を見渡すと、すぐそこには全員が集まっていた。もう、そんな時か。

『あらら。私達が一番最後だったんだ。悠聖』

アルネウラに悠聖が頷く。そして、不敵に笑みを浮かべた。

「行こうぜ。優月を助けに」

悠聖の言葉に誰もが無言でうなずく。でも、誰もが笑みを浮かべていた。必ず成功すると信じているから。

そして、都が杖を構える。

「皆さん。私につかまってください。これから、ピンポイントに瞬間移動（ショートジャンプ）を行います」

都の言葉に全員が都の体に触れた。

悠聖と浩平は右肩に。冬華とリースは左肩。七葉は前から抱きついている。悠聖の手はアルネウラの手を握って、浩平とリースが手を繋いでいる。冬華の残る手は七葉と繋がれていた。

誰もが戦闘服に着替えている。悠聖と冬華以外が黒と白のコントラストが特徴的な服。悠聖は真っ青な服で、冬華は透き通るような水

色。

「行きます」

そして、視界が変わった。

真っ先に動いたのが悠聖。すでに召喚しているディアボルガとルカの位置を確認しながらアルネウラの手をしっかり握り、周囲を見渡す。

前方にいるのは真柴昭三。真柴昭三が目を見開いて驚いている。

「大いなる証を刻む者。猛れ、母なる大地より。グラウ・ラゴス！
純粋な欠片を示す者。来よ、清らかな水辺を映す鏡より。レクサス！　赤き力を統べる者。出でよ、灼熱の地獄より。イグニス！
雷雲より生まれし者。響け、遥か彼方の空より。ライガ！」

すかさず四体の精霊を召喚する。エルフィンだけはとある理由からまだ出さない。

悠聖が四体の精霊を召喚すると同時に相手がようやく動き出した。でも、悠聖達は止まらない。

「行くぞ！」

悠聖の言葉に全員が動き出した。そして、戦いが始まる。中東とは遠く離れた地で起きる同じ敵との戦いが。

第百七十二話　星喰いを追って（後書き）

リースがどうしてみんなにあんなことを言っていたのか。その理由はもう少し後で語られます。

第百七十三話　白川悠聖　後編（前書き）

予定していたものとは少し違うことに。

第百七十三話　白川悠聖　後編

『ふはははははっ。我が名はイグニス。灼熱の精霊だ！』

戦場で起きる爆発。その中をかいくぐってオレは突撃していた。隣にアルネウラを連れて。

浩平はリースと一緒に突撃してくる敵を吹っ飛ばし、七葉と冬華はその二人に向かってくる攻撃を全て弾いている。都さんはフォトンランサーを出しながら相手の牽制だ。

どうやら、オレが真柴昭三と話すのを待ってくれているらしい。

「瞬間移動（ショートジャンプ）ですね。まさか、狭間の巫女にそのような力があるとは」

真柴昭三が驚いていたのはほんの少しの時間だった。あっという間に現状を把握して動いている。でも、こっちの方が動きが早い。

「レクサス！　シンクロ！」

『ええ』

すかさずレクサスとシンクロを行う。とは言っても、それほど長くやるわけじゃない。レクサスの武器を取り出すことなく空中に大量の水玉を発生させた。そして、レクサスとのシンクロを解く。

オレは真柴昭三を睨みつけた。

「ここが年貢の納め時だ、真柴昭三」

「この状況でですか？」

真柴昭三が周囲を見渡す。確かに、今の状況はどちらかと言えばオレ達が囲まれていると言う方だろう。というか、確実にそうとしか見えない。でも、それが普通の戦力ならの話だ。

オレはアルネウラの手を握り締めた。

「『シンクロ』」

オレとアルネウラの声が重なる。そして、アルネウラがオレの中に入ってきた。いつもとは違う感覚。いつもとは違うアルネウラの存在を強く感じる状況。

オレはアルネウラの武器でもあるチャクラムを取り出して真柴昭三に向ける。囲まれているが、いや、むしろ、囲まれている状況だからこそ、この技が出来る。乱戦なら確実にできない。

「あなた達が何をしようかわかりませんが。こちらには最強の精霊がいるのですよ？　なのに、戦おうと言うのは愚かと言いませんか？」

「愚か？　お前はバカか？」

オレがそう返すと真柴昭三はまるで間抜けみたいな顔をしていた。オレの言った意味がわからないのだろう。そもそも、そんなことを言われて止まれる状況でもない。

それに、最強という言葉には一つの疑問があるし。

「最強の精霊がいたからって、その精霊召喚師が最強なわけじゃないだろ？　例え、ユニゾンという精霊の意志に反したことを行うものがあっても、それで最強の精霊召喚師を名乗れるわけがない。それをお前達は勘違いしている」

「最強の精霊さえあればいいのです。最強という名前だけね。そもそも、精霊というのは使い捨ての道具ですから」

「・・・・・お前にとって、精霊とはなんだ？」

オレは冷静になるよう自分に言い聞かせながら尋ねた。アルネウラは無言でいてくれる。

こういう時は本当にありがたい。

「道具、と言いませんでしたか？」

「わかった」

オレは小さく息を吐いた。そして、チャクラムを握り締める。

アルネウラ、あれをやる。

オレは心の中でアルネウラの語りかける。それにアルネウラは頷いてくれた。

『うん。私は、悠聖と一緒だよ』

心の中に響くアルネウラの言葉にオレは声を上げた。

「アルティメットシンクロ！」

シンクロの最終形態。シンクロ率１００％にするためのもの。術者と精霊が心を通わせることによってこの段かに入ることが出来る。精霊にとっては術者が死ねば精霊自身も死ぬ状況になるため、これには一蓮托生の覚悟が必要だ。

例えば、ぜっと一緒にいることを誓い合った恋人達の様に。

「今ここで、お前を拘束する！」

「出来ますか？　この状況で」

周囲を見渡せばすでに敵は武装を完全に整えている。いつでも戦闘準備は万端だろう。

浩平がゆっくりオレに近づいてきた。

「いきなりまずいな」

浩平も上手く射撃で敵をいなしているが、それも限界がある。だから、訪ねてきたのだろう。

オレは小さく頷いた。

「行くぞ！」

そして、オレはチャクラムを投げる。方向はオレ達の周囲。最強の精霊召喚師の能力を思い知らせるために。

轟音。

その時の表現はこれが一番だろう。周囲に浮かばせていた水玉がチャクラムに触れて破砕する。飛び散る水滴。だけど、それは空中で静止していた。

氷属性のアルティメットシンクロのみに出来る強力、いや、凶悪な技。

「眠ってろ！」

水滴がまるで弾丸のように敵に向かって放たれた。そして、敵に当たった瞬間にバタバタと倒れて行く。

事情を知らないものが見ていたら完全に目を疑う光景だろう。実際に、周囲を見渡しても冬華くらいしか理解していないし。

レクサスとシンクロした時に出現させた水玉は当たれば一撃で眠りに誘うことが出来る強力な魔力を込めた水。それをチャクラムで破砕し、動きの変化を完全に停止させることで飛び散った水滴内部に反発していくエネルギーが溜まる。それに、一か所だけ変化を解けば、弾丸の様に飛ぶ水が相手にあたり、一撃で眠らせると言うわけだ。

ちなみに、普通にしようとしてもまずできない。というか、不可能。

「バカな。この数を一撃で」

オレは戻ってきたチャクラムを手に取った。そして、ニヤリと笑み

を浮かべる。

「さあ、優月を返してもらおうか」

「へえ、奪って置いて返せか。横暴だね。『ＧＦ』」

オレはその声を聞いて笑みを浮かべたままだった。この場にいてくれることがわかって十分だから。

オレは笑みを隠そうとしても隠しきれず、諦めて笑みを浮かべたまま言葉を返す。

「ここにいいたか。クラスメートＡ」

オレの言葉に周囲が固まった。もちろん、優月をさらったクラスメートも。

「で、でめえ。俺の名前を覚えていないのか！？」

「全く」

そもそも興味なんてなかったし。オレの興味は女の、

『悠聖。少しストップ』

アルネウラの言葉にオレはその後を自嘲して考えることを止める。今は優月を助けることだけだ。

「悠聖。それだけは本当にひどいと思うぜ」

「私の悠聖がそんなんだったなんて」

「悠兄ってバカ？」

「最低」

「最低ですね」

味方から飛んでくる様々な言葉。どれを聞いても完全に四面楚歌にしかなっていない。

「だあーっ、もう。そもそも、お前は勝手に優月の意志と関係なく契約したんだろうが！　なのに、奪っただの返してもらっただの言う権利なんてない！」

「契約した以上、俺の精霊だ」

「だから」

オレはクラスメートＡを睨みつけた。

「お前の思っているほど精霊は小さな存在じゃねえ！　よくわかったよ。お前は一度完全にやられなきゃ性根は直らないタイプだ。今ここで、お前を倒す！」

「できるかな。この俺に！」

オレはチャクラムを投げつけた。クラスメートＡはそれを回避しようと動く。だけど、オレは当てるために投げたわけじゃない。

オレはすかさず魔術陣を作り出した。

「ちょっと付き合ってもらうぜ！」

魔術が発動する。それと同時にオレとクラスメートＡを周囲の空間から切り離した。

隔離魔術と呼ばれる氷属性の中でも最上級に位置する強力な魔術だ。文字通り、その空間を隔離するものだが、範囲がとても小さく、なおかつ周囲の人は内部に手出しすることが出来ず、外も同様に手だしする事が出来ない。

だからこそ、オレはこれを張った。

「これは、何だ？」

「このことも知らないのか？　最強の精霊を持っているというのは嘘みたいだな」

オレは笑みを浮かべる。

こういう時って本当に本性が出るよな。誰かを助けるために行動する時に笑みが浮かぶオレの本性が。

「最強の精霊召喚師白川悠聖。行くぞ！」

そして、オレは地面を蹴った。

第百七十三話　白川悠聖　後編（後書き）

水滴飛ばしは普通にできません。周でも不可能です。冬華でも不可能です。

第百七十四話　知らない未来

冬華が一歩踏み出しながら握りしめた刀を鞘から振り抜いた。

飛んできた魔術を正確に斬り裂いて消滅させる。そのままさらに踏み出しながら振り抜いた刀を戻して術者を斬り裂いた。斬り裂いたとは言っても、『ＧＦ』ので戦闘デバイスを使っているため気絶させただけだが。

「数、多いわね」

斬り込んできた相手の剣を弾きながら素早く回転して刀の柄で相手のこめかみを打ち抜く。

「しゃあねえだろ。ここは敵のど真ん中だ。手の内全てさらけ出しても十分なくらいにな！」

浩平がフレヴァングを右手で撃ちながら左手から魔力で編まれた剣を振る。それに近づいてきていた相手の剣詩が後ろに下がった。その瞬間に浩平はフレヴァングを両手で構えて引き金を引く。

フレヴァングは正確に額を撃っていた。

「大体」

そして、すかさず竜言語魔法を発動させる浩平。光弾が敵を撃ち抜いていく。

「戦闘の要のはずの悠聖が他の場所で戦闘してんだ。今は、俺達が

全員と相手するしかないっしょ。にしても」

浩平は素早くベルトから特殊鉄鋼弾を一つ抜き放った。そして、流れる動作でフレヴァングの銃身に詰め、相手に向かって放つ。

だが、それも相手は予想していたのか幾重もの防御魔術を展開した。しかし、特殊鉄鋼弾にそれは通じない。防御魔術を貫通し、相手にぶつかった瞬間、特殊な魔力粒子を撒き散らして周囲一帯の敵を昏倒させる。

「どこからこんな数がいるんだか」

「多分、周囲に散っていた人達が戻っていると思う」

その屍を越えて駆けてきた斧使いにリースは容赦なく光弾を叩きつけた。そして、すかさず竜言語の魔術書を全て取り出し、その中の一冊を手にとってページを開く。

膨大な量の水流が攻め込んできた敵兵をさらって流していく。だが、それにも負けず突進してきた相手に水流から形取られたドラゴンが襲いかかった。

一瞬にしてさらわれていく。

「でも、この数は問題じゃない」

リースは飛んできた魔術の群れに防御魔法を展開する。魔術は防御魔法の前に一瞬で散って行った。竜言語魔法の防御魔法は防御魔術とは違って桁違いの防御力を持つ。障壁魔術以上に。

「問題は、真柴昭三を逃げさせないようにすることのはずよ」

冬華が飛んできた八つの炎弾に手を向ける。すると、炎弾は動きを止め、そして、飛んできた方向に向かって飛ぶ。

その先にいる術者に炎弾が直撃して吹き飛んだ。

「だな」

浩平が真柴昭三の位置を見るとほとんど動いていない。この状況では逃げた方がいいのだが、最強の精霊と呼ぶ優月と都がここにいる以上、全てが奪われたなら全ての苦労が水の泡と化すと思っているのだろう。

だから、動けない。

だから、真柴昭三が見限るより早く拘束しないといけない。かなり命がけになるかもしれないが。

「一つ、質問していいかな？」

七葉が槍を頸線に解き、それを使って魔術や攻撃を弾きつつ、そして、相手の行動を阻害させながら口を開いた。

「どうして会話しながら戦闘出来るのかな？」

頸線の網をくぐり抜けた魔力の矢が七葉の頬にかすり、一筋の血が流れる。

確かに、浩平や冬華は普通に話しながら戦闘していた。しかも、戦

闘能力はほとんど落ちていない。
都は黙々と戦っているのに。
フォトンランサーを展開しながら時折、瞬間移動（ショートジャンプ）を繰り返しつつ敵を上手く攪乱（かくらん）させている。
どれだけ練習したかわからなかいが、飛んでくる攻撃にもフォトンランサーで相殺していた。
「そういや、いつの間にか体力がついているよな」
フレヴァングを上に放り投げ、浩平が二丁拳銃を取り出して周囲に乱射する。だが、そのほとんどは防御魔術に受け止められた。
だが、その防御魔術に光の塊が直撃して吹き飛ばす。
リースは小さく溜息をついた。
「私も思う。多分、訓練」
「あれね。あれはあれでないと思ったわ」
冬華も第７６移動隊の訓練にはしたことがある。はっきり言って、訓練という名前では確実におかしい。
言うなら強化合宿。
七葉は一番実力が低いから基礎の部分しかしていないため、その辛さは体験したことがない。

「あれに慣れれば並みの戦場じゃ息は切れなくなるわね。ところで」

冬華は大量に放たれた魔力の矢を空中で静止させ、上空に向かって無理やり方向を変える。

「悠聖の精霊はすごいわね」

まるで他人事のような言葉。だが、それはこの人数が完全に囲まれている状況で生きている理由を示す言葉でもあった。

悠聖の精霊達は少し離れた所で戦っている。

フロントはセイバー・ルカとグラウ・ラゴスにイグニス。センターにレクサス。バックにはディアボルガとライガ。

六体の精霊が上手く駆け回り、戦場の一角を完全に支配している。指揮官であるレクサスによって。

多分、精霊達がいなければさらに危険なことになっていただろう。

「フェンリル！　あなたも暴れなさい！」

冬華の言葉と共にフェンリルが現れる。召喚した気配はない。だが、フェンリルは瞬間で現れていた。

周囲の敵が動揺する。だが、その動揺の間にフェンリルは飛びかかっていた。

「さすがに頼もしいぜ。最上級精霊が三体もいればな」

浩平は笑みを浮かべてフレヴァングの引き金を引く。

完全に囲んでいるはずなのに浩平達のモチベーションが上がっていっていることに気づいた真柴昭三が怒りに顔を歪めている。

それを見た浩平はニヤリと笑みを浮かべた。

「自分の思い通りに行かないことがそんなにも悔しいか？」

「貴様！」

真柴昭三が杖を取り出す。だが、その瞬間を浩平は狙っていた。

特殊鉄鋼弾をベルトから指で弾き、芸術的な軌道でフレヴァングの中に収め引き金を引く。

真柴昭三の近くにいた男達が準備していたように障壁魔術を展開するが、特殊鉄鋼弾はそれすらも貫通し、真柴昭三の杖に突き刺さった。

基本的に、魔力を込めたものにさらなる魔力を入れると二つの反応が起きる。一つは攻撃強化。そして、もう一つが爆発。

真柴昭三の杖が小さな爆発を起こした。特殊鉄鋼弾によって膨大な魔力が叩き込まれたからだ。

「なっ」

真柴昭三がすかさず杖を取り落とす。

「へっ、次はお前の体に風穴開けてやるよ」

「貴様、言わせておけば！」

真柴昭三は気づいていない。自分の話し方が変わっていることに。
それは、真柴昭三側の兵が動揺する原因ともなる。

その瞬間に冬華は刀を地面に突き刺した。

「オリジン・クラスター！」

戦場の至る所から氷柱が生まれていく。それに気づいた敵が冬華の魔術を止めようと動き出す。

しかし、それをフェンリルの吐き出されたアイスブレスが動きを止める。下手に当たっても一撃で死ぬレベルの威力だからだ。

だが、その一瞬があればいい。

氷柱が砕けた。そして、周囲にいる敵に破片が直撃する。

氷属性最強の魔術と言われるオリジンがある。それの劣化拡散型がオリジン・クラスターだ。

一瞬の動揺をついた攻撃に真柴昭三側が大きく動揺した。

冬華が刀を引き抜く。このまま攻撃すれば勝てそうだから。今の冬華の攻撃で敵の大半が倒れてもいる。

しかし、冬華は前に進むことが出来なかった。七葉に突き飛ばされたのだ。驚く冬華の視界に瞬間移動（ショートジャンプ）によって距離をつめてきた槍使いが入ってきた。そして、一直線に槍を突く。

冬華のいた場所に。そして、七葉がいる場所に。

槍は七葉の左胸を捉えていた。

七葉の体が吹き飛ばされて、腰から地面に叩きつけられる。

「かはっ」

「七葉！」

冬華は素早く地面を踏みしめて刀を槍使いに叩きつける。もちろん、力任せに。

突かれた場所は左胸。瞬間移動（ショートジャンプ）による加速も使った突き。そして、防御魔術すら発動していない。

冬華は七葉に駆け寄った。

「七葉ッ！」

「大丈夫、だよ。あくっ」

駆け寄った冬華に七葉は気丈に笑みを浮かべるがすぐに痛みで顔を歪めた。

すぐに治療しようと胸を見るが、左胸から血は全く流れていない。

「七葉、どこが痛いの？」

思わずそう尋ねていた。

「腰、だよ。あれ？」

七葉自身もおかしいことに気づいたらしい。左胸を突かれたはずなのに七葉が痛がっているのは腰だった。

「こんな未来、知らないよ」

七葉の声はとても小さく、少し混乱している冬華の耳には聞こえていなかった。

「ちっ」

そんな中、浩平が舌打ちをする。何故なら、真柴昭三が動き出したからだ。まるで、逃げるように。

冬華が立ち上がる。いや、立ち上げられる。立ち上げたのはリース。

「行って」

たった一言だが、リースがこう言った意味を冬華、そして、浩平は気づいていた。

浩平が頷く。

「冬華、都さん。真柴昭三を追おう」

「ええっ」

冬華が刀を握りしめる。その二人を見ながら都は周囲を見渡した。

「ですが、どうやって突破します？」

確かに、浩平達は完全に囲まれている。ここを突破しなければ真柴昭三に追いつけない。

浩平の指が特殊鉄鋼弾にかかった瞬間、浩平達を包囲していた敵にイグニスが飛びかかった。

『行けっ！　ここは我らが食い止める』

『肯定』

ライガの雷が真柴昭三との道を塞ぐ敵を薙ぎ払った。それにより道が出来上がる。

「助かる」

浩平は走り出した。手に取った特殊鉄鋼弾をポケットに戻して真柴昭三を追いかけて走り出す。

その後ろを追いかけてくる冬華と都。

「絶対逃がさねえ。真柴昭三」

浩平がフレヴァングを握りしめた。

第百七十五話　精霊の力（前書き）

優先順位については位が高いほど優先されます。ちなみに、同順位内でもかなりの差はあります。

第百七十五話　精霊の力

オレの体が勢いよく吹き飛ばされる。だが、オレはすぐさま体勢を戻して地面に着地した。

「最強という割には弱いな！」

クラスメートＡの持つ薙刀がオレねいた地面を砕いていた。オレはその前にさらに後ろに下がっている。

はっきり言って相性が最悪だ。

隔離結界は場所が極めて小さい。だけど、それだけだったら幾らでも戦い方があっただろう。

だが、一番の問題が優月の精霊としての力。こちらが放つものを全て無効化している。

術者殺し（マナシンク）よりも凶悪な魔術殺し（マジックキャンセラー）。

はっきり言うならゼロ距離から発動する魔術以外効かない。ゼロ距離まで効かないなら魔術殺し（マジックキャンセラー）自体が発動しない。

ちょっとした空間があるからこそ、魔力を使用する魔術が使用出来る。

『悠聖、大丈夫？』

大丈夫だ。

オレはアルネウラに言葉を返す。でも、状況が悪いのは事実だ。

クラスメートAはまだ傷が無いがオレはすでに何ヶ所も怪我をしている。特に、左肩に出来た切り傷。これだけはかなり深い。

「泥棒にはお似合いの状況だな。もうボロボロだろ？　楽になれよ」

「まるで三下みたいな言葉だな。いや、お前は三下だな。圧倒的な力の差がないのにそんな台詞を吐く奴がいると思うか？　三下以外に」

オレの記憶の中ではいない。いないからこそ、こうやって挑発する。

「どうやらお前の目は節穴みたいだな。この俺の力がわかっていないようだな。このあらゆる魔術が効かないものを使えば、オレは最強だ。最強の精霊召喚師だ」

オレは呆れたように溜息をついた。こいつも根本的なことから間違っている。というか、完全に三下だ。

まさか、こんな奴と本当に出会うとは。

「俺は最強だ。この最強の力でお前を倒す」

「はあっ」

オレはまた溜息をついた。こいつは色々な意味でバカだ。

「あのな、精霊の力が優月だけなわけないだろ。精霊の力はシンク

ロした全員が使えるんだよ」

「どんな力にせよ、俺の力には適わない。何故なら、魔術が効かないのだからな」

まあ、確かに魔術殺し（マジックキャンセラー）は強い。無茶苦茶強い。はっきり言うなら精霊召喚師の天敵と言ってもいいだろう。

というか、精霊自体が魔力に近いから、下手すれば消される。

だけど、魔術殺し（マジックキャンセラー）にはとある弱点がある。ゼロ距離攻撃が効くのもあるが、もう一つある。

優月の精霊としての力は魔術殺し（マジックキャンセラー）。それに対抗出来るのは同じ精霊の力。

オレはチャクラムを投げつけた。

魔力によって操作するチャクラムは魔術殺し（マジックキャンセラー）によって落ちる。

それを知っているクラスメートAは憐れみの視線をオレに向けて、チャクラムが左腕を微かに斬り裂いた。

「がっ」

クラスメートAが斬られた左腕を押さえてうずくまる。オレは戻ってきたチャクラムを掴み取る。

「お前！　何をした！」

クラスメートAが泣きながらオレに向かって喚き叫ぶ。多分、斬られることなんて全くなかったんだろうな。

「流動停止（フリーズ）」

名前は短いが、能力という点では究極に近い防御力と強力な攻撃が出来る。

能力は簡単に言って動きの変化を操作する。

精霊の力でなくても可能だが、アルネウラの精霊としての力はそれを超える。

「バカな。魔術殺し（マジックキャンセラー）が何故効かない！」

「そこに驚かなかったらオレが驚いていたよ。魔術には優先順位が存在する」

オレがそう言うとクラスメートAは言った意味がわからなかったのかポカンとしていた。

まあ、優先順位なんてほとんど使わないから仕方ない。うん、仕方ない。

「魔術殺し（マジックキャンセラー）は第一級能力。つまり、優先順位が極めて高い奴だ」

それは魔術殺し（マジックキャンセラー）に驚いてちまちま出だししていて計ったものだ。だから、確実に合っている。

まあ、優先順位を探すのは精霊召喚師としては必須だからな。特に、精霊が特殊能力系の力を持っている時は。

優先順位を守らなければ発動したところで他の魔術が優先されて効果自体が発動しない。つまり、無駄撃ちとなる。

だから、精霊召喚師は普通にこういうことをする。まあ、優先順位関係なく魔力任せに発動するなら話は変わってくるけど。

「対するアルネウラの力が特一級。まあ、魔術殺し（マジックキャンセラー）とよく似た技だ。そっちが魔力を消し去るなら、こっちは魔力を止める」

魔力そのものの動きが止まれば魔術は形を保つことが出来ず消え去っていく。

魔術殺し（マジックキャンセラー）とは相性が最悪に悪いけど。

「そ、それで勝ったつもりか。俺はまだ負けていない。俺に勝ちたかったら殺すんだな。さもなくば、お前は負ける」

「そうか？　まあ、お前はオレが優月を心配して攻撃に消極的となる希望的観測をするなら話は変わってくるよな。だけど、オレは優月を助ける。お前みたいな三下はお呼びじゃないっての」

クラスメートAが地面を蹴った。荒々しく怒りに満ちた突撃。オレはそれを待っていた。

「シンクロ解除！」

ここからは間違い一つで負ける。だけど、絶対成功するという奇妙

な感覚はあった。

「儚き風を運ぶ者。奏でよ、聡明たる歌声を。エルフィン！」

魔術殺し(マジックキャンセラー)の範囲に入るより早くエルフィンを呼び出す。そして、すかさず叫んだ。

「シンクロ！」

事前の打ち合わせ通りにシンクロを行う。そして、オレも地面を蹴った。対するクラスメートAは薙刀を振り上げている。

迫る振り下ろされた薙刀をギリギリで回避し、オレはクラスメートAの懐に飛び込んだ。

魔術殺し(マジックキャンセラー)の範囲外である内側に。

「お前の心の音を聞かせろ！」

それはエルフィンだからこそ出来る能力。吟遊詩人になりたいらしい（さっき聞いた）エルフィンが語った能力。

エルフィンの精霊としての力は精神感応(クリアマインド)と言った。

第百七十五話　精霊の力（後書き）

周の持つ精神感応とエルフィンの精神感応（クリアマインド）は違います。精神感応（クリアマインド）は相手の心の中に入って会話するだけの能力です。ちなみに、優先順位は最低クラスです。

第百七十六話　優月の心

オレは一人、真っ白な空間の中に立っていた。一人というのがすごく久しぶりだと思ってしまう。

だって、いつもアルネウラやレクサス達がいたのだから。

エルフィンの精神感応（クリアマインド）によって優月の心の中に入れたはずだ。それにしても、エルフィンの力はかなりのものだ。

いくら心を塞いでいても、強制的に開いて中に入る。まあ、優先順位の低さからほとんど発動出来ないけど。

「優月」

オレは優月の名前を呼んだ。だけど、周囲からの返答はない。話せない状況にいるのか、はたまた、

「まあ、今は捜すしかないか」

オレは歩き出した。でも、常に真っ白な空間を歩いて程なく、オレの気力がほとんど無くなった。

だって、風景すら変わらないからオレが本当に動いているのかわからなくなるじゃないか。まあ、足を止めて諦めることにするけど。

「もしかして、ここは記憶を失った優月の中なのか？」

そう思った瞬間、風景が現れた。いや、風景というより遊び道具か。

真っ白な床に散らばっている遊び道具。小さな子供が遊ぶような道具ばかりだ。心理学者じゃないから何を意味するか全くわからないけど。

それが無造作に放置されている。

オレはその中からクレヨンの箱を見つけ、懐かしく思いながら蓋を開けた。だが、そこには何も入っていない。

「どういうことだ？」

ここには何か入っていてもいいはずなのに何も入っていない。まるで、中のものを知らないかのように。

「もしかして」

オレは箱の中を開けいく。箱の中身はない。そして、八つ目を開けて確信した。

「これは、優月が望んでも手に入らなかったものか？」

箱の中身がないというのは優月の記憶の中でその中身を知らないというものである。つまり、優月はこれらのものを望んでいながら手に入れることが出来なかった。

事情はわからない。でも、何らかの形で抑圧されていたというのは確かなはずだ。

「どうして、抑圧されていたんだ？」

まるで、このようなことは必要ないとでも言うかのように。もしかしたら、

「優月。お前は、世界の滅びについて何か知っているのか」

その言葉にオレの感覚が震えを捕えた。空間自体が震えたわけでも、空間内の空気が震えたわけでもない。多分、優月の心が揺れ動いたから。

オレは言葉を続ける。

「アルネウラから全部聞いた。アルネウラ自身が世界の滅びに対抗するために生まれた存在だと言うことも。もしかして、お前は精霊の中でも上位に位置するものか？」

『答えなければ、なりませんか？』

その声は指令が話すような優月の声だった。人の発声の仕方とは違う、少し印象に残る声。

「いや、答えなくてもいいさ」

オレはそう言って満足そうに笑った。優月の心を知ることが出来たから。

優月がどんな精霊だっていい。オレの大切な奴であることには変わりはない。

『どうして、ここに？』

「ちょっと、優月と話をしたくてな」

『助けに来たわけじゃないの？』

まるで、何かを求めるような声。でも、今はすぐに答えるわけにはいかない。

「助けてほしいのか？」

『！　迷惑、だよ。もう、付きまとわないで』

やっぱりこう答えるよな。まあ、最初から姿を現さない時点でわかってはいた。

オレはあくまで精霊召喚師として精霊の意志を優先する。だから、精霊の意志を無視して連れて帰るなんてしたくない。

「だから、話に来たんだ。まあ、そんなに長くはかからない。言うなら、未来の話だ」

『未来？　でも、未来は決まっている。変えることはできない』

「それは預言書の内容だろ？」

預言書の内容は変えることが出来ない。でも、オレが第７６移動隊にいたからこそ思えるものがある。多分、周だって同じように思えるだろう。

狭間の鬼をめぐる戦いで貴族派が言ったという世界の滅亡。そして、

今回の真柴・結城両家の行動。多分、結城家の方も世界の滅亡から世界を救うためだろう。真柴昭三は確かにそう言っていた。やり方はどうであれ、世界の滅亡をさせるわけにはいかないと思っているのも事実だ。

「オレは思うんだ。精霊だけじゃない。人界にもたくさん未来の滅亡を知っている人がいるんじゃないかって。どういう理由かわからないさ。世界が滅びる方法とか、いつ滅びるとか。それがわかっているからこそ、誰もが力を手に入れようと動いている。今の世界はそんな感じだ」

『全てがですか？』

「ああ」

周も確実に気付いている。というか、あいつみたいに怖いほど頭の回る奴がオレの気付いたことに気づかないわけがない。だから、周は絶対だ。

多分、これからの世界はそういう風に動いていく。オレのバカな知識でもそれがわかる。

「未来を。滅亡の未来ではなく、新たな未来を求めて、どの勢力も知恵を振り絞って動いている。多分、オレ達第７６移動隊が作られた理由もそうだろうな。同年代の実力者を集めてその部隊を特殊部隊として鍛え上げる。世界でも若手の採用があるのはそれが理由だろうな。この年代は、日本が極めて強い若手が多かっただけだと思うし」

世界を見ればオレ以上の強さを持つ１０代なんていくらでもいる。

オレは精霊召喚師としては最強ではあるが、単体ではそこまで強くない。多分、精霊召喚無しというルールだと七葉にも負けるだろう。

そして、周だって。あいつは前線指揮官として最高のパラメータを持っているはずだ。１０代の中ではかなり上の強さだけど。

オレらの中でダントツに低い被弾率。的中率の高い戦術予測。支援魔術の厚さ。そして、自身の行動範囲。

どれもが正規部隊で通用するレベルの能力。もしかしたら、第７６移動隊は周を輝かせるために作られた部隊かもしれない。

「周が求める望み。誰も失わず全てを守る、夢。オレはそれに協力したいんだ。未来に何が起きるか知ったからでもない。誰かを守るためには戦わないといけないから。確かに、戦わない奴だっているさ。力の無い奴は声高に叫ぶしかない。でも、オレはそれを否定しない。声を出すことで行動しているからだ。だったら、滅亡を望まないことでみんなを結束させればいい。世界が一つになれば、滅亡は回避できるかもしれない」

『無理だよ。絶対に無理。人は、魔界の住人や天界の住人と仲が悪い。どうやって一つになるの？　世界はそんなに簡単じゃない！』

「知ってるさ！　知っている。そんなこと当の昔に。簡単だったら今頃誰もが仲良しだ。でもな、そうじゃないからオレみたいな奴が戦っている。世界を守ろうと。簡単じゃないからなんだよ」

世界がそんなにも簡単だったなら、オレは第７６移動隊のみんなや精霊達に絶対に合わなかった。周とかは除くけど、確実に会わない。

簡単じゃないからこそ、オレ達の様な普通を外れた子供が戦っている。

「簡単じゃないから、みんなで力を合わせるしかないんだ。力を合わせて、望む道を求めて行く。その道に山や谷はある。必ず。でも、そんなことで諦めていたら人間は何も前に進めないんだよ！」

どんなに険しい山でも諦めた瞬間にそれは終わる。諦めないからこそ、世界に名を轟かせる人達がいる。だからこそ、オレ達は未来を信じて戦っている。

「オレ達の最終地点がどこにあるかわからない。でも、オレ達は決めたんだ。自分達の手でそうすることを。選択することで決めたんだ」

『選択』

優月が小さく呟いた。多分、優月は今まで自ら選択することはなかったのだろう。そして、他人の言われるがままに行動していた。だから、今もこの状態でいる。

全てを選択しないということは、生きているとは言わない。

「決めろ。決めるのは全てお前だ。他人に責任を押し付けるな。自分の選択で自分の進むべき道を見つけろ。それが、生きているってことなんだよ」

『悠聖、私は』

「お前がどうしたいか言え。それがお前の望みなら、オレは手伝っ

てやる。全力で、最後まで」

選択すると言うのは自分の足で歩くこと。そこにようやく力が生まれる。

「私は、悠聖と一緒にいたい！」

その言葉と共に優月がオレの胸の中に飛び込んできた。そして、泣きじゃくる。

本当は辛かったのだろう。何があったかわからないけど、ここまで優月を追い詰めたものがあるに違いない。この戦いが終わったらそいつに真正面から言ってやる。

優月に全てを選ばせろと。

「優月を守るよ。だから」

オレは足元に魔術陣を出現させた。そして、優月の頬を優しく撫でる。

「自分の意志で傍にいろ」

そして、オレはゆっくり優月にキスをした。

第百七十六話　優月の心（後書き）

なんか悠聖が女たらしのように見えてきたのは作者だけでしょうか？

第百七十七話　ユニゾンの脅威

オレ達は現実世界に帰還した。もちろん、優月の手をしっかり握ったまま。ユニゾンを強制解除できたということは、優月と契約を結べたと言うことだ。

クラスメートAが膝を折ってそのまま地面につく。

「何をした」

クラスメートAが青ざめた顔でオレに尋ねてくる。オレは優月の手を取って距離を取りながらクラスメートAを見る。

まるで何かに脅えているかのようにその体は震えていた。ここまで行くとどこか異常だ。

「何をしたんだ！」

「優月が選んだ。お前の精霊ではなく、オレの精霊として正式に契約を結んだんだよ」

「なっ」

クラスメートAが絶句する。まあ、契約の上書きなんてほとんど不可能に近い状況だからな。

やり方はいくつかあるが、最低条件として、お互いに相手のことを深く思っていなければならない。そして、何らかの接触が必要。手を握ると言うレベルではなく、キスをするという風な接触だ。

それをしなければ契約の上書きが不可能だ。

「俺の、俺の精霊を、返せ！」

「相手のことを深く考えない奴は最低だぜ」

オレはそう言ってクラスメートＡに背中を向けた。アルネウラが笑顔で向かってくる。

「悠聖」

そして、アルネウラはオレに跳びかかり、全力で頬を殴られた。

オレはそのまま地面に打ち付けられる。

『優月になんてことをするんだよ。優月、大丈夫？』

顔を上げると、そこには優月をしっかり抱きしめるアルネウラの姿があった。まあ、契約を上書きしたということはキスしたということだからこいつには普通にわかるよな。うん、確実にわかるはずだ。

まあ、軽い嫉妬だろうと思うけど。

「大丈夫、だけど。悠聖は？」

「心配してくれるのか。アルネウラと違って優月は優しいな」

オレは立ち上がって優月の頭をなでる。優月は満面の笑みでえへへっと笑っていた。その光景を見ているアルネウラの顔がどんどん不

機嫌になっていくが、気にしない、気にしない。
本当に気にしない。気にしたら確実に死ぬ。
『悠聖？　今ここで死ぬ？』
「嫉妬か？　アルネウラも可愛いな」
オレがそう言ってアルネウラの頭を撫でようとした瞬間、何か嫌な気配が背中を襲った。
オレは二人を後ろにやりながら振り返る。そこには、複数枚の精霊召喚符を握るクラスメートＡの姿があった。
「絶対殺す。殺してやる。白川悠聖！　お前だけは、殺してやる！」
クラスメートＡが精霊召喚符を発動させる。オレは隔離結界を破壊して後ろに下がった。
周囲を素早く見渡せば、精霊達が固まっている。その中央にいるのは倒れた七葉。
「っく。アルネウラ、七葉の様子を優月と一緒に」
『わかった』
アルネウラが優月の手を取って走り出す。オレはクラスメートＡを注視した。精霊の同時召喚。それは、下手をすれば最悪の結末が起きる。

いくつもの召喚陣が重なり合い、一つの大きな召喚陣が出来上がった瞬間、オレは周囲に叫んでいた。

「下がれ！　死にたくない奴は下がれ！」

その言葉に真っ先に反応したのがオレの精霊達だった。

アルネウラが優月を抱え、オレを含めて距離を取る。それをリースが追いかけてきて敵も動き出す。

「悠聖、何が？」

何が起きるかわからないリースがオレの横を飛びながら尋ねてきた。オレは一回だけ振り返る。

クラスメートAを黒い触手のようなものがまとわりついていた。いや、何本かは突き刺さっている。しかし、その顔に浮かんでいるのは悦楽の表情。

「邪神の降臨だよ。精霊召喚陣は数十組み合わせることで邪神を召喚する。術者の命と一緒にな。精霊召喚符は通常召喚と違うから危惧していたが」

案の定起きてしまった。はっきり言うなら最悪に近い状況から最悪な状況に踏み込んだ。

今いる数で対抗出来る可能性は不明。

「どうして知っているの？」

リースの疑問は最もだろう。オレは小さく頷いてディアボルガを指差した。

「教えてくれた」

このことは出来るだけ誰にも教えないようにとも言われている。そもそも、精霊召喚を複数することは術者への危険が高い。精霊が一斉に牙を向けば死ぬからだ。実際に精霊が牙を向くことがある。

だから、普通は一対一で行うのが普通だ。

しかし、邪神の召喚方法が複数の召喚を組み合わせるということは一部にしか知られていない。

どうして一部なのかというと、過去に復活した神が同じやり方で復活しているからだ。どこかで漏れたと考えるのが妥当だ。

しかも、召喚される邪神は基本的にその土地に何らかの関係があるものが多い。だから、復活させたい邪神の場所で行えばいい。

「全員、準備しておけよ。今回の敵は今までとは違う。嫌な予感が確かなら」

オレは身構えた。今ここに、あの時最前線で戦っていた奴らは一人もいない。

「狭間の鬼がやって来る」

そして、周囲が闇に包まれる。次の瞬間には空から明るい光が降り注いでいた。

空を見上げると、そこにあるのは満月。強制的に周囲を夜にする力。
通称、狭間の夜。

『久しいな。だが、まだ完全ではないか』

クラスメートAがいた場所には狭間の鬼がいた。周達が全力を出してようやく互角になったという怪物。

背中に冷や汗が流れるのがわかった。

第百七十八話　狭間の夜、再び（前書き）

短くなりました。

第百七十八話　狭間の夜、再び

浩平の指が特殊鉄鋼弾にかかりベルトから特殊鉄鋼弾が弾かれる。そして、フレヴァングを目の前にいる真柴昭三に向けた。

「終わりだ。もう、お前を守る兵はいない」

真柴昭三が周囲を見渡すが、そこにいるのは都と冬華の姿。それ以外に誰かの姿は見当たらない。

「傭兵共め。私の崇高なる理想を見捨てるというのか！？」

「崇高？　あなた馬鹿じゃないの？」

冬華が真っ正面から反論する。

「世界が滅亡しようがなんだろうが、崇高な理想と言う甘い言葉でみんなをたぶらかしているだけでしょ？　世界はそんなにも甘くない！」

「甘い言葉ではない！　最強の精霊。そして、狭間の力があれば世界を滅亡から救える」

「たった二人の力で世界が救えるなら、周様が必ず救います」

世界はたった二人の力で変わるものじゃない。過去にいた英雄だった少年と英雄になった少女は二人の力ではなく、たくさんの人の力を借りていた。

だから、二人で変えられるほど甘いものじゃない。

「世界を救うのは一人ではありません。確かに、英雄が世界を救います。でも、英雄一人が世界を救ったわけではなく、英雄達の仲間と一緒に世界を救ったのです」

「私の計算が確かなら、世界は救える。これは事実だ。私は事実を」

「例え事実でも、そんな不確かなものには賛同できねえよ。それに、お前は自分が苦しまずに他人が苦しむのを見ているだけだ。そんな奴に世界を救うなんて言葉を吐く資格はねえ！」

自分が経験、体験したからこそ、その時にようやく口を出すことが出来る。そして、世界を救うことを叫べるのは、必死で戦っていた奴だけだ。

別に戦闘で戦っているというわけじゃない。宿命や運命など不確かなものから地位や立場など戦闘とは関係のないものまで、必死に戦っているからこそ言える。

「世界を救うのは声高に叫ぶ奴らじゃない。世界を救うために動いた奴らだ。時雨総長だって善知鳥特務隊長だって、世界を救うために戦っていた。お前は戦っているのかよ？　世界を救うということは今の世界の流れに逆らうってことだ。だったら、お前は何かに逆らっていたのかよ？」

「ふ、ふざけるな！」

真柴昭三が浩平に飛びかかる。浩平は冷静にフレヴァングを引き金を引いた。

特殊鉄鋼弾が真柴昭三に直撃して昏倒させる。

浩平は小さく息を吐いた。

「ミッションコンプリートってな」

そう言って拘束竜言語魔法を発動させる。こういうのもあるから竜言語魔法は便利だ。

フレヴァングを戻した浩平に都と冬華が近づいてくる。

「終わったわね。まあ、残存勢力に気をつけないといけないけど」

「それなら大丈夫だろ。真柴昭三が倒れたんだ。敵に戦う意志はねえだろ？」

「気を抜かない方がいいと思いますよ」

この時ばかり、三人は完全に安心していた。もちろん、周囲への警戒は全く緩めていない。

でも、今回の元凶でもある真柴昭三捕まえたのだから戦いは一区切りだと完全に考えていた。

そう、この瞬間までは。

世界に闇が覆う。太陽が差していたはずなのに世界は一瞬にして暗闇に染まっていた。

いや、暗闇の中に存在する光の塊。月だ。満月の月が彼らを照らしている。

それは1ヶ月近く前の光景と酷似していた。

「狭間の、儀式」

都の口から漏れた言葉に汗を一筋流している冬華が首を横に振った。

「儀式ではないわ。狭間の夜。狭間の鬼のホームグラウンドよ」

第百七十八話　狭間の夜、再び（後書き）

次の話は悠聖＆リースＶＳ狭間の鬼です。懐かしいキャラも登場する予定。

第百七十九話　違和感と再来

オレは素早く後ろに下がった。それと同時にオレのいた場所に鬼の腕が突き刺さる。回避出来なかったら確実に死んでいた。

体勢をしっかり立て直し、拳を握りしめる。

「さすが周隊長を苦しませた奴だな。桁が違う」

『余裕だな』

イグニスの声が頭の中で響く。オレは地面を蹴って鬼に殴りかかった。そして、真っ正面から拳を打ち合う。

普通なら死ぬ威力。だが、イグニスのシンクロしているオレからすれば普通に痛いだけだ。

『しかし、我が力でも同等かそれ以下か』

珍しいな。イグニスが自分の力を誇らないのは。くっ。

オレは飛んできた鬼の拳をギリギリで回避するが、姿勢を崩して大きく後ろに下がった。

今の戦場にいるのはオレとリース。

精霊達はイグニスを残して安全な場所に七葉を送っている最中だ。

『小癪な。まだ刃向かうか』

鬼の言葉にオレは中指を立てて挑発する。

「ああ、刃向かうさ。オレ達はお前をこの世に出させるわけにはいかないんでね。それに、お前は今、完全に復活したわけじゃないだろ」

オレは鬼の攻撃を弾き、力任せに殴り飛ばした。

このレベルで周や孝治が苦労するわけがない。苦労するとしたらオレや浩平のような奴らだ。

『その仕草を見ると我が宿敵を思い出すな』

その鬼の言葉にオレは驚いていた。何故なら懐かしそうな顔をしたからだ。そして、遠くの空を見つめている。

『完全復活した我を殴り飛ばした男。もう、生きてはいまいが、奴の血はこの世界にいる』

こいつは何が言いたいんだ?

『貴様は何故、精霊と共にいる?』

次にきた言葉はオレに対する質問だった。オレは訝しむように眉をひそめる。それは、オレ達が戦った狭間の鬼とは考えられないセリフ。

あの時は鬼とよく似た存在である精霊を真っ先に殺そうとしてきた。まあ、周達の方が厄介だったからか周達が来てから狙われなかった

けど。

「理由？　お前に言って何か変わるのか？」

『変わらない。だが、我が聞きたいだけだ』

オレは小さく息を吸って拳を握りしめた。そして、しっかり身構えて鬼の行動に備える。

「最初は力のためだった。でも、最初に契約した精霊達と一緒にいる内にそいつらのことを大切に思うようになった。そして、恋をした。オレはオレの精霊達を大事な仲間で家族だ」

『そうか』

狭間の鬼の気配が変わる。だんだん力が溜まっていっているような気がする。気を抜けばやられる。

『ならば、容赦なく殺しにいける』

『来るぞ！』

イグニスの言葉にオレは身構えた。そして、一挙一動を見逃さないように神経を尖らせて狭間の鬼を見る。

そして、狭間の鬼の体が動いた。オレはすかさず後ろに下がる。だけど、オレの体に吸い込まれるように。

「がっ」

オレの体に鬼の拳が突き刺さり吹き飛ばされた。そのまま近くの木に叩きつけられる。

今の、速いという次元を越えていた。こんな奴と周や孝治は戦っていたのかよ。

『ほう、まだ抗うか』

立ち上がろうとしたオレに向かって狭間の鬼が向かってくる。

イグニスとのシンクロて力やらスタミナやら上がっているはずなんだけどな。全く効かなかった。

「抗うに決まっているだろ。諦めたらそこで終わりだ。だから、オレは諦めない。それがオレの決めた道だ！」

出来る限り強がって聞こえるように言う。狭間の夜に気づいて冬華達が戻ってきたならいいけど、それは難しいだろう。

だったら、オレはまだ戦うだけだ。

「イグニス、いけるか？」

『我が誰だと知って言っているのか？』

イグニスの言葉にオレは少しだけ笑みを浮かべる。

オレは指輪を触った。指輪型のデバイスでフィネーマからの贈り物。

「一撃だ」

速度は向こうが上。力も向こうが上。防御力ですら向こうが上。反応速度ももしかしたら向こうが上かもしれない。

例えそうでも、戦う隙はある。

『愚かな』

狭間の鬼がそう言った瞬間、爆発的な加速で前に出た。実際に爆発させた爆風で加速しているだけだ。

速度なら周を超えるはずだ。オレはそのまま狭間の鬼に肘を下から上に向かって振り上げた。

だが、そこに狭間の鬼の姿は無かった。

『一瞬の油断をつくか。さすがだな』

「シンクロ解除！」

オレはシンクロを解除しながら後ろに跳んだ。しかし、回避出来るような距離じゃない。

速度はおかしい。この速度なら、周は確実に負けるはずなのに。一体どうやって。

そして、オレの体に絶望的な速度で鬼の腕が吸い込まれた。

それは確実に即死するような攻撃。だけど、その腕がオレの体を貫くことは無かった。

狭間の鬼の腕によってオレは殴り飛ばされる。だが、狭間の鬼の腕は空中に現れた魔術陣から飛び出す鎖によって捕まえられていた。

「くっ、何が」

痛みをこらえて体を起こす。ちょうど目の前に誰かがいた。服装は第７６移動隊が着る戦闘服ではない。

一体誰が来たんだ？

「間に合ったッスね」

さの言葉にオレは目をパチパチとまばたきしていた。目の前の光景が信じられないからだ。

だって、どうしてここに『雷帝』の刹那がいるのかわからなかった。

「せっちゃん。今のはせっちゃんと違うから」

そして、刹那の隣にいる人物にも驚く。炎熱蝶々を背中に宿し、いつでも砲撃出来る準備にしている元『炎帝』であるエレノア。

そして、その隣にいるベリエとアリエ。

「やっぱり、人間だけじゃ頼りないわね。私達が直々に手伝ってあげるわ」

「べ、ベリエちゃん？　私達はそんな理由で」

「いいの。こういう状況で恩を売っておけば後々楽になるから」

それをオレの前で言うのか？

オレは小さく溜息をついた。誰が呼んだかわからないけどこれなら戦える。

「悠聖！　って、あれ？　どうなってんの？」

戻ってきた浩平が不思議そうに周囲を見渡す、まあ、そうなるわな。

「狭間の鬼が復活していることだけは確かですね」

「都は下がっていて」

どうやら向こうは全員無事らしい。真柴昭三を逃がした可能性は考えない。

「さあ、全力で行くぞ」

オレはニヤリと笑みを浮かべて身構えた。

第百八十話　ソラ

狭間の鬼が動く。だが、その前を塞ぐように刹那が紫電をまとませて襲いかかる。

刹那の武器はナイフであり、最速の属性である雷属性の加速でヒット&アウェイを行う珍しい戦い方だった。

鬼は刹那に向かって腕を振るが、それより速く刹那が動き、鬼の体に傷を付ける。だが、その傷はほとんど見えない。

「硬いッスね」

鬼が刹那に肘を叩きつけようとするが、刹那は大きく後ろに下がった。その瞬間に灼熱の塊が狭間の鬼に直撃して吹き飛ばす。

『小癪な！』

鬼が立ち上がった。そして、立ち上がった鬼が見たのは大量の銃口。

鬼の周囲に展開していた銃が一斉にエネルギーを吐き出し、まるで、小石を雨あられのぶつけられたダメージが通る。

しかし、鬼は倒れない。

『我が力の前にひれ伏せ！』

「させないわよ！」

対暴徒鎮圧用魔術（ダウンバースト）を放とうとした鬼の体に氷がかすかに突き刺さる。
しかし、鬼はそのままダウンバーストを放った。

だが、そのダウンバーストは広がらない。まるで、止められた空間内部で反響する音のごとく、自ら放ったダウンバーストの衝撃が鬼の体を揺さぶる。

『貴様ら！』

戦場は完全に悠聖達の有利だった。鬼は必死に動こうとするが、刹那か都の作るフォトンランサーによって押し戻される。

強引に動こうとすればベリエとアリエによって障壁（障壁魔術とは違う物理属性によるただの壁）が作り出され、浩平の射撃によって撃ち落とされる。

その全てを指揮しているのは悠聖だった。

そもそも、精霊召喚師はシンクロしていない時は精霊に指示を出して戦う。だから、他人を指揮するのは悠聖は得意だった。

「都さん、お願いします。浩平は都さんの援護。エレノアは収束準備。ベリエとアリエは障壁展開。都さんは下がって、浩平、前に。刹那は浩平の援護を受けつつ道を塞いで。ベリエとアリエは刹那の背後に障壁。エレノアは障壁を破壊しないように砲撃。冬華はダウンバーストだけを処理することを警戒して」

いくつもの指示を流れるように指示していく。それは一朝一夕で見につくようなものじゃない。

自ら大量の精霊を率いているからこそ、悠聖は他人を動かすということに慣れていた。

だけど、このままではじり貧であることも理解している。そもそも、この数だけで狭間の鬼をその場から動かせないで攻めまくることはできても、倒すまでは至っていない。それに、疲労がたまってきている。特に都は。

初めての実戦で魔力消費が桁違いのフォトンランサーを何個も展開しながら何百という数を放ち続けているのだから。おそらく、周ですら魔力が枯渇して動けなくなるだろう。

都が崩れれば他も一気に崩れると気づいている。だから、悠聖は小さく頷いた。

「浩平、１０秒間だけ一人で止めてくれるか？　都さんとエレノアは最大出力での攻撃の準備。冬華は都を、刹那はエレノアを守れ。ベリエとアリエは障壁をいくつも展開して道を塞げ！」

全員が悠聖の言葉に従って動き出す。悠聖も次の手が成功しない限り確実に勝ちはないと思っていた。浩平も同じ様に思っている。思っているからこそ、浩平はフレヴァングを構える。

「最大出力。本気の本気行くぜ」

浩平の周囲に浮かびあがる大量の銃口。その全てが狭間の鬼を狙っている。

「くらえ！」

銃口の全てが火を噴いた。エネルギーの嵐が狭間の鬼の体に直撃する。いくら狭間の夜という狭間の鬼にとって最高のフィールドにしていたとしても、この攻撃を受け止めることは不可能だった。

一瞬にして展開した防御魔術を砕かれ体が弄ばれる。

「都さん、エレノア、全力砲撃を」

その言葉と同時に悠聖が魔術陣を展開する。魔術陣の形から支援型の魔術。ただし、効果を及ぼす相手はこの中にいる誰でもない。

「フォトンバスター！」

「プロミネンスレーザー！」

二人の放つ砲撃が狭間の鬼に直撃した。だが、狭間の鬼の体を貫通はしない。でも、これでいくらか装甲は削った自信が悠聖にあった。

そして、降り注ぐエネルギーの柱。

竜言語魔法の中で中規模殲滅竜言語魔法『ジェネシス』。冗談抜きの光の暴風に狭間の鬼は完全に呑みこまれた。

勝った。

その場にいる誰もがそう思った瞬間、エネルギーの柱が消え去った。

何が起きたかわからない。でも、完全に消えたのは確かだった。

狭間の鬼が一直線に動く。一直線に悠聖に向かって。障壁を飛び越

え、刹那の攻撃を気にすることなく突き進み、狭間の鬼は悠聖の目の前まで来ていた。

「悠聖！」

冬華が叫びながら駆ける。でも、確実に間に合わない。

狭間の鬼が腕を振り上げ、振り下ろした。悠聖の展開した防御魔術を刹那で砕き、悠聖の体に腕が迫る。

浩平の射撃も、冬華の攻撃も間に合わない。悠聖は死ぬことを覚悟した。

「させない！」

だが、その間に入ってきた何かが狭間の鬼の腕を吹き飛ばした。そして、巨大な剣が狭間の鬼を殴り飛ばす。

悠聖の目の前に立つ一人の少女。背中から光の翼を出し、手に持つ薙刀を構えている。その姿を見た全員が目を見開いていた。

「ゆ、づき？」

全員を代表して悠聖が尋ねる。少女は振り返り、そして、頷いた。

「うん。優月だよ。これが、精霊としての私の姿。精霊王の娘ソラとしての姿」

精霊王ということは精霊の中でも一番偉い人物。過去何百年の間に精霊王の家系を契約できたのはたった一人しかいないらしく、精霊

王の血族がどのような人物かすら知られていなかった。

悠聖はその話を知っているから信じられないような表情で優月を見ている。そして、背中の翼に手を伸ばした。

悠聖の手に触れる感触。柔らかく滑らかで温かい。

「悠聖！　ちょっとばかしこっちも見てくれ！」

その言葉に悠聖が我に返った。狭間の鬼をめぐる戦いはだいぶ変わっている。

フロントにいるのは刹那とルカ。センターにライガ、エルフィン、浩平が位置し、バックはエレノア、ベリエとアリエにグラウ・ラゴスがついている。

ちなみに、都さんとイグニスはレクサスの治療を受けていた。

浩平がすかさずフレヴァングを三連射する。それは、ルカのわきの下を通り、狭間の鬼の額に突き刺さった。

体勢を崩した鬼に刹那の紫電を纏う斬撃が襲いかかった。それと同時に飛来する射撃。多分、このまま鬼に主導権が移ることはない。

悠聖はそれらを見ながら小さく頷く。

「アルネウラ、いるか？」

『うん。私は常に悠聖のそばにいるよ』

アルネウラはいる。優月もいる。信じている大切な二人の精霊がここにいる。

「ダブルシンクロ、いけるか？」

『悠聖？　私を誰だと思っているのかな？』

悠聖の耳に聞こえる頼もしい声。アルネウラだからこそこういうことが言える。シンクロのために生まれた存在は、シンクロの中でも最も特別な存在。

優月は頷いている。でも、怖いのかその手は震えていた。悠聖は優しくその手を握り締めてあげる。

「優月。いきなりのシンクロでダブルシンクロはないと思うけど、狭間の鬼を倒すために必要なんだ」

ルカの剣が鬼によって弾かれ鬼の腕がルカに迫るが、それより早く大地の壁が間を塞いだ。鬼はすかさず後ろに下がり、灼熱のエネルギーによって体を焼かれ、足元を足ごと凍りつかされる。それを砕こうと動くが、まるで鋼のごとく壊れない。

そこに刹那のナイフが突き刺さり、ライガの紫電と共に流れ込んでいる。

「うん。少し、怖いけど。私は頑張るよ。アルネウラも手を繋いで」

優月の言葉にアルネウラが手を繋ぐ。そして、残った手で悠聖の手を掴んだ。

「「『ダブルシンクロ』」」

三人の声が重なる。それは、信じ合う三人によって出来る新たなシンクロ。アルティメットシンクロを超える力を持つ悠聖の中でも最後の切り札。

二人の精霊と同時にシンクロをするというシンクロの概念をほとんどぶち壊したようなもので、その力は二つの力を同時に使用できる。一体ずつシンクロする複数シンクロのデュアルシンクロとは桁違いの能力を持つと悠聖は信じている。

悠聖の体に二人が入る。それと同時に悠聖の背中から光の翼が現れた。そして、その手に握られているのは薙刀。周囲に浮かぶ四つの氷を纏うチャクラム。

「さあ、行くぞ。二人共。戦いをここで終わらせる！」

第百八十話　ソラ（後書き）

シンクロの種類は三つあります。
一つは平凡なただのシンクロ。
一つはデュアルシンクロと呼ばれる精霊とシンクロした後にさらにシンクロする方法。ただし、この時は精霊の力を一方しか使えない。
悠聖は絶対に使用しないシンクロ。
最後がダブルシンクロ。悠聖とアルネウラ＋他の属性の精霊とで出来るシンクロ。もちろん、悠聖にしか使用できない。
デュアルシンクロが急に出てきたのは悠聖が使うつもりが全くないから考えることすらしていないからです。

第百八十一話　精霊と人（前書き）

ダブルシンクロした悠聖と狭間の鬼が殴り合いをする話です

第百八十一話　精霊と人

狭間の鬼を薙刀で大きく吹き飛ばす。オレはそのまま加速して狭間の鬼を蹴り飛ばした。

今までとは少し違う戦い方。でも、狭間の鬼の動きに完全に対応できる力がある。

『精霊王。また、阻むのか！』

「一体何の話か知らないけどよ！」

鬼の腕を石突で弾き、そのまま勢い良く振って鬼のこめかみを殴りつけた。ぐらつく鬼に薙刀を振り下ろす。

凄まじい反動と共に鬼の腕が落ちる。

鬼は慌てて後ろに下がってオレと距離を取った。すでに戦場はオレと鬼の一騎打ちだ。正確にはオレ、アルネウラ、優月の三人と鬼との戦い。

それはだれも介入出来ないほどの力と力のぶつかりあいだった。

優月の力によって得た無限にも等しい魔力。これにより魔術殺し（マジックキャンセラー）の展開が可能だが、オレはあえてアルネウラの力を最大限にまで使用することにした。

氷属性の精霊としての変化操作。それを体のいたるところに使用しながら攻撃にも使用し、なおかつ狭間の鬼にも使用する。それによ

り、オレは苦手な殴り合いすらもできるようになっていた。

「この世界の外に出すわけにはいかないんだよ！」

薙刀を槍のように構えて全力で突く。だが、それを狭間の鬼はギリギリで避けていた。鬼のこぶしが迫り、何とか受け止めるが大きく吹き飛ばされる。

そして、放たれる指向性のダウンバースト。

オレは迫りくるダウンバーストの塊を全力で魔力を纏わせた薙刀によって空に打ち上げた。懐に入り込んでくる鬼。オレはそれをタックルで迎え撃った。

『貴様に我の何がわかる！』

「わかんねえよ！　ただ、お前はオレ達の天敵だと言うことはわかるさ！」

お互いのこぶしがお互いの顔に入る。でも、オレは後ろに倒れない。

「オレ達は必死に生きている。なのに、お前みたいな奴らにオレ達がやられてたまるかよ！」

『世界の滅びを見たいのか！』

狭間の鬼の拳がオレの頬を捉える。だけど、オレはその腕をしっかり握りしめた。

「関係ねえ！」

そのまま全力で鬼を殴り飛ばす。

「世界が滅びるとか今は関係ねえよ！　お前の行動に世界の滅びがかかっているとしてもな」

全力での頭突き。それにより、狭間の鬼の体が大きくぐらついた。

「誰かを犠牲にして救われる世界なら糞食らえだ！　世界を救うのに犠牲を出してたまるかよ！」

狭間の鬼の足腰に力がこもる。そう思った瞬間、凄まじい速度で頭突きが襲いかかってきた。普通なら頭がぱっくり割れそうないりょくで。でも、アルネウラの力でオレの体に傷はつかない。気絶しそうになるほど痛いけど。

『犠牲を出して救われる世界があるなら、それこそ我の本望だ！』

「んなことさせるか！」

鬼とお互いに拳がぶつかり合う。オレ達の力はそのまま拮抗していた。

「誰も犠牲になんかしない。全員の笑顔を守ることがオレ達の使命だ。それを邪魔するなら、力づくでも説得して見せる！」

『そんな御伽話に誰がついていく！　力も、聖剣も、伝説も、手に入れる力がないお前はどうやって世界を導くと言うのだ！』

「御伽話でもな」

鬼の攻撃に体が揺らぐ。威力が極めて高く、常に脳振とうを起こしているような状態だ。さすがにそこまでの変化は止められないか。でも、オレは倒れない。

多分、狭間の鬼を倒すには精神的な部分からも倒すしかない。

「諦めずに立ち向かう必要があるんだよ！」

足を払い、薙刀を叩きつける。だが、薙刀は鬼によって掴まれ薙刀ごとオレは投げ飛ばされた。着地したオレに鬼が殴りかかってくる。

オレはその拳を受け止める。

「御伽話でもなんでも諦めたら終わりだ。オレ達はその御伽話を達成できる一番近い位置にいる。だったら、オレ達が頑張ればいいんだろうが！」

『不可能だ。ならば、我がこの世界を徹底的に破壊して』

その瞬間、オレの中で何かがキレた。もしかしたらアルネウラや優月もかもしれない。まるで、大きな怒りが一つとなり、大きな力となったような感覚。

「世界を滅ぼさせはしない」

魔力の流れを一気の掌握し複数個所で流れを変化させ収束させる。

そして、収束させた魔力を鬼に直接たたきつけた。

狭間の鬼の体をいくつもの収束した魔力が貫く。その攻撃によって

鬼の動きは完全に止まっていた。

オレは掌を前に出す。その掌を中心に集まる魔力。周囲に浮かぶ魔力の流れを全て変化させ、一点に収束させる技。思いついたのはさっき。多分、三人で考えついた。

「世界を滅ぼさせてたまるかぁ！」

魔力が収束したものにオレは勢いよく薙刀を叩きつけた。そして、膨大な魔力が狭間の鬼に直撃し大きな爆発が起きる。

『これが、精霊と人の可能性か』

爆風に巻き込まれた瞬間、オレの耳にそんな声が聞こえたような気がして、オレ達も自ら放った攻撃の爆風に呑みこまれた。

第百八十一話　精霊と人（後書き）

ダブルシンクロ中の悠聖の防御力や速度は周を超えますが、周よりも殴り合いは弱いです。

第百八十二話　狙い撃つ（前書き）

タイトル通り浩平のターンです

第百八十二話　狙い撃つ

悠聖の体が地面に叩きつけられる。もちろん、自分の放った収束砲の爆風に巻き込まれたからだ。地面に叩きつけられると同時にアルネウラと優月も分離する。

浩平と冬華が慌てて駆け寄る。

「無事、だよな」

「ええ。全員気絶しているみたいね」

冬華の言葉に遅れて駆け寄ってきた全員が安心したように息を吐いた。

傍目から見ていた最後の砲撃は桁違いの威力を誇っていた。何故なら、爆風が巻き起こった場所には巨大なクレーターが出来上がり、周囲の木々は爆風によって薙ぎ払われているのだから。

至近距離で放ったため、途中で技がキャンセルされてすらこの威力。もし、最後まで放っていたならどうなっていたかわからない。

「なんつうか、オレ達ってここに来てからかなりパワーアップしているよな」

浩平の言葉に隣にいたリースが不思議そうに首を傾げた。多分、この中では浩平以外意味がわからなかったのだろう。

「あ、いや、体力って面もそうだけどさ。俺や悠聖は様々な出会い

から本当に強くなっていると思うんだ。自惚れとかじゃなくて。由姫ちゃんだって強くなった。ここに来てから、狭間の鬼と関わってから大きく変わったなって」

「確かに」

リースが頷く。

リースもここに来て変わった。浩平と出会い、周から弱点を知り、そして、浩平と共に歩くことを誓った。もしかしたら、一番影響を受けたものかもしれない。

「私達も、かな」

「うん。周お兄ちゃんが全力で私達を止めようとした」

「そうね。あんな奴でも頼りになるときがあるのよ」

エレノアやベリエ、アリエの三人もそうだ。最初は貴族派として狭間の鬼の力を利用しようとした。でも、周達に止められ、今ではエレノアは『炎帝』の役から下りている。

「そうなると、私も否定できないか。悠聖や七葉と久しぶりに出会えたし。まあ、悠聖がアルネウラと付き合ったのは誤算だけど」

冬華もここに来てからいろいろあった。『ＥＳ』では出来なかったことがたくさんある。例えば、大好きな人と一緒にいることなど。

「ふふっ。全ては周様のおかげですね」

都が嬉しそうに笑った。

都もみんなと同じだ。周達が来て、周を知り、そして、周に受け入れてもらった。大切なものを失っても、それ以上に大切なものが出来た。

刹那一人仲間はずれなのだが、刹那は空気を読んで隅の方で精霊達を会話をしている。邪魔をするつもりはないのだろう。

「周は不思議な奴だよな。どうして、ここまでみんなを集めるのかわからないくらいだ」

浩平の言葉に誰もが思っている疑問があった。

全ては周がいたから始まった。周がいたから第７６移動隊が結成され、正規部隊所属の五人もそこに加わった。由姫が周に認められ、孝治は浩平を呼び、七葉が悠聖についてくる。

ここではアル・アジフ達『ＥＳ』の穏健派と仲良くしていた。それも全て周がいたから。

「周お兄ちゃんの一番の才能は人を集めることかな？」

アリエの言葉に全員がそちらを振り向いた。アリエはきょろきょろとしてから顔を真っ赤に染める。

「まあ、アリエの言う通りかもね。あいつ、無駄に人との出会いだけはすごいから」

「ベリエは相変わらずツンデレなんだから」

エレノアの言葉と共に空気が静まりかえった。そして、凄まじい速度で顔を赤くしつつ、エレノアに詰め寄る。

「お、おおお、お姉様？　一体何を」

「あれ？　違った？」

「違います。絶対に違います。違いますからね！」

強く否定するベリエの前に誰もが声をあげて笑う。それにベリエの顔がさらに赤くなった。

その時、浩平の視界に何かが映った。浩平はそっての方を振り向く。

「どうかしました？」

それに気付いた都が浩平に尋ねた。

「いや、何だろう。今、何か光ったような」

浩平が周囲を見渡す。確かに、浩平の視界の隅で何かが光ったのだが、それが何か分からない。でも、都は何かを見つけたように杖を構えた。

「来ます」

都のその言葉にその場にいた誰もが動きを止める。そして、膨大なエネルギーが飛び込んできた。

「なっ」

浩平がフレヴァングを、リースが魔法書を構えようとするが間に合わない。間に合ったのは都ただ一人。

「連綿と続く章を断て！」

その言葉と共に膨大なエネルギーぬ向けて杖を叩きつけた。すると、一瞬にしてエネルギーが全て消え去る。

だが、その場にいた全員のショックは隠せないものだった。そもそも、いったいどこから来た攻撃かわからなかったからだ。

浩平がフレヴァングを構える。

「一体どこから」

「わかりません」

都が杖を構えつつ周囲を見渡す。だが、周囲には何も見えない。超人的な視力を持つ浩平だすら見つけることが出来ない。隠れているのか。それとも、

「今の攻撃は戦艦に搭載されているバスターマグナムだよな。そんな砲撃を一体どこから」

浩平は静かに考えだす。自分の知る兵器の使い方を思い出しながら。

「エネルギーを充填できるポイントが少ないはずだぞ。イグジストアストラルが格納されていた場所はただの空間だったし」

つまり、どこかにエネルギーをバスターマグナムにつぎ込む場所があるはずだ。つまり、自ずと場所は限られてくる。

浩平はフレヴァングを構えた。

「フレヴァング、リフレッシュ」

その言葉と共にフレヴァングの機能をつかさどるコアに魔力の弾丸が叩き込まれた。それだけでフレヴァングの形が変わる。通常のライフルから貫通能力を極限まで上げたものである対物ライフルのようなものへ。

浩平が膝立ちになりフレヴァングを構える。そして、目的のものがありそうな場所に向かって銃口を向けた。

もし、またバスターマグナムが撃たれたなら、浩平はその場所を知ることが出来るように。

そして、浩平が予測していた場所から膨大なエネルギーが放たれた。都が動く。

「連綿と続く章を断て！」

放たれたエネルギー弾を都が打ち消した瞬間、浩平の視界に目的のものが見えた。

バスターマグナムの発射台の姿。カモフラージュしていたようだが、バスターマグナムが放たれた瞬間に膨大なエネルギーを使うためカモフラージュに割くエネルギーが足りないと思っていたら案の定だ

った。

だが、問題点として距離が余りに離れすぎている。大体7、８ｋｍと言ったところか。

この世界のライフルが狙える平均距離は大体２ｋｍほど。対物ライフルとなると４ｋｍ。ただし、専用の弾丸などを使用しての話だ。

今回はそれよりも長い距離。浩平は息を整える。そして、引き金に指をかけた。

「狙い撃つ。外すものか」

そして、フレヴァングからエネルギー弾が放たれた。エネルギー弾は浩平の思い描いた軌道を外すことなく向かい、バスターマグナムがある場所に突き刺さる。

一拍遅れての爆発。

それを見た浩平は小さく息を吐いた。

「これで、終わりだな」

第百八十二話　狙い撃つ（後書き）

戦闘はこれで終わり、後は事後処理だけとなりました。ですが、まだ後半の前編は終わっていませんよ。終わるのは周達が狭間市に戻ってきてからです。

第百八十三話　戦いの終結（前書き）

久しぶりの周視点です。
というか、一日に五話投稿はさすがに書くのが辛いですね。

第百八十三話　戦いの終結

オレは小さくため息をついて歩いていた。いや、その場をぐるぐる回っていたというべきか。心配事はただ一つ。悠聖や浩平達が無事かどうか。

あいつらは完全に連絡するのを忘れているだろうしな。もしかしたら、何かあったのかもしれない。『ＧＦ』駐在所の通信機器は妨害がほとんど効かないはずなのに。

まあ、レヴァンティンだと無理だけど。

オレはまた小さくため息をつく。連絡が入ればいいけど。

「落ちついてください」

その時、オレの頭が叩かれた。いつの間にか傍に由姫がいる。いつの間に移動したんだ？

「兄さんは動揺しすぎです。今は待っているだけしかできませんよ」

「わかっているけど、心配で心配で。悠聖と浩平なら大丈夫だと思うんだけどな」

『座る』

オレの目の前にスケッチブックが出される。オレはそれを見て小さくため息をつきながら近くのいすに座り込んだ。

今、オレ達がいるのは『ＥＳ』穏健派本拠地の地下シェルター。オレ達が相手の戦意を喪失させた後、過激派の援軍が遅れてやってきた。結城家の兵はすぐに武器を捨て、音界の兵はルーイとリマがまとめている。

いつの間にかリマの妹でもあるルナもいることに気付いたがオレ達は何も言わなかった。リマが苦笑しながらこっちに向かって頭を下げたからでもあるけど。というか、今までどこにいた？

アル・アジフは穏健派の生き残りをまとめてアリエル・ロワソと共に行動しており、オレ、由姫、亜紗、孝治、中村は著しく疲労の色が濃かったので休ませてもらっている。ちなみに、孝治と中村は仲睦まじく身を寄せ合って眠っている。

孝治のこんな姿は久しぶりだな。

ちなみに、悠人は右腕が折れていたらしく、疲労の色が一番濃かった鈴やソードウルフの急激な変形で体のいたるところを痛めたリリーナと一緒に医務室に運ばれていた。

音姉は第７６移動隊代表として外に出ている。

『心配ないと思う。リースだっているし、周さんも信頼しているよね？』

「信頼はしているさ。でもな、相手が真柴昭三なんだぞ。どんなけ卑怯な手を使ってくるかわからないし。もしかしたら、バスターマグナムを使用するとかいうバカみたいなことをしでかす可能性だってあるし」

後に、本当にバスターマグナムが使用されており、周が数秒固まるのは後日の別の話。

「兄さんは心配性ですね。今は皆さんを信じましょう」

「わかっているけど」

わかってはいるけど心配になってしまう。悠聖や浩平は大丈夫でも、都が大丈夫かどうか。

オレが小さく溜息をついた瞬間、ドアが開いた。そこからアル・アジフとアリエル・ロワソ、そして、音姉がやって来る。

「アル、連絡はあったか？」

オレは思わず立ち上がってアルに詰め寄った。アルが呆れたように溜息をつく。実際に呆れているだろうな。

「落ち着くのじゃ。そして、我らが座るまで待て」

アルにそう言われてオレは渋々椅子に座る。その光景を見ていたアリエル・ロワソが楽しそうに笑った。

亜紗が刀を取り出す。

「いや、やはり、海道周も年相応だなと思ったのだよ。仲間を心配してあたふたする姿をね。海道時雨なら涼しい顔をしているだろうけど」

アリエル・ロワソがそう言うと亜紗は刀を戻した。渋々という感じ

だったが、オレを笑ったわけじゃないとわかったらしい。
多分、今でも理性と戦っているだろうな。
「全員座ったの。では、まずは狭間市のことじゃ」
アルがオレの顔を見て安心しろという風に笑みを浮かべる。
「『ＥＳ』は被害無し。『ＧＦ』は怪我人が二人、いや、精霊を含めて四人じゃな。その内三人は気絶。仲良く眠っているらしいぞ」
それを聞いてオレの体から完全に力が抜けた。安心し過ぎて何もする気になれない。
「アル・アジフさん。もう一人の怪我人は？」
よくよく考えてみるとそうだ。あまりに安心し過ぎて大事なものを忘れていた。
「大丈夫じゃ。槍で突かれた反動で転けて腰を強打しただけじゃからな」
「ちょっと待て」
オレは思わず声に出していた。一瞬、アル・アジフが何を言ったか理解するのが確実に遅れた。
槍で突かれた反動で転けて腰を強打って間抜けにしか見えない。おそらく七葉だろうけど。

「槍で突かれたダメージは？　戦闘服はそこまで硬くないぞ」

「いや、そこまでは来なかったの。一応、病院で精密検査するらしいの」

それなら安心だ。狭間市の病院は普通に設備がいい。七葉もゆっくり休めるだろう。

オレはもう一回安心したように息を吐いて本題を尋ねた。

「結城家は？」

「結城家は降参じゃ。当主が降参したことで兵も全員が武装解除に応じてくれた。今は過激派の面々が見ておる」

「大人しいものだよ。どうやら、あの巨大なフュリアスをみんなで倒したことで戦う理由が失ったらしいね」

アリエル・ロワソの言葉にオレは頷いた。おそらく、アリエル・ロワソの言う通りだろう。

あの巨大なフュリアスはいらないものだとしてオレ達は破壊した。敵味方関係なく一緒に。だから、戦意が無くなって当然だ。

「音界の者達はルーイがまとめておる。まあ、大丈夫じゃろ」

「つまり、戦いは終わった、というべきだな」

オレの言葉にアル・アジフとアリエル・ロワソの二人が頷いた。

結城家側の兵は武装解除に従い、音界の兵はルーイの下に結集しているから大丈夫だろう。

つまり、この地から戦う者はいなくなったというわけだ。そして、遠く離れた狭間市でも戦いが終わった。

「良かった。本当に良かった」

この戦いでたくさんの人が死んだ。でも、今は仲間がみんな生き残ったことに感謝しよう。そして、狭間の地に帰ることを考えよう。

「そうじゃな。アリエル・ロワソ、この場で話したいことがある」

「何かな？」

アル・アジフが息を吸う。そして、

「穏健派は中枢がやられ壊滅じゃ。機能も殆ど出来ぬ。だから、過激派に穏健派を吸収して欲しい。もちろん、我が過激派内部で残った穏健派の指揮をとる」

「ふむ。わかった。過激派や穏健派という名称は無くなることでいいかな。海道周。君はこのことを海道時雨に伝えてもらえるか？」

「別にいいけど」

オレはアルを見た。アルはオレにそばに居させて欲しいと言ったはずだ。それを叶えることも誓った。

オレの視線に気づいたからか、アル・アジフは笑った。今までのよ

うな笑みじゃない。まるで子供のような天真爛漫な笑みだ。

「我はやるべきことが残っておる。それが終わった時、そなたのそばに行く。今は大切な家族を守ることが先じゃ」

地位や居場所という意味だろう。

オレはそれに頷いた。アルも頷く。オレ達にはそれで十分だった。

「クロノス・ガイアに続いてアル・アジフも第７６移動隊に引き抜かれるか。ふむ、さすがは女たらし」

「誰が女たらしだよ！」

オレは思わず叫んで反論した瞬間、地面が揺れた。そこそこ大きい揺れだ。震度は４ほどだろうか。

この地域は案外地震が多いからな。ユーラシア大陸とヨーロッパ大陸の境目にある断層があるし。

それにしても、長い。どうしてここまで長いのかわからないくらい長い。長いということは地震が大きいということだ。

「周」

後ろから声がかかる。こういう時はどうするか、正規部隊に入ったことのある奴ならわかっているからありがたい。

「第７６移動隊は今から非常事態宣言。地震の被害を調べてくれ」

『ＧＦ』だからこそ、こういう時は迅速に動かないといけない。

オレは溜息をついて立ち上がった。

「ちょっくら、人助けにでも行きますか」

第百八十三話　戦いの終結（後書き）

自然災害に対して戦争中でもメンバーを派遣する。それが『ＧＦ』です。

幕間　新たな未来へ（前書き）

短めです

幕間　新たな未来へ

「生き残っちゃったな」

七葉は一人小さく呟いた。七葉がいるのはちょうど病院のベッドの上。多分、もうすぐ見舞いが来るだろう。

七葉の怪我は酷くなく、腰を激しくぶつけたことによりひびが入ったらしい。おかげで下半身が微かに痺れているけど、医者の話によるとリハビリで治るらしい。

「本当なら、あの時に死ぬはずなんだけどな」

七葉がさらに呟く。

七葉は未来を知っていた。自分が死ぬ未来を。そして、その未来を変えることが出来ればと思い、七葉は第７６移動隊に入った。

未来を知っているからこそ、影で動き、周ですら知らない場所であれこれしていた。

例えば、狭間市の長い一日の時、貴族派の軍勢の進軍が遅かったのは七葉が罠を張り巡らせていたからだ。

だけど、もう、未来はわからない。

「運命から生き残った、というべきかな」

「まだ見舞いの時間には早いよ」

突如として聞こえてきた声に七葉は呆れたように声を返した。

いつの間にか病室の中に正の姿があったからだ。正は小さく笑みを浮かべて七葉に歩み寄る。

「どんな手品だい？　どうやって運命を回避したのか是非聞きたいね」

「さあ？　私だってわからないよ。私だって死んだと思っていたのに、生き残っていた。どういう理屈かなんてわからない」

「そうなのかい？　つまり、未来を変える手段は知らないと？」

七葉は頷いた。もし、知っていたならもっと違うことをしていたはずだ。でも、知らないからこういうことになっている。

七葉は小さく溜息をついた。

「正。あなたは何か掴んでいるんじゃないかな？」

「どうしてそう思うんだい？」

正がうっすらと笑みを浮かべた。それを見ながら七葉は言う。

「唯一の人だから」

「そうだね。ねえ、七葉。君は神の存在を信じる？」

「神？　神なら私達の」

「その神じゃない。創造神というべき存在かな」

その言葉に七葉はハッとした。思いつくようなことがいくつかあるからだろう。

正は少しだけ笑って窓の外を見る。七葉もそれにつられて外を見た。

「僕はそれを調べるよ。君は今の内に平和な世の中を楽しんでね。七葉にとっての新たな未来を」

その言葉に七葉が振り返る。だが、そこに正の姿はいなかった。

七葉は小さく溜息をつく。

「お姉ちゃん。あなたは何を求めているのかな?」

幕間　新たな未来へ（後書き）

次で後半前編を終わらせます。

第百八十四話　帰還（前書き）

短めですかこれで後半前編は終わりです。

第百八十四話　帰還

オレ達が戦った中東での大規模なフュリアスとの戦い。そして、狭間市で起きた狭間の鬼を巡る戦い。

狭間の鬼のことを知らされたのはオレ達が中東大震災の救助活動に勤しんでいた時だったため、目眩がして倒れかけたりもした。

それらの戦いは今では『狭間戦役』と呼ばれ、規模の割りには死者がいなかった狭間市の長い一日を含めた１ヶ月間となっていた。

その中心で活動していたのが第７６移動隊で、未曽有の戦いを二回（狭間市の長い一日と中東での戦い）も体験したことで第７６移動隊は正式に正規部隊に格上げされた。

時雨から聞いた話では、８月にする予定があまりに早くなりすぎたらしい。一応、初期からある正規部隊を除けば史上最速かつ平均年齢が史上最低を獲得させていた。

まあ、そんな記録はどうだっていい。オレの考える未来へ進むためなら。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

微かに息の切れてきたオレに心配そうに由姫が声をかける。由姫は自分とオレの分の荷物を持っているが平気そうだ。まあ、八陣八叉だし。

「まあな。さすがにいつもと違うのは辛いな」

自分で体中の疲労を感じつつ困惑気味に答える。まさか、ここまでオレの体が脆いものだとは思わなかった。

オレの言葉を聞いていた音姉がクスッと笑う。

「弟くんも人の子なんだよ」

「そうなんだけどさ」

やはり、まだまだ体は子供だ。というか、医者からそう言われた。

いつもならそろそろ駐在所がはっきりと見えてくるだろうが、今の状態では朧気にしか見えない。

亜紗達はもう駐在所でくつろいでいるだろうな。

今、オレの近くにいるのは由姫と音姉の二人だけだ。二人共、まだまだ体力が余っているらしく、オレと同じ速度で歩いている。

デュアルオーバードライブを使ったオレの体には様々な副作用が表れていた。

そもそも、成熟しきっていない体でのデュアルオーバードライブはオレの体の魔力のバイパスをことごとく破壊したらしい。

まあ、バイパスならいくらでも繋げれるけど。

最大の問題が核晶だ。核晶へのダメージは極めて高かった。おかげで医者から2ヶ月はあらゆる魔術の使用禁止を食らってしまった。

まだまだ体は子供なんだから、今は無理せず休むこと。

それが医者に言われた言葉だ。心はいくら大人でも体は子供のままだしな。

「そう言えば、悠聖さんの言っていた客人って誰なのかな？」

悠聖と直接連絡を取り合った時、悠聖はオレに客人がいると言っていた。その客人に鬼との戦いで助けてもらったらしい。

全く誰かわからないけど、可能性として一番高いのは刹那だろうな。

「さあ？　オレもよく知らない。まあ、帰ってくるまでいるって言っているからもうすぐ会えるだろう」

それにしても、魔術強化無しの歩きって遅いし疲れるな。

「お姉ちゃんは何か聞いていない？」

「私は聞いていないよ。孝治君達は聞いているみたいだったけど」

つまりオレ達だけが除け者か。まあ、いいけど。

そのままオレ達はたわいもない世間話をしていた。

政治のことや経済のこと。そして、将来どう世界が推移していくか。

そんなたわいもない話を。

そして、ようやく駐在所につく。そして、オレは声を上げながら中に入った。

「ただいま」

第百八十四話　帰還（後書き）

後編の話は基本的に、

・体育祭
・ルーチェ・ディエバイト
・狭間の鬼（戦闘は無し）

で行こうと思っています。学校での話が多くなる代わりにルーチェ・ディエバイトに出る由姫の出番は少なくなる予定です。
ルーチェ・ディエバイトには名前だけ出してきた二人ほどを由姫と戦わせる予定。
狭間の鬼に関してはとことん続けます。後編の最後に周が知るもの。
それが第二章以降に続く予定ですので。

皆様の感想をお待ちしております。何か気になる点があれば指摘してくだされば嬉しいです。

幕間　ルーチェ・ディエバイト　本命選手及びダークホース（前書き）

ここから後半後編です。戦闘は極端に減らし、日常を描いていきたいと思っています。

幕間　ルーチェ・ディエバイト　本命選手及びダークホース

第３７回ルーチェ・ディエバイト選手目録本命及びダークホース

本命１

名前：アルト・シュヴッサー
所属：第１１機鋼師団
年齢：１８
戦闘ランク：ＡＡ
異名：『鋼鉄騎士』

今大会大本命。絶対的なまでの防御力を誇る。トトカルチョ予想一位は堅い。

本命２

名前：エリオット・フィルマ
所属：第３米国本土防衛隊
年齢：２６
戦闘ランク：ＡＡ
異名：『砲撃悪魔』

距離を取れば無双の可能性。砲撃力なら大会トップ。アルトと一騎打ちの可能性も。

本命３

名前：ガハナット・ゼオルガ

所属：第４９防衛隊
年齢：４０
戦闘ランク：Ａ
異名：『戦闘狂』

攻撃力と突進力ならトップ。対処を間違えれば誰でも止められない力を持つ。

ダークホース１

名前：リコ・エンターク
所属：米国地域部隊所属
年齢：１７
戦闘ランク：Ａ
異名：無し

１対１でＡＡランクに勝ったと言われる人物。その戦闘能力は完全に未知数。

ダークホース２

名前：白百合由姫
所属：第７６移動隊
年齢：１２
戦闘ランク：不明
異名：無し

『ＧＦ』に入ったまだ２ヶ月ほどの新人。第７６移動隊に所属していることと『歌姫』白百合音姫の妹。そして、八陣八叉をやってい

る以外の情報は無し。今回の台風の目か？

幕間　ルーチェ・ディエバイト　本命選手及びダークホース（後書き）

アルトとエリオットは名前だけ出ていましたが、他の二人は初登場です。どういうキャラにするかまだ考えていませんが、印象に残りやすいキャラにしたいです。

第百八十五話　ルーチェ・ディエバイト予選

『今年もやって参りました！　ルーチェ・ディエバイト！　そのＺブロックの予選決勝！　解説はこの私、カーツ・バリアットと特務隊長善知鳥慧海で行きます』

『よろしくな』

テレビから流れる音声をオレ達は静かにお茶を飲みながら聞いていた。

近くにいるのは亜紗、悠聖、ベッドの上にいる七葉。そして、何故か和樹もいる。

七葉の見舞いに来たついでにみんなで予選を見ようということにしたのだ。Ｚブロック予選決勝には由姫も出ているしな。

ちなみに、音姉達は駐在所の方で見ている。

『今回は波乱尽くめの展開となっております。Ｚブロック予選第１回戦において正規部隊の副隊長が別の正規部隊の新人に開始８秒でやられるというトトカルチョ予想部真っ青な展開となっております』

ちなみに由姫のことだ。何をしたかというと、接近して武器を弾き飛ばした後、ゼロ距離砲撃魔術を使っていた。

由姫の魔術適性が低いからダメージはそこまでないが、ゼロ距離で放たれたなら避ける方法はない。

『さて、予選決勝ですが、一辺４ｋｍの特殊なフィールド内部で予選を勝ち抜いた１５が最後の一人になるまで戦うというルールです。野戦となればさすがの正規部隊でも辛いのではないでしょうか』

『いや、そういうわけじゃないな。確かに、序盤の乱戦に巻き込まれたなら、正規部隊でも辛いかもしれない。ただし、正規部隊員の子は八陣八叉を習っているという話を聞いているから、長引かせたら不利かもな』

何が長引かせたら不利だ。由姫の場合は乱戦の方が力を発揮出来るのに。

まあ、被弾率は上がりやすいけど。

レアスキルの使用回数が制限されない予選決勝からは由姫に勝てる人がいるとすれば正規部隊のエース級くらいだろう。

多分、オレは勝てない。

『皆さん、聞きましたか。白百合由姫選手を倒すには序盤で乱戦に持ち込むべきだそうです』

「で、実際はどうなんだ？　由姫ちゃんは乱戦に弱いの？」

何も知らない和樹がオレに尋ねてくる。まあ、由姫の強さを知っているオレ達はわかっているから冷ややかにテレビを見ている。

オレは予選決勝前に連絡を取った時にきた返事を言うことにした。

「乱戦はする気がないから開始早々半分は落とすって言ってたな」

「出来んの？」

和樹の疑問は最もだ。バラけてスタートする予選決勝で半分落とすなら砲撃魔術が必要だ。

ただ、レアスキルの使用回数が制限されない予選決勝でなら、たった一つだけ方法がある。

「重力砲か？」

「なにそれ？」

まあ、普通は知らないだろうな。

「前方に重力力場を作り出してそれを一定方向に打ち出す方法。ただし、撃てるのは現役で一人だけ」

「由姫ちゃんが出来るの？」

「多分、それを見せるつもりじゃないか？」

由姫の戦闘ランクを決めてもらうついでにレアスキルは自由に使えとは言っているけど、何をするかまでは聞いていない。

決勝でアルトと1対1で戦って欲しいとは思うけど。

『さあ、予選決勝、まもなく始まります。誰が決勝の部隊に上がるのか』

確実に由姫だろうけど。

カウントが始まる。画面に映っているのは全体だが、個別へのカメラがあるだろう。始まった瞬間に由姫へ視点が向くに違いない。

『予選決勝、開始！』

その瞬間、いきなり画面が変わった。もちろん、由姫に。

由姫の前方にあるのは２０ほどの重力力場。

「ちょっ」

オレの口から声が漏れるのがわかった。

いきなり凄まじいことをしているな。

そして、その重力力場の真ん中に拳を叩きつけた瞬間、重力力場が砲撃として打ち出された。

一瞬にしてフィールドが吹き飛ぶ。

多分、これを見た全員が言葉を失っているだろう。開始早々半分どころかほとんど吹き飛ばしたのだから。

画面が全体図になると、予選決勝用の場所の大半がえぐられていた。

『な、な、な、なーんと！　開始早々の砲撃で１２人がダウーン！
残る二人は直撃しなかったものの相当なダメージを負っているようです！』

『今のは重力砲か。そんな技が出来たなんて』

お前は由姫のレアスキルを知っているだろうが。

『重力砲とはなんでしょうか？』

『重力力場を周囲に作り出して放つ砲撃魔術の一種だ。『ＧＦ』が知っている中じゃ里宮愛佳以外は使用出来ない。その場所の重力を知っていなければならないからな』

地球上のあらゆる地点で緯度が変わらない場合を除けば重力に微かならムラがある。それを理解しておきながら放つのが重力砲だ。

つまり、今いる場所の緯度を誤差が許容範囲内になる数値を知っていなければ使用出来ない。

『ほうほう。つまり、このために緯度を測ったと。おっと、本部からの連絡です。白百合由姫選手がレアスキルを使ったため、公表するようです』

ルーチェ・ディエバイトはレアスキルを使用すればその情報が放送されることになっている。もちろん、初回の一回だけ。だから、決勝ではレアスキルや隠し技のオンパレードとなりやすい。

だが、由姫はそれを使わなかった。つまり、決勝で各ブロックの強豪と真っ正面から戦いたいのだろう。

『レアスキル名はグラビタス、グラビタスです。重力変化系の名前ですが、聞いたことがありませんね』

『伝説と呼ばれる二大スキルの一つだな。神を縛るための重力、日本なら神への重力と書いてグラビタスと読む』

『伝説ですか！？　なんという。第７６移動隊の新人はまさかの伝説のレアスキルを持っていた！　これは今大会の台風の目ですね！』

解説の言葉が聞こえている中、由姫は凄まじい速度で移動していた。まるで、猪のごとく木々を薙ぎ倒しながら。

木々を薙ぎ倒しながらは比喩ではなく事実だ。

『おっと、白百合由姫選手が合田篤選手とエンカウント？』

最後の言葉が疑問になったのは由姫の攻撃によって相手の選手が一撃で気絶させたからだ。

後ろに回って首を叩いて気絶させるわけではなく、顎をかすめて脳震とうを起こさせた後、こめかみを蹴り飛ばす。

かなり特殊なやり方で人相手にしか通用しないが、この技は八陣八叉ではなくオレが教えた技。由姫の速度でなら可能だからこその技。

それを見たオレの顔に笑みが浮かぶのがわかった。

「おっ、周隊長が笑ってるな。そんなにも活躍が嬉しいのか？」

「まあな。今の技、オレが最近教えた技なんだ。脳震とう中の相手を時雨だろうが慧海だろうが気絶させる技。ただし、相手を超えるスピードがいる」

力加減を間違えばかなり危険な技だが、由姫の最大魔力は高校生の平均くらいなので、最大で放っても大事には至らない。

『あれは力加減がかなり難しいから。顎をかすめて脳震とうを起こすことも、適度に魔力を込めて蹴りつけることも』

ちなみに、亜紗は完全に断念した。まあ、亜紗の戦闘服はスカート（今年はまだ見ていない）がよくあるので出来ないというべきか。

由姫は由姫で八陣八叉を応用しているみたいだ。

「本当にすごいね。私もこんなに強かったらな」

「七葉ちゃんは強くなくてもいいと思うぜ。それに、七葉ちゃんの得意系は結界系だろ。だったら、そっちを極めたらいいじゃないか」

その言葉にオレ達は完全に目をパチパチさせていた。和樹がこんなことを言うなんて思っていなかったからでもあり、七葉の得意魔術を知っていることもだった。

七葉は頬を赤く染めてありがとうと言う。

「ん？　どうした？　周」

「いや、意外だったからさ。おっと、そろそろ終わるな」

由姫が残ったもう一人の選手に接近していた。あらゆる攻撃、魔術を避けて凄まじい速度で向かってくる由姫は相手からすれば確実に悪夢だろう。

由姫が至近距離で重力力場を形成する。それを見た相手が目を瞑った瞬間、由姫は後ろに回り込み、拳をこつっと当てていた。

『終了！　試合終了です！　最後はフェイントで相手の背中を触りました！　大会規定により白百合由姫選手の決勝進出です！　私達は伝説の始まりを見ている！』

まあ、試合時間が五分も経っていないしな。歴代最速、いや、魔術学園同士が行っていたルーチェ・ディエバイトも含めるなら歴代二番目か。

「本当にすごいや。周兄ならどうする？」

「開始早々砲撃を叩き込むな。相手の数は減らせればそれだけでいい。まあ、決勝じゃ通用しないけど」

決勝は正規部隊により戦いと言ってもいい。正直、正規部隊しか出て来ない。だから、由姫の最初の作戦はまず通じないだろう。

楓や中村、エリオット以外ならの話だ。

「楽しみだな。ルーチェ・ディエバイトの決勝が」

第百八十五話　ルーチェ・ディエバイト予選（後書き）

戦闘は模擬戦かルーチェ・ディエバイトだけになると思います。

第百八十六話　経過

オレは窓から帰って行く周達を見下ろしていた。周は未だに魔術を使えない。使わないだけで使えないことはないのだが。

亜紗がいたのはそれが理由だ。周の警護でもある。

デュアルオーバードライブはダブルシンクロと似ている。違うのは、魔力の掌握を誰に任せるかどうか。

デュアルオーバードライブなら周自身が魔力を操作する。それが出来るのは周が魔力の掌握に慣れているから。対するダブルシンクロはアルネウラに任している。こちらは信頼していなければ出来ない。というか、よほどの信頼関係と息の合った行動がなければ無理。

「悠兄、やっぱり周兄が心配？」

「そりゃな。帰って来たら帰って来たでいきなりオレを一時的な副隊長に上げたんだぞ。早く治ってくれなきゃ疲れるんだよ」

「優月やアルネウラとデートしたいからかな？」

七葉が小悪魔のように笑みを浮かべながら言う。一度殴ってやろうか。

「副隊長も大変なんだな。俺は周が一人で何でもこなしていると思っていたけど」

「あいつは器用に器用貧乏なんだよ。あらゆる能力は高いけど、飛

び抜けたものがない。別の言い方をするなら弱点がない。例えば、音姫さんは機械音痴。孝治なら持続時間など、それぞれにあるはずの弱点。それが周にはない」

それがどれだけおかしいことか分かる人は分かるだろう。勉強やスポーツとかいう問題ではない。

戦場だろうが日常だろうが、あらゆる状況に対応出来る究極の才能。それが最強の名がつく器用貧乏だ。

「弱点が無いということはそれだけで絶対的な利点だ。周の場合は何でも器用にやりこなす。オレ達の助けがほとんどいらないくらいに」

それがどれだけ異常なことかあいつは理解していない。多分、心の底から自分のできることは自分ですると思っているんだろうな。他人がするより自分がした方が早く終わることが多いから。

あいつは責任を背負おうと思っているから。

「だから、一人でこなす。まあ、その分、無理なものは無理だとわかっているだろうしな」

そう言う時は指示を出してくれる。まあ、最近は音姫さんはマシだけど、最初の頃なんて周が諦めたくらいのこともあったよな。

「あいつも苦労しているんだな。そんなの表情には出さないけど」

「周兄の凄いところがそこなんだよね。昔なら心配していたけど、今なら大丈夫じゃないかな？」

「だろうな」

今なら周の近くに周自身の大切な人達がいる。だから、安心してもいいだろう。

「お前らがなんの会話してんのかわからん。まあ、身内のことは身内が一番わかっているってことはわかった」

和樹がそう言いながら窓の外を見る。窓の外はしっかり晴れており、そこから見える青空は綺麗だった。風景もなかなかのものだ。ただし、戦闘の後が大きく残る山肌や森を視界に収めなければ。

とある部分にある森の中に作り上げられたクレーター。無我夢中で放ったオレの収束砲のせいらしい。覚えていないので何とも言えないが、アルネウラと優月の二人がいたからこそできた技。オレの切り札というべきか。

「そういや、七葉っていつ退院するんだ？」

「んーっと、一週間後が目安かな。もう、だいぶリハビリをこなしているから先生もそろそろ退院のことを考えておいて欲しいって」

第７６移動隊の駐在所が弱者に優しい設計にはなっていないからな。リハビリをこなしているとはいえ、学校まではそこそこの距離はある。他の所に行こうとしても時間がかかるのに松葉杖でやっていけるわけがない。それが七葉の入院が伸びている原因なんだけどな。

「つまり、それくらいなったら七葉ちゃんも学校に通うのか？」

「そうなるかな。まあ、松葉杖での登校だけどね」

今考えたら、いつの間にかこの二人はいい関係になっているよな。まあ、七葉が生きているのは和樹から借りたお守りのおかげと聞いているし。

「そうなると、なんとか体育祭は見に来れるな」

「うん。絶対に行く。悠兄が周兄と孝治さんにボコボコにされる瞬間の写真を収めに」

「趣味悪いな」

そうとしか言えない。というか、クラス対抗８００ｍリレーのアンカーのほとんど全員が第７６移動隊ってどうよ。

しかも、一組は亜紗。二組は周。三組は孝治。なんで部隊自走トップ５の内三人いるわけ？

５０ｍを６秒前半じゃ話にならないよな？　特に周は５０ｍを４秒前半で魔術なしで走れるし。

「まあ、そうだよな。いくら周が怪我をしていると言っても、魔術がつけないだけだから体育祭には何の支障もないと言っていたし。あいつって魔術なしで部隊何番目なんだ？」

「由姫と同じ同率二位。ちなみに、一位は音姫さんね。あの人はただ単に魔術が使えないだけだから」

それであらゆる行動についてこられる脚力と体力に戦闘能力まであ

り。まあ、数少ない戦闘ランクＳって人だしな。

「悠聖は？」

「七位だよ。さすがに私やリースさんには勝つけど、前線のみんなには勝てないよ。ちなみに光ちゃんも」

あいつって地味に足が速いよな。確か、孝治に匹敵するくらい。魔術なしではの話だ。

「一瞬で抜かされるようにしか見えないけどな。まあ、頑張るさ。さすがに妹の前じゃかっこつけたいし」

「無理だと思うよ」

その言葉はぼそっと呟かれたもの。でも、その声ははっきりとオレの耳に届いていた。

「ですよねー！　つか、バックかセンターにいるオレがフロント中心の奴らに勝てるわけねえっての！　こんちくしょうめ」

本気で泣きたいぜ。

オレは小さくため息をついて時計を見た。予定より少しばかり早いけど、そろそろか。

「じゃ、オレは帰るわ」

「あれ？　ゆっくりして行かないのか？」

和樹からすればあまり長くいないことを不安に思っているのだろう。まあ、その気持ちはわかるけど、今はとても大事なことがあるから。

「大事な会議だアル・アジフがそのために来るらしいし。まあ、予定より早いのはお二人さんの邪魔をしたくないだけだ」

「そ、そんなんじゃねえよ」

「そ、そうだよ。私達はそんなんじゃないからね」

必死にごまかそうとしているが、二人の顔は真っ赤だ。時々、視線を合わせているのが初々しい。

オレは笑みを浮かべて立ち上がった。

「だから、和樹はオレの分もゆっくりして言ってくれ」

「ったく。わかったよ。さっさと行け。その代わり、会議が終わったら変われよ。七葉ちゃんも第７６移動隊なんだから」

「それくらいわかっているさ」

オレはそのまま部屋から出て行く。

アル・アジフが来る用事。いや、周から聞いた話だと周が呼び寄せたらしい。アル・アジフも内部の処理がほとんど終わってここに来る予定もあったからすぐに承諾したとか。

周が呼び寄せると言うことはおそらく今回の結城と真柴が起こした事件についてだろう。

「一体、何の話になるのやら」

「ったく。悠聖の奴。ななのためにもう少しいてやれよ」

悠聖が立ち去った病室の中で和樹が呆れたようにため息をついた。
和樹はわかってはいるが、やっぱり許せないらしい。

「いいよ。かず君がそこまで言わなくても。悠兄には悠兄のやるべきことがあるんだよ。それに、多分だけどかなり大事な話だと思うから」

「そうか」

二人は無言でしばらくの時を過ごす。でも、二人の顔は真っ赤だ。
まるで、この空気の中に酔っているかのように。

「なあ、もう少し寄っていいか？」

「うん」

和樹が七葉が寝ているベットに椅子を寄せる。

二人きりの病室は看護師が入ってくるまで続いたとさ。

第百八十七話　過去（みらい）（前書き）

過去と書いてみらいと読みます。

第百八十七話　過去（みらい）

天高く上った太陽。そして、初夏を匂わせる蝉の音。そして、我慢できないくらい蒸し暑いこの環境。

「何、これ」

僕は汗をだらだら流しながらリュックを背負って前かがみになって歩いていた。今日は久しぶりの帰国だ。今までいろいろなことをしていたのでずっと中東にいた。

折れた右腕はほとんど治っており、無茶な運動をしなければいいらしい。

「えっと、悠人はもしかして日本の梅雨は久しぶり？」

鈴の言葉に僕は頷いた。

「こんなに酷いものだとは思わなかったよ」

確かに梅雨は辛い時期だと記憶しているけど、これなら中東の夏の方が断然に過ごしやすい。あっちは無駄に乾燥しているから涼しく感じられる時もあるし。

「でも、リリーナ、大丈夫？」

「へ、平気」

リリーナは僕よりも死にそうになっていた。ちなみに、鈴はリリー

ナの分の荷物も持っている。本当なら僕が持たないといけないのに。

リリーナは滝のように汗を流し、手に持つ水筒からしきりに水を飲んでいた。まあ、これは尋常じゃなく熱いけど。

「こんな天気、魔界にも存在しないよ」

「魔界の夏場ってどんな感じ？」

「最高気温３０弱。ほとんど乾燥している」

うん。日本よりも明らかに涼しいよね。どうりでこんなに弱いわけだ。

「どうして、鈴は平気なのかな？」

「日本からしたら普通だから。これくらいならまだ涼しい方だよ？」

「鈴の言っていることがわからない」

僕もだ。まだ涼しいってことはもっと酷い時があるのだろうか。

「だって、まだ１２時前だし」

つまり、まだまだ気温は上がる。

「「む、無理」」

僕とリリーナが同時に声を漏らした。そんな環境でよく日本人って生きていけるよね。こんな空気の中でいたら確実に死ねると思うけ

ど。

僕とリリーナの姿を見た鈴がクスッと笑う。まあ、仕方ないけどね。

「おや、君達は悠人とリリーナに鈴かい？」

その言葉に僕達は同時に振り向いた。

そこにいたのは一人の女性。服装はいたってシンプルなワンピース。ただ、どうしてかわからないけど、この人を見ていると無性に不安になってくる。どうしてだろうか。

「えっと、悠人かリリーナの知り合い？」

鈴の言葉に僕とリリーナは同時に首を横に振った。振ってから一つの疑問が出てくる。

どうして僕達の名前を知っているのか？

多分、リリーナも同じことを思ったのだろう。いつでも武器を取り出せるように身構えている。

「僕に戦うつもりはないよ」

その声は背後から聞こえていた。目は離していない。まばたきはしたけど、そこまでの短時間で移動できるわけがない。でも、確かに声は聞こえる。視界の中から消えて。

「なっ」

リリーナが振り返りながら鎌を取り出した。でも、それより早く女性が動いたのか、リリーナの手から鎌が弾かれていた。

速いというレベルじゃない。反応すらできない速度。リリーナですらだ。

もしかしたら、周さんのレベルじゃないと反応できないのかもしれない。

「もし、戦うなら別に僕は構わないよ。二人の首が落ちるだけだから」

「・・・・・あなた、もしかして」

リリーナが何かに気付いたのか僕の後ろにいる女性に向かって何かを言おうとする。でも、情勢の手が伸びてリリーナの唇に当たった。

「内緒だよ。着物想像のとおりかもしれないし、違うかもしれない。それを信じるのは君だけだ」

「・・・・・わかった。何の用？」

僕達は動けない。いや、動くことを拒否されているような状況だ。鈴と目で会話をしても同じような回答が返ってくる。

「散歩していたら見かけてね。つい、話しかけてしまったよ。ところで、君はもうソードウルフに乗ったのかい？」

「答えなければならない？」

「そうか。乗ったのか」

女性が笑ったような気がした。まるで、何かに楽しんでいるかのように。

「どうやら、過去（みらい）は面白いことになっているみたいだね」

「未来？」

僕は思わず声をあげて尋ねる。女性が何を言いたいのかよくわからなかったからだ。

未来という風に聞こえたけど、どこか違うようにも聞こえた。一体、女性はなんなんだ？

「君がいるにはまだ早いよ。リリーナ。君の推測はどうだい？」

「やっぱり。あなたはあの人なんだね。ようやく思い出したよ」

「それでいいよ。さて、僕はそろそろ行くよ。すまないね。君達を不安にさせて。じゃ」

女性の気配が消える。僕は慌てて振り返ったが女性の姿を見つけることは出来なかった。

「リリーナ。どういうこと？」

鈴がリリーナに尋ねるが、リリーナは首を横に振っているだけだ。

多分、話したくないんじゃない。離せないのだろう。

僕はリリーナの手を握った。

「大丈夫だよ。今は話さなくてもいい。リリーナが話したい時にちゃんと聞くから。鈴と一緒に」

「うん。ありがとう」

リリーナが俯いて声を震わす。

泣いているんじゃない。多分、何かに恐れている。一体、何があるんだ？

第百八十八話　未来（かこ）（前書き）

未来と書いてかこと読みます。

第百八十八話　未来（かこ）

駐在所会議室。厳重に結界が張り巡らされ、あらゆる盗聴器や盗聴魔術ですら会議室の中の微かな振動さえ聞くことが不可能にされた場所に七葉を除く第７６移動隊のメンバー（都を含む）にアル。そして、エレノアにベリエとアリエ。さらにはルーイまでいる。

ちなみに、楓と冬華はいない。今は過激派の方に戻っている。

決して会議室は小さくないのだが、あまりの人数な上に悠聖がディアボルガやセイバー・ルカを召喚しているためさらに小さくなっている。

「みんな揃ったな」

オレは周囲を見渡して全員がいることを確認してからアル・アジフに話しかけた。

「アルに尋ねたいことがあるけど、その前にオレから色々と言わせて欲しい。今回の事件、『狭間戦役』。時雨達は全て一つの事件と見た。それはオレも同じだ」

この『狭間戦役』には共通のことがある。それを知っていれば一つにくくりやすい。

「最初の事件。魔界の貴族派が起こした事件だが、あれは世界を救うために狭間の鬼の力を得ること。そして、結城・真柴が起こした事件。結城家の方はイグジストアストラル、マテリアルライザーの二つを集め、滅びから救う世界を構築すること。真柴家の方は精霊

王の娘と都の力を集め、世界を滅びから救うこと」

三つの事件は戦っている相手や規模が全く違う。違うのだが、共通していることが一つだけある。

「それを踏まえてアルに尋ねたい。世界は未来のために動いている。でも、その未来はあたかもすぐにやって来るような滅びに対してだ。これから何が起きる？　いや、何が起きたんだ？」

多分、アルなら知っているはずだ。レヴァンティンを知るアルなら確実に何かを知っている。

アルは小さく頷いた。

「そうじゃな。そなたらは知る権利がある。過去に何が起きたか」

アルは目を瞑った。おそらく、言う内容をまとめているのだろう。

「世界は四回、文明が滅びたことがある。最初は科学時代。この頃のことは我は詳しく知らぬが、今よりも遥かに高度な文明じゃった。もちろん、戦闘能力も」

つまり、それが滅びたということは一大事以外の何物でもない。それを滅ぼしたのが前に話した『Ｄｅｓｔｒｏｙｅｒ』だろう。

そうなると、世界が躍起になる理由もわかる。

「続いて魔科学時代。我が生まれた時代じゃ」

その言葉に事情を知らなかったであろうエレノア達が驚いている。

オレ達すでに全員に言ってあるから驚かないけど。

「鈴の乗るイグジストアストラル。エリシアのマテリアルライザー。我が魔術書アル・アジフ。周の持つレヴァンティン。孝治の運命。全てが魔科学時代に作られたものじゃ」

地味にオレの秘密を言われているし。しかも、孝治も持っていたんだな。オーバーテクノロジーの武器。

「弟くんはいいとして、孝治くんは持っていたんだ」

「ああ。周が手に入れた時と同じ日にな」

「ちょっと待て。オレが持っているのは全員知っていたのか？」

そのオレの言葉に都を含めた第７６移動隊全員が頷いていた。こうなると、ここにいない由姫も絶対に気づいているな。

オレは小さく溜息をついた。

「オレって隠し事が下手？」

『それはないと思いますよ』

全員に存在が知られたレヴァンティンが声を出す。オレはまた溜息をついてレヴァンティンを机の上に置いた。

『初めまして。私がレヴァンティンです。名前は好きなように呼んでくださいね。ちなみに、アルとは友達です』

「仲間の間違いじゃろ」

アルが呆れたように言うが、その顔に笑みが浮かんでいるのはその場にいる誰もがわかった。

多分、レヴァンティンから友達と言われてアルは嬉しいのだろう。昔からの知り合いなのだから。

『補足をするなら、六つの魔術器と六機のフュリアスが開発されましたよ。まあ、フュリアスの場合は一機未完成でしたけど』

「それは置いておいて、その魔科学時代も滅んだ。いや、文明の滅亡と引き換えに相討ちとなった方が正しいかの。次じゃ。次は三番目。神威時代。文字通り、神の威厳が世界を回した時代じゃ。周には悪いがの」

オレは神なんて信じていないからな。だから、神剣も信じていない。だけど、アルが言うなら信じるしかないか。

べ、別にアルの言うことを素直に聞いているわけじゃないからな。

「神剣が生まれ、神が滅び、それと共に文明も滅びた。最後が神剣時代じゃ。結論から言えば、今までで一番世界が滅びた時代じゃ。人口の９０％が死滅。動植物も８０％ほどが絶滅じゃ」

「ちょっと待て。そんなに滅亡したらこの世界の文明がここに来るまで何年かかるって言うんだ？　あまりに人が死にすぎだろ？」

一応、記録として残っている部分なら約８００年くらい前からはっきりしている。でも、そんなに滅亡したなら世界はどうしてその記

録が残っていないんだ？

何らかの別の力が働いたのか？

すると、アルは何かを考えるように目を閉じ、ゆっくり頷いた。

「それが今の世界の流れとなった原因じゃ」

「理解出来た奴は？」

オレがみんなに尋ねると誰もが答えなかった。

「もし、世界の滅びが近づいているとするなら、民衆はどう動くかの？」

「暴動だね」

音姉の言葉に全員が頷いた。そんな暗い未来を信じるわけがないから。あらゆる劣勢な状況でも強気の発言をしなければ国民はついて来ない。

例えば、戦争中でひたすら勝ちの報道をしているように。

「そうじゃ。各勢力のトップはそのことを知っておる。『ＧＦ』や『ＥＳ』も起源的には滅びに対する対抗策じゃ。特に『ＧＦ』はの」

「なあ、アル。つまり、オレ達も滅びに対する対抗策だと考えた方がいいのか？」

あまりに若いメンバー。でも、そのメンバーが全員一線級の能力を

持っている。なら、そう考えれるのが妥当だ。

オレの言葉にアルは頷いた。

「そうじゃな。我は関わりは無いが、そなたらはおそらく滅びに対する対抗策。海道、白百合、里宮。過去に神との戦いで大きな役割を果たした者達がいるからの」

オレ、音姉、由姫か。孝治や浩平は偶然と考えていいだろう。悠聖や中村は厳密に言えば親族だ。まあ、中村はそこそこ離れているけど。

考えたくはないが、何か作為的なものも感じる。

「質問だ。トップが知っている内容を下が知る可能性があることはわかる。だが、滅びが近づいているというのは何故だ?」

確かにそうだ。直に滅びが来るというならわかるが、貴族派も結城・真柴も滅びが来るとわかっているようだった。

オレは正から聞いていれからわかるけど、孝治達は知らないだろう。

「未来を知る者。聞いたことはないかの?」

その言葉に反応したのはリースだった。反応したと言ってもオレや音姉くらいしかわからない微妙な揺れ。

「正確な数は把握しておらぬが、この世には未来を知る者達がいる。未来と読むより未来と読む方がいいかの」

「よくある話じゃねえの？　ほら、前世とかみたいな」

浩平が似ているようで似ていないことを言う。確かに、前世の記憶を持っている人は極稀にいるけど、今は違う。

「違う。前世があるということは生まれ変わっている。でも、それで未来を知ることは出来ない」

リースが静かににダメ出しする。それに関してはオレも同じだ。前世の記憶は似ているけど違う。

「未来予知の類いなん？」

首を傾げながらオレに尋ねてくる中村。オレは首を横に振った。

「未来予知は曖昧だ。だから、可能性としては低いと言わざるをえない。気になるのは、それはどういう滅びなんだ？　文明が滅ぶのか、それとも」

「そこはブラックボックスになっているよ。誰も他人に話せない空白地帯」

オレの言葉を遮ってエレノアがはっきりと言った。

「思い出そうとすれば発狂する。今までも誰もがそうだった。もちろん、私も」

「エレノアは未来を知る者なのか？」

質問に対しての答えとしてエレノアは頷いた。

一瞬だけ逡巡したのか目をふせ、そして、真っ直ぐオレを見つめてくる。

「でも、私が思い出せる未来は少ないよ。これから起きることはほとんど思い出せない。ただ、滅びは確実に来ることだけはわかる」

それでも十分だ。それに、たくさん未来を知っていたならオレがようやく押し通した案が白紙になるかもしれない。

「滅びが来ることはわかっている。それに対して行動したことから『狭間戦役』が起きた。『GF』や『ES』も滅びに対して動いている。そうなると、時雨や慧海も知っているのか」

オレは小声で考えをまとめていく。まとめたなら何か思いつくかもしれない。

「アル・アジフ。滅びには何が来る。文字通りの神が来るのか？」

「我はわからぬ。我が体験した滅びは魔科学時代。あの時はマテリアルライザーに乗って敵の本拠地の外を掃討していたからの」

「アルちゃん、本拠地って？」

「今では存在せぬが、ハイゼンベルクの地に存在する崖によって出来た山があるじゃろ？　それが本拠地じゃ」

確かにあったな。インドにあるヨーロッパの地名。そこには謎の山があり、崖に囲まれているためフリークライミングに適した地形になっているからたくさんの人が集まっている。

「本拠地の周囲を掃討ということは中の様子はわからなかったのか。ふむ、相手がわかれば対処はし易いのだがな」

「そやな。うちや楓、エリオットさんらで一斉射撃を叩き込むことが出来るかどうか」

「そなたら、世界を滅ぼすつもりかの？」

あそこを調べてもただの山だったって聞いているからな。話によると、あの山だけが他の土地とは違うらしいし。

そうなると、あの土地がどこで出来たものか調べれば何かわかるのか？

「ちなみに、山の土壌はアフリカ産じゃ。アフリカに文献は残っておらぬぞ」

アルがオレを見ながら言う。まあ、言われると思っていたけどさ！

「珍しいな。周隊長が黙っているって。こういう時にはよく質問するよな？」

「考えをまとめているだけだ。まあ、ディアボルガ、セイバー・ルカとルーイに尋ねたいんだけど、精霊界や音界ではどうなっているんだ？」

その言葉に悠聖が微かに動揺したのがわかった。多分、オレと音姉にしかわからないような動揺。

「まず僕から言おう。音界で知っているとするなら歌姫様だ。それ以外なら首相達。親衛隊と言っても、歌姫様が教えてくれる可能性は高くない。だから、悪いが僕からは何も言えない」

「いや、いいさ。知っている可能性がある人が聞けただけで十分。いつか遠くない日に時雨か慧海かわからないけど音界に『GF』から誰か行くから。ディアボルガやセイバー・ルカは？」

オレは二人に尋ねた。でも、二人は何も話さない。まっすぐオレの目を見ている。

オレはなんとなく理由がわかって少しだけ笑みを浮かべて頷いた。

「悠聖。語りたくないなら今はいいさ」

「周隊長。どうして」

「ディアボルガもセイバー・ルカもお前が話すことを選択したんだ。だから、お前が決めろ。まあ、オレの予想だと、アルネウラか優月のどちらかが関わってくるんじゃないか？」

オレの言葉に悠聖が黙った。図星か。でも、それだからこそ今は尋ねない。

「やっぱり、情報がまだ足りないな」

「そうかの？　我はかなり貯まっていると思うが？」

「いや、何か引っかかるんだ。あっ、なあ、都」

「はい。なんでしょうか」

今まで一度も発言していなかった都にオレは尋ねた。

「狭間市の中で狭間の鬼に対する文献がある場所はないか？　古文書でもなんでもいいから」

「実家の方になら」

オレは小さく頷いた。

「明日、そっちの方に向かいたい。ちょっと調べたいことが出来たからな。今日のところは解散。アルは孝治と一緒に今日のことをまとめて欲しい。それで時雨にこのことを一応連絡。多分、向こうは知っている」

アルの言葉を信じないというわけではないが、時雨は確実に知っていると断言できる。もしかしたら、『赤のクリスマス』のことを知っていたのかもしれない。

「ルーイは音界と連絡を取って欲しい。無理ならいいんだが、出来れば歌姫と話がしたい」

「出来ないことはない。歌姫様、メリル・シュトローム様は寛大な御方だ。今から連絡を取ってみる。一応、そちらの国の歌姫も話をさせてもらってもいいか？」

音姉が不思議そうに首を傾げていた。

「いや、あのじゃじゃ馬、違った。歌姫様がこっちの歌姫に関心を

持ったからな。僕だけでは止められない。だから」

「いいよ。メリルってこと仲良くなれればいいし」

音姉はいつもそうだよな。誰とでも仲良くなろうとする。まあ、オレか由姫の敵には全く容赦しないけど。

オレは小さくため息をついた。

「解散だ。まあ、自由にしていいぞ」

第百八十八話　未来（かこ）（後書き）

どこまで謎を解くか全く決めていないので壮絶なネタバレしないか不安です。

第百八十九話　音界の歌姫

音界との通信。それは、ルーイの機体であるアストラルブレイズを使う必要があった。だから、オレ達はアストラルブレイズを収納している『ＥＳ』の格納庫（イグジストアストラルが保管されていた場所なので厳密には『ＥＳ』のものじゃないけど、イグジストアストラルやソードウルフまで収納されている）に来ていた。

ルーイはイグジストアストラルのコクピット内部で機器を操作している。

「リマ？　聞こえるか？」

『ルーイ？　えっと、何かありました？』

『えっ？　ルーイ？　ルーイがそこにいるのですか？』

リマとは少し違う声。それを聞いたルーイが小さくため息をついていた。

『親衛隊の皆さんが返ってくると聞いていたのでてっきりルーイもいるものだと思っていたのですが。ルーイ、あなたは今どこですか？』

「歌姫様。静かにしてください。今はまだ人界にいます。僕達と共闘した部隊の隊長が話をしたいということで通信を開いたのですが」

『ルーイが返ってこないなら嫌』

何だろう。すごく暴君みたいな発現なのにルーイが苦笑しているのを見ると、ルーイのことを心配しているとしか見えない。

多分、ルーイと音界の歌姫は仲がいいんだろうな。

「こちらの歌姫もいますが」

『会う』

「変わり身早くない？」

オレは思わず声をあげていた。その言葉にルーイがまた苦笑してアストラルブレイズを操作する。

「今から投影装置でスクリーンに映します。器材に関しては十分なものがあるのでご自身の目で見て会話してください」

オレと音姉の前にはカメラとスクリーンがある。歌姫と会話できることになったならこれで会話するためだとルーイは言っていた。まあ、顔も見ずに信じろというのが難しいよな。

ちなみに、オレと音姉は珍しく『ＧＦ』の戦闘服で会話をする。普通は失礼なんだろうけど、事務用の制服、しかも、世界の首相級と会話するような上等なものがないからこういうことになったのだ。

スクリーンに一人の少女が映る。

『初めまして。私はあなた達の言う音界の代表。歌姫であるメリル・シュトロームです。代表というよりも象徴といった方がいいかもしれませんね』

少女はお人形さんみたいに可愛いと言うべき容姿だった。波打った金髪の長い髪に可愛らしい瞳。顔の造形も見事というべきか。

「オレは第７６移動隊隊長海道周。ルーイ達に手伝ってもらいこちらの被害はほとんどなかった。感謝している」

『いえいえ。ルーイは音界でもエースパイロットですから。アストラルブレイズの名を持つ機体を持っていますし』

まあ、深くは聞かない方がいいかな。

『そちらの方は？』

「初めまして。白百合音姫です。この世界の歌姫と呼ばれています」

『本当？　本当に歌姫？』

向こうの歌姫が興奮しているようにも見える。どういうことだろうか。

すると、凄くうれしそうな表情で歌姫が話しかけてくる。その顔に浮かんでいるのは満面の笑み。

『初めてです。私以外の歌姫と出会うのは。わあー、凛々しくて綺麗。音姉様（おとねえさま）と呼んでもよろしいですか？』

「え、うん。いいよ」

あの音姉が押されている瞬間を初めて見た。いつもは音姉が押して

いるのに。

「ちょっと聞きたいことが」

『私は音姉様と話をしているのです。話さないでください』

泣いてもいいですか？

オレは少し泣きそうになりながらカメラの範囲から出た。多分、今は歌姫達の会話で何も話せないだろう。

オレが離れているとルーイが苦笑しながら近づいてくる。

「悪いな。歌姫様は極度の男性恐怖症なんだ。僕は大丈夫だけど、それ以外の人だとカメラやスクリーンを使わないと満足に話せなくて」

「ふーん。なるほどね。もし、歌姫が男なら大変なことになっていただろうな」

「それは僕が断言する」

まあ、振り返ってみたら二人は楽しそうに笑っているみたいだしよしとするか。多分、オレの聞きたいことを音姉が聞いてくれるだろう。

オレは小さく息を吐いて腕を伸ばした。

「それにしても、ルーイってエースパイロットなんだな」

「僕達の世界の話さ。この世界だと悠人には勝てない。彼は天才の中の天才だ。羨ましい限りだよ」

確かに、悠人のフュリアス操作は神がかっているしな。マテリアルライザーを使って悠人の動きをシュミレーションしてみたけど、あの動きをしようとしたら凄まじい微調整が必要だ。もちろん、マテリアルライザーについていないスラスターやブースターやらを使って。

ルーイの操作もなかなかだと思うんだけどな。

「周さんにルーイ？　どうかしたの？」

その言葉にオレ達は振り返っていた。そこには汗だくの悠人の姿がある。ちなみに隣ではリリーナが完全にダウンしていて鈴から水をもらっていた。

オレは振り返りながら背後を指す。

「音界の歌姫様と音姉が会話をしているんだ。まあ、男のオレは弾きだされたって感じだな」

「そうなんだ。音界の歌姫様ってどんなんかな？」

悠人がスクリーンを覗き込み、そして固まった。

オレ達がそちらを見ると、楽しそうに談笑している二人の姿が。本当に楽しそうだ。音姉だからすぐに打ち解けたに違いない。

「可愛い」

そんな言葉が悠人の口から洩れた瞬間、梅雨に入ってじめじめして蒸し暑いはずの空気が一瞬で緯度の高い地域に来たような感覚に陥った。もちろん、冬だ。

オレがゆっくりそっちを向くと、そこには凄まじいまでの負のオーラ宿すリリーナの姿があった。隣にいる鈴はあたふたとしてどうしたらいいかわからないらしい。

「悠人ー？　今、何て言ったのかな？」

「ひぃっ！」

悠人が声を上げた。何故なら、リリーナがゆらりと文字通りゾンビのように歩き出したから。その歩行速度は遅いけど、その遅さが上手なお化け屋敷以上の怖さを出している。

というか、その手に持つ鎌が一番怖い。

「リ、リリーナ。す、少し落ち着かないかな？」

「悠人。私のことは可愛い？」

これって選択し間違えたら死にそうだな。とりあえず、レヴァンティンでも抜けるように、

『今のマスターは出来ないですよね』

呆れたような声がレヴァンティンから耳に入ってくる。このことも時雨達に話すことを二人で決めたので白昼堂々会話することが出来

る。

まあ、いろいろ騒がれるだろうけど。

「忘れてた。ルーイは止められるか？」

「僕に何を期待している？」

ですよね。

「そもそも、音界の住人はフュリアスに乗るのに適した進化をしている。フュリアスを操作させれば強いが、生身となればこの世界の子供にも負けるだろう。僕も同じだ。まあ、あいつだけは別だが」

「あいつ？」

「『漆黒の聖騎士』と呼ばれる男だ。音界最強の機体でもあるアストラルブレイズ系列を過去に１３度落とされている。僕も落とされかけた」

アストラルブレイズを落とすことなら不可能じゃないけど、かなり難しくなる。問題として、アストラルブレイズにあるであろう特殊能力さえ分からなければ対処しにくい。

まあ、教えてもらえないだろうけど。

「誰か助けてー！」

その声にオレが顔を上げるといつの間にか悠人がリリーナに追いかけられていた。リリーナの動きはまさにゾンビ。ただし、むちゃく

ちゃ速いから恐怖感がやってくる。化け物が怖いという意味ではなく死の恐怖が襲ってくる。

オレでも絶対逃げている。絶対にデュアルオーバードライブを使ってでも逃げる。

「はあ、メリルちゃん。ちょっと待ってね」

音姉が刀を抜いた。ちなみに光輝じゃない。新しく打ってもらった刀だ。耐久度は平凡クラスだが、どこぞの刀匠が打ったとかで斬れ味が少しおかしい。

音姉の体がゆらっと揺れたと思うと一瞬でリリーナの懐に入り込み鳩尾に刀の柄を叩き込んでいた。

久しぶりに見るけど、完全静止状態から最速に移行する加速移動だ。ちなみに、武器を構えていたら発動できないので戦場じゃまず見ない。

「あ、ありがとうございます」

「女の子は大事にしないとだめだよ」

音姉がにっこり笑って刀を鞘に収める。その笑みは般若が背後にいるように見えるけど。

『音姉様？　その女の子は？』

「お、女の子！？」

悠人が大きな声をあげて驚いていた。歌姫は少し首をかしげて、そして、顔を真っ赤にして、

『ご、ごめんなさい。女の子に見えたもので』

悠人はその場に体育座りで座り込んで泣いている。まあ、泣きたくなるだろうな。男なのに女の子と言われれば。

「ほう。あれが男の娘か」

「？　悠人は男の子だけど？」

ルーイの呟いた声にオレは不思議そうな声で返した。ルーイはオレを見て若干目を見開き驚いている。

「バカな。今ので通じないとは。お前は本当に１３歳か？」

「いや、だから何？」

孝治や浩平も時々同じようなことをするけど、一体どういうことだろうか？

『えっと、あなたのお名前は？』

「悠人。真柴悠人」

「なあ」

オレはこの光景を見てルーイに話しかけていた。

「歌姫って男性恐怖症だよな。どうして悠人と平気に会話をしているんだ？」

「僕に聞くな。僕だって驚いているんだ」

悠人と歌姫は今普通に会話をしている。ルーイから聞いていた情報が嘘のようにも思えてくるけど、ルーイが嘘を言うメリットはほとんどないから本当に男性恐怖症なのだろう。

でも、歌姫の顔はどことなく楽しそうだ。頬時は若干赤いし。

『悠人はもしかしてフュリアス乗りですか？』

「うん。ダークエルフってフュリアスに乗っていたよ。ちょっと前の戦いで大破したから今は機体無しかな」

『そうですか。ルーイ』

歌姫の呼びかけにルーイがカメラの前に立った。

「なんでしょうか」

『悠人の機体の型は？』

その言葉にルーイが完全に固まる。まあ、仕方ないだろう。何故なら、悠人の機体は第三世代型。対するルーイの機体は第七世代型。

オレの予想だと、世代の型に合わせて贈り物でもするつもりなのだろう。

「悠人の機体はオリジナルです。はっきり言いますが、操作できるのは悠人一人かと」

『特殊なスラスターやブースターがついているのですか？』

「その」

ルーイはとても言いにくそうだ。だって、本当のことを言っても信じてくれなさそうだし。

「僕の機体は第三世代型だけど」

『えっ？』

歌姫が固まる。まあ、第三世代型と言っても第七世代に匹敵する戦闘能力を持っているからな。

「ダークエルフは第三世代型。とは言っても、僕達の世界での表現だから、そちらの世界は当てはまらないのかな？　ルーイは確かダークエルフの設計図を見ていたよね？」

「悠人の機体は文字通り第三世代型のスペックです。悠人専用に改造はされていますが戦闘能力は第七世代に匹敵するかと」

『ルーイ？』

歌姫の顔がだんだん怒りに染まっていく。オレは小さくため息をついて両者の間に入った。正確にはカメラの前に。

「ストップ。こんなところで言い争いはよくないぞ」

『黙っていてください』

「やだね。歌姫さんは悠人の実力を信じれないらしい。だったら、悠人がその実力を見せればいい」

オレの提案にその場にいる誰もが目を点にしていた。

最大の問題点は悠人のフュリアスが大破しているということなのだが、それに関してならオレには秘策があるから大丈夫。

「悠人とルーイの模擬戦だ。ルーイはアストラルブレイズ。悠人はエクスカリバーを使ってもらう」

「エクス、カリバー？」

悠人が不思議そうな声を上げた。まあ、エクスカリバーは今までのフュリアスの名前に存在しないだろうからな。

オレは笑みを浮かべる。

「音界の技術とソードウルフの技術。その二つを応用したＮＧＦ、Ｎｅｘｔ　Ｇｅｎｅｒａｔｉｏｎ　Ｆｕｒｉｏｕｓの機体だ。まあ、期待していてくれ」

オレはにやりと笑みを浮かべて悠人に言った。名前の由来はとある聖剣からだけど、この名付けたことには理由がある。

エクスカリバーははっきり言うなら設計図は書いたもののスペックを出すことは到底不可能なものになったからだ。それを悠人が扱い

こなせるかどうか。

完全に賭けになるけど悪くはない。

「日にちは一ヶ月後。もし、悠人がスペックを出せるなら」

オレはルーイに笑みを浮かべた。

「アストラルブレイズ程度じゃ手に負えないぜ」

『わかりました』

歌姫も同意してくれる。これで十分だろう。

『では、こちらもロールアウトしたばかりの第八世代型のフュリアスをルーイに託します』

あれ？　なんだか周囲の視線が痛いぞ。

『これは私達の世界とあなた達の世界の喧嘩です。どちらが強いか、この際はっきりしましょう！』

そして、映像が切れた。

悠人とルーイがオレを批判するかのように見てくる。オレはただ苦笑いを浮かべるだけで精いっぱいだった。

第百八十九話　音界の歌姫（後書き）

エクスカリバーはどんな機体にするか決まっていますが、ルーイの最新機はまだ決めていません。何かアイデアを募集しています。

第百九十話　結界術師

オレは小さく溜息をついていた。溜息をつきたくなるくらい大変だったので溜息をついていた。

結論から言うなら悠人とルーイにしこたま怒られた。

まあ、ルーイは全力の悠人と戦いたかったから許してくれたけど。

ＧＦＦ－０３エクスカリバー。

一応、設計図を作って送ったものの、今のパイロット技能では操作出来ないと言われた。

まあ、作った本人が言うけど、悠人が乗ることを前提に作ったからな。乗られたらむしろ落ち込む。

「それにしても」

オレは小さく息を吐いた。そして、空を見上げる。

空は雲一つない青空が広がり、太陽の光がじりじりと周囲を焼いている。

『どうかしましたか？』

レヴァンティンが不思議そうに尋ねてくる。急に空を見上げているから不思議に思ったのだろう。

「いや、ふと思ってな。狭間の鬼のことだ。封印はしっかりしているから再度破られることはないだろうし、このまま夏休みの最後まで見る必要はあるけど多分大丈夫だろうとは思う。でも」

『でも？』

「あいつは一体何なんだ？　まるで、正と不が一緒になっているような」

オレ達が来た理由がこの地の地域部隊が全滅したからだ。そして、市長が『ＧＦ』の介入を拒否し、『ＥＳ』を呼び寄せた。

でも、『ＥＳ』だけでは無理だと判断したアルが『ＧＦ』を呼んだ。だから、オレ達がいる。

『ＧＦ』からも『ＥＳ』からも狭間の鬼は敵だと判断出来る。判断出来るのだが、オレと殴り合った時と悠聖が殴り合った時とは話を聞く限り雰囲気が違うように思えた。

まるで、

『まるで多重人格のようですね』

レヴァンティンの言葉にオレは頷いた。

「ああ。狭間の鬼が世界を滅ぼした存在と聞いているけど、もしかしたら違うのかもしれない」

『どういうことですか？』

「推測なんだけど、世界を滅ぼす存在又は原因は別の場所にあるんじゃないかなって」

狭間の鬼は確かに強大だ。強大だが、あの程度の力では第一特務、特に慧海と戦えばあっという間に終わる可能性がある。

完全復活すれば世界を滅ぼすかもしれないとあいつの口から聞いたことはあるけど、そうなると、完全復活には様々な要因が必要だと考えていいだろう。

そうじゃなかったら都や琴美を殺していれば完全復活になったはずだ。

「犠牲を出して救われる世界。狭間の鬼によって滅びを見なくて済む可能性がある。力も聖剣も伝説も手に入れる力がない、か」

悠聖や浩平達から聞いた悠聖と鬼との会話で鬼が言ったこと。この部分だけを聞けば明らかに今までのイメージが違いすぎる。

『まるで、ヒントの少ないクイズですね。さすがの私でもわかりません』

「何かあればいいんだけどな」

明日に期待するしかない。明日になれば古文書を調べるから。

「ん？　誰かいる」

オレは森の中で誰かが動いているのがわかった。レヴァンティンを軽く叩いてそっちに向かう。

茂みを掻き分けてそこに向かうと、ペリエとアリエの二人がナイフを使った戦っている。

動きを見る限り準備運動だな。

ペリエのナイフ捌きは素早く、アリエがだんだん押されていく。というか、ナイフを使う奴って少ないんだよな。リーチが短いし壊れやすい。

使う場合は都みたいに片手銃と一緒に使うなどサブみたいな役割だ。まあ、都は今杖が基本だけど。

ペリエがアリエのナイフを弾き飛ばす。

「はぁ、アリエはちゃんとやってよ」

「やっているよぅ。でも、ペリエちゃんが強くて」

「私達結界術師はサポート要員なんだから、あいつに迷惑かけないように相手の攻撃を捌けるようにならないと」

どうりでナイフを使うわけだ。

ナイフは小回りが効く上に狭い地形でも使えるから守るという点ではかなりの及第点がある武器だ。

それ以外は悲しい性能だけど。

「頑張っているな」

オレは茂みから出て二人の前に歩いていく。ペリエは驚いて固まって、アリエは嬉しそうにオレに近づいてきた。

「周お兄ちゃん～！」

そして抱きついてくる。由姫に見られたらどうなっていたことやら。

「今日は訓練がない日だろ？　ゆっくり休めよ」

「そういうわけにはいかないわよ。私達は第７６移動隊の中でも下なんだからね。気を抜いていたらいつクビにされるかわからないじゃない」

ペリエとアリエの二人は第７６移動隊に入った。正確には、第７６移動隊がエレノアを観察処分することになったため、そのサポートのために魔界から貸し出されたが正しい。

エレノアも第７６移動隊のメンバーに登録している。

「負けっぱなしは嫌なのよ。でも、みんな化け物みたいに強いし」

二人からすればエレノアクラスがごろごろいると言うべきか。ちなみに正規部隊の中でもここまで戦力が極端なのは第一特務を除けばここだけだ。

下手をすれば正規部隊によるチーム戦で優勝出来るような戦力。

「私達は結界術師。だから、それを伸ばそうと思って」

「一芸特化か。まあ、サポート要員は第７６移動隊にほとんどいないしな」

オレと音姉を除けばサポートがない。音姉の場合はサポートと言うには生易しいか。

「うん。だから、ペリエちゃんと考えて、戦闘能力を上げるんじゃなくて、サポートを強くしようって決めたんだよ」

「私は足手まといは嫌だから。お姉様の苦しみをわかってあげられなかった。もっと力があれば、お姉様は」

「今のエレノアは幸せに見えるか？」

オレの質問にペリエはキョトンとし、そして、ゆっくり頷いた。

「憑き物が落ちたようだわ」

「だったら、今を大切にしろ。オレ達は第７６移動隊だ。何か困ったことがあれば相談しろよ。後、サポートについてもな」

サポートに関してなら第７６移動隊どころか同年代の中でトップの自信がある。

というか、フロントやバックの立ち位置は一芸特化が好まれるが、センターに関しては器用であればあるほどいいからだけど。

「そうなの？」

「信じていないな。だったら見せて」

『医者から言われた言葉を忘れましたか？』

レヴァンティンに諫められてオレはしょぼんとする。

夏休み入るくらいまで魔術は使用禁止だ。教えたくても教えてくれない。

すると、ペリエがクスッと笑った。

「わかったわ。夏休みになったら教えなさいよ。結界術師として第７６移動隊のみんなを助けたいから」

その顔に浮かんでいた笑みは満面の笑みだった。

第百九十一話　魔法

「邪魔するぞー」

その声と共にドアが開き俊輔が現れた。そして、その後ろには委員長の姿がある。

「佐々木君。病院だから、静か、に」

委員長の言葉が途中で止まる。何故なら、その部屋の中の光景を見たからだ。そして、顔を真っ赤にする。

「これは面白いネタね」

委員長の後ろから顔を覗かせた琴美が笑みを浮かべた。それに俊輔が笑みを浮かべて頷き同意する。

何故なら、その部屋、病院の中の病室、その中で二人の男女がキスをしたまま視線を三人に向けて固まっていたからだ。

もちろん、顔は真っ赤。

「はうはうはう。篠宮君がいつの間にか大人に」

「大丈夫だ。あのへたれが童貞を卒業出来るわけがない」

「誰がへたれだ！」

ようやく我に返った和樹が言葉を返す。色々と遅いが。

七葉は恥ずかしいからか頭の上から布団を被って隠れていた。あんな光景を見られたからにはわからないでもない。

「部屋に入る時はノックだろ！」

「貴様は何故常識を知っているんだ？」

「常識外れに向かって言ってんだよ！」

「ついに自分が常識外れと理解したか」

「お前のことだ！」

和樹はゼーハーと息は荒いが、対する俊輔は涼しげな顔をしている。

「えっと、とりあえず、中に入ろうよ。元気かな？　七葉ちゃん」

「ううん、恥ずかしくて死にそうだよ」

七葉が真っ赤な顔を布団から少しだけ覗かせる。そんな様子をみた琴美がクスッと笑った。

「いつから付き合っているのかしら？」

「えっと、二日前から」

そう言う七葉の顔も真っ赤だが、和樹の顔はさらに真っ赤になっていた。

俊輔達はベッドの近くに置かれていた椅子に座り込む。

「お前ら何の用だよ」

「心外だな。この俺様が見舞いに来たのだぞ？　もっと喜べ」

「「わーい」」

七葉と和樹の二人が同時に声を揃えて棒読みで言う。それでも俊輔は満足だったらしく嬉しそうに笑みを浮かべていた。

委員長が苦笑いをしながら七葉に話しかける。

「怪我の具合は？」

「大分よくなったよ。最初の頃は全く動けなかったけど、今ではゆっくりなら歩けるかな。松葉杖はまだまだいるけど」

「そうなんだ。良かった。みんなが帰って来た時、七葉ちゃんが病院に送られたって聞いた時なんて心配で心配で」

あの時、帰って来た第７６移動隊を迎えた時、そこに七葉の姿は無かった。和樹が悠聖に詰め寄って事情を聞き、全員が安堵して座り込んだことはお互いがお互いを見ていた。

一番安堵していたのはもちろん和樹だが。

「そうだな。七葉がいないのを見た時の和樹の慌てっぶりときたら今でも笑えるくらいだ」

「し、仕方ないだろ。俺は七葉のことを心配していたんだから。委員長や琴美様だってずっと祈っていたじゃないか」

誰もが帰って来るのを待っている間、思い思いの格好で無事に帰って来ることを祈っていた。

それは真剣な祈り。誰もが真剣に帰って来ることを祈っていたのだから。

「そっか。だからかも」

七葉は小さく呟いた。

「みんなが祈ってくれたから私は助かったのかも」

「ふむ、興味深いな。聞かせろ」

「あっ、うん。その前に、みんなは魔法を知っているかな？」

魔法。

それは今ではほとんど絶滅した魔術よりも強力なもの。ただ、使用するには魔術と比べてかなりの制限がある。

そして、魔術と違う大きな点もある。

「えっと、魔術よりも制限があるけど強力なものかな。それがどうかしたの？」

委員長の疑問はその場にいる全員の疑問だった。急に魔法と言われ

ても何が何だか誰も理解出来ていない。

もし、周がいたならすぐにわかったであろうが。

「魔法にはね、信仰心を糧に発動するものがあってね、その信仰心は祈りなんだよ」

「つまり、俺達の祈りが？」

和樹の言葉に七葉は頷いた。

「正確にはわからないけどね。だって、ちょうど槍で突かれた場所に純鉄の板が入った御守りがくるわけないよ」

そう言いながら七葉は御守りを取り出した。一部は布をあてたのか真新しいが、重量感のある古びた御守り。

和樹から受け取ったその中には世にも珍しい純鉄が入っていた。魔力の攻撃を一切通さない純粋なもの。これによって七葉は助かったのだ。

これが偶然槍を受け止めたから。でも、あまりに偶然すぎる。

「みんなの祈りが通じたんだと思う。力のある人は戦える。でも、力のない人は戦えない。でも、何も行動出来ないわけじゃない。みんなの無事を強く願っていれば、いつか報われる時がある」

それが今回なのだから。

「リースちゃんはそのことを知っていたのか？」

「えっ？　篠宮君も？　実は私も同じことを考えていた」

二人の会話に他の三人が首を傾げる。まあ、仕方ないだろう。リースから直接言われたのはこの二人だけなのだから。

「いや、みんなが出る前にリースちゃんが望めば叶うかもって言っていたんだ。祈りは魔法の始まりだとも」

「私もそう言われたから。だから、知っていたかもしれない」

琴美を除いてリースが竜言語魔法を使えることを知らない。使えることを知っている二人からすれば納得出来る内容だった。

魔法というほぼ絶滅したものを扱うからこそ、魔法の原理を知っているのだから。

「望めば叶う、か。だったら、私も望もうかな」

七葉は小さく呟く。世界の滅びが来ないことを祈って。

第百九十二話　亜紗の友達（前書き）

皆さん忘れていると思いますが、第四話にあった亜紗の友達のことです。というか、自分も忘れていた。

第百九十二話　亜紗の友達

由姫は一人椅子に座っていた。

決勝進出の決定でたくさんの地元の報道陣が駆け寄り、様々なことを聞かれたからだ。もし、周からアドバイスを受けていなかったら確実にパニクっていただろう。

だって地元ということは予選決勝が行われた土地。ちなみに、予選決勝の地は中国でもある。由姫に中国語を話す能力はない。

その対処に疲れたから由姫は椅子に座っていた。

「はあ、流石に重力砲はまずかったかな」

そう言う由姫は全く後悔していない。周から言われたのだが、

『由姫はアルトと戦えば確実に負ける』

と言われ、こういう風に手の内の一部をさらけ出すことにしたのだ。それが良かったか悪かったか今はわからない。でも、後悔しないことを考えたらこうなった。

真っ正面からＵ－２０でトップ３に入る近接防御の鬼と戦いたいから。

とは言っても、ルーチェ・ディエバイトの決勝には様々な正規部隊員がいる。その全員を倒して一騎打ちすることを考えたら難易度は高い。

「私の拳、通用するかな？」

「通用すると思うよ」

その言葉に由姫は慌てて振り返っていた。そこにいるのはヨーロッパ系の女の子。由姫よりも年齢は上だ。

色白の肌に天然パーマ気味の金髪。そして、青い瞳にそばかすがいくつか見える。

由姫が慌てた理由は、

八陣八叉をやって気配には敏感なはずの由姫の隣に座っていたから。だった。ちなみに、それが出来るのは第７６移動隊の中だと孝治の一人だけでもある。

さらには流暢な日本語。

ルーチェ・ディエバイトの予選決勝があったのは中国だ。それなのに、ヨーロッパ系の言葉ではなく、中国語でもなく、日本語で話しかけてきたのだから。

「あなたは？」

「あたし？　あたしはリコ。リコ・エンターク。聞いたことがないかな？」

由姫はどこかで聞いたことがある名前だなと思いつつどこだったか

必死に思い出す。

「えっと、確かトトカルチョの予想選手の中で私の上に載っていた」

「正解」

ついでに由姫は周から言われた言葉も思い出していた。

「武器は双剣。属性は風。得意な魔術は気配遮断。緩急をつけた加速で敵を翻弄しつつ気配を隠した一芸で敵を倒す」

「正解。情報提供者はやっぱり亜紗？」

「亜紗さんのお知り合いなのですか？」

由姫が驚きながら尋ね返す。何故なら、亜紗の性格から考えて、あまり知り合いが少ないと思っていたからだ。周に引っ付いていたし。

だから、亜紗に知り合いがいることにかなり驚いている。

「あれま。第７６移動隊だから亜紗から聞いたものだと思っていたけど。もしかして、周ちゃん？」

「はい。兄さんからですけど」

「やっぱり。周ちゃんなら私のことを事細かく覚えているはずだよ。亜紗に勝てたのに周ちゃんには一度も勝てなかったし」

「えっ？」

由姫はまた驚いていた。

亜紗の強さは由姫も知っている。真っ正面から戦いたくないと思えるほど。

使って来ないとは言え一撃で全てを断つ矛神だけでなく、亜紗の戦い方も由姫からすれば苦手だった。

相手よりも遥かに速い速度で翻弄する。

それが1対1の時の亜紗の動きだ。

それに勝つレベル。つまり、考えていた以上に緩急がついているか、はたまた、気配遮断がすごいのか。

周に効かないのは周が持つ危険に対する反応速度だろう。いくら死角から不意打ちで攻撃しても受け止められるから。

「それにしても、君が周ちゃんが自慢していた自慢の妹か。うん、確かに可愛いや。あたしの妹にならない？」

「お断りします」

「あらら、断られちゃった。まあ、いいや。ルーチェ・ディエバイト決勝進出おめでとう。ルーチェ・ディエバイト史上史上最速らしいね。入隊から決勝進出まで」

そう言ってリコがにっこり笑いながら由姫に顔を近づける。

「でもね、ルーチェ・ディエバイトはそこまで甘くないよ。決勝は

あたしがあなたを倒す」

その言葉には微かに殺気に近いものが含まれていた。この気配を由姫は知っている。

戦いたいという気持ち。言うなら、闘争心。

「亜紗から聞いているよ。だから、周ちゃんが見ている前でけちょんけちょんに君を倒す。そうすれば、亜紗が周ちゃんと一緒に」

「そんなことは関係ありませんよ」

由姫は笑みを浮かべた。その笑みはあまりにも獰猛な笑み。

「私はあなたを倒す。私はアルトさんと一騎打ちしたいので、どんな卑怯な手を使ってでもあなたを倒します」

「おお、言ったね」

リコも笑みを浮かべた。由姫とよく似た笑みを。

「君のことは調べておくよ。周ちゃんから情報でも聞いておくといいよ。私は、普通じゃないから」

それは言われなくても由姫はわかっている。そもそも、亜紗に勝つような人が普通なわけがない。

でも、いや、だからこそ、由姫はそんな人がいることに安心していた。八陣八叉流を最大限まで出しても大丈夫な相手がいることを。

「しっかり調べた方がいいですよ。私の八陣八叉は普通ではないので」

第百九十二話　亜紗の友達（後書き）

ルーチェ・ディエバイト決勝は１ヶ月以上先なので、その前に体育祭と悠人ＶＳルーイが入ります。

第百九十三話　精霊召喚師（前書き）

いつの間にやら二百話目になりました。四月に終わりたいとほざいていた昔が懐かしいです。第一章は五月には終わらしたいですが。

第百九十三話　精霊召喚師

「我は求める。そなたとの契約を。我は求める。そなたの力を借りることを。我は求める。我が命ある限り、そなたと共にいることを」

複雑に書かれた魔術陣。いや、召喚陣。その上で俊也とフィンブルドがいる。その様子をオレは離れたところで見ていた。

隣にアルネウラと優月を連れて。

『いいんだな。正式な契約をして』

「うん。僕はお師匠様みたいに精霊と共にいたい。そして、僕が守りたいんだ。僕みたいな人を」

『わかったよ。我、フィンブルド。我が召喚主名山俊也の言葉に従い契約する』

召喚陣の色が変わる。契約が為された時に色自体がフィンブルドの持つ魔力の色によって変わるからだ。その色は緑。

オレは拍手をしながら二人に近づいた。

「成功だな」

「はい。フィンブルド、これからもよろしくね」

『ああ。俺はお前が心配だから契約してやったけど、他の奴らは一筋縄じゃいかないぜ』

『あれ？　フィンブルドってもしかして照れてる？』

アルネウラの言葉にフィンブルドはアルネウラを睨みつけた。アルネウラがオレの後ろに隠れる。

オレは小さく溜息をつきながらフィンブルドを見た。

「俊也のことを頼むな。オレはこれからしばらく忙しくなるから夏休みになるまでは俊也についていられない。だから、色々なことをシンクロ出来るお前が教えてやれよ。後、シンクロも」

『わかってる。俊也はまだまだ精霊召喚師としてはひよっこだ。今からバシバシ鍛えてやるし』

「お願い、フィンブルド」

俊也はフィンブルドに任せばいいだろう。

アルネウラやエルフィンから聞いている限り、フィンブルドはぶっきらぼうだが、面倒見がかなりいいらしい。

だから、俊也と契約をした。まあ、風属性は魔術の中でもかなり強いから身の安全は保証されるだろう。

『アルネウラのマスター。一つだけ言っていいか？』

「急になんだ？」

フィンブルドが真剣な表情でオレの目を真っ直ぐ見ながら言う。

『精霊の秘密を話してもいいぜ』

「急に何を」

『俺は真剣だ。俺達はお前が話すことを認めている。悩んでいるんだろ？』

精霊界にある預言者の話。それをオレはアルネウラから事細かく聞いていた。だから、預言者の中身がどれだけ危険か知っている。

知っているからこそ話せない。アルネウラや優月も話していいと言っていたけど、オレは未だに踏ん切りがついていなかった。

「悩んでいるさ。オレが聞いたのはある意味核心だ。だから、話せない。いや、話さないのが間違いかな」

多分、オレの持っている情報を与えたなら周は気づくだろう。あいつはオレ達の中でも頭の回転が早い。

本当に断片だけだけど気づくに違いない。だから、オレはまだ話さない。

「明日、だな。明日、周と一緒にちょっと出かけるからな。狭間の鬼のことを。そこで答えが見つからなかったら」

『それならいい。ただ、精霊界はお前を指示しているってことだ』

「フィンブルドって優しいね」

俊也の言葉にフィンブルドは微かに頬を赤くしてそっぽを向いた。
それを見ているアルネウラはクスクス笑っている。

「お師匠様はすごいですね。精霊みんなから好かれているなんて」

「お前が精霊を大事にすれば、精霊は必ず答えてくれるさ」

それがオレなのだから。

オレは昔から少し特殊な精霊召喚師と呼ばれていた。精霊をたくさん召喚出来るのもだけど、戦場では全く無理をさせず精霊を様子見に行かせろと言った上司に真っ向から反抗したから。

精霊というのは戦場の道具と言われていた当時でオレのやることはかなり特殊だったからだ。

もしかしたら、オレや七葉の環境がこうしたのかもしれないな。

「悠聖みたいに頑張れば俊也だってきっと出来るよ。悠聖は普通のことをしていたから。確かに、悠聖は特殊だと思うよ。でも、そんな悠聖だから私やアルネウラは悠聖を好きになった。そして、私は悠聖の精霊として隣にいたいと思った。女の子としても」

優月が今までのことを思い出すように言う。

オレが悠聖と出会い、精霊としてではなく普通の少女として扱った。
それはフィネーマやアルネウラと同じように。

そして、オレは優月を取り戻すために戦った。それは優月からすればオレが白馬の王子様に見えただろうな。

「あ、ありがとう。僕、頑張るから。お師匠様はこれから何か用事がありますか？」

「ちょっと待ってくれ」

オレはスケジュール帳を取り出した。何か用事があったような気がする。

今日の日付には何もないが、明後日の日付に何かあったはず。

「あった。使役精霊の表を再更新するためにいろいろしなくちゃ駄目だな。悪い。また、な」

「はい。フィンブルド、次にお師匠様から教えてもらうまでにレベルアップしよう」

『簡単にレベルアップはできねえよ。まあ、アルネウラごときには負けたくないな』

『むかっ。べぇー、だ』

俊也とフィンブルドの二人が向こうに歩いていく。姿が見えなくなるまでオレ達はずっとその場にいた。ちなみに、アルネウラはずっと舌を出している。

オレは小さく溜息をついた。

「面倒だな」

『精霊の表のこと？』

オレは頷く。あれはあれで面倒だからな。

だけど、あれをしなければオレがアルネウラ達を使えば冗談抜きで捕まる。それが世界に通用する法の一つだから。

違法な精霊召喚師を捕まえるために作られたものだけど、あれは精霊を道具として見ているとしか思えない。

「悠聖、私のせい？」

「オレはお前が大切だから契約をしたんだ。だから気にするな。システムとしては悪くないさ。でも、オレはあれが好きじゃないからな」

「ごめんなさい。私のせいで」

オレはこつんと悠聖の頭に拳を軽く落とした。そして、手のひらで優月の頭を撫でてやる。

「違うさ。だから、もう言うな。精霊召喚師は自分の精霊達を申告するのが義務だからな。でも、いつかオレはそれを撤廃したい。精霊召喚師にとって精霊は道具じゃない人だってたくさんいる。だから、オレは」

空を見上げ笑みを浮かべる。

「精霊召喚師として誇りを持ち、周達の理想を叶えながら、いつか精霊と共に暮らせる日常を作りたい。それが、オレだ」

『悠聖ならきっと出来るよ』

アルネウラがオレに飛びついてきた。そして、オレの頬にキスしてくる。

『悠聖は最強にして最高の精霊召喚師なんだから』

第百九十三話　精霊召喚師（後書き）

悠聖個人の夢を書いて見ました。悠聖は自分の中ではかなり好きなキャラです。精霊や味方がいなければ逃げ回ることしか出来ないので。

第百九十四話　探し物

都築本家にある書庫。その中に、オレ、孝治、音姉、都の四人はいた。悠聖達は駐在所に待機してもらっている。そもそも、他のメンバーだったら見逃す可能性が高い。

だから、オレ達は四人だけで来ていた。

家主でもあり市長の都築春夫がオレ達を通す時に浮かべていた笑みはかなり気にはなっているが、今は気にせずに探している。

「それにしても、すんなり来れたな」

孝治が本を手に取りパラパラ捲って元の場所に戻す。オレも同じようにパラパラ捲りながら答える。

「そうだよな。心配だ」

ここに来るまで都築春夫に拒否されると思っていたのだが、都築春夫はオレ達を止めることなくこの書庫まで案内してくれた。

気持ち悪いくらい丁寧に。

まあ、膨大な本の量に焦ったけど。

「まあ、見つかるはずがないと高を括っているかわからないけど」

これなら納得は出来る。

オレは小さく溜息をついた読み終わった本を元の場所に戻した。

「魔術さえ使えればな」

「お前は日常生活に魔術を応用するからな。俺には出来ん」

「時々魔術を使ってスルメを作っているお前には言われたくないな」

どっちもどっちなんですけどね。

オレは小さく溜息をつきながら本を開き、捲り、閉じる。これをひたすら繰り返す。単純な作業ばかりは本当に疲れる。

「昔話ばっかりだな」

「ああ。童話というべき内容が多い。材質的に考えてかなり昔に作られたものだな」

「ああ。下手をすればオーバーテクノロジークラス。肌触りからおかしいしな」

鬼に関する内容にかすったものがあったのでオレはそれを近くにあった机の上に置いた。そして、新たな本を手に取る。

オレはまた溜息をついて本を戻す。

「いつになったら終わると思う?」

「このペースだと今日中か?」

孝治が周囲を見渡しながら言う。下手すれば一万冊に届きそうなんだけど。

「それは難しいだろうな」

捲りながらページを見つつ、関係のありそうな内容を探していく。見つかったなら机の上に置く。

「全員がオレ達みたいな速度じゃないだろ？」

「弟くんが早すぎるだけだからね！」

音姉の言葉にオレは苦笑した。

オレの読む速度は、本を取り、ページをパラパラ捲り、本を戻すことをするから、一冊約二秒から三秒だ。

音姉が一冊読み終わる前に横一列が終わりそうな速度。ちなみに、都はどこに何が入っているかわかっているのか端のほうで選定していた。

「それにしても、色々話があるんだな」

本の内容をしっかり読む限り、狭間の鬼の内容はほとんどがお伽話みたいな感じしかない。

お伽話と言っても童話みたいな感じでもある。

それが大半。後は経済の本。ただし、明らかにこの時代のものじゃない。

「世界が滅んだ、にしてはたくさんあるよな」

「ああ。周、これを見ろ」

オレは孝治が差し出した本の内容を見た。

そこに書かれているのは日本の輸入についてのグラフだ。そこに書かれている文字を見てオレは微かに目を見開く。

「石油、に鉄。石油って確か、魔科学時代に使用されていた燃料だよな？　魔力鉱石よりも燃費がいい」

「ああ。お前が開発する出力エンジンよりも遥かに強力な出力が出せるものだったはずだ。それが書かれているってことは」

「魔科学時代の書物ってわけか。コレクターの間じゃ５０００万ほどで売買されるものだよな。でも、魔科学時代含めて三回滅んでいるのにどうしてこんなに残っているんだ？」

魔科学時代の書物は数が少なく希少である。だからこそ、コレクターが集めたくなるのだ。

しかし、ここにはおそらく山のようにある。一体、どうして。

この部屋はさほど頑丈には見えないから、シェルターのような場所にあったのだろうか。はたまた、ただ逃れただけなのか。

「どうすればこれだけの蔵書を守ることが出来る？　三度の文明崩壊が起きたなら、普通は不可能なはずなんじゃ」

「それには賛成だ。だが、俺にはわからない。周でも無理か？」

オレは首を横に振った。そんなに簡単に思いついたなら苦労しない。

オレは小さく溜息をついてレヴァンティンを見る。

「レヴァンティンはどうだ？」

『私は魔科学時代と今の時代の間ではアルタミラで眠っていただけですよ。その間にアルタミラ内で一度使用されましたが、それ以外は動いていません』

つまり、レヴァンティンは知らないというのか。知っているとするならアルだろうな。アルなら確実に知っている。

あいつはだてに長生きはしていない。

「はあ。わからないか。まあ、仕方ないけど。今は蔵書を調べておこう。さっさと終わればいいけど」

その後、オレ達の捜索は続いた。時間で言うなら大体夕方の六時というところだろうか。

だんだん夜が近づいている。それはオレ達の帰る時間も意味していた。

「こんなけか」

オレは山積みにされた本の中から一冊を取り出し中の内容を読む。確かに狭間についての話があった。ただ、狭間の鬼がいるという話はないようだ。

「これだけじゃ何もわからないな」

ハズレだったものを脇にどける。そして、小さく溜息をつきながら他の本を手に取った。

「これだけの数を今日一日で詳しく調べるのですか？」

「いや、今は当たりと外れだけだ。まあ、当たっているものはなさそうだけどな」

オレがそう言った瞬間、オレは手を止めた。開いた本の隙間から紙が落ちたのだ。ページだと思うけど。

オレはそれを拾い上げる。そして、触った感触が微妙に違うのがわかった。

「なんだろ」

オレはその紙をよく見てみる。すると、見開きのように微妙に開いている部分があった。そこに何かが入っている。

オレはそれを取り出す。中に入っていたのは一枚の紙と、そこに張られた極薄極小のチップだった。

「小さいですね」

都がチップを見ながら感嘆の声を上げる。

オレはレヴァンティンを取り出した。

「やっぱりか？」

『はい。魔科学時代の産物です。しかも、アルタミラで使われていたものですね』

その言葉に孝治は微かに目を見開いた。

「アルタミラということはこれもオーバーテクノロジーの産物か。周。お前はどうやって調べるつもりだ？」

「さあな。こんな極小のチップを読み込めるものが存在するわけが」

『この程度なら可能ですよ』

「・・・・・」

オレは完全に言葉を失っていた。まさか、そんなことを言われるとは。

そう言えば、こいつもオーバーテクノロジーの塊だったよな。

「なら頼む。映像だったなら映写機でも」

『その程度も可能ですが？』

「お前はどこまで万能なんだ？」

オレはレヴァンティンにチップを差し込んだ。見たことのない隙間があったので差し込んでみたのだが正解だったみたいだ。

チップの内容を読みとるには例えデバイスを大量に使った集積デバイスでも時間がかかる。今は他の資料でも、

『ふむふむ。マスター。女性の方、特に都さんは退出してもらってもよろしいですか？』

「そっち方面か」

女性の方の退出をお願いするということは正視に耐えないくらい極悪なグロい画像だろう。そういう時はよく女性の方には退出してもらっている。後は見慣れていない人にも。

もし見たなら、悲鳴を上げて時には泣き叫ぶか、その場で吐くか気絶するか。その程度ならまだいいが、精神病を患う可能性だってある。

オレや孝治に言わないのはさらに極悪な状況を知っているからだろう。

「都、ちょっと退出を」

「見ます」

都がオレの手を握ってくる。

「確かめたいのです。誰が何のためにどのような理由でそのチップを残したのかを」

「最悪、心が狂うぞ？」

実際、ニューヨークで生き残った人の内、一人は完全に狂って今でも精神病を扱う隔離施設な中だ。

オレもどこか心が壊れた。

「覚悟の上です。でも、もし、心が狂ったとしても、周様が助けてください」

オレは小さく溜息をついた。そこまで言うなら仕方ない。

「レヴァンティン、頼む」

『わかりました。覚悟して見てください』

第百九十四話　探し物（後書き）

次回、凄まじい内容になります。

第百九十五話　映像

鮮血。

「ひっ」

レヴァンティンが自らを映写機としてスクリーンに映した映像にはその光景が真っ先に映っていた。

都が小さな声を上げるがオレ達は上げない。戦いでは、特に魔界との戦いでこんな光景は見慣れている。

そう思えたのは次の瞬間までだった。

「なっ」

「ひっ」

オレと音姉の声が重なる。孝治も声には出していないが完全に動揺していた。

スクリーンに映った光景を簡単に言うなら真っ赤。ただし、血の色だ。しかも、ただ赤いだけじゃない。

頭が千切れ、腕がひしゃげ、心臓はえぐり取られ、腸はぶちまけられ、足があらぬ方向に向いている。

もし、それが一体だけだったならいいだろう。それならオレや孝治は見たことがある。だが、そこに映っていたのは一人じゃない。

老若男女関係なく、全てが苦悶の表情を浮かべたまま散らばっている。

五体満足の死体などない。全てが破壊されている。ひしゃげているのはまだ軽い方だ。中には握り潰されたようなものや、千切られたものがある。

千切られたものにしても力任せに千切られたものから噛み切られたものまで。腸も腹の中に散らばっているならまだ軽い方だ。誰のものかわからない腸が周囲に散らばっている。

あまつさえ、顔はさらに酷い。共通しているのは胴体から全てが切り離されている。踏み潰されたり、噛み千切られたり、くり抜かれたり。

共通しているのはやはり苦悶の表情。おそらく、生きたまま五体を潰されていったに違いない。さもなくば、こんな死体なんて生まれない。

都はオレの手を握ったまま震えている。仕方のない光景だ。そんなに大量の死体が周囲に散らばっているなか、動物が集まってきているからだ。もちろん、蠅や蛆なども。

はっきり言うなら正視出来る人がいるとは思えない。こんな光景はほとんど見ない。もし、臭いもわかったなら今頃オレはこの場で吐いていただろう。はっきり言って、少しだが冷静にいる今がかなり不思議なくらいだ。

画面が動く。この光景を映している人は一体どういう感情で映して

いるのだろうか。

まるで、小高い丘に登っているのか。画面が頂点に立ち、空を見上げる。そこに映っているのは真っ赤な空。夕焼けなんかじゃない。決して夕焼けなんかじゃない。

何故なら、夕焼けのような優しい赤じゃない。

そして、画面が動く。見えた光景は都市全てを呑み込む炎。周囲にも動く。都市だけじゃない。山も燃えている。

都市に向かって画面が拡大される。見えてきたのは燃えているもの。それを理解した瞬間、都がうずくまるのがわかった。

人だ。真っ黒にりなりかけた人が道路の上でたくさん燃えている。こんなに酷い光景は見たことがない。よく似た光景ならあるが。

その中で動いているものが三つあった。一つは赤い服を着た青年。もう一つは黒い何か。何かまではわからないが、この青年と黒い何かは共に戦っていた。

黒い何かより巨大な黒い何かと。

ぞくり、と背中が凍る。それは、嫌な予感を感じる時、しかも、最も最悪な時、フィネーマを失ったあの時のような逃れることが不可能に近い状況と同じだった。

今までこんなことは戦闘中以外にはならない。でも、そうなるということは、あれは一体なんなんだ?

映像が途切れる。ようやく終わったものだと思った瞬間、新たな映像が現れた。そこに映っていたのは空飛ぶ山。

まるで、禍々しいまでの山。

そして、映像が途切れた。

オレも孝治も音姉も無言だ。都はオレの手をしっかり握りしめたまま何も言わない。

最初の光景。周囲に散らばる死体。画面から見た限り、死体がない場所なんてなかった。よくよく考えてみると、服装がまちまちだったため一般人だろう。

最後の光景。一体何の意味があったのだろうか。

「レヴァンティン、今のはなんだ？」

レヴァンティンなら知っている。そういう直感があった。

『今のはおそらくですが魔科学時代の光景です。最後の浮遊山。あれは滅びの存在。私達は別の名前で読んでいましたが、それに関してはマスターも知っていますよね？』

「ああ。『Ｄｅｓｔｒｏｙｅｒ』だろ。アルから聞いた世界を滅ぼした存在。それが？」

『はい。あの山は魔科学時代が総戦力で挑んだ最終決戦の地です。私もこの場にいましたから』

レヴァンティンが作られた理由は災厄の敵と戦うためだろう。だから、最終決戦の地に参加した。

でも、最初の映像は一体、

『あれはアルタミラです。私も噂でしか聞いたことがないのですが、『Ｄｅｓｔｒｏｙｅｒ』が最初に狙った土地がアルタミラで。そこでは膨大な数の死者が民間人から出たそうです』

「数は？」

画面から見る限り何百万だろうな。

『２５００万人』

「ちょっと待て。今の総人口で言う１％が死んだって言うのか？それは」

否定しようと思っても否定出来なかった。

画面一杯に散らばる死体。大地が見えたことがない。まるで、隙間なく敷き詰められた死体。そして、燃え盛る都市で息絶えた人達。

もし、範囲がさらに広かったなら？　もし、あの周囲にも都市があったなら？

「『Ｄｅｓｔｒｏｙｅｒ』ね。破壊者とはよく言ったものだよ。最悪だ。最低を通り越して最悪だ」

魔科学時代の戦力ですらあんな大虐殺が起きたと考えていいだろう。

だったら、今の時代で何が出来る。

これを知っていたなら、世界が動く理由がわかる。誰もが切羽詰まっているのだろう。

「あれが狭間の鬼なのですね。狭間にあのような力があったなら」

「ああ。完全復活でもされていたならオレ達は死んでいただろうな。多分、狭間市ごと消滅していた」

「こいつが完全復活する時が滅びの時というのか？」

オレは孝治の言葉に頷いた。オレはそう思っている。だが、孝治は首を横に振る。

「違うな。周、お前は大事なことを忘れている」

「大事なこと？」

いつもとは逆の立場にいる孝治が頷く。

「貴族派は狭間の鬼の力を得ようとした。復活する危険性も考えてだ。だが、力の魅力が勝ったのだろう。この意味がお前ならわかるな」

その言葉にオレは苦々しい顔で頷いていた。

そう言えばそうだった。それが正しいなら狭間の鬼＝滅びを起こす存在ではない。よくよく考えてみるとそうだ。

「なら、一体何なのか。調べる必要があるな」

オレは抜き出していた本の山を見た。ここには何かがあるかもしれない。だが、ないかもしれない。

今はただ、一心不乱に探すしかない。

「滅びが何なのか。滅びに対してどうすればいいのか。そして」

チップが何のために残されたのか考えなければいけない。自分が目指す目標のために。

第百九十六話　名を受け継ぐもの

右のレバーで出力を操作しつつペダルを踏み込み機体の姿勢を変えていく。反応速度はダークエルフより甘いけど、機動力は桁違いに高い。ほんの少し踏み込むだけで驚くほど前に進む。

でも、若干の違和感がある。やっぱり、ダークエルフの時に使っていた精神感応システムがないからだろうか。少しだけ動きに違和感がある。

「すごい」

鈴が後部座席で感嘆の息を吐いた。僕はそれを聞きながら小さく息を吐いてコクピットのハッチを開く。

「うん。機動性は悪くないと思うよ。でも、やっぱりというべきかな。精神感応があった方がやりやすいかも」

そう言いながらイグジストアストラルのコクピットから外に出た。そう、僕が乗っていたのはイグジストアストラル。鈴は秘密にしていたみたいで、複座式の機体だった。

複座式の機体は珍しくはない。実際に、『ＧＦ』過激派で開発されていた第二世代は全て複座式。レーダーを確認する役とフュリアス自体を動かす役目。この二つが合わさって強力な戦力となる。

イグジストアストラルの場合は少し違うが。

二人が乗ることで後方への射撃が可能になる。今までは背中の翼に

あるエネルギー砲、サルガタナスの砲門を前に向けてしっかり固定しなければエネルギーチャージが不可能だったが、後部座席の人が手動でエネルギーチャージを行えば前に向ける必要がない。つまり、イグジストアストラルが存在するだけでいつでも射撃できる体勢であると威嚇できる。

「ダークエルフはその点では最高だったかな」

僕はそう言いながら首につけていた首輪のようなものを外した。いつもはパワードスーツの中に身につけているためわからないが、これが精神感応の装置を頭の中に手術して埋め込まなくても精神感応が使えるようになるものだ。神経の一部をインタラプトするとか聞いたけど、原理はよくわからない。

もちろん、これにも限度があり、オーバーテクノロジーがふんだんに使われているため量産することが出来ない。

この首輪、パワードスーツ、ダークエルフ。その全てが僕専用に改造されたものだからかなり使いやすかった。

「ＧＦ－０３エクスカリバーか。どんな機体になるんだろ」

周さんから話を聞く限り、量産は難しく、もしかしたら僕専用になるかもしれないと言っていた。僕はそれで嬉しいけど、そんなオーバースペックの機体を作り上げる周さんはすごいや。

「悠人、イグジストアストラルじゃ訓練にならなかった？」

「ううん。そんなことないよ。イグジストアストラルはかなりいい機体だからね。大分使いやすいよ。これなら腕が鈍らないし」

「だったら、ターゲットの約3割が壊れていないことを説明して」

僕は小さくため息をついて周囲を見渡す。

周囲にあるのは森。そして、その間にぽつぽつと配置されている板がターゲット。確かに、かなりの数が残っている。

「悠人の実力なら全部打つ抜けるはず。でも、失敗したということは、悠人の腕が鈍ったか」

「多分後者だからね。イグジストアストラルの標準装置が若干狂っている。最初は気付かずにやっていたからこうなったけど、最初から気づいていたならこうならなかった」

僕の言葉に鈴がきょとんとする。確実に気付いていないか。まあ、それでも当てられるということは鈴は構えて打つのが苦手なのだろう。典型的なサポート要員だ。

「そうなの？　普通だと思っていたけど」

「３００ｍで１ｍ近くずれるよ。今回のものじゃまず当たらないから。さて」

僕はイグジストアストラルが保管されていた格納庫を見た。そこに今朝早く運び込まれた一機のフュリアスがある。名前はアストラルソティス。アストラルの名前を受け継ぐフュリアスらしい。

今はルーイやリマが音界の歌姫と会話中らしい。昨日の今日なのに送ってくるとは。

向こうも本気みたいだね。

「鈴、ありがとう。イグジストアストラルを送ってくれて」

「う、うん。悠人！　あのね、あのね」

鈴が僕の腕を掴んでくる。そして、僕の目をまっすぐ見てくる。その眼に映っているのは懇願の意志。

「悠人が良ければイグジストアストラルに乗らない？　私は後部座席の方がいいから」

「ごめん」

僕は首を横に振りながら鈴に謝った。そう言うわけにはいかない。いかないから。

「イグジストアストラルは堅牢な要塞だよ。でもね、そんな要塞に籠もってばかりじゃ僕は飛べない。この大空に」

ハッチに足を乗せ落ちない程度まで体を出し手を広げる。まるで、空の全てを掴むように。

「僕は、この大空を飛び交う鳥のように動きたいんだ。戦場でも」

鈴はわかっているはずだ。イグジストアストラルは確かに強力だ。この世に存在するフュリアスの中で最強というに相応しいかもしれない。絶対的な防御。圧倒的な火力を持つ弾膜。

でも、それは機動性を殺すようなこと。それでは空を飛びまわりみんなを守りながら戦えない。

「僕には力がある。あるからこそ、僕は戦場の全てを握れるフュリアス乗りになりたいんだ。鈴が後方でみんなを守りながら戦えるように。僕は、あらゆる状況に対して対応出来るようにしたい。周さんの様に。器用貧乏じゃない、本当の意味で戦場のオールラウンダーになりたいから」

エクスカリバーという名前はアル・アジフさんに聞いた限り過去に存在したらしい聖剣の名前だそうだ。そんなものをもらうには恐れ多いけど今の状況ではそうは言っていられない。

ゲイルナイトと呼ばれた巨大なフュリアス。あれを倒すために大量のフュリアスを動員した。そして、やられたフュリアスも少なくない。そんな機体も戦えるような剣であるなら僕は、

「そして、リリーナや鈴を僕が守る。二人に守られながら守りたい。だから、僕はイグジストアストラルに乗らない」

僕ははっきりと言う。僕の決めたことを。

すると、鈴が少しだけ笑った。

「うん。わかった。今は前部座席に座っておく。あれ？　あれはルーイ君の？」

鈴の言葉に僕が振り返ると、そこにはルーイがいた。正確にはアストラルソティスに乗ったルーイ。コクピットが開いているから中に乗っている人がわかる。

アストラルソティスはアストラルブレイズをさらにスマートにしたもの。色は同じ青。簡単に言うならほぼ人型だが、マテリアルライザーよりかは微かに大きい。シルエットはちょっと体の大きな人というべきか。

装備はわからないけど、腰についているのは対艦刀だろう。ただし、ただの対艦刀じゃない。周さんが設計してみたというエネルギーサーベル。エネルギーを圧縮しつつ解放することで剣の形を取る。消費エネルギーは半端ないがその分抜刀など様々な応用が出来る。ちなみに、ソードウルフにも取り付けられているらしい。ただ、リリーナは使う気がないみたいだ。

背中のブースターはまるで翼のようなアストラルブレイズに似ている。ただし、砲門はないし数も段違いだ。スラスターと背中の中央にあるブースター。この二つを合わせてアストラルソティスのブースターを言ってもいいくらいまるで天使のようだった。

ただし、ここから見ても翼には様々なギミックがあるみたいだ。

「悠人、イグジストアストラルはどうだ?」

「やっぱり、僕の肌には合わないかな。ルーイだったら合いそうかも」

その言葉にルーイは少し考えるしぐさになった。

「僕も乗りたいが、今は歌姫様から受け取ったアストラルソティスがいる。アストラルの名を受け継ぐもの、フュリアスの中でも守護の位置に座する機体、イグジストアストラルを引き継ぐ守護者とい

う役割だからな。僕はこの機体に乗る。例え、守護機の期限であるイグジストアストラルと選択しいられたら迷うけど」

そう言ってルーイはクスッと笑った。いつもは少し大人びているけど、こういう時はほんの少しだけ年上なんだなと思える。

僕はさっきの言葉の中で疑問に思ったことを尋ねた。

「ルーイ。イグジストアストラルって何なの？　ルーイは知っているようだけど」

「そうだな。口止めされていない範囲で教えるなら、アストラルと呼ばれた聖女が乗ったとされる機体だ。だから、イグジスト、存在するという意味の名を付けてイグジストアストラルだ。これ以上は語れないな。鈴はどうだ？」

「私は詳しく知らないから。でも、この機体はなんだか温かい感じはする、かな。もし、聖女がいたとするなら、きっと今でもこの機体にいると思う。そして祈っていると思う」

鈴が笑みを浮かべる。その笑みは満面の笑み。僕やルーイが見とれるくらいの。

「みんなを守れることを望み、そして、誇りに思いながら」

第百九十六話　名を受け継ぐもの（後書き）

アストラルの名を受け継ぐ機体はルーイだけが持っているわけではありません。その話は第三章になれば勝たれると思います。つまり、２０１１年秋か冬になると思います。

幕間　シュナイトラファルト（前書き）

シュナイトラファルトは中二くらいに作り出した言葉です。意味はドイツ語で言ってヴァイスシュヴァルツになります。日本語は本文に出てくるので。

幕間　シュナイトラファルト

一人の青年が地面を駆ける。青年の顔はフードを深くかぶっているからかよくわからない。でも、その腰にぶら下げられているのは白と黒の刀が二本。そして、身につけている服はフード付きの体を隠すようなコートだが、時おり見える場所には白の色が見える。

青年の走る速度はまさに風のように草原の中を全力疾走で駆けて行く。その後ろから追いかけてくる影が一つ。巨大な影でもあり、それは空を飛んでいる。

青年は微かに後ろを振り返り、そして、迫ってくる姿を見た。

「嫌な予感がして引いて正解だね。やはり」

青年が立ち止まる。そして、黒の刀を抜き放った。

「ここがあの地か」

黒の刀を振り抜いた瞬間、何かが潰されるような音が響き渡った。

潰されたものが地面に落ちる。大量の血と共に。その血の色は赤ではなく真っ黒だった。そして、その姿は地面に溶けるように消え去る。

「これ以上は進めないみたいだね。確かに、ここまで厳重に配置されているなら誰も行く心配がしないわけだ。あの語り部の言うこともわかるよ」

そう言いながら青年がフードを脱いだ。

現れる金髪。整った幼さを微かに残す顔。その顔は見た全員がイケメンと思うような神によって作られたともいえる顔だった。

青年が小さく息を吐く。

「さすがに、慧海に言われて顔を変えているとはいえ、やっぱりこの顔が一番かな」

そう言いながら青年、ギルバート・R・フェルデは息を吐いた。彼は気づいていないが、顔を変えた姿でも十分にイケメンのため何の意味もなしていない。

「あれ？　君は」

ギルバートはこちらに向かってくる影を見つけた。その影に近づく。

「ギルバートではないか。なにをしておる？」

アル・アジフだった。アル・アジフは周囲を見渡しながらギルバートに尋ねる。

周囲には生き物の動きがない。もちろん、虫の音も。

「調べものさ。君が単身で動いているのは珍しいね。どうかしたの？」

「いや、我も調べものじゃ。正確には場所を探していたというべきかの。ギルバート、ここは」

「ああ。そうだよ。ここまで来たなら君には話した方がいいかもね。その前に」

ギルバートが振り返る。そこにはやってきた者達を歓迎するかのように黒い異形達が並んでいた。

ギルバートが白の刀も抜く。

「歓迎者達は追い返させてもらうよ」

左右の刀を同時に横に振った瞬間、異形達の体が切断され一瞬にして潰された。まるで、握りつぶされたかのように。

「さすがじゃな。さすが、世界最強の剣士」

「よしてください。僕は最強じゃないよ。最強なのは音姫さんだから」

「そうじゃったな。ギルバート、聞いていいかの？　ここはあの地なのじゃな？」

アル・アジフの言葉にギルバートが頷いた。それを見たアル・アジフがギルバートに背中を向ける。

「それだけを聞けば十分じゃ」

「十分？　君は周に答えを教えるために」

「それはせぬ」

ギルバートに振り返ったアル・アジフの顔には笑みを浮かんでいた。まるで、周を信じているかのように。

「周は必ず辿りつく。その時に説明するのが我の役目じゃ。それまでは我は話さぬ。それを周は嫌うからの」

おそらく、アル・アジフが言おうとすれば周はこう言うだろう。

何かを考えることを止めればそれは生きているとはいえない。答えだけを聞くレールの上を走る列車にはなりたくないな。オレはオレ自身の手で探す。もし、オレが道を見失ったときはヒントとしてくれよ。でも、答えだけは言うなよ。

そうアル・アジフは思っているから周には言わない。

「幸せだね。君は」

「そなたも見つけるとよい。そなたなら引く手数多じゃろ?」

「そういうわけじゃないよ。僕は白(シュナイト)だから。探しているのさ。僕が自ら支えたいと思う、黒の人(ラファルト)を」

「過去にいた伴侶の様なものかの?」

アル・アジフの言葉にギルバートは頷いた。

「そうじゃな。そなたにそのようなものが見つかればいいが。そなたの望みは大きく、そして、深い。いつ見つかるかわからぬぞ」

「それでも君は僕にその考えを改めるように言わないのだろう？」

その言葉に満足した表情でアル・アジフは頷いた。

「我らを助けたものがようやく見つかったからの。我は周を助ける。それは我らの総意じゃ。そなたの言う伴侶の条件を見つけ出したからの」

「それはよかった。君が一番独り身だったからね」

その言葉にアル・アジフが魔術書を開く。でも、ギルバートは動じない。まるで、魔術を放つ隙を作ってくれと言わんばかりに。

アル・アジフは小さくため息をついた。

「そなたと話し合っても進まぬな。では、また会おう。今度はルーチェ・ディエバイト決勝じゃろうな。我は由姫の応援をするつもりじゃし」

「へえ、恋敵と応援するのかい？」

「そういうわけではない。我は由姫の成長を見てみたいのじゃ。周と由姫はお互いが気づいていない以上に根を絡ませておる。もう、対処しようのないくらいにの。じゃから、見てみたいのじゃ。由姫が周のいない場所でどこまで戦えるのかを」

今までほとんどが周のいた場所で戦っていた由姫だったからこそ、アル・アジフは見てみたい。本当の由姫の強さを。本当の意味での恋敵を。

「我は知りたいのじゃ。周を慕っている皆を。その中で勝ちたいからの」

「君らしいかもね。さて、僕も帰るとするよ。長居する気にはなれないからね」

「そうじゃな」

二人は歩き出す。そして、ギルバートは歩きながら振り返った。

「白と黒か。僕はいつか、あいつを助けられるのかな？」

その言葉は本当に小声で近くにいるアル・アジフにすら聞こえることがなかった。

幕間　シュナイトラファルト（後書き）

次から体育祭に向けて一気に書いていきます。そんなに時間はかからないかと。ＧＷ中には終わらしたいです。

第百九十七話　学校の光景（前書き）

周が珍しく敗北します。

第百九十七話　学校の光景

「チェックメイト」

その言葉にオレの顔が引きつるのがわかった。机の上にあるのはチェス盤。そこでは完全にオレのキングが追い詰められていた。ただ、向こうのキングも追い詰めており、クイーンを完全に動けない状況にした瞬間に戦況をひっくり返された。

「ま、参りました」

「イヤッホーッ！」

向かいの椅子に座っていた和樹が腕を振り上げて跳び跳ねる。まさか、和樹に負けるなんて。

「篠宮君はすごいんだね」

「チェスだけは勝てん。だが、将棋や囲碁なら負けんが」

俊輔はさほど驚いていない。驚いた面子の中で唯一言葉を発した委員長以外は完全に驚いたような表情で固まっていた。

オレは小さく息を吐く。

「まさか、和樹にこんな才能があったなんて」

「へっ、なな、七葉ちゃんとさらに特訓したからな。七葉ちゃんはかなり強いんだぜ」

「知ってる。というか、チェスだけは七葉に勝てたことがない」

これは事実だ。チェスの腕が七葉は桁違いに高い。というか、狡猾というか小悪魔というか、ほとんどの手が誘いてを誘発してくるため盤上が簡単にひっくり返っていくのだ。まあ、やっていて七葉ほど面白い奴はいないけど。

和樹の場合は真剣勝負で楽しめる腕だ。七葉は真剣勝負ではやりたくない。

「海道君ってなんでもできるんだ」

「何でもってわけじゃないさ。オレだって出来ないこともある。まあ、特に音楽とかは」

とある楽器を除いて全くできないからな。ちなみに、リコーダーも下手だ。面白いくらいに。

「兄さんは音楽は苦手ですからね。ヴァイオリンを除いて」

「ふむ、周はヴァイオリンを弾けるのか？」

「まあな。弾けると言っても趣味程度だ。そんなに上手いわけじゃない」

音楽も適当に弾いているので本当にあっているかは分からない。でも、ヴァイオリンを弾く時は大抵家族の二人はいるからやり応えはある。

そう言えば、ここに来てから一度も弾いていないな。今度都の前で弾いてみるか。

「それにしてもいいのか？　こんなことをして」

オレは周囲を見渡しながら尋ねた。

トランプをやっているものや将棋をやっている者。一心不乱にノートに何か書きこんでいる者。ちなみ勉強じゃない。友達と談笑している者。そして、カードゲームをしている者。

トランプとカードゲームは違う。これだけは言っておこう。

「何がだ？　自由にしていいＨＲだし別にいいじゃん」

和樹が呑気に言う。オレはそれに対して小さくため息をついた。

「あのな、このＨＲは体育祭前のＨＲだぞ。何か決めることはないのか？」

～一組の光景～

「諸君、聞いてほしい」

黒板の前にある教壇に一人の少年が立っていた。入学式の日に由姫に投げ飛ばされた一人だ。

「私は入学式の日に一度過ちを起こした。そのことは諸君が知っていると思う」

その言葉にとある二人を除いた全員が頷く。

「その日に私は過ちを犯し、傷つけたはずの少女から声をかけてもらったのだ。だからこそ、私はここにいる。だから、宣言させてもらう。我らの女神を二組のあの野郎に奪われていいのか？」

『否！』

声が響き渡る。その中でため息を吐いている数が確実に二つ。

「そうだろう。体育祭を一週間後に控えた今こそ、我々は団結しなければならない。あの時の過ちを私は悔いている。悔いているからこそ、我々は動かなければならない。我々が女神さまと仲良くしていることを。そして、倒さなければならない。二組を」

光が小さくため息をつきながら、亜紗に話しかけた。

「盛り上がるのはいいけど、亜紗からすればありがた迷惑やんな？」

『うん』

亜紗が困ったような表情になる。それに気づかないクラスメートはだんだん話が白熱している。実はここにいる大半が知らない。これが元から一部の生徒によって計画されていたことを。もちろん、亜紗も。

『でも、周さんには勝ってみたいかも。浮気をする旦那は痛めつけないと』

「手加減しやなあかんで」

その言葉に亜紗は頷いた。

〜三組の光景〜

盛り上がっている一組。だらけている二組と違い、三組はきちんと席に座り先生の話に耳を傾けている、というわけではなかった。何故なら、全員がおもいおもいの教科書を取り出して自習しているからだ。もちろん、孝治も。

ただし、孝治のしていることは少し違う。自習しているように見せて体育祭の作戦を練っていた。

ここの担任は全クラスの中で一番厳しく、こういう時間でも自習するように強要するのだ。もちろん、担任自身も何かの本を取り出して勉強している。

だからか誰も反論できない。反論できないからこそ孝治は一人で作戦をし続けている。

出来る理由はいくつかあるが、その内の一つが担任に近いくらい頭がいいということがある。そのため、この学校の教科書以外も勉強

していい。それは隠しやすい森のようだった。

しかも、孝治が今書いているのは日本語でも英語でもない。ラテン語だ。だからこそでもある。

だから、孝治は一心不乱に書き続ける。

例え、周の様な絶対的なリーダーがいなくても、一組の様な圧倒的な勢いがなくても、このクラスが一番であることを証明させるために。それは担任のためじゃない。二ヶ月ほど共に学んだクラスメートたちのために。

「見ていろよ、周」

孝治は小さくつぶやく。そして、ほんの少しだけ笑みを浮かべた。

～四組の光景～

「無理」

オレは即答していた。もちろん、クラスメートに懇願されたから。

「頼むよ。俺達は勝ちたいんだ。だから秘策なんかないのかよ？」

「オレは第７６移動隊の中だと弱い方なんだよ。それにオレが教えれる作戦は全て教えただろ」

まあ、その作戦を無に帰すような存在が二組にいるけど。

「それでもだ。俺達は本気だ。参謀長」

「参謀長に肉体労働させるなよ」

オレは小さくため息をついた。となりでアルネウラがくすくす笑っている。

あの日からアルネウラはオレの隣にいる。クラスメートや先生も驚いたけど、オレの大事な人であることや、クラスメート全員に面識があったからか今ではクラス内で友達もできている。

時々、精霊というのが不思議になる瞬間があるけどな。

「そうだな。オレが言えることは、いや、ここは周隊長の言葉でも言うか」

こういう時は周はよくこう言うよな。

「自分は自分のために戦え。それが全体の結果につながる。オレはそうだと思っている。戦いを決めるのは数だ。だが、数が同じ場合は実力よりも勢いが勝るときが多い。どんな状況でも諦めず戦い続けた時に勝利というものが見えてくるんだ。だから、オレが出せる策はもうないな。でも、本気で全員が戦うなら、自ずと勝利は見えてくる」

オレは拳を握りしめた。

「何が何でも勝つ。絶対にだ」

〜二組の光景〜

「王手」

オレは額に汗が浮かぶのがわかった。そして、盤面を見る。もう、王が逃げる隙間はない。

「参りました」

オレは素直に負けを認める。将棋は得意ではないが苦手でもない。でも、こういう状況になるまでされたのは初めてだ。

机の向かいにある椅子に座る委員長がぐっと拳を握りしめる。

「兄さんって案外弱いんですね」

「弱くない。委員長が強すぎる」

はっきり言ってアマチュアがプロ、しかも、タイトルを獲得するようなプロと戦っているような気分だった。簡単に言うなら実力の差がありすぎる。

相手の手を予想すれば予想するほど絶望しか襲ってこないなんて。

「海道君もなかなかいい手を打つと思うよ。私の手をことごとく潰してきたし」

「それが精いっぱいだったけどな」

委員長がしようとしていることにお気づいた時、オレは勝てる方法をほぼ全通りで探した。でも、出てきた答えが生き延びる手しかなかったのも事実。気づくのがもう少し早ければ対処のしようがあったかもしれない。

オレは小さく息を吐いた。

「ふっ、周が二連敗。ここは俺様がとどめをさすしかないな」

俊輔が囲碁を取り出す。どうやら俊輔は囲碁で勝負を決めたいらしい。オレは小さく頷いた。

俊輔はオレのことを甘く見ているようだが、オレはそこまで甘くない。アマチュアごときには負けないような実力を持っているからな。

オレは俊輔と向かい合う。そして、お互いに笑みを浮かべて勝負が始まった。

放任していた担任が戻ってきた時、燃え尽きて真っ白になった周がいたらしいが、それは別の話である。

第百九十七話　学校の光景（後書き）

クラスで個性を書きたくて書いたら凄まじく差がついてしましました。面白うそうなので放置しますけど。ちなみに、五組は普通です。普通の光景を考えてください。それで全てが収まります。

第百九十八話　平穏（前書き）

周の趣味はヴァイオリン。

第百九十八話　平穏

オレはヴァイオリンを下ろした。手入れは定期的にしていたものの久しぶり弾いたのでかなり腕が墜ちているのがわかった。でも、こいつらの前だと気にしなくていいだろう。

「どうだった？」

ヴァイオリンをケースに収めて尋ねる。オレの質問に誰もが無言だった。オレは苦笑しつつ一番前にいた都の額をコツンとつつく。

「どうだった？」

そして、同じ質問をした。

「周様、すごいです。本当にすごいです。私、感激しました」

「いや、オレよりすごい奴はいくらでもいるから。浩平やリースはどうだった？」

都から少し離れた位置にいる二人に尋ねる。

「周って何でも出来るんだな。いや、まじですごかった。お金は払わないけど」

リースもコクリと頷いている。みんなの反応が聞けてオレは満足だった。

今いる場所は都の家。時刻は放課後になって一時間後。

ちょうど息抜きをしたかったから都にヴァイオリン聞いてもらおうと思い来てみれば、浩平達もいたので一緒に聞いてもらったのだ。

まあ、評価は概ね良かった。

「良かった。これで罵詈雑言が飛んできたらどうしようかと思っていたよ」

「今の音色ならお金を払うなら満足いかないけど、個人がやったり街角でやるなら十分だと思うぜ。リースはどう思う？」

「吟遊詩人になれる」

「それが天職だといいたいのか？」

リースが笑みを浮かべながら頷いた。こいつのこういう顔は浩平と付き合い出してから頻繁に見れるようになった。最初は無表情だったから少し怖かったところもあったけど。

すると、部屋にチャイムの音が鳴り響いた。都が立ち上がって玄関に向かう。

「客人か？　誰だろうな。周のヴァイオリンを聞き逃すとはもったいない」

「多分、知り合いだろう。そうじゃなかったら宅急便。都の家に訪問者があることが珍しそうだし」

すると、廊下からこっちに向かって来る足跡がやって来る。一人じ

ゃない二人だ。

二人ということはつまり、

「あら、あなた達もいたの？」

顔を出してきたのは案の定琴美だった。琴美は少し驚いたようにオレ達を見ている。

「まあな。ちょっと休息を含めて。最近は調べものが多くてさ」

「そう言えばそうですね。私は訓練や調べものですけど、周様は常に調べものですし。どなたと連絡を取っているのですか？」

オレが連絡を取りながら調べものをしていた姿を都は知っている。だからこその言葉だろう。

オレは頷きながら肩をすくめた。

「アルトだよ。今度、ルーチェ・ディエバイトで由姫が戦うアルト。一応、あいつは大学に通っているからな。そっちの方で調べものを頼んでいた。まあ、時間はまだかかるみたいだけど」

「アルト」

リースが少し苦々しい顔になる。何かあったようだ。

「リース？　アルトって奴がどうかしたのか？」

「あいつにコテンパンにされた」

アルトとはよく一緒の任務になっていたからあいつの能力は知っているけど、確かに当時のリースとは相性が悪かっただろうな。

オレみたいな相性の悪さではなく、速度という点で。由姫も下手をすればコテンパンにされるし。

「周、アルトってそんなに強いのか？」

「まあな。音姉、孝治に続く若手三番目の強さを持つ奴だ。『鋼鉄騎士』の異名を持ち、その防御力は極めて高い。七人チーム戦でよく取った戦法が、フロントに音姉とアルトを置いて、バックに孝治と中村。フロントがオレ、亜紗、悠聖でいったからな」

あの時はオレも音姉もレアスキルはほとんど発動させなかったのに正規部隊をいくつも倒した。

その時に手に入れた異名が亜紗と孝治以外継続している。

「ほうほう。つまり、フロントを任せれるくらいの戦闘能力なのか。周、そいつも第７６移動隊に勧誘すれば良かったんじゃないか？」

「アルトは母国大好き人間なんだよ。それに、『僕はドイツ語より日本語の方が得意なんだ。だから、ドイツ語を勉強するよ』とか言う奴だ」

「その人はドイツ人なの？」

琴美が疑いの目でオレを見てくる。まあ、そうなるわな。

アルトは孝治と同じで外国語は堪能だ。まあ、孝治には勝てないけど。日本語に至ってはプロと言ってもいい。ただ、国語だけはダメだ。

どれだけダメかと言うと、孝治に確実に負けるくらい。

「ドイツ人だ。まあ、オレ達の兄貴分みたいな感じだな。感じ的には浩平みたいかな」

「ああ、バカなのね」

「バカなのですね」

「俺にバカって言われてる気分なんだが」

まあ、そうなるけど。

オレは小さく溜息をつきながら時計を見る。時刻から考えてここにいれるのは後一時間ほどか。

「そう言えば、琴美はどうしてここに来たんだ?」

「借りていたCDを返しにきたのよ。そしたら上がっていってと言われて来てみれば」

オレ達がいたということか。

「そうだな。琴美、何かリクエストはあるか? 今なら拙いヴァイオリンの腕で曲を奏でてやるけど?」

「へぇ、あなたはそんなことまで出来るんだ。そうね、ドラマ『Ｊｕｓｔ　ａ　ｌｏｖｅ』の最終回に流れた曲」

「『Ｊｕｓｔ　Ａｌｉｖｅ』だったっけ。あれなら何とか出来るな」

オレはヴァイオリンのケースを開けてヴァイオリンを取り出す。

「あのドラマは斬新でしたね。恋愛ドラマだったはずが大地震が起きてサバイバルものの新ドラマに続きましたし」

あの展開には一緒に見ていた由姫や音姉も呆然としてしまったからな。まさか、次回予告にあった衝撃の最終回という言葉が現実になるとは思わなかったし。

オレは苦笑をしながらヴァイオリンを構える。

それにしても、平穏が続くな。

第百九十八話　平穏（後書き）

最後のドラマはとある雑誌に載っていたものを使いました。最初見た瞬間に呆然したので記憶に残っていましたし。

第百九十九話　前日（前書き）

かなり難産でした。というか、大きな帝国をしていたら時間が・・・

第百九十九話　前日

孝治が担いでいた入場門を下ろす。もちろん、一人じゃなくてクラスメートのみんなと一緒にだ。

そして、一息ついた。

「明日か」

その言葉にクラスメートが入場門を見上げながら頷く。

そう。明日には狭間市立狭間中学校において体育祭が繰り広げられる。注目の種目は最後に行われるクラス対抗８００ｍリレー。その一年生のリレーの注目が極めて高かった。

五つある内の四つのクラスが第７６移動隊のメンバーをアンカーとしているからだ。そのため、誰が一番になるか賭けすら行われている。

「どれだけリードしているかによって決まるな」

孝治は理解している。周の足の速さを。だから、それを前提で考える。

「みんな。俺達は勝つぞ。いや、勝てる戦力だ。必ず勝つ。そのためには全員の力を最大まで出し切るしかない。頑張ろう。テストの点が悪くても、俺達には誇れるものがあるのだと証明してやろう」

オレは呆れたように溜息をついた。理由としてはいくつかあるけど、一番の理由は目の前の光景だろうな。

「七葉、何しに来たんだ？」

オレの目の前には七葉の姿がある。松葉杖をついているがにこやかに笑いながら近づいてくる。

「あっ、悠兄。よっすー」

「よっすーって何だ？」

「学校で流行っている挨拶。おいっすーじゃないよ」

「わけわからん」

オレはまた溜息をついた。

「で、何しに来たんだ？」

「かず君を迎えに。今日はかず君と会う約束していたから」

最近の七葉は和樹と恋人であることを隠すことはなくなった。七葉には全員が祝福しているけどな。

ただ、和樹の方は手荒い歓迎はされているみたいだ。

「悠兄は何をしているの？」

「見たらわかるだろ。体育祭の準備だ」

オレはそう言いながら運動場を指差した。人っ子一人いない運動場を。

まあ、準備と言っても凄まじく卑怯な手を使うだけだけど。

『体育祭の準備と言うより罠だけどね』

召喚すらしていないアルネウラがオレの隣に現れる。

召喚しなくても精霊が現れることは可能だが、その能力は普通の人より劣ることが多い。今のアルネウラは普通の少女だ。

「悠兄らしいかも」

「ちょっと待て。どういうつもりだ？」

「あははっ。私はかず君の場所に向かうから、また」

七葉が松葉杖をつきながら歩いていく。向かう場所は周達のクラスだろう。

オレは小さく息をついてニヤリと笑みを浮かべた。

「絶対に勝ってやる」

散々卑怯な手を使いまくる予定でオレは明日に備えて歩き出した。

「チェック」

オレが動かしたクイーンが和樹のキングを追い詰める。和樹の額には汗が浮かんでいた。

和樹がすかさずナイトを動かすが、その隙を縫うようにビショップが入り込む。

チェックではないが、次の一手を間違えればチェックメイトに変わる一手。

「これが、海道周の指揮か。さすがだな」

俊輔が感心したように言う。

とっさの判断で打っているのだが、いつの間にか形勢はこっちに傾いていた。小難しく考えるなというわけか？

まあ、そういうのがオレの性分だし。

「っく。強くなりすぎだろ。攻めながらこちらの攻め手を全て潰してやがる。下手に動けばクイーン、ビショップ、ルーク、ナイトによってチェックメイトに持っていかれ、チェックに持っていってもクイーンとルークに狩り穫られる。なんじゃこりゃ」

はっきり言って、完全に詰めたと言っても良かった。和樹の額に汗が流れる。

「で、どうするんだ？」

オレが余裕の表情で笑みを浮かべながら言う。これなら負けることはまずない。

「ま、参った」

和樹が頭を下げる。それを聞いたオレは小さく息を吐いた。

「勝てたー」

「海道君、おめでとう。練習でもしていたのかな？」

「いや、直感でいっただけさ」

そう言いながら席を立ちつつ時計を見る。いつの間にかかなりの時間が過ぎていた。用事があったからオレはここに残っているけど、和樹達は大丈夫なのか？

「それより、委員長は時間、大丈夫なのか？」

「うん。今日は何もないから。海道君はそろそろ帰るの？」

「待ち人未だ来たらず、だからな。もう少し待って」

オレがそう言った瞬間、教室のドアが開いた。全員の視線が向く先には由姫の姿があった。

由姫がこっちに駆け寄ってくる。

「周の待ち人って由姫ちゃん？」

「んなわけないだろ。どうした？」

「悠人君からの伝言で、少し遅れる、だそうです。校門のところでリリーナさんと出会ったので」

少し送れるのか。そうなるともう少しいておかないとな。

「後三十分はいないとな。体育祭の準備は終わったし、何をすべきか」

オレが小さく溜息をついていると和樹が立ち上がった。

「じゃ、俺は帰るわ」

「そうか。七葉との時間を楽しめよ」

「な、なな、なな」

オレの言葉が理解出来ないかのように和樹が壊れた機械のごとく同じ言葉を繰り返す。

チェスをやっている間もしきりに時計を気にしていたからな。まあ、終盤になるとそんな余裕が無かったのか見ていなかったけど。

最近の言動や行動から考えるとこれしかないからだ。

「篠宮君の行動はバレバレだったしね」

「これほどわかりやすいものはないな」

そう俊輔が笑みを浮かべた瞬間、ドアが開いた。

「だぁー、もう、そうだよ！　今からななと一緒にデートだよ！　満足か？　これで満足だよな！」

「かず君、それは恥ずかしいよ」

オレは笑いをこらえるのを必死だった。何故なら、ドアが開いた先には七葉の姿があったからだ。

ちなみに、何故かベリエとアリエだっている。

「な、なな、なななな」

「相変わらずだよな。七葉はいいとして、ベリエとアリエはどうしているんだ？」

「お姉様から届け物よ。本当ならあんたなんかに渡したくないけど仕方なしよ、仕方なし」

どうやらここに来る最中に七葉と出会い、一緒に来たらしい。エレノアからの届け物ということはあれだろう。

オレはベリエから紙袋をもらう。ずっしりとした重さを感じながらオレは小さく頷いた。

「確かに受け取った。委員長達とは初めてだよな。ベリエとアリエ。サイドテールがベリエでツインテールがアリエ。第７６移動隊の部隊員で七葉と同じ小学校に通っている」

「本音を言うなら屈辱よ、屈辱。なんで私達が小学校に通わないといけないのよ」

「ベリエちゃん、リリーナ様もいるんだから仕方ないよ。小学校も楽しいよ？」

アリエが不思議そうに首を傾げる。まあ、魔界の成長速度とここの成長速度は違うからな。年齢と外見が合わないことなんて多々ある。

この二人だってそうだし。

「アリエはね。あんたに嵌められるとは思ってもいなかったわ」

「仕方ないだろ。七葉が怪我で活動出来ないんだから。完全復帰は夏休み後半だしな」

「私はあんたと同い年なのよ。なのに、何で小学校なんかに」

「ベリエちゃんは周お兄ちゃんと一緒が良かったんだよね？」

アリエの無邪気な一言にベリエの顔が真っ赤に染まる。それと同時に、

「ツンデレ、キターッ！」

「むかっ」

目を輝かせて万歳をした和樹に七葉が容赦なく松葉杖を下から跳ね上げる。もちろん、とある箇所を狙って。

和樹はその場に倒れ込んだ。

「アリエーッ！」

ベリエが大声を上げてアリエに向かって飛びかかる。だけど、アリエは軽い身のこなしで避けて走り出した。

もちろん、教室の中を。

「ま、待ちなさい！」

「いやだよ。捕まえたかったら追いつけばいいよ？」

「だから、待ちなさい！」

教室の中を駆け回る二人をオレ達は優しい目つきで見守るのだった。

「周さん、待ちくたびれているだろうな」

僕は狭間市立狭間中学校への道のりを走っていた。大体、フルマラソンを二時間半で走破出来る速度。ただ、同年代から見れば速いか

もしれないけど、戦場にいる同年代から見れば遅い。

３０分走れば疲れるし。

「せっかく、エクスカリバーについて話があるって聞いていたのに」

ＧＦ－３エクスカリバー。

大破したダークエルフの代わりに『ＧＦ』から友好の証として提供されたフュリアス。

話を聞く限り、スペックの上ではＧＦ－１ソードウルフと同等に近いらしい。ただ、ソードウルフと違ってエクスカリバーは機動性特化。

火力特化のソードウルフや射撃特化のイグジストアストラルと組めばかなり凶悪になるだろう。

ただ、ルーイの乗るアストラルソティスに勝てるかどうかで言えば難しい。

アストラルソティスはフュリアスの開発で一歩先を行く音界の最新機。しかも、アストラルの名を受け継ぐ極めて強力な機体らしい。

話によれば、アストラルブレイズは音界で２０年ほど最高機として君臨していたらしい。

「お偉いさんもかなり来るらしいし、瞬殺されたらどうしよう」

エクスカリバーとアストラルソティスは共にどちらの世界の最新機。

特に、エクスカリバーは今までのフュリアスとは全く違うと宣伝しているらしく、『ＧＦ』、『ＥＳ』、音界のトップだけでなく、様々な国家からお偉さんが来るらしい。

フュリアス自体が新しいもので、どちらの勢力が優れているのか品定めする可能性もある。

「まだまだ先なのに心配になってきた」

「あっ、悠人だ。先生からの用事は終わったのかな？」

ちょうど中学校に入ると七葉さんが男の人を連れて出て来るところだった。この人が七葉さんの恋人か。

「はい。今から周さんのところに。周さんは教室ですか？」

「そうだよ。チェスで遊んでいるから大丈夫だと思うし」

「ありがとうございます」

僕はさらに速度を上げる。

来賓用の玄関から入り、靴を素早く走りながら脱ぎ、地面を蹴る動作と共に靴を上に飛ばす。それをしっかり捕まえて僕はカバンからビニール袋を取り出して中に放り込んだ。

そのまま周さんのクラスに向かう。

「ごめんなさい。遅れました」

僕がそう言いながらドアを開けると、そこには周さんが由姫さんとチェスをしていた。

周さんが僕を見る。

「大丈夫だ。まあ、さっさと用事を終わらせるか」

そう言うと周さんは紙袋の中から何かを取り出した。旅客機を小さくしてカクカクさせたようなもの。

何かの模型かな。

「ＧＦＦ－３エクスカリバー１／７２の模型」

「これが？」

フュリアスには見えない。

僕がそう思うと周さんが模型を動かした。パーツを動かしていくと、いつの間にかそこにいたのはフュリアスの模型。

「えっ？　えっ？」

僕はあまりのことに目をパチパチさせていた。だって、小型旅客機からフュリアスに変形出来るってありえないからだ。

「完全変形を可能にした模型だ。エレノアの知り合いにプラモデルと呼ばれる模型作りの達人がいたからそいつに頼んで作ってもらった」

「ふむ、これがフュリアスか。ニュースで散々話題となり、ここにも復興のためにいたが、ここまでスマートではなかったな」

「うん。達磨みたいな感じだったよ。これが本来のフュリアスなんだ」

完全変形ということはソードウルフと同じ変形が可能な機体ということになる。でも、これは少し不自然な変形の仕方だ。

フュリアス形態前では飛行が可能だろうけど、フュリアス形態ではせいぜいホバリングしか出来ないに違いない。

「周お兄ちゃん、一般人の前でいいの？」

アリエさんの指摘は最もだ。エクスカリバーは最新機。そんな最新の技術が盗まれたなら色々と大変なことになる。

でも、アリエさんは決戦の時にたくさんの人が来ることを知らないだろうな。

「大丈夫だ。この技術はおいそれと真似出来ない。悠人、これを渡しておくから頭の中でシミュレートしておけよ」

「難しいと思うな」

僕はそう言いながらエクスカリバーの模型が入った紙袋を受け取った。

操作してみないとわからないが、精神感応があるかないかで色々と変わってくる。そのことも聞きたいけどこの場じゃ無理だ。

「それにしても、どうして僕をここに？」

「ここに呼んだのは今からが本題なんだけどな」

周さんが僕に近づいてきて耳元に口を寄せる。

「エクスカリバーの開発が遅れている」

その言葉は本当に消え入りそうで僕にしか聞こえいであろう言葉だった。

「当日には間に合わせるが、最悪、ぶっつけ本番だ。それでもいけるか？」

「精神感応があるなら何とか」

精神感応がなければルーイのアストラルソティスに勝つことは難しい。本気のルーイと1対1で勝ちたいから。

「大丈夫だ。精神感応に関してはエクスカリバー専用のシステムを構築している」

その言葉に僕は驚いていた。精神感応は今では研究がストップされた分野だ。最悪、人の尊厳を無視出来るから。だから、精神感応は10年ほど前から全く進んでいない。

僕の精神感応は外部接続型で、これが開発されたから研究がストップしたらしい。

首輪のような端子が脳から送られる何かを使らしい。詳しくは難しいからわからなかった。

でも、それは『ＥＳ』の技術。『ＧＦ』の周さんがどうして。まさか、アル・アジフさんに何かあったんじゃ、

「安心しろ。オレも精神感応を持っているから。それまではＧＦＦ－２グラムライザーで訓練してもらう。一応、テストパイロット扱いでな」

周さんはそう言いながら僕から離れた。そして、時計を見て息を吐く。

「そろそろみんなで帰るか」

その言葉に僕達は頷いた。そして、周さんの顔が楽しそうであることに気づいた。それは、まさに何かを求めているかのような姿。

まるで、同年代と同じような生き生きとした姿。

僕はこの時、周さんとほとんど年が変わらないことを再認識させられた。

第百九十九話　前日（後書き）

次は第二百話で体育祭を最後まで書きます。何文字になるかわかりませんが。

2016

第二百話　体育祭（前書き）

難産通り越してスランプでした。予定よりも一週間ほど遅くなることに。ｏｒｚ
内容は体育祭ですが、結構ストーリーで重要なものがいくつか混ぜています。
新しい話を始めました。「ディバインナイツ　～星語りの物語～」です。ｔｈｅ
ｏｒｉｇｉｎの方は次の更新がエクスカリバーＶＳアストラルソティスの後になりそうです。フュリアスについてのことを書くのでどうしてもそうなりました。
星語りの方は少し趣向を変えて主人公最弱物語にしています。興味がある方はぜひ読んでください。

2017

第二百話　体育祭

雲一つない晴天。澄み切った空は眩しいまでに朝日を光らせている。

そんな中、浩平が窓枠に腰掛けて朝日を眩しそうに見つめていた。

そして、すぐ隣にあるベッドに視線を向ける。

そこにいるのはクマ柄のパジャマを着たリース。

「全く。何回言っても入って来るんだからな。これでも健全な中学生なんだぜ」

そう言いながら浩平はリースの頭を撫でてやった。リースが嬉しそうに笑みを浮かべる。もちろん、寝息を立てながら。

「それにしても、体育祭か。憂鬱だぜ」

浩平は溜息をつく。

彼が憂鬱になる理由はいくつかあるが、一番の理由は第７６移動隊所属だからだろう。そのおかげで８００リレーのアンカーとして走ることになっていた。

さらに言うなら誰も応援してくれない。応援してくれるのはリース一人。ただし、負けるとは言われている。

「それにしても、まだこんな時間だよな」

時計を見ながら浩平は小さく溜息をついた。狙撃手（スナイパー）として活動出来

る浩平にとって睡眠時間はほとんど関係ない。戦闘中でなければいくらでも寝ることが出来るから。

ただ、一つだけ問題が出て来る。

「今から何をしておこう」

浩平はそうつぶやき、窓枠から降りた。

それから一時間後、目を覚ましたリースが一人人生ゲームを絶好調でやっている浩平を見たという。

場所は変わって洗面所。宿舎の洗面所はそこそこ広く、五人が同時に使っていても不便がないほどだ。そこに由姫と音姫の二人がいた。

二人はシャワーを浴びたのか微かに髪の毛が濡れている。

「相変わらずお姉ちゃんは朝練が厳しいんだから」

「仕方ないよ。ルーチェ・ディエバイトに向けて毎日しないと。私を倒せないと優勝は難しいよ？」

「いや、別に世界最強に名乗り出ようとは思っていませんから」

由姫はそう言いながら小さく息を吐いた。そして、髪の毛をまとめていく。

由姫の髪の毛は音姫ほど長くはないが、普通に学校がある場合は無造作に括っている。ただ、大事な場面では音姫と同じポニーテールにすることがある。
由姫は少しだけ手を止めて、そして、ポニーテールに括った。

「おっ、由姫ちゃんは本気だね」

「茶化さないで。私は別に本気というわけじゃないから。ただ、お兄ちゃんが最後の勝負で楽しく戦ってくれたらなって」

「楽しくか。最後は弟くん、孝治くん、悠聖くん、浩平くん、亜紗ちゃんがアンカーだからね。みんなそれぞれの速さを知っているだろうし」

浩平が一人だけ全く注目されていないのは音姫も知っている。だけど、いや、だからこそ、全員の名前を言った。

音姫は全員が競い合うことを期待しているから。

「これは私の聞いた話なんだけど、私達の知らないところで取り引きがあるみたい」

「取り引き?」

「うん。最後のリレーの時までに、接戦になるように点数調整をするって。友達の美菜さんから聞いて」

「ありえるかも」

実際に賭けすら起きているほどだ。そんなことが起きている可能性だってある。

音姫は長い髪の毛をポニーテールに括った。周からもらった特殊なリボン。歌姫の力を制御するためのアイテム。

音姫は鏡を見てリボンでしっかり括っていることを確認する。

「由姫ちゃんも弟くんも、応援するからね」

フライパンの上で目玉焼きがいい音を立てながら焼けている。隣のウインナーもこんがりになってきた。

オレはそれを確認しながらサラダに特選のドレッシングをかける。

「さてと、後は」

いつもの癖で身体強化魔術を使い、右手に痺れを感じておれはドレッシングの入ったボトルをその場に落とした。

オレは右の拳を握る。

「相変わらずか。ダメだな、このままじゃ」

こういうことはよくある。日常的に魔術を使っていたから無意識に使い、そして、失敗する。

オレは手早く目玉焼きとウインナーをそれぞれの皿に移す。

「後、半月は様子見だもんな。早くならないかな」

魔術があるとないじゃ大きく世界が違ってくる。魔術がないとあの時みたいで嫌なのだ。

あの、『赤のクリスマス』の時みたいに。

「まあ、気にしてても仕方ないか。さてと、後は運んで」

「周お兄ちゃん、おはよう」

アリエの声に振り向いていた。そこには元気良さそうなアリエとアリエに手を引かれた寝ぼけ眼のベリエ。そして、それを苦笑しながら見ているエレノアの姿。

「おはよう、周。手伝った方がいい？」

「そうだな。エレノアは皿を運んでくれ。ベリエはアリエを洗面所に連れて行ってやれ」

そのままじゃ朝ご飯抜きになりそうだしな。

「はーい。ベリエちゃん、行くよ」

ベリエが頭をカクカクさせながらアリエに手を引かれて洗面所に向かう。今の時間帯にいるとするなら中村かな。

「相変わらず周はすごいね。これだけの量を一人で作るなんて」

「そうか？」

オレは味噌汁が入った鍋をかき混ぜながら作ったものを見る。

ただの目玉焼き。焼いただけのウインナー。特選ドレッシングをかけたサラダ。味噌汁。ご飯。

シンプルにいったんだけどな。

「別に手間暇かけるようなものじゃないしな。あっ、そうだ」

オレは冷蔵庫を開けた。その中に入っていたものを取り出す。

「味見するか？」

オレがエレノアに手渡したのはサトウキビのような細長いもの。ただし、サトウキビのように汁を吸うのではなく普通に食べる。

まあ、お菓子だし。

「これ、甘椿？」

「まあな。一昨日に材料が来たから作ってみたんだ。疲れた時には甘いものだろ」

「うん。じゃ、味見するね」

エレノアがオレの作った甘椿をかじる。

2023

甘椿は柔らかくもないが固くもない。噛めば普通に切れるし握り潰すことだって出来る。わかりやすく説明するなら少し溶け始めたチョコレートか。

「甘いけど、甘椿の甘さじゃないよね？　何かアレンジしたの？」

「食べやすいように甘さ控えめにしただけ。魔界じゃ有名なお菓子と言ってもこっちじゃ無名だから。それに、甘過ぎて吐きそうになる」

ちなみにオレは初めて食べた時は吐いた。口を大きく開いて一気に食べたからだ。

おかげで甘椿に関しては微かにトラウマがある。

「そっか。でも、これはとてもおいしいよ。うん。周はすごいね」

「すごくないさ。ただ、作業が面倒だったけどな。さて、さっさと運ぼうぜ。みんなが朝食を待っているはずだ」

「うん。みんなやる気満々だから。羨ましいな」

エレノアがそうポツリと呟いた。エレノアだって本当なら学校に通っているような年齢だ。ただし、実年齢から考えて中学校ではない。観察処分として第７６移動隊にいるが、そのために学校に行くことは許可されていないからだ。

「本当は、お前も学校に行きたかったのか？」

「ううん。私は大丈夫。私は取り返しのつかない罪を一杯したんだから、幸せを望むなんて出来ないよ」

オレは小さく溜息をついた。

「お前は世界を救おうと必死だったんだろ」

エレノアは頷いた。

エレノア達は世界を滅びから救うために狭間の鬼の力を手に入れようとした。それは失敗したけど、世界を救うために動いていたのは否定しない。

「だったら、今度はオレ達と一緒に世界を救おうぜ。今はまだ見つかっていないけど、必ず救ってみせるから」

「言うほど簡単じゃないけどな」

「でも、言わなければ何も始まらない」

世界は黙っていても何も起きない。だからこそ行動したり発言したりするから。選挙もそう、抗議もテロも。

あらゆるやり方で自分の主義主張を表そうとする。確かに過激なこともあるけど、そうでなければ聞き入れてもらえないと思っているから。

「世界を救うことがどれだけ大変かはまだわからないさ。でも、言わなければ、行動しなければ何も始まらない。そういうことだ」

「周って本当に私より年下？」

「誉め言葉をありがとう」

術式阻害結界。

それが張られていることをオレとアルネウラが確認しながら周囲を見渡す。ちなみに、優月は悠人達と一緒に観覧席の方にいる。

術式阻害結界の外にはディアボルガとルカを控えさせているから何かがあれば大丈夫だろう。

「にしても、魔術が使えないってここまで不便なんだな」

体が少し重いような気がする。

戦場での魔術強化は必須だ。特にオレのようなバックかセンターで戦う支援要員は特に。

味方への強化はもちろん、自分への強化により相手のフロントに近づかせないようにしなければならい。戦場で最も狙われるのが支援要員だから。

『そうかもね。術式を阻害するだけだから精霊にはあまり効かないみたいだけど。シンクロでもする？』

「不用意に使えるか。でも、この程度なら魔術トラップの作動には何ら支障をきたさないからな。さてと、準備運動でも」

時計を見ながら言葉を続けようとしたオレの視界に激しく動く二人の姿があった。周と由姫だ。二人は準備運動どころか軽い組み手をやっている。ただし、周の方は全力だろうな。

『うわっ、激しい準備運動だね』

「やっぱり？」

感心するアルネウラとは対照的にオレは溜息をつくだけだった。二人の動きは準備運動というレベルをはるかに超えている。言うなら、訓練だろう。

まあ、見る限り、攻撃と防御を交代しながら打ち合っているからそこまでのものじゃないのかもしれない。

「あいつら、相変わらずというべきかな」

『ははっ。私からすれば由姫ちゃんが周にじゃれついているように見えるけどね。二人はやる気満々だよ』

「やる気満々すぎて怖いくらいだ。二組には要注意人物が多いしな」

最後に行うクラス対抗８００リレー。第７６移動隊がアンカーだが、それ以外の総合力では二組はそこまで高くない。男子の中に女子も混じっているからだが、二組には逃げ足なら学校最速と言われる男子とそれに追随可能な男子がいるらしい。

つまり、リードされた状況やリードしている状況で戦況が酷くなる可能性がある。

上手く妨害しないとな。

『悠聖は相変わらずだね。こういう時は正攻法じゃなくて悪者っぽくやるのは』

「当たり前だろ。大体、勝つために手段は選んでられないしな。それに、オレは勝ちたいんだ。だったら、何でもやってやる」

『戦場で真っ先に狙われるタイプだね』

「自覚はあるぞ」

支援要員だからそんなことはわかっている。時間的にはそろそろ開会式だよな。

「アルネウラは優月のところに。開会式が終わってクラスの席に戻ってくるまで我慢してくれ。はぁ、校長の話とか長いんだろうな」

「本日はお日柄もよく」

始まった。ついに始まった。学生の中でとても嫌われているものの中の一つ。

短ければ短いほど評価が上がるという謎のもの。その名も、

校長先生の話。

もちろん、真面目に聞く人はあまりいない。ほとんどが隣と話していたり妄想の世界に入っていたり。一部は立ったまま寝ている。

「えー、栄えある狭間市立狭間中学校の体育祭が」

もちろん、孝治だって聞いていない。孝治が考えているのはクラス対抗８００ｍリレーのことだ。

おそらく、あれで勝負は決まる。点数配点が極めて高いからだ。クラスの運動神経を調査した限り、一位は一組は堅い。多分、これは確実。ただ、僅差で五組を除いた全てがあるという結果が出ていた。

だからこそのクラス対抗８００ｍリレーだ。

多分、悠聖はトラップを仕掛けている。だが、そのトラップはちょっとした妨害用だから気にしなければ大丈夫だ。問題は周と亜紗の二人。そして、８００ｍであること。

孝治は６００ｍほどなら全力疾走が可能だ。ただ、それ以上は厳しい。

距離が８００ｍであることがかなり弱点になっている。周なら全力疾走以上の速度で２０００ｍは走るだろう。今の状態ならほぼ８００ｍほど。

つまり、ペース配分を考えなければまず勝つことは不可能だということだ。しかも、魔術が使えないという条件だとかなり厳しくなる。最悪、最後の直線で負ける。

どこまでリード出来るかによって大きく変わってくるのだ。

孝治は小さく溜息をついた。

二組をクラス対抗８００ｍリレーまでに大差をつければいい話なのだが、一番の問題として騎馬戦に由姫がいることだ。

騎馬戦は十六人の中から好きな人数で組み、四人の騎手の頭につけている鉢巻きを取れば勝ちという単純明確なものなのだが、同時に複数のクラスが行う。

由姫はおそらく単身で騎手を背負って突っ込んでくるのは目に見えていた。しかも、鉢巻きを取るのではなく、おそらく騎馬から崩していくに違いない。

周と由姫の二人が体育祭での最大のポイントと言っていい。何故なら、二人は魔術を使わなくても身体能力が極めて高い。特に由姫はだ。

その二人の対策を孝治は考える。ついでに、実際起きるであろうシュミレーションも行う。

「たくさんのご来場の皆様にも」

校長の長ったらしい話は続いている。孝治が周囲に目を走らせると聞いている人はほぼ皆無だった。

周は目を瞑り、由姫は空を見上げ、亜紗は足下にある石で遊び、中村は目を開けたまま寝て、悠聖は大きな欠伸をし、浩平が普通に立っている。

「ですから、これからの時代は」

他の人達からの半端ないオーラが校長先生にぶつかっているが、校長先生は汗一つかくことなく話し続けている。

騎馬戦はまず真っ正面からでは無理。だったら、搦め手で行くしかないが、圧倒的な力の前ではその搦め手ですら無力である。搦め手で行っても巻き添えをくらって全滅という可能性だってある。

どうしたものか。

数パターンの搦め手を考えてみたがやっぱり無理だ。当たらないことを祈るしかないのか。

「皆さんが正々堂々戦うことを祈って」

だんだん話し声が大きくなっている。考え込んでいる孝治は気づいていないが、すでに１０分ほど話し続けているのだ。

もちろん、シュミレーションをしていた孝治は時間が経っていることすら気づいていない。

「では、これで終わります」

ようやく校長の話が終わる。それと同時に孝治は最も最適な作戦を

考えついていた。これさえ出来れば騎馬戦はどうにかなる。

「後は交渉するだけか」

そう言いながら孝治は少しだけ笑みを浮かべていた。

「へぇ～、校長先生の話って長いんだ」

「僕達の学校の校長先生が短いだけだからね」

変なところに感心しているリリーナに僕は小さく溜息をついた。

僕達は大きなブルーシートの上に座っている。ちょうど土曜が暇だったのと、アル・アジフさんが所要で来れないからその代わりだ。

ブルーシートには七葉さん、ベリエさん、アリエさんにエレノアさん。そして、僕にリリーナと鈴。ただ、何故かリリーナのお父さんであるギルガメシュさんがいる。

「校長先生の話が長いのは全国共通だと思うよ」

鈴がクスッと笑いながら言う。その笑顔はとても可愛くて思わずドキッとしてしまった。

そんな僕をみたリリーナがムッとする。

「悠人？　何、鼻の下を伸ばしているのかな？」

「の、伸ばしてなんかいないよ。それにしても、結構無防備だよね」

僕は周囲を見渡しながら言う。特に一般来場者の人達を。

身のこなしから考えて一般人に『ＧＦ』のメンバーが混ざっているようには見えない。こういう時には必ず何人かいるはずなのに。

「無防備というより警戒する必要がないだけだと僕は思うが？」

その言葉に振り返ると、ジーパンにジャケット姿のルーイがこっちに近づいてきていた。肩からはカバンがかけられている。ちなみに、隣には誰もいない。

「珍しいね。ルーイが一人でいるなんて」

「リマもルナも演技披露に精を出しているからな。僕は悠人と戦うだけだからアストラルソティスを慣らせればいい」

「ルーイってもう乗っているんだね」

僕なんてまだエクスカリバーに乗っていない。模型は渡されたけど。

「リリーナや鈴もリマやルナと同じように演技披露を行う予定じゃなかったか？」

「うん。鈴は高性能スナイパーライフルの御披露目。私はソードウルフによる演技だよ。悠人は気楽でいいよね」

「気楽というか、僕はまだエクスカリバーに乗っていないからね。いつになったから完成するんだろ」

前日とかに完成させられてぶっつけ本番みたいな状態になったら最悪だ。せめて、三日は練習したい。

模型を使って考えた作戦もあるし。

「エクスカリバーか。ふむ、聖剣の名前だな」

僕達の話を聞いていたギルガメシュさんが唐突に口を開いた。

「パパ。もしかして、星詠みの剣や絶氷の剣と同じクラスの武器？」

星詠みの剣と絶氷の剣は聞いたことがある。確か、とある夫婦が使っていた剣で、世界を滅ぼす力を持った武器。

ただ、あまり強いようには思えないけど。剣を振り上げるだけで光が降り注ぐとか、地面に突き刺すだけで永久凍土が出来上がるとか。

「そうだな。数少ない神剣の中でも過去に破壊神と相対したとされる神剣が聖剣だ。エクスカリバーも同じようなものとされている」

「されているってことは正確にはわからないんだ」

ギルガメシュさんは頷いた。

「はっきり歴史に残っているのは聖剣の中ではエクスカリバー以外のものだ。だが、我が知る限り、エクスカリバーは伝承にしか存在しない。それをつけたとするなら周はその伝承を読んだことがある

みたいだな」

「どういうこと？」

リリーナの疑問は僕も同じだった。ギルガメシュさんは周さんがエクスカリバーという名前をつけた理由を知っているのだろう。

でも、その理由が全くわからない。

「フュリアスという存在がヒントだ。答えは考えろ」

「そうか」

ギルガメシュさんの言葉が言い終わると同時にルーイが小さく頷いた。

「エクスカリバーを何かの方向に導くものだと解釈すればわかりやすいな。この世界ではフュリアスに戦力の流れが傾いている。つまり、エクスカリバーがこれからの世界を導くと過程出来る」

「それはあくまで過程ね。エクスカリバー自体が何なのか知らないならそういう解答もありよ。でも、悠人が乗る意味を考えなさい」

ベリエさんがどこか呆れたように言う。ルーイの答えははどこか間違っていたらしい。ただ、ダメ出しをしていないところを見ると、大きく外れてはいないようだ。

僕は考える。エクスカリバーが僕に渡された理由を。

「もしかして、抑止力？」

僕はポツリと呟いた。

「その答えだと僕と変わらないが？」

「フュリアス開発の先を行くのじゃなく、圧倒的な力を持つフュリアスによってフュリアスの行動を制限するためだとしたら？　これからはルーイの言うようにフュリアスが戦力になると思う。だからこそ、エクスカリバーはフュリアスに対しての抑止力として作られた」

そう考えるとエクスカリバーの形態理由がよくわかる。あの形はスピードを出しやすい。広域に渡って行動が可能な機体だと考えればわかる。

ギルガメシュさんは満足そうに頷いた。

「そうだ。エクスカリバーの持ち手は理想郷、理想郷（アヴァロン）を捜すと言われていてな、エクスカリバーの力でその理想郷（アヴァロン）を作り出すために名が付けられたのだろう」

「ちなみに名付け親は慧海な」

周さんの言葉が聞こえ、そっちを向くと、そこには周さんの友達らしき人を連れた周さんがいた。

周さんは僕の隣に座る。

「オレも和樹も競技がまだまだ先だからな。遊びに来た。ルーイも来てたんだな」

「ああ。僕だって一休みしたい時がある。それに」

ルーイがカバンから何かを取り出す。大きな箱のようなもの。デバイスがついているということは何かの兵器かな？

すると、周さんが感心したように頷いている。どういうことだろう。

「へぇ、ハンディカムか。珍しいな」

「カメラ？」

「記憶媒体をつけた録画用のカメラ。そのカメラの手持ち版がハンディカムだ。結構高くてな、それだけで１００万は飛ぶ」

「ひゃく！？」

僕は完全に絶句していた。中東で１００万ドルを貯めようとしたらどれだけ大変かわかっているからだ。

よほどの金持ちじゃない限り手が出せない。

「ここの通貨換算で１０万円ってところだ。１００万円もしない」

そっか。ここ日本だから通貨は日本円だよね。完全に勘違いしていた。

「ルナに頼まれてな。体育祭行けない代わりに撮ってこいとさ。どういう目的かはわからないが、僕も息抜きついでにしようと思って」

「そういうわけね。それにしても、ハンディカムが１０万か少しカルチャーショックだな」

「魔科学なら僕達の世界が上らしいしな」

音界の技術は極めて高い。アル・アジフさんが舌を巻くほどだ。一番の例を挙げるならフュリアスだろう。

ちなみに、周さんの閃きは完全に化け物のランクに入っているから。

『ＧＦ』も『ＥＳ』も世界も音界の技術を手に入れようと躍起になっている。

「代わりにこっちは魔術が発展している」

「ああ。まさか、生身でフュリアスを蹴り飛ばす人がいるとはな」

「普通は出来ないぞ」

そんな芸当を誰もが出来ていたら今頃は世紀末になっているだろう。というか、フュリアスを蹴り飛ばす人ってことは由姫さんしかいないような。

「でもでも、周お兄ちゃんの閃きはすごいと思うよ。だって、出力エンジンを発明するくらいだし」

「確かに、この世界の出力エンジンは独特だ。特にソードウルフの機体のはな」

変形を念に入れた半永久型出力エンジン。エネルギーを貯めつつ機

動力も高いという摩訶不思議な機体。それがソードウルフの特徴だ。
ただ、鈴が試し乗りした時なんてコクピットが大変なことになっていたっけ。

「変形可能という概念も新しい。僕達の世界では人型しか作られたことがなかったからな」

「まあ、機動力を高めなければついていけない時があるからな。例えば、オレ達と一緒に行動する時なんて最速ならソードウルフの狼形態じゃないとついてこれない」

周さんは本当に早いからね。アイゼンを使って追いかけた時なんて全くついて行けなかった。

「魔術と魔科学の違ってことだろ。まるで、合わせ鏡のようにそれぞれの片方が成長している。二つが合わさればオーバーテクノロジーの頂に近づけそうだな」

確かに、ソードウルフのようなものが作れる技術がある僕達の世界と魔科学が発展したルーイ達の音界。二つの技術が合わさったならどこまで発展するかわからない。

それこそ、オーバーテクノロジーイグジストアストラルやマテリアルライザーみたいなレベルに達しても何らおかしくない。

「まるで強制的に二つに分けられ」

周さんの言葉が途中で止まる。そして、周さんはおもむろに立ち上がった。

「推測もなるけど、もしかしたら」

呟いたような小声。これだけじゃ何を言っているのかよくわからない。

「周？」

エレノアさんが立ち上がって周さんに近づく。周さんはエレノアさんに向かって何かを呟いた。

「うん、いいけど」

「助かる。じゃ、悠人達は体育祭を楽しんでくれよ」

そう言いながら僕の頭を撫でてくるけど、周さんの表情はどこか硬く、まるで何かを警戒しているようだった。

何かに気づいたような表情。言うなら、最悪の事態に直面したアル・アジフさんみたいな表情。

僕はエレノアさんと一緒に歩いていく周さんを見送る。胸にかすかな不安を覚えながら。

体育祭が始まって二種目が消化された。

１００ｍ走と２００ｍ走の予選。特に圧巻だったのが音姫さんが走った２００ｍ走女子だった。

陸上競技部ですら追いつけないほどの圧倒的な走り。ポニーテールがあまりの速度に真横になびくという現象に誰もがポカンとされた。もちろん、隣にいる優月も。

ちなみに、オレやアルネウラは今更という感じだ。あの音姫さんだからこれくらいは普通だろう。

「アルネウラ、次の競技は？」

『ちょっと待ってね。えっと、三年のクラス競技の綱引きだね。でも、何で綱引き？』

「オレに聞くな」

開会式が終わった瞬間にオレはアルネウラ、優月と合流してクラスの待機場所にやって来ていた。もちろん、背中から痛いまでの視線を浴びていたけど今更だ。

「私も悠聖と一緒に参加したかったな」

「そうだよな。一般の人と一緒に参加出来る種目があればいいんだけどな」

そういう種目があるなら確実に出ていた。だけど、先生に聞いた限りじゃ生徒が一般の人の参加種目に参加することは出来ないらしい。

例えば、地元の商店街やら主婦さんやらが集まって行う団体リレー

だ。

「あれ？　白川君知らないの？」

オレの言葉を聞いていたらしい近くの女子が驚いたように口を開いた。

「生徒の参加申請は駄目だけど、一般からの参加申請はありなんだよ。これとか」

指さされたのは二人三脚。来場者から参加者を募って行うタイプだと聞いていたけど。

「これなら二人で参加出来るよ」

その言葉にアルネウラと優月の間で火花が散ったのがわかった。

教えてくれたのは嬉しいけど、せめて、二人がいないところで聞きたかった。

「アルネウラはいつも学校で一緒なんだから譲って」

『やだよ。優月だって精霊なんだから悠聖と一緒に行けばいいじゃん』

「私はアルネウラと違って姿が消せないの。そりゃ、自分の力が未熟なだけだけど、悠聖と一緒に参加したいから」

『二人三脚に参加するのは悠聖の恋人である私なんだよ。悠聖の精霊である優月じゃダメだよ』

「そんなことないもん」

『あるよ』

「ない」

『ある』

「ない」

『ある』

「ないってばない！」

『あるったらある！』

オレは小さく溜息をついていた。オレからすれば二人共大切だから二人を大事にしたいけど、二人はオレを独占しようと必死みたいだ。

周囲の視線、特に男子からの人を殺せそうな視線が本当に痛い。

「えっと、余計なことをした？」

二人三脚のことを教えてくれた女子が苦笑いをしながら尋ねてくる。

オレは笑顔で返した。

「いや、ありがとう。教えてくれて」

「どういたしまして」

女子が離れて行く。まあ、あの視線の中を耐えようとしたらかなり辛いだろうな。オレなら確実に無理だと断言出来る。

そんな中、オレに近づいてくる誰か。その姿を視界の隅で捉えたオレはそっちを振り向いていた。

「どうかしたか？　孝治」

「様子を見るのと、ついでにこれを」

孝治が差し出したのはリレーの申請書。チーム名は第７６移動隊。

ということはつまり、

「団体リレーに出るのか？」

「ああ。俺、お前、周、亜紗、由姫、音姫さんの六人でな」

一般人というより外部のチームしか参加出来ない団体リレー。豪華景品が出るという噂もある。確かに、第７６移動隊としてなら参加可能だ。ただ、これは酷いだろ。

このメンバーで勝てないならどこの正規部隊ですら勝てない。はっきり言うなら、周、由姫、音姫さんの三人で相手が一人で２００ｍトラックを走りきるより速く、リレーを完走出来るだろう。

まあ、８００ｍリレーでは使ってこないだろうけど。使ってこられたら勝てない。

「まあ、いいけどな。ここにサインすればいいのか？」

オレはペンを取り出してサラサラと名前を書いた。そのままペンを虚空にしまう。

フィネーマからもらったデバイスは無駄に高性能だ。こういう文房具を入れていても空間のどこにあるかわからないという事態にはならない。

他のデバイスは基本的に小物を入れたら見つからない。ごちゃごちゃの部屋にペンを一つ隠したような状況だからだ。

「つか、何で一般参加の団体リレーに？　別にやらなくても」

孝治が露骨に視線を逸らした。

「周と由姫が瞬動を使いたいと言ってな」

あいつらは体育祭を何だと考えているんだ？

「音姫さんは瞬歩を」

「・・・・・・お前は？」

「・・・・・・普通に走る」

今の間が少し怖くて何も聞けない。

「相手が可哀想になってくるよな。というか、瞬動を周は使って来ないよな？」

もし使ってくるなら勝ち目がなくなる。あれは術式が使えない状況なら完全なチートだからだ。

すると、孝治は首を横に振った。

「俺は大丈夫だ」

「お前はな！」

オレは大きな声で怒鳴っていた。

体育祭が繰り広げられている中、校舎裏にはオレとエレノア以外の姿はなかった。誰もいないことに今は感謝する。

オレの出番はまだまだ先だし、今抜け出しても十分に大丈夫だろう。

「悪いな。こんなところに連れて」

「ううん。周の顔が少し怖かったから」

オレは自分の顔に手を当てる。そんなに怖かったのだろうか。

「冗談。ただ、深刻そうな顔だったてのは確かだから。思い詰めた感じかな」

「まあ、ちょっと気になったことがあったからな。この推測が正し

いなら色々と大変なことになるし」

「大変なこと？　世界がひっくり返るとか？」

「狭間の鬼は世界の滅びに対して言うなら、滅びを先送りするための存在だとしたら？」

オレの言葉にエレノアが固まった。オレはそれに気づきつつも話を続ける。

「世界の滅びというのは狭間の鬼と関係があるなら、オレ達で倒せるような存在が関係するとは思えない。完全復活していなくてもだ。だったら、狭間の鬼が何故存在するかに行き着く」

「それは神だから」

「魔科学時代、神威時代、神剣時代、そして、今の時代」

オレの言葉にエレノアがハッとした。魔科学時代は最も魔術と科学が合わさった魔科学が最も発展した時代。

魔術よりも遥かに強力な威力を持つ武器が存在したとされる時代。レヴァンティンやアル・アジフ、イグジストアストラルにマテリアルライザーも魔科学時代に作られたことから嘘ではないだろう。

だが、その時代は滅びた。イグジストアストラルやマテリアルライザーを作る技術力を持ちながら滅びた。

次の神威時代はあまり伝承には無いが、オレが知っている情報は神威時代の終わりに神剣が生まれた。オレは魔科学の最高傑作だと思

っているけど。

ただ、神威時代は神の威光が世界を席巻したとされている。つまり、神がいたとされるのは神威時代からと考えられる。

「もし、狭間の鬼が滅びに関係するとしても、魔科学時代で戦えるような力はないはずだ。だから、滅びとは無関係」

「で、でも、滅びをもたらす存在の手先だとしたなら滅びと関係があるんじゃ」

「『世界の滅びを見たいのか』悠聖が聞いた狭間の鬼の言葉だ」

一番の理由は悠聖から聞いた言葉なんだけどな。

「犠牲にして救われる世界があるなら本望だとも言っていたらしい」

「その発言を聞いていると確かに関係がないかも」

「だからだ。だから、オレは滅びと狭間の鬼は無関係だと感じた。そして、狭間の鬼は実際に世界を滅ぼしたと思っている」

「ちょっと待って。意味がわからないから」

確かにそうだろう。オレは鬼が世界の滅びとは無関係だと言いながら世界を滅ぼしたと言った。それは明らかに矛盾している。でも、そうでなければ『Ｄｅｓｔｒｏｙｅｒ』みたいな仰々しい名前がつくわけがない。

「狭間の鬼は世界を滅ぼしたわけじゃない。文明を滅ぼしたんだ。

だから、都は世界を滅ぼした存在だと言い、アル・アジフは『Ｄｅｓｔｒｏｙｅｒ』として記憶している」

「文明が滅びるのと世界が滅びるのは同じじゃないの？」

「なら、何故世界の滅びが魔界や精霊界でも言われているのか」

文明と世界で使い分けたのはこういう理由だ。相手が簡単に移動出来ると仮定したならオレの考えはことごとく潰れる。

その時はその時で諦めるさ。

「今まで世界が滅びたとされている。それは文明が滅んだということだ。文明を滅ぼした存在が狭間の鬼だとするなら色々と辻褄があってくる」

「そこで何をしている！」

その言葉にオレ達は振り返った。そこにいたのは孝治のクラス担任だ。どうやらここに来ていたことを見られていたらしい。

「話はまた後で」

「うん」

核心の話であるこの世界と音界について思いついたことはまた後でいいだろう。今は、今までの情報で得た中で裏付けや推測としてしっかり成り立ったものを言っておけばいい。エレノアならそれだけでいろいろと考えてくれるはずだ。

もしかしたら、ベリエやアリエの方にも話が行くかもしれない。

「貴様、海道周。何故ここにいる？」

「人に聞かれたくない話をしていたので。すぐに表に出ますよ」

実際に人に聞かれたくない話だ。世界の滅びなんて今の世の中で言っても頭がおかしいと言われるか世界が混乱するかのどちらかだ。

時雨や慧海がそのことを知っていながら言わないのは混乱させないためだろう。

「人に聞かれたくない話？　どうせよからぬことを考えていたのだろ？　そいつはこの街を襲った犯罪者だからな」

教師がエレノアを見ながら鼻で笑う。エレノアは拳を握りしめていた。事実だから何も反論できない。でも、オレはかなり気になることがあった。

「どうしてエレノアが犯罪者だと断定できるんだ？」

その言葉に教師の顔があからさまに動揺したのがわかった。エレノアが貴族派に属していたのは『ＧＦ』と『ＥＳ』、そして、市長しか知らない。市長にはしっかり釘をさしておいたし第７６移動隊のみんなが言うわけがない。

市長側から洩れたか、別のルートで漏れたか。

「まあ、いいさ。本当なら秘密裏の情報を諜報したわけだから警察に突き出して訴えても何ら問題はないが、今回は許してやる。さっ

さとどっかに行け」

「貴様、教師に向かって何たる口を」

「エレノアのことは第７６移動隊の管轄だ。オレは第７６移動隊隊長海道周としてお前に話している。どうする？」

教師はあからさまに舌打ちをすると背中を向けた。このままだと噂話でも伝わる可能性がある。最悪の場合はエレノアの身柄をどこか別の場所に移さないと。

「周、ごめん」

オレの背中にエレノアの額が当たったのがわかった。

「私のせいで厄介なことに巻き込まれて。迷惑、だよね」

「ああ。そうだな」

おれはすぐに素直に返す。

「だけど、人は迷惑をかけてるのが当たり前だろ。だから、気にするな。それに、何か大変なことになってもオレが守ってやるよ」

「ふふっ」

エレノアが笑みを浮かべる。それを聞いたオレは満足して歩き出した。エレノアがオレを追いかけるように歩いてくる。

もし、何かのアクションをしてきた場合でも何かをすることを考え

ておかないといけない。この世は上手くいかないのだからこそ、最悪のことも考えておく。それがオレの役割だ。

「まるでプロポーズだね」

「なら、前言撤回する」

「ええっ！？　周は私のことが嫌い？」

「好きだ。ただ、仲間としてな」

「ううっ、予想外だよ。絶対に周には好かれていると思っていたのに。今にも押し倒されそうな感じで」

「オレをなんだと思っているんだ？」

そんな破廉恥なことを誰がするか。

「ご機嫌ね」

鼻歌を歌っていた都の隣に琴美が座った。そして、今開催されている競技を見る。そこで行われているのは第一学年競技種目の球入れ。周と孝治の二人が凄まじい戦いを見していた。

簡単に言うなら二人の戦いと言っていいだろう。クラスのほとんどが球を集める係で、周と孝治が狙いを定めて投げ入れるかかり。た

だし、スピードが半端ない。

「周様が活躍していますから。それに、これだけは周様にも負けないので」

「そう言えば、訓練に取り入れていたわね」

落ちているものを拾って投げる動作はそこそこ重要だ。戦場だとあらゆるものが武器となる。そのため、落ちている者も活用できる時があるのでこういう訓練もする。もちろん、魔術の仕様も無しで。

この動作は遠距離に炸裂魔術を投げ放つ時にも有効なので第７６移動隊ではこれを基礎メニューの一つとして取り入れている。

「私はバックがポジションですから遠距離への投擲は特に必要です。この動作はかなり疲れるんですよ」

「そうなの？」

あまりよくわからなさそうな琴美。ただ、実際にやってみたらわかるが、地面に落ちたものを間髪いれず拾い上げて投げる練習はかなり辛い。下手をすれば腰に怪我を負う。だからこそ練習するのだが。

制限時間が終わった。

周と孝治の二人が肩で息をしながらにらみ合っている。どちらの顔にも笑みが浮かんでいる。確実にオレが勝ったとでも言うつもりなのだろう。

「最初は腕の疲労を感じるんですけど、後々に上半身を起こすこと

が億劫になってくるんです。そして、結局は全身筋肉痛という事態に」

「それは大変ね」

大変では済まないのだが事態を軽く見ている琴美にはそう言う風にしか返せない。

「それにしても、第７６移動隊に入ってから都は生き生きしているわね」

「今更ですよ。周様の隣にいられることもありますが、力を付けているという実感もあります。今は足手まといですが、いつか、周様の隣で活躍できるようになりたいので」

「つまり、都の希望ポジションはセンター？」

「はい」

センターはフロントとバックのどちらも行わなければならず、さらには支援要員としての活躍も大事だ。周が天性のセンター向きの能力を持っている。なんといっても『最強の器用貧乏（オールラウンダー）』だ。

フォトンランサーで相手を威嚇する都の戦い方じゃ到底不可能なのだが。

「無理ね」

「決めつけないでください！」

涙目で言う都の向こうでは勝負の結果が出ていた。結果は同点だ。
二人とも本当に悔しそうな顔になっている。

「それにしても、生き生きしているわね」

「それは先ほど話しましたよ」

「周達の話。最初は子供離れした思考に驚かされたけど、体育祭に参加している姿を見ると中学生って感じよね」

周と孝治がお互いに拳をぶつけ合って下がっていく。確かに、二人の姿はどう見ても中学生として見える姿だった。いつもならどこかもう少し大人びた雰囲気を出しているのに。

「ここに来てから周様達は変わりましたよ。最初はピリピリしていました。第７６移動隊の初任務でしたし。でも、今は任務が無く、純粋に楽しんでいます。周様達は無理に大人びた子供ですから」

「大人びた子供が言うと説得力があるわね」

「い、言わないでください」

都が恥ずかしそうに顔を赤らめて言う。琴美はそれを見ながらクスッと笑った。

そして、呆れたように周囲を見渡す。

「それにしても、生徒会長は大変ね」

「大変なのです」

そう言う都の言葉はどこか楽しそうだった。

都がいるのは本部席の一つだ。生徒会長だからクラスとは離れて本部席にいる。

「でも、やりごたえはありますよ。それに、推薦も取りやすいですし」

「都は学園都市が志望だったわね。学校は？」

「都島学園です。周様達が九月から中等部に通うと言っているので」

「九月から？　ああ、周達は夏休みまでね」

最長で一年の任務だったが、狭間の鬼の一件が終わり、今は封印の経過を見守るだけで十分な状態になっている。予定では夏休みの真ん中まで見守れば後は大丈夫だとか。

だから、周達がいられるのは夏休み終わりまで。

「後二ヶ月半ね。長いようで短い」

「そうですね。その半年後に私はここから出ます」

二人の間で沈黙が走る。今までは都と琴美以外に千春がいた。でも、千春はいない。更には都までも琴美の前からいなくなる。

だから、琴美は何も言えない。

その二人が見ているのは新たに始まった球入れ。浩平がほとんど手のスナップだけで投げている。それは全て入っていた。

「琴美は、大丈夫ですか？　私や千春とは違った意味で皆さんから距離を取られていますし」

「私は大丈夫よ。今までと同じだもの。でも、大学は学園都市にしようか考えているわ」

「どうしてです？」

琴美は少しだけ顔を赤らめた。そして、

「医者になりたいのよ。あの日、狭間の夜の日に私の作った薬が周を起こした。でも、綱渡りギリギリのことをしていたから。もし、いつか周達やあなたが怪我をした時、助けられるようになりたいなって」

「医者ということは医学部ですね。でも、学園都市の医学部は本当に難関ですよ？」

「知っているわ。でも、目指してみる。免許が取れたら第７６移動隊に雇ってもらおうかしら」

「琴美なら大丈夫です。きっと、医学部に入れます」

琴美が恥ずかしそうに顔を赤らめた。それを見た都がクスッと笑う。

それはまるで別れるがあるが、また会おうという誓いのようだった。

しっかり足を伸ばしながらオレは小さく息を吐く。球入れが終わり、結局は浩平の独り勝ち、いくつかの種目が過ぎた後、昼休憩前にクラス全員リレーがある。

三年生、二年生、一年生の順に走るため今走っている二年生が終わればオレ達の番だ。

「海道君、緊張している？」

委員長がオレに話しかけてくる。オレは首を横に振った。

「全く。それにしても、大胆な順番だよな」

オレは全員リレーで走る順番を思い出しながら答える。はっきり言うなら最後の四人を除けば勝つことを諦めているような布陣だった。全クラス男女同数のため、走る順番は女子から男子か男子から女子。ほとんどが女子から始まる。アンカーが男子というのがポイントだからだろう。

「これも作戦の内だから。今回は全員１００ｍずつ走るし、そんなに差は開かないと思うよ」

「開いてもオレ達で挽回か」

挽回出来るような距離ならいいけど。最悪、瞬動と瞬歩を同時に使

わないといけないかもしれない。まあ、ないと思うけど。

「周隊長もアンカーか？」

悠聖の声に振り返ると、アンカーのたすきをかけた悠聖と孝治がいた。亜紗もたすきをつくている。

本気でガチだな。

「８００ｍリレーの前哨戦ってか？」

「そうなる。五組を除いてアンカーは俺達だ。この勝負が８００ｍリレーの作戦にも繋がる」

「周隊長はガチで速いからな」

瞬動や瞬歩だと色々問題が出て来るのだが、まあ、言わなくていいだろう。ただ、このメンバーだと今回は瞬動や瞬歩を使わないと辛いだろう。

使ったら何かと言われそうだけど。

それに、本番で使えないことをこいつらは理解しているのだろうか。

「今勝っているのは五組か。やっぱり、球入れがでかかったか」

「ふむ。確かにな。俺とお前がお互いに潰し合って同率二位だからな。五組が一位なのは当たり前だろう」

「それにしても、なんで球入れなんだ？　普通、球入れの球は玉だ

ろ？」

悠聖の疑問は最もだ。ただ、球の形を見ていたらわかるだろう。

「使われた球がソフトテニス用の柔らかいものだからだろ。何でこんなにあるかわからないけど」

「そこは学校の七不思議だろうな。さて、そろそろ入場だ。周、お前は最速で行くのだろ？」

オレが頷くのと同時に二年生の退場が始まる。さて、そろそろ出番だ。

「海道君、頑張ろうね」

委員長がにこやかに笑みを浮かべながら拳を突き出してくる。オレはそれにコツンと拳を当てた。

「ああ。勝つさ。オレ達でな」

クラス全員リレー一年生の戦い。

すでにリレーは終盤に入っていた。トップを走っているのは三組。そのすぐ後に一組と四組。少し離れて五組と、ここまではかなりの接戦だった。だが、三組の前に二組が走っている。後ちょっとで一周抜かしだ。

走者は二組が後ろから六人目。つまり、他は後ろから四人目二組の人は必死に逃げている。だが、距離はだんだん詰まっていく。

「少しマズいな」

由姫は小さく呟いた。もし、前に誰かいる状態だったならこの戦局を乗り切ることは難しい。

次のランナーは俊輔だ。そして、由姫、一樹、委員長、周となっている。

誰もが見ても二組が最下位なのは確かだ。でも、それを逆転する手段があるとするなら、それは完全に爽快となる。

周はそれを狙っている。最後の直線５０ｍほどで全員を抜かして勝つことを。

「お兄ちゃんのために詰めたいけど」

トラックに入りながら由姫は戦況を見る。ほとんど三組に並ばれて俊輔にバトンが渡った。

三組の人は８００ｍリレーでも走る人。

俊輔が走る。三組より明らかに速いスピードで。

「きた」

由姫は目を瞑って体の状態を変える。戦闘用への状態に。

由姫が目を開けると俊輔がリードを開けながら向かってくる。実際はだんだん距離を詰めている。

傍目からみれば絶望的な差。でも、由姫からの四人は一筋縄じゃいかないメンバーばかりだ。

由姫は構えた。クラウチングスタートのように姿勢は低い。でも、手は地面についていない。

由姫の視界にトラックを挟んで向こう側にいる亜紗が目に入った。その手にあるスケッチブックにはこう書かれている。

『頑張れ』

その文字に笑みで返し、俊輔が差し出したバトンを掴んだ瞬間、その姿を見ていた全員の視界から由姫が消えた。それと同時にずざざざっと大きな音と土煙と共に由姫がいる。

八陣八叉流の移動技である瞬動だ。

魔力に頼るのではなく体にある気力を足裏に溜めて爆発させることで移動する方法だ。ただ、性能はかなりピーキーなためあまり使われない。

もし、前に誰かいたら跳ね飛ばしていただろう。そう言うべき速度だった。

由姫がいる場所はバトンを受け取る場所から少し離れた位置。ちょうどトラックが丸くなっている部分の一番端までの距離を直線で駆

け抜けたような感じだ。

由姫がさらに地面を蹴り、今度は次の走者である和樹まで一直線の場所にたどり着いていた。

その時にようやく三組が次の走者にバトンが渡る。７、８ｍの差があっという間に５０ｍ近くまで開いていた。

由姫が地面を蹴る。その時には和樹は走り出す。走り出した和樹の後ろで由姫はスピードを殺しながら減速し、最高のタイミングで和樹にバトンを渡した。

「お願いします！」

「任せろ！」

和樹が走る。さすがに半分も離されていないなら和樹からすれば追いかけるというパターンだ。しかも、他のクラスが渡すバトンの相手は女子。距離をさらに詰める。

「俺は、追いかけるのは、得意だ！」

その言葉と共に和樹が加速する。その速度は誰の目から見ても早かった。

距離がどんどん詰まって行く。四位から８０ｍほどがスタートだったのに、半分走った頃には７０ｍ。そして、２５ｍまでやってきた時には４０ｍほどまでに縮まっていた。

和樹はさらに走る。腕を振り、足を動かし、最速の動きで。

「頼んだ！　委員長！」

「うん！」

委員長にバトンが渡る。この時点で先頭までの距離は６０ｍ。トップは一組だが、四組と三組が少し離れてついている。

委員長が地面を蹴る。その速さは完全に一般人最速というべきだった。

五組との差があっという間に縮まる。もちろん、五組も足の速い女子を入れているからか、三組、四組の背中がだんだん見えてくる。でも、それすらも遅い。

「負けない」

委員長は小さく呟いた。その小さな体のどこに力が詰まっているのかわからない速度。先頭がバトンを渡すより早く五組の背中を抜く。距離はすでに３０ｍほど。

向こうが５０ｍ弱走る前に７０ｍ近く走ったことになる。

先頭の一組のバトンがアンカーである亜紗の手に渡った。続けざまに孝治、悠聖と三組、四組のアンカーに渡っていく。

渡った瞬間から距離は全く詰まらない。むしろ、離されているような気もする。でも、委員長は負ける気がしなかった。

「海道君！」

委員長の手にあるバトンが周の手に渡る。

「勝って！」

「任せろ！」

バトンが渡った瞬間、周の体は２０ｍほど先にあった。

由姫のように一直線で走っていない。トラックを周りながらありえないというべき速度で走って、いや、歩いているように見える。

まるで走り幅跳びのごとく跳んでいるのだ。ただ、上半身が全くブレていない。あっという間に悠聖を抜かし、デットヒートしている亜紗と孝治の二人に並ぼうとする。

「先に行くぜ」

「行かすか！」

孝治が周の進行方向に体を動かす。その間に亜紗は速度を上げた。後１０ｍほど。この状況で抜かそうとすれば亜紗が一位になる。そういう状況だった。

周は体をズラす。ゴールまで一直線。一位の亜紗との差は２ｍ。亜紗はゴールまで５ｍ。

そして、周の姿が消えた。消えたと同時にゴールテープを切る周がいた。

続けて亜紗、孝治がゴールする。

「まさか、瞬歩に瞬動を使ってくるとはな」

周が距離を詰める際に使用した技が瞬歩だ。ただし、まだまだかなり荒いが。

白百合流の行動術で、まるで走っている歩いているように見せる。速度は普通に走るより速い。

周の場合は走り幅跳びをしているようにしか見えないが、上半身だけを見れば歩いているように見える。そして、最後の瞬動。

ほぼ一周抜かしの状態から五人で一位を取るというある意味暴挙。それを成し遂げた周は孝治に笑みを浮かべていた。

「８００ｍリレーじゃ使えないからな。ここで使うしかないだろ」

「そうだな」

「あれ？　周は８００ｍで瞬動使わないのか？」

悠聖が不思議そうに尋ねる。この三人は先程まで全力疾走していたはずなのに息すら切れていない。そのことに周囲の生徒はポカンとしていた。

普通は少しくらい息が切れていてもいいのだが、こういう全力疾走の訓練はよくするので息が切れることはない。

「瞬歩は除いて、瞬動は足への負担が大きいからな。８００ｍも瞬

動で動けばどこかが肉離れする。これは基本だぞ」

「八陣八叉流と戦う時は５００ｍの距離を開けておけば基本的に大丈夫だ。俺や周は八陣八叉流の相手と戦ったことはあるが、悠聖はないな」

「まあな。由姫ぐらいじゃね？　オレが戦ったことのある八陣八叉流の人物は」

退場の音楽が流れ、周達は仲良く退場する。

「これでオレ達の二組がリードだな」

「くっそ。二組に勝てると思ったんだけどな」

「周の前に走った人物が速かったな。俺達の少し遅いくらいか？」

「確実にオレは負けるな」

「違いない」

「まあ、８００ｍリレーで走るからな。今は飯だ飯。ベリエとアリエ、そして、エレノアの作った弁当だな」

周はそう言いながら退場門をくぐった。

「「「いただきます！」」」

みんなの声が重なり、ブルーシートの上に座る第７６移動隊及びその関係者達は一斉に弁当に箸をつけた。

弁当を作ったのは基本的にエレノアだが、ベリエやアリエにリリーナ、鈴、さらにはリースまでも手伝っていた。

「光は手を出していないだろうな」

「目をくり抜いたろか？」

真顔で尋ねる孝治に光は真顔で返していた。ちなみに、光も手伝おうとしたが厨房から出されたのが事実だ。

「それにしても、これだけの量を作るのは大変じゃないのか？」

いつも人数分の朝食を用意する周からすれば全員分の昼食を用意するのがどれだけ大変かわかっている。

「そんなにかな。料理は好きだし、ベリエやアリエにみんな手伝ってくれたから」

エレノアがにっこり笑いながら言う。そう言いながら料理のレベルには周ですら舌を巻いていた。

味付けや盛り付けなど様々なありとあらゆる部分で負けているとわかる。簡単に言うなら雲の上の存在。

「中村はエレノアから料理を学べばいいんじゃないか？」

「俺を殺す気か！？」

孝治の言いたいことはその場にいる第７６移動隊のほとんどがわかっていた。光の料理は冗談抜きで殺人級だ。光の料理だと知らずに食べた時なんて百戦錬磨の周と孝治が泡を吹きながら気絶したこともある。

料理が下手というレベルを超越していたりもする。

「孝治、何が言いたいん？」

光の手に握られていた箸がバキッと音を立てて折れた。音姫がクスクス笑う。

「光ちゃんは料理下手だけど、今の孝治くんの言葉はどんな料理でも味見するってことじゃないかな？」

孝治がそっぽを向く。少し顔が赤いような気もするが、この場所でそれを指摘する人はいない。

光の料理は殺人級だ。周は確実に食べないと言うだろう。だけど、孝治は殺す気かと言った。つまり、殺人級の料理であっても光が作ったなら味見はするということだ。

光の顔も真っ赤に染まり俯いている。

「孝治は愛されているな。リースも俺を愛してくれ」

「無理」

リースの声は消え入りそうだったが、その理由をみんなわかっていた。何故なら、浩平の弁当だけが他のと違う盛り付けだったからだ。はっきり言うならハートマークがある。

浩平は無意識かもしれないがそれを見ながらニヤニヤしている。そして、みんなが微かに距離を取っているのも気づいていない。

そんな中、リースは顔を真っ赤にして夫婦のように浩平と隣り合っている。こういう姿を見るだけでもお似合いだ。

「なあ、俊輔。俺は久しぶりにお前らを殺したい気持ちで溢れているんだが」

「心配するな。俺はお前を殺したい」

俊輔は七葉と隣り合って座る和樹に向かって言う。そんな俊輔を見ながら委員長はクスクス笑った。

「カップル率がすごいよね。男の人の大半に彼女がいるって」

「くっ、この俺様がぼっちだと。ありえん。何故、俺に彼女がいないんだ！」

「性格だろ！」

和樹がニヤリと笑みを浮かべる。その笑みは完全な勝者の笑み。明らかに挑発していた。

俊輔が立ち上がる。

「和樹、今日という今日は」

「静かにしてください。兄さん達みんな昼食を取っているんですよ」

そんな俊輔を見かねたのか由姫が呆れたように言った。ただし、自分のデバイスを隣に起きながら。

俊輔が座って弁当を食べる。逆らえばどうなるかはよくわかっている。

「さすがの俊輔も由姫の武力の前では形無しだな」

「兄さん？　それはどういうつもりですか？」

『由姫の拳は殺人級。光と同じくらいに』

「亜紗？　どういう意味か説明してもらおか？」

火に油どころか石油タンクの中身をぶちまけたような状況に周が弁当を持ったまま後ろに下がる。

由姫と光は亜紗に近づいた。対する亜紗は楽しそうにスケッチブックを捲る。

『事実』

「確かに光さんの料理は殺人級ですけど」

「由姫？　殴られたいん？」

指をボキボキ鳴らす光を見ながら周は小さく息を吐いた。

「平和だな」

「周さん、現実逃避をしないでください」

悠人が呆れたように言うが、戦闘が始まりそうな光景に焦っているのか周と同じように下がっている。ちなみに、悠人は弁当を持っていない。リリーナと鈴の二人が自分達の弁当から悠人の口に運んでいるのだ。

「悠人、僕は一つ質問していいか？」

「ルーイ？　まあ、いいけど」

不思議そうに周囲を見渡しているルーイは真顔で、本当に真剣な表情で悠人に尋ねた。

「男女の仲が何故ここまでいいのだ？　僕は悠人達が特別だと思っていた」

「・・・・・・・・・・えっ？」

悠人がかなり間を開けて聞き返す。普通は悠人と同じような反応になるだろう。だが、ルーイの表情はそれをものともしないくらいに真剣だった。

というか、あまりに真剣過ぎて周の手すら止まっている。

「ルーイ。音界はここまで仲良くないの？」

「ない」

悠人の言葉にルーイは即答していた。

新たな音界の豆知識が入った。

「あれれ？　リマやルナとは？　リリーナから見てもかなり仲がいいと思ったけど？」

「？　上司と部下だが？」

「リマさんは確実にルーイさんに、んむっ」

鈴の言葉をリリーナは物理的に塞いだ。そして、リリーナは鈴を自分の方に引き寄せる。

「それだけは言ったらダメ。リマとの約束だし」

声は本当に小さく普通は聞こえないのだが、近くにいた悠人が思わず苦笑してしまう。どれだけ小さくてもすぐ近くにいたなら聞こえてしまう。

「悠人、僕の顔に何かついているか？」

「何でもないよ」

知らぬは本人だけということだった。

ルーイがブスッとした顔になっているとアリエがルーイに近づき、

「弁当、美味しくなかった？」

その表情は完全に涙目であり誰もがルーイに非難の視線を向けている。

その視線の群れにルーイは一瞬だけうろたう、慌てて弁解した。

「弁当は上手い」

「本当に？」

「ああ。悠人達が何か隠し事をしているのが少し不機嫌でな」

「良かった。弁当が美味しくないかと思った」

アリエがホッと胸を撫で下ろす。

「それにしても」

周が弁当の中身を咀嚼しながら小さく呟いた。

「騒がしくなったな」

その言葉を聞いていたのはちょうど横にいたベリエだけ。

ベリエは不思議そうに首を傾げた。

「あんた達は元からじゃないの？」

「最初はオレ、孝治、悠聖、浩平、亜紗、音姉、中村、由姫だったからな。今じゃ悠人達やら和樹達にお前らもいる」

だから、騒がしくなった。

周はそう言うがベリエから見ればその顔は幸せそうだった。みんなと、仲間と一緒にいることが幸せだと言うかのように。

「あんたはやっぱり家族が恋しいの？」

「どうしてだ？」

「なんとなくよ。今の中であんたは幸せそうだから」

このメンバーの中で幸せなのは周も思っていた。ずっと続けばいいのにとも。

だけど、このままは続かないというのもわかっている。

「恋しいというより、家族がそばにいるからな。茜のことは心配だけど」

「・・・・・聞いたわ。茜のことを。茜は」

「新たな代替え法がない限りどうしようもないだろうな。古今東西の魔術書を漁っても出てこないんだ。だから」

ベリエが微かに目をふせた。そして、何かを決心したように周を見る。

「もしかして」

言葉の続きを言おうとしたベリエの唇を周の人差し指が塞いだ。

「わかってる。一番オレがな。茜が望んだことだ。だから、今は」

周が空を見上げた。その時の周はこの場にいることが場違いなような儚さを周囲に出している。

「茜からもらった力でやるさ」

昼食の時間が終わった。

狭間市立狭間中学校は前半部に個人種目が集まっている。クラス全員リレーくらいだろう。それに当てはまらないものは。

後半部は主に団体種目や個人種目決勝しかない。三年生によるダンス以外は極めて配点の高い競技ばかりだ。

だから、オレ達の二組の顔は険しい。

「個人種目決勝に進めたのは委員長の１００ｍと２００ｍだけか。かなり厳しいな」

オレは小さく呟いた。

クラス全員リレーでの大逆転劇（規定違反扱いされそうになったが

ちゃんと説明した）で二組がトップになったものの、点差は僅差。最悪の状況を考えて、

「騎馬戦と８００ｍリレーは最低一位か」

２００ｍリレーを最下位と仮定した場合、今まで見た中から考えてこの二つは一位を取らなければ優勝は難しい。

騎馬戦はかなり変則的なチームになる。まあ、２００ｍリレーもだけど。

学年関係なくクラス単位なのだ。そして、それぞれの学年で好きな数の騎馬を作り、最初の騎馬数一残った騎馬数の数が少ない方が勝つ。

数で攻めるか上手く防衛するか。

「考え事？」

オレの横にいつの間にか委員長の姿があった。戦闘中たったらこういうことはまずないんだけどな。

「まあな。二組が勝つにはどうすればいいかを考えていた。騎馬戦と８００ｍリレーは確実に取らないと厳しいだろうな」

「そうだね。今の点数は私達が勝っているけど、決勝に進出出来た人がほとんどいないのに。どうして今一位なんだろうね」

「全員リレーと決勝の存在がない個人種目のほとんど一位取っていたからな。力の入れるところ間違っているだろ」

オレは小さくため息をつきながら入場している由姫を見た。由姫は隣にいる女子と話している。結構仲が良く、教室内でも二人で話している姿を見はことはある。

どういう作戦で行くかわからにけど、他のクラスが全員男子とかに対して、二組だけ女子が普通に混じっているからな。さて、ここからどうするか。

「海道君は一体どれくらいの確率で勝てると思うの？」

「１００％」

オレは即答していた。相手チームに第７６移動隊の姿はない。学生『ＧＦ』の人はちらほらいるみたいだが、そんなレベルで由姫に勝てるわけがない。

「そんなに？」

「まあな。見てたらいいと思うぞ。多分、由姫はオレのよくやることをするはずだ」

「海道君のよくやること？」

乱戦中のみオレがよくやることと言い換えた方がいいかもしれないけど。

集団戦で生かせれるオレの器用貧乏。そのなオレだからこそ大規模集団戦でポジションは決まっていない。だから、乱戦になれば縦横無尽に動くことが出来る。

「駆け回ってかき乱す。相手はまず由姫を潰しに来るはずだ。でも、それがわかっているならいくらでも対処の方法がある」

そして、由姫が女子を戦果に背負う。もちろん、一人だけだ。他の面々は四人やら五人やらで組んでいるが由姫だけ二人組。

「あれで大丈夫なのかな？」

委員長は心配した声で言うが、オレは全くそんなことがなかった。何故なら、おんぶしながら走る訓練は今はほとんどしないが、素人部隊や武術の訓練などで足腰を鍛えるためにやることがある。とくに、八陣八叉は地面をしっかり踏みしめて攻撃する部分が多いため足腰の重要性は高く、第７６移動隊で一番の足腰の強さを由姫はもっているだろう。

音姉は除く。音姉はただの化け物に近いから。

「まあ、オレが心配しない理由がわかると思うぜ」

そして、試合が始まった瞬間、由姫が地面を蹴った。瞬動ではない。普通に走っている。ただ、オリンピックに出るような短距離走の選手みたいな速度だ。

委員長は口をぽかんとあけた。

「由姫は近接格闘家。フロントの中で最接近するポジションだ。最近は位置取りもかなり上手くなってきたから、盛大にかき回すだろうな」

相手の動きは冷静だ。一人突っ込む由姫を囲もうと動いている。でも、それは間違いだ。

オレはにやりと笑みを浮かべた。

「八陣八叉の使い手に」

由姫が地面を蹴る。

「半端な包囲は一瞬で抜けられるぜ」

一気に加速したと思った瞬間、由姫は凄まじいステップで包囲を避けていた。よっぽど上手く包囲をしていない限り八陣八叉の実力者に包囲は効かない。

後ろに回った由姫を追いかけて方向転換しようとする騎馬同士がぶつかり合いいくつかが自滅していく。すると、そこに本体が襲いかかった。抵抗しようとした騎馬もいたが、多くは本体によって鉢巻きを取られていく。

抵抗しようとした騎馬は背後から襲いかかった由姫達によって簡単に鉢巻きを取られていた。

結果は見るまでもなくパーフェクトゲーム。

「うわっ、すごい」

「オレでもこれは不可能だな。由姫だからこそできるやり方。まあ、真似したいとは思わないけど」

「海道君が真似したら戦場が大変なことになるんじゃないかな？」

「戦場で相手をかき乱すのはオレの役目だからな」

由姫はフロントで道を作り出す役目だし。

「それに、今のは相手の作戦が悪い。由姫を真っ先に倒そうとするのは正解だ。残しておけば戦況がいっ繰り返される時があるからな。ただ、後ろぬ回り込まれた瞬間に全員で本体に突撃すればよかったんだ。自滅で戦力が落ちたところに襲いかかられたけどな。数だけじゃ有利だった。もしかしたら、由姫が孤立していたかもしれない」

「そういうやり方もあるんだ。それって実戦でもあるの？」

「まあな。突撃して抜けるのは相手の本拠地を直接たたく目的じゃなければまずない。普通は相手に飛び込んで相手の中を乱戦状態にしてかき乱しまくり、本体が突撃してきた瞬間に離脱して合流。それが一番だ」

まあ、由姫にはまだ酷だし、今回のでそれをされたなら普通に相手は勝てない。

「海道君はよくするんだ」

「一回だけだ。さすがにそんな状況になる戦場が珍しい」

オレがそう言うと委員長がクスッと笑った。オレはわけもわからず委員長を見る。多分、ばか面だろうな。

「そう言う海道君はとても輝いているね」

「そう、なのかな？　オレにはよくわからないさ。でも、そう言われるのは悪くな」

オレの背中に何かの電流の様なものが走り抜けた。オレは恐る恐る振り返る。

そこにいるのは亜紗だ。ただし、その眼に光を映しているのか本当に怪しい？

『何いちゃいちゃしているのかな？』

体中からオーラが噴き出している。汗が滝のようにだらだら流れてくるくらいの湿度を持ったオーラだ。どこかで体験したことがあるけどトラウマだからか思い出せない。

オレは微かに後ろに下がった。

「いちゃいちゃってただ話しあっていただけだから」

『そうは見えない』

オレは小さくため息をついて亜紗に近づいた。そして、亜紗の頭をなでてやる。

「亜紗も嫉妬だなんて結構可愛いな」

『だって、最近あまり構ってくれなかったし。訓練のときだって周さんは由姫についていたから少しさみしくて』

「悪い。いろいろと考えていたことがあったからさ、あまり構ってやれなかったんだ。そうだな」

こういう時は何かの埋め合わせをしないと。これからの予定を考えると開いている日は少ないな。

「今日の夜、あの場所で」

『うん』

亜紗の顔に笑みが浮かぶ。あの場所で通じるのはおそらく亜紗か由姫かのどちらかだろう。春の頃はよく上っていたけど最近は上っていなかったからな。ちょうどいい機会だ。

どれだけ変わったかも興味あるし。

『時間は？』

「そうだな。十時でどうだ？」

『待っているから』

亜紗が満面の笑みでクラスの位置に戻っていく。小さく息を吐いて周囲を見渡すと、オレと視線が合ってすぐさま逸らす姿がいくつか見えた。まあ、あんな場所でやったらそうなるわな。

「ラブラブだね」

「言うな」

委員長の言葉にオレは小さくため息をついていた。

「今のはズルじゃないのか？」

その言葉がオレの耳の中に聞こえてきた。まただ。今度は由姫の動きに難癖をつけている。まあ、人を背負ったまま高々と飛び上がって騎馬の頭上を飛び越える姿なんて見せられたら誰だってそうなるだろうな。実際にオレだってそれはないだろと思った。

だけど、一部の生徒の見る目は明らかに冷たい。そのほとんどが全員リレーで負けたことが本当に悔しい奴らだろう。

ほぼ一周抜かしされた状態からの大逆転劇。会場は大いに盛り上がったけど、魔術を使っているのではないかと言う疑問が出てきたのも事実だ。

「悠聖、いいの？」

隣にいる優月が心配したように話しかけてくる。オレは小さくため息をついて頷いた。

「最初からわかっていたことだ。特に、周に由姫、音姫さんの機動力は人間離れしているしな。元からそういうのはあるだろうなって話はしていたんだよ」

「悠聖は大丈夫？　友達のことをあんなに言われて」

「大丈夫なわけがないだろ。でも、今ここで起こったとしての何の対処にもならない。言わせたい奴には言わせておけとは言わないけど、今は何もしない方が賢明だ」

『悠聖らしくないんじゃないかな？　悠聖なら喰ってかかりそうだし』

アルネウラがにこにこ笑いながら言う。うごく笑顔だ。まあ、理由はわかるけど。

優月が時計を見た。

「そろそろ時間だよ」

『そうなの？　いや、後２３秒残っているよ』

「むっ、確かにそうだけど」

優月がその２３秒を数え始める。だって、オレの膝の上にアルネウラが座っているのだから。

二人三脚は喧嘩になったため出ないことにし、代わりにオレの膝の上に座りだしたのだ。周囲の視線が無茶苦茶痛いけど今更だから気にしない、ようになれたらいいな。あははははっ。

優月が２３秒を数え終わりアルネウラが不服そうに離れる。代わりに優月が座った。

周囲の視線がいたいまでに突き刺さる。

「次の悠聖の出番は？」

「最後の方。団体リレーのからだな。それまではゆっくりできる」

「じゃあ、このままずっと座ってられるね」

『ちゃんと変わってよ』

「わかってる」

優月が笑みを浮かべた瞬間に周囲の視線が一気に痛くなったような気がする。

我慢だ。我慢するしかない。

「うわ、お師匠様、すごいですね」

俊也の声に振り返ると、フィンブルドを連れた俊也が小走りに近づいてきた。オレは軽く肩をすくめる。

「何に対しての凄いかは聞かないとして、いつ来たんだ？」

「ついさっきです。お師匠様の出番はまだまだ先ですけど、別にいいかなって」

「暇だぞ」

『だから言ったんだよ。時間どうやって潰すか考えておけって』

「お師匠様と話しておけばいいと思って」

その瞬間、オレの膝の上と隣から凄まじいまでの殺気が俊也に襲いかかった。俊也の体がびくっとなり動かなくなる。

多分、気絶したな。

「お前らな」

オレは小さくため息をついて頭を抱えた。

体育祭ももう終盤。残す種目は後二つだ。

団体リレーと８００ｍリレー。

団体リレーにはガチンコの戦いというべきか、狭間市にある企業の陸上部や体育の先生チーム。はたまた、第７６移動隊と冗談抜きでガチンコの戦い。

僕はそれをわくわくしながら見ている。

「悠人、まだ勝負は始まっていないよ？」

「そうそう。わくわくする気持ちは分からないでもないけどね」

今、ブルーシートの上にいるのは僕と鈴、リリーナの三人だけだ。

エレノアさん達は用事があると言って出て行き、七葉さんはほとんどここにはいない。ギルガメシュさんもいなくなっていた。

二人の言葉に頷きながら僕は周さん達を見る。周さん達は楽しく談笑しながら入場していた。

先頭は亜紗さん。そして、由姫さん、音姫さん、悠聖さん、孝治さん、周さんの順番だ。

「周さん達は本気で走るみたいだしね」

「本気じゃないよ。ウォーミングアップだよ」

リリーナの言葉に僕も鈴もキョトンとしていた。だって、僕は本気で走るものだと思っていたから。

リリーナは自分の足をさすりながら、

「常に全力を求められる戦場だと戦う前に体のコンディション、特に下半身のコンディションは最大にしておかないといけないから。だから、８００ｍリレーに向けて、みんながコンディションを最大にするためのウォーミングアップとして走るんだよ」

リリーナが言う言葉はリリーナ自身に当てはまる言葉なのだろう。まるで、それが出来なかったことを思い出すかのように。

僕や鈴じゃ分からない。僕らはパイロットなのだから。

「ごめん。悠人にはわからない話だったね。忘れて」

「ううん。むしろ、聞かせて欲しいな。僕はパワードスーツを着て前線で戦う時があるから」

「わ、私だって聞きたい。役には立たないと思うけど」

「あはっ、鈴は正直だね。でも、始まるよ」

第一走者である亜紗さんがトラックに入る。団体リレーに出るチームは全部で八チームだ。

亜紗さんがしゃがんで手をつき足を後ろに流す。確か、

「クラウグスタート？」

「ちょっと違う。クラウチングスタート、だよね、リリーナ」

「うん。魔術無しなら初速から加速まで一番速いものだよ。まあ、戦場じゃ見ないけど」

パンっと何かが爆発する音と共に全員がスタートを切った。

第７６移動隊の訓練時に見るような速度じゃないけれど、亜紗はかなり早く二番手につけている。

前を走るのはスポーツマンというべき筋肉がついた人。

「あちゃ、二番手だね」

「でも、亜紗さんなら抜かせるんじゃないの？　僕は亜紗さんの速さを知っているし」

「多分、無理かな」

鈴がそう言うのと同時に全員が直線に入る。亜紗さんが加速するけど先頭の人はさらに速い。

「あの人、確かオリンピックに出ていた」

「どうりで」

僕は感心した。第一走者からすでに亜紗さんともう一人だけが完全に突出している。オリンピックに出るくらいすごい人ならよくわかる。

最後のカーブに入ってようやく距離が縮み出す。ここは全力疾走の訓練を常にしているからだろう。でも、抜かせない。

バトンは次の由姫さんに渡った。でも、相手チームの方がバトン運びが上手かったらしく、距離がさらに空いている。

由姫さんが地面を蹴った瞬間、距離があっという間に縮まっていた。

「「えっ？」」

僕と鈴の声が重なる。だって、由姫さんの速度は第７６移動隊最速と言われる亜紗さんより速いから。

でも、リリーナは知っていたようで驚いていない。

「リリーナ、どういうこと？」

だから、僕は尋ねた。

「白百合家はね、魔術に頼らない戦い方をするんだ。魔術が使えないから」

由姫さんがあっという間に抜く。

「特に、音姫は魔術がほんの少しも使えない。強大無比の剣術を持ちながら魔術は一切使えないんだよ。だからこそ、術式に頼らない加速を行える」

由姫さんは速度を落とすことなく直線を終わり、最後のカーブに入った。

「魔術が使えない環境下で白百合家に勝てる人はいない。でも、魔術しか使えない環境下なら、どんな子供でも白百合家に勝つ可能性がある」

こういう術式を阻害する結界内では白百合家に勝てる人はいないということだ。

由姫さんから音姫さんにバトンが渡る。音姫さんは由姫さんほど速くはないがそれでも距離は開いていく。

「白百合家に勝てる人がいるとするなら、それは周ぐらいだと思う」

「周さんが？　どうして？」

リリーナは決心出来ないように目を伏せた。そして、軽く頷いて顔を上げる。

「周はね、昔、核晶欠損症だったという噂があるんだ」

「鈴は聞いたことがある？」

「うん。確か、自分の力で魔力が作れない病気だったと思う」

リリーナは頷いた。ちなみに、僕は聞いたことがない。

バトンが音姫さんから悠聖さんに渡される。速度は一気に落ちるが速いことには変わりない。

「本当なら動けないはずなんだよ。生命を維持するためには定期的に魔力鉱石を必要とする。でも、周はそんなものが必要なかったとも聞くんだけどね」

だけど、とリリーナは続けた。

「最高の天才と呼ばれた周の妹がとある事件を境に核晶欠損症になり、周が魔術の才能を開花させた。これは偶然なのかな？」

オレがゴールテープを切る。さすがに大人は速かった。かなり突き放したはずなのに、いつの間にかかなり距離を詰められていた。

悠聖も孝治も全く遅くはない。むしろ、同年代平均だと圧倒的に速いというべきだろう。でも、大人と比べれば差が出るのは歴然だった。

由姫や音姉は例外だから置いておく。オレはそもそも術式が使えないことが慣れているので大丈夫だ。

「さてと」

オレは小さく呟いて得点板を見た。得点板にはトップが一組で、続いて三組、五組、四組と続いている。一組と二組の差は８００ｍリレーで一位になれば二組も優勝出来るくらい開いていなかった。

どこか作為的なものを感じる。

「体は暖まったようだな、周」

孝治が笑みを浮かべる。どうやら孝治は準備万端のようだ。悠聖は分からないが亜紗は準備万端だろう。

オレは笑みを浮かべて返す。

「負けはしないさ」

「その自信満々の笑み、打ち砕いてやる」

オレと孝治の間で火花が散るのがわかった。それを亜紗や悠聖が苦笑しながら見ている。

「弟くん、変わったね」

その言葉にオレはキョトンとしていた。そんな音姉はクスクス笑っている。楽しそうに。

「ここに来るまでの弟くんは『ＧＦ』のことか由姫ちゃんか亜紗ちゃんのことしか考えてなかった。なのに、今じゃ体育祭を純粋に楽しんでいる」

言われてみればそうだ。オレは狭間市に来るまでひたすら仕事のことを考えていた。後は亜紗と由姫。オレの大切な二人のことを。

でも、この街、狭間市に来てからは『ＧＦ』だけのことじゃないものを習った。例えば、テレビゲーム。デバイスにこういう使い方もあるんだなと思いつつのめり込めた。例えば、クラスメートとの日常。『ＧＦ』にとって人質に取られれば判断が鈍る原因なのに、オレはそこに居心地のよさを感じていた。

オレは少しだけ笑みを浮かべる。そう言う風に変わっている自分は悪くないと思った。

最後のチームのアンカーがゴールに入り退場の空気が流れる。それと同時に流れる期待の視線。

「なあ、みんな。みんなはここに来てよかったと思っているのか？」

オレはふと疑問になって尋ねた。すると、亜紗がクスッと笑い、

『周さんだけじゃない。ここにいる全員がここで色々なものを知った。だから、私はここに来れてよかったと思っている。もちろん、戦いもあったし悲しいこともあった。でも、この体験があるからこそ私は前に進めると思う。周さんやみんなと一緒に』

亜紗の言葉に全員が頷いていた。それにオレは笑みを浮かべる。

「そうか。さて、そろそろ最終決戦と洒落込もうか。孝治、悠聖、亜紗、準備はいいな」

「いくらでも行けるさ」

退場が始まる。退場門から入場門まではあまり距離が離れていないからすぐに集合できる。

「これで勝敗が決まる。周、これが俺とお前との決着だ」

「何の？」

「兄さんは空気を読んだ方がいいと思います」

いつの間にかオレが蚊帳の外になっていた。

緊迫した空気。それはまるで戦闘が始まる前の戦場の空気。

誰もがこの緊張感の中で話すことが出来ず、誰もがほとんど身動きしていない。全員が今から始まる８００ｍリレーを見守っている。

この緊張感は久しぶりだ。ここ最近は魔術を使っていないし、戦闘が始まる前にここまで静かだったことがない。いつも戦ってい最中か、戦い終わった後に到着しているかのどちらかだ。

オレは小さく息を吐いた。最初に走るのは委員長。すでにクラウチングスタートの状態で構えている。緊張感が高まった瞬間、スタートの合図が鳴り響いた。

最初に先頭に出たのは委員長。さすが陸上競技部というべきか、スタートの切り方とタイミングが完全に絶妙だった。他が全員男子なのにトップに躍り出ている。

「委員長、飛ばしているな」

俊輔が小さくつぶやいた。第二走者は和樹だが、和樹のタイプから考えて委員長が先頭を走るのは少し不味いと思っているのだろう。それに関しれはオレも同意だ。和樹は追いかけることに関しては定評があるが、逃げることに関しては弱い。俊輔と浜逆だ。ここは反対の方が良かったか。

「考えても仕方ない。それに、例え負けていたとしても、その負けている状況からひっくり返すのが楽しいしな」

「そうだな。なら、俺はリードを広げられずにお前にバトンを渡せばいいのか」

「６０ｍ」

オレは頷きながら言った。

「最大６０ｍだ。それ以上は難しい。それ以内なら逆転はできる」

とは言っても、かなりギリギリになるのだが。浩平なら１００ｍほど開けられていても大丈夫だが、亜紗や孝治となると６０ｍ以上開

けられたら勝てる確率がきわめて低くなる。

「６０ｍか。わかった。心得ておこう」

トラックに目をやると委員長がダントツで一位だった。大体１０ｍほどの差が開いている。とは言っても、スタートからの差が大きいのかほんの少しずつ縮められていた。このままだと抜かされる。

心配した事態にはならないか。

「周、すんげー緊張してんだけど何かいい方法がないか？」

手の震えが完全に止まっていない和樹が青ざめた声で聞いてくる。まあ、ご愁傷さまというべきかな。こういう状況ならかなりきついかもしれないけど。

オレはトラックの最初のカーブ付近にある観覧席を見た。そこにいるのは七葉の姿。どうやらちゃんと移ってくれたらしい。

「何もない」

「ちょｗｗｗ！」

和樹は気付かなかったみたいだが、俊輔はオレの視線に気づいていたらしくふっと笑っている。

「俊輔、何か頼む」

「がむしゃらに走れ」

「お前もかー！！」

和樹の叫び声に周囲にいた人が笑う。緊張していたのだろう。でも、これで敵にも塩を送った。

和樹が小さくため息をつく。まあ、少しくらいは緊張が取れただろう。

「なんでそんなに冷静なんだよ」

「いつもだからな。戦いの最中に冷静になれなきゃ勝てない。でも、これでもかなり興奮しているんだぜ」

オレはそう言って笑みを浮かべた。

「手加減なしの魔術なしの全力で、こいつらと戦えるい。そんな状況で心が躍らないわけがないだろ」

一位の二組が第二走者にバトンを渡す。その光景をオレは歯がゆく見ていた。オレらの順位は四位。ただし、二位以下が完全に混戦だ。

差は１０ｍほど。挽回できない距離じゃないけど、こちらが圧倒的にリードしていなければ勝ち目がかなり薄くなる。正直に言ってかなり厳しい。

「せめて、抜かしてくれよ、瀬田」

オレは今は知っているクラスメートの名前を呟いた。距離はだんだん縮まっている。８００ｍと長い距離のためにどこで飛ばすかによってリードが大きく変わってくる。二組の第一走者はスタートの加速と後半での加速。ともに上手かった。だから、男女の違いがあっても距離を詰めることが出来なかった。

「距離と詰めることが出来なければ、次の走者でリードを保たれたまま周に渡される。ここで、抜かさないと」

俊輔の足の速さ走っている。特に、逃げ足の早さは。

追いかけることは苦手でも、逃げるだけならオレよりも速いだろう。ここで、トラップを使うべきか。

「そうだ、悠聖」

いつの間にかオレの隣に周が近づいてきていた。そして、何かをポケットの中に入れてくる。

「昨日の落し物だ」

「お前、気づいて」

周はにやりと笑みを浮かべた。

「気づかれずに回収するのがかなり大変だったからな。まあ、見つかったのが運のつきだと思っておけ」

「はあ、相変わらず、真剣勝負で不正は許さないってか？」

「まあな」

周が笑みを浮かべて離れて行く。オレは小さくため息をついてポケットの中に入っていたのもの握りつぶした。これで、真剣勝負しか方法がない。

トラックを見ると、いつの間に先頭との差がほとんどなかった。和樹は必死に逃げているけど他の人の方が速い。そして、抜かす。

「よしっ！」

オレが拳を握りしめると、周囲から歓声が上がっていた。一位だった二組がだんだん順位を落とす。このまま最下位に落ちてくれればありがたいけど。

「かず君！」

その時、グラウンドに七葉の声が響き渡った。

「頑張って！」

オレは周を見る。そこには笑みを浮かべた周の姿が。

最初からこれを狙っていたのか。

「テンション上がってきたぁあ！！」

和樹がそう叫んだ瞬間、和樹の速度が一気に上がった。抜かされた人をあっという間に抜き返して一位に躍り出る。

「なっ」

オレは開いた口が閉まらなかった。

「やられたな」

隣にいる孝治が小さくつぶやく。そう、やられた。

「挽回、できるのかよ」

トラックを走る人達。すでに五人集団で固まっている。差が開くことも縮まることもない。まるで、そうなるように決められたかのようだった。

周が小さな息を吐く。それと同時に孝治も息を吐いた。

大混戦も大混戦。勝負はアンカーに委ねられたということだ。

「勝負のし甲斐がありだな」

悠聖が呟く。亜紗はそれに無言で頷き、浩平はリースに向かって手を振っていた。

「勝っても負けても、これが最後の勝負」

周の言葉と共に集団が最後のカーブに入った。ここで順位が変わる。一組、三組、二組、四組、五組の順番だ。

その順番にならって全員が横一列に並ぶ。そして、カーブを曲がり切り先頭が向かってくる。

「頼むぞ！」

俊輔の言葉に周は頷き、全力で地面を蹴った。完全な混戦の中レースが始まる。真っ先に跳び出したのは亜紗。だけど、孝治、周、悠聖が遅れ内容に加速する。遅れているのは浩平一人だけ。

速度は今までとは段違いだ。まるで、社会人の走りを再現しているかのような速度。その速度のまま四人がさらに加速する。

「全力で飛ばしているな。お前ら、体力が持つのか？」

周が余裕の表情で全員に言う。場所は亜紗と悠聖に挟まれているためかなかなか加速できない。でも、この場で加速すれば後半失速するのがわかっていおるから周はしない。だが、その考えとは裏腹に速度はだんだん上がっていく。

「体力は問題ない。だが、最後の一直線で瞬動を使われたなら俺達に勝ち目はないからな」

孝治が振り返らずに言う。周は小さく舌打ちをした。

「そう言うこった。周隊長には瞬動があるからな。それを使わさないための作戦だ。ちなみに、全員個別で考えている」

亜紗は話さないが頷いているのを見ると同じなのだろう。

「まあ、いい作戦だぜ。でもな、ここで黙ってられるかっての」

周が加速する。すでにトラックは二周目だ。そのカーブ中に周が大きく横に動いた。それに気付いた他の三人がさらに速度を上げて距離を取ろうとする。

だけど、周は一気に加速した。瞬動だ。周の姿はいつの間にかカーブを曲がりきった直線の向こうにある。

周は走り出す。だが、その速度は今までと比べてもかなり遅かった。距離があっという間に縮まる。それでも、周は三週目に入った。

「奥の手を使ったな。だが、タイミングが早い。もう少し後なら俺達は勝てなかったというのに」

「そうか？」

追いついてきた孝治に周は笑みを浮かべて横に並ぶ。速度はすでに一緒になっているが、遅くなっていはずの周の足取りはかなり軽やかだ。

「それでも、オレの瞬動にお前らはついていこうとしただろ」

そして、速度上げた。

「最初の計画からずいぶん崩れているんじゃないか？」

「相変わらず、周隊長はオレらの想像の斜め上を行くぜ」

リズムに沿って加速していたはずの動き。周は当初の作戦を諦める代わりに先頭集団のリズムを大きく崩すことにしたのだ。そして、それは成功した。

リズムが崩れればこれからの体の動きが遅くなる。

作戦を理解しつつ、その作戦を潰して自分に有利になるようにする。それが元からの周の作戦だ。

周に最も有効な作戦は単純な正攻法。それをしなければ周の作戦によって痛いしっぺ返しをくらう。

味方なら頼もしいが敵ならかなり嫌な相手。

「この状況だとそれが一番だからな」

周がカーブを曲がる。それについていく孝治達。

そして、ラスト一周になった。周が、孝治が、亜紗が、悠聖が加速する。そして、浩平を抜き放つ。

「こうなりゃ誰が一番になるかわからない。それの方が勝負は燃えるだろ？」

「そうだな。お先に」

「「行かせるか！」」

前に出ようとした悠聖を周と孝治が同時に塞ぐ。その隙に亜紗が前

に出るが、すぐに周と孝治が並んだ。

「最後のカーブだ」

周達がさらに加速する。残った力を振り絞っての加速。悠聖もそれに負けじとくらいつく。そして、カーブを曲がりきった。悠聖が若干遅れているがほぼ完全に横一列。全員が加速する。加速する。加速して、ゴールを駆け抜けた。

全員がブレーキを駆けて振り返る。ゴールテープを最初に斬ったのはだれかわからない。誰が一番だったかも走っていた彼らからはわからない。シーンと静まり返るトラックの中、周達の横を浩平が駆け抜ける。

全員が唾を飲み結果を待つ。そして、

『勝者、二組』

その言葉を誰もが一瞬理解しなかった。そして、沸き起こる歓声。周はこぶしを振り上げた。

「よっしゃぁあ！！」

第二百話　体育祭（後書き）

かなりの長文に心身共に疲れ気味です。

第二百一話　合わせ鏡の世界

体育祭が終わった。それは学校内部にあった熱気が消え去ったことを意味する。少し寂しさを感じながら、跡形もなく片付いた校庭をオレは屋上から見下ろしていた。

勝負はオレの、二組の勝ち。戦いで全ての力を出し切った心地良い感じは久しぶりだった。

「これが、普通の日常なんだな」

オレは屋上のフェンスに手をかける。普通の人生からはかけ離れた人生。もう、普通の日常なんて諦めていたはずだった。

でも、ここに、この狭間市に来てから普通というものに深く関わっていると思う。そして、それが本当に楽しい。楽しくて楽しくて、戦うことを忘れそうになる。

でも、戦うことを止めることは出来ない。オレに力をくれたあいつのために。

「ごめん、遅れた」

エレノアの声にオレは振り返っていた。そこには『炎熱蝶々』を展開しながら降りてくるエレノアの姿。

そう言えば、エレノアとはここで再会したよな。

「大丈夫だ。黄昏ていたから」

「名残惜しい？」

オレは頷いていた。体育祭に向けてチーム一丸となっていた。まるで、戦場に向けて力を合わせあうチームのように。そういう空気が心地良く、名残惜しい。

「まあな。普通は捨てたはずなんだけどな。やっぱり子供だ。でも、今はそれで良かったと思ってる」

「別に無理に大人にならなくてもいいのに」

「わかっているさ。でも、早く大人にならないと、この年齢を理由に色々難癖つけてくる奴が多いしな」

例えば評議会。第７６移動隊が正規部隊として登録されることになったとしても、まだまだ文句を言う爺共がいる。特に孝治はそいつらにキレていたな。

例えば世論。第７６移動隊は平均年齢が極めて低い。だから、世論の一部が反発している。子供に戦わすなと。そいつらと喧嘩したのはいい思い出だ。

子供を親のおもちゃだと思うな、と言った時に反論を全て潰した時の相手の顔はすごかったし。

「仕方ないと思う。私だって、『炎帝』になった時は年齢から反対されたし」

「エレノアは実力があるさ。オレなんて最強の器用貧乏だしな」

あまり活躍出来ないのが少し痛いか。それでも、オレにはやれることがたくさんある。

「まあ、頭の回転が早いのはいい利点だけど。エレノア、話の続きだ」

「うん。世界の滅びと文明の滅びは別物だということまでは聞いた。まだ、少し納得出来ないけど」

「まあ、急に話されたら突拍子もないことだと思うさ。でもな、この世界と音界のことを考えたら納得がいく」

エレノアは首を傾げた。だから、オレは最大の疑問点をエレノアにぶつけた。

「何故、この世界で魔術が極めて発展し、音界で魔科学が極めて発展したと思う？　まるで、二つで一つ。合わせ鏡の世界のように別々に発展したと思う？」

「この世界だって魔科学は発展してるよね？　あっ、でも、元は全てオーバーテクノロジーか」

オレは頷いた。

今の世界に溢れた魔科学製品は全てオーバーテクノロジーから生まれたということを知っている人はどれだけいるだろうか。

ここ五十年の間にアルタミラなどのオーバーテクノロジーの産地から発掘されたもので文明が発展したと知る人は少ない。少ないから

こそ気づかない。

フュリアス、第二世代のアイゼンや第三世代のダークエルフは元はアル・アジフが持っていたオーバーテクノロジーからだ。

「デバイスも、テレビも電話も全てがオーバーテクノロジー産物。それを魔科学の発展と言えるか？」

形が残りやすかったからこそ、魔科学は今でも発展している。だが、音界では常に魔科学が発展していた。この世界とは逆のように。

「まるで、合わせ鏡の世界だ。最初から重なり合うのが目的だったみたいに」

「でも、それが滅びと何の関係があるの？」

「これからは文明が発展する。文明が発展するということは人類が力を持つということだ」

「まさか、人が世界を滅ぼす？」

オレは頷いた。力を持てばそれを使う人達が出て来る。その力のために誰をも虐げようとする。

そう考えれば結城、真柴両家の行いもわかる。

結城家は世界を制して社会のゴミを戦わせると言った。つまり、弱者を使い世界を統べるということだろう。星喰いは精霊と鬼の力を得ようとした。力によって全てを押さえつけようとした。

「狭間の鬼が悠聖に言った言葉も大方はこれで理解出来る。世界を滅ぼさせないための鬼ということだ」

「でも、そんな力があると思うの？　それに、周はその答えを信じていないよね？」

エレノアの言葉にオレは微かに動きを止め、諦めて溜息をついた。そして、フェンスに背中を預ける。

「どうしてわかった？」

「周にしてはあまりに推測すぎるから。周はもっと理路整然として言うのに、希望的観測はありえないし」

エレノアはよくオレのことを見ているみたいだ。そういう奴がいてくれてオレは本当に嬉しい。

オレは笑みが浮かぶのを隠さず口を開いた。

「滅ぶのがここじゃないとすれば？」

「どういうこと？」

エレノアは首を傾げる。

「魔界は魔力粒子が極めて多い。天界は魔力粒子が少なめ。これはエレノアも知っているよな？」

「うん。魔界出身だし。それが何の関係があるの？」

普通はそうだろう。それが何を意味するのかオレだって言われてもわからない。でも、今までに世界が滅んだことと、この世界のことを考えたら一つの推測が出来上がる。

「オレが別のことを言ったのは次も推測だからだ。途方もないくらいにな。魔界と天界、人界と音界。どちらも合わせ鏡の世界だとしたなら、それらは関わり合いがあるということだ」

二つが関わり合って一つになるということは合わせ鏡ということだ。それは二つが関係している。つまり、

片方に何かが起きたらもう片方にも変化がある。形が歪んだものと合わせても、元の形にはならない。

「四つの世界が全て合わせ鏡の関係だとして、その合わせ鏡たる中心の存在があるとしたら？」

その中心を合わせる場所だと仮定した場合、この推測が出来上がる。

「その根源たる世界が滅んだ時、連鎖的に世界が崩壊する」

「ちょっと待って。もし、その世界が滅ぶとしたなら、どうして未来を知る者が」

「その世界に行けるとするなら？」

今では魔界、天界、音界へのゲートが見つかっている。音界のゲートなんてつい最近見つかったものだ。なら、他の世界へのゲートがあってもおかしくはない。

近い未来にその世界に行けるなら？　その世界が滅ぶから兵力を出して阻止しようとするなら？

「滅びが何なのか未だにわからない。でも、あらゆる世界で滅ぶ未来が存在するなら、それの元凶があってもおかしくはない」

「確かに、周の言う通りかも。根源界、にするけど。そこが魔界や人界の根っこだとして、そこが何らかの力で破壊されて、魔界も人界も共倒れなら納得出来る。周、魔界に戻っていい？　ベリエとアリエを連れてその線から探ってみる。本当なら第７６移動隊の監視下にいないといけないけど」

「そうだな。ギルガメシュと刹那に頼んでみる。オレも時雨や慧海に聞かないとな。あいつらなら、何か知っている」

第二百一話　合わせ鏡の世界（後書き）

だんだん第一章の終わりに近づいてきました。これからはエクスカリバーＶＳアストラルソティスの後にルーチェ・ディエバイト。そして、夏休み編です。夏休みはあまり長くしないので６月入った頃に終われたらなと思っています。
次回は久しぶりに時雨と慧海が出ます。

幕間　探し求めるもの（前書き）

幕間はかなり深い部分を書いていますが後々にまとめられるか心配です。

幕間　探し求めるもの

ニューニューヨークにある『ＧＦ』本部総長室。そこに慧海、時雨の二人は向かい合って座っていた。二人の手元にあるのはとある資料。さきほど、周から送られたとある資料だ。

「合わせ鏡の世界に。あいつ、面白いことを言いやがる」

「事実だろ。実際にそう言う意見はオレも行ったはずだ。人界、音界、魔界、天界、その全てが一つになる要素を持つ。そして、周が考えたとある推測」

資料の最後に書きなぐられた文字の羅列。時雨はそれを見ながら小さく息を吐いた。

「これは完全に盲点だ。確かに、今までのことを考えたら理解できる」

「そうなるな。科学時代は科学の発展により、魔科学時代は魔科学の発展により、神威時代は人が神を殺すほどの力を得、神剣時代は神剣が全て人間の手に渡り、そして、この時代は魔術と魔科学がついに合わさった」

今回の人界と音界との新たなゲートの出現。それは、魔術と魔科学が合わさったということ。つまり、どちらか片方しか発展していなかったものがお互いの技術を使ってどちらも発展するということだ。

「文明の発展ではなく、軍事力の発展により何かが起きる可能性。はっきり言うなら眉唾ものだが」

「文明の崩壊の仕方をオレ達が知る以上。無視できない」

「そうなる。ったく、周の奴も大変なものを送ってきたものだ。時雨はどう思ってる？」

「全面的に賛成だ。反対する要素が見つからない」

その言葉に慧海も頷いていた。そして、小さくため息をつく。

「オレが百年かけて探してきたものを周は簡単に見つけるんだな」

「ああ。周はオレ達の希望だ。力を知らなかったからこそ、力を手に入れても驕らない。そして、自分のために誰をも救おうとする。懐かしいな。昔のオレみたいだ」

「そうだな。昔のお前みたいだ」

慧海はそう言いながらニューニュヨークの街並みを見た。すでには太陽は沈んでおり、幻想的な魔科学の明るさが都市に満ちている。だが、周が見たら別のこと言うだろう。おそらく、変わったことを言うはずだ。

あいつはニューヨークの夜景が好きだったからな。

「まあ、あいつが見つけてくれたのは僥倖だ。オレは別のことに専念できる。『GF』はお前に任していいよな？」

「今はオレが総長だ。むしろ、お前の方がそっちの仕事は適任だ」

時雨と慧海が笑い合う。これからの方針を知っているからこその笑み。

「白百合の文献、里宮の文献はあらかた探しつくした。英国の博物館は入り浸っていたから中身は覚えている。世界最古のエジプト博物館の方はギルがあらかた探した。他にあるとするなら中国、かロシア。そして、アフリカだよな」

「中東は『ＥＳ』が探しつくしているだろう。それは周から聞けばいい。慧海、アフリカを頼めるか？　ギルはロシアにつながりが深い」

「了解。エジプトを除くアフリカの探索だな。探すのは大変だけど、見つけるさ。じゃ」

慧海の姿が消える。それは魔術によって消え去ったわけでもなければ、普通に扉から出て行ったわけでもない。最初からそこに伊奈勝隆のように、まるで、糸が解けて見えなくなるくらいの繊維になるかのようにそこからいなくなっていた。

それは時雨は見ており、いつものことだからか椅子に深く腰掛ける。

「手掛かりは見つかっている。後は時間との勝負か。後七年。その間にデュランダルを見つけられるかどうか」

それはアル・アジフが探し求めている者であり、有名な聖剣の名前。時雨はその名前を言った。それが探し求めているものだから。

「今は、待つしかない。情報と、成長を」

その声はどこか切羽詰まった響きがあるように思えた。

幕間　探し求めるもの（後書き）

慧海と時雨を活躍させたい。でも、能力がチート級なので活躍させれない。どうしたものか。

第二百二話　星空（前書き）

最近亜紗の出番が少なくなっているような気が

第二百二話　星空

満天の星空が見えるその下にオレと亜紗の二人は屋根に寝転がっていた。周囲は静けさが支配し虫の音しか聞こえない。第７６移動隊のみんなは疲れでもしたのかもう眠っている。

みんなが寝静まり返っているのにオレと亜紗の二人は屋根の上で寝転がりながら空を見上げている。

『綺麗だね』

亜紗が話しかけてくる。精神感応を使って。これなら会話を邪魔されることなく話せるからだろう。

ああ。

オレも精神感応を使って返す。もし、由姫が起きてきたならこんな静寂はあっという間に破られるだろうしな。今は、静かであることの方がいい。

『周さんは凄かった。魔術が使えなくても今まで鍛えた体がちゃんと反応していた』

自分の鍛えた体は裏切らない。まあ、一生懸命鍛えていたらだけどな。それにしても、亜紗もだいぶ楽しんでいたんじゃないか？

オレの疑問に亜紗は無言だった。でも、この雰囲気からしっかり楽しんでいたということだけはわかる。亜紗だって人の子だ。楽しいことは楽しいはずなのに、オレのように、いや、オレ以上に普通で

あることを怖がっている。

もしかしたら、自分が話せないことに引け目を感じているのかもしれない。

亜紗は、普通の人生は歩みたくないのか？

『そういうわけじゃにあ。私だって普通の人生を歩みたい。周さんと結婚するとか』

オレの顔が赤くなるのがわかった。多分、亜紗の顔も真っ赤に染まっているだろうな。

『でも、学校というのは私の心を揺らす。みんな優しいから、その優しさに頼りたくなる。私は非常じゃなければならないのに』

多分、第７６移動隊の中で一番人を殺した回数が多いのが亜紗だ。もっともフロントに立ち、ひたすら刀を振り続ける亜紗の姿は『殲滅姫（マーダープリンセス）』の名前をもらえるほどになっている。

だから、人とかかわることを極力減らしたいのだろう。自分が殺すのもまた人なのだから。

別に非常じゃなくてもいいさ。むしろ、オレは非常だった方が心配だな。いつか、亜紗が戦場の中で独りぼっちになって死ぬかもしれないから。

『私は死なない。ううん、死ねない。私にはまだまだやることがあるから』

気負いすぎるなよ。お前は一人じゃないんだから。

亜紗の手がオレの手に触れる。そして、オレはその手を握り締めた。

亜紗はどこか一人で戦っているような感じがある。オレといたとしても前に出て敵を倒そうとする。前に出る精神はさすがというべきだが、それが自分が傷を負う可能性を考えていないならただの無謀な行為だ。

『周さんは私が戦わない方がいいと思っているの？』

争いなんていい方がいい。

それはオレの本心だ。でも、人は争うことを止めることはできない。戦いはそんなに平和な世の中でも存在する。殺し合いという意味での戦いだけじゃない。学校だってそうだ。受験戦争とは誰がつけたか知らないけど的確すぎて笑えない。

人は争いを編めることが出来ない種族なのだから。でも、殺し合いという意味での戦いを止める方法ならある。

『ＧＦ』の存在は力の無いものを守るため。そして、無益な争いを起こさないため。国家間で行われる自分達の思惑通りに支配しようとするやり方じゃない。オレ達はその土地にあったものを目指している。もちろん、反発はあるさ。戦いだって起きるさ。でも、戦いを止めて話を聞く。それが一番大事なんだ。誰もが争わない世界はむしろ退屈なんだけどな。

だけど、オレは戦争は許容しない。そう言うことだ。まあ、今の言葉は亜紗もわかっているだろう。昔に効かせたことがあるし。

案の定というべきか、亜紗は頷いていた。もちろん、そんな夢想が実現できるなんて亜紗も思って以内だろう。オレが言いたいのは、力に頼ったものではなく、話し合いをしようというのだ。

大国が小国にするような話し合いは力によって圧力をかけながら従わせようとする。従わないなら戦争を勃発させるとでも言うかのように。

それをさせないたもの組織が『ＧＦ』だ。

『もし、争いがなくなったなら、私は普通の人生を歩まないといけないの？』

わからないなら一緒に歩けばいい。戦いに身を付けた人なんていくらでもいる。いくらでもいるから、亜紗みたいな人がいても同じような人達がいるんだ。もし、そんなことが起きるなら、戦っていた敵とも仲良くして友達になりたいな。オレはそう思う。

『周さんらしいな。私、時々思うの』

オレが手を握っている反対側の手をまるで星を掴むかのように伸ばした。もちろん、星なんて掴めないのだが、その握りしめられた手には何か力がこもっているような気がする。

まるで、この星空に何かを思ったかのように。

『私の立ち位置がわからなくなる時がある。周さんと一緒に戦う私と、学校の中でクラスメートと談笑する私の二人がいるような気がして、少し怖い。いつか、私が私じゃなくなるんじゃないかって不

安が押し寄せてきて』

不安か。確かにそうだな。オレだって今の日常がどうしようもないくらいに楽しいんだ。『ＧＦ』の海道周、総長の孫としてのオレ、じゃなくて、普通の海道周として見てくれるからかもしれない。普通に接してくれる。力があるなんて関係なしにな。

亜紗が不安に思うことはよくわかる。実際にオレが不安に思っていることでもあるから。時々、逃げ出したくなる。全ての戦い亜から。でも、オレは絶対に逃げ出さない。この力をもらった茜のために。

それに、今は出来る限りお金を稼がないとだめだよな。

『私だけじゃないんだ。周さんも不安なんだ』

誰だって不安だよ。戦うことが怖くない奴なんていない。それでも、オレ達は戦う。今の過ごした普通である日常を守りたいから。

もし、『ＧＦ』が存在せず、それに近い組織もなければ、今頃世界は世紀末だろう。オレはそう思っている。だって、世界の治安の半分は『ＧＦ』によって保たれていると自負しているから。違っていたらかなり恥ずかしいけどね。

『この星空のように自由に輝きたいな』

「急にどうした？」

あまりにもらしくなかったので思わず口に出していた。亜紗がクスッと笑う。

『双子星のように周さんと一緒にいたい』

夢壊すようで悪いけど、双子星ってかなり距離があるからな。ちょっとやそっとじゃたどり着けないぞ。

『夢を壊さないで』

亜紗の言葉にオレは笑う。なにはともあれ体育祭は終わった。これから色々と騒がしくなるだろう。だから、

「精一杯暮らして、精一杯思い出を作ろう。それが今のオレ達にできる最良の方法だ」

これからは色々とあるに違いない。正規部隊として可動出来る以上、移動隊を生かした行動をスｋ¥るかもしれない。だから、今はこの暮らしを楽しもう。

『うん。自分を見つめなおすのも忘れないようにしながら』

第二百二話　星空（後書き）

次からエクスカリバーＶＳアストラルソティスについて本格的に書いていきます。

第二百三話　聖剣の名を冠するもの

ＧＦＦ－３エクスカリバー

戦闘機と呼ばれるフォルムを身にまとい、白銀の機体は目の前に存在していた。

尖った機首にまるで鳥のような翼。鳥を真似たと言われる旅客機をさらに小さくしたものがそこにある。

「これがエクスカリバー」

僕の口から言葉が漏れる。

アストラルソティスに対抗するこちらの世界の最高傑作。あまりのスペックの高さに乗り手を選ぶ機体。

後、三日以内に乗りこなさないといけない。

「ソードウルフと同じ変形機構持ちだよね？　という、この大きさで動けるのかな？」

リリーナが不思議そうに技術者達と一緒に最終調整に走っている周さんに尋ねた。周さんは頷く。

「絶えず出力エンジンを起動させないとこの形態じゃ飛べない。でも、最高速度ならエクスカリバーの右にでる機体はない」

そう言いながら周さんがエクスカリバーを撫でる。確か、エクスカ

リバーは周さんが一から作り出した機体のはずだ。

フォルムからエンジン機構まで。中学生が出来るようなものじゃない。周さんは本当に天才だ。

武器に関しては複座式のコクピットの後部座席に集積デバイスを積み込んでいて、そのデバイスの力で武器を取り出す。希望的には戦闘機形態での追加装備か人型での装備からしい。

ほとんどがどちらか一方しか使えないけど、一部のブースターと装備がどちらも使えるらしい。これは重要なので頭に叩き込んでいる。

ニトロブースターとカスタムブースター。そして、旋回式電磁砲。

今は何もつけていないけど、この機体を操る以上、その三つは三日以内に使いこなさないと。

「これからやることがはっきりしているみたいだな」

いつの間にか周さんがそばにいた。技術者達もエクスカリバーから離れている。

「対戦相手にイグジストアストラルを準備している。エクスカリバーを存分に操れ」

「はい！」

僕はエクスカリバーに向かって駆け出した。精一杯の身体強化を使って飛び上がりコクピットに乗り込んだ。

コクピットはソードウルフと同じ形式で、右のレバーが出力の調整と変形の起動。左のレバーはエネルギー弾の出力調整。ダークエルフとはここまで一緒だ。

でも、足下にあるペダル。それを踏み込む力によってブースターの射出方向の設定。人型なら足の力の動きになる。

スラスターに関しては新しく設定してもらった精神感応システムを使う。そのため、今身につけているのはパワードスーツだけど、戦闘に使えるものじゃない。

アル・アジフさんはパイロットスーツと言っていたけど。

レバーのグリップをしっかり握りしめる。エクスカリバーを収納する隔壁が開くのをコクピットの中がら見えた。

レバーの出力を上げてスラスターを使い車輪を動かして機首を外に向ける。さらに出力を上げて格納庫の中から外に向かってエクスカリバーを動かしていく。

リリーナは外にあるソードウルフに向かって走っていく。それを見ながら僕はエクスカリバーをゆっくり格納庫から出した。

格納庫内部で絶対ブースターを使うなと言われているのですぐに発進することは出来ない。

外は雲一つない晴天。その晴天の下で灼熱の砂漠が陽炎を作り出している。

『悠人、リラックスリラックス』

リリーナの通信に僕は笑みを浮かべた。どうやらリリーナにも鈴にも隠しごとは出来ないみたいだ。

緊張しているのがバレている。

「大丈夫だよ。僕もエクスカリバーも最高のコンディションだから」

周さん達が必死に作り上げた機体。僕用にスペックすら作り出された僕専用機。そんな機体と相性が悪いはずがない。

僕は出力を最大限まで引き上げた。ブースターが起動しエクスカリバーが加速する。ある程度加速したところで車輪を収納しエクスカリバーを大空に向かって飛翔させる。

大空を舞うエクスカリバー。大空を鳥のように飛翔するのは本当に心地よいものだった。加速中の圧力さえ除けば。

パイロットスーツや集積デバイスの力でかなり抑えられているけど、それでもかなりキツい時がある。

それでも、僕はエクスカリバーを駆る。加速減速急加速急減速ローリングなど、ダークエルフの時に空中で使う技法。エクスカリバーはそれを滑らかに使える。

レバーが動かすままに、ペダルを踏み込むままにエクスカリバーが滑らかに動く。まるで、僕が鳥になったかのように動けた。

「すごい。これ、本当にすごいよ！」

僕は興奮していた。ダークエルフとは違う機動性。イグジストアストラルとは違うレスポンス。ソードウルフとは違う加速。その全てが僕にしっくりくる能力だった。

「周さん！　これ、本当にすごいね」

僕は周さんとの通信を広げて興奮しながら感想を言った。

『悠人、大丈夫か？　クルクル回転しているって、宙返りも出来るんだ』

エクスカリバーを駆ることが、空を飛ぶことがこんなに楽しいとは思わなかった。

すると、僕の視界の中に蒼鉛の機体と青い機体。イグジストアストラルとアストラルソティスだ。

僕は出力を下げながらレバーを立てた。エクスカリバーが変形し人型に変形する。この時にコクピット内部はシートが倒れほとんど立っているように形が変わった。確かに人型の状態じゃこっちの方がやりやすいけど。

『それがエクスカリバーか。僕達が想像していたよりも遥かに高性能だな』

ルーイが苦笑しながら言うのを聞きつつ、僕はエクスカリバーを地面に着地させた。もちろん、イグジストアストラルとアストラルソティスの近くだ。

『悠人、すごいね。あんな動き私じゃ出来ないよ』

「多分、エクスカリバーしか出来ないと思う」

他の機体も出来たらそれはそれで問題だと思う。というか、エクスカリバーのみであって欲しい。

『あの動きなら当てるのが大変だな。だが、いいのか？　僕がここにいて』

僕はその言葉に頷いていた。

「僕がアストラルソティスの動きを見ているのに、ルーイがエクスカリバーを見ないのは卑怯だよ。それに、今日は追加装備を使わないから」

エクスカリバーの本領は追加装備にあると僕は思っている。追加装備の攻撃オプションに関してはダークエルフと大差はない。旋回式電磁砲があるくらい。だけど、機動オプションに関してはダークエルフより幅が広い。

幅が広い分、使い分けれるか心配だけど。

『奥の手は隠す、か。アストラルソティスの方も隠しているから何とも言えないか。今日はエクスカリバーの通常機動を見させてもらう。四日後が楽しみだ』

「僕もだよ」

音界最強のフュリアスであるアストラルソティス。それと僕のエクスカリバーが本気で戦う。僕はそれが楽しみで仕方ない。

「負けないから」

『こっちもだ』

エクスカリバーとアストラルソティスの拳がぶつかり合った。

第二百三話　聖剣の名を冠するもの（後書き）

後二話くらいすればエクスカリバーＶＳアストラルソティスです

第二百四話　演目披露予定

「リリーナ」

僕は近くの椅子に座って息を吐いているリリーナに話しかけた。

リリーナは疲れたような顔をしている。僕も疲れているけど、エクスカリバーは爽快感があるため疲労は心地よい。

リリーナがやはり疲れた顔で僕を見上げてくる。

「悠人、ご苦労様～」

その声もどこか疲れている。まあ、リリーナが今やっていることを考えると仕方ないか。

「リリーナも。僕はエクスカリバーに慣れたしね」

御披露目が明日になり、僕はさっきまでエクスカリバーを扱っていた。今日は追加装備をふんだんに使いながら。

追加装備を使ってわかるけど、エクスカリバーの凶悪さが桁違いに上がる。特に、旋回式電磁砲は反則だ。弾数制限があるけど。

「あう～、リリーナはまだ慣れないよ～」

私ではなく自分のことをリリーナと呼ぶリリーナは疲れている時やぼーっとしている時だ。リリーナにとってあれは疲れるだろうな。

「明日なのに～、悠人に恥ずかしい姿を見せちゃうよ～」

「気ままにやればいいと思うよ。リリーナはソードウルフの演技と新兵器の披露だよね」

「うん」

新製品の披露は昨日急に決まったことだった。対フュリアス用、対人用の兵器ではなく、巨大フュリアスであるゲイルナイトのような要塞に対する新兵器。

対要塞用グラビティキャノン。

威力はバスターマグナムを遥かに超えるが追加装備をつけたソードウルフ以外撃てないという凄まじい兵器。

ただ、反動が桁違いでリリーナでも心身共に疲れている。

「披露が先だからまだマシだよね」

「そうだよ～。でも、グラビティキャノンなんて誰が考えたのかな～？」

リリーナが椅子の上で肩を落とす。

グラビティキャノンを作ったきっかけが僕だとは言えない。

ソードウルフの最大出力は出力エンジンを三つ搭載するエクスカリバーと同等な上に攻撃出力ならエクスカリバーより遥かに上だから、ゲイルナイトを一撃で落とせる武器を作れないかなと言ったのが始

まりだ。

本当に完成するとは思わなかったけど。

「悠人の方は大丈夫？　明日の模擬戦はたくさんの職人の命がかかっているんだよ」

いつの間にかリリーナは背筋をしっかり伸ばしていた。どうやら疲れがとれてきたらしい。

それに対して僕は軽く肩をすくめる。

「どうかな。エクスカリバーは確かにダークエルフを超える最高傑作だと思うよ。でも、アストラルソティスがどこまでの飛翔能力があるかで大きく変わるから」

エクスカリバーの最大の特徴を戦闘機形態における高速空中戦闘だとするなら、アストラルソティスの最大の特徴はあらゆる敵に対して対応出来る能力だろう。だから、エクスカリバーにどこまで追いついてくるかが問題だ。

エクスカリバーを最大限まで使って勝つ確率は大体五分くらい。ただし、アストラルソティスが何らかの能力を隠していなかったら。

「明日か。悠人、最近なんか時間が早くなったように思えない？」

言われてみればそうだ。僕がリリーナや鈴と出会ってから周囲の環境が目まぐるしく変わったように思える。

全ては狭間市に行ったことから始まった。

「『狭間戦役』。それが私達の始まりだよね」

「うん」

『狭間戦役』の最初、狭間市の最も長い一日と呼ばれた日に僕とリリーナは出会った。

僕はダークエルフの初実戦を行い小破したためパワードスーツで防衛に参加していたところ、殺されかけていたリリーナを助けたのが始まり。

それから、復興の最中に鈴と出会いたくさん宝探しに出かけた。あれは鈴が結城・真柴家の目的僕達を遠ざけるために出かけたけど、あの時間は本当に楽しかった。

そして、結城・真柴家の戦い。ルーイと出会い、イグジストアストラルに乗った鈴を取り戻すためにかなり無茶をした。

でも、みんなと戦い、ルーイと仲良くなり、語り合えたから今では音界とは仲良くなっている。

明日はアストラルソティスとの戦い。周さんから託された聖剣の名を冠するフュリアスで僕は大空をかける。

その日には周さんやアル・アジフさんだけじゃなく、各国の代表も来る。失敗は出来ないけど、それ以上に戦いを楽しみたい。

「悠人？」

リリーナの言葉に僕は我に帰る。

「えっ？　あっ、ごめん。考え込んでいた」

「やっぱり？　悠人の顔が本当に楽しそうだったから。そんなにルーイと戦うのが楽しみ？」

「うん」

僕は即答で頷く。ルーイと、人界と音界の現時点で最高傑作同士が戦い合うのに楽しみじゃないなんてありえない。僕はそれほど楽しみにしている。

それに、

「メリルを絶対にアッと言わせてやるからね」

「メリルって、確か音界の歌姫だよね？　喧嘩したの？」

「こっちの世界のフュリアスはポンコツだって言うんだよ。確かに、ダークエルフなら言われても仕方ないけど、エクスカリバーはＮＧＦ、次世代フュリアスなんだからポンコツって言われる理由にはならない！　というか、戦闘能力を見てないのにポンコツ言うな！」

僕の言葉にリリーナが呆れたように乾いた笑いを浮かべる。ちょっと興奮しすぎたかな。

「悠人、ＮＧＦ、次世代フュリアスって今までのフュリアスとどう違うのかな？」

「えっと、今までのフュリアスはほとんどに精神感応システムを使

っていないんだ。ダークエルフとか特殊な機体を除けばね。エクスカリバーは最新の精神感応」

そう言ってパイロットスーツの内側に隠してある首輪をリリーナに見せた。

「この首輪を使って精神感応を作用させるんだ。ダークエルフでも試作型を搭載していたけど、エクスカリバーは正式なもの。だから、ＮＧＦって呼ばれてるんだ」

「あれ？　フュリアスって精神感応無かった？」

「うん、あるよ。全ての機体に」

だから、僕は使っていないと言った。

精神感応はこの首輪タイプを除けば脳にチップを埋め込むために手術が必要だ。それにはかなりのリスクを伴うため普通のフュリアスでは使わない。

「ＮＧＦの機体、エクスカリバー。それが演目披露予定とあらば、たくさんの人が否が応でも参加するしね」

「ああ。ＮＧＤ現象だね」

リリーナの言うＮＧＤ現象は次世代デバイスが開発され、それなりの成果を収めて御披露目された時のことだ。

全世界のマスコミが集まり、ＮＧＤの特集がかなり組まれた。どういうルートを通ったかわからないが、ＮＧＤを持つ都さんのところ

にも取材が来ていた。

周さんの話では第７６移動隊全員がＮＧＤを持っているし、エクスカリバーの集積デバイスはＮＧＤの集まりだ。

「新作の演目披露予定。みんなが食いつく物事だよね」

第二百五話　演目開始

澄み渡った空。雲一つないほどの晴天。

中東に急遽作られた天然のフィールドと客席等々。その客席にはテレビによく出る各国の代表の姿や『ＧＦ』総長海道時雨とギルバート・Ｒ・フェルデ、『ＥＳ』からは過激派副代表の姿などがあった。

もし、この客席が爆破でもされたなら世界は混乱するであろう顔ぶれ。だが、そんなことはしない。いや、そんなことは出来ない。

その客席を守っているのが第一特務だから。

客席の隣にある仮説格納庫。その中に周や悠人の姿があった。近くにはアル・アジフやリリーナ、鈴など、人界側のパイロット達が集まっている。

「よ、よよよ、よ、ようやく、だ、だね」

緊張でガッチガチの悠人が口を開く。笑いは起きない。誰もが緊張しているから。周とアル・アジフを除いて。

「はぁ、悠人、そのままだと失敗するぞ。気楽に気楽に」

「周さんはど、どうして、そんなに気楽な、なんですか？」

「色々あるんだよ」

周の言葉にアル・アジフがクスッと笑った。

アル・アジフは周が気楽でいられる理由を知っているからだ。例えば、学会で発表したりするから。

「オレはまだ気楽でいられる。マテリアルライザーの披露だからな。オレとアル・アジフの専用機、フュリアスの原型の動きを見せるだけだから。悠人は模擬戦だもんな」

周の言葉に悠人が首を縦に何回も振る。悠人にとってこういう場面は初めてなのだろう。リリーナや鈴、他のパイロット達の表情は堅い。

ルーイ達の音界側は別の仮説格納庫なので状態はわからないが、緊張はしているだろう。

「このままだと成功しそうなのがマテリアルライザーだけだよな」

音界側の仮説格納庫。その中には数機のギガッシュ、一機のアストラルブレイズ、そして、ロールアウトされたばかりの一機のアストラルソティスと凡庸新型機カットラスが数機あった。

アストラルブレイズのコクピットではリマが、カットラスのコクピットの一つにルナ。そして、アストラルソティスの中にはルーイの姿がある。

パイロット達は一心不乱に最終調整を行っていた。誰もが無口だ。

その時、アストラルソティスのコクピットに通信が入った音が鳴る。

「どうかしたか？　リマ」

『いえ、こちらは調整が終わったので。そちらはどうですか？』

「今更調整することはないさ。今は、装備の確認だ。悠人のエクスカリバーは高機動かつ高攻撃力だ。正直に言って、アストラルソティスの装備だと隠し兵器を使わないといけない」

『あれをですか？』

ルーイは頷いた。そして、小さく息を吐く。

「歌姫様も来ているのに情けないことは出来ないさ。それに、僕はフュリアスのパイロットとして負けたくない」

ルーイにとって悠人は雲の上にいる天才だ。フュリアスの稼働時間はルーイの半分にも満たないし、戦闘経験も少ない。

でも、第三世代を第七世代クラスまで操れる上に、戦闘センスもかなり高い。だから、ルーイは負けたくなかった。

フュリアスのパイロットとして。そして、一人の男として。

凡才でも天才に勝てることを示したいから。

『無茶はしないでください。私もルナも、あなたが怪我をすることは望んでいません』

「無茶はしない。そろそろ時間だな。行くぞ。音界の技術力を見せつけてやろう」

演目が始まった。最初はマテリアルライザーとイグジストアストラルによる模擬戦だ。

最初にどちらが演目を行うかで色々あったが、最初にどちらの世界の技術も使われていない二機が行うことになった。

もちろん、マテリアルライザーのパイロットは周とアル・アジフ。イグジストアストラルのパイロットは鈴だ。

「これが、真のフュリアスなのですね」

客席の中、数人の護衛が周囲に視線を巡らせる中、まるで、姫のようなドレスを着た少女が座っていた。

まるでお人形のような姿。でも、呼吸もしている。時々、微かに体を揺らしている。

「フュリアスが生まれた時から存在する六機のフュリアス。その内の二つがマテリアルライザーとイグジストアストラル」

少女の呟きは周囲の人には聞こえていない。まるで、その少女だけが世界から隔絶されているようだった。

少女はさらに呟く。

「音界にあるはずなのですが、まさか、こちらにあったとは。確保したかったのですけどね」

イグジストアストラルの一斉射撃にマテリアルライザーが避けている。ステップだけじゃない。側転から宙返りなどあらゆる動きを使って砲撃を避けている。

当たれば一撃でアウトなのにマテリアルライザーは軽々と避けている。それは周の行動力とアル・アジフのサポートのおかげだった。

「マテリアルライザー。接近戦用の未完の機体。パイロットが存在せず、乗り手は１００％死んでいるはずなんですが、あのパイロットは一体」

はっきり言うなら気持ち悪いくらいの機動性だった。マテリアルライザーが剣を抜き、避けつつ攻撃を弾いていく。

「他のフュリアスはどこにあるのでしょうか」

「メリルちゃん」

その言葉に少女はビクッとしながら横を見た。横にいるのは音姫だった。

少女が恐る恐る尋ねる。

「どうして私が見えるのですか？」

それは純粋な疑問だった。音姫が髪を括っていたリボンを解く。そして、呟いた。

「【私の姿は誰にも見えない】。【私の声は誰にも聞こえない】」

メリルにリボンを握らせながら言うと、メリルの視界には見えなくなったはずの音姫の姿が見えるようになっていた。

メリルは驚いてリボンを見る。

「これは弟くんが作ってくれたリボンでね、歌姫の力を簡単に使えないようにする特殊なものなの。これを握っていれば歌姫の力は効かない」

「だから、私の姿が」

効かないというだけで効果は発動している。現に二人の会話は誰も聞こえていない。

「マテリアルライザーとイグジストアストラル。メリルちゃんはどう思ってる？」

「えっと、さすが悠遠やストライクバーストと同じ真のフュリアスと呼ばれる機体だと思います」

「悠遠？　ストライクバースト？」

音姫がキョトンとする。その言葉は全く聞いたことが無かった。

「えっ？　あっ、すみません。出来れば忘れて」

「マテリアルライザーにはね、私の義理の弟が乗っているの。だから、忘れられない。でも、話さないことは出来るよ。よければ話してくれないかな？」

音姫がにっこり笑いながら言う。メリルは音姫の顔を見て、そして、ゆっくり頷いた。

「真のフュリアス、マテリアルライザーやイグジストアストラルの属する六機のフュリアス、それは私達が作り出せるフュリアスの原型です」

それは音姫も知っている。メリルは音姫の頷きを見ながら言葉を続ける。

「マテリアルライザー、イグジストアストラル、ストライクバースト、ヴェスペリア、ラインセントラル、そして、悠遠。魔科学時代に作られたものです。全てが世界の滅びに対抗するために」

音姫の目が微かに見開かれた。だけど、それにメリルは気づかない。メリルの視線はフィールドに向かっているからだ。いつの間にか音界の機体の演目が始まっている。

「その機構の大半、マテリアルライザーとイグジストアストラルにヴェスペリアを除けば魔科学時代の機構ではありませんが、それでも、世界の滅びに対する最大の戦力でした」

「それでも、滅んだ」

「はい。真のフュリアスが集まっても不可能なら私達は真のフュリアスに近いフュリアスを作り出せばいいと思っていたのですが、まさか、こちらの世界の技術がここまで高いとは」

「自慢の弟くんだよ♪」

そう言う音姫の顔は誇りに満ちていた。まるで、優秀な子供を持つ親のように。

「もしかしたら、音界と人界、二つが合わされば世界の滅びに対抗出来るかもしれません」

それは希望に満ちた言葉。世界の滅びが近づいている今、あらゆる手段を使ってあらゆる勢力が動いている。もしかしたら、それによって世界が救えるかもしれない希望。

だけど、音姫は首を横に振った。

「多分、無理かな」

メリルの目が見開かれると同時に音姫が言葉を続ける。

「人界、音界だけじゃないよ。魔界、天界、精霊界。本当にあらゆる勢力が集結しないと不可能かもしれない。どの世界も一長一短があるから」

「お互いに埋めなければ勝利は難しいと？」

音姫は頷いた。

フィールドでは音界の演目が終わり、ソードウルフが出て来ている。

「どうしてかわからないけど、そう思う」

第二百五話　演目開始（後書き）

文中に出てきたラインセントラルですが、ｔｈｅ　ｏｒｉｇｅｎでは別の名前で出ます。

次回はエクスカリバーＶＳアストラルソティス。ちょっと長くなりそうです。

第二百六話　白銀の翼（前書き）

エクスカリバーＶＳアストラルソティス戦は話をいくつかに分けていきます。

第二百六話　白銀の翼

最終演目。エクスカリバーＶＳアストラルソティス。

全てはこれから始まった。周さんが提案した僕の実力を示すやり方。結局は見せ物市みたいになったけど、エクスカリバーという現時点で最高傑作に乗れている。

試し乗りした限り文字通り最高傑作の性能だった。機動オプションの性能が特にいい。

僕はレバーを動かしながら一直線の道に入った。エクスカリバーの形態は戦闘機形態。

今のエクスカリバーにはニトロブースターをつけている。戦闘機形態のエクスカリバーの上にエクスカリバーの翼をさらにつけたようなエンジンをつけたものだ。

あらゆる機動オプションの中で最高の加速が出せるもの。

僕は深く息を吸い込み、そして、吐き出した。

『悠人、大丈夫？』

鈴から通信が入る。僕はそれに対して頷きで返した。向こうから見えてないだろうけど。

「大丈夫だよ。緊張はしているけど」

多分、ルーイのアストラルソティスも準備万端だろう。鈴のイグジストアストラルは周さんとアル・アジフさんのマテリアルライザーと一緒に客席とフィールドを挟んで正反対にある場所にいる。

一応、警備らしい。

「アストラルソティスがどんな性能かわからないけど、このエクスカリバーに勝てるわけがないよ」

『悠人にしては珍しい』

確かにそうだ。僕がそう言うのはまずない。だけど、今回だけは僕の全てを出すつもりだから。

演目開始の時間が近づく。スラスターやブースターを微かに起動させてスラスターやブースターを温めていく。

エネルギーに関しては三つの出力エンジンが勝手にエネルギーを作り出すためダークエルフみたいに気にする必要はない。

カウントが始まった。

「白銀の剣を今ここに」

僕は呟いて出力をゆっくり上げていく。

「全てを切り裂く翼をその手に持ち」

そして、カウントが0を示す。

「天駆ける力を権限する！」

その瞬間、ニトロブースターが火を噴いた。ニトロブースターにある特殊な制御システム。それを解除するための暗号。

システムを解除した瞬間、ニトロブースターをつけたエクスカリバーは化け物とかす。

僕の体がシートに押さえつけられる。もし、パイロットスーツがなければ気絶していたであろう加速。直接を駆け抜けてエクスカリバーが大空に飛翔した。

向かってくるエネルギー弾。向こうは近づかれる前にこっちを狙ったらしい。アストラルソティスの支援ＡＩはかなり優秀なようだ。ニトロブースターの超加速を行ったエクスカリバーに直撃するルートを撃ってくる。

だから、僕は直進した。エネルギー弾がエクスカリバーの翼に当たった瞬間、翼がエネルギー弾を切り裂いていた。

「生半可な火力はエクスカリバーに効かない」

ニトロブースターを戻し、集積デバイスの力で新たな武器を取り出す。ちょうど、両翼に取り付けられる砲身が長い砲門。スピードを出す形とはほど遠いため、速度が一気に激減する。

「だから、こんな攻撃を飛ばしてこい！」

僕はそう言いながら姿の見えたアストラルソティスに向かって引き金を引いた。だが、速度の影響でアストラルソティスの体が岩影に隠れる。

砲身から文字通りのエネルギーの塊が吐き出された。それは障害物である岩影を貫通する。

その瞬間、僕の体にまるで電流が走った。嫌な予感がする。ペダルを斜めに踏み込み右に動かしながらスラスターで機体を斜めに倒す。

だが、上空から飛んできたエネルギー弾が左の翼の砲身に直撃した。

「くっ」

すかさず砲をパージしてニトロブースターを取り付けて加速する。

「今のは僕の放ったバスターマグナム？」

エクスカリバーを戦闘機形態から人型に変形させて地面に着地する。着地して近くの岩影に姿を隠した。

今の攻撃は確かに僕が放ったバスターマグナムのはずだ。それがアストラルソティスのいる真っ正面からではなく、上空から襲いかかった。

「リフレクトショット？」

それが出来るのは浩平さんくらいのはずだが、向こうのシステムによってそれを可能とするならかなり辛い。

特にこんなところに隠れていたら。

「今は考えても仕方ない。アストラルソティスの姿を、なっ」

見えた。アストラルソティスの姿が先ほどいた場所とは真逆の位置からエクスカリバーをエネルギーライフルで狙っている。

僕はレバーを横に倒した。

第二百六話　白銀の翼（後書き）

エクスカリバーが反則的な機動力なら、アストラルソティスは反則的な特殊能力です。

第二百七話　悠遠の翼（前書き）

ルーイが使う特殊能力の解説が入ります。ゲイルナイト戦で使った能力です。

第二百七話　悠遠の翼

ルーイは小さく息を吐きレバーを操作してアストラルソティスの手に握られているエネルギーライフルを下ろした。ルーイが見つめているのはエネルギー弾が破壊した岩肌。

完全に隙をついたアストラルソティスの攻撃はエクスカリバーが戦闘機形態に変形したことで完全に回避されていた。あの反応速度は予想以上だ。

「まさか、今のも避けられるとは」

絶対に当たると思っていた攻撃が避けられたのはさっきのを含め二回目。今回は死角からの攻撃ではなかったため、偶然避けられたで済ますことはできたが、一回目はありえない。完全に死角をついたこちらの攻撃は完全に避けられた。

エクスカリバーのレスポンスもさることながら、パイロットの技量が桁違いに高いのも理由だろう。だが、それでも納得することが出来ない。

相手の支援ＡＩが極めて優秀なのか、死角が存在しないのかのどちらかだ。

できれば前者であってほしいとルーイは思っている。

「レスポンスは向こうが上。攻撃力も、速度もか。これが、人界のフュリアス」

ほんの最近まで第三世代のダークエルフが最強の座に位置していたとは思えない。もっとも、悠人の乗るダークエルフなら特殊能力を使わないアストラルブレイズでは刃が立たない可能性だってある。

ルーイはエクスカリバーの位置を見る。大空を飛翔しながらこちらをうかがっているエクスカリバー。その姿は鳥のように美しい。

ルーイはアストラルソティスが握っている両手のエネルギーライフルを構えた。

「行くぞ、悠人」

「周さん、今のは？」

鈴がイグジストアストラルに取り付けられているモニターを見ながら近くのマテリアルライザーに乗る周に尋ねた。周もこの光景を見ているはずだ。

『多方向からの同時攻撃。しかも、丁寧に死角からの攻撃もある。まあ、避けているのが奇跡の様な状況だな』

確かに奇跡と言っても差し支えがないほど極めてレベルの高い移動だった。はっきり言って、マテリアルライザーを使う周の回避力に匹敵するかもしれない。

イグジストアストラルなら自慢の防御力でどうにかなるが、エクス

カリバーではそうはいかない。

「リフレクトショット？　それとも」

『多方向同時攻撃。俗に言うＡＡですね』

複数地域からの一点への同時攻撃。テロ組織の拠点を攻撃する時に使われる手法だ。ほとんど囲んだ状態から使うため、標的はまず逃げることが出来ない。

アストラルソティスはそれをたった一体で成し遂げている。

『ＡＡ自体が使えないってわけじゃないけど、一人で仕様と思ったらよほどの集中力を必要とするからな。実戦じゃおススメしないけど、この攻撃は見事というしかないな』

エクスカリバーを簡単に翻弄するエネルギー弾の嵐。確かに、それだけは見事としか言いようがない。だが、それに玩ばれているのは鈴の想い人なのだ。

「勝ち目はないんですか？」

『ある。エリシア、解析は？』

『終わりました。これは確かにＡＡですが、歪曲空間を使ったやり方ですね』

『やはり、都と同じか』

二人の言葉に鈴は首を捻った。歪曲空間ということは曲がる空間の

ことだろうが、エネルギー弾が曲がった形跡はない。モニターにも映っていない。まるで、見えないエネルギーライフルによって撃たれているかのように。

『放たれたエネルギー弾が歪曲空間を通って別の歪曲空間から出る。それが多方向同時攻撃の真実か。所見でほとんど避ける悠人の実力はけた違いだな』

鈴にはあまり理解できなかったが、悠人が凄いということだけは理解できた。

『この能力は悠遠の力ですね』

『悠遠？』

『はい。最強のフュリアスの機能の一つです。アストラルソティスの中身がわかりましたよ』

鈴のモニターに何かの設計図が現れる。よく見てみると、それはアストラルソティスの設計図だ。

その背中にある一本の棒のようなもの。

『真ん中の棒状のものがエネルギー機関。通称『悠遠の翼』です。理論上は無尽蔵のエネルギーを生み出す機能で、特殊能力を有しています』

「そんなものがあるんですか？」

『はい。この中でも悠遠は歪曲空間を作り出し、攻撃を無力化した

り、対象を閉じ込めたり、歪曲空間の出口を自由に設定できたりとかなり強力な機能です。この映像を見てください』

マテリアルライザーから送られてきた映像。それは、ゲイルナイトとの戦いの映像だった。

『蒼い閃光の後にバスターマグナムが破壊されています。これは、バスターマグナムの攻撃を歪曲空間を使いＡＥＦの内側に展開したからです』

『つまり、その力があればどんな攻撃も簡単に返すことが出来て、あらゆる方向から攻撃が可能というわけか。チートだな』

『チートなのは悠人の方です』

鈴がエクスカリバーの動きをみる。だんだんエクスカリバーの動きが正確にはっきりとなってきていた。確実にアストラルソティスの隙を狙っている。

『多分、近接格闘戦を狙っています』

『そういうことか。いい作戦だ』

「何がですか？」

二人で納得しているが、鈴には全く分からない。すると、エクスカリバーの向きが変わった。アストラルソティスの方向へ機首を向けている。

『悠人は狙っているんだよ。理論上、アストラルソティスを一撃で

倒し、イグジストアストラルですらタダで済まない攻撃をな』

その言葉に鈴は鳥肌が立ったのを感じた。もし、周のその言葉に誇張した表現があったならここまではならなかっただろう。実際に、鈴はエクスカリバーと模擬戦をしている。それをしているからこそわかる。そんな攻撃はないと。

だが、本能がそれはないと叫んでいた。周の言葉にウソはないと本能が確信している。

『エクスカリバーに聖剣の名前が付けられた理由。それをルーイが知った時、悠遠の翼は白銀の翼によって打ち砕かれる運命になるだろうな』

第二百七話　悠遠の翼（後書き）

アストラルソティスもかなり凶悪な性能も持ちますが、エクスカリバーはさらにその上を行きます。

第二百八話　旋回式電磁砲（前書き）

この話に切り札です。

第二百八話　旋回式電磁砲

ペダルを踏み込みブースターを動かす。レバーを操作し不規則に出力を上げることで予測を不可能にする。スラスターでそれらの変動を限界ギリギリまで操作する。

はっきり言って、僕でなければ今頃落ちていても不思議ではない行動だった。ほとんど無意識に、自分の勘が告げる場所に最高の技術力で到着する。そうしていると不思議なことに攻撃は当たらなくなっていた。

でも、限界は近い。アストラルソティスの攻撃がどのようなものかわからないけど、ほぼ全方位から攻撃できるなんてありえない。マテリアルライザーと戦う方が楽なように思える。あっちはあっちであらゆる攻撃を避けられる絶望を味わえるけど。

アストラルソティスの位置を確認する。エネルギー弾は直線的にほとんど飛んでこない。だったら、近接格闘戦に持って行くのが一番か。

僕は出力を上げペダルを勢いよく踏み込んだ。スラスターの力で強引な姿勢制御と方向転換を成功させアストラルソティスとの一直線のルートに入る。アストラルソティスはエネルギーライフルを構えたままだ。距離は１４００ｍ。ちょうどいい距離だ。

「今だ」

僕は機動オプションを身に付けた。

ニトロブースターだけじゃない。エクスブースター、ジェットブースターなど同時装着が可能なブースターをこれでもかと取り付ける。そして、出力を最大まで上げた。

「がはっ」

体がシートに押し付けられる。パイロットスーツの力でも耐えきれないほどの圧力。僕は全ての機動オプションをパージした。

減速が始まる。それと同時に視界に入るアストラルソティス。その距離はほぼ４００m。

「今だ」

エクスカリバーの形態を戦闘機形態から人型に変形させて地面に着地する。その時点で距離は３００mを切っていた。ペダル操作とレバー操作で距離を詰める。

アストラルソティスはエネルギーライフルを構え、引き金を引いた。放たれるエネルギー弾は一直線にエクスカリバーを狙う。だから、レバーを横に倒した。

戦闘機形態に変わったエクスカリバーの頭上をエネルギー弾が駆け抜ける。それがわかっていたのか戦闘機形態のエクスカリバーに迫るエネルギー弾。完全な直撃コースだ。だから、僕は出力を上げながらレバーを立てた。代わりに機動オプションを取り出す。

ペダルを踏み込みつつ取り出した機動オプションに精神感応を繋げ、ブースターを起動した。

轟音。

表現としてはそれが一番だろう。少し盛り上がっていた地面の大地が吹き飛び、エクスカリバーの体が浮かび上がる。しかも、高速に。

エクスカリバーの足元をエネルギー弾が通り過ぎた。今のルーイの顔はさぞかし面白いことになっているだろう。

エクスカリバーに取り付けられた機動オプションはカスタムブースター。本来は人型で翼が正面から見た場合完全に体に隠れるように移動するが、カスタムブースターを付けた場合だけはその翼が翼をもっているかのように横に開いている。空気抵抗が極めて高くなるが、カスタムブースターの出力がそれを補っていた。

本来ある翼の上からぴったり装着されたカスタムブースター。その先には自由に３６０度旋回が出来る旋回式ブースターが取り付けられていた。つまり、浮かび上がるのも前に進むのもこれ一つで済むということだ。しかも、カスタムブースターにはエクスカリバーに積んである出力エンジンと同等のものが積み込まれている。

ただ、周さんの話ではカスタムブースターを一つ作る値段でエクスカリバーがもう一機作れるらしい。

カスタムブースターの旋回式ブースターを最大限まで使ってアストラルソティスとの距離を詰める。

アストラルソティスはエネルギーライフルを捨てエネルギーサーベルを引き抜いていた。僕は対艦刀を取り出しエクスカリバーの両手で握り締める。そして、地面を蹴りながらさらに距離を詰めた。

『その装備、その技能、その性能。何から何まで羨ましいまでの機体だな！』

ルーイの声と共に対艦刀とエネルギーサーベルがぶつかり合い火花を散らす。アストラルソティスは足を振り蹴りつけてくるが、それを僕は旋回式ブースターの力で回り込んで回避する。そして、また対艦刀とエネルギーサーベルをぶつけ合った。

出力は同じ。小回りはアストラルソティスに軍配が上がるけど、機動力は確実に上だ。向こうの行動を先読みしてこちらの有利な条件に持っていく。僕は悟られないように新たな武装を取り出した。

「そっちこそ、まさか、僕がここまで追い詰められるとは思わなかったよ！」

『僕もだ。まさか、あそこまでしてほとんど当たらなかったのは悠人が始めただ。誇っていい。だが、近接格闘戦では負けるわけにはいかない！』

アストラルソティスの姿が前から消える。急激な加速で横に回り込んだのだ。対艦刀とエネルギーサーベルをぶつけあったまま。でも、ルーイは気付いていただろうか。僕がアストラルソティスに回り込むことでプレッシャーをかけていたのと同じように、アストラルソティスを僕が誘っていたのも。

人にする嫌がらせはされると一番嫌がることがある。その言葉通りにアストラルソティスが背後に回り込んでいる。そして、今頃目を見開いているだろう。両手で握るエネルギーサーベルが対艦刀によっｔ阻まれているため避けることはできない。

アストラルソティスの目の前にある旋回式電磁砲を。

旋回式電磁砲から実弾を放った。アストラルソティスが慌てて回避するが左の翼が実弾によって貫かれバラバラに吹き飛んだ。

僕はエクスカリバーを動かして距離を取るのと同時にアストラルソティスが距離を取ろうとする。僕は振り向きざまに旋回式電磁砲の砲身を前に向け、実弾をもう一発放った。

アストラルソティスの右の翼を粉砕する。

カスタムブースターを付けている場合、正面からでは旋回式電磁砲が後方に向けられている時、その姿を確認することはできない。回りこむことによってその姿を見ることが出来る。今回はそれを使った。

左右の翼を破壊されたアストラルソティスの姿が消える。どこかに移動したのだろう。僕は小さく笑みを浮かべた。そして、弾切れを起こした旋回式電磁砲を収納する。

旋回式電磁砲は極めて強力だが、最大で二発の実弾、左右に一発ずつ、しか積めないため長期戦には不向きだ。でも、このような不意を突くことに関してなら真価を発揮できる。

「ルーイ、確かに今のタイミングで距離を取るのは正解だよ。でも、エクスカリバーの真価の前ではそれは失敗なんだよね」

第二百八話　旋回式電磁砲（後書き）

次の話で勝負が決まります。

第二百九話　エクスカリバー（前書き）

エクスカリバーＶＳアストラルソティス戦のラストです。

第二百九話　エクスカリバー

ルーイは自らの失態を理解していた。

悠人の前でアストラルソティスの特殊能力をしようし移動したことでアストラルソティスが何らかの力で移動出来ると理解出来たはずだ。

岩影に隠れながらアストラルソティスの状態を確認する。

両翼のサブブースターとスラスターの大半は破壊された。メインブースターは生き残っているが、このアストラルソティスで小回りは効かない。

「まさか、あんな武装があるとはな」

放たれたのはエネルギー弾ではなく実弾。コストがバカみたいにかかる兵器だ。効果対費用で考えても普通は装備しない。

しかも、エクスカリバーに装着されていた追加ブースターの影に隠れ正面から見えなくなっていた。つまり、エクスカリバー専用兵器だと思っていいだろう。

「旋回式の実弾砲か。下手に当たれば一撃で落ちる。今は」

アストラルソティスのレーダーでエクスカリバーの位置を確認する。

エクスカリバーは高速でアストラルソティスを探すために移動していた。

向こうが何の武装を使うかわからない。だが、こうなった以上、アストラルソティス専用装備を使うだけだ。

この世界で開発されたバスターライフル。それを音界の技術で発展させた悠遠の力を持つアストラルソティス専用のライフル。

「フレキシブルカノン。使うぞ」

大空を舞うエクスカリバーの中で悠人は周囲を見渡しながらレーダーを確認する。アストラルソティスにはステルス装甲でも用いられているかのようにレーダーには映らない。

悠人は小さく溜息をついた。

「アストラルソティスの位置さえわかれば後は一撃なんだけどな」

アストラルソティスの両翼は破壊した。スラスターやサブブースターによって小回りを可能とする両翼を破壊した以上、超高速の一撃はアストラルソティスには避けられないはずだ。

ただし、アストラルソティスの場所がわかっているなら。

ペダルを操作しながら精神感応によってカスタムブースターの旋回式ブースターを上手く稼働させて無駄なく移動する。

悠人は目を瞑りながら小さく息を吐いた瞬間、見開くように目を開

けて出力を上げた。

エクスカリバーが旋回式ブースターの影響で９０。回転する。その瞬間、ちょうどエクスカリバーを上下に挟み込むようにエネルギー弾が通り過ぎた。大空と地面から。

「今のは」

通り過ぎたはずのエネルギー弾がエクスカリバーを狙って曲がる。だが、その曲がり方はかなり荒く、軌道を変えるだけで当たらない。エネルギー弾の大きさは通常のエネルギー弾より大きい。もしかして、

「理論上可能な曲線射撃（フレキシブルショット）？　出力的に考えてバスターライフル以上のものかな」

曲がるエネルギー弾ははっきり言って厄介だ。例え、悠人の勘が当たりやすいとしても避けるのはかなり難しくなる。

「面白いね」

悠人の顔に笑みが浮かんだ。そして、飛んでくるエネルギー弾をことごとく回避する。

その全てが曲線を描くエネルギー弾だった。軌道が全く予測出来ない。だが、エクスカリバーの体にはかすりもしない。

旋回式ブースターがくるくる回りながら火を噴きつつエクスカリバーの機体を面白いように動かしていく。それはＡＩですら予測不可

能なまでに複雑な軌道だった。

だが、悠人の勘が告げる。このまま進めば撃ち落とされると。そして、視界の隅でアストラルソティスを発見した。

その手にあるのはバスターライフルのようなもの。あれが曲線射撃（フレキシブルショット）を可能にしたライフル。フレキシブルカノンだ。

チラリと計器を見ると、一番端にちょこんとついている、これまた小さなランプが赤く光っていた。それを見た悠人が頷く。

悠人はすかさずカスタムブースターをパージし収納する。そして、精神感応の力でエクスカリバーにとあるコマンドを送った。

エクスカリバーが動く。それと同時にフレキシブルカノンから放たれた幾つもの曲線射撃（フレキシブルショット）がエクスカリバーを狙って迫り来る。

悠遠の力で周囲に張り巡らされた歪曲空間から普通に進んだだけでは避けることは出来ない場所に。

その瞬間、エクスカリバーの翼に変化があった。翼が後ろに収納されたのだ。まるで、徳利のような形になっている。それがありえない軌道を描いた。

まるで、紙飛行機がそよ風によって進路を変えたように、強烈に吹いた突風がエクスカリバーの体を翻弄している。減速しながらその場で縦に回転する。それは本来ありえない機動。下手をすれば空中分解しかねない動きだった。

だが、その動きが全ての曲線射撃（フレキシブルショット）を回避する。翼が展開されエクス

カリバーは態勢を立て直した。

「見せよう。僕と、エクスカリバーの本当の剣を」

出力を最大まで上げる。

その光景をメリルは見つめていた。ありえない軌道を描き、アストラルソティスの奥の手であったフレキシブルカノンを完全に避けきった。かすっていれば支障をきたす攻撃をエクスカリバーは避けきった。

おそらく、音界ではこのような軌道を描けるパイロットはいないだろう。

「嘘ではなかったみたいですね」

メリルは最初第三世代で第七世代の性能を出せる悠人を認めなかった。それから発展したこの戦いだが、それを見ている限り認めざるをえない。

エクスカリバーとアストラルソティスのスペック差は微々たるものだ。最高速度はエクスカリバーが遥かに上回っているが、出力、攻撃力はアストラルソティスが上。総合的ならアストラルソティスが上のはずだった。

しかし、悠人は様々なオプション武装でその差を追い越して圧倒的

な差を作り出している。

機体を完全に熟知しなければ出来ないはずだ。

エクスカリバーがアストラルソティスの方向を向く。アストラルソティスはフレキシブルカノンを構えた。

次で勝負が決まる。

そう思った瞬間、エクスカリバーが新たな装備に包まれた。いや、装備というにはあまりにも大きすぎる。まるで、装甲だ。

メリルの目に映っているのはまるで四角錘になったエクスカリバー。対するアストラルソティスはフレキシブルカノンを構えてエネルギーを溜めている。

そして、エクスカリバーが加速した。その加速は今まで以上に速い。対するアストラルソティスはフレキシブルカノンの引き金を引いた。放たれたのは極太のエネルギー弾。

両者がぶつかり合う。

「メリルちゃん」

メリルの隣にいた音姫が真剣な表情で言う。

「研ぎ澄まされた刃に断ち切れぬものはないよ」

エクスカリバーが駆け抜けた。フレキシブルカノンとアストラルソティスの右腕と頭を破壊する。装甲をパージしながら人型に変形し

つつカスタムブースターに切り替えて逆噴射をかけている。

アストラルソティスが振り返る。残ったセンサーだけでも攻撃しようとしている。左手に握られたエネルギーサーベルを引き抜きながらエクスカリバーに飛びかかる。

エクスカリバーはカスタムブースターの旋回式ブースターで姿勢を制御しながら対艦刀を取り出し、着地した足で地面を蹴った。

対艦刀とエネルギーサーベルがぶつかり合い、対艦刀が砕け散る。

アストラルソティスはすかさず振り切ったエネルギーサーベルを振り下ろす。狙いはエクスカリバーの頭。だが、エネルギーサーベルは空を斬り、変わりに戦闘機形態に変形したエクスカリバーがアストラルソティスに突撃していた。

アストラルソティスが跳ね飛ばされて崖に激突する。そして、その手からエネルギーサーベルが落ちた。

エクスカリバーはすぐさま人型に戻り、対艦剣でアストラルソティスの右腕を破壊した。

メリルが小さく息を吐く。

この瞬間、エクスカリバーＶＳアストラルソティスの戦いはエクスカリバーの勝利で終わった。

第二百十話　二人のエースパイロット

僕は戦闘機形態のエクスカリバーを着地させコクピットを開いた。
アストラルソティスも同じようにコクピットを開き、下に下りてきている。

「ルーイ、大丈夫？」

「大丈夫だ。まさか、ここまでこっぴどくやられるとはな。僕にとっては完全な想定外だ」

そう言いながらもルーイはエクスカリバーを見つめていた。
アストラルソティスは両翼と両手に頭すら破壊された完全な大破。
本格的な修理工事に送らなければどうにもならないだろう。

「まさか、ルーイが曲線射撃（フレキシブルショット）を使ってくるとは思わなかったよ。あれを避けるのはかなり苦労したしね」

「簡単に避けた奴が何を言う。エクスカリバーはどういう性能をしているかわからなくなった」

「エクスカリバーというより僕かな」

多分、ルーイにはわからないだろうけど説明をするだけしておかないと。

「当たりそうなところに嫌な予感がするんだ。それを使って嫌な予感のしないところにエクスカリバーを動かしていたら」

「全て避けたということか。理解しがたいな」

だと思った。この回避の仕方は鈴やリリーナに説明しても理解してくれない。勘での回避なんて駄目だと言われたくらいだ。周さんなら別のことを言いそうだけど。

でも、それは事実だ。勘だけの制御で、今までほとんど被弾していない。よほど気を抜かない限り。

すると、ルーイが深く考え込んだ。

「第六感というべきか。それがずば抜けて高いということか。やはり、信じられないが」

「うう、信じないなら信じなくていいよ。希望を植え付けないで」

そう僕が泣きそうになっているとフュリアスが飛ぶ飛翔音と地面を駆ける振動があった。

イグジストアストラルとマテリアルライザーだ。それがこっちに向かってくる。多分、モニターで戦闘の一部始終を見ていたのだろう。

岩影からマテリアルライザーが、空からイグジストアストラルが近くに着地しコクピットが開く。マテリアルライザーは開くコクピットがないためマテリアルライザー自体が消えた。

「お疲れ様」

鈴がそう言いながら僕の胸に飛び込んでくる。そして、胸をペタペ

タ触ってくる。

「何？」

その行為に僕は思わず尋ねていた。

「べ、別に何もないよ」

そう言いながらも鈴はペタペタ触り、満足したのか離れた。

「一体何が」

「悠人がちゃんといるか確認したかったんだろ？　エクスカリバーの回避はマテリアルライザー並みだったし」

エクスカリバーの回避力は文字通り化け物だ。どうやったら乱戦の中で傷一つつかない戦闘が出来るかわからない。

周さんの技能もあるだろうけど、マテリアルライザー自体が桁違いということか。

「そうなの？」

僕は鈴に尋ねた。鈴は顔を真っ赤にして俯いている。

「ありがとう」

そう言って僕は鈴の頭を撫でた。心配してくれる人がいて良かった。

「あれ？　アル・アジフさんは？」

「我はそなたの実力をよく知っておるからの。心配なぞしておらん」

「あれ～？　曲線射撃（フレキシブルショット）の時に『危ない』やら『避けて』やら叫んでいなかったか？」

アル・アジフさんの顔が真っ赤に染まり、動いた。回し蹴りが周さんを狙い、周さんがそれを受け止める。

「ほう。かなり動けるようにはなったみたいじゃな」

「リハビリを開始しているんでね。本調子まではまだまだ遠いけど」

「ならば、本気を出してよいの」

アル・アジフさんが魔術書を開く。周さんの額に汗が流れているように僕の額からも汗が流れていた。

久しぶりに、本当に久しぶりにアル・アジフさんがキレた。

この状況じゃ止められない。

アル・アジフさんが笑みを浮かべながら魔術を放とうとした瞬間、鞘に入った刀がアル・アジフさんの首に入った。

アル・アジフさんがその場に崩れ落ち、周さんが抱き留める。

「音姉、助かった」

そこにいたのは鞘に入った刀を持つ音姫さんと片手で抱かれている

メリルの姿。

音姫さんはメリルを下ろした。

「駄目だよ。アルちゃんをからかったら」

「音姫だってよく抱きついているじゃないか」

それをアル・アジフさんは心底嫌がっている。

「大丈夫大丈夫。私にアルちゃんは勝てないから」

「納得」

それで納得するんだ。

「ルーイ、お疲れ様です」

「申し訳ございません」

ルーイがその場に膝をついて頭を下げた。多分、アストラルソティスのことだろう。

「歌姫様から授かったアストラルソティスを」

「ルーイ、この場に音界の目はありません」

そう言いながら僕達を見ながらメリルがウインクしてくる。多分、黙っておけということかな。

「わかった。メリル、すまない。負けた」

「ルーイは何も悪くありませんよ。人界のエクスカリバーとパイロットが上回っただけのこと。悠人」

僕の名前が呼ばれ、体をビクッとさせながら直立した瞬間、メリルが僕に向かって頭を下げた。

「ごめんなさい。あなたの実力を疑って」

「あ、謝らなくていいよ。第三世代で第七世代の実力を出せるなんて普通は信じれないし」

「だとしても、いえ、だからこそ、謝ります。ごめんなさい。そ、それと」

メリルが少し顔を赤らめながら僕を見てくる。

「と、友達になってくれませんか？　あなたのことをもう少し知りたいというか」

その瞬間、周囲の時が止まった。誰も、メリル以外身動きしない。そして、最初に動いたのはルーイだった。

「悠人！　メリルに何をした！」

「何もしてないよ！」

胸ぐらを掴まれて顔を近づけてくる。僕は慌てて弁解した。

「る、ルーイ。悠人は何も」

「メリルは黙ってて。これは僕と悠人の会話だ」

メリルは音界の歌姫なのにいいかな？

「海道周！　どうにかしなさい！」

ルーイの言う言葉を全力で右から左に聞き流し、聞こえないようにしながら周さんに助けを求める。周さんなら必ず、

「二人のエースパイロットによる歌姫の取り合いか。面白いな」

「海道周！」

メリルが叫ぶ。対するルーイは掴み上げる力を強めた。

「悠人！　聞いているのか！」

「聞いていないよ！」

僕は思わず本音を返してしまった。ルーイのこめかみがひくつく。

ヤバい。

「誰か助けてー！」

その言葉は虚しく大空に響き渡った。

第二百十話　二人のエースパイロット（後書き）

次からはルーチェ・ディエバイトです。すぐに入るわけではありませんが。由姫が大暴れします。リコやアルトの活躍も見てください。

第二百十一話　海道茜（前書き）

本戦にはまだ入りません

第二百十一話　海道茜

オレは開いていたモニターを閉じた。そして、そのモニターからレヴァンティンに繋げている端子を抜く。

「お兄ちゃん、すごかったよ。本当にすごかった。いいな、私もあんな風なことをしたいな」

目の前にあるベッド。その上にいる左右を三つ編みにした少女。着ているパジャマは花柄で性格をよく表している。

海道茜。核晶欠損症で入院しているオレの実の妹だ。

オレは茜の言葉に苦笑してしまう。

「フュリアスの操作は生身での戦闘とは勝手が違うぞ」

「わかっているよ。でも、フュリアスなら私だって」

茜の視線が下を向く。そして、ベッドのシーツを握りしめた。

茜だって本当は元気に走り回りたいはずだ。こんなベッドの上で縛り付けてていいはずがない。

でも、今のオレにはどうすることも出来ない。

「お兄ちゃん、私は望んでこうなったんだよ。お兄ちゃんなら絶対に対処法を見つけてくれるって」

茜が微かに俯かせた視線を見たからかオレの頭を撫でてくる。

「核晶欠損症でありながら魔術が使えたお兄ちゃんなら」

やっぱりバレていたか。

オレは思わず苦笑してしまった。茜にはそのことを秘密にしていたはずなのにな。

オレは昔、核晶欠損症だった。対する茜は近年稀に見る天才の一人、音姉と同じような扱いだった。

だから、親族はこぞって茜を褒め称え、対するオレは邪魔者扱いされた。もちろん、親族全員が核晶欠損症だと知っていたわけじゃない。知っていたなら放り出されていただろう。

知っていたのは親父とお袋、そして、慧海くらいだ。どういう理由かわからないが、オレは核晶が無くても走り回っていたから。

そして、あの日、あの『赤のクリスマス』の日。大怪我を負った茜は傷が奇跡的になかったオレに対して核晶を移植した。

それは自殺行為に等しいものだったが、オレは無我夢中で魔術を使い、唯一伸ばしていた治癒魔術を拙いながらも倒れるまで使用した。

そのため、茜は命は助かったが、核晶欠損症になった。

最初は返そうとしたのだが、茜が受け取ることを拒否したため、今も茜の核晶はオレの中にある。

その後、『赤のクリスマス』の真実を知り、オレは白百合家へ養子に出されたというわけだ。

「そう言えば、今日はお兄ちゃん一人なんだね。由姫姉は？」

茜は白百合家の養子になったわけじゃない。だから、茜は未だに海道茜だ。

ただ、由姫は昔からよくオレと一緒に茜の見舞いにきていた。最初は恐る恐るだったけど、オレが『ＧＦ』に入ってからは頻繁に、おそらくオレ以上に茜の見舞いをしているだろう。

確か、どっちがオレをお兄ちゃんという権利について論争していたような。

「由姫はルーチェ・ディエバイトに向けて音姉と特訓中だ。今回はオレ一人。悪かったな」

「ううん。お兄ちゃんが来てくれるだけで嬉しいよ。最近は来てくれなかったし。由姫姉、ルーチェ・ディエバイトに出るんだ。お兄ちゃんはまだ出ていないよね？」

「出る機会がないだけだ」

他の言い方をするならルーチェ・ディエバイト本戦に出る前に負けるだけ。同年代でも上位に入ると言っても、器用貧乏以外は完全に埋もれるレベル。

そんな実力でルーチェ・ディエバイトの本戦にいけるわけがない。まあ、出たいとは思うけど。

「出て欲しいな。ルーチェ・ディエバイトって最近はケーブルテレビで生中継があるから応援も出来るし」

「そうなのか？」

孝治や悠聖が出た時はなかったような。まあ、あの二人が出た時は年齢が年齢だけに自重された可能性はある。

「そうだよ。ケーブルテレビって言ってもかなり小さいものだと思うよ。去年のルーチェ・ディエバイトなんて本当にすごかったんだから」

去年のルーチェ・ディエバイトは全く見ていない。確か、ちょうど孝治と任務に出ていたはずだ。見れるわけがない。

「ケーブルテレビね。だったら、由姫の活躍もテレビで見れるな」

「うん。すでに関係者は懐柔済みだよ」

本来、個室にテレビを置くことはまずない。休息所みたいな誰もが集まれる場所に置いてある。

懐柔済みということは病院の医師も看護師もグルというわけか。もしかしたら、同じように入院している人も。

なんて用意周到な。

「でも、由姫姉って強いの？　ルーチェ・ディエバイトの本戦に出るってことはかなり強いはずだけど」

「まあ、第７６移動隊でなら近接格闘はトップだろうな。格闘なら」

というか、格闘出来るメンバーが少なすぎる。オレか孝治くらいだろう。孝治もかじったことがあるレベルだが、由姫には遠く及ばない。

「ずばり、由姫姉の優勝確率は？」

「三割」

いくら譲歩してもこれ以上はいかない。

「えっと、３０％？」

オレは頷いた。茜は信じられないような目でオレを見ている。

「今回はアルトやリコがいるんだよ。エリオットもな。そいつらが簡単にリタイアしたなら、由姫の勝つ確率が高くなる」

「そんなに強い人がいるんだ。だったら、お兄ちゃんは由姫姉を応援しないとね」

「ああ。音姉と一緒に教えているさ」

白百合流のあの技を。あの技さえ使えるようになればリコはどうにかなる。アルトは由姫の実力で倒してもらうしかない。

エリオットは、どちらかに倒されることを祈るだけだ。

ガハナットさんもいるみたいだけど由姫の敵じゃない。

正直、優勝するかしないかはかなり運頼みな部分が多い。

「まあ、その確率を上げる手段ならいくらでもあるさ」

そう言ってオレは笑みを浮かべた。

第二百十二話　白百合姉妹（前書き）

本戦はもう少しかかります。

第二百十二話　白百合姉妹

由姫が一歩を踏み出しながら右の拳を振り切った。だけど、その右の拳は音姫が構える木の棒によって受け止められる。

すかさず蹴りを放つがそれは木の棒に弾かれた。由姫が後ろに下がる。

「相変わらず、お姉ちゃんの技術はすごいね」

「そうかな？」

音姫がニコニコ笑いながら木の棒を構えている。それ一本でどれだけの攻撃が受け止められたかわからない。

由姫は左のナックルを身につけた拳を握りしめた。

「いや、今の結構本気だったんだけど」

「八陣八叉が白百合に勝つなんて百年早いよ」

「お姉ちゃんって八陣八叉を毛嫌いしていたっけ？」

「ううん。全く」

その瞬間、音姫が動いた。全身を使って一気に加速する。それを由姫が右手で打ち落とそうとする。だけど、それより早く音姫の木の棒が由姫の目の前に差し出された。

由気が微かに目を細める。

「さすがに静止状態から一瞬で詰め寄るのは反則ですってば」

「これくらいは出来るようにならないと」

音姫が呆れたように木の棒を引いた瞬間、背中に掌が当てられた。
目の前にいたはずの由姫の姿がなく、音姫は目を見開いている。

「一本取れた？」

「今のは？　八陣八叉の移動術じゃないと思うけど」

「うん。お兄ちゃんから習った」

周はかなりの量の武術を習っている。だから、それらを総合的に合わせた複合技なども作り出せる。ただし、それが周自身が出来るかは別として。

今の移動術は音姫の知る限りどの武術にも存在しないものだからそう感じたのだ。

音姫は由姫の才能を理解している。剣の才能を音姫自身が持っているなら、由姫は拳の才能。しかも、あらゆる武術に対応出来る能力を持っている。

「お姉ちゃん。そろそろあの技を練習していい？」

「いいけど、本当に使うの？　あの技は由姫ちゃんとは相性が悪いよ？　確かに、リコちゃんとは相性はいいけど」

「アルトさんと戦うために私は立ち止まっていられないから。それに、お兄ちゃんには見せていない八陣八叉の技は一杯あるんだよ」

「そうなの？」

音姫はあまり八陣八叉について詳しくない。そもそも、白百合流の剣技自体がどんな相手にも対処が可能な部分が多いからでもある。だけど、周が知らないものがあるとは思えなかった。

由姫が笑みを浮かべる。

「例えば」

腰を捻りナックルを身に付けた拳を握りしめ、勢いよく振り切った。その瞬間、威圧感を伴う衝撃波が前方２０ｍほどを駆け抜けた。八陣八叉流にある気合いの力を拳にまとめて飛ばす拳砲とは違う。そんな優しいものじゃない。

「狐砲。近距離射撃用の里宮本家の技。他にも」

由姫が動く。それに対して音姫も動いた。

由姫の隙に合わせて木の棒を振る。でも、それより早く由姫の拳が木の棒を弾いていた。そのまま掌が音姫の腹部に押し付けられる。

「里宮本家八陣八叉流迎撃術『絶衝』。ここから狐砲を放つこともできるから」

「へぇ～。里宮本家になると少しタイプが変わるんだ」

「うん。複数の打撃を組み合わせて相手を崩すものが多くなるのかな？　お兄ちゃんと本気で戦ってみたいけど」

「うん。それもあるかな。弟くん、まだ何かを隠しているみたいだし」

「隠している？」

音姫は頷いた。頷いて木の棒を指先で回す。

「弟くんのオリジナル剣技あるよね？」

由姫は頷いた。

周のオリジナル剣技は一撃の火力を極めて高くした雷属性の『破魔雷閃』。広範囲に状態異常を持つ水を攻撃として使いながらばらまける水属性の『水牙天翔』。広域まで攻撃範囲が及び隠れている相手にも有効な炎属性の『炎舞氷壁』。

その全てが第一特務にいるメンバーすら舌を巻くような威力がある。はっきり言うならオリジナル剣技を作り出す才能は極めて凄まじい。

「破魔雷閃なんか多分、受け止めようとしたら一撃で刈り取られるし、水牙天翔なんてかなり高レベルな防御じゃないと抜いてくる。炎舞氷壁にいたっては受け止めるのは事実上不可能。弟くんのすごいところはそれを実戦でのぶっつけ本番で成功させるところ」

「うん。お兄ちゃんのオリジナルは本当にすごいけど、それがどう

かしたの？」

「由姫ちゃんはまだ気づいていないんだ。弟くんのオリジナル剣技、他の剣技と簡単に組み合わせれることに」

その言葉に由姫は気付いた。確かに、破魔雷閃は白百合流の剣技を流用している。つまり、白百合流の剣技や他の剣技からの連撃で使うことが出来る。それは完全な脅威だ。

「だから、本気の弟くんと戦ってみたい。私は、白百合家最強の剣士として弟くんを、『最強（オールラウンダー）の器用貧乏』と戦いたい」

「だったら」

由姫が右のこぶしを握り締める。そして、右の拳に魔力を集め出した。

「私もお兄ちゃんと戦う。お兄ちゃんやお姉ちゃんが教えてくれたこの技を使って新しいコンボは考えてあるから、それをルーチェ・ディエバイトで使う。それで、お兄ちゃんが私を褒めてくれたら真剣勝負を申し込むから」

最初は我がままだった。

第７６移動隊に入ったのは八陣八叉を愛佳から習ったからだけど、それでも周は本当は由姫を第７６移動隊に入れたくなかったはずだ。今では十分なアタッカーとして機能しているが、もしかしたら死んでいたかもしれない。多分、これからも周は由姫の事を心配するだろう。

由姫が周に助けられたと思うと同じように周も由姫に助けられたのだから。

「私が成長したところをお兄ちゃんにぶつける。勝ったら今度はお姉ちゃん。もう、白百合の搾りかすなんて言わせない」

「由姫ちゃん。うん。もし、弟くんに勝てたら私が戦うよ。全力で。歌姫の力も使って」

二人が頷き合う。そして、お互いに距離を取った。

「よーし。こうなったら本線で優勝できるように完璧にしないと。お姉ちゃん、行くよ」

「いつでもどうぞ」

そして、二人がぶつかり合った。

第二百十二話　白百合姉妹（後書き）

本戦では里宮本家八陣八叉流の大放出でもしようかと。

第二百十三話　本戦前

ルーチェ・ディエバイト本戦会場。それはアメリカの広大な大地の中に作られた特設会場だった。

半径７ｋｍにも及ぶ広大なフィールド。その中に２６人の選手がぶつかり合う。

ルーチェ・ディエバイトの賭けでもあるトトカルチョではアルトが圧倒的な人気の高さを誇っていた。由姫やリコはワーストとブービーを争っている。

どちらも若手であることと、無名であることが問題だろう。

ちなみに、オレや音姉は全額由姫に賭けている。家族でもあるし、何より由姫の実力を知っているから。

そんな由姫はオレの前でカチコチに緊張している。

「大丈夫か？」

「だ、ただ、大丈夫です。多分」

下手をすれば狭間戦役の時よりも緊張しているような気がする。オレは小さく溜息をついて由姫の横に座った。

由姫の手をしっかり握りしめる。

「大丈夫だ。目を瞑って」

由姫がオレの言うように目を瞑る。

「思い出すんだ。自分のしてきたことを」

大事な戦いの前では自分のしてきたことを思い出せばかなり落ち着ける。オレや孝治はそうしてきた。

「鍛錬は苦しかったはずだろ？」

「苦しいなんてものじゃないよ」

由姫が不満そうに言う。

「冬の山に生身で登らされるし、狼の群れと戦うし、戦闘訓練じゃ師匠が手加減無しで向かってくるし」

オレなら裸足で逃げている。逃げても確実に捕まるだろうけど。

「冬の津軽海峡を泳がされたと思えば体を暖めるとか言って里宮本家技を全て避ける訓練が始まるし、筋トレとか言われていきなり一万回やらされるし、筋肉でガチガチにならないように努力したんだよ」

最後のは何の努力だ。

「というか、それを考えたらルーチェ・ディエバイトはまだ楽なように思えるんだが」

「それは兄さんだけです」

多分、由姫以外全員、あっ、愛佳さんも含めた二人以外全員がルーチェ・ディエバイトの方が楽だと言うだろう。

そんな特訓してたら確かに狭間戦役で戦えるな。

「テレビ局が来てるんだよ。まさかの日本の放送局大手。まさかの全国放送だよ。ケーブルテレビじゃなかったの？」

「すまん。それはオレの責任だ」

確か、ほんの数日前にとある放送局大手から取材があり、音姉や孝治と一緒に取材を受けたのだ。

その時にオレがこぼしたルーチェ・ディエバイトという言葉に放送局がくらいつき、まさかの放送決定となった。

『ＧＦ』の方もスポンサーをギリギリまで探していたからちょうど両者の思惑が一致したらしい。

地味にケーブルテレビの方もグルになったとか。

「まあ、いいです。でも、ルーチェ・ディエバイトをよく許可出来ましたね。世論というか人権団体がうるさそうなんですけど」

「それなら大丈夫。義母さんから『自称人権団体は黙らせたから思う存分戦いなさい』って伝言をもらった」

「お母さんは何者？」

「オレに聞くな」

それは伝言を聞いたオレが一番思っている。人権団体を黙らせるって何をしたか本気でわからない。

もしかしたら殴り込みか？

「やっほー、周ちゃん」

義母さんについて考えていた最中、オレの名前が呼ばれた。この声はあいつか。

「敵陣視察か？」

「あたしはそういうつもりじゃないよ。ただ、亜沙の嫉妬がピークに達したから」

振り返ると頬を膨らませた亜沙の姿がある。オレが立ち上がろうとした瞬間、隣から由姫が消えた。

そして、いつの間にか亜沙の後ろで亜沙の背中を優しく押している。

「兄さんの隣に座ってください」

『いいの？』

亜沙が不思議そうな顔をして由姫にスケッチブックを見せる。すると、由姫は頷いてリコを見た。

リコは笑みを浮かべている。由姫も笑みを浮かべている。

亜沙がオレの隣に座り手を繋いでくるが、オレ達の視線は二人に向いていた。

「今のが答え？」

「わかりました？」

二人は笑っている。意味がわからないが、多分、由姫はリコに喧嘩を売られたと言った。多分、どうやってリコを倒すか自分なりに表したものだろう。

オレのアドバイスを考慮して。

「まさか、君が本当に覚悟を決めるとはね。これは少し失敗だったかな」

「兄さんは言ってましたよ。リコさんは私に自分の得意なものを捨てて兄さんと同じような戦い方をさせようとしているって。だから、私は考えました」

最初に由姫はオレにリコを倒した時のことを聞いてきた。オレはそれを素直に教えたのだが、その戦い方を訓練しようとした由姫に言った言葉だ。

リコの最大の特徴は緩急の差が極めて高い近接戦闘。亜沙ですら翻弄されるくらい差が激しい。

オレには通用しないけど。

「私は自分の力を使います。里宮本家八陣八叉流の継承者として」

その瞬間、リコの顔色が変わった。それを見たオレと亜沙は笑みを浮かべてしまう。

多分、リコは今まで普通の八陣八叉流を習っているものだと思っていたのだろう。だが、実際は里宮本家八陣八叉流。普通ではない。

「白百合家の人として、海道周と白百合音姫の妹として、あなたに勝ちます」

「あちゃー、完全に予想外。亜沙も周ちゃんもグルになって隠しているんだから。本当にわからなくなったな。でも、それくらいがいい」

リコの顔に笑みが浮かぶ。今まで以上の笑み。それを見た由姫は笑みを消して真っ直ぐリコを見つめた。

無言の会話が続く。

オレは小さく息を吐いて立ち上がった。

「トイレに行く」

『わかった。ここは見ておくから』

亜沙の文字に頷いてオレはトイレに向かって歩き出した。そして、門を曲がり、

「緊張感出てきたな」

目の前に現れた二人にオレは話しかけた。

どちらも男で青年という感じだ。片方はイケメンという文字がぴったりと当てはまる人物でもう片方は好青年と言えばいいだろう。金髪で青い瞳であるところ以外にも身体特徴まで顔の造り以外が似ているから遠目だと見分けはつかない。

ただ、服装だけは個性的だ。イケメンの方は何故かアロハシャツ。ちなみに年中アロハシャツ。好青年の方は上から下までピンクだ。

端からみれば頭のおかしい人にしか見えない。

アルト・シュヴッサーとエリオット・フィルムだ。

「やあやあ、まさか君の秘蔵っ子があそこまで可愛いとは思わなかったよ。エリオット、ここは告白する場面だよね？」

「お前、アホやろ。音姫の妹は周の恋人や。付け入る隙はない」

エリオットは大阪が大好きで日本語は何故か関西弁で話す。だから、時々通じにくい時があるとか。

アルトの方はいつも通りだ。

「周、僕にあの子を譲ってくれないか？」

「死ね」

とりあえず、こいつの扱いはこんなものでいい。

「それよりも、数日前に音界のフュリアス交流があったらしいな。どうやった？」

エリオットが興味津々に尋ねてくる。まあ、フュリアスに関しては隠すこともないからいいか。

「順調だった。エクスカリバーＶＳアストラルソティスの戦いは録画してあるからルーチェ・ディエバイトが終わったら見るか」

「見る！　いや、見させてください！　お願いします！」

「でた。エリオットの得意技で日本の得意芸、ジャンピング土下座」

「アルトって日本好きなくせに間違った知識が多いよな」

時にはすごく迷惑になる。

オレは小さく溜息をついて二人を見た。いや、見ようとしたけど土下座したエリオットが視界に映らない。

まあ、いいや。

「ルーチェ・ディエバイト、オレの大切な奴だからって手加減するなよ？」

「可愛いから手加減したいな」

「アルトは黙っとけ。周、俺らだって本気や。だから、本気で行く。周には悪いけどコテンパンにするから」

その言葉にオレは笑みを返した。

「オレ達の結晶を、甘く見るなよ」

第二百十三話　本戦前（後書き）

次からルーチェ・ディエバイト本戦始まります。
後、アルトとエリオットの姿は手抜きで表現したわけではありません。その話はまだ別の話で語ります。

第二百十四話　開幕（前書き）

ルーチェ・ディエバイトが始まります。

第二百十四話　開幕

『ついにやって参りました。『ＧＦ』の武術大会であるルーチェ・ディエバイト。その本戦、言うならば決勝です。遂に決勝の日となりました。解説はカーツ・バリアットと特務隊長善知鳥慧海でお送りします。慧海さん、ついにやって来ましたね』

『そうだな。今年は注目の若手が多い。トトカルチョ一位のアルト・シュヴッサー。唯一の地方部隊から出たリコ・エンターク。入隊から出場までの期間が史上最速の白百合由姫。メンバーの大半は正規部隊だからか、それぞれの熟練度も極めて高い』

『ほう。つまり、期待できますね。慧海さんが目をつけている選手は一体誰でしょうか？』

『やはり大本命のアルト・シュヴッサー。お気に入りはやはり第７６移動隊所属の白百合由姫だな』

『おっと、まさかの白百合由姫選手を押してきたー！　皆さん、トトカルチョはすでに締め切っています。すでに締め切っています。理由を聞いてもよろしいでしょうか？』

『白百合家に生まれながら剣の才能に恵まれず、常に姉の影にいたが、八陣八叉流を習いだし第７６移動隊に入り、第７６移動隊が関わった狭間戦役において大きな戦果も挙げている。入隊から半年あまりで極めて成長した人物だからかな』

『ほうほう。新人が化けたということですね。それにしても、白百合家でありながら八陣八叉流を習うとはかなりの挑戦ではなかった

のではないでしょうか？』

『おそらくな。白百合は剣の一族。優秀すぎる姉に苦労していたとも聞く。まだ戦ったことはないが、第７６移動隊隊長の話では近接戦闘ではかなりいい順位に行くのではないかと言われたな』

『それは期待できますね。しかし、近接戦闘で言えばガハナット選手がいますよ。戦えばどうなるのでしょうか。おっと、それぞれの選手の詳しい説明があるようです。説明役のユーリさーん』

『ＧＦ』駐在所にあるテレビの前にオレ達の姿があった。

隣には優月とアルネウラ。そばには七葉と和樹、俊輔に委員長の姿がある。孝治達は見回りに出ているが、どうせ見回り先で見ているだろう。

「ルーチェ・ディエバイトか。懐かしいな」

『そうだね。本当に懐かしいね』

アルネウラも懐かしいようにその時のことを思い浮かべている。あの時は本気で死に物狂いだった。

ディアボルガやセイバー・ルカとはぐれて負けかけたし。

「あれ？　悠兄ってルーチェ・ディエバイトに出てたの？」

「なな、それは問題発言なような気がするけど」

確かに七葉にはルーチェ・ディエバイトに出たことを言ったはずだ。

「二年前のルーチェ・ディエバイトにな。まあ、優勝したけど」

あっ、七葉の顔が驚いたまま固まっている。和樹達は本気でオレを疑っている目だった。

まあ、理由はわかるけど。

『まあ、あればディアさんとルカっちによる無双劇場だったけどね』

「ルールには違反していないだろ？」

精霊召喚師としての力を最大限まで使った結果だ。何の卑怯なこともしていない。まあ、年齢が年齢だけにいろいろ言われたけど。

ルーチェ・ディエバイトに出た時は本気で緊張してアルネウラを呼び出すまでに何回も失敗したほどだ。

多分、由姫の奴も緊張しているだろうな。

「ルーチェ・ディエバイト優勝か。賞金はいくらだったんだ？」

俊輔の目がキラリと光ったような気がした。多分、額を知っているな。

オレは小さく溜息をついた。

「あんまり高くないし、全額家に入れた。ルーチェ・ディエバイトは賞金を稼ぐ場所じゃなくて実力を示す場所だ」

「ふむ、そういうものか」

ルーチェ・ディエバイトは確かに賞金が出るが、確かな実力があっても優勝することは難しい。

第一、オレが優勝出来たのもかなりの運要素が強い。

「さて、どこまで大活躍するかな」

オレは期待で胸を膨らませてテレビに視線を移した。

「アル・アジフさん、そろそろ始まるよ」

僕はテレビを見ながらアル・アジフさんに言った。テレビの画面にはルーチェ・ディエバイトの映像が映っている。

今は各選手の紹介みたいだ。だから、そろそろ始まるだろう。

「わかっておる。少し待っておれ」

アル・アジフさんは何かを作っているらしく顔すら出さない。

「確か由姫さんだったっけ。ルーチェ・ディエバイトに出るのは」

僕の横で体育祭を食い入りながら見ている鈴が画面を指差しながら言った。画面にはちょうど由姫さんの姿があり色々解説されている。

あまり能力はわかっていないらしく、疑似パラメーターはほとんどが?で埋まっている。

「戦ったことはないけど、遠目で見た限りかなりの力があるよね。ほら、フュリアスを蹴り飛ばすとか」

リリーナが僕の膝の上に座りながら言う。鈴と何かの取り決めをしたらしいけど、少しテレビが見にくい。

でも、確かに考えてみるとあった。確かに由姫さんはフュリアスを蹴り飛ばしていた。はっきり言うなら信じられない光景だけど。

「悠人、本当ですか?」

その声に僕達は同時に振り向いていた。そこにいたのは音界の歌姫であるメリルとアストラルソティスの修復のために帰ったはずのルーイの姿だった。

というか、どうしてここにいるの?

「間に合ったようじゃな」

「間に合ったって、アル・アジフさん、どういうこと?」

「ルーチェ・ディエバイトを見てもらおうと思ってな。ルーチェ・ディエバイトならこの世界のトップクラスの実力がわかるであろう」

まあ、それは確かにそうだ。ルーチェ・ディエバイトに出るのは『GF』の正規部隊に所属するような実力。戦闘能力はかなり高い。

メリルは僕の隣に座った。

「メリルは帰ったんじゃなかったの？」

「はい、帰りましたよ。でも、ちょうどエクスカリバーの技術を提供してもらおうと交渉に戻ってきました。交換条件でアストラルソティスの技術と交換になりますが」

つまり、一度帰ったまた来たからここにいるのか。それにしても、どうしてこんなところで？

メリルならルーチェ・ディエバイト会場で見れるはずなのに。

「悠人、本当にフュリアスを蹴り飛ばしたのですか？」

「う、うん。ルーイの方が詳しいと思うけど」

「ああ。確かに蹴り飛ばしていたな。僕も悠人も最初見た時は信じられなかった」

むしろ、話して信じられる人がいるのか不思議に思ってしまうほどだ。でも、最初に見た時は本当に吹き飛んでいた。

「もしかして、ここの人間は生身でフュリアスを倒せます？」

「どうかな。リリーナは？」

「リリーナじゃ無理かな。でも、ルーチェ・ディエバイト本戦参加者は全員倒せると思うよ。アル・アジフさんもじゃないかな？」

「戦ったことはないが、負ける気はせぬ」

というか、アル・アジフさんはある意味フュリアスの天敵なんですけど。

「そんなにすごいのですね」

「それでも一部だと思うよ。フュリアスが強力な兵器ってことは変わらないし、使い方によっては戦局を大きく変えられる」

でも、この世にはたった一人で戦争の劣勢を優勢に変えた人物がいる。その人物がいればフュリアスは文字通り全滅しそうだ。

「そろそろ始まるみたい。メリルさんもちゃんと見ていてね。多分、フュリアスじゃ勝負にならない人がいると思うから」

鈴の言葉に僕は賛成だった。

『さあ、開始時間が近づいて参りました。すでに一分を切っています。選手の皆さん、準備はいいですか？　観客の皆さん、応援の準備はいいですか？　テレビの前の皆さん、停電の予定はありませんか？　カウントに入ります。５』

たくさんの人の声が重なる。それをアルトは手に持つ槍を握りしめながら聞いていた。

『4』

さらに大きくなる。エリオットは砲撃槍を構えた。

『3』

リコが手のひらで双剣を回す。そして、柄を握りしめる。

『2』

由姫は大きく深呼吸をして身構えた。

『1』

誰もが力を溜める。

『0！』

その一秒後、会場の約半分が吹き飛んだ。

ルーチェ・ディエバイトの開始だ。

第二百十四話　開幕（後書き）

次から何話かに渡ってルーチェ・ディエバイトが続きます。ルーチェ・ディエバイトが終われば一章の終わりは近い予定です。

第二百十五話　始まりの場所（前書き）

予定と違う内容になったけどまあいいや。

第二百十五話　始まりの場所

始まった瞬間、由姫は重力砲を速攻で放っていた。別に攻撃するために放ったわけじゃない。向かってきた砲撃を相殺するために放ったのだ。

周囲が、フィールドが爆風によって土煙が舞う。こうなれば視界はゼロに等しい。見るのではなく感じることが重要になる。

由姫は目を瞑った。そして、周囲の気配を探る。

「見つけた」

地面を蹴る。一番近くにいるターゲットに向かって。

オレは土煙の中走り出した由姫を見ていた。一応、オレの立ち位置は由姫のセコンドだ。試合中一回だけヒントを選手に与えることが出来る。

でも、オレはヒントを与えるつもりはなかった。由姫の力ならたった一人でどうにか出来るはずだ。

『マスターはシスコンですね』

「黙れ」

オレは話しかけてきたレヴァンティンに即答で答えを返した。この場に他の人はいないが、いつカメラの目が向くかわからない。

オレは近くにあるモニターで全体図を確認する。

現在の選手総数は２５。エリオットの開始早々の一撃によって一人やられたらしい。まあ、エリオットの砲撃は中村や楓のようなトップクラスの威力を持つ。

やはり、本戦参加者はただ者じゃない。

「いつか、この場に立てたらな」

『マスターなら可能です。今のマスターは半年ほどの間でかなり強くなりました』

「強くなったのはわかる。でも、それは実力じゃない。人として強くなった気がするんだ」

狭間市でいろいろな人と出会い由姫や亜沙以外にも守りたい人が出来た。助けたい人が出来た。

そして、たくさんの友達が出来た。

普通の人生を捨てたはずのオレが歩み出した普通の道。それは、オレを、みんなを、確かに強くしている。

「来年は、オレが出ようかな」

「すっげ」

和樹が開始早々絶句していた。当たり前だ。フィールドの半分が一瞬で吹き飛んだからだ。

多分、エリオットさんの仕業だろうな。

「白百合さんは大丈夫かな？」

「由姫なら大丈夫なはずだぜ。重力砲を撃ったのが見えた」

砲撃に対しては防御するよりも砲撃で相殺した方がいい。ただし、エリオットのような溜め時間がノータイムの高火力射撃に対しては対抗しにくい。

でも、由姫はそれをした。重力砲のノータイムなんて前代未聞だ。

「相変わらず、すげえな」

オレは小さく呟いた。周と由姫の二人がこの狭間市に来てから一番成長したように思える。確かに、オレや孝治、みんなも強くなった。

だけど、周と由姫の二人の成長は著しい。

由姫は戦闘能力という面で成長した。周は戦うというより人として成長したように思える。

「また、突き放されたかな」

「そんなことはないと思う」

優月がオレの手を優しく包んでくる。

「悠聖も強くなったよ。私はここに来てからそんなにだけど、悠聖は強くなってる。何というかな、覚悟を決めた？」

「そりゃな」

オレはアルネウラを恋人にした。優月は何故か愛人という立場になっている。精霊と付き合うのは世間体から考えてデメリットは多いだろう。でも、オレは覚悟を決めた。

二人を絶対に幸せにすると。

「オレだって考えているんだ。アルネウラや優月の二人と幸せになるにはどうすればいいかってな。今のままじゃダメだ。力も心もまだ弱い。強くなりたい。今は心の底からそう思える」

今なら周の気持ちがわかる。周は大切な人を、守りたい全ての人を守るために血を吐くような訓練をした。それは生半可な覚悟じゃ絶対に出来ないこと。

それを小学生でありながら周は実行した。

孝治や音姫さんのような才能や、オレや光みたいな特殊な力も無い、ただ器用貧乏だけが取り柄だったのに。

「周に離されてばっかりじゃ性に合わない。オレは周を見返してやりたい。あいつが安心してオレ達と共に戦えるように。そうなったら、今度はもっと強くならないとな」

『ヤバい。悠聖に惚れ直した』

アルネウラを見ると、確かにアルネウラは顔を真っ赤にして恥ずかしそうに顔を逸らしていた。

オレはアルネウラの頭を撫でる。

「狭間市に来たことがオレ達にとってプラスになった。オレは自信を持って言えるさ」

土煙がフィールドを覆っている。だけど、それぞれの位置を表す光点は絶え間なく動いていた。その数２５。

「今のは」

開始早々の砲撃を見たメリルは完全に絶句していた。ルーイも驚いているようだがメリルよりかは少ない。

ルーイは狭間戦役の最中にリュリエル・カグラの砲撃を見ているはずだ。

「相変わらず、人界の開始早々の砲撃は派手だよね」

「魔界にはないの？」

「うん。あまりないかな。鈴が思っているほど魔界に砲撃系の人はいないし。あー、エレノアとかはまだ可能かな」

「それは砲撃ではなく熱線じゃ。魔界は力、天界は魔力、人界は火力と呼ばれているくらいじゃからな。開始早々の砲撃は人界の特権じゃ」

アル・アジフさんはそう言うけど、本当の実力者が放つ砲撃は本当に洒落にならない。開始早々起きた砲撃がいい例だ。

下手をすればそれ一発で戦闘が終わる。

「でも、砲撃力ならエクスカリバーＦＢＤシステム使用時も負けてないよ」

「ＦＢＤシステム？　悠人、初めて聞くが？」

ルーイは不思議そうに首を傾げていた。まあ、戦っている最中には使わなかったしね。

「エクスカリバーの出力を最大まで上げた状態での高火力砲をつけて放つタイプかな。足を止めるからアストラルソティス戦じゃ使えなかったし」

「納得だ。様々な装備があってエクスカリバーは面白そうだな」

「エクスカリバーは最高の機体だよ」

僕専用に改造された完全な専用機。全ての能力を最大限まで扱える設定になっている。

それは、本当に全てが僕のために作られたもの。

「嬉しいの」

アル・アジフさんがポツリと呟いた。

「そなたがそこまで強くなったとは、我も最初は想像しておらんかった」

「そうかな？」

僕は首を傾げた。そんなに強くなったようには思えない。

「本当は、我は悠人に戦って欲しくはなかったのじゃがな」

「うん。僕も最初は戦いたくなかったよ」

僕は自分の手を見つめる。たくさんの命を奪ったその手を。

「でもね、僕は守りたいと思える人が出来た。リリーナや鈴を守りたいと思えた。僕はフュリアスに乗ることしか才能がないよ。でもね、狭間市でいろいろな人と出会って、周さんと出会って、僕は周さんが羨ましかった。明確な意志を持とうとしていることに」

僕はただフュリアスの適性が高いだけだった。ただ、それだけが理

由でフュリアスのパイロットになった。

でも、周さんを見た瞬間、僕の中で何かが芽生えた気がした。

「多分、僕が強くなったのは周さんと出会い、リリーナや鈴と知り合えたからだと思う。もし、それがなかったら、僕はルーイに勝てなかっただろうな」

「私だってそうだよ。悠人と出会えて、魔王の娘として恐れられていた私を普通の女の子として見てくれた。だから、私はフュリアスに乗ろうと思えたと思う。自分の心に向き合えたから」

リリーナの顔は真っ赤だ。真っ赤でも伝えたいことはちゃんと伝えていた。

鈴がクスッと笑う。

「私も。悠人に会えて、ただ命令だけを受ける私は嫌だと思えたから。悠人がいたから、私は戦えた」

そう思えば僕達は狭間市にいたことが良かったかもしれない。アル・アジフはクスッと鈴と同じように笑った。

「由姫と同じじゃな。ルーチェ・ディエバイトに出ている由姫は最初はそれほど強くはなかった。でも、狭間市で動くことで今ではトップクラスの実力じゃ」

土煙が晴れた画面の中で由姫さんが出くわした相手に速攻で一撃を叩き込んで気絶させていた。観客がどよめく。

もちろん、僕達もだ。

「狭間市が我らの始まりだったかもしれぬな」

由姫は確かな手応えを感じていた。

通じる。

愛佳から教わり、周や音姫によって一段上に昇華されたこの力が。

最初は、由姫は周に勝てなかった。でも、だんだん訓練している内にどんどん強くなれた。

由姫は拳を握りしめる。

「私は、第７６移動隊に入って良かった」

本当にそう思える。狭間市に行けて良かった。そう思える。だから、

「私の成長した姿を見せる」

そう言いながら由姫は茂みを抜けた。

ルーチェ・ディエバイト本戦の会場には様々な障害物や地形がある。

由姫がいたのはちょうど茂みの近くだった。

抜けた先にいた気配に由姫は視線を向けて固まる。そこにいたのは、

「アルトさん？」

「手加減はしないよ」

槍と半透明の盾を持つアルトだった。

第二百十五話　始まりの場所（後書き）

最後に戦うはずだったアルトと出会ってしまった由姫。まさかの展開です。

第二百十六話　鋼鉄騎士（前書き）

由姫ＶＳアルトのガチバトルです

第二百十六話　鋼鉄騎士

由姫は拳を握りしめ、地面を蹴った。そして、そのままアルトの後ろに回り込む。

だが、由姫の目の前には薄い膜が展開されていた。

振り上げた拳を下ろして後ろに下がる。

アルトの能力を由姫は周から聞いている。

『鋼鉄処女（アブソリュート）』と呼ばれる極めて強力な全体防御らしい。その殻を破ることは極めて難しく、鎧通しのような攻撃すら通らないと聞いている。

最大の弱点は『鋼鉄処女（アブソリュート）』展開中は攻撃が出来ないこと。防御しか出来ない。

でも、その防御は『天空の羽衣』に匹敵する。

「やはり早いね」

アルトが半透明の盾を構えながら槍を握りしめる。由姫は腰を落とした。

「展開速度が思ったよりも早い。でも、あれなら」

「由姫ちゃん。僕は由姫ちゃんと戦うことを楽しみにしていたんだ」

アルトが自分の手の中で槍を回した。そして、由姫の視界からアルトが動く。

由姫はすかさず絶衝で勢いよく槍を弾いた。しかし、目の前にいつの間にか半透明の盾が迫っていた。

腕をクロスして半透明の盾を受け止めようとしたが、そのまま半透明の盾に吹き飛ばされた。

吹き飛ばされ、何とか体勢を立て直した由姫の目の前に槍が迫っている。由姫はギリギリでその槍を避け、カウンターの一撃を半透明の盾に向かって放っていた。

八陣流突破術『絶砲』

見た目はただ殴っているだけだが、殴った瞬間に拳に溜めた力を爆発させる技。由姫がこれを放ったのは盾を弾くためじゃない。アルトを盾ごと吹き飛ばすため。

由姫の思惑通りにアルトの体が吹き飛ぶ。ダメージは直接与えてはいないが、由姫の思惑通りに進んだ。

「へぇ、ダメージが通らないなら盾ごと吹き飛ばすか。さすが八陣流突破術『絶砲』だね」

技を知られているということは八陣八叉流について深く研究しているということだ。里宮本家八陣八叉流は隙を見て使わないと。

「僕の『鋼鉄処女（アブソリュート）』ごと殴り飛ばす。うん、結婚してくれ」

「はぁ？」

あまりの言葉に由姫は間抜けな声を出していた。でも、こればかりは仕方ない。ルーチェ・ディエバイトの最中にまさか告白してくる人がいるとは。

周囲も静まり返っている。

「君の美しさに最初は惚れたよ。でもね、君のその力強さに僕はさらに心底惚れた。僕と結婚してくれ」

「里宮本家八陣八叉流突破術」

由姫は小さく呟いた。そして、地面を全力で蹴る。

「『天破』！」

そのままアルトに向かって両手を突き出しながら掌底を叩き込んでいた。アルトはすかさず『鋼鉄処女（アブソリュート）』の盾で受け止めようとする。だけど、アルトの体が浮かび上がり、『鋼鉄処女（アブソリュート）』ごと吹き飛んだ。

里宮本家八陣八叉流突破術『天破』は絶砲の上位互換技と言っていい。ただ、タイミング自体がかなりシビアなので里宮本家でしか伝えられていない。

アルトの体が木々を薙ぎ倒す。

「これなら」

由姫の体から気を抜いた瞬間、アルトは槍を投げた。気を抜いて隙

が出来た由姫に槍が迫る。由姫はそれに気づくのが遅れ、槍の一撃が由姫を捉えた。

一瞬にして気絶しそうなくらいのダメージが襲いかかる。だけど、由姫はこらえて踏ん張った。

戦場なら死んでいた。槍が捉えたのは由姫のお腹。戦場なら貫かれていただろう。今のは完全な由姫の落ち度。

由姫は後ろに下がった。でも、足が震えて倒れそうになる。

「僕と戦う武道家はみんな同じ戦いになるんだ。最初は『鋼鉄処女（アブソリュート）』の上から圧倒していたけど、気を抜いた瞬間の一撃で倒れるか、ダメージを負うか」

つまり、今の由姫のような状況。

「『鋼鉄処女（アブソリュート）』は絶対だよ。君には貫けない」

由姫の足が一歩後ろに下がる。体が勝手に恐怖を覚えていた。今までのタイプとは違う新しいタイプ。

どうして周がアルトと戦った方がいいと言ったのがわかった。

『鋼鉄処女（アブソリュート）』は『天空の羽衣』と同じ、近接戦闘において天敵となる。

「君はここで負ける。安心しなよ。僕は女の子には優しいから」

「負けない。負けたくない」

由姫は拳を握りしめる。一応、対アルト用の技を考えてきたが、『鋼鉄処女（アブソリュート）』が絶対ならどうしようもない。

でも、由姫の中では負けたくないという気持ちが膨れていた。多分、周なら絶対に諦めないから。自分の出せる力を全て使って最後まで戦う。それが周だ。

「僕としては君みたいな可愛い子を傷つけたくないからギブアップしてくれることを願うけど」

「そんな要求は糞食らえですよ」

拳を握りしめる。大丈夫、まだ戦える。足に力を込める。大丈夫、まだ戦える。

「里宮本家八陣八叉流継承者」

その言葉にアルトは驚かない。でも、体が強張るのがわかった。

こういう公の場で名乗るのは初めて。だけど、今はそれでいい。

「あなたの『鋼鉄処女（アブソリュート）』が絶対というなら」

拳を握りしめる。左のナックルが応援してくれている、そんな気がした。

「私はその絶対を打ち破るだけ」

「正気かい？　僕の『鋼鉄処女（アブソリュート）』を破った人物は数少ない。武道家

の中では一人もいない。それをどうやって」

風が吹いた。アルトにはそう感じた瞬間、背中に手のひらが押し付けられる感覚と共に由姫が目の前から消え去っていた。

「狐砲！」

『鋼鉄処女（アブソリュート）』の内部からエネルギーが爆発した。

第二百十七話　愛する人の言葉

アルトの体が勢いよく吹き飛んだ。それは今までとは違う。『鋼鉄処女（アブソリュート）』の弱点の一つを由姫は完全についていた。

『鋼鉄処女（アブソリュート）』内部の衝撃は『鋼鉄処女（アブソリュート）』で受け止めることは出来ない。

『天空の羽衣』の場合は展開していない時、ゼロ距離でなければ防御することが出来る。でも、『鋼鉄処女（アブソリュート）』はその範囲がある。

「絶対の防御なんてこの世界には存在しません。もし存在するなら、それは神の技です。『鋼鉄処女（アブソリュート）』は絶対じゃない」

「君が初めてだよ。武道家の中で直接、僕にダメージを与えたのは。やはり、可愛い女の子だからかな」

アルトがまるでダメージがなかったかのように立ち上がった。そして、半透明の盾を構える。

「でも、『鋼鉄処女（アブソリュート）』は絶対だよ」

由姫が地面を蹴ろうとした瞬間、いつの間にかアルトの周囲に半透明の壁がたくさん出来上がっているのに気づいた。

こんな技は聞いたことがない。

「公の場で初御披露目になるのかな。『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』。『鋼鉄処女（アブソリュート）』の派生技だよ」

由姫の額に汗が流れるのがわかった。『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』一枚一枚が『鋼鉄処女（アブソリュート）』と同じに近い防御力を持っている。しかも、『鋼鉄処女（アブソリュート）』とは違い、アルトはその中にいない。

アルトが槍を由姫に向けた。『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』がいくつか間にあるのに。

「これには面白い能力があるんだよ。例えばね」

槍の穂が割れた。由姫の視界に映ったのは砲口。

回避は間に合わない。反応するにはあまりにも遅すぎる。

だから、由姫は左の拳を握りしめた。

砲口から放たれたエネルギーが由姫に向かって飛び、由姫はそれを殴り飛ばした。

「うおっ、すごいや。ますます惚れたよ」

「『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』は厄介ですね」

由姫は『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』の位置を確認する。そして、地面を蹴った。『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』の間を縫うように高速で移動する。

そして、『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』の群れを抜けた。アルトが槍を突き、その穂先が由姫の頬を掠める。

由姫はそのまま勢いよく拳を放った。普段は使わない魔力を込めて。

里宮本家八陣八叉流破壊拳『天破絶命』

由姫の知る里宮本家八陣八叉流で最大威力の技。だが天破絶命は半透明の膜によって受け止められた。

「誰が『鋼鉄処女（アブソリュート）』と『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』を同時に使えないと言ったかな？」

由姫の胸に絶望が影を差した。

『おっと、まさかの新しい技です。えっと、名前は『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』。『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』です』

狭間中学校の職員室にあるテレビ。そのテレビの前にいるたくさんの先生、生徒がいる中、里宮愛佳は唇を噛み締めていた。

はっきり言うなら想定外。『鋼鉄処女（アブソリュート）』の弱点を上手くついた時、愛佳の顔には笑みが浮かんでいた。だが、『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』が出た瞬間、顔は険しくなっている。

アルトが放った砲撃を由姫は弾き飛ばし、由姫は『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』の間を縫うように駆け出す。

「それは駄目ですよ」

愛佳は小さく呟いた。でも、由姫にその声は届かない。

勢いを載せ、八陣八叉流にしては珍しい、気ではなく魔力を載せた一撃である天破絶命を放つのを見ながら祈っていた。攻撃が通るように。

だが、無常にもその攻撃は『鋼鉄処女（アブソリュート）』によって受け止められていた。

『『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』と『鋼鉄処女（アブソリュート）』の同時展開だと!?』

画面の中の慧海が叫んでいた。叫びたい気分は愛佳も同じだった。

『慧海さん、どうかしましたか？』

『いや、『鋼鉄処女（アブソリュート）』の弱点が多面同時攻撃なんだが、『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』によってそれが不可能になるんだ。しかも、『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』はアルトの攻撃を通す。ほぼ無敵に違い絶対防御の布陣だ』

愛佳は両手を組み由姫に祈った。

「後ろに下がらず、前に出てください」

その言葉は由姫には届かない。

由姫は大きく後ろに下がろうとした。だけど、背中に『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』がぶつかる。

「ごめんね」

その言葉と共にアルトが勢いよく槍を突くが、由姫はそれをギリギリで避けて『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』の間を縫うように走り出す。

その背中に向かってアルトが砲撃を放つ。それを由姫は避けることが出来ず肩に直撃し、その場に倒れた。

勝てない。

その気持ちが由姫の中に渦巻いている。勝ち目がない。勝つ方法が見つからない。

気持ちが渦巻いている。でも、やることは一つだけだった。

早く距離を取らないと。

『前に進め！』

その瞬間、周の言葉がフィールドに響き渡った。由姫は立ち上がり、走り出そうとした足を止める。

『自分の信じる道を真っ直ぐ進め！　結果は勝手についてくる！』

もしかしたら、愛佳師匠もこの状況を見ているかもしれない。由姫はそう感じた。多分、師匠なら同じことを言うと。

『お前の拳は何のために身につけた！』

周が使った一回だけのヒントを与える権利。周はそれを由姫の背中を押すために使った。もしかしたら、周は最初から使うつもりがなかったかもしれない。

『自分から逃げるな！』

「うん」

由姫は頷いていた。頷いて、そして、アルトの方を振り返る。

「絶対防御なんて関係ない。私の拳はお兄ちゃんの隣にいるためのもの。師匠から習った拳は相手の防御を崩すもの。『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』とか『鋼鉄処女（アブソリュート）』なんて関係ない。私は」

由姫が腰を落とす。そして、小さく息を吸い込んだ。

「里宮本家八陣八叉流継承者白百合由姫。行きます」

由姫は後ろに下げていた足を前に向けて出した。理論上絶対防御の相手に対する突撃。それは普通の人からみれば無謀であるが、周や愛佳はこの時に別の言葉を送っていた。

前に進み、希望を掴み取れ。

第二百十八話　反撃（前書き）

現在こっちがノリに乗っているのでルーチェ・ディエバイトが終わるまでこちらを優先します。

第二百十八話　反撃

由姫は勢いよく地面を蹴った。そして、全力の蹴りを『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』に叩き込む。

『鋼鉄処女（アブソリュート）』と同程度の防御力があると由姫は考えていた。でも、『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』にはとある利点がある。

由姫の蹴りが『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』の半透明な壁を捉え、『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』自体を蹴り飛ばした。

「なっ」

そのことにアルトは驚き反応が遅れる。何故なら、『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』が他の『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』を貫いて向かって来るからだ。

『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』はアルトの攻撃を通す。それを知った由姫はあることを考えた。

なら、どうしてアルトが砲撃しかしないのか。もしかしたら、砲撃しかしないのではなく、砲撃しか出来ないのではないかと思ったから。

アルトがギリギリで『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』を避ける。それを見た由姫は満足そうに笑った。

「やっぱり、『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』はアルトさんの魔力を通す能力があるんですね」

「バレた？」

微かに笑みを浮かべるアルトだが、その体には一分の隙もない。

「もう、私に『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』は効きません」

「みたいだね。それにしても、里宮本家の八陣八叉流は誰もがそのような蹴りを放つのかな？」

「そんなわけないじゃないですか。八陣八叉流の蹴りは魔力よりも気、気合いの要素が強いです。でも、私の蹴りは重力をまといますから」

由姫の周囲に重力の歪みが出来上がる。それは不自然なまでに土を少し巻き上げていた。

由姫のレアスキルである『神への重力』。それを最大限までに使った蹴りはフュリアスすらも吹き飛ばす。

「ますます惚れたよ。だから、君を倒す」

アルトが槍を向けた瞬間、由姫は瞬間的な加速でアルトの背後に回り込んでいた。

里宮本家八陣八叉流の構え方の一つである隼の型。それを由姫なりにアレンジしたものだ。周や音姫の力を借りて。

一瞬で消えるという移動は移動者自体も周囲の風景を知覚出来ない。だから、近接格闘での背後への回り込みはまずないだろう。だけど、由姫はそれをいとも簡単にしている。

アルトは慌てて『鋼鉄処女（アブソリュート）』を発動した。由姫の手のひらが『鋼鉄処女（アブソリュート）』に押し付けられる。

ギリギリ間に合ったとアルトが息をついた瞬間、由姫の手のひらが離れた。『鋼鉄処女（アブソリュート）』にへばりつく『神への重力』を残して。

「里宮本家八陣八叉流崩落『綺羅朱雀』」

一歩後ろに下がり、加速しながらの拳の一撃。ちょっとしたステップの間に組み込めるこれは威力が極めて高い。だが、『鋼鉄処女（アブソリュート）』の前では無意味だ。

それは由姫もわかっている。わかっているからこそ由姫はその一撃を右の拳で『神への重力』によって作り出した重力球に叩きつけた。

パリンとガラスが割れるような音と共に『鋼鉄処女（アブソリュート）』が砕け散る。

由姫は左の拳を握りしめた。

「里宮本家八陣八叉流滅牙『飛龍一閃』！」

全ての威力を載せた拳はアルトの体に突き刺さり、アルトを大きく吹き飛ばした。

「よっし」

オレは年甲斐もなく叫んでいた。まあ、七葉や和樹も言っているしいいとするか。

テレビの中継は完全に由姫ＶＳアルトだった。戦いが激しいのど、最初にヒントを与えられら選手だからかそれしか映っていない。

ルーチェ・ディエバイトの推移は基本的に自分に有利な地形を見つけることから始まる。今回は由姫とアルトが偶然のエンカウントだったからか各地で戦いが起きているみたいだ。

「白百合さんってすごいんだ。確か、アルト選手の『鋼鉄処女（アブソリュート）』って絶対防御の一種じゃなかった？」

「１対１において絶対的な防御力を持つという意味ならな。絶対防御だけなら周が上だ」

『天空の羽衣』は使用制限があるが、絶対防御の中ではその意味を表すものだ。まあ、大きな弱点があるけど。それを除けば桁違いの能力を持つ。

ただ、『鋼鉄処女（アブソリュート）』の最大の弱点が、『鋼鉄処女（アブソリュート）』の許容防御力を超えた瞬間に砕け散るということだ。ディアボルガとセイバー・ルカの同時攻撃でなんとか砕けるくらいだけど。

「じゃ、このまま由姫ちゃんが優勢だな」

和樹が呑気に言う。だが、オレは顔を曇らせていた。

「『鋼鉄処女（アブソリュート）』一つで勝ち抜けるほど、ルーチェ・ディエバイトは

甘くねえよ」

その言葉に全員が振り向いてきた。

「確かに、アルトは『鋼鉄処女（アブソリュート）』と『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』を出してきた。だけど、『鋼鉄処女（アブソリュート）』一つで本戦まで出られるわけがない。あいつの異名『鋼鉄騎士』。マテリアルナイトと呼ばず普通に鋼鉄騎士と呼ばれる理由はここからだ」

「さすがだね」

由姫の前でアルトがゆっくり立ち上がった。それを見た由姫が思わず距離を取ってしまう。

『飛龍一閃』は完全に成功していた。手応えも受け流された感覚は無かった。重力球と『綺羅朱雀』で『鋼鉄処女（アブソリュート）』を打ち砕いた瞬間にアルトは完全に驚愕していたはずだった。

思考が早まっている。ありえない光景を見て由姫の思考がまとまらない。

「本当にさすがだよ。僕も君が容赦なく急所を狙ってきたなら今頃リタイアしていたと思う。うん、さすがだよ。だからね、教えてあげよう」

アルトが槍を構える。それと同時にアルトの体を半透明な膜が包み

込んだ。まるで、鎧のように。

「『鋼鉄騎士』」

由姫は小さく呟く。それはアルトの異名。文字通りのものだったから。

「じゃ、行くよ」

速度は今までの中で一番速い。でも、由姫からしたらまだ遅い。

由姫はすかさず槍を弾くために迎撃術である絶衝を放っていた。今までの力を考えて確実に弾ける。そう思っていた。

由姫の腕が弾かれる。穂先をギリギリで避けて由姫はすかさず後ろに下がった。

「『鋼鉄処女(アブソリュート)』と『鋼鉄騎士(マテリアルナイト)』で倒せれば良かったけど、どうやらそうも行かない。だったら、『狂乱騎士(バーサーカー)』の力を使えばいい」

「名前、決まっていたんですね。兄さんは圧倒的な防御力と圧倒的な突撃力から『鋼鉄騎士』の名をもらったと聞きましたが」

「それも事実だよ。『鋼鉄処女(アブソリュート)』と『狂乱騎士(バーサーカー)』は今まで一つだったからね。『狂乱騎士(バーサーカー)』自体が『鋼鉄処女(アブソリュート)』の派生型だ。まあ、これに関しては名前を除いて知るものはたくさんいるよ。言うなら、『鋼鉄騎士』の名前こそ、『狂乱騎士(バーサーカー)』というべきものかな」

多分、アルトの異名は三つの能力から考え出したものだろう。

『狂乱騎士（バーサーカー）』をまとうアルトは半透明な膜が覆う槍を構えた。

「さっきまでは君の有利だったかもしれない」

由姫は拳を握りしめた。『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』を蹴り飛ばして攻撃したり、『神への重力』を使った攻撃で『鋼鉄処女（アブソリュート）』を突破した。だが、『狂乱騎士（バーサーカー）』に隙は見当たらない。

迎撃術で一番優秀な絶衝ですら弾かれる攻撃。由姫は後ろに下がりそうになる足をこらえる。そして、小さく息を吸い込んだ。

「そうですね。でも、私は負けない」

その足を踏み出す。前に向かって。もう逃げないと決めたから。

「私は兄さんの背中を守る人になりたいから」

「そうか。なら、これからは反撃と行こう。僕のターンだ」

第二百十八話　反撃（後書き）

由姫ＶＳアルトもいよいよ大詰めです。後二回ほど続きますが。

第二百十九話　狂乱騎士（前書き）

世の中には絶対はないということです。

第二百十九話　狂乱騎士

由姫が勢いよく前に踏み出した。ちょんとしたステップの合間に入った里宮本家八陣八叉流崩落『綺羅朱雀』は避けることが極めて難しい。

ただ、綺羅朱雀自体は威力は高いものの、里宮本家八陣八叉流滅牙『飛龍一閃』のような大火力の攻撃には及ばない。

放った拳が重力球を捉える。『鋼鉄処女（アブソリュート）』を破壊した一撃は弾かれた。『狂乱騎士（バーサーカー）』によって。

由姫がすかさず後ろに下がるが、『狂乱騎士（バーサーカー）』によって半透明な膜が覆われた槍が頬をかする。

もし、これが予選だったなら由姫はいくらでも勝つ方法があっただろう。完全な隙に背中に手のひらを押し付けた場合だけ予選では相手の敗退が決まる。

だが、本戦ではそれは通じない。

由姫が着地した瞬間、膝がガクッと落ちるのがわかった。倒れそうになるのを必死にこらえる。

「愛佳師匠と比べれば」

由姫の体力を蝕んでいるのは序盤に食らった一撃と『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』や『鋼鉄処女（アブソリュート）』と言った堅固な盾を砕くために戦い、今は弱点が見当たらない『狂乱騎士（バーサーカー）』と向かい合っているからだった。

普通なら諦めるかもしれない。でも、由姫の頭の中には周の言葉が響いていた。

八陣八叉を習ったのはお兄ちゃんのそばにいるため。今は、お兄ちゃんの背中を守りたい。

最初はがむしゃらだった。でも、諦めることはしなかった。

「保つね」

アルトが笑みを浮かべるが、息はかなり切れていた。『狂乱騎士（バーサーカー）』によるアルトの攻撃は過激というのがお似合いだろう。

全力で避けに入った由姫を何回もかすっている。縦横無尽に空間をかける槍。由姫はどうしてアルトが同年代で三指に入るか再認識させられていた。

この槍捌きだけでも血の滲むような努力が見える。アルトも周達と同じなのだとわかる。

アルトが動く。対する由姫は前に出た。通用しないとしても、本当の意味で絶対防御なんて存在しない。何かの弱点があるはずだから。

里宮本家八陣八叉流滅牙『飛龍一閃』。

拳は『狂乱騎士（バーサーカー）』の膜に弾かれた。すかさず蹴りを放つ。ただの蹴りじゃない。全身の力を使った最大の威力を持つ蹴り。

里宮本家八陣八叉流破壊『双月・翔破』。

だが、それさえも弾かれた。迫り来る槍をアルトを支点に回り込むことで避けた。そして、左足に力を込め、右足で地面を踏みしめる。

里宮本家八陣八叉流破壊『双月・月下』。

それはまるで轟音だった。由姫の体が、腕が微かに動いたと思った瞬間、由姫の左の拳は『狂乱騎士（バーサーカー）』の膜に触れていた。

踏みしめた大地に大きく右足は食い込み、音を超えたかのような速度によって放出された衝撃波は周囲の木々を吹き飛ばしている。それでも、そんな攻撃でも、由姫の拳は弾かれていた。

由姫は目を見開きながら両腕を交差してアルトの振るわれた槍を受け止める。

腕に激しい衝撃を覚えて由姫の体は後ろに吹き飛んだ。

もし、今のが戦場なら腕を落としていた。

「双月・月下もダメですか」

双月・月下は由姫にとっては最後の望みだった。里宮本家八陣八叉流の中で最大のモーションと最大の破壊力を持った対物専用の技。対人に使えば一撃で死ぬであろう威力を『狂乱騎士（バーサーカー）』は受け止めていた。

「君の力もなかなかだよ。惚れただけはある。でも、僕の『狂乱騎士（バーサーカー）』は何も通さない。君の拳はもう通じないよ」

アルトが槍を構える。由姫も身構えた。はっきり言うならもう限界だ。

これ以上の戦いは由姫の心が折れる。

その瞬間、何かの気配を感じた。魔力を纏ってこっちに向かって来ている。リコではない。リコならもっと隠れてやる。それに、一直線に向かって来るのはおかしい。

アルトも異変に気づいたようだ。

「ガハナットさんか！」

その言葉にアルトは本戦出場者の解説をする周の言葉を思い出していた。

『いいか、由姫。ガハナットさんが突進する直線上には絶対に立つな。魔力を纏ったイビルチャージはオレでも受けきれない』

その言葉を思い出すと同時に茂みから長い髪を振り乱して一人の狂戦士が表れた。それを見た瞬間、由姫の心臓が早鐘を打つ。

長髪であり、それを振り乱してしるのもだが、引き締まった体は別にいい。問題は顔だ。どう考えてもどこかの組にいるようないかつい顔。それが汗で顔をギタギタにさせて笑みを浮かべながら向かって来ている。しかも、

「ぐるばぁぁぁあっ！」

とか叫びながら。

普通は絶対に引く。由姫もあまりのことに体を固まらせていた。

「こんな時に」

アルトが『狂乱騎士（バーサーカー）』を纏ったままガハナットの直線上から離れた。ガハナットは直接由姫を狙う。

もし、武術を身につけた人がパニックになり、誰かが攻撃する満々で突っ込んできたならどうなるか。

答えは簡単だ。

「いやぁぁっ」

悲鳴を上げた由姫の左の拳がガハナットの顔にめり込み、殴り飛ばした。アルトは呆然と由姫を見ている。

「ガハナットさんにカウンターだと」

由姫は全くの無意識だったのだが、アルトからすれば完全にありえない光景だったらしい。

由姫は気を取り直すために後ろに下がった瞬間、視界に入った。

砲撃槍を構えたエリオットの姿が。穂先は由姫達に向いている。

由姫はすかさず重力場を作り出した。その瞬間、周囲にエネルギーの塊が叩きつけられた。

「由姫！」

オレは思わず叫んでいた。でも、もうアドバイスすることは出来ない。

オレは小さく舌打ちをした。

『マスター、落ち着いてください。重力場を作り出した以上、ダメージは由姫さんには通りません』

「わかっている」

オレは自分が苛立っているのがよくわかっている。

『鋼鉄処女（アブソリュート）』は知っていた。だが、『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』と『狂乱騎士（バーサーカー）』は初めて見るものだった。

慧海が驚いたように『狂乱騎士（バーサーカー）』について推測を立てていたが、由姫の最大級の一撃を受け止めた限り、防御力は極めて高い。

由姫とアルトを狙うエリオットの攻撃は続いている。多分、エリオットも普通の攻撃じゃ二人は倒せないと思っているのだろう。

残り六人になっている以上、温存はしないつもりなのだろう。

「『狂乱騎士（バーサーカー）』。完全に想定外だ。『天空の羽衣』より性能が高い

ぞ」

『天空の羽衣』は絶対防御だが、耐久には限界があるし、致命的な弱点ともある。だけど、『狂乱騎士（バーサーカー）』にはそれらが見当たらない。

どうやって抜けというんだ。

『鋼鉄処女（アブソリュート）』なら方法はあるが、『天空の羽衣』を超える『狂乱騎士（バーサーカー）』に弱点はない。

光の嵐が止んだ。そこにいたのは重力場を作り出したまま荒い息をしている由姫と『鋼鉄処女（アブソリュート）』を展開しているアルトの姿。

「そうか」

それはその瞬間、理解した。そして、小さく頷く。

「同じ、だったか」

由姫は荒い息を整えるように深く深呼吸をする。アルトも展開していた『鋼鉄処女（アブソリュート）』を解いて槍を構えた。

「君は大分消耗したようだね。次で決めるよ」

『狂乱騎士（バーサーカー）』を纏うアルトの姿を見た由姫は笑みを浮かべた。アルトが怪訝そうな顔をする。

「今頃、兄さんは祈っていますね」

「君が出来るだけ怪我なく戻ってくることを？」

アルトの言葉に由姫は首を横に振ることで答えた。

「気づけよ、って」

アルトの目つきが微かに鋭くなった。

「アルトさんは兄さんのレアスキル、『天空の羽衣』を知っていますか？」

「知っているよ。周とは仲がいいからね。魔術以外は通さない鉄壁の羽衣。まるで、『狂乱騎士（バーサーカー）』の、劣化したもののようだ」

その言葉に由姫は満足そうに頷いていた。

「そうです。『天空の羽衣』は魔術以外は絶対防御。『狂乱騎士（バーサーカー）』と似ていませんか？」

「何がだい？」

アルトが深く腰を落とす。まるで、早々に由姫を倒そうとするように。

「では、もう一つ。兄さんはガハナットさんの対策をこう教えてくれました。魔力を纏ったイビルチャージはオレでも受けきれない、と。確かに、『天空の羽衣』は魔力を通します。なら」

アルトの顔が強張るのを由姫は理解した。理解して最後の言葉を言う。

「どうして『狂乱騎士（バーサーカー）』でイビルチャージを受けなかったのですか？」

アルトは地面を蹴り、由姫に向かって槍を放った。だが、由姫はそれを軽々と避ける。

「おかしいと思いました。改めて考えると明らかにおかしいのですが、あの時はパニックに近かったので気にも止めませんでした。でも」

アルトが横に振った半透明の膜を纏う槍を由姫は左の拳で無造作に弾いた。弾かれたではなく弾いた。

「エリオットさんの魔術砲撃に対し、アルトさんは『鋼鉄処女（アブソリュート）』を使用しました。もし、アルトさんの言うように『狂乱騎士（バーサーカー）』が『天空の羽衣』を魔術も防げるまでに強化したものなら『狂乱騎士（バーサーカー）』で受け止めた方が安全です。『鋼鉄処女（アブソリュート）』は上限がありますから」

「もしかしたら僕が見せたブラフかもしれないよ」

その言葉に由姫は笑みを浮かべた。

「今から試せばいいだけです。白百合由姫、行きます」

今日三度目の名乗り。でも、前の二回とは違う八陣八叉を出さない。名乗り。それは、白百合としての名乗りでもあった。

「白百合音姫の妹としての意地を見せます！」

第二百十九話　狂乱騎士（後書き）

里宮本家八陣八叉流ではなく、ただの白百合由姫と名乗ったのは、アルトを八陣八叉ではなく白百合として倒すためです。

第二百二十話　白百合の異才

由姫は駆け出した。アルトは戸惑う。

『狂乱騎士（バーサーカー）』の弱点を知ったとしても、由姫の力では『狂乱騎士（バーサーカー）』を突破することは出来ない。

そう思っていた。だが、由姫の左の拳が『狂乱騎士（バーサーカー）』を突き破る。

威力はかなり減衰していたが、アルトは後ろに下がった。

「そんな。まだ、白百合なのにそんな魔力があるのか？」

白百合家は基本的に魔力が極端に低い。その代わりに剣技に関しては異常なまでに高い才能を持つ。

歴代最強と言われる音姫が魔術を全く使えないのが例だ。

由姫はその言葉に笑みを浮かべた。

「私は白百合にとっての絞りカスだから。だって、剣技の才能がありませんから」

アルトはこの時、自分の迂闊さを呪った。由姫がどうして八陣八叉流を習ったのか調べたはずだった。剣技は使えず白百合家の中では魔力が極めて高いから。あくまで、魔術がほとんど使えない白百合の中で。

だから、由姫の魔力量を侮っていた。剣技の才能があるから魔力量が少ないとすれば？　剣技ではなく拳技に才能があり、剣技の才能

がないとするなら？

剣技と拳技は違う。何より、白百合には白百合流という剣技がある。拳技ではない。

「完全な偶然も考えられるけど、そういう理由か」

里宮本家八陣八叉流では一生アルトは倒せない。だから、由姫はあえて里宮本家八陣八叉流と付けなかった。

あえて、白百合の絞りカスと言われた白百合由姫単体で名乗った。白百合家にとっては剣技が出来ない絞りカスでも、その絞りカスにあったものは拳技の才能と魔術の力。

「これは兄さんから教えてもらった力！」

由姫は地面を蹴る。アルトはそれに対して冷静に槍を振った。だが、その槍は由姫の左の拳によって払われた。

アルトが後ろに下がる。だが、下がったアルトの視界に、由姫の目の前に光を放つ球体が入った。魔力を凝縮させたもの。一部では攻撃魔術の基礎とも言われている砲撃魔術の準備。

アルトはすかさず『狂乱騎士（バーサーカー）』を『鋼鉄処女（アブソリュート）』に変更する。

だが、それは由姫の思惑通りだと気づいたのが『鋼鉄処女（アブソリュート）』を展開した後だった。

魔力を凝縮させたものを置き去りにしたまま、『鋼鉄処女（アブソリュート）』に重力球が押し付けられた。

『鋼鉄処女（アブソリュート）』を『狂乱騎士（バーサーカー）』に変える隙はない。

由姫の拳が重力球にぶつけられ、ゼロ距離からの重力砲が『鋼鉄処女（アブソリュート）』を砕く。その瞬間、アルトは『狂乱騎士（バーサーカー）』を纏っていた。

そして、自分の失態に気づく。

目の前に輝きを持つ魔力を凝縮させたものがあったからだ。避けられる距離じゃない。何より、今のアルトは『狂乱騎士（バーサーカー）』を纏っている。

アルトはとっさに『狂乱騎士（バーサーカー）』を纏うように防御魔術を展開した。『狂乱騎士（バーサーカー）』との同時展開はかなりの魔力を消費するが、腹に背は変えられない。

由姫は踏み出した。大地を踏みしめ音速を超えたかのような一撃が凝縮させた魔力を捉え、砲撃魔術が放たれた。

双月・月下と共に。

神速の速さ、砲撃魔術よりも速い速度で由姫のナックルは防御魔術を一瞬で砕いていた。そこに砲撃魔術が到来する。

避けることは出来ない。アルトはとっさに盾を構えるが、『狂乱騎士（バーサーカー）』を纏った体は砲撃魔術によって吹き飛ばされた。

由姫は小さく息を吐く。

すでにルーチェ・ディエバイトは残り四人。あれでアルトを倒せた

とは思っていないが、ここで倒しておかないといけない。

「さすがだよ。本当にさすがだよ。僕は君のような戦士と初めてあった。周のようにあらゆるテクニックで抜こうとしてくるのでもなく、孝治のように力押しで抜けてくるわけじゃない。その場で連撃を構築し追い詰めてくる」

アルトは笑っていた。満身創痍の体でアルトは笑っていた。

「さあ、決めよう。僕も限界だ。『狂乱騎士（バーサーカー）』の最大技を使わさせてもらうよ」

由姫は拳を握りしめた。アルトの槍に半透明の膜が覆っているからだ。尋常じゃない量が。それと同時にアルトの周囲で魔力が凝縮される。

多分、これがアルトの全開だろう。

由姫は身構えた。そして、周から習ったもう一つの魔術を思い出す。

『近接戦闘はな、どれだけ魔力や気合いを込めた攻撃を出来るかによって勝負が決まる。もし、お前に魔力が残っているならこれを使え』

そう言われて身につけたとある魔術。いや、近接格闘用の魔術。八陣八叉流では難しい部分があるためなかなか使う機会はなかった。

だけど、今なら使える。

由姫は一歩を踏み出した。アルトも一歩を踏み出す。

突き出される槍。それに向かって由姫は前に踏み出した。

槍は振り回すことが出来る。もし、横に飛んでも振り回されてやられる可能性がある。『狂乱騎士（バーサーカー）』を纏った槍はかなり威力が高いから。

だから、由姫は前に踏み出した。迫り来る槍から由姫は微かに顔を逸らす。それをかすりながら避けても前から凝縮された魔力が迫っていた。

避けた槍も由姫を殴ろうと動いている。だから、由姫は左手で槍を受け止め、右手を突き出した。

現れるのは四枚の防御魔術。重力操作によってその四枚が四角錘の形を取った。

とある時に周に使われた受け流しの布陣。重力操作によって形を制御することで作り上げた防御魔術は迫って来ていた凝縮された魔力を受け流した。

必中に近い攻撃を止められたアルトは盾で由姫を殴りつけようとする。判断としては正しいだろう。だが、相手を間違えた。

由姫が右手で盾を受け止めたと思った瞬間、由姫の体が前に出た。槍と盾がぶつかり合い、由姫がちょうど間に入り込む。

そして、由姫の左手がアルトのお腹に当てられた。もう、避けられる距離じゃない。アルトは完全に自分の失敗を悟った瞬間、由姫の左手が爆発する。性格には魔力が爆発したのだ。

天空属性の魔術『エナジーバースト』。

その爆発の威力は極めて高い。純粋魔力の爆発なのだから。

アルトの体が吹き飛んだ。そして、由姫が小さく息を吐く。

「私を甘く見た。それがアルトさんの敗因です」

第二百二十話　白百合の異才（後書き）

ルーチェ・ディエバイトはまだ続きます。

第二百二十一話　翻弄（前書き）

ルーチェ・ディエバイトはそろそろ大詰めです。

第二百二十一話　翻弄

「よっし」

オレはアルトが倒れ、動かなくなった瞬間を見届け、拳を握りしめた。

まさか、由姫がここまで考えて戦ったのは意外だった。最初は力業でオレを倒そうとしたが、今なら柔軟な連続攻撃が出来るだろう。

オレは純粋に由姫の成長が嬉しかった。

『鋼鉄処女（アブソリュート）』だけなら簡単に砕けたかもしれない。でも、『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』や『狂乱騎士（バーサーカー）』など初めて見るようなことをして由姫は大いに困惑したはずだ。

この勝利は由姫を強くする。

「後は、残っているのが」

オレは残っているメンバーを確認する。残っているのは由姫、エリオット、リコの三人。

ルーチェ・ディエバイトは基本的に予選の平均タイムより早く終わる。だが、今回はかなり短い方だった。多分、エリオットやリコが倒したんだろうな。

由姫は木にもたれかかって少しの間休んでいる。今頃トトカルチョをしていたメンバーは罵詈雑言の嵐になっているだろう。

優勝候補のアルトはやられ、比較的人気の高かったガハナットも由姫にやられた。残ったのは最下位争いをしている二人と人気二位のエリオットだけ。

「多分、リコが狙うのは」

オレは小さく呟いた。

『な、な、な』

アルトが倒れた瞬間、オレ達は飛び上がっていた。まさか、隠していた技を使用したアルトを由姫が倒すとは思わなかったからだ。

解説の人も固まっている。

だが、喜んでいるオレ達の中、和樹だけの反応が少し違った。泣いている。どうしてだ？

「俺のトトカルチョ、ぐぼっ」

和樹のわき腹に七葉の肘がめり込む。まあ、こいつはそれくらいのことをしたわけだし、自業自得か。

『ななな、なーんと、トトカルチョ人気一位にして優勝候補と言われたアルト選手が白百合選手に負けたー！　慧海さん、今のは』

『まあ、アルトが判断を間違えたな。『鋼鉄処女(アブソリュート)』は許容攻撃力を超えない限り破壊されない絶対防御。『狂乱騎士(バーサーカー)』は魔術以外は通さない物理系の絶対防御。それの使いこなし方は見事だった。実際に、『狂乱騎士(バーサーカー)』を出してから途中まではアルトが有利だったからな』

それはオレにもわかる。周ならさらにわかっているだろうけど。

『アルトが判断を間違えたのは二つ。一つ目が白百合が白百合家だと判断したから』

『えっと、どういうことでしょうか？』

白百合家を知らない人から見れば誰だってそうだろう。多分、今頃テレビの前では同じことになっているはずだ。

『白百合家は魔術の才能が全くない。代わりに剣術の才能があるんだ。だから、アルトは白百合が魔術をほとんど使えないとしたのだろう。そして、失敗の二つ目が最後の瞬間だ』

慧海の言葉と共にハイライトとして最後の瞬間が映された。

『『鋼鉄処女(アブソリュート)』ではなく『狂乱騎士(バーサーカー)』を展開した。判断としては悪くない。だが、この時は『狂乱騎士(バーサーカー)』を展開すべきではなく、後ろに下がるべきだった。白百合のセコンドからのヒントを聞いていたらな』

『確か、前に進め、でしたね』

『ああ。拳というのはリーチが短い。短いからこそ前に進む勇気がいる。その勇気が時には勝負を決める。今回もな。あの言葉の前後で白百合の動きが変わったのに気づいたか？』

『なんとなくですが』

解説の人が頷く。

『白百合が攻撃的になった。そして、自分の力を最大限に使って一直線に進もうとした。『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』の隙間を駆け抜けているのと、『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』を蹴り飛ばすのは全く違うだろ？』

『はい。確かに攻撃的になりました。でも、それが勝負を決めるとは思えないのですが』

『普通はな。でも、白百合は八陣八叉流は『狂乱騎士（バーサーカー）』に通じないとわかったからこそ、不慣れな魔術を使って戦った。普通は出来ないぞ。前に踏み出す勇気が無ければ』

由姫にとって魔術は虎の子の技だっただろう。だから、それを効果的に使える戦法を取った。前に進むことで道を開くことを。

普通なら出来ない。アルトの槍捌きは見事だし、『狂乱騎士（バーサーカー）』では魔術以外は効かない。なのに、八陣八叉流主体の由姫は真っ正面から戦いを挑んだ。

『白百合選手とアルト選手の戦いが激し過ぎて他の選手があまり映っていませんが、ＣＭに入ります』

テレビの画面がルーチェ・ディエバイトからファンシーな動物が出

ているＣＭに変わる。オレは小さく息を吐いた。

「アルトを倒したのは凄まじいが、かなり厳しいな。これじゃ」

「えっ？　白百合さんは勝てないの？」

委員長の言葉にオレは頷いた。オレは正規部隊にいたからこそ、エリオットや目を付けられているリコの実力を知っている。

エリオットは砲撃が得意だが、近接戦闘もかなり強い。リコは近接戦闘では対戦相手のほとんどを翻弄する。

「残った二人、今の体力で勝てるような甘い相手じゃないからな」

『そうだね。精霊で例えるなら、エリオットのことは上の上級精霊。リコの方は中の上級精霊』

「強敵だね」

優月が感想を漏らすが、一番の問題としてその例えが理解出来るのはこの中ではオレくらいだろう。

エリオットやリコは第７６移動隊のメンバーでは表せれない。

「まあ、桁違いに強いってことかな」

オレはとりあえず曖昧にボカすことにした。

体中が悲鳴を上げている。ダメージの蓄積がかなり辛い。今、膝をつけば確実に倒れる。

アルトを倒した由姫は満身創痍だった。満身創痍で木々にもたれかかっている。後少し、ほんの少しでもダメージを食らえば確実に倒れたのは逆だっただろう。

由姫は小さく深呼吸をする。

アルトを倒したことは周も愛佳も喜んでいるはずだと思えた。そして、多分だが、後悔しないように戦えというはずだ。

拳を握りしめる。

右手は動く。大丈夫だ。左手も動く。大丈夫だ。

由姫は力を込めて木々から背中を離した。

小さく息を吸い込み、魔力を体中に循環させる。

集気法と呼ばれるやり方だ。魔力を循環させるイメージによって体中に魔力が行き渡り疲労などが回復する。ただし、戦闘中では完全に気休めだ。だが、由姫にとって気休めで良かった。

まだ戦える。それがわかるから。

「さてと、これ以上休んでいたらお兄ちゃんが心配するだろうな。残り人数は」

由姫が残り人数を確認する。残っているのは三人。いや、今、二人になった。湧き上がる歓声。残ったのは多分、

「案外近くで戦っていたんですね」

やって来た気配に対して由姫は語りかける。気配は由姫の後方で止まっていた。

隙を伺っているわけじゃない。多分、由姫の出方を伺っているのだろう。

「最初に言っておきます。約束を後回しにしてすみません。そして、言います。あなたを倒す。リコさん」

名前を呼ばれたリコが加速する。由姫は振り返りながら気配を頼りに蹴りを放った。だが、蹴りは当たらない。リコがまだその地点に到達していないからだ。

リコが加速する。今度こそと思いつつ由姫は拳を放った。だが、一瞬にして減速したリコが悠々と拳を避ける。避けて一瞬で加速した。

由姫を狙う双剣。普通なら反応が出来ないくらいの隙と速度。だが、由姫は反応した。体が勝手に。

無意識に動いた右手が双剣を弾き、左の手のひらがリコに押し付けられる。

「狐砲！」

由姫は気合いと共に狐砲を放った。威圧感を伴う衝撃波がリコを吹き飛ばす。

「いったー。手加減してよー。君と戦うために君以外の参加者を倒したのに」

リコはふてくされたように言う。それを聞いた由姫は苦笑していた。

「本当ならリコさんを倒した後でアルトさんを倒したかったんですけどね」

「そうだね。でもね」

リコが加速する。緩急を織り交ぜた加速とは桁が違っていた。一瞬の加速と共に一瞬の減速を行ったと思えば最高速で迫る。

由姫は小さく呻いて拳を握りしめた。

迂闊に攻撃をすれば一瞬の減速で隙を狙われるだろう。さっきは体が反応してくれたから良かったものの、ずっとそうなるわけはない。偶然は続かない。

リコが由姫に近づく。由姫は蹴りを放った。その瞬間、リコの体が止まる。まるで、由姫の蹴りを予測していたかのように。

だが、それは由姫にもわかっていた。蹴りを放った足で地面を踏みしめ、前に進みながら右の拳を放つ。だが、そこにリコはいなかった。

リコは由姫の懐に潜り込み、そのまま双剣の柄を勢いよく由姫の鳩

尾に叩き込んだ。

由姫の体がくの字に折れ曲がる。意識が途切れそうになる。視界が真っ白になりかける。このままじゃ、負ける。

「本当は万全の状態で戦いたかったな」

リコのその言葉が由姫の頭に響き渡った。

倒れたくない。

由姫の中で強烈な意志が生まれる。

「お休み」

体が前に倒れそうになる。

倒れたくない。

意識が次第にはっきりになる。それと同時に視界に大地が迫る。

戦いたい。リコさんと、真剣勝負で。そして、

「負けたくない！」

由姫は倒れそうになる体を踏み出した一歩で食い止めた。ちょうど前にはリコがいる。

リコは慌てて後ろに下がった。

「確実に入ったのに」

「確かに、私は万全じゃないし、リコさんに翻弄された」

由姫は身構える。腰を落とし、拳を握りしめる。

「でも、私の背中を押してくれる人がいる。私を見守ってくれる人がいる。私は、私自身のためにも、戦う。満身創痍でも、私は私を貫く」

「似てるね。君も亜沙も周ちゃんも。羨ましいくらいに眩しい。うん、だから、私も全力全開手加減無しで行くよ」

「来てください。私は、負けない！」

ルーチェ・ディエバイトの最後の戦いの幕が切って落とされた。

第二百二十一話　翻弄（後書き）

次は由姫ＶＳリコです。

第二百二十二話　リズム（前書き）

ここに出てくるとある名前は作者の妄想の産物です。

第二百二十二話　リズム

リコの加速と減速。緩急の差が凄まじく初見では翻弄される。それはリコと戦った全員が言うくらいだった。

ただし、オレは除く。オレはリコに負けたことはない。はっきり言うなら緩急をつけてくれてもオレの勘はちゃんと告げてくれるから。

だが、目の前の光景はどうしようもならない。

急加速と急減速を巧みに使い満身創痍の由姫を次第に壁際まで追い詰めている。何回も切らているが由姫は倒れることなくひたすら動いている。ダメージを最小限にまで落とすため。そして、オレは気付いていた。由姫が何かを狙っていることに。

「くっ、先に気づくか倒れるか。確率は半分半分だな」

『おっと、満身創痍の白百合選手にリコ選手は猛攻だ！　巧みな加速と減速を使い分けて白百合選手を追い詰めている！』

テレビの中で由姫はひたすらに体を動かしていた。だが、その動きはいつもより、オレ達が知る中でもかなり遅い方だ。

和樹が振り向いてくる。

「悠聖、大丈夫なのかよ。由姫ちゃん、かなり追いつめられているぜ」

「うん。白百合さんも攻撃に転じていないし」

二人の見たものはそのままだ。でも、オレ達のような戦いを見慣れた人からしたらもう少し別のことが浮かんでくる。

「攻撃に転じていないんじゃない。攻撃していないだけなんだ」

「そうか」

オレの言葉に俊輔が納得したように頷いた。

「確か、攻撃はもっとも体力を消費すると聞く。つまり」

「ああ。由姫はただ単に狙っている。リコの隙が出来るのを」

『白百合の行動は正しい。攻撃はもっとも疲れるものだからな。ただ、リコも攻撃しないわけにはいかにない。体力を回復させれば不利になるからな。だから、リコはひたすら攻撃に移っている。そして、白百合はひたすら回避に回っている』

テレビを見ていればわかるが、由姫の目は全く死んでいない。時々、足をもつれさせながらも由姫は鋭い目つきで動き回っている。対するリコはだんだん疲労の色が見え始めていた。

双剣は極めて難しい攻撃手段だ。ただ、慣れればかなりの威力を発揮するが、両手を動かす性質上、片手剣を使うよりも疲労は数倍高くなる。その分、緩急をつけられるリコにとっては最適な武器だろ

う。緩急を使った連続攻撃に耐えられるのは悠くらいなのだから。

「悠聖、一ついい？」

優月が何かに気づいたように尋ねてきた。

「由姫さんは、何を狙っているの？」

その言葉にオレは驚いていた。隣にいるアルネウラも驚いている。だって、そのことに気づくのはかなり難しいはずだったから。

七葉だって気づいていない。多分、オレも周と理子の戦いを見ていなかったら気づいていないだろうな。

「えっと、どういうことだ？」

「俺に振るな。隙を狙っているわけではないのか？」

さっき言った時は普通に隙を狙っていると言ったからな。でも、優月が気づいたのはそれ以外だ。

「えっとね。由姫さんのステップが何かのクラシックの音楽に似ていて」

「「「「えっ？」」」」

七葉達の声が完全に重なる。そして、テレビを食い入るように見つめた。というか、普通はわからないぞ。オレがわかったのは周からリコの動きの理由を教えてもらっただけだし。

確かに由姫はリコのステップに合わせている。だが、そのステップは優月が大好きなクラシックなのだから。

「あっ、『境界線上のマリアージュ』だ」

どうやら優月の中じゃ完全に音楽が一致したらしい。オレは頷いた。

「そう。リコの動きは曲に合わせたものなんだ。リコの耳に注目してくれ」

全員がリコの耳に注目する。激しい動きの際に耳にかかっていた髪が揺れた瞬間、リコの耳に小さな何かが入っている。

「あれがリコのセコンド、亜紗からのヒント」

「音楽を常に流しているんだ。つか、何でクラシック？」

「まあ、そこは事情があるんだ」

和樹の言葉にオレはそう言った。本当のことは言えない。本当のことは。

リコさんの剣をギリギリで回避する。タイミングはわかってきた。まさか、あの音楽と同じリズムで向かってくるなんて思わなかったけど、今では完全に合わせられる。

「『境界線上のマリアージュ』」

私が小さくつぶやくとリコさんの剣が微かにぶれた。その瞬間に私は前に出る。

剣を弾きステップの中に組み込んだ綺羅朱雀を叩き込もうとする。だけど、綺羅朱雀はリコさんに避けられた。やっぱり、まだリズムを掴み切れていない。

「どうして？」

リコさんが距離を取る。その眼に浮かんでいるのは驚愕。

「兄さんがヴァイオリンでよく弾いているんです。まあ、人前では絶対に弾かないらしく一人で、なんですけどね」

「周ちゃんが？　そっか。執念だったな。周ちゃんもまだヴァイオリンを続けていたなんて」

その言葉に私は少し引っかかった。でも、その考えを振り払い私は身構える。

「あたしの動きを戦闘中に気づけたのは周ちゃんと君だけだよ。誇ってもいい」

リコさんが身構えた。そして、耳につけていた何かを取り外す。多分、音楽をずっと再生する機械なのだろう。ヒント扱いにはなるから亜紗さんが今まで流していたの違いない。

つまり、これからは音楽に頼らない行動になる。

「行くよ」

その言葉と共にリコさんが動いた。その動きは早く一瞬だけ虚をつかれる。

「っく」

ギリギリまで見極めてからの攻撃を弾くための動き。右手で双剣の一本を弾こうとする。だけど、それはリコさんの頬をかするだけで終わった。

迫り来る双剣。普通の反応なら、多分、お兄ちゃんでも反応しきれない距離。だから、私は振った腕に力を使った。

凄まじい勢いで地面に引っ張られるように私の肘がリコさんの側頭部を捉えた。それと同時にわき腹に痛みが走る。

私達は弾かれたように離れ合った。

「今のを、当ててくるんだ。普通は無理なのに」

リコさんが肘で強打した側頭部を押さえている。力任せに与えたものだけど、威力は十分に高い。ただし、その代償は極めて大きかった。

右手に力を込めると右腕に激痛が走った。

腕だけ重力を高めて落下する速度を速めたから。おかげでその反動で右腕が使えなくなった。与えたダメージはかなり高いはずだけど。

「でも、あたしはまだまだ倒れないよ」

リコさんが動く。でも、その動きは確かに遅いが緩急の差はむしろ大きくなっているような気がする。

加速、減速、最高速、減速、停止、加速、加速。

ちょっとした距離でも加速と減速を使いこなして反応出来ない。タイミングが掴めない。

減速、加速、来る。

私の体が勝手に動いていた。ほとんど無意識に放った左腕はリコさんが振った双剣を弾き、そのままリコさんを殴り飛ばした。

「今のは、何？」

私は呆然と呟いた。

「掴んだな」

オレは小さく笑みを浮かべた。モニターには自分の左腕を見つめる由姫の姿がある。多分、どうして反撃出来たか理解出来ていないのだろう。

由姫に教えたあの技はリコのとあるリズムを理解しなければ当たら

ない。理解すれば一撃で倒せるだろう。

「さて、リコ。オレの、オレ達の妹はお前が考えているほど白百合から離れていないぜ」

第二百二十二話　リズム（後書き）

次で由姫ＶＳリコは終わりになります。

第二百二十三話　白百合由姫（前書き）

ルーチェ・ディエバイト、終わります。

第二百二十三話　白百合由姫

白百合由姫は白百合家の絞りカスと言われていた。いや、言われ続けている。

剣技の天才が集まる白百合家において剣技の才が全くない由姫。そんな由姫を両親と姉以外の全員が絞りカスと呼んでいた。

力が欲しかった。絞りカスと呼ばれる誰をも黙らす力が。

その時の由姫はそう思っていた。だから、幼いながらも力をつけようとしていた。そして、由姫は出会った。

世界を拒絶していた当時の周と。

由姫は閉じていた目を開く。倒れそうになる体をギリギリでこらえて両足に力を込めた。

対するリコは近くの木に背中を預けて腹を押さえている。

由姫は思い出す。

そうだった。リコさんの攻撃にカウンターを入れたんだ。タイミングがずれて攻撃は直撃したけど。

意識を刈り取るような一撃。もし、『ＧＦ』のデバイスで無ければ今頃大怪我をしているだろう。それはリコも同じだ。由姫が『ＧＦ』のデバイスで無ければ腸をぶちまけていてもおかしくない。

由姫は目を瞑って息を整える。

由姫が周と出会った時、周は案の定、由姫を拒絶した。だけど、由姫は周を放っておけなかった。その時は理由がわからなかったが、今ならわかる。

由姫自身も世界から拒絶されたいと思っていたから。一人でいれば傷つかないですむと思っていたから。そして、周を守りたいと思ったから。

周が助けられたのと同時に由姫も助けられた。だけど、『ＧＦ』で実績を残し出した周と何もしない由姫では風当たりが大きく違った。

だから、由姫は力を手に入れようとした。でも、それは周囲を黙らすわけじゃない。周の隣にいるために。

多分、その頃には周に恋をしていたのだろう。

視界が揺れる。カウンターを外し、リコさんの攻撃が直撃したからだ。

ふらふらになる足をこらえてリコさんの服を激痛が走る右腕で捉える。リコさんの目は完全に驚愕していた。そして、その顔に左腕を叩き込む。

八陣八叉流なんて関係ない。純粋な殴り。

リコさんが大きく後ろに下がった。私も後ろに下がる。いや、体が後ろに下がり、背中が木に当たる。

私もリコさんもわかっていた。倒れた方が負ける。もう、私達には立ち上がる体力はない。

八陣八叉の門を叩いた由姫を最初に対応してくれたのが愛佳だった。

由姫が八陣八叉を習いたいと言うと由姫は笑って頷いた。そして、一つの疑問を尋ねてきた。

力だけが全てを解決するわけじゃない、と。

それを由姫は知っていた。周はどれかが特化した一芸特化型ではない。『ＧＦ』の子供の中では唯一の平均型と聞いている。そして、それが尋常じゃないくらいにおかしいことを。

平均型は『ＧＦ』で一番多いタイプ。でも、実力者は極端に少ない。一芸特化が求められやすいからだ。それは子供だって同じ。むしろ、子供の平均型は一般兵にも劣るはずなのに、周は第一線で活躍した。力だけが全てじゃない。それは由姫も理解している。周がすごかったのは仲間。

だから、由姫は自信を持って答えた。

一人では戦えないから、と。

多分、愛佳は由姫に考え直して欲しかったのだろう。でも、由姫の答えはみんなで力を合わせれば解決出来ると言ったようなものだった。

一対多が得意という一人相撲に近い八陣八叉流の門を叩いて。

停止からの加速。そして、減速してまた加速した。さらに加速してくる。

由姫はすかさず後ろに下がった。だけど、それに追従するようにリコが追いかける。

地面を踏みしめ腰を落とす。力を入れて足を前に踏み出す。

リコは攻撃を察知して減速した。だが、由姫はそれを予想している。

だから、さらに前に一歩を踏み出した。

リコが慌てて後ろに飛びながら両手を交差する。その間を縫うように由姫の左腕が突き刺さった。

リコが後ろに吹き飛ぶ。だけど、その体は倒れない。何とか体勢を戻して背中から木にぶつかる。

もう、どちらも満身創痍を通り越していた。戦えているのは負けたくないという思い。そして、意地。

由姫は左腕を握りしめる。

もう体力は少ない。体に蓄積したダメージが許容を大幅に超えているからだ。動けているのはおそらく里宮本家八陣八叉流の訓練をやっているからだろう。

由姫が八陣八叉流を習い始めて3ヶ月が過ぎた。その時にはベテランの門下生どころか師範代すらも倒せる時があるまで急激に力を蓄えていた。

そして、習い始めて3ヶ月がたったある日、由姫は愛佳に呼び出された。そして、里宮本家八陣八叉流を習うことが許されたのだ。

由姫は一気に力をつけた。だけど、里宮本家八陣八叉流は技の使い方と体力を鍛え上げることしかしなかった。

八陣八叉流ではやっていた模擬戦も里宮本家八陣八叉流ではほとんどしない。その理由を愛佳に尋ねると、

癖をつけないため、と答えられた。

その時にはわからなかったが、今ならわかる。今、由姫はリコのリズムを完全に捉えていた。

あらゆる武術でもそれをマスターした場合、どうしても戦い方に癖が現れる。それを愛佳は理解していたからこそ、模擬戦をほとんどしなかった。

由姫がいつか出る戦場であらゆる時に対応出来る力をつけるために。もし、里宮本家八陣八叉流特有の癖がついていた場合、由姫はリコに勝てないだろう。それくらいに相性は悪い。

由姫が覚えたのは技だけ。その技の積み重ねが由姫の力だった。

リコの体が加速した瞬間、由姫の体が動いた。右腕は使えないからこそ双剣を避けるように飛び上がり蹴りを放つ。

八陣流『旋風脚』

だが、リコはギリギリでそれを避けて由姫の背後に回り込もうとした。だが、それより早く由姫の着地した体が回転する。

リコの背中に嫌な感覚が走り抜けた。慌てて右の剣で受け流そうとする。だが、その剣を砕き、由姫の左腕が振り切られた。

左腕はリコの右肩をかすり、リコは大きく後ろに下がる。

「やっぱり、見つけられたか」

「攻撃する際に加速を二回行いますよね」

リコが左手の剣を構える。右肩は脱臼したのか全く動かしていなかった。

「あらら。八陣八叉流ならあたしが有利だなと思っていたんだけど」

もし、由姫が普通に八陣八叉流を習っていたなら今頃由姫は倒れているだろう。

「八陣八叉流にある癖。力を入れすぎるあまり緩急の差に極めて弱い、のはずが由姫には通用しないんだもん。あたしにとっては完全に予定外だよ」

「多分、愛佳師匠のおかげです。愛佳師匠に私は技を教えてもらいましたが、戦い方は教えてもらっていませんから」

「本当に？　だったら、戦い方はもしかして」

「兄さんと姉さんからです」

由姫の言葉にリコは微かに目を見開いて、そして、呆れたように溜息をついた。

「はぁ、どうりで。周ちゃんや音姫から習ったなら、相手の戦い方を理解して臨機応変に対応する白百合の戦い方と、相手の弱点をひ

たすらにつく周ちゃんの戦い方が出来るわけだ」

この会話を聞いていた周がニヤリと笑みを浮かべたのは二人には分からない。

リコは片手で剣を握りしめた。

「もう、あたしは限界に近いよ。由姫は？」

「私もです。アルトさんもリコさんも強敵でしたから」

二人が身構える。どちらもボロボロでちゃんと真っ直ぐ立っていない。だけど、二人の目は諦めていなかった。

どっちから走り出したのだろうか。ほとんど同時に二人が走り出す。駆け引きの無い加速。全力を使った一撃を叩きつけようとしている。

由姫は左腕を振り上げ、リコは左手で抜刀のように腰に柄を当てている。そして、由姫は振り下ろした。リコは剣を振り上げた。

お互いの武器が弾かれ合い、

リコの右腕が動く。

これこそ最後の一撃。脱臼したかに見せた右腕を振り抜こうとして、リコの視界にあるものが入った。

由姫の右腕が振られている。

由姫も最後の一撃。振り抜いた左腕は弾かれ、体は安定していない

が、それでも力は込められていた。

速度は同じ。動き出したタイミングも同じ。だから、二人の拳はお互いの鳩尾に突き刺さった。

二人が同時に膝をつく。そして、そのままうつ伏せに倒れた。

『し、し、試合終了！　まさかの、まさかの同時優勝だ！　白百合選手とリコ選手の同時優勝！　ルーチェ・ディエバイト史上初の出来事です』

『見事な戦いだった。今は二人の戦いに拍手をしておこう』

そんな声を聞きながら周は小さく溜息をついていた。ちなみに、周は亜沙と一緒に走っている。

「まさかの同時優勝とはな」

そう言いながらトトカルチョの用紙を握り潰す。同時優勝なんて前例がないからトトカルチョは完全に大荒れだろう。

多分、同時優勝に賭けた奴なんていないから、賭け金がどうなることか分からない。それを思いながら周がまた小さく溜息をつくと、亜沙が何かを取り出していた。

そこにあったのは一枚のトトカルチョ用紙。そこには、

優勝・・・白百合由姫&リコ・エンターク

と書かれてあった。

「まさかの総取り？」

周は顔をひきつらせながら頭が痛くなるのを感じた。

「同時優勝パーティー。お前の金な」

由姫はその言葉に対して満足そうに頷いた。

第二百二十三話　白百合由姫（後書き）

最初は由姫を優勝させるかさせないかを悩んだのですが、結局はこういうことに。所々に昔話が入ったのは由姫の意識が朦朧としているからです。

第二百二十四話　祝勝会

ルーチェ・ディエバイトが終わった。結果は由姫とリコの同時優勝。ルーチェ・ディエバイト史上、初めての出来事らしい。だからか、ルーチェ・ディエバイト公式の賭博であるトトカルチョは大いに荒れた。

該当者がたった一人だったからだ。もちろん、亜沙のことで、賭け金総額が史上最高の２００億ドルに達していたこともあり、本気で荒れた。

どれくらい荒れたかと言うと、暴動が起きたくらいに荒れた。本気で洒落になっていないが事実だ。

まあ、そんなことはオレ達ルーチェ・ディエバイト参加者及びセコンドみたいな面々には今は関係のない話（一人だけ当事者がいるけど）であって、祝勝会を開いていた。

ただし、公式の祝勝会じゃない。オレ達だけのこじんまりとした祝勝会だ。参加者はオレ、由姫、亜沙、リコ、アルト、エリオットの六人だけ。

オレ達六人は録画していたエクスカリバーＶＳアストラルソティスの映像を見ていた。

「おお、すげー、すげー！　さすがメイドインジャパン」

「エクスカリバーはアメリカで作ったし、アストラルソティスはそ

もそもこの世界で作られていない」

目を輝かせているエリオットに対してオレは呆れたように溜息をついた。というか、一番年上なのに一番興奮していないか？

「エリオットは相変わらずだな。あっ、お嬢さん、私がつぎましょう」

「あ、ありがとうございます」

由姫が頬をひきつらせながら紙コップにアルトからジュースを注いでもらう。どうやらまだ由姫を狙っているようだ。

どうやって懲らしめてやろうか。

『一つ気になったけど、周さんから見てエクスカリバーとアストラルソティスはどれくらいの強さ？』

「難しいな。エクスカリバーは下手をすれば一線級の実力。アストラルソティスはそれに少し劣ったくらいか？」

計ったことはないが、戦闘結果を見る限りそれくらいであることは確かなはずだ。

『そんなに強いんだ』

「勘違いするなよ。こいつらがかなり強いだけだ」

オレは映像を指差した。そこにはフレキシブルカノンによる曲線射撃（フレキシブルショット）を避けるエクスカリバーの姿があった。

それを見ているアルトやエリオットの顔は本気で見ものだ。

曲線射撃（フレキシブルショット）を全て避けるのは理論上可能だ。理論上は可能なのだが、それを実行するにはフレキシブルカノン自体の曲線率を計算しなければならず、今回の場合は完全に勘だろう。

「フレキシブルカノンの射撃に関してはマテリアルライザーでも難しいところがあるからな」

『マテリアルライザーの回避力はおかしいから』

亜沙は不満そうに言う。まあ、確かにマテリアルライザーはすごいけど、回避力がすごいというわけじゃない。

駆動系に関しては開発中のフュリアスに取り入れたいとは思うけど。

エクスカリバーがアストラルソティスに突撃し、腕と頭を破壊する。これがエクスカリバーの最強技だ。

最大の加速で研ぎ澄まされた剣は断ち切れぬもののない刃となる。

オレがエクスカリバーを作る時からこれを狙っていた。だから、エクスカリバーの機体には鉄を少し多めに使っている。

「すっげー、ほんますげー。周、俺にエクスカリバーをくれ！」

「無理だ、バカ。エクスカリバーはスペックの高さから生産中止になったものを悠人専用にスペックを高めたやつだ。素人に扱える機体じゃない」

「へぇ〜、エクスカリバーってそんなにスペックが高いんですね。ちょっと戦ってみたいです」

「あたしはやだな。刃が通らないと思うし」

オレは小さく溜息をついた。こいつらは頭の中から戦闘狂かよ。

「周ちゃんも酷いよね。まさか、由姫が八陣八叉の型にはまっていないことを逆手に取って戦い方を覚えさせるなんてね」

オレがそれに気づいたのは狭間戦役で狭間市での鬼との戦い以降だ。里宮本家八陣八叉流の型を取らなければ使えないのを知ったオレは戦場で有利になるために他の戦い方を教えた。

どちらかというと白百合流に近いものだ。ルーチェ・ディエバイトが近くなってからは由姫と音姉の二人で訓練させた。

その結果がこれだ。八陣八叉流にとらわれない白百合流も使いこなす完成系。

「ルーチェ・ディエバイトに出したのは由姫に自信を持って欲しかったからだ。由姫が白百合流も使いこなすことで白百合の名を誇って欲しかったからだ。まあ、移動術だけだけどな」

本来はもう一つ教えていたけど、由姫が効き手である右腕を壊していたのでルーチェ・ディエバイトでは使わなかった。

でも、由姫はオレ達の思いに答えてくれた。

「兄さん、一つ質問なんだけど、第７６移動隊の模擬戦じゃあまり通用しない私の移動術がどうしてルーチェ・ディエバイトでは通用したのですか？」

確かに、過去の模擬戦を見ていても、由姫が勝てたのはほとんど力任せだったなと思い出す。

確かに、由姫のステップはほとんど合わされてやむなく八陣八叉流の型をうろ覚えで使ったこともあったような。

「そりゃ、由姫に教えたのは白百合流だからな。白百合流を使う現役はオレ、音姉くらいだ。慣れてる奴らがルーチェ・ディエバイトに出るわけないだろ」

ルーチェ・ディエバイトに勝てた原因はそれが多い。白百合流は相手の動きを誘う部分があり、対する八陣八叉流は相手の攻撃にカウンターを入れる技術がある。

二つが合わさったら反則に近いのだが、白百合流の距離の取り方には少し欠点があって孝治とかはそれをよくついてくる。

まあ、音姉は剣技が桁違いだからそんな欠点はものともしないけど。

「まあ、俺はリコにやられたけど、まさかアルトも負けるとは思わんかったわ。『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』は蹴り飛ばしていたし」

「そうだね。あれには僕も驚いたよ。まさか、『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』どころか『鋼鉄処女（アブソリュート）』も抜いてくるとはね。さすが周の妹だ」

「どういうことですか？」

アルトの言葉に由姫が不思議そうに首を傾げる。すると、リコがクスクス笑い出した。

アルトは顔を真っ赤にしてリコを睨み付けている。そんなに恥ずかしいことじゃないと思うんだけどな。

「アルトは周ちゃんに負けっぱなしだからね。『鋼鉄処女（アブソリュート）』も最初に抜かれたのは周ちゃんだったし」

「あの時は屈辱だったよ。レアスキルの御披露目で対戦した周に『鋼鉄処女（アブソリュート）』が簡単に割られたからな」

あの時は試したい技があったから使ってみたのだが、どうやらそれが『鋼鉄処女（アブソリュート）』の弱点だったらしく、瞬間で砕けたからな。

あの時はオレも驚いた。

「アルトの場合は『鋼鉄処女（アブソリュート）』に傾倒しすぎているんだよ。『狂乱騎士（バーサーカー）』ももう少し上手く運用すれば良かった。実際に、由姫との勝負はお前が勝てたぞ」

『鋼鉄処女（アブソリュート）』、『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』、『狂乱騎士（バーサーカー）』の使い方次第ではアルトが由姫を圧倒しただろう。由姫も恐れがあったみたいだし。

「私が勝てたのは兄さんのおかげですから。あの時、兄さんからの言葉がなかったらアルトさんにやられてました」

あの時はオレも必死だったからな。あのまま後ろに下がったなら由姫がもう戦えなくなると思った。

それでも良かったけど、一番安心出来るのはそばにいることだから。

「それはそうと話を変えて」

リコが明るく言いながら亜沙の肩を掴んだ。そして、みんなの真ん中に押し出す。

「トトカルチョの単独的中者の亜沙さんでーす。で、一体いくら貰えるのかな？」

そう言えば、リコは孝治と同じでお金を貯めるために『ＧＦ』に入っているって聞いたことがあるな。それだからか？

亜沙はスケッチブックを恐る恐る開いた。

『１３０億』

オレは持っていた紙コップを落とす。それはその場にいた誰をも同じだった。円ではない。レートが桁違いに低いものでもない。

トトカルチョはドルしか受け付けていない。つまり、

「お兄ちゃん。今の円のレートは？」

「素に戻っているぞ。ちょっと待ってろ」

オレはレヴァンティンを取り出して震える手でレートを調べた。今の値段は、

「1ドル＝１０３円９１銭。大体一兆三千億強か？」

「一人で国家を動かせるね」

アルトは冗談を言ったつもりなのだろうが、誰も笑っていない。あまりの額の高さに呆然とするしかない。

一兆三千億の使い道なんてない。寄付をするにもどこに寄付をしたらいいかわからない。

すると、亜沙はスケッチブックをまた開いた。

『私に一つの案があるんだけど』

第二百二十四話　祝勝会（後書き）

ルーチェ・ディエバイトを書いた理由。それは膨大なお金を手に入れるため。
ちなみに事実です。お金の使い道が出るのはもう少し後に。想像しながらお待ちください。ヒントは移動隊の足。

次から夏休み編です。戦闘はなくなる予定です。

第二百二十五話　終業式

終業式。

それは、学生にとっては遊び放題の期間への始まり。宿題をやる時期によっては天国しかないか地獄もあるかになってしまう。

そして、『ＧＦ』の正規部隊所属の学生にとっては、

「夏休み来て欲しくない」

由姫は小さく呟いていた。まあ、その気持ちはわかる。気持ちがわかるからこそ、オレは、

「まあ、訓練だけじゃないからさ。そう気を落とすなって」

「気を落としますよ」

由姫はそう言うと予定表を突き出してきた。学校の予定表に第７６移動隊の予定を書き込んだものだ。

書いている内容のほとんどが訓練やら勉強やら多岐に渡っている。ちなみに、空白の時間は見当たらない。

「兄さんと一緒の夏休みは久しぶりなのに。ルーチェ・ディエバイト同時優勝してから取材はたくさん来るし」

「期待の新人現るってな。まあ、奴らからすればオレや音姉の妹ってこともおいしいかもしれないしな」

「こんなになるんだったらルーチェ・ディエバイト出なければ良かった。あっ、兄さんの予定はどうなっています？　出来ればデートしたいので」

「臆面もなくよく言えるよな」

オレは小さく溜息をつきながらオレの予定表を由姫に渡した。由姫はそれを見て固まる。

「何々？　何見てんだ？」

その予定表を和樹も覗き込んで絶句する。同じように覗き込んだ俊輔も固まっていた。

まあ、普通はそうなるだろうな。固まらない人がいたら年中無休のビジネスマンくらいだ。

だって、そこには空白が一つも無いからだ。つまり、予定が埋まっていて暇な日にちがない。

「海道君、これはさすがにマズいと思うよ。せめて白百合さんとのデートの時間を」

非難の目で見てくる委員長に対し、オレは由姫の予定表と一緒にとある期間を指差した。

「ここのアメリカ出張はオレと由姫、音姉の三人で向かうからな。まあ、本来はオレ一人だったけど、由姫も連れて行った方が身につくと思って。音姉は護衛だ」

「そっか。海道君はまだ本調子じゃなかったね」

「だいぶやれてきているとは思うんだけどな。全力はまだ出せない。最近帰ってきたベリエとアリエの二人に見てもらったけど、まだ完治していないらしい」

あの二人は結界術が得意だが治療術もかなり上手いらしい。というか、魔界での医者の免許を取っている。こっちじゃ使えないけど、今は慧海が掛け合ってくれている。

もし、使えるようになったら在中の医者で登録しておこう。

「完治してないなら無理すんじゃねえぞ。お前が倒れたらどれだけの人が心配すんのかわかってんのか？」

「ああ。あの時は迷惑をかけたからな。もう倒れたくないさ」

ついでに、あの薬も飲みたくないし。

「あれ？　琴美さん？」

由姫の言葉にオレは廊下の方を向いた。そこには周囲の視線を気にしながらクラスメートの一人に話しかけている琴美の姿があった。

琴美と話していたクラスメートがこっちに向かってくる。

「海道、呼ばれてるぜ。琴美様に」

「了解。そうだ。この日」

由姫の予定表でも空白になっている場所をオレは指差した。

「この日だけは予定を入れるなよ」

８月２９日。夏休みは終わりかけで、次の日が狭間市で最後の任務となっている。

それを見た全員が視線を落とした。

「そっか。海道君がいられるのは１ヶ月半だけなんだ。ちょっと寂しいな」

「だな。周達がいたから楽しかったもんだしな。無理だと思うけど」

「悪いが無理だ」

オレはどういう風に尋ねられるか予想出来たので先回りして答えておいた。

「もし、地域部隊だったなら可能だったけど、オレ達は正規部隊だ。新たな足が出来上がる以上、止まっているわけにはいかない」

「だよな。悪い。忘れてくれ」

「でも」

オレはフッと笑った。

「また来ることは出来る。再来年の３月、オレ達が中学校を卒業す

るまでは月一でここに来る予定だ。まあ、オレともう一人くらいだけど」

オレの言葉に和樹達ははっと顔を上げた。

「その時は歓迎してくれよ」

「長かったわね。何の話？」

教室を出たオレを待っていた琴美が嬉しそうな表情で尋ねてくる。多分、どういう会話をしていたかわかっているんだろうな。

オレは少しだけ笑みを浮かべた。

「いろいろとな。で、もうそろそろ終業式だろ？　都の手伝いに行かなくていいのか？」

「そのことなんだけど、周に少し尋ねたいことがあって」

「尋ねたいこと？」

琴美は真剣な表情で頷いた。そして、ポケットから一枚の紙を取り出す。そこに書かれていたのは何かの勧誘の文字だ。

書かれている内容はほんのごくわずか。簡単に言うなら民間警備隊への案内だ。ただ、オレはこんなものを許可した覚えがない。

こういう民間警備隊となると『ＧＦ』の業務とかぶる時があるため、その地域の『ＧＦ』トップの承認が必要だ。ここら一帯はもちろんオレだし、オレ達が来るまでに承認されていても、配る際にはオレの承認を必要とする。

「これがポストに入っていたのよ。都に聞いても同じような内容が色々な人に。これって確か違反よね？」

「主に書類偽造だな。こいうのは犯人が見つけにくいからな。ほら。連絡先は無いし、事務所の住所は完全にでたらめ」

「よくわかったわね」

「駐在所の近くにある畑の住所だからな。これでも第７６移動隊隊長だ。ミスはできるだけ少なくしないと」

オレはそう言いながらそのチラシをポケットの中に入れた。

まあ、犯人の目星は大体ついているから対策を講じておかないとな。

「周、一つ聞きたいのだけど」

「ん？　なんだ？」

琴美は不安そうな視線をオレに向けて、そして、小さく頷いた。

「あなたはもう将来を決めているの？」

「なんだよ。藪から棒に」

「いいから」

将来か。そんなこと考える余裕なんてなかったな。『赤のクリスマス』を再現させまいと行動力と戦闘能力を高めた部隊を作ろうとした。その結果が第７６移動隊だ。

様々な勢力。いつの間にか世界を超えてまで隊員が所属している。この第７６移動隊だけのものだ。

確かに、将来についてよく考えてもいいかもな。

「今は、ただ単にこの状況を整理するだけで考える余裕はないな」

「意外ね。あなたならもう将来について決めているものだと思っていたわ」

琴美は本当に意外そうな顔をしていた。まあ、そう言う言葉もわからないわけではない。『ＧＦ』内部じゃオレはすでに時雨の後を継ぐ存在と言われているしな。

でも、よくよく考えてみると『ＧＦ』以外にもたくさんやりたいことがある。

「戦いを捨てることはできないと思う。でも、別の道を探ることはできると思う」

「都やあんたが必死に探している何かを？」

その言葉にオレの動きが一瞬止まった。

それを見た琴美が呆れたように小さくため息をつく。

「あのね。私は都の親友よ。都が悩んでいれば簡単にわかるし、それが他人には言えないことだってわかる。だから、知りたいの」

琴美がグイッと顔を近づけてきた。

「第７６移動隊の事務になる方法は？」

「事務？」

「ええ。私は戦闘が出来ない。でも、それ以外でサポートすることが」

「それはお前がよく考えたことか？」

オレの言葉に琴美がハッとする。

「ほんの一瞬の感情でついてこられても迷惑なだけだ。オレ達は常に最前線に立つ覚悟でいなければならない。戦いが出来ないということは、敵の前に立てば殺されるだけだ。それをわかって言っているのか？」

「それは」

琴美が言葉に詰まる。今の言葉に即答で返されてもいろいろと困るのだが。

「生半可な覚悟で立たれても迷惑なだけだ。もし、お前にその覚悟

があると言うなら」

オレは琴美に背中を向けた。

「都と共に都島高校に入って来い。ちなみに、学力はそこそこ高いぞ。その覚悟があるなら、話はそれからだ」

そう言ってオレは歩き出した。

オレ達は覚悟を決めている。いつ死ぬかわからない戦場で戦い続ける覚悟を。だから、その覚悟がないなら事務でもさせるわけにはいかない。

本当に覚悟があるなら琴美はあることをするはずだ。それをして都島高校に入って来たその時は、

「ちゃんと、事務にしてやるよ」

その言葉はオレの口の中だけで消えた。

狭間中学校終業式。

体育館の中で一学期の終わりに相応しい校長先生のとても長くありがたい話（生徒の半数以上にとっては全くありがたくない話）が終わり、生徒会長である。都が壇上に上った。

校長先生の時から起きていたざわめきが静まりかえる。
静まり返った体育館。その中でマイクを前に都の口が開いた。
「狭間中学校生徒会長の都築都です。今日は皆さんに夏休みの諸注意を申し上げたいと思います」
夏休み前の諸注意。だが、その言葉をまじめに聞かないものはこの場にいなかった。この場にいる誰もが狭間市で起きた狭間決戦を経験しており、どんな些細なことでも聞き逃さないかのように都の言葉に注意する。
水辺のこと。夏休みだからはしゃぎすぎないこと。遠くへ外出することなど、諸注意は多岐にわたっていた。
そして、都の言葉がほんの少しだけ途切れる。
「夏休みに入り、新学期になるまでにこの学校から去る人達がいます。第７６移動隊の皆さんです。彼らはとある任務からこの地に一学期の間だけいました。第７６移動隊隊長海道周さん。皆さんにひとことお願いします」
都の言葉にオレは壇上に出た。そして、静まり返った壇上の中、オレは都に歩み寄る。
「お好きに喋ってください」
「そうさせてもらう」
マイクを受け取りみんなの方を向く。

「第７６移動隊隊長海道周です。新しく発足された部隊と共にここに来てあっという間に時間が経った気でいます。そして、私達は夏休みの終わりにこの地から離れて行きます」

離れるからこそ、これだけは言っておかなければならない。千春の意志をだれかの心の中に覚えておいてくれたらと思いつつ。

「離れて行くからこそ、私はある言葉を残したいと思います」

オレは息を吸い込んだ。

「『友達を助ける勇気を持て』」

その言葉に反応したのが都と琴美だった。多分、オレが千春のことについて語ろうとしているのがわかったんだろうな。

「どんなに自分が辛い状況でも、友達を、大切な仲間を助けられる余裕があるなら、助ける勇気を持ってください。その行為がいつか自分を助けてくれます。ただし、それは日常での話です。もしかしたら、この中から魔術の適性を見いだされて『ＧＦ』に入隊してくる人がいるかもしれません」

実際に、『ＧＦ』には各学校で一人はなると言われているくらいだ。多い時で学校の半分くらいが『ＧＦ』に入隊したと聞く。

「他にも、高校に出ず就職する人もいるでしょう。高校に行き、大学に行き、就職する人もおいはずです。だから、この場でこの言葉を最後とします」

由姫に言った言葉。それを言う状況だよな。

「『信じる道をまっすぐ進め。結果は後からついてくる。自分から逃げるな』」

オレはそれだけを言って頭を下げた。

その言葉はルーチェ・ディエバイトを見ていたら聞いたことがある言葉だろう。オレが由姫に言ったヒントの言葉。それを短くしたものだから。

拍手が起きる。最初に拍手をしたのは由姫だったか亜沙だったか。拍手が会場を包み込む。その音をオレは耳に聞いていた。そして、マイクに声が入らないように呟く。

「ありがとう」

感謝を込めて。一筋の涙と共に。

第二百二十五話　終業式（後書き）

次から夏休み編に入っていきますが、基本的には第二章へ繋ぐためのことや今までで残していたものなどを回収していく話になります。そんなに長くはならない予定です。後、作中の８月２９日に模擬戦を入れる予定です。

第二百二十六話　放課後

レヴァンティンを取り出し鞘から抜き放つ。腕に慣れた重さ。手に入れてからずっと使っているから、久しぶりに持つ今でもその重みに全く違和感はない。

オレはレヴァンティンを鞘に戻した。

「お別れなんだな」

もう、学校に来る用事はない。だから、今この場、体育館の中に入ることはまずないだろう。

オレは目を伏せた。今でも思い出せる。入学式のこと、授業のこと、体育祭のこと。そして、狭間戦役のこと。

狭間市に来てから色々あったが、一番の思い出はやはり学校だろう。

「学校が、ここまで心地のよい場所だったなんてな」

小学校はほとんど通わなかった。誰もがオレを特別扱いしたから。だけど、今はあまり特別扱いされない。

オレは少しだけ笑みを浮かべる。

「戦いだけが全てだとは思っていたのにな」

将来は『ＧＦ』でもっと活躍する予定だったのに、今では将来について考え直していたりもする。

多分、それは全てここに来たから。

「悩んでいるのかい？」

その言葉にオレは振り返った。体育館の入り口に背中を預けるように佇んでいる正の姿がある。

オレは軽く肩をすくめた。

「これぱかりは、誰に聞いても答えは出ないさ」

「戦いだけが全てじゃない。その意見には僕も賛成だよ。でも」

「戦わないといけない時がある、だろ」

正はそういう風に戦ってきたに違いない。多分、一人で。

オレはレヴァンティンを鞘から抜き、正に向けた。だが、正は全く視線を揺らさない。どうやら、この行動の理由がわかっているようだ。

「なあ。正はどうして戦い続けているんだ？」

「新たな未来を求めて。君達と同じだよ。僕も未来が欲しいんだ。滅びの来ない未来が」

「その口振りだと絶対に色々と知っているよな」

オレは小さく溜息をついた。知っているとわかったとして、絶対に

教えてくれるとは限らない。多分、正は教えてくれないだろう。又は、詳しくわからないか。

「世界は滅びを止めるために動いている。それにオレ達は巻き込まれたからここにいるんだ」

正の目が微かに細まる。まあ、不思議に思う気持ちはわかる。

でも、多分だがこの考えは正解だ。

「まあ、未だに滅びが詳しくわかっていないけどな」

「そうかい。君はもうなんとなく理解していたのではなかったか？」

オレは小さく溜息をついて動いた。レヴァンティンを抜き放ちながら瞬動によって正の首筋にレヴァンティンを叩きつけようとする。

普通なら反応出来ない。だけど、目の前には正の姿はなく、いつの間にか剣が首筋に突きつけられていた。

「どういうつもりかな？」

正の言葉が聞こえる。冷静なようで怒っている。

オレはレヴァンティンを鞘に戻した。

「聞きたいことがあるんだ。第五の世界について」

正の剣がピクリと動いた。

「人界、魔界、天界、そして、新たに見つかった音界。それ以外に、いや、その四つの下に世界がある」

「根源界だとでも言うのかい？」

「おかしいとは思わないか？　地球という莫大な質量を持った星の内部に四つの世界があるなんて」

「それはゲートで繋がっているから」

その言葉が来ると思っていた。というか、オレも最初はゲートがあるからということで思考を止めていた。

でも、それだけじゃ説明がつかない。

「ゲートの原理を言えるか？」

正は答えない。答えられるわけがない。ゲートは未だに理解されていないからだ。確かに、ゲート以外にも道はある。でも、一番安全なゲートが一番解明されていない。

「召喚門みたいなものでは？」

「だから、推測を立てた」

オレは少しだけ笑みを浮かべる。ここから正がどのような反応をするかによってオレの行動は変わってくる。

「昔話によくある生命を生み出す樹。それに例えられるんじゃないかって」

正の剣は動かない。

「根源界があるとして、その世界が生命を生み出す樹の根だとしたら？」

「ここは枝だと表現するのかい？」

「いや、実だ。樹のことを世界樹としておこう。世界樹はその力を枝の先にある身に実らす」

そこに生物が生まれるということだ。

「その推測が確かなら、他にも世界があるということになる。それは突拍子もないほど壮大な夢物語だね」

正はほんの一ミリも剣を動かさず感想を言ってくる。でも、そう考えたら色々と納得がいくのだ。

別に世界樹じゃなくてもいい。世界樹は例えてわかりやすくするためのものだ。一番下で支えるものがあるなら何だっていい。

「周、それは証拠がない。説得力はないよ」

「だろうな。オレだって納得するのに時間がかかった。なら、人界や魔界に滅びの話がある？　今まで含めていなかった精霊界にも」

天界や音界にだってその話はあった。メリルに尋ねてみたら、確かに滅びが迫っているという予言があるらしい。

あらゆる世界にある滅びの話。時期はわからないけど、ここまで連続して出ていることの時点でおかしい。

オレは正の剣を見た。剣がゆっくりオレの首筋から外される。

「だからこその推測だ。まあ、笑われて終わる可能性だって」

「僕は笑わない」

その言葉にオレは振り返っていた。正は真剣な表情でオレを見ている。

「僕は絶対に笑わない。推測の領域は出ていないけど、ちゃんと筋は通っている。君が悩み考えたことは、絶対に笑わない。笑わせない」

「突拍子もない夢物語だけど？」

「夢を現実にすればいい。誰も届かなかった世界を君は見つければいい。僕は君を応援する」

「ありがとう」

恥ずかしさのあまり顔を逸らしてしまう。真剣な正の表情はかっこよく、意志に溢れているのだが、どこかドキドキしてしまう。

どうしてだろうか。

「ふふっ。どうやら君には勝てないようだ。何か調べることはないかい？　手伝ってあげるよ」

「そうだな。いや、今はいい。今はオレ達が手探りで作業をしている最中だ。それに、正は正らしく過ごせばいいさ」

その言葉に正はキョトンとして口の中で何かを呟いた。そして、視線を伏せる。

「そうだね。じゃ、また」

正の姿が消えた。目の前から不自然に消え去る。これが一番、世界の不思議に直結しているような気がするんだけどな。

『自分らしく、と呟いていましたよ』

「そうなのか？」

『はい。もしかしたら、彼女は自分にコンプレックスを覚えているようです』

オレはレヴァンティンの言葉を聞きながら体育館を後にする。

「さてと、どう過ごすとしますか」

第二百二十七話　将来

「あれ？　海道君？」

体育館から出たオレの耳に委員長の声が入ってきた。

声の聞こえた方角を向くと、そこには委員長の姿がある。ちなみに一人だけだ。

「体育館に何か用事でも？　あっ、告白か」

「亜沙と由姫、そして、都の三人をかいくぐって告白出来ると思っているのか？」

2ヶ月ほど前、オレの下駄箱に入っていた誰かの手紙を亜沙が燃やしているのを見たし。

ついでに、何故か由姫も千切りまくっていた。

「ふふっ。そうだったね。じゃ、何をしていたの？」

「多分、体育館に来るのは最後だから。お礼参り？」

「それは違うから」

委員長が小さく溜息をついて振り返った。オレ達が1ヶ月の間通っていた校舎を。

「海道君、学園都市ってどんな感じ？」

「何だよ。藪から棒に」

「いいから」

あれ？　何かデジャブを感じたけど大丈夫だろう。

「そうだな。文字通り学生か先生か研究者しかいない、とは言っても、首都圏の近くにはあるから別段一人暮らしが多いってわけじゃない」

「そうなんだ。でも、一人暮らしをしている人もいるよね？」

「ああ。高校から多くはなるな。大学はかなりの数が学校の寮に入っている」

学園都市は広さだけなら世界一らしい。らしいというのは興味がないからで、学園都市がそう言っていると聞いただけだ。

オレ達が入っている都島学園は小学校から高校まで一貫教育をしていたりもする。私立の大学は大体そんな感じだ。

「実験要素も多いからな。便利なこともあれば不便なこともある。例えば、学園都市にはスクールバス以外の自動車は存在しない。基本的には自転車とかな」

「そうなんだ。私は高校は学園都市の方に行きたいから」

「そうなのか？　委員長の学力を考えて、このままなら総附高とか月高とかか？」

「そんなレベルはないと思う」

総附高も月高も学園都市内部じゃかなり上の方だからな。委員長でも入るのはかなり難しいと思う。

実際、総附高の最高偏差値である医学部に今のオレで合格率５０％だし。

「えっと、都島高校は？」

「都島学園付属都島高校か？　まあ、委員長の実力なら十分だけど、あそこは勉強するところじゃないぞ。都島学園自体が在学中に働くことを奨励しているからな。『ＧＦ』、特に、オレ達のような正規部隊にとってはありがたいけど」

都島学園付属都島高校はかなり特殊な学校だ。在学中の仕事を奨励しており、学力さえあるなら出席はあまり考慮にされない。

自由が特徴と言える学校だ。

「海道君にだけ話すけど、私、将来看護師になりたいから。『ＧＦ』医療部隊に入れば看護師の資格を貰えると聞いているし」

「まあ、そうなんだけどな」

かくいうオレも一時期は医療部隊にいたことがあるからわかるが、あそこは地獄だ。最前線なんて休む暇なく怪我人がやってくる。

したくないことだってやらされる。

「都島高校の医療科を狙ってみたらどうだ？　自由すぎるから人気が無くてさ、金はかかるけど『ＧＦ』医療部隊にも所属出来るし」

「学生『ＧＦ』だから授業にも出れる？」

「そういうこと。まあ、嫌ならいいけど」

「ううん。考えてみる」

「そっか」

パンフレットを取り寄せるのはまだ早いとして、都島高校に上がれるのか少し不安な奴らがいる。

まあ、一定学力以上だったら都島高校は何ら干渉して来ない。都島高校は、だ。都島中学となると干渉すらされない。だから、日本にいる正規部隊の学生は都島学園に入らされる。

そんな奴はかなり少ないけど。

「海道君は将来どうするの？」

「オレか？　そうだな。第７６移動隊はやって行くと思う。でも、研究もしたい自分もいるんだよな」

「意外。海道君って、オレは『ＧＦ』一色だ、とでも言うかと思ってた」

「一昔前はそんな感じだ。『ＧＦ』以外に道は無いと思ってた。でも、ここに来て、色々な人と出会って、オレは将来について考え出

したんだ。ＮＧＤやＮＧＦもその一環」

「ＮＧＤはすごいね。毎日特集が組まれているよ。次世代の名を持つ正真正銘の上位互換だって」

ＮＧＤを開発した理由は都の補助デバイスだなんて言えない状況だよな。レヴァンティンのオーバーテクノロジーを使って並列処理を強化しつつ全体の処理速度を強化したら量産が容易い値段になったのも。

量産型は都に渡した試作型の処理速度を落としたさらに安いＮＧＤだし。

通常デバイスが現在７万程度だけど、ＮＧＤは６万で売れるらしい。おかげで特許料を桁違いに低く設定出来た。

「海道君って本当にすごいよね。苦手なのは保健体育の保健くらい？」

「あれは学校の授業と認めていない」

そっぽを向くオレの顔は絶対に赤くなっているだろう。保健だけは教科書を開くのに抵抗がある。は、破廉恥な。

「ふふっ。海道君達がいなくなったら狭間市はどうなるのかな？」

「『ＧＦ』の用意が揃うまで『ＥＳ』が管轄するって話だ。用意がそろえば『ＥＳ』は撤退。代わりに地域部隊がやって来る」

「『ＧＦ』と『ＥＳ』の仲は悪いって言われ続けているのにね」

言われてはいるが、実際は『ＥＳ』がよく吠える臆病な犬なだけだ。全面戦争になれば第一特務が全滅させるだろう。

それくらいに戦力差は歴然としている。

「この一学期間本当に楽しかったな。海道君、ありがとうね」

「別にオレは何もしていないよ。オレはひたすら走り回っていたから」

「ううん。海道君には感謝してもしきれないから。私の中じゃ、海道君はすごい存在だよ。強くて、優しくて、時々脆い」

どうやらオレのことを見られていたらしい。でも、委員長なら恥ずかしくない。

「そんな海道君が私は好きでした」

「委員長」

「叶わぬ恋だとわかっていても、私は海道君といられた一学期間を忘れない。絶対に。今まで、ありがとう」

「礼を言うのはこっただ」

オレは笑みを浮かべる。今までの学校を思い出しても、由姫がいて、和樹がいて、俊輔がいて、委員長がいて、他のクラスから亜沙や都達が来ていた。

本当に楽しい学校生活だった。

「オレに学校生活というのを教えてくれてありがとう。色々サポートしてくれてありがとう。委員長、鈴木花子」

「名前、覚えていたんだ」

「そりゃな。でも、委員長は委員長だから。オレの中だと他に委員長はいない」

「ありがとう」

委員長の頬に一筋の涙が流れる。オレはそれが流れるのをしっかり見て、委員長に背中を向けた。

「帰ろう。家まで送って行く。それに、オレはまだ狭間市から出ないからな。もっと思い出を作れるさ」

「うん。そうだね」

オレの手を委員長の小さな手が掴んできた。

第二百二十八話　出発

亜沙がルーチェ・ディエバイトのトトカルチョによって手に入れた大金は様々なマスメディアが由姫以上に食いついていた。

宝くじどころじゃない。本当に億万長者になったからでもある。普通は放送されないものだが、その大金がすでに消費されたからか、マスメディアは食らいつきは半端なかった。

そう、終業式があった今日も。

「相変わらず人多いな」

委員長を送って駐在所に戻って来ると、そこにはたくさんの記者の姿があった。その中の一人がオレに近づいてくる。

フリージャーナリストの寄本（よりもと）だ。ＮＧＤの時に何回も取材を受けたことがある。

「周君じゃないか。今帰り？」

「まあな。今日はやけに多いな」

「どこかのバカな放送局が特集を組んだからな。ルーチェ・ディエバイト関連で亜沙さんも出すらしい。ちなみに僕は君のことだ」

「だろうと思ってた」

寄本は何故かオレにご執着らしい。まあ、寄本の話は面白いからオ

レを退屈にさせないためやりやすい。

「次世代関連？　それとも」

「ＮＧＤについて。ここで聞きたいところだけど、うちの編集長がね、一度周君を呼んで周君一冊の本を作りたいと息を巻いているよ」

「売れるのかよ」

「売れるよ。それに、僕も記事の書き応えがあるからね」

それは良かった。オレの記事を嫌々書かれていたらこっちが困っている。

「そうだな。７月３０日。ちょうど学園都市に向かう用事があるから、３時頃からはどうだ？」

「わかった。７月３０日だね。すごく楽しみだよ。それにしても、今まですぐだったのに今回は時間がかかるんだね」

「ああ。今日から一週間ほど中東に向かうんだ。亜沙を連れてな」

その言葉に駐在所の前に集まってきていた記者達の動きが固まった。完全に亜沙の名前を出したからだろう。

「それと、ルーチェ・ディエバイトのトトカルチョで手に入れたお金だけど、発表は８月２９日まで待ってくれ。その日まで関係者の誰も話さない。無理に聞き出そうとするなよ」

「それはどうしてでしょうか？」

記者の一人が純粋な疑問と共に尋ねてくる。それに対してオレは苦笑で返した。

「軍法会議に参加したいならどうぞ」

脅すと共にこれは歪曲的なヒントでもある。

軍法会議に参加ということは使われたお金が『GF』関連の最新兵器に使われたということになる。これでも十分な情報を与えた。後は、

「ヒントは足。楽しみにしておけよ」

記者の間をすり抜けて、オレは駐在所の中に入った。中ではすでに亜沙が荷物を整えて準備をしている。

リュックサックの中に入った着替えと、腰に身に付けられた矛神。対するオレは自分の机の上に置いていたポーチを掴んだだけだった。

「さて、準備は出来てるし行きますか」

「慌ただしい奴だ。もう少しゆっくりしていったらどうだ？」

駐在所の中にある一般人用のソファーで寝転がって雑誌を読んでいる孝治が言ってくる。こいつは相変わらずだよな。

現在はまだ営業時間じゃないから出来る方法だ。

「悪いな。色々押し付けて」

「構わん。お前は元から詰め込みすぎだ。今日は俺と光が受付の日だから見送りは俺だけだ」

中村はシャワーを浴びているのだろう。まあ、下手に刺激しない方がいい。

「由姫と七葉は？　あいつらは自由時間だろ？」

「由姫は友達と一緒に街の中心に。七葉は和樹とデートだそうだ。けっ」

彼女がいるお前がどうしてそんなことをする？

「悠聖は俊也と訓練。音姫さんは浩平、リースと見回り。都さんは生徒会長の仕事だろう」

「そっか。じゃ、オレ達は行くとするか。亜沙、準備はいいか？」

『いつでも大丈夫。周さんは荷物が少ないけど大丈夫？』

「大丈夫だ。問題ない」

ちなみに、着替えはレヴァンティンの力で収納している。ちなみに、本来収納していた他のモードのパーツは自室の机の上に積み重なっている。

ポーチの中に入っているのはお金だ。スリに会わないよう気をつけないと。

『羨ましいな。レヴァンティンの性能が高くて。私なんて未だに部隊で一人だけＮＧＤじゃないし』

ヤバい。亜沙が拗ねだした。あのことを言うべきか。

『安心してください。中東に亜沙さんを連れて行くのはマスターとアル・アジフが作り出したＮＧＤを渡すためでもありますよ』

「おい、漏らすな」

せっかく隠していたのに。

オレは小さく溜息をついた。

「亜沙のための新しい武器をアルと開発していたんだよ。ついでにＮＧＤもプレゼントしようってことに。一人だけ仲間外れは悪かったな」

『ううん。周さんが私のことを忘れたと思っていた。由姫ばっかり見ていたから』

「悪い。でも、亜沙が大切なことは」

『わかってる』

オレの言葉を制して亜沙が満面の笑みを浮かべる。オレも笑みを浮かべ返した。

「あっついな。本当に熱々や」

その言葉にオレ達は同時にそっぽを向いていた。あまりの恥ずかしさに顔が熱い。というか、孝治の存在すら忘れていた。

孝治の方を向くと、孝治はニヤニヤしている。

「亜沙、行くぞ」

オレは亜沙の手をしっかり握りしめて歩き出した。そんなオレに背後から中村が声をかけてくる。

「やる時は避妊しやんなあかんで」

「そんな破廉恥なこと誰がするか！」

第二百二十八話　出発（後書き）

次からは中東に三話ほど移ります。

第二百二十九話　新たな『ＥＳ』

中東のとある空港。『ＥＳ』過激派専用機に乗ってオレと亜沙は『ＥＳ』過激派本拠地に来ていた。

中東に行く用事というのは『ＥＳ』との狭間市に関する話だ。穏健派の吸収は上手くいっているらしく、もう少ししたら『ＥＳ』には過激派も穏健派も無くなるらしい。

『ＥＳ』のその行動は各国が支持してもいるので『ＧＦ』が出る出番ではないのだが、アルから聞いた話では色々複雑な議題があるという。

「厳戒体制だな」

本拠地飛行場に降り立ったオレの視界に何人もの警備兵やフュリアスの姿がある。

音界で開発された第五世代フュリアス『アシューム』だ。ギガッシュと比べて遥かに丸みを帯びていてシルエットはまさに相撲取り。中古ではあるが戦力としては充分らしく安く買ったという話を聞いている。

『仕方ないよ。ここは過激派本拠地なんだから。周さん』

亜沙は自らのデバイスをオレに渡してきた。矛神を収納しているデバイスを。

『周さんに持っていて欲しい。アリエル・ロワソに襲いかかりたく

ないから』

「そういうことね。わかった。ちゃんと預かっておく。アルもアリエル・ロワソも参加だからな。どんな大規模な会議になることやら」

多分、『ＥＳ』の幹部級は参加していると見ていいだろう。この厳戒体制を見る限り、凄まじいメンバーが、

「あれ？　リマ？」

「海道さん？」

本拠地建物に向かって歩いていると、厳戒体制の中で格納庫前にいるリマを見つけてオレは話しかけていた。

ロングコートを身に付けたリマはオレの姿を見て話していた人物に断りを取ってからこっちに向かって来る。

「どうしてこのような場所に？」

「『ＥＳ』から呼ばれていてな。色々と決めるから来て欲しいと。リマは？」

「そういうことですか。私は護衛です。ここからは見えませんがギガッシュ部隊もいますよ」

つまり、メリルも来ているというわけか。

思っていたよりも、いや、思っていた以上に厳戒体制というわけか。

「つまり、格納庫内部にはアストラルブレイズとアストラルソティスがあるのか？」

「エクスカリバーとソードウルフ、イグジストアストラルもいますよ。悠人さんやリリーナさん、鈴さんの三人は格納庫待機です」

多分、第一特務がぶつかっても多数の犠牲者を出すだろうな。明らかな戦力過多だ。

「私は今から向かう先も海道さんと同じのはずです。これでも歌姫様の護衛ですから」

「そうなのか？　音界の住人は近接戦闘が苦手なんじゃないか？」

「苦手な人が多いだけです。それに」

リマがロングコートをはためかした。そこにあったのは腰に身に付けられた拳銃。逆にもホルダーが見えるから二丁拳銃なのだろう。

リマがにっこり笑った。

「武術の心得もありますし。横の方には叶いませんが」

確かに、亜沙は世界でも屈指の実力者だ。若手フロントの中では音姉や孝治、アルトクラスと言われておりその強さはかなりのもの。

確かに、年齢が近いリマじゃ話にならないか。

『二丁拳銃は珍しい。浩平くらいしか見たことがないけど』

「拳銃は片手で支えるようなものじゃないからな。撃った時の反動が大きすぎる。ただ、浩平のものはフレヴァングの中にあった二丁拳銃らしい。分解させてもらったけど素材から低反動になっていたからな」

「この二丁拳銃はオーバーテクノロジーの一種です。歌姫様を守る護衛筆頭に代々与えられるものですから」

「えっ？　ルーイが護衛筆頭だと思っていた」

「ルーイはただにフュリアスバカなだけです」

リマがそっぽを向く。それを見たオレ達は顔を見合わせて吹き出していた。

フュリアスバカとは言っているが、その言葉はどこか誇らしげだったからだ。全くの嫌みがない。

「どうして笑いますか？」

『気のせい気のせい』

「笑ったまま言っても説得力ねえぞ」

「あなたもです！」

オレ達の笑いとリマの怒りはほんの少し歩き過激派本拠地のエントランスに入るまで続いた。

オレ、亜沙、アル、メリル、アリエル・ロワソ、それ以外にもたくさんの顔ぶれがある。ただし、座っているのは今挙げた五人以外に三人だけだ。

過激派の副代表であるタタナ。副代表の右腕であるレバンとユカナ。立っている面々の中ではルーイやリマの姿がある。

「集まってもらったのは他でもない」

アリエル・ロワソがゆっくり口を開いた。亜沙の目がデバイスの入っているオレのポーチに向くが、すぐに外される。

オレはレヴァンティンを腰にさげている。

「我ら『ＥＳ』穏健派についてのことだ。これには『ＧＦ』や音界にも関係することなので彼らも呼んだ」

オレ達に飛ぶ殺気がものすごい。まあ、『ＥＳ』の勢力が拡大出来ないことを歯痒く思っている奴らも少なくないだろうしな。

でも、アリエル・ロワソは動かないから誰も動かない。

「穏健派代表アル・アジフ。今回の件について君が説明したまえ」

「わかった」

アル・アジフが立ち上がる。

「全ての始まりが結城家及び音界の造反組が我の持つフュリアス、マテリアルライザーを奪うために穏健派本拠地を攻撃したことじゃ。これにより、穏健派の大半は死亡。生き残った者は非戦闘員。いち早く結城家の企みに気づいた第７６移動隊がいなければ我はこの世にはいないじゃろう」

実際の事はかなり深刻だった。もし、オレが遅れていたらどうなっていたかは想像に堅くない。

でも、もっと早くついていれば、もっとたくさんの人を救えたんじゃないかと思う。

「穏健派をもう維持することは出来ぬ。じゃから、我は今まで穏健派の面々を過激派に組み込むのを躍起にやっておった。先日、全ての工程が終了し、ここに穏健派の廃止を宣言する。過激派はこれより『ＥＳ』を名乗るがよい。もう、内部に二つの勢力がないのでの」

「了解したよ。『ＧＦ』代表。何か意見は？」

「アル・アジフが決めたならオレ達は何も言うことはない」

「ガキのくせにふてぶてしい態度だな」

レバンが小さく毒づく。それに対してオレは笑みを浮かべて返した。

「オレは『ＧＦ』代表としているんだぜ？　アリエル・ロワソの言葉を聞いていなかったか？」

レバンは小さく舌打ちをするとそのまま黙った。タタナやユカナはそれが分かっていたらしく何も言わない。

「そうか。今より、穏健派の廃止を正式に決定する」

拍手は起こらなかった。ただ、レバンが見えないような角度で笑みを浮かべたのが気になる。

「そして、元穏健派代表から重大な発表がある」

その瞬間、アリエル・ロワソがまるで子供のように一瞬笑い、タタナが呆れたように溜息をついたのが分かった。

オレは嫌な予感が背筋をかける。

「我は『ＥＳ』を辞め、第７６移動隊への入隊を希望する」

「「はぁーっ！！」」

何故かオレとレバンの声が完全に重なっていた。ちなみに、オレは思わず立ち上がっている。

「ちょっと待てちょっと待てちょっと待て！　『ＥＳ』を辞めてこっちに来る？　何でだ？」

「何でと言っても、我はそなたが好きだから」

「そんな理由で簡単に所属を代えるな！　というか、全て過激派に入れたと言ってもお前は『ＥＳ』では必要な存在なんじゃないのか？」

「アリエル・ロワソは許可しれくれたぞ」

あの笑みはそういうことか。完全に外堀を埋められているし。

「ちなみに、亜沙も知ってる」

『黙っててって言われて』

しかも、四面楚歌になっているとは。オレは小さく溜息をついて椅子に座った。

もう、反論する材料がない。

「来る面々は？　アルだけじゃないだろ？」

「そうじゃ。我、悠人、鈴、リュリエル・カグラ、冬華の五人じゃ」

楓と冬華までもかよ。

「アリエル・ロワソ、いいのか？　か、リュリエル・カグラも冬華も『ＥＳ』の中じゃ一線級だろ？」

「一線級以上に、彼女達の意志を反映したい。それだけだ」

なら、仕方ない。

『ＥＳ』はアル・アジフがいない中、新しくやり、第７６移動隊は新たに戦力増加となるのか。

書類提出が色々と大変だな。

「分かった。第７６移動隊隊長権限において、入隊を許可する」

アルの顔が見違えるくらいに輝いた。こんな顔を見られるなら悪くはないかな。

「では、新たな枠組みを決めて行こう。次は音界との取引の話だ」

アリエル・ロワソの声にオレは背筋を伸ばした。

第二百三十話　新たな第７６移動隊隊員

音界との新たな取引の枠組み。それは、『ＧＦ』と『ＥＳ』では『ＥＳ』側の方が取引を優先すると言う枠組みでもあった。ただし、一般商人たちや国連の取引とは関係の無い話でもある。

それは強大な戦力を『ＧＦ』側に送る見返りということだが、音界からすれば同レベルに機体を作り出せる『ＧＦ』と取引しても利益が少ないとも感じているようだ。実際に少なくなりそうだし。

オレからすればあまり反論はない。評議会の爺共からすれば利益が減るとか言うだろうけど、今の技術差だとそこまで交流しなくても大丈夫なはずだ。それに、フュリアスがどの程度の強さなのかもだいぶ分かってきている。

人界最強のパイロットである悠人と絶対無敵の要塞イグジストアストラルの所有者である鈴が『ＧＦ』にいる以上、おいそれと手出しはできないはずだ。

とは言っても、色々と問題は出てくるけど。

「悠人と鈴にリリーナも付いてくるのか？」

オレはエクスカリバーやらを見上げながら傍にいたリリーナに話しかけた。ちなみに、悠人と鈴はアルから話を受けている。

「もちろんだよ。私は悠人にぞっこんだからね。それに、周がいるならパパももう少し安心してくれると思うから」

「まあ、中東はなかなか不便だからな」

中東とアフリカは未だに通信施設が完全に整っていない。だから、毎日連絡取ることが出来ないのだ。ギルガメシュはさぞ心配しているだろうな。親バカだから。

オレは頭の中で何の書類を用意しなければいけないかリストを上げる。この中で大変なものは三つほどか。それ以外は簡単にどうにかなる。

「レヴァンティン、孝治との通信を頼む」

『少しばかり待ってください。線を見つけるためにしばらく時間を必要ですので』

オレはレヴァンティンの回答を聞いて小さく頷いた。

「やっぱり、相変わらず凄いよね。周のデバイスは特に。こんなところで単身で通信を？げれるなんて」

「レヴァンティンの場合は通信施設を探せる範囲が極めて大きいだけだ。時間さえ与えれば３００ｋｍまでは」

『５００ｋｍです。お間違えないように』

オレの言葉にどこか不満だったのか少し不満げにレヴァンティンが言ってくる。オレからすれば３００ｋｍも５００ｋｍもよく似たものだと思うのだが、レヴァンティンからすればそうじゃないらしい。

まあ、別にいいけど。

『相互通信は不可能なのでメールは送れるようにしておきました。ちなみに、一方通信は可能です』

「なら、一方通信で。孝治、オレだ。第７６移動隊にアル達を迎えることになったから入隊希望者用の履歴書と個人記録陳述書の準備を頼む。お前の爺さんに連絡してちゃんと申請が通るように根回しも頼む。詳細は負って連絡する。こんなもんか？」

オレはレヴァンティンをしまった。とりあえず、これだけしておけば大丈夫だとは思う。他の書類もそこまで急ぐようなものじゃない。でも、入隊のことはしっかり書いておかないと。

後は、時雨や慧海にも言っておかないとな。

「さてとい、次は慧海にでも連絡を」

「呼んだか？」

「「うわあぁぁっ！！」」

オレとリリーナが同時に声をあげていた。いつの間にかオレ達には慧海の姿があったからだ。気配すら察知することが出来なかった。というか、いつの間に？

リリーナはいつの間にかかなり離れた壁際まで下がっている。

「何事？」

外で談笑していた悠人と鈴が格納庫の中に入ってきた。その後ろか

らはアルの姿が。

「よっ。久しぶりだな、アル」

「そなた、何故ここにいる？」

アルが静かにアル・アジフの紐をといた。漏れ出すプレッシャー。気配を感じて魔力を飛ばすと、いつの間にか格納庫の上の方にある通路に亜紗の姿があった。

慧海が小さくため息をつく。

「オレはお呼びじゃないってか？　まあ、そう言うなって。今回のことは周が決めた内容でいい」

「聞いていたのかの？」

「企業秘密だ。アル達が第７６移動隊に入隊することは反対はない。というか、隊長が決めたからには絶対だ。口出しできるのは時雨くらい。時雨としても、五角関係が楽し、ゲフンゲフン。えっと、どこまで話したっけ」

こいつ、完全に話を逸らしやがった。

オレは小さくため息をついて慧海を見る。

「どうしてお前がいるかだ。ここは『ＥＳ』の本拠地。厳戒態勢の中どうやって来たんだよ」

「地下」

オレは思わずぽかんとしてしまった。慧海は真顔で地面を指さしているのだ。その顔に嘘いつわりの色は全く見受けられない。

地下ということは秘密通路でもあると言うのか？

「そう言えば、そなたの特異な属性は土属性じゃったな。それの応用かの？」

「そういうこと。まあ、飛翔の力で強制的に固定しなければならないほど柔らかかったから同じ手段で誰かが来ることはないぜ」

どういう理屈で来たかわからない、ともかく、真似できない方法で来たことだけはわかった。

ともかく、今は報告できることだけでも報告しておくか。

「慧海、とりあえず、ここにいるメンバーと、楓、冬華の二人を加えた六人が第７６移動隊に入隊するから」

「オッケー。まあ、ここに来たのはお前がちゃんとやれるか心配だったんだけどな。じゃ、お暇させてもらいますか」

慧海がそう言った瞬間、慧海の体が消えた。いや、下に落ちた。いつの間にか床に地面が開いている。

オレ達は顔を突き合わせてその中の様子を見ていた。

「えっと、周さん、どういうことですか？」

「オレに聞くな」

わからないからオレに聞かれてもオレがわからないことは応えられん。

オレは軽く肩をすくめた。

「まあ、あいつもオレが心配ってことだろ。リリーナを心配するギルガメシュと同じように」

「納得しました。ところで、リリーナはどうしてそんなに距離を取っているの？」

リリーナは一人で離れた壁にへばりついている。まるで、慧海に何かのトラウマがあったかのように。

リリーナは周囲を見渡した。

「慧海はもういないよね？　よね！？」

リリーナが涙目で悠人に詰め寄ってくる。背中にいつの間にか出された鎌が凄く恐ろしい。

「えっ？　う、うん」

詰め寄られた悠人もかなり驚いていた。オレは小さくため息をついて、リリーナに向かって口を開く。

「まるで苦手なものと会ったようだな」

「苦手なものじゃないよ！　慧海はね、リリーナのトラウマの全てを作り出しているんだよ」

その言葉にオレは完全にぽかんとしていた。どういうことだ？

「リリーナのご飯の中にカエルの肉を混ぜたり、落とし穴を作ってそこにナメクジを大量に配置したり、楽しげな音楽を聴いていたら悲しげな音楽のサビ部分を永久にリフレインしてきたり、私の大好きなお菓子から中に入っていたチョコレートを抜いたり、必死に括った紐をほどきやすいようにしたり」

「やること全て子供だよな」

食用のカエルだったら結構食えるものだと思うんだけどな？　まあ、よほどのことがない限り食おうとは思わないけど。

多分、慧海のことだから舐め記事落とし穴の上には大量の塩をまいていたに違いない。多分、オレをひっかけるように。

「そんなこんなでリリーナは慧海が大っっっっ嫌いなの！　わかった！？　悠人！」

「は、はい！」

完全に悠人にとばっちりを飛ばしているよな。

「大丈夫だよ。リリーナは私達と一緒なんだから、慧海さんから私と悠人で守ってあげる」

「本当？」

「うん。そうだよね。悠人」

「当り前だよ。リリーナはもう家族みたいなものなんだから、僕達を少し頼ってよ」

「うん」

リリーナが鈴に甘えたように抱きつく。鈴もリリーナを抱きしめた。

「いい光景だな」

オレはそれを見ながら小さくつぶやく。そして、亜紗に視線を向ける。

亜紗その視線に気付いたのか上から飛び降りてきた。風を操作して落下する速度を弱めつつ地面に着地する。

『タイミングを逃した』

「だと思ったよ。アル、あれ持ってきている？」

「当り前じゃ。亜紗」

アルはポケットから指輪をオレに渡してきた。普通の結婚指輪の様な形で、周囲には緑の宝石が散らばッている。

それをオレは亜紗の手に通した。もちろん、左の薬指に。

「お前を一番ってわけじゃないけど、アルと相談したらこれがい言

って譲らなくて」

亜紗は信じられない目で指輪を見つめていた。そして、スケッチブックを慌てて開く。

『もしかして、ＮＧＤ？』

Ｎｅｘｔ　Ｇｅｎｅｒａｔｉｏｎ　Ｄｅｖｉｃｅ。今出ている次世代型デバイスのその次世代モデルとして作ったのがこの指輪だ。

コンセプトがアクセサリーでいつも身につけるにしたら、ピアスとか指輪としか残らなかったので指輪にすることにした。

「今までの感謝と、これからもよろしくな」

『うん。えっと、これっちどんな機能があるの？』

「武器を呼び出して」

亜紗が左の手を前につきだす。そして、目の前に二本の小刀が現れていた。

驚いたような眼でそれを掴む亜沙。それと同時に二つを逆手に持った。

「亜紗の戦い方で一番型にあったものはないかと探していたらこうなったんだ。一応、オレが設計してアルが開発した。アルが言うには最高の出来らしい」

『ありがとう。本当にありがとう。周さん、アルさん』

亜紗が頭を下げる。その目じりに涙が溜まっているのオレ達は見逃さなかった。

オレとアル顔に笑みが浮かぶ。

「そうじゃな。我が作ったものじゃから周は我が優先的に」

亜紗の腕が舞った。アルの目の前に小刀がひるがえる。だけど、その小刀はあるが作り上げた防御魔術によって受け止められていた。

オレは一歩後ろに下がりながらため息をつく。

『アルさんでも周さんは渡さない』

「育て親に切りかかるとは、この場で懲らしめてやった方がいいかの？」

どちらもやる気満々だ。それはもう一回だけため息をついて二人からさらに離れた。

「周さん、止めなくていいの？」

心配した表情の悠人が話しかけてくる。オレは出来るだけ済ましたような表情でかっこつけるように前髪を上げながら、

「世界で一番怖いのは人の取り合いだよな？」

「それには僕も賛成する」

いつの間にかリリーナと鈴の間で言い争いが起きていた。多分、悠人をめぐって。

というか、どうしてオレらはこの年齢でここまで苦労しなければならないんだ？　誰か教えてくれ。

第二百三十話　新たな第７６移動隊隊員（後書き）

亜紗の新しい二本の小刀の名前は綺羅と朱雀です。

第二百三十一話　あの日の真実

『ＥＳ』本拠地屋上。そこにオレと亜紗の二人はいた。静まりかけの太陽がオレ達の体を赤く照らしている。

オレ達がここに来てからすでに三日がたった。細かな話をしっかり綿密にやっていくため時間がかかってしまう。でも、メリルもルーイもそのような話ですらしっかり聞きとっていた。

オレはかなり疲れてしまったというのに。

「まだまだ未熟だよな。オレも」

『そんなことはない。周さんはしっかりやっている。私には真似できない』

「亜紗は慣れてすらいないだろ。オレは第７６移動隊隊長。正規部隊隊長だ。これくらいは出来るようにならないといけないのに、まだまだだな」

メリルもルーイもずっとこの様な事をし続けていたのだろう。だから、ここまで長時間の間やっていられる。

追いつくにはそこまでしないといけないのか。

「亜紗はさ、将来のことをどう考えているんだ？」

『将来？　えっと、周さんのお嫁さん』

「それは将来の夢だ。オレが聞いているのは将来のことだ。仕事とかあるだろ。第７６移動隊もこのままでいいわけがない。戦力過多であることが理由に分裂させられるかもしれない。お前は、オレ達から離れてやっていけるのか？」

『うん』

亜紗は即答していた。それがオレには以外で思わず目を見開いてしまう。

亜紗はスケッチブックを捲った。

『どんなことがあっても、私は周さんの傍にいる。離れても、必ず周さんの傍に向かう。私は、周さんを守るための騎士だから』

「騎士ね。その騎士の役割はオレにやらせてくれたっていいんじゃないか？　そういうのは男の担当だろ？」

オレは笑みを浮かべて空を見上げる。亜紗も亜紗で考えているのかもしれない。いや、こいつが考えないわけがないか。一年間ほど、オレの傍から離れさせていたのだから。

もしかしたら、同じ事態になるかもしれないと感じているに違いない。でも、亜紗はオレの傍にいると言う。それは純粋に嬉しかった。

「さてと、中東に来た目的は後一つだな」

『一つ？　会議以外に何かあったの？』

「まあな。そろそろ来るはずだぜ」

屋上のドアが開く音がする。振り返った先にいるのは、アリエル・ロワソ。

亜紗が綺羅と朱雀を取り出した。でも、オレはそれを手で制する。

「ようやく来たか。ちょっと遅いんじゃないか？」

「こちらも用事があるのでね。ところで、君の要件は何かな？　黄昏時の２５日について尋ねたいと書いていたが？」

「お前ならオレの話したいことが分かっているんだろ？」

アリエル・ロワソがフッと笑みを浮かべた。

黄昏時というのは夕暮れの時間帯。周囲が太陽の光によって真っ赤に照らされる。そして、２５日。２５日の中で世界で有名なイベントと言えば、

『『赤のクリスマス』』

亜紗が開いたスケッチブックにその文字が踊る。オレはそれを見て頷いていた。

「私怨かな？」

「今はそんな気分じゃない」

オレはレヴァンティンを鞘から抜き、横に投げつけた。レヴァンテ

ィンの刃が屋上に突き刺さる。
あくまでも攻撃しないという意志を込めて。
「まずはオレの推測から語らせてもらう」
オレは小さく息を吐いた。今まで調べた内容を統合し、アリエル・ロワソがどうして起こしたのかを言わせる。
向こうも分かっているはずだ。オレの条件が達成出来た時点で向こうも話だろう。
「まずは前提条件。お前はオレが生まれた時に誘拐し、生体兵器になるように改造した」
「それは推測ではなく事実では？」
「前提条件だ。どうして改造したのか。ここからが推測だ。アリエル・ロワソ、お前は世界の滅びについて知っていると仮定する」
ここからが本番だ。どこまでアリエル・ロワソの考えをなぞれるかどうか。
「世界を救うにはどうすればいいか。物語的には勇者を作ればいい。だけど、現実的な勇者はあらゆることを可能としなければならない。それこそ、万能（オールラウンダー）のように。オレを誘拐した理由がそれに当てはまるから。そして、改造を行い、奪還されてからは一つも手を出さなかった。それは、警備が厳しかった可能性も高いが、本当の理由は別のところにある」

オレはアリエル・ロワソの目を真っ直ぐ見つめた。

「『ＥＳ』の手でオレを育てるよりも、『ＧＦ』の手で育てた方が強くなるから」

『待って。だったら、『赤のクリスマス』はどう説明するの？　あれは、周さんを狙った』

「アリエル・ロワソはニューヨークを狙うつもりがなかったとしたなら？」

オレの言葉に亜紗は驚いていた。

「もし、アリエル・ロワソがニューヨークのような壊滅的な被害を狙ったのだとしたら、どうしてニューヨークだけが焼け野原になったのか、今までそこが疑問だった。アリエル・ロワソが狙ったのは第７６移動隊の下地だとしたら？」

『孝治や光みたいな人達を作り出すため』

「そう。『赤のクリスマス』は滅びに対する特効薬部隊を作り上げる下地だとしたら？　ここにアル・アジフが入ってくる理由にもなる。今の第７６移動隊は戦力過多だからな」

下手をすれば第一特務といい勝負が出来るくらいまで強くなっている。

そんなに強い部隊があったら不公平という話はあるが移動隊という特殊な部隊だから許されてもいる。

「移動隊という特殊な部隊は元はと言えば時雨が考えたものだ。第一特務よりも柔軟に行動が出来る部隊。一時期『ＧＦ』にいたお前なら知っているはずだ。だから、『赤のクリスマス』によって未来に活躍する子供達を『ＧＦ』に入るよう下地を作った」

『たとえ、そうだとしても、そんな理由で起こしたと考えているの？』

「結城家は音界と手を結び、圧倒的な機械の力で世界を制圧しようとした。真柴家は精霊と鬼の力で世界を掌握しようとした。対するアリエル・ロワソは『赤のクリスマス』によって戦いを行う人達を増やした」

これは事実だ。結城家と真柴家は自分達が主導でやろうとしたが、アリエル・ロワソが起こした『赤のクリスマス』は『ＧＦ』の戦力を底上げする結果となった。

第７６移動隊だけじゃない。アルトやエリオット、リコも『赤のクリスマス』による被害者だと言ってもいい。

つまり、アリエル・ロワソは主導して世界を救うのではなく、全員の力で世界を救おうとしている。

「だが、最大の誤算がニューヨークだ。今までの推測から考えて、ニューヨークを狙うのは確実に間違っている。親父やお袋、『ＧＦ』の主戦力メンバーが数多く亡くなったからな。お前がそれを知っていなかったとは思えない。つまり、ニューヨークのテロはお前が主導したものじゃない。模倣犯か、部下の誰かがやったか」

「理由は？」

アリエル・ロワソがゆっくり口を開く。オレは小さく頷いた。

「楓を助けたからだ。生き残った中で楓が一番大怪我をしていた。早く治療しないと死にかけていたくらいに。だから、お前は楓を助けた。もし、ニューヨークを本当に焼け野原にするなら生き残りは残さないはずだ」

これが、ニューヨークの真実だと推測する。

「お前も新たな未来を求めて必死に行動した。違うか？」

アリエル・ロワソがフッと笑みを浮かべる。

それに対して、オレも小さく笑みを浮かべた。

「よく出来た推測だ。だが、それは推測にしかならない。『赤のクリスマス』を起こした理由としてはまだ甘いのではないかね？」

確かにアリエル・ロワソの言う通りだ。これだけじゃまだ甘い。まだ甘いからこそ、オレは最後の推測を言う。

「だったら、『赤のクリスマス』を起こした理由にもう一つあるとするなら？」

アリエル・ロワソが動きを止めた。それだけで十分だ。

「『赤のクリスマス』で狙われたのは基本的に先進国。狙われた発展途上国は少ない。これは何故か？　簡単だ。『赤のクリスマス』のもう一つの理由は文明を破壊するため。もちろん、すぐに復興出

来るレベルだが、それによって世界の滅びを遅くしようとした。違うか？」

それがオレの推測の全てだ。『赤のクリスマス』がどうして起きたのか、今もっているカードを全て出した。

アリエル・ロワソがフッと表情を緩める。

「先に言っておく。私は『赤のクリスマス』について謝るつもりはない。私は私の信念に従って行ったのだから」

「分かっている。オレはそれでもいい」

「そうか。なら、言わせてもらおう。君が推測した内容は事実だ。どうやって情報を集めたかは気になるが、狭間市にいた以上、集まるのは必然か。『赤のクリスマス』は君の言った通りだ。今まで頑なに黙っていたのだが、まさか、君のような年端もいかない子供が正解するとはな。いやはや、さすがは神に見初められた存在だ」

「どういうことだ？」

神に見初められたって一体何のことだ？

「私が知る滅びの記憶の中に君はいた。だが、そこまで頭はよくなかったし、フュリアスを開発するような発想力もなかった。そして、そのような器用貧乏な一面も」

オレは黙って話を聞く。これはアリエル・ロワソしかわからない話だ。口出しはあまりしない方がいい。

「そして、性」

「それ以上は語らないでもらいたいね」

いつの間にか、オレとアリエル・ロワソの間に正の姿があった。その手に握られているのは一本のただの剣。

亜紗がオレの前に出る。レヴァンティンは遠い。

「アリエル・ロワソ。君はヒントを与えすぎた。僕は黙っていてくれた方が都合が良いのでね、ここで死んで」

『させない』

スケッチブックが舞った。

その文字が目に入るのと亜紗が正に向かって朱雀を振り切ったのは同時だった。

正の体がひるがえり、朱雀をギリギリて回避する。

「おや？　彼は君の仇だよ？」

亜紗は空に舞ったスケッチブックを掴み取った。

『アリエル・ロワソは私が倒す。これ以上はやらせない』

正の目が微かに細まった。見極めているのか。それとも、

「どうやら、僕が知る未来とは違ってきているみたいだ」

「どういうことだ？」

オレはいくつもの魔術をストックしながら尋ねた。全てが水属性の超広域状態異常技でもある。

「亜紗の持つ双子刀のことか？　確かに、私もその存在を知らない」

「面白いね。本当に面白いよ。未来が変わっていくのは。アリエル・ロワソ、周のことを話すなら僕は君を殺す。それでもいいなら話せばいい。僕は聞いた者全てを殺すだけだから」

まばたきをした瞬間、そこに正の姿は無かった。バラまいていた魔力にも異常がないため幻だったのかと思いたくなる。

「私は死にたくないので語らないでおこう。周、君に一つ、ヒントを与えよう」

「ヒント？」

アリエル・ロワソは頷いた。頷いてオレに背中を向ける。

「君の推測は正しい。正しいが、一つだけ君の言ったことには間違いがある。私の言葉を思い出して、本当の力を発揮したまえ」

推測は正しいが間違いがある？　意味がわからない。推測が正しいならどうして間違いがあると言うのだろうか。

亜紗が綺羅と朱雀を収める。オレもレヴァンティンを鞘に収めた。

『周さんはわかる？』

「わかるか。本当の力って何だよ」

核晶欠乏症として生まれたオレに一体何の力があるというのか。ともかく、

「アリエル・ロワソ！」

オレは声を上げていた。アリエル・ロワソがオレの方を振り向く。

「どんな理由があっても、お前は犯罪者だ。次に会う戦場では、絶対にお前を捕まえてやる！」

「楽しみにしているよ。二人の成長を」

アリエル・ロワソは屋上から建物の中に入っていった。

オレは小さく息を吐いてその場に座り込む。

『周さん、大丈夫？』

「大丈夫、と言いたいが」

心配して覗き込んでくる亜紗にオレは笑みを返した。でも、目尻に溜まる涙は堪えようがない。

想定していた通りになったけど、本来死ぬはずのなかった親父やお袋まで巻き込まれたことが悲しかった。オレや茜、中村や楓も。

みんな『赤のクリスマス』で未来が変わった。

「滅びを絶対に止めよう」

『うん。何をしても、何としても絶対に』

「それが、第二の『赤のクリスマス』を無くす最良の手段だ」

第二百三十一話　あの日の真実（後書き）

『赤のクリスマス』の真実を書きましたが、『赤のクリスマス』当時の話はこれからも出ます。特に周視点で。

第二百三十二話　残されるもの　離れる者（前書き）

久しぶりに浩平とリースが登場します。

第二百三十二話　残されるもの　離れる者

「来て、タイクーン！」

俊也の言葉に召喚陣が煌めき、炎を纏う一つ目の巨人、タイクーンがそこから姿を表した。

俊也のそばにはすでにフィンブルド、アーガイル、グレイブの姿がある。風、水、大地、そして、炎の最上級精霊を従えた俊也の姿。

オレは純粋に拍手した。

「召喚には時間がかかるが、これからはお前が自分なりにやっていけ。もう、教えることはない」

悔しいことにだが、俊也は本当に天才だ。もしかしたら、精霊召喚師としての才能ならオレを遥かに超えるだろう。

「お師匠様のおかげです。僕一人だけだったら、今頃みんなと一緒に死んでいたと思いますし」

でも、こいつらの強さ、最上級精霊の強さはけた違いだからな。ルーチェ・ディエバイト本戦参加者を圧倒するくらいの強さを時には持つ。

アルネウラや優月というイレギュラーな精霊もいるんだけどな。

「これで、心おきなくオレはここから立ち去れるな」

「えっと、夏休みの終わりまでですよね。それまで僕に指導を」

「これ以上教えるとなると戦闘の仕方、周隊長の分野になってくる。精霊召喚師は自分の精霊から色々学んでいくんだ。お前には頼もしいパートナーがいるだろ」

「そうですけど」

不安になる俊也。その気持ちはわからないでもない。でも、これはオレも師匠から言われたことだ。

「大丈夫だ。焦るな。お前には大切な仲間がいる。そいつらと話し、暮らし、共にいることが精霊召喚師の最善の方法だ。それに、個人で訓練の仕方は大きく変わってくるからな」

「そうなんですか？」

「オレの師匠がバック型に対し、オレはセンター型。戦場の中心で戦況の有利になるように援護と攻撃を行う役目だ。対する俊也はフロント型。精霊の特質から考えても、最前線で仲間を守るのに適している。まあ、これはオレの推測だから、お前がどう考えるかわからないけど」

戦場のポジションであるフロント、バック、センター。その全てが鍛える内容が違う。オレの場合はディアボルガやルカを引き連れながらも、個性的な精霊達が多かったのでセンターで戦うことを決めた。もちろん、その時は精霊達と深く相談して。

オレは俊也の頭をなでる。

「大丈夫だ。お前はもう立派な一人前だよ。これからのことはお前たちで話せ。『ＧＦ』に所属するのか、それともフリーになるのか。はたまた、戦いから足を洗って長閑に暮らすか。お前にはまだ選択の余地があるからな」

「お師匠様はどうなんですか？　もう、選択の余地はないように聞こえましたけど」

「オレは周隊長についていくって決めたからな。あいつの子供じみた願い。誰も失わないという途方もない夢物語。でも、そんな夢物語が実現できる世界を夢見てもいいじゃないか。オレは、オレ達はまだ子供なんだから。夢を追い続けることをしたいんだ。まあ、俊也みたいな精霊召喚師を増やしたいとは思うけどな」

周隊長についていくと決めたからオレは第７６移動隊にいる。本当の意味で救うことを成し遂げたい。そんな子供じみた夢のために。

オレは俊也に背中を向けた。

「これがオレから教えられる最後の授業だ。後は、みんなと話し合え」

『ちょっと待て』

フィンブルドの言葉にオレは振り返った。そこにあったのは頭を上げる最上級精霊達。オレはそれをポカンと見つめていた。

『ありがとう。俊也をここまで導いてくれて』

『キサマノオカゲダ』

『ＧＪ』

アーガイルは人間の言葉を話せないため素振りだけだが、ちゃんと親指を立てた人の手を形取っていた。というか、グレイブのＧＪはないだろう。多分、周なら理解できない。

フィンブルドが笑みを浮かべながら顔を上げる。

『これからは俺達が俊也を見守る。師匠の役目は引き継ぐぜ』

「お前らならオレも安心していられるわけだ。俊也、夏休みの間なら好きに尋ねてこい。相談事ならいつでも乗るぜ」

「ありがとう、ございました！」

俊也の大きな声を聞きながらオレは背中を向けて歩き出した。

オレが育てた生徒第一号ってところだな。こんなにも嬉しいだなんて。

「さてと、浩平でも探すかね」

「呼んだか？」

その声にオレは顔を上げると、そこには枝の上で仲良く二人で座っている浩平とリースの姿があった。

オレは眉をひそめる。

「こんなところで何をしているんだ？」

「いやー、リースとデートしていたらさ、重要そうな場面に出くわしちゃって。で、ここにいた」

浩平が枝から飛び降りる。ちゃんとリースも一緒だ。ゆっくり落下しているところをみると、もう竜言語魔法はほとんど使えるようになっているみたいだな。

オレは本題を切りだすことにした。

「オレに銃の使い方を教えてくれ」

「拳銃？　ライフル？　それとも、精霊銃？　ちなみに精霊銃は扱ったことがないから」

「精霊銃だけど、拳銃型だ。今発注しているものだから先に銃の扱い方ぐらいは慣れておこうと」

「へぇー、悠聖も考えているんだな。対するオレは何も考えてないし」

「そんあことねえよ」

オレの言葉に浩平がきょとんとした。そんなにオレが言うのが意外か？

「お前は竜言語魔法を習得したじゃないか。リースの傍にいたいからって」

二人の顔が真っ赤に染まる。だけど、その手を離すことはなかった。
お似合いの二人だよな。

オレは軽く肩をすくめながら言葉を続ける。

「オレも精霊の力だけじゃなくて、自分の力も頼らないといけないからさ。精霊召喚師の弱点を補うために銃の扱い方を教えてくれ」

「別に銃じゃなくてもいいと思う。剣でも槍でも。どうして銃？」

リースの疑問はもっともだ。精霊召喚師の中には剣を使うものもいる。だけど、オレの場合は少し違う。

「持ち運びにスペースを取りにくいからだな。精霊武器を扱う時に邪魔にならない武器を考えたら真っ先に銃が出てきた」

「なるほど。それなら納得だ。それにしても、最近はサブ武器が増えているよな」

「確かに」

例えば亜紗は新しく二本の小刀を手に入れたらしい。名前は綺羅と朱雀。双子というところからその名前を取ったのだろうけど、どんな能力になることやら。サブ武器じゃないけど、浩平も竜言語魔法を練習している。立派なサブの戦闘技術だ。

本来の武器とサブ武器とを使い分けることはかなり難しいが、それが出来た時はかなりの戦力になる。

「みんな、このままじゃ駄目だと思っているんだろ。狭間戦役を体

験したからこそ、自分の弱点がわかってきている。だから、みんな前に進もうと試行錯誤しているんだ」

「そろそろ、俺もリースも覚悟を決めないとな」

その言葉にオレは不思議そうに首をかしげた。そして、浩平が笑みを浮かべる。

「俺達、結婚するんだ」

「ちょっと待ったー！　お前らまだ中学生だろ！」

「私が『ＥＳ』を抜ければいいだけの話」

「そんな簡単な話じゃねえよ！　そもそも、法律を考えろって、『ＥＳ』を抜ける？」

アル・アジフが『ＥＳ』を抜けて『ＧＦ』に来るのは聞いているが、リースが『ＥＳ』を抜ける話なんて聞いたことがない。

でも、浩平が驚いていないことを見ると、二人で話し合って決めたのだろう。

「私は浩平と共にフリーの傭兵になる」

「つまり、浩平は『ＧＦ』を抜けるのか？」

「まあな。とは言っても、高校くらいになるまで世界を放浪するだけだ。リースと一緒にもっと世界を回りたいと思ってな。俺は力を付けた理由が終わったからゆっくり見てみたいんだ。強くなるため

に走り回っていた世界じゃなくて、自由な世界そのものを」

浩平の目は輝いていた。そんな目を見たオレは何も言う言葉が見つからなかった。

「そっか。お前も将来について考えているんだな。この話は周には？」

「まだしてねえ。帰ってきた時にするはずだ。俺の予想だが、周なら見送ってくれるんじゃないかと思う。推測だけどな」

「あいつは個人が決めたことは尊重するからな。将来、か」

オレもしっかり考えないといけないかもしれないな。こお狭間戦役を通じて見つけたもの、手に入れたもの。それらを守るためにどうすればいいか。

「戦うだけが全てじゃないからな。オレも、考えよう」

アルネウラや優月、そして、大切な精霊達と共に。

第二百三十三話　都の初任務

「えっと、任務、ですか？」

朝早くに呼び出された都が不思議そうに首をかしげる。それを見た孝治がゆっくり頷いた。

「そろそろ慣れてきたころだから一つ任務を任せたいと思って。一応、音姫さんがサポートにつくけど、都さんが主導でやってほしい」

その言葉に都は純粋に驚いていた。確かに、都は第７６移動隊に所属しているが、神剣を持っているという理由であり、任務につくものとは思っていなかったからだ。

孝治は一枚の紙を差し出す。

そこに書かれていたのは終業式の時に周と琴美が話していた規定違反のチラシだった。

「これについて聞きこみの調査して欲しい。本来なら警察に頼んでもいいのだが、周から都さんを出すように言伝を受けていてな」

「周様からですか？　私が主導で」

都は不安だった。不安だからこそ、自分がやっていいのか不思議に思ってしまう。

「一応、今わかっているのは連絡先無し。住所は畑だ。民間警備隊というアイデアは悪くないが、無許可でやられると色々と後任の『

GF』面々に迷惑がかかる」

「わかりました。出来る限り頑張ってみます」

孝治が言った後任という言葉に深い意味はないだろう。でも、都にとっては取っても大きな意味のある言葉だった。

周がこの狭間市からいなくなる。それだけを考えるとやっていけるかどうか不安だ。学園都市内部都島学園付属都島高校が都の受験先ではあるが、半年ほどの間、一ヶ月おきにしか会えなくなるのにちゃんとやっていけるか不安だからでもある。

でも、そうだからこそ、都は受けることを決めた。

「もしもめ事になった場合は」

「自由に対処してくれていい。ただ、怪我人は少なく」

都には前科がある。狭間戦役中に一人を病院送りの重体にしたという戦果が。

ちなみに、そのことで周からはどっぷり怒られていた。

「わかりました。音姫さんは？」

「音姫さんならいつもの訓練場で訓練している。一応、期限は周が戻ってくるまで。周も犯人が見つかるとは思っていないから気楽にして欲しいということだ」

その言葉を聞いて都はカチンときた。そして、不敵に笑みを浮かべ

ている。

「周様は私の人気を知らないようですね。周様が戻ってくるまでに決着をつけます。この私と、神剣『断章』の名にかけて」

「へぇ～、都の神剣は断章って言うんだ。ちょっとカッコイイかも」

「音姫さんこそ。光輝という名前はカッコイイと思いますよ。神と相対すれば光り輝くんですよね」

「うん。神又は神剣クラスのもの。神の力と相対かな」

都と音姫の二人は揃って道を歩いていた。都の手に握られているのは狭間市の地図。ただし、広く丸い円が書かれている。

これは琴美が作り出したものだ。噂や井戸端会議などを盗み聞きしたり、話を聞いて作ってくれたらしい。琴美が言うには暇だったからそうしたとか。

「では、この断章と相対してもですか？」

「多分。ここじゃやらないけど。それにしても、どうして断章って名前？　他にも色々あるんじゃないかったのかな？」

「この神剣の特殊能力なんですけど、『連綿と続く章を断て』という概念が存在するんです。効果は相手の攻撃の無効化。そこから名

前を取りました」

「無効化か。弟くんのレヴァンティンによる相殺空間の形成みたいな感じかな？」

実際には相殺ではなく消滅のなのだが、力を使い続けることで今の状態を維持できることから総裁となっている。消滅といっても発動した一瞬だけで、消滅空間というには少し程遠い。

対する断章は概念の発動により向かってくるあらゆる全てを無効化する。それは、連綿、途切れることなく続いた物事の章、存在を断ち切るという極めて凶悪なものなのだが、都が言うとそうなんだで済ませられる。ちなみに、それを聞いた周の顔が引きつっていたとかなかったとか。

「でも、それの一番の能力は物と物との間に存在する狭間の力を集めて使えるんだもんね。羨ましいな」

「それでも、力が強力すぎてセーブするのが大変ですよ。音姫さんは経験がありませんか？」

「うーん。私は魔術を使えないからわからないけど、暴走している人を止めたことはあるから大変であるとは思えるよ」

「扱う力が多ければ多いほど暴走する危険性は高いものです。ここですね」

都は立ち止りインターホンを鳴らした。そして、しばらくして家の中から人が出てくる。

「はい。あら？　都築のお嬢ちゃんじゃない。どうかしたの？」

「はい。ちょっと探し物をしていまして。このチラシを配った人物についてなんですけど」

都は持ってきていた手帳に今まで集めた情報を全て書いていた。そして、その手帳を閉じる。

「情報はまとまった？」

「すみません。一人でさせてなどおこがましいことをして」

「ううん。都が成長するなら私も嬉しいからね。それにしても、都ってすごいね」

手帳に隙間なく書かれていた内容。その全てが都一人で聞きだしたものだった。ちなみに、音姫は周から重要そうなポイントの連絡先や住所などをすでに聞いていたので前がふさがった時はヒントを上げようとしたのだが、そのヒント以上のことを全て一人で調べ上げていた。

始まった時には朝だったのにすでに時刻は夕方になっている。

「情報、そんなに集めるのは弟くんでも二日はかかるよ？」

「私は地元ですから。それに、琴美が色々と下調べをしてくれたの

で二時間ほど短くなりましたし」

都はすでに犯人の目星を掴んでいた。この目星も全く調査していない周から聞かされていたものと同じだった時は音姫もあいた口が塞がらなかった。

たくさんある情報。その中から正確なものだけを抜き出して理路整然となるように組み立てる。その肯定は周とは違っていても周と似た才能があると思えた。

「では、行きましょうか」

「いいの？　目的地は都の」

都が立ち止まって音姫の方を振り向く。そして、笑みを浮かべた。

「私は第７６移動隊隊員です。しっかり受けた任務は成し遂げないといけませんから」

「わかった。見届けるよ。都のやることを」

都は頷いてインターホンを鳴らす。しばらくして、インターホンに誰かが出てきた。

『はい？　都築ですが』

「お父様。都です」

男の声に間髪いれず都が声を上げる。インターホン越しで息を呑むのがわかった。

『何をしに来た？』

少し怒ったような声。それに対して都はしっかり背筋を伸ばして言う。

「第７６移動隊隊員として事情を聴きたいことがあります。市内で配られた民間警備隊について、お父様が関与していることがわかりましたので」

『な、何の証拠があって』

「チラシを配った短期のアルバイト。チラシを印刷した印刷所。チラシのデザインを考えた絵師。総勢２８名が証言してくれました。お父様。証拠を残しすぎなのでは？」

『ち、父親に対してそのようなことを言うのか！　やはり貴様は鬼の子だ！　帰れ！』

都がその声に目を伏せた瞬間、音姫が助け船を出した。

「第７６移動隊副隊長白百合音姫です。今回の件で話す内容がないなら話は警察の方に持っていきます。もし、そうなれば逮捕は免れないでしょう」

『お、脅すのか？　やっぱり脅すのだな。『ＧＦ』というのは最低の組織だ。このことはちゃんと警察に報告する！　この街の警察がお前らに従うとは思うなよ！』

その言葉と共にインターホンが切れた。音姫は小さく息を吐いて都

を見る。

「都、戻ろう」

「ごめんなさい。最後の最後で手伝ってもらって」

「ううん。弟くんからお願いされているから。それに、さすがに親でもあれはないと思ったし」

「血は繋がっていませんから。音姫さん、警察に行きましょう」

音姫はその言葉に驚いていた。今の言葉を聞いていたのか少し不思議に思ってしまう。

都の父親は警察にも根回ししているように聞こえたからだ。だが、それを聞いてもなお、都は警察に行こうとしている。これだけは音姫も予想外だった。

「警察は難しいかもしれないよ？　さっき言っていたし」

「大丈夫です。今の狭間市警察署のトップは知り合いです。こういう時は国家権力に頼るべきですから」

「うん。都は大丈夫だったよ」

音姫は自分の部屋の中で通信機を片手に周との連絡を行っていた。

今日起きた都の初任務に関する報告を。

『予想はしていたけど、まさか、本当に都築家だったとはな。しかも、あれよあれよ様々な賄賂の証拠が見つかるなんて。都に済まないことをしたかな』

「だと思う。少し落ち込んでいたし」

書類偽造の疑いで家宅捜索に入った警察に対し、都築家はちょうど証拠隠滅を図っていたらしく、あえなくたくさんの証拠を回収された。おかげで大量の賄賂など様々なものが出来上がったという。

『大規模にもほどがあるだろ。書類偽造だけ睨んでいたら、まさかそれ以外の証拠もぞろぞろと見つかるなんてな。警察の認識を改めないといけないみたいだ』

「そうだね。で、弟くん。どういて都を今回の任務に？　他の任務でも」

『身内だからと言って手を抜かないことを見たかったんだ。そして、これはある意味内外に知らせることでもある。『ＧＦ』は身内だろうが関係なく調査すると』

周の目的は予想以上に達成されたと言ってもいいだろう。ただ、いろいろと残る部分はあるが。

音姫は小さくため息をついた。

「うん。そうだね。でも、弟くんは帰ったらちゃんと都の面倒をみること。父親だけが逮捕だと思っていたら、いつの間にか市長から

関係者一同まで芋づる式に逮捕されたんだもの。精神的ショックは計り知れないと思うよ」

『ああ。まあ、明日の昼ごろには着くから都の家に顔でも出す』

「あれ？　予定じゃ明々後日に帰って来るんじゃなかったの？」

『都の調査があまりにも早すぎた』

多分、周の予定では帰ってくる頃にちょうど調査が終わるようにしたかったのだろう。でも、想像以上に早い終了となり、周は急いで帰ることにしたと言うところのようだ。

『ちなみに、亜紗とアル達は明々後日だ。オレ一人先に帰るから、孝治にだけ伝えてくれ』

「了解。もう、そろそろ寝る時間だから切るね。お休み、弟くん」

『音姉こそお休み』

音姫は通信機を切った。そして、小さく息を吐いてベットに寝転がる。

「弟くんが明日帰ってくるのか。都、元気になったらいいな」

第二百三十三話　都の初任務（後書き）

第二章に繋ぐためとして書いたので、自分でも結構酷いことを都にさせているなとは思います。

第二百三十四話　平和な一日

都の初任務。本来なら口頭注意ですませれたのだが、相手側がそれを拒否。国家権力でもある警察が動き相手側、都築家一同を逮捕した。

規模の大きさにも驚いたけど、警察がまさかここまで動いてくれるとは思わなかった。さすがは国家権力。

そして、オレは今、都の家にいるのだが、

「どうしてこうなっているんだ？」

「私に聞かないで」

尋ねた琴美が含みのある笑みを浮かべながら言い返してくる。

都は現在オレの腕の中で眠っている。泣いたのであろう赤い目をしながら。

オレは小さく溜息をついた。

「悪いことをしたかな」

「そうね。絶対に悪いことをしたわね」

琴美の言葉が胸に突き刺さる。

「まさか、父親が犯人だとわかっていながら都に調査させるなんて」

「都だから大丈夫だと思ったんだけどな。本来なら口頭注意で済ませれる内容なのに、向こうが拒否をした。だから、警察というジョーカーを使用した。ただ、それだけだ」

「今更なんだけど、あなた達と警察ってどういう関係？」

オレは自分の頭の中で情報を整理する。今まで考えていたものとかなり違っていたからな。

よくよく考えてみると、

「実働部隊と検察みたいな感じか？」

「警察と検察は似ているけど違うものでしょ？」

「いや、『ＧＦ』は正確には民間警備隊なんだ。ただ、規模が桁違いに大きいから世界的な組織になっているけど。そのシステムとしては傭兵が近いな。近年増えてきた凶悪犯に対する抑止力的な扱い。対する警察は犯人を逮捕する権利がある。『ＧＦ』の場合は現行犯か特殊犯、大きな事件を起こした人物ぐらいしか逮捕する権利はない。まあ、身柄を確保して警察に突き出すという手段は取れるけど」

それをして万が一に犯人と違った場合、『ＧＦ』を罷免された上に犯人扱いした人へ慰謝料を払ってお縄につくという究極コンボを食らう。

実際に、年に数人は出ている。

ただ、それが行われるのは大半が似顔絵のある人物なので、あまり

に特徴が似すぎて警察すら判断出来なかった場合は許される。まあ、慰謝料は払わされるけど。

「『ＧＦ』はあくまで抑止力なのね。警察の全般業務を出来ると思っていたけど」

「実際に、警察がするはずの業務を『ＧＦ』が代わってすることは可能だぞ。法律で許可されているからな。例えば、学園都市なんて全般的にそれが行われている。警察の代わりに『ＧＦ』を使う世界初の試みとしてな」

いくらそれをしたところで犯罪が無くなるというわけでもないのだが。

学園都市では警察がいかに素晴らしかったか認識する『ＧＦ』メンバーがいるくらいだ。ちなみにオレは狭間市で認識した。

「『ＧＦ』が力を持つとするなら、警察は法の力を持っている。『ＧＦ』で入れない場所は警察が入るって感じで補い合っているんだ。中身は表裏一体でも、『ＧＦ』が活躍しすぎて勘違いする人も多い。オレもそうだった」

「でも、将来の夢として警察官を志望する人は多いわよ」

「『ＧＦ』が力を重視するなら、警察は知恵を使う。頭がよくなければ入れないからな。力さえあれば馬鹿でも入れる『ＧＦ』と違って知的な感じがあるんだろ？　それに、『ＧＦ』は戦争をしているイメージも強いし」

正確にはかなり違うのだが。

『GF』が主導で行った戦争はない。ほとんどが防衛戦に参加するなどをして映像に映っているからだ。

それがイメージとして染み付いている。

「そうなんだ。都が第76移動隊に入ることが不安になってきた」

「都は優しいからな。本当は、戦いには向いていないはずなんだ。みんなの前にいる都なら」

そう。生徒会長としてみんなの前で振る舞う都は戦いには向いていない性格をしている。

「だけど、戦いになれば都は平気で禁じ手を使う」

「あなたに何がわかるというのよ。都の何が」

「これでも、一生懸命見てきたんだ。オレは都に惹かれている。亜紗や由姫のように、かけがえのない人物だと思っている。都を見守るのはそんなにおかしいか?」

「おかしいわよ。あなたが来て、狭間市は変わった。特に、都が変わってしまった。別にあなたのことを話すのはいいわ。前と比べれば穏やかになったから」

前と比べればって、聞きたいけど聞けない。

「でも、都は時々戦いの話をするのよ。まるで、もっと戦いたいというように。親友の変化をこの目で見てきた私の気持ちはわかる?

あなたは、都をどこに連れて行きたいの？　都を、どういう風に変えたいの？」

それは親友として心配している言葉だった。オレは眠っている都の頭を撫でてやる。

「オレは都に強くなって欲しい。自分にだ。今の都は自惚れている状況だ。断章という力を手に入れ、弱かった自分が強くなれたと自惚れている。この状況になれば、オレに出来るのは見守るだけなんだ」

「それを語ればいいんじゃないの？」

「そう簡単にいけば若手の天才候補が後遺症が残るくらいの怪我を負わないさ」

そして、悠聖のように大切な人を失わない。

『ＧＦ』が人権団体からうるさく言われている部分にはこれがある。まだ、未成年が大怪我を負って後遺症を残すことがある。しかも、未成年だからか色々なメディアが取り上げる。

悠聖の時はさすがに押しかけてこなかったが。

「力がある自分に酔いしれて、自分が強いと思い込んで、そして、潰れていく。若手によくあることだ」

「あなたの体験談？」

オレは首を横に振った。

「長年、近くにいた音姉を考えてみろ。真っ正面からはもちろん、あらゆる手段を使っても倒せなかったんだぞ。むしろ、相手の強さに関して疑心暗鬼になったくらいだ」

孝治は孝治で程よい緊張感を常に持っていた。切羽詰まっていてもだ。

「都しか乗り越えられない壁なんだ。それを越えられるかどうか」

「都なら超えられる。私はそう信じているわ」

真っ直ぐ見つめてくる琴美に対し、オレはしっかり頷いていた。

オレも同じ意見でもあったから。

「それでも、あなたのすることには賛成出来ないわね。やっぱり、都には私がついていないと」

「過保護だな。まあ、いいさ。そこは自由にしてくれ。お前が自分で決めたならな」

オレはそう言うとその場に寝転がった。都の体を優しく抱きしめると、その体は柔らかく気持ちいい。

「変態」

その言葉にオレは我に返っていた。

「オレは何を」

「完全に犯罪者だったわよ。まあ、そんな犯罪者の腕の中で眠っている都もだけど。周、一つ聞いていいかしら？」

「いいぞ」

オレはそのまま目を瞑った。目を瞑っているといつの間にか眠気が襲ってくる。

「あなたにとって、恋人は何？」

「恋人か。そうだな。ずっと隣にいたい人、じゃないかな」

「それは一人だけよね」

「ああ。そうだな」

だんだん、眠気が、

「あなたは、誰を選ぶの？」

「選べるか」

そして、オレの意識は闇の中に落ちていった。

懐かしい夢を見た。本当に懐かしい夢だ。

『赤のクリスマス』が起きるより前の懐かしい出来事。オレと楓と光が泣かされていた茜を庇っていた出来事だ。

相手は三つほど年上の少年達。その時は怖くて怖くて仕方なかったけど、オレは一番前に出ていた。

そして、いや、やはりというべきか、オレ達は盛大な殴り合いをした。もちろん、オレ一人でボロボロに負けたけど、向こうの大将はしっかり泣かせておいた。

ボロボロになったオレに対して茜は泣きながら尋ねてきた。

『どうして助けたの？』

そんな茜をオレは意外そうに思いながら笑いながら言ったのだ。

『お兄ちゃんとして当然だろ？』

本当は茜の泣いている姿なんて見たくなかったから。オレよりも将来が有望だった茜に泣いて欲しくなかったから。

よく考えると、この時から年不相応な思考を持っていたんだなと思える。

多分、オレの今はここから始まったんだろうな。泣いている姿を見たくなかったから。オレを見てくれる人を。そして、オレが大事な人を。

目を開ける。懐かしい夢を見たオレは清々しい気分だった。

いつもならあまり寝ないのだが、いつの間にかかなり寝ている。大体四時間くらいか？　すでに外は赤くなっている。

「オレは、一体」

「起きましたか？」

その言葉に振り返った。そこには花柄のエプロンを身に付けた都の姿がある。その手にあるのは包丁。

「晩ご飯か？　悪い。邪魔をして」

「いえいえ。周様は晩ご飯を食べていってください。腕によりをかけて作っていますので」

「和食か？」

「フルコースです」

「何の！？」

どうやらオレはまだ寝ぼけているみたいだ。

気を取り直すためにオレは小さく溜息をついた。

「そこまで言うなら食べていく。連絡入れないとな」

「すでに入れておきました。後、泊まるということも」

「計画済みかよ。わかった。今日はゆっくりさせてもらうよ」

オレは笑みを浮かべて降参という風に手を上げた。

急な案件はないから別にいいだろう。それに、都のそばは何故か安心出来る。懐かしい夢も見れたし。

久しぶりの何もしない平和な一日にオレは軽く感謝をした。

第二百三十五話　新たな旅立ち（前書き）

このまま第一章が終わるまでこっちを書き進めます。七月までには第二章に入りたいです。五月に終わるやら六月やら様々な詐欺をやっていますが（笑）

第二百三十五話　新たな旅立ち

レヴァンティンを抜き放ち素早く振り切る。すかさず刃を返して振り払った。

「うーん、まずまずだな。体の調子は」

『そうですね。これなら２９日に本調子に持って行けますよ。それにしても、マスターの力強さが上がっていますね』

「オレが使えなかったのは魔術だ。筋トレぐらいしている。まだ、若干だるさはあるけどな」

簡単な運動なら可能だと勝手に判断して動いているのだが、やはりまだ本調子じゃないか。今は、素振りだけでも、

「無理したら駄目だって私達は何度も言っているけど？」

振り返ってみるとそこにはベリエの姿があった。その背中に担がれているのは一本の杖。

オレは軽く肩をすくめる。

「無理はしていないさ。ベリエこそ、無理はしていないか？」

「大丈夫よ。お姉様やアリエも『ＧＦ』にかなり慣れているし。私が戸惑っているくらい。なんでこんなに順応性高いのよ」

ベリエはぶつぶつ言いながら杖を構える。そして、魔術を発動させ

た。

「魔力を体内に巡らせてみて」

「わかった」

レアスキルは使用せず、体内に魔力を巡らせる。身体強化魔術を使う前によくやることだ。慣れていなければ時間はかかるが、慣れさえすれば簡単に身体強化魔術を使える。

『GF』に入った場合はまずこれを習わされる。

「循環系には異常なしね。後は、今まで使っていなかったから体が魔力にボケている。さっき、体がだるいって思わなかった？」

「よくわかったな」

「魔界じゃよくあるのよ。魔力が濃すぎて久しぶりの戦闘に体が慣れないまま死んでいくのが。ただ、この状態で無理は駄目。訓練も軽めなら大丈夫よ。本格的な戦闘は駄目かな」

つまり、剣を振るくらいなら大丈夫か。白百合流の動きは力任せにトレース出来るけど、腕を痛めかねないしな。

出来るとすれば、魔力をあまり使わない八陣八叉流の近接格闘戦とかか。これは由姫に手伝ってもらうとして、剣を振るのは少し難しいな。

軽めに振って体を慣らしていくしかないか。

「あんたは根っから戦闘しか考えてないのね」

「不安、だからじゃないか？　あの日を、『赤のクリスマス』を知っているからこそ、オレは力が欲しいと思っていた」

「思っていた？　今は違うの？」

オレは頷いた。

「今は大切な奴らを守りたい。ただ、それだけだろうな。そのためには力が不可欠だ」

「力だけが全てじゃないわよ」

「いや、力は必要だよ。それは腕力という意味だけじゃない」

オレは自分の拳を握りしめる。

「努力して得た力が無ければ守ることは出来ない。オレはそう思っている」

確かに、直接的に守るとしたなら魔術などの力が必要かもしれない。実際に力によって理不尽な目に会う人は多い。

実力があれば誰かを守ることも出来るし、自分の身の安全も守ることが出来る。でも、守る手段はそれだけじゃない。

言葉だってそうだ。あらゆる武器よりも最も守ることに特化したもの。言葉一つで敵の全てを止めることだって出来る。

「これからは第７６移動隊も大変になっていくからな。守るためには何だってする」

「でも、私達をどうして受け入れるの？　お姉様もアリエも私も犯罪人。お姉様なんて観察処分で済んだけど、魔界に居場所なんてない。それが知られれば第７６移動隊」

「誰かを犠牲にして世界を救えたとしても、それは世界を救えたことにはならない。世界を救うということは、自分も仲間も知り合いも誰もかも救うことだ」

オレはいつもの言葉を言った。

オレが目指したい未来。

「仲間を見捨てる奴に世界なんて救えない。オレはもう決めたんだ。誰をも救うと。まあ、問題は実力があまりないからな」

器用貧乏だからいくらでも戦う方法はある。でも、その強さはパッとしない。実際に、器用貧乏としては有名だが、強いという方向ではかなり無名だ。

オレが第７６移動隊で戦えているのは一芸特化の面々を動かしているから。

オレはレヴァンティンを鞘に収めた。

「ベリエも無理して第７６移動隊に入らなくていいんだぞ。戦うことを止めてもいいし、浩平とリースみたいに世界を旅することを考えてもいい。ベリエは将来の夢はないのか？」

「えっ？　将来の夢？」

ベリエが驚いたように尋ねてくる。そして、周囲を見渡し、

「えっと、お嫁さんじゃ、だめかな？」

オレは完全に固まっていた。まさか、あのベリエがそんな将来の夢を持っていたなんて。

意外を通り越して驚愕だ。でも、

「いいんじゃないか？　ベリエを大切にしてくれる相手がいるなら」

「うん。魔界じゃ政略結婚とか特性を伸ばすために望まない結婚は日常茶飯事だから。私は、大好きな人のお嫁さんになれたらな」

「いるのか？」

「うん。強くて、カッコ良くて、イケメンで、優しくて、泣き虫だけど、決めたことは貫き通す」

「ああ。刹那か」

ベリエの動きが止まった。そして、頬がピクピク動く。

「どうし、て？」

「オレの知り合いの中でぴったり当てはまったからさ。へぇ～、かなり意外だな。というか、刹那って彼女いたよな？」

「うん。刹那さんと『雷帝』を争った人。幼なじみらしい」

かなりの強敵だ。刹那をその彼女から手に入れようとしたら障害が大きすぎる。

ベリエにはちょっと難しいか。

「私には無理よね。無理。絶対に無理。ううん、こんな奴に相談しなければ良かった」

「刹那に尋ねてみるぞ？　彼女について。もし、別れていたりしたら紹介するけど」

「いい。あんたの手を借りたくないという意味じゃないけど、そんなことで知り合っても私は嬉しくない。知り合うなら戦場かな」

それはそれで難しい注文だよな。だけど、時期がちょうどぴったりか。

オレは小さく頷いた。

「彼女についてはそこはかとなく聞いておくさ。まあ、頑張れ」

「あんたは刹那さんと出会う予定があるの？」

「オレは明日から学園都市に戻った後、アメリカに行くだろ？　アメリカでギルガメシュや刹那と会うからな」

学園都市に行く用事は茜の見舞いと義母さんと義父さんと久しぶり

に食事をするため。
そのために由姫や音姉も一緒に行く。
「そっか。ついにあれの本格的な組み立ての開始なんだ」
「あれってお前には話した覚えがないけど？」
「簡単な推理よ。移動隊の足。そして、今まで無かったもの。結論は結城家」
「そこまでわかっているのかよ」
そこまでというか完全に答えがわかっていた。
オレは小さく溜息をついてレヴァンティンを元の形であるペンダントに戻した。そして、小さく息を吐く。
「まあ、当日まで黙っていてくれたらいいさ」
「別に話す理由なんてないし。あんたに一つ聞いていい？」
「何でもどうぞ」
軽く腕を伸ばしながら頷いた。
剣を振るのを止めて、走り込みでもするかな。
「あんたは誰を選ぶの？」

「ヘビーな質問が来たな」

まさか、そんな問いがくるとは思わなかった。

「今はまだ選べないさ。由姫も亜紗も都も、オレにとっては大事な奴だし、アルとは約束したからな。将来、オレがみんなから一人立ちできたなら、ちゃんと選ぶ。自分で決めて」

今はまだこのままでいいだろう。

でも、いつかは選ばないといけない。その時は必ず決めないとな。

オレは空を見上げながらそう誓うのだった。

第二百三十五話　新たな旅立ち（後書き）

次からはアメリカ編です。こちらも三つほど。周の言う移動隊の足について語る予定です。

第二百三十六話　自由の国

アメリカ合衆国。

はるか昔、何千年以上前から存在する最長の歴史を誇る大国。

別名、自由の国と呼ばれ、『ＧＦ』は秩序の存在。国連は戒律の存在とされ二つの勢力による警備隊が存在していた。

特に、今のオレ達がいるニューニューヨークは『ＧＦ』最大のビルを持つ『ＧＦ』本社がある。

元はワシントンの方にあったのだが、復興の象徴として本社をニューニューヨークに移したのだった。

だけど、オレはその本社にはいない。オレがいるのは献花台が前に置かれている慰霊碑のある公園だった。もちろん、花を携えて来ている。

あの日。七年近く前の１２月２５日。ニューヨークの街は瓦礫の街となった。比喩でもなんでもなく、生存者がたったの六人という史上最悪のテロが起きた場所。

オレも茜も楓も中村もその日、そこにいた。

献花台に花を置く。献花台にはいくつもの花が置かれており、史上最悪のテロを悲しむ人は少なくない。

「もう、六年半か。そんなに経つんだな」

時の流れとは残酷だと思う。まだ幼かったからか、オレも茜も写真の中でしか親父やお袋がわからない。

それに、ここに来ても、ただ、あの事件があったのだとしか思えない。あの時の記憶も薄れてきている。

時々、悪夢として見ることを除けば。

「どうして、こんなに悲しいことが起きたのかな?」

黒いワンピースを身につけらた由姫が献花台に花を置きながら小さく呟いた。その答えはオレも知っている。知っているからこそ言うことが出来ない。

今はただ、悲しむだけしか出来ない。

「こんなことを絶対にさせないようにしないと」

「そうだな。オレ達の目的もそれだ。『GF』は誰を守る。そのための組織だ」

だから、『赤のクリスマス』は繰り返させない。

オレは小さく頷きながら献花台に花を置いた。そして、両手を合わせる。

オレは元気です。茜も元気一杯です。オレ達は精一杯生きています。これから大事な話とか続いて大変だけど、頑張っていきます。お父さん、お母さん。どうか、安らかに眠ってください。

いつの間にか閉じていた目を開ける。アメリカに来た時はいつもここに来るからかかなり無難なこととしか言えない。本当ならもっと話していたいけど、これからの予定もある。

「さてと、由姫、デートにでも行くか」

「うん」

オレの手を由姫が握った瞬間、懐かしい匂いがした。いつの間にか、オレ達の近くにロングコートと帽子を深くかぶり、サングラスをかけた男がいた。

不審者の装備というべきだろうか。その男の手にあるのは花束だ。おそらく、オレと同じなのだろう。

オレは由姫の手を引いて歩き出した。そして、

「相変わらず、美しいな」

その言葉が耳に入り、オレは思わず振り返っていた。

「やはり、歴史に名を残すことは最高だ」

「お兄ちゃん、どうかしたの？」

由姫が首を傾げてオレを見ている。由姫には聞こえていないらしく、もしかしたら幻聴かもしれない。

意識をはっきり持っておかないと。

オレは首を横に振って歩き出した。

「行こう。とりあえず、ニューニューヨーク最大のショッピングモールにでも向かうとしますか」

「みんなへのお土産を買うんだよね？　何を買うの？」

「えっと、孝治、悠聖、浩平、中村、アルネウラ、優月、リースがペアルックの何か」

「いきなりレベル高いね」

総勢七人のペアルックのもの。つまり、同じものは言語道断だし、あいつらのことだから、常に身につけられるものだろう。

浩平とリースに関してはあるものを考えているからいいとして、残りの五人に関しては揃えないといけない。

「ネクタイとかは？」

「確かに孝治と中村は使うけど、孝治は次の誕生日に送る予定らしい。ここは、ゴブレットの銀細工でいいかな」

「いやいやいや、お兄ちゃんの財布の中は大丈夫？」

ゴブレットというのはセレブの中でもトップクラスのセレブ御用達のアクセサリーメーカーで、銀細工のものは桁違いな値段を誇る。

オレはポケットからパンフレットを取り出した。

「孝治のものは視力補正が入るもので、中村のものは術式補助の入るものでいいか？」

「何千万飛ばすつもり？」

由姫が呆れたように言ってくる。まあ、普通はそうなるよな。

「その点なら大丈夫。戦闘補助も可能な銀細工なら本店で９５％オフで売ってくれるから」

それでも７０万くらいするけど。

「時々お兄ちゃんの凄さが桁違いに膨れ上がるよ。仲のいい人でもいるの？」

「まあ、社長とな」

今度こそ由姫は固まった。

「マジ？」

「開発に関して術式を提供したら食らいついてきてな。今では頻繁にメールをする」

「お兄ちゃんの人脈ってどこまで？」

由姫が呆れたように溜息をつくが、オレはあまり気にしない。人脈は出来る限り作っていた方がいいからでもあるから。

オレは由姫の手を軽く引っ張った。

「行こうぜ。さっさとしないと日がくれてしまう」

女の子のショッピングは時間がかかるって言うしな。

「私はそんなに買い物は長くないよ？」

「言い訳は？」

ショッピングモール内部にあったカフェ。その中にオレと由姫はいた。

オレの前にはコーヒー（砂糖はたっぷり）があり、由姫の前には大きなパフェがある。

「本気で反省しているから」

由姫はパフェを口に運びながらしゅんとしつつ答える。

その理由はオレの近くにある荷物の量をみればわかるだろう。

紙袋七個分。由姫の近くには紙袋五個分がある。

確かに由姫の買い物は早かった。一つの店の平均時間は結構短く、即断即決でもあった。

ただし、その量がかなり多い。

「でも、みんなから、女子のみんなから買って来て欲しいリストを全て網羅したら、紙袋九個分に」

「自分用に二個もあるだろが」

オレはそう言いながらコーヒーをすする。

由姫が買ったのは可愛らしい服ばかりだ。試着はしていないが、どれもこれも由姫に似合うものだろう。

一つ気になるのが亜紗の分と言いながら買った紙袋の中身だ。色違いの上下しか入っていない。

「お兄ちゃんはわかってないよ。好きな人の前ではおしゃれしたいんだよ」

「それで、その服装か」

黒いワンピースを着た由姫というのは見たことがない。いつももっと明るい色をしているのに。

まあ、ワンピース大好きというところだけは変わらないか。

「今日は慰霊碑に寄るって聞いたから。というか、その言葉は本気で私の言葉だよね？　どうして学生服？」

オレは自分の服を見た。これこそ学ランというべき服装をしている。

まあ、狭間中学校の学生服をそのまま来ているだけだが。

「ファッション」

「センス悪いよ。ラフな格好で良かったのに。というか、何で長袖？」

「元ニューヨークだから」

オレはそれだけを言ってコーヒーをすすった。由姫は何も言わない。いや、言えない。

この学生服自体が強力な術式が張り巡らされており、下手な防御魔術より遥かに頑固なことや、衝撃に極めて強いことはわかっているはずだ。

どうして、どうしてニューニューヨークに来た時はこういう風に防御性に優れた服装を身につけなければ体が恐怖を覚えてしまう。

それをわかって聞くことは、『赤のクリスマス』について掘り返すことになるのだから。

ちなみに、これでもあまり熱くはない。

「まあ、別に気にしなくていいぞ。それに、オレは気にしていない」

「気にするから。せっかくのデートなのにお兄ちゃんがそんな格好だなんて」

「そうだよな。由姫、次はどこに」

「あれ？　周じゃないか」

その言葉に振り返ると、そこにはアルトと見知らぬ女性の姿があった。

ちなみに、話しかけてきた言葉は英語。こいつは英語もペラペラだ。

つか、完全にデートだよな。

「奇遇だな。というか、お前はドイツじゃないのか？」

オレは丁寧に日本語で返してやった。由姫の顔が呆れたようになるのがわかる。

「少し用事があってね。二人もデートかい？」

「ああ。ついでに、お土産類もな」

オレは軽く肩をすくめながら答える。もちろん、アルトは英語で話し、オレは日本語で話している。

オレは女性の方を見た。どこかで見たことがあるな。

「由姫もそろそろパフェを食べ終わる頃だし、今から再開だな」

「残念。ダブルデートと行こうかと思ったのに。由姫ちゃんも可愛いからさ」

女性の顔がムッとするのがわかった。まあ、当たり前だろう。

「予定を決めているからな。さてと」

オレはレヴァンティンを取り出して紙袋を虚空の中に収納した。ついでに固定化の魔術をかけてバラバラにならないようにする。

レヴァンティンはこういうのが可能だからありがたい。ただし、同時に入れないといけないから大変だ。

「由姫、行くか。お二人はデートを楽しんでおくんだな」

オレは立ち上がり由姫の手を取った。もう片方で紙袋を一つだけ残して持ち上げる。由姫は残った一個を持ち上げる。

「そちらこそ」

アルトの言葉を背中に受けて歩き出す。

「お兄ちゃん、これからの予定でもあるの？」

「何もない。だけど、由姫はオレと二人っきりの方がいいだろ」

「うん」

由姫の満面の笑み。それを見てオレは満足しながらショッピングモール内を歩く。

行く当てはないけど、こういうのも楽しいな。

第二百三十七話　移動隊の足

ニューニューヨークの都市は中心部分はかなり復興しているものの、中心部分からかなり外れた場所では都市というよりも軍事基地とでも言うかのような地形が広がっている。

国連軍と『ＧＦ』の部隊の駐屯地があるからだ。そこの警備はかなり厳しく、『ＧＦ』内の敷地には巨大な格納庫がある。

縦１ｋｍ。横６００ｍ。高さ１００ｍ。

その大きさはニューニューヨークの街並みから見ても異質なほど大きいものだった。

この中では主に開発が行われ、ソードウルフやエクスカリバーもここで組み立てられた。

その中にオレ、由姫、音姉がいた。

「かなり組み上がっているね。このままだと予定には余裕で間に合うんじゃないの？」

格納庫内部にあるとある物。それを見ながら音姉は呟いた。

確かに、外見は９０％ほど組み上がっており、後はほんの少しなのだが、色々と問題がある。

それを知っているオレは小さく溜息をついた。

「艦橋は出来上がっているからそういう風に見えるけど、完成していない部分はかなり多いぞ。フュリアス格納庫とかも完成しているかな？」

あれはそのまま組み立てたパーツをはめ込んだだけだから正確には完成したとは言えない。

完成していない部分を上げるなら、部屋や食堂にトレーニングルームなど必要なものがまだ抜けている。これでもかなり出来上がっている。

オレは第７６移動隊のこれからの足となるものを見上げながら思った。

全長４００ｍ級フュリアス搭載型強襲航空空母。

航空の名の通り、空を飛ぶことが出来る。そして、フュリアスを搭載可能。最大六機だが、エクスカリバー、イグジストアストラル、ソードウルフの三機だけなので十分だ。

これ以上増えないことを祈る。

フュリアスの整備士や航空空母自体の整備士を載せた上に第７６移動隊全員を載せても普通規模の正規部隊も載せれるくらいの容量がある。

後は、飛べるかどうかだけど、そこは音界の技術を流用しまくって、理論上は可能な水域を飛び抜けている。

「お兄ちゃん。これが、第７６移動隊の足になるんだね」

由姫の言葉にオレは頷いた。

移動隊なのに移動が遅いことを逆手に取ったアイデア。まあ、結城家の作り出した航空空母が無ければ完成していないけど。

性能としては悪くはないはずだ。後は、どこまで飛べるかどうか。こればっかりはどうしようもない。

「でも、こんな箱が空を飛ぶんだね」

「箱言うな」

まあ、外見は箱だ。箱に翼とくちばしをつけたと言われても反論出来ない。反論する材料がない。

魔術の力で強引に進むシステムにしているからな。そこは我慢して欲しい。

「いや、箱にしか見えないから。これってお兄ちゃんが考えたんだよね？」

「オレが考えたのは内部構造と出力エンジンだけだ。それ以外は技術者達。出力エンジンも音界の技術者と強力したから正確には内部構造だな」

積載量上限一杯にならないようにいろいろと考えた。最初はフュリアスを八機も載せれる構造だったが、難しいと悟り諦めた。

部屋もゆったりさせることで人数的にたくさん乗らないようにして

いる。

「おっ、来てたか」

「七分の遅刻だ」

オレは聞こえてきた声に振り返った。そこにいるのは時雨だ。その横には秘書のフィルアさんの姿がある。

時雨はにかっと笑みを浮かべながら航空空母を見上げる。

「名前は決めたのか？」

「４００m級フュリアス搭載型強襲航空空母『エスペランサ』」

「中学生だからドイツ語が来ると思っていたら、いやはや、別の言語が来るとは」

意味は確か希望だったと思う。この艦の名前に相応しい。

「完成状況は？」

オレは時雨に尋ねた。エスペランサの組み立てを担当しているのが時雨だからだ。

時雨は険しそうな顔になる。そんなヤバいのか？

「予定より三日早く完成しそうだ」

オレの拳がうなりを上げていた。時雨はギリギリで、いや、余裕の

表情でギリギリで回避する。

かなりいらつく。

「紛らわしいわ！」

「紛らわしくしただけだ。どうだ、見事な演出だろ？」

「一度死にたいみたいだな」

オレはレヴァンティンを取り出し、柄に手を乗せて、

「はぁ、バカみたいだな。もういいよ。余裕で完成するんだな」

「ああ。今回は技術者達の力の入れようがすごいからな」

それはわかっている。わかっているから当分の間無視しようと三人で入った瞬間に決めていた。何故なら、

「出来る。お前らなら出来る。今からお前達はポッシブルマンだ！」

「うっす！」

「そこ！　諦めるな！　諦めるなよ！　どうしてそこで諦めるんだ。ダメダメダメ。君なら必ず出来るから」

はっきり言うならかなりウザイしうるさい。お近づきになりたくない人種達のように思える。

オレは小さく溜息をついた。

「完成させてくれる職人達にはありがたいと思うけど、あれはないわ」

「うん。オレもねえな」

オレと時雨の意見が合致する。予定より早く完成することを考えると本当にありがたいけど、熱すぎる。

オレは軽く肩をすくめた。

「まあ、完成させた暁には『ＧＦ』の新たな顔になるんだよな」

「そういうこと。圧倒的な戦闘能力を誇る第７６移動隊がどんな離れた距離でもあっという間に来るからな。まあ、最近は暇だから出番はなかなかないと思うけど」

「その方がありがたいよ」

むしろ、頻繁にあったらかなり嫌だ。

「『ＧＦ』という抑止力。その力を最大限に発揮出来る航空空母。お前の考えは時にオレ達の斜め上を行く」

「まあ、そのために考え出したからな。どこまで上手く行くかはわからないけど、上手く行くことを祈っているさ」

第二百三十七話　移動隊の足（後書き）

移動隊の足は航空空母でした。ちなみに、第一章で活躍する機会はありません。アメリカ編はこの話について書きたかったからです。アメリカ編は次で終わります。

第二百三十八話　子を見守る親（前書き）

子は第７６移動隊。親は『ＧＦ』総長です。

第二百三十八話　子を見守る親

程良い緊張が会場内を支配している。いや、緊張しているのはほぼ大半なので程良い緊張とは言えないだろう。

だけど、その会場では緊張感がピリピリと肌で音を立てている。まるで、戦場だ。

それもそのはず。今回、このニューニューヨークで行われる会議。それは全勢力による会談だ。

人界だけの勢力じゃない。魔界、天界、音界の代表も来ている。

もっとも、『ＥＳ』代表は名も無き外交官だ。

国連代表トルートン・ユラナス。

『ＧＦ』代表海道慧海。

『ＥＳ』代表シュナ・ハレイ。

魔界代表ギルガメシュ。

天界代表オルグトス。

音界代表ケビン・マクレガー。

基本的に会議を取り仕切るのは国連だ。理由としては、世界最大の国家の集まりである国連が仕切るのは当たり前だそうだ。

実際はかなり怯えているのだが。

「周も護衛か」

「ルーイか」

オレは振り返ることなく肩をすくめて答える。

おそらく、音界代表の護衛だろう。音界代表はかなり緊張しているし。

「お前らのところの代表は大丈夫か？」

「大丈夫だ。問題ない、と言いたいところだが、さすがのケビン外務長官でも人界は初めてだ。緊張はしている。僕だって緊張しているさ。もし、テロリストがいれば」

「心配ない。外にいるのは人界で実力がトップスリーの三人と第一特務に第６６ＳＰ隊だ。本音を言うなら、内部に犯人がいなければ心配はない」

「その内部でも魔王と天王、そして、『ＧＦ』代表に周がいる、か。僕の出番はないな」

「オレの出番もなければいいけどな。だけど、一波乱ありそうだ」

ルーイが不思議そうに首を傾げた。それに対してオレは笑みを浮かべて返し、レヴァンティンをコツッと小突く。

これで準備は万端だ。

「一波乱とは何が？」

「全員の表情を見てみろ」

国連代表は笑みを浮かべ、『ＧＦ』代表は秘書と真剣な表情で話し、『ＥＳ』代表は深刻な表情で怯え、魔王は爆睡、天界代表の天王オルグトスは目を瞑っている。

この中で、国連代表が気になる。魔王はデフォルトだ。

この状況で笑みを浮かべれるのはよっぽどの余裕か、時雨みたいに場慣れした奴だ。

時雨も時々笑っているが、冗談を織り交ぜているからだろう。

「僕からすれば魔王が一番怪しいが」

「ギルガメシュはあれが普通だ。それに、ギルガメッシュは会談になったらちゃんと起きるからな。こういう時は頼りになる」

力という面でも、指導者という面でも。

「周。『ＧＦ』の護衛の数は？」

「外に正規部隊が二つだけ。中にいるのはオレと由姫だけだ。急に言われた割にはよく集めたさ」

「急に？　僕達は一週間前に告知されたが？」

「『ＧＦ』は昨日だ」

昨日、オレ達が格納庫内にある巨大な航空空母を見に行った最中に知らされたことだからだ。

多分、時雨は最初に尋ねても手違いが起きたで済ますつもりだろう。場所も参加出来ないような距離ではなく、用事も何も無かった。

多分、何の会談か悟らせないための布石だろう。

「奴らは何をするつもりだ？」

「国連は恐れている。『ＧＦ』を特にな。『ＧＦ』にある情報収集力は他の勢力の遥か彼方のレベルにある。たった一日で反論出来る材料を集めることは難しい」

それが国連の狙いだろう。つまり、今日攻めてくるのは音界と、そして、航空空母に関すること。

『ＧＦ』という強力な勢力で地域的なものにそれを必要とする時は来ないと言うつもりだろう。

国連代表の顔にあるのは笑みと怯え。この状況になっても怯えているとはよほどのことだ。

オレは軽く笑みを浮かべる。

「さあ、その実力を見せてみろよ。『ＧＦ』総長」

「急な集まりに参加してもらい有り難く思っている」

国連代表の言葉。その言葉に緊張が高まる。ギルガメシュもすでに起きているし、時雨も準備万端だろう。

「今回の件は音界という新たな世界についてのことだ。音界の存在が確認されて数ヶ月。だが、その世界と国交を持ったのは『ＧＦ』と『ＥＳ』だけだ。我らはそれについて質問したい。『ＧＦ』と『ＥＳ』の諸君は貿易による富を独り占めにでもするつもりかと」

「反論させてもらおう」

手を挙げたのは意外にも『ＧＦ』や『ＥＳ』ではなく音界だった。

「外務を担当する私の下には『ＧＦ』と『ＥＳ』だけでなく、ゲート付近の国とも貿易を行っている。今は微々たるものだが、それは独り占めしていないという証拠だ」

議長が止めないということは国連側から何らかの取引があったのだろう。普通は指名されてから言うものだ。

「私達は許可をしていない。つまり、音界との貿易は違法であるとまず最初に言う」

『ＥＳ』代表がチラッと時雨を見た。時雨は目で頷いている。

途中で一気に反論するつもりだな。

「次に、『ＧＦ』の諸君は航空空母となるものを作っているみたいだが、それの必要性について説明して欲しい。君達は地域的な防衛を目的としており、航空空母は必要はないはずだ。最後に、第７６移動隊についてだ。あのような子供達に働かせることについても聞きたい。私達からは以上だ。君達も聞きたいことがあれば述べるがいい」

あくまで挑発するように言う国連代表。会場の雰囲気は困惑しているはずだが、騒ぎがないということは国連の手で操作されているからだろう。

国連は国家にとって絶対に近い存在だしな。

「では、私達が」

時雨がゆったり手を挙げた。

さあ、反撃の時間だ。

「まずは国連代表について尋ねたい。『ＧＦ』へのこの会談が遅れた理由について話して欲しい」

「手違いだ」

やっぱりそうくるだろうな。だから、時雨は笑みを浮かべていた。

「会議ばかりで音界との対応を決めていないからな。そういう認識で納得しておこう」

「この場で言いがかりはよしてもらおうか。そちらこそ、子供の勝手な判断によって街の被害は甚大だったではないか。あれは元からあなた達が情報を受け取りながらも戦力を出し渋ったのが原因ではないか？」

「不毛な争いを続けるなら」

ギルガメシュの声が周囲に響き渡る。それによって国連総長の言葉が止まった。

「私は退出させてもらおう。今回の会議は音界との貿易の協定のはずだ。まあ、百歩譲って国連がこの会場を用意してくれたのだから、国連の質問は受けてもいいんじゃないか？」

「そうだな」

時雨が薄く笑みを浮かべている。それを見た国連代表の怯えが大きくなった。確実にあの二人は打ち合わせをしていたな。

「では、最初の質問の回答から行かさせてもらう。音界との貿易に関してだが、音界との貿易を始めたのが音界の象徴ともいえる歌姫メリルと仲良くなったからでもある。かのエクスカリバーＶＳアストラルソティスとの戦い以降だ。その時は国連代表殿もその場にいたはず」

国連代表は頷いた。あの時は本当に各国の有名人の姿があった。だからこそ、時雨はとあることが出来る。

「最初は貿易というよりもプレゼントみたいなものだ。そして、技

術交換が本格的に始まり、つい再起ほどから貿易が始まったということでもある。つまり、いきなり独占をしたわけではなく、手順を踏まえて貿易を開始したことを理解して欲しい」

「しかし、我々はまだ音界を一つの国と容認して」

「なら、何故ここにいる？　国交というのもそれぞれの国同士、勢力同士が開くものだ。国連が口出しをする場面じゃない」

これで一つ目の質問は完全に封殺。国連が何を言おうとも、向こうの対応が遅いとかその他もろもろで黙らせることが出来る。貿易が違法というなら、国交は国同士がするものだから酷い内政干渉で済ますことが出来る。

切り返しとしては十分だ。オレの考えていた方法と同じでもある。後は、航空空母のことだが、まあ、大丈夫だろう。

特に、資金の点から考えてみれば。

「では、次のことを尋ねたい。航空空母なるものについての見解だ。そんな予算を使う暇があるなら」

「あー、話の途中悪いんだけど、国連側はどうやら勘違いしているみたいで。航空空母に関しては予算を組んでいない」

「へっ？」

国連代表の顔が凄く間抜けな顔になっていた。オレとルーイは笑いを必死でこらえる。もちろん、時雨もそうだ。

誰だって普通はそうなるだろう。あの航空空母の予算は推定で約１２０億ドル。そんな予算を放りだせるのはよほどの大国か『ＧＦ』だけ。

多分、国連は私利私欲に走る『ＧＦ』とでも言いたかったのだろうが、いきなり出鼻をくじいている。

「で、では、一体どこからお金が出ているというのだ！　そんな大金」

「とある個人のポケットマネー。個人名に関しては公共の場なので控えさせてもらうが、推測が出来る人なら簡単に思いつくとは思う」

いろいろとヒントは多い。個人名を公表しないというのは未成年だからと推測できる。そして、そんな大金を持つ大富豪。しかも、ポケットマネーということはよほどの人物にある。そして、ここ最近にあったとある賭けによる大金の取得者。ここまで繋げたら答えは出てくるだろう。

「航空空母は別名４００ｍ級フュリアス搭載型強襲航空空母。第７６移動隊に配属することになっている。何か質問は？」

「な、何故、第７６移動隊に」

「狭間戦役中に中東で起きた『ＥＳ』穏健派本拠地壊滅。それの狙いがわかり、公共の交通手段を使い第７６移動隊は中東に向かったものの、本拠地の陥落より早く着くことが出来なかった。だから、スピードを出せる航空空母の開発に乗り出したんだ。ちょうど、ポケットマネーを放り出してくれた人がいたからさ、その金を使って航空空母は完成した。資金源の人物からの要望通りに第７６移動隊

に配属する条件を呑んで」

これで航空空母に関することは大丈夫だ。後は、第７６移動隊に関して。これだけは時雨の回答に期待するしかない。でも、こいつならちゃんと言うだろうな。

昔、５０年ほど前に自分の親に向かってとある言葉を言い放った奴だから。

「で、では、第７６移動隊はどうする？　あんな子供の部隊を」

「第７６移動隊の設立理由を言ってやろう。あの部隊はな、オレの孫である海道周が考え出したものだ。移動隊という知識はオレ達が元から考えていたものだけど、あいつは自分の仲間たちを集めて独自に部隊を作り上げた。その申請はすでに通り、今では立派な正規部隊の一つだ。オレ達大人はな、子供を守らなければならない」

国連代表の顔が変わる。笑みではなく驚愕に。何かを思い出したかのような顔になっている。

多分、時雨の学生時代の言葉だろうな。

「それは子供がまだ弱い存在だからだ。でもな、そいつらが自分達の足で歩こうとしているのに、それを止めようとする大人がいてどうする！？　時には辛いことや悲しいこともあるだろう。もしかしたら、もう友を失っているかもしれない！」

その言葉にオレの胸が痛む。時雨は知っている。報告していないはずの千春の死を。

「嘆き、悲しみ、苦しむかもしれない。でも、それを乗り越えてこそ、子供達は成長できるんだ！　大人が決めたレールにのみしたがって生きることが幸せなんかじゃない！」

「黙れ！　子供は黙って大人の言うことに耳を傾けておけばいいのだ！　そうしないからこそ、苦しみを味わい、人勢に挫折し、人というレールから外れて行く！」

「確かに失敗して心が傷ついて逃げだしてしまうかもしれない。でも、そんな弱さは誰にだってある。オレやあんたにだって。だけどな、そう言う風に転んで起きてを繰り返して、一つずつ学んでいくんじゃないのか？　失敗の無い人生を歩めば、大人になっても幸せかもしれない。だが、失敗した時には立ち直ることのできないダメージを負うことがある。オレは、そんな風になるくらいなら、まだ可能性の多い子供の内に精一杯やらせたいんだ。苦しみを味わったからこそ、オレはこの場所にいる」

オレは時雨の子供の頃の昔話は間接的に聞いたことしかない。その中で時雨は親から拒絶され、たった一人で生きてきた。その苦しみはここにいる誰にもわからないだろう。

「第７６移動隊はオレからすれば息子みたいなものだ。そんな奴らを見守りながら成長してく姿を見るのが楽しみでしかたない。道に迷った時には手を差し伸べる準備をする。それが親のやることだろうが！」

「うるさい！　都市はの行かない子供を働かせるのは罪だ！　警備員！　こいつらを捕まえろ！」

「生憎だが、言葉で負けたからって実力行使に出るのはまずいと思

うぜ」

慧海の言葉が会場に響き渡った。

関係者の中を突き進む慧海。その前にいた人はまるでモーゼのごとく道を開けて行く。

オレは安心したように息を吐いた。

「音姉、上手く行ったみたいだな」

「うん」

「うおっ」

気配に気付かなかったルーイが驚いたように声を上げた。まあ、オレも気づいたのはほんの少し前だから大丈夫だ。

これに関してはオレが音姉を通して慧海に作戦を立案していたのだ。

「な、何故ここにいる？」

国連代表は本当に驚いていた。当り前だ。外の警備に出ているはずの慧海がここにいるのだから。

ルーイも不思議そうに首を傾げていた。

「簡単だよ。音姉に合図があったらとある重要な情報を持って来るように言ってあったんだ。そして、この会場に誰も入れたくなかった国連側の警備員はもちろん入るのを拒否する。この時点でオレの

作戦が本格的に開始。外と中との連絡を拒否されたら誰だってテロリストの関係を疑うだろ？　音姉はそのまま慧海に報告。慧海はそのまま部隊を連れて突入。邪魔をする警備員を逮捕する形でな。もちろん、現行犯」

「えぐいことをするな」

「褒め言葉をありがとう」

まさか、ここまで成功するとは全く主わなかった。ここで警備員に止められなかったらオレと音姉の位置が変わるだけで、それ以外に変化はない。でも、完全に予想通りに進むとは思わなかった。

同じ内容を離したのか、国連総長の顔は青ではなく赤く染まっていた。

「越権行為だぞ！」

「いやいや。さすがに連絡係を止めてくるとは誰も思わないから。オレらとすれば、大事なＶＩＰの皆さんに危険が迫っていれば危ないと思って、テロの可能性を考慮して、テロリストと関与していたと思われる警備員達を片っ端から逮捕しただけ。まあ、まさか、国連側が誰も通すなと言っているとは思わんし。連絡不足だな」

「貴様、こんなことをしてただで済むと」

「そうかっかしなさんな」

慧海はいつの間にか国連総長を椅子に座らせていた。そして、時雨に小さく頷く。

「これからの警備は第一特務がさせてもらう。議論は大いに盛り上がってくれよ」

その笑みには有無を言わせぬ迫力があった。

第二百三十八話　子を見守る親（後書き）

亜紗の賭け金の使用用途が出てきました。航空空母を作るための資金源を得るためにルーチェ・ディエバイトを起こしたようなものです。

アメリカ編はこれくらいにして小話を挟みつつ、８月２９日を越えれば第一章後半はほとんど終わりになります。

第二百三十九話　記事

周を特集する雑誌は少なくない。

第７６移動隊隊長という最年少正規部隊隊長であり、技術者としても有名。さらには、性格もいいとあって、月に一度はどこかの雑誌に周隊長の名前はある。

だけど、これは特別だろうな。

その雑誌を読んでいた冬華が顔を上げる。

「何これ？」

「オレに聞くな」

オレは小さく溜息をついた。その雑誌、とある零細企業がフリージャーナリストから記事を集めて出しているものだが、今回はフリージャーナリストではなく一冊丸々海道周特集だった。

後半の方になると第７６移動隊の記事も多くなり、オレや孝治の名前も出てくる。

「周ってすごいのね。たった一人の記事で雑誌一冊が完成するとは思わないわよ」

「周隊長は努力しているからな。これくらいしても不思議はない。中身はＮＧＤか？」

「うん。ＮＧＤとＮＧＦの製作秘話が少し。半分くらいは第７６移動隊についてかな」

冬華から記事を受け取りながら中身を見る。そこに書かれているのは第７６移動隊のメンバーを周の観点から見たものだ。

一人二ページずつ。総勢１５名分。エレノア、ベリエ、アリエの名前はない。

「冬華のまであるのか。何々、剣技は我流が多く荒削りではあるが、宝石の原石であり、白百合音姫副隊長の下で訓練をすれば輝くだろう。かなりの高評価だな」

「あ、当たり前よ。私はこれでも『ＥＳ』では最前線にいたんだから。でも、私より悠聖の方がすごいわよ」

冬華の言葉にオレは自分のページを開いた。そこには大きくデカデカと文字が書かれている。

「ふぃ～、見回り終わったよ。あれ？　悠兄は何を読んでいるの？」

見回りを終わらせた七葉がオレの肩に手を置いて記事の中身を見てくる。そこに書かれているのは、

「未来の副隊長候補って、オレには身が重いぞ」

「荷が重い、ですよ。お疲れ様です」

七葉と一緒に見回りをしていた都さんがやって来る。そして、七葉の後ろからその中身を覗き込んでくる。

「お疲れ様。周隊長の奴、オレをベタ誉めじゃないか」

「周様は悠聖さんを高く評価していますよ。悠聖さんが副隊長では無かったのは音姫さんと孝治さんという実力のある二人がいたからだと思います」

「そうだね。悠兄は指揮も上手いし、精霊召喚師としては世界最強だから周兄も期待しているんじゃないかな？」

記事の内容を見ると、オレの強さの理由が書かれてあった。

何事も諦めない勇気。どんな敵にも立ち向かう力。そして、仲間を思う優しい心。

オレは顔が熱くなるのがわかった。

「あっ、悠聖が恥ずかしがってる」

「な、なんのことだかわけがわからないな？」

冬華がクスクス笑ってくる。それに対するオレの声は微かに高くなっていた。これじゃバレるのは当たり前だ。

「そういうことにしておくわ」

冬華がまたクスクス笑みを浮かべる。

オレは小さく溜息をついて次のページを捲った。そこに書かれているのは都さんのこと。

そして、そこにある大きな文字にオレの目が天になった。

「えっ？　私が潜在能力は世界一ですか？」

「だろうな。都さんって狭間の魔力を使えるから、実質無限の魔力があるし、神剣自体も敵の攻撃を打ち消す能力がある。ポテンシャルの高さなら第７６移動隊随一ですよ」

「そうね。都はフォトンランサーを展開しながら近接格闘戦が出来るもの。フォトンランサーを好きなタイミングで打ち出せるおまけ付きで」

本音を言うなら一番戦いたくないタイプだ。しかも、都さんは音姫さんから剣技を習っている。おかげで時々苦戦するくらいだ。

ポテンシャルの高さで言えばずば抜けている。ただ、今はまだ言うほど強くはない。どこまで強くなれるかはこれからだろう。

「フォトンランサーの射出を極めたら雷属性でも練習したらどう？」

冬華の提案は妥当だ。

フォトンランサーはその場に停滞させて指向性を持たし放つ魔術であり、それを応用した電磁砲は距離が短いものの威力は桁違いに高い。

抑止力という点ではフォトンランサーはかなりのレベルだが、威力で見るなら明らかに電磁砲の方が上。

オレも練習しているけど、飛距離がなかなか伸びないんだよな。

飛距離さえ出れば牽制技としては最高だけど。

「雷属性はちょっと。私は収束系が得意ですから、今度は楓さんに収束砲撃魔術を習おうかと」

「出番が少なくなるわね」

冬華の言葉にオレは頷いていた。

すでに砲撃術師は二人いる。そこに都さんも入ったなら開始早々の砲撃によって相手は壊滅するだろう。

「あっ、私のことも書いてある」

いつの間にか雑誌は七葉が読んでいた。そして、自分のページを見ている。

「何々、結界術師としては優秀だが、魔界から来ている二人と比べては劣る。武器も頸線を使うため、乱戦では役に立たない。そうだけど、もっと褒めるようなことを言ってよ」

「ちゃんと読めって」

オレは七葉のページの最後の方を指差した。そこに書かれているのは今後のことだ。

「結界術師として腕はいいから防衛戦に強くしていく。頸線を使った結界防御は範囲が広く性能も高い、か。えへへ、周兄に褒められた」

「現金な奴だな。よくよく考えると七葉と都さんって相性いいよな」

結界防御を使える人は少ない。というか、第７６移動隊で七葉くらいだ。結界防御は発動が難しい反面、半透過性を持ち、術者が許可した魔術を通すことが出来る。

様々な弱点は他にもあるが、フォトンランサーの発動速度から考えて、相性はかなりいい。

「都さん、これからコンビを組もうね」

「周様とコンビが組みたいのですが」

「それは無理ね」

冬華が一刀両断で切り捨てる。

「周の戦い方はオールラウンダー。あなたの戦い方はセンターとバックの両方であるサポーター。フロントも出来ないと難しいわ」

「サポーターって聞いたことがないな」

フロントとセンターを絶えず動き回るのがアタッカーだ。ただ、フロントだけをアタッカーという場合がある。

サポーターというのは初耳だ。

「別名支援要員ね。日本ならこっちの方よ」

「なるほど」

思わず納得してしまう。支援要員（サポーター）というわけか。

「近接に強くなるにはどうすればいいのでしょうか？」

都さんの質問に冬華は呆れたように溜息をついた。

「そういうことは簡単には行かないわよ。そもそも、近接というのは相手との読み合いよ。あなた、ボケッとしていそうだから性格的に難しいんじゃない？」

「冬華って遠慮がないよな。まあ、オレが考える限り、冬華の戦い方は近接に魔術を組み込まないタイプだ。周隊長ならこう言うんじゃね？　まずは自分で考えろ、って。都さんが考えた近接の仕方。それの悪い点を教えてもらいながら変えていく。そういうものだろ？」

「悠兄がそう言うのは意外」

「意外ってなんだよ」

オレは呆れたように溜息をついた。

第二百四十話　幼なじみ

楓の姿が宙に舞った。風魔術によって宙に舞いながら方向を上手く定め、目的地に向かって一直線に落ちる。狙いは、

半額の値札がついた弁当。

商品棚にある弁当を手に取り、楓はもう片方の手で商品棚を勢いよく押してさらに飛び上がった。

そして、楓が光の隣に着地する。

「どう？」

「才能の無駄遣い」

見事なVサインを送る楓に対して光は呆れたように溜息をついていた。

今、二人は調味料が少ないことに気づいて買い出しに来ていた。そこで、ちょうど半額シールが弁当各種に貼られたので、それを狙っての争いに楓が参加したというわけだ。

ちなみに、光は買い物カゴに醤油と味噌を入れている。

「楓って風魔術が得意やねんな。リュリエル・カグラっていう収束砲撃の有名人なのに」

「基本的には光属性の方が得意かな。でも、飛行補助とかは風属性

が慣れている。あっ、光みたいに属性翼は出せないよ」

「うちのは属性翼やなくて『炎熱蝶々』って言うレアスキルや。これでも珍しい能力を持ってんねんで」

『炎熱蝶々』自体はかなり珍しく、光、エレノア以外に二人ほどしか使用出来ない。それくらいに珍しい。

珍しいとは言っても能力的には他のレアスキルに劣りやすい。

「あれ？　楓って飛べるよな？」

「うん。私のデバイス、ブラックレクイエムって言うアリエル・ロワソが開発した人造神剣試作型だから」

「人造神剣？　レーヴァテインみたいな？」

「それはオーバーテクノロジーだから。アリエル・ロワソが言っていたけど、周君のレヴァンティンと光のレーヴァテインは製作時期は大きく違うけど、中のオーバーテクノロジーは似通っているって聞いたし」

「まあ、そうやな」

光は自分のデバイスを見た。

レヴァンティンもレーヴァテインも同じようなオーバーテクノロジーを使っている。その仕組みは周と光、二人の秘密である。

二人共、その片鱗しか見せていないから。

「ブラッククレクイエムと比べれば光のレーヴァテインともう一つのレアスキルの方がすごいよ。私なんてブラッククレクイエムと神剣『カグラ』を持ってから有名になったし」

光は世界でも珍しい二つのレアスキルを持っている。その二つを上手く使いこなすことで光は今までやってきた。

だけど、光は自分の中で自問自答をする。

確かに能力を使いこなせば強力だが、数の暴力で来られた場合、どうしようもない事態が起きることがある。

狭間戦役中でも自爆によって敵を巻き込もうとしたのも同じだ。あの時は楓と冬華に助けられたが、次に助けられるかはわからない。

「もう少し、近接戦闘の練習をした方がいいんかな？」

「どうだろう。光は弾幕を張れるから別に」

「弾幕を張れるだけで勝てないと思っている。違う？」

急に話しかけられて二人は振り返っていた。そこには買い物カゴを手に提げたエレノアとアリエの姿。

光は不思議そうに首を傾げた。

「ベリエは？」

「知らない！」

怒ったようにそっぽを向くアリエが答えたので光と楓は思わず顔を見合わせていた。

エレノアがクスッと笑みを浮かべる。

「今、二人は喧嘩をしているから。私も『炎熱蝶々』を持つから気持ちはわかる。弾幕だけじゃ戦いには勝てないって」

「そういうものかな？　収束砲撃の弾幕を張ったらアリエル・ロワソも近づけないよ」

「それが出来るのは楓だけやから」

光が呆れたように言うが、エレノアも同意見だったらしく頷いていた。

そもそも、収束砲撃は弾幕を張るようなものじゃない。

「弾幕で戦えるとは思わない方がいい。弾幕を張っても周は抜けてくる。私の場合は気づかれないように浮遊機雷を設置するけど、それでも無理がある」

「うちは収束系と設置系は苦手やからな。出来れば、別のがあったらいいんやけど」

「よく砲撃役できたね」

楓は純粋に驚いているが、砲撃系の面々なら何ら不思議がない反応だ。

基本的に、砲撃を行う面々のほぼ全てが収束系を得意とする。対する光はレーヴァテインのコピーを能力解放することで砲撃のようにすることが出来る。

厳密には砲撃とは違うのだが、砲撃ですら相殺する威力のため砲撃にカウントされている。

「収束系と設置系が苦手。得意なタイプは？」

「実は、魔術ってあまり得意やないねんな」

「本当に、よく砲撃役できたね」

砲撃役としては前代未聞ではあるが。

「近接戦闘も苦手やし、どうすればいいかなって」

「召喚とかは？　精霊にフロントを任して砲撃に専念するとか」

「あっ、具現化もいいんじゃない？　私だって風王具現化出来るし」

「あの、具現化ってレベル高いですよ」

ちなみに、具現化は周やアル・アジフですら出来ない。

光は呆れたように溜息をついた。

「ほんま、どうしたらええかなって思ってる。第７６移動隊も砲撃役が入ってきたやろ。砲撃しか出来ないうちなんて」

「そんなことはない！　絶対に！」

落ち込みかけた光に対し、アリエが必死に語りかける。

「私とベリエなんて完全なサポート要員だよ。周お兄ちゃんよりも弱いサポート要員だけど、周お兄ちゃんは私達が活躍出来るように色々教えつける。だからね、えっとね、あれ？　何を言おうとしたんだっけ」

多分、この場にベリエがいたら何かと口出しいるだろうが、ベリエがいない今は誰も何も言わない。

だけど、アリエの言葉は光にちゃんと届いていた。

「そっか。そうやんな。決めた。うちはこのままで行く。楓、収束系教えて。エレノアは設置系。孝治からは近接戦闘を聞く。うちだって足手まといは嫌だから」

「結局手当たり次第になるんだね。でも、光らしいかな。うん、不肖、木村楓が光の教官になるよ」

「お願い。なあ、エレノア。何でアリエとベリエって喧嘩してるん？」

ふと思いついた疑問。エレノアは複雑そうに顔を歪めて、そして、

「ソフトクリームはバニラかチョコか」

「「はい？」」

光と楓、二人の声が重なった。

第二百四十一話　国連（前書き）

『ＧＦ』と『ＥＳ』以外の第三勢力についてです。

第二百四十一話　国連

新聞各社の一面。そこは基本的に興味を引くような内容が書かれる場所で、よほどの大事件が無ければ各社は違うはずだった。

でも、今回は違う。新聞各社の一面は全て同じ。内容は、

『ＧＦ』が国連を圧倒！

だった。中身を読んでも確かにそうなっている。国連が開催した各勢力首脳会談において、『ＧＦ』と『ＥＳ』を糾弾した国連が『ＧＦ』の反論によって全て封じられた。

さらには、国連が用意した警備員が『ＧＦ』の連絡役を中に入れなかったため、テロ未遂容疑で逮捕されたことも書かれている。

二面や三面にはそのことに関する様々な政治家や専門家の意見が乗っていた。

「あれ？　悠人って新聞読むんだな」

「浩平とは違う」

その言葉に僕が振り向くと、見回りから帰ったきた浩平さんとリースの姿があった。ちなみに、二人はちゃんと手を繋いでいる。

「日本の新聞って色々書いているから面白くて。それに、日本のこともよくわかるから」

僕はほとんど中東で過ごしていた。日本語はアル・アジフさんから習ったし、英語もペラペラに話せる。

でも、日本のことに関しては調べるものが少なかった。時々、アル・アジフさんと一緒に日本について行くけど、わかることは少しだし、時間制限もある。

だけど、今は楽々と調べられる。

「新聞って漢字が難しいから目がクラクラするんだよな」

「それは浩平がバカなだけ」

それは僕も同意だ。確かに難しい漢字もあるけど、内容が読めないというわけじゃない。小学生でもギリギリ読めるんじゃないかと思う。

僕は新聞を閉じた。

「それに、お前が一人って珍しいな。普通はアル・アジフかリリーナ、鈴がそばにいるのに」

「孝治さんと光さんが奥にいるよ。楓さんとエレノアさんはまだ見回り中で、リリーナや鈴はアル・アジフさんや亜紗さん、七葉と一緒に買い物。悠聖さんは和樹さんに誘われて遊びに行った。アリエとベリエは訓練中だったかな」

「理解できた。悠人、新聞一部貸して」

「うん」

僕は無造作に選んだ新聞をリースに渡す。リースはその中身を見てパラパラ捲り、そして、返してきた。

リースは今ので新聞を全て読むからね。

「『ＧＦ』の記事が多い」

「仕方ないよ。『ＧＦ』にとって国連は鬱陶しいって言われているくらいだしね。その国連を『ＧＦ』が圧倒したとなれば、色々な人が食いつくと思うよ」

だから、新聞各社が一面にその記事を置いている。

「それって昔からなのか？」

「アル・アジフさんからそう聞いている。『ＥＳ』は国連の手が届きにくい中東を中心に活動していたから国連と仲は良かったよ」

「『ＧＦ』は国連と同じ地域にいる。国連と意見がぶつかり合うのは当たり前。『ＧＦ』自体が最初は傭兵部隊みたいなものだから嫌われていた。でも、増加する犯罪に対して『ＧＦ』の必要性が高まって今の形になった」

「へぇ～、そうなんだ」

「僕達は少し前まで『ＥＳ』だったんだけど」

どうして浩平さんが知っていないのか不思議に思ってしまう。

国連が『ＧＦ』を嫌っているのは子供だって知っていることだし、その理由も知る人は知っている。

「というか、国連ってどうやって出来たんだ？　『ＧＦ』や『ＥＳ』の歴史は聞いたことがあるけどさ」

「リースは知ってる？」

「知らない」

リースも首を横に振ったから答えられる人はここにはいないだろうな。誰が知っているだろうか。

その時、入り口が開く音がした。僕達が振り返ると、そこには入り口から入ってきた琴美さんが周囲を見渡している。誰かを探しているようだ。

「悠人、都はいる？」

「都さんは今日非番だけど」

「あちゃ。まあ、約束はしていなかったしいいとするわ」

琴美さんが小さく溜息をついて背中を向けて出て行こうとする。その背中にリースが声をかけた。

「琴美は知ってる？　国連の成り立ち」

「成り立ち？　リースは知らないの？」

リースはコクリと頷く。それを見た琴美さんは小さく頷いた。

「わかったわ。暇だったから都を探していただけだし、ちょっとした歴史の授業でもするわ」

「国連の始まりは第四次世界大戦の後よ。第四次世界大戦前はそれぞれの地域に分かれて連合を作っていた。だけど、それぞれの思惑から世界が分裂し始まった第四次世界大戦を繰り返さないためにヨーロッパ連合のマイザー・ハウゼンが提唱したの」

マイザー・ハウゼンの名前なら聞いたことがある。慧海さん達と同じ旅の仲間で、人気もかなり高かったらしい。

第四次世界大戦の話は有名だけど、その後はかなりごたごたしていたから歴史が少し途切れたところもある。

「第四次世界大戦で主導で戦争を止めた日本、サウジアラビア、アメリカの三国をトップに起き、その下に様々な連合を一つにしたのよ。今では各国が平等だけど、今でも日本、サウジアラビア、アメリカは特殊権限である拒否権があるわ。まあ、日本とサウジアラビアは一回も使ったことがないけど」

拒否権の話に関してはかなり有名だ。アメリカは気にくわないことに拒否権を使いまくっているが、日本やサウジアラビアは一度も使っていない。

日本は特に拒否権に関しては否定的でもある。

「国連の目的が第四次世界大戦に匹敵する戦争を起こさないため。そして、犯罪者の勢力に対して一致団結して戦うため。まあ、昔は『ＥＳ』に突撃しようとしたけど」

『赤のクリスマス』のすぐ後に国連軍が『ＥＳ』に矛を向けたことがある。この時はアリエル・ロワソと全く関係のない勢力だったため、『ＧＦ』が両者を止めたことでも有名だ。

「国連が無ければ世界はもっと混乱しているわよ。貿易の枠組みや経済の枠組みを組み立てているのは国連だし、新聞じゃ悪者みたいに言われているけど、実際は必要な組織よ」

「へぇ～、国連って優秀な組織だったんだな。初めて知った」

「『ＧＦ』が強すぎるだけよ。国連は縁の下の力持ちだし。国連の話はこれでおしまい。私は都を」

「あれ？　どうして琴美がここにいるんですか？」

入り口には今日非番なはずの都さんが麦わら帽子を被って駐在所に入ってきた。そして、ハンカチで流れている汗を拭く。

「都を探してここに来たのよ。まさか、非番だとは思わなかったわ」

「今日は家でゆっくりしようと思ったのですが、暇だったので」

琴美さんがクスッと笑みを浮かべる。僕も思わずクスッと笑みを浮かべた。

どうやら、二人は本当に仲がいいみたいだ。

僕は新聞を開ける。そこに書かれている内容を見ながら僕は少しだけ物思いにふけった。

８月３０日のことを考えながら。

幕間　海（前書き）

久しぶりの幕間です。その場にいるはずなのにほとんど出ないキャラもいますが。

幕間　海

「海だぁー！」

眼前に広がる広大な海。そこに向かって悠人は叫んでいた。

それをオレ達、特にリリーナと鈴は呆れたように見ている。

まあ、周囲の目がこっちに向いていることを除けば悪くはないだろう。

「ねぇ、リリーナ、鈴。海だよ海。うわぁー、初めて海に来たよ」

「あれ？　海道君、みんな海に来たことがあるって聞いていたけど」

「悠人が海に初めて来たとは思わなかった」

オレは呆れたように溜息をつく。

今、ここにいるのはオレ、悠人、悠聖、亜紗、由姫、アル・アジフ、都、琴美、冬華、優月、リリーナ、鈴、和樹、俊輔、委員長の１３人だった。

孝治が、興味ない、と言い、中村が、孝治が行かないならいかん、と言い、楓が、海はちょっと、と言って辞退。

エレノア達はそもそも許可が取れなくて、浩平とリースは二人で行くと言い出した。

「それにしても、海は久しぶりだな」

「そうなんだ。海道君のことだから海はよく言っていると思うけど」

「海岸での戦闘なら何度も体験したことはあるさ。ただ、遊びに来るのは久しぶりだ」

前に遊んだのはいつのことだろうか。確か、とある孤島にテロリスト集団が基地を作っていたのでそれを制圧した時に遊んだくらいだ。

あのガチンコ水鉄砲戦はヤバかった。みんなが本気で水を操るから水鉄砲戦というより魔術合戦になったっけ。

「なあ、周。オレは珍しく落ち込んでいるんだ」

「そうなのか？　というか、お前に呼び捨てされるのは久しぶりだな」

悠聖の顔は真っ青だ。体調でも悪いのか？

「何で全員の水着がオレや和樹、俊輔を除いてスクール水着なんだ!？　これはこれでおいしいけど、やっぱりここは周囲の人がつけているような水着だろ!？　ビキニとか、ビキニとか、ビキニとか！」

「そうか？　スクール水着で十分だろ。委員長達がビキニを買ってもすぐ買い換えるだろうし。それに、急だったろ？」

オレはほんの数日前のことを思い出していた。

「はぁ？　全員に休暇？」

オレはレヴァンティンから流れてくる音声に驚いていた。

周囲で書類作業をしていた亜紗と都が顔を上げる。

『国連の作戦に対してお前が取った作戦が有効だったからな。だから、その報酬だ』

「いやいやいや、街の警備はどうするんだよ？」

『第一特務から出す。のんびり田舎で過ごせってな』

オレは小さく溜息をつく。

休暇が出来ることは普通に嬉しい。書類作業もさほどの量は無く、もうすぐで仕事がかなりなくなる予定でもあった。

「日にちは？」

『そうだな。明後日か明明後日だな。どっちがいい？』

全員のスケジュールを通話をしながらレヴァンティンで確認する。

明明後日はちょうど訓練の日で仕事も多い日だ。

こういう時にすることは、

「明明後日。重要書類は明後日までに完成させればいいから」

『わかった。明明後日に休暇だ。思う存分羽を休めろよ』

通話が切れてオレはレヴァンティンを机の上に置いた。

「レヴァンティン、メール通達。明明後日の８月１４日は全員で休暇。思う存分羽を休めろ」

『それにしても急ですよね。もう少し早くあっても良かったのですが』

「爺共が許可を出さなかったんだろ。多分、人権団体を動かしたな。亜紗も都も聞いていただろうけど、明明後日が休暇に」

「海道君、海、海に行こう！」

急に現れた委員長にオレは驚いていた。いつの間にやって来たんだ？

委員長はオレの机に身を乗り出してきている。

「海？　何で？」

「夏と言えば海、なんだけど、私は新しい水着を買っていないからスクール水着かな」

オレは目が点になるのがわかった。とりあえず、小さく溜息をついて少しだけ考える。

「そんなこと聞いていないけど、海は悪くないよな。泳ぐだけなら

十分気休めにはなるし。亜紗と都はどうだ？」

『スクール水着しかない』

「私もです。最近よく成長して」

『羨ましい』

この時期は成長する人は成長するからな。背の高さとかは特に。

別に否定的な意見じゃないから海は行ってもいいな。

「レヴァンティン、明明後日の海に行くメンバーを募ってくれ。人数的にはあまり多くないはずだし」

そして、今に至る。

「ちくしょう。もう少し時間があれば」

「だが悠聖。俺はスクール水着にしかない魅力があると思うぜ。特に、ななとかリリーナちゃんに鈴ちゃんは」

「いや、都さんや琴美さんのダイナマイトボディも悪くはないな」

「何を言う。女の子はやはり平均だ。俺はアル・アジフを押す」

こいつらが何の話をしているかわからないが、とりあえず近づいていたら嫌な予感がするから離れておこう。

オレは一番近くにいたアルに近づいた。アルは何故かスクール水着だ。本当に何故か。

アルがオレに気づく。

「ど、どうじゃ？　亜紗に手伝ってもらって作ったのじゃが」

「可愛いけど、どうしてスクール水着？　アルは無理やり合わせなくても」

「いや、我はそなたがスクール水着好きかなと想像して」

「別に泳ぐから何でもいいと思うけど」

オレが純粋にそう言うとアルは何故か驚いたように目を開いて、そして、膝と手を地面についた。

何故か亜紗がオレに向かってグッと親指を立てている。

「亜紗さんはえげつないことをしますね」

『抜け駆けは許さない』

オレは小さく溜息をついた。

「ったく、早く泳ごうぜ。時間は有限だからな」

プカプカと海に浮かぶ。こういう風にゆらゆら揺れる海の中にいるのもいいかもしれない。

燦々と光り輝く太陽の光りを見に浴びながらオレは魔術を使った。絶対に沈まないようにしながら寝る体勢になりつつ、オレは腕を伸ばした。

海はこういう風に気楽に浮かんでいるのがいい。

「こういう時もいいよな」

「兄さん」

その声にオレは魔術を止めて足を完全に海の中に入れた。振り返ればそこには由姫と浮き輪をしたアルの姿がある。

「アルって泳げないのか？」

その言葉にアルの顔が赤くなった。

「わ、悪かったの。我はこれで十分じゃ。それに、泳げなくても別に困ることはないからの」

まあ、浮かぶことは出来るだろうけど。あっ、今はアル・アジフを持っていないからアルは魔術が使えないのか。納得納得。

「兄さんならアル・アジフさんを泳げるように出来るかなって思っ

て。ほら、急流とかで戦う時とか」

「そんな機会はまずないし、泳げなくても大丈夫だけどな」

魔術で浮かぶことが出来るからでもある。

だが、オレはアルの手を取った。泳げなくてもほとんど支障はないが、やっぱり泳げる方がいいだろう。もしもの時を考えて。

これからオレ達は活動範囲が広くなる。もしかしたら、海上の戦闘があるかもしれない。

「教えてやるよ。由姫も手伝ってくれよ」

やるとすれば顔に水をつける練習からかな。これが出来ているなら色々やりようはあるけど。

「わ、我は泳ぐのは別に」

「兄さんと泳ぎたくないのですか？」

由姫、その言葉は一番卑怯だと思うぞ。

「わ、わかった。周、教えてくれ。我は由姫に勝つ」

「無理だと思う」

由姫は一緒に競争したくないほど速いから。

アル・アジフさんが周さんに泳ぎ方を教えてもらっている。頑張って顔をつけてのばた足だ。その光景を見ていると本当に微笑ましい。

そして、後ろの光景は、

「はい、名古屋城」

「鈴、すごいね。こんなの作れないよ」

砂のお城が三つ作られている。右から順に、熊本城、姫路城、そして、今作り終わった名古屋城。

はっきり言って、やけにリアルすぎて怖いくらいだ。

というか、どうして海に来たのにお城なんか作っているのだろうか。

「リリーナ、鈴、泳がないの？」

「「何で？」」

二人の声が見事に重なる。

「私は泳げないだけだし

「塩水を飲んで何が楽しいのかな？」

「リリーナの考えは間違っているよね！？　というか、海水は飲む

ものじゃないよね！？」

海に来たら普通は泳ぐものだと思うんだけど。この二人からすれば海には入るものじゃないらしい。

僕が泳ごうとしたら二人に止められたし。

「リリーナ、次は何を作る？」

「うーん。イグジストアストラルでも作る？」

「うん、頑張ろう」

難易度が桁違いに高いように気がする。というか、イグジストアストラルを砂で作ることは絶対無理だと思うんだけど。

僕は小さく息を吐いて立ち上がった。二人は作戦会議をしているのか僕に気づかない。

そのまま歩き、みんなの荷物が置いている場所に向かう。そこなら誰かいるだろうから誘って泳ぎにでも行こう。

「うん。で、何が起きているの？」

僕の目の前には首から下が地面に埋まった悠聖さんと和樹さんの姿があった。顔の向きからして真下に体がある。

そばには爽やかな笑顔がとても怖いアルネウラさんと七葉さん。グラウ・ラゴスと優月さんが呆れたように溜息をついている。

「何が起きたの？」

僕は優月さんに話しかけた。優月さんは苦笑して、

「悠聖と和樹さんがナンパをしていて、それを見つけたアルネウラと七葉が」

「グラウ・ラゴスの力を使って地面に埋めたってことかな。どうしてナンパ？」

「「海だから！」」

二人の声が見事に重なる。

意味はわからなくもないけど。

『反省の色が全くないよね？　このまま口元まで埋めようか』

「それいいかも。グラウ・ラゴス、お願いでき」

「「オレ（俺）が悪かった！　だから、それだけは止めてくれ！」」

さすがに口元まで埋めたら死にそうだしね。必死になるのはわかるよ。悠聖さんも苦労しているんだな。

「アルネウラ、そろそろそれくらいでいいと思う。飲み物を買いに行った二人も戻ってくるし」

『だめ。浮気した男は死にそうな目に合わないと反省しないんだよ』

アルネウラさんの周囲に黒いオーラが纏われているような気がする。
リリーナと共通したものがあるような。

「お待たせしました」

都さんが腕一杯に缶ジュースを抱えてやってきていた。そして、その缶ジュースを荷物の置いているブルーシートの上に置いた。
都さんはその中から四つだけを手に取る。

「私は周様に渡しに行きますね」

『都、亜紗はどうしたの？』

そう言えば亜紗の姿が見当たらない。アルネウラさんの言葉だと、都さんと一緒に飲み物を買いに行った感じだけど。
都さんは小さく苦笑した。

「亜紗さんなら今頃ナンパされていますよ。私は、もう決めた殿方がいますので、と言って亜紗さんをスケープゴートにしました」

「それ、駄目だよね」

僕は呆れたように溜息をつく。そして、ブルーシートに置かれたジュースを三本無造作に掴んだ。

「じゃ、僕は鈴とリリーナに渡してくるよ。二人共、真剣にイグジストアストラルを砂で作ろうとしているから」

「イグジストアストラルって、鈴さんの乗る機体だよね。砂で作れるのかな？」

『優月、そこに行こ。悠人、案内して』

「うん。いいよ」

僕はジュースを腕に抱えて二人がいる場所に向かって歩き出した。

「ぷはっ」

アルが水から顔を出した。オレはそれを見て小さく溜息をつく。

「どうじゃ？」

「由姫、習い始めてたった２０分ほどで素潜り１０ｍ出来るか？」

「私は１０ｍも出来ないですよ」

アルが胸を張りながら誇らしげにしている。

最初、水に頭をつけて出す練習をした後、クロールを教えたところ、簡単に出来た。そして、簡単に素潜りをしたのだ。

本音を言うなら頭が少し痛くなる。

「本当は泳げたんじゃないよな？」

「何を言う。水なぞ怖くてそんなこと出来ぬわ。周がいたから、泳げたようなものだしの」

アルが顔を赤くしながらそっぽを向く。この仕草はかなり可愛いと言えるレベルだった。

オレの頭を由姫が軽く叩いてくる。

「見とれないでください。アルさんも泳げるようになりましたし、岸まで競争します？」

「バカ言うな。泳げるようになったアルが競争したら足がつるだろ。今はゆっくり泳ぐぞ」

「周様～！」

その声に振り向くと、都が杖を背中に担いで海の上を座りながら移動していた。その手にあるのは四本の缶ジュース。

オレは水の中に空気の層を作り出してそこに乗る。そして、浮かび上がった。

「別にここじゃなくてもいいだろ」

「いえいえ、海の上だからこそいいのですよ。由姫さんやアル・アジフさんの分もありますよ」

「ありがとうございます」

「感謝する」

由姫が重力球を作り出し、そこに腰掛けた。アルも同じ場所に腰掛ける。

「それにしても、周囲の視線がすごいですね。海の中に潜りたくなります」

まあ、海の上で飲み物を飲もうとしているしな。誰だって視線を向けるだろう。特に、三人共魅力的なのだから仕方ない。

オレはふと思った。

「都、亜紗は？」

「スケープゴートです」

「はぁ？」

わけがわからない。

「ナンパしてくる人が鬱陶しかったのでスケープゴートにしちゃいました。亜紗さんもまんざらでは無かったので」

「後で恨まれるな。うん？」

缶ジュースの中身を口に入れようとした瞬間、波と波の隙間に人の手が見えたような気がした。

もがいているような。

「由姫」

オレは缶ジュースを由姫に渡すとそのまま足場を作り出して空に飛び上がった。

レヴァンティンが無いからか足場は安定しない。でも、飛び上がったオレの視界には溺れている女の子が映った。

すぐさま足場を蹴って最短の距離で向かう。

必死に伸ばされた腕。その腕に向かって全速力を出す。だけど、オレがその腕に向かって手を伸ばすより早く、女の子の体が波に呑まれた。

「マズい」

水中での魔力拡散率はかなり低い。速攻で見つけないと。

『天空の羽衣』を展開して海の中に突入する。水の中を掻き分けてありったけの魔力を周囲に拡散させた。

拡散させた魔力が散っていくが、微かに反応を捉える。

すかさず水魔術で女の子の周囲の水を飲んだら空気に変換されるようにし、風魔術で道を開いた。

腕を伸ばし、女の子の手を掴む。そして、そのまま引き寄せた。引

き寄せて海面に向かって浮上する。

「ぷはっ」

オレは水中から顔を出した。女の子の顔もすぐに水中から出てくる。

「けほっ、けほっ」

オレはホッと息を吐いた。どうやら間に合ったようだ。多分、ほんの少しでも見つけるのが遅かったなら大変なことになっていただろう。

オレはしっかり女の子の体をもう少し高く上げる。

「海岸まで我慢してくれ。今はオレの魔力も空だからな」

オレは波を掻き分けて海岸に向かって泳ぎ出す。魔術が使えたならもう少し楽なんだけどな。

そうしていると、オレの体が海上に浮かび上がった。もちろん、女の子も一緒だ。

「由姫、助かる」

「早く向かいましょう。今はよくても容態が急変するかもしれませんし」

「そうだな。レヴァンティンが無い今、ここにいても意味はない。都とアルは？」

「二人なら先に海岸に向かいました」

「了解」

このまま海岸まで向かえばいい。それで、この子は助かるだろう。

オレがホッと息を吐いた瞬間、何かの影が覆い尽くした。オレと由姫が振り返った先にあったのは、少し大きな波。

無機物だから気配が無く判断するのが遅れた。

間に合わない。

そう思った瞬間、迫り来る波が凍りついた。そして、その場から動かない。

「全く、最後まで油断しないことね」

その言葉と共に腕の中にいた女の子が誰かに抱き上げられた。そちらを振り向くと、フェンリルの背中に乗った琴美が女の子を背中を上げていた。

オレはホッと息を吐く。少し安堵しながら。

「本当に、助かったよ」

オレンジ色に染まる車内。その中で、オレと冬華は隣り合って座っ

ている。周囲には死屍累々の表現が近い状態になっていた。

「ふふっ、可愛いわね」

冬華の言葉にオレは頷いていた。場所はすでに電車の中。狭間市に向かい帰っている最中だった。

冬華が見ているのはオレの隣に座っている優月とアルネウラだろう。二人はお互いに体を寄せ合い、優月はアルネウラの肩に、アルネウラは優月の頭にお互いの頭を乗せている。

「向かいの席はさらにすごいけどな」

疲れ果てたのか周や亜紗ですら寝ている。由姫、アル・アジフ、都さん、琴美さん、委員長。さらには七葉までもが一列に座って寝ている。本当に子供だ。

「まさか、周が疲れ果てているとはな」

「溺れた女の子を助けるために頑張っていたからな。今まで貯めていた魔力を全放出してまで」

「死ぬ可能性があるのによくやるわ。悠聖、一つ聞きたいことがあるんだけど」

冬華が自分のスケジュール帳を取り出した8月のページを開いた。

「8月29日。悠聖、周、由姫、亜紗、都、アル・アジフ、孝治、光、音姫、楓の十人がアメリカ出張になっているわよね。どうして？」

「そうだな」

オレは周囲を見渡した。和樹と俊輔が喧嘩をして、悠人達も眠っている。これなら大丈夫だろうな。

「実はな、２９日に」

聞こえてきた大声は電車内にいた誰をも振り向かせるには十分だった。

幕間　海（後書き）

次は8月29日に移ります。そして、第一章最後の模擬戦に。

第二百四十二話　8月29日（前書き）

第一章最後の戦闘に向けてです。

第二百四十二話　8月29日

レヴァンティンを鞘から抜き放つ。そして、軽く振り上げた。柄を両手で握りしめ、振り下ろす。

白百合流衣斬り『風迅一閃』

放たれた刃は正面に立つ由姫を通り越して空き缶を空に弾き飛ばした。空き缶が地面に転がる。

「よし。習得だな」

「やっぱりお兄ちゃんはすごいな。この大一番の前で完全復調するんだから」

「そうか？」

オレはそう言いながら周囲を見渡した。そこにいるのは様々なマスメディアや各国の官僚だけじゃない。抽選で選ばれた世界中の『GF』隊員がいた。

そこにいる全員には集まってもらった理由はまだ告知されていないはずだ。

レヴァンティンを鞘に戻す。

「サブの理由が航空空母の御披露目だからな、マスメディアとしては力が入っているだろう。でも、これは一種の抑止力が入ってくる」

「そうなの？」

「どこまで第７６移動隊が戦えるか。あの部隊を相手にどこまで戦えたかによって航空空母を持つ第７６移動隊の戦力価値が変わる」

航空空母という圧倒的な機動力とエクスカリバーという広域を高速で移動出来る機体。そして、第７６移動隊の戦闘能力。

それが噛み合わさった時、下手な行動は打てなくなる。

「まあ、今回の作戦の要は由姫、亜紗、音姉だしな」

「大丈夫かな。というか、お兄ちゃんの作戦が外れた場合は」

「秒殺だろうな。まあ、気にしても仕方ない。亜紗、終わったか」

オレは小さく笑みを浮かべて気配を隠してやってきた亜紗に声をかけた。オレの背後で亜紗がビクッとなるのがわかる。

本当はオレを驚かせたかったんだろうな。

「で、何故にリコまでいるんだ？」

オレは振り返りながら尋ねた。リコはたははと笑っている。

「あたしはこのアメリカ『ＧＦ』だから。ちょうど休みだったし亜紗と周ちゃん、そして、由姫を応援しに」

『本当は来なくていいって言ったんだけど。そんなに興味深い戦闘は見逃すわけにはいかないって。会場には入れないのに』

今回会場に入れるのは招待した人達だけだ。残念ながら、リコは招待されていない。それは人物名簿を覚えているからわかる。だから、来た理由は一つ以外には思いつかない。

「そんなの関係ないよ。みんなはまだ会場に入っていないから。あたしが言いたいことは一つだけ。亜紗も由姫も強い。それはあたしが証明する。だから勝って」

「オレはいいのかよ」

「周ちゃんはあたしに絶対勝てるからいいの。むしろ、負けちゃえ」

「酷いな」

オレは苦笑する。やっぱり、リコは応援に来てくれた。会場に入るだけが応援じゃない。

現に亜紗と由姫はリコの言葉にしっかり頷いている。

「亜紗もリラックスしてね」

『うん。絶対にあの技を成功させるから』

「あの技？　何か秘策でもあるのか？」

オレは首を傾げる。亜紗が使う剣技の中に難易度が極めて高い技なんて、一つだけあった。

たった一撃で七回転がしながら八回倒すという究極の剣技が。あの

技が使えるようになれば音姉ですら対処出来ないだろうな。

「兄さん。何かありました？」

「いや、あの技だとしたら、成功したら大騒ぎだぞ。トトカルチョの比じゃない」

『私は、周さんのそばにいなくても一人でやって行ける。そのことを証明するための力だから』

その技を使えばマスコミが黙っていない。だけど、亜紗はそれをわかっていて使う覚悟を決めたみたいだ。

オレは軽く両手を上げる。

「わかった。でも、無理はするなよ。さてと、会場に入ろうぜ。リコ、ありがとな」

「どういたしまして。みんな、勝ってきてね」

「ああ」

オレ達は歩き出す。リコは手を振っているが、オレ達は背中を向けながら会場の中に入った。

会場内はすでにピリピリしている。

今日のイベントが行われる会場はルーチェ・ディエバイト本戦の場所と同じだ。航空空母の御披露目と、第７６移動隊の簡単な模擬戦が行われる。

ちなみに、観客席にはメリルやルーイなど、音界の面々も招待している。

オレ達は廊下を進み、第７６移動隊専用の控え室の前までやって来た。そして、入り口を開ける。

控え室に入ると、そこにはガチガチに緊張しながら座っている都が真っ先に目に入った。アルと楓もある程度は緊張しているみたいだが、都ほどじゃない。というか、緊張しすぎで手が震えている。

「準備体操は終わったか？」

エネルギーバッテリーの確認をしている孝治がこちらに顔も向けずに尋ねてくる。オレは小さく頷いた。

「まあな。悠聖は？」

「大丈夫だ。簡易召喚（インスタント）から高速召喚（アドバンスド）までいつでも出来るぜ」

「そのインスタントやらアドバンスドやらはわからないけど、準備が出来たことはわかった。後は」

音姉と中村は聞かなくても大丈夫だろう。オレ達と同様に修羅場をくぐり抜けている。でも、都だけは違う。

都はまだ模擬戦には慣れていない。

「し、周様？　ど、どうかしました？」

緊張からかやや早口かつ高い声になっている。オレは都の隣に腰を落とす。そして、都の頭を胸に寄せた。

「オレの心臓の音を聞け」

都ならわかるだろうが、微かに鼓動が早くなっているはずだ。都はさらに早くなっているが。

都が目を瞑ってオレの鼓動に耳を澄ませる。

痛いまでの殺気が体に突き刺さるがオレは気にしない。気にしたら負けだ。

「周様の鼓動はやや早くなっていますね」

「オレだって緊張するさ。少しは落ち着いたか？」

「はい」

都はゆっくりオレから離れた。そして、自分の手のひらに断章を取り出す。

「私は、大丈夫です。みんなから教えてもらった技を使います」

都が断章を握りしめると同時にドアがノックされた。時間的にはそろそろだな。

「さて、出陣と行きますか」

『第７６移動隊模擬戦の実況中継を任されたカーツ・バリアットです。ルーチェ・ディエバイトの実況も任せられた私が今回の模擬戦を実況します。模擬戦が終われば『ＧＦ』が総力を挙げて作り上げた航空空母エスペランサの御披露目です。招待された『ＧＦ』の諸君は模擬戦をしっかり見るのだぞ』

実況の声が響き渡る。それを僕はメリルの隣で聞いていた。リリーナや鈴はここにいない。

ルーイはメリルを挟んで向かい側に座っている。

「楽しみですね。第７６移動隊、悠人のいる部隊の戦闘メンバーの実力を見るには十分です。もし、実力がなければ悠人を引き抜きます」

「ははは。お手柔らかにね。でも、みんなどの部隊と戦うのだろう？」

「悠人は知らないのか？」

僕は頷いた。

実は、第７６移動隊所属の中で僕だけがどの部隊と戦うか聞いていない。リリーナや鈴は知っているのに。

僕は小さく溜息をついた。

「教えてくれてもいいのに」

「もしかしたら、悠人が私と一緒に見るから言わなかったのではないですか？　よほどのサプライズとか」

「そんなサプライズはいらないよ」

メリルとルーイが小さく笑う。それを見て僕は小さく溜息をついた。

『さーて、第７６移動隊と戦うチームの紹介です。実は私も知らされていません。さて、相手は、えっ？』

実況の人の声がなくなる。一体、何を見たのだろうか。

どうせ、どこかの正規部隊だろうな。

僕は飲み物をストローを使って口に含んだ。中身はオレンジジュース。

『第一特務です！』

至る所から吹き出す音が響き渡った。もちろん、僕も。あまりのことにメリルとルーイが僕から距離を取っている。

『唖然とするしかありません。第７６移動隊の相手は第一特務です！』

「第一特務とはすごいのでしょうか？」

メリルは不思議そうに首を傾げた。それを見たルーイは苦笑してい

る。

ルーイは第一特務の人と出会ったことがあるからだ。

「強いってレベルじゃないよ。簡単に言うなら、第一特務＝人界総戦力」

「じ、冗談ですよね？」

メリルは顔をひきつらせながら尋ねてくる。そんな等式が成り立つとするなら世界は第一特務によって世界の命運が変わるかのように聞こえるから。

「どうかな。多分、今回の戦いを見たらわかると思う。第一特務がどれだけのものか。そして」

僕は会場に入ってくる周さん達を見る。誰もが武器を持っている。周さんの持っている武器は槍。

「第７６移動隊がどこまでの強さなのか。それがわかるよ」

第二百四十二話　8月29日（後書き）

第一特務との模擬戦。相手の戦闘能力は桁違いの予定。

第二百四十三話　開始の攻防（前書き）

こんなの戦場だと絶対に起きません。

第二百四十三話　開始の攻防

オレはレヴァンティンモード？の柄を握り締める。

第一特務との戦い。実戦経験から全体的な実力まで全てが総合的に上だろう。多分、音姉、孝治、アルの三人だけが第一特務と対等に戦えるはず。今回の作戦の要である由姫と亜紗がどこまであの人を抑えられるかどうか。

オレは小さく息を吐く。

「とりあえず、相手のメンバーの復習だ。要注意人物は五人」

オレはレヴァンティンと投影装置を使い、壁に相手メンバーを全員出す。

「『無敵』の異名を持つ善知鳥慧海。はっきり言うならチート。作戦が当たらなかったら一人で夢想されるな」

「オレは慧海さんとは戦ったことがないんだけど、そんなに強いのか？」

悠聖が不思議そうに首をかしげる。まあ、仕方ないだろう。慧海の強さは次元を超越している、と言っても全く過言じゃない。

昔はもっとチート的存在だったらしいけど。

「簡単に言うなら、一撃の重さは由姫の全力。通常攻撃範囲は楓の砲撃級。魔術の威力はアルに匹敵」

「何そのチート？　なんていうレアスキル持ちだよ」

「あいつ、個人スキルすら持っていないぞ。純粋な才能」

才能の時点でチートと言うしかない。オレや孝治がタッグを組んでギリギリまで追い詰めれたくらいだ。一応、総長に勝つ実力はあるんだけどな。

オレは小さくため息をついた。

「次は『雷神』の海道時雨。我ら『ＧＦ』の総長。加速術式『ミョルニル』が冗談抜きのチート。反応速度はオレ並みだと思ってくれた方がいいな。スピードは亜紗クラス」

時雨に関しては全員が知っているだろう。『ＧＦ』の中ではかなりの有名人だ。その能力から本気で雷の神様と呼ばれているくらいだし。

「次、『破壊者』アイシア。破壊という一点では最強。多分、『天空の羽衣』が一撃で剥される。続いて、『黒牙』レノア。アイシアとよくコンビを組んでいる。速度は亜紗級。武器は鎌。リーチの長さとレアスキル『影縛り』には気を付けるように」

これで四人目。後の一人は本当に最重要人物だ。

「『闇聖の貴公子』ギルバート。はっきり言うが、今回の最重要人物だ。速度は世界最高。武器の能力もチート級。今回、ギルバートさんをどう止めるかで勝敗が大きく変わると思う」

「やっぱり、周は勝つつもりやねんな」

「当たり前だろ。勝ち目がない戦なんで誰が仕掛けるか。全員、四月と比べて格段に強くなっている。新しい武器、新しい戦い方。それを実戦でも使える証明にすればいい」

模擬戦でも勝つことを諦めていたら前には進めない。戦場でただ死ぬだけだ。勝つことだけを考え、敵を倒す。それが、今回の一番の目的。

それに、みんなの新技は舌を巻くほど強いからな。第一特務にも一回だけなら通用する。

オレはレヴァンティンから投影装置を外した。そして、第一特務がいるであろう方角に向く。

開始の時刻まで後二分か。

「みんな。今回は負けることを考えるな。勝つことも考えるな。ただ、自分の全てをぶつけるとを考えろ。狭間戦役を乗り越えたオレ達がどこまで強くなったか、子供だからと言って何かを言ってくる奴らを静かにさせるために、力を使い果たせ」

レヴァンティンモード?を構える。それに応じてアルが魔術書アル・アジフを開き、楓がカグラを構え、都が断章を掲げた。

向こうも砲撃係が砲撃の準備をしているはずだ。ただ、向こうの火力はかなりおかしい。

「レヴァンティン。ＦＢＤシステム起動」

ＦＢＤ（フルバーストドライブ）システム。

悠人のダークエルフに搭載されていたシステムをオレとレヴァンティン専用に組み替えたもの。レヴァンティンだからこそ可能とする圧縮魔力を幾重にも溜めて一気に解放するシステム。もちろん、戦いが長引けば不利になるけど、今回は短期決戦。常に全力全開だ。

『ＦＢＤシステム起動。スタート同時に魔力収束に入ります』

「ああ、どでかい花火」

残りのカウントが１０秒になる。それを見た誰もが息を呑んだ。

今まで他の部隊と模擬戦すらしなかった第一特務が第７６移動隊との模擬戦をするから。そして、それが開始されるから。誰もが息を呑む。そして、

カウントが５になる。４、３。

アル、都、楓が息を吸い込む。

２、１。

レヴァンティンの柄に力を込めた。

０。

「「「スターゲイザー・バスター！」」」

三人の声が重なり合った。収束系の魔術をコンマ一秒の間に放つ特殊な方法。複数人が同時に魔術の発動に入るのだ。それを行った三人。主な魔力は狭間から受け取っている。見る人が見ればわかるが、周囲にある木々や草などが微かに距離を寄せているだろう。地面を微かにえぐりながら。

放たれたスターゲイザー・バスター。だが、それは、向かってきたスターゲイザー・レインによってぶつかり合った。

「やっぱり、慧海が砲撃に入ったか！」

三人の砲撃がたった一人に受け止められる。この時点で相手は完全な化け物だ。

スターゲイザー・レインも一応収束系だが、その気になれば収束の時間なしで発動できる。その威力を極めて低くして。

なのに、普通に収束したスターゲイザー・バスターと同威力。もう、次元が違う。

「レヴァンティン！」

『収束率９８％です。マスター、いけます！』

レヴァンティンモード？カノンを構える。砲撃系で、もっとも的にダメージを与えられる特殊砲撃。これの準備をするだけでまる一日の消費する魔力と同じ魔力を必要とする。だけど、開始の攻防にしては一番ふさわしい。

「混沌たる闇より出でし聖なる光。大地を包み、炎を焦がし、水を

狂わせ、風を乱舞させる。稲妻は周囲に舞い、その向きは敵を狙おうと矛先を向ける。世界を舞う神楽のごとく、世界を包む力となせ！」

長い詠唱と共に巨大な魔術陣を出現させる。昔、楓が放ったことのある神剣『カグラ』を使った史上最強の砲撃魔術。天空属性でありながら、全ての魔術属性を持つ究極の砲撃魔術。

拮抗していたスターゲイザー・バスターとスターゲイザー・レインがお互いに消滅する。そして、迫りくるのはスターゲイザー・バスター。

ちょうど消えるタイミングで放ってきた。でも、これは予想通りだ。

「スターゲイザー・ブレイカー！！」

スターゲイザーの派生形の中で最も異質であり、もっとも戦場に置いて戦果を発揮する究極の砲撃魔術。その威力は、単一属性であるスターゲイザー・バスターを簡単に消し去る。

属性の暴力が天空属性だけのスターゲイザー・バスターを消し去った。威力が弱くても、属性が五つ以上多い魔術を放った場合、相手の魔術の威力次第では消し去ることが出来る。

オレの放ったスターゲイザー・ブレイカーは相手に迫り、そして、巨大なハンマーが具現化した。

オレは予定通りに『天空の羽衣』を展開しながら前に出る。

スターゲイザー・ブレイカーを打ち消し、迫りくるハンマーと正面

からぶつかる。

『天空の羽衣』が消滅してオレの目の前に赤いゴスロリ服を着るアイシアさんが姿を現した。その手にあるのは巨大な斧。

「周坊、やるじゃねえか」

「予想はしていたんでね」

アイシアさんが獰猛な笑みを浮かべる。その笑みを見た瞬間、オレの体が総毛立つ。

「そうか。なら、お前はここで私が」

「あなたの相手はオレが努めますよ。だから、周は先に行け！」

その瞬間、アイシアさんに向かってチャクラムが放たれた。アイシアさんが手に持つ斧でチャクラムを弾き飛ばす。

それと同時にオレは地面を蹴った。アイシアさんが近くにいると言うことは、すぐ近くにレノアさんがいる。

神経をとがらせる。そして、嫌な感覚と共にその場にスライディングをした。オレの髪の毛をかすめるように鎌が通り過ぎる。視線を向けた先には驚いた表情のレノアさん。完全な不意打ちを避けられたからだろう。でも、驚いている暇はあるのですか？

オレの視線に気づいたレノアが振り返ろうとする。だけど、それより早く、レノアさんの背後に回り込んだ孝治がその手にある運命を振り切っていた。

レノアさんの右足を運命が浅くえぐり、レノアさんが孝治から距離を取るように離れる。その時にはオレの姿は敵陣に向かって一直線に進んでいた。

「都」

「はい」

オレの横に都が瞬間移動（ショートジャンプ）で現れ、オレと都との間を固定する。つまり、オレが走れば都の体も勝手に動く。オレに負荷はかからない。はっきり言うなら反則だ。

「このまま作戦通り、倒すぞ」

「大丈夫でしょうか。確かに、ルール上は可能です。私も許可を出すので力を使えますし」

「あいつに勝とうと思えばレヴァンティンと断章。二つの力を使うしかない。オレ一人じゃ限界があるからな。でも、そしてでも、オレは、海道時雨を倒す。そう決めているんだ」

第二百四十三話　開始の攻防（後書き）

チート級の面々である第一特務との戦い。周と都は時雨と。悠聖はアイシア、孝治はレノアと戦いますが、他の面々は次に機会に語ります。模擬戦さえ終われば第一章の終わりは間近です。

第二百四十四話　周の戦略（前書き）

どっちかというとこっちの戦いがメインですかね。

第二百四十四話　周の戦略

ギルバートは一人走っていた。時雨から提案された作戦が、周回状にギルバートと慧海が回り込み、残るメンバーが正面から衝突するというものだった。ちなみに、時雨だけは居座るらしい。

ギルバートは小さく息を吐く。

「音姫さんが来れば、少し辛いかな」

ギルバートは音姫には勝てない。それは、かなりの人がしる事実だった。勝つにはかなり分の悪い賭けをする。だから、勝つことは不可能だと言ってもいい。

「だけど、僕は第一特務だ。ただで負けるわけにはいかない」

第７６移動隊の中で音姫さえ封じることが出来れば、第一特務の勝利は揺るぎないとギルバートは感じている。それほどまでに音姫は強い。

強いからこそギルバート自身で止めることを決めていた。

「例え負ける戦いだとしても、僕が食い止めている間に慧海が戦場を支配する。そうなれば、僕達の勝ちだ」

小さく呟きながらギルバートは地面を駆ける。そうしていると、前方に森が現れた。躊躇することなくその中に入る。

「誰かいる」

気配を感じとる。前方に誰かいる。鋭いような殺気を向かって来るギルバートに向けていた。

場所は森の中にある開けた地形。ギルバートは白の刀の柄を握りしめ、その開けた場所に飛び出した。

目の前にいるのは亜紗だ。

「音姫さんじゃない？　でも、好都合」

亜紗が身構える。それに対してギルバートも身構えた。

「君は僕に勝てない。だから、この場で倒させてもらうよ」

亜紗の手の中に現れる綺羅と朱雀。その瞬間にギルバートは地面を蹴っていた。いつもの力でいつものように一歩で距離を詰めたまま刀を振る。

『ＧＦ』最速のギルバートはそれだけで十分だ。いや、十分なはずだった。

振り切った白い刀は亜紗に当たらない。亜紗が動いたわけじゃない。ギルバートが予想より動いていなかったからだ。

ギルバートが目を見開く。その瞬間、横手から誰かが飛び出してきた。

すかさず地面を蹴ろうと力を込める。だが、体が重い。その理由を飛び出してきた人物の顔を見て理解した。

「重力魔術か」

由姫が振った拳がギルバートの体を捉え、吹き飛ばす。ギルバートは上手く着地するものの、確実なダメージを感じていた。

「卑怯かもしれませんが、二対一で戦わさせてもらいます。そうしないと、あなたを止められないので」

「最初から、僕は周の手のひらで踊っていた感じだね」

まさか、見事に不意打ちを決められるとは思わなかった。周がギルバートの動きを完全に推測していたのだろう。

「いいよ。二人の挑戦、受けてたつ！」

「風迅一閃！」

慧海はすかさず放たれた衝撃波を受け止めようと右に持つ無骨な剣で受け止めようとする。だが、風迅一閃は受け止めようとした剣をくぐり抜けて慧海の体を強く打った。

「くっ、鎧通しか」

後ろに下がろうと足をやった瞬間、目の前にいた人物が加速した。そして、周囲に同じ人物が現れる。東西南北に一人ずつ。

その刹那に慧海は障壁魔術を全方位に展開していた。通常は絶対防御。だが、相手は止まることなく動いていた。

「白百合流四方奥義」

慧海の背中に汗が流れる。

「琥珀霧消！」

その瞬間、慧海の周囲にあったあらゆる障壁魔術が砕け散り、斬撃の嵐が慧海の体を吹き飛ばした。

「んな技知らんぞ！」

地面に着地すると同時に慧海が無骨な剣を振る。すると、無骨な剣、まるでほどけたように分解して鞭のように相手、音姫に迫る。

音姫はすかさず後ろに下がった。

「琥珀霧消は実戦だと初めてですから」

「防御系魔術を砕く能力とはな。しかも、白百合流姿隠し『朧』まで使ってくるなんて。というか、使えたのかよ」

慧海は素早く剣を戻した。そして、柄を握り締める。

「まさか、偶然お前とエンカウントするとはな。まあ、作戦は成功か？」

「どうかな？」

音姫が地面を蹴る。一瞬で距離を詰めようと地面を蹴る。慧海はすかさず魔術陣を大量に展開した。そのずべ手がスターゲイザー・レイン。だけど、音姫はさらに早く動いた。

慧海はスターゲイザー・レインの発動をしながら左手で虚空の中に手を突っ込んだ。

音姫が四人どころか八人に分かれる。

「お前を使うぜ！」

虚空から取り出したものは蒼い剣。それを慧海は振り切った。その瞬間、蒼い炎が周囲に包み込んだ。

ちなみに、観客から見た光景は蒼い炎を出す巨大な爆炎だった。

だが、慧海はそれだけじゃ止まらない。そのままある方向に向けてスターゲイザー・レインを叩き込んだ。

これが慧海の最大技と言っても過言ではない。この技を食らえば、一定範囲内にいる誰もがやられる。

慧海は蒼い剣を右手に取りだした鞘の中に収めた。そして、小さく息を吐く。

「さすがに、音姫でも。げっ」

土煙が晴れた先にポニーテールをくくるリボンを外した音姫の姿が

あった。ちなみに、完全な無傷だ。慧海でなくても声を上げるだろう。

「弟くんの作戦。主力メンバーで最重要人物を抑える。私は慧海さん。弟くんの作戦通りかな」

「最初からオレ狙いということかよ。ちっ、まさかそう来るとはな。でも、オレだってだてに」

かっこつけようと慧海が口を開いた瞬間、音姫が光輝を鞘に収めた。

「一撃必殺。さっさと倒して、由姫ちゃんの助けに行く！　だから、一気に倒す！」

「オレに何か話させろ！」

第二百四十四話　周の戦略（後書き）

ちなみに、残りメンバーは残りのメンバーと戦います。次の話で戦わせます。

第二百四十五話　地獄の攻撃者

レーヴァテインのコピーが空に舞う。狙うのは空中杖を構えている女性。だけど、光の視線は空中に向いてはいない。向いているのは地上。

楓がカグラともう一つの柄が極めて短い黒い槍、ブラックレクイエムを両手に持って二人の男からの猛攻を受け止めている。相手は剣と槍。二本の槍でうまくいなしているが、このままじゃじり貧だ。

両手に二本の槍という論外に近い持ち方だが、ブラックレクイエムはかなり特殊な能力を持っているから大丈夫でもある。

「お願い！　ブラックレクイエム！」

その瞬間、ブラックレクイエムが空に浮かび上がった。そして、楓に剣を振りかぶった男に向かって砲撃を放つ。

ブラックレクイエムは自動で攻撃を行うデバイスの枠を超えた武器。柄が短いのもそれが理由でもある。

「カグラ！」

楓の手にあるカグラが光を放つ。見た目はただの砲撃槍。だが、その砲撃槍を形どっていたパーツがはじけ飛んだ。

穂の短い槍。その穂に魔力が終結して極めて薄い刃となっていた。

「私の二つ名はリュリエル・カグラ。聞いたことはあるよね？」

そのまま魔力の刃を形成するカグラを構える。それに対して、第一特務の二人の男は一歩後ろに下がった。リュリエル・カグラの名前は聞いたことがあるからだろう。楓が少しだけ笑みを浮かべる。

「行きます！」

そのまま前に踏み出す。カグラを横に振りきるが、男達は二人とも空に跳び上がっていた。そこにブラッククレクイエムが突撃する。

「ちっ」

槍を持つ男がブラッククレクイエムがを弾こうと槍を振った瞬間、

「避けろ！」

もう一人の剣を持つ男が魔術が魔術を発動し、風によって男を吹き飛ばした。男のいたところを地上から放たれた砲撃が通り過ぎる。

「ガキだからと言って舐めるな！」

剣を握り締め、楓に向かって突撃する。楓はそれを正面から迎え撃った。ぶつかり合うカグラと剣。火花が散る。

それを見ながら光は空に視線を向けた。

杖を持つ女性と槍を持つ男性が合流して光を見下ろしている。多分、このまま光を狙うのだろう。

「海道の奴。最重要人物を抑えるのもいいけど、うちらは三人で残

る五人を抑えやんなあかんねんで」

そう小さくつぶやきながらレーヴァテインを構える光。

一人は楓が、もう二人はアル・アジフが戦っている。だから、今の光のすることは一つだけ。

目の前にいる二人を倒すために全力を尽くす。

「レーヴァテインを投影。全力全開。行きます」

「くらえ！」

迫りくる槍。アル・アジフはそれを一瞥して空中宙返りを行った。そして、槍を避けて槍をついてきた相手の頭上にかかと落としを決める。

そのまま振り返りつつ準備していた障壁魔術を天界。放たれた砲撃魔術を受け止める。

「嘘でしょ。完全な死角からの攻撃を避けきるなんて。どうなっているのよ」

砲撃槍を持つ女性と槍を持つ男性が合流する。どちらもアル・アジフも魔術を食らったからかダメージが大きい。

「確かに、そなたらの連携と魔術は一級品じゃ。あの五人の中で危険だと判断した我の目に狂いはなかった」

「でも、残る三人も腐っても第一特務だ。あのような小娘に負けるわけがない。なら、俺達はあなた」

「勘違いしておるの」

アル・アジフは自らの魔術書を開いた。そして、炎の塊を周囲に展開する。

「楓はリュリエル・カグラ。戦闘センスから言えば、周をも越えるぞ」

剣を受け流し、石突を相手の頬に叩きこもうと動く。だけど、それより早く相手は動いた。楓はすばやく距離を取ろうと空に跳ぶが、相手はそれをさせまいと追随してくる。

これが第一特務。今まで戦ったてきた『ＥＳ』のトップクラスの実力者よりも戦いにくい。

楓は心の中で愚痴りながらカグラを振る。だけど、カグラは簡単に避けられ、代わりに剣が目前まで迫った。そこにブラックレクイエムが殺到し、男を吹き飛ばす。

完全にじり貧だ。このままだと勝てない。

「なかなかやるな。小娘と侮っていたが、まさか、リュリエル・カグラだとは。その年で『ＥＳ』トップクラスか」

「今は『ＧＦ』所属。私も、第一特務の隊員の力を侮りすぎた。まさか、ここまで強いなんて」

「当り前だ。腐っても第一特務。小娘相手に、無様な戦いは出来ない」

その言葉と共に生まれるいくつかの剣。それが周囲に漂っている。

楓はカグラを構えた。

「投影魔術。光の弱体版かな？」

「あれは反則だ。あの小娘も大人になれば第一特務に入れる実力になるだろうな。もちろん、お前も」

「ありがとう。褒めても手加減はしないよ」

「手加減をすれば、死ぬぞ」

男が動く。いや、それより先に周囲の剣がまるで意志を持つかのように動いた。楓の視界がまるで時が遅くなったかのように動く。

剣の数は９。それぞれが違う軌道を描きながら楓に殺到している。その向かって来る軌跡を感じながら考える。避ける確率は低い。そして、男も一直線に向かってくる。

楓はこの感覚が好きだだった。研ぎ澄まされる感覚。時間がまるで遅くなったかのように錯覚する状況。リュリエル・カグラとして『ＥＳ』内で模擬戦をしたときの幾度も感じた感覚。

まずは迎撃するしかない。選択するのはフォトンシューター。魔力を凝縮させて放つだけの魔術。そして、エアカッター。風の刃を作り出し、迎撃した剣を弾き飛ばす。向かってくる男に対してはカグラとブラックレクイエムの二つによる二重砲撃。

楓はすぐさまカグラを構えた。そして、フォトンシューターとエアカッターを同時に発動させる。

楓は気付いていない。ここまで思考から発動までコンマ一秒もかかっていないことに。

楓の視界が速くなる。フォトンシューターが迫りくる剣を弾き、エアカッターがさらに高く打ち上げた。そして、ブラックレクイエムが火を噴く。

一度目の砲撃。男はそれをギリギリで避けるように動いた。そして、避けた先に楓は砲撃を放った。

カグラから放たれたのはカグラの穂先にある刃。刃砲と呼ばれる一点特化の砲撃だった。

男は無理だと悟りながら防御魔術を展開する。その男の顔にあるのは潔く負けを認めて満足している顔。まるで、楓の強さが嬉しいかのように。

刃砲が防御魔術を刹那より早く砕き、男の体に突き刺さった。男が

そのまま地面に叩きつけられ動かなくなる。

「やった」

楓が顔に笑みを浮かべた瞬間、体に剣がつき刺さった。

「えっ？」

魔力の刃だからか血は出ない。でも、体力と魔力を根こそぎ奪い取られる。そして、さらに突き刺さる計九本の剣。

弾き飛ばした全ての剣が楓の体に突き刺さり、体力と魔力をほぼ全て奪い取っていた。

「ブラッククレクイエム、後は、お願い」

楓の意識が闇に落ちる。楓は落ちる前にこう思っていた。

第一特務を甘く見ていた、と。

「楓！」

ブラッククレクイエムに支えられて落下する。親友の姿を見た光は声をあげていた。だけど、駆け寄ることはできない。

「しゃら！」

迫り来る槍。光はそれをギリギリで受け止めていた。もし、周達と模擬戦をしていなければ対処すら出来なかったであろう速度。受け止めることが出来ただけでも偶然に近かった。

だけど、攻撃はこれだけじゃない。槍を持つ男の速度が上がる。さっきより早く突いてくる。対処することは出来ない。

光のわき腹を槍が貫く。デバイスの力から本当に貫かれることはないが、体力と魔力は根こそぎ持っていかれた。

後ろに下がりながら体勢を立て直そうとした瞬間、光がいる場所に光が降り注いだ。

見事な連携攻撃に光の意識が闇に落ち掛ける。

「くあっ！」

気合いの言葉と共にレーヴァテインのコピーを一気に作り出して全力で放つ。だが、放った先には誰もいない。

「『胡蝶炎舞』！」

推測を元に光は後方に『胡蝶炎舞』を作り出した。そして、その『胡蝶炎舞』にとある設定をする。

『胡蝶炎舞』を作り出しほんの一秒くらい経った瞬間、背後で爆発が起きた。

準備をしていた光は展開していた防御魔術と共に吹き飛ばされるだ

けだが、直撃した人はそうはいかないだろう。

光が振り返った先には倒れ伏す男。まさか、『胡蝶炎舞』によって自爆覚悟で爆弾を撒き散らす人はいないだろう。

ボロボロの体に鞭を打って立ち上がる。残るは一人。

「まさか、あの状態でその技を選択しますか。ですが、もう終わりです」

朦朧とし始めた意識の中、光はそっちの方向を向いた。そこにあるのは凝縮した光の塊。それが八つある。

レーヴァテインを握りしめる。ここでやられるわけにはいかない。

「終わり、か。うちはまだ負けてないで。それに」

レーヴァテインの先を相手に向ける。

自分でもわかっている。次の一撃を受けたなら光は倒れるだろう。それがわかっているから最後の賭けに出る。

楓とエレノアから教わった技術で作り出した光専用の技を。

「うちは異名持ちや。まだまだやれる」

「そう。なら、これで終わりです！」

放たれるフォトンランサー。膨大な光が光のいる場所に突き刺さった。

「これで終わりじゃ」

アル・アジフが無造作に腕を振ると同時に虚空から現れた鎖が相手二人の体を縛り上げた。

アル・アジフが魔術書を閉じる。

「そなたらはまだまだじゃな」

「こ、これが最強の魔術師？　強すぎるよ」

「桁違いだな」

捕まった二人の顔にあるのは完全な諦め。何故なら、アル・アジフの体には傷一つないのだから。第一特務所属の二人の猛攻でここまでなのは最強という名を持つからだろう。

アル・アジフは小さく溜息をついた。

「そなたらは連携がかなり良い。フロントとバックの組み合わせで見れば世界でもトップクラスじゃろう。じゃが、まだまだじゃ。収束系と拡散系をもう少し上手く使わねば我には勝てぬ。では、少し眠ってもらおうかの」

アル・アジフが魔術書を開くと同時に二人が一瞬にして眠りに落ち

た。

小さく息を吐きながら地上へと降りる。

「楓と光は無事かの？」

光が降り注いだ後、第一特務の女性は杖を下ろしていた。相手が避けた素振りはなかった。さらには傷ついていたからこれで気絶しただろう。今、戦況がどうなっているかわからないが、アル・アジフの下に向かう方がいい。

そう思いながら飛ぶ方角を変えた瞬間、どうっ、と空気が揺れる音がした。恐る恐る振り返ったその先に、『胡蝶炎舞』を周囲に舞わせ、『炎熱蝶々』をその身に纏う光の姿があった。

「レーヴァテイン、オーバーロード！」

その言葉と共に光の魔力が膨れ上がる。

「まだ動けるのですか！？」

その言葉を聞いた光はニヤリと笑みを浮かべた。相手が動揺している。だからこそ、奥の手が使える。

「当たり前や。最後の最後、うちの新技で終わらせる！」

「あと一撃さえ入れば」

「舞え！　『胡蝶炎舞』！」

光の言葉と共に炎の蝶が女性に迫る。女性はすかさず杖を構えて防御魔術を展開した。

「レーヴァテイン、コピー展開」

その言葉は展開し終えた女性の背後から聞こえてきた。そこにあるのは大量のレーヴァテインのコピー。

瞬間移動（ショートジャンプ）したかのような移動に第一特務所属ですら反応が遅れる。

「当たれ！」

放たれたレーヴァテインに向かって女性はもう一度防御魔術を展開した。『胡蝶炎舞』による砲撃とレーヴァテインによる砲撃。それを受け止めながら女性はエネルギーを収束させる。

「やられてばかりはさせません！」

防御魔術を二方向に展開しながらの収束系砲撃。それは通常では出来ないほど極めて強力な攻撃手段だった。今までの光なら回避出来なかっただろう。

だが、収束系砲撃は光の手前で不自然に軌道を変え、空に消え去った。

光が手に持つレーヴァテインを構える。その体に纏っているのは『

胡蝶炎舞』によって作られた炎の蝶。それが隙間なく、まるで、光が燃えているかのように存在していた。『炎熱蝶々』の翼を広げる光の姿はまるで、

「フェニックス」

砲撃を凌ぎきった女性が小さく呟いた。その呟きを聞いた光は笑みを浮かべる。

「行くで」

爆発的加速。光は『胡蝶炎舞』によって一部を爆発させることで物理的に一気に加速したのだった。女性がすかさず多重に防御魔術を展開する。

だが、その防御魔術はレーヴァテインによって全て砕かれた。そのままレーヴァテインと共に光の体が女性と激突する。

二人はそのまま地面に激突して弾かれあった。

女性がすかさず体勢を戻して杖を構える。さすがは第一特務だろう。強力な一撃によって体力と魔力の両方を奪われながらも戦闘が出来るように身構える。

だけど、その意志は瞬間で挫けた。

周囲に『胡蝶炎舞』が舞い、空にはレーヴァテインが複数浮かんでいる。

「地獄」

自然と口から出た言葉。それを聞いた光が笑みを浮かべた。

「その攻撃者がうちや。やから、吹き飛べ」

『胡蝶炎舞』が一斉に爆発し、レーヴァテインが一斉に放たれる。

それは誰が見てもオーバーキルの一撃だった。

第二百四十六話　神速の一撃（前書き）

亜紗＆由姫ＶＳギルバートです。

第二百四十六話　神速の一撃

白い軌跡が由姫と亜紗に襲いかかる。由姫はナックルで受け流すが、そのまま軌道を逆にした白い刀が迫る。

「くっ」

由姫はその場で側転した。白の軌跡は由姫の服をかすめるように動き振り上げた姿勢のままギルバートが止まる。

由姫はすかさず亜紗のところまで下がった。

「速いという次元じゃないんですけど。気づけば距離を詰められている経験自体初めてなんですけど」

『音姫さんとか周さんなら』

戦場のも関わらずスケッチブックを開ける亜紗。由姫は首を横に振った。

「いや、あれは一応軌道が見えていますから。でも、ギルバートさんのものは全く見えないんですよね。速すぎて」

「おしゃべりはそろそろいいかい？」

その言葉に二人が身構える。ギルバートは右手に白い刀を握り締めた。そして、左手でもう一本の刀である黒い刀を抜く。

二刀流。ただし、周がするような攻防一体の二刀流とは違う。基本

は一方を逆手に持つことが多いが、ギルバートは普通に持っている。世界最速の速度を持つからか、それとも、

「行くよ」

その瞬間、ギルバートの姿が二人の目の前にあった。ギリギリで反応出来たのは由姫だけ。亜紗はピクリとも反応していない。

見えた黒い軌跡に対し、由姫の体は勝手に前に出ていた。そのまま腕がギルバートの左手を掴み投げ飛ばす。

「「えっ？」」

由姫とギルバートの二人の声が見事に重なるところを見ると、完全な無意識のようだ。だが、自分の行動に驚いた由姫に白い軌跡が迫っていた。

亜紗はすかさず間に入り込んで綺羅と朱雀で受け止める。

受け止めた瞬間に黒い軌跡が亜紗に迫っていた。すくい上げるような軌道を描く黒い刀に対し、両手が塞がっている亜紗は何もすることが出来ない。

「させない！」

由姫はすかさず黒い刀の刀身を横から蹴り上げた。軌道が大きく変わり、ギルバートが後ろに下がる。

「まさか、今のを防ぐとは。見事だね」

ギルバートの顔には余裕の笑みが浮かんでいるが、二人の顔にはそんな表情は浮かんでいない。むしろ、額に汗をかいているような気がする。

由姫は身構えた。

「姉さんと戦っているみたい」

亜紗がゆっくり頷いて綺羅と朱雀を構える。

「音姫さんは別格だよ。僕は勝てない。でも、慧海なら勝てるんじゃないかな？」

「そうですか。なら、ギルバートさんは私達が倒さないとダメですね」

ギルバートが白と黒の刀を構えた瞬間、亜紗が取り出した矛神を鞘から振り抜いていた。

神速の抜刀。それにより、矛神の斬撃が回避することの出来なかったギルバートを直撃する。

デバイスによる変換は例え矛神でも起きるのか、ギルバートの体には傷はない。しかし、後方の木々は綺麗に切断されていた。

ギルバートは片膝をつく。例え第一特務であっても今の一撃は辛いものだろう。そこに由姫が放った重力砲が直撃した。

ギルバートの体が吹き飛び後方の木々に激突する。そして、動かなくなった。

「勝った、の？」

由姫が亜紗に尋ねる。亜紗はスケッチブックを取り出して、

『わからない。でも、手応えはあった』

「私もです」

二人がギルバートの方を向く。ピクリとも動かない。いや、今ピクリと動いた。そして、ギルバートがゆっくり立ち上がる。

身構える二人。それに対してギルバートは笑みを浮かべていた。

「ははっ、ははははっ、ふはははは」

まるで、狂ったかのように笑うギルバート。そして、その笑い声が止んだ瞬間、ギルバートの姿はそこではなく、二人の目の前にあった。

スピードは最速にはほど遠いだろう。事実、由姫は動けていなくても亜紗が動いている。でも、対処は出来なかった。

無造作に振るわれる右の刀。その威力を前に二人は後ろに吹き飛ばされた。

「くっ」

上手く着地した由姫がギルバートに向かって地面を蹴る。最速による拳の一撃。一直線に突き進む攻撃。

八陣八叉流『猪突猛進』

ギルバートは素早く後ろに下がる。そう、進行方向であるはずの後ろに。

どうして、と思う時間は無かった。後ろに下がると同時にギルバートが黒い刀を縦に振り切っていたからだ。その刃から現れた衝撃波が由姫の体を吹き飛ばす。

体が捻れ千切れそうになる感覚と共に体力が根こそぎ奪われる。意識を失うことは無かったが、そのダメージは極めて高かった。

何とか体勢を戻した瞬間、目の前にギルバートの姿がある。振られる白い刀に対し、由姫は体を動かした。

左の甲で刀身を弾きながら右の拳をギルバートに叩き込む。純粋なカウンター。それが見事にギルバートに入っていた。

ギルバートが吹き飛ぶ。

「はぁ、はぁ、はぁ。何とか体は動いているけど、このままじゃ」

前にいるギルバートはまるでダメージが無いかのように立っていた。さっきのカウンターは完全に決まったはずなのに。

「さすがだね。本当にさすがだよ。愛佳の弟子で音姫さんの妹。ここまで僕と戦えるなんて思わなかった。お礼に僕の武器の名前を教えてあげるよ」

ギルバートが両の手に白と黒の刀を構える。

「白の半身、シュナイトフェザー。黒の半身、ラファルトフェザー」

聞いたことがある。神剣図鑑という胡散臭い図鑑の中に書かれていたもの。実際に、有名な神剣、清浄や黎帝などは書かれているため由姫は覚えていたのだが、そこに二つの名前はあった。

周なら確実に神剣自体を否定しそうだが。

「断裂の力と歪曲の力」

「知っているようだね。それでいい。それでこそ、一撃を叩き込める」

由姫は前に出た。いや、距離を詰めようとしたはずだった。だが、ギルバートとの距離は縮まらない。ギルバートが後ろに下がっているのだ。

「くっ」

由姫がさらに加速する。だが、その瞬間にはギルバートが前に出ていた。距離が一気に縮まる。

それに対し、由姫はさらに前に出た。刀のリーチよりも拳のリーチの方が短い。だから、さらに前に踏み出した。

ぶつかるのは怖い。だけど、後ろに逃げるのはもっと嫌だから。

由姫は拳を出す。純粋なパンチ。今まで何万回何億回と放った拳。

その速度はまさに神速というべきくらいに速かった。ギルバートはそれをギリギリで回避する。そして、黒の刀、ラファルトフェザーが由姫の体を切り裂いていた。

その場に倒れ気絶する由姫。ギルバートは小さく息を吐いてラファルトフェザーを鞘に収めた瞬間、矛神の斬撃がギルバートを捉えていた。

「ぐっ」

ギルバートはこらえるように呻き、そして、前を見る。

そこには、綺羅と朱雀を構えたまま突撃してくる亜紗の姿。今まで隠れていたのだろう。完全な不意打ちにギルバートは完全にやられていた。

小刀である綺羅と朱雀が凄まじい速さでギルバートに迫る。それに対してギルバートは白の刀、シュナイトフェザーで迎え撃った。

右、左上、右下、上、下、左、右、左下、右下、下。

様々な方向に亜紗は綺麗と朱雀を振る。斬撃全てに風の刃を纏い、確実にギルバートにダメージを蓄積させる。ギルバートはシュナイトフェザーで全てを弾きながら額に汗が流れるのがわかった。

由姫のカウンターが効いていたからだ。あのような一撃は食らえば立つこと自体難しいのだが、ギルバートは普通に立っているように見せていた。だから、ギルバートも限界が近いことがわかっている。

対する亜紗も限界が近かった。ギルバートの一撃を食らって少しの

間動けなかったくらいだからだ。由姫はそれ以上の打撃を受け慣れているので動けるが、亜紗はそうはいかない。だから、全力を振り絞って最大最速の一撃を叩き込んでいた。

綺羅と朱雀がシュナイトフェザーを上に跳ね上げる。その瞬間、亜紗は後ろにステップで下がっていた。まるで、里宮本家八陣八叉流の綺羅朱雀のようにステップ一回分後ろに下がっていた。

そして、前に踏み出す。後ろに下がることで前に踏み出す距離が出来、その力で前に進みながら矛神の柄を抜き放つ。まるで、綺羅朱雀と紫電一閃の合成技。高速というには生易しい神速の一撃。その速さに、ギルバートは反応しきれていない。

矛神の一閃がギルバートの体に直撃していた。だが、それと同時にシュナイトフェザーの一閃が亜紗の体に直撃する。

矛神を振り切った亜紗はその場に矛神を落としギルバートの胸に倒れ込んだ。だけど、ギルバートは倒れずに亜紗を受け止めた。

「見事だよ。本当に」

亜紗をその場に寝かせる。そして、落ちたシュナイトフェザーを手に取った。

あの瞬間、亜紗の動きがもう少し速かったなら結果は相討ちだっただろう。シュナイトフェザーの一撃で亜紗の力が途中で弱まり、結果、ギルバートに最大のダメージを与えることが出来なかった。

「今度は七年後ぐらいに、全てが終わったら、また、君達と戦いたい。そう思うよ」

第二百四十七話　紅の戦鬼

手に持つハンマーを握りしめ、オレはアイシアさんに叩きつけた。
アイシアさんは巨大な斧で弾いてくる。

「へっ、嬉しいな。まさか、あたしと同じ力を使えるとはな」

「人間の力を越えているぞ」

オレは小さく愚痴りながらチャクラムを投げつけた。でも、アイシアさんはそれを受け流す。

そこで懐に飛び込みハンマーを振り切った。アイシアさんは斧の柄で受け止めるが力任せに吹き飛ばす。

ダブルシンクロをしているオレと力が同等なんて有り得ない。今、シンクロしているのはアルネウラとグラウ・ラゴスだぞ。アルネウラはいいとして、グラウ・ラゴスの馬鹿力が効かないなんて。

「あたしは桁違いなんだよ」

「あんたが言うことじゃないでしょ！」

巨大な斧を振ってくるアイシアさんに対し、オレはハンマーを叩きつけた。正式にはグラウハンマーらしいが、長いのでハンマーで行く。

力はほぼ互角。お互いに弾かれ合いアイシアさんがドロップキックをしかけてくる。

オレはそれを避けた。

「てめぇ、避けんな！」

「無茶言わないでください！」

オレは叫びながらハンマーをアイシアさんに向かって放つ。アイシアさんはハンマーを斧で受け止める。

「それがダブルシンクロかよ。あたしの力と同等になるってか。ドーピングじゃねえか」

「そんなものじゃありません。アルネウラとグラウ・ラゴスの力を借りているだけ。それが精霊召喚師としての戦い方」

「はん。結局は他人の力かよ。自分の力だけで勝ってみろってんだ」

「そもそも」

オレは地面を蹴りアイシアさんとお互いの武器をぶつけ合った。

「第一特務に一人で勝とうなんて十年早いですよね？」

「孝治や音姫は？」

「あの二人は別格。一緒にしないで」

斧を弾き、回転しながらハンマーを叩きつけた。アイシアさんはそれを簡単に避けて逆に斧を振ってくる。それをチャクラムを放つこ

とでアイシアさんの動きを阻害した。

アイシアさんが後ろに下がる。

「その浮かぶチャクラムは厄介だな。アルネウラの武器だっけか？」

オレは周囲に浮かぶチャクラムを見た。氷を纏うチャクラムが四つ。

これはオレの指示で飛び、後はアルネウラが操作する。

威力は高くないが、牽制にはかなり使えるので便利だ。相手からすれば厄介なことこの上ないが。

「ちょくら、本気を出すか」

「アイシアさん、もしかして、まだ本気じゃなかったとか？」

「力と速度は本気だ。これからは魔術も加えていくぜ」

その瞬間、アイシアさんの頭上に巨大なハンマーが現れた。巨大というか絶対に持てない大きさの。

物質具現化。

属性具現化という魔術の中でも最上級中の最上級、よほど極めないと放つのは不可能とされる具現化の中でたった一人しか術者がいない物質具現化。

それは巨大な物量を叩きつける純粋かつ最強の威力を持っている。

それが目の前にあった。

「無詠唱？」

「んなわけあるか、馬鹿。無詠唱でホイホイ具現化が使えるのは、一人いるか」

オレとアイシアさんの頭の中では音姫さんと戦っているはずのとある人物の顔が思い浮かんでいた。あの人ならホイホイ使っても疑問はない。

「ともかく、あたしは無詠唱は出来ない。お前との打ち合い中に準備してたんだよ。行くぜ」

「正直来て欲しくないんですけどね！」

放たれる巨大なハンマーをオレはハンマーで打ち返した、つもりだった。ハンマーは大きく弾かれ、変わりに物質具現化による巨大なハンマーが直撃する。

「こなくそ！」

魔力を最大まで利用し氷属性魔術を瞬時に展開。指向性を変えることで左に受け流す。

凄まじい衝撃と共にハンマーに吹き飛ばされた。何とか体勢を立て直して、

「終わりだ！」

目の前には斧を振りかぶって飛び上がっているアイシアさんの姿。

回避出来るような距離じゃない。だから、オレはハンマーの柄で受け止めようとした。

しかし、ハンマーの柄が一瞬で切断され斧が直撃する。

デバイスの効果が無ければ確実に一撃で絶命する威力。でも、デバイスによって後ろに吹き飛ばされるだけ済んだ。

「デバイス様々だな」

「ちぇっ。デバイスなけりゃあたしの勝ちだってのに。悠聖、お前はまだ本気を出してないだろ？　待ってやるから本気になれ」

「正気？」

はっきり言って、あのチート能力満載の状態になれと？

「正気も正気だ。あたしは今回、あたしと力で対抗出来る奴がいないかと思っていたんだ。そうしたら、お前がいるじゃねえか。本気、出せよ」

「わかった。グラウ・ラゴス、ありがとう。シンクロ解除」

アイシアさんは武器を下ろしてニヤニヤしている。絶対楽しいだろうな。自分の力に対抗出来る人がいるのは。オレだって俊也の才能を知って嬉しかった。

だから、わかる。容赦なくあらゆる力を使うしかないと。

グラウ・ラゴスがオレの背後に、アルネウラがオレの隣に現れる。

「グラウ・ラゴスは下がって。優月、来て」

オレの言葉と共にグラウ・ラゴスの気配が消えて、代わりに優月の姿があった。背中に光の翼を生やし、薙刀を片手に持つ優月が。

「二人共、やるぞ」

アルネウラと優月が無言で頷く。オレはそれに対して頷いて二人の手を握った。

「『「ダブルシンクロ！」』」

オレの言葉と共に二人がオレとシンクロする。

まるで、全てを掌握したかのような膨大な魔力。そして、二人の力を感じる。

「それが本当の姿が。あたしから言わせてもらえば反則的な魔力量だな」

薙刀を両手で握り、構える。

「手加減はしませんよ」

「あたしを相手に手加減なんて５０年早いんだよ！」

アイシアさんがオレに向かって物質具現化によって作られた巨大なハンマーを叩きつけようと振ってくる。だから、オレは、

「流動停止（フリーズ）」

そう小さく呟いた。たったそれだけで巨大なハンマーが動きを止める。

「なっ」

アイシアさんが驚いた瞬間、オレは地面を蹴っていた。そして、流動停止（フリーズ）を解く。

巨大なハンマーがオレのいた場所を砕き、オレはアイシアさんに向かって薙刀を振っていた。

「くっ」

アイシアさんが迎撃のごとく巨大な斧を振ってくる。

薙刀ごとき、アイシアさんの力だと普通は弾かれるだろう。特に、アイシアさんはまさに紅の戦鬼のごとく強力な打撃技が多い。

相手の防御魔術や障害物など様々な壁を砕くことで有名だ。今回もそう思っただろう。

だけど、アイシアさんの斧を薙刀は弾き、そのまま薙刀を叩きつけた。

アイシアさんが目を見開いたまま後ろに下がる。でも、手応えはあった。

「そうか。氷属性のベクトル変化か」

「べくとる?」

なんだろう。その横文字みたいなものは。

「あたしの天敵だな。でも、その変化は一方向かつ一種類にしか出来ない。違うか?」

「心でも読みました?」

「これぐらい出来なきゃ第一特務じゃねえよ。だったら、これで行く」

その言葉と共に大量のハンマーが現れた。大小様々。数の多さはかなりヤバい。

アルネウラが持つ精霊の力である流動停止(フリーズ)は選択した一つに対して自由に方向を変えることが出来る。その弱点は今のような大量の攻撃。

対処方はあるが、かなり辛い。だから、オレは笑みを浮かべた。

「次で最後、ですね」

「お前もか?　実戦なら勝ってんだけどな」

アイシアさんが小さく息を吐いた。そして、地面を蹴ってくる。それに対して、究極の対抗技を使った。

「魔術殺し(マジックキャンセラー)」

優月の能力。桁違いに大きい魔力を消費してあらゆる全ての魔力を打ち消す最強の能力。弱点はオレの魔力も全て打ち消されるというポイントなのだが。

アイシアさんの体が一気に遅くなり、振り上げた斧がアイシアさんを押し潰した。もちろん、物質具現化によるハンマーは消え去っている。

「反則だろ」

斧に押し潰されたアイシアさんが小さく呟いた。確かに反則だろうな。魔力を全て打ち消すということは身体強化も打ち消すということ。アイシアさんみたいな普通は持てない武器を使っている場合、相手の攻撃手段を大きく減らすことになる。

「これがオレの本気ですよ」

「あーあ。実戦なら勝ってんだけどな。しゃあない。あたしの負けだ負け。気絶させるまで攻撃加えろ」

「そうします」

オレは薙刀を振り上げようとして動きを止めた。この構図を他人が見たらどうなるだろう。動けなかい女の子に対し攻撃を加えようとする男。

何があっても後者が悪者になる。

オレは小さく溜息をついて考えることにした。どうすれば名声を傷

つかせずにアイシアさんを倒せるかどうかを。

第二百四十八話　周ＶＳ時雨（前書き）

強力な能力には確実に弱点があります。

第二百四十八話　周ＶＳ時雨

二つの黒が火花を散らしながら交錯する。

一人は黒の剣、運命を握りしめて戦う孝治。もう一人は黒い鎌を握りしめて戦うレノア。

二人の力量はほぼ互角だった。お互いにお互いの武器を弾き、受け流す。時には背後まで回り込み叩きつけようとするが、受け止められる。

二人の速度は互角。力は孝治が上だが、技はレノアが上。完全に互角の勝負だった。

レノアが静かに黒い鎌を握り締める。

「強い」

「そっちこそ」

孝治も応じるように運命を構えた。両手に持ち、その剣先を斜め前に向けている。レノアも腰を落とし、鎌を振りかぶっていた。

二人は動かない。ほぼ互角の実力だからこそ、動けない。

「本当に強くなった。去年までは私とここまで張り合えなかったのに」

「狭間戦役がオレを強くした。ここまで対抗できたのも、周達と第

７６移動隊で戦ったおかげだ」

「そう」

レノアが地面を蹴る。それに対して孝治は運命で鎌を受け流す。そのまま振り切るが、鎌の柄によって受け止められる。

完全な膠着。二人は笑みを浮かべあった。

「このまま誰かが来るまで続きそうだな」

孝治が距離を取りながら言う。レノアも小さく頷きながら鎌を孝治に向けた。

「賛成」

地面を駆ける。今頃、悠聖と孝治はどうなっているだろうか。そして、音姉はちゃんと慧海とぶつかっているか、由姫や亜紗はギルバートさんと戦っているかどうか。不安になってくる。ここで予想通りに戦いが繰り広げられていないなら、戦況は一気に悪くなっているだろう。

「周様、不安ですか？」

オレの表情を読み取ったのか都が横を移動しながら尋ねてくる。

オレは頷いてレヴァンティンを握りしめた。

「今回の作戦は模擬戦だからということと、『ＧＦ』のデバイス設定を逆手に取った作戦だからな。根性論でどうなか出来るというのもあるし、勝ったとしても、実戦なら負けていたという場面じゃなければならないんだ」

「どういうことです？」

「第一特務の力が絶対であること。そして、第７６移動隊がそれに匹敵する実力を持つこと。みんなには話していないけど、これが目的なんだ」

「つまり、第７６移動隊は作戦次第では第一特務と戦えるということですか？」

「正解」

今回の戦いは全てがそれに要約される。第７６移動隊が圧勝したなら第一特務という化けの皮が剥がれて終わるだろう。それは、『ＧＦ』に対する反抗が大きくなる可能性がある。

つまり、第一特務は元から本気を出さないわけにはいけない状況でスタートするのだ。そこに出るのが狭間戦役という大きな戦いと少人数の部隊で戦い抜いた第７６移動隊。その力をどう出せるかで抑止力が大きく変わる。ただし、圧勝や圧敗しなければだ。

実戦だと死んでいるという状況なら良し。そうじゃなかったら第一特務は桁違いなのか第一特務は弱いのどちらかになる。

「一番良いのは第７６移動隊がギリギリで勝利。ただし、不意打ちというか疲れ果てたところにダメージを与えてだ。その勝利も実戦だったら負けていたという状況が前提だ。その時に、第一特務の強さと第７６移動隊の強さの両方が目立つ」

今回の模擬戦はそれを狙っている。

「もしかして、八百長でも」

「ない。オレがそう考えているだけだ。多分、向こうも同じことを思っているだろうな。だから、半数は入って間もないメンバーを入れてきた」

半分は模擬戦に参加させるため。残る半分は負けないようにするため。慧海一人でオレ達は負ける可能性だってあるからな。

「第一特務という絶対的な戦力。そこに八百長は必要ない。実力だけで世界が取れるからな」

オレは前を見る。ようやく姿がはっきりしてきた。

刃の小さな斧を地面に突き刺し、漆黒のマントを身に付け、赤い戦闘服を纏った男の姿。

『ＧＦ』総長海道時雨

オレはレヴァンティンの柄を握りしめて地面を蹴る。

時雨の口が小さく動いた。口の動きから何を言ったかわかる。

来たか、と。

凄まじい加速と共に時雨が動く。感覚を頼りにレヴァンティンを握りしめる。

左から来ているが左はフェイント。攻撃を仕掛けてくるのは、

「右！」

右手で柄を握りしめ、右に向かってレヴァンティンを鞘から抜き放った。

紫電一閃。

レヴァンティンが時雨の斧によって受け止められる。時雨の顔に浮かんでいるのは驚愕。

「見えたのか？」

「見えてない。欲望に忠実なだけだ」

時雨が後ろに下がり、また加速する。次に来るのは、

「正面！」

オレは振り下ろされた斧をレヴァンティンで受け止めた。また、時雨の顔に驚愕が浮かぶ。

「馬鹿な。お前の速度はオレより下のはずだ！」

「知ってるさ！」

レヴァンティンを微かに引き、時雨が微かに前のめりになった瞬間、オレは肩から時雨にタックルをしていた。

身体強化無しなら避けられるが、身体強化をして鍔迫り合い状態なら音姉ですら反応出来ない攻撃。時雨はそれをまともに受けて一歩後ろに下がった。

「白楽天流『鍔斬り』！」

レヴァンティンを振り上げ、一歩踏み出しながら振り下ろす。まるで剣道のような一撃だが、違うのは純粋魔力により巨大な魔力の刃を形成するという点だ。

時雨はそれを受け止める。

「白楽天か。相変わらずの技が読めない奴だ」

「当たり前だろ。あらゆる戦場において柔軟であれ。お前に教えてもらったことだが？」

「柔軟すぎる。鍔迫り合いからのタックルで吹き飛ばして鍔斬りなんて普通は思いつかない」

ミスったら隙が大きいからだろう。オレの場合はミスってもいくらかは取り返すことが出来るし。

オレはレヴァンティンを右手で握りしめた。

「さすが駿の息子というべきか。オレも手加減してられないな」

「賛成だ」

時雨の言葉にオレは同意する。それと同時に対時雨用の武器を呼ぶ。

「来い、断章！」

オレの呼びかけに応じ、オレの左手に断章が収まった。

他人の神剣は神剣の主てある都が一定時間認証することで使うことが出来る。そのルールと、味方の武器なら何でも使っていいという模擬戦裏ルールを使った荒技。

時雨の引きつった顔を見る以上、完全に予想外だろう。

「おいおい。それは普通思いつかないぞ」

人数制限のある模擬戦でそれを使えば単純に味方が少なくなる。神剣という強力な戦力の持ち主がいなくなるからだ。実力が拮抗、又は劣っている時は人数が重要な鍵を握る。だが、状況にもよる。

「都はまだ第７６移動隊の中でもバックの戦い方しかしていないからな。フロントの多い第一特務に対してすぐにやられる。だったら、別の使い方をすればいい」

「それで神剣を借りるという選択か。都は端でお勉強ね。わかった。倒すのはお前の後にする」

「後悔するなよ」

断章から狭間の魔力を呼び出しレヴァンティンと断章共に魔力を纏う。

時雨が動いた。動体視力でギリギリ見える速度。時々残像が出来るが、その速度で時雨が斬りかかってくる。レヴァンティンで受け流そうとして、レヴァンティンが弾かれた。力任せの一撃。

オレは振り下ろされる斧に対して防御魔術の二つで狭間を強制的に閉じた。

「なっ」

防御魔術の二つが頑固に噛みつき、斧を離さない。それはかなり強力な拘束魔術になる。

オレはすかさず回り込んでレヴァンティンを振る。時雨はそのレヴァンティンを防御魔術で受け止めた。

「狭間の固定か。さすが神剣、チートじゃねえか」

「弱点があるからチートじゃねえんだよ。お前は武器が一つしかないから使える方法だ」

「一つにしか作用出来ない、か」

「ああ」

極めて強力な能力には重大な欠点があることが多い。

例えば、悠聖の精霊、アルネウラの力である流動停止（フリーズ）。最も優先的な位置にありながら、単体にしか拘束能力はない。ただし、範囲の制限はないから結界に使うと最強の防御になる。

例えば、優月の力である魔術殺し（マジックキャンセラー）。範囲が広く、強力な力を発揮するが、消費魔力が桁違いを通り越して多すぎる。一日最大一回だそうだ。

そして、狭間の力。対象はくっついているものにも作用することは可能だが、流動停止（フリーズ）と同じ単体専用。

時雨は自分の斧を離し、後ろに下がった。

「なら、これで行くぜ」

その言葉と共に周囲がピリピリと痺れだす。ヤバいを通り越して死ぬかも。

時雨の周囲に現れる稲妻の束。その全ての雷エネルギーを時雨は操作している。

雷王具現化。別名、超チート。

雷王具現化中は攻撃全てがねじ曲げられ、近接することすら出来ない。近接したら自爆だ。

つまり、雷王具現化中は術者の一人無双。消費魔力は半端ないから生き残ればどうにかなるが、今は狙わない。

雷王具現化の範囲を見ても、レヴァンティンで打ち消すには範囲が

広すぎる。つまり、魔力を根こそぎ消費して倒れて終わり。でも、

「タイミングは十分だな」

オレは笑みを浮かべた。そして、断章を手放す。

「なっ」

時雨の顔に驚愕が走った。時雨はまだ気づいていない。これがオレの狙い通りだということを。

「なっ」

そして、時雨がまた驚いた。そうだろう。オレの後方には断章を構えた都の姿があるのだから。

「やらせるか！」

雷王具現化によって作り出した稲妻を都に向かって放とうとする。だけど、オレはそれに対してレヴァンティンを地面に突き刺した。

「レヴァンティン、打ち消せ！」

『了解です！』

レヴァンティンがオレの命令に応じて時雨が放った稲妻を打ち消す。その時に時雨はようやく狙われていたことに気づいた。

「最初から、オレに雷王具現化を」

「真っ正面から戦ったなら、雷王具現化を使われた時点でオレ達は負ける。だったら、雷王具現化を出させて勝つ作戦を考えればいい。一人じゃ無理だ。だったら」

オレは都の方を振り返った。

「都の力、へっ？」

その光景を見てオレは言葉を失ってしまう。そこには、魔力を凝縮させた光で構成された翼を持つ都の姿があったからだ。しかも、浮いている。

確かに、膨大な魔力を翼状にすればイメージはしやすい。天使みたいな感じで、イメージ出来れば維持出来やすい。

ただ、その翼がどう考えても縦２０ｍほどあるんですが。

「行きます！」

その瞬間、時雨の頭上に巨大な魔術陣が現れた。範囲は、普通に都の場所も飲み込んでいる。オレは地面を蹴った。時雨はその瞬間に稲妻を都に向かって放っている。

「させるか！」

オレは稲妻をレヴァンティンで打ち払った瞬間、

「エターナルバニッシャー！」

都の言葉と共に膨大を通り越してバカみたいな量の魔力の光が降り

注ぎ、光によって埋め尽くされた。

レヴァンティンの力を最大限まで使った威力を相殺する。だけど、魔力が根こそぎ奪われていく。

どれくらいの時間が経っただろうか。顔を上げるとエターナルバニッシャーは終わり、地面に倒れている時雨の姿があった。

オレはレヴァンティンを鞘に収める。

「周様、無事ですか？」

「無事なわけねえだろ」

魔力は根こそぎ奪われ、これ以降の戦闘はかなり辛い。

オレは小さく溜息をついて振り返って、また溜息をついた。何故なら、そこにはまだ光の翼を持つ都がいたから。戦闘服も汚れている。

つまり、自分の魔力をまだ使用していない。

「無尽蔵にもほどがあるだろ」

「何がですか？」

「背中」

エターナルバニッシャーは範囲を見て威力を体験した限り、断章でしか無理だろう。問題として敵どころか味方や術者まで巻き込む問題児。

強すぎる力は必ず弱点がある。

「疲れないと思ったらこういうことだったんですね」

「今気づいたのかよ！」

「周様、可愛いですか？」

オレは小さく溜息をついた。

「次に行くぞ」

そのままオレは走り出す。都もオレとの距離を固定してついてくる。

「答えてくださいよ」

「また後でな！」

オレはさらに速度を上げる。本音なんて言えるかよ。刹那だけ見とれたなんて。

『マスターらしいですけどね。刹那という時間が』

黙れ。

頭の中に語りかけてきたレヴァンティンに対して、オレは小さく溜息をついた。

第二百四十九話　最強ＶＳ最強（前書き）

第７６移動隊最強ＶＳ第一特務最強との戦いです。

第二百四十九話　最強ＶＳ最強

「紫電一閃！」

音姫が一歩踏み出すと同時に光輝の刀身が眩い輝きを放ちながら神速の速さで煌めいた。

慧海は後ろに下がりながら蒼い剣で受け流す。しかし、すでに光輝はひるがえっている。

「紫電逆閃！」

「ちょっ」

神速の速さで振り下ろされる光輝く光輝をギリギリで回避しながら慧海は蒼い剣を虚空に戻した。それと共に光輝の輝きがなくなる。

光輝の特性は神の力と対抗した時に光輝き、持ち主の能力を底上げするもの。だが、音姫の速度は全く衰えることなく光輝がまたひるがえっていた。

「紫電連閃！」

振り上げ、そして、振り下ろす。気を抜けば一撃でやられるような攻撃に紙一重で回避する慧海。

「なろ！」

振り下ろした光輝を見て慧海は無骨な剣を振り切る。だが、それは

振り上げられた光輝によってお互いを弾かれていた。

まだ、音姫の連撃は止まらない。

「雲散霧消！」

弾かれた勢いをそのままに体を回転させ、光輝を慧海に向かって放つ。慧海はそれを何とか受け止めた。

「しゃら！」

慧海が力任せに音姫を弾き飛ばす。音姫は後ろに下がった。

「直接本気で戦ったことはなかったけど、反則に近い性能だな。ちっ、少し惚れ惚れすれぜ。そんな能力はオレも欲しかった」

「そんなことを言われても。私は今は由姫ちゃんと弟くんを守る剣。この能力はそのためのものだから」

それを聞いた慧海が軽く肩をすくめる。

「剣ね。それがお前の将来か？」

「ううん。教師になろうかなって」

「へっ？」

間抜けな顔になった慧海に向かって勢いよく光輝が振り抜かれた。

地面をえぐりながら放つ白百合流姿返し『無常の太刀』。それを寸

前で慧海は避ける。しかし、音姫は勢いよく光輝を振り下ろしていた。

白百合流燕返し『無名の太刀』。

慧海は無骨な剣で受け止めようとするが、剣自体が地面に叩きつけられる。驚愕の表情を浮かべる慧海の視線の中で、音姫は四人に分裂した。

「琥珀霧消！」

四方向からの斬撃を受けて、慧海の体が揺れる。それを見ながら音姫はパチンと光輝を鞘に収めた。

「見事だな」

音姫が目を見開く。目の前にいたはずの慧海が解けたのだ。まるで、組み合わされた糸のごとく。そして、声は背後から。

音姫の額に汗が流れる。

「だが、まだまだだ」

振り返る時間はなかった。背中に強烈な打撃を受けて音姫の体が吹き飛ぶ。

吹き飛びながらも姿勢を制御しつつ振り返った。目の前に迫っていたのは小さな刃のついた頸線。

光輝によってすかさず弾く。音姫は気づいた。光輝が光輝いている

のを。

「光輝が光るのは神に相当する力。オレの二分の一も出せないダミーが光るわけないよな」

慧海の右手にあるのは刃のない剣。いや、音姫は見ている。周囲に張り巡らされた頸線を。そして、左手には蒼い剣。

「神剣『飛翔』と神剣『蒼炎』。オレの本気だ。受け取れ」

蒼い炎が舞った。いや、頸線全てに走った蒼い炎が頸線が動くことによって動き出したのだ。不規則に、しかし、絡まることのない動き。

音姫はしっかり頸線の位置を見て体を動かす。

飛び、しゃがみ、弾き、受け流す。だけど、全てを受け止めることは出来ない。体に絡みつく頸線。そして、蒼い炎が包み込んだ。

「これで終わりだ」

慧海がかっこつけのために背中を向ける。そして、前方には、鞘に収めた光輝を握りしめる音姫の姿があった。

「へっ？」

慧海がまた間抜けな顔になると同時に、音姫が鞘から光輝を走らせた。

「鬼払い！」

２０に及ぶ剣閃が慧海の体を切り裂き吹き飛ばした。だが、慧海が無意識で振った蒼炎が振り切った態勢にいた音姫の体を切り裂く。

音姫はその場に片膝をつき、慧海は背中を木々にぶつける。

「おいおい。どのタイミングでダミーと入れ替えていたんだ？」

「慧海さんが蒼炎とスターゲイザー・レインを使った瞬間。慧海さんがダミーでいたのはわかっていたから私もダミーをと」

「見事に騙されたってわけか。でも、勝負は今からだな。オレも音姫も、今の一撃は実戦ならどっちも死んでいる一撃。つまり、まだ互角だ」

「はい」

音姫が光輝く光輝を鞘に戻す。白百合流剣術の基本的な動作だ。ただ、そこからの連撃は並大抵の努力で手に入るものじゃない。

慧海は両手の神剣を構える。そして、腕を振った。

細かな刃が大量についた頸線が音姫に迫る。音姫はそれを左手で掴み取った。

「なっ」

慧海が絶句すると同時に音姫が一歩を踏み出す。鞘から光輝を走らせながら振り上げる。

慧海はすかさず飛翔を振ろうとした。だが、その刃は音姫によって掴まれているのか動かない。

「根本を掴んだか！」

先っぽならまだ対処の仕方はあった。だが、根本を掴まれていた以上、慧海は飛翔を手放すしかない。

飛翔を手放し、蒼炎を両手で握りしめる。その時には音姫は片手で光輝を振り下ろしていた。

白百合流滅び斬り『陸斬り』。

白百合流の中で最も使っていない最大技。鬼払いを単体相手に大ダメージを与える技なら、陸斬りは、戦場を分断させる斬撃だった。

当てることは考えていない。敵を分断することに主眼が置かれた技。それは模擬戦のフィールドをちょうど半分に両断する威力を持っていた。

轟音というべきか、爆音というべきか、凄まじい音と共に衝撃波が大地を砕く。そして、衝撃波が慧海の体を吹き飛ばした。

「デバイス使っているよな！？」

慧海は思わず叫ぶ。そうしなければならないほど極めて威力の高い攻撃だった。

「当たってたら終わっていたのに」

「人生終わっていそうだけどな。なんだよその大技は。まあ、次は当たらないし、次で決める」

慧海が蒼炎を握りしめる。それに対して音姫は前に踏み出していた。鞘に戻した光輝を握りしめ、最速の一撃、最高の一撃を狙う。

慧海が前に踏み出す。踏み出しながら蒼炎を横に振り切った。

「燃え尽きろ！」

蒼い炎が周囲を包み込んだ。そして、慧海が蒼炎を振り上げた。対する音姫は蒼い炎の中を真っ直ぐ慧海に向かって走り込んでくる。

「クリムゾンフレア！」

「紫電一閃！」

慧海と音姫が同時に攻撃を放つ。

凄まじいまでの蒼い炎の渦が音姫を包み込み、紫電一閃の斬撃が慧海の体を切り裂いた。

二人が交錯する。どちらも剣を振り切った体勢のまま動かない。そして、慧海の手から蒼炎が落ち、音姫の体が横に倒れた。

「まさか、相討ち覚悟で来るとはな」

慧海はそのまま片膝をつく。もし、音姫が魔術を使えたなら勝負は変わっていただろう。

慧海は小さく息を吐いた。

「体力と魔力はほとんど尽きたし、これはちょっとマズいかもな」

第二百五十話　最終局面

「光、無事か？」

意識が朦朧とし気絶しかけていた光は顔を上げた。そこにいるのは傷一つないアル・アジフの姿。

「アル・アジフや。ごめん。ちょっと無理かも」

「そうか。座っておれ」

アル・アジフは光をその場に座らせた。すると、すぐに目を閉じて眠り始める。

相手が何人か残っているかはわからないが、アル・アジフは合流した方がいいと直感で感じていた。そして、魔術書を開き、

「アル・アジフ？」

ギルバートの声にアル・アジフは振り返っていた。そこには見るからに満身創痍のギルバートの姿。

アル・アジフはそれを見て身構える。

「亜紗と由姫にこっぴどくやられたみたいじゃな」

「そうだね。まさか、あそこまでやって来るとは思わなかったよ。でも、ここからは負けない」

ギルバートがシュナイトフェザーとラファルトフェザーを構える。
アル・アジフも魔術書アル・アジフを開いた。

漆黒と漆黒が空中でぶつかり合い互いに弾かれる。
孝治は素早く弓に持ち替えて矢をいくつも放った。レノアはそれを全て弾き返す。

「そんな攻撃は牽制にすらならない！」

そのまま加速して鎌を孝治に叩きつける。孝治も運命をレノアに向かった放っていた。お互いの武器がぶつかり合い大きな火花を散らす。そして、また弾かれ合った。

二人の息は荒く、孝治は運命についたエネルギーバッテリーを新しいのに変える。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ、強い。さすが、第一特務」

孝治は荒い息のまま運命を構える。

「はっ、はっ、はっ、これで１３歳？　才能に嫉妬しそう」

レノアも荒い息のまま鎌を構えた。二人が空中で動きを止めている。動かない。どちらが先に動くかどちらも待っている。痺れを切らした方が負ける。そんな感覚が周囲に張り巡らされていた。

そして、轟音。

二人は同時に動き出した。二人のちょうど真ん中で巨大な土柱が起きたからだ。お互いがお互いの姿を見失い、加速する。

「貴様の力、見せて見ろ、運命！」

孝治は勢いよく運命を振りかぶった。土柱が地面に落ちる。そこには、鎌を振りかぶったレノアの姿。その鎌いは漆黒のオーラがまとわりついている。

どちらも同じタイミングで、同じ速度でお互いの武器を振り下ろしていた。

ガキッと鈍い音が響く。それと同時に黒の斬撃が背後の空間を吹き飛ばしていた。

空に舞う破片。鎌の部分が半ばから砕けた破片が地面に突き刺さる。

孝治は倒れてきたレノアを受け止めた。そして、小さく息を吐く。

「何とか勝てたな」

「おーい、孝治！」

その声に孝治は地上を見下ろした。そこには、優月とアルネウラとダブルシンクロをした悠聖の姿があった。孝治はそのまま地上に降りる。

「そっちは勝ったか」

「ああ。互角の戦いだった。そっちこそ」

「実戦なら負けていた。模擬戦様々だ。どうする？」

悠聖が聞いているのはこれからのこと。孝治は少し考え込んだ。

周の戦略はみんなに話しているからここは重要人物を攻撃すべきという考えが浮かんできた。だが、相手の一人はギルバート。孝治では手も足も出ない相手。そして、もう一人は慧海。さらに手も足も出ない相手。

小さく頷く。

「待機だ」

「なんでだよ。まあ、気持ちはわからんでもないな」

孝治がレノアを木の陰に下ろすのを見ながら悠聖が言葉を続ける。

「今は後方組と合流しよう。最悪、負けている可能性だってある。そいつらが戦っている人達を」

その瞬間、ソラが蒼く染まった。二人が思わず顔を見合わせてしまうくらいに空が蒼く染まった。

ちなみに、この瞬間にメリルが天変地異ですかと騒いでいるのだが、二人は知る由もない。でも、この原因を二人は簡単に思いついていた。

「慧海さんの攻撃だろうな。孝治、音姫さんやられたかも」

「可能性としては高いな。今は後方に」

「おーい」

その声に二人は振り返っていた。そこにはこっちに向かって走ってくる周と都の姿。正確には都は走っていないのだが、今はまあいいだろう。

周がすぐに二人と合流する。

「何とか勝てたみたいだな」

「オレは模擬戦様々。孝治は実力だけどな。周は？」

「都様々。正直、雷王具現化された瞬間に泣きそうになった」

実際にレヴァンティンが無かったら周は今頃やられているだろう。

周が空を見上げる。すでに蒼い空ではないが、その原因を周もわかっていた。わかっていたからこそ周は次の作戦に入る。

「三人共、聞いてくれ」

風の刃がギルバートに襲いかかる。ギルバートはそれを紙一重で避けた。だけど、次は土の槍がギルバートに迫っている。すかさず側転で避けるが、目の前に炎の弾が迫っていた。

寸前で飛びのいて回避するがギルバートの息はかなり荒い。

「やはりの」

アル・アジフは何かにわかったように頷き風の刃を放った。ギルバートはその場から飛びのく。

アル・アジフの体はすでにいくつかの個所が傷ついているが、ギルバートよりは遥かにましだった。アル・アジフが氷の槍を放つ。

「8秒」

その言葉にギルバートが微かに動きを鈍らす。そこに氷の槍が飛来した。シュナイトフェザーで払うがその瞬間には強烈な風の塊がギルバートを吹き飛ばす。

アル・アジフはギルバートに指を向けた。

「シュナイトフェザーとラファルトフェザー。二つの強力な斬撃を持つ神剣。違うかの？」

「そうだよ」

ギルバートが攻撃をさけながらアル・アジフの問いに応える。それに対してアル・アジフは満足したように頷いていた。

「その斬撃を放つには平均八秒を必要とする。一発一発ごとのチャージでの。つまり、絶えずそなたを動かしておけば斬撃は放てない」

「それでも」

ギルバートは前に出た。シュナイトフェザーとラファルトフェザーを握り締めアル・アジフに近づこうとする。でも、その前に土の壁が現れこっちに向かって倒れてくる。ギルバートは素早く土の壁を切り裂いた。開けた視界の先に、迫りくる雷球。避けられるような距離じゃない。

「おっと。悪いがそれはさせねえ」

その瞬間、頸線が雷球を砕いていた。ギルバートが声の下方向に向く。

「慧海！」

「悪いな。遅れた」

そこには満面の笑みを浮かべる慧海の姿。対するアル・アジフは小さく舌打ちをしていた。

ただでえさえ不利だった状況がさらに不利になった。このままだとただやられるだけだ。

「さてと、アルには恨みはねえけど、今回は模擬戦だ。全力全開でやらせてもらう」

そう言いながら飛翔を構える慧海。それを見たアル・アジフは呆れ

たように両手を挙げた。

「我はそなたには勝てぬよ。いや、ここは我が負けた方がいいのかの？」

「どういうことだ？」

何かに気付いたギルバートが振り返る。そして、シュナイトフェザーとラファルトフェザーを後方にある茂みの中に向かって振り切っていた。

「レヴァンティン！」

その言葉が聞こえた瞬間、慧海はアル・アジフに向かって魔術を放っていた。昏倒させる睡眠魔術。アル・アジフは抵抗する気がなかったのかそのまま眠りにつく。

でも、そのタイミングが慧海にとってはかなり大きかった。

気配を感じて横に跳びながら振り返った瞬間、目の前に矢とチャクラムが迫っていた。回避することが絶対不可能な軌道に二つの攻撃が直撃する。

「くっ、まさか」

慧海が小さくつぶやくと同時に周がレヴァンティンを振りかぶりながら現れギルバートに叩きつける。慧海の方には悠聖が薙刀を振りかぶっていた。

慧海は薙刀を受け止める。

「ラストバトルってか？　上等だ。第一特務の残りとして、相手をしてやるよ！」

第二百五十話　最終局面（後書き）

次回、模擬戦が終了します。

第二百五十一話　ラストバトル

白い軌跡がオレに襲いかかる。オレはそれをレヴァンティンで受け止めた。

速度も剣の切れ味もオレの知っているギルバートさんにはほど遠い。それを知ってオレの顔がにやけるのが分かった。

レヴァンティンでシュナイトフェザーを弾き飛ばす。

「さすがに、キツいか」

ギルバートがそう言うと共にラファルトフェザーが迫っていた。

ギルバートさんの戦い方は双剣。両手にシュナイトフェザーとラファルトフェザーを持つことで広範囲への攻撃と高速連撃を可能とする。

というか、万全ならまず止められない。

ラファルトフェザーを受け流し、レヴァンティンを振る。だけど、それはシュナイトフェザーで受け止められた。

「やっぱり、抜けないか」

「周も万全じゃないね」

お互い同時に距離を取り、そして、ぶつかる。

オレはレヴァンティンをモード?に変更してシュナイトフェザー、ラファルトフェザーとぶつけ合った。

「いつもなら、鍔迫り合いになれば隙あらば魔術を放ってくる。僕の今の状況は特にね」

「時雨に雷王具現化さえされなければ、な！」

シュナイトフェザー、ラファルトフェザーを弾き振り上げながら勢いよく振り下ろした。

ギルバートさんの肩に微かにレヴァンティンが当たって受け止められる。

「オレは魔力が枯渇しているだけだが、ギルバートさんは肉体的ダメージだろ？　そんなに由姫と亜紗は強かったか？」

「やられたよ。由姫ちゃんは僕を直接倒そうと、亜紗は僕にダメージを与えるつもりで向かってきた。おかげで体力も魔力も枯渇気味だ。でもね」

ギルバートが後ろに下がり、シュナイトフェザーを振り上げる。

来る。

オレは全ての神経を集中させた。シュナイトフェザーとラファルトフェザーの斬撃は不可避の斬撃。あらゆる障害物もあらゆる魔術もそれごと斬撃が破壊する。

避ける術は一つだけ。しかも、シュナイトフェザーの斬撃のみ。

振る軌道を見切り、動く。それをするしかない。

まるで、時間が遅くなるような感覚。ギルバートさんの腕が遅くなり、オレは感覚と共にその場に滑り込んでいた。

ギルバートさんがシュナイトフェザーを横に振る。その斬撃はオレの頭上を通過し、木々を切り裂いた。

「なっ！」

ギルバートさんは驚きながらもラファルトフェザーを振る。それに対してオレはレヴァンティンを突き出していた。

「レヴァンティン！」

『消します！』

ラファルトフェザーの斬撃がレヴァンティンの力によってかき消えた。今度こそ、ギルバートさんが完全に動きを止める。

「モード？！」

レヴァンティンを振り上げ、振り下ろす姿勢のままオレは叫んでいた。

レヴァンティンが巨大な剣の形に変わる。魔力が尽きた今の状態では持ち上げることは出来ない。でも、このまま下ろすことが出来る。

ギルバートさんがシュナイトフェザーとラファルトフェザーで受け

止めようとした。だけど、モード？になったレヴァンティンはそれを叩き落とし、ギルバートさんを切りつける。

横にゆっくり倒れるギルバートさん。

「これで」

オレはレヴァンティンを通常の剣に戻していた。油断していた。だから、ギルバートさんが倒れる間際に振ったシュナイトフェザーに気づかなかった。

体が真っ二つになったような感覚と共に、オレの意識は闇に包まれた。

漆黒の剣が虚空を走る。慧海さんはそれをたった一本の頸線で受け止めていた。

「化け物だろ！」

それを見ていたオレは薙刀を振り下ろす。魔力をたっぷり溜め込んだ薙刀の一撃は頸線を全て断ち切っていた。

しかし、蒼炎によって受け止められる。

「孝治、疲れてるな」

「くっ」

慧海さんの笑みに孝治が顔を歪める。

慧海さんはボロボロのはずだ。なのに、その魔力の質は全く衰えているようには見えない。

オレですら優月から借りている魔力を乗せに乗せてようやく頸線を斬れるくらい。孝治の斬撃は受け止められる。

確かに、こうなると無敵の異名が相応しく思えてくる。

「お前の力はそんなものか？」

「うるさい！」

孝治が新たなエネルギーバッテリーを差し込み運命を振り切る。慧海さんはオレを蒼炎で弾き飛ばして運命を蒼炎で受け止めた。

そして、ニヤリと笑みを浮かべる。

「できるじゃねえか」

「優月！」

オレは魔力の流れを掌握し、魔力を収束させる。これなら受け止められることはない。

「ニュートロン！」

魔力の塊をドリル状に回転させながら放った。これなら、

「甘いな」

その言葉と共にニュートロン、放った魔力の塊が全て頸線によって受け止められていた。本音を言うならありえない。

そのまま慧海さんが飛翔を振ってくる。オレは薙刀を構えた。

「流動停止（フリーズ）！」

だが、飛翔から放たれる頸線は止まらない。

「んなバカな！」

オレは叫びながら魔力任せの防御魔術を多重に展開した。かなりの枚数の防御魔術が細かな刃を持つ頸線によって砕かれる。

流動停止（フリーズ）は対象が一つに対しては絶対の威力を発揮する。考えられる可能性は、方向性が多すぎて流動停止（フリーズ）が発動しなかったか。

それをするだけでも人間離れしているのに、そんな気の遠くなるような作業と並行して孝治の猛攻を凌ぎきっているところだろう。動きは多少荒いが、一撃一撃の威力が極めて高く、さらには闇属性魔術であるエネルギーを凝縮させたレーザーを大量に放っているのだが、それすらも簡単に防いでいる。

ここは、賭けにでるしかないか。優月、アルネウラ、ちょっと無理をする。

オレはシンクロしている二人に話しかけた。

『サポートするから』

『任せて！』

二人の声が聞こえてくる。オレは薙刀を地面に突き刺した。

「孝治！」

今のオレ達にはその一言で十分だった。

「魔術殺し（マジックキャンセラー）！」

優月の力を解放する。魔力が少なすぎて範囲はかなり小さくなったが、慧海さんを呑み込み、孝治をちょうど呑み込まない位置に展開していた。

慧海さんの目が見開く。

「駆けよ、運命！」

その言葉と共に弓に矢の代わりに運命を構えた孝治が手を放した。黒の閃光が慧海さんの体を貫く。

「これで」

勝ったと思った。慧海さんはそこまで人間離れしていないだろうと思った。だけど、慧海さんは倒れない。そして、蒼炎を周囲に向かって振っていた。

蒼い炎が周囲を焼き、オレと孝治の意識は完全に闇に呑み込まれた。

慧海がその場に蒼炎を落とす。気力と気合いとその他諸々で何とか立っていたが、もう限界だった。

慧海が小さく息を吐く。

「ようやく終わったか。ギルバートの奴はどうなった？」

負けたとは思えないが相手はあの周だ。慧海が考えている通りなら、周は時雨を倒している。

「まだ、戦いは終わっていないみたいだしな。残っているのは周だけ」

その時、空に巨大な魔術陣が浮かんでいた。それを見て慧海が空笑いを浮かべる。

「都残っているの忘れてた」

そして、エターナルバニッシャーが慧海の体を直撃していた。

第二百五十一話　ラストバトル（後書き）

都は忘れていたわけじゃありません。瞬殺されるので置かれていただけです。（笑）

第二百五十二話　戦いを終えて

模擬戦及び航空空母の発表。それは波乱が起きると思っていたが、波乱以上に大波乱が起きていた。

簡単に言うなら第７６移動隊が世界中のマスメディアに取り上げられたからだ。まあ、ここまでは良かった。ここまでならオレも時雨も想像していたことだった。

まあ、自称人権団体の諸君がしゃしゃり出てくるのもわかっていたし、資金に関しても出るのはわかっていた。わかっていたんだが、

「どうしてエレノアのことまで半日で出ているのかね？」

最初から狙っていたかのようなタイミングにオレは航空空母の艦橋で小さく溜息をついていた。

隣の椅子には苦笑したように笑みを浮かべているアル。

「仕方ないじゃろ。第７６移動隊はあまりにメンバー構成がおかしいからの。我しかり、元『炎帝』しかり。でも、そなたは見捨てない」

「当たり前だ。例え指で刺されるようなことがあっても、オレは守る。確かに、エレノアは狭間戦役の始まりを起こした。でも、あいつは必要最低限の犠牲しか出すつもりはなかった。もし、オレが気絶しなければ犠牲はもっと少なかった」

「気負うではないぞ。我はそなたと共にいる。ずっとな。そなたが

守ろうとすることは我も守ろう」

「助かる」

オレは座っているアルの頭を撫でた。アルが嬉しそうに目を細める。

こうなると猫のようで可愛い。

「ところで周よ。スケジュールで一つ気になったことがあるんじゃが」

「もしかして、明日のスケジュールか？」

「そうじゃ。明日、我らが出るのは夕方になっておるが、そなたと都、音姫だけスケジュールが空白になっているじゃろ」

確かにそうなっている。とある用事からオレ達はスケジュールを開けていたのだ。

まあ、夕方にしたのはやることが一杯あるだろうし。

オレはアルに話すかどうか考えて、そして、

「狭間の鬼に会いにいく」

「そなた、何故。いや、そなたの考えがあってのことじゃな。それに、そなたら二人ならば大丈夫じゃろう。我らは控えておればいいのじゃな」

「さすがアル。よくわかっているな。頼めるか？」

「当たり前じゃ。一つ気になったんじゃが、これからの第７６移動隊の部隊編成はどうするんじゃ？」

今の第７６移動隊は三段式、隊長と副隊長に隊員という三つしかない。でも、第７６移動隊もこれから増えていくからだろう。事務を含めて３０人くらいになるかもしれない。

オレは少しだけ考えた。

「従来の四段式だろうな。それが一番安定する」

四段式というのは隊長を一番上に副隊長兼部隊長、部隊副隊長、部隊員の四つに分けるやり方だ。

１０人前後の部隊だった場合、三段式でも可能だが、第７６移動隊は２０近くまで増えている。三段式では纏めれない。

「部隊内に四つの小部隊に分けることになるだろうな」

「そうじゃな。しかし、最初の頃と比べて第７６移動隊もすごいことになっているの」

「全くだ」

最初はオレ、孝治、音姉、悠聖、亜紗、中村の正規部隊組＋由姫、浩平、七葉の９人から始まった。

リースが来て、都が入って、エレノアが観察処分でベリエ、アリエと共に来た。そして、アル達も来た。今では２０人にもなっている。

この中で離れていくのは浩平とリースだけ。

「夏休みに色々あったからな。まさか、都がオレ達について来ることになるなんて」

オレが中東に言っている間、都築家の大半が捕まるような事件が発生した。そのため都がそのまま学園都市に来ることになっている。

都からそう提案されたんだけどな。

「学園都市か。楽しみじゃ。我はまだ言ったことがないからの」

「そうなのか？　いいところじゃないけど、楽しいところだけどな。さて、そろそろみんな来る頃だな」

オレは時計を見てから入り口の方面を見た。そこには若干開いた扉。開いたところから誰かが見ている。ちなみに、複数。

アルが無言でアル・アジフを開くと、入り口が開いた。現れたのは悠聖とアルネウラ。優月はいない。そして、航空空母エスペランサの操縦士であるクロウェン。

「いやー、クロウェンさんが来たから案内したらお前らがいるんだもの。ちなみに、オレ達以外見てないぞ」

「そうか。まあ、別にいいさ」

オレは小さく溜息をついて近くの椅子に座った。そして、目の前にあるパネルをいくつか叩いていく。

「今回はオペレーターにオレ、補助操縦士にアルがやる。何か疑問は？」

オレはエスペランサを完全に起動させながら振り返る。クロウェンはは首を横に振って操縦士の席に座った。

結構寡黙なんだけど、航空機のパイロット歴は長いし、『ＧＦ』専用航空機のパイロットでもある。

ちなみに、知り合いでもあるし、話が合えば凄まじく饒舌になる。恐ろしいくらいに。

「全員乗っていることは確認しているから、出発準備だな。乗組員全員に告げる」

オレは艦内放送用のマイクに口を近づけた。

「今から２０分後に離陸する。積み込みが終わっていないものがある場合、１０分以内に連絡を頼む」

オレはそれだけを言って放送を切った。多分、これでみんな艦橋に来るだろう。

『それにしても、もうすぐなんだね。航空空母エスペランサの離陸は。ちょっと楽しみだな』

「ちょっとかよ。散々旅客機で騒いでいなかったか？」

『あれはあれ、これはこれだよ。周、何か手伝うことはない？』

「ない」

オレは小さく溜息をついて最終チェックに入ることにした。

第二百五十二話　戦いを終えて（後書き）

クロウェンの熱い語りは第二章で書く予定です。時にはなくなるかも。

第二百五十三話　滅びと鬼

８月３０日。

第７６移動隊のメンバー全員は市の郊外にある広大な空き地に着地している航空空母エスペランサに様々な荷物を乗せていた。ちなみに、操縦士のクロウェンはコンビニ巡りに走っている。

そして、オレと音姉、そして、都は狭間の夜があったあの丘に来ていた。端にある千春の墓。そこに都は狭間市から出て行くことになった日と同じように様々なことを報告している。

その様子を見ながらオレは小さく溜息をついた。

「緊張しているね」

すでに髪の毛のリボンを解いた音姉がオレに話しかけてくる。オレは肩をすくめて頷いた。

「そりゃな。狭間の鬼は封印出来ただけなんだ。二人だけでどうにか出来るかどうかが」

「大丈夫。お姉ちゃんに任せなさい」

無邪気に笑う音姉にオレは笑みを返した。音姉だって緊張しているだろうにオレを勇気づけようと言ってくる。

それがオレは純粋に嬉しかった。

「そうだな。オレは鬼と対話することだけを考えるよ」

「うんうん。あっ、都が終わったみたい」

都が立ち上がってこっちに向かってくる。その顔には微かな緊張。

オレはレヴァンティンを鞘から抜いた。

「準備をしてくれ。今から、封印を段階解除を行う」

「はい」

「うん」

二人の声を聞きながらオレはレヴァンティンを構えた。そして、息を大きく吸い込む。

『大丈夫ですよ。私がマスターを援護しますから』

「頼もしいな。頼むぜ、相棒」

魔術を展開する。オレが狭間の鬼に使った封印は魔力任せの封印だったが、十八重に展開された強力な封印。封印を維持したまま狭間の鬼を出すには五回、封印を剥がさないといけない。

細かな魔力操作をレヴァンティンと共に行う。

一枚目。

これは簡単だ。たった一枚なのだから。

二枚目。

魔力操作が少しずつ難しくなってくる。細かな作業は本来四重までが限度なのだが、気合いと気力の根性論でどうにかするしかない。

三枚目。

ここからは絶対に間違えない。間違ったなら封印が破壊される。

四枚目。

成功した。でも、これ以上は論外。論外でも、やるしかない。

レヴァンティンと共に細かな魔力操作を行い、そして、

五枚目が剥がれた。

意識を前に戻す。そこにはうっすら姿を現した金色の姿をした狭間の鬼。

『封印が弱まったので来てみれば、貴様らか。何のようだ？』

「尋ねたいことがあったからな。あんたと戦った４ヶ月以上経ってオレが至った結論だ」

オレは息を吸い込んだ。

「まずは一つ。狭間の鬼は二つある。一つは世界を滅ぼそうとするものと文明を破壊しようとするもの」

鬼は何も語らない。いや、聞いてから答えるのだろう。

「次に、滅びが始まるのはこの世界ではないが、滅びがこの世界に関係している。さらに、滅ぶ原因は文明が一定レベルか、戦力が一定レベル、又はどちらも達した時。そして、お前が生まれたのは滅びを止めるため。以上だ」

こいつが世界を滅ぼすことにこだわっていたのは滅びを止めるために生まれた。オレはそう推測した。

こいつが語ろうが語らまいがオレはこいつに言いたいことはある。

『根拠は？』

「お前を求める勢力がいた。そして、オレと戦った時のお前と悠聖が戦った時のお前との違い。様々な世界に滅びの話があるということ。それらを総合して考えた」

『よく出来た御伽噺だ』

「そうか？」

オレはニヤリと笑みを浮かべた。そして、レヴァンティンを構える。

「今ここで全ての封印を解けばはっきりすることだぜ？」

もし、オレの推測が正しければ、狭間の鬼の次の言葉は、

『止めておけ。貴様には何の利益も』

「それだけで十分だ」

オレはニヤリと笑みを浮かべていた。推測通りに全てが進むのは本当に気持ちがいい。

オレはレヴァンティンを鞘に収めた。

「最初の質問の解答をありがとう」

「周様、鬼はまだ」

「封印を解くために動いた狭間の夜の時と違うよ。今の狭間の鬼は弟くんが言ったように二つある内の一つ」

そう。例えば、封印される前とされた後で考えが違うとしたならどうなるか。封印された後に封印を解けばわかると言えばいい。

封印された状態では主に文明を滅ぼす方なのだろう。だから、止めた方がいいと言った。

「ついでに最後の質問も答えになっているからな。お前は滅びに対して生まれた。だけど、人を殺すためじゃない。封印されていない状態は何らかの原因、滅びの一部を内包したとかじゃないのか？」

『貴様は一体何者だ？　何故、そこまで辿り着こうとするそれではまるで』

「誰かを犠牲にして世界を救えたとしても、それは世界を救えたことにはならない。世界を救うということは、自分も仲間も知り合い

も誰もかも救うことだ。オレは世界を救う。全てを守って」

『不可能だ。そのような子供の夢、そんなものが出来るとでも』

オレは頷いた。真剣な表情で、真っ直ぐ鬼の目を見つめて。

「出来るまで追い続けるさ。例え、それが出来なくても、オレはレヴァンティンと、オレ達の仲間と一緒に世界を救うために戦い続ける」

『後悔するぞ』

「後悔しない人生なんてない。だから、オレは進み続ける。だから、お前は静かに眠っておけ」

それを言った瞬間、狭間の鬼は本気で驚いたような顔になっていた。そして、フッと笑みを浮かべる。

『面白いな。貴様ら人間は本当に』

その言葉と共に金色の光がオレの目の前に現れた。

『受け取れ。滅びに対して生まれた我の純粋な力だ。我は貴様に世界の命運を預ける。貴様が死ぬまでな』

「いいのか？」

『貴様が死ねば封印が解ける。その時こそ世界が滅ぶだろう』

オレは笑みを浮かべ、金色の光を掴み取った。金色の光がオレの体

の中に入っていく。

『我は眠ろう。そなたが、死ぬその日まで』

鬼の姿が消えた。オレは剥がしていた封印を再度展開する。

静まり返った周囲。オレは小さく溜息をついた。

「予想外だ」

「弟くんが力を受け取ったことが予想外だよ。どうして不用意に？」

「そうです。周様に何かあったら私はどうすれば」

詰め寄ってくる二人にオレは苦笑するしかなかった。

「多分、信じたかったんだろうな。鬼のことも。さてと、そろそろ駐在所の方に戻ろうぜ。オレ達も準備しないとな」

「弟くん？　話は終わっていないよ？」

音姉が光輝を鞘から抜く。都も断章を構えていた。

とりあえず、オレの取る行動は一つだけ。

「さらば」

そう言って走り出す。もちろん、全速力で。

「絶対に逃がさないよ」

「逃がすとお思いですか？」

地獄の鬼ごっこは駐在所につくまで続いたのだった。

どうしてこうなった。

第二百五十三話　滅びと鬼（後書き）

次回、第一章最終話です。長かった。

第一章最終話　学園都市へ（前書き）

ようやく第一章が終わります。

第一章最終話　学園都市へ

空が真っ赤に染まる頃。オレは、オレ達は広大な広場に着地するエスペランサの周りにいた。周りにはたくさんの人がいる。

主に都の見送りに。そして、オレ達のクラスメートが見送りに。

「もう、お別れなんだね」

委員長が名残惜しそうに呟いた。確かにもうお別れだ。

「そうだな」

オレはそう素っ気なく返す。ちなみに、和樹と七葉は抱き合っており、悠聖及び悠聖のクラスメート達が冷やかしていた。

オレは委員長と俊輔の二人を見る。

「今までありがとう。お前らと和樹がいた学校生活は楽しかった」

「俺もだ。貴様のような天才がいなくなるとは、この俺ですら寂しくなる」

俊輔は涙をこらえようとして失敗している。ちなみに、委員長はもう目が真っ赤だ。

そんな二人を見て、オレはクスッと笑みを浮かべる。

「相変わらずだな」

「それが私達じゃないかな。海道君、私は海道君達が学校に来てからいつも以上に楽しかった。本当に楽しかった。今まで、ありがとう」

「こちらこそ。次に会えるとしたら1ヶ月後になるかな。もしかしたら、別の部隊が来るかもしれないけど」

「そうかもね。海道君が狭間市に来た時はまた遊びに来てね。絶対、絶対に」

「ああ、必ずだ」

この時のオレは笑っていられただろうか。

「俺は絶対学園都市に行く。だから、待っててくれよ」

「うん。待つよ」

ひたすら繰り返される七葉と和樹のラブコメ。オレはそれを見ながら近くのベンチに腰掛けた。

そして、小さく笑みを浮かべる。

「こんなにたくさん来るとはな」

「全くだ」

隣に座っているしわくちゃにされた孝治が同意してくる。オレはそれを見ながら少しだけ笑った。

「手荒い別れだな」

「それほど重要だったということだろう。あいつらにとっても、オレ達にとっても」

「そうだな」

オレは笑みを浮かべる。

学校の生活は本当に楽しかった。まあ、隣にほとんどアルネウラがいるという奇妙な状況でもあったけど。ちなみに、後半からは優月もだ。

「第７６移動隊の全員が狭間市に来て変わった。そう思っている」

「俺やお前も、変わった。ふっ、まさか、敬遠していたはずの生活が、俺達にここまでプラスになるとはな。驚きだ」

孝治がそう肩をすくめながら言った。それに関してはオレも同意だ。

正規部隊にとって学校生活は邪魔者。オレも、おそらく、周もそう思っていただろう。でも、実際は大きなプラスになっている。

「学園都市に戻っても学園生活があるんだよな」

「ここと比べてどうかはかなり気になるところだが。まあ、大丈夫

だろう。みんながいる」

孝治がそう言いながら笑みを浮かべる。

こんな孝治の姿は久しぶりに見た。

「さてと、最後の挨拶に回るとしますか」

多分、赤いであろう目から零れる微かな水気をハンカチで拭いて立ち上がった。

外の喧騒とは無縁の世界。フュリアスの格納庫内に僕はいた。通常形態のコクピットでエクスカリバーのプログラムをしっかり確認している。

鈴やリリーナは外で友達と会っているが、僕は別れを言うような友達がいないから外に出なくていい。

「静かだな」

エスペランサのフュリアス格納庫内は設備は整っているものの、まだ、人員が全く確保出来ていない。今の段階では整備士がいない。

一応、僕も整備士は出来るもののまだまだ未熟だ。

目を閉じる。静かさが周囲を包み込む。

思い出すのは狭間市での出来事だ。

最初はアル・アジフさんについてここに来た。そして、狭間戦役に参加し、実戦で初めてダークエルフを動かした。

ダークエルフが使えなくなってからもパワードスーツを着て戦い、リリーナと出会った。リリーナと仲良くなり、そして、鈴とも出会った。

それからは三人で色々なことをして、狭間戦役の後半に入り、中東で鈴達と戦った。

よくよく考えてみるとすごい戦いだなと実感する。僕はただ巻き込まれたような形だったけど、僕はその中でたくさんの人と出会った。

周さん。今では上司だけど、僕からしたらお兄さんみたいな存在。

リリーナ。明るく楽しく、でも、時々僕達にも言わないような暗い顔になる。これからはもっとリリーナを知りたい。

鈴。最初は別の目的があったみたいだけど、今では大切な人の一人だ。僕達三人の中だとお姉ちゃんみたいな存在でもある。

そして、メリル。音界の歌姫というすごい役職だけど、中身は普通の女の子。可愛い女の子だ。

ルーイやリマ、ルナなどたくさんの人と狭間戦役を体験して出会った。僕はこの狭間市で大きく成長した。

「学園都市だったら、何の出会いがあるかな」

「都ちゃん、学園都市でも元気でね」

「ありがとうございます。長く生きてくださいね」

「都築の嬢ちゃん、手土産だ」

「大きなナスですね。ありがとうございます」

「都お姉ちゃん、みんなで書いた色紙だよ」

「わぁ、ありがとうございます。大切にしますね」

都の周囲にはたくさんの人が集まっていた。誰もが都を見送りに来たとも言っていい。そうしていると急に人の集まりが分かれた。

そこにいるのは巫女服姿の琴美。

「琴美？」

「私からの見送りよ。来年からは都築家はもう祭りを主導する立場じゃないんだから、私が教えていかないとダメなのよ」

「琴美は今年の狭間の巫女でしたしね。琴美なら大丈夫です」

「だから、見て」

琴美が隣の人から錫杖を受け取る。そして、それをシャランと鳴らした。

「あなたが最後に合格を出して。私の舞を」

「はい」

琴美が舞を始める。それは、静かに、だけど、激しく、そして、全ての感情を都にぶつけるようだった。

実際にぶつけているのだろう。今までの全てを全部。だから、その場にいる誰もが口を開くことさえできなかった。

時折鳴り響く錫杖の音が周囲に響き渡りまるで催眠術にでもあっていたかのようにハッとする人達が多い。それほどまでに琴美の舞は全てを魅了していた。

人も、鳥も、精霊も、全てを魅了する踊り。

琴美の動きが遅くなる。この時、周囲の人はようやく理解した。いつの間にかかなりの時間が断っていることに。いつの間にか、真っ赤に染まっていた周囲が闇の帳によって覆われていることに。

動きが止まる。そして、静寂が場を制した。

「ありがとう、ございます」

都が拍手をする。その眼に大量の涙を溜めて。

それを見ていたたくさんの人が拍手を始める。それは狭間市にいる人全てが拍手をしているかのような大きな音だった。

琴美はゆっくり都に近づく。

「都。私達は離れていても友達よ。何があっても、例え、何が起きても」

「はい。はい！」

二人が抱き合うが拍手は止まらない。まるで永遠の友情に対して拍手をしているかのようだった。

そんな光景を冬華がエスペランサの上で見ていた。そして、少しだけ不満そうに口ととがらす。

「あのバカ。離れたくないならそう言いなさいよ。でも、琴美も学園都市に来そうね。アリエル・ロワソ様に報告しておきますか」

そう言いながら通信機を取り出すのであった。

離れて行く狭間市の光景。オレと都は艦橋の中でその狭間市に向かって人の姿が見えなくなるまでずっと手を振っていた。

「周様。このまま学園都市に向かうのですね」

「ああ。明日一日で色々な作業も終わらさないといけないからな、肩がこる」

「手伝いますよ」

オレは首を横に振った。そして、都に向かって笑いかける。

「都は休め。お前は泣いただろ」

「周様こそ泣きました」

その言葉に周囲が静かになったような感覚に陥る。ちなみに、艦橋にはオレと都、アルにクロウェンの四人しかいない。残りの全員は部屋の中で休んでいた。

「泣いてない」

「泣いていました」

「泣いていないったら泣いていない」

「泣いていました！　アル・アジフさんも見ましたよね？」

急に矛先が向いて目に見えるようにうろたえるアル。そして、アルは観念したかのように何かを取り出した。

投影装置だ。それをデバイスに繋いで画面に何かを映す。そこには、一筋の涙を流すオレの姿。

「なっ」

思わず絶句してしまった。まさか、こんな画像を撮られていたなんて。

「ください！」

「仕方ないの。我のおかずにしようと思っておったのに」

「何に使うつもりなんだよ」

オレは小さくため息をついて椅子に深々と座り込む。

エスペランサが向かっているのは学園都市。オレが六年ほどホームにしていた都市。

「これから、どうなることやら」

これからのことを考えると少しは大変なことになるが、それでも楽しい毎日が舞っているのは想像できた。だから、オレは笑みを浮かべる。

「学園都市へ、直線軌道に入ったぜ」

第一章最終話　学園都市へ（後書き）

ようやく第一章が終わりました。第一章は周が狭間市において世界について様々なことを知る章でもあります。そして、周自身も成長する章でもあります。

この章は当初考えていたよりも長くなり、必要な物語を組み込んでいけばさらに長くなりました。第二章は簡潔に行けたらいいなと思ってます。

特に最後の方は第二章へと続けるための物語でもあり、第一章での話の多くを引き継ぎます。

第二章のは舞台は学園都市。最初は学園生活、そして、終盤は新たな滅びに対する戦いについて書いていく予定です。周の年齢も１８歳でスタートしますので、第一章で周達に違和感を感じた人にはあまり違和感を感じないように書いていけたらいいなと思っています。その違和感は狙って書いているんですけどね。

では、第二章へとどうぞ。最初はキャラ達の第二章第一話開始時点でのプロフィールから始まります。

プロフィール　第７６移動隊第１分隊（前書き）

これは第二章第一話の時点でのプロフィールです。第一章と少し設定が違うところもありますが、それは間違っているか変わったかのどちらかです。それぞれの分隊ずつに出すので全てで五つになります。

プロフィール　第７６移動隊第１分隊

第１分隊
ポジション：オールラウンド
戦場において戦況に応じてポジションを変える部隊。大規模戦闘において主力となる。

第１分隊隊長：海道周第７６移動隊隊長
新暦１０２２年４月１日生
年齢：１８歳　身長：１７０ｃｍ
武器：レヴァンティン　形態：様々
魔術素質：全て　得意魔術：無
戦闘ランク：ＡＡ　準空戦能力持ち
『ＧＦ』戦闘ランキング：５５９位
異名：『戦場を制する者（オールラウンダー）』

備考：戦闘ランク及び戦闘ランキング共にトップレベルではないが、全体的な能力の平均的な高さとあらゆる剣技を使う器用貧乏さで乱戦の強さは桁違い。指揮官としても優秀であり、あらゆるポジションに位置出来るオールラウンダー。武器にはいくつかの形態があり、あらゆる局面で戦うことが出来る。レアスキル『天空の羽衣』は物理攻撃に対して絶対防御である。

都島学園都島高校一年生

第１分隊副隊長：白川悠聖
新暦１０２２年６月２０日生
年齢：１７歳　身長：１７４ｃｍ

武器：各精霊武器及びゼロ式精霊銃
魔術素質：無　得意魔術：召喚魔術
戦場ランク：ＡＡ　一時空戦能力持ち
『ＧＦ』戦闘ランキング：２４０位
異名：『万世術師』

備考：戦闘ランク及び戦闘ランキング共にトップレベルではないが、全属性の精霊召喚が可能であり白川悠聖しか出来ないダブルシンクロは大規模戦闘において大きな戦果を上げれる。精霊武器を持ち替えて戦うがゼロ式精霊銃の射撃も得意とする。

都島学園都島高校三年生

第１分隊隊員：中村光
新暦１０２２年８月３０日生
年齢：１７歳　身長：１６８ｃｍ
武器：レーヴァテイン　形態：槍
魔術素質：炎　得意魔術：投影魔術
戦闘ランク：Ｓ　空戦能力持ち
『ＧＦ』戦闘ランキング：１９９位
異名：『地獄の攻撃者（ヘルズアタッカー）』

備考：レアスキル『炎熱蝶々』と『物質投影』を持っており射撃の火力は世界トップレベル。特殊デバイス『胡蝶炎舞』による防御が槍のリーチを使った攻撃等射撃方にしては隙が少ないのが特徴。空戦能力も高く、空中戦においては第一特務主力に匹敵する。

都島学園都島高校三年生

プロフィール　第７６移動隊第２分隊（前書き）

戦闘ランキングの順位決めは実戦結果と制限時間ありの１対１の勝負を総合して決まります。周の順位が低かったのは制限時間ありじゃなかなか勝てないからです。後は、本気を出していないから順位が低い人もいます。

プロフィール　第７６移動隊第２分隊

第２分隊
ポジション：フロント
戦闘においてセンターやバックからの援護を受けつつ前に出る分隊。
あらゆる戦場で活躍出来る。

第２分隊隊長：白百合音姫第７６移動隊隊長
新暦１０２１年２月３日生
年齢：１９歳　身長：１６２ｃｍ
武器：光輝　形態：刀
魔術素質：無　得意魔術：無
戦闘ランク：ＳＳ　準空戦能力持ち
『ＧＦ』戦闘ランキング：２位
異名：『歌姫』

備考：白百合流を継承する剣士。あらゆる白百合流剣技を修得し、その実力は世界でも一、二を争う。レアスキル『歌姫』は効果が絶対であり、それを使えばあらゆる戦闘に対して有利になれる。弱点は魔術が使えないため魔術攻撃に関して弱いところだが、世界トッププレベルでなければ当てることすら難しい。

都島学園都島大学一回生

第２分隊副隊長：田中亜紗
生年月日不明。ただし、新暦１０２２生
年齢：１７歳　身長：１５３ｃｍ
武器：綺羅と朱雀、矛神　形態：小刀と刀魔術素質：風　得意魔術：

機動魔術
戦闘ランク：ＳＳ　準空戦能力持ち
『ＧＦ』戦闘ランキング：１８位
異名：『殲滅姫（マーダープリンセス）』

備考：白楽天流を扱う剣士。サブ武器による高速攻撃と矛神を使った一撃必殺の白楽天流奥義など多彩な技と速度で翻弄する。魔術の才能も申し分なく、限定的ながら風王具現化が可能。『ＧＦ』の若手トッププレベルの名が上がる。

都島学園都島高校三年生

第２分隊隊員：白百合由姫
新暦１０２３年３月３１日生
年齢：１７歳　身長：１５１ｃｍ
武器：ナックル
魔術素質：天空　得意魔術：重力魔術
戦闘ランク：Ｓ　空戦能力持ち
『ＧＦ』戦闘ランキング：４６位
異名：『重力姫』

備考：白百合家でかなり珍しい刀を使わない白百合音姫の妹。里宮本家八陣八叉流を修得しており、レアスキルである『神への重力（グラヴィタス）』による重力操作の一撃は山をも砕くと言われている。魔術が得意ではないという弱点もあるが重力砲による砲撃魔術も可能。

都島学園都島高校一年生

第２分隊隊員：長峰冬華
新暦１０２１年１１月２８日生
年齢：１８歳　身長：１６０ｃｍ
武器：刀
魔術素質：氷　得意魔術：封印術
戦闘ランク：ＡＡ　空戦能力持ち
『ＧＦ』戦闘ランキング：１８７位
異名：なし

備考：氷属性最上級精霊フェンリルと契約する。そのため、氷属性に対して造詣がとても深い。ポジションはフロントだが、センターでも戦闘が可能で戦略の幅を広げるメンバーの一人。

都島学園都島高校三年生

プロフィール　第７６移動隊第３分隊（前書き）

周と由姫の学年に関しては間違いではありません。それは第二章第一話で語ります。

プロフィール　第７６移動隊第３分隊

第３分隊
ポジション：センター
フロントの支援とバックにとっての最終防衛ラインの分隊。支援に特化したメンバーが多い。

第３分隊隊長：花畑孝治第７６移動隊副隊長
新暦１０２２年４月８日生
年齢：１８歳　身長：１８３ｃｍ
武器：運命、弓　形態：直剣、弓
魔術素質：闇　得意魔術：移動魔術
戦闘ランク：ＳＳ　空戦能力持ち
『ＧＦ』戦闘ランキング：８位
異名：『漆黒の帝王』

備考：レアスキル『影渡り』を持つ。夜の戦闘ではランキング一位。センターでありながら長距離からの射撃と近距離での格闘戦も可能。移動魔術の他に拘束魔術も得意としており、フロントへの支援も得意である。

都島学園都島高校三年生

第３分隊副隊長：都築都
新暦１０２０年９月２６日生
年齢：２０歳　身長：１４９ｃｍ
武器：断章　形態：杖
魔術素質：天空　得意魔術：収束魔術

戦闘ランク：ＡＡ　空戦能力持ち
『ＧＦ』戦闘ランキング：８０９位
異名：『狭間の巫女』

備考：センターの中でも特に射撃特化の人物。断章から得る無尽蔵の魔力で撤退戦や防衛戦で力を発揮しやすい。近接戦闘は少し苦手ではあるが、１対１では反則的な性能を発揮する。

都島学園都島大学二回生

第３分隊隊員：リース・リンリーエル
生年月日不明。ただし、新暦１０２１年生
年齢：１８歳　身長：１４０ｃｍ
武器：竜言語魔法書
魔術素質：無　得意魔術：無
戦闘ランク：Ｓ
『ＧＦ』戦闘ランキング：９４位
異名：『クロノス・ガイア』

備考：竜言語魔法の使い手。詠唱の必要がない発動を可能としており魔術戦においては絶大な威力を発揮する。近接戦闘には弱いものの、バックからの援護が極めて強いためフロント無しでも戦闘が可能。

都島学園都島高校二年生

第３分隊隊員：ベリエ・アトラス
新暦１０２０年５月１３日生

年齢：２０歳　身長：１５４ｃｍ
武器：ナイフ、杖
魔術素質：水　得意魔術：支援魔術
戦闘ランク：ＢＢ　空戦不可
『ＧＦ』戦闘ランキング：ランク外
異名：無

備考：世界に名だたる結界師姉妹の一人。支援に関しては第７６移動隊で最も強く、支援の仕方によっては戦況を大きく変えることが出来る。アリエと形成する術式凍結結界は範囲が通常結界より狭く、脆いものの、結界内の敵は魔術が使えなくなる。

学校には通っていない

第３分隊隊員：アリエ・アトラス
新暦１０２０年５月１３日生
年齢：２０歳　身長：１５４ｃｍ
武器：ナイフ、杖
魔術素質：水　得意魔術：結界魔術
戦闘ランク：ＢＢ　空戦不可
『ＧＦ』戦闘ランキング：ランク外
異名：無

備考：世界に名だたる結界師姉妹の一人。結界に関しては第７６移動隊で最も強く、結界の仕方によっては戦況を大きく変えることが出来る。ベリエと形成する術式凍結結界は範囲が通常結界より狭く、脆いものの、結界内の敵は魔術が使えなくなる。

学校には通っていない

プロフィール　第７６移動隊第４分隊（前書き）

空戦能力持ちがこんなにも多かったなんて自分でも驚いています。

プロフィール　第７６移動隊第４分隊

第４分隊
ポジション：バック
後方からの射撃を得意とする分隊。火力に関しては世界トップレベル。

第４分隊隊長：木村楓
新暦１０２２年４月３０日生
年齢：１７歳　身長：１６３ｃｍ
武器：カグラ。ブラッククレクイエム　形態：共に砲撃槍
魔術素質：風、光　得意魔術：収束魔術
戦闘ランク：Ｓ　空戦能力持ち
『ＧＦ』戦闘ランキング：３２位
異名：『リュリエル・カグラ』

備考：世界最強の砲撃術師。その砲撃は一撃で戦闘を終わらせることが可能で威力は極めて高い。風王具現化と光王具現化という二つの魔術形態最大の技が使えるということも特徴。

都島学園都島高校三年生

第４分隊副隊長：アル・アジフ（エリシア・アルベルト）第７６移動隊副隊長
生年月日秘密（アル・アジフが語らない）
年齢：不明　身長：１５５ｃｍ
武器：アル・アジフ　形態：魔術書
魔術素質：全て　得意魔術：全て

戦闘ランク：ＳＳ　空戦能力持ち
『ＧＦ』戦闘ランキング：６位
異名：『最強の魔術師』

備考：異名の通り最強の魔術師。魔術合戦においては魔術で右に出る者はおらずバックかつ魔術師でありながら近接戦闘をそつなくこなすオールラウンダー。戦況の把握も得意で的確に戦場に砲撃を行える。

第４分隊隊員：エレノア・スカートレット
新暦１０８８年１月１４日生
年齢２２歳　身長：１７１ｃｍ
武器：杖、砲撃杖
魔術素質：炎　得意魔術：砲撃魔術
戦闘ランク：Ｓ　空戦能力持ち
『ＧＦ』戦闘ランキング：１０１位
異名：無

備考：元炎帝で火力特化の人物。一点火力なら第７６移動隊でもトップであり精密射撃と絨毯爆撃お得意とする。ベリエ、アリエ姉妹とコンビを組めば圧倒的な火力で敵を殲滅する。

学校には通っていない

プロフィール　第７６移動隊第５分隊

第５分隊
ポジション：事務及びフュリアス部隊
４００ｍ級フュリアス搭載型強襲航空空母『エスペランサ』を操る人及び搭載されているフュリアスのパイロットの分隊。エスペランサとフュリアスが動かない限り通常は事務をやっている。

第４分隊副隊長：エリシア・アルベルト（アル・アジフ）第７６移動隊副隊長
生年月日秘密（エリシアが語らない）
年齢：不明　身長：１５５ｃｍ
武器：アル・アジフ　形態：魔術書
魔術素質：全て　得意魔術：全て
戦闘ランク：ＳＳ　空戦能力持ち
『ＧＦ』戦闘ランキング：６位
所持フュリアス：マテリアルライザー
戦闘ランクＦ：ＳＳ
『ＧＦ』戦闘ランキングＦ：３位
異名：『悪夢の少女』

備考：第４分隊副隊長にして第５分隊隊長でもある。マテリアルライザーは一人でも操作が可能だが、海道周が乗ることで戦闘能力が約３倍となる。

第５分隊副隊長：白川七葉
新暦１０２３年５月１日生
年齢：１６歳　身長１５４ｃｍ

武器：頸線　形態：基本的に槍を形取る
魔術素質：風　得意魔術：伝達系魔術
戦闘ランク：Ｂ　空戦能力無し
『ＧＦ』戦闘ランキング：ランク外
エスペランサのポジション：オペレーター
所持フュリアス：ＧＦ－０６『リヴァイバー』
戦闘ランクＦ：ＡＡ
『ＧＦ』戦闘ランキングＦ：ランク外
異名：無

備考：結界の展開など時にはセンターの役目に回れる事務員。エスペランサ稼働時はオペレーターとして戦況報告及びエスペランサの状態維持を行う。実はフュリアスにも乗れる。

都島学園都島高校二年生

第５分隊隊員：真柴悠人
新暦１０２３年７月７日生
年齢：１６歳　身長：１５９ｃｍ
所持フュリアス：ＧＦ－０３Ｚ１『エクスカリバーＺ１』
戦闘ランクＦ：ＳＳ
『ＧＦ』戦闘ランキングＦ：１位
異名：『最強のパイロット』

備考：フュリアスに愛された天才フュリアスパイロット。パイロットとしての実力はオーバーテクノロジーの塊であるイグジストアストラルやマテリアルライザー（海道周搭乗）を遥かに超える。単身で敵フュリアス部隊を壊滅可能。

都島学園都島高校二年生

第５分隊隊員：リリーナ・エルベルム
新暦１０２０年１０月３日生
年齢：１９歳　身長：１４７ｃｍ
武器：鎌
魔術素質：炎　得意魔術：無
戦闘ランク：Ａ　空戦能力無し
『ＧＦ』戦闘ランキング：ランク外
所持フュリアス：ＧＦ－０１Ｗ３『ソードウルフＷ３』
戦闘ランクＦ：ＳＳ
『ＧＦ』戦闘ランキングＦ：４位
異名：無

備考：魔王の娘。時には近接戦闘でフロントでも活躍する。ソードウルフＷ３は戦場のあらゆる状況に対応可能で機動速度と換装速度、エネルギーチャージ速度をソードウルフよりも高めた機体。

都島学園都島高校二年生

第５分隊隊員：結城鈴
新暦１０２３年８月１７日生
年齢：１６歳　身長：１５５ｃｍ
所持フュリアス：イグジストアストラル
戦闘ランクＦ：ＳＳ
『ＧＦ』戦闘ランキングＦ：２位
異名：『移動要塞』

備考：フュリアス部隊が制圧した敵の全てが語恐怖の対象。あらゆる攻撃を受けても攻撃してくる姿はトラウマそのもの。機動力には乏しいものの火力と弾膜に関してはフュリアス一である。

都島学園都島高校二年生

第５分隊隊員：白鳥琴美
新暦１０２１年２月２２日生
年齢：１９歳　身長：１６３ｃｍ
エスペランサのポジション：補助操縦士
所持フュリアス：ＧＦＦ－０９『アルケミスト』
戦闘ランクＦ：Ａ
『ＧＦ』戦闘ランキングＦ：ランク外
異名：無

備考：エスペランサの補助操縦士だが、時にはＧＦＦ－０９『アルケミスト』に乗り長距離射撃パック『ラフレシア』を装備して戦う時もある。操縦技術だけはそこそこ優秀。

都島学園都島大学二回生

第５分隊隊員：篠宮和樹
新暦１０２２年１２月１日生
年齢：１７歳　身長：１７６ｃｍ
エスペランサのポジション：火器制御士

備考：エスペランサに搭載されている射程距離の短い火器類を制御するポジション。当たることは全く期待されておらず別名島流し席

となっている。

都島学園都島高校二年生

第５分隊隊員：鈴木花子
新暦１０２３年１月４日生
年齢：１７歳　身長：１５８ｃｍ
ポジション：治療兵
異名：『委員長』

備考：第７６移動隊唯一の治療兵（ベリエ、アリエ姉妹も魔界での医師免許は持っている）でありみんなから委員長と慕われている。治療兵としての実力はかなりのもので第７６移動隊のみならず様々な部隊から委員長と呼ばれ異名として定着した。

都島学園都島高校三年生

プロフィール　第７６移動隊第５分隊（後書き）

浩平とクロウェンがいないのはちょっとした事情があります。
次は第二章のプロローグ。戦闘が入ります。

プロローグ（前書き）

戦闘が思った以上に入らなかったです。

プロローグ

スコープ越しに覗く子島。一見はただの島だ。ただ、スコープから見ている人物にはその島が巧妙にただの島のように見せていることに気づいている。

「へぇ、案外巧妙に隠しているんだな。だけど、ここで正解だ」

その視界に映っているのは巧妙に隠された施設に、そしうて、フュリアス。形態はＧＦ－０４ウィンデル。ＧＦの試作機の一機だが、どうしてここにあるのかがわからない。

その人物が小さく頷いた。

「情報通り。やっぱり、元評議会アグネウのアジトだな。だけど、やはり警備が厳重というべきか。隙が全くないな。まあ、いい。リース、聞こえるか？」

『聞こえている』

通信機を取り出した人物、浩平は通信機に向かって語りかけた。

「敵さん、準備万端だぜ。援護射撃は行う。だから、よろしく頼む」

『わかった。そう伝えておく』

リースの声が終わるとともに浩平は通信機を直した。そして、フラベルムを構える。

「さあ、久しぶりの第７６移動隊との共同戦線。この位置から狙い撃つぜ！」

浩平がいるのは島から２ｋｍ離れた海上だった。

リースが静かに通信機を下ろす。そして、所定の位置に通信機を置いた。

「目的の位置であっている」

「了解」

その言葉をオレはしっかり聞いていた。オレ達がいるのはエスペランサの強襲用のカタパルトだ。エスペランサには他に二つのカタパルトがあり、その内一つがエクスカリバー専用カタパルト。残る一つが他のフュリアス専用のカタパルト。

カタパルト内部には強襲班である、亜紗、由姫、孝治、中村、冬華の計七人がいる。

本来、フュリアスはよほどのバックパックがなければ飛ばないものなんだけどね。エスペランサ内部にあるフュリアスは最新型が性能が少しおかしな機体か。

「さてと、悠人、鈴、準備はいいな？」

『いつでも大丈夫です』

『私も』

二人からの通信が返ってくる。オレはそれに頷いた。そして、艦橋に指示を飛ばす。

「エクスカリバー、イグジストアストラルの発進を許可。タイミングはそっちに任せる。クロウェン、エスペランサを全速前進。相手が反応するより早く、オレ達強襲班が中を制圧する！」

エクスカリバーの機体がエスペランサの艦上にあるカタパルトに設置される。通常形態がアル・アジフさんが言う戦闘機形態なので出撃にはいくらかの助走が必要らしい。

そして、今日が実戦で初めて使うカタパルト。はっきり言うなら緊張している。訓練ならいくらでもここから出撃したことはあるけど、ここから出る実戦が初めて。というか、エスペランサを使った実戦自体が初めて。

レバーを握り締める。高機動パックでもあるニトロブースターの接続を確認する。

『悠人君、準備はいい？』

そうしていると、急に通信が入ってきた。確か、今年から入ってき

たばかりの治療兵の委員長さんだ。委員長さんは時々オペレーターの手伝いをすることになっていて、今回は僕の担当の様だ。

「はい。大丈夫です」

『カタパルトの起動は完了しているから、発射タイミングはそっちに任せるね』

「わかりました。エクスカリバー、出ます！」

その言葉と共にエクスカリバーの機体をカタパルト上に走らせた。カタパルトの加速機構も相まってエクスカリバーの速度がさらに加速する。

そして、カタパルトから無事に射出された。漆黒の大空を駆け抜けるように白銀の翼が闇夜の空を切り裂いていく。周囲にある暗闇をよそに、浩平さんの持つフラベルムから正確に送られてくる情報が敵本拠地のデータを正確に知らせてくれる。

暗闇なんて関係ない。全ては仲間の視界を信じて飛ぶだけ。

「周さんの予想だと、相手の迎撃準備が整いだすのが大体2分だから、僕が攻めるのは」

相手のフュリアス発進口。予想される場所は全部で六ヶ所。その全てを破壊しないといけない。

「いくよ。エクスカリバー」

僕の声に応じるかのようにエクスカリバーの速度が上がる。目標は

近づいてきていることに気づいていない敵陣地。

呑気というよりも異常な気配を感じる。まるで、誰もいないような。

「鈴、ストップ。出来ればエスペランサの周囲に」

『どうかしたの？』

嫌な予感を感じて僕は鈴に指示を飛ばしていた。アル・アジフさんがマテリアルライザーに乗っていない今、フュリアス部隊の指揮権は僕にある。

だから、僕は見つかるのを覚悟な上でニトロブースターを機動した。

「何かおかしい」

加速と共に視界の中にうっすらと形が見えてくる。夜中だからあまりよくわからないけど、島の形は見えていた。

「動きがない？　ニトロブースターはエネルギーを大量に散布するからレーダーに映らない方がおかしいのに」

エクスカリバー本体についているライトを点灯させて島を照らす。見えている範囲には誰もいなかった。

滑走路にはフュリアスの姿がある。ＧＦ－０４『ウィンデル』だ。だけど、身動き一つしていない。起動しているのに。

「周さん、聞こえる？」

『何か見つかったのか？』

「うん。ウィンデルが起動したまま動いていない。カスタムブースターに切り替えて様子を見るよ」

エクスカリバーのニトロブースターをカスタムブースターに変換する。旋回式ブースターを上手く使えば立て直す時間は容易に出来るはずだから。

『わかった。強襲作戦の内容はまだ変えない。だけど、注意は頼む』

「了解」

カスタムブースターの他に旋回式電磁砲を装着し、僕はレバーを横に倒した。

エクスカリバーが変形し人型になる。そのまま僕はエクスカリバーを滑走路に着地させる。敵の気配はないし、ウィンデルに動きもない。

ウィンデルをライトで照らす。そこには、コクピットが貫かれたウィンデルの姿があった。何か細いもので貫かれている。槍か魔術かそれ以外か。

「すでに強襲を行ったチームがある？　浩平さんの援護射撃じゃなさそうだし」

作戦だとエクスカリバーが敵のフュリアス部隊や砲台を引きつけている間、鈴のイグジストアストラルと浩平さんの射撃でフュリアス部隊及び砲台を破壊する手はずになっていた。

敵の動きがない以上、浩平さんは動かないはずだ。

「どういうこと？　考えても仕方ないか。今は」

嫌な気配が体を貫いた。僕はエクスカリバーを慌てて後ろに向かせる。そこには、見たことのないフュリアスがいた。音界で開発中及び配備されたフュリアスにも適合しないフュリアス。

純白のコートを着たような外見をしているが、純白のコートというより純白のマントだろう。それで機体自体を覆っている。

「誰？」

僕は旋回式電磁砲を向けながら尋ねた。だけど、純白のフュリアスは何も身動きがない。そして、姿が消える。

すぐさまレーダーに反応を探すが、ステルス機能が著しく高いからかレーダーには映らない。でも、近くにはいることはわかる。

敵なのか敵じゃないのかわからない。ただわかるのは、エスペランサが最高速度で島に向かって突撃している最中だと言うことだ。

凄まじい衝撃。凄まじいとは言ってもそれほど強くはない。まあ、立ってはいられないけど。

衝撃と同時にカタパルトが開く。そこにはちょうど島に掘られた格納庫の入り口があった。ちなみに、シャッターは閉まっている。まあ、作戦通りだ。

「チームは分けたように。分かれるまで集団行動だ。行くぞ」

その言葉と共にオレは走り出した。走り出したとは言っても、このメンバーの中ではオレが一番足が遅い（他の面々が速すぎる）のでみんなはオレに合わせてくれる。

格納庫の入り口のシャッターに向かって走るオレ達。すると、背後からレーヴァテインのコピーが飛来しシャッターを爆発でこじ開けた。オレはそこに飛び込み、そして、思わず足を止めてしまった。

オレの背中に冬華がぶつかる。

「周、急に立ち止まらないでよ。えっ？」

鼻を押さえながら涙目で言う冬華は周囲の光景を見て思わず固まっていた。何故なら、周囲は赤かったからだ。いや、赤黒かった。隣の由姫がオレの手を握ってくる。

「兄さん、これは」

「血が固まっているな。周、どうする？」

周囲の赤黒い部分を触った孝治が周囲を警戒しながら尋ねてくる。

オレは小さく頷いた。

「前に進む、が、中村は外で待機。孝治はオレの部隊に入って二隊

で進む」

「妥当ね。この状況はさすがに予想していなかったわ。島がやられてから一日というところかしら。どこの誰が強襲を」

『強襲じゃない』

冬華の言葉を亜紗が否定する。それはオレも同意見だった。

『格納庫を見渡して』

亜紗がスケッチブックをみんなに見せながら周囲を見渡す。周囲は電気がついていないので暗いが、格納庫内部にはウィンデルの姿とあった。

それを見た中村が不思議そうに首を傾げている。

「これがなんかあるん？」

「パイロット」

リースがボソッと単語だけを言った。それに亜紗が頷く。

『強襲されたならパイロットは自分のウィンデルに向かう。整備士は出撃準備を行う。でも、ここにはパイロットはいない。整備士もほとんどいない』

強襲されたなら陸から離れた孤島であるここは準備が容易い。だから、世界で数少ない航空空母の中でも最高速度を出せるエスペランサによる強襲という作戦を取ったのだ。

だが、それが出来るのはエスペランサくらい。いくら姿を隠して接近してもアグネウはウィンデルすら持てるレベル。つまり、レーダーも最新式だろう。

それすらわからないということは、

『生身による少数精鋭の部隊による攻撃だと考えるのが妥当』

「そうね。言われてみれば違和感があるわね」

「うちにはわからんわ」

「光は黙っていた方がいいわ。でも、そんな少数精鋭部隊なんて第一特務しかないはずよ？」

オレ達がこの島を強襲するのは第一特務にしか伝えていない。もし、強襲したなら伝えてくるはずだ。それに、この殺し方は『ＧＦ』のやり方じゃない。

オレは一番近くにいた死んだ人の目を閉じさせながら前の扉を見つめた。

「前はオレが出る。分かれ道になるまで行くぞ」

『天空の羽衣』を展開しながら走り出す。そのまま扉を蹴破った。通路には誰もいないし何もいない。静寂だけが周囲を漂っている。

不気味なまでな静寂。音はしていない。

「一体、何が起きているんだ」

孤島での異常。それをオレは七葉からの連絡で聞いていた。

艦内待機のリリーナも艦上のカタパルト付近で周囲を警戒するほど。

悠人は周辺をエクスカリバーで飛び回っている。

「どう思うよ？」

オレはそれを報告しながら尋ねた。隣にいる浩平に。

「俺に聞かれても。つかよ、第７６移動隊って分隊に分かれてるんじゃなかったっけ」

「この春第５分隊に新たなメンバーが増えたけどな」

「分隊機能してんの？」

浩平の疑問は最もだ。強襲班なんて分隊関係なくメンバーを組んでいる。まあ、それでも凄まじいメンバーが集まっているけど。

機能してるかしてないかで言われたら機能していないが正しい。

「もう少しメンバーがいたら良かったんだけどな」

「分隊を１部隊で戦場を回れるように組み直せば」

「周とオレ以外の指揮が追いつかなかった。孝治はオールラウンダーじゃないしな」

「なるほど」

全てのポジションを入れた場合、どうしてもそれらのポジションを熟知する場合がある。音姫さんなんて魔術を使うこと考慮せずに戦うし。

あなたは魔術を使わなくてもオレ達は使うんですけど。

「相変わらずだな」

「お前が抜けてからあまり変わっていないぜ。それにしても、お前はかっこよくなったよな」

「リースの彼氏として、だらけた姿は見せられないだろ？」

「ごちそうさま」

オレは小さく溜息をついて周囲を見渡した。周囲に姿は見受けられない。ただ、気になることはある。

「静かすぎないか？」

「そうか？」

周囲には波の音が響き渡る。夜なので鳥はあまり見当たらない。でも、波自体が静かな気がする。いや、周囲に見える波の音と比べて

音が少し小さい。

気のせいかもしれないが。

「警戒した方がいいみたいだな。抜けられた場合は迎撃班に任すしかないか」

通路を走る。オレの後について来るのは孝治と冬華の二人。さっき分かれ道があり、由姫や亜紗達と分かれたからだ。

さらに分かれ道があった場合は分かれない。

時折目に付くのが殺された人達。そのほとんどが一撃で殺されたのか緊張した表情や恐怖した表情などは見受けられない。

相手のレベルが凄まじいのか、それとも。

コツッ。

小さな音が響き渡る。振り返ってみれば二人共頷いていた。どうやら空耳じゃなかったらしい。

生き残りがいるのか、それとも、敵がいるのか。どっちかはわからないが、今はその存在を確かめるのが先決だ。

警戒は怠らない。すると、また、コツッ、と音が響いた。今度はさ

らに大きい。

声を殺し、足音を消しながら（履いている靴が9割方消してくれる）通路を駆け抜ける。そして、開かれていた扉にレヴァンティンを抜き放ちながら飛び込んだ。

そこにあったのは赤黒い部屋。いや、何十人と死んだ人が床に横たわっているから、全て血なのか。

その部屋の中央にいるのが白衣を着て手を合わせて祈っている男と悲痛な顔をしている少女。

オレが男の名前を呼びながらレヴァンティンを構えようとした瞬間、冬華がオレの隣から飛び出した。

「ルネ！」

そう言いながら。

「冬華！」

相手の少女も冬華の名前を呼びながら抱き合っている。

オレは小さく溜息をついてレヴァンティンを鞘に収めた。白衣の男も近づいてくる。

「熱い抱擁をご所望かな？」

「引くわ。で、何でアリエル・ロワソがここにいるんだ？」

亜紗がこっちに来ていたら確実に斬りかかっていたな。

「偵察、というべきかな。私達も元評議会の専行には少しイラついていてね。さすがの私も我慢出来なかったくらいだよ」

「納得だ」

「お前が犯人ではないのか？」

孝治が運命を構える。だが、それをオレは手で制していた。

「アリエル・ロワソからは血の匂いがしない。それに、血が乾いている」

「匂いか。匂いはなかなか取れないからな。納得だ」

普通は納得出来ないと思うが。

「アグネウは？」

「あそこだ」

アリエル・ロワソが指差した壇上に首のない太った老人の姿があった。そのそばにはアグネウの顔が転がっている。

オレは小さく溜息をついた。

「エスペランサを使った強襲作戦を華々しく成功させようと思えばこうなんだもんな」

事件の解決どころか新たな問題がいくつも現れてきている。はっきり言うなら嫌になる。

オレはアリエル・ロワソに尋ねた。

「目星は？　ちなみに、このレベルとなると『ＧＦ』に該当者は無い」

「こちらも犯人の目星はわからない。『ＥＳ』で出来るとしても私くらいだろう。ただし、限界はある」

いくら天才と言っても出来ることには限界がある。これはよほどの組織がやったに違いない。

暗殺集団でこれくらい出来そうなのが、

「ファントムか」

「聞いたことがないな」

孝治が不思議そうに首を傾げた。まあ、普通は聞かないだろうな。

「簡単に言うなら実態の掴めない集団をひとまとめにしたのがファントムだ。最近、そんな事件が多いからな」

「こちらと同じだね。中東方面にもファントムが現れている。そちらと同じか」

「一体、何が起きているって言うんだ」

島の裏側。エスペランサが強襲した場所のちょうど裏側に僕はエクスカリバーと一緒にやって来ていた。

ライトで周囲を照らすが、そこにあるのは巧妙に隠されたウィンデルと砲台しか見当たらない。人は、いない。

「ここまで来たらいいよね」

僕は振り返りながら取り出したエネルギーライフルの引き金を引いた。それは暗闇に吸い込まれ、そして、弾かれる。

弾かれると同時に暗闇の中から何かが現れた。純白のコートを着たフュリアス。先ほど出会った機体だ。

つけられているのは分かっていた。だから、裏側までやって来た。

エクスカリバーの両手にエネルギーライフルを取り出す。少しばかり本気にならないと危ないかもしれない。

「あなたが誰かわからない。でも、『ＧＦ』、『ＥＳ』、音界のデータに無い機体だから、攻撃させてもらうよ！」

エネルギーライフルを構え、引き金を引こうとした瞬間、嫌な気配が体をよぎった。旋回式ブースターを最大出力にしてエクスカリバーを飛び上がらせる。それと同時に純白のコートの中から真っ黒な腕が飛び出し、その手に握られた黒い銃口からエネルギーが吐き出

された。

エクスカリバーがさっきまでいたところにエネルギー弾がぶつかり、爆発する。

「なっ」

僕は絶句しながら両手のエネルギーライフルの引き金を引いた。しかし、エネルギー弾は白いコートによって弾かれる。

「ヤバい、かな」

僕は小さく呟きながらエネルギーライフルを直し、対艦刀を取り出した。そのままブースターの力で力任せに純白のフュリアスに斬りかかる。

純白のフュリアスは黒い腕に握られた黒い対艦刀で僕の対艦刀を受け止めていた。

力は今のところ互角。

「力は互角でも、エクスカリバーを、舐めるな！」

旋回式ブースターの力で前に加速する。純白のフュリアスを対艦刀ごと押して加速する。そのまま純白のフュリアスを壁に激突させた。

すぐさま旋回式ブースターを逆方向に噴射させバスターライフルを取り出す。そして、引き金を引いた。

バスターライフルから放たれたエネルギー弾は白いコートに直撃し、その全てを散らす。

「っつ！　バスターライフルでもダメ！？」

純白のフュリアスはゆっくり起き上がった。そして、僕を、エクスカリバーを真っ直ぐ見つめてくる。

僕はバスターライフルを構えたままその挙動に注目した。すると、純白のフュリアスが飛び上がり、そのまま夜空に向かって上昇する。

バスターライフルすら効かない敵は相手に出来ない。僕はエクスカリバーを着地させ空に上昇する純白のフュリアスを見送った。

「あれは？」

浩平が空を見上げる。それにつられてオレも空を見送った。そこにあるのは暗闇だけ。浩平にしか見えていないのか？

『何かある。魔力が動いているのかな？　そんな感じ』

『そうだね。私もそう感じているよ。ただ、今からじゃ追えないね』

シンクロしている優月とアルネウラがオレに話しかけてくる。二人は精霊だから魔力の流れは感知しやすいのだろう。

「わかった。浩平、射撃は無理そうだな」

「ああ。速度を計算しても、上空の空気は荒れやすいしな。十中八九どころか絶対外れる」

「そうか」

オレは小さく息をついた瞬間、浩平がオレに向かってフレヴァングを構えた。そして、引き金を引いてくる。

エネルギー弾はオレの顔の横を通り過ぎて背後に飛んだ。

オレは振り返る。そこには直剣を持ってエネルギー弾を受け止めたフード付きのコートで体を隠す男の姿があった。すかさず薙刀を振り切るが、男は後ろに下がっていた。

薙刀を構える。一人なら対処の仕様がいくつかある。特に、アルネウラの精霊の力は極めて強力だ。

男はそのまま後ろに飛び、背中を向けて走り出す。空戦能力ではなく、準空戦能力持ちか。

「逃がすか！」

浩平がフレヴァングの引き金を引こうとした。だが、男が振り返ると同時に収束砲が放たれていた。オレは浩平の前に立って収束砲を薙刀で弾き落とした。

その時には男は遥か彼方に移動している。

浩平がフレヴァングを下ろした。

「悠聖、助かった。あのままだったら直撃していた」

「だろうな。それに」

オレは薙刀を握っていた手を見た。微かに震えている。収束砲は魔力的なダメージを与えるものじゃなく、物理的なダメージを与えるもの。

『ＥＳ』でも魔力的なダメージを与えるデバイスに移行が始まっているから手に入れるのは容易だから特定はしにくい。

「一体、何なんだ？」

オレは通信機から送られてきた連絡を聞き終わった。そして、通信を切る。

オレ達がいるのはエスペランサのカタパルト前。アリエル・ロワソの姿もあり亜紗がうずうずしているがリースによって止められている。

「とりあえず、悠聖と悠人からだ。悠聖は襲われたらしい。完全なヒット&アウェイだそうだ。準空戦能力持ち、気配遮断に関しては信じられないくらい強力。竜言語魔法でも気づきにくいくらい」

オレの言葉に誰もが驚いていた。竜言語魔法は魔術体系とはかけ離れたもので魔術をごまかせるものはあっても竜言語魔法をごまかせ

るものはまずない。

つまり、理論が未だにわからないものもあるレアスキルの類だろう。

「悠人の方は純白のフュリアスらしい。バスターライフルすら効かない純白のフュリアスだとさ」

「バスターライフルも？　あの威力をか？」

バスターライフルの威力を知っているアリエル・ロワソは驚いていた。オレも驚いている。あの威力は本当に桁違いなのだから。

「一体、何が起きているんだ？」

オレはそう言いながら壁に背中を預けた。その疑問に答える者は誰もいなかった。

プロローグ（後書き）

次から第二章に本格的に入ります。基本的に戦闘は後半に凝縮される予定です。

第一話　入学の日（前書き）

ここからが第二章本編です。主に学園生活が中心に書いていきます。
戦闘も時々ありますよ。もしかしたら戦闘の方が多いかも。

第一話　入学の日

しっかりとネクタイを結ぶ。ネクタイを結ぶのは久しぶりだから少し時間をくってしまった。そして、鏡に映るオレの服装を確かめる。

見た目はただのスーツ。これで革靴を履いていたら完璧かもしれないが、あいにく身につけるのはスニーカー。何故か。

都島学園都島高校の制服だ。

学園都市内部の呼び名はスーツ学園。学力さえあれば出席日数から授業態度まで、最低限の参加（入学式や始業式及び終業式、卒業式）で卒業が可能というはちゃめちゃな学校でもある。

そんな学校は意外にも学力は高く、上の下に位置している。ただ、男子の学校指定の学生服だけは評判の悪さだけで学園都市に名が轟く。

女子の学校指定の学生服はスカートがチェック柄でそれ以外は普通の女子の学生服。胸に校章のワッペンが張られている以外は至って普通。本当に普通。

そこにオレは、オレ達は入学する。

カバンの中に入れるものは少ないからこれくらいでいいだろう。

「さてと、そろそろ降りると」

「周君、時間よ」

その言葉と共にドアが開いた。そこにいたのは由姫や音姉を老けさせたような顔立ちの人物。オレの義理の母である白百合素子だ。ちなみに、家内カースト最上位に位置している。

義母さんはオレの服装を下から上まで見て、そして、

「わぁ、わぁ、わぁ！　その服装似合ってる。周君ももう大人ね」

「年甲斐もなくはしゃがないように。また倒れるぞ」

「いいのいいの。写真撮るね」

いつの間にか取り出したカメラによって映される。義母さんには何を言っても通じないからいいけどね。

「ご飯出来ているから。音姫も下にいるわよ。私は今から由姫を起こしにいくわ」

そう言いながら義母さんが隣の部屋に向かう。オレはそばにあったカバンを掴むと、そのまま出口に向かって歩き出した。

「ほふぁほぉー」

一階に下りるとそこにはパンを口にくわえた音姉の姿があった。紺色のセーターと灰色のロングスカート。

オレはカバンを椅子の上に投げて音姉の向かいに座った。

「昨日はどうだった？　浩平の連絡は」

「何も、かな。定時連絡は普通だった。見つけるのは難しいと思うよ」

「そうか」

約二年前、第７６移動隊はとある孤島に強襲作戦を行った。第７６移動隊が行ったエスペランサを使った強襲作戦。

そこでは中にいた人全員が殺されていた。オレ達はそれから純白のフュリアスと悠聖、浩平を襲った男を探している。特に、純白のフュリアスはだ。

男の方は事実上犯人として第一特務に任せ、純白のフュリアスは浩平に探してもらっている。まあ、学業と両立してもらうために色々と大変なことになっているけど。

リースが本気で反対したが、浩平に説得されて今は大第７６移動隊にいる。

「さすがに二年も経てば証拠は少ないよな」

「そうだね。二年か。もうそんなに経つんだね」

オレの姿を見ながらニヤニヤする音姉。嫌な予感がする。

「弟くんが」

「言うな。言わないで。言わないでください。まあ、あの日からちゃんとオレは学んだから」

「三度目の正直」

それを言われるとどうしようもない。オレは小さく溜息をついてパンを口にくわえた。

今日の朝ご飯も普通においしいな。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、おはよう」

「「おはよう」」

オレ達が声を揃えて下りてきた由姫に返す。由姫はピカピカの学生服を着ていた。そのままオレの隣に座る。

「お兄ちゃん、ちゃんと朝起こしてって言ったよね？」

「お前もそろそろ一人で早く起きれるようになれ。毎度起こす身にもなってみろ」

「それは、ほら、お兄ちゃんがおはようのキスを」

「バカか」

オレは小さく溜息をついてコーヒーをすする。とりあえず、これから毎朝同じようなことを繰り返すのだろうか。

そう考えると悪くはないな。

「むっ、妹にバカはないと思うけど？」

「なら、誰の手も借りずにオレより早く起きてみろ。そうしたなら撤回してやる」

「ごめんなさい」

「諦めるの早すぎないか？」

すぐさま謝ってきた由姫にオレはまた溜息をつく。由姫は朝は普通の強さだからな、早起きはなかなか出来ない。

オレは残っていたパンを口に入れた。

先に朝ご飯を食べていた音姉が手を合わせて小さくごちそうさまを呟き、立ち上がる。

「音姉はもう行くのか？」

「うん。都や琴美と待ち合わせしているから」

オレ達が狭間市から学園都市に戻った次の春、琴美は学園都市にやって来た。そして、そのまま第７６移動隊に入ったのだ。入ったとは言っても事務であり、戦闘能力はほぼ皆無。

ちょっとくらいは何かを身につけてくれてもいいんだけどな。

音姉が食器を台所に置いてそのまま玄関に向かって歩き出す。玄関近くには音姉愛用のカバンと光輝の姿があった。

本来なら刀は身につけてはいけないのだが、光輝だけはデバイスとの関係で収納することが出来ないため帯刀が許可されている。

「じゃ、また放課後に」

「行ってらっしゃい」

「行ってきます」

オレの言葉に音姉が返事をしてドアを開けて外に出た。

オレは最後に残っていたサラダを口に運ぶ。

「ごちそうさまでした。さてと、時間はまだまだあるし、ゆっくり向かうと」

「待った」

立ち上がったオレを由姫が強制的に座らせる。オレは小さく溜息をついた。

「こんなに可愛い女の子を待つという気持ちはないんですか？」

「可愛いのは認めるけど、待っているのも退屈だろ。ちなみに、お前と行きたくないってわけじゃないぞ」

「わかってる。お兄ちゃんがそんなこと言わないもん。でも、少し

だけ待ってくれたらな、と」

オレは小さく溜息をついた。

「わかった。さっさと準備を終わらせろよ」

「五分だけ待って」

五分後、オレと由姫は家から外に出ていた。春の日差しがポカポカと降り注ぎ、そよ風が周囲の風力発電機をゆっくり回している。気持ちのいいくらいな春の陽気だ。

学園都市は真ん中を商業エリア、外周部を工業、研究、住宅エリア、その真ん中を学園施設エリアとしている。全学生数は今年入学するメンバーを含めて大体５００万人ほど。治安の差は激しいものの場所さえ間違えなければ極めて安全な生活を送れる場所でもあり、学生からの人気も高い。ついでに、学園都市を守っているのが世界に名だたる『ＧＦ』だからか親の信頼も厚い。

さらには世界でも珍しい自然エネルギーを利用された場所でもある。そのため、魔力エネルギーを使用する際に必要なコストが極めて削減される。おかげでオレの発明品はほとんど流用されていない。オレのものは魔力エネルギー利用型だし仕方ないか。学園都市もそれをコンセプトにしているのか自然エネルギー研究者はかなり多い。

まあ、数は多くないがちゃんと魔力エネルギーの研究者もいる。例

えば、オレとか。

交通機関もそれが影響しているのかバスしか存在しない。基本は自転車か走るか飛行するか。飛行するにしても許可証（三ヶ月３万円）が必要だしな。基本は歩きか自転車。それぞれの学園もそれを考慮してか近くの外周エリアに寮や下宿生用のマンションなどを用意している。ちなみに、研究者か教師の関係者なら住宅エリア内に一軒家を持つことだってできる。ちなみに、白百合家はその一軒家だ。珍しい方だけど。

ちなみに、バスの本数はかなり多い。ほとんどが太陽光発電とか地味に風力発電など自然エネルギーを装備しつつ利用しまくる電気自動車。時代の最先端だ。

白百合家から都島学園都島高校まで歩いて一般人が歩いて４５分ほど。一般人なら。

オレはカバンを空に投げレヴァンティンの力で虚空の中に収納した。由姫も自分のデバイスの中にカバンを入れる。

「最初は１５分狙うか？」

「信号に捕まったら少し辛い時間だけど、それくらいじゃないと」

「了解。じゃ、行くぞ」

オレの言葉と共にオレと由姫は走り出す。もちろん、都島学園都島高校に向かって。

さすがにこの距離はということで自宅が近くにもあるが都島学園は

寮に入ることを薦めてきたが、音姉が速攻で拒否。理由は、

「走れば１０分強の距離なのに寮に入るのはおかしいと思います」

だそうだ。そのおかげでオレと由姫はこういう風に走っていくことを決めた。目標は、音姉が何の技術もなく記録した８分１３秒を切ること。信号に一回でも捕まったらアウト。ちなみに、交通ルールを守らなかった場合は放課後の鍛錬を倍にするという取り決めもある。

それの最初の日。道を全速力で駆けていく。時には塀の上を走り、時には点滅する歩行者信号を駆け抜け、信号に引っかかりそうになったら寸前で道を変えて駆け抜ける。

人に当たりそうになるならちゃんと塀の上に上がり駆け、道がなければ飛んででも作り出し、川が前を塞げば走り幅跳びで飛び越える。

そして、都島学園都島高校の校門の前でオレの足は止まった。

ちなみに、これらのことはちゃんと学園都市から許可をもらっている。音姉が行った道を再現しただけだし。

オレはレヴァンティンを取り出し時刻を確認する。

「１４分２９秒。悪くはないな。最初だしこんなものだろ」

「そうですね」

オレも由姫も息は切れていない。校門周囲にいる人は不思議そうにオレ達を見てくるが気にしない方がいいだろう。校門のところには

一つの看板が。

新暦１０４０年都島学園都島高校入学式

そう。オレと由姫が参加する入学式。海道周、１８歳の高校入学式。

第一話　入学の日（後書き）

１８歳での高校入学式。理由はあります。それは次の話で。

第二話　都島学園都島高校（前書き）

第一章と第二章の中で何が起きていたかはゆっくり書いていくつもりです。

第二話　都島学園都島高校

そう、それは忘れもしない二年前の冬。

都島学園都島高校の入試を一週間前に控えたオレと由姫はとある任務でロシアにいた。任務と行っても戦闘ではなく調査だったためロシアに行ったことのなかった由姫を連れて行ったのだ。

その調査の最中、近くの国家からのテロリスト達が襲撃してきた。オレ達は他に調査していた人達を守りながら目的の遺跡で飢えを堪えながら一週間守っていた。

まあ、一週間の内のほとんどがブリザード到来したからだけど。

オレと由姫の二人だけならブリザードは普通に突破出来たが、調査班がいる上にテロリストの存在もあり救援部隊が遅れてオレ達は簡単に高校浪人となった。すごく恥ずかしいことに。

キレた由姫がテロリストを相手に大立ち回りをしたのはすごかったけど。

そして、一年前の冬。この時は去年の二の舞になるまいと一ヶ月前から任務につかなかった。そして、受験当日、二人揃ってインフルエンザにかかってしまった。今までかかったことがなかったのに。

ベリエが言うには、

「動かないから免疫が落ちたのよ」

だそうだ。インフルエンザの中、無理にいったオレ達は全く頭が回らず由姫はダウン。オレは解答を一個ズラすという技を出して落ちた。

そして、今年。受験は成功した。まあ、一教科だけ名前を書き忘れるミスをしたけど学園側がオレの背景を知っているから大学（医学部レベル）の問題で再試験させられた。まあ、ギリギリだったけど。

そして、ようやく、ようやくオレ達は都島学園都島高校に入学出来た。

「何故回想に入っているんですか？」

由姫が外用の話し方で話しかけてくる。一度直さないか尋ねたのだが、慣れて修正が出来ないらしい。オレも嫌いではないからいいけど。

オレは都島高校の校舎を見上げながら言う。

「久しぶりの学園生活だからさ。オレも由姫も本当なら三年生だろ？」

「言わないでください。人生の汚点です。就職が不利になると思いませんか？」

「大丈夫大丈夫。由姫の将来の夢ってオレのお嫁さんって書いて」

手加減無しの拳が飛んできた。

痛む鼻を押さえつつ、オレと由姫の二人は校舎の壁に張られたクラス表を見ていた。入学式前にクラスに分かれないといけないようだが、オレのクラスは、

「3組か。由姫の名前もあるな？」

「本当ですか？　やった」

由姫が小さく拳を握りしめて嬉しそうに笑みを浮かべている。そこまで喜ばれるとこちらも嬉しい。

同じクラスなのはオレ達が第76移動隊所属だからだろうな。

「また、兄さんと同じクラスですね」

「中二の頃以来だよな」

「そうですね。これで亜紗や都さん、アルさんにリードです」

口ではそう言っているけど、純粋に嬉しいだけなんだろうな。別名照れ隠し。

オレは笑みを浮かべながら玄関の方を見た。体育館に渡る渡り廊下が上にあり、その下に玄関。一年生クラスは四階だったな。一番上が四階で。

「これから教室向かえばいいんだよな。ん？　あれは」

オレは見知った姿を見つけて歩き出した。由姫も歩き出したオレの後を追いかけてくる。

「何でこんなところに委員長がいるんだ？」

玄関付近にいた学生、上級生だろう、の中に委員長の姿を見つけた。

容姿はやはり相変わらずの委員長スタイル。第７６移動隊内ではコンタクトにする時が多いけど。

「あれ？　海道君には言ってなかった？　生徒会長するって」

「あー、何か聞いたことがあるな」

「覚えておいてよ。事務の仕事もなかなか手伝えなくなるって言ったよね？」

言われた記憶がある。でも、その時は結構重要な書類をやっていたから覚えていなかったようだ。

しっかりしないと。

「会長、知り合いですか？」

委員長の隣にいた学生が委員長に尋ねている。生徒会の関係者か。

「うん。海道周君。第７６移動隊隊長」

「あの」

隣の学生が絶句していた。そりゃそうだろう。第７６移動隊隊長海道周は委員長と同じ年。着ている服装は都島高校のものだから同学年だとして聞いたことがないからだろう。

まあ、本当のことを言ったらさらに言葉を失いそうだけど。

「委員長が生徒会長か。優遇されそうだな」

「身内には厳しいから。それに私は生徒会長だって」

「異名が委員長だろ？」

委員長こと鈴木花子。『ＧＦ』では内外共に委員長と呼ばれている。理由は学園都市にやって来て第７６移動隊の治療見習い兵として入隊してから最初の実戦治療で他の見習いじゃない治療兵に指示を飛ばすという凄まじいことをした。そのため、史上最速で治療兵に昇格した。

まあ、見習いなのにおどおどした他の治療兵に怒鳴りつけて指示を飛ばしたんだもんな。

オレが委員長と呼んでいたから異名が委員長に。ちなみに、日本語だ。

「もう、いいよ。海道君が異名を広めた存在だしね」

「まあ、委員長は委員長だし。これからオレ達は教室に向かえばいいのか？」

「うん。確か、3組だったっけ。そこに向かえばいいよ」

「ありがとう。行こうぜ、由姫」

「はい」

オレは由姫と一緒に玄関に入る。そして、そのまま上履きを取り出して履き替えた。

由姫が呆れたように溜息をついてくる。

「兄さんは覚えていなかったんですか？　鈴木さんが生徒会長だということを」

「あの頃はアメリカで通り魔が起きていたじゃないか。あれに関して色々まとめていたからな」

「まあ、兄さんも人の子ということですね。ところで、私達の3組はどこにあるんですか？」

ちょうど近くに地図が張ってあったので確認する。廊下は東から西に伸びていて東から1組ということは、

「東から三番目だな。さて、どういう人がクラスメートになることか」

「悪いことにはならないと思いますよ。天下の第７６移動隊ですし」

「そりゃそうか」

オレは階段に足をかけながら笑みを浮かべた。

都島高校には少し面白い特徴がある。一学年につきクラスが五つしかない。五つしかないからか教室がかなり広々としているのが特徴だ。

そんな5組の教室の中を階段を上がりながら見ていた。緊張している人から友達と話している人まで様々な人がいる。

ようやく高校生活なんだなとしみじみと思ってしまうのはオレだけだろうか。

「ようやく高校生活なんですね」

もう一人いた。オレは軽く息を吐いて階段を登りきる。

「毎日上り下りするとなると億劫になってくるな」

「いや、そんなに登校しませんって。まあ、階段が面倒ということには賛成しますが。飛んだらダメですか？」

「許可を出すと思うか？」

「ですよね」

そんあ私的なことの飛行許可を出したら他のものを認めないといけ

なくなる。あくまで、飛行許可はちゃんと書類を申請してもらわないと。

まあ、申請書類のはそんな私的流用をしようとする奴もいるからそれに許可を出させないのがオレ達の仕事でもある。まあ、許可を出された場合でも回収する任務があるけど。

オレは上を見上げた。教室の入り口についているプレート。そこには１－３と書かれている。

オレはその中に足を踏み入れ、

「ふざけんなよ！」

いきなりの怒鳴り声に思わず目をパチパチしていた。踏み入れた足が完全に止まっている。まあ、横に跳ぼうとしたら扉があることを思い出して跳ばなかっただけだけど。

視界にいるのは男子グループ五人と男女一人ずつが向かい合っている。そのそばでは一人の背が小さめな女子がおどおどしていた。

一体何が起きているんだ？

「何勝手に人の私物を取っているんだよ。『ＧＦ』だからって言うのか？」

「ええ、そうよ。さすがにこの袋に入った粉は見過ごせないもの。ちゃんとした機関で調べてもらうから」

どうやら男女の方が『ＧＦ』らしい。女子がその手に白い何かが入

った袋を振っている。あれはもしかして。

「だから、ふざけんな言ってるだろが！　帰せ！」

「おっと。『ＧＦ』に刃向かうつもりか？」

袋を取り返そうとした男子に『ＧＦ』の男子が笑みを浮かべながら言う。その言葉に相手は手を止めた。

『ＧＦ』に刃向かうということは学園都市に刃向かうと同義に聞こえるんだけどな。

オレは小さく溜息をついて歩き出した。

「『ＧＦ』に刃向かえばお前達に待っているのは地獄だぜ。まあ、こんな怪しいクスリを持っているならもう地獄行きは確定」

「主成分から考えて最近出たばかりの『カンタミラ』に近いものだな。まあ、クスリっちゃ薬だけど、中毒症状にはかなり遠い部類だな」

オレは袋の中身を微かに舐めていた。微かにというのもポイントだが、一番魔術で判断し易い舌で舐めるというのもポイントだ。もちろん、事前にいくつもの解毒魔術を使っておかなければならないけど。

『カンタミラ』は簡単に説明するなら拒食症の人に使う薬の一緒。向精神薬みたいな合法ドラッグとはほど遠くて良かった。

「てめぇ、何者だ？」

『ＧＦ』の男子が詰め寄ってくる。

「『ＧＦ』が取り上げたものを奪って舐めるとはいい度胸じゃねえか。学園都市を敵に回すつもりか？」

そのまま睨みつけつつ顔を近づけてくる。それに対してオレは溜息で返した。

「呆れてものも言えん。学園都市を敵に回す？　『ＧＦ』が学園都市を仕切っているわけじゃねえぞ？」

「『ＧＦ』が実質学園都市の仕切っているもんだ。それすらわからないてめぇはお子ちゃまだな」

呆れて何も言う気にならない。『ＧＦ』女子の方は完全にオレの正体に気づいているって言うのに。

オレは薬を男子グループに投げた。

「使い方は教わっているのか？」

「あ、ああ。こさじ一杯以上はいれるなと」

「正解だ。用法用量守らなかったら痛い思いをするのはお前らだしな。まあ、そんな袋に入れずに別の袋の方が」

「無視すんなや！」

掴みかかってきた腕に対し、オレはそれを左手で掴んだ。そのまま

体を前にやりつつ背中を向け、上手く背負い投げる。

殴ってきたなら普通に投げる方が有効だけど、掴みかかってきたなら背負い投げた方が成功しやすい。

オレは小さく溜息をついた。

「チェーンバインド」

すかさず背負い投げた男子に拘束魔術をかける。さすがに今のは上限を超えた。

「とりあえず、お前の言う地獄に行くのはお前自身みたいだな」

「てめぇ、何者だ！」

喚き叫んでいるが、チェーンバインドの威力に関しては自信がある。

オレは『ＧＦ』帳と呼ばれる学園都市専用の『ＧＦ』証明書を取り出した。

「第７６移動隊隊長海道周。お前が威張る学園都市内部の『ＧＦ』組織のトップだよ」

その言葉に誰もが言葉を失っていた。まあ、予定より早いから気にはしないけどな。

第三話　新たなクラスメート（前書き）

新しいクラスメート達です。

第三話　新たなクラスメート

オレは小さく溜息をついていた。ちなみに、由姫にはすでにいろいろ言われている。

入学式当日に起きたちょっとした事件。その関係者や見ていた人は全員入学式に参加せずに会議室に集められている。

男子グループ、『ＧＦ』の女子、オレ、由姫、一番近くの傍観者であった小さめの女子。ただ、どこかで見たことがあるんだよな。

オレが捕まえた『ＧＦ』の男子は越権行為として周囲の地域『ＧＦ』が連れて行った。

「最悪です。兄さんのせいで最悪です」

「そうなの？」

由姫と『ＧＦ』の女子はいつの間にか仲良くなっていた。

「小学校以来の入学式だったのに」

「あれ？　中学校は？」

「乱闘騒ぎが起きて同じ状況に」

「なるほど。あれ？　由姫って問題児？」

「違います」

仲がよいのはいいことだけど、一人ぼっちって寂しいよな。

「なあ、一つ聞いていいか？」

男子グループの一人が尋ねてくる。首にバンダナをかけたひょろっとした背の高い奴だ。鍛えているようで体は引き締まっている。

「俺達はどうなるんだ？」

「まあ、厳重注意だろうな。紛らわしいことはするなって感じで。『ＧＦ』の方はやり方は全く問題ない」

「そうなのか？」

「当たり前だよ。『ＧＦ』自体はそういう権利があるって言ったよね！？　記憶に残っているんだけどさ！？」

バンダナの男子に後ろにいた背の小さなひょろっとした男子、ただしこちらはただ痩せているだけ、が叫ぶ。

まあ、次からはちゃんと注意するだろう。

「んなくらい見逃してくれてもいいじゃねえか。俺達のお金のために」

バンダナの男子が口を尖らせて文句を言う。

まあ、そういう気持ちもわからないわけではない。ただ、それを見逃していたら本当に違法なクスリも見逃すことになる。

「お金って何に使うんだ？　それを売っても金にならないだろ？」

「放課後に商業エリアで大食い大会があんだ。それに参加するのは俺みたいなタフガイだろ？」

それに答えたのは背が高く体ががっちりと筋肉がついた男子。確かに、タフそうではある。

というか、完全にドーピングじゃないのか？　いや、合法か。

「ちなみに、ちゃんと使用出来ることは確認していますよ。今、疑いましたね」

残った二人の内の一人、髪の毛がまるでワカメのように見えるメガネをかけた男子。あだ名はおそらくワカメだろう。

指によって上げられたメガネが光を反射する。

「わかりますよ。ドーピングのように一見見えますが、用法容量を守れば大丈夫です」

「まあ、入手手段は気になるな。病院関係者でも手に入れにくいだろ？」

入れすぎたら本気で暗殺用の毒に早変わりするからな。入れすぎたらと言ってもかなりの量をいれないといけないし。

確か、１日１５０ｇ摂取だったと思う。

まあ、一気に呑ませないと下痢でひたすらトイレに籠もるという事態になるけど。

「まあな。ワカメが調達してくれた」

バンダナの男子がワカメを指差しながらニカッと笑みを浮かべる。

やっぱりあだ名はワカメか。

「ワカメ言わないでください。私には若宮明矢（わかみやめいや）という立派な名前が」

「名前もワカメなのか」

「もとは何ですか？」

さすがに今のは怒るだろうな。

「そうだ、自己紹介まだだったな。俺は古市健太（ふるいちけんた）。今年で17歳。去年は自分探しの旅に出ていた」

バンダナの男子がニカッと笑みを浮かべながら言う。自分探しの旅に出ていたのは冗談じゃなさそうだな。

「僕は有明真人（ありあけまさと）。健さんの一つ下だよ」

ひょろっとした男子が笑みを浮かべて言ってくる。バンダナの男子のあだ名は健さんか。

「俺様は羽柴月人（はしばつきひと）。つっきーと呼んでくれ」

ガチガチの自称タフガイが視線で求めてくる。それにオレは応じることにした。

「ハト」

「ハトじゃねぇ！　どっちかと言うとタカだ！」

「勝負に勝てないタカ派ハトですけどね」

「ワカメ、てめぇ」

あだ名がどんどんわかってくるな。バンダナの男子は健さん、筋肉はハト、ワカメはワカメ。真人は真人でいいか。残る一人は、

「落ち着け。今騒げばまた問題になる」

そう言いながらワカメとハトの間に入った。そして、オレを睨みつけてくる。

「琴宮一誠（ことみやいっせい）だ」

「海道周。第７６移動隊隊長をやっている」

その視線を見ながらオレは微かに驚いていた。視線だけでオレを計ろうとしている。無理ではないが、かなり難しいはずだ。

ただ者じゃないということか。

「私達もした方がいいかな。私は北村恵（きたむらめぐみ）。みんなからメグって呼ばれてるよ」

「白百合由姫です。兄さんと同じ第７６移動隊に入っています」

残るは一人だけだな。部屋の端でオレを見ている小さめな女子。でも、本当にどこかで見たことがあるな。最近じゃない。大体、狭間市にいた頃だろう。

そんなところで出会ったとするなら、

「あっ」

オレは思い出していた。見覚えがあるはずだ。

「海で助けた」

「あ、あの時は、ありがとう、ございました」

頭をぺこぺこ下げてくる。

狭間市にいた時の夏休み。オレは溺れかけていた女の子を一人助けた。その助けた女の子がこの子だ。名前は確か、

「星村夢、だっけ」

「は、はい」

「夢ちゃんか。よろしくね」

メグが夢に近づいて夢の手を取る。人なつっこい笑みを純粋にしているから性格的にモテそうだな。

オレがそんな二人を見ていると、オレの背中を誰かが掴んだ。振り向くと、

「周、話を聞いていいか？」

ハトがにこやかに笑みを浮かべながら近づいてくる。その顔に有無を言わせない力があった。力も強いから見た目はだてじゃないか。

「人口呼吸したんだよな？　したんだよな？　感触ほべらっ」

オレは思わずハトの体を蹴り飛ばしていた。悠聖や浩平とかにする威力で放ったけど大丈夫だろうか？　いや、大丈夫だろう。

「今のはハトが悪いですね」

「ワカメ、てめぇ、俺様のどこが」

「キモい」

メグの一言でハトがその場で崩れ落ちた。そして、真っ白に燃え尽きている。

こういう状況は気にしない方がいいだろう。

「うわっ、メグは容赦ねぇな。ワカメもそんなこと言わないぞ」

「だって事実だし。えっと、健さんでいいかな？」

「おう。俺はお前らのクラスメートだ。敬語は止めてくれよ」

「なら、オレ達もだな」

オレの言葉に全員が不思議そうに首を傾げる。

「オレと由姫は今年で１８歳だぜ」

「「「「えっ？」」」」

健さん、ワカメ、メグ、真人の声が重なった。

迫り来る白刃。それをオレはほぼ無心で白刃取りをしていた。目の前にいるのは完全にキレた音姉の姿。

事情を聞きに来た『ＧＦ』メンバーの中に音姉が混じっていたのだ。それ以外のことは言わずもがな。

「弟くんがそんなことをする人だとは思わなかったよ。だから、ここで弟くんを倒す！」

「オレを悪の権化みたいに言わないで欲しいな！　というか、オレはただ捕まえただけだろうが」

「問答無用！」

「話聞け！」

オレは叫びながら振り抜かれた光輝をレヴァンティンで受け止めそのまま音姉の体に手のひらを当てた。

「ちょっと眠ってくれ！」

そのまま手のひらに集めたエネルギーを叩きつけ、音姉の意識を一瞬で刈り取る。失敗したら泣きたくなる事態だったな。

オレは意識を失って倒れてきた音姉を抱き止めた。

「姉が見苦しいところを見せてすみませんでした」

すかさず由姫が頭を下げる。こういう時の連携はかなり出来上がっている。

ちなみに、他に来た『ＧＦ』メンバーは委員長とリースだった。

「海道君には後で話はあるとして、まとめて言うよ。以降、気をつけるように。以上。解散で」

「ちょっと待った。簡略すぎないか？」

あまりにも簡略化されている。普通なら個人個人に何かを言うはずなのに。

すると、委員長は溜息をついた。

「今回の事件は不注意と越権行為。みんなから事情を聞いてもいいけど、もうすぐＨＲだから戻った方がいいと思うよ。海道君は私と

音姫さんからキツいお灸を据えるから」

「頑張ってください」

真っ先に由姫が見捨ててきた。まあ、仕方ないか。

「わかった。みんなは先に戻ってて。オレは委員長と話がある」

「今は生徒会長だからね！」

委員長が涙目で訴えてくるが、オレは軽く苦笑して返すだけだ。委員長は委員長だからオレの中じゃ返られないな。

これぱかりは委員長に我慢してもらうしかないか。

「あの、私も残っても、いいですか？」

そんな中、メグがおずおずと手を挙げていた。みんなの視線がメグに集まる。

「同僚を止められなかった責任もありますし、あの場に最初からいた『ＧＦ』としていた方がいいんじゃないかなと」

「怒られるのは一人でいいぞ」

「それこそ私が周に怒るよ。間違ったことをしたならそれをちゃんと直さないと」

オレは小さく溜息をついた。そして、由姫をチラッと見る。由姫はいつの間にか部屋から退出していた。本気で逃げ出したということだろう。

「わかった。委員長もそれでいいよな」

「もう、どうでもいいよ」

一体どっちに言ったのか。

結局、委員長の説教と途中から加わった音姉の説教が終わったのは放課後に突入した瞬間だった。

第四話　ナイトメア

「ようやく終わったー」

椅子に座るメグがまるで溶けた氷のようにぐでんとしていた。まあ、音姉と委員長の説教長い上に的確だったからな、体験したことがなければ無理だろう。

オレは小さく溜息をついた。

「終わったと言ってもこれから『GF』の仕事はないのか？」

「今日は休みの日なんだよ。まあ、訓練には参加するけど」

「休みの日くらいゆっくり休んだ方がいいぞ」

年がら年中訓練していても本当に強くなれない。強くなるには適度に休みを挟まないと本当の強さは手に入らない。

「そうなのかな。みんなから休め休め言われてるけど動かないのが心配なのよね。体が動くことを欲している」

「それならまあいいや。ただし、体がだるいと感じたらしっかり休めよ」

「それはちゃんとしているわよ。そういう日は事務に参加してるから。まあ、数値には弱いけど」

「それでよし」

オレは教室のドアを開けた。すでに放課後だからかほとんど人の姿はいない。いるのは由姫と夢の二人。

メグは二人に駆け寄っていった。

「由姫に夢ちゃんだ。待っていてくれたの？」

「私も夢さんも兄さんを待っていましたから」

「ガーン。私だけ仲間外れ」

「そ、そんなことは、ない、と思います」

「それって仲間外れだと思っているよな」

オレは机の上にあったカバンを手に取った。中身はほとんど入っていないけど。あの五人組はもう帰ったのだろう。

さて、これからの仕事だな。

「あ、あの、海道周さん」

「何だ？」

夢に呼ばれてオレは振り返った。夢は顔を真っ赤にしてもじもじしている。由姫は笑みを浮かべてオレを見ていた。

「あ、あの時、助けてくれて、あ、ありがとうございました」

「大したことはしてないさ。まあ、あの時は助けれてホッとしたけど」

「私は、海道周さんに助けれて、良かったと、思って、ます。だから、その、友達に、なってくれませんか？」

「友達もなにも、同じクラスで名前も知り合った仲だし、もう友達だろ？」

オレの言葉に夢の顔に笑みが咲いた。ヤバい。抱きしめたいくらいにむちゃくちゃ可愛い。

でも、自重自重。

「夢ちゃん、可愛い！」

代わりに自重しない奴が一名いた。メグが夢に抱きついている。

オレが微笑ましくそれを見ていると、由姫がゆっくり近づいてきた。

「可愛いかったですか？」

「ノーコメントで」

答えているようなものだが、今はこれでいいだろう。由姫もクスッと笑っているし。

その時、レヴァンティンが微かに震えた。誰かからの連絡だ。オレはレヴァンティンを取り出して耳に近づける。

「オレだ」

『周か？　すぐに商業エリアに来れるか？』

連絡は孝治からだった。ただ、声にどこか切羽詰まっている。それに、商業エリアということは、

「学園自治政府からの干渉か？」

商業エリアに『ＧＦ』が直接守る場所はない。学園都市には学園自治政府が存在する。その自治政府は有志の学生から出され、学生が学生による学生のための商業エリアの発展に力を入れている。

そのためか学園都市内部にいる『ＧＦ』の大半が直接乗り込むことの出来ない一種の聖域となっていた。そこに直接乗り込めるのはオレ達第７６移動隊だけ。

『それだったらどれだけ楽だったか。近くにいた悠聖、冬華を呼び寄せている。他には光と七葉、後は和樹だ』

「わかった。オレ一人で向かう」

オレはレヴァンティンを下ろした。

「いざこざ？」

メグが不安そうな目でオレを見ている。同じ『ＧＦ』として商業エリアのことを考えているんだろう。

「もっと酷い可能性がある。由姫は待機。オレ一人で向かう」

「わかりました。もしもの時はすぐに駆けつけます」

「そんな時はないさ」

さすがにルーチェ・ディエバイト優勝者が四人も集まっていたら世界でもトップレベルの実力者が十人くらい出て来なければ大丈夫、なはず。

まあ、孝治に悠聖がいるし大丈夫だろう。

オレは教室から飛び出して窓枠に足を乗せた。そして、そこから窓枠を蹴って空に跳ぶ。

魔力による足場を伝って最短最速で商業エリアに向かう。何が起きているかわからないけど、早く向かわないと。

商業エリア。

学園都市の中心に位置した所謂繁華街。様々な店が存在し、たくさんの学生がアルバイトをしている。

商業エリア自体は『ＧＦ』があまり手を出さないように学園自治政府と呼ばれる学生組織が治めていた。そのため、『ＧＦ』が動けるのは現行犯か書類を申請してからか。

書類を申請してからでは遅い。商業エリアの犯罪者は学園自治政府にスパイを送っているという噂もある。簡単に雲隠れされるか囮を捕まえさせられるか。

そこで申請無しで動けるのが第７６移動隊でもある。

オレは商業エリアのほぼ中央、学園都市の中央でもある広場の近くにある路地に入った。確かこっちだったような。

「こっちだ」

孝治がオレの姿を見つけて手招きしてくる。オレはそれに応じて孝治に近づいた。そこには、周囲が真っ赤に染まった空間があった。

倒れている数は3。

「処理班には？」

「連絡している。見つけたのは和樹と七葉。路地裏に血の跡があって入ったら見つけたそうだ」

「七葉は？」

「広場で光といる」

こんな光景を見ていられるのはオレ達みたいな死体に見慣れた奴らだけだろう。オレは死体のそばでしゃがみ込む。そして、ポケットから何かがはみ出ているのを見つけた。

ポケットから取り出してみる。

「白い粉だな」

白い粉の入ったビニールだ。

「悠聖と冬華が研究所に持って行っている。見た目はどうだ？」

「ただの粉、にしか見えないが、この敏感な時期に露骨なこれはヤバいだろ。粉は悠聖の持ったやつと二つだけか？」

孝治は頷いた。オレはその粉をポケットに戻す。一応、こっちでも色々調べないと。魔力的観点から。

死体の全てはまるで死んだことを理解していないように穏やかだ。この手口は二年前のものと告知している。

「『悪夢の正夢（ナイトメア）』か」

二年前からずっと調べていた結果、一つのレアスキルが浮かんだ。オレの親父のレアスキルでもあった『悪夢の正夢（ナイトメア）』。それを使われた可能性が高いことに。

能力は簡単に言うならあらゆる気配を遮断する能力。その能力の高さは桁違いで隠密行動に向いている。でも、そのレアスキルは登録上親父しか持っていなかった。親父が死んだ今、誰が持っているかわからない。

オレは小さく溜息をつく。

「悠聖達の結果待ちだな。もし、結果が予想通りなら」

「『ナイトメア』と『悪夢の正夢（ナイトメア）』が一致する。笑えない冗談だな」

「そう考えるしかないだろ。もし、一致したなら大仕事になるな」

確実に商業エリア自体が潰れる可能性がある。第７６移動隊が行う強制捜査の最中に各『ＧＦ』が同時に捜査に関する必要書類を提出する。オレ達が先に動くことで相手の動きをかき乱し、人海戦術で統べていく。

作戦として悪くはないけど花がないからな。

「とりあえず、ここはそのままにして」

「またあなた達ですか」

その声に振り向くと、そこにはメガネをかけた坊主頭の男子と武装をした男子達がいた。

学園自治政府代表楠木大和。はっきり言うなら『ＧＦ』の天敵。

「殺人が起きているという現場に来てみれば、またあなた達がいますね。まさか、『ＧＦ』が犯人だと」

「証拠を捜してもいいぜ。まあ、前回のように無駄で終わるだろうけど」

前にも同じような事件、同じような遭遇があった。違っているのはクスリもナイトメアも関係のないことくらいか。

一応で取り調べを受けてアリバイが成立してあっという間に帰された。楠木大和曰わく、

「時間を無駄にするつもりはありませんから」

だそうだ。

「しかし、手口が鮮やかではありませんか？　こんなことを出来るなんて」

「限られている。だけど、心当たりが故人しかないのが問題だ」

「その人が生きているとかは？」

「ありえない」

ありえない。絶対にありえない。あの日、オレ達の目の前で親父やお袋のいたビルが爆発によって吹き飛んだのをこの目で見たのだから。

いくら親父が『ＧＦ』最強の魔術師と言われても生き残ることは不可能だ。絶対に不可能。

「根拠は聞かなくてもいいでしょう。信じておきます。死体を運び出す準備を」

「早かったな」

孝治が楠木大和を睨みつけながら尋ねる。

「処理班が連絡したにはあまりに速すぎる。誰が情報を？」

「フードをした怪しい男が。指差した方角を見た瞬間に消え去りましたけ」

オレと孝治は同時に地面を蹴り壁を蹴っていた。そのまま建物の屋上まで出る。

「レヴァンティン、索敵を手伝え」

『わかっています』

オレはレヴァンティンの形を変える。魔術を使うための杖の形。モード？だ。これを使って周囲の魔力粒子を掌握した。

すかさず魔力を周囲一体に散らして確認する。そこにいるのに見ることが出来ない相手を。

「商業エリア東通り８－３」

孝治が弓を構えながらオレの言った地名の方を向く。そして、小さく頷いた。

「不自然に隙間がある」

「それだな。見つけれるのがオレだけなら追わない方がいいか。他の奴らがいけばやられる。それにしても、学園都市内部に入り込んでいるのか。一体、奴はなんなんだ？」

第五話　一日の終わりに（前書き）

ユニーク１００００突破しました。読んでくださってありがとうございます。

第五話　一日の終わりに

オレは手に持っていた資料を机の上に置いてベッドに寝転がった。

検査結果は予想通り。

だけど、『悪夢の正夢（ナイトメア）』の持ち主が関係していることがわかり、事態はただごとじゃなくなった。今まで通りにクスリの事件だったら楽だったが、そうは行かないようだ。

これからは大規模な捜査を行っていないとな。

学園自治政府が関係しているのは確かだが、自治政府自体を潰しかねないことを普通はするだろうか。やるとするなら下っ端。そこを洗いざらい調べるしかないか。

そう考えていると部屋のドアがノックされた。

「はい、どうぞ」

オレの言葉と共にドアが開き花柄のパジャマを着た音姉が資料を片手にやってきていた。オレはベッドから起き上がる。

「弟くんと情報交換したくて」

「そうだな。音姉の方は琴美からか？」

「うん。すごいよね、琴美は」

オレ達が狭間市から学園都市に戻った半年後、オレ達を追いかけて琴美が学園都市にやって来た。護身術も身につけていたので第７６移動隊に入隊。事務をやりながら情報収集を行っている。

というか、情報収集能力があまりにも高い。

「私の情報から。都島大学にもナイトメアの噂は広がっているよ。悪い方向で」

ナイトメア。

今、オレ達が追いかけているクスリの別名だ。うつ病に対して使われる薬でもあり、合法ドラッグとなっている。向精神薬としてはかなり優秀な部類なので取り締まれないのが現状である。しかも、中毒性がそれほど高くないのも特徴だ。

だが、それをクスリとして扱えばそのまま他のクスリに手を伸ばすリスクが極めて高いというのもある。売られているのは主に商業エリア。『ＧＦ』の監視下じゃないからなかなか摘発出来ない。

「悪い方向ってことは」

「うん。中毒性が低いからすぐに抜けられる。痩せれる。気分が高揚する」

どれも全て当てはまっている。当てはまっているからこそ質が悪い。手を出す人が増えやすいのだ。合法ドラッグでもあるというのが追い風かもしれない。

中毒で倒れるのも少ないから見つけにくいし。

「試してみたいという人もいたかな。問題として、ナイトメア以外のクスリも回っている」

「ったく、どこからそんなクスリが出ているんだか。内部と外部を通る流通ルートは全て押さえているよな？」

「うん。多分、個人が個別にだと思う」

どれだけ水際で食い止めようとしても抜けて行く数はある。だから、これは止めることは出来ない。ずっと戦っていくものの一つだろうな。

問題としては、ナイトメアが学園都市内部の供給量より出回っている数が圧倒的に多いということ。

他のクスリ、覚醒剤とかよりも遥かに外部から入っているとしか考えられない。それを個人が個別にするのはかなり大規模である。

「で、次が琴美からの報告」

さて、どんな報告が来ることやら。

「ケリアナの花が大量に学園都市に入っている」

「はぁ？」

オレは思わず聞き返していた。今、何て言った？

「だから、ケリアナの花が大量に学園都市に入っているって」

「ケリアナの花って魔界原産の花だよな。観賞用としても使えるから人気が高い花だろ？　それが大量に入ってきたからなんなんだ？」

「そっか。弟くんは魔界の草花に詳しくなかったんだ。じゃ、リリーナちゃんからの言葉。ケリアナの花の根は麻薬になる」

「ちょっと待て」

琴美がどうやって情報収集しているか気になってくるが、どうしてそこまで繋がるかはわからない。

でも、その情報はかなり使える。

「市場で出回っているのはもしかして」

「もしかしたら、私達が掴まされたのは本当の薬で、ナイトメア自体は別にあるかもしれない。これが琴美の結論」

「見当違いだったってわけか。オレ達が見事に踊らされていたのか」

久しぶりの経験だ。ここまで食い止められなかったのはナイトメア自体が別物だったなら納得出来る。

これで対策は立てやすくなった。

「レヴァンティン、孝治にコールを頼む」

『もう繋いでいますよ』

『話は聞いていた』

「勝手に繋ぐな」

オレは小さく溜息をついていた。ありがたいと言えばありがたいのだが勝手に通信を開くデバイスなんて聞いたことがない。

まあ、レヴァンティンは普通じゃないから仕方ないか。

「孝治、明日から張り込めるか？　学園自治政府にも気づかれないように」

『わかった。怪しいところは張り込もう。しかし、レヴァンティンがここまでハイテクだったとは』

「オレも驚いている。何かあったら連絡を頼む」

『ああ』

通信が切れてオレはレヴァンティンに軽く拳を入れた。

『何をしるんですか？　マスターのために私は頑張ったのに』

「先走りすぎだ。まあ、ありがたいけどな。音姉はどうする？　明日は何か用事はあるか？」

明日は普通に平日だ。授業もあるが、音姉や孝治になら監視を頼める。出来れば、早々に根源を潰したい。オレの場合は今日の明日だからちゃんと行かないと。

音姉は少しだけ考えた。そして、ゆっくり頷く。

「明日は大丈夫かな。授業は一回サボっただけでもどうにかなるし。心当たりはなかなかないけど」

「だと思った。商業エリア中央広場付近。怪しい動きがないか見つからないように見張って欲しい。孝治が裏を探すはずだ」

「わかった。『悪夢の正夢（ナイトメア）』と相対してどうにか出来るのは私、弟くん、孝治くん、悠聖くんの四人だけだしね」

「由姫も何とかなると思うけどな」

色々と大変なことになるだろうけど。

オレは小さく息を吐いて立ち上がる。

「どこか行くの？」

「散歩。気晴らしにな」

レヴァンティンを手に取りオレは窓を開けた。心地よいくらいの空気が肌を撫でる。それを感じながらオレはその窓から飛び降りた。

ナイトメア自体が合法ドラッグとは違うものの可能性がある。おそらく、新たに作られた麻薬だと考えたらいいだろう。レヴァンティ

ンがハッキングを駆使して調べた結果、ケリアナの花とナイトメアだと思っていた薬は微妙な違いがあるだけでよほど詳しく調べないとわからないらしい。

調べ方は本当に簡易なやり方だからな。

だけど、気づかなかった。その考えに至ることが出来なかった。まだまだだ。まだまだ能力が足りない。もっとすごくならないと。

「あれ？　周？」

その言葉に振り返っていた。そこにはジャージ姿のメグがいる。どうやら走っていたらしく腕が構えていた。

こんな夜中にまで訓練とは頑張るな。

「どうかしたの？」

「色々とな。お前は走っていたのか？」

「うん。体が動かし足りなくて軽く２０ｋｍほど」

「それ、軽くないからな」

体力をつけるために２０ｋｍほど全力疾走する訓練はあっても軽く走る距離じゃない。

まあ、オレも時々軽く走っているからとやかく言うものじゃないけど。

「私の場合は人一倍訓練しないと強くなれないから」

「戦闘ランクは？」

「聞いて驚きなさい。先月にＡランクになったわ」

「なぬ」

オレは純粋に驚いていた。二個下でＡランクというのはかなり強い方でもある。オレ達自体が別格でもあるが、Ａランクならオレ達がやる任務についてこれる可能性がある実力だ。

見た目からして全くわからない。

「ただね、隊のみんなはＡランク以上だからまだまだだよね」

「メグの部隊はどこだ？」

「学園都市第８地区地域『ＧＦ』」

全員Ａランク以上の部隊なんて聞いたことがない。第７６移動隊ですらＢＢランクが交じるからな。事務を含めて。

どこかきな臭い雰囲気を感じる。

「あれ？　何かマズいことを言った？」

「メグはまだ時間あるか？」

「あるけど？」

「軽くそこの公園で組み手でもしないか？　実力確かめてみたいし」

そう言った時、メグの目は輝いていた。まるで、最初から戦ってみたかったかのように。その手にはいつの間にか薙刀が握られている。よく使い込まれた薙刀だ。

一応、調べるついでに人材発掘でもしますか。

第六話　北村恵（前書き）

五人衆が本格的に活動するのは中盤くらいからです。

第六話　北村恵

軽く体を伸ばす。そして、レヴァンティンを取り出した。すでにメグは準備が終わっているのか腕を使って薙刀をしっかり振っていた。

その動きは鋭く洗練されていた。天才型にあるような荒さは全くない。ひたすらに努力をして身につけたかのような動き。

オレはレヴァンティンを右手で構える。

「準備はいいな」

「いつでも」

その言葉と共にオレは地面を蹴った。そして、勢いよく振り下ろす。力は三割ほど。メグはそれを薙刀の刃で受け流し、そのまま石突で殴りかかってくる。

それをオレはレヴァンティンで受け止めた。

「へぇ、やるな」

「これくらいは簡単よ」

メグが動く。薙刀を上手く動かして斬りかかってくる。それに対してオレはレヴァンティンで受け流そうとした。だが、レヴァンティンが薙刀によって絡め取られる。

そして、薙刀が跳ね上がりレヴァンティンが空に弾かれた。おっと

思った瞬間には刃が迫っている。

技はAランクで大丈夫だ。動きもAランク相当。薙刀の刃を簡単に避けながらオレは後ろに一回ステップを取る。そして、一気に前に踏み出した。

メグの薙刀に掌底を叩きつける。

由姫が使っていた綺羅朱雀を流用した技だが、格下相手じゃないと決めにくい。由姫みたいに神速に近い速さがあるわけじゃないし。

それだけでメグは大きく後ろに吹っ飛んだ。だけど、上手く地面に着地する。本当は左胸に打撃を与えるのがいいんだけどな。

「今の衝撃は」

メグが驚いている間にオレは振ってきたレヴァンティンを右手で掴み大きく振り切った。だけど、メグは避ける。だから、オレ大きく振り切ったレヴァンティンを手放した。

メグがすかさず薙刀を振り切ろうとする。でも、オレの左手にレヴァンティンがあることに気づいていない。振り切られた薙刀をオレはレヴァンティンで弾いた。

「なっ」

メグの顔に驚きが入った瞬間、オレはレヴァンティンをメグの前に突き出していた。

「これで終わりだな」

「両利き？」

「実は左利き」

ほとんど右で使っているが、両方使えた方が便利であることが多い。だから、両利きで使えるようにしているだけだ。

オレはレヴァンティンを鞘に収めた。

「確かにＡランクってレベルだな」

「おかしいな。海道周ってＡＡランクのはずじゃなかった？」

「ＡＡランクとＡランクじゃかなりの差があるぞ」

ＡＡランクは実戦で一定以上の活躍をしなければ取得出来ない。ただ、それだけでも取得は出来ない。

Ｓランクとなるとさらなる桁違いさを必要とする。一応、実戦の結果だけならオレはＳランクらしいけど。

「薙刀の使い方は悪くないけど、相手の剣を払ってから油断したよな」

「ううん、普通はあれで終わりじゃないの？」

「Ａランクなら武器を手放しても攻撃が来ると思っているんだな。それに、拳の相手は苦手じゃないか？」

「うん」

そうじゃなかったら綺羅朱雀もどきをまともに入れられなかっただろう。Ａランクってのはそれくらい実力があってもおかしくない。

オレはレヴァンティンを元の形に戻しポケットの中に入れた。

「というか、お前の薙刀術は我流だよな？」

「そうだよ？　何か悪いところがあった？」

「動きも振りも綺麗なんだけど、実戦を経験していないなって」

振りも動きも見事だった。レヴァンティンを持っていかれたしな。ただ、そこまでだ。本当ならあの瞬間に武器を突きつけて終わっていたが、その動きも鈍かった。

推測するからには、スピード型で我流薙刀術を使う努力型の人物ということがわかるな。

「うわっ、本当に当てられた。ちょっぴり驚くね。実戦ってなかなかないからさ」

「そりゃないだろ」

というか、あったら驚く。東京特区学園都市は著しく犯罪というより戦闘が関わる犯罪が少ない。だから、実戦経験が多かったなら驚いてしまう。

第７６移動隊は世界を回るから実戦経験は学園都市内部で圧倒的に多い。

模擬戦じゃなくて実戦に近い訓練があったらな。

「あっ、そうだ。明日第７６移動隊内で模擬戦があるんだがやっていかないか？」

「行ってもいいの？」

メグの目はとても輝いていた。どれくらい輝いていたかと言うとオレが一歩後ろに下がってしまう。尻尾がついてたら凄まじい速度で振っているだろうな。

一応、クラスメートがチーム戦でとこまで動けるか見ていてもいいだろう。

「ただし、チームはオレと由姫もいるからな。Ａランクならまずは立ち回りを覚えろよ」

「はい！　師匠！」

「そう言うわけで、クラスメートのメグだ」

「北村恵です」

その瞬間、ほぼノーステップの綺羅朱雀がオレの顔面を捉えていた。動作から約コンマ０１ほど。音姉すら直撃する究極の技。

愛佳さんすら凌駕すると言われた最強の技。感覚すら追いつかないからな。

「兄さん！　どうしてメグさんを連れて来ているんですか？」

そのまま胸ぐらを掴んで持ち上げてくる。冗談ではなく本当に。

「由姫ってすごい力持ちだね」

「えっ、これは」

「まあ、今回は副隊長全員いないから大丈夫だろ」

孝治と音姉は商業エリアにアルは悠人達と一緒に学園都市外でフュリアスの操作。和樹と七葉もそこだ。

ここにいるのは亜紗、由姫、悠聖、冬華、中村、楓、エレノア、ベリエ、アリエとオレの十人。そこにメグを加えた十一人。

「珍しいな。外部部隊から連れて来るなんて」

「お前は俊也を連れて来ているだろうが」

悠聖の弟子である俊也は別の高校に入り政治・経済を習っている。精霊についてもっとみんなに知ってもらいたいらしい。ちなみに、戦闘ランクはＡランク。実戦に参加すればＳランクはおかしくない。

時々こっちにもやって来る。模擬戦をしに。悠聖と二人で組めばオレと音姉が組むより遥かに強いというむちゃくちゃな実力がある。

オレと音姉は事実上タッグ最強なのに。

「まあ、そうなんだけどな。でも、人数が一人余らないか？」

「そうか？　オレ側は、由姫、亜紗、メグ、楓。悠聖側は、冬華、中村、エレノア、アリエ、ベリエ。バランスは取れてる。ちなみに、お前は召喚禁止」

「まあ、そうなんだけどよ」

というか、召喚されたら勝てるものが勝てなくなる。

「周君、明らかに不利なんですけど」

楓がブラックレクイエムを担ぎながら言ってくる。まあ、確かに不利なんだけど。

オレはニヤリと笑みを浮かべた。そして、レヴァンティンを取り出す。

「圧倒的不利を覆すのが楽しいんじゃないか」

レヴァンティンを握りしめ、構える。その言葉にみんなが呆れたように位置を変える。ただ、メグ一人だけが不思議そうに首を傾げていた。

オレは最近圧倒的不利を覆すことに快感を覚えている。まあ、模擬戦だけだけど。

「制限時間は？」

悠聖が薙刀を掴む。最近は優月も悠聖に自らの武器を渡すことが多くなった。まあ、別の言い方をするなら悠聖の魔力キャパシティが成長と共に大きく跳ね上がったため優月を使えばレアスキルを封印した音姉とタイマンと戦えるくらいに。

ダブルシンクロをすれば本気の音姉や夜の孝治、由姫との肉弾戦すら戦える。

「5分。AAランクはリミット5。Sランクはリミット8。SSランクはリミット9」

『リミット9なんてAランクとすら戦えない』

「数値的に言ったらオレの弱体化がヤバいないからな」

リミットはデバイスでかける能力制御のことで、最大がリミット15でリミット15の基準はSSランクがBランクにすら勝てないというレベルだ。

ちなみに、平均的に高いだけのオレはリミットかけたら本当に技勝負となる。つか、アリエ一人にすら力負けするかも。

「メグは悠聖を。由姫と亜紗は冬華と中村。楓はエレノアでオレは双子を抑える。買ったらメグ以外の援護を」

「あれ？　私一人？」

メグが汗を流しながら尋ねてくる。まあ、第76移動隊という超実戦経験部隊とタイマンだもんな。

オレはレヴァンティンをしっかり握りしめる。

「さあ、開始しようぜ」

第六話　北村恵（後書き）

次回は模擬戦です。

第七話　努力の力

薙刀て薙刀がぶつかり合い片方が大きく弾かれる。弾かれたのはメグ、北村恵の薙刀だった。すかさずメグに迫る薙刀をギリギリで避ける。

それを見ていた悠聖はゆっくり笑みを浮かべた。

「やるじゃねえか」

悠聖がすかさず薙刀を振る。メグはそれを受け止めた。力だけなら勝っているという実感はある。だけど、一つ一つの威力が高い。能力を制御されているのにあらゆる分野で押されていた。

洗練された動き。何回も、何十回も、何百回も、何千回も、絶え間なく降り続けたに違いない。その動きでメグを攻めてくる。

だけど、メグは驚きながらも精神が落ち着いていた。力では勝てない。スピードでも勝てない。でも、薙刀を振った数だけは負けるつもりはなかった。

大きく後ろに下がるようにステップをする。周があの敵見せたステップ。それを真似しながら回転しつつ前に出る。そして、勢いよく薙刀を縦に叩きつけた。

「おいおい」

悠聖が大きく後ろに下がらせる。あまりの勢いに受け止めた衝撃のまま後ろに足が滑ったのだ。そして、驚いている。

今の衝撃は普通の打撃なんかじゃない。あんな無理やりなステップを踏みながらの回転攻撃は威力が大きく落ちやすい。足場が安定しにくいのと、上手く回転しながら上手く叩きつけなければ外れやすい。だけど、メグはそれで悠聖に向かって縦に叩きつけた。

「天才？　いや、違う。この動き、何万回と振っているな」

悠聖の言葉には賞賛が混じっていた。薙刀を合わしていればわかる。メグの攻撃は純粋で混じり気のない素直な攻撃。その分、攻撃は読みやすい。ただ、その素直さはかなり高く、あらゆる体勢からでも威力の似た打撃を放てる。

血の滲むような努力。それがなければここまでは扱えない。だけど、天才じゃない。天才ならここまで素直じゃない。

基礎を積み上げているからこそリミットをつけているとはいえ悠聖と互角に渡り合っている。

「力と速度は負けていても、努力じゃ負けないってか？」

「努力の積み重ねはいつか結果を生む」

「賛成だ。特に周はその手本だな。あいつは器用貧乏の天才だ。でも、世界で認められる一人。努力は結果を生む。だからこそ、オレは本気で行かないとな」

悠聖が地面を蹴って薙刀を振り切る。その速度は今までより速い。メグはすかさず薙刀で受け流した。

受け流したはずなのに手が痺れている。これではまるで周の時と同じだと思った。

打撃の瞬間、思っていた以上に手にインパクトが来ている。まるで、当たる寸前で威力が上がったように。

「周には悪いがリミットを解除させてもらった。君の力を理解したからこそ、オレは君に全力を出す。殺す気で行く」

膨れ上がる悠聖の気配。それを感じてメグはごくりと唾を飲み込んだ。

これが実戦経験豊富な部隊の隊員。申し分なく恐怖が沸き起こってくる。でも、顔に笑みが浮かんでくる。

自分の力がどこまで通用するのか、我流でどこまで戦えるのか。それを試してみたい気持ちがうずうずしてくる。戦いが好きというわけじゃない。でも、今は目の前にいる人、白川悠聖に全力を叩きつけたい。

「望むところよ」

薙刀を握りしめる。我流の薙刀術。それでも作り出した技が五つある。さっきの回転攻撃である『鳳』の他に四つ。この状況ならあれが使える。

メグは一歩を踏み出し薙刀を振り下ろす。すでに薙刀の刃には魔力を纏わせておりそれを放つ。悠聖は前に踏み出しながらそれを弾いた。だが、メグは止まらない。薙刀を握りしめ、さらに一歩を踏み出す。

振り切った薙刀を同じ軌道で振り上げる。その攻撃は不意をつくには十分。

「『燕』！」

振り上げた薙刀は悠聖によって受け止められる。地面を振り切れなかった刃から放たれた魔力の刃が大きな傷跡を残す。

「嘘」

「初見殺しの技だな。だけど、相手が悪かった。周もよく似た技が使えるからな」

メグは一歩後ろに下がる。悠聖も一歩後ろに下がった。

今の一撃が防がれるとは思わなかった。普通なら武器を弾かれたところに魔力の刃が直撃するはずだったのに。

実際にメグの一撃は白百合流さえ知らなかったら簡単に通用する一撃だった。最初の魔力の刃を受け止めたところに薙刀が受け止めたものを跳ね上げながら魔力の刃を当てる。白百合流を知っていても対処しずらい攻撃。

ひたすら薙刀を振ったからこそ出来る芸当だった。それは悠聖も肌で感じている。

稀にいるんだよな。努力だけでかなりの実力を持てる人が。

文字通り、努力の天才。

周と同じタイプ。違いは実戦経験と戦いを始めた年代だけ。

「君はどうして『ＧＦ』に入った？」

だから、由姫はメグに尋ねた。メグは薙刀を構える。

「強くなりたかった。何をするにしても努力しなければならない私は強くなりたかった。自分を変えたかった。根暗で弱かった自分を変えたかった。ただ、それだけ」

強くなることで何かを変えることが出来る。メグはそう信じている。信じているからこそ強くなろうと努力をした。

それは周と同じ。まるで、鏡の中にいるような状況だと悠聖は感じた。

強くなろうと今でも努力している。現にメグは悠聖の隙を探っている。その目はどこか周と似ているものがあった。

「生い立ちは違えども、根本的な動作は似ているのか。どうりで周が目を付けるわけだ」

この言葉は目具には聞こえていない。悠聖の心の中の言葉だ。悠聖は薙刀を片手で構えた。そして、もう片方の手で腰のホルダーにあるゼロ式精霊銃を引き抜く。ゼロ式というのはエネルギー弾を補充して放つことが出来る浩平のものと違い、精霊との契約によるエネルギーを弾丸で放つものでエネルギーを弾に詰めるリロード式には威力はかなり劣るが悠聖の様な強力な精霊がいる場合は関係がない。

「さあ、行くぜ」

悠聖が地面を蹴る。それに対してメグも地面を蹴った。一歩踏み出しながら薙刀を振り下ろす。それを悠聖は薙刀で受け流しつつ精霊銃の引き金を引こうとした。だけど、メグの体は受け流した割りには前に出ている。まるで、受け流されることを想定されていたかのように。初めからイメージトレーニングをして通常の訓練でもまともにやってなければ成功しない技だ。もしかしたら、最初からそうなることを考えていたのかもしれない。

その悠聖の考え方は当たっていた。受け止められることはメグは想定はしていないが受け流されることはあると思っていた。だから、悠聖の行動を見た瞬間に体が勝手に動いていた。受け流してくるからこそ体を捻りながら薙刀の刃ではなく薙刀の石突で殴りかかる。目的は銃口を向けている精霊銃。

さすがにこれは想定していなかったからか悠聖は精霊銃を叩き落とされそうんになった。でも、そこは精霊銃で薙刀を受け止める。その時には薙刀の刃が向かってきていた。薙刀で受け止めるが完全に鍔迫り合いに近い状況に持っていかれる。

強いわけじゃない。悠聖のとって何度も経験したことがあることだが、だけど、その動きと流れは完全に相対してきたものとは違う、周と同じやりにくさを感じていた。

実戦慣れした動きでもなければ、レアスキルに頼ったごり押しでもない。昔の周達の様な、努力によって強くなろうとしていた者たちの力。バカにできないくらいの力を持っている。

「じゃ、次で終わらせるぜ！」

悠聖はその言葉と共に力任せに、片手で、メグを弾き飛ばした。その時には薙刀はメグに迫っている。普通は薙刀は両手で構えるのにまるで、重さがないかのように操っている。それにメグは刃を合わせた。それと同時に悠聖の精霊銃からエネルギー弾が放たれる。

放たれたエネルギー弾は凄まじい速度でメグに迫り、薙刀の一部を砕く。だけど、それだけだ。

「なっ」

悠聖が驚いた瞬間、メグは一歩を踏み出していた。合わせた薙刀で受け流しながら悠聖の薙刀の柄に体を当てながら回転する。

「『鳳』！」

そのまま悠聖に薙刀を叩きつけた。悠聖はとっさに飛び上がり横向きに振られる薙刀を飛び越える。完全に回転していたメグはその行動を読むことが出来ず簡単に避けられた。そして、首元に突きつけられる薙刀。

「終了。てか、リミット外してもその戦闘能力かよ」

「えっと、何か悪いところでもありました？」

「ない。型にはまりすぎているけど、その型を他の型で補っているから充分だろ。まっ、悪くない戦闘だ」

「ありがとうございます。あれ？」

メグはふと空を見上げた。そこでは凄まじい空中でのバトルが勃発している。簡単に言うなら収束系の攻撃が空を飛び交いまくっているのだ。外れて行く収束系の攻撃は周囲にある薄い膜の様なものに当たって散っている。

メグは周囲を見渡した。

「あれ？　いつの間に結界が」

「ベリエとアリエだろうな。二人の結界能力はむちゃくちゃ強いし。まあ、いつ見ても怪獣大戦争しか思いつかないけどな」

二人の視界の先にある空には激しく飛び回りながら戦う楓とエレノアの姿があった。どちらも砲撃術師としては超一流のため様々な距離や魔術を使って戦っている。

収束系と収束系のぶつかり合い。楓は風を圧縮したものや光を放っている。対するエレノアは炎を圧縮した光とでもいうかのようなものを放ちまくっている。空を縦横無尽で駆けまわり、超人的な魔術を連射して戦っている。

「いやー、さすが二人だな」

その言葉に二人が振り向くと、そこにはボロボロになった周の姿があった。ベリエとアリエはいつのまにか由姫を戦っている。冬華は亜紗と戦い、光は地面に座り込んでいた。

「おっ、負けたか？」

「ああ。さすがに、二人の連携は凄まじかった。リミットかけてい

るとはいえほぼフルボッコ」

「さすがの周隊長も無理か。というか、周！　お前、わかっていてやっただろ！」

「当たり前じゃん。メグがどこまでこの隊についてこられるか試してみたかった」

「どういうこと？」

メグが不思議そうに首をかしげる。周の言葉には悠聖も首をかしげていた。

周は笑みを浮かべる。

「第７６移動隊に入らないか？」

その言葉にはさすがの悠聖ですら口をぽかんと空けることとしか出来なかった。

第七話　努力の力（後書き）

悠聖が薙刀を片手で振り回せるのは力が強いからというわけではありません。精霊武器の基本的な重さは大体０．１ｋｇ以下で上位の精霊であればある程重さは軽くなります。（セイバー・ルカとディアボルガは例外）なので、優月の薙刀はほぼ空気です。魔力も纏っているので抵抗もほとんどありません。

第八話　事務の力

第７６移動隊駐在所。

そこは狭間学園のそばに存在していた。そこまで広くはないが一応仮眠室もあり籠城しようと思えば十分に可能な施設でもあった。その中にあり得ないというかほとんど残像の動きと共にキーボードを叩くような音とは思えないキーボードをたたく音が鳴り響いていた。

カタカタカタ、ではなく、ガガガガガが正しいだろう。キーボード自体が旧式のものだからか机も凄まじく揺れている。一番の気になるところは最新式の立体ディスプレイを使っているはずなのにキーボード旧式というところか。

「よし」

キーボードを破壊しかけない威力で叩きまくっている委員長が小さく拳を握りしめた。その傍で新型のキーボードを叩いている琴美が小さくため息をついた。

「相変わらずの破壊力ね」

「特注品だから大丈夫です。とりあえず、第八セキュリティーを完全に無効化しました」

「まさか、相手もたった二人で、しかも、魔術を介入せずにやっているとは思わないでしょうね」

二人がやっているのは簡単に言うならハッキング。ただし、やり方は異常というべきかもしれない。流用しているのは周が作り出したハッキングプログラムで多重に形成されたセキュリティーをいくつかのワードを組み合わすことで無効かまたは弱体化させるという犯罪要素満点のもの。ただし、それを使っているのは琴美一人。

委員長はむちゃくちゃな速度での力技でセキュリティーを突破している。

どれくらいむちゃくちゃかというと、周の『天空の羽衣』に対して物理攻撃で挑むようなもの。普通にかんがえたらむちゃくちゃなのだが、琴美のプログラムによって綻びた傷を破壊している。

「じゃ、最後の防壁を」

委員長が超高速でキーボードを叩く。委員長の得意な魔術が治癒魔術と指先の強化だったからか独自で開発した新たな魔術を使ってこうなっている。ちなみに、周ですら真似することを放棄したとか。

琴美も気を取り直してキーボードに手を置いた瞬間、

「よっし、終わった」

「早っ！」

時間にしてほんの数秒。ダミーを掴まされたと思えるような速度だった。そして、委員長が有無を言わさぬ力技でデータのファイルを丸ごとコピーする。立体ディスプレイにある記憶機器ではなく、荒事専用の記憶デバイスに。

一定時間とあるワードを打ちこまなければデータが崩壊するようなプログラムがあるなら一瞬で消し去る記憶専用のデバイス。ちなみに、記憶機器に入れた場合はとある情報で一部の電波を飛ばすことがあるのでそちらに保存するのは厳禁だったりもする。

コピーを終えたデバイスを委員長は引き抜く。その間に琴美は多量のスケープゴートを放っていた。そのほとんどが確認されている極悪ハッカーから強力な権限を持つ部隊、もちろん第７６移動隊も、に配置しておく。

「相変わらずの早業で」

リースがせんべいをぱりぽりしながら賞賛する。らだ、視線はほとんど移していない、映しているのは目の前にある立体ディスプレイ。

委員長は小さく息を吐いた。

「今日も疲れた。どうして海道君はこんな命令を送ってきたんだろ」

送って生きた内容は全部隊の戦歴データを取り出せと言うものだった。一応、『ＧＦ』の全隊員の利益を乗せたものは戦歴データとして地下にある集積デバイスに保存されている。個人情報の塊で第７６移動隊など一部の部隊しか見れないが、それを盗み見ようとする理由が委員長にはわからない。

琴美も不思議そうに頷いていた。

「そうよね。この手の情報は普通に調べれば出てくるはずなのに。どうして、こんなハッキングまがいのことをしたのか」

「もしかしたら、気取られたくなかった？」

リースがち作つぶやいた。その言葉に二人の視線がリースに向く。

「周ならわかっているはず。そんなことをしなくても見れることを。もしかしたら、こっちが動くことでデータが書き換えられる可能性があったなら」

「不正データというわけね。そうかんがえるのが妥当だわ。委員長、周から何か聞いている？」

「えっと、細かい話は都さんが」

「今戻りました」

その言葉と共に駐在所の扉が開いて都が入ってきた。そして、手に持っている段ボール箱を下ろす。持っているという表現は少しおかしいが。

都はそのまま段ボール箱を開いた。

「お帰りなさい。何が入っています？」

委員長が都に駆け寄り段ボール箱の中身を手に取る。そこに書かれているのは『ＧＦ』が記録したＡランク以上の人物の名簿だ。更新日時が４月１日を見ると最新版らしい。

琴美が何かに気づいたように頷いた。

「ランク詐欺ね」

ランク詐欺。

戦闘時の強さを示す戦闘ランクやフュリアス搭乗時の強さを示す戦闘ランクF。それらは厳重な審査で管理されており、ランクが上がれば給料が上がることにも直結している。

だから、ランク詐欺は重要な犯罪だから普通はしないはずなのだが、されればほとんど見つけようのないのが事実。特に、戦闘地域では。

「でも、どうして学園都市のデータなのかしらね？」

「そっか。海道君はＡランクとＡＡランクで違反者がいないか調べて欲しいんだ。学園都市内部は実戦経験がほとんどない。あったとしても他の地域部隊で活躍した名の知れた人物」

「そこを調べる。確かに、作戦としては正しい」

リースも頷いていた。学園都市だからこそ見つけることのできる手段がある。戦闘が圧倒的に無い学園都市ではＡランクからＡＡランクに上がるのは至難の技と言ってもいいだろう。だからこその手段。気取られたならデータの打ち間違いでしたと修正が入るかもしれないから。

「データさえ残しておけばいくら改ざんされても言うことは可能よね。しかも、私達は第７６移動隊」

「ハッキングで調べられるかどうかやってみたと言えば全て解決します。それが周様の考えです」

「海道君って時々えげつないことをしますよね」

委員長の言葉にはその場にいた誰もが頷いていた。誰も、第７６移動隊が専用の端末を使って調べるんじゃなく、ハッキングによってデータを保存しているとは考えないだろう。というか、絶対に考えない。だからこそ、周はこの作戦をとった。

「じゃ、調べてみましょう。調べ出したデータで」

委員長はそう言いながらデータを収めた記憶デバイスをみんなに向けた。

第九話　謎の相手

「おはよう」

メグは元気よく教室のドアを開けた。すると、そこにはちょうど由姫の姿がある。

「おはようございます。体大丈夫ですか?」

由姫が心配しているのは昨日の訓練のこと。第７６移動隊の訓練は他の部隊とは全く違うので心配しているのだ。

メグはその場で宙返りを行った。

「これくらい大丈夫だよ」

「スカートの中見えますよ?」

「大丈夫。スパッツ着用だから」

そう言いながら指をＶのように立てる。それに由姫はクスッと笑うとちょうどワカメが登校してきた。

そして、教室中を見渡す。

「おや、健さんや真人はまだですか」

「そう言えば二人は早いよね。家はどこにあるのかな?」

「あの学生寮です」

都島学園学生寮の中でも最も近い位置にあり、競争率が極めて高い場所だ。それを見てメグは目を輝かせていた。だが、由姫は頭に手を当てている。

まるで何かが起きていることがわかっているかのように。

「あそこ、今、兄さん達が封鎖してます」

その言葉にメグとワカメの二人が目をパチパチとまばたきした。

「おはよう、ございます？」

それはちょうど入ってきた夢を困惑させるには十分だった。

扉がガチャと開く。本人からすれば普通に登校するつもりだったのだろう。だけど、扉を開いたその先にはオレの姿があるとは思わないはずだ。

そこにいたそいつは目を見開いていた。

「雪村洋輝だな」

「第７６移動隊隊長海道周！？」

名前を呼んだ瞬間、そいつは一歩後ろに下がっていた。扉を閉められないように一歩前に踏み出す。

「正解。正解ついでに尋ねたいことがあるんだけど」

「な、なんだ？」

オレはとある紙を取り出した。それはリストアップされたとある資料。

その中には２８名分のＡＡランクの人が書かれている。

「総勢２８名のランク詐欺容疑がかかっているんだ。話を聞かせてくれないか？」

「くっ」

雪村洋輝はすかさず扉を閉めようとした。だが、オレはすかさず扉を足で蹴り飛ばし壁に手をつきながら側頭部を蹴りつけた。

雪村洋輝が吹き飛ぶ。それをしっかり見届けてオレは部屋の中に入った。そして、気づく。

「この匂い」

嗅いだことがある。確か、ケリアナの花の匂い。ただ、むせかえるほどに強い。少し、いや、かなり怖いくらいに。

空間自体に結界を張っていたことはわかるがかなり頑固だ。匂いが漏れないように何十にも結界が施されている。

オレはさらに入り込んだ瞬間、異様な状況に気づいた。部屋中がケリアナの花で埋め尽くされていたのだ。住むスペースがどこにもない。

「これは一体」

その瞬間、嫌な気配を感じてオレはしゃがみ込んだ。オレの上を何かが通り過ぎ、オレはそれに対して蹴りを放つ。

確かな手応え。確実にあばらは二本はやった。だが、その足を捕まれた。すかさずもう一本の足で相手の顎を蹴り飛ばす。確実に脳震盪を起こす威力。オレはすかさず距離を取ろうとした瞬間、無理やり足が引っ張られた。相手、雪村洋輝は狂ったような目で引っ張ってくる。

「らしゃっ！」

手をつき体をひねり、顎を蹴り飛ばした足で壁を蹴り上手く体を回転させる。そのまま着地しながらレヴァンティンを取り出した。

『マスター、相手は確実に』

「痛みを感じていないな」

レヴァンティンを握りしめながらも雪村洋輝はゆっくり前に向かってくる。まるでゾンビのように。そして、意識がないかのように。

「だったら」

加速と共に勢いよくドロップキックを放った。雪村洋輝の体を直撃して廊下に吹き飛ばす。これで正気に、

「残念だったな」

その声は背後から響いていた。振り返った先にいるのはフード付きのローブを着た男。中肉中背で年齢は２０後半から５０前半。声からして男なのは確かだ。

ローブの男はニヤリと笑みを浮かべた。

「証拠から離れてくれてありがとう」

その瞬間、部屋が炎に包まれた。オレはすかさず結界の維持を奪い取る魔術を使用する。あっけなく結界を奪いながら結界をさらに強化する。

「ちっ、やられた」

まるで元から燃えていたかのような燃え方だ。最初から狙われていたのか、それとも。

そう考えていると手に持つレヴァンティンが微かに震えた。どうやら他から連絡が入ったらしい。オレはレヴァンティンを口元に近づける。

「どうかしたか？」

『すまぬ。先を越された』

一瞬、連絡を寄越してきたアルが何を言ったかわからなかった。そして、オレは目の前のことを見て理解する。

「燃やされたのか？」

『燃えていたのじゃ。怪我人はおらぬから安心して欲しい。まあ、我の服が微かに焦げただけじゃな』

それなら大丈夫だと思おうとした瞬間、オレはとあることに気づいた。

アルの服は防刃性に関しては全く無いが対魔術性は極めて高いはずだ。それが焦げた？

「それはそれで重要な問題だな。中の奴は？」

『無理じゃ』

もう燃やされて死んだというわけか。あのローブの男がやったというわけね。ふざけている。

いくら周囲を探っても手がかりが見つからない以上、無闇に追いかけない方がいい。オレは背中を壁に預けた。

「こっちは目標の確保は成功。ただし、目的の部屋は燃やされた。後手に回ったというより同時に行動があったという感じだな」

『どういうことじゃ？』

「ケリアナの花。それがたくさんあり、臭いが結界によって閉じこ

められていた」

そうとしか言えない。そして、その臭いはまるで麻薬のように濃かった。もし、オレじゃなければやられていたかもしれない。

オレは小さく息を吐いて雪村洋輝を見る。そいつはただ気絶しているだけだった。だけど、あの力はどう考えても、

「ナイトメア」

『悪夢がどうかしたのかの？』

アルが不思議そうに尋ねてくる。オレは小さく首を横に振った。オレは小さく息を吐いて言葉を発する。

「何でも」

その瞬間、ピシッと何かにひびが入る音が鳴り響いた。マズい。

「レヴァンティン、術式固定を頼む。アル、援護を」

『すまぬ！　結界が破られそうじゃ！』

頼りには出来ない。だったら、オレ一人でやるしかない。

「レヴァンティン、モード？！」

すかさずレヴァンティンをモード？に変えて結界の補強に入る。補強さえすれば破られない。その瞬間、階下で爆発が起きた。それほど大きいわけじゃない。

向かいたいけど向かえない。誰か、頼む！

その爆発は都島学園都島高校からも見えていた。由姫がデバイスを取り出しながら走り出す。そして、窓枠に足をかけて思いっきり蹴った。重力の制御で空を飛翔し目的の場所に到着する。

そこは部屋から炎が吹き出していた。その前にいるのは右腕を押さえるアル・アジフの姿。

「アル・アジフさん！」

由姫はすかさずアル・アジフの横に着地してハッとなった。アル・アジフの右腕が黒く焼けている。そして、それを堪えるアル・アジフの顔は真っ青だった。

だけど、その目はまだ戦っている。

「すまぬ。思った以上に威力が高かった」

「私に任せてください」

由姫はすかさず重力魔術を使用した。簡単にはその部屋の内部だけに収まるように圧力を変える。これくらいは朝飯前だ。

「救急キット持って来たぞ！」

その言葉と共に委員長とバンダナを巻いた健さんがアル・アジフに駆け寄る。そして、委員長はすかさず救急キットの蓋を開けた。その時には治癒魔術を発動しておりアル・アジフの右腕は少し色を戻している。

委員長が救急キットの道具を手に取った。

「上か」

いつの間にか、本当にいつの間にか健さんの後ろにフード付きのローブを被った男が立っていたからだ。その手にあるのは一本の刀。その姿勢は周がいる場所に向いている。

マズい。

由姫は本気で思っていた。今戦えば、全力は出せない。全力を出さなければ勝てない戦いのはずなのに。

「目撃者は殺す」

上にいるのは周だ。それを殺すということは。

由姫はとっさに動いていた。その男に対して重力魔術をかけようとした瞬間、男に標準が向かなくなる。まるで、目標自体が見えているけど狙えないかのように。

由姫の重力魔術はピンポイントで狙わなければ効果が薄い。だけど、相手を標的にできない。

「だったら」

男が立っている場所に重力魔術を発動させようとした瞬間、男が飛んだ。跳躍でそのまま周のいる場所に。

「お兄ちゃん！」

由姫がそう叫んだ瞬間、何かが屋上から飛び降りた。そして、男に跳び下りた何かが放った衝撃波が直撃する。男は壁を蹴った量とは逆方向に跳んだ。

飛び降りた誰かが着地する。

小刀を二本持ち、腰に一本の刀を提げた亜紗。

亜紗は綺羅と朱雀を構えた。

ローブの男が舌打ちをする。

「邪魔者が入ったか」

その言葉と共に男が跳躍した。人ごみを飛び越えてそのまま向こうに消えて行く。亜紗が静かに綺羅と朱雀を後ろの腰にある鞘に戻す。

「助かりました」

『もしもの時のために待機していたから。アルさんが怪我したときは本当に駆け寄りそうになったけど』

由姫が魔術を展開している場所を見る。そこは、真っ赤な炎に包ま

れている。もう、酸素は入らないようにしているはずなのに。

『狙いが付けられない相手だった。もしかしたら』

「そうですね。おそらく、『悪夢の正夢（ナイトメア）』だと思います」

第十話　整理

『連絡は受け取った』

オレはレヴァンティンを片手に本部との通信を開いていた。オレは小さくため息をつきながら口を開く。

「資料通りだ。学園都市全体で逮捕者は現在９３名。多分、三倍くらいに増えるだろうな」

『学園都市最大の不祥事だな』

通信相手である慧海が楽しそうに言ってくる。事態はかなり深刻なんだけどな。

「頭が痛いよ」

内部の膿を出すのにはうってつけだがこれによって色々と厄介なことが舞いこんでくるに違いない。主に、学園自治政府から。

ため息がこれからどれくらい出てくるかわからない。

『送られてきた内容をこっちでも検討したけど、可能性は高いな。今まで見つかったナイトメアの再調査をしてもらっている』

「助かる。こういうことはそっちに頼んだ方が本格的だからな。それにしても、まさか証拠を燃やしてくるとは」

『アル・アジフが作り出した対魔術服の耐火性を無視する威力か。

気にはなるな』

調べてみたところ、アルの服の耐火性は２０００℃くらいまでなら普通に耐えられる。だけど、それを焦がしてくるとは完全に予想外だ。

結界自体を破壊する火力も驚きだが。

『一応、ケリアナの花の匂いを部屋に充満させて爆発させる実験の準備をギルガメシュに頼んだ。ギルガメシュの話だと3日かかるはずだ』

そうすれば爆発の原因がわかるだろう。オレの予想は匂いか花粉のどちらかに燃焼能力を上げる効果がある。そうじゃなければフードの男だろう。

問題はそれだけじゃ済まないけど。

『悪夢の正夢（ナイトメア）』。

もしかしたら、オレ達が考えているような能力じゃないのかも知れない。

「なあ、親父のレアスキルは認識阻害だったのか？」

『ああ。『悪夢の正夢（ナイトメア）』は自分に対する認識を阻害する能力がある。気づく方法は影とか霧とかお前みたいな魔力とか』

「効果付与は？」

『ターゲットにされない上に他のものにも効果付与なんて強すぎるだろ？』

最もだ。そんな能力があるなら爆弾を隠して運び入れることが出来る。されたらかなり困るようなことが容易になる。

『悪夢の正夢（ナイトメア）』がそんなに万能だったなら色々と片付くんだがな。

『何かわかったのか？』

「由姫や亜紗が『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男が見えても標的を合わせられないと言ってきた。『悪夢の正夢（ナイトメア）』自体が分割して使用出来るんじゃないか？」

『認識阻害と照準阻害』

その二つを別々に付与出来るとするならかなりキツいことになる。認識阻害はただでさえ強力なのに。

相手になるのがオレ一人になるじゃないか。

向こうで慧海が小さく溜息をつく。

『駿が生きていれば調べられるんだがな』

「いないから推測を立てるしかない。オレはそう考えている」

『だったら、お前の推測を聞かせてくれ。今回のことを』

やっぱり来ると思っていた。オレは小さく頷く。

「まずは前提条件から。ケリアナの花がナイトメアの材料とする。オレの推測はそれが前提条件であって機能するからな」

『そうだな。最近の報告から考えてそれが前提条件でもおかしくないな』

「で、ナイトメアを製造する団体。それは学園都市内部に存在すると思う。理由はナイトメア自体が学園都市内部でとても出回っているからだ」

学園都市外部ではオレ達が最近まで考えていたナイトメアの供給量と予想使用量で誤差は少ない。少ないとは言っても合法ドラッグとして出回っている数はかなりに上るだろう。だが、学園都市内部では差が激しい。つまり、学園都市で作られている可能性が高い。

「そして、ケリアナの花の大量輸入。製造場所は商業エリアか工業エリアのどちらか。作り方がわからなかい以上、これはわからないが、どちらか一方だろう。で、ケリアナの花は基本的に観賞用として大半が売られているはずだ。それを一般人に紛れた組織、『悪夢（ナイトメア）の正夢』や炎の男などのローブ集団が買う」

そもそも、ケリアナの花は安く、量産がしやすく、花が長く開花する上に香りもいい。匂いとなるとかなり強烈だが複数のケリアナの花を買っても何ら違和感はないはずだ。

違和感がないということは見つけにくいし判別がかなり難しい。ただ飾っているだけなのか、ナイトメアのために買っているのか。

「それをナイトメアの工場に運べば終了だ。今回の事件はオレ達が

動き出したから動いたわけじゃない。もしかしたら、最初から動き出すつもりで偶然重なった。多分、ナイトメアを造る別の組織だったんだろう。『ＧＦ』側の」

『確かに筋は通っているな。だけど、まだ少し足りないような気もするな。『ＧＦ』側の別の組織なんてどうやって』

「入学式の時の事件。殺された三人は『ＧＦ』側ルートからナイトメアを買おうとした。だけど、それを許さない『悪夢の正夢（ナイトメア）』が粛清を行った。オレ達にわかるようなことを残して、勘違いさせるように」

今まで見つかったものは本物のナイトメアが混じっていたかもしれない。でも、巧妙に隠された中で見つけることは難しい。

「それまでの情報を全て統合することで外部の巨大な組織が組織的に行ったように見せる。『悪夢の正夢（ナイトメア）』をチラツかせながら」

『操作を撹乱するためか。というか、お前のところの事務は優秀すぎるだろ。ハッキングの天才か？』

「琴美の場合は地道な情報収集だ。あいつの交友関係はかなり広いぞ。だから、些細な情報を集めて都がその情報から必要なものを引き出し、それを詳しく琴美が調べる」

『それでどうやってケリアナの花を調べたんだか』

確かにそれは疑問になるだろう。オレも同じ意見だ。でも、オレは理由がわかっている。

「琴美の下宿先には必ずケリアナの花があるぞ。都の分もよく勝ってる」

『花屋と知り合いだったわけね。納得だ。琴美がいなかったら大変なことになっていたな』

「同感だ。第７６移動隊は人材に恵まれているぜ。そうだ。アルトやリコは元気にやっているか？」

アルトとリコの二人は第一特務に入った。二人の実力なら充分ではないが、今では実力をつけて第一特務の隊員として上手くやっていると聞く。

『ああ。どちらも充分な戦力だ。リコなんて時雨に土をつけたからな』

「マジかよ」

時雨は第一特務でも普通に強い。それに打ち勝つとは。まあ、二人の能力はお互いに相性悪いからな。

『そうだ。周には話しておかないといけない話があるんだった』

「話？」

オレは首を傾げる。何かあるのだろうか。

『資料を整理して見つけた話なんだが、学園都市は最初エネルギー不足だったのは知っているよな？』

「そりゃな」

今では完全に自然エネルギーで回しているが、昔はそれ以外のエネルギーを使っていた。自然エネルギーに転換出来たのは魔力エネルギーの発電量が桁違いに上がり、その余剰を上手く使って自然エネルギー製品を作り出したからである。

つまり、オレのおかげだからそのことはよくわかっている。

『理論上の数値と実際の数値が大きくかけ離れる時があるだろ？理論上の数値と実際のエネルギー消費量の数値は同じくらいなのに、実際のエネルギー生産量が大きく増えるのはあると思うか？　ちなみに、最初の頃な』

「ありえない」

オレはすぐに答えていた。技術者として様々な知識を覚えたからこそ答えることが出来る。

「今の状態なら風が強かったで出る可能性はある。でも、魔力エネルギーは理論上のエネルギー生産限界値を越えることは出来ない。それはオレが保証する。それが出来たならその機器はほんの数分で機能停止するし」

『だよな。ただ、国が正確に計った値が理論上の数値よりも多いんだ。年々、数値の幅は大きくなるけど、総量はほとんど変わっていなかった。四年前までは』

四年前と言えばあらゆる魔力エネルギー機関が停止した時だ。緊急用に様々な施設ついてはいるが、全く稼働していない。

自然エネルギー機関によって消費が余裕を持って賄えると考えられた。だけど、結果はギリギリ足りたぐらい。それから頑張って機関を増やして今の状況だ。

『おかしくないか？　その年の気候は平年並みだ。風は若干強かったくらいだからエネルギー生産量は理論上以上になっても不思議じゃない』

「何か別のエネルギー機関がある？　問題は、学園都市自体は国が作ったものだ。そこを調査することは難しいな」

『国は『ＧＦ』が嫌いだからな。警察とは仲がいいけど』

連携を取った方が強いからだろうけどな。

「これに関して調べるのは難しいな。時間をもらっていいか？」

『ああ。一応、こちらでも調べてみる。まあ、お互い見つからなくても恨みっこなしな』

「そうだな。じゃ、また」

オレは通信を切ってレヴァンティンを机の上に置いた。情報は纏められたけど、別件が来るとは。ゆっくり出来るのはいつだろうか。

「調べることが増えたけど、大丈夫だろう。オレ達は第７６移動隊なんだから」

第十一話　学校にて

カリカリとノートを書く音が響き渡る。今は二時間目。授業内容は英語なのだが、まともに聞いている人の数はかなり多い。何故なら、先生がよくキレることで有名だからだ。

まあ、オレも由姫もこのレベルは苦もなく出来るから話なんて全く聞いていないけど。

オレは今回の推測を整理したものをルーズリーフに書いていた。大体が慧海と話した時と同じ内容だ。ついでに、学園都市のエネルギー機関についての推測も纏めている。

簡単に結論を書くなら機関の故障としか思えない。エネルギー生産量が推測より遥かに越える事態になるなんて想像すらつかない。可能性を上げるなら何らかのエネルギー機関の存在し

曖昧模糊とした推測だが。

「はぁ、何が何だか」

「白百合！　私の話を聞いているのか！」

「「聞いていません」」

オレと由姫は同時に答えていた。由姫は外国語をしている。中国語だが。あれって結構ややこしいからな。

先生のこめかみがピクピク動く。キレる寸前だな。

「貴様ら、『GF』だからと言って許されると思うのか！？」

「全く。まあ、どうせ聞いても知っている知識なら内職してる方がまだましですが」

「白百合兄、今から指定する文を全訳しろ」

オレは小さく溜息をついてルーズリーフをファイルに閉じた。

「すげぇな。まさか、あの量を簡単に訳すなんてよ」

真っ青な顔をした先生が帰った瞬間、健さんが話しかけてきた。自然と周囲にいつものメンバーが集まる。

「そうだよね。私なんてチンプンカンプンだったよ。夢ちゃんは？」

「私は、何とか。難しい内容じゃ、ないし」

「そうなのか？　俺様には全くわからなかったぜ」

「バカにはわからないということです」

「うわっ、勉強も出来ないのに人のことをバカって言っているよ。僕には真似出来ないな」

五人衆にメグと夢、由姫、そして、オレ。それがいつものメンバーだ。入学式の日にみんな一緒で入学式に参加出来なかったからか奇妙な連帯感が生まれている。

「しかし、授業を聴かないのは問題だ。いつか学園自治政府に言われるぞ」

「一誠、俺も授業は聞いていないぜ」

「健さんは別だ。こいつらは『ＧＦ』。学園自治政府とは対極にいる」

言うほど対極ってわけじゃないんだがな。まあ、確かに対極に近い位置にはいるだろう。

それにしても、休み時間の度にこんな会話をしているような気もする。

「そうだ。周、昨日の事件はどうだったの？　私は関わらなかったし」

「一人死んだって話を聞くけどよ、それはあの魔術師っぽい女の子か？」

「違う。燃えた部屋の住人だ。骨しか残らなかった」

まあ、部屋の住人かどうかはわからないが、今現在、住人が行方不明であるためそう判断している。それにしても、よく骨も残ったよな。骨も溶けそうな気がしたんだが。

「犯人はまだ不明。動機も不明。見つけしだい捕まえるさ」

そう言うと恐る恐るメグが手を挙げた。

「何か私に手伝えることは」

「ない」

「ありませんね」

「がーん。二人から全否定」

実際に手伝ってもらえることはない。手伝ってもらってもかなり危険性が高いのだ。どれくらい高いかと言うと任務ランクは約S。実戦経験が無ければAランクはまず使えない。そう思っている。

『悪夢の正夢（ナイトメア）』も炎の男もどちらもただ者じゃない。

「何か僕達が手伝えることがあったら遠慮なく言ってね。僕はハッキング得意だから」

「もう得意な奴がいる」

「なら俺様だな。このタフガイっぷりを」

「タフガイ枠は埋まってる」

「なら俺だな。風に追いつける奴はいない」

「風はもういるから」

「では、この私の知識を」

「オレに勝てるのか？」

手伝おうとした四人を一瞬にして切り捨てる。そういう気持ちはありがたいが、素人が無理に手伝えば危険性が高まる。今回は第７６移動隊を中心にやっていかないと。

すると、一誠が呆れたように溜息をついた。

「だろうな。第７６移動隊と言えばかなりバランスがいいと聞く。だが、俺達は友達だ。何か困ったことがあれば相談してくれ。手伝うさ」

「何かあったら頼るとするさ。メグは無理にこっちに首を突っ込むなよ」

「そ、そんなことしないよ」

ちなみに、声は微かに裏返っている。完全にバレバレだ。

「今はお前の部隊がかなり大変な時期なんだし、部隊内にいること」

「大変な時期？」

メグは不思議そうに首を傾げた。普通なら連絡が入ってもおかしくないんだが、完全に蚊帳の外というわけね。

部隊の大半は証拠隠滅に奔走しているだろうけど。

「お前の部隊の戦歴を評価する奴が捕まったんだぜ。Ａランクまでは触らないけどＡＡランク以上は調査するし」

「で、でも、そんな情報、は、話していいの？」

夢の疑問は最もだ。普通は話さない。けど、話せる理由がちゃんとある。

「証拠隠滅すれば罪が重くなるだけだな。逃げても『ＧＦ』の指名手配リストに入るだけだ」

「つまり、この際に膿を出すと？」

ワカメの言葉にオレは頷く。それもあるが、第７６移動隊単体ではそこまで早く動けないからでもある。だったら、まずは首謀者クラスを捕まえておきそこから違反者を見つけていく。

何人になるかわからないが、出来る限り探し出さないと。例え学園自治政府に文句を言われても。

「なあ、真人。俺様には何の会話をしているかわからないぜ」

「威張りながら言わないでよ！　ハトはもう少し考えることを学ぼうよ」

わかりにくいことはなかったはずなんだけどな。まあ、その可能性もあるから仕方ないか。

「ねえねえ、学園自治政府の対応はどうするの？　何かの不祥事の

度にネチネチ言ってくると思うけど」

「それはオレが担当するから大丈夫。まあ、向こうが決めたものを流用するけどな」

「学園自治政府と『ＧＦ』は不干渉であり、干渉出来るのは学園自治政府代表か学園都市『ＧＦ』代表である。違うか？」

一誠の言葉にオレは頷いた。つまり、これで向こう代表とこっちの代表がお互いに話し合うことが出来るわけだ。部外者を無視して。

卑怯な手だが、第７６移動隊ということでメンバーを何人か増やすことは出来る。それは状況にもよるが。

「なるほど。うるさく言ってくるのは向こうの代表だけだから周はそれに対応すればいいだけなんだ」

「そういうこと。後は他にも言うことがあるし」

「兄さんの切り札はかなり強力ですから。多分、一撃で相手を黙らせることが出来ると思いますよ」

オレの切り札の大半は整理した推測なんだけどな。推測を出せば学園自治政府が悪いという結論になることもある。

まあ、推測になるからいくらでも無視することは出来るが。

「今は『ＧＦ』内をどうにかしないとな」

「いきなり大変、だね。周君は、入学したばかり、なのに」

「まあ、それも『ＧＦ』の仕事だ。それにやりがいはかなりあるしな。って、次の授業は移動教室か？」

いつの間にか周囲の人は少なくなっている。授業まで時間もあまりないし。

時間割りを素早く取り出して確認すると、次の時間は音楽だ。音楽室に向かわないと。

「ここは競争だ！　俺が一番を目指す！」

「ずりぃぞ。俺様が追い抜く」

「私も参加する！」

健さんとハト、そして、メグが必要な道具を持って駆け抜けて行く。それを見ながらオレは小さく溜息をついて窓を指差した。

「由姫、頼む」

「そうですね」

由姫は窓を開けて重力魔術を使用した。

第十二話　七天（前書き）

多分、アル・アジフが捜す武器の中で一番性能がおかしいのは七天だと思います。

第十二話　七天

放課後。学校から解放されて学生が自由となる時間。アルバイトに精を出す人もいれば商業エリアに遊びに行く人もいる。

そんな放課後にオレは商業エリアの中央にある広場に来ていた。服装は今時の服装を頑張って着ている。任務じゃない。オレは今日非番だからだ。

さすがの『ＧＦ』でもほぼ毎日参加すれば労働基準法に抵触するらしく一回オレが注意を受けた。オレ自身のことで。だから、非番の日を月に二日作っている。それが今日。その日にオレは広場にいた。

ベンチに座って時計を見ている。少し早く来すぎたか？

すると、オレの目の前にスケッチブックが現れた。

『待った？』

みんなとちゃんとコミュニケーションを取れるように作った傑作中の傑作。今では少し性能が落ちたものが失語症や難聴の人達に大人気となっている。

何となく作ったら何となく出来上がったものなんだけどな。

「いや、待ってない。さてと、行きますか」

『うん』

オレは人ごみの中をはぐれないように亜紗の手を握った。

「せいやっ！」

由姫の右の拳が都の作り出した防御魔術を砕く。そして、そのまま地面を踏みしめて左の拳を放った。だが、都はそれを断章で受け流しつつ片手でナイフを取り出しながら投擲する。

由姫はすかさず後ろにステップを踏みながらナイフを弾いた。そして、前に出る。その時には都も断章を振り切っていた。

拳と断章がぶつかり合い、お互いに弾かれる。

そんな覇気迫る模擬戦の様子をアル・アジフと冬華は近くから見ていた。

「今日は気合い入っているわね。何かあるの？」

「抜け駆けじゃ」

アル・アジフが拳を握りしめている。それを見た冬華は苦々しく笑うしか出来なかった。

「亜紗が周とデート。我だって、我々だって」

「完全にデートってわけじゃないでしょ。亜紗は確か見回りだし」

「商業エリアでの」

アル・アジフの言葉に冬華は納得する。亜紗は見回りしながら周とデートというわけだ。周も元から商業エリアを回るつもりだったのだろう。

だから、みんな覇気迫っている。都なんてフォトンランサーを５０ほど展開しながら戦っている。

これは模擬戦なのに。

「私も悠聖とデートしたいな」

「そなたなら大丈夫じゃろ。悠聖のハーレムに入っているしの」

「アルネウラも優月も私からしたら妹よ。邪険に思う必要はないわ」

実際に悠聖は冬華のことを大切に思っている。ただ、アルネウラと付き合っているからどうしようもない状況だ。

ちなみに、アルネウラ一人と付き合っており優月は付き合っているかのように振る舞っているだけである。

「そうじゃな。悠聖はまだそっちの常識があるからいいが」

「周は朴念仁に近いから。特に、恋愛に関しては」

「うぶというべきかの。都に聞いた所、周とラブホに騙して入ったら顔を真っ赤にして倒れたと聞くし」

「都って時々すごい行動力があるわよね」

周の反応もかなりのものだが。

アル・アジフは小さく溜息をついて空を見上げた。

「はぁ、今頃二人はデート中じゃの。どんな羨ましいことをしていることか」

オレは地面を蹴って標的の肩を掴んだ。そして、そのまま足を払って地面に転がす。少し前には亜紗がもう一人の標的を蹴り飛ばしていた。

「なんでこんなところに学園自治政府がいんだよ」

転がした相手は大体１２歳くらいの少年。その手には他人のカバンが握られている。どうやらオレを学園自治政府関係者と間違えているみたいだが。

ちょうど、オレ達の目の前でひったくりがあったから行動した。ただそれだけだ。騒ぎを聞きつけた学園自治政府の武装集団の姿が見えてくる。

「お前は、第７６移動隊隊長海道周！」

「ほらよ。ひったくり犯を現行犯逮捕だ。向こうでもう一人捕まえている」

「本当か？　まあ、嘘だったら弱みが手に入るからな。お前らは向こうを。俺らはこいつを確保する」

「はい」

武装集団が亜紗の方にも向かう。オレは少年の服を掴んだ学園自治政府の武装集団に渡した。それと同時に亜紗がやって来る。

『私に任せてくれればよかったのに』

亜紗がスケッチブックを見しながら少し苦笑いになっている。まあ、仕方ないだろう。オレは非番だから非武装だ。レヴァンティンは持っているけど。だから、別に現行犯を捕まえることに参加しなくてもいい。だけど、そんなのを見逃すわけにはいかない。

「でも、一人より二人だろ。そういうことだ。さてと、あの場所に向かおうぜ」

『うん』

今回の商業エリア訪問はいくつかの理由がある。その内の一つがちょっとした古物商に出かけるからだ。

簡単に言うなら鑑定依頼。とある刀が納品されたらしいのだが納品された箱の中には刃が欠けた刀が入っていたらしい。ただ、歴史的価値はかなりのものらしくＮＧＤを作ったオレが呼ばれたというわけだ。

ちょうど近くだったからすぐに向かえる。

「それにしても、刀か。使い古されたということは戦場で使われたってことだよな。そんなものを鑑定する意味があるのかね？」

『何か特殊な武器ということかな？　形態とか聞いていない？』

「柄の近くの刃に七天って文字があったらしいな」

オレがそう言うと亜紗が動きを止めた。そして、また歩き出す。どうやら心当たりがあるようだ。

『七天は白楽天流に存在するある奥義を使う際に使用される神剣』

「七転八倒の文字通り１５の斬撃を放つ七天抜刀か？」

七天抜刀。

はっきり言うなら剣術使用史上最強の技である。居合から放たれる神速の刃は足を刈り取る七つの見えない斬撃と上半身を確実に狙う七つの斬撃。そして、通常の刀による斬撃の計１５の斬撃で相手を確実に仕留める技。亜紗は風の刃を代用として使い風王具現化を限定的に発動させてようやく使用可能なもの。はっきり言ってそれくらいしないと無理。

それが可能な刀となると本気で神剣クラスだな。

「んな冗談は止めてくれ。もし、本物だったら誰が扱うんだよ。敵の手に渡ればオレくらいしか突っ込めないぞ」

『そうなると思う。七天抜刀は強すぎる。でも、七天は扱いの難しいじゃじゃ馬って聞く』

「どんな刀だよ」

全く想像がつかない。神剣はじゃじゃ馬じゃなくてよほど認められた存在じゃなければ使えない。可能性としては。あれ？　そう言えば、アルから聞いたことがあるような。

「ちょっと待て」

オレはレヴァンティンの通信を開いた。通信相手はアル。

「アルか？　七天って昔にお前が言っていたよな？」

『いきなり何じゃ。確かに、我は昔そなたに言ったことはある。よく覚えておったの。そうじゃ、我は七天を探しておる』

「今、古物商前にいるんだが、七天という名前の刀が納品されたらしくてな。一応、報告を」

『はっ？』

どうやらアルですら話がわからなかったらしい。まあ、オレだって同じ反応をするだろう。探していたものと同じ名前があるなんて普通は信じない。

「七天がどういうものかだけ教えてくれないか？」

『そうじゃな。ヒントで頼む』

「いいぜ。で、そのヒントは？」

『白楽天』

「答えじゃん」

オレはすぐにアルに返していた。七天と白楽天が結ばれるなら七天抜刀を使えると言われるらしい七天はアルの探しものということにある。それが本物かどうかを置いておいて見ておくのは悪くないだろう。

それに、七天じゃなくてもいい刀だったら改造出来るかもしれない。

「一応、今から鑑定はするけど期待はするなよ。普通の刀だったら専門外だし」

『そうじゃな。しかし、七天は昔に刃が折れたと聞く。折れたものなら可能性はあるかもしれぬぞ』

「了解。ちょっくら見て来るは」

オレはレヴァンティンを戻して小さく息を吐いた。そして、古物商があるビルに向かって亜紗の手を握って歩き出す。

噂の七天を見るために。

「これです」

オレ達の目の前に年代物という感じが全くしない真新しい箱が現れた。古物商の商人は箱の蓋を開ける。そこにあるのは刃のが欠けた刀。刀の波打った紋のところを線に切断されたような感じだった。

こんな折れ方はまずしない。オレは真新しい手袋をして刀を手に取る。本当に中古で純粋に鉄ばかり使われたオーバーテクノロジーの刀なら出来るだけ湿気に当てたら駄目なのでハンカチも加えている。

見た感じは普通の刀。ただし、材質は魔鉄。比率はわからないが鉄のみというわけじゃない。柄を握った感触から考えてデバイス内臓ではあるだろう。ただ、見えないように作られているところを見ると特殊能力専用のデバイスとしての武器が開発された当初のもの。

オレは刀を箱に戻した。そして、商人が蓋を閉める。

「魔術的な観点で言うならかなりの値打ちはあると思う。精密な検査をしなければわからないけど、デバイスと武器の融合体、まあ、魔術器が生まれた当初に作られたものだな。能力は解析しないとわからない」

「値段はおいくらぐらいになるでしょうか」

「欠けたのが惜しいな。１５万で売れたら十分、まあ、解析をしっかりすれば三倍までなら何とか」

多分、思っていたより安かったのだろう。商人は忌々しく刀を見て

いる。

「ただし、オレからの視点だ。コレクターからすれば本物なら１００万になる可能性だってある。観賞用としてはすごい」

その瞬間、机の上に１００万円が置かれた。オレと商人は同時に１００万円を置いた亜紗の方を見る。

亜紗のスケッチブックには一言、

『武器に惚れたから売って欲しい』

「惚れたって、いや、まあ、どうしようもないってわけじゃないけど、あんたはどうする？」

「大歓迎です、が、１００万ではなく７０万円でいいです。調べてもらいましたし」

仕入れ値はおそらく５０万ほどだろう。下手をすればそれ以下の可能性があるので大歓迎であるのはわかる。７０万も言った通りだろう。

「だったら、鑑定料はいらない。値段を安くしてくれたからな」

「ありがとうございます」

現金と現品が受け渡しされる。亜紗は箱から刀を取り出した。

七天と書かれた文字。刃がないため使えないが、これ専用の刃を作らないと駄目だ。そうなると、専門家を捜すしかないか。

亜紗は付属されていた鞘に刀を収める。ぶかぶかではあるが、鞘に安全帯と呼ばれる鞘から滑り落ちないようにする留め具で緊急時には邪魔だが鞘の大きさが合わない時は有効だ。

亜紗はそれを嬉しそうに虚空の中に入れた。矛神を手に入れた時と同じような反応だ。商人もそれを見て嬉しそうに笑っているからよしとするか。

「では、これで失礼します」

「ありがとうございました」

アルは小さく溜息をついて首を横に振った。目の前にあるのは鞘から抜かれた刀だ。そのまま鞘に戻して安全帯をつける。

「わからぬ。七天は一番形がわかりにくいからの。見た目は普通の刀じゃ」

「能力があるかないかだな。それはわからないんだろ?」

「七天は失った剣。造り方は確かにアル・アジフの記述に存在するが、今では不可能な比率じゃからの」

刀を机の上に置いてアルがオレに体重を預けてくる。アルはあまり甘えてこない。だから、甘えているというわけじゃないのだろう。

オレの袖を握る手が微かに震えているし。

「アル？」

「すまぬ。少し、考えておったのじゃ。滅びの日まで全てを集めることが出来るかどうか」

おそらく、アルは集まらなかった時のことを考えていたのだろう。レヴァンティンも運命も極めて強力な能力を持つ。もちろん、アル・アジフもだ。残る三つも強力な能力を持っているに違いない。

それが集まればかなり強力な戦力になる。でも、集まらなかったら。

「もし、集まらなかったら」

「アル、集まらなかったじゃない。集めるんだ。七天も隼丸もデュランダルも絶対に集める。いつ滅びが来るかわからないけど、それまでには確実に」

「そう、じゃな。もしもは考えない方がいいの」

オレからすればもしもは考えないと駄目なんだがな。作戦を立案する際はあらゆるもしもを考えるからだ。でも、アルが元気になったしよしとするか。

アルがそのままオレに膝に頭を乗せてくる。

「少しだけ、甘えさせてもらうぞ」

「ご自由に」

オレはアルの頭を撫でてやった。

第十三話　痴話喧嘩

静まり返ったグラウンド。授業中だからか校舎から声は聞こえない。そして、グラウンドで体育をしている面々も言葉を発していなかった。

グラウンドに書かれたコート。そのコートは大きな日の字に書かれており、どちらの中にも十六人ずつ。そして、外側に三人ずつ。

オレの目の前にいる由姫は不適な笑みを浮かべていた。担任の先生が呆れたように溜息をついてボールをしっかり抱える。

「準備はいい？」

先生の言葉にオレ達は頷いた。そして、ボールが空に向かって放たれる。オレ達は同時に地面を蹴って飛び上がった。

事の発端は今日の一時間目の後の休憩だった。

オレは次の授業の用意を机の上に置く。

「周、悪い。俺様に宿題を写させてくれ」

ハトが両手を合わして少し気持ち悪いウインクをしてくる。それに対してオレは小さく溜息をついた。

「昨日何をしていたんだよ」

ハトは爽快な笑みを浮かべた。

「決まっているだろう。寝てた」

「ハトは相変わらずですね。宿題を見せてもらう相手のことを考えなさい」

ワカメが呆れたように言うが、こいつは宿題なんてしない。こいつらどうやってここに入ったんだ?

オレは宿題を書いたノートを取り出した。

「今月だけだぞ」

「恩に切る」

「私もいい?」

いつの間にかメグが恐る恐る尋ねてくる。それに対しては由姫がノートを差し出していた。

「メグさんは私のものを見てください。兄さんと一緒にやったので答えは同じはずです」

「やったではなく写しただろ?」

オレが宿題をやっている最中に由姫が部屋に入ってきて一緒宿題を

やったのだ。ほとんどオレが教えながらやったけど。

「些細な違いです」

「全く違うからな。ったく、お前はもう少し勉強する癖をつけろよ」

「兄さんと一緒にしないでください。兄さんは勉強が趣味なんですから」

「宿題をちゃんとやれないとこれから苦労するぞ」

その言葉にメグとハトの二人が露骨に視線を逸らした。まあ、宿題をやっていない二人だしな。

すると、由姫の視線がキツくなる。

「兄さんがすぐに教えてくるからです」

「大半は教えてって聞いたような気がするけど?」

「空耳です」

「苦労する身にもなれよ」

その時、由姫が身を乗り出してきた。

「何が言いたいんですか?」

「何も。自分のやったことを理解してないとは思ってな」

お互いに結構キレているとは思っている。だけど、言葉は止まらな

い。

「いつもいつも兄さんは人をバカにしすぎです！」

「バカにしてない。それに、こんなレベルの宿題は出来て当然だろ？」

「それをバカにしていると言うんです！　兄さんは人を知らなすぎです。自分が出来れば当たり前と思っていますよね？」

「こんなレベルは中学校の内容だろ？　それくらい出来て当たり前だ」

「だから、それが」

「ストップ！」

オレと由姫の間に夢が入ってきた。オレ達は完全に言葉を止める。

「二人共、いい加減にして！　喧嘩をするなら別の機会にやってよ！」

夢の言葉にオレ達は気まずそうに視線を逸らした。でも、言い出した以上、言葉を引っ込めるわけにはいかない。何か、いい手段があればいいけど。

由姫も気まずそうにチラチラこちらを見ている。由姫も同じだろうな。今まで言いたいことを言ったのだから。

模擬戦で決着をつければいいよな。

「こういう時は決戦だ！」

そんな中、いきなり健さんが現れた。ニヤニヤしながら手に持った紙を渡してくる。

オレはそれを受け取って中身を読んだ。

簡単なメモみたいだが、五時間目に書かれている体育に大きな丸が書かれていた。

「体育の時間に先生に事情を話して喧嘩の決戦を行う。それなら二人も納得だろ？」

「確かにありだな。由姫は？」

「兄さんと同じです。でも、何をするんですか？」

由姫の言葉に健さんが笑みを浮かべる。

「ドッチボールだ」

空高く上げられたボールを追ってオレ達は同時に地面を蹴った。オレと由姫だけは相対した時に魔術の使用が許可される。だから、オレはほんの少しだけ飛び上がり、地面が足についた瞬間、後ろに下がった。

由姫がボールを手に取りオレに向かって放つ。オレはそれを避けた瞬間、凄まじい土煙が起きた。

簡単に言うなら重力魔術によってさらに加速した球が地面と激突して衝撃波を撒き散らしたと言っていい。

レアスキルを最大限まで使用した文字通り必殺の一撃。

「殺す気か！」

オレは思わず叫んでいた。今の一撃、防御魔術も砕くので当たりどころが悪かったら死ぬ。絶対に。

「兄さんも本気で来てください。でないと、死にますよ」

冗談じゃない一言。その言葉にオレは小さく笑みを浮かべた。

「本気？　だったら、いつも以上を出してやるよ」

イメージはブレーキに対して油を差す感覚。あらゆるリミットに対して効かなくするような油を使う。もちろん、制御はレヴァンティンに任せる。

「んな大口叩ける立場か！？」

ボールを拾い上げて全力で由姫に向かって投げつけた。由姫はそれを軽々と受け止める。

「大口を叩ける立場です！」

返ってくるのは全力投球の物理的に凄まじく重い球。それをレヴァンティンで力を打ち消して手に取る。

オレは勢いよく振りかぶった。

「大体、お前は時々生意気なんだよ！　心配する身にもなれ！」

「無茶をするのはお兄ちゃんの専売特許じゃない！　『天空の羽衣』があるからって不用意に前に出すぎなんだから！」

「お前と違って対処の仕方があるからだ！　お前は魔術があまり使えないから対処が少なくなるだろうが！」

「私だって白百合の子なんだから！」

「だったら、オレは海道の家系だ！　家なんてどうでもいい！」

「お兄ちゃんにはわからないよ！　親戚一同がお兄ちゃんといつ結婚するか尋ねてくることを！　お兄ちゃんは亜紗さんが好きなんでしょ！？」

「お前も大切な一人だ！」

『あの、よろしいですか？』

レヴァンティンの言葉に振りかぶった腕を止めていた。オレも由姫もまだまだいける。このままだとオレの方が圧倒的に有利だ。このまま押し切れる。

そう考えているとレヴァンティンが小さく溜息をついた。

『些細な喧嘩から痴話喧嘩に発展しないでください』

その言葉にオレ達は周囲を見渡した。いつの間にかクラスメート一同がニヤニヤしながらこちらを見ている。

いつから見ていた？

「～～～！！」

由姫は声にならない悲鳴を上げて校舎に向かって走り出す。対するオレは振り上げた手を下ろせないでいた。

いつの間にか近づいていたハトがオレの肩をポンと叩く。

「羨ましい限り、ぐおっ！」

オレは顔を真っ赤にしながらハトに向かってボールを投げつけていた。

「恥ずかしいよ～」

由姫がオレの隣で唸っている。ちなみに、オレはもう諦めたので悟りを開いた状況だ。

グラウンドでは元気にドッチボールが開始され、メグが大活躍をし

ている。いや、メグと健さんか。この二人がお互いのチームのエースとして活躍していた。

「諦めろ。みんなに聞かれている」

些細なことから始まった喧嘩はいつの間にか痴話喧嘩に発展した。その間のボールの飛び交い方は悪夢のようだったと聞くけど。

まあ、その様子をクラスメート全員から見られたんだもんな。

「うう、みんなに聞かれた。お兄ちゃんって言っているのを聞かれた」

「まあ、オレ達が血の繋がっていない兄妹ってわかっているから別に」

「恥ずかしくて死にそう」

そう言いながらも由姫はオレの肩に寄りかかってくる。オレは由姫の頭を撫でてやった。

結局はお互いに色々と溜め込んでいたみたいだから。それに、オレも最近忙しいから疲れているし。

「由姫、お前はオレにとって大切な奴なんだ。だから、あまり気にするなよ」

「だって、亜紗さんがお兄ちゃんに刀を買ってもらったから」

「亜紗が買った、だからな。鑑定に一緒に向かった亜紗が気に入っ

ただけだ」

「周さんって本当に多芸ですよね」

背後からかけられた言葉にオレ達は飛び上がりながら振り返っていた。そこにいるのたは体操服に着替えた悠人の姿。

由姫なんて完全に身構えているし。すると、授業の終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

「なんでここにいるんだ？」

「前の授業が早く終わったんです。そして、次は体育なので」

「なるほど。というか、気配を消すな」

「お二人が自分の世界に入っていただけなのに」

由姫が拳を握りしめる。それを見たオレは小さく溜息をついてその拳を上から握りしめた。

多分、悠人の言う通りなのだろう。

「だな。由姫、みんなのところに向かうぞ」

「うぅ～」

嫌がる由姫の手を引いてオレは歩き出す。もちろん、集まっているみんなから冷やかされたのは言うまでもない。

第十四話　体育祭の役割

「皆さんに連絡があります」

帰りのＨＲ。オレは帰りの準備をしながらレヴァンティンに入ったメールを確認していると、唐突に担任の声が耳に入った。

ＨＲは瞬間で終わることが有名だったのに珍しい。

「六月に学園都市全体で体育祭があります。そのため、体育祭クラス代表を明後日までにクラス代表以外から皆さんで決めてください」

学園都市はあまりにも大きすぎる。もし、各学校がそれぞれ体育祭が起きた場合、学園都市の権力者、『ＧＦ』代表のオレやら学園自治政府代表の楠木大和が引っ張りだこになる。というか、オレや楠木大和が代表じゃないそれを行って代表が共に疲労で倒れる事態が発生した。

だから、学園都市では体育祭は一括ですることを決めたのだ。

おかげで秋にある文化祭と共に学園都市の名物となっている。まあ、学校対抗試合なんて学園都市しか出来ないし。

「では、よい放課後を」

そのまま担任が出て行く。こういうところが本当にすごいなと思うんだよな。

放課後となりみんなが席を立つ。

「兄さん、放課後は」

「あれだな」

「あれですね」

日々を暮らしているからこういうことで通じるからやりやすいんだよな。

「うわ、すごいね。あれで通じるところを始めて見たよ」

「これが世に言うバカッ、ぶるっ！」

とりあえず、冷やかしてきたハトを殴りつける。

みんなは全く同情しない。

「それと、殴られて廊下まで弾丸ライナーで飛んで行くのも」

真人が呆れたように言う。オレは振り切った拳を下ろした。

「それにしても、体育祭か。久しぶりだな」

「俺も俺。俺は一年ぶりだけど周と由姫は二年ぶりか？」

「由姫は二年ぶりでオレは四年ぶりだ。去年も一昨年もどうしても外せない用事があったからな。一番気になるのは学校対抗試合だけど」

確か、メンバーは全部で１５ほど選び、様々な競技を学校代表としてするはずだ。ちなみに、四年前からずっと都島学園が優勝。

孝治とか亜紗とか音姉とか『ＧＦ』でもトップレベルの面々が暴れたからな。仕方ないと言えば仕方ない。

多分、今年も優勝だろうな。

「都島学園の優勝は確定だと私は思うよ。周に由姫。二年のエルベルムさん、リンリーエルさん、白川さん。三年の花畑さん、中村さん、田中さん、白川さん、長峰さん、木村さんで十一人固定だし」

「第７６移動隊の主力メンバーですからね」

確かに、メグが言うメンバーは選出される可能性がある。リリーナはそれほど強くはないが、学園都市内部で言うならかなり強い。

ここにメグとか入れたら完璧か。

「トトカルチョが全く面白くないな。もっと面白い相手がいたらいいんだけどな」

健さんが不満そうに言うが、その要望に答えるのはまず無理だろう。第７６移動隊の相手を出来るのは第一特務か『ＥＳ』の精鋭部隊のみ。

真っ正面からの戦闘ならになるけど。

まあ、そんなこんなで要望にはまず無理としか言えない。

「一番燃えたのは五年か六年前のルーチェ・ディエバイトのトトカルチョだよな！　まさかの同時優勝！　あの勝負は見応えもあった」

由姫が優勝した時のやつだな。まあ、亜紗がトトカルチョ総取りという凄まじい結果にもなったけど。キャリーオーバーが無いか調べてみたら、年一回だからキャリーオーバーは無かったらしい。

当の本人は顔を真っ赤にしているが、あの勝負は本当に見事だった。今は第一特務にいる二人と対等に戦っていた。

「んな勝負があればいいんだけどな」

「悠聖と俊也が戦ったならそうなるかもな」

「悠聖さんが勝つと思うんですけど」

由姫が不思議そうに首を傾げる。悠聖のダブルシンクロは反則中の反則にとでも言うかのように強力だ。だから、一見はそうなるのだが、

「悠聖の場合は個々の精霊は弱いんだ。対する俊也はほぼノータイムで全精霊を召喚する。そのタイミング次第じゃ悠聖を劣勢に持っていける」

精霊召喚師の最大の弱点が精霊の召喚時間だ。悠聖の場合はアルネウラと優月の召喚に約八秒かかるが、俊也は全精霊が一秒未満。ゼロ式精霊銃があるとはいえバカに出来ない時間。

そのタイミングでどこまで動けるかどうか。

「どちらも利点が多いからな」

「話はよく、わからないけど、体育祭クラス代表は、どうする？」

夢の言葉に誰もが現実に戻った。確かに、それがかなりの問題だ。

そんな面倒なものは誰もならないと思う。さらには我先にと教室から出ているし。

こんなものなら決めれるものも決まらない。

「次の長いＨＲを使うしかないだろ。予定が入らないならだけど」

「予定はないはずだ。先生から聞いている」

一誠が手帳を開きながら言う。どうやら先生から情報を集めているみたいだが、一体誰からもらっているんだ？

「さすがだな一誠。俺様ですら聞いてないぞ」

「私も聞いてないわよ」

「安心しろ。オレもだ」

そんな話があるとは思えないし。もしかしたら、渡り歩いているのか？

「兄さん。兄さんは高校の体育祭について詳しいんじゃないですか？」

「急になんだよ」

「兄さんがいつも体育祭の会議に参加しているからです。そういうものには詳しいんじゃないかと思いまして」

「お兄ちゃんって呼ばな、ぐはっ」

由姫の拳がハトを天井に打ち上げた。見事に天井にぶつかって床に激突する。それにしても防御力高いよな。

「まあ、詳しいっちゃ詳しいな。体育祭は学園都市の花だから、警備体制もかなりキツくなるしな。常に毎回第一特務の一部が他の正規部隊、地域部隊を引き連れて警護に来てくれるし警察も来る」

「そんなことをしなくても私は大丈夫だと思いますが」

「簡単に言うなら祭りだからはっちゃける奴らが増えるんだよ。犯罪を行う奴は少ないけど、ちょっとした違反が多くなる。そういうことだ」

去年なんてオレや由姫は学園都市内を駆け回っていたからな。まあ、それを決めたのはオレなんだけど。

第７６移動隊は行動力が高いし、由姫は空も飛べるから準空戦を持つオレと二方向から追いやすい。

「なるほど。確かに、体育祭ではちょっとした違反者が多いと聞きますし」

「夢は特に気をつけろよ。可愛いし奥手だから路地裏にでも連れて行かれやすいし」

「はう」

夢の顔が真っ赤に染まっている。それを見ていた由姫は小さく溜息をついていた。オレが何か悪いことをしたかな？

「じゃ、スリとかも多いのかな？　僕は狙われやすいらしいし」

「レヴァンティン、どうだ？」

『いつもと比べて三割増し、と言ったところですが、財布の落とし物が五割増しですね』

つまり、スリというより財布を落とす方が多いみたいだ。

『犯罪者は確かに増えますが、マスターや真人さんの言うような人はむしろ少なくなる傾向です。いつもより警備が厳しいですし』

「ついでに屋台も色々ある。財布の紐も緩くなるからスリは狙うが第一特務がな」

「第一特務の凄さは噂しかない。本当なのか？」

第一特務の面々はあまり表舞台に立たない。だから、その力を一誠のように疑問視するけど、その力を知っているオレ達からすれば冗談じゃない。

まあ、そう思いたいのはよくわかるけど。

「第一特務で一番弱い男が千里眼ってレアスキルを持っているんだ。

簡単に言うなら、不審者を一瞬で見つけるスキル」

「噂じゃ有名ですよね。本当にいるか見たことはないですけど」

「確か、５０ｋｍ先のスリを見つけて逮捕したことがあるらしい」

その言葉に沈黙が降りた。見たオレからすれば信じられない奇跡だった。というか、普通は無理。

浩平ですら最大で１５ｋｍらしいのに。

「そんな人がいるなら安心ね。でもさ、どうして体育祭は大規模なの？　警備にお金をかけるなら身内だけでもいいのに」

「それは、私も気になっていた。周さんは知っていますか？」

「体育祭の役割だろ。一つは学園都市を見てもらうため。学園都市は閉鎖的な側面が強い。学校見学も学園都市が一括でやっているからな。だから、スポーツで優秀な成績を出す学校はアピールのチャンス。もう一つが学園都市が身近であること」

オレの言葉に誰もが首を傾げた。傾げられるのはわかっていたけど、全員からとは思っていなかった。

オレは窓の外を指差す。

「学園都市は自然エネルギーをふんだんに使った都市だ。つまり、技術力が高くて身近に感じられない時がある。でも、その技術に触れてみて思った以上に技術に差が無く身近に思える。それが狙いだ。文化祭はただはっちゃけるだけだし」

はっちゃけ方がかなりおかしいけど。文化祭だけは未成年者の飲酒は口頭注意ですまされる。よほど飲んでいなければ。

「体育祭は来年入って来ようとする生徒を獲得するため。まあ、知名度とかでそんなことしなくても入って来るんだけどな」

かなり特殊な授業をする学校もあるし。

「詳しいんだな」

一誠が何故か目を細めながら尋ねてくる。オレはそれに対して肩をすくめて返した。

「それほどでも」

「一番の問題は体育祭クラス代表になるのが誰か、よね。夢はクラス代表で除外だから」

「オレも除外な」

『ＧＦ』代表として会議に出なければならないし。

「おっ、もうこんな時間だ。真人、ワカメ、俺様達の大食いの時間だぜ」

「僕は確定なんだ。じゃ、僕らは先に帰るよ」

「それでは、また明日」

ハト達が教室から出ていく。オレは由姫と視線を合わした。

「駐在所に向かいますか」

「うん」

第十四話　体育祭の役割（後書き）

体育祭は終盤ぐらいになる予定です。

第十五話　依頼

「シェルター点検？」

オレはキーボードの上を走る指を止めて委員長に尋ねていた。委員長が頷きながら資料を渡してくる。

どうやら時々定期的にやっているシェルター点検のことらしい。初耳だけど。

「そうみたい。海道君も知らなかった？」

「シェルターがあるのは知っていたけど、点検があるなんて一つも。ちょっと待ってくれ。資料を読む」

渡された資料を上から下までじっくり見る。じっくり見ると色々と内容がわかってきた。

シェルター点検は基本的に様々な部隊が順番にやっているらしい。点検する中身はシェルターの入り口を閉じることが出来るか、シェルターの中にある貯蔵庫はちゃんとしたものが入っているか等々やこしいことは一つもない。

「点検日は来週の月曜か。今が水曜だから五日後。何か予定はあったっけ？」

「ちょっと待って。えっと、音姫さん孝治君、光が教官として別部隊に。悠人やリリーナもフュリアスの操縦教官として格納庫方面に。予定が空いているのは、由姫、亜紗、アル・アジフさん、都さんに

海道君」

「メンバーとしては十分だな」

というか、例えドラゴンが出て来ても倒せそうだ。

実際に出たら笑うしかないが。

「私達は待機として、悠聖君もいるから大丈夫だと思う」

「だろうな。レヴァンティン、四人にメールを頼む。朝から任務で」

『朝からですか？　別に夕方でも』

「シェルターってことは各シェルターに繋がる通路もあるだろ。そこも点検してみる」

点検しすぎだと言われるかもしれないが、オレ達からすれば普通だ。第７６移動隊はもしもの時のための実働部隊。その行動力の高さはかなりのレベルでなければならない。

それに、シェルターの中なんて知らないからな。探検としては十分だ。

「わかった。一応、シェルターの通路を調べるから。後、さっき入った匿名の依頼」

委員長が渡してくるもう一枚の紙。オレはそれを手に取った。そこには、

「白東場空雪？　何だこりゃ？」

「わからないけど、ポストに投函されたの。お金と一緒に」

「アルを呼んでくれ」

オレはこういうものに一番頼りになる人を呼んでもらうことにした。

「わからぬ」

「ですよね」

紙を見て数十秒後、アルはオレに紙を返してきた。オレだって完全にお手上げだ。

「法則さえわかれば解読は可能じゃが、あまりにヒントが少なすぎる」

「だよな。白。東。場。空。雪。共通するものがない」

「文字を変えて繋げるとかはどう？」

「全部で１２０のパターンがある。どれも意味をなさない」

そんなものはもうオレもアルも試している。何かヒントさえあればな。

東は方角と考えれば、それ以外の意味がわからない。場ってなんだよ、場って。

「あれ？　何しているの？」

顔を寄せ合っていたオレ達はその声に顔を上げた。そこにいるのは白とピンクによって作られた学園都市専用の『ＧＦ』女性常務服を着たメグの姿があった。

メグは何かの資料が入った封筒を抱えている。

「どうかしたか？」

「隊長が第７６移動隊に持っていけって。何を見てたの？」

お手上げだったオレ達はメグに文字が書かれた紙を渡した。

「えっと、東工場エリアにある空印と雪丸の合同工場で白に関する何かがあるみたいね」

「えっ？」

一体、どこからそんな情報を。

「最初の白は、周にとって大事な話題。次の東は方角。場はエリアの前の文字。業なら商業エリアだし、校なら学校エリア。最後の二つが固有名詞の一部」

「なるほど。でも、どうしてわかるんだ？」

「小学校の頃に流行った暗号だからね。わかるのは私達の小学校時代のクラスメートだから」

「わかるわけないか」

そんな限定的な場所なら確実にわからない。暗号はいくつか勉強したオレや実際に暗号に触れていたアルですらわからないし。でも、メグのおかげで情報は組み上がった。

オレは委員長に尋ねる。

「今動けるメンバーは？」

「ここにいる三人ともうすぐ来る予定の都さん。後は、空の巡回に出ている楓とエレノアさん」

オレがフロントに出て都がセンター。バックにアル。後は、メグも数えておこうか。

戦力としては十分だな。

「メグ、お前のところの隊長に連絡。第７６移動隊に借りられるって」

「私も？　今日は訓練日だったのに」

「実戦に勝るものなし。委員長は待機。一応、近くにいる音姉と由姫に連絡して用事が終わったら来るように言ってくれ」

孝治か悠聖を呼びたいところだったけど、呼べるような状況じゃない。二人共商業エリアの方に向かっている。

オレはレヴァンティンを手に取った。

「白、ね」

心当たりがあるオレからすれば最悪な文字だが、もしもの時にあの力の完全解放を考えていた方がいいだろうな。

オレは小さく息を吐きながらレヴァンティンの剣を取り出し鞘を腰に身に付けた。

空印と雪丸の合同工場。学園都市が始まった当初に存在した学園都市最大の工場。工業高校の生徒が機器のメンテナンスなどを実地てするなど学園都市の繋がりはかなり深かった。

だけど、三年前に機器が爆発する事件があり、ちょうどいた工業高校の学生と従業員合わせて３８名が死亡して操業停止になった。

今は全く操業していないはずなんだが、

「気配があるな」

敷地のすぐ近く。フェンスのそばでオレは小さく溜息をついた。工場の中から話し声がする。

学園施設エリアからは離れているからこんなところで遊ぶ子供はまずいない。いないが、時々いる。

でも、それが関係しているのかはわからない。

「周様、数はどれくらいですか？」

「最初からバラまいていないから感づかれる可能性がある。無理に探るべきじゃないな」

「気づく者は気づくからの」

そういうアルも気づく一人だ。魔術の才能に長けた人なら普通に気づくことが出来る。

オレはレヴァンティンの柄を握りしめて敷地内を覗き込んだ。人の姿は見当たらない。そして、視線も感じない。

「メグ、準備はいいか？」

「だ、大丈夫」

多分、こういう潜入ミッションは初めてだろうな。緊張するのは無理もない。

オレは敷地に入る門につけられた鎖をレヴァンティンで叩ききった。後で物理魔術でくっつければ問題ない。

「潜入ミッション、開始」

第十六話　幻想種（前書き）

タイトルについて語られるのは次の話です。

第十六話　幻想種

鞘からレヴァンティンを抜き放つ。レヴァンティンは簡単に前にあった巨大な木の根を切断した。これで八ヶ所目。

切断した木の根は一瞬にして消滅する。

「これも消えたわね。どういうこと？」

「多分、木の根は本物じゃない。魔力によって形取られたもの。侵入者の行動を阻害するためのものだろうな」

アルがいればそういうものの解析を任せることは出来るだろうが、少し前の分かれ道でオレ達は二手に分かれた。オレとメグ。アルと都。戦力的にはオレ達の方が弱いがメグをサポートできるということでこういう風にしたのだ。

周囲がそこそこ動けるほど広く、天井もかなりの高さであるからだけど。

まあ、今は分かれて失敗だと思っているけど。

「そんな魔力をどうやって？　確か、大きくなればなるほど必要魔力が比例するって聞いたことがあるけど」

「問題がそれだ。こんな大きさを作ろうと思えば人三人くらいの命を生贄にしないといけない。でも、そんな事件があったなら誰も立ち入っていないのはおかしい」

そう言いながらオレは床を指で撫でた。指についた大量のほこり。
それを払いながら前を見る。前に広がっているのは漆黒の空間。

メグはゆっくり振り返った。多分、今までの道を思い出しているんだろうな。今までは電気が通っていたのでオレ達は何の障害もなく到着することが出来た。でも、これからは電気が通っていないのか暗闇が広がっている。

「はぁ、お兄ちゃんみたいな魔術の素質があったらな？」

「北村信吾だっけ。炎の魔術素質を持ったＡＡランクだった人だよな？」

「うん。三年前に死んじゃったけどね。お兄ちゃんは炎と光が得意だったからこういう暗闇はさぞ照らしていただろうなって」

「そうだな。まあ、それくらいなら普通にできるし」

オレは前の空間に向かって光を放った。一定時間、停止した周囲で光だけを撒き散らすライトシャワーだ。殺傷能力すらないので戦闘では全く使用できない。でも、こういう時には本当に便利だ。

通路を光が照らす。そこにあるのは虫一匹もいない通路。それを見てオレは眉をひそめた。

「ありがとう。あれ？　周？　顔が怖いよ」

「悪い。おかしいなと思って」

メグは不思議そうに首をかしげた。違和感を感じて欲しかったけど。

「この工場が停止になってからの帰還を考えても虫が入っているはずなんだ。でも、それが一匹もいない。この先に、何かがある」

「この先に何かがあるの」

アル・アジフは前に広がる通路を照らしながら口を開いた。その言葉に都も頷く。

「そうですね。虫一匹もいない場所。周様から聞きました。一部の昆虫は暗いところを好む。そして、廃棄された工場では必ずその存在を確認できる」

「確認できない場合は人の介入がある可能性がある。基本的なことじゃ。これ以上先に進むのは危険かもしれないの」

そう言いながらアル・アジフが背中を向けようとした。だが、何かの視線を感じて自らの魔術書でもあるアル・アジフのページを開く。

「どうかしました？」

「何かいる。何かはわからぬが」

周囲に視線を出すがなんの姿も見当たらない。本当にいないのか、『悪夢の正夢（ナイトメア）』がいるのかはよく分からない。

アル・アジフは静かに歩を進める。そして、天井を見上げた。

「上じゃ！」

その言葉にアル・アジフと都が同時に飛び退いた。お互いの体を蹴るようにして強制的に離れる。それと同時に降ってくる姿。不気味なまでの大きな八本足をした昆虫の様なもの。だが、その体には不自然なまでに甲羅で覆われている。そして、顔はまるで岩のようにごつごつしていた。

「ゲルナズムじゃと」

アル・アジフは驚愕の表情その昆虫の様なものを見ていた。都が断章を構える。

「知っているんですか？」

「太古の昔に存在していたとされるあらゆる生物の長じゃ。そんなものが存在しているとは」

その瞬間、甲羅が蠢いたように見えた。それと同時に何か細長いものが都に向かって放たれる。都はそれを狭間の力で作り出した防御魔術で受け止めた。体が衝撃で後ろに下がる。

防御魔術を展開しながらデバイスの力を借りて並列処理。そして、フォトンランサーを２０の数だけ展開する。

「吹き飛んで！」

そのまま放たれるフォトンランサー。だけど、その全ては甲羅によ

って弾かれた。

「出力が足りない？」

「そいつの弱点は腹じゃ！　背中は甲羅が覆い、頭には岩石が融合しておる。狙うなら最大出力による一点砲撃か腹を直接打つかじゃ！」

アル・アジフは狭い通路の中を腕から光の剣を出しつつ動き回る。迫りくる細長い触手をアル・アジフははその手でたたき落としていく。しかし、相手の方が手数が多いからかアル・アジフですらだんだん押されていく。

都はすかさずフォトンランサーを放った。狙うのは関節部分。だが、甲羅が蠢きフォトンランサーを受け止める。あの場所を放っても意味はない。

「アル・アジフさん！　二秒間だけ動きを止められますか！」

「それくらいなら余裕じゃ。時の鎖！」

アル・アジフが魔術書アル・アジフを開くと同時にゲルナズムの体を半透明の鎖が縛り上げた。その瞬間に都は防御魔術を解いて走り出す。だが、体は縛っても触手は動いている。

都は断章を握り地面を駆ける。

「剣となれ！」

周囲に浮かぶフォトンランサーが剣となり、迫りくる触手を切り払

った。そして、そのままゲルナズムの舌を駆け抜ける。フォトンランサーの剣であるフォトンソードで腹を切り裂きながら。

そして、アル・アジフの隣で停止した。それと同時に鎖が砕け散る。

「化け物じゃな。時の鎖で三秒しか持たんとは。しかも、腹を切り裂かれてなお、まだ生きておる」

ゲルナズムが二人を睨みつけている。睨みつけているのは主に都の方だ。

「いえ、もう倒しましたよ」

都がそうにっこり笑みを浮かべた瞬間、閃光が走り抜けた。それと同時に響き渡るゲルナズムのものであろう叫び。ただ、ほんの一言、ギャに近い音にしか聞こえなかった。

アル・アジフが腕で顔を守りその腕を下ろしてみると、そこにはこっぱみじんに吹き飛んだゲルナズムの姿があった。

アル・アジフは小さくため息をつく。

「空間圧縮型時限爆弾かの？」

「はい。狭間の魔力を予備用に圧縮させておきました。備えあれば憂いなしですね」

「そうじゃな。じゃが、周の方は大丈夫かの？」

二人は来た通路の方角を見る。分かれ道で別れた二人は総合力では

こちらが上だ。だから、心配しているのだろう。

「戻りますか？」

「いや、そうは言ってられないみたいじゃな」

アル・アジフが振り返る。これから向かう通路の先は光で照らされている。そこに、たくさんのゲルナズムの姿があった。

二人が同時にお互いの武器を構える。

「まずは相手の殲滅を。おそらく、この先に何かがある」

「わかりました。断章、行きますよ」

そして、二人は同時に魔力を収束させた。

「こなくそ！」

オレは地面をスライディングしつつ触手を避けてそいつの腹に鞘から抜き放ったレヴァンティンを一閃した。降り注ぐ赤色の血は防御魔術で受け止める。そのまますぐさま立ち上がり、目の前にいた蜘蛛と亀と岩を合体させたような甲虫の甲羅にレヴァンティンを突き刺した。

ほんの少しだけ突き刺さる剣先。

「幻影斬！」

その瞬間、レヴァンティンの剣先が膨れ上がったかのようになった。そして、甲羅を大きく割り昆虫の体の中を正確にレヴァンティンで貫く。そのままオレはレヴァンティンを振り払った。ガキンと音が鳴り響き、昆虫の体をほとんど両断する。

そのままレヴァンティンを両手で握り締めて飛びかかってきた昆虫に向かって振りかぶった。

「モード？！」

力任せに大剣となったレヴァンティンを振り切り昆虫の頭部を破壊する。慣性のまま向かってくる体は上手く掌で捕えて後ろに投げ飛ばした。

「はぁ、はぁ、はぁ。メグ、無事か！」

「な、なんとか」

レヴァンティンを鞘に納めてメグの声がした方を向く。そこには、真っ赤な血で服を染めたメグの姿があった。ただし、外傷はなし。その前には動きの無い昆虫が横たわっている。

「うへっ、汚い。これ、どうしよ。べたべたして気持ち悪いんだけど」

「生物の血は防御魔術で受け止めろよ。浄化する」

オレはすかさず水属性の魔術であるクリアを発動した。それと同時

にメグの体にかかった血を無害なものに変換してかつべたべたしないようにしながら色を透明にする。移動するにはできないからこれで我慢してもらおう。後は、におわないようにしておかないと。

「それにしても、周は凄いね。私が一体倒している間に八体も倒すんだもん」

「アルか都のどちらかがいればもっと楽だったんだけどな」

あの二人なら確実に三体同時に戦える。それにしても、オレは生傷が多いな。おもに、地面を滑ったり壁に激突しながらも回避したりと、かなり無茶な行動をとっていたし。

メグが無色になったものの、重さがあって違和感があるからか自分の服を鼻で嗅いでいた。

「匂いは無しと。というか、よくよく考えてみると、私が最初に戦った魔物？」

「魔物ってレベルじゃないな。この通路の広さだから戦えたけど、開けた場所なら三体か四体しか同時に戦えない。オレのレベルで。こんな奴が大量に生産されていたら話にならないぞ」

「そうかも。私もかなり苦労したから。関節部についても意味はないし、触手を一本一本落としていくのは面倒だったし」

「だろうな」

そんな面倒なことをしていたら囲まれて殺されてしまう。昆虫だから腹が弱点かなと思って正解だった。そうじゃなかったらメグが危

険だったかもしれない。

「先に進もう」

「えっ？　ま、また、同じ奴が出てくるかもしれないわよ。だ、だからね、ここはいったん引いて」

「オレの感覚だが、メグは学園都市の地域部隊でかなりの上位に入る実力だと思うんだ」

急な話にメグがきょとんとする。

「えっ？　あっ、ありがとう」

「そんなメグで一対一が限度なら、もし、大量に世の中に光を浴びたらどうなる？」

「阿鼻叫喚よね」

「『ＧＦ』にはそれを未然に防ぐことも必要だ。でも、お前が嫌なら戻っていい。防御魔術を多重にかけておくからそれで外には出れるだろう」

実際に、これ以上メグが来るのは危険だ。でも、『ＧＦ』である以上、前に進まないと街に危険が及ぶ可能性だってある。そんなことになる前に食い止めないと。

「ちょっと待って。防御魔術を私にかけておくってことは、周の魔術処理が遅くなるってことよね？」

「仕方ないだろ。オレは『ＧＦ』だ。だったら守る。それだけのこと」

それに、そんなハンデを負うが、人目をなくなることを考えたらあの力を使うこともできるしな。

だけど、メグはため息をついた。

「私も一緒に行く。周が守ってくれるんだよね？　だったら、こっちの方が安全よ」

「そうか。じゃ、行くぞ」

オレ達は歩き出す。周囲の気配を感じ取りながらもレヴァンティンを握り締める手は緩めない。何かがいれば一撃で切り捨てれる準備をする。通路を上下左右に見渡しつつ前に進む。

どれくらい歩いただろうか。息を殺し、足音を一人だけ殺し、気配を一人だけ殺して通路を進んでいると、急に通路が開けた。いや、空間に出たのだ。今まで明かりを照らしていたからかわからなかったが、電気がついている。

広大な空間。もしかしたら、模擬戦でもできそうなくらいの広大な空間の真ん中に卵のような存在があった。いや、ようなじゃない。事実、卵だ。その前にいる一人のローブを着た男。

「来たか」

そいつが声を挙げた。オレはレヴァンティンを握り締める。

「そう警戒しなくてもいい」

「そう言われても、警戒するものは警戒するんでね。何者だ？　ここは廃墟になっているはずだが？」

「知っている」

男が小さく笑みを浮かべた。その笑みにどこか見覚えがある。どこだったか思い出せない。でも、どこかで見たことがある。

その瞬間、目の前を赤が包み込んだ。実際に包み込んだんじゃない。崩れた街並みを炎が呑みこんでいる。そして、聞こえてくるのは助けを呼ぶ声と人の肉が焼ける音と匂い。

オレはその場に片膝をついていた。息が荒い。思い出してしまった。いつもは思い出さないようにして時々悪夢で見る『赤のクリスマス』の光景を。

「周！」

「私はまだ何もしていないぞ」

駆け寄ってきたメグが男を睨みつけているのだろう。だからか、男はどこか不満そうな声だった。

「よくここまで来たな。ゲルナズムの群れを通り抜けて」

「あれは、お前らの仕業か」

吐き気をこらえながらゆっくり立ち上がる。そのことばに男は笑み

を浮かべていた。

「そうだとも。護衛としては素晴らしい能力を持っていてな。まあ、抜けられる可能性はあったから予想外ではないが、足止めには十分だったな」

そう言いながら男は卵の表面を撫でた。まるで脈動しているように蠢く卵。そこからは不気味な気配と嫌な予感を感じていた。

まるで、あれが孵化したなら最悪の事態になるかのような。でも、魔力を上手く練ることが出来ない。まるで、起きたばかりであるかのように動きが遅い。

あの光景を思い出したからか。

「ああ、これか」

だから、オレはレヴァンティンを二回叩いた。

「これは鍵だ。我らの悲願へ向けた第一の鍵。素晴らしいだろう？これが孵化した時、この学園都市は火に包まれる」

「ふざけるな！　そんなことをして、たくさんの人を殺して何の意味がある！　『赤のクリスマス』を再現するつもりか！！」

「そうだとも」

その瞬間、オレの中で何かがはじけた。そして、感覚が冷静になってくる。弾けたのは金色の塊。どうやら、本気を出せと言うことか。

「世界を救うために、学園都市は最初の犠牲となってもらう」

「世界を、救うため？」

メグが声を漏らした。どうやら、こいつらが『赤のクリスマス』を引き起こした集団のようだ。許せない。許せない。こいつは、こちらだけは、オレが。

だふが、レヴァンティンが微かに震えてオレは動きを止めた。ようやく位置についたか。

「さあ、孵化を止めたければ私を倒すがいい。私は、弱くはないぞ？」

「いや、もういいさ。間に合ってよかった」

その瞬間、巨大な光が卵に直撃した。爆発によって男が吹き飛ばされる。それと同時に放たれる炎のレーザー。孵化する前に遠距離射撃を行えた。

奴らの言う卵は破壊出来た。これで、大丈夫だ。そう思っていた。

卵のあった場所で何かが蠢く。それは、巨大な尻尾。爆炎が晴れると同時にその姿がわかってくる。全長は３０ｍほど。その頭には特徴的な角があり、翼はボロボロであるものの、とある魔物に似ていた。

「ドラゴン？」

メグが小さくつぶやく。レヴァンティンを握り締める手に力がこも

る。いや、ドラゴンなんかじゃない。そんな小さな存在じゃないと思った。まるで、神々がその場にいるような威圧感。

『我の眠りを妨げるのは貴様らか』

そして、ドラゴンの声が周囲に鳴り響いた。

第十七話　金色の力

目の前に存在する威圧感の塊。あまりの威圧感に前に踏み出すことが出来ない。桁が違う。素直にそう感じることが出来る。

メグは一歩後ろに下がっている。だから、オレは前に踏み出すしかなかった。

『ほう。我が前にいながら前に踏み出すか』

「オレの名は海道周。あなたは？」

『我か？　我が名はまだない。だが、我はこう名乗っておこう。あらゆる幻想種の頂点に立つ存在と』

幻想種。

今では伝説上にしか存在しない噂の存在。はっきり言うなら桁違いの実力を持つと聞いている。だが、存在しないためその力を計ることは出来ない。

だから、目の前にいる存在の力がよくわからない。でも、相手にしたくないというのはよくわかる。

「レヴァンティン、いけると思うか？」

『難しいですね。むしろ、止めた方がいいかもしれません。おそらく、一人で戦うような相手じゃないと思います』

レヴァンティンと同意見だ。せめて孝治がいれば何とかなりそうだが、場所自体が反対側だったから来れないだろうな。

楓とエレノアの二人は多分退避している。

ドラゴンに対して近距離での射撃はかなり危険だからだ。今頃、応援を呼んでいるに違いない。

『我に刃向かうつもりか？　諦めるがいい人の子よ。我に勝とうなど世界がひっくり返っても不可能だ。だから、大人しく』

嫌な予感が体を貫いた。オレは後ろに下がりながらメグの体を勢いよく後ろに押す。それと同時に視界を何かが通り過ぎた。

角ありドラゴンの尻尾。

それが遠心力を利用して振られた。その速度と質量から考えて『天空の羽衣』は一撃で砕かれる。

「まじかよ」

『我に喰われるがいい。特に、貴様は特別みたいだからな。金色の力が宿っている』

オレはレヴァンティンを握りしめた。やはり、ただのドラゴンじゃない。金色の力をわかるなんて。オレはまだ体中に待機させている状況だぞ。

これが幻想種というものか。

「レヴァンティン、サポートは頼むぜ」

『わかっています』

レヴァンティンの言葉と共にオレは体の中にあった力を凝縮させる。この力にオレ特有のバランスだけの高さはない。力を一点特化させるオレの性能とは別物のものだ。だから、使い時を間違えるわけにはいかない。

染み渡らせるのは反応速度。相手の攻撃に対して対応出来る速度が必要だ。

レヴァンティンを両手で握りしめる。そして、前に踏み出した。

『愚かな！』

角ありドラゴンの体が回転する。先ほどと同じ遠心力を使った尻尾を叩きつける攻撃。それに対してオレは握りしめたレヴァンティンに魔力を纏わせて振り下ろした。

レヴァンティンに伝わる軽い感触。それと同時にオレの横を何かが通り過ぎる。それは、尻尾の一部。

「燕閃！」

オレはすかさず角ありドラゴンに向かってレヴァンティンに纏わせた魔力の刃を放った。地面を蹴りながらさらに前に進む。

『人間の分際で！』

角ありドラゴンが動く。口を開き、オレに向かってブレスを吐く態

勢になっていた。だから、オレは最大のオリジナル技を発動する。

「ファンタズマゴリア！！」

魔力を凝縮させて多角の錘を作り出す。それを何十重にも重ねた対一方向射撃用の最硬のオリジナル防御魔術。

角ありドラゴンが吐き出した白い炎は全て受け流した。だが、受け流した方向にあった地面や壁はドロドロに溶けている。

「おいおい、当たれば一撃かよ」

『マスターのファンタズマゴリアは相変わらずの防御力ですね』

吐き出された白い炎のおかげで前に進む道すらドロドロに溶けている。これだと空戦を仕掛けるしかなくなる。

『今のを受け止めるか。長きに渡る夢から覚めたかいがあったというものだ。我が力になるには十分な素質』

角ありドラゴンが笑っている。不気味なまでの笑みを浮かべている。ファンタズマゴリアは極めて強力だが、連続発動が出来ない。

今は他に手段を見つけないと。

『我が糧となれ！』

「幻想種の弱点さえわかればな！」

地面を蹴って空中に作り上げた魔力の足場に乗ろうと覚悟を決めた

瞬間、上から嫌な予感が襲いかかった。

見上げる隙はない。だから、唯一の安全圏である後ろに向かって跳ぶ。それと同時にオレがいた場所に何かが降ってきた。通路であった昆虫を大きくした存在。

『ゲルナズムか。久しいな』

角ありドラゴンが懐かしがるように言った。その名前を呼ばれた昆虫が角ありドラゴンの方を振り向く。

『我が主。盟約に従いあなた様を守っていましたが、我ら一族の力が足りないばかりに』

『大丈夫だ。気にはしていない』

『思い出しました』

オレの手の中にあるレヴァンティンが小さく呟く。

『ゲルナズムとエンシェントドラゴンです』

「ゲルナズム？」

レヴァンティンを鞘に収めつつ腰を落とす。

『ゲルナズムは魔神の下僕。石柱の魔物です。エンシェントドラゴンは神によって創造された至高の存在』

「んな大物が相手かよ」

どちらもどう考えても勝てない。オレからすれば神の存在はあまりに認めたくないが、ゲルナズムとエンシェントドラゴンを見ている限りそうは言ってられない。

「こんな奴ら見たことないぞ」

『魔科学時代でゲルナズムは。エンシェントドラゴンは資料の中でしか見たことがありません』

どこの資料かは聞かないでおこう。どう考えても大変なくらいの大事になるに違いない。

オレはメグの姿を確認する。メグは完全に座り込んでいた。周囲に敵の姿はないから目の前の二体と真っ正面から戦うことが、いや、出来ない。

「囲まれているな」

オレは周囲を見渡した。姿は見当たらない。でも、存在は隠すことが出来ない。

ばらまいた魔力にはゲルナズムの小型が数十匹確認出来た。

『ほう。今のを気づくか。人とは面白いな。だからこそ、殺す価値があるというものだ！』

「黙っていればてめぇは何様のつもりだ？　人は餌か何かか？」

『人など生まれた価値のないただの人形だ。我の栄養になるべくし

て生まれた存在。抗うがいい。我は、それを超える力で叩き潰して』

「人は道に迷っている」

レヴァンティンを鞘から抜き放つ。この数相手に初撃の紫電一閃は有効かもしれないが、小型のゲルナズムに連撃が通用するとは限らない。

「常に道を探している。子供も大人も。確かに、オレは人形かもしれない。あの事件をまた起こさせたくない、オレみたいな人間はもう十分だったから、戦うことを選択した。幼いオレなりに考えて。それが大人達の思惑通りだったとしても、オレは道を探す。誰かを犠牲にして世界を救えたとしても、それは世界を救えたことにはならない。世界を救うということは、自分も仲間も知り合いも誰もかも救うこと。それを達成出来る唯一の道を」

『貴様は何を言っている？』

エンシェントドラゴンが不思議そうに首を傾げた。それに対してオレは笑みを浮かべる。

「道を探す邪魔をするなら、オレは前に進むことを選択する。例えそれが後悔するとしても、前に進む。だから」

オレはレヴァンティンを振り上げた。

「時間稼ぎに付き合ってくれてありがとう」

その瞬間、周囲で姿を隠していた全ての小型ゲルナズムが爆発した。防御魔術をオレとメグにかけて飛び散る破片を受け止める。

『何をした！』

ゲルナズムがオレに向かって突撃しようとした。だが、オレの前に着地した人物がゲルナズムに向かって手をかざすと、ゲルナズムが全く前に進まなくなった。八本の足は絶えず動いているのに。

「遅れました？」

都が振り返る。それに対してオレは首を横に振った。

「ナイスタイミング。さてと、反撃開始と行きますか」

『貴様。我に嘘をつき時間を稼いだか？』

「嘘じゃないぜ」

やはり、エンシェントドラゴンはそう感じたか。

「年不相応に過ごした時期があった。その時はオレと大人の思惑が合致したからだけど、だからこそ、オレはここにいる。オレとしての年齢の違和感があったからこそ、今のオレがある。お前らからすればちっぽけかもしれないが、オレの考えはオレだけのものさ。時間稼ぎという役割と共にオレの本音を述べさせてもらった。本音を言えばちゃんと聞いてくれると思ったからな」

『人間の分際で我を試すとは。ならば、今ここで焼き尽くしてやろう！』

エンシェントドラゴンの口が開く。それに対してオレはファンタズ

マゴリアを発動しようした瞬間、光が降り注いだ。

エンシェントドラゴンが空に向かって炎を放つ。

「スターミラージュ！」

すかさず術式を変更して魔術を発動させる。レヴァンティンのサポートが無ければ無理な技だが、発動した魔術は放たれた炎の前にキラキラと細かな輝きとなっている。

そして、炎が包み込んだ瞬間、炎が不自然な軌道を描いてエンシェントドラゴンに降り注ぐ。

天空属性の中で上級のスターミラージュは発動時に凄まじい魔力を必要とするが、攻撃を歪曲させて反射することが出来る。

問題点があるとするなら、発動時の魔力消費と反射時の魔力消費がイコールということだ。

エンシェントドラゴンはボロボロになった翼で炎を受け止めた。

だが、さらに光が降り注ぐ。

「今の内に」

オレは地面を蹴った。力を再凝縮させる。反応速度に出していた力を戻してレヴァンティンを握りしめる。

『させるか！』

だが、ゲルナズムが飛びかかってくる。都が固定したのは都との狭間の距離であり、都以外に対しての距離には何ら力が働かない。

ゲルナズムの弱点はお腹の部分。地面を蹴りながらレヴァンティンを振り上げる。レヴァンティンの刃に金色の魔力を纏わせる。

「金色夜叉！」

大上段からの全力の振り落とし。ゲルナズムは真っ正面から突っ込んできた。だが、金色の魔力を纏ったレヴァンティンはゲルナズムを簡単に両断していた。

『ゲルナズム！』

エンシェントドラゴンの声が鳴り響く。オレはさらに地面を蹴ってエンシェントドラゴンに向かって走る。

空からの援護と背後からの援護。二方向からの援護射撃にエンシェントドラゴンは目標を定めていられない。

レヴァンティンを握りしめ、金色の一撃を与える。それが最善の策。

「周様！」

だが、それをするより早く、都の言葉と共にオレの体に何かの衝撃が走った。

「かっ」

肺から空気が漏れる。いや、空気と一緒に血が飛び散る。触手の先

っぽと共に。

いつもの感覚が無かったのに。

触手が突き刺さったまま空中での静止。ファンタズマゴリアを使える体調じゃないからさっさと脱出しないと。

「くそっ」

オレはレヴァンティンで触手を断ち切った。触手という支えを失ってオレの体は落下する。そして、受け身を取れずに地面に叩きつけられた。

息が詰まる感覚をこらえて治癒魔術を発動する。レアスキルの『強制結合』で細かな部分はサポート出来るが限界はある。

「倒した、はずなのに」

オレはゆっくり体を起こした。いつの間にか復活したゲルナズムとエンシェントドラゴンに囲まれている。都はメグを守るために動けない。

『幻想種を甘く見るとはな』

「レヴァンティン、ドライブは制御出来るか？」

『今は逃げることだけを考えてください』

絶望的か。

『やはり、その絶望に染まった顔は素晴らしいな。貴様を喰らってやろう。その金色の魔力もな』

エンシェントドラゴンの口が開く。ファンタズマゴリアの発動は出来ない。

走馬灯のように蘇る光景。

大切な家族であり、義理の、妹である由姫。

オレと同じ体を持ち、懸命に生きる亜紗。

オレをずっと慕ってくれる都。

常にサポートしてくれるアル。

そして、何故か正の顔が思い浮かんだ。狭間市以来一度も会っていない正の姿が何故か。

「周様！　逃げて！」

ゲルナズムの触手を迎撃しながら都が叫ぶ。逃げる時間はない。感覚がそう教えてくれる。

『さあ、死ぬがいい！』

降り注ぐ光の雨をものともせず、エンシェントドラゴンの口から白い炎が吐き出された。もう、逃げ場はない。

「周！！」

空から聞こえるアルの声。ああ、オレはこんなところで死ぬのかな？

白い炎から床に視線を移す。多分、何一つ残らない火力だろう。だから、目を逸らす。

「ファンタズマゴリア」

だけど、その声にオレは顔を上げていた。

そこには、金色の色をしたファンタズマゴリアを展開する女性の姿があった。オレの記憶の中から一切変わっていない女性の姿。

「海道、正」

オレは小さく女性の名前を呼ぶ。女性はファンタズマゴリアを展開しながら振り返った。

その手に時計の針がたくさんついた剣を握りしめて。

「今の君は、僕が守るよ」

第十七話　金色の力（後書き）

次回、正が大暴れします。

第十八話　幻想種殺し

正の言葉を聞いたオレは正の姿に見とれていた。オレのオリジナルであるファンタズマゴリアを使えたのにも驚いていたが、正の姿を見たオレの心臓が確かにトクンと跳ねたのがわかったからだ。

まるで、由姫や亜紗、都にアルが時々見せる愛おしい姿を見た時と同じように。

『二人目の金色の力だと。ありえん。貴様、何者だ!?』

エンシェントドラゴンの言葉に正は振り返りながら笑みを浮かべる。

「僕かい？　ありえないことはありえない。それがモットーの最強の存在かな」

『我が前にいながら最強を名乗るとは。我が炎によって焼き尽くされるがいい!』

「スターミラージュ」

炎を吐き出そうとしたエンシェントドラゴンがその動きを止める。

エンシェントドラゴンの周囲でスターミラージュが発生したからだ。

もちろん、発動したのは正。

オレのものより精密で範囲が広い。

『我が主!』

オレはその声に振り返りながら迫ってきていた触手を叩き落とした。
だけど、体中に痛みが走る。

『マスター！　それ以上は危険です！』

「正、大丈夫か？」

「君は相変わらずだね。自己犠牲の塊だ。狭間市の頃からずっと」

「当たり前だろ。そうじゃなかったらオレはここにはいない」

正と背中を合わせながら笑みを浮かべる。金色の力を治癒能力にシフトしたので傷口はかなり塞がっている。ほとんど致命傷に近かったのに。

ゲルナズムは背後にいる都と正面にいるオレ達を警戒して動けないでいた。

「その傷で動けることが不思議でたまらないけど」

「金色の力は正も持っているだろ」

「なるほど。そういう使い方もありなのだね。応用が利かないから魔術強化に使っているけど」

「そんな使い方初めて知った」

オレは笑みを浮かべる。正との背中合わせは亜紗や由姫と同じような感覚があった。多分、どう行動するかわかっている。

お互いが金色の力を持つから話も合うし。

『貴様ら、何者だ？　貴様らは人か？』

「愚問だね。僕も周も人だよ。幻想種相手には引かない。周、何か切り札はあるかい？」

「ない」

残念ながら即答だ。特にエンシェントドラゴン相手には金色の力を纏わせた斬撃である金色夜叉じゃなければダメージが与えられないような気がする。

何か方法があればいいんだけど、思い当たることは一つもない。

「幻想種相手は久しぶりだからね。この装備だと対策が難しい。勝てないわけじゃないけれど」

『大した自信だな。ならば、我がその自信を打ち砕いてやろう！』

「ファンタズマゴリア」

正はエンシェントドラゴンの尻尾攻撃をファンタズマゴリアによって受け流した。そして、エンシェントドラゴンに向かって光の矢を放つ。しかし、光の矢はエンシェントドラゴンの皮膚に当たって散った。

今のは正の全力ではないだろう。もしかしたら、エンシェントドラゴンの実力を計るための矢か。

「魔術防御は極めて高いね。一本角にしては最高峰、いや、二本角クラス」

「どういうことだ？」

「エンシェントドラゴンには角がある。最大が三本であり、三本ならば幻想殺しの武器しか通用しない。二本は神剣が必要。一本ならまだ勝負はあったけど」

『我が前にひれ伏すがいい！』

吐き出されるブレスに対して正は展開したままのファンタズマゴリアで受け止めた。

正の話から考えると相手は神剣クラスの武器が必要というわけか。オレはレヴァンティンを握りしめる。

「レヴァンティン、例のあれは大丈夫か？」

『大丈夫です。とは言っても、色々危険ですよ』

「放射線というものは魔術で分解出来るんだろ？」

『理論上ですが』

レヴァンティンの言葉にオレは頷いた。どれくらいの危険性があるかわからない。だけど、今はその奥の手を出すしかない。

「正。エンシェントドラゴンの相手を頼めるか？　オレはゲルナズムを先に倒す」

「大丈夫かい？　かなり血を失っているだろ？」

正の声は完全に的を得ていた。ゲルナズムの触手による貫通された箇所はかなり大きく、致命傷になりかねないくらいだった。

もし、『強制結合』と金色の力が無ければ今頃出血多量で倒れているに違いない。

「だから、すぐに終わらせる。都！　準備は大丈夫か！？」

「はい！」

都が断章を構える。それを見てオレはレヴァンティンを鞘に収めた。

「行くぞ！」

地面を蹴りゲルナズムとの距離を詰める。ゲルナズムはオレに向かって触手を放つが、オレは前後左右だけでなく上下に激しいステップを行う。

横っ飛び、飛び上がり、宙返り、急降下、飛び込み前転、側転、ダッシュ。

様々な動きで大量の触手を避ける。そして、避ける度にレヴァンティンを鞘から走らせる。

触手を斬る。受け流す。返しの刃で切り捨てて前に進む。飛び上がりながらレヴァンティンを振り触手を斬る。そして、着地した目の前にゲルナズムが近づいていた。そして、オレに向かって先を向け

るいくつもの触手。

だから、オレは前に進んだ。『天空の羽衣』を展開しながら治癒能力に振り分けていた金色の力を腕の力に振り分ける。

「モード?!」

迫り来る触手をフォトンランサーが貫く。だけど、いくつかはフォトンランサーの雨を抜けて迫っていた。それを『天空の羽衣』が受け止める。

オレはレヴァンティンモード?を振り上げた。

『アクセルドライブ起動終了。バランサーシステム正常化確認。現世空間に浸食完了。いけます!』

「限定解除!!」

レヴァンティンの刀身が真っ赤に染まった。レヴァンティンのエネルギー源でもあるとある存在。その熱量を刀身に召喚する最大の技。ついでに放射線と呼ばれる病気になりやすくなるものを纏わせておく。それをゲルナズムに叩きつけた。

軽い感触。レヴァンティンモード?の大剣はあまりの熱量にゲルナズムに当たった瞬間、ゲルナズムを斬りつけた点を融解させていた。そして、両断する。

『バカ、な。この力、まさか』

『ええ、そうですよ。あなたが魔科学時代に殺された時と同じ殺さ

れ方です！』

切断面から紫の煙が立ち上る。オレはレヴァンティンを引いて後ろに下がった。

『放射能の海に覚えて溶けなさい！』

『また、また、核の力で我は死ぬのか！？』

そして、ゲルナズムが一瞬にして燃え尽きた。オレはレヴァンティンから教えてもらった放射線となるものの除去魔術を周囲に発動する。

「周様！」

すると、オレの胸に都が飛び込んできた。そして、オレの体全体、主に貫かれた場所を見る。ペタペタ触りながら。実際はまだ傷口が塞がっていないけど。

オレはゆっくり振り返った。正がファンタズマゴリアを展開しながら守っていると思っていた。だが、そこには翼が同時に落ちたエンシェントドラゴンの姿がある。

正は空を飛びながらエンシェントドラゴンのブレスを回避していた。

『貴様！』

「頭に血が上っていたら、僕には勝てないよ」

急降下と共に振り下ろし。それは、エンシェントドラゴンの尻尾を

根元から断ち切っていた。

エンシェントドラゴンは正に向かって体当たりを行う。だが、正の姿はそこにはなかった。代わりに腹を大きく切り裂く正の姿。

ゲルナズムはレヴァンティンが言う幻想種殺しによって倒すことは出来た。だが、エンシェントドラゴンだけは一人で倒せるような気がしなかった。

だけど、目の前にはエンシェントドラゴンとたった一人で戦う正の姿。

『消えろ！』

エンシェントドラゴンが放つブレスに対し、正はファンタズマゴリアで受け止めた。

「弱いね」

次の瞬間、正の姿はエンシェントドラゴンの反対側にいる。そして、剣で大きく斬り裂いていた。

すでにエンシェントドラゴンの周囲には大量のエンシェントドラゴンの血だまりが出来上がっている。それをしたのは正だ。

「さて」

正が動く。エンシェントドラゴンの胴体を半ばまで断ち切りながら。そして、正の姿が消えたと思った瞬間、エンシェントドラゴンが縦に両断された。

多分、エンシェントドラゴンは何が起きたかわかっていないだろう。
それほどまでに強力な一撃。
それを見ていたオレの体が急に重くなる。そして、片膝をつく。どうやら限界のようだ。
オレはそのまま意識を闇に投げ出した。

第十九話　幻想種の滅び

正が静かに剣を鞘に収める。それと同時に断ち切った幻想種であるエンシェントドラゴンの姿は霧のように霧散した。

これが幻想種の滅び。幻想種と呼ばれる由縁。

「これで、一つ目の脅威は」

「動くな」

その言葉と共に正は周囲を見渡していた。周囲には楓とエレノア、そして、魔術書アル・アジフを開くアル・アジフの姿がある。

正がゆっくり溜息をついて剣の柄に手を乗せようとする。だが、それより早く首筋にアル・アジフの指先から生えた光の剣が迫っていた。

「動くなと言ったはずじゃ。そなた、何者じゃ？　エンシェントドラゴンを断ち切ったといい、まるで、時間すら超越した転移といい」

「さすがに、かの有名なアル・アジフには違和感ありありだったね。わかっていたことだけど」

そう言いながら正が肩をすくめる。それを見たアル・アジフが肩の力を抜いた瞬間、正がアル・アジフの腕を掴んでいた。そして、引き寄せながらその体を後方に蹴り飛ばす。ちょうど楓がいる場所に。

エレノアは正に向かって杖を構えた。だが、そこには正の姿がない。

代わりに、背後に気配があった。

振り返りながら杖で攻撃を受け止めようとする。だけど、エレノアに伸びてきたのは正の腕だった。そのまま正がエレノアの頭をなでる。

「確かに、背後を振り向きながらガードしようとする行動は正しいよ。でも」

呆然としているエレノアの杖を掴み、楓がいる方向に押し飛ばす。楓と再び空を飛ぶアル・アジフは飛んできたエレノアを受け止めた。

誰も武器を構えていない。だからこそ、正は剣を抜き放つ。

それに対して三人が離れて武器を構えた。

「どうやらやる気みたいだね。僕は戦いたくないのに。でも、仕方ないか。邪魔をするなら僕は君たちを」

その時、正は背後を振り返った。そこにいるのは都の姿。その手にあるのは片手用の銃。

正の腕が動く。剣は正確に銃を弾き飛ばし都の杖を受け止めていた。だけど、そこまで。都の蹴りが正の体に入る。

「フォトンランサー！」

「くっ、ファンタズマゴリア！」

都が放つフォトンランサーに対して正はファンタズマゴリアを発動

していた。そして、気づく。失敗したと。

回り込む気配。でも、正は振り返ることが出来ない。回り込んだアル・アジフは魔術書を一気に開いた。

「ページ６、１２９、３２２、５０１、８０３！」

ページ数を叫びながら並列で大量の魔術を正に向かって放つ。正はファンタズマゴリアを維持したまま剣を握り締めた。そして、正の姿が消える。それと同時に少し離れた位置に正が現れた。

フォトンランサーとアル・アジフが放った魔術がぶつかり合い相殺していく。お互いに放っているアル・アジフと都は完全に驚いていた。

正が剣を構える。

「見事なコンビネーションだね。さすがの僕も本気を出すしかないようだ。もう一度警告するよ。これ以上戦うなら僕は君達を怪我をさせても責任は負わない。僕はあくまで海道周を助けただけなのだから」

「じゃ、一つ聞くけど。帯剣許可証は？」

楓がカグラを向けながら尋ねる。

『ＧＦ』や学園自治政府のメンバー以外の場合武器を持っている場合は帯剣許可証を必要とする。その時に帯剣する武器の登録が行われるのだが、それを持っているなら身分が簡単に割れる。

正は顔を逸らした。持っていないのと同じ意味だ。

「ともかく、そういうわけじゃからそなたを拘束させてもらう。異論はないの？」

「一本取られたね。でも、黙って拘束されるつもりはないよ。それに、この四人が相手ならいくらでも逃げ切ることは出来る。それでも、やるつもりかい？」

正の言葉に四人は無言で武器を構える。エンシェントドラゴンを単体で倒すほどの実力がある正はせめて身分だけでも明かさないといけない。

そうでなければこれから様々な不具合が出る可能性がある。

「そうだね。君達はそういう組織だ。今までも、これからも」

「そなたに危害を加えるつもりはない。じゃが、一本角とはいえエンシェントドラゴンを単体で倒すそなたを手放しにしておくわけにもいかぬ。出来れば、大人しくして欲しいのじゃが」

「お断りさせていただくよ。僕はソロでの活動だからね。力づくで来るなら僕も力づくでいかさせてもらう」

正が剣を鞘に収めて腰を落とす。それはまるで白百合流の剣技と同じ型だった。それに対してアル・アジフ達はそれぞれの武器を構え、

「ではね」

その声はアル・アジフの背後から聞こえていた。正の姿が消えてア

ル・アジフは慌てて振り返る。そこには天井に空いた穴から出て行く正の姿があった。

完全に出し抜かれた。だが、今の動きは完全に不自然だ。

「都、周は」

「周様ならメグさんに任しています。一応、気絶していらっしゃるだけなので」

「良かった」

楓が安堵の息を吐く。だけど、エレノアは険しい顔をしたままエンシェントドラゴンがいた場所を見つめていた。そして、おもむろに口を開く。

「アル・アジフ、エンシェントドラゴンは何？」

その言葉はその場にいた誰もが思う疑問だった。特に楓とエレノアの二人はそう思うだろう。

世界屈指の砲撃手である二人の射撃ですらエンシェントドラゴンに致命傷を負わせることが出来なかった。そして、ゲルナズムに至っては両断されても生きていた。

アル・アジフが開いていた魔術書を閉じる。

「幻想種。その存在がまさに幻想の中にしか存在していないあらゆる生物の頂点に立つ存在じゃ。特にエンシェントドラゴンは幻想種の長。その話はリースに聞いた方がいいかもしれぬな。リースはエ

ンシェントドラゴンに友達がおる。エンシェントドラゴンの話はリースが詳しいじゃろう。ただ、今言えることは」

アル・アジフは少しだけ間を開けた。そして、エンシェントドラゴンがいた場所を見る。

「幻想種は死と共に世界に還る。それが幻想種と呼ばれる由縁でもあるのじゃ」

「幻想種は世界と同じ存在であるということですか？」

「そうじゃな。幻想種は極めて複雑な存在じゃ。世界と同意義でもあり、死ねば世界と同化する。常に見られることになるということじゃな」

つまり、エンシェントドラゴンだったものはここで見守っているということ。確かに、生物の頂点に立っていると言えなくもない。

アル・アジフは周囲を見渡した。

「しかし、幻想種を呼び出す方法が存在したとはの」

「説明をお願い」

エレノアの言葉にアル・アジフは頷いた。

「この世に幻想種は存在しない。そのはずじゃった」

「えっと、つまり、召喚ということ？　悠聖君のような精霊召喚と同じで」

「おそらく。もし、どこかの勢力がそれを出来るとするなら、世界は混乱するというレベルではないぞ。一体、どこの組織が」

アル・アジフの言葉に答えられる人はこの場にはいなかった。

第二十話　過去の記憶（前書き）

結構重要な話です。周の過去の一部分でもあります。

第二十話　過去の記憶

あの日、オレ達は街を歩いていた。親から離れて四人だけで歩いていた。

オレと茜と楓と光。

いや、歩いていたはおかしいな。今、その光景をオレは見ている。

あの時の記憶に焼き付いているように一番弱かったオレが一番後ろで茜と楓に手を引かれながら歩いていた。

あの時のオレは海道家の落ちこぼれと言われるくらいに魔術が使えなかった。代わりに茜は文字通りの天才だった。

あらゆる魔術をたった五歳でマスターした本当の天才。親族の誰もがオレではなく茜に期待していた。だけど、茜はオレに期待していた。

ああ、あの日の言葉が聞こえてくる。

「お兄ちゃん、楽しいね！」

無邪気な茜の笑み。その時はその笑みに隠された本当の意味がわからず、茜の笑みに癒やされていた。いや、もしかしたら茜に助けられていたのかもしれない。

あの時のオレは死んだら楽になるのかなと思っていた。迷子になっても心配してくれた家族が茜だけだったから。

「ほら、周君も行こうよ」

「置いておけばええやん」

「駄目だよ。お兄ちゃんにそんなことをしたら」

あの日のオレが何か口を開いて話している。でも、何を言っているのか聞こえない。だけど、三人の顔が驚いたのがわかった。一体、何を言ったのだろうか。

でも、茜の目が悲しんでいるのがわかる。ああ、思い出した。あの時、オレは、

「僕を置いていった方がみんな楽しいと思うよ」

こう言ったのだった。

僕という言い方に懐かしさを覚えてしまう。あの時はそういう一人称を使っていたな。

「楓、茜、行こ」

その言葉を聞いて光が楓と茜の手を引っ張って歩き出す。それによってオレから手が離れた。

多分、この時にオレは安心していたのだろう。だけど、同時に感じていた。嫌な予感を。周囲の雑踏から感じる嫌な予感じゃない。だけど、この場にいたらダメだという予感があった。

だから、あの日のオレは走り出していた。そして、三人にぶつかっ

て三人と一緒に倒れる。それと同時に周囲が赤く染まった。周囲にいた人が爆風によって吹き飛び、

「うわぁぁぁぁああっ！！」

オレは叫んでいた。その時、遠くからあの日のオレ達を見ていたはずの視界があの日の視点に鳴っていたからだ。

人がゴミのように吹き飛ぶ。そのほとんどが爆風によって四肢をもがれながら。その様子を四人の中では唯一オレだけが見ていた。だから、時々思い出す。悪夢として。

「うわぁぁぁぁああっ！！」

真っ赤に染まる視界。この時は何が何だかわからなかった。そして、左腕に受ける凄まじい痛み。

「がはぁっ」

その痛みにオレは飛び起きていた。そして、ようやく悪夢が覚めたことを思い出す。だけど、左腕の痛みがなくならない。見た目は普通だが神経の通らない左腕に『強制結合』は発動していない。だから、痛みは幻痛だろう。

だけど、その痛みは計り知れない痛みだった。いつもなら『強制結合』を外して痛みを感じなくするけど、これはそういうわけにはいかない。だから、痛みが残る。

「はぁはぁはぁはぁはぁ」

息が荒い。まともに空気を吸えていない。いや、過呼吸になっているのか？　頭が回らない。今の自分の状況がわからない。

怖い。恐怖が神経に走る。体が恐怖で硬直する。悪夢が頭の中に思い浮かぶ。あの日の光景が。

「うわぁぁぁぁああっ！！」

だから、また叫ぶしかなかった。混乱している。頭の中を恐怖がかき乱してくる。まともな判断が出来ない。ただ、あの時の光景だけが頭の中を巡る。凄まじい左腕の痛みと共に。

「あぁ」

駄目だ。もう駄目が。現実にいたくない。現実に、夢の中に行きたい。茜が笑って隣を歩いている夢の中に。

オレが歩けなくしたのだろ？

誰かの声が聞こえる。いや、これはオレの声。オレが思っている声。幻聴だ。幻聴だけど、幻聴だけど！

オレが茜からもらったのだろ？　茜がオレに全てを投げ出したのだろ？

聞きたくない。聞きたくない。聞きたくない。

ない。聞きたくない。聞きたくない。聞きたくない。聞きたくない。聞きたくない。

もう、こんな世界、たくさんだ。

「誰か、オレを、殺して」

「周様！！」

その時、オレは誰かに抱きしめられていた。ようやく、視界がはっきりする。そこには心配した表情で寄り添う由姫と亜紗。そして、力強く抱きしめてくる都がいた。

ようやく、ようやく、頭が現実に戻ってくる。

「オレ、もしかして」

「うん。また、お兄ちゃんは見たんだね」

この中で唯一オレのこの姿を知っている由姫は頷いた。

『もしかして、ずっと？』

「うん。特にお兄ちゃんが白百合家に来た時は毎日。ずっと、ずっとあの日のことを悪夢で見ている」

『『赤のクリスマス』』

「はい。いつもの役目は都さんに取られたけど」

そうだ。そうだだった。いつもは由姫がオレを抱きしめてくれていた。ずっとずっとずっと。家が一緒だったからでもあるけど、それ以上にオレが由姫に依存していたから。

オレは体から力を抜く。この時にようやく幻痛はなくなっていた。

「ごめん」

「もう言わないでください」

オレの言葉に都の言葉が耳に響く。その声は泣いていた。だから、オレも涙を流す。いや、違うか。涙はもう流していた。

いつもと同じだ。違うのは由姫ではなく都に抱きしめられている。

「今日は都さんに後を任せようかな。亜紗さん、私の部屋に行こう」

『うん。今日、は、都に任せる』

そう言って二人が部屋から出て行く。だからか、都はより一層オレを抱きしめてきた。

「周様が狭間市に来るまで無理していたのはもしかして」

「強くなろうと、大人であろうとした。でも、本当の理由は忘れたかった。子供の頃なんて大人にらなれば忘れられると思ったから。結果は不相応な子供になったけどね。無理に大人になろうとした子供。姿と思考が一致しない違和感のある子供」

それがあの時のオレだ。都によって色々と発散出来たが、今でも時

々悪夢として見てはいつも由姫に抱きしめられて目を覚ます。
過去の呪縛が未だに断ち切れていない。

「悪い、都」

「謝らないでください。周様がそこまで苦しんでいたなんて」

「茜も楓も光、中村もあの光景をちゃんと見てはいないからな。オレだけがあの光景を見ていた。だから、悪夢で見る。人が四肢をバラバラになりがら吹き飛んでいく様を」

「周様はそれを見たのですね」

オレはゆっくり頷いた。あれは人が死ぬ光景じゃない。
オレは都の背中を手を回して強く抱きしめた。

「左腕の痛みと、自責の言葉と、その光景が悪夢の中で繰り返される。だから、オレは悪夢を見る度に同じことになるんだ」

「だからといって、殺して、とは言わないでください。周様が死ねば悲しむ人がたくさんいます。由姫さんも、亜紗さんも、アル・アジフさんも、私も」

「悪い」

いつも心配される。今までは由姫だけだったけど、これからは都も。

「都」

オレは都を抱きしめたままベッドに倒れた。都は抗うことなく一緒に倒れる。ただし、端から見ればオレが押し倒された光景になるが。

「少しの間、こうしてくれ」

「いいですよ。周様の好きなように。私は周様になら何をされても大丈夫ですから」

「こういう状況では言わないように」

オレと都の二人しかいない状況では勘違いされるだろう。都のことだから本気かもしれないけど。

都はオレを抱きしめる力を強くした。

「傷は、大丈夫ですか？」

「何とか。オレの力がなかったらマズかったけど」

「金色夜叉、狭間の鬼の力ですね」

やはり都には隠せなかったか。都は断章という狭間の鬼が必要とした神剣を持っているから隠せないとは思っていたけれど。

金色の力。狭間市の最後に狭間の鬼から手に入れた力だ。だけど、それをどうして正が持っているかは気になる。でも、今は、

「鬼の力はすごいですね」

「すごくなんてないさ。即死の一撃は意味がないし、感覚が鈍る。なあ、都」

「なんでしょうか？」

オレの胸の上で都が首を傾げる。こんな顔を見たら我慢出来ない。

「キス、していいか？」

都の顔が真っ赤に染まった。真っ赤に染まって、そして、ゆっくり頷く。

オレはゆっくり都に顔を近づけた。そして、都とキスをする。

都とのキスの味は由姫や亜紗と同じだった。

第二十一話　姉（前書き）

当初の予定を大きく違ってメグが主要キャラになってきています。
夢を主要キャラにするつもりだったのに。

第二十一話　姉

机の上にマグカップが置かれる音が部屋の中に響いた。その音にハッとしたメグが顔を上げると目の前に湯気が立つミルクが入ったマグカップがあった。

「これを飲むと落ち着くよ。弟くんがそうだった」

さらに顔を上げてメグはマグカップを置いた音姫を見る。音姫の顔には笑みが浮かんでいた。

そして、向かいの席に座る。

「えっと、白百合音姫さん、ですよね。由姫のお姉さんの」

「うん、そうだよ。由姫ちゃんもちゃんと友達が作れたんだ。良かった。由姫ちゃんって弟くんについて行く子だから友達が出来るか心配で」

「そうなんですか？　由姫はそんな風に見えませんけど」

実際に由姫は周とよく一緒にいるのだが、由姫はかなり社交的であり友達もかなり多い。よく嫉妬されてはいるが。

メグは前にあったホットミルクの入ったマグカップを手に取った。

そして、ホットミルクが波だっているのを見てようやく気づく。

自分が今まで震えていたことに。

「初めて強力な魔物と戦ったらよくそうなるから心配しなくてもいいよ。私や由姫ちゃんもそうだった」

「音姫さんもですか？」

「うん。メグちゃんよりもっと若い、八歳くらいの時にね、今は縁を切ったけど白百合家当主に命令されてドラゴン退治に無理やり行かされたの。当時から私は天才だともてはやされていたから。そして、私は戦った。後から聞いた話だとドラゴンじゃなくてエンシェントドラゴンだったらしいけど」

エンシェントドラゴン。その言葉にメグの胸に何か黒いものが落ちた。

周ですらうかつに攻撃出来なかったあの巨大な存在。それと音姫は昔に戦ったらしい。でも、どうやって倒したのだろうか。

「私一人じゃ倒せず殺されそうになったんだけどね、弟くんや孝治くんとギルバートさんが助けてくれた。それが終わってから私も立てないくらい震えていたの。自分が死んだかもしれないって」

メグも同じだった。小さなゲルナズムとの戦いでも一歩間違えたなら死んだかもしれない。そんな状況だったのに戦っている最中はそうは思わなかった。

でも、終わってからよくよく考えてみると死んだかもしれないと思ってしまう。

「今はホットミルクを飲んで落ち着いてね。それから、これからのことを考えていこう」

「これからですか？」

音姫は頷いた。その目は真剣であり、メグは思わず息を呑んでしまう。

「これから、まだ『ＧＦ』として戦うか。それとも、一般人になるか」

その言葉にメグは目を伏せた。そうなるとわかっていたから音姫は尋ねたのだ。

戦いの恐怖を得た隊員はその大半が『ＧＦ』を辞める。だから、音姫は真剣な表情で言った。

「その選択はメグちゃんが決めること。誰にも入らせはしない。だから、落ち着いて考えてね。焦らず、時間をかけて」

「あ、あの、一つ質問をいいですか？」

メグの言葉に音姫は頷いた。

「世界が滅ぶということについて」

「それをどこで？」

音姫の声には微かに驚いている節があった。でも、表情にほとんど出さなかったのは今までの経験とメグが関わった事件から推測していたのだろう。

メグはマグカップを両手で包みこむ。

「工場の中でローブを着た人が。世界を救うためと言っていたので世界が滅ぶんじゃないかなと」

「うん。そうだね。でも、ここでの話は他言無用。話す時期は今見計らっているから」

音姫の言葉にメグはしっかり頷いた。世界の滅びが本当のものだったら世界が混乱するに違いない。だからこそ、聞かないといけないとメグは思っていたのだ。『ＧＦ』の隊員として。

音姫は小さく息を吐き、そして、命題に入った。

「時期は不確定なんだけど、世界は確実に滅ぶと言われている」

「言われているですか？　確実なのに」

「問題がそこなんだよ。この話を知っているのは未来を知る者。世界中でもかなりの数がいるみたいなんだけど、未来を正確に知る人たちが口をそろえて世界が滅ぶと言っているの。もちろん、国連や国々は信じていない。でも、『ＧＦ』と『ＥＳ』はそれに対抗するために力を付けている」

「それが信じられる確証でもあるんですか？　ただ、個人がそう言っているだけだとか」

「狭間戦役。それが一番の例かな。魔界の勢力と、人界の一部の勢力が滅びに対抗するための力を得るために起こした事件。それに私達は深くかかわった」

狭間戦役の名前はかなり有名だ。特に、第７６移動隊の存在が大きくなるほど。

その話はメグも聞いている。狭間戦役を止めたのはメグ自身とあまり年の変わらない人達だというある意味伝説と共に。

「そんな事件を起こされたら私たちも信じるしかない。まあ、そのことについて深く考えてほとんど答えを得たのが弟くんだけどね。世界が滅びに瀕している。でも、私達の力じゃその滅びを回避することはできない」

「どういうことですか？　それに対して準備をしていれば」

「人が成長するのに限界があるんだよ。だから、今のままじゃ滅びは避けられない。それが弟くんの考え」

「確かに、そんなことを話せば暴動が起きますね。一つ聞きたいんですけど、どうして滅びが避けられないんですか？　しゅ、周さんみたいな実力者なら」

「個々の力は大衆の力に勝ることはない」

その言葉にメグははっとした。たった一人の英雄がいたとしても、それに従う仲間がいなければ世界を救うことはできない。その証明を歴史がしてくれている。

今では架空の物語とさえささやかれているほどである英雄と呼ばれた善知鳥慧海と英雄になった白百合姫路のことで。

「たった一人、世界を敵に回せるような人がいても世界は救えない。世界を救うにはみんなの力が必要」

「慧海さんが姫路さんに英雄になって欲しいと言った時の言葉だね。メグちゃんはあの物語は好き？」

「はい。純粋なブレイブストーリーですし、世界を救う言葉を持った少女を世界を壊す力を持った少年が守る物語だから」

「私も好きだよ。だから、世界は一人じゃ救えない。世界を救うのはいつも個人じゃない。みんなだから」

「だから、世界は滅ぶと」

すると、音姫は首を横に振った。そして、楽しそうに笑みを浮かべる。

「これは私の感覚なんだけど。弟くんはそれを阻止知る鍵を見つけたんじゃないかなと思っているの。もちろん、それは誰にも言わないと思うし、よほどのことがない限り私や由姫ちゃんにも話さないと思う」

「どうしてですか？」

自信満々な声にメグは首を傾げた。それに対して音姫は満面の笑みを浮かべる。

「だって、私の自慢の弟だから」

第二十二話　交錯（前書き）

真ん中から悠聖視点が入ります。

第二十二話　交錯

「はあ、今頃お兄ちゃんと都さんはいちゃいちゃしているんだろな。羨ましい」

ため息をつきながら由姫が周の部屋の方向を見て言う。それを亜紗はため息をつきながらスケッチブックを捲っていた。

『羨ましいのは由姫の方。クラスが同じだからって毎日いちゃいちゃしている』

「毎日はしていないし、毎朝おはようのキスで起こそうとしても何故か投げ飛ばされるし」

『それは由姫が悪い。戦場じゃ寝ている最中に襲われることもある』

「お兄ちゃんと同じ回答」

由姫は小さくため息をついた。そして、机の上に置いてあった資料に目を通す。

そこにあったのは周達が相対した幻想種のゲルナズムとエンシェントドラゴンについて書かれてあった。詳細な図と共に。

ゲルナズムは魔人の下僕であり石柱の魔神。過去には全ての生物の頂点に立っていた。対するエンシェントドラゴンは幻想種の頂点。音姫も昔に戦ったことがあるが勝てなかったと書かれている。

「どう思う？　幻想種について」

『矛神で一撃』

「いや、まあ、そうなんですけどって、もし大量に出てきたらどうするつもり？」

『頑張る』

「や、根性論を出されても。でも、こんなのが量産できるなら」

由姫は考えた。もし、ゲルナズムが量産されて学園都市に放たれた場合のことを。結果は全て阿鼻叫喚の地獄絵図になるだろうことは想像できた。

相対していない以上わからないが、資料の上ではその装甲を断ち切るのは難しく、周が倒した方法もほんの少しの割れ目にレヴァンティンを突き刺して魔力の刃呼び出して割る方法と、腹部を斬りつけて倒す方法。そして、頭部を全力で破壊する方法。

どう考えても普通の隊員じゃ対処出来ない。

「首謀者達を見つけないと大惨事になるかも」

『賛成。でも、今はナイトメア関連で忙しい』

「うん。ナイトメアもこっちも学園都市としては一大事だから。亜紗さんは今回のことはどう思ってる？」

『別件』

「ですよね」

ナイトメアと『悪夢の正夢（ナイトメア）』が共通しているとわかっていたからちょっとした希望を由姫は抱いた。だが、そこまで世界は甘くないらしい。

小さく溜息をつきながら自分のベッドに仰向けに寝転がる由姫。亜紗は由姫の持っていた資料を手に取った。

目を通してからそれを亜紗の胸の上に置く。

『でも、幻想種一派が動くなら体育祭だと思う』

亜紗の開いたスケッチブックを見た由姫が目をパチパチする。そして、亜紗の顔を見た。

「どうしてですか？」

『力を誇示するなら犠牲者はたくさんいた方がいい』

確かにそうだ。力を示すだけなら犠牲者がいればいるほど誇示しやすい。そういう意味では亜紗の言うように学園都市で行われる体育祭はうってつけでもある。

亜紗はさらにスケッチブックを捲った。

『問題点は第一特務が来ること』

「いや、まあ、そうなんですけどね。亜紗さん、自分で言ってありえないと思ってない？」

『少し』

その文字に由姫は小さく溜息をついた。第一特務が来る以上、リスクが高すぎる。下手をすれば第一特務だけで全滅しかねないからだ。

だから、亜紗自身もほとんど冗談のように言っている。

『だけど、嫌な予感はする。今回の幻想種一派の行動とナイトメア関連の事が同じ時期に起きていることが』

「どっちかを先に解決出来たらいいんだけどな。ここはお兄ちゃん任せで」

『自分で動かないと。まあ、由姫なら無理かも』

「喧嘩売ってますよね？」

由姫は小さく息を吐いた。そして、自分の腕を上に上げる。ちょうど部屋の灯りを遮る位置で止めて拳を握りしめた。、

「私はお兄ちゃんの拳だから、お兄ちゃんの力にしかなれない」

『私も。周さんは何でも一人でしようとする。別の言い方をすれば自己犠牲の塊』

「昔と比べたらかなりマシです。昔は他人を危険にさらすくらいなら自分が行くってくらいだったから。今はかなり落ち着いているけど」

実際は周の勘が極めて的中率が高く、それを従った回避が成功する

ので他人が行くなら自分が言った方が生き残りやすいというわけなのだが、由姫や亜紗にはわからない。

由姫は起き上がった。そして、亜紗の顔を見る。

「お兄ちゃんもさすがに今は動けないから駐在所で何か仕事がないか聞きにいきませんか？」

『私達に出来ることがあるかな？』

「行動あるのみ」

由姫は亜紗の手を取って立ち上がった。

「仕事はないな」

書類整理を片手間でしながらオレは由姫と亜紗の二人に告げた。

仕事と言ってもほとんどない。というか、周及び副隊長メンバーが仕事を仕切っているため書類整理ですら仕事はほとんどない。

「いきなり出鼻を挫かれました」

『さすがにこれは予想外』

二人が思いっきり肩を落とす。多分、周がいない今、周を楽にする

ために来たんだろうな。

「で、周隊長の様子はどうだ？」

『都といちゃいちゃしている』

「あー、はいはい。心配しなくて大丈夫だな。まあ、みんなが思うことは同じというわけか」

オレは整理していた資料をホッチキスで纏める。そして、それを向かいにある周の机に置いた。

これで報告書の類は終わったな。

「みんな？」

「二人だけじゃなくて、周が倒れたって聞いてからみんなここに来ているんだ。オレは出遅れた方だから仕事は書類整理しかなかったけど」

それだけで見ても周がどれだけ慕われているかわかる。倒れた時だからこそ、みんな周の力になりたいのだ。

オレはデバイスに出力装置を取り付けてメールを確認する。入って来ているメールの大半は仕事が終わったということだが、一つだけ荒事関連があった。

その内容ひ斜め上から斜め下に流し読む。

「オレは待機するから行けないけど、二人に適当な仕事だ」

「喧嘩の仲裁って」

由姫が苦笑いを浮かべたのがわかる。とある高校二つの番長とその配下が廃工場後で睨み合っているらしい。

こういう荒事なら二人が第７６移動隊の中で一番適当だ。

『ひとっ走りして行ってくる』

「あっ、抜け駆けはしないでください」

二人が全力で走り抜けて行く。それを見ながらオレは小さく息を吐いた。

「若いって、いいよね」

「悠聖も十分若いと思うな」

その言葉と共にオレの背中に誰かの体重がかかった。オレの頬を黒髪が撫でる。この感覚でわかるからな。

「優月に比べれば」

振り返った先には優月がいる。少し離れた場所にはアルネウラの姿もある。アルネウラの姿は変わっていないが、優月の身長はいつもよりも高い。表すなら清楚な少女をそのまま大人にした姿。水色のワンピース姿だがそれがかなり似合っている。

優月は精霊としても特殊で成長する。誰もいないところでは大人の

優月として現れる。別の言い方をすれば誰かがいれば狭間市の時から同じ姿でいる。

このことを知っているのはオレと周の二人だけ。精霊には周知の事実らしいけど。

『むう、二人でいい雰囲気になってる。悠聖の恋人は私なんだよ』

「わかってる。私は悠聖を盗む女狐だから」

『堂々と宣言するんだね。だったら、勝負するよ。第１９３回悠聖争奪戦で』

「望むところ」

オレは小さく溜息をつきながら二人を見る。相変わらず、二人の姿はいつ見ても見飽きないものだった。

ただ、１９３回も争奪戦をするのは勘弁して欲しい。

『争奪戦の内容はケイドロだよ』

「大人しく鬼ごっこにしろ！」

毎回つっこみを入れる立場を考えて欲しい。

第二十三話　暗躍する存在

漆黒の剣が軌跡を描く。だが、それは同じように軌跡を描いた白銀の剣によって弾かれた。

孝治が運命を構える。周囲にいるのは何人ものローブを着た者達。男女様々であるが、学園都市にいる学生でないのはわかる。その面々に孝治は囲まれていた。

エネルギーバッテリーを新しいの変えながら孝治は周囲を警戒する。数は大したことがない。だが、その質は桁違いまでに高いものだった。まるで、エース級が揃って襲いかかったかのように。

孝治の額に汗が流れる。

「貴様ら、何者だ」

「答える義務はない」

その言葉と共に孝治にローブを着た人達が襲いかかる。孝治は素早く飛び上がった。だけど、大半が孝治に追随するように飛び上がる。

多勢に無勢。もし、周がいれば話は変わったかもしれないがそうは言ってられない。

「くっ」

放たれた魔術を運命で受け流し、素早く迫って来ていた男を斬り裂

いた。

だけど、まだまだ敵はいる。

「単独行動は失敗か」

孝治は運命を握りしめる。

「謎の情報？」

その話を孝治が聞いたのは周が倒れたと聞いて駐在所に戻ってきた時だった。委員長が記憶デバイスを片手に頷く。

「うん。調べてみたらナイトメア関連みたいで。さすがに、これは事務として指示は出したらダメだなってね」

「周についていなくていいのか？」

孝治はその記憶デバイスを受け取って尋ねる。治療が必要なら委員長の出番だが、ここにいる以上、さほど重体ではないのだろう。

孝治が出力装置に記憶デバイスを差す。そこから立体ディスプレイに出力させた。

「アリエとベリエの二人が先に治療を終えていて。私の出番はなしだったよ。そこまで重体じゃないけど、三日間は安静にしてくれな

いと」

「三日か。怪我は胸部から腹部にかけての貫通と聞いたが？」

「うん。戦いながら治療したみたいでほとんど塞がっていたけどね。命に別状はなし。さすが海道君というべきかな」

「その怪我で戦闘中に治療とは。相変わらずの化け物っぷりだ」

普通はそんな傷を受けたら致命傷かよくて動けないのどちらかのはずだ。だけど、周は戦闘をしながら治療した。精神論だけではどうにかならない。

「治療兵いらずだとは思うけど、かなり無茶はしたみたい。私の知る限り、三日間の安静ってほとんどないから」

「デュアルオーバードライブを使って魔力回路がズタズタになって以来だな」

「あれは話が別だと思うけど」

孝治が立体ディスプレイを操作して謎の情報を読む。そこには確かにナイトメア関連の話があった。

白い粉とローブを着た人達。それが商業エリアにあるとある廃ビルの中で見かけたという情報だった。

確かに、これだけあれば調査に入るには十分である。

「匿名の情報か。周達がいった廃工場と一緒だな。罠か？」

「アル・アジフさんから聞く限り、廃工場の方は罠じゃなかったみたい。罠というより侵入者を排除しようと幻想種が出てきたって聞いたし」

「内部告発というわけではないな。『ＧＦ』よりも広い情報網を持つのか」

『ＧＦ』ですら掴んでいない情報をここまで言ってくるなら『ＧＦ』以上の情報網を持っているようだ。ただ、それが孝治からすれば疑問に思ってしまうレベルである。

孝治は自分のデバイスを手に取った。

「俺が行こう。様子を見てくる」

「一人で？」

「ああ。様子を見るだけならそっちの方がやりやすいからな」

そう言いながら孝治は運命を取り出して腰に身につける。

「一応、光と冬華に連絡を頼む。目的地が近いからな」

商業エリアに存在する数少ない廃ビル。そこはかなり広大なエリアだった。孝治が見ているディスプレイには元はスーパーとして計画

されていたらしい。だが、計画元の会社が倒産。とある不動産が買ったらしいのだがそれから全く発達していない。

孝治はディスプレイから目を離した。すでに日は傾き夜が近くなっている。周囲に人の姿も少ない。完全に夜になればそれこそ孝治のフィールドだ。

「行くか」

孝治は走り出した。そして、廃ビルの中に飛び込む。廃ビルは三階立て。すかさず孝治のレアスキルである『影渡り』で三階まで飛んだ。

広がっているのは広大な空間。ただし、何もない。運命を鞘から抜きながら周囲を見渡す。

運命にエネルギーバッテリーを装着して歩き出した。

「気配はない、が、何かはあるな」

そう言いながら孝治が音を立てないように足を少し強く動かした。しかし、埃は立たない。

あまりに床が綺麗だ。いや、綺麗すぎる。

「何か、いるな」

そして、地面を蹴る。それはほとんど無意識の動作だった。孝治がいた場所に矢が突き刺さる。

孝治はすかさず運命を振り切った。

何かの感触とともに何かを吹き飛ばす。

「確かに、ナイトメア関連だな」

周囲に現れる人達。いつの間にか孝治は囲まれていた。ローブを着た人達に。

「『悪夢の正夢（ナイトメア）』。少し尻尾は掴ませろ」

光と冬華の二人は走っていた。目的は孝治が向かった廃ビルの方角に。

二人の仕事が終わり委員長からの連絡を確認した光が全速力で走り出したのだ。それを冬華が追っている構図でもある。

「光！　先行しすぎよ！」

「今だけは許して！　飛行許可おりひんかったし」

「だから、私も行くって行っているでしょ」

光は速度を緩めない。レーヴァテインを握りしめて走る速度を上げる。

『GF』が武器を持ちながら走るのは緊急事態という意味でもあり、救急車が通る道のごとく人が別れていく。

冬華は小さく息を吐いてさらに走る速度を上げた。

「こっちよ！」

光の手を取り路地裏に入る。そして、壁を蹴って近くの建物の屋上に上がった。光を引っ張りながら。

でたらめな力だが、氷魔術をフルに使い落ちないように方向性を変えているためでもある。

屋上に上がってさらに床を蹴る。建物の屋上から屋上に向かって跳ぶ。

「目的地の廃ビルはこの道がショートカットよ」

「本当？　でも、どうして知ってるん？」

「アリエル・ロワソ様からの教え。自分のホームグラウンドの地形くらいは覚えておくようにって。ショートカットなら周に勝つ自信があるわ」

「確かに海道は勝たれへんな」

二人が屋上を跳ぶ。そして、目的地を見つけた。目的地の三階にある窓から見えるのは火花。まるで、武器と武器がぶつかり合うような。

「フェンリル！」

冬華はすかさずフェンリルを呼び出した。フェンリルは即座に窓に飛び込む。そして、窓を割って中に飛び込んだ。

冬華も刀を取り出しながら飛び込む。そして、目の前に運命が迫っていた。

「ちょっと！」

すかさず宙返りを行って運命をギリギリて回避する。運命を振り切った孝治も少し驚いたまま何事もなかったように背後から斬りかかってきたローブの男の槍を受け止めた。

「冬華か」

「冬華かじゃないわよ！　味方を殺すつもり！？」

「つい」

「ついって何よ！」

冬華が叫びながら放たれた矢を刀で叩き落とす。そして、刀を弓を持つローブの女に投げつけた。刀が突き刺さり、女が倒れる。そこに飛びかかるローブの人達。

「邪魔」

冬華は腕を振った。それと同時に投げた刀がまるで鎖がついているかのように動いた。

冬華の手に刀が戻ると同時に斬り裂かれ倒れるローブの人達。

「なかなかやるな」

「誉めても何も出ないわよ。それにしても何なの？」

「わからない。急に襲われた」

「どうせナイトメア関連でしょうけど」

二人が背中合わせでお互いの武器を構える。ローブの人達は一部が倒れている人を、残りが二人を囲んでいた。

うかつに飛び出せない。

「さて、これからどうするつもり？　完全に膠着よ」

「膠着だな。まあ、いいだろう。もうすぐ夜だ。そうなれば」

「引け」

急に響いた声にローブの人達が動き出す。二人が呆然すると同時に撤退する面々の中から一人だけが二人の前に出た。

ローブを着た男。被ったフードからは微かに赤い髪が見えている。

「てめぇら、第７６移動隊だな」

「何者だ？」

孝治が尋ねる。男はニヤリと笑みを浮かべた。

「今は名乗る名はないな。今度会う時に名乗ってやるよ。生き残れたらな！」

その瞬間、そのフロアが一気に炎に包まれた。孝治と冬華の二人にも炎が迫る。

「運命！」

「フェンリル！」

お互いがお互いに最大限の力を使い炎を止める。孝治は運命によって炎を斬り払い、冬華はフェンリルの力を借りて炎を止める。

だが、その時には男の姿は無かった。

「逃げられたか」

「今はここから脱出する方法を考えた方がいいわよ」

「大丈夫だ、問題ない」

その瞬間、周囲にあった炎が全て炎の蝶に変わった。それと同時に『炎熱蝶々』を背中から出す光が部屋の中に入ってくる。

大量の『胡蝶炎舞』と共に。

「大丈夫？」

「助かった」

そう言いながら孝治は光に向かって笑みを浮かべた。

第二十四話　休日

目が覚める。それは一日の合図。だけど、オレからすればそれは日常にいることへの確認。

『赤のクリスマス』の悪夢を見た日はいつもそうだ。いつも自分の左腕を触って確認する。不安なのだ。オレはまだ『赤のクリスマス』にいるんじゃないかと思ってしまって。

だけど、オレは右腕に何かの重みを感じた。左腕に触れない。

「周様、おはようございます」

その声の方向、正確には右を向く。そこには布団の中に入ってオレの顔を見つめる都の姿があった。

布団からはだけて見える部分は全て裸。その時、オレはようやく昨日の夜のことを思い出していた。そして、顔が一気に熱くなる。

「お顔が真っ赤ですよ」

そう笑う都の顔を見て、オレは恥ずかしくて顔を逸らした。昨日の夜は言うほどではなかったのだが一夜を過ごしてみると恥ずかしくて顔を合わせていられない。

「ふふっ、昨日の周様はあれほど可愛らしかったのに」

「頼むから言わないでくれ。恥ずかしくて死にそうだ」

都から見えるオレの顔は完全に真っ赤だろうなと思いつつゆっくり起き上がった。この時点でオレは上半身裸なのだが気にしない方がいいだろう。いや、気にしたら負けだ。負けなのだ。

オレは小さく溜息をついて都を見る。

「しちゃったんだよな」

「はい」

都の顔は本当に嬉しそうだった。その時のことを思い出しても顔が真っ赤に染まる。はっきりいってかなりキツい。

都はそんなオレ見て笑っている。

「周様らしいですね。そういう知識がほとんどないのは」

「仕方ないだろ。そんなは、破廉恥なもの、見る気にならない」

顔が真っ赤になりすぎて死にそうだ。都はそんなオレを見て笑っているだけでもある。

オレは手を顔に当てて息を吐いた。

「着替えるからこっちを向かないでくれ」

「いえ、私が部屋から出て行きますね」

その言葉に振り返ってみればいつの間にか都は私服に着替えていた。昨日着ていたような私服ではなく少し違う。違いを言うならロング

スカートが普通のサイズになったこと。上は普通に長袖だ。

都のことだからあまり驚かないが、いつの間に着替えたんだ？

「では、また朝食の席で」

そう言いながら都は部屋を出て行く。その姿を見ながらオレは小さく息を吐いた。

「制服に着替えないとな」

周の部屋から出た都を待っていたのは制服姿の由姫だった。由姫は都に近づいて都の匂いを嗅いでいる。

「都さん、兄さんと何をしていましたか？」

「秘密、にしたいところですが、由姫にも秘密にしません。私は昨日、周様に抱かれました」

「まあ、覚悟してはいましたけど、まさか兄さんの初体験が都さんになるなんて」

由姫は両手を壁について落ち込んだ。覚悟していたという割にはかなり落ち込んでいる。

都はクスッと笑って由姫に近づいた。

「大丈夫ですよ。周様は由姫さんのことが大好きですから。ちゃんとお願いすれば大丈夫です」

「本当？　お兄ちゃんは私を抱いてくれるの？」

「お前ら何の話をしているんだ」

周の部屋のドアが開き制服姿の周が現れる。その顔は未だに真っ赤だ。

「周様の着替えは早いですね」

「オレより早く着替える奴の言うことか？　とりあえず、下に降りるぞ」

「わかりました」

周の言葉に都はクスッと笑みを浮かべた。そして、呆然と固まっている由姫の手を引っ張って歩き出す。

由姫の顔は当然のことながら真っ赤に染まっていた。

「み、都さん。私、私」

「落ち着いてください。周様は否定はしていません。タイミングは悪かったですけど。でも、今は時間があります。周様はこれから三日間は安静に普通の学生になるはずですから。大丈夫です」

「う、うん」

由姫はゆっくり頷く。その真っ赤になった由姫の様子が可愛くて都が由姫に抱きつこうとした瞬間、

「由姫ちゃん可愛い！」

いつの間にか現れた音姫がかっさらっていた。都は苦笑しながら音姫を見る。

「音姫は相変わらず可愛いものに目がありませんね」

「うん。特に由姫ちゃんなんてお持ち帰りしたいくらい可愛いよ～。由姫ちゃん、私の着せ替え人形にならない？」

「それはかなり人権を損害していますよ」

溜息まじりに言う由姫に向かって音姫はウインクをした。

「大丈夫大丈夫。私が法律だから」

「全く大丈夫じゃないからね！　お姉ちゃん」

人はそれを唯我独尊と言う。

「音姫、これから三日間、由姫の仕事を私が肩代わり出来ませんか？」

「そのことで一つあるんだけど」

音姫は少し申し訳なさそうに由姫を見た。

「亜紗ちゃんとも休暇が被っちゃった」

「「へっ？」」

由姫と都の声が重なる。

「弟くんが大好きな由姫ちゃんのために休暇を頑張って作ったんだよ。主に私とアルちゃんの二人が負担する形で。そうしたら、亜紗ちゃんが元から三日間の休みがあった。てへっ」

音姫は最後に可愛らしく舌を出しているが由姫の反応は全く違った。由姫はその場に崩れ落ちる。そして、壁に手を当てた。

「不幸だ」

「亜紗ちゃんとも交渉したんだけど丸め込まれちゃった。ごめんね」

「音姫、いくつかの仕事を私に回してもらえますか？」

「お願い出来る？　私とアルちゃんだけじゃ少し辛いことが多いから」

「負担が増えるのは孝治と悠聖も同じだろ」

その言葉と共に周がカバンを持ってやってくる。そして、由姫の頭を優しく撫でた。

「三日間の安静か。二日じゃダメ？」

「強制的に弟くんを三日間眠らせることが出来るけど？」

「わかったわかった。由姫、さっさと飯食うぞ。今のオレはタイムトライアルに参加出来ないんだから」

「はーい」

少し拗ねたような由姫の声にその場にいた三人は笑みを浮かべた。

「「「えぇーーっ！！」」」

オレの耳にメグ、健さん、真人の声が響きわたった。何事かとクラス中の人達が一斉にオレ達の方を向く。ちなみに、オレは耳を押さえて隣にいたメグを睨みつけていた。

さすがにほぼ耳元で大声を出されたら耳が痛くなる。

「うるさいわ！」

「だって、だってだって、周の怪我ってかなり深かったよね？　だから、私は絶対安静になったものだと」

「迅速な治療は生存率を上げる。というか、勝手に入院させるな。まあ、心配してくれたのはありがたいけど」

どうやらメグは今日は来ないと思っていたらしい。まあ、無理もない。実際に『強制結合』がなければ今頃入院していてもおかしくはないからだ。

みんなの驚きは全員に話していたからだ。

「お腹を貫かれて致命傷ですらないとは。あなたは本当に人間ですか？」

「筋肉さえあれば人は生き残れるのさ」

「や、ワカメさんの言うことは私も思いますが、ハトさんの言うことは少し間違っていますよ」

確かに、筋肉さえあれば人が生き残れるなら由姫はおそらく最強だろう。

「由姫さん、体、引き締まっている、から」

「体重は平均より上っと」

オレはギリギリで由姫のかかとを避けた。由姫の顔には見事な笑みが浮かんでいる。目は全く笑っていないけど。

女の子に体重の話はタブーだっけ。

「うわっ。周ってチャレンジャーだな。年頃の女の子に体重の話は禁句じゃなかったっけ。まあ、俺には関係ないけど」

「健さんらしいね。でも、そんな風には見えないけどな。僕は痩せ

ているように見えるけど」

「真人、筋肉ってのは、脂肪よりも重いんだぜ。だから、由姫の体は筋肉で重い、おぐぉっ」

由姫の蹴りがハトの鳩尾に決まる。ハトはその場に崩れ落ちた。

「浅はかだな」

一誠が少し離れた位置から面白そうに言っている。確かに、当事者じゃなければ面白いけど。

「由姫さんは、そうは、見えない。普通に、可愛いし、わ、私なんて」

「確かに、のっぺらですね。残念、がはっ」

由姫とメグの拳がワカメを殴り飛ばした。うん、いつもの光景だな。

「口は災いの元だ」

一誠はクールに言っているつもりだが、その口元に浮かんだ笑みは隠せないでいる。まあ、その気持ちはわかる。

オレは夢の体を上から下まで見た。

「そうか？　夢も十分に可愛いと思うぞ」

その瞬間、夢の顔が真っ赤に染まった。何故か由姫からの視線が痛い。

「ジゴロ」

「あのさ、由姫。それは間違っていると思うぞ。ジゴロの意味はひもだ。ｂｙ国語辞典」

「普通は面と向かっていいませんからね。兄さんは顔も性格もいいんですからそんな甘い発言をしていたら勘違いされますよ。ロリコン兄さん」

「オレがいつロリコンになった？」

いつの間にか由姫が膨れている。そんな発言をした覚えはないんだけどな。女心は複雑だ。

「まあ、ロリコンの意見は無視して、夢は十分に可愛いと思うよ。健さんや一誠は？」

「確かに可愛いよな。ここにいる面々はレベルが高いぜ」

「賛成だ。中身と裏腹に凶悪な性格の人もいるみたいだが」

「誰のことですか？」

由姫のこめかみがピクピク動いている。オレはそんな会話に少しだけ笑ってから窓の外を見た。

久しぶりの完全休日。学園都市はいつも通りに平和だ。

第二十四話　休日（後書き）

次の話からあまり出ていない面々を出す予定です。戦闘はしばらくないかと。

第二十五話　弓道部（前書き）

作者は弓道なんて詳しく知りません（笑）

第二十五話　弓道部

チャイムが鳴り響いた瞬間、張り詰めていた空気が一気に緩んだのがわかった。その気持ちはわからないでもない。

「では、授業を終わります」

担当の先生が部屋から出て行き教室内は完全に放課後ムードになっていた。

いつもなら駐在所に向かうところだが、今は三日間の完全休暇。だから、駐在所にいっても仕事を手伝うことは出来ない。

「暇だ」

「えっと、今からようやく放課後だよね？　周は何もしないのかしら？　普通は私のように『ＧＦ』の仕事とか」

「オレは三日間の完全休暇だ。仕事をしたら怒られる」

「なるほど」

メグが納得したように頷いた。

中学生の時に幾らか和らいだとはいえ、普通とは異なった生活をしていたからな。こういう時は何をしようか本当に困る。

せめて何かすることがあればいいんだけど。

「おっ、周は暇なのか？　だったらオレ達と遊ばねえか？　暇なんだろ」

「それもいいんだけどな、暇だし学内でも見て回ろうかな」

「そう言えば、ゆっくり学校内を見て回ったことがありませんね。私もついて行きます」

そうと決まれば即行動っと。

「ちぇっ。せっかくＦＢＳを一緒にやれると思ったのにな」

「ＦＰＳ？　俺様達はそんなのしないぞ」

「ハト、真顔で言わない方がいいよ。ファーストパーソンシューティングじゃなくてフュリアスバトルストライカーズ。略してＦＢＳ」

聞いたことはあるな。フュリアスのコクピットを再現した装置で遊ぶゲームセンターの筐体だっけ。前に悠人が熱く語っていた。

反応がかなり遅いから実戦としては全く使えないと。リリーナが言うには練習としては普通に使えるらしい。

まあ、興味はあるけど値段が高いって噂だしな。

「健さんと僕のコンビは学園都市内部で最強だからね。だから、周達ならどうかと思ったんだけど」

「悪いが、オレの乗るフュリアスは普通のものとかけ離れているか

ら出来ないぞ」

というか、あんなのが実現する未来があるならオレは本気で驚いてしまう。マテリアルライザーはフュリアスの練習機よりも扱いにくい。

まあ、そんな二人と戦えるなら悠人とリリーナの二人だろうな。学園都市『ＧＦ』のフュリアス部隊の中で一番合っているのがこの二人だし。

「残念。すごいＦＢＳパイロットはいないのかな？」

真人は本当に残念そうに笑った。

オレは知っているが言うほどのことではないだろう。

オレがカバンを掴んだ時、夢が何かを決めたように近づいてきていた。

「あのさ、周君、もし、良かった、ら、弓道部、に、来ない？」

「弓道部？　そういや、孝治が時々参加してるって聞いたことがあるな」

弓道と孝治の使う魔弓は少し違うが、実体のあるものかないものかの差以外は共通性が多い。

魔力の矢も風の影響を普通に受けるからだ。だから、弓道をやるのは『ＧＦ』の弓使いとしては当たり前でもある。

「うん。先輩も、連れて来て欲しいって。ダメ、かな？」

「いや、大丈夫。由姫も大丈夫だよな？」

「大丈夫ですよ」

由姫も頷いてくれる。オレはカバンをしっかり握り立ち上がった。

矢が高速で空間を駆け抜ける。そして、的に突き刺さった。すかさず放たれる矢。それも的に突き刺さる。

オレは孝治の矢の放ち方を見ていた。完全な精神集中と共に連続で放たれる矢は的に確実に突き刺さる。完全に集中した孝治には聞こえていないだろうな。

「きゃーっ！」

「孝治くーん！」

「すごーい！」

一言で片付けるなら取り巻き達。ただし、弓道場の外から見ている。孝治はなんだかんだ言って優しいからな。

それにイケメンだし。

孝治は小さく息を吐いて弓を下ろした。的には５８にものぼる矢が突き刺さっている。これを一分間で放ったと聞いたら誰もが疑うだろう。

「周、来ていたのか？」

そこでようやく孝治がオレに気づいた。オレは軽く肩をすくめる。

「さすがだな。ペースは遅かったけど」

「ここでは精神集中で放つのが目的だ。数を打つわけじゃない」

「納得」

孝治と話していると未開封のペットボトルが横から差し出された。

「花畑君、お疲れ。そして、君が海道君か。星村君が連れて来たみたいだね。私は弓道部キャプテン折原皐月。よろしく」

「第７６移動隊隊長海道周。孝治が世話になっていたしちょうどの機会だからやってきた。ところで」

オレは頬をかきながら周囲を見渡す。弓道部の部員らしき面々がいつの間にか取り出したカメラや色紙を構えていた。夢が少し離れた場所で申し訳なさそうな顔になっている。

今から色紙を書く時間になるのか。

「ちょっとの間部活を休憩にしてもらっていいか？」

「私の分も頼む」

そう言いながら折原皐月も色紙を差し出してくるのであった。いや、まあ、覚悟をしていないわけじゃなかったけど。

こういうことは昔にはなかったなと思いつつオレは色紙を手に取った。

的に矢が突き刺さる音が鳴り響く。孝治がしていたような高速かつ連続で突き刺さる音はあまりない。まあ、これが一般的なんだけどさ。

その様子をオレは見ていた。集中しだしたらオレらの存在を忘れてみんなが黙々ど矢を放っている。一部はオレをチラチラ見ているけど。

名を挙げるなら夢。夢はチラチラとこちらを見て弓を構えている。普通は当たらないはずなのだが、矢は的の中心を捉えていた。

かなりの技量、というより戦闘経験がありそうな感じだ。

「海道君はどうやら星村君にご執心らしいね」

折原皐月がオレの横に座ってくる。オレは軽く肩をすくめた。

「そりゃな。夢は弓道部の中でもかなり強いだろ？」

「見ていればわかると思うが、一年の中で唯一弓を触っている。それは彼女が桁違いに強いというわけだ」

他の一年生らしき姿は弓道場の隅の方で精神集中をしていた。一年生としてはよく見る姿でもある。

ほんの少し前までオレと孝治と一緒に写真撮影とかしていたのにな。

「星村君の実力はここにいる誰もが知っている。だからこそ、一年であの場に立てる。私ですら最初は全く立てなかったのにな」

「夢はそれほどまでにすごいのか。ただ」

オレは夢と視線が合った。夢は慌てて視線を逸らす。それを見ていたオレは微かに目を細めた。

「警戒しているのか？」

「警戒？」

「いや、なんでもない。というか、うちの孝治は迷惑になっていないか？」

「とんでもない。花畑君は弓道部になくてはならない存在だ。彼は教えるのが上手くてね、私がキャプテンになれたのも彼のおかげだ」

「確かに孝治は教えるのが上手いよな」

オレと孝治は戦い方がある意味正反対だからお互いに弱点を言い合

うことがある。その時の孝治の言葉は極めて正確であり、アドバイスは極めて役に立つ。

他にも教えてくれることは極めて正確だ。

「孝治が役に立って良かった。これで邪魔になったら土下座しないとダメだった」

「ははは っ。それはないよ。君を呼んで良かったみたいだ。みんなリフレッシュ出来たようだしね」

確かに的にたくさん当てている。それを見ている限りオレの行動は上手くいったものだと考えていいだろう。

オレは小さく息を吐いて立ち上がった。その音に今まで瞑想していた由姫も目を開けて立ち上がる。

「なら、オレ達はそろそろ行くとするよ。今日はありがとうな」

「こちらこそ。それにしても、君の妹はすごい集中力だったね。その秘訣を教えてもらいたいよ」

確かに由姫の瞑想はすごかった。オレの音以外には全く反応しないというところも。由姫の頭の中ではオレ以外が排除されてそうだ。

由姫は少しだけ苦笑する。

「三日間飲まず食わずで瞑想をし続ければ嫌でもこうなりますよ」

「ふむ、チャレンジしてみようか」

「頼むから止めてくれ」

オレは小さく溜息をついた。

第二十六話　合流

弓道場を後にした時にはまだまだ日暮れまで時間はあった。弓道場にそんなに長くいなかったからだが。

これからどうするか。

「お兄ちゃん。商業エリアに向かわない？　デートしに」

「商業エリアに向かうのはありだな。というか、完全休暇だもんな。事務作業はダメ？」

「ダウト。お兄ちゃんは働きすぎだから。今日、明日、明後日くらいはゆっくり過ごすこと。いい？」

「わかった」

由姫がいる以上、目を盗んでというのもダメだな。三日間も『ＧＦ』の事務作業すら関わらないのは初めてだ。今までは一日中ゴロゴロしていた経験はあるが、三日間はない。

今やっている案件も三日間の内でかなり進みそうだけど、音姉や孝治がいればどうにかなるだろう。

オレは小さく溜息をついた。

「なら、商業エリアにでも向かうか。まあ、やることはないからぶらぶらとして」

「なら、私の下着選び」

「却下。単独行動してやるぞ」

「じょ、冗談ですってば」

あははと由姫が笑う。もし、そんなことになったならオレは本気で単独行動に走るだろう。

由姫もそれがわかっているからしつこくは食い下がらない。

「まあ、何も買わずに歩いていれば楽しいと思うし。それに、お兄ちゃんとだから私はどこでもいいよ」

「そう言われると困るんだよな。まあ、商業エリア向かってからでも」

『遅い』

オレの目の前にスケッチブックが差し出されていた。校門の前でずっと待っていたのだろう。少し不満そうな顔の亜紗が本当に不満そうにスケッチブックを差し出している。

そう言えば、亜紗も休暇が被ったらしいな。

『五時間目から待っていたのに』

「授業中だろ？」

『私が法に縛られない』

それはあまりに唯我独尊すぎる。まあ、亜紗の学力から考えて別に授業をサボってもどうにかなるだろう。

授業をサボるくらいじゃ都島学園都島高校は何ら干渉すらしてこない。不気味なまでに。

『周さん、商業エリアに私と二人でデートしよ』

「むっ、兄さんとデートをするのは私です。亜紗さんの出番じゃありません」

『本当は休みじゃないくせに』

「それを言われたらどうしようもありませんがって、兄さん！　どこに行くんですか？」

オレは言い争いを始めた二人を置いて歩き出していた。こういう時になったら二人はかなり不毛だ。どれくらいかと言うと今熱中しているものを語り出した二人くらいに不毛である。

そういう時はまずはオレが動かないと。

「さっさと行くぞ。今日は三人で街に繰り出すんだからな」

商業エリア東地区リュミエール。

そこは巨大な複合百貨店のような場所だった。簡単に言うならこの場所で揃わないものはないというくらいに。

売り場面積で見れば世界最大級だったか。そのためかたくさんのカップルがうろついている。

そんな場所にオレ達はいた。オレ達がいるのはリュミエール三階にある小さな喫茶店。繁盛しているというわけではないが、オレ達がここらへんにくれば必ずと言っていいほど来る場所だった。

言うなら第７６移動隊御用達でもある。ここのコーヒーと紅茶は高いが学園都市では最高峰だとオレは感じている。

オレはコーヒーのカップを受け皿に置いた。

「ウインドウショッピングじゃなかったのか？」

「つい」

由姫がそう言いながら自分の椅子の隣にある紙袋をオレから隠すように動かした。亜紗は元から本を買うつもりだったのか数冊の本を買っている。

オレは小さく溜息をつきながら紙袋を見る。

「単独で何を買ったんだ？　オレ達と一緒だとダメだったのかよ」

「えっと、それは秘密です」

『勝負』

亜紗が開いたスケッチブックにはその二文字が踊っていた。それを見たオレは首を傾げ、由姫は完全に慌てている。そして、スケッチブックを力づくで閉じた。

亜紗が不満そうな顔で由姫に向かってスケッチブックを開く。

『私は事実を言っただけなのに』

「事実は時に人を傷つけるものです。特に、今回のようなことは」

『大丈夫。周さんはすぐに見る』

「言わないでください！」

由姫が珍しく亜紗相手に涙目になっている。基本的には音姉かアルのどちらかが涙目にするのに今回は亜紗だ。

いつもは由姫が亜紗を涙目にするのに。

「すぐ見るってことは服か？　また、前の時のように見せてくれよ」

あの時の服は似合っていたからな。まさか、由姫が赤色で統一しただけであそこまでよくなるとは。

次はどんな服を見せてくれるんだろう。

『由姫は意外とアクティブ』

「違いますから！　私服を見せただけです。赤のあれを」

『確かにあれは似合っていた。どうやったら赤を上手く着こなせる？』

「そんなことはわかりません。私はただ気に入ったから買っただけです」

由姫がどこか恥ずかしそうにそっぽを向く。実際に恥ずかしいんだろうな。由姫って服に関してはずぼらな部分がある。

例えば、一日の大半を制服で過ごすとか。

『でも残念。周さんは制服フェチ』

「いきなり変な嗜好をつけるな。で、これからどうする？　リュミエールをもっ、てぇ？」

「兄さん？」

オレが急に言葉を止めたことを不思議に思った由姫と亜紗が同時にオレが見ている方向を向いた。

そこにいるのはキョロキョロと周囲を見渡す悠人。ここまではいい。その悠人と手を結んで歩くウェーブがかかった長めの金髪に帽子とサングラスをかけた小柄な少女。服装はイメージ清楚。そして、確実に伊達眼鏡をかけたルーイ。

まあ、ルーイがいる時点で少女が誰かわかるけど、まさかのだな。

悠人が小さく溜息をつく。そして、オレ達がいる喫茶店の中に入り、

オレ達の方向を向いた。
亜紗が三人にスケッチブックを見せる。多分、カモ～ンとか書かれているんだろうな。
「き、きききき、きききききき」
「悠人落ち着け。僕の耳にはきしか聞こえていないぞ」
「きききききき奇遇ですね。周さんも、あいたっ」
とりあえずオレは一発殴ることにした。
「あんたらが来るとは聞いていないけど？　メリル、ルーイ」
「わ、私はメリルと言う名前ではありません。ルリメです」
「メリル、さすがにそれは苦しいぞ。僕達はお忍びできた。だから、『ＧＦ』の上層部にも話を通していない」
それは違法入国になるのだが、まあ、悪さはしないだろう。多分。
見つかったら怒られるですまないだろうがどうにかしないとな。こういう時には色々と安全マージンを払っておくべきか。
「第７６移動隊隊長としてメリルの訪問を認知していたことにする。それだったら文句はないだろ？」
「周さん、ありがとうございます。僕もメリルが来た時は本当にどうしようか悩みましたから」

確かにそうだろうな。メリルは音界の歌姫。凄まじく重要な位置についている。ルーイという護衛がいても音界と人界じゃ能力がかなり違うからな。

一応はオレ達もいた方がいいか。

「由姫、亜紗、悪いけど護衛という理由で一緒に行動していいか？さすがに放っておけない」

「ですよね。わかりました。みんなで楽しんだ方が楽しいですし。亜紗もそれでいいですよね」

『仕方のないこと。ちょっと残念だけど』

二人共顔がかなり残念そうだけど。まあ、その気持ちは分からないでもない。だが、我慢して欲しい。

オレは小さく息を吐いてカップを手に取った。

第二十七話　本職の二人

リュミエール内の喫茶店から離れたオレ達はリュミエール内部を回っていた。メリルが悠人によって先導され、ルーイがメリルの横に。オレと亜紗、由姫は少し後ろからついて行っている。

メリルはほとんどのものに興味津々らしく悠人に様々なことを質問していた。

「なあ、ルーイ」

「何だ？」

オレがルーイの名前を呼ぶとルーイはこっちにやって来た。オレは少しだけ二人から前に出てルーイと並ぶ。

「メリルはこういうところに来たことがないのか？」

「ああ。音界にはこのような場所はないからな。僕もかなり驚いている」

「全く見えないけどな」

ルーイはほぼポーカーフェイスでメリルを見守っていた。

まあ、ルーイは結構ポーカーフェイスが出来るやつなんだけどな。

「しかし、人界にはこういう建物がたくさんあるんだな」

「リュミエール、ここは学園都市最大にして世界最大級だったかな。由姫は知ってるか？」

「ほんの少しの差で世界最大級ですよ」

「だそうだ」

世界最大級でこの広さだもんな。というか、広すぎて迷子になったらかなり大変だろう。

ルーイもそれがわかっているのかメリルからほぼ目を離さない。

「まるで父親だな」

「幼なじみなだけだ。それに、悠人じゃ危ない気がして目を離せない」

「同感だ。知り合いがいれば確実に慌てるだろうな。それが目に見えている」

悠人はそういう奴だ。そういう奴だからこそみんなからかなり愛されている。悠人は隠し事が出来ない正直者だから。

そんな純粋な奴が社会ではなかなか生き残れないけど、悠人ならのらりくらりと何とかしそうだ。

「今回の滞在はどれくらい？」

「明後日には帰る。新しいアストラルタイプの機体がロールアウトしたからな。マッシバ隊長が乗る予定だ」

「確か、音界一のフュリアス乗りだったか？」

確かそんな話を聞いたことがある。音界からこちらに来たことはないがかなりの腕前だと悠人から聞いた。

人界最強のフュリアス乗りとして悠人は戦いたかったんだろうな。

「ああ。現在ロールアウトされている最新型アストラルソティス。僕はその悠遠タイプ。マッシバ隊長は伝承タイプに乗っている」

「何でもぶった斬るタイプだったっけ。フュリアス乗りからしたら悪夢だろうな」

「確かに、マッシバ隊長はあらゆる攻撃を回避して近接し攻撃を叩きつけるのが主体だ。回避には定評がある。もっとも、死角からの攻撃には無理だが」

そう言いながらルーイは悠人を見た。悠人はルーイのフレキシブルカノンを全て避けた。さらには、死角からの多方向同時攻撃すらも避けた。

どう考えても人間という範疇には収まらない。まあ、オレもだけど。

「だからこそ、悠人は最強のフュリアスパイロットなのだろうな」

そう言いながらルーイは笑みを浮かべる。ルーイにとって悠人はライバルだ。おそらく悠人もルーイをライバルだと思っているだろう。

それぐらいまでに二人の技術は極めて高い。

「悠人、あれは何ですか？」

メリルが指差した先をオレ達は見た。そこにあるのはリュミエール内部にあるゲームセンター。

日本最大級のゲームセンターであり様々なゲームがおいてある学生達の憩いの場。

確か、健さん達がこのゲームセンターにいるはずだ。

「ゲームセンターだよ。様々なゲームがあるんだ。周さん、寄ってもいい？」

「亜紗と由姫から離れないなら」

「はーい。メリル、行こうよ」

「はい」

二人が歩き出す。手を繋ぎながら。それを見たオレは小さくため息をつきながら振り返った。

「頼めるか？」

『私は大丈夫。由姫の方が適任だけど私達で頑張るから』

「わかりました。亜紗さんは兄さんに近い位置にいてください。一応、兄さんは戦えない状況ですから」

オレは軽く肩をすくめながらペンダント形態のレヴァンティンを取

り出した。そして、それを二人に見せる。

「一応レヴァンティンは携帯しているから」

『私が許可をするとでもマスターは思っていますか？　少しは自分の状態に気をつけた方がいいですよ』

デバイスから拒否された人間って絶対にオレが最初だよな？

その言葉を聞いた由姫がクスッと笑う。

「兄さんは大人しくしてください。亜紗さんなら兄さんと話せますから危険も少ないですし」

「知っていたのか？」

「亜紗さんとアル・アジフさんから聞いています。だからこそ、私は負けたくありません。亜紗さんにも」

そう言って由姫が二人を追って駆けていく。その様子を見ていた亜紗も由姫の後を追って歩き出した。

その様子を見ていたオレは小さくため息をつく。

「どうかしたのか？」

「いや、いつの間にか頼れる奴らになったんだなと思ってさ。さてと、オレ達も行きますか」

リュミエール内部にあるゲームセンター。名前はゲームワールド。安直な名前ではあるがメーカーの枠を越えた様々なゲームがあり、ゲームセンターとしてはかなりの異色を放っている。

極めつけがその値段。基本的に百円だ。だが、通常百円のゲームに関しては2プレイ百円という値段設定。

それにはとある理由がある。このゲームセンター内のゲームはは日本でも最新機か先行設置のものばかりだ。簡単に言うなら学生の評価を見ているテスト場所と言ってもいい。

その中でも『ＧＦ』と『ＥＳ』が共同で作ったシュミレーションゲームがＦＢＳだ。その人気は桁違いに高い。だって、

「ここの経営者はバカですか？」

メリルの頬が引きつるくらいに。だって、全四階あるゲームワールドの中でＦＢＳフロアは三階全て。総設置台数は百を超える。

「一応、理由はあるんだけどね。ＦＢＳは元々はフュリアスのパイロット候補生を鍛えるシュミレーション装置だったんだけど、フュリアスを擬似的に扱えるからゲーセンに置いて欲しいという声が出て」

「おかげでゲームセンター用に作り上げるだけで一ヶ月も技術部が操業ストップしたからな」

本気で笑えない話である。ちなみに、学園都市内部では1プレイ百円だが、学園都市外では三百円かかる。

「楽しいのですか？」

「メリルもやって見る？　えっと、列は」

「あれ？　何で周の姿があるんだ？　やっぱりＦＢＳしに来たのか？」

声がかかった方向を見ると、そこには健さんと真人の姿があった。どちらも近くの筐体に座っている。

そして、その手はせわしなく動いていた。

「こいつ、やるな」

その動きを見ながらルーイが小さく呟く。確かに動きはすごいけど、そこまでのものなのか？

「健さんはさすがだね。余所見をしながらＣＰＵを倒すなんて」

「そんなの簡単だろ。だって相手はエクスカリバーとアストラルソティスだぜ。ＦＢＳで使える機体でワーストとブービーの機体。見なくても勝てるって」

その時、三人のキレる音がオレの耳に鳴り響いた。オレは小さくため息をつく。

まさか、オレ達の前でエクスカリバーとアストラルソティスを批判

するとは完全に予想外だ。予想外すぎて笑えてくる。

「悠人、このコクピットは音界規格と同じなんだな？」

「うん。乱入、入れるよ」

確かに向かいの席には誰もいない。健さんと真人はＦＢＳじゃ学園都市最強だって聞いたからな。誰も相手をしたくないのだろう。

だけど、今から立ち向かうのは本職の二人。エクスカリバーとアストラルソティスはそれら特有のクセをプログラミングされている。未だにそれを掴めた人がいないのだろう。

多分、健さんや真人も。

そもそも、データを取れたエクスカリバー自体が悠人しか使えない機体で、アストラルソティスはルーイの悠遠タイプしか取れていない。

「悠人、ルーイ、本気でお願いします」

メリルもキレている。まあ、気持ちはわかる。

「本気？　そんなものじゃ生ぬるいよ」

悠人は笑みを浮かべた。

「本物を見せる。それだけだよ」

悠人とルーイが席に座る。それに気づいたギャラリーが筐体の近く

かモニターの近くに集まりだした。

チャンピオンに挑む無名の二人だもんな。注目の的になるわ。

「レヴァンティン、時雨にメリル達がお忍びでついたことの連絡を」

『いきなり安全策ですね。まあ、仕方ありませんけど』

レヴァンティンが納得したように言う。

悠人が選んだのはエクスカリバー。ルーイが選んだのはアストラルソティス。

「おいおい、素人が最弱機体使ってるぜ」

「何秒で負けると思うよ？」

「俺二十秒」

すでに会場は二人が負けることが確定しているらしい。その声を聞きながらオレは笑みを浮かべていた。いや、オレだけじゃない。オレとメリルは笑みを浮かべていた。

「人界最強のパイロットと」

「音界最強クラスのパイロットを」

そして、オレ達の声が重なる。

「「なめるな」」

第二十七話　本職の二人（後書き）

次話で軽く戦闘が入ります。ＦＢＳの戦闘ですが。

第二十八話　最強のリアルパイロットＶＳ最強のＦＢＳパイロット（前書き）

ＦＢＳはイメージではガンダムＶＳと戦場の絆を合わせた感じです。

第二十八話　最強のリアルパイロットＶＳ最強のＦＢＳパイロット

僕はレバーを握りしめる。ＦＢＳは何度かやったことがあるがエクスカリバーの癖を忠実に再現していた。

変形時におきる微かなタイムラグ。それはタイミングが合わなければ棒立ちになる瞬間が起き、そのタイミングを合わせるには本当に細かなペダル操作が必要となる。

それはエクスカリバーに存在する致命的な欠陥ではあるが、エクスカリバーを熟知した僕からすれば感覚を失っても成功出来るタイミングだ。

アストラルソティスはまだタイミングはましだがかなり難しいものがある。でも、ルーイなら大丈夫だ。

僕達の前にある画面が変わる。そこに広がっているのは戦場。相手の機体はアストラルブレイズ。アストラルソティスに乗る前のルーイの機体だ。

ＦＢＳにはコストという概念があり、コスト１００００を切る前に相手のコストを削らないといけない。コストは普通２０００や１５００だが、アストラルブレイズは２５００。エクスカリバーとアストラルソティスは３０００。ちなみに、二機だけのコスト３０００にして不人気な機体。

戦いが始まる。アストラルソティスが前に出て僕が後方から援護をする。いや、違う。僕がすべき行動はあれだけだ。

ゲームが開始する。その瞬間、僕はエクスカリバーを変形させて前に加速させた。広がるどよめき。それを聞きながら僕は距離を詰める。

アストラルブレイズは手に持つエネルギーライフルの引き金を引いた。放たれるエネルギー弾を紙一重の軌道で回避する。

ＦＢＳの特徴として攻撃には誘導性が存在する。その誘導性は威力が低い武器ほど高いことが多い。

それを回避する方法は色々あるが、エクスカリバーにしか出来ない特殊な回避の仕方がある。

エネルギー弾をかすめて避けるやり方だ。それが一番特殊な回避で、回避時に使用するエネルギーゲージの消費をゼロで扱える。

エネルギー弾を紙一重で回避する。もちろん、ほんの少しかすめることは狙っている。

ＦＢＳの立ち回りとして不用意に突撃しないことが上げられる。エネルギー弾の回避の方がエネルギー弾を放つよりエネルギー消費が激しいからだ。だから、二機のアストラルブレイズはエクスカリバーに向かってエネルギー弾を放っている。

でも、残念ながらエクスカリバーのエネルギー消費は未だにゼロ。ゲーム専用のスキルだからかなり凶悪だ。

エネルギー弾をギリギリで回避した瞬間に僕はエクスカリバーを変形させた。エネルギー弾を回避しながらエクスカリバーが変形する。

多分、相手からすれば好機だと思ったのだろう。一体のアストラルブレイズが飛び出してきた。エネルギーを消費する加速を使いながら。

普通なここでタイミングがズレてエクスカリバーはストップする。だけど、僕はペダルを上手い加減で踏み込んだ。そして、そのまま前に加速する。

ほんの少しだけとあるタイミングで加速をすれば継続的に加速することが可能なのだ。

アストラルブレイズがエネルギーサーベルを振り上げる。だけど、僕はそこに再度変形させたエクスカリバーを突撃させた。

がら空きの胴体にエクスカリバーが突き刺さりアストラルブレイズが吹き飛ぶ。この時にアストラルブレイズのライフは約半減していた。

もう一方のアストラルブレイズはエクスカリバーに向けてエネルギーサーベルを振り上げている。確かに正しい反応。だけど、僕はエクスカリバーを変形させながら蹴りを放っていた。

エネルギーサーベルを避けるようにエクスカリバーが動き、アストラルブレイズを蹴り飛ばす。

ちなみに、この蹴りは変形したのと同時に絶妙ペダル操作をしなければならない。実戦でも使えるものだ。

ただ、相手のライフはあまり減らないけど。

蹴り飛ばしたアストラルブレイズが宙返りを行って体勢を戻す。だけど、その背後からアストラルソティスが斬りかかった。アストラルブレイズは回避する暇なくエネルギーサーベルによってライフを削られていく。

エクスカリバーにエネルギーサーベルはついていないからこういうのを見ていれば羨ましいと思ってしまう。

僕は小さく息を吐きながらペダルを踏み込んだ。

放たれたエネルギー弾を回避するようにエクスカリバーが宙返りを行う。すると、アストラルブレイズがすぐ背後に迫っていた。

エネルギーサーベルを持って接近してくる。回避出来るような距離じゃない。だけど、実戦でも時々ある話だ。

僕はエネルギーサーベルの軌道を見切ってエネルギーライフルでエネルギーサーベルを受け流した。エネルギーライフルは壊れて使えなくなるけど、アストラルブレイズはすぐさま後ろに下がっている。

だから、僕はバスターライフルをアストラルブレイズに向けていた。そして、バスターライフルをアストラルブレイズに向けて放つ。

エクスカリバーが不人気な理由がバスターライフルにもある。バスターライフルの使用条件は二回以上変形するというものだった。だから、威力の高いバスターライフルが使えない。

でも、僕からすれば些細なことだ。

バスターライフルによってアストラルブレイズのライフが残り五分

の一になる。

ルーイの方はと言うと、アストラルソティスの一斉射撃がアストラルブレイズを貫いていた。こちらもライフは五分の一ほど。

僕はレバーを握りしめる。

「エクスカリバーは、最強の機体だよ」

僕はそう呟きながらエクスカリバーを前に走らせた。

ゲームワールド内にある巨大モニター。そこには悠人&ルーイVS健さん&真人の戦いが繰り広げられていた。いや、繰り広げられていたというよりも一方的な試合展開になっていた。

エクスカリバーとアストラルソティスがアストラルブレイズを完全に押している。

『すごいですね。FBSではエクスカリバーとアストラルソティスは残念機体とかゴミクズ機体とか呼ばれているのに』

レヴァンティンがオレ達にだけ聞こえるような小さな声で囁いてきた。

二人の操作を見ればそうは思えない。だって、二人共ノーダメージだったから。

「相変わらず、フュリアスに関しては鬼神っぷりだよな」

「私もやりたくなってきました」

確かにその気持ちはわかる。だけど、今は二人の応援だ。

すでに健さんの顔は必死である。でも、悠人が簡単に二人をあしらいルーイが闇討ちのごとく迫ってくる。そして、どちらもノーダメージ。

対する健さん達はコストが半分減少していた。

モニターを見る誰もが話すのを忘れている。それほどまでに見事な戦い。

悠人とルーイがお互いに場所を変えた。アストラルソティスが前に、エクスカリバーが後ろに。

今度はルーイが二人を相手にする。時々攻撃を受けながらもアストラルブレイズ相手にエネルギー弾をバラまくアストラルソティス。

オレは小さくため息をついた。

「悠人達が買ったな」

「えっ？　まだ、試合は終わってないよね？」

由姫が不思議そうにモニターを見つめる。確かに終わってはいない。だけど、エクスカリバーは最強の技の最終条件が凄まじいものだっ

た。

ダメージならコスト１０００なら即死。コスト１５００でもギリギリ。ただ、被撃墜０で相手のコストが２５００以上。しかも、変形回数１０回以上。

悠人みたいに変形を多用しなければ使えない。

エクスカリバーの最大の利点であり弱点らしい変形を。

「さて、どうなるかな」

アストラルソティスが撃墜される。

どうやら実際とは使い勝手が違うみたいでどこか動きがぎこちなかった。でも、二機のアストラルブレイズのライフはあまりない。

対する僕のエクスカリバーはライフが減少していない。

そろそろかな。

「ルーイ、突撃で可能？」

「大丈夫だ」

復帰してきたアストラルソティスが前に出る。それに続くようにエ

クスカリバーを前に出した。

僕達の突撃に周囲がどよめく。それを聞きながら僕は画面を見据える。

相手は距離を取りながらエネルギー弾を放っている。警戒しているのはエクスカリバー最大の技。

「突撃させてもらうよ」

僕はエクスカリバーを変形させて前に出た。アストラルブレイズがエクスカリバーに向かってエネルギー弾を放ってくる。だけど、アストラルソティスがさらに加速してアストラルブレイズの一機に挑みかかった。

これで一対一の構図が二つ。前にいるアストラルブレイズはもう一機のアストラルブレイズに近づこうとしている。確かに、二機固まっている方がいい。

だから、僕は変形を解きながらエネルギー弾を連射する。エネルギーゲージの減少は気にしない。今はアストラルソティスがやられるのを阻止した方がいい。

アストラルブレイズがこちらの攻撃を回避しながらエネルギー弾をアストラルソティスに向かって放つ。相手はかなり上手い。僕を見ながらアストラルソティスに向かって攻撃を加えている。

でも、これはシュミレーションだ。本物じゃない。本物だったらそれは当たり前。

アストラルソティスがエネルギー弾を回避しながらアストラルブレイズに斬りかかる。アストラルブレイズもエネルギーサーベルでアストラルソティスに斬りかかっている。

ＦＢＳのダメージソースは近接攻撃。だから、僕達のリアルパイロットは若干の不利だ。現実のダメージソースは射撃。ソードウルフやイグジストアストラルのような射撃機が活躍出来るのはそれが例。

僕の場合はかなり特別だけど。

アストラルソティスが二機のアストラルブレイズによって斬り裂かれる。大きく減少するライフを見ながら僕はバスターライフルを取り出し放っていた。

片方のアストラルブレイズはそれに気づいてバスターライフルを盾で受け止める。実際は受け止められないけど。だけど、もう一機のアストラルブレイズはバスターライフルに呑まれて爆発する。

相手の残りコストは２５００。

僕はエクスカリバーで加速する。そして、フルパワーかつコマンドを打ち込んだ。

凄まじい速度でエクスカリバーが盾を構えるアストラルブレイズに突撃し、貫通する。

エクスカリバーのエクスカリバーだけの最大の技である突撃技『エクスカリバー』。ＦＢＳにもそれが再現されており防御無効の極めて高い一撃を与えられる。

画面に現れるＷＩＮの文字。それを見ながら僕は脱力した。相手のアストラルブレイズが極めて強かったからでもあるけど、こっちのコクピットはかなり疲れるからだ。

若干ペダル操作が甘いしレバー操作も反応が良すぎる。慣れるまでかなり時間がかかった。

「勝ったな」

「勝ったね」

僕とルーイはお互いに拳を合わせた。

第二十九話　終わって

悠人が激しく動く。その横でメリルがぎこちなくレバーやペダルを操作していた。使っている機体はＧＦＦ－０６『リヴァイバー』。バランスの高さが売りの機体だ。ちなみに、フュリアスの中で唯一オレが開発した技術に関わりがない機体でもある。

その様子をオレと健さん、真人は離れたところから見ていた。

「まさか真柴悠人が来ているとはな。さすがのオレも勝てないって」

「世界最強のパイロットだからね。エクスカリバーがあんなに強いとは思わなかったよ。というか、勝てないよね」

確かに勝負は悠人の圧勝だった。どれくらい圧勝かと言うと、悠人がノーダメージでクリアしたくらいに圧勝だ。桁違いにもほどがある。

それを端から見ていたオレからすればさすが悠人になるけれど。

「まっ、これも世の常ということで。楽しかったから万事よしだ。にしても、真柴悠人の隣のお嬢さんは楽しそうににやっているよな」

「そうだね。完全に初心者だけど本当に楽しそう。僕達もあんな時期があったよね」

「いつの話だよ」

健さんが苦笑する。確か、ＦＢＳが稼働しだしたのは二年前だから、二人はそれ以来の古参のプレイヤーなのだろう。

まあ、その気持ちはわからないでもないけど。

「ったく、由姫や亜紗も楽しみやがって」

悠人とメリルがやっている筐体の近くにはＦＢＳをやっている二人の姿があった。二人共慣れない手つきで頑張っている。

それを見ながらオレは苦笑した。

「まあ、楽しそうだからいいかな」

二人が楽しそうであるなら何だっていい。オレはそう思っている。

それに、こういう場所にはあまり来ないからな。

「本当は周とも戦いたいんだがな」

「無理だ。一応、オレ専用のフュリアスもあるけどコクピットがかなり違う。勝てるわけないだろ」

そもそも、実戦で使うような機体でもない。

マテリアルライザーはフュリアスの大部隊が来た時にエクスカリバーとイグジストアストラル及びソードウルフが近くにいない場合に使用する。

そんなことはまずありえないので実戦でマテリアルライザーを使っ

たことはない。

「はぁ、オレもフュリアスに乗れたらな」

「大体、フュリアスが使える部隊は学園都市には第７６移動隊しかないぞ。フュリアスが使いたいなら日本の自衛隊に入るか『ＧＦ』のフュリアス部隊に入るか」

「狭き門だからね。かなり適性が試されると聞くけど」

「戦闘になればただ座っているだけでも疲労はかなり溜まる。相手がどこにいるかわからないからな。アルケミストのような強力な電子戦装備をデフォルトでついているなら別だけど、相手がわからない以上全方位に気を配らないといけない」

そもそも、フュリアスに使われる魔鉄は耐久性は極めて高いが魔術に対する耐久性は一切ないもの。だから、フュリアスだけじゃない。普通の人間に対しても気を配らないといけない。

フュリアスの部隊が学園都市にない理由がそれだ。いくらでも隠れることが出来るから。

エクスカリバーのように大空を飛翔出来たり、イグジストアストラルやソードウルフのように遠距離からの射撃が行えないなら倒されやすい。

フュリアスは安くはないのだ。

「うへっ、俺には無理そうだな。エクスカリバーとか本物を使ってみてぇけど」

「残念ながら、エクスカリバーは悠人の機体しかない。そもそも、エクスカリバー自体のスペックが高すぎる。パイロットに要求する技量が大きいからな」

「だよね。ＦＢＳでもエクスカリバーは性能は高いけど操作性能が最悪だって聞くし。僕も健さんも完全に諦めたよ」

エクスカリバーを使えるのが悠人だけだからというのもあるけど。

フュリアスやパワードスーツに関しては人外の実力を発揮するし。

「おっ、そろそろ時間だな。俺は帰るとするわ。もうすぐバイトだ。また明日な」

「じゃあ、僕も帰ろうかな。周、また明日ね」

健さんと真人の二人がオレに手を振りながら歩いていく。それをオレは姿が見えなくなるまで振っていた。

そして、小さく息を吐いて手を下ろす。

「いったか」

「驚かすなよ」

ルーイがいつの間にかオレの隣にいた。本当にいつの間にか。

「奴らは何者だ？」

「学園都市最強のＦＢＳパイロット。ゲームだから気にするなよ」

「いや、違う。撃墜されたことが悔しいわけじゃない。あの二人の動きにどこか実戦臭さがあった」

「ゲームを体験しているからだろ？」

ＦＢＳの対人戦も対ＣＰＵ戦も実戦を想定されて作られている。だから、何ら実戦臭さがあってもおかしくない。

だけど、ルーイは首を横に振った。

「ゲームの動きは見慣れた。だが、あの二人はゲームの動きとは違う」

オレは周囲の画面やモニターを見る。そして、少しだけ目を細めた。

「ゲームの回避行動にあまり頼っていない？」

「そうだ。悠人のように本物とゲームを熟知しなければ出来ないはずだ。それが出来るということは」

「実戦を経験したことがある、か？　まだ推測でしかない。確定にはいたらないけどな」

ゲームで慣れた場合でもその極地に辿り着くことは不可能じゃない。というか、ＦＢＳでは回避行動に頼らず避けるテクニックは有効みたいだ。

悠人の場合はエクスカリバーのみの曲芸ではあるが。

それでも、ＦＢＳで操作が出来るようになっただけで実戦は経験していない可能性もある。

「ＦＢＳ自体がフュリアスのコクピットと同じだ。可能性は低くない」

「問題がそれなんだ。可能性が低くないからマークするのは犯罪者または犯罪を行う可能性がある者。健さんも真人もどちらでもない。善良な一般人をマークするなんて『ＧＦ』じゃ御法度だ」

「そういうものなのか？」

音界の場合は基本的にメリルがトップでその下に首相達。そして、ルーイ達という権力構図だ。

簡単に言うなら一党独裁。だからこそ強硬な手段が簡単に取れる。

「そういうものだ。『ＧＦ』はちゃんと手順を踏まないなら無法地帯になるからな」

オレはそう言いながら二人が消えた先を見ていた。そして、小さく息を吐く。

「まあ、ルーイがそう言うなら警戒はしておく」

「頼む。だが、『ＧＦ』とは厄介な組織だな。音界のようにすればいいのに」

「人界は音界のようにフュリアスが主力の戦いじゃないんだよ。フュリアスさえあれば戦力になる音界と違って生身でもフュリアスで

すら倒せる人界じゃ強攻策は反発者を生む。それを押し通せば反発者は増えるし、認めれば協賛者が減る。難しいんだよ。世界は」

「複雑なのだな。わかった。世界はそう言うものだと理解しておこう」

ルーイが頷いてくれたのでオレは小さく息を吐いて由姫と亜紗を見た。どうやら戦闘に負けたからか悔しそうな顔で立ち上がっている。

ちなみに、悠人とメリルはハイタッチしていた。

「悠人とメリルって仲がいいよな」

「メリルは悠人のことが好きだ」

「やっぱり？　まあ、対する悠人が気づいていないような気もするけど」

悠人からすればリリーナや鈴がいるからな。メリルは親しい友達だと思っているのだろう。

「最初は喧嘩から始まったのにな」

「ああ。僕も周に巻き込まれた」

「あれは悪いと思っている」

まさか、あそこまで大々的に大きくなるとは思わなかった。最終的には結果オーライだが、未だに二人からは恨まれている。

「ルーイはメリルのことが好きなんじゃないのか？」

「僕のメリルに対しての好きは幼なじみとしてだ。それに、僕には好きな人がいる」

「リマ？　ルナ？」

「誰にも話すなよ」

そう言いながらルーイはオレにだけしか聞こえないようにとある人物の名前を言ってきた。それを聞いたオレの顔を表現するなら、

『ハトが豆鉄砲をくらったような顔』

オレの状態を的確に当てた文字が書かれたスケッチブックが目の前に出される。オレはそれを見ながら軽く肩をすくめた。

「色々あってな。どうした？」

『周さんも一緒にやらないかなっと。主に由姫が』

「のめり込んだか。わかった。行くぞ」

オレはそう言って歩き出した。由姫達の場所に向かって。

第三十話　商業エリア（前書き）

ちょっと設定を少し変えたので内容が変わった部分があります。浩平に関してが。

第三十話　商業エリア

すでに空は赤く染まりだしている。だけど、人の活気はあまり衰えない。それが学園都市商業エリアの常だ。

商業エリアは基本的に夕方からが稼ぎ時となる。部活を終えた学生や仕事を終えた先生がやって来るからだ。

だから、飲食店は活気に満ち溢れている。一部を除いて。

オレ達以外の客がいないような飲食店だづてあるのだ。まあ、一見さんお断りの店だけど。

「周坊は相変わらず食うな」

「だから、周坊は止めてくれって何度も言っているだろ？」

オレは小さくため息をつきながらカウンターの向こうにいる店のマスターに声をかける。

マスターは優しそうな面持ちだが、坊主にされた頭が全てをぶち壊し、可愛いエプロンを着ているのに腕に彫られた竜の刺青が全てをぶち壊していた。

「俺からすればお前はいつまでも周坊だよ。ほらよ。酢豚四人前だ」

手早い手つきで作られた酢豚がオレ達の前に置かれる。それをメリルは不思議そうな目で見ていた。

そう言えば、ルーイも最初ここに来た時は酢豚を食べたことがないって言っていたな。

「悠人、なんですか？」

「酢豚だよ。店のマスターが一番上手い料理でもあって看板メニュー。おいしいから食べてみて」

「あ、はい。いただきます」

「ほらよ、周坊。特製濃厚ソースを使ったソースカツ丼超大盛だ」

そう言いながらマスターがオレの前に洗面器のようなものを置く。そこにはカツがいくつもご飯の上を覆い尽くしており、そのカツにかけられたソースがいい香りを放つソースカツ丼があった。

マスターの酢豚に並ぶ看板メニューでもある。

「こんな短時間でどうやって作るんだか」

「ははは、料理に関しては『倍速化（クッキングマスター）』がかかるからな。俺の力の前には圧力鍋などいらん」

「圧力を倍に出来るからだろ」

オレがそう嘆息すると入り口のドアが開いた。そこから現れたのは浩平とリースの二人。どちらも化粧や服装に力が入っているためデートだったのだろう。

この店はデートにはあまり相応しくないが知り合いしかまず来ない

ため場所としてはいい。

「久しぶりだな」

「おっ、周に、あれ？　メリル姫？」

「人違いです。マスター、この酢豚はおいしいですね」

「ありがとよ」

怪訝そうな顔になった浩平とリースがオレ達に近づいてくる。ちなみに、由姫と亜紗は酢豚をひたすら食べている。

なんか勝負とか言っていたような気もするけど。

「で、どうしてメリル姫が酢豚食ってんだ？」

「かくかくしかじかなんだ」

「お忍びで来た」

かくかくしかじかで理解したリースがマスターの出したお冷やを手にとっている。絶対にリースはメリルが来るのを知っていた。

浩平も同じことを思ったらしく軽く肩をすくめている。

「まあ、俺はなんも言わないけど、お前は大変だろ？」

「すでに安全策は三つ発動してる」

一つは慧海や時雨に連絡。一つはオレ達が護衛。もう一つが浩平達だ。

「だから、俺達も呼ばれたのか。まあ、ちょうどお腹減っていたからここに来ようと思っていたし。『ＧＦ』と学園自治政府どちらにも知らせたことになるのか」

「そういうこと」

浩平は現在学園自治政府に籍を置いている。第７６移動隊ではなく学園自治政府なのは一応、学園自治政府内に不正が無いか『ＧＦ』の面々が調査に入るためである。ついでに、単独行動もとってもらうためだ。

最初は別の奴に行かそうかと思っていたら浩平が名乗り上げたのだ。おかげで浩平抜きの編成を考えるはめになった。

「そっちは順調か？」

「まあな。順調と言ってもやっぱまだまだ『ＧＦ』は受け付けないって空気が大きいわ。同期の奴らなら友達になれたんだけどな」

「浩平なら大丈夫だろ。それにしても、リースとデートする時間があったんだな」

「見回りついでのデートだけどな。現在の学園自治政府の情報と『ＧＦ』の情報を交換しながら」

プライベートかつ仕事というわけか。こういうのはよくあることなので別段気にすることはない。

まあ、向こうからすれば見た目は狂喜乱舞しかねない行動だけど。

「まあ、報告はリースから聞くとするさ。何か問題があれば真っ先にオレに連絡が来るだろ？」

「いや、まあ、そうなんだけどよ。今、学園自治政府で悩んでいる議案があるんだが、それが少し問題でな」

『ＧＦ』が頭を悩ましている内容と関わりが薄そうだ。ナイトメア関連ではないだろう。

だったら、考えられるのは、

「商業エリア内に出ている自称“義賊”か？」

「知っていたのか？」

「まあ、本当に噂の範囲内だけどな。由姫から教えてもらった」

そう言いながら由姫の頭に手をポンと置く。

その話を聞いたのはちょうどここに向かっている最中だった。

「兄さんは義賊って聞いたことがありますか？」

それは急に唐突な話だった。オレ達は馴染みの店に向かっている最中。

その単語を聞いたオレは眉をひそめる。

「それはオレに単語の意味を聞いているのか？　それとも」

「商業エリアで名乗っている自称“義賊”です。商業エリアで様々な事件を起こしている」

「義賊なのにか？」

義賊という本来の意味では少し違っているような気もする。

『聞いたことがある。事件は起こすけど、それは不法侵入やハッキング等らしい』

「もしかして、それを起こして」

「はい。もっと大きな事件を暴いています」

色々と問題があるような気もするが、オレが覚えている限りではそんなことが無かったような気がする。

学園自治政府が報告しなかった可能性はあるけど、気になるのは、

「それは噂か？」

「はい。噂です。だから、兄さんに聞こうと思って忘れていました。ちなみに、ハトさんやワカメから聞きましたよ」

「オレは聞いたことはない、が琴美に調べてもらうか。レヴァンティン、連絡を頼めるか？」

『噂でも動くのですね。まあ、連絡はしますけど』

「頼む」

そう言いながらオレは小さく息を吐いた。まあ、浩平と久しぶりに会うしちょうどいいだろうな。

「というわけだ」

オレはその経緯をかいつまんで説明した。まあ、ぶっちゃけかなり省いたが。

「なるほどね。まあ、学園自治政府が隠しているのは事実だ。が、調べたら簡単に出て来るぞ」

「レヴァンティン」

『はい。確かにデータベースに潜れば簡単に見つけましたよ』

「そっちじゃなくて警察の方な」

ちなみに、レヴァンティンは普通にハッキングをする。

「『ＧＦ』との関与を減らしたいからな。周は聞いたことがあると思うが、建設業の大規模談合」

「というか、あれはニュース沙汰になったからな。談合していたのが商業エリアだったから当時のトップが辞任したな」

そして、現在の楠木大和に変わった。それほどまでに大きな事件。だけど、『ＧＦ』は全く関与していないからかなり驚いたのを覚えている。

学園自治政府からすれば『ＧＦ』の力を借りたくなかったんだろうな。

「あれも“義賊”の仕業だ。学園自治政府からすれば敵か味方かわからない存在になっている」

「どうしてですか？　犯罪行為を見つけるということはむしろ味方だと思いますけど」

酢豚を全て食べ終わった由姫が話に入って来る。ちなみに、亜紗はまだ食べている。

「多分、不法侵入をして犯罪の証拠を見つけたならまだいいとして、不法侵入しながら何も音沙汰がないからだろ。ただの不法侵入で終わっている。ただ、個人情報は流出していない」

「さすが周だな。学園自治政府でも対応はかなり困っている。事件を見つけることが出来れば味方だが、それ以外は空き巣となんら変わりがない」

「難しいものだな。必要悪として放置するか、悪は悪だから捕まえるか。学園自治政府でもかなり揉めているんだろ？」

「ああ。だから問題なんだ」

学園自治政府としてはかなり悩ましい問題だろう。放っておけば利益となる可能性だってある。でも、利益とならずに不利益となる可能性もある。

もちろん、どちらも可能性の部類に入るものだ。だから、一概には何とも言えない。

でも、現時点では犯罪行為の方がやっているため捕まえるべきという声は挙がっているだろう。

「オレ達からの回答は学園自治政府が何か助けを求めてきたなら助ける、だ。『ＧＦ』と学園自治政府はそういう関係だろ？」

「助かるぜ。さてと、何頼もうかな」

浩平がメニューを見ているリースに顔を寄せる。オレはそれを見ながら考えていた。

「商業エリアで何が起きているんだ？」

第三十話　商業エリア（後書き）

浩平はフュリアスに関して調べてもらうために第７６移動隊とは離れる前から学園自治政府の方に参加しています。

第三十一話　深層石の刃

見上げた空に星空は見えない。狭間市と比べれば全く違う夜の空。
それが学園都市、いや、都会というものだ。

そんな感覚になりながらオレと亜紗の二人は夜道を歩いていた。

オレが亜紗を守っているわけじゃない。オレが亜紗によって守られている。

メリルはマスターの店で眠ってしまい由姫によって担がれて第７６移動隊宿舎にある簡易ベッドに運ばれている最中だろう。駐在所にある宿舎だけど使っている人は完全に皆無。稀にオレや委員長が徹夜して使うくらいだ。

悠人やルーイも付き添い。浩平やリースは護衛として。

だから、オレ達は歩いていた。とある店に向かって。

『夜風が気持ちいいね』

亜紗が満面の笑みでスケッチブックを見せてくる。オレはその笑みを見て少しだけ苦笑しながら頷いた。

「ちょっと寒いけどな」

まだ４月だ寒いものは寒い。でも、亜紗は繋いだオレの手に少しだけ優しく力を込める。

確かに、ここは暖かいけどさ。

亜紗は器用にスケッチブックを片手で捲った。

『ごめんなさい。私の用事に付き合わせて。どうしても七天失星を見たくて』

「いいさ。それに、その用事はオレにも関係することだろ？　だったら、ついていくさ。どんな刀になったか興味あるからな」

オレ達が向かっているのは学園都市内部にある『ＧＦ』が武器修理を頼む店だ。商業エリア内部にある唯一の『ＧＦ』管轄地と言ってもいい。

まあ、学園自治政府も使っているけど。

その店の店主は本当に気に入った武器しか触らず、それ以外はたくさんいる従業員が修理をする。

気に入った武器はオレのレヴァンティンや亜紗が古物商で買った刀だ。

名は七天失星にしたらしい。

現段階では能力は未知数。オレを実験台にして探すしかないだろう。

『楽しみだな。どんな刀になったんだろ』

「亜紗には矛神があるだろうが。後は、鍛え抜かれた刀」

『確かにどちらもすごいけど、やっぱり七天失星の方がいい。一目惚れだから』

そう言う亜紗の顔は本当に嬉しそうだ。亜紗と最初会った頃なんてほとんど感情が無かったのに。

変わったのはオレに好きだと告白してからか？　あれっていつの話だっけ。

『考え事？』

オレの目の前にスケッチブックが差し出される。亜紗の方を向くと、亜紗は不思議そうに首を傾げていた。

「亜紗と出会ってからを思い出してな。あの頃は結構無表情が多かっただろ」

『私が笑ったら周さんがかなり驚いたのは覚えている』

「あの時はお前が可愛かったからだよ」

最初に見せてくれた亜紗の表情は本当に可愛くて驚いたのをオレは覚えている。その時の笑顔と亜紗の今の笑顔にはあまり変わりがない。

相変わらず可愛いままだ。

「もう、亜紗は一人でも十分やっていけるようになったよな？」

『昔は金魚のフンだったけど』

「オレは狐だぞ」

虎の威を借りる狐だった。当時から亜紗はかなり強かったからな。強いと言っても世界トップクラスというほどじゃなかった。

若手では音姉に次ぐ第二位。まあ、孝治やアルトがすぐに抜かしたけど。

『あの時は大変だった。来る日も来る日も戦いばかり。あの頃には戻りたくない』

「賛成だ。あの頃は強くなることしか考えていなかったからな。勉強か訓練かの二択。今じゃ考えられないな」

『うん。あの頃に戻りたいか聞かれたら私はノーだから』

「オレも」

あの頃は子供でいるのが嫌だった。だから、大人に早くなろうと頑張った。おかげで違和感だらけの人間になったけど。

それがあったからこそ、今のオレが出来上がっている。

「見えて来たな」

オレは話を切り上げて呟いた。前方に武器修理専門店阿修羅が見えてきた。確かに武器修理専門店だから名前としては悪くないけど、こんな名前が流行るなんて世も末だなと思う。

亜紗が小走りになる。それをオレは苦笑しながら追いかけた。

『楽しそうですね』

レヴァンティンの声。周囲に誰もいないからだろう。だから、レヴァンティンの声が響く？

「レヴァンティン」

『抜かせませんよ』

「言うと思った。気配は全くないが？」

『人払いの結界でしょう。ここは元々人通りが少ないですから』

結界が張られることにかなりの違和感があるが、ただ単に誰もいない可能性がある。武器修理専門店阿修羅前は夜になれば阿修羅以外の店が閉まるからだ。

だから、ただ単にいない可能性は十分に高い。

オレは軽く肩をすくめて歩き出した。そして、阿修羅の入り口をくぐり抜ける。

「あっ、周兄だ」

その声にオレは横を向いた。そこにいたのは七葉と和樹のカップルと、冬華と楓だ。どうやら四人共一緒に来ていたらしい。

おそらくデバイスのメンテナンスだろう。

『GF』は基本的に三ヶ月に一回はデバイスをメンテナンスしなければならない。レヴァンティンですらだ。

だから、時々まとまってメンテナンスに来る。

「亜紗さんカウンターに向かって行ったけど、もしかして、新しい武器かな？」

「そう言えば、楽しみにしていたわね。私からすれば刀なんて一本でいいと思うけど」

「わかってねぇな。ロマンがあるんだよロマンが」

そんな言葉を聞きながらオレはカウンターの方を向いた。そこには目を輝かせて確実に尻尾があったなら凄まじい勢いで振っているであろう亜紗がいる。

こういう姿を見るのは久しぶりだよな。

「どんなロマンよ」

「そりゃ……、周」

「自分で考えろ」

オレにはコレクターのロマンが全くわからない。

「仕方ないよ。亜紗は本当に楽しみにしていたから。周君も少し楽しみじゃないの？」

「やっぱりわかるか？」

「えへへっ、幼なじみさんですから」

楓が笑う。幼なじみの期間はなかなかに短いけど。

「へぇ、周兄楽しみなんだ。でも、どうして？」

「プレゼントだよプレゼント。きっとそうだ」

「亜紗は古物商で買ったと言ってたわよ」

言葉に詰まる和樹。いつもの光景だった。

オレはそれに対して苦笑しながら亜紗を見る。そこには店主である楠木正成の姿があった。

身長は２ｍを越え、体重は１００オーバー。筋肉ムキムキであり見た目は冗談抜きにして阿修羅のような雰囲気を出す。

まあ、中身は非武装派なんだけどな。手先がかなり器用だし。

「見事な刀だったぜ。とびっきりの刀を打った」

そう言いながら鞘に入った刀を亜紗に渡す。亜紗はそれを受け取って鞘から刀を抜いた。

真っ先に見えたのは真っ黒な刃。それが魔鉄によって見事な銀色に光る峰と上手く対になっている。

刀にはそこそこ詳しいが、見た目はかなり見事だ。

「真っ黒の刃？　周、真っ黒の刃って脆いんじゃないのか？」

和樹の認識はなんら間違ってはいない。魔鉄を黒くすれば切れ味はかなり鋭いが折れやすい剣が出来上がる。

だから、普通は黒にはしない。でも、とびっきりの刀と言ったから、おそらく材質は、

「深層石かな？　周君はどう思う？」

「同感だ」

「これまた高いものを使うわね」

深層石。

文字通り深層で取れる石だが、その希少性は極めて高い。希少物質（レアメタル）の一種であり、黒の刃を作り出せ鉱物でもある。

そこから作り出した刃は常識を越える硬さを誇る。黒の刃唯一の例外だ。

ちなみに、孝治の持つ運命はほぼ１００％深層石で出来ている。

「なな、深層石ってなんだ？」

「周兄」

「お前らな」

深層石は武器としては必須項目だ。希少物質（レアメタル）の中でも有名中の有名。普通は習う。

こいつらはそれを忘れたのだろう。

「魔鉄として使えば最強クラスの物質だ。そう言えばわかるか？」

「へぇ～、じゃ、鉄の一種なんだね」

「かなり特殊だけどな」

亜紗が七天失星を軽く振る。その漆黒と白銀のコントラストはあまりにも綺麗で見惚れてしまうほどだった。

現に楓や冬華も見惚れている。

「ひゅー、すげーな。あんな武器ってあるんだな」

「魅せる武器を追求したならいくらでも出来るぞ。ただ、それが実戦に使えるか別にして」

実戦で使えば普通に砕け散るだろう。何かに当たった瞬間。

亜紗が店主に頭を下げて七天失星を鞘に収めこっちに向かって駆けてくる。その顔に浮かんでいるのは満面の笑み。

「どうだった？」

『最高。重さも長さも矛神と変わらない本当にぴったりの刀。周さん、ありがとう』

「礼を言われるほどじゃないさ。それに、その刀に惚れたのは亜紗だろ。オレじゃない」

オレなら完全に見逃していたほどだ。亜紗は嬉しそうに頷いて鞘に入った七天失星を胸に抱いた。本当に気に入ったみたいだ。

「さてと、帰りますか。お前らは？」

「帰るところだ。一緒に帰ろうぜ」

和樹が気持ち悪いくらいに笑みを浮かべてウインクしてくる。本当に気持ち悪い。

オレは嫌々頷きながら外に出て、そして、動きを止めた。

向かいにあるビルの三階に灯りが灯っている。普通なら気にしないところなのだが、あそこだけは気にするところだった。

大規模談合事件があった談合場所。それがあそこだったはずだ。

「怪しいわね」

オレと同じことを思ったのか隣に立った冬華が口を開く。オレは小さく息を吐いてビルに向かって歩き出した。

だが、オレはすぐに足を止める。そして、そのビルの屋上を見上げ

た。

こちらを狙って弓を構えている姿がある。だけど、暗くて判断出来ない。狙われているのはオレだろう。

「周君、どうする？」

楓が手にブラッククレクイエムを取り出しながら尋ねてくる。オレは少しだけ考えた。今のオレは戦力にならない。だからか相手は狙っている。

オレは小さく息を吐いた。

「レヴァンティン」

『ダメです。マスターを戦わすことは出来ません。ただでさえ傷口が治っていないのに』

「わかったわかった。待機。あの場所はすでに学園自治政府と警察が調べきったはずだ。奴らも他にないか確認しているだけだろ。で」

オレはこめかみをひくつかせながら左を向いた。そこにはいちゃいちゃしながら歩く七葉の和樹の姿。そして、二人に向かって頑張って伝えようとしているが伝わっていないからおろおろしている亜紗の姿がある。

オレは小さくため息をついて視線を戻すと、いつの間にか電気が消えて屋上の誰かもいなくなっていた。

「緊張感ない奴らだな」

「第７６移動隊って本当に不思議よね」

「それには賛成する」

オレは小さくため息をついた。

第三十二話　義賊

「はぁ？」

オレはレヴァンティンに耳を当てたままそう返していた。聞いた言葉が信じられなかったからだ。いつもならそんなことはないのだが、今回だけはそうせずにいられなかった。

レヴァンティンと通信している相手がもう一度言ってくれる。

『だから、談合事件の新たな証拠が見つかった。いや、“義賊”からの匿名のものだ』

「それはわかった。その後をもう一回頼めるか？」

オレは相手の浩平にもう一度尋ねていた。

『談合事件に関わったのは学園自治政府だけじゃない。『ＧＦ』の一部も関わっていた。関係者の中じゃ第７６移動隊の名前を出す奴らも出て来たらしい』

「どういうことだ？」

あまりに唐突すぎる。唐突すぎて信じられないくらいだ。急に第７６移動隊の名前が出て来た。一体どこからだ？

『学園自治政府の報告には確かにある。第７６移動隊隊長の保護者ってな』

「保護者？　んなバカな急に出て来たにしてはあまりにも唐突すぎるぞ」

『それは俺も大和も学園自治政府内でも同意見だ。第７６移動隊はそれほどまでに信頼が厚いからな』

いや、だからこそというべきか？　オレ達第７６移動隊が学園自治政府から信頼されているからこそ狙ったような感じがある。

オレはレヴァンティンに机の上の接続端子を繋げた。そして、キーボードに向かって指を走らせる。

「事情を聞きに行っても大丈夫か？　オレと音姉、悠聖で向かう」

『ちょっと待っててくれ。確認を取る』

その言葉と共に通信が切れる。オレはレヴァンティンを机の上に置いて小さくため息をついていた。

それはあまりにも唐突であり信じられない話でもあった。まるで、今までその話を封印されていたかのように。

確か、そんなレアスキルがあったよな。お袋が持っていたレアスキル。確か、名前は、

『現実回避（エスケープ）』

「お兄ちゃん、朝ご飯だよって、何かあったの？」

由姫がオレの顔を見ながら尋ねてくる。オレはそんなに酷い威顔だ

ろうか。

「由姫、悪い。音姉を呼んでくれないか？　かなり大事な話がある」

「う、うん。本当に何かあったの？」

「ややこしい事態がな。今から学園自治政府に向かって来る。色々と聞かないといけない事態が起きたからな」

まずは事実関係の確認。オレの関係者ということだから知り合い全員で取った写真を持っていけばいいだろう。

誰かに化けていた場合も考えておかないと。

「お兄ちゃん、お兄ちゃんは大丈夫だよね？」

「不安なのか？」

「うん」

由姫がオレの服を掴んで抱きついてくる。

「今のお兄ちゃんの顔が昔みたいだから」

「昔？」

オレは思わず自分の顔を触っていた。触った感覚では何の変化もない。だけど、長年一緒にいたからか、由姫にはわかっているようだった。

オレは笑みを浮かべて由姫の頭を撫でる。

「大丈夫だ。絶対にオレは戻ってくる。だから、由姫は安心して学校に行ってこい」

「うん」

由姫がオレから離れる。そして、部屋から出て行った。

オレは小さくため息をついてベッドに寝転がる。

とりあえず、情報を整理しよう。

大規模談合事件。

学園都市内部でほとんどの建設業が学園自治政府と手を結び商業エリア内部で談合していたことがわかった事件だ。

その時に関係者は根こそぎ捕まった。もう芋づる式に。なのに、今日になって新しく『ＧＦ』が関係していたという情報が入った。しかも、オレの保護者を名乗ったらしい。

義母さんがするわけがない。もし、本当にするなら真っ正面から堂々とやるだろう。義母さんはそういう人だ。つまり、誰かがオレの保護者を語ったということ。

「今になって関係者が名前を挙げるのがおかしいからな。二年前の話だぞ」

『確かにおかしいですね。まるで、そのことだけを完全に忘れていたかのように』

オレは小さくため息をついて立ち上がる。レヴァンティンを掴み、レヴァンティンを身につける。

制服には袖を通さず、通すのは『ＧＦ』で使う儀礼服。色はほとんど青のスーツだ。それに袖を通す。

「一体、何が起きているんだ」

「一体、何が起きているんだ？」

オレと音姉が悠聖と合流し事情を簡単に説明したら悠聖がそう返してきた。それに関してはオレも同意見なので何もいうことがない。

今回はそれほどまでに不自然だから。

「そうだよね。いきなり弟くんの保護者って話が出たんだろ？　お母さんがそんなのに参加するわけがないし」

「名前を語られたとか？　それだったら楽になるんだけどな」

語られただけなら第７６移動隊は完全に無関係だ。無関係だからこそオレ達も捜査に参加することが出来る。

それでようやく事件とは無関係じゃなくなるから。

「周隊長も大変だよな。せっかくの休暇なのによ」

「こういう事態は休暇を返上しないとダメだろ。それに、護衛には音姉とお前がいる」

「まあ、手数だけは多いからな」

そう言って胸を張る悠聖。悠聖は第７６移動隊の中でもかなり頼りになる。同じ分隊というのもあるが、オレが不在の時は暫定的に副隊長に昇格するように決めている。

音姉も世界最強の戦力だし、孝治や亜紗達に及ばないもオレの良き理解者で聞き上手。本当に頼りになる。

オレは今はレヴァンティンが使わせてくれないから戦闘はできないけど、この二人がいるなら問題はないだろう。

「じゃ、行くか」

オレは前にあるビルを見上げた。そこにあるのは少し大きめの建物。元は公民館のような感じて使われることを想定して作られたが、学園自治政府が出来てからは学園自治政府専用の建物になっている。

オレ達は学園自治政府に入ろうとして、

「あれ？　周？」

その声にオレ達は振り返っていた。そこにいるのは資料の束を抱えたメグの姿。どうやら早朝出勤が長引いているらしい。

というか、メグが都島学園にいるからだろう。あそこの出席率はあまり関係ないし。

「学校はどうしたの？」

「朝から大変な事態になっているんだよ。というか、それを尋ねるのはオレのセリフなんだが」

「私は学園自治政府にこの書類を渡せばいいだけ。そっか。周は昨日いなかったから知らないんだ」

「処分者リストか？」

それならかなり納得出来る。メグは頷いて資料の束を少しだけ掲げた。

「個人情報は満載だよ。いる？」

「いるか。お前はさっさと用事を済ませて学校に行くんだな」

オレは背中を向けて学園自治政府専用の建物に向かって歩き出す。その後ろを悠聖達も続いてくる。

中に入ったらまず楠木大和に事情を説明してもらうか。いや、浩平に詰め寄るという選択肢も悪くはない。楽しいし。

オレは前に歩を進めた瞬間、

「きゃっ」

メグの悲鳴。それにオレは振り返っていた。そこには赤いローブを着た誰かがメグの持っていた資料を奪ったのだ。

音姉が光輝ではない刀を抜き放ち加速しようとする。だけど、音姉の目の前に矢が突き刺さった。

「聖なる刻印を纏いし者。光の道を指し示せ。光の剣聖『セイバー・ルカ』！」

悠聖がすかさずセイバー・ルカを呼び出す。だが、セイバー・ルカは横手から飛び出した赤いローブによって弾き飛ばされた。

赤いローブが持っているのはハルバート。

オレはレヴァンティンを掴む。

『緊急事態ですからね！』

レヴァンティンの声と共にレヴァンティンの柄がオレの手に収まった。すかさず身体強化をかけて赤いローブが振ったハルバートを悠聖に当たる寸前で受け止める。

だが、激しい衝撃に腕が痺れる。

「なんて威力だ」

「周！　この野郎！」

悠聖がゼロ式精霊銃を取り出して引き金を引く。ハルバートの赤いローブは放たれた弾丸を器用に弾き、立ち直ったセイバー・ルカの

斬撃を受け止めていた。

こいつ、強い。

「今だ」

地面を蹴りレヴァンティンを鞘に収めて前に出る。セイバー・ルカと力が拮抗している今がチャンスだ。

オレはレヴァンティンを鞘から走らせる。だが、ハルバートの赤いローブは飛び上がって回避していた。それと同時に転がされる何か。

その形をみた瞬間、オレは叫んでいた。

「ファンタズマゴリア！」

ファンタズマゴリアを限定的に展開してその何かをファンタズマゴリアで包み込む。そして、その何かが眩いまでの光と衝撃を放った。

精霊爆弾と呼ばれる精霊の力を封じた爆弾だ。威力はそこまで高くないが爆風が強く、怪我人が出やすいのも特徴。

ファンタズマゴリアによって爆風は防げたが光は防げなかった。猛烈な光によって一時的に視界が奪われるほど目が焼かれる。

視界が戻った時には赤いローブはいなくなっていた。

周囲を見わたせば音姉が道路に倒れている。

「音姉！」

オレは音姉に駆け寄っていた。外傷はあまり見当たらず、むしろ、擦り傷が多い。

「大丈夫、だよ。光に驚いて落ちただけだから」

音姉がゆっくり起き上がる。すかさず体全体を調べるが大きな怪我はないみたいだ。オレは安心して息を吐く。

「何事だ！」

楠木大和の声。どうやら騒ぎを聞きつけたらしい。学園自治政府専用の建物を振り返ると楠木大和と浩平の姿があった。

オレは小さくため息をついてメグを指差す。

「赤いローブの集団に出し抜かれた。取られたのはランク詐欺の資料。個人情報満載の名簿だ」

「赤いローブ？　“義賊”か？」

楠木大和が周囲を見渡す。だが、そこには赤いローブの姿は見当たらない。

「話してもらうぞ。“義賊”について。そして、談合事件に関しても」

第三十二話　義賊（後書き）

音姉もセイバー・ルカも不意をつかれることには弱いので。

第三十三話　絡み合う存在

オレはレヴァンティンを机の上に置いた。少し激しく動いたため体の内側の傷が開いたかと思ったが全く開いていなかった。

おかげで話を聞くことが出来る。

オレ達がいるのは学園自治政府専用の建物にある代表室。そこには第７６移動隊側からオレと音姉。学園自治政府側から楠木大和と浩平の姿がある。

悠聖はメグのフォローだ。さすがにメグを放っておくわけにはいかない。

「どこから話したものか悩むな。どこから話せばいい？」

楠木大和が笑みを浮かべながら肩をすくめてくる。それに対してオレは苦笑で返した。

「そうだな。“義賊”についてまずは尋ねたい。さすがに放っておくわけにはいかないだろ。オレ達の不注意でも“義賊”は念入りに計画したのだから」

あまりにも動きが鮮やかだった。資料を奪う人物。その人物を追いかけようとする相手を食い止める狙撃手。残るメンバーを引きつけるパワータイプの攻撃手。

ヒット&アウェイを狙う際によく使う手段だ。結構成功しやすい。

そして、逃走に関しては精霊爆弾を使った。音姉に放った精霊爆弾は光だけだったらしく、地面に落ちた際の打ち身くらいしか音姉は怪我をしていない。

「“義賊”か。奴らの行動は私達の理解が及ばない部分がある。簡単に言うなら賊だ」

“義賊”という名前からわかるけど、“義賊”という名前がつけられるほどだ。確かにやっていることは賊まがい。

なのに、個人情報を盗むのはどういうことかわからない。

「理解が及ばない部分が多い。多いからこそ私達はあまり実態を掴めていない」

「だろうな。不法侵入から犯罪を見つけるならともかく、今回のような個人情報を盗むのは完全な御法度」

「さすがに今回のはマズい、が『ＧＦ』が仕組んだ“義賊”を陥れる計画の可能性も」

「理由は？」

オレは楠木大和の言葉を遮って尋ねた。

それをするには理由がいる。ちゃんとした理由でなければ名誉に関わってくる。それが冗談だとしても色々と問題だ。

「ローブという共通項目はどうだ？」

「なるほどな。『ＧＦ』が広く捜査しているナイトメアに関して共通する可能性があるからか？　その理由なら納得だ。問題として、“義賊”の話を『ＧＦ』はほとんど知らない。噂という部類になるな。学園自治政府がそれを隠していたのに」

「それは謝らしてもらおう。私達が隠していたのには理由がある」

「“義賊”が大規模談合事件に関与したからだろ？」

「理解が早くて助かる」

大規模談合事件を発覚させただけでも“義賊”はかなりのお手柄だ。だからこそ“義賊”に関しては話せなかった。

『ＧＦ』からすればどんな手柄でも確保すべき対象。そして、犯罪者。

学園自治政府からすれば犯罪をしてでも手助けしてくれる相手。

二つの違う組織から見ればかなり対応が変わる相手でもある。だから、学園自治政府は名前を出さなかった。

「そして、“義賊”から新たな情報があった。君達が大規模談合事件に関わったという話だ。その弁解に来たのだろ？」

「残念だが、たかがそんなもので犯人に仕立て上げようとするなんて器が知れているな。楠木大和」

「残念だが証拠としては十分だ。見た前」

楠木大和が差し出したのは一枚の写真。そこには確かにオレの姿があった。

「決定的な証拠だと思わないか？」

「全く。なら聞くが、今までどうしてオレの名前が出なかった？」

「簡単だ。今まで黙っていただけのこと」

オレは小さくため息をついた。そして、周囲に視線を走らせる。

音姉も頷いているしレヴァンティンも軽く振動していた。

「じゃ、本格的な話に入ろうか」

「そうだな」

オレが笑みを浮かべると楠木大和も笑みを浮かべる。どうやら楠木大和もオレと同じことを思っていたらしい。

この場で意味が分かっていないのは浩平のみ。浩平は不思議そうに首を傾げている。

「周、どういうことだ？」

「レヴァンティンと音姉に盗聴器や盗聴者がいないか探してもらっていたんだ。オレや楠木大和がお互いに言い合っているなら盗聴者なら聞こうとするだろ」

「なるほど。つまり、演技？」

「わからなかったのか？」

写真はあまり証拠とならない。オレみたいな役職では様々なところに出入りするため関係者だと判断出来る時はあるがそれが実質の証拠に繋がるなら冤罪がたくさん起きるだろう。

写真はあくまで証拠を補完するためのものだ。

「そうです。まさか、あなた達が関わってくるとは思いませんでしたよ」

「つか、周と普通に話す時っていた大和は丁寧なんだな」

「当たり前です。向こうは第７６移動隊隊長。学園都市のトップ。ちゃんとした言葉を使うべき存在です。まあ、相手からすればそのようなことはないようですが」

「目上だろうがほぼタメ口だからな。まあ、今はいい」

本当に今はいい。楠木大和がオレに向かっていつもと違う話し方をしてオレも音姉もピンと来ていたからな。

話し方が違うからこそ、いつもとは違い怒っているように見せた。そして、盗聴者を誘ったというわけだ。

「具体的な話を聞かせてもらえるか？」

「そうですね。“義賊”から来た情報。それには確かに第７６移動隊隊長の保護者が関わっているという情報でした」

「それは浩平から聞いた。義母さん、素子さんがそんなことをするとは思えないし」

「保護者の名前は海道椿姫」

その名前にオレは思わず立ち上がっていた。浩平と楠木大和が不審そうに見つめてくる。

だけど、今のオレはそんなことを気にしていなかった。

「誰だ。その名前を出した奴は」

「“義賊”」

楠木大和がその名前を告げる。オレは小さく息を吐いてその場に座った。

これは偶然なのか？　それにしても奇妙に合いすぎている。

「そして、昨日から大規模談合事件で捕まった者達が第７６移動隊隊長の保護者の名前を出し始めた」

「弟くん、大丈夫？」

「大丈夫だ。腸が煮えくり返りそうだけど大丈夫だ」

「周、その名前に聞き覚えがあるのか？」

浩平の質問にオレは頷いた。

「海道椿姫。オレの母親で十一年ほど前に起きた『赤のクリスマス』で死亡した人物」

「それは悪いことをしました」

「いや、楠木大和が謝ることじゃない。だけど、妙なんだ。『悪夢の正夢（ナイトメア）』も急に思い出してって言うことも親父やお袋のレアスキルと似すぎている」

親父は『悪夢の正夢（ナイトメア）』を持っているしお袋の能力である『現実回避（エスケープ）』は完全に忘れ去られる能力でもある。

だから、あまりに奇妙だ。

「しかし、周の両親は」

「ああ。『赤のクリスマス』に巻き込まれた。それに、人一倍正義感のある親父やお袋がそんなことをするわけがないんだ。親族だからでもあるが、オレはもういない二人を信じたい」

「わかりました。では、話はこれだけにしておきましょう。第７６移動隊隊長の保護者という話はこちらで処理出来るだけ処理しておきます」

「助かる」

オレは楠木大和に頭を下げた。

『ＧＦ』からすれば学園自治政府にはあまり借りを作らない方がい

いかもしれないが、オレ個人からすればそんなことは関係ない。

「では、次の話でもいきましょうか」

「他に何かあるのか？」

「はい」

その回答にオレは眉をひそめた。そして、とある鍵を取り出してオレに差し出してくる。オレはそれを受け取って鍵をまじまじと見つめる。

「どういう意味だ？」

「三日後ぐらいにあるシェルター点検。その際にシェルター奥深くを点検して欲しいということです。本来なら業者を使うところですが、どうやら奥深くは点検していないらしく」

つまり、それほどまでに危険なところか賄賂をもらっているかのどちらか。前者であって欲しくはないけど後者でもあって欲しくはない。一番の理想は忘れ去られているということ。

まず、ありえないけど。

「わかった。それにしても、シェルターの奥深くには何があるんだ？」

「わかりません。わかりませんが、学園都市にとって重要なものがあると聞き、鍵を渡されました。『ＧＦ』には内緒にするように」

「『ＧＦ』に内緒？　それはあまりにも怪しくないか？」

「だからですよ」

だから、第７６移動隊のシェルター点検の際に奥まで探ってもらえるよう鍵を渡してきた。

オレはそれをしっかりポケットに収める。

「了解した。まあ、何事もないことを祈るけどな」

「お気楽ですね。そんなことがありえるとお思いですか？」

「全く」

第三十四話　顛末

『なるほどね。“義賊”か。学園都市の方も大変みたいだな』

オレは通信越しに聞こえる慧海の声にため息をついていた。当事者じゃないから簡単に言ってくれるが、オレからすれば大変というレベルでは終わらない。

「おかげランク詐欺事件の関係者名簿が作り直しになったからな。名簿はそっちにもいっているだろ？」

『ああ。レノアがちゃんと確認した。さすがにマズいとは思うけどな』

「同感だ。すでに降格処分と除名処分は行った。降格処分は計２７２名。除名処分は１９名って感じだ」

降格処分は通常にＡまたはＢＢランク相当に戻っただけで、該当者はかなりの数に昇る。
まあ、除名処分よりかはかなり軽い除名処分なんて違反金とかかなりのお金を請求しているから。

もちろん、払えない額じゃない。だけど、学園都市にはいずらいであろう額だ。

『オレから言えるのは再発防止に努めてくれってことだな』

「それだけかよ」

オレは思わず苦笑してしまう。でも、それ以外に言うことはないだろう。だから、別にそれ以上を求めることはない。

「まあ、いいけどさ。ところで、時雨忙しいのか？」

『時雨に連絡か？　しかも、直接言う案件』

「いや、慧海にでもいいんだ。ただ、時雨には話を通して欲しい」

『わかった』

別に時雨以外でもいいが、時雨には話を通してもらわないといけない。

これはそれほどまでに重要なのだから。

「大規模談合事件を覚えているか？」

『耳に挟んだことなら。『ＧＦ』が関わらなかった大きな事件だろ』

「その関係者に海道椿姫の名前が出た」

電話の向こうで慧海が絶句したのがわかった。

海道椿姫。オレのお袋の名前だ。慧海は確実にそれを連想したに違いない。

『おいおい。まさか、『現実回避（エスケープ）』を疑う出来事が起きているんじゃないだろうな？』

「ああ」

お袋のレアスキルである『現実回避（エスケープ）』。能力は極めて限定的ではあるが記憶を隠すことに関しては最大の力を発揮する。

能力的に言うなら本来の記憶に蓋をするものだ。一定条件になれば外れるようにして。

『『悪夢の正夢（ナイトメア）』に『現実回避（エスケープ）』。駿と椿姫が生き残っているってわけじゃないよな？』

「生き残れるわけがないだろ？　あの『赤のクリスマス』でオレや茜達が生き残れたのはオレの『天空の羽衣』があったからだ。無意識に発動した『天空の羽衣』がニューヨーク各地で起きた爆風のほとんどを受け止めてくれた。だから」

『ああ。だから、信じられないんだ。駿と椿姫は死んだ。あの日に。だから、『悪夢の正夢（ナイトメア）』と『現実回避（エスケープ）』の持ち主が現れたことに驚きを隠せない』

オレだって同じだ。しかも、ナイトメア関連の事件に『悪夢の正夢（ナイトメア）』。大規模談合事件に『現実回避（エスケープ）』。どちらも違う事件だ。

だけど、その名を聞く限り、ナイトメアと大規模談合事件は関連があるように思えてしまう。

『問題が、どうして椿姫の名前が急に出てきたかだな。周はどう考えている？』

「えっ？　あっ、すまない」

そのことは全く考えていなかった。『悪夢の正夢（ナイトメア）』と『現実回避（エスケープ）』について考えているだけで精一杯だった。

『ったく、その気持ちはわかるけど、しっかり頭を働かせろ。そうしないと道も見失うぞ』

「悪い。とりあえず、『現実回避（エスケープ）』によって隠されていたと考えるのが現実的だ」

『だろうな。でも、条件はなんだ？』

「“義賊”」

寸前の出来事から考えてこれが一番しっくりくる。

「“義賊”が海道椿姫が関係者であることを突き止めた。それと同じくらいの時間から新たな関係者として海道椿姫の名前が挙がりだした。それから考えると、“義賊”が何らかの資料を見つけた。それが隠されていた場所が暴かれたことで『現実回避（エスケープ）』が外れた」

『普通に納得出来るな。問題が、“義賊”が本当にそれをしたかどうかになるな』

「“義賊”の存在がわからなければどうしようもないっての」

オレは小さくため息をついた。

オレが考える可能性が一番高いが“義賊”がどう行動したかわからなければどうしようもない。それほどまでに“義賊”は不明な存在

だ。

まずは“義賊”を調べるのが先決でもある。

「問題が、“義賊”は学園自治政府が調査しているからな。色々とオレ達は手を出さない方がいい」

『そうだな。『ＧＦ』と学園自治政府の調査が被った場合、学園自治政府が優先される。ただし、商業エリア内のみの話だが』

「そういうこと」

厄介な取り決めが決められたものだが取り決めである以上仕方ない。そうしなければ規模でも数でも勝る『ＧＦ』が全てを取り仕切れる。

『誰がそんなものを作ったんだよ』

「お前だお前。ナイトメア関連は商業エリア内には留まっていないから調査出来るけど、“義賊”は別だしな」

『苦労しているんだな』

「一度殴ってやろうか？」

取り決めを決めたのは時雨や慧海だ。オレは関係ないし楠木大和に言われるまで知らなかったくらいでもある。本気で一度殴ってやりたい。

オレはまたため息をつきながらレヴァンティンを指先でいじる。

『そうだ。周、前に連絡した時のことを覚えているか？』

「そのことについても訪ねようと思ってたところだ。結果は？」

『ビンゴ。しかも、成功だ。ケリアナの花の匂いを充満させた場所で火をつければ、耐熱性の建物が一瞬にして溶解した』

「ちょっと待て。もう一度頼む」

オレは完全に自分の耳を疑っていた。

『耐熱性の建物が一瞬にして溶解した』

「おいおい。何の冗談だ？　耐熱性ってことは１０００℃ほどなら耐えられるだろ？」

『ギルガメシュの話だと２０００℃なら１０分は耐えられるらしい』

「んなバカな」

なのに一瞬で溶解したという。ありえないというレベルじゃない。その炎の温度にもよるが建物全体が溶解するような温度はレーザーと言った方がいい。

アルの服にある耐火性を破るには十分だ。

ケリアナの花にそんな効果があったとは。

「はぁ、つまりケリアナの花の匂いには可燃性物質があり、燃えた

場合は異常な高温を出す、でいいよな」

『ああ。現在様々な資料を作っている。匂いが籠もるまで約三日。花の数は約２５００』

「そんなにたくさんなのか」

しかも、その数で三日。おそらく、他にも様々な条件を考えたのだろう。そして、実行したに違いない。

その中で一番信頼に足るのが２５００か。

「わかった。ありがとう。こちらでも学園自治政府に連絡して花屋全てにそのことを伝えてもらう」

『そうしてくれると助かる。後は、学園都市のエネルギーの秘密だな』

「そんなのもあったな」

あまり重要そうな話ではなかったので完全に忘れていた。確かにあったけど、あまり重要な話じゃなかったような。

『ちょっと面白い情報を見つけてな。聞きたいか？』

「じゃ、通信切るぞ」

オレはそう言って通信を強制切断した。そして、レヴァンティンを置いて小さくため息をつく。

『やっぱりですね。マスターが考えていた通りでした』

「当たり前だろ。でも、ケリアナの花は思っていたより危険だよな。だけど、観賞用としては十分だし」

『また、通信が入りましたよ』

オレはレヴァンティンを手に取り通信を開きながら小さくため息をつく。

「何のようだ？」

『勝手に切るなっつうの。まあ、そんなことはどうでもいいか。学園都市のエネルギーに関して面白い情報が入った。いや、情報の断片か？』

オレは微かに眉をひそめる。情報の断片というのは正確な情報じゃないという意味だ。ワンワードまたは噂。それらを情報の断片とする。

普通ならわからないことに関してはあまり使わないはずなんだけどな。

『シェルター、だそうだ』

「今何て言った？」

『シェルターだ。あくまで情報の断片だから調べるのはお前らに任せるけど』

「ちょうど明明後日にシェルター点検があるからついでに調べておく」

楠木大和からもらった鍵はもしかしたらそれに関係があるかもしれない。

『わかった。だが、危険だと判断すればすぐに帰って来いよ』

「わかっている。オレはそこまでリスクを背負うことはしないって」

『だといいんだが』

いつもと違って慧海は不安そうだった。それを聞きながらオレは笑みを浮かべる。

「みんなを連れてオレも帰って来るさ。じゃあな」

オレはまたレヴァンティンで通信を切断した。そして、小さく息を吐く。

「シェルターの中に一体何があるんだ？」

オレの問いに答えることが出来る者は今この場にはいない。レヴァンティンもわからないだろう。だから、オレ達が調べないと。

レヴァンティンを机の上に置いてオレはベッドに寝転がった。

「まさに神のみぞ知るところだな。準備は万端にしておかないとな。久しぶりにあれを持っていくか」

オレはベッドから起き上がって近くの押入を開けた。そして、目的のものを探し始める。

「備えあれば憂いなし。さてと、あれはどこにあるかな?」

第三十四話　顛末（後書き）

シェルター点検にはまだ入りません。まだ休日を挟みます。

第三十五話　休日の過ごし方（前書き）

この話でようやく１００００００文字に到達しました。ちょっとした大台気分です。次は１５０００００文字を秋の最中には出したいです。その頃には第二章が終わっていればいいなと思っています。

第三十五話　休日の過ごし方

金曜の授業が終わった次の日は土曜。普通の高校は授業が無く、一部の高校ですら三年生以外授業がないという学園都市。どうようになればたくさんの学生が商業エリアに繰り出す。

そんな中、第７６移動隊副隊長の孝治は一人第７６移動隊専用の訓練場に一人早朝からいた。

その手には漆黒の刃が煌めく運命が握られている。

動きながらも片手、時には両手を使って運命を使っている。その流れは見事で、止まることなく前後左右に体を動かしながら運命を扱っていた。

「やはり、周がいなければ対戦相手としては不服だな」

その言葉と共に孝治は運命を振る。一心不乱に。

その動きは光が姿を現す二時間後まで続くことになる。

基本的に音姫の休日は起きるのがいつもより遅い。大体六時頃には目が覚める。それはこの日も同じだった。

あくびをしながら片腕を挙げて大きく体を伸ばしている。ただし、

いつもはしっかりとしたポニーテールの髪は今は完全にぼさぼさだ。

「ふわぁ。弟くんと由姫ちゃんはもう起きているかな？」

その言葉と共にぼさぼさの髪を優しく触りながら廊下に出た。廊下から聞こえてくるのは何やら騒がしい声。

音姫は怪訝そうな顔をしながら階下に向かって降りて行く。

「お兄ちゃんは私に任せて！」

「いや、今日はオレが作る。いつも由姫に任せてばかりだろ？」

「大丈夫です。私は大丈夫ですからお兄ちゃんはゆっくり新聞でも読んでて。お兄ちゃんは今日まで休まないとだめなんだから」

「それは隊の仕事だ。家事には関係ない。それに、いつもは由姫が頑張っているだろ。だから、由姫が今日は休め。いいな？」

「よくない」

「二人とも、おはよう」

「あっ、おはよう、お姉ちゃん。ああ！　お兄ちゃん！」

一階に降りた音姫の視界には調理場を巡って争う二人の姿があった。いつもは髪を後ろで結んで小さなポニーテールみたいにしている由姫だが、今は括っていない。そして、周の方はとさかの様な寝癖がついている。

音姫はそんな二人を見て噴き出していた。

「仲良くしようね」

「おはよう、音姉。音姉はゆっくりしてくれ。今日はオレが朝ご飯を」

「だから、私が作るって」

「わかった。なら、ご飯を頼む。オレはおかずを作る」

「わかっ、てないからね！　それだとお兄ちゃんが朝食を作ることになるじゃない！」

「だから、オレが作るって」

「私が作る」

「オレ」

「私」

「オレ」

「私！」

「オレ！」

顔を突きつけ合っていがみ合っている二人の苦笑しながら音姫は洗面所に入った。そして、寝起きの顔を水で洗う。

実は休日の朝にはよく見る光景だから音姫はあまり何も言わない。結局は仲良く朝ご飯を作るのだから。

「よしっ、朝練にでも向かおうかな」

悠聖の朝は平日だろうが休日だろうが早い。それにはとある理由がある。

「いった」

悠聖は体中に感じる痛みを受けておき上がった。どうやらベットの上から落ちたらしい。ちなみに、ベットはかなり大きく、言うならキングサイズ。部屋の大半がベットだ。

そのベットの上には優月と冬華、そして、アルネウラの姿がある。

ちなみに、悠聖は毎日優月とアルネウラと寝ている。アルネウラは悠聖と付き合ったいるし、優月は二人からすれば妹みたいだからだ。ただし、冬華は寝ていない。

悠聖は小さくため息をついて周囲を見渡した。

入り口のドアに付けられているのは八つの鍵。窓には様々な侵入防止用のグッズが張り巡らされ、勝手に入ろうとすれば警報が鳴るようにしている。

だけど、何一つ解除された痕跡がなく冬華はベットにいた。そして、寝像の悪さから毎回悠聖をベットから落として起こしている。

悠聖はまたため息をついてカーペットの上で寝転がっているフェンリルの頭を撫でた。

「お前のマスターは毎日どうやって入ってくるんだ」

実に呆れているがその方法が全く分からない。休日はほぼ確実、平日は週に一回の確率で冬華が部屋にやってくる。別の言い方をするなら夜這いを仕掛けてくる。問題は悠聖が寝る時間が早いからでもあるが。

ベットの上で誰かが動く。そして、端にいた冬華をアルネウラがベットの外に蹴落とした。

冬華がいなくてもアルネウラによって悠聖は落とされる。

冬華はゆっくり起き上がった。

「おはよう、悠聖。それにしても」

起き上がった冬華がベットの上を見る。

「どうしてこの子は寝相が悪いのかしら?」

「どうしてお前は毎休日夜這いを仕掛けてくるんだ?」

思わず尋ねてしまう悠聖であった。

「都、説明してもらえるかしら？」

鏡の中に映る琴美の顔には見事な笑みがあった。ただし、その体からにじみ出ているのはまさしく修羅のオーラ。

琴美の後ろにいた都は完全に鏡の中の琴美と視線を合わさない。

「えっと、なんのことでしょうか？」

「しらばっくれるんじゃないわよ！　何よ、この髪型！」

琴美の髪型は見事なパイナップルの様な形になっていた。狙ってやったようにしか思えない。

「か、可愛いですよ。それに、それなら身長が伸びますよ」

「都のように身長には困っていないのよ」

琴美は立ち上がり都のこめかみを握った拳でぐりぐりする。ぐりぐりされている都は「あうー」と叫びながら痛そうな顔で琴美の腕をぺちぺち叩いていた。

「しかも、平日ならちゃんとするのに休日だけはどうして創作意欲がわくのかしらねぇ？」

「あうー、ごめんなさいごめんなさい。痛いです。痛いですってば」
琴美の気がすんだのか琴美はようやくその手を離した。
「頭が割れるかと思いました」
「都がこんな変な髪型にするからじゃない。私は今日は大学の講義があるって言わなかった？」
「言ってました。ですけど、イメージチェンジした方が琴美はもてますよ？」
「一度頭を割られたいのかしら？」
琴美がにっこり笑いながら都は首をぶんぶん振りながら両手を前に突き出した。
「お断りします、お断りします。それにしても、何の講義があるんですか？」
「英語よ英語。私のクラスの先生が今秋休んだからって土曜に補講よ。普通にありえないから」
琴美はそう言いながら鏡の前のいすに座った。そして、都がパイナップルのように結んだ髪の毛を解いていく。
すぐに櫛を当てていつものようなストレートに戻した。
琴美が鏡と自分の手でちゃんと髪の毛がなっているかどうか確認する。

「はあ、まさか三つ編みやポニーテールじゃなくてパイナップルで来るとは」

「三つ編みならよかったんですか？」

その言葉に琴美の目が光を放った。

「そうね。都は今日三つ編みにしようかしら？」

「えっ？」

顔をひきつらせる都に対して琴美は満面の笑みを浮かべて近づいた。

「羨ましい。いつもと違う髪型なのに普通に似合う都が羨ましい」

「し、仕方ないよ。ベリエちゃんも私もそれほど長くないんだから」

三つ編み姿で駐在所にやってきた都をベリエは羨ましそうに見つめていた。ちなみにアリエはその横でそんなベリエを苦笑している。

「お二人も髪を伸ばしてはいかがですか？」

「却下。長かったら戦いにくいし」

「私達はナイフが基本だから。都さんは杖だし」

「そう言えば、音姫も髪が長いですよね」

「「あの人は別」」

アリエとベリエの声が完全に重なる。それを聞きながら委員長が苦笑しながらもお茶を三人に出していた。

「確かに、音姫さんは別ですよね。髪の毛も武器であるかのように舞っていますし」

「実際に音姫は別格よ。髪が長いという近接戦闘のデメリットを剣技の実力で完全に打ち消しているから。もしろ、髪を短くしたら勝てる勝負ですら勝てなくなるかも」

「ベリエちゃん、私達は音姫さんにかったこと無いよね？」

「気分よ気分」

ベリエの声にその場にいた全員が苦笑する。そして、委員長が時計を見た。

「そろそろ営業開始時間だね。都さんは今日は訓練？」

「いえ、周様の代わりに事務です。仕事の大半は昨日でかなり片付けていますし、後ちょっとですから」

「さすが都さん。書類整理は上手いですよね。それと比べてベリエは」

委員長がベリエを見ると、ベリエは口笛を吹きながら視線を逸らしていた。口笛でならしている音楽は『天国と地獄』。かなり器用だ。

それを見ながらその場にいる全員が苦笑する。

「ベリエちゃんの書類整理は私の仕事だから。都さんを手伝うよ？」

「ありがとうございます。では、手伝ってもらいましょうか」

「私は何を手伝えばいい？」

ベリエが目を輝かせながらアリエに尋ねる。アリエは少し苦笑しながら駐在所の一角を指さした。

「では、あそこの１０万ピースのパズルを完成させてください」

「オーケー」

周が冗談のごとく作った１０万ピースパズル。未だに１０００分の１ほどしか完成していないそれにベリエは近づいて行く。ちなみに、完全な真っ白のミルクパズルだ。

周も遊んで作ってから後悔していた。

「これでベリエちゃんも静かだね」

「何気に酷いと私は思うな」

にっこり笑みを浮かべる選りえの横で委員長が苦笑しながらパズルに取り掛かるベリエを見ていた。

訓練は夏であろうがなかろうが、例え冬であったとしても質は全く変わらない。それは春先である今の時期も同様だった。

「休憩」

音姫の言葉と共に音姫の向かいにいた冬華が巣の場に崩れ落ちる。対する音姫の顔は涼しいものだ。

慌てて優月とアルネウラが近づき持っていたスポーツドリンクを冬華に飲ませる。

「相変わらずの鬼畜っぷりだな。孝治の次に近接が強い冬華ですら倒れるか」

「音姫さんの剣技は絶えず相手を動かす。そして、体力を奪われていく剣技だ」

孝治と悠聖の二人も涼しいものだった。だけど、その周囲には地面が大きくめくれたような跡がたくさんある。

冬華はゆっくり体を起して悠聖を見た。

「どうして悠聖はそんなに余裕なの？　孝治と手合わせしているはずなのに」

「オレか？　そうだな。孝治は動き方がなんとなくわかるから休憩

のポイントがわかると言うか」

「じゃ、次の手合わせ相手は悠聖君で」

「げっ、下手に言うんじゃなかった。優月、手伝って」

「お断りします」

優月がにっこり笑みを浮かべて死刑宣告を行う。悠聖はすぐにアルネウラを見た。

「アルネウラは」

『私は冬華を見るので忙しいよ。春だからと言って熱中症にならないと決まったわけじゃないから。それに、音姫との訓練だったらむしろ熱中症になりかねないよ』

それほどまでに音姫との訓練は強力ということだ。悠聖は諦めたように肩を落とした。そして、周囲を見渡す。

「それにしても、今日ってこんなけなんだな。本当なら周と由姫と都さんも加わっていたよな？」

「正確にはアリエ、ベリエ、エレノアもだ。エレノアは風邪を引いたと聞いている」

「やっぱり慣れないのかね？　魔界と人界じゃ」

悠聖はそう言うが魔界と人界であまり差はない。あるのは魔力の濃さだろう。だが、エレノアはよく風邪を引くことでみんなの認識は

共通していた。

優月が何かを考えるように悩む。

「どうしてアリエもベリエもエレノアさんのように風邪を引かないのかな？」

『あれだよ、あれ。バカは死ななきゃ治らない』

「バカは風邪引かない、だからな」

悠聖が呆れたようにため息をつく。そして、空を見上げた。

「時間、止まってくれないかな」

もちろん、そんなことはなかった。

「ごめん、けほっ、けほっ、なさい」

咳をするエレノアの背中を見舞いに来ていたアル・アジフが撫でる。

エレノアは服を着込んでいる。

「喋るでない。そなたはかなり辛いじゃろ」

「けほっ。だけど、アル・アジフも、けほっ、けほっ。風邪を」

「我は大丈夫じゃ。寝ておれ」

アル・アジフがエレノアをベットに寝かせる。そして、エレノアの体温を計った。

体温は３９℃。かなり体温は高い。

「そなたは体が弱いのじゃから、無理をするでない。常に季節の変わり目は風邪を引いているからの」

「うん。『炎帝』を目指したのも、けほっ。体の弱い私でも力強く生きていることを示したかったからだし。はぁ、ちょっと、楽になってきた」

「ベリエとアリエが調合したそなた専用の風邪薬じゃからの」

アル・アジフは机の上に置かれた錠剤を見ながらエレノアにウインクした。エレノアはそれを見てクスッと笑う。

そして、大きく息を吸い込んだ。

「周は心配しているだろうな」

「じゃろうな。周は優しいからの」

「嫉妬？」

「ちが、いや、そうじゃな」

アル・アジフが苦笑する。そして、近くにあった椅子を引き寄せて

エレノアの近くで座った。

エレノアは楽しそうにアル・アジフを見ている。

「羨ましいな。アル・アジフには周がいて。私もそういう人が欲しいな」

「そなたは周が好きではないのかの？」

「どっちかと言うと、弟、かな。お姉ちゃん役はすでに音姫がいるけど」

「そうじゃな。音姫は立派な周と由姫のお姉ちゃんじゃ。そう言えば、音姫も色恋沙汰を聞かないの。モテているはずなんじゃが」

アル・アジフは深く考え込んだ。確かに、音姫はモテる。優しいし可愛いし性格もいい。ただ、ブラコンでシスコンというデメリットが大きかった。

そして、世界最強の剣士。

「あはは。けほっ、けほっ。音姫はそういうのには疎いと思うよ。でも、相手を見つけたらバカップルにはなる」

「そうじゃな。そなたも見つかればいいの」

「アル・アジフの意地悪」

学園施設エリア上空。

そこから見える学園都市の姿は学園都市の外にある姿とは全く違うものだ。たくさんの建物が並び、広大なグラウンドが広がっている。

高校と高校の間は一番近い距離で約５０ｃｍと他の場所と比べたら遥かに狭い。その代わり、学校間の交流は極めて盛んだが今は関係がない。

そんな学園施設エリア上空に光と楓の姿があった。

光は肩くらいまであるストレートの髪をなびかすながら、楓はショートカットの髪を押さえながら浮かんでいる。

「相変わらず涼しいな。やっぱり空は」

「サボっていたら怒られるよ」

「規定のルートはもう通ってる。後は時間まで見回るだけや。大丈夫大丈夫」

光はそういいながら『炎熱蝶々』をはためかせる。それをするだけで浮力が生まれるのだから魔術というのは神秘の塊だ。

対する楓はブラックレクイエムの上にちょこんと座っていた。

「光はもう少し真面目にしないと。いつか花畑君に愛想尽かされるよ」

「孝治はモテるからな。むしろ、うちが不釣り合いやないかって思ってる」

「そんなことはないって。光と花畑君はお似合いだよ。まあ、佐野君とリースに負けるけど」

「あの二人はバカップルや」

実際に二人はかなりバカップルでもある。だけど、二人はかなりお互いに依存しているのだ。狭間市以来の付き合いでもあるから仕方ない部分もある。

それに、最近は浩平がかなり忙しい。

「孝治はかなり特殊やからな。枝豆とかスルメとか大好きやし、ノンアルコールビールにちょくちょく手を伸ばしているし、最近おっさん臭さが出てきたし、頼りがいが上がったし」

「十分に光もバカップルじゃないかな？　お似合いだと思うよ」

「そんなことない。孝治はカッコいいし、強いし、私なんか足手まといやし」

「光は花畑君とはかなり戦闘タイプが違っていると思うけど」

孝治はあらゆるポジションが出来るが基本的には前線型だ。対する光もあらゆるポジションが出来るが、武器やレアスキルの性質から後方からの射撃型である。

だから、一緒に戦えば共闘することが難しい。

「悩めるだけ十分だよ。私なんて、叶わない恋だし」

「くしゅ」

周はくしゃみをしていた。そんなくしゃみをした周を呆然とリースが見ている。

「そんなにオレのくしゃみはおかしいか？」

「うん」

「はっきり言われると傷つくな」

周が小さくため息をつきながら周囲を見渡す。周とリースがいるのは商業エリアのリュミエール。その屋上に二人はいた。

周囲を見渡しても由姫や亜紗の姿は見当たらない。

「はぁ、はぐれるんじゃなかった」

「私も」

周とリースは揃ってため息をつく。実はリースも浩平とはぐれていた。そして、周と偶然合流して今にいたる。

周は手に持つ缶コーヒーをゴミ箱に投げ捨てた。

「リースは今日休みだったのか？」

「浩平と一緒」

「なるほどね。それでリュミエールにいたのか。ちなみにオレは」

「聞いていない」

「さいですか」

リースに話を強引に切られ周は小さくため息をついた。ここまでばっさりいかれたのは周にとって久しぶりだ。まあ、リースだから仕方ないだろう。

リースは未だに浩平以外とは若干の壁がある。第７６移動隊の面々にすら。だから、本当はみんなと笑って会話して欲しいと周は思っているのだが。

「余計なお世話」

その言葉に周はリースの方を見た。リースはその手に竜言語魔法の書物を持ち周を見ている。

「聞こえていたか？」

「余計なお世話。私は私だから。それに、壁はないつもり」

「いや、あると思う。ほら、オレとの会話も」

「それは嫌いなだけ」

「さいですか」

まさか、ここまで嫌っていたとは。

周はそう落胆しながら小さくため息をついていると屋上に誰かが入ってくるのがわかった。人数は五人。それに振り返ると、そこには由姫や亜紗、浩平以外にもメグと夢の姿があった。

何故かメグや夢も。

「何で二人も一緒なんだ？」

周は首を傾げながら浩平に走り寄るリースを追って歩き出した。

亜紗と由姫の二人は周囲を見渡していた。周とはぐれたからだ。リュミエール内にまた遊びに来ていた二人はたくさんいる人の中から頑張って探そうとしている。

『由姫、センサーは？』

「リュミエール内にいることしかわかりませんってば。でも、遠くはないです」

『周さんのことだからきっとどこかで座っていると思う。こういう時に一人の方が動くのはかなり危険だから』

「ですよね」

リュミエール内ではあまり電波は届かない。だから、二人はデバイスの通信で探すことは諦めていた。

亜紗が周囲を見渡し、小さく息を吐く。

『いない』

「すぐには見つかりませんよ。上の階に向かって」

「あれ？　由姫と亜紗か？」

その声に二人は振り返っていた。そこにいるのは周囲を見渡しながら向かってくる浩平の姿。

そして、浩平が二人の近くまでやってきた。

「リース見なかったか？」

『見なかった』

「もしかして、浩平さんもはぐれたんですか？」

「お前らもか。ああ、ややこしいことになっているな」

確かにややこしいことになっている。亜紗や由姫は周とはぐれて浩平はリースとはぐれて三人は合流している。

三人が同時にため息をついた時、由姫の背中を誰かが叩いた。

「はい？」

由姫が振り返るとそこには私服のメグと夢の姿があった。メグは活発そうなイメージそのままジーパンを着ており、メグはロングスカートだ。ちなみに、上はお揃いのシャツ。

「ヤッホー。深刻そうな顔をしてるね。どうかしたの？」

「兄さんとはぐれて。兄さん見ませんでした？」

「夢は？」

「えっと、屋上に、金髪の、髪の長い女の子、と一緒に」

「誘拐？」

メグが不思議そうに首を傾げる。それを見ながら二人はぶんぶん首を横に振っていた。

金髪の髪の長い女の子と一緒ということは周の知り合いだ。周の知り合いでそれが該当するのはリースのみ。

「じゃあ、屋上に向かうか」

「そうですね」

浩平と由姫が屋上に向かうエレベーターやエスカレーターではなく階段に向かって歩き出す。それを苦笑しながら残った三人は後を追いかけていた。

「なるほどね。どうりで五人なわけだ」

周は苦笑しながらその経緯を聞いていた。ちなみに、浩平とリースの二人はさっさとデートを再開してここから出て行った。。

「いやー、本当に驚いたわよ。夢と一緒に遊んでいたら由姫に出会うんだから。お三方ははデート？」

「『はい』」

由姫の声と亜紗の文字が重なる。それを見ながら聞きながら周はまた苦笑していた。

「まあ、まさかはぐれることになるとは思わなかったけどな」

「あれは兄さんが悪いんです。兄さん、左に行きましたよね？　右利きなんですから普通は右です」

「あいにくオレは左利きだ。右も使えるように両利きに変えただけで実際は左利きだ」

「屁理屈です。あそこは右の方がいい店が揃っていました」

「左もなかなか捨てがたい店が」

『全員が悪い！』

周と由姫の間に亜紗が入り込んでスケッチブックを二人に見せた。

『私は中央から最短で向かおうとしたし、周さんも由姫も自分の理由でそっちに向かった』

亜紗のスケッチブックに二人は視線を外す。どちらも自分が悪いことがわかっていたからだ。

『だから、みんな悪いの。わかった？』

「そう、だな。亜紗、ありがとう」

「ありがとうございます」

『べ、別に謝ってもらおうとは思っていないし、それに、私も悪いから。ごめんなさい』

三人が同時に頭を下げて、そして、三人共に笑い出した。

ほんの少しの時間だけ、周囲から奇異の視線で見られるような声で。

「ははは っ。さて、デートの再開といきますか」

「そうですね。亜紗さん、行きましょう」

『うん』

そして、三人は一緒にリュミエールの中に入っていった。

日が沈んでいる。その様子を悠人はフュリアス搭載型強襲空母エスペランサの横窓の一つから見ていた。

悠人は今日メリルやルーイを音界のゲートがある場所に送っていたのだ。だから、エスペランサの中にいる。

「悠人」

その声に悠人は振り返った。そこにいるのはリリーナの姿。リリーナが悠人の横に立つ。

「鈴は寝たよ。もう、ぐっすりと」

「リリーナは大丈夫？　昨日、遅くまでメリルと遊んでいたし」

「私は大丈夫だよ。これでも丈夫なんだから」

「そっか」

そのまま二人で沈み込む夕日を見つめる。傍目からすればロマンチックな光景ではあるが、二人からすればただ太陽を見つめているだ

けだった。

リリーナが笑みを浮かべる。

「悠人はさ、このまま第７６移動隊にいてフュリアスのパイロットとして戦っていくの？」

「どうかな。アル・アジフさんは僕達に他の道を示してくれている。第７６移動隊にいることだけが幸せじゃないから。でも、僕はそれには頼りたくないけど、今のままじゃダメだなって思ってるんだ」

「どうして？　悠人ならどんなフュリアス部隊に行ってもエースになれるはずだよ」

悠人は人界最強。音界の最強パイロットとは戦ったことはないが、エクスカリバーと悠人の力を考えて十分に強い。

だけど、今のままを悠人は求めていなかった。

「僕は昔、英雄に憧れていたんだ。自分を守り、みんなを守るような存在。確かに、今の僕はその英雄に近い力を持っていると思う。だけど、僕は本当は違うと思っている。この力は僕の求めていたような力じゃないって」

「贅沢だね、悠人は。でも、悠人らしいかも」

悠人は目を瞑った。そして、小さく頷く。

「いつか、それを見つける。それが僕が出来るアル・アジフさんに対する恩返し。僕はもう一人で立っていけることを示したいから」

「そうだね。リリーナに手伝えることがあったら言ってね。何でも手伝えるから」

「ありがとう」

悠人はリリーナに向かって笑みを浮かべた。リリーナの顔は赤い。夕日のためか、それとも、

「和樹さんや七葉さんを手伝いに行こ。二人共、ずっと動いているし」

「そうだね。じゃ、悠人、競争で」

「ずるいよ、リリーナ」

二人は駆け出す。楽しそうに笑いながら。

第三十六話　復帰

レヴァンティンの鞘を腰に身につける。三日着ないくらいで久しぶりの感覚になった青が基本の戦闘服。白の部分は脇と首もとから真ん中を一番下まで半分ずつに分けたような形だ。

オレはその服装を鏡を見て確認する。

昨日、病院に行ったところ、傷は完全に完治。激しい動きをしても大丈夫というところだった。

オレは小さく息を吐いてレヴァンティンに全てを収納する。

『久しぶりだから浮かれていますね』

「仕方ないだろ。こういうのはあまりないんだから。三日間も休むなんてほとんど無かったからな」

『昔はあったと思いますよ。私を拾った時のような』

「あの時はそれほど忙しい役職じゃなかっただけだ」

今は違う。こういう忙しさは第７６移動隊を立ち上げてから感じるようになった。それを苦に思ったことはないが。

オレはレヴァンティンをポケットに直して部屋のドアを開ける。すると、そこにはちょうど同じように起きてきた由姫の姿があった。

「お兄ちゃん、おはよう」

「ああ、おはよう。今日から復帰だけど体はなまっていないか？」

「毎夜基礎訓練はしていたけど実戦はさすがに。今日中に明日まで合わさないと」

「一日で合わせられるお前が羨ましい」

一日休めば取り返すのに三日というが、実はそういうことはない。オレや由姫はそういう訓練をよくするので取り返すには約半日で済む。

ただし、三日だから一日半。明日にはオレは間に合わないだろう。亜紗は大丈夫だろうけど。

オレは小さくため息をついた。

「今日こそはオレが朝飯を作るぞ」

「いえ、今日も私が作る。お兄ちゃんの復帰祝いだから」

「そうなると明日はオレになるよな？」

「明日も私だけど？」

さも当然のごとく首を傾げる由姫にオレは小さくため息をついて、そして、地面を蹴った。

ギリギリ限度の魔力で加速して由姫の横を駆け抜けようとする。タイミングは完璧だ。これなら、

「はいっと」

あっけなく由姫に捕まっていた。由姫はオレの襟を掴み簡単に持ち上げる。

「お兄ちゃんはゆっくりして。私が作るから」

「だから、今日こそはオレが」

「由姫ちゃーん！　弟くーん！　ご飯出来たよー！」

階下から聞こえてくる声。それに対してオレらは顔を見合わせて、そして、笑いあった。

鞘から抜き放ったレヴァンティンが亜紗の七天失星によって受け流される。オレはその受け流されるままに従って地面を蹴りながら亜紗の鳩尾に飛び膝蹴りを放っていた。

亜紗の体がくの字に折れ曲がり、オレは返したレヴァンティンを叩きつけようとする。だけど、亜紗は七天失星でレヴァンティンを受け止めた。

お互いに剣を弾き合い距離を取る。

亜紗との戦いは基本的にこれだ。オレは間髪入れずに距離を詰めて

レヴァンティンを振る。

亜紗に動かす時間を与えれば様々な高速の連続攻撃で追い詰められる。だから、こちらの攻撃で丸め込む。

亜紗は攻撃は得意でも防御は苦手だからそれを狙うのがポイント。本人の苦手なところを狙うことで亜紗が戦闘でやられにくくすることを挙げる狙いがある。まあ、実際は、

三日ぶりの戦闘訓練で無様な姿を見せられないだけだけど。

紫電一閃からの紫電逆閃。普通はここで終わるけどオレはさらにレヴァンティンを握り締めた。

鋭く放つ突き。亜紗は慌てて七天失星で受け止める。だけど、オレの腕は止まらない。

レヴァンティンで突いた腕をさらに動かす。さらに二連続の突き。この時点では亜紗は気付いているだろう。レヴァンティンに風が纏っていることに。

二連続の突きは強く突いて亜紗を弾き飛ばす。亜紗は七天失星を握り締めて走り出そうとしていた。だから、オレは左上からの斬り下ろしと振り上げを行う。それによって放たれる風の刃。

亜紗はすかさず風の防御魔術を展開した。亜紗の目の前に風の盾が現れてオレが振ると共に放たれた風の刃を受け止める。

「破魔雷閃！」

だから、オレは一歩踏み出しながらレヴァンティンを勢いよく振り下ろしていた。雷の刃が亜紗の作り出した防御魔術を貫き亜紗の体を貫く。亜紗はその場に片膝をついた。

「ふう、オレの勝ちだな」

『ずるい。破魔雷閃の前の技は何？』

「烈風刺突。新しいオリジナル剣技？」

完全に押している状況でしか使えないが、すぐに破魔雷閃に繋げられるからかなり前から練習していたのだ。まあ、成功するとは思っていなかったけど。

『でも、不完全。本当は突きの時点で風の刃を放っているはずだと思う』

「やっぱりばれてた？　風属性はそんなに得意じゃないからな。やっぱり、少し無駄が多いと思う」

レヴァンティンとの動きは完全かもしれないが、やっぱり烈風刺突は未完成だ。これを完成させれれば想定の威力を叩きだせるんだけどな。

「やっぱり、実戦なるのみか」

『マスターの技術では十分に連続攻撃の一つとして組み込めますよ。突きを風で纏っている以上、払うことも難しいですし』

「でも、亜紗なら本気になれば受け流すことは可能だろ？　問題が

そこなんだよ。オレの最大の弱点」

オレは器用貧乏だ。上手くなんだってできると思っている。でも、亜紗のような属性系の具現化を使える魔術師に対してオリジナル剣技の同属性はほとんど意味を成さない。だから、オレは様々なオリジナル剣技を作り出してはいる。

でも、弱点も多々ある。

「破魔雷閃は雷に対して抵抗がある場合は威力が低くなるし、水牙天翔は発動までに時間がかかる。炎舞氷壁は発動に対して詠唱が必要。烈風刺突は未完成。やっぱり、白百合流の中に組み込むしかないか」

『悪くはないんですけどね。やはり、オリジナルであることから他人からのヒントをもらえないということでしょうか。どの技もマスターがかなりオリジナル要素を入れていますし』

「そうなんだよな」

誰かからアドバイスをもらえたら一番いいだろう。剣技に関しては音姉から、魔術に関してはアルからのヒントが一番役に立つ。だから、二人に聞いてみたのだが、やはり専門外すぎるらしい。

オリジナル剣技は魔術との融合。魔術が使えない音姉では理論が理解できないし、アルでは理論が理解できなくても剣技ができないからヒントを出すことも難しい。

他の面々は言わずもがな。

「やっぱり、もうちょっと理論を煮詰めるべきだったな」

『そんなことはない。周さんのオリジナル剣技は十分に強い。だから、そこまで悲観しなくていい』

「まあな。そりゃ、オレは自分の剣技に自信を持っている。だけど、このままじゃ、最強の器用貧乏のままじゃだめなんだ」

『今の周さんのオールラウンダーは戦場を制する者。最強の器用貧乏じゃない』

オレは首を横に振った。そして、自分の握った拳を握りしめる。

今のままじゃダメなのはオレ自信がわかっている。

「確かにオレは第７６移動隊の司令塔だ。全体を見て行動する。だけど、いや、だからこそ、オレはやられたらダメなんだ。エンシェントドラゴンとの戦いでオレは負けた。もっと強くならないと。今は、今だけは」

『一緒に強くなろう。私や由姫と一緒に。周さんは一人じゃない。一人よりも二人。二人よりも三人。三人よりもたくさん。人は誰一人として一人じゃ生きていけないから』

「そうだな」

オレは鞘からレヴァンティンを抜く。そして、それをしっかり握りしめた。

「明日、シェルター点検で必ず何かあるよな。大丈夫なのかな？」

『マスターの中では何かがあることは確定しているんですね。まあ、私も同感ですが、正直、戦力が足りないと思います』

「いや、大丈夫だ」

それだけは自信を持って言える。

「オレも亜紗も由姫も都もアルもみんな強い。そして、絆がある。オレ達は簡単には負けないさ。そうだろ、亜紗」

『うん』

オレは空を見上げた。そして、明日のことを考える。明日の最悪の出来事を。

最悪の場合はローブ集団と出会うこと。『悪夢の正夢（ナイトメア）』の存在を『現実回避（エスケープ）』によって忘れ去られたら大変だ。

そうなると、対処は、

「いや、ちょっと待て」

どうしてオレはローブ集団と会うのが最悪の未来だと思った？　もしそうだとしたら、シェルター内部は、

「推測だけど、ありえない話じゃない」

ナイトメアの製造工場は見つかっていない。最近では大規模な捜索が起きているがどの地区からもその話は聞かない。でも、もし、も

し、その工場が地下にあるとするなら。

オレは考えた。もしもの時のあれを持っていかないといけない。

『周さん、どうかした？』

「いや、何でもない」

一応、時雨には伝えた方がいいな。

オレは小さく息を吐いてレヴァンティンを鞘に収めた。

「さてと、次の模擬戦は誰としようかな」

亜紗には気取られるだろうが出来るだけ元気よく言う。

もし、オレの想定が正しいなら作戦を変えなければいけない。オレは小さく舌打ちをする。

自分の考えを振り払うために。

第三十六話　復帰（後書き）

次話でシェルター点検に入ります。長さはそこそこ長くなるかと。

第三十七話　シェルター点検（前書き）

第二章は前編中編後編に分けられ、シェルター点検は前編のラストに入っていきます。

第三十七話　シェルター点検

学園都市にあるシェルター。それは『赤のクリスマス』のような大規模テロ事件が学園都市内部で起きた場合、一般人が隠れるために作られたもの。

他の地域にあるような核と呼ばれる兵器から身を守るために作られたオーバーテクノロジー産物の核シェルターと言われるものとは違い、言うほど強度はない。

核シェルターは噂では慧海ですら抜けなかったとか。

そんな学園都市のシェルターの入り口の一つ、学園施設エリア第八入口にオレ達は来ていた。

本当なら音姉や孝治も連れて行きたかったがナイトメア関連で調べており、代わりに学園自治政府から援軍が来ていたりもする。

「久しぶりの一緒の任務。よろしくな」

そう言いながらオレの目の前にいる浩平は挨拶してきた。オレは小さくため息をつく。

「何でお前が来るんだよ」

「大和からの命令だよ。学園自治政府で一番の戦力は俺だからな」

「確かに、閉鎖空間の中じゃ一番強いかもしれないけど」

弾丸と弾丸を弾き合わせて逃げ場を無くす技と建物の壁に弾丸を反射させる技を得意とする浩平だからこそこういう任務にはかなり向いている。

ちなみに、名前は五年前に浩平が考え出した。浩平レベルのビリヤードショットやリフレクトショットは世界でも数人しかいない。その大半が『ＥＳ』だ。

「俺なら大和からシェルターについていろいろ教わってきたからな。周をサポートすることも出来るぜ」

「嬉しくて涙が出そうだぜ」

そんな情報はすでに集めている。

オレは小さくため息をつきながらシェルターの入口のロックを解いた。

解き方は簡単だ。暗証番号を打ち込むだけ。普通は誰もが開けれるようにするのが普通だが、そんなことをして不良の溜まり場になったらしく暗証番号制度になった。

ネットで調べれば普通に番号があるけど。

シェルターのロックを解いて重たいドアを開ける。開けた先の空間から少しひんやりした空気が流れてきた。

シェルターは地下にあるからか温度は他と比べて低めだ。だから、ひんやりするのはわかるけど、そのひんやりに従って何かの匂いがそんの少しだけ鼻につく。

ただ、ほんの少し。本当にかすかな匂いだった。

「何か匂うの？」

「そうなのですか？」

都が鼻を鳴らして匂いを嗅ぐがわからないだろう。最初嗅いだ時にはわかったが、ほんの少しの時間で匂いがわからなくなった。

だから、もう気づけない。ほんの少しの間しかわからなかった。

「どこかで嗅いだことがあるような気はした。だけど、それがどこか少しわからないな」

「そうじゃな。ここまで匂いが薄いと判断することは出来ぬ。我や周以外にわかったものは？」

由姫も亜紗も首を横に振る。浩平は元から期待していない。

「わからぬか。しかし、シェルターに匂いがあるものかの？」

「匂いは籠もりやすいだろ？　食料か何かが漏れているとしか考えられないな。まあ、潜ってみたらわかるだろ」

オレはそう言いながらシェルターの中に向かってボール状のものを投げた。簡単に説明するなら毒など人体に有害なものが濃い濃度である場合に警報を鳴らして知らせてくれる不便な便利グッズだ。先に入れないといけないのが問題だ。

音は鳴らないので一酸化炭素やらその他毒も大丈夫そうだ。少量あってもオレかアルが気づくし。

「さてと、フロントは亜紗と由姫。センターはオレと孝治。バックに都とアルで。シェルター内の危険はないだろうけど、単独行動だけはするなよ」

単独行動は本当に危険なのだから。

『了解』

みんなの声、何故かレヴァンティンの声もする。オレは小さく息を吐いて歩き出した。

「食料庫はよし」

オレはシェルターの中にある扉を開けながら確認する。オレの声が聞こえたアルは用紙にそのことを書いていた。

今、オレはアルの二人と回っている。シェルター一般空間に到着したオレ達は三組に分けてシェルター点検を始めたのだ。

シェルターは基本的に三つの通路があり、それぞれが様々な施設に繋がっているからだ。

そこでオレは一番数が多い中央通路をアルと一緒に行うことにした。

「ふむ、順調じゃな。このままではかなり早く終わるのではないかの？」

「シェルター点検だけならそんなに時間はかからないさ。ただな」

オレは楠木大和からもらった鍵をアルに見せた。アルはそれを受け取ってじっくり見る。

「ほう、かなり魔術細工が深い鍵じゃな。シェルター内の鍵かの？」

「シェルターよりさらに深部に至る場所への鍵だそうだ。よくわからないが。というか、そんなに魔術細工が深いのか？」

そっち方面は知らないからよくわからないが、アルからすればちょうど専門家だ。だからこそ、わかるのだろう。

オレから見れば何か細かい鍵にしかならない。

「細かいの。我でもコピーするのに三ヶ月はかかる」

「どんだけかかるんだよ」

まるで、どこかの銀行の金庫だ。あそこは専門家が専門的な道具で作っているのと同じこと。それほどまでに重要なのか。

シェルターにそんなに必要な区画が必要なのか疑問だ。

「次は、避難してきた人の待機所か」

オレはドアを開けた。そこにあるのはただの広い空間。空間なのだが、その空間の匂いを嗅いだ瞬間、オレは眉をひそめた。アルも同じように眉をひそめただろう。

「匂うな」

「そうじゃな。この匂いはシェルターを開けた時の匂いじゃの」

「ああ。それに、埃があまり見当たらない。多分、ここで何か行われていたな」

オレとアルはその区域に入った。そして、同時に地面を触る。

定期的に掃除しているならともかく、シェルター点検は一ヶ月に一回のはずだ。なのに、綺麗すぎる。まるで、昨日か今日に掃除したかのような。

「運び出されたか。証拠がわからないように綺麗にした」

「普通の部隊なら気づかないからの。我やそなたしか気づかぬことじゃ」

「だろうな。気づくとするなら都くらいか。他のところも調べた方がいいな。アル、さっさと点検を済ませて他を回るぞ」

「了解じゃ」

オレ達は走り出した。これと同様の部屋が他に見つかったならかなりヤバい。ここで何があったかわからないが、何かがいるということは確かだ。

腰に提げたレヴァンティンに肘を置いてオレはその部屋から出た。
そして、次の部屋のドアを開ける。

そこには、扉があった。

「ここは、地図には書かれておらぬ扉じゃな。しかも、扉の中に扉があるとは」

「ここでこの鍵を使うのか。今は開けるべきじゃないな」

開ける時はメンバーが揃っている時の方がいい。

「奥を調べよう。何かわかるかも、なっ」

オレはレヴァンティンを鞘から抜いた。何故なら、前方にあいつの姿があったからだ。

幻想種であるゲルナズム。それが通路の先から八匹ほど。

「おいおい。普通はシェルターの奥に入ってからだろ。シェルター内で出るものじゃないっての」

「どうやら我らが気づいたから慌てて出したという感じじゃな。本当ならもっと早くに出しておる。罠と共に」

「おかげで奥に何かがあるってわかった。アル、援護を頼む」

「了解じゃ」

オレは前方にいるゲルナズムに向かって床を蹴った。

第三十七話　シェルター点検（後書き）

次回から戦闘が続きます。

第三十八話　攻防（前書き）

ゲルナズムって結構強いんですよ。みんなが少し桁違いなだけです。

第三十八話　攻防

レヴァンティンがゲルナズムの柔らかい腹を切り裂く。そのまま目の前にいたゲルナズムの頭にレヴァンティンを勢いよく突き刺した。

エンシェントドラゴンと共にいたゲルナズムと違ってこっちのゲルナズムはまだ柔らかいし切り裂けば倒せる。あの時のようなレヴァンティンの力を最大限使う必要はない。

ただ、こっちの方が明らかにややこしい。

「これで十一体目」

「まだまだ減っておらぬがな」

アルのため息にオレもため息をついてしまう。そういうことは本気でやる気がそがれるので止めて欲しい。

オレは後ろに下がってレヴァンティンを構えた。

「実際、オレ達の組み合わせじゃゲルナズムに一番不利だからな」

「ゲルナズムの持つ骨格をなかなか抜くことはできないからの。それは他の組も同じじゃろ？」

オレは首を横に振った。ゲルナズムに対して剣を入れているからこそわかる。

「こんな装甲じゃ由姫は止められないぜ」

由姫の拳がゲルナズムの甲羅を上からたたき割る。そして、たたき割ったところから直接重力砲を放っていた。

ゲルナズムの体が内部から破裂して由姫は小さく息を吐く。小さく息を吐きながらも由姫は飛び上がっていた。そして、近くにいたゲルナズムの触手を受け流しながら最大威力のかかと落としを決める。

たったそれだけでゲルナズムの甲羅は綺麗に割れた。そこに重力砲をねじ込んで放つ。

それと同時に真っ赤な血が由姫を避けるように吹き出していた。

「わぉ、さすが由姫ちゃんだ。桁が違うね」

浩平が笑みを浮かべながら双拳銃の引き金を引いている。浩平が使っているのはリボルバータイプのもので一発放つ度にリボルバーの中の弾丸を一つ消費していた。

消費していると言っても魔力の込められた弾だ。

「桁が違うって、浩平さんの方がすごいと思いますけど」

向かってきた触手を掴み、力任せに触手ごとゲルナズムを壁に叩きつける。そして、他のゲルナズムに叩きつける由姫。

もう、戦い方がめちゃくちゃだった。だが、浩平の方がさらに上を行く。

由姫が倒しているのはあくまで浩平が討ち漏らした敵だからだ。だから、さらに前方には腹がはっくり割けて痙攣しているゲルナズムの山。

「こっちは球数制限があるっての。まあ、フレヴァング使えばどうにかなるさ」

浩平がそう言いつつリボルバーの留め具を外しリボルバーの中身を排出する。中身は全て浩平が作り出して虚空の中に収納されてリボルバーにはすでに虚空から取り出された弾丸が装填されている。

早いというレベルじゃない。リロードまでが本当に一瞬。浩平はすでに単独で戦場を動き回れるまで成長していた。

それに由姫は感心する。もしかしたら、今の浩平には勝てないのではないかと。

「それにしても、こいつが幻想種か？　幻想種にしては湧いてくるんだが」

「そうですね。拍子抜けの弱さですし」

「それは多分、由姫ちゃんだけだぜ」

浩平が双拳銃を放つ。だが、その内の一発はゲルナズムの触手に突き刺さり、もう一発は腹に突き刺さった。

そして、腹に突き刺さった弾丸が爆発する。

「弱点は腹のみ。俺のバーストバレットも球数が厳しい」

「そうですか？　甲羅とかまだ柔らかいと思いますけど」

そう言いながら由姫はゲルナズムを上から叩き潰していた。甲羅はぺちゃんこに潰れている。

相手からすれば攻撃を仕掛けても由姫によって倒され、距離を取ったら浩平の餌食となり、近づけば簡単に甲羅が割られる。

この二人の組み合わせは幻想種としてのゲルナズムの尊厳を打ち崩すには十分だった。

「さてと、由姫ちゃん、下がって」

浩平が双拳銃を戻して虚空からフレヴァングを取り出す。そして、フレヴァングを構えた。

「久しぶりに狙い撃つぜ！」

その言葉と共にフレヴァングと、浩平の周囲から虚空を割って現れた様々な銃が火を噴いた。

壁を跳ね返りながら、お互いがお互いの弾丸を弾きながらゲルナズムに襲いかかる。ビリヤードショットとリフレクトショットの融合。

はっきり言うなら桁違いまでの一掃だった。

何百、何千という弾丸がゲルナズムの体を、主に腹を貫きずたずたに切り裂いていく。

そして、浩平がフレヴァングを下ろした時にはまともに立っているゲルナズムの姿は見あたらなかった。

「すごいですね」

「ふっ、これくらい当然、と言いたいところだが、やっぱりリースに援護してもらわないと辛いな。ビリヤードショットとリフレクトショットの同時発動で命中率が９０切るなんてまだまだだよな」

「浩平さんがいつの間にか超人の部類に入ってる」

普通、ビリヤードショットやリフレクトショットを行えば命中率は極端に下がる。それは、あまりに不確定要素が大きいからだ。シェルター内という閉鎖空間を使っているとはいえ、ビリヤードショットとリフレクトショットを組み合わせて使うのはある意味論外だろう。

しかし、浩平はそれすら出来るほどの空間把握能力がある。

正確には、あらゆる窪みや模様を見つけることが出来る能力だが。

「にしても、他の場所は大丈夫かな？」

「大丈夫ですよ。兄さんもアル・アジフさんと一緒ですし、亜紗さんは都さんと一緒です。おそらく、一番危険なのは兄さんのところでしょうけど」

七天失星が煌めく。そして、漆黒の刃がゲルナズムの首を落としていた。そんな亜紗に触手が放たれるが、その全てを都が簡単にフォトンランサーで叩き落とす。

亜紗が前に出る度に援護をし、後ろに下がった時には前に出てフォトンランサーを放つ。

都の動きはセンターの動きだった。状況に応じて自分のポジションを変えるポジション。それがセンターだ。

亜紗が後ろに下がり都と横並びになる。代わりに、前に出てくるゲルナズムの群れ。

「キリがありませんね。エターナルバニッシャーが使えれば」

すると、亜紗は勢いよく必死な形相で首を横に振っていた。都のエターナルバニッシャーは都最大の技であり、具現化系最強の雷王具現化ですら及ばない範囲内全てを攻撃する魔術。そう、全てを。

こんな場所て使われたなら亜紗は確実に倒されるだろう。

「わかっています。今はフォトンランサーで乗り切らないと」

都がすかさずフォトンランサーを放ち触手を撃ち落とす。だが、ゲルナズムは後から後からたくさん湧いてくる。

都は後ろに下がりながらフォトンランサーを魔力の塊ごとゲルナズ

ムに向かって放った。それはゲルナズムの床部分に突き刺さり爆発を起こす。

純粋な魔力爆発だ。ゲルナズムも耐えられなかったのか至近距離にいたゲルナズムの甲羅は破砕され、爆発によって中が吹き飛んでいた。

だが、ゲルナズムはまだまだやってくる。

まるで、味方の死に何も感じていないかのような。

「あれだけ味方をやられながらも向かって来るなんて。幻想種には知性があると聞いたことはありますが」

『そうじゃない。ゲルナズムにとって他のゲルナズムは味方じゃない。捕食者にとっての小さな獲物に味方は不要』

そう言いながら亜紗は矛神を一閃した。たったそれだけでゲルナズムの大半が上下に真っ二つにされて地面を転がる。

都が作り出した防御魔術が真っ赤な血を受け止めた。

亜紗が片手で持っているスケッチブックを捲る。

『ゲルナズムからすれば自分が捕食出来る可能性があるならそれは喜ばしいこと』

「一利ありますね。でも、今はそんなことを考えるより」

都が放つフォトンランサーがゲルナズムを装甲の隙間から貫いた。

「倒しましょう。それが近道です」

第三十九話　剣の舞

「レヴァンティンモード？」

オレの言葉が響き渡ると共に血飛沫がたくさん飛び散る。オレはゲルナズムの血がかかることを承知で限定的に防御魔術を展開しながらゲルナズムの群れに飛び込んでいた。

双剣のレヴァンティンがゲルナズムの腹に突き刺さり、腹を大きく切り裂く。そして、すかさず次の相手に向かって飛びかかっていた。金色の力を使って最大限まで加速しつつゲルナズムを切り裂いていく。

「くそがっ」

ゲルナズムが一斉に放ってきた触手に対してオレは後ろに下がることで回避するしかない。

だけど、それは、目的地から遠ざかる。

「どけっ。どけって言ってんだろうが！」

オレは双剣のレヴァンティンに金色の力を載せてゲルナズムを甲羅ごと切断した。

その行動にゲルナズムが一瞬怯む。その瞬間にオレは駆け出していた。

双剣で舞い、立ちふさがるゲルナズムを輪切りにしていく。
前に、前に進まないと。
「アル、無事でいてくれ」

「お兄ちゃん？」
由姫がゲルナズムを蹴り飛ばしながら振り返った。それを見ながら浩平はサポートするようにフレヴァングの引き金を引く。
たちまちの内にゲルナズムが数体地面にひれ伏し痙攣する。
「由姫ちゃん、どうかしたのか？」

「今、兄さんの声が聞こえたような。必死で、誰かを守ろうとして必死に、がむしゃらに戦っている兄さんの声が」

「俺には聞こえないけど、由姫ちゃんには聞こえたんだな。にしても、一向に数が減らないな」

浩平がそう言いながらもフレヴァングの射撃を的確に当てていく。
由姫も頷きながら向かってきた触手を殴り返してゲルナズムを吹き飛ばした。

「兄さんに何かあったのは確実だけど、何かあったんでしょうか？」

「わからねぇ。今は、前にいる敵を倒そうぜ。こいつらが街に出れば大惨事だ」

「賛成です。兄さんのことは心配ですが、今は、通さないことが大事ですから」

「あれ？　由姫ちゃんのことだから後はお願いしますって言うと思ったのに」

浩平は意外そうな顔をしながらフレヴァングの引き金を引いている。なのに、その射撃の命中率は百発百中。

由姫は接近してきたゲルナズムの顔に重力砲を放って破砕する。

「一昔前の私ならそう言っていたと思います。でも、今の私は兄さんとのデートで心が穏やかです。言うなら、賢者モードです」

「由姫ちゃんが言っても何ら違和感がないのは笑えるよな」

亜紗が駆ける。七天失星をゲルナズムの懐に潜り込みながらゲルナズムを切り裂く。そのまま速度を緩めず向かって来た触手を七天失星で切り裂いた。

亜紗が立ち上がると同時に七天失星を収めている。

「行きます」

小さなその言葉。その言葉と共に亜紗の体がさらに加速した。亜紗の体からは比喩ではなく文字通り青い煙が出ている。それを纏ったまま亜紗は七天失星を振り抜いた。

放たれる十の斬撃。それは七天抜刀に及ばないにしても十分な威力があった。

切り刻まれるゲルナズム。亜紗は荒い息のまま後ろに下がる。

あれだけ倒したはずなのにゲルナズムの数は減るどころか増えている。

だけど、亜紗は全く引けなかった。何故なら、都がここにはいないから。

由姫が周の異変を感じ取ったように亜紗や都も異変を感じ取った。

そして、亜紗が都に行くように言ったのだ。

だから、亜紗は一人で戦っている。

ゲルナズムの体を確かに切り裂き、返す刃が確実にゲルナズムの命を奪っている。

亜紗は後ろに下がってゲルナズムから距離を取った。すでに息は荒く、普通は戦える状況じゃない。でも、亜紗は自分の体の特製を利用して戦っていた。

「モード剣の舞」

亜紗が小さく呟く。それと同時に亜紗が駆けた。

七天抜刀左手で持ちながら右手で予備の刀を引き抜く。そして、二本の刀でがむしゃらに斬りかかった。

普通は両手に武器は出来ない。ナイフやレヴァンティンのモード？みたいな両手に持てるだけの重さをしたものなら後は戦い方と鍛え方次第でどうにかなる。だけど、亜紗の七天失星と予備の刀は違う。どちらも通常の刀の使い方を想定しているためそれなりに重い。だから、片手ではなく基本的には両手で扱う。

それを亜紗は両の手どちらにも握っている。

亜紗が走る。常人じゃない筋力と機動力でゲルナズムを翻弄し倒していく。だけど、ゲルナズムは減らない。

亜紗は攻防を繰り返しながらゆっくり後ろに下がっていた。

狭間の力を使い瞬間移動（ショートジャンプ）を行う。行う距離は短くてもその速度はかなりのものであった。

連続の瞬間移動（ショートジャンプ）は練習していたため問題はないが、瞬間移動（ショートジャンプ）を行う位置が少しずつズレている。

「周様」

都は別れ道のところに来るとそのまま周達が向かって方向に瞬間移動（ショートジャンプ）を行う。

一気に瞬間移動（ショートジャンプ）を行った都は足を止めた。

そこにあったのはゲルナズムの死体。それが何十と積み重なっていた。

「一体、周様の身に何が」

都は手に持つ断章を握りしめて走り出した。こういう時は走った方が明らかに早い。障害物が多いということは瞬間移動（ショートジャンプ）を行いにくいということだ。

だから、都は走る。

「周様、アル・アジフさん、どうか無事で」

「金色夜叉！」

レヴァンティンの先から現れた金色の刃が入り口を塞ぐゲルナズムの体を簡単に斬り裂き、目の前に存在する扉を斬り裂いた。

オレはすかさずそこに飛び込む。

そこにあったのは広大な空間の一つ。確か、避難民を受け入れるための区画だった。だが、そこにアルの姿はない。確実にこちらの方角に来たはずなのに。

「アル！　アル・アジフ！　どこだ？　どこにいる！？」

こういう場所で声を出すのは危険だ。いや、危険だからこそ声を出す。

すかさず粒子状の魔力を拡散させて隠れていないか探す。だが、どこにもアルの姿は見当たらない。

いや、姿は見当たらないけど、これは、

「周様！」

その声にオレは振り返った。そこにいるのは都。都がこちらに走り寄ってくる。

「周様！　ご無事ですか？」

「無事、とは言い難いな」

よくよく気づいてみるとオレの左腕に大きな傷が出来上がっていた。いつの間にかゲルナズムの攻撃を受けていたらしい。でも、無意識の内に『強制結合』の中で痛覚だけを切っていたのだろう。

オレは左腕に治癒魔術をかけた。

「アル・アジフさんは」

「連れて行かれた。多分、ゲルナズムの親玉に」

「親玉というと、エンシェントドラゴンの時のような」

「おそらくな」

オレはあの時のことを思い出すと自分が悔しくなる。あれはオレの不注意だった。

レヴァンティンがゲルナズムの触手を斬り裂く。そして、返す刃がゲルナズムの首を落とした。

だけど、背後から攻撃が来る。オレはそれを察知しながら横に跳ぼうとした。

それより早くアルの魔術が背後から迫っていた触手を吹き飛ばした。

「周、下がれ！」

「だけど」

「そなたは疲れておる。フロントとバックの位置を交代じゃ」

「了解」

オレは後ろに下がった。実際にオレの体の疲労はかなり限界だったりもする。その理由の大半が確実に三日間の休暇だった。

その間ほとんど運動しなかったからか体力がかなり落ちている。まあ、狭間戦役の時と比べれば遥かにマシだけど。

でも、ゲルナズムは１００単位で倒したはずだ。防御魔術でも受け止めきれなかった血がそれを表している。

オレはすかさず前方に魔術を放った。放つ魔術は都の十八番、フォトンランサー。魔力の塊から放つ収束した光の槍がアルを狙う触手を打ち抜く。

アルはいつの間にか取り出したフランベルジュを握りしめてゲルナズムと戦っている。早く、体力を回復させないと。

「レヴァンティン、魔術サポートを」

『何か来ます！』

その声にオレはレヴァンティンを鞘に収めていた。フォトンランサーを展開しながら紫電一閃を放てるようにする。

アルも異変を感じ取ったのか後ろに下がってオレに並んでいた。そして、オレがばらまいていた粒子に反応がある。それは、背後。

振り向きながらの紫電一閃。だけど、それはレヴァンティンが今までのゲルナズムよりも大きい触手によって弾き飛ばされていた。

触手がオレの体を吹き飛ばす。

「周！　きゃっ！」

壁に打ちつけられる前にアルが触手に絡め取られ巨大なゲルナズムがオレ達が向かっていた方角に走ったのがわかった。

そして、オレの体が壁に叩きつけられる。だから、オレは体中に神経を巡らせた。

自分の体を戦闘に最も適当な状態に組み換える。生体兵器というアドバンテージを最大限まで使ってあらゆるところを強化する。力も速度も。

それが、生体兵器専用の特殊形態、

『剣の舞』

体を剣にしてあらゆる全てを切り裂く状態。

ゲルナズムが迫る。だけど、『剣の舞』の最中ではその動きは遅い。

「どけっ！」

オレはゲルナズムの群れに突っ込んだ。

「だから、アルがここにいると思ったんだが」

そして、オレはレヴァンティンで床を切り裂いた。パネルが弾け、床の下にあるものが姿を表す。

それは扉。ただし、頑固な扉。

「下にいるな。都、みんなと合流するぞ。本格的な話はそれからだ」

「はい！」

オレと都は来た通路を駆け抜ける。

第三十九話　剣の舞（後書き）

『剣の舞』はデメリットも大きいです。ただし、突撃するだけならメリットはかなり多いものでもあります。
デメリットの一つとして成長バランスが崩れるというものがあり、周と亜紗は今まで『剣の舞』を使わなかったためにここで出ることになりました。

第四十話　馬鹿力（前書き）

由姫の馬鹿力の話です。

第四十話　馬鹿力

亜紗の体が触手によって弾かれる。亜紗はそのまま壁に叩きつけられていた。

亜紗の口から空気が漏れる。それと同時に亜紗の中で展開していた『剣の舞』が切れるのがわかった。

ダメージが大きく立ち上がることが出来ない。

だけど、ゲルナズムは止まらない。そのまま触手を亜紗に向かって放っていた。

亜紗は悔しそうな顔のまま目を閉じ、そして、

「ファンタズマゴリア！」

周の声と共に亜紗が目を開く。そこにはファンタズマゴリアによって触手を受け流した周の背中があった。

周が振り返る。

「どうした？　もう、終わりか？」

亜紗が首を横に振って立ち上がる。だけど、その足は震えている。

「『剣の舞』はまだ使えるか？」

亜紗はゆっくり頷いた。

「十分だ。エントランスまで戻るぞ。そこならまだ戦いやすい」

『わかった』

亜紗が『剣の舞』を再発動する。そして、入り口の方向に向かって走り出した。周はその場にファンタズマゴリアを放置して亜紗の後を追って走り出す。

ゲルナズムは二人を追いかけようとするがファンタズマゴリアが障害物となりどけるまで追いかけることが出来ない。

周は亜紗に並んだ。

「大丈夫か？」

『問題ない』

「実際は？」

『少し辛い』

周は並行して走る亜紗の頭を撫でると同時に周達が分かれた部屋についた。エントランスという表現も悪くはない。

周は一人足を止めて振り返り、レヴァンティンを構えた。

「レヴァンティン、ファンタズマゴリアの並行展開の補助を頼めるか？」

『むちゃくちゃなことを言いますね。それだとただの防御魔術になりますよ』

「それをファンタズマゴリアでやるんだよ」

『わかりました。理論構築はマスターがすでに終えているんでしょ』

その言葉に周は頷いた。そして、ゲルナズムやって来る通路に向かって手のひらを突き出す。

「ファンタズマゴリア！」

由姫のかかと落としが最後のゲルナズムの頭を完膚無きまでに砕いていた。

浩平が構えていたフレヴァングを下ろす。

「由姫ちゃん怒らせたら俺でも死ぬかも」

「さすがに浩平さんは無理じゃないですか？　兄さんと孝治さんと悠聖さんとリースさんのつっこみを受けてピンピンしていますし」

ちなみに、全員全力だ。

由姫は前に広がる空間を見つめた。そこにあるのはたくさんのゲルナズムの死体だけ。

由姫は小さく息を吐いて背中を向ける。

「兄さん達と合流しましょう。おそらく、どこも襲われているはずです」

「それにしても、ゲルナズムだっけ。こんな奴らはどこから現れたんだ？　全く見えなかったけど」

「姿を隠せる能力があるらしいのできっとそれでしょう。浩平さん。早くみんなと」

由姫の言葉が途中で止まる。何故なら、瞬間移動（ショートジャンプ）を行った都が現れたからだ。瞬間移動（ショートジャンプ）は本当に一瞬で移動するため今いた位置に急に現れる。

都は周囲を見渡した。

「戦闘は終わっていますね。由姫さん、浩平さん、ちょっと面倒なことになっています」

「面倒なことですか？」

「はい。アル・アジフさんが連れ去られました」

都の言葉に由姫と浩平が絶句する。アル・アジフの戦闘能力ははっきり言って桁違いだ。魔術師でありながら近距離戦闘も可能というまさにオールラウンダー。第７６移動隊の中では戦略上、周の右腕のような状況でもある。

そんなアル・アジフが連れ去らとなれば相手はどんな敵なのか。

「敵は大型のゲルナズムです。速度や攻撃範囲は戦っていたゲルナズムとは違うようで。今は周様が亜紗さんを助けに行っています。私達は二人ど合流しましょう」

由姫は唇を噛んだ。

やはり、あの時、嫌な気配を感じたあの時に周の前からアル・アジフが連れ去られたのだと直感的に感じる。そして、亜紗は都に周の場所に向かってもらった。対する由姫はその場に止まった。

由姫の力なら亜紗以上に戦えるはずなのに。

「私のせいだ。私が、一人で出来るくらい強ければ」

「違います。周様は必ずそのようなことは」

「でも、私がもっと強ければ、アル・アジフさんは」

「んなｉｆのことを考えても何の意味もないだろうが」

呆れたような浩平の声。そして、浩平は由姫を指差しながら近づいた。

「今の俺達の行動は自分の力の無さを嘆くことか？　違うだろ？俺達はすぐにアル・アジフを助け出す。そうじゃないのか？　くよくよしている暇があるなら走れよ！　まだ、間に合うから」

その言葉を聞いた由姫はポカンと浩平を見つめていた。そして、一

言、

「浩平さんは馬鹿じゃありませんでした？」

「喧嘩売ってんのか？」

色々な意味で台無しだった。

思考が回る。『剣の舞』は維持していないし金色の力も発動していない。だけど、頭の中で急速に理論が組み上がっていく。

それはもう不気味なまでに。不気味だからこそ、オレはそれを幸運だと感じる。今、発動しているファンタズマゴリアの弱点を瞬時に修復出来るから。

様々な魔力の構成の仕方をゲルナズムの攻撃を受け止めながら考える。ゲルナズムの攻撃は極めて威力が高い。通常展開のファンタズマゴリアなら一生破壊は出来ないだろうが、今のような広域展開ではファンタズマゴリアにひびが入る。

だから、構成を変える。

これはあまり知られていないだろうし、オレが知ったのもついさっきのことなのだが、同じ技でも魔力と魔力の結合の仕方を変えることで耐久性が極めて変わる。

例えば、今までのファンタズマゴリアは大量の四角錐を集めた姿だったが、その一つの面の構成を変えることで耐久性は大きく変わる。

例えば、細かな四角や三角が組み合わさったような構成にする。ひびは入りやすいが威力は逃げやすく、耐えるという点なら一番効率的だ。別に細かくしなくても円や楕円など様々な構成を試していく。

レヴァンティンもフルに回って手伝ってくれるからかなり楽だ。

弱くなる。逃がしやすくなる。強くなる。これを元に新しく作る。弱くなる。弱くなる。ひびが入る。違う。これじゃない。弱くなる。逃げやすくなる。逃げやすくなる。強くなる。けど、割れやすい。弱くなる。弱くなる。組み合わせる。成功しない。

「くっ」

ファンタズマゴリアのひびが大きくなる。このままじゃ割られる。せめて、都が由姫達を連れて来るまで持たないと。

組み合わせる。S字の構成を大量に組み合わせてみる。足りない場所は細かな点で固める。これで、どうだ。

ゲルナズムが体当たりを敢行する。おそらく、ファンタズマゴリアに大きなひびが入っているからだろう。オレもファンタズマゴリアは砕け散ると思った。だけど、ファンタズマゴリアは砕けない。

「どういうことだ?」

触手がファンタズマゴリアを打つ。だけど、ファンタズマゴリアに全くこれ以上のひびすら入らなかった。

成功したのか？

『マスター、広域展開型のファンタズマゴリアが通常展開型のファンタズマゴリア並みの耐久性があります』

レヴァンティンの驚いた声。それにオレは拳を握りしめていた。

「これなら大丈夫だな」

『マスターはいいところで成功しますよね』

「兄さん！」

由姫の言葉にオレはファンタズマゴリアを解いた。それと同時にゲルナズムが大量に向かってくる。それに対してレヴァンティンを構え、

「穿て」

大量の重力砲がゲルナズムの群れを上から叩き潰していた。そして、由姫がオレの前に着地する。生き残っているゲルナズムは仲間の死体を乗り越えて、

「里宮本家八陣八叉流奥義『海砕き』！」

由姫が動いた。それと同時に世界も動いた。そのような気がするくらいの一撃だった。重力を最大限まで乗せた拳は先頭のゲルナズムの体に直撃する。

拳に乗せていた威力は全てゲルナズムの体に染み込み、ゲルナズムの体は耐えられず爆発する。後方に向かって。

次に起きたことはオレの開いた口が閉まらなかった。

爆発したゲルナズムの破片が他のゲルナズムに当たり、同じように爆発して破片を撒き散らす。

結果、ゲルナズムの群れは全滅した。

多分、オレの後ろにいる三人もポカンとしているだろうな。

「兄さん、大丈夫ですか？」

オレは少しの間、何もすることが出来なかった。

「ここですね」

都がアルが連れ去られたであろう扉を触る。床の下に隠された扉はほとんど壁だった。調べた限り、人間の力ではまず不可能な質量。大人しく扉を開けておけば良かったかな。

でも、アルが連れ去られたということはアルがいる場所の最短の通路。どうにかして開けることが出来れば。

「無理なんじゃねえの？　ビリヤードショットとリフレクトショッ

トを最大限まで使って一点に強烈なダメージを与えても無理だぜ。
それに、時間がない」

アルが連れ去られてからそれなりの時間がかかっている。だから、早く向かわないと。

「やっぱり、扉から行くしか」

『由姫なら出来る』

スケッチブックの文字と共に由姫の背中が亜紗によって押された。由姫は完全にうろたえている。

「私？　いや、さすがの私でも」

『新技『扉砕き』』

「名前、かなりカッコ悪いですよね？　わかりました。兄さん、一回試していいですか？」

「いいけど」

都が扉の前から退く。その場所に入るように由姫が歩んだ。そして、息を吸い込む。左手の拳を握りしめ、振り上げる。

その動作にオレは嫌な予感がしていた。それは、白百合流滅び斬り『陸斬り』の姿勢に似ていたから。

そして、由姫が拳を振り下ろす。

轟音。

そう表すしかない。光景を例えるなら瓦割りの瓦のような感じだ。
オレもレヴァンティンも浩平も不可能だと判断した扉が真っ二つに割れている。

その光景にオレ達は完全に固まっていた。

「では、行きましょうか」

振り返った由姫の顔には満面の笑みがあった。

うん。怒らせたら死ぬかも。

第四十話　馬鹿力（後書き）

最後に砕いた扉はシェルターの扉です。核ミサイルすら効かないような設定作られる扉です。由姫はそれを砕きます。

第四十一話　目的（前書き）

ここで言う選民思想は本来の意味とはちょっと違います。

第四十一話　目的

アル・アジフの体が地面に投げ出される。すかさず体勢を戻して魔術書アル・アジフを開こうとした。だが、その手からアル・アジフが弾かれる。

「私達は戦う気がないのでね」

その言葉と共に目の前にいるフードの男が弾かれたアル・アジフを掴み取る。それを見ながらアル・アジフ、いや、エリシアが立ち上がり、虚空からスケッチブックを取り出した。

『あなた達は何者ですか？』

その言葉と共にエリシアは周囲を見渡す。ローブを着た人物は三人。その内の一人は女性だ。

アル・アジフを握る男が笑みを浮かべる。

「エリシア・アルベルトか。話せないという噂は本当だったのだな。まあ、いい。そんな内容を話せると思うか？」

『無理ですね。『悪夢の正夢（ナイトメア）』さん』

エリシアの文字にローブの男がピクリと動いた。エリシアは予想通りだと笑みを浮かべる。

『やはりですか。『悪夢の正夢（ナイトメア）』、『現実回避（エスケープ）』、そして、炎の魔術書。あなた達はナイトメアに関係する人達』

「ナイトメア？　ああ、『GF』内での呼び名か？　そんな名前は止めて欲しいな。あれはヘブンと呼ぶべきだよ。人としての最大の特性を得ることが出来るヘブンとね」

『あなた方は自らが神になったつもりですか？』

「この世に神はいない。それは君が、アル・アジフがよく知っていることだろ？」

その言葉にエリシアはスケッチブックを捲ろうとしていた手を止めた。その反応に『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男が笑みを浮かべる。

「ならば、私達が世界の主になればいい。簡単なことだ。本当に簡単なことだ」

『簡単じゃない。そんなことは出来ない。一体誰がそんなことを』

「滅びについて語ればいい」

その言葉にエリシアは言葉を失った。

そんなことをすれば暴動が起きるのは目に見えている。世界が滅ぶ本当の理由が語られたならば、テロが多発するだろう。

正義の名の下にテロが起きる可能性だってある。

『世界を混乱させる気？　そんなことをすれば騒ぎは『赤のクリスマス』以上のことになる』

「あれは良かった。私達のやっていることが正しいとわかった瞬間だよ」

エリシアは思わず後ずさった。

つまり、『赤のクリスマス』を起こしたのはローブ達ということになる。

アリエル・ロワソの計画に便乗し、ニューヨークの街を消し去った者達。

「世界は滅びから離れた。それは事実だ。実際に、今までなら世界はすでに滅んでいる。あの事件が世界の滅びを遅らせた。それが事実なのだよ」

『違う。そんなわけがない。世界はまだ滅びない。アル・アジフの記述にもそう書かれている』

「当たり前だ。私達がこれから世界をひっくり返すのだから。滅びはさせない。滅んでいいのはヘブンにいらない人間達だ。選ばれた人間以外、いらない」

エリシアは『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男を睨みつけた。そして、スケッチブックを捲る。

『そんな選民思想、受け入れられるわけが』

「選民？　お前達はすでに選民思想に染まっているだろ？　『ＧＦ』は民を脅かす者達には容赦ない攻撃を加える。もちろん、第７６移動隊はよほどの大きな組織じゃなければ戦わない。しかし、それは

『ＧＦ』が正義だと選んでいるからだろ？　そして、相手を悪だと決めつけている。それが世界だ。『ＧＦ』だ」

ゆっくりと手を広げる『悪夢の正夢（ナイトメア）』。それはまるで、その腕の中が世界だとでも言うようだった。

「世界は変わるべきなんだよ。正義の名を語る『ＧＦ』にその居場所はない。この世に正義はない。あるのは選民思想。誰もが選んでいる。正しいことと、正しくないことを。それこそ、選民思想ではないか？　違うのは人種にしていないこと。私達はそこまで愚かじゃないさ。人種にこだわることはない。かのフェイレルのような一部の人種を強制収容することはしない。私達は寛容なのだよ」

『今でも世界は寛容』

「寛容？　違うね。世界は悪を許さない。世界を救うための正義を悪と決めつける。人種差別より酷いじゃないか？　真の意味での正義を許さない」

『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男は高らかに宣言する。

「だからこそ、私は世界の住人に滅びの事実を説く。そして、言うのさ。こうなったのは『ＧＦ』や国連が隠していたからだとな。混乱したあとの世界は私達が導く。必要のない人間を全て殺し、選ばれた人間のみが暮らせるヘブンを。
クスリはその足がかりさ」

『ふざけないで。そんなあなた達の勝手はさせない』

「ほう。今ここでマテリアルライザーを使うか？　それもいいだろ

う。使うがいい。その時にマテリアルライザーは壊れる運命にあるがな」

マテリアルライザーは一撃でも受ければ破壊出来る。だから、エリシアはマテリアルライザーを呼び出せない。周がいるなら話は別だが。

「それに、今のお前では私達には勝てない。このアル・アジフがなければな。どうするつもりだ？」

『もうすぐ周が来ます。皆さんなら』

「不可能だよ。ここは核シェルター。上にあるシェルターとは耐久が違う。そうだな。君は核ミサイルの威力を知っているのだろ？君が連れて来られたら道はそれを二発分の破壊力で壊れる設計だ。そこを抜けられるとしたなら、それはもう人間じゃない」

『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男が笑みを浮かべる。

「ここに至る道にはゲルナズムを配置しているさ。その前にいくらでも脱出出来る。周が来る前にいくらでもな」

その瞬間、轟音が鳴り響いた。

どう表現したらいいかわからない轟音が上から鳴り響く。ローブの者達が慌てて上を見上げた瞬間、エリシアは動いた。

虚空から取り出した小さなナイフを『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男に向かって投げつける。『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男はすかさずナイフを腕で払った。

その瞬間、エリシアがアル・アジフを掴み、『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男を蹴り飛ばす。

「あなた！」

ローブの女がアル・アジフを掴んだエリシアを狙って手に持つ槍を突く。だが、それはエリシアの前に着地した周がレヴァンティンで受け止めていた。

「ギリギリセーフ、ってか！？」

槍を弾き、レヴァンティンですかさず突きを放った。だが、槍で受け止められる。

「周！」

アル・アジフに戻ったエリシアがローブの女に向かって魔術を放つ。炎と風の衝撃波はローブの女を吹き飛ばすには十分だった。

「なあ、はっさん、俺、本気を出していいか？」

ローブの男が拳を握り締める。『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男はニヤリと笑みを浮かべた。

「やれ」

「ああ。やるぜ。だからよ、死ねよ！」

その言葉が鳴り響いた瞬間、ローブの男の背後で陽炎が揺らいだ。揺らいだと同時に炎の塊が放たれる。周はそれをレヴァンティンで弾いた、はずだった。

炎の塊はレヴァンティンを弾き、周の左腕をかすかに焼く。

「がっ」

あまりの痛みに周はレヴァンティンを放した。弾かれたレヴァンティンが放物線を描き『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男の前に突き刺さる。

「あはははっ、はははっ、ふはははっ。それが学園都市最強の部隊の隊長か？　弱い。弱いぜ！　あはははっ」

「言わせて、おけば」

焼かれた左腕を押さえながら周はローブの男を睨みつける。だが、誰が見ても戦えるような状況ではなかった。

『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男が笑みを浮かべる。そして、笑い出す。

「こんなところで出会うとはな。たった一人で来るとは笑える。違うか？　海道周」

「……。そうだな。だけど、アルは返してもらう」

「いや、そんなことは無理だな。だが、ここまで来たことは褒めてやろう。君は世界の礎になることを選んだ」

周が身構える。もうすでに囲まれている。周は戦えないしレヴァンティンは離れた場所にある。アル・アジフも魔術の準備をしているがローブの三人はかなりの実力者だ。

『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男は笑みを浮かべたまま話しかける。

「のこのこと一人で来た礼だ。私達が起こす壮大な物語を述べてやろう」

「世界に滅びの事実を説き混乱させる、だろ？」

「なっ」

『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男が完全に息を呑んだ。それを見た周がニヤリと笑みを浮かべる。

「悪党でありがたいぜ。お前達の思ったようにはさせない。オレが食い止める。何が何でもな」

「きっ、くっ、お前も選民思想の塊か！？」

「違うな」

周は『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男を指差した。

「オレの大事な奴を奪って誘拐犯を捕まえる。ただ、それだけだ」

「一人で何が」

「誰が一人と言いましたか？」

その声は『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男の背後から聞こえてきた。『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男が振り返った先にいたのは由姫と都。由姫はすでにステップに入っている。

里宮本家八陣八叉流崩落『綺羅朱雀』。

由姫の拳は『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男を捉え吹き飛ばしていた。

「あいにく、オレにはあんな扉を破る力はないんでね」

瞬間移動（ショートジャンプ）で横に現れた都からレヴァンティンを受け取る周。それを右手で構える。

「ナイトメアの関係者としてあなた達を拘束する。異議は認めない。異論があるなら捕まえてから聞いてやる」

第四十二話　焔の鬼

右手でレヴァンティンを構える。焼かれた左腕は絶えず治癒をかけて痛覚の『強制結合』だけ解いていた。痛みはないから支障はない。

レヴァンティンを構えながら前を見る。

今現在の近接が可能なメンバーは四人。対する向こうは三人だが、その家の一人、背後で陽炎が揺らいでいる男が一番危険だろう。

レヴァンティンを弾き、オレにダメージを与えた。そこは普通にありえる話。ただ、オレはレヴァンティンで攻撃を受け流そうとしていた。なのに、弾かれたのだ。

威力というよりも何かがあるようにしか思えない。

ゲルナズムの姿は周囲にはいない。もしかしたら、隠れているのかもしれない。だからこそ、油断は出来ない。

「気配はなかったのに何故」

「気配ぐらいいくらでも隠せますよ。それよりも、逃げられるとは思わないでください」

都がフォトンランサーを展開する。その数は約３０。都にしてはかなり抑えている方だ。多分、都も気づいているんだろうな。

こいつらの実力は少なくともＳランク相当だということを。はっきり言うならこのメンバーじゃなければ危ないはずだ。

「おいおいおいおい、まさか、海道周だけじゃなく『白百合の奇児』白百合由姫に『狭間の巫女』都築都までいるのかよ。ふはははっ。やべぇ、お前らの肉が焼ける音を想像するだけでゾクゾクする」

「周様」

都が不安そうにオレに一歩寄せてきた。この中でも陽炎の男が一番危険だと思う。こいつだけは本気で行かないと。

「はっさん、全員殺していいか？」

「周を甘く見るな。最強の名の一人だ」

「ただのオールラウンダーなだけだろ？　甘く見るつもりはないさ。俺が『ＧＦ』にいた頃からこいつらの名前は聞き及んでいるからな。せいぜい、楽しませろ！」

放たれる炎の塊。それに対してオレはファンタズマゴリアを展開した。通常展開型の絶対防御障壁。だが、炎の塊は真ん中程までファンタズマゴリアを砕いていた。

威力が違う。

「散開！」

オレの言葉にみんなが飛び退く。だけど、陽炎の男はオレを狙って炎を投げつけてくる。オレはそれを避けた、はずだった。だが、熱波がオレの体を焼く。

まるで衝撃波のごとくオレの体に熱い空気が触れた。
火傷はしない。だけど、何回も受けたら火傷するであろう熱量。
「燃え尽きろ！」
放たれる大量の炎。それに対して都はフォトンランサーを放った。
だが、フォトンランサーは炎の塊によって打ち消され、オレを狙って塊が飛来する。
オレは地面を転がりながら白楽天流の燕閃を放った。しかし、レヴァンティンから現れた衝撃波は陽炎によって打ち消される。
あの陽炎が力の源なのか？
「アクアブラスト！」
アルがすかさず陽炎の男に水柱を放った。一応、氷属性との合成魔術だが、水を放つという点ではかなり優秀だ。
だが、その水が陽炎に触れた瞬間に蒸発する。だけど、アルの狙いはおそらくあれだろう。
オレは広域展開型のファンタズマゴリアを使用した。みんなの前にファンタズマゴリアが大きく広がった瞬間、爆発が起きる。
アルが水属性を使って混ぜたのは熱によって爆発する物質だろう。
蒸発することで気化し爆発した。
これならダメージは、

「ははははっ、ははははははっ。まさか、ここまでとはな」

爆炎の中から現れたのは炎に身を包んだ男。いや、この感じはどこかで覚えがある。そらは、そう、

金色の鬼である狭間の鬼。

今のこいつは言うなら焔（ほむら）の鬼。

「本気出したのはいつ以来かな？　そうだな。俺が『ＧＦ』抜けた三年ぶりか？」

「周様、おそらく」

「ああ。狭間の鬼と同等だな」

こんなレアスキルは聞いたことがない。だけど、こうなった以上はまともに戦えないはずだ。それほどまでに相手の強さは桁違い。

オレはレヴァンティンを握りしめた。

「耐火装甲。魔力の５０％を回してくれ」

『了解です』

オレは息を吸い込み前に飛び出した。ファンタズマゴリアは置き去りにしたままレヴァンティンを握りしめる。

「焼き尽くされろ！」

すかさずオレに向かって炎が放たれた。オレはそれを避けてレヴァンティンを勢いよく突く。だが、レヴァンティンが上に弾かれた。

オレは無理やり方向転換して後ろに下がろうとする。だけど、オレの体に炎がまとわりついた。

「あがっ」

体中に灼熱のエネルギーが駆け巡る。

オレはレヴァンティンの力を発動して炎を相殺した。すかさず後ろに下がる。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ。レヴァンティン、計測は？」

『約３５００℃。はっきり言いますが戦闘服の機能の約九割方犠牲にしました』

「つまりはただの布？」

『はい』

戦闘服には様々な魔術耐性と物理耐性がある。よほどの点の攻撃でなければ破壊出来ないものだが、まさか、あれだけでほとんど破壊されたとは。

「戦場なら戦略的撤退」

「出来ぬからな！」

アルがアクアブラストをまた放つ。だが、それは簡単に蒸発した。
オレはレヴァンティンをモード?に変更する。
「有効な手段がないのじゃろ？　なら、こういう時は全力の砲撃じゃ」
「やっぱりそうなるのね。レヴァンティン、弱点を探りながら」
「弱点がなんだって？」
その言葉は背後から聞こえてきた。オレが背筋が凍る思いで振り返った瞬間、そこにあったのはオレに向かって炎を放つ姿。
回避出来るような距離じゃない。だけど、オレとの間に誰かが入り込んだ。由姫だ。由姫はステップを踏み、炎を右手で弾く。
「なっ」
「綺羅朱雀！」
その弾いた姿勢のまま左手につけたナックルが男に叩き込まれた。
男が大きく吹き飛ぶ。
どうして無事なんだ？
「そうか。由姫は重力魔術を全身に張っているんじゃな」
「はい。固定に少し時間がかかったのです」

なるほどね。炎だろうが何だろうが、その熱量を重力操作によって受け流せばいいのだ。熱量の移動を受け流す。確かに由姫にしか出来ない技だ。

そうなると、由姫がある意味最強になるような。

「バカな。この状態の俺に殴りかかるだと？　しかも、殴られた」

「次で決めます。あなたの能力は私に効きませんから」

「ふざけるな！　俺は、俺はまだやられるわけには」

「そこまでです」

今まで戦闘に参加していなかった都の声が響く。それと同時に都の周囲には大量のフォトンランサーが展開されていた。

相手が力業で来るならこちらも力業でいった方が戦いやすい。だから、都はフォトンランサーの物量差を狙っている。

「これ以上の戦闘は無意味です。投降してください」

「この俺がここまで追い詰められるだと？　だが、これくらいがいい。逆転するには十分だろ？　そうじゃないか？　海道周」

オレは眉をひそめた。由姫には攻撃が効かないことはわかっているはずだ。なのに、相手は未だに勝つ気でいる。まあ、こちらからすれば勝ったも同然だが。

レヴァンティンを握りしめる。そして、先を向けた。

「逆転出来る要素はあるのか？」

「あるさ。例えば」

オレは振り向きながら収束砲を放っていた。

都の背後に放たれた収束砲は虚空で散る。その現象に何かがいることは確実だった。この状況で考えられるのは、

「レヴァンティン！」

地面を蹴りながらレヴァンティンを通常形態に戻し鞘に収める。そして、勢いよく抜き放った。

鞘から放たれたレヴァンティンが突如として現れた触手によって受け止められる。それと同時に姿を現したのはゲルナズムだった。

大きさは工場で見た最大のものよりさらに大きい。それを見ただけで不安になるほど大きかった。

「さあ、第二ラウンドの開始だ」

この空間に男の声が鳴り響いた。

第四十三話　ゲルナズム（前書き）

新たなオリジナル剣技が出ます。ただし、今回は完全な周の思いつきです。

第四十三話　ゲルナズム

あれと同じなら弱点は腹とモード？。だけど、それをするには隙がなさすぎる。

「くそっ、ヤバいな」

横手から飛び込んできたゲルナズムを金色夜叉で断ち切る。だが、大きなゲルナズムはオレに向かって大量の触手を放ちながら黄色い粘液を放ってくる。

オレは触手を避けながら黄色い粘液を防御魔術で受け止めた。その瞬間、黄色い粘液が防御魔術にへばりつき、煙を放ちながら防御魔術を溶かす。

他のゲルナズムと違い、この大きなゲルナズムの放つ黄色い粘液は一撃でやられる威力がある。だけど、向こうも抜けられれば一撃でやられるとわかっているのかオレから注意を逸らさない。

オレも注意を逸らせないが、小型のゲルナズムが時々襲いかかってくるためどうしようもない。そっちは都とアルに任せているのだが。

「相性が悪すぎだぜ」

オレは小さく毒づきながら手のひらに魔術陣を描く。そして、炎の剣をゲルナズムに向かって放った。

だけど、その炎の剣は触手によって弾かれる。

厄介なのは黄色い粘液とこの触手。はっきり言えば斬れない。モード？なら可能だろうが、そんな隙は全く見当たらない。

『防御力も極めて高いとは。これが本当の幻想種』

「感心している隙はないぞ」

放たれた触手をオレはレヴァンティンで受け流しながら隠れて迫っていた触手を掴み取る。そして、金色夜叉で触手を斬り裂いた。

触手を斬る方法は金色夜叉のみ。それ以外は何をしても切れない。

「金色夜叉以外切れないなんて、あいつの体の組成は何で出来ているんだか」

『物語上のオリハルコンと言われても納得出来ますよね』

「本物のオリハルコンだったら笑ってやる」

物語上のオリハルコンは最強の物質やら何やら。ともかく、固くて堅くて硬いのだろう。対する本物のオリハルコンは強化金と呼ばれ戦闘でも使えるほどの強度はある。ただし、魔鉄よりも弱いし金自体が希少だからまず見ない。

まあ、その分魔術に対して耐性がかなり高いけど。

『それだったら嬉しいんですけどね』

「そうだよな」

オレは小さくため息をついて向かって来た触手を金色夜叉で斬り払った。もう何回斬っただろうか。あの時みたいに全力疾走しているわけじゃないから体力には余裕があるけど、精神的に辛いな。

相手のゲルナズムも攻撃がだんだん慎重、いや、手数を少なくして誘って来ている。飛び込むのは危険だ。

『何というか、音姫の戦い方に似ていますね』

「隙を作っている。あいつの全力じゃこんな隙は起こらないさ。だから、突っ込む」

相手が隙を見せた以上、こちらもその隙をつく。それに、こちらにはまだ見せていない隠し技はいくつもある。

オレは前に出た。レヴァンティンをモード?にしてどちらからも金色夜叉を具現化させる。そして、迫って来ていた触手を斬り裂こうとした瞬間、嫌な予感が背筋に走った。

すかさず金色夜叉を解きながら背後に飛ぶ。そして、レヴァンティンモード?をクロスして触手を受け止めながら後ろに下がった。

あのまま進んでいたら何かがあった。オレはそう断言する。

『マスター?』

「自分の感覚に素直なのも考えたものだよな。嫌な気配に下がってみれば」

『その感覚は大切だと思いますよ。今までの全てはその感覚で生き

残っていましたし』

「だよな」

オレは触手をレヴァンティンで払った。このままじゃ埒があかない。危険な手ではあるが、こういう時には目をよくするに限る。

オレは金色の力を自分の両目に与えた。一瞬にして視界がよくなる。そして、

ゲルナズムの周囲に浮かぶ奇妙な陣をはっきり捉えていた。

金色の力を戻しながらレヴァンティンで触手を打ち返す。

「レヴァンティン。今のは見たか？」

『はい。さすがは幻想種ですね。まさか、魔法を使ってくるとは』

「魔法？」

『はい。まあ、竜言語魔法と比べれば月とスッポン以上の差はありますが、魔術では探知出来ない極めて危険なものです』

「詳しいんだな」

レヴァンティンはアルタミラの遺跡から封印されてから出ていないはずなのに。

魔法なんて世間一般じゃ滅びたと言われているくらいだ。オレも魔法使いとはあったことがあるが、戦闘というよりも家事に特化した

技術形態だった。

『最初のマスターの友人が魔法使いだったので。魔法のことならそれなりに詳しいと自負しています。ただし、幻想種の魔法は通常の魔法とは違うようです。リースの竜言語魔法を見習うべきかと』

「あの詠唱がノータイムのやつをか？　軽く死ねるぜ」

あれを見習えば全く前に出れない。リースの竜言語魔法はアルよりも凶悪だ。

オレはレヴァンティンを構えた。今の布陣から隙はわからない。わからないなら、魔法陣を破壊する。

オレは前に出た。魔法陣の大きさはわかっている。わかっているからこそ、その範囲外で嫌な予感がした瞬間にオレは下がっていた。

進めない。魔法陣を破壊すればいいはずなのに、攻撃が届く範囲に入れない。触手は問題じゃない。こんなもの、幾らでも耐えられる。だけど、あの魔法陣だけは、『天空の羽衣』ですらやられる予感しかしなかった。

レヴァンティンで触手を弾きながら後ろに下がる。ゲルナズムは動いていない。いや、現れてから一歩も動いていなかった。

「どうしてだ？」

『何がですか？』

「ゲルナズムが動いていない」

ありえないというよりもおかしい。まるで、攻撃してくれと言わんばかりに。ゲルナズムの装甲は極めて高いから魔術はあまり意味がないし、触手で撃ち落とされる。だから、近接するしかないとは言え、全く動かないのはどうしてだ？

『確かに変ですね。触手は動いているんですけど』

「どうして？」

考えろ。金色夜叉で触手を払いながら考えろ。行動しないということは何らかの意味があるはずだ。戦闘の中で意味のない行動なんてない。わざと隙を見せたのは何故だ？　魔法陣にまで近づけないのは何故だ？　何故、ゲルナズムは動かない？

ゲルナズムは動かないんじゃない。動けない。魔法陣まで近づけないのはその範囲外までにセンサーがあり魔法が発動するから。隙を見せているのはそのセンサー内に入らすため。

そうなると、得られる答えはただ一つ。

「そこだ！」

オレはレヴァンティンをモード？にして天井に向かって射撃した。魔力の塊が天井で爆発し、ゲルナズムが膨れ上がる。そして、オレが判断して下がったギリギリの場所まで黄色い渦が出来上がり呑み込んでいた。

やはり、そういうことか。

ゲルナズムは罠だった。動かないことで挑発しているのではなく、

罠だからこそ動けなかった。床の魔法陣は魔法を使うためのもの。ただし、それはトラップであり、本物は天井にあった。隙を見せたのは飛び込んできてもらうため。

『やはり、貴様はただ者じゃないな』

オレは現れた本物のゲルナズムに向かってレヴァンティンを向けた。

「真っ正面から戦うのは分が悪い、そう思ったんだろ？」

『我が同胞と主を殺した貴様に警戒しないものは愚かだ。だが、罠を破った以上、幻想種として隠れながら攻撃するのは愚かだと思ってな』

「まあ、さすがにそこはオレもわからなかったけど」

ゲルナズムがいるのはオレからかなり離れた壁だ。そこまでの距離は探索しているならともかく戦闘中ではまず探らない。

レヴァンティンを握りしめ、ゲルナズムを睨みつける。

「前はあんたの同胞にやられたからな。今回は油断しない」

『同胞を殺した恨みは忘れぬぞ！』

ゲルナズムがオレに向かって触手を放ってくる。だから、オレは『天空の羽衣』を纏って前に出た。

例え、幻想種だろうが何だろうが、物理攻撃であるなら『天空の羽衣』が受け止めてくれる。触手の嵐をレヴァンティンと『天空の羽

衣』で受け流し、オレはゲルナズムに接近する。

『くらうがいい！』

ゲルナズムがそう言いながら黄色い粘液を連続で放ってきた。当たればやられる。だから、オレは腕を前に突き出した。

「ファンタズマゴリア！」

現れたのは金色に光るファンタズマゴリア。金色の力をファンタズマゴリアに与えたのだ。そのため、防御力は桁違いに高い。

金色のファンタズマゴリアが黄色い粘液を受け止める。だが、それ以上は何もなかった。

オレはファンタズマゴリアを展開したままファンタズマゴリアの先をゲルナズムの開いた口に叩き込んだ。そして、高く飛び上がる。

「白百合流瓦割り『崩落斬り』！」

高く飛び上がりながらの振り下ろし。振り下ろす瞬間に素早く剣を引くことで大きなダメージを与えられる技。だが、レヴァンティンの一撃が触手に受け止められる。

それは想定通り。だから、そのままレヴァンティンを手放した。

八陣八叉流虚仮威し『三味線』。

高さを利用したドロップキックがゲルナズムに大きな音を立てて直撃する。ただし、これは虚仮威し。本来の技じゃない。本来の技は

これだ。

オレは振りかぶった拳を振り下ろした。甲羅に当たる瞬間に威力を奥に押し込むように叩き込む。

八陣八叉流鎧通し『桔梗』。

その瞬間、ゲルナズムの体が大きく震えた。だから、オレは振ってきたレヴァンティンを受け止める。そして、受け止めて振り下ろした。

「金色夜叉！」

ゲルナズムの体を両断する。だけど、それだけじゃゲルナズムは止まらない。オレを狙って迫ってくる触手。それに対して、オレは大きく飛び上がった。

モード？に変える時間はない。一番使えるのは光属性だが、貫くのは無理だよな。なら、斬れないかな？

「レヴァンティン。ふと思いついたことを試してみていいか？」

『嫌だと言っても決行しますよね？　どうぞご自由に。私は全力でサポートします』

ぶっつけ本番上等！　試して成功すればさらにありがたいけどな！

オレはレヴァンティンを振り下ろす。周囲から見ていればそう言う光景だろう。だけど、レヴァンティンが光り輝いているのは見えるはずだ。その輝きは触手すらも切断する。いや、切断するはおかし

いか。

今、レヴァンティンを纏う光は炎とは違う熱量だ。そもそも、光というのはレーザー。収束した熱量が光だが、この光は少し違う。光によって出来上がった光の剣。熱量はあるが、焼き尽くすためのものや貫くためのものじゃない。ただ、斬るためのもの。

オレは技名を叫ぶ。

「光輝矛神！」

光輝く全てを切り裂くオリジナル剣技、ということで光輝矛神だ。

光輝矛神は簡単に触手を切り裂き、ゲルナズムの体に突き刺さった。

「モード？！」

『これで終わりです！』

ゲルナズムの体が溶ける。そして、オレは地面に着地した。

「完全勝利」

オレはそう言いながらレヴァンティンを鞘に収める。

第四十三話　ゲルナズム（後書き）

次は由姫の戦闘でも。

第四十四話　努力（前書き）

最近、伏線をばらまくのが大変だなと思ってきました。

第四十四話　努力

炎が床を焼き尽くす。その上を由姫は走り抜けた。そして、そのまま拳を焔（ほむら）の鬼となった男に向かって放つ。だが、拳は見えない力によって打ち上げられた。

「やはり、ですか」

由姫は小さく呟きながら後ろに下がる。確か、習ったことがある。炎のそばでは上昇気流が起きており、それはクリーンベンチのような無菌操作にも使われる、という話を。

つまり、今の男が纏っている炎が強力な上昇気流を作り出し、その上昇気流で攻撃を受け流しているのだった。ただ、上昇気流だけでは考えられないため他の何かがあると由姫は思っている。

「どうした？　天才一家の白百合家。この俺にすら攻撃が届いていないぞ」

由姫は身構える。実際にいくらでも攻撃を届かせることは出来る。上昇気流に負けない重力を拳に纏って放てばそれで終わりだ。だが、その威力は例え『ＧＦ』のデバイス機能である肉体的ダメージを与えず昏倒させることが出来ても無視出来ないダメージを与える。

一番の欠点であるダメージが高すぎれば高すぎたほど、肉体的ダメージは無くても精神的ダメージは長く残りやすいのだ。過去の事例でも精神喪失という最悪のケースさえある。

だから、由姫は使えない。色々と聞かなければならないことがある

のだから。

「もしかして、俺を捕まえるとか思っているのか？　ふはははは っ、笑わせてくれる。てめぇらみたいな選民思想に染まった奴が俺を捕まえられると思っているのか？　勘違いもはだはだしい」

「私には理解出来ません。何が選民思想なんですか？」

「すでにその力だよ。てめぇらは才能という力がある。それを使って戦って来たんだろ？　俺達みたいな努力しなければ強くなれない人とは違うんだよ」

由姫はそのことが理解出来なかった。確かに、音姫や孝治に対して言うならわかる。あの二人は文字通りの天才。状況が揃えば世界最強という頂に手が届くくらいに。だけど、由姫や周、そして、亜紗の三人は違うことを知っているから。

「才能才能才能。世界は全て才能のある人が活躍出来る。才能のある天才が表に立てる。努力の人間はいつでも縁の下なんだよ。ただ、世界を動かす駒でしかなぇ。それこそ、選ばれた民のための思想だろ？　お前らみたいな天才共しか脚光を浴びない」

「あなたに兄さんの何がわかるんですか？」

由姫は静かに拳を握りしめた。尋ねてはいるが答えはわかっている。男は周のことを知らない。何一つ、わからない。

だって、向こうはただ才能のある人を恨んでいるだけ。努力をしたと思い込み、表に出ようと懸命に足掻くことしかしない。そんな人に他人から聞いただけで周は評価出来ない。

「生まれた頃に誘拐され、改造された化け物だろ？　結局は天才になるんだよ。選ばれた人間はな。そして、世界にのし上がる」

「あなただって才能がありますよ？　なのに」

「才能？　これが才能？　ふはははははははっ、笑わせてくれる。こんな醜い獣が才能だと言うのか？　お前の目は腐っているな」

その言葉に由姫は開いた口が塞がらなかった。

今の力は周すらてこずるくらいの能力を持っている。それは才能だと言えるだろう。だが、男はそれを才能とは言わない。まるで、自分の力ではないかのように。

「才能がある奴にはわからないさ。才能のない奴がいくら努力をしても強くなれないことを。何千何万と剣を振り続けてもな！」

その言葉に由姫は笑った。馬鹿にしたような笑み。いや、実際に馬鹿にした笑みだった。

「たかが何千何万？　血豆が出来ても、それが破けても、木刀握る柄が真っ赤に染まっても、足下に血がたくさん落ちても、雨の日も風の日も雪の日も台風の日も春夏秋冬あらゆる季節の中で、朝から晩まで一心に振り続けたことがありますか？」

その人物を由姫は知っている。

「自分の力が弱いからと攻め、同世代の子供と遊ぶことなく朝から晩まで訓練。休憩の合間に勉強をして一年を過ごしたことはありま

すか？」

本当の意味で努力しなければならない。

「大人になろうと血反吐を吐く勢いで勉強をし、訓練をし、言葉遣いを変え、性格を変え、知恵をつけたことはありますか？」

誰をも守るためには何があっても力と知識は必要だったから。

「友達を普通に作ることを無駄と判断し、戦友以外仲良くならなかったことはありますか？」

今は違う。今は普通だ。

「努力という言葉を口にせず、それが当たり前だと思ったことはありますか？　ありませんよね。全て。それは普通じゃないから。あなたも私達と同様に友達と遊び暮らし、空いた時間で必死に努力をした。強くなっていく自分が嬉しくて頑張って。でも、あなたは壁にぶつかって諦めた。そこを乗り越えようともしなかった。それが私達とあなたの違いです」

「才能を持っているくせに何を言うかと思えば。そんな人間いるわけがないだろうが。ふはははははっ。そんな気休めはいらねぇ。俺の目的はただ一つ。お前らが俺達を排除するなら、俺達はお前らを排除するだけだ。さあ、再開しようぜ。俺とてめぇ、どちらが強いかだ。この世に神がいるなら、正しい方が勝つだろうよ」

その言葉に由姫が諦めたようにため息をついた。そして、地面を蹴る。その瞬間には男の体に掌底が突き刺さっていた。

そして、男の体が吹き飛ぶ。

「馬鹿馬鹿しい。そんなのに何の意味があるんですか!?　強いか強くないかじゃない。意志があるかないか。本当に守りたいものがあるなら、ずっと努力し続ければいいじゃないですか!?」

「妹みたいなことを言うんじゃねぇ！　そんなに簡単だったら俺はもっと強くなってる！」

男が放つ炎は由姫が纏う重力場によって受け流される。そんな力は由姫には通じないはずなのに。

由姫は前に飛び出した。上昇気流なんて関係ない。近距離まで近づいて殴り飛ばす。今はそれだけで十分だった。

由姫が地面を蹴る。そして、拳が男を捉えたはずだった。だが、そこに男はいない。まるで陽炎のごとく揺らめいて消え去る。

「蜃気楼がどうして」

由姫は小さく呟いた。実際は蜃気楼ではないのだが、由姫の中ではそうなっているらしい。

「そこまで大規模なものじゃねぇ。でもよ、てめぇを倒すには十分だろ？」

その瞬間、由姫の周囲で炎が立ち上った。それと同時に由姫は感じていた。息苦しいことに。そして、吸い込む空気が熱い。

「てめぇの防御は受け流すことに特化しているみたいだが、空気が

無くなれば関係ないよな」

由姫は飛び出した。そして、炎を抜けようとして、

「残念でした」

目の前に広がっているのは分厚いまでの氷。由姫はそれに対して拳を放った。砕け散る氷。それに安心して息を吸い込んだ瞬間、灼熱の空気が由姫の肺を焼いた。

「がぁっ」

由姫はその場に倒れる。倒れるしかなかった。不意を打った一撃を食らい、由姫は完全に戦闘出来るような状況ではない。

魔術が得意じゃない由姫にとって単身でいる時にこのような怪我は致命傷と言ってもいい。それほどまでに強烈な一撃だった。

空気を吸えば吸うほど痛みが跳ね上がり、肺から空気が無くなる。だけど、吸うしかない。でも、痛みで気を失いそうになる。さらには酸素が薄くなっている。だから、呼吸の数が多くなり、痛みが跳ね上がる。

まさに、生き地獄。

「あはははははははっ。ふはははははははははっ。ざまぁないね。才能があるからと言っても所詮は虫けらか。選民思想の中でしか生きられない虫けらなんて死ねよ」

「なら、お前は選民思想に染まった虫けらだよな?」

周囲にあったあらゆる炎が消え去る。苦しみ悶える由姫の体を周がいつの間にか抱きしめていた。そして、治癒魔術を由姫にかける。

「お、にい、ちゃん」

「喋るな。今は眠っていろ」

その言葉と共に周は由姫に魔術をかけた。そして、立ち上がる。

「よくも由姫を」

「俺と戦おうというのか？　止めとけ。そいつまで焼き殺すぞ」

「なら」

周がレヴァンティンを構える。その目は怒りに満ちていた。

「その前にお前を倒すだけだ」

第四十五話　高速機動戦

壁を駆け抜ける。そして、手に持つ七天失星を振り切った。

ゲルナズムの体が地に沈む。そのまま壁を蹴って地面に速度を殺さないように着地しながら滑り込んだ。ゲルナズムの懐に入り込みゲルナズムの腹を切断する。

狭い通路の中、亜紗は上下左右に激しく動きながら前に進んでいた。それを後ろから追いかけるのは浩平。

「亜紗ちゃん！　急ぎすぎだ！　ペースを考えろ」

亜紗は振り返りながら浩平に向かって親指を立てる。まるで大丈夫とでも言うかのように。

浩平は小さく舌打ちをしてフレヴァングではなく双拳銃に持ち替えた。亜紗の速度は浩平からすれば全力疾走。そんな状況でフレヴァングなんて使えない。命中出来ない。だから、浩平は双拳銃を握りしめる。

「っく、周の奴。後で絶対特別手当てをもらうからな」

浩平は小さく呟きながら双拳銃の引き金を引いた。

瓦割りのごとくシェルターの防壁を由姫が砕いた瞬間、その場にいる誰もが開いた口を閉じることは出来なかった。

由姫が小さく息を吐く。

「兄さん、大丈夫ですか？」

「それはこっちのセリフだ。お前、腕は？」

「大丈夫です。いや、まあ、本当に成功するとは思いませんでしたけど」

そう言いながら照れている由姫。ただし、周を含めて全員が引いているが。

あまりの頑丈さに誰もが投げ出した場所を事も無げに破壊したのだから。

「アルはこの下に行ったんだな。亜紗、浩平」

周は亜紗に向かって鍵を投げる。亜紗はそれを受け取った。

「来た道にあった扉を開けてそこから下りろ」

「ちょっと待てよ。みんなでいった方が確実だろ？」

「ああ。だけど、普通はここを破れない。だから、二人は通常ルートで下りて欲しい。道は確実に繋がっているから」

その言葉に浩平が小さくため息をついた。

「わかった。後で請求書送りつけるからな。双拳銃はフレヴァングと違って金かかるんだからよ」

「頼む」

浩平が駆ける。駆けながらも双拳銃の引き金を引く手は止めない。一匹二匹三匹とバーストバレットによってゲルナズムが崩れ落ちていく。だが、道から溢れ出てくるゲルナズムの数は減りはしない。

「バーストバレットは後４０か。後はプリズムバレットを使うしかないな」

浩平が小さくごちながらリボルバーの中のバーストバレットを新しいものに変える。そして、リボルバーを元に戻した。

「亜紗ちゃん、高速機動中の援護は後４０ほど。無くなったら合図をするから速度を緩めてくれ！」

亜紗はゆっくり頷いて触手をかりくぐりゲルナズムに向かって七天失星を放つ。そのままもう片方の手に握っていた刀を力のゲルナズムに投げつけた。刀はゲルナズムの目に突き刺さり、亜紗は勢いのままさらに突き刺して引き抜く。

それによってゲルナズムは崩れ落ちた。

「うわっ、弾丸じゃそこまで貫通力はないから無理だな」

あくまで外すことを考えていないのが浩平らしい。

浩平は双拳銃を構えて四連続で引き金を引く。それだけで亜紗の前に立ち塞がったゲルナズムが崩れ落ちていく。

高速機動戦闘。

常に走りながら足を止めることなく流れる動作で攻撃をし続ける戦闘形態の中で最も難しいもの。

足を止めれば危険性が増すというのもあるが、動き回ることによってひたすら攻撃出来るというメリットが生まれる。防衛ではなく攻撃を行うなら高速機動戦闘は必須だ。

それを二人は行っている。浩平は全速力で駆けながら、亜紗は上下左右に壁や天井を蹴りながら空間というものを最大限に使って。

「つか、なんでこんなに敵が量産されているんだよ。量産型幻想種なんてぞっとしねぇぞ」

そう言いながらも浩平は双拳銃の引き金を引く。引き金を引いている際には亜紗は普通に走り、リボルバーの中身をリロードしている最中には斬り込んでいる。

誰が見ても見事な連結だった。

亜紗がゲルナズムの触手を避けて潜り込もうとした瞬間、ゲルナズ

ムを貫くように光が降り注いだ。

亜紗がすかさず後ろに下がり、変わりに浩平が前に出る。

ゲルナズムの後方にいるのは蛇のような存在だった。ただし、その目は八つある。魔物ではないことは確かだ。

「新たな幻想種ってか！？」

すかさず双拳銃を戻して地面と壁を蹴りながら取り出したフレヴァングの引き金を引く。放たれたエネルギー弾は確実に蛇のような存在の目を打ち抜いていた。すかさず連続で引き金を引き目を打ち抜く。

そして、全ての目を打ち抜いた瞬間に亜紗が七天失星で斬り裂いていた。防御力はゲルナズムより硬くなく、むしろ柔らかいほどだ。

亜紗が着地した先にはゲルナズムの姿は見あたらない。

「はぁ、これで少しは休憩出来るな」

『突き進む。休んではいられない』

「わかってるよ。だけど、スピードは抑えた方がいいだろ。このまま走ってたらバテるぞ」

『大丈夫』

そう言いながらも二人は走る速度を緩めない。浩平は小さくため息をついてフレヴァングを戻した。

「まあ、確かに亜紗ちゃんなら大丈夫だろうな」

亜紗が七天失星を鞘に収めて速度を上げる。対する浩平はそれについて行くだけで十分だった。

第７６移動隊最速の亜紗と浩平じゃ勝負にならないから。

「つか、亜紗ちゃんは三本の刀提げているのになんでそんなに速いんだよ」

矛神と七天失星と普通の刀。

重さ的にはかなりのレベルではあるのがだが、亜紗の足は止まらない。

「これからの考えたら魔力温存したいし、リースからの援護は期待出来ないし」

頑張ってくらいつきながら浩平は小さく呟く。その瞬間、ほんの一回だけ足音がする。

浩平はすかさず振り返った。そこにいるのは槍を持った男。

「亜紗ちゃん、先に行け！」

その言葉を叫びながら浩平は空中に飛び上がる。本来は通路での空戦は危険なのだがその危険性を考慮しながらも浩平は飛びフレヴァングを構えた。

そして、ローブの男に向かってフレヴァングの引き金を引く。放たれたエネルギー弾は壁を跳弾しながらローブの男に襲いかかる。しかし、ローブの男はそれを軽々と弾いた。

「さすがに、やらせてはくれないかよ！」

浩平はフレヴァングを戻し手のひらをローブの男に向ける。すると、凄まじい風の刃がローブの男を切り裂こうと襲いかかった。

だけど、ローブの男は壁や天井を縦横無尽に駆け回り回避する。

「おいおい。今のを回避するのかよ」

距離が縮まっていないのが唯一の幸運だと思っていい。浩平の飛行速度とローブの男の走行速度はほぼ同じ。だったら、浩平に分がある。

「悪いが、決めさせてもらう」

浩平はすかさず双拳銃を構え、引き金を引く。浩平の十八番の一つ、ビリヤードショット。

通路なのでもう一つの十八番であるリフレクトショットは使わなくていい。壁による跳弾でいくらでもリフレクトショットの代わりは出来る。

引き金を引く速さはギリギリ限界。高速の射撃は追いかけるローブの男の動きを完全に止める。

浩平はそれを確認しながらさらに速度を上げた。

高速機動戦闘中は飛行出来る方が便利な時がある。それが今だった。

孝治は後ろ向きのまま飛行しつつ自らの十八番であるビリヤードショットを簡単に成し遂げた。それは高速機動戦闘中にするようなものじゃない。そして、それは下手をすれば壁にぶつかるようなもの。

前に進む亜紗と自分の飛行能力に自信が無ければ出来ない芸当だった。

「相手はビリヤードショットでもダメだった。リフレクトショットも組み合わせるしかないのか？　ったく、こういう時は通路じゃなくて開けた空間の方がやりやすいぜ」

そう言いながら浩平はローブの男を見る。ローブの男は立ち止まり、その手に持った槍を下ろしていた。

浩平も双拳銃を戻す。

「次会う時は、俺の得意なフィールドでな」

そう言いながら、銃使いにとって一番有利とされる通路を浩平は後ろ向きに飛んで駆け抜ける。

第四十五話　高速機動戦（後書き）

第二章後編において浩平が派手に戦闘を行う予定です。ビリヤードショット、リフレクトショット、竜言語魔法など力の全てを出す予定なので、浩平の活躍を期待していてください。期待に沿えるかわかりませんが（笑）

第四十六話　見えない存在

いつになく体が熱い。いや、これは体が熱いのではなく周囲が熱いのだ。由姫を苦しめた炎。そして、熱。

確かに由姫は直接的な炎は効かないようにはしていただろう。だけど、空気は違う。息を吸い込む以上、避けることはできない。

「ふはははは っ。笑わせてくれる。俺の能力はわかっているんだろ？　幻想種のような力はないが、人を殺すには十分だ。この熱量さえ操れればな」

確かに厄介だ。厄介だけど、勝てる気しかしない。

【倒せ】

頭の中に声が響き渡る。

【本当の自分を解き放て】

倒す。あいつを、由姫を傷つけたあいつを出す。

【手加減はするな】

レヴァンティンを握りしめる。一撃だ。相手が攻撃に移るより早く一撃で相手を。じゃなければ、由姫が傷つけられる。だから、

殺せばいい。

『マスター！』

レヴァンティンの声が頭の中で響いた。それに対してオレはハッと目を覚ます。

今、何が起きていた？　聞いたことのない、いや、ある。あれは確か、狭間市で聞いたことがあるような声。それが頭の中で響いていた。

『何らかの魔術の介入があったので私の判断で精神操作に対するインタラプト系の魔術を連続で発動しました』

助かる。

今、オレは何を思った？　目の前にいる男を殺そうとした。駄目だ。殺したら駄目だ。

オレは小さく息を吐く。

「来ないのかよ。だったら、俺が」

「行くぞ！」

オレは地面を蹴った。そして、魔術を展開する。

「バカな奴め。死ねよ！」

放たれる炎の塊。それに対してオレはレヴァンティンで下から打ち上げた。凄まじく重い感触と共に炎が打ち上がる。その瞬間にはまた炎が放たれていた。さらに、打ち上げた炎も方向を変えてオレに

迫っている。

「レヴァンティン！」

『打ち消します！』

だから、オレはレヴァンティンの力で炎を消し去った。鞘に収めて前に踏み出す。そして、レヴァンティンを鞘から抜き放つ。

だが、その一撃は大きく空に打ち上げられていた。

でも、すかさず体を回転させる。

紫電一閃からの連続技である白百合流姿返し『雲散霧消』。

弾かれた勢いを乗せて叩きつけるため威力は極めて高い。高いからこそ試すには十分だ。

回転させながらの振り下ろしは何かの壁、いや、感触的には水の入ったペットボトルを軽く握っているような感じだ。

オレは後ろに下がる。

「上昇気流か」

「わかったところでどうしようもねぇだろうが！」

放たれる炎をオレはレヴァンティンで打ち上げる。この炎にも上昇気流があるから受け流すのは危険だったのだ。それさえわかればいくらでも対処はある。

レヴァンティンを握り締め、周囲に散らした魔力で打ち上げた炎をって。

オレは放たれた炎を避けた。服が焼けるがすぐに消火して前に踏み出す。踏み出すのは男が立っている場所よりも２ｍ右。そこに向かってレヴァンティンを下から振り切った。

ガンっと鈍い音が響き渡り、レヴァンティンが炎の剣によって受け止められる。

「おいおい。斬撃を受け止めるくらいに高密度な炎かよ。幻覚と言い上昇気流と言い、科学じゃ全く解明出来ない能力だな」

「選民思想以外に科学信奉者か。救いようがない」

「科学信奉者には頷いてやるよ。今でも神剣は存在しないってテーマで研究しているんだからな」

まあ、結論から言えば神剣が存在する理由しか出来上がらないけど。

「それに、選民思想はお前らの方が重傷だろうが！」

レヴァンティンで男を弾き飛ばしさらに駆ける。そして、レヴァンティンを振り下ろした。男はレヴァンティンを炎の剣で受け止めている。

じりじりと炎よって体が焼かれるが今のオレは皮膚に金色の力を流してあるからそんな熱量は直撃しなければ意味がない。

「選ばれたとか選ばれてないとかどうだっていいんだよ！」

確かに、この世に選民思想はあるかもしれない。だけど、それはある理由からだとオレは信じている。

「本当に努力をし続けた人が選ばれる。それが今の世の中だ。そんなごたごた言っている奴はな、普通なんだ！」

自分は努力をした。だけど、選ばれない。

由姫と男の会話を聞いていたレヴァンティンがまとめてくれた内容だ。それを聞く限り、それは普通なのだから。

「てめぇに何がわかる！　天才のくせに何が」

「努力はな、本当にした努力は自分じゃ気づかない。それが当たり前だと思っているから。強くなりたいから努力するんじゃない。当たり前に努力するから強くなるんだよ！」

鍔迫り合いは続く。でも、今は好都合だ。

「それは普通じゃない。天才と言われる奴らの理論だとわかっているさ。でもな、それをしてこそ天才は天才になれるんだろうが！　音姉だって孝治だって、苦しんで苦しんで生きてきた。戦うことが当たり前だと感じて、訓練することが普通だと思い、普通の人生が毒だと思っていたんだよ！　何が努力だ。そんなの、むしろ羨ましいわ！」

レヴァンティンで大きく男を弾く。

「普通の人生を歩んでいたお前をオレは酷く羨ましいんだよ！」

「ふざけるな！　てめぇに何が、何がわかると言うんだ！」

「わかんねえよ。そんなことは知るか！」

レヴァンティンを打ち合わせる。もう、理由なんかじゃない。今のオレは目の前にいるこいつが気に食わなかった。

まるで、オレ達のことをわかっているかのように言っている男が、天才という意味を履き違えたこいつが、気に食わない。本当にに気に食わない。

だから、今は捕まえる。

【気に食わないなら殺せばいい】

頭の中に響く声。でも、オレはそれを気にすることなく前に踏み出した。

【己を解放しろ。それで楽になるぞ】

楽になるかもな。

頭の中に響く声にオレは言葉を返す。そして、炎の剣を高く弾き飛ばした。

そんな楽でオレは生きようとは思わない！

男が後ろに下がりながら炎を放ってくる。オレはそれを打ち上げながら前に進む。

「そんな攻撃で」

渾身の力なのか、巨大な炎の塊がオレに迫る。それをオレはレヴァンティンで打ち消した。男の顔に恐怖が走る。

オレはその顔に拳を、

「させるとでも」

いつの間にか隣にローブの男がいた。

『悪夢の正夢（ナイトメア）』。

そう思った瞬間、オレは強く蹴り飛ばされていた。

すかさず体勢を戻して、目の前に槍が迫っていた。首を横に倒してギリギリで槍を避ける。だが、槍はオレの側頭部を打ち払った。

完全に二人を忘れていた。これが『悪夢の正夢（ナイトメア）』と『現実回避（エスケープ）』か。いつの間にか『現実回避（エスケープ）』にかかっていたらしい。

「助かったぜ、はっさん」

「相手の言葉に惑わされすぎだ。自分を強く持て。そうしなければ勝てない相手だぞ」

頭がクラクラする。どうやら一撃で脳しんとうになったようだ。気づくのが遅れたとは言えかなりの威力ではあった。

「今まで姿を隠して」

「確かに『悪夢の正夢（ナイトメア）』だけなら無理だっただろう。だが、『現実（エス）回避（ケープ）』は万能だ。お前の思考から私達を消すことで存在は認知出来ない」

親父やお袋だってそうだ。二人の力が合わされば見つからずに行動することが出来る。

オレのような存在があれば見つけることが出来る『悪夢の正夢（ナイトメア）』でも『現実回避（エスケープ）』によって忘れ去られたなら見つけられない。

「くっ」

オレはゆっくり起き上がった。そして、レヴァンティンを握りしめる。

「邪魔をするのか？　もう、限界だろ？」

「全く」

脳しんとうでふらふらする以外は体は大丈夫だ。大丈夫だからこそ、オレは前に踏み出す。レヴァンティンを握りしめて槍をもつローブの女に、

「ダメな子供だ」

『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男の言葉と共にオレは滑り込んだ。オレがいたところを何かが通り過ぎる。素早く起き上がりレヴァンティンを、振ることは出来ない。

鋭く突かれた槍をレヴァンティンで受け止め受け流すだけで精一杯だ。

相手はただ者じゃないか。

「どうした？　海道周。お前の力はそんなものじゃないだろ？」

『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男がニヤリと笑みを浮かべる。一対三のこの状況は完全に不利だった。

第四十七話　アドバンテージ

レヴァンティンが攻撃を弾く。いや、レヴァンティンが弾くのじゃない、弾こうとした瞬間に相手の槍がこちらの攻撃を弾いてくる。

相手はオレの攻撃に合わしてくる。まるで、倒す気がないように。向こうが突いてきてレヴァンティンで弾こうとしても逆に弾いてくる。

やりにくい相手が。白百合流をやっている身としては防御の攻撃は極めてやりにくい。

何というか、由姫と戦っているような。

「よそ見してんじゃねぇ！」

放たれる炎。オレはそれを避けながらレヴァンティンで迫って来ていた風の刃を受け止めた。

「遅い！」

その瞬間に槍が迫る。連携というよりも炎使いの男を『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男と『現実回避（エスケープ）』の女が援護している感じだ。

はっきり言って、やりにくい。

「レヴァンティン、魔術サポートを頼めるか？」

『精神操作のインタラプト系を連発している私に無茶な注文をしま

すよね。可能な限りやってみますが期待はしないでください』

「わかってる。オレだって切羽詰まって、っく」

オレは放たれた炎を受け止めた。この背後に由姫がいる。せめて、援軍さえいればありがたいのだが。

アルや都はまだ小型のゲルナズムと戦っているだろうし、別行動中の亜紗と浩平が来るのはもう少し時間がかかるだろう。今はオレ一人で三人を相手にしないと。

ほとんどの攻撃をレヴァンティンモード?で受け流しながらオレは考える。どうすれば上手く回るか、今のオレにあるアドバンテージを探し出す。

相手は魔術師が二人、槍使いが一人。魔術師の一人は近接も出来る。そして、炎使いの魔術師は戦闘素人。狙うとすれば、

「もう一人の魔術師!」

槍をギリギリで避けて掴み投げる。相手も馬鹿じゃないからすぐに槍を手放すが、その時にはオレは速度を乗せた肘の一撃を『現実回避(エスケープ)』の女に叩き込んでいた。そして、『悪夢の正夢(ナイトメア)』の男に向かって踏み出す。

その時には『現実回避(エスケープ)』の女は復帰している。でも、その場所は炎使いの邪魔をする。

鞘に収めたレヴァンティンを走らせる。だが、それは『悪夢の正夢(ナイトメア)』の男が取り出した剣によって受け止められた。

「状況判断が上手いな」

相手の声と共にオレと『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男が同時に力を弱める。剣を引いたわけじゃない。鍔迫り合いから剣を引いて体当たりしようとした。だが、向こうも同じことを思ったのたか力を弱めている。

オレはすかさず前に踏み出した。レヴァンティンを合わせながら柄に手を乗せてもうモード?に変更する。そして、左手で『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男に斬りかかった。

「なっ」

『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男が剣を受け止めながら驚く。そりゃそうだろう。実際、オレだって忘れていた。左腕が炎使いの男によって焼かれていたことに。

実際は神経が通っていないから一部の痛覚以外繋げなければ普通に行動は出来る。問題は怪我が悪化するところか。

今は気にしてはいられない。オレが一人であるということ以外の一回だけ使えるアドバンテージなのだから。

レヴァンティンモード?を振り切る。『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男が回避するような時間は、

「焼き尽くせ！」

その瞬間、オレに向かって炎が放たれていた。この場所は『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男も巻き込むはずなのに炎使いの男はそれも関係なく狙っ

て来ている。

オレは一瞬の判断の後、横に避けた。魔術で狙って来ている炎を相殺しながら。

「そうか」

オレの背筋がゾクッとなる。回避出来ない瞬間が迫っている。そういう時の感覚だ。

「そこまで育ったか」

炎使いの魔術に集中しすぎた。背後に回り込まれている。

「ならば、死ね」

押し付けられる手のひら。防御魔術の展開は間に合わない。

衝撃が体を吹き飛ばした。気づいた時には地面を転がっている。どうやら意識を失っていたらしい。

ゼロ距離から魔術は防御も出来なければ回避も出来ない。ダメージを微かにズラして直撃することは避けたが、それでもダメージは酷い。

オレはレヴァンティンを握りしめてゆっくり立ち上がる。何とか、由姫の近くに飛ばされたな。

「まだ戦いますか」

『現実回避（エスケープ）』の女が呆れたような口調で言う。でも、その響きはどこか心配しているような響きがあった。

レヴァンティンを鞘に収め腰を落とす。

「戦うさ。オレが倒れれば由姫がやられる」

既視感、いや、確かあの日も同じだった。

目の前に現れた敵に対してオレは、

「ならば、楽になりなさい」

『現実回避（エスケープ）』の女が距離を詰める。オレはレヴァンティンを握りしめる。

狙うは一撃。そうじゃなければ押し込まれて負けるだろう。最速の一撃を叩き込む。

「紫電」

何回も練習した。音姉から初めて習って何回も練習した。多分、オレが使える技の中で一番練習した技に違いない。

鞘から剣を走らせる居合い抜き。だけど、それはただの居合いじゃない。先に攻撃するためじゃなく、相手の攻撃を見極めた時に最大限の力を発揮する能力。

後手に回る居合い抜き。

「一閃！」

気合い一閃。

鞘から走ったレヴァンティンは穂先を打ち上げ、強烈な一撃を『現実回避（エスケープ）』の女に叩き込んでいた。

『現実回避（エスケープ）』の女が後ろに吹き飛ぶ。身につけたローブが微かに外れその素顔が目に映る。

茜？

一瞬、妹の名前が思い浮かんだ。どうしてかわからない。わからないけれど、素顔が似ていたように思えた。

「お前！」

『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男が向かって来る。オレはそれに対して一歩踏み出しながら、

「フォトンランサー！」

大量の光の槍が『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男の前に突き刺さった。『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男は後ろに下がる。

「周様！　大丈夫ですか！？」

「無事じゃな。来たぞ」

足音は三人。都、アル、亜紗だろう。

「数のアドバンテージも奪われたか。下がるぞ」

「はっさん！　一網打尽に」

「今は姿が割れるわけにはいかない。私達の計画を忘れたのか？」

「逃がすか。レヴァンティンモード？！」

すかさずレヴァンティンモード？を取り出し相手に向ける。アルも都も同じように武器を構えているだろう。

それに対して『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男は笑みを浮かべた。

「逃がさせてもらうさ」

その瞬間、周囲から音が鳴る。

「ここの壁はこの部屋で実験を行うためのものでね、文字通り、生体兵器の実験部屋。だから、隔壁があるのだよ」

隔壁が開く。それと同時に強烈な甘い香りが襲いかかった。甘いというよりも重いというべきか。この匂いは、

「ケリアナの花？」

「正解だ。嬉しいな」

隔壁が開いた先にあるのは一面を埋め尽くす量のケリアナの花。ここが、ナイトメアの製造工場だったのか。

そして、ケリアナの花の上に浮かんでいるのは合計四体の一本角のエンシェントドラゴン。そして、大量のオレが戦った大きさのゲルナズム。

ケリアナの花と幻想種がどうして一緒に。

「そなた、ケリアナの匂いから作り出したのか！？」

アルの声が周囲に響く。それに対して『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男はニヤリと笑みを浮かべた。

「どうする？　このまま引くか、それとも戦うか」

レヴァンティンを握る手が湿りだしたのがわかった。

たった一体ですら手こずって勝てていないエンシェントドラゴンが四体も。どうやって勝てと言うんだ。

「さあ、どうする？」

『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男の声が周囲に響き渡る。オレ達はただ武器を握りしめるだけだった。

第四十七話　アドバンテージ（後書き）

次回、シェルターの戦いが終わります。

第四十八話　悲劇

レヴァンティンを握る手が震える。このままじゃ勝ち目はない。エンシェントドラゴンなんて正がいなければ勝てない戦いだ。

「周様。瞬間移動（ショートジャンプ）で逃げましょう。今は戦うべきではありません」

都の言葉も一理ある。実際に、エンシェントドラゴンと相対していたからこその言葉だった。前回よりも人数は少なく、しかも、由姫は未だに戦えない。この状況なら逃げる方がいいけど。

亜紗、矛神は後何回使える？

オレは亜紗に精神感応で尋ねた。すぐさま亜沙が言葉を返してくる。

『二回』

エンシェントドラゴンは四体いる。二回だけじゃ残り一体まで倒しきれないはずだ。

「逃げられるような状況ならな。それに、こいつらはその気になれば学園都市内部で暴れまわることも可能だ。はっきり言うならここで倒しておきたい」

「しかし、戦力差は歴然としておるぞ。我も都の意見に賛成じゃ。すぐさまここを出て第７６移動隊全員に緊急招集をかけるべきじゃ」

「いや、違うな」

頭の中で戦略が組み上がる。一番の不確定要素がどうなるかわからないけど、今はこれが一番の戦略だ。
オレがどうにかして一体のエンシェントドラゴンを抑える。かなり危険な賭けだけどな。

「戦うぞ」

「愚かだな。では、幻想種の中にもまれて死ね」

その言葉と共にゲルナズムが動き出す。エンシェントドラゴンはケリアナの花のおかげでブレスは吐けないはずだ。こうんな濃厚な場所で吐けばその時点で死ぬ。

「レヴァンティン、全力を出せ」

『了解です。では、これより』

「見つけた」

その言葉と共に誰かが降ってきた。誰もが動きを止める。そこにいるのは人形のような容姿、金髪の長い髪。そして、一つ上とは思えない身長。

運良く不確定要素が来てくれたらしい。

「あれ？　何でリースがいるんだ？」

不思議そうに首をかしげながら唯一の通路から現れる浩平。それに振り返りながらリースは笑った。

「援軍」

「てか、何これ!?　怪獣大戦争!?」

ふざけたように驚く浩平。この時の浩平は少し狙っている節があるからな。

オレはレヴァンティンを構えながら笑みを浮かべた。

「さて、これでこっちは六人だ」

「違う」

リースが首を横に振る。それと同時にゲルナズムの一体がリースに跳びかかった。だけど、誰かが来る。そんな気配が上空からする。

そいて、誰かが降ってきた。

リースよりも背は小さい。蒼い髪のショートカット。そして、その手には身長ほどもある巨大な蒼い斧。その小さな体から溢れる威圧感は慧海の比じゃない。

「七人」

リースのその言葉と共に少女が動いた。いや、動き終わった。無造作に斧を縦に振って床に叩きつけただけだ。まるで、由姫が上空の扉を砕いたような轟音と土煙が起こり、オレ達は腕で顔を守った。

目を開けたその時、そこにあったのは一直線上に出来あがった巨大なクレパスとクレパス周囲にいるエンシェントドラゴン一体を含む

幻想種が姿を消している光景だった。

オレ達は言葉も出ない中少女が振り返る。その眼は蒼く人で無いように思える。

「ちょっと待て。リース、その子もしかして」

浩平はどうやら知っているようでオレが振り返ると思いだそうとして頭を捻っていた。そして、

「エンシェントドラゴンじゃないか？」

その言葉に誰もが絶句する。だって、エンシェントドラゴンは向こうにまだ三体もいるのに。

少女が浩平に向かって笑みを浮かべる。

「あなたの動きは見ている。リースと一緒によく頑張っている。あの時の誓いと同じように」

「やっぱり。契約の儀式のことは夢見心地であまり覚えていないからな。でも、君と会話したのは覚えているぜ。リースの次くらいに可愛かったということも」

「はあ、お前からすれば世の中の女の子は全員リースの次なんだろ？」

「その通りだが何か？」

四人の女の子で悩んでいるオレからすれば羨ましいところだけどな。

「周様、浩平さん、今、戦闘中ですけど」

「忘れてた」

「よくよく考えると」

どうやらいつの間にか浩平のペースにはまっていたらしい。周囲の幻想種は動いていない。いや、怯えている？

「なあ、えっと、名前は？」

「メリル」

「メリルってエンシェントドラゴンなのか？」

「そう」

「角は？」

「三本」

確か、角が三本のエンシェントドラゴンって一番強いんじゃなかったっけ。

「最強の助っ人」

リースが親指を立てる。いや、まあ、確かに最強の助っ人なんだけどさ。

オレは小さくため息をついえメリルより前に出た。

「メリルはオレ達が危なくなるまで由姫を守ってくれ」

「何故？」

「今のオレ達がどうにか対処できなければ、もし、奴らが学園都市を滅ぼそうとして攻めてきてもどうにもならない。だから、今は」

「そうですね。私達の力で」

「この難局を乗り切るのが最善じゃ」

都とアルもオレに賛同してオレの横に並ぶ。相手はゲルナズムが、えーっと、４８とエンシェントドラゴンが3。戦えない数じゃない。さすがに四体は辛かったけど。

オレは頭をフル回転させる。この時点で一番いいのは、

「亜紗はエンシェントドラゴンを。都と浩平、リースはゲルナズム。オレとアルでローブ集団をどうにかする。出来るな？」

『了解』

みんなの声が響き渡る。その声を聞いてオレは足を踏み出した。狙うのは『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男。『現実回避（エスケープ）』の女は気絶させたし炎使いの男はここじゃ力が使えない。

オレはレヴァンティンを振り切った。だが、レヴァンティンは件によって受け止められる。

「いいのか？　私達の相手をして」

「なら、よそ見をしてもいろよ」

オレの視界の隅ではすでにゲルナズムは１０は沈んでいる。ゲルナズムの弱点は腹だが浩平のビリヤードショットとリフレクトショットははっきり言って天敵だ。大量の触手があってもその中の一発でもくぐり抜けた瞬間に魔力の弾丸が腹を直撃して縛春する。特に、リースと二人の場合は竜言語魔法のリンクからか威力が高い。

「くっ、そういうことか」

オレがすぐに吹かなかった理由がこれだ。ゲルナズムの相手ならこの二人と二人を守る都がいればどうにかなる。でも、エンシェントドラゴンはそうはいかない。だから、オレは悩んでいた。

「エンシェントドラゴンも三体だけならどうにかなるんでな！」

視界の隅でエンシェントドラゴンが両断される。矛神の一撃は何でも切断できる。だから、二体までなら確実に倒すことが出来る。

後一体は全員で片付ける。それが、オレの作戦だ。

「くっ、引くぞ！」

『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男が後ろに下がる。オレはそれを追いかけようとして追いかけられなかった。オレと『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男の間にちょうどエンシェントドラゴンが入ったからだ。オレはすかさず後ろに下がる。

「厄介じゃな」

魔術の準備を整えていたアルがその手にフランベルジュを取り出す。作戦通りにはいかないのが常だけど、今回は少し分が悪い。エンシェントドラゴンにダメージを与えられる武器が少ないからだ。

オレはレヴァンティンを握り締める。

「アル、援護を頼めるか？」

目の前にいるエンシェントドラゴンを睨みつけながらオレはアルに向かって尋ねた。アルはその言葉を鼻で笑う。

「我を誰だと思っておる。そもそも、エンシェントドラゴンを相手に効く魔術を開発していないとい思っておったのか？」

「信頼しているさ」

だから、オレは体中に神経を巡らせた。自分の体を戦闘に最も適当な状態に組み換える。生体兵器というアドバンテージを最大限まで使ってあらゆるところを強化する。力も速度も。

エンシェントドラゴンと戦うために最大限の状態に組み替える。

「行くぞ、レヴァンティン」

『いつでも行けますよ』

エンシェントドラゴンにモード?が効くかわからない。でも、今は

それにかけるしかない。

オレは前に踏み出した。エンシェントドラゴンも動く。振るわれる尻尾をギリギリで回避して空中の足場を蹴ってさらに向かう。ゲルナズムがいない分、攻め込みやすい。

いくつもの足場を作り上げそこを跳び乗るようにして駆け抜ける。エンシェントドラゴンがブレスを吐けない以上、怖いものは少ない。

そう思っていた矢先にエンシェントドラゴンの目の前に魔法陣が出来上がっていた。あの形はリースや浩平が使うものに酷似している。

「竜言語魔法か！」

『気を付けてください。雷属性の魔術が来ます！』

レヴァンティンの言葉と共に魔法陣から紫電がほとばしった。オレはすかさずレヴァンティンで紫電を打ち消す。だが、魔力がごっそりもって行かれるのがわかった。

威力がかなり高い。オレは空中に作り出した魔力の足場に着地する。だが、その時にはエンシェントドラゴンの第二波が迫っていた。オレはすかさずレヴァンティンで打ち消す。だが、その効能は足場にも作用し、オレは空中で姿勢を崩した。

マズい。

振られる尻尾。回避する手段は、ない。

「舞え、紫電よ！」

その瞬間、アルの声と共にエンシェントドラゴンの尻尾が弾き飛ばされた。オレの隣にはいつの間にかフランベルジュを構えるアルの姿がある。

「そなた、我を忘れておったの？」

「まさか、近接だとは思わなくてな。悪い」

「いいのじゃ。我だって自分でも驚いておる。じゃが、この技はかなり有効じゃからな」

理由はわからないが正しいのだろう。エンシェントドラゴンの攻撃を弾き飛ばす威力がある。でも、そんな力はアルには無いはずだが。

エンシェントドラゴンは驚くことなくオレ達に向かって氷の槍を放って来る。数はかなりおかしいほど多いが。オレはレヴァンティンを、

「舞え、紫電よ！」

だが、その氷の槍はフランベルジュの一振りで吹き飛ばされていた。原理が全く分からない。

「我が全てを弾き飛ばす。そなたはただ攻撃することだけを考えよ！」

「そうだな。さすがにエンシェントドラゴン二体なら無理だけど、一体なら可能だよな！」

オレ達が同時に宙を駆ける。エンシェントドラゴンは怒り狂った目でオレ達を見ている。

「レヴァンティンモード?」

『アクセルドライブ起動終了。バランサーシステム正常化確認。現世空間に浸食完了。いけます!』

オレはレヴァンティンモード?を振り上げた。その刀身に金色の力が纏う。

「金色夜叉!」

最大威力の最大攻撃。そのモード?の刀身はエンシェントドラゴンの体に、

突き刺さらなかった。

「なっ」

声が漏れる。その瞬間、エンシェントドラゴンの首が動く。避けられない。避けるような距離じゃない。

「周!」

アルの声。それに対してオレは手を伸ばしていた。そして、叫ぶ。

「マテリアルライザー!」

エンシェントドラゴンの首振りをマテリアルライザーの左の剣であ

るライルダムで受け止めた。そして、後ろに一歩下がって前に踏み出す。右の剣レイルダムを突き出して。

エンシェントドラゴンの体にレイルダムが突き刺さった。そのまま下に切り裂いてエンシェントドラゴンを半ばから断ち切る。

「まさか、マテリアルライザーがエンシェントドラゴンに有効だとは」

「私も驚きです。この場でこのままは危険なので戻りましょう」

アル、いや、エリシアの声にオレは頷いてマテリアルライザーを解除した。そして、小さく息を吐く。

ゲルナズムの群れは浩平の射撃によって全滅し、残ったエンシェントドラゴンも矛神によって両断されている。

「『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男もいないし逃げられたか」

「そうじゃな。今は、なっ」

アルが絶句する。その言葉にオレはアルが向いている方向を向いた。そこには倒したはずの全ての幻想種が一つに集まりだしている。

一体、これはどういうことだ？

そう思っていた瞬間、メリルが前に踏み出していた。巨大な斧を普通に持って距離を亜紗と同速度で詰める。そして、幻想種が集まり核の様なものになったところに斧を叩きつけた。

轟音と共にケリアナの花が空に舞う。それと同時に何か嫌な予感が迫っていた。これは、まさか、

「ファンタズマゴリア！」

そうであってほしくないと祈りながらファンタズマゴリアを展開する。その瞬間、爆炎がファンタズマゴリアを直撃していた。展開している腕に大きな負担がかかる。

このままじゃ、破られる。

「周」

そんなオレにアルは話しかける。そして、オレに向かって魔術書アル・アジフを投げてきた。

エリシアの手にあるのはオレがプレゼントした亜紗と同じスケッチブック。

『ごめんなさい』

その文字と共にファンタズマゴリアが砕け散る。迫る炎に対してエリシアは背を向けた。そして、緑色の光が包み込んだ。

目もくらむような緑色の光。オレは腕で顔を覆いやり過ごす。そして、光が消えたその時、炎は無かった。代わりにあるのは無傷のまま立っているメリルと、体全体が大きく焼けただれたエリシアの姿。

「エリシアーッ！！」

オレの叫びが空間の中にこだました。

第四十八話　悲劇（後書き）

次からは後編になるまで戦闘が極端に少なくある予定です。一応、訓練とかで入るかもしれませんが体育祭関連で物語が進んでいく予定です。最初は少し別の話を進めて行きますが。

第四十九話　生還

――生まれた時からそうだった。

――私は誰かの代わりだった。

――当時世界最高峰の魔術師の力を残すために私は生まれた。

――開発されたマテリアルライザーを操るために生まれた。

――例え壊れてもいくらでもパーツを交換することが出来たから。

――腕がなくなろうが足がなくなろうが記憶媒体さえあればいくらでも生き残ることは出来たから。

――だから、私は道具だった。あの人は必死に指定したけど、私は道具。

――だから、私は消えることが怖くない。怖くなんて、ない。ないんだから。

『嘘じゃな』

私の中に響き渡るアル・アジフの声。あの日からずっと一緒だった親友の声。

――どうして？

『そなたは本当は後悔をしておる』

――していない。でたらめを言わないで。

後悔なんてしていない。あの時が最善の手段だった。マテリアルライザーに内包された魔力を放出する魔力バースト。これで、みんな助かった。絶対に助かったから悔いはない。

『我はそなたと一緒だったのだぞ。そなたが何をしたいのか、そなたが何を思っておるのか、我は知っておるぞ』

――そんなことはない。私は、私は、みんなを守れたんだからいい。あの日守れなかったけど、守ることが出来た。だから、私はこれでいい。このまま、みんなの記憶の中で暮らしていけば、

『ふざけるな!!』

アル・アジフの声が響き渡る。その声に私は驚いていた。本当に怒っている。私のことに対してここまで怒っているアル・アジフの声を聞くのは初めてだ。

『そなたは周のことが好きなのじゃろ！　そんなんで、そんなんでそなたの人生は満足だとでも言うのか？』

――私は生き残れないからこれでいい。だって、私の体はもう焼き尽くされたんでしょ？

その言葉の返答はない。それくらいはわかっている。確かに記憶媒体は生き残っているのだろう。それは今アル・アジフと話しているからわかる。でも、いや、だからこそ、私は自分の体がもう無いことを自覚できる。

いくら痛覚を切ってもあの瞬間、私は魔力バーストの中で炎に焼かれていた。ほんの一瞬でも完全に再起不能なまでに焼かれていたのがわかる。

そして、もう、予備のパーツは存在しない。

――記憶媒体だけ周の渡して。私はその中でずっと生き続ける。もう、一生見ることが出来ない世界を思い出しながら。

『そなたは、そなたはそれでいいのか？　もう、周と会えなくても』

――いいよ。私はもう、別の意味で死ぬから。

『我が強情じゃ。元のマスターもそうじゃった。だから、言わせてもらうぞ』

アル・アジフの気配が膨れ上がる。

『そなたとはまだ決着がついておらん！』

――け、決着！？

あまりのことに私は声を上げていた。そんなことは私は思っていないのに。

『我は周のことが好きじゃ。それはそなたもじゃろ？　そして、我はそなたがいなければ周とは触れない。そなたはこのまま逃げる気か？　我とのこれからの勝負を』

――で、でも、私は、

『目を覚ませ！　我と、そして、亜紗や由姫、都に周を取られていいのか！？』

――盗られたくない！

それが私の本音。もう、諦めている本音。

――私は周の彼女になりたかった。ずっと周と一緒にいたい。周に愛してもらいたい。

アル・アジフの気配が軽くなったような気がする。気のせいかもしれない。でも、私はそれが正しいとどこかで思っていた。

『ならば、目を開けよ。そなたはその権利がある。怖がらなくてもよい。そなたの本当の意味での目を開けるのじゃ』

見えたのは天井。黒い染みの広がる天井。天国というわけじゃないだろう。私は死ぬときは壊される時。天国になんていけない。ただ、バラバラになって止まるだけ。なのに、私の視界には天井が移っていた。

「私、生きてる」

その声に私は起き上がっていた。

声が出せる。今まではマテリアルライザーを介してしか出せなかった声が出せる。どうして？

「起きたようだね」

その言葉に私は振り向いた。そこにいるのは白衣を着た長髪の男。『ＥＳ』にいたころはずっと見ていた。

「アリエル・ロワソ。あなたがどうして？」

「それが君の、エリシアの声か。ふむ、綺麗な声音だ」

私は体が焼き尽くされたはずだった。予備パーツはすでに朽ちて使いものにならず、修復不可能な傷を受ければ終わるはずだった。でも、私はここにいる。

見る限り、患者が着る服の上からではあるが大丈夫そうだ。ちゃんと感覚もある。

「説明をした方がいいかな？」

「お願いします」

わけがわからない。

「まずは君の元の体。残念ながら治癒、いや、修復不可能だった」

「でしょうね。私の体は全体が焼き尽くされたはずです。あれを修復出来るとすれば私が生まれた時の技術が必要ですから」

「そう。だから、用意させてもらった。新しい体をね」

私は自分の拳を握る。確かに前と比べて変わったように感じる。どこが変わったかは答えることは出来ないけれど。

「基本は海道周や田中亜紗と同じだよ。田中亜紗の方が近いかな。封印した技術を再復活させるために、まさか、善知鳥慧海の力を借りる羽目になるとはね」

「あれから何日が経ちましたか？」

「四日。私と海道周と善知鳥慧海の三人で必死に組み上げた。いやはや、海道周の閃きには驚いたよ。彼のレアスキルを元にしたとは言え、私が到達出来なかった極地に到達したのだから」

生体兵器についてはそれなりに詳しいからわかるが、周が到達した極地というのはあれだろう。

神経伝達。

機械の体や生体兵器ではどうしても兵器であることを求めると細かな神経伝達が必要となり大きくなってしまう。私の元の体は近接には向かないようにしたため小さかったが、生体兵器はどうしても生身の体の神経をほとんど使わなければどうしようもない。

「おかげで、君の体の最大の問題点は解決した。後は出来るだけ人に近くなるように作り上げて終わりだ。記憶媒体が私達のものと同じタイプで助かったよ」

「私とアル・アジフが提唱しましたから。もしもの時に私の知識を残せるように」

「なるほどね。質問は何か？」

「前の体と比べての運動性と食事に関して。後は、どうして声が出るのか」

生体兵器であればあるほど声は出ない。亜紗がいい例でもある。私はそれよりも生体兵器の比率が高いのに。

「ふむ、そうだね。運動性に関しては前と同等かそれ以上だと思っていい。詳しく計らなければわからないが。食事に関しては心配しなくていい。普通に食べても大丈夫なようにしている。食べた分だけエネルギーが出来て脂肪もつきやすい」

「この体は本当に生体兵器ですか？」

完全な生体兵器で脂肪がつかなんてありえない。

「それは君の先輩二人からのデータから作り出したからね。生体兵器でありながら生身とほぼ変わらない。違う点は背が伸びないことと、子孫を残せないこと。ちなみに、ちゃんと行為は出来るから」

「なっ、なっ、なっ」

私は完全に絶句していた。確かにそれは嬉しいことだけど、今の状況で言わないで欲しい。

「声が出るのは善知鳥慧海が持ってきた『ＧＦ』の新技術を実験的

に使わさせてもらっただけだよ。結果は大成功。君の可愛い声がきけて良かった」

「ふみゅ」

恥ずかしくて変な声を出してしまいさらに恥ずかしくなって顔を真っ赤にする。

すると、アリエル・ロワソが大きな笑い声を上げた。

「まさか、そのような顔を見れるとはね。本当に世界は面白いよ。一度立ち上がってもらえないか？」

アリエル・ロワソの言葉に私は立ち上がる。そして、体中を確認した。

異常は見当たらないと思う。アリエル・ロワソも満足そうに頷いている。

「隣の部屋に周とアル・アジフがいるよ。二人共、四日間寝ないで過ごしていたからね。ぐっすり疲れ果てて眠っているよ。でも、君が行ったら起きるんじゃないかな？」

アリエル・ロワソの言葉に私は走り出していた。ドアを開けて隣の部屋のドアまで駆け寄って開ける。そこには、たくさんの資料の中で眠る周と机の上に置かれた一冊の魔術書があった。

エリシアは駆け出す。大好きな二人に向かって。

「周！」

エリシアの元気一杯の声が響き渡った。

第五十話　評議会

オレは床に落ちていた資料を拾い上げる。それは様々なアリエル・ロワソ達が書いた生体兵器に関する資料だった。その中にはオレ達の知らないようなものまであった。

だけど、使う必要がないものばかり。さすがにアクセルドライブの副作用がびっしり書かれているのは焦ったけど。

今ではドライブやアクセルドライブよりも『剣の舞』の方が近接戦闘においては使えるからな。まあ、オーバードライブには適わないけど。

この資料があったからこそエリシアはベッドの上で眠っている。

「まさか、『強制結合』の理論を組み立ててみたら生体兵器なら応用出来るなんてな。かなり驚きだよ」

資料をまた拾い上げる。神経伝達に関する問題点が書かれていた。これを『強制結合』の理論を使ってみたら上手く言ったのだ。

オレからすればかなりありがたい。

「神経伝達に関しては医療には応用出来ないらしいからな。あくまでエリシア専用。でも、成功して良かった」

エリシアが起きた後一騒動があり、それで疲れたからかエリシアはまた眠ってしまった。一騒動と言ってもエリシアのフライングボディプレスによってオレが医務室に運ばれる事態になっただけだけど。

さすがに不意打ちは無理ですよ。

それからオレはアリエル・ロワソと一緒に起きている間に検査したデータを見て結論づけた。

開発は成功したと。エリシアだからこそ運用出来るタイプにしたから他の生体兵器には応用出来ない。まあ、声帯部分に関しては医療用としても十分だから広めることで『ＧＦ』と『ＥＳ』は取り決めたけど。

資料を拾い上げる。この資料はオレと亜紗の現在のデータだ。オレ達のデータからエリシアのボディを作り出したため詳しいデータを取ったというわけだ。

「周、起きておったか」

その言葉に振り返った。そこには眠たそうに欠伸をするアルの姿がある。アルの隣に浮かんでいるのは一冊のスケッチブック。

『本当に失礼しました』

精神感応を取り付けたからかアルとエリシアは主導権を握っている以外の人格がスケッチブック内で話せるようになっていた。完全に予想外の結果になったけど二人と会話出来るから結果オーライというべきか。

オレは少しだけ苦笑。

「嬉しいのはわかるけど、フライングボディプレスはやりすぎだぜ」

『マスターも嬉しくて痛みにのた打ち回りながら喜んでいた、あうっ』

オレはレヴァンティンを地面に叩きつけていた。レヴァンティンだからこの程度じゃ壊れない。

アルが少し苦笑をしている。

「そなたらは仲がいいの」

『周はM？』

「違うから。レヴァンティン、お前のせいで勘違いされかけているだろうが」

『いやー、マスターは案外Mっ気があると、止めてー、踏まないでくださーい！』

とりあえず踏みつけておこう。

「エリシアに新たな体を与えてもらって、我は感謝しておるぞ」

『私は感謝してもしきれません。周がいたから私がいる。周がいなければ私はもっと早くにいなくなっていたから』

「まあ、オレも二人がいなくなるのは嫌だったからさ。アルは本当に頼りになる人でエリシアは一緒にいて安心できて、二人共オレの中じゃなくてならない人だし」

「まるでプロポーズだな」

その言葉にオレは飛び上がりながらも爪先でレヴァンティンを壁に向かって蹴り跳ね返ってきたレヴァンティンを受け止めてレヴァンティンの剣を取り出しながら振り返る。

今この場で忘れ去るまで殴り倒さないと。

「ストップストップ。戦うなら別にいいけどさ」

オレはレヴァンティンを戻した。何故なら、そこには慧海が蒼炎を構えていたからだ。こんなところで戦えば大事な資料が焼き尽くされる。

「評議会からの回答を聞いてげんなりしながら来てみれば、まさか、ハーレム作ろうとしているとはな」

「ハーレムなんかじゃ、ないわけがないか」

他人から見ればところ構わず手を出しているように見えるだろう。確かに、ハーレムだ。だが、オレはハーレムじゃないと思う。

「いつかは決めないといけないだろ」

「周の場合は優柔不断に長引きそうだな」

『アル・アジフに賛成です。だって、まだ勝負は決まっていないし』

「うぐっ」

何も言い返せない。事実だから。

オレは小さくため息をついた。

「で、評議会からの回答は？」

「逃げたか」

「逃げだの」

『逃げましたね』

「回答は？」

このままじゃ埒が明かない。というか、この面子だと年の功からか口では全く勝てない。

逃げるが勝ちだ。

「簡単だ。アリエル・ロワソを捕まえてこいとさ。評議会の奴らや世間一般の奴らには悪いが、かなり司法取引しているからな」

「そうなのか？」

初耳だ。そんな話はまずオレにも来ると思っていたのに。

「ここだけの話、いや、ここしか話せない話だな。評議会がかなり怪しい動きをしている。その動きはかなり掴めていないけど、ハッキングと盗聴をした限り『赤のクリスマス』について調べているみたいだ」

「何故じゃ？　『ＧＦ』の中ではアリエル・ロワソが起こした事件だと断定されているんじゃろ？」

「十中八九だが、評議会は『赤のクリスマス』のニューヨークはアリエル・ロワソが起こした事件じゃないと掴んでいるはずだ」

その言葉にオレは驚いていた。その事実を知っているのはオレと亜紗だけだと思っていたのに。

アルの顔も見る限り、アルもわかっていたらしい。

「こっちもまだ真相を掴めていないのに、評議会が掴んだらかなり厄介だよな。下手をすればお前達まで飛び火する」

「どうりでアリエル・ロワソと司法取引か。最悪の状況を考えているわけじゃな」

最悪の状況ということは評議会が何らかのアクションを起こして『ＥＳ』と全面戦争になることだ。この時点で第一特務など正規部隊の大半は傍観を決めるだろうからその時のことを考えて『ＥＳ』とパイプを太くしておくというわけか。

「最悪というかヤバいだろ。『ＧＦ』と『ＥＳ』の全面戦争が起きれば被害は『赤のクリスマス』の比じゃない」

「だろうな。評議会の奴らはそれを狙っている可能性はある。まあ、それを探るのがオレ達の仕事なんだけどな。周とアル・アジフ、エリシアはオレを信用しろ」

信用するしかない。評議会に関しては孝治から色々と聞けばいいにしても細かなことは無理だろう。それを調べるのは慧海達のこと。

オレ達は最悪の時のことを考えて備えるしかない。『ＧＦ』と『ＥＳ』の全面戦争はオレ達に標的が向かう可能性だってあるのだから。

「一体、あの爺共は何を考えているんだ？　まるで、自分達の世界を作り上げたいような」

「あながち間違っておらぬ可能性があるの」

アルの言葉にオレはキョトンとした。

『周は評議会が出来た理由を知っていますか？』

「確か、総長の暴走を防ぐため」

「半分だ正解。実際は正規部隊から引退した面々がそういう理由をつけて最大権力者になるため。評議会はメンバー入れ替えが少ないだろ？」

「そうなのか？」

評議会にいるメンバーなんて爺共ばっかりだと思っているからあまり気にしていなかった。でも、よくよく考えてみると確かにそうだ。

というか、実際の理由がかなりヤバいな。

「慧海や時雨達に上位の職を取られていたからってそういうことをするんだな」

「まあ、オレだって驚いているぞ。仕方ないと言えば仕方ないけどな。ただ」

慧海が真剣な表情になる。

「評議会の動向には気をつけろよ。特に、周、亜紗、エリシアは。あいつらは生体兵器に関して調べている節があった。今はわからないが」

つまり、オレや亜紗の時のことか。オレ達が検査する時は時雨の息がかかった病院を使っていたからな。最近は落ち着いているから普通に近くの病院で十分だし。

確かに、生体兵器はかなり非人道的ではあるが、戦力を作るという点ではかなりのレベルだ。亜紗がいい例だし。

「エリシアは特に周達の中で一番の完成系だ。だから、あまり周達から離れるなよ」

「わかっておる」

『はい』

オレは考え込む。一体、評議会の爺共は何がしたいんだ？　考えれば考えるほど答えは出て来ないけど、対策を練っておくしかない。オレの大切な人を守るために。

第五十一話　帰還

エスペランサの甲板から見る夕焼けは絶景だった。今見ているオレはそう断言する。断言するのだが、

「寒いっつうの」

エスペランサが飛んでいるのは高度３０００m以上上空。必然的に気温も低くなるのだが、現在は６０００以上あるのだろう。おかげでかなり寒い。

オレはそんな中でも甲板に三本の命綱と共に立っていた。みんなのいないところで勢力を整理したいからだ。

まずはナイトメア関連の勢力。やはり、『悪夢の正夢（ナイトメア）』や『現実回避（エスケープ）』達だろう。シェルターよりも下、元から存在していたらしい核シェルターと呼ばれる究極のシェルター内にケリアナの花と奴らがいたからこれは確定だ。ただ、ケリアナの花の匂いから幻想種が現れた。

ケリアナの花の匂いから作り出しているということになるけど、詳しくはアルに聞くしかないだろう。

そして、不穏な動きを見せる評議会。こちらはかなり厄介だ。流れは見えているのに動きが全く見えない。まるで、雲の上から見ているかのように。

『赤のクリスマス』について調べているのも気になる。

「敵の数が多くて厄介だよな。せめて、敵がひとまとめになってくれればありがたいんだけど」

まあ、そんなことになれば世界が混乱するというレベルじゃなくなる。下手をすれば世界が真っ二つに割れかねないレベルだ。

「どうなるか見極めないとな」

「こんなところにいましたね」

その言葉に振り返るとそこにはアル、じゃなくてエリシアの姿があった。はっきり言うならわかりにくい。判断する材料が少ないし。今はアル・アジフを握っていないからエリシアだとわかるけど。

「これが寒さ」

「エリシアは感じたことがないのか？」

「はい。どうも神経伝達の一部が未完成だったようで。多少の寒さや熱さは感じなかったから。今は感じますよ」

「わかってる」

オレは苦笑した。とは言っても、生体兵器になった以上、今までよりも寒さや熱さには強いはずだ。オレ達と同じように。

エリシアが命綱をつけて両手を広げる。

「気持ちいい。これが、新しい体」

「満足か？」

「はい。でも、私のために中東まで来て」

エリシアの体ははっきり言って『ＧＦ』じゃどうにもならなかった。だから、オレは一縷の望みと共にアリエル・ロワソを尋ねたのだ。

結局は交換条件になったけど協力を得ることに成功。慧海も呼んで『ＧＦ』、『ＥＳ』の最新技術をつぎ込んでようやくだった。

「いや、あくまでオレのためさ。オレが自分勝手にみんなを巻き込んで助けようとした。ただそれだけだ」

「素直じゃないですね。でも、そんな周を私は好きだから」

「あ、ありがとう」

気温は寒いが体は熱い。オレは小さく息を吐いて命綱を一本外した。

「中に戻ろうか」

「はい」

オレは命綱を全て外しエリシアの手を繋いでエスペランサの中に入る。そこにはちょうど魔術書アル・アジフが置かれていた。スケッチブックを漂わせたアル・アジフが。

『遅かったの？』

あまり長く話したわけじゃないのだが、アルはどうやら怒っている

ようだ。

多分、エリシアが放置していったんだろうな。エリシアがアル・アジフを手に取る。

「心配でしたか？」

『そなたなら大丈夫じゃ。それより、周には伝えたのかの？』

「あっ」

どうやらエリシアはオレに何かを伝えようとして来たらしいが完全にそのことを忘れていたようだ。オレは小さくため息をついてエリシアを見る。

エリシアはあたふたしながらアル・アジフを見ると目を瞑った。

「ふぅ、そなたもその癖を直した方がよいぞ」

『わ、わかっています。でも、私の人格の元となったのはあなたと同じはずですが？』

「育て方を間違えたようじゃな」

話が全くわからないが、今まではアルかエリシアのどちらか一方としか話さなかったから二人と一緒に話すのは新鮮だ。

何というか、愛おしいって感じだよな。

「そうじゃ。用件じゃ。そろそろ学園都市につくから甲板から降り

るようにと」

「結局は降りているんだけどな」

まあ、甲板にも長居するつもりはなかったからいいけど。

「それにしても、エスペランサはクロウェン一人で動かすことが可能なのじゃな」

エスペランサに乗っているのはオレ、アル、エリシアに操縦士のクロウェンだ。まあ、普通は一人じゃ動かせないと思うだろう。

実際に普通は動かせないけどクロウェンだけがエスペランサを動かすことが出来る。

「相変わらずの不思議人間じゃな、クロウェンは。数字のことといいエスペランサの操縦といい」

「前者が無ければ寡黙な優しい人間なんだけどな」

クロウェンは数字フェチと言っていい。というか、クロウェンに任せればあらゆる数字の問題を解くことが出来るし解説もわかりやすい。

欠点は話し出したら止まらないということだろう。どれくらい止まらないかと言ったら、進級がかかった現三年のバカメンバーに教えてと言ったところ、八時間に渡って教えていた。ちなみに、テストは驚異的な点数を取って誰もが驚いていたりする。

確か、あまりの難しさに満点がいないテストで上位トップ3を独占

したんだっけ。バカメンバーが。

「クロウェンは本当にすごいからな。クロウェンがいなければエスペランサ自体がなかなか動かないし」

「そうじゃな。これが旅客機とかなら資源の無駄遣いと言われるんじゃろうな」

「まあ、エスペランサはエネルギー機関は半永久機関だからな。部品が壊れない限り他の資源は使わない。それに、クロウェンの操縦は趣味だから」

ちなみに、クロウェンの職業は非常勤の講師だ。テスト前になれば様々な学校で数学を教えて数学の平均点を極限まで上げる。どんな授業をやっているかわからないが、スパルタという話と優しいという話が起きるくらいだ。

一体どっちなんだよ。

「我からすればそなたも凄い人間じゃ。どうしてそこまで知恵が出てくるかが特にの」

「今回はアリエル・ロワソや慧海のおかげだよ。オレはそれをまとめて理論を組み立ててわかりやすくしただけ。神経伝達以外何も活躍していない」

本当に悔しいことにオレはあまり活躍していない。まとめたことに意義があるとしても、今回はそういうわけにはいかない。

悔しいのだ。オレがあまり活躍していないのが。

「そなたは強くなる」

「いきなりどうしたんだよ」

「そなたはエリシアを一人で助けられなかった。それが悔しいのじゃろ？　そなたならいつの間にか全てにおいてトップになってそうじゃしの」

「オレはそういう人間じゃない。オレは器用貧乏。あらゆることが可能な人間だ。天才なんて言われるけど本当は器用に器用貧乏なだけだよ」

オレはそういう人間だ。でも、それでいいと自分は思っている。

「でも、いつかはそういう風になりたいとは思っている。日常も戦いも全てにおいてみんなを引っ張れる人間に」

『周は引っ張れるというより相手をかき乱すが正しいですしね』

「一言余計じゃ」

アルが小さくため息をつくと同時に窓の外を見る。オレもつられてそこを見ると、そこには学園都市の姿があった。談笑はさすがに聞こえては来ないがオレ達第７６移動隊のホームグラウンドだ。今頃、賑やかな授業が繰り広げられているに違いない。

メグや夢達も。

オレは息をつく。

「ようやく学園都市に帰還だな。シェルター関連のことは音姉達に任せたからどうなっているかかなり不安だぜ」

「そなた、まさか、仕事を投げ出して」

「それほど大事な要件だったんだよ。それに、音姉達の訓練になると思って」

オレはアルから視線を外した。恥ずかしくて見ていられない。そんなオレを見たアルはクスッと笑っている。

「嬉しいぞ」

その笑顔のアルは本当に可愛くて見ていれば頭が沸騰しそうなほど幸せそうだった。

第五十二話　体育祭に向けて

「体育祭か」

メグが小さく声を漏らす。それを聞いたオレは不思議そうに首を傾げた。

「嫌なのか？」

オレが学園都市に戻ってからすでに四日が経った。シェルターのことに関してはすでに連絡がいっており、次の日には学園自治政府の主力と第７６移動隊の主力が共にシェルター内に入ったらしい。

結局は証拠という証拠が見つからなかったらしいけど。

帰ってからも第７６移動隊の面々でシェルターを見に行ったが何もなかった。おかげで今は学校に登校出来る。

「嫌というわけじゃないけど、規模が大きすぎて」

「まあな」

学園都市全体で行われる体育祭。一応、文化祭もあるのだが、あまりの規模にどこに行けばいいかわからなくなるので商業エリアにおいて有志が行うということで文化祭はある。

興味がないやつにとって無いに等しいイベントだ。

「そう言えばそろそろですね。生徒会長が抽選に向かうのが」

「抽選？」

ワカメの声にオレは首を傾げる。

「知らないのかよ。俺様だって知ってるぜ」

そう言いながらハトがニヤリと笑みを浮かべる。それに対して隣にいた健さんが笑みを浮かべたような気がした。

「なら、言ってみろ。ちなみに間違ったら俺に発言権が渡されます。そこで俺が答えたら罰ゲームな」

「なっ。えっと、えっと、抽選ってあれだろ？　例えるなら抽選」

意味がわからない。健さんの意味はこういうことだったのね。

健さんがさらに笑みを浮かべる。

「体育祭の抽選だよ。俺達がどこの高校と戦うかを決める抽選」

「正解だね。ハトの罰ゲームはどうしようか？　僕は好きな人の名前を叫ぶという方針で」

「ありですね」

「ありだな」

「賛成だ」

「真人も一誠もいつの間に混ざっているんだよ！」

相変わらず騒がしい五人組だ。

罰ゲームというのはかなり興味があるけど参加するのは悪いだろう。

「まあ、どこだって同じだろう」

「甘い。甘いわ。甘椿みたいに甘々よ」

「どうしてメグが甘椿なんて知っているんだ？」

こっちじゃあまり有名じゃないはずなのに。

「お兄ちゃんがよくくれたから、じゃなくて、私達からすれば抽選は死活問題なのよ」

メグがこちらを指差しながら言うがどうして死活問題なのかがよくわからない。

大体、どこの高校と当たっても大丈夫だろうに。

「もし、体育会系の学校と当たってみなさいよ。第７６移動隊はよくても私達がボコボコにされるわ」

「なるほどね。納得だ。まあ、オレには関係ないけど」

よっぽどの勢力差がなければオレや由姫が負けるわけがないし二人でいればいるほど負ける確率は各段に下がる。

でも、他の人からすれば死活問題になるんだよな。
「私は別にどこと当たってもいいんですけどね。学年対抗のドッチボールに勝てば大丈夫ですし」
「ちょっと待て。学年対抗がドッチボール？」
「はい。各学年２０人ずつ代表を出して学年対抗のドッチボールを行いますけど、兄さん、もしかして」
「昨日、先生が、言っていたよ？」
夢が心配そうに尋ねてくる。そう言えばそうだった。左から右に聞き流していたから完全に忘れていたけど確かにそうだった。
でも、ドッチボールとなると色々大変だよな。
「学校対抗試合もあるのにな」
「メンバーは確定しているけどね」
真人の言葉にオレ達は頷いた。第７６移動隊の主力全員で行けば大丈夫だろう。まあ、何やら制限がかかりそうな気もするけど。
「まっ、どんな学校と当たろうと全力を尽くしてやるのが俺らの仕事だろ」
「だよね。僕もこんなんだけど頑張るよ」
「というか、体育祭なんだよな」

ちょっと前までシェルター関連で走り回っていたから体育祭が近くなってきている自覚が全くない。というか、体育祭なんてほとんど参加しないか参加していないかのどちらかだったしな。

他地域からの援軍に関しては第７６移動隊じゃなく学園都市地域『ＧＦ』統括部隊が配置を行ってくれるからいじるとこはないだろうし。

「そう言えば、第７６移動隊はどうなるのですか？　体育祭に全面参加か一部参加」

「後者だろうな。そこまで時間に余裕があるわけじゃないし。それに」

オレは言葉を引っ込めた。これ以上は言ったらダメな部分だ。いつもの空気だったから思わず答えそうになった。

オレは小さく息を吐く。

「ややこしい事態が起きているからな。学園都市外で。もしかしたら、駆り出されるかもしれない」

嘘は言っていない。言ってはいないが罪悪感はある。

「そうなんですか？」

由姫が不思議そうに首を傾げた。第７６移動隊全員には評議会が不穏な空気を出していると言ったはずだ。完全に忘れているな。

オレが呆れたように由姫を見ると由姫はあからさまに目を逸らした。

「ごめんなさい」

「目を逸らしながら言うな。まあ、そっちはあまり気にしなくていいさ。オレがまとめるから。まあ、学園都市の体育祭って規模が桁違いだからオレ達も警備に走らないといけないし」

「兄さんとのデートは？」

「確実にないからな」

多忙すぎてそんな時間はないだろう。それに、デートと浮かれて警備を疎かにしても困る。そこはかなり難しい配置になるだろうな。

配置するなら分隊ずつにわければいいか。第一分隊はそれぞれの分隊に分かれて、第五分隊は駐在所配置で。

「で、でも、少し、回りたい、かも」

「そうそう。夢の言う通りよ。私達も周や由姫やみんなと一緒に回りたいから」

「それは体育祭に近くならないとわからないけど、体育祭に向けて今から準備をしておくのは悪くないかな」

その時、レヴァンティンが震えた。オレはレヴァンティンを取り出して通信を開く。

「はい」

『海道君？　私』

「委員長か？」

『委員長じゃなくて生徒会長だって。いや、まあ、そんなことはどうでもよくて、今体育祭の抽選に来ているの』

体育祭の抽選ということは対戦校を決める抽選のことか。まあ、確かに生徒会長の委員長が行くのは当たり前だよな。

でも、連絡をかけてくるってことは、

「何かあったのか？」

『うん。ちょっと大変なことになって』

「場所は？」

今から言っても間に合うかどうか。

『大丈夫大丈夫。海道君の出番じゃないけど、一応、海道君に話は通した方がいいかなって』

緊急事態じゃないだけましだろう。オレは小さくため息をついて口を開いた。

「わかった。要件は？」

『体育祭に向けて、『ＧＦ』側の援軍代表の名前が』

委員長が一拍間を空ける。その時にオレはみんなが近づいて耳を澄ましているのがわかった。

今からどけるのも億劫だからいいだろう。

『一人がギルバートさん』

「それは慧海から聞いた」

オレが中東にいる間に慧海から、援軍代表はギルバートになるだろう、と聞いていた。でも、代表は一人しか聞いていない。

「もう一人は？」

『エクシダ・フバル。海道君は知っているよね？』

「評議会の中でも一番の権力を持つ」

『うん。だから、海道君の耳に入れた方がいいだろうし。それに、警備のスケジュールも変えないとダメだよね？』

オレの中で組み立てていた警備のスケジュールが崩れ落ちていくと共に委員長の声が決める。確かに体育祭に向けてこの話を聞いていて良かった。もうすぐで本決まりになるところだったし。

オレは小さくため息をつく。

「わかった。ありがとう。じゃ、また駐在所で」

通信を切ってオレは小さくため息をついた。まさか、こんなところ

であいつの名前が出てくるとはな。

「周、エクシダ・フバルって誰？　『ＧＦ』の関係者？」

不思議に首を傾げるメグとは裏腹に由姫の顔は暗い。おそらく、オレと同じ考えを持っているだろう。

「エクシダ・フバル。元第一特務で『ＧＦ』評議会のある意味最高権力者。急にしゃしゃり出てきた爺だ」

第五十三話　対策（前書き）

対策ですがあまり対策は立てません。

第五十三話　対策

エクシダ・フバル。

『ＧＦ』の創生期からずっと『ＧＦ』にいた人物で第一特務にも所属していた元エース。

評議会を設立する原動力になったと言われ、第７６移動隊の設立に障害となった人物でもある。そんな爺が東京特区学園都市の援軍代表として来るなんて。

「世も末だな」

孝治がスルメをつまみながら言う。表現がかなり間違っているが気にしていたら終わらないだろう。

孝治の向かいに座る悠聖も近くのせんべいに手を伸ばす。

「第一特務が代表じゃないのかよ。どうせ、評議会がごたごた言ってねじ込んで来たんだろ。周隊長はどう思っている？」

オレはポテトチップスに手を伸ばした。

「悠聖と同じだ。問題があるなら第７６移動隊の警備体制をどうにかしないとダメだろうな」

「あーあ。せっかく空き時間にアルネウラとデートしようと思っていたのに」

「光に殺される」

「孝治はいつになく落ち込んでいるな」

オレは小さくため息をついてポテトチップスを口に運ぶ。

今、オレ達は対策会議と称して近くのお菓子メーカーからもらった試作品の品評会を行っていた。

孝治が食べているのはスルメだ。ただし、スルメタコ味という何がしたいかよくわからないもの。悠聖が食べているせんべいは味噌味。ちなみに、かなり強烈な匂いがある。

そして、オレが食っているポテトチップスは、

「案外いけるなラフレシア味」

「誰がそんなもの開発したんだよ。ちなみに、かなり臭いからな」

「俺のはイカを食っているのかタコを食っているのかわからなくなってきた」

まあ、スルメタコ味だし。オレのポテトチップスなんて『新感覚ＲＰＧ型ポテトチップスラフレシア味』という商品。

味は悪くはない、悪くはないのだが悠聖の食べる味噌味よりもはるかに匂う。ちょっと前までアルネウラと優月がいたのだが、ラフレシア味を開けた瞬間に逃げていったくらい。

「こっちはヤバいな。せんべいの感触なのに味噌の味しかしねぇ。

周隊長、消臭系は？」

オレが取り出したのは、

『新感覚ＲＰＧブレスキュアトリカブト味』

「「殺す気か！？」」

悠聖と孝治の叫び。残念ながらそのセリフはオレが試作品を渡して担当者に言っていた。

まさき新感覚ＲＰＧ。やりたくないけど。

「そうだと思って普通のブレスキュアを買ってきた」

そう言いながらオレはコンビニで買ったブレスキュアを机の上に置く。

お菓子が作るブレスキュアはかなり大人気だからな。口臭が消せるし飴として十分においしいし。

「まじチャレンジャーだよな。前回がユリの根味だっけ？」

「前々回はフグだ」

どう考えても試作品でオレを殺そうとしているに違いない。絶対にそうだと断言出来る。

オレは小さく息をつきながら肩をすくめた。

「さてと、誰が試食するか決めないとな」

オレ達の目が光る。そして、全員が拳を握りしめた。

「最初はぐー。じゃんけんポン！」

ぐー、ぐー、ぐー、ちょき。よし、勝ったって、

「あーあ、負けちゃった」

いつの間にか音姉の姿があった。この場はオレ達だけで大丈夫だと言ったはずだが。

「ところで何のじゃんけんだったの？」

オレ達の視線が交錯し同時に頷きあった。そして、一瞬にして共謀することが成立する。

「味見の順」

「ブレスキュアの順」

「毒味の順」

部屋に静寂が落ちる。ちなみに順番はオレ、孝治、悠聖だ。孝治と悠聖は全く隠していないしオレを含めた全員が結局は同じことを言っている。

オレは小さく息を吐いた。

「結局、そのブレスキュアの試作品を毒味なんだね」

「音姉、聞いていただろ」

音姉は頷いてブレスキュアトリカブト味を手に取る。そして、手に取ってから固まった。そりゃ、味がトリカブトなんだめんな。毒の味ってチャレンジャーだ。

音姉がゆっくりまるで機械のようにこっちを向く。

「食べなきゃダメ」

「オレが食べる」

「俺が食べよう」

「オレは食べん」

悠聖の言葉に全員の視線が集まる。そして、オレ達は目を合わせることなく頷き合った。

悠聖が額に汗をかいて焦っているのがわかる。

「いやー、なんだ？　穏便に、穏便に」

「確保」

オレと孝治が同時に動いた。そして、悠聖の手を取り完全に拘束する。

「ちょっ、ちょっと待て。まだ、心の準備が、んぐっ」

口を開いた悠聖の口に何かが飛び込んだ。音姉の方を見るとそこにはブレスキュアトリカブト味の蓋を開けて指で弾いた体勢になっている。

どうやら指で弾いて吹き飛ばしたらしい。そして、それが悠聖の口に。

悠聖の体が震える。そして、

「今だから言うが、オレって寂しがり屋なんだ」

爽やかな笑顔で泡を吹きながら倒れた。

「「悠聖ーーーーッ！！」」

オレと孝治の叫び声と共にオレ達は悠聖に向かって敬礼する。尊い人柱に敬礼。

「こういう時の弟くんと孝治くんって息が合っているよね。そんなに不味くはないと思うんだけどな」

振り返った先では音姉が普通にブレスキュアトリカブト味を食べていた。悠聖が泡吹きながら痙攣しているのにすごいチャレンジャーだ。

というか、普通に食べてないか？

「下はピリピリして手も痺れてきたけど」

「吐き出せ。吐き出してくれ音姉！」

「よくその状態で食べられるな」

オレは慌てて若干青ざめ出した音姉に向かって駆け寄った。

ブレスキュアレモン味を口の中に放り込む。オレの口からはポテトチップスラフレシア味の臭いが酷いからな。

ちなみに、悠聖は口から煙を出してぐったりしているものの味噌の匂いは全くしない。これがブレスキュアトリカブト味の効力か。

ちなみに、音姉は耐性があるのかないのかわからないが現在はスルメタコ味を食べていた。

「エクシダ・フバルか。確か、あのエロ爺だよね。なかなかのお爺ちゃんって感じだったけど」

「確かに、エクシダ・フバルはどちらかというと『ＧＦ』寄りだな。評議会トップではあるが、他の面々と比べるとまだ優しい」

オレは内心驚いていた。エクシダ・フバルと言えば第７６移動隊の設立から揉めていた人物で何回か口論になったことがある。

それを考えると『ＧＦ』寄りだなんて思えない。だけど、そうなると、

「エクシダ・フバルの暗殺？」

オレの言葉に二人が驚いていた。オレは慌てて解説する。

「二人の言うような人物だとしたら、評議会の一部からは疎まれているはずだと思う。だから、第７６移動隊管轄の中でエクシダ・フバルを暗殺すれば」

「第７６移動隊に責任を問えるし、評議会から『ＧＦ』派の最重要人物を排斥出来る。一石二鳥だね」

「一石二鳥すぎる気もする。もしかして、評議会が暗躍していることに関係があるのか？」

「おそらく。考えたくはないけど、評議会と『悪夢の正夢（ナイトメア）』が繋がっているとか。今日の新聞を見たか？」

オレは持っていた新聞の切り抜きを二人に見える位置においた。学園都市で一番有名な夕日新聞だ。『ＧＦ』を毛嫌いしていることでも有名。

そこに書かれているのは学園都市内部で流通しているドラッグの市場に関してだった。大手新聞社が全て推測で語るという大技に走っているが、現実的な数値になっている。

「クスリは金になる。それは二人もわかっていると思うけど、金になるということは資金が潤うということだ。『悪夢の正夢（ナイトメア）』達は少数精鋭。そうなると、何か別の部隊を動かす可能性がある」

「傭兵や評議会傘下の部隊だな。上手く動くのか？」

「孝治君はあまり知らないと思うけど、『ＧＦ』を恨む人はたくさんいるよ。特に中東には。『ＧＦ』と『ＥＳ』のいざこざによく巻き込まれたから」

日本では『ＧＦ』派の人が多いが、世界を見れば言うほど多くはない。五割ほどが『ＧＦ』。三割ほどが『ＥＳ』。残りが国連という具合だ。

学園都市は『ＧＦ』の象徴とも言えるから格好の餌食になるだろう。

「これも全部評議会と『悪夢の正夢（ナイトメア）』が繋がって場合だけどな。まあ、対策を考えていた方がいいだろう。エクシダ・フバルはいけ好かない奴だが」

「賛成だ。エクシダ・フバルは俺も嫌いだ」

「あれ？　孝治君はエクシダ・フバルのこと『ＧＦ』派って言ってなかった？」

音姉の言葉に孝治は頷く。

「エクシダ・フバルは『ＧＦ』派だ。爺からそう聞いている。だが、どこか達観しているところが気にくわない」

そういう孝治の顔は本当に気に食わなさそうだった。

第五十四話　駒の動かし方

エクシダ・フバルが来ることによってオレ達の仕事が慌ただしくなった。それは各『ＧＦ』部隊も同じだったりする。

だからか、現在別部隊にいるはずの悠聖の弟子である俊也が第７６移動隊駐在所に来ていた。ちなみに一人だ。

オレは俊也にお茶を出す。

「悠聖ならいないぞ」

キョロキョロ周囲を見渡す俊也に対してオレは小さくため息をついた。俊也はビクッとしてしおれたように小さくなる。

「べ、別にお師匠様に会いたいわけじゃありませんし、その、えっと」

「気になる女の子でもいるのか？」

その言葉に俊也は真剣な表情で頷いていた。まあ、その気持ちはわからないでもない。

でも、今は別の案件のはずだ。

「で、体育祭の要件は？」

「す、鈴木さんが事務じゃ」

鈴木と言われて一瞬誰だかわからなくなったが、委員長の名前だと思い出し満足そうに頷く。

「委員長は生徒会長だから。今日は忙しい。だから、俊也には悪いがオレが相手をさせてもらう」

「わかりました」

見るからにしょぼんとする俊也。そんな姿を見て笑いを殺すのが精一杯だった。

「案件です。エクシダ・フバル評議会代表が来るので警備体制の確認をしたいと隊長が」

「第十三学園都市地域部隊だから、紅か。あいつはまめだからな。警備体制に関しては第７６移動隊を中心にする予定。自慢のフュリアス部隊も動かすさ」

「でも、どうしてこんな時期にエクシダ・フバル評議会代表が来るのか僕にはわからないんですけど」

「それはオレにもわからないさ」

オレは肩をすくめた。実際にエクシダ・フバルが来るのは寝耳に水だったからな。どうせあの糞爺のことだ。オレ達が慌てているのを見て笑っているに違いない。

ありがたいのはもう一人の代表が一緒に守ってくれる方だからな。

ギルバート・Ｒ・フェルデ。『ＧＦ』史上最速の男で亜紗と戦闘ス

タイルは重なる。おそらく、乱戦の中で三指に入る実力者。ちなみに、オレも入れている。自惚れじゃないぞ。

「まあ、評議会の奴らだから興味はあるっちゃあるんだけどな。でも、詮索はしない方がいい」

「わかりました。隊長からは他には、第７６移動隊との合コンの開催と女の子の出会いの場の提供をお願いしたいと」

「紅はどこにいる？」

すぐに殴り倒してやる。

「ちゃんと僕が却下しました。さすがに周隊長が怒りますから。でも、色気がないのは事実ですし」

「第十三学園都市地域部隊って女子がいないんだっけ」

「言わないで。お願いだから言わないでください。むしろゲイがいるから逃げたいくらいなので」

それはとても災難だ。

「でも、隊長も不安なんです。周隊長やお師匠様のような総合力がありませんから守れるかどうか」

「俊也。オレ達は『ＧＦ』だ。『ＧＦ』は組織だ。お前達は責任を感じる必要はない。全ての責任はオレにある」

それがリーダーとしての役割だ。

学園都市の『ＧＦ』トップ第７６移動隊隊長が全ての責任を負う。

「お前達の仕事は事件が起きたら食い止めること。それ以上でもそれ以外でもない。まあ、問題が先のランク詐欺なんだけどな」

Ａランクでありながら捕まった人もいるため正直に言って学園都市の戦力は落ちたと思っていい。第一特務の面々によっては少し辛いことになるだろうな。

オレは小さくため息をついて立ち上がり机の上から一枚の書類を俊也に渡した。

「現在の暫定配置だ。第７６移動隊第２分隊が商業エリアに近い位置に。第３分隊が学園施設エリア。第４分隊は空中になる予定だ。暫定だから確定はしていないけど何事も無ければこうなると思う」

「ふわぁ。フィンブルド、どう思う？」

『わかるか。そういうのは自分で今は考えるんだ。後がなくなったら呼ぶこと』

「そうだね。ありがとう」

現れたフィンブルドは少しだけ顔を赤く染めて姿を消した。俊也はそれを見て考え込む。

「まあ、第十三学園都市地域部隊の面々と協力して考えれば」

「ごめんなさい。今来ました」

委員長が慌てた姿のままやってくる。そして、オレ達の方にやって来た。

「海道君ごめんね。生徒会長の仕事で。あれ、俊也君だ。遊びに来たの？」

「ち、違います。第十三学園都市地域部隊から正式に聞きに来ただけで」

「そっか。海道君、代わる？」

「いや、話すことは少ないからな」

実際に話すことはほとんどなかった。まだどの時間帯に来てどの場所に行くかすら決まっていないのだ。オレ達がどうにか出来るわけがない。

まあ、どうにかする方法がないわけじゃないけど。

「委員長。今日で体育祭との対戦スケジュールは確定だよな？　そのデータはあるか？」

「うん」

委員長が取り出した記憶媒体にオレはレヴァンティンを繋げた。そして、立体ディスプレイに繋げて映し出す。

全高校の対戦表。体育祭で一番熱いのは高校だから確認するのは高校だけで十分だ。そこから有名校を抽出していく。

有名校同士の戦いがある場合は人気が極めて高い。だから、それによって人も動く。そのため予測することが出来るのだ。

「うわっ、柵高と東付が同じブロックか。しかも、そこに総付高と関付、時高も入っているし」

作為的としか思えない抽選だ。

体育祭で人気の高い高校は全国常連の柵川高校と東京大学付属高校。関東大学付属もかなり強い。総合大学付属高校は強くはないが人気が極めて高く人が溢れかえることは間違いなし。時山高校は学費が公立より安いということで有名だ。

まあ、同じブロックに都島学園都島高校の文字が見えるけど。

「すごいところを引き当てたな」

「うん。みんなのテンションだ下がりだから。でも、予測はしやすいよね？」

確かに同じブロックに集まってくれた方が予測はしやすいしやりやすい。予測される競技会場と時間を考えて人の移動も考慮すると、

「カオス理論に突入しやがった」

あまりに人気のある高校が集中したからか予測出来ないカオス理論状態に。実際、都島高校が学園都市で一番有名だからな。

学園都市トップ3というイケメン上位三人に孝治が入っているくら

いだし。

「仕方ないと思う。これだけはさすがに予測出来ないよ」

「学園都市史上類を見ない混雑になりそうな予感がします」

「仕事が増えるだけじゃねえか。交通規制をかけることも考えた方がいいな」

はっきり言うなら交通量がそれほど多くない学園都市でするようなものじゃないと思う。まあ、仕方ないけど。

だけど、不祥事だけは出来る限り避けないと。オレの地位なんてどうでもいい。評議会にエクシダ・フバルは必要な人物かもしれないからだ。まあ、よく話してから判断するけど。

それにしても、ブロックどうにかならないかな。どうにもならないよな。まあ、どう動かせばいいかわかったけど。

「えっと、海道君ごめんね」

「別に謝らなくていいさ。抽選の結果だ、仕方ないしカオス理論が出来るほど混雑する可能性があるのも事実だ。対策はまだ立てれる。立てられるはずだ」

オレは立ち上がった。そして、自分の机に向かう。

「ちょっと情報を整理するから俊也は待っていてくれ。委員長は俊也の相手を」

「うん」

委員長が俊也の前に腰掛ける。ちなみに、俊也は輝いた目でオレを見ていた。オレは自分の机に戻りレヴァンティンを机の上に置く。

「で、レヴァンティンはどう思う？」

『あの二人はお似合いですよね』

「怒っていいか？」

オレはそんな話をしていない。

『カオス理論になるのは仕方のないことだと思います。実際に私の試算でもカオス理論になりましたから』

「人の行動は予測出来ないからな。レヴァンティン、お前ならエクシダ・フバルをどう動かす？」

『マスターは決めていますよね』

それと同時にレヴァンティンが立体ディスプレイに地図を映し出す。そして、一本の線を引いた。

完全にオレと同じ意見か。

『エクシダ・フバル氏を一直線で動かす。それが一番だと思います』

「だな」

カオス理論が来るならエクシダ・フバルをわかりやすいように動かす。あくまで一直線に。変な道は使わない。

「相手が無差別に狙わないなら、十分だ。後は、ベリエとアリエの二人が大活躍だろうな」

第五十五話　予測

オレはチラッと委員長と俊也を見た。二人は少し恥ずかしそうに話している。まるでお見合いの光景だ。

もし、悠聖がいたならきっと、

「ついにあいつにも春が来たか」

そうそう。絶対にそう言うって、

「いつの間に？」

唇を動かさず資料をまとめているように見せながら隣で隠れている悠聖に訪ねた。

というか、お前は今日ここの担当じゃないだろ。

「そう言うな。ちょうど休憩だったし俊也が来てるからって様子を見に来たんだよ。あいつが委員長をデートに誘えるかどうか」

「知っていたのか？」

「まあな」

まあ、俊也はオレよりも悠聖と親しいからな。お師匠様に追いつくんだと言って学園都市に来た時はかなり驚いたけど。

それに、俊也は真面目だし優しいから委員長とはお似合いだろう。

委員長の趣味を知って逃げないか問題だけど。

「問題は趣味だよな」

「周もか？　さすがに幻想殺しにはなりたくないからさ。フラグクラッシャーにはなりたいけど」

「死亡フラグの？」

「イエス、サー」

噂によるとすでに浩平がフラグクラッシャーだとか。あいつは実際に物理防御に関しては世界最強らしいからな。人体の神秘でもある。

二人は笑い合っている。どうやら話が弾んでいるようだ。

「ついに新たなカップルが誕生か？」

「そうなったら祝福しないとな」

オレの言葉に悠聖が笑みを返す。悠聖からすれば初めての弟子だからその弟子の幸せも嬉しいのだろう。

最大の障害がやはり委員長の趣味だが。

「一つ気になったんだけどよ、エクシダ・フバルをどう行動させるかの案は出来上がったのか？」

「一直線。普通は曲がったりするけどひたすら一直線にすることで警備をしやすくする」

「狙われやすくなるよな？」

「それも狙っている。第７６移動隊と第一特務が全力で守ればどうにかなるだろう」

出来ればアルトが来て欲しいとは思う。あいつの『鋼鉄処女（アブソリュート）』と『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』に『狂乱騎士（バーサーカー）』は防衛に関しては世界最強クラスの能力だ。

アルトの有る無しによってエクシダ・フバルの防衛のしやすさは大きく変わる。『天空の羽衣』は『鋼鉄処女（アブソリュート）』や『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』みたいに他人にも完全に貼れるわけじゃないのだから。

もし他人に貼れるなら使い易さはかなりのものだろう。

アルトがいるならオレ達も楽出来るけど。

「なるほどね。作戦としての美しさは全くないけど不穏な動きは見破りやすいというわけか」

「そういうこと。オレ達が全力で守ればいいだけだし。さてと、二人で話し込んでいるところ悪いけどこの資料を」

「なんじゃ。俊也が来ておるのか？」

その言葉と共に入り口からアルが入ってきた。スケッチブックはしまっているためエリシアは眠っているらしい。

「アル・アジフさん、お邪魔しています」

「周、今帰ったって、そなたら何をしておるんじゃ」

オレと悠聖が必死で唇に人差し指を当てていたのにアルはお構いなしにそなたらと来た。複数だったからか俊也が振り返って驚いている。

「お、お師匠様？」

「よ、よう。驚かそうと思ったらアル・アジフに妨害された」

「そなたらがこそこそしておったからじゃ。俊也が来たということはエクシダ・フバルの動き方でも協議していたのかの？」

「まあ、な」

オレは軽く肩をすくめて詳細をさらに表示していく。それまでにはアルがこっちまで来ていた。

立体ディスプレイにはエクシダ・フバルの動き方と観客の動き方が色々と表示されていく。

「あのな、せっかく二人がいい雰囲気だったのに」

唇を動かさず手を動かしながらアルに向かって言う。アルは少し不服そうな表情になってスケッチブックを取り出した。

「そなたらは。まあ、気持ちはわからないでもないが」

「向こうは気まずい空気が流れているぜ」

悠聖の言葉にオレ達はアルを見た。アルは不器用に口笛を吹きながら目を逸らしている。

オレは小さくため息をついて画面を指差した。

「この部分がオレの中だと完全にカオス理論になる。レヴァンティンのシュミレーションも同じだ」

「実際、学園都市史上初の好カードって言われているくらいだしな。同じブロック全てが有名校ばっかり。観客もかなり来るだろうって。全く、警備するオレ達の身にもなってくれっつうの」

「そうじゃな。確かに、これぱかりはカオス理論になるのは仕方ないの」

仕方ないじゃ普通は済まないけど、まあ、いいだろう。

学園自治政府もシュミレーションをするらしいし、学園都市体育祭実行委員なるものもシュミレーションするらしいから三つのデータを合わせれば大丈夫だろう。多分。

「一応、これをプリントして俊也に渡すとするか？」

「カオス理論すぎて理解出来んの？」

「おそらく無理だ」

こんなものを理解出来るやつの方が少ないだろう。実際に、オレだって理解することが難しいほどでもある。

オレはレヴァンティンに印刷の指示を出した。そして、小さく息を吐いて天井を見上げる。

学園都市のことを考えると今まで以上に混沌とした状態になるような気しかしない。

今からでも十分に頭が痛い案件だ。

オレは印刷されたものを手に取って二人の元に向かう。

「ほらよ。あまり当てにならないだろうが観客の行動予測シュミレーションとエクシダ・フバルの動き方を図で表したもの。行動予測シュミレーションはかなり混沌してカオス理論に突入しているから気にするなよ」

「えっと、僕には全く解読出来ないのですけど」

俊也が苦笑いしながらオレを見てくる。まあ、実際に苦笑いされるような図だしな。

「赤の矢印が予測される行動。青の矢印がエクシダ・フバルの動き方。重なった黒い部分が時間次第で鉢合わせする場所。空白部分はカオス理論到達地点だ」

「へぇ〜、ほぉ〜、へぇ〜」

多分、わかってないな。

「俊也君わかるんだ」

「いえ、全く」

ほらな。

これを見て理解出来る奴の方が少ない。あまりに観客の予測線が多すぎるからだ。しかも、カオス理論到達地点が四ヶ所はある。

エクシダ・フバルの動き方も一部途切れているし。

「海道君、もうちょっとわかりやすい。地図を書こうよ」

「仕方ないだろ。世界で唯一予測出来ないのは人間の行動だからな。いくらレヴァンティンのようなＡＩが全行動をシュミレーションしたところでそれが当たる確率は星屑を触るくらいになるさ」

「まあ、そうじゃな。人の行動をよすることは古来よりされてきた。じゃが、戦争の歴史はそれを無意味なものにした。予測とはそういうものじゃ」

アルの言うように戦争の歴史が人の行動を予測出来ないと証明している。それが何であれどうであれシュミレーション程度じゃどうにもならない。

「あれ？　でも、海道君って攻撃回避率が高いよね。それはレヴァンティンに予測してもらっているんじゃ」

「あれは予測というより筋肉の動きから次の行動を確率で作り上げて勘で回避しているだけだから」

筋肉なんてほとんど見れないから勘だけど。

『戦闘中ほど相手が型にはまっていなければ回避は難しいですよ。鍔迫り合いをするのはそれを予測しやすくするためです』

かなり行動を制限出来るのは戦いやすくするため。まあ、一対一の時に限るけど。

「予測なんてあまり当てにならないけどな」

オレがそう言って笑うとアルが呆れたようにため息をつくのがわかった。

『それを言ったら全てはおしまいです』

エリシアの言葉にオレは苦笑する。どっちも正しいのだから。

第五十六話　追跡

レヴァンティンを口元に当てる。そして、通信を行う。

「目標確認。二人だ」

通信を行いながらも視線はその二人から外さない。

『確認だ。普通にしか見えない』

続いて聞こえてくるのは孝治の声。オレは孝治がどこから追っているか詳しく聞いていないからどこにいるかわからないけど、上手く紛れているのだろう。

『こちらも確認だよ。睦まじく歩いているねー』

『睦まじくというより俊也が緊張してガチガチになっていないか？』

続いて聞こえてきたのは七葉と和樹の声。二人は周囲にたくさんいる人の中に紛れているのだろう。

木の葉を隠すなら森の中。カップルを隠すならカップルの中だ。

『こっちも確認。つか、あいつらどこに行ってんだ？』

そして、最後のメンバーである悠聖の声。それを聞いたオレは頷いた。

「さあな。さて、全員が配置についたな。頑張って二人を追いかけ

るぞ」

オレはそう言いながら人ゴミの中に身を入れた。

事の発端は三日前のことだ。

「そうだ。委員長、次の土曜日って非番だよな？」

オレは備品の中身とスケジュールを交互に確認しながら委員長に訪ねた。委員長は不思議そうに首を傾げながらスケジュールを確認する。

「うん。そうだけど、何かあるの？」

「隊用のペンやら何やら足りてないからさ、注文をかけようと思っていて、注文出来なくて個買いになるものがいくつかあるんだ。それのお使いを頼みたいなって」

「今からは、ダメだね」

エクシダ・フバルが来ることになって第７６移動隊の仕事は一気に慌ただしくなっている。はっきり言うなら仕事量がかなり増えた。

オレは今から学園自治政府との会議だけど買い物の時間は取れないし、残念ながら土曜日まで見回りは誰も行かない。

だから、非番を承知で委員長に頼んでいる。

「ちょうど買い物に出かけようとしてたから大丈夫だよ」

「助かる。買い物をする地区は？」

「リュミエール。俊也君に頼まれて両親へのプレゼントを選んで欲しいって」

オレの手がピクリと動いた。事務作業をしていた七葉の頭もピクリと動いている。これがアニメなら耳がでかくなっていただろう。現に七葉の顔がこっちに近づいている。

「私も買い物をする予定だったからちょうどだったし。何を買うの」

「小物がたくさんだな。メーカー品じゃない奴が多いからリュミエール内じゃ揃わない。裏通りになるかな」

そこなら十分に品は揃うだろう。揃うと言ってもあそこは品数自体が少ないから最悪揃わない。

オレはその小物のリストを作る。

「急ぐようなことじゃないから忘れても大丈夫だぞ」

「あのね、私は生徒会長なんだよ。ちゃんと仕事はするから」

「頼むな、委員長」

「生徒会長だって」

委員長が苦笑しながらリストを受け取って駐在所から出て行く。委員長はこれから生徒会長としての仕事だそうだ。

委員長が出て行き七葉が顔を上げた。その顔に浮かんでいるのはいたずら小僧のような笑み。まあ、オレも同じことになっているだろう。

「七葉と和樹も非番だったよな？」

「そうだよ。ぐふふっ、私達の手にかかれば委員長を捉えることは容易いよね」

「見回りメンバーはオレ、孝治、悠聖だな。しかも、ちょうど商業エリア」

「神は私達に味方しているね」

オレ達は笑い合う。多分、この時点で誰かが入ってきたなら確実に引くだろう図。でも、オレ達はそんなことを気にせずに笑みを浮かべた。

レヴァンティンを軽く叩き、メールを、

『作戦内容はすでに送りました。三人共即答で参加する旨のメールを返して来ましたよ』

「早いな。でも、ありがたい」

これで無駄にメールを書く隙が無くなった。

「さて、オレ達は暖かい目で見守るとしますか」

そして、現在ではこうなっている。

委員長は俊也に話しかけているが俊也はガチガチだ。おそらく初めてのデートだからだろう。

『にゃはは。見ていて楽しいね』

『俺には俊也の気持ちがわかるんだが』

『俺もだ』

『つか、委員長は緊張しないんだな』

四人の声を耳にしながらオレは人ゴミを抜ける。二人の姿は時々人ゴミの中に揉まれながらも裏通りに向かって歩いていた。

裏通りは商業エリアにある表通りの隣にある大きさが小さめの道路だ。品揃えでは負けるが値段や珍しいもの、品質の高いものに関しては学園都市一とも言われている。実際にオレ達第７６移動隊もよく利用するほどに。

オレは変装用のサングラス（小型デバイスによる変装魔術を常時展開するタイプ）を身につけているからオレの容姿で騒がれることは

まずない。

「人通りが多いな。もう少し人通りが少なかったら追いかけやすいんだけど」

『周兄、諦めた方がいいって。周兄は単独行動なんだから。というか、周兄の特製サングラスがあればもっと近づけるんじゃないかな？』

「実はあまり」

このサングラスは盗られた時のことを考えて発見しやすくしている。そういう風に回路を作っている以上、一定のデバイスには何ら通用しないのだ。

もちろん、それは委員長のデバイスにも当てはまる。

「まあ、このまま見守るしかないだろ。悠聖はポジションについているのか？」

『ああ。浩平から借りたスコープで遠距離から見ている。ちなみに、周囲の見回りはアルネウラと優月に任せた』

「なら、大丈夫だな。さてと、オレももうすぐ」

人ゴミを抜ける際にはどうしても誰かと肩がぶつかる。オレは誰かとぶつかりながら二人を追おうとして、

「待てや、こらっ」

誰かに肩を掴まれた。

「ロストする」

オレは唇を動かさずにそう言って振り返る。そこにいたのは不良と言えば容姿が思い浮かぶような奴らだった。数は八人。

最初にこういう事態になることを想定していて良かった。

「兄ちゃん、人にぶつかってきて謝りも無しか？」

レヴァンティンを二度叩く。これだけでレヴァンティンは録音を開始してくれるだろう。

「そうだな。オレはどちらも悪いという前提なら謝ろう。すまなかった」

「兄ちゃんにぶつかったおかげで肩が痛いくなったけどどうするつもりだ？　折れてるかもしれねえな」

「謝った以上、兄ちゃんが悪いんだよな？」

普通は謝った方が悪い。それは当たり前だ。当たり前なのだが、オレは前提条件をつけたぞ。

「オレはあくまでぶつかったお前も悪いという前提で謝っただけだ。もしかして、お前らは悪くないと思っているのか？　だったら、前提条件自体が崩れるから意味がなくなるよな」

人の話を聞かなさそうな奴には案外通用する。まあ、見る見るうち

に不良達の顔色が赤くなっていくけど。

「てめぇ、調子に乗るなよ？」

「おいおい。もしかしてキレたとか？　カルシウム足りてるか？　骨が折れたのはもしかしてそれが原因？　骨粗しょう症なんだ」

あくまで挑発するように。絡んできたのは向こうからだ。一部の一般人は最初から見ている。最初から、あそこにいる夢とか。

夢？

「何様のつもりだ、あぁ？」

胸ぐらを掴みかかってきた男の腕をオレは掴み捻り上げた。

「知っているか？　胸ぐら掴むのも十分暴力なんだぜ」

「てめぇ！」

殴りかかろう動き出すより早く、オレはサングラスを外した。不良達の動きが止まる。

「まあ、オレも通信していたから喧嘩両成敗ということだな。文句があるなら聞くぞ？」

「い、いえ、ありません」

オレの顔は有名だ。学園都市にいるなら誰だって知っているだろう。だから、サングラスを外せばそれだけでわかる。

不良達が慌てて走り出す。もちろん、近くの路地裏に向かって。オレは小さくため息をついた。

「完全にロストしたな。仕方ない。悠聖と連絡を取るか」

オレは周囲を見渡した。でも、見渡したそこには夢の姿は見当たらない。見つけたはずなんだけどな。

オレは小さく息を吐いて歩き出す。

「野次馬うるさいからどう撒こう」

二人を追いかける以上、これが最重要案件だ。

第五十七話　裏通りの裏

委員長が小さくため息をつく。それに応じるように俊也もため息をついていた。

「俊也君も？」

「うん。つけられている。多分、お師匠様達がこんなへまをするわけがないから、七葉ちゃんかな？」

「数は二人だと思いますけど」

二人は振り返ることなく会話する。実際に和樹と七葉の二人は露骨にストーカーとなっているため気づかれやすい。ただし、孝治や悠聖がいることは気づかれていない。

委員長は前にあった虎のぬいぐるみを手にとった。

「ちょっと可愛いかも」

「そうですね」

俊也もそのぬいぐるみを見ながら言う。そう言いながらも二人は自分達を見ている気配を探っていた。

俊也は精霊の目を使って。委員長は気配を探るように。この時点で悠聖と孝治はそれに気づいて身を隠しているが。

「二人でいるところを見つかったのかな？」

「そうだと思います。そうじゃなかったらお師匠様がいそうな気が」

「確かに、海道君もいそう」

そう言って二人は笑う。

「えっと、買い物はあと四ヶ所ですよね？」

「うん。じゃ、行こうか」

委員長は虎のぬいぐるみを置いて俊也と一緒に歩き出した。

裏通りの裏。表通りの隣の隣の隣は治安という点では最悪な場所でもある。

道という道が入り組んでおり、商業エリアがホームグラウンドの学園自治政府ですらその細かな間取りはわからない。そして、そこまで混沌としているからかここをホームグラウンドとしているのは一般的に言えば不良。ホームレスもいるそうだが、そこまでいくと捕まえることになるだろう。

オレはその裏通りの裏に来ていた。もちろん、人目につきすぎたから。

「今まではあまり見回っていなかったけど、こんな場所になってい

るんだな」

『そうですね』

ついでにサングラスをかけ直して歩き出す。もちろん、道に関しては位置把握（ピンポイント）という凡庸な魔術を使っているから迷うことはない。

ただ、同じ道じゃなくて抜けられるかどうかと聞かれれば首を傾げてしまうが。

「表通りの方に行けば良かったかな。まあ、仕方ないか。さてと、また行き止まりか」

道を曲がった先にあるのは行き止まり。道を引き返せばいいのだが、あそこにいたように思える夢が気になる。

「まあ、気長に探せばいいよな。一応、こっちは見回りという大義名分があるし」

『まあ、そうですけど、見回りという大義名分を使ってストーカーをしていたのでは？』

「過ぎたことだ」

オレは少し遠い目をしながら言う。それを突かれるとかなり弱いからな。

オレが軽く肩をすくめて歩き出す。裏通りの裏は人通りが少ないからか横を抜ける数は両手で数えられるほど。ただ、素人だ。

「数は7か。裏通りの裏って暇人が多いのか？」

『ただ単に部外者だからという可能性もありますよ。サングラスをかけた変な人ですし』

「サングラスは大丈夫だろう。変装の道具だ」

『いや、だからマズいんですってば』

レヴァンティンが小さくため息をつきオレは道を曲がる。そこにはたくさんの人がたむろしていた。抜けるのは難しそうだな。ただ、こういう時って出口は道を塞がれるんだよな。

オレは小さくため息をついて踵を返す。

『マスターのことだから突き進むのだと思いましたが』

「あっちは行き止まりだ」

オレは肩をすくめる。

「あそこ、位置的に言ったら裏通りの八橋商店と金谷工具点がある場所だ。あそこに出口はない」

『なるほど。位置把握（ピンポイント）でどの地点にいるかわかっているとは言え歩いた距離から計測するなんて。さすがはマスター』

「後は気分」

『気分九割ですか？』

「当たり前だろ」

歩いた距離が完全にわかるならともかく、そんな不確定要素だけで判断するわけにはいかない。

あそこまで行けば完全に袋小路だからな。

オレは十字路に出た。そして、小さく息を吐く。

「まあ、結局は袋小路になるんだよな」

十字路全てから人がやってきている。その数それぞれ１０程度。正面から１５か。後ろはさらに多い。どうやら、元からここに出す予定だったみたいだ。

さすがは裏通りの裏。いきなりこう来るか。

「なぁ、金を貸してくれよ」

「ほらよ」

オレは虚空から一応用意していた紙を取り出して投げた。ちなみに、れっきとした借用書だ。

さすがにこの反応は予想外だったからポカンと口を開けている。

「どうした？　金を貸して欲しいんだろ？　だったらそこに貸して欲しい金額上限１００万以内で書けよ。ちなみに利子は年８％。かなり破格だぜ」

「ふ、ふざけんな！　この人数差がわからないとでも言うつもりか！？」

オレは小さくため息をつきながらサングラスを外す。

「そうか。なら、やるとでも言うのか？　こちらは正当防衛でどうにかするけど？」

「てめぇ、やれ！」

一斉に動き出す。オレが身構えた瞬間、オレの周囲に矢が突き刺さった。

上から？

すかさず空を見上げると目に入ったのは赤いローブの端。すかさず地面を蹴り跳び上がり、屋上に着地する。

弓を持った赤いローブの誰かが向こうに走り抜けていた。

「レヴァンティンモード？」

レヴァンティンの形が変わる。通常の剣から十字の剣、というより大きな手裏剣に変わる。

オレはそれを赤いローブに向かって投げつけた。

赤いローブはそれを確認するや否や弓を構えてレヴァンティンモード？に向かって矢を放つ。矢はレヴァンティンモード？の軌道を変

えた。

だけど、その時にはオレは赤いローブに向かって距離を詰めていた。赤いローブが気づくが遅い。

手元に戻ってきたレヴァンティンモード?を掴み赤いローブを押し倒しながら首筋に通常形態のレヴァンティンを当てる。その拍子に頭を隠していたローブのフードが外れていた。オレは思わず目を見開く。

「ゆ、夢?」

そこにいた人物の名前をオレは思わず声に出す。

そこには涙を溜めながらこちらを見ている夢の姿があったのだから。

どうして夢がここにいるのかわからないし、赤いローブを着ていたのかもわからない。赤いローブということは“義賊”の仲間なのだろうか。

「待てや、おらっ」

後ろから聞こえてくる声。オレは夢のローブについたフードをしっかり被せてあげて顔を見せないようにする。そして、立ち上がって振り返った。

そこにいたのは武器を構えた不良達。どうやら非合法品を使っているらしい。

「仲間がいたとはな、どういうつもりだ?」

静かにレヴァンティンを構える。こうなれば本気で倒すしかない。
夢の逃げる時間を稼ぐ間。

「オレが食い止める。だから、先に」

「いや」

夢が立ち上がって弓を構えた。本当なら『ＧＦ』の前で許可されていない武器を構えれば犯罪だ。それがわかっているはずなのに夢は弓を構えている。

オレは小さく笑みを浮かべた。

「上等。援護は期待しているぜ」

「合計で１３５０円になります」

俊也が店員の言葉にお金を出す。そして、二人は店から外に出た。

「おいしかったね」

「はい。お師匠様から教えてもらった店でしたけどかなり」

「確かに白川君って詳しいよね。いつも行っているのかな？」

『それはね、私が悠聖を連れて行っているんだよ』

その言葉に二人は飛び上がっていた。いつの間にか隣にアルネウラがいたからだ。アルネウラの横には会釈する優月の姿がある。

『驚かすつもりはなかったんだけど』

「どうして？」

委員長が少しびくびくしながら尋ねる。アルネウラはポリポリと頬をかきながら、

『悠聖が連絡が途絶えた周を探すって言って別行動にしたんだ。おかげで優月と悲しくデート』

「アルネウラ、さっきまで笑っていたよね？」

『優月は細かいところを気にしない。まあ、そういうことだから見回りしていて見かけたってわけ』

委員長が安心したように息を吐く。ただし、俊也はアルネウラが嘘を言っていることがわかっていた。同じ精霊召喚師だからかそういうのはよくわかる。でも、俊也は言わない。

悠聖が見守ってくれていたとわかるのだから。

「周さんとの連絡が途絶えたって普通じゃないですよね？　フィンブルド、お師匠様のお手伝い出来る？」

俊也の言葉に子供の姿のフィンブルドが現れた。精霊召喚師が近く

にいれば目を疑うであろう光景だ。

精霊の無詠唱完全召喚。

精霊武器ならともかく、精霊自体を呼び出すのは普通は不可能。例外は優月くらいだが、優月は魔力によって隠れているだけでずっと召喚された状態。アルネウラの場合は悠聖との絆が深すぎて中途半端な能力しか使えない状態なら勝手にアルネウラの意思で現れることが出来るだけ。

『いいぜ。タイクーン、少しの間頼む』

『ワカッタ』

フィンブルドが姿を消す。俊也は小さく息を吐いた。

「何が起きているんだろ」

その言葉に応えられる人はここにはいなかった。

第五十八話　裏の裏（前書き）

他の二作の更新が全く進んでいませんが、８月になれば更新出来ると思います。多分。

第五十八話　裏の裏

レヴァンティンの柄を最後に残っていた不良の鳩尾に叩き込む。男はくの字に折れ曲がり倒れ込んだ。

「ふぅ、というか、こいつらなんで『ＧＦ』仕様のＮＧＤを使っているんだ？」

「どういう、こと？」

「『ＧＦ』は未だに旧デバイスが主流だからな。一部、最前線とか正規部隊に関してはＮＧＤが使われているけど、学園都市内部じゃ第７６移動隊を除いて旧デバイスだ」

夢は自分のデバイスも見る。見た限りでは旧デバイスだけどかなりいじっているだろうことはわかる。そうでなければあれほどまでに戦闘中の精密射撃は出来ないはずだ。

オレは小さくため息をついた。

委員長と俊也をストーカー、もとい追跡していた最中に意外な拾いものだよな。

オレはそう思いながら相手のＮＧＤを手に取り目を疑った。いや、感触を疑ったというべきか。

ＮＧＤは一部の魔術で構造を把握出来るようになっておりこれも触って把握は出来た。そう、把握は。

「おいおい、何の冗談だ？」

「どうか、したの？」

「このＮＧＤは処理能力を無視してる。魔術を使うことを念頭に置かれた『ＧＦ』仕様のはずなのに、処理能力を無くしているんだ。こんなの、音姉くらいしか使い道がないのに」

他に割いているわけじゃない。これは、もしかして、

「地図？」

ＮＧＤの大半を占めているのは情報データ。ＮＧＤの許容量を超えて処理能力を無くしているということは精密な地図でしか考えられない。

オレはＮＧＤの一つを夢に向かって投げた。

「どうして」

「“義賊”だろ？　なら、“義賊”のリーダーに渡してやれ。何があるかわからないからな」

「わかった。でも、私は」

「月曜日の放課後。学園施設エリア東８－３。もし、話すつもりがあるなら一人で来てくれ。オレも一人で行くから」

夢はゆっくり頷いた。そして、走り出す。

もし、オレと一緒にいたことがわかったなら大変なことになるだろう。夢は友達だ。オレは無理やり聞きたくない。

「レヴァンティン。ＮＧＤのデータを吸い取れるか？」

『立体映像で出しますよ』

その言葉と共にレヴァンティンがデータを映し出す。そこにあったのは地図。位置把握（ピンポイント）が描かれた地図。

実際は位置把握（ピンポイント）がないだろうからこれは、

「裏通りの裏の地図か。ここまで正確だとはな」

『まあ、あそこまで入り組んだ場所を根城にするわけですからここまで詳しく書かないとやってられませんよ。もちろん、私も。位置把握（ピンポイント）にも限界がありますし』

「だよな。だからこそのＮＧＤ全てを使った地図。『ＧＦ』仕様というのも気になるし、これは一体」

『こんな所にいたんだ。探したぜ』

その言葉に振り返った。そこにはフィンブルドの姿がある。

「どうかしたのか？」

『悠聖がお前との連絡が途絶えたって言っていたらしいから探しにだよ。それにしても、面白い場所に来ているな』

フィンブルドの言葉にオレは眉をひそめる。

『ここは一種の人払いの結界の中だぜ。普通は来れないはずだけど』

「レヴァンティン」

『ありました。このＮＧＤには人払い結界を打ち消す効能があります。もしかしたら』

「ここに何かあるかもしれないか」

人払いの結界が作用しているということは連絡が取れないはずだ。普通はこんなことはないんだがな。

オレは小さくため息をついた。そして、レヴァンティンからＮＧＤを外す。

「フィンブルド、悠聖に伝えられるか？」

『いいぜ。伝えたら戻るからな』

「ああ。これも頼む」

オレは位置把握（ピンポイント）を行ったＮＧＤをフィンブルドに投げた。フィンブルドはそれを受け取って飛び立つ。

どうやら念入りに探さないといけないようだ。

「レヴァンティン、結界術式の特定を頼む。オレは」

「まさか、このような場所にいるとはな」

オレは振り返りながらレヴァンティンを引き抜いた。そこにはいつの間にか『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男がいたからだ。もちろん、ローブを着ているため顔はわからない。

レヴァンティンを握りしめて構える。

「戦うつもりはない。私達は工場の破棄を宣告しに来たのだから」

「工場？　ナイトメアか」

「ああ。君達のおかげで原料が大きく減衰してね、いくつも工場を閉じることになったよ」

構えていたレヴァンティンを降ろす。だけど、警戒は解かない。向こうは魔術師としては実力を隠している。世界トップクラスと仮定しておかなければオレだってやられる可能性はある。

ファンタズマゴリアを常に展開出来るようにするが、あれの広域展開には致命的な弱点があるからな。

「さすがは『ＧＦ』だ。今までと同じように相手の手札を少しずつ潰していく。いつの間にかジョーカーすら壊して」

「ジョーカー？　エンシェントドラゴンか？」

「さすがに虎の子のエンシェントドラゴン八体が斧を持った少女に瞬殺されたのは焦った。まるで叔父、善知鳥慧海みたいだ」

その話は聞いていないからメリルが勝手に動いたのだろう。というか、エンシェントドラゴン八体を瞬殺って、三本角のエンシェントドラゴンはどこまで強いんだ？

それにしても、今なんで慧海のことを叔父と言った？

「後は切り札しか残っていない。相変わらず変わっていないな。その手法も」

その声はどこか懐かしく、そして、嬉しそうな響きだった。

「元『ＧＦ』か？」

「ああ」

「そして、『赤のクリスマス』を起こした」

「君の妹、茜は元気かな？」

その言葉にオレの足が踏み出しかけていた。怒りのあまりに突き進みそうになる。だけど、堪えろ。今は、堪えないと。

「核晶は見つかったのか？」

堪えることができなかった。前に踏み出して、そして、後ろに下がる。

近づけない。近づいたら蜂の巣にされる。

「貴様、何故、そのことを」

「そうだな。海道駿に聞いたというべきか？」

レヴァンティンを握りしめる。今の状況では完全に不利だ。『悪夢の正夢（ナイトメア）』で気づかれない間に大量の魔術を設置している。このままじゃただ蜂の巣にされて終わるだけだ。

どうにかしたいのに。親父とお袋の仇を取りたいのに。

「どうした？　来ないのか？　来ればいい。さもなくば」

「レヴァンティン、準備は出来たか？」

『大丈夫です』

その瞬間、『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男が大きく後ろに下がった。それと同時に『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男がいた場所に矢が突き刺さる。

ようやく来た。

「レヴァンティンモード？カノン！」

「くっ」

オレはレヴァンティンモード？カノンで砲撃を行う。『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男がそれを腕で受け止め、かすかにフードの中身が見えた。ほんの微かだったが、その顔を見て連想したのは、

赤。

「ぐっ」

思わず片膝をついてしまう。いつの間にか手からこぼれたレヴァンティンが床に落ちて音を立てた。

赤だ。あの日の赤。『赤のクリスマス』の赤。

赤を連想したからかフードの中から見えた顔は全く覚えていない。だけど、やっぱりわかる。

あいつを見たら『赤のクリスマス』を思い出す。

理由はわからない。だけど、関係者だからかもしれない。

「周！」

いつの間にかオレの隣には悠聖の姿があった。どうやら『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男には逃げられたのか孝治の姿もある。

「おい、大丈夫か！？」

「大丈夫だ。問題ないとはいかないけど」

今日の悪夢は確定だろうな。

「『赤のクリスマス』を思い出したか」

孝治の前では一度同じことになったからわかったんだろうな。

オレはその場に座り込みながら頷く。

「ああ。あいつの顔が見えた瞬間に赤の光景がな。おかげで顔を思い出せない」

「仕方ないぜ。周隊長にだって思い出したくないことはあるだろ？　にしても、周隊長がな」

「仕方ないことだ。周は昔から苦しんでいる。いつか、それが晴れる時があればいいが」

絶対に一生晴れないだろう。『赤のクリスマス』はオレからたくさんの大切なものを奪った。だから、晴れることはない。

だけど、いつかは過去を断ち切らないとな。

「孝治、悠聖、『ＧＦ』部隊の召集を頼む。ここにナイトメアの工場跡がある可能性が出て来た」

「了解。孝治は待機で頼む。セイバー・ルカやディアボルガはすでに囲っているから逃れた奴らを頼む。オレにはちょっと無理だしな」

「そうだな。お前には無理だ」

オレ達は笑い合う。そして、動き出す。ほんの少しでも証拠を見つけるために。

第五十九話　食い違い（前書き）

『赤のクリスマス』編パート2です。

第五十九話　食い違い

体を起こした時、あの大きなニューヨークは見るも無惨な姿に変わり果てていた。数々の建物の姿はなく、変わりに広がっているのは廃墟。燃え盛る廃墟だった。

「がぁぁっ」

左腕に痛みを感じてのたうち回る。左腕には瓦礫が鋭く突き刺さっていた。

「お兄ちゃん！　お兄ちゃん！」

茜の声。それを聞きながらオレは左腕を押さえていた。

「楓お姉ちゃん、光お姉ちゃん、お兄ちゃんを押さえて」

暴れ回るオレの体を誰かが押さえる。いや、楓と光か。オレは二人に押さえつけられていた。

左腕から何かが抜かれる感覚がする。おそらく、茜が瓦礫を引き抜いたのだろう。引き抜かれてから何かが出ていくのがわかる。その時はわからなかったが大量の血が流れていた。そこに治癒魔術がかけられる。

遠くから聞こえる爆発音。だけど、悲鳴は聞こえなかった。多分、この時点で生きているのはオレ達くらいだったから。

「痛い痛い痛い痛い！」

「大丈夫。大丈夫だから。お兄ちゃんは私が助けるから！」

「うぅ、ぐすっ」

痛みのあまりに泣いてはいるが、だんだん痛みは少なくなっていくのがわかった。そして、茜が立ち上がる。

「大丈夫。傷口は閉じたから、早く、病院に」

ふらつく茜を光が支える。強引な治癒魔術による魔力欠乏。一時的なものだから大丈夫だが、この時のオレ達は正常じゃなかった。

「周君、起き上がれる」

「うん。ぐすっ」

楓に引っ張られてオレは起き上がる。起き上がって周囲の光景を見て動きを止めた。そこにあったのはたくさんの千切れた人達。だけど、感覚が麻痺していたからかそれを人と認識出来なくなっている。当時のオレは何の反応も示さなかったのだから。

「光、病院はどっちだった？」

「多分、あっち。お父さんに教えてもらったから」

指差した方角にあるのは崩れた瓦礫の山。ただ、その瓦礫の山の近くに誰かがいる。誰かはわからない。でも、こっちを見ているような。

「私は、平気だよ。それより、お兄ちゃんを」

オレは茜の手を取っていた。多分、怖かったのだ。親族で唯一味方でいてくれた茜がいなくなるのが。

あれ？　親族で唯一？　親父やお袋は味方じゃなかったのか？

「お兄ちゃん？」

「茜がいなくちゃ、僕達は何も出来ない。だから、茜を、先に」

左腕はとても痛い。だけど、役立たずで使えないいらない子の自分よりも茜をどうにかしないと思っていた。

「私は、大丈夫だから」

「行くよ」

オレは歩き出す。先頭を。

この時のオレ達は立ち止まるということをしなかった。実際に立ち止まらなくて良かったと後に思っているしオレが先に歩き出したのも良かったと思っている。

目に付くのは、瓦礫の山。燃え盛る炎。千切れ飛んだ体。そして、異臭。最後のは目に付くものじゃないけど、ともかく、オレ達は歩いていた。

「嘘」

茜の言葉にオレは立ち止まる。だって、横を向いたそこにはオレ達が出て来た、親父やお袋がいるはずのビルの跡地があった。瓦礫が山となり炎が燃え盛っている。

生きてはいない。

オレはそう思って歩き出したのは覚えている。でも、茜は動かなかった。いや、動かなかったんじゃない。その場に座り込んでいた。

茜は親父やお袋から可愛がられてきたから失ったと思ったのだろう。だけど、オレは違う。オレは笑っていた。笑って、いた。

ざまぁみろ。子供を愛さない親なんて死んでしまえ。

オレの声が聞こえる。でも、違う。オレは親父やお袋が大好きだった。守ってくれる二人が大好きだった。

せいせいする。あんな奴らが死んだって涙なんて出ない。実際に、今のオレは笑っているからな。

その光景の中にいるオレは確かに笑っていた。信じられないように建物を見ている三人とは違い、オレだけが笑っていた。

違う。違う。絶対に違う。これは夢だ。

苦しめた人がいなくなったんだろ？　なら、笑うしかないじゃないか。笑って笑って笑って笑って笑って笑って笑って笑って笑って笑い尽くせ。幸せを噛み締めろ。

違う。違う。違う。違う違う違う

「計画性？　できちゃった結婚とか？」

「違う。子供というのは手間もお金もかかるものじゃ。我は作ったことがないが、昔、友人が作った子供を世話したことがある。その時は我に任せるなど無計画もいいところじゃと怒ったが、友人達は元から我を巻き込むつもりじゃった」

そう言いながらアルが苦笑する。アルの言う友人がいつにいたかはわからない。でも、本当に信頼していたんだろうな。

「子供は手間が本当にかかる。じゃが、友人はそれを覚悟していた上で子供を作ったのじゃ。その覚悟が実際に必要な覚悟を下回っていたなら、親は子を見捨てる時がある。そういうことじゃ」

「そうじゃないんだ。オレが思っている両親の像と、悪夢の中の両親の像が全く違っていたんだ」

アルは何も言わない。何も言わずに手を握ってくれる。

「オレは笑っていた。悪夢の中で、親父やお袋がいた崩れたビルの前で、オレは笑っていたんだ。気持ちはわからない。でも、オレは、わからないんだ。親父やお袋は優しかった。あの時のオレを二人は守ってくれていた。そう思っていたのに、オレは笑っていたんだよ。どっちが、どっちが正しいのかわからないんだ。オレは、オレは」

「周、よく聞け」

オレはアルの顔を見た。今のオレの顔は本当に情けないことになっているだろう。でも、アルがオレを見る目は真剣だ。

「記憶の中の性格が反転するのは実際に存在する。それは嫌な過去、本当に嫌で嫌で忘れたい時に理想の姿と混ざる時があるのじゃ。そして、記憶は理想の姿を追い求める時がある。もしかしたら、そなたはそうなっている可能性があるのじゃ」

アルが目線を逸らした。申し訳なさそうに。

「どちらかが真実かは我にはわからぬ。じゃが、我は嫌な記憶ほど信用出来ると思っている。じゃから、そなたは」

「ありがとう」

オレはアルに向かってそう言っていた。多分、うわごとで何かを言っていたのだろう。だから、嫌われることを承知で言ってきた。

「まだ、何を信じたらいいのかわからない。わからないけど、ありがとう。ちゃんと言ってくれて」

「そうじゃないかもしれぬし、そうであるかもしれぬ。今では確かめる術はないぞ」

「ああ。わかっている。わかっているから。アルに相談して良かった。ちょっとは気が楽になったよ」

「それは良かった。では、下にいる皆にそなたが起きたことを」

立ち上がろうとしたアルをオレは引っ張った。そして、抱き締める。

「ちょっと、悪い癖だ。どうしても、あの悪夢を見た後は人肌が恋

しくなる」

「勢い余って都とやったと」

「いや、あれは、その、はい」

言い訳出来ない。事実なのだから。でも、悪夢を見たからという言い訳はしない。

「だから、ちょっとだけ一緒にいてくれないか？　オレが安心するまで」

「いいぞ。我はそなたのそばにいると言ったからの。そなたが我を求めるならそれでよい」

「別にそういうわけじゃ」

「我のようなロリババァはいらないと言うのじゃな？」

理論が飛躍しすぎている。

オレはギュッとアルを抱き締めた。

「あのな、ロリババァじゃないからな。アルはオレからすれば十分に魅力的な女の子だし」

「そなたとの子を作りたい」

ある意味爆弾発言。だけど、オレはアルの言葉を予測していたからこそ冷静に返すことが出来た。

「さすがにそこまでの機能は作れなかった。一応、人工子宮とかはあるけど、どこまで作用するかは」

「周のバカ！」

アルのストレートがオレの顔面に入ってオレはベッドの上に倒れた。

そして、アルが部屋から出て行く。

小さく息を吐きながら一言。

「どこで間違えた？」

どうして殴られたかわからない。人の心とは複雑怪奇だ。

第五十九話　食い違い（後書き）

『赤のクリスマス』編は後二回する予定です。

第六十話　致命的なズレ

オレは駐在所にあるソファーの上で小さくため息をついていた。

思い出すのは今朝の出来事。アルに顔面を殴られたことじゃない。

悪夢の中で見た、いや、思ったオレの感情。

親父やお袋が死んだことに対して、オレは笑っていた。臆面もなく笑っていた。

一体何なんだ？　この致命的なズレは一体。

「あれ？　周君？　今日は訓練じゃないの？」

顔を上げたそこには楓がいた。楓な肩に神剣カグラを微かに乗せながらこっちに向かって来る。

確か、楓は今日見回りだったからな。

「もしかして、アル・アジフさんのこと？　周君もすごいよね。アル・アジフさんが魔術じゃなくてグーパンチをするくらい怒らせるなんて」

「あれに関しては反省している」

アルにグーパンチで殴られた後、アルの言葉とオレの言葉を思い出して完全に回答を間違えたとわかった。

あのセリフはアルなりに誘ったのだろう。だけど、オレは普通に子

供が出来ないことを答えていた。
結果はグーパンチ。
これぱかりはオレの責任だ。
「まあ、あのアル・アジフさんが今じゃ恋する女の子だもんね。最初に見た時と比べられないよ」
「確かにな。最初は責任感が強いリーダーだったけど」
「私は全力で戦う姿。鬼神という表現が生易しいと思ったかな」
確かに、あの光景を見た瞬間はかなりすごいからな。大量の魔術を並列に連続しながら展開するのはアルに並ぶ魔術師と呼ばれるリースですら出来ない芸当。
楓やリースを一撃必殺型とするならアルは手数型。ただし、その手数はおかしいくらいだ。
「まあ、鬼神片神ってことだろ」
「名前的には間違っていそうだけど的を得ているね」
アルの戦闘は本当に激しいからな。それが市街地戦でなければ桁が変わってくる。文字通りの桁違い。それがアルだ。
それが今ではオレに恋する女の子か。
「罪作りだね」

「否定出来ないけどな」

これで否定していたらすごい目で見られただろう。

「でも、周君ならそんな状態でも訓練には」

「『あの日』を、悪夢で見たんだ」

それだけでオレの言いたいことはわかるだろう。現に楓はその言葉を聞いて俯いている。

あの日。それだけでオレ達はわかるのだから。

「確かに気になるよね。昔、周君が私達の裸を見たこと」

「なんでそうなる!?」

オレは叫んでいた。確かにあったような気がする。だけど、それはかなり昔だ。昔過ぎて全く関係ないし、なんでそうなる。

「あれ？　違った？　周君ってＢＬじゃなかったっけ？」

「いつの間にそんなことになってんだよ。オレはノーマルだノーマル」

「アル・アジフさんに誘われても乗らなかったし、未だに由姫や亜紗に手を出していないから思わず」

思わずでそんなことを思わないで欲しい。オレは小さくため息をつ

いた。

「赤だよ赤」

「だよね。今の私達にとって全ての原点だからね。あの時のことはあまりよく覚えていないけど。茜な光と離れて、周君と二人になってアリエル・ロワソに助けられながら気絶したくらいかな」

オレと同じだ。オレも鮮明には覚えていない。だけど、何か違和感がある。

「なあ、楓。オレ達は本当にあの時、茜や中村と離れ離れになったのか？」

「うん。私や光も同じだったけど」

「あの時、茜がオレに核晶を渡したのを覚えているか？」

「えっ？　確か、瓦礫でちょうど分断されて、それまでは普通だったよね？」

違和感。

おかしい。オレはあの当時核晶が無かった。産まれもってなかったらしいが、オレは単純な魔術な使えたのを覚えている。

だけど、あの日、『赤のクリスマス』の日にオレは茜から茜自身の核晶を受け取った。その時のことはオレも覚えている。

でも、オレ達は分断されたんじゃなかったのか？

「周君って核晶欠損症だったの？」

「あー、そういや、話してなかったな」

正確には話す機会が無かっただけだが。

「オレは生まれた頃から核晶欠損症だったんだ」

「あれ？　でも、周君って普通に動き回ってなかった？」

当時のことは楓の視点から言えば天才の茜と才能が全くないオレだったはずだ。なのに、仲は良かった（茜が一方的に慕ってくれただけだけど）から不思議だ。

核晶欠損症は自由に体を動かせない。当たり前だ。核晶という体を大きく動かすエネルギーを作り出す部分が駆けているのだから。生きることは出来ても満足に歩くことは出来ない。

ただし、外部からの魔力供給でいくらでも動くことは出来るが魔術は使えない。

「だからなんだよ。秘密だったのは。もし、核晶欠損症なのに普通に動けるなんてどう考えてもおかしいだろ？」

普通はおかしい。だけど、オレはそのおかしいはずのことを普通に行っていた。

「そのことを知っていたのは？」

「慧海や時雨は確実。茜が核晶欠損症になってすぐに魔力鉱石が質のいい定期的に調達出来たことから考えてそれが出来るように準備していた可能性がある。親父やお袋はわからない」

そう、わからない。でも、記憶の中だと知っていたことになっている。もし、知っていたなら、

「周君を守ろうとしたはずだよね。魔術が使えない周君を世間の目に晒さないように」

「だろうな。よくよく考えると、ここから致命的なズレがあるんだ。オレの考えていることが正しければ、オレの記憶はもしかしたら」

「偽物なんかじゃない」

楓がオレの手を握ってきた。

「周君の記憶は偽物なんかじゃない。実際がどうであれ、周君が今まで過ごした全ての記憶は本物だよ。それはみんなが語ってくれる。もし、それが不安ならみんなに尋ねようよ。みんなは喜んで昔話をしてくれるはずだから」

「そうだな」

あの日、アリエル・ロワソに一番怪我が酷かった楓を助けてもらって良かったと思っている。だって、いくら離れたところにいてもまた過去を話せるのだから。

それにしても、怪我をしたんだよな。怪我？

「なあ、楓。お前はあの日、どうして怪我をしたんだった？　オレ

は思い出せないんだが」

「えっ？　わからないけど、アリエル・ロワソに聞いてみたら何か鋭いものが突き刺さった感じだったって。瓦礫か何かが突き刺さったんじゃないかな？」

確かに、オレが気を失う寸前に瓦礫が崩れるのを見たような気がする。気がするだけでよくわからないけど。

だけど、何かが頭に引っかかる。何かが、引っかかる。

「っつ」

目眩がした。

そう表現するしかない。気づいた時には楓の胸の中にいたからだ。状況から考えて時間は立っていないようだが。

「あれ？」

「疲れてるね」

楓の優しい声。その声にオレは頷く。疲れているのだろう。今朝は悪夢を見て、そして、今まで考えていた。

だから、疲れているに違いない。だけど、何かが違うような気がする。

「周君はどうしてあの日のことを求めるの？」

「わからない。わからないけど」

何故かはわからない。だけど、あの悪夢が頭に残る。まるで、オレに何かを示しているかのように。

「同じなんだ。何かを見つけようとした時、オレは考える。狭間市でのことや戦場で指揮を執る時も考える。考えて考えて自分の道を作り出す。理論を組み立てる。信頼してきたその筋道の作り方がおかしいことを訴えているような気がするんだ」

何がおかしいかはわからない。わからないけど、だけど、

「考えてみる。みんなと日常を過ごしながら考えてみる。『悪夢の正夢（ナイトメア）』の奴らと関係があるから、考えて考えて考え尽くす。そして、必ず答えを見つける」

「そっか。周君の中じゃもう決めているんだね。うん、私も、私達も決めたよ」

何が、とは聞けなかった。急に眠気が襲いかかってきたからだ。どうしてかわからない。わからないけど、急に、眠気が、

「周君が真実に辿り着いたその時は」

意識を保っていられない。目を、瞑る。

「致命的なズレを治すから」

第六十一話　友達

睨みつけてくる視線。それを一身に受けながらオレは無言でお茶碗の中にあるご飯を口に含む。

ちなみに、視線の数は三つだが、その内の一つは睨みつけてくる視線。他の一つは呆れたような視線と野次馬の視線。

明らかに義理の息子に向ける視線とは違うような気がする。

「もしかして、音姫とついに肉体関係」

「「「ブフッ」」」

オレ達全員が同時に口の中に入っていたものを吹き出していた。

「お母さん！」

「「ケホッケホッ」」

音姉が怒りながら立ち上がる。ちなみに、オレと由姫は気管の中に入ったものを咳き込んで吐き出していた。それほどまでに今の義母さんの言葉は強烈だった。

「いやね～、ご飯の最中は静かに食べるものよ」

「お母さんのせいじゃない！　私にとっての弟くんは弟なんだから！」

「そうよね～。近親相姦をするなら姉は呼び捨てかくん付け、妹はお兄ちゃんよね」

「「ブフッ」」

落ち着くために飲んでいたお茶をまた吹き出してしまう。

どうしてこの人はそんなことを平然と言えるのだろうか。

「や～ね～、汚いわよ？」

「汚くしている張本人はどこのどいつだ！？」

オレは拳を握りしめながら尋ねる。もし、これが漫画だったら怒りのマークがついていただろう。

すると、義母さんは首を傾げながら、

「音姫？」

「一度お母さんとは決着をつけないといけないのかな？」

そう言いながら音姉が光輝を手に取る。まあ、その反応はわからなくもないけど、今は静かにして欲しい。

オレは小さくため息をついた。

「もういい。というか、何で音姉なんだよ」

「だって、由姫が周君を睨みつけていたから。ついに三角関係なん

だって。あっ、七角関係か」

「絶対真相知っているだろ！」

じゃなければ七角関係なんて絶対に出て来ない。

オレの言葉に対して義母さんは笑みを浮かべながら頷いていた。もう、何でもいいや。

「オレが疲れていたから倒れて楓の胸の中で寝ただけだよ。それで由姫が嫉妬しているだけ」

「兄さんが悪いんです。兄さんが」

由姫が怒りながらご飯を口に運ぶ。オレは小さく頷いてご飯を口に運ぼうとして箸を止めた。嫌な予感がしたから。

「ツンツンした由姫も可愛いわね。音姫、やっぱり私の理論は間違っていないわ」

由姫がプルプル震えている。多分、怒りで震えているんだろうな。

「どうして私に？　理論って？」

頼むからその話は蒸し返さないでくれ。

「お兄ちゃんくん近親相姦理論」

「ブフッ」

由姫が口に含んだものを怒りのあまり吹き出すから。

「朝から散々な目に会いました」

由姫は朝からご立腹だ。まあ、あんな風になったら普通は怒るからオレも賛成しておく。というか、実の娘達に何を言っているんだか。

「兄さんのせいで」

「全く否定出来ないな。よっと」

オレ達が校門前に到着する。タイムは今までの平均より遅いくらいか。今日のことを考えると仕方ないことでもある。

由姫はオレをチラッと見てから歩き出す。視線的な感じで言えばついて来るなという感じだ。

オレは小さくため息をつく。

まあ、あの時は本当に不可抗力だったし、全体から見れば仕方ないことだけど、由姫からすれば裏切られたと思っているんだろうな。

亜紗やアルならともかく楓だなんて。

「楓とは幼なじみなだけだってのに」

実際はもう少し違うかもしれない。だけど、オレは、

「あれ？　周だ。由姫は？」

振り返った先にはメグの姿があった。一人だけか。

「メグも珍しく一人で登校だよな」

「一人？　夢と一緒にって、夢～、待ってよ～」

夢はスタスタと昇降口に向かって歩いていく。まあ、仕方ないだろう。今日、“義賊”について話すかもしれないのだから。

まあ、来る可能性と来ない可能性は半々だが。

「あっ」

「あっ」

その言葉と共にいつの間にか登校して来ていた楓と目があった。そして、どちらからともなく顔を赤くして、

「周君のエッチ」

そう言って走り出す。残されるのはオレ一人。いや、一人じゃない。周囲にたくさんいる同じ都島高校の生徒達。

別名野次馬。

誰かがオレの肩を叩く。

「なあ、周隊長。任意同行という言葉を知っているか？」

オレは爽やかな笑みを浮かべる悠聖の顔面に肘を叩き込んだ。

これほどまでにひそひそ話がいたいとは思わなかった。というか、オレにはあまり罪がないと思いたい。思いたいだけで本当に罪がないかになれば疑問があるくらいだが。

でも、楓には何もしていない。ただ、楓の胸の中で眠っただけだ。

オレは小さくため息をつきながら屋上から学園都市の向こうを見つめる。

「新しい周のあだ名が広まっているよ」

後ろからかかったメグの声にオレは小さくため息をつく。

そんなつもりは全くない。全くないのだが野次馬からすればそういうわけにはいかない。オレは言い意味でも悪い意味でも有名人なのだから。女たらしとかハーレム王とか呼ばれているけど。

「ちなみに、なんて名前だ？」

「鬼畜王」

「ちょっと待て。オレの噂はどうなっているんだ？」

振り返りながらメグに尋ねる。メグは軽く肩をすくめた。

「曰わく、毎日姉妹に手を出す卑劣漢」

出来ればそんな噂を流す奴らを殴り倒したい。

「曰わく、超お金持ち。ポケットマネーで船を造る」

それはオレじゃない。しかも、超お金持ちでもない。金持ちであることは認めるが。

「曰わく、九角関係を作った人」

「ちょっと待て。いつの間にそんなに大きくなっているんだ？」

五角関係なら認めてやる。事実なのだから。

メグは苦笑して、

「私が流した」

小さくため息をつきながら肩の力を抜く。それと同時に何かが突きつけられたのがわかった。

槍だ。メグの槍がオレに向かって突き出されいる。その目に映る意志は真剣。殺す覚悟を決めた意志ではなく、嘘をついたら刺す意志。

「周、夢に何をしたの？」

「やっぱり、まだぎこちないか？」

「夢は周のことを話す時、本当に楽しそうだった。でも、今は周のことは話したくないって言った。悩んでいるとも言った。周は何をしたの？」

「何をした、というか、まあ、色々あって」

目の前まで槍が突かれる。もし、この様子が誰かに見られていたならメグは捕まるだろう。理由がどうであれ、非武装の人に武器を突きつけるのはしてはいけないから。

それほどまでにメグは夢のことを思っている。

「大切なんだな」

「うん。友達だから」

オレは少しだけ笑みを浮かべた。だけど、それが夢について話していいかになれば疑問が浮かぶ。浮かぶのだが、オレはメグに尋ねた。

「真実を知る覚悟はあるか？」

「周？」

「もし、覚悟がないなら今の話は忘れろ。そして、思い出すな。中途半端な覚悟で入ってくるなら夢を傷つける」

“義賊”についてはオレは夢から無理やり聞き出したくない。だけ

ど、メグが入ってきたならそうは言ってられない。

オレは第７６移動隊隊長だ。いくらでもごまかすことは出来るしそういうことには慣れている。だけど、メグは慣れていないはずだ。下手なごまかしは人を傷つけるから。

「それでも覚悟があるなら夢に尋ねろ。真剣に、何を言われても受け止める覚悟で。その時に夢は話してくれるはずだ。メグが本当に夢の味方」

「甘く見ないで」

メグが槍を引き、自分の肩に槍を担ぐ。

「私は友達を見捨てない。ナイトメアに関わっていようが“義賊”に関わっていようが学園都市の都市伝説に関わっていようが私は夢の友達。大切な、大切な友達だから。だから」

振り切られた槍の穂先はオレの頬を微かに裂いていた。

強くなっている。多分、オレ達と一緒に模擬戦をしたからだろう。そして、実戦を経験したから。

「もし、周が夢に酷いことを」

「その時はお前がオレを断罪しろ。それに、オレも友達は大事にする主義なんだ」

「わかった。夢と何をしたか知らないけど、私は、大事な友達達を

信じるから」

メグは笑みを浮かべた。それにつられて笑みを浮かべる。

放課後までの時間はまだまだある。

第六十二話　取引

学園施設エリア東８－３。

そこは学園施設エリアの中でも珍しい空き地だった。普通は何らかの学園施設が建てられていたはずだが、ここから様々なものが出土したため開発が禁止されたのだ。

見つかったのはほとんどがオーバーテクノロジーの産物から埴輪のような歴史的産物まで多岐に渡る。

その中にオレはいた。発掘しているというわけじゃない。ただ、人を待っていた。

『マスター、来るとお思いですか？』

「当たり前だろ。来なければいつ来ると言うのかむしろ聞きたいくらいだな」

『彼女にとって“義賊”は大切な組織のはずです。ならば、このまま黙っていることだってできるはず。マスターなら無理矢理聞いてこないということも考えられるのではないかと思いまして』

「それは無いな」

確かにそれも考えたことはあるが、それはありえないとオレは断定しておく。

「夢のことだから、きっと来る。そして、交換条件を持ちかけてく

るはずだ」

オレはそう言って振り返った。道の向こうから歩いてくる二人の影。メグと夢の二人。ただし、夢は赤いローブを着てフードを外している。

周囲に他の気配もないことから誰にも気づかれなかったのだろう。

オレはレヴァンティンを外してポケットの中に入れた。

「ほらな」

『わかりました。では、マスターの好きなように』

夢とメグがオレの前に立つ。メグは一歩後ろに下がり夢が前に出るように。

「話に、きました」

「その前に一つ」

オレは夢の言葉を止める。そして、いつも携帯している第７６移動隊の証明書を取り出していた。

「オレは今、『ＧＦ』移動課第一部隊第７６移動隊隊長としてここにいる。もし、お前がこれ以上話すなら、それは海道周ではなく、第７６移動隊隊長の海道周に話すことになるがいいか？」

「はい」

夢は頷いた。

「私は、私が語れる範囲内で、話します。質問も、答えられる範囲内で、話します」

誰だって答えたくないことはある。だから、オレはその言葉に頷いた。

「私達は、“義賊”と、自らを、呼んでいます。私達の目的は、単純明快で、学園都市を、よくするため、です」

「学園都市をよくするなら学園自治政府に入るのが一番じゃないか？『GF』はちょっと違うけど、学園自治政府は学園都市をより学生の都市にするために頑張っているはずだぞ」

学園自治政府の頑張りはオレも知っているし、学園自治政府が学園都市のために夜遅くまで会議をしているのを知っている。なのに、学園自治政府はだめなのだろうか。

すると、夢はフルフルと首を横に振った。

「学園自治政府に、出来ないことが、あるから。だったら、出来ないことをする。それが、私達」

「そういうことね」

“義賊”がどうして出来上がったのかわかった気がする。学園自治政府もオレ達『GF』も犯罪行為には手を出せない。それが結果オーライになることでも手を出すわけにはいかない。

まあ、組織内なら一定範囲内で理由付け出来るならありではあるが。

だからこそ、“義賊”は学園自治政府とは違う立場に立っている。

「正攻法じゃ時間がかかる。だから、犯罪を使ってでも証拠を押さえて学園自治政府、又は『ＧＦ』に提出する」

もし、学園自治政府が無理だった場合は『ＧＦ』に頼れば大丈夫だ。証拠があるならオレ達はどんな犯罪を犯してでも捕まえる。殺傷以外で。

確かに、“義賊”にしか出来ないことだな。

「なるほどね。それはわかった。“義賊”の対応はオレ達の中でもかなり分かれているからこの事は話していいよな？」

「そのために話した。認められないと思うけど」

当たり前だ。そんなことを容認するわけにはいかない。でも、黙認する手段ならいくらでもある。

「“義賊”の構成や今まで起こした事件は？」

「構成は、言えない。でも、数は、多くない」

夢からすればそれが最大限の譲歩だろう。オレも回答は期待していなかった。

数を言うことは対策を教えることだ。実際に八人以下と以上では対策が大きく変わってくる。

「事件は、学園自治政府が、把握しているから」

「確かにな。“義賊”の話は学園自治政府から詳しく聞いたし、学園自治政府もかなりの数を把握しているようだった。それにしても、どうやって今まで捕まらずにやっていたんだか。優秀な指揮官がいるんだろうな」

「うん。だから、“義賊”は必要だと、私は思った。だからね、その、私を、監視していれば、いいと思う」

「それを“義賊”のリーダーには？」

フルフル首を横に振る夢。オレは小さくため息をつきながら夢に近づいた。そして、頭を撫でる。

「無理しなくていい。オレ達はオレ達でやる。“義賊”が学園都市のために動いているなら、犯罪現場で出会わない限り追わないさ。ただし、『ＧＦ』からも“義賊”捜索部隊を出す。これだけは引けない」

「うん、わかってる」

「“義賊”のリーダーに伝えてくれ。もし、お前達が学園都市に仇を成す存在になった時、『ＧＦ』移動課第一部隊第７６移動隊が全勢力を持って撃退するってな」

「わかった」

オレは夢から手を放す。そして、小さく目を細めた。

「ローブを隠して」

オレの言葉に夢がローブを隠す。それと同時に誰かが空からやって来るのがわかった。

学園都市にある『ＧＦ』航空部隊は警備場所が違うから、楓か中村だろうな。

オレはレヴァンティンをポケットから出して空を見上げる。空からやって来たのは案の定中村だった。

「海道、ここで何してるん？」

「クラスメートと会ったから。ちょっと話してた。中村は見回りだよな？　どうしてここに」

「ここら辺って人少ないからさ、うちも楓も人を見かけたら降りてんねん。というか、海道も一緒の見回りやからサボりやんな？」

まあ、そうなることは覚悟していたけれど。

一応、色々言い訳は作っていたし。

「このエリアはオーバーテクノロジーが出土した時があるだろ。だから、時々学生が遊んで掘りに来る時があるんだよ。だから、オレの見回りルートの一つ」

ちなみに、ちゃんとした事実である。

オーバーテクノロジーの品は高く買い取られる。それば『ＧＦ』だけじゃなく世界各国が手に入れようと求めるからだ。だから、オーバーテクノロジーの品をちゃんとした形で手に入れれば品によっては巨万の富を得る。

過去にあった事例だが、デバイスの元となったオーバーテクノロジーの取引額は約３００億ドル。文字通り桁違いでもある。だから、学生が稀に掘りに来る時があるのだ。

「確かにそうやな。うちのレーヴァテインもかなり高価やったし」

「買ったのはお前じゃないだろ」

買ったのは時雨だ。

オレは小さくため息をつきながら肩をすくめる。

「他に何か尋ねたいことは？」

「海道が言い訳しているのはわかったけど、二人はどうしておるん？」

中村が指差したのはメグと夢。確かに、この二人がここにいることはおかしい。専用の道具があれば理由は付けられるけど、完全に手ぶらだ。

というか、どうしてオレのが言い訳だとわかった。

「ごめん、なさい。私が、周君に、相談していて。夜中に、付けられているかも、って。人前じゃ、話せないから」

「本当の理由を語りたくない意味がわかった？」

とりあえず、ここは夢の言い訳に乗っておこう。後々に大変なことになりそうだが、今はそうしておかないと。

「そうなんや。なら、仕方ないな。じゃ、うちは戻るとするわ。そや、海道」

中村が笑みを浮かべる。この笑み、まさか、

「ちゃんと二人との逢瀬報告しとくから」

「ちょっｗｗｗ！」

叫び声を上げるがもう遅い。中村は空高く飛び上がっていた。

今から、何百通りの言い訳と、何万通りの謝罪の言葉を用意しておかないと。

「えっと、周君、元気、だして」

「頑張って」

二人からの応援は耳に入る。だが、帰ってからのことを考えるオレからすればあんまり意味のないものだった。

「不幸だ」

第六十三話　覚悟（前書き）

出す予定が無かったものがー！　まあ、今後の展開を考えてみればあり、なのかな？

第六十三話　覚悟

ずっと考えていた。あの日からずっと。そして、今日、周から夢について尋ねていた。

私は夢から尋ねていた。周と何があったのかを。周に尋ねたら夢に聞くように言われたことを。そして、覚悟を決めたことを。

夢の口から出たのは衝撃の言葉。だけど、私は受け入れた。大切な友達だからでもあるけど、私が信じないといけないと思っていたから。

「はぁ、『ＧＦ』、辞めようかな」

あの日からずっと考えていたこと。本物の魔物よりも遥かに強い幻想種と戦ってからずっと考えていた。

魔物と戦うということは覚悟がいること。そして、敵の命を奪うということ。『ＧＦ』は魔物とも戦うことを想定しているからその時になって私は戦えるのだろうか。

私の額に手が当てられる。

「熱はないか。頭の病気？」

「いきなり失礼ね」

私は目の前にいるルームシェアをしている時音を見ていた。時音は嬉しそうに笑みを浮かべながら手を放す。

「そんなに褒めなくても」

「失礼という言葉がいつ褒め言葉になったの？」

私は目を細めながら尋ねる。そして、壁に立てかけていた槍に手を伸ばそうとして、止めた。

もう、私はどうすればいいのかわからないから。

「それよそれ。メグはいつも槍を握っていたじゃない。ボールは友達ならぬ槍は友達って感じで」

「そう、だけど」

確かにそうだ。私は毎日槍を持っていた。訓練しなかった日は特に自主練と槍を弄っていた。今では重さがちゃんとわかるし、ほんのちょっと欠けただけでも何がズレたかわかるようになっている。

「『ＧＦ』に入って私はリア充ですよって感じだったのに」

「リア充って。私が『ＧＦ』に入ったのは憧れていたお兄ちゃんがいたからで、それに、お兄ちゃんを越えたかったから」

「あー、はいはい。メグのブラコンはすごいから。で、何があったの？　返り血だらけの服で帰ってきた日からずっと悩んでいたこと。私には話せない？」

あの日、幻想種の返り血は周によって無色透明にされたはずだった。だけど、周が気絶していたからか帰った瞬間に赤く染まり時音が真

っ青になったのを覚えている。

その時は第７６移動隊と一緒に任務を行って魔物を倒したということにしていけれど。

「戦うことは怖くない。自分が頑張った結果を出せるし。でも、私には覚悟がないから」

周が戦っている理由を知った。

世界に滅びが近づいている。それは第７６移動隊が有名になった狭間戦役の原因ともなった。

世界は滅びに対抗するために動いている。周達第７６移動隊も幻想種を動かしていたローブの集団も。

夢が隠している秘密を知った。

“義賊”であることを隠して私達に近づいていた理由はわからないけど、そのことを話した時の夢は泣いていた。隠していたことを謝るために。

だから、私は夢の味方でいることを決めた。

だけど、いや、だからこそ、『ＧＦ』側にいる自分が苦しい。世界の滅びを知っているから、今のままが苦しい。

「私は、どうすればいいのかな？」

「はぁ、メグからそんな言葉を聞くことになるとはね。メグは何を

したいの？」

「私？　私は」

何をしたいかわからない。でも、夢の味方でいたいし滅びを知ってしまった以上、どうにかしたいとも思っている。思っているけど私の力じゃどうしようもない。

「覚悟を決めるか決めないかだと思うよ。決めないなら『ＧＦ』は止めた方がいい。中途半端なんてメグのためにはよくないから。だけど、メグが本当に覚悟を決めたなら」

時音が押し入れを指差した。

「あれを使うべきだと思う」

「でも！」

時音も知っているはずだ。私と一緒にあの場にいたのだから。あの場で時音が言うあれを使ってお兄ちゃんが魔物相手に戦っていた様子を見ていたから。

だから、知っているはずなのに。あの槍がどれほど強力で凶悪なのかも。

「私はメグの考えを支持する。あの訓練バカのメグが悩むほどのことだから、私はメグの味方でいるよ。メグが選んだ道なら私はその背中を押してあげるから」

「もし、もしもよ。私のやっていることが無駄になるなら」

「ならない。絶対にならない」

時音は断言してくれる。その目に映っているのは信頼。私の事を、力を信頼してくれている。

「メグは絶対に結果を残せる。だって、メグがあんなに頑張っているんだよ。強くなろうともがいたんだよ。その努力を私は知っているから。だから、無駄にはならない」

「時音」

「だから、悔いのないように決めなさい。私は今から走ってくるから、もし、封印を解くならその間に。時間は二時間くらいかな」

時音がそう言いながら腕を伸ばす。時音も私と同じように努力型の人間だ。その努力は桁違いで努力だけで学園都市最強クラスになった人でもある。

ある意味私の憧れで、私の大事な親友の一人。

「じゃ、言ってくるから」

時音が部屋から出て行く。それを見送りながら私は押入に向かっていた。押入を開けた先にあるのは布に巻かれ、札が貼られた長い品。

お兄ちゃんが昔使い、とある事件から使用禁止となり封印された槍だ。お兄ちゃんからもらった形見とも言える。

私はそれを手に取った。

『汝、何故に力を欲するか』

私にしか聞こえない声。この槍を持つといつもそうだ。

『汝、何故に力を欲するか』

理由はわからない。わからないけれど、時音には聞こえないことから考えて私にはその資格があるのかも知れない。

言うなれば神剣。神の身から削り出されたとの噂がある神の武器。この槍がそうなのかもしれない。

私は今までこの槍に触らなかった。怖くて触らなかった。でも、触ってみてわかる。

重い。これが、覚悟に必要な重さ。重さはいつも使う槍と同じはずなのにこの槍はそれ以上に重い。

『汝、何故に力を欲するか』

槍を握り、目を瞑る。

最強の剣士である白百合音姫から言われた真実。夢から聞いた真実。二つの事実が頭の中に渦巻く。

私がしなければいけないことは考えない。しなければいけないじゃない。しようと思うことを考える。

私は、私は、

味方でいたい。

周も夢も大事な親友達の味方でいたい。だから、私は、

『汝、何故に力を欲するか』

「私は、私の大切な友達のために味方でいたい。信じるから。世界を知って、友達を知って、私は、自分の最大限の力を出したいから。あなたの力を貸して欲しい」

『汝、何故に我を求めるか』

質問が返ってくる。私はそれに言葉を返す。

「あなたに力があるから」

『汝、力は全ての手段ではない』

「知っているわよ。でもね、力が無ければ出来ないことなんていくらでもあるのよ。力は手段の一つに過ぎない。でも、守りたい人達を手助けできるなら、私はその手段を取る」

世界の滅びを知ったからの義務じゃない。力になりたいから。滅びに対して頑張っている周達の力になりたいから。

手段は一つじゃないけれど、私はこの方法を使う。

「私は私であることを誇るためにあなたを使う。確かに、私はまだまだ未熟者だし、天才じゃない。だけど、私は」

『世界を救う者が誰も天才というわけじゃない』

その言葉に目を開けた。いつの間にか自宅のマンションではなく真っ白な空間にいる。真っ正面に立つのは一人の青年。

どこはかとなく、周と気配が似ている青年。だけど、容姿は全く違う。

『君はその槍を使う覚悟があるのかな？』

私の手にはいつの間にか布から解かれた槍が握られていた。赤い穂先。炎の装飾が描かれた柄。そして、石突部分にある大きなコア。

これが槍の姿。お兄ちゃんがあの日振るっていた槍。

『大きすぎる力は人を呑みやすい。前所有者もそうだった。その槍を使うことは誰かを傷つけること。それがわかっているのかな？』

前所有者はお兄ちゃんのことだ。お兄ちゃんは力を制御出来ず、私にちょっとした火傷を負わした。もちろん、今では跡が残っていないけど、お兄ちゃんはあれ以来、この槍を封印してもらい使うことを止めた。

「傷つけられる痛みを知っているから私は覚悟がある。使ってみせる。この力を」

『及第点かな。その槍の名前は』

「炎獄（えんごく）の御槍（みやり）。お兄ちゃんから名は授かっている。私は北村恵。お

兄ちゃんから預かった炎獄の御槍を扱う人」

『君に幸あれ。その槍が、君の大事な人を傷つけないように』

そんなことは絶対にさせないから。

第六十三話　覚悟（後書き）

炎獄の御槍を出したことは後悔はしていない予定です。多分。

第六十四話　入隊試験（前書き）

当初の予定とはちょっと違う進行になっています。メグはクラスメートで終わる予定でした。なのに神剣まで。

勢いって怖いですね。

第六十四話　入隊試験

レヴァンティンと炎獄の御槍がぶつかり合い激しく火花を散らし合う。これは比喩ではない。実際に火の花が飛び散っている。

炎獄の御槍はどう考えても炎属性の武器。レヴァンティンはあらゆる魔術属性に対して耐性があるくらい強固な剣だがこのままじゃ押し切られる。

炎獄の御槍を大きく弾き後ろに下がる。

『凄まじいですね。炎属性による身体強化。カロリー消費が高いことで有名ですが、それを武器が行うとは』

「光輝と同等クラスの能力か。炎操れる分かなり厄介だよな」

『賛成です』

再びレヴァンティンと炎獄の御槍がぶつかり合う。炎獄の御槍を握るメグの目に映っているのは決意。揺るぎない決意だ。

オレは笑みを浮かべながら炎獄の御槍を弾いて距離を取る。

「いい目だ」

『ですね』

レヴァンティンを鞘に収めて腰を落とす。ならば、本気で行くまでのことだ。

学校に登校したオレは机の上に身を投げ出していた。端から見れば死んでいるという表現が正しいだろう。

「あれ？　周？　どうかしたの？　僕でよければ相談に乗るよ」

登校してきた真人が駆け寄ってくる。こういう時は友達に相談すべきかもしれないが、相談していいのだろうか。

数瞬悩んだ末にオレは口を開いた。

「由姫が一言も口を聞いてくれない」

「それはご愁傷様。僕は忙しいから」

「だと思った。真人、考えてみろ」

オレの言葉に真人が止まる。シチュエーション的に一番正しいのはああいう場面だろうな。

「自分のフュリアスの愛機が動いてくれない」

「僕なら自殺出来るね」

つまりはそういう状況だ。由姫はオレの大事な奴だから無視されると、無視されると、

「おはよー」

メグの声に顔を上げ、そして、飛び上がっていた。メグの背中には布にくるまれた槍が背負われている。ただし、その布が問題だ。

見た目から考えて聖骸布（アストラル）と呼ばれる特殊デバイスの一種で耐火性と対衝性、対裂性がある。簡単に言うなら風属性、物理属性、炎属性に耐性のある布だ。ただし、めちゃくちゃ高価。

あのサイズだとマイホームが一つ買えるくらいの値段だろう。二階建て一軒家のもので。

「おはよー。メグは何を背負っているの？」

「これ？　周に見せたくて。多分、神剣かな？　あれ？　周？」

オレは立ち上がってメグの手を取り歩き出す。由姫とすれ違うが気にすることなくオレはメグを連れて屋上まで上る。そして、屋上に出て鍵を閉めた。

ここまでは完全に無言。そして、オレはレヴァンティンをポケットから取り出し聖骸布（アストラル）らしきものに当てる。

「結果は？」

『聖骸布（アストラル）ですね』

そんなレアアイテムを巻いているそれは一体なんなんだ？

「あのな、そんな高価なもの巻いて持ってくるなよ。盗られたらどうするつもりだ？」

「そんなにすごいものなの？」

メグは不思議そうに首を傾げている。だが、もしかしたら来る途中までにこの聖骸布（アストラル）に気づいた人がいるかもしれない。

聖骸布（アストラル）自体は高価だがたくさん流通しているため切断さえ出来れば簡単に売ることが出来る。対裂性、切断系に対してバカみたいな耐久力があるから出来るかどうかわからないが。

「その布一枚で何千万はする。で、どうしてそれを持っているんだ？」

すると、メグは聖骸布（アストラル）を剥がしていく。そして、聖骸布（アストラル）にくるまれていたものが姿を現した。

一本の槍。ただし、穂は赤く柄は炎の装飾が為されている。みるだけで高級品だとわかる。

メグがそれを掴んだ瞬間、メグの気配が膨れ上がったのを感じた。まるで、音姉が光輝を抜いた時のように。

「私の神剣『炎獄の御槍』。えっと、お兄ちゃんの形見」

「炎獄の御槍？　もしかして、工業エリア魔物騒動時の」

「正解」

あの事件はかなり有名だ。学園都市で大規模な魔物が出現し魔物による怪我人は出なかったが『ＧＦ』の隊員が一般人を怪我させたという事件があった。

その時に隊員が使っていた武器が神剣認定を受けた炎獄の御槍で持ち主が北村信吾。怪我人が北村恵って、

「出会う前から名前覚えてんじゃん」

「あの時に周はいたよね。お兄ちゃんとは違うブロックだったけど魔物に真っ向から斬りかかる姿はかっこよかった」

「あの時は一般人を逃がすためにあえて無謀な突撃を仕掛けただけなんだけどな」

本当なら一人で突っ込むべきではなかったが、あの時は魔物の近くに一般人、というより社会見学に来ていた中学一年生がいたからだ。だから、突っ込むしかなかった。

まあ、すぐさま音姉が駆けつけてきてくれたからありがたかったけど。

「お兄ちゃんはあの日にこの炎獄の御槍を封印して私に預けてきたの。もし、この槍を使う時が来たなら手に取ることって」

「そうか。それにしても、メグは戦うことを選んだんだな。てっきり、時期が来たら『ＧＦ』を止めるかと思った」

本当の戦場を体験した人の約三割が『ＧＦ』を止める。これは比較的戦闘行為が少ない地域での話で日本も当てはまるが、オレはメグ

がそうなると思っていたからだ。

部隊同士で連絡を取ることはよくあるため、メグがいる部隊からメグが訓練を真剣にやらなくなったと苦情が出たのだ。

オレからすれば苦笑するしかなかったが。

「うん。私もそれを考えていた。私の力は貧弱だし、第７６移動隊と比べてもまだまだ弱い。だけどね、弱いから友達を見捨てるわけにはいかないと思った。周達第７６移動隊が本当に目指す未来を手助けしたいと思った。夢を守りたいと思った。だったら、『ＧＦ』の中でやれることを思いついたから」

それが炎獄の御槍を手にすることなのだろう。炎獄の御槍は見る限り身体強化のかかる光輝と同等クラスのもの。光輝が神殺しの力を持つなら炎獄の御槍は炎の力。

かなり凶悪なものだし、使い方次第では大変なことになるだろう。だから、オレは尋ねた。

「神剣の許可証。第７６移動隊から発行するぞ」

「うん、お願い」

神剣を普通に振り回していいわけがない。そんな強力なものを扱うなら必ず許可証を携帯しなければならない。さもなくば、神剣の能力を使った犯罪が起きるから。

よくよく考えると、オレって昔は神剣なんて信じていなかったな。

「後ね、もう一つお願いがあるの」

「なんだ？　さすがに神剣の許可証は三日はかか」

「第７６移動隊に入れて」

固まった。完全に固まった。もちろんオレが。

今、メグはなんて言いました？　第７６移動隊に入れて？

オレは小さく息を吐く。そして、考える。

第７６移動隊の入隊条件は都島学園に在籍していること。ただし、学生のみ。

入隊条件は筆記試験と実技試験。筆記試験に関しては『ＧＦ』の他部隊所属の場合は必要なし。

ランクはＡランク以上。それ以下の場合は第７６移動隊副隊長ならびに隊長からの推薦を必要とする。

結果、実技試験のみ。

「実技試験で一定以上の成績。第７６移動隊の実技試験だから炎獄の御槍は使っていいぞ」

「わかった。じゃ、やろうか」

「ここでするわけがないだろうが！　場所を考えろ場所を。それに、実技試験だ。オレも本気を出す。この意味がわかるな？」

メグがビクッと震えた。オレが本気を出すということは世界最高峰の実力者と戦うということ。それに対してちゃんとした戦績が出せないなら入隊は出来ない。

第７６移動隊としても中途半端な戦力は入れたくないし、入っても第５分隊所属になる。それはメグも嫌だろう。だから、オレは本気を出す。

音姉な孝治と同等の戦いが出来る万能型のオレがメグの実力を探る。

「日にちはいつがいい？　場所はこっちが指定するけど時間とかもメグが指定していいぞ」

基本的には早朝か夕方だろう。気温がそこまで高くなく、動くとするなら極めていいコンディションになるはずだ。早朝はないとすれば夕方。

そうなると、次の土日くらいが、

「今日の放課後の五時から」

その言葉にオレは固まった。また、固まった。そして、小さく息を吐きながらメグを見る。冗談を言っているようには見えない。つまり、本気だ。

炎獄の御槍にまだ慣れていないだろうに五時からって。

「わかった。じゃ、オレからのヒント。ちゃんとエネルギーは取っておけよ」

「了解。あっ」

チャイムが鳴り響く。まあ、真人がオレ達のことを見ていたから弁解はいくらでも出来るだろう。

オレは小さく息を吐きながら屋上の入口に向かう。

「お前の本気、楽しみにしているからな」

「うん。出来る限りをぶつけるよ」

そう言って鍵を開けてドアを開けた瞬間、屋上に数人がなだれ込んで来た。

由姫に亜紗、真人、ハト、ワカメ、健さんの六人。野次馬根性丸出しだな。

「あはは。兄さん、おはよう」

「お前ら全員遅刻な」

すでに出欠の確認は始まっているからな。

第六十五話　放課後に向けて

オレはレヴァンティンで向かって来ていた七天失星を受け流す。そして、そのままレヴァンティンを亜紗の体に入れようとした。だが、亜紗は上手くレヴァンティンを避けて後ろに下がる。

「体の調子は大丈夫だな」

『少し好調なくらい？』

手合わせをしてくれている亜紗も首を傾げながらスケッチブックを捲ってくる。確かに亜紗とこんなに渡り合えるのは久しぶりだ。

オレはレヴァンティンを鞘に収めた。

「そうだな。というか、向こうもすごいよな」

オレは校庭の方を見つめた。そこでは由姫と炎獄の御槍を持つメグがぶつかり合っている。ちなみに、由姫は手加減しているようだがメグの動きはかなりいい。

ＡＡランクを名乗っても何ら違和感がないくらいだ。

だからか、前一緒にやった模擬戦の時と比べて動きがかなり違う。まあ、由姫の拳と真っ正面からぶつかり合っているんだもんな。見物客では賭けすら行われてるし。

今は昼休み。昼休みの校庭は基本的には運動系のクラブが扱うのだが火曜日だけは『ＧＦ』に優先権がある。優先権があるからこそそ

の優先権を使って放課後の模擬戦のためにオレは亜紗とメグは由姫と手合わせしているのだ。

「にしても、炎属性の身体強化はすごいよな」

『炎属性が女の子に一番選ばれているから』

スケッチブックを捲って亜紗はそう言ってくるが、亜紗の得意な属性は風属性だ。しかも、亜紗は炎属性は苦手だったりする。

確かに、戦闘で使えるか使えないかを別にすれば炎属性が一番人気だ。次に風属性、大地属性となっている。

炎属性が人気な理由は医療にも取り入れられているから。

炎属性の身体強化は体内のカロリーを消費して力を出すもので適度な運動に身体強化を使えば簡単に痩せられる。ただし、継続しなければすぐにリバウンドするが。

血糖値も下げれるので医療でも炎属性が推奨されるくらいだ。

オレも炎属性は使うが苦手だったりもする。だって、炎属性を戦闘で使おうとすれば熱量変換を使った攻撃が出来ないならまず無理。出来たとしても本当の使い手相手なら炎魔術を使った瞬間に制御を奪われたりもする。

まあ、方向転換はまず出来ないだろうけど。

「身体強化で言えば炎属性は一番重視されていない。近代の戦闘の高速化からパワータイプは邪魔になっといるだけだからな。使うな

ら体の速度が上がる風属性、体の反応速度が上がる雷属性、耐久力を高くする物理属性、耐性が多い大地属性のどれかになるんだが、ここまで炎属性が見事だとな」

パワーを上げることで速度も無理やり上げている。

光輝の場合は全く原因不明で握るだけで力が上がるなんて何の冗談かと思ったが、原因不明の能力上昇が実際に発生している。というか、光輝を抜いた音姉止められるのはオレか慧海くらい。

対する炎獄の御槍は炎属性の身体強化をとことん使ったものより強力な身体強化を施しているらしく、何も知らなければ一回りも二回りも大きく見える。

炎獄の御槍の強化は強力だがその分反動も大きい。無理して倒れなければいいけど。

『心配？』

「まあな。強大な力は時に自分と他者を傷つける。それは白百合家にいた頃から痛感していたからな」

由姫も音姉も一度自分の力を暴走させている。音姉は立ち直ったが由姫は未だに自分のレアスキルの全力を出していない。

あの時はオレも死にかけたからな。

『確かにそう。私達の体だって強大な力の一つ。アル・アジフさんが使い方を間違えなければいいけど』

「そうだな」

でも、アルなら大丈夫だろうという自信はある。なんて言ってもあのアルだ。そのことはよくわかっているだろうから。

「にしても、入隊試験ね。いつ以来だ？」

『委員長以来？』

あの時は筆記試験で満点取られて本気で焦った。オレや孝治ですら満点は取れなかったのに。

おかげで実技試験はパス。まあ、実技試験で受かる気がないから完全にそれを狙ってやっただろうが。

「まあ、オレも負けるわけにはいかないよな」

『でも、相手は強敵』

「わかってる」

炎獄の御槍は炎を纏う武器。『天空の羽衣』は何ら意味を成さないものとなる。だから、受け止めたり受け流すしかない。弾きまくって相手を消耗させるという手段はあるが、それは相手がよほどの使い手じゃなければ無理。メグ相手には成功の確率は低いだろう。

相手の武器がわかっている以上、対策はいくらでもある。

『相手が神剣術を使って来ない限り大丈夫ですよね』

レヴァンティンのその言葉にオレ達は同時に首を傾げた。

「『神剣術？』」

そんなもの聞いたことがない。

『知りません？　神剣使いが時々叫ぶ中二病用語』

「確か、絶対なる神明の剣、のルビが、オベリスク、みたいな」

『正解です。まあ、神剣術は使い手によって大きく変わる面白い技なんですよね。いい年した大人が魔術ならともかく技名を叫ぶなんて、プププ』

レヴァンティン、笑うな。オレも笑いたくなってくるから。

確かに笑えることではあるが、実際に撃たれた場合はどうなるかわからない。神剣術というのは聞いたこと見たこともないし、慧海達の物語で必殺技を叫ぶきち〇い的な人はいたみたいだけど。

それが神剣術なのだろう。

「レヴァンティンは炎獄の御槍の神剣術を知っているのか？」

『知るわけないじゃないですか。そもそも、神剣術を知ったのは『ＧＦ』の最高、おっと失礼。国連の最高機密文書で見ただけです』

今、『ＧＦ』の最高機密文書って言いそうになっていたよな。あらゆる集積デバイスでも中身を見ることが不可能とされている超集積デバイスの最高機密部分をレヴァンティンは単体で見たというのか。

まあ、国連の方は何ら違和感がないんだよな。あそこ、委員長の力で砕いたことがあるらしいし。

オレは小さくため息をつきながらメグの動きを見る。一つ一つがとても洗練されていて流れるように槍が動いている。見るものを惹きつける極めて強力な槍舞。

その華麗な動きは手加減している由姫をだんだん追い詰めている。

「手加減しているとはいえ、よく由姫をあそこまで追い詰めれるよな」

『賛成』

近接戦闘では第７６移動隊の中では音姉の次くらいに強い由姫。亜紗ですら勝率は４０％ほどだ。それほど強い由姫がメグに押されている。

可能性を上げるなら炎属性の身体強化だろう。

それと、光輝と同じシステムだからか二重にかかっている可能性があるが。

「燃費は悪そうだな。ただ、瞬間的な爆発力は下手したら楓を超える可能性がある」

『それには賛成出来ない。槍でそんな爆発力』

その瞬間、メグが炎獄の御槍に膨大な炎を纏った。由姫がすかさず

重力フィールドを作り出す。そして、槍を振るうメグ。

熱波が周囲を焼き尽くす。炎属性だからあるだろうと思っていたがやはりあった。慧海の持つ蒼炎で見たことがある横払いと共に炎を撒き散らす攻撃。威力は極めて高い。

防御魔術でも威力が高い分砕けやすいからだ。

メグが槍を振り終わった後、そこには自分の作り出した重力場を周囲に展開する重力フィールドで無傷の由姫がいた。

由姫が動く。メグはすかさず槍で受け止めようとするが、メグの目の前に由姫の拳があった。

メグは諦めたように両手を挙げる。

「なるほどね」

『何かわかったの？』

オレは頷いた。実技試験で突くポイントは見つかった。

「メグの弱点だよ。生半可な練習をしていないからこそメグは総合的に高い能力を持っている。だけど、総合的に高いからオレとよく似た現象が発生しやすいんだ」

亜紗は不思議そうに首を傾げる。まあ、亜紗みたいな一芸特化にはあまりわからない話だろうな。

「力を持つことの覚悟。それを知ってからまず始めにぶち当たる壁。

メグにはそれを体験させるさ。それが出来るかどうかが」

オレは笑みを浮かべた。

「実技試験の合否だ」

第六十五話　放課後に向けて（後書き）

次からメグの実技試験で戦闘が入ります。中盤での戦闘の見せ場になるかと。

第六十六話　実技試験

「勝負は一本勝負。第７６移動隊隊長海道周が直々に相手をします」

第７６移動隊がいつも使っている訓練所。そこにはたくさんの人がいた。大体２００人くらいだろうか。観客としてはあまりに多すぎる。

オレは審判である音姉を見た。音姉はちょっと苦笑しているようだ。

「周、どういうこと？」

「オレに聞くな」

というか、こんなに人をどうやって集めた。都島高校の生徒は少ないのに他の学校の生徒がかなり多いぞ。

オレは小さくため息をつきながらレヴァンティンを構える。

「観客がいれば力は入らないのか？」

「えっ？　そういうわけじゃないけど」

「なら、構えろ。今回の勝負は勝利条件が厳しいぞ。ただし、オレを倒せたなら一発合格だ」

勝利条件はいくつかある。その全てに合格が出たならメグはその時点で入隊。一つでも合格でなければ入隊は許可出来ない。

そのことはすでに音姉な孝治にも言って承諾をもらっている。

「余計なことを考えるな。自分の力を使い果たせ。そして、オレに力を見せろ」

「うん」

メグが炎獄の御槍を聖骸布（アストラル）から取り出す。そして、聖骸布（アストラル）をマントのように羽織った。確かに、耐性の極めて高い聖骸布（アストラル）ならそれでも十分な防御になる。

「位置について」

オレはレヴァンティンを握りしめる。鞘には収めない。鞘に納めた白百合流は体験していなければ一撃で落ちる時がある。そして、その必要もない。

「よーい」

メグが力を込めるのがわかった。多分、開始早々あの技を使ってくる。

「スタート」

メグの足元が爆発した。これは比喩ではない、本当の話だ。本当に爆発した。

炎属性の加速術の一つ。危険ではあるが、強靭な身体強化をしていれば可能な技。メグは速攻を狙った。だから、オレはレヴァンティンを炎獄の御槍に合わせる。

周囲の目から見れば炎獄の御槍の穂先が上に受け流されたように見えただけだろう。だけど、その受け流しの中でレヴァンティンが動く。

完全に受け流した瞬間、レヴァンティンがメグに襲いかかった。メグは瞬時に加速した時とは別に足場を爆発させて強制的にさがる。

白楽天流燕斬り『奈落返し』。

相手の攻撃を受け流しながらも剣を動かし相手を斬る技だ。

右手のレヴァンティンを炎獄の御槍に合わせるように水平に構え、炎獄の御槍を受け流しながらも振り上げるようにレヴァンティンを動かし受け流しきったら振り下ろす。

単純なようで難しい。ちなみに、白百合流にも似た技があるが、あれは音姉くらいしか出来ない。だって、受け流した勢いそのまま回転して斬りつける技になる。タイミング次第じゃ使えるけど、近接戦闘時は隙が多すぎて回転速度が一瞬に近い音姉くらいしか成功しない。

「無闇に突っ込むだけが作戦じゃないだろ。本気を出せよ。さもないと、オレに認められ」

「くっ」

メグが動く。そして、前に出た。

炎獄の御槍の連続突き。オレはそれをレヴァンティンで弾く。これ

はまだ序の口。三連続の突きを弾いた瞬間にメグは勢いよく回転した。炎を炎獄の御槍に纏わせて。

槍の使い方で一番厄介な薙ぎ払い。勢いがつくため受け止めることは難しく今回は潜り込むことができない。

素直に後ろに下がるしかない。だけど、メグはそれを逃さない。薙ぎ払いからの突撃。最初の二の舞にならないように慎重な一撃だが悪くない。

振り上げからの振り下ろし。それを後ろに回避しながらオレは呟く。

「技〇」

メグがさらに加速しながら距離を詰める。受け流されることは考えていないような感じだ。

レヴァンティンと炎獄の御槍が勢いよくぶつかり合い火花を散らし合う。

炎獄の御槍の炎は極めて強く数合打ち合うだけでレヴァンティンが熱くなってくる。レヴァンティンはあらゆる魔術属性に対して耐性があるくらい頑固な剣だがこのままじゃ押し切られる。

炎獄の御槍を大きく弾き後ろに下がる。

『凄まじいですね。炎属性による身体強化。カロリー消費が高いことで有名ですが、それを武器が行うとは』

レヴァンティンに任せていた炎獄の御槍の調査結果。どうやらオレ

と同意見のようだ。

「光輝と同等クラスの能力か。炎を操れる分からに厄介だよな」

炎獄の御槍は光輝と同等クラス。そうなってくると色々勝手は違ってくる。

オレは小さく笑みを浮かべた。

『賛成です』

レヴァンティンの言葉と共に再びレヴァンティンと炎獄の御槍がぶつかり合う。炎獄の御槍を握るメグの目に映っているのは決意。揺るぎない決意だ。

連続突きからの振り払いからの振り回し。力任せの部分もあるが、蓄積した練習量がそれをサポートしている。

オレは振り回された炎獄の御槍を弾いて距離を取る。

「いい目だ」

『ですね』

実力は見切った。レヴァンティンを鞘に収めて腰を落とす。ならば、最後に本気で行くまでのことだ。

今回の試験項目は三つある。一つは速度。これはまだ〇はだしていないが音姉が判断することだからオレは気にしない。一つは技。これに関してはすでに〇を出した。連携はもう少しやり込む必要があ

るが、十分に及第点を超えている。

もう一つは今からだ。これまではその二つを見るために多少は手加減していた。これからはもう一つを見る。

メグが地面を蹴ると同時にオレは前に出た。受けに回っていたオレが前に出る。それはメグのタイミングを崩すのに十分だった。

レヴァンティンを鞘から抜き放つ。メグはそれを炎獄の御槍で受け止め、後ろに滑る。

手がビリビリする。今の、力任せに受け止められたか。普通は弾かれるか弾き飛ばすかなんだけどな。

オレはすかさず前に出る。レヴァンティンを横薙ぎに振る。メグはこれも炎獄の御槍で受け止めた瞬間、オレは飛び上がっていた。

メグの顎を狙って膝を繰り出す。メグはそれを受け止めて押し返す。オレは上手く宙返りで姿勢を戻した。メグはそのまま炎獄の御槍を薙ぎ払ってくる。

オレはそれを側転するように避けた。さすがにこれはメグだけじゃなく音姉も驚いている。オレも出来るとは思わなかったけど。

完全に隙が出来たメグに対してオレは肩から体当たりを行っていた。だが、弾き飛ばされる。感覚的に言ったら相撲取りに体当たりを行ったような感覚だ。やったことはないけど。

振られる炎獄の御槍を受け止める。だが、力強かったからかオレの体は後ろに下がっていた。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ」

メグの息は荒い。限界が近いのは誰の目にも明らかだった。

「どうした？　疲れているなら止めるか？」

「疲れてなんか、ない」

メグは炎獄の御槍を構える。

混乱しているはずだ。どうしてこんなに疲れるのかと。確かに無茶はしているが今までのことを考えれば十分にまだまだいけるはずだ。

メグはそう考えているに違いない。平均的に性能を上げていた場合、力を得た時に感じる現象でもある。

「懐かしいな」

オレはメグを見ながらレヴァンティンを構えた。

『そうですね』

今のメグは昔のオレだ。オレがレヴァンティンを手に入れた時にメグと同じことになった。

今までの練習量から考えてまだバテないはずなのに動けない。体がなまったように思える。

メグが動く。その動きは誰が見ても遅かった。オレはレヴァンティ

ンで突かれた炎獄の御槍を大きく弾いてメグのわき腹に蹴りを入れる。

周囲から上がる悲鳴。普通はここで追撃するが、今回はしない。

「それがお前の限界か？」

メグは炎獄の御槍を握りしめて立ち上がる。そして、槍を構えた。

「次で決める」

オレは地面を蹴った。次でメグが理解しなければ入隊は、

「いつものように」

メグの口から漏れた声。その言葉と共にレヴァンティンは弾かれた。力任せに。すかさずレヴァンティンを返す。

「流れるように」

しまった。そう思うがすでに遅い。レヴァンティンは受け流されていた。この感触は上手く合わせてきた。

炎獄の御槍が振られる。オレはストックしていたファンタズマゴリアを展開して、

「時には激しく」

炎獄の御槍がファンタズマゴリアにぶつかった瞬間、粉々に砕け散った。力任せの振り。

炎獄の御槍がオレの体を捉え吹き飛ばす。

『マスター』

レヴァンティンが笑ったような気がした。多分、オレの顔も笑っているだろう。これでお互いに一撃ずつ。本当に次で決める。

メグは前に踏み出した。炎獄の御槍に炎を纏わせ振り切る。周囲に炎を撒く範囲技。その中をオレは突っ切っていた。レヴァンティンを下から振り上げる。

だが、レヴァンティンはメグに当たる前に炎獄の御槍に払われていた。宙を舞うレヴァンティン。メグの目に喜びが映る。周囲で湧き上がる歓声。

それを見ながら聞きながら、オレはメグの足を払っていた。体勢を崩したメグの上に乗りかかりながら拳を振り下ろす。

拳はメグの顔手前で寸止めされていた。

「そこまで！」

「えっ？」

「「「「「えっ？」」」」」

音姉の言葉と共にメグと周囲から響く驚きの声。まあ、そりゃそうだろうな。あの瞬間、メグや観客の大半はメグが勝ったと思ったのだから。

オレはメグの手を取り立ち上がらせる。

「戦場だとああいうのもあるから気をつけろよ」

「勝ったと思ったのに」

「その時が一番危ないんだってば。まあ、合格だな」

オレの言葉に音姉が頷く。

「十分に大丈夫だと思うよ」

その言葉にメグは固まった。オレはメグに向かって笑みを浮かべる。

「実技試験合格。まだまだ荒いけど強くなれる。太鼓判を押しておく」

「本当に？」

「これからよろしく頼むな。北村恵第７６移動隊第２分隊所属」

「やった。やったー！」

メグは喜んで走り出す。もちろん、守ると誓った大事な親友の元に。

「夢！　やったよ！　私、受かったよ！」

「おめでとう。おめでとう、メグ」

夢と抱き合ってその場を回るメグ。オレはそんな光景を苦笑しながら見ていた。

「最後、弟くんが油断したね」

「まあな。だけど、メグが入れて良かったと思うな。あの実力なら体育祭までにはオレと対等に戦えるまで強くなれるだろ？」

「そうだね。力任せの戦い方を矯正出来れば弟くんと同じ長期間戦える平均的な人になれるよ」

最後の項目。それは自分の力をどこまで扱えるか。力任せだけでは疲労は早く第７６移動隊でやっていられない。だから、それが出来るか見ていたのだが、最後の最後でそれを成し遂げた。

オレは拍手に包まれるメグを見る。メグは本当に嬉しそうだ。

「これから、大変になるな」

「新人の教育は任せてね。みっちりしごくから」

「お手柔らかに」

オレは音姉の言葉に苦笑するしかなかった。

第六十七話　悩み

机の上で死んでいるメグ。ちなみに比喩だ。生きてはいるけど真っ白に燃え尽きている。

オレはそんなメグの様子を見ながら小さくため息をついた。

「そんなんじゃこれからやっていけないぞ」

模擬戦なんてこれからいくらでもするからこの程度でへばっていたら追いつけるものも追いつけない。まあ、その気持ちは分からないわけでもないけど。

オレはメグを慰めるように語りかける。

「音姉や孝治のことは気にするな。あの二人は第７６移動隊でも別格だから」

音姉に関してはオレは『天空の羽衣』を展開しなければ勝率を五分に持っていけない。展開しないなら勝率０だけど。

孝治は昔から戦い方を知っているからか、やはり戦いやすい。対処が立てやすい。まあ、かなり強いが。

「わかってるわよ。あの二人に勝とうなんて百年早いから。でも、由姫や亜紗さんに瞬殺されたのが」

亜紗には確か開始二秒で喉元に七天失星を突きつけられていたしな。亜紗は速度に慣れなければまず勝てない。

由姫には開始早々の綺羅朱雀で沈んだ。あれだけは音姉ですら防御出来ない。防御出来るのは勘でどうにかなるオレくらいだ。

「あれ？　昨日はあんなに喜んでいたのに今日はもう沈んでるのかよ」

その言葉に振り向くと健さんと一誠がちょうど登校してくるところだった。オレは片手をあげて挨拶する。

「第７６移動隊の朝練でメグがものの見事に模擬戦全敗してさ。だから、落ち込んでいる」

「言わないでー。私だって頑張ったんだよ。うん」

「オレに二十秒も保たなかったよな」

「うわーん」

ついに泣き始めたメグ。それを見ながらオレは思わず苦笑してしまう。

「そういうわけだ」

「なるほどな。にしても、周ってそんなに強いのか？　昨日の実技試験でも言うほど強くなかったって聞いたけど」

「あのな、これでもオレはオールラウンダーの中で一番バランスが高いんだ。メグがいくら神剣もとうが魔術使ってこようが多人数で来ようが負けるような戦いはしない。それに、メグはまだまだバラ

ンスが高い一般クラスだからな。はっきり言うならオレの弱いバージョン」

バランスの高さを売りにするなら最強のオールラウンダーであるオレを超えることはまず無理だ。超えるならさらなるバランスの高さが必要になるし。

それに、バランスが高いだけじゃオレには勝てない。

「踏み込みから剣の速度。音の鋭さから地面を踏みしめる音。それらを判断出来なきゃ半人前だと音姉は言うけど、まあ、メグは踏み込みから剣の速度を見極める必要があるだろうな」

ちなみに、オレでも後者の二つは不可能だ。音の鋭さなんてあまり分からないし、踏みしめる音はまだかろうじて。

ちなみに、音姉にそれを尋ねると、

「えっ？　大体３００段階くらいない？」

という返答が返ってくる。世界最強クラスになれるわけだ。

「そんなの無理だって。周の踏み込む速度かなり速いから」

「だから、それに慣れろってことだ」

実戦の速度で行ってもらったからすぐに順応されたら困るところだが、オレといくつか打ち合えたからメグはまだましだ。

炎獄の御槍は詳しく調べたいから学園施設エリアにある島塚理工学

園研究施設の使用許可を申請中。炎獄の御槍の性能がわかればメグの今後の育て方が大きく変わってくる。

オレは小さく息を吐いてメグの肩を叩いた。

「メグはまだ大丈夫だって。七葉みたいに諦めろということないし」

「七葉って白川七葉先輩のことか？　白川悠聖先輩の妹の」

健さんがそう言ったのでオレは純粋に驚いていた。まさか、七葉の名前をって、都島学園じゃかなり有名な話か。

すでに和樹との二人で夫婦漫才するくらいだしな。ちなみに、本来の意味ではなく文字通りの意味で。

「あの人って本当に天真爛漫だよな」

「脳天気なだけだけどな」

「ある意味有名人だしよ」

確かに和樹は有名人だ。実は二年前まで不純異性交遊は禁止という結構厳しい校則があったのだが、和樹はその校則をたった三ヶ月で撤廃させた伝説を持つ。

ちなみに、その時は孝治や悠聖も全力で援護、というかこの二人と中村は本気で退学の危機、したためらしいが、第７６移動隊の権限を使いまくって校則を変えるのは止めて欲しい。

七葉も七葉でいろいろやらかしたらしいけど。

「よくよく考えると第７６移動隊って案外面白いメンバーが集まっているよな」

「言うな」

それはオレが一番自覚している。自分達のために校則すらも替えようと動き出すくらいだしな。まあ、今はかなり助かっているけど。

それに、昔と比べたらかなりの違いなんだよな。オレがまだ戦いだけのことを考えていた時と比べたら。

「周、いいか」

そこでようやく一誠が口を開いた。一誠の視線の先にいるのは一人の少女。

まあ、気になるのはわかるぞ。そいつの周囲から机が離されたりいなかったりしているからな。

「よくない」

「どうにかしろ」

オレの言葉を無視して言う一誠。その気持ちは分からないでもない。だって、体感も少し寒くなってきたしな。

「なぁ、俺からも頼むぜ。ある意味異空間がこの教室にあるからよ」

「私も～」

三人からの頼みにオレは頭をかきながら頷いた。こうなったらどうにかするしかないじゃないか。

オレは小さく息を吐いてその少女、由姫に近づく。

「なぁ、由姫」

「話しかけないでください、海道周君。今の私はあなたを呪い殺すことで精一杯です」

「この世で呪刹は一番効率の悪い殺し方だぞ」

最低でも複数人必要だし。

「ならばどうやってあなたを殴り殺すか考えています」

「いや、お前なら普通に出来るよな」

綺羅朱雀の時点でヤバいところに入ったら一撃で死ぬし。

「ともかく、話しかけないでください」

「つか、何でお前はそんなに怒ってるんだ？」

確かに昨日は機嫌が悪かった。だけど、メグの入隊志願でかなり打ち解けたはずだ。昨日の夜もちゃんと話したし。

だけど、朝になってからまたこうだ。今朝なんて顔を合わした瞬間

に悲鳴を上げて逃げられた。その後に音姉からこってり絞られたけど。

「に、兄さんには関係ありません。本当ですからね」

「そ、そうか」

オレは顔を強ばらせて由姫から離れる。そして、メグ達の元に戻って一言。

「あの瞬間、めっさ可愛いかった」

「「「シスコン」」」

「言われると思った」

少し拗ねた顔だけど恥ずかしそうに顔を赤く染めて上目づかいで見上げてきた瞬間、あまりの可愛さに今風に言って萌え殺されかけた。

ちなみに比喩じゃない。

「周のせいじゃないとなんのせいなんだ？　由姫の主成分はほとんどお前だろ」

「失礼な。由姫の頭の中は八陣八叉流と音姉とオレだ」

「それあんまり変わってないことを自覚してる？」

かなり酷いことは言っているけどな。

「おはようさん。こんなに集まって俺様の登場を待っていたのか？」

「「「「ないない」」」」

「がはっ」

登校してきたハトの言葉にオレ達は瞬間で否定する。誰もハトなんて待ってないし。

「ハトにはそれがお似合いです。おそらく、私の話をしていたのでしょう」

「ワカメの話をして誰が喜ぶの」

「ぐはっ」

ワカメもハトと同じように崩れ落ちる。二人の屍を超えるように、というか踏みつけて真人が向かってくる。真人って結構容赦ないよな。

「何気にメグって酷いよね。みんな、おはよう」

「いつもと比べて遅いな」

一誠が時計を見ながら言う。確かに真人にしては遅い。理由は知らないけれど、いつめなら真人は健さんや一誠よりも早い。

すると、真人は苦笑しながら二人を指差す。

「人間の限界フレームはいくらなのかと」

「コンマ1だろ？」

ちなみに時雨しかそれは出来ない。だから、時雨は格ゲーを常に極めているらしい。

「うわっ、やっぱりそうなんだ。その人人間？」

「悩むところだ」

時雨はそんな奴である。

第六十八話　相談事（前書き）

これからメグ視点がちょくちょく入る予定です。

第六十八話　相談事

昼休みの屋上。一般に解放されたその場所で私と夢、由姫の三人は昼ご飯を食べていた。いつもなら周や健さん達を誘うけど、由姫から相談事があるらしく三人で食べることに。

そうなったのはいいのだけど、

「これ美味しいですね」

「秘伝のタレを、使っている、から」

「なるほど。どうりでここまで美味しく味が出るわけですね」

「由姫さん、のも、美味しい」

「今日は姉さんの作品です」

「疎外感がヤバいんだけど」

ちなみに私は料理が出来ません。全部時音任せだから。

私は小さくため息をついて由姫に尋ねた。

「由姫、相談事って何？」

「そうでした」

由姫が姿勢を正す。そして、私見てくる。一体何を話すのだろうか。

「メグは胸の大きくする方法を知っていますか？」

「はい？」

私は思わずそんな声を上げていた。

「そういうわけだ」

オレは弁当を突き合っている孝治と中村の二人に相談していた。

二人は由姫が機嫌悪いと聞いて真剣に話を聞いてくれている。

「ふむ、確かに思いつく心当たりはないな」

「そうやな。やけど、あの由姫が海道を無視するほどやで。しかも、顔を赤らめるなんて、無意識にやった、あう」

オレは中村の額を軽く突いた。中村が声を上げながら額を押さえる。

「んなわけあるか。そ、そんな破廉恥なこと、だ、誰が」

『都にはしたよね』

いつの間にか視界の中に入っているスケッチブックにオレは小さくため息をついた。そして、ゆっくり頷く。

ちなみに、この行動だけで周囲から悲鳴が上がったのはどういうことだろうか。つか、亜紗はいつの間に入ってきた。

「亜紗、いつの間にいたん？」

どうやら中村も同意見のようだ。亜紗は胸を張って、

『由姫は私の大事な親友だから』

親友の話には必ず入るってわけね。ただ、オレ達が聞いているのはいつの間にいたかどうかだ。理由じゃない。

まあ、亜紗がいてもいいか。

「その話は置いておいて」

「花畑君、この書類の確認って、海道君！？」

「なんでそんなに委員長は驚いているんだ？」

いつの間にやら委員長まで来てるし。オレ達は円になるように座り直す。

「孝治達に相談していたんだよ。由姫の機嫌が悪いのか悪くないのか分からないのに無視されるって」

「「シスコン」」

委員長の声と悠聖の声にぐさっと、あれ？　悠聖の声。

「面白そうなメンバーでいるよな。オレも混ぜてくれよ」

「「帰れ」」

オレと孝治の声が同時に被さる。こういう時だけオレ達は最大限以上のチームワークを発揮するからな。

「人の相談事を無理やり聞こうとするとは調子に乗るのもいい加減にしろ」

「あれ？　なんかオレが攻められてね。周隊長、孝治をどうにかしてくれ」

「お前に話したくないから帰れ」

「お前もか！　いいもんいいもん。アルネウラと優月が焼いたクッキー」

その時にはアルネウラと優月の二人がオレ達にクッキーを配っていた。

『お裾分けだよ。悠聖のはないけど』

「えっと、一欠片くらいは残そうよ」

「裏切り者ーッ！」

悠聖が廊下を駆けていく。今、あいつ本気で泣いていたよな。

オレ達は小さく笑みを浮かべ合いクッキーを口に含み、全員が同時に顔をしかめた。

『えっ？　えっ？』

アルネウラが少し青くなりながら周囲を見渡す。オレは小さくため息をついて持っていたクッキーをアルネウラの口に放り込んだ。

『むぐっ、塩辛い』

「砂糖と塩を間違えたよな？　気づかなかったのか？」

塩クッキーと言われたならまだ納得出来る味だからいいが、砂糖の甘味が全く感じられない。

お菓子は専門外だから分からないがこんなのどうやって作るんだ？

『うう、悠聖はおいしいいいながら泣きながら食べてたのに』

「塩辛くて泣きながらか。まあ、塩辛いと言ってもまだ、うぐっ」

口に放り込んだクッキーを思わず吐きそうになった。よく見れば全員があまりのことに口を押さえている。委員長に至っては首を横に振っていた。

オレは頑張ってその物を飲み込む。

「優月、お前、砂糖どれだけ入れた？」

「台所にあっただけ全部」

どうりでこんなに甘ったるいわけだ。味を表すなら、砂糖をふんだんに入れた生クリームに蜂蜜と練乳と砂糖をこれでもかとかけてさらに各国の激甘調味料以下略を全て混ぜて一口で食ったような味。

まあ、簡単に言うならクッキーじゃなく甘い何かを食べた感じだ。その前に食べたのがギリギリ食べられる塩辛いクッキーだったからかみんなが吐きそうになるくらい甘い。

「マズいな」

食べた結果はそうなる。悠聖は頑張って味見したんだろうな。

「『うわーん』」

二人が泣きながら廊下に、正確には悠聖のいる場所に向かって走り出す。まあ、追撃をくらうだろうけど。

「うわっ、海道って容赦ないな」

「料理に関しては容赦ない方がいいんだよ。まあ、食べるけどな」

オレは二人の残ったクッキーを口に含む。

料理はちゃんと食べて何が悪いか教えないといけない。まあ、そこは悠聖が教えるだろう。悠聖はああ見えてお菓子作りに関しては桁違いの知識と腕前を誇るから。

確か、前にわけが分からない名前のケーキを作ってオレ達に食べさせてきたけど、あまりの美味しさに数秒間意識が飛んだっけ。

「さてと、とりあえず、オレの相談事を頼む」

私は開いた口が閉まらなかった。夢も同じように固まっている。

目の前にいる由姫は頬を赤くしてもじもじしながら言葉を待っている。

私は小さくため息をついた。というか、ため息をつくしか出来ない。

「えっと、どうかな？」

由姫が尋ねてくる。尋ねてくるのだが私達は答えることが出来ない。

ともかく、私から言える言葉は一言だけ。

「私達に尋ねることを間違えたよね」

「でも、同じ女の子ですから少しは知っているかなと」

「第７６移動隊、の、人達、は？」

確かに夢の言うとおりだ。胸を大きくする方法なんてよく分からないし知っているわけがない。第７６移動隊の面々なら、なら、なら。

「夢、第７６移動隊のほとんど残念な大きさだから」

みんな気にしないみたいだけど本人達はかなり気にするだろう。私は、まあ普通だから満足しているし。

「というか、どうしてこんな話に」

「今朝、悪夢を見たんです」

その真剣な表情に私達が唾を呑み込む。そして、由姫が口を開いた。

「私が兄さんの好みの体型にならないと抱かないっていう悪夢」

由姫の言葉の途中で私と夢はあまりの内容に脱力して横になっていた。私一人なら精神的におかしいのかなと思うが、夢も一緒で良かった。

由姫は目を丸くして私達を見ている。周も由姫もやっぱり兄妹だ。どこかがズレている。

「それがどうして胸を大きくする方法に繋がるの？」

私は頭を押さえながら尋ねた。誰だって私と同じようになるはずだ。

由姫は不思議そうに首を傾げて、

「だって、兄さんのベッドの下の床下の材木の中にあるデバイスの中のプライベートエリア内の隠しエリアにあるそっちの本が全部だったから」

私は開いた口が閉まらなかった。

確かにベッドの下は有効な隠し場所。私もそこに、ゲフンゲフン。さらに床下を見るならわかるけど、さらに材木の中にあるデバイスの中のプライベートエリア（パスワード必要）の中の隠しエリア（別個のパスワード必要）を見つけ出すなんて。

周のプライベートが全くないようなことだけはわかった。

「はぁ、じゃ、どうして周を無視して？」

「だって、胸を大きくする方法って好きな人に揉んでもらうじゃないですか。そんな破廉恥なこと」

由姫が顔を真っ赤にしてうつむく。それを見ながら私は小さくため息をついた。

やっぱり、似た者同士だ。

第六十九話　強くなること

学園都市の『ＧＦ』の戦闘服は基本的に共通している。男子は脇から白いラインの入った緑色が基本の戦闘服で女子はその逆となっている。

メグもその学園都市『ＧＦ』女子用の戦闘服に身を包んでいた。

「この服で第７６移動隊の業務って違和感ない？」

そういう気持ちもわかる。第７６移動隊の戦闘服は黒と白。学園都市『ＧＦ』男子用の緑色が黒色になったと言えばわかりやすいだろう。

確かに、第７６移動隊のバッチはつけているが違和感がある。まあ、オレなんて青色の戦闘服に白いラインがいくつも入ったものだけど。

「いいんじゃないか。それに、聖骸布（アストラル）を羽織るだろ」

炎獄の御槍を包んでいた聖骸布（アストラル）は今は収納されているが、いざ戦闘となればマントのように羽織る。ちなみに、聖骸布（アストラル）にある対裂性は対刃性とは違い一定以上の物理系の斬撃には意味を成さない。対する戦闘服は基本的な魔術耐性と高い対刃性があるから上手く噛み合っている。

ちなみに、防刃性ではないのが特徴だ。防刃性の戦闘服はあるにはあるが、八桁単位の値段になってくるセレブ御用達。

「やっぱり、早く第７６移動隊の戦闘服が来ないかな」

「三日は待て。第７６移動隊の戦闘服は他の戦闘服と違って魔術耐性を高くしたやつだからな。さてと、そろそろ行くか」

オレは装備を確認して駐在所の外に向かう。それに続くようにメグも後を追いかける。

「委員長、見回りに行ってくる」

「わかった。海道君はメグをちゃんとリードしてね」

「わかってる」

オレは苦笑しながら駐在所の外に出た。そして、大きく伸びをする。

「さてと、今日は第７６移動隊の見回り地域を見て回るからな」

「周も見回りに行くんだ。私はてっきり分けられていると思っていたけど」

地域『ＧＦ』は基本的に訓練組と見回り組に分けられる。訓練組は非常時に前線に行くものの見回りはほとんどせず、見回り組は非常時はバックアップのために走り回るが前線にはあまり出ない役割がある。

だから、基本的にはどちらかではあるが、第７６移動隊でそれをしたらかなり悲惨なことになるからな。

「人数が少ないからな。オレで週三は見回り。学園都市で数少ないフュリアス部隊があるからそっちにも人数が取られるし」

第７６移動隊及び他の学園都市のフュリアス部隊は工業エリアに本拠地を置き、それぞれが様々な工業高校や工科大学など機械関連の学校と提携を結んでいる。第７６移動隊の場合は様々な工業高校からエリートを選りすぐっているけど。

他のフュリアス部隊なら旧世代とかが多いため精密機器は少ないが、エクスカリバーやソードウルフは旧世代とは言えカリカリに弄っているため精密機器等も人界フュリアストップクラスの数がある。だから、かなりの知識が必要なのだ。

まあ、悠人一人でも点検や整備が出来るんだけどな。

だから、フュリアス部隊の方に悠人達やアルが行くため数はかなり少なくなる。

「それに、見回りだけでもかなり訓練になるし」

「どうして？　ただ歩くだけじゃないの？」

「メグは魔力負荷って聞いたことがないか？」

自らの体に魔力という重りをつけることだ。訓練としては魔力使用時にだけ使われる魔力筋肉と呼ばれる部分と通常の筋肉も鍛えられる。

ただ、よほど鍛えた筋力がなければ魔力負荷はかなり危険だ。どれくらい危険かと言うと疲労骨折のリスクが跳ね上がる。

「聞いたことはあるかな。お兄ちゃんから。強くなる最初の関門だ

って」

「まあ、そうだな。魔力負荷が上手く出来るようになれば筋力が一気に跳ね上がるから単純には強くなる。ただし」

「力任せになりやすくなる、だよね」

「正解」

一芸特化ならまだしもオレはレヴァンティンを手に入れたと同時期に魔力負荷を使い出して一気に模擬戦で勝てなくなったからな。力任せになればその分技に負ける。技任せになれば負けない戦いは出来ても勝てない。結構戦いは難しい。

「今のメグはこれからの訓練で魔力負荷に耐えられる体造りを目指す。魔力負荷さえ出来れば見回り中にも鍛えられるからな。ただし、魔力負荷に関する座学も受けてもらうぞ」

危険を知らなければ回避することは出来ない。メグはこれから十分に強くなる。だから、こんなところで止めるわけにはいかない。

「うん。ところで、炎獄の御槍の検査はいつするの？」

「明日。急だが、ちょうど行く予定があったからついでに調べる。ちなみに、魔力負荷を炎獄の御槍による身体強化で耐えようなんて思うなよ」

メグの体がビクッとなった。

こいつ、絶対にそれをする気満々だったな。

「一番疲労骨折しやすいパターンだ。まずは自分の限界を知れ。そして、一ヶ月かけて体を強くする。自主練の内容は？」

「走り込みだけかな。さすがに槍は夜に使えないから時間がある限り振っている」

「基礎は出来ているからな。足腰ももう少し鍛えれば大丈夫だし。メグって学園都市の『ＧＦ』にしてはかなり珍しいタイプだよな」

その言葉にメグが首を傾げた。まあ、そう思うのは無理もない。メグのタイプは基礎から鍛えて強くなるタイプ。学生に多い魔術を強化して強くなるタイプとは違う。

第７６移動隊はそんなタイプは珍しい。ベリエとアリエくらいだが、あの二人は強力な結界術が使えるからそれでどうにかやっている。

二人の連続攻撃も受けに回ったら音姉ですら圧倒するからな。

「本当に強くなる意志がある。魔術で強くなれば限界があるんだ。まあ、楓や中村みたいな大火力を扱える才能があるなら別だけど、メグは基礎から強くなろうとしている。やっぱり、兄の教えか？」

「うん。お兄ちゃんはいつも言ってた。強くなるにはやっぱり基礎からだって。一気に強くはならないけどだんだん強くなっていく実感がある。それが楽しいって。でも、お兄ちゃんは最後は壁にぶつかっていたみたい」

その言葉にオレは炎使いのことを思い出していた。努力をしてもど

うしても壁にぶち当たったことを言った男だ。それと重なる。

「頑張って努力し続ければいいんじゃないって言ったら、お兄ちゃんは現実を知ればわかるって言ってたな。あれが最後の会話だったけど」

「ぶち当たった壁。魔力負荷だな」

「周の話を聞いているとそう思う。お兄ちゃんも魔力負荷が使えたら、今もそばにいたのかなって」

メグが空を見上げる。オレはそんなメグの頭を撫でてやった。

「無理はするなよ。それに、魔力負荷も利点ばかりじゃないんだ。だけど、世界クラスまで強くなるには避けて通れない道。オレみたいな器用貧乏でも出来るから誰だって頑張れば出来るんだけどな」

「えっ？　周で出来るなら誰でもっておかしくないかな？　私は周だから出来ると思って」

確かにオレは天才と呼ばれている。平均的に高い器用貧乏ではあるが全体的に能力の高い天才と。でも、その理由はメグになら話していいかもな。

「雨の日も風の日も雪の日も台風の日も嵐の日も灼熱の日も毎朝毎昼毎晩寝る間を惜しみ、休憩時間にひたすら勉強し、来る日も来る日も木刀を振り、走り続け、余分な全てを排除してがむしゃらに訓練したからな。学校なんて行かず、それを無駄だと感じ、努力することが当たり前で強くなろうと頑張って。何回吐いたか、何回血を出したか分からない。そこまでしてオレは強くなった。そこまでし

てようやく『ＧＦ』に入った。それからも強くなろうと頑張った。白百合流、八陣八叉流、白楽天流、他にも使えるものは全て覚えた。レヴァンティンを手に入れてから魔力負荷を無理してかけてさらに強くなろうとした。そこまでしたら、誰だって強くなれるさ」

ただ、今のオレなら断言出来る。そんなことは不可能だと。不可能だからこそ、オレはここまで強くなることが出来た。

時雨や慧海や第７６移動隊のみんなはオレを努力の天才と呼ぶけど、それは本当に正しい。気が狂っているほど努力したからな。

「でも、今はみんなと知り合った。努力だけがオレを強くするわけじゃないって知った。由姫がオレを救い、亜紗と共に支え合い、都が慰めてくれて、アルがそばにいてくれる。今の強さは今までの努力の結晶で仲間との絆だってわかるんだ。あっ、悪い。しんみりさせたか？」

メグは首を横に振った。

「周が天才と呼ばれる意味が少しわかった気がする。確かに、ここまで頑張ったら強くなれる。私も、これから周みたいに強くなりたいな」

「なれるさ。覚悟があるならな。さてと、見回り、ついて来いよ」

オレはスピードを上げる。少し恥ずかしく思えたから。だから、オレは顔に少し笑みが浮かんでいた。

第七十話　見回り

第７６移動隊と言っても行う見回りは他の部隊とあまり大差はない。溜まり場となりやすい場所を定期的に見回りだけだ。商業エリアの見回りはあまりしない。するとしても出来る限りフルメンバーで行う。

「ここか結構カップルの溜まり場だから見回り際には気をつけるように」

オレは説明したのは近くにある公園だ。公園と言っても遊具があるような場所じゃなく、芝生が広がり桜の木がたくさん植えられた公園。ちなみに、桜が満開になるとたくさんの人がやってくる。

地味に商業エリア以外のデートスポットでもある。

「注意する際は基本的に時間。それ以外はフリーだけど、不穏な感じがしたら一体を見回すように。一回、レイプ未遂が起きたから」

「本当に？　ここ、大丈夫なの？」

「大丈夫だ。実行犯全員の急所を由姫が蹴り上げて」

思い出すだけでかなり辛い。あのシーンは男としては地獄だ。

「それ以来、不埒な人間は蹴り上げられる伝説が出来て不審者が一気に減った」

実際、襲われた際には一番有効な手段だからな。オレからすれば絶

対にやりたくない手段だけど。

まあ、ここはこれくらいでいいだろう。

「次は向こう側だけど、基本的には向こう側は学園都市第８地区地域『ＧＦ』、メグが前いたところが管轄だからわかるだろ？」

「うん。路地裏に結構溜まりやすかったから大変だったのを覚えている。じゃ、次は逆側」

オレはメグが指差した方角を見て頷いた。

そっちは商業エリアと隣接しているため人はそこそこ多い。まあ、平日だから言うほど多くはないけど。

「とりあえず、向こうに行くか。現地でいろいろ言った方がわかりやすいだろ」

「うん。でも、ちょっと意外だったかな。第７６移動隊だからもうちょっと特殊な仕事があると思っていた」

「琴美や委員長もそうだった。『ＧＦ』移動課第一部隊。ある意味実験的な部隊だったからな。同年代でも極めて強い面々を一ヶ所に集めて高機動の部隊を作る。一応、他の部隊案であったのをオレ達が強引に奪った形だ」

そもそも、最初はオレ達に白羽の矢が立つことはなかったが、同年代の戦力が正規部隊、特に第一特務に分かれている以上、一つにまとめるのは難しいというものがあった。

そこで、オレが新しく部隊を作れないか相談したところ、同年代が誰も第一特務に入っていないオレ達に目をつけて評議会を除く『ＧＦ』上層部が賛成したのが第７６移動隊だ。

年齢が低いのも正規部隊に分かれてはいるがそれぞれが同年代だからか認識があり仲が良かったというのもポイントらしい。

「第７６移動隊はあくまで『ＧＦ』の一部隊。エスペランサという強襲艦がある以上、特殊作戦にブリッツはよくするけど日常はこういうものだ。訓練して見回りして、魔力負荷を高めながらお茶をして」

「最後のが鍛えているのか休んでいるのか分からないわね。でも、良かった。第７６移動隊ってひたすら飛び回るイメージがあったから、見回りも範囲が広いんじゃないかなって」

「実際、ランニングかねて規定された以上の地区を見回るのはよくあるぞ。第７６移動隊という特権乱用でな。まあ、飛び回るというイメージは間違ってはいないな。メグは学園都市の航空部隊の数を知っているか？」

「一部隊だよね」

空戦持ちは学園都市には案外少ない。正規部隊には部隊内全員が空戦持ちで航空戦力としてはかなりの制圧力がある部隊はあるが、学園都市ではたった一部隊。ちなみに人数は１０ほどしかいない。

対する第７６移動隊には楓、中村、冬華、孝治、アル、リースに限定的なら悠聖や都も飛べる。準空戦を入れたらさらに多くなる。まあ、そうなると学園都市内では百単位に膨れ上がるけど。

「第７６移動隊は世界トップクラスの航空戦力がいるから空の見回りもしているんだ。まあ、学園都市の航空戦力自体が頼りにならないのもあるけど」

学園都市の航空戦力は基本的にはレアスキルだ。実力による純粋飛行が出来るのは二人だけ。どちらもＡＡランク。この二人ならまだ安心出来るが、残る面々は準空戦にすら落とされかねないレベル。不安にならない方がおかしい。

「だから、飛び回るというイメージは間違ってはいない。それに、商業エリアも合法的に見回れるしな」

「そう言えば。でも、商業エリアで第７６移動隊の戦闘服は見たことがないけど」

「商業エリアは学園自治政府の管轄だ。オレらが全てを仕切るわけじゃない。だから、基本は私服。ただし、動きやすい服装ですぐに戦闘服に変えれるような姿」

見回りと言ってもよっぽどの事件がなければ駆けつけない。例えば、誰かが殺されるような事件やナイトメア関連の事件などが起きないならオレ達は私服で回るだけだ。それに、学園自治政府は信頼しているからな。

あいつらの学園都市をよくしようとする思いは本当に伝わってくるし。

「まあ、商業エリアは基本的に見回りをする名目で遊びに行くようなものだけどな。ただし、ゲーセンとかに入り浸るのは無しな。買

い物はそんなに買わないなら大丈夫」

「でも、緊急事態があったら動くのよね？」

「時と場合によってはな。商業エリアは何度も言うが学園自治政府のエリア。学園自治政府の警備部隊が周囲に確認出来ない場合や、民間人がターゲットの場合は第７６移動隊に限って学園自治政府より優先権があるんだ。まあ、学園自治政府の部隊が来たら現場を明け渡すんだけどな」

そういう事態にはなったことはないけれど、そういう事態になったとしても大丈夫だろう。学園自治政府って無駄に戦力は多いから。

「そういや、メグって浩平と会ったことはあるか？」

「ないよ。確か、学園自治政府のナンバー２だよね。双拳銃を使う姿は誰をも魅了するって」

「まあ、そんな奴だ。浩平は元第７６移動隊だから後日顔合わせさせるから。学園自治政府側だから商業エリアについて詳しいしな。商業エリアで困ったことがあれば浩平の名前と第７６移動隊の名前を出せば何とかなると思うから」

多用するのは止めて欲しいけど。まあ、商業エリアで困った時なんてまずないからな。

オレは小さく息を吐いて周囲を見渡す。

「ここでいいな。向こうが商業エリア。商業エリアに近い分、ここは路地裏に気をつけること。単身や二人組の場合は路地裏に入らず

見るだけ。三人以上の場合は路地裏も見る」

「路地裏ってそんなに危険なの？」

「確か、五年前に殺傷事件があったんだ。犯人は捕まったけど、『GF』の隊員一人が亡くなりもう一人が大怪我。それ以来、路地裏に関しては複数人以上で入るように言われているんだ。まあ、メグの実力と武器から考えて言ってるだけだから今日は入るぞ」

狭い場所での槍は本当に使いにくい。剣も大概だから戦闘の基本は魔術だ。

オレ達は路地裏と言っても普通に歩く広さは確保されているため窮屈さは全くない。

「路地裏ってもっと汚いと思ってた」

「路地裏はちゃんと清掃されるからな。ここら辺を根城にする不良達がいるんだが、そいつらが清掃に力を入れていてな、清掃業者と本当に仲がいい。話してみたらわかるけど顔が厳ついわりにはいい奴らばかりだから」

路地裏を抜けて次の道に、

「おい！　おい！　大丈夫か！」

その声が聞こえた瞬間にオレは走り出していた。そして、すぐに道を曲がって確認する。

そこにいたのは倒れている大柄な男とその男を揺すっている二人の

男。見たことがあるから不良達だな。

「大丈夫か！？」

「えっ？　あっ、海道さん」

オレはすぐさま倒れている男に駆け寄る。脈は正常ではなく口から泡を吹き出し体は微かに痙攣している。顔はほとんど真っ青だ。

「メグ、この位置を楓に連絡。その後すぐに委員長に連絡して病院の手配を」

「うん」

メグがデバイスを取り出して通信機器を取り付ける。オレはその間にオレの背中を触っていた。

「恨むなよ」

その言葉と共に拳を叩き込む。すると、倒れていた男が胃の中のものを吐いた。

すかさずレヴァンティンで術式補助を行ってもらい胃の中を綺麗な水で洗浄して吐き出させる。

「水属性は苦手なんだよな」

オレはそうぼやきながらまた水を男の中に入れる。だが、洗浄のためじゃない。水を吸収させやすいように成分を調整し、変わりに毒素を抜けやすいようにして入れる。

痙攣がだんだん収まってきた。顔は赤くなってきたし脈もだんだん正常になってきている。とりあえず、危険な状態は過ぎたな。

「周君！」

その言葉と共にカグラを握った楓が降りてきた。オレは大柄な男を担ぎ上げてブラックレクイエムに乗せる。

「病院まで頼む。委員長から連絡が言っているはずだ。薬物中毒で」

「うん」

楓がすかさず飛び上がる。こういう時は本当に頼りになる。

オレは楓から視点を戻して男が吐いたものをみた。そこにあったのは半分溶けた固形物。オレは氷属性魔術によって溶けるのを停止し回収する。

「海道さん、あいつは大丈夫なんですか？」

「大丈夫だ。これがよっぽどヤバい毒性を持ってなければ大丈夫。とりあえず、話を聞きたいから第７６移動隊駐在所まで同行を出来るか？」

「あ、はい。俺達で良ければ」

オレは歩き出す。まさか、見回りの最中にこうなるとはな。これがナイトメアじゃなければいいけど。

第七十一話　浮上

オレはＡ４のプリントを片手に小さくため息をついていた。隣には白衣をきたメガネの男がいる。

オレは小さくため息をついてそいつにプリントを返した。

「清水、これはちゃんとしたデータなのか？」

「ああ。君が持って来たクスリを詳しく調べてみたよ。今までのありとあらゆるナイトメアのサンプルと共にね」

清水は学園都市内部での研究者仲間だ。専門は全く違うが、何故か息が合ったためちょくちょく相談していたりもした。

今までは学園都市外に以来していたが、今回は今回だ。情報流出の可能性も考えてここにした。

「それだったら、今までの対策が一気に覆るな」

「そうだね。文字通りの悪夢。確かに、夢を見るという点では最高かもしれないね」

「冗談を言うなよ。対処が遅れていたら助からなかった。まさか、たった一粒で致死量を超えるなんてな」

Ａ４のプリントに書かれていたのは中毒症状を引き起こした男が吐いた固形物のデータだ。オレはそれをナイトメアだと判断して解析を依頼した。

本当にちょうどのタイミングで郵便物として到着したケリアナの花の根から作られたナイトメア試作品を持って。慧海がいつの間にか作ってくれたらしいが、今回は本当に助かった。

「オレ達が追っていたナイトメアの原型がこれか。粉を叩いていたのは間違いだったとはな」

男が口に含んだのは確かにナイトメアだった。ただし、不純物が一切見あたらない高純度のナイトメア。この状態で一粒食べたなら確実に昇天するレベルでもあった。

だけど、手かがりは少し掴めたか。

「固形狙いを叩いた方がいいな。今から『GF』の会議を開かないと」

「データをまとめた記憶媒体だ。使え」

オレは清水から記憶媒体を受け取ってその部屋から出て行く。ちょうど外には楠木大和と浩平の姿があった。

一応呼んでいたのだが無駄にならなくて良かった。

「ビンゴだ」

「そうですか。つまり、ナイトメアは粉ではなく」

「固形。どうりで販売ルートがよくわからないことになるわけだ。粉ばっかり追っていたら本当にループしているからな」

「固形を砕いて粉にしたというわけね。周、お前が助けた奴の事情聴取は？」

オレは肩をすくめながら首を横に振った。そもそも中毒症状を引き起こして死にかけた奴が昨日の今日で話せるわけがない。ただし、近くにいた二人からは色々話を聞くことは出来たけど。

「一緒にいた奴の話だと、被害者はラムネが好きだったらしい。固形のラムネな。いつものようにラムネを食べていた急に倒れたとか」

「つまり、ラムネがナイトメアだったと。迂闊でしたね。そのような経路は考えても」

「違う」

オレは首を横に振った。今回はそんな簡単なことじゃない。もし、ラムネが全てナイトメアだったなら助からなかっただろう。それは確実に言える。

オレは清水に返したＡ４のプリントのコピーを楠木大和に渡す。

「固形のナイトメアは一粒で致死量を超えているらしい。固形だけなら二人は殺せるだとさ」

「周、待った。でもよ、ナイトメアって粉状だと毒性は高くないよな？」

それは今までの見解だ。確かにナイトメアは毒性は高くない。だけど、今回のデータでは別の結果がある。

「固形だからですね。ナイトメアの粒子と粒子を繋ぐ物質、ＳＧ型タンパク質。これとナイトメアが繋がることで強力な毒性を出す」

「ああ。ＳＧ型タンパク質の厄介な特徴が火で炙れば簡単に機能を失うからな。おかげで、今まで見つけることが出来なかった」

もし、その厄介な特徴がなかったならもっと早くに見つけることが出来ていただろうに。悔やんでも仕方ないか。

オレは壁に背を預ける。

「見つかった場所も場所だ。学園施設エリアと商業エリアが隣接する場所。はっきり言って、一番厄介な場所。どちらで受け渡しされたかわからないからな」

「いえ、ラムネである以上商業エリアの可能性が高いでしょう」

「いや、ラムネだからこそ学園施設エリアの可能性も高いな」

言い終えてオレと楠木大和は同時に笑みを浮かべ合った。今まではわからなかったけど、オレと楠木大和との相性は悪くないかもな。こいつとなら色々対策を立てられるような気がする。

オレは頭の中で考える。明日には学園都市内全『ＧＦ』に会議を呼びかけている。だから、『ＧＦ』管轄内で見回りを増やしてもらうしかないだろう。

「これからの予定も大きく変わるな。だが、対策は出来上がっている」

「そうですね。見回りを強くするのと地道な聞き込み各学校からの注意喚起もしましょう」

「さすがに毒性が高いとなれば学校も放ってはおけないだろうな」

注意喚起は出来てもそれでは相手の警戒を上げてしまう。そうなると、

「注意喚起は金曜日。木曜日に全『ＧＦ』による見回り強化を行う。裏の裏まで調べてな」

「わかりました。学園自治政府も全勢力で同じように見回りをしましょう。相手が警戒するまでに出来る限り叩くという方針で」

「それが一番理に叶っているしな」

もし、学生に注意が行き渡ったら、不可能だけど、ナイトメアの売り上げは落ちて規模を縮小するだろう。なら、今の内に叩けるだけ叩く。

体育祭が近づけばその分お祭り騒ぎとなるため見つけるのはさらには難しくなる。

「連絡があるなら浩平に頼む。オレは一部第７６移動隊駐在所に戻る。色々集まっているだろうしな」

「では、また」

オレはその言葉を背中に受けて歩き出した。今回の件は完全に後手に回った。まさか、ナイトメアが粉状じゃなく固形が元だったとは

な。

オレは小さくため息をついて拳を握りしめる。

「『悪夢の正夢（ナイトメア）』奴ら、許さない」

「なるほど。そういうことだったのね」

オレが駐在所に戻るとそこにはアル、エレノア、琴美、そして、委員長の姿があった。他の面々は見回りを強化しているらしい。

「私が聞いた限りでは各『ＧＦ』がそれぞれ見回りを強化しているわ。各地で続々とナイトメアらしきものが見つかっているらしいし」

「ここまで行動が早いとはな」

完全な予想外だ。まあ、見回りを強化してくれるならこちらにとっても利点が多いからいいけど。

そうなると、一日早めた方がいいな。

「委員長、全『ＧＦ』に連絡。明日の会議を明後日に回す。明日は『ＧＦ』全隊員を動員して見回りを最大限強化すること。昨日あったことを踏まえて不審者には任意同行を」

「一斉捜査。しかも、学園都市全『ＧＦ』が行うのか。でも、そう

したら動きを悟られて見つからないのじゃない？」

エレノアが首を傾げながら尋ねてくる。まあ、普通はそうなったら隠れるだろうな。だけど、むしろそれが目的だったりもする。

「隠れるということは後ろめたいことがあるということじゃ。つまり、必ず不審な行動をする。周が不審者に任意同行をと言ったのはそれが理由じゃ」

「事件が事件だから不審者の持ち物検査は合法だ。堂々とされたら意味はないけど、そこまで出来るのは少ないだろ」

普通は無理だ。今頃『ＧＦ』だけじゃなく学園都市全体にナイトメアのことが広まっているはずだ。だから、『ＧＦ』を見れば動揺しやすい状況になっている。

それはオレ達からすれば完全に好都合だ。

オレはレヴァンティンを四回指先で軽く叩いた。今の話からレヴァンティンが勝手にまとめてくれるはずだ。そう考えるとレヴァンティンはかなりありがたい。

「私は聞き込みを行うは。固形というのも気になるし、何より一番気になるのはラムネと一緒だったってことよ。考えられるのは」

「無差別の殺人」

「ええ。そちらの線で考えてみるわ。エレノア、行くわよ」

「うん。じゃ、また」

琴美とエレノアの二人が駐在所から出て行く。その光景をオレ達は見ながら首を傾げていた。

「エレノアって琴美と仲が良かったっけ」

「さあ」

アルが肩をすくめる。あいつら、いつの間に仲良くなったんだ？

第七十二話　作戦中（前書き）

お気に入り登録が増えてきていて驚いています。こんな拙い文章を読んでいただきありがとうございます。

第七十二話　作戦中

それからオレ達は大忙しだった。

基本的には見回りを行うのだが、担当地区で見回りを行うのは空戦及び準空戦を持たない面々、まあ、メグと、ベリエ、アリエに七葉だ。

それ以外の持たない面々は駐在所で情報整理。そして、オレ達は空を駆け回っていた。

航空戦力が少ないということもあるが移動隊という制限を気にしないで行動出来るからだ。

空戦メンバーは工場や住宅エリアに。準空戦メンバーは学園施設エリアを走り回っている。

「にしても、こうなるとはな」

空中に作り出した足場に次々と飛び乗りながら周囲を見渡す。周囲ではたくさんの『ＧＦ』隊員が戦闘服を着て動き回っていた。

空中からでは地上から見えない動きがよくわかりかなりありがたい。例えば、路地裏を慌てて逃げている男とか。

足場を蹴る。ほぼ垂直に落下しながらオレはそいつらの前に着地した。

「路地裏を走り回っていたら危ない。転けて怪我をするかもな」

「な、な、な、くそっ！」

男がナイフを抜いて切りかかってくる。だけど、そんな動きはメグよりも遥かに遅い。

オレはそいつの手を取り背負い投げた。背中を打ちつけて男がナイフを放す。それと同時にポケットから粉状の何かが零れ落ちた。

男はそれを回収しようとするが、オレはそれをすかさず手に取る。

「ちょっと、同行を願えるか？　ちなみに、これは任意じゃない強制だから」

オレの言葉に男は肩を落とした。

孝治は空に浮かんで弓を構えていた。別にサボっているわけじゃない。孝治が弓を使う時はかなりの集中が必要だからだ。だから、孝治は集中して周囲を見渡している。

すると、孝治は唐突に弓を下ろした。一台のトラックが出て来たからだ。しかも、そのトラックは出る前に周囲を見渡して誰かがいないか確認を取っていた。

つまり、怪しい。

「地点Ｒ－Ｐ２５。トラックが一台」

『うちも確認した。前はお願い出来る？』

「当たり前だ」

孝治は笑みを浮かべると垂直に落下しトラックの前に着地した。道路には全く車の気配はない。工場エリアまでバスが通っていないのもあるが、工場エリア専用のトラックは今日はかなり厳しく検査されるためなかなか入ってこれない。

だから、道路に立っても跳ねられない。

運命を鞘から引き抜く。それを見たトラックはスピードを抑えるのではなくさらに上げた。完全に孝治を轢く気だ。ただ、孝治には笑みが浮かんでいる。

「断ち切れ、運命！」

パン、とタイヤが破裂した音が鳴り響き、トラックが火花を散らしながら地面を滑って止まる。

孝治は静かに運命を鞘に戻す。孝治はあの瞬間にトラックの車輪のみを切断したのだ。横転する危険性はあったが、幸か不幸か近くに病院があるため大丈夫と判断していたりもする。

運転席から慌てて二人の男が出て来て逃げ出すが、音を聞きつけてやってきた『ＧＦ』隊員が前を塞ぐ。

「また、つまらぬものを切ってしまった」

「何かっこつけてるん？」

いつの間にかやってきていた光がレーヴァテインのコピーを消しながら着地する。

孝治は少し顔を赤らめて逸らした。

「やってみたかっただけだ」

「クスッ。可愛いな～。じゃ、積み荷を調べよか」

「ああ」

孝治と光はトラックの積み荷を調べるために歩き出した。

オレは静かに周囲を見渡した。亜紗とこの地域の『ＧＦ』隊員三人が頷いてくる。

すでに裏口も確保しているため大丈夫だろう。

オレは手に持つ薙刀を握りしめ、扉を開けた。

中にあるのはいわゆるバーだ。そこではお酒も販売しているがちゃんと年齢確認をするタイプだ。

「第７６移動隊隊員白川悠聖だ。匿名の報告により調査させてもらう」

「なっ、君達は何の権限があって、調査は警察の管轄だろうが！」

バーの主人はうろたえながら反論してくる。まあ、そうなるとはわかっていたけどな。オレは亜紗に奥の道を指差して書類を一枚見せる。

「今回は警察から正式に許可をもらっている」

正確には今日の見回り中、家宅捜索などちゃんとした手順を踏まえれば『ＧＦ』や学園自治政府でも介入していいということになっている。

唯一の『ＧＦ』や学園自治政府の手が及ばない店内も今日だけは簡単に手が出せる。とは言っても、来年から完全移行して踏み込み用のみにいた警察部隊も撤退するんだけどな。希望者を残して。

これは予想外だったのか目を見開いて固まっている。

「だから、今は大人しく」

「死ね！」

向かって来たのは一本のナイフ。オレはそれを一瞥して手のひらを向けた。

「流動停止（フリーズ）」

ナイフが空中で静止し薙刀を叩きつける。もちろん、一撃で昏倒。

「まさか、包丁じゃなくてナイフを隠し持っているとはな。亜紗達は大丈夫か？」

「あら？　喧嘩？」

その言葉にオレは振り向いて薙刀を構えた。そこにいたのはおばさ

「それ以上思ったら殺すから」

化粧がどぎついお姉さんだ。年齢はおそらくアラフォーぐ

「それ以上思ったら殺すから」

見た目は二十代後半だ。というか、

「心読めるのかよ」

「ふふっ、どうかしらね。第７６移動隊隊員白川悠聖君」

「あんた、何者だ？」

「匿名人よ。それと、また会うこともあるかもね」

女性が店から出て行く。オレはそれを見ながら追いかけることが出来なかった。あいつ、今のオレと同等くらいの実力があるだろうから。

オレは近くの椅子に座り込んだ。

「なんなんだよ、一体」

『『悠聖』』

アルネウラと優月の声にオレは答えることが出来なかった。

壊れんばかりにキーボードを叩きまくっている委員長。その横ではゆったりと琴美がキーボードを叩いていた。

立体ディスプレイにあるのは様々なデータ。更新されていっている確保者のデータだ。ナイトメアやそれ以外のドラッグなど一斉に摘発されているのかすでに５０はあるだろう。

「かなりの数があるわね。そっちはどう？」

「こちらもですね。学園都市内に戸籍の無い方が数人います」

「不法滞在か。それを叩くのはかなり難しいわね。今はそれを無視して整理に回りましょ。後は確保した場所を地図でだしてどの地域が多いか洗いざらい探すわよ」

「それなら」

委員長がエンターキーを叩くと琴美の立体ディスプレイに地図が現れた。そこに表示されているのは今回のナイトメアらしきものが見

つかった場所。

商業エリアに関してはまだわかっていないからかデータはないが、学園都市西側に集中していた。

周が強制同行した人や孝治の停止させたトラックは南側に近い南南西になっている。

「西側ね。他にもポツポツ見つかっているけどあくまで西側が主流ということかしら」

「私もそう思います。西側に工場がある場合、ここから商業エリアに出せば違和感はありませんし」

「そうね。このデータを周達に送りましょ。このままでいるより周達に送った方が上手く回るわ」

「はい」

二人のキーボードが激しく動く。ちょうどリースが見回りから帰ってきたのだが二人は気づかない。二人は一心不乱にキーボードを叩いている。

そんな様子を見たリースは少し呆れたようなため息をついてソファに座り込む。

「見回りはこれで大丈夫かな」

七葉さんが大きく伸びをする。私はその言葉を聞いて安心したように息を吐いた。

「これで終わりですよね」

「うん。隅々まで見たしね。まあ、この区域は第７６移動隊担当だから動きがない可能性はあったけど。だから、私達だったんだよね」

「そうね。全く。私達だって一応準空戦なんだから捜すのを手伝っても良かったじゃない」

「ベリエちゃん、私達は援護が得意だよ？」

「わかっているわよ」

ベリエさんが小さくため息をつく。そして、私を睨みつけてきた。

「メグ。終わったばかりだからって気を抜かないように。駐在所が終わるまでは警戒していなさい」

その言葉に私はポカンとした。そして、ベリエさんが歩き出す。その背中を見ながら七葉が笑みを浮かべた。

どうやら私は心配されているようだ。この中じゃ一番戦闘ランクは高いはずなのに。

「ベリエはいつも通りかな。じゃ、メグの歓迎パーティーを帰ったらしようよ」

「お～」

七葉さんの言葉に賛同するアリエさん。私はそれを聞いて苦笑するしかなかった。

「見回りをもっとしなくていいんですか？」

「大丈夫大丈夫。罠はもう仕掛けたから。私達の目が黒い内はこの地域でさせないから、ねー」

「ねー。あっ、ベリエちゃん、早く歩きすぎだって」

「あなた達が遅いだけよ」

こんなやり取りに、やはり私は苦笑するしかなかった。

第七十三話　作戦後

結果報告書

昨日に行った大規模捜索によりナイトメアが８８、それ以外のドラッグが１３発見。所持者は全員逮捕しており関係者を含め２００人規模の逮捕者が出た。
それとは別に学園都市西側に巨大なケリアナの生産工場を確認。ただし、撤収作業中だったからかその数はほとんど無かった。
商業エリア内においては学園自治政府からの報告により逮捕者は９２名。見つかったナイトメアは６０にも及んだ。
負傷者は８名。大した怪我ではなく全員が3日の安静で大丈夫なレベルである。
未だに固形のナイトメアは確認されていないためこれからより一層捜査が必要である。

『ＧＦ』移動課第一部隊第７６移動隊隊長海道周

「こんな感じか」

オレは適当に報告書を書いて慧海のところに送信する。今日の捜査は大規模かつ大変な作業だった。

怪我人の数が少なかったのは良かったが、少々見当違いの逮捕を数回起こしている。これからはもう少し気をつけないとな。

今日は色々大変だった。全部隊の渉外役を集めての会議というか報告会というか、ともかく、色々と大変だった。

ナイトメア関連についての情報がかなり少なく、一部の部隊以外では完全に蚊帳の外だったからか紛糾した。まあ、情報は出来る限り出したんだけどな、さすがにオレの推測は出せなかったけど。後、『赤のクリスマス』のことも。

「さてと、後は戸締まりして」

「あれ？　今日は海道が最後？」

中村の声にオレは大きく腕を伸ばした。レーヴァテインを肩に担ぐ中村がこっちにやって来る。

「会議の後に報告書を書いていたからな。委員長や琴美がデータを作っていたとは言え、やっぱりまとめないと」

「律儀やな」

「そういう中村はどうした？　今日は空の見回り後夕方には帰ったはずだろ？」

「忘れ物や忘れ物。明日の宿題の一部を忘れてな」

そう言って中村が自分の机の上から何枚ものプリントを手に取る。

オレは小さく息を吐いて立ち上がった。戸締まりをして我が家に帰りますか。

「周、あの日のことを夢見てるらしいな」

中村がオレのことを周と呼ぶのはあの日以来か。あの日、オレが中村に誓った日以来のこと。

「そうだな、光」

オレはそう言いながらカバンを掴む。

「今回の件、『赤のクリスマス』に関係あんねんやろ。あまり無理しやん方がええで。周はよく悪夢を見るんやから」

「そっくりそのまま返させてもらうよ。そうだな。ちょうどお前だからいいか」

オレは小さく息を吐いて口を開く。

「今回のナイトメア事件は『赤のクリスマス』の実行犯が起こしている。その実行犯は元『GF』。多分、あの日に親父達と一緒に巻き込まれて死んだとされる人達」

「根拠は？」

「『悪夢の正夢（ナイトメア）』の男が親父について語っていたこと。そして、オレが幻想種と最初に出会った工場で見たフラッシュバック」

あの時、フードの男を見てオレは『赤のクリスマス』を思い出していた。関連性がないなんて言えない。オレがあの日を思い出すのはあの日に近い出来事があったらだからだ。

『赤のクリスマス』を生き残った中で一番引きずっているのはオレだからでもある。

「それらを考えた。はっきり言うなら、今回の事件は心の底から降りたいさ」

これ以上踏み込むのは危険である可能性が高い。もしかしたら、またあの日の悪夢を見るかもしれない。新たな事実を思い出すかもしれない。

「だけど、いや、だからこそ、オレは今回の事件であの日の決着をつける。あの日、オレ達が何を見たのか、まだ、思い出していないから」

「何を見たって、あの日みたんはニューヨークの」

「そうじゃない。そうじゃないんだ。オレの核晶は茜のものだって光なら知っているよな」

「うん。茜ちゃんから聞いてる。直接見てないけど」

やっぱりだ。やっぱりおかしい。あの日の記憶からどこかがズレている。

「茜じゃなく、オレが核晶を使わないといけない事態になったんだ。でも、その時を覚えていない。オレは茜から核晶をもらった事実は覚えていてもそれ以外は覚えていない。最後の記憶は二人と強制的に分断されて気絶するまでだ。でも、その中に茜から核晶をもらった記憶がないんだ」

「周」

「思い出さないといけない。過去に決着をつけるためにも」

オレは拳を握りしめた。楓や中村がわからないのは当たりなのだろう。実際にオレは気絶した気絶がある。だけど、その中に核晶に関する記憶がない。

茜じゃなくオレでなければいけなかった状況。それは一体、なんなんだ？　オレは何を忘れているんだ？

違和感があるのは両親に対する記憶。中村にも前に聞いたが仲が良かったとしか答えられていない。

八方塞がりに近いな。

「悪い。こんな話をして気分を悪くしただろ。そこの自販機で一本くらいなら」

「私は周を応援してるから」

中村の言葉がオレの頭の中に響いた。この言葉でわかる。中村はあの日の真実を知っている。だけど、隠していることを。

「でも、これだけは周が思い出さなあかん事実や。うちらは何もヒントは出さん。やけど、応援してる。周は私の初恋の人で、大事な親友やから」

「ありがとう。さてと、戸締まりするから早く出てくれよ。それとも、戸締まりってもういないし」

相変わらず自分の嫌なことに関しては逃げ足が本当に早い。

オレは少し苦笑して駐在所内の電気を消す。そして、駐在所の外から鍵をかけてシャッターを下ろした。

他の場所の戸締まりは話しながら中村と一緒にしたから大丈夫だ。後は、裏口が閉まっているかどうかを確認して、

「やあ」

裏口に回ろうとしたオレの目の前に正がいた。その手にあるのは缶コーヒーが二本。

「昨日は大変だったね」

正がオレに缶コーヒーを投げてくる。オレはそれを受け取って缶コーヒーのプルタブを開けた。

「大変ってレベルじゃないけどな。お前のことだから全体を把握しているんだろ？」

「残念ながら昨日は中国に行っていてね、中国の最新技術を色々な意味で堪能してきたよ。でも、やはり日本が一番だ。安全面では特にね」

「そりゃな。それにしても、どうしてこんな時間にいるんだ？」

オレは肩をすくめながら尋ねる。すると、正は意地悪そうな笑みを浮かべた。

「君に会いたくなったと言えば？」

「ベッドの上で語ってくれ」

正が手に持っていた缶コーヒーを落とす。どうやら空だったらしく、中身が零れることなくかん高い音を奏でた。

よく見れば正の顔は真っ赤だ。

「は、破廉恥な。そんなことを言っていいのは成人式に出てからだ」

「言ったオレがめちゃくちゃ恥ずかしいから忘れてくれ」

どうしてオレはあんなことを言ったのだろうか。

今考えてみたら頭が回っているはずなのに頭が回っていないような状況になっている。

「コホン。僕が来たのは君の様子を見るためさ。『赤のクリスマス』について調べているよね？」

今度はオレが缶コーヒーを落とした。だけど、すかさず蹴り上げて中身をほとんどこぼさず手の中に戻す。

それを見た正は拍手をしている。

「未来を知っているからさ。まあ、今の君に言うつもりはないけれど」

「オレも言われるのは勘弁だ。未来は自分の手で作り出すものだ。その未来を考え、行動し、手に入れる」

「そうだね。だから、お節介かもしれないけれど一言だけ」

正はオレを真っ正面から見つめる。そして、上目づかいで、

「頑張って」

あまりの可愛さにオレは思わず壁に片手をついていた。顔が真っ赤になるのがわかりながらも正の方を向くと、そこに正の姿はなかった。相変わらずの状態だ。

オレは小さくため息をつく。

「不意打ちにもほとがあるだろ。あ～、夜風が気持ちいいな、おい」

オレは財布から冷たい飲み物を買うためにお金を取り出した。

第七十四話　参加種目

学園都市の体育祭というのは一言で言うならすごい。学園都市全体が一気に体育祭を行うからだ。おかげで警備もかなり厳しいことにはなるが、最大のものがクラス対クラス規模の競技が少ないということだ。

基本的に選抜対選抜又は志願者対志願者。それ以外は学年選抜対学年選抜か学校選抜対学校選抜と一回も競技しない人はさすがにいないが、一回しか競技しない人もいる。

体育祭に勝てばその分学校に対しての援助金や内申点プラスなど様々なものがあり、校名を轟かすには十分なものだ。

その体育祭もブロックで勝ち抜けば本戦があり、その本戦でも勝ち抜けば優勝という最終的にはよくわからない規模になる。優勝すれば賞金が出るのもどうかと思うけど。

だからか、競技を決める際には運動系のクラブのメンバーが中心となる。だけど、オレ達のクラスは違った。

オレは小さくため息をつきながら言う。

「だがら、オレと由姫もメグは第７６移動隊の仕事が忙しいからそんなに出られないっつうの」

全競技にオレや由姫の名前を入れるのは本当に止めて欲しい。由姫はともかくオレは隊長だからお偉いさんの接待とか色々あるんだよ。

黒板の前に立つ健さんはどこか不満そうだ。

「ちょっとくらい大丈夫だってば。じゃ、これとこれとこれを消して」

「学年選抜と学校選抜にだけオレと由姫の名前を入れろ。他は無理だ」

正確なスケジュールはまだ決まっていないが、学年選抜は基本的に最初で学校選抜決勝は基本的に最後になるのが通例だ。今回のブロックはそれを容易にすることは出来るだろう。

「えーっ、お前ら以外の誰が勝てんだよ」

「健さん、てめぇは十分に速いだろうが」

どうして種目を決めるのにこんなに怒らなければならないのだろうか。

オレは拳を握りしめながら健さんを睨みつける。

「俺はＦＢＳに出るんだよ」

「体育祭で何でそんなものがあるんだよ」

体育祭の競技に何故かあるＦＢＳの種目。まあ、フュリアスは最近の軍事の目玉だし、ＦＢＳは学園都市で一番有名なゲームだろう。だから、わからないでもない。

実際に、日本でもフュリアスを増やすことが決定したし。

「他の競技に出ればいいだろうが」

「やだ。俺は万全の状態でＦＢＳに臨むからな。俺と真人のコンビならいくら負け戦になっても勝てる」

「悪いが、二年の代表は悠人とリリーナだからな。人界のトップクラスパイロット」

リリーナもＦＢＳはやっているだろうから確実に勝ち目はあるだろう。というか、勝つしか考えられない。

悠人はエクスカリバーに乗れば最強だし、リリーナもソードウルフで十分に世界を圧倒出来る。

「もらったな」

確実にもらっただろうな。だけど、そうなると誰が他の競技に出るのだろうか。

「ハトワカは？」

「ちょっと待ってください。こんな筋肉ダルマと一緒にして欲しくはありませんね」

「それは俺様のセリフだ。こんな筋肉メガネと一緒にするな」

「誰が筋肉メガネですか誰が。筋肉ダルマは黙ってください」

「黙れ筋肉メガ、ごふっ」

ハトワカの二人にオレと由姫の拳が振り下ろされた。二人は白目を向いて倒れる。

この二人に任せるのは難しいか。

「じゃ、メグを入れておけばいいな。どうせ仕事少ないし」

「ちょっと待って。何で私なのかな？　出来れば説明をお願い」

「シフトはすでに作ってあるから」

分かりやすく言うならメグが第７６移動隊に入ってくるより早く簡単なシフトは作ってある。まあ、学年選抜と学校選抜がある最初と最後はかなり緩いけど。

その言葉を聞いたメグの顔が引きつっている。まあ、仕方ないだろう。

「私も、ちょっとなら、参加、出来る」

「ありがとう、夢。由姫は駄目なの？」

「私も出たいことには出たいのですが、兄さんとのデートのタイミングを計りたいので」

「あー、ごちそうさま」

とりあえず、シフトの変更を考えておこう。由姫は本当にやりかねん。

「じゃ、メグと夢は色々な競技に出てもらうとして、競技が決まっていない男衆、そんなんでいいのか？」

健さんが夢に目配せしたのがわかった。おそらく事前に打ち合わせしたのだろう。女子のは大概埋まっているのに男子ががら空きだからな。というか、本当に空きすぎているし。どうりでオレの名前が全部入るわけだ。

すると、夢が立ち上がった。

「みんなの、頑張っている姿、見たいな」

「俺出ます！」

「俺も出る！」

「俺も俺も！」

「俺が出る！」

「俺の出番！」

「俺がやる！」

「俺だ！」

「俺！」

「テンション上がってきたぁあーーー！！」

「付き合ってください！」

「てめぇずるいぞ！」

「俺が告白する！」

「私が出ます！」

「私も出る！」

「告白は私よ！」

おかしいな。男衆のテンションが上がっているのは何ら違和感がないしやる気になってくれるのはいい。あまりのテンションに夢がどん引きなのもいいだろう。

だけど、告白まで出るわ、女子の立候補、はいいとして、最後の女子、夢に告白してるよな。

健さんはしてやったりという顔になっている。

「上手く使いましたね。夢さんは清楚系で小動物みたいですからクラスの人気を二分しています。ちなみに、もう一人はメグさんです。活発で犬みたいに愛着があると人気がありますよ」

「いらない知識をありがとう。ちなみに由姫は？」

「私は兄さんラブですから人気は少ないですよ」

「それは良かった」

オレは安心して息を吐く。由姫は可愛いから人気がありそうだったけど、人気がないならいいや。

別に由姫が人気がないことを喜んでいるわけじゃないぞ。

「大好きですから」

「オレも好きって、あれ？　どうかしたのか？」

オレは周囲がいつの間にかオレ達を見ていることに気づいた。オレはそれに首を傾げる。

「場所を考えた方がいいと思う」

メグの言葉にオレ達の顔が赤くなった。どうやら話を聞かれていたらしい。さすがにあの話はかなり恥ずかしいな。

黒板の前にいる健さんは呆れたようにオレ達を見ている。

「青春してるよな。羨ましいぜ。というか、なんで青春って言うんだ？」

「青年の春、だからだろ？」

オレも詳しいことは知らないけれど。

「なるほど。でも、どうして恋したら春になるんだ？」

「春は始まりの季節だ。だから、恋という始まりだから春が来たって意味なんだろ」

これも詳しくは知らない。辞書とかで調べたら見つかるかな。

「ともかく、メンバー決めて行くぞ。希望者全員手を上げろ。そして、勝手に俺が決めていく。みんなどっこいどっこいだろ？」

「それは言わない約束だと思うけど」

健さんの言葉にメグが小さくため息をついた。

「いやー、さっきの時間は本当に助かった。ありがとな」

「事実、だから。みんなの、頑張っている姿、見るの大好き、だよ」

参加種目が完全に決まり、その決め手となった言葉を言った夢の席にオレ達は集まっていた。毎度のことながら本当に仲がいいよなと思ってしまう。

「俺様と筋肉メガネが重量上げね。まあ、妥当だな」

「筋肉ダルマと同じというのが気に入りませんが、妥当な人選ですね」

まあ、こいつらなら確実に勝てるだろう。というか、体育祭になん

で重量上げがあるかわけがわからないんだが。ＦＢＳと一緒に七不思議になりそうな気がする。

夢は学年選抜競技のドッチボールだけだ。夢の志願に誰も反論しなかったからな。

メグはクラス最多の４競技に出ることになった。まあ、これから鍛えていくしメグなら大丈夫だろう。

「そうだ。メグに一つ聞きたいことがあるんだけど、第７６移動隊ってどんな感じ？」

「何でオレ達に尋ねないんだ？」

真人の質問にオレは首を傾げた。第７６移動隊在籍なら一番長いのに。

「ほら、外から入って来た方が違いがわかりやすいからさ。僕も少し興味があってね」

「えっと、訓練が鬼」

まあ、確かに訓練は鬼だろうな。正規部隊トップクラスの訓練量でメニューを組んでいるし。

「３０分以内に２０ｋｍマラソン完走したら打ち合いなんだけど、みんなみんなレベル高くてついていくのが精一杯。次の日の筋肉痛は酷いし」

「うわぁ、鬼だね。周はどう思っているの？」

「まあ、移動隊は時に過密スケジュールになるからな。だから、体力だけは必要だ。鬼というのは認める」

実際に孝治や音姉からも鬼メニューと言われている。だけど、これくらいこなせなければ正規部隊の一員とは言えない。

それに、メグはまだ軽い方だ。自主練を禁止しているからな。

「今は体力をつけて筋力をつける。体育祭になるまでには終わるからそれからさらにトレーニングだ。まあ、体育祭終わってからだけど」

「私、死ぬ」

「つまり、体育祭は頼りになるってことだよね。すっごく楽しみだな。みんなでメグのことを応援するから」

「あ、ありがとう」

メグは顔を真っ赤にして縮こまっている。まあ、体育祭の足手まといにならないように鍛えるつもりだけど。

それに、体育祭になる前に魔力負荷まで持っていきたい。

「まあ、頑張れ」

オレはそう苦笑しながらメグに言葉を投げかけた。

第七十五話　学業（前書き）

学校の日常を書くのは難しいですね。戦闘なら流れに身を任せて簡単に進むのですが。

第七十五話　学業

私は小さくため息をついていた。そして、前の席で呑気にご飯を食べている周を睨みつける。

「ため息なんてついて。幸せが逃げるぞ」

「誰のせいよ誰の。周のおかげで色々な競技に出ることになったんだからね」

「まあ、意味があることだから頑張ってくれ」

「意味？」

私は首を傾げた。それに周は笑って答える。

「中間試験だから。魔術無しでメグがどこまで成長したか。無理だと判断したら第５分隊に異動だから」

「鬼！　悪魔！」

まさかの宣言に私は叫んでいた。中間試験というのは完全に予想外だし、第７６移動隊に入ったからもう安全だと思っていたのに。

周の言葉に同じようなことを思ったのか誰もがポカンとしていた。

私の味方はいっぱいいる。

「周、それは軽いぜ」

「うん、軽いね」

「軽いですね」

「俺様もだ」

「軽いな」

「軽い、と思い、ます」

「私の味方は誰もいないの！？」

実際には由姫が何も言ってないけど由姫は完全にノーコメントらしい。こういう時の黙秘って肯定の意味よね？

私は小さくため息をついた。もう、どうしようもない。

「わかったわよ。中間試験として受ける。でも、結構ヤバい種目あるんだけど」

学園都市の体育祭で一番有名だと言われている借り物競争。学園都市外の学校ならすぐに借りれるものだろうが、学園都市のは無駄に範囲が広い。だから、借り物によっては体力が関係なく勝ち負けが決まる時がある。

借り物としては、三人以上の校長のかつらとか第７６移動隊の隊旗（駐在所）の物置の奥底とか個人名とか友達とか。

ともかく、範囲がかなり広い。

実際に亜紗さんですら負けたらしい。

「それは無理。孝治でギリギリだぜ。んな勝負は絶対に勝てないから。まあ、孝治の場合は場所が良かったというべきか」

周は少し遠い目をしながら言う。だけど、それ以外の競技もかなり大変だと思う。

障害物競争に８００ｍ走と障害物パン食い８００ｍ競争。最後のは本当に体育祭の見せ場だ。

「まあ、一位を取って欲しいのは障害物競争だな。実戦では全てが平地だと限らないし。障害物パン食い８００ｍは、頑張れ」

「あれって案外難しいらしいからな。ただ走るだけじゃ一位にならないって聞くしよ」

「噂だと８００ｍ走中にパンを何個確保したかによってタイムが減るらしいよ。僕もよくわからないけど」

障害物パン食い８００ｍは障害物競争とパン食い競争と８００ｍ走を合体させたもの。本当に混沌とした競技で、去年見た限りパンを確保しながら障害物をくぐり抜けて行くという奇抜な競技。

ただし、面白い競技でもある。順位が変動しやすく、『ＧＦ』隊員でも簡単に負けることで有名。見ていて本当に楽しいけど。

「まあ、メグがどれだけ頑張れるかだな。体育祭だけじゃない。普通に学業も。第７６移動隊にいることを言い訳にはするなよ」

「むぐっ」

学業に関してはかなりヤバいかも。まだ、高校の最初だからついて行けるけど、これからついて行けるか本当に不安だ。

すると、由姫が呆れたようにため息をつく。

「メグさんだけじゃなくみんなに言った方がいいですよ。第７６移動隊の戦闘分隊で赤点スレスレじゃないのは兄さん、孝治さん、亜紗さんなんですから」

「じゃ、第７６移動隊ってバカばっかり？」

私の質問に周は躊躇うことなく頷いていた。

「一番どっぷり『ＧＦ』に浸かっているのに勉強出来る方がおかしいからな。まあ、亜紗は訓練と自主練後に勉強しているらしいけど」

「じゃ、なんで私だけに言うのよ」

「途中参入の奴らは大抵頭がいいからな。メグもしっかり頑張るように。まあ、テスト前は勉強会開くからその時にしっかり勉強すればいいさ」

そう言いながら周は口の中にご飯を運ぶ。確かに周は勉強出来るらしいから頼りになるけど。

「この学校に入れたんだから勉強はまずまず出来ると思うんだけどね。そう言えば、今回のトップでやっぱり周なのかな？」

「真人、俺様にはお前の言っている意味がわからないんだが」

「これくらいは常識だよね！」

「自慢じゃないがテストは出来ないのが当たり前だ」

「うわぁ、本当に自慢にならないや」

真人とハトのやり取りに私は笑みを浮かべる。見渡してみればみんな笑みを浮かべていた。

テストは5月の真ん中だ。そんなに難しくはないという話はよく聞くけど、やっぱり心配なものは心配だ。ちゃんと勉強しておかないと。

「勉強くらいなら見るぞ。一応、テスト勉強なんて復習で済むから」

「大丈夫だ。俺が見る」

周の申し出を一誠が慌てたように遮る。その行動は少し不自然だった。今までの一誠なら希望者には傍観という感じであまり意見を述べなかったのに急に割り込んでいる。

どうやら周も同じようで不思議そうに一誠を見ていた。

「そうか？　なら、いいんだ。まあ、オレからすればありがたいんだけどな。というか、ハトは本当に大丈夫なのかよ。いつも授業で寝てるだろ」

「えっ？　授業って寝る時間じゃないの？」

鶴の一声ならぬハトの一声で私達だけじゃなく教室全体が静かになる。

ハトに関してはこの教室でもかなり有名人だ。あらゆる授業を寝るという意味で。だから、私達は完全に固まっていた。まさか、授業をそういう風に思っていたのに。

「これは重傷ですね。健さん、あの方法をしますか？」

「するしかないな。さもないと、ハトの奴は本気でテストを落としかねん。一誠も同意見か？」

「いや、今回のテスト範囲は受験で勉強した範囲にかかっている。あの方法でいけば大丈夫だろう」

「あの方法って何ですか？」

由姫が不思議そうに首を傾げる。私も同意見だ。あの方法というのが見当もつかない。一体、どんな手段で覚えるのか。

ただ、周はなんとなくわかっているのか少し苦い顔をしていた。

「ハトは筋トレしながら勉強すれば何でも覚える。そういう奴だ」

「効率はかなり悪いけどな」

周が苦笑する。やはり知っていたらしい。確かに効率は悪いがそれだけで覚えるならかなりのものではないかとは思う。絶対に真似し

たくないけれど。

私の場合はひたすら書いて覚えるタイプかな。

「そう言えば、周ってどうやって覚えているの？」

私はふと疑問に思って尋ねてみた。すると、周は若干苦笑している。どうしてだろうか。

「一日中机に向かって勉強を一ヶ月くらいかな」

その言葉に私達は固まった。

周が一瞬何を言っているかわからなかったからだ。一日中机に向かってるのはわかるが、それを一ヶ月する意味がわからない。

「昔にありましたね。兄さんが白百合家に来て一ヶ月ぐらいしてから、食べる時と寝る時以外全部勉強につぎ込んでいるのを」

「あの頃はちょっと心の病気にかかっていたからな。まあ、おかげで今のオレがあるけれど」

「ごめんなさい。私、不用意に」

すると、周は首を横に振った。その表情はさながら気にしなくていいという風に。

「あの時はあの時でオレも大変だったからな。それに、その時のオレをオレは否定しない。今まで起きた全ての出来事がオレを形づけているからな。それに、親友達にも知ってもらいたいし」

そう言いながら周は笑みを浮かべる。その笑顔はさながら子供のような天真爛漫な笑顔だった。

それを見た私は安心して少しだけ笑ってしまう。周はやっぱり強い。第７６移動隊隊長というのもあるけど私達なんかよりも遥かに大人びている。すごい。本当にすごい。

「でも、周君は、アメリカの、大学を卒業、したって聞く、けど」

「飛び級でな。大学を卒業しなければ部隊の隊長になれないから頑張って。あの時は本気で大変だったからな。由姫はワンワン泣いたし」

「い、言わないでください。あの時みたいに兄さんが長期間いなくなるのは初めてでしたし。姉さんも母さんも父さんも忙しかったので」

赤くなりながらもじもじする由姫。それを見た私達は思わず吹き出していた。由姫はキョトンとして私達の顔を見ている。

周は暖かい目で由姫を見ながら頭を撫でてるし。

「そうだ。由姫。今、あのことを相談したらどうかな？」

「あ、あのことですか？　えっと、その、兄さん」

由姫が周の方を見る。それにつられて私も周の方を見た、が、そこに周の姿はなかった。見えたのは逃げ出すように教室から出て行く周の姿。

由姫がゆらりと立ち上がる。

「兄さん、いい度胸ですね」

何もしていないはずなのに由姫の足下でミシッと嫌な音が鳴り響いた。それを聞いた誰もが思わず顔を見合わせてしまう。視線が合わなかったのは由姫だけ。

「今日という今日は逃がしません！」

その言葉と共に走り出す由姫。その姿はほんの一瞬で消え去っていた。

「あはは。相変わらずあの二人は面白いね」

私は笑ってしまう。見ればみんなが笑っている。これくらいは周も許してくれるだろう。だから、私は笑ってしまう。

第七十五話　学業（後書き）

これから物語はいつの間にか日にちが過ぎていきます。

第七十六話　手段

オレは息を吸い込む。そして、目前にいるメグを見た。メグは緊張しているようで視線を机の上に向けている。

これから始まる勝負は負けられない。負けられないんだ。

「では、いきますよ」

審判の由姫が声を上げた。そして、手を振り下ろす。

「スタート！」

右手を動かす。並んだカードの数字から場に出していく。出した場所にはすかさず左手で弾いたカードを並べていく。空中にある時点で数字を確認しタイミングが来たなら空中で掴み、出す。

メグの動かすカードの数字を一瞬で読み取り全ての場を確認する。すかさずインターセプトのごとく介入して場をこちらの流れに引き寄せる。

場の状況を判断し、山札に残った枚数を追い出し、まだ出していないカードを思い浮かべる。確率計算から順番を組み立てて予想していく。そして、オレの手札となる最後の一枚を出し終えた。

「こんなものか？」

メグの山札はまだまだたくさんある。そして、メグは目を丸くしていた。

「えっと、何その速度」

オレ達がやっていたのはトランプのスピード。ただし、ただ遊んでいるわけじゃない。

簡単に言うなら情報の取捨選択。場にあるカードと出せるカード、そして、相手の場にあるカードを確認して妨害しながら全てを出しただけ。

まあ、これを最初に見たら全員が狐に包まれた顔になるけどな。

「兄さんは速すぎますよ。一応、第７６移動隊で二番目に速いですし」

「今ので二番目って、一番は」

「お疲れ様」

その言葉と共に冬華がフェンリルを連れて戻ってきた。今日は冬華が空の見回りだったみたいだな。

冬華は駐在所の中を見渡してこっちに向かってくる。

「悠聖は？」

「あいつなら周囲の見回りだ。というか、その前に報告しろよ」

「そんな些細なことは悠聖よりも優先度が下よ。あら？　スピードをやっていたのね」

些細なことじゃないからな。オレは小さくため息をついて冬華を指す。

「ちなみに、冬華が最速だから」

「今のにどうやって勝つんですか？」

「勘」

本当にそうなのだ。冬華とやったらひたすら妨害された上にあれよあれよと言う間に冬華の山札がなくなっていく。はっきり言うなら完全な悪夢である。

まあ、オレも大概だということは理解している。

「まあ、メグは今のをやってどうだった？」

「えっと、速すぎて何が何だか。でも、周が時々私の手札を見ていたのはわかった」

「それがわかったなら及第点は上げられそうだな。スピードには戦闘の基本が詰まっている。まあ、相手が未知の存在じゃない限りな。まずはオレの手札」

四枚のカードを並べる。もちろん、適当に並べたやつだ。

「現時点で何が出来るかを表した手札だ。そして、相手の手札。服装や武器、ステップ等の特徴だと考えた方がいいな。真ん中のカード出す場が戦場。そこでオレはどう動けばいいか。流れるようにス

ピードの流儀に乗っ取って文字通りだな」

オレは手札を動かす。

「この際、相手の手札によってこっちが詰まる可能性があるだろ。それは戦場じゃ必ず避けないといけないんだ。だから、相手の手札を見て情報を取捨選択する」

オレが動かしたのは出せる手札をあえて出さず別の手札を出すという手段。

「戦場でも同じだ。相手の流れではなく自分の流れに持っていく。戦いの型にはまらず相手を自分の作戦の中に引き寄せる。まあ、それを毎回しろというのは酷だから」

オレは全てのカードからジョーカーを取り出した。

「閃きも大事だ。たった一枚のジョーカーでスピードは荒れる。作戦を一気に崩されるからな。スピードを通して流れを見ることの重要性を知る。後は訓練の中でどこまで出来るかどうかだ。だから、感覚で全てをやられたらかなり困るんだけどな」

「いいじゃない。戦場でも感覚は大事よ」

「スピードをやるのは感覚を養うためじゃなくて情報の取捨選択をわからせるためだからな。まあ、わかったか？」

メグはコクコク頷いた。これは時雨から教わった方法でレノアさんやアリシアさん、愛佳さんもやったらしい。

戦場を擬似的に見立てたものだから有効性は高くはないけど、戦闘中の情報の取捨選択は本当に大事だからだ。だから、休憩中にスピードをやることを推薦している。

「周みたいなスピードでやるのは不可能だとわかった」

「それは最初からわかってるから。オレのやり方はかなり難しいぞ。右手で山札を持って一枚だけを正確に弾いて場に出す。山札からカードを引くという時間がなくなるけど、片手しか使えないというデメリットもある」

ただ、山札からカードを引く時間がないというのはメリットとして大きすぎる。カードを弾くことに慣れたら山札を見ずに目的地に弾けるからだ。そして、カードも宙にある時点で確認出来る。

スピードに出来るほんの少しの隙も有効利用出来ないか考えたのが始まりだ。

「自分の行為のメリットデメリットを考えないといけないからな」

「スピードって奥が深いんだね」

メグはそう感心するが、正確には言うほど奥が深いわけではない。だけど、考えるという行為が大事なのだ。

「それにしても、たったこれだけのトランプで戦場を真似することが出来たわよね」

「そんなことはないと思うぞ。トランプも手段の一つだ。オレはこれを情報の取捨選択として考えている。もちろん、そうじゃない可

能性もあるしそうである可能性もある。まあ、手先が器用になりたいなら手品というのもありだけど」

「では私が」

「由姫がやったらタネも仕掛けも本当にないすごいトリックが出来上がるからな」

レアスキルを使った由姫のマジックはまずバレない。バレないということはし放題であり、本気でタネも仕掛けもないのにおかしいからありえないマジックを披露出来る。

例えば、手と手を合わせる時にその間にトランプを挟んでいると開いた時に消えるやつは物理的に圧縮させて消している。相手が選んだカードを選択するのも重力場によってマーキングするから絶対に成功する。

文字通り力業で出来るものなら何だって可能だ。

一回やったのが何もない箱に予め圧縮しまくったトランプを入れておく。それによって中には何もないように見えるが、順々に圧縮をといていくと箱からトランプが溢れ出るというものだ。

これをやったのはとある著名なマジシャンの前だったので本気で驚かれた。まあ、タネも仕掛けもないし仕方ないか。

「手段、か。強くなるにはこういうことをたくさんした方がいいのかな？」

「これはあくまで手段の一つにしかすぎないわ。例えば、トランプ

をすることによってあなたはこのダイヤのエースを手に入れる」

冬華はメグにダイヤのエースを渡した。そして、それ以外のカードを無造作に並べる。

「これがあなたの取れる選択肢よ。どれが強くなれるかなんて誰にもわからない。分かるのは全てが強くなる可能性があること。周のようにあらゆる手段を試すのもいいし、悠聖みたいに一つのことを極めるのもいい。だけど、これは手段。それに変わりはないわ」

本当に強くなるなら実戦が一番だが、今の世の中は平和だ。『GF』と『ES』がお互いに協定を結んだからでもあるが、世界のいざこざが本当に少なくなったのだ。

だから、実戦は難しい。別の手段を取ろうにも冬華の言ったようにどの手段が強くなれるかなんて誰にもわからない。

「あなたが選ぶのは何なのか。取捨選択の大事さはスピードを通じてわかったのじゃないかしら。イメージトレーニングで強くなれるかもしれない。自主練で強くなれるかもしれない。あなたがどのような選択肢を取っても私達はサポートするわ。それが、仲間でしょ」

「さすが冬華さんですね」

「当たり前よ。私だって自分のためなら手段は問わないわ」

まあ、冬華はそうだろうな。わざと高校浪人となって悠聖と一緒の学年になったくらいだから。ちなみに、クラスは違うけど。

「考えることが大事なんだ」

「そういうことだな。自分で何を考えるか。それが一番大事だ。まあ、冬華に全部持って行かれたけど、サポートはするから」

「兄さんがこうなるって珍しいですよね」

「だって、今の私は自分で選んだ結果なのよ。こればかりは周にも負けないわ」

そうだな。みんな、自分で選んでいるんだ。

オレだって頑張らないと。今の学園都市にある悪夢（ナイトメア）をどうにかしないと。

第七十七話　関連

オレは小さくため息をつきながら工程表を見ていた。様々な訓練が書かれておりそれらの一部には〇がついている。

これはメグがこなした訓練の数々を表にしたものだ。基礎訓練は自主練をしっかりしていたから早々に切り上げ、基礎応用訓練にステップアップしたのだが、そのスピードは凄まじい。

訓練に必死というのもあるが、別の意図で頑張っているようにしか思えない。

「あれ？　周、まだ残っていたの？」

その言葉にオレは顔を上げた。そこにいたのはエレノアだ。今日は見回りの日だが、あれ？　何か見たことがあるような光景だ。

オレは小さくため息をつきながら軽く肩をすくめる。

「別にいいだろ。ゴールデンウイーク前の確認だよ。エレノアこそ、今日はどうしたんだ？」

「私達は明日に帰省するからちょっとね」

エレノア、ベリエ、アリエ、リリーナの四人はゴールデンウイークは魔界に帰省する。帰省すると言っても魔界の王ギルガメシュに報告するだけだが。

アルや冬華も『ＥＳ』の方に行くため若干人数は厳しくなる。

厳しくなると言ってもメグが入ってきたから若干の余裕はあるけれど。

「まあ、久しぶりに楽しんでくればいいさ。こっちはこっちで楽しむから」

「そうね。学校でもお楽しみだったらしいし。ほら、一昨日とか」

一昨日、嫌な予感がしてオレは由姫から逃げた。結局は捕まったけどあれは壮絶なレースだった。というか、階段の上り下りってあんなに疲れたっけ。

その後は色々あって駐在所でメグに手段について語ったからまあお楽しみと言えばお楽しみか。

「新人はどんな感じ？」

「頑張っているというかちょっと怖いくらいにがむしゃらだな。基礎訓練と基礎応用訓練の終了が予定より一週間早い」

「じゃ、即戦力としては十分に期待できそうね」

確かにメグは即戦力としては十分だ。まだまだ模擬戦では勝てないとは言えその実力は第７６移動隊としては相応しいだろう。それに、訓練を真剣にやってくれる以上、こちらもやり応えがある。

だけど、オレからすればそれは危険だと感じていた。

「ちょっとオーバーペースなんだよ。メグはそもそも体力がかなり

あるし基礎がしっかり出来上がっているからベリエ、アリエのどちらか一人となら勝てると思う。それほどまでに原石としては優秀なんだ。優秀だからメグは訓練についてくる。魔力負荷で鍛えているオレ達の訓練にも」

「疲労骨折になるかも。確かにオーバーペースよね」

「そうなんだよ。ゴールデンウイーク中は模擬戦自体も強化する予定だったけど、予定を変えないとな」

でも、考えられる候補はかなり少ない。オレからすればオーバーペースのメグは心配ではあるがゴールデンウイーク中に新しい訓練を取り入れようとしているからそれをどうするかだ。

いっそのこと既存の訓練を根本的から変えるのはありかもな。

「周も大変だね」

「わかっていたことさ。それに、オレは昔からそうだった。ずっと、ずっと戦っていた。何事にも。だから、今更だとは思う。まあ、この学園都市にいれば世界の滅びなんてありえないと思うしな」

「うん。私もここに来るまでは新たな未来を求めて戦おうって思っていたのにいつの間にか学園都市ののほほんとした空気にやられたかも」

「だよな。狭間市にいた頃なんて世界の滅びを止めて新たな未来を作るための戦いが繰り広げられていたからな」

狭間戦役が特にそうだ。狭間市にいたオレ達第７６移動隊が戦い抜

いた戦役。未来を変えるために動く勢力を止めるためにオレ達は戦い抜いた。

滅びがどういうものなのかを探り、どうすれば世界を救えるかも必死で考えていた。今もそれは変わらない。

だけど、ここにいたら日常というのに身を流されてしまう。今までのオレが崩してしまう。

「久しぶりにその話でもしない？　周は今はどう思っているのか」

「そうだな。滅びを回避する方法はまだ見つかっていないな。そもそも、前がどんな滅び方をしたのかよくわかっていないのも問題だと思う。巨大な敵によって滅ぶならこちらのメンバーはどうなのかがわからなければ動きようがないし」

「ごめんなさい。そこまではわからないの」

それが分かれば苦労はしないだろう。だけど、問題としてあの慧海がいるのに世界が滅んだのはおかしいというべきか。

慧海の本気は本気で世界を砕くのに。

「やっぱり、人数を集めるしかないな。滅びの明確な時期が分かった時、世界に報告して戦時体制に入る。そして、集めれるだけの人を集める。そうすればまだ望みはあるだろ」

「むしろ、少数精鋭はどう？　第一特務と第７６移動隊と強襲作戦とか」

「難しいところはあるけどありっちゃありかな。でも、今は学園都市内のことに目を向けないとな」

いくら世界が滅ぶ時が近づいているとしてもオレ達は学園都市の治安を守らなければならない。それが今の仕事だ。

そして、オレ達がやらないといけないのはナイトメア関連だろう。『赤のクリスマス』と繋がるナイトメア関連。

「よくよく考えてみると『悪夢の正夢（ナイトメア）』達って世界の滅びに対抗するための組織だよな」

「手段はかなり過激だけどそう思う。大規模なテロを起こすなんて正気じゃないと思うけど」

「確かに、文明や軍事力が滅びに関係するかもって思ったけど、『赤のクリスマス』のニューヨークはむしろ逆効果じゃないのか？」

ニューヨークの死者は他の都市とは桁違いに多かった。だけど、それがあったからか世界は軍事力増強になったはずだ。

アリエル・ロワソが『赤のクリスマス』を起こしたのはオレ達のような人を作り出すため。それはわかる。実際、『赤のクリスマス』ではニューヨーク以外は小さなテロばかりだ。だから、警備体制は増強になっても軍事力増強はなっていない。

多分、アリエル・ロワソはそれも警戒したのだろう。だけど、ニューヨークで起きた。『悪夢の正夢（ナイトメア）』達は何が目的でニューヨークで起こしたのだろうか。

「そう？　別にニューヨークでも」

「だって、ニューヨークには『ＧＦ』の主力部隊がいたんだぞ。滅びが起きれば一番対抗策になる若手で優秀な主力部隊が。なのにニューヨークを狙った。滅びから遠ざけるために。逆効果じゃないか？」

親父は『ＧＦ』最強の魔術師と呼ばれ、第一特務に属する世界屈指のだった。だけど、ニューヨークで亡くなり戦力が一時的に落ちたと言われている。

よくよく考えると逆のことをしていないか？

「ニューヨークで起こしたのはただ人が多かったからじゃないのか？」

「ニューヨークで起こさないといけなかったってこと？」

オレは頷いた。オレの考えからしたらそれ以外に思いつかない。『赤のクリスマス』でニューヨークじゃなければいけなかった理由はなんだ？　何を狙ったんだ？

「だぁー、頭がこんがらがってきた。どうやって証明すればいいんだっつうの」

「いつもの推測は？」

「判断材料が少ない。はぁ、今は考えても仕方ないか。『悪夢の正夢（ナイトメア）』と『赤のクリスマス』は一度離して考えた方がいいし」

「周らしくない」

「それはわかっている」

わかっているのだが、オレからすれば小骨が引っかかった状況だ。
これを取り除くことが出来ればいいのだが。

「考えても仕方ない。そろそろ戸締まりするから出るぞ」

「うん。送っていこうか？」

「それはオレのセリフだ」

エレノアが危険にさらされるわけじゃない。エレノアに手を出した不審者が危険にさらされる可能性があるからだ。

実際、過去にあったからな。

オレは小さくため息をついて立ち上がる。引っかかる何かをそのままに。

第七十八話　言葉

校門前にオレと由姫が同時に足を止める。そして、すかさずレヴァンティンを取り出した。

「タイムは？」

『９分５８秒です』

「よし」

「やった」

オレと由姫はお互いにハイタッチ交わしあう。家からここまでのタイムアタックは初めて１０分を切ることができだ。たったそれだけでかなり嬉しい。

まあ、ゴールデンウイーク中だから登校するってわけじゃないけれど。

「じゃ、またな」

「うん。駐在所で」

オレと由姫はそこで分かれる。オレはゴールデンウイーク中ながら学校に用事があったため来たのだ。対する由姫は普通に駐在所に。

どうせなら走ろうということで走ったのだが、ゴールデンウイークだからかいつもより人通りが少なくスムーズに駆け抜けた。

だけど、音姉のタイムにはまだまだだ。音姉には色々と驚かされる。

「さてと、生徒会室にでも」

「周君？」

オレが右を振り向くとそこには弓道着を着た夢の姿があった。その首にはタオルが巻かれている。

「ゴールデンウイーク、だよ？」

「わかっているから」

夢から見たらオレはゴールデンウイークなのに忘れて来た男になっているのだろうか。

「委員長から、生徒会長からお願いされてな。色々提出しなけりゃならないだけだ」

「そう、なんだ。ハト君とは、違うよね」

あいつ、ゴールデンウイークだと知らずに登校したのか？

すると、夢がゆっくり近づいてきた。

「１２時に、屋上。お願い、できる？」

「わかった」

夢が真剣な目でオレを見ているからおそらく“義賊”のことだろう。だったら断る理由もない。

オレは夢に手を振って歩き出す。夢は少し心配そうな顔で手を振ってくれる。よほど重要なことなのかそれとも、

「今は考えても仕方ないか。さっさと委員長のところにでも」

その時、レヴァンティンが震えた。オレはレヴァンティンを取り出し届いたメールを開く。そこにあったのは新聞の記事。大体十年前のものか。

送り主は時雨だからこれが回答というわけね。

「夕日新聞ってすごいな。各国の軍事予算や『ＧＦ』の軍事予算まで正確に載せているし」

『確かに驚きますね。でも、この軍事予算は』

「余計疑問が膨らんだな」

エレノアに話した矛盾点。あれはオレの中で正確な数字があったわけじゃない。ただ、『ＧＦ』ではそういう風に推移したのだけはわかっている。

言うなら、軍事力増強。

オレが予測した滅びの条件は文明か軍事力か。この二つをあの日、金色の鬼に否定されなかった。

否定されなかったということは事実だと考えていいだろう。それに、文明だけならひたすらテロ行為を起こせばいい。

だけど、このデータでは『赤のクリスマス』以後、ニューヨークの二の舞にならないように軍事力増強が続いている。一番幅が大きいのは『ＧＦ』だ。

「『赤のクリスマス』がどうしてニューヨークを起こしたかわからないな。たった一都市を地図上から消しても文明は衰退しないのに」

『相手が衰退すると考えていた可能性がありますが、そこまでいくと推測は難しくなりますね』

「人の行動ほど予測出来ないものはない。もう少し原因方面で調べた方がいいかもな。レヴァンティンは合法手段で調べてもらえるか」

『ちゃんとした結果は出ませんよ』

今まで何回もしたことだ。だけど、『赤のクリスマス』の事実をいくつか知っている以上、新しいものが見えてくるかもしれない。

「わかってる。そんな簡単なことじゃないって。さてと、失礼します」

オレは生徒会室のドアを開けた。そこには委員長の姿しかない。

「予定通りだね。さすが海道君」

「何がさすがなのかわからないけど。で、提出する書類」

オレは昨日の時点で渡されていた書類を委員長に渡す。委員長はそれを確認して生徒会の名前が入った判子を押す。

オレが委員長に提出したのは第７６移動隊が都島学園の『ＧＦ』であることを証明するものだ。毎回何故か知らないがゴールデンウイーク中に呼び出される。

まあ、今回は色々あるからいいけど。

「他にこれとこれを書いてくれる？」

「厄介なやつだな」

学園に提出する用の名簿だった。だけど、去年のを流用しているらしく名前はほとんど書かれている。

オレはペンを手にとってそこにメグの名前を書き込んだ。

「にしても、どうしてゴールデンウイーク中なんだよ」

「それ、去年も会話したよね。でも、海道君に少し元気があって良かった」

「どういうことだ？」

意味がわからない。オレはそんなに元気がなかった自覚はないのだが。

「エレノアさんから聞いたよ。『赤のクリスマス』で悩んでいるって。花畑君達は傍観になったみたいだけど、私はやっぱり心配で」

「あいつらも心配してくれるからな。『赤のクリスマス』で関わった中でオレが一番心の傷が大きいし」

「だからね、何かあったら相談して欲しいな」

オレは委員長の言葉に頷いた。そして、委員長の頭を撫でてやる。

「ありがとう」

「も、もう。子供扱いしないでよ」

そういう委員長はどことなく嬉しそうだった。

屋上にあるフェンスに手をかける。考えるのはやっぱり『赤のクリスマス』について。多分、オレの記憶が鍵になっているはずだ。絶対にオレはあの中で一番最後まで気絶しなかった。そんな感覚がオレの中にある。

「オレが思い出すのが一番だろうな」

『思い出さない方がいい記憶もありますよ。特に、マスターのものは幼い頃のトラウマを起こす可能性があります』

「だろうな。だけど、今回はオレの戦いだ。オレがどうにかしなければならない。オレがな」

『マスターらしいというか何というか。止めはしませんよ。それがマスターの決めたことなら』

「ありがとう」

レヴァンティンは相棒としては最高だ。よくオレのことを考えてくれている。こういう相棒を持ってオレは幸せだよな。

オレは時間を確認した。すでに時刻は正午になっている。メグが来るとしたらもうすぐか。

すると、誰かが駆け上がってくる音が響いた。オレはフェンスから手を離し屋上の入口を向く。

ドアが開き屋上に入ってきたのは案の定メグだった。すでに制服に着替えおりすぐにこっちに駆け寄ってくる。

「待った？」

「全く。ちょうど来たところだ。結界は展開した方がいいか？」

「それは、大丈夫。気配、探知は、得意、だから」

「なるほどね。レヴァンティン、一応探索魔術を頼むな」

オレはレヴァンティンに指示を出して夢に向き直る。

「“義賊”の方に、色々と、話した。周君の、ことを」

ちなみにこちらは話していないからちゃんと約束を守っている。

「それで」

夢が何かを手渡してくる。それはデバイス内蔵型の携帯だ。すでに通話は開いているらしく通話中になっていた。

オレはそれを受け取る。

「もしもし」

『君が海道周君か。始めましては“義賊”のリーダーだ』

その言葉にオレは小さく息を吐く。声は声を変えているのかＡＩが言っているのかわからないが多少機械音が混ざっている。

絶対にレヴァンティンが勝ち誇っているな。

『君のことは夢君から聞いている。どうやら迷惑をかけたようだね』

「助かったとだけいっておくよ。で、“義賊”のリーダーさんが何のようだ？　黙認は出来ても共闘は出来ないぞ」

『わかってはいるさ。夢君のことを少しね』

「夢の？」

オレは夢を見た。夢は心配そうにオレを見ている。

『もし、君が夢を捕まえるような真似をしたら、“義賊”は『ＧＦ』

と全面戦争に入る。協力者は以外と多くてね』

そりゃそうだろう。“義賊”なんだから。

オレは小さくため息をついて空を見上げた。

「オレが夢を捕まえるのは夢が犯罪行為をした時だけだ。それ以外ならオレは守る。例え、“義賊”のことだとしても、夢はオレの親友だ」

『なるほどね。君の考えはよくわかったよ。それなら安心だ。話したかったことはこれだけだよ。何か聞きたいことがあるなら』

「ナイトメアについて『GF』が知っている以上のことは」

『それは知らない』

“義賊”がどこまで情報を持っているかはわかった。

オレは少しだけ笑みを浮かべる。

「ありがとう。じゃ、また」

オレは携帯を切ってメグに返した。デバイス内蔵型はかなり高価だが通話することに関してはレヴァンティン単体を使うよりもやりやすい。

“義賊”の言葉を思い出すと、“義賊”が持つナイトメアの情報は『GF』のものよりは知らないらしい。だけど、それはと言ったことから考えて他に何かあるな。

「まあ、これは後々考えて」

「『ＧＦ』が『ＧＦ』の犯罪現場を見たらどうするか知っているか？」

急に響いたその言葉。それにオレは振り返った。そこにいるのはここにはいない人物のはずの人がいた。

オレはレヴァンティンを取り出す。

「実力行使でも止めるように」

「正解だ。周、わかっているよな」

蒼炎が鞘から抜かれる。目の前にいる慧海が笑みを浮かべた。

「さあ、焼き加減を選べ」

第七十九話　共同

目の前にいる善知鳥慧海。その手に握られた蒼炎は蒼い炎を猛々しく上げている。

オレの慧海との通算成績は１２戦１２敗。勝ち目がないという方が正しいくらいの相手だった。

「“義賊”はどういう結果であれ犯罪集団だ。それを庇うということはどういうことかはお前がよくわかっているよな？」

考えろ。この場を切り抜ける最適な手段を。“義賊”との関係を維持しながらこの場を無傷で切り抜ける手段を。

慧海は話はわかるやつだ。だから、手段さえ間違えなければ勝てる。

「ああ、わかっているさ。わかっていても、“義賊”の行動は今の学園都市にとっては有益なものなんでね」

「無益か有益かじゃない。犯罪か犯罪じゃないかだ。お前はそれを理解しているのか？」

「理解しているさ。よく理解している。でもな、今はその犯罪が必要だ。学園都市の膿もナイトメアのことも“義賊”と共にいれば何とかなる」

ここから選択を間違えたら一撃で死ぬな。言うことは頭の中に入ってある。通用しないこともわかっている。最悪の手段も考えている。

だから、今だけはあれを狙うしかない。

「ナイトメアはオレが片をつける」

「出来るのか？　『悪夢の正夢（ナイトメア）』達を倒せるのか？」

「オレがやらないとダメなんだ」

未だに終わっていない。『悪夢の正夢（ナイトメア）』達の『赤のクリスマス』に関係していたことはまだ報告していない。

だから、これを使う。

「『赤のクリスマス』に関係しているからな」

「そんな報告は聞いたことがないぞ？」

「言っていないからな。これは、オレが片をつけないといけない事件だ。だから、お前が何を考えようがオレは“義賊”と手を結ぶ」

慧海はオレを真っ直ぐ見つめてきた。そして、フッと笑みを浮かべて肩をすくめる。

「オレもそんなに言うつもりじゃなかったんだけどな。二人がそんなにラブラブ」

「違うわ！」

思わず叫んでしまった。そして、レヴァンティンの柄から手を放す。

どうやら慧海は元からオレ達をどうこうするつもりはなかったらしい。ただ、オレの覚悟を聞きたかっただけか。

「まあ、お前がこういう時のために手段として残していたのはいいけど、この関係だけは初めて知ったぞ」

「オレと夢の約束だっからな。なっ、夢って、大丈夫か？」

そこには座り込んだ夢の姿があった。どうやら本気で聞いてきた慧海に対して腰を抜かしたらしい。

オレは夢に近づいて手を伸ばすが夢は首を横に振る。

「“義賊”はちょっと問題視されていたからな。まあ、面白い情報と共にゴールデンウイーク休暇で遊びに来てみれば」

慧海が笑みを浮かべている。はっきり言っていらつくのはオレだけだろうか。

「まあ、こっちの用事を簡単に済ますぞ。『悪夢の正夢（ナイトメア）』に関してだ」

「ちょっと待った。夢もいていいのか？　何なら、また別の場所で」

「オレは“義賊”にも話している」

その言葉にオレは頷いた。慧海が手に入れた情報はオレ達だけじゃなく“義賊”にも有益なものだと判断したのか。

夢を見ると、夢は頑張って立ち上がろうとしているがやっぱり立ち

上がれないようだ。

「別に無理して立たなくていいからよく聞け。周もな。今回のナイトメア関連に関してだが、オレ達『ＧＦ』上層部は学園都市に手を出さないことを決定した」

「手を出さないってことは代表の警備だけか？」

「ああ。評議会からの要請だ。まあ、反論するところも見つからなかったから頷いておいた。オレ達は周達に期待しているからな」

普通ならオレはここで変な期待をかけるなというべきところかもしれないが、今回は違った。

どこから要請されたかが気になったからだ。

「評議会から？　それは本当なのか？」

完全に耳を疑う。こういう大きなことに対して第一特務や他の地域部隊を援護に向かわせるように頼むのはいつも評議会だ。

だけど、今回だけはよくわからない。評議会が『ＧＦ』上層部に手を出させないというのがよくわからない。

もし、何かがおきれば責任は必須なのに。

「本当だ。だから、今回は手を出せない。特に、第一特務はな。地域部隊を持ってこれるとは言え第一特務が使えない以上大変というのはお前がよくわかっているだろ？」

「ああ。計画を見直さないとな。評議会の爺共めって、夢に話したのはもしかして」

「第一特務というジョーカーが上手く使えない以上、他の組織に頼るしかないだろ。そこで出て来たのが“義賊”だ」

確かに“義賊”は犯罪はしてもそれは義賊というに相応しいことをする。だけど、行為は犯罪なのだ。

だから、『ＧＦ』からしてみれば忌避する存在だが、こういう状況ではむしろ喜々と使う方がいいだろう。多分、『ＧＦ』上層部でもそうなったんだろうな。

「で、来てみればまさかの密会中。かなりありがたかったな。一応、お前がそれに荷担してないか尋ねたけど」

「あの行動はそういうわけね。まあ、いいけど。夢は大丈夫か？“義賊”が『ＧＦ』と一緒に行動するのは」

「大丈夫、だと思う。リーダーに、尋ねたら、大丈夫。電話、していい？」

「頼む」

夢はデバイス内蔵型の携帯電話を取り出してオレ達に見えないようにアドレスを入力する。その間にオレは慧海と向き直った。

「あのな、夢はか弱い女の子なんだからもう少し手加減しろよ」

「悪い悪い。いや～悪のりって楽しいからさ、思わずやっちゃって。

で、夢ちゃんはお前のハーレムのひと」

オレの拳が慧海の顎を打ち抜いていた。だけど、慧海はピンピンしている。相変わらずの浩平に匹敵する防御力だ。

すかさず拳を鳩尾に叩き込むがやはり慧海はピンピンしている。ここまで来るとかなりムカつくな。

「テレるなって」

「照れるか。それに、夢はクラスメートで友達だ。そういう関係じゃない」

「可愛いのにな」

「それは認める」

入学して早々に抱きしめそうになったのがあるからこんな場所では否定出来ない。

「まあ、これからのことはお前と“義賊”で決めるんだ。オレはちょっくら駐在所の方に情報を渡してくるわ」

「わかった。慧海、評議会の方は頼むな」

「わかってる。任せろ」

慧海はオレに向かって親指を立てるとそのまま跳び上がった。そして、校舎の向こうに落ちていく。

オレは小さくため息をついて振り返った。夢はまだ会話中らしく通話している。

「なあ、レヴァンティン。どこで『赤のクリスマス』のことが漏れたんだろうな」

『おそらくというより十中八九ですがアル・アジフからでしょう。それ以外は考えられませんし』

「だろうな。まあ、言わないように念押しはしなかったから仕方ないか。さてと、これからどうするかだな」

『評議会がまさか動いてくるとは思いませんでした。ですが、これはむしろ良かったのではないでしょうか』

「ああ」

第一特務は代表の護衛にしか動かせない。別の言い方をするなら第一特務だけで代表を護衛すればいいのだ。オレ達は護衛せずに他の地域に回すことが出来る。

つまり、結局は良かったと言える可能性が高い。まあ、警備体制の見直しは必須だけど。

「周君、お願い」

夢が駆け寄ってきて携帯電話を渡してくる。オレはその携帯電話を手に取った。

『まさかこんなに早く連絡が来るとは』

「オレだって意外だ。まさか、評議会が口出ししてくるとは思わなかったからな。まあ、一応の内容は夢から言ったと思うけど」

『ああ。まさか、手を貸して欲しいとはな。『ＧＦ』は人材不足か？』

「面は足りている。だけど、足りていないのは裏の部分だ。これはかりはどうしようもない」

『なるほど』

オレが“義賊”に頼みたいのは面立って動けない部分。つまり、犯罪行為に抵触するようなことだ。

「条件は捕まったとしてもオレ達の名前を出さないなら資金の援助、とは言ってもポケットマネーで動かせる額だが、それと、捕まった際の弁護を約束する」

『条件としてはかなり破格だな。いいのか？』

「頼りにしているからな」

それに関しては事実だ。

あの学園自治政府ですら尻尾を掴めていない“義賊”は戦力にはなる。それはオレも『ＧＦ』上層部と同意見。だから、これに関してはかなりありがたい。

『わかった。連絡役には夢を使うが、夢を第７６移動隊所属には』

「それは無理だ。夢が“義賊”だと知っている人数は少ない。少ないからこそこれは不自然だ。まあ、孝治に弓を教えてもらうとか遊びに来るなら大丈夫だ」

第一、メグを入れたからか第７６移動隊に入りたいという奴は多い。だから、時々志願者が来るのだ。まあ、大抵は音姉が叩きのめして終わるけど。

だから、夢まで入れたら身内びいきとなる。事務担当ならいくらでも歓迎なのにな。

『そうか。なら、仕方ない。“義賊”はこれから動くとする。新たな情報が手に入ったら連絡する』

「頼んだ」

オレは通話を切って夢に携帯返した。夢はそれを受け取る。

「まあ、これからよろしくな」

「うん、よろしく」

そう言って笑った夢の顔はかなり可愛いかった。

第八十話　見舞い（前書き）

ようやく、ようやく八十話です。日常って意外と書けないものですね。後三十話は続ける予定なのに。

第八十話　見舞い

学園都市外にあるとある病院。オレはそこに来ていた。隣には由姫と音姉の姿。

「別に茜の見舞いだからオレ一人で良かったのに」

「そういうわけにはいかないからね。茜ちゃんは私や由姫ちゃんからしても妹なんだから」

オレと茜は一緒に養子に入った。でも、オレも茜も白百合とは言わずに海道の名前を使う。

茜は白百合も使うが自分の名前を名乗る時は必ず海道だ。オレも茜も義母さんや義父さんには本当に感謝しているし、音姉や由姫にも感謝している。だけど、オレ達は海道であることは逃れられない。

海道というのは名門の一族。慧海も海道の家系だし時雨は完全に海道の家にどっぷり漬かっている。それほどまでに有名な一族。

だから、オレは海道を名乗る。もっとも、オレや茜は海道本家から海道の名を名乗らないように一度言われたけれど。

「そう言えば、お兄ちゃんって新しい魔力鉱石を渡したの？」

「渡している。それに、今年になってから新しい治療法を試しているらしいんだ。最近は忙しかったからなかなか行けずにどうなっているかどうか」

病院の中に入る際にオレ達はデバイスの電源を切る。レヴァンティンは切らないけれどちゃんと電波は出さないようにしてくれるからありがたい。

そして、茜の部屋に向かおうと、

「お兄ちゃん、久しぶり」

入口近くにあるたくさんの椅子の一つに茜が座っていた。その隣にいるのは茜の看護を担当している看護士だ。

オレ達は完全に呆気にとられて固まっている。それを見ながら茜はしてやったりという笑顔になって向かってきた。

「本当ならもう少し早く来て欲しかったな。私だって色々待っていたんだよ」

「質問その1。ドッキリ？」

「兄さん、いきなり核心から行きましたね」

「うん、ある意味ドッキリだよ」

朗らかに笑う茜。うん、本物だ。

「オーケー。質問その2。どうしてここに？」

「普通はそれが一番だと私は思うけど」

「お兄ちゃんを驚かせるため。音姉や由姫姉までいるとは思わなか

ったけどね」

まあ、確かにメールじゃ見舞いに行くとしか言わなかったしな。それに、ゴールデンウイーク中は里帰りする奴がいるからメンバーが少しキツいとも書いた。

茜はそれを覚えていたのだろう。

「オーケー。質問その3。どうして立てるんだ？」

「新しい治療法、というより新しいサポートの方法かな。核晶の替わりに人工的な核晶を入れているんだよ。人工的な核晶と言っても魔力鉱石から魔力を補充するタイプだからそんなに長く動けないけどね。最中は四時間かな。それにしても、すごいよね。これって魔術を使っても大丈夫なんだよ。試しに使ってみたけどあまり劣っていなくて良かった。結構、昔の感覚そのまま使えるんだね。まあ、いわゆる魔力ボケに会うから少し辛いけど。訓練しておけばお兄ちゃんと一緒に第７６移動隊って、何で固まっているのかな？」

ちなみに、最中は四時間くらいのところでオレは固まっていた。

新しい治療法は核晶欠損症にとってもっとも有効なもののようだ。一応、理論だけならオレも四年ほど前に提唱したが技術的に不可能だとされた。出来てもほんの数分しか出来ない。

それほどまでに核晶は精密なものなのだが、開発者はよほどの天才……、アリエル・ロワソしかいないな。

「まさか、茜がここまでになったなんて。人工核晶は自然核晶と変わりはないのか？」

「うん。核晶の入れ方も外し方も同じ魔術で可能だよ。えっと、ＡＲって人が作ったらしいすごい技術だよね。このおかげで時間制限はあるけど私も走り回れるんだよ。まあ、長い入院生活だったからか筋力はかなり落ちているけどね。でも、これにしてかれかなり動けるようになったから今は筋トレをしているよ。魔力負荷はまだまだ無理だけど、今なら５０ｍを七秒切れるくらいかな。正確には計ったことはないけどそれくらい。魔術も練習しているからこの技術がもっと発展して一日中歩き回れるようになったら私を第７６移動隊って、何で固まっているのかな？」

「やけに饒舌だよな」

こういう茜を見るのは初めてだ。本当に嬉しいのだろう。こうして走り回ることが出来るのが。

今までの治療法というより延命法の方が近いな。何もしなかったらただ衰弱させるだけなのだから。その延命法は病室自体に魔力を充満させることで核晶が無くても病室内を動き回れるようにするものだ。

ただ、コストがかかりすぎる。だから、それをするのは体が鈍らないように定期的に動く時だけ。それ以外はずっとベッドの上にいるだけだ。

「うん。ようやくだもん。ようやく、私は普通の人に近づいた。普通に走って普通に歩いて普通に魔術が使えるように。お兄ちゃん達のおかげだよ。お兄ちゃん達が必死に私をサポートしてくれた。お金が主だったけどそんなことは関係ない。お兄ちゃんがいてくれたことは本当に何事にも変えられない事実だから。お兄ちゃんがいた

から私達は助かったんだよ。お兄ちゃんがいたから私はここにいる。お兄ちゃんがいるから私は笑っていられる。いつか、私がお兄ちゃんの妹として隣に立ちたいから。お兄ちゃんという天才の隣に」

「そっか。オレも茜がいたからやってこられた。礼を言うよ。ありがとう」

「えへへ、どういたしまして。そうだ、美沙っちがお兄ちゃんに話があるらしいよ。音姉、由姫姉、散歩しよ」

茜がオレの横を抜けて二人の手を取る。二人は一瞬オレと視線を合わせ、そして、歩き出した。

オレは三人を見送ってから看護士の人、名前は小原美沙だったはず。というか、名札に小原って書いてあるし。

「茜ちゃん、本当に嬉しそうだったね。周君も嬉しいよね」

「そりゃ。茜がここまで歩けるなんて考えられなかったから」

「とりあえず、新しい治療法についての説明と、これからのお金について説明するね」

そう言いながら小原さんはポケットからプリントを数枚取り出した。

「今回の治療は茜ちゃんが言ったように人工核晶を使った実験要素が強いものなの。だから、四時間と言っても看護士の目が光る場所にはいてもらわないとダメ」

「帰宅は無理ですね」

海道家は今もなお残っている。多分、埃まみれになっているだろうから近々掃除をしにいかないとな。

いつか、茜と一緒に帰宅出来る日があればいいけど。

「だけど、看護士、基本的には私だけど、私がいる場所ならちゃんと走り回ったり魔術を使ったりしても大丈夫。だから、安心してね」

「久しぶりにあんなに生き生きしている茜を見たような気がします。やっぱり、動けるのと動けないのじゃ心の持ち方が違いますよね」

「そうだね。茜ちゃんは今まで抑圧されていたからそれの反動かもしれない。だけど、いい方向には向かっているから。この治療法が確立されて発展したなら一日中走り回れるのは一年だと言われているし」

それはかなり嬉しい話題だ。あの家に、オレ達の家に帰れる日が近いということになる。あの日からずっと一人でしか帰ったことのなかったあの家に。

「これからお金の話になるけどいい？」

「はい」

小原さんがオレにプリントを渡してくる。そこに書かれているのは様々な必要経費の表だ。個室だからかなり高いのと最新鋭の設備を使うため値段はかなりする。一ヶ月３５０万円。

だけど、この値段は完全に予想外だ。考えていた以上の数値でもあ

る。

「安いですね」

旧治療法は月々６００万くらいかかったことを考えればかなり安い。

「魔力鉱石の必要数が少なくなったから。リハビリのために魔力を部屋に充満させるのと人工核晶に魔力を入れるのとじゃ必要数は十分の一。今までのようなやり方も出来るから魔力鉱石が少ないの。それに、実験要素もあるから値段は安くしているだけ」

「でも、少しはありがたいですね。これくらいなら余裕なので」

「言うと思った。茜ちゃんは本当に愛されているよね、お兄ちゃんに」

オレ達は外で楽しそうに談笑している三人を見た。あんな笑顔を見たのはいつ以来だろう。

そうだ。あの笑顔は確か、『赤のクリスマス』の時のあのオレが助かったことに笑みを浮かべた茜の、

「っく」

視界が微かに揺れる。今、頭の中に何かが映った。ローブ？　わからない。わからないけれど、あれは、一体何。

「大丈夫？」

顔を上げるといつの間にか小原さんの顔が近くにあった。オレは頷

きながら小さく息を吸う。

「ちょっと、思い出して。他に何かありますか？」

「ないかな。周君、茜ちゃんのところに行きたいんでしょ」

「ええ、まあ」

オレは少し苦笑しながら言う。確かにそうだ。そうなのだが、思い出さないといけない気がする。だから、何かを思い出すために茜の側にいたい。

利用するようで嫌な気分になるけど。

「何かあったら連絡すること。魔力補充は鉱石が無くても直接入れられるから」

「わかりました。ありがとうございます」

オレは小原さんに頭を下げて歩き出した。茜のところに向かって。

第八十一話　海道家の周（前書き）

タイトルについて意味が不明かもしれません。これについては後々語っていきますが、一応はある意味『悪夢の正夢（ナイトメア）』達の正体のヒントでもあります。

というか、最初考えていた話と大幅に違うことになったんですよね。日にちを開けたからでしょうか。

第八十一話　海道家の周

普通であることは難しいとは思う。それは普通というものがどういうものか理解出来ないのもあるが、オレみたいな普通とはほど遠い道を歩んでいたら普通がわからない。

昔から強くなろうとした。大人であろうとした。それは『赤のクリスマス』を起こさせないためとは言っても結局はお金のためだったかもしれない。

茜のためにお金を稼がないといけなかったから。

でも、今の茜は本当に幸せそうだ。普通であることが出来なかった。満足に歩き回ることが出来なかった茜だからこそ、満足に走り回れる今の状態は本当に幸せなのだろう。

「お兄ちゃん、嬉しそう」

ベンチで一緒に座る由姫が嬉しそうに語ってくる。ちなみに、茜は音姉と追いかけっこをしていた。ただ、音姉が本気で逃げ回っているので茜がひたすら追いかける形だ。

音姉って意外と負けず嫌いだからな。茜も負けず嫌いだけど。

「そりゃな。オレのせいで茜は核晶欠損症になったんだ。元気に動き回ってくれるなら、それだけで十分に幸せだ」

「そうだったね。でも、茜ちゃんがここまで元気になるなんて」

「オレもすごく意外だ。やっぱり、天才のアリエル・ロワソにはかなわないな」

あいつは桁が違う。『ＥＳ』というのはあいつ動かしていると言っても過言ではない。戦闘能力はもちろん生体兵器を開発する頭脳。そして、人工核晶。

オレも機関関連で天才と呼ばれているし、その自負も多少なりともあるけれどさすがに、アリエル・ロワソには勝てない。

あいつは天才の中の天才。世界で一番天才の枠の上にいる男だろう。

「お兄ちゃんって昔ほどアリエル・ロワソのことを悪く言わなくなったよね。どうして？」

「あいつも、世界について考えているからな。今まで戦って奴らもそうだ。エレノア達がいた魔界貴族派。真柴と結城。アリエル・ロワソだって、法律から見たら犯罪者だ。真柴と結城なんて価値のないものの排斥。でも、それは世界から見たら正しいことなのかもしれない」

法律によって犯罪者を捕まえて世界が滅ぶより、犯罪を逃して世界を救う方が指示する人は多いだろう。だけど、世界はそれを信じない。自分達が考えるよりよい方向に向かおうと互いが動いている。

世界を救うとするなら過激に動かないと無理なのだ。それも、極論のレベルで。

「お兄ちゃんは考えたんじゃないの？　どうすれば世界を救えるのかを」

「考えたというより策を考えたしかないな。だけど、未来を知る人によって変わっていく世界は結局はその未来に繋がっているんだ」

「えっと、どういうこと？」

由姫は首を傾げる。今の説明で理解された方が困るけれど。

「要するに、どれだけ世界が動こうとも、過激な行動をとろうとも、それに反対する勢力、まあ、オレ達『ＧＦ』だろうな。それによって鎮圧されていたら結局は同じ未来に繋がっていくんだ」

「つまり、どういうこと？」

「だから、慧海や時雨は警戒している。『赤のクリスマス』以上に世界を変える事件が起きる可能性があるからな。それに、本当に未来を変えるつもりなら何かを起こさないといけない」

そうしなければ世界は変わらない。変えられない。ただ、事実を知らせただけでは人は信じないだろう。だから、それが起きることを示す事件が必要だ。

世界をどう救うか。それが問題になってくる。どうやって事実を知らせるかが問題になってくる。だからこその事件だ。

「『悪夢の正夢（ナイトメア）』の奴らも結局は世界を変えるために何かを起こすかもしれない。オレ達はただ、後手に回るしかないんだ」

「大変なんだね」

「他人事のように言わないでくれよ。大体、世界をどうこう変えようかだなんて」

ちょっと待て。考えてみろ。『赤のクリスマス』以降に何が変わった？　世界の軍事力？　『ＥＳ』の動き？　一番変わったのは『ＧＦ』だ。

あの日、親父やお袋は若手メンバーで集まるパーティーに参加していた。若手と言っても二十代から三十代の主戦力メンバーだ。そこには楓や中村の両親もいた。

だけど、『赤のクリスマス』によってそのメンバーが全滅。『ＧＦ』の戦力が一時的に下がり、それにより各地で治安が悪化。オレ達みたいな子供でも活躍出来る戦場が出来上がったんじゃないか？

『赤のクリスマス』ではっきり変わった。変わったけど、世界を救うためなら逆効果だ。主戦力メンバーだからこそ滅びに対抗するために必要なはずだ。

なのに、狙った。つまり、それは、

「生きた証拠を隠すなら絶望的な状況での行方不明か」

繋がっていく。頭の中でとある推論が繋がっていく。それが真実なら今までのことはありえる。全ての事象を統合しても納得は出来る。

だけど、それは今の『ＧＦ』の体制を根本的から破壊しかねないものだしそれによって第７６移動隊も被害を受ける。

「お兄ちゃん、どうかしたの？」

「何でもない」

これは話さない方がいい。確信に至るまで話さない方がいい。

今、この状況で由姫を危険な目に合わせない方がいい。調べるのはオレ一人だ。

「ちょっと、慧海と連絡を取ってくる。すぐに戻ってくるから由姫はそこにいてくれ」

「う、うん」

由姫は心配そうな顔で見送る。長い付き合いだから何かあるのはわかっただろう。だけど、それを聞かないでくれるのは本当にありがたい。

話せるなら話したいのだけど。

オレは早足でその場を立ち去りながらレヴァンティンを取り出す。これはレヴァンティンに調べてもらわないといけない。

『マスター、私に何を頼むつもりですか？』

「気づくか？」

『当たり前です。どれだけの付き合いだと思っているんですか？』

その言葉にオレは苦笑してしまう。レヴァンティンとは本当に長い付き合いだし最高のパートナーだ。だから、こういうことを頼むこ

とが出来る。

「今から言うことを調べてもらえるか？」

オレはレヴァンティンに向かって口を開いた。

『正気ですか？』

言い終わったオレにレヴァンティンが言葉を返してくる。まあ、この反応は予想していたから仕方ない。

だけど、実際に言われてみると結構傷つくんだよな。

「正気だ。ありえない話じゃないだろ」

『そうですね。確かにありえないことはない話ではありますが、私からすればきの頭文字がつくか疑いますね』

「むしろ、そんな隠され方をされたらかなり気になるからな」

オレは小さくため息をついた。そして、レヴァンティンをポケットに戻す。

「ともかく頼む。今回は当たって欲しくはないけれど、もし当たった場合のことを考えないといけない」

『最悪は自分の身を滅ぼす方法になりますよ』

そうなることはわかっている。もし、そうだとしたならオレや茜は確実に誹謗中傷の的になる。

それがわかっていたとしても、いや、わかっているからこそ、この手で終わらさないとダメなんだ。

それが、あの日からずっと続いている海道の名を持つオレの役割だとわかるから。

「自分の身を滅ぼしてでも、オレは『悪夢の正夢（ナイトメア）』達を止めないといけないんだ。誹謗中傷なら慣れているさ。海道家にいた頃からな」

あの頃と比べたら遥かに天国だ。あの時のオレの評価は海道家の役立たず、はまだ軽い方で、一部では生ける屍とも言われた。

魔界の一部に存在するアンデットの一族は魔術が使えないからそれの引用だろうが、改めて考えてみると本当にすごい呼ばれ方だよな。

「だからこそ、オレは断ち切ってみせる。オレがやらないといけない役割なら進んでこの身を晒してやるさ。そして、この世界を救ってやる。それだけの覚悟を決めなけりゃ」

オレは歩き出した。茜達がいる場所に向かって。

「『悪夢の正夢（ナイトメア）』達と戦うことは出来ない」

第八十一話　海道家の周（後書き）

今月は全アクセス記録が全てにおいて自己最高の記録を出しました。有名な人と比べたら些細な数字ではありますが、読んでくださる皆さん、ありがとうございます。

学生にとって進級のかかる大事なものの最中にむしろペースを上げたりもする無謀な挑戦をしていました。自分でも馬鹿だと思いますが。

来月は他の作品も進めて行くのでこれのペースは遅くなる予定で行こうと思っていますが、予定は未定です。

第八十二話　海道家

「今日は疲れたね」

病室に夕日が差し込む。オレと茜の二人はその夕日を見つめていた。

由姫や音姉はすでに帰り、今は二人っきり。お願いしたのだ。二人っきりになれるように。

「まあ、お前が走り回れたことにはかなり驚いたけどな」

「えへへ。みんなに口封じ、違った。黙ってもらっていたからね」

そう言いながら茜が朗らかに笑う。

今、茜が使っている人工核晶はベッドの上で静かにする用で時間は約16時間持つらしい。ただし、走り回るのは厳禁。日常生活もまだまだ難しい。

「魔術の練習をしているんだな」

「うん。ほら、私って魔術に才能があったからさ。お兄ちゃんが嫉妬するくらい」

「ああ。本当に羨ましかった。茜だけが見られ、オレはまるで路傍の石ころだったのが本当に悔しかった」

「今じゃ立場が逆転しているけどね」

茜はそう笑うがオレの顔は暗い。絶対に茜はオレのことを嫉妬していると思ったからだ。

それに、オレの核晶は茜の核晶。嫉妬しない方がおかしい。

「お兄ちゃんの活躍はよく耳にするよ。ルーチェ・ディエバイトの決勝だって病院のみんなで観戦したんだから」

「そう言ってくれるとありがたいな。まあ、あれは由姫が優勝したからオレも出たいと思ったわけだし」

「由姫姉は本当にすごかったよね。お兄ちゃんよりも遥かに」

「実際、史上最高の大会だったって言われているくらいだしな」

由姫とアルト、そして、リコという現在第一特務にいる二人との壮絶な戦い。本当に見事だった。

「茜は、人工核晶がさらに開発されて一日中動き回れるようになったなら、『ＧＦ』に入るつもりか？」

「うん。実際、もうすぐ新しい人工核晶を使う予定だからね。拒絶反応が無ければ八時間くらいになるし」

「どうして？　今の茜じゃ完全に足手まといだ。出番なんて」

「『悪夢の正夢（ナイトメア）』」

その言葉にオレは言葉を止めていた。

「慧海さんから聞いたよ。今のお兄ちゃんは『悪夢の正夢（ナイトメア）』と『現実回避（エスケープ）』と戦っているって。『悪夢の正夢（ナイトメア）』も『現実回避（エスケープ）』もお父さんとお母さんが使っていたレアスキルってことも。もしかして、二人が」

「ない」

オレは首を横に振る。

「あの日に、オレ達は失ったんだ。親父もお袋も」

「そうだね。だけど、偶然なのかな？　お父さんやお母さんと同じレアスキルを持った人が『赤のクリスマス』を起こしたってことが」

「それ、誰から聞いた？」

オレは一言も言ってないぞ。

「慧海さん。お兄ちゃんは絶対言わないからって教えてくれた。お兄ちゃんは復讐でもするつもり？」

「いや、違うな」

オレは首を横に振る。復讐するつもりなんて全くない。

「確かに、復讐について考えたことはあるさ。だけど、オレは『GF』だ。『GF』の第７６移動隊の学園都市での役目は学園都市を守ること。それに」

オレは目の前で拳を握りしめる。

「オレは守りたいんだ。守らなければならないじゃない。世界を知ったからでもない。オレはただ純粋に、みんなを、仲間を失いたくない。そのためなら本気のオレだって見せてやる」

まあ、今の状態での本気は本気にすらならないと思うけど。

「オレはオレだ。復讐なんて関係ない。オレはオレの自己中心的な考えで進む。その前に障害があるならどうにかする。それだけだ」

オレと茜じゃ見ているものが違う。

茜は未だに『赤のクリスマス』前を見ている。だけど、今のオレは遥か未来、新たな未来を求めている。

だがら、この気持ちは茜にもわからないだろう。

「それが、どうしようもない未来でも？」

茜の一言に次の言葉を話そうとしたオレの口は完全に固まった。茜は真っ直ぐオレを見ている。

「今のままでは世界の滅びは避けられないとわかっていても？」

「茜、お前」

「知っているよ。近い未来に世界が滅びるのを。姫ちゃんが教えてくれた。海道家はそれに対して動いているって」

茜が姫ちゃんというのは茜と同い年の海道姫子だ。海道家の中で最

も位が高い宗家一族であり、茜には及ばないもののオレからすれば遥かに強い女の子だった。

確か、学園都市にいるらしいが詳しいことは知らない。

「つまり、時雨のバックアップか？」

「ううん。お爺ちゃんのバックアップじゃなくて独自に動いているみたい。姫ちゃんは今は海道家とは少し離れているからわからないらしいけど、何か不穏な動きだって」

海道姫子には苦々しい記憶しかない。言うなら、ガキ大将。

まあ、『赤のクリスマス』より以前の話だけどな。今は会っていないからわからない。

「少し不安なんだよ。お兄ちゃんが無理をしないか。あの、海道家まで動いているのに」

海道家が動くということは里宮家も動いているだろう。その二つは面白いくらいに犬猿の仲だ。だけど、不安になる材料はそれだけじゃないだろう。

「茜は、海道家に戻らされるかもしれないのが心配か？」

「うん。私は、海道家が嫌い」

「そんなことを言うなよ、マイハニー」

その言葉にオレは振り返りながらレヴァンティンをポケットから取

り出していた。レヴァンティンがすぐさま反応して手の中に剣が収まる。

振り返った先にいるのは開きだしたドアと笑みを浮かべる男。オレはこいつを知っている。海道姫子の取り巻きの一人だ。

「久しぶりだな『能無し』。今は『簒奪者』と言った方がいいか？」

「てめぇ」

「昔よく遊んでやったのにそんな口を聞くとは。泥棒の躾がなっていないな」

「名前、何だっけ？」

オレの言葉に男がずっこけた。まあ、そうだろう。覚えているだろうと思っていたのに覚えていなかったらこれくらいの反応はする。

「貴様、分家の分際で宗家の名を知らないというのか？」

「宗家？　ああ、役立たず一族の」

ちなみにこれは実際に言われている。海道家の分家は『ＧＦ』での活躍が目覚ましいが、本家は権力にしがみついた犬であると。

実際に、本家がしゃしゃり出てくるのは時雨が何か大きいことをした後にテレビで、

『さすが海道の名を持つ分家。宗家のために頑張ってくれている』

と言うからだ。だから、海道家宗家は役立たず一族と笑われている。

「誰が名前を覚えるかよ」

「貴様！　宗家をバカにして生きていられるとでも」

「天誅！」

その言葉と共に男の後ろから足が蹴り上げられた。もちろん、股を。

思わず押さえてしまうのは仕方ないだろう。実際な男のように悶絶しているだろうし。

「このクズムシ。茜がマイハニーだったのは十年前までだろうが。クズムシ自身が破棄したくせに茜が走り回れるようになったと聞けば戻すつもりだったのか？　一度死んでまた死ね！」

あまりのことにオレはレヴァンティンを持ったまま動けない。

前にいるのはピンクのリボンで髪をサイドテールにした少女。ただ、どっかで見たことがある。

服装は総付高のセーラー服。

「茜！　久しぶり！　ところで、このサナダムシは誰？」

「いきなりサナダムシって酷いな」

「まあ、剣はあのクズムシがノックもせずに部屋の言葉を盗み聞きしているから２０００歩進んでいいとして」

進むんだな。下がるじゃなくて。

「茜の病室に男がいることがおかしいの。男の毒牙から茜を守る。それが私の使命だから」

「レズか」

「バイよ。特に茜は可愛くて可愛くて、お持ち帰りしたいくらい」

「気持ちはわかるが少し落ち着け」

というか、こいつは本当に誰だ？　多分、海道家の関係者だろう。じゃなければ宗家を名乗る男をゴミムシなんて言わない。

だとすると、一体誰だ？

オレはレヴァンティンを鞘に収めた。

「で、あんたは誰だ？」

「聞いて驚きなさい。私の名前は海道姫子。宗家トップよ」

「はぁ？」

オレは思わずそう言っていた。だって、海道姫子はオレの一つ年下なのに宗家トップってありえない。

「畏れ敬いひれ伏しなさい！」

海道姫子はオレを指差しながらそう言ってきた。

第八十三話　海道姫子（前書き）

ゴミムシサナダムシ言いますが普通に良い子です。

第八十三話　海道姫子

オレは完全に固まっていた。だって、本当に久しぶりに会った元ガキ大将はまさに可愛い女の子に変わっていたからだ。

ただ、性格は変わっておらずいきなりひれ伏しなさいかよ。

オレは小さくため息をつく。

「バカ？」

「むかっ。バカって何よ。あんたは茜の何なのよ！」

「兄だけど？」

もしかして、わざとじゃなくて完全に気づいていなかった？

海道姫子がオレを指差したままぎこちなく首を茜の方に向ける。

「本当に？」

「うん。お兄ちゃんだけ」

「すみませんごめんなさい生きててすみません、『ＧＦ』移動課第一部隊第７６移動隊隊長海道周様！」

見事なジャンピング土下座にオレの顔が引きつるのがわかった。

いきなりサナダムシと呼ばれたと思えば今度は様を付けられた。全

く持って意味がわからない。

「まあ、性格は変わっていないみたいだけど」

「だよね。姫ちゃんは学校で猫かぶっているらしいけどぶっちゃけキモイよね」

茜は満面の笑みで言うと海道姫子は真っ白に燃え尽きていた。

まあ、バイを宣言しておきながら茜にキモイと言われたなら立ち直れないだろうな。多分、茜のことが好きだろうし。

オレは苦笑しながら頷く。

「オレの中じゃイメージは変わっていないからな。昔は立派なガキ大将だったし」

「どうせ私なんて性悪女ですよーだ。それはいいとして、何で周がここにいるのよ」

「いたらダメなのか？」

妹の病室にいるだけでとやかく言われるとは思わなかった。

「ここは禁断の乙女の園。私と茜だけの世界だから」

「はいはい、ワロスワロス。姫ちゃんって相変わらずだよね」

「ワロス？　今の会話に魔物の名前がどう関係するんだ？」

ワロス。

妖精族（ピクシー）の一種。嫌がらせをする妖精（ピクシー）で基本的に糞尿を投げつけてくる。全長は平均１０ｃｍ。

茜からしたら禁断の園が嫌がらせだと思ったのか？

「それは置いといて、男は帰れ。今から女だけの酒池肉林が始まるから」

「おいおい、マイハニーが困って、ごふっ」

復活した男の鳩尾に海道姫子のつま先が食い込み吹き飛ばす。

海道姫子はそれに見向きもせずに小さく息を吐いた。

「はぁ、そういうわけだから出て行って」

「誰が出て行くか。というか、宗家トップってどういう意味だ？宗家はお前みたいな若い奴が動かせるほど簡単な軍団じゃないだろ」

「少し黙って。今日来たのはこのことを茜に伝えるためなの。『ＧＦ』移動課第一部隊第７６移動隊隊長海道周様にはまた後で話すから」

「いや、ここで聞く」

オレは小さくため息をついて海道姫子に椅子を差し出した。そして、オレはベッドに腰掛ける。茜も起き上がってオレの横まで移動した。

「君の言っていることが正しいなら、海道家で何かが起きていることになる。分家として見過ごせない」

「はぁ、わかった。一回しか言わないからよく聞いてね。海道家宗家のほとんどが分家との縁を切った」

その言葉をオレは信じることが出来なかった。宗家と言えば役立たず一族と呼ばれるくらいで分家がいなければ何も出来ないし知名度も上がらない。

だけど、その宗家が分家と縁を切るなんて並みのことじゃない。

「残ったのはゴミムシと私だけ。私は茜が心配だったからだし、ゴミムシはただ茜と一方的に婚約者気取りなだけ。だけど、この意味がわかる？」

「今の分家を束ねる海道家宗家は力がない」

「そう。私は確かに魔術が得意。だけど、それは学生で見たらのレベル。『ＧＦ』移動課第一部隊第７６移動隊隊長海道周や茜と違って強力な魔術が使えない。対する分家にはたくさんいる。『ＧＦ』で活躍する人が」

確かにそうだ。海道家は宗家よりも分家の力が強い。その理由は宗家筋のオレと茜のおばあちゃんが時雨と結婚したからなんだけどな。

宗家筋は宗家筋と結婚するという掟を無視した結果、分家が時雨について行くということに。権力構造的には宗家と時雨という奇妙な状態になっている。

宗家は弱い。ただ、海道姫子は弱いわけじゃない。だけど、飛び抜けて強いわけでもない。

「だから、茜に海道家分家を従えて欲しい。分家の中で最も宗家筋に近い二人なら大丈夫だから」

「その意味ならわかるが、どうして茜なんだ？　というか、急に」

「急にじゃないよ。お兄ちゃんは海道家の中で一番海道家からほど遠い位置にいるから。それに、お兄ちゃんじゃダメなんだよ」

「『能無し』、『簒奪者』に海道家を任せられ、ぐばっ」

海道姫子のつま先が顎を蹴り飛ばす。とりあえず、口は災いの元を表しているような光景だ。

「『ＧＦ』移動課第一部隊第７６移動隊隊長海道周は海道家にいた頃は力がなかった。海道家は私が言うのもなんだけど、変にプライドがあるから。それに、海道周は海道家じゃないという見方もある」

「それは君の見方だろ」

「そう。第７６移動隊の話はよく聞いているし、生徒会を通じて話を通してもらおうとしていたから。海道家じゃない第三勢力として」

「なるほどね。だから、あんな土下座か」

第７６移動隊のネームバリューは極めて高い。第一特務と対等に渡り合えたり世界でもトップクラスが集まっていたり唯一の強襲空母を保有する部隊だ。

機動性と戦闘能力の二つを見れば世界トップと言っても過言ではない。

「海道家に今の争いを止める手段はない。元々、宗家と分家の仲が悪かったから。私が例外かな。海道家にいた周を除いて出来るだけ平等に接していたし。まあ、それでも宗家だからという反対意見もある」

「今は宗家ＶＳ分家だからな」

だから、分家は分家の代表を出したいのだろう。だから、茜の名前が挙がった。

茜なら分家でもあるし、あの『ＧＦ』最強の魔術師と呼ばれた海道駿の娘で天才的な才能を持った人物。

おまけを付けるなら第７６移動隊隊長の兄がいるってこともある。

「だから、私は茜に分家トップになって欲しい。もちろん、無茶なお願いだとわかっているから最悪はゴミクズ集団から選ぶけど」

「君がそのまますることは？」

「私に才能がない。力も言葉も何もかも」

確かに、力も言葉も何もかもないかもしれない。だけど、それがなくても海道姫子にはとあるものがあると思っている。

「なら、君が思い描く未来は？」

「未来？」

「そう。君が思い描く新たな未来は？」

オレの言葉に海道姫子が悩む。未来という位置づけは本当に難しいものだが、目的があるとなしじゃ大きく変わってくる。

その思い描く新たな未来がどのようなものなのか。多分、こいつならオレが想像する答えを言ってくれる。

「私は、喧嘩のない海道家がいい。宗家や分家なんて関係ない。私は、宗家や分家が隔たりなく仲良く出来るものが見て見たい」

その言葉にオレと茜は笑みを浮かべていた。オレ達だけじゃない。宗家の男も笑みを浮かべている。

そう言えば、こいつって宗家宗家言うけど本質的には分家よりの宗家の一人なんだよな。茜をマイハニーと呼ぶ腐れ外道だけど。

海道姫子が追い求める未来は難しい。だけど、それを思い描けるなら十分。

「お兄ちゃん、セリフを奪うね」

「オレは何も言ってないぞ」

茜も同じだろうな。

「姫ちゃん。私は姫ちゃんの代わりにはならない。姫ちゃんが一番

適任だから」

「適任って、私はそんなに強くもないし」

「強さが全てなら糞くらえだよね」

茜がオレを見ながら言ってくる。

確かに、オレは強くない。一般的に見れば強いかもしれないが、平均的に全てがそこそこ高いだけで実力はかなりたかが知れている。

だけど、仲間がいる時にオレは最大の力を発揮する。

「強さなんていらないよ。だって、弱くてもみんなが手助けするから。お兄ちゃん、私の代わりに姫ちゃんを助けてもらえる？」

「最初からそのつもりだ。それに、オレは海道は捨てたが法律上は一応海道家なんでな」

名前って便利だよな。

「ありがとう、二人共。私が無理な場合は、茜か周のどちらかに任せる。ちゃんと、最後までサポートするから」

「よろしくな。ところで、分家の会合はあるんだろ？　それ、いつにする？」

「今日」

その言葉にオレと茜は目を見合わせて小さく息を吐いた。

海道家と離れていたことにここまでデメリットがあったなんて。

「まあ、オレは一日中休暇だからいいけど、一応、あいつも連れて行くか」

オレは連れて行く奴の名前を思い浮かべて小さくため息をついた。

第八十四話　プライド（前書き）

海道家の話は少し続きます。後に意味を持たせれるか少し疑問がありますが。

第八十四話　プライド

本当なら音姉や孝治を連れて行きたいところだったが、隊長が学園都市からいなくなる以上、それは無理。

で、残る候補は由姫、亜紗、都。他の面々はカップルやらいないやら用事があるやらで無理だった。まあ、仕方ないけれど。

だから、オレはこいつを選んだ。

『周さんと逃避行。周さんと逃避行。周さんと逃避行。周さんと逃避行。周さんと逃避行』

同じ文字がひたすらスケッチブックに踊っているからかなり怖い。

オレは亜紗の横で電車に揺られながら小さくため息をついた。

「あのな、今回は遊びじゃないんだぞ」

『わかってる。でも、二人っきりで学園都市外を出かけるのは本当に久しぶりだから』

確かにそうだ。確かにこれは久しぶりだ。どれくらい久しぶりかと言うと二年前の任務は、ちょっと違うか。えっと、えっと、えっと、

「狭間市以来？」

『うん。本当に久しぶり。でも、どうして私を選んだの？　絶対由姫の方が適任なのに』

「海道は白百合とよく似た場所なんだ。だから、あまりあいつのトラウマを再発させたくない」

白百合は本当に由姫にとってトラウマだからな。オレ達一家だけが由姫にとって安心出来る白百合家だ。

『都は？』

「交渉役は二人もいらないからな」

それに、都は屋外戦の訓練はよくしているが、屋内戦の訓練はあまりしない。あまり出来ないのと都のスタイルが屋内戦には全く適さないだけだ。

だから、屋内戦の訓練をしっかりやっていて、息を合わせられる奴でもある亜紗を選んだ。ただ、それだけだ。

『なるほど。それにしても、かなりいきなりだと思うけど』

「海道から離れていたからな。情報は全く入って来ないし、それに、時雨からも話されていないし」

おそらく、時雨はわかって言わなかったのだろう。海道家宗家のいざこざには興味ないはずだし。

オレからすればかなり怪しいけどな。宗家が分家と別れるなんてよほどのことがなければ不可能だ。

「まあ、ここで海道家に恩を売っておくというのも悪くはない。亜

紗は海道家についていろいろ知っているよな」

『うん。神の子孫と呼ばれていて、里宮、園宮、白百合に並ぶ四大名家。今は白百合は没落したけど、海道家は日本を裏から牛耳っているといわれている』

「正解。まあ、海道家を助けるにはそういうメリットもあるんだよ」

『も？』

亜紗が不思議そうに首を傾げる。

そう、メリットもある。そういうメリットも考えてオレは判断したんだ。

「ああ。まあ、それはおいおい話すとして、まさか、海道家の会合に巻き込まれるとはな」

『周さんは初めてなんだ』

「そりゃな。大体、オレは海道家から嫌われているんだ。今は現トップの海道姫子の味方をするために向かっているけど、実際は生きたくもないさ」

『次は、海道、海道』

電車のアナウンスが流れる。海道の名の土地にいるから海道じゃない。海道家があるから海道という名前の土地なのだ。

オレは軽く肩をすくめて立ち上がった。

「頼むぜ、オレの護衛」

『任されました』

使用人から変な目で見られながらとある部屋に通される。

玄関からここまで１０分ほどかかって。

どこまで大きい自宅なんだよって話だ。

部屋の中にいたのは総付高のセーラー服を着た海道姫子。宗家の男の姿は見当たらない。

「なんでスーツ、ああ、都島高校」

「やっぱり有名なんだな。とりあえず、第７６移動隊の田中亜紗。今回の護衛だ」

「そう。一応、海道周のことは護衛として知らせているけど、本当のことを知ったら怒るだろうな」

「怒るですむか？」

「すまないかな。でも、護衛役だから大丈夫だと思うけど」

ここに来るまでの間、時雨に尋ねて調べたのだが、会合では宗家は護衛役を二人出せる。だから、オレと亜紗の二人で問題は全くないはずだ。

だけど、基本的には護衛役は海道家の関係者。普通なら大丈夫だが、オレは嫌われているからな。

「まあ、サナダムシなりに期待はしている。海道周が噂通りの人物なら大丈夫よ。さて、作戦会議と行きましょうか」

「会合の中身だろ？　オレの考えを言うなら会合は分家側からの提案。宗家の大量離脱に伴い分家代表組、時雨以外が会合を迫った。目的は現海道家の行く末が表で、実際は海道家をどの分家が支配するか。抑圧されていた以上、もう力のない宗家には従う義理も理由もない。こんなものか？」

「エスパー？」

海道姫子が頬を引きつらせている。まあ、ほとんど事情を知らないオレが当てるのは一種の恐怖だろう。だけど、これはある意味利点だ。

「私はただ、海道家の宗家として今の海道家で無用な戦いをさせないこと。それが一番だと思っている。だから、海道家が落ち着いたらトップから降りるつもり。私よりも適任は多いしね」

「宗家としての使命か？　まあ、確かに、今、どこかの分家が指揮を執れば混乱しかねない。だけど、それをすれば学園生活から遠ざかるぞ」

「大丈夫。休学届けを出したから。来年はサナダムシと同じかもね」

「学校自体が違うだろ。それと、サナダムシは止めてくれよ」

「大丈夫。みんなの前ではしないから」

まあ、みんなの前でされたならあらぬ関係を疑われそうな気もするけどな。

すると、ドアがノックされる。

「姫子様、そろそろお時間でございます」

「わかりました。周、亜紗。行くわよ」

「了解」

『はい』

オレ達は部屋の外に出る。外にいたのは使用人と屈強な男が二人。なるほどね。

「姫子様、行きましょう」

屈強な男の一人が一歩前に出る。海道姫子はそれに対して眉をひそめた。

「あなた達は？」

「姫子様の護衛役でございます」

「間に合っています。護衛役はこの二人」

「いえ、護衛役は海道家縁のものでなければ」

「『ＧＦ』移動課第一部隊第７６移動隊隊長海道周。あんたらの言いたいことはわかるけど、下がれ。不相応だ」

オレは一歩前に踏み出しながら言った。二人の男は睨みつけてくる。

「護衛役は私達で十分」

「不相応だと言ったろ」

オレはレヴァンティンを突きつける。亜紗はもう一人に七天失星を突きつけていた。

「そんな実力で宗家代表を守ろうと言うなんて百年早い。出直せ」

「この、ガキ」

「武器を下ろしなさい」

海道姫子の言葉にオレ達は武器を下ろした。

「あなた達のどちらか一人と海道周の二人を護衛とします。亜紗さんは別室待機を」

オレはレヴァンティンを戻して握りしめた。ポケットに戻したわけではなく握りしめる。

亜紗も七天失星を鞘に収め、鞘ごと七天失星を虚空の中に戻してデバイスを握りしめる。

オレはそれを確認して亜紗に話しかけた。

別室での待機は距離があるなら風王具現化の準備を。近いなら矛神をいつでも抜刀出来る状況で。

『わかった。周さんも気をつけて』

遠近両方で戦える亜紗が控えてくれるだけでかなりありがたいからな。オレは小さく頷いて海道姫子を見る。

「行きましょう。会合の場に」

オレは歩き出した。歩き出しながら横を歩く屈強な男を見た。

鍛えられた筋肉とごつごつした拳。魔術無し、武器無しなら多分、勝てない。喧嘩なれはしているし、魔術の使い慣れているだろう。

海道家の関係者というより、海道組の関係者だな。

ついに分家はプライドすらも捨ててきたか。

海道姫子の前を歩く使用人がドアを開ける。そこにある光景を見た瞬間、オレは思わず唾を飲み込んでいた。

一列に並んだ机の両方に縦に向かって向かい合うようにして座る海道家分家。時雨の姿はないが、遠縁の海道家の一員の姿はある。

その後ろに控えているのは護衛役が一人。ただし、有名無名はわからない。

海道姫子は机の横に置かれた椅子に座って。オレは左、屈強な男は右に座る。

「全員が揃っていますね。では、これより海道家の会合を始めます。暫定的に会合を仕切るのは私、海道家宗家代表の海道姫子」

「別にあなたが会合を仕切らなくてもいいんじゃない？」

海道姫子の近くにいた丸々と太ったおばさんが言う。

いきなり攻めて来たか。だけど、海道姫子も一応の策は取っている。

「暫定と言いました。今の会合で決めるのはこれからの海道家について。宗家の大半が抜けた以上、宗家の残りである私達だけでは海道家を動かすことは出来ません。ですから、今は暫定です。この会合を動かす役目を今までの伝統を今回で最後としてやらせていただきます」

「宗家のプライドを捨てたか」

場に響く小さな声。だけど、静まっていたからかやけに大きく聞こえた。

その言葉に海道姫子が笑みを浮かべる。

「プライド？　そんなものは犬にあげればよろしいのでは？」

その言葉に怒気が膨れ上がったのがわかった。プライドを全否定ということはこれからの相手の工程が大きく変わったのが意味するからだ。

相手の考えは予想通りに、だけど、海道姫子の考えは予想以上の結果を出す。

「この場にプライドは必要ありません。この会合は海道家の行く末を決める大事なものです。この場にプライドが必要だと言うなら出て行きなさい。考えなくてはいけないのは個人のプライドではなく海道家の行く末。その事をお考えください」

宗家はプライドの塊。出席者の大半はそう思っているだろう。だから、宗家の誇りについて攻めようとしたに違いない。

だけど、それは海道姫子が全面否定した。後は、海道姫子がどこまで定められた盤上のゲームをどこまでひっくり返せるか。こればかりは口出し出来ない。どこまで賛同者が得られるかわからないが、最悪の想定だけは考えておく。

会合はこれからだ。

第八十五話　会合

話は進む。

最初は海道姫子からの宗家についての話だった。

急に離脱した真意はわからず、宗家の一員として分家を混乱させた責任があると述べると、一部の人から責任があるなら海道家を辞めろという言葉が飛び交う始末。

それに関しては責任を取らずに責任があると辞めるのは愚か者の仕業だと言い拒否。それには全面的に賛成だけどな。

「本題に移りたいと思います」

部屋に緊張が走る。本題は今の海道家の代表についてだ。すでに根回しは終わっているだろうが、海道姫子はどこまでひっくり返せるか。

「海道家の次期代表について。ただし、今回は代表だけではなく代表補佐と進行役を決めさせていただきます」

オレは表情を変えることをこらえるのに必死だった。

だって、分家の大半がポカンと口を開いているからだ。一部は苦笑している。

「何か質問はありますか？」

「ま、また後日に決めれば」

「今決められることならば今決めるべきです。それとも、今日は何か不都合がありますか？」

根回しが済んでいるのは確実に代表だけだろう。それ以外は代表が決まった後にするに違いない。つまり、かなり荒れる。

反論意見があってもほとんど全てが潰れるだけだ。強攻策に出ない限り。

「いえ、代表以外は後日にしましょう。私は大事な会議が」

その中の一人が愚策にも発言する。そんな発言は切って捨てられるだけなのに。

「では、今すぐ代理人を立ててください。無理なら欠席ということで」

「横暴だぞ！」

「横暴？　海道時雨殿はちゃんと代理人を立てています。海道家の行く末を決めるこの会議の後に予定を入れた方はまずありえないと思っていたのですが、最悪、代理人さえいれば大丈夫です」

反論を封じることは出来る。だけど、今動いているのは分家の下っ端。自分の考えで愚策を決行する海道姫子の本来の敵ではない。

手が上がる。それは海道姫子に一番近い男からだった。

海道巧。海道家分家トップにして宗家以上にオレを排斥しようとしていた。まあ、宗家もたいがいだけど。

「では、この場で議決を取る。賛成は挙手を」

「進行役ではない方は進行役に介入しないでください」

「何故だ？　お前がやっていても何も進まないではないか。宗家のわがままを言うところなのか？　違うだろ。この会合は海道家分家の行く末を決める会合だ。宗家はお呼びじゃない」

そう来るのか。確かに、海道姫子は海道家の行く末と言っていたからな。おそらく、今離脱している宗家が戻ってきてもいいように下地を整えるはずだ。

地位はさすがに与えないと思うが。

対する海道巧はこの会合を海道家分家だけのものだと思っている。宗家を排斥する気満々だ。

「宗家も落ちたものだ。このような子供を進行役にするとは。見ていて醜いものだ。そうだな、あの海道駿や海道周のように」

オレは微かに頬を引きつらせた。誰も見ていないから良かったものの、見つかっていたら色々大変だったな。

「海道家の最高傑作だった男があのような最低のクズを生み出すとは。しかも、今でも海道を名乗っている。我慢ならん。あんなゴミは海道家に必要がない。そう、宗家もな。これからは分家の時代だ」

海道姫子は完全に圧倒されている。それはそうだろう。普通、本人の前でそんなことを言うなんて考えられないからだ。向こうからすれば気づいていないだけだろうが。

まあ、レヴァンティンも録音してくれているし証拠としてはばっちりだろうな。

「そうだな。話しているだけでイラついてきた。海道周を殺さないか？　海道家でありながら恥知らずの海道周を。そうしたら、海道家の傑作である海道茜を向かい入れれる。どうだ？」

「黙りなさい。今のあなたに発言権は」

「大丈夫だ。この会合で代表になるのは私でね。私が勝手に役目を決めさせていただこう」

「会合での進行役以外の進行役が選出を決める場合は海道家の全員一致が必要条件です。まだ、決まったわけではありません」

その言葉に海道巧が笑みを浮かべる。

「進行役以外の会合に参加した海道の名を持つもののな」

海道姫子が俯いた。だけど、その顔には笑みが浮かんでいる。

絶対こいつらはキレるだろうな。会合までに根回しするのは当たり前だけど、会合の護衛役まで根回しはしない。

「では、反対の方を挙手してもらおうか。同士の手を煩わせるわけにはいかないのでな」

そして、手を挙げる。そう、オレが。

「海道周、反対させてもらうぜ」

その言葉に会合参加者が全員動きを止めた。海道姫子は笑いをこらえるので必死だ。

海道巧の顔なんて本当に見物だからな。

「ふざけるな！」

海道巧が立ち上がる。その顔は真っ赤に染まっていた。

「貴様はこの会合に呼んではいない！」

「呼んではいない？　おいおい。護衛役は参加者が決定するんだぞ。たかがそんな理論が覆せると思っているのか？」

「貴様は白百合の養子に入った裏切り者だ！　会合に参加する資格もない！」

「悪いけど、ここに治外法権は適応されないんだよな。つまり、オレは日本の法律上白百合も名乗れるし海道も名乗れる」

「つ、つまみ出」

「いい加減にしなさい！」

海道姫子の声が響き渡る。

「巧おじ様。諦めたらどうですか？　会合の規定は絶対です。それに背くということは海道家に背くと同じ」

「黙れ！　ガキは黙ってい」

「黙るのはそっちだ」

オレは海道巧にレヴァンティンを突きつけていた。まあ、みんなが海道巧に視線が向いた時に気配を出来る限り隠して移動しただけだけどな。

やっぱり、気配を隠すのは難しいな。護衛役の何人かは苦笑しているし。

「警告だ。海道姫子は一度警告をした。次に規定である進行役の注意を無視した場合は実力行使によってつまみ出す」

「ふざけるなよ。ふざけるな！　貴様らみたいなガキ共に何が出来るというのだ。他力本願の貴様らにな！」

「海道周」

海道姫子の声が響き渡る。だけど、海道巧は気にすることなく声を荒げた。

「そうだ。私を陥れるための策略に違いない。護衛役、こいつを捕まえろ！」

「やりなさい」

静かに、そして、はっきりと海道姫子の声が響き渡る。

それに対してオレは動いた。海道巧の護衛役の腕をかいくぐり海道巧の胸ぐらを掴んでそのままドアに向かって投げる。投げながらも加速してドアを開けた。

開けたドアから海道巧が飛んで出て行きカエルが潰れたような音が鳴り響く。

オレはそれを聞きながらドアを閉じる。会合を行う部屋の中では奇妙な静寂が残っていた。

「では、会合の続きを行いましょう。代表への立候補を。この場で立候補する者は名乗り上げてください」

オレは軽く苦笑しながら会合を見ていた。

海道巧の護衛役は顔を真っ青にして固まっているし、海道巧が出たことで代表に根回ししていた者がいなくなったからか誰も手を挙げない。

どうりで、海道姫子が茜に泣きつくわけだ。

あのまま言っていたなら代表は海道巧となり海道家はあいつのものになっていただろう。だけど、オレ達のどちらかがいることで否定出来る。後は、横にいる屈強な男だよな。

とりあえず、ファンタズマゴリアの部分展開の準備をしておけば大丈夫だろう。

オレは小さくため息をつきながら魔術を展開する。

「では、私が立候補します。海道家の代表に」

「ちょっと待ちなさい。あなたが立候補すれば今までと同じ」

最初に発言したおばさんが声を上げる。確かにそういう反対もあるだろう。だけど、オレは何も助言しない。

「それが海道家宗家の最後の責任だと思っています。宗家が離脱した今、海道家は新たな道を進まなくてはいけません。その道を私は作ります。後継者は巧おじ様を指名します」

その言葉にどよめきが走った。ちなみに、オレもかなり驚いていろ。だって、海道巧は会合で暴れたからとして放り出したからだ。普通は役職にはつかせない。

だけど、海道姫子の顔には後悔はない。

「今の私は非力です。ですが、これからの海道家の礎になれればと思っています。宗家と分家の垣根が無く、そして、名家として進む道を作り出せればいいと思っています。これが私の決意です。他に、立候補者は」

「では、採決を取りましょう」

おばさんが口を開く。丸々と太った体を揺らしながら周囲を見渡した。それに対して海道姫子はキョトンとしている。

「海道姫子が代表に就任することに反対な人は手を挙げてくださらない？」

おばさんの言葉に誰も手を挙げない。オレは真剣な表情で口を開いた。

「海道姫子の護衛役として尋ねたい」

「周」

「大丈夫だ。オレは確かに賛成だ。だが、賛成になった理由を聞きたい。ほとんど部外者感覚で言えばこの場は全て海道巧が代表になる予定だった。なのに」

「子供のあなたにはわからないかもしれないけど、私達は賭けたのよ。姫子がどこまで海道家を引っ張れるか。あそこまで言われたなら私達は賛成するしかないじゃない。それはある意味投資よ。第７６移動隊が生まれた時と同じで」

「なるほどね。ありがとう」

確かに、そういう考え方もある。だけど、今回はかなり分の悪い賭けのはずだ。普通はこんな風にはしない。

最悪、海道家自体が潰れかねない。

「それに、こんなに可愛いボーイフレンドがいるじゃない」

「「ボーイフレンド？」」

オレと海道姫子は同時に首を傾げ、そして、お互いの顔を見る。そして、おばさんの方を見た。

「誰が！」

「そうよ。周は今日彼女連れで来ているんだから」

彼女でもない、とは言えなかった。実際に亜紗が好きなのは事実だしな。

「あらあらまあまあ。つまり、そういうことよ」

「わけがわからないよ」

オレは呆れたようにため息をついた。

第八十六話　新たな記憶

燃え盛る建物をオレ達は見ている。

ああ、これはあの日の光景だ。あの日の、赤のクリスマスの時の光景。これはあの時の続きか。

信じられないように建物を見ている三人とは違い、オレだけが笑っている。

消えてくれた。いらない存在が消えてくれた。

「ははははっ。やった。ようやく、ようやく」

オレの口から漏れる言葉は三人には聞こえない。だけど、聞いただけでわかる。その声は本当に喜んでいた。

両親が死んだことをオレは喜んでいる。

「お兄ちゃん、どうして」

茜の声が響く。信じられない表情をした三人が振り返った。どうやら聞こえていたらしい。

でも、オレは笑みを浮かべるのを止めない。

「だって、いなくなったから。もう、あいつらはいない」

「パパもママもいる！　助けに来てくれる。ヒーローなんだから」

「現実にそんなヒーローはいない」

ああ、そうか。オレは大人になろうと大人びていたわけじゃないんだ。

誰も付き合ってくれない、見放されいたから、オレは大人になろうとした。子供の考えることだ。同じになれば見てくれると思ったのだろう。

だから、勉強を始めた。見よう見真似で勉強を始めた。

思い出してきた。霧に包まれたかのように、オレの昔が。

物心がついた頃はまだ両親はオレを愛してくれた。だけど、魔術が使えないことを知った二人はオレを突き放した。そして、茜にだけ愛情を注いだんだ。

茜は二人の希望以上の天才だった。まるで、オレの才能が茜に移ったのかのように。実際は核晶欠損症だっただけなのだが。

その日以来、オレは見向きもされなくなった。されなくなって、オレは一人でいることが多くなった。

勉強を始めてからは哀れに思ったのか両親が与えてくれたテキストにオレは熱中した。思い出す。記憶がだんだん思い出してくる。

一人で中学生レベルまで勉強を進めたくらいで海道姫子が初めて家に遊びにきたのだ。そして、一心不乱に勉強するオレを見ていた。オレはそれまで会話も必要最低限しかしなかった。だから、話しか

けられても答えなかった。

それから、海道姫子はオレをいじめるようになったんだろうな。楓や光と出会ったのは全て茜を通じて。

これが、オレの原点。偽りの記憶に彩られた本当の記憶。

『現実回避（エスケープ）』で隠されていたのかもしれない。『現実回避（エスケープ）』の解除条件は術者か本人がトラウマを思い出すことで解除される。

オレは天才なんかじゃなかった。何でも器用に出来るのではなかった。ただ、ただ単に見てもらいたかっただけだった。実の親に誉めてもらいたかっただけだから。

だから、あの日のオレは口を開く。

「死んでくれてありがとう」

廃墟と化したビルに向かって壮絶な笑みを浮かべる。だけど、自分でもわかっていた。泣いていることを。嬉し泣きでもある。だけど、悲しくも泣いている。

茜が詰め寄ってくる。だけど、茜はオレの服を掴むだけで終わった。

茜はオレと別の意味で大人びている。それは親から愛情を注がれ、熱心に教育されたからだ。だから、オレと茜は仲が良かった。そして、お互いを憎んでいた。

オレは茜に愛情を注がれていることに嫉妬し、茜はオレに自由でいることに嫉妬していた。

どこかで爆発が起きる。頭の中で警鐘が鳴らされる。ここにいては危ないと。

「早く離れよう。死ねば元も子もない」

「うん。そうだね」

茜が力無く賛同する。オレは楓の手を取った瞬間、近くで爆発が起きてオレ達は吹き飛ばされた。

背中に何かがぶつかり、生暖かい何かが流れる。そっちを向いた先には、頭から血を流す楓の姿があった。

「やだ、止めて。死なないで」

必死に傷口に手を伸ばす。知識があるから、頭の傷は危険だとわかってしまう。だから、助けようと、

「誰かいるのか？」

その言葉に振り向いた。そこにいたのは白衣の男。ただし、全身が黒ずんでいる。

「楓を、楓を助けて！」

「頭に傷か。かなり深いな。仕方ない。この子は助けよう。ただし、君には気絶してもらう」

「えっ？」

男の手のひらが迫る。そして、オレの意識は闇に落ちて、光に照らされた天井を見上げていた。

「ここは」

体を起こして周囲を見渡す。そこは見知らぬ部屋。いや、海道家の客間だ。確か、夜も遅いから泊まっていくように海道姫子から言われたのだ。

「ははっ」

笑い声が漏れる。あの日にオレはアリエル・ロワソに出会っていたなんて思わなかった。多分、記憶を曖昧にするため気絶させられたのだろう。

でも、まだだ。まだ、とあることをオレは思い出していない。オレは、まだ、真実を見つけていない。

「どうしてオレが茜から核晶をもらったのか。その意味が未だにわからないな。後一回、一回だけあの日を思い出せたなら、完成する。最後の鍵が」

「気になって来てみれば、何やっているのよ」

海道姫子の声に振り返ると、そこにはクマ柄の寝間着を着た海道姫子と心配そうにこちらを見つめる亜紗がいた。

「泣きながら呟くなんて変人の一歩手前よ」

「泣きながら？　あっ、泣いていたんだ」

この時にようやくオレは頬に涙が流れていたのがわかった。それを見た海道姫子が小さくため息をついて肩を押してくる。

「サナダムシはまだ寝ておくこと。あんたが倒れたら亜紗が心配するじゃない。じゃ、私は外に出ておくわ。後は二人で仲良く」

オレを無理やり寝かしてから海道姫子が笑みを浮かべて言う。その笑みを見ながらオレは頷いた。そして、口を開く。

「後、無視して悪かったな」

一瞬、海道姫子がキョトンとする。

一体何を言っているのかわからなかったのだろう。でも、すぐに心当たりを見つけたのかクスッと笑った。

「そうね。サナダムシなりに誠意を見せなさい」

そのまま部屋を出て行く。部屋の中に残ったのはオレと亜紗の二人だけ。

亜紗はスケッチブックを取り出した。

『海道姫子はどS』

「お前はオレにどう反応しろと？」

『周さんはどSが好き？』

「これは怒っていいところだよな」

オレは小さくため息をつく。こんな反応をしてくるとは思わなかった。

亜紗はオレが寝ているベッドに腰掛けて手を握ってくる。

『思い出した？』

頭の中に声が響く。オレ達だけにしか出来ない会話。

「ああ。たくさん、思い出した。昔のことをたくさんな。オレがどんな人間だったのかも」

『今のままと同じじゃないの？　私が出会った時は焦っていた感じだったけど』

「あの時は本当に焦っていた。だけど、あの日よりも前のオレは、必死だった。本当の両親に振り向いてもらおうと、勉強して、言葉遣いを変えて、そして、茜とは違う天才になろうとした」

あの日を乗り越えて勉強を始めてあそこまでなれたのは前から勉強していたからだ。そして、大人びていたのはオレが前から大人びていようと思っていたから。

思い出せば違和感ばかりの人間じゃないか。

オレは一体、どこまで弱い人間なのだろうか。

『周さんは頑張っている。頑張っているから周さんにみんながついて行っている。もちろん、私も同じ』

「ありがとう。亜紗には心配かけっぱなしだよな」

『ううん。私は周さんに助けられた。助けられたから周さんを助けている。助けていると言ってもそれは私がしたいから。ただの自己満足』

「自己満足か。そうだな。オレだって自己満足で頑張っている。それでも、みんながいるからオレはやっていけるんだろうな」

亜紗が笑みを浮かべて頭を撫でてくれる。それが本当に気持ちよくてオレは目を瞑った。

多分、後一回記憶を思い出したなら、あの日の真実が組み上がるはずだ。その時は、絶対、

「守ろう。みんなを。オレ達の力で」

『うん』

頭の中に響いた亜紗の声は本当に誇らしげだった。

第八十七話　炎属性魔術

「この身に纏う焔の力。全てを焼き尽くす炎と共に具現せよ。ドラグーン！」

私の目の前で光さんが炎属性上級魔術であるドラグーンを詠唱込みで発動する。

ドラグーンは炎属性の中で最も身体強化を行う強化魔術だけど、風属性の強化魔術や雷属性の強化魔術、大地属性の強化魔術と比べれば遥かに見劣りはする。

「メグが目指すのはまずドラグーンかな。メグは純粋な炎属性の術者やからすんなりドラグーンまで行けると思うんやけど」

「あの、私、中級魔術も満足に使えないのですが」

事の発端は今日の朝。夢が孝治さんに弓を習いに来たことから始まった。

私は軽く光さんと手合わせをしていたのだけど、炎を纏う炎獄の御槍を見て夢が首を傾げたことからだ。

近接戦闘において魔術は強化魔術以外に必要はないと思っていたのだが、孝治さんと光さんの二人の模擬戦を見て変わった。

二人共、至近距離からの砲撃魔術を簡単に行っていたから。

「ちなみに聞くけど、メグの一番上の魔術はなんや？」

「フレイムドライブ（炎属性中級強化魔術）」

私の言葉に光さんが溜め息をつく。相変わらずレベルが高い。

「他には、フレイムランス（炎属性中級攻撃魔術）」

どうやら論外らしく、光さんは諦めたように溜め息をついていた。

「フレイムランスは詠唱速度の関係はあるけど、無詠唱は可能？」

「さすがに無理です」

すると、光さんはさらに小さく溜め息をついた。そんな溜め息をつかれたら結構傷つくのですけど。

確かに、第７６移動隊のみんなはほとんど無詠唱だ。特に周は多彩な魔術を起用に使いこなす。

「高速機動戦は無詠唱魔術は必須や。特に、速度と威力は。上手く使えば魔術に強い海道ですら倒せるくらいにな。メグはやっぱ上級魔術一つは無詠唱にして欲しいな」

「打ち合いだけで精一杯なんですけど」

私は思わず苦笑してしまう。炎獄の御槍はそれ自体が持ち主から魔力を奪っているらしく、そのおかげでかなり疲れる。最近はかなりマシになって来たが、それでも気だるい疲労感はある。

その代わり、体はかなり鍛えられている。昨日、ベリエさん、アリ

エさんに見てもらったが応用訓練が二段階ほど不要になり、二週間もすれば魔力負荷を与えてもいけるらしい。

いつも筋肉痛だけど。

「確かに、槍を扱ったらうちより遥かに強いとは思うよ。やけど、経験の差でまだ負けてるだけや。メグの実力なら一年したら世界で通用するんちゃうか？」

「本当ですか！？　ありがとうございます！」

「ただし、自惚れたらあかんで。自分は強くない。十分に弱いってことは自覚しときや。うちだってレアスキルとこの武器があるから世界に通用するだけで、槍の腕はまだまだや」

私からすれば十分に強いと思うけどな。

「将来、世界で戦うなら炎魔術一極じゃあかんけど、やっぱ、炎魔術が一番やな」

「将来ってことは光さん、ずっと『ＧＦ』ですか？」

「そやな。うちは海道を信用してる。海道なら必ず、世界を救うって」

確かに周はすごい。何事にも真っ正面から真剣にぶつかって解決する。時には汚い手段にも出るけど、それでも周は真っ直ぐだ。

助けを求める人がいれば手を伸ばし、争いが起これればその原因を知るために動いたと聞く。

普通は出来ない。そして、二歳しか違うことがありえないくらい。

「私も。周と一緒なら守れる気がする」

「やっぱり、メグは敬語じゃない方がええわ。これからうちも海道と同じように敬語は無しで」

「えぇぇっ!?　いや、さすがに上級生には抵抗がありますって」

「上級生命令」

その言葉に私は諦めたむしろ諦めた方がいいかもしれない。

「わかった。よろしくね、光」

「よろしく。じゃ、炎属性魔術はうちが教えていくから。じゃ、基本的な問題だして行くで。炎属性の本質は?」

「熱量変換です」

炎属性は熱量を上手く扱うもの。基本的に炎を生み出すというイメージもあるけど、生み出した炎による熱量は逆の熱量、凍らすという方面でも作用する。

どうして炎属性と呼ばれるかはこの部分が強い。氷を作り出しても氷属性魔術と併用しなければ簡単に溶けるからだ。氷属性魔術は対象のべくとるというものに作用するらしい。

「正解や。じゃ、炎属性強化魔術の特徴は?」

「筋力強化」

風属性の加速や雷属性の伝達加速と違って炎属性強化魔術は筋力強化。そのため、力も速度も上がるが、力は大地属性の強化魔術に負け、速度は風属性の強化魔術に負ける。

位置的に言うならちょうど真ん中くらいだ。

「これは大丈夫やな。炎属性魔術の戦場における役割は？」

「えっと、前線を抜く？」

「不正解」

やっぱりという風に光が溜め息をついた。

「前線を抜くなら基本的には力を上昇させる大地属性か状態異常を引き起こす水属性や。掻き乱すなら風属性って相場は決まってる。炎属性の役割は相手のフロントとバックの間に楔を打ち込む役目や」

「楔？　でも、炎属性にそんな威力がある魔術なんてあった？」

私の記憶ではない。炎属性は扱いやすいという性質がある分、威力も弱めになっている。

だから、そんな楔を打ち込める魔術なんて聞いたことがない。

「まあ、普通はそうやな。だけど、インフェルノボムって上級魔術は知ってる？」

「確か、そこに爆弾を打ち込む魔術だよね？　威力はそれほど高くないけど」

「インフェルノボムの最大のメリットはそこやない。最大のメリットは爆弾を打ち込むことや。それによってバックは前に出られへん。そうなったら超射程の上級魔術しか攻撃方法が無くなる。フロントも後ろに下がられへんから怪我した人も下がられへん。ただ、インフェルノボムは連続発動が出来ないデメリットがあるけど」

第７６移動隊見ていたらわかるけど、バックにいる人もフロントの訓練をしている。元の部隊はフロントとバックが完全に分かれていたけど、ここは分かれていない。

本当の戦場でフロントもバックも関係ない時があるというのが嫌でもわかる。

「メグの場合はフレイムウォールやな」

「フレイムウォール？　ファイヤーウォールとどう違うの？」

「基本的な性質は同じやな。ちょっと見せるで」

光がそう言うと同時に炎の壁が出来上がる。燃え盛る炎は薄っぺらく、氷魔術で水を集めればどうにかなりそうな気もする。

これが、炎属性中級魔術のファイヤーウォール。

「次がフレイムウォール」

次の瞬間、ファイヤーウォールと比べ物にならないくらいの炎の壁が出来上がっていた。簡単に言うなら厚い。下手に対策を取らずに突破したなら大火傷を負う感じだ。

「違いがわかった？」

「炎の厚さ？」

「正解や。フレイムウォールは一番簡単に壁を作れる魔術。メグの場合は炎獄の御槍を振るだけで出来るようにならんとな」

私は自分の握っている炎獄の御槍を見つめた。

今まで魔術なんてほとんど練習しなかった。真剣に練習していたのは強化魔術だけ。でも、このままじゃダメだということはわかる。

炎獄の御槍とどこまでやっていけるか。試してみたい気持ちはある。

「じゃ、最初はファイヤーウォールから。魔術はイメージや。イメージを強くすれば簡単に出来る。だから、しっかりイメージして」

「ただいま」

私は帰った瞬間に着替えることなくベッドに飛び込んだ。制服のままだからシワになるかもしれないけど、そんなことは無視して目を瞑る。

今日はいつも以上に疲れた。いつもの訓練に魔術訓練を加えたハードスケジュール。こんなことをしていたらいつか倒れる。

「あれ？　メグが帰った瞬間に倒れるなんて珍しいね」

「私を体力バカみたいに言わないで。今日はとても疲れているから」

時音に言葉を返しながら目を開く。そこには嬉しそうに笑みを浮かべている時音の姿があった。

「何かあったの？」

「メグが一生懸命頑張っていることが嬉しくて。なんか、リア充のさらに上の存在に昇格したような感じ？　リア仏？」

「死んでいるようにしか聞こえないけどでも、まあ、充実しているのは確かかな」

第７６移動隊に入って大変だけど色々学ぶことが出来た。そして、少しずつ強くなっている。

このままもっと強くなりたい。そして、世界を救いたい。

「明日は、九時から。お休み」

「メグ？　制服しわになるよ。まっ、いっか。それにしても、メグがこんなに充実しているのは久しぶりかな。私も自主練頑張りますか」

第八十八話　新たな海道

小さく息を吐く。いや、溜め息か。これを見ていれば本当に溜め息しかつけない。

だって、海道家分家全ての署名がここに揃っているからだ。もちろん、海道巧の名前までである。

手のひらを返すかのような事だが、オレと一つしか変わらない少女が全ての責任を取ると言ったのだ。それを応援しないわけがない。

「まさか、ここまでとはな」

「黙っていろ。今回は貴様のおかげで海道家宗家の役目を果たせたことには感謝するが、貴様のような『簒奪者』、ごぶっ」

宗家の男が文字通り上から叩き潰される。オレはそれを苦笑しながら見ていた。

「少しは手加減したらどうだ？」

「こんなゴミムシに手加減する理由はないから。まあ、今回は助かった。ありがとう」

「どういたしまして。海道家のネームバリューはかなり高いからな。それで、離脱した宗家は今、何をしているんだ？」

「さあ？」

海道姫子が肩をすくめる。確かにさあになるだろうな。

レヴァンティンに調べてもらったけど、宗家の大半の足取りは掴めていないらしい。事件に巻き込まれたか事件を起こすために潜伏しているか。

どっちにしても厄介だ。

「あなたには正直、色々助かった。昔のことと比べても帳消しね」

「あの時は悪かった。まあ、記憶は完全に戻っていないけど。『現実回避（エスケープ）』のせいだろうな」

「『現実回避（エスケープ）』。椿姫さんのレアスキルよね。どうして、『現実回避（エスケープ）』がサナダムシに？」

「わからない」

オレはそう口にする。だけど、海道姫子は何かに納得したように頷いていた。

「そう」

「やけに淡白だな」

「だって、あなた達兄妹は似てるもの。嘘をつく時の動作も」

そんな話聞いたことがないけど。

オレは小さく溜め息をついた。そして、レヴァンティンを取り出す。

「とりあえず、連絡先の交換でもしておくか？　これから、海道家とは綿密に連絡を取り合った方がいいからな」

「サナダムシにしては気が聞くじゃない。私も『ＧＦ』移動課第一部隊第７６移動隊との連絡は綿密にしようと思っていたもの」

オレは通信用ケーブルをレヴァンティンと海道姫子のデバイスと繋げる。すぐさまレヴァンティンを操作する振りをして連絡先を交換し合う。

これで大丈夫だろうな。

「これからもよろしく頼む。海道家代表海道姫子」

「こちらこそ。『ＧＦ』移動課第一部隊第７６移動隊隊長海道周殿」

そう言い合って、オレ達は笑い合った。おそらく、昔のことを同時に思い出したからだ。

オレが思い出したのはあの日の数日前に海道姫子から言われた言葉だ。

多分、そのことを思い出したに違いない。オレも海道姫子も。

「あの時の回答を今した方がいいか？」

「止めた方がいいわよ。私は振るから」

「そういうわけじゃないって」

あの時、海道姫子はこう言ってきた。

あなたのことが好きだとしたら？

対するオレの回答はこうだ。今の僕を見ない方がいい。

でも、今は海道姫子はオレを見ている。だから、オレは言葉を返す。

「姫子は魅力的な女の子だよ。だから、オレなんかを気にせずに前に進むこと。後悔しない道を進むこと」

「あーあ。振られちゃった。周の活躍はずっと耳にしていたから。まるで、手のひらを返したかのように周を歓迎しようとする宗家の名前と一緒に。まるで、ヒーローだった」

「住む場所が違う。オレはこれからも戦い続ける」

「世界が滅ぶとしても？」

その有効な対策はまだない。だけど、一つだけ、一つだけ心の底からこうした方がいいと望む声がある。

それに従うべきだとオレも思っている。

「オレ達はそれを救うんだ。救った後の世界でも戦い続ける」

「自己犠牲の塊ね」

「違う。自己満足の塊だ」

オレはそう言って笑みを浮かべた。それに対して海道姫子は肩をすくめる。

「ほんと、らしいわね。わかった。海道家として私の代の間は全面協力をさせてもらう。あんたなら世界を救ってくれるんでしょ？」

「こちらも、海道家は頼りにしている。さて、オレ達はそろそろ学園都市に帰る。これでも第７６移動隊隊長なんでね」

「隊長らしくない隊長だけど。そうだ、今人払いしているから聞きたいことがあるんだけど」

海道姫子が不思議そうに首を傾げた。

「学園都市のエネルギーって本当に自然エネルギー？」

「どういうことだ？」

オレは首を傾げ返す。

風力発電と太陽光発電。それが学園都市のエネルギーだ。魔力エネルギーは自然界にある魔力粒子を消費する。それはエネルギー、主に電力として扱われるが、扱われた後は粒子に戻る。

ただし、この時、消費した魔力粒子＝戻った魔力粒子の式は成り立たず、若干ながら減少するのが確認されている。

だから、オレを激しくバッシングしてくる奴らもいるんだけどな。

「自然エネルギーを作っているにはあまりにも発電量が多いのよ。海道家の資料をまとめていて見たのだけど、自然エネルギーは賄っている約８０％だって」

「それは自然エネルギーを使い始めた最初の頃か？」

最初の頃は確かに試算より足りなかったという事態はあるが、現在では極稀に危険数値になることはあっても足りないことはない。

まあ、その日も曇りかつ無風の日が続いたらになるけど。

「不自然に自然エネルギーの発電施設が多いから私達からしたら眉をひそめる話だけど、よくよく考えてみるとおかしいのよね。自然エネルギーによる発電量で住宅を賄えることはありえない。一回、詳しく調べた方がいいかもしれないわ」

確かに、オレが魔力機関を作ったのはそれが理由の一つだ。自然エネルギーではエネルギーが全く足りない。そして、火力発電では施設が大きすぎるし公害がうるさい。

だから、魔力機関を開発した。

学園都市に来て自然エネルギーだけで都市を動かす計画には面白いとは思っていたし、その多さに驚きもした。確かに、よくよく考えてみるとおかしさはある。

「確かによく考えてみるとおかしな話だよな。学園都市にいればその多さに納得するけど」

「そういうこと。里宮に聞くのもいいけど、そんな根幹となると情

報量が高いから。値段も書いていたけど、7兆±2兆らしい」

「小国を潰す気か？」

もちろん、そんなお金が海道家から出るわけがない。出たらすごいよな。というか、そんなお金を持っているのは慧海くらいだろう。

「どことなく調べてみる。それにしても、海道家の情報量はかなりありそうだな」

「そうね。色々整理しているけどかなりの量があるわ。新たな情報が見つかった連絡するし」

「完全に新しい海道家だよな」

情報は里宮、政治なら海道、力なら白百合。

これが基本だ。しかも、里宮に情報を手に入れようとしたならお金を請求され、海道は宗家した発展させるつもりはなく、白百合は弱き者は排斥思考。

正直言って、どれかが変わってくれるなら本当にありがたい。

「そう。あなたが新たな未来を求めているように、私達は新たな海道を作り出す。それが吉と出るか凶とでるかわからないけど」

「出るさ。確実にな」

オレの言葉に海道姫子は笑みを浮かべた。

電車に揺られながらオレは資料を見る。

海道姫子からもらった資料のコピー。そこには確かに正確なデータが記入されていた。

太陽光発電施設や太陽光発電パネルに風力発電施設など数はオレの中にある統計と同じだ。そして、その発電量もオレが知っている数値。

ただし、電力使用量だけが違う。まるで、どこかのエリアが丸々加算されたように。

オレは小さく溜め息をついて隣を見た。隣では亜紗がオレに体重を預けて眠っている。

周囲に他の乗客の姿も見当たらないから大丈夫だな。

「レヴァンティン」

『正直に言って厳しいです』

だろうな。あの事も調べてもらっているし。

『ですが、やるだけやって見ます。期待はしないでくださいね』

「わかった。頼む」

オレはレヴァンティンをポケットに戻す。上手く行くかはわからないけど、上手く行くことを祈っている。

「学園都市の秘密か。学園都市には一体何があるんだ?」

オレは小さく溜め息をついて窓から空を見上げた。空には見事な夕焼け空となっている。

オレはそれを見ながら小さく息を吐いた。

第八十九話　魔術理論学

気だるい空気が教室内に漂っている。オレはそれを感じながら隠れるように欠伸をした。

ゴールデンウイークと土日を過ぎた最初の平日の一時間目の授業。今までも気だるい空気はあったが、今日はそれ以上に気だるい空気だ。

授業名は魔術理論学。

必要なのは『ＧＦ』みたいな戦闘を行う可能性のあるとこに就職予定の人。

ただ、あまりの基礎っぷりに誰もが聞いていない。授業をしている体育会系の先生は熱弁を奮っているが、大半は興味なく見ている。

ちなみに、由姫とメグは睡眠中でオレは新たな魔術の開発中。そんなに簡単には進まないけど。

「海道周！　風属性魔術について説明しろ！」

「風を操る魔術。基本的には攻防一体だが、膨大な質量のある攻撃には弱い。工場では送風や無風空間を作り出すために利用される。日常ではクーラーを使用しないようにするために使われる」

「う、うむ。正解だ」

オレは片手を動かしながら答えていた。こういう風に内職を片手に

授業を受けられる。むしろ、内職が本職か？

魔術理論学なんて大学の授業じゃなければためにならない。高校で習うのは基礎までだ。

本当の理論学は新しい魔術の開発に役立つものだ。例えば、風属性で言うなら利点と欠点を事細かく教えてくれる。

利点は大地属性に関して強いとか、氷属性に関しては相手の力量にもよるが基本的には強めとか。

弱点は炎属性や光属性。闇属性にも案外弱い。

ここまでなら高校でも習うだろうが、大学はここからが一味違う。

風属性の組み合わせやすいやり方を教えてくれる。

風属性は文字通り風を操る属性。基本的には氷属性に似ているが、大規模か小規模かの違いがある。それに、氷属性最大の特徴である封印術のような強力な拘束系の魔術は風属性には存在しない。

風を操る以上、面への攻撃はやりやすいが点への攻撃はあらゆる魔術属性で一番難しいし、威力は一番低い。低いと言っても広域への突風は十分な威力がある。

だから、その面への攻撃について語られる。面への攻撃と言っても、出力によっては面のところどころで威力が変わりやすい。その弱点をどうするかというディスカッションすらある。

本当の魔術理論学はそういうものだ。

だから、正直に言ってこの魔術理論学はつまらない。もっと実戦に使えるような魔術理論学じゃなければな。

まあ、メグには聞いて欲しいところだが。

とりあえず、氷属性のオリジナル剣技でも考えるか。

氷属性は最も組み合わせにくい魔術だ。その特徴が方向性を操るもので、反射は出来ない。

その最大の特徴はやっぱり封印術だ。封印術は氷属性にしかない利点で、使い方によっては相手の行動を完全に束縛出来る。ただ、そんな利点をオリジナル剣技にいれるわけにはいかない。

使えるとしたなら方向性を操る特性だろう。

よく似た剣技なら白百合流の雲散霧消がある。あれは紫電一閃からの連撃にも使えるが、最大の特徴は相手の攻撃を弾き合った時に発揮される。

弾かれることで普通は剣を戻そうとするが、雲散霧消はその力すら使って回転しながら斬る。

通常で放てば隙は多いが、紫電一閃のような高速の一撃みたいな相手にも隙が出来る状況下なら使い易い。

それと同じ方向性、いや、雲散霧消の改造に走った方がいいな。

雲散霧消の最大の特徴である弾かれたことに対する回転攻撃はかな

りのメリットだ。氷属性とも相性は悪くない。だから、力の無駄を完全に無くしながら放つしかない。

理論的には難しくはないが、実戦的には不可能に近いよな。

というか、氷属性が生かしきれない。

氷属性は細かなところで役に立つからな。例えば、方向転換。前に進んでいるのに後ろに跳んだ場合はかなりのエネルギーを消費する。それを氷属性で行えば止まった瞬間に運動の向きは後ろになっている。つまり、後ろに跳ぶのがスムーズに素早く行えるのだ。

まあ、氷属性魔術は中級以上は本当に難しいからな。実際、氷属性の使い手は片手で数えるほどしかいない。例えば冬華とか。

冬華は元の戦闘能力が高いのもあるが、魔術的に言っても世界最高峰であろう。氷属性の方向性の変換を上手く用いて無駄なく動き、無駄なく攻撃に移る。

魔術にしても封印術という特性を生かして絶対防御（敵も味方も中立というか空気すら）を作り出す。まあ、規模は大きくないけれど。

というか、誰が氷属性なんて命名したんだろうな。動属性は、カッコ悪いか。

まあ、氷属性の最大技、唯一の具現化系を規模と威力のどちらも超える技は氷を使った攻撃だけど。

というか、あれって召喚術と攻撃魔術と封印術の三つを内包した最大の技なんだよな。

っと、話が脱線した。

氷属性をどうするか。それが問題なんだよな。方向性に強くすれば雲散霧消と変わらず、魔術的に強くすれば使用不可能。

もっと別の技にすべきか。

「海道周！　炎魔術について語れ！」

「最も一般的かつ原始から使われた魔術。純粋に炎を作り出すだけでなく、熱量変化による氷を作り出すことが出来、一時期は炎魔術の一部を氷魔術にすべきだという声が出たほど。威力は高くなく、攻撃範囲も広くはないが長時間の発動を容易とする。ただし、使用後は上手く維持していなければ敵味方関係なくダメージを与える上に山火事を発生させることがある。炎魔術による山火事で有名なのは三年前に起きた日本の富士山の樹海で起きた大火災とシベリアで起きた死者数千人を出した大火災。それにより、炎魔術は簡単なものではあるがかなり危険なものでもある。ただし、魔術による炎は下級であれば雑草すら燃やすことは難しく、料理には使えるものの山火事を起こすには難しい。以上です」

「くっ、正解だ」

やっぱり、理論的には出来るのが問題だよな。その理論をどうやって実戦にするか。

難しいな。

「どうして周は授業を聞かないんだ？」

魔術理論学が終わり、次の時間の準備をしたところで健さんが話しかけてきた。オレはキョトンとして首を傾げる。

「あんな授業、聞く価値があるのか？　一応、これでもアメリカの大学は出ているからな。その時の魔術理論学と比べれば遥かに最悪だ」

「周らしい意見だよね。まあ、あの授業は僕もさすがにどうにかした方がいいと思うよ。大半が寝ているし」

「えっ？　俺様、あの授業は睡眠学習だと思っていたけど？」

ハトの言葉にみんなが呆れたように溜め息をつく。ちなみに、寝ていた由姫やメグも一緒だ。

「ハト。違うよ。あれは睡眠学習なんじゃない。睡眠時間なんだか、あいたっ」

オレはメグの頭に拳を落としていた。睡眠学習より遥かに酷い。

「私は兄さんから魔術理論学はいつでも学べますから」

「今回の定期試験はアテにするなよ。最近は何かと忙しいから勉強する時間が少ないんだ」

「夢さん、助けてください」

「私、勉強、出来ない」

その言葉に由姫が周囲を見渡す。オレも周囲を見渡した。

ハト。見るからに無理。

ワカメ。頭の回転は早いが実は勉強はあまり出来ない。

健さん。無理。

メグ。言わずもがな。

「真人か一誠だな」

「悪いが、期待には沿えない」

「一誠はあまり勉強が好きじゃないからね。僕でよければ教えるよ。人並みの学力しかないけど」

そう言って真人は周囲を見渡した。そして、頷く。

「よく考えると凄い集団だよな」

「揃って夏休みの補修を食らったりしてな」

オレは笑みを浮かべて言うが、全員は一斉に視線を逸らした。由姫はまだ大丈夫だと思うけどな。メグは確実にヤバいな。

「まあ、暇なら見てやるよ。魔術理論学についてもな」

まあ、そんな暇は無いだろうということは口には出さないけど。

第九十話　体育祭に向けての練習

全速力の球が飛来する。オレはそれを空高く蹴り上げた。上がって、上がって、上がって、落ちて、落ちて、蹴り飛ばす。

由姫はそれを軽々と受け止めた。

「甘いですよ。兄さん。そのような球で私を止められるとでも？」

「全く。というか、今って体育の時間だよな」

オレは由姫が投げつけてきたボールを避ける。そのボールはちょうどオレの後方にいたハトの顔面を直撃し、見事に反射してワカメの顔面を直撃する。

それを見ながら隣にいた一誠が一言。

「ワカメはアウトだな」

「これはアウトになるのか？」

「わからん」

一誠が軽く笑みを浮かべながら言う。一誠って頭いいか悪いかわからないんだよな。実際に、ほんの少し前まで頭がいいと思っていたけど、ただ単に要領が良かっただけだったりもする。

「お前って不思議だよな」

オレはボールを受け止めてすぐさまボールを投げた。だけど、ボールは簡単に夢に捕られる。

「何がだ？」

「あの五人組の中だと参謀役みたいな立ち位置だろ？　それなのに、勉強はあまり出来ないのが不思議に思ってな」

「教えるのは上手い」

「それは知ってる」

一度、夢が尋ねていたのを聞いていたが、一誠は教えるのは上手い。参謀役としてはまずまずだろう。

オレは首を捻って球を避ける。すかさずオレを狙って放ってくるが、オレは気にすることなく避けた。

「確かに参謀役だが、メンバーを考えろ」

「そうなんだけどよ」

ハト。筋肉バカ。

ワカメ。筋肉バカ。

健さん。ゲームバカ。

真人。普通。

一誠。要領が良い。

「確かに参謀役だな」

「だろ」

オレは由姫が放ったボールを受け止める。さすがに真っ正面から受け止めたらかなり痛いか。

すかさず投げ返すが受け止められる。投げ返されたボールは避けるしかない。

「まあ、自分の習っていないことには教えられないだろうな」

一誠が飛び跳ねて避ける。すかさず内野にいたメグがそれを受け取って一誠に向かって放った。

オレは手を伸ばし、それを片手で受け止めた瞬間に雲散霧消と同じ要領でその場で回転して投げつけた。

メグは返って来たボールを受け止めることが出来ず当たったボールが転がって行く。

「由姫の勉強を見てくれればありがたいけど」

「健さん達で十分だ」

由姫が全力でボールを放ってくる。オレがそれを避けるとちょうど後ろにいたハトにボールが直撃して吹き飛ばした。

「相変わらず威力が高いな。あれで生身ってのがかなり驚く」

「体育祭では魔術は禁止だからな。しかし、あの速度は簡単には出せないだろう」

「だろうな。まあ、魔術禁止でチートに近いのは、オレも同じだし」

向かって来たボールを受け止めながら雲散霧消と同じように投げ返す。

雲散霧消ってこういう風にも使えるからな。向かってきた攻撃を受け流すって、

「それもありか」

オレは首を傾げて避けた。

新しいオリジナル剣技に使えるな。

完全な防御用のオリジナル剣技になるけど、上手く使えば雷王具現化も受け流せるな。

「なんで当たらないのよ！」

メグが全力で放ってくる。オレはそれに角度を合わせて手も合わせる。見た目は当たったように見えるが、オレは一瞬のインパクトでボールを投げた。

加速したボールは由姫のタイミングを外し、肩をかすり近くにいた他の女子達にも跳ね返りながら面白いように当たって地面に落ちる。

転がって来たボールをオレは蹴り上げて手に取った。

「さてと、逆転しますか」

こっちの内野にいるのはすでに三人。ワカメはノビて使い物にならないし、一誠は戦力外だ。

相手の強敵は夢一人。

由姫を倒した以上、余裕だ。

オレはボールを振りかぶった。

「どういう体をしているのかな？」

オレと由姫の体をメグがジロジロ見てくる。オレはそれを確認しながら小さく溜め息をついた。

「何がだよ」

「ドッチボールで普通はあんな速度は出せないからね。由姫に当てた球なんて身体強化しなかったら残像しか見えなかったし」

「うん。あれは、私にも、わからない。あの速度は、さすがに」

確かにあれはかなり速い球だった。現に由姫が受け止められなかったくらいだ。

色々とコツはあるが大事なのはタイミングである。

「攻撃を合わせる技だな。まあ、タイミングが難しいし、物理的なものじゃなければまず成功しない。今回は好条件が揃っていただけだ」

メグの球速を含めてだが。

オレはそう言ってグランドに目を向ける。そこには様々な体育祭に向けての練習を行っている。何もしていないのはオレ達と健さんや真人くらいだ。

「にしても、一誠って不思議だよな。教えるのは上手いけど」

「うん。一誠くんは、教えるのは、上手い」

「どうしてあの時出て来たんだろうな」

あの時というとメグも覚えがあるのか頷いていた。

あの時、ハトの勉強を教えると言った時、一誠は慌てて入ってきた。あまりに不自然に。その時にオレは勉強が出来ると勘違いしたのだが、蓋を開けてみればそうでも無かった。

「まあ、考えても仕方ないか。つうか、メグは練習しなくて大丈夫なのか？　オレ達はドッチボールを準備運動変わりにしたけど、お前は違うだろ」

「そうなんだけどね、障害物競争って何の練習をしたらいいのかなって」

「確かにな」

障害物競争は毎年変わる。障害物自体がだ。去年は洒落にならない障害物ばっかりだったからな。

競技場は平らな大地。それを見ただけで競技者全員が固まっていたのを覚えている。

障害物競争に平らな大地はありえない。つまり、必ず何かのトラップがあるとしか考えられない。

結果は落とし穴やら地雷やら、はたまた底有り沼やら様々な障害物というか完全にトラップの嵐だった。

多分、オレでも引っかかる。

「走るのは部隊の訓練でするからな。うん、必要ないな」

「だよねだよね。私だって何もしたくないわけじゃないけど、競技が競技だから」

さすがに練習は出来ないな。健さんと真人も練習出来るわけがない。というか、ＦＢＳって一学年に一組だけなんだよな。まあ、並みいる猛者は全部二人が倒したからだろうけど。

悠人達は、誰も立ち向かってなさそうだ。

「私は、弓道の練習、したいけど」

「さすがに弓道はないからな。でも、どうしてだ？」

「孝治さんに、教えて、もらったから。エイミングを」

エイミング。

遠距離射撃をする際に標的をロックオンするために使う魔術で、弓道など射撃を行う競技でも使用は認められている。

何故なら、エイミングはかなりの集中力を使うからだ。さらに、エイミングはただ単に標的を見えやすくするだけで当てやすくするわけじゃない。狙いやすくはなるけど。

確かに、エイミングは上手く使えばかなりのレベルにはなるからな。

「兄さん、エイミングって何ですか？」

「ふふん。ここは私が教えるから。エイミングは射撃を当てやすくする魔術なんだよ」

「狙いやすくする魔術だ。当てやすくする魔術じゃない」

メグの顔が固まる。

まあ、そりゃそうだろうな。知ったか振りは結構恥ずかしい。

「練習、したいから」

「というか、いつの間に孝治に教えてもらったんだ？　ああ、オレがいない日か」

「実家のゴタゴタに巻き込まれたって聞いたけど、海道家はそんなに荒れているの？」

「まあ、荒れてはいるけど収束したな。海道姫子のおかげ」

あれを海道姫子のおかげと言わずに何というか。

「えっ？　海道姫子って総付高の？」

「そうだけど」

もしかして、海道姫子を知っているのだろうか。

「そうなんだ。姫さんって本当に海道家の人だったんだ。時音の言う通りだった」

「誰だ？」

「ルームシェアしている人。親友なんだけと、総付高女子野球部のエースで四番」

「風祭時音かよ」

総付高一の有名人だ。どれくらい有名人かと言うと男で生まれていたなら後楽園を全試合完全試合出来たと言われるくらいの学園都市の天才の一人。

「確か、ドッチボールに参加していたはず」

「まあ、敵じゃないけどな」

オレは小さく溜め息をついて空を見上げた。そして、思う。

世界って、案外狭いものなのかな、と。

第九十一話　イメージの本意

「我が身に宿れ、灼熱の炎。我が身を包め、絶氷の力。全てを呑み込め！　炎舞氷壁！」

言葉と共にレヴァンティンが地面に突き刺さる。

オレの周囲に八つの炎の柱とそれに向かって氷の柱が走り、そして、氷の柱が炎の柱にぶつかった瞬間、膨大な水蒸気が覆い尽くした。

「吹き飛ばせ」

そして、起きる爆発。

飛び散った水蒸気に熱量を加える。それによる水蒸気爆発、の簡易版。

水から起こす水蒸気爆発と違って威力は低い、が色々な箇所で起きるため『天空の羽衣』では受け止めきれない。

ただし、上手く防御魔術によって爆発自体を受け流せればダメージはない。

もちろん、色々な箇所で起きるため範囲の内外関わらずダメージを与えられる。

オレはレヴァンティンを地面から抜いて鞘に収めた。

「これがもう一つの召喚術。精霊召喚とは違う系統の召喚。扱いは

難しいけどな」

炎舞氷壁はオレの数少ない召喚術のレパートリーの一つで唯一の召喚術を使ったオリジナル剣技だ。

オリジナル剣技に召喚術を使う例は珍しいらしく、最後の水蒸気爆発を加えたら召喚術を組み入れたオリジナル剣技最強とも慧海に言われたことがある。

召喚術だからマテリアルライザーに乗っても使えるのがポイントだな。水蒸気爆発を起こせば自爆するけど。

オレの炎舞氷壁を見ていたメグはポカンとしていた。

炎獄の御槍は魔力を起爆剤に炎を作り出すシステム、まあ、基本的な魔術による炎の作り方と同じなので炎が強ければ強いほど魔力を使う。

対する召喚術は威力や範囲は限定されてくるが、使い方次第では広域に攻撃が可能だ。

「上級魔術も大事だが、メグはこれも練習」

「無理！」

即答された。

「ただでさえ上級魔術を扱うのに苦労しているのにこんなに大変なものをするなんて、私には出来ない」

「まあ、そう言わず頑張ってみろって。まあ、召喚術は準備が必要だけど、炎属性の召喚術は一番簡単なんだ」

そう言いながらオレはレヴァンティンに炎を纏わせる。これも一種の召喚術だ。

「魔術はイメージだ。無詠唱もイメージが強ければ強いほど詠唱があるのと同じように強くなる。それはトラウマも同じだ。世界最大の火力を持つ中村はそれを利用している」

実際、オレも無詠唱における魔術では炎と雷が断トツに強い。炎は中村と同じあの日のトラウマを利用するからだ。

雷は時雨の強さを間近で見ていたからだろう。

断トツに強いと言っても他も十分に高い。

ちなみに、アルの場合はイメージというよりもアル・アジフに記述された魔術を召喚するだけだ。発動には時間がかかるがイメージを必要としない分、真逆のイメージを必要とする大地と風の並列発動すら可能である。

合成魔術の基本はよく似たイメージを使った創生だ。

「イメージか。私が炎属性なのはやっぱりお兄ちゃんのイメージが強いからかな？」

「得意属性は家系で遺伝しやすいからな。オレが魔術に対しても万能なのは親父が万能だったからで、別に兄弟姉妹のイメージが左右するのは低い。威力に関わり合いはあるけど」

「ふーん。あれ？　もしかして、魔術がイメージによって強く出来るのは戦闘において有効？」

「正解」

勘違いする人は多い。魔術はイメージすればするほど利便性が増すとは思われているが、実際には戦闘においての利便性が増すだけだ。

このことに関しては勘違いする人は多い。多分、一番密接な治癒魔術に関してはイメージが強ければ強いほど効能が増すから勘違いしているのだろう。

イメージはあくまで補助だ。それを忘れてはいけない。

「魔術は魔術陣と魔力による科学では証明出来ない現象を引き起こすもの。発動に必要なのは無意識に描く魔術陣と魔力であって、イメージだけで魔術が使えるわけがない。イメージだけで魔術が使えると思っているならそれは妄想だ。魔術という根幹は自身が持つ魔力であって魔術陣。イメージだけで魔術が放てるのは無意識に無詠唱でイメージと結びつけて魔術陣を目に見えないように展開しながら無意識に魔力を使った結果だ。まあ、中村や楓がしているのは完全に感覚派だろうし」

中村や楓は完全に天才のカテゴリーに入るだろう。それは悠聖も同じだ。そして、オレや茜を含めた五人は遠縁ではあるが親戚同士。

これを見ただけで慧海や時雨が描く新たな未来の求め方は想像つくけどな。

多分、それが理由だろう。

「さすがにメグに感覚派になれとは言わないさ。ただ、魔術はイメージだけじゃない。イメージで通用するのは子供の児戯か虚仮威しのみ。本当に強くなるのは基礎を極めてイメージを作り出した者。メグなら出来るんじゃないか？」

「難しいと思うけど。魔術って奥が深いんだ。みんなそんな感じはしないけど」

「魔術に関してなら孝治が一番いいかもしれないな。まあ、オレはオリジナル魔術に関しては他者の追随も許さないけど」

オレが持つ最大にして最高傑作のオリジナル魔術。あれだけは本当に無理だ。オレみたいなあらゆる系統を得意としなければ。

「自慢だね。でも、そんな魔術なら見せて欲しいな」

「誰にも言うなよ」

この魔術だけは実際に体験した人にしかわからない。

オレは魔術を展開する。時間を引き伸ばすために使用する魔術だが、正直、レヴァンティンの補助演算がなければ到底不可能な魔術だ。

オレ達を囲むように空間を固定し、あらゆる空間の内外への移動を停止する。簡単に言うなら隔離するものだが、その停止を時間にも加える。

これによって出来上がるのが隔離空間だ。

「オレのオリジナル魔術の傑作の一つ、ロストボックス。まあ、使い道がかなり限られたものになるけどな」

「失った箱？」

「時の流れを見失い、世界すらも見失なった究極空間。結界系魔術の最高傑作。まあ、外に干渉することは出来ないし、内部でも流動が停止する以上、魔術の発動は出来ない」

ロストボックスの最大の弱点がそれだ。空間を最大限まで肥大化させたところで何のメリットも無いし、魔力を失うというデメリットしかない。

しかも、集中が切れて空間が砕け散ったなら急激な時の流れにダメージを受ける。

オレはロストボックスを解いた。全てに時間が戻る。

「イメージの最終形態がオリジナル魔術だまあ、オレの誇れるオリジナル魔術なんてファンタズマゴリアとロストボックスだけだけどな」

ファンタズマゴリアは絶対防御だけど、とある弱点を内包しているからな。それ以外は完全に絶対防御だ。

「魔術って難しいね。でも、やってみる。最初はイメージはあまり作らないでやった方がいい？」

「結構難しい議題にはなるがそうだな。イメージは障害になりやす

いけど道を開く手段にもなりやすい。まずは自分の中での魔術を喚起する。それが安定してからイメージを作っていくのが一番だろうな。本当に強くなるなら」

「わかった。まずは自分の中の魔術を喚起する」

メグが目を瞑り、魔術陣を展開する。その魔術陣を見た瞬間にオレは小さく頷いた。小さくというより理解して頷いたというべきか。

メグが魔術を放つ。オレはそれをレヴァンティンで打ち消した。

「あれ？　不発？」

「メグも大概だな」

オレは小さく溜め息をつく。

今の魔術陣は炎属性上級魔術のフレイムブラスト。

メグの魔術の本質はやはり炎に対するトラウマだろう。

「メグは炎に関するトラウマはあるか？」

「えっと、一度、自宅が家事になって、お父さんが助けてくれるまで部屋の中にいたからかな」

どうりでフレイムブラストなわけだ。

メグのトラウマはおそらくバックドラフト。空気が少ない炎の空間の中に空気が入ったことで燃焼して炎を噴き出す現象だ。

見た目はフレイムブラストに似ている。

あれでフレイムブラストを放てるのはトラウマしかない。

「前途多難だな」

オレは軽く肩をすくめた。

第九十二話　みんなの関係（前書き）

この話は登場人物が多めです。話し方は皆別々なので今までの話から大体の話し方はわかってから読んでください。

第九十二話　みんなの関係

すでに五月は半ば。気温も少しずつ上昇を始め、昼になると少し暑いという状況になっていた。暑いと言っても夏本番にはまだまだであり、気温的にはまだまだ過ごしやすい。

ただし、この時期から訓練中の熱中症には気をつけないといけない。冷却魔術があるとは言え、熱中症にかかれば訓練は約一週間は遅れる。その遅れを取り戻そうとすればさらに熱中症になりやすくなる。そういう負の連鎖があるからだ。

ただし、訓練バカ（オレも含む）に関しては話は違う。文字通りバカだから元気に訓練をする。むしろ、熱中症なんてかからないからな。

「一つ、聞いていいですか？」

「いいぞ」

由姫が水分を補給しながら尋ねてくる。オレは炎獄の御槍を受け流しながら言葉を返す。

「今日、暑いですよね？」

「珍しく３０℃近くになるんじゃないか？　体感の話になるけど」

「どうしてそんなに動けるのですか？」

メグがすかさず炎獄の御槍を振ってくる。オレは後ろに下がりなが

らレヴァンティンで受け流す。

そのまま一歩を踏み出しながらレヴァンティンを振るがメグは炎獄の御槍で受け止める。

なかなか万能はよくなってきた。まあ、そうなるように鍛えているからな。土台が出来上がっている分、成長は早い。

「体のセーブの仕方があるからな。オレの場合は昔から変わらず訓練しているからで、メグはただ単に炎に強いだけだろ」

オレはそう言いながらメグを見た。メグは汗一つかいていない。

新陳代謝が悪いというわけではなく、息は荒いが汗をかいていないだけだ。聖骸布（アストラル）を巻いていないというのもあるかもしれないが、おそらくは炎獄の御槍のおかげだろう。

「周、まだやる？」

「いや、これぐらいなら十分だろ。それにしても、休憩時間にまで手合わせってよくやるよな。受けるオレもオレだけど」

「だって、最近、強くなったって思えるから。みんなのおかげで強くなっているし。そろそろ魔力負荷？」

「もう少しだな。三日後ぐらいになるから、体調は万全にしておくこと」

「兄さん、魔力負荷って何でしたっけ？」

由姫の言葉にその場にいた全員（第4、第5分隊とベリエ、アリエ以外）の視線が由姫に集中した。

確かに、由姫は音姉と一緒で魔力負荷なんてしない。まあ、出来ないだけど。だから、手段はわからなくてもいいが、名前と意味だけは知っていて欲しかった。

「メグ」

「えっ？　えっと、魔力による負荷を日常生活中に与えることで魔力筋肉と通常筋肉を鍛えられる。ただし、生半可な肉体でしたら怪我をする？」

「まあ、合ってはいるな。由姫の場合は必要ないけど」

「重力負荷ならしていますよ」

そのことは初めて聞いたのだが。

『由姫の重力負荷はすごい。というか、普通は耐えられない』

「そうやな。由姫の重力負荷は飛んでられへんし」

「ですが、体を壊さないのでしょうか」

「大丈夫ですよ。徐々に強くしていけば強い負荷でも大丈夫です」

「由姫ちゃんの場合は元が出来ているからだよね」

オレは固まって休憩している孝治達に近づいた。

「知っていなかったのはオレだけか？」

「だろうな。俺や悠聖も知っていたことだ。重力負荷というのは危険だが、筋力を鍛えるという点ではこの上なく負荷が高いからな」

「オレには理解出来ない負荷だけどな。体重を重くしてどうするんだか」

悠聖の言うこともわかるけど、お前は体重を気にするような奴だったか？

オレは小さく溜め息をついた。

「まあ、重石をつけたトレーニングだと考えればいいか」

「重石って、周隊長はいつの時代の人間なんだ？」

「違和感はないが？」

「オレは孝治にも違和感を覚えだした。つか、重石って言わないだろ、普通」

「そうなのか？　由姫が昔、時々数十キロの重石で筋トレしていたからさ」

昔と言っても一年ほど前だ。第７６移動隊にいても学生でなかった時代に由姫はよくそれで訓練をしていた。

オレもいくらか重石をつけてやっていたな。

「周隊長って案外脳筋なのか？」

「周が脳筋以外の何がある。訓練バカだぞ」

「今更だったな」

「お前らはオレに喧嘩を売っているのか？」

別にオレは脳筋でも何でもないはずだ。由姫は別だが。

『確かに、由姫のトレーニングはみんなと一味違うというか、音姫と同じ？』

「由姫ちゃんは白百合随一の魔術師だけど、才能は中学生レベルだもんね。私も由姫ちゃんも白百合の血が通っているし」

白百合の血は本当にすごいからな。生身で身体強化をしたのと同等の能力を出せる。ただし、ちゃんと訓練したらの話だ。

何もしないでそんな力は出せない。

「白百合の血は反則よ。私もアリエル・ロワソ様に連れられて戦場に行った時、白百合家の一人と戦ったけど、一分持たなかったわ。どうやったらそんな力があるのかしら」

「お母さんの話だと、白百合家は遥か昔に神の力を持った男と、最強の人間の女が結婚して生まれたって聞いたけど」

そりゃ最強になるな。

実際、白百合家は音姉や由姫だけじゃなく、素子さんや親戚の奴らも加えたら第一特務みたいな戦力になるからな。その中でも音姉は最強中の最強だけど。

『最強と言ったら周さんの家系も同じ。周さんの場合は魔術？』

「まあ、雷魔術のエキスパートである時雨に最強の魔術師だった親父。魔術師としての才能は親父を超える茜に万能の魔術師であるオレだからな」

確かに魔術という点においでなら海道家もすごい家系だ。

「確か、始まりが神になった男と神であった女が結婚したからだったっけ」

「へぇ、海道の家ってそんな始まりやったんや。海道家ってすごいな」

「いやいや。光も周隊長と同じ海道家だよね？　オレもだけどさ」

「それと比べれば俺は」

「私も」

「か、考えても仕方ありませんよ。そうですよね、周様」

そういう都も鬼の血を引いているんだけどな。つか、よくよく考えるとすごいパーティーだよな。

『気にしない方が勝ち組』

「あなたの場合は気に出来ないの間違いでしょ。私は悠聖の隣にいたらなんだっていいし」

『報われないくせに』

亜紗がボソッと言うかのごとく小さな文字をスケッチブックに作り出して見せる。多分、冬華の言った言葉が図星だったんだろうな。

「悠聖さんはどうして冬華さんの思いに答えないんですか？　悠聖さんと冬華さんってお似合いだと思いますけど」

「由姫、わかってないよ。三角関係というのはね、本当に複雑なんだよ。私にはわからないけど」

「わからないのかよ。つか、メグ、三角じゃなくて四角だろ。まあ、悠聖が考えそうなことなんてよくわかるさ」

オレは悠聖に向かって笑みを浮かべた。対する悠聖は視線を逸らす。悠聖は確かに傍目からみれば優柔不断な奴だが、あいつが考えているのは一つだけ。オレと同じでどうすれば全員を幸せに出来るかだ。それを考えているからか実は未だに童貞だったりもする。

「私は言ったように悠聖のそばにいるだけよ。亜紗と同じように」

『私は周さんの隣にいるだけ』

「羨ましいです。私も冬華さんのように周様と隣にいられればよい

のですが」

年齢どころか学校すら違うからな。それに、冬華みたいにされたら毎朝が大変だから拒否させてもらう。

「何というか、第７６移動隊ってみんな恋をしているんだね。ちょびっと羨ましいかも」

「メグさんもいつか見つかります。私の場合は兄さんのような人が」

「ごちそうさま。でも、周と由姫って本当に仲がいいよね。というか、よくよく考えてみると、周ってギャルゲーの主人公？」

「なんじゃそりゃ？」

ギャルゲーって何だ？　ゲーというのはゲームのことだろうから何かのゲームの分類なのだろう。

オレみたいな主人公でギャルという言葉。

確か、ギャルというのは古代の言葉で無双という意味があったはずだ。つまり、無双ゲーム。意味がわからない。

「光、説明をお願い」

「海道って案外世間知らずやから。ある意味『ＧＦ』バカ？」

「バカと言われて否定したいが否定出来ない。というか、『ＧＦ』バカなのは孝治の方だろ」

「羨ましいか？」

「そんなに誇らしげに言われても」

オレはどう言葉を返せばいいんだ？

「まあ、確かに『ＧＦ』バカなら周隊長よりも孝治だよな。そうなると、オレは何バカ？」

「ただのアホやないん？」

「バカですらない。というか、アホと言われる方が地味に傷つくことに今気づいた」

「そうなん？　うちはバカと言われたら怒りたくなるけどな」

中村の場合は何故か根っから関西の方だからな。ちなみに、昔からそうだ。関東生まれ世界育ちなのに。

間違ってないよな。『ＧＦ』の隊員として世界を飛び回っていたから見たがってはいないはず。

『ところで、いつの間にこの話に？』

「さあ。いつの間にだ？」

亜紗の言葉にオレは首を傾げる。今となっては最初にどんな話をしていたか思い出せない。

「とりあえず、訓練の再開を」

「誰か来た」

音姉がそう言ってオレの背後を見る。振り返ったそこにいるのは白銀のコートで身を包み、短髪の銀髪をした白人の青年。その腰には白と黒の刀がある。

『ＧＦ』のランキングで音姉の一つ下の人物。

「ギルバートさん」

オレは声を上げた。ギルバートはにっこり笑みを浮かべる。

「久しぶりだね、第７６移動隊のみんな」

第九十三話　ギルバート・Ｒ・フェルデ

ギルバートさんの白の刀、シュナイトフェザーが孝治の握る運命を受け流す。孝治はすかさず姿勢を戻しながら黒の刀、ラファルトフェザーを受け止めようとするが、それより早くラファルトフェザーが孝治の首筋に突きつけられていた。

ギルバートさんがシュナイトフェザーとラファルトフェザーを鞘に戻す。

これでギルバートさんの四連勝。メグ、冬華、由姫、孝治が負けた。

メグはともかく、冬華はいい勝負すると思ったのだが、相棒のフェンリルが開始早々眠らされて苦しい立ち回りとなり負けた。

由姫はリーチの差。孝治は完全にスピードだろう。

世界最速の人間。それがギルバート・Ｒ・フェルデだ。

ギルバートさんは小さく息を吐いた。

「みんな強くなっているね。このままだと僕の地位も少しは危ないかも」

「ギルバートさんの地位は大丈夫だろ。そもそも、世界三強の一人じゃないか」

オレは呆れたようにギルバートさんに言った。

ギルバートさんが苦笑を返してくる。実際にギルバートさんは世界三強の一人、ランキング三位の人物だ。ギルバートさんに勝つならオレは孝治か由姫か亜紗と組まないと勝てない。

戦い方はいくらかあるけれど。

「最近はそうは言っていられないからね。さて、手合わせは終わりとさせてもらうよ。僕が来た理由は周に話があってね」

「だと思った。みんな、通常訓練に戻ってくれ。メグには音姉がつくように」

オレの言葉と共に全員が動き出す。それを見ていたギルバートさんは嬉しそうに笑みを浮かべた。

「本当に隊長らしいね」

「ギルバートさんはオレを何だと思っているんだか。で、用事はなんなんだ？　ギルバートさんが来るほど大きな用事なんだろ」

「そうだね。これは君と亜紗、アル・アジフに関わる話でもあるからね」

「生体兵器か」

オレ達三人に共通すること。それは体のどこかが生体兵器として改造されているという点だ。

確かに、ギルバートさんが来るのに相応しい。

「昨日、『ＥＳ』のデータバンクから生体兵器についての情報が流出した可能性がある」

「情報流出？　どのデータが？」

「アリエル・ロワソの話から推測してアル・アジフの体自体と周と亜紗、二人のデータ」

はっきり言うなら最悪の情報流出だ。生体兵器は必ず生身の人間を利用する。エリシアの場合はオーバーテクノロジーによる記憶媒体で生身の思考と同じものを作り出せたが、現実はそうはいかない。

つまり、無理やり拉致した人を生体兵器とすることも可能だ。

最悪、生体兵器部隊というのも作れる。人道的ではないが、オレや亜紗という例がある以上否定出来ない。

「犯人の目安は『悪夢の正夢（ナイトメア）』達だろうな」

「やはり？　僕達も同じ結論だ。アル・アジフのデータも流出した以上、アル・アジフが生体兵器、又は、新たな体を手に入れたことを知る人物しかありえない」

候補に挙がるのは『ＧＦ』や『ＥＳ』も同じだが、情報が多ければ多いほど痕跡も残しやすくなるため、比較的データの多い『ＧＦ』と、開発データの存在する『ＥＳ』はまずない。

そもそも、エリシアが生体兵器になったことを知っている数が限りなく少ないはずだ。

それを知っているのは『悪夢の正夢（ナイトメア）』達。エリシアが再起不能になったと知っているはずだから。

「奴らの規模もよくわかっていないのに生体兵器の情報までいくとはな。あいつらは何者なんだ？」

「目下調べ中だよ。ただ、僕も慧海も不穏な空気を感じ取っている。ただでさえ幻想種や『赤のクリスマス』に関係してくるのに、まさか、生体兵器にまで関わってくるなんて」

「生体兵器が亜紗クラスになるなら第一特務でも対処は難しいぞ。アリエル・ロワソからの回答は？」

「大事なデータは持っている」

その言葉だけで十分だ。

生体兵器になることで使用出来るドライブモードの一つ、ブラストドライブ。

オーバードライブに匹敵する力はあるが、オーバードライブよりも遥かにデメリットが多く、使用時の制約も多い。

ただし、オレや亜紗クラスがブラストドライブになればオーバードライブしなければ対処出来ない時がある。オーバードライブが命を蝕む技だとしても。

ドライブだけでも何とか戦えるんだけどな。

アリエル・ロワソが言った大事なデータとはブラストドライブのデ

ータだろう。ブラストドライブはオーバードライブと違って命は削らないから流出したらかなり大変だ。

最悪の可能性も考えたなら第一特務が蹂躙されかねない。ブラストドライブのあれはそれほどまでに強い。

「最悪の事態は逃れられたが、危険であることには変わりはないな。まあ、どうにかなるレベルには収まっているけれど」

「生体兵器の情報が手に入った以上、次は実物を狙う可能性もある。だから、気をつけて。アル・アジフは大丈夫だろうけど、周や亜紗は大きな弱点がある。それを狙われたなら」

「そんなこと、オレら自身が一番理解しているさ。オレも亜紗も弱点がある。それを知っていてここまで戦いぬいていた。これは紛れもない事実だ。違うか？」

「そうだね。周達は戦ってきた。今までも、これからも。すこし、愚問だったかな」

「多少はな」

オレは笑って答える。確かに、ギルバートさんの言うようにオレ達が危険なことは変わりない。ブラストドライブのデータはアリエル・ロワソや時雨が必死に隠している物事の一つだ。

もし、オレか亜紗が捕まり、解剖でもされたならその真実が解き明かされる。ブラストドライブの大きなメリットが。

それにしても、どうしてこのタイミングで『悪夢の正夢（ナイトメア）』達は動き

だしたのだろうか。少し疑問に思ってしまう。

「調べ物が多いな。どこまで情報を絞ればいい？」

「生体兵器に関して周囲に漏れないように出来るなら。それは周がよくわかっているよね」

確かに、オレならよくわかっているさ。

「わかった。ギルバートさんはこれからどうするんだ？」

「久しぶりの学園都市だし見て回るよ。色々と変わったところもあるだろうし」

「まあ、シュナイトフェザーとラファルトフェザーを持っているギルバートさんだから大丈夫だとは思うけど、建物に被害が無いように」

ちなみに、全く冗談じゃない。『天空の羽衣』やファンタズマゴリアなどの防御系に関しては極めている自信のあるオレでもシュナイトフェザーとラファルトフェザーの斬撃は受け止めることは出来ない。

気絶はさせても建物に被害を及ぼす可能性が極めて高いのも特徴だ。

オレの言葉にギルバートさんは笑みを浮かべた。

「手加減はするよ」

ギルバート・R・フェルデ。

『GF』において三強の一角。その強さは一時期、矛神を持つと言われたほど。

そのギルバートが足を止める。

「そろそろだと思っていたけど、遅かったね」

ギルバートが振り返った先には鮮やかな赤のゴスロリ服を着た正の姿があった。その腰には柄の半ばまで隠れるほど大きな鞘のある剣が身につけられている。

「やはり、気づかれていたようだね。さすがは、ギルバート・F・ルーンバイト」

正の言葉にギルバートの眉がピクリと動いた。そして、笑みを浮かべる。

「君は、本名で呼ばない方がいいかな」

「やはり、僕のことを知っているみたいだね。まあ、予想はしていたさ」

正がクスッと笑う。

ここに周がいたら思わず唾を呑み込むであろう光景。その中で、正

は笑みを浮かべている。

「色々嗅ぎ回っているようだけど、君は、いや、君達は何がしたいのかな？　僕には到底わからない。周をどうするつもりだい？」

「僕達はそういうつもりはないさ。僕達は新たな未来を求めて動いているだけ。君や周と同じように」

正の言葉にギルバートが返す。ギルバートは静かに笑みを浮かべた。

「僕からすれば君の方が不思議に思えるよ。君は、死ぬ気かい？」

ギルバートのその言葉に正は笑みを浮かべた。そして、口を開く。

「僕が世界を救うためだよ」

「なるほどね。さすがは『聖剣の担い手』だ」

正が鞘から剣を抜き放とうとした瞬間、正の首筋にシュナイトフェザーが当てられていた。

正は柄から手を放す。

「君だけが物事をたくさん知るわけじゃないよ」

「そうだったね。君は、ギルバート・Ｆ・ルーンバイトは『伝承を紡ぐ者』。僕のことも知っているはずだ。だけど、どうして僕を止めない？　君ならわかるはずだ。このままだと」

「必要ないからかな」

ギルバートの言葉に正は背筋が凍るのがわかった。ギルバートの力を知っている以上、否定する材料が無かったからだろう。

「君は勝てない。例え、いくら歴代最強だとしても、覇者にはなれない。君は、何を目指す？」

「知っているかい？　ギルバート・R・フェルデ」

正はギルバートに背中を向けた。

「聖剣を掴んだ者は伝説に名を残す。だけど、伝説を掴むことは出来ない。なら、どうすれば伝説に手が届く？」

ギルバートが正を向いてまばたきした瞬間、そこに正の姿は無かった。

ギルバートが向けていたシュナイトフェザーを鞘に収める。

「君は、本当に何がしたい？」

第九十四話　異名の理由

黒板に踊る文字。それを理解している人は一体、このクラスに一人はいるだろうか。

黒板の文字は数式。ただし、高校レベルではまずお目にかからないレベルの数式だ。普通は解けない。

かく言うオレもあまりの難しさに見て一秒で降参したけどた。確かにオレはアメリカの大学を出ているから普通に大学レベルでもついていくことは出来る。

だけど、数学だけは違う。数学だけは出来ない自信しかない。

つか、この授業に何の意味があるんだ？　ひたすら倫理の授業や教育の授業を聞いている方がためになるような気しかしないんだが。

オレは小さく溜め息をついて考える。

ギルバートさんが持ってきた話。それはオレやアリエル・ロワソからすれば苦々しくなる話だ。

生体兵器の開発は確かにアリエル・ロワソ達、『ＥＳ』研究者が行っていたが、その生体兵器はオレのような一部改造型で、亜紗はちょっと違う研究者達だったらしい。よく知らないけれど。

その面々やデータはオレやレヴァンティン、アリエル・ロワソが消し去ったので安心していたが、まさか、最新のデータを、しかも、全体生体兵器のデータも盗られた。

それは最悪の出来事だ。また、亜紗みたいな奴が生まれるのか。

「面倒だよな」

「ほう、先生の授業中にそういう独り言を呟くのだな？」

斜め右後ろから聞こえてくる数学教師の声。

黒板には理解出来ない数式。そして、今は授業中。

背筋に汗が流れるのがわかった。

「今ここで、謝るか、外で立っているかどっちかを選べ」

「はぁ、面倒だよな」

とりあえず、オレはもう一度呟くしかなかった。

「災難だな」

授業が終わり、オレが自分の席に戻るとちょうど近寄ってきていた一誠が話しかけてきた。オレは軽く肩をすくめる。

「そうでもないさ」

「口は災いの元だ。場所と状況をわきまえた方がいいぞ」

「わきまえた方？　ワカメ、俺様にわかるように説明してくれ」

「どうしてあなたのようなハトが偉そうなのか気になりますが、説明しましょう。わきまえたは漢字で言うと脇前たになります」

そんなこと絶対にありえないからな。

「つまり、脇の前に立ったような感覚になるわけです」

「なるほど。俺様特製のラフレシアの香りがほのかに香るんだな」

とりあえず、あのバカ二人の言葉は理解しないでおこう。

「でも、珍しいよね。周が授業に集中しないなんて。いつも、授業をしっかり受けているか内職してるかだもんね。僕はよく目にするよ」

「確かに。兄さんは必ず何かに集中していますよね。考え事なんて珍しい」

「いや、普通にしているからな」

オレはいたって普通に否定する。

「大体、並列処理は大事だからな。オレは今まで授業を受けて内職しながら考え事をしていたし」

「その秘訣を僕にも教えて欲しいな」

「それって、戦闘の基本スキルを発展させたやつだよね？」

メグが少し考え込むような仕草と共に尋ねてくる。対する由姫は不思議そうに首を傾げていた。

これが感覚派と努力派の違いか。

「マルチタスクのことだな。まあ、よく似たものだ。マルチタスクは同じ事柄を同時にするものだ」

「マルチタスクならよくやるよね。僕だって得意だよ」

多分、ＦＢＳのことだろうな。

「マルチタスクの欠点が並行しながら処理をするためどちらも完全な力を発揮出来ない。戦闘では臨機応変さを求められるからそこは問題にならないけど」

「つまり、周の並列処理は完全に力を発揮するということよね？そんなことは出来るの？」

「この中だと、夢が出来そうだな」

名前を呼ばれて夢はビクッと体を震わせた。

「夢の場合は集中力がすごいから、その集中力で複数の事柄を並列処理出来るようにすれば出来るとは思う」

「でも、難し、そう。私には、ちょっと」

「まあ、普通は難しいからな」

並列処理はマルチタスクとは違う。マルチタスクというよりデュアルタスクかダブルタスクのどちらかが正しい。

マルチタスクは絶対に二つの事柄だ。対するオレの並列処理は複数の事柄。最大四つを並列に処理する。その難しさを例えるなら、音姉と孝治と亜紗の攻撃を耐えきるくらいだ。

それが出来るのも、オレが生体兵器だからなんだけどな。

「へぇ～、僕も頑張ったら出来るかな」

「無理だろうな」

一誠が真人の言葉を一刀両断する。

「それが出来るからこそ、周は異名を獲得したのだろう」

「確か、戦場を、制する、者、だった？」

「正解。戦場を制する者と書いてオールラウンダー。まあ、命名理由は今でも有名なんじゃないか？」

「三年前のアウロラの戦いだな」

一誠の言葉にオレは頷いた。

三年前。『ＥＳ』の中から過激派が再分離をした。しかも、過激派

の中でも最も過激派が分離し『ＥＳ』過激派を作り出すということがあった。

戦うことでしか全てを手に入れられないと信じるその一派は多くのテロを起こし、『ＧＦ』、『ＥＳ』、国連の連合軍が本拠地を攻めるという史上類を見ない作戦さえ行われたのだ。

その戦い、アウロラの戦いの最中、国連軍が突如として崩壊。その余波に巻き込まれて完全な乱戦になった最中、ちょうどオレ達が到着した時だった。

乱戦の最中にオレはとある命令を第７６移動隊に出して乱戦の真っ只中に飛び込んだのだが、その言葉がいつの間にか広まっていたりもする。

「アウロラの戦いってことは、周が自由に戦えと言った時よね？」

「どうしてそれが広まっているんだか」

オレは小さく溜め息をついた。乱戦の最中で作戦は難しいと判断したからそう言ったのだが、翌年には、自由に戦え、という命令形態が出来上がっていたりもする。

『ＧＦ』はいつからでたとこまかせの作戦を作るようになったんだ？

「その乱戦の中で、オレは混乱する味方をまとめ上げ、深くまで潜り込んでいた奴らを囲み、残った面々を指揮官に預けて本拠地に孝治と一緒に飛び込んだ、というわけだ」

「実際に、それが異名の理由となりましたからね。ちなみに、私もかなり驚いています」

「そう、なんだ。でも、たった、それだけで、どうして？」

まあ、そうなるだろうな。

確かに戦況を立て直して敵陣に突入しただけじゃ普通はそんな大仰な異名はつけられない。

由姫が驚いているのもそれが一つでもある。

「まあ、あの時の戦果がいろいろやっちゃったからな」

オレは苦笑した。アウロラの戦いの際には様々な戦果を出した。その報告を全てまとめてからオレは頭を抱えたっけ。

「敵フュリアス部隊全滅と砲撃部隊の撹乱、突撃兵部隊の壊滅でしたよね」

由姫が思い出すように言う。ちなみに、乱戦の最中でそれを行った。

混乱する味方を立て直し、敵の攻撃の要を壊滅させて一気に攻勢に出た。一つ一つを見れば小さなことだが、その全てを見てみればアウロラの戦いはオレによって途中から戦況をひっくり返したと言ってもいい。

元々、戦術指揮やオールラウンダーとしての評判、あらゆる戦場で最大の力を出せることも考慮されて出来たのが、戦場を制する者（オールラウンダー）。

「海道周は単体では弱いという話は確かみたいだな」

「まあ、オレは器用貧乏だからな。負けない戦いは得意でも勝つ戦いは相性になってくる。というか、一誠はよく知ってるよな。これでもルーチェ・ディエバイドの優勝者なんだけど」

まあ、あれは乱戦に飛び込んで漁夫の利を得ただけだけどな。

「情報収集は得意だ。そろそろ時間だな」

一誠の言葉にオレ達は時計を見る。確かに次の授業が始まりそうだ。

オレは小さく息を吐いて席に座る。

「退屈な授業が始まるな」

「頑張って」

夢の言葉にオレは苦笑するしかなかった。

第九十四話　異名の理由（後書き）

日常の話が全く思いつかないという状況に。そういうわけで予定を早めて日常をぶった斬りストーリーを進めていきます。そろそろ第二章の重大な内容に入って行こうと思ってます。

第九十五話　オーバーテクノロジーの産物（前書き）

日常なんてもう無理です。

第九十五話　オーバーテクノロジーの産物

「すまない。耳が遠いようだ。もう一度言ってくれないか？」

オレは通信機を左手に、右手を額に当てながら口を開いた。

さっき聞いた内容があまりに予想外だったからか全然頭の中に入っていない。というか、普通はありえないだろう。

『話は聞け。狭間市に研究所跡が見つかった』

通信機から聞こえてくる時雨の声にオレは小さく溜め息をつく。

「年代は？」

『慧海の話では、魔科学時代。施設自体もはっきりしているらしい』

「アルタミラ以上にか？」

『ああ』

その言葉にオレは溜め息をつくしかなかった。

オーバーテクノロジーの産地であるアルタミラは世界で最も原型を残した場所とされており、今でもアルタミラ発の新たなテクノロジーが発表されることがある。

それ以上の施設。どう考えても胡散臭く感じるが、場所が場所だ。

「狭間の地か。誰か中に入ったのか？」

『まだだ。安全確認が出来ない以上、入れない。だからこそ、お前に連絡をした』

「確かに、オレやアルなら安全に調査出来るしな。わかった。オレも気になるから行くことにする。明日に到着でいいよな？」

『ああ。慧海が滞在しているから大丈夫だろう。では』

時雨が通信を切る。その音を聞いたオレは通信機の配線の一部をレヴァンティンから抜いた。

『いやー、驚きましたね。まさか、狭間研究所が見つかるなんて』

「そうだな。狭間市は確かに特別だけどって、レヴァンティン。今、何て言った？」

『いやー、驚きましたね。まさか、狭間研究所が見つかるなんて、ですけど』

「狭間研究所？」

そんな話は聞いたことがない。

「周、狭間研究所がどうかしたのかの？」

オレの声を聞いたアルが近寄ってくる。というか、アルも狭間研究所について知っているのか。

『マスターにさっき通信が入って狭間研究所らしきものが見つかったそうですよ。私とアル・アジフにエリシアは行くことが確定ですね』

『久しぶりで楽しみですね。今では体は少し違いますが』

「そうじゃな。じゃが、ようやく見つかったなら行きたいとは思うぞ」

「お前らストップ。狭間研究所って何なんだ？　イグジストアストラルが保管されてた場所以外に何かあるのか？」

オレ達が狭間市にいた頃、真柴、結城の事件の際、狭間市に眠っていたイグジストアストラルを鈴が動かしたことがある。

あの時は鈴が悠人達と一緒に目を逸らさせるために色々向かったのだが、その中に奇妙な遺跡があった。

調べて見たが、対した手がかりは見つからなかったのを覚えている。

『マスターにわかりやすく説明するなら、私達が生まれた場所ですね』

「アルタミラじゃないのか？」

「間違ってはおらぬ。我もレヴァンティンもアルタミラで最初は開発された。そして、正式に作り上がった場所が狭間研究所じゃ。すでに無いものだと思ってはいたが」

『そうですね。私もアル・アジフと同じでした。だから、私達は狭

間研究所を真剣には探さないでいたのですが』

『まあ、イグジストアストラルがあったことを考えても、狭間研究所は隠されていたと考えるべきですね。それにしても、よく、今までアル・アジフにも見つかりませんでしたね』

「それほどまでに秘匿性の高い施設なんだろ。実際、史実にも様々な秘匿性の高い施設はたくさんある。例えば、慧海達の時の相手とか。慧海が情報を手に入れれたのがスパイからの連絡だもんな」

魔術の探査ですら逃れられるレベルをこの世界の技術で作ることは出来る。金はかかるけど。それを考えたら魔科学時代の技術なら今の技術をはるかに超越できるものが作れるはずだとは思うけど。

まあ、それは置いておいて。

「メンバーをどうするかだな。強襲任務じゃないからメンバーは絞っておかないと」

「そなたと我は確定じゃろ。つまり、孝治と音姫は居残りじゃな」

普通はそうなるよな。第７６移動隊を動かすのは実質、オレ、孝治、音姉、アル、悠聖の五人だ。悠聖は言うほどではないが、もしもの時の指揮官としては十分だから悠聖も置いておいた方がいいだろう。

「そうなるな。後は、向こうに友達のいる由姫と、護衛に亜紗。地元の都と琴美、ぐらいか？」

施設内部に入ることを考えたら砲撃メンバーは誰も入れない。小回りが利いて戦闘能力も十分に高い面々を考えておかないとな。

「和樹や花子はどうするのじゃ？」

「花子？　ああ。委員長のことか。今回は遊びに行くってわけじゃないからな。最低限の戦闘が出来る琴美クラスが上限だ。それに、たくさんいるのも邪魔になるしな」

「なるほど。フュリアス部隊は置いて行くのか？　それとも、共につれて行くのかの？」

「えっ？　電車で行くぞ」

その言葉にアルが固まった。気持ちはわかる。

「ここから狭間市は一応、エクスカリバーの防空圏内だ。もしもの時はエスペランサを動かすさ」

「なるほどの。電車旅とは予想だにすらしておらぬかった。了解じゃ。面倒ではあるがの」

「エスペランサだと片道一時間弱だしな。あっ、そうだ。メグもつれて行くか」

メグが入隊してから大きな任務は未だに無い。だから、メグもつれて行くのはいいかもしれない。小回りは全く効かないから戦場では役立たずになりそうだけど。

まあ、戦闘になればオレ達でどうにかするしかないか。

「妙案じゃな。メグはそなたに似て成長する。もしかすると、そな

たと肩を並べるレベルになるかも知れぬしな」

「まあ、確かにメグは努力の塊だからな。オレとよく似ている。持っている神剣も極めて強力なものだし、筋も悪くはない。魔力負荷も順調だ。だけど、オレと並べるのは言いすぎじゃないか？」

「そうか。そなたは炎獄の御槍の噂を聞いておらんのじゃな」

「噂？」

あの槍に何かあるのだろうか。神剣についてはあまり詳しくないからそこまで調べたことは無い。まあ、つい最近まで神剣なんて存在しないという理論で言っていたからだけど。

「曰く、世界を創生した炎の名残」

「はいはい。そんなわけないだろ。世界の創生なんて文献がなくなってから机上の空論ばかりだろ。レヴァンティンやアルみたいなオーバーテクノロジーの産物ならともかく、そんな空想の産物を持ってこられてもわかるかっつうの」

「ちなみに、そなたはどうやって地球が生まれたと思っているのじゃ？」

「一番考えられるのは塵屑から集まったからだろ？　まあ、人界やら魔界やら天界やら音界がある以上、何らかの別要因によってこの世界の宇宙が作られたと考えるのが妥当だろうな」

これに関しては永遠に結論は出ないだろう。もし、誰かが世界の創世に立ち会って、地球のような世界を作り上げる工程を見ることが

出来たなら話は別だが。

そんなことはアルですら不可能だ。

「しかし、創世の炎というのはあながち間違いではあるまい」

「まあ、確かにそうなるな。オレは神を信じるわけじゃないけど、地球の創世に神が関わったと言われた方がしっくりするし」

「神というものも説明出来ぬ怪奇現象を説明するために生まれただけかもしれぬしの」

確かにアルの言う言葉も一理ある。大体、地球に生命が生まれたことが奇跡なのだ。様々な過程の中の奇跡。

まあ、生命が生まれたというより人類が生まれたということに感謝を込めて奇跡だと言っているのだろうな。神というのもそれを込めたものという見方も出来る。

「というか、オレ達は何の話をしていたんだ？」

「そう言えばそうじゃな。エリシアは覚えておるか？」

『狭間研究所のことです』

『マスターもアル・アジフも脱線すれば話はとても長いですね』

そう言えばそうだった。とりあえず、メンバーは決まったし、後はどうしていくかだな。

狭間研究所の中に入ってみないとわからないし、それに、狭間市にはあいつがいる。

「まあ、何とかなるだろ」

オレはあいつの顔を思い出しながら小さく息を吐いた。

第九十五話　オーバーテクノロジーの産物（後書き）

次から舞台は狭間市に入ります。結構長くなるかもしれません。狭間市から戻れば第二章はいよいよ大詰めの体育祭に入る予定です。

第九十六話　再び狭間市へ

ガタンゴトンと電車の音が鳴り響く。時間は早朝。オレの周囲にはたくさんの屍が散乱していた。

文字通りの屍ではなく、死屍累々と言うべき状況かもしれない。理由は、寝不足。

ケロッとしているのは亜紗くらいだ。

「つうか、準備だけで一日を潰すなよ」

オレは小さく溜め息をついて読んでいた本を閉じた。慧海が書いたものだが、魔術についての仕組みとその派生に関して書かれた７０年ほど前のものだ。

今の魔術体系として確立するより昔のものだが、その当時は独創的だった考え方がかなり的を得ており、オリジナルに走るなら一度は読んだ方がいいと言われている代物だ。ちなみに、オレのものはかなりくたびれている。時雨からもらったものだしな。

『女の子は色々準備をしないといけないよ』

亜紗が苦笑しながらスケッチブックを開く。

亜紗の服装は紺のワンピース。亜紗は基本的に夏の私服の半数はワンピースだ。本人曰わく面倒だからしい。

「そういう亜紗はいつもと変わらないよな」

亜紗の手に握られているカバンは今と昔であまり変わりはない。変わりがあるとするなら手首につけられたブレスレット型のデバイスくらいだろうか。

亜紗は基本的にオレと同じ宝石タイプ、ネックレスにも出来るしポケットにも入れられる、を使っているのだが、これだけは今までとは違う。

完全な七天失星用のデバイスだ。許容量はまだまだあるから小物も入れているみたいだが。

『私は昔から慣れているから。荷物は必要最低限だし。周さんこそ、眠くないの？』

「眠くはないな。まあ、こいつらが爆睡している以上、オレが気を引き締めないとダメだろ」

オレはそう言いながら右肩に頭を載せている由姫を見た。

由姫は黒の半ズボンにイグジストアストラルと同じ蒼鉛色のＴシャツだ。ちなみに、イグジストアストラルが世間に公開されたと同時に販売された記念品でもある。

『周さんは相変わらずシスコン』

「まあ、否定はしない。由姫も茜も大切だからな。シスコンでも亜紗は気味悪く思わないだろ？」

『周さんだし。それに、周さんがシスコンなのは家族を大事にする

証。私は立派だと思うよ』

「何が立派なのか聞きたくはないが。つうか、アルも爆睡だよな」

アルはオレの左肩に頭を載せている。つまり、オレは身動きが出来ない。

アルの服装は亜紗と同じワンピースだが、純白だ。穢れなき白というべきか。

向かいの席では都と琴美が身を寄せ合って眠っている。二人共、お揃いの紺のスカートと白のTシャツなので服だけでは判別しづらい。

『多分、アルさんはめい一杯おめかししていたら時間がなくなった、だと思う』

『否定出来ないのが辛いですね』

アルの近くでスケッチブックが開く。エリシアは一応起きているのか。

『一つ聞いていいですか？』

矢継ぎ早にエリシアのスケッチブックが開いた。そして、さらにページが捲られる。

『どうして制服なのですか？』

『それは私も気になっていた』

ちなみに、オレとメグの二人は制服だ。メグは訓練のつもりか空気椅子をしながら眠っている。これだけはオレは出来ない。

「普通は制服だろ。オレ達は遊びに行くんじゃないぞ。まあ、由姫や都達は仕方ないとしても、亜紗は制服か戦闘服だろ」

『可愛くない』

そう言うと思っていたから一言も今まで言わなかったけどな。

「まあ、施設の調査の時は戦闘服に着ていればそれでいいさ。まあ、最初はオレとメグの二人で行くしさ」

制服を着ているのがオレとメグだからだけど。

『なるほど。周さんは施設が何か掴んでいるの？　話によるとアルタミラ並みに古い施設だけど』

「まあ、色々あるんだよ。にしても」

オレは窓の外を見つめた。そして、一言。

「電車旅ってこんなに長かったっけ」

『電車だから仕方ないよ。エスペランサは規格外だし、人界で最初に作られた航空戦艦の類でありながら今現在世界最強の能力なんだから』

「出力や最高速度に小回りの良さとかなりの点で最高クラスだしな。『ＧＦ』と『ＥＳ』に音界の研究者が惜しみなく金をつぎ込んで作

ったものだし」

ちなみに、航空戦艦の値段は約４０億。航空空母は１０億ほどで造られる。円の計算でだ。

「出力エンジンに最高水準のものを注ぎ込んでいるからな。速度はかなり速いさ。まあ、電車旅もなかなかいいものではあるけど」

『暇という点を除いて。私は最初に狭間市行った時みたいにみんなでワイワイしながら行くものだと思っていたのに』

「オレも」

集合の時点ではみんなピンピンしていたのだが、いざ電車に乗るとオレの隣に誰が座るかという論争が勃発。それで疲れ果てたのか由姫とアルがほぼ同時に寝て、他の三人も寝たということだ。

最初の時みたいに浩平がいたら楽しいのにな。色々な意味で。

『この人数でも十分にワイワイ出来ませんか？　三人いますし』

『メンバーが悪い。この面々で共通の話題は？』

亜紗の文字にオレは考える。

共通の話題を言うなら第７６移動隊だろう。だけど、そんなことは普通に話さないし、他の話はよくよく考えると亜紗とエリシアが噛み合わない。

亜紗には前線の話を語れてもエリシアには無理だし、エリシアには

フュリアスの話を語れても亜紗には出来ない。本当に奇妙な関係だ。

「なるほどな。叩き起こすか？」

オレはそう言いながらアルを指差した。アルなら話についていけるだろう。かなり、何でも出来るし。

『可愛いそう』

『起こしましょう。何があっても起こしましょう。私は賛成します』

何故かエリシアはかなら乗り気だった。

『そもそも、アルだけがあなたの隣でいるのがいたく気に入らないのです。私だって周の隣にいたいのに』

『周さん、起こさなくていいと思う』

「賛成」

そんな理由でアルを起こしたら何が起きるか本当にわからないから本当に止めて欲しい。

電車内での戦闘にならないようにしないと。

『私は周さんがメグを連れて行くことに驚いているけど』

「そりゃな。メグは右も左も分からないってわけじゃないけど、これから第７６移動隊ってやって行く以上、第７６移動隊のやり方には慣れてもらわないといけない。だからだよ」

『そうなんだけど、メグの使う武器は槍だから、通路ではかなり不利になると思う』

「それを言うならオレや亜紗の剣だってそうだろ」

槍は桁違い不利になるが、それは剣も同じだ。槍と違ってリーチはないが、懐に潜り込まれても対応はしやすい。実際に、槍を使う方が圧倒的に多い。無名なのも圧倒的に多いが。

通路での戦闘では槍は足手まといになりやすい。だから、『ＧＦ』部隊の施設突入の際は必ず剣を持っている。

一番いいのは拳なんだけどな。

『私は矛神があるから大丈夫』

「施設は破壊するなよ」

『魔術がある』

それはそれで破壊しそうだが。

もし、施設内での戦闘が起きたならフロントをオレと由姫が。バックを都とアル。センターに亜紗、メグ、琴美だ。

まあ、センターはバックアップ要員だけど。

「それに、メグはまだ施設内の戦闘を経験していないはずだ。槍がどれだけ使いにくいか、槍をどうやって運用していくか。それを見

つけてもらわないとな」

『なるほど。戦闘がない方がいいけど、相手はオーバーテクノロジー産物。周さんの得意な想定だね』

「これくらいは普通に考えるだろ。セキュリティーシステムが生きているなら、オレ達は本気で行かないといけない。まあ、システム面に関してはレヴァンティンとアル、エリシアに頼ると思うけど」

そう言いながらオレはアルを見た。アルは幸せそうに眠っている。

『まあ、私達をマスターが頼るのはいいとして、戦闘中や非常事態の最中ではバックアップは無理ですよ。私も、エリシアも。システム面に関しても制御室にいかなければなりませんし。マスターの考えではセキュリティーが生きている可能性は』

「１００％」

『言うと思いました。エリシア、私達てマスター達をサポートしましょう』

『不安ですが頑張ります。私の華麗な活躍を期待してくださいね、あなた』

『それは聞き捨てならない。いつからエリシアは周さんとそう呼ぶ中になったのか説明してもらう』

亜紗がアル・アジフを掴んだ。エリシアの体をアルが使っている際はエリシアの精神はアル・アジフの中にいるらしい。詳しいことはよく分からないが。

アルがエリシアの中にいてもアルの体はアル・アジフだと思うんだけどな。

『実は昨日、真夜中に』

『自分自身で決めたと。マスター、エリシアは本当に困ったちゃんですね』

『そうですけど！　そうですけど！　私はアルと』

その瞬間、アル・アジフを誰かが掴んだ。いつの間にかアルが起きており、決して大きくない手をめい一杯開いてアル・アジフを掴んでいる。

「エリシア、我が何かしたかの？」

その顔にあるのはにこやかな笑み。ただし、状況が状況だからかなり怖い。

『えっと、その、あの、助けをお願いします』

『マスターの指示と体がなければ不可能です』

「お前は指示無しでよく動いているだろ」

ここは黙っておく場面かもしれないが口を開かずにはいられなかった。

実際、レヴァンティンはオレの指示無しでよく暴れている。本当に

困ったことに。

『マスターは黙っていてください。この場で誰がエリシアを助けると思っていますか？　あなたのような後先考えないじゃじゃ馬娘を助ける人なんて、えっ？』

いつの間にかアル・アジフを手放していたアルがオレのポケットからレヴァンティンを取り出していた。

いや、アルじゃない。これは、

「レヴァンティン？　ちょっと向こうで話をしましょうか」

『えっと、その、へ、ヘルプミー』

『自業自得じゃ。観念せい』

エリシアがレヴァンティンを持って立ち上がる。向かう先は誰も乗っていない次の車両。

オレは歩いていく二人に向かって両手を合わせた。主に、レヴァンティンに対して。

よく見ると亜紗も手を合わしている。

まあ、自業自得だから助けるなんて絶対にしないけど。

第九十七話　再会（前書き）

日常三十話なんて到底不可能な目標でしたね。

第九十七話　再会

狭間市。

集約型都市の実験モデルとしての第三号であり、学園都市によく似たものがある。

問題を挙げるとするなら駅から都市まで遠いというところか。まあ、狭間市中心部と見つかった狭間研究所は駅を挟んで正反対の位置にあるのですぐさまそちらに向かうが。

「にしても、全く変わってないな」

駅から降り立ったオレは周囲を見渡しながら言った。

駅の周囲には本当に田舎だ。市街は普通に都会と言ってもいいような施設がたくさんあるのだが、駅周辺にあるのはバス停とか畑とか。

「ふわっ、ここは変わらないと思います」

眠たそうに欠伸をした由姫が一言。それには大いに賛成だ。

集約型都市の最大の裏の理由は畑などの農作地を確保するためでもある。実際、日本は食糧自給率が６０％台だからな。

ちなみに、このことを知ったのはつい最近でもある。今までは集約型都市は守るための意味合いが強かったと思っていた。

極稀に出るはぐれ魔物や集団の犯罪者をどうにかするためだ。それ

は表の理由だったけど。

「この狭間の土地は愛着の強い方々が多いですから。多分、お金を積まれても手放さない人は必ずいますよ」

「そうね。私も狭間市は好きよ。学園都市も悪くはないけど狭間市は特に」

「この土地はこのままが一番いいさ。下手にいじって封印が解けたら最悪だからな」

「そんなことがあるんですか？」

尋ねてきた由姫に対してオレは小さく溜め息をついた。ちなみに、みんなは驚いたように由姫を見ている。

代表してオレが口を開いた。

「由姫は座学をちゃんとやっていたか？」

「えっ？　め、メグさんは」

「封印魔術って拘束系魔術と似通った部分があるからそれで大体は。封印魔術の方が拘束系魔術よりも土地との関係が強いから下手に土地を弄ると魔術が暴走したり消滅したりする。じゃなかった？」

メグがオレを見ながら確認を取ってくる。それに対してオレは頷いて答えた。

「９０点。抜けていたポイントは土地改造により、時には封印魔術

が強化されるということ。よく覚えていたよな」

「『ＧＦ』関連のことなら覚えるのは得意だから」

「授業は？」

目を細めて尋ねるとメグは全力で目を逸らしていた。

第７６移動隊っとどうしてここまで成績の差が激しいのだろうか。

上の上と下の下の差だからな。

真ん中の成績はまずいない。普通は上か下か。

「ったく、『ＧＦ』だけじゃなく普通に勉強も出来るようになれって、まあ、オレ達みたいになれとは言わないけどさ」

「そう、学業は大事だ。日本でトップになれとは言わない。しかし、自分自身で考えられる力を身につけるべきだ」

その声にオレは振り返った。懐かしい久しぶりに聞く声。オレはその声の主に向かって歩いて行った。

「久しぶりだな、俊輔」

「変わりないようで安心だ、周」

狭間市で出来た友達の一人。一番仲のよかったグループの友達。

オレは俊輔と拳をぶつけ合った。

「立派な白衣着てんじゃねえか」

「当り前だ。貴様こそ、立派なスーツを着て」

「制服だ」

オレ達の間に沈黙が下りる。

まあ、この制服自体見た目はほとんどスーツだ。実際に、この制服の一部を変更して就職活動に使用したと言われているくらいだから仕方ない。

「ふ、ふむ、し、新顔もいるみたいだな」

俊輔は顔を若干引きつりながらもオレ達の面々を見て行ってくる。

「ああ。北村恵。今年に入隊した新人だ。メグ、こいつは佐々木俊輔。和樹や委員長、由姫とも友達だな」

「つまり、周と同い年。北村恵です。今回は第７６移動隊の初任務として同行させてもらっています」

「俊輔様と呼ぶがいい」

相変わらずだな。

俊輔が身につけているのは白衣だ。ただ。ただの白衣じゃない。衝撃を緩和する特殊な魔力素材を利用したオーダーメイドで、戦闘服よりも遥かに防御力は高い。

その理由としては俊輔の才能と今の地位があるんだけどな。

「で、その白衣の気心地はどうだ？」

「悪くはない。この天才たるオレにぴったしのものだ」

そう言いながら笑みを浮かべる俊輔。

俊輔は狭間市の神童と呼ばれている。まあ、その片鱗はオレ達がいた時から見せてはいたけど、それおれを出したのはオレらが中学三年生の時、簡単に考古学について説明を請われて話してみたらのめり込み、質の間にか世界有数の考古学者となっていた。

その理由としては狭間市には過去から存在する施設、例えば、イグジストアストラルの保管場所の様な施設が多く、研究者がたくさんいるからだ。だから、俊輔はその知識を生かして研究者を意見を交換し合い、いつの間にか狭間市の研究者のトップの位置にいる。

誰が聞いても眉唾ものだが、一回、考古学についての講義を受けてみたらわかりやすい解説と深い造詣でオレは言葉を失ったことがある。

「今回は俺が案内することになっている」

「新たに見つかった施設には入ったのか？」

「いや、慧海さんが止めているからまだ入ってはいない。入口付近だけでもきな臭い雰囲気がぷんぷんしているからな。正直に言うなら、非戦闘員の俺は入らない方がいい」

その考えは確かだ。実際にトラップが仕掛けられていて中に入った研究者が死ぬことは珍しくない。だから、『ＧＦ』かつ研究者という人は多い。

今回はオレやアルがいるから並大抵のことがあってもどうにかできるだろうけど。

「その点ではお前らは大丈夫だろうな。本当は俺も参加したいが」

「危険だ」

「言うと思った。何があってもいいように通信の中継点は用意した。サポートは任せろ」

「頼りにしているぜ」

俊輔は十分に頼りになる。ほら吹きというわけではなく、よく準備をしたり、自信がある時に行動するからだ。それに関しては昔から信頼している。

まあ、間違った知識から暴走する時も多いけど。

「周、ちょっと待って。それって、かなり危険ってこと？」

メグが顔をひきつらせながら尋ねてくる。ちなみに、他の面々は寝起きの体をほぐしていたり、デバイスの調整をしていたり、魔術を準備していたりもする。

『今さらだよね。第７６移動隊の任務で安全なものがあるならこんな戦闘メンバーで来ないし』

「そうじゃな。じゃが、戦闘が無いにこしたことはない。一応の用意じゃ。何があるかわからない以上、最悪の想定でいかなければならぬ」

「危機感が無いのが私だけというのはよくわかりました。周、私って大丈夫よね？」

「まあ、戦う機会は無いだろうな。オレやアルがいる以上、どうにか出来る」

どうにも出来ない事態にならないことを祈っているが。

「まあ、そういうなら頑張るけど、魔力負荷は継続させたままで」

「ちょっと待て。メグ、まさか魔力負荷をずっとかけているのか？」

「うん。周に教えてもらったレベル１だけだけど。ちゃんと日常生活中の２４時間寝る時もずっとかけているけど」

その言葉にオレは完全に言葉を失った。

確かに、魔力負荷は日常生活中にかけるものだ。レベル１は一番軽いものだから、オレみたいな最大のレベル５まで耐えられるようなら一日中、寝る時も、ずっと魔力負荷をかけていられる。

だけど、メグはまだレベル１しかしていない。

「ふむ、魔術の継続性はかなり高いみたいじゃな」

「アル、冷静に分析するな。もしかして、さっき空気椅子している最中も？」

「えっ？　私って空気椅子をしていたの？」

こっちは完全に無意識か。それなら怒るにも怒れない。

オレは小さく溜め息をついてメグの額を小突いた。

「これから寝る時は魔力負荷を切れ。体を休めるタイミングを作らないといつか潰れるからな」

「はーい」

メグはしぶしぶ頷いてくれる。それを見たオレは頷いて俊輔を見た。

「じゃ、案内を頼むな」

第九十七話　再会（後書き）

学園都市に俊輔を出さなかったのはこういう理由です。

第九十八話　状況説明

狭間研究所の入り口。それは小規模な地滑りによって見つかった場所だった。

その近くには看板やらフェンスやらが立てられて普通は入れないようになっている。ただ、出入りは激しいため誰にも気づかれずに入ることは難しくない。

オレ達、オレと亜紗、そして、メグに俊輔の四人はそのフェンスの内側に入る。

外側から見ていても思ったが、本当に奇妙な光景だ。国の研究者やら警察やら『ＧＦ』やらが集まっている。しかも、仲悪く。

国としては『ＧＦ』に手柄を盗られたくないと思っているのだろうが、現場の主導権を握っているのは完全に慧海だ。

オレは小さく溜め息をつきながら慧海に近づいた。

「相変わらず、名声だけは大きいみたいだな」

「おっ、ようやく突入班が到着か？　半数くらいいないみたいだけど」

慧海が白銀の騎士甲冑を身につけたまま振り返ってくる。

まさか、慧海の奴がそんな高級品を引っ張り出してくるなんて思いもよらなかった。

「里帰りやら体を温める目的で街まで走りに行っている」

「なるほどね。で、その子が新しい隊員？」

「北村恵。こいつがかの有名な『無敵』の英雄善知鳥慧海」

「第一特務隊長で、元『ＧＦ』総長の？」

メグの顔が引きつっているのがわかった。まあ、無理もない。

だって、オレが慧海と敬語関係なく話すのを初めて見た人は必ず口を開けてポカンとするし。

慧海は白銀の騎士甲冑を軽く叩いた。

「にしても、威厳を高めるためにこれ着てるけど、暑すぎてどうにかなりそうなんだが、周、どうにかできねぇ？」

「知るか。それより、中の様子は？」

「まあ、これを着ているからわかるだろ」

慧海がそう言いながら白銀の騎士甲冑をコツコツ叩く。

それだけでオレと亜紗は中で何があるか何となく理解した。そして、顔が引きつるのがわかる。

「慧海、お前はオレらを殺すつもりか？」

「まあ、障壁甲冑（ミスリルレイド）を着ているのを見たらわかるけど、罠の知識なかったら即死級が多いな」

障壁甲冑（ミスリルレイド）。

戦闘服の最上位であり、文字通り、ミスリルという物質が作られている。

ミスリルは魔鉄の魔力含有率が鉄本体の重量の６０％を超えたもののことだ。ちなみに、専用の装置か職人がいなければまず作れない。

鉄本体に対し、同じ質量の魔力を含ませたことで出来る魔鉄はアストラル装甲と呼ばれている。イグジストアストラルの装甲だ。そんなもの、今の技術で作れるわけがない。

つまり、障壁甲冑（ミスリルレイド）は作製可能な装甲の中で最も高価で最高の防御力を発揮する。

そんな障壁甲冑（ミスリルレイド）を着ていないと駄目だなんて、『天空の羽衣』で対抗しろというのかよ。

「いやー、本当に死にかけたよ。まさか、トラップの中に底なし沼があるなんて」

「はぁっ、それはお前が障壁甲冑（ミスリルレイド）を着ているからだろ」

慧海の声にオレは溜め息と共に言葉を吐く。

障壁甲冑（ミスリルレイド）は重い。アストラル装甲はさらに重い。防御力が高い分、重さが桁違いだからだ。だから、障壁甲冑（ミスリルレイド）を着ている相手に対し水

攻めはかなり有効だったりもする。
慧海には効かないが。
「トラップの内容は？」
「落盤トラップ、地雷トラップ、毒ガストラップ、はない」
その言葉にオレは安心したように息を吐いた。
「ただ、人並みの大きさをしたフュリアスがいる」
「明らかにトラップより質が悪いよな？　そいつの能力は？」
「硬い」
そう言いながら慧海はその手に槍を取り出す。それを見ながらオレは絶句していた。
二の句を継げないオレに対し、亜紗がスケッチブックを開く。
『地の槍で貫けない？』
「ああ。防御力という点じゃ、イグジストアストラルと同じアストラル装甲を使っていると言ってもいいだろうな。まあ、攻撃手段から考えて、聖骸布（アストラル）は使える。まあ、入り口にいただけだからな、他は同じタイプかわからないけど」
「おいおい、オレ達にどう戦えと」

「一見不可能な相手を倒すのがお前のお家芸だろ？」

その言葉にオレは肩をすくめるしかなかった。それを言われたらどうしようもない。

気になるのはいくつかある。だけど、それを証明するのは一生出来ないだろうから難しい命題だ。

オレは小さく溜め息をついた。

「オレ達の突入時間は今から三時間後。そこまで他の奴らを食い止められるか？」

「それくらいならな。問題としては、数の差によって突入されるかされないかだ。安全を確保するにはお前らが突入してからじゃないと難しいし」

「だろうな。とりあえず、休める場所でも」

「それなら」

慧海が指差した先には建物がある。真新しい建物だ。

見た目はビジネスホテル。しかし、そこにはこう書かれていた。

“カップルのみ歓迎”

オレの踵が慧海のこめかみを直撃していた。

「何であそこにラブホテルがあるんだ？」

「必要だろ？」

こめかみを蹴り抜いたはずなのに相変わらずピンピンしている慧海。こいつの体は浩平並みか。

「んなわけあるか」

「お前らだって休憩しに行くんだろ？　料金は三時間３０００円。安いぜ」

「需要ないだろ！？」

あんなところにカップルのみ歓迎なんていうホテルがあったならあっという間に潰れるだろう。

それほどまでにありえない場所にある。

「ちぇっ、ジョークの通じない奴らだな」

慧海はそう言いながら指をパチンと鳴らした。それと同時に看板やら何やらが外されていく。

そして、そこにあった文字はレストランレノアだった。

名前に強烈な違和感を感じるが、あの人ならやりかねない。レノアさんは慧海以上に謎の人だし。

「わかった。とりあえず、軽く飲み物でも行こうぜ」

レストランレノア。

従業員の話によると、一ヶ月間限定のレストランらしく、値段は儲けることを考えていないくらいに安い。

ただ、誰もが困惑するだろう。

レストランレノアは基本的に座敷だ。座敷に卓袱台とどう考えても日本を意識している。そこまではいい。

レストランの内装は極めてよく、座敷も掘り炬燵のように正座をするような作りになっているのは少ない。さすがに外国の研究者もくる以上、こういうタイプにしたのだろう。

だけど、だけど、メニューだけが納得出来ない。どうして日本料理がなくて豪快な肉料理やカロリーの高そうな飲み物しかないのだろうか。コーヒーだけは許す。

軽食の欄にあるフライドポテトにいたっては、

アメリカンサイズ。スーパーアメリカンサイズ。エベレストサイズと三種類ある。怖くて頼めない。

オレらはコーヒーを注文して座っていた。

「とりあえず、質問がある奴は？」

「では、俺から行こう。障壁甲冑（ミスリルレイド）の防御力は噂しか聴かないが、その噂通りだとしたなら施設内はかなり危険ではないか？」

俊輔の声には心配してくれている色が混ざっている。こういう奴がいてくれるだけでもかなりありがたいからな。

オレは軽く肩をすくめた。

「障壁甲冑（ミスリルレイド）には短所も長所もあるからな。まあ、トラップに関してはオレやレヴァンティン、アルがどうにかする。次」

「内部構造とかわからないの？　ほら、無駄に高性能なレヴァンティンだったらわかりそうじゃない？」

メグの考えはわかる。でも、それがわかっていたならこんなに苦労はしていない。

『さすがに私はそこまで高性能ではありませんよ。私は最強のデバイスではありますが、そこまで無駄に高性能ではありません』

「自惚れられるほど高性能だもんな。次」

『おやつ食べていい？　エベレストサイズを』

「止めてくれ」

お前は少食だろうが。

「まあ、状況把握をするには時間がかかるだろうな。施設内の危険性は極めて高いから独断行動を慎むこと。メグ？　どうかしたのか？」

メグはオレの話を聞いていなかったのかポカンとしていた。そして、首を横に振る。

小さく呟いてはいるが声は聞こえない。でも、その唇の動きは、

そんなはずはない？

「メグ？」

「ひゃい？」

変な声を上げてメグがオレを見てくる。オレは小さく溜め息をついた。

「どうかしたのか？」

「えっ？　あっ、うん。他人の顔をお兄ちゃんに見間違いかけて。ありえないのにね」

確かにありえない。メグの兄はもう死んでいる。だから、ありえない。

「もう少し周には状況説明をして欲しいな、なんて。周なら色々知ってそうじゃない？」

「賛成だ」

「わかった。これはアルから聞いた話なんだけどな」

オレは口を開く。今の状況と施設の状況を分かる範囲で説明するために。

第九十九話　急転

爽やかな風。木々が音を立て、鳥達がさえずり、小川に清らかな水が流れている。

その中を都と琴美の二人は歩いていた。

「懐かしいわね、ここ」

「そうですね。何回も来た道ですが、最近は忙しくて来れませんでしたし」

「そうね。一応、いくつかの支援魔術はスタンバイしているけど」

琴美の第７６移動隊としての戦い方はバックアップ。ただし、バックアップと言っても規模が違う。

琴美は普通よりも魔力の量が極めて多い。もちろん、人間離れをした魔力を保有する周のようなレベルではない。

ただ、琴美の魔術には大規模なほど作用が強くなる効果がある。レアスキルと呼ぶほどではないが、これも一つの固有スキルだ。そのため、戦闘支援魔術に関しては周には及ばないもののかなり高い水準にある。

「琴美がもう少し攻撃魔術を使えたらいいのですけど」

「悪かったわね。攻撃魔術が苦手で」

そのためか攻撃魔術は極めて苦手だ。どれくらい苦手かと言うと、最も簡単な攻撃魔術、魔力を固めてぶつけるだけのエナジーシュート。慣れれば外すことはないが威力は皆無。ただ、琴美が使えば目標に当たることはないがぶつかった瞬間に爆発を撒き散らし甚大なダメージを与える凶器となる。

つまり、使えない。

「見えてきましたね」

都の言葉に琴美は顔を上げた。そこにあるのは小さなお墓。

二人の大親友だった雨宮千春のお墓。

都はその手にあったお花をお墓の前に静かに置いた。

「お久しぶりです、千春。元気でしたか？」

「あんたなら私達がいなくても元気でやるわよね。寂しそうにだけど」

二人は笑みを浮かべる。その笑みもどこか寂しげだった。

「最近は色々と忙しかったものですから。学園都市にもたくさん事件はあります」

「最近の事件は特に、あなたの力を借りたいくらいのものが多いわね」

「そうですね。皆さん、特に周様は大変ですから。私も精一杯頑張

らないといけません」

言葉が止む。そして、二人はお互いに視線を合わせた。頷き合い、お墓に向き合う。

「ここだけの話をしますね。私は大学を卒業したら琴美と共にここに戻ってくるつもりです。もちろん、第７６移動隊を辞めて」

「『ＧＦ』は辞めないわよ。ただ、異動させてもらうだけ。周もみんなが学校を卒業していく頃には第７６移動隊を変えるつもりらしいわ。第７６移動隊は学園都市にあるから第７６移動隊だから」

「そのタイミングで私達は戻ってきます。必ずです。そして、この街をよりよくして行くつもりです。だから、応援していてください」

『やっぱりいいところですよね』

アル・アジフが宙に浮くスケッチブックを見ながら頷いた。

様々な所に挨拶周りを行ったアル・アジフはエリシアと会話をしながら歩いていた。

「そうじゃな。学園都市もいいところじゃが、やはり、この地は格別じゃな」

『はい。この地にいたから私は、いえ、私達は周達と出会いました。

思い出の土地です』

「そうじゃな」

エリシアの声にアル・アジフは笑みを浮かべる。そして、そのまま前に踏み出そうとして、上げた足を止めた。そのまま足を下に下ろす。

「せっかく人が過去を懐かしんでいるというのに、そなたらは無粋な者達じゃな」

その言葉をアル・アジフは近くにある建物の影に向かって放った。そこからローブの男が現れた。その手に握られているのは一本の槍。

アル・アジフは自らの魔術書を開く。

「アル・アジフだな？　大人しく我々について来てもらおうか」

「ふむ、やはり無粋じゃな。いきなりにもほどがあるぞ。女性をエスコートするなら」

「生体兵器は人ではない」

その言葉にアル・アジフは目を細めて小指を少しだけ動かした。たったそれだけで幾重もの光の輪が槍を持つ男を拘束する。

ストックしていた魔術の発動を小指でしただけだが、その正確性はさすがアル・アジフというレベルだった。

槍を持つローブの男が微かに目を見開いて驚いている。

「我を生体兵器と知っていることはおいおい話させてもらおうかの。とりあえず、隠れている三人は出て来るのじゃ」

アル・アジフの言葉に物陰からそれぞれ、剣、槍、弓を持ったローブの者達が現れた。一様に驚きが顔に出ている。

頑張って気配を消していたようだが、その気配の消し方に慣れているアル・アジフにとっては意味がない。

「大人しくすれば怪我はさせぬ。刃向かうなら」

「刃向かうならどうなるか教えてな」

その言葉はアル・アジフの背後から聞こえてきた。アル・アジフはすかさず振り返りつつ障壁魔術を展開する。障壁魔術は迫ってきていた槍を受け止め弾き飛ばした。

「あらま。受け止められたわ。まあ、ええか」

槍を持っているローブを着た女性は槍を構えた。アル・アジフは全方位を警戒しながら身構える。

「あんたがアル・アジフやな。とりあえず、うちらのために」

女性が動く。踏み出す速度は極めて早く、亜紗を彷彿とさせるような加速だった。

「余裕じゃの」

対するアル・アジフは動かない。そんなアル・アジフを怪訝に思いながら女性は槍を突き出して、

「じゃが、爪を隠すべきじゃな」

アル・アジフは女性の背中に手のひらを当てていた。それと同時に魔力が爆発して女性を吹き飛ばす。その行動にその場にいた誰もが動けないでいた。

実際は魔術による広域幻覚を与えていただけなのだが、あまりに高度なやり方に誰もが気づかなかったのだ。

「さあ、わけを話してもらおうかの。黙っているなら少々痛い目にあってもらうが」

コーヒーの香りが花の中に広がる。オレはそれを感じながら小さく溜め息をついた。

「集合時間をもっと早くすれば良かったな」

『今更』

「私もそう思う。周って集合時間はいつも早いよね」

「まあ、昔いた正規部隊の名残だろうな」

正規部隊は基本的に朝は早く、夜は遅い。その理由は色々あるが、夜の行動は危険だからというのもある。もちろん、夜専用の訓練もある。

そのため、一日のサイクルとしては朝は広くなっている。

「早寝早起き。それが一番健康にいいしな。亜紗、外に出て軽く手合わせをするか？」

オレはレヴァンティンを取り出しながら亜紗に向かって言う。亜紗も自分のデバイスを取り出しながら頷いた。そして、器用にスケッチブックを開く。

『賛成。でも、軽くだよね』

「当たり前だろ。体を温めるのが目的だし」

オレはそう言いながら肩をすくめて立ち上がった。同じように亜紗とメグも立ち上がる。

中に突入する以上、手合わせをして体を温めるのは十分に有効だ。だからこそ、オレは手合わせをするために外に向かおうとして、足を止めた。

「外が騒がしい？」

窓の外では慌ただしく人の行き来がある。オレは持っていた財布をメグに向かって投げた。

「メグ、会計は頼んだ。亜紗、行くぞ」

「えっ？　あっ、うん。わかったわ」

オレと亜紗はすぐさまビジネスホテル風のレストランから飛び出した。

慌ただしく動いているのは主に『ＧＦ』の面々のようだ。入り口付近に何人かの姿が見えるな。慧海の姿もあるし。

オレ質は慧海に向かって駆け寄る。何かを話していた慧海は駆け寄って来るオレ達に気づいて振り向いてきた。

「何があった？」

「いいタイミングだ。お前らはすぐに突入出来るか？」

「今からか？」

慧海が頷く。

「どっかのバカが中に入ったらしい。詳しくは見ていないが、男女二人組。武装は不明」

「そういうことか。どうりで蜂の巣を突いた事態になっているわけだ。わかった。オレと亜紗の二人で突入する。メグはここに置いておいてくれ」

二人だけだとメグを守りきれるかわからない。だったら、オレ達だけで先に突入した方がいい。危険であることに変わりはないが。

オレと亜紗は同時に戦闘服を着込んだ。そして、オレはレヴァンティンを抜き放ち入り口に向かう。

「危険だったら引き返す。慧海は入り口の防衛を任せた」

「わかってる。行ってこい」

「行ってくる」

その言葉と共にオレと亜紗は走り出す。誰が入ったかわからないけど早く連れ戻さないと。

オレはレヴァンティンを握りしめて中に突入した。

「全く。先に行っちゃって」

私は小さく愚痴を吐きながらレストランから出た。周の財布だったからか少し手こずったけど、早く追いつかないと。

私はすぐに駆け出す。だけど、近くの物陰から出てきた誰かとぶつかりそうになった。

「ごめんなさい」

「すまな、い」

誰かの声が一瞬途切れる。それを不審に思った私はその誰かを見上げた。そして、

「お兄、ちゃん？」

そこにいたのは私の兄、北村信吾と瓜二つの人がいたのだから。

見間違えるはずがない。だけど、お兄ちゃんは死んだはずなのに。

「メグ、なのか」

その言葉に私は確信した。確信したと共に疑問が出て来る。

「どうして、お兄ちゃんがここにいるの？」

第九十九話　急転（後書き）

次の話では色々と重要な話が入ります。

第百話　炎

「どうして、お兄ちゃんがここにいるの？」

背中に背負っている聖骸布（アストラル）が炎獄の御槍を手に取る。

お兄ちゃんは死んだ。そう聞いている。それは『ＧＦ』の任務の最中で行方不明となり、死亡した可能性が限りなく高いからだった。ＤＮＡも一致するお兄ちゃんの右腕と左足も見つかっている。

「色々聞きたいことがあるから、今は大人しくしてくれる？」

「たくましくなったな。まさか、炎獄の御槍を取るとは。予想外だよ。そして、不愉快だ」

炎獄の御槍から聖骸布（アストラル）をはぎ取り素早く体に巻きつけながら炎獄も御槍をかませる。対するお兄ちゃんは薄く笑みを浮かべたままだった。

「こんなところに来なければ死なずに済んだ命なのにな」

「どういうこと？　お兄ちゃんは何をするの？」

「さあ？　俺がやることはただ一つ」

お兄ちゃんの手に炎が生まれる。見ただけでわかる。当たれば骨まで溶かす炎。

「全てを焼く尽くすだけだよ！」

私は放たれた炎を炎獄の御槍で受け流した。思い感触と共に炎が空に打ちあがる。その時にはお兄ちゃんが私に向かって走ってくる。その掌に灼熱の炎を宿して。

多分、私にあの掌を押し付けてくるはずだ。炎獄の御槍を包んでいた聖骸布（アストラル）だと言ってもあのような熱量には対抗できない。でも、どうしてだろう。お兄ちゃんの速度が遅い。

由姫と比べたら亀のように遅い。

お兄ちゃんの炎は掌のみ。全体を覆い尽くしているわけじゃないからやり方はある。

私は斜め一歩前に踏み出した。そして、炎獄の御槍の石突をお兄ちゃんに向けて横に薙ぎ払う。お兄ちゃんはそれを受け止めようとするけど全力で振り切った。

鈍い音と共にお兄ちゃんが吹き飛ぶ。

「あれ？」

私はそこで気付いた。

私はお兄ちゃんと『ＧＦ』で一緒になったことはない。でも、私の記憶の中にいるお兄ちゃんはもっと早かった。今のお兄ちゃんはなんというか、遅い。

「っつ、今の反応速度、お前、本当にメグか？」

「えっ？　うん。私も驚いている」

もしかしたら第７６移動隊に入ったからかもしれない。それはそれで純粋に嬉しかった。

「本気を出さないとダメななようだな。メグには痛みもなく殺そうとしようとしたんだが」

「どうして？　お兄ちゃんはどうして戦おうとするの？　話し合いだけで解決できることだって」

「本気で言っているのか？」

その言葉に私はきょとんとした。

「この世界は力が全てだ。なんの力もない者たちはただ蹂躙されるだけ。それが世の中の真理だ」

「そんなことはない。みんな平和に暮らして」

「日本が特別だ。メグ、『ＧＦ』や『ＥＳ』がどうして存在すると思う？　戦いがあるからだ。力のある者が自分達の都合で力の無い者から搾取する。それが世界の姿だ」

その言葉に私は反論できなかった。実際にそうだと感じたからだ。

でも、今は、

「今はとりあえずお兄ちゃんを拘束するから。話はそれから」

「それから？　甘いな」

異変に気付いた警部の人達が近づいてくる。その中には善知鳥慧海さんの姿もあった。

「今やらなければいつやるっていうんだ！？」

私はとっさに炎獄の御槍を構えた。だけど、私の体は簡単に吹き飛ばされる。

気づいた時には地面に激しく背中を打ちつけていた。息が、止まる。

「かはっ」

「弱い。弱い弱い弱い弱い！　そんな力で俺を止めようだなんて百年早いんだよ！」

必死に体を起こす。だけど、そこには信じられない光景が広がっていた。お兄ちゃんの周囲にいる炎の人。炎を纏った人じゃない。炎から出来上がった人が五人いる。そして、お兄ちゃん自身も炎に包まれている。

焔の鬼。

その話は周から聞いていた。

「『悪夢の正夢（ナイトメア）』一団」

「へえ、はっさんのことを知っているのか。つまし、第７６移動隊か。残念だった。メグにとっては栄転だったかもしれないが、その命はここで終わりだ」

炎の人が近づいてくる。私は炎獄の御槍を杖代わりに立ち上がった。
そして、炎獄の御槍を構える。

周囲の建物の一部は崩れ、人は吹き飛ばされている。血を流している人もいる。私はまだ軽い方だ。

だから、ここで負けるわけにはいかない。

「たった一人で何が出来る？　お前見たな子供を殺すのは忍びないが」

「ご高説のところ済まないが、オレを忘れていないか？」

その言葉に私達は振り返った。そこにいるのは大剣を握り締める善知鳥慧海さんの姿。その体には傷一つない。

確かに、あの中で私が生き残っているなら善知鳥慧海さんも生き残っているのが普通。

「やはり死なないか。でもな、面白い情報を教えてやるよ。今ここに、幻想種の群れが向かってきている。もちろん、大軍だ。俺と、そいつらを相手にして、守りきれるかな？　この怪我人の数を」

お兄ちゃんは笑みを浮かべている。今立っているのは私と善知鳥慧海さんくらいだ。だから、戦力は完全に足りていない。だけど、善知鳥慧海さんはきょとんとした顔で、

「えっ？　たったそれだけでどうにか出来ると思っているのか？」

「「はぁっ？」」

私達は同時に口を開いていた。

断った二人しかいないのにたったそれだけって言うのがありえない。

「舐められたものだな。とりあえず、メグ。そいつの相手は任せた」

「一人で複数はつら」

私の言葉は強引に止められた。だって、炎の人が一瞬にして灰燼になったからだ。炎を超える蒼炎。あまりのことに空いた口がふさがらない。

善知鳥慧海さんは私にウインクをするとそのまま姿を消した。

「バカな。下僕を一瞬でだと。まあ、いい。今はメグを殺すのが先決だ」

お兄ちゃんが一歩を踏み出してくる。それに対して私は一歩後ろに下がった。

怖い。今のお兄ちゃんが怖い。私の知っているお兄ちゃんとは完全に別人だから怖い。だから、戦いたくない。

「怖気づいたか？　メグらしいな。背中を向けて無様に逃げるなら許してやるよ。敵前逃亡で、たくさんの人を見殺しにするならな」

逃げたい。本当は逃げたいけど、逃げられない。逃げたら、逃げたら、

「さあ、死ね」

お兄ちゃんが踏み出してくる。私は、動けない。

『それが君の選択？　違うよね』

頭の中に響く声。炎獄の御槍の声。

私は大きく横に跳んだ。私のいたところから炎が噴き出して地面を解かす。

「ちっ、避けられたか」

『君はまだ何も選んでいない』

槍を構える。逃げたい。だけど、逃げたくない。ここで逃げたら今までの頑張りが無になると思ったから。逃げたら、何も捕まえられないと思ったから。だから、逃げたくない。

『逃げることは一つの手段だ。でも、君はそこで立ち止まるのかい？』

立ち止まる？

『そう。可能性を信じ、前に踏み出す。もちろん、戦略的撤退もあるよ。だけど、君はまだ使っていない。この槍の力を』

炎獄の御槍を握り締める。出来るかわからない。だけど、やるしかない。

教えて。この槍の力を。

『それを選択すると言うのは戦うと言うことを選択すること。君はそれで』

いい。

私は断言した。そして、炎獄の御槍を構える。

お兄ちゃんはぶん殴ってでも私が止める。それが、私の役割だから。

『なるほどね。じゃ、教えよう。だから、これを使うからには、勝て』

その言葉に私は踏み出した。お兄ちゃんも踏み出している。

確かに、お兄ちゃんの炎は当たっただけで死ぬかもしれない。でも、恐れることはなかった。だって、今の私には援護の御槍がある。それに、周に、第７６移動隊のみんなに鍛えてもらったこの力がある。そのちからが、他人の力を利用しているお兄ちゃんなんかに負けるわけがない。

正義が勝つとは言わない。最終手的には様々な要因から一番強い方が勝つ。力が全てなのはお兄ちゃんの言うとおり。だから、私は勝つために力を得る。

今はお兄ちゃんを止めるために。そして、今後は、誰かを救うために。

私は頭の中に浮かんだ言葉を叫んでいた。

「炎閃！」

お兄ちゃんの炎と私の炎がぶつかる。そして、炎がお互いを弾き合った。それに、お兄ちゃんは心底驚いていた。

「メグ、その力」

私は炎獄の御槍をお兄ちゃんに向ける。

「これが炎獄の御槍の力。お兄ちゃんは、私が止める」

私は、全身に炎を纏う姿となっている。炎が聖骸布（アストラル）を輝かせており、その姿は幻想的に違いない。これが、炎獄の御槍の力。

感じる。これはまだまだ弱い力だと。でも、炎獄の御槍だけではこの力が限界だと。

「行くよ、お兄ちゃん」

私は、地面を蹴った。

第百話　炎（後書き）

炎獄の御槍の最終形態が出るのは数年後になると思います。

第百一話　施設内

オレは左に出る。亜紗は右を頼む。

オレは頭の中で亜紗に語りかける。精神感応を使った会話はこういう時には便利だ。頭の中で、オレ、亜紗、レヴァンティンの三人で会話出来る。

『わかった』

亜紗の声と共にオレ達は同時に通路から飛び出した。右手にレヴァンティンを、左手に八式魔弾銃を構えるが、そこに何の姿も見当たらない。。

安全みたいだな。

オレは語りかけつつ考える。精神感応は慣れないと思考がだだ漏れになる。だから、こういう時はしっかり分けないといけない。

『うん。もう少し危険な場所だと思っていたけど』

『まだ深く潜っていませんからね。それに、入った人が例え尋常じゃなく強くても必ず戦闘の痕跡はあります』

だろうな。だけど、不思議に思わないか？

オレは今まで考えていたことを口にする。もちろん、頭の中で。

音がない。

全く音がしない。狭間研究所が隠されていた場所だから音がしないのは当たり前だが、ここはつい先ほど誰かが入った施設。むしろ、音がしない方がおかしい。

完全に音を殺していない限りの話になるが。

八式魔弾銃は使わない方がいいかもな。

オレはそう言いつつ八式魔弾銃を腰のホルダーに収めた。

八式魔弾銃は最初から八つの魔力を凝縮した弾丸が入っている拳銃だ。八回しか使えないが威力は極めて高いため通路ではかなり使いやすい。レヴァンティンと同じくらいにだ。

『八式魔弾銃は音が大きいですからね。まあ、戦闘になれば意味の無いものだと思いますが』

それはよくわかっている。魔弾銃系統の使用目的は基本的には威嚇用だ。射程範囲の長さと威力の高さ。そして、弾速から考えて威嚇にはもってこいなのだが、相手がそこそこの実力、多分、Ａくらいあれば簡単に弾けるだろう。そんなものだ。

だから、普通は使えない。

使えはしないけど、今回潜り込んだのは目がくらんだどこかの研究員だろ？　だったら、使えるとは思うし。

『研究員なのに音がしないのはおかしいと思うけど』

研究員も鍛えている奴らはいるからな。それに、今回は強引に来たんだ。気配を隠してでも突入しないと追いつかれて戻されるだけだろ。まあ、用心はしておかないとな。

オレは次の通路を見た。やはり、何の音もしない。

オレは小さく息を吐くと地面を蹴る。その後の続くように亜紗もかけてくる。

レヴァンティン、見取り図とかは無理か？

『どこかの端末に繋げてくれれば大体わかりますよ。端末が生きていればの話ですが』

『ここってかなり古そうだから生きてないと思うよ』

遺跡には何回も立ち寄ったことがあるからわかるが、生きている遺跡、機器関連の動力がまだ動く遺跡は本当に片手で足りるほどしかない。オーバーテクノロジーの産地であるアルタミラですら一つも見つからなかったのだ。あそこまで巨大な研究都市だったのに。

もしかしたら、吹き飛ばされた場所に何かの発電施設でもあったのかもしれない。

『何か考え事？』

亜紗が訪ねてくる。オレは小さく首を横に振った。

何でも無い。次はオレは左に出るから右を頼む。

『了解』

オレ達は次の部屋に飛び込んだ。レヴァンティンを構え前を睨みつける。

そこにあったのは人と同じような姿をした機械。いや、文字通り人型のフュリアスというべきか。全長は１７０ｃｍほど。成人男性の平均身長くらいだ。オレと同じ背なのがむかつく。

その小型フュリアスがこちらに手に持つエネルギーライフルを向けてくる。オレはすかさず横に跳んだ。

亜紗も跳ぶ音がする。それと同時に小型フュリアスの体にエネルギー弾が直撃した。ちょうど、向かい側にいたフュリアスから。

「二体いるのかよ」

オレはレヴァンティンを握り締め小型フュリアスに跳びかかる。そのままレヴァンティンを小型フュリアスに叩きつけるが、返ってきたのはまるで壁を殴ったかのような感触。

小型フュリアスが動き腕を振ってくる。オレはそれを上手く回避しながら後ろに下がった。

『まだ生きていたんですね』

頭の中に響く呑気な声。もちろんレヴァンティンの声だ。

『小型自動防衛フュリアス『エンペラー』。イグジストアストラルの余った装甲から作り出されたガードロボットです。ロマンとロマ

ンと情熱と気合によって生み出された機体で、理論上、エンペラーを破壊することはう可能です』

「背中を向けている方が危険だっつうの」

オレは前に出る。たとえ、相手がむちゃくちゃ強いものだとしても、ここで残しておけば結局は出る時に戦わなければならない。だった、今、この場で倒しておくに限る。

前に踏み出しながら左の拳を握りしめる。その拳にファンタズマゴリアを部分展開してそのまま全力でエンペラーに叩きつけた。エンペラーの体が少しだけ浮き上がる。オレは装甲の継ぎ目に向かってレヴァンティンを突き刺した。

ほんの微かに食い込む切っ先。レヴァンティンを両手で握り締め、エンペラーを突き刺したまま背負い投げるようにレヴァンティンを動かす。

「これでどうだ！」

頭から落下したエンペラーが地面に転がる。オレはそこに追撃を叩き込む。

レヴァンティンを鞘に収め、その鞘に魔力を入れれるだけ入れ込む。そして、許容量一杯になってもさらに入れる。そして、レヴァンティンの柄を握り締め、

「紫電一閃・改！」

紫電一閃以上の威力を出せる白楽天流の紫電一閃・改だ。ちなみに、

白百合流の方が紫電一閃の開発は早い。

最大異常の魔力を乗せたレヴァンティンはそのままエンペラーの継ぎ目に食い込み、装甲を吹き飛ばした。装甲の中にあるのは細かな精密部品。そこにレヴァンティンを突き立てる。

動作を停止するエンペラー。オレは小さく息を吐いてレヴァンティンを鞘に収めた。

「ったく、慧海の奴、情報が違うぞ。ここまで強いだなんて聞いてねえし。亜紗、大丈夫、だな」

オレは振り返って呆れたように息を吐いた。

そこにはエンペラーの体を縦に両断した亜紗がきょとんとした顔で立っている。矛神はイグジストアストラルに効かないはずなんだけどな。

『マスター、あっちに端末があります』

レヴァンティンが声を出す。オレは周囲を見渡して端末らしく台を見つけた。誇りがかぶっていて一瞬何のものかわからなかったが、光がともっているところをみるとまだ生きているのだろう。

オレは端末の台に駆け寄りながらほこりを払う。その中央にデバイスらしき宝石があった。すかさずレヴァンティンをそこに当てて小さく息を吐く。

「どうだ？　見取り図とか出せるか？」

『大丈夫です。今、画面を出します』

レヴァンティンの声と共に、台の近くにある画面が地図を映し出す。そこに書かれているのは広大な地図だった。思わず口をぽかんとあけてしまう。

『どうやらここは研究所というより倉庫のようですね。つまり、ここは狭間研究所じゃないということで』

「おいおい。でも、倉庫ってことは何かあるのか？」

『何もありませんね』

その言葉にオレは思わずずっこけていた。何もない施設にエンペラーなんて置くなよ。

『ただ』

レヴァンティンが声を上げる。

『厳重に隠されたブロックが存在します』

『隠されたってことは何かあるのかな？』

頭の中で響く亜紗の声。頭と耳の両方から声が入ってくるから少しややこしくなる。

「そこには何がある？」

『ちょっとまってください。えっと、これは、そんな、こんな場所

にこれがあるなんて』

「レヴァンティン？」

レヴァンティンが珍しく焦っている。本当に珍しい。

『この道への隔壁がどんどん開いていること見ると、マスター、地図をインストールしたので子も日を急いで辿ってください』

画面に描かれる一本の道。それは、この施設の最奥に続く道だった。

『侵入者は研究者でもなんでもありません。狙いはこの施設の一番奥にある武器、隼丸です』

第百二話　シリーズ（前書き）

久しぶりにスラスラ書けた話です。

第百二話　シリーズ

「化け物」

声が響く。それを聞いていたアル・アジフは口元に笑みを浮かべた。まるで、褒められたかのように笑っている。だが、目は笑っていない。むしろ、極寒の視線と言うべきだろうか。

アル・アジフは自らの魔術書アル・アジフを開いた。

「そうじゃな。我はアル・アジフ。偉大な魔術書アル・アジフにして人智を越えかけた存在。そなたらが化け物というのは間違ってはおらぬ。じゃが」

その手に白い炎がバチバチと雷を纏いながら現れる。それと共に大地の一部が隆起していた。よく見ると、その炎自体は中央に収束している。光を呑み込んでいる。

炎属性、大地属性、雷属性、光属性、闇属性、そして、氷属性の六つが合わさった魔術。どれもこれも強力な魔術だと見ればわかる人はわかるレベル。

もう、人が使える限界をはるかに超えている。

「言った以上、覚悟は出来ておるのじゃろ？」

その声にはまるで全てを凍らす炎属性が組み込まれたようだった。

「これが、アル・アジフ」

光の輪で拘束された男が小さく呻く。普通はこんなに複数の魔術を組み合わせられる者は魔術の精密発動は、普通は出来ない。

複数の魔術の合成は数が少ない、二個まで、なら精密さを必要とする。だけど、三つ以上の属性を組み合わせるなら精密さよりも大雑把な組み上げを必要とする。六つとなればなおさらだ。

過去に全属性を組み合わせられる人物（簡単な属性魔術を）がいたが、その人物は基本的に細かい魔術はとても苦手だ。

ただ、アル・アジフは男を縛っている光の輪、天空属性系統拘束魔術エンジェルリング、は細かな操作が必要な魔術でもある。

エンジェルリング自体の効果範囲が狭いというのもあるが、拘束魔術の中で最も強力である反面、誘導性が全くないのが特徴だ。

拘束魔術は基本的に誘導性が極めて高いもの、例えばチェーン系統（語尾にチェーンの名が付く拘束魔術）やバインド系統（語尾にバインドの名が付く拘束魔術）、を使用する。ただ、どちらも魔術ではなく力技で破壊可能な物理属性だ。

誘導性が無い魔術は精密発動以外に動く標的を捕まえることは出来ない。

「化け物は化け物らしく、大人しくやられとき！」

爆発で吹き飛ばした槍を持つ女性が距離を詰めてくる。槍の特性を生かした突進。距離とスピードと体力が揃った時、一撃必倒の技となる。

だけど、タイミング、スピード、距離、力、その全てが揃った槍の突撃をアル・アジフは簡単に受け止めていた。

「なっ」

槍を持つ女性が絶句する。アル・アジフはそのまま槍を両手で掴み、背負い投げた。

絶句していた女性は反応が遅れ、そのまま槍と共に背負い投げられ地面に激突する。威力が極めて高かったから女性はピクピクと体を痙攣させたまま動かない。

アル・アジフは小さく息を吐いた。

「では、話してもらおうかの？　我を襲った理由を」

「いいだろう」

槍を持つ男が笑みを浮かべた。そして、

「やれ、シリーズ」

その瞬間、アル・アジフの頭の中に何かが響き渡った。音を例えるなら黒板に爪を立てて音を鳴らす嫌な音。その音が一斉に複数の方向からアル・アジフの頭の中で響き渡ったのだ。

「これは」

驚愕の声と共にアル・アジフの雰囲気が変わる。それは、アル・ア

ジフ、いや、エリシアの驚いた声。

アル・アジフは直接受けたダメージによって意識を失ったらしい。

だから、エリシアが面に出ていた。

「精神感応を使った攻撃」

男を拘束していたエンジェルリングはすでに解けている。男は笑みを浮かべたまま槍を構えた。

「頭の中さえ残っていればいいさ。さあ、タイプ０１（ゼロワン）、やれ」

「了解」

エリシアがとっさに振り返る。そこにいたのは拳を握りしめて凄まじい速度で向かってくる中学生くらいの女の子。

魔術書アル・アジフがあまり使えないエリシアにとってその攻撃は必中の攻撃。

エリシアはただそれを見つめるだけで、そして、その拳は隣から現れた拳によって払われる瞬間をしっかり見ていた。

完全な不意打ちだったからか女の子の顔が驚愕に染まり、その鳩尾に拳を払った人物の肘打ちが見事に突き刺さった。

八陣流崩拳『落陽』。

攻撃を弾いた瞬間に懐に潜り込みながらタックルをするかのように

肘を叩き込むカウンター技。

そんな技を簡単に出来る人は限られている。そして、見事な動きが出来る人はエリシアが知る中で二人だけだ。

「久しぶりに会って、夕方にまた会おうねと約束して機嫌がとてもいい状態なんですけどね？」

威圧的な声が響き渡る。拳を握りしめてにっこりとキレた笑みを浮かべる由姫は周囲を見渡す。

「あなた達は何ですか？　アル・アジフさんに何か用ですか？」

「くっ、相手はきん、ぐあっ」

槍を持つ男が命令を出そうとした瞬間、由姫が放った重力砲が直撃して吹き飛ばした。由姫は小さく息を吐く。

誰の目から見ても明らかだった。由姫は完全にキレている。男も声を出しただけで行動に移っていないというのに重力砲を叩きつけている。でも、これは戦場を制するという点ではかなり良かった。

もし、少しでも声を出せば、少しでも動けば、由姫は重力砲を撃つ。それを知らしめている。

「アル・アジフさん、大丈夫ですか？」

「私は大丈夫です」

エリシアの声。それを聞いた瞬間、由姫は一瞬きょとんとして、そ

して、納得したように頷いた。

「記憶喪失ですよね」

「エリシアです」

エリシアはしょぼんと肩を落としながら言う。由姫はエリシアも知っているはずだが、どうやら完全に忘れていたらしい。

「そう言えばアル・アジフさんの中の人にそんな人もいましたね。中の人って声の主という意味じゃなかったんですか？」

「由姫さんって何気に酷いですよね」

エリシアが悲しそうに目を伏せた瞬間、由姫に打ち飛ばされたタイプ０１と呼ばれた女の子が由姫に向かって駆け出した。対する由姫はそれを一瞬だけ見てから周囲を見渡す。

周囲のローブの者達三人は動いていない。いや、反応出来ていないというべきか。

だから、由姫は前に向かって一歩を踏み出した。

タイプ０１はさらに加速して拳を打ち出す。その速度は凄まじく速く、普通は回避出来るような速度じゃない。だけど、由姫は微かに後ろに下がる。

踏み出した足でそのまま体重を後ろにズラして下がり、前に出る。

それは完全なタイミングズラし。完全に嵌ったなら近接格闘戦では

致命的な隙が出来るし、覚悟をしていなくても前に出る時の加速は脅威の一言であり、避けられる速度ですらない。

里宮本家八陣八叉流崩落『綺羅朱雀』。

タイプ０１の拳は頬を掠め、由姫の拳は上手くタイプ０１の顎を弾いていた。

タイプ０１が体勢を崩す。顎を打たれたことで脳しんとうが起きているのだ。そんなタイプ０１に向かって由姫は動く。

振り抜かれた拳を手に取り、その体を回転させながらこめかみに向かって蹴りを放つ。タイプ０１はとっさに腕を動かしガードするが、由姫の蹴りはそのガードごとタイプ０１を蹴り飛ばした。

タイプ０１は地面を数回バウンドした後転がり、止まる。頑張って立ち上がろうとしたが、そのままタイプ０１は地面にひれ伏した。

「なかなかの速度ですが、八陣八叉流には通用しませんよ。さて、そろそろ理由を」

「お姉さん、強いね」

その声に由姫は振り返った。そこにいたのはやはり、中学生くらいの男の子。その左右の腰に身につけられた刀は地面に当たり、重いからか引きずった後を残している。

「僕とどっちが強いのかな？」

男の子はそのまま刀を抜いて駆け出した。その速度に由姫は見覚え

がある。まるで、亜紗のような速度。

「さあ、僕を楽しませてよ！」

第百三話　タイプ０３

煌めく刃の輝き。まるで、光輝のごとく光を放ちながら迫る二つの刃を由姫はギリギリで避けた。しかし、完全に避けたはずの刃は由姫の身につけた戦闘服を微かに焼く。

光属性の魔術だと由姫は理解するが、魔術に疎い由姫には何の魔術かはわからない。

迫り来る刃を避けながら由姫は後ろに下がった。相手の攻撃は熾烈にして過激。刀は光属性で回避しても一定範囲以内なら熱量を持った光によって焼かれる。刃の切れ味は極めて高いだろう。

「お姉さん、早いね」

両手に刀を握りしめる男の子は満面の笑みを浮かべる。対する由姫は額に汗をかいていた。

動きは亜紗と同じ。だけど、刀の軌道はまるで周のレヴァンティンモード?と同じだったからだ。そして、スピードは亜紗に近い。

先ほどのタイプ０１を近接格闘型だとするなら、この男の子は高速戦闘型である。

「でも、僕の方が速いかな」

「そうですね」

由姫は頷く。速さという観念では由姫は勝てないだろう。由姫は速

い。もちろん、一流で通用するくらいに速い。でも、速さの超一流ではない。

由姫は身構える。左手に身につけたナックルの感触を確かめる。

「でもね、僕はお姉さんのような強い人ともっとたくさん戦いたいんだ。欠陥品をただ壊すだけじゃなくて、斬ったら血が出る人間と戦いたい。だから、お姉さんはどこまで僕と頑張ってくれる？」

「狂ってる」

「狂ってなんかないよ。これが僕という生体兵器の特徴なんだよ」

その言葉に由姫はハッとした。

生体兵器。つまり、周や亜紗、そして、アル・アジフと同じ存在。

だけど、生体兵器は三人だけとしか聞いていない。

「殺戮の感情かな？　人を殺したい。力自慢のお姉ちゃんや出来損ないのタイプ０３、シリーズの中で唯一僕が持つ特別な感情。お姉ちゃんより強いお姉さんは、僕をどこまで楽しませてくれるの？」

「楽しませるつもりはありません」

由姫が腰を落とす。拳を握りしめ、前に出た。

だが、その瞬間に全て常人の視界から由姫が消えた。

白百合流高速加速術『切羽』。

周すら知らない白百合家のみ伝えられる魔力を一切使わない走破術。加速した体にタイミングをズラすように微妙な加速をした後に速度を一瞬無くす。それから最大加速を行う極めて難しい技だ。

ただ、リコ以上に視覚を揺さぶるからか、視界の外に出ることは造作もない。だけど、男の子は違った。

刀を握りしめ、振り返りながら振り切る。

速度は完璧でタイミングも最高。淀みなく動く刀は見事だとしか言いようがない。もし、何かがそこにあっても完全に切り裂けただろう。そう、そこに合ったなら。

男の子が振り抜いた先にあったのは何もない空間だった。男の子が目を見開く。

「それに、速度は負けていても」

背後に回り込んだ由姫が左の拳を男の子の背中に当てた。

「機動力では私は負けません」

そのまま押し込むように力を解放する。それはまるで魔力を爆発させるようなものだが、由姫が爆発させるのは気という名の力。要するに気合いだ。

近接格闘において魔力よりも必要とされる未だに物質の正体がわからない気の力は当てた相手を吹き飛ばすだけでなく、当てた相手の体に直接作用してダメージを与える。ついでに滋養強壮までやれる

ある意味万能な力。

由姫はそこまで、滋養強壮までは不可能だが、普通に魔術を叩きつけるよりも遥かに威力の高い一撃を放てる。

男の子は吹き飛び動かなくなった。

「さて、次は誰が相手ですか？」

由姫が周囲を見渡す。ローブの者達は動かない。いや、動けないという方が正しいか。それほどまでに由姫は戦場を支配している。

近接戦闘で由姫の右に出る人物は少ない。むしろ、一人くらいしかいないだろう。由姫と対抗するには魔術を使った戦い方。

だけど、生半可な魔術は由姫には効かない。第７６移動隊は魔術のレベルが高いからだ。

「では、私から」

「そ、そんな、こ、ここ、ことは、さ、させましぇっ、ううっ、舌、噛みました」

怖いのか何かわからないが緊張しすぎてちゃんと言葉が紡げず結局は舌を噛んだ女の子の声。

その声に由姫は振り返った。そこにいたのは緑色のローブ、というか、どう説明すればいいかわからないものを着た小学生くらいの女の子がいた。

うさぎの着ぐるみとローブを足して二で割ったような服装。幼稚さは出ているが、由姫の肌を撫でる感覚は女の子がより危険な存在だと警告している。

「タイプ０３、下がり、なさい！」

地面に転がるタイプ０１が叫ぶ。

タイプ０３と呼ばれた女の子はその手に持つ杖を構えた。

「タイプ０２ですら勝てない相手にあなたが戦えるわけが」

「わ、私だってシリーズの一員、だ、だから。た、戦います」

由姫は拳を握りしめる。タイプ０３の能力は未知数だが、杖を持っているところを見ると、完全に魔術師型だろう。

持っている杖はどこにでも売っているような簡易用の杖。壊れやすく、大規模な魔術を使えば必ず一回で使用不能になる安物だ。タイプ０３はそれを持っている。

「そうですか」

由姫は腰を落とし地面を駆けようとした。だけど、それより早く、ほんの一瞬で魔術陣が展開される。由姫の周囲一帯に。エリシアも巻き込む形で。

由姫はすかさず神への重力（グラヴィタス）を最大出力で周囲一帯に展開した。

「お姉ちゃんやお兄ちゃんは、私が守るんだから！！」

轟音。

その表現が相応しい音が鳴り響いた。

千春の墓の前で手を合わせていた都と琴美の二人はハッと顔を上げて音がした方向を見る。

そこには大きな土煙が巻き起こっていた。

「戦闘？」

「そうかもしれません。今から座標を固定して瞬間移動（ショートジャンプ）を」

「あらあら。それは困るのよね」

急に響いた声に振り返った。そこには千春の墓に腰掛ける化粧がどぎつい女性がいた。

年齢は四十歳ほど。

「あんた、何してるのよ」

琴美が自らのデバイスを取り出す。女性はそれを見ながら薄く笑みを浮かべた。

「あなた達を行かすわけにはいかないの。だから、この場で」

「千春の墓に、腰掛けるな！」

琴美はその手に取り出した槍を女性に向かって投擲する。だが、女性はその時にはすでに移動していた。空中に。

琴美がすかさず指を動かす。すると、投擲された槍は全てが糸のような線に解け、集まり、剣となって女性に迫る。女性はそれを一瞥して、

「野蛮は嫌いよ」

その言葉と共に琴美が尻餅をついていた。剣は軌道を逸れて何もない空間を薙ぐ。

「腰掛けたことは謝るわ。墓だとは思わなかったもの。だけど、これからはここに止まってもらう。それが作戦だもの」

「作戦、ですか。つまり、あそこにいる方はアル・アジフさんから由姫さんのどちらか」

「正解よ。賢い子は好きよ。でも、刃向かう野蛮な子は嫌いよ」

都は断章を取り出して構える。

「刃向かう？　それは違います。私は今から、あなたを拘束します」

発動した魔術は標的に当たった瞬間に爆発するものだった。由姫はそれを下に外に向かう重力空間を作り出していたおかげで直撃はしなかった。でも、神への重力（グラヴィタス）を抜けたダメージがかなり高い。

「ご、ごごご、ごめんなさい！　痛かったですよね？　ごめんなさいごめんなさい！　殺すつもりは全くないので安心してください」

「あなたは、何者ですか？」

由姫は脂汗をかきながら身構える。タイプ０３の魔術は極めて威力は高い。昏倒させるように設定はされているみたいだが、全て直撃すれば、最悪は痛みのあまりショック死する可能性だってある。

由姫が苦手な大火力の魔術師。

「わ、私ですか？　私はタイプ０３。生体兵器です」

その言葉に周囲が固まる。もちろん、由姫も固まっていた。

タイプ０３は周囲を見渡しながら首をかしげる。

「皆さん、どうかしましたか？」

「普通、敵にそう言う情報を与えますか？」

一瞬だけきょとんとしたタイプ０３は意味に気付いたのか顔を真っ赤にした。

由姫は静かに前に踏み出す。あの威力、今のタイミングで倒してお

かないと。最大の加速と最大の一撃を与えるために左の拳を握り締めて前に駆けだす。

「こ、来ないでください！」

タイプ０３は魔術陣を展開する。近づく前に撃ち落とすつもりなのだろう。由姫は大きく横に跳んだ。そして、魔術が発動する。

「「「えっ？」」」

そんな声がいたるところから出るほどの不発の魔術が。

由姫は足を止めることなく踏み出して杖を弾き飛ばす。そのまま流れる動きで肘を叩き込んだ。肘を叩き込まれたタイプ０３は大きく吹き飛んで動かなくなる。

「これで」

続けようとした由姫の言葉が完全に止まる。何故なら、由姫の周囲に大量の魔術陣が展開されたからだ。完全に油断して動きを止めている今、回避する手段はほぼ無い。

そして、魔術が発動する。由姫は気休め程度に重力場を形成するがそれが間に合うかどうかのタイミング。

轟音と共に大きな爆発が起きていた。だが、その中心にいる由姫にダメージはない。とっさに瞑っていた目を開けると、そこには頼もしい後ろ姿があった。

「危ないところじゃったな」

アル・アジフが静かに魔術書アル・アジフを開く。ここに、世界最強の魔術師が復活する。

「次は我らが相手になるぞ」

第百三話　タイプ０３（後書き）

魔術の不発は基本的に術者の魔力が足りない時か、魔術の発動に利用する武器が壊れている時に起きます。

第百四話　隼丸

隼丸。

その名前はアルの口から聞いたことがある。

アルが探し求めるオーバーテクノロジー産物の武器。その内の一つが隼丸だ。

他にはオレのレヴァンティン。孝治の運命。アルのアル・アジフ。そして、デュランダルに七天。デュランダルと七天、そして、隼丸は今まで場所がわからなかった。その隼丸がここにある。

オレ達はレヴァンティンの指示に従いながら通路を駆け抜ける。

『隼丸は可変機能を持った弓です。一芸特化のアル・アジフ、デュランダル、七天、運命と違い、隼丸は状況に応じて使い分けることで真価を発揮する武器です』

オレ達の頭の中でレヴァンティンが隼丸について解説してくる。亜紗にもある程度、アルが集める武器について説明しているのでわからないことは今のところないはずだ。

つまり、レヴァンティンと同じということか？

『私よりも万能性は低いです。そもそも、私をマスターみたいな複数の形態にして状況に応じて使い分けつつサポートしてもらう、という使い方をされたのはマスターが初めてですからね。私の場合は他の能力の一芸特化とは違い、マスターをサポートする能力がずば

抜けて高いだけです』

高すぎるのもどうかと思うけどな。

オレは小さく溜め息をつきながらレヴァンティンを握りしめる。

何で侵入者が隼丸を求めていると思ったんだ？

オレはレヴァンティンに尋ねる。もしかしたら、偶然、その道を進んでいるのかもしれない。

『マスター。私が調べた情報を覚えていますか？』

忘れるわけがない。レヴァンティンがその情報を持ってきたのは今朝方だ。想像通りの情報だと思っていたら、実は想像以上にややこしい事態になりかねない情報でもあった。

施設について調べたい気持ちがかなり強かったから考えないようにしたけど。

覚えているさ。でも、あれが、

『この施設の見取り図が、ある機関の最重要機密にあった何の注釈も存在しない見取り図と同じだったなら？』

『えっと、説明をお願い』

理解出来ない亜紗が尋ねてくる。亜紗は両手に綺羅と朱雀を握りしめていた。少しずつ通路が狭くなっているので七天失星から綺羅と朱雀に変えたのだ。

オレは少しだけ考えてから亜紗に説明する。

レヴァンティンに『悪夢の正夢（ナイトメア）』関連で調べて欲しいことがあったんだ。それを頼んでいたんだが、とある機関で関連の情報が見つかってな。

『国連から見つかったの？』

その言葉にオレは足を引っ掛けて転けそうになった。というか、国連なんて文字は一つも出していないぞ。

『今まで不思議だった。『悪夢の正夢（ナイトメア）』達の動きは大規模すぎる。クスリに絡んでいるからと言って、シェルター内の隠し通路を使ったり、『ＧＦ』の庇護下にある学園都市内部でケリアナの花を使ったりするのは小さな組織ではありえない。バックに大きな組織が存在する』

確かにそこまで考えることは出来るはずだ。実際に、『悪夢の正夢（ナイトメア）』達のバックには何か巨大な組織があると学園都市の『ＧＦ』も気づいている。でも、その巨大な組織がわからない。

『『ＧＦ』はありえない。学園都市の表は『ＧＦ』が支配していても、裏は、地下は特に日本政府が支配している。『ＥＳ』は学園都市と接点がない。弱腰の日本政府がバックなわけがない』

『つまり、『ＧＦ』、『ＥＳ』と並ぶ自称世界の協調者である国連というわけですね。いやはや、マスター、負けましたね』

レヴァンティンの声にオレは黙る。

オレがバックに国連がいると確定させたのは今日だ。だから、絶対に顔には出さないように、絶対に考えないように暗示に近い感じで封印した。でも、亜紗はより早く気づいていた可能性がある。

オレなんて身内を疑っていたのに。

『国連なら情報量から考えて、レヴァンティンが戦うに相応しい存在だから』

確かに、レヴァンティンのハイスペックさは委員長のハッキングすら負ける。まあ、二人が合わさったら国連の防壁なんてものの二十秒で落ちた。

この時ばかりはオレの顔も引きつったし、ちょうど遊びに来ていた慧海の顔も引きつっていた。

完敗だ。まあ、国連に見取り図があった以上、国連の関係者が狙っているのは考えられる話だよな。

国連の関係者としてなら研究者と偽って入れるはずだ。そうなれば慧海達は止めることは出来ない。

相手が誰かわからないが、実力もかなりのものだろうし気を引き締めないとダメだな。

レヴァンティン。一つ気になるんだが、どうしてそれが隼丸を狙っているになるんだ？　確かに、ここの見取り図が国連にあったのと同じものだと思うけど、それだけで国連の関係者が隼丸を狙うとは考えにくいだろ？

『確かにそうです。国連自体は隼丸を狙っている可能性は極めて低いと思います。例え、国連に、隼丸に関する資料があるとしても、隼丸はオーバーテクノロジーの武器の中で一番扱いが難しい武器です。私が知る限り、花畑孝治が一番適合した人物でしょう。それ以外にはいません』

弓と剣の二形態というわけか。

確かに、孝治はかなり珍しい剣と弓の二つを使う。普通、遠距離攻撃には杖を使うのだが、孝治は頑なに弓を使うと言った。

理由を語るなわ簡単だ。前にポツリと漏らしたのだが、武士道、らしい。

弓を扱う人物は普通に弓でしか戦えない。弓はそれだけで千差万別とでも言うかのようなその人物の特徴と幾万の使い道が出来る。だから、弓だけでも初心者は近距離戦以外はやっていける。

さらに、近距離となれば、まるで絵空事のようなアクロバティックな攻撃が可能だ。そこまでの実力に到達するのは難しくなく、鍛えれば簡単に出来るようになる。

つまり、弓だけで戦場を駆け回る方が、下手に他の武器を使うより強い。だから、弓と剣の両方を極めた人は少ないし、どちらかが疎かになる。

『ですが、隼丸という存在は極めて貴重です。そのためだけに隼丸を求める可能性は決して低くはありません。ですが、ハイリスクハイパーローリターンなことは国連はしないでしょう』

だから、レヴァンティン。お前は何が言いたいんだ？　理由になるどころか否定していないか？

『私もそう思う。レヴァンティンが何を言いたいのか今一わからない』

オレの言葉に亜紗が賛同する。レヴァンティンがどうして国連側が隼丸を狙っているのかわけがわからない。

『そうですね。もし、隼丸を狙っているのが国連側だとするならメリットが少なすぎると言いました。でも、その国連内に隼丸が欲しい一団があるなら？　そして、その一団が狭間市に入っているなら？　その一団が一直線に隼丸の保管位置を目指しているなら？』

『国連の思惑を超えた動きに必ずなる。これは、もしかして』

『はい。国連をバックにつけた組織の暴走。マスターはわかっているんじゃないですか？　むしろ、わかったんじゃないですか？』

ああ。今、この施設に入っている奴らがどの組織かもばっちりだ。

オレはレヴァンティンを握りしめて速度を上げる。同じように亜紗も速度を上げた。

レヴァンティンの言う推測を評する理由はオレにはない。レヴァンティンの推測はレヴァンティンが調べた情報から統合したものだ。おそらく、今回、調べてもらっていた情報から抜き出した推測。

つまり、その組織は一つしかない。

『右を曲がれば保管場所です』

その言葉と共にオレ達は右に曲がった。そして、立ち止まる。

そこにいたのはローブを身につけた男女の姿。ただし、見覚えがある。

「『悪夢の正夢（ナイトメア）』に『現実回避（エスケープ）』か」

オレはそいつらのレアスキルを呟いた。シェルター内で出会った二人と同じ姿。その言葉に『悪夢の正夢（ナイトメア）』が笑みを浮かべる。

「正解だ、海道周。それにしても早かったな。エンペラーを倒したのか？」

「当たり前だ。あんな機械にオレ達が止められるわけがない」

エンペラーはこいつらに従っていたわけじゃないから認識を攪乱してやって来たのだろう。オレ達は倒したというのに。

オレはレヴァンティンを握りしめる。握りしめた手が汗で湿っている。

緊張している。珍しく、相手と話すことに緊張している。

「しかし、遅かったな。すでに隼丸はこの手だ」

「あんたらが隼丸を狙っていたとはな。目的は何だ！？」

「愛娘へのプレゼントよ」

『現実回避（エスケープ）』が答える。その言葉にオレは全てを理解した。頭の中でバラバラだったパズルが組み合わさっていく。あらゆるものが一つになる。

オレはレヴァンティンを握りしめて構える。これ以上はさせない。

「そうかよ。だったら、今ここでお前達を倒す」

「いいのか？　戻らなくて？　今頃、外では幻想種が、君達の仲間はフュリアスが襲っている。全滅しかねないぞ？」

『悪夢の正夢（ナイトメア）』が笑みを浮かべた。確かに、普通ならかなり危険だろう。でも、それは通用しない。

「なあ、最強のフュリアス、エクスカリバーって学園都市からここまで何分で来れるか知っているか？」

そんなことはすでにお見通しだ。何かあった時のための準備はすでに知っている。『悪夢の正夢（ナイトメア）』達がここにいたのは完全予想外だが、関係者が襲ってくるのはいくらでも考えられた。だから、すでに布石は打ってある。

「並のフュリアスじゃ、瞬殺されるぜ。だから、オレ達はここでお前達を捕まえる。ただそれに全身全霊を注ぎ込むだけだ！」

「生意気な。どこでそんな育ちをした」

「悪いが、あんたらとは違う育て方をされたんでね。一応言っておく。武器を捨てて投降しろ。さもなくば、気絶させてでも捕まえる

第百四話　隼丸（後書き）

隼丸の持ち主に関しては最初の構想と違っています。最初は孝治が持っている予定でしたが、運命を持っていた以上、隼丸は持たせない方がいいと判断しました。この結果が良かったのかは私にはわかりません。全て、読者の皆さんが決めることです。

まあ、上手く利用出来たとは思っていますが。

第百五話　神速の翼（前書き）

途中で過去話入ります。

第百五話　神速の翼

エスペランサのエクスカリバー専用整備ブース。

他のフュリアスとは違い、エクスカリバーの通常形態は戦闘機型。ソードウルフよりかはスペースは取らないが、エクスカリバーは専用の整備ブースで整備をしないといけない。

その整備ブースでは何人もの技師がエクスカリバーの最終チェックを行っていた。

「大丈夫です。行けます」

そのエクスカリバーのコクピットに乗る悠人がコクピットに近寄っていた技師の一人と会話をしていた。悠人の言葉に技師は頷く。

「わかった。全員、待避！　今からエクスカリバーが出るぞ！」

その言葉に技師の人達が慌てて離れて行く。悠人はエクスカリバーのコクピット内で小さく息を吐いた。

悠人が今着ているのはいつものピチピチのパイロットスーツではない。悠人専用のパワードスーツだ。ただし、エクスカリバーに乗る時専用のパワードスーツで衝撃緩和以外の防御性能はない。

悠人はまた小さく息を吐き、パワードスーツに包まれた手でレバーを握りしめる。

「アル・アジフさん、周さん、無事でいて」

「えっ？　常にエクスカリバーで待機ですか？」

僕は周さんの言葉に驚いていた。周さんは呆れたような表情で頷く。

「今のエクスカリバーＺ１は未だに戦闘経験はないけど、最高速度と機動性だけは一番だろ？　ここから狭間市までものの数分で到着出来る」

「そうですけど」

「連絡はオレかアルが行う専用回線で繋げる。出撃要請が出たらすぐに準備して欲しい」

「一つ、いいですか？」

僕は周さんに向かって手を挙げる。周さんは僕が質問してくるとわかっていたからか小さく頷くだけだった。

「周さんは何を心配しているんですか？　それは、アル・アジフさんに関することですか？」

「ああ。狭間市は学園都市ほどの戦力はない。もしかしたら、オレ達が狭間市に行くのを狙って襲いかかってくる集団がいる可能性もある」

「『悪夢の正夢（ナイトメア）』ですね」

僕の言葉に周さんは頷いた。

学園都市内部ということで僕達フュリアス部隊はあまり関わりはないけど、今、第７６移動隊が相手をしている『悪夢の正夢（ナイトメア）』を代表とする集団。

自惚れじゃないけれど、僕みたいなパイロットを待機させるような相手なんて数少ない。

音界のルーイ達か『ＧＦ』の第一特務。そして、『悪夢の正夢（ナイトメア）』を代表とする集団。

「オレ達は全力を尽くす。だけど、狭間市ということで都達やアルに由姫は挨拶まわりをするんだ。直接向かうのはオレ、亜紗、メグの三人。みんな、普通の相手だと大丈夫だと思うけど、『悪夢の正夢（ナイトメア）』達が幻想種やフュリアス部隊を出してきた場合、対処しづらいはずなんだ。その時は、頼めるか？」

周さんの言葉に僕は笑みを浮かべた。

「じゃ、帰ってきらた整備班のみんなや第5分隊のみんなを連れてご飯、奢ってね」

「ちょっと待て。整備班を加えたら百人近くになるじゃないか」

整備班は第７６移動隊所属ではなく、近くの専門学校生や『ＧＦ』が派遣する学園都市の技師達の集まりだ。第７６移動隊ではあまりたくさんいないが、それでもかなりの数になる。

僕を待機させるということは整備班も待機させるということ。だから、そうしないといけない。

「ったく、わかった。焼き肉くらいなら奢ってやるよ。その代わり、何かあった時は必ず来てくれ」

「うん」

僕は頷く。今まで僕達は第７６移動隊の中にいながら完全に蚊帳の外だった。でも、今回はようやく入ることが出来る。

もし、アル・アジフさんを狙う奴らがいるなら、僕は赦さない。

「任せて。ほんの数十秒で全機倒すから」

数十にも及ぶ展開されたフォトンランサーが女性を狙う。しかし、そのフォトンランサーは不自然に軌道を変えて地面に突き刺さった。

都はすかさず断章を構えて魔術陣を展開する。

「どうして当たらないのよ！」

魔力を編み込んだ糸である頸線を琴美は飛ばすだが、その頸線も軽々と女性は避けていた。

「そんな小さな攻撃、当たらないもの」

都が放った収束系の魔術も簡単に回避する。いや、簡単に魔術が回避する。

何かを行っていることはわかっても、その何かがわからない。

「指向系魔術、氷属性ですか？」

都が断章を握りしめて地面を蹴る。女性はそれを一瞥した瞬間、都の体が宙を舞った。まるで、見えない力で投げ飛ばされたかのように。

都は上手く着地する。

「惜しいわね。でも、私はそこまで複雑な術式は使えないもの」

「使えないわりには回避力は高いわね」

琴美が手に持つ槍を握りしめる。都と琴美の二人は膨大な量の攻撃を行っている。でも、一つも掠ってすらいない。

「今はあなた達の足止めばかりしているからよ。攻撃も行えば、さすがに捌けなくなる」

「指向系ではなく、攻撃を捌く能力ですか。大体、見えて来ました。でも、底が見えませんね」

「ここで見せても意味はないわ。今はあなた達を足止めすればいいだけだから。あそこに行かせないように」

女性が指差した方向をチラッと都は見た。そして、慌てて振り返る。
そこには十数機ものフュリアスがあったからだ。
「さすがにシリーズと最新のフュリアスがいれば、拘束も容易いはずよ」
「シリーズ？　最新のフュリアス？　あなたは何を」
声を上げていた琴美を都は手で制した。そして、断章を下ろす。
「琴美。今は静かにしておきましょう。いくら攻撃に出ても私達は傷一つ負わせれません。ですが、色々とわかりました」
都は真っ直ぐ女性の目を見る。
「あなたは『悪夢の正夢（ナイトメア）』一味ですね」
「根拠は？」
「あのフュリアスは国連が開発した最新型のフュリアス。試作機が一機盗まれたと話を聞いていましたが、実は、国連が裏経由で『悪夢の正夢（ナイトメア）』一味に送っていた方が辻褄が合います」
「そんな話は初めて聞いたわよ」
琴美が呆れたように都を見る。都はクスッと笑みを浮かべた。
「多分、『ＧＦ』でその情報を持っているのは私だけだと思います。

あのフュリアスはＬＮＦ－１５アサルトですよね？」

「都って視力良かったっけ？」

琴美がフュリアスの方を見ながら呟く。都の言葉に女性は答えない。

「私達を狙う組織。そして、国連をバックとする組織。そんなものは『悪夢の正夢（ナイトメア）』一味しかありません」

「どうかしらね」

女性は薄く笑みを浮かべるだけ。対する都も薄く笑みを浮かべていた。その中で琴美は千春の墓に向かい合って正座をしていた。

「千春、あの二人をどうにかしなさいよ」

「フュリアスですか」

由姫が小さく呟いた。いつの間にか由姫とアル・アジフの周囲にはフュリアスの姿がある。

背中にあるバックブースターと頭にある特徴的な狐耳のような通信用アンテナ。国連の機体であるということは一目瞭然だった。

「ふむ、ＬＮＦ－１１ティアラよりも飛行に特化したタイプみたいじゃな。最新型かの」

「アル・アジフさんも知らないんですか？」

「確かに、我はフュリアスに関しては物知りじゃが、我らに対し秘密主義の国連機を知るほど人脈も広くはない。知っているものがいるなら、それは国連関係者じゃろう」

フュリアスの手に握られているのは通常のエネルギーライフルじゃない。エネルギーバルカンと呼ばれる鎮圧用の武器だ。

威力は低いが弾幕を張ることに特化しており、フュリアスには効かないものの生身の人間が相手なら当たるだけで気絶させられる威力がある。

その銃口が二人を狙っていた。

「アル・アジフさん、耐えれますか？」

「難しいじゃろうな。エネルギーバルカンの威力は我の障壁魔術では砕かれる。そなたの重力魔術と共になければの」

二人はお互いに魔術を展開していた。アル・アジフは障壁魔術を。由姫は重力魔術を。この二つの布陣はある意味絶対防御の一つだった。

だが、防御だけではどうにもならない。

「歯がゆいですね。このままだと完全に布陣を組まれてしまいます」

障壁魔術と重力魔術の外ではいつの間にか現れたローブの人達が二

人を囲んでいる。その数は約三十。二人からすればかなり厳しい状況だ。

「そうじゃな。もし、向こうが十五秒以内に行動に移ったらマズいの」

アル・アジフの言葉に由姫は驚いた。だが、アル・アジフは口を開き、数字をカウントする。

「十」

周囲は誰も動かない。いや、何かの準備をしているみたいだ。何かはわからないが由姫の視界からは何かの魔術だと判断する。

「七」

それでもアル・アジフはカウントを進める。その口に浮かんでいるのは笑み。

「五」

まだ動かない。いや、動く。二人を囲むようにしていたローブの人達が一斉に杖を構えた。

「二、一」

アル・アジフのカウントが無くなった瞬間、周囲にいたフュリアスの内三機が同時に爆発した。爆発したと言っても頭を撃ち抜かれて機能停止になる。

「なっ」

周囲から響く声。それに対してアル・アジフは今にも口から笑い声が出そうな状況になっていた。

「ようやく来たの。最終兵器が」

それは、エスペランサからエクスカリバーが発進してからたったの三分の出来事だった。

第百六話　ＧＦＦ－０３Ｚ１　エクスカリバーＺ１（前書き）

そろそろ狭間市での戦いも大詰めです。

第百六話　ＧＦＦ－０３Ｚ１　エクスカリバーＺ１

秒速３５１８ｍ。

専用装備を身につけたエクスカリバーが出した最速記録だ。エクスカリバーと言っても『ＧＦ』内で試験稼働が始まっているＧＦＦ－０３エクスカリバーじゃない。

ＧＦＦ－０３Ｚ１エクスカリバーＺ１。

世界最高峰のパーツと装置を組み合わせ、精神感応とパワードスーツの使用を可能とした僕専用のフュリアス。

Ｚ１は他のエクスカリバーと区別をつけるため周さんが２６番目に開発し、開発から２６回弄った末に完成した特殊エネルギー機関『Ｚ機関』を使用した機体だからだ。

Ｚ機関用にエクスカリバー本体もかなりいじっているため、性能は最近ロールアウトしたばかりのアストラルシリーズであるアストラルルーラより遥かに高い性能になっていたりもする。

エスペランサの甲板にあるエクスカリバー専用カタパルト。そこに、僕のエクスカリバーＺ１がエクスカリバー専用エレベーターを使って移される。

『エクスカリバーの発進準備は出来ているから、タイミングはそっちに任せるよ』

委員長さんの声に僕は頷く。エクスカリバーＺ１は今までのエクス

カリバーとは違う。発進してからどれだけ加速出来るか。アル・アジフさんの危機にどれだけ早く行けるか。

エクスカリバーＺ１にしか出来ないことはたくさんある。だから、

「エクスカリバーＺ１、行きます！」

僕は出力を最大まで一気に上げた。エクスカリバーのエンジンが火を噴く。普通は一気に出力を上げても上手く加速しない。でも、今のエクスカリバーは装備が違う。

ハイニトロブースター。

ニトロブースターの強化版じゃない。ニトロブースターとは似ても似つかないくらいのエクスカリバーＺ１戦闘機形態専用の真っ黒のパワードスーツだ。

加速という点では他の追随を許さないし、音速を超えることで出る衝撃波に耐えることが出来る。そもそも、音速を超えると衝撃波が出るって本当の話なのかな？

ハイニトロブースターに火が吹いた瞬間、エクスカリバーの体はカタパルトによって打ち出されていた。エクスカリバーが加速する。その時には機首を高く上げて一定の高度まで上がっていた。

すでにこの時にはエクスカリバーの速度は音速に達している。体にかかる圧力。でも、身につけているパワードスーツが緩和してくれている。

この加速で近距離を目指す場合、放物線を描くようにエクスカリバ

ーの機首を動かさないといけない。そうしなければあまりの加速に通り過ぎてしまう。

機首を動かすのは慎重に。だけど、大胆に。最低限の軌道で狭間市へ、アル・アジフさんが信号を出した場所に向かわないといけない。

「待っていて、アル・アジフさん。必ず、間に合わせるから」

炎と炎がぶつかり合う。飛び散る炎を受け止めるのも炎だ。

メグは炎獄の御槍を握り締めたまま兄である北村信吾に向かって駆けだす。信吾が繰り出すのはまるで蛇のようにうねる炎。だが、メグはその中を一気に突っ切った。

「なっ」

「でやっ！」

槍を一閃。だが、その一戦は簡単に避けられる。

「何故だ。何故、お前が炎獄も御槍の力を使える！？」

信吾はその手に炎の槍を作り出し、炎獄の御槍とぶつけ合った。メグはその槍と真正面から受け合う。

「俺が使えなかった力を、何故、お前が！？」

信吾の言葉に反応した炎がメグを襲う。だが、炎に包まれているメグ自身にそんな攻撃は通用しない。

メグはそのまま力任せに信吾を弾き飛ばした。そのまま前に出る。

「そんなこと、知らない！」

横一線に振られた炎獄の御槍は信吾の頬を浅く裂いた。だが、当たらなかったことで大きな隙が生まれる。その瞬間に信吾は炎の槍をついていた。確実に避けられない一撃、のはずだった。

「なっ」

だが、そこには炎の槍を受け止めるメグの姿が。ただし、その受け止めているものは炎の塊。炎の槍だからこそ受け止めることが出来る防御方法だった。ただし、これを狙ってするのは至難の業である。

メグは小さく笑みを浮かべて炎獄の御槍を同じ軌道で戻した。

信吾が慌てて炎獄の御槍を受け止めるが、メグはそのまま受け止めてきた炎の槍ごと信吾を殴り飛ばす。

「貴様！」

「お兄ちゃん、どうしてそう攻撃を急ぐの？」

メグは一歩後ろに下がる。それに対して信吾は大きく前に出た。だが、その瞬間にはメグが前に出ており炎の槍を穂先で薙ぎ払いながら石突で信吾の腹を殴り飛ばす。

「がはっ」

「今だって、不用意に前に出すぎだし」

さらに一歩を踏み出して勢いよく石突で突いた。信吾の体が近くにあった建物にぶつかり、そのまま跳ねて地面を転がる。その上からメグは炎獄の御槍をつきつけた。

「どうして、そこまで弱くなったの？」

ほんの数瞬。たったそれだけでフュリアスの戦闘範囲を大きく逸脱するこの速度。その速度をキープしたまま、僕は機首を下げ出した。

ここからがポイントだ。ハイニトロブースターは加速のみに力を割いているので減速に関してはなんの能力もない。ただ、空気抵抗が極めて大きいので、ハイニトロブースターを使用しない場合は減速しか起こさない。

だから、ハイニトロブースターをパージして虚空に収納する。

速度は減速させているため音速よりも遅い。だから、エクスカリバーそのままの白銀の装甲が陽光を受けて煌めく。エクスカリバーＺ１の装甲は音速の中でも行動できるくらい頑丈だけど。

予定通りに行動出来ていることをエスペランサから送られてくる位

置データを見ながら確認する。そして、アル・アジフさんから送られてくる戦闘データも確認する。

アル・アジフさんのいる位置の周囲にフュリアスが十七機。機体の系統は不明。だけど、国連の型番系統であることは確からしい。そうなると、弱点は頭。

「全て、頭を打ち抜けばいいよね。だから」

ブースターを逆噴射させて減速を開始する。すでに、エスペランサから発進して三分弱が経過している。

秒速５００ｍの速度は一瞬にして周囲を駆け抜け、標的視界に捉えた。

すかさずレバーを倒し変形させる。秒速５００ｍでの変形は普通なら空中分解か気絶するレベルだけど、エスペランサーＺ１とパワードスーツを着込んだ僕ならどちらも回避できる。

「いけっ！」

エネルギーライフルを両手に取りだし、構え、放った。

エネルギー弾は余すことなく三機の敵フュリアスの頭部を貫き、爆発する。

すかさずレバーを立てて戦闘機形態にして一気にフュリアスの群れの中央に跳び込んだ。跳び込んだ瞬間にレバーを再度倒して人型に変形する。

対艦刀は取り出さない。使うのはエクスカリバーＺ１のみの装備であるエネルギーナイフ。手首付近につけられたエネルギーソード発生装置の改造版で通常のエネルギーサーベルよりも短い４ｍほどしか伸びないが射出やトンファーのようにすることもできる。

僕は地面を滑る機体をそのままにエネルギーナイフで近くにいたフュリアスの頭部を貫いた。そのまま振り返りながら両手の発声装置からナイフを射出する。

エネルギーナイフはちょうどアル・アジフさん達の向かい側にいたフュリアスの頭部を貫いた。

その時点でようやくフュリアスが動きだすが遅い。持っているのはエネルギーバルカンだろう。フュリアスには使えない対人鎮圧用兵器。だから、他の攻撃オプションを取り出すのに時間がかかっている。

僕は一瞬で周囲の位置を確認してエクスカリバーＺ１の腕を振りながらエネルギーライフルを取り出す。この時にはエネルギーナイフを四度射出しており、その内三つが頭部を貫いている。

横に跳びながらエネルギーライフルの引き金を引く。ちょうど直線状にいた二機のフュリアスの頭部をエネルギーライフルが貫く。これを両手で行う。計四機の撃破。

この時に相手フュリアスはようやく動き出すが、その動きだしたフュリアスの内一機の頭部にエネルギーナイフをトンファーのように逆手にして破壊した。破壊しながらエネルギーライフルの引き金を引く。

残るは一機。その一機は対艦剣を振り上げてこちらに向かって踏み出している。

多分、敵のエース格。だけど、ルーイと比べたら月とすっぽん。僕はその対艦剣を腕で薙ぎ払った。そして、そのまま頭部を掴み、握りつぶす。

国連系統のフュリアスは頭部を破壊されることでセーフティが発動する。それによって機体は完全に動かなくなる。そもそも、頭部にはカメラ搭載されているため、最も破壊されやすい場所でもある。

僕は周囲を見渡した。周囲にいるローブの人達は蜘蛛の巣をけちらしたかのように散り散りなって逃げ出している。僕は小さく息を吐いて、間に合ったことに安堵した。

レヴァンティンの刀身が。『悪夢の正夢（ナイトメア）』の作り出した防御魔術によって受け止められる。オレはそれを強引に破壊して。『悪夢の正夢（ナイトメア）』に斬りかかった。

「さすがは第７６移動隊隊長というべきか」

レヴァンティンが再度防御魔術によって受け止められる。そして、。『悪夢の正夢（ナイトメア）』が持つ隼丸が形を変えて剣となり襲いかかってくる。

「くっ」

オレはそれを後ろに下がりながら避けた。だが、後ろに下がった瞬間にいくつもの魔術がオレを狙って飛来する。

それを上手く避けながらオレはさらに後ろに下がった。

「やっぱり、一筋縄じゃいかないか」

「当り前だ。お前とは出来が違うのでな。残りかす」

その言葉にオレは笑みを浮かべた。

「残りかすね。人の才能を認めようとしなかったあんたがそれを言うか？」

オレは笑みを浮かべながら魔術陣を展開する。

「確かに、オレは弱かった。でもな、その弱さをお前達は欠陥品扱いしていただけだろ？　オレは、考えたさ。自分の本当の能力を」

「貴様、まさか」

「だから、見せてやるぜ。オレの第三のレアスキル」

『天空の羽衣』でも『強制結合』でもないオレのもう一つのレアスキル。隠していた切り札中の切り札。これを前に使ったのは命の危険があった七年ほど前だ。

オレはレヴァンティンをモード?に変更した。そして、その刀身にオレの背中から出ているであろう魔力の輝きを放つ翼が纏わりつく。

「核晶欠損症のオレが弱くても魔術を使えた理由。それが、周囲の魔力を吸収してその魔力を使用できるこのレアスキルだ」

魔力を吸収できると言っても防御には完全に使用できない。ただ、空中に存在する魔力粒子を魔力に変換して吸収し、それを使用できるという破格の能力がある。ただ、その量自体が微々すぎて完全に魔力が虎穴した時にしか利用できない。でも、その量は空間の魔力量によって変化する。特に、部屋の中で戦闘があった場合の恩恵は計り知れない。

戦闘で飛び散った魔力を回収できる、室内に置いて大きなアドバンテージを得る能力。

「まさか、そんな力が」

「あんたはオレを真正面から見ようとしなかった。確かに、オレはこのレアスキルには気づいていなかったさ。気づいたのはあんたらがいなくなってからだ」

「それより、その口ぶり、まさか、俺のことがわかっているのか！？」

その言葉にオレは頷きで返した。そして、両手のレヴァンティンモード?を構える。

「ああ。わかっているさ。だから、ここで終わらせる。オレが、この手で！」

第百六話　ＧＦＦ－０３Ｚ１　エクスカリバーＺ１（後書き）

周の新たな能力は一見、『天空の羽衣』やレヴァンティンの力と組み合わせることで強力な力を発揮するように思えますが、実は相性がかなり悪いという何とも言えない機能があります。つまり、同時運用はかなり難しいです。出来なくもないですが逆効果だと周も知っています。ただ、能力の使い方次第では魔術師の天敵となりえる能力でもあります。

第百七話　『悪夢の正夢（ナイトメア）』の正体（前書き）

ついにボスの名前が公開です。気づいていた人も少なくないはず。

第百七話　『悪夢の正夢（ナイトメア）』の正体

レヴァンティンモード?を握り締めて前に駆ける。

このレアスキルはどんなものかは実はオレもわかっていない。わかっているのはこの能力によって核晶が無くても動き回れることだ。

それ以外は実戦ではほとんど使っていない。使う機会がないからだ。この能力は通常の魔力があれば十分に補えるものだ。

唯一、別の使い方が出来るのはこの剣に魔力を纏わせることだけ。

「その力は、一体、何なんだ!?」

『悪夢の正夢（ナイトメア）』がオレに向かって雷属性の魔術を放つ。それに対してオレはレヴァンティンを合わせた。

レヴァンティンモード?と雷撃がぶつかり合った瞬間、雷撃が一瞬にして消え去った。代わりに、レヴァンティンモード?を包んでいた魔力が少しだけ減少する。

この効果の副産物は、レヴァンティンの能力のように魔術を打ち消すものだった。そのため、魔術に合わせることで何の魔力消費もなく打ち消せるおかしな技が出来る。

ただ、使いにくいけど。

この時に魔術の中心を捉えないと打ち消せない。さらに、数で来たなら押しきられる。そして、拡散系の魔術には通用しない。

ほんの一瞬、実験のごとく使用していてわかった能力の一部だ。

一番のデメリットは『天空の羽衣』と併用出来ないという点だろう。『天空の羽衣』を展開中にこの能力を使えば『天空の羽衣』自体が魔力に分解される。

オレは前に踏み出しながら右手に持つレヴァンティンモード?を振り切った。だが、『悪夢の正夢(ナイトメア)』はそれを軽々と避けて、代わりにナイフを放ってくる。

それを弾き、嫌な予感が背中を襲った。

オレは『悪夢の正夢(ナイトメア)』から視線を外さずに横に跳ぶ。すると、ちょうどオレがいた位置を槍が貫いた。

「避けられた?」

槍をもつ『現実回避(エスケープ)』の女は少し驚いたような顔になっている。おそらく、亜紗との戦闘中に狙っていたのだろう。だから、亜紗からの警告は無かった。

「やっぱり、近接は強いな」

オレはボソッと呟きながらレヴァンティンモード?を握りしめる。

一対一には出来たものの、相手を分断したというよりはこちらが分断した方が正しい。

オレならともかく、亜紗は少し熱くなりやすい部分がある。そのた

め、亜紗が攻撃に専念する時は苛烈だが周りがあまり見えなくなる。その特徴を『現実回避（エスケープ）』は掴み、使ってきた。

全くなまっていないじゃないか。表どころか裏からも姿を消していたというのに。

「厄介にもほどがあるっての」

オレは小さく溜め息をつく。『悪夢の正夢（ナイトメア）』と『現実回避（エスケープ）』が合流したのでオレと亜紗も合流する。

『まさか、隼丸があの人達に従うとは予想外ですね』

「隼丸もレヴァンティンと同じように話せるのか？」

『私やアル・アジフみたいに万能ではありませんが、意思疎通なら可能ですよ。ですが、まさか、『悪夢の正夢（ナイトメア）』達に従うとは思いませんでしたから』

「そりゃ、『悪夢の正夢（ナイトメア）』達も最終的にはオレ達と同じだからな」

レヴァンティンモード？を通常のレヴァンティンに戻し、鞘に収め腰を落とす。

それだけで向こうは通じるだろう。白百合流の紫電一閃。命名理由通りのまるで紫電がほとばしるような速度で抜き放たれる高速の抜刀技。

多分、白百合流で一番有名で、白百合流以外を含む技の中で出が最速かつ、高威力の使い易い剣技。

「あいつらの最終目的は世界を救うこと。そうだろ、『悪夢の正夢（ナイトメア）』」

「ほう。頭はだけは賢いようだな」

「これまでの経歴をあんたらは知っているだろ。オレは二回、世界を救うために動き出した集団から戦った」

「そうだな。確かに、お前は戦った。だが、それは世界を滅ぼす可能性を内包していると思わなかったのか？　魔界の支配による滅びからの脱却。人間のクズを使って滅びを乗り切る。どちらも、今のままよりかは遥かにいい。世界が滅びる一端はお前達に」

「そんなので乗り切って、待っているのは混迷の世界だ」

もし、その二つのどちらかによって世界が救われても、その後の世界にたくさんの火種を残したままになる。もしかしたら、世界大戦になるかもしれない。

ほぼ百年前の世界大戦は英雄達が死に物狂いで戦い、終わった。しかし、その戦いも実は滅びから救うためだったりもする。

世界大戦は一時的に文明のレベルを下げる。もし、それが取り返しのつかないレベルにまでなったら文明は崩壊だ。多分、それを狙ったのだろう。

「そんなことは守れたとは言えない。今のまま、滅びを乗り切るのが一番だ」

「馬鹿げた事を。このままだからこそ、世界は滅ぶ。だったら、世界を大きく変えれば」

「方法はある。いや、世界間ではもっといい関係を目指せるかもしれない」

「どういうことだ？」

『悪夢の正夢（ナイトメア）』の顔色が変わる。オレは一世一代の賭けをするかのように気合いを入れた。

多分、心の底では戦いたくないと思っているんだろうな。

「オレは滅びがどういうものかわからない。わからないからこそ、オレは推測を考えた。みんなの行動を見ている以上、滅びのトリガーは文明。そして、戦力があればどうにかなる可能性がある。だったら、総力戦だ」

「そんなことは最初から」

「人界が、音界が、魔界が天界が主導権を握るんじゃない。文字通り、世界同士で結束するしかない」

「絵空事だ」

「だが、その絵空事が無ければ世界は救えない」

人界と魔界、音界の仲はいい。だが、魔界と音界、音界と天界、天界と魔界の関係は最悪だと言ってもいい。

その理由として、魔界と天界は今の領地以外の領地が欲しいという思惑があるからだ。案外知られていない理由でもある。

その格好の標的が音界だ。まあ、悠人繋がりで音界と魔界はかなりマシになってはいるが。

そんな状態で協力出来るとするなら、それは本当に絵空事に近いことだろう。でも、それくらいしないといけない。

「そうだな。確かにそうだ。しかし、周。それは不可能だ」

「やってもいないことを不可能なんて言うんじゃねえ！　今の関係は慧海達第一特務の存在によって保たれている。だったら、オレ達が動いて世界を動かすしかないんだよ。第一特務が壊滅した瞬間に世界が滅亡へ向かうなんて嫌じゃないか」

「子供だな。まだ、世界を理解していない」

「あの日からずっと隠れていたあんたらには言われたくないな。そうだろ。あんたはあの日、『赤のクリスマス』の日にテロを起こした。それは、あんた達の存在を隠すため。『赤のクリスマス』で犠牲になったと思わせるため。そして、策は成功した。一つを除いてな」

オレの頭の片隅にはあの日の光景が思い浮かんでいる。それは、思い出すことの出来ないパーツの最後の欠片。

「最強の魔術師となりえる才能を持った茜だ。本当なら、自分達の手で回収するつもりだった。だけど、茜はオレに核晶を渡した。他人の核晶を強制的に排除すれば、その核晶自体が壊れる可能性があ

る。だから、お前達は退いた。姿を隠すために」

「ほう、何故、そう思う？」

『悪夢の正夢（ナイトメア）』の顔に笑みが浮かぶ。この状況を楽しんでいるのか？

「もう、いい加減芝居は止めたらどうだ？　『悪夢の正夢（ナイトメア）』。いや、海道駿！！」

その言葉に亜紗がこっちを振り向くのがわかった。『悪夢の正夢（ナイトメア）』がさらに笑みを浮かべる。

「根拠は？」

「今までの言動だよ。お前はオレを知っているようだった。つまり、オレと認識のある奴以外はあり得ない。そして、その能力。『悪夢の正夢（ナイトメア）』と『現実回避（エスケープ）』のユニークレアスキルとも言えるものが二つ同時にあることはおかしい。そうなんだろ。親父、お袋」

「しかし、それでは決定打とはなりえない。もう一つ、根拠があるんじゃないか？」

オレは頷いた。そして、目を瞑る。あの時の光景は簡単に思いだすことが出来た。オレと相対する親父とお袋の姿が。オレはレヴァンティンを『悪夢の正夢（ナイトメア）』に向ける。

「親父とお袋が生きている。それを知っているからこその発言だ。そうだろ、『赤のクリスマス』首謀者海道駿！」

「まさか、欠陥品がここまでとはな」

『悪夢の正夢（ナイトメア）』の手がフードにかかり、フードを脱ぐ。そこにあったのは写真の中の親父から年を重ねたらそうなるであろう姿。

「嬉しいぞ、周」

「あんたに褒められても嬉しくないさ」

オレはレヴァンティンを握り締め、腰を落とした。

第百七話　『悪夢の正夢（ナイトメア）』の正体（後書き）

海道周の過去を断ち切る物語はこれからが本番です。

第百八話　援軍（前書き）

いつの間にか１２５００００文字を超えていますね。次は頑張って１５０００００文字。その間に第二章が終わればいいんですが。多分、無理かもしれません。

第百八話　援軍

炎獄の御槍を突きつける。

お兄ちゃんは弱い。動きは全力だと思うけど、周や第７６移動隊のみんなと比べれば遅い。私でも簡単にタイミングを合わせてカウンターを放てる。

「お兄ちゃん、聞かせて。どうしてお兄ちゃんはこんな馬鹿げた事を」

「馬鹿げた事？　ふざけるな！？　人類が生き残るためにははっさん達について行くのが一番なんだ！」

「わからないよ！　だって、『悪夢の正夢（ナイトメア）』は学園都市をむちゃくちゃにしようとしているんでしょ！　そんなの許せるわけないじゃない！」

「そうか。そうだったか」

お兄ちゃんが笑みを浮かべる。その笑みは私をまるでおかしいとでも言うかのような笑み。

私は炎獄の御槍を突きつけたまま動きを完全に止めていた。

「お前は騙されているんだよ。『ＧＦ』に、そして、学園都市に」

「どういう、こと？」

「学園都市にはな、世界を救えるだけの力がある。だが、それは学園都市を動かしているエネルギーだ。そんなものを学園都市が手放すと思うか？」

私は答えることが出来なかった。もし、それが本当のことなら手放すとは思えない。そんな力があるなら、どうして『ＧＦ』は使わないのか。

「学園都市からそれを奪えば学園都市のあらゆる機能は停止する。つまりだ、学園都市は自分達のためにそれを手放さない。『ＧＦ』もそれがわかっていながら今を過ごしている。お金のために、世界の人達を食いつぶしているんだよ。『ＧＦ』こそが選民思想に染まったクズ共だ。そんな奴らに、世界なんて渡すかよ。メグ、俺達と一緒に来い」

その言葉に私の心が揺れるのがわかった。確かに、第７６移動隊にいて強くなったとは思う。だけど、『ＧＦ』がお兄ちゃんの言う通りの組織だったなら、私が何のために第７６移動隊に入ったかわからない。

でも、周はそんなことを絶対に思っていない。周の考えは全てを守る考え。誰かを犠牲にしようとする人達はぶっ飛ばし、周が望む最善の未来を真っ直ぐ突き進む。

その最善の未来は一番の理想だが、その理想の壁の高さに誰も取らない選択肢を周はしている。

私は首を横に振った。

「お兄ちゃんが言うような『ＧＦ』だとしても、周は、第７６移動

隊隊長海道周はそんなことは絶対にしない」

「言い切れるのか？」

「言い切るよ。だって、周だから」

私は言い切る。周だから、信じる。周の生い立ちは不幸と言ってもいいだろう。だけど、いや、だからこそ、周はそんな不幸な人を少なくするために動いている。

もしかしたら、周は滅びに対する秘策があるのかもしれない。

「海道周か。人の大事なものを奪っていながらのうのうと生きる輩に、世界は救えない」

「大事なもの？　周は何か」

「核晶。しかも、妹のものだ。海道周は妹の核晶を奪って自分のものにしたんだよ。そんな奴について行くつもりか？」

私は一瞬、言葉を失った。その瞬間、お兄ちゃんが動く。炎獄の御槍を弾きながら手のひらを私に向かって伸ばしてくる。

私はすかさず後ろに下がった。

「だったら、やっぱりお前は殺す。あんな奴、生きていいわけがないんだ。人の大事なものを奪う奴なんて」

お兄ちゃんの炎が手のひらに集まる。その炎を見た瞬間、私の背中に悪寒が走った。

炎獄の御槍が叫んでいる。あの炎は、悪い炎だと。

「消え去ればいいんだよ！」

お兄ちゃんが加速した。土踏まず付近が爆発し、一気に加速して私に向かって来る。

私は炎獄の御槍を構えて、

「遅いんだよ」

いつの間にか、背後にお兄ちゃんがいた。腕を振り上げたお兄ちゃんが。

そのまま、手のひらを私に向かって押し付けてくる。私はすかさず振り返りながら炎獄の御槍を使ってギリギリでその手のひらを受け止めた。

だが、その瞬間、焼けつくような痛みが炎獄の御槍を握る手を貫き、私はすかさず後ろに下がった。

痛みのあまり手のひらを見てみる。そこには、真っ赤に焼けただれた手があった。

「終わりだ！」

お兄ちゃんが腕を振り上げている。もう、手は使えない。だから、受け止められない。

私はお兄ちゃんの手のひらを見つめ、目を瞑ろうとした。

「流動停止（フリーズ）」

その瞬間、そんな声が響いてお兄ちゃんの体から炎が消えた。

「おいおい。女の子を傷つけるなんて、男の風下にも置けないな」

私は振り向く。そこにいたのは三本の大小の異なる剣が周囲に浮かび、手の中にはチャクラムを持つ悠聖の姿があった。

悠聖が笑みを浮かべる。

「その力、封印させてもらったぜ」

「しつこいな」

慧海は小さく溜め息をつきながらその手に持つ剣、『飛翔』を振る。すると、剣はまるで鞭のようになって周囲にいた幻想種を一気に薙ぎ払った。

数少ないエンシェントドラゴンが口を開き、ブレスを吐き出そうとするが、それより早く慧海の持つ『飛翔』の先がエンシェントドラゴンを貫いた。

「予想外に少ないけど、一体一体の能力が高いな。さすがは人工的

とは言え幻想種か。まあ、弱いけど」

『飛翔』の一閃。たったそれだけで数十もの幻想種が細切れにされる。だが、向かってくる幻想種の数はまだまだ多い。慧海が目算した限りでは二万ほど。

「それにしても、よくこれだけの数を集めたよな。それだけでかなり尊敬出来るけどっと」

突っ込んできたゲルナズムを拳で叩き潰し、そのまま蹴り飛ばす。それだけでゲルナズムの群れの大半が巻き込まれて団子状になった。

慧海は小さく溜め息をついて『飛翔』を構える。

「仕方ないか。天の力、解放」

そして、慧海が『飛翔』を一閃する。

『飛翔』の鞭がさらに細くなった。鞭から糸へ。まるで、頸線の細さ。

幻想種の群れから大量の血が吹き出す。たったの一閃。一閃しただけで数百どころか千を超える幻想種が細切れになったのだ。

慧海がまた『飛翔』を振る。

「さてと、悠聖の奴もそろそろ合流するだろうな。まあ、しょうもない理由で呼んでおいて良かったぜ」

慧海は笑みを浮かべながら『飛翔』を振る。幻想種の数は目に見え

て少なくなっていた。一閃で千以上の幻想種が消え去るからだ。
慧海は笑みを浮かべて『飛翔』を構える。
「さてと、最後の仕上げと行きますか」

オレは地面を蹴る。メグに手のひらをつきつけていた男に対してチャクラムを投げつける。
「俺に、何をした！」
男が喚きながらチャクラムを回避するが、その瞬間にオレはセイバー・ルカの剣を突きつける。
「大人しくしろ。話は後々、警察にでも聞いてもらうさ」
「ふざけるな！　これは、俺が手に入れた炎獄の証だ！　お前なんかに、神に選ばれたお前達なんかに奪われてたまるか！」
「神に選ばれた？」
俺はその言葉に眉をひそめる。選民思想がどうとか言っている奴らか？
「この炎は秩序の炎。お前らなんかに、奪われてたまるか！」

『悠聖！　下がって。私じゃ抑えきれない！』

アルネウラの言葉にオレはメグの腕を掴んで後ろに下がった。その瞬間、男の体から炎が現れる。

一番優先されるはずの流動停止（フリーズ）を解除してくるとは思わなかった。というか、こんなことは初めてだ。

「あの熱量、厄介だな。アルネウラ、もう一度流動停止（フリーズ）を」

「その必要はないわ」

その瞬間、オレ達のちょうど間に女性、いや、おばさんが現れた。しかも、そのおばさんはあの時、オレが勝てないと思った時のおばさんだ。

「どいてくれ。俺は、こいつを」

「落ちつきなさい、信吾。熱くなれば負けるわよ。それに、炎獄の証を手に入れている人は一人じゃないでしょ？」

チャクラムを握り締め、動向を警戒する。今の動きは転移だ。しかも、瞬間で現れたことから高位の転移術者。あまりの数の少なさにオレすら使い手を見たことがない。

「退き時よ。リーダー達も下がっているわ。予期せぬ事態が起きたらしいけど。別動隊も作戦失敗」

「ちっ、仕方ないか。メグ、今日、俺が行ったことを考えておけ！」

その言葉と共に二人が走り出そうとする。だから、オレはチャクラムを握り締めて、

「諦めなさい」

尻もちをついた。今、何かに押された？

顔を上げると、すでに逃げ出した後だ。オレは小さくため息をついて立ち上がる。

「悠聖さん、聞きたいことがあります」

「わかった。オレも聞きたいことがあるからな。だから、今は怪我人の手当てをしようぜ」

「あっ」

どうやらメグは完全に忘れていたらしい。まあ、初心者によくある出来事だ。戦闘に傾倒しすぎて怪我人をあまり見ない。初心者らしいミス。

「とりあえず、怪我を治しておくよ」

オレはメグの手に魔術を発動する。火傷を治す治癒魔術だ。

「後で周にでも見てもらえ。治癒魔術ならオレよりも遥かにできるしな。ところで、周は？」

「周なら」

メグが指さした先にあるのは入り口。あそこが、周の向かった施設の入り口なのだろう。

オレは小さくため息をついて頭をかく。

「今は、治療が先だな」

第百九話　レヴァンティンモード？

海道駿。

オレの親父で世界最強の魔術師と言われた男。もちろん、現、世界最強のアル差し置いて世界最強の称号を得ていたのが親父だ。

その魔術師としての才能は極めて高く、魔術合戦となれば勝負にならないという話もある。

「そこまで才能を開花させたなら、お前を勧誘」

「興味無いな。親父たちが何をしたいかわからないけど、オレはそれには応じない。応じれない。親父たちのやり方は最善の道であったとしても、オレは最高の道を進むだけだ」

「息子にしては愚かだな。最善と最高は違う。最高の結果など不可能だ。だからこそ、我々は最善を尽くす。そのためには、犠牲になってもいい人達がいる」

「いない！」

「いや、いる。お前の考えでも、総力戦だろう？　つまり、人は死ぬ。その死ぬ人も犠牲の一つだ。違うか？」

その言葉にオレは返答することが出来なかった。そう言われてしまえば犠牲として頷くことしか出来ない。

「なら、最初から犠牲になる人を作ればいい。そうすれば解決だ」

「人の意思を無視して導き出した答えに一体何の意味がある!?」

「あるさ。世界を救うための犠牲だ。みんなが助かる代わりに犠牲達は死ぬ。それは素晴らしいことだろ？　世界が滅ぶか滅ばないかの瀬戸際で人権団体は文句は言わない」

「だとしても、そんなことで犠牲には」

「ならば問おう。お前は世界を滅ぼしたいのか？」

オレみたいな不確定要素の多い策は正攻法によって真っ正面から打ち砕かれやすい。だから、オレは言葉に詰まる。

オレがやろうとしているのは全世界での協力関係。魔界、音界にはかなり繋がったが天界には全く繋がっていない。どうすればいいかわからない。

「そうだろう？　ならば」

「だからと言って、許容出来るわけがないだろ!?　確かに、戦いが起きれば人は死ぬ。いくら非殺傷設定がある『ＧＦ』のデバイスだからと言って、非殺傷設定でも死ぬ時はある。それは逃れられない宿命だ。だけどな、だからこそ、犠牲になっていい人なんていないんだよ！　みんな、みんな必死にこの世界を生きているんだ。そんな奴らに死ねと命じることが出来るものか!?」

「浅はかだ！　そんな理想を追い求めて世界が救えるとでも」

「救える。救ってみせる」

オレはレヴァンティンを構えた。ぶっつけ本番だがやるしかないな。ここを乗り切るにはあの形態を使うしかない。だけど、あの形態は操作性の難しさから未だに実戦じゃ使用していない形態。

レヴァンティンを握りしめ、息を吸い込む。

亜紗、タイミングを合わせるぞ。話が終わって二秒後にドライブモードに移行。お袋を頼む。

『わかった。周さんも気をつけて』

亜紗が言い終わった瞬間、オレ達は同時に床を蹴っていた。

「レヴァンティンモード?!」

そのまま巨大な手裏剣の形をしたレヴァンティンモード?を親父に向かって投げつける。だが、親父はそれを炎の塊で迎撃する。

魔術師の基本的な戦い方は相手を近づかせないこと。そして、迎撃魔術をいくつか常にストックしておくこと。

だから、オレは叫んだ。

「レヴァンティンモード?!」

レヴァンティンモード?が真ん中から四つに分解し、それぞれが意志を持ったかのように動き出す。それと共にオレは拳を握りしめて一気に距離を詰める。

レヴァンティンモード?はレヴァンティンモード?からの派生武器だ。だが、本質が大きく異なり、レヴァンティンモード?が投擲武器に対し、レヴァンティンモード?はオレの精神感応によって一つを動かし、残る三つはレヴァンティン自身が自ら動かす。

動くのにも魔力を大量消費するためかなり扱いにくいが、レヴァンティンモード?からレヴァンティンモード?に移りつつ、近接格闘に持っていく。もちろん、迎撃されたら危険だが、三つのレヴァンティンモード?は自立している。

親父は魔術を放つ。風属性の魔術だ。右側のレヴァンティンモード?二つを吹き飛ばしながら空気の塊を叩きつける風属性魔術のエアープレッシャー。攻撃範囲が広めで回避にはコツがいる。

オレは精神感応を使ってレヴァンティンモード?の一つを動かしながらさらに距離を詰めた。

それを見た親父はエアープレッシャーを維持したままオレに向かって雷撃を放つ。しかし、それはオレが先に動かしていたレヴァンティンモード?が避雷針代わりに雷撃を受け取った。

視界の隅でレヴァンティンモード?の内、レヴァンティンが動かす二つが吹き飛ぶ。それを確認しながらオレはもう一つのレヴァンティンモード?と共に親父の懐に飛び込んだ。

肘を入れ、蹴り上げ、上から拳を叩きつける。そのままやってきた一つのレヴァンティンモード?を受け取った。

「これでどうだ!」

横薙ぎの一閃。だが、そこに親父の姿は無かった。いつの間にか違う場所に、オレの後方にいる。

オレが振り向いた瞬間、目の前に槍が突き出されていた。

「大人しくしてください」

チラッと亜紗の方を見ると、亜紗は片膝をついてこっちを見ている。その右足は真っ赤に染まっていた。

お袋が笑みを浮かべる。

「まさか、あなたがここまで成長しているとは」

「意外か？　オレはお袋から生まれたはずだけど？」

「そうですね。ですが、私はあなたが嫌いです。あなたのような欠陥品が最高傑作を」

「オレ達は道具じゃない」

その瞬間、レヴァンティンが動かすレヴァンティンモード？がお袋に襲いかかった。お袋は後ろに下がりながらレヴァンティンモード？を避ける。

オレは全てを戻し、レヴァンティンモード？を通常形態に変形させる。

「誰からも、親からも、道具扱いされるわけにはいかない」

「黙りなさい欠陥品。私に近接戦闘で勝てるとでも？」

「勝つだろうね」

その言葉にオレとお袋が同時に後ろに下がった。いつの間にかオレ達の間に正の姿があったからだ。

「周は強いよ。槍のアドバンテージなんてほぼ無いに等しいよ」

「あなたは、誰ですか？」

お袋が正に向かって槍を構える。それに対して正は笑みを浮かべた。

「そうだね。自己紹介をするなら、海道正と名乗っておこうか」

「正、どうして」

「周、どうして止めたかは君が一番わかっているんじゃないかな？」

その言葉にオレは小さく溜め息をついた。ちょうど入ってくれたおかげで助かった部分はかなりある。

レヴァンティンモード？まで出したのに、オレは親父の罠に完全にはまっていた。

認識の撹乱。ほんの少しのタイミングのズレが最終的には大きなズレとなる。親父の『悪夢の正夢（ナイトメア）』によって視覚、聴覚などの感覚を狂わされていたのだろう。

「これ以上、ここで戦わない方がいい。亜紗も傷ついている以上、

戦った先にあるのは敗北だけだ」

「だろうな」

オレはレヴァンティンを握りしめる。このままいけば完全に『悪夢の正夢（ナイトメア）』の術中になるかもしれない。

気づかなければ、待っているのは敗北だけだ。

「周、最後だ。こちらに来い。今のお前ならメンバーに加えても」

「お断りだ。オレはオレの道を行く」

「そうか。ならば、お前が守りたいものが崩壊する様子を絶望と共に見てるがいい」

親父とお袋が駆け出した。オレもすぐさま駆け出す。亜紗に向かって。

「大丈夫、みたいだな。傷はそれほど浅くないか」

『ごめんなさい。周さんのお母さんだと思うと、体が上手く動かなかった』

亜紗が困ったような笑みを浮かべながらスケッチブックを開く。

「オレ達生体兵器はメンタル面が肉体に出るからな。でも、悪い。事前に言わなくて」

『ううん。周さんは葛藤していたと思う。だから、レヴァンティン

と二人だけで探していたんだよね？　そうじゃないことを祈って』

オレは亜紗に治癒魔術をかけながら虚空から応急キットを取り出した。心が疲労しているからか、魔力が尽きかけている。だから、今はこれで傷を塞いでおく。

「オレだって考えたくなかったさ。でも、思い出した以上、オレは親父達を止めないといけない。オレが、この手で」

『大丈夫だよ』

亜紗の声が頭の中に響くのと同時にオレは亜紗に抱きしめられていた。

『みんなで、止めよう。周さんは一人じゃないから』

「ああ。ありがとう」

「オホン。少し、いいかな」

その言葉にオレ達は神速の速度で離れた。そこには、正が顔を真っ赤にしてこちらを見ている。

「僕が来たのは偶然、として欲しい」

「最初から助けに来たんだろ？　もしかして、親父やお袋が生きていたことを」

「いや、それは知らなかった。周、これからは君の試練だ。僕がサポート出来ることは少ない」

「わかっているさ。親父達が次に狙うのはあそこしかない」

オレはレヴァンティンを鞘に収める。

親父達は確実にあそこを狙うはずだ。

『周さん、あそこって、どこ？』

亜紗が首を傾げながらスケッチブックを開く。それを見たオレは小さく頷いた。

「学園都市。多分、親父達の狙いは『ＧＦ』ですら存在を正確に理解していないエネルギー体だ」

第百九話　レヴァンティンモード？（後書き）

最終決戦の場は学園都市です。その前に体育祭が入りますが。

第百十話　あの日のフュリアス（前書き）

この話で狭間市での戦いは区切りを迎えます。

第百十話　あの日のフュリアス

僕は小さく息を吐いて周囲を見渡す。

「それって、本当？」

エイクスカリバーのつま先に座りながら僕はアル・アジフさんの話を聞いていた。

その話を聞き終わってから僕は思わず尋ねていた。それはあまりにも唐突の話で信じられない話だったから。

「信じられない話だとは思うが、事実じゃ。シリーズと呼ばれる生体兵器。それが我らに襲いかかってきた」

「生体兵器ですか。でも、どうしてですか？　生体兵器は兄さんと亜紗さんにアル・アジフさんの三人だけじゃなかったんですか？」

「もしかして、アリエル・ロワソの研究室とかから盗まれたって話じゃないよね？　生体兵器に関してはアリエル・ロワソが詳しいって聞くし」

「そうじゃ。我らの中で秘密にしておったのじゃが、ここまで事態が深刻になれば周も話すことを許可するじゃろう」

シリーズ。

確認できたのはタイプ０１からタイプ０３までの三人。それぞれ近接格闘特化、高速戦闘特化、魔術戦闘特化らしい。コンセプトから

考えて、戦場でのオールラウンダーを目指したアリエル・ロワソの研究とは少し違うように思える。

つまり、『悪夢の正夢（ナイトメア）』達が独自に研究したからだろう。

「それにしても、悠人は生体兵器について詳しいの。我はアリエル・ロワソがやっていたとは一言も言っておらぬが」

「『ＥＳ』内だと公然の秘密になっているけど。僕も今でも『ＥＳ』とは繋がりがあるから、その関連で色々噂話は聞いていたし」

「なるほどの。納得はしたが、そなたが未だに『ＥＳ』と繋がりがあったことに我は驚いておるが」

「僕と仲のよかった女の子いたよね。その子と今でもメールをしているんだ。一応、リリーナや鈴とも友達だよ」

僕の言葉にアル・アジフさんが頷く。中のいい女の子というのは少し亜紗さんに似た女の子だ。特殊なレアスキルを持っていて『ＥＳ』の次世代を担うメンバーの一人とも言われている。僕に懐いていたから僕が『ＥＳ』を離れる時は泣きつかれたな。

その時、僕の感覚に何かを感じた。これは、エクスカリバーから送られてくる緊急通信だ。

僕は顔色を変えてすぐさまエクスカリバーのコクピットに乗り込んだ。

エクスカリバーＺ１は人型の形態でもコクピットの開閉が出来る。ただし、、こっちの方が整備が難しくなるらしく、基本的には戦闘

機形態なのだけど。

僕はレーダーを見た。そこにあるのは一つの光点。それが高速でこっちに向かってきている。

「アル・アジフさん、何かが来ます。僕は出るので皆さんとの合流を」

僕はマイクをオンにしながら飛び上がり人型から戦闘機形態に変形した。すかさず出力を上げて加速する。

光点が何であれ、この状況で向かってくるとなるとかなりややこしいことだ。だから、僕は敵かどうかを見極める。敵なら撃墜しないと。

「そろそろ視認域に、えっ？」

僕は戦闘機形態から人型に変形した。何故なら、ようやく見えたその存在は、純白のコートに身を包んだフュリアスだったから。

このフュリアスは見たことがある。あの日、元評議会アグネウのアジトで見た純白のコートに身を包んだフュリアス。コートから出ているフュリアスの体は真っ黒。

僕はすかさず対艦剣を取り出してフュリアスに斬りかかった。もちろん、マナーとしては悪いけど、このフュリアスは目下捜索中で見つけた瞬間に攻撃していいように『ＧＦ』、『ＥＳ』両勢力に通達されている。

向こうのフュリアスもこっちに気づいて対艦刀を取り出して斬りか

かってきた。お互いの対艦剣と対艦刀がぶつかり合い、向こうの対艦刀にひびが入る。

僕はすかさず対艦剣を片手で持って手を離したもう片方の手のエネルギーナイフを展開して斬りかかった。向こうのフュリアスはすぐさま対艦刀を離すが、僕はすかさずその対艦刀を手に取り投げつける。

しかし、その対艦刀は白羽取りのように受け止められた。反応速度は並大抵のレベルじゃない。

僕は小さく溜め息をついて対艦剣を構える。

「出力は同等。純白のコートに関してはまだ分からないことも多いけど」

対艦剣を片手で握り締めてエネルギーナイフを射出する。やはり、それは純白のコートに阻まれた。

「ステルス性能とエネルギー弾に対する防御力の高さだけは確定出来るよね」

あの時もそうだった。エネルギー系統の攻撃は高威力のものを含めてあの純白のコートによって散らされている。対艦剣で斬りかかれば対艦刀を取り出したことから物理系の攻撃（フュリアスでは基本的に費用対戦果が悪い部分）を使わないといけない。

全ての武器を収納して装備を変更する。装備はカスタムブースター。そして、旋回式電磁砲。弾は二発だが、威力だけなら最大だと断言する。

それを迷うことなく放った。直撃コースで跳ぶ弾丸だったが、それは突如として上空から飛来したエネルギー弾によって撃ち落とされた。

僕は嫌な予感と共に旋回式ブースターを操作して後ろ向きに後退する。すると、エクスカリバーがいた位置にエネルギー弾が飛来した。

あのままいればやられていた。

「何が」

サブカメラを操作してその位置にいる何かを映す。そこにあったのは、もう一機の純白のコートに身を包んだフュリアス。コートから出た黒い腕からはこれまた黒いエネルギーライフルが握られている。

僕は顔が引きつるのがわかった。

「ちょっと待ってよ、あの機体が二機も？」

操作技能の観点から見て負ける事はないと断言できるけど、さすがに二機相手なら難しい。僕は二機のフュリアスを睨みつける。

「負けないわけじゃないけど、勝てないわけでもない」

相手の装甲はエネルギー弾に対して高い耐性を持つ機体。対するエクスカリバーはそれほど高くはない。牽制に放った一撃すら効かないから接近するしかない。つまり、接近しながらもう一機を牽制しないといけない。

あの新兵器を使うしかないかな。

「あんまり使いたくないけど、使うしか」

その瞬間、二機のフュリアスが僕に背を向けた。そして、向こうの飛び去っていく。

あまりの行動に僕は武器を取り出すしぐさのまま固まっていた。

「どういう、こと？」

「やっぱり、お前らか」

その言葉を慧海は呟いた。それはちょうど海道駿が施設の入り口から出た時のこと。

駿は小さく笑みを浮かべる。

「やっぱり、気づいていましたね、慧海さん」

「当たり前だろ。お前をよく知る全員があの日に死んだことが未だに信じられていないからな。だって、お前ならあんな状態でもみんなを守って生き残れるだろ？」

海道駿の能力を慧海はよく知っている。そもそも、魔術についてレクチャーしたのは慧海なのだ。さらには何回も魔術のみの模擬戦を

本気でやり合っている。

駿の能力を知っているからこそ、慧海は必ず生きていると理解していた。そして、『悪夢の正夢（ナイトメア）』が出て来た瞬間に正体はわかっていた。

「世界を救うためか？」

「はい。あなた達のやり方では世界は救えない。そうでしょう？」

「まあな。ただ、これからはどうかわからないけど」

慧海はそう言って笑みを浮かべた。

「過去も未来も現在も予想も全て、それらを周は最高を求めている。オレ達の切り札だ」

「周に何が出来ますか？　あいつは役立たずの欠陥品ですよ」

「おいおい。役立たずの欠陥品にした本人がよく言うぜ」

慧海が呆れたように肩をすくめるが、駿は目を見開いて驚いていた。

「それに、あいつは役立たずの欠陥品じゃない。先に言っておく。お前らは周によって止められる。どんな手を使ってもな」

「それは楽しみですね」

駿は慧海に背中を向けた。背中を向ける前にあった表情は笑み。

そのまま駿達が駆け出し消えて行く。それを慧海は追うことはなかった。この場で慧海が戦えばここら一体は焼け野原になるだろう。そうなればたくさんの人が死ぬ。

勝てないわけじゃない。だけど、駿も無駄死には避けたいはずだから。

「あいつも十分に親バカだよな。まあ、これからは周がどうにかするだろう」

慧海は小さく笑みを浮かべて空を見上げる。

「あいつなら大丈夫だ。そうだろ、姫路」

第百十話　あの日のフュリアス（後書き）

プロローグに出たきり全く出なかったフュリアスを登場させました。
作者自身、存在を忘れかけていましたが。

第百十一話　脱出

レヴァンティンがエンペラーの装甲の隙間に突き刺さり装甲を無理矢理剥す。そして、その装甲の隙間に亜紗が七天失星を突き刺した。すぐさま沈黙するエンペラー。

近くでは正が一人でエンペラーを片付けている。倒し方はオレらと同じだ。だから、倒す速度は若干ながらオレ達の方が早い。

「それにしても、何でこんなにエンペラーが湧いているんだ？」

『わからないけど、大事なものを盗られたから？』

亜紗がスケッチブックを取り出しながら首を傾げる。まあ、考えられる候補と言えばそうなるだろうな。隼丸はレヴァンティンが言うようなものだとするなら本当に大事なものだ。それを守るものがいても何ら不思議ではない。

オレは実体剣を振りかぶってくるエンペラーの腹を蹴り飛ばし、ちょうど脇の部分にレヴァンティンを突き刺してさらに内部に食い込ます。その部分から火花が飛び散り、エンペラーの動きが停止した。

「レヴァンティン、エンペラーって大量生産できたのか？　イグジストアストラルの余ったパーツを使用したんだよな？」

『そうですよ。ただ、その余ったパーツがかなり膨大でしたからね。イグジストアストラル専用のオプション装備がいくつも開発され、実際に使用される一つを除いて全てがエンペラーの素材になりましたから』

「もう一機イグジストアストラルを作れよ」

時間がなかったのだろうか。

『マスターは馬鹿ですね。イグジストアストラルの動力源を考えてくださいよ』

オレはイグジストアストラルの動力源を思い出す。とは言っても、イグジストアストラルのデータから推測しなければいけないが、今の出力装置と同じで魔力粒子を吸い込むことでエネルギーとするものだ。ただ、そのキャパシティが大きいからかエネルギー量は極めて大きい。

とは言っても、イグジストアストラルのエネルギー消費も大きいから、満タンでも一日動けば空になる。

『底がついて動かないイグジストアストラルなんてただの棺桶ですよ。それに、イグジストアストラルには弱点大きな弱点があります』

「衝撃に弱いところか？」

魔鉄には衝撃を吸収する能力があり、その魔鉄を使用するフュリアスの大半は衝撃にも強い。魔術には脆いが。ただ、イグジストアストラルの装甲は硬すぎるからか衝撃を吸収する能力が低い。そのために、衝撃によって中のパイロットである鈴が模擬戦中に何回か気絶したことがあるのだ。

『そうです。その当時も大型の敵がいました。エンペラーを作るよりもイグジストアストラル二号機を作った方がいいのではないかと

いう声もありましたよ。でも、それは却下されています。当り前ですよね。パイロットが気絶したフュリアスなんて使い物になりません。イグジストアストラル以外では強制的にコクピットを開けば事は足りますが、イグジストアストラルではそう言う風に行くわけがなく、気絶したなら起きるまでどうしようもないのです』

「なるほどな。大量生産できた理由はわかったけど、装甲脆すぎだろ」

オレはエンペラーを見下ろしながら呟いた。

確かに、エンペラーは真正面から戦えばまずは勝てないだろう。装甲がイグジストアストラルと同じなのだから。でも、装甲の継ぎ目は極めてゆるく、継ぎ目が存在しない、又は継ぎ目の奥の装甲も同じで突き破れないイグジストアストラルと違って戦いながらの装甲を剥すことは難しくない。

ついでに言うなら中の装甲はただの魔鉄のようで硬いが簡単に貫くことが出来る。

『脆すぎていいと思うけど。矛神にも使用制限があるし』

「彼女の言うとおりだよ。装甲がイグジストアストラルと同じなら、僕達はすでにやられている。さすがに、この材質で精密部品を作る技術は無かったみたいだね」

正が手に持つどこかの高級な材質を利用した剣を用いてエンペラーにトドメを刺した。正の戦い方はどこか白百合流に通じるものがある。でも、白百合流を習えるのは白百合家の関係者だけ。海道家なのに白百合流を使えるなんてな。

やっぱり、正の存在をキーとすべきか。

「うん？　周、僕の顔に何かついているのかい？」

「いや、戦い方に驚いていたからな。白百合流か？」

「そうだね。僕の戦い方は白百合流を元にしたものが多いよ。教えてくれた人は秘密だけど」

「まあ、オレだって本家の方に報告しようとは思っていないし、かなり我流が入っているみたいだから」

『周さんの戦い方に似ているよ』

その言葉にオレは一瞬キョトンとして、納得したように頷いた。正もオレと同じように古今東西ありとあらゆる剣技を探し求めて習っているのだろう。だからこそ、オレとよく似た戦い方だと亜紗が評価したのだ。

オレの戦い方も白百合流が基本だしな。

「確かにそうだね。君に似ているかもしれない」

「ちょっとは嬉しいかな」

その言葉に亜紗が微かに目を細めた。オレは選択肢を間違えたと一歩後ずさる。

「それは僕に好意を寄せているという解釈でいいかな？」

『周さん、どういうこと?』

正は楽しそうに笑っているし、亜紗は全身からどす黒いオーラを出しているような。

オレは半笑いになりながら二人に背中を向けた。

「とりあえず、脱出するぞ。エンペラーの群れに襲われたら対処しづらいだろ?」

「それもそうだね」

正がくすくす笑いながらオレの横にならんでくる。

「で、実際はどうなんだい?」

「ノーコメントで」

こんな回答をすれば答えを言っているようなものだが、あまりの恥ずかしさにこう言う回答をするしかできない。

その言葉を聞いた正は本当に楽しそうにくすくす笑う。

「君が望むなら、僕もやぶさかではないけどね」

「えっ?」

その言葉に驚いてオレが足を止めた瞬間、オレの背中は亜紗によって蹴り飛ばされていた。

「急に何をする！？」

オレは振り返りながら亜紗に言うが、亜紗がかなり怒った顔で、全身から黒いオーラを撒き散らしながら、スケッチブックを握るつぶすかのように握り締めてオレを睨みつけている。

そのスケッチブックに書かれた文字は一言。

『変態』

「オレは変態じゃねえ！！」

普通、気のある女の子にそんなことを言われたら誰だってそう言う反応するだろうが！　オレだって一応は１８歳なんだぞ！！

もちろん、こんなことは心の中の叫ぶだけで亜紗には聞こえないように言っている。もちろん、レヴァンティンにも。こんなことを知られたら怒るを超越して何か来るような気もするから。

「冗談だよ冗談。周だけじゃなく君も落ち着いて。確かに周は魅力的な男の子だよ。かっこいいし、可愛いし。でも、僕は今やるべきことがあるからね。今は興味はないよ」

「そ、そうか」

そう言われるとオレも少し落胆してしまう。正って亜紗や由姫達に負けず劣らず可愛いから。

『周さんがそんなことするわけないよね。周さんってジゴロだけど』

「それには賛成しておくよ。きっと、周にはファンクラブがあるんじゃないかな？　学園都市に」

「それなら、亜紗や由姫達が率先して作った。オレの好きな人を牽制するためらしい」

相変わらず、オレに対する行動力が半端ない奴らだ。

オレは小さくため息をつきながら前を見た。そこにあるのは地上の光。どうやら、ようやく脱出出来るみたいだ。

入った時はレヴァンティンに急かされるように最速で走り抜けたから、ゆっくり帰ってきた時はかなりの距離があるように思えた。

「ここまでだね。じゃ、僕は先に一足先に消えるとするよ」

「一足先にって、もう少し聞きたいことが」

オレがそう言って振り向いた瞬間、そこに正の姿はなかった。かわりに、かなり驚いている亜紗の姿がある。大事なスケッチブックを落とすくらいに。

亜紗はスケッチブックを拾い上げ、ページを捲った。

『剣を取り出したと思えば姿を消した』

亜紗の動体視力は第７６移動隊でもトップクラス。世界でも二桁に入るかもしれない。それくらいなのだが、亜紗ですら見えなかったということは別の移動手段か。

「そうか。まあ、残念だが、とりあえず脱出に」

『残念？』

スケッチブックに書かれた文字を見た瞬間、オレの背筋が凍るのがわかった。亜紗は、完全にキレている。

『説明、お願いできる？』

「出来れば夜にお願いします」

オレはただその場に土下座をするしか手段がなかった。

第百十二話　統合

「遅かったな」

オレ達が施設の外に出ると、そこには近くの壁にもたれかかっている慧海の姿があった。

オレは呆れたように溜め息をついて慧海を見る。

「仕方ないだろ。エンペラー、魔科学時代の遺産が道を塞いでいたんだから」

「なるほどね。駿達が脱出してから展開したんじゃないか？」

「見たのかよ」

慧海の顔には驚きがあまりない。つまり、生きていたことを知っていたんだろうな。

オレは慧海を見る。そして、尋ねた。

「いつからだ？」

「最初から疑っていたさ。よく考えてみろよ。世界最強の肩書きが、あんなところで死ぬと思うか？」

「なるほどね」

それなら納得出来る。世界最強は文字通りの肩書きだ。今の最強の

魔術師はアルだが、それを超える親父なら『赤のクリスマス』で生き残らなかった方が不思議だ。

そして、親父が犯人だとわかった以上、あの日を生き残った数はさらにいるだろう。つまり、共犯者という意味で。

「この事は世界にバラすか？　バラせば、面白いくらいに世界が反応するぞ」

「いや、これは切り札だ」

「切り札？　ああ、なるほど」

一瞬キョトンとした慧海だが、すぐにオレの言いたいことがわかったらしい。楽しそうに笑みを浮かべながら頷く。

「諸刃の剣だぞ」

「なあ、慧海。学園都市を守るために自分の地位を捨てることは間違っているか？」

「命を捨てると比べれば大正解だ」

オレの親父とお袋が生きている。これは世界に知られていないオレ達だけの切り札だ。この切り札はとある状況以外は使えないが、最悪の状況なら親父達はそのカードを切るだろう。

なら、オレも切り札を持っていなくてはならない。

このカードを切るということは、下手をすれば身を滅ぼしかねない。

だけど、

「親父やお袋はオレがこの手で捕まえる。過去を断ち切るために」

「そうだな。お前らなら絶対に出来る。頑張れよ」

「ああ」

オレは慧海に背中を向けて歩き出す。亜紗もオレの横に並んで歩き出した。

『周さん、切り札ってどういうこと?』

オレの頭の中に亜紗が語りかけてくる。内容が内容だからこういう会話にしているんだろう。

オレは軽く苦笑した。

今は秘密な。使わない可能性の方が高いから。

『そうなんだ。わかった』

オレの回答に亜紗は納得したように頷いた。亜紗は結構、オレの言う事は無条件で信じる。信頼されているのもあるけどな。

オレからすればかなりありがたい。そして、まるで妻のようにずっと近くにいてくれるのも。時にはストーカーまがいのこともされるが。

「目で会話。熟年夫婦だな」

「誰が熟年夫婦だって、何でお前がいるんだ？」

降りかかった言葉に振り返りながら返すと、そこには悠聖と悠人を新たに含むみんなの姿があった。

全員が戦闘を行ったらしく、戦闘服のいたるところを何らかの理由で汚している。

「慧海さんに呼ばれててな、ちょうど来たってわけ。それにしても、厄介な奴らを相手にしちまったな」

「厄介な奴ら？　『悪夢の正夢（ナイトメア）』の奴らのことか？」

「そうそう。今も話し合っていたんだけど、腰を落ち着けて話さないか？　オレが聞いただけでもヤバいってだけは簡単にわかる」

悠聖は後ろにある建物を指差す。そこにあるのはレストランレノア。

あそこなら腰を落ち着けて話せるだろうが、人に聞かれたくない話があるからああいう場所は勘弁してもらいたい。個室ならわからないように結界が張れるが、そんな都合のいい場所はまずないだろう。

「あっ、個室は取ってあるから安心しろよ」

「準備いいな、おい」

オレは呆れて溜め息をつくしかなかった。

レストランレノアの個室。そこは恐ろしいことに防音などの様々な加工が施された場所だった。呆れるほど様々な加工が施されている。しかも、今のメンバー総計九人だ。それがゆったりと座れるくらいの広さ。

オレは小さく溜め息をつきながら結界を展開する。結界と言っても声を結界外に漏らさないようにするためのものだ。ちなみに、盗聴器はアルが探している。

「盗聴器はないようじゃな。ふむ、学園都市にもこういう個室をたくさん作ればいいのに」

「需要ないからな。とりあえず、全員が何らかの敵と出会い、戦ったってことでいいよな」

オレの言葉に亜紗を除く全員が頷いた。戦ったのは親父の関係者だろう。あまりたくさんいないとは思っていたけど。

「じゃ、オレとメグからいくな。オレは途中からだったけど、メグが戦っていたのは炎使いの男」

「焔の鬼か」

親父達の仲間の一人に焔の鬼がいる。ただ、メグがよく生き残っているよな。聖骸布（アストラル）のおかげか？

「その相手でみんなに話があります」

メグがおもむろに立ち上がった。その表情にあるのは何だ？　まるで、申し訳なさそうな顔だ。

「私が戦った相手。お兄ちゃん、北村信吾でした」

オレは一瞬、メグが何を言っているかわからなかった。メグの兄が焔の鬼？　でも、メグの兄は死んだんじゃないのか？　生きているのはありえない状況で行方不明になったんじゃ。

「周、言いたいことはわかるよ。でもね、あの人はお兄ちゃんだった。ちゃんと、お兄ちゃんだったよ。誰かに操られているわけじゃなく、お兄ちゃんだった」

オレは小さく息を吐いた。

信じられないという気持ちは少ない。何故なら、親父やお袋が生きていたのだ。死んだはずの人が生きていても不思議ではない。

「後、そいつに流動停止（フリーズ）が効かなかった。能力はわからないが、流動停止（フリーズ）を打ち破るくらい強力な力みたいだ」

「流動停止（フリーズ）が効かないってのが眉唾ものなんだが。都達はどうなんだ？　戦ったのか？」

「私達は足止めされた方よ。転移術者だっけ。４０は過ぎたおばさんよおばさん」

「はい。かなり稀有な転移術を操る術者でした。攻撃が見えないと言った方が正しいですね」

そんな転移術者、今の『ＧＦ』には存在しないし、そんなレベルとなると故人しか候補がいない。それでも候補に出来るなら『赤のクリスマス』の犠牲者。その中にちょうど年齢が一致する人がいる。

まあ、親父やお袋が生きていたし、共謀していたと考えればいいか。

「なるほどね。大体の規模はわかってきたな。アルや由姫は？」

「我と由姫の二人はシリーズと戦っておった」

「シリーズ？」

何かのチーム名だろうか。

「生体兵器のチーム名」

アルの言葉にオレと亜紗の二人は目を見開いていた。

もちろん、生体兵器という言葉に反応したからだけど、それを作り出せる技術を親父達が持っているということになる。つまり、生体兵器を量産出来る状態なのだろう。

どうやって不可能な部分を乗り切ったのかわからないけれど。

「信じられぬとは思う。じゃが、相手の一人、タイプ０３がそう宣言した以上、信じる方がいいじゃろう。我らが見たシリーズはタイプ０１からタイプ０３まで。０１は近接格闘型。０２が高速戦闘型。０３が魔術師型じゃ」

「特化型か。問題がどんどん増えて行くな」

「次は僕が言いますね。純白のコートに身を包んだフュリアスとエンカウントしました」

顔が引きつるのがわかる。純白のフュリアスと言えば浩平に別ルートから追ってもらっている者だ。いくつかの噂話の収集しかできなかった存在が現れたということか。エンカウントしたということは悠人が戦っているし。

「戦闘力は僕よりも下ということは確かですが、リリーナや鈴では苦しいクラスだと思います」

「ルーイレベルか。つか、この場で出てきたってことは奴らに関係あるだろうな」

オレは小さくため息をついた。多分、これでみんな言っただろう。だから、次はオレの番だ。

「じゃ、次はオレだな。まず、アルに連絡。ここの施設の中に隼丸があった」

「本当か！？」

アルが立ち上がる。だが、オレの顔を見て喜んでいられる状況ではないと悟ったらしい。すぐさま立ち上がってオレを見てくる。オレはそれに対して頷きで返した。

「本当だ。ただ、隼丸は『悪夢の正夢（ナイトメア）』達の手に落ちた。そして、『悪夢の正夢（ナイトメア）』がわかった」

「正体がわかったのか？」

悠聖が驚いたようにオレを見ている。そして、何かに気づいたように手を唇の元にやっていた。

何度も頷いていることから多分、悠聖も気づいたのだろう。親父達に。

「なあ、周。話したくないらならいいんだが、『赤のクリスマス』の犠牲者の中に、『ＧＦ』にいた高位の転移術者がいたよな？　女性で２０代後半の」

「ああ。悠聖、気づいたか？」

「不思議だったんだ。最初に不思議に思ったのは、お前が『悪夢の正夢（ナイトメア）』関連の事件にかかわった時、必ず過去の悪夢を見ていたということ。そして、偶然の一致とは思えないくらいにメンバーが集まっていること。メグの兄も参加していたことから一つ考えられるんだ。なあ、お前の両親は本当にあの日に犠牲になったのか？」

「悠聖さん！　兄さんにそんなことを」

「由姫ちゃんは黙っていて。聞きたいんだ。あの日、何があったんだ？　お前は、覚えているのか？」

その言葉にオレは小さく頷いた。そして、レヴァンティンをテーブルの上に置く。

「これから話す内容はオレが許可するまで他言無用で頼む。オレが

思いだした、あの日の真実を」

第百十二話　統合（後書き）

次で『赤のクリスマス』の時の話は終わります。

第百十三話　記憶の終わり（前書き）

『赤のクリスマス』の光景はこれで終わります。

第百十三話　記憶の終わり

目を覚ましたそこには誰もいなかった。いや、違う。いる。二人、倒れている。

オレはそれがわかっている。でも、当時のオレはそれがわからずただ呆然としていた。

思いだしているのはどうして楓がいないのか。そして、どうして、誰もいないのか。

「天罰、なにかな？」

オレは小さく呟く。誰もいなくなって欲しいと思ったに違いない。だから、誰もいなくなった。だから、誰も傍から消えた。この燃え盛る街で誰も、いない。

オレの口から出るのは笑い声。思い出しただけでも自分の人生は歪んでいるとわかる。たった六歳の子供が、ここまで歪んでいるなんて。

「あはは、ははははっ。僕が、待ち望んでいた世界。誰も、僕をさげすんだ目で見ない世界。嬉しいのに、嬉しいのに」

でも、そうは言っても、オレは人の子だったようだ。

「どうして、こんなに悲しいのかな？」

わからない。自分のこの感情がわからない。当時のオレはそうだっ

たに違いない。でも、今のオレならわかる。

当時のオレは両親に見てもらいたくて必死だった。でも、親父やお袋が見ていたのはいつも茜だけ。最強の魔術師になれると言われた茜だけ。だから、様々のことを頑張った。頑張って、そして、見てくれたのは茜、楓、光の三人だけだった。

オレは人が恋しかったのだ。自分の頑張りを褒めて欲しかったのだ。歪んでいる。その考え方から実行していることも歪んでいれば、こういう今の状況も歪んでいる。

その時、誰かのうめき声が聞こえた。オレはすかさず立ち上がり、周囲を見渡す。そこには倒れている茜と光の姿。

オレはすかさず二人に駆け寄った。

「茜！　光！」

多分、この時は安堵していたのだろう。オレは二人に駆け寄った。

光の怪我の具合はあまり酷くなく、代わりに茜の怪我の具合はかなり酷かった。お腹に穴があいておびただしいくらいに血が出ている。

死ぬ。茜が死ぬ。大事な茜が死ぬ。両親から見られている茜が死ぬ。僕を見てくれて慕ってくれている茜が死ぬ。

この時、オレの頭の中には茜が死ぬかもしれないことしかなかった。だから、オレは茜を助けることだけを考えた。見捨てることなんて選択肢に無かった。だって、オレは茜のお兄ちゃんだから。

治癒魔術を展開する。でも、核晶の無い自分の魔力なんてたかが知れているから治癒なんて全く進まない。だから、オレは祈った。

茜を治すくらいの魔力が欲しい。茜を救うくらいの魔力が欲しい。大事な妹を守る力が欲しい。

その時だった。オレの体に急に魔力が現れたのが。多分、この時に初めて、これが最初で今現在中最後の三つ目のレアスキルの完全開放だったのだろう。

膨大な魔力を用いた強制的な治癒。これは、治癒魔術の中で最も危険であり、最も最速で治癒が可能なものだった。その危険をオレは知っている。知っているからこそ、それを回避する手段をオレはいつの間にか覚えていた。理由はわからない。だけど、オレが行ったの奇跡と言ってもいい所業だろう。

茜を治し、光を治す。この時にはレアスキルが切れていたのかオレの体には心地よいまでの疲労があった。

「これで」

「出来そこないがそこまでの掘り出しものだったとはな。能ある鷹は爪を隠す、ということか？」

その言葉にオレは振り向いていた。そこにいるのは親父とお袋の二人。

「お父、さん」

そう言えば、この時はまだお父さんって人前や本人の前では呼んで

いたよな。だから、とっさにそう言う言葉が出たのだろう。

だけど、返ってきた言葉は完全に予想外だった。

「出来そこないがその名を呼ぶな。お前みたいな奴の父だと思うと虫酸が走る」

「えっ？」

「化け物め。こんなことならお前を生まれて過ぎに事故に見せかけて殺しておくべきだった」

「お父さん？」

その意味がわかる当時のオレからすればそれは絶望的な言葉であり、多分、オレの力を完全に把握していたらならあの状態になっていただろう。それほどまで衝撃的だった。

オレは後ずさる。もちろん、ちょうど後ろにいた茜の体に足を取られてその場に倒れ込んだ。

「化け物は化け物らしく、この世に痕跡がないように消し去ってやろう」

「いやっ、いやっ！！」

「大丈夫だ。痛くはしない。我が息子だ。気晴らしに一瞬で消し去ってやる」

親父の手のひら炎が生まれる。オレはそれを見つめていた。動けな

い。体は完全に硬直しているし、なにより、言葉が衝撃的すぎて動くことが出来ない。

だが、親父の動きは完全に止まる。何故なら、オレを中心に、いや、茜を中心に魔術陣が展開されたからだ。

「お兄ちゃん」

茜の声。それと共に、オレの目の前に綺麗な結晶が差しだされる。蒼く、青く、碧く、どこまでも澄んだ綺麗な結晶。まるで、茜の心を表しているかのような綺麗な核晶だった。

「受け取って。そして、パパをぶっ飛ばして！」

その言葉に、オレは核晶を受け取った。

本来、他人の確証は自身には必ず合わない。だから、いろいろなところが劣化するのだ。だけど、オレ達は少々違っていた。

茜は元々最強になれると言われるほどのキャパシティを持つ存在。そして、オレは核晶がなくても平然と動ける存在。

オレは力任せに魔術を展開した。オレが使える魔術は少ない。だけど、数少ないからこそ、必死に練習した魔術の質は茜にも負けない。

使う魔術は純粋な魔力を固めて放つだけの初級の砲撃魔術。だが、それは予想以上の魔力を得て強力な砲撃となった。だけど、親父の前では簡単に受け止められる。

「貴様、出来そこないの欠陥品のくせに大事な娘の核晶を」

「ねえ、お父さん。僕がどんな気持ちで生きていたからわかる？　わからないよね。お父さんはずっとうごい人だった。でも、お父さんは僕のことなんて見ていなかった。見ていたのは茜の才能だけ、だよね？」

「貴様に何がわかる？　お前のことがわかった時の絶望の何がわかる！？　お前達のせいで俺達は一年間を無駄にしたのだ！！　お前達がいるから、俺達は一年間を失った。だから、殺す。お前を、この手で」

「あなた、今、あの出来そこないを殺せば核晶は一生回収できないわ。それに、今の茜は確実に受け取らない」

親父の顔が苦痛にゆがむ。やっぱりだ。やっぱり、親父はオレや茜そのものを見ていたんじゃない。見ていたのはその才能。自分達の血がどれだけ濃く受け継がれているか。その一点だけだったのだろう。

だから、平然と殺すとか、無駄になったとかいう。まるで、自分達の子供には感情が無いかのように。

「お父さんが、これを起こしたんだよね」

「なっ」

「そうじゃないと、すぐに避難しようっていうもんね。お父さんの目的はなんなの？　僕達を産んだ理由はなんなの？　どうして、僕を産んだの？」

「お前を産みたくて産んだわけじゃない」

「僕だって、産まれる親を選べるわけがないじゃないか！　どうして、そんなことを」

その時の親父の表情はどこか悔しそうだった。そして、オレを睨みつけてくる。

「お前にはわからない。わかってたまるものか！　この気持ちをな！　こいつの記憶を封印しろ」

そう言って親父はオレに背中を向ける。お袋はオレをまるでゴミを見るかのように睨みつけ、そして、手のひらをかざした。

「あんたなんて、産むんじゃなかった」

その言葉を最後の『赤のクリスマス』の記憶が途切れる。次に目を覚ましたのは病院のベットの上だった。そして、その病院で、その時の記憶を全て失ったオレに対して茜は笑顔で言った。

「お兄ちゃんが、私の核晶を守ってね。私なんかよりも、お兄ちゃんの方が絶対に役立つから」

第百十四話　男二人

夜の河原。

シチュエーション的には女の子と二人っきりで歩いているというのが一番かもしれないが、あいにく、オレの隣にいるのは悠聖だ。悠聖だけだ。

アルネウラや優月は寝静まっている。まあ、今の時刻が夜二時だからな。

あれから慧海主導の下、怪我人の治癒や破壊された施設（オーバーテクノロジーの方ではない）の復旧などを行い、夕方前には終わったが、先に入ったオレ達の言葉から捜索隊が改めて明日に入ることになった。

もちろん、オレ達第７６移動隊の面々のことだ。

そして、今日の出来事を整理していたオレが気晴らしに外に出ると、ちょうど外に出ていた悠聖とばったり出会ってこうなった。

「周はいつから気づいていたんだ？」

悠聖が立ち止まりながら尋ねてくる。それに対してオレは空を見上げながら答えた。

「シェルター後、だな。あの時の言動からいろいろ引っかかっていた。推測が立ったのはそれほど前じゃない」

「なるほどな。どうりでいつもと違うわけだ」

「いつもと違う？　オレは」

「気づいていないのは周、お前だけだぜ。孝治も浩平もみんな気づいている。だって、あれからお前は『悪夢の正夢（ナイトメア）』について調べだしただろ？　他の業務を削って」

言われて見てから思い出してみると、確かに他の業務を数分単位で削っている。でも、そんな数値は誤差の範囲内だから何か言われることは無いと思ったのだが。

というか、それ以外に削ったことはあまりないような気がするんだが。

「まあ、こういう時は本人に全く自覚がないし。書類でもミスがあったくらいだ。心配するのは当たり前だろ」

「悪い。オレだって悩んでいたんだぞ。『赤のクリスマス』をだんだん思い出していく度に今までの自分がどうして出来たがわかっていった。オレは何なんだろうって考え出した」

「見てもらいたいがために必死に努力をした。まあ、オレから言わせてもらえば、実の親が生きている時点で羨ましいからな」

「そうだな」

悠聖の両親は今はいない。いないから悠聖は少し寂しそうな顔をする。こういう時にアルネウラと優月がいたらこいつは笑うんだけどな。

オレは軽く肩をすくめて空を見上げた。

「推測に変わったのはそうだったなら全てが繋がるからだ。『悪夢の正夢（ナイトメア）』と『現実回避（エスケープ）』という親父やお袋しか持ち得なかったレアスキルが揃っていること。『現実回避（エスケープ）』の顔をチラッと見た時に茜を思い出したこと。世界の滅びについて知っていること。『赤のクリスマス』でのニューヨークにいたこと。いろいろ挙げたら終わらないけど、その全てに当てはまるのが海道駿ただ一人だった」

「お前らしい解答の導き方だな。この事は茜ちゃんに言うのか？」

「ああ」

オレは即答していた。だって、茜と中村は絶対に親父やお袋が生きていることを知っているはずだ。

もしかしたら楓も知っているかもしれない。オレが思い出すまで隠すことを決めたのだろう。相変わらず、オレの近くにはいい奴が大勢いるよな。

「そっか。なら、オレから言うことは何もないな」

「というか、悠聖こそよく推測出来たよな。親父やお袋のこと」

「お前がやってくる前に全ての情報は集めていたからな。『悪夢の正夢（ナイトメア）』は国連の関係者であり『赤のクリスマス』の首謀者でもあり仲間に転移術者がいる。転移術者なんていうレアキャラは数少ないからな。さらに、おばさんとなると現存する人はいない。そう考えると、生きているけど死んだことになっているってことだ。『悪夢

の正夢（ナイトメア）』、『現実回避（エスケープ）』、国連、故人。全てを考えたら『赤のクリスマス』の日に何が起きたかわかるだろ」

言われてみればそうだ。ただ、転移術者なんて滅多にいないから調べるのは大変だったはずだ。多分、悠聖も独自に調べていたんだろうな。

でも、今言った言葉の中で少し気になることがあった。

「悠聖。国連ってどういうことだ？　確かに、親父達を匿っていたのが国連だけど、推測を作るにはあまり必要がないんじゃないか？」

「あっ、まだメグと話していないのか。周隊長はさ、学園都市の謎のエネルギーについて知っているか？」

「どうしてそれを？」

「知っているんだな。学園都市の地下には計り知れないエネルギーを作り出す何かがある。メグの兄はそれを手に入れるためにお前の親父さん達が動いていると言っていた。『ＧＦ』はその存在を隠しているって」

なるほどね。確かに、学園都市の設計には日本政府が絡んでいる以上、国連がその情報を知っていてもおかしくはない。国連からすれば『ＧＦ』がそれを隠していると宣言するだろう。

今の学園都市は『ＧＦ』が仕切っているのだから。

「メグから尋ねられた。メグはちょっと疑心暗鬼になっているみたいだぜ。だから、オレは説得しておいた」

「まあ、疑心暗鬼になるのは仕方ないな。オレだって詳しい話はよくわからないし」

その言葉に悠聖はきょとんとした。確実にオレがそれらの情報について知っているものだと思っていたのだろう。だけど、オレはそれについては詳しくは知らない。

そもそも、この情報は慧海から来る話に依存しているのだ。自ら調べても全く情報が出て来ないから。

「マジで？」

「本当だ。まあ、親父達が狙うくらいのエネルギー源なんだろ。それはもしかして、世界を救える類とか？」

「そういう話もあったらしいな。でも、そんなエネルギー源が存在」

「悠遠の翼」

その言葉に悠聖は首を傾げた。

オレはずっこけそうになるのをこらえて頑張って溜め息をつくだけにする。

悠遠の翼は悠聖は知っているはずだ。悠人がいれば説明させたんだけどな。

「アストラルブレイズ、アストラルソティス、アストラルルーラ。アストラルシリーズの最新機に積み込まれる永久エネルギー機関だ。

フュリアスを半永久的に動かす場合に必要なエネルギー量は学園都市の総エネルギーの５％」

「フュリアスってそんなに必要なのか？」

「一日中戦闘を行う場合な。その場合においてはエネルギー消費量が桁違いだからそこまでになる。まあ、アストラルブレイズ、アストラルソティス、アストラルルーラに関してはエネルギー消費が他のフュリアスより高いから一概に５％とは言えないけどな」

「ぼったくりじゃね？」

確かにそう言われてもおかしくはない。悠遠の翼はそれほどまでに強力なのだから。

「これは詳しい話を知らないんだが、悠遠の翼の中でもかなり特殊なものがあるらしいんだ。エネルギー源としては下手をすればアストラルシリーズの二十機分に相当するって言われているものが」

「噂話だろ」

悠聖の顔が引きつっている。まあ、そんなものが本当に実現したのなら色々と大変なことになるからな。特に、そんなものが学園都市の地下にあるなら、究極と言ってもいいフュリアスが製作できる。

まあ、詳しい話を知らないというか、完全な伝承の中にある御伽話でしか知らないんだけどな。

「まあ、悠遠の翼のエネルギーを作り出す力の正確な値なんて調べたことがないからわからないからな。これ自体、音界の正式データ

だけど、音界のものと人界のものが同じなわけがない。だから、本当はもっと少ない可能性だってある」

「なるほどね。もし、そんなものが学園都市の地下にあるとするなら、周、お前はどうするつもりなんだ？」

「そうだな。いや、あるとするならじゃない。オレはあると思っている。理由としては、他にエネルギー源が存在しないからだけど、もう一つの理由として、親父が狙うには十分すぎる獲物だろ？」

その言葉に悠聖が笑みを浮かべる。多分、オレと同じように思っていたのだろう。

メグの兄がそう言ったなら事実だろう。そうなると、今まで考えていた学園都市の発電量の不思議な部分が解明できる。そして、それを狙うとするなら、

「体育祭前後。人の出入りが甘くなってマークがしにくくなる時だろうな」

「やっぱ、周隊長は賢いな。オレなんて今まで考えてようやくそこまで出たんだぜ。なあ、周。お前は過去を断ち切れるのか？」

「当たり前だろ。それと、海道駿はオレが捕まえる。邪魔はするな」

「するか。してどうするんだよ。そもそも、あんな偉大な魔術師殿なんかに勝てるわけがないだろ。オレは転移術者を抑えるさ」

「頼むな」

今、親父たちが動くことはないだろう。でも、体育祭は、機材の搬入や人材の侵入が容易な体育祭前後では話が違う。

狙うならそこだ。もしかしたら、競技中にしかけてくれるかもしれない。

「ちょっと、音界に行く必要があるかもな」

オレは小さく言葉を漏らした。だけど、その言葉は悠聖の耳に入るほど大きくはなく、代わりに、とぞらの中に吸い込まれていった。

第百十四話　男二人（後書き）

次回は幕間を入れる予定です。周が音界に行くのはもう少し後になるかと。

幕間　新兵器

エクスカリバーを滑走路に着陸させる。エスペランサの甲板より遥かに広いから人型で着地してから戦闘機に戻す作業をしなくてもいいのがありがたい。

ブレーキをかけながら滑走路の奥に見えるフュリアス専用格納庫を見つめる。

あそこにはルーイのアストラルソティスやリマのアストラルブレイズ。そして、リマの最新型量産機サーペンテインがある。

そう、僕は今、音界に来ていた。

「音界に生きたいじゃと？」

僕の言葉を聞いたアル・アジフさんは小さく溜め息をついた。それは、全ての話を一つに統合し、それから自由行動になった時だ。

僕は今のままじゃ純白のコートを着たフュリアスと勝負出来ないと思い、音界に行っていいか尋ねたのだ。

「うん。エネルギー系統が効かない純白のコートは厄介だから、音界の最新技術を借りようかなって」

「シールドブレイカーか？　あれはまだ試作品の段階じゃぞ」

「試作品なのは実戦で使う機会が少ないから。だったら、僕がそのテストをすればいいし」

「そうじゃな。まあ、音界なら大丈夫じゃろう。ちゃんとメリルに連絡するのじゃぞ。国際問題に発展したならそなたが脱走したと言うぞ」

「ちゃんとします」

とりあえず、L装備を付けている間にメリル達に連絡しよう。

「ようこそ、音界に。悠人は三回目だな」

エクスカリバーから降りた僕をルーイとリマ、ルナが出迎えてくれた。

僕はルーイが差し出した腕を握り返す。

「そうだね。前回はリマとルナには出会わなかったけど、元気そうだね」

「当たり前よ。私なんて元気だけが取り柄なんだから」

「ルナ、本当は悠人君が来るのを心待ちにしていましたよね？」

リマの言葉にルナが顔を真っ赤に染めて、僕に向かって拳を放ってきた。殺す気がないのは確かだと思うけど、避けるのはかなり難しい。

僕は頑張って顔を逸らしたけど頬をかすった。

「してない。してないんだからね！　悠人！　勘違いしたならあんたを記憶が無くなるまで殴り回す」

「記憶どころか命まで飛びそうだよね！？　それより、急に押しかけて三人ともごめんなさい」

「気にするな。僕もリマもルナもちょうど休みの日だったからな。お前が来るなら大丈夫。それより、メリルから案件は預かっているよ。シールドブレイカーの製品を使いたいらしいな」

その言葉に僕は頷いた。音界に来た理由がそのシールドブレイカーだからだ。

すると、ルナが不思議そうに首を傾げた。

「悠人、シールドブレイカーを使って何かするの？」

「ＡＥＷＣとＡＥＢＡの機体を相手にするためだよ」

人界でＡＥＷＣとかＡＥＢＡと言っても通じない。何故なら、ＡＥＷＣとＡＥＢＡは音界の技術だからだ。

ＡＥＷＣはＡｎｔｉＥｎｅｒｇｙＷｈｉｔｅＣｏａｔの略称で純白

のコートの正式名称だ。エネルギー系統が効かない以上、ＡＥＷＣと考えておかないといけない。

ＡＥＢＡは上の黒い装甲バージョン。ただし、この二つには大きな違いがある。

ＡＥＷＣはエネルギー弾に対して無敵だけど、対艦刀や対艦剣のような斬撃にエネルギーを使うものに効果はない。対するＡＥＢＡはＡＥＷＣとは真逆で斬撃にエネルギーを使うものに無敵でエネルギー弾には弱い。

ＡＥＷＣを使っている以上、ＡＥＢＡも使っていると仮定しておいた方がいい。

「納得しました。確かに、ＡＥＷＣとＡＥＢＡはこちらでもかなり厄介なものですし。簡単に倒せるのはルーイくらいじゃないですか？」

「アストラルソティスにそんな武装あったの？」

「いや、アストラルソティスじゃなくて、見た方がいいな」

ルーイが格納庫に向かって歩き出す。僕はそれを追いかけて歩いた。格納庫の中はたった三機のフュリアスしかない。アストラルソティス、アストラルブレイズに、見たことのない機体。

アストラルシリーズではあるけど、アストラルブレイズやアストラルソティスみたいに背中のスラスター付きの翼が横に広がっているのではなく、上手く畳まれて縦になっている。だから、格納スペースが小さい。

「僕の新たな機体、アストラルルーラだ。最新のリアクターを三機配備して悠遠の翼の性能を最大限にまで高めた機体。背中の収納された翼は飛翔中に開かれる。最大エネルギーとコンパクトに出来たことから大型の対艦剣と対艦砲を同時に運用出来る仕組みになってる」

「むちゃくちゃじゃないかな？」

対艦剣と対艦砲の同時運用なんて不可能だとは思う。だけど、それを可能とするくらいにエネルギーが高いというのはかなり驚く。

「アストラルルーラの通常装備。それを使えば悠人もＡＥＷＣ対策は出来るはずだ」

そう言いながらルーイがアストラルルーラのスペック表を渡してくる。確かにスペックは高い。だけど、その装備の中にかなり気になるものがあった。

アストラルシリーズには似つかわしくない装備。

「僕も疑問に思う。メリルに聞いてみたら、これはメリルが設計した機体らしいんだ。困っている人を助ける力。だから、その装備が付けられている」

「そっか。だからこんな装備なんだ。災害救助用の試作機」

アストラルシリーズという音界最高峰の機体でありながら、そのコンセプトは災害時に使用出来る機体。

だから、腰の装備や足の装備に腕の装備がああなっているんだ。技術部の人達が必死に戦闘に使えるように改良したものが。

「アストラルルーラをそのまま持って帰りたいな」

「駄目だ。アストラルルーラは僕専用の機体だからな」

「えっ？　量産されてないの？」

アストラルシリーズは常に量産されているはずなのに。実際、アストラルブレイズは指揮官機として活躍しているし、アストラルソティスは上級士官機となっている。

アストラルルーラもそうだと思っていたのに。

「アストラルルーラはメリルが守るために作り出した機体。技術部も軍部も民衆もたった一機だけ、歌姫の騎士に与えようと一致したんだ」

歌姫の騎士。つまり、ルーイに。ルーイならメリルの思いを間違えることなくアストラルルーラを扱うだろう。

僕は納得したように頷いた。

「ルーイ。このスペック表をコピーさせてもらっていいかな？　参考に出来る」

「いいけど、どうするんだ？　エクスカリバーに装備出来るようなものじゃないだろ？」

「うん。でも、僕のフュリアスはエクスカリバーだけじゃないよ」

その言葉にルナを除く二人の顔が引きつるのがわかった。

僕が乗った僕専用の機体は二機だけ。そう、二機だけ。

「祭りを彩るには十分な性能になっているよ」

その言葉に僕は笑みを加えた。

幕間　新兵器（後書き）

悠人のもう一つの機体は骨董品の分類です。

第百十五話　あの日を生き残った者達（前書き）

久しぶりに苦労した話に。書いている最中に携帯の終了ボタンを間違って押して千文字近くが消え去ったり、最初書いていた話を次の話にズラして新たにこの話を書いたり、納得いかないので消去したり、苦労しました。

第百十五話　あの日を生き残った者達

窓からの夕陽が眩しい。だけど、その光を誰もが鬱陶しく思いながらもカーテンを閉めることはなかった。

部屋の中に渦巻いているのは静寂。そして、何と声をかければいいかわからないという空気。

そして、おもむろに楓が口を開く。

「そっか。全て、思い出したんだね」

その言葉にオレは頷いた。

部屋の中に渦巻いていた静寂が若干ながら薄くなる。だけど、みんな、言葉を探している。

オレ達がいるのは茜の病室だ。そして、この中にはみんな集まっている。『赤のクリスマス』のニューヨークを体験して生き残った四人が集まっている。

「やっぱり、オレには黙っていたんだな」

「そう。幸せな過去を夢見ている海道を見たら、うちらは口出されへんって。それに、本当のことを知った海道は、今度こそ暴走しかねないし」

「まあ、確かに暴走だよな」

親に見てもらいたいがためにひたすらに努力をしていた。よくよく考えてみると、他の物事には何の関心も無かったかもしれない。

ただ、褒められたいために。

「周くんは見ているだけで可哀想だった。うん、可哀想だった。同情だったと思うよ。私も光もそんな周くんを見ていておかしいと思っていたから」

「確かに同情やな。でも、うちは海道のことは嫌いじゃなかったけど」

「昔はお兄ちゃんラブだったよね」

茜がおかしそうに笑みを浮かべる。確かに、昔はそうだった。孝治と出会ってからは孝治一筋だけど。

オレは昔を思い出しながら小さく頷く。

「昔は昔でよかったさ」

「つまり、周くんは今の方がいいの？」

「まあな。だって、みんながいるじゃないか」

そう、第７６移動隊のみんながいる。

「ついでにお兄ちゃんが好きなカルテットも」

「余計なことを言うな」

オレは小さく溜め息をついたが否定はしない。実際に事実なのだから。

「というか、うちらを集めたのはそれを話すだけじゃないやろ？」

「「そうなの？」」

茜と楓の二人が同時に首を傾げる。それを見るだけでオレは頭が痛くなった。そんな話をするだけなら四人だけで集まらない。

中村はそれに気づいていたらしいけど、楓は天然なのか知らないが、平然と首を傾げている。

「『赤のクリスマス』でニューヨークを消し去った大罪人である海道駿や海道椿姫が生きているというのはお前らは知っていただろ。今回話すのはこれからだ。あの日、ニューヨークで死んだはずの人達が生きている可能性がある」

「そうやな。誰が生きているかわからんけど、転移術者やったら」

みんなの視線が同時に合った。そして、同時にオレ達の口が開く。

「「「「リーリエ・セルフィナ」」」」

若干ながらトラウマのある人物だ。昔、茜がリーリエ・セルフィナのことをおばさんと言った瞬間、言葉では語り尽くせない様々な威圧感を出された。

頑張って表現するなら、神の威光？

「生体兵器に関することはアリエル・ロワソに聞けば早いと思うよ」

「そっちは冬華に任せている。多分、あっという間に名前を列挙するんじゃないか？　生体兵器の科学者に関しては『ＧＦ』と『ＥＳ』の両勢力が非道な人体実験を行った罪として指名手配されることになっている」

アリエル・ロワソも指命手配に入るけど、そういう細かいところは慧海達が何とかするだろう。もし、国連が匿っているとするなら、国連を責めるには格好の標的と出来る。

「まあ、それを加えて、親父やお袋のことなんだけどな、ここだけの話。二人は茜を狙っている」

その言葉に茜に視線が集まる。茜は一瞬キョトンとした後におもいっきり首を横に振った。

「ありえないありえないって。だって、私の核晶はお兄ちゃんの中にあるんだよ。今の核晶だと数時間が限界なのにどうやって」

「何か策があると思う」

あの時も言っていた。隼丸は愛娘へのプレゼントだと。確かに、弓での戦闘なら魔術さえ立派なら普通に戦えるだろう。

でも、確かに茜の核晶はオレの中だ。核晶自体は茜が返して欲しいと言わない限り返さないようにちゃんと決めている。もちろん、その時の言葉も。

「でもさ、お兄ちゃんが隠していた三つ目のレアスキルがバレたんだよね？」

「まあな」

オレは頷く。オレの三つ目のレアスキルの存在は何となくわかっていたらしい。まあ、核晶無くても動き回っていたからな。

そのレアスキルに関してはオレは未だにわかっていないことが多い。その一つとして、魔力粒子をどうやって魔力に転換しているのか。

それさえわかれば色々なことが出来るのに。新型エンジンとか新型発電機とか新型デバイスとか。

「私はすごく気になっていたんだけど、お兄ちゃんはどうして私の核晶を使えるの？」

「それは、茜の核晶が規格外だから」

「違う。確かに、私の才能は規格外だったと思うよ。お兄ちゃんもそれはわかっていると思うけど、私の才能よりも、私の核晶よりも、お兄ちゃんのポテンシャルが一番規格外じゃないのかなって思っているの？」

オレのポテンシャルが規格外？

確かに、あらゆる戦場で最大限の力を出せるというとてつもないメリットを持っているけど、ポテンシャルと言うほどじゃない。

というか、隠れてないような。

「まあ、他人の核晶は馴染まないって話は聞くけど、そもそも茜の場合は魔力容量が」

「私の推測なんだけど、お兄ちゃんのレアスキルが核晶に依存しているとするなら？」

「茜、ストップ。オレのレアスキルは『天空の羽衣』も『強制結合』も茜の核晶で」

「私はね、レアスキルについての話はそこそこ詳しいよ。多分、お兄ちゃんよりも。そもそも、レアスキルというのはよくわかっていないんだよ。だから、レアなスキルと呼ばれているの。まあ、そこはお兄ちゃん達も知っていたよね？」

「そりゃ」

「そうなんや」

肯定の言葉を口に出そうとしたオレを遮るように中村が感嘆の声をあげる。もちろん、それをオレ達はジト目で見ていた。

まさか、あの状況であんな言葉が出るなんて。

「あっ」

どうやら中村も気づいたらしく、顔を真っ赤にして背中を向ける。

それを見ていた茜は小さく溜め息をついた。

「話を戻すよ。レアスキルがどこで発動してどこで作用しているのかはわかりにくいことが多いんだよ。例えば、お兄ちゃんの『天空の羽衣』とかは一番の謎かもね。どこで発動しているのかが特に」

確かに『天空の羽衣』はわからない。感覚的に言うならほぼ無意識に発動しているようなものだ。ただ、それを祈るだけで『天空の羽衣』は発動する。

その機能は折り紙付きだし、レアスキルのランクで言っても音姉の『歌姫』と同等のSランク。

「光の『炎熱蝶々』とか『物質投影』もかな。でもね、お兄ちゃんの『天空の羽衣』も含めて、推測はいくらでも作ることが出来る。確認する手段はあまりないけど推測は立てられる。でもね、お兄ちゃんの三つ目のレアスキルだけは推測が立たないの。そもそも、個人の魔力に干渉出来るレアスキルなんて存在していないし、そんなものが存在していたという記録もない。お兄ちゃんのものは完全に新しい土俵にポツンと一つだけ存在する完全なユニークスキルなんだよ」

確かにそうだ。慧海にもオレの新たなレアスキルについては報告した。だけど、返ってきた答えは困惑だった。

そんなレアスキルが存在するわけがないという困惑。

「脳が直接発動するわけじゃない。神経が発動するわけじゃない。魔力のバイパスが発動するわけじゃない。他のレアスキルの発動場所の可能性は却下出来る。そうなるとね、ありえない。お兄ちゃんのレアスキルは」

「じゃ、どうしてオレのレアスキルはあるんだ？」

そこまで否定されたならむしろ聞きたくなる。発動場所なんて考えたこともなかったし。

「お母さんやお父さんは私に最初から目を付けていたのは確かだと思う。でもね、もしかしたら、お兄ちゃんに目を付けたかもしれない。お兄ちゃんのレアスキルが本当の核晶に依存している可能性があるから」

「ちょっと待て」

オレは茜の言葉を止めた。それはかなりややこしい事態ではあるが、推測は立つ。確かに、向こうに元アリエル・ロワソ一派がいるとするならありえない話じゃない。

茜の核晶がオレに馴染んでいるのは相性がいいからだとオレが思っていたように親父達も思っていたなら？

「親父達はオレの核晶を持っている？」

「推測だけどね。私を狙う以上にお兄ちゃんを狙うかもしれない。その能力が核晶依存なら、お兄ちゃんを狙う」

「はっ、なら、好都合だ」

オレは笑みを浮かべた。その推測が正しいなら本当に好都合だ。

「オレ達のやることは単純明快。親父達を捕まえてオレの核晶を取り戻し、茜に核晶を返す。簡単だろ」

「周くんが言うと本当に簡単に聞こえるね」

「なんでやろな」

「それがお兄ちゃんパワーだよ」

気づけばいつの間にか日は沈んでいる。いろいろと考えていたからかいつの間にか時間が過ぎたようだ。

「楓、中村。そろそろ帰るぞ」

「あっ、お兄ちゃんだけ先にロビーに言ってくれないかな？　女の子同士で会話したいから」

「そんなに長くなるなよ。帰ってからも仕事があるんだからな」

別に止めるほどの予定も無かったのでオレは先に茜の病室から出る。そして、小さく息を吐いた。

もし、親父達が核晶を持っているなら好都合だ。オレはそれを取り返せばいいだけ。そして、ようやく核晶を茜に返せる。

「さてと、気合いを入れ直しますか」

周が去った病室。その中で三人は向かい合っていた。

「私は何も出来ないから、お兄ちゃんをお願いね」

「わかってる。海道はうちらがちゃんとサポートする」

「うん。周くんはあの日、私達を救おうと、守ろうとした。それを私達は忘れてないよ。だからね、私は強くなったんだよ。いつか、私が周くんを守るために」

そう言う楓の目には決意が溢れている。そして、その決意は並大抵以上のことが起きても消えることはないだろう。

それは楓が本当にしたいから。

「そうやな。海道ならうちらがいなくても何でもするやろうけど」

「でも、周くんにも無理はある。だから、私達がいるんだよ」

みんなが頷く。楓の言葉を聞いた茜は笑みを浮かべた。その笑みは周とどこか似ている。

「お兄ちゃんをお願いします」

「「任せて」」

茜の声は確かに二人に聞き入れられた。

第百十五話　あの日を生き残った者達（後書き）

茜の暇つぶしは勉強です。兄妹って似ますよね？

第百十六話　フェアリー・ダンス（前書き）

最近はいろいろと忙しく他の作品の更新が全く出来ていません。ｏｒｉｇｉｎの方はレヴァンティンモード？の本当の形態が出るまで休載ですが、星語りは単純にストーリーが思いつかないだけです。このストーリーは時間がある限り更新していきます。どういう筋道にするかは決まっていますので。

第百十六話　フェアリー・ダンス

月光のみが映し出す世界。それは、学園都市の中でも特別な時間。

そんな世界の中で一人の少女は片手に握る刀と共に動き回っている。

黒き軌跡と眩く銀に光る軌跡と共に少女はまるで舞を踊るかのように自分の中で想定している仮想敵を相手に動き回っている。

斬る。払う。刀を使った簡単な動作だけじゃない。時には突いたり体当たりしたり蹴りを入れたり様々な攻撃を使って動き回る。だけど、時には防御の姿勢も入る。

何もわからなければおかしな動きにしか見えない。だけど、それがわかっている人から見れば仮想敵の実力がわかる。そして、動き方も。

仮想敵の武器は槍。そして、速度は速め。実力はS相当。自分の持てる技術を使って動いている。

亜紗の剣技は白楽天流だ。白楽天流は白百合流の原型のためよく似た部分があるし、オレも白楽天流はかなりやっている。白楽天流は基本的に一撃必殺。でも、実力者との相手は一撃必殺なんてできない。

それがわかっているからこそ、亜紗の剣技は一撃必殺の白楽天流を高速で行動することで一撃必殺の一撃を連続で放つようになっている。その速度は白百合流に匹敵する。

その手に持つ七天失星の柄を握り締め、鞘に収める。そして、紫電一閃を放つかのように腰を落とし片足を前に出す。居合の構え。

でも、オレは知っている。この構えは居合抜きにしては姿勢が高い。そして、亜紗はそれを狙っていない。

振り抜かれた刃は神速。だけど、それには速度が最大まで乗っていない。でも、これからが本番だ。振り上げた刃をほぼ同速度で振り下ろす。

白楽天流の二番目に最大の技『鬼一文字（おにいちもんじ）』。

振り上げた刃を同じ速度で振り下ろす。ちなみに、白百合流の無常の太刀、無名の太刀のコンボに似ているが、威力はこっちの方が高い。

鬼一文字の後に亜紗はすかさず鞘に七天失星を鞘に収めた。そして、鞘から抜き放つ。

その放たれた刃がどう見ても十にも及ぶ連撃にしか見えなかった。

七天抜刀（しちてんばっとう）。

白楽天流最大の技にして一振りでの攻撃では一番威力の高い技。でも、本来の技には遠い。本当なら十五の斬撃が放たれるはずだから。

「だいぶ、技の完成度が上がってきたな」

オレはそれを機に物陰から出て亜紗に話しかける。

『見ていたんだ』

「軽く走っていたら見かけただけだよ。相変わらず、練習しているのか？」

『うん。私だけの剣技を』

そう言いながら亜紗が七天失星を鞘に収める。

今のままだとまだまだ未完成だ。亜紗の本当の剣技、フェアリー・ダンスは完成していない。でも、フェアリー・ダンスがもし完成したなら、それは究極の戦闘技法になるだろう。

「ブラストドライブを発動すればいいんじゃないか？」

『ブラストドライブはあまり使いたくないから。私のブラストドライブ、フェアリー・ダンスは危険だし』

「そうは思わないな。使い手によって大きく変わる。まあ、今の状況でブラストドライブは危険ではあるけど」

でも、土壇場での戦闘ではオレも亜紗もオーバードライブではなくブラストドライブを信用している。オーバードライブはブラストドライブでもどうにもならない時の最終手段だから。

オーバードライブの危険性がわかったのはオレ達が狭間市から学園都市に戻って数ヶ月後のことだった。

その原因となったのがオレの体だったりもする。

オーバードライブのさらに上をいくデュアルオーバードライブを行ったオレの魔力のバイパスがことごとく破壊されたため、時雨が調べてみたらしい。

結果はオーバードライブは悪影響を与えるとても危険なものだと判明した。寿命を削る可能性だってあるから。だから、オーバードライブに関してはあらゆるデバイスにリミッターが取り付けられている。

実際に、オーバードライブを使った後遺症は特に、オレ達みたいな子供から使っていた面々に大きく出ている。特にオレなんて『強制結合』がなければ魔術の使用は難しいと言われるくらいに後遺症が残っている。

『周さんこそ、最近はブラストドライブどころかドライブモードになっていないよね？』

「まあな。実際、ドライブモードになる状況が珍しいし」

『周さんのお父さんとの戦いでも使わなかった。周さんは何を考えているの？』

それに関しては孝治にも聞かれた。オレは小さく溜め息をついてゆっくり頷く。

「まあ、簡単に説明するなら奥の手を出さない、ということかな？」

『奥の手？』

「ああ。レヴァンティンモード?の本当の形態。まあ、亜紗にはまだ見せてなかったっけ」

亜紗がこくりと頷く。レヴァンティンモード?に関しては調整のために何度も音姉や孝治とは手合わせしたから二人はよくわかっている。

ただ、親父達と戦った時は待機状態のレヴァンティンモード?を使ったから本当の姿は親父にはバレていないはずだ。おそらく、待機状態を本当の姿だと思っているだろう。

「とりあえず、結界を展開して」

オレは足下に魔術陣を展開して結界を展開する。この結界は視界を塞ぐと共に防音にも優れている。専用の機器が無ければ中の様子が全くわからないくらいに結界術の中でも上級のものだ。

そして、オレはレヴァンティンを取り出した。

「レヴァンティンモード?とレヴァンティンモード?ね。まあ、あらゆるデバイスの中で最も異色で最も最高のデバイスだから出来るであろ機能だろうな」

慧海が手に持つ資料を向かいに座っているギルバートに渡した。ギルバートはそれを見ながら小さく頷く。

「やはり、伝承は確かに記録していたようだね。特に、レヴァンティンモード？は」

「まあ、遥か昔にあったとされる北欧神話。その中にある九つの世界を滅ぼしたとされる力の名前。それを持ったデバイス。そして、そのデバイスは九つの形態を持つ。ギル、お前から見てレヴァンティンモード？の真の形態はシュナイトフェザーやラファルトフェザーよりも強力だと思うか？」

「愚問じゃないかな。比べるなら慧海の『飛翔』の方だと思うよ。でも、レヴァンティンモード？は」

「最終手段だろうな。つか、レヴァンティンモード？については周に言うなよ」

その言葉にギルバートが資料を手にしながらキョトンとしていた。

「だってよ、周はレヴァンティンモード？について知らないから」

「すまない。君が何を言っているのか頭が理解出来なかったよ。もう一度、お願い出来るかな？」

その前の言葉によってはとても失礼な言葉になるが、今回は正しい言葉でもある。

レヴァンティンは周をマスターと呼ぶ周のデバイスだ。だけど、そのデバイスの機能を周は知らず、慧海が知っていることがおかしい。そもそも、慧海よりも先に周がレヴァンティンを知っていたから元々知っている可能性もありえない。

「だから、周はレヴァンティンモード？については知らないんだよ。レヴァンティンが個別に連絡を飛ばしてきたからな」

「どうりで。確かに、これを周が知ったなら単体では戦闘出来ない形態は破棄するだろうね」

「そういうこと。サポートに関してはあらゆるデバイスを凌駕するレヴァンティンが自身の機能強化ではなく、他者の機能強化にのみ働く形態。これはこれで面白いものだけどな。新たなデバイスの理論にもなる」

慧海の言葉にギルバートは頷く。

資料の中のレヴァンティンモード？は今まで武器の形をしていた他の形態とは異なる全く新しいタイプの形態だ。この形態の理論を提唱した人はいくらでもいる。でも、ＮＧＤですら出来ない理論ばかりだった。

「ねぇ、慧海。このレヴァンティンモード？の形に僕は見覚えがあるんだけど」

「だろうな。サイズや形が同じだけだと思いたいな」

「そうだよね。もし、これが本当にそうだったなら」

ギルバートの言葉に慧海は頷いた。

「世界中の集積デバイスを集めたものですら足下にも及ばないほど人智を越えた処理速度を持つ最強のデバイスが完成するな」

第百十六話　フェアリー・ダンス（後書き）

何となく重要な話を織り交ぜて見ました。レヴァンティンモード？についてはまだまだ出ません。ヒントを出すなら正の言葉を見返していただければあります。

第百十七話　準備

オレは小さく息を吐き、そして、息を吸い込んだ。

手に持つレヴァンティンを握りしめ、その言葉を口から放つ。

「レヴァンティンモード？」

レヴァンティンが剣から杖に変わると同時に周囲にある機材が浮かび上がる。それを、オレは頭の中に完全に叩き込んだ設計図をレヴァンティンの補助と共に、設計図通りに組み立てる。

組み立てる時間はほんの数秒。だけど、失敗は許されない。

オレは全神経を集中して機材を組み上げ、小さく息を吐いた。

「完成だ。後は確認するだけだ」

「すげー。俺様が活躍する場すら無かったぜ」

「あなたが活躍する場はこれからです。確認しますよ」

ハトとワカメを含むこの場所に割り振られた生徒達が高くそびえる機材に向かって近づいていく。

それを見ながらオレは小さく息を吐いた。

「というか、オレがいない他の入口は大丈夫なのかよ」

「それは大丈夫。東門には白川君を、南門には由姫さんを、北門には佐野君を配置しているから」

「相変わらず用意周到だな、委員長」

様子を見に来たであろう委員長に向かってオレは溜め息をつく。委員長はボードを片手にオレが今作り上げた学園都市西門入口の入場門を見上げる。

しばらく見ていた委員長は頷き、

「これなら大丈夫かな」

「委員長も大変だよな。都島学園生徒会長の仕事をしながら学園都市体育祭実行委員長をしつつ第７６移動隊の事務って」

「都さんを見ていたらやりたくなって」

「都の場合は瞬間移動（ショートジャンプ）があるからな。一番大変な移動をほんの刹那で終わらせるし」

確かに都は生徒会長で実行委員長（体育祭と文化祭の両方）で第７６移動隊の訓練にも普通に参加したからな。

都は第７６移動隊の中で三番目に全体指揮が上手い。一番はオレだし二番は悠聖だ。そんな都だからこそ出来る芸当だ。

オレの場合は専門が違うから出来ないけど。

「問題はないか？」

「うん。見た目はね。細かいところは海道君達が確認してくれないとわからないし」

「今は下を確認してくれているからな。終われば『ＧＦ』隊員で上の方も確認するだけ。後は、絵の書いた壁画をつけるだけ」

「壁画？　ああ、海道君って何でも出来ると思っていたけど、美術関連だけはすごいよね。光さんの作る料理みたいに」

「うっせー」

『何故、何故気高き精霊である我がこのような』

「そこ！　イグニスさんは特に！　グラウさんやレクサスさんだって頑張っているから！」

そんな様子をオレは苦笑しながら見ていた。

オレは少し離れたところから突っ立って見ているだけだ。でも、それはサボっているわけじゃない。優月から頼まれたものだった。

優月は天空属性の精霊であり、精霊王の娘。だから、いつかは精霊界の精霊を導かなければならない。そのため、精霊に指示を飛ばす練習がしたいと言ってきたのだ。

もちろん、オレは承諾したし、周囲にいる生徒も許可してくれた。

『だ、だが、姫。我は』

「口答えするイグニスなんて大嫌い！」

『慎んで拝命させていただきます！』

イグニスのその言葉にオレは声を上げないように大爆笑する。これって結構難しいからな。

『ふむ、相変わらず難しいことをするな』

そんな器用な真似をしていたオレの隣にうっすらとしたディアボルガが現れる。ディアボルガ単体の力でオレとのパスを通じ勝手に現れたのだ。まあ、今回の作業にオレはディアボルガ、セイバー・ルカ、ライガの三体は参加させていない。

ライガはそもそも雷の集合体。そんな存在を戦場以外で一般人に近づけたくない。ディアボルガとセイバー・ルカの二人は手伝わせたら大変なことになるのは目に見えているからだ。

『我が力を使わなくて済む』

「お前は不器用だろ。去年、何回骨組みを崩落させた？」

オレの質問にディアボルガは威厳たっぷりに答える。

『三回だ！』

「自慢気に言うな」

『誇らしいことではないのか？』

「相変わらずぶっ飛んでいるな」

去年はディアボルガと、セイバー・ルカの二人のせいでかなりヤバい事態になった。何が起きたかと言うと、最上級精霊同士の喧嘩。止めるためにアルネウラと優月の二人とダブルシンクロをして止めた。

被害は北門の崩落。結局は第７６移動隊全員で修復した。三日間徹夜して。

『うんうん。相変わらずだよね。相変わらずディアボルガはサボっている』

『我は悠聖に言われ、仕方なく、手伝っていないだけだ。お前とは違う』

作業をサボっているアルネウラが自分のことを棚に上げていた。確かに、アルネウラはこういう作業は嫌いだからな。

というか、アルネウラは優月と同じ見た目は少女だし優月以上に非力だし。優月も十分に非力だけど。

「アルネウラ！　一人サボってないで手伝いなさい！」

優月の怒鳴り声。それにオレ達は肩をすくめた。その中でディアボルガは苦笑する。

『やはり、精霊王の娘というわけか』

「何かあったのか？」

『昔の話だ。我がまだ上級精霊にすら名を連ねていない時、精霊王の指揮下に入ってな。ふっ、懐かしい話だ』

多分、その指揮下の中で戦ったことがあるのだろう。戦場というのは最も指揮能力が問われるところだしな。

優月はそれに向けての練習というわけか。

『ぶーぶー。私だって別に休みたくて休んでいるわけじゃ』

「精霊はそこまでか弱くありません！　これ以上サボるなら冬華さんと一緒にあなたを今晩悠聖と一緒に寝かせませんよ！」

その言葉にオレは頭を抱える。視線が、痛い。

『ふむ、さすが我がマスターだ』

「勘弁してくれ」

オレは優月に向かって猛ダッシュするアルネウラを見ながら溜め息をついた。

「名前を呼ばれた気がする」

その言葉に冬華が悠聖達がいる方角に視線を向けた。それを見た亜紗が不思議そうに首を傾げる。

『テレパシー？』

スケッチブックに書かれた文字に冬華は苦笑する。

「ただ、悠聖達に勘が鋭いだけよ。全く、花子のやつ、私だけを除け者にして」

『多分、アルネウラや優月は悠聖さんがいなければどうしようもないけど、冬華さんは一人で十分にすごいから』

「わかっているわよ。今頃、あの二人がいちゃいちゃしていると考えると」

冬華の背中には何かが立ち上っていた。文字で表すなら殺気に近い何か。

亜紗はそれを苦笑して見ている。そんなことは周にとっては日常茶飯事だ。周はみんなの幸せを追求している。それが優柔不断だと罵られても、周は追求し続けるだろう。

それが海道周だから。亜紗はそう思っている。

「でも、どうして私達がこんなことをしているのよ」

冬華は小さく溜め息をつきながら手に持つ荷物を見ている。体育祭実行委員から配られる体育祭の医療道具だ。『ＧＦ』の隊員は使い方を知っているし、一般人でも調べれば使えるようになっている。

重くはないが軽くはない。だから、クラスから代表としてジャンケンで負けた二人が持っているのだ。

『例年通り、力が入っているね』

片手で器用にスケッチブックを捲る亜紗に頷きながら冬華は周囲を見渡す。

体育祭は文化祭以上に力が入っている。体育祭の方が参加しているというイメージが強いからだ。だから、何気ない装飾にも力が入っている。

「当たり前よ。年に一度なんだから。誰だって力を入れるわ。それに、私は体育祭の方が好きよ」

『賛成。文化祭は来場者の気分だけど、体育祭は参加者の気分になれるから』

「まあ、私達は『ＧＦ』の仕事があるから出来ることは少ないけど」

二人は笑い合う。笑い合うと言っても亜紗は声を出せないから冬華が一人笑い声を上げている。

「後、三日ね。頑張らないと」

『うん、そうだね』

そういう二人の目には体育祭と頑張るという以外の別の意味があった。それは、海道駿達が仕掛けてくるであろう作戦。それを、周は体育祭期間中に予想している。

だからこそ、二人は口にした。

犯罪者達を捕まえるために。そして、学園都市のみんなを助けるために。

第百十八話　増援（前書き）

いろいろと忙しくてなかなか更新出来ませんでした。明後日くらいからは普通に作っていく予定です。

第百十八話　増援

「第一特務特命部隊部隊員アルト・シュヴッサー、今日より第７６移動隊を援護するために着任しました」

「同じく第一特務特命部隊リコ・エンターク、着任しました」

そんな二人の顔を見ながらオレは小さく溜め息をついた。

「お前らか」

「こういう場合は知己がいた方が進みやすいものだよ。それに、防衛に関しては僕の右に出るものはいないしね」

「あたしはただ単に志願しただけ。亜紗と久しぶりに会うしね」

よく考えてみるとそうだ。亜紗とリコの二人は少し前までお互いの住所を行ったり来たりしていた。でも、最近はそんな様子はない。だから、リコは学園都市の『ＧＦ』代表でもある第７６移動隊の援助部隊として志願したのだろう。

「アルト。お前はエクシダ・フバルの護衛を直接やった方がいいだろうが」

「大丈夫だよ。エクシダ・フバル氏にはギルバート副隊長がついているからね。だったら、僕は第７６移動隊と一緒にいる方がいい」

「対処出来ない可能性もあるだろうが。まあ、アルトが来るなら好

都合か。先に言っておく。オレ達は人員交代が激しいからお前ら二人は常にエクシダ・フバルに縛りつく部隊に入れるから」

リコは防御よりも攻撃だが、アルトは防御にかなり特化している。だから、アルトはエクシダ・フバルと一緒においた方がいい。

二人に言ったように、オレ達は学園都市の学生だ。だから、競技にも参加するしクラスの行動にも参加する。上手く時間調整はしたので指揮官役と隊員は確保出来た。

学生じゃない面々はかなり入っているけど。

「僕は体育祭を見に来たというのに。特に、由姫の活躍を」

「あのな、お前は何のために学園都市に来たんだ？」

「遊ぶためだよ」

「あたしは別に平気かな。亜紗とは重なるよね？」

その質問にオレはスケジュールを思い出す。リコは亜紗と重なるように休憩にやる予定だから大丈夫た。

オレは小さく頷いた。

「ちゃんと休憩を重ねてる。時間は二時間ほどだな」

「周ちゃん、ありがとう！」

「失礼します」

満面の笑みを浮かべるリコの後方のドアが開き、そこから俊也が姿を現した。その手には資料の束がある。

おそらく、紅から様々な資料の提出をお願いされたのだろう。部隊内で俊也は狙われているらしいし。性的な意味で。

俊也の声にアルトとリコが振り返る。

「君は？」

「第十三学園都市地域部隊所属の名山俊也です」

「僕は第一特務所属アルト・シュヴッサー。彼女が同じ第一特務所属リコ・エンタークだよ」

アルトの紹介に俊也が目を丸くした。アルトもリコもいろいろな意味で有名だからな。特に、由姫と繰り広げられたルーチェ・ディエバイトの決勝は未だに語り継がれている。

力と力、技と技、速度と速度のぶつかり合い。今戦ったならもっといい勝負をするだろうな。

「俊也、何か用か？」

「あ、はい。隊長からルートの最終確認と、僕の召喚許可証を」

俊也が二人の横を抜けてオレに書類を渡しに来る。オレはそれを受け取って中を確認した。

内容の趣旨は俊也が言った内容ではあるが、一つだけ違うものがある。

「俊也はこの書類に目を通したのか？」

「いいえ。僕は中身を見ないように隊長から言われていたので」

「そっか。第十三学園都市地域部隊所属名山俊也は本日から体育祭終了三日後まで第７６移動隊の警備に参加させる。この時の指揮権は第７６移動隊に移譲する、だとさ」

書類の中身を言いながらオレは俊也に書類を渡した。当の本人は目を見開いて驚いている。

俊也が入ってくるのはありがたいけど、都島学園じゃないから日程を合わせにくいんだよな。ただ、手数が増えるのはありがたい。

俊也の精霊召喚師としての実力は世界トップクラス。精霊との絆も良好で悠聖とのコンビネーションは極めて強い。

「いきなりすぎて、反応に困っているのですけど」

「だろうな。つか、普通、この時期に俊也を出すか？　第十三学園都市地域部隊にとっても俊也は貴重な戦力だろうに」

おそらく、オレと由姫が高校に入ったからだろう。

「つまり、体育祭期間中は僕と同僚というわけか。君の名前はよく悠聖から聞いているよ、名山俊也君。悠聖の次に強い精霊召喚師だとね」

「えっ？　ぼ、僕はそんな実力はありません。お師匠様の誇大評価」

「んなわけねえよ。周隊長、今帰ったって、アルトにリコじゃん。援助部隊？」

俊也の声を遮るように悠聖と、その後ろから緊張した面持ちの委員長の姿があった。本当なら委員長がアルト達と最初に会うはずだったけど、体育祭が近いからか今日は遅かった。

ちなみに、今は夕方の五時前だ。アルト達が早いというのもあるけど。

「そうだ。委員長、理由は？」

「体育祭の用事が長引いて。すぐに受付に」

「委員長は俊也の書類を俊也と共に頼むな」

オレは走り寄ってきた委員長に書類を渡す。委員長はすぐに書類の中身を見ながら自分の机に向かう。

それを俊也が追いかけていった。

「周隊長。俊也のやつ、どうかしたのか？」

「体育祭期間中はオレ達と行動を共にするんだ。アルトやリコもな」

「俊也、リコはわかるけど、どうしてアルトも？」

どうやら悠聖も同じ考えらしい。アルトはおどけるように肩をすくめた。

そこはギルバートさんの管轄だからよくわからないが、もしかしたら、時雨が指示したかもしれないな。アルトを第７６移動隊に置く意味は一応考えられるし。

「僕は周や悠聖達と共に働きたいからね。でも、僕は希望しただけでここに配属したのは」

「ギルバートさんの考えだろ。おそらく、時雨が何か言っただろうな。エクシダ・フバルを守る戦力は第一特務と第７６移動隊で足りているから」

「そうかな？　僕は、最近、学園都市を騒がしている『悪夢の正夢（ナイトメア）』がアクションを起こす可能性があるよ」

なかなか鋭いな。さすがは第一特務というべきか。

リコもわかっていたのかすでに話を合わせていたのかわからないが、顔はあまり変わっていない。

オレは言うか言わないか一瞬だけ迷った。そして、二人を手招きする。

「デバイスを出せるか？　今からレヴァンティンから『悪夢の正夢（ナイトメア）』についての情報を送る。これに関しては箝口令だ。誰にも言うな。そして、すぐに消去すること。消去したらレヴァンティンで痕跡を跡形もなく消し去るから」

「周ちゃんがそこまで言うってことは『悪夢の正夢（ナイトメア）』が誰かわかっているんだね」

「ああ。だからだ」

アルトとリコの二人がデバイスを取り出した。オレはそれにレヴァンティンを当てる。

レヴァンティンはワンテンポ置いて情報を送る。ちなみに、このワンテンポはレヴァンティンがウイルスを仕掛けるためのワンテンポだ。

このウイルスがある以上、デバイスの持ち主が正式にデータの転送をしない限り、あらゆるデータを破壊するというかなり便利なデータウイルスだ。

レヴァンティンしか作れないけど。

レヴァンティンが送った情報を見た二人の顔が驚愕に染まる。そして、オレの顔を見た。

「周、これは」

「他言無用だ。このことは広まるまで墓場にまで持って行くこと。諸刃の剣にはなるけど、最大の一撃を与えれるかもしれない」

「そこまで言うからには何か策がありそうだね。わかった。僕は語らない」

「あたしも。でも、どうして、という疑問は残るけど」

アルトもリコも世界の滅びについては知らないだろう。でも、それは言わない方がいい。

「『悪夢の正夢（ナイトメア）』達は体育祭期間中に何らかのアクションを起こすはずだ。その時に捕まえればいい。そして、その時に理由を聞けばいい。オレ達の手で」

第百十八話　増援（後書き）

次回は第二章になってからあまり出ていない面々を出す予定です。

第百十九話　羽休めの時間（前書き）

体育祭期間中で活躍の場が少ない面々を書きました。つまり、体育祭期間中はあまり出ない予定です。悠人、音姫、アル・アジフを除きますが。

第百十九話　羽休めの時間

煌めく白銀の刃を迎え撃つのは漆黒の刃。それを補助するかのように輝く鋭い糸が白銀の刃を握る音姫に襲いかかる。

しかし、音姫はその糸を軽やかに避けながらその手にある光輝の刃は漆黒の刃を握る孝治に襲いかかる。

それを孝治は受け流し、後ろに下がった。

「今のでもダメなんだ」

七葉が槍を持ちながら落胆の息を吐く。その横では琴美が肩で息をしていた。

「孝治くんの動きはいいよ。でもね、急増のチームだと孝治くんの動きを生かせていないよ」

「そもそも、俺以外の二人は臨時戦闘員だ」

孝治が小さく溜め息をついて運命の刃を鞘に収める。そして、そのまま腰を落とした。その体勢はまるで白百合流の構え方。

それを見た音姫がピクリと動き、孝治は地面を蹴った。

運命の柄を握りしめ、その柄を真っ正面にいる音姫に向かって地面と並行に抜く。

だが、運命だけでなく、光輝やレヴァンティンも同様に真っ正面に

向かって地面と並行に抜くには長すぎる。だから、普通は出来ない。
だけど、孝治はそのまま最大限まで運命を抜いた。

「牙狼砲！」

孝治の気合いと共に漆黒の狼の頭部が音姫に向かって襲いかかった。
口を開き、鋭い牙を音姫に向けている。

音姫はすかさず後ろに下がろうとして、背後から何かが迫っているのがわかった。感覚からして七葉か琴美どちらかの頸線。

音姫は牙狼砲を避けるために身をひねりながら背後に向かって光輝を振る。だが、光輝はまるでネットのように展開された頸線によって絡め捕られた。

「えっ？」

驚きながらも音姫の体は動いている。光輝を手放して距離を取ろうとして、

「終わりだ」

孝治の運命が首筋に当てられていた。

「もしかして、最初から狙っていた？」

「ああ。即席チームで勝てるほど音姫さんは弱くない。狙うなら音姫さんの隙をつくしかない」

「確かに、初めて見た技に驚かせて背後から頸線で狙う。私は技を回避しながら頸線を弾こうとするけど、頸線は攻撃ではなく吸収用の頸線。うん、私も気持ちよくはめられたな」

そう言いながら音姫が両手を上げた瞬間、周囲にいた観客から歓声が起きた。そう、観客から。

歓声を上げる観客を見ながら七葉が恥ずかしそうに頬をかく。

「かず君がいなくてよかった」

「あなた達のバカップルぷりはやばいわよね。学園都市一有名なバカップル」

「そんなこと・・・・・・・・・・・・ないと思う」

「今の間は何？」

琴美が呆れたように七葉を見ると七葉は思いっきり視線を逸らした。

「今日はこれくらいにしようか。第5分隊のみんなの動きも見れたし、それに、明日から体育祭だし」

その言葉に孝治が引き抜いていた運命を鞘に収める。音姫と孝治の二人は全く息が切れていない。しかも、まだまだ余裕があるようにも思える。

それを見ながら七葉が口を開いた。

「二人はなんでそんなに体力があるのかな？」

その音場と共に七葉の視線が移り、その視線の先は地面に座っているエレノア達に向いた。

今日、この訓練に参加しているのは音姫、孝治、七葉、琴美以外にエレノア、ベリエ、アリエ、の七人だが、ひたすら音姫ＶＳ孝治＋誰か二人の模擬戦を延々と朝から休憩しつつやっていたのだ。

もちろん、消費した水の量は言わずもがな。

「これくらい普通だよね」

「ああ」

「絶対普通じゃないから。フルマラソンを余裕で完走できるんじゃないかな？」

七葉が呆れたように言うと音姫は不思議そうに首を傾げた。

「それくらい小走りで出来るけど」

「そんな解答誰も求めていないから」

琴美が呆れたようにため息をつく。それを見ながらベリエが大きく息を吐いた。

「音姫は相変わらずむちゃくちゃよ。周みたいな体力バカだし由姫みたいに疲れを知らないし」

「ベリエちゃん、そんなことを言ったらダメだよぅ」

「いいじゃない、別に。魔界と違って日本じゃ言論の自由、ひゃわ」

呆れたように言っていたベリエの背後から音姫が抱きついた。正確には、抱き締めて持ち上げたというべきか。

音姫は時々可愛い女の子を抱き締めるという癖がある。これもその癖だ。

「ベリエちゃんはもっと強くなりたいんだよね？　弟くんにライバル宣言したから」

「そんなんじゃないから。離せー！」

音姫の腕の中で暴れまわるベリエを観客達は暖かい目で笑いながら見ている。でも、それは長く続かなかった。

エレノアが杖を突き出して軽く音姫の手を叩くと拘束が緩み、その間に逃げ出したベリエがまるで警戒する猫のように距離を取った。

「そろそろ私の可愛い妹達を離してくれないとね？」

エレノアの表情は笑っている。笑ってはいるが、目は全く笑っていない。対する音姫も笑っている。もちろん、目は全く笑っていない。

「可愛いものを独占するのはよくないものだよね？」

音姫の言葉にエレノアが笑みだけをさらに深くする。音姫も笑みだけをさらに深くする。

そして、二人は同時に距離を取った。

「光り輝け、光輝！」

「炎よ集え！」

そんな二人を見た孝治は小さく溜め息をつく。

「ベリエ、アリエ」

「結界、展開するわよ」

「はーい」

漆黒のフュリアスが野を駆ける。その感触を感じながら対艦剣を握るソードウルフとイグジストアストラルを視界に捉えていた。

対艦剣はエネルギー供給のないただの鈍器だとは言え、フュリアスが、リリーナ専用機であるソードウルフW3である以上、一撃で大破する可能性だってある。

イグジストアストラルはエネルギーライフルを持っているけど、今の装甲には全く意味がない。

イグジストアストラルがすぐさまこちらにエネルギー弾を放ってくる。僕はそれを避ける動作なく真っ正面から突っ込んだ。

軽い衝撃。

それと同時にエネルギー弾が漆黒の装甲に弾かれる。それと同時に僕は対艦剣を取り出してソードウルフに斬りかかった。

ソードウルフが対艦剣で対艦剣を受け止める。

『それがリアクティブアーマー？』

「そうだよ。慧海さんや時雨さん達、『ＧＦ』の技術部が総戦力で作り上げた」

対艦剣を軽く引く。それと同時にソードウルフが微かに前に出た。その瞬間、僕はソードウルフの懐に潜り込み背負い投げていた。

その動きは周が得意とするもので、ショートレンジの対応が極めて難しいフュリアスには効果抜群だった。

ソードウルフを地面に転がしながら、向かってきた嫌な予感に向け正面を向きながら両手をクロスする。そこに飛んできた長距離射撃パック『ラフレシア』についている射撃砲の大きなエネルギー弾が直撃した。

大きな衝撃と共にエネルギー弾が弾ける。それと同時に視界の隅でイグジストアストラルが全ての砲を向けるのがわかった。そして、全ての砲が火を噴く。

断続的に続く衝撃。それを受けながら僕は四肢に力を入れて耐えきった。

イグジストアストラルの砲が動きを止める。それと同時に僕はリアクティブアーマーの耐久を確認するために頭の中で画面を操作した。

精神感応によって操作された画面に映るリアクティブアーマーの残り耐久値。それは全ての観測点がほぼ１００の数字を表していた。

「アル・アジフさん、耐久テストと運動性テストを終わったよ」

『こちらもモニターで確認しておった。それにしても、アルケミストとは何とも座り心地の悪い機体じゃな』

その言葉に僕は苦笑してしまう。確かに、マテリアルライザーと比べれば全ての機体の座り心地は悪いだろう。この機体ならそれ以上だと思う。

『運動性は大丈夫じゃな。一本背負い、周がよくやる技からの繋ぎはフュリアス戦ではかなりのアドバンテージじゃぞ』

「マテリアルライザー以外のね」

マテリアルライザーの柔軟性は文字通り桁が違う。一度、周さんの乗るマテリアルライザーに対して同じように懐に潜り込んだけど、その体勢から簡単に巴投げされたから。

『リアクティブアーマーの耐久性はどうじゃ？』

「完璧かな。でも、このリアクティブアーマーはすごいよね」

『装甲に常にエネルギーを循環させておるからの。値段だけで言え

ばエクスカリバーとソードウルフの二機をフル装備で買えるぞ』

「装着出来るのは僕のダークエルフだけだと思うけど」

そう言いながら僕はコクピットを開けた。パワードスーツを拘束していた器具が外れ、ダークエルフのコクピットから僕は出る。

新たに生まれ変わったダークエルフ。ほぼ全面改修でコクピットやパワードスーツすらも新しくなったダークエルフはショートレンジに関してはエクスカリバーを遥かに超える機動性を得た。その代わり、遠距離戦には弱いものの、全てのリアクティブアーマー内にある出力エンジンの全てを直結して放つバスターマグナムの威力は桁が違うが。

「これなら、勝てます。あの白銀のコートを着たフュリアスに」

第百十九話　羽休めの時間（後書き）

新しいダークエルフにもＦＢＤシステムはあります。

第百二十話　体育祭当日（前書き）

長ーい長ーい体育祭が始まります。第二章最大の山場であり、作者自身何話続くかわからない体育祭です。予定では５０近くになるんじゃないかなと。ですが、予定は未定。頑張って精一杯書きます。

第百二十話　体育祭当日

学校指定の体操服に袖を通す。その姿を鏡で見ているがある意味滑稽だと言うべきだろう。

服装は基本的にスーツ、違った、制服か戦闘服が儀礼服のどれかだからだ。儀礼服は基本的ではないが、遠出の任務の際には必要とする。

だからか、体操服姿というのは見ているだけで笑いが込み上げてくるのはオレだけだろうか。いや、そろそろ現れる人物が必ず、

「ぷぷっ。全く似合ってないわね」

やっぱり笑った。

「笑うな、義母さん」

義母さんがおかしそうに笑っている。確かに、この姿は全く似合っていないけど。

「周君がまさかここまで似合わないとは。写真撮るね」

「勝手にしてくれ。朝飯は？」

「作ってあるけど、由姫と一緒じゃなくていいの？」

「オレは開会式場で演説があるからな。その準備もあるし、というか、場所が場所だろ」

オレは開会式の場所を思い出して小さく溜め息をついた。想像していたのは学園都市最大のスタジアムであるＳＣスタジアムだったが、それが決まった瞬間に完全に唖然とした。

そのおかげで開会式場を決めた体育祭実行委員は先生など大人からの非難が一時期はすごかったらしい。だけど、それら全てを委員長が跳ね退けた。

「まあね。反対、だけど、由姫や音姫、それに、周君や学生が決めたなら私達は何も言わないから」

「ありがたいな。まあ、オレだって賛成と反対の半々だ。でも、スタジアムで行えば学校代表は集合だからな。それをするくらいなら、第一日目第一種目会場でやるのは妥当だ」

「すぐに出来るしね。あっ、時間は大丈夫？」

オレは時計を確認する。まだまだ開会式までは大丈夫だが、悠人から早々に呼ばれているためすぐに向かわないといけない。

「すぐに朝ご飯にするよ。開会式は中継があるから、暇なら見てくれ」

リュミエール内部。体育祭期間中は食材や生活必需品などのものが

ある一階と二階のみを通常営業としている。

では、三階より上はどうなっているのか。

それはたくさんの筐体、ＦＢＳの筐体がたくさん置かれている。その数は軽く５００の数字に到達するだろう。

体育祭の中で最も異色の競技。それがＦＢＳだ。反対もかなりの数があったが、フュリアスに関しては世界中で需要が増しており、メイドインジャパンの第一号も近々発表されるからか日本政府から関心を高めるためにやって欲しいという要望すらあった。

これらの筐体は首都圏から集められたもので、苦情が殺到しているらしいが、オープニングセレモニーがあると知ればみな不満ながらも納得してくれたらしい。

まあ、そのオープニングセレモニーがかなり凄まじいことになっているけど。

そんなリュミエール内部にオレはいた。正確にはＦＢＳのプログラムをいじっている。

「反応値は十分です。動きも再現出来ています。さすがに、リアクティブアーマーは再現出来ていませんけど」

「リアクティブアーマーを再現出来たら負けない機体になるからな」

オレは小さく溜め息をつきながらいじっていたプログラムを完成させて保存する。

悠人はＦＢＳの筐体の一つから出た。

「まさか、オープニングセレモニーがあんなことになるなんてね。周さんは想像出来た？」

「出来ると思うか？　オープニングセレモニーに関しては向こうから打診してきたからな。日本政府が真っ先に飛びついて、学園自治政府及び体育祭実行委員も頷いた」

おかげでこんな朝早くから最終調整に入っているけど。

「『ＧＦ』も第７６移動隊が本戦中以外は全体指揮だし、第５分隊は十分に本戦中も手が空くから日程的に大丈夫。最悪の場合を除いて、問題はない」

「最悪の場合か。周さん、周さんが考えた布陣、あるよね。どうしてダークエルフがあの場所なの？　エスペランサとは」

「悠人、ストップ。それ以上は機密だ。まあ、当たればいいし、当たらなくても待機しているだけで大丈夫。それに、ダークエルフなら誰に乗られても無理だろ」

「そうですけど」

悠人はそう言いながら自分の首に身に付けたリングに手をやる。最新型の精神感応システムで量産化までこぎつけた一品だ。ただ、使える機会は少ないが。

ダークエルフは悠人の精神感応でのみ機能する。だから、誰かにパスワードを破られて乗られることはない。

「オレの推測が正しいなら、オレが推測した範囲内での動きになるはずだ。それからは現場が頑張る」

「そうですね。起こって欲しくありませんし、楽しんでもらいたいから」

「そうだな。だから、まずはオープニングセレモニー用に準備しないとな。最終調整にいくぞ」

「はい」

悠人が筐体の前に座る。そして、調整している最中の機体を選択し一人プレイに興じる。

周囲の筐体にはＦＢＳを慣らすために何十人と開会式はまだまだなのに筐体の前に座っている。もちろん、偵察している人もいるので百人単位になっているが。

「周さん、人払いは」

「それはオープニングセレモニー用だろ。本戦だとエクスカリバー使うくせに」

「そうですけど、明らかにおかしいじゃないですか」

そう言いながら悠人はレバーやペダルを目まぐるしく動かす。それを見ている限り、あらゆる動きは完全な許容範囲内だ。

というか、ほんの僅かな癖も残らず再現しているのに悠人はそれす

らないかのように見事なコンボを決めている。
普通、フュリアスで背負い投げは無しだろ。背負い投げからのジャイアントスイングって普通は不可能だろう。
相変わらず、フュリアスに関することに関してはありえないくらいに技術が高い。
「どうだ？」
「やっぱり、精神感応で動かす以上、違和感がありますね」
その違和感が見ている以上、全く違和感の無い動きなんだがな。
オレはＦＢＳは得意ではないが、中級者という実力はある。それでも戦えば完封されるだろう。
「でも、大丈夫です。コストの関係上、これぐらいが妥当じゃないかなと」
「まあ、そうだろうな。さて、プログラミングをＦＢＳの開発者達に」
「おっ、周じゃねぇか。こんな朝っぱらからどうした？」
その声にオレが振り返ると、そこには健さんに真人。そして、メグに夢の四人の姿があった。メグと夢は体操服ではなく制服姿だ。
開会式の参加ではなく応援に来たのだろう。というか、ＦＢＳを体操服でやるのは違和感が強い。

「これでも学園都市『ＧＦ』代表なんでね、開会式の仕事があるんだよ」

「なるほどね。真柴先輩は、エクスカリバーじゃなくてダークエルフを使っているのか？」

悠人が使っている機体はエクスカリバーではなくダークエルフ。新しく調整されたダークエルフを使用している。

「そんなポンコツを使うのかよ」

「ポンコツって言わない方がいいよ。ダークエルフはコスト１００の中でも強機体なんだから。アーマー着けているからライフも高いし、ＦＢＤシステムを使えばコスト２５００以上の近接格闘が出来るし」

「ＦＢＤシステム使えば当たれば即死になるじゃねぇか。まあ、真柴先輩が使うなら何かの考えがあるってことだろうな。真人、俺達も特訓だ！」

「そうだね」

健さんと真人の二人が近くの筐体に向かう。すると、位置が替わるようにメグと夢の二人が近づいてきた。

「私は夢の付き添い。夢が周に話したいことがあるって」

「ごめん、なさい。本当は、忙しい、よね」

「いや、大丈夫だ。このデータをＦＢＳの調整係に渡せば開会式が近くなるまで時間はある。そうだな。四階の中央ベンチに五分後集合で。出来れば、夢一人で」

オレはそう言いながらメグを見る。メグはわかっているというように頷いた。

「私はちゃんと話を聞いているから。私はあのベンチに座っているね。夢、一人で大丈夫？」

「大丈夫。ちゃんと、話すよ」

「そっか。頑張ってね」

メグが手を振りながら指差したベンチに向かう。

オレはそれを視界の隅に捉えて記憶媒体を夢に見せた。

「じゃ、オレも出してくる。だから、また」

「うん。また」

夢が歩き出す。それを見ながらオレも反対方向に歩き出した。

夢の話はおそらく“義賊”に関すること。

オレはそう頭の中で断言しながら考えを巡らせつつ目的地に向かって歩き出した。

第百二十一話　体育祭開幕直前その１（前書き）

開幕直前その１です。今回はメグのお話。世界の滅びに対する明確な対抗策は体育祭後夜祭で周の口から語らせる予定です。それまで想像を膨らませておいてください。

第百二十一話　体育祭開幕直前その１

私は一人でベンチに座っていた。

本音を言うなら夢と一緒にそばにいたい。そして、私の大切な友達を見守りたい。でも、夢は一人で歩こうとしている。

この案件は“義賊”から口止めされていることらしく、本当なら言ってはいけないこと。でも、夢は“義賊”の本当の目的のために周にそのことを話す。

“義賊”が義賊であるために。

そのことを話された時、私は思わず絶句していた。“義賊”内で起きたこと。それは最悪の可能性に繋がるかもしれない。もしかしたら、周の想定を超える事態になるかもしれない。

「私に、何が出来るかな？」

もし、そんな状況になったなら私に何が出来るかわからない。だけど、今は、

「出来る精一杯を、やらないと」

「それは無駄に終わる」

その言葉は私の背後から聞こえてきた。私は目を瞑って言葉の主に応える。

「ここで私を殺さないの？」

「はっ、今ここで暴れたら海道周だけじゃねぇ、“義賊”のエース様とも戦闘になるじゃねぇか。そして、お前も。そんな状況になればこのリュミエールを燃やし尽くさないと逃げられない」

「周がそんなことをさせると思っているの？　お兄ちゃん」

私の背後にいつの間にかいるお兄ちゃんが苦笑する。

考え事をしていたからわからなかったけど、お兄ちゃんの存在はわかる。その中にある、周が推測した、力のことも。

「思ってねぇな。はっさんが言うには海道周は敵の一枚上手じゃない、十枚上手を取る。いくら策を練ったところで海道周が作り出した直感の前には勝てるものはいない」

「そうかもね。私はお兄ちゃん以上に周を知っている。そして、当日のお兄ちゃんの動きも知っている」

「なるほどな。メグ、お前が俺を捕まえる係か」

周の作戦上、お兄ちゃんと戦えるのは耐熱性が元から高く、耐熱性の高い聖骸布（アストラル）も持っている上に、炎獄の御槍によってさらに耐熱性を上げられる私が一番妥当。だから、お兄ちゃんと戦うのは私。

今度こそ、お兄ちゃんを私が捕まえる。

「いいのかよ？　俺達は世のため人のため、最大の特効薬を手に入れようとしているんだぜ。学園都市地下にあるエネルギー源。それ

を手に入れることが出来たなら、世界を救えるかもしれない」

「それが学園都市を混乱させるとしても？」

「世界を救えるようなものをたかが人間の生活に使うなんて馬鹿げているだろ？　それさえあれば世界を救える可能性がある。ならば、それを使うのが当たり前だろ？」

世界を救うためならいくら犠牲が出ても仕方がない。

私の耳にはお兄ちゃんがそう言っていると感じた。確かに、世界を救うためならみんなは我慢するだろう。でも、それだけじゃないと思う。

「『誰かを犠牲にして世界を救えたとしても、それは世界を救えたことにはならない。世界を救うということは、自分も仲間も知り合いも誰もかも救うことだ』。これは周からの受け売り。周が本当に目指す未来」

「犠牲無しに世界を救うだと？　不可能だ。そんな夢物語が出来るとでも思っているのか？」

「私は正直出来ないと思う」

その言葉にお兄ちゃんが拍子抜けするのがわかった。それが面白くておかしくて、思わず笑みを浮かべてしまう。

「でもね、周なら出来ると思うから」

「無理だな。何故、人界が天界や魔界から今現在、干渉を受けてい

ないか知っているか？　百年ほど前にはゲートから現れた魔物の一派によって地域一つが制圧されたことだってあった。だが、それを解放したのは善知鳥慧海達だ。人界には他の世界から干渉を受けないほど強力な力があったからだ。その力がなければ世界は未だに魔界や天界からの恐怖に怯えていただろう。力が無ければ世界は救えない。だから、誰もが力を求めて」

「そうかな？」

私はお兄ちゃんの言葉に首を傾げる。お兄ちゃんが言いたいのはこういうことだろう。

もし、人界に干渉したならたった一人からなる軍によって全滅するだろう。だからこそ、魔界や天界はあまり干渉してこなかった。

でも、私は違うと思う。だって、第７６移動隊にいるから。

「魔界の魔王の娘に精霊界の精霊王の娘。さらには音界の最高権力者である歌姫。第７６移動隊に入っている、又は、関係の深い人物がいるから。このまま行くと世界の架け橋になるんじゃないかな？」

「だとしても、天界はどうする？　あの世界は未だに魔界と争い続けている。海道周が考える夢物語なんてどうにかして全ての世界の協力なんだぞ！　そんなことが出来るなら、本当に海道周が望む」

「『誰かを犠牲にして世界を救えたとしても、それは世界を救えたことにはならない。世界を救うということは、自分も仲間も知り合いも誰もかも救うことだ』」

私は笑みを浮かべながらお兄ちゃんの言葉を遮った。

『誰かを犠牲にして世界を救えたとしても、それは世界を救えたことにはならない。世界を救うということは、自分も仲間も知り合いも誰もかも救うことだ』

それは周が考える最高の未来。いや、周だけじゃない。世界の誰もがそうであったならいいなと思う世界。でも、そんなことが出来るなんて夢物語にしかならない。それは周もわかっているはず。

周は賢いし頭が回るし考えれば答えがたくさんでる。賢いから、現実というのがよくわかる。そんな不可能なことを賢い人が言うなんてありえない。

でも、周はそれを自分の夢としてやろうとしている。それに第７６移動隊のみんなは協力している。

「周は何かを隠している。でも、それは周にとっての切り札だと思う。そんな切り札、おいそれと言わないよね？」

「例え切り札があるとしても、前途多難どころではない。不可能だ。ありえない。無理だ。そんな無理な未来をするくらいなら、俺達の未来を」

「お兄ちゃん達が考える未来に、希望を見いだせない」

だから、私は無理やり突き放すような言葉をお兄ちゃんに向かって言った。

「確かに、学園都市にそんなものがあるなら世界は救えるかもしれない。でも、そんなものがあるなら、それを『ＧＦ』が知っている

なら、必ずそれを使う。使わないということはどういうことなのか、お兄ちゃんならわかるよね？」

『ＧＦ』が私利私欲のために使っているわけじゃない。使うとするなら世界の滅びに対してギリギリまで有効活用しているだけだと私は思う。お兄ちゃんだって同じなはずだ。

だから、使うタイミングはどうであれ、世界を救えるものだとするなら、今はまだその時じゃないということ。

それに、そんな力があるなら、どうして周は私に滅びについて話してくれたのか。そんな力があるなら頼ってもいいのに。

「そんな力じゃ世界は救えない。本当に救えるのは全ての世界が一つになり、滅びに対する準備に『誰かを犠牲にして世界を救えたとしても、それは世界を救えたことにはならない。世界を救うということは、自分も仲間も知り合いも誰もかも救うこと』が出来上がった時。世界は、変わらなきゃ駄目なんだよ。今のままじゃ、絶対に」

「メグ、お前には失望した。まさか、そんな世迷い言に惑わされるとは」

その言葉に私は驚いていた。多分、誰だって驚くだろう。

「お前は俺が殺す。だが、今は殺さない。世界が滅ぶ意味。それを死ぬまで考えておけ」

お兄ちゃんの気配が去って行く。それを私は感じながら思った。

多分、お兄ちゃんも私と同じように思ったに違いない。でも、私を

打ち負かすことが出来ないから諦めた。まるで、子供だ。

私はゆっくり口を開く。

「そんなこと、私が考えていないと思ったの？」

その言葉は誰にも聞かれずに虚空の中に散っていくのがわかった。

第百二十一話　体育祭開幕直前その１（後書き）

その２は周のお話。“義賊”に関する重要な話です。

第百二十二話　体育祭開幕直前その２（前書き）

おかしいな。正を出す予定がこれっぽっちもなかったのにどうして出たのだろうか。勢いって怖いね！

第百二十二話　体育祭開幕直前その２

オレは握っていたレヴァンティンを静かに鞘に収めた。視線の先にいるのはメグとその兄である信吾。

記憶媒体を渡し、四階に向かう最中に見かけたのだ。どうやら夢も気づいていたらしく誰からも見えない角度で弓を握っていた。

オレは物陰から出ながら夢に向かって手を上げる。

「お待たせ」

その言葉にビクッとなった夢は驚いたようにオレを見てきた。

「いつの、間に？」

「メグの近くにあいつが来た時から。気配を隠すのは得意だから気づかなかったんだろ？」

「うん。メグが、心配だった、から。いつでも放てる、ようにしていた」

それは見ていてわかった。メグの射出速度は孝治には及ばないが正確性は遥かに孝治を超える。

もし、細い輪がいくつも連なっていても、メグはその中心に向かって放てるだろう。

「あの、人は？」

「『悪夢の正夢（ナイトメア）』一味、と言えばわかるな。メグから兄について聞いているか？」

「じゃあ、あの人が、メグの、お兄さん」

どうやらメグから兄については聞いているらしい。そのおかげで幾分かは話を通しやすいけど。

「多分、メグに最後の忠告をしに来たんだと思う。メグの兄は妹想いだから」

「うん。メグから、ちゃんと、聞いているから。炎獄の御槍も、お兄さんからもらったって」

「ここで戦闘にならなくて良かった。この場なら全員を守りきる自信がない」

その言葉に夢が驚いたように目を見開いていた。多分、オレがそんな発言をしたのに驚いているのだろう。確かに、今までの言動から考えて普通は言わないはずだ。

「おかしいか？　オレがそんなことを言うのは」

「少し。周君は、いつも自信満々で、私の憧れだから」

「憧れ？　オレに憧れてもいいことはないぞ」

その言葉に夢は首を横に振った。

「そんなことは、ない。周君はかっこいい。目標に向かって、懸命に、頑張っているから」

そう言われるとむず痒い。確かに懸命に頑張っている。今の学園都市をどうすればよく出来るかから世界の滅びをどうするかまで。

夢は緊張しやすく人見知りするからかいつも自信がないように思える。でも、それは最初の頃のことだ。

「夢も頑張っているさ。それはオレが認めるし、絶対にメグが認める。最初の頃よりもずっとしっかり話しているじゃないか。夢は可愛いからそういう風に努力していけば必ずいい方向に進んでいける。これは第７６移動隊隊長海道周が言うから確実です」

「ありがとう。うん。だから、もう少し、頑張るから」

そう言う夢はオレを真っ直ぐ見つめていた。そして、口を開く。

「これは、“義賊”の中でも、秘密の話。でも、周君には、話しておかないと」

オレは真剣な表情で夢を見つめる。夢は必死に頑張って言葉を探している。頭の中でまだ整理がついていないのだろう。だから、こうなっている。

でも、夢は必死なのだ。それをオレが冗談のように受け取ることは出来ない。

「“義賊”の所有する、リーゼアインと、リーゼツヴァイが、離脱、しました」

「リーゼアインとリーゼツヴァイ？」

聞いたことがない名前だ。所有するということは人ではないのだろう。だけど、“義賊”にとっては大切な何かのはずだ。

オレは夢の言葉に耳を傾ける。

「“義賊”の所有する、フュリアス。真柴、悠人君の、エクスカリバーも、戦ったことのある、ＡＥＷＣを身につけたＡＥＢＡのフュリアス」

ＡＥＷＣやＡＥＢＡの言葉は悠人から報告が来ている。音界の技術の一つで耐性に関しては極めて高い防御力を発揮するというものだ。

そんなものがある機体なんて人界や音界を含めて一つしかない。

「あのフュリアスって親父達の機体じゃなかったんだな」

オレは呟いた瞬間、間違ったと感じた。何故なら、親父達の話は“義賊”には通していないし、何より、想定通りに事が進んだ時の切り札だからだ。

オレは夢の顔色を見る。夢は不思議そうに首を傾げていた。

「周君の、お父さんは、『赤のクリスマス』で」

やっぱり気づかれた。

オレは一瞬の逡巡の後、決意をして頷いた。

「次に話すことは、黙っていてくれないか？」

「わかり、ました」

夢が頷くのを見てオレは手短に話をする。

今回のことを。オレ達のことを。そして、親父達のことを。

「そう、だったんだ」

全てを話し終わった時、時間はかなり過ぎていた。でも、まだまだ開会式までは時間がある。

「ああ。それが今のオレ達を取り巻く状況だ。はっきり言って、オレの考えることよりも、親父達のやることの方が確率は高いかもしれない。オレだって思っているさ。自分の使用としていることが夢物語だって。でも」

「その夢物語を君は成し遂げようとしている。君の仲間も」

その言葉にオレはレヴァンティンを抜きかけた。そして、すんでのところで腕を止める。そこにいたのは軽く笑みを浮かべた相変わらずのゴスロリ服を着る正。オレは小さくため息をついてレヴァンティンの柄から手を離す。

「お前か。夢、弓を下ろせ」

オレの背中に隠れるように弓を展開する夢に向かって言う。こいつに弓は通じないと思う。夢が弓を持っていることに気づいている。

夢が弓を戻すとともに正が目にも笑みを浮かべる。

「面白い話を聞いたものだからね、思わず声をかけてしまったよ」

「ったく、一般人のお前は、この期間は学園都市に入れないはずだけどな。まあいい。で、何の用だ?」

オレは鋭く視線を正に向ける。対する正は静かに笑みを浮かべていた。

「散歩だよ。それ以上、詮索するかい?」

「する気はない。まあ、なんとなく理由はわかるけどな」

オレは小さくため息をつきながら正の気配の消し方を探る。そして、一つの納得する結論を作る。

ともかく、今は正と話しているんじゃない。オレは夢と話している。

「こいつは海道正。オレの海道家とは関係の無い人物らしい」

「正さん、ですか? 本当、ですか?」

夢が不思議そうに首をかしげる。

「周君と、同じ匂いがするのに」

「同じ匂い？」

同じシャンプーとか使っているのか？

正の顔を見るとかなり驚いたような顔になっていた。多分、同じ匂いと言われたのが気になっているのだろう。現に、驚きながらも自分の体の匂いを嗅いでいるし。

「うん。気配は違う。だけど、匂いは、同じ」

「匂いがわかっても何の意味もないだろ」

「追跡は、出来る」

「警察犬か」

オレは呆れてため息をついた。そして、正をジト目で見る。

「で。、お前はどうしてオレの体の匂いを嗅いでいるんだ？」

いつの間にか近づいてきていた正がオレの体の匂いを嗅いでいた。はっきり言うなら変態にしか見えない。しかも、正はオレの言葉に不思議そうに首をかしげている。

「僕だって女の子だよ」

「それは知っている」

「こんなに汗臭くない」

「それは知らない」

正が現れてから話が妙にこじれているような。

オレは小さくため息をついて話を続けることにした。

「正は知っている話だろ？　だから、話を続けるぞ」

「そうだね。僕も知っている話だ。知らされた、ね」

なんか言い方にひっかかるけど、とりあえず、話を続けるか。

「ともかく、親父達の方が成功の可能性がある。だから、リーゼアインとリーゼツヴァイも離脱したんじゃないか？」

「言われて、みれば。“義賊”の中でも、リーゼアインと、リーゼツヴァイは、切り札。勧誘されたのも、納得できる」

「まあ、あまり支障がないのはありがたいな。もともと、リーゼアインとリーゼツヴァイは親父達のフュリアスだと思っていたし。それにしても、“義賊”がもっているなんて、“義賊”のバックには何がいるんだ？」

「知らされていない。リーダーなら、何か知っている、かも」

ＡＥＷＣやＡＥＢＡとかから考えるに音界の関係者は入ってくるだろう。どちらも、音界の最先端技術だ。その技術提供は受けなかったから、音界の装備だと考えてもいい。

“義賊”のバックには大きな組織があるみたいだな。

「周君は、勘違い、していたの？」

「まあな。だから、勘違いしたまま作戦を練っていた。でも、これなら準備に時間はかからないな」

頭の中で作戦を確認するが大丈夫だ。全く問題はない。

「夢に話はわかったし、オレの話も終えた。とりあえず、心配しているであろうメグのところに戻るか」

「うん」

「そうだね」

「何故、お前も頷く」

オレは呆れたように正を見る。こいつは全く関係ないよな？

「いいじゃないか。僕だって、久しぶりに学生生活を謳歌したいのでね」

「ちゃんと、ばれないような服装って」

正は一瞬だけ目を離した隙に服装を変えていた。何故か都島学園の女子制服に。

「じゃあ、行こうか」

にっこり笑みを浮かべた正にオレは呆れたようにため息をつきながら不安そうに服を掴んでくる夢の頭を撫でるのであった。

第百二十二話　体育祭開幕直前その２（後書き）

次でようやく開会式に移れると思います。それからとても長い長い体育祭期間が始まる予定ですが。

第百二十三話　体育祭開幕（前書き）

危うく開幕直前その3になるところでした。

第百二十三話　体育祭開幕

振り切られる拳。それをオレの後ろにいた正は軽々と受け止めていた。すぐさま拳を放った人物は地面を蹴り、蹴りを放つ。

正は呆れたように溜め息をつきながら蹴りを受け止めた。

「君は、元気だけが取り柄のようだね」

「正こそ。ちょっとくらい鈍っていると思ってのだけどね」

自ら作り出した頸線に乗ることで空中で姿勢を支えながら七葉が笑みを浮かべる。

オレは呆然としている和樹と委員長に近づいた。

「よっ。時間には早いな」

「海道君、冷静だね」

「つか、ななの動きを止める気なかったよな」

オレは軽く肩をすくめる。

「正がたかが七葉の動きに負けるわけがないだろ。せめて」

体を捻りながら放たれた拳を受け流しつつ、その手を取って背中に回り込み、その背中を押す。

拳を放った七葉は和樹と抱き合う格好になっていた。

「これくらいは出来ないとな」

「全くだね」

正も同意見らしく頷いてくれる。多分、夢は困ったように見ているだろうな。

「むぅ、周兄。どうして正がここにいるのさ!?　学園都市関係者じゃないよ!」

「わかってはいるけど、潜り込む気満々だからさ、危害を加える気がないならいいかなって」

「僕は危害を加える気はないさ。ただ、久しぶりの学園都市、しかも、体育祭を味わいたくてね。あくまで、一般人さ」

「一般人、と言う割には、よく動く」

夢の小さな声。でも、その声はみんなに響いていた。まあ、最初に疑ったのは夢だもんな。オレと同じ匂いがするって。

オレは臭くないよな?

「海道君。その人は海道君のいとこ?　なんだか、海道君と雰囲気が似ているけど」

「匂いの次は雰囲気か。こいつは海道正。度々現れては時々助けてくれる人物だ」

「ふーん。何歳？」

和樹の言葉に全てが固まった。主に七葉を中心に。

正が引きつったような笑みを浮かべる気配をするから、完全にこの感覚は間違えていないのだろう。

というか、普通、初対面の女の子に年齢を聞くか？

「かず君、ちょっと、向こうに行かないかな？」

七葉が指差した方向にあるのは関係者以外立ち入り禁止の部屋。その中にある第７６移動隊専用の部屋だ。

開会式に出席する第７６移動隊隊員はオレと七葉、委員長に和樹の四人だ。だから、あの中には誰もいない。ついでに言うなら防音能力は高い。

「遠慮させてもらいます」

和樹が一歩下がろうとした瞬間、七葉が作り出した頸線が和樹を縛り上げて担ぎ上げる。

七葉は意外と力持ちだ。由姫や中村には及ばないが、第７６移動隊の女子で第三位の力持ちである。一番貧弱なのは音姉だったりするけど。

「周兄。ちょっと、かず君をお持ち帰りするね」

「周、助けろ。本気で助けてくれ！　絶対になんに」

「人柱に敬礼！」

オレの言葉にその場にいた全員（部外者含む）が一斉に敬礼をする。
和樹はそれを絶望の表情で見ていた。

七葉はオレ達に敬礼をしてそのまま部屋に入っていく。

「合掌」

そして、オレ達は手を合わせた。

「周！　って、何してんだ？」

その声に合わせていた手を離し、声の方向に視線を向ける。そこには浩平と楠木大和の姿があった。

楠木大和もオレと同じように開会式で一言二言話す予定だ。

「和樹に手合わせ」

「なるほど。南無」

浩平も同じように手を合わせて和樹が消えて行った部屋の中に向かって頭を下げる。

「相変わらずですね。騒ぎを起こすことだけは一人前」

「まあ、それは認めるけど、別に騒ぎを起こすだけがすごいわけじ

ゃないだろ？」

「ふっ、どうでしょうか」

オレと楠木大和は睨み合う。正確には睨み合うような状態で目で会話をしているだけだ。

今回の体育祭では『ＧＦ』だけで全てに手が回るわけじゃない。だから、純白のコートを着たフュリアス、リーゼアインとリーゼツヴァイの所在が何となくわかった以上、今まで以上に浩平にパイプ役を頼んでいるのだ。

「私は先に部屋に向かいます」

そう浩平に言って楠木大和は学園自治政府の部屋に向かう。

その背中を見ながらオレは軽く笑みを浮かべた。

「悪いな。お前が来るとは思ってなかったからリースはここにいないぞ」

「リースなら俺の部屋で眠っているから大丈夫だぜ。それにしても、お前もまたすごいことを考えるよな」

「すごいこと？」

オレは微かに眉をひそめて尋ねる。すると、浩平が満面の笑みを浮かべた。

「そりゃ、朝っぱらから美少女をはべらっ」

オレの蹴りがまず顔面にクリーンヒット。そして、体勢を崩した浩平に向かって蹴り戻した踵が顎を捉え、上に跳ね上がらせる。その浩平をすかさず掴みながらバックドロップを決めた。

オレは小さく溜め息をつきながら頭を床に突き刺した浩平から手を放す。

「周、それ、大丈夫なの？」

いつの間にか合流したメグが恐る恐る尋ねてくる。それに対してオレは満面の笑みで頷いた。

「こいつがこんな攻撃で死ぬわけがないだろ」

「そうだよね。『最強の盾』、『最硬の物質』、『物理攻撃に無敵』の異名はだてじゃないよね」

「俺以外だったら死んでるからな！？」

浩平が床から頭を引っこ抜きつつ立ち上がる。その姿は、さながら死なないゾンビのようだ。

「お前なら大丈夫だからやったんだろうが。何、当たり前のことを」

「当然のように言うなよ！　というか、こんなことをするのは全く普通じゃないしありえないよな！？」

「さぁ？」

「ありえないんだよ！」

浩平はぜぇっ、ぜぇっ言いながら息を吸う。そして、小さく溜め息をついて天井を見上げた。

「とりあえず、新しい武器を確認したけど、使いにくい」

「やっぱり？」

「確信犯か、てめぇ！」

オレは苦笑しながら口を開く。

「まあ、それも一環だしな、我慢してくれ。それよりも、楠木大和についていなくていいのか？」

「そうだった。じゃな。また、開会式後に」

浩平が手を上げて楠木大和を追いかけて歩き出す。オレはそれに手を振り返して振り返った。

口から出る言葉は困惑の言葉。

「なあ、何時間くらい間を空けた方がいいかな？」

その言葉に応えるものはいなかった。

学園都市体育祭開会式。

いつもは違った場所で各学校生徒が近くの競技場や校庭からその様子をスピーカーで聞いているのだが、今回はそういうことはない。

何故なら、それは自由参加だからだ。今年のみになりそうだが、開会式はリュミエール内部からの放送だからだ。しかも、オープニングセレモニーもあるからか視聴率はかなり高い。

学園都市内で９８％か。

「お疲れ様」

簡単な挨拶を済ませ、特設会場から下りてきたオレに正がにっこり笑みを浮かべて迎えてくれる。本当なら委員長が控えているが、体育祭実行委員長として忙しいため正が手伝っているのだ。

例え部外者でも学園都市関係者の要請を受けたならこの日も参加出来るから。

「疲れるってほどじゃないんだけどな。こんな挨拶、正規部隊隊長になってから度々やっている報告会と比べれば簡単だし」

言う言葉も季節の挨拶から始まって『ＧＦ』からの注意を言って終わりだ。長いのは嫌われるから淡々と短めに言った。

去年と比べればかなり楽だ。去年は炎天下の中だったからな。オレの挨拶中に救急車が飛び交っていた。

「なるほど。確かに、あれは緊張したね。さて、これから君はどうするのかな？　僕は交代要員が来たから暇になったけど」

「そうだな。だったら、オレについて来てくれるか。あっ、でも、もう少し待った方がいいな」

オレが振り返るとそこには特設会場に登った委員長の姿。楠木大和は本当に手短に終わらせたらしい。

開会式の流れはオレの挨拶の後に楠木大和の挨拶。そして、委員長の開会宣言だ。

委員長がマイクを前に深呼吸をする。

「皆さん、私は体育祭実行委員長の鈴木花子です。今年の体育祭は例年と違い前代未聞とも言える開会式となっています。ですが、体育祭で皆さんがやる仕事は同じです。全力を出し切ってください。悔いの残らないように頑張ってください。時には第７６移動隊みたいな相手にならない敵もいるかもしれません。それでも、最後まで諦めず、体育祭が終わった時には最高の体育祭だったと思えるようにしてください。そして、怪我をしないでください。体育祭を怪我で終わらせないようにしてください。それが、私、体育祭実行委員長鈴木花子からの言葉とします。それでは、今年度学園都市体育祭を開幕します！」

その言葉と共に開会式に参加していた人達が一斉に歓声を上げる。

それを聞きながらオレは委員長に背中を向けて歩き出した。

「いいのかい？　待たなくて」

「いいんだよ。それに、これからオレも仕事がある」

オレの後ろを子犬のように追いかけてくる正に言葉を返す。

「ちょっと、お姫様を歓迎しにね」

第百二十四話　異界のお姫様

予定的には今頃お偉いさんの長々とした眠気を誘う挨拶が始まっているだろう。体育祭実行委員はそういうものも極力排除しようとしたが、上からの圧力で断念したらしい。

まあ、仕方ない。こういうのは無かったら無かったでかなりうるさいからな。

「周、どこに行くのだい？」

リュミエールから出たオレを不信そうに尋ねてくる正。こういうことはわからないのか。

「だから、お姫様を迎えに行くんだよ。とは言っても、ここまでは音姉が」

「弟くーん！」

その言葉にオレが振り向くと、そこには音姉と、明らかに不審者四人の姿があった。

だって、全員がサングラスとかマスクとかつけているから。実際に顔見知りの『ＧＦ』隊員が不審そうにこちらを見ている。

「待ってないよね？」

「ここは普通待ったと聞くだろ」

「だって、弟くんが出て来たのを見ていたし。由姫ちゃんは家で開会式中継を見ているよ」

「了解。あのさ、これは音姉の入れ知恵？」

オレは音姉の横にいる見た目は不審者の少女を指差した。

マスクにサングラス、髪はポニーテールにまとめて帽子をかぶっている。

「失敬です。これが人界の潜入工作用の服装ではないのですか？」

そう言いながら少女がサングラスとマスクを取る。そこには、やはりというべきか、メリルがいた。声と感覚でわかっていたけど。

後ろにいるルーイも苦笑しながらサングラスやマスクを外す。

「だから言ったんだ。どう見ても不審者だって」

「あの悪魔。次にあったら殴ります」

悪魔ということはリリーナのことだろう。メリルとリリーナってなかなか仲がいいからな。もちろん、鈴の方が仲はいい。

メリルが髪をくくっていた紐を解くとメリルの髪がフワッと広がった。

「それにしてもよろしいのでしょうか。私達みたいな異界の者が参加して」

「異界とか言うなよ。世界が違うだけで隣人だろ。言うならば、国が違うだけ」

「遺伝子的にも同じ人だからね」

正がオレを援護するように言う。そう、遺伝子的には同じ人なのだ。

人界と魔界は遺伝子的に多少は異なっているが、人界と音界は遺伝子的には異なっておらず、分類的には同じ人である。ちなみに、悠人とリリーナでも子供を作ることは可能だ。そんな些細な差しかない。

「わかりました。では、私は参加させていただきます。あの、悠人は」

「悠人はオープニングセレモニーに向けて忙しいからな。ルーイは大丈夫か？」

「大丈夫、と言いたいところだけど、たかがシュミレーションと侮りたくはない。だから、軽くやらせてくれると嬉しい」

「それくらいなら大丈夫だ。音姉は先にルーイの案内を頼めるか？　オレはメリル達に話すことがある」

「うん。じゃ、ルーイ君、行こうか」

音姉の後ろを頷いたルーイが離れていく。本当ならルーイもいて欲しいのだが、オープニングセレモニーがある以上、そういうわけにはいかない。

音姉とルーイを見送ったオレはメリルと向き合った。

「まずは一つ。この時期に来て良かったのか？　音界でも大事な祭りがあるだろ？」

「知っていたのですか？」

メリルはかなり驚いていた。まあ、気づかれていないと思っていたのだろう。確かに、悠人には知らされていないらしいけど。

「大丈夫です。だからこそ、ここに来ました」

「なるほどね。なら、オレから何も言わないさ。個人の主義主張は最も大切にすべきことなのだから」

「ありがとうございます。まずは一つと言いましたよね？　では、次が本命ですか？」

聡い人物がいればそれはそれで話すスピードはスムーズになる。メリルはかなり頭の回転が早いみたいだ。

「そうなるな。二つ目は、良かったのか？　巻き込まれるぞ」

メリル達は長く学園都市に滞在する。それも、体育祭期間中。外交があるため最初の二日ほどは世界を飛び回るみたいだが、それ以外は学園都市にいるらしい。

つまり、完全に被ってしまう。オレが考えている相手の作戦日時に。

「それなら大丈夫です」

そうメリルがにっこり笑った瞬間、後ろに控えていたルナとリマの二人が同時に前に出て自分の右拳を自分の胸に当てていた。

音界式の敬礼だ。

「音界歌姫親衛隊隊長及び隊員計三名。学園都市にいる間、第７６移動隊への編入の許可をもらいに来ましたから」

メリルの言葉にオレはかなり驚いていた。

歌姫親衛隊と言えば音界の中でもトップエリート。隊長はルーイで隊員に数名いるが、リマはアストラルシリーズを持つエリートの一人。

編入の許可ということはフュリアスもあるのだろう。

「リマ・アルカトラ。アストラルソティスと共に編入を希望します」

「ルナ・アルカトラ。アストラルブレイズと共に編入を希望します」

「アストラルソティスにアストラルブレイズ？　リマの機体がアストラルブレイズじゃないのか？」

「ルーイがロールアウトされたばかりのアストラルルーラに乗っているからです」

最近、ロールアウトされたばかりのフュリアスはそんな名前じゃなかったような？

確かに、メリルの言う通りならリマがアストラルソティスを、ルナがアストラルブレイズを持っているのはわかる。

「わかった。防衛に関しての詳しい話はエリシア、アル・アジフに聞いてくれ。フュリアス部隊の所属は第５分隊だ」

「周、いいのかい？」

正が心配そうに尋ねてくる。

「例え、強力なフュリアスを持っていようとも、相手もフュリアスを使ってくる。それなのに」

「二人なら大丈夫だろうな。特に、ルーイの腕は信頼に足る力がある」

「だけど」

正はそれでも心配のようだ。確かにその気持ちはわかる。心配なのはルーイ達ではなくメリルなのだろう。

一応、そのための案はあったから良かったというべきか。

「メリルはオペレーターは出来るか？」

「艦内オペレーターですか？　一応、訓練は受けていますし」

「艦内じゃなくて、イグジストアストラル後部座席に座るオペレーター」

確かに艦内オペレーターも必要ではあるが、最悪、クロウェンが全てをしてくれる。問題となるのはメリルの安全性だ。

例えエスペランサの中にいてもエスペランサが墜落する可能性だってある。だから、一番安全な場所、イグジストアストラルの中に入れておけばいい。

イグジストアストラルの防御力は最強の切れ味を誇る神剣『矛神』ですら破壊することは出来ない。だから、何があっても安全だ。

「イグジストアストラルですか。わかりました。鈴は私から説得します。今は、開会式のゲストとして参加、ですよね」

「ああ。もうすぐ案内が、来たな」

リュミエールから浩平が駆け足でやって来る。浩平の隣にはいつの間にかリースの姿があるが、気にしなくていいだろう。

浩平はそのままオレの横に並び、メリルを見る。

「やあ、久しぶり」

「誰？」

メリルがリマの背後に隠れながら尋ねる。かなり良くはなったとはいえ、まだまだ男性恐怖症はある。とは言っても、悠人やオレには恐怖をあまり感じないみたいだけど。

浩平はメリルに誰と言われたのがショックだったのか微かに落ち込

んでいた。

その背中を傍目から見れば慰めるようにリースが叩いている。そう、見れば。

実際はバシバシと音を大きくして叩いている。

「えっと、学園自治政府の佐野浩平。今日は会場に歌姫様をお連れするために来ました。というわけで、周、いいか？」

「ああ。時間が迫っているんだろ？」

「言うほど迫っている状況ではないけど。護衛の二人も来てくれていいよ。まあ、お嬢さんの手は煩わせないけど」

そう言いながら浩平は笑みを浮かべる。確かに、室内でも浩平のリフレクトショットはかなり有効だからな。

「わかりました。では、また後で」

メリルがオレに一礼をして浩平の後を追いかける。リマの背中に隠れるようにしながら。

すると、怒ったような表情のリースが近づいてきていた。

「どうしてあなたがここにいる？」

怒りの矛先はもちろん正。

正は微笑を浮かべている。

「どこにいてもいいとは思うけど？　僕は神出鬼没だからね」

「そんなことはどうでもいい。目的は？」

オレは二人に見えない位置でレヴァンティンを取り出す。だが、二人は確実に気づいているだろう。オレがレヴァンティンを取り出したことに。

「久しぶりの体育祭なんだ。参加させてもらってもいいよね」

「それがあなたの目的？」

リースの言葉に正は頷く。リースはそれを見て小さく息を吐き、力を入れていた体から力を抜いた。

「それならいい。でも、変なことをしたら」

その瞬間、リースの気配が膨れ上がったのがわかった。リースはあまり本気を見せない。だから、本気になった時の力は隊長であるオレですら把握しきれていない。

「あなたの存在をこの世から完全に消滅させる。たとえ、あなたが逃げても、私の竜言語魔法はあなたに喰らいつく。たとえ、私を殺しても、私の竜言語魔法が敵討ちをする。そのことを、忘れないで」

その言葉と共にリースがオレ達に背中を向けて歩き出す。

オレは小さく息を吐いた。呆れているわけじゃない。呼吸をするのを忘れていたのだ。リースの気配はそれほどまでに強く、そして、

恐ろしいものだったから。

まるで、本気の慧海と相対してるかのような感覚。若き天才魔術師。まさに、リースにはその肩書が適当であった。

「周」

正の言葉が聞こえるとともにオレの手を正が掴んだ。その手は震えている。オレは汗まみれだけど、正は震えている。

「少しだけ、こうしていていいかな?」

「ちょっとな。少しだけ」

「ありがとう」

正のその言葉を聞きながら近くにある時計を見る。時刻的にはまだ余裕はある。後、五分くらい。それまでの間は近くにいよう。今、こんなに怖がっている女の子を見捨てて行くことはオレには出来ないのだから。

第百二十五話　オープニングセレモニー

「理由を説明していただけますか？」

オレの目の前に立ちふさがったのはにっこりと笑みを浮かべた都。

それだけならオレも何とか頑張れただろう。でも、その手に断章が握られている以上、オレは掴んでいた手を離しその場に土下座をする。

「あっ」

少し寂しそうな声が聞こえるが今は我慢した方がいいだろう。ただ、本音を一言言いたい。

「どうして都がここにいるんだ？」

「周様が見知らぬ女の子と密会しているとリースさんから聞いたものですから」

にっこりと深いまでの笑みを浮かべる都。オレは部屋の端にいるリースを横目で睨みつけた。その顔に浮かんでいるのは笑いをこらえる表情。

確実に狙っていたな。

「だから、これには、事情が」

「事情ですか？　周様にはしなければならない仕事があるのではないのですか？　それすらも放っておいて女の子とうつつを抜かして

密会することを優先とする用事なのですか？」

どうやら勝ち目はないようだ。

「すみませんでした！！」

オレはその場に土下座した。この状態の都には誰も勝てない。訓練中の音姉と同じだ。有無を言わさぬくらいにっこりとした笑みのまま放たれる怒りの言葉。どう考えても恐怖だよね？

「し、周は謝らなくていい。僕が悪いから」

「いえ、女の子に罪はありません。悪いのはずべ手周様なのですから。ねえ、周様」

「違う。僕が悪いんだ。周はどこも悪くない。周はただ、僕の隣にいてくれただけだから」

多分、それが、ダメだったんだろうな。

「仕方ありませんね。そろそろ、オープニングセレモニーという名のリベンジマッチが始まりますよ」

「もうそんな時間か？」

オレが頭を上げて時計を見ると確かに近くなっていた。そろそろ向かわないと間に合わない。

オレは小さく息を吐いて立ち上がる。

今、第７６移動隊専用の部屋にいるのはオレ、都、正、リースの四人だけだ。他のみんなは会場に向かったのだろう。

それに、フュリアス乗りとしてはオープニングセレモニーは絶対に見逃せない。

「じゃあ、みんなで行きますか」

「先に行く」

その言葉と共にリースが部屋を出て行こうとする。その表情には笑みが浮かんでいた。もう、隠す気はないのだろう。

正も憮然とした表情でリースを見ている。すると、リースは笑ったまま、

「そのままでいる正は、可愛い」

そう言うと部屋から出て行った。オレはそう言われた正に話しかけようとして、何故か拳がとんできていた。

オレはギリギリで避けながら距離を取る。拳を放った当の本人は顔を真っ赤にして右の手のひらで頑張って隠そうとしながら左の手のひらをオレ達に向けていた。

「み、見るな！　頼むから僕を見るな！」

「ほわっ」

そんなことを言う正の姿にオレは一瞬見惚れ、何か棍棒のようなも

ので後頭部を思いっきり殴られていた。

「周様、女の子のお願いはしかと聞き入れないとだめですよ？」

振り返ると、そこにはにっこり笑みを浮かべた都の姿。

そんな都に恐怖を感じていると誰かが走り、部屋から出て行く。どう考えても正です。

「少し、お仕置き、しましょうか」

「ちょっとは加減してくれよ」

開会式後にやるオープニングセレモニー。いつもは有名人歌手や有名チーム同士の試合など、様々な意向をこなされてきた。そして、今年、今までのものより完全に白熱するであろうものとなっている。

それを打診してきたのは音界側からだが。

「周はもしかして知っていたの？」

会場でオープニングセレモニーの内容に知らされ、興奮した面持ちのメグが嬉しそうに尋ねてくる。確かに、今の学園都市にいる大半は興奮すること間違いなしだろう。何故なら、同年代が多く、世界的にも有名なものを使ったオープニングセレモニーだからだ。

正直、このオープニングセレモニーも批判が来る可能性もあったが、その全てをメリルがことごとく抑えた。

『レディース&ジェントルマーン。学園都市体育祭開会式オープニングセレモニーへようこそ。オープニングセレモニーのみの視界を担当する学園都市総合大学四回生筒谷がお送りします』

会場に流れる声。どうやら、オープニングセレモニーが始まるらしい。特設会場の中央にはＦＢＳの筐体がお互いに背を向けて置かれており、その席にはリリーナとルナが座りあっていた。

どちらもやる気満々だからか慣らすためにＣＰＵを相手に戦っている。

『今回のオープニングセレモニーは異色も異色。なんと、今話題のゲームセンターのゲーム、フュリアスバトルストラーカーズを使った戦いです。フュリアスバトルストラーカーズとは、今現在、世界各国で廃部され始めているフュリアスのコクピットを模したものを使い、プレイヤー同士で戦い合うゲームです。そのコクピットも本物を使っているため『ＧＦ』でも訓練に使用されているほど。体育祭ではこれを使用するという異色の競技もありますが、今回のオープニングセレモニーはなんと、記憶に残っている方も多いはず。人界と音界がお互いの最新機を使い戦った世界と世界のフュリアスバトル。あの戦いに熱狂された方も多いはず』

あの時は結局は全世界に配信されたからな。そもそも、最初はそのつもりは全くなく、軍事関係者のみが撮影可能としていたのだが、結局はそれがいつの間にか放映されていた。

まあ、慧海は元から放映するつもりだったみたいだけど。

『今回は音界からの申し入れにより、フュリアスバトルストライカーズを使って擬似的なリベンジマッチがオープニングセレモニーとして行われます！！』

その言葉と共に湧き上がる熱狂。

あの時は文字通り社会現象になっていたからな。フュリアスという今までは空想の産物であったロボットが現実として放送されたのだから。

かの有名な電気街もフュリアスでいろいろ騒がれたっけ。

『今回のオープニングセレモニーは前哨戦として、都島学園都島高校二年生リリーナ・エルブレムＶＳ音界歌姫親衛隊隊員ルナ・アルカトラとの戦いです』

リリーナとルナの二人はいつの間にか向かい合っていた。そして、ちょうど真ん中に置かれたマイクの電源が入る。

「負けないから」

「それはこっちのセリフよ」

二人が睨み合うのを周囲の人達がはやし立てる。その間にオレはメリルの近くまで来ていた。

メリルの隣にいた委員長がオレに気づく。

「海道君、今までどこに」

「野暮用でな。委員長こそ、忙しくないのか？」

委員長は首を横に振った。そして、ハラハラした面持ちで今にも始まりそうな戦いを見守っているメリルを見る。メリルの手は悠人の服の裾を掴んでいた。

「大事なお客さんの接待も仕事だから。まさか、ここまですごいことになっていたのに。全国中継だよね？」

「そうなっている。そもそも、学園都市の体育祭は前々から人気の高いものだったからな。日本唯一の特区であり、世界最大級の学術都市。そして、『ＧＦ』の警護実験区画。まあ、人気ない方がおかしいな。それに、悠人ＶＳルーイの戦いはルーチェ・ディエバイト並みに今でも受け継がれているし」

「そっか。海道君はそういうの詳しいよね。じゃ、私はちょっと離れるから。メリルさんをお願いね」

「わかってる」

委員長がそのまま人混みの中に消えていく。オレは一歩メリルに近づいた。

「なあ、メリル。オレはルナの実力を知らないのだが、どれくらい強いんだ？」

真柴と結城家が起こした事件でもルナはフュリアスを失ったため、早々にオレ達とは別行動で裏方に回っていた。だから、ルナの実力は知らない。

メリルは少しだけ考える素振りを見せた後、小さく頷いた。

「親衛隊の中では最下位。音界では中の上の実力ですね。親衛隊にいられるのも、私と幼なじみという理由ですから」

「へぇー」

つまり、メリルが頑張って人事に干渉しているということか。

「ですが、あなたみたいなタイプです。努力で差を埋めようとする」

「私達と同じなんだ」

後ろから静かについてきていたメグが小さな声を漏らす。メリルはオレを真っ直ぐ見つめてきた。

「優秀すぎる幼なじみや姉を持つルナは、ひたすら努力をしています。おそらく、実戦に参加した回数はルーイやリマを超えるでしょう。例え、相手がトップクラスのパイロットでも、ルナは頑張って食らいつきます。それが、ルナですから」

「つか、本来ならルナとは鈴が戦う予定だったのだけどな」

「えっ？」

オレの言葉にリリーナは驚く。それはそうだろう。今回の順番は実力順なのだから。

「リリーナが希望したんだよ。ルナと戦いたいって。あいつって勘

がいいからさ、何かを教えたいんじゃないか？」

「でも、それで足下をすくわれますよ」

「うーん。でもな、リリーナだから何をするかわからないのだよな」

あいつは試合前に言っていた。

現実で出来ないことはゲームで出来る、と。

『さあ、ソードウルフＶＳアストラルブレイズ、試合、スタート！』

そして、ゲーム上での戦闘が始まる。

第百二十六話　現実では出来ないこと（前書き）

正確には現実では試せないことの間違いですが。

第百二十六話　現実では出来ないこと

ソードウルフが開始早々に地面を駆ける。

ソードウルフはフュリアスの中でも数少ない変形コマンドを有しており、変形することで高速で行動できる。ただし、エクスカリバーと違ってエネルギー消費を必要とする。さらに、ソードウルフが変形できるのは背中の装備がブースター装備をしていないといけない。

つまり、変形中は近接格闘がそれほど強くはない。

対するルナの乗るアストラルブレイズはエネルギーライフルを片手に前に出ている。

ＦＢＳは近接が主なダメージソースとなるけど、ソードウルフは数少ない射撃が強い機体でもある。ソードウルフのフルバーストはコスト３０００機体で半分ほど、２０００となれば八割近く削る驚異の攻撃だ。ただ、そんなことはまずできない。そのフルバーストが滅多なことでは当たらないからだ。ただ、遠距離から放たれた場合、動作に気づかなければ当たり、消し飛ばされる。

ＦＢＳでのソードウルフとの戦いは基本的に近接が基本だ。

『さあ、ついに始まりました。人界ＶＳ音界。第一線は射撃の悪魔であるソードウルフＶＳバランスの高さではＦＢＳ一と名高いアストラルブレイズ。両機共に両選手の愛機でもあります』

解説している間にも戦況は変化する。リリーナがすかさずソードウルフを変形させたのだ。その時には背中の装備オプションも変更し

ている。

この動作には会場だけでなく僕も驚いた。ＦＢＳのプロでも三回に一回しか成功しないと言われている変形換装だ。ソードウルフ専用の換装の仕方で、変形中のとあるタイミングでのみ受け付ける。そのタイミングのシビアさからまずお目にかかれないもの。

まあ、リリーナは実戦でこれをするから余裕だろうけど。

ルナのアストラルブレイズもそれを予測していたのかいつの間にか取り出した対艦刀を振りかぶっていた。

リリーナが背中に手をまわして対艦剣を手に取る。そして、鞘から引き抜いた。

『素晴らしいタイミングでの換装の後は鍔迫り合いだ。ＦＢＳではかなり珍しい鍔迫り合い。この間に、今回の特別ルールです。今回のＦＢＳはコストと制限時間はなく、どちらかが墜ちるまで続きます。つまり、極めて現実に近いバトルということです』

実況が言い終わった瞬間、リリーナが動いた。もう片方の手で対艦剣を抜き放ち、アストラルブレイズに斬りかかる。だが、アストラルブレイズはそれを後ろに下がりながら避けようとして、

「逃がさない！」

リリーナの声がはっきりと耳に聞こえた。リリーナは振ろうとした対艦剣をそのまま投げつけたのだ。ルナはとっさに虎の子であるはずのアストラルブレイズの翼を使ってその対艦剣を受け止める。

アストラルブレイズ専用の防御武装で一定以上のエネルギーがある時に使用できるものだけど、一定以上のダメージを受ければ翼自体が破壊されていく。破壊されればされるほど最高速度や旋回速度など行動で必要な数値が減少していくのだ。エネルギー消費も上がる。

ソードウルフはそのまま対艦剣を握り締め、

「そうはいかないから！」

アストラルブレイズが翼を戻した瞬間、アストラルブレイズの背中の四砲と手の中にあるエネルギーライフルがソードウルフに向いていた。

最近つけられたらしいアストラルブレイズの追加武装で強力な攻撃を放つことが出来る。

実際は現実だと不可能なんだけどね。アストラルブレイズのエネルギー機関ではゲーム内であるような数秒にも及ぶ長時間の射撃ができるエネルギーを生み出すことは難しい。それに、翼を戻した瞬間に放つなんて無理だ。

「むかっ、それは現実だとできないよね！」

「これはゲームよ、ゲーム！」

『おっと、優勢に立ってはずのソードウルフがアストラルブレイズのバーストを受けて大ダメージを受けています。ですが、ゲームだけでなく現実でもバトルが勃発しそうです！』

その実況の言葉に僕とルーイは同時にため息をついた。

「リリーナがごめん」

「こちらも。まあ、ゲームだし」

ソードウルフは起き上がる。だが、その手に対艦剣が一本足りない。対艦剣が全てなければ換装は出来ない。

ソードウルフはその特性上、換装によって戦場を生きる機体。剣のみでもどうにかなるけど、どうしても射撃に弱くなる。

『さて、リリーナ選手はここでどう出るのか。対艦剣を一歩失った以上、射撃戦では不利になるはずですが』

「不利、ね。そんなわけないよ」

僕は小さく笑みを浮かべる。それを怪訝そうにルーイが見つめてきていた。今、バトルはアストラルブレイズの放つエネルギー弾をソードウルフが回避している。近づくこともできるがアストラルブレイズは万能だ。下手に勝負に出れば逆にライフの少ないソードウルフがでは押し切られる可能性もある。

「悠人、リリーナは何を狙っているんだ？　僕にも想像つかないけど」

「えっとね、ゲームでしか出来ないことかな」

「現実では出来ないのか？」

「試すことが出来ない」

試すことが出来たとしても、失敗すればソードウルフ自体が自壊して爆発するだろう。それに、周囲に大きな傷跡を残す。

タイミングはわかるから、ソードウルフがどこまでアストラルブレイズのライフを削れるかどうか。

『膠着状態ですね。今のソードウルフでは射撃戦に難ありですが、おっと、ソードウルフが前に出る。どうやらここは打って出るようです。対するアストラルブレイズも距離を詰める』

リリーナはタイミングを図っている。アストラルブレイズはコスト２５００。そのライフはそこそこ高く、削るにも限度はある。翼を使われてガードする可能性も考えて、ライフは半分以下にしないと成功しないだろう。

リリーナが打って出る。それは完全に捨て身の攻撃だった。何故なら、対艦剣を投げつけたのだ。さすがにその行動は予測できなかったのかルナは慌てて持っていたエネルギーライフルを犠牲に防ぎ、ソードウルフが距離を詰めていた。

そして、アストラルブレイズの体を掴むとそのままバックドロップを決める。

「普通、それする？」

言葉を放てたのは僕くらいの様で、僕以外の全員がポカンと口を開けていた。ＦＢＳで対艦剣を使った近接格闘ではなく、まさかのプロレス技を決めるなんて。

アストラルブレイズはすかさず立ち上がるけど、この時にはソードウルフは飛び上がっており、ブースターの加速によってアストラルブレイズを蹴り飛ばした。

『な、な、な、なんと、なんと！　まさかＦＢＳでバックドロップを見れるとは思いませんでした。確かに、不可能ではありませんし、飛び蹴りは有効な手段ですが、まさか、バックドロップだとは！』

実況が興奮している間にリリーナは使った対艦剣を二本とも収納して換装していた。その手にあるのはバスターライフル。リリーナも面白い装備の選び方をする。

「シュミレーションであんな動きが出来るなんてな。僕も戻ったら試してみるか」

「現実では出来ないことだもんね」

イグジストアストラル以外でそんなことをしたなら確実にフュリアスが壊れる。フュリアスって案外高いからね。ちなみに、飛び蹴りもまず出来ない。だって、フュリアスは硬いから、普通なら相手は大破。こちらは蹴った足が壊れる小破となる。

アストラルブレイズはすかさず予備のエネルギーライフルを構え、ソードウルフが突っ込んでくるのを見た。放たれるエネルギー弾をソードウルフは変形しながら回避する。そして、さらに変形しながらバスターライフルの引き金を引いた。

アストラルブレイズはあまりの行動に反応が遅れバスターライフルの直撃を受けて吹き飛ばされる。これで、残るライフはほぼ半分。

『おっと、この避け方はすごい。ついに、残りライフが逆転しました！　このまま勝負は決まってしまうのか？』

リリーナはその好機に武装を変更して対艦剣を手に取った。そのまま飛び上がりながらアストラルブレイズに近づく。当のアストラルブレイズはエネルギーサーベルを抜いて構えていた。

「あっ」

僕は思わす声を上げてしまう。だって、リリーナが笑みを浮かべたのだから。その瞬間、ソードウルフは対艦剣を上に放り投げ、

『武器を放り投げて、えっ？』

実況が絶句する。だって、ソードウルフが空中でフルバーストを放つ姿勢になったからだ。

ソードウルフのフルバースト。ＦＢＳで最大の威力を誇り、現実でも最高の威力を誇るグラビティキャノン。放つ時に起きる衝撃でフュリアス自体がひっくり返るため、放つ際は、地上で、地面に杭を打ち込み、最大限に逆ブーストをかけた状態で、放たなければならない。

つまり、空中では文字通り一回転以上回転したり、頭から地面に直撃したりする。もちろん、自分のライフがタダでは済まない。その準備に完全に足止めと時間がかかるからだ。そのため、初心者でも避けられる上に誘導性が全くない。つまり、当たらない。

だけど、当てる方法が一つだけ存在する。絶対避けられない距離からの空中フルバースト。そう、リリーナが今しようとしている現実

では出来ないこと。

杭を打つ時間もブーストをかける必要もない。ただ、ソードウルフはグラビティキャノンを構えている。グラビティキャノンは左右に一つずつある砲で、腰に固定することで理論上は１８０。に撃ち分けれる。もちろん、理論上。

そして、一つずつにトリガーがついており、そのトリガーを引くことで放つことが出来る。だからこそできる芸当。

リリーナは右のグラビティキャノンについているトリガーを引いた瞬間、ソードウルフの体が回転した。空中で放てばこういう風に回転するのだ。だけど、その瞬間に異変を感じたアストラルブレイズは両方の翼を盾にしている。

勘が鋭いけれど、フルバーストはそんなものじゃ防げないよ。

半回転した瞬間、アストラルブレイズの体がグラビティキャノンから放たれるエネルギーに呑みこまれていた。会場からは口をぽかんとあけているからか声すら出ない。多分、リリーナは笑っているだろうな。

一瞬にして翼を破壊し、ライフを大量に削りながら、ソードウルフは慣性のまま地面に激突した。ちなみに、この時にはライフの半分が減少する。半分以下なら１は残る。でも、アストラルブレイズはまだ生きていた。翼が全て消え去りながらも、ほんの些細なライフが残っている。

『な、なんというフルバーストの使い方でしょう。こんなものを出来るのはまさに愛機だからこそ。ですが、アストラルブレイズもま

だ残っている。どちらもライフは虫の息。勝負はまだまだ、へっ？』

その反応に僕は笑いをこらえるのに精一杯だった。だって、アストラルブレイズに空中から落ちてきた対艦剣が突き刺さり、残っていたライフが消え去ったからだ。ルナはぽかんとその様子を見ており、リリーナはガッツポーズをとっている。

「悠人」

「リリーナはね、ずっとこれをしようとしていたんだよ。フルバーストでルナが翼を使ってガードすることも想定済みでね」

「なるほど」

ルーイが感心したように息を吐く。確かに、あの技には感心するしかないだろう。何回も練習していて成功率はそれほど高くないのに。

『し、勝者、リリーナ・エルベルム！』

「鈴、勝ったよ！」

リリーナが飛び上がりながらこちらに向かって駆けてくる。そして、躓いた。

「あっ！」

「リリーナ！」

僕が駆けだす。でも、間に合わない。だけど、僕よりも近くにいた鈴が躓いてそのままヘッドスライディングしようとしているリリー

ナ受け止めて一緒に倒れた。

「リリーナ！　鈴！」

僕は慌てて二人に駆け寄った。でも、駆け寄る頃には二人は起き上がっている。僕はホッと息を吐きながら二人に手を差し伸べる。

「大丈夫？」

「鈴、ごめん」

「平気平気。痛っ」

鈴が僕の手を掴んだ瞬間、鈴が顔をしかめた。僕はすかさず鈴に向かって魔術を当てる。

「鈴、どうかしたの？」

リリーナの声に僕は顔が引きつるのがわかった。

「捻挫、してる」

「「えっ？」」

リリーナと鈴の声が重なった。そして、鈴がうろたえて周囲を見渡す。

「次の試合、どうしよう」

「今は試合のことじゃない！　リリーナ、鈴を控え室に。周さんも

呼んで治療をお願い。ルーイ」

僕はルーイの方を振り返った。ルーイは笑みを浮かべて頷いている。

「準備は大丈夫？」

「いつでも」

その言葉に僕は頷いた。

「リマは委員長さんに事情を。本部はあそこだから。リマには悪いけど、一戦だけ中止。僕とルーイが戦うから」

「はい。わかりました」

「悠人、私は出来る」

「駄目だ！」

僕の声に周囲が静かになる。僕は片膝をついて鈴と同じ視線の高さになった。

「今はゆっくり休んで。必ず勝つから」

「でも」

「大丈夫だよ。僕とルーイが最高の試合をする。鈴が怪我をしたことに悔しがるくらいにね」

「うん」

僕は笑みを浮かべて立ち上がる。そして、ルーイに拳を突き出した。

「負けない。絶対に負けないから」

「こっちも、手加減は出来ない」

『皆さんに重大なお知らせがあります。次のバトルに出る予定だった結城鈴選手が手首を怪我したため、一戦を繰り上げ、真柴悠人選手ＶＳルーイ・ガリウス選手との戦いを、行います』

そのアナウンスに会場は湧くけれど、僕達は静かに睨み合っている。

今回は今まで以上に負けられない。もし、負けたら鈴が自分のせいだと思うから。ルーイも鈴のために手を抜くことは出来ない。僕と同じように。

「負けない」

この勝負、絶対に負けられない。

第百二十六話　現実では出来ないこと（後書き）

次はＦＢＳの戦闘ではありません。控え室内での会話です。

第百二十七話　控え室

「三日間安静」

オレは小さく溜め息をついて鈴の手首から手を放した。鈴の手首にはすでに魔術陣を描いた湿布とテーピングを行っている。

委員長が来れないからオレが診断を行ったのだ。

「えっと、体育祭は」

「参加するな。絶対に、必ず。捻挫が癖になればただでさえ衝撃の多いイグジストアストラルで戦闘していても捻挫するだろ」

「リリーナ、助けて」

「ごめん。怪我をさせた本人が言うのもなんだけど、これだけは私は周の味方でいるから」

リリーナが本当に申し訳なさそうに鈴に言う。というか、今にも泣きそうだよな。そばにはリマもいるからちょっとは大丈夫か。

鈴は座っていた椅子から立ち上がる。

「でも、期待していた人達もいるから、その人達の期待を裏切るわけには」

「私は、怪我をしていたから負けた、という理由で勝ちたくありませんから」

だが、そんな鈴に対してリマが少しきつめの言葉で言った。言われた鈴は驚いてリマを見ている。

「私はあなたの全力と戦い、全てを叩き潰す。それが出来ないなら例え実戦でも戦う価値はありません」

「そういうわけだ。捻挫自体、それほど酷いわけじゃないし、あまり手を使わないようにすれば大丈夫だから」

魔術はこういう時は不便だ。傷を強制的に塞ぐことは出来ても、捻挫のような体の内部で起きる怪我には対処が難しい。切り傷の方がそこまで作用出来るので対処がし易いのだ。
治せないというわけじゃないけど、専用の機器が必要だし、なによりお金がかかる。鈴はそのようなことは望まないだろう。

「まあ、安静にしていれば三日目には動けるようになるさ。とは言っても、二日間も絶対安静にしているわけにはいかないだろ」

「うん。体育祭期間中だし」

「リリーナに手伝ってもらえ。悠人は、うん、無理だな」

悠人ってパワードスーツを着ていなかった運動神経は皆無だからな。魔術の才能は悪くないのに。

「鈴、ごめん。私のせいで」

「謝らないで。私だって興奮してリリーナに近寄っていたから。私はリリーナが勝って本当に嬉しかったよ。だから、謝らないで」

「でも」

「でもじゃないだろ。オレはあの時の状況を知らないから大したことは言えないけど、聞いた以上は手を捻挫する方がおかしいからな」

鈴は手首を捻挫している。もし、本当に手首を捻挫しようと思えば倒れる時に片手で受け止めないといけない。普通なら倒れてくる相手は両手で受け止めるのに。

つまり、鈴は変な体勢で受け止めたか、変な状況になっていたかのどちらかだ。

「反省しています」

「周、鈴は悪くないよ。悪いのは全て」

「どちらも悪い。リリーナがはしゃいだのも悪ければ、鈴も我を忘れていたのも悪い。オレ達は第７６移動隊だ。どんな時でも助ける時は冷静になれ。まずはそれが第一だ」

自分が冷静でないのに助けに行けば二次災害の可能性が大いにある。特に、戦場では命取りだ。

とは言っても、オレもそこまで強く言うつもりはない。

「「ごめんなさい」」

二人の声が重なる。二人共、ここまで言えばこれからはもっと気をつけるだろう。

「わかったならいいさ。そこまでとやかく言うつもりはないし、鬱陶しく思われたくないからな。以後、気をつけること」

「ふふっ、すっかりお二人のお兄さんですね」

「オレはいつからそんな役になったんだ？」

笑いながら言うリマに対してオレは小さく溜め息をついた。

「つうか、お兄さんなら悠人」

「悠人は弟」

「うんうん。悠人は弟だよね」

「と、言っていますが？」

だからと言ってオレが兄だというのは納得がいかない。せめて上司だろう上司。とは言っても、この二人は部下には見えないしな。

そう考えていた時、控え室のドアが勢いよく開いた。

「何で私がインタビューを受けなければいけないのよ！」

開口一番に、入ってきたルナが声を荒げる。まあ、普通はそうだろうな。

鈴が手首を捻挫するというアクシデントでリリーナが控え室に鈴を連れて行ったため、ヒロインインタビューではなく敗北者インタビ

ューがあった。もちろん、受けたのはルナだ。

ルナは怒りに満ちた目でオレを見ている。まあ、そうし向けたのはオレだからな。睨みつけられるのは仕方ない。

「海道周！　あんたね、あんたのせいで私は赤っ恥を受けたのよ！」

「滅多に経験出来ないたろ。敗北者インタビューって」

「普通はしないわよ！　せっかく勝とうと息巻いていたら、現実では出来ないこととされて負けたし」

「出来ないってわけじゃないよ。ただね、グラビティキャノンの特性上、何もない荒原じゃないと試せないだけだから」

確かに、　グラビティキャノンの最大射程は約２０ｋｍ。ただし、命中の可能性が高い距離でそれだ。エネルギー弾の減衰率から考えて実際値最大射程は２５０ｋｍほど。ちなみに、それくらいで最低威力のエネルギー弾程度の威力まで減衰する。

それより距離を取ると武器としては作用しない。

「確かにそうですね。グラビティキャノンの威力は未だに開発部が再現出来ていませんし」

「そりゃな。ソードウルフの最大出力は現存するあらゆるフュリアスの中で最大だからな。イグジストアストラルやマテリアルライザーも勝てない」

「あのエンジン機関は化け物だよね。実際にスペックを知っている

から言えるけど、普通のエンジン機関を使えば数秒で停止するからね」

ソードウルフはエネルギーバッテリーとエンジン機関のハイブリッドだ。エンジン機関もエクスカリバー並みの出力のある大きなものを作っている。

だから、最大出力という点ではハイブリッドタイプのソードウルフに勝つのは難しい。

おかげで維持費がかなりかかる。

「わかっているわよ。ソードウルフの桁が違うことくらい。問題はあんた！」

ルナが指差してきたのはオレにだ。オレは思わずまばたきで返してしまう。

「戦いに負けたのはいい。リリーナの実力はすごかったし、私もまだまだ未熟だとわかったからいいの。でも、敗北者インタビューだけは納得がいかない」

「ただの時間稼ぎだよ。本当ならすぐにやる予定だったけど、メインイベントの悠人とルーイがアップする時間は必要だ」

「それでも、リリーナは怪我をしていないから私じゃなくてリリーナがヒーローインタビューを受ければいいじゃない」

ヒーローインタビューじゃなくて正確にはヒロインインタビューなんだけどな。そういう細かいところはいらないか。

「悠人が一緒にいれない以上、リリーナがついていないと心細いからな。鈴もリリーナも悠人も、みんなで一人みたいなものだし」

「はぁ、わかったわよ。確かに、悠人達はみんなで一緒が一番だわ。でも、それはいいことじゃない。いつか離れるかもしれない。海道周、あなたの過保護面もいいかもしれないけど、いつかは離れ離れになることを考えておきなさい」

「それくらい、理解しているさ。まあ、敗北者、インタビューをさせたのは悪かった」

わざと敗北者という表現を強くして言うとルナは顔を引きつりながら笑みを浮かべている。

「いい度胸ね、海道周。あんたとはいつかフュリアスで決着をつけないといけないと思っていたのよ」

「そうかそうか。なら、エリシアを呼ばないとな。マテリアルライザーを使わないとオレは本気を出せないし」

オレが余裕を浮かべてそう言うとルナの血管が切れる音が鳴り響いた。もちろん、幻聴だろうけど、今の状況ならそれが正しい。

リマが慌ててルナをなだめようと近づく。

「望む所よ！　あんたなんてこの私がボッコボコに倒してやるんだから！」

「ルナ、落ち着いてください。それに、マテリアルライザーに勝て

るわけがありません」
「姉さん！　放して！　こいつだけは、こいつだけは！」
「にゃはは。周、遊びすぎじゃないかな？」
おそらく、今の状況を一番楽しんでいるであろうリリーナが笑いながら語りかけてくる。対するオレは小さく溜め息をついた。
「やりすぎた、が、反省はしていないから」
「相変わらずだね」
リリーナが心底楽しそうに笑う。オレはこの状況をどうするか一瞬だけ考えて、一瞬で諦めて肩を落とす。
結論はどうしようもない。今頃、悠人とルーイが凄まじい戦いをしているに違いないのに。
オレはその様子を頭の中で思い浮かべながら小さく息を吐いた。

第百二十七話　控え室（後書き）

次回、悠人ＶＳルーイ

第百二十八話　ダークエルフＶＳアストラルルーラ

『これがオープニングセレモニー本戦となります。人界最強のパイロット真柴悠人選手ＶＳ音界若手トップにして歌姫親衛隊隊長ルーイ・ガリウス選手。過去にエクスカリバーＶＳアストラルソティスという大試合を行った両選手が、片や昔の専用機を改造した機体に乗り、片やは音界の最新機に乗り、ＦＢＳというリアルではなくゲームの場であの激戦が再現されようとしています』

僕は小さく息を吐いた。今回使うのはエクスカリバーじゃない。今朝方、リュミエール内部のＦＢＳにのみアップデートされコスト１０００の機体からコスト２５００まで上方修正された機体、ダークエルフを使う。対するルーイもアップデートされ参入したばかりのアストラルルーラを使う。

どちらも初お披露目。特に今までのＦＢＳでここまで上方修正されたことのない初めての機体であるダークエルフにみんな興味津々のようだ。

「緊張していますね」

近くで僕達を見ているメリルが僕に向かって笑みを浮かべる。それに対して僕は頷いた。

「そうだね、緊張するよ。今回の戦いは負けられないし、それに、負けたくない。ルーイには絶対に負けたくないから」

「ルーイも負ける気はないようですよ。それに、アストラルルーラは私の娘みたいな機体ですから。負けません」

僕はメリルと笑い合う。僕が負けられないのと同じようにルーイも負けるわけにはいかない。アストラルルーラは初お披露目の機体だからだ。否応無しに注目は浴びるし、相手はあのダークエルフ。僕がルーイと出会った時に乗っていた機体。

あの時のルーイはアストラルブレイズだったけど、ルーイからすれば感慨深いだろう。

『今回はダークエルフがコスト２５００、アストラルルーラがコスト３０００と５００のコスト差がありますが、両選手、これを負けた言い訳にしないという条件でこの変則マッチは行われます。片やコスト１０００最強機と名高かったダークエルフと最新機のアストラルルーラ。コスト１０００からコスト２５００への上方修正にはかなりの驚きですが、三機目のコスト３０００であるアストラルルーラにも否応無しに注目してしまいます』

確かに、コスト３０００と判断されたアストラルルーラにはかなり注意が必要だ。スペックと装備は見たけど、知っていても回避が難しい装備をアストラルルーラは持っている。

ダークエルフにもそれに近い装備はあるけど、純白のコート、ＡＥＷＣに対抗するための装備だ。アストラルルーラみたいに万能な使い方は出来ない。

でも、戦う方法は決めている。

『両選手共に準備は出来たようです。さあ、試合開始までの時間。会場にいる誰もが息を呑み待っています。さあ、始まります。ダークエルフＶＳアストラルルーラ。世紀の戦いが今、再び』

機体選択は終了。ルーイも選択は終わっている。すぐに画面が変わる。戦いが、始まる。

ダークエルフＶＳアストラルルーラ。

僕はレバーとペダルを握りしめた。ルーイからのリベンジマッチが、今、始まる。

『バトル、スタート！』

その瞬間、僕はペダルを踏み込みレバーを動かしてダークエルフを走り出させていた。アストラルルーラはこちらに腕を向けている。

僕はすかさず横に飛ぶ。エネルギー消費は大きいけれど、アストラルルーラが放つ攻撃はこれでしか避けられない。

アストラルルーラが放ったのはアンカーだ。ただ、先に何かを掴むような鋏がついている。災害救助現場ではブースターによって行くには危険な場所があるため、ロープの代わりに使用するのが目的だ。ＦＢＳでは威力がない代わりに捕まえる用の武装となる。

そのアンカーはダークエルフの横を抜ける。最大射程はかなり長い。

僕は地面を蹴りながらダークエルフの武装から対抗出来そうな武装を考える。すぐさま結論を出して、僕はダークエルフの動きを止めずにアストラルルーラに向かって腕を向けた。

放つのは同じようにアンカー。ただし、先についているのはカッターだ。アストラルルーラとは違い完全な攻撃用。アストラルルーラ

はそれをちょうど戻ってきたアンカーで弾いた。

その瞬間に前に走る。ＦＢＳに存在する致命的な硬直。それが攻撃を弾いた時に存在する。攻撃を受けた時や攻撃を受け流された時、受け流した時は必ず同じ現象が起きる。タッグを組んでいる時は必ずこれを利用する。一人の時は無理やり作り出す。

硬直時間はほんのコンマ数秒。その瞬間には距離を詰めていた。アストラルルーラはすかさず対艦剣を手に取る。僕は対艦剣を手に、

「なっ」

取らなかった。ルーイの驚いた声と共にダークエルフの体がアストラルルーラの懐に入り込む。そして、そのまま対艦剣を持つアストラルルーラの手を掴んだ。

手を掴み、引っ張りながらアストラルルーラの体を背中に乗せる。そして、そのまま勢いよく投げるようにダークエルフを動かした。

『せ、せ、せ、背負い投げだ！　なんと、フュリアスで、背負い投げを行った！』

そのまま腕を掴んだままハンマー投げの要領で投げ飛ばす。威力はあまり高くはない。バックドロップのようにフュリアスの弱点でもある頭を破壊するならともかく、背負い投げでは弱い部分を直接攻撃することは出来ない。

直接攻撃するならバックドロップを決めればいい。でも、バックドロップでは相手の攻撃をバックドロップの最中に受ける可能性がある。その点では背負い投げに心配はない。

『威力はあまり高くはないようですが、確実にダメージを受けていますね。近づけば同じ技を受ける可能性があるあります』

僕の一番の狙いはそれだ。ＦＢＳのダメージソースは近接攻撃。でも、その近接攻撃をかいくぐってカウンターを受けるとするならどうなるか。近接攻撃は簡単に出来なくなる。

でも、これは別の意味でもある。ＦＢＳのダメージソースは近接攻撃。でも、現実のダメージソースは射撃だからだ。

僕は距離を取りながらエネルギーライフルを掴んだ。起き上がったアストラルルーラもエネルギーライフルを掴んでいる。どうやら意図は伝わったようだ。

「これからが本番だよ。メリル。例えゲームでも、僕達の戦いはリアルを追求する！」

僕はダークエルフでエネルギーライフルを構えて引き金を引いた。

「やっているな」

ようやく会場に舞い戻ってきたオレ達はあまりの人混みに会場に入るのを断念して会場の近くにあるモニターに近づいていた。

そこには激しく撃ち合っているダークエルフとアストラルルーラの

姿。撃ち合いでは弱いのか、ダークエルフが若干押されているようだ。

まあ、悠人とルーイは最初からこれで戦うつもりだったんだろうな。

「悠人はもう少し近づけばいいのに。鈴もそう思うよね？」

「うん。でも、悠人の考えは違うと思う」

「そうですね。ルーイも同じ考えのようですし」

「姉さん、どういうこと？」

どうやら鈴とリマは気づいたらしく、リリーナとルナは気づかなかったようだ。確かに、これを気づくのはお互いをよく知っていないとな。

「悠人もルーイも、射撃戦で戦うつもりなんだろ？　本当なら近接攻撃を狙った方がいいタイミングで射撃しか使っていない。どちらも射撃戦がしたいと思っているんだ」

ダークエルフもアストラルルーラも目まぐるしく動き回っていた。地形を有効に利用し、相手のエネルギー弾を避けながらエネルギー消費を気にしつつ相手の着地を狙っている。

普通の射撃戦としてはどちらも攻撃的でまるでタッグ同士の戦いを見ているようだった。

「そっか。ＦＢＳじゃダメージソースは近接だけど、実際は」

「射撃がダメージソース。でも、そろそろアストラルルーラの本気は見れそうだな」

アストラルルーラはタイミングを計っている。おそらく、アストラルルーラが動き出した瞬間にダークエルフも動くだろう。

「悠人、ルーイ。不満だらけのこの会場を、どう変える？」

観客の声がうるさい。もう少し黙っていて欲しい。もうすぐだ。もうすぐルーイは突っ込んでくる。その時がクライマックスに相応しい。

アストラルルーラが放ったエネルギー弾の三連写を避けた瞬間、アストラルルーラの翼が開いたように錯覚した。いや、ずっと開いていたはずなのに、動きが違う？

僕はすかさず足についている武装を取り出した。

アストラルルーラの体が加速する。だが、この加速は、

「くっ」

僕はダークエルフの体を捻りながら急に現れたアストラルルーラの攻撃を避けつつその手に取り出したフュリアス用のナイフであるスラッシュナイフを投げつけようとした。だけど、それより速くアストラルルーラがもったスラッシュナイフがダークエルフの体を直撃

する。

後ろにダークエルフが吹っ飛ぶが、僕は吹っ飛ぶ体勢のままスラッシュナイフを投げつけた。追加攻撃を行おうとしているアストラルルーラはそれを受け流す。受け流しながらも追いかけてくる。その前を、パージした装甲が塞いだ。

スラッシュナイフを投げつけた瞬間にＦＢＤシステムを起動して全追加装甲をパージしたのだ。そのパージした分がアストラルルーラの目の前にある。

アストラルルーラは受け止めることが出来ずにパージした装甲にぶつかった。目的通り。

装甲をパージする前に握っていた装甲の装備であるスラッシュナイフをアストラルルーラに投げつける。アストラルルーラは避けることが出来ずにスラッシュナイフを受けて、

両翼の端についていた砲がダークエルフを狙っていた。

避ける距離じゃない。ダークエルフは停止状態。でも、今は、

「行けっ！」

放たれたエネルギーの奔流をくぐり抜けるようにダークエルフを前に出した。だけど、完全に避けきることが出来ず、両腕が吹き飛ばされる。

ＦＢＤシステムを起動している最中に腕にエネルギー弾を受けると腕が吹き飛ぶからだ。この状態になれば攻撃はまず当たらない。で

も、新しいダークエルフはこれでは終わらない。

両翼の端から放つエネルギー弾によって起きるほんの僅かな行動停止時間。その隙に僕はアストラルルーラの顔面に向かって跳び蹴りを放っていた。そして、跳び上がった瞬間に、ギミックが発生する。

ちょうど右の膸に当たる部分が開き、そこからスラッシュナイフが射出されたのだ。スラッシュナイフはアストラルルーラの顔面を貫き、少しの間の停止をもたらす。そして、そこに跳び蹴りが入った。

アストラルルーラのライフがガクンと減少し、ほんの少しだけ残る。ダークエルフもライフは後少しだ。だから、跳び蹴りを入れたまま、一緒に倒れるように体重を動かして、左の膸にあるスラッシュナイフが残っていたアストラルルーラの胴体を貫いていた。

そのスラッシュナイフの一撃は的確にアストラルルーラのライフを削りきる。

だけど、それと同時にダークエルフのライフも削り取られていた。

画面に映るのはライフが失ったため爆散するダークエルフとアストラルルーラ。それを見ながら僕はポカンと口を開けていた。

第百二十九話　引き分け（前書き）

いつの間にやら４００話目。長かったような短かったような。これからもどんどん頑張ります。

第百二十九話　引き分け

オープニングセレモニー　ダークエルフＶＳアストラルルーラ　引き分け

大きく書かれたその文字にオレは苦笑していた。ＦＢＳに引き分けがあったことに驚いている。

オープニングセレモニーの結果は文字通り引き分け。だが、試合内容は素晴らしいというべき状況だった。近接格闘から射撃戦までリアルを追求したかのような動き。

会場の大半が満足し、残る面々も射撃戦ではなく近接を行えば良かったというだけで、ほぼ全員が満足していた。

満足していないのは試合が終わった瞬間にポカンとしていた悠人とルーイくらいだろうか。今では悠人が初戦を圧勝で終わらせて第７６移動隊の部屋に二人で引きこもっている。

体育祭最初の競技も見る限り順調だ。

「すごい、熱気ですね」

会場を見渡したオレにメリルが声をかけてくる。委員長達はかなり忙しく、持ち場に付きっきりだ。というか、足りていないのかリリーナですら借り出されている。

「音界にはこんな行事はないのか？」

「それほどありませんね。音界は人界と比べて緩やかな生活ですから。時は金なり、ではありません」

「なるほどね。隠居生活にはもってこいだな」

「そうですね。では、悠人と共にあなたが音界に来るのはどうですか？　今なら陸軍将校の地位を授与出来ますよ」

その言葉にオレは苦笑した。最初の頃と比べてみればメリルはかなり男嫌いがマシになっているように思える。とは言っても、さすがに悠人やオレくらいにしかまともに話せないけど。

特に悠人とはまるで昔から知り合いだったかのように話している。というか、一番、音界に行ったことのある人界の人間だろうな。

「魅力的だけど遠慮しておくよ。オレは今の第７６移動隊というポジションが気に入っているんだ」

「そうですか。では、『ＧＦ』を追われるような事態になれば、いつでも歓迎しますよ」

「例えそういう事態になっても、彼は第７６移動隊を守り続けると思うよ」

その言葉にオレとメリルの二人は振り返っていた。そこには都島高校の制服を着た正の姿。ただし、その手首に巻かれている腕時計に関してはデバイスだろう。でも、正はこんなデバイス持っていなかったような。

メリルが体を強張らせたのを見た正が優雅にスカートの裾を掴んで

礼をする。

「やぁ。先ほど会ったと思うけど？」

「今の状況で私達に気づくとは思えないので」

確かにメリルは歌姫の力を使っている。能力的には関係者以外は気づかないものだ。もちろん、メリルが指定した関係者は第７６移動隊とルーイ達だ。

それなのに正は気づいたというのに驚いているのだろう。

「そこはデバイスが優秀だからね。先程の試合、両選手共に素晴らしいものだったよ」

「それにはオレも同意見だが、どこに行っていたんだ？　探していたんだぞ」

「ごめんね。さすがに、あんなことがあったばかりだと恥ずかしく君に合わす顔がなかったのだよ。大丈夫。多分、もう大丈夫だから」

それならいい。正が一人の時に身分確認をされたなら大変なことになる。

「デバイスが優秀ですか。そうですか」

すると、メリルはオレが思ったこととは違うように意味深く頷いていた。おそらく、いや、確実に別の答えを考えている。

その答えはわからないけど、正の目が若干鋭くなったことを考えて

それが正しいのだろう。

「ところで、周。君はこれからどうするんだい？」

「どうすると言われてもな」

はっきり言うなら暇になるだろう。確かに仕事はあるし、体育祭参加種目もあるが、それを行うのは明日だ。

それまでは基本的にオレは様々な部署の渡り歩き。他の面々はそれぞれが担当する場所での警護。

「そんなに忙しくはないな。一点にいられるほど暇でもないし」

「そうか。なら、僕は君について行くことにするよ。久しぶりの学園都市だ、何が変わったか確認したいからね」

「神出鬼没だから歩き回っているように思えたけど？」

「心外だね。この制服を調達出来たのがごく最近だからね。いつものゴスロリ服を着ていれば目立つだろ？」

「まあ、場違いだな」

正の言うようにゴスロリ服を着ていたなら明らかに場違いだと考えていいだろう。まあ、メイド喫茶が存在する近くなら違和感はなさそうだが。

体育祭期間中は競技の参加は体操服で外出も出来る限り体操服か制服推奨だが、その日に競技が無い場合は別に私服でもいい。本戦最

終日となれば参加者はかなり減るのでコスプレする人はかなりの数に昇る。

最終日は堂々とゴスロリ服で来るだろうな。

「まあ、いいか。ただし、歩き回っている間は出来る限り変な行動はするなよ。ただでさえ、正は正規の手段で学園都市に入ったやつじゃないんだ。だから、大人しくすること」

「大丈夫だよ。君と二人なら必ず大人しくしてみせる」

「途中から亜紗が加わるから」

その言葉に正が固まった。そもそも、今日は亜紗と回る日だといつの間にか決まっていたのだ。半分強制で。

明日は由姫で明後日はアル。明明後日になれば都となっている。確かに、デートが出来ない以上、こうなっても仕方ないだろう。

「べ、別にいいさ。いくらでも我慢することは出来る。ところで、音界のお姫様はどうするつもりだい？」

「これからの予定は話していなかったな。まず、メリルとルーイをオレとお前で護衛しながら航空区画にまで向かい、見送る。それからが行動開始だ。後はルーイが来るまでなんだが」

本来ならルーイはすでに合流しているはずだった。だけど、ここにルーイの姿はないし、ルーイがいる場所は容易に想像がつく。

オレは小さく溜め息をつきながら周囲を見渡した。

「とりあえず、控え室に向かいますか」

「絶対にルーイの方が早かった！」

「いや、絶対に悠人の方が早かった！」

控え室のドアを開けた瞬間、オレの目には信じられないものがあった。何故なら、悠人とルーイが言い争っているからだ。ただ、信じられないものは今聞こえてきた言葉だ。

「鈴！　絶対にルーイの方が早かったよね？」

「リマ！　絶対に悠人の方が早かったよな？」

悠人はルーイを、ルーイは悠人が勝ったと主張しあっているからだ。タイミング的にはほぼ同時、ダークエルフが放ったスラッシュナイフとアストラルルーラが放ったスラッシュナイフはほぼ同時に突き刺さっていた。というか、レヴァンティンが同時に突き刺さったと言うくらいだ。

それほどまでに同じタイミングだったのに、二人は相手が勝ったと言い合っている。かなり珍しい言い争いだ。

「お前ら、何しているんだよ」

「周さん。あの勝負、絶対にルーイが勝ちましたよね？」

「いや、あれは悠人の勝ちだ」

『私が見ていた限りほぼ同時ですね。ただ、ライフが無くなったのは同時なだけでスラッシュナイフが当たったのは悠人さんの方が早かったですよ』

レヴァンティンの結論は引き分けだ。でも、この二人に引き分けは納得されない。

「そんなわけがない。悠人のダークエルフは信じられないくらいの機動性、柔軟性にアーマーパージによる目くらましなど僕には出来ない様々なテクニックを使っていたんだ。確実に僕より悠人の勝ちだ」

「ルーイもすごかったよ。瞬間移動（ショートジャンプ）に目くらましを受けた後の両翼からの射撃。さらにはほんの一瞬の隙をついたスラッシュナイフの射出。あれはどう考えてもルーイの勝ちだよ」

結局はどちらも相手が素晴らしかったということだ。確かに、悠人もルーイもありえないくらい素晴らしかった。だから、相手を賞賛しているのだろうと思いたい。

「周さん、どっちの勝ち？」

「そうだな。僕も周に」

「お前ら、いい加減にしてくれ」

オレはただ、小さく溜め息をつくことしか出来なかった。

第百三十話　航空区画

学園都市航空区画。

航空空母エスペランサの登場により一気に発展した航空艦。それにより学園都市にも航空艦専用の航空区画と呼ばれる場所がある。

そこは許可証のある航空艦なら自由に離発着可能な場所だった。そこから一機の航空艦が飛び立つ。

長距離航空防護艦。

『ＧＦ』が開発した重要人物を乗せる航空艦だ。エアフォースワンと考えればいいだろう。あれほどの機密性は無いが。

メリルが乗った航空艦が飛び立つ。それを見ながらオレは小さく溜め息をついた。

『どうかしたの？』

航空区画でちょうど合流した亜紗が首を傾げながらオレを見てくる。そばには正もいるが、正は怖い顔をして周囲を見渡していた。

見ているのはオレを悩ませている存在。

少し大きめの体をしたフュリアスだ。攻撃的というより防衛的に開発された機体なのだろう。両肩には取り外し可能なショルダーシールド。左手にもシールドがあり、右手に至ってはエネルギーシールドの発生装置すらある。

防衛という点から言えばかなり強力な機体になるであろうフュリアス。

「これは、日本政府が開発した機体だね」

正の言葉にオレは頷いた。ショルダーシールドにあるのは日の丸。どう考えても日本政府が開発した機体だ。

もうすぐ公開される最新型のフュリアス。型番は確か、

「第７６移動隊の隊長さんは、偵察にでも来たのかな？」

その言葉にオレは振り返った。そこにいたのはピッチピチのパイロットスーツを着た男だった。パイロットスーツの材質はかなり高級品だろう。普通のパイロットスーツ、悠人が着るもの（パワードスーツの下に着るインナースーツとは違う）ですらもう少しモコモコしている。

材質がよければ薄くなるという話はよく聞くことだ。

「偵察じゃなくて見送りだ。オレの名前を知っているということは」

「政府委託期間『黄泉川委託事務所』所長黄泉川司だ。今回はイージスの学園都市での演習の部隊長としてここにいる」

「第７６移動隊隊長海道周。音界の代表を見送るために来ていた。本来なら見るつもりはなかったが、フュリアスの開発関係者としてみれば放っておけなくて」

「わかるぜ。俺も歴戦のフュリアスパイロットだからよ。第７６移動隊ってことは悠人の坊主は元気にしているか？」

黄泉川の言葉にオレは驚いていた。まるで、悠人を知っているかのような言い方だったからだ。

黄泉川はオレ達の顔が面白かったのか笑みを浮かべる。

「俺は昔『ＥＳ』にいたんでね。まあ、『ＥＳ』穏健派基地を守れなかった不甲斐ない男さ」

「アルの部下だったのか」

「アル・アジフ殿とはあまり接点は無かったが、悠人の坊主とはよく模擬戦をしたよ。あいつの強さは格別でよ、一度も土をつけることが出来なかった」

確かに、悠人の強さは桁違いだ。よくよく考えてみると、勝てないイグジストアストラルや勝負出来ないマテリアルライザーを除いて一度も負けていない。

「悠人なら元気だぞ。アポさえ取れば会うことは」

「いや、こんなおじさんが若者の邪魔をするわけにはいかないだろ。それに、俺はイージスのパイロットだ」

『イージスって海洋艦の名前じゃないの？』

亜紗がスケッチブックを黄泉川に見せる。黄泉川は驚いたように亜紗を見て、そして、納得したように頷いた。

「確かに海洋艦にイージス艦ってのはあるな。あんなアホみたいにコストがかかる海洋艦。イージスはフュリアスだ。フュリアス開発において数歩遅れている日本政府が開発した防衛に特化した機体」

「確かにな。ショルダーシールドに普通のシールドとエネルギーシールド。おそらく、バックパック装備でフレアやチャフ、電子戦装備に変更出来るんだろ？」

「ビンゴ。さすがは第７６移動隊隊長だな。まあ、本番二日目にイージス部隊の演習が公開されるからな、客はもらうぜ」

日本政府が作り出した最初のフュリアス。技術大国と呼ばれる日本が唯一遅れていたフュリアス開発において、他とは違う路線の下、作り上げられたのがイージスだ。

ＮＦ－０１『イージス』

おそらく、防衛だけならイグジストアストラルに匹敵する可能性だってある未知数の機体。これに注目しているのは国連だけじゃない。『ＧＦ』も『ＥＳ』も注目している。

「祖国防衛。確かに、日本らしい機体だよな」

『うん。周さんの設計するフュリアスとは違う』

「悪かったな。オレは戦略的に必要な機体の設計図は書くんだよ」

出来上がるのはエクスカリバーのような並のパイロットでは乗れない機体になるが。

「お嬢ちゃん。海道周の作るフュリアスは馬鹿にしたら駄目だぜ。海道周の作るフュリアスは高い操縦技術を必要とするフュリアスだ。並のパイロットだけじゃない、エースパイロット、悠人の坊主みたいな、がいなければ話にならない機体だ。でも、今ではその機体が量産化に向けてプロジェクトが動いているくらいでもある」

『えっと、どうして？』

亜紗は答えがわからないのかスケッチブックを捲って尋ねていた。対するオレはそういうことに関してはよくわかっている。

「技術が追いついたんだよ。今までは高い操縦技術が必要だったが、それを埋める技術が出来上がっている。つまり、海道周の作る機体は未来の機体だ」

そう言われるとどこかこそばく感じてしまう。確かに、オレの設計図は悠人みたいなパイロットがいなければ機能しないフュリアスだ。黄泉川が言ったように技術が追いついてきたから今ではプロジェクトが立ち上げられている。

さすがにエクスカリバーは難しいと思うけど。

「まあ、そんな海道周から見ればイージスは幼稚に見えるけどな」

「まさか。イージスの防御力次第になるけど、アルケミストにラフレシアを装備した遠距離射撃部隊をイージスとリヴァイバーを同時運用するという編成が思いつくな」

前衛と後衛をはっきりする。リヴァイバーを入れたのは平均的なフュリアスだからだ。

「おっ、日本政府も考えている手段じゃないか。『ＧＦ』のアルケミストに装着できるラフレシアの遠距離射撃はかなり有効だからな。それを守るのはイージスだと息巻いているぜ。他にも『ＥＳ』のアルカタとの同時運用だな」

「アルカタは難しいんじゃないか？　アルケミストと違って遠距離射撃じゃなくて遠距離狙撃だろ。むしろ、アルカタは隠密行動でアルケミストとイージス、リヴァイバーの混成部隊を全面に出すのはどうだ？」

「いいね、それ。確かにそれなら組みやすい」

「だろ。うん？　亜紗、どうした？」

オレ達の会話の最中、亜紗が服の裾を引っ張ってきた。そして、スケッチブックには一言、

『時間、大丈夫？』

時刻を確認してすぐに乾いた笑みを浮かべる。

ちょっと厳しくなってきた。

「なんか用事があるのか？」

「ああ。これでも学園都市『ＧＦ』トップだからな。じゃ、黄泉川。会う機会があれば」

「おうよ」

オレ達は少し足を速くして歩き出す。時間的には余裕があるが、予想外の会話があれば時間的には厳しくなる。オレもオレでかなり熱くなりすぎたし。

「君が好きな議題というのはわかるよ。でも、彼女を放っておくのはいただけないね」

「はいはい、悪かったって、正、それってお前自身がお邪魔虫って意味だよな」

すると、正が満面の笑みで頷いた。まあ、ここまできたなら面倒を見ないといけないし。

『私は別にいいよ。周さんが二人になった臭いがするし』

「臭いってなんだ？　というか、正も露骨に離れるな」

オレは小さく溜め息をつきながら次に向かう場所を考える。次に向かうのは第十三学園都市地域部隊だ。

紅とは顔見知りだしそれほど大変なことにはならないだろう。多分。

「とりあえず、次に向かいますか」

オレは歩くスピードを速めた。

第百三十一話　体育祭初日（前書き）

なかなかスムーズに書けています。久しぶりにスラスラ言ってます。
多分、学校が始まったからかもしれません。

第百三十一話　体育祭初日

体育祭初日は基本的に静かだ。別に種目をしていないというわけじゃない。短距離走や長距離走の予選が多いからだ。団体種目でない以上、駆け引きはそれほど多くなく、出場者が必死に走り回っている。

だから、体育祭初日は警備がしやすい。だが、警備がしやすいとは言えいさかいが起きないというわけではない。それを止めるのが『ＧＦ』の地域部隊だ。

オレ達はその一つである第十三学園都市地域部隊の駐在所に来ていた。隊員の大半は体育祭のために動き回っている。だが、駐在所にも最低限の人数はいるのだ。

駐在所に入った瞬間、筋肉がムキムキで上半身裸の男（高校生）が白く光る歯に光を反射させ満面の笑みで迎えてくれた。

「ようこそ、第十三学園都市地域部隊へ」

チラッと横を見ると亜紗が完全に視線を逸らしていた。確かにその気持ちは本当にわかる。正直、耐性がなければかなり辛いはずだ。

耐性があってもかなり辛いが。こいつの性癖を知っていれば。

「おや、海道周第７６移動隊隊長ではありませんか」

「よっ、アレックス（源氏名）。紅はいるか？」

「紅隊長なら奥の部屋にいます。海道周隊長からビシッと言ってやってください。女の子に目を向けるのではなく男の子に目を向けろと」

俊也が逃げ出したい理由の８５％をこのアレックスが占めている。噂によると、アレックスの上位存在にロドリゲスという人物がいるらしいが。

つまりはそういう性癖だ。

「とりあえず、奥にいるんだな。ったく、一体誰といるんだか」

勝手知ったる駐在所だからオレは普通に奥の会議室に向かう。そして、会議室のドアをノックした。ノックしてすぐにドアが開く。

「周じゃない」

会議室から現れたのは冬華だった。あまりのことにオレは一瞬だけ目を疑う。

「何か部隊の用事があったのか？」

「そうじゃないわよ。個人的な用事。悠聖達の用事と言っていいわね。ちょうど休憩時間だから来たけど」

冬華が視線を細める。そして、小さく溜め息をついて正の肩を掴んだ。

「こいつと一緒に外で待っているわ」

「仕方ないね。周、また会おう」

別に紅ならどうにかなったとは思うが、正が冬華に連れられて出口に向かう。ちょうどその方向にはボディビルダーの写真が大量にある雑誌を見ながらハァハァ言っているアレックスの姿。

オレは猛烈に頭が痛くなった。

「紅、今は業務時間中だよな？」

「当たり前のことを言うなって。海道、早く入れ。この部屋だけはさすがにマズいから」

確かにこの部屋だけはかなりマズい。どれくらいマズいかと言ったら第十三学園都市地域部隊が消え去るくらいにマズい。

オレは小さく溜め息をつきながら会議室という名の紅の私室に入った。そこにあるのは大量に張られたポスター。ただし、ぐらびああいどるとなる謎の集団のポスター。基本的に水着。

この部屋に来る度に焼き払いたい気持ちになるのはオレだけか？

『周さん、斬っていい？』

「頼むから斬らないでください。ここのポスターは超高級ばかりなんです」

紅が見事なジャンピング土下座を決める。亜紗が来る度にこんなことをしているような。

オレは小さく溜め息をつく。とりあえず、この部屋に来たら溜め息が多くなる。そう思いながら溜め息をついた。

「紅、今のところは順調か？」

「今のところはな。まあ、外部から人が入って来ないからいい人が見つからない、とアレックスが嘆いているけど」

「それは無視していいな。まあ、基本的にはそういう風になるだろうな。予選初日だからまだ大丈夫だけど、本番初日になれば忙しさは桁違いだからな。ちゃんと休暇は出しているか？」

その言葉に紅は満面の笑みで頷いた。

「当たり前だろ。今年こそは彼女を作るためにナンパ技術を増やしているというのに」

「誰がそんなことを聞いた？」

第十三学園都市地域部隊はこういう部隊だ。簡単に言うなら思春期真っ只中の中学生がたくさんいるかのような部隊。まあ、アレックスのようなアブノーマルな人物も数人いるが。

さすがにゲイはちょっと。

特に紅は隊長職よりナンパ技術を磨くことに力を入れているくらいだ。まあ、成功したという話は聞かないけど。

ちなみに、蛇足ではあるが、第十三学園都市地域部隊隊員は誰一人として彼女がいない。正確には誰もが妨害と牽制を行うから彼女が

作れないが正しい。

一番近いのは俊也だろうな。

「海道みたいに彼女候補がたくさんいるのとは違うんだ。俺達の今はこの瞬間しかない。ならば、この瞬間を最高の時間にするために日々努力し、最高の男を目指して邁進する。それこそが大学生活というものだ。そして、それが男としての義務だ！」

ドヤ顔で言い切った紅に対してオレは手のひらに炎を作り出した。

「なあ、紅。どのぐらびあいどるだっけ、それを燃やせばいい？答えないなら右から順番に」

「この私が間違っておりました！　ですから命より大切なグラビアアイドルのポスターは燃やさないでください」

「命は軽いな」

紅がジャンピング土下座をするのをオレは呆れて溜め息をつきながら見ていた。アレックスといい紅といい、第十三学園都市地域部隊は変人が多い。

『うん。相変わらず変人にしか見えない』

もしかして、無意識に精神感応をしていた？

「誉め言葉をありがとう」

「『誉めてないから』」

オレの言葉と亜紗の文字がぴったり重なった。まあ、さすがに今のは誉めてはいない。

「ともかく、何かあればオレ達に連絡すること。これは体育祭前に言ってはいるが」

「わかっている。不審者と変質者と可愛い女の子がいたら連絡しよう」

「最後のは必要ないからな」

それに、変質者なんてお前らだ。

「チッチッチッ。わかっていないね。第７６移動隊で可愛い女の子を必要とする関係者は三人はいる。命懸けで頑張る三人が」

「亜紗。後で中村、アルネウラ、優月、冬華、リースに報告な」

『了解！！』

「我が同士を殺すつもりか！」

多分、死ぬより辛い目に会うだろうな。確実に。

オレは小さく溜め息をついた。

「不審者と第十三学園都市地域部隊以外の変質者を見つけたらだ」

「なるほど。わかったが、海道はもしかして、イニシャルＤか？」

『最低』

亜紗が即答でスケッチブックを捲るが、オレは紅の言った意味がわからなかった。というか、完全に第十三学園都市地域部隊が変質者だということをスルーしたよな。

多分、一番スルーすべきじゃないところを。

「それがわかっているならいいさ。困ったことがあれば連絡すること。基本的に音姉が受け付けるはずだから」

「了解って、スルーかよ！　相変わらず抜けているよな」

「意味がわからないのは答えないって決めているんだ」

オレは肩をすくめてドアに手をかける。そして、ドアを開けた瞬間、そこにアレックスの姿があった。オレはすかさず後ろに飛び退く。

「どうかしましたか？　海道周第７６移動隊隊長」

「驚いただけだ」

「合田、どうかしたのか？」

「隊長、アレックスと呼んでください。そんななよなよした名前は僕、嫌いなので。隊長にお客様です」

アレックスが退いた先にいたのは私服姿の女の子だった。首から提げたのは許可証だから、学園都市外の人物か。

オレが紅をチラッと見ると、紅は目を見開いて女の子を凝視していた。オレは亜紗の手を取る。

「じゃ、紅。何かあったら連絡な。アレックス、出るぞ」

オレは亜紗の手を引っ張りながら会議室から出て扉を閉める。そして、小さく息を吐いた。

「彼女は？」

隣にいるアレックスに尋ねる。だが、アレックスは首を横に振った。

「冬華殿が案内してきた人物で」

どうやら冬華に直接話した方がいいみたいだな。

「ありがとう。アレックスも気をつけろよ」

「了解です」

オレ達はそのまま第十三学園都市地域部隊の駐在所から外に出た。そして、あの女の子を案内した冬華に近づく。

「彼女は？」

「妹、らしいわよ。紅の。少々ブラコン気味の妹」

『焼かれたかな？』

「僕も妬かれたと思うよ」

その文字は間違っているようで合っている。今頃、会議室は大変なことになっているだろうな。

余談ではあるが、その日に第十三学園都市地域部隊会議室でボヤ騒ぎがあったらしい。おかげで貼っていたポスターが全て焼けたとか。

第百三十二話　競技

パァーンとピストルの音が鳴り響く。それと同時に駆け出す私よりも上級生の人達。その様子を見ながら、私は肩に聖骸布（アストラル）を巻いた炎獄の御槍の重量を少しだけかけつつ小さく溜め息をついた。

ただ見ているだけというのはかなり大変だ。見ているだけというより観客席内で何か異変がないか見守っているだけだけど。

今、私がいるのは総合大学付属高校のグラウンド。

総合大学付属高校のグラウンドは学園都市の中でもかなりの大きさを誇っており、設備の良さもかなり有名な場所だ。だから、体育祭ではかなりの競技に使用される。

もちろん、グラウンド自体の大きさもそこそこあるのだから警備もそこそこの数がいるはずだった。

でも、警備はたったの四人。

学園自治政府所属で元第７６移動隊の佐野浩平と、同じ第７６移動隊のリースさんに第十三学園都市地域部隊の壽厚（ことぶきあつし）さん。壽さんは何故かロドリゲスと呼んで欲しいと言っていた。

佐野さんはリースさんの彼氏らしく、見た目はかっこいいと言えなくもないし、しっかり学園自治政府の制服を着こなしている。髪は前が短く後ろは長くて無造作に括られているから違和感はあるけど。

リースさんは第７６移動隊でも一緒に仕事をしたことはなかった。

もう六月だというのに長袖の黒いゴスロリ服を涼しそうに着ている。頭の帽子は前見た時はまるで犬のような帽子だったのに、今日は麦藁帽子だ。違和感しかしない。

壽さんは何故か上半身裸で下半身はブーメランパンツ？　よくわからないが、ともかく半径２０ｍ以内に人の姿はない。そんな中にいるからか、正直落ち着かない。

「大丈夫？」

隣に座っている夢が心配した表情で尋ねてきた。私はそれに笑顔で返す。

「大丈夫大丈夫。夢こそ平気？　そろそろ夢の出場する短距離走だけど」

「準備、運動は、万全。後は、天に祈る、だけ」

「夢ってそんなに速くないもんね」

速くはないが遅くもない。速いというのはそう、今行っている女子３０００ｍ走（学校から代表一人）をぶっちぎりの先頭を走っている委員長さんのことを言う。

だって、他の人はどう考えても陸上競技用の服（陸上競技部だけの特権）を着ているのに、委員長さんだけは体操服。なのに、委員長さんはすでに一周５００ｍのトラックの四周目にして全員を一周抜かしている。

周から聞いていた以上に委員長さんは速い。

「陸上競技部が」

「うん、夢の言いたいことはわかるけど、委員長さんは第７６移動隊で非戦闘員だから。戦闘出来ないというわけじゃないけど、魔術無しのマラソンは女子の部隊内三位だし」

一位は由姫で二位が音姫さん。私はブービー。最下位は魔術が無ければ走る気のないリースさんだ。

「すごい、ね。天性、かな」

「おや、知らないのですか？」

いつの間にか私達に近づいてきていたハトが委員長さんを見ながら口を開く。

「彼女、都島学園都島高校生徒会長は中学生の頃、全国に名を轟かせていた超有名陸上選手だったのですよ。彼女は控えめにしか自分の記録を話しませんし、体育祭では本気を出さなかったらしいのですが、中学二年の時に叩き出した中学記録は未だに高校生ですら破られていないほどです」

「雑学をありがとう。確かに、委員長さんは自分の足の速さに関しては謙虚よね。陸上選手の方が道はあるような気がするけど」

「委員長は兄さん達と一緒にいたいために第７６移動隊に入ったんですよ」

そう言葉をかけてきたのは由姫だ。由姫は急な怪我人によってメン

バーが足りなくなったため、補欠メンバーとして短距離走予選に参加したのだ。結果はもちろん圧勝。１００ｍ走を１１秒８３で走り抜けた。もちろん、魔術無しで。

由姫は里宮本家八陣八叉流というかなり特殊な武術をしているから、魔術無しでもかなりの速度を出せる。

「お疲れ、様。本当に、速かった、よ」

「あれでも軽く流したつもりなんですけどね。本気で走れば5秒台ですし」

「５０ｍ走？」

私は顔がひきつるのがわかった。由姫の本気はかなり速い。私との模擬戦では度々視界から消えられている。

周が言うには脳が目についていっていないらしい。これに関しては慣れが必要だとか。私からすれば慣れるのはかなり大変だと思う。

最近はようやく音姫さんの剣撃が少しずつ見え始めたところなのに。

私達の視界の中で委員長さんが圧勝でゴールテープを切った。未だに走っている人の何人かは泣いているような気がする。

都島高校は地味に学園都市内でも体育祭強豪校の一つとなっている。個人種目は弱いけど、点数配分が桁違いに高い学年選抜種目やさらに配分の高い学校選抜種目で確実に一位を取るからだ。学年選抜はどこかの学年がだが。

強豪校と言ってもここ四年ほど前からの話だけど。

「やはり、圧勝ですね。３０００m走も都島高校が手に入れたということは、点数配分的に言えば学年選抜と学校選抜がネックになりますね」

「学年選抜は一年と三年、学校選抜は一位確定じゃないかな？　さすがに、あのメンバーで負けるのはありえないし」

特に学校選抜。メンバーの大半が第７６移動隊で、体育祭が始まる前から一位は確実と言われているくらいだ。私もそう思う。

「そうなると、強豪校が集まるこのブロックの相手は全て予選敗退ですね。つまり、トトカルチョで勝てる確率が上がります」

「トトカルチョって、都島高校の倍率は１．３倍だよね。儲かるの？」

「儲かりません」

ですよね。

体育祭のトトカルチョは総合優勝する高校はどこかを当てるものだけど、今までのほとんどが総合優勝＝学校選抜一位と学年選抜どれかで一位という方程式があるためか、都島高校の優勝をみんな予想している。

おかげで次に低い倍率が３倍超えというくらいになっている。

「とは言っても、数少ない資金を増やすチャンスですし、つぎ込め

るだけつぎ込みました」

「負けたら、どうする、のかな？」

夢の疑問はみんなの疑問だった。ハトは小さく笑みを浮かべて空を見上げる。

「次の日の朝、近くの川で水死体が見つかることでしょう」

「兄さんにもプレッシャーをかけておかないと」

由姫が半笑いでハトを見ている。さすがにそんなことをされてはクラスメートとしては嫌だから何としてもでも勝たないと。

「そう言えば、見張り、大丈夫？」

「大丈夫ですよ」

そう答えたのは私ではなく由姫だった。

「浩平さんもリースさんも犯罪や不正は大嫌いですから。浩平さんの実力なら本当は一人でこのグラウンド程度見渡せますよ」

「ほぉ、そんなにすごいのですね」

「うん。それに、今でも術式が展開されているから」

「術式？」

私は目を瞑って術式の反応を確認する。確かに、何かがあるような

気がするけど、それはそれでわからない点が出て来る。
だから、私は目を開けて由姫に尋ねた。
「術式の反応はあるけど、ここって術式阻害空間の中だよね？」
身体強化魔術も許可されてしまえば、体育祭は優秀な魔術師の独壇場となる。だから、こういうスポーツでは徹底的に魔術は排斥されるのだ。まあ、阻害空間内でも破り方は簡単だから破壊することは出来るけど。
「そうですよ。術式阻害空間は魔術に関しては作用します」
「そういうことですか。彼女の竜言語魔法には作用しないと」
ハトがそう言った瞬間、由姫の目が微かに細くなったような気がしたけど、多分、気のせいだろう。それよりも、
「竜言語魔法？」
聞いたことはあるけど、それが何だか覚えてはいない。
「竜言語、によって発動する、魔術の上位、だったと思う。図書室にある、魔術大全に、名前だけは」
「そうです。リースさんは数少ない竜言語魔法の使い手ですから、フィールド内での犯罪行為は簡単に見つかりますよ」
にっこり笑みを浮かべながら由姫は言うけど、その笑みのどこかに少し怖いような感じがある。

『８００m走総合大学付属高校グラウンド予選に参加する選手は、今すぐ入場門に集まってください。繰り返します。８００m走総合大学付属高校グラウンド予選に参加する選手は、今すぐ入場門に集まってください』

グラウンドにアナウンスが流れる。ちょうど、私が出る競技だ。

「由姫、少しの間交代してもらっていい？」

「大丈夫ですよ。そのために来ましたから。メグさん、今までの訓練でメグさんは強くなっています。だから、メグさんが中間試験を必ず乗り切ってください」

「うん」

私は聖骸布（アストラル）を巻いた炎獄の御槍を由姫に預けて入場門に向かって走り出す。

ライバルは誰だけしらないけど、魔力負荷をかけている今ですら体はかなり軽い。魔力負荷を解けばどこまでいくか不安なくらいだ。

私は少しだけ笑みを浮かべながら魔力負荷を緩めた。

第百三十三話　体育祭の裏側

結局、向かう先が一緒だった冬華も加え、オレ達四人は次の目的地である都島学園が予選を行っている場所、総合大学付属高校のグラウンドに向かっていた。

今日は予選初日。学園都市の体育祭には予選と本番の二つがあり、予選は生徒のみによって構成される体育祭だ。対する本番は一般の来客もある体育祭本番でもある。

エクシダ・フバルもちょうど本番に合わせて来日する。

その本番に学園都市内にあるあらゆる学校が競技をすれば例年の混乱から考えても収集のつかない事態になるため、予選と本番の二回に分けられているのだ。

もちろん、その分授業がないため生徒達は満足しているようだが。

「全く、そもそも、どうして体育祭をやるのにここまで大規模なのよ」

冬華の愚痴にオレは苦笑で返す。そのことに関してはオレもそう思っているからだ。体育祭をやるだけだというのに一週間もするなんて正気の沙汰じゃないとは思う。

ただ、余裕を持って体育祭をやるなら話は変わってくるが。

『体育祭は余裕を持ってやるものだから。忙しくやって予定がズレたり怪我人が出たら、それはそれで大変だよ』

「わかっているわよ。学園都市の大きさから考えて、体育祭が一週間に及ぶのは仕方ないとは思う。でも、本番を二日間だけにすればもう少し節約出来ないかしら」

「それは難しいかもね。学園都市も生徒が集まらないなら話にならない。だから、生徒を集めるためには大々的に宣伝となるように工夫しなければならないよ」

「正の言う通りだ。学園都市はただでさえ学校の数が多いんだ。区別をつけるために体育祭で宣伝するのが一番手っ取り早い。学園都市体育祭の決勝は完全に全国クラスだし」

一部は世界クラスと言ってもいい。実際に学園都市は二年に一回のペースで何らかの競技で世界チャンピオンが生まれているくらいだ。

それほどまでに決勝は熱い。熱い分、競技がどんどん激しくなる。特に、妨害行為に関しては酷い時が多々とあるのだ。

去年を例に挙げるなら、

・決勝に行きたいがために決勝に行く可能性のない学校に金品を渡し、敵対チームとの対戦でたくさんの負傷者を出す。

・個人戦において賄賂を渡し、出来る限りいい順位になろうとする。

・相手チームの食事に細工をして食中毒を出す。

等々、様々な反則行為がはびこった。まあ、『ＧＦ』が大活躍して違反行為の大半は取り締まることが出来た。取り締まれなかったも

のも後々わかったため、要注意人物には孝治や浩平がマークしている。

「どうせ、卑怯な手を使っている場所が多いのでしょ。噂によると学校同士、生徒同士でお金が飛び交っているとか」

「すでに13件摘発されているから」

生徒同士はわかりにくいが、学校同士の場合は委員長、琴美、レヴァンティンの三人（二人と一体？）がお金の流れを確認しているため全てわかっている。

ちなみに、摘発された学校は高額な罰金やら大きな罰則がかけられている。

「すでに13だとはね。僕はこれから倍に増えると思うよ」

「私は数倍ね」

『せめて、少なくなることを祈ろうよ』

亜紗には悪いがオレも二人と同意見だ。目立てば目立つほど生徒が入る。生徒が入れば入るほど収入が増える。ついでに言うなら政府から出る援助金も増える。それだけ資金が潤うということだ。

だから、違反行為はなくならない。最近はデータを使うことに危険を覚えたのかお金をどこかの金庫に現金のまま入れているというケースが増えている。不審な引き出しがないため気づきにくいのだ。

ただ、レヴァンティンが防犯カメラを常時ハッキングしているのか、

常に犯行現場を押さえているらしい。

事実上、完全な密室で行われなければ不可能という状況だ。おかげで、レヴァンティンの機能は本来の二割程度低下しているが。

「まあ、これからは厳しくいかないとな。生徒間同士ではどうしても確認出来ない部分が出て来るからな。誰もが全力を出し、そして、気持ちの良い体育祭にする。裏で違法行為に走る奴らを捕まえるのはオレ達『ＧＦ』の仕事だ」

『でも、限界はあるよ』

「そりゃな。オレ達は全能でもなければ万能でもない。ただ、『ＧＦ』には組織という規模がある。その規模を最大限まで使ってやっていくのが一番だろ」

レヴァンティンに負担はかかるが、見回りをしながら一つ一つ潰していくしかない。それに、去年の報告にあった要注意人物へのマークはすでに完了しているし。

オレは小さく息を吐いて周囲を見渡した。

初日だからかそれほど人の行き来は多くない。『ＧＦ』からすれば、見回りはやりやすい時期だ。

「今頃、競技が始まっているのね。悠聖はどうなっているかしら」

「悠聖が出ているのか？」

悠聖はそれほど仕事は担当していないので普通に競技に出ることは

出来るだろう。というか、悠聖は非常時にオレが『ＧＦ』の全体指揮を行うため第７６移動隊の臨時指揮官になる。だから、むしろ仕事が少ない。

もし、臨時指揮官でなければ競技にはおちおち参加していられない。実際に、由姫はヘルプという形で競技には参加するが、それ以外には強制参加の種目以外の種目は本番まで出ない。

特に、オレは見回りやら挨拶回りやら様々なことをやらないといけないため参加する時間なんてないに等しい。

『そう言えば、今頃メグが走っている時間？』

オレは時刻を確認した。確かに、予定通りなら今頃メグが８００ｍ走を走っているだろう。魔力負荷は緩めて走れと言っているし、緩めたなら十分にメグは速いはずだ。ここで負けるようなら第７６移動隊は脱隊ものだけど。

「メグは頑張るわよね。やっぱり、お兄さんのことがあるのかしら」

「おそらく、そうだろうね。僕も親族に関しては熱くなる時が多いから止めるためならばどんな手段も使いたくなるよ」

その正の言葉にオレ達は同時に足を止めていた。足を止めていないのは発言した本人である正くらいだ。

正は足を止めて振り返る。

「どうかしたのかい？」

「どうしてあなたがメグのお兄さんのことを知っているの？」

冬華の手は腰に差している刀の柄に置かれていた。

メグの兄である北村信吾に関しては第７６移動隊内では知られているが、それ以外では全く知られていないはずだ。なのに、正はそれを知っている。

それはあまりにも不自然でありおかしいものだった。だが、正は軽く笑みを浮かべる。

「君達が体育祭の裏側に強く警戒しているように、もう少し、日常にも警戒した方がいいかもしれないね。僕は何でも知っているわけじゃない。でも、僕の能力は少しは気づいているよね？　それを使えば盗み聞き出来ないことはない」

「盗み聞きをしたのね。なら、今ここで」

「冬華、ストップ。正が本気になればこの場はただじゃ済まない」

いつの間にか亜紗が冬華の柄を握る手に自分の手を乗せている。こういう時に以心伝心はありがたい。

「周。君は僕を過大評価しすぎだと思うけど？」

「勘違いするな。お前を止めるためなら最低限ブラストドライブにならないといけないからな。この場がどうなるか、正なら想像がつくんじゃないか？」

その言葉に亜紗が驚いて振り返っていた。これはある意味賭けだ。

オレが考えている正の正体が正しいなら、オレが考えている同じ反応をするだろう。

ズバリ、ほんの刹那だけ目を見開いてから目の奥で微かに頷いたような光を放ち、否定する。

正はほんの微かに驚いた。それは刹那の間。ほんの刹那だけ目を見開いてから目の奥にある意志が変わる。まるで、何かに納得したように。そして、小さく首を横に振った。

「どうかな。僕の本気は、君の想像を超えるかもしれないよ」

「なるほどね。まあ、勝負事なら、負けたくはないな。特に、自分自身には」

その言葉に正は軽く笑った。オレも笑みを返す。

「とりあえず、総付高のグラウンドに向かうか」

「はぁ、あなたがそれでいいなら私は何も言わないわ。亜紗、そんなボケッとした表情でどうかしたの？」

亜紗は今まで驚いた表情のまま固まっていた。冬華の言葉に我を戻したのか首を勢いよく振ってスケッチブックを開こうとし、オレはその手を止めた。

「大丈夫だ。任せろ」

亜紗は一瞬だけ心配そうな顔になって小さく頷いた。

多分、亜紗にもわかっただろうな。

「早くしないと時間が押すよ」

まるで、今を楽しんでいるかのように正が笑みを浮かべる。その笑みにオレは軽く肩をすくめて歩き出した。

第百三十四話　お昼休み（前書き）

予定していたものより少し脱線しました。理由は白百合素子さんの存在です。

第百三十四話　お昼休み

『次の競技の開始は午後二時からとなります。最初の競技は５０ｍハードル走です』

そのアナウンスにオレは話していた言葉を止めた。もうそんな時間か。

「海道第７６移動隊隊長、どうかしましたか？」

怪訝そうに見つめてくるのは体育祭実行委員の一人だ。多分、彼もお昼休みだから早々に話を切り上げたいのだろう。それはオレも同感だった。

「いや、何でもない。初日の競技に違反者がいなかったなら十分だ。何かあったら第７６移動隊に連絡するように」

「はい」

オレは彼に背中を向けて歩き出す。そして、小さく溜め息をついた。

「顔には出ていなかったけど、感情は丸出しだったね」

そんな溜め息を聞いていたのか折れ曲がった通路の先からそんな声が聞こえてくる。

オレはその声を耳にしながら速度を緩めることなく道を曲がり、その人物と合流した。

「正もこんなところにまでついて来るなんて物好きだよな」

「即戦力の面々の中で自由に動けるのは僕くらいだろ？」

「本来は最も自由に動けないからな」

総付高のグラウンドでの用事を済ませたオレは総付高校舎内にある体育祭実行委員支部にやってきていた。内容は至極簡単。ただの報告である。

ただし、その報告はオレ達が聞いた以外にも孝治や音姉達から入ってくる様々な連絡があるため膨大な量になっていた。

まあ、膨大と言っても言うほど多いというわけではないけれど。時間的にも押していたためオレ一人で行くはずがいつの間にか正と一緒に行くことになっていたのだ。

「友好的でないのは明らかだろ。体育祭実行委員の大半は体育祭に参加したくないから面倒でも仕切る側にいたいから」

「そうだね。君の言う通りだ。だから、こういうお昼休みにはとても敏感だよ。支部と言っても仕事が一杯あるはずなのにね」

「まあ、初日だからな。本番となればあたふたするはずだ。迷子とか迷子とか迷子とか迷子とか迷子とか迷子とか迷子とか」

迷子と連発するのは去年の経験からだ。孝治と音姉からひたすらに迷子に関する愚痴を受けたからでもある。

その年の体育祭実行委員は本当にお粗末で迷子を全て『ＧＦ』に回したのだ。おかげでたくさんの地点で人材が不足して一部の犯罪を

防ぐことが出来なかった。

体育祭実行委員は総括でそのことを指摘してきたため、総括に出席していたオレと委員長の二人は体育祭実行委員を完膚無きまでに言葉で潰したりもした。言葉のみで。

だからか、体育祭実行委員はどこかオレや委員長に怯えている部分もあるように思える。

「とりあえず、今はお昼休みだ。この手のお話を無しにしてご飯にしよう。君はもう何を食べるか決めているのかい？」

「いや、まだだな。予定通り総付高校舎内体育祭実行委員会支部でお昼休みに到達したから、予定通りに商業エリアのどこかの店で食べようとしたけど、正がいるから難しいなと思っていたところだ」

体育祭期間中は正のような本番以外に不法侵入する面々を見つけるために飲食店では必ず学生証又は身分証明証を必要とする。

だが、正は確実に持っていないので飲食店では使うことが出来ない。

「ごめんなさい」

正が素直に謝ってきた。正がいるのは完全に予想外だから飲食店では食べられない。それがわかっているからこその発言だ。オレは少し考えた。

お昼休みの間はさすがのオレも休憩だ。次に回る場所のことも考えてご飯はあそこにすればいいか。

「なぁ、正ってご飯を作れるよな？」

「愚問だね。古今東西ありとあらゆるとは言わないけれど、基本的な料理のレパートリーはあるよ」

「なら、一緒に昼を作らないか？　昼休みが終わったら次の地点は家の近くからなんだ。亜紗とはちょうど家の前で待ち合わせしているし」

その瞬間、正は固まっていた。そして、頬を赤く染める。

「そうだね。お呼ばれさせてもらうよ」

オレはそんな赤くなった正から視線を逸らす。そもそも、どうしてオレは正にこんな提案をしたのだろうか。

「じ、じゃあ、スーパーにでもよるか」

「あらあら、まあまあ」

「何でいるのさ」

ドアを開けた瞬間、オレは小さく溜め息をついた。ドアを開けたそこには義母さんの姿があったからだ。

本当に面白そうな笑みを浮かべている。

「彼女？」

「違う。諸事情で飲食店に入れないから家で昼ご飯を食べようという話になったんだ」

「彼女なのね」

「人の話を聞けよ」

義母さんはにこにこしたまま顔を近づけてくる。

「今から二時間ほど家を空けるから」

「余計な気を使わなくていいから。ともかく、今から台所を使うだけだ」

「台所でのプレイはオススメしないわよ」

「ただご飯を作るだけだから！」

こういう時はしつこくからかってくるからな。まあ、我慢するしかないか。

オレが小さく溜め息をついて振り返ると、そこには顔を真っ赤にした正の姿があった。

こういう正の姿を見られるのは結構役得かな。

「正、行くぞ」

「う、うん」

オレが伸ばした手を正が掴む。そして、オレはその手を引っ張って家の中に入った。

「とりあえず、台所を説明するから。それから分担作業で」

「そう、だね。うん。頑張るよ」

義母さんがいたのは予定外だったけど、とりあえずは昼ご飯を作らないと。よくよく考えてみると、誰かと一緒にご飯を作るのは久しぶりだよな。

オレは居間を抜けて台所に向かう。台所にある器具の場所を説明しないと。

「とりあえず、包丁とかの機材は」

「間取りから考えて下の収納棚かな？」

「正解。計量スプーンやカップは上の収納棚。正は使うか？」

「使わないよ。そこまで料理に自信がないというわけじゃないからね」

「わかった。なあ、正。本当にこのメニューでいいのか？」

オレは手に持っていた食材を台の上に置きながら尋ねる。スーパーに行った時にそれぞれの得意料理を作ろうということになったのだ

が、得意料理が被ってしまったのだ。

まあ、単純に作れる得意料理だから被ったわけで、実際の得意料理なら被ることはなかった。オレは煮込み料理全般で正はカレーだったから。

作ろうと思えば可能だが、時間的に厳しいという理由でこういうことに。

「愚問だよ。僕の料理の腕を甘く見てもらいたくないからね。君こそ、本気を見せてもらいたいものだ」

「まあ、別にいいんだけどさ、コンロもゆったり広いから二人同時に作れるし。じゃ、作り始めますか」

オレは二つの包丁とまな板を取り出して片方を正に渡した。

炒飯。

その言葉を聞いて何を連想するか。オレが聞いたならお米は黄金色でふわふわの卵が適度に混ざっておりパラパラしているがまとまりはある。だが、口に含めばそのまとまりが解けて口の中でホクホクするのが理想だと考えている。

もちろん、具材のバランスも必要だ。バランスが悪ければいくら条件を満たしていてもそれはおいしい炒飯とは言えない。

ご飯。卵。野菜類。肉類。それらのバランスが完全に噛み合った時に至高の炒飯を作る具材は揃ったとオレは思っている。

だが、そこからが大変だ。どれだけバランスよく集めても作り方の失敗によって全てが決まると言ってもいい。

そして、それら全てが噛み合わさった最高級の炒飯がオレの目の前に存在していた。

「ま、負けた」

一口、口に含んだだけでわかる。オレが最大級の自信を持って作り上げた炒飯は児戯にも等しいものだと。そして、この炒飯と比べたら未熟者が作り出したものだとわかってしまう。

それほどまでに目の前にあった炒飯は完全にして完璧で無敵なまでに凄まじい料理であった。

「言い過ぎだよ。君の炒飯もよく出来ているよ」

「慰めはよしてくれ。この炒飯と比べたら」

「確かに周君の炒飯なんておままごとね」

「げふっ」

義母さんの一言によってオレはそのまま崩れ落ちた。もう、生きてはいられない。

「いや、周の炒飯も美味しいよ。僕のものは万人に認められる味だと思うけど、君の炒飯の味は僕の好みだから」

「だけどさ、確実に正の炒飯に負けているんだよな。やっぱり、研鑽が足りないか」

「周君は未熟者だから」

「義母さん！　傷ついている義理の息子に何て言い方だ！」

「だって、周君は白百合を未だに名乗ってくれないじゃない」

戸籍や学校の書類にはちゃんと白百合周となっているが、ほとんど海道周となっている。先生の出席確認も海道周だ。

「オレだって色々考えがあるんだよ。義母さんには本当に感謝している。もし、普通に学生をしているなら、オレは白百合を名乗っているさ」

「わかっているから。そう言えば、彼女の名前は？」

「海道正って、義母さん、一つ聞いていい？」

義母さんが首を傾げる。正をチラッと見ると同意するように頷いてくれる。思っている疑問は完全に同じだ。

「いつからいるの？」

まさにそれだった。確か、出掛けるとか言っていたはずなのに、いつの間にか同席している。あまりに自然すぎて気づいたのはほんの

さっき。

義母さんはにこにこしながらオレを見ている。そして、手を合わせた。

「ご馳走様でした」

「いやいやいや。ご馳走様じゃないから。いつからいてるのかって聞いているんだけどな」

「細かいことはいいじゃない」

「細かいことじゃないからな！」

「いいじゃないいじゃない」

義母さんには一生勝てないような気がする。

「僕は別に君のお母様がいてもいいよ。それに、君にはお世話になっているしね」

「正がそう言うなら何も言わないけどさ」

オレは小さく溜め息をついて義母さんを見た時、そこに義母さんの姿は無かった。代わりに、正の方を見ると、そこには正の手を握っている義母さんの姿がある。

「海道正さん。周君のお嫁さんにならない？」

「お、お嫁さん？」

正が完全に慌てふためいてオレを見てきた。まあ、普通はそうだろう。急にオレのお嫁さんにならないか言い出したのだから。

オレは小さく溜め息をついて義母さんを正から離す。

「あのな、正とはそこまで深い仲じゃないんだよ」

「家に招待しているのに？」

「それはやむを得ない事情があるから。まあ、そういうわけだから」

本当はそれだけじゃない。それだけじゃないんだが、それだけじゃないことは確認出来なかったからな。もしかしたら、考えていることとは違うのかもしれない。

でも、正しいという証拠はある。

「つまり、周君は正さんを下心なく連れてきたということね」

「えっと、その、どうだろう」

下心なく連れてきたわけではないから答えに困ってしまう。はぐらかせばいいかもしれないが、義母さんに嘘は通じない。

正確には、嘘をつけば死ぬより辛い説教を受けるからだ。一番餌食になっているのは由姫。

「周。時間は大丈夫なのかい？」

「時間？」

オレは時計を確認した。時刻はすでに一時半ば。そろそろ急がないと遅刻してしまう。

「正、急げるか？」

「僕なら大丈夫」

「そうじゃなくて、女の子って何かと準備に時間がかかるだろ」

オレは正が作った炒飯を口に含みながら言う。

これに関しては都で嫌というほど味わっている。女の子にとっては大事な準備があるらしいが、そんな準備は由姫や亜紗では見たことがない。

正は一瞬キョトンとして、そして、嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとう。でも、僕は大丈夫だよ。準備はしなくていいからね」

「そうか」

オレは頷いて炒飯を飲み込む。なら、時間には多少余裕があるな。

「じゃ、ちゃっちゃと味わって食べて次の場所に向かおうぜ」

「うん」

頷いた正の声はどこか嬉しそうだった。

第百三十五話　密会

『聞きたいことが山ほどあるけど、とりあえず、一つだけ聞いていい？』

家のドアを開けたオレ達を待っていた亜紗はスケッチブックを開けて尋ねてきた。

オレは言われることをすでに予測していたため小さく頷いて返す。

『どうして二人が一緒なの？』

「言いたい気持ちはわかるが落ち着け」

その手にある小刀の綺羅と朱雀を見て顔をひきつらせながらオレは小さく溜め息をついた。

嫉妬に狂った亜紗を止めるのは難しい。何故なら、的確にオレの急所を狙ってくるからだ。気を抜けば確実に死ぬ自信がある。

「そう怒らないように。僕はただ周の家にお呼ばれされただけだよ」

その瞬間、亜紗の気配が膨れ上がった。気持ちはわかるが落ち着いて欲しい。気持ちはわかる。

「何も無かったからな。ただ、正と義母さんと一緒に昼ご飯を食べただけだ」

『それならいい』

お前にとっては何が良くて何が悪いんだ？

『そう言えば、昼から何をするの？　私はただ挨拶回りとしか聞いていないけど』

「まあ、挨拶回りは、間違ってはいないな。これから向かうのは近くにある店だから」

『店？』

スケッチブックを開きながら首を傾げる亜紗。それにオレは頷いた。

「完全防音の密室を作るプライベート空間が売りの店だよ。そこで、今日一番の相手に挨拶する」

「学園自治政府代表楠木大和だね」

「正解」

今日の目的はある意味、楠木大和との会話と言ってもいいだろう。確かに、見回りをすることは大事だが、学園自治政府とはこれから連携を取り合わないといけない。そして、情報は隠せるだけ隠した方がいい。

今回はそれだけ重要だ。

「それに、最近他部隊にやってもらっていたナイトメアについて、情報整理もしたいからな」

「おや、三人ですか」

完全防音の個室に入ったオレ達を出迎えた楠木大和は微かに目を細めていた。最初は二人で来るって言っていたからな。正を不思議に思っているのだろう。

楠木大和以外には浩平の姿しかない。オレは頷いて指をパチンと鳴らした。

指を鳴らすことで魔術陣を解凍する方法だ。魔術陣の発動を氷属性の魔術によって封印することで出来るが、難易度が高く、普通ならしない。だが、今回はどうしてもこれをしなければならない。

常に発動させた状態を維持しているため、解凍する際にストックした魔術と違って妨害を受けにくいという特徴がある。魔術が一番妨害を受けるのは発動寸前でもあるから。

体育祭で使われる術式阻害空間も発動寸前で作用する。

もし、それを結界系で行ったなら阻害されたことに気づかない。万全を期すためにはこの結界発動が一番でもある。

「こいつは海道正。口の堅さならオレが保証する」

「僕の評価が高いのに驚いたよ」

正は本当に驚いていた。そんな風に思われていたなんて心外だ。

「正なら、たくさんの人を犠牲になんてしたくないだろ？」

「そうだね。たくさんの犠牲が出るなら僕自らが剣を抜こう」

「そういうわけだ。信頼出来ないならお願いするが」

「いいでしょう。彼女もこの場にいてくださっても。席についてください」

オレはちょうど楠木大和と正面になるように座った。楠木大和は真剣な表情で頷く。

「今回の件、応じてくださってありがとうございます。学園自治政府代表としてお礼を申し上げます」

「学園都市『ＧＦ』代表として義務をしているだけだ。そちらが気にすることは何もないって、堅いのは抜きにして話そうぜ」

「そうですね。一応、形式は必要ですから」

確かに形式は必要だが、ここは完全に非公式の場だよな。

「まずはいくつか質問をさせていただきたい。いや、質問だけで終わるでしょう」

「だろうな。こちらは確認するだけだし。で、最初の質問は？」

「犯行予想日時について。何故、すでに確定しているのか」

来るだろうとは思っていたからすでに解答は用意している。

「オレならそうするからだ。はっきり言って、その日が一番、人の出入りが少ない。少ないということは作戦に支障が出る可能性が少ないからな」

「納得出来るとでも？　体育祭期間中に相手は来ると予想したならもっとはっきりした理由を」

「理由は簡単だ。その日にギルバートさんはいない」

その日だけはギルバートさんはおらず、代わりにエクシダ・フバルが来ることになっている。つまり、それだけで戦力は大きく変わる。

「さっき述べた理由とギルバートさんがいないこと。そして、第７６移動隊の大半が一点に集まる競技が存在する」

「つまり、警備が薄くなると？　馬鹿にしないでいただきたい。学園自治政府も『ＧＦ』も、そこまで愚かでは」

「並大抵の相手ならな。だけど、今回は相手が完全に悪い。いくら増援が来るとは言っても、学園都市の警備は第７６移動隊が大半を握っている」

これは過言でも何でもない。

学園都市はある意味実験都市。『ＧＦ』が単体でどこまで警備出来るかを実験するために作られたと言っても、これも過言でもない。

世界で最も勢力範囲の大きな『ＧＦ』だからこそ、近年増加する犯罪やはぐれの魔物に対して対抗するために日本政府が『ＧＦ』に協力してもらって作り上げた。

「第７６移動隊の最大の特徴は個々の機動力。それを封じられた場合、学園都市は下手をすれば落ちる」

相手はそれが出来るかもしれない。最悪な状況に対する最強の手札。それを瞬間で切る準備は整いつつある。だからこそのスケジュールも組んでいる。

「納得しました。第７６移動隊が集まるということは」

「学校選抜。これだけは第７６移動隊の大半は集まる。学園都市の中央に最も近いスタジアムに」

「タイムスケジュールまで指定したのはこういうことなのですね」

「ああ。狙い目がわかっているなら対策はし易い。だから、狙いはその日のその時間」

どうやら納得してくれたみたいだ。簡単に言うならこの時間以外に相手がアクションを起こすことはないということだ。それだけ『ＧＦ』や学園自治政府が他の事に動ける。

「外れた場合は？」

「外れない。これは絶対だ。絶対に言い切ってやる。多少の誤差はあるかもしれないが、その日その時間で行動は起きる。敵にとっての目的は『ＧＦ』でも学園自治政府でも学園都市でもお金でも何で

もない。狙いは学園都市地下にあるとされる永久機関だ」

「周、そんなものが本当にあると思っているのかよ。お前が『ＥＳ』に行っている最中に『ＧＦ』と合同でシェルターをあらかた捜索したんだぜ。でも、扉の一つも見つからなかった。シェルターにそんなものはないってことだろ」

確かに、シェルター内はあらかた捜索された。第７６移動隊の面々を中心に行ったし、中東から帰ったオレも独自に調査を行った。その結果は何もなし。

ただ、地下に通じるのはシェルターだけじゃない。

「じゃあ、浩平は下水道とか通ったことあるか？」

「誰がそんなところを通るかよ」

「普通はそうだろうな。楠木大和。お前は地下にある今は使用されていない下水道はどれくらいあると思う？」

「想像はつきませんが」

だが、二人はオレの言いたいことはわかったはずだ。

オレが調べた以上、シェルター内にさらに地下に続く道がないなら下水道のどこかにあるのではないかという考えをだした。

ただ、下水道に関しては犯罪に使われる可能性が無きにしも非ずなので下水道を把握している政府は全く教えてくれなかったけど。

「下水道の存在は周知されている。でも、基本的にはただ汚い水やら何やらが流れているってだけだろ。その中に使われていないトンネルがあるとしても、普通は気づかない」

気づくとするなら下水道の位置を全て把握している日本政府だろう。

「ただ、どの下水道や使われていないトンネルがさらに地下層に続いているかは日本政府でもわからないらしい」

「ちょっと待った。周は何でわかるんだ？」

頭を押さえながら浩平が尋ねてくる。オレはレヴァンティンを掲げた。

「こういうことだ」

「なるほど」

理解が早くて助かる。

「敵が狙う場所はおそらくピンポイント。オレ達はそこに遅れて到達する。学園都市内部は守れても学園都市外部や学園都市地下は厳しいところがあるからな」

「そうか。ありがとう。では、次の質問に移りますが、何故、音界の歌姫を呼んだのですか？」

第百三十五話　密会（後書き）

唐突に終わっていますが、次の話はそれに丸々注ぎ込む予定です。
二つの世界の二つの歌姫。技術レベルも魔術レベルも異なる二つの歌姫の違いについてです。
音姫の歌姫として発動した能力を見直していただければ、その能力と違う歌姫であるメリルの能力は予想がつくと思います。

第百三十六話　二つの歌姫（前書き）

上手くは書けなかったですが、周の推測に基づく二つの歌姫の違いを書きました。

第百三十六話　二つの歌姫

「そうか。ありがとう。では、次の質問に移りますが、何故、音界の歌姫を呼んだのですか？」

来るとは思っていた。学園自治政府からすれば厄介ごとだと思っているだろう。メリルの存在はアメリカの大統領よりも重いものだ。

大統領が死ねば代わりはいるが、メリルが死ねば代わりはいない。歌姫という能力は音界では歌姫が死ぬことによって、新たな歌姫が生まれる。産まれるではなく生まれる。唐突に能力が現れるらしい。

「音界の歌姫を人質に取られたなら、誰も手出しは出来ませんよ」

「まあな。でも、人質を取らせたとしても、歌姫って耐性がかなり高いって知っていたか？」

おそらく知らないだろう。音姉の近くにいたからこそオレは気づけた。

音姉を止めるには妨害魔術はまず無理だ。最初は当たらないと思っていた。妨害魔術自体の範囲は狭く、音姉の速度なら避けられてもおかしくないと。

でも、核心に至った経緯は少し前の企業からもらった試供品。ブレスキュアのトリカブト味を食べても倒れなかったことからだ。

あれはある意味罰ゲーム用ではあるが、口臭は完全に消せるためお酒の席では有効だろう。泥酔していなければ。

多少は異常が出たものの、音姉は倒れることなく食べていた。それからこっそりレヴァンティンと協力して音姉の耐性について調べていたのだ。

「歌姫は基本的に妨害系、睡眠誘導催眠誘導麻痺等々、それらに圧倒的な耐性を持っている。例え、魔術が使えなくても。そもそも、歌姫というのが謎に包まれていたんだ。二人の歌姫の特性を知っていなければメリルなんて呼ぶかよ」

『メリルも音姫さんと同じ歌姫じゃないの？　歌姫は世界が変わっても同じものだと聞いたけど』

「僕の推測だけど、もしかしたら、同じ歌姫でも特性が違うのではないかい？　そうだね。音姫は支援に関する能力をよく使うことを考えて、メリルの方は攻撃に特化しているとか」

「正解」

オレが正に向かってそう言うと、正は驚いていた。そんなに答えが意外だったのか？

「どうして音界では歌姫がトップだと思う？」

『国民が歌を愛しているから』

音界と名付けた理由は歌姫がいるからだと亜紗には言ったよな？

「それはこっちと変わらない。音界では歌姫の下に大統領みたいな役職があるんだ。それが攻撃も可能な歌姫の力。考えたことはある

か？　どうして、音界ではフュリアスに関する技術が発展しているか」

よくよく考えてみるとおかしいのだ。今は第八世代のフュリアスが音界では開発されている。一世代は大体二十年持つらしいが、それを計算しても二百年は持たない。

実際にルーイにフュリアスの歴史を教えてもらったが、フュリアスが生まれたのは二百年ほど前。最初は作業用機械だったらしい。こちらでは最初から戦闘用機械として作られた印象が強いけど。

「音界のフュリアスは作業用機械が始まりだ。それを戦闘用として使われ始めたのは約百五十年ほど前から。音界では戦争が起きていたらしい。その戦争の引き金となったのが歌姫だ」

「周、俺には全く理解出来ないんだが、もう少しゆっくり丁寧にわかりやすく説明してくれないか」

「話続けるぞ」

たった一人に合わせていたな本当に時間が無くなる。

「歌姫が引き起こした戦争、音界じゃ歌姫戦争とか呼ばれているみたいだな。正確な話はわからないが、その時に歌姫が最前線に立っていたらしい。それを止めるために殿として残ったのが、本来作業用機械だったフュリアスだ」

そのフュリアスで一定の戦績を残せたから戦闘用になったわけだ。

ただ、この会話の中で一つだけおかしな部分がある。

「つまり、作業用フュリアスですら歌姫は止められなかったってわけだよな」

どうやら浩平はそこだけは理解出来たらしい。オレはその言葉に頷いた。

「音界は魔術のレベルは低い。フュリアスが無ければ第７６移動隊で壊滅させられるくらいにな。オレ達が生身でフュリアスに勝てるのはそれが原因だ。ただ、作業用フュリアスとなれば耐久値は高くなる。それですら耐えられない歌姫の能力、わかるよな？」

「僕達と同レベルの魔術。確かに、桁違いではあるね」

『音姫さんはそんな能力は使っていないけど』

「音姉が使った最大のものは戦域全体に声を届かせる技だ。範囲は桁違いだろうけど、メリルも同じ範囲があるとしたなら、それは強力な武器とならないか？」

「待った」

オレの言葉に楠木大和が待ったをかける。オレはそれに頷いて応じた。

「まさか、全て推測では？」

「最終的にはそうだけど？」

オレがそう当然のように言うと楠木大和を除く三人が呆れたように

溜め息をついた。

「相変わらず推測かよ」

『周さんだし』

「さすがの僕もそこまでは推測を立てないと思うけど」

一定の理解があるというのはありがたいことだ。

「音界の歴史やらは事実だぞ。これからはオレの推測が大多数を占めるだけ」

「聞きましょうか」

楠木大和の声にオレは頷いた。

「音界の歌姫は攻撃に特化していると考えられる。そもそも、歌姫としての実力はメリルの方が上のはずだ。だけど、音姉も歌姫としての能力は範囲が限定的ながら支援効果は強いし、音を使った攻撃すら可能だからな」

「音？　周、音姫さんは歌というより、条件下における特定ワードによる発動じゃなかったか？　俺はそう記憶しているんだが」

「多分、歌姫は音、空気の振動によって魔術陣を形成していると思うんだ。これは推測なんだが、音姉の場合は歌姫という能力に一種のトラウマがある。歌姫と白百合としての才能にトラウマがな。だから、本人はオレがプレゼントした特殊なリボンで封印しているんだ。特定ワードというのも、トラウマから起因するだけ。正確には」

「魔術の終局形態。音と意志による発動。違うかい？」

オレの言葉を推測したであろう正が尋ねてくる。全く持ってその通りなんだが、せめて、そのセリフだけは言いたかったな。

オレはその言葉に頷き、言葉を紡ぐ。

「それが歌姫としての本質だと思う。メリルの音界での評価は、特殊能力的な歌姫という意味ではなく、本来の意味の歌姫。国民的アイドルらしいからな。ここからがオレの一番間違っていそうな推測なんだが、人界の歌姫は魔術技術の高い場所では本来の性能は発揮出来ない。対して、音界の歌姫はその力を使わなければ生き残ることが難しい。だから、人界の歌姫は大きな範囲に干渉出来るように。音界の歌姫は威力を高めるように」

「音姫さんって個人に対して使っていなかったか？」

確かに音姉は個人に対して力を使っている。でも、あの時の性能を知っているからこそ、オレはこれに関しては確信は持っている。

あの時、狭間の鬼との戦いで音姉は自らに相手の攻撃が当たらないという能力を使った。実際にそれは当たらないようになった。だが、音姉はそれを他の全員にかけることは無かった。

『範囲を限定したから、じゃないかな？　普通の魔術でも広範囲に影響を与える魔術はどうしても威力は低くなるけど、単体が相手なら比べ物にならないくらい高い威力のものもあるから』

「一理ありますね。ですが、範囲が広くなれば威力が落ちるのではないですか？　それなら、あなたは何を」

「デュエット」

正がぽつりと呟いた。やはり、正はわかったか。

「デュエット？　カラオケにあるやつか？　リースとよく歌っているけど」

「ボケはいらないからな。まあ、正の言う通りデュエットだ。今回、楠木大和に来てもらったのは音姉が戦列には参加出来ないということを知らせるためだしな」

『音姫さんが？　音姫さんなら歌いながらでも』

「それがメリルと共鳴させるためなら？」

メリルの来訪を許可した理由。それがこれだ。二人の歌姫、そして、二つの歌姫の力。歌は勇気づけるものであり、二人の願いが一つになれば、強力な力となるはずだ。

「音姉の場合はちょっと特殊な歌があるんだ。それはとても長く、永久にリフレイン出来る。それをずっと歌ってもらう。集中力が切れるのもマズいから基本的には離れた場所でだ」

「君も大胆なことを考えるね。それが成功する確率は決して高くないだろうに」

「まあな」

そもそも前例にない。まあ、前例にあったら驚くけれど。そして、

効果は未知数。作戦が成功しなければオレ達の作戦自体が失敗する。

「だから、賭けたいんだ。歌姫の力に。人界と音界。その二つの可能性に」

第百三十七話　しばしの別れ（前書き）

ただの別れにするつもりが思いっきり脱線しました。結果、かなり重要な話に。

第百三十七話　しばしの別れ

「やはり、君は僕とは全く違うね」

夕暮れに染まる学園都市。その中にあるとあるビルの屋上にオレと正の姿はあった。

沈む夕日が学園都市から遠ざかっていく。それをオレ達が見つめていた最中、正が話しかけて来たのだ。

「急にどうしたんだよ」

オレは振り向くことなく尋ねる。それに対して正はクスッと笑みを浮かべた。

「君と僕は違うということさ。僕は君がどう学園都市を守るか興味があった。僕もアドバイスが出来るように様々な作戦を考えていたさ。でも、君はまるで神が乗り移ったかのように対策を作り出した。誰も想像がつかないいくつもの対策を作り出した」

その言葉にオレは軽く肩をすくめる。正が今日ずっと付きっきりだったのはなんとなく気づいていた。正も未来を知る一人だから、正の知る未来とは違うものを見たかったのだろう。だから、オレは尋ねる。

「で、正の歩んだ歴史と今の歴史は異なっているんだろ?」

その言葉に一瞬だけ正が目を見開いた。それにオレは笑みを浮かべる。多分、正は気づいていないと思っていたのだろう。正が歩んだ

未来とは少し異なっていることを。

「どうして」

案の定の答え。それにオレは笑みを浮かべたまま頷く。

「未来を知っている中でも正の知識はずば抜けているように感じていたからな。だから、推測した。それに、さっきの話の中で普通は想像がつかないような答えを何回も言っているんだぜ。でも、正の瞳には驚きがあった。それらを考えての推測、いや、断定だな」

「ふふっ。たった一日でそこまで見抜かれるなんて。周、君はすごいね」

「褒めても何も出ないからな。本当なら聞かなくてもいいとは思っていたんだけど、一つだけ聞きたくて。未来が変わったのは『赤のクリスマス』。違うか？」

「正解だよ」

諦めにも似たような言葉。おそらく、全てを語るつもりはあるだろう。

「でも、どうして分かったんだい？　僕は失言したつもりではないけど」

「かなり昔の話、狭間市の時に、正ってオレの親について写真が無いって言っていたよな。だけど、写真が存在している。正の話は嘘ではなさそうだから、それを考えると、正の歴史では写真が消失する現象が起きている。『赤のクリスマス』の時にアジアでの被害は

アメリカやヨーロッパと比べて少ないように感じていたから、正の時には『赤のクリスマス』はアジアを中心として起きた。その被害にオレ達は巻き込まれた。違うか？」

「そこまで推測しているとはね。確かにそうだよ。僕の歩んだ未来と今の未来は大きく異なっている。細部は特にね。未来のことを話すつもりはないし、君も聞くつもりはないだろ？」

「当り前だ」

未来というのは誰かに導かれるものじゃない。自分達の手で掴み取るものなのだから。それを間違ってはいけない。

確かに、今の世界は滅びに対抗するために動いている。でも、その未来を勝ち取るために歩んでいるのだから。

「では、過去に異なった出来事を、君が関わった事件について言うとするよ」

正は姿勢を正した。対するオレは屋上の策に両腕を乗せたままだ。

「まずは一つ目。狭間市への異動の理由。あそこにはとある女学園があってね、そこに同じような任務のために向かった。その頃の第７６移動隊は女性メンバーだけで構成されていたんだよ。二つ目。狭間の鬼は確かに存在した。でも、その狭間の鬼は狭間の巫女であった都を生贄として復活している。この時、エレノア達はいない」

それだけを聞いても結構変わっているような気もする。

「鬼の力を受け継いだのは僕と琴美の二人。そして、君達が関わっ

た真柴と結城との戦い。これは基本的に同じになるかな。理由は滅びのためではなく、私利私欲のためだったけど。そして、三つ目。七葉が生存していること。七葉が生存していること。七葉は確実にその時に死んだ。だけど、生きている」

「なかなか変わっているよな。でも、オレ達が関わった大きな事件はその二つくらいだし、他には」

「その最中で異なることが一つあるんだよ。この体育祭が開催される四ヶ月前に音界で戦争が起きている。おそらく、歴史がもっとも歪んだものごとだけどね」

音界での戦争。音界が部隊になると言うことはフュリアス同士の戦いが激化するのか。はっきり言って、悲惨な戦いになるだろうな。フュリアス同士の大規模な戦いは人界では未だに起きていないが、行動範囲の広さと命中力の低さを考えて周囲に及ぼす被害が大きくなる。

正直、ぞっとしない話だ。

「僕が語れるのはこれくらいだ。これからは、君が未来を作り出すのだろう?」

「ああ。ありがとうな。正って、ちょっと待て。正が親父達について言及していないってことは、正の歴史でも別の勢力が学園都市を襲ったってことなんだよな?」

「そうなるかな。でも、その時の軍隊は音界で起きた戦争の敗戦兵達だよ。だから、今回のことは正直僕もどうなるかわからない」

「そっか」

親父やお袋はむやみやたらと人を殺すことはないだろうから正の時と比べて安心はできるだろう。でも、オレの推測が成功しなければかなり厳しいことになる。

オレ達の腕の見せ所ってことか。

「周、君は怖くないのかい？　未来というものが」

「怖い、とは思わないわけはないけど、オレからすれば死ぬことの方が怖いかな」

「滅びは君も死ぬよ」

「滅びに対してはどうにかできると思う。これはオレの推測だけど、多分、オレの考えが正しいなら、確率は２０％で可能」

正直言って、オレも推測できない部分が多すぎる。一番のキーポイントは交友関係の広さだろう。それを駆使すればどうにか出来る可能性が出てくる。最良の手段を見つけるのも時間がかかるだろうし、みんなに頼っていかないと。

「２０％。確率は高いね。僕の時で、おっと、これは語らない方がいいかな。でも、それが成功するかは分からない。一回だけの最終手段だよ。確認する方法もないし、失敗すれば後は無い」

「だろうな。オレだってそう思っている。というか、滅びってほどだからな、どんな滅びかさえ分かればいいけど」

正は何か言いたそうな表情だった。でも、オレは首を横に振る。

正が言えばそれは正が責任を負うということだ。こいつに、これ以上の責任を負わせたくない。負うならオレ一人だけでいい。

「そうだな。一つだけ、一つだけ聞いていいか？」

「いいよ」

「体育祭の最終日、優勝はどこだった？」

「最終日に体育祭は無かったよ。それだけ、答えておく」

「そっか」

オレはその言葉に笑みを浮かべた。

「だったら、最終日のこの時間、夕日が沈む頃、また、ここで会おうぜ」

オレがそう言うと正は驚いたように目を見開いていた。当り前だ。正は未来で最終日には戦いの戦火によって体育祭がなくなったと言ったのだ。だけど、オレは最終日にここで会おうと言った。普通は理解できない。

でも、これはオレの覚悟だ。

「オレはこの学園都市を守りきる。自分の地位を陥れようが、あらゆる手段を使おうが、この体が汚れようが、この学園都市を守りきる。そして、次の日は呑気に体育祭を行うんだ。最終日に、お前に

言いたいことがあるからさ」

そう言ってオレは体を起して両手を広げた。それは、学園都市全てを手に収めるかのように大きく、大きく手を広げる。

オレは笑みを浮かべて正に告げる。

「その時、オレの話を聞いてくれ」

「はい」

正は顔を赤らめて頷いてくれた。その言葉にオレはさらに笑みを浮かべる。

「ま、まあ、君がこの都市を守れたらだけどね。僕達は守れなかった。この意味がわかるかい？　この都市は広い。どう頑張ってもそれは不可能だと」

「正はそう思っているのか？」

オレは自信満々に尋ねた。

全ては推測の下に成り立つ式のようなもの。でも、それは、最終的に求められる解が決まっているもの。だから、オレは全てを考える。この学園都市を占領するにはどうすればいいか。どこから攻めればいいか、どこを叩けばいいか。そして、第三者勢力の可能性も考える。

「君は、自信満々だね」

「まあな。オレはオレの出来ることをする。オレの力はただの器用貧乏（オールラウンダー）だ。だったら、その何でもできることを使ったどうにかして守る。根性論だけどな、オレは作戦だけは誰にも負ける気はしない」

「それでこそ君だ。今の君は本当に輝いているよ。だから、僕はしばしのお別れだ。今の君に僕の助言は必要無いみたいだしね」

本来いてはいけにない正を匿っておけるのは一日くらいが限度だったんだ。だから、これ以上大変な事態になる前に説得するつもりだったからありがたい。

でも、正は柔らかく笑みを浮かべていた。それは、まるで、恋する女の子のように、優しく、可愛らしい笑み。

「君の力に僕はなろう。君のピンチに僕は駆け付けよう。君を僕は信じている。君のためなら命を投げ出そう。君は、世界で一番、素敵な人なのだから」

その瞬間、正の姿が消えた。相変わらずの神出鬼没ぶりだけど、今の言葉ってどう考えても、

「告白だったね」

能天気なその声にオレは驚いていた。人がいることに驚いていたわけじゃない。でも、声の下方向に驚いていたのだ。だって、柵の下から子がかかったんだぞ。

「七葉、聞いていたのか？」

「うん。だって、周兄とお姉ちゃんが一緒にいたんだよ。そんな面

白、違った、楽しい、違った、愉快な現場を見逃せないよ」

「言い直す理由はなかったよな？　というか、お姉ちゃんって」

「もう、知っているから言うよ。私は本当なら死んでいたはずの人間。周兄の近くで数少ない未来をする人間だから」

「なるほどね。どうりで狭間市にまでついてきたったわけか。七葉は聞いていたよな？」

七葉はまるで重力が横方向にあるかのように壁に足を付けて立ったような体勢になっている。頸線のみの技量でなら世界でもトップクラスだ。戦闘能力はあまりないけど。

そんな七葉は確かに頷いていた。

「周兄は出来ると思っているの？」

「出来る」

オレは断言した。そして、正のいた場所を見る。しばしの別れということはまた、決戦の日に会うだろう。

「そう思わなければ、正とは約束しないさ」

第百三十七話　しばしの別れ（後書き）

正が語る正が歩んだ未来は実は一度作ったことのある物語です。内容がほぼ戦闘シーンだとか、文字通り中二の時に書いた中二病小説でしたけど。この新たな未来を求めての最も最初の原作というものです。投稿するつもりはありません。何故なら、長さがこれに匹敵するからです。そんなものは気力的にも書けないわけで、正の歴史として話すことにしました。

正の正体を少し紐解いたつもりですが、どうでしょうか。おそらく、何人かは正の正体を気づいているはず（願望）

次からは普通に体育祭の物語に戻る予定です。書くことはまだまだたくさんあるので。体育祭はまだまだ、もしかしたら十一月までかかるかもしれませんが、お付き合いのほどよろしくお願いします。

第百三十八話　初日の終わり（前書き）

ちょっと予定と狂いました。

第百三十八話　初日の終わり

手に持っていたノートをパタンと閉じる。今日買ったばかりのノートはすでに全てのページに様々なことが書き綴られていた。

近くのペンケースにあるマジックを無造作に手に取り、表紙にマジックを走らせる。だが、マジックから文字は書けなかった。

オレは小さく溜め息をついてもう一本マジックを手に取る。キャップを外し、表紙にマジックを走らせる。

書く文字は簡単だ。

第八回学園都市体育祭業務報告書。

第八回と言っても八回も体験したわけじゃないが。ただの上に提出する用の書類を作る業務報告書だ。

『お疲れ様』

目の前に差し出されるスケッチブックと共に冷たいお茶の入ったコップが出される。

「疲れたって言うほどじゃないけどな。今日は悪かったな。夕方に仕事を押し付けて」

『周さんの役に立てるなら本望だよ。周さんのそばにいられないのは辛いけど』

「だから、悪かったって」

オレはそう言いながら時計を確認する。時刻はすでに夜の九時。普通ならすぐに戸締まりをする準備を始めるが、体育祭期間中は様々な『ＧＦ』の駐在所が開いている。特に、第７６移動隊は二十四時間営業だ。

今日の予定では九時半まではオレと亜紗が、九時半から翌朝五時までは孝治と中村。五時からは委員長とリース、アルとなって体育祭二日目が始まる。

『でも、楽しかった。周さんと正さんの二人といるのは面白かったし新鮮だった。まるで、お兄さんとお姉さんが出来たような』

「で、亜紗はブラコンでシスコンの妹だろ？」

『正解』

亜紗は嬉しそうに微笑んだ。それだけで正と一緒に行動して良かったとは思う。

『それに、周さんの気持ちもわかったから』

「気持ち？」

オレは首を傾げる。亜紗の前では正について悟られないようにしていたはずだが。

亜紗は頷きながらスケッチブックを捲った。そこに書かれていた文字にオレは目を見開く。

『正さんのことが好きだよね？』

普通ならそんなわけがない、と言うところだろう。でも、オレはそう言うことが出来なかった。理由はわからない。わからないけれど、その言葉を言うつもりにならなかった。

『今日の周さんを見ていたらわかるよ。本当に楽しそうだった。私や由姫、都さん、アルさんと一緒にいる時みたいに』

「そうかも、しれないな」

楽しかったのは事実だ。正が楽しんでくれたのも嬉しいと思っている。

『周さんって今までは誰か一人ってのは選ばなかったから。都さんとは、え、エッチしたけど、慰める目的だったから。積極的に周さんが好き好きオーラを出したのは初めて』

「好き好きオーラってなんだよ」

正のことを気にかけているのは確かだ。オレの推測が正しかったなら正の正体はとある人物になる。だから、気になっている。

でも、オレの中では正が別の意味でも気になっているのも確かだった。それは、亜紗や由姫達に感じる感情と同じもの。

『それが周さんの選択なら、私達は何も言わない。周さんが自ら選んだなら、誰も怒らないと思う』

「それが、大事だから一人に決められなくても？」

『周さんが真剣に考えて選んだなら。でも、正さんに周さんは惹かれている。正さんは綺麗だし可愛いしギャップがすごくて周さんのことを理解している。献身的な女の子だから、私なんかよりもっと』

「バカ」

オレは立ち上がって机を回り込み、亜紗の頭に手を乗せた。

「自分のことを、なんかって言うな。確かに、正に惹かれているのはあると思う。でもな、お前のこともオレは好きなんだぜ。みんな長所もあれば短所もある。それがみんなに違いを与え、みんなに輝きを与える。オレが恋している五人は、そういう女の子だ」

『ハーレムを目指さないの？』

「悪くはないけど、目指したいものじゃないな。でも、決めなくちゃいけないんだ。オレは、自らの手で」

ハーレムというのはある意味男の夢かもしれない。でも、オレは決める。絶対に、決める。

「孝治達がそろそろ来るかもな。一応、明日のスケジュールを確認するとしますか」

『うん。明日は学校選抜予選、だよね？』

「ああ。何の競技をするかわからない、っていうか、委員長なら知っているけど委員長な教えてくれないだろうな」

学年選抜は毎年様々な競技をいくつもやって決める。例えば、大ムカデ競争とか匍匐前進競争とか竹馬１５０ｍ走とか。

噂によると、一部の実行委員は競争を漏らしているためか、ネット上ではいくつもの競技の生身があった。

『委員長だし。私はそんな委員長が大好きだよ』

「対策は立てられないけど、基本的に由姫が無双だろうな」

魔術が使えないという条件下なら由姫は第７６移動隊で二番目に強い。由姫の近接格闘は音姉の剣技には及ばないが、由姫単体でもかなり強い。

由姫の苦手な競技（苦手と言いながらそれなりに強い）がなければ基本的に由姫が暴れる。

『去年は本当に色々なものがあったよね。去年みたいのだったらどうしよう』

「去年みたいな学校選抜なんてやりたくないからな」

去年の学校選抜は基本、〇〇食い競争シリーズだった。パンだけじゃない。様々なものの食べ物競争シリーズ。余ったものはスタッフがおいしくいただきましたとも。

一昨年は確か走る系統ばかりだったが、一昨年には第７６移動隊最強の音姉が文字通り一人無双をしたためすごいことになった。

今年は何が来るだろうか。

『並大抵の競技なら心配はないよね。何て言っても第７６移動隊なんだから』

「まあ、そうなるんだけどさ。どんな競技かによって対応は変えないとダメだろ。被害は少ないに越したことはないから」

『去年はそんなに激しいものじゃなかったけど』

「ただでさえ連覇しているんだ。マークが厳しくなるのは当たり前だし、オレの考えから言って、相手は競技内容を知っている」

『むぅ、圧倒的不利だよね』

その言葉に頷いた。これは推測ではあるが、対戦校は全て名門又は有名校なのだ。オレ達も有名校の一つだけど、相手からすればどうやっても勝ちたい。勝てばそれだけで第７６移動隊に勝ったというステータスが出来上がるからだ。

名門や有名校としてはこれ以上に無いってくらいに宣伝になる。

『圧倒的不利なんだけど、周は負けるつもりがないよね？』

「個人種目なら向こうも勝ち目はないとわかっているだろう。だから、全員参加種目を練習しているだろうな。まあ、騎馬戦とかになれば無双するけど」

オレと孝治と由姫の三人で。

『競技内容によらなくても周さんと孝治さんならしそう』

オレと孝治のコンビネーションは極めて高い。それに、学校選抜には悠聖もいる。負けない自信しかない。

『周さんは自信満々だよね』

「当たり前だろ。オレは一人じゃ弱い。弱いけど、みんなと集まればオレは最強だ。戦場を征する。それだけをすればいい」

『そうだね。周さんなら絶対に出来るよ。私も出来る限り頑張るよ』

「お前ら二人に頑張られたなら、俺達の出番はないな」

その言葉にオレ達は振り返った。そこには大きなリュックを背負った孝治と手ぶらの中村の姿がある。

オレは笑みを浮かべた。

「夫婦の到来だな」

「海道？　茶化されるのはうちは嫌いやけど？」

『二人共幸せそうだから。私も夫婦だと思ったし』

「婚姻は卒業すれば、うぐっ」

孝治の頭を中村が勢いよく叩く。中村の槍、レーヴァテインによって。ちなみに、周囲に『胡蝶炎舞』が舞っているのが恐怖のポイントだろうな。

これでコピーされたレーヴァテインが大量にあれば無条件降伏する自信しかない。

「余計なことは言わんでいいから!?」

「どうせ後々にわかることだ」

「恥ずかしいやんか!」

「しかし」

「あのさ、一つついいか?」

オレがゆっくり手を挙げるとそこにはゆっくり振り返る中村の姿。ただし、どう見ても鬼と言うべき姿だった。炎の蝶が周囲を舞い、レーヴァテインのコピーが所狭しと並んでいる。

ここが戦場なら確実に詰んでいるよな。

「お前らが結婚することなんて今更なんだけど」

「えっ?」

中村の驚いた顔。オレはそれに驚いていた。

「オレらからすれば遅かった風に思えるからさ。小学生から付き合って今まで継続しているんだぜ。二人の性格は知っているからお前らなら幸せにやれるってわかっていたし」

「は、恥ずかしいやんか」

「そ、そうだ」

二人が恥ずかしがる。中村はともかく孝治が恥ずかしがった顔なんて初めて見るな。

「貴重なものが見れたかも」

そうぽつりと呟いた瞬間、発言を間違ったと理解して、そして背中にゾクリと嫌な予感が走った。

前にいるのはにこやかな笑みを浮かべた中村の姿。

「海道？」

「な、何だ？」

中村が笑みを深める。

「一度死ね！」

そして、放たれるレーヴァテインのコピー。オレはそれがゆっくり時間を引き延ばされたように向かってくる様を見ながら、

「一日が終わったな」

感慨深く現実逃避することにした。

第百三十九話　二日目の朝

――――予想が外れたらどうする？

頭の中に響く声。オレ自身の心にある不安の表れ。

――――考えている作戦が失敗したらどうする？

いくら自信満々に推測したところでそれが失敗したなら全てを失う。

――――大切な仲間が死んだらどうする？

考えたくないのに考えてしまう。それはオレの心の弱み。

――――逃げ出したいんじゃないか？

オレが背負っている重みは１８歳にしては重すぎる。

――――楽になりたい。

ああ、そうだ。確かに逃げ出したいとは思ったことがある。

――――だけど、

だけど、オレはこの道を突き進むと決めたから。

――――諦めたくない。

自分でそう決めた道なのだから。だから、オレは、

「お兄ちゃん！　お兄ちゃん！」

由姫の声が耳に響く。それと同時に体を揺すられている。オレはゆっくり目を開けた。

目を開けた先にいるのは心配した表情の由姫。

「何か、叫んでいたか？」

「そうじゃなくて、お兄ちゃんが時間になっても起きて来ないから心配して。声をかけても反応しないし、もしかしたら、お兄ちゃんが」

「悪かった」

オレは起き上がりながら由姫の頭を撫でる。疲れていたとは思えない。だけど、やっぱり緊張しているんだろうな。

例え、オレの推測通りに事が進んでも、オレは第７６移動隊隊長の地位にいられるとは限らない。もしかしたら、誰かに殺されるかもしれない。

それでもいい。それでもいいはずなのにオレは、まだ、諦めきれない。

「不安、なんだよ。本当に作戦が成功するのか、本当にこのままで

大丈夫なのか。」

「お兄ちゃん」

「失敗したら全てを失う。成功しても、オレは失うものが出てくるかもしれない。それが地位や名声なら大丈夫だ。でも、みんなを失うと考えたらオレは」

その時、オレは由姫に抱きしめられていた。

「大丈夫だよ。私は大丈夫だから。今回の体育祭はたくさん傷つくかもしれない。たくさん批判を浴びるかもしれない。でも、私はお兄ちゃんの隣にいるよ」

「由姫」

「妹だからじゃない。お兄ちゃんを、海道周を手助け出来る白百合由姫として支えたい。だから、お兄ちゃんは前に進んで。それがお兄ちゃんが決めた道なら私は喜んで手伝うから」

「お前は、どうしてオレに手伝ってくれるんだ?」

疑問だった。不思議だった。未だに納得がいっていない。オレみたいな青二才がただの推測だけで語っているのだ。

例え、義理の妹である由姫だとしても納得出来ないと思う。

「自惚れないで。妹だから、一人の女として好きだから、お兄ちゃんを手伝うのじゃない。お兄ちゃんの未来に私は向かおうと決めたから。例え否定されたって、私は自分の決めた道を進む」

「そっか。そうだよな。オレは一人じゃないよな」

親父達とは考えが違う。もしかしたら、親父達が異端ではなくオレ自身が異端であり世界の滅びを手伝っているんじゃないかと思える。

結果が出ないから、というわけではない。結果に求めることが多すぎるから。

「もし迷ったら振り返ってよ。お兄ちゃんの後ろには私やお姉ちゃんみたいに頼りになる人がいるから」

「そうだよな。ところで、由姫の後ろはどうなんだ？」

オレは由姫に尋ねる。これに気づいたのはほんの今さっき。由姫に癒されていたら完全に気配を感じれなかった。

「後ろ？」

振り返った先にいたのは音姉と義母さんの姿。音姉は頬を赤く染め、義母さんはとても面白いものを見つけたかのように笑みを浮かべている。

状況としては最悪だけど、開き直るしかない。

オレはとっさに離れようとした由姫を抱き締めた。

「お、お兄ちゃん？」

戸惑いの声。オレはそれを聞きながら耳元で囁く。

「もう少しだけ、頼む」

「うん」

頬を赤く染め頷く由姫。ここで部外者の、

「あうあう、由姫ちゃんと弟くんが非行に走ってる」

「あらあらまあまあ」

の二つの声が無ければ雰囲気的には押し倒していたかも。というか、非行ってなんだよ。

オレは少しだけ由姫を抱き締める。不安な自分を由姫に知らせるかのように。

「由姫ちゃんと弟くんのせいです」

「兄さんのせいです」

「オレのせいだ」

結果、遅刻した。

オレと由姫と音姉の三人は揃って集合場所（駐在所ではない）に正座させられている。

「こんな大事な時に遅刻するとは自覚があるのか？」

腕を組んだ孝治が高見から見下ろしてくる。まったくもって反論出来ません。

「周、お前は第７６移動隊隊長だ。第７６移動隊隊長は女の子といちゃいちゃして遅刻する人という噂があったらどうする？」

その言葉にオレ達三人は同時に視線を逸らした。孝治の額に青筋が浮かぶのがわかる。

隊長と副隊長揃ってこうだもんな。怒るのは当たり前だ。

「くっ、羨ましい」

「レーヴァテイン、セット」

唐突に響き渡る死刑宣告（レーヴァテイン）の名前にオレ達の顔が引きつるのがわかった。

振り向いてはいけない。振り向けば、とばっちりを喰らう。

「孝治？　羨ましいって、どういうことなん？」

「ひ、光。落ち着け。昨日ちゃんと可愛い」

「死にさらせ！」

そして、孝治に放たれる死刑判決（レーヴァテイン）。こういう時の中村を止めようと

思えば本気で死ぬ気でいかないとダメだからな。
爆音と同時にオレ達は両手を合わせた。
「悪い、遅れた」
呑気に響き渡る声。その悠聖の声にオレ達は両手を合わせて目を瞑った。
「死にさらせ!!　このアホんだら!!」
「『胡蝶炎舞』に『炎熱蝶々』とレーヴァテインの同時展開はさすがに死ぬと思うからな!」
「ブラスト!」
「孝治ガード!」
孝治、不幸なり。
「ブラストブラストブラストブラストブラスト!!」
「ちょっ、それ以上はさすがに、ギャーッ!!」
ああ、頭の中で光景が簡単に思い浮かぶ。オレは二人のご冥福を祈った。

「遅刻してすいません」

「口を滑らせてすみません」

オレ達の代わりに座る悠聖と孝治。悠聖はともかく孝治の理由はすごいよな。

「孝治は第７６移動隊副隊長って自覚はあるん？　ただでさえ学年都市の中でも残念イケメンって呼ばれてんねんで」

オレは隣にいる都に尋ねた。

「都、残念イケメンって何だ？」

「孝治さんのことです。学年都市トップ３に入るイケメンで第７６移動隊副隊長ありながら、小学生、から彼女を持っているため名付けられました。後は、光さんが美人というより可愛い方面だからでしょうか」

「なるほどね。確かに孝治はイケメンだよな」

「「周様（兄さん）の方がイケメンです」」

うん。お前らならそう言うと思った。

「ただでさえ女の子近寄ってくるのに、うちより可愛い女の子がいっぱい寄ってくるのに、うちなんて」

「光、ストップ」

中村の唯一のストッパーである楓がやんわりと中村を止めた。

「今日からは第一特務の人も本格的に手伝ってくれるんだから。ほら、二人共ポカンとしてる」

確かに、アルトとリコの二人を見れば口を開けてポカンとしているよな。

二人は昨日、学園都市の案内を都と琴美にしてもらっていたのだ。だから、体育祭の護衛の参加は今日から。

「っと、さすがはリュミエル・カグラ。世界で唯一地獄の異名を持つ光を止めるとは」

確かにキレたら音姉くらいしか止められないしな。

「亜紗、第７６移動隊って怖いね」

『基本的にはいい人達だよ。基本的には』

「そなたら、話が脱線しておる。今は遅刻した者達の魔女裁判じゃろうに」

『絶対に通じないと思いますが』

エリシアの言うように魔女裁判って何だ？

「とりあえず、今日の予定を確認するぞ」

オレは何かを言われることを覚悟で口を開いた。

第百四十話　別行動　チームＡ

今日の予定は簡単だ。体育祭は二日目から本格的に忙しくなる。だから、第７６移動隊も部隊を四つに分けるのだ。

一つはチームＡ。これはオレと由姫の二人だけ。途中からメグも合流するが、それは学年選抜が終わってからだ。することはある意味挨拶まわりも

一つはチームＢ。これは孝治や悠聖達、高校三年生が所属する。このメンバーは見回りを行ってもらう。

一つはチームＣ。これは第５分隊以外のメンバーが所属している。一番自由に動けるようにしたかったからだ。

最後はチームＤ。第５分隊でエスペランサ待機組。待機組と言ってもほとんどアルやリマ、ルナがいるだけだが。

というわけで、オレは由姫と一緒に商業エリアに来ていた。ここは来る予定ではなかったのだが、浩平からの予想外の連絡で一番近くにいたオレ達が来ることになった。

「浩平、報告は本当なんだろうな？」

「目撃証言がいくつもあんだよ。大和からは人員が割けないらしいから、助けを呼んだんだ」

「まあ、急げば昼休み潰さずにどうにか出来るからな」

オレの近くに由姫はいない。由姫はすでに目撃証言があった場所に向かっているからだ。

オレは小さく溜め息をつく。

「本当に、巨大な斧を担いだ女の子がいたんだよな？」

「信じたくないが」

ちなみに、リースにも浩平が個人的に連絡したら捜すのを手伝ってくれるらしい。多分、

「エンシェントドラゴンのメリルだよな」

メリルと、音界の歌姫メリルと同じ名前だから一緒にいた場合、かなりややこしい事態になる。

まあ、今日はまだメリルの姿はないから大丈夫だけど。

「多分な。リースよりも小さくて青い髪。そもそも、青い髪なんざ染めなきゃ出来ねえよ。こんな学園都市で出来るわけがない」

「まあ、学園都市は黒か茶か金だもんな。ともかく、オレも出る。目撃情報があったらオレと由姫にすぐ回してくれ」

「はいよ。俺も竜言語魔法で捜すけど、期待はすんなよ」

「お前の竜言語魔法には期待なんてしてないからな」

オレはそう言って走り出した。すぐに近くの建物の屋上を上がる。

「レヴァンティン」

『次は商業エリア東側ですかね』

その言葉にオレは一瞬足を止めて地面を蹴った。

「相変わらず、先回りするよな」

『何年の付き合いだと思っていますか？　それに、ちょうど休憩中だったのでかなりありがたいですね』

ちょうどオレはメリルの位置を目撃情報から算出して次の予測を作って欲しいと言おうとした。だが、レヴァンティンは先回りして答えてくれる。

何でも出来るから頼っちゃうんだよな。もう少しレヴァンティンから脱却しないと。

「ともかく、今はメリルを捜すのが先だ。というか、知り合いに二人のメリルってかなりややこしいな」

『メリルというのは昔は珍しい名前では無かったようです。過去の文献のいくつかにメリルという名前のお姫様と、子供の姿の大人として書かれたメリルの名前もありますし』

「なるほどね。というか、レヴァンティンはよく知っているよな」

『優秀ですから』

何が優秀かは聞かない方がいいな。確実に長くなるだろうから。

「偶然の一致だと考えたいけど、何かの象徴だったら笑うしかないな」

『そうですね。神、だったらすごいのですが』

「呼んだ？」

その言葉にオレは足を止めて振り返った。手はとっさにレヴァンティンの柄に置かれている。だが、それより早くオレの体が両断されるイメージが流れ込んできた。

レヴァンティンの柄から手を離す。

「私を捜しているようだから来た」

「エンシェントドラゴンのメリルだな」

「メリルでいい」

「メリルって名前の知り合いが一人いるからな。それに、確認のために」

「ならいい」

メリルは素っ気なく頷くと斧の柄から手を離した。

後ろからかかってきた声に反応したメリルがとっさに斧を掴んだのだろう。気配なく近づかれたから殺気を飛ばしてしまったし。

「悪いが、今の期間は一般客の来場を遠慮してもらっているんだ。だから、今日は大人しく帰って欲しい」

「招待状はある」

「期限、明明後日からだからな」

オレがそうメリルに言うとメリルはブスッとしたような顔になった。そして、ぼそりと呟く。

「人の法則には当てはまらない」

確かにお前はエンシェントドラゴンだから人の法則に当てはめるのは無理だけどさ。

「郷に入れば郷に従え。エンシェントドラゴンだとしても、ちゃんとルールに従わないと討伐隊が組まれるぞ」

「焼き尽くせばいい」

否定出来ないってのがかなり怖いよな。

「まあ、今は学園都市内にいるんだ。その招待状はポケットに戻して、今日はリースにでも案内を」

「メリル！」

リースの声と共に近くの屋根に誰かが着地した。そして、リースはメリルの体を確認する。

まるで、オレが何かしたような感じだよな。

リースはその手に竜言語魔法の書を取り出してオレを睨みつけてきた。

「メリルに何をしたの？」

リースにしてはかなり怒っている。だから、オレにはそれが少し怖かった。

「何もしてないって」

「メリルの体重が少し少なくなってる。あなたが戦闘したからに違いない」

「何もしていないって」

「許さない」

「だから、何もしていないって言っているだろうが」

オレが小さく溜め息をついた瞬間、メリルがもぞもぞと動いてリースから離れる。そして、メリルはオレ達を無視して歩き出した。

思わず手を出してメリルを止める。

「ちょっと待った。どこに」

「退いて。私には目的がある」

斧の柄に手を当てるメリル。オレは額に汗が流れるのがわかった。

メリルの攻撃力は完全に人間離れしている。レヴァンティンですら真っ正面から斬り合えば普通にレヴァンティンごと真っ二つされるだろう。

運が良くて肩が外れるくらい。勝負すべきではないが、

「だから、今の期間中はどうしても無理なんだって。今日は大人しく」

「今から向かわないと麗菓堂限定月２０個の商品が食べられない」

オレとリースは完全に息を失った。息をすることを忘れたではない。あまりのことに息をすることが出来ないのだ。復帰するのはその五秒後。

麗菓堂と言えば学園都市商業エリアにある有名な和菓子の店だ。その中でも月２０個限定商品は口に入れた瞬間、文字通り溶けるくらいになっている。

和菓子なのに和菓子じゃないと言うべきか。

オレはレヴァンティンを耳に当てた。

「由姫、聞こえるか？」

『どうかしましたか？』

すぐさま由姫の声が聞こえる。

「今どこだ？」

『えっ？』

驚いたような声になる由姫。どこか焦りが混じっているような。

「どこにいる？」

『麗菓堂の前』

ちょっと範囲から離れすぎじゃないか？

「限定和菓子一個よろしく」

それだけ伝えてオレは通信を切った。おそらく、限定和菓子を買うために並んでいるのだろう。

限定和菓子は一人一個だから罰としては十分だ。

オレは小さく溜め息をついてメリルを見る。対するメリルは不思議そうな顔をしてオレを見ていた。

「もうすぐだからちょっと待ってろ」

斧から手を離れたのを見てホッと息を吐くのだった。

「ああ、私の和菓子」

メリルの口の中に放り込まれていく和菓子を見ながら由姫が小さな声を漏らした。よく見れば微かに手が伸びているような。

由姫が買ってきたのは限定和菓子だけではないが、買ってきたほとんどがメリルの胃に収まっている。

「あのな、オレ達は遊びじゃないんだ。今は孝治が代わりに行ってくれているけど、オレ達にも仕事があるんだぞ」

「だって、麗菓堂の和菓子だよ。学園都市内史上最強商品だよ。あまりの美味しさに一時期二日前から並んでいる人がいるくらいだよ」

実際は三日前から。

オレは幸せそうなメリルの顔を見ながら小さく息を吐いた。

「で、メリルはどうして来たんだ?」

「和菓子を買いに」

「メリルが行っても今の時期は買えないけどな」

体育祭期間中は身分証明書の提示が必要な店がほとんどだ。基本は学生証。なければ保険証などが必要になる。

というか、名前の書いてあるものさえあれば何でもいいんだけどな。

「後、調整」

「調整？」

「そう。あっ」

メリルが口を開けてしまったという顔になる。そして、青ざめだした。

オレは小さく溜め息をつく。

「聞かなかったことにする」

「でも」

「まあ、予想なら」

オレは地下を指差した。それに対してメリルは肯定してくれる。

一体、メリルは何なんだ？　エンシェントドラゴンだけど、エンシェントドラゴンとは違う何かを感じる。

「周、一つお願いがあるけどいい？」

今まで黙っていたリースがオレを見つめてくる。そして、両手を合わせた。

「一日だけ連れ回って」

「確信犯かい！」

リースはきっとメリルを手引きした張本人なのだろう。リースと合流するより早く待てなかったメリルが麗菓堂に向かおうとしたためこうなった。

一番簡単に納得出来る。

「メリル。お前はオレ達以外の『ＧＦ』に知り合いはいないか？」

「『ＧＦ』総長善知鳥慧海」

「総長時代の慧海かい。ちょっと待ってろ」

オレは三人から離れてレヴァンティンを耳に当てた。

『愛しのマイハ』

レヴァンティンが強制的に接続を切る。ちなみにオレが切ったわけではなく、レヴァンティンが切ったのだ。

すぐさま回線が開いた。

『どうした？　マイ』

今度はオレが接続を切った。

すぐさま回線を開く。

『マ』

オレとレヴァンティンが同時に接続を切る。ここまですれば大丈夫だろう。

『おいおい。ちょっと冗談だろ』

『鳥肌が立ちましたので』

『レヴァンティンも会話に参加出来んの？』

今初めて知りました。

「慧海。メリルって知ってるか？」

『目の前にいるけど？』

「通信取んなよ！　歌姫じゃなくて、エンシェントドラゴンの」

『エンシェントドラゴン？　ああ、はいはいはい。エンシェントドラゴンのメリルね。ロリババァの』

ビキッ。

振り返りたくない。絶対に振り返りたくない。

『そのメリルがどうかしたのか？』

「今、学園都市に来ているからさ、お前の権限でどうにかしてくれないかなって」

『なるほどね。どうしようかな。そいつとは死闘を演じたからな。それに、嫌いだし』

メキッ、バキッ。

振り返りたくない。振り返りたくない。振り返りたくない。振り返りたくない。振り返りたくない。振り返りたくない。振り返りたくない！！

『わかった。レヴァンティンに直接送るから権限的には最低だな』

「了解。それで十分だ」

『じゃ、ま』

オレは強制的に通信を切った。そして、小さく息を吐く。

「何とかなりそうだ。由姫、いいか？」

「私なら大丈夫です。それにしても、よく例外が通りましたね。こういうことは本当に厳しいですから。特に学園都市は」

「例外は認めない。それが方針だからな。一度でも認めれば例外がずっと続く。まあ、抜け道もあるからな」

「そう。じゃ、メリルをよろしく。メリル、また」

「うん」

リースが走り出し地面を蹴った。そして、空を飛ぶ。本当なら違反

だが、おそらく、浩平が交付しているだろうな。そこら辺はリースがしっかりするし。

「じゃあ、ちょっと不自由かもしれないけど、オレ達についてきてくれよ」

「わかった」

オレはその言葉に頷いて歩き出した。とりあえず、孝治と連絡を取らないとな。

第百四十話　別行動　チームＡ（後書き）

メリルの名前の重複はわざとです。理由は後々語りますが、いつになるかはわかりません。

第百四十一話　別行動　チームＢ（前書き）

チームＢなのに三人しか出ません。

第百四十一話　別行動　チームB

「そうか、わかった」

孝治が壁にもたれかかりながら通信機を耳に当てている。オレはその様子を冬華と横並びで見ていた。

「周も大変みたいね」

「そりゃな。周隊長はある意味一番多忙な十代じゃないか？」

「言えているわね」

オレの言葉に冬華が苦笑しながら頷く。周は本当に忙しい。特に、体育祭期間中のあいつのスケジュールは朝から晩までほとんど詰まっている。

周には一度、みんなで分ければそうかと尋ねたが、周は首を横に振って拒否した。まあ、周にしかできない仕事は多かったし。

「なのに、体育祭の競技まで出るなんて変わっているわね」

「あいつはさ、二年間も学校生活から離れていただろ？　多分、楽しみたいんじゃないか？　久しぶりの学校生活を謳歌したいって感じで」

「一理あるわね」

今の周は頑張りすぎだ。周が鉄人のごとく体力はあるから体力的に

は心配していないが、精神的に倒れるんじゃないかといつも気にしている。

あいつは何でも一人で頑張りすぎるから。

「そう言えば、悠聖は周のことを周隊長を呼ぶわね。どうして？」

「オレなりのけじめかな。オレが『ＧＦ』に入れたのは、周隊長がいたからなんだ」

冬華は意味がわからないという風に首をかしげた。

「あいつはさ、努力だけで天才の領域に上り詰めた。でも、周囲はそうは見ない。たった六歳、七歳で『ＧＦ』に入ろうとする悲劇を経験した主人公ってはやし立てられるだろ。それを見たことがあるんだ。昔の話だけど」

本当に昔だ。今までフィネーマ、アルネウラと優月にしか話さなかったこと。

オレの『ＧＦ』の始まり。

「テレビ会社によって面白おかしく編集されていても、オレはあいつに惹きつけられた。本当に、かっこよかった。世の中にはイケメンがいるけどさ、周みたいにかっこいいイケメンなんていないだろ？」

「そうね。周は本当に輝いているわ。もし、悠聖がいなかったら惚れている自信があるくらいに」

「だろ。今のオレは周隊長のおかげで存在する。だから、みんなの前では敬意を表そうって思っているんだ。『ＧＦ』の道を開いていくれた師匠にね」

精霊を召喚できるから『ＧＦ』に入ったのではなく、『ＧＦ』に入ろうと頑張っていたら精霊が召喚出来たのだ。

周にだけはこれからも頭は上がらないだろうな。

「悠聖、あなたも十分に輝いているわ。人と精霊との絆。私になんて真似できないくらいに」

「冬華にはフェンリルがいるじゃないか。オレにはアルネウラ、優月、そして、フィネーマがいたからな」

「スルメを食って元気出せ」

「意味がわからないから」

唐突に出されたスルメに対してオレは小さくため息をついた。そして、スルメを差し出している孝治を見る。

「むっ、ダメか。スルメを食えば元気になるぞ」

「そんなの知らないから。で、周からはなんて？」

「用事は済ませたから戻ってくれ。後は無様な戦いはするなとも言っていたな」

「無様な戦いね」

そろそろ時間が迫っている第三学年の学年種目だろう。学年で二十人を選抜し、学校同士でドッヂボールで戦う。もちろん、魔術は使用できないが、精霊召喚師にはいくつもの裏技がある。

「シンクロした方がいいかな」

「そうね。シンクロした方が戦いやすいわね」

魔術は使えないがシンクロさえしていれば体内で発動すると言うことが出来、阻害なんて意味がなく使えることだってできる。

ばれたら失格だけど。

「するな」

オレ達の言葉に孝治が呆れたように言った。

「正々堂々としていればいい。どうせ、誰も俺達には勝てない」

「だろうな」

魔力が使えない条件下での戦闘は無いわけではない。例えば、魔力粒子が濃い状態では周を除いて普通は行動が出来なくなる。だが、その時に魔力を最低限しか使用しないようにすれば何とか動けるのだ。後は慣れるだけ。

ちなみに、これを見つけたのは悠人。あいつって幸運の女神がついているのか？

「まあ、相手になりそうなのが一人しかいないけど、学年が違うから大丈夫よね」

「一人？　オレ達と戦える奴がいるのか？」

「まあね。メグから聞いた話だけど、ルームシェアしている親友が風祭時音なのよ。総附高一の有名人」

「あの、たった一人の天才によってプロ野球界が女の子を参加可能にしようとしている人？」

オーバースローで最速１５７ｋｍが出たとか。孝治なら野球が詳しいから知っているかもしれないな。

「孝治、その風祭時音ってどんな人なんだ」

「ＭＡＸ１５８ｋｍのストレートを武器に１５０ｋｍを超える高速スライダーと高速シュート。ストレートと同じ速度で打者の手前で顔から地面まで落下する縦のスライダー。球質は極めて重く、並みの力ではファールにしかできない」

「あ、あの、孝治さん？」

思わずさんを付けて尋ねてしまう。だが、孝治は止まらなかった。

「特筆すべきはサイドスローでも投げると言う点だ。サイドスローではさすがに球速は落ちるがそれでも１５０ｋｍ台は出る。特に、その速度から出るクロスファイアは女子野球界ではキラーボールと言われ、風祭時音相手には右バッターは並べられないらしい。サイドスローで警戒しなければいけないのはスライダーとシュートだ。

さすがに球速は劣るが、変化量が極めて高く、かの有名なバッター、シローですらバットに当てるのが精いっぱいという状況だ。試合中にオーバースローとサイドスローを投げ分ける非常識な才能と、強力な変化球はプロでも通用すると言われている。悠聖、どうした？」

「反応遅いな。そんな話されてもオレ達は野球にはあまり詳しくないからわからないって」

「ありえん。貴様は敵の能力を把握しようとはしないのか？　風祭時音の能力をゲームで言うならオールS。変化量は平均6にはなるはずだ。最近ではカットボールを覚え、ストレートと変わらない速さで手元で曲がるため凶悪すぎるとか、ストレートが若干ムービングだとか情報を集めないのか！？」

「集めるか！」

そんな野球の話をされてもオレの中では一切わからない。そもそも、野球に興味がないし。

というか、孝治が酒のつまみ以外にここまで熱く語るのを初めて見た気がする。

「噂によると、キンボール（直径約１２０ｃｍ　重さ１ｋｇ）を時速１００ｋｍで投げたとか」

「キンボール？　なんだそりゃ」

「知らないならいいわ。ドッヂボールの球なら１４０近く出るみたいよ。多分、止められるのはほんの極わずかね」

「学年違うことになってよかった。その風祭時音は何年生なんだ？」

「一年よ」

つまり、周と戦うと言うことか。でも、周なら、

「周なら簡単に取るな。由姫もいる」

孝治の言うことに全面的に賛成だった。だって、周の反応速度はおかしいから。完全な死角からの攻撃すら対処するし、ギルバートさんと対等に打ち合える（勝てないけど）し、状況を的確に判断するし。

由姫は由姫で凄まじいからな。それくらいなら何とかなりそうだ。

「結構有名な話なのよ。風祭時音ならあの海道周を止められるかもしれないって。一番危険なのは由姫の方なのに」

「周隊長もたいがい危険だからな。相手からすれば。まあ、オレ達とは違ってまだ少ないからだろ。一年の要注意人物は周隊長と由姫の二人だけ、だと思われている」

「我らが第７６移動隊新人の北村恵を忘れているな」

「メグは参加しないわよ」

冬華の言葉にオレ達は固まった。そして、同時に冬華の顔を見る。

「メグは他の競技に専念するらしいわ。まあ、周がそう決めたことらしいけど」

「ヤバくない？　都島高校って学校選抜と学年選抜以外に勝てる競技がすくないだろ？」

「大丈夫だ。多分、問題ない」

「それ、死亡フラグじゃないかしら」

冬華が呆れたように溜め息をつくのと同時にオレ達は立ち止まった。

富良野高校。それが目の前にある。

富良野高校はグラウンドの大きさはそこそこだが、商業エリアに近く、交通の便がいいため結構な数の種目が行われる。

もちろん、学年選抜もだ。確か、学園都市名物借り物競争予選もだっけ。

「さてと。乗り込みますか」

「違和感があるな」

「周なら似合っているけど」

「文句を言うなら黙ってくれ！」

泣いてもいいですか？

第百四十一話　別行動　チームＢ（後書き）

次回、別行動　チームＣではなく、学年選抜競技に入ります。

第百四十二話　学年選抜予選（前書き）

平日より土日の方が書くのが遅くなります。平日の方が暇なので。

第百四十二話　学年選抜予選

大きく振りかぶった腕から放たれるドッヂボールに使うボール。それは相手に当たる寸前で急激に落ち、内野に残っていた最後の一人の足に当たり、地面に転がった。

「ウィナー」

そのボールを投げた悠聖が天高く腕を掲げた。

沸き立つ歓声、は少ない。むしろ、あまりのことに驚いている人が多い。

学年選抜であるドッヂボールは１７選手が内野１４人、外野３人で戦うのだが、悠聖側の内野には、

孝治、亜紗、楓、中村、悠聖、冬華、委員長、

の七人の姿がある。はっきり言うならこの七人による無双だった。

やはり、第７６移動隊とは力の差がありすぎる、というのに改めて驚いているのだろう。

「敵がいないってのも面白くも何ともないよな」

「敵がいないにこしたことはないけど」

メグはそう言うがオレはそうは思わない。

オレ達からしてみれば体育祭は別に参加しなくてもいいものだ。むしろ、第７６移動隊の仕事を考えれば参加しない方がいい。

とは言っても、オレ達は学生なのだから体育祭には参加したい。参加するからにはちょうどの実力を持った相手が欲しい、ということだ。

「まあ、メグの言うことにも一理はあるけどな。今のところは中間試験、上手くパスしているよな」

「あー、私の忘れたいことの筆頭だったのに。何とか、ね。次の借り物競争が一番気合いが入るけど」

「例年、おかしなくらいの借り物があるからな」

体育祭の借り物競争は独特だ。多分、世界で一番、独特だろう。

「おっと。そろそろ時間だな。じゃ、言ってくる」

「周はウォーミングアップしなくて良かったの？」

メグは周りを見渡しながら尋ねてくる。確かに、周囲にはたくさんウォーミングアップをしている人がいる。由姫や夢もその一員だ。

だけど、オレはそれが目的だった。

「ウォーミングアップを見れば、大体の実力がわかるからな。そこから作戦を組み立てれば」

「やっぱりね。どうりであの海道周がウォーミングアップをしない

わけか」

その言葉にオレは振り返った。そこにいたのは総附高の刺繍が入った体操服を着る短髪の少女。身長は普通だけど引き締まった体からよく訓練されているとわかる。

顔は可愛いらしいけど、見た目の活発そうなイメージが勝っているな。目を引くポイントは自己主張の少ない胸くらいか。

「やっほー、メグ。敵陣視察のついでに遊びに来たから」

「時音。ウォーミングアップはいいの？」

「うん。新しい変化球を練習していたし」

時音と呼ばれた少女はその手にある野球のボールを指先で上手く回す。

回転はとても綺麗で軸はあまりブレていない。

「後は、大将に挨拶かな」

そう言いながら少女は笑みを浮かべる。それに対してオレも笑みを浮かべた。

「いいのか？　オレ達を甘く見て」

「甘く見ているのはそっちかもね。私は二人の実力を何度もビデオで見た。反応速度を計算し、反射神経の高さから様々な作戦を考えた。海道周。あなたは想像出来ないような球を受けた時に対応出来

るのかな？」

どうやら自信満々のようだ。確かに、研究されているなら自信満々な理由は少しわかる。ただ、彼女は勘違いしている。

反射神経の高さから反応速度が速いわけじゃない。それだけを見れば普通のカテゴリーに入るだろう。

脊髄反射が可能な孝治や音姉、反応速度が脊髄反射より速い時雨とかと比べれば全然だ。

でも、見た目の反応速度だけで言うなら世界最速にはなる。彼女はそれを勘違いしている。

「第７６移動隊隊長を舐めるなよ」

「舐めてはいないかな。海道周の凄さはいろいろな所で噂されているからね。特に、メグからは耳にたこが出来るかと思った」

「そんなに話していないんじゃないかなと私は思うような気もしないわけじゃないような気がする」

確実に話しているという意味でいいよな？

「海道周を超える。私はそのために学年選抜に出るから。本当なら先輩達の最後の大会が近いから出ない方がいいんだけどね」

「なるほどね。でも、オレ達を簡単に超えられると思うなよ」

「思ってないよ。何たって、伝説の海道周だからね。簡単に超えら

れたら、拍子抜けよね」

「わかってるじゃないか」

相手としては不足無し、とでも言っておこうか。

「そうだ。メグ、借り物競争でどのランクを取るか決めたの？」

風祭時音は突如として話していた相手をオレからメグに変えた。急に話しかけられたメグは少しだけ驚いている。

メグからすれば話しかけられないと思っていたのだろう。

「えっと、Ｓランクを行こうかなって」

そして、その言葉にオレ達は絶句させられた。

借り物競争の借り物には五種類のランクがある。順位を取るだけなら最低ランクのＤ。順位ではなく到着時間の速さを頑張るならＳという風になる。ちなみに、クラスに入るポイントはＳランクが一番高い。

予選でもなかなかのタイムを出せば本戦及び決勝全てでＡランクを取った以上のポイントが手に入る。

ただし、普通に本戦には行けない。

Ｓランクを取って本戦に行けたのは孝治だけだ。

「つまり、メグは諦めていると」

「そういうわけじゃなくて、Sランクにある一億円以上の物、か、歴史的価値のある物を狙おうかなって」

Sランクにはその二つが普通にある。そんなものは簡単に用意出来ないが、よくよく考えてみるとメグはどちらも持っている。

「なるほど。二つを引けば大当たりになるね。メグは聖骸布（アストラル）と炎獄の御槍を持っているよね？」

「そうだけどって、時音、知っていたの？」

「当たり前じゃん。というか、押し入れの中に入れっぱなしになっているのを気づかないのがおかしいと思うけど」

神剣を押し入れの中に入れるってのもすごいよな。まあ、神剣は何故か持ち主を選ぶ傾向があるから盗まれても何も出来ないことが多い。

レヴァンティンはデバイスの中でも例外だから、ある意味神剣か？

レヴァンティンの意志でマスターの命令を拒否するし。

「おかしいかな？　お兄ちゃんなんて聖骸布（アストラル）巻かないで抜き身で置いているし」

「どれだけ炎獄の御槍を制御しているんだよ。まあ、札はすぐさま変えられるから、無理だと思ったら諦めろよ」

「わかってる。私はそこまでバカじゃないし。あれ？　都さん？」

その言葉にオレが振り返ると、そこには都と琴美、そして、音姉の姿があった。

オレは首を傾げる。

「どうかしたのか？」

「いえ。見回りに出かけるので周様に挨拶をと」

「本当は都が弟くんの顔を見たかっただけだよね」

「音姫！　余計なことは言わないでください！」

顔が真っ赤になっているところを見ると事実らしい。まあ、そう言われた方が嬉しいけれど。

「そっか。別に無理しなくてもいいんだぞ。予定なんて狂うものだから」

「それって上の言う言葉じゃないような気が」

メグの声が聞こえてくるが無視だ無視。

「まあ、見回りに出るなら一つだけ。多分、戦闘は起きないから」

オレの言葉に三人の顔色が変わった。オレがむちゃくちゃ遠回しで言った意味を理解したのだろう。三人共、頭の回転はかなり速いし、物事にもよく気づく。

オレが注意して欲しいのはそれだけだったからこれだけ言えば十分

だろう。

「じゃ、見回りよろしくな」

「わかりました。何かありましたら連絡しますので」

都が一礼して歩き出す。その後を琴美とオレに向かって手を振る音姫が追いかけていった。

オレも手を振り返して見送る。

『学年選抜対抗ドッヂボール。Ｄブロックの選手は集合して下さい』

「時間か」

オレの言葉と共にメグと風祭時音が頷く。

「さて、気合い入れていきますか」

第百四十三話　別行動　チームC

「周様が言っていたこと、琴美はどう解釈しましたか？」

都、琴美、音姫の三人が周囲を見渡しながら歩いている最中、都が唐突に琴美に尋ねた。

琴美は一瞬だけキョトンとした後に小さく頷く。

「どうせ、『悪夢の正夢（ナイトメア）』一派が話しかけてくる可能性があるってことでしょ」

「でしょうね。私もそう思いました。ですが、どうして私達に言うのでしょうか」

「多分、弟くんは三人に言ったんじゃなくて、都にだけ言ったんじゃないかな？」

音姫の言葉に都は不思議そうに首を傾げた。それに対して音姫がクスッと笑みを浮かべる。

「弟くんに近い四人の女の子。由姫ちゃん、亜紗ちゃん、アルちゃんに都。その中でも都は一番弟くんに依存していないと思われているから」

「それに、都は頭はいいわ。何が良くて何が悪いか訴えたなら、コロッと鞍替えするのじゃないかしら」

「確かに依存していないと言われればそうですが、周様は私に依存

していますよ」

その言葉に音姫と琴美の二人は同時に溜め息をついた。二人からすればそれが怖いのだろう。

周囲から見ていても、周は都に若干ながら依存している節はある。もちろん、由姫や亜紗にもあるが、都の方が大きい。アル・アジフに関しては無いが。

海道駿からすればそれが叩くポイントの一つだろう。海道周にダメージを与えるなら、都を引き込むのがお得だと。

「それにしても、相変わらず周は怖いわね」

「弟くんが？」

「あらゆる作戦を見抜く力。物事を予期して的確に指示する力。それだけを見ていても、私からすれば周が人知を超えた存在だと思えるわ」

「言われてみると。弟くんって昔から変だったから」

琴美からすれば音姫も十二分に変だと思っているが、それを口に出すことはない。

「脅迫観念かな。それが強くて、訓練しているか勉強しているか。私は弟くんみたいにはなれなかったから、せめて、弟くんを手伝える人物になりたかった。今だと、弟くんはみんながいる。私もそろそろ、ブラコンから抜けた方がいいかな」

「音姫は第７６移動隊を辞めるのですか？」

都の疑問に音姫は頷いた。

「第一特務からずっと勧誘があって、今の第７６移動隊は私がいなくても十分に機能する。それに、私はみんなと違って、ただ、強くなりたいだけに『ＧＦ』に入ったから」

「私なんてどうなるのよ。ただ単に都と一緒にいたいだけよ」

「私は周様といたいだけです」

都は胸を張ってそう言うが、むしろ、都や琴美の考え方はかなり少数派だ。

『ＧＦ』に入った理由としては音姫の、強くなりたい、が一番多く、次に、誰かを守りたいから、お金が欲しいから、就職先に、と様々な理由がある。

「強くなるだけなら第７６移動隊にいるのはむしろデメリット。確かに、第７６移動隊には弟くんや孝治くんみたいな強い人達はいるけど、第一特務はそれを越えるから」

「第一特務を越える部隊があるなら聞きたいものね」

「名前が上がるのは私達第７６移動隊くらいですからね」

第７６移動隊には第一特務に無いとある特色がある。それを最大限利用すれば第一特務以上の戦略級部隊となれる。

実際、近接戦闘でも十分に強いが。

「昔みたいに白百合の名前にはこだわらない。今は強くなりたい。もっと、弟くんをもっと手助け出来るように」

「音姫は昔から白百合の名前にこだわっていたように思えますが」

都が不思議そうに首を傾げた。それに琴美が同意する。

「そうね。白百合流を使っている音姫は輝いていたわ。何かあったの？」

「それは」

言いにくそうに口を噤む音姫。二人は音姫の言葉を待つ。

「それは、由姫が白百合家で起こした事件に起因しているから」

その言葉は音姫からではなく、別の方向から聞こえてきた。三人が一斉に振り返る。

そこにいたのはエレノア、ベリエ、アリエの三人組。

「リースちゃんは？」

「リースなら友達と一緒に商業エリアにいるよ。大事な友達だって言ってた」

「あの子に友達なんていたのね」

「失礼だと思います。よね、ベリエちゃん」

「私に振らないでよ」

ベリエは小さく溜め息をついた。そして、音姫を見る。

「音姫はまだ気にしているんだ。あの日のことを」

「気にするよ。だって、私のせいだから」

ベリエの言葉に音姫が顔をうつむけて呟く。その顔にあるのは後悔だけだ。

その顔を見た都と琴美は何も言わない。いや、言えない。いつも気丈な音姫を知っている二人からすれば、あまり見たことのない姿だったからだ。

「ベリエの言うことは気にしないでね。この子、周と回れないことに怒っているだけだから」

「お姉様！　余計なことを言わないで！　私は、周や由姫がいたなら絶対に言うことを言っているだけよ！」

「周お兄ちゃんも由姫さんも絶対に言わないと」

「何？」

ベリエがアリエを睨みつけて、アリエは開いていた口を閉じる。この時のベリエは暴君と言っても差し支えのないレベルだった。

「ともかく」

ベリエが近くにあったとある緑の丸いマークに文字が入ったコーヒーショップのテラスを指差す。

「ちょっとみんなで話をするから。もちろん、拒否なんてさせない」

事の発端は第７６移動隊が狭間市から帰って一ヶ月後のことだった。自宅に白百合家本家から一通の手紙が送られてきた。

それは由姫のレアスキルである『神への重力（グラヴィタス）』についての話。

簡潔にまとめるなら、由姫を白百合として認める、という意味でもあった。元々、由姫は白百合家の中では異端であり、海道家の中の周のような立ち位置だったからだ。いや、周よりはマシかもしれない。

由姫は里宮本家八陣八叉流を継承した人物であり、それだけは白百合家の中でも認められていた。

その手紙に由姫は喜び周は祝福したが、音姫と素子の二人だけは懐疑的だった。あまりにも唐突で、手のひらを返したかのような反応に怒っていたとも言える。

結局は本人の希望通りに白百合家本家に向かい、そして、事件が起きた。

由姫のことを快く思わない一派が由姫のレアスキル発動中に攻撃。気づけなかった由姫がその言葉を受けたことでレアスキルが暴発。周と音姫の二人が怪我をした事件だ。

由姫はそれ以来の恐怖からレアスキルの発動を無意識で威力を落とし、周と音姫は由姫を守れなかったことを後悔した。

この事件から、素子は白百合家本家から完全に分離を決意。今ではほとんど関わり合いがない状況でもある。

「そんなことがあったんだ」

話し終わった音姫の言葉にアリエがボソッと呟いた。それに対してエレノアとベリエがアリエを呆れたように見る。

「周様が怪我をしたということはあの時ですね。確かに、由姫さんもかなり落ち込んでいましたが」

「うん。私のせいだから。本当なら、集中している由姫ちゃんを私達が守らないと駄目だったのに傷つけてしまった。私が弱いから」

「音姫は弱くないわよ。私なんかよりもはるかに強い」

「ううん。弱いよ。私は、本当に弱いから」

本当に強いなら、由姫ちゃんを守れているから。

まるで、その言葉を言ったかのように頭の中に響く声。もちろん、それは幻聴だ。幻聴だが、その場にいる全員はそう聞こえた。

「強さって何かな？」

静まり返りかけた空間の中でエレノアが口を開いた。

「強さの意味を分かるのが私は一番だと思うけどね」

そう言いながらたった一人注文したコーヒーのカップを掴むエレノア。

「私は、弟くんや由姫ちゃんを守りたいから」

「私からすれば二人共十分に強い。魔界でも、二人に勝てるのはほんの数人じゃないかな？　レアスキル無しで。でも、それだけが強いって意味じゃないよね？」

力があるから、技術があるから強いという意味じゃない。

「音姫が望む強さ。周や由姫の二人を護りきる力なら、もう持っている。でも、それだけじゃ、どうにもならないことがある。どうして強さを求めるのか、どんな強さを求めるかを明確にしないと、音姫はいつか道を踏み外すと思うよ」

その言葉に、誰もが固まっていた。いや、驚いていると言った方がいい。エレノアの言葉はある意味見つけることが極めて難しいものだからだ。

強さというのは人それぞれだ。だけど、その強さに向かう人は少ない。向かうなら目標だ。強さではない。

「音姫が求める強さは、何？」

「その強さを求める理由である存在の罪、教えてやろうか？」

その言葉に全員が振り返る。そこにいたのはスーツ姿の一人の男。その顔を見た都や音姫は不思議そうに首をかしげている。だが、琴美とエレノアの表情は違った。どちらも驚愕と、それぞれ武器を手に取っている。もちろん、一般人にはわからないように。

「海道駿」

エレノアが小さく呟くと共に海道駿が指をパチンと鳴らした。それと同時に隔離される世界。

「結界系ですね。空間隔絶。結界系でも最上級に位置する強力な魔術」

冷静にいるのは都一人か。他は皆、武器を構えて身構えている。

海道駿は近くにあった椅子に腰を下ろした。

「ここで戦闘してもいいなら、今すぐ結界を解こうか？　もちろん、仲間がどういう行動に出るかわからないけどね」

そう、笑みを浮かべている。周囲にはたくさんの生徒の姿がある。この店で休憩している数も多い。ここで戦えばたくさんの怪我人が出るのは必須だった。

最初に矛を収めたのは音姫。そして、そのまま腰を下ろした。

「話を聞くけど、もし変なことをしたなら」

そして、髪の毛のリボンを解く。

「【容赦なく、慈悲もなく、殺すから】」

第百四十四話　全力全開

「っ！！」

都と繋いでいたはずのラインが強制的に切断されたのを感じてオレは思わず都がいた方角を振り向いていた。

あの日、都とつながったあの日、オレは無意識の内に都との絆とも言うべき魔力による生命探知であるラインを結んでいた。もちろん、それは深く愛し合っていてこその力だが、ラインを繋いだ相手が死ぬか、結界に取り込まれない限り切断されることはない。

後者であって欲しいが。

「兄さん？」

隣にいた由姫が心配そうに見つめてくる。オレは小さく首を横に振った。

「何でもない」

「何でもないわけありませんよね。急にそんなことをするということは何か予想外のことが起きたという認識でいいですか？」

「まあ、そうだな。予想外というかなんというか。ともかく、今は試合に集中しよう」

試合はまだ始まっていない。向かいにいるのは総合付属高校。最初の球を取り合うのはクラス一の身長を持つバスケ部の人と、相手は

風祭時音。

オレは息を吸い込んだ。この試合を抜けだすのは簡単だ。でも、異変があるとは気づかれたくない。それに、都達は音姉と一緒だ。並みの相手じゃ勝負にならないし、勝負になったとしても都がやられるわけがない。

あの神剣、断章は都の心だから、断章が砕けない限り都は死なないし、断章が砕けても、都が死ぬまで大丈夫という少しチート武器。とは言っても、都自体はそこまで単身で強いわけじゃないから恐怖感はある。

「無事でいてくれ」

オレのとの呟きと共にホイッスルの音が鳴り響いた。続いてボールが高く上げられる。そのボールに対してクラスメートは飛び上がり、風祭時音は後ろに下がる。

嫌な予感が背中を襲う。

ジャンプで勝ち目はないのは周知のとおりだ。だけど、風祭時音の位置は相手コートの真ん中よりも前。比較的こちらだ。こんな距離だと反応出来ることが難しい。

バスケ部のクラスメートがボールを弾き、野球部のメンバーがそれを掴んで一番近くにいる風祭時音を狙う。

「残念」

風祭時音は前に出た。向かってくるボールに対して前に出て、手に

取ると同時にサイドスローで投げつけてきた。その速度は高速。
前にいたバスケ部と野球部のメンバーが吹き飛ばされる。

「はっ？」

オレは思わず声を上げていた。ボールの勢いに負けた二人の体は大きく吹き飛ばされて後方にある相手の外野にまで到達している。直撃したボールは風祭時音の手の中だ。

「ありゃ？　力半分くらいで放ったんだけどな。まあ、いいか。痛い思いをしたくないならさっさとサレンダーした方がいいよ」

「それってある意味死亡フラグだよな」

「わかって、るね！」

次に放たれた球は神速。オレの目ですら確認できてからの反応が間に合わない。でも、オレは投げる前から体が動いている。迫りくる危機に対して反応する体は神速で迫るボールを避けて、後方にいたチームメイトに直撃した。

地面をボールが転がる。

「避けたらだんだん犠牲者が増えるよ」

「そうですか」

ガシッとボールを掴む音が聞こえる。いや、そんな音は出ていない。でも、ボールを掴んだ由姫からはまるでその音を出したかのような

威圧感があった。

由姫はにっこり笑ったまま言う。

「なら、当てればいいんですね」

そして、振りかぶられた腕は、ありえない速度でオレの顔面に直撃した。

「ぐほっ」

「兄さん!?」

「周君!?」

「ほえっ？」

由姫、夢、風祭時音の声が聞こえる。オレは倒れそうになりそうな体を必死でこらえて起き上がった。

「何でオレを狙う!?」

「ちゃんと狙いましたって！」

６５。くらい角度は違っていたけどな。

オレの顔面を直撃したボールは夢がしっかり掴んでいる。まさか、敵に向かって放ったボールが味方を直撃する事態になるなんて思わないから審判もホイッスルを鳴らさない。一応、内野の味方同士のパスは厳禁だ。

夢はそのままボールを投擲する。上手く狙われたボールは相手の型に直撃して地面に落ちた。

「気を取り直していくぞ」

「そうだね」

とりあえず、由姫が放つボールには気をつけないとな・

「仲良く会話しているところ悪いけど、真っ先に狙わせてもらうから！」

風祭時音はそのまま俺に向かってボールを放って来る。オレはそれを上半身を逸らすだけで回避して、後ろにいた由姫がそのボールを受け止めた。

「もう一度行きます！」

由姫が振るかぶると同時にオレはしゃがみ込んだ。これで、当たりはしない！

そして、脳天に凄まじい衝撃がやってきた。

「っっっっっっっ！！」

声にならない悲鳴。思わず当たった脳天の押さえてしまう。

「兄さん！？　大丈夫ですか！？」

「お前はオレになんか恨みでもあるのか！？」

普通はオレに当たらないよな。しかも、由姫のバカ力だから当たった時のダメージも半端なく高いし。

「えっと、お取り込み中のところごめんだけど」

背中を襲う悪寒。オレはそれに対して真正面から受けて立った。放たれるボールと一直線になる。そして、神速で向かってくるボールに対し、後ろに跳びながらボールを受け止め。

ボスンと大きな衝撃。だけど、オレの手の中にはしっかりとボールが握られていた。

「うらっ！」

すかさず駆けだしてボールを放つ。狙うのは風祭時音以外。

「なっ」

「えっ」

「あっ」

ボールは上手いこと生徒間を跳ね、三人を一気に当てる。近くにいた相手チームの男子生徒がボールを放つが、そんな球、風祭時音のものと比べたら天と地ほどの差がある。

「反撃、開始」

その球を夢が掴みすぐさま投げ返す。だが、それは前に出た風祭時音によって受け止められた。

「ごめんね」

その言葉と共に放たれる神速の球。だけど、それは由姫が軽々と受け止めていた。その距離は大体３ｍ。よく受け止められるなという距離だ。

由姫はすかさずボールを掴み、オレは後ろに下がる。そして、

ひょろ。

山なりの緩いボールが風祭時音の腕の中におさまった。世界が何とも言えないような空気に陥る。

「由姫、球技は苦手なんだな」

「私も今初めて知りましたからね！！」

投げ返されるボールを受け止めてすぐに投げ返すが今度はさらにゆっくりとした山なりのボールが風祭時音の頭上を飛び越えていた。

オレは笑いをこらえるので精一杯だ。

「兄さん？　何か言いたいことがありましたら言ってくださいね」

「な、何もないぞ」

「来る」

夢の言葉にオレは相手のコートを見る。一人が倒れ、地面に転がったボールを相手チームの女子が手に取ったところだった。そして、放たれる球。

「海道や白百合だけにいい姿させられるかよ！」

そのボールを跳び出してきたクラスメートが掴んだ。そして、そのままボールを放つ。しかし、風祭時音がいとも簡単にそのボールを受け止める。

「残念」

投げ返されるボールはクラスメートを守るように飛び出した由姫を手に収まった。

「きりがないな」

相手のエースを崩すのは本当に難しい。このままだと完全にじり貧だ。どうにかしないと。

「周君、私に、ボールを」

「夢？」

山なりのボールが相手陣地に吸い込まれる。

「必ず、討つから」

「なるほどね。狙撃、頼めるか？」

「任せて」

それを狙うには風祭時音を前におびき寄せないとだめだろう。だから、オレは、

「由姫、後ろで外野からの味方を守れ！　オレが前に出る！」

「兄さん？　うん、わかった！」

ボールを受け止め投げ返しながら由姫は後ろに下がる。さて、ここからはオレの本領発揮だ。

オレはすかさず前に出た。向かってくるボールを簡単に受け止めて風祭時音に投げ返す。

「作戦は決まったのかな？」

「ああ。決まったさ！」

投げ返されるボールを受け止めてすかさず投げ返す。腕がかなり痛い。このままじゃすぐにやられる。

「エースを倒す。その選択は間違っていないけど、私を甘く見ているんじゃないかな！？」

ボールを受け止め、投げ返しながら後ろに下がった瞬間、風祭時音が前に出た。そして、ボールを受け止めてオレに向かって放つ。

「今だ！」

それの言葉と共に夢が後ろから走りだした。風祭時音はすでにボールをオレに向かって放っている。オレはボールに対して後ろに跳びながら、前に軽く弾いた。ちょうどそこに夢の姿が入る。

「嘘!?」

風祭時音はすかさず後ろに下がろうとする。だけど、それより早く夢がボールを掴み、風祭時音に向かって放っていた。

だが、速いと言ってもそこまでの速度じゃない。風祭時音はそれを受け止めようとして手を伸ばし、ボールが落下した。

「っ」

風祭時音の足にボールが当たり地面を転がる。

「オレ達の味方を過小評価した。それがお前の敗因だ」

第百四十四話　全力全開（後書き）

次の話は結構重要な話が多くなる予定です。

第百四十五話　未来を求めて（前書き）

久しぶりに滅びについての話なんじゃないかなっと。

第百四十五話　未来を求めて

「【容赦なく、慈悲もなく、殺すから】」

その言葉は宣言。だけど、それは歌姫の宣言。その状況になった時、音姫は文字通り自分の中の力を開放するだろう。狭間市での鬼姫のように。

海道駿はまるで呆れたかのように肩をすくめた。

「君は私達が今日、襲わないとでも？」

「襲えるならどうぞご自由に襲ってください。あなたというリーダーがこの場にいるのに捕まらないと思っているのですか？」

「たくさんの人が死ぬことになるけどな？」

「それと、あなたのような人の作戦を周様が理解していないとでも？　例え、あなたがその裏をかこうとしても、周様はすでにそれを基に作戦を組み立てているはずですから」

「なるほどね。君達は周を信じているというわけか」

そう言いながらいつの間にか持っていたコーヒーカップを口元に近づける。その口元に浮かんでいるのは笑み。まるで、何かがおかしいかのように。

都はいつでも断章を使えるように準備する。

「狭間の巫女のお嬢さん、そこまで警戒しなくてもいい。私達は何もするつもりはない。何もね」

「例えそうだとしても、複数いる以上、警戒しないわけにはいきません」

「なるほどね。一理あるかな。私からは何もしない。私からはね」

「証拠はもらったわよ」

その言葉と共に琴美がポケットから何かを取り出した。それを見て海道駿が微かに目を見開く。

「神剣のレプリカ、かな」

「デバイスの一種よ。一定空間内の定められた行動を制御するだけの使い捨ての道具。もちろん、こんなものであなたを止められるとは思わないけど、臨戦体勢に入るまでの時間なら悠々に稼げるはずだわ」

「隙を狙ったと思っていれば最初から狙われたのは私の方か。憎らしい」

その言葉に都の眉が微かに動いた。

海道駿がそう発言した瞬間、海道駿から周への嫌悪感を感じていたのだ。それに対して都は微かに反応した。ちなみに、音姫は反応しないように頑張っている。この状態の音姫がキレたならは暴走と隣り合わせなのだから。

「周様はあなたの息子ではないのですか？」

「息子？　あんな奴が息子であってたまるか。私と椿姫の子供があんな魔力のない非力な人間であっていいはずがない」

「あなたは、自分の子供になんてことを」

「世界を救うためだ。それすら切り捨てられないなら世界を救うことはできない」

「【どういうことかな？】」

音姫の言葉が響き渡る。それは、万物に対して優先的に強制的に発動する力。海道駿は一瞬しまったという顔になって、そして、諦めたように頷いた。

歌姫という力には対抗できないとわかったのだろう。

「世界の滅びを最初に知った者は誰か知っているか？」

その言葉に全員が首を横に振った。そうだろうと言葉を続けながら海道駿が語る。

「最初に知ったのは善知鳥慧海、ギルバート・Ｒ・フェルデ達だ。それから百年、彼らは百年計画で世界を救うために動いてきた。そう、私や椿姫、周に茜も巻き込まれた一員だ」

「人界じゃ、百年計画だったんだ。魔界だと三千年計画だったのに」

「魔界の様な下等人種にはそれぐらいがお似合いだ」

海道駿の言葉に前に出ようとしたベリエをエレノアが止める。ベリエは何かを言おうとして振り返るが、何も言うことが出来なかった。何故なら、エレノアが凄まじい表情で笑みを浮かべているからだ。簡単にいうなら怒っている。

琴美もそれに気付いたのか一歩離れた。

「世界を救うためには俺を越える存在が必要だった。だが、そこで生まれたのは欠陥品だ。元からの核晶異常により魔力をほとんど保持できない存在。私達は絶望したよ。こんな存在で世界を救うことは出来ない。だからこそ、私達は見捨てた。そして、産まれたのが最高傑作だ」

「あなたは、子供をなんだと思っているのですか？」

「私自身が滅びから世界を救うための道具だったのだ。だから、自分の子供を道具にして何が悪い。それに、私に怒るな。場違いだ。周が生まれたのは私達が原因じゃない。海道時雨が強引に椿姫と婚姻を結んだからだ。今では、最強の魔術師を産んだことに感謝しているけどな」

その言葉に誰もが口を開くことを忘れていた。それほどまでに海道駿の言葉は強烈だったから。

もし、その話が本当だったなら、滅びに対する慧海達の策は文字通り最強の英雄を作り上げること。それも強制的にだ。

「まさか、周の存在のおかげで茜の力がなくなるとは思わなかったが。疫病神め。あいつさえいなければ計画に支障はあまりでなかっ

たのに」

「そうだね」

その言葉に、エレノアが反応する。滅びの未来を回避するために周と戦ったことのある少女は笑みを浮かべて海道駿を見る。

「周がいなければ、大きく歴史が変わっていたかもしれない。でも、周がいるからこそ、未来はここにある」

「どういうことだ？」

「息子を理解しようとしない父親に話したところで、理解されないから話す気にはなれない」

「くっ」

海道駿の顔が怒りに染まる。だが、行動することはできない。行動すれば命はないからだ。

エレノアは小さく頷いている。まるで何かにわかったかのように。だからこそ、海道駿の額には汗が流れていた。おそらく、海道駿にとってはエレノアも不気味な存在に見えているのだろう。

周と同じように、物事を理解するのが速いから。

「一つだけ忠告しておく。周を舐めないように。あなたが何を考えているかはわからない。それでも、私達の隊長、海道周はあらゆる全てを理想に近づけようと頑張っている。それがどんなに困難な道であったとしても、それを成し遂げるための力と能力を持っている」

「君達も周の与太話を」

「それは本当に与太話だと思っているの？」

その話を笑い飛ばそうとした海道駿をエレノアは驚いたように見ていた。

「あなたは周が何を成し遂げているか知らないからそんなことが言える。あなたの根本的な考え方は力で制圧すること。それは最終的には同じかもしれない。最後は力でどうにかしないといけないのは、新たな未来を求めて戦っている私たちにもわかる。でも、そこまでの手段が違う。周は、欠陥品でも疫病神でもなんでもない」

「ありえないな。私達にはわかる。あの存在が、未来を創る希望を消すことを。世界全ての強力なんて夢のまた夢。そんなもので世界が動くなら、すでに世界は強力」

「それがわかっていない」

エレノアは笑い飛ばした。そして、海道駿を睨めつける。

「私は周がどうしてそのようなことを言ったのか理解している。だからこそ言っている。周はあなたが考えているような小さな存在じゃない。周を過小評価しないように」

「あんなごみくずを過小評価しないだと？　すでに過大評価だ。そんなことをするより、私達と共に世界を救わないか？　すでにこの地下にある存在はわかっているのだろう？　なら、それを使えば」

「そんなもので世界が救われるなら、世界はすでに救われている」

「ちっ。そうか」

舌打ちと共に聞こえるその言葉と共に、周囲の音が戻った。結界が解除されたのだ。音姫は静かにリボンで髪をポニーテールに整える。

「六人一緒にいるのを間違えたか」

海道駿が帽子をかぶった瞬間、海道駿の姿がまるで夢幻のように消え去った。これが『悪夢の正夢（ナイトメア）』の力。

海道駿が消えると共にその場にいた全員が椅子に深く座り込んだ。

「お姉様、よく、あそこまで啖呵を切れましたね」

ベリエが呆れたように言う。確かに、あの状況であそこまでいくのはある意味至難の技だろう。それに対してエレノアは軽く肩をすくめた。

「本当のことだから。周が望む未来。それは、三千年計画を打ちたてた初代魔王が成し遂げようとした恒久平和を実現するための手段。あの時は魔王の側近が裏切ったから出来なかったけど、今では魔王も音界の歌姫も人界最強の戦力の周の手元にいる。今度こそ、周なら出来るから」

「確かに条件なら揃っていますよね。それにしても、本当に来るとは。周様の推測は相変わらずずば抜けています」

「二人が本当に羨ましいな。私なんて声を出さないように必死にこ

らえていたから」

「音姫が口を開いた瞬間にこの場は阿鼻叫喚の世界になっていたじゃない」

琴美の言葉にベリエとアリエが頷く。確かに、あの状況で音姫が動いていたなら真っ先に光輝を引き抜いて戦っていただろう。それこそ、この場が阿鼻叫喚になりかねないような戦いになるだろう。

「ところでエレノアさん。どうしてそこまで弟くんを信頼できるかちゃんとした理由を聞きたいな？」

音姫のその言葉にエレノアはクスッと笑みを浮かべた。そして、

「恋の力、かな」

第百四十五話　未来を求めて（後書き）

体育祭が終わる気配が全く見えないことに。本当なら百五十話を目安に決戦の日に入ろうかなと思っていたら予想以上に長くなりました。一体いつになったら決戦に入れるのだろうか。

第百四十六話　過去の記憶

グラウンドではたくさんの生徒が楽しそうに動いている。その中には孝治や悠聖達の姿もあった。

そんな様子を外から見ていれば、守りたくなるのはオレだけだろうか。

そして、オレの膝の上に頭を乗せて寝ている由姫。いわゆる膝枕というものだ。

総附高とのドッヂボールが終わり、続けざまに二戦やった後、オレ達は待ち時間となった。そこで精神的に疲れていた由姫を無理やり寝かせたのだ。

やっぱり、誰かを傷つけることにトラウマを持っているのか。

「過去の記憶に縛られるなんて、オレと同じじゃないか」

由姫を縛っているのは白百合家で起きた事件だろう。レアスキルである神への重力（グラヴィタス）によってオレと音姫が怪我をした事件。どちらも怪我の具合は軽かったが、それ以来、神への重力（グラヴィタス）は熟練すれば使える重力魔術程度になっている。まあ、威力が弱いということだ。

球技が苦手なのもそのトラウマが一因だろう。『ＧＦ』の作戦中ではデバイスがあるため大丈夫だが、今のようなデバイスを起動していない最中では、由姫の拳は完全に凶器であり鍛え上げられた体による球技も凶器となる可能性だってある。

だからこそ、由姫は怖いのだ。誰かを傷つけることが。無意識に力をセーブしてしまうほどに。

「由姫を球技に出したのは失敗だったかな」

「でも、由姫ちゃんは弟くんと一緒に出来て良かったと思っているはずだよ」

トンっと誰かが着地する音。声を聞いていたからわかるが音姉だ。孝治と一緒で、気配を消すのが上手いよな。

本当に今さっきまで気づかなかった。

「見回りじゃなかったのか？」

「代表して私が来ただけ。ちょっと、弟くんに伝えておかないといけないことがね」

「親父が来たのか？」

その言葉に音姉が頷いた。

やっぱりと言うべきか。本当に来るとは思っていなかったけれど。

「まさか、白昼堂々入って来るとは思わなかったけど」

「侵入するのはそんなに難しいことじゃない。現に正やエンシェントドラゴンのメリルは入って来ているからな。ただ、入れば出るのが難しいだけだ。そういう風になっているからな」

入る時は普通に入り口を使えばいい。業者を装えば簡単に入れる。だが、入れば出る時には何をしたか事細かく聞かれるのだ。矛盾があればアウト。矛盾がなくても積み荷も簡易的に調べられる。

まあ、体育館本番期間中はそんなことはないけど。

「あの人なら出るのも簡単だと思うけど」

「『悪夢の正夢（ナイトメア）』自体が人の認識を掻き乱す能力だからな。そこにあってもそこには見えない。そこに触れても確認することが出来ない。人がいる時に起きる存在感も消すからな」

「でも、『悪夢の正夢（ナイトメア）』の力を使って人ごみの中をどうやって歩くんだろう」

「認識の違いだ。見えなくても頭の仲ではそこにあると理解しているんだよ。それが気づかないだけでな」

感覚としてはそこに人がいるとわかっている。だからこその行動だ。そこに見えなくも人がいると認識は理解されているから。

「『悪夢の正夢（ナイトメア）』自体が認識に働くものだから、よほど相性がよくない限り認識出来ない。オレですらな」

『悪夢の正夢（ナイトメア）』で隠れられたなら見つけることは難しい。一応、粒子をバラまいてその動きで見つける方法はあるが、正直に言って普通に出来るものですらない。

実際にバラまくのは本当に限定的だ。というか、常にバラまいていたら魔力負荷もしていたら確実に倒れる。

「弟くんはどうして海道駿が来ると思ったの？」

「オレ達を過小評価しないためだろ」

親父はオレ達第７６移動隊を最大限に警戒している。狭間市で襲って来たのもそれが理由の一つじゃないかと考えている。

親父達は世界を救うために動いている。オレ達の救い方とは相容れないから戦っているが、親父達にとってもオレ達は重要な戦力だ。目的が達成出来る道が出来たなら、オレ達も協力すると思っているだろう。

実際にそうなんだけどな。その方法が実現出来るなら、オレは協力する。

「世界を救うためならオレ達を過小評価するのは間違っている。親父が来たのは連携を確認するため。まあ、無事だったからいいけど」

「エレノアさんがすごかったけどな。何というか、弟くんを信頼しているって感じかな」

「エレノアって妙に勘がいいからな。もしかしたら、わかっているのかもな」

「ある意味『歩く司令塔』だよね」

確かにエレノアは指揮官としても優秀だ。さらには単身で戦闘も出来る。バランスの高さから言えば孝治と逆の遠距離の方が得意な存在だ。

戦場になれば信頼出来る一人でもある。

「ところで、由姫ちゃんはどうかしたの？」

「今更かよ。つか、妹なんだから真っ先に心配しろよ」

「弟くんがいれば安心だから」

「納得」

確かに、オレならかなりの事に対応出来るからな。

「もしかして、レアスキルの？」

「多分な」

体力バカの由姫がたったあれだけのことで疲れるとするならそれくらいしか理由がない。こんなに疲れるのは精神的な何かがあった。だから、候補として考えられるのは過去のあの事件しかない。

由姫が倒れるくらいだからオレ達の想像以上だったんだろうな。

「由姫ちゃんもバカだな。私達はもう大丈夫なのに」

音姉がオレの横に座って由姫の頭を撫でる。音姉の言葉にはオレも同じだ。あの時は油断していただけだから。

でも、そう割り切れないのが加害者なんだよな。

「そうは思っても、割り切れないのがオレ達なんだよ」

「弟くん？」

「自分のせいでたくさんの人が死んだ。又は、大切な人が傷ついてしまった。そうなった時に簡単に割り切れないものなんだよ」

「そうだったね。弟くんも、そうだったね」

『赤のクリスマス』。あの時の理由は今ではわかっているが、昔はオレのせいだと思っていた。多分、記憶を変えられたのかわからないがそう思っていた。

だから、オレはある意味心が壊れていたと思う。由姫がいなければ今頃どうなっていたかわからない。

「由姫はオレ達を傷つけた。自惚れじゃなければ、大事なオレと大事な姉を」

「自惚れなんかじゃないよ」

その声はオレの下から聞こえてきた。由姫を見ると、目を開けた由姫がオレを見つめている。

「私はお兄ちゃんやお姉ちゃんのおかげでここにいる。お兄ちゃんがいなければどうなっていたかわからないしね」

由姫はゆっくり起き上がった。そして、オレの肩に体を預けてくる。

「私は怖いの。私の力がいつか誰かを、大切な人を殺すんじゃない

かなって怯えているから」

「だろうな。自分の存在が誰かを傷つけるなら」

「私なんて生きていていいのだろうか」

オレの言葉に由姫が続く。やっぱり、同じだったか。

由姫の神への重力（グラヴィタス）の威力はレアスキルの中で最高クラス。下手をすれば最強とも言える。そんな能力なら、いつか誰かを殺してもおかしくない。

だから、それが怖い。オレは自分の存在だったが由姫は自分の力。怖くなるのは当たり前だ。

「吹っ切られないといけないとは思っているんだけどな」

「別に吹っ切られなくていいんじゃないか？」

オレの言葉に由姫が驚いたように見上げてくる。多分、驚いたんだろうな。

「オレだって未だに吹っ切られているわけじゃないさ。『赤のクリスマス』では親父達が事件を起こしたからな。目的は茜だったみたいだけど、オレ達の問題だからな。だから、オレは親父達をこの手で捕まえる。そこまで吹っ切られない。そう思っている」

「私は」

「だから、ゆっくりやっていけばいいさ。無理にやろうとすれば逆

効果だからな。落ち着いて、ゆっくり、吹っ切れていけばいい。オレはそう思っている」

無理にやってしまえば言ったように逆効果になりかねない。過去を吹っ切るためには何かのきっかけが必要だ。そんなきっかけはなかなか当たらない。

だから、ゆっくりやっていけばいい。今でも由姫は十分に強いから。

「迷惑をかけるよ」

「昔からだろ。オレも音姉もお前に迷惑をかけていた」

「足手まといになるよ」

「里宮本家八陣八叉流を使えば十分に強いさ」

「いつか、怪我をするかもしれないのに？」

「守ってやるよ。オレが、オレ達が」

どこまで守れるかわからない。でも、守りきらないといけない。今を、今の日常全てを。

「だから、安心しろ」

「うん」

由姫が頷く。俯いているその表情は見えない。でも、オレは表情を確認しない。表情がわかるから。由姫に安心したオレと同じだから。

オレはそっと由姫の背中に手を当てた。

第百四十七話　別行動　チームD

「それにしても、体育館本番期間中にしか僕達が活躍出来ないなんて本当に驚きだね。リコもそう思わないか？」

「あたしからすればアルトの行動に一番驚いているけど」

エスペランサの看板の上には上半身裸のアルトとリコの姿があった。アルトはただ単にひたすら筋トレしているだけでリコはエスペランサ周囲で模擬戦を繰り広げているフュリアスを見つめていた。

アストラルブレイズとアストラルソティスの二機だ。軽く手合わせのようなものをしている。

「そうかい？　暇な時は訓練。今週は筋力強化週間だからね、魔力負荷を最大まで展開して頑張っているよ」

「はぁ。別にいいけど」

リコは腰に身につけた鞘から剣を抜き放つ。リコの装備は一本ロングソードと二本のショートソード。ただ、形状は若干違うため名称は正しくない。だが、間違っているわけではない。

どれもデバイスが柄に埋め込まれている。

「最新型のデバイス武器が私達に支給されるなんてね」

「それほどまでにエクシダ・フバル氏の護衛を最優先にしたいのだろうね。大丈夫。僕の『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』や『鋼鉄処女（アブソリュート）』に『狂乱騎士（バーサーカー）』

がある限り護りきる自信はあるよ」

「相手が周ちゃんやギルバート副隊長みたいだったらどうするんだか。でも、昔と比べたらデバイスもかなり変わってきたわね」

昔の武器と言えばデバイスの虚空と呼ばれる空間に収納するタイプだ。レヴァンティンのようなものを除けば基本的にそういうものである。

だが、今ではレヴァンティンと同じタイプ、呼び出すことでその武器が具現化するものだ。デバイス内蔵のため魔術の威力もかなり上がっている。

最大の弱点は、武器の数だけデバイスが必要なため装飾品が増えて大変なことになるくらいか。

「今の方がありがたいけどね」

「私はむしろ迷惑。両腕にブレスレットとネックレスってどこのセレブって感じだし。周ちゃんの作るデバイスが欲しい」

「確かにあれは特別だからね。許容量を増やしながらも処理能力を格段に上げたオーダーメイド。第７６移動隊は全員、周が作ったデバイスじゃないかな？」

「市販のデバイスより性能はいいし、旧世代デバイスでも今の市販のデバイスに近い性能だし。早く最新モデルは出ないかな」

そう言いながらロングソードを軽々と片手で振り回すリコ。体の大きさに対して剣に振られているという感じはまったくしない。見た

目ではレヴァンティンより重そうなのに。

軽々と剣を踏みながらステップをする。由姫とルーチェ・ディエバイドの優勝を争った時とは違い、軽快勝つかつ高速のステップ。どこか白百合流や八陣八叉に通じるものはあるが。

「周ちゃん印のデバイスは世界最高峰だから」

「今のデバイスも悪くはないと思うけど。僕からしてみれば、魔術が強化される分使いやすいし」

「アルトはそうだと思うけど、あたしは使いにくいの。新しいデバイスは国が威信を賭けて作り上げた、いわゆる『世界最高峰のデバイス』と言っているけど、周ちゃんが世界に出した当時ＮＧＤと呼ばれた現在主流のデバイスは旧世代のデバイスよりも価格が抑えられていたもので、今の最新デバイスは周流のデバイスの約１０倍。企業もなかなか手が出ないんじゃないかな？」

「配備が進んでいるのは軍と聞いているけど」

「だろうね。アメリカは未だに世界に強力な影響を与える二強の一つ。プライドがあるけどあたしには少し理解できないかな。いくら軍備を増強したところで、『ＧＦ』と対抗できる戦力にはならない。過去に世界を救った英雄が今なお生きている『ＧＦ』に勝てるのは身内くらいじゃないかな？」

「同感だね。本当ならドイツの技術力こそ世界一だと言うのに」

「いつの話？」

リコがため息をつきながら剣を振る。そして、剣を天高く投げ捨てるとそのまま日本のショートソードを抜いて連続で踏み出しながらショートソードを振りまくる。その剣劇の嵐はまるで亜紗のものを見ているかのようだった。

リコがショートソードを鞘に収め、落ちてきたロングソードを掴み取る。

「技術力なら世界一はあっちじゃない？」

そう言いながら指さすのはアストラルブレイズとアストラルソティスだ。どちらも、今の人界の量産型フュリアスを越える戦闘能力を持っている。個人機も含めたならそうとは言い切れないが。

確かに、技術力の高さで見るなら音界に勝つことは難しい。

「それにしても、音界の兵力が第７６移動隊に来るとは想像だにしていなかったな。僕からしてみれば、音界は未だに火種がくすぶっていると言うのに」

「ロシアで起きたヴァルフォミア港襲撃事件だよね。あれは音界の政府及び歌姫が公式に関与を否定しているけど、歌姫自身がヴァルフォミア港にあったパーツは音界の旧量産機であるギガッシュのものだと回答しているから」

「そう。本音を言うなら狂気の沙汰じゃない。アメリカなら息好んで戦争を仕掛けようとするだろうね」

「『ＥＳ』と『ＧＦ』、特に、世界最強のパイロットの悠人ちゃんを敵に回すから動けないだけじゃないかな？」

悠人のフュリアスとしての実力はアメリカ大統領がワンマンアーミーと名付けたほどの戦闘能力だ。実際に、悠人一人で壊滅させられたフュリアスを持つ武装集団は数知れない。もちろん、大小含めずに。

なら、生身の人間が戦えばいい話だが、『ＥＳ』には世界最強にして最狂の天才アリエル・ロワソがいるし、『ＧＦ』には指揮官としては様々な書籍や新聞で世界最高と言われている周や世界最強の魔術師アル・アジフだっている。二つを敵に回せば指揮官及び戦力という点で越えないといけない。

しかも、『ＧＦ』には切り札とも言うべき二人の英雄が残っている。この時点で国連くらいしか相手にならない。

「その火種も、音界では詳しく調べているって聞くけどね」

「表向きはだろうね。僕は音界が行ったと信じているし、音界政府の発表は信じない。あそこはある意味一党独裁だ。まるで、昔の中国のように」

「今でもかなり独裁の様な気もするけどね」

「僕は政府は信じないと言った。音界の歌姫は信じるに値する人物だと思っている。だから、音界の歌姫は関わっていない」

「人界でも人気高いもんね。隣にはイケメンの護衛。しかも、まだ２０にもなっていないのに音界ＮＯ．２の実力を持つパイロット。音姫の性格もお淑やかで優しく、笑顔が可愛い。ファンクラブが出来て当然じゃないかな？」

そう言いながらアルトはポケットから何かのカードを取り出す。そこに書かれていたのは、

『音界歌姫メリルファンクラブＮＯ．００００００００１　アルト・シュヴッサー』

と書いてあった。

リコは自作自演だと口になりそうになるが、そのファンクラブは今では数百万人規模にまで膨れ上がっているので何とも言えない。もしろ、ファンクラブを作り上げたのがまさかのアルトだったなんて。

『そこ、どうしてメリルの話をしているの？』

二人がその声に振り返ると、ちょうどアストラルブレイズがこちらを向いたところだった。アストラルブレイズはそのまま飛び上がり甲板に着地するとコクピットからパイロット用の小型パワードスーツを着込んだルナが下りてくる。

「全く、メリルは忙しいんだから、人界の変な祭りには参加させないでよ」

「ですが、武道館ライブはメリルがしたいと言い出しましたよ」

「うっ」

後ろに着地したアストラルソティスのコクピットが開き、そっこから顔をのぞかせたリマが声を上げる。そして、そのままコクピットから飛び降りて甲板に着地した。

「リマもルナも休憩？」

「フュリアスの操作は思っている以上に体力を使うの。でも、休憩と行ったら休憩かな。後は、変なものを見たから」

「変なもの？」

リコが不思議そうに首をかしげる。それにリマは頷いた。

「学園都市内に怪しい集団がいました。一応、その報告を兼ねて」

「怪しい集団？　そっか、そろそろ時間か」

リコは時計を見ながら呟いた。それに二人が不思議そうに首をかしげる。

「アル・アジフさんがいないことにいつから気づいていた？」

その言葉と共に、学園都市の一角で爆発が起きた。

第百四十七話　別行動　チームＤ（後書き）

次は戦闘を入れます。というか、戦闘を入れないと自分の書くスピードが絶対鈍るので。

第百四十八話　制圧戦

『体育祭実行委員会より連絡します。現在、１２時２３分より昼休みとします。次の競技の開始は２時からです。それと、第７６移動隊からの通達です。今から約３０分間、西区工場エリアにおいて変則的な模擬戦を行うため時折爆発音が聞こえますが、生徒の皆様に危害が及ぶことはないので、西区工場エリアには近づかないでください。繰り返します』

アナウンスの声が聞こえると共にオレ達は地面を蹴っていた。狙うのは西区工場エリアにある美術品保管庫。ここには様々な美術品が一時保管されるため、この時期には確実に窃盗団が狙う場所でもあった。

だから、オレ達は最初から準備をしていた。窃盗団を捕まえるために。

「作戦の内容がいきなりすぎるんだけど！？」

メグがオレ達の横を走りながら叫んでくる。確かにメグには説明していなかったな。

ひたすら見回りやら挨拶やらで歩きまわっているオレ達なら怪しまれないが、競技に参加するため見回りスケジュールの少ないメグがいれば何かあると思われる。だからこその電撃作戦だ。

とは言っても、かなり厳しいものだけどな。

「アナウンスが出た以上、オレ達は２００秒以内に目標地点へ到着

しないといけない」

「そうですね。先には姉さんや都さんがいますけど、相手の数を兄さんは絞り切れていませんし」

「まあ、あの二人がいるなら大丈夫だろう。それに、孝治や悠聖もいる。オレ達の目的は逃げ出してきた窃盗団を根こそぎ捕まえるだけ。武器の準備はいいな」

オレはレヴァンティンを腰に身に付けた。それと同時に工場エリアで爆発が起きる。

工場エリアの施設が爆発した音じゃない。それに浮かぶ中村とエレノアの二人が砲撃を加えたのだ。威力が高すぎるが、元々アナウンスしていたのはこれで動揺させないため。

第７６移動隊の模擬戦では度々起きているため学園都市の生徒は完全に慣れている。

「制圧戦。開始だ」

倉庫の中から出てくる覆面の人達。その人達に向けて都は断章を構えた。

「フォトンランサー！」

すかさずフォトンランサーを展開して光の弾を大量に放つが、当たるより早く防御魔術や障壁魔術によって防がれる。

すかさず攻撃魔術が放たれてきた。

都はそのまま横に跳んで近くの壁に隠れる。隠れると同時に都がいたところに様々な攻撃魔術が飛来した。共通しているのは全てが地面を抉る攻撃。

「相手は物理ダメージを与えるタイプ。デバイスはおそらく旧式の『ＥＳ』製です」

都はすかさずデバイスに向かって叫んだ。つまり、長引けば近くの建物に大きな被害を与えるものだ。はっきり言ってとても危険なもの。

周はそれを想定していたからこそ、アナウンスを流している。

『承知した』

返ってくるのは孝治の声。それと同時に漆黒の弓矢が倉庫前にたむろしている盗賊団に降り注いだ。

『かく乱はする。だが、それ以上は』

「十分だ！」

その言葉と共にアルネウラ、優月の二人とシンクロをした悠聖がちょうど都の反対側から飛び出した。それと呼応するかのように都も飛び出して準備していたフォトンランサーを最大限まで展開する。

その展開が終わるぐらいのタイミングで倉庫の両側から音姫と亜紗が飛び出した。

盗賊団は完全に動きを止めている。作戦を読まれている可能性は考えていたかもしれないが、まさか、第７６移動隊の主力部隊が制圧に乗り出すとは思わなかったはずだ。

これは周が予測していたこと。周囲に悟られないように話をすることはなく、部隊をいくつにも分けて相手からすれば危険性が少なくなるかのように誘導した結果だった。

一日目に部隊を分けなかったのに二日目に部隊を分けたのはこれが理由。

部隊を分けることで相手の警戒を低くするのが周の目的だったのだが、ものの見事に的中していた。

そのことに都は内心驚きながらフォトンランサーを放つ。盗賊団を制圧するために。

「くそっ、くそっ、くそっ！　どうしてばれていた。いや、ばれているのはいい。相手はあの海道周だ。だが、部隊を小さくしていた第７６移動隊がどうして合流している!?　くそっ、くそっ、くそっ!!　学園都市を警戒させるために」

「海道駿から依頼されたこと。違うか？」

オレは笑みを浮かべながら尋ねた。オレ達の目の前で男が立ち止まる。

「海道駿はお前がオレ達をどこまで出し抜けるか試されたんだろ？」

「だったらどうする？」

「いや、素晴らしい道化師だなと思ってさ」

オレは男をバカにするかのように肩をすくめて笑みを浮かべた。相手は予想通りに顔を真っ赤にしている。

「海道駿が試したのはオレ達だ。お前という当て馬を使ってオレ達の行動能力を把握しようとした。まあ、出し抜けられれば良かった、というところか？」

「ありえん！　私は駿様から直々に命令を頂いたのだぞ！」

「作戦日時は教えられていないのに？」

オレの質問に男は答えられないとでも言うかのように口を閉じた。

やはり、そうだ。海道駿はオレ達を過小評価でも過大評価でもしないために実行者達のみで作戦日時を決めさせ動き出した。

もちろん、一般人には被害を出さないように言ったのだろう。そして、この男一味の窃盗団は第７６移動隊が四つのチームで分けられたのを見計らって動き出した。

作戦としては悪くないし、普通はそう考えるだろう。だけど、オレは全てを推測していた。

まあ、これに関しては完全に運任せがあったからな。犯行時刻とかはさすがにわからなかったから、一般人を傷つけない最高の時間からアナウンスを流してもらう技に出た。失敗したらかなりうるさいけど。

「大人しく捕まるか、殴られて捕まるかのどちらかを選べ。オレはあくまで平和主義者だ。抵抗しないなら痛い目には合わさないさ」

「こういう時の周って目が輝いていない？」

「自分の作戦が当たったことが嬉しいはずですよ。兄さんはいつもそうです」

後ろの二人、今の状況では黙っていて欲しい。

「お前らみたいな子供に、負けるかよ！！」

男が取り出したの巨大な戦斧。普通に受け止めたら腕がイかれる可能性があるな。

オレはレヴァンティンの柄を握りしめた。

「世界を救うのは、俺達なんだよ！」

「誰かを犠牲にして世界を救えたとしても、それは世界を救えたことにはならない。世界を救うということは、自分も仲間も知り合いも誰もかも救うことだ！！」

「うるさい！」

振り上げられる戦斧。オレはレヴァンティンを握りしめて前に踏み出した。

パチンと七天失星が鞘に収められる。それを音姫は小さく息を吐きながら見ていた。

「弟くんの言ったように、やっぱり当て馬みたいな人達だったのかな？」

『そんなに強くないから実働部隊じゃないと思うけど。そこは周さんに聞かないとわからなかいと思う』

二人の足下にはたくさんの窃盗団員が倒れ伏している。一応、いくつかの窃盗品も転がっているが、そちら悠聖や都の二人がどうにかしてゆっくり落としていた。

都が断章を掲げると同時に倒れている全ての窃盗団員にチェーンバインドがかけられる。強力な魔力の鎖によって縛り上げられた。

「それにしても、周様はよくここが襲撃されるとわかりましたね」

「周隊長は場所は最初からわかっていたみたいだぜ。時間に関してはわからなかったから、アル・アジフに指示を出してもらっていた

みたいだけどよ」

「アルちゃんなら仕事がないから連絡しやすいもんね。でも、ちょっと怖いかな」

音姫は光輝の柄に手を乗せながら呟く。

「海道駿が本当に学園都市を狙っているのはわかるけど、私達の力を試すように動いているのが不気味で。今まではずっと、動き出した相手を追いかけて倒しただけだったから」

「相手も必死ってことじゃないのか？　相手の目的は滅びから世界を救うこと。対するオレ達は犠牲者なく世界を救うこと。結局は正義と正義がぶつかり合うんだよ。正義と悪が区別されていたら戦いやすいけど、どちらも正義だ。オレ達は自分でどちらの正義を貫くか考えなきゃいけないしな。オレはそう思うけど、音姫さんは？」

「私は、ただ守りたいから。弟くんを、由姫ちゃんを、みんなを。いつか世界を敵に回す時が来ても、それだけは貫きたいかな」

「そういうことでいいんじゃないかな。多分、オレ達が海道駿の作戦の方が未来があるから敵についても周隊長は怒らないと思う。あいつはそんな奴だから」

それは自分が決めたことだから。四人がここにいるのが自分が決めたことであるのと同じように、自分が決めたことなら周は反対しない。例え、敵になったとしても。

「周様なら悲しみますが全力で止めてきますよね」

『賛成。私は周さんを信じているから、絶対に守りきりたい』

「うん。そうだね。みんなを、学園都市を、守ろうよ」

振り下ろされた戦斧が地面を砕く。オレは後ろに下がりながらレヴァンティンを構えた。

相手の力はかなり厄介だ。人と比べればありえないくらい力が強いため魔界の住人だろう。だからか、近づくのが難しい。

由姫は精神的に不安定なため後ろに下げているが、一人じゃかなりキツいな。

「どうした！　勢いは口だけ」

「破魔雷閃！」

一歩を踏み出しながらレヴァンティンによる振り下ろし。だが、男は戦斧によって受け止めた。すかさず一歩を踏み出しながらレヴァンティンを振り上げて鍔迫り合いに持ち込む。

「力が強いな。ギルガメシュと戦っている時みたいだ」

「魔王か。そこまで大層な存在じゃないさ。ただ、餓鬼を一人潰すくらいの力はあるさ！」

戦斧が力任せに振り回される。オレは上手く宙返りすることでその戦斧を避けた。

「これで終わりだ！」

オレに向かって振り下ろされる戦斧。それに対してオレはレヴァンティンを振り上げた。

イメージは全てを凍らすような力。時を止めるような力は無いし、封印を行うような技じゃない。でも、オレとレヴァンティンは、絶対に動かない障壁となるための技。

「氷華満天」

レヴァンティンが戦斧を跳ね返す。いや、戦斧がまるで壁にぶつかったかのように跳ね返ったのだ。

オレのオリジナル剣技である氷華満天はただの振り下ろしではあるが、技の発動中は相手の魔力攻撃がこちらを越えない限り破られない状況にするかなり特殊なオリジナル剣技。

発動条件が難しいからなかなか使えなかったけど、上手く成功したみたいだな。

「なっ」

武器と武器がぶつかり合った衝撃とは違う衝撃に驚く男にオレは距離を詰めて手のひらを押し当てた。そして、体内にダメージを響かすように腕をつく。

八陣流遠当て『椿』。

ダメージ自体を奥に入れるカウンター技だ。威力は高く、椿を入れた男はそのまま後ろ倒れて動かなくなる。

オレは小さく息を吐いてレヴァンティンを耳に当てた。

「孝治、どうなっている？」

『窃盗団は全員捕まえた』

「了解。制圧戦、終了だな」

第百四十九話　敵と正義と悪と味方

ストップウォッチを片手に小さく息を吐く男がいた。海道駿だ。

海道駿はストップウォッチで計った時間を確認する。

「予想よりも２０分も早いか」

それは海道駿が海道周を過小評価していたということ。第７６移動隊の動きから推測した時間よりも遥かに速い。むしろ、完全に相手は配置についていた。

そんなこと、最初から予測されていないと動けない。

「部隊を分けたのは罠か」

その顔に浮かんでいるのは笑み。

「あなた」

その背後から言葉をかけるおばさんと言うべき女性。海道椿姫だ。

海道駿は笑みを浮かべながら海道椿姫を振り返った。

「出来損ないだったはずの息子を、過小評価していたとは」

「嬉しそうですね」

「嬉しいに決まっている。世界最強と言われた私だが、それに対抗

出来る存在が出来損ないの周だったのだぞ。嬉しいさ。親子が戦うのはあってはならないが、世界を救うためだ。むしろ、嬉しい」

「私達の目的は周ではなく」

「わかっている。周は障害だ。親父や善知鳥慧海よりも遥かに強い障害だ。おそらく、私達がやろうとする滅びから救う方法とは真っ向から対抗する障害。世界の誰もが夢を見て、誰もが諦めるような夢をむしゃらに成し遂げようとしている子供だ」

確かに周はそうだ。海道駿は強力な兵器を使うことでどうにかしようとしている。だが、周はたくさんの仲間を集めてどうにかしようとしている。

今までの確執全てを清算するつもりなのだろう。

それは無謀にして愚か。だが、成し遂げた時には、それこそ最高の物語として語り継がれる物語。

だから、海道駿は呟く。

「椿姫。私は、このままでいいのか？」

「あなた？」

「周を協力すべきという自分がいる。周の夢物語を手伝いたいと思う自分がいる。ああ、そうか。親父達が来ないのは周を信じているからだ」

「私達は成し遂げないといけません。必ず、茜のような子供を作ら

ないように。私は打ち合わせに行きます。あなたは少し休憩してください」

「ああ」

ドアが開いて海道椿姫が出て行く音が鳴り響いた。それを聞きながら海道駿は小さく溜め息をつく。

海道駿にとって周は魔王に見えた。カリスマがあり、たくさんの仲間を持って覇道を突き進もうとする魔王。そして、エレノアは魔女だ。

海道駿の考えはエレノアの言葉からかなり変わっている。あのまま行けば完全にこちらに引き込める雰囲気だった。だけど、エレノアの存在がそれを不可能にした？

海道駿の顔に笑みが浮かぶ。

「嬉しいな。本当に嬉しいな。周。私はお前と茜の父親であったことを誇りに思う。だから、お前は私が倒す。絶対だ」

その声は誰に聞かれることもなく部屋の中に散っていった。

コツン。コツン。

音が鳴り響く。その音はこの暗闇の監獄においては来訪を示す音だ。

コツン。コツン。

高い音を奏でながら誰かが階段を使って降りてくる。この監獄に来るのはいない。いたとしても二ヶ月に一人ほどだ。

その監獄の中にいる少し年老いた男は小さく笑みを浮かべた。誰かが来たということはそれだけで暇潰しが出来るということだ。

ここの誰もいないような空間の中では生き長らえるのは難しい。だが、男は約五年もの間、この監獄にいた。それなのに、男は未だに正気でいる。

看守は男を狂っていると言った。確かにそうだ。男を突き動かしているのは復讐のみ。最愛の人を息子に殺されたことによる復讐のみ。それを果たすその日まで、男は我を失わず死なないことを決めたのだ。

コツン。コツン。

足音が止まる。ちょうど、鉄格子の前に止まった。

「君は僕の暇潰しを手伝いにきてくれたのかい？　さすがに、脳内でのシュミレーションは疲れたからね。何のシュミレーションか聞きたいよね。息子を殺すシュミレーションだ。もう、何万回と繰り返したよ」

「真柴悠人を殺したくないか？」

その言葉に、まだ子供の男の子声に、男は開いていた口を閉じた。

姿は見えないが、おそらく参謀役だろう。

「冗談ならいらないよ」

「冗談なんかじゃない。真柴悠人を殺したくないか？　もちろん、フュリアスなら用意が出来る」

その言葉に男は笑みを浮かべた。

ずっと考えていたことだ。だが、『ＧＦ』総長によって禁固５０年という長い時間が決まってしまった。だから、ずっと考えていた。

どうすれば真柴悠人を殺せるかを。

「何故真柴悠人を？」

「今ね、学園都市では二つの勢力がお互いに掲げた正義のために戦っている。でも、その正義は自分達のための正義だ。他人のためじゃない。だからこそ、俺達は世界の真の平和のために、正義の名を語る悪の組織を倒そうとしている。その中で一番厄介なのは真柴悠人だ。だからこそ、あなたを捜していた」

「そうか。僕は嬉しいよ。まさか、これほど早くにあの真柴悠人を殺せるチャンスがやってくるとは思わなかったからね」

「では、勧誘には」

「乗ろう。だけど、僕はここから出られない。この鉄格子は結界の能力があるから魔術じゃ破れない。それをどうにかしないと」

男の言葉が途中で止まる。何故なら、いつの間にか男の体は鉄格子の外に出ていたからだ。魔術の気配や発動の言葉すらなかった。本当に一瞬。

目の前にいる少年が笑みを浮かべる。

「さあ、行こうか」

その声はまるで、悪魔と言うべき誘惑の声であった。

この日、アメリカにあるとある監獄から一人の男が脱走した。その男の名前は真柴隼人と言った。

「なんだ？」

メグの借り物競走が始まりそうな時間になり、オレ達は窃盗団を増援の『ＧＦ』に任せて富良野高校グラウンドに返ったと思ったら慧海から連絡があったのだ。

いつもの定期連絡は夜にするから何かあったのか？

『周か？　ちょっとこっちでかなりごたつきがあった』

「何かアクションを起こしていたのか？」

『まあな。アメリカのロッキー山脈にある秘密基地の制圧作戦を行っていた』

「初耳なんだが」

オレは微かに眉をひそめる。ロッキー山脈に秘密基地を作るのは事実上不可能だと思うのだが、イグジストアストラルが隠されていた場所みたいに自然を完全なカモフラージュにしたオーバーテクノロジーによる基地ならわからないでもない。

ともかく、オレに知らせないということはそれほど大きな基地ではないのだろう。

「で、その基地がどうかしたのか？」

『ああ。技術的にはこの年代のものなんだが、かなり奇妙な設計図が出てきてな』

「奇妙？　フュリアスのか？」

『フュリアスとフュリアス専用のデバイスを使った武器』

オレはさらに眉をひそめる。何故なら、フュリアス専用のデバイスを使った武器は極めて効果で対戦果が著しく、それこそ悠人ですら、悪い。だから、オレは集積デバイスはフュリアス本体に積むことで虚空から取り出すだけにしたのだ。ただ、デバイス搭載の武器なら呼び出す時間とかも完全なアドバンテージを作り出せる。

それを考えるとオーダーメイドで作られたものか。

『後は、リーゼアインとリーゼツヴァイにリーゼフィアが開発されたことかな』

「リーゼアインとリーゼツヴァイ？」

確か、夢の口から聞いたことがある。昨日だ。昨日、夢が“義賊”から離脱したフュリアスの名前にその二つがあったはずだ。つまり、そこは“義賊”関連の工場だと思うけど、リーゼフィアって何だ？

つか、ドライはないのか？

『知っているのか？』

「ああ。“義賊”の機体だった」

『なるほどね。“義賊”関連の基地ということか。それなら納得だ』

「納得って」

『天界の誰かがいた形跡がある』

その言葉にオレは一瞬息をするのを止めてしまった。

今まで人界には沈黙を保ってきた天界、一度慧海がたった一人で軍隊の半数を撃退してから（１００年ほど前）、が動いた形跡がある。余りの戦力差に進行は諦めたはずじゃないのか？

『こっちはオレ達が動くから気にするな。お前は体育祭を頑張れよ』

「ああ。何かあったら連絡してくれ」

オレは小さく息を吐いてレヴァンティンを下ろした。そして、小さく息を吐く。

「厄介を通り越してヤバいな。さすがに」

天界の狙いがわからない。でも、一つ思うのは、

「フュリアスが、目的なのか？」

そうとしか考えられない。本当ならもっと基地を調べたいところだが、今はいけない。体育祭が終われば飛んでいけばいいか。

オレはそう思いながらため息をつきつつ、借り物競走が始まるのを見ていた。

第百五十話　借り物競走（前書き）

こんなのが実際の体育祭であったなら完全にぐだぐだになるだろうなと思いながら書きました。本番ではもっとはっちゃけて書く予定です。覚えていれば。

第百五十話　借り物競走

天国と地獄。

この名前を知っている人は多いはずだ。オレも暇な問いはヴァイオリンで戯れ程度に弾いている。完全に成功するのは本当に確率が少ないが。

ただ、天国と地獄は流れているが、グラウンドで走っている人はいない。

ちなみに、オレは一人で見ている。由姫と夢の二人はお花を摘みに行った。

現在の種目は借り物競走。メグはまだ走っていないがこの学園都市の借り物競走だけは学園都市しかできないものでもある。

「海道君、隣いい？」

オレが横を向くと、そこには委員長と俊也の姿があった。というか、手を繋いでいるし。

「報告しに来たのか？」

「えっ？　あっ、そういうわけじゃないけど」

委員長がそう言った瞬間に俊也が泣きそうな顔になる。委員長は一度振り返ってそんな俊也の顔を見てまた戻ってきた時には小さく頷いていた。

「お試し期間かな。俊也君が付き合って欲しいと言ってきたんだけど、私は自分に自信がないから」

「そんなことありません。鈴木さんは優しいですし可愛いですし」

「あー、ごちそうさま。ともかく、座れよ。体育祭実行委員の仕事もかなり落ち着いたんだろ」

「うん。みんなが頑張ってくれるから。それに、俊也君とデートしろってうるさいし」

「僕は鈴木さんと一緒にいられれば本望です」

ここはオレにまたごちそうさまという言葉を言わそうとしているんだよな？　というか、そう思っていていいよな？

そう考えていると、グラウンドに一人の女子生徒が入ってくる。その後ろにいるのは困った顔をしている音姉。借り物にされていたのか。

「ちゃんと音姫さんに許可は取っているから」

「なるほどね。委員長、予選で使われる借り物ってどんなものがあるんだ？」

「えっとね。多いのが人、かな。ただ、シフトから考えてここの近くの人。ちゃんと場所は書いているし、そこから動かないように海道君以外の上司からは了承を取っている」

オレから取らなくても音姉だから大丈夫だろう。それに、委員長のことだから必ず誰かに代役を頼んでいるはずだ。それくらいしていてもおかしくない。

もしかしたら、今、姿の見えない孝治達に頼んでいるかもな。

「他にも、第７６移動隊以外の神剣とか、『ＧＦ』最新型デバイス内蔵武器とか、時価総額３０００万円を超えるものとか」

聖骸布（アストラル）なら一発で３０００万円を超えるだろうな。見た目で４０００万は硬く、詳しく調べてみたら億の大台に到達していてもおかしくないものだったし。

まあ、最初の二つは正直、学園都市じゃ手に入らないから完全にＳランクの借り物だ。

「委員長さん？」

「えっと、体育祭実行委員長？」

「由姫さんに海道君のお友達かな？　私は鈴木花子」

「星村夢、です」

「星村さんだね。星村さんは北村さんの応援？」

その言葉に夢がこくりと頷いた。オレの横に由姫が座る。

「まだ始まっていませんよね」

「ようやく第一組の一位が決まったところだ。というか、見ているのはかなり退屈なんだよな。本番ならともかく、予選の借り物競走ってアナウンスの一つもないから誰が何を借りたかわからないし」

本番ならどのレーンの誰が何を借りようとしているのかまで教えてくれる。候補に見つかる人がいれば準備できるというものだ。ただ、予選ではそんなものがない。

まあ、簡単なものから難しいものまでたくさんあるからな。過去に会ったのはとある学校の校長のカツラとか、オレ自身とかあった。

その時、ちょうどちょっとした事件があったため本当にかわいそうなことはしたけど。

「じゃ、兄さんか委員長さんがアナウンスをすればいいのではないですか？　機材はありますし、借り物競走を見ている人は少なくありません。ここは飛び入りで行っても大丈夫じゃないですか？」

「委員長」

「どうする？」

オレは委員長と視線を合わす。目でわかる。乗り気だ。そういうオレも乗り気だ。負けるわけにはいかない。だから、オレは腕を振り上げた。

「最初はグー！」

『第二組より体育祭実行委員長鈴木花子が飛び入りで実況を行います。これは予選の借り物競走が静かという指摘があったので急遽やらせていただくことになりました。では、第二組の皆さま、スタート位置についてください』

オレはそんな様子を体育座りで見ていた。

そんなオレを由姫は慰めてくれる。

「元気出してください」

「そう言うわけにはいかないだろ。せっかく、せっかく暇つぶしになると思ったのに。楽しそうだったのに」

「後半が本音？」

夢の言葉には無言を貫く。どっちも正しいけど、どちらかというと後者という感じだ。

「そう言えば、今日はそんなに用事を入れていないんですね」

「昨日で孝治達がかなり終わらしてくれたからな。前倒しで何件かやっていたんだよ。だから、今日はかなり余裕がある。そもそも、メグと合流する予定だったから余裕がないとだめだしな」

「そうですね。私は兄さんと二人がよかったですけど」

「ごちそうさま」

夢が呆れたように言う。その言葉に由姫の顔は真っ赤に染まった。

自分で言った言葉なんだからそこまで赤くなるなとは思うけど、由姫の性格から考えて仕方のないところのもあるだろうな。

オレは小さく息を吐きながら夢を見る。

「夢は大丈夫なのか？　何かクラスの仕事でも」

「大丈夫、だよ。今日はもう何もないし、メグの応援をしに来ただけ、だから」

「そっか。夢は学年対抗で本当に活躍したからな」

その言葉に夢の顔が真っ赤になる。

学年対抗は夢のおかげで勝つことが出来た。というか、相手の目の前で急降下するボールなんて受け止めることは本当に難しい。

多分、夢がいなかったならじり貧で負けていた可能性もある。

「まあ、お疲れ様。今日はゆっくり休めばいいさ」

「ありがとう」

オレ達はこれから忙しいけれど。

第二組のいないグラウンドを見つめると、次の第三組にメグの姿を見つける。思っていたより早かったな。

もう少し後、第七組くらいで来ると思ったいたのに。

「兄さん、メグさんは勝てると思いますか？」

「借り物によるだろうな。メグはSの借り物を狙うって言っていたから何が出るか。聖骸布（アストラル）は持っているからとあるものが出たら大当たり」

「前々から疑問だったんですけど、どうして聖骸布って書くんですか？　アストラルだけでいいような」

「色々と逸話が多くて詳しい話を語るのは難しいんだが、聖遺物って知っているよな。主に、宗教を作り出した神のごとき人の遺物。その中の一つに布の逸話が残っているんだ。曰く、どんな炎にも焼く尽くされることなく、神の従者の遺骸を炎の中で守り続けたとされるもの。それをいつの間にかアストラルと呼ぶようになって、聖人の遺骸を守る布、つまり、聖骸布がアストラルとなったんだ」

この話はポピュラーどころか比較的新しい文献を漁らないと出てこないんだよな。遥か昔、それこそ魔科学時代の本とかには一切出てこない、無いだけで存在したかもしれないが、ともかく、見つかることのないもの。まあ、魔科学時代の書物なんて現存しているのはアル・アジフの記述だけだからな。

聖骸布（アストラル）の命名理由はその部分が強い。

「初めて知った。聖骸布（アストラル）については、調べたことがあるから」

「まあ、そういう聖遺物に関する話はかなりあるからな。一番有名

なのはデュランダルかな。世界史上もっとも有名な聖剣。聖遺物が四つ埋め込まれているとされているもの」

「兄さん、エクスカリバーは？」

「エクスカリバーは聖剣というより伝承の剣という意味合いが強いな。聖剣としてエクスカリバーが有名になったのはゲームが発祥と言われているくらいだし」

そもそも、エクスカリバーという名前の神剣が存在しているし。

「二人共、メグが」

グラウンドに視線を向けると確かにそこにはメグの姿があった。第二組が続々帰ってきているところをみると、それほど難しいものじゃなかったのだろう。

「さてさて、メグがどんなものを引くか気にはなるよな」

「私としては面白いものを引いてくれればうれしいのですが」

「多分、会場のみんなが期待している」

お前ら二人って案外酷いよな。

第二組全員がゴールに到達する。すでに第三組は準備万端だ。

『第三組、スタート！』

パァンと音が鳴り響き、メグ達が走り出す。こういう時は素早く進

めて行かないと借り物競走はかなり時間がかかるからな。

メグが目指しているのはSランクの借り物札。落ちているそれを拾い上げて内容を見る。そして、固まる。

他の参加者は最低ランクのものばかりを取ってすぐさま走り出していた。

メグの顔にあるのは困ったような顔？

オレが首をかしげると聖骸布（アストラル）を取り出して反転する。

「いいのか、これ？」

「さあ？」

「いいと、思うよ」

オレはただ、頭を抱えるしかなかった。ある意味反則だろ。

第百五十話　借り物競走（後書き）

体育祭は多分、後５０話は続きそうな予感がします。

第百五十一話　連絡

持っていたペンを机の上に置く。そして、僕は小さく息を吐きながら今まで書いていた書類の内容に間違いがないか確認する。

「大丈夫かな」

僕は立ち上がる。立ち上がって周さんの机の上にその書類を置いた。機密性の必要なものじゃない書類だから別に放置でもいい。

僕はそのまま駐在所の外を見る。すでに風景は赤く染まりたくさんの帰る人達がいた。そんな人達を見ながら僕は席に置いてあるカバンを手に取った。

「そろそろ周さん達が来るころだから、今の内に机の上を整理しておこう」

第5分隊だから資料整理も多い。だから、机の上はしっかりと整理しておかないといけない。資料整理が下手なリリーナの机なんてすごいことになっているし。

「えっと。これはこっちのファイルで、これはあっちのファイルかな。それで、これは」

ピーピーピーピーピーピーピー。

少し甲高いピーという連続した音。受話器からの音じゃない。駐在所に備え付けられた第７６移動隊専用の航空衛星電話と呼ばれるものだ。

人が到達出来る最も高い場所に設置された術式を介入して行う特殊な電話で緊急時に使うものでもある。コストがかなり高く、普通は使うなとも言われているけど。

僕はすぐにその電話に駆け寄った。そして、近くにあったパネルを操作して受話器を手に取る。

「第７６移動隊駐在所です」

もちろん、口から出すのは英語だ。『ＧＦ』の公用語に日本語（総長や第一特務隊長が日本人だから）があるけど、衛星電話を使うのは『ＧＦ』だけじゃない。

『こちらはカリフォルニア地下刑務所です』

聞こえてきた英語の声に僕は一瞬だけ耳を疑った。

カリフォルニア地下刑務所は世界にも珍しい地下に刑務所がある刑務所だ。人権団体からうるさく言われているが、そこに入れられている人は基本的に凶悪犯か死刑囚であり、『ＧＦ』及びアメリカ政府の部隊が合同で警備をしている。

『第７６移動隊隊長又は副隊長格はいらっしゃいますか？』

「今現在、海道周隊長及び花畑孝治副隊長、白百合音姫副隊長、アル・アジフ副隊長はこの場にいませんが」

『重要な話があるため隊長又は副隊長に直接お話しさせていただきませんか？　出来れば、今すぐに』

「少し待ってください。海道周隊長がもうすぐ戻ってくると思うので」

僕は電話を保留にすると近くのデバイス内蔵型の壁掛け通信機に手を伸ばした。そして、すかさず周さんに連絡を取る。

『周だ』

幸いにも周さんはすぐに出てくれた。僕はホッと息を吐いて口を開く。

「僕です。悠人です。すぐに駐在所に戻れますか？」

『急げば2分くらいだな』

「衛星電話でカリフォルニア地下刑務所からの電話です。重要な話らしくて」

『わかった。最速で向かう』

その言葉と共に通信が切られる。僕は通信機を元の位置に戻して保留にした電話の受話器を取った。

「海道周隊長との連絡が取れました。すぐに戻ってくるとのことです」

『そうですか。わかりました。ありがとうございます。それと、真柴悠人隊員も呼び出していただけないでしょうか』

「真柴悠人は僕ですが」

『ご本人でしたか。それでは、真柴悠人隊員には先に述べさせていただきます。真柴隼人が脱獄しました』

その言葉に僕は受話器を手から落としていた。だけど、その受話器は床に落ちる寸前で周さんが掴み取る。

「お電話変わりました。第７６移動隊隊長海道周です」

スラスラと流れる流暢な英語。だけど、僕の頭にはあまり入って来ない。

真柴隼人が、あいつが、脱獄した？　あの、絶対封印の監獄から？

『海道周隊長ですか。急な電話となりましたがご容赦ください。カリフォルニア地下刑務所です』

衛星電話のスピーカーから聞こえる声。周さんがスピーカーをつけたらしい。でも、僕は後ろに下がっていた。その体が誰かに当たる。いや、抱きしめられる。

振り返った先にいたのはルナ。

「大丈夫。落ち着いて」

ルナの声が耳に囁かれる。それを聞きながら僕はゆっくり頷いた。

『要件を手短に伝えます。真柴隼人が脱獄しました』

その言葉に僕の心が揺れる。それほどまでに真柴隼人の名前は強烈だった。

「真柴隼人が？」

周さんは訝しむように答えを返す。周さんもあの監獄から出ることに驚いているのだろう。

あの監獄はあらゆる逃走の手段を潰すものだ。例え慧海さんでも無理と言われる監獄。

そんな場所から脱獄出来るなんて。

「何かの間違いではなくて？」

『信じたくない気持ちはわかります。私達も信じたくはないことではありますが事実です。真柴隼人はカリフォルニア地下刑務所の監獄から脱獄しました』

ありえない。信じたくない。絶対に信じない。

カリフォルニア地下刑務所の鉄格子は絶対だ。神剣に対して絶対的な力はないけれど、慧海さんの神剣でも断ち切れなかったという話はある。

『監獄の鉄格子には何一つ傷はなく、そして、何一つ扉を開けた形跡はありません。気配もなく逃げられました』

「気配もなく？　そうですか。わかりました。連絡、ありがとうございます」

『いえ、真柴隼人は真柴悠人隊員に復讐すると常日頃から言っていました。ですから、必ず真柴悠人隊員を守ってあげてください』

「わかりました。真柴悠人は私達の大切な仲間です。ですから、必ず守ります。忙しい中、連絡をいただきありがとうございました」

『新しく何かわかった場合は『GF』本部と密接に連携を取りますのでそちらに連絡します。それでは失礼します』

周さんが受話器を置く。そして、パネルを操作した。

「悠人、大丈夫か？」

「僕は」

大丈夫じゃない。大丈夫じゃないけど、頑張らないと。僕は、大丈夫だから。

「大丈夫、だから」

「バカ。こんな時まで意地を張らなくていいの。会議室を借りていい？　悠人を落ち着かせないと」

「ああ。オレはこれから慧海と連絡を取る。何かあった場合は床に伏せろよ」

「そうするわ」

僕はルナに抱きしめられたまま会議室の中に入る。そして、ドアが

閉められた。ルナが鍵も閉める。

「悠人、座って」

僕は近くの椅子に座った。座ってから気づく。僕の体が震えていることに。貧乏揺すりが止まらない。手を見たら震えが止まらない。

何より、心から恐怖心が襲ってくる。

「落ち着け、っていうのも無理か。悠人、真柴隼人って悠人の父親よね？」

「うん」

「あなたが、母親を殺したから？」

ルナの言葉はストレートに僕の耳に入ってきた。

そうだ。僕は殺したんだ。実の母親を。でも、あんな奴は死んでも当然だ。当然なんだ。だから、僕は悪くない。悪くなんて、ない、のか？

例え、どんな理由があっても殺すのはいいのか？　人殺しは駄目なこと。なら、僕は、

「悠人は悪くないから。悪いのは戦争だよ」

ルナに抱きしめられる。抱きしめられてようやく気づいた。ルナって柔らかいんだ。

「戦いが起きれば恨みはある。断ち切ることが出来ない恨みが。それが大きくなって、戦争は酷くなる」

「でも、僕はたくさんの人を」

「大丈夫。まだ、少ないから。私なんて何回も実戦に参加したのよ。たくさん、たくさん殺した。敵だから、敵だからと言い聞かせて。殺した。何百、何千も。軍人や民間人に関係なく。悠人はまだ戻れるよ」

ルナが僕の手を掴む。僕の手は震えている。いや、ルナの手が震えているんだ。

「悠人の手はたくさんの人を守れる手だから。きっと、大丈夫。私と一緒にならないで。悠人なら、みんなと一緒に守れるから」

「ルナは」

「うん？」

「ルナは一緒じゃないの？」

ルナも僕からしたらちゃんとした友達だ。だから、一緒じゃないの？

「私は、戦うのが人生だから。もう、戻れない」

「そんなことはないよ。ルナは僕に優しくしてくれた。こんなにも僕を安心させてくれた。戦うだけが人生だなんて悲しいことは言わないでよ」

だけど、ルナは首を横に振る。

「優しくしているのは打算だからよ。悠人はもう大丈夫ね。戻るわよ。きっと、みんな心配して」

立ち上がろうとしたルナの手を僕は掴んだ。どうして掴んだかわからない。でも、掴まないと、逃げて行くような気がしたから。

「ルナ」

名前を呼ぶ。ルナの顔は今にも泣きそうだった。この顔を見たことがある。そうだ、見たことがある。正確には、アル・アジフさんの瞳に映った僕の表情だ。

嬉しいけど、逃げ出したいアル・アジフさんと出会った時の表情。

そうか。ルナは僕と似ている部分があったんだ。僕は違うと思っていた。ちょっと生意気で突っかかってくるけど、努力をして、強くなろうして、強がりを言う、優しい、優しい女の子なんだ。

だから、僕はルナに近づいていた。

自分からこんなことをするのは初めてだ。でも、僕は後悔していない。ルナにしたいと思った。リリーナや鈴、メリルではなく、ルナに、

キスしたいと思った。

ほんの触れるだけのキス。でも、気持ちを伝えるには十分だったかもしれない。

ルナは顔を真っ赤にした後、恥じらうように視線を逸らした。

「初めてだったのに」

「僕も」

「覚悟、しているわよね？」

その言葉に僕は躊躇うことなく頷いていた。

第百五十一話　連絡（後書き）

ある意味一目惚れに近い感じです。今までと違うルナを見た悠人が、的な感じで。

第百五十二話　対策

重苦しい空気が駐在所を包み込む。部屋の中にいるのはオレを含めて三人。

孝治と音姉とアル。すぐさま三人を呼び出したのだ。もちろん、真柴隼人のカリフォルニア地下刑務所からの脱獄についての話だ。

「事情はわかった」

孝治が片目だけを開けて腕を組んだ姿勢のままオレを見てくる。そして、その視線が会議室に向いた。

「何故、ピンク色の空気が流れてきている？」

やっぱりバレたか。

「オレじゃないよ？」

「わかっている。悠人と、この気配はルナだな。どうしてエスペランサにいるはずのルナがここにいる？」

実は駐在所の前にいて一緒に飛び込んだだけなんだけどな。というか、悠人を落ち着かせるために会議室に入れたのだが、まさか、こういうことになっているとは。

「初体験はベッドの上ではないのか！」

「お前の持論には相変わらずついていけないからな！！　というか、

いきなり話を変えるなよ。出来れば無視してくれればありがたいけど」

「出来ると思っているのかの？」

アルの言葉にオレは頷くしか出来なかった。だって、事実なのだから。

オレは小さく溜め息をつきながらみんなの前に置いている資料を手に持つ。

「ともかく、今は真柴隼人についてだ。みんなもわかっているように、真柴隼人は真柴昭三の息子、ではなく、真柴家に婿養子に入った一人だ。真柴・結城家との戦いで捕まり、捕まった後に悠人を殺すだの喚き散らしたからカリフォルニア地下刑務所に入れられた人だ」

「弟くん、本当にカリフォルニア地下刑務所から脱獄したの？　ありえない話じゃないけど、ありえないに近いからありえないというか」

「音姉の言うこともわかるけど、時雨が言うには、カリフォルニア地下刑務所は物理的にも魔術的にも脱獄方法を気づかれずにすることは不可能だとされているからな。オレが言うのも何だが、理論上不可能。レヴァンティンも同じ解答だ」

カリフォルニア地下刑務所の鉄格子はまず壊せない。壊すには孝治の持つリバースゼロの力を受けた音姉が光輝の全力状態で紫電一閃を放てば断ち切れるだろう。

あの鉄格子の物理的防御力は鉄格子自体に魔術術式を書き込んだからかありえないくらい高いからな。ちなみに、エスペランサをつくるくらいのお金をカリフォルニア地下刑務所の一つの階層フロアに必要とする。

「神剣にも対応出来る鉄格子を、どうやって抜け出すことを可能にしたのか想像がつかないからな」

「アルちゃんは何か心当たりがないの？」

「ないとは言えぬの。じゃが、竜言語魔法を使えるのはリースと浩平のみじゃ。メリルもおるが、その三人が真柴隼人を連れ出す理由にはならぬ」

確かに竜言語魔法なら色々と出来そうだな。既存の魔術とは桁違いの万能性を誇るから。

「まるで神隠しだな」

オレは小さく呟いた。本当に神隠しだったならどれだけ良かったことか。

「ふむ。神隠しとは面白い言い方をする。だが、神隠しとは少し異なる気もするが」

「あれはただの行方不明だしね。神隠しなんて普通はおきないものだよ」

「わかってる。神隠しは誘拐されただけってのも。でも、そういう風に原因のわからない失踪は神隠しだと」

「そうか。神隠し（トリックオアトラップ）じゃ」

アルが何かを思い出したかのように呟いた。それに対してオレは微かに目を細める。

神隠し（トリックオアトラップ）はかなり有名な話だ。有名というのは一度、トリックオアトラップという名前の小説が出たからでもある。

神隠し、正確には妖精による姿隠しだったか、それが起きて行方不明者が出た村で起きる数々の事件。それがたった一つの神剣に起こされたものという小説だ。

確かに、題材となった神隠し（トリックオアトラップ）は現存しているはずのものだ。ただ、所有者がおらず、地下倉庫に封印された。

神隠し（トリックオアトラップ）を使えば確かに可能かもしれない。

「手品と罠？」

「神隠しのことだよ。神隠し（トリックオアトラップ）。神剣の中でも最低クラスの神剣で、腕輪型と言っても、身に着けたなら見えなくなるから見つけるのは難しい。能力は奇術の発動。手品みたいなものだ。だけど、使い方次第では手品じゃなく罠を作り出してその中に呼び出すことも出来る、神隠しのように消すことだって出来る」

「そもそも、神隠し（トリックオアトラップ）の最初の所有者は今は絶滅した妖精が持っていたものじゃ。日本では神隠しと言われて

おるが、ヨーロッパでは妖精が起こすという話は聞いておるじゃろ」

異世界に導く存在も、日本では神であるのが一般的だが、ヨーロッパでは妖精であるのが一般的だ。例えば、ピーターパンのような子供達を導く存在も妖精である。

そもそも、神剣の一部には語られている通りの能力を有する武器がある。例えば、伝承の中でしか存在してないが故に伝承の能力を受け継いだとある剣のように。

「神隠し（トリックオアトラップ）はそもそも神隠しを起こすためのもの。妖精という単一世界に新たな血を呼び寄せるためのものじゃ。じゃから、神隠しとも呼ばれる」

「神によって隠されることで異世界に呼び出されるって感じかな」

「そうじゃ。過去にそういう事件も存在しておる。最も、異世界ではなく異界と言うべきじゃがな。神隠し（トリックオアトラップ）は異界に通じる力を持つとされる。それがもし本当なら、神隠し（トリックオアトラップ）によってカリフォルニア地下刑務所に誰にも気づかれずに真柴隼人を連れ出すのは不可能なことではあるまい」

確かに、アルのものが一番、理に適ったものだ。支援系の神剣は孝治の持つリバースゼロのようにかなり強力な特殊能力を持つ。それは、リバースゼロがそれしか出来ないからだ。

神隠し（トリックオアトラップ）も同じような神剣だと考えられるから、奇術に使えるのは副産物であり、実は神隠しの能力が本物である可能性だってある。

「とりあえず、その線で当たってみる。みんなは神隠し（トリックオアトラップ）による攻撃を警戒してくれ」

「それには及ばぬぞ」

アルが涼しい顔で言葉を返してくる。

「神隠し（トリックオアトラップ）は観客を楽しませる奇術として成り立つ状況でしか発動せぬ。例えば、脱出不能な場所の中からとかの」

『ビンゴだ。神隠し（トリックオアトラップ）は四ヶ月前に盗難にあった神剣だ。確かに、神隠し（トリックオアトラップ）ならあのカリフォルニア地下刑務所を抜けられるだろうな』

オレはすぐさま慧海に連絡して神隠し（トリックオアトラップ）について聞いていた。どうやら慧海もその存在は忘れていたらしい。

『犯人はわかっていないが、状況から考えて『悪夢の正夢（ナイトメア）』の能力だろうな。だけど、疑問に残るのは』

「どうして真柴隼人の脱獄に手を貸したのか」

真柴隼人の狙いは悠人を殺すことだけ。それを考えても、最小の犠牲で世界を救おうと考えている親父達とは相容れないはずなのに。

『もしかしたら、奴らも一枚岩じゃないかもしれないな。まあ、神隠し（トリックオアトラップ）を使っても、脱出不可能な状況とかはなかなか作れないからな。むしろ、神隠し（トリックオアトラップ）って災害救助用の神剣なんだぜ』

「そうなのか？」

そんなことは初耳だったし初めて聞く。

『元々、神隠し（トリックオアトラップ）は不可能から可能への転換能力なんだ。一番使えるのが、災害時に逃げ出せない状況からの逃走。それが妖精や神の導きだとしても、神隠し（トリックオアトラップ）に対する崇拝はすごいことになったからな』

「不可能から可能への転換能力か。今では、奇術で例えられるんだな」

『幸か不幸かそういうことだ。奇術なんて見た目だけは絶対に不可能なものだ。だけど、それを覆すもの。神隠し（トリックオアトラップ）の象徴だろ』

確かにそうだ。不可能から可能までの転換能力がどこまで強力かわからないが、それを使われたならかなり辛いだろう。

「このことを知っているのは？」

『知らなかったのか？　神隠し（トリックオアトラップ）の元所有者はオレなんだぜ』

その言葉にオレは絶句する。

『神隠し（トリックオアトラップ）なら心配するな。あれは本当の使い方を知っているなら化け物だけど、知らないならただの奇術の道具だ』

「あ、ああ。わかった」

『そうそう。オレも暇があったらお祭りに参加するから、対策は頑張ってたてろよ』

その言葉にオレの顔が引きつるのがわかった。今度こそ、根本的から対策を見直さないといけないだろう。

そうなると、あの可能性も考えないとな。

「慧海。一つ、依頼していいか？」

『いいぞ』

気楽な声にオレは口を開く。

「最新型デバイスをある能力をつけて学園都市の『ＧＦ』全員分用意してくれないか？」

こんな無茶な要求は通るわけがない。だが、耳に聞こえてきた声は別の言葉だった。

『いいぜ』

オレはまた、絶句させられた。

第百五十三話　二日目の終わり（前書き）

時刻的にはすでに三日目。しかし、周の中ではまだ二日目です。

第百五十三話　二日目の終わり

対策の組み直し。はっきり言うならやりたくない仕事だ。今まで組み上げていた全ての構築を一度無にしてから新たに組み立てないといけない。

その構築にしても何が危険か何が危険じゃないかという選別から不測の事態に陥った時の対応など、やるべきことは多岐に渡る。

正直に言うなら、かなり大変ではあるが、組み立てていけば楽しくはなってくる。ただ、楽しくなるのは開始三時間後が平均だ。作業開始から一時間。今の時間はと言うと、

「午前2時、か。ったく、術式のデータを送るだけでこんなに時間がかかるとはな」

『マスターの術式は独創的ですからね。私も多少ながら独創的に手伝っていますし』

確かに、あの術式は運良く組み合わせたことで出来上がったものだ。それをオレが考えたやり方をするなら完全なデータとして組み込まないといけない。

レヴァンティンで試すのは不可能だから、向こうに作業してもらうことになるが。

『それにしても、マスターは相変わらず凄いことを考えますよね。実用化出来れば防衛拠点はかなり堅くなりますよ』

「堅牢の方がいいだろ。それに、オレが考えたことが確かなら」

キーボードを叩いてデータを打ち込む。作り出すのは当日の戦況予測シュミレーション。条件を極めて最悪にした場合の予測を算出する。

ただ、これは意見の一つだ。このシュミレーションは、最高の状況に導くためにありとあらゆる思考を行う。おかげで、シュミレーション一つに集積デバイスは必ず必要となる。

オレが使っているものは体育祭前に新しくしたデバイス内蔵型の出力装置とキーボードを一緒にしたものだ。出力装置はもちろん、宙に浮かぶ立体ディスプレイのもの。

デバイス内蔵型と言っても集積デバイス内蔵型だから大きさは比べものにならなくなってはいる。

「やっぱり、ここが弱いか」

オレはシュミレーション結果を見ながら小さく溜め息をついた。突かれたポイントは特殊合流地点。確かに、ここにあれが隠されていないならこう来るのは当たり前だ。

問題は、予測出来ない味方の動きをどうするか。

「まあ、気長にやっていくしかないな。このままだと朝日が拝めそうな」

『マスター。明日、いえ、今日は何も参加しないのですか？』

「そもそも、今日は溜まりに溜まった事務の仕事を片付ける日だ。事務の仕事は孝治や音姉でも可能だし、今のオレは今の状況に専念出来るってわけ。まあ、明日の仕事も考えないといけないから、都とアルには悪いけど、見回りは無しだな」

『仕方ありませんよ。マスターの作戦はただでさえ学園都市全てを使う大掛かりなものですから』

オレは頷きながらキーボード上を走る手を動かす。

「唯一の嬉しいことが、作戦を変えてもここ一週間で作り上げたプログラムが使えるってことだからな」

『必死に点検もしましたよね。でも、もしもの時を考えていた方が』

「もしもというか、すでに学園自治政府と体育祭実行委員にメールを送ったからな」

オレは小さく息を吐きながら言う。

オレの考える最悪の事態が的中したなら民間人を守ることに最善の努力を行わないといけない。それは、『ＧＦ』としての指名であり、最終日の体育祭を行う最終条件。

正は言ったんだ。最終日は無かったって。だったら、オレ達で守りきればいい。まあ、真柴隼人の脱獄で難易度が桁違いに上がったけど。

『マスターは本気なんですね。本気で、未来を変えようとしている』

「そりゃな。世界の滅びなんて未だに実感が湧かないけど、出来る限りの全てをしないと。後悔はしたくない。まあ、後悔する暇はないかもしれないけど、出来る限りのこと、あらゆる種族、あらゆる存在、あらゆる武器、あらゆる思い全てを使って対抗するしかないんだ。それに必要なのは四つの世界の共闘」

『マスターの志はたくさんの人が理解しています。が、一つ問題があります』

「そんな問題くらいわかってる」

理解してくれる人はいるが反対する人もいる。何か大きな事件、それこそ、滅びに関する大きな事件が発生しなければ動かない人も多いだろう。

例え、オレがそれに対する最大の策だとしても。

「今は、本当にどうするかを考えないとな。ともかく、このポイントを狙うのは当り前だからな。そもそも、対抗策が少なすぎるって。金色夜叉、剣の舞、妖精乱舞（フェアリー・ダンス）、里宮本家八陣八叉流、八陣流、八叉流、狭間の力、白楽天流、白百合流、光輝、運命、栄光、リバースゼロ、矛神、エクスカリバー、ソードウルフ、イグジストアストラル、アストラルブレイズ、アストラルソティス、アストラルルーラ、ダークエルフ、アル・アジフ。そして、滅びの破壊（ルナティック）の鬼。要所では使えても、絶対的に対抗策が少ないからな」

『ですよね。マスターが今あげた全てはこの学園都市にとって切り札となるものですが、今回の対策で使えるのは、おそらく』

「金色夜叉と妖精乱舞（フェアリー・ダンス）に滅びの破壊（ルナティック）の鬼。金色夜叉は何回か発動し

ているから手の内は割れているだろうけど、妖精乱舞（フェアリー・ダンス）と滅びの破壊（ルナティック）の鬼は見せていないから大丈夫だろうな」

『本気ですね。滅びの破壊（ルナティック）の鬼に関しては私は使わない方がいいと思っていますが』

「オレだってそうだ」

滅びの破壊（ルナティック）の鬼ははっきり言うならハイリスク超ハイリターンなものだ。亜紗の妖精乱舞（フェアリー・ダンス）と比べても、滅びの破壊（ルナティック）の鬼は下手を打てば周囲に甚大な被害を及ぼす技。

地下で使うようなものじゃない。

「相手の行動がある以上、向こうの動きはかなり限定できる。ただ、限定できないのは真柴隼人の行動だな」

『行動原理から考えたてみたらどうですか？　真柴隼人は真柴悠人単体を狙っています。なら、その単体だけを狙うと考えて』

「問題は、真柴隼人の軍団だ。真柴家自体、というか、真柴・結城と戦った時では相手方を全て捕まえたとは言えない。もしかしたら、別個にフュリアス部隊を持って来るかもしれない」

『ただでさえ、陽動部隊にフュリアス部隊はあると断言していましたからね。まあ、そこにリーゼフィアはあると考えていいでしょう』

もう一つの問題は、リーゼフィアがどんなものかわからないことだ。夢にリーゼの名前がつく機体はリーゼアインとリーゼツヴァイ以外にあるのかと尋ねたことがある。ただ、解答はこうだった。

「リーゼアインと、リーゼツヴァイ以外の、フュリアスは、知らないよ？」

夢は嘘をつくような性格じゃないし、夢の目を見てもごまかしている様子もない。知らされていないだけか、ただ、所有していないだけか。

でも、リーゼフィアもリーゼアイン、リーゼツヴァイと同じ場所で作られたはずだ。それを考えると何かとややこしい自体にはなりそうだが。

『復讐をしにくる相手は本当に苦手ですよね。私もですが。復讐とは時に大きな力となります。ですが、その力は諸刃の剣。時には身を滅ぼす者です』

「拘りがあるのか？」

『昔の話です。昔の、本当に昔の、今から時代を二回またぐほどの昔の話ですよ。そこにあった人類の希望の武器の一つであるものと、復讐を胸に戦い、復讐を果たして死んでいった気高くも哀れな人間の話です』

多分、レヴァンティンの体験談だろう。レヴァンティンはその時のことを語ろうとしない。時には語ってはくれるが、その時の人物や英雄の存在とかは特に語ってくれない。レヴァンティンなりの思い入れがあるのだろう。

オレはただ、「そうか」とだけ答えて作業に集中する。

レヴァンティンはおそらく復讐をさせない方法を考えるだろう。でも、オレは無理だと思う。

悠人が自分の母親を復讐のために殺したように、大切な妻を殺された真柴隼人は悠人を復讐のために殺そうとしている。止める方法はまずない。

『いつか、復讐というものがなくなればいいのですが』

「その時は、戦いの無い世界だな」

オレはそう答えながらこうも思う。

それは、衰退していくだけの死んだ世界だとも。

レヴァンティンの声を聞きながらキーボードに手を走らせる。それは、オレの日常の作業風景。

そして、オレの日の二日目の終わりは、朝日を拝むと共に到来した。

第百五十三話　二日目の終わり（後書き）

この話を書いている最中に思ったのですが、この小説、ファンタジーの分類では今、ありませんよね？　そういう疑問を持った人も多いと思いますが、ファンタジーと言えば、異世界、と考えていますので第三章まで待ってください。つまり、第二章は学園の分類です。大きく見ればファンタジーなだけなので、一応。

第百五十四話　緊急招集（前書き）

緊急招集（笑）が正しいタイトルじゃないかなと。

第百五十四話　緊急招集

体育祭三日目。

私は小さく息を吐きながら靴紐を結んでいた。

「朝から溜め息？　もしかして、要求不満？　３０分ほど外に出ようか？」

くすくす笑いながら時音が話しかけてくる。昨日、散々私をいじったから機嫌がいいのだろう。

「違う違う。というか、要求不満って何？」

「言わせないでよ。まあ、メグが槍を持つということは、『ＧＦ』絡み？」

私は靴紐を結び終わって立ち上がる。確かに『ＧＦ』絡み。というか、私は常に炎獄の御槍を持ち歩いているはずなんだけど。

「そうなんだけど、周からの緊急招集。昨日は何かあったらしくて大きく予定が変わったし」

「そう言えば、晩ご飯はいらないとか言っていたのに晩ご飯前に返ってきたよね」

「本当にごめん」

私が頭を下げると時音はまたくすくすと笑った。

「今日はどうするの？　晩ご飯がいるなら一緒に食べたいけど」

「どうかな。多分、今日は忙しいと思うから別々じゃ、ダメ？」

「ダメじゃないけど、最近のメグは付き合いが悪いなって」

そのことに関しては何も言えない。第７６移動隊のことをしていればどうしても時間が足りないのだ。私はまだまだ未熟で、勉強しないといけないことが山の様にあるのに。

私はドアノブに手を伸ばした。

「じゃ、また寝る前に」

「体は気を付けてね」

「わかってる」

私はドアを開けて部屋から外に飛び出した。そして、手すりを掴み、そこから飛び降りる。

地上三階。そこから飛び降りたならよほどの状況じゃない限り何か怪我をするだろうけど、私は上手く着地して走り出した。

時間にはまだまだ余裕はあるけどこれも訓練だと思って走らないと。

まだ早朝だと言うのに手を繋いだカップルの横を通り過ぎる。羨ましいけど、気にしている余裕は、

「あれ？　メグさん？」

その言葉に私は完全に足を止めていた。そこにいたのは悠人さんと、体育祭期間中、音界から来た第７６移動隊への増援の、確か、ルナさんだった。二人が手を繋いでいる。

「そんなに急いでどうしたんですか？　時間にはまだまだ余裕があると思いますけど」

「訓練だと思ってランニングついでに」

「ランニングって速度じゃないわね」

ルナさんが呆れたように言うが、嫌みは一つもない。音界の身体能力は人界と同じという話は聞くけど、魔術に関しては完全に差がある。その分、技術関連に差はあるらしい、だったと思う。

そもそも、音界のことなんて私からすれば雲の上の出来事だ。

「二人はどうしてですか？　あまり、接点がないような」

「えっと、ルナと付き合うことになって」

「私の初めてを奪ったんだからそれくらい当然なのよ。それより、止まっていたら間に合うものも間に合わないわよ」

頬を赤くして見当違いの方向を向いているルナさん。それだけで何があったかよくわかる。つまり、大人の階段を上ったということだろう。

私は祝福するように何回か拍手をする。

「みんなへの報告は今日ですか？」

「うん。ちょうどみんな集まるしね」

「みんな？」

「うん」

悠人さんは満面の笑みで頷く。

「第７６移動隊のメンバー全員」

「朝早くに悪いな」

私を含め、みんなが腰かけている中、周が一人立ち上がって周囲を見渡している。これを立ち上がってみたら本当にすごい様子だろうな。

私はあまり周や由姫以外の人と一緒の任務は少ない。まだ私が慣れていないと言うのもあるけど、訓練以外ではまず顔を合わせることはない。だから、ここにいるメンバーがどれだけすごいかよくわかる。

最強の剣士との呼び声がある音姫さん。

音姫さんと対抗するように最高の拳士と呼ばれる由姫。

全身真っ黒だけど、その戦闘技術は高校生にして世界トップクラスの孝治さん。

最高の精霊召喚師である悠聖さん。

最強の精霊召喚師である俊也さん。

世界に名を連ねる砲撃術師の楓さん、エレノアさん。

特殊なレアスキルで地獄を呼び出す光。

最強の魔術師であるアル・アジフさん。

竜言語魔法という魔術を異なる体系を用いるリースさん。

膨大な魔力と繊細な操作が出来る都さん。

世界三指に入る速度を持つ亜紗さん。

世界最強のフュリアスパイロットの悠人さん。

魔界の魔王の娘のリリーナさん。

絶対防御のフュリアス、イグジストアストラルを持つ鈴さん。

防御の天才であるアルトさん。

音界のパイロットのルナさんにリマさん。

そして、あらゆる部門で器用貧乏のようにあらゆる作業が出来る周。

よくよく考えてみると、この中に私がいていいのかなと思ってしまう。

「みんな、昨日、予定が多く変わったことに疑問があると思う。だから、説明させてもらう。昨日、カリフォルニア地下刑務所第八層第一独房から真柴隼人が逃げ出した」

その言葉に驚いている人の数は多い。驚いていないのは第5分隊の一部と私くらい。私は真柴隼人の名前に聞き覚えがないからだ。ただ、真柴と言えば、私が小学栄の頃に中東であった戦いの中であったはず。あの時は中東の組織である『ES』の比較的おとなしい穏健派がほぼ壊滅したという話もあった。

その時に真柴という名前が出てきたはずだ。

それに、悠人さんも真柴だし。

「真柴隼人は悠人の父親だ。逃げ出した理由はわからないが、おそらく、悠人を狙っているってことだけは確かだ」

その言葉に視界の隅で悠人さんが微かに肩を震わせた。隣にいるルナさんの表情が強張るけど、その近くに座っている和樹さんや悠聖さんの表情はさらに強張っている。

だって、リリーナさんと鈴さんが凄い顔でルナさんを睨みつけているからだ。

周が小さくため息をつく。

「そこ、リリーナと鈴は話を聞いているのか？」

「聞いているよ。そこお泥棒猫をどうにかして殺す算段を立てようって話だよね」

「違うよ。殺すじゃなくて、死ぬよりも恐ろしいことをしようって話に」

「鈴、明暗。周、今すぐ」

周がため息をついて腕を上げ、そして、振り下ろした。たったそれだけで魔術が発動して二人の頭の上に空気の塊が落下する。ダメージ的には拳骨を落とされたくらいかな。

「話をよく聞け。みんなに集まってもらったのはこれからのことだ。真柴隼人の脱獄ははっきり言って予想外だ。だから、これからの作戦に仕様が出来る可能性があることをみんなは理解して欲しい。特に、第５分隊のフュリアスパイロットは気をつけるように」

「質問」

すると、アルトさんがすっと手を上げていた。

「つまり、真柴隼人はフュリアに乗ってくるということだね」

「おそらくな。真柴隼人の狙いは悠人だ。悠人を倒すにはフュリアスを使ってくると思う。だから、リリーナ、鈴、リマ、そして、ル

ナの四人は最大限の注意を」

「海道君。予備のパイロットは必要ないの？」

委員長さんは確か固定機体は持たないけど、フュリアスに乗ることは出来るはず。だから、周にそう尋ねたのだろう。固定機体を持つ予備のパイロットの七葉さんや琴美さんの名前は無かったし。

周はゆっくり頷いた。

「相手のフュリアスの性能が未知数だからな。本音を言うなら戦わない方がいいが、そうは言ってられないだろ。だから、実戦経験豊富な四人に任せる」

リリーナさんは後方支援特化にしやすい機体なのに最前線で特攻する気質があるらしいし、前線に立っても壊れない機体を持つ鈴さんは後方支援だし、よくよく考えるとバランスが悪いような。

「他の問題は色々あるんだが、そこはどうにか出来るから気にはするな。さて、今回みんなを呼んだ本題を話そう」

その言葉にその場にいるほぼ全員が呆けたような顔になった。だって、普通は今までの話が本題だと思うはず。現に、私もそうだった。でも、周はそれが本題じゃないらしい。もしかしたら、もっと大きな事件が起きて、

「悠人とルナが付き合うことになった」

「はい？」

私は思わず声を出していた。実際にこの場にいる全員が本題とはかけ離れた内容に、

「ほう。そうか。悠人、めでたいな」

「おもでとさん。まさか、オレと同じハーレムルートを辿ると思っていた悠人が付き合うなんて」

「ジーザス！！」

「かず君？　今は普通にお祝いしようね。というか、意味、わかってないよね？」

「おめでとうございます」

「普通にお祝いできる都の精神に少し驚いているわ」

「私はいいと思うけどな。弟くんも早く誰かと付き合って欲しいし」

「その言葉、そっくりそのまま返すからな！」

「僕は素直にお祝いすればいいと思いますよ」

「俊也君。海道君達は放っておこう」

「いやー、めでたいね。本当にめでたいね」

「アルト、あたしにはこの状況が理解できないのにどうして呑気に祝えるの？」

「ルナ、おめでとう」

「絶対に認めないから。こんな○(ピー)○○○○と悠人が付き合うなんて」

「リリーナ、落ちついて。大丈夫、悠人はいつかあんなき○(ピー)○いなんて飽きてすぐに私達のところに戻ってくるから」

どういうことーー！！

叫びたかった。でも、叫べなかった。むしろ、この状況をおかしく考えていることが異端。発言を聞いていても琴美さんとリコさんくらいしか私と同じ意見いないし。

「どういうことよ」

私はただ、小さくため息をつくしかなかった。

第百五十五話　バカ騒ぎ（前書き）

三日目は一瞬で過ぎます。理由、周達が三日目の大半をこれに費やしたからです。

第百五十五話　バカ騒ぎ

ルナが僕の後ろの座席でエクスカリバーに乗る時に身につける最新型の精神感応システムを内蔵した首輪を触っている。そんなシステムは音界にはないから珍しいのだろう。

僕はただエクスカリバーのプログラムの確認を行っている。

「悠人、あんた達っていつもこれを付けて戦っているの？」

「正確には極一部のパイロットかな。リリーナや鈴は付けていないけど、僕はその首輪型、周さんは内蔵型を付けているから」

「マテリアルライザーの動きはフュリアス離れしているからわかるけど、どうして精神感応？　普通にパイロットの腕だけで」

「そういうのをカバーできない部分があるんだよ」

僕はそう言いながらルナの前にある画面にエクスカリバーの人型形態時の姿を映した。そして、そこにいくつかの矢印を打ちこんでいく。

確かに、精神感応を付けたフュリアスはすでに廃れた分野だと言われている。実際に、精神感応について研究している研究者はアリエル・ロワソと周さんくらいだろう。それほどまでに精神感応は研究されていない。

精神感応にはいくつかのデメリットがあるからだが、その一つに体が生身では僕みたいに首輪型しか装着できないという点がある。つ

まり、生体兵器、周さんや亜紗さんのような生体兵器じゃないと精神感応の能力を発揮できない。

だけど、生体兵器は完ぺきに近づけば近づくほど人としての能力を失っていくと聞く。もしかしたら、相手方の生体兵器はそうなのかもしれない。

だって、周さん達は発展させることをしようとしなかったから。

「精神感応によって細かな動き、本当に細かな動きだけど、一流との戦いでほんの少しだけ有利になるポイントを作り出しているだけ。それだけでも、生き残る確率が上がるしね」

例え僕が最強のパイロットだとしても、いつかは死ぬ。だから、生存できる可能性を極限まで高めていないと。そうしないと、悲しむ人が増えるから。

「バカね。フュリアスの内部機構はパイロットを守りやすいようにしているのよ。よほどのダメージを負わない限り、フュリアスに乗っていれば死なないから。私だって、何回も撃墜されたし」

「そう言えば、ルナはルーイやリマ達の中で一番戦場に出ているんだよね」

「そう。総出撃回数１６８回。その内、無傷での生還は２２回だけ。撃墜されたのは１６回。それ以外はどこかに傷を負っているわ。フュリアスは本当に命がけだから、私みたいな戦場に長くいるパイロットは少ないの」

確かにフュリアスによる戦場は命懸けだ。人界でもフュリアスが戦

場に使われるようになってからたくさんのパイロットが死んでいる。生き残るのはエースパイロットくらいだ。だから、イグジストアストラルみたいな機体が作られるのだろう。

「それでも、私は出撃した。ルーイやお姉ちゃんと一緒にいたいから。幼馴染と実の姉が天才的才能を持つエースパイロットだから大変なのよ」

「僕にはそれがわからない。でも、少し羨ましいかな」

「羨ましい？」

「家族がいて、幼馴染がいることが。僕には家族も幼馴染もいないから。今ではアル・アジフさんが親代わりだけど、本当の母親は僕がこの手で殺したしね」

「バカ」

そういうルナの声は優しい。ほんの少しルナと一緒にいるだけだけど、ルナの性格はよくわかる。こんなに優しい子がフュリアスに乗って戦争しているなんて何かの間違いだと考えたい。

ルナはただ、追いつきたいだけなのだろう。でも、ルナはもっと別の道があるはずなのに。

「悠人、どうかしたの？」

「あっ、うん。少し、この後のことを考えたら」

「この後のことね」

ルナが少し呆れたような声になる。この後、夕方の6時になれば僕達は商業エリアに移って予約した店で僕達の付き合いだした歓迎パーティを行うのだ。ただ、そこに参加するメンバーはいつの間にかクラスメートや学園自治政府の代表など、様々な場所から来る上に、メリルも予定を繰り上げてやってくるらしい。

本当に、僕達は幸せ者だな。

「でも、私は嬉しいかな。悠人は？」

「僕も。僕はルナと付き合って後悔はしていない。多分、これからもっと大変になるかもしれない。でも、みんなが祝福してくれるなら何とかできるような気がするし」

「そうね。私も。メリルには、少し悪いことをしたかな」

ルナがそう思うのは無理もない。僕の勘違いでなければメリルは僕に好意を持っていたはずだ。でも、メリルなら僕達にこういう言うとわかっている。

「祝福してくれるさ。僕達を」

「そうだね。そろそろ向かう？」

すでに時刻は5時を指していた。確かに、ここからな今すぐ向かっても何ら問題はないはずだ。僕は頷いてコクピットを開いた。ルナが先に降りると、後部座席の後ろが動き、後部座式にデバイスなどの精密機器が収まる。

これによって二人乗りが可能になったけど、人型に変形できないんだよね。

「悠人」

ルナが嬉しそうに僕に手を伸ばしてくる。僕はその手を掴んだ。

「周さん、一つ聞いていい？」

僕は顔が引きつるのがわかった。ルナは隣で放心している。僕も放心したいけど、二人揃って放心していたら何が起きるかわからない。

僕達を歓迎した周さんはにこやかに首をかしげる。

「いいぞ」

「どういうこと？」

その全てにあらゆる意味を込めていた。

疑問その１

ここは店ではなく学園都市最大の公民館であること

疑問その２

学園自治政府全員がいるのはいいとして、何故か判らないけど『ＧＦ』のお偉いさん、善知鳥慧海さんや海道時雨さんの姿まであること

疑問その3
立食パーティ？

「いやー、いろいろと進めていたら人数がかなり増えてな。予約していた店じゃ入らないからこっちに変えたんだ。その代わり、予約していた店のご飯を作ってもらうことにしてな。慧海や時雨がいるんはメリルが呼んだから。立食パーティになったのは人数が多すぎるから。他に疑問はあるか？」

「エスパー！？」

「普通に考えそうなことを答えただけ。まあ、こっちも神経すり減らしてやっているから、はめをはずしてバカ騒ぎしたいだけだろ」

そう言いながらみんなを見渡す周さん。

確かに、今の状況はかなり神経をすり減らす。周さんは明確に日時を指定しているけど、僕達はそれ以外でも気をつけないといけない。だから、神経をすり減らす。

いくら予想されているからと言って勝てるわけでもないのに。

「だから、今日は散々バカ騒ぎといこうぜ。おーい！　主賓のカップルが入場したぞー！」

その言葉にその場にいた全員がこちらを向いた。かなり恥ずかしい。だけど、僕はルナの手を引っ張って歩き出す。

何も悪いことはしていないのだ。だったら、どうどうとしていれば

いい。

「ルナ、悠人」

その言葉に会場が静まり返る。その言葉に僕達は足を止める。そこにいたのはメリルの姿。隣にはルーイもいる。

「メリル」

「歌姫様」

僕とルナの声。その声には驚きが入り混じっていた。

「おめでとうございます。お二人とも」

「歌姫様、私、歌姫様が悠人のことを」

そう話そうとしたルナの口をメリルの人差し指が触れた。

「私は、あなたが幸せになれればそれでいいと思っています。ほんの少し、悔しいという気持ちはありますけど、どこの誰ともわからない人に悠人を盗られるより、あなたが悠人の隣に立つなら、私はあなたを全力で応援しましょう」

「メリル」

ルナの瞳から涙がこぼれる。それを見たメリルはにっこり笑ってルナを抱きしめた。周囲から沸き起こる拍手。それは僕達を祝福する拍手。

をれを聞きながら僕は抱き合っている二人を見る。多分、ルナが泣きやむまでこうだろうけど、誰も批判はしないだろう。だって、今の二人は、立場をなんて関係ない友達なんだから。

「隣、いいか」

すでに時刻は9時になっている。相変わらずバカ騒ぎは収まっていないし、いつの間に用意したのかわからないビンゴ大会が開催されていた。

僕はそれを端のほうでオレンジジュースを片手に立っていると、隣にルーイがやってくる。

「いいよ」

「驚いた。まさか、ルナと付き合うことになるなんて。ルナは確かに悠人に惚れてはいたが、悠人は由名に惚れていなかっただろ？」

「うん。どちらかというと、リリーナ、鈴、メリルかな。でも、慰めてくれるルナを感じて、ルナは優しい子なんだって思ったらいつの間にか」

「あいつってギャップが激しいからな。短気ではあるけど、心配してくれた時は本当に献身的になるし。ころっといくのもわからないわけじゃない。ただ、みんなを代表して僕から言わせてもらうけど」

「ルナを不幸にはしない」

僕は断言する。多分、ルーイもこう言いたいのだろう。だからこそ、僕は自分の口で言う。

「ルナは僕みたいになって欲しくないから。だから、僕はルナを幸せにしたい」

「それならいいよ。僕だって他人の濃い時にとやかく言うつもりはない。悠人、そろそろバカ騒ぎの中に戻ったらどうだ」

「うん。そうだね」

僕はゆっくりバカ騒ぎの中心に向かって歩きだす。その中心では悠聖さんや浩平さんが騒いでいるし、周さんや孝治さん達もいる。もんな、笑っている。

そんな中に僕は向かう。笑みを浮かべて。

第百五十六話　追加連絡

後悔はあるかと尋ねられたならオレは後悔はないと答えるだろう。ただ、今の状況はどうにかしないとかなりまずいような気もするが。

だって、三日目の仕事を全くしていないのに三日目が終わった。はっきり言うならかなりヤバい。確かに、予定は早めにくりあげてはいあが、まさか、こんなことになるなんて。

『自業自得ですね』

「お前に言われなくてもわかっているからな！　自業自得なんて自分がわかっているわ！」

多分、徹夜明けのテンションでやったのがかなりまずかったのだろう。というか、睡眠時間一時間が一番まずかったのだろう。

まあ、息抜きにはなったけど。

オレは小さく溜め息をつきながら山積みになった報告書を一枚一枚確認していく。

『マスターはもっと人に頼れば』

「それはしない主義だ。今回のことは自業自得。だったら、自分自身で全てを終わらすべきだろ？」

確認した書類に承認印を押して規定の場所に入れる。

レヴァンティンは小さく溜め息をついた。

『マスターらしいと言えばマスターらしいですが、トップがやるべきことじゃありませんよね』

「そうそう。周君はもう少し私達を頼ってくれてもいいな」

「余計なお世話だ」

オレは小さく溜め息をついて承認印を、

「って、楓!?」

「私はこっちの書類をやるね。こっちは承認印じゃなくて内容確認みたいだから」

「じゃなくて、何でここにいるんだ？　全員帰したはずだろ？　今日はオレが午前3時まで」

「早起きしたから」

今は十二時前なんだけどさ。

「周君も周君だよ。自分だけで頑張るんじゃなくてみんなも使わないと。多分、それが周君が器用貧乏と呼ばれる理由なんだから」

「まあ、他人を動かすのは得意とは言えないからな。おかげで、戦術予測は凄くても、指揮能力は低いって言われるし」

他人と同調することは得意だ。器用貧乏だから。

「ともかく、周君が何と言おうと手伝うから。これは私の中では決定事項なのです」

「わかったわかった。その代わり、二時になる前には帰すからな。寝不足は美容の大敵だぞ」

「『ＥＳ』時代から睡眠時間は五時間だと決めているから。でも、そうしないと周君は怒るよね？」

「当たり前だ。一人で背負い込むなということもわかるけど、この作業だけはオレしか出来ないからな」

承認印は隊長又は副隊長以外押してはいけない。スケジュールの関係上、押せるのはオレくらいだ。

オレは承認印を書類に押していく。すると、レヴァンティンが淡く光った。

『マスター、総長からの通信です』

「開いてくれ」

レヴァンティンがオレの言葉に応じて通信を開く。

『周。時間は大丈夫か？』

「もうすぐ深夜だけど、大丈夫だ。書類整理しながらでもいいか？」

『問題ない。こちらで調べていた学園都市地下についての追加報告

だ』

オレの手がピクリと動く。それに応じるように楓が録音機器をつけた。そんなことをしなくても、レヴァンティンが録音してくれるけど。

『学園都市の地下だが、国連を通じて日本政府に語りかけたが拒否の一点張りだ』

「直接日本政府に言わないのか？」

『『ＧＦ』と話すことはないと言われた。今の外務大臣は反『ＧＦ』だ』

「確か、『赤のクリスマス』で家族を失ったんだっけ。ちょうど、『ＧＦ』の動きが遅かった部分で」

オレはテレビで見た内容を思い出しながら答える。親父が生きていると知ったら行動はさらに過激になるような気はするが。

だけど、こちらの正当性を訴えるはずなんだけどな。

「理由は何にしたんだ？」

『学園都市で大規模な事件が起きる可能性がある。相手は地下水路を使う可能性があるので、地下水路の詳細な図面が欲しいと言ったが断られた。アポを取らずに直接向かったのがまずかったか』

多分、それは関係がないような気もするが。

「『ＧＦ』には話すことはない、か。わかった。こっちで外務大臣について調べてみる。何かきな臭い空気がするしな」

『駿と繋がっている可能性か？』

「ああ。犯罪者の逮捕に協力しないなら、むしろ、犯罪者と繋がっている可能性を疑うのが筋だろ。警察が行っても、外務大臣の逮捕はまず無理だしな。だったら、『ＧＦ』が追い詰めればいいだけだ」

何かの証拠があっても警察は動かない。いや、動けないだろう。外務大臣の逮捕となれば政権が崩れるのは当たり前だし、犯罪者集団と繋がっていたならことさらだ。

それに、警察トップと繋がっていてもおかしくはない。

だから、オレ達で証拠を見つける。

『相変わらず、エグいことを考えるな』

「相手が相手にしないなら相手にしてもらえるように目につくことをすればいいだけだ。それに、親父達と繋がっていることがわかればそれだけで動きを制限しやすいしな」

『では、外務大臣についてはお前に任せよう。それと、日本の外務省経由から面白い情報が入った』

「面白い情報？」

時雨が面白いということは、何かがおかしい情報だと思っていいだろう。何が来るかわからないけど。

『学園都市で政府が動かす機体だが、重大な欠陥があるらしく、とあるデータを流すことで緊急停止するらしい』

「イージスが？　それよりも、どうしてそんな情報が」

考えられるのは外務省のトップに近い人達が意図的に情報を流したということだ。情報を流した真意はわからないが、こんな情報を流すということは何かがあると言っているようなものだろう。

やはり、親父達は狙ってくるか。

「ありがたいな。そのデータはあるのか？」

『ああ。第７６移動隊の中心集積デバイスに送っている。追加連絡は以上だが、何か質問はあるか？』

「いや、ない。助かった」

『そうか。頑張れよ』

時雨との通信が切れる。

オレは小さく溜め息をつきながら承認印を押した書類を所定の場所に置く。

「周君、どうして『ＧＦ』と日本政府は仲が悪いの？　『ＥＳ』は中東やアフリカの国家との仲は良好なのに」

「それを話すとなると、歴史の話になるんだよな。日本政府と『Ｇ

F』の仲は、『GF』設立当初からかなり仲が悪かった。悪かったと言っても、日本政府と、自称『平和を愛する団体』からの印象が悪かっただけだけどな」

昔の日本は大きな事件も少なく、平和というのに相応しい国でもあった。平和ボケと言われるが、あそこまで事件が無かった時代は一種の理想郷だ。

「力による防衛の『GF』と日本政府の違い。大きな溝となって、その溝がだんだん大きくなっているんだ。今では、勘違いした政治家が日本から『GF』の影響を少なくしようとしているが、かなり間違ったことではあるけどな」

「なるほど。あれ？　それと、イージスの話はどう関係するの？」

「今の日本政府の閣僚は『GF』が嫌いってメンバーだらけだけど、官僚の半数以上は『GF』の存在に肯定的だからな。昨今の犯罪に対しての『GF』の活躍は目につくし、まともな対抗手段が少ない警察庁自体が『GF』に頼る比率も大きいからな。というか、警察庁が『GF』の傘下にならないか本気で議論されたくらいだし」

結局は相も変わらずただ存在するだけの組織に成り果てているけど。警察の存在は否定しない。現に、『GF』では介入出来ないようなことも、警察だと介入出来るからだ。

「批判うんぬんよりも、どうすれば上手く回るか考えた方が賢いけどな」

「そうなんだ。ややこしいね」

「ああ。本当なら、一つだったらもっと簡単なんだけどな」

本当に簡単だ。でも、世界はそんなに簡単じゃない。

「まあ、イージスを止めるデータが本当なら、ありがたいけどな」

オレはそう言いながら承認印を押していく。

時雨からの追加連絡はありがたいものばかりだ。地下水路に関しては外務大臣を狙えばいいけど、罠の可能性があるよな。

「レヴァンティン。頼めるか？」

『表示しますね』

その言葉と共に立体ディスプレイが立ち上がり、まるで、蜘蛛の巣のような図が浮かび上がる。

相変わらず仕事が早い。

『外務省のサーバーはチョロいですね。ダミーや停止をほんの数十回使うだけで隔壁は開きましたし、ほんの少しいじるだけで内部犯の犯行に出来ましたし』

オレは小さく溜め息をつきながらデータを保存する。これを基に作り上げたら簡単だろう。

「レヴァンティンは本当に高性能だね。私のブラックレクイエムも同じくらい高性能だったら」

「同じレベルを求めるのが間違っているからな。さて、データの消去は頼むな。もちろん、廃棄じゃなくて破壊で」

もしもの時を考えて、それくらいはしていても大丈夫だろう。レヴァンティンの噂は有名だから、罪状を突きつけてやってくるかもしれない。

まあ、その時用のデータはレヴァンティンが確保しているみたいだけど。

「ともかく、書類をさっさとやるぞ」

「うん」

オレ達は書類に向き直った。山のようにある書類もかなり減ってきたからどんどん崩していかないと。

でも、いつ終わるだろうか。

第百五十七話　本番前日

日の光が目に染みる。オレがゆっくり目を開けると、ちょうどそこには太陽があった。思わず視線を逸らす。

「眩しい」

おかしいな。オレの部屋には朝日が直接入ってくるような構造をしていないはずなのに。

ゆっくり体を起こそうとする。だけど、オレの体には誰かが乗っている。由姫か？　いや、日の光から考えて、由姫が起きているわけがない。

オレが見たそこには、オレの体の上で寝ている楓の姿があった。

落ち着け。落ち着くんだオレ。というか、何が起きているんだ？

混乱しかける頭の中を整理して昨日のことを思い出す。確か、昨日は、いや、時間的には今日だが、書類の整理が終わった時には楓が机の上で突っ伏して寝ていたんだった。

だから、オレは会議室に常備している布団を敷いて楓を寝かせた。交代要員の孝治と代わり、疲れていたオレは会議室に布団を敷いて寝たはずなんだが。

どうしてこうなった。

ともかく、楓を退かせて起き上がらないと。音姉が来る前に。

「おはよう。弟く」

音姉の言葉が途中で止まる。うん。終わった。

「弟くん？　どういうことか説明してくれるよね？」

「待て音姉。オレが起きたのはほんのさっきで今の状況を全く理解していない。少し話し合わないか？」

「うん、そうだね。首を落とすか男性器を落とすかの相談をしようか」

音姉はにっこり笑みを浮かべながら光輝を抜き放つ。

ヤバい。どこで選択を間違えた。とりあえず、レヴァンティンを、

『マスター、言い逃れは出来ませんよ』

レヴァンティンは音姉の手の中にありました。うん。死んだかな、これは。

「懺悔するなら聞いてあげるよ。聞くだけだけど」

「それって死刑宣告の間違いだよな！　というか、楓、起きろ！　こんな状況でどうやったらまだ寝ていられるんだ！？」

「天誅！」

「洒落になってないから！」

オレはすかさずその場から楓を突き飛ばして飛び退いた。ほんの数瞬遅れていたら冗談抜きで光輝の錆びになっていただろう。

床を簡単に切り裂いた光輝を音姉は構える。

「弟くん？　一息に殺すかみじん切りにして殺されるか千切りにして殺されるか、どれがいい！？」

「どれもお断りだからな！」

「じゃ、一刀両断だね！」

「だね、じゃねぇ！！　ファンタズマゴリア！」

振り上げた光輝をオレはファンタズマゴリアで受け止める。というか、ファンタズマゴリアを久しぶりに使ったような気がする。

「さすが弟くん。私の一太刀を受け止めたなんて」

「殺す気か！？」

「殺す気だよ！」

再度振り上げられた光輝がファンタズマゴリアを破壊する。音姉の剣技では対抗する手段がないはずなのに。

オレはすかさず後ろに下がりながら障壁魔術を、

「弟くんを殺して、私も死ぬ！」

懐に入り込まれていた。障壁魔術の展開は間に合わない。迫り来る光輝にオレは目を瞑り、

「断章！」

都の声が聞こえた。

恐る恐る目を開けると、光輝はオレが薄皮一枚裂いた所で止まっている。

オレはホッと息を吐いた。

「都、助かった」

「いえいえ。周様が生きていなかったら大変ですから」

背中をゾクッとした気配が駆け抜ける。嫌な予感しかしない。

「私、死体を拷問する趣味はありませんので」

「お前もか！？」

「都！　すぐに狭間の固定を外して。弟くんが殺れない」

「いえいえ。ここはゆっくり痛めつけるべきですよ」

味方だと思っていた都は完全に敵だった。こうなったらこの二人から逃げ切るしかない。

逃走方法は三通り。一番確率が高いのは窓を使って逃走。

オレはよこに跳びながら障壁魔術を二人の前に展開。そのまま窓を開けて、

「兄さん♪」

にっこり笑みを浮かべた由姫と矛神の柄に手を置いた亜紗。

絶体絶命？

由姫の体が残像のように動くと共にオレの顔面に由姫の拳がめり込んだ。

オレは瞬間に後ろに跳んで一定のダメージは少なくしたものの、由姫に殴られたオレは床を転がる。

転がった場所はちょうど楓の隣。

「おはよう。周君」

呑気に挨拶された。

「起きていたなら助けろよ」

「面白くて」

他人から見たらそうだろうな。

オレは小さく溜め息をついて大の字に寝転がった。

「今日は予選最終日というのはみんなもわかっていると思うが、やることはいつもと変わらないから」

オレはみんなに向かってそう言う。集まっているのは第７６移動隊のメンバーほぼ全員だ。

ただ、視線がかなり痛い。

「明日になれば『ＧＦ』代表のエクシダ・フバルが来る。体育祭期間中に休めるのは今日が最後だと思うように。明日と明後日はとことん働いてもらうから。何か質問は？」

「弟くんが楓ちゃんと寝ていた件について」

「蒸し返すな！　あれは楓の寝相が」

「周君も積極的だったよ」

確信犯かてめぇ。

楓は頬を赤く染めてもじもじしながら言うと周囲の視線がさらに厳しくなった。

というか、視線が厳しすぎて逃げたくなってくる。

「裁判長、ここは民主主義で決めようぜ」

「悠聖は黙ってろ！　民主主義って多数決じゃねえか！」

別名魔女裁判。

「ともかく、蒸し返すな。話がややこしくなるから。今日はこれだけだ。明日になれば一気に忙しくなるから今日中にゆっくり休むこと。いいな？」

誰も反論しないことを見回して確認して小さく息を吐く。

「じゃあ、解散。都とアルだけは残ってくれ。他の全員は所定の位置に行くように」

「ふむ。では、周の極東裁判を」

「いい加減にしろよ、てめぇら」

オレは小さく溜め息をつく。もちろん、さっきまでのことだ。

確かにあれはまずかったけど、あそこまで騒ぎになることは無かっただろう。

「都、お前がある意味ややこしくしたからな」

目的地に向かう途中、オレは都に話しかけた。アルは都とオレを挟んで反対側にアル・アジフに座って浮いている。

本当なら注意すべきなんだろうけど、アルだし大丈夫か。それに、飛んでいるわけじゃなくて、元から浮いているアル・アジフに座っているだけだし。

「そうじゃな。そなたがあそこで飛び込み周を押さえていたら良かったものの」

「ここに味方はいないということだけはよく分かったから」

両隣は完全に敵しかいないということだけはしっかり確認することは出来た。気持ちはわかるから反論のしようもないけど。

「周様も周様です。自身の体はいたわってください。明日からは大事な時なのですから自宅又は私の家で休んでください」

「まあ、わかっているんだけど、自宅に戻るのは億劫だし、お前の家に行くのは命の危険性があるし」

「都の家の近くには暗殺者でもいるのかの？　ともかく、今日はどこに向かうのじゃ？」

「ルートはこれだな」

オレは紙に手書きをしたルートを二人に差し出した。二人の反応は正反対で、都は不思議そうに首を傾げ、アルは納得したように頷いている。

アルは最初から想定していたんだろうな。

「周様、どうして遠回りになっているのですか？　もう少し直線距離で」

「下水道じゃな」

都の疑問にアルが答える。学園都市を歩き回ったことがあるなら気づくかもしれないルートだ。

このルートでは主に下水道、マンホールの位置をなぞって描いている。つまり、下水道の探索を行いながら仕事もこなすのだ。おかげで幾つかの案件を音姉に投げ出すことになった。

「そう。これで地下の隠し通路が見つかったならそれでいいし、見つからないなら候補から外すことが出来る。闇雲に探すより先に見当をつけていた方がいいからな」

「そうなのですか。納得しました。ですが、本当に下水道に地下への道があるのでしょうか」

「確率は半々。他に道がある可能性も考えているから心配するな。問題は」

もし、地下に向かう道がシェルターに向かう避難路にあったなら大変なことになる。親父達が来たなら真っ先に避難路は確保しないといけないが、むしろ、避難路を確保されるだろう。

考えられる策は全て対策を打った。後は、待つだけ。

「明後日が、楽しみだな」

オレはそう、小さく呟いた。

第百五十八話　誘拐

誰かが歩く音が鳴り響く。普通は看護師が歩く音だと感じるだろう。ここは病院の中。それが面会時間になってもいない朝ならそうだろう。だが、ベッドに座る茜は小さく首を横に振っていた。

看護師ではないと足音から判断したのだ。そして、歩く音が茜の病室の前で止まり、ドアが開いた。

「少し、遅くないかな？」

茜は読んでいた本を閉じてドアを開いた人物に話しかける。ドアを開いた人物は呆れたように溜め息をついた。

「私の来訪をわかっていたのか？」

「うん。お兄ちゃんから言われていたよ。今日又は明日に来るって。来たとしても反抗しないようにとも言われたかな。今の私だと勝負にならないって」

「そうだな。今の茜では勝負にならない。しかし、そこまで予想されていたとは」

「お兄ちゃんが全て予測しているよ。多分、当日の行動も全て」

その言葉に息を呑む気配があった。ただ、気配だけ。表面上に変わりはない。だからこそ、茜は笑みを浮かべる。

「今、お兄ちゃんに恐怖したよね？」

「どういうことだ？」

微かな怒気を含んだ声。それに対して茜は笑みを浮かべた。

「お兄ちゃんが恐ろしいと思った？　何の力も無く、ただ、役立たずだと思っていたお兄ちゃんが、自分達より優位に立っていることに恐怖したよね？」

その言葉には喜びという感情が乗っていた。

周の頑張っている姿を一番見ているのはおそらく茜だろう。核晶を失う前も、失ってからも、茜はずっと見ていたに違いない。

だから、周を見なかった親が周に恐怖を抱いたことが心底嬉しいのだった。

「お兄ちゃんの考えた予測は多分、的を得ているよ。それがお兄ちゃんだからね」

「例え予測を立てたとしても、イレギュラーの存在が」

「真柴隼人」

「カリフォルニア地下刑務所にいる犯罪者がどうかしたのか？」

その反応に茜は驚いた。そして、納得したように頷く。

「そっか。お兄ちゃんは本当にすごいね」

「茜、何が言いたい？」

「お兄ちゃんがすごいということ。で、私をどうするつもり？」

「茜には悪いが誘拐させてもらう」

茜はわかっていたかのように頷いた。そして、笑みを浮かべる。

「そっか」

そして、口を開く。茜は意図的に言わないが、口の動きだけはしていた。だから、相手には意味がわかる。

茜が言ったそれは周の予測でもあったから。

「周は、それを知っていたのか？」

「予測だよ。私の核晶に手が出せないなら、その逆を使えばいいと考えるよね。だから、お兄ちゃんは動いていた。アリエル・ロワソと話をして」

「腑抜けた目をしていたのは私達だったというのか。想像以上、そして、生きていた中で一番驚かされるな」

「私も、かな。お兄ちゃんは努力家だよ。見られたいから必死に頑張っていた。必死に頑張って頑張って、結局は見られることなく終わって、一度は諦めた。でも、由姫姉や音姉と出会った、また、努力を始めた。自分を見てもらうために。わかる？　お兄ちゃんはただ、見てもらいたいだけなんだよ。誰にも見られなかったから、寂しかったから、お兄ちゃんは気づいていないけど、それがお兄ちゃ

んの活動原理なんだよ」

見られたいから。見られなかったから見られたい。茜は周が頑張っている姿をそうだと感じた。必死に努力して必死に頑張って、天才と言われるくらいに頑張って、本当の天才と一緒でも必死に努力をして、いつの間にか目的は変わっていたが、最初からみた場合、見て欲しいから頑張ったということになる。

親にただ、見てもらいたいから。

「だから、お兄ちゃんは全力を出すよ。心の底から、あらゆる手段を用いて止めに行く。それがお兄ちゃんだから」

「面白いな。久しぶりだ。久しぶりに面白いと思える状況だ。周が全力で来るのか。だったら、全力を持って戦うしかないな。茜、準備はいいか？」

「うん。いいよ」

茜が持っている本を近くの机に置く。そして、にっこり笑みを浮かべた。

「お兄ちゃんが必ず助けてくれるから」

「はい。はい。はい。わかりました。ありがとうございます」

オレは小さく溜め息をついて通信を切った。

予想通りの展開ではあるが、予想以上にショックなんだよな。

「周様、どうかしましたか？」

断章を構えたまま尋ねてくる都にオレは首を横に振った。

「何でもないさ」

「何でもないわけがなかろう。親族が誘拐されたかのような顔をしておるぞ？」

「絶対に聞いていたよな」

アルは満面の笑みを持って頷いていた。聞き耳を立てていたのか、直接通信を傍受していたのかわからないが、聞かれていたなら大丈夫か。

「茜が誘拐された。犯人はおそらく親父達だ」

「なるほどの。ただ、そなた、誘拐されることはすでにわかっておったじゃろ」

「まあな。親父達は隼丸を手に入れた理由が茜に隼丸をプレゼントするって理由だったからな。最初からわかっていたけど、まさか、今日だとはな」

オレは小さく溜め息をついた。

まさか、明日じゃなくて今日に来るとは。考えなかったわけじゃないけど、確率的には明日の方が高いはずだ。だけど、今日に誘拐したということはそういうことなのだろう。

『今日だと都合が悪いのですか？』

スケッチブックが開き、エリシアが尋ねてくる。それに対してオレは首を横に振った。

「むしろ、今日の方が都合がいい」

「私もエリシアさんと同じように思いましたが、どうして今日の方が都合がいいのですか？」

「理由はいくつかあるんだが、まあ、終わった後でな」

この事は全てが終わった後でもいいはずだ。主に関係するのはオレなのだから。

オレは小さく息を吐いて魔術陣を解く。

「ここも外れだな」

「そうじゃな。それにしても、普通は親族が誘拐されたならもっと動揺するものだと思っておったがの」

「親父達だから安心出来るだけだ。それ以外なら今の仕事を放り出して向かうかもしれないし」

本当なら今すぐ茜のところには行きたいものの、出来る限り我慢し

ないといけない。オレにはオレの仕事があるからだし、茜も望んでいないはずだ。親父達なら茜を守るだろうし。

茜は作戦が成功すればオレが協力するためかなりのメリットと成り得る。だから、危害を加えるわけがない。

「それが普通ですよ。周様はお父様達を信頼しているのですね」

「信じたいってのが正しいな。あの大惨事を起こしたのが親父達だとしても、親父達の目的は最終的にはオレ達と同じだ。やり方は違うけど、オレは親父達を信じたいさ」

親父達も新たな未来を求めている。だからこそ、必死のはずだ。オレの考えが正しいなら親父達は真っ先にそのことから正当性を持って行くだろう。

だから、真っ向からぶつかり合う。

今から考えるだけでワクワクしてくるな。

「周、そなたの顔が悪者の顔になっておるぞ」

「楽しみなんだよ。ようやく親父達がオレを見てくれる。それが敵だとしても、オレは親父達に構って欲しいから強くなったんだ。子供の時の夢を全力を持って叶えれる」

「悪者の顔ですが、周様はそれくらいの顔がちょうどかっこいいですよ」

『私もそう思う。何というか、野性的?』

見てろよ親父。オレは、オレ達は、成長した姿を親父達に見せてあんたらの目論見を止めてみせる。

誰かに言われたからするんじゃない。自分達で決めたから、オレが夢見る世界を見るために戦う。

「さて、次のポイントに向かうぞ」

「はい」

「そうじゃな」

オレ達は歩き出す。次の目的地に向かって。

幕間　『ＥＳ』の動き

それは一週間ほど前の話。『ＥＳ』本部にあるとある一室において一人の白衣を着た男性が優雅に水を飲んでいた。そう、優雅に、水を、湯飲みで。

「そうか。もうそんな時期か。最近は研究室にこもっていたから俗世には疎くてね」

『そう言いながらしっかり情報を持っているあたりが憎らしいけどな』

据え置き型の通信機から周の声が聞こえる。男性は優雅に水を飲む。

『で、アリエル・ロワソ。お前は来るのか？　二日目に』

「そうする予定でいるよ。こちらも、君の父親には恨みが積もっているからね。本当なら私がこの手で決着をつけたいところだけど、それは君が許さないだろ？」

『当り前だ。親父と決着はオレがつける。邪魔をするならお前を捕まえるからな』

「わかっているさ。今回の事件で君の父親を捕まえる最適の人間は君しかいない。君以外にはいないとも言うべきかな。君は、過去に終止符を打つつもりなんだろ？」

その言葉に向こうで頷く気配がアリエル・ロワソにはわかる。だから、アリエル・ロワソもゆっくり頷いた。

そして、優雅に水を注ぐ。

『二日目に来るなら、せめて戦力ぐらいは持ってこいよな。お前の実力は疑うことなく強いが、お前の戦い方は特徴すぎて、学園都市の『ＧＦ』にも知っている人が多い。もし、お前が単独で来たなら学園都市の『ＧＦ』が見つける可能性が高くなる』

「そして、鬼ごっこのために人員が割かれて作戦が成功しなくなる。それくらい理解しているよ。君ほどではないにしても、今回の事件は相手がどう狙ってくるかわかりやすいからね。懸念があるとするなら、相手方の内部組織の状態というべきか。もし、内部が分裂状態にでもあるとするなら」

『昔の『ＥＳ』並みにややこしいことになるから止めてくれ。そこのところは祈るしかないな。オレも、言うほど作戦を立てているわけじゃないし』

「君の作戦を聞かせて欲しいところだね」

アリエル・ロワソは答えが来ないだろうと思いながら尋ねる。通信を傍受されたら筒抜けだからだ。今の時点でならいくらでも作戦の変更は聞く。だから、答えがないと思っていた。

しかし、返ってくる言葉は違う。

『いいぞ』

その言葉にアリエル・ロワソは手に持っている湯飲みをその場に落としかけた。それほどまでに周の言葉は不用心だからだ。

『おいおい。オレが通信している相手は天下のアリエル・ロワソだぜ。傍受されないように通信機自体も改造しているんだろ』

「そうか。君にはレヴァンティンというチート武器があったね」

『チート言うな。まあ、大まかに説明するだけだ。親父達はオレ達が一ヶ所に集まったところを叩くはずだ。狙いは前に言ったように。親父がそこに現れる可能性は高くはないが、確実に事情を伝える演説をどこかでやるはずだ。多分、学園都市関係者と観光客やらをシェルターに逃がす時間を作るために』

「それを聞くと、悪者には聞こえないね。悪者は一般人を虐殺するものだけど」

『そのイメージ、『ＥＳ』の過激派が発祥だからな』

周が呆れたように言う。確かにその通りだった。

悪者が民間人を大虐殺するのは『ＥＳ』の過激派中の過激派の行いだ。ただ、それは悠人によって全滅したが、そのイメージは『ＥＳ』が作り出している。

アリエル・ロワソはわかっているとでも言うかのようにクックックッと笑う。

「しかし、正義の味方と正義の味方とのぶつかり合いというのは本当に面白いね。全ての決着は話し合いではなく力で決まる」

『力が無ければ話なんて聞いてもらえないからな。話を聞いてもら

えるのは有利とも言える立場か、対等の力がある時。今、親父達は対等だとオレは感じているからな』

「ほう。世界最強の魔術師を相手にそんな口を」

『お前なら、知っているだろ。オレの能力を』

その言葉にアリエル・ロワソの動きがほんの少しだけ止まった。

『お前が生まれたばかりのオレを誘拐したのは生体兵器にする目的が本当の目的じゃない。本当の目的はオレの体から核晶を抜きとること。違うか？』

「君は生まれながらにして核晶欠損症ではないのかい？」

『なら、尋ねるが。親父達は核晶欠損症の妹に対して隼丸を渡すと言っていた。この意味がわかるな？』

「プレゼントということかな？」

その言葉づかいはまるで、わかっているけどはぐらかしているような声だった。

それに周はもちろん気づいている。だからこそ、言葉を続ける。

『疑似核晶の存在があっても、その稼働時間は少ないし、戦闘に出れば出るほど時間は少ない。だったら、考えられるのは核晶を手に入れたということだろ？　核晶は個人によって大きく違うし、他人が使えば大きく性能は落ちる。でも、さほど性能が落ちていないと思えるオレがいるなら？』

「その本人の核晶を手に入れて使えば、強力な力を発揮するかもしれない。そもそも、核晶というものは未だに解明できていない部分が多いものだよ。人体実験するしかないからね。そんな非人道的なことは誰も許さない。だけど、極稀に核晶自体が適合する時がある。血縁関係の時は確率は大きくなるね」

『それを親父達は勘違いした。で、オレの核晶を調べたお前に尋ねたいんだが』

アリエル・ロワソは笑みを浮かべた。それは、周の次の質問を理解しているからだ。だから、先に言う。

「君の考えているような能力だよ。それは私が保証しよう」

『そうか。助かる。だったら、その日に面白いものが見られるかもしれないぜ。じゃな』

通信が切れる。その音を確認してアリエル・ロワソは小さく息を吐いた。

「海道周。君は、この運命の中でどこまで抗うのかな？　私はその未来を本当にみたいよ。君が、君の望む世界。それを見せてくれるというなら、私は、いや、私達は、君に、君達『空の民』について行くと言うのに」

すると、ドアがノックされる音が鳴り響いた。アリエル・ロワソはほんの一瞬でその場に会った全てを片付ける。そして、椅子に座った時には優雅にカップを持ち、湯気が立ち上る紅茶を静かに口に含むアリエル・ロワソの姿があった。

また、ドアがノックされる。

「どうぞ」

その言葉にドアが開く。

「失礼します」

その言葉と共に入ってきたのはショートカットの活発そうな少女だった。年齢は周と同じくらいか。ただ、その背中にあるのは槍とライフル。腰には刀とナイフがある。

アリエル・ロワソは小さく頷いてカップを机の上に置いた。

「ルネ君か。私に何か用かな？」

「えっと、アリエル・ロワソ様が学園都市に行くという話を聞いて、私もつれて行ってもらえないかなと直談判に来ました。アリエル・ロワソ様から貸し与えられた部隊を置いて行くのは忍びないのですが、それ以上に冬華や楓と会いたくて」

「ふむ。私もちょうど実力のある面々をさがしていたところだったよ。ちょうどいい。君を学園都市に向かう際のメンバーとしよう。もちろん、メンバーと言っても当日は自由行動だ」

「あ、ありがとうございます」

ルネは勢いよく頭を下げた。ほとんど９０。近くまで下げているからか後ろの腰にある武器が見える。そこにあるのは槍の穂先だけの

武器。一応、換え刃らしいが、そんな雰囲気は見えない。

そして、ルネはそのままドアから出て行った。

アリエル・ロワソが腕を振るだけで開いていたドアが閉じる。

「若者たちが頑張るんだ。私の様な大人達は傍観者に徹するとしますか。でも、もし、君の父親以外が学園都市を狙うと言うなら、私も動きだすよ。大事なパーティを邪魔にさせたくはないからね」

そして、アリエル・ロワソはいつの間にか持ち替えた湯飲みの中に入っている水を優雅なしぐさで口に含んだ。

第百五十九話　隠されているもの

閉じていた目を開く。どうやら少し寝ていたらしい。ちょっと前の、一週間ほど前の出来事を思い出していた。

前にはマンホールを挟むようにしゃがんでいる都とアルの二人。どう考えても不審者だよな。

「何かわかったか？」

「周様、おはようございます」

「時間的には夕方じゃがな」

どうやら二人はオレが疲れているから起こさないでいてくれたらしい。ほんの少しだけ感謝だ。

ウトウトしてしまうなんて、オレもまだまだだよな。

「悪いな。二人にだけ任せて」

「こんな時くらいは頼ってください。私からは何とも。下水道であるとは確認出来ますが」

「それがさらに地下に続いている可能性は低いの。我が全力を出せばいいが」

「不自然だ。アルの全力は少し危険だというのはちゃんと自覚しようぜ」

アルが本気を出したなら確かに見つかるだろう。でも、魔力反応的に桁違いのことになるから、最悪、『ＧＦ』の面々が飛んでくる。可能性は８０％くらいか。そんな確率勝負はやっていられない。

「まあ、見つからなくても大丈夫だ。オレの中だと今日探した場所は基本的にそこだったら困る位置だったからな」

「困る位置ですか？」

「ああ。基本的にシェルターに近い位置。他にも候補はあるけど、シェルターに近くて見通しのいい場所。守るという観点から言わせればかなり都合のいい場所」

「ふむ。シェルターへの避難を妨害するためそちらに人員を割かずにはいられまい。攻撃するメンバーが少なくなればそれだけで制圧は遅くなるからの」

「最悪の想定を考えていたら、必ずそれらは探しておかないとダメだからな。最悪、シェルターの場所の誘導指示の変更を考えていたけど」

難しく考える必要はなかったかもしれないが、とりあえずはこれでいいだろう。

後は、当日にどれだけ早く向かうかどうか。

「相手は使われていない下水道の位置を割り出していますよね？どうしてそれがわかるのでしょうか。普通はわからないような気が

するのですが」

「向こうに設計当初に関わっていた人がいるんだろ。それ以外に考えられないから」

だから、下水道の位置がわかっているのだろう。隠し通路という存在がわかれば本当にありがたいのに。

せめて、日本政府にデータがあればな。

「下水道を整備した会社はどうじゃ？　複数関わっている可能性はあるじゃろ？」

「データが全損していた。バックアップも全滅。こちらはちゃんと応じてくれたけど、ほんの少し前に新しい集積デバイスに移すバックアップを失敗したらしい。連鎖的に元のデータも」

どんな失敗したかわからないけど、普通はバックアップから連鎖的には消えないだろう。

レヴァンティンを使っているから考え方が違うのかもしれないけど。

「どんな不運が起きているのかの。だから、日本政府からの」

「そういうこと。本当なら下水道管理会社に問い合わせたかったけどな。案外、協力的だったし」

「協力的？　どういうことじゃ？　厄介事は関わりたくないとは思うはずじゃが」

「これは聞いた話なんだけど、学園都市開発当初に、下水道の配管を行った会社は一社だけだったのに、実際に工事した会社は他に二つあったんだ」

その話を聞いてかなり驚いた。その会社も莫大なお金を貰い、学園都市全体に下水道を巡らせると思っていたらしく、いざ、施工してみれば他に二社がやっていたそうだ。

おかげでたくさんのお金を貰いながらほんの少し、学園都市の端にでしか工事しなかったらしい。

その会社は聞いたことのない会社だったようだが。

「つまり、政府が意図的に隠そうとしているのじゃな」

「多分。政府なら知っていて隠していてもおかしくはない。もしかしたら、『ＧＦ』が隠していたことにするかもしれないしな」

「そんなことはさすがにしないと思いますけどね。『ＧＦ』が日本から撤退したらどうなるかわかりませんし」

「警察が名目上の組織となっておるからの」

名目上の組織ではあるけど一応は活躍していることを考えような。

「まあ、全部が推測だ。日本政府がどう思っているかなんてわからないし、オレ達に出来ることなんて、場所を推測しておくしか方法がないからな」

「もう少し早く調べることが出来ればの」

「仕方ないだろ。学園都市『ＧＦ』トップの第７６移動隊とは言え、日本政府と対話するような能力がないからな。時雨に任すしかなかったし」

「レヴァンティンならば調べることが出来るじゃろうに」

「確率勝負になってくるな。見つかったらオレ達はアウト。かと言って、見つからないように動けば見つかるものも見つからない。かなりややこしいからな」

レヴァンティンなら逃げ切れる可能性は高いが、最後の最後までその切り札は取っておきたい。それに、レヴァンティンの正体は親父達にもバレているだろうから警戒されているだろう。

だからこそ、オレは今日、マンホールがある地点を中心に調べたのだ。何か尋ねられても答えられるように。

「そうですね。レヴァンティンが没収された周様なんてただの器用貧乏な人になりますよね」

「否定出来ないのがかなり痛いけどな。まあ、こいつはオレ達にとっても切り札だからな」

『ふっふっふっ。敬ってくれてもいいのですよ』

レヴァンティンが偉そうに笑みを浮かべる。実際には笑みを浮かべていないけど、レヴァンティンが人だったなら笑っているだろうな。

『レヴァンティン、それを言ったら全てがお終いじゃないかな？』

『どうせマスターは敬うことがありませんから』

すごいとは思うけど敬うことは確かにないな。だって、無駄だし。

『そうなの？』

スケッチブックで尋ねてくるエリシア。オレは軽く肩をすくめた。

「レヴァンティンの性格を考えてくれ」

『なるほど』

「納得じゃな」

「そうですね」

『私の味方なんてこの世にはいないのですよ。はぁ』

オレは思わず苦笑してしまう。レヴァンティンは本当に相性のいいパートナーだ。

「ともかく、レヴァンティンはオレには必要なんだよ。オレの今があるのはレヴァンティンのおかげなんだから」

『マスター。私も、今の私がいるのはマスターのおかげですよ。それに、マスターは本当にサポートしがいがありますし』

「そうなのか？」

オレがレヴァンティンを扱いやすいと思っていた。慧海なんて、「軽い」と言って拒否して、時雨は、「もろい」と言って放り投げ、孝治は、「短い」と言っていたけどな。

『はい。マスターは本当にバランスが高いから手助けのしがいがあるんですよ。前のマスターは支援特化だったので』

「なるほどな。器用貧乏がここまで役に立つとは」

オレはそう言いながら笑みを浮かべた。レヴァンティンとの相性がいいのはありがたい。レヴァンティンはオレのパートナーなんだから。

オレはゆっくりと目を瞑る。少しだけ嬉しいから目を瞑ったのだが、目を瞑ってようやくわかる。

オレはすぐさま目を開けた。

「何か感じる」

「何かですか？」

「何も感じぬぞ」

都とアルはわからないようだ。だけど、気づいてみればわかる。

今まで気づいていない方がおかしいくらいの感じ。

でも、これは、何だ？

『感覚が止まりましたね』

レヴァンティンの言葉にオレは頷いた。

さっき感じたはずの何かはすでにない。だけど、もし、この感覚が正しいなら、

「見当違いだったのか？」

『それこそまさに、確率勝負というものではないかと。ですが、マスターの感覚は間違ってはいません』

オレの相棒と同意見。どうやら、信じるしかないようだ。

『何かありました？』

不思議そうに首を傾げている二人の前に、不思議そうに角を傾げながらスケッチブックが開かれる。

「何かの魔力の流れを感じたんだ。僅かだけど、方角は商業エリア方面」

「魔力の流れですか？　誰かが魔術でも使ったのでしょうか？」

「いや、違う。これは」

感じたことがないはずなのに懐かしく感じれこの感覚は、一体何だ？

それなのに、その何かを答えることは出来る。

「悠遠の翼」

そう感じた。理由はわからないけどそう感じたのだ。

オレは魔力の流れを感じた方角を向く。

「一体、何があるんだ？」

その疑問に答える人は誰もいなかった。

第百六十話　予選最終夜（前書き）

書いていたらいつの間にかかなり重要な話になりました。周が器用貧乏にしては平均的じゃないような理由（特に学問で）でもあります。強要されたなら子供は嫌がりますが、強要されていることがわからないならどうなるか、ということです。

第百六十話　予選最終夜

最後に感じたあの感覚。あれがわからない。確かに魔力の流れを感じたけど、それはオレだけだった。狭間の力を操る都や世界最強の魔術師であるアルですら気づかなかったくらい微量な流れ。

なのに、オレにはその流れをはっきり感じた。今は全く感じないが。

「一体何なんだ？　何が、どうして」

わからない。あの魔力の流れを感じて悠遠の翼だと感じた考えがわからない。わからないのにオレの中には確信がある。

こういう状況はかなり厄介だ。せめて、途中の過程だけでもわかるような状況であったなら。

「はぁ。多分、地下にある悠遠の翼だと思うけど、何か違うんだよな」

あの魔力の流れは地下にあるようなものじゃない。まるで、地上に現れたかのような流れ。悠遠の翼自体がありえないくらいに魔力を作り出すものだから、わからないわけじゃないけど、それを考慮しても、わからない。

あそこまでわかるのにアルがわからなかったのが問題か。

「一体、何だって言うんだ」

予選最終夜なのに疑問が積み重なっただけだ。この状況はかなりマ

ズい。

流れを感じたのは商業エリア方面だ。商業エリア方面と言ってももしかしたら商業エリアを越えるかもしれない。

でも、かなり絞り込めた。

おそらく、学園都市のさらに地下に向かえる場所はおそらくだがあそこだろう。

「深刻そうな顔をしておるの」

そんな声が聞こえて顔を上げるとそこにはちょうどコーヒーが入ったカップをオレの前に置くアルの姿があった。

周囲を見渡しても都の姿は見当たらない。

「都は？」

「船を漕いでおったから先に帰したぞ。少々強引にな。我やそなたなら慣れてはいるが、都に徹夜はかなり辛いと思っての」

「アルもしっかり休めよ。明日からはさらに忙しく」

「それは我のセリフじゃ」

オレの言葉を遮るようにアルが身を乗り出して言ってくる。

オレは思わず苦笑してしまった。

そう言えば、今日の回っている最中にオレは寝ていたな。

「そなたは働きすぎじゃ。少しは休むがよい」

「休んでいるより考え事が多いからな。心配で眠れないというか、考えていることが普通だから、考えてしまう」

「変な魔力の流れかの？」

オレは頷いた。

もしかしたら、親父達は予定を早めて確保に乗り出したかもしれない。オレが目当てをつけた場所ならそれも可能だ。

だけど、もしそうだとしたなら脱出はどうする？　どこかに抜け道があるというのか？

「それが考え過ぎなのじゃ。少しは落ち着くがよい」

「考え過ぎだったらいいんだけどな。もし、事実だとしたなら」

「落ち着くがよい」

いつの間にか、本当にいつの間にか、オレの頭はアルによって抱きしめられていた。

柔らかい感覚を感じる。アルって、こんなにも柔らかかったんだ。

「すまぬ」

「どうして謝るんだ？　悪いのは」

「すまぬ。そなたの苦労をわかっておらんかった。そなたがどこまで精神的に疲弊しているか気づけなかった」

「オレは疲れていないぞ」

うん。自分でもわかる。いつもの調子だ。

「なら、そなたは何故、回っている最中に寝たのじゃ？」

答えられない。答えないとアルが心配するとわかっているのに答えが見つからない。何と答えればいいかわからないのだ。

自分は大丈夫。自分は大丈夫。自分は、大丈夫。

「体力的に疲れていただけだ。心配しなくても」

「本当の事を話せ。今はエリシアが眠っておるから私しか聞いておらん。じゃから、本当のことを」

「だから、大丈夫」

「周！」

アルの強い声。そして、強い意志を持った瞳。完全に完敗だった。

多分、オレがいくらはぐらかしてもアルはずっと尋ねてくるだろう。

それは、オレを心配してくれているから。

「怖いんだ。全ての対策を立てても、予想外という言葉がある。もし、予想外の事態が起きて、誰かが傷ついたならと思うと怖いんだ。考えることを止められない。予想外を無くすために。体力は回復しても精神的に疲れていくのはわかる。でも、オレは立ち止まったらいけないんだ。オレは海道周だ。第７６移動隊の隊長だ。学園都市を守るリーダーだ。失敗なんて出来ない。失敗するわけにはいかない。失敗したら、駄目なんだ。こんなの初めてなんだ」

オレは自分の手をアルに見せるように出した。オレの手は震えている。武者震いならどれだけ良かったか。

止めようと思っても手は止まらない。止まらないんだ。

「怖いんだ。心の底から、誰かが傷つくことが、心底怖いんだ。今までたくさんの指揮を行ってきた中で、一番怖いんだ。なあ、オレの作戦は大丈夫か？　成功するのか？　誰も傷つかないのか？」

アルは答えない。いや、答えられるわけがない。正確な未来なんてわからないから。正ですら最終日は無かったと言っている。

オレはちゃんと約束を守れるのか？　みんなを守れるのか？　オレは、戦えるのか？

「考えれば考えるほど恐怖が襲ってくる。誰にも見せないように、誰にも気づかれないようにしてきた。でも、誰か、助けてよ」

それは心の叫び。オレが弱くなった証。本当ならアルの前でこんな姿は見せたくないが、我慢出来ない。

もう、止められない。

「どうしてオレなんだよ。どうして、どうしてオレがこんなにも背負わないとダメなんだよ。普通の人生を、歩めないんだよ」

今まで積もりに積もった何かが崩壊していく。隠していた何か、誰にも見せないようにしていた何かの壁が崩れ落ちていく。

いや、破壊されていくという表現が正しいかもしれない。

「どうして、オレは、こんなところにいるんだよ」

自分がわからない。よくわからない。今のオレは何だ？　今までのオレは何なんだ？

オレは、オレは、僕は、一体、何なんだ？

「すまぬ」

誰かの声が聞こえる。これは、アル？

「今までずっと苦しめて。我の決断が、ここまでそなたを苦しめることになるとは思わなかった」

「ア、ル？」

優しくしないで。これ以上、優しくしないで。優しくされたなら、大事な何かを、使命のような何かを忘れてしまう。

「大丈夫じゃ。そなたは我が守る。じゃから、ゆっくり休むがよい。次に目を明ければ、そなたはもう大丈夫じゃ」

「本当？」

それはまるで子供のようだった。もう、こらえられない。今まで引っ張られていた何かが千切れる。

「僕は、休んでいいの？」

眠気が襲ってくる。アルの表情を見ながら眠気が襲ってくる。心地いいまでの眠気が。

「いいぞ。我を誰だと思っておる。我はアル・アジフ。全ての魔術の母じゃ」

「アルは、お母さんじゃないよ」

眠気が我慢出来ない。でも、これだけは伝えないと。

「アルは、僕の、大切な」

もう、意識が、闇に落ちる。

暗闇。

取り囲む全てを表現するならそれが正しいだろう。僕は、いや、オレはそれを感じながらゆっくり目を開けた。

目を瞑っていてもわかった光景に一つだけ異なるものが現れる。それを表すなら一言で十分だ。

金色の鬼。

「懐かしいな。狭間市を離れていないか？」

『今の我は常に貴様と共にある』

「なるほどね。でも、オレからすれば懐かしいな。お前の力は使っても、存在は感じないからな」

オレはそう言いながら腕を振った。それと同時にちょうどサイズの椅子が現れる。

金色の鬼、狭間の鬼の反応は無反応だった。

「少しくらい驚いてくれてもいいだろ？」

『我は常に貴様と共にある、言ったはずだが？』

「なるほどね。最初からわかっていたのか。オレの状態を」

『貴様はいつ？』

いつ、これに気づいたか尋ねられたなら答えることは難しいだろう。でも、答えるならアルのことだろう。

アルはオレに対して何かの解除魔術を使った。でも、今のオレは混乱することなく気づいている。つまり、心のどこかでは理解してい

たのか。

「わからないな。だけど、何でだろう。今はすっきりした気分でいられている」

『確かに。今の貴様は憑き物が晴れたような感じ、いや、実際に憑き物が晴れたのか』

狭間の鬼が笑みを浮かべた。それはまるで安心したかのように。

オレも笑みを浮かべる。

「ここは、オレの一種の幻想空間なんだろ？　それくらいわかるさ。まさか、そうだとはな」

今までのオレだけなら理解しなかっただろう。でも、僕がいたオレなら理解出来る。今までの、強迫観念に捕らえられていたオレだけの姿を。

「これから、オレはオレであるために僕と共に歩む。誰かに操られたオレじゃなく、オレ自身のために」

本当なら戦うのは嫌だった。訓練じゃなくゲームをしたかった。仲間ではなく友達が欲しかった。学業以外の知識が欲しかった。

それがオレの本音だった。でも、オレの本音は誰かによって隠されていた。そして、強くなるように誘導されていた。

それが、天才じゃないオレがここにいる理由。器用貧乏のオレがここにいる理由。

オレは天才なんかじゃない。天才なんかじゃない。努力の天才でもない。ただ、オレは、

「海道周であることを証明するだけだ」

誰かに操られていたなんて関係ない。オレはただ、オレがオレと僕でいるために戦う。

『世界の意志を跳ね返すか。さすがは海道周だ』

「世界？」

『貴様は世界を救う器だと聞いたなら、どう反応する？』

そんなもの、決まっている。

「最高じゃないか」

目を開ける。視界に飛び込んできたのはアルの顔だった。後頭部が柔らかい何かの上に乗っているということは、これは膝枕か。

案外、むず痒いものだな。

「アル」

だから、オレはアルに話しかけた。アルはゆっくり目を開ける。

「周。そなたはもう」

「オレは戦うよ」

アルの言葉を先読みして言う。アルは一瞬だけ目を見開いて、そして、アル・アジフを取り出した。

「まだ、誰かに操られておるのか！？」

「やっぱりアルには見えていたんだな」

オレはゆっくり起き上がる。催眠系統は対象自身に自覚は無いと言われているけど、事実だったみたいだな。

オレは真っ直ぐアルの目を見つめる。

「そなた、まさか」

「わかったよ。オレがどうして戦っているのか。いや、どうしてここまで来れたのか。その理由を」

「そうか。そなたにはいつも糸のような何かが見えておった。もちろん、それが糸かわからぬ。それに操られるようにそなたは動いていた。我は、そなたを救いたいと思ったのじゃ。そなたは無理やり戦わされていると感じて」

「ありがとう」

だから、オレはアルを抱き締めた。多分、見守るつもりだったのだろう。誰かに操られていたとしても、オレは生き生きしていたはずだから。だから、アルはオレが限界になるまで待った。

その限界が来たのは今日。予選最終夜。

「見守ってくれてありがとう」

「じゃが、もっと早くに解いていれば、そなたがここまで苦しまずに」

「そうだったら、逃げていたと思う。今の重圧がどれだけかわかっているから。こんな役目は逃げ出したい。心の底からそう思う。だけど、見てくれている人達がいる。だから、オレは戦う」

「そなたが戦わなくても我が戦う！　我はそなたが戦って欲しくない！　我は、我は、そなたが生きていて欲しいのじゃ。いつか、そなたは倒れる。疲れ果てて動けなくなる。それを考えると恐ろしい。我が全てを背負えばいいのじゃ」

アルも必死なのだろう。だからこそわかる。だからこそ、笑みが浮かぶ。

「なら、一緒に背負っていこう。オレはオレが僕でありオレであるために、みんなと共に戦う。一人だと限界があるからな。だから、力を貸して欲しい。アルの、みんなの力を。共に、頑張ろう」

「そなたは口だけじゃ。口だけは達者じゃ。幾らみんなと一緒と言っても一人で動く。一人で悩む。一人で苦しむ。次にそれをしたなら我はそなたを呪うからな！」

その言葉にオレは笑みを浮かべた。そして、そのままアルを床に押し倒す。

「だから、お前と共にいる証を、刻んでいいか？」

「そなた、積極的じゃな」

「これでも青春の高校生だぜ。だから」

オレはゆっくり、アルにキスをした。

「初めてを、ください」

多分、顔は真っ赤だろう。真っ赤でも、ちゃんと言い切った。対するアルも真っ赤だ。

「はい」

その答えに、オレはアルを抱き締めた。

第百六十話　予選最終夜（後書き）

周が戦っていた本来の理由を書きました。器用貧乏なはずの周がここまでのレベル、ある意味器用貧乏じゃないレベルまでいるのはこれが原因です。どうしてそうなったかは第四章で語れるかなと。ちなみに、器用貧乏であるのは元からなので、操られたわけではありません。

周の考えが飛び抜けているという理由にもなるんじゃないかなと。

孝治はただの天才ですよ。

ここで出て来る“僕”という第一人称は周が操られていないと仮定した場合の自分の呼び方です。そう考えていただければ内容はスッと入っていくんじゃないかなと。

途中で出てきた幻想空間に関してはある意味周の切り札となるものです。ヒントは、かなり前の話で書いた『魔術はトラウマによって強くなる』的なこと。多分、書きましたよね？

次から体育祭本戦です。何話続くかわからないと言っていながら本当に何話続くかわからない状況に。第二章で書きたい話は詰め込んだ予定なので、これから覚醒した周達の本番をお楽しみください。

第百六十一話　本番初日の朝

朝日が目に染みる。オレの部屋はここまで朝日が入ることは無かったはずなんだけどな。

ゆっくり目を開けた先にあったのは見慣れない天井。ここは、駐在所か？

ゆっくり体を起こす。今までの体が重かったように思えるほど軽い。

「何かが、外れたからか？」

オレは周囲を見渡す。周囲を見渡してもアルの姿が見当たらないということは、先に起きているのか。

「といか、ここまで来ると清々しいよな。オレは一体、何に縛られていたんだ？」

狭間の鬼は世界の意志とか言っていたっけ。アルは鎖か紐か忘れたけどそのようなもの。何なんだろうな。

「世界の意志か。この世界に一体、何が隠されているんだか」

今は情報が少なすぎるけど、本当に踊らされていたなら真実を見極めたいという気持ちがある。

何がオレを動かしていたのか。

「周、起きたのか？」

ドアが開き、そこから顔を出したのは孝治だった。オレは頭をポリポリと掻きながら立ち上がる。

「アルは？」

「一度家に戻っている。日常品を常に持ち歩くお前とは違うらしい」

「オレも好きで持ち歩いているわけじゃないからな。でも、何かあった時のために必要だろ」

何かあった時にしか使用しないけど。

それはオレの性分かわからないけど、一応は用意してしまう。

「本当なら持ち歩きたくないけど」

「ほう」

孝治の目が微かに細まり、オレはファンタズマゴリアを展開して孝治が振り切った運命を受け止めていた。

孝治の癖を知っていなかったら確実に首を落とされいたかも。でも、直感が無いということは寸止めにするつもりだったのか？

「偽物というわけではないか」

「かなり危ないからな。ファンタズマゴリアの展開をミスったら首飛んでたぞ」

「安心しろ。峰打ちだ」

運命の刃は両刃ですが。

「気持ちはわかるが、少しは落ち着け。急かしていてもいいことはないぞ」

オレがそう小さく溜め息をつくと、未だに展開しているファンタズマゴリアに運命が叩きつけられた。今度は刃ではなく腹で殴ってきている。

ファンタズマゴリアの弱点を的確についてきたなこの野郎。

「周、変わったな」

「変わった？　まあ、そうかもしれないな」

確かに変わったのだろう。オレは新しい道を見つけたのだから。自分が本当にやりたいこととというべきか。

今までのオレはひたすら急かして生きていたからな。

「今までのお前はひたすらに前に進もうとしていた。俺や音姫さんに追いつけないとわかっていても、追いつこうと食らいついてきていた。いや、何かに押されていたというべきか」

「お前も気づいていたのかよ」

「いつからの付き合いだと思っている？　お前が普通とは違うことは見ていた。努力というより強制に近かったからな。だが、もう安

心だ」

孝治が笑みを浮かべる。その笑みは柔らかい、親友を心配してくれていた笑み。

「ようやく、本当のお前と一緒に戦うことが出来るな」

「言ってろ。自分の力はまだ把握しきれていないんだよ。だから、どこまでいけるかなんて」

「何年の付き合いだと思っている？」

その言葉はオレが気づいていないことを気づいていると言うかのような言葉。オレはそれに対して苦笑で返した。

「そうだな」

全く持ってその通りだ。こいつならオレの力もオレが理解していない範囲で気づいているだろう。

これからは考えていかないとな。オレの戦い方は特に。

「だが、気になることは前からあった」

「気になること？」

「ファンタズマゴリアがお前しか使えないことだ」

確かにファンタズマゴリアはオレしか使えない。由姫も近い技は使えるがファンタズマゴリアのような強力なものじゃない。

構成は簡単なのに、ファンタズマゴリアだけは慧海でも使用出来ないのだ。それなのに、データとして打ち出せば使うことが出来る。

「もしかしたら、今までのお前が関係しているかもな」

「まぁ、本人のトラウマによって大きく威力が変わるから、それもあるかもしれないな」

関係があるとするなら、あの幻想空間だろう。だけど、あれはトラウマではないような気もする。

ファンタズマゴリア自体が規格外の性能だからでもあるけど。ある方法を除いてよほどの攻撃を受けないと砕けないし。

「だが、お前はファンタズマゴリアが無くても十分に戦えるだろ？」

「まあな。ファンタズマゴリア自体、使えば一定時間、使用不可能になるからな。まあ、壁のように展開したままというのもありだけど」

「俺とお前の組み合わせは最強だ。そうだ。一つ尋ねていいか？」

「いいぞ」

オレは小さく息を吐いて両腕を伸ば、

「時間は大丈夫か？」

そして、固まった。

現在の時刻は午前七時半。ギルバートさんやエクシダ・フバルが来るのは八時。ここから目的の場所に向かうまで必要時間は約二十五分。

額に汗が流れる。

間に合うというレベルじゃない。準備する時間が全く足りない。

「音姉達は？」

「着いている頃だろうな」

「レヴァンティン」

オレが近くにあったレヴァンティンを掴み取ると一瞬で服装を着替える。時間がないから仕方ない。

服装は『ＧＦ』の儀礼服。堅苦しくて着たくはないが、向こうは『ＧＦ』の大幹部。仕方ないという気持ちが強い。

「ナビを頼む」

『夜の感想を一言、あべし』

レヴァンティンを蹴り飛ばしながら加速し、駐在所を出たところで蹴り飛ばしたレヴァンティンを捕まえる。

「次に変なことを言ったら投げ飛ばす」

『別にいいじゃないですか。減るものではありませんし。激しくてアル・アジフとエリシア合わせてよ』

「星になれ！！」

全力全開の投擲でレヴァンティンを空高くまで投げ飛ばす。こいつの存在は完全に忘れていたから知られている。記憶を消すには殴るのが一番だろうか。

オレは近くの屋根に飛び移り、塀や屋根を伝って最短距離で向かう。途中でレヴァンティンを拾うことを忘れない。

『英雄、色を好むとでもいいますし、恥ずかしいことではありませんよ、絶倫さん』

「今、お前をパートナーにしていることをすごく後悔しているんだが」

『ジョークですよ、イット、イズント、ア、ジョーク』

「お前って流暢に英語を話せたはずだよな？　どうして片言になってんだ？　それと、ジョークじゃないって意味だよな？」

『マスターのツッコミ力がレベルアップしていますね。本当なら、最後のツッコミだけのはずなのに。これぞ真のマスター』

「なあ、今からお前を破壊していいか？」

今なら握力だけでこいつを握り潰せるような気もする。

『マスターの雰囲気が変わったのは私もわかりますよ。私としては、昔の二の舞にならないか心配だったので』

「昔？」

『はい。昔の話です。でも、今のマスターなら大丈夫だと断言します。だって、マスターですから』

「そっか」

レヴァンティンばかりに頼っているのも悪いからな。オレも、もっと強くならないと。ただの器用貧乏じゃなく、本当の意味での器用貧乏（オールラウンダー）に。

まあ、オレから言わせてみれば、最強の器用貧乏（オールラウンダー）時代が懐かしいけどな。

「『赤のクリスマス』に狭間戦役とこれ。なかなか激しい日常だよな」

『今更ですか？』

「まあな。滅びを救ったら、誰かを育て上げるのも悪くないな」

『まさかのロリコン宣言。さすがマス、壊れます壊れます。さすがにそれは壊れます』

オレは握りしめていた拳を開けてレヴァンティンを放した。そして、レヴァンティンはポケットに入る。

「オレが戦うんじゃなくてさ、みんなが戦えるようにしたいなって」

『今までのマスターなら、「誰かが傷つくくらいならオレが戦う」でしたしね』

機械だからか声真似上手すぎだろ。一瞬、自分の声かと思ったし。

『変わりましたね』

「元に戻っただけさ」

多分、オレは戦うことよりも指導役や支援役の方が好きなのかもしれない。いつか、本当にいつになるかわからないけど、いつか、世界を救えたならオレはそうしたいと思える。

新たな未来が来たなら、ちょっとくらい、そうしてもいいだろう。

『マスター、時間は大丈夫ですか？』

「大丈夫だろ？」

『駐在所の時計、五分遅れていましたよね？』

オレは全力で屋根を蹴った。

第百六十一話　本番初日の朝（後書き）

本格的な本番初日は次の次くらいです

第百六十二話　エクシダ・フバル

ＧＦＦ－１３『ギガント』。

今までのＧＦＦとは違って完全な攻撃を主としての機体が目の前にあった。それが視界の右側に並んでいる。

ギガントは特徴的な大きなフォルムと肩についたミサイルポット。ミサイルという名前は過去の文献であったけど、あれを再現するとは。

しかも、ミサイルポットの中のミサイルは拡散型粒子ミサイルと言って、一定距離で爆発し一定距離まで魔力粒子が拡散するものだ。簡単に言うならフュリアスの装甲を脆くするためのもの。

対する左側にはＧＦＦ－０６『リヴァイバー』とＧＦＦ－０９『アルケミスト』。

ギガントの方はエクシダ・フバルの私物で、リヴァイバーとアルケミストは第７６移動隊の機体だ。

リヴァイバーには七葉が、アルケミストには捻挫した手首の調子を確かめるために鈴が乗っている。

本当はダークエルフも近くに隠されているんだが、悠人がエスペランサに待機されている以上、必要ないだろう。

「ギガントがいるとはね。予想外も予想外だな」

オレは小さく溜め息をついた。

そもそも、ギガント自体は量産化の目処が立っていない機体だったりもする。特殊部隊に配備されているし、実際の機動性も悪くはない。ただ、コストが高い。

リヴァイバーはＧＦＦシリーズの中で平均的すぎて最も安く、エクスカリバーが複雑怪奇な変形機構から最も高くなっているが、ギガントはエクスカリバー並みに高い。

まあ、ギガントはミサイルポットが通常装備だからな。拡散型粒子ミサイルがかなり高いのもポイントかもしれない。

そう考えると、維持費は桁違いになるのか。

ただ、フュリアスを使ったテロが近年増えているため、対フュリアスに特化したギガントの需要は高まっているが、やっぱり高い。

高いのにも理由はいくつかあるんだけどな。

「まあ、日本政府がイージスを発表するから、それに対抗するために持ってきたとしても不思議じゃないけどな」

実際に、イージスは世界中が関心を寄せている機体でもある。

というか、この体育祭期間中にどこかのバカがイージスの写真をネット上に上げたらしい。今では国民総デバイス持ち（半数は処理専用デバイス）と言っても過言ではないこの日本で一気に広まった。日本で広まれば世界に広がるのも早いわけで、いつの間にか政府には話を聞きたい各国の面々が話しかけてきたらしい。

いやはや、国の威信をかけた機体がここまで注目されると、日本政府としては嬉しい悲鳴を上げるしかないだろうな。

「弟くん、何か考え事？」

「違う違う。ギガントを初めて見たからさ」

「弟くんはフュリアスの設計に関わっていないの？」

「関わることが出来ないってのが正しいな。最近は開発も行わなくても技術の進歩が目覚ましいし、エクスカリバーの後継機の設計図を出しても瞬間で却下されたし」

ちなみに名前はデュランダル。アル・アジフに教えてもらった聖剣の名前シリーズで、最も最強の聖剣として教えられたもの。

ただ、それを意識して作ったら最高速度から機体の旋回性、機体反応などあらゆる点でエクスカリバーＺ１の二倍近いスペックになっていたりもする。

もちろん、悠人ですら操作不可能で冗談抜きに未来の機体として厳重に保管している。

「弟くんでもそんなこどかあるんだ」

「オレからすれば嬉しいことだけどな。今までは技術がオレに追いついていない部分があったけど、今はようやく技術が追いついて追い越したからな。新たな設計はしても革新的な開発は難しいだろうし」

「妙に達観しているよね。何というか、弟くん、変わった？」

「わかるか？」

「うん。今までの弟くんなら自分が先導するんだって感じだったのに」

確かにそうかもしれないな。実際に、家にはたくさんの設計図がある。でも、それは幾ら見直しても新しく出ている技術の方が進歩しているのだ。

もしかしたら、世界の意志というものは、今までの世界の繰り返しの一つであって、オレの知識はそこから借りているだけかもしれないな。

有頂天になっていた自分がちょっと恥ずかしい。

「でも、私はそんな弟くんが好きかな」

「惚れるなよ？」

「絶対にないよ」

さすがに断言されるとかなり辛い部分があるのですが。

「お二人はよく会話出来ますね」

ちょうど音姉の向こう側にいる都が呆れたように溜め息をついた。

確かに、エクシダ・フバルを待っているだけとは言え、こうも呑気

に話しているのは少し非常識だったか？

「予定時間を過ぎていることには何も思わないのですか？」

「全く」

「うん、全然」

オレと音姉が即答で答える。だって、約束時間って破るためにあるものじゃないのか？

まあ、さすがに体育祭本番オープニングが開始する午前九時まで後四十分という事態にはなっているけど。

「『ＧＦ』の評議会という大幹部がほんの少しの遅れなんて小さなことだと僕は思うけどね」

「そうそう。ギルバートさんの言う通りだ。向こうは『ＧＦ』のトップクラスの権力者なんだし」

「だよね。ギルバートさんの言葉は的を得ているよ」

「そうですか。私ももう少し我慢強くならないといけないですね」

「あのさ、一ついい？」

横並びでエクシダ・フバルを待っているオレ達四人の最後の一人である琴美が頭を抱えながら言葉を発する。

「あなた達の思考回路がぶっ飛んでいるのも、都が周のことなら何

でも賛成するのもわかった。でも、いつの間にか一人増えているのに会話を平然と続けられあなた達の根性が意味わからないのよ」

呆れたように言う琴美に全員の視線が向く。というか、気づいていないのは琴美だけだったのか。

「琴美、気づいていなかったのですか？　ギルバートさんは周様より先にここに来ていましたよ」

「都と琴美が来た後だったかな。ギルバートさんが完全に気配を隠してやってきたけど」

「一応言っておくが、琴美はフュリアスのパイロットとして数えている。鈴が乗っているアルケミストは本来琴美の愛機だし。

そもそも、琴美はフュリアスのパイロットとして数えている。鈴が乗っているアルケミストは本来琴美の愛機だし。

槍の扱いは悪くはないけど、第７６移動隊に槍を使って近接出来る奴が少ないからな。楓は砲撃槍な上に二刀流ならぬ二槍流だし、中村なんて槍よりも砲撃だ。オレも槍は言うほど強くはない。

だって、槍って振り回しにくいものだからだ。おかげで槍を扱うのは苦労する。一応、レヴァンティンモード?である砲撃槍形態はあるが、あれって振り回すものじゃないし。

ちなみに七葉は例外。あれは槍じゃないし、天性の感覚が必要だ。頸線であそこまで戦えるのは慧海の話によれば七葉以外に、インドの不思議少年とロシアの特殊工作員の男らしい。

まあ、第７６移動隊には指導役がいないのだ。筋は悪くないからそこそこ強くなるとは思うけど。頸線に関しては七葉に教えをもらっている。頸線に関しては本当にスペシャリストだからな。

「音姫に気づかれた時は僕もまだまだだと思ったね。やはり、孝治みたいに上手くはいかないものだ」

「孝治は一応、そういうのに才能があるからな。根っからの特殊工作員向けだし。まあ、武器が剣と弓だから、そこが不釣り合いかもな」

特殊工作員って基本はナイフだからな。孝治はその分、レアスキルでカバーするけど。

「僕ももっと精進しないとね。おっと、どうやら来たようだ」

ギルバートさんが示した先にオレ達は視線を向ける。そこには確かに長距離航空防護艦の姿があった。

あれなら到着まで数分だろう。時間的に厳しいし、そろそろ種明かしをしてもらいますか。

「んで、ギガントのパイロット、いや、エクシダ・フバルさんは出ないのか？」

その言葉に誰もが驚いてオレを見ていた。その言葉と共にギガントのコクピットが開いて独りの『ＧＦ』の儀礼服ではなく戦闘服を着た老人が姿を現した。

ギルバートさんが微かに驚いている。

「いつからだ？」

ギガントのコクピットから飛び降りながら（１０m近くあるはずなんだけどな）エクシダ・フバルが尋ねてくる。

「そもそも、あんたのギガントが到着より前に到着していることがおかしいだろ。後は勘だ」

「なるほど。頭の回転は悪くはないみたいだな」

どうやらオレはエクシダ・フバルに試されていたらしい。

「ようこそ、エクシダ・フバル。これより第７６移動隊があなたを警護しながら学園都市を回りますが、移動するルートはこちらの指示に従ってください」

「いいだろう。お前が守る学園都市を見てやろう」

これからが体育祭の本番だ。気を引き締めよう。

第百六十三話　本番の始まり（前書き）

ついに、お気に入り件数が三桁に到達しました。こんな誤字脱字が多い小説をお気に入りに登録していただきありがとうございます。と言っている間に二桁になっていそうですが。

文字数もそろそろなろう検索ベスト２０を射程圏内に収めたはずです。第二章が終わるまで一気にいきます。第二章が終わればクールタイムです。執筆って、疲れますよね。

第百六十三話　本番の始まり

学園都市体育祭本番。

それは学園都市外に住む一般人や受験を控える小学校六年生か中学三年生、高校三年生が学校の見学にやってきたりする大規模な催し。基本的に、学園都市の体育祭は競技レベルが高い上に、体育祭期間中だけ様々な商店がセールをしていたりもする。

結果、来場者は本当におかしなくらいの量になる。

確か、三日間で百五十万ほど来たはずだ。もちろん、最初の一年目は。そのため、この期間中は学園都市『ＧＦ』以外の地域部隊の援軍がやってくる。まあ、大半は観光気分みたいだが。

もちろん、この時期に合わせて第一特務もやってくる。

「学園都市の体育祭には初めて来るが、かなりの賑わいだな」

エクシダ・フバルの言葉にオレは頷いた。

「そりゃな。今通っているのは体育祭でも有名校が集中するブロックが戦うからな。人の出入りも多い」

「つまり、お前は賑わっている部分を見せたいというわけか」

「そういうわけじゃないさ。このルートの方があなたを守るには有効だからな」

「花畑孝治か」

孝治はオレ達に隠れて警護している。というか、本気で孝治のいる位置がわからないくらいに隠れられている。

ギルバートさんも未だに捜しているみたいだし。

オレは肘を小突かれる感覚を無視しながら口を開く。

「そのブロックにはオレ達、第７６移動隊も入っている。警護するにはちょうどというわけだ」

「なるほど。一理あるな。むしろ、納得させられた。だが私を狙うものがいるならそんな状況でも」

「近くにあのアルトがいる。いくら暗殺者がいたとしても、オレのファンタズマゴリアを破れても、アルトのレアスキルを破るのは至難の技だからな」

そのアルトが真っ先にやられたら意味はないが、ファンタズマゴリア自体、ある弱点を除いて効かないし、ある弱点も鬼の力を乗せればほぼ無くなる。

とは言っても、北村信吾のような桁違いの火力を出されたなら無理だけど。

肘が食い込む感触がするが無視だ無視。

「学園都市というのは一種の閉鎖都市だから守るにも好都合か」

「正確にはみんながシェルターに逃げる時間を稼ぐだけだ。学園都市の設計上、何らかの戦闘に巻き込まれた場合、外側の工業エリアは元から捨てている。外壁は変な侵入者を入れないためと、逃げる時間を稼ぐため。それが学園都市の外壁だ。勉強に集中出来る環境のためじゃない」

勉強に集中出来る環境というたい文句は実は関係なかったりする。勉強に集中出来るのは基本的には静かな場所とやる気だ。集中出来ないのをマンガやゲームのせいにする人や、図書館などの静かな場所の方が家でするよりも勉強しやすいという人の話は若干間違っている。

正確には静かな場所とやる気さえあれば何でも出来る。或いは興味か。

「そもそも、学園都市に商業エリアがあるのはいいとして、格安のゲームセンターがあるのは間違っているだろ。本当に勉強に集中させるなら、学園都市に来たくなくなるくらいの教育をさせないといけないからな」

「つまり、貴様は学園都市に反対方針か？」

オレは小さく溜め息をついて首を横に振った瞬間、オレのわき腹に信じられないくらいの威力が籠もった刺突技が飛んできた。ただし、刃は向けていない。そう、刃は。

オレは飛んできた方角である右側を向く。

「何をするんだよ、音姉」

「時雨さんや慧海さんにギルバートさん達に敬語を使わないのはいいとして、フバル評議会議員に敬語を使わないのはマズいと思うけど」

「一応言っておくが、正規部隊隊長は評議会議員と同等の地位だからな。さすがに、評議会の最大のトップには勝てないけど」

今はそのトップが不在だからエクシダ・フバルがある意味トップなだけだ。

つまり、向こうが敬語ならこちらも敬語。向こうがタメ語ならこちらもタメ語という理論が成り立つ。

「そう言う問題かな？」

「そう言う問題。そもそも、評議会と言えば歴戦の勇士が集まる場所だ。オレみたいな若造が敬語で話せば確実に下に見られるだろ？」

「だから敬語を使いたくないの？」

「面倒なだけ」

光輝の鞘がオレの後頭部を殴り飛ばした。

「弟くん？　一度、社会の常識を教えた方がいいのかな？」

「敬語を使う人の大半はそうだろ。本当に敬う相手なら敬語だけど、基本的には強制的に敬語を使わされているだけだ。まあ、上司が納得しないからだと思うけどな」

「いつから弟くんはそういう風に育ったのかな？」

よよよ、と泣き真似をする音姉。音姉って本当に泣き真似が上手いからな。ここで手のひらを変えた瞬間に基本的に殺される、はず。

そのシーンは確実に記憶を失っているからな。覚えることが出来ないだけだ。まあ、それをされたのは、オレがまだ小学生の頃だったから、今されたら威力はどうなるかわからない。

「周様、音姫、エクシダ・フバル様が驚いていますよ」

「あなた達、相変わらずよね」

都が頬をひきつりながら見事な笑みを浮かべて言い、琴美が呆れたように溜め息をついている。仕方ない。仕方ないと思いたい。多分。

「第７６移動隊とは愉快だな、ギルバート」

「そうだね。僕もそう思うよ」

ギルバートさんとエクシダ・フバルが親しそうに笑みを浮かべ合う。オレはそれを見て首を傾げた。

「二人共、知り合いなのか？」

「知り合いというより知り合いの教え子かな。時雨の親友に金城剛（きんじょうつよし）がいてね、その教え子がエクシダ・フバル。一時期は閃光という異名を持っていたよ」

閃光という異名は聞いたことがあるというレベルじゃない。有名も

有名だ。

だって、閃光は光が閃くより速いかのように攻撃することが可能な人に送られる称号で、閃光の名を持つ人物は文字通り閃光のように速い人物と言える。

一応、ギルバートさんも閃光の異名持ちだけど、閃光の名前を持つのは世界にも少なく、たった八人しかいない。もちろん、現役のみに与えられる名前だ。

「しかし、ギルバートには勝てなかったな」

「僕に勝てる人は少ないよ。音姫以外に、本気の僕は負けるつもりはないし」

そう言いながらギルバートさんは漆黒の刀と純白の刀を微かに抜き放つ。その瞬間に第一特務を含む何人かの『ＧＦ』隊員がギルバートさんに視線を向けた。

今のに気づくとは学園都市の『ＧＦ』にもなかなかのメンバーはいるみたいだな。

「つか、ギルバートさんの本気はチートだろ。慧海もギルバートさんもチートだし」

「そうかもね」

頷くギルバートさんの顔にはどこか寂しげな雰囲気があった。それを見たオレは一瞬だけ、ほんの一瞬だけ眉をひそめてしまう。

ギルバートさんの過去に何かあったのだろうか。

「そろそろ時間じゃないかな？」

音姉の出来る限り場を明るくしようとする声。それを聞きながらオレ達は足を止めた。それと同時に放送が鳴り響く。

『学園都市にご来場の皆様。今回のご来場、誠にありがとうございます。私は学園都市体育祭実行委員長の鈴木花子です』

鳴り響いたのは委員長の声。周囲から委員長、委員長という声が響く。

委員長って有名だしな。『ＧＦ』にも、それ以外にも。

『これより、学園都市体育祭本日程を開催したいと思います。今回の本日程ではいくつか注意点があります。一つ、決して他人の妨げとなる行為を止めましょう。お互いが気持ちよく体育祭を行い、体育祭を見るために必要な行為です。一つ、何かの事件があった場合にはお近くの『ＧＦ』隊員に相談してください。必ず当事者達ではなく、『ＧＦ』を間に挟んでください。これにら第７６移動隊隊長及び第一特務副隊長より許可が出ています。一つ、体育祭では不足の事態が起きる可能性があります。不足の事態が起きた場合は体育祭実行委員長に変わりまして、第７６移動隊隊長海道周が指示を出します。その指示に従い、落ち着いて行動してください。一つ、係員からの注意は守ってください。これは人として当たり前のことです。当たり前のことを当たり前のように出来るようになりましょう。一つ、体育祭を楽しみ尽くしてください。競技者の皆様は楽しみながら真剣に、そして、楽しませるように、応援者の皆様は楽しみながら応援するように。ご来場者の皆様は楽しみながら、見守ってく

ださい。それが、私からの注意点です。何かご不明点があればお近くの係員にお尋ねください。では、学園都市体育祭の開催を宣言します！』

その言葉と共に、周囲でクラッカーの音が鳴り響く。ちなみに、オレとアルトは地味にファンタズマゴリアとかを展開していたりするけど何もないようだ。

「海道周。お前は学園都市をどう思っている？」

「いいところだ」

オレはエクシダ・フバルの問いに即答で答えていた。

「だから、守りきる。誰もかも、全てを。今は約束を守るために」

そう。正との約束を守るために。

第百六十四話　学年選抜

殺気立つ二つの陣営。それは戦いと戦いを控えた二つの陣営。両者の間に砂を巻き上げるほどの風が起きる。お互いにあるのは目の前にある敵を競技で倒すだけ。

そして、種目が発表される。

『第一回戦の種目は、野球、です』

それを聞いた瞬間、オレは観客席にしながら溜め息をついた。何故なら、片方の陣営が盛り上がり、片方の陣営が落胆したからだ。

だって、片方は総附高だぞ。

「ふむ、落胆っぷりが激しいな」

エクシダ・フバルが驚いたように口を開く。事情を知らない人から言えばそうなるが、事情を知っている人なら納得出来る。

そもそも、オレ達が勝てたのは相手が得意種目じゃなかったからだ。

「片方には日本最近の高校球児に風祭時音がいるからな」

「ほう。あのメジャー優勝チーム相手に完封した」

風祭時音さん、何をしているの？

メジャーで完封って、桁違いもいいところだよな？

「まあ、相手がそうだから、素人集団ならキツいだろ」

「そうだな。模擬戦で慧海と一対一戦うようなものだな」

そういう例えをエクシダ・フバルは使うが少し間違っている。

慧海は一対一ではあまり強くない。まあ、十分に強いけど、相応の火力とスピードがあれば対抗出来る。というか、一対一ならギルバートさんの方が強い。

だが、あいつは『無敵』。敵がいないと言われる存在だ。それは戦場において発揮される。というか、一対多が得意というオレと表面上は同じで相手が多数になれば桁違いの性能を発揮するだけだ。

「慧海は確かに一対一でも強いからね。音姫には勝てなかったけど」

「私は慧海さんの致命的な弱点に気づいていますから」

そう言いながらにっこり笑みを浮かべる音姉。

まあ、それが白百合流の真骨頂だからな。戦いながらも相手の隙を誘う。別の言い方をするなら相手の弱点を導き出す戦い方。

音姉に勝てるのは第７６移動隊でも夜の孝治、長距離からの砲撃が可能な場合の砲撃手メンバー、『天空の羽衣』を展開しているオレ、風王具現化と光王具現化の準備が終わった亜紗。

つまり、まともに戦えば勝ち目は本当にない。面白いくらいにない。

というか、ギルバートさんですら負けるんだよな。音姉に勝てる人、オレくらいか。

そう考えるとめちゃくちゃだよな。

「若手はいいな。特に第７６移動隊は世界的に有名な若手が多い。白百合流継承者白百合音姫。里宮本家八陣八叉流継承者白百合由姫。夜間の戦闘では無類の強さを発揮する花畑孝治。竜言語魔法の使い手リース・リンリーエル。もうすぐ佐野リースだったか？」

確かに浩平は１２月生まれだから、１８になったら結婚すると言っているけどさ。どうしてエクシダ・フバルが知っているの？

あいつらからすれば妥当か。浩平ってリースと一緒にいたいけど、任務があったら離れ離れになる可能性があるから今で予行演習とか言っていたし。

「他にも、世界最強の魔術師アル・アジフ。元『炎帝』にして現『炎帝』次席のエレノア・スカートレット。リュミエル・カグラの木村楓。狭間の巫女都築都。有名結界術師姉妹アトラス姉妹。地獄の火力を持つと言われる中村光。神速の剣士田中亜紗。最強のフュリアス乗り真柴悠人。そして、あらゆる組織とのバイパスがあると言われる海道周」

それだけ見ると第７６移動隊ってどれだけの異常さがよくわかる。第７６移動隊に近い若手の部隊はいるが、メンバーの大半が実戦経験豊富というのは第７６移動隊だけだ。

まあ、そういう意図が目的で作られたんだけどな。

「これからの『ＧＦ』は若手が新たな世代を作っていく。第７６移動隊はその先頭だろう」

それはオレも思っている。第７６移動隊というのは若手筆頭の存在だ。これからはオレ達が作っていかないといけない。

そう、滅びを回避してからが特に。

「しかし、それを抜きにしても、若いのはいいな。あそこまで絶望していたのにいつの間にか頑張ろうという気になっている。本当に、若いっていいな」

「完全に老人だな」

「自分の力ぐらい理解しているからな。それに、完全というには少し語弊があるぞ。文字通り老人だ」

老人って感じは全くしないけどな。爺ではあるけど。

「さてと、オレはそろそろ向かうから音姉、後は頼んだ」

「あっ、うん」

オレが音姉を見るとまばたきを二回した。そして、返答から考えて、なるほどね。

オレは笑みを浮かべるのをこらえて歩き出す。

今のはある意味合図だ。オレの粒子による探索は距離が離れれば離

れるほど難しくなる。だから、一定距離以上のものは音姉に任している。

今では音姉は髪をリボンでくくっているが、オレは一つだけ歌姫の力を使うように頼んでいた。

それは規模と時間において今までで一番力を発揮しなければならない状況だったが。

「エクシダ・フバルを起点に南東方面か。上手く妨害出来る手段があればいいんだけどな」

「なるほど」

学校選抜前だというのに弓をいじっている孝治にオレはそのことを相談した。

本当なら夢に頼んだ方が正確性は高いだろうが、夢は学校選抜には参加していない。それに、孝治はオレが一番信頼出来るやつだから。

「しかし、競技が合わない可能性があるぞ」

「体育祭実行委員に根回しはしている。エクシダ・フバルが狙われていると判断した場合、射撃系統の学校選抜競技にしてもらえる」

「問題は、何の競技になるかわからない、か」

「そこは介入出来ないからな。相手に射撃系統の人はいるだろうから」

一応、予備メンバーにそういう人はいるが基本的には孝治が競技に出るからな。“義賊”にも話は通しているから夢も控えている可能性はある。

「もしもの時は頼むな」

「任せろ」

孝治が笑みを浮かべる。オレは頷いて拳を孝治に向けた。

「都島高校学校選抜の皆さん、入場してください！」

係員の声にオレ達は歩き出した。それと同時に由姫がオレに近づいてくる。

「孝治さんと何を話したのですか？」

「あっ、うん」

オレは音姉が行った反応と同じ反応をする。それを見て由姫は頷いた。まばたきと言葉によって方向を示す手段だ。ちなみに、第７６移動隊専用。

まばたきは東西南北のどれかを言葉は文字数とコンマの位置によって場所を示す。

例えば、「ん、うん」という言葉とまばたき一回の場合は北北東。

「あっ、うん」とまばたき三回は南西。「そうだね、うん」とまばたき四回は西北西、という具合だ。

わかりにくいかもしれないが、わかりにくい方がバレにくい時がある。これは自分の位置が東西南北のどこにいるかわかっていたなら相手からしたら簡単なんだけどな。

まあ、用心警護の時しか使わないけど。

「エレノアにはそれ以外の場所を注意してもらっているから大丈夫だろ」

「相変わらず、姉さんの探査はすごいですね」

「歌姫の力を使っているからな」

エクシダ・フバルを狙う視線を探し出すように歌姫としての力を音姉は使っている。その範囲は学園都市敷地内であるため疲労はかなり出るはずだ。

「何事もなければいいけど」

「そうですね。姉さんにも、エクシダ・フバルさんにも」

オレは心配そうな顔の由姫の頭を撫でてやる。

「大丈夫だ。オレ達を何だと思っている？」

「心配なものは心配ですから」

オレは周囲を見渡す。もちろん、南西の方角を見るが、そこに見える少し高めのビルの屋上に誰の姿も見えない。

歌姫の力は世界に作用するから間違いというわけじゃないだろうけど。

『第一回戦の種目は、団体風船割りです』

その言葉と共にたくさんの風船が作り上げられた空気のみを干渉する結界の中へ上げられる。それが両チームに一つずつの結界って、こっちの風船は不自然に多くないか？

『なお、都島高校には第７６移動隊のメンバーがいるので、風船の数は三倍です。ルールは簡単。結界内の風船を全て割ってください。ただし、魔術は使用してはいけません。と言っても、武器を使った魔術は使用可能ですが、広域に当たるものは禁止です』

つまり、爆発系の砲撃は禁止か。ちょっと待て。武器を使った魔術は使用可能ってことは、中村が最強にならないか？

視界の隅でガッツポーズをしているのが第７６移動隊隊員でないことを祈ろう。

『なお、都島高校三年生中村光選手はバランスを著しく損なう攻撃があるため、予備メンバーと交代してください』

ですよね。

視界の隅で膝と手をついて落胆しているし。

『準備は出来ましたか？』

それぞれが武器を構えている。武器を構えていない人には武器が渡されている。オレは小さく溜め息をついた。

「楓、設定をちゃんと変えろよ」

「うん。準備は出来ているよ」

楓はカグラを構えている。たかが体育祭に神剣を持ち出すのは反則じゃないか？

由姫も身構えているが、重力砲は風船を割るのは苦手だから、集めることに特化するだろう。さすがの三倍、しかも、重なっていない状況な難しいと思うかもしれないが、こっちには砲撃メンバーがいる。

「レヴァンティン、モード？で行くぞ」

『大人気ないですね』

レヴァンティンが呆れながらもちゃんと砲撃槍形態を取る。

それに、一番頼りになるオレの親友が、自分の弓に運命を矢の代わりとしていた。

『では、試合、開始！』

「運命よ、煌めけ」

その言葉と共に孝治が運命を手放した瞬間、漆黒の軌跡が風船を横

一線に割った。オレ達も追随するように砲撃魔術を行う。

連射型にすれば一定時間でかなりの数が撃ち抜けるが、三倍の数はかなりキツい。由姫がまとめてくれるため外すことはないが、風船の数の差がキツい。

「運命よ、煌めけ」

横一線に風船が、

「運命よ、煌めけ」

横一線に、

「運命よ、煌めけ」

横、

「運命よ、煌めけ」

「容赦ないな！　お前！」

「運命よ、煌めけ。ハンデがなんだと、運命よ、煌めけ。いうのだ。運命よ、煌めけ。それくらい、運命よ、煌めけ。力業で、運命よ煌めけ。跳ね退ければ、運命よ、煌めけ。いいだけだ。運命よ、煌めけ」

風船の数、三倍じゃ、足りないな。うん、確実に。

だって、どう見てもこっちが少ないし。

「大丈夫だ。手加減している」

手加減していなかったら楓の砲撃で一瞬だ。

「だが、これくらいでいいだろう」

そう言いながら孝治は笑みを浮かべて弓を下ろす。確かに後少しというか、全てなくなったし。

孝治のやり方は違反ではない。ただ、剣を飛ばしているだけだ。だから、違反にはならない。運命を戻しているのは孝治の魔術だけど。

それがなかったらかなり辛かっただろうけど。

オレは小さく溜め息をつきながら、笑みを返した。

第百六十五話　裏の仕事

伸ばした手がそこにある破片に触れる。その破片は砕け散っているがまるで小型のカメラの様な形をしていたであろうことがわかる。

それに手を伸ばしたベリエが小さくため息をつく。

「どうやってあんなところからこれを撃ち抜けるのよ」

そう言いながらベリエが見たのは目算３００ｍほど離れたグラウンドだ。そこから普通の視力では屋上の逆の端まで動けば見えなくなるような小型サイズのカメラを撃ち抜けるほどの性能。

ベリエが小さくため息をつく。

「ベリエちゃん、どうかしたの？」

「アリエ、そっちは？」

「うん。見つかったよ」

破片を手にしていたベリエはその破片をポケットに収める。そして、振り返った。

アリエがその場の光景を写真に収めているが、普通の神経をしていたなら普通は位の中のものを吐き出すであろう光景。何故なら、そこには大きな純白の鳥、形的にはワシが近いかもしれない。それほど大きなものが剣のようなものに貫かれた後を残して死んでいた。

もちろん、周囲には血や羽が飛び散っている。
だが、二人が見ているのはその死骸じゃない。
「もう一つ、何かの気配はある」
アリエはそう答えた。それに対してベリエはまたため息をつく。
「探索系はアリエの方が得意じゃない」
「そうなんだけどね。なんというか、わからない、かな」
「アリエらしくないわね」
ベリエはアリエは一部を除いて隠し事はしないことを知っている。
だからこそ、その言葉に不安を覚えていた。
「この世のものじゃない何か。そんな気がするから」

「三つの監視がいた!?」
オレはその報告にかなり驚いていた。監視は一つだけだと思っていたのだが、どうやら想定違ったようだ。
報告に来たエレノアが少し困ったような顔で頷く。

「一つは小型のカメラ。デバイスは大量生産品だから足を掴むのは難しいと思う。一つは純白のワシ」

「純白か。天界の監視役か？」

その言葉にオレの隣で一緒に報告を聞いていた孝治が尋ねる。

天界が好む色は白だ。正確には、一時期、展開は神聖視され、魔界が悪魔扱いされていたからな。白というのは聖なる色で、黒というのは悪魔の色、という具合だ。それと、善良なる魂は天に昇るとも言われていたからそこに起源もある。

まあ、実際は魔界とほとんど変わらないんだけどな。

だが、天界は監視役に必ずと言っていいほどに純白の何かを選ぶ。魔界は逆に黒だ。ついでにいうなら動物体は必ずカラスである。

他にも言うなら、天界はほぼ天界から代表者を除いて人界にやってくることはない。基本的にあそこ、交渉したいなら貢物と共にやって来いだからな。それにキレた慧海やギルバートさんが殴りこみに行って土下座させたとかあるらしいけど。

「機械は親父達だろうな。ワシはどう考えても天界だとして、残りの勢力は？」

「それが、アリエでも何かいたのにわからないって」

その言葉にオレ達は同時に眉をひそめた。

「わからない？　魔術的解析でもわからないのか？　アリエはかな

りのレベルと到達していたと思うけど」

「うん。それでもわからないらしい。私もよくわからないけど、アリエはこれ以上深く探らない方がいいかも、って言っていた。本心で」

「深く探れば何かが来るからか？」

孝治が不思議そうに尋ねる。確かに、深く探ればどこかの組織がやってくるなら話はわかるが、今回はやってくる可能性はあまりないはずだ。でも、アリエが言うことを考えると、

「根源的な恐怖？」

「根源的な恐怖がどうかしたの？」

エレノアが不思議そうに首をかしげる。オレは頷いて言葉を返した。

「いや、少し考えたんだ。あらゆる生物もさ、本気で切れた音姉とか、抗えないほど怖い存在からの恐怖に関しては誰もが逃げたくなるだろ？　それと同じ理論で、それを調べたら何かが見つかる。でも、それを見つけると言うことは恐怖というものに火をつける可能性がある。どうだ？」

「なるほど。だが、問題はその理論だと根本的、お前が言うように根源的、生物として刻まれた恐怖ということになる。それをなんと表現するかだが？」

孝治の疑問はもっともだ。というか、これだけは世界の意志とか言えば簡単だろうけど、そんなの答えたら頭の心配をされる。

「問題がそれなんだよな。何かが見ていたのはわかる。でも、何かを調べることは出来ないということは、答えを導き出せないと言う意味になるからな。言うなら、滅びに関連する事柄か？」

「確かにそうだね。答えの無い問題を考え続けても仕方ないし。一応、みんなに注意を」

「注意するのは天界のことだけでいい。何か分からない存在について知らせたところでどうしようもないからな」

「わかった。言ってくるね」

エレノアが走り出す。エレノアは体育祭の裏方リーダーだ。基本的に暇をしているメンバーを仕切っている存在でもある。まあ、学校に行っていないと言うのもあるけど。

オレはその後ろ姿を見ながら小さく頷く。

「さてと、オレ達も仕事を再開させますか」

「だな」

オレと孝治は笑みを浮かべあい同時に踵を返した。

書類を持つ手がプルプル震える。でも、私はそれをこらえて書類を

目的の机の上に置いた。

「これで、終わり、ですよね」

ゼーハーと荒い息をしながら私は尋ねる。机の前に座っている委員長さんは満面の笑みで頷いてくれた。

「北村さん、ありがとう。今日は大丈夫だったの？」

「今日は、何も、無いです、ので」

書類の重さは２００近くはあるだろうか。魔力負荷を無くして筋力強化を最大限まで使用しても、絶妙なバランス感覚を必要とする３００ｍほどの書類運び（階段もあり）はかなりキツイものであった。というか、キツイで済まないんだけど。

今日、何もなくてよかった。

「ともかく、ありがとう。飲み物飲む」

「飲みます」

委員長さんが差し出してきたペットボトルを手に取って私はラベルを見た。

メントスコーラ　蓋を開ければ噴き出すパーティグッズ

委員長さんはネタで渡してきたんだよね。

「あっ、間違えた。それは私が飲むようだった」

「何か間違えていると思います。これ、パーティグッズですし」

「そうだよね。ちゃんとしたシャンパンは用意しているから大丈夫だよ。飲む用と、振る舞う用の二種類を」

何かがずれている。この人との今の会話は何かがずれている。

「委員長さんは今年で１８、ですよね？　日本でお酒は２０からですよ」

「そうなの？　第７６移動隊の高校三年生面々はお酒は１８からの国で人とりは経験しているよ。みんなには理解されないけど、ストレスがたまるとお酒で発散しないと気が済まない日が多くて」

「心労、溜まっていますか？」

「最近はウォッカを一気かな。２００のものを」

なんというか、体育祭実行委員長って本当に大変なんだなと思う。そもそも、委員長ってまだ１７だったと思う。それなのに、もう酒飲みって、この人の将来が凄く心配だ。

そもそも、学園都市内でお酒を手に入れるのは本当に大変だし、見つかったらかなり厳罰に処罰されるって聞いているけど。

合法的に飲める場所が一応はある。もちろん、１８以上ならの話。

「では、私はもう行くので」

「これ、お礼のドリンク」

委員長さんが渡してくれたのはとある製薬会社が出したスポーツドリンクだ。私は世界最大の飲料メーカーのものよりこっちが好きだったりする。

「ありがとうございます」

「お酒を飲んだ後に９００ｍｌのこれを一気したら頭の中が天国になるから美味しいよね」

「それは別の意味で天国に昇りそうですね」

「なるほどね」

人の気配が全くしない空き地。そこに置かれた廃材の上に座るように浩平はリースから受け取った書類を見ていた。

「大和にしっかり報告しておくよ。ありがとな」

「うん。浩平は、元気？」

「ああ。お前となかなか会えないのが辛いだけで、それ以外は元気だ。それに、俺はこれでもタフなんだぜ。体も根性も」

「わかっているけど」

不安そうなリースの顔に浩平は笑みを浮かべた。そして、浩平はリースの頭を撫でる。

「俺には俺の仕事があるように、お前にはお前の仕事があるだろ。だから、頑張れ。来年には俺も第７６移動隊に戻るんだ。それまでの辛抱だろ」

リーズがゆっくり頷く。そして、そのまま背を向けて走り出した。

浩平は小さく息を吐く。

「周の奴、相変わらずド派手なことをする。確かに、これさえあれば不測の事態は逃れられるな。裏の仕事もしっかり逃さず頑張るとは、さすがは周だ。まあ、これを渡されるってことは誰一人欠けることなく守り抜けと言うことだろうけど」

浩平は笑みを浮かべながらも持っていた書類をポケットの中に収めた。それと同時に浩平の手にフレヴァングが現れる。

そのタイミングと同じとするように周囲から何人かのローブを着た人達が現れた。一番前にいるのは槍をもった男。

それは、シェルター下で戦って倒せなかった槍を持つ男。

「佐野浩平だな」

「だったらどうする？」

フレヴァングを肩に担ぎながら尋ねる。その解答の答えは、武器を

構えることだった。

「大人しくその書類を渡せ」

「はっ。どうやら下っ端が焦って動き出したか。いいぜ、相手になってやるよ」

浩平は獰猛なまでの笑みを浮かべる。

「お前ら、装備の耐久値は十分か？」

第百六十五話　裏の仕事（後書き）

委員長が酒を飲んでいることは周は知りません。

次は最初から最後まで浩平が主役での戦闘シーンです。どこまで浩平らしさを出せるかわかりませんが頑張ります。

第百六十六話　雨霰（前書き）

ある意味因縁の戦いです。

第百六十六話　雨霰

最初は一つの銃声だった。だが、その銃声が聞こえた瞬間にいくつもの銃弾が放たれていた。速射という領域を超えた天才による掃射は的確にローブを被った者達に向かい、弾かれた。

「お前の技術など、わかっている！」

一瞬の驚きがあるであろうタイミングに槍を持つ男は前に踏み出した。タイミングは完璧。浩平が驚いていたなら確実に当たるであろう速度とタイミング。

だが、浩平はすかさずフレヴァングを向けていた。引かれる引き金は一回。だが、四方八方から放たれたいくつもの弾丸が槍を持つ男を狙い、弾かれる。

「ウィルガ」

そう浩平が小さく呟いた瞬間、浩平の靴にまるで翼が生えたかのように光が集まり浩平は上手く槍を押さえながら空に飛び上がった。

男は振り返りながら槍を振ろうとするが、浩平はその瞬間に双拳銃を構えている。

武器の高速展開及び高速収納と高速連射。それは浩平が持つ天才の領域。

放たれる弾丸はまるで雨霰のごとく降り注ぐ。しかし、それらは全て弾かれた。見えない何かに。

「対抗術式、じゃねえな」

宙返りをしながらちょうど囲まれるような位置で着地する浩平。周囲に目配せするが、数は把握しきれない。

近接武装を持つ者は一人。それ以外は全員杖を持っている。とう考えても支援型の軍団。多分、結界も展開しているのだろう。

竜言語魔法を使えばリースを呼び戻せる。だけど、今回戦うのはこいつ一人なら、

「大人数で寄ってたかって倒すつもりじゃなかったのか？」

「目的はお前が手に入れた書類と、私の後悔のみ。あの空間で何故お前を逃したかわからないが、その後悔をここで断つ」

「上等だ。俺は周や孝治のようにバカみたいに強くはないが、その分、手加減は出来ないぜ。後、流れ弾で仲間を失いたくないなら今すぐ避難しな」

リボルバー型の拳銃を取り出しとっておきの弾丸を詰め込む。それを腰のホルダーに収めた。

そして、双拳銃を虚空に戻し、フレヴァングを取り出す。

「避難？　お前を逃がさないための面々だ。撃ち抜けないように細工はしている」

「そうか」

浩平は笑みを浮かべながら無造作に引き金を引く。その瞬間、男は走り出していた。槍を握りしめ、下から上に跳ね上げようとして、槍が弾かれた。

男の視界に映ったのは槍がたった一発の弾丸によって弾かれる瞬間だ。

「まさか」

さっきの一発。放たれてからどこかで反射させて槍を弾いたことになる。

浩平はフレヴァングから手を離し、腰の拳銃を手に取って引き金を引いた。

ただの銃声と共に弾丸が放たれる。それに対して男は槍で払おうとした。払おうとして、失敗を悟った。

ただの弾丸じゃないことに気づいたからだ。まるで、魔力の塊であるかのような弾丸。払おうと動かした槍は止まらない。

「大いなる翼（メア・ウィル・シデン）の斬撃」

浩平の言葉と共に炸裂する。

強烈な暴風のような鎌鼬が男の体に襲いかかり、槍を細切りにする。だが、それだけだ。

浩平は失ろに下がりながら拳銃を腰に戻した。

「おいおい。今のは風王具現化クラスの技だぞ」

男が手に持っていた破片を投げ捨てる。

「対策は立てている。だが、お前が本当に戦うに値する相手だったとはな」

その言葉と共に男が新たな槍を取り出す。だが、その槍はまるで、禍々しいまでの空気を作り出していた。

言うなら神剣ならぬ魔剣の類。

「第2ラウンドだ。ここからは死ぬ気でかかれ」

「厄介だな！」

フレヴァングを片手で構えて引き金を引く。だが、その瞬間には男はそこにいなかった。

瞬間移動（ショートジャンプ）したのだとわかった時には背後で土を踏みしめる音が鳴り響く。だから、浩平はいくつかの銃器を空中に取り出しつつ制止させ、振り向きながら竜言語魔法の防御魔法を高速で展開した。

凄まじい衝撃と共に防御魔法に蜘蛛の巣が張ったかのようなひび割れが出来上がる。竜言語魔法の防御魔法は障壁魔術に近い耐久性があるはずなのに。

衝撃と共に浩平は後ろに滑りながら下がる瞬間、空中に制止させていた銃器の引き金を頭の中で引いた。

放たれた弾丸が槍を狙う。だが、槍に当たった瞬間、全ての弾丸はまるで熱い何かに落ちた雪のように溶けた。

「文字通り魔剣かよ！」

「魔槍と言って欲しいな」

禍々しい空気を纏った槍が勢いよく疲れる。浩平がすかさず飛び上がると、浩平がいた場所がえぐり取られた。

機構がわからない。あんなもの、どうすればいいかわからない。まだ一日ある以上、後四発は残して起きたい。

つまり、使えるのは中級クラス一発だけという計算になる。

浩平は頭の中で戦術を組み立て直しながら作戦を新たに考える。

周がいればありがたいという気持ちは変わらない。でも、やることは一つだけ。

「フルバースト！」

フレヴァングを空中で構え、ありったけの魔力を使い切るように全ての銃器を取り出す。頭の中で放つイメージは最速の一斉掃射かつ連射。

一瞬で組み立て放ちきる。放たれた瞬間はまるで太陽が爆発したかのような光と音が連続的に鳴り響き、あらゆる弾丸が男を狙って動き回る。

とあるものは壁を跳ね、とあるものは地面を跳ね、とあるものは人を跳ね、とあるものは他の弾丸に当たって軌道を変える。時には弾丸自体が真っ正面からぶつかり合って正反対の方向に向かう。

攻撃するタイミングはバラバラのように見えて同時。放たれた弾丸は一斉に男に向かい、

「目障りだな」

槍の一振りが向かっていた全ての弾丸を消し去っていた。

「確かにすごいな。この槍が開発されたばかりでなければさすがに破られていたか」

「つまり、許容量を超える威力に関しては意味がないというわけか。普通状態のフルバーストで達成出来るのね。まあ、消されたのは想定内だからいいけどよ」

「何？」

「あんたからしたら、想定外だよな！？」

その瞬間、足下が光り輝き始める。浩平は全ての武器を虚空に戻して右腕を天高く空に向けて掲げた。

「エルセル・ディオ・グイン・ラルフ。アルティメ・レティオ・アルバード・ゼア・フォリス」

「させるか！」

男は槍を投擲体勢に入る。だが、遅い。

浩平の目の前に現れる一冊の書物。それは、浩平が唯一自分の体内にある魔力だけで使用出来る最大級の竜言語魔法。

「ぶち抜け。雨霰（セントリア）」

その瞬間、膨大な光弾が、それこそ無数の雨のように、まるで夕立の時のように出現し、降り注いだ。

雨霰（セントリア）。

別名。滅びの雨。

竜言語魔法を知る浩平だからこそわかる威力。これは限定的に放っているが、広域に放った場合、それは一国を滅ぼす力を持つとされる威力。

浩平はそれを切り札とし、一国を滅ぼす力をたった一人の男に向かって放った。

最大フルバーストを囮とした最大級の竜言語魔法。おそらく、周ですら気持ち良くはめられて終わるだろう攻撃。

だが、それは普通だったらの話。そう、槍が普通だったなら。

雨霰（セントリア）が男に向かって放たれる。一つ一つが地面に大きめの隕石が落下したかのようなクレーターを作り出す光弾が明確な意志を持って集中する。

だが、その全てがかき消えた。迫り来る槍と共に。

響き渡る銃声。

それと共に浩平は体勢を崩して地面に落下した。受け身を取らずに地面と激突する。

「がはっ」

浩平の肺から空気が漏れる。それと同時に浩平の首元に禍々しいまでの空気を放つ槍が突きつけられた。

投擲されたはずの槍が男の手にあるということは、

「神剣か？」

「人造神剣が一番近い表現だな」

「人造？」

レヴァンティンや運命のことをそう例えるならわかるが、人造神剣というのは意味がわからない。

男は笑みを浮かべる。

「滅びに対抗するための武器だ。さあ、書類を渡してもらおうか」

「勝手に取れ」

激痛のために体が動かないため、浩平は顔を逸らしながら言う。男はそれに満足そうな笑みを浮かべて、

「それは困るかな」

禍々しいまでの空気を纏っていたはずの槍の穂先が宙を舞った。それを追いかけて顔を上げた男の目に入ったのは、

黒い何かの中心にある真っ白何か

と頭が何かを理解するより早く、男の顔面をその人物の踵が直撃していた。

男が大きく吹き飛ぶ。

「君は？」

痛む体をこらえて体を起こす浩平。そんな浩平に振り返りながら、その人物は笑みを浮かべた。

「僕はただ、新たな未来を見たいだけの、人間さ」

第百六十六話　雨霰（後書き）

戦いはまだ続きます。

第百六十七話　聖剣ＶＳ魔道具（前書き）

前回で楽しく書いたからか今回は少し弱めです。

第百六十七話　聖剣ＶＳ魔道具

「僕はただ、新しい未来を見たいだけの、人間さ」

その言葉と共に正は手に持つ時計の針がいくつもついた剣を構えた。

男は大きく後ろに下がりながらさっきと同じような槍を取り出す。

「デバイスを使ったものであるはずなのに、どうやら魔槍を断ち切ったのか、聞かせて欲しいな」

「魔槍、か。君達は面白い名称の付け方をするみたいだね。絶対的な魔力至上主義のこの世界で、魔力に対して絶対的優位に立てる武器、言うなら魔道具だね」

「なるほど。見ていたか」

浩平の銃撃や雨霰（セントリア）はおそらくファンタズマゴリアですら受け止められない威力だったかもしれない。だが、それをたった槍の一本で消し去った。

つまり、魔槍となるものは魔力に対して絶対的優位に立てる武器だと考えていいだろう。

「確かに、今の『ＧＦ』には少々荷が重いところだけど、それは大量生産出来るものなのかい？」

「基本的には槍と同じた。そこら辺の武器やに行けばあるだろうな」

「なるほど。だったらそれは、本当に無差別に魔力を消し去るものかな？」

正の顔に浮かんでいるのは笑み。それは、魔槍がどういうものか理解しているとでも言うかのようだった。

「だったら、何故最初から使わなかったのかな？　力を隠していたわけじゃない。おそらく、調べていた。個人の魔力の質を」

「おい、女。お前はどこまで知っている？」

「心外だね。僕は何も知らないよ。魔槍の存在もさっき初めて知ったばかりだ。でもね、戦闘はしっかり見ていたよ。これくらい、僕なら気づける」

男が槍を構える。それと同時に杖を構えていた面々が杖を戻してそれぞれの武器を正に向ける。

それは正を最大の障壁だと認識したことによる排除行動。だが、それを見た正の顔に浮かんでいるのは笑みだった。

ゾクッと、正に武器を構える面々の背中に悪寒が走る。

「彼が持つ書物は君達に渡ってはいけないものだと僕は思っているよ。だから、僕は向かってくるなら喜んで君達と戦おう」

「ふざけんじゃねえぞ、糞女！」

一人の男が斧を振り上げて迫ってくる。正はそれに対して小さく溜め息をついて簡単に斧を避けた。そして、手に持つ剣の刃をその男

に叩き込む。

男は勢いよく後ろに向かって飛び、壁にぶつかって止まった。

「安心しなよ。この剣は刃が潰れているから。変わりに、死ぬほど痛いと思うだろうけどね」

「だったら、貫かれて死ね！」

その言葉と共に周囲の物陰からたくさんの魔術で作られた様々な属性の槍が放たれた。その数は約５０ほど。

だけど、正は軽く笑みを浮かべる。

「光の方が怖いものだね。ファンタズマゴリア！」

正をファンタズマゴリアが包み込み、全ての槍を受け止める。

「金色夜叉」

そして、正はすかさず前に一歩を踏み出した。最後の槍が消え去った瞬間に剣に金色夜叉を纏わせ、金色の刃でファンタズマゴリアを切り裂きながら振り下ろす。

金色夜叉は周囲にいた三人のローブを着た者達を呑み込んだ。

「大技こそ、隙が出来る！」

タイミングよく走り込んでくる男。金色夜叉を使った正の振りはかなりの大振りだ。だからこそ、大きな隙が出来る。それを狙った加

速はタイミングもスピードも完璧だった。

ただ、相手が悪かった。

男が槍を突く。しかし、正はすかさず力任せに体を捻った。振り下ろした瞬間に体を捻ったので普通なら腕に何らかの異常が出るはずだが、正はそれに関係なく体を捻る。そして、まるで後ろにいる相手を斬るかのように剣を動かしたのだ。

ちょうど軌道上にあった槍を高く跳ね上げ、正は反対側に振り下ろす。そして、今度は逆に体を捻った。

むちゃくちゃな体の動かし方。力任せによる部分が多いため、普通なら左右の腕が確実にイかれる。例え魔術を使ってもイかれる。

だが、正は平然と跳ね上げられた槍を振り下ろした槍とぶつかり合い、弾き飛ばしていた。

「何という戦い方」

「そう思うことは無理もないよ。初めてやってみたけど、腕への負担が凄いね。次に使えば確実にどちらかが再起不能かな？」

別の言い方をするなら、そんな無理に近いことをしなければならないほどの完璧なタイミングだったということだ。だが、男はそれがもう一度通じないとわかっている。

さっきの行動はがむしゃらのようだが、完全に予測されていた槍の軌道を通っている。がむしゃらではなくわざと狙った。

「これ以上戦うなら僕は君達を追わないよ。僕はただ、周が考えた作戦が成功することを祈っているだけだから」

「ならば、これ以上、邪魔をして欲しくないな」

その言葉と共にその場にいた全員が身を堅くして声のした方向を振り向いていた。

そこにいるのは海道駿。その背中には杖と、腰には剣が身につけられている。

「は、駿様」

「減点だ。勝手な行動をするなと言ったはずだが？」

「申し訳ございません」

「まあ、いいだろう。お前ほどの奴が守る書類。私も興味が出てきた」

そう言いながら海道駿は腰の剣を抜いた。やはりと言うべきか。禍々しいまでの空気を纏っている。

正は静かに剣を構える。

「僕は書類の中身を知らないよ」

「知らない？　そんなわけがないだろう。お前がお前である以上、その書類は想像がつくものでなければならない」

「話は通じないようだね」

正は小さく溜め息をついて発動時間がほぼ一瞬の魔術で作られた純粋な光の槍を放った。だが、それは海道駿の持つ剣によって消される。いや、溶かされる。

正は軽く息を呑み、気合いを入れ換えるように息を吸い込んだ。

「魔術自体を消し去ると僕は思っていたけど、どうやら勘違いのようだね」

「今のでわかったか」

「うん。だから、ここは逃げる一手かな」

そう言いながら正は浩平の隣まで下がった。浩平は周囲を睨みつけているが、動けない以上、どうしようもない。

正はしゃがみ込んだ。

「逃げ切れるような状況かな?」

「無理だな。あの瞬間、手加減無しに自分に撃ち込んだ弾丸のダメージがかなり大きい」

「地面にぶつかった衝撃は大丈夫ということか」

「他者からのダメージだからな」

どうやら浩平は自分が投擲された槍から逃げるために撃ち込んだ一

撃がかなりのダメージになっているらしかった。
正は呆れたように溜め息をつきながら振り返る。
そこにはゆっくり近づいてくる海道駿の姿があった。
「手負いの獅子を片手に逃げ切れると思っているのか？」
「逃げ切るしかないよ。だって僕は」
「貴様ら、動くな」
その瞬間、その場にいた全ての動ける人間が一歩後ずさった。それは正も例外ではなく、その言葉によって恐怖したのだ。
それほどまでに背筋が泡立つかのような気配。今、一歩動けば生半可な実力では殺される事が明白な空気。
「浩平に何をした？」
やっとのことで正と浩平、海道駿の三人がそちらを振り向く。
そこには、近くの屋根の上でレーヴァテインを矢の代わりとした孝治の姿があった。
その背後にはまるで阿修羅がいるかのような気配。もっとも、武器が阿修羅より怖いが。
「花畑、孝治！」

海道駿が孝治の名前を呼ぶ。完全有利な状況を一瞬にして完全不利にした存在。さらに、レーヴァテインがあるということは光がそばにいることを表している。

いくら数を集めた所で、刹那で勝負を決められないなら、それは命の半分を握られていることに等しい。それほどまでに、孝治と光の二人は戦略的兵器みたいな人物なのだ。

「引くぞ」

海道駿が後ろに下がる。孝治は動かない。狙いを付けているからだ。もし、レーヴァテインが放たれたなら、この場で受け止められるのは正のファンタズマゴリアだけだろう。

それほどまでに強力にして強烈な一撃だからだ。

その言葉に一人、二人と撤退していく。そして、海道駿が背を向けて走り出すとその時にその場には誰もいなくなっていた。

孝治が小さく息を吐いて跳び、浩平の横に着地する。そして、

「起きろ」

浩平を全力で踏みつけた。

「ごはっ、何すんだ!?」

浩平が文字通り跳び上がり孝治との距離を詰める。だが、孝治は誇らしげな顔で浩平を見ていた。

「動けるな。なら、大丈夫だ」

「大丈夫じゃねえよ！！　殺す気か！？」

その言葉に孝治は目を見開いた。

「まさか、貴様、死ぬのか？」

「俺はどんな人間だ！？　不死身じゃねえぞ！！」

「あははは っ。君達はやっぱり面白いね。でも、今はそのような漫才をしているほど暇じゃないよ。今の相手の情報を周に届けないと」

「ああ。その前に、大和にこの書類を届けさせてもらっていいか？奴はこの情報を狙いにきたからよ」

そう言いながら浩平が書類をポケットから取り出す。戦闘の余波で折れ曲がっているが、紙だから大丈夫だろう。

「それは何だ？」

「周が考えた新たなデバイスを学園自治政府も使えるから、それの取り扱い説明書。別名、幻想展開（ファンタズマゴリア）デバイス」

第百六十八話　対抗術式

オレは小さく溜め息をついた。体育祭はようやく昼休み。エクシダ・フバルはギルバートさんやアルト達第一特務の面々と学園都市にいる大人のお偉いさんの接待を受けている。だから、オレ達は戻ってくるまで自由時間なのだ。

そのため、オレは近くにあったベンチでぐてっとしている。

「兄さん、お昼ご飯を食べないと昼に倒れますよ」

『栄養補給はしっかりと』

「そうじゃぞ。そなたが倒れたらどうやってあの狸爺の相手をするのじゃ」

ぐてっとしているのだが、背後から聞こえてくる声が耳障りに思えてくる。

オレは小さく溜め息をついて振り返った。

「あのな、オレの心労を察してくれ」

「お断りします」

即答。

芝生の上でレジャーシートを広げてご飯を食べている三人がニコニコ笑っている。もちろん、由姫、亜紗、アルの三人だ。

本来なら都もいるはずだが、

「私は昼休み以外でも周様と共に行動するので皆さんで食べてください」

とのことで音姉と琴美と一緒に別行動している。

『周さんが心労って言ったのは初めてかも』

「周も疲れているのじゃぞ。要人警護は気を使うからの」

「と言ってるアルも手加減しないよな？」

「当たり前じゃ。我はそなたの寵愛を受けた存在じゃぞ」

その言葉に、その場の空気が氷点下まで落ち込んだ。爆弾発言ではあるが、この二人も知らないからな。

だが、その氷点下はあっという間に終わる。

「まあ、私は兄さんとよく一緒にいますし」

『私は一番周さんと一緒に行動しているから』

嫉妬しているのは丸分かりだけど。この二人も可愛いから今すぐ抱きたいという気持ちはあるけど、自重自重。

「ともかく、兄さんはこちらに来てください」

「はいはい」

オレは軽く苦笑して立ち上がり、レジャーシートの上に座り込んだ。
すると、卵焼きを挟んだ箸がオレの目の前に現れる。

『あーん』

スケッチブックに書かれたそんな文字と共に。

かなり恥ずかしいのですが。以前のオレだったら躊躇いもなく食べていたような気がする。

以前のオレってある意味すごいよな!?

「あーん」

そうしていると由姫も同じように卵焼きを差し出してきた。アルだけがニヤニヤしながら見ている。

「あーん」

『あーん』

オレにどないせいと?

「君達は何をしているのかな?」

その言葉にアル以外のオレ達が固まった。そして、ぎこちない動きで声のした方を振り向く。

そこには正だけでなく、呆れたような孝治と憎悪の視線を向けてくる浩平の姿。完全に見られていたよな。顔を戻すと差し出していた箸はその場になく、二人の口が動いている。

「羨ましい。羨ましいぞ、周！　リースにすらされたことないのに」

「初耳なんだが」

「あいつは顔を真っ赤にして、はでゅば」

ドン、という純粋な何か重いものが落下したような音と共に顔を真っ赤にしたリースが竜言語魔法の魔法書を片手に、もう一方の手にはハリセンを片手に立っていた。

ハリセンで、あの音？

「疑問に思ってはいけない」

リースがハリセンと魔法書を消し去る。

「それは竜の逆鱗に触れること」

「わかったわかった。気にしないし気にも止めない。そのハリセンが鉄で出来ていてもおかしくないからな。そういうことだ」

そういうことで納得しておこう。死にたくはないから。

「つか、何で浩平がここにいるんだ？　お前は学園自治政府の方にいるだろ」

「そうなんだがよ、ちょっと厄介なことに巻き込まれたからさ」

「厄介なこと？」

「ああ。そういうわけで、結界（レミリア）」

その言葉と共に周囲に結界が展開される。竜言語魔法の結界だから気づかれることはないだろう。

オレがレジャーシートから立ち上がると正がそこに座り込んだ。

「竜言語魔法の結界を展開するということは、よっぽど隠したいことがあるんだな」

「まあな。単純明快に言うなら『悪夢の正夢（ナイトメア）』一団に襲われた」

「単純明快すぎて笑えるな」

オレは顔がひきつるのがわかった。まさか、このタイミングで襲いかかってくるなんて思わなかった。

考えられるとしたら、あれか。

「狙われたのは例のデバイスか？」

「全く持ってその通り。リースから受け渡された後に狙われた」

「知らなかった」

「呼ばなかったからな。ただ、あいつら、竜言語魔法を打ち消す術

式を使ってやがる」

「はぁ？」

オレは思わずそんな声を出していた。

竜言語魔法ははっきり言うなら不可侵の領域だ。オレやアルが共同でリースに協力してもらって研究したのだが、結論は無理。

竜言語魔法は難解を通り越して、一言（ワンワード）で魔術を越える絶大な威力を発揮する。魔術の理論からしたらありえない。

「術は？」

おそらく一番冷静でないであろうリースが尋ねる。リースのポテンシャルは基本的に竜言語魔法だ。それが封じられたならどうしようもないから。

「雨霰（セントリア）」

「はぁ？」

また、同じように反応してしまう。

雨霰（セントリア）と言えば浩平が使える最大級の竜言語魔法だ。それを打ち消されるならどうやって戦えばいいかわからない。

いや、ちょっと待て。

「浩平、お前の射撃は？」

「打ち消された」

「それ、竜言語魔法が打ち消されたわけじゃなくて、お前の魔力自体に反応して打ち消されたんだろ？」

その言葉にその場が静まり返る。そういうことは想定していなかっただろう。実際、魔術になら魔術殺（マナシンク）しという技はあるが、個人の魔力に反応して打ち消すのは一般的ではないし。

確か、国連で開発していたものだ。

魔道具という名前だったはずだ。

「つうか、よく無事だったな」

「無事なもんか。槍を投擲されたから自分を撃って避けたけど、地面と激突して終わり。あの子に助けてもらうまで動けなかった」

確かに無事じゃないな。浩平の話を聞く限り、魔道具はほぼ完成したものだと考えていいだろう。

魔道具はある意味術者殺し。対抗する術者に絶対的な性能を発揮する能力。相手にあるなら厄介だな。

「一ついいかい？」

オレが考えていると正が手を挙げた。

「どうかしたのか？」

「その魔道具についてなんだけど、戦闘した僕から言わせてもらえばそれほど高性能ではないのかもしれない」

「どういうことだ？」

「デバイスをついているものに対して強いという発言をしていたからね。デバイスというものに取り巻く個人の魔力反応にすら反応するみたいだよ」

「デバイスに対して強い？　アル」

オレはアルを見た。アルと一緒に亜紗のデバイスを作り上げたことがあるからこそ、魔道具の機関が本当にどういうものかがわかる。

「個人波動じゃな」

「個人波動ですか？　えっと、個人が放つ気みたいな何かですよね」

そのことを由姫が知っていることにかなり驚く。デバイスの開発に関わっていなければ、特に個人専用のデバイスを開発していなければお目にかかることが珍しい内容だ。

それに対するものということは、あらゆる攻撃に対抗可能な対抗術式。

「周、どういうものだ？」

「個人波動は基本的に個人が持つ波動、まあ、文字通りなんだが、生命力とかそういうものなんだ」

「個人波動はもちろんそれぞれが違う。一般的なデバイスでは様々な個人波動に対応するために幅広く使えるようにしているのじゃ。それを気をつけないといけないのが個人専用デバイスじゃ」

『これみたいな？』

亜紗が取り出したデバイスを見てアルが頷く。亜紗の武器、綺羅と朱雀が入ったデバイスだ。

「そう。個人専用デバイスはその個人に対して個人波動を合わせておる」

「つまり、その波動に反応する武器というわけか」

孝治が自分の運命を見る。確かに、オレのレヴァンティンや運命は完全なユニーク装備。それに対して対抗術式が発動するならかなり厳しい部分がある。

デバイス部分が壊されたら代えは無いし。

「心配しなくてもよい。レヴァンティンと運命に我のアル・アジフは意味がないからの」

「どういうことだ？」

「我と同じ魔術器はそれぞれが所有者を選ぶ。もちろん、気に入った所有者をな。個人波動を使わずにじゃ」

『なるほど。つまり、魔道具に対しては周さん達しか抗えないとい

うことか』

「神剣も対抗出来るだろうから、後はどうやって対抗するか」

今からじゃ対抗のしようがない。どうやって今ある戦力でどうにかするかだ。

「素手なら大丈夫ですよね」

「素手で無理なら打つ手無しだぞ」

「そうだな。俺達の負担が限りなく大きくなるだけか」

とは言っても、かなりぶっつけ本番になる。失敗したら元も子もない。

どうすればいいか。

「あのさ、大火力ならどうにかなるんじゃないか？　個人波動を調整するのって難しいのか？」

浩平のその言葉にオレは一瞬固まった。そして、我に戻って頷く。

「ああ。調整はかなり難しい。個人専用デバイスは基本的に一般的なデバイスを改良したものが多いけど、個人波動から調整なら一週間はやらないといけない」

「そんな精密なものを使う魔道具ならよ、許容量オーバーしたなら壊れるんじゃないか？　楓ちゃんとかエレノアさんならぶち抜けるような」

確かに精密なら壊れやすいって聞くし。

「ちょっと待った。浩平、ドライブ中の雨霰（セントリア）じゃなかったのか？」

「使ってないけど、あいつらの防御がオレ専用の防御みたいで、許容量を越えたら壊れるって言ってたけど」

「初耳なんだが」

「どうだ？　俺の理論は」

満面の笑みを浮かべる浩平。

「そんなわけないだろ」

「ないですね」

『ありえないと思う』

「ない」

孝治、由姫、亜紗、リースの四人から否定される。だが、オレは首を横に振った。

「アルはどうだ？　オレはありえると思うけど」

「我もじゃ。正はどうじゃ？」

「僕も同じ意見だよ」

オレ達三人だけが頷く。ありえないわけがない。確かにある意味盲点だ。

確かに浩平のものが消されたものは一発一発の威力は低い。それが消されたのはわかる。だからこそ、最大威力での試算はしないといけない。

「浩平、デバイスを一日だけ貸してくれないか？　調べてみる」

「我も力を貸そう」

「監視はする」

「あのさ、俺の意志は？　まあ、貸すけどさ」

そう言いながら浩平がデバイスを投げてくる。オレはそれを受け取ってアルを見た。

「今日は徹夜だな」

「そうじゃな」

オレ達は呆れたように笑みを浮かべながら溜め息をついた。

第百六十九話　雪月花（前書き）

おかしいな。本当なら第一章で出ている予定の武器が今頃出てきたぞ。

第百六十九話　雪月花

戦闘データの抜き出し。それはかなり難しいものだ。というか、セキュリティーの一つとして禁止されている。

戦闘データは個人の戦い方。つまり、蓄積された戦闘データを見れば何が弱点が一目でわかるからだ。オレみたいにわからないものもあるけど。

だからこそ、高いセキュリティーがかけられている。まあ、大掛かりな施設なら抜き出せるのだが。

オレは浩平のデバイスとレヴァンティンを繋げた。

「浩平は武器無しで大丈夫かの？」

「フレヴァングはこれを使って呼び出していないからな。あれも一応、神剣だし」

「そう言えばそうじゃったな」

神剣というのは特殊だ。神剣はレヴァンティンや運命と同じように持ち主を選ぶが、特徴的な特徴として他者は持てないというものがある。ついでにデバイスには収納出来ない。

収納する方法はあるのだが、音姉しか出来ないため収納出来ないと言っておく。

神剣は持ち主が呼ぶことによって現れる。現れ方は基本的に具現化

させる際と同じため、神剣学者達はこれを現界と呼んでいる。その現界によって神剣は収納する必要がないのだ。

まあ、現界自体が魔術の一種だから音姉には使えないけど。

「神剣とは不思議じゃからの。我が知る神剣も不思議なものが多い」

「慧海の飛翔と蒼炎や、孝治のリバースゼロみたいにな」

特殊能力に特化している分、威力は極めて高い。

神剣にはよく驚かされる。

神剣学者の大半は神剣を否定しようとしていて調べていた人物だし。

「周、レヴァンティンと言えどもデータを抜き出すには時間がかかるじゃろ」

「まあな。これから二時間くらいは見込んでいないと」

「そなたは神剣について詳しいのかの？」

「オレは神剣を魔術と科学で証明しようとしたからな。まあ、無理だったけど」

言うなら神剣学者と同じ道を辿っていたりもする。

まあ、神剣についてはいろいろとあるからな。

「ふむ、そうか。では、我がありがたい講義をしてやろう」

「神剣のか？」

「そうじゃ。神剣が生まれた時のお話じゃ」

オレは周囲を見渡す。隣のアルネウラや優月も周囲を見渡す。周囲には反応は見当たらない。

オレは小さく溜め息をついた。

「疲れているのか？」

背後からかけられる声に背筋を伸ばして振り返りながら答える。

「疲れてはいません」

オレの目の前にいるのはエクシダ・フバル。隣ではアルトがクスクス笑っている。リコにいたっては笑いをこらえるので必死だ。

後ろにいる音姫とギルバートもニコニコ笑っていれ。

「やっぱりおかしいね。悠聖君の完全敬語」

「意味が若干おかしいと思いますけど？　音姫さんには敬語を使いますよね？」

「時々ね。時々、普通にため口になっているよ。私はその方がいいけどね」

「悠聖、私にも敬語を使って」

「意味がわからないからな」

オレは頭を押さえて優月を見る。優月は頬を膨らませていた。

「敬語使ってくれたら悠聖に命令出来るのに」

『優月優月。悠聖が敬語を使うくらいで命令を聞くわけがないよ』

「じゃあ、服従させるの？」

『調教だね』

ここに味方はいないのか。

オレは小さく溜め息をついて前を見る。

今進んでいるのは人通りがまばらな地区だ。エクシダ・フバルが行って欲しいと言ったところらしいが、オレからすればヤバい雰囲気は流れている。簡単に言うなら危険だ。

商業エリアの裏ほどではないが、ここも日当たりがわるくて結構な数の不良の溜まり場となっている。

なのに、いない。こういう期間だからいそうなものだがいない。

「孝治」

オレは孝治に対して小型通信機で語りかけた。周が自作したデバイス内蔵型の通信機だ。だが、返ってきたのは雑音だけ。

オレが眉をひそめると同時に誰かがオレの前に着地する。

身構えるアルトとリコ。

「冬華か」

前に降り立ったのは冬華だった。続いてフェンリルが冬華の後ろに着地する。

「ようやく見つけたわ。ジャミングが酷くて見つけるのが大変だった」

「やっぱりな」

小型通信機を外しながら前方に誰もいないことを確認して振り返る。

音姫さんとギルバートさんの二人は鞘から鍔を放しているし、アルトとリコも若干身構えている。

ボケッと立っていたのはアルネウラと優月だけか。

「数はわかるか？」

「わからない。ただ、大きな反応が大きいというのはわかるから」

「親玉が接触してくるか」

オレは通路の先に視線を向ける。そこにはいつの間にか男の姿があった。

目を見開いてしまいそうな状況をこらえる。驚いて身構えてしまいそうになるのをこらえる。

アルネウラと優月は一歩後ろに下がっているけど。

「『悪夢の正夢（ナイトメア）』か」

男がゆっくり近づいてくる。オレはゆっくり身構えた。

「海道駿か」

エクシダ・フバルが鼻を鳴らしながら尋ねる。対する海道駿はエクシダ・フバルに向かって礼をした。

「まさか、あなたがここに来ているとは思いませんでしたよ、エクシダ・フバル師匠」

「ふん。若僧が。海道周が言うように本当にお前がいるとはな。やはり、今の時代は若手が作り出すということか」

「作り出すのは大人ですよ。だから、私達は戦っている。あの日からずっと」

海道駿に浮かべられた笑みを見た瞬間に、オレは体の中で怒りが浮かび上がった。

あの日から戦っているのは本当だろう。でも、戦っているのはお前だけじゃなくて周やみんなもだ。

「ふざけんな！　あの日からずっとって言っているが、お前らはあの日にたくさんの人を殺した犯罪者だろうが！　お前らのせいで苦しんだ奴らがいるのをわかっていないのか！？」

「世界のために必要だ」

その瞬間、完全にぶち切れた。我慢することなんて出来ない。

「ふざけんな！！」

アルネウラと優月の手を掴む。二人の顔を見て頷くのを確認しながらダブルシンクロを行う。

薙刀を握りしめて前に踏み出そうとして、

「我慢だよ」

「我慢して」

音姫さんとギルバートさんによって止められた。

右肩は音姫さんに、左肩はギルバートさんによって止められる。二人共力強く止められる。

だけど、こいつだけは許さない。こんな奴のために周は、周達は、

「悠聖、止めなさい。罠よ」

オレの前を刀を構えた冬華が塞ぐ。フェンリルもそのそばに立っている。

「やはり気づいていたか。その少年はわかっていなかったようだが」

「そうね。あなたは完全に悠聖を狙っていた。エクシダ・フバルではなく悠聖を。違うかしら？」

「ふっ」

海道駿が笑みを浮かべる。その笑みに対して、オレがまたキレそうになる。

「精霊使いの少年は本当に厄介だからな。この場で再起不能にしたかったのだが、無理だったか」

「再起不能だ!?　ふざけんじゃねえぞ!!　てめぇは、周が、周達がどんな思いで戦って来たと思っているんだ!!」

「些細なことだ」

「てめぇ!!」

こいつだけは、こいつだけは！

「いい加減にしなさい」

その言葉が全てを凍らす。底冷えするかのような言葉。それは、オレの前にいる冬華から発せられていた。

「いい加減やかましいと」

「フェンリル」

そんな絶対零度の言葉がフェンリルの名前を呼ぶ。フェンリルは冬華の前に立った。

「それ以上悠聖を怒らせるような発言をしたら、殺すわよ」

「ほう、出来るものなら」

「我の精霊フェンリルよ。全ての力を我に預けよ」

その瞬間、フェンリルが光を放った。その光に対して冬華が手を伸ばす。

「来て、雪月花」

その瞬間、フェンリルから発せられていた光が弾けた。弾け飛んだ時にはフェンリルの姿は無く、代わりに冬華の手に一本の刀がある。

その刀は見るだけで底冷えするかのような絶対的な冷気を纏った剣であった。

「どうするのかしら、海道駿。全ての策を潰されて殺されるか、尻尾を巻いて無様に逃げるか。どちらか選びなさい」

第百七十話　神剣の力

「人の望みを歪曲して叶えた形が神剣なのか」

オレはアルから神剣の始まりについて聞いていた。

神剣というのはとある全ての神の最高位の最高神が死んだ際に出たエネルギーが人の望みを歪曲して叶えた形らしい。

確かに、本当にそれが正しいなら納得出来る。

「神というのがかなり気になるけどな。神というのは本当に存在するのか？」

「存在するぞ。そなたも知っているはずじゃ」

「オレが？」

オレに神の知り合いは、

「時雨や慧海達か？」

確かにあいつらは神になったから不老とか聞いたことはあるけど。

「そうじゃ。神というのは基本的に神格を持つ者。神格というのは受け渡しが可能じゃ。もちろん、奪うことも。その神格を持つ者は不老となり、神となる。

「なるほどね。慧海達がいなくなった空白の一年は」

「それに関することじゃろうな」

「でもさ、光輝はどうなるんだ？　あれは神殺しの神剣だろ？」

光輝が光り輝く時、それは神格の持ち主が相手の時は光り輝くのだが、あまり見たことがない。神剣に対して光り輝くのは神剣が神が死んだことによって生まれたから。

いろいろとわかればいろいろと納得出来る範囲が増えてくる。でも、光輝だけはわからない。

「そうじゃな。例えば、周は存在のエネルギーというのはどう思う？」

「存在エネルギー？　人一人ずつが生きていることによって歴史が動くと考えたらたった一人でも膨大なものになるぞ」

「そうじゃな。もし、その力と神の力が合わさったなら？」

「まさか」

神剣を生み出すほどの膨大な神のエネルギーと、世界を動かす莫大な存在エネルギーが合わさったなら、神剣の中でも飛び抜けている光輝が生まれた理由になる。

あれって通常時で身体能力強化があるのに、神格と相対すればさらに強力な効果を発揮する。

「精霊武器も同じ原理じゃ。あれは精霊本体。その力は神剣にも匹

敵するからの」

雪月花。

聞いたことがある。噂の中では氷属性で二番目に強い武器の名前でそんな名前があったはずだ。それが、冬華の手の中にある。

見ただけで凍えそうな刀。

「どちらも選ばないとしたなら？」

「そう。なら、選ばせてあげるわ」

「冬華ちゃん、私も手伝うよ」

「僕もかな」

音姫さんが光輝を抜き放つ。ギルバートさんはシュナイトフェザーを。

海道駿の顔が引きつる。確かに、この状況は顔が引きつるしかないだろう。オレだけを潰しに来たら、作戦が失敗し、代わりに獅子がやって来たって感じだしな。

『悠聖、落ち着いた？』

『突っ込んでも良かったのに』

優月とアルネウラの声が響き渡る。オレはそれを聞きながら安心したように頷いた。

悪いな、二人共。

『大丈夫大丈夫。私と悠聖と優月の三人ならどんな罠でも大丈夫だよ』

『ちょっとくらいは危険視しようよ』

あの時は頭に血が登ったが、今は大丈夫だ。冷静だ。

「雪月花があるのか。それさえわかれば十分だ」

「海道駿！」

背中を向けて逃げ出そうとした海道駿にエクシダ・フバルが声を上げる。その声に全員が振り向いた。

「お前は何を目指している！？　お前が望むのはたくさんの人を不幸にする災厄か！」

「災厄ではありませんよ。私はただ、新たな未来を求めて戦っているだけです」

「それがどうしてあの日のニューヨークに繋がるんだ！　あの日にどれだけたくさんの人が死んだと思っている！　周だって、あの日からずっと苦労しているんだぞ！」

「そうだな。子供にはわからないだろう。だが、言うなら、必要なことだ」

海道駿が姿を消す。最後の言葉にオレは拳を握りしめた。

「必要なことってなんだよ。誰かを殺すために必要なことってあるのかよ」

「悠聖君」

「音姫さんは悔しくないのかよ。あいつは、自分の息子の周ですら殺そうとしたんだぞ」

「今は、抑えて」

その音姫さんの言葉にオレは気づいた。音姫さんが拳を握りしめ、その拳から血が流れていることに。

「そうだね。今の駿は逃げる手段を豊富に作っている。今追いかけたところで追いつけないよ」

ギルバートさんの言う通りだ。海道駿は『悪夢の正夢（ナイトメア）』を持っている。追いかけるのは至難の業だろう。

だから、オレはシンクロを解いた。

「悠聖」

「悠聖」

アルネウラと優月が心配そうにオレの名前を呼ぶ。
オレはただ空を見上げるだけだった。
「明日よ」
冬華の声が響き渡る。
「明日、全てを終わらせばいいのよ。全てを」
「ああ、そうだな」
空を見上げていたオレは目を瞑り顔を戻した。そして、確かに頷く。
「明日だ。明日、全てが決まる」

静かに弓を下ろす。位置を見失った以上、当てることは不可能だ。
孝治は小さく息を吐いて展開していたリバースゼロを消し去った。
「孝治、どうやった？」
「逃げ切られた。確かに当てられないとは思っていたが」
「視界から消え去ったもんな。『悪夢の正夢（ナイトメア）』とはよく言ったもの

やん」

孝治が光の言葉に頷く。

孝治の視界には海道駿がまるで陽炎のように消え去ったのを見ていた。だからこそ、あれを当てられないとわかる。

「しかし、雪月花が。すごいものを持っているな」

足下にいる冬華が持つ雪月花を見ながら孝治は呟いた。光が不思議そうに首を傾げている。

雪月花の名前は有名だ。いや、神剣を持っている人からすれば有名というべきか。

「あらゆる武器の中で二番目に強い氷属性の武器だ。まあ、雪月花がフェンリルそのものなら納得出来るものだが」

フェンリルは氷属性の精霊で最上級の存在。アルネウラの方が精霊としての能力が強い（アルネウラが強すぎるだけ）が、フェンリルもふざけた性能を持っている。

狼だからか、スピードや力は文句なしだし、最上級のため単身での大規模戦闘に乱入出来る。さらにはその精霊武器はあの雪月花。

セイバー・ルカやディアボルガに続く戦闘能力と言っていいだろう。

「二番目ってことは、一番は？」

「オリジン」

その言葉は光にも聞き覚えがあった。

過去にいたとある男女の片方が持つ創世の剣の一つだ。氷属性というより炎属性＋氷属性みたいな能力である。

もう片方は究極神剣と呼ばれた文字通り究極の神剣を持っていた。究極とは言っても、相応の人物が使えばの話で、その片方は最弱神剣使いと呼ばれていたりもする。

「雪月花はそれに続くねんな。冬華はどうして今まで隠していたんだろ」

「雪月花と言えど、上位の神剣は暴走の危険性がある。それに、雪月花の場合はフェンリルが元だ。使いきれないならフェンリルの方が強い」

「なるほどな。それ以外にもありそうやけど、孝治はどうして私のレーヴァテインを無断で借りてたん？」

レーヴァテインをその手に取り出して笑みを浮かべながら光が孝治に近づく。孝治は微かに汗を流しながら一歩後ろに下がった。

光は笑みを浮かべたまま一歩を踏み出す。

「うちに内緒で勝手に持って行ったよな？」

「それは、緊急事態だ」

「緊急事態な」

光がレーヴァテインを構える。孝治もリバースゼロを取り出した。

「一度死にさらせ！！」

怒りによって加速した光の体は孝治の懐に入り込み打ち上げると、そのまま四方八方から放たれたレーヴァテインのコピーが孝治の体に直撃して爆発するのだった。

「揺れたか？」

オレは微かな振動を感じて外を見る。外では何の異常も見える範囲からは見当たらないので大丈夫だろう、多分。

オレが顔を戻すと、そこにはオレとアルにコーヒーを入れた正の姿があった。

正はいつの間にか都島高校の制服に着替えている。

「微かな感じはあったね。大丈夫だと思うよ」

「まあ、大丈夫だろうな。海道駿が出たとしても、狙うのは悠聖くらいだ。悠聖には冬華や音姉がいる」

この二人なら普通に悠聖を止めるだろう。

アルが正の入れたコーヒーが入ったカップを掴む。

「そうじゃな。しかし、相手も焦っているようじゃな。ここまで強力な武装のデータを残していくなど」

レヴァンティンが真っ先に取り出したのは相手の防御術式について。これは対浩平専用防御かつ、壊れやすいものらしい。

これなら、ドライブにならなくても破壊できそうだ。

「問題があるとするなら魔道具の方か。後一時間くらいか？」

「そうじゃな。レヴァンティンと言えど時間はかかるじゃろう」

オレは浩平のデバイスから情報を取り出しているレヴァンティンを指で撫でた。

「そう言えば、正はいいのか？」

「僕は大丈夫だよ。十分に体育祭は回ったからね。明日からは援軍としては」

「いや、正はもしもの時のために控えてくれ」

その言葉に正は一瞬だけキョトンとした。そして、納得したかのように頷く。

「了解したよ。隊長殿」

「周、いいのか？　正の戦闘能力は極めて高いぞ」

「切り札だよ。相手がどこまで切り札を握っているかわからない以上、オレ達も切り札を握っていないといけない。今ある四つのカード以外に切り札は欲しいだろ？」

正の戦闘能力は切り札と言っていい。だからこそ、オレは正を切り札として使う。

これが吉と出るか凶と出るかわからないけど、悪くならないことを祈ろう。

「切り札か。確かにありじゃな。じゃが、切り札が四つとは何じゃ？　ダークエルフ以外に切り札が」

「まあな」

だから、オレはアルにオレの切り札について語った。アルは一瞬だけキョトンとした後、そして、納得したように頷く。

今のを聞けば納得するしかないだろう。それは本当に切り札なのだから。

「そうじゃな。そなたらは確かに切り札じゃな」

「だろ。まあ、成功するかしないかは明日にならないとわからないし」

オレは窓から学園都市を見つめる。

「明日に、全てが決まるからな」

第百七十話　神剣の力（後書き）

ようやく、ようやく次の次から本番二日目運命の日です。ここまで来るのは本当に長かった。最初の予定ではこの話で終わる予定だったんですよね。最後は第何話まで行くのかわかりませんが。

次は幕間が入ります。

幕間　最後の夜（前書き）

第７６移動隊全員を出そうとしたら長くなっちゃいました。場面がよく変わります。

幕間　最後の夜

離陸する一機の輸送艦。滑走路の光をその背中に受けて漆黒に染まる大空に向けて飛び立つ。それを見送りながらメリルは小さく息を吐いた。

「間に合いましたね」

その言葉に隣にいたルーイとリマの二人が頷く。

「そうだな。ようやく、間に合った。アストラルルーラ専用装備一式が。本当にぎりぎりだった」

「今回はかなり技術部の皆さんに無茶を言いました。帰ったならしっかりとお礼を申し上げないといけませんね」

「その前に、僕達は勝たないといけない」

「二人共、もうすぐ夏とはいえ冷えますよ。明日のために早く戻りましょう」

メリルが頷く。だが、その視線は今日運ばれてきた一式が存在する倉庫に向いていた。

音界の技術部がメリルの意志と共に作り上げた最高傑作。悠人のエクスカリバーＺ１を人界の最高傑作とするなら、この装備によってアストラルルーラは最近ロールアウトされたばかりのアストラルシリーズを凌駕す性能を発揮するはず、の装備。

「ルーイ。お願いします。この学園都市を、愛する友と、愛する仲間と、愛する家族のいるこの学園都市をアストラルルーラで守りきってください」

「歌姫様の命ならば」

ルーイがその場に片膝をつく。リマも同じように片膝をついていた。

「リマも、ルーイと共に守ってください」

「歌姫様の言葉のままに」

二人の返事を聞いたメリルは頷く。頷いて空を見上げた。

その空にあるのは音界に帰っていく輸送艦。それを見上げながらメリルは小さく頷く。

「明日、全てが決まるのですね」

「心配？」

僕は隣から聞こえてきたルナの声に振り返った。ほとんど布団をかぶっているけど、その柔らかい肩は出ている。だから、僕は少しだけ頬を赤らめて頷いた。

「うん。心配、かな。もう明日なんだなって」

「大丈夫。悠人は強いもの。私だっているしお姉ちゃんやルーイだっている。あなたの頼りになる仲間達だっている。きっと大丈夫」

それでも心配なものは心配なのだ。今回、真柴隼人が関わっているから。

僕は震える手を握り締めた。そして、頷く。

「そうだね。でも、今回は今までと違うから。経験したことが少ない防衛戦。しかも、状況としては敵は中に入り込んでいる状況。心配になるよ」

「そう言えば、第７６移動隊って強襲や突撃が主体だったわね。だったら仕方ないか。大丈夫。海道周の作戦予知能力は本物よ。あいつが考えた通りにしていればきっと大丈夫だから」

「うん。僕は周さんを信じているから。周さんは本当に強いよ。何だってしようとする。だからこそ、僕は周さんに最大の信頼を置いている。大丈夫だよね。うん、大丈夫」

僕は窓の外を見つめた。そこにあるのは輸送艦が地上から出る光を受けて漆黒の大空を飛ぶ姿。

僕は布団の中でルナの手をギュッと握りしめる。少しでも不安を押し殺すかのように。

漆黒の大空を舞う輸送艦の姿。それを見ながらリリーナと鈴、そして、琴美の三人はエスペランサの甲板にいた。

第７６移動隊はすでにこの時間から待機状態だからだ。ただ、ほとんど自由時間な上にすぐに準備できる位置にいるなら完全に自由行動が許されている。

「あーあ。今頃、悠人はルナとしっぽりやっているんだろうな」

リリーナが小さく言葉を漏らす。その言葉に鈴は苦笑した。

「リリーナ、二人共恋人なんだから仕方ないよ」

「仕方ないで済ませられると思っているの？　私は無理。あの〇〇〇（ピー）め」

「それには本能に意外だったけど、どうしてあなた達もここにいるの？　あなた達の機体はメンテナンスが大変じゃないのかしら？」

琴美のアルケミストは基本的なＧＦＦナンバーと同じで整備にあまり時間がかからない。システム面は意味がわからないし、機体整備も意味がわからないの見る意味がない。だが、ソードウルフとイグジストアストラルは細かな整備が必要だった。イグジストアストラルはシステム面だけだが。

「こういう星が綺麗な時に整備なんてしていられないって」

リリーナの言葉に三人が空を見上げる。確かに、そこには星が輝く漆黒の大空があった。本来の学園都市なら考えられないが、体育祭

期間中は出来る限り光を抑えて夜空を楽しもうという風習があるのだが、この三人が知るわけがない。

「綺麗」

鈴が小さく言葉を漏らす。そんな二人をちらっと見た琴美は小さく息を吐く。

「いいわ。付き合ってあげる」

「ありがとう」

リリーナが空を見上げながら笑みを浮かべる。それを見た琴美は笑みを浮かべて、また空を見上げた。

「あっ、流れ星」

鈴の言葉が甲板に響き渡った。

「あっ、流れ星」

都の言葉にキーボードを叩いていた委員長が顔を上げる。しかし、見上げた先には流れ星なんてない。だから、委員長は小さく息を吐いた。

都がコーヒーを入れたカップを委員長の机に置く。

「願い事をしたかったですか？」

「いえ。そもそも、流れ星が見えてから三回のお願いなんて間に合いませんし」

「そうですね。でも、願うことに意味があるのですよ」

そう言いながら都は自分の入れたコーヒーに口を付ける。ちなみに、山ほど砂糖を入れていたりする。委員長も山ほど角砂糖とガムシロップ、ミルクを入れていた。

二人共、ただ単に目を覚ますためにコーヒーを飲んでいるだけなのだ。

「言葉に出せばそれは力となる、と聞いたことはありませんか？」

「言霊ですよね。でも、それは迷信では？」

「言霊というのは解釈が難しいですから。でも、祈りは魔法です。今まで祈ることによって様々な奇跡 g起きていました。ですから、流れ星が流れるまでに三回とお願いを祈るというものがあるのです」

「難しいからこその奇跡」

その言葉に都は頷いた。都は空を見上げる。そして、笑みを浮かべた。

「みんな、明日に向けて緊張しているはずです。だから、少しくらいは祈りをささげておきましょう。一つ一つの祈りは小さくても、

それら全てが合わさることによって力となるのですから」

エスペランサの艦橋の中にある椅子に二人並んで体を寄せ合って空を見上げている。

七葉と和樹の二人だ。二人はお互いに手を繋いで夜空を見ている。すでに輸送艦の姿は小さくなっている。

「かず君。かず君は明日が心配？」

「心配に決まっているだろ。俺はななや琴美さんみたいにどちらの戦闘をこなせるわけじゃないんだから。出来たとしても、リヴァイバーに乗ってラフレシアを撃っているだけだろ」

「かず君らしいね。私は心配かな。周兄はフュリアスの規模がわからないって言っていた。フュリアスでの戦闘は私も頑張らないとダメだから」

「そうだよな。ななには専用機があるんだよな。俺に出来ることは、ここで戦況を知らせるだけだ。俺にもっと力があれば」

すると、七葉が和樹の顔を覗き込みながら小さく首を横に振った。

「かず君には戦えないよ。かず君は人を殺す覚悟を持っていないから」

戦いというのは人を殺すかもしれないということだ。例え、『ＧＦ』のデバイスを使い、いくら殺す確率が低く設定しても、戦闘の余波で死ぬかもしれない。瓦礫が落ちてつぶされるかもしれないし、倒れた衝撃で頭を撃つかもしれない。

もしかしたら、殺すかもしれない状況で半端な覚悟で望むことはは許されない。

「悔しいじゃんか。ななや、周に孝治達が戦っているのによ」

「戦場は前線だけじゃないよ。ここだって大事な戦場。かず君達はここでみんなに戦況を知らせないといけない。それは、命綱だよ。フュリアス部隊に一つ一つ指示を出してみんなを誘導する。確かに前線じゃないけど、私達からすれば、そこも戦場なんだよ」

「なな」

「だから、胸を張って。私達は、頼りにしているから」

七葉が力強く和樹の背中を叩く。それに和樹は背筋を伸ばしながら苦笑した。

「そうだな」

そして、二人はそれを見上げる。寄り添うような双子星がないか探しながら。

「ねえ、悠聖」

空を見上げていたオレは冬華の声に顔を戻した。

オレの膝の上ではアルネウラと優月の二人が膝の上で座っている。

そんな二人の髪の毛を撫でながら冬華が笑みを浮かべる。

「悠聖は、明日が心配？」

「いや、全く」

その言葉に冬華は驚かない。多分、想定していたんだろうな。

「悠聖らしいわね」

むしろ、冬華は笑みを浮かべてる。オレらしいと言うのはわからないが、そもかく明日は勝負の時間だ。全てを守れるか、守れないか。それが決まる時間。

だけど、そこに不安はない。どうしてと尋ねられたらすぐに答えられる自信がある。

「一応、聞いておくわ。どうして？」

「頼れる仲間がいるのに不安になる材料もないだろ？」

オレは即答した。

周がいる。孝治がいる。浩平がいる。悠人がいる。俊也がいる。音

姫さんがいる。由姫ちゃんがいる。光がいる。都さんがいる。まあ、このまま続けて行けば大変なことになるから他にもたくさんの仲間がいる。

みんなそれぞれどこかに特化しているし、心配しないほど強い。だから、不安はない。

「一人なら不安だ。自分の力が未熟だと思っていても不安だろうな。でも、オレはそうは思わない。一人じゃない。オレの隣にはこんなにもたくさんの仲間がいるじゃないか」

そう言いながらオレは周囲を見渡した。そこにオレの大切な友がいる。

傲岸不遜が似合うディアボルガ。寡黙な剣士のセイバー・ルカ。姉のような存在のレクサス。猪突猛進のイグニス。実はおしゃべりなライガ。頼れる防御役のグラウ・ラゴス。吟遊詩人をやりだしたエルフィン。

そして、オレの大事なアルネウラ、優月、冬華。

「むしろ、負ける気がしないな。悪いが、周がいなくてもどうにかできそうだ」

「そうね」

冬華が自分の隣に座るフェンリルの体を撫でる。

それに、俊也もいる。俊也は慣れていないからか今は自宅で眠っているが空いたになれば大丈夫だろう。俊也もオレ達の仲間だし、あ

いつはオレの弟子だから。

「頑張りましょ」

「ああ」

オレは冬華の顔を見て笑みを浮かべた。

「空が綺麗だね」

その言葉に反応するのはエレノアの一人だけ。ベリエとアリエの双子は必死に図面とにらめっこをしていた。

エレノアの隣に立つ楓が片手にブラックレクイエムを持ちながら呟く。

「新月か。明日はほんの少しでも月が出ているのかな？」

「新月なら、よかったけど」

エレノアが自分のデバイスを確認しながら呟く。それに楓は不思議そうに首をかしげた。

「どうして？」

「新月は夜に最も明るい存在である月がない時。つまり、れおは一

般的に闇に属する存在の力を強化できるの。だから、私達にとって新月というのは特別な時だから。ベリエとアリエの術式にとってもありがたかったのに」

「あれ？　狭間の夜は？　あれは満月だったと思うけど」

楓の言葉は間違ってはいない。狭間の夜は確かに満月だった。だからこそ、エレノアは頷く。

「満月は全ての種族に魔力的加護を与える、簡単に言うなら満月はこの世界に魔力が満ちる時だから。ああゆる魔力が高まるから狭間の鬼の様な存在するだけで魔力を使う存在には有効な状況だから」

「なるほど。でも、満月だろうが新月だろうが関係ないと思うよ。私達はまた明日ここで空を見上げればいいのだから」

そう言いながら楓が両手を広げる。エレノアはそれを見ながら苦笑する。確かにそうなのだから。新月や満月関係なく、明日の夜になってそれを見上げればいい。そこには必ず月が存在する。

「そうだね」

エレノアは苦笑しながら周囲に消えるような音量で呟いた。でも、楓の耳にはしっかり聞こえるような声で。それに楓は頷く。明日、それを約束するように。

「孝治はさ、明日の作戦をどう思ってるん？」

その言葉に弓の手入れをしていた孝治は顔を上げた。思考するのは数瞬。

「周らしい作戦だ」

「確かに海道らしい作戦やねんやけど、なんというか今までと違うねんな」

「違う？」

孝治の疑問に光が頷く。

「今までの周やったら若干な突撃思考。どんな拠点防衛でも打って出るタイミングが存在したのに、今回そんな要素が見つからんねん。どちらかというと相手をこちらの作戦にはめるまで何の動きも見せないような感じ」

「確かにそうだな」

そのことに関しては孝治も思っていた。思っていたからこそ頷く。頷くが孝治はすぐに口を開く。

「だが、これはある意味最適の戦い方だ。今回は特にな」

「そうなんやけどな。海道が今までと違うから不安やねん。私の知っている海道と違うような気がして」

あの日からずっと戦場で見つめていたからこその言葉。幼馴染を心

配するような言葉。だが、孝治は笑みを浮かべて弓をその場に置いて後ろから光を抱きしめた。

光は顔を真っ赤にしてうつむく。

「大丈夫だ。あいつはすっとあいつだろう。確かにあいつは変わった。いい方向にな。今までのあいつは光の知るような周だった。でも、今は周らしい周の姿を出している。見守ろう。そして、戦おう。俺達に出来るのはそれくらいしかない」

「そうやな」

光は抱きしめられた孝治の手に自分の手を当てる。そして、優しくその手を握り締めた。

「これ」

リースが差し出した手の上には一つのデバイスが置かれていた。そのデバイスを浩平は手に取る。

「周達は何て言っていた？」

「相手の武器と防御のシステムは完全に理解できた。珍しく役に立ったな、だって」

「珍しくって、まあ、第７６移動隊とはあまり関わりあいがなかっ

たからな。しゃあないか。リースはすぐに戻らなくていいのか？」

「戻った方がいいの？」

不安そうな顔になったリースに浩平は笑みを浮かべて近づく。そして、リースを抱きしめて近くのベットに倒れ込んだ。

「本当はずっとそばにいたい。でも、俺達は単純にそうしていいような状況にいないからな。本当ならお前とずっと暮らしたい。今も、これからも。でも、俺達には俺達のやることがあるだろ？　明日も」

リースは頷く。孝治もリースも自分のやるべきことがわかっている。わかっているからこそ、ずっと一緒にいることを選ばない。

昔ならリースがずっと浩平の傍にいたかもしれないが、今ではそういうことは言わない。みんな成長しているのだから。

「明日が終わって明後日も終わったらさ、大和から休暇をもらっているんだ。だから、どこかに出かけないか。二人で、温泉旅行でも」

「呑気」

「決まりだな」

そう言いながらリースは笑みを浮かべる。それを見た浩平は頷いた。

浩平はカレンダーに〇をつける。そして、笑みを浮かべた。

「だからさ、頑張ろうぜ。明日と、明後日をよ」

その笑みは明後日があることを信じてる笑みだった。

「ようやく、明日じゃな」

アル・アジフが小さく笑みを浮かべながら頷く。そして、手に持っていた角を手に取り、

「亜紗、これ、詰みかけではないかの？」

『今気づいたの？』

亜紗は真剣に驚いていた。すでにアル・アジフの場にはまともな駒が残ったいない上に地味に囲まれているという状況だ。延命も難しい。

亜紗は涼しげな顔で持ち駒の一つである金を手に取っている。次の一手でトドメを差す気満々だった。

「これは見事だね」

「亜紗。やるね」

観客のアルトとリコの二人驚いたように亜紗を見ている。やはり、亜紗は涼しげな顔だ。

「な、なら、王手」

『はい』

王手を行った駒が一瞬で取られる。アル・アジフはまた手持ちの駒を動かすが一瞬にしてかすめ取られていた。

「投了」

「亜紗、強いんだ。あたしはチェスしか出来ないけど」

「僕も将棋は出来ないかな。中将棋は出来るけど」

『どうして出来るの？』

亜紗が不思議そうに首を傾げる。確かに、普通の将棋が出来ないのにさらに難しい将棋が出来るのはある意味おかしいが。

アルトは笑みを浮かべる。

「なら、今日はベッドで共、ごふっ」

隣にいたリコの肘がわき腹に食い込み数十ｃｍほどアルトの体を浮かび上がらせる。内臓に直撃響く一撃にアルトはその場にしゃがみ込んだ。

そんな様子を亜紗はクスクス見ている。

『相変わらずだね』

「あたしは相変わらずだからね」

「それにしても、呑気にこうしていていいのかの？」

再度、駒を新しく並べながらアル・アジフが呟く。

亜紗は静かに頷いてスケッチブックを開いた。

『心配？』

「多少はの。それほど心配しているわけではないぞ。ただ、明日は大きな戦いになるじゃろうし」

「そうだね。明日は学園都市全体を巻き込んだ戦いになる。僕とリコはエクシダ・フバルから離れられないし」

「周ちゃん達はあの海道駿を止めないといけない。でも、あたしは周ちゃんやあたし達が大丈夫だと確信しているけどね」

その言葉は自信満々だった。自信満々に言葉を紡ぐ。

「あたしは第７６移動隊の力を知っている。知っているからこそ、大丈夫。だって、今の第７６移動隊は第一特務より強いよ」

リコは自信満々に言葉を紡いだ。その言葉にアル・アジフは苦笑しながら頷いた。

「そうじゃな。我らは大丈夫じゃ」

それはまるで自分に言い聞かせるように。そして、アル・アジフは飛車の前にある歩を前に出した。

「「「いただきます」」」

オレの耳に三人の声が聞こえる。その声を聞きながらオレはまた小さく溜め息をついた。

「周は迷惑だったかな？」

その言葉にオレが振り向くと、煮物を食べている正と視線があった。その表情はどこか不安そうだ。

「迷惑じゃない。迷惑じゃないんだが、どうしてオレはご飯を食べられないのかなって悲しく思ってさ」

そう言いながら目の前にある書類の山を見つめる。

レヴァンティンが浩平のデバイスから取り出した戦闘データその全てだ。取り出せるだけ取り出したため、確認する作業だけでも徹夜は確定。

アルは今、亜紗やアルト達と一緒にエクシダ・フバルの護衛に回っているから一人で確認しないといけない。

「僕も手伝おうか？」

「正はお客さんなんだから大人しくすること。由姫と音姉が何も出

来ないのが悪いから」

その言葉に由姫と音姉の二人が同時に煮物を詰まらせた。煮物ばっかり食べているから。まあ、食卓にはご飯と味噌汁と多種多様な煮物しかないけど。

「けほっ、けほっ。お兄ちゃん。私達は出来ないからね」

「そうだよ。知らないことをしろって方が横暴じゃないかな？」

すかさず二人が反論して来るが、オレは溜め息で返した。

「知ろうとする努力はしたのか？」

二人が同時に視線を逸らす。まあ、そういうことなんだけどな。

「知ろうとする努力をしていないのに知らないと言うのは子供と同じだぞ。教えてもらってもわからないなら別だけど」

さすがにそれはどうしようもない。少しややこしいからこういうものが嫌いな人はわからないことが多い。まあ、最初から期待していなかったけど。

「それに、これだけは今日中にやっておきたいからな。相手の完全解析。せめて、神剣持ち以外全員のデバイスに内容をインストール出来るくらいに解析しないと」

「でも、弟くん。間に合うの？　デバイスのインストールは時間がかかるって聞くけど」

「それはおそらくプログラムインストールのことだね。ちょっとしたデータのインストールは内容によってはほんの短時間で上書き出来るよ。特に、戦闘データに関してはデバイスに拡張領域が存在するから簡単に加えられるよ」

「詳しいんですね」

由姫が驚いたように正に向かって言う。正は苦笑しながら自分のデバイスを取り出した。

「これでもデバイスを作ったことがあるからね」

デバイスを作ったことがあるならデバイスのことを細かく知っているのが普通だ。オレやアルもデバイスに関しては世界の技術者に引けを取らないと思っている。

まあ、レヴァンティンやアル・アジフ本体のサポートがあるからだけど。

オレは戦闘データの記録を流し読みする。

「まあ、ちゃんと解析出来ればいいんだけどな」

オレはそう溜め息をついて読み終わった書類を机の上に投げ捨てた。

「明日、だね」

「うん、明日」

夢の言葉に私は頷く。

夢は“義賊”の赤いローブを着ていた。だけど、フードは被っていない。

「メグは、大丈夫？」

「大丈夫、とは言えないかな。明日、私はお兄ちゃんを捕まえないといけないから。お兄ちゃんは強い。本当に強い。今の私がどうこうしたところで埋められないかもしれない差があるから」

「メグは、強い。私が、証明、するよ」

「ありがとう。お兄ちゃんはね、力も技もスピードもないのはわかっているの。でも、お兄ちゃんの扱う炎は私の扱う炎獄の御槍の炎とは根本的に違うみたいだから」

言うなら、お兄ちゃんの炎は悪魔の炎。対する私は優しい優しい炎と言うべきかな。でも、その威力には差がある。

例え、私が聖骸布（アストラル）を身につけていても、いくら炎獄の御槍の力を最大限にまで利用しても、その炎が直撃したなら燃え尽きるだろう。聖骸布（アストラル）で一回。だから、二回当たれば死ぬ。

「私は、思うけど、メグの炎は、優しい炎。守りたい人を、守るための、炎。だから、攻撃に向かない、と、思う」

そういう風に思われていたなんて思わなかった。確かに、そういう考え方もある。私の炎とお兄ちゃんの炎は攻撃するという意志で大きく違う。

もしかしたら、攻撃する意志があれば強くなるのかな？

「無理を、しないで。メグの炎は、私は好きだから」

「ありがとう。夢。じゃ、私はそろそろ戻るね。夢も頑張って」

「うん。メグも」

私は夢に手を振って歩き出す。

明日。明日に全てが決まる。全てが決まるから、私はお兄ちゃんを止めないといけない。

「炎獄の御槍、よろしくね。明日、全てを決めるから」

「やあ、慧海」

航空区画に響き渡る声。その声に話しかけられた慧海は笑みを浮かべた。

「ギルバートは今から帰るところか？」

「日本政府の方に向かうところ。君が来たということは」

慧海は頷いた。頷いて振り返る。

そこにはたくさんの人によって運ばれるたくさんのダンボール箱があった。

「ギリギリ間に合ったぜ。周が作り出した防衛専用の究極の防御デバイス『幻想展開（ファンタズマゴリア）』が」

幕間　最後の夜（後書き）

次からは本番二日目。長い長い二日目が始まります。

第百七十一話　二日目の朝

朝。

こういう時は鳥が鳴く音でもあればいいかもしれないが、そんな声は聞こえない。ただ、上ったばかりの朝日に目が染みる。

向かいのソファーの上では正が寝息を立てており、机の上には散乱した書類が散らばっている。

オレは小さく息を吐いてキーボードから手を離した。

「完成、だよな」

オレは小さく息を吐いて横になった。

『はい。戦闘データから考えた限り最適なデータが出ています。いやはや、まさか、こんな結果になるとは思いませんでしたね』

「まあ、な。このデータがあれば、どうにかなるか。つか、もう無理」

オレは目を瞑る。眠気はもうすぐそこまで来ていた。徹夜で完成させたのはいいもののほとんど不休でやっていたからか疲労が強い。

それに、最近の緊張も色々出てきたからな。

「レヴァンティン、ちょっとだけ眠るな。みんなにはそう言っておいてくれ」

『了解しました。マスターはゆっくり休んでください』

「後は頼んだ」

オレは眠気に身を任せる。これなら、ゆっくり眠れそうだ。

「眠った？」

周が寝息を立てた後、周の寝顔を覗き込んだ人物がレヴァンティンに訪ねる。

レヴァンティンはまるで頷くように一拍だけ間を開けた。

『はい。ぐっすり眠っていますよ』

「良かった。最近、お疲れだったし」

そう言いながらその人物が周に毛布をかける。その表情には心配が浮かんでいた。

『素子さんは今回のことに関わる予定はないのですか？』

その言葉に布団をかけた人物、白百合素子が頷いた。

『マスターからすれば凄まじい戦力になるのではと思いますが』

「確かに、私が加われば戦力としては申し分ないけど、私はただの体育教師。自衛のために力を使うことはあっても、子供の喧嘩には手を出さないと決めているの。レヴァンティンちゃんには悪いけどね」

『いえ。マスターは最初から素子さんが加わることは否定的でした。音姫さんからしてみれば、素子さんに加わって欲しかったようですが』

「音姫の剣はまだ未熟だから。白百合流最終二大奥義にようやくたどり着いたところだし」

そう言いながら素子はレヴァンティンを手に取り近くのテーブルに乗せた。そして、その前にある椅子に座る。まるで、大事な話があるかのように。

素子は小さく息を吐き、そして、頷いた。

「今、私達大人が関わってはいけない。関わっていいのは慧海君達海道家関係者だけ。だから、私達は関わらないってお父さんと決めているの」

『白百合の剣は悪用してはいけない、ということですか？』

「それもあるけど、今回は周君の試練だから。周君が由姫や音姫と協力してどこまで私達に成長した姿を見せられるか。今回の事件が終われば、周君が離れるような気がしてね」

そう言いながらどこか寂しげに笑みを浮かべた。

その表情にレヴァンティンは一瞬だけ間を空ける。

『そうですね。もしかしたら、マスターは離れるかもしれません。もし、マスターが考えている通りに時間が過ぎたなら、おそらくそうなるのでは』

「ふふっ。やっぱり。周君が決着をつけたら、その時にようやく、周君の戦いの一つが終わるから」

『ですが、新たな戦いが』

「わかっている。三人が次に何と戦おうとしているのか。だからこそ、私は手伝わない。これしきのことを乗り越えないとこれからの戦いに生き残ることなんて出来ないから」

周の最終的な戦いは世界の滅びを回避し、新たな未来を築くこと。それをするためにはここで止まっていていいわけがない。だからこそ、素子は手を出さない。

周達が、周達の手で決着をつけられないなら、それは滅びの回避なんて不可能だからだ。

本当なら素子は手を出したいだろう。だけど、出したいからこそ我慢する。本当に必要な時まで。

『いいお母さんですね』

「当たり前よ。私は、血が繋がっていない周君にも母親でいると決めたの。周君が本当の道を見つけるまで。ところで、聞き耳を立て

てないで起きたらどうかな？」

その言葉に正が起き上がる。まるで観念したような表情と共に正は立ち上がった。

「いつから気づいていたのかな？」

「最初から。私がここに座った時には起きていたでしょ？」

その言葉に正が諦めたように肩をすくめてそのまま素子の向かいの席まで歩いていく。

「さすがは白百合素子さん。やはり、白百合流の元最強は騙せないか」

「せーちゃんと呼ぶか、あーちゃんと呼ぶかどっちがいい？」

その言葉に正は目を見開いた。素子はニコニコしたまま正を見ている。

「どうして」

「私が母親だから」

まるでそれが全ての理由だと言うように言う素子。それにはさすがの正も観念するしかなかった。

小さく息を吐いて背筋を伸ばす。

「素子さん。一つ、聞いていいかな？」

「いいわよ」

「僕が将来しようとしていることには」

「大丈夫。必ず周君が助けてくれる。せーちゃんがしようとしていることは、周君が全力で止めるし、あなたが後に起きることは、必ず周君が助けてくれる。周君はね、まるで太陽なの」

二人の視線が周に向く。

「太陽。光り輝いているのもあるし、周君が周君であるための存在理由を証明し続けている。周君はね、みんなの希望なんだよ。周君を見た大人は全て、周君に期待している。それは、強さでも、知識でも、才能でも、運命でも、カリスマ性でもない。周君はただ、みんなという存在を明るく照らす太陽みたいな存在だから。音姫も由姫も、周君がいたから戦おうと思った。周君がいなかったら、今頃、私がまだ白百合流最強だったかな」

そう言いながら素子は正を見る。そして、納得したように笑みを浮かべた。

「うん。大丈夫。せーちゃんはまだ大丈夫。まだ、太陽を持っているよ」

「僕が？」

素子が頷く。まるで、絶対に正しいことを言っているかのように。

「周君は裏切らないよ。必ず、せーちゃんを助ける」

「素子さんは相変わらずだ」

正は笑みを浮かべた。まるで、素子がどういう人かわかっているとでも言うかのように。対する素子も笑っている。

そんな笑みを浮かべていた二人は同時に階段がある方向に視線を向けた。すると、階段から誰かが降りてくる音がする。そして、階段から音姫の顔がひょっこりと飛び出す。

「あれ？　弟くんは？」

「寝ているわよ」

「そうなんだ」

音姫がそのまま一階に降りてくる。すでに服装は『ＧＦ』の戦闘服に着替えいた。色は銀色。ギルバートと同じ色の戦闘服。

それに気づいた素子が不思議そうに首を傾げる。

「新しい戦闘服？」

「うん。今回のために弟くんが作った新しい第７６移動隊専用ね戦闘服だよ」

そう言いながら音姫はその場で一回転する。さすがに戦闘服なのでスカートではないが、一回転したからといって何も起こらないが。

だが、どうして銀にしたか何となく見当がつく素子は小さく頷いた。

「似合っているわよ」

「ありがとう。私も弟くんらしさが出ていて好きだから」

「銀、だからね。銀には魔除けの意味がある。魔除け、厄除け。周が君達に望むことを端的に表した戦闘服だね」

「うん。正はどうするの？　戦いには」

正は静かに首を横に振る。

「僕は観客だよ。見ているだけしかしない。でも、周が望むなら僕は手伝うよ。全ての力を使ってでも君達を助ける」

「弟くんは絶対にノーって言うよね」

わかりきったことに音姫は小さく溜め息をついた。そして、正の隣に座る。

「二人共、本当に気をつけてね。お母さんも正も強いから大丈夫だと思うけど、怪我はしないように。無理もしないように」

「音姫は心配性ね。私は大丈夫よ。今でも熊の群れなら素手で倒せるし」

「そう言うのが心配なんだから」

呆れたように言うが、その顔に浮かんでいるのは笑み。その笑みを見ながら正が苦笑する。

「素子さんは、やっぱり素子さんだね」

その声はどこか懐かしそうに部屋の中に響いた。

第百七十二話　一歩手前

炎獄の御槍が空を切り裂く。そして、振り回された炎獄の御槍が地面に叩きつけられる。動きを今まで見ていたらわかるが、全体的に速度が上がっていた。

魔力負荷を完全に解いたのだろう。今頃、メグの体はかなり軽いに違いない。

「まあ、それくらいなら普通に戦えると思う。動きは悪くないし」

「そう？　私もかなり調子が良くて、もしかしたら、って思うけど」

「調子がいいのは二種類あるからな。悪い方でないことを祈る」

メグは頷く。

そういうことが最初からわかっている人は本当にありがたう。体調がいいのは全ていいことなのだが、嵐の前の静けさという言葉があるように、重大な怪我をする前は調子がいいことが多い。

オレは体験したことがないのでそういう状況がわからない（レヴァンティンがいつもチェックしているので考えなくていい）が、戦場では何回も見たことがある。

戦場でそんなことになれば命取りだ。

「私の体は大体わかっている。今の状況は体の調子が一番いい調子だから。魔術もかなり調子がいいし」

「だったら、オレ達が教えた魔術は使えるのか？」

「すでにストックはしているし、何回も練習したよ。合成魔術も可能だった」

合成魔術を教えたのはある意味これからのこと、この体育祭が終わってからのことなのだが。多分、この体育祭が終わったら第７６移動隊のＡランク又はＡＡランクの面々は確実にＳランク昇進になるだろう。だからこその合成魔術。

「合成魔術は難しいから気をつけろよ」

「わかってる。私なんかよりも周は大丈夫？　周は過去を断ち切るための戦いなんでしょ？」

「まあな」

相手は親父とお袋。あの日、あの『赤のクリスマス』のニューヨークで起きたオレの戦いの始まり。全ての始まりの過去を断ち切るための戦い。

親父のことは慧海や時雨から耳が腐るほど聞いた。だから、この作戦で大丈夫なはずだ。

「自分に出来る事を成し遂げる。それ以外に何が出来るかなんてない。オレはただ、親父とお袋を倒すことだけに全神経をつぎ込むんだ」

今までだったならオレが全体的な指揮をしていただろう。でも、今

回ばかりは無理だ。組織体系が大きすぎる上に、避難の誘導にも人員を割かないといけない。だから、手を出す場所が限られている。

「出来る事、か。うん、周らしいね。私も、お兄ちゃんを止めないと。止めて、絶対に連れ戻す」

「そうだな。全てが成功すればいいけど」

「お前が心配とは、珍しいな。お前は自分の作戦に自信を持っていたはずだが？」

気配がないのに後ろからかかる声。オレは振り返りながら頷いた。

「北村信吾に関してはな。メグの炎を超える炎。はっきり言って、危険以外の何ものでもない」

メグの炎を纏った姿は見たことがあるが、あの時の炎に対する耐久性は極めて高い。いや、極めてというのは少し語弊がある。言うなら、神剣以上の存在による炎で無ければ傷つけることは難しいだろう。試すことはできないが。

振り返った先にいる孝治が同意するように頷いた。

「最悪、殺すことも考えておいた方がいいな」

「わかっています。孝治さんに言われなくても今までの戦いでお兄ちゃんがそこまで甘いはずがないのはわかっていますから。一縷の望みも無かったなら、私はお兄ちゃんを殺す。そうしないと、たくさんの人が死ぬと思いますし」

どうやらわかっているようだ。メグと北村信吾の決定的な違いが。

「お兄ちゃんの炎は人が操る炎じゃない。多分、何か別の存在の炎を借りていると思う。そうじゃなかったら、あそこまで炎は出せないし、失ったはずの腕や足も戻っていない」

「見当さえ付けばやりようはあるんだけどな。孝治は何かないか？」

「俺に聞くか？　そういうことはお前かアル・アジフだろ」

「そうなんだけど、今回だけはわからないんだよな。それに、あの炎は怖い感じがするんだ」

オレの言葉に二人が不思議そうに首をかしげる。まあ、仕方ない。この感じだけはオレ特有のものだとはわかっているから。

「この感覚はオレだけってのはわかっているんだ。ただ、恐ろしく濃い気配、というか、なんだろう、表現が出来ない」

感覚はある。でも、言葉に出来ない。

それは、アルを失いかけたことによる恐怖でもなく、炎によってファンタズマゴリア自体が一瞬で破壊されたことにも起因しない。言うなら、根源的な恐怖。体の奥底に染みついた恐怖。

これは、まるで、

「『赤のクリスマス』？」

考えられるのはそれだけだ。それだけのはずなのに、ありえないと

いう考えが思いつかない。

オレはいつの間にか地面を向いていた顔を上げた。心配する孝治とばっちり視線が合う。

「男とあっても嬉しくないな」

「同感だ。後ろを向け」

振り向いた先にいるのはメグ。メグは十分に美少女だから癒されるって、

「違うから。あの炎を見ていたら、まるで『赤のクリスマス』を思い出すんだ」

「『赤のクルスマス』か。ついに頭の方も狂いだしたか」

「ここは怒っていいよな」

オレは小さくため息をつく。

「ふーん。周、『赤のクリスマス』で、どうしてニューヨークの都市が壊滅したの？　不思議に思っているんだけど、都市一つが炎に呑みこまれるって考えられないなって」

「そりゃ、親父達がアリエル・ロワソ達の作戦に」

ちょっと待て。今までアリエル・ロワソの口から聞く前はアリエル・ロワソ達によってされたと思い込んでいた。でも、よくよく考えてみるとおかしい。

メグの疑問はどのような方法だったらニューヨークの都市全てを破壊出来たのか、だ。それは純粋な疑問。オレの思いついたこととは似ているが違う。むしろ、ニューヨークの都市をどうすればあそこまで壊滅させられたかだ。

幾ら、他の世界各国で行われた方法を使っても、ニューヨークを破壊するには理論上、いくら最強の魔術師が障壁魔術を展開していても、その障壁魔術すらも破壊されるような威力の爆発が数回起きてもおかしくはない。どれだけ効率よく爆発させたところで人によってほんのコンマ数秒単位で魔術の発動が可能な人だっている。そんな人も巻き込むなら、かなりの威力が必要だ。

今までの知識を総動員して考えられることはただ一つ。その確認の連絡を取れるのは一人だけ。今、どこにいるかわからないけど。

「三人そろって辛気臭い顔をしているわね。当日なんだからもっと自信満々でいたら？」

ちょうどいた。不思議そうな顔で近付いてくる冬華。オレは冬華に走り寄る。

「な、何？」

「すぐさまアリエル・ロワソに連絡を取れるか？」

「アリエル・ロワソ様に？　通信機があれば。今、持っていなくて」

オレは自分の通信機を冬華に渡した。冬華は通信機にデバイスを渡し、アリエル・ロワソに連絡をかける。コールは数回。でも、オレ

からすれば本当に長い時間だった。

『何か緊急連絡かな？』

アリエル・ロワソの声にオレは通信機をひったくる。

「アリエル・ロワソか？　オレだ。海道周だ」

『君が冬華のデバイスからかけてくるとはよっぽどの緊急事態の用だね。私に何か用かな？』

「お前がニューヨークを狙った時の爆弾の量は？」

一瞬の間。アリエル・ロワソは考えているのだろう。そして、その一瞬の後に答えが返ってくる。

『ニューヨークを最大でコンマの後に0は四つほど続いた後に3の数字がつくほどの大きさかな。ただ、それは最大攻撃面積の話になるから、建物が乱立していたあの年ではそれより0がさらに増えると思うよ』

「やっぱりか。なるほどね。あの日にあの場にいたお前に質問だが、あの炎は普通の炎か？」

多分、アリエル・ロワソなら答えを出すはずだ。

『違う』

オレは帰ってきた言葉に笑みを浮かべた。これで、かなりのパーツが揃っていく。

『おそらく、アル・アジフなら知っていると私は思うよ。アル・アジフに、再生を司る炎について尋ねると言い。そろそろ空港が近いから切るよ。君達に、幸運を』

その言葉と共に通信が切れた。オレは小さく息を吐いてデバイスを冬華に返す。

「理由、説明してもらえるかしら？」

その表情は怒っている。でも、その気持ちはわかるけど、今回だけは許して欲しい。

「そうだな。とりあえず、駐在所に戻ろう。最悪の結果なら、冬華、お前の力が必要だ」

第百七十三話　再生を司る炎

再生を司る炎と言われれば何を連想するか。そんなもの、簡単だ。

「フェニックスだろ？」

アル・アジフにそのことを尋ねた周にオレは言う。

「フェニックス？」

対する周は不思議そうに首を傾げた。確かに、普通なら聞き覚えがないだろうな。

「俊也も知っているだろ？」

オレは後ろにいる俊也に話しかけた。が、俊也は委員長と横並びに座って話しこんでいるのでこっちの話は聞いていないだろう。

オレは小さくため息をついて顔を戻す。アル・アジフは懸命に自らの魔術書であるアル・アジフを開いていた。あれって魔術が書いているだけじゃなくて歴史も書いているらしいな。周の話によると、１ページのはずなのに、１ページで数百にも及ぶページを見たって言っていたよな。

「フェニックスは精霊界の魔王と呼ばれている存在だな。まあ、精霊について詳しく勉強している奴なら知っているけど、周は知らなくてもおかしくないな」

「そうみたいじゃな。フェニックス。再生を司る炎を持った精霊と

して最上級精霊じゃった。じゃが、過去にフェニックス自体が精霊界で反乱を起こし、精霊王に刃向ったことから精霊界から追放された存在。確かに、精霊の話じゃが、かなり深いデータじゃぞ」

アル・アジフが魔術書アル・アジフを閉じながらオレの顔を見てくる。

「そなたが知っていることが驚くなくらいにの」

「なんなら、アルネウラでも」

『悠聖の話は事実だからね』

オレが呼び出すより早くアルネウラが出てくる。いつの間にか優月も出ているし。

これで他の奴らも出てくるとかないよな。

「お母様からよく聞きますが、フェニックスというのは元精霊王の血筋だそうです。ですから、気高き存在として崇められ、その日まで再生を司る炎の存在として立派にいたと聞いています」

『でもね、フェニックスが精霊王に戻りたいとか言い出して、精霊王が怒ったんだと思う。そこの話はちょっとわからないかな。私は優月は精霊の中でもまだ若い方の分類だし』

「なるほどね。簡易召喚」

オレは魔術陣を展開する。そして、その上から召喚魔術を展開した。

「ディアボルガ」

その言葉と共にディアボルガが現れる。その姿は全長２０ｃｍほどにデフォルメされた可愛らしい姿。これだけを見ればマスコットして通用するんだよな。目がかなりというか、不自然なまでに大きいから。

現に、アルネウラに優月、冬華までもが視線を釘付けにしているし。

『何か用か？』

ディアボルガがつぶらな瞳をオレに向けてくる。隣の優月が叫びたそうになっているのを我慢しているし。

「お前なら知っていると思ってな。フェニックスについて」

『あの焼き鳥小僧か。奴がこの世界に顕現してからすでに１２年ほどたっているが』

「ちょっと待て。１２月２５日じゃないだろうな？」

周がこめかみを押さえながら尋ねる。すると、ディアボルガはその小さな体で精一杯胸を張りながら腕を組み、つぶらな瞳で頷いた。

ある意味、最後の全てが台無しだよな。

『確か、『赤のクリスマス』があった時だな。場所は、あめりか、の、にゅーよーく、と言ったか』

とりあえず、ディアボルガは横文字に弱いみたいだな。

周の体がプルプル震えている。オレからすれば『赤のクリスマス』のニューヨークでフェニックスが出ただなんて。本音を言って、その場にいたかった。

再生の炎を司るフェニックスは精霊の中でも規格外の存在。そんなやつとは出会ってみたい。

『些細なことがどうか』

「全く些細なことじゃないからな。ったく、悠聖」

オレを見る周の目は真剣。それを見たオレは嫌な予感に囚われる。

「フェニックスの対抗策は？」

「ディアボルガは？」

『あいつの炎は精霊の中でも特別だ。対抗するには最上級精霊が必要だろう。この中では、一番適任なのはフェンリルだな』

確かに、フェニックスとなればフェンリル並みの能力がないといけない。フェニックスは不死鳥なのだから。

「やっぱりフェンリルか。作戦変更だ。みんな、聞いてくれ」

周の言葉にその場にいる全員の視線が周に向く。

「北村信吾とはメグが戦う予定だったが、北村信吾とは冬華が戦う」

「待って！」

その場に座っていたメグが立ち上がる。必死な形相で周を見ている。

メグからしたら北村信吾を捕まえたいのは自分自身だろう。だから、他の人がやるとなれば必ず反論する。

だが、それは周もわかっているはずだ。そもそも、北村信吾と周を当てたのは周自身だから。

「お兄ちゃんとは私が戦う。ううん、戦わなくちゃいけないの。だから、私に」

「駄目だ。北村信吾はフェニックスを宿している」

なるほどね。そういうことか。

「じゃが、あやつの炎は違っていたと思うぞ。あれは精霊の炎ではなくもっと別の炎。全てを焼き尽くす意志を持った炎じゃ」

アル・アジフからしたら一回焼き尽くされたからわかるのだろう。オレは直接あっていないがなんとなくはわかるけど、精霊の炎は焼き尽くす能力は少ない。だから、精霊の炎ではないというのはわかる。

それは周も同じだろう。実際に頷いているし。

「オレも一瞬は思ったんだ。だけど、北村信吾は行方不明になったはずの時に腕と足の片方ずつは見つかっているんだ。だけど、それが再生している。それに、あの炎はありえない。神剣を超える炎は

神剣か精霊武器のみ。意味がわかるな？」

そうなると候補に挙がるのがフェニックスくらいしか残らない。

「なるほどね。つまりは、冬華の雪月花クラスじゃないとフェニックスへの対抗策は無しに等しい、ってわけだな」

オレは周の考えに頷く。だって、フェニックスは再生を司る存在。それがどれだけおかしい存在かは周も名前から類推しているはずだ。言うなら不死身。そんな敵を相手にただの神剣使いであるメグが対抗できるわけがない。

「そういうことだ。冬華は本来、お前と行動してもらうつもりだったけど、北村信吾をどうにかしないことには何もできない。だから、メグには悪いが北村信吾とは冬華が戦ってもらう」

「少し待ちなさい。確かに、あなたの考えは正しいわ。フェニックスならフェンリルの力で何とか抑え込めるかもしれない。でも、フェニックスの炎は質が悪いわよ。それだけはフェンリルでも止められない」

問題点を上げるならそこなんだよな。再生を司る炎の力は極めて強い。再生だけがフェニックスの能力ではない。それだけで最上級精霊になれるわけがない。その炎をどうにかしないことには戦えない。もちろん、オレでも難しいだろう。

アルネウラの力なら確かにどちらかは抑えられる。でも、どちらかはだ。たった一人を相手に二人の戦力を割けるわけがない。

「じゃ、悠聖と冬華の二人で対処してもらうと言う方針で」

「本当に割くのかよ！　戦線ボロボロになるぞ！」

オレが地上の指揮官だったはずだ。オレが抜けたらだれが入る？
音姫さんは無理だし、孝治は周について行くはずなのに。

「そりゃ、配置後退だろ。孝治を地上に上げて、突入班にメグを入れる。メグの実力はまだまだだけど、十分に使える戦力にはなっているからな」

空いた口が塞がらない。確かに、メグは一般兵の中で考えればかなり強い。いや、かなりじゃないな。めちゃくちゃ強い。だが、その強さは世界トップクラスに通用する実力じゃない。最悪、足手まといになる。

「ちょっと待って。私が突入班に入ったら絶対に足手まといになる」

「なる」

「なるわね」

リースと琴美さんの二人がって、いつの間にかメンバー全員が集まっているし。

「否定してくれないのはそれはそれだ悲しいけど、ともかく、私の実力じゃ」

「大丈夫だ。メグは基本的に支援。前はオレと亜紗が切り開く。それに、メグの実力はみんなが思っているほど弱いわけじゃないぜ」

そう言いながら周は笑みを浮かべる。

「実力的にSランクを名乗っても恥ずかしくないくらいにな」

第百七十四話　新たな勢力

作戦が変わった。そのことに関しては異論を挟みたくないし、周の考えが正しいとわかっている。

あの炎は普通の炎じゃないし、普通の炎では対抗出来ない。それでも、私は、

「私は、お兄ちゃんを止めたかったな」

手の中にある炎獄の御槍を見ながら呟く。悠聖さんと冬華さん。第７６移動隊のコンビの中では多彩なバリエーションを持つ悠聖さんとあらゆる対応が可能な冬華さんが組み合わさった第７６移動隊三強の一角。

ちなみに、他に強いコンビは周と孝治さん。音姫さんと由姫だ。

「というか、今までよりも厳しい任務になっているのはどうかと思うけど」

私は小さく溜め息をついて炎獄の御槍をまるで握り潰すように炎獄の御槍を持つ右腕に力を入れる。すると、炎獄の御槍が赤い粒子となって私の手の甲に痣となって消える。

これは神剣の持ち主にしか見えない痣。時音で散々確認したから大体はわかっている。

神剣を取り出す際はただ名前を呼ぶだけ。それだけで炎獄の御槍は現れる。もちろん、遠く離れていても。

「はぁ、せめて、フェニックスをどうにか出来たらな」

フェニックスがどういう性能かはあの後悠聖さんがみんなに講義していた。

炎属性の最上級精霊の名の通り、その威力は極めて高い。だけど、一番の特徴はその炎よりも再生の力。

体の再生だけではなく、魔力が減っても再生する最初から最後まで全力全開（フルドライブ）が可能な精霊。それがフェニックスらしい。

最大熱量は単純計算で炎獄の御槍の数十倍。ただ、炎獄の御槍の力を私は使いきれていないからそうなっているらしいけど。

今のままじゃ勝負にならない。それはわかっている。わかっているけど、やっぱり、悔しい。

「強くなったはずなのに」

第７６移動隊に入る前と比べたら格段に強くなった。桁違いに強くなった。でも、そんな力でも、まだまだ及ばない。化け物のような相手と戦うにはまだまだ足りない。

どこまで目指せばいいかわからない。どこが目的地かわからない。

「誰か、道を指し示してよ」

「なーに、辛気臭い顔をしてんだよ」

その言葉と共に誰かが迫る。私はとっさに反応して炎獄の御槍を取り出しながらその穂先をその人物に向けた。

炎獄の御槍の穂先はハトの額に突き刺さる寸前で止まっている。

「うひょー、声をかけただけで良かったぜ」

「お前は俺様を殺すつもりか！？」

振り向いた先にいるのは健さんにハト、ワカメ、真人に一誠がいる。いつもの五人衆だけど、最近は忙しすぎて久しぶりに会うような感覚だ。

「ハトならいいや」

私は炎獄の御槍を痣に戻す。

「いいやじゃねえよ！　危うく、俺様の額が裂けるところだったじゃないか！」

「まあまあ。悪気があったのはこっちなんだから、我慢我慢」

怒り出したハトを真人がなだめる。そんな光景を見ながら私は小さく溜め息をついた。

「はぁ、私の悩みを救ってくれる白馬の王子様でもいたらな」

「白馬の王子様か。メグの異性の好みは白馬だな。メモメモっと」

「明らかにバカにしか聞こえない発言ですね」

「わかりきったことだ」

健さんの発言にワカメと一誠が呆れたように声を出す。

私は小さく溜め息をついて尋ねた。

「何の用？」

「冷たいなー。最近メグが忙しくてなかなか出会ってないから寂しいんだよ」

「寂しいのあなただけです」

「賛成だな」

「俺様はお前ら二人が冷たい気がしてきた」

「僕も」

そのやり取りに私は少しだけ苦笑する。

「元気づけてくれるんだ。ありがとう。でも、大丈夫。すぐに戻るから」

「信用なんねーよ。今のメグは死相が出てるぜ」

「いやいやいや、健さんそんなのわからないよね！」

「じゃ、真人だったらわかるのかよ」

「わかるわけないじゃない！　常識的に考えてよ！　常考だよ！　ＪＫだよ！」

やっぱり、この五人はいてて楽しいな。私は笑みを浮かべながらそう思った。

「ありがとう。そう言えば、ウェイトリフティング」

そこまで言った瞬間、ハトとワカメの体が震えだした。その震え方は尋常ではなく、身に染み着いた恐怖が襲いかかっているような感じだ。

私はそれを一歩引きながら顔をひきつらせる。

「あー、僕もその場にいたんだけどね、悪夢だったな」

真人ですら遠い目をしている。

何が起きたのか聞きたくなってきた。

「何が起きたの？」

私は純粋な疑問を投げかける。だが、返ってきたのは別の方向だった。

「準決勝で相手方のチーム二人が二人に愛の告白。二人が本気で迫ってきたから二人は本気で逃走。結果、不戦敗」

「言うな！　言わないでくれー！！」

「聞きたくない聞きたくない聞きたくない聞きたくない聞きたくない聞きたくない」

二人が壊れだした。私は声のした方を振り向く。

「時音、と、どなた？」

「ヤッホー。今にも心中しそうな顔をしていたからやってきたよ。こっちはヒメヒメ」

「誰がヒメヒメよ。海道姫子よ。海道周の親戚」

「海道宗家トップ」

驚き言葉が私の耳に入る。この声は一誠からだろう。でも、驚きの中に二種類あったような気がする。

でも、何だろう。嫌な予感がする。

「ヒメヒメは私の友達なんだけど、海道周に話があるらしいから海道周がいそうなところに。メグは知らない？」

「連絡を取れば見つかると思う。ちょっと待ってて」

デバイスに通信機を繋いですぐに周に連絡を取ろうとする。

コールは一瞬、すぐさまコールが途切れる。

『今現在、海道周は忙しいので代わりにレヴァンティンが伝言を受

け付けます』

「レヴァンティン？　私、メグ」

『メグさんでしたか。マスターは手が離せないので伝言を受け付けますよ』

「うん。えっとね、海道姫子が周に会いに来たってことを」

『なるほど。わかりました。マスターは駐在所にいるのでそこまで案内してもらえますか？』

「わかった」

その言葉と共に通信が途切れる。私はデバイスから通信機との配線を外した。今の私は予備だから抜け出しても大丈夫だ。

私は小さく息を吐く。

「じゃあ、案内するからついて来て」

「いいのか？　お前はここの警備じゃないのか？」

一誠の言葉に私は頷く。

「この会場の中だと私は予備だから。第７６移動隊は今日は予備のメンバーとかが多いかな」

「なるほど」

その頷きに私は微かに目を細めようとして止めた。気づかれるのがわかっているからだ。

今ここで、反応すべきじゃないと、今までの経験がそう言っている。

「だから、早めに行って、早めに用事を済ませようよ。時音の知り合いなら私とも友達だしね」

「そうね。じゃ、案内してもらえる？」

海道姫子の言葉に私は頷き歩き出す。

一誠達の反応が少しおかしかった。海道姫子の名前を聞いただけで海道宗家トップと気づいた。

普通はこんなに若い女の子が、あの海道宗家トップなわけがない。それに、あの反応は半信半疑ではなく、わかっていての言葉。

胸騒ぎがする。

「姫子さんは」

「わかった。姫子はどうして周に？」

「姫子でいい。さんで付けられるのは海道家の中で十分だから」

私がそう尋ねると、姫子はどこからか、多分、虚空から、紙袋を取り出してそれを軽く掲げていた。

届け物のようだ。

「海道宗家の倉庫で見つかったものだけど、過去のデバイスらしくて周に調べてもらいたいの。忙しいのは重々に承知しているし、本当ならこの日から外すべきだったけど」

姫子が一瞬だけ時音を見た。時音はそれに気づいていない。

多分、姫子にも今日のことは伝わっているのだろう。一瞬だけ時音を見たのは私に対する確認。だから、私は答える。

「体育祭はどこも忙しいから」

「そう。そうね。まあ、久しぶりにあのサナダムシの顔を見られると思うと、嫌がらせのかいがあるかな」

「サナダムシ？」

「海道周のこと」

私の疑問に姫子が笑みを浮かべて答える。それは、周を信頼しているということだ。

「こんな時期にこんなデバイスを渡せばてんてこ舞いになるしね」

「ヒメヒメって案外腹黒いからね。総附高だと常にお嬢様だけど」

「実際にお嬢様だから。ともかく、私はこの海道家の秘宝を」

その瞬間、私の視界の隅で誰かが動いた。そして、何かが煌めく。

すかさず炎獄の御槍を取り出して煌めく何かを弾きながら姫子を私の背後に動かした。その瞬間には炎獄の御槍は消している。

「今のは」

私は周囲を見渡す。周囲におかしな気配はないようだ。今のは一体。

「狙いは海道家の秘宝みたいね」

その言葉に私は振り返る。そこには呆れた表情の姫子の姿。

「本当、海道宗家は暇人の集まりね」

第百七十四話　新たな勢力（後書き）

後から気づいたことですが、いつの間にやら３０００分越えていたんですね。ここまで約１０ヶ月。短い用で長かったです。問題は、全九章と言っていながら未だに第二章が終わらないこの作品がどこまでの文字数に到達するのかですが、第四章が終わるころには６００分は越えて行きたいですね。それを越えそうな気もしないわけではないですが。

第百七十五話　白百合家の秘宝

「はい」

オレの目の前に差し出されるのは一つのデバイス。いや。ただのデバイスじゃない。これは装着型のデバイスだ。

デバイスのコアである丸い球体（見た目はそう見えるだけ）はまるで板のようなものにくっ付いている。

これは他のデバイスに装着するためのデバイスだが、使い道がほとんど無いため絶滅しかけだったような。

「これは何だ？」

オレはそれを差し出した相手に尋ねた。

海道姫子。

海道家宗家トップで今忙しいはずなのにオレにデバイスを差し出している。

「拾い物？」

「叩き潰して不燃ゴミに出しておけ」

それがデバイスのゴミの出し方だ。データを全部消してからリサイクルに出すのもありだけど、拾い物は無差別テロ（デバイスウイルスによる）の可能性があるから一番いい。

オレは小さく溜め息をついて海道姫子を見る。

「本題は？」

オレは周囲を一瞬だけ探知してから尋ねた。時間が時間だから盗聴の危険性は高いはずなのに気配はない。

「ようやく宗家の足取りが掴めたの。だから、海道家の中で自由に動けて戦力にもなる私が来たってわけ」

「いやいや、宗家トップが自由に動ける時点でおかしいよな」

「これからの海道家は分家が中心だから、極力私を排除してもらっているだけ。仕事は一応あるわよ」

「わかってる」

今の海道家は本当に新しくなっているからな。海道家の一員としては本当に嬉しいことでもある。

「で、宗家は？」

「国連よ」

その言葉にオレは小さく溜め息をついた。ある意味最悪なところで足取りが掴めてしまった。まあ、罠の可能性はあるが、今回ばかりはそうじゃないだろう。

「これまた厄介なところに。つまり、お前は海道家の戦力としてや

ってきたと認識していいよな？」

「そのつもりでいいわ。これでも戦闘訓練は一応は行っているから。まあ、第７６移動隊の中だと足手まといだけど」

「いや、作戦を知っている面々が少ない以上、作戦を知っている面々が手伝ってくれるならありがたいものだし。歓迎するさ。まあ、ついでにこれを持ってくるとは思わなかったけど」

オレは小さく溜め息をついて装着型デバイスを手に取る。

この手のものはかなりの重さがあるはずなのだが、この装着型デバイスに関してはかなり軽いというべきか。そもそも、装着型デバイスは専用の武器が無ければ付けられないのに。

「で、これはどうすればいい？」

「判断に困っているのよ。海道家の集積デバイスで調べようとしたら集積デバイス自体が機能停止にされて、海道家縁の研究所に持っていっても同じ結果になって」

その言葉にオレは驚いていた。集積デバイスが機能停止になるのは珍しい。集積デバイス自体が攻撃を受けるか許容を超えるデータを解析するかのどちらかだ。

装着型デバイスなら許容量はかなり高いが、集積デバイスには及ばない。つまり、攻撃を受けたということか。

オレはレヴァンティンを取り出した。

「レヴァンティン、解析を頼めるか？」

『わかりました。抗体プログラムは数億パターン準備しているので大丈夫だと思います』

数億パターンというところで何か言いたい気分はあるが、レヴァンティンとしてはそれくらい準備していないと不安なのだろう。

相手は集積デバイス以上とも言えるデバイス。通常のアクセサリー型デバイスと違い、装着型デバイスは容量や処理速度は同一規格で作れば装着型デバイスの方が上を行く。

オレはレヴァンティンを装着型デバイスと繋げた。

「レヴァンティンは高性能なの？」

海道姫子が不思議そうに首を傾げる。その気持ちもわからなくはない。レヴァンティンはどう見ても普通のデバイスで相手は集積デバイスを機能停止に陥れるデバイスだからだ。

だが、オレは心配していない。だから、笑みを浮かべて頷く。

「オレが知る、史上最強のデバイスだからな」

『史上最強とは語弊がありますよ。正確には歴史上最強。これからの未来では私を越えるデバイスが作られると信じていますから。それと、解析が終わりました』

レヴァンティンの言葉にオレ達はレヴァンティンの方を向く。

さすがはレヴァンティンと言ったところか。もう解析が終わっただなんて。

「兄さん、エクシダ・フバルの護衛をアルトさん達に引き継いできました」

由姫の声が聞こえる。オレがそちらを向くと、由姫、中村、エレノア、ベリエとアリエの五人の姿があった。

「ご苦労様」

『ちょうどいいところに。由姫さん、こっちに来てください』

レヴァンティンの言葉にオレと由姫は顔を見合わせて首を傾げ合う。そして、由姫が小走りで近づいてきた。

『そのままナックルを出してください』

「えっ？　わかりましたけど」

由姫は疑問に思いながらもナックルを取り出した。すると、装着型デバイスが浮き上がる。

レヴァンティンが魔術を使っているのだ。許可せずに勝手にオレの魔力を使うとは。

その装着型デバイスがナックルの甲に張り付く。ぴったりと。元からそこにあったかのように。

『これで完成です。いやー、まさか、ここでこれをこの目に入れる

ことが出来るとは。このレヴァンティン、マスターをマスターに選んで良かったです』

「レヴァンティン、説明を頼む」

オレは頭を抱えながらレヴァンティンに尋ねた。この場にいる全員がオレに説明を求めている。

『マスターは気づいていなかったのですか？　一番由姫さんのナックルを』

「気づくか」

オレはレヴァンティンを掴む。そして、徐々に力を入れながら口を開く。

「説明してくれるよな？　レヴァンティン」

『わかりました。わかりましたから、ギブです。ギブアップです。壊れます。壊れます！』

オレは手の力を無くして手を離す。レヴァンティンはそのまま机の上を転がった。

『マスターには冗談が効かないようですね。説明するなら魔科学の遺産。以上』

その瞬間、オレの思考がストップする。多分、他の全員も同じだろう。

つまりは、レヴァンティンと同じ時期に作られた存在ということか。
だが、レヴァンティン、運命、七天、アル・アジフ、デュランダル、隼丸の六つのどれかということになる。つまり、これはデュランダルか。

『このデバイスの名前は栄光』

「デュランダルじゃないのかよ!?　しかも、七つ目!?」

アルから聞いていた情報とは全く違うことになっているけど。

『私もアル・アジフも栄光に関しては白百合家があると知っていても失ったものだと思っていましたから』

「あのさ、うちらにもわかるように説明してくれへん？　意味がわからんねんやけど」

「由姫のナックルも魔科学時代に作られた武器だそうだ」

レヴァンティンについてわかっているだろうから割愛。だが、由姫のナックルがそこまで古いものだとは思わなかった。

中村は不思議そうにナックルを見ている。まあ、見た目は普通のナックルだし。

「私は、あまりわかりませんけど」

「羨ましいな」

「アリエ、頼むから人のものを羨ましく思わないで。私だって欲し

くなるから」

「二人共、双子ね」

「お姉様！」

このままじゃ話が進まない。ともかく、レヴァンティンにもっと尋ねよう。

「白百合家はあるのに栄光は失ったものだと思っていたってどういうことだ？」

『そのままの意味ですよ。当時の白百合家は今と変わらず化け物ばかりでした。あっ、別に由姫さんをどうこう言うつもりは』

「大丈夫ですよ、レヴァンティン。白百合家がどこまでおかしいかはよくわかっていますから」

由姫が苦笑しながら答える。確かに、由姫に音姉にあの素子さんだからな。

『そして、私達が生まれた時代にも白百合家は凄かったのです。そうですね。神への重力（グラヴィタス）の持ち主がいたと言えばいいでしょうか』

「由姫と同じ」

『はい。その者が持っていたのが栄光です。実際には、一人にして一軍の戦闘能力を持った人物のために作られた武器ですが、その人物のスペックの高さに栄光の性能が追いつくことが出来ず、恋人である白百合の者に渡ったというべきでしょうか』

「その理論だと、神への重力を制御出来るって感じだよな？」

由姫の最大の弱点を今更上げるなら神への重力制御出来ないということだ。制御さえ出来ればやりようはあるんだけどな。

由姫の弱点を補える可能性があるなら、由姫はかなり強くなれる。

『はい。白百合の秘宝でもある栄光なら、理論上は制御可能です。理論上はですが』

「理論上？」

『はい。正確なデータを取る前に最終決戦でしたから。まあ、私が見た限り、かなり制御出来ていましたね』

つまりは期待が持てるということか。

「海道姫子、装着型デバイスはもらっていいか？」

「別にいいわよ。私が持っていても意味がないものだし」

「というわけだから、由姫のナックルもとい栄光はお前のもの。いいな」

「いいんですか？」

由姫が栄光を見つめながら海道姫子に尋ねる。海道姫子はそれに対して頷いて答える。

「その代わり、約束。絶対に栄光を犯罪目的で使わないで。それが条件」

「はい！　絶対に使いません。私が兄さんと共にいる限り、兄さんは必ず正義を貫いてくれると信じていますから」

その満面の笑みにオレは若干ながら心が苦しくなる。

これで、由姫は大丈夫かな。

オレな心の中でレヴァンティンに話しかけた。レヴァンティンも心の中で言葉を返してくる。

『そうですね。ですが、マスターは心苦しいのでは？』

わかるか？

『どれだけ付き合っていると思っていますか？　私はマスターがしようとしていることを理解していますし納得しています。ですが、それはマスターに憎しみが集中する可能性があります。それをわかっていて』

これは、オレの正義という名のわがままだからな。

オレはそう答える。

守るためならオレ自身すら使う。それがオレの考えだ。正義と正義のぶつかり合いで勝つのは強い方。その強さのためなら何だって使ってやる。

『私はマスターについていきますよ。どこまでも』

「助かる」

オレは小さく呟いて笑みを浮かべた。

周囲のみんなは由姫の周りにいる。だから、オレの声はみんなには届かない。

「白百合の秘宝ね。栄光にはどんな力があるのやら」

オレの呟きは、やはりみんなには届かない。

第百七十五話　白百合家の秘宝（後書き）

前日が驚きの閲覧者数。まあ、微々たるものですが、システムの異常じゃなければ嬉しいです。前の時に受けて落胆したので

第百七十六話　最後の準備（前書き）

最後の準備です。ようやくここまで来ました。

第百七十六話　最後の準備

「後、一時間」

オレは小さく息を吐きながら呟いた。

オレが予測した相手の動き出す時間まで後一時間。オレは目的地近くの会場で座って体育祭を見物していた。

エクシダ・フバルの護衛は第一特務が中心に行っている。空をアルと楓の二人が見回っているだけだ。

だから、オレは今の時間は暇である。

「これから何が起きるやら」

オレは小さく溜め息をついてレヴァンティンを鞘から軽く引き抜く。

「これからどうなるんだろうな」

『さあ。私に尋ねられましても。神のみぞ知る、とでも言いましょうか』

「だよな。はぁ」

「心配？」

その言葉に声を上げる。そこには亜紗の姿があった。

正確には赤い目をした亜紗の姿。

「準備を始めたのか？」

「うん」

そう言いながら隣に座る。

今の亜紗はブラストドライブの一部展開中の状態だ。その時だけ亜紗は話すことが出来る。

「妖精乱舞（フェアリー・ダンス）をいつでも展開出来るようにしないと。作戦だと、私がかなり重要な位置にいるから」

「そうだな。オレ、亜紗、由姫の三人が中心に進むからな。突撃、防衛、突破。作戦が通用するかはオレ達の手にかかっているからな」

そう言いながらレヴァンティンを持たない手の拳を握りしめる。

オレ達の作戦さえ成功すれば、第一段階は終了だ。第二段階は、時間との勝負。

「もしかしたら傷つけられる可能性もある。だから、気をつけてくれ」

「大丈夫。大丈夫だよ」

亜紗がオレの手を握ってくる。

「大丈夫。私は強いよ。妖精乱舞（フェアリー・ダンス）の私は負けない」

「暴走だけはするなよ」

妖精乱舞（フェアリー・ダンス）の亜紗ははっきり言うなら音姉に勝てる。それほどまでに妖精乱舞（フェアリー・ダンス）は強い。

強い分、暴走した時のリスクも高い。だから、亜紗を止められる可能性のある由姫とアルと一緒にしている。

「その時は頼れる仲間が助けてくれる」

「だろうな。そうなるようにメンバーを組み立てているし」

オレはレヴァンティンを鞘に収める。収めてから小さく溜め息をついた。

自信はある。だけど、オレの予測での場合だったら第二段階でどうなるかわからない。第二段階だけは本当に無理だ。

「やるしかない、か」

「ようやく見つけた！」

すると、メグの声が響き渡る。それにオレ達は振り返った。

「はぁ、はぁ、はぁ。駐在所にいるものだと思っていたから、全力疾走で捜したんだからね」

そこには息を荒くしたメグの姿。作戦一時間前だというのにもう少し休憩しろとは思うけど、それほど一大事なのか？

オレは立ち上がってメグに近づく。

「大丈夫か？」

「大丈夫じゃないわよ。どれだけ走り回ったと思っているのよ。まあ、ウォーミングアップになったけどさ。ともかく、話があるの」

「話？」

メグが頷く。その目は真剣。

「うん。大事な話。もしかしたら作戦が大変なことに」

「場所を変えるぞ」

オレはメグの手を掴み、亜紗の手を掴んで歩き出す。メグがそこまで言うということは大事な話があるはずだ。

オレは周囲にある人気の少ない場所に向かって歩き出した。

私は周に真剣に話す。一誠のことを。

私の中にある違和感全てを話し尽くす。もしかしたら、嫌な予感がするから。もちろん、その予感は当たっていない方がいい。

何故なら、それは友達を疑うということだから。私は信じたくない。友達がそんなことをしているなんて。

「なるほどな」

私の考えを聞いた周は苦虫を噛み潰したかのような表情になっていた。これにも嫌な予感がする。

「考えていた最悪の想定なんて久しぶりかもしれないな。レヴァンティン、音姉と孝治、悠聖の三人に連絡。第三段階への移行の可能性６０％強。他言無用で」

『わかりました』

その言葉に私は愕然とする。

第三段階。

それは周が考えた作戦の最悪の想定。民間人への被害が出る確率が８０％を越す場合にしか移動しないはずの段階だった。

やることはただ一つ。オーバードライブの許可。命に負担がかかるオーバードライブを行ってでも守らなければならない状況ということ。

「周、本当に？」

「オレだって考えたくはないんだ。今までのことを考えたらそういうことしか考えられない。嫌な想定が的中した時、第三段階にならないと駄目だろうな」

「周は一誠が何をしようとしているのかわかっているの？」

「正確には健さん達もだな」

その言葉にまた、愕然とし耳を疑う。確かに、あの五人組が仲はいいから確かにひとまとめになっていてもおかしくはない。

「じゃ、周はみんなが何か予想はついているの？」

「推測はな。ただ、あまりに情報が少ないから確定出来るようなデータは何一つない。何一つないけど、全てを合わせたら答えが出て来るんだ」

周は悔しそうに言う。

「健さんと真人のＦＢＳの腕が実戦に近い動き。一誠はオレ達がハト達を教えようとしたら慌てて遮った。そして、一誠が海道姫子のことに気づいたこと。そして、五人組。そもそも、学園都市にフュリアスのパイロットがいるのがおかしいんだ。つまり、健さん達の正体は」

「“義賊”」

その言葉に私達は振り向いた。そこには赤いローブを着た夢の姿があったからだ。

「ごめん、なさい。“義賊”のみんな、止められなかった」

「夢、どういうこと？」

私は尋ねる。その言葉に夢は頭を下げた。

「“義賊”は、海道駿に、つく。“義賊”から、離脱したのは、私だけ」

「最悪の想定が的中か。本気でやってられないぜ」

「ごめん、なさい。みんな、ちゃんと、周君と同じ目的を持っている、はずなのに」

「謝るな。オレの目的よりも親父の目的の方が成功しやすいと思ったんだろ？　それなら仕方ないさ。夢とだけは戦いたくなかったからいいけど」

周はそう言っているがかなり顔が険しい。誰だって戦いたくないだろう。友達とは。

「この最後の一時間で情報が集まったから最後の準備に時間が出来てよかった」

「最後の準備？」

私は首を傾げる。そんなに準備することがあるのだろうか。

周は笑みを浮かべた。

「最後の最後。最終の第四段階。それが発動出来たなら、勝負はオレ達の勝ちだ」

オレはレヴァンティンを取り出す。そして、レヴァンティンに口を近づけた。

「学園都市内にいる『ＧＦ』支部に第７６移動隊隊長海道周より連絡がある。今朝方届いた防御専用デバイスの全員所持を徹底するように。使い方の連絡もしっかりとするように。最後に、第７６移動隊からの許可が無ければ極力使わないように。以上」

これだけ通達しておけば大丈夫だろう。もしもの時の最終手段。

「どうやら、最後の準備は完成したようだね」

その言葉にオレは振り返らずに答える。

「まあな。最後の準備は整った。後は、待つだけだ」

「君は自信満々なようだね。この学園都市を守り、そして、最終日を迎えることを」

「約束しただろ」

正と約束した。必ず、最終日の後夜祭で正に伝えたいことがあると。

まあ、障害はいろいろとあるけどな。

「親御さんが黙っていないよ。大事件の後は必ず」

「学園都市は子供達の都市だ。学生達が動かし、学生が守る。そんな学園都市に大人達が口を挟む余裕なんてさせるか」

「学園都市のお金は全て親御さんだよ。そのお金を止められたなら」

「問題ない」

そんなことはすでに考えている。その対策も。

「オレ達の学園都市はオレ達が動かす。楠木大和とも話はつけている。だから、待っていてくれるか？」

体育祭の最終日が終わるのを。

「待っているよ。君が、君達がどこまで戦えるか。僕は、全てを見ているから」

オレは振り返る。そこには正の姿はなかった。姿はなかったが、オレは正がいたであろう場所に声をかける。

「見ていろよ。お前が守れなかったものを、オレは守ってみせる。そうじゃなかったら、オレはお前と話せない」

拳を握りしめる。時間は刻一刻と近づいている。

「だから、見ていてくれ。オレの進む道を」

第百七十六話　最後の準備（後書き）

次は始まりの話です。何話続くかわかりません（笑）

第百七十七話　始まりの時間（前書き）

ようやくここまで到達しました。もう少しだけお付き合いください。

第百七十七話　始まりの時間

レヴァンティンを鞘から軽く抜き、すぐに鞘に収める。

落ち着かない。全く落ち着かない。落ち着きたいとは思っているのだが、全然落ち着かない。理由はなんとなしにわかっている。

作戦の時間は近い。近くて、そして、状況が近づけている。

エクシダ・フバルがオレの見える位置にいる。近くにはアルトとリコ。さらには亜紗や由姫の姿がある。

オレ達がいる場所は商業エリアにあるスタジアムだからエクシダ・フバルがいる中段を囲むように第７６移動隊が集合していた。

ここにいないのは音姉、悠人、リリーナ、鈴、委員長、琴美、七葉、和樹。他にはメリル、ルーイ、リマ、ルナが共にエスペランサで待機している。

作戦開始まで後少し。

『マスター、少し落ち着いたらどうですか？』

「落ち着けると思っているのか？　ったく、こんなことがなければ静かに体育祭を過ごせたんだけどな」

『それは無理というものでは？　マスターの気持ちもわからないでもありませんが、落ち着くことを推奨しますよ』

レヴァンティンの言葉にオレは溜め息をつく。

そりゃそうなんだけどさ。やっぱり、大変なものは大変だから。

「それにしても、相手の動きはわかりやすいな」

ここからだからよく見えるが、スタジアムに怪しい人達が数人入り込んでいる。普通は気づかないけど、キョロキョロとしきりに周囲を気にしていたり、魔術を気づかれないように展開していたりする。

そういうのはわかりやすい位置にいるからわかるだけで、孝治はまだ気づいていないだろうな。

「この位置に陣取ってよかった」

『普通ならこんな位置にいませんからね。それに、周囲の認識を阻害するデバイスを配置していますし』

「破るには大規模な魔術が必要。だけど、そんなものはまずお目にかからない。バレるからな」

そうなれば空中を警備している楓とエレノアの二人に気づかれるだろう。いや、二人だけじゃない。セイバー・ルカとディアボルガも姿を隠しているが空中にいる。

この状況で親父がどう来るか楽しみだ。

「タイミング的にはそろそろかな」

『そうですね。次の種目は日本政府主催のＮＦ－０１『イージス』

の演舞ですし。マスターはどう来るとお考えですか？』

「親父は直接現れる。まあ、親父達が国連と繋がっているなら、第一段階は的中するだろうな」

『それが本当ならかなり厳しいものになるのでは？　普通なら最初は大々的にアピールするために派手に行くはずです。今のこの場はたくさんの観客がいます』

確かにそうだ。ここから見るだけでも満席ではないがかなりの観客がいる。その中にはスーツ姿の集団だっているのだ。もちろんＳＰもいるだろう。

狙い目としては十分。それに、この後には学年選抜競技だって控えている。オレだったなら確実に狙うだろう。

『観客を味方に引き込む。それこそが一番の狙い目です』

「だろうな。確かに、観客を引き込めたなら、オレ達が圧倒的に不利になる。そんなことは重々に承知しているさ。だけど、いや、だからこそ、そこに狙い目がやってくる」

親父が狙うのはレヴァンティンの言うように観客を味方につけること。それさえ出来れば親父の立場は一気に有利になるだろう。

だから、それをさせないためにいくつもの策は考えている。オレは小さく笑みを浮かべる。

「親父が狙う狙い目はオレからすれば狙い目だ。その狙い目さえ潰せれば、オレ達の勝ちは揺るがない」

『そう簡単に上手く行きますかね。マスターの作戦はわかっています。だからこそ、最悪の状況になった場合、名誉挽回は不可能ですよ』

「そんなことで名誉挽回になるなら名誉返上してやるよ。名誉挽回が出来ない？　そんなことはどうだっていいさ。今回は名誉なんて関係ない。オレ、海道周と親父、海道駿の親子喧嘩だ。この学園都市を巻き込んでな」

本当に傍迷惑な親子喧嘩だ。ただ、今回ばかりはその親子喧嘩に第三者が介入する可能性がある。多分、それに親父は気づいていない。

オレは小さく溜め息をついてレヴァンティンを軽く鞘から抜き鞘に戻す。緊張しすぎてヤバい。

『学園都市を巻き込んだ親子喧嘩ですか。確かに、マスターの言いたいことも真ですね。第三者さえいなければよかったのですが』

「それは仕方ないだろ。相手の黒幕がどう出るか。いないならいなくていい。第三者が介入されるのは嫌だからな。さてと、始まるか」

オレの眼下でスタジアムにイージスが入場していく。様々な対エネルギーシールドをつけた防御特化のイージスが数機入ってきていた。

一応、日本政府から渡されたプログラムでは射撃模擬戦闘を行うらしいが、それに使用するのは模擬弾使用のエネルギーライフル。だが、持っているのは、

『通常のエネルギーライフルですね。いやー、相手も大胆ですね』

「孝治達も気づいているな。由姫とか露骨に腰を動かしているし」

『アル・アジフがこちらを見ましたね』

「場所は教えていないぞ」

こんな場所、普通は陣取らないからな。

その時、視界の隅で動きがあった。会場警護、ただし、人気のない場所で行っていた赤と白の制服を着た学園都市の『ＧＦ』隊員がローブを着た者に倒されたのだ。代わりに『ＧＦ』隊員の制服である赤と白の服を着た者がそこに立つ。

気づかれないようにするためだろう。内部の監視魔術を確認しても何人もの隊員が昏倒されている。殺されてはいないようだ。

真っ先に狙われたのは司令塔だな。

「レヴァンティン、全員に通達」

「その必要はないな、周」

その言葉にオレは振り返った。そこにいるのは剣を構えた親父の姿がある。

やっぱり、気づかれていたか。

「ようやく隙を見せたな。お前をここで捕まえさせてもらう」

「ふーん。で、茜は元気か？」

「元気だ。久しぶりに親子水入らずでご飯を食べに行った。寿司はやはり回らないに限る」

「ブルジョワめ」

寿司と言えば回る寿司だろ。それ以外に手が出せん。

「さて、無駄話はおしまいだ。周、大人しくしていろ。そうすれば、誰も傷つけないと約束する」

「悪いが、オレ達は第７６移動隊なんでね。リスクを恐れた先にあるのは敗北だ。そんなこと、誰が選ぶと思っている？」

「そうか。なら、戦うしかないか」

「ああ。戦うしかない」

レヴァンティンを鞘から引き抜く。そして、構えた。

親父も剣を構えながら魔術を展開する。

「では、始めようか」

親父が一歩踏み出した瞬間、親父は背後に飛んだ。そのまま宙に浮くと同時に親父がいた場所に誰かが着地する。

「周君、無事？」

着地したのは楓だ。カグラを右手に持ち、左でブラックレクイエムを空中静止させながらどちらも親父に向けている。

相変わらず、レヴァンティンの仕事は早い。

「楓、ここで戦うなよ」

「どうして？」

楓が振り向くことなく尋ねてくる。それにオレは呆れたように周囲を見回した。

普通はこの位置を考えたら思いつくはずなんだけどな。

「破片が危ないだろ」

「なるほど。周がいきなり斬りかかって来なかったのはそういう理由か」

「こんなところで破片でも落としたら観客に怪我人どころか死人が出るじゃないか」

オレは軽く肩をすくめる。

今、オレ達がいるのはスタジアムを照らす照明の上。もちろん、安定する場所ではないため普通はここにいない。

楓は一瞬ポカンとした後に小さく溜め息をついてカグラを下ろす。

だが、ブラックレクイエムは向けたままだ。

「わかった。相手が動かない限り、私も動かない」

親父が満足そうに笑みを浮かべる。オレはそれに対して笑みで返した。

「自分が優位に立っていると思っていると、足下掬われるぜ」

「大丈夫だ、問題ない」

その言葉と共に親父がマイクを取り出す。

眼下を見てみればイージスがとある一機を除いて観客にエネルギーライフルを向けていた。

『突然のことを申し訳ない。私の名前は海道駿。『赤のクリスマス』から生還した男だ』

そして、始まった。オレが思っていたスケールより遥かに大きな戦いが始まった。

第百七十八話　始まりの宣言（前書き）

言い合いって勢いで相手を打ち負かしても勝ちですよね

第百七十八話　始まりの宣言

海道駿の声が響き渡る。その声に眼下が騒ぐのがわかった。

海道駿の名前は未だに有名だ。『赤のクリスマス』で失った最強の『ＧＦ』戦力。圧倒的な魔術で全てを叩き潰す反面、魔術に対する造詣も深く、何冊もの魔術に関する本を出しており、その内の一つは学校教材の副読本として幅広く広まっている。

『私は帰ってきた。あの日、国連を助けられていらい、あの日の真実を調べていた』

海道駿の語りに周囲が静かになる。確かに、あの日のことはアリエル・ロワソが起こしたことであり、そのアリエル・ロワソが黙秘している以上、真実はわからない。

でも、狙いはあれだろうな。

『そして、私達は知った。『赤のクリスマス』は止められることが可能であったのに止められなかったことが』

実際は不可能だ。アリエル・ロワソが狙った場所は数十万にも及ぶ。それほど大規模なものだった。

『それは『ＧＦ』が意図的に動いたからだ。『ＧＦ』はただ、日本や中国など、自分達の勢力が極めて強い場所を守ったにすぎない！
そして、あの日、ニューヨークを見捨てたのだ』

正確には東アジアが狙われるとわかっていたために警備を厚くした

が、アリエル・ロワソは裏をかいてヨーロッパやアメリカに比重を置いていた。もちろん、東アジアも狙っていたが、テロリストの検挙数は東アジアがダントツだったりもする。

その数値は公表されているため、一部の本には『ＧＦ』が『赤のクリスマス』を予見していたのでは、と思っていたりもする。

『私は調べた。そして、この真実を見つけた時に私は愕然とした。『ＧＦ』は民を守る組織ではないのかと。そして、『ＧＦ』は新たな事実を隠している』

事態は親父の有利に進んでいるな。公表されているデータは有名だ。だからこそ、今、口だけで言っても信じられる。

『それは、世界を滅ぼそうとしていることだ。世界を守護する組織と言いながらも、『ＥＳ』や国連に地域を明け渡し、かの狭間戦役においても子供ばかりの第７６移動隊が戦いに出向いた。『赤のクリスマス』がわかっていたのに対し、『ＧＦ』は自分達の地域だけを守り、あまつさえ、大きな事件にも子供ばかりで行かせる。これはどう考えても世界を守る気がないのは明白だ！』

まあ、オレ達が有名すぎたからな。

『だからこそ、私達は動いた。学園都市の皆さん、よく考えてください。学園都市内部での『ＧＦ』を。地位を騙し、麻薬をバラまき、のうのうとお金を貰っているという事実を。敵対する者には容赦なく剣を抜く姿を。『ＧＦ』という組織は偽りだ！　だからこそ、私達は動く！　あらゆる組織が対抗出来ない『ＧＦ』と対抗するためにこのタイミングで動く。私達は正義だ。世界を滅ぼそうとする『ＧＦ』に正義の鉄槌を与えるための。だから、皆さんは、特に学園

都市『ＧＦ』の諸君は動かないように。私は今から、この地下にある学園都市のエネルギー源を回収しに行きます。それは『ＧＦ』が埋めたこの学園都市を滅ぼすためのもの。安心してください。私達が、皆さんを救います』

なるほどね。『ＧＦ』がどれだけ悪者かを言い、『ＧＦ』の代わりに自分達が守るということを言う。確かに、作戦としては悪くない。現に、眼下では何人かの観客が近くの『ＧＦ』隊員に尋ねていた。

オレ達にとっては寝耳に水。だが、学園都市にいる身としては死活問題。これにより、『ＧＦ』隊員の大半は身動き出来ない。

イージスが狙いをつけているのが全て『ＧＦ』というのもポイントだな。

オレは小さく溜め息をついた。予想通り、いや、予想以上というべきか。まあ、いくつか良かった点はある。

想定外までなることはなかった。

「見事な作戦だな。たったこれだけの時間で海道駿はたくさんの味方をつけた。そのことには脱帽させてもらうよ」

オレはレヴァンティンを口に近づけて言う。それは、マイクのようにあらゆるスピーカーからオレの声が流れていた。

レヴァンティンの多機能っぷりには本当に驚きだ。

「だからこそ、反撃させてもらうぜ。学園都市はオレ達の都市だ。学生が、学生のために作り上げる都市だ。お前達犯罪者には絶対渡

さない」

『犯罪者？　何を言う。私達は確かに体育祭を乗っ取った。それを罪だと言うならそのことを』

「違うな。麻薬をバラまき、違法なものを輸入し、『赤のクリスマス』の理由をでっち上げ、ニューヨークの惨事は自分達が作り上げたことを棚に上げている」

『でたらめだな。どんな証拠があってそれを言う？』

確かに証拠をこの場で立証するのは不可能だろう。不可能だからこそ、全てをひっくり返す理由が必要だ。だから、オレは笑みを浮かべる。

「『赤のクリスマス』はアリエル・ロワソが公式で否定されている生体兵器であるオレを回収するために目くらましで起こされ、それに乗じたお前らが世界を救う鍵となる茜と共に姿をくらますために起こした事件。結局のところ、お前らは私利私欲のために『赤のクリスマス』でニューヨークを消し去ったんだよ！」

オレは顔が引きつるのがわかった。

周が流した放送によって近くにいたクラスメート達が固まっている。ほんのさっきまで海道駿が正義だったのに、それが一瞬でひっくり返ったのだ。

『赤のクリスマス』が起きた要因は周と茜ちゃんの二人によるものだと。

「おいおい。周。お前は一瞬で真っ黒に埋められていた板状を白に戻したけど、両刃の剣だぜ」

周が持つ最大の武器。それはあのニューヨークを生き残った当事者であるということ。しかも、その前に学園都市自体を学生達が動かすものと言っていた。

つまり、学園都市外の『ＧＦ』に学園都市内のことを介入させないという言葉の現れ。

『それは』

『言葉に詰まるか海道駿。確かに、お前の目から見たらバカな行為かもしれないな。あの『赤のクリスマス』の要因となったのがオレ達兄妹だとしたなら、世界中からの非難を浴びるだろう。もしかしたら、オレ達は路頭に迷うかもしれない、殺されるかもしれない。だけどな、これだけは言ってやる。『ＧＦ』が『赤のクリスマス』が起きることを知っていたのは事実だ。それは様々なデータを参照すればわかる事実。それは否定しないし事実だと思っている。だから、言わせてもらうぜ。『ＧＦ』がどうして知っていたか。簡単だ。信じられない話かもしれないが未来を知っていた』

周の言葉に顔がにやつくのがわかった。興奮する。あいつがしようとしていることが手に取るようにしてわかるのだ。

海道駿を相手にした喧嘩じゃない。世界の、様々な勢力が必死に隠

そうとしている事実の公表。つまり、世界との喧嘩だ。

『『ＧＦ』は知っている。それは世界を『ＧＦ』が滅ぼす未来ではなく、世界が滅びに直面しているという未来を！　狭間戦役もそうだ。『赤のクリスマス』もそうだ。今回の海道駿の動きもそうだ。全てが世界を救うために様々な勢力が様々な考えの下に動いた結果だ！』

周囲に浮かんでいるのは信じられないという言葉。多分、何が正しくて何が正しくないかはわからないだろう。

「周、頑張れ」

オレは笑みを浮かべながら小さく周を応援する。周が望む未来を作り出して欲しいから。

「それをお前は耳がいいように言い直し、嘘をついた」

『世界は滅びはしない！　周、お前も『ＧＦ』の手先だったのか！』

オレは笑みを浮かべる。

親父の顔にあるのは焦り。もし、作戦が成功したとしても、オレが言ったことが事実なら、親父のやったことは完全な犯罪だ。だが、それはオレにすら刃が届きかねないこと。だからこそ、オレは口にする。

「『ＧＦ』を滅ぼせば、この体勢に楔を撃ち込めるかもしれない。それは、ただの世界の混乱だ！　そんなことで世界を混乱させようとするこそ、犯罪者というべきものだろう！　そんなことはさせない。それにな、この学園都市はオレ達の領域だ。『ＧＦ』じゃない。オレ達学生の領域だ！　そんなところに大人の介入なんてさせるかよ！」

『貴様たちが仕様としているのはただの子供の喚きだ！』

「ああ、そうさ。だから、もう一度言う。学園都市はお前達の好きにはさせない！　学園都市はオレ達がオレ達で作り上げる聖域だ！　学園自治政府も、様々な学校組織も、自分達の手でよりよく学校を、都市を作り上げてきた！　そこにお前達が介入していいものか！　学園都市はオレ達の手で守り、オレ達が動かす。大人の手なんか借りずに、オレ達はやっていけることを証明してやる！　全『ＧＦ』隊員に通達。今より緊急事態宣言を発令。学園都市にいる人全員をシェルターに誘導。第７６移動隊、第一段階始動！　オレは、今までのオレの過去を断ち切るために、海道駿を捕まえる。オレに続け！」

『貴様、正気か！？』

親父の驚きの声。それに対してオレは笑みを浮かべた。

「『ＧＦ』のやるべきことはただ一つ。守るべきものを守り、守るべきものを脅かすものを捕まえる。単純明快それだけだ。だから、オレは親父と戦う。確かに、総長や第一特務隊長が何を考えているかわからない。もしかしたら、親父の考えている通りかもしれない。そうだとしたなら、オレが、オレ達がそうにかする。それが、第７

6移動隊だ。だから」

レヴァンティンを親父に向ける。この戦いの始まりを宣言するために。

「海道駿。『赤のクリスマス』でニューヨークを壊滅させた首謀者としてあんたを拘束する！」

第百七十八話　始まりの宣言（後書き）

最近、ユニーク数が怖いです。時折かなり伸びているのですが、アクセス数の伸びがあまり芳しくないのが怖いです。いや、まあ、自己満足で書いているのでいいんですけど、やっぱり、気にすることは気になってしまいますね。

第百七十九話　始まりの動き

『海道駿。『赤のクリスマス』でニューヨークを壊滅させた首謀者としてあんたを拘束する！』

周の声が学園都市に響き渡る。それは、戦いの合図。もちろん、その合図はエスペランサの甲板で向かい合うようにしてたたずむ二人の少女の耳にも聞こえていた。

「始まりましたね」

少女の内の一人、メリルが小さく呟く。その言葉に隣にいる髪の毛を括る大きなリボンを解いた音姫が頷いた。

「そうだね。準備はいい？」

「はい。ですが、出来るのでしょうか」

メリルの目にあるのは不安の色。そんな不安の色を見た音姫はメリルに笑いかける。そして、その手を掴んだ。

「大丈夫だよ。私は音姫。歌の姫の力を持つ音の姫。制御なら任せて。だから、メリルは自分の心をめい一杯歌って。私が、助けるから」

「わかり、ました」

メリルが音姫の手をしっかり握りしめる。そして、小さく息を吐いた。

今回の作戦では民間人の命は二人にかかっていると言っていい。そして、そんなことを試すのはもちろん二人共初めてだ。

「私は、今まで祈りにしかこの歌姫の力を使いませんでした」

「私は、今まで戦いにしかこの歌姫の力を使わなかった」

二人が両手を繋ぐ。そして、お互いに額をくっつける。音姫の方が身長が高いからちゃんとした左右対称ではないが、二人は目を瞑り、集中する。

力を使うために。歌姫の力を、今までとは違う、守るために使用するために。

守りたいものを、守るために。

メリルの手が震えている。音姫は強くメリルの手を握った。感覚の鋭い音姫だからこそわかるが、周囲には隠れて兵士が待機している。何かあればすぐに向かってくるだろう。問題は、今、ここには近接戦闘が可能なメンバーが少ないこと。

「やりましょう」

「うん」

二人が頷き合う。そして、メリルが口を開いた。

言葉では表すことのできない音。

メリルの歌を表現するとするならそうだった。まるで音程を歌っているようにも聞こえる。だが、その音程は頭の中で音符に直そうとしてもどこに当てはめたらいいかわからない音。文字でも表すことのできない。だが、それは心地よく耳に入り、心地よく体の中に染み込み、心地よさを演出する。

音姫とは違う歌姫の力。歌姫として、音界のトップとして君臨し続けていたメリルの力。

それは高らかに清らかに響き渡る。それに重なるように、いや、それに惹かれるように音姫も口を開く。

音姫の口から流れるのもメリルと同じ音。言葉でも、文字でも表すことは一生出来ないであろう音。ただ、一つ言えることがある。

世界中、今まで存在していたあらゆる歌姫を呼ばれたアーティスト達を遥かに超える歌であること。それはまさに、『歌姫』という力の表れ。

響き渡る音。それは学園都市の全てに響き渡る。不協和音なんて一つもない。全てが心に染み込む強烈なまでの歌だった。

だが、それを快く思わない一団もいる。

音姫の感覚に誰かが急激に近づいてくるのがわかった。今の音姫は動けない。歌姫の力を使っている上に、メリルと同調しているからだ。動くことなんて不可能だ。

同調しながらも歯噛みする。気配は近くまで迫っているのに。だけど、その瞬間、高らかに清らかに響き渡る歌の中にはっきりと声が

聞こえた。

「清き風が全てを吹き、清浄なる道を指し示せ。風の妖精『フィンブルド』！」

その瞬間。強烈な風が吹いた。それは温かく、優しい風。笑みが浮かんでしまういい風だった。

「猛き炎が燃え盛り、創生の炎を作り出せ。炎の皇帝『タイクーン』！」

次はやはり温かく優しい熱気。苦も無く体がぽかぽかするような心地よい熱気がやってくる。

「生命を司る水よ、森羅万象を守る力と成せ。水の化身『アーガイル』！」

命の象徴。見ていなくてもそう感じるような生命を感じる。やはり、これも優しく温かい気配。

「世界の根幹を成す大地よ、全ての一歩を刻みこめ。大地の鳴動『グレイブ』！」

周囲に現れたのは四体の優しい、優しい精霊達。

音姫とメリルの二人を守るように精霊とその精霊のマスターである俊也が身構える。

「これ以上、進ませない。これから、僕と、僕の大切な家族達が相手だ！！」

はっきりとわかるほどの濃い魔力。それが周囲の建物に吸い込まれていく。それを感じながら浩平はフレヴァングを片手に道を走っていた。

「大和！　避難誘導で遅れが生じている場所は？」

『少し待ってください。商業エリアでは大丈夫ですか、東地区工業エリア周辺で戦闘が起きています。その周囲にいる人達が遅れているとの報告が』

「わかった」

浩平が大和の言葉を聞くないなや飛び上がり、近くの建物に跳び乗った。そして、狙いを付ける。

目的の場所では確かに戦闘が起きているであろう動きが見える。だが、ここからでは狙いを付けることは難しいはずだ。

それなのに浩平は片膝を立てたままフレヴァングを構えている。スコープは使わず目視で。

「どこの誰だから知らないけど、こっちの仕事を邪魔するなら」

引き金に指をかける。

「容赦はしない！」

その瞬間、引き金が引き絞られ魔力によって作られた弾丸が浩平の思い描く軌道を描いて飛ぶ。その軌道を見た浩平はすぐさま視線を外して周囲を見渡した。

「周の野郎。いきなり避難誘導がスムーズに行くと思っているのかよ。実際、至る所で混乱しているし」

浩平の目で確認しただけで１００のも及ぶ混乱がわかる。もちろん、見える範囲でだ。これが学園都市全体となれば数はさらに膨れ上がるに違いない。

『聞こえますか？』

そうしていると、浩平の通信機から楠木大和の声が響き渡る。浩平はすかさず通信機を手に取った。

「どうかしたのか？」

『工業エリア南地区との通信が途切れました。行ってもらえますか？』

「俺が行くしかないだろ？」

浩平はその場から跳び上がる。瞬間で竜言語魔法を無詠唱で発動してさらに飛び上がる。

今回の作戦では自由に動けるのは最初のみだが浩平一人となっている。基本的には第７６移動隊も避難誘導に走るからだ。だから、何

かの異常があれば空戦が可能な浩平が行くしかない。

その分、戦いの中心で起きることには全くの蚊帳の外にはなるが。

「後から事情を聴くぞ。つか、何で工業エリアでごたごたがあるんだよ。普通は中心の商業エリアだろ。何か、っつ」

浩平がすかさず近くにあった建物の陰に隠れる。そして、手鏡を出して周囲を確認する。正確には、周囲にある風景を反射するものを。

そして、そこの光景を見た浩平は息を呑んだ。

「おいおい。洒落になってないぞ」

そこにあったのはいくつものフュリアス。その中には純白のコートを着たフュリアスのリーゼアインとリーゼツヴァイの姿がある。さらには、その近くには奇妙な灰色の追加装甲を付けた機体の姿も。

フュリアスの数は大体１００近く。

「どうしてこんな場所にフュリアスが。それに、あそこのブロックは」

「日本政府の区画」

その言葉に心臓が飛び出しそうになった。そして、すぐさま振り返る。

そこには竜言語の魔法書を手にするリースの姿があった。

「びっくりするだろうが」

「ごめんなさい。びっくりさせたかっただけ」

「確信犯？　まあ、いいけど。リースはどう思う？」

「周の裏付けは確か」

その言葉には浩平も賛成だ。連絡が取れなくなったのは口封じされたかただ単に眠らされているだけか。後者ならいいが、前者なら大変な事態になる。

全てのことは周の作戦にかかっているということか。

浩平は小さくため息をつきながらそう思うとフレヴァングを握り締めた。

「もう少し近づくぞ。お前と二人なら心強いからな」

「うん」

二人はお互いに手を握り締めてゆっくり動きだした。

鞘から抜かれたレヴァンティンが親父の持つ剣の先を斬り裂く。そのまま返した刃が親父の服を微かに斬り裂いた。

そのまま一歩を踏み出したが、作り出した足場の上限にまで来ていたので慌てて後ろに下がる。

「周、予測していたな」

「当り前だ。親父達の使用としていることはわかっていた。だから、最初から避難誘導の指示を出せるようにしていたしな。まあ、やっぱり混乱はあるけど、このままシェルターに避難してくれたら御の字だ」

「だが、すんなり行くと思うのか？　私達は地上では無用な騒ぎは起こさないと決めている。決定的な出来事が起きないなら避難は進まないはずだ」

確かにそうだ。現に、避難誘導の状況は芳しくない。派手に戦闘しているのが少ないからだ。ここで確認できているだけでもエスペランサ周辺。工業エリア南地区。そして、ここ。

決定的なことが起きれば避難は混乱するが、それが起きないなら避難は進まない。

「第一段階の悲しいところだ。まあ、無事に避難さえ進めまそれでいいんだけどな」

「そうだな！」

放たれる魔術をオレはステップで避ける。無誘導だから難しくはないが、さすがに至近距離での高速詠唱による発動は辛いな。

レヴァンティンを握り締めて親父を睨みつける。

「さあ、大人しく」

「死になさい」

その瞬間、嫌な予感が体を襲った。とっさに体を捻り、後ろから迫っていた攻撃をギリギリで避ける。

振り向いた先にいるのは海道椿姫の姿。

お袋、空戦持っていたんだ。

そう思いながら足場を作り、そこに足を踏みしめて渾身の回し蹴りを放つ。回し蹴りはお袋の直撃して吹き飛ばした。

だが、その瞬間には親父は魔術を発動させている。とっさにレヴァンティンで来るであろう方向にガードするように構えると、ちょうど魔術がレヴァンティンに直撃してオレは吹き飛ばされた。

「っつ」

すかさず足場を作り出して復帰を、と思った瞬間、嫌な予感がした。足場を作る魔術の展開を止めて十六に引かれて落下する。体が落ち始めると同時に足場を作っていたなら立っていたであろう場所に槍が通り過ぎていた。

足場を作り大きくその場から飛びのく。それと入れ替わるように振り下ろされた槍が足場を破壊した。

新たな足場に着地しながらレヴァンティンを鞘に収める。

「し損ねましたか」

その言葉と共にお袋が槍を向けてくる。後方には魔術を展開する親父の姿。典型的なフロントとバックの組み合わせにオレは息を整える。

強い。

純粋にそう思う。隙がない。オレ自身が空戦を持っていないのもあるが、この二人の実力は本物だ。

お袋が高速かつ強力な一撃を放つ隙に高速で放たれる無誘導の魔術が襲いかかってくる。二人共実力は一級品だから一人での勝ち目はない。

「しかし、いいでしょう。ここなら、これからの出来事がよく見れるはずです」

「これからの出来事？」

「周。この世は綺麗事ばかりではどうしようもないのだぞ」

その言葉と共にオレは地上を見下ろした。それと同時に地上で爆発が起きる。様々な個所で起きる爆発が。しかも、避難している人達の近くの建物の屋上でも起きている。

オレはレヴァンティンを鞘に収めた体勢のまま完全に動きを止めていた。

「最後は、勝ったものの言い分が優先される。だからこそ、私達は剣を取る。本当の世界を求めて。犠牲は少ないにこしたことはないがな」

爆発の黒煙はもくもくと空に向かって立ち上っていた。それは、まるでオレ達をあざ笑う親父達に味方をしているようだった。

第百七十九話　始まりの動き（後書き）

本格的な戦いは次回から。

第百八十話　避難誘導

爆発。

それに反応した都はすかさず広範囲に降り注ぐ破片から守るための防御魔術を展開した。

衝撃が防御魔術を揺らす。それと共に周囲に上がる悲鳴。それを聞きながら都は怒りのあまり唇を噛み締めていた。これは完全に避難している人達を狙った攻撃だからだ。

防御魔術に破片が墜ちていないことを確認して防御魔術を解く。

「皆さん！　避難を急いでください！　決して押さず、ですが、ゆっくりともせずに！」

都の声に誰もが動き出す。その速度は今までよりも遥かに速い。遥かに速くみんなが動いている。それを見ながら都は小さく息を吐いた。

正直に言うなら相手がこういうことに乗り出してくれてよかった。そうしなければ本格的な戦闘に避難している面々が巻き込まれていただろう。これで、学園都市のあらゆる箇所での避難が早まるはずだ。

「都！」

その声に都は断章を握り締めたまま振り返った。そこには走り寄るアル・アジフと近くにいる男の人の姿。確か、唯一操られていなか

ったイージスのパイロットだ、と頭の中で確認する。

アル・アジフは周囲を見渡しながら都の横で止まる。

「相手は強硬策に出たようじゃな。おそらく、避難を早めるために」

「アル・アジフさんもそう思いますか？　確かに、この爆発は人を殺すことを目的としたわけではなく、人を攻撃するのが目的のはずです。被害が出れば否が応でも避難は早まります」

「そうじゃな。避難誘導がどこまで早く出来るかじゃが」

そんなアル・アジフの顔に浮かんでいるのは不安の声。そんな声を聞きながら都は空を見上げた。今、この様子を周は見下ろしているだろうから。

本当なら何人かで戦うのだが、避難誘導に人がいるため周が一人で戦っている。あの周が負けることはないが、都は不安で仕方なかった。

「都、そなたはここら一帯の避難誘導を頼む。我は黄泉川と共に逃げ遅れた者達を探す」

「わかりました。アル・アジフさん、気を付けてください」

「そちらもの」

その言葉と共にアル・アジフと黄泉川が走り出す。それを見ながら都は小さく息を吐いた。

避難誘導さえ終われば戦いが始まる。だからこそ、都は断章を握り締めていくつかの魔術を準備する。

「このまま上手くいけばいいのですけど」

その瞬間、都の背中に寒気が襲いかかった。正確には周が感じる嫌な予感と同じものだが、それは都にはわからない。ただ、その場にいてはいけないと思いながら都は前に向かって地面を蹴った。

それと同時に都がいた場所に魔術が突き刺さる。

「誰ですか！？」

振り返りながら断章を構える都。そこにいたのは赤いローブを着た集団。その先頭に立つのはハルバートを肩に担ぐ大柄な赤いローブを着た男だった。

「ちょっとだけ、静かにしておいてくれないかな？　俺様、女の子を虐めるのは好きじゃないんだよ」

「このタイミングで」

避難誘導はまだ終わっていない。現に、たくさんの人が赤いローブの集団を見て駆け足で走り出している。このままだと混乱するのは確実だ。だけど、この集団を放り出してそちらに向かうわけにはいかない。

都は断章を構えたまま歯を噛み締めそして、杖の先を集団に向けた。

「あなた達の目的はなんですか？」

「話さなくちゃいけないことか？」

返ってくる言葉。それに対して都は小さく笑みを浮かべた。

「あの“義賊”なのに、あなた達がしようとしているのは正反対だと思いましたから。まるで、火事場泥棒みたいで」

「仕方ないだろ。俺様だってこんなことはやりたくない。避難している奴らがいるのにこんな美少女を捕まえろだなんて。でもよ、今回のことでは必要なんだ。悪いけど、捕まってくれないか？」

「お断りします」

その言葉に“義賊”の集団が呆けた顔になる。それを見た都は笑みを浮かべることを堪えることが出来なかった。

そのままさっき発動してストックした魔術を再展開する。

いくつもの光の刃を放つフォトンランサーの上位互換、フォトンスラッシュ。それが２０ほど都の周囲に展開されていた。

「あなた達を片付けてすぐに避難誘導に戻る。それが私の仕事です」

「落ちついて避難してください！　ここのシェルターはまだまだ入ります。大丈夫です。大丈夫ですから押さないでゆっくり移動して

ください」

シェルター付近。そこは通勤ラッシュの電車の中とでもいうかのような状況だった。はっきり言うならみんなが我先にとシェルターの中に入ろうとしている。それが後ろまで続いているのだ。

シェルターは極めて広い上に、いくつかの中で繋がっているため余裕はある。だけど、それは心理的に追い詰められた状態ならなんの意味もなさない。

「グラウ、そのまま交通制限を頼む。イグニスは無理矢理入ろうとする奴らを締め出すように。レクサスとアルネウラは怪我人の治療。ライガは周囲の警戒を」

オレは精霊達に指示を飛ばしながら避難誘導用の光る棒（正式名称忘れたけどいいか）を使って誘導する。

オレの学園都市の知名度はなかなかなものだから、比較的落ち着いているがやはり辛いことは辛い。

学園都市の中にいれば平和という都市伝説が完全に終わりを告げたからだ。建物に仕掛けられた爆弾による爆発で何人もの犠牲者がでたという噂が広がっている。ただ、現場を知る者がいれば完全に笑い飛ばすだろう。

「悠聖、避難している人達の終わりが見えたわ」

近くの建物に上っていた冬華が下りてくる。そして、オレの隣に着地した。

終わりが見えたというということはほんのしばらくしたならここに避難する人も少なくなる。

「とりあえず、肩の荷は若干下りたな」

「ええ。後、かなり混線しているけど、周囲の連絡を聞く限り、未だに犠牲者は出ていないわ。でも、いくつかの場所で戦闘が起きている」

「戦闘？　ちょっと待て。いくつかの場所ってことは周が予測していない場所まで戦闘が起きているのか？」

「そうよ。戦闘しているのは聞きとれただけでも都さん、エスペランサ周辺、航空区画周辺、由姫、亜紗の五ヶ所。他に戦闘しているところも含めるなら１０近くにも及ぶわね」

「まじかよ」

顔が引きつるのがわかる。思っていた以上に相手の動きが早い。いや、もしかしたら、最後の最後で連絡があった“義賊”の一部が裏切ったことに関係があるのかもしれない。

ともかく、今はただ避難を先に進めるしか方法はないだろう。

「ちっ。さっさと戦線に行きたいけど」

「あなた達を行かせるわけにはいかないと言ったなら？」

その言葉に二人は振り返った。そこにいたのは化粧がどぎつい女性。

その特徴を考えて二人は頭の中に現れた人物の名前を口にする。

「「リーリエ・セルフィナ」」

「嬉しいわ。お姉さんの名前を覚えてくれていたなんて」

その言葉にオレの全員の毛が逆立つ。強烈な寒気を感じたというべきだろうか。どう考えてもお姉さんじゃなくておばさんからお姉さんと言葉を聞くなんて。

世も末だ。

「世も末ね」

冬華も同じことを思っていたらしい。違ったのは口に出したかどうか。

リーリエ・セルフィナ。

『赤のクリスマス』で犠牲者になったとされていた一人で、転移術者としては最高峰の実力を誇る。はっきり言うなら攻撃の軌道が曲げられて当たらないらしい。

そんな相手が魔の前にいる。

「お姉さんは戦うつもりはないのよ。ただ、あなた達が動くと困る人がいるのよ。だから、ここにいてくれれば私は何もしないし大人しく捕まってあげる。どう？　悪くない取引でしょ？」

確かに悪くはない取引だ。だけど、避難誘導はここだけじゃない。

こんなことに止められていたなら避難誘導が終わらない。

どうすればいい。考えろ、白川悠聖。どうすればこのおばさんをどうにかすることが出来るか考えろ。

「あらあら。お困りのようね」

その声にオレは振り返った。ここにいるとは思っていなかった人物がそこにいるのだ。

姿はまるで音姫さんのよう。ただし、髪の毛の長さは由姫のようで、二児の母でありながらまだまだ若さをにじみ出しているまさにお姉さんと呼ぶべき姿。その腰には刀が一本。

「素子さん？」

「誰よ」

隣にいた冬華が目を鋭くして尋ねてくる。怒る気持ちはわかるけどさ、少しは落ち着いて欲しいな。

いつの間にか避難誘導はほとんど終わっていた。シェルターを閉める作業が始まっている。

「ここは私に任せなさい」

素子さんがオレ達の間を通り抜ける。オレはそんな素子さんを視線で追いかけた。

「でも」

「大丈夫よ。私はただ、この、おばさん、に話があるだけだから」

その瞬間、空気が固まったような気がした。思わず冬華と顔を見合わせてしまう。

「お、おばさん？　私はまだ４０手前よ」

「あらあら。十分おばさんね。昔は私とミスコンで競った仲なのに。見た目が本当におばさんね」

怖いもの知らずと言うべきか、オレ達は思わず後ろに下がってしまう。そして、背中を向けた。

ここに関わっていたならいいことがないと判断したからだ。

「冬華は予定通りに。オレは戦いが起きているところ見て回る」

「わかった」

そして、オレ達は走り出す。もちろん、背後から声をかけられるがそんなことは無視して突っ走る。オレ達にはやることがあるのだから。

迫りくる槍。それを受け流した瞬間、目の前に魔術が迫っていた。回避することが出来ない。

「ファンタズマゴリア！」

すかさずファンタズマゴリアを展開して魔術を受け止めて、

「死になさい」

側面から槍が迫っていた。ギリギリでレヴァンティンによって受け止めるがそのまま力任せに弾かれてファンタズマゴリアが展開されている面から出てしまう。そこに到来する大量の魔術。

オレはレヴァンティンの力で全ての力を消し去った。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ。くそっ、じり貧じゃねえか」

レヴァンティンを握り締め、声を漏らす。このままじゃ全然ダメだ。ひたすら回避と防御しかしていない。攻撃が出来ない。

攻撃しようとした瞬間に親父が魔術を放ち、避ければお袋が突っ込んでくるのだ。完全に攻撃のリズムが作れていない。

「大人しく諦めろ。今頃、お前達の仲間も拘束されているはずだ。爆発で飛び散った破片により出た怪我人を見捨てていないならな」

確かに、それを見捨てていたなら『ＧＦ』としてはあるまじき行為だ。

「殺さないのですか？」

「周にも有効価値はある。それに、味方に引き込んだ方が圧倒的に

楽だ」

完全に有利に立ったと思いこんでいる二人。確かに、親父の言うことは事実だろう。第７６移動隊の戦力ではどうしようもない部分が出てくるのは仕方がない。

だけど、オレは笑いを堪えることが出来なかった。親父とお袋が視線を鋭くしてい睨みつけてくる。

「何が言いたい？」

その言葉にオレは笑みで返す。

「何も分かっていないんだな。本当に笑えるよ。確かに、親父の言うように破片で怪我人が出たなら、捕まっているだろうな。でも、それは前提条件が破片がまき散らされているということだ」

その言葉に二人が怪訝そうな顔になる。そして、二人は同時に地上を見下ろして目を見開いた。

何故なら、そこには傷ついた建物が一つもないのだ。爆発によって傷つくべき場所に傷が存在していない。それが地上の様子だった。

「まさか」

親父の顔が驚愕に染まる。オレは腰を落としてレヴァンティンを構えた。

「お前らの好きになんてさせるかよ。学園都市は、オレ達の手で守るんだ。邪魔する奴は捕まえる。ただそれだけだ」

そして、オレは空中に作り出した地面をり、二人に斬りかかった。

第百八十一話　栄光

体が軽い。

ローブの集団と戦いながら由姫はそう思っていた。迫り来る刃を受け流し、カウンターの一撃を叩き込む。

その際には体を回転させて回し蹴りを放つのだが、その全ての行動が由姫自身が思っているよりも遥かに速い速度であった。

三方向から襲いかかってきたローブの集団を一歩後ろに下がることで回避し、回転しながら上段回し蹴りで蹴り飛ばす。

八叉流発破『強襲脚』。

足を叩きつけるように振るため防御の上から簡単に吹き飛ばすことが出来る。

由姫はさらに後ろに下がった。

ローブの集団は警戒しながらゆっくり距離を詰めてくる。すでに半分は倒れているが、残った半分は完全に警戒していた。

背後をチラッと見てみれば避難する人がまだいる。すでに数が少ないからかシェルターを閉める準備は始まっているが。

「兄さんの作戦通りに進んでいますけど、このタイミングでの敵襲は体に悪いです」

そう言いながら由姫は小さく息を吐く。

息を整え次の一撃に備える。そんな雰囲気を感じたローブの集団はなかなか動けない。

「警告します。武器を捨ててください。これ以上戦うというなら手加減することは出来ません」

由姫の言葉にローブの集団に怒りが渦巻いた気がした。そして、ローブの集団が地面を蹴り、

「筋肉バスター！」

「筋肉ラリアット！」

そんな言葉と共にローブの集団が吹き飛ばされた。

由姫は身構えたまま完全に固まっている。何故なら、そこにはブーメランパンツだけの姿をしたガチガチのボディビルダーがいたからだ。

身構えたまま後ろに下がる由姫。

「神よ、何故人に女という種族を作った。全て男で解決すればいいというのに何故作った」

由姫だけでなくローブの集団も引いている。

「見ろ、この筋肉美を！　世界には男だけで十分だ！」

「ロドリゲスさん！　あなたに一瞬ついて行きます」

まさか、これが有名なロドリゲスとアレックス。

由姫はそう思いながら後ろに下がる。

ロドリゲスは身長２ｍを軽く越す長身な上に暑苦しい。学園都市内ではかなり有名人で、学園都市ゲイ協会（非公式にして非公認であり取り締まり対象）のトップと言われている。

「な、なんだ。こいつは」

ローブの一人が声を上げる。普通はそうなるだろう。だけど、ロドリゲスについての話を同じ格闘家（ちょっと違うが）である由姫は知っている。

見た目はあれだけど、学園都市で数少ないＳランクを持つ化け物。

「ちょっと遅れたようだな」

その言葉と共にロドリゲスと由姫の間に青年が着地した。その姿には由姫は見覚えがある。

「紅さん？」

「おうよ。由姫ちゃんだけにいい格好はさせられないからな。たった三人だけど、援軍に来たぜ」

「避難誘導は」

「俺らの地区は終わった。隊員が必死こいて誰かいないか走り回っているだけだ。さてと、おい、あんたら。こんな可愛い女の子を狙って悲しくならないか？」

紅が笑みを浮かべながら声をかける。

その言葉にロドリゲスが呆れたように振り返った。

「隊員が女の子を可愛いなんて言うのが悲しい」

「俺はお前の言葉が悲しいわ！」

紅が咳を一回して再び笑みを浮かべる。

「女の子を傷つける奴は敵だ。容赦はしない」

「むしろ、女の子を嫌う人は味方だな」

「ロドリゲスは黙ってろ！」

なんというか、色々と台無しになっていく。

紅は小さく溜め息をついて身構えた。

「この学園都市には助けを待っている女の子がたくさんいる。俺達はそれを守るのが仕事だ」

「男の子しか守らない。特に男の娘なら大歓迎」

「自分もであります！」

由姫と紅の二人がロドリゲスとアレックスを見ながら小さく溜め息をつく。そして、紅は顔を上げて手のひらに炎を作り出した。

紅は周が一目を置く人物。人柄もあるが、周は部隊内の信頼の高さとその能力に一目を置いていた。

何故なら、一時期Sランクを持っていたのだから。

「てめぇら、覚悟は出来ているんだろうな？」

「それはこっちのセリフだ」

聞いたことのある声に由姫はそちらを振り向いた。そこには赤いローブを着た人物と、隣に立つ３ｍほどの巨人が八体。

「ここにいる部隊は別の場所へ。Sランク相当三人だと気が重いはずだ」

「一誠さん？」

由姫は信じられない思いで赤いローブの人物に話しかける。そして、赤いローブの人物は深く被っているフードを脱いだ。

そこにいるのは由姫のクラスメートである一誠。

「ここまで事態が動かないとはな。さすがは海道周と言うべきか」

「どうして一誠さんが、“義賊”がどうして私達の敵に」

「理解していないのか。いや、理解するわけがないか。“義賊”というのは本来、お前達みたいな選ばれた存在とは違うのだから。話は終わりだ」

一誠が指を由姫に向け、近くの巨人に命令する。

「殲滅せよ」

その言葉と共に巨人達が動き出した。動きはかなり速く、あっという間距離を詰めてくる。

「筋肉ボンバー！」

そして、巨人の一体がロドリゲスによって殴り飛ばされた。そのままもう一体の巨人を蹴り飛ばす。アレックスも巨人と掴み合いになっているが、明らかにアレックスが押していた。

ただ、気になるのはその目。どう考えてもハートマーク。

「ロドリゲス、アレックス、下がれ！」

紅の言葉に二人が同時に道を開けた。そして、そこを灼熱の炎が食らいつくす。

紅は炎に関してはスペシャリストだ。学園都市一とも言っていい。だが、その炎を受けた巨人は微かに表面を焼いただけで平然と動いてくる。

「おいおい。生物の限界を超えているぞ」

「大丈夫です」

その横を由姫が駆け抜けた。拳を握りしめ、巨人が振った拳を一歩後ろ下がるステップで軽々避け、前に踏み出した。

里宮本家八陣八叉流崩落『綺羅朱雀』。

刹那で直撃した由姫の拳に身につけられた栄光が巨人の体に食い込み、バラバラに吹き飛ばした。

吹き飛んだ破片を見ながら由姫は目を見開く。生物ではなく無機物。無機物から生命を創造する能力。

「人形使いか！？」

紅の声が周囲に響き渡った。

戦闘ではあまり作られない物理属性を極めたスペシャリスト。それが人形使いだ。ゴーレムを作り出す能力に長けているが、そのゴーレムはどれだけ小さくても五体が限度のはず。

だが、一誠は軽々とゴーレムを使っている。

「まさか、兄さん達が“義賊”に襲われたのは」

「俺が作ったゴーレムだ。まあ、止められるとは思わなかったが」

その言葉と共にさらに大量のゴーレムが現れる。その数は約２０。人形使いという限度を超えている。

由姫は拳を握りしめた。ゴーレムはそれほど強くはない。一番強くてもAランク程度と言われている。だが、このゴーレム達は違う。

「本気、出さないとダメなようですね」

「いいのか？」

一誠の顔に笑みが浮かぶ。

「また、傷つけるぞ」

心を揺さぶる言葉。それに対して由姫は笑みを浮かべた。笑みを浮かべて身構える。

「そうですね。今までの私だったならそうかもしれません」

ゴーレムの一体が由姫に飛びかかる。だが、そのゴーレムは真上から見えない何かによって押し潰された。

ゴーレムの部品だったであろうパーツが周囲に転がる。

「私の神への重力（グラヴィタス）は確かに強力です。強力すぎて誰かを傷つけてしまう。ですが、無機物に対して手加減する必要はありますか？」

そう言いながら由姫は自分のレアスキルを最大展開する。それと同時に周囲のゴーレムが叩き潰された。

由姫が作り出した重力によって。

「なるほどな。だが、相手が人ならどうする？」

一誠の言葉と共に現れたのはハルバートを持った赤いローブの人物。
それに対して由姫は笑みを浮かべる。
「大丈夫ですよ」
そして、栄光を現れた人物に向け、下ろした瞬間、見えない何かによって上から叩かれたかのように現れた人物が地面に叩きつけられた。
「私はこの栄光と共に歩み限り、大丈夫です」
体が軽いと思ったのは栄光がサポートしてくれたからだった。栄光は由姫の神への重力（グラヴィタス）の制御を行ってくれている。
だが、そんな光景を目の当たりにしたはずの一誠は未だに笑みを浮かべていた。
「それで勝ったと思うのか？」
その言葉は由姫の背後から聞こえてきた。そして、一誠の姿は由姫の視界にはない。
振り返った時にはそこに一誠の姿はなかった。
紅達は驚愕の表情で由姫の背後を振り向く。そこにはどう考えても孝治が持っているはずの運命を握る一誠の姿があった。
「優勢は、変わらないさ」

その言葉に由姫は栄光を身につけた拳を握りしめた。

第百八十一話　栄光（後書き）

そろそろ本格的に戦闘ですかね。ちなみに、ロドリゲスとアレックスの攻撃の名前は基本的に筋肉という頭文字がつきます。二人共、普通に強いですよ。

ちなみに、紅の強さは最初に考えていたメンバーに紅が入っていたからです。今では浩平と変わっていますが。

第百八十二話　風王具現化（前書き）

こんなタイトルですが風王具現化で暴れまくるという意味ではありません。

第百八十二話　風王具現化

気配を出さずに動き、音も無く着地する。

隠密行動の基本であり、魔術を使えば簡単だが見つかりやすい。だから、隠密行動を行う部隊は魔術無しでそれを行えるように訓練される。

隠密行動を行っている人物は周囲を見渡した。周囲には何人もの監視役がいるが、その人物がいる位置には気づいていない。

その人物は小さく息を吐いて目を瞑った。

『周さん、見つけたよ』

そして、周に向かって精神感応によって言葉を送る。

通常の魔術による通信ではよほどの高度な魔術を使った通信機で無ければ傍受されるか妨害されるかのどちらかだ。特に、持ち運び型や艦内での通信用は極めて受けやすい。

もちろん、いくらか高度な魔術であっても妨害は受けるし傍受の可能性もある。だが、精神感応は違う。

個人個人が違う魔力の波動やら何やらを登録しておき、その波長に対して語りかける方法のため、精神感応を直接妨害するようなことしか出来ない。

通信機の機能が著しく下げられている今の学園都市内においてその

通信能力は貴重であった。

『見つかったか。っく、場所は？』

精神感応を行う人物、亜紗へ周が言葉を返す。亜紗は周囲を見渡した。

『学園都市の中央。周囲にシェルターが全く存在しない空白地帯』

『なるほどな』

亜紗がいるのは学園都市のほぼ中央である広場の草むらの中。草むらの影に隠れているわけじゃない。草むらの中に完全に隠れているのだ。

草が鳴るのは動くから。なら、最初から動かないように固定した、いや、固定された状況ならやりようはある。ただし、全身擦り傷だらけになるので戦闘服による自動防御は必要だ。

亜紗が見ているのは広場の完全な中央にある噴水。だが、噴水から水は出ておらず、まるで枯れたかのような状況になっている。

確かに、ここなら候補の一つとして成り立つだろう。

『親父やお袋をそっちに向かわせるように仕向けたいけど』

周の声はどこか焦っているようにも聞こえた。海道夫妻をたった一人で抑えているのだ。疲れが出ていてもおかしくはない。

亜紗は周囲を警戒しながら言葉を返す。

『撤退するのは？』

『あれだけ啖呵を切った以上、撤退するのはかっこ悪いだろ。それに、今は時間を稼がないといけない』

亜紗の視界の中で噴水を破壊しようと四苦八苦しているローブの集団がいる。

『エスペランサが攻められているから早く進みたいとこだけど、今まで先手を取ってきたんだ。出来る限り先手を取り続けたい』

『一度でも後手に回れば勝機は限りなく低くなる。部隊の全体的な強さは向こうが上だ。向こうが先手を取っているように仕向けて先手を取る。それが一番妥当な作戦』

その言葉と共に亜紗が微かに目を細める。

『見つかった』

亜紗が迷うことなく言う。だが、周はそれを気にすることなく言葉を返す。

『地形特性を考えて戦えよ』

今の学園都市にある最大の地形特性。それに気づいている人は少ない。もちろん、第７６移動隊のメンバーは知っている。

亜紗は頷きながらその場から飛び退いた。それと同時にそこに誰かが着地する。

緑を基調とした戦闘服。年齢は５０近いだろう男。それを見ながら亜紗は七天失星の柄に手を乗せる。

「気づいたのは俺だけか。不甲斐ない」

緑色の服装から黒色の服装に変わる。

「だが、別にいいだろう。女の子を潰すなら」

その瞬間、亜紗は後ろに跳んだ。それと同時に亜紗がいた場所に拳が直撃する。だが、その位置は砕けない。

それがわかっているから亜紗は看板を踏みしめ、七天失星を握りしめながら前に出た。

男が目を見開いている間に亜紗は七天失星の剣閃を叩き込んだ、つもりだった。

だが、七天失星の深層石の刃が黒色の戦闘服によって食い止められる。

亜紗が目を見開いた瞬間、男の手が亜紗の腕を掴んだ。

「気持ちがいい」

そして、亜紗は地面に叩きつけられた。力任せに横に振られただけなのに、亜紗の体は地面と平行に叩きつけられていた。

あまりの衝撃に声にならない音が亜紗の口から響く。

「さて、どうやって潰すかな」

地面を転がる亜紗の横に男が着地する。服装は赤い。

亜紗は痛む体に力を込めてその場から飛び退いた瞬間、炎の塊が亜紗に迫っていた。七天失星の腹で炎の塊を打ち上げて、

「隙あり」

背後に回り込まれていた。

回避が間に合わない。七天失星の位置は振り上げた体勢。いくら体を戻そうとしても無理がある。

男は拳を握りしめている。

亜紗は目を微かに細める。そして、体を回した。

男の服装は黒。七天失星が受け止められのは亜紗もわかっている。わかっているが亜紗は七天失星を振り下ろす体勢にあった。

だが、男の腕が速い。亜紗が七天失星を振り下ろすより速く、男の拳が、

亜紗の体をかすめた。

「なっ」

男の驚く声と共に振り切られた七天失星が男の体を吹き飛ばす。男

は地面を転がった。

すかさず七天失星を鞘に収め、亜紗はその場から走り出す。何人かの足音が聞こえているからだ。戦闘によって見つかった以上、隠密行動を取る価値はない。

亜紗はたった三歩で最高速度に到達し、距離を突き放す状態で、緑色の服装になった男と並んでいた。

亜紗が七天失星の柄に手を乗せた瞬間、神速の拳が亜紗の腹に突き刺さっていた。

亜紗は体をくの字に折り曲げられ吹き飛び壁に激突する。

「同じ場所に八つの斬撃を受けたなら吹き飛ばされるか。勉強になった」

痛みをこらえて立ち上がった瞬間、目の前に拳が迫っていた。猛烈な風を纏わせ振るわれる拳。

亜紗は冷静に分析する。冷静に分析して、

冷静に、リミットを外した。

亜紗の体が横にズレて拳をギリギリで避ける。そして、七天失星を握りしめて亜紗は男に向かって振り切った。だが、男の黒の服が七天失星を受け止める。

すかさず後ろに下がり、男の拳が空を切った。その瞬間に亜紗は七天失星を大上段から振り下ろした。

今度は七天失星が男を後ろに下がらせる。

亜紗はスケッチブックを取り出してページを捲った。

『あなたの能力はわかった』

「ほう。だが、今度は外さない」

男が拳を握りしめる。そして、前に踏み出した。だが、その拳は亜紗の手前寸前で奇妙に軌道を変えて当たらない。

亜紗は距離を取りながら七天失星を右手で構える。

『黒の服は攻撃と防御。緑の服は速度。赤の服は魔術にそれぞれ特化している』

「わかったところでどうしようもないはずだ。お前は一人。今まで戦っていた壁ならともかく、地上ではすでに見つかっている」

その言葉に亜紗は頷いた。頷いて、七天失星を鞘に収める。

『だったら、倒せばいい』

その言葉と共に亜紗はスケッチブックを空高く投げ捨てた。そして、腰を落として背後から飛来した矢を避けつつ鞘に収めていた七天失星を振り返りながら抜き放った。

それと同時に放たれた風の刃が矢を放った人物を吹き飛ばす。

亜紗が七天失星を鞘に収めてスケッチブックを受け止めた。

『それが真理』

「同じだな。俺と同じだ。さあ、死合うとしよう。俺の能力か、お前の居合いか、どっちが強いか」

『居合いじゃない』

亜紗は首を横に振ると七天失星を抜き放った。それと同時に七天失星を風が包み込む。いや、風は亜紗の全身を包み込んでいた。

『私はまだ、負けられない』

「風王具現化か」

男の言葉にはどこか苦々しさが混じっていた。

風王具現化。

風属性魔術でありながらあらゆる具現化を超える破壊力を持っているのが風王具現化。

風属性という広範囲かつ高性能な能力を使いこなせるもので具現化としての性能は極めて高い。

『相手になる。あなたの弱点はもうわかったから』

そして、亜紗は前に踏み出した。

第百八十三話　幻想空間（前書き）

周の中にある世界の意志と呼ばれたものについてです。一見チートに見えますが、使い勝手はかなり悪いですよ。

第百八十三話　幻想空間

レヴァンティンが槍を弾き、作り出した足場で放たれた魔術を避ける。タイミングを上手く合わしたけど足にかすって軽く血が飛び散る。

『運動性能３０％ほど下がっていますね』

レヴァンティンの声が頭の中に響く。それを聞きながら槍をレヴァンティンで受け止めた。

「いい加減に死になさい」

お袋の言葉がオレの耳だけに聞こえるような小さな声を出す。オレは微かに目を細めた。

「お袋は親父とは考え方が違うみたいだな」

オレは口を開かずに言う。そして、軽くレヴァンティンを引いた。だが、その瞬間にはお袋が後ろに下がる。

上手く嵌ればかなり有効なんだけどな。

「椿姫、あまり前に出るな」

「大丈夫ですよ。今は周を押さえるのが先ですから」

親父からすればオレを押さえているのが作戦だと思っているみたいだが、まだまだ手のひらの上で踊っている。

オレは小さく息を吐いてレヴァンティンを構えた。

「早く地下に潜らなくていいのか？」

「エスペランサが落ちるまで気が抜けないからな」

「なるほどね。まだ、道が開いているわけ、じゃないんだな」

全く顔は動かない。

だが、微かに息が乱れたような気がする。

「地下への通路は目星はついているんだろ？　だけど、日本政府もそのエネルギー源は手中に収めたい。だから、国連の隠し部隊にある親父達を使い、『ＧＦ』が不利になるように動いた」

「何の話だ？」

やはり言質は取れないか。だが、休む時間だけは稼げた。

オレはレヴァンティンを握りしめて構える。

「さて、そろそろ本気に」

その瞬間、視界の隅で何かを捉えた。

人だ。民間人であろう小さな子供、幼稚園くらいの年齢の子供がそこにいる。しかも、誰かに狙われている。

頭の中で作戦の状況を考える。ここでのロスはかなり致命的。もしかしたら後手に回るかもしれない。だけど、

「見捨ててられるか！」

オレは足場を蹴って地上に向かって飛び降りた。

「なっ」

親父が驚きの声を上げるがオレは気にすることなく地上に向かって最大加速で駆け下りる。

鞘に収めたレヴァンティンを握りしめ、ファンタズマゴリアを展開出来るように準備しながら敵の姿を確認する。

そこにいるのは一本の剣を持った男。幼い子供は泣きながら逃げている。

「紫電」

オレは攻撃範囲に捉えた男に対し、レヴァンティンを鞘から抜き放った。

「一閃！」

最大加速かつ最速の速度と軌道を持って放たれたレヴァンティンの刃は背後から男に迫り、避けられた。

まるで幻のように姿を消したのだ。着地しながら背後から嫌な予感がする。オレはその予感通りにレヴァンティンを振り、迫っていた

剣を弾いた。弾いた勢いを利用して後ろに下がり幼い子供の横に着地する。

「大丈夫か？」

「ひっく、お兄さんは？」

「ちょっとした正義の味方だ」

レヴァンティンを構える。男はだらっとした体勢でゆっくり歩み寄ってくる。その足取りはどこかフラついており、その目はまともに見えていない。

その姿に得体の知れない何かを感じてしまう。

『マスター、気をつけてください。嫌な予感がします』

「そんなの普通に」

目の前から男が消えた。

微かな驚きと共に振り返りながらレヴァンティンを振り切る。

幼い子供を狙った剣を弾き、胸ぐらを掴もうと手を伸ばした瞬間、幻のように男が消え、背後に嫌な予感が迫っていた。

すかさずその場から跳びつつ子供を抱え後ろに下がる。ギリギリで振り下ろされた剣を避ける。

粒子をバラまいているからこちらの視界に異常があるわけじゃない

し、相手が瞬間移動（ショートジャンプ）しているわけじゃない。まるで幻のように消えるのだ。そして、現れる。

認識の撹乱なら手の出しようはない。

「完全に予定外だが、歩けるか？」

オレは抱えている子供に尋ねた。子供は頷いてギュッと服を掴んでくる。

安全圏まで避難したいけど、そういうわけにはいかないしな。

「さてと、どうやってこいつを気絶させるか」

今までの敵とは違う。認識ではなく感覚で戦うしかない。

「ちょっとだけ、待ってろよ」

オレは子供の頭を軽く撫でて前に向かって踏み出した。一歩目から最速で駆け出してレヴァンティンを振り抜く。だが、相手は幻のように消える。

そんなものは想定済み。オレはレヴァンティンを握りしめながら背後に向かってレヴァンティンを振り下ろしていた。

紫電一閃から紫電逆閃ではなく、背後への雲散霧消。

レヴァンティンの刃は男の持つ剣を砕き、男の体を殴り飛ばした。

殴り飛ばしたが、それで終わらない。さらに一歩を踏み出しながら

雲散霧消の軌道をなぞったようにレヴァンティンを動かす。

白百合流燕返し『雲散霧消・三日月』。

見事な弧を描き、レヴァンティンは吹き飛ぶ男を壁に叩きつけた。

オレはレヴァンティンを鞘に収める。

「何とかなったな。とりあえず、あの子を」

「手遅れですよ」

その瞬間、何かの衝撃と共にオレの体を槍が貫いていた。

そのまま槍が引き抜かれ、再度槍が突かれる。灼熱の痛みが腹の二ヶ所に出来上がり、オレはその場に倒れ込んだ。

子供がいた場所に目を向ければ、そこには血を流して倒れる子供の姿。

「『現実回避（エスケープ）』、か」

痛みを堪えて立ち上がろうとした瞬間、再度槍が疲れた。今度は左胸。肺がやられすぐさま息苦しさと共に血を吐き出す。

「本当に憎い子。せっかく私が作り上げた狂戦士をいとも簡単に倒すなんて」

「き、さま」

声は漏れるが体は動かない。傷が深すぎる。

「あなたは駿と一緒に私の手のひらの上で踊っていればいいのよ」

レヴァンティンを握りしめる。だけど、力があまり入らない。体からどんどん力が抜けていく。

ようやく、オレがオレであることを作り出せたのに。ようやく、何かの意志によって動かされていたオレから自分を取り戻せたのに、こんなところで、

死んでたまるか。

心の中で声が響く。それは、自分の中にある空間。何者かによって作り上げられた空間。

何者かはわからない。いや、違うな。何者かはわかる。オレだ。もう一人のオレだ。本当のオレはオレであり僕の二つ。だから、オレは口を開く。

突き動かされる衝動そのままに。

――――君はその力を使う覚悟はあるのか？

頭の中で声が響く。オレはそれに対して頷いた。

ああ。覚悟はある。

――――それが君の特有の力で無くても？　与えられただけのものであっても？

例えそうだとしても、オレは自分の中にある全てを使う。器用貧乏だから。

オレは苦笑しながら答えた。器用貧乏だから全てを使う。それに、それもオレだから。

――――そうか。なら、同族のよしみで君に言葉を贈ろう。負けるな。自分に、そして、世界にも。

当たり前だ。負けるのは嫌いだ。特に、今までのオレ自身に負けるなんて絶対に嫌だ。

前に進むから、今までとは違う自分になりたいから。だから、オレは大声で叫ぶ。

「幻想空間（ファンタズマゴリア）！」

その瞬間、全ての痛みが消え去った。痛みを感じなくなったわけじゃない。傷が一瞬にして治癒されたのだ。

オレはゆっくり起き上がる。

「何故」

槍をオレに向けるお袋。オレは腰を落とした。

「自分の中の世界を周囲に具現化する魔術を知っているか？」

「投影空間（フリーダム）。それをしたというのですか？」

「さあな。この空間がどこまで広がっているのかわからないさ。でもな、一つだけ言ってやる」

今までの戦うでこの世界にはよくお世話になった。

ファンタズマゴリアという絶対防御はオレが作り出せた魔術ではなく、この投影空間（フリーダム）による幻想空間（ファンタズマゴリア）の一部を具現化して取り出したものだった。

人の心のイメージをそのまま作り出せるファンタズマゴリアなら絶対防御に近いものだと言うのもわかる。でも、この世界は一つの能力がある。

「今のオレを殺せると思うな」

世界の意志に身を任せるのじゃない。世界の意志という意味のわからないものもオレの中の一つなのだ。だから、受け入れる。それによって、オレはこの世界を知った。

幻想空間（ファンタズマゴリア）を。

「傷の治癒。厄介ですね。ですが、あなたの相手は私ではありません」

その言葉と共にオレの背後で誰かが起き上がった。誰かなんて言う必要はないか。

「あなたは手のひらで踊っていなさい」

その言葉と共にお袋が離脱する。オレは小さく息を吐いた。それは安堵の息。

「空間集結」

展開していた幻想空間（ファンタズマゴリア）を閉じる。それと共にオレはレヴァンティンを振り上げた。

「幻想空間（ファンタズマゴリア）」

そして、再度、幻想空間（ファンタズマゴリア）を展開する。

幻想空間（ファンタズマゴリア）はオレの望むものを作り出す世界。だからこその幻想。他の言い方をするなら妄想。

それが、幻想空間（ファンタズマゴリア）にあるたった一つの能力にして、たった一つの弱点である能力。

「破魔雷閃」

そして、振り下ろしたレヴァンティンによって放たれた破魔雷閃は男の体を呑み込み再度壁に叩きつけた。

「原理はわからないけど、ともかく、お前が幻みたいに消えるのを無くせばいいんだろ」

妄想だからこその能力。

“たった一つの性能を限りなく極限まで展開出来る能力”

それが幻想空間（ファンタズマゴリア）の力だった。まあ、ファンタズマゴリア自体が受け流すために作った防御魔術だし、そう考えると幻想空間（ファンタズマゴリア）って使いにくいとは思う。

「お袋、ありがとな。あんたのおかげでオレはようやく最大の力を手に入れた」

オレは子供に歩み寄って抱え上げる。服を血だらけにした子供は静かに眠っている。オレはそれに安心しながら歩き出した。

「だから、頼むぜ。オレ」

オレは笑みを浮かべながら考える。

一番近くのシェルターはどこかな？

第百八十三話　幻想空間（後書き）

幻想空間（ファンタズマゴリア）の補足。

後に出すかもしれませんが、忘れる可能性があるのでここで書いておきます。

幻想空間（ファンタズマゴリア）の極限まで性能を伸ばせると書きましたが、特徴を一つだけ伸ばせるだけです。例えば、防御魔術の場合、ファンタズマゴリアは受け流すことを極限まで上げたもので、受け流せない面の攻撃には弱く、砕けない防御魔術を作り上げた場合は、幻想空間（ファンタズマゴリア）自体を消さない限り防御魔術自体が消えないということになります。

ちなみに、最初の幻想空間（ファンタズマゴリア）での性能は治癒の極限強化によってほぼ蘇生の能力を得る能力です。即死には意味がありませんが。

第百八十四話　合流

漆黒の刃が駆け抜ける。それは地面を砕き、建物に傷を負わせていた。その攻撃をギリギリで避けた由姫が額の汗を拭う。

一誠は疲れた様子もなく手に握る運命らしきものを振り切る。それは漆黒の刃となり由姫に襲いかかった。由姫はそれに対し栄光を合わせて殴り飛ばす。

上手く流したはずなのに、腕は軽く痺れている。

「第７６移動隊というのはこんなものか」

一誠の言葉に由姫は身構えた。だが、一誠は持っていた剣を捨てる。すると、剣はまるで無かったかのように消え去った。

「そろそろ時間か。せいぜい、俺の手のひらの上で踊っているんだな」

その言葉と共に一誠の姿が消える。由姫は小さく息を吐いて周囲を見渡した。

ロドリゲスとアレックスは負傷によって退却。紅はシェルターの最終確認のために後ろに下がっていた。

由姫が神（グラヴィタス）への重力で叩き潰した敵はいつの間にか撤退している。

「お兄ちゃんの言う通りになっているけど、あまりにかけ離れていない？」

由姫が疑問に思っているのは海道駿についてだ。周から聞いた話から考えても海道駿の人となりと作戦が違うような気がする。

海道駿のやり方は犠牲者を出来る限り少なくするようなやり方。だけど、今の状況はまるで誰かを傷つけるために動いているように由姫は思えるのだ。

「考えても仕方ないか。でも」

由姫は周囲を見渡す。そこには戦闘の爪痕が残っていた。砕かれた地面、傷ついた建物。由姫は拳を握りしめ、近くの壁に拳を叩きつける。だが、その拳はまるで柔らかい何かを殴ったかのようにほとんどの威力が吸収され、痛みはないし建物に傷すらついていない。

「本気、なんだけどな」

栄光を身につけた拳を見ながら由姫は呟く。そして、小さく息を吐いて歩き出す。

「とりあえず、動かないと」

「由姫？」

その言葉に由姫は振り向いた。そこには血まみれの服を着る周と、周の腕に抱えられた幼い子供の姿があった。

周は地面を蹴って由姫の横までやって来る。

「シェルターは閉じれたみたいだな。だけど、この戦闘の爪痕は？」

由姫は軽く後ろにステップし最速の打撃を近くの壁に叩き込んだ。だが、壁にはひびすら入らない。

「お姉ちゃん達の能力は発揮している。でも、これは一誠さんによって作られたから？」

「一誠が？　“義賊”の中でも戦闘能力が皆無だと思ったんだけどな」

周は小さく溜め息をついてしゃがみ込み地面を触る。そして、小さく頷いた。

「何か変な行動をしていなかった？」

「一誠さんが？　えっとね、気配もなく後ろを取られたかな。後は、ロドリゲスさんやアレックスさんに力で勝っていた」

「なるほど。とりあえず、この子をシェルター内に預けるぞ。一誠については次の場所に向かいながら話をする」

周はそう言いながら立ち上がった。そして、シェルターに向けて歩き出す。由姫もその後ろを歩く。

「次の場所？」

「一番近いのは、都のところだな」

断章の先が振り抜かれたハルバートを打ち返す。そのまま都はフォトンスラッシュを赤いローブに向けて放った。だが、ハルバートによって全てが散らされる。

都は荒い息を整えるために後ろに下がった。

周囲には倒れ伏す赤いローブの人達。だが、たった一人だけ、たった一人だけ腕の違う相手がいた。

断章を握りしめながら自分の体を考える。

すでに左腕は二ヶ所斬られ、わき腹も微かに斬られている。力業で押しきられたものばかりなのでまだ対処出来ているが、このままだとかなり厳しいのは明白だった。

「いい加減にしてくれよ。俺様は女の子を傷つけたくないんだけど」

「お断りします。この地区の避難は未だに完全に終わったとは言えません。ですから、まだ食い止めます」

「はぁ、俺様は本当に戦いたくないけど、降参しないなら仕方ないな」

赤いローブの男はハルバートを地面に叩きつける。だが、ハルバートは地面に食い込まない。

都は断章を握りしめて腰を落とす。フォトンランサーを５０ほど展

開して相手の攻撃に備える。

「仕方ねえよな。ドライブっと」

何気なく言われた言葉と共に赤いローブの男はハルバートを振り上げながら都との距離を詰める。

都はすかさず後ろに下がりながら断章をハルバートに合わせるように振った。

「連綿と続く章を断て！」

断章の力を使いハルバートの力を無くそうとして、断章が都の手から弾き飛ばされた。

「なっ」

すかさずハルバートが都の腹部に叩き込まれる。都は体をくの字に折り曲げられ、近くの壁に叩きつけられていた。

都の口から息が漏れる。それと共に都は血を吐き出していた。

「これだから、自分の力を過信している優等生は俺様、嫌いなんだよな。断章だっけか、その力はあらゆる力を打ち消す力。だったら、別の性能を付与しておけば、そっちが消えるだろ？　そして、断章は弾き飛ばされる」

都はその言葉を聞きながら自分の体を診断する。

内臓が破裂していないのには驚きだが、確実にいくつかは傷つけら

れている。腹部の痛みが全く収まらない。肋骨も折れて杯に突き刺さっている可能性がある。何より、痛みのあまり体が動かない。さらには足は痺れている。

「最後に物を言わすのは筋肉ってこった。さて、悪いようにはしないから大人しく」

都に手を伸ばした赤いローブの目の前を一本の矢が通り過ぎた。赤いローブが振り返る。

視線の先にいるのは弓を構える赤いローブを着た人物。だが、そのローブについているフードは被っていない。

「夢か」

赤いローブの男が笑みを浮かべてハルバートを構える。

「どういうつもりだ？　裏切るのか？」

「裏切るのは、あなた達。私は、あなた達を、信じていた。でも、今のあなた達は、学園都市において、“義賊”としての、役割を、果たしていない」

「仕方ないだろ。でもよ、俺様も、周よりも『悪夢の正夢（ナイトメア）』一味の方が希望はあると思っているぜ」

「私は、周を信じる」

力強い夢の言葉。それに赤いローブの男はさらに笑みを浮かべていた。

「“義賊”の掟。裏切り者には死を。女の子だから手加減していたけど、俺様、強いぜ」

そして、赤いローブの男は地面を蹴った。

「神隠し（トリックオアトラップ）？」

「そう。真柴隼人の脱走の際に使用された神剣。一誠はそれを持っているはずだ」

オレ達は人の気配がない通りを全速力で走り抜けていた。

あの後、幼い子供と共にシェルターに入ったオレを待っていたのはちょうどその子供を捜そうとシェルター入り口を守る『ＧＦ』隊員と小競り合いをしていた母親だった。

血まみれだったため一瞬顔が蒼白になったが、怪我なく寝ているだけだと説明したなら泣き崩れて土下座をするように感謝された。オレからすれば当然のことだったから子供を返してすぐさま由姫と一緒に飛び出したのだ。

「不可能から可能への逆転。その能力を知っていたのは驚きだけど、歌姫によって守られている学園都市を傷つけられるなんて、そんな能力しか考えられない」

「確かに。不可能なことを可能に出来るなら可能かな。お兄ちゃん、今の状況はどうなっているの？」

「一歩後手に回った。後悔はしていない」

その言葉で由姫は理解したのだろう。何も聞かずに歩調を合わしてくれる。

「このまま予定通りに進んだら少しマズい事態になるからな」

「マズい事態？」

「ちょっと思い違いをしていたんだ。学園都市には二つ、いや、“義賊”を合わせて三つの勢力がある。そう思っていた。だけど、実際には四つの勢力だったんだ」

オレはそう言いながら速度を上げる。この事に気づくのが遅れたのはかなりのデメリットだ。理由はいくつか考えられけど、オレの推測が正しいならあれしかないだろう。

「一つはオレ達『ＧＦ』。一つは親父達の部隊。そして、“義賊”と、お袋の部隊」

「お兄ちゃんのお母さんの？　どういうこと？」

「由姫は感じなかったか？　親父なら民間人は狙わないし、民間人を守る『ＧＦ』にも普通は攻撃しない。避難最中に戦闘に巻き込まれるのは一番混乱することだからな」

混乱すればするほど怪我人は多くなる。そんなことを親父の考え方

ではまずはしないだろう。

そして、今まで戦ったからこそわかる。

「お袋の目的は多分だが」

その瞬間、目の前の地面に赤い何かが叩きつけられ跳ね上がる。その何かを見た瞬間、オレは滑り込むように何かを抱き止めていた。

胸の中にいるのはボロボロの姿をした夢の姿。だけど、その目に映る戦いの意志は消えていない。

「大丈夫か？」

「大丈夫、じゃないけど」

夢はゆっくり起き上がる。そして、弓を構えた。それと同時に前方に赤いローブの男が現れる。

「私は、“義賊”だから」

「“義賊”から逃げ出したくせに何を言っているんだか」

「その声、ハトか？」

「わかっているじゃないか」

赤いローブのフードが脱げ、そこから現れたのは笑みを浮かべたハトの姿。

ハトは静かにハルバートをこちらに向ける。

「周、俺様は裏切り者を殺すのに忙しいんだ。邪魔しないでくれよ」

「由姫、近くに都がいるはずだ。探してくれ」

「わかりました」

その言葉と共にオレは地面を蹴った。そして、ハトに向かってレヴァンティンを、

振り抜かずに後ろに下がった。それと同時にオレがいたところをハルバートが叩く。すぐさま地面を蹴り、前に進みながらレヴァンティンを鞘から抜き放ち、振り切ろうとした。

だが、レヴァンティンはハルバートに受け止められる。

「俺様はよ、お前が大嫌いなんだよな」

「オレはお前のことを嫌いじゃないぜ」

「何でも出来る優等生。全てにおいて上の存在。唯一驚いたのは、見下していないところだな」

鍔迫り合いに持ち込みながらオレはハトに一歩近づく。

「優等生の感覚は無かったんだけどな」

「お前にはわからないよ。恵まれた人生を生きるお前にはな」

「恵まれた、ね」

親父とお袋からは相手にされず、ニューヨークで巻き込まれ、茜のおかげで助かり、力を手に入れた。それからは戦った。常に戦った。戦うか勉強するかの二つだけ。

どこが恵まれた人生だ。すでに波乱万丈な人生じゃないか。

「自分が恵まれたなんて思ったことはないな」

「だから、嫌いなんだ」

力任せに吹き飛ばされる。

オレは地面を滑りながらも魔術陣を複数展開した。全ては同じかつ同じ軌道を描いている。

「だったら、少し眠っておけ！」

虚空からすかさず魔鉄の破片を取り出して魔術陣に向かって指で弾いて放った。

幾重にも張り巡らされた加速の魔術を発動する魔術陣を破片は駆け抜け、神速の速さでハルバートを砕きながらハトを吹き飛ばした。

オレは小さく息を吐いて展開していた魔術陣を消し去る。

「これで大丈夫だろうな。夢は今から」

オレが振り返った瞬間、オレの顔の横を矢が通り過ぎた。再び振り

返ったそこには飛来した矢を砕いたはずのハルバートで弾くハトの姿。

あの打撃は直撃したはずなんだけどな。

「まだ。あの人の、能力は特殊、だから」

「ふぃー、さすがの俺様も焦ったぜ。この力が無かったら確実にやられていたな」

「焦るのはこっちだ。アクセルシュートは直撃しただろ？」

加速術式による物体射出。速度によっては摩擦によって燃え尽きるが、直撃すればある意味一撃必殺。

ただ、直線にしか撃てないため普通は使用しないし、簡単に受け流されたりする。

「次はこっちの番だよな。俺様、結構強いぜ」

「結構か。なら」

レヴァンティンを鞘に収める。

「オレはかなり強いぜ」

紫電一閃からの紫電逆閃。弾かれた場合は雲散霧消。武器が弾かれた場合は綺羅朱雀。

頭の中で行動を考える。そして、最悪の状況も考えておく。これが、

オレの戦い方。

ハトが地面を蹴る。その速度は極めて早く、レヴァンティンを鞘に納めていなかったなら迎撃は難しかっただろう。

オレはレヴァンティンを鞘から走らせようとして、嫌な予感がした。レヴァンティンを使ってはいけない感覚がオレの体の中を駆け巡る。理由はわからない。だけど、予想外の事態のオレは一瞬で答えを作り出していた。

「幻想空間（ファンタズマゴリア）」

すかさず幻想空間（ファンタズマゴリア）を高速展開し能力を発動する。能力は思考速度の極限まで上昇させること。

レヴァンティンが使えない理由はわからない。でも、今使える手段は一つだけだ。

オレはレヴァンティンの代わりに左手に虚空から新た武器を取り出す。正確にはオレとアルの二人の共用である虚空から。

「レイルダム！」

取り出したのはマテリアルライザーにの装備である剣のレイルダム。巨大なレイルダムはハトのハルバートとぶつかり合い、砕け散る。

「「なっ」」

オレとハトの言葉が重なった。レイルダムを砕くハルバートではない。これは、特殊能力か。

レイルダムが砕けた破片の間を縫うように一本の矢がハトのハルバートを弾き飛ばした。その瞬間に破片をくぐり抜けてレヴァンティンの柄を握り締めながら距離を詰める。

「紫電一閃！」

だが、紫電一閃は防御魔術によって受け止められた。防御魔術を切り裂きながらレヴァンティンの刃が降り上がる。そこに纏わせるのは紫電ではなく陽光。

破魔雷閃では再度展開された防御魔術に阻まれてダメージは与えられない。なら、雷属性ではなく、光属性の避けることのできない斬撃なら、

「光輝矛神！」

膨大な熱量を持つ一撃が再度展開された防御魔術を貫き、いつの間にか手元にあったハルバートを斬り裂いてハトの体に突き刺さった。魔術ダメージを与えるためだけだったのでハトはその場に崩れ落ちる。

「破壊と、再生か？　いや、転移？　ともかく、今は近くに都がいるはずだから」

「兄さん！」

由姫の言葉に振り向く。そこには、血まみれの都の姿があった。体の傷よりも喀血による部分が多い。それに、意識がないようでぐっ

たりしている。

本当なら動かさない方がいいのだが緊急事態だ。

「幻想空間（ファンタズマゴリア）」

すかさず治癒能力を極限まで高めてすぐさま都の治癒に、

「周君！」

夢の言葉。すかさずその場から跳び退いた瞬間、オレがいた場所をハルバートが通り過ぎていた。

レヴァンティンを抜き放ちながらハルバートを弾き飛ばしながらその場をさらに飛び退いて由姫の隣に着地しつつ都の治癒を開始する。それと同時にハルバートを握る人物を見る。

「ハトにワカメか。なるほどね」

オレはレヴァンティンをワカメに向ける。ワカメは倒れ伏しているハトを担ぎ上げる。

「ハトが負けましたか。まあ、いいでしょう。海道周、あなたの評価が極めて高くなったと言うべきことですし」

「ワカメ、お前達は何をしたい？」

「あなた達と同じだと答えておきましょう」

その言葉と共にワカメが凄まじい跳躍で建物の向こうに消えて行く。

オレは小さくため息をついて都の治療を終える。

「ともかく、合流は出来たな」

オレは小さくため息をついてレヴァンティンを鞘に収めた。

第百八十五話　動き始めた存在

「フュリアスの数は見えているだけで１００くらいかよ」

浩平が額から汗を流しながら小さく呟く。ＬＮＦ－１５アサルトが数十機。ただ、倉庫にもまだまだあるだろう。

その周囲にはイージスの姿も見える。

「この学園都市を攻め滅ぼすつもりかよ」

どう考えても浩平の目からはそのような状況にしか見えない。浩平は顔をひきつらせながらリースに話しかける。

「そっちはどうだ？」

『確認できた。実弾もいくつか見られる。装備的に言うなら学園都市を火の海に出来るレベル』

「まじかよ。とりあえず、監視を続けるぞ。このまま、悠人達のフュリアス部隊が動くより早く動かれたら、本気でどうしようもないからな」

『わかった。見つからないように気を付けて』

「ああ」

浩平は小さく息を吐いて周囲を見渡す。この場所なら普通に見つからないし、隠密行動は狙撃手（スナイパー）の基本だ。

「さて、他の奴らも動き出しているだろうし、そろそろ第二段階になってもおかしくないよな」

フレヴァングを構えながら浩平は小さく呟く。

「頼むぞ、周」

孝治の持つ運命がローブの集団を一瞬で斬り裂いていた。そして、返された刃がさらに集団を倒す。

ローブの集団も目的を孝治の無力化ではなく、孝治の後方へ駆け抜けることになっているが、全く駆け抜けていない。むしろ、だんだん逆に押されていたりもする。

「夜だけ強いのじゃないのかよ！」

ローブの一人が叫んだ瞬間、運命の刃がその人物を斬り伏せた。そのまま回転しながら力任せに横に振り吹き飛ばす。

「夜に強いだけだ。俺自身の強さは昼も夜も変わらない」

「くそ。とりあえず、誰でもいいから抜けろ。そして、シェルターを」

「シェルターを、どうするって？」

その瞬間、その空間に何かが駆け抜けた。それはまるで全てを威圧するような感覚。その感覚と共に孝治は振り返る。そこには、大量のレーヴァテインを空中に浮かす光の姿があった。

光はその手に持つ本物のレーヴァテインをローブの集団に向ける。

「孝治！　委員長から連絡。西区と北区の避難は９９％完了。少し遅れている南区と東区も悠聖と冬華の二人が指揮を取って進行中。うちらは自由行動が与えられたで」

「そうか。木村は？」

「すでに行動中。空中から他の人を援護するって」

「そうか。第二段階はまだ来ていないから本気を出せないが」

孝治が半分だけ囲まれた状況であるのに余裕の笑みを浮かべていた。そして、運命を構える。

その運命は鈍く光っている。

「少々俺も怒っていてな。最後の体育祭をこのような輩に邪魔をされたとなると」

その顔に浮かんでいるのは笑みと共に、怒り。目が全く笑っていない。

「この場にいる全員を叩き潰しても収まるものじゃない」

「後ろは援護するで。やから、思う存分戦い！」
「助かる。お前ら、覚悟はできたか？」

迫り来る鈍く光る刃をベリエは上手く後ろに下がりながら避けた。
そして、持っていたナイフを投げつける。そのナイフは刃によって弾かれるが、その瞬間にはベリエは走り出していた。

相手の腕を取りながら肘を叩き込む。そして、微かに浮いた相手のがら空きの胴に蹴りを叩き込み壁に叩きつけた。

ベリエは小さく息を吐いてナイフを拾う。

「ふぅ、単独行動中にやって来るなんて」

そう言いながらベリエは周囲を見渡す。周囲は路地裏でローブの者達が八人倒れていた。

ベリエは避難しきれていない人達を捜すためにアリエやエレノアとは別行動で動いていたのだが、どうやらそれが裏目に出たらしい。

「由姫から近接格闘を習っていて良かった」

ナイフをポケットに入れながらベリエは歩き出す。路地裏を抜けた先には人の気配が全くしない大通りがあった。

この地域の避難はあらかた終わっているため人はまずいない。

「思い出すな。魔界を」

ベリエはそう言いながら小さく息を吐き、走り出した。

今やるべきことは避難しきれていない人達を捜すこと。それ以外にベリエのやることはない。

人の気配を捜しながら走っているとベリエのデバイスが震えた。ベリエはすかさずデバイスを取り出して通信機を繋げる。

「はい」

『ベリエちゃん？　よかったよぅ。今まで連絡が取れなくて』

「絡まれていただけよ。そっちは？」

『東区に移動することになったの。ベリエちゃんは今、どこ？』

ベリエは自分がいる場所を確認する。そして、小さく溜め息をついた。

「合流は難しそう。アリエはお姉様と一緒にお願い。私は単独で向かうから」

『わかったよ。気をつけてね』

「はいはい」

ベリエはそう言いながらデバイスから通信機を外した。そして、小

さく溜め息をつく。溜め息をついた時にはベリエの手にはナイフが握られていた。

「で、いつまで見ているつもり？」

「やはり気づかれてしまったか。さすがは結界術師の姉妹の姉。感覚が鋭いというのは本当だったみたいだね」

その言葉と共に建物の影からアリエル・ロワソが姿を現す。アリエル・ロワソの右手には魔力の刃を作る剣が握られていた。

前回見た時とは武器が違うことに驚きながらもベリエは小さく溜め息をつく。

「なんでいるかは尋ねないけど、手伝うの？　それとも」

「手伝うのは難しいかな。私はこれでも犯罪者だ」

これでもというところでベリエは何かを言いたそうだったが、何も言わないように唇を噛み締める。

「だが、味方であるのは確かかな。君達が正義である以上」

「『ＥＳ』の部隊を極秘裏に出したのね。わかった。周に伝えておく」

ベリエはアリエル・ロワソに背中を向けて走り出そうとした瞬間、ベリエの前をナイフが転がった。ベリエはそれを拾い上げて振り返る。

だが、そこにアリエル・ロワソの姿は無かった。

ベリエはデバイスが内蔵されたナイフをポケットに収めて走り出す。

「事態は動き出した、か。私も頑張らないと。周の隣に立ちたいし」

ベリエは走る速度を速める。次の目的地に向かって。

「漆黒よ、駆けよ！」

その言葉と共に最後のローブの人物が倒れ伏す。

孝治は小さく溜め息をついて振り抜いた運命を下ろした。

「これで大丈夫だな」

「そうやな」

その隣に光は降り立った。そして、周囲を見渡しながら展開していたレーヴァテインのコピーを消し去る。

二人の周囲には立っている人はいない。

「作戦は順調か。さすがは周だ」

そう言いながら孝治は座り込み、倒れ込んでいるローブのフードを

捲った。そして、微かに目を細める。

その感情にあったのは怒りでもあった。

「まあ、周やからな。うちからしてみれば、作戦が順調にいかんほうがおかしいとは思うけど」

「そうだな」

孝治は立ち上がりながら頷いた。光は今までの孝治の表情に気づいていない。

孝治は運命を鞘に収め、魔力によって編まれた漆黒の翼を広げる。

「次の目的地に向かうぞ」

デバイスを取り出し、次の位置を確認しながら孝治は言う。デバイスと装置によって示された場所は学園都市中央。

「そうやな。『炎熱蝶々』」

光の背中にも炎の翼が生まれる。それを確認した孝治は小さく頷いて飛び上がった。そして、光も飛び上がり、学園都市中央に向けて進路を取った。

その時、孝治がすかさず運命を抜き放ち振り切る。運命は飛来した光の塊を弾き飛ばしていた。すかさず光もレーヴァテインを構える。

「へぇー、完全に隙をついたつもりだったけどな」

そこにいたのは砲撃槍を構える青年。ローブは着ておらず、顔を晒している。青年は笑みを浮かべて砲撃槍を孝治に向ける。孝治も運命を構えた。

「光、先に行け」

「わかった」

迷うことは無かった。

光は頷くと共に飛び立つ。青年は視線で光を追いかけるが砲撃槍を向けることはない。

わかっているからだ。一瞬でも注意を逸らせば一撃で叩き斬られることを。孝治もわかっている。下手に動けば撃ち落とされることを。

だから、二人共動かない。

「お前も同じか？」

その時、唐突に孝治は尋ねた。青年は一瞬だけキョトンとした後、頷きを返す。

「そうだよ。僕は同じさ。君はどうやら僕達について少しは知っているようだね」

「『ＧＦ』は国連の裏側について知らないことが多い。独自に調べていた情報に限度はあるが、お前達の噂は聞いている」

「光栄だね。だから、撃ち落とさせてもらうよ」

「やれるものならやってみろ」

その言葉と共に青年が砲撃槍から光が収束した砲撃を放った。だが、その砲撃は孝治によって作られた漆黒の球体に包まれて消え去る。

「俺も本気で行く」

最速。

今の速度を自分で言うならまさにその言葉が正しいだろう。

炎獄の御槍を握りしめ、聖骸布（アストラル）を体に巻き、全力で学園都市の中を駆けている。それは、逃げ遅れた人を捜すためでもローブの集団を倒すためでもない。

私は道を曲がる。道を曲がって、ようやくお目当ての人物を見つけることが出来た。

私は地面を滑るように急停止する。そして、炎獄の御槍を構える。

「お兄ちゃん」

「メグか。やはり、来たな」

お兄ちゃんが笑みを浮かべる。

「さあ、殺し合いを始めるか」

お兄ちゃんは笑みを浮かべたまま、フェニックスを宿す腕を私に向けた。私は炎獄の御槍を構える。

お兄ちゃんは本気だ。本気だからこそ、私も本気を出さないといけない。

「炎閃！」

私の体を炎が包み込む。その姿を見たお兄ちゃんは愉快そうに笑みを浮かべていた。

私はそんなお兄ちゃんを睨みつけながら炎獄の御槍を握りしめる。

周の作戦とは違うけど、私は、お兄ちゃんを捕まえたい。だから、第二段階が入るより早くお兄ちゃんを倒し、捕まえる。それしか方法はない。

私は小さく息を吸い込み、地面を蹴った。

第百八十六話　北村兄妹

炎獄の御槍を包む炎がお兄ちゃんを包むフェニックスの炎とぶつかり合う。私の炎の威力は高いのだが、お兄ちゃんの方が威力は高いから簡単に食らいつくされる。

そんなことは最初からわかっている。

「焼き尽くせ」

お兄ちゃんの言葉と共にフェニックスの炎が私に向かってまるで蛇のように襲いかかる。

私はすかさず魔術陣を展開した。

「イグニスランス！」

その魔術陣から膨大な熱量を持った炎の槍が射出される。

フレイムランスの上位魔術であるイグニスランス。威力はフレイムランスを遥かに上回り、一点に対する火力なら炎属性最強だろう。

イグニスランスとフェニックスの炎がぶつかり合い、爆発を起こした。

「そんな弱い炎で消せると思うな！」

その言葉と共にフェニックスの炎が私がいた場所に食らいついた。

そう、私がいた場所に。

私は炎獄の御槍を振り上げながら飛び出す。イグニスランスによって出来た爆発の煙の中から。

「なっ」

お兄ちゃんの驚く顔。炎獄の御槍を最大限まで使えるこの形態でなければ爆発の中に飛び込むのは自殺行為だ。でも、爆発の中に耐えられ状況なら話は変わる。

基本的な魔術探知だと爆発で紛らわせることが可能だから。熱量もあるし、爆風による粒子の乱れもある。だから、私はこの策を取った。

結果は、成功。

お兄ちゃんは私を見ている。私はすかさず炎獄の御槍を縦に振り下ろした。

「くっ！」

お兄ちゃんの目の前に炎の壁が出来上がる。だけど、私はそれを気にすることなく振り切っていた。

空に血が飛び散る。

炎獄の御槍はお兄ちゃんの腕を微かに斬り裂き、炎の壁を砕いたことによる炎の破片は私の頬を微かに裂いていた。

私は炎獄の御槍を握りしめて後ろに下がる。

「燃え尽きろ！」

その言葉と共に放たれるフェニックスの炎。

お兄ちゃんの顔にあるのは焦り。多分、傷つけられたのが焦りを生んでいるのだろう。前のお兄ちゃんには圧倒されてしまったから。

私は炎獄の御槍を構える。そして、前に踏み込んだ。

フェニックスの炎は精霊の炎。だからこそ、たった一つだけ対処する方法がある。もちろん、一回だけの特殊技。

悠聖さんみたいに絆が深い場合は無理だけど、お兄ちゃんとフェニックスなら大丈夫。絶対に大丈夫。

「どけっ！！」

私の口から出る大きな声。その言葉と共にフェニックスの炎が勝手に軌道を変えた。

「なっ」

今度こそお兄ちゃんは絶句する。だから、さらに踏み込む。

炎獄の御槍の柄をお兄ちゃんのわき腹に叩き込んで、私はお兄ちゃんを近くの建物に叩きつけた。

いくら威力を吸収すると言ってもここまで威力が高かったなら気絶するだろう。

「成功、した」

私は小さく息を吐いてその場に座り込んだ。まさか、成功するとは思わなかった。

精霊の力は人によって使役される。なら、使役する人よりも強烈な気配を出せばどうにかなるんじゃないかと思ったからやってみた。

周がいたなら確実に自殺行為だと罵っただろうけど、結果オーライだよね。

「後は、精霊を封じる腕輪を」

『小娘にしては面白いことをする』

お兄ちゃんが、いや、お兄ちゃんじゃない。お兄ちゃんの姿をした別の誰かが起き上がる。

「あなたは、誰？」

だから、私は尋ねた。立ち上がり、炎獄の御槍を構えて。

『気づいているのではないか小娘？　わかっていたからあのようなことをしたのだろ？』

「フェニックス」

私は炎獄の御槍を握りしめる。精霊が人を操るなんて聞いたことがない。精霊というのはお互いに契約して成り立つものだからどちら

かが一方的なんてないはずなのに。

『そう、我はフェニックス。精霊で最も気高き血筋であり、精霊を統べるに値する存在。こやつより小娘の方が体は馴染みそうだな』

「どういうつもり？　お兄ちゃんを操っていたの！？」

『下等な人間ごときを操るとでも思っているのか？　我はただ、代償と共に力を貸しただけだ』

その言葉に私は驚く。精霊の契約に代償なんてないはずだから。

『こやつの考え方はこやつのもの。我はただ、代償と共に傷を癒やしていただけ』

「代償って何？　お兄ちゃんに何をしたの！？」

『何もしていない。我が提示した代償をこやつが呑んだだけのこと。我もそれには驚いたが』

私は魔術陣を展開してイグニスランスを放った。だが、イグニスランスは簡単に受け止められ、炎を吸収される。

『代償はただ一つ。こやつの生命力を分け与えてもらい、復活した暁には共に世界を変革すること。こやつは嬉々と応じてくれた。ありがたいことにな』

「じゃ、お兄ちゃんは人を殺したいと思っていたの？」

『正確には世界の変革だ。殺したいわけじゃない。選ばれたと思っ

ている存在。当たり前の生活が幸せと気づかない存在。こやつはそいつらが憎らしかった。世界の秩序にはいらないと思っていたほどにな』

そう語るフェニックスの顔はどこか生き生きしている。そして、さらに生き生きした笑みを浮かべてフェニックスは言う。

『選民思想。どれだけ自分が恵まれているかわかっていない人間のゴミを焼き尽くし、新たな大地に選ばれた民だけを残す。こやつはそう考えていた』

「嘘だ」

お兄ちゃんがそう考えていたなんて。それだったら、お兄ちゃんが完全にテロリストじゃない。

昔のお兄ちゃんみたいに、『GF』が正義じゃないの？

『嘘ではない。こやつの考え方はそれだ。我も驚いた。世界に仇なす存在ではあるが、我の考えと同じだったからな。世界は変革されるべきだ。この世にはいらない民が多すぎる。だからこそ、再生を司る炎を操る我が共に歩める存在だ』

「返して」

私はふらっと前に出る。そして、全力で炎獄の御槍を振るっていた。

「お兄ちゃんを返せ！！」

全力で振った炎獄の御槍は、お兄ちゃんの姿をしたフェニックスに

よって簡単に受け止められていた。

「危ないじゃないか、メグ」

「あっ」

お兄ちゃんの声に私は思わず炎獄の御槍を手放してしまった。

助けたかったお兄ちゃんを私は攻撃してしまった。でも、それは失敗。

お兄ちゃんが炎獄の御槍を掴み、構える。それと同時に私の体から炎が消えた。

「メグ、共に歩まないか？　俺と共に」

「お兄ちゃん、どうして」

「この世界がどれだけ腐っているかわからないのか？　世界を救うには変革が必要だ。だから、俺はフェニックスと共に変革することを決めた。メグはいつまでこの停滞する世界を歩んでいる？」

「停滞なんて」

「停滞している。だからこそ、壊さなければならない。『赤のクリスマス』と同じ理論だ。壊して壊して壊して壊して、文明を破壊すれば世界は滅びから遠ざかる。なら、変革すればいい。必要な人以外を殺して、それ以外を生き残らせる。それが正しい世界の姿だ」

「違う」

私ははっきり言葉を口にする。

お兄ちゃんの考え方は間違っているから私は胸を張って反論する。

「停滞なんてしていない。世界はずっと進み続けている。お兄ちゃんは世界を見ていない！」

「世界を見ていないのはお前だ。この学園都市という箱庭の中で」

「見ているよ。だって、第７６移動隊の隊長は周だから。周は苦悩している。このほんの二ヶ月ちょっとの間でたくさんのことがあった。周はたくさんのことを理解したよ。そして、繰り返させないために動いている」

「それが停滞していると言っている！」

確かにそうかもしれない。今の周はあの日の悲劇を起こさせないために戦っている。多分、あの日の後悔を断ち切るために。

過去ばかり見ていると言ってもいい。でも、それは過去に縛られているわけじゃない。

「停滞じゃない。過去を乗り越えようと頑張っている。昨日の自分よりも今日の自分。明日の自分は今日よりも。必死みんなが頑張っている。世界に対してどうすればいいか。一人一人が出来ることなんて少ないのに周達は考えている。必死に、一生懸命。そんな周達を否定なんてさせない！」

「そんなちんたらやっていたら、世界は変えられないんだ！」

お兄ちゃんが炎獄の御槍を突いてくる。私はその穂先を見ながら小さく笑みを浮かべ、動かなかった。

炎獄の御槍の穂先が私のお腹を突き破る。灼熱の痛みと共に私の体が炎に包まれた。

私はすかさずそのまま後ろに下がる。お兄ちゃんは炎獄の御槍を手放している。多分、私を貫いたことがショックだろうな。

痛みをこらえて炎獄の御槍を抜くと、さらなる痛みが襲いかかり、私はその場に膝をついた。

炎獄の御槍を握りしめ、お兄ちゃんを睨みつける。

「どうして」

お兄ちゃんの口から出る言葉。私は笑みを浮かべて返した。

「炎獄の御槍は、私の神剣だから」

痛みのあまり目を瞑る。我慢しないと。お兄ちゃんをどうにかするためには我慢しないと。

その瞬間、頭の中に何かの光景が広がった。

炎に包まれるまるで太陽みたいな星。その炎と炎を半分にするかのように氷の大地が姿を見せている。言うなら、氷は大陸。炎は海。

それを見た瞬間、私は目を開けていた。目を開けた時にはあれが何だったかはわからないのに、私の中には一つの術式があった。

もしかしたら、炎獄の御槍がくれたのかもしれない。
私は痛みをこらえて立ち上がる。
「炎獄の御槍、行くよ」
だから、私はその術式を展開する。
「炎王具現化！」
私の体を今まで以上の炎が包み込んだ。多分、炎獄の御槍を握っていないなら出来ないであろう炎王具現化。もしかしたら、今日を過ぎたなら使えなくなるかもしれない。
でも、それでいい。
「共に、行こう」
私は一歩を踏み出した。そして、炎獄の御槍を振り払う。お兄ちゃんはフェニックスの炎で槍を受け止めた。だが、炎は完全に拮抗している。
「今度こそ、お兄ちゃんを止めてみせる！」

第百八十七話　第二段階へ

学園都市中央部中央広場。

そこはただの広場として覚えられている場所。その中央にある噴水。それはいつもの姿とは違うあるべき姿を取っていた。

簡単に言うなら移動しているのだ。移動している噴水は地下へ続く通路を作っている。

周は使われていない下水道をルートとして考えていたが、実際は違う。ミスリードを誘うために様々な工作がされていただけだった。

そんな地下への入り口の前に海道駿は降り立った。隣には海道椿姫の姿がある。

「よく開けてくれた」

入り口を守る槍を持つ男に対して海道駿は声をかける。男は敬礼をしながら応える。

「ありがとうございます。これも隊長の大望のため」

「助かる」

だが、海道駿は気づいていない。その人物が隊長と言った時、視線が海道椿姫に向いていたことを。

「では、椿姫。行ってくる。この世界を新たな段階に変革するため

に。私達人類が、選ばれた存在だと確定させるために。だから、後は頼んだ」

「わかりました。いってらっしゃい。あなた」

海道駿は頷き、何人かローブを着た者達と共に中に入っていく。

海道椿姫はそんな様子を笑みを浮かべながら見ており、そして、

「バカな人」

そう呟き、笑みを浮かべた。

「作戦段階を次のステップに移します」

「了解しました」

噴水を守る男も笑みを浮かべた。その笑みは人殺しを楽しむかのような笑み。海道椿姫の笑みもよく似たものだ。

海道椿姫はその手に持つ槍を握りしめながら歩き出す。

「さあ、戦争の始まりです」

その瞬間、爆発が俊也の体を吹き飛ばしていた。

甲板をタイクーンとアーガイルに任せ、地上をフィンブルドとグレイブと共に戦っていた時、目の前でどこからか放たれた砲撃によって吹き飛ばされたのだ。

大きな衝撃と共に俊也の体がエスペランサの壁に叩きつけられる。

『俊也！』

フィンブルドの声。目を開けた先には剣を振り上げるローブの男の姿。その剣は鈍く光り、俊也には凶器のように見えていた。

フィンブルドが風を操るが男が振り下ろし始める方が速い。そして、宙を舞った。

ローブの男が持つ剣の刃が。

それと共に漆黒の閃光が男を両断するかのように通り過ぎ、その場に倒れ込む。

「ギリギリ間に合った？」

その言葉と共に大きな鎌を握りしめるリリーナが俊也の前に着地する。

俊也はゆっくり立ち上がるが体の痛みが全身を襲う。爆発を至近距離で受けたのだ。仕方がない。

「リリーナさん、どうして」

「ソードウルフのファランクス装備って案外使いにくいからね。特

に、市街地を破壊出来ない市街地戦でのソードウルフのファランクス装備は本当に難しいよ」

そう言いながらリリーナは手に持つ大きな鎌を構える。

リリーナはフュリアスのパイロットでありながら近接もこなすことが出来る。ただ、戦力としては文字通り一般隊員ではあるが。

「相手からの砲撃か。これって第二段階への移行だよね？」

「おそらく」

リリーナの言葉に俊也は頷く。それに対してリリーナはその手に握る鎌をしっかりと握りしめた。

「だったら、本気で行かないとね」

「砲撃を開始しただと！？」

浩平の視界の中でアサルトがラフレシアみたいな長距離射撃用の装備を使って曲射射撃を行っていた。

砲撃されている先はエスペランサ。

「第二段階へ移行ってか。つか、撃ち落としたいのは山々なんだけど、撃ち落としたら完全に見つかるよな。まだ、リーゼアインとリーゼツヴァイは動いていないのにな」

未だに純白のコートを着たフュリアスは動いていない。もしかしたら悠人達が動くのを待っているのかもしれない。

悠人はリーゼアインかリーゼツヴァイくらいしか抑えきれないし。

「リース、どうする？」

『見つかった』

リースに尋ねた瞬間、リースが少し驚いた様子で応える。

コートはフレヴァングをリースがいる方角に向けると、そこには囲まれているリースの姿があった。

作戦上ではこのまま待機してフュリアス部隊と共に敵フュリアス部隊へ攻撃を加えることになっている。だが、このままだとリースが危ない。

竜言語魔法すら消し去るもの。単体が相手なら火力で強制突破は可能だが、複数となると未知数だった。

浩平は考える。周に連絡すべきかどうか。そして、浩平は通信機を取り出した。

「リースを助けるために勝手に行動する」

一方的な言葉を投げかけて浩平は通信機を外し、フレヴァングを向けた。

リースはその手から光の剣を両手に出して暴れ回っている。

浩平は狙いをつけ、そして、引き金を引く。

リースを囲んでいた一人が浩平の射撃を後頭部に受けて昏倒する。

それによって相手が数人振り返った。

今の射撃で場所は見つかった。だが、元より見つかるために放った一撃。注意を引きつけて合流するだけの時間を稼げばいい。

浩平は近づいてくる気配を感じ、フレヴァングから双拳銃に持ち替えた。

「リース、今行く」

そして、浩平は地面を蹴った。

この時、浩平は知らない。この行為が、周の作戦を大きく逸脱した行為が、これからの未来を変えることになるとは思いもよらなかった。

オレは小さく溜め息をついてレヴァンティンを耳から遠ざけた。そして、背中に担ぐ都を担ぎなおす。

浩平の作戦行為からの逸脱。そもそも、オレ自身が作戦行為を大きく逸脱した行動を取っているため今更ではあるが。

「誰からの連絡ですか？」

「浩平だ。隠密行動をして相手の動きを探ってもらっていたが、どうやら見つかったらしい。まあ、状況自体が今更だから大きな作戦の変化はないな」

これによって大きく作戦が乱れることにならなければいいけど。

エスペランサ自体は周囲が戦闘中のためフュリアス部隊が外に出ていない。それは少しばかり不利な状況でもあるが、面々の動きから考えてもうすぐエスペランサを巡る攻防戦は一応の終わりとなるだろう。

「後は、メグと合流するだけか。夢はどうする？」

「私は、別行動。室内戦は、得意じゃない」

「まあ、射撃メンバーは三次元を上手く使わないと戦えないからな。わかった。ただ、誰かと合流出来なければどうしようもないと思うけど」

夢はおそらく隠密行動は得意だが近距離での戦闘はまず無理だろう。だから、無理させないことを考えておかないと。

それに、そろそろ第二段階に突入する。合図はまだ送っていないけど一部の人はわかっているはずだ。

「メグとは通信が取れないし、合流出来ればいいんだけどな」

オレは小さく溜め息をついて道を曲がったそこには、真っ赤に焼けた大地があった。いや、地面の上を炎が走っているだけで本当に燃えているわけじゃない。

その中で戦っているのは二人、メグと北村信吾。

メグは炎獄の御槍による炎を、北村信吾はフェニックスによる炎を纏いぶつかり合っている。だが、やはり火力の問題かメグはだんだん押されていた。つか、メグの炎とフェニックスの炎が拮抗しているし、メグの炎が今までよりも遥かに強いような気しかしない。

メグは一体、どこまで強くなるんだ？

「イグニスランス！」

「フェニックス！」

メグが放つイグニスランスをフェニックスが呑みこむ。だが、その瞬間にはいくつもの魔術陣をメグは展開していた。すかさず北村信吾が後ろに下がる。だけど、魔術陣の細かなところまで見たオレから言わせれば完全な失敗。だけど、普通はこんなことはしないだろう。

メグが作り出したのはインフェルノボム。北村信吾はその範囲に捉えられ、爆発に呑みこまれる。

爆発に呑みこまれながらも北村信吾はすかさず炎を放とうとして、目の前に炎の分厚い壁が広がっている。

炎属性の上級魔術であるフレイムウォール。北村信吾は思わず後ろ

に下がる。それは、人として当たり前の行為。だからこそ、隙が出来上がる。

メグはすかさず炎獄の御槍を投擲する体勢になる。その炎獄の御槍をいくつもの魔術陣が包み込んでいた。その魔術陣はイグニスランス。

複数のイグニスランスを憑依させた炎獄の御槍が放たれる。それをメグは北村信吾に向けて投げつけた。

炎獄の御槍を防御すべきか、それともイグニスランスを防御すべきか。おそらく、北村信吾はそれを考えていただろう。だからこそ、ほんの一瞬の隙が出来上がる。その隙にメグはもう一つの魔術を展開していた。

それを見たオレは思わず顔をひきつってしまう。

炎属性上級魔術の中で具現化よりも高度と言われる収束系の上級魔術。ほぼ光属性の炎魔術である熱量を収束させたもの。

アトミックブレイカー。

確か、放てる人はこの世にいないと言われたほどの最大級の威力を持つ収束系魔術。魔術陣はわかっていても、そこまでの熱量を作り出すことが出来なければ放つことすらできない最高難易度の魔術。

それをメグは平然を展開していた。

そして、メグがアトミックブレイカーを放つ。初めて見るその魔術はどう考えても光を収束させたかのような攻撃だった。まあ、光魔

術自体が光の持つ熱量を使った攻撃だから似ているのはわかるけど、アトミックブレイカーは目も眩むような砲撃。

北村信吾はすかさず判断する。フェニックスの炎をアトミックブレイカーに向かって放った。そして、炎獄の御槍を掴もうと体を動かす。アトミックブレイカーをフェニックスの炎が包み込み、炎獄の御槍が北村信吾の手に触れようとした瞬間、炎獄の御槍が姿を消した。代わりに、イグニスランスがその場を駆け抜ける。

北村信吾の腕をイグニスランスは微かに焼き、アトミックブレイカーはフェニックスによって完全に消されていた。だが、今までいたところにメグの姿はない。

「これで」

その声に北村信吾は上を見上げる。そこには、炎獄の御槍を振り下ろすメグの姿。

「終わり！」

炎獄の御槍は北村信吾を上から両断するように叩きつけられ、北村信吾はその場に倒れ込んだ。

「メグ！」

オレはすぐさまメグに駆け寄る。メグはその声に気づいてこちらを振り向いた。

「やっほー。何とか、勝てたよ」

「勝てたよ、じゃねえよ。無茶しやがって。ちょっと見せろ」

メグの腕を手に取るとその腕の大半が火傷一歩寸前の様な状態だった。オレは小さくため息をついて治癒魔術によって火傷を治癒する。

ほぼ全身に火傷をしていたのでついでにやるが、聖骸布（アストラル）を身につけているのに火傷に近くなるということはメグは炎王具現化を使ったみたいだ。炎王具現化は火力が上がる半面、使用時間が長いと全身に火傷を負って早く治癒しなければ大変なことになる。

オレは呆れたように息を吐く。

「炎王具現化は禁止な」

「わかっちゃった？」

「オレを誰だと思っている。というか、都。そろそろ降りてくれ」

オレはその場に都を下ろすと目を覚ましている都がしっかりと自分の足で地面に立った。振り向きながら小さくため息をつく。

魔術について詳しくない由姫は全くわかっていないようだし、そもそも、アトミックブレイカーすらわからないであろう夢は首をかしげている。ほんの少し起きたような都は理解していない。

「とりあえず、北村信吾に拘束用の腕輪を」

「それをされると困るのですけどね」

その言葉にオレは笑みを浮かべる。少し展開は違うけど、オレが考

えている通りの状況。

オレは振り返りながらメグよりも前に出た。

そこにいるのはお袋と一誠の二人。いや、その後ろにはたくさんのゴーレムが作り上げられている。

神隠し（トリックオアトラップ）による効果だろう。歌姫の力で守られているはずの地面から作り出せるなんてそれくらいしか考えられない。

「やはり、お前みたいな存在を産んだことを後悔しています」

「後悔、ね。まあ、別にいいけど。お袋の考えからすれば、今頃学園都市の大半は掌握していたはずなんだろ？」

「それをあなたは阻止した。まるで、全ての戦術を読んでいたかのように。本当に憎らしい」

「お袋は何がしたい？　お袋がこの学園都市でしようとしていることはわかっている。その結果、お袋は何を」

その瞬間、ほんの一瞬だけお袋は笑みを浮かべた。その笑みを見ただけで理解できる。

お袋とはわかりあうことができないのだと。

「お前は私が手のひらで踊っていると思いますよね？　違います。手のひらで踊っているのはお前達の方ですよ。だから」

周囲から気配が現れる。隠密行動を取っていたのかわからないが、

ともかく急にたくさんの気配が現れていた。

オレはレヴァンティンの柄に手を置く。そして、笑みを浮かべた。

「レヴァンティン！」

『撃ち上げます！』

その言葉と共に一発の信号弾が撃ちあがる。その信号弾が引く煙の色は青。そして、大きく緑色に爆発した。

「ドライブ、スタート」

「ドライブ、行きます」

「断章、ドライブです」

「ドライブ展開」

オレと、由姫、都にメグの声が響き渡る。

オレは笑みを浮かべてレヴァンティンをお袋に向けた。

「第二段階、スタートだ」

第百八十七話　第二段階へ（後書き）

メグが強くなる理由。炎獄の御槍の存在です。この神剣に関して語るのはほんとうにいつになるかわかりませんが、メグが握っている間は、どうしてここまでメグが強くなれた本当の理由が解き明かされる予定はありません。強くなりすぎだと思った方は炎獄の御槍がチート装備なんだと思っていてください。

第百八十八話　エスペランサ攻防戦　前編

「ドライブ！」

大きな鎌を握り締めるリリーナは撃ち上げられた信号弾を見た瞬間にドライブモードに入っていた。

すかさず目の前にいた者達を三人斬り伏せる。

「ようやく作戦は第二段階だね」

高速で飛来する矢を鎌で弾き飛ばしながらリリーナは呟く。

第二段階。それは各々が自由にドライブモードによる行動を許可する段階。さらには、第７６移動隊が予め作られていた作戦に沿って動き出す段階。

本来ならこのタイミングでエクスカリバーやアストラルルーラ達は出るのだが、未だに敵の数が多いため道を空けられない。

「俊也、体は大丈夫？」

リリーナが振り返った先には両柄から刃を出す両剣を握りしめる俊也の姿があった。その速度は極めて速く、ヒットアンドアウェイで攻撃を仕掛けている。

「痛みはありますが大体は」

『俺様がシンクロしているんだ。ちょっとくらいは肩代わりするさ』

爆発によって吹き飛ばされた俊也はフィンブルドとシンクロをしていた。だから、フィンブルドの声は俊也が握る両剣から聞こえる。

リリーナはそれに頷きながら大きく後ろに下がった。後ろに下がると同時にリリーナがいた位置に収束砲が突き刺さり爆発する。

「砲撃手の位置は確認出来ただけで八ヶ所。ただし、それが囮かはわからないよ」

相手の攻撃を避けながらリリーナは俊也に向かって言う。本当ならどちらかが出たいところだが、二人で完全に囲まれてしまっている。ついでに言うなら防衛戦だ。だから、放置している。

ずっと放置出来ないのはわかっているが。

「せめて後一人いれば」

俊也が小さく呟く。この時に俊也の頭の中にあったのは悠聖のことだった。確かに、悠聖ならこの状況をあっという間に打開するかもしれない。

でも、今ここにいるのは自分自身とリリーナのみ。

迫ってきたローブの相手を両剣で殴りつけ、斬り伏せる。

この戦力でどうやって挽回していくかを考えないといけない。そして、どうやってフュリアス部隊を出撃させるか。

「人がいないことには文句は言えないよ。文句を言うなら、自分の、

実力に、文句を、言って！」

リリーナは攻撃を弾きつつ、鎌を大きく振り切ることで近づいていた敵を吹き飛ばすがやはり焼け石に水だろう。

リリーナは鎌の先を相手に向ける。

二人の耳にはまだ旋律が聞こえているため全く絶望的ではないが、このまま行くと作戦に支障が出る。

『怖いのは、未だにエース級がいないってことだな』

フィンブルドの言葉にリリーナが頷く。

「そろそろ相手のエース級が出て来てもおかしくないからね。出て来たらあっという間に私達は負けると思うよ」

『お前はな。俺達はまだ戦える』

「だろうね。でも、相手は一体」

「知りたいか？」

二人に投げかけられる声。そこにはローブを着ているのにフードを被っていない男がいた。

二人はすぐさま武器を向ける。

「あなたは、確か」

リリーナが苦々しそうな顔で呟いていた。
男は笑みを浮かべて懐からナイフを取り出す。
「お初にお目にかかる。魔界の姫君。しかし、姫は私を知っているようだな」
「バックに国連がついているとは聞いていたけど、まさか、こんな大物までいるとは」
「リリーナさん、知り合いですか？」
『俊也、話は聞いていたか。まあ、まさかあんたがここに来るとはどういう風の吹き回しだ？』
どうやらフィンブルドも知っているらしく、フィンブルドの気配が膨れ上がる。殺気とも言っていい。
男は笑みを浮かべ、そして、地面を蹴っていた。
リリーナがすかさず前に出て鎌を振るう。だが、男はその鎌をナイフ一本で受け流すとリリーナの腹部に蹴りを叩き込んでいた。
とっさのガードでリリーナは直撃を防ぐが、１０ｍ近く吹き飛ばされる。
何とか体勢を立て直したリリーナの前には一本のナイフが迫っている。リリーナはとっさに鎌で打ち払い、懐に潜り込んだ男の姿を見ていた。

体はバックステップをしようと動いている。だが、迫り来るナイフを持つ腕を避けることは、出来ない。

リリーナの体にナイフが突き刺さり、リリーナは体をくの字に曲げて吹き飛ばされた。腹部にある痛みを自覚しながらリリーナは相手を睨みつける。

「国連の犬」

「誉め言葉として耳に入れよう。まずはどこから解剖されたい？腕？　足？　それとも、内臓？」

「誰が、そんなことを」

「フィンブルド！」

完全に注意がリリーナに向いている男に向かって俊也はいくつもの風の刃と共に前に踏み出していた。

両剣を握りしめ、振り下ろしながら前に踏み出している。

男はそれに対して前に踏み出した。もちろん、俊也がいる方向にだ。

風の刃を全てナイフ一本で弾く。可視不可視なんて関係ない。全てをナイフ一本だ。そして、ナイフが両剣を受け流して、そのまま俊也に迫った瞬間、男の体が風の刃によって切り裂かれていた。

だが、男は気に止める事もなくナイフを俊也の右腕に突き刺した。

俊也は灼熱の痛みを感じながらも風によって男を吹き飛ばす。

強いというレベルじゃない。俊也の実力は普通に高く、真っ正面からの戦いでは相手がよほどの敵でなければフィンブルド一体で圧倒出来るだろう。

だが、男の実力は俊也とリリーナの二人を相手にしてもまだまだ余裕がある様子だった。

俊也は両剣を地面に突き刺して倒れるのを防ごうとするが、地面に突き刺すことが出来ずにその場に倒れてしまう。

「あんた達の、好きにはさせない」

リリーナが腹部の傷を手で押さえながら片手で鎌を向けているが流れ出る血を止めることは難しい。一応、治療兵である委員長は近くにいるものの、戦闘の最中では乱入することは難しい。

だが、ここで降伏したらエスペランサは奪われるだろう。そのまま空を制圧されてどんどんじり貧になるのは確かだ。

「ここは、私達が、守るから！」

鎌を片手で構えリリーナは前に踏み出す。男はそれを鼻で笑い、ナイフを握り締めて前に踏み出した瞬間、

近くにあったカタパルトのハッチが吹き飛んだ。破片を避けるために男は大きく後ろに下がる。

カタパルトの中にいるのは鋼鉄のマントを身に付け。エネルギーバルカンを持つリヴァイバーとアルケミスト。そして、翼の砲全てを向けているイグジストアストラルの姿。しかも、その三機は同じカ

タパルトに搭載されている。

それを見たリリーナは顔をひきつらせ大きく後ろに下がった。その瞬間、三機のフュリアスがカタパルトから撃ちだされる。カタパルトから撃ちだされた瞬間、リヴァイバーとアルケミストが同時に跳び上がり、イグジストアストラルがそのまま正面を滑って男に肉薄する。

「イグジストアストラルにファランクス装備のフュリアスか！」

その言葉と共に男はナイフを投げつけた。だあ、イグジストアストラルは減速することなく、地面を滑りながら、男を跳ね飛ばし、呆然と固まっている集団に向けて背中の砲を一斉に放った。

「俊也君！　リリーナさん！」

俊也とリリーナの二人もその光景に呆然と固まっていると、委員長の声が響き渡り、二人がそちらを向いた。そこには防護用のマントを羽織った委員長の姿。その手には簡易杖が握られている。

「今すぐ治癒するからね。フィンブルドはその間だけ守ってもらえる？」

『いいぜ』

委員長の言葉にフィンブルドが両剣から通常の妖精の状態となり三人を守るように風を動かす。委員長はその間に倒れている俊也に近づいた。

「傷は少し深いかな。破片はないから、そのままの治癒と包帯を巻

くだけで十分か」

委員長は症状を確認するための魔術と治癒魔術、それに、包帯を巻く作業を同時に行っている。ふつうはどれか二つなのだが、委員長は普通に三つを同時に並行して行っていた。

「ごめんなさい」

「謝らないで。俊也君は頑張ったじゃない。もう少しだけ、頑張らないと。リリーナさんは大丈夫じゃないかな？」

「傷が深いのは自覚しているよ。でも、これはどういう状況？」

リリーナがゆっくりとした足取りで近づく。委員長は俊也に包帯を巻きながらリリーナに的確な治癒を行っていく。

「エスペランサの放棄を悠人君が決めたから。篠宮君がエスペランサのデータを初期化している最中。もちろん、バックアップはあるよ」

その言葉と共に委員長はポケットからデバイスを取り出した。

「それにね、ようやく完成したから。学園都市を守る歌の第一段階が。歌姫の歌は第二段階。ここからは最強の戦力が戦場に参加するよ」

その言葉と共にエスペランサの屋上から誰かが墜ちてくる。いや、飛び降りてくる。

その人物は地面に着地すると同時に片手で器用に括っていたリボン

から手を離した。

「お待たせ、二人共」

第７６移動隊最強の戦力である音姫が着地すると同時にイグジストアストラルが飛び上がる。おそらく、メリルをイグジストアストラル内に回収するためだろう。

音姫は光輝の柄を握り締めながら腰を落とす。

「ここからが戦いの本気かな」

その言葉と共に音姫は前に踏み出した。

第百八十九話　海道椿姫の目的

オレはレヴァンティンをお袋に向ける。こちらがドライブになったとは言え数的優位はお袋の方が遥かに上だ。それに、お袋はオレ達が手のひらの上で踊っているように思っている。

まあ、そこから前提条件は間違っているんだけどな。

「死にたくなければ投降しなさい」

お袋が笑みを浮かべながら言う。だが、オレは笑みを浮かべて返した。

「投降してもどのみち殺されるんだろ？　まあ、やることなんてわかっているさ」

「命だけは助けてやる、と言っても？」

「命だけだろ。お袋のことだ。障害物になる敵を逃すわけがない。とりあえず、オレは四肢切断か？」

その言葉にオレの両脇にいる由姫と都がピクリと動いた。反応する気持ちはわかるけどさ。

お袋は笑みを浮かべたままだ。それくらいは想定していたのであろう。だから、オレはその笑みを固まらせる言葉を発する。

「世界をめちゃくちゃに壊すためなら手段は問わないだろうしな」

その言葉にお袋の笑みが固まった。

親父とは違う考え方を持っていることにオレは考えていた。親父のやり方は『ＧＦ』に似ている。でも、無差別に殺すようなやり方をするような感じではない。

だったら、お袋が親父とは違う考え、何かを犠牲にしてでも救うために動いているなら、お袋は全てを破壊するために動いていると推測したのだ。

「フェニックスを使い『赤のクリスマス』でニューヨークを消し去ったのも、親父の考え方とは違う動きをする部隊も、海道駿の妻という立場なら不可能じゃない」

「何の証拠があって」

「証拠なんてないさ。全てはオレの推測。でもな、そうじゃなければ説明はつかない。それに」

オレは笑みを浮かべる。その笑みでお袋ではなく一誠を見ていた。一誠の表情は無表情だが楽しそうに目で笑みを浮かべている。

それにオレは推測が間違っていないことを理解した。

「いや、今はいいか。今はただ、どちらが新たな未来を構築出来るかの戦いだ。勝てば官軍、負ければ賊軍。結局のところ、戦いで決めるしかないんだろ？」

話し合いなんて無理だとわかっている。わかっているからこそ、オレは戦う。

話し合いで全てが解決するなんてただの妄想だから。

「なら、後悔させてあげましょう。あなたの言葉を、降伏した方が良かったと思えるような未来を」

周囲にいるのはゴーレムが３０ほどにローブの敵が４０近く。隠れている数は６、いや、８だな。二人はかなり離れた位置からライフルを構えている。話で時間を稼いで良かった。

オレは笑みを浮かべてレヴァンティンを鞘に収め、腰を落とす。三つの魔術陣を展開してストック。タイミングは難しいから慎重に。

「やりなさい！」

お袋の言葉と共に由姫とメグの二人が前に踏み出していた。そして、お互いが栄光と炎獄の御槍を握りしめ、前にいた相手を殴り倒す。

それを開始する合図のように敵が動き出した。こちらを囲むように動きながら隙間のない陣形を構築しようとする。だが、そこにメグがインフェルノボムを埋め込んだ。

陣形の構築が固まった瞬間にオレと由姫の二人がそこに入れた楔を大きくするように前に踏み出す。

レヴァンティンを鞘から走らせて紫電一閃からの破魔雷閃で八人を一気に倒す。そのまま紫電一閃の鞘から抜いた状態での消し技である紫電連鎖で殴り飛ばす。

そのまま後ろに下がった。その瞬間にオレと相手の間に分厚い炎の

壁が出来上がる。

すかさず由姫が跳び込んでいる部分にオレは跳び込んだ。レヴァンティンを握り締め地面を蹴りながら振り下ろす。

由姫を背後から攻撃しようとしていた敵を斬り飛ばしながらさらに近くにいた相手に蹴りを放った。そのまま振り向いた由姫の拳に足を合わせてオレの足を殴り飛ばしてもらう。

オレ達の集団の後ろから攻撃仕掛けてきた相手をレヴァンティンを振り払いながら吹き飛ばした。

「相変わらず、バカ力だな」

オレは振り向きながら笑みを浮かべる。由姫も殴り飛ばしながら笑みを浮かべながら返す。

「後で覚悟してくださいね」

「周様、相変わらず肝を抜くことをしますね」

都が顔を引きつりながらフォトンランサーとフォトンスラッシュを同時に合わせて１００近く運用している都だが、その様子を見ている相手全員の顔が引きつっていおるのに気づいていないのか？

つか、ドライブ中の都ってこれでも余裕があるんだよな。

一回、模擬戦でフォトンスラッシュを１００ほど避けたオレの前にフォトンランサーが２００ほど展開されていたってあっけ。

「よくよく考えると、前衛のはずの私がここまでなるなんて」

「サポートも、上手いよ」

メグはただオレ達の背後を守っているだけだ。アタッカーとしては極めて強力な由姫と状況判断に優れている（そう思いこんでおく）オレとの組み合わせではメグは後ろに下がるしかない。

サポートもインフェルノボムかフレイムウォールを撃ちこむだけだし。

夢は相変わらず弓による射撃。

「あなた達は下がりなさい。私とゴーレム部隊で行きます」

「ようやく本丸が動き出したか？」

オレはレヴァンティンを鞘に収めながらメグと夢の二人の間を抜けて前に跳び出した。そして、腰を落としレヴァンティンの柄を握り締める。

「殺してやりたい。本当に、この手で。どうしてあの時、死ななかったのかは疑問に残りますが」

「さあな。実際、オレの能力には未だにわかっていないところがあるからな」

オレは体に治癒魔術をかけて、微かに目を細める。治癒魔術の効能が薄いのだ。いつもなら回復するような筋肉の損傷も治りが遅い。

幻想空間（ファンタズマゴリア）にも副作用があるってわけね。

「オレ達の今やるべきことはお袋達を倒し、親父を止める。ただ、それだけだ」

「あなたは何も分かっていませんね。不意義に思わないのですか？　この学園都市がどれだけおかしな立場にいあると言うことが」

「日本政府の主導、いや、国連によって作られた学園都市を実質支配しているのは『ＧＦ』。利権に固まった国連の連中が易々と手を離すわけがない。なのに、どうしてそうしたかというと、『ＧＦ』を潰すためか？」

オレの言葉にお袋は頷く。

「全てはこの日のために。『ＧＦ』という強大な戦力を持つ部隊が都市を守ることが出来ずたくさんの生徒を失ったなら？　そうなれば、日本での『ＧＦ』の居場所はないでしょう。それに、本当の意味での復讐となりえる」

「復讐？」

その言葉に違和感を感じる。どうして復讐なのかわからない。確かに『赤のクリスマス』でニューヨークを消し去ってまで姿をくらましていたのに何が復讐なのだろうか。

考えられるのは一つくらいしかないが、その一つだけありえる要素は少しだけ否定できる。

「わかっていませんね。そうですね、例えば、とある男女が付き合

っていたとしまいます。その内の一人がどこかの令嬢で、昔から決められていた許嫁がいましたが、それに反抗してその人物はほかの男と付き合っていました。ですが、その令嬢は男と引き離されます。何故なら、親が仕組んだ自作自演に巻き込まれたかです。そして、愛すべき男を失った令嬢は許嫁と結婚しました」

「それがお袋なのか。なら、どうしてオレや茜を」

「その理由、教えて上げましょうか？」

お袋が笑みを浮かべる。その笑みに、オレは嫌な予感が背中を駆け抜けた。そして、オレの索敵範囲に今までいなかったはずの誰かがいることに気づく。まるで、幻のように存在している。

この感覚は一体、何だ？

「私の手駒が欲しかったのですよ。優秀な、手駒が」

その言葉にオレはそちらに振り向いた。

体の奥が引かれる。オレの体が何かを求めている。そして、そこにいたのは、弓を構える茜の姿。そして、矢が放たれる。

その矢は一直線にオレに向かい、そして、夢が放った矢によって弾かれた。

「さあ、戦争を始めましょう。第７６移動隊を倒し、学園都市を焼け野原にし、世界を変革するための戦争を」

第百九十話　フュリアスの戦い

『リヴィバー及びアルケミストのファランクス装備の出撃を確認。両機共に所定の位置に向かっている。アストラルソティスとアストラルルーラのアルティメイト装備を続いて射出する。両機はカタパルトに移動してくれ』

通信から和樹さんの声が聞こえる。僕はレバーを握りしめていた手を外し、パワードスーツの腕を外して汗を拭った。

緊張する。

実戦は実戦でも今回は強大な敵がいる。リーゼアインにリーゼツヴァイ。そして、正体不明のフュリアス、リーゼフィア。

今までならエクスカリバーの力でどうにか出来るくらいの戦力差はあった。だけど、リーゼアインにリーゼツヴァイ、そして、リーゼフィアの三機は恐らく手強い。

今まで以上に注意深く行かないと。

『悠人、緊張してる？』

ルナの言葉と共にルナの顔が映った。僕はルナを見て笑みを浮かべる。

「大丈夫だよ」

『ちょっと緊張しているわよね。初体験の時みたいな表情になって

いるけど』

「何でそんな時の僕の表情を覚えているのさ！？」

僕は顔が赤くなるのを感じながら叫んだ。ルナは顔を赤くしながらも笑みを浮かべている。

『だって、可愛かったから』

多分、ここが水の中なら確実に近くの水が沸騰していただろうな。

「あぅ」

『ふふっ。悠人、大丈夫。悠人の強さはよく理解しているから。私じゃ相手にならないくらい、ううん、この世界にいる誰もが機体性能以外で勝つことは出来ないって信じている。あんたの戦いを、私はずっと見ていた。あんなに綺麗にフュリアスを動かせる人はいない。あんなに状況判断が上手いフュリアスは数少ない。あんなに心がときめく戦いが出来る人はあんたしかいない。大丈夫。私は、悠人の実力を信じているわよ』

「今回は難しいかも。リーゼアインもリーゼツヴァイも強力な装備をしているし」

『装備が何だと言うわけ？　悠人はわかっていないわね。いくらすごいものを作り出してもそれを扱える人がいないなら意味がない。その点に関してはお姉ちゃんやルーイも同じ。二人共、まだ機体性能に頼っている部分が多いから。その点では悠人の技術はずば抜けている』

「そう、かな」

そんなことを思ったことはない。でも、みんなはどうしてあの武器を使わないのかな、と模擬戦の中では思ったことはある。

だから、ルナを少しは信じようかなと思う。

『悠人！　メリルを回収したよ！』

その時、僕の耳に鈴から通信が入った。僕はパワードスーツの装着を確認してレバーを握り締める。メリルを回収したということは甲板での出撃が可能ということだ。

『悠人、また、後で』

「うん。また、作戦が終わったらね」

僕はルナの声を聞いてい息を吸い込み、そして、小さく頷き声を上げる。

「アルテミスパック装備エクスカリバーＺ１の搬送エレベーター使用許可を」

『任せろ。大空を駆け回れよ』

和樹さんの声と共にエクスカリバーの搬送エレベーターが動き出す。それと共に甲板のカタパルトも起動しているだろう。

僕は小さく息を吐いて外部カメラから写される。外の様子を見る。見えるのは壁。だが、しばらくしたそこには何人かのローブの人が

魔術を展開している姿だった。だけど、その人達全員が固まっている。多分、エクスカリバーのフォルムを見ているからだろう。

『エクスカリバー射出後、アストラルブレイズを射出する。その後、データアンインストールを開始するからリリーナは早くソードウルフに乗って出撃すること』

『わかったよ。ハッチや固定用器具は？』

「解除済みだよ。すぐにソードウルフは出撃できる」

僕は声を上げ、出力を一気に上げた。カタパルトが同時に起動してエクスカリバーの体が一気に加速する。直線上にいる人達は慌てて魔術を放つが、アルテミスパックの前では効かない。

「どけっ！！」

僕は外部スピーカーをオンにして叫んだ。その叫びと共にローブの人達が慌ててエクスカリバーの進路から遠のく。

エクスカリバーの体が大空を舞った。それとどうじに緊急出撃用装甲であるアルテミスパックをパージする。

エクスカリバーを覆っていた鋼鉄の衣が剥がれ、エクスカリバーの銀翼の翼が大空を光を照らすかのように現れる。

「目標地点確認」

僕は目標地点である敵フュリアス集合地点に視線を向けた。そこには確かにリーゼアイン及びリーゼツヴァイ、そして、おそらくリー

ゼフィアを含む国連の最新型フュリアスであるアサルトの集団があった。

慌てて動いているのはアサルト。だから、僕はエクスカリバーを変形させることなく現形状の最高速度になるまで出力を上げる。

「これより、強襲作戦を開始する！」

その言葉と共に、僕はアサルトの群れの中を駆け抜けた。駆け抜けてすかさず空へ舞い上がりながら変形する。

強烈な重力が体にかかるが気にすることなく僕はその手にバスターライフルを二つ取り出した。そして、引き金を引くことなく一気に急降下する。

その時になってようやくアサルトの一部が僕に向かってエネルギーライフルを構えるけど、エクスカリバーは地面に着地し、僕はバスターライフルの引き金を引いていた。

バスターライフルから生まれるのは光の奔流じゃない。

超極厚のエネルギーの刃。

それを握り締め、エクスカリバーで地面を蹴る。

フュリアスの近接戦闘はいたって簡単だ。もしかしたら、生身での戦闘よりも簡単かもしれない。あらゆる補助ブースターを使い通常では出来ないような軌道を描くことで相手の予測を外し、確実にダメージを与えることが出来る。

後は全て僕の体から湧き出る勘を使いきるだけ。

嫌な予感と共に迫りくるエネルギー弾を僕は嫌な感じのしない方向にひたすらエクスカリバーの体を動かしていく。そして、両手に持つバスターライフルソードを振り回す。フュリアスの力を使った無茶苦茶な回転攻撃や鷹飛びしながらの攻撃など、ことごとく予想を外すような攻撃。

右に避けて回転しながらバスターライフルを振りつつエネルギー弾を避けて目の前にいるアサルトを両断する。そのまま両断したアサルトに飛び蹴りを放ちながら足についているメインブースターでその場に一回転してエネルギー弾を避けつつ着地。そのまま機体上方の補助ブースターをつかって屈み込み、すかさずメインブースターによる加速で一気に距離を詰めつつエネルギー弾を回避。そして、アサルトとの距離を詰める。

やっぱり、この軌道はＦＢＳじゃ出来ない。あるはかなりのコマンドが簡略化されているからここまでの機動が出来ない仕組みになっている。

だから、ゲームじゃなく、この機動が出来る現実の方がいい。

右、左、右、そこ。

僕は両手のバスターライフルを合わせた。

全ブースターと全スラスターを噴射して下がりながらもデュアルバスターライフルを放った。

極太のエネルギー弾が吐きだされ、一直線上にいたアサルトを巻き

込んだ破壊する。すかさずバスターライフルから手を離し、変形しながら一気に距離を詰める。そして、アサルトの目の前で再度変形して取り出した対艦刀で斬り裂いた。

僕は小さく息を吐いて対艦刀の先を地面に当て、残ったリーゼアイン、リーゼツヴァイ、リーゼフィアを睨みつける。

「残りはあなた達三機だけど、どうする？」

対艦刀を構えながら僕は尋ねた対する回答は三機共に対艦剣を取り出して構えること。

僕はゆっくり笑みを浮かべる。戦いに酔っているともいえる状況。でも、その状況が僕にとっては好都合でもあった。

「そう。わかったよ。手加減は出来ない」

僕は対艦刀を構える。

「世界最強の名にかけて、あなた達を破壊する！」

第百九十一話　戦場の動き（前書き）

やっちゃった

第百九十一話　戦場の動き

地面を駆ける。そして、飛び上がる。

手に持つ大剣を握り締め、こちらに気づいていない集団に叩きつける。それによって無事な人もオレに気づくがオレの周囲に浮かぶ二本の剣が吹き飛ばした。

「つかよ、相手の目的があまり見えないんだが」

オレは小さく溜め息をつきながら隣に着地した冬華に尋ねた。冬華は不思議そうに首を傾げている。

「どういうこと？」

「何というか、今まで通った時に蹴散らしていた相手はただその場で見回っているだけのような存在なんだ。言うなら、『ＧＦ』みたいな感じだ」

「確かに。配置に目的が無かったように感じるわね。それがどうしてかはわからないけど」

オレは小さく溜め息をつく。周ならば、何かの答えを持っているだろうが、相変わらずオレのような頭じゃわからない。

だけど、違和感はある。言うなら、二つの勢力と戦っているような感じだ。

「ともかく、予定より早いけど北村信吾を見つける作業に」

「行けるとでも？」

その言葉と共にオレ達の前を誰かが転がった。折れた刀にボロボロになった女性。その人物にオレは駆け寄った。

「素子さん！」

冬華は刀を抜き放ちながらオレと素子さんの前に出る。

視線の先にいるのはリーリエ・セルフィナだった。

「ようやく見つけた。そこのおばさんを連れて来ただけで大変だったわ。だから、大人しくしてくれていたらありがたいのだけど」

「私達が言うことに応じると思っているの？　リーリエ・セルフィナ」

「そろそろ時間的にも厳しいかしら。駿さんはそろそろ潜るころだろうし、あなた達だけでも食い止めておかないと」

冬華が刀を握りしめたままじりじりと動く。対するリーリエ・セルフィナは動かない。オレは手に持つ大剣を握りしめた。

リーリエ・セルフィナは転移術者と聞いている。だけど、この余裕は一体なんだ？

「指揮官として優秀なあなたを食い止めなければ、駿さんの作戦は成功しない。この意味がわかる？」

「オレを潰すつもりか？　残念ながら難しいだろうな」

オレは立ち上がり大剣を構える。

「すでに作戦は伝えてある。周が作り出した工程に沿った作戦がな」

「なるほど。では」

リーリエ・セルフィナがオレ達に向かって指を向けた瞬間、オレ達は叩きつけられていた。

何に？　近くの建物にだ。

「かはっ」

肺から息が漏れる。あまりのことに思考が追いつかない。

「では、あなた方を倒しましょう。お姉さんが優しく、そして、派手に動けないようにしてあげるわ。これもあなた達を守るため。ですから、動かないでね」

「なるほど」

ベリエは感心したように息を吐いた。そして、小さく溜め息をついて周囲を見渡す。

「作戦指揮が周からエスペランサへ移って、エスペランサの放棄が決まったから悠聖に、か」

『そういうことだね。悠聖は作戦通りに目的地に進んでいるし、エレノアとアリエの二人も向かっているよ』

「問題は、私はアリエと一緒が一番強いけど？」

その言葉と共にベリエはアルネウラを睨みつけた。アルネウラは苦笑しながら肩をすくめる。

どうやらそのことについてはわからないらしい。ベリエもそれ以上追求する気はないのか溜め息をついていた。

「別にいいわ。単独行動が出来ないわけじゃないし、お姉様は私よりもアリエの方が相性がいいし」

『やっぱりだね。悠聖も多分、そうかなって言っていたよ。ベリエはアリエとは正反対だって』

「まあ、そうだけど。ともかく、単独行動で行ってみるわ。それよりも、あなたはここにいていいの？　悠聖の精霊の中で一番重要なのはあなたでしょ？」

ベリエも同じ第７６移動隊にいるので悠聖の精霊については知っている。だからこそ、ここにアルネウラがいるのが不思議でたまらなかった。

アルネウラは悠聖の他の精霊と組み合わさることで無類の性能を発揮するから。

『悠聖にはセイバー・ルカがついているから。一応、連絡役でみんな散っているから私も働かないと』

「そういうことね。じゃ、私は次の場所に」

その時、ベリエは慌てて振り向いた。アルネウラは不思議そうにベリエが振り向いた方向を見る。そこには何もない。あるのは並んだ建物くらいだ。

アルネウラは不思議そうに首を傾げるが、ベリエはただ目を細めるだけだった。そして、地面を蹴る。

『ベリエ？』

アルネウラは慌ててベリエを追いかけながら名前を呼ぶ。対するベリエは振り返ることなく口を開いた。

「リーリエ・セルフィナが本格的に動き出した」

『どういうこと？　リーリエ・セルフィナなら周のお母さんが』

「あいつは転移術者じゃない。空間制御術者よ。多分、お姉様もアリエも気づいている」

『意味がわからないよ！？』

アルネウラはベリエに並びながら尋ねるがベリエは苦々しそうな顔である方向を見つめている。それはまるで後悔の顔。

そんな顔を見たらアルネウラはこれ以上、何も言えなくなる。

「私もアリエもお姉様も、昔の事は話したくない。だから、リーリエ・セルフィナに会えばわかる。あいつは」

ベリエはナイフを取り出しながら道を曲がった。

そこにいるのは壁に叩きつけられた悠聖と冬華。そして、笑みを浮かべているリーリエ・セルフィナの姿。

「人を痛めつけることが大好きな奴だから！」

取り出したナイフをリーリエ・セルフィナに向かって投げつける。だが、ベリエが放ったナイフはリーリエ・セルフィナが何もしていないのに弾かれてしまった。

ベリエはそれが元からわかっているのか新たなナイフを取り出しつつ前に駆ける。

リーリエ・セルフィナはゆっくりベリエの方を振り向き、そして、目を見開いた。

「あなたは」

「くらえ！」

ベリエはナイフを投げつける。だが、そのナイフは簡単に弾かれた。でも、それはベリエにとっては想定済み。

すかさず魔術陣を展開しようとして、

目の前にリーリエ・セルフィナが迫っていた。

ベリエはすかさず防御魔術を発動しようとして、天地がひっくり返る。地面にぶつかる寸前で上手く着地をするが、ちょうど目の前にリーリエ・セルフィナの蹴りが迫っていた。

とっさに腕で防御しようと顔を覆った瞬間、ベリエの側頭部に蹴りが直撃していた。

頭が揺さぶられる感覚と共にベリエの体が地面を転がる。それと同時にベリエの周囲にいくつもの硬貨が転がった。

持っていた財布でも破けたのだろうか。

「薄汚い魔界の化け物が、何故、このような場所に？」

「あぐっ」

そして、リーリエ・セルフィナはベリエの頭を踏みつけた。

「あんただけは、私が、倒す」

「無理ね。あなたの実力は低いもの。たった一人で何が出来るか教えて欲しいわ」

その言葉と共にリーリエ・セルフィナはベリエを勢いよく踏みつけた。

「ぐっ」

ベリエが目を閉じて痛みを堪える。だが、リーリエ・セルフィナは何度も、何度もベリエを踏みつける。

その行為はまるで楽しんでいるかのようだった。

「フェンリル！」

冬華がその言葉と共にフェンリルをリーリエ・セルフィナに向かって放つ。だが、リーリエ・セルフィナは軽く腕を振るだけでフェンリルを壁に叩きつけていた。

レベルが違いすぎる。その場にいる誰もが、ベリエ以外の二人が思った。

だが、ベリエはリーリエ・セルフィナを睨みつけている。

「あんたの能力、私はわかっているから」

「転移術者ですが？」

リーリエ・セルフィナは当たり前のように言う。だが、その瞳に焦りがあるのをベリエは見逃さなかった。

「あんたはこのために転移術者であると嘘をついていた。あんたの本当の能力は」

「うるさい化け物ですね」

そして、リーリエ・セルフィナが足を振り上げ、動きを止める。性

格には周囲に展開された魔術陣がたくさんの紐がリーリエ・セルフィナに巻きついていた。

ベリエは踏みつけられていた頭を押さえながら立ち上がる。

「空間制御の力。空間自体の数値を変え、転移術者であるかのように見せた。だから、こちらからの攻撃はその力を超える攻撃か、それ以上の幸運を作り出す術式しか成功しない」

ベリエはその言葉と共に後ろに下がる。この時にリーリエ・セルフィナは気づいた。

周囲に散らばっている硬貨、五円玉がうっすら光を放っていることに。

「正月に集まる全てのご縁を術式と共に封じたもの。この鎖を破ることは出来ない」

そして、ベリエが笑みを浮かべる。

「これで終わりよ！」

その言葉と共に空から降り注ぐ灼熱の光がリーリエ・セルフィナを包み込んだ。

第百九十一話　戦場の動き（後書き）

短編集始まりのクロニクルに書いて第四章で出すはずだった内容なのに書いていたらいつの間にやら。
というか、リーリエ・セルフィナ自体が早すぎたんですけどね。
ともかく、リーリエ・セルフィナとの因縁に関しては後に書く予定です。頭の中で物語を描いていたら話は飛躍しますよね？

第百九十二話　闇と光と属性と

放たれる光の嵐。それを受け止めるのが黒い球体。

孝治はすかさず弓を構えて矢を放つ。だが、その矢は光によって弾かれる。

「ははははっ。そんな攻撃じゃ、僕には当たらないよ」

「確かにな」

孝治は冷静に答えながら矢を放つ。だが、その矢は青年を当たらない。

「高機動かつ三次元行動も熟知した攻撃。確かに君は強いね。情報通りだ。だけど、火力が貧弱だよ」

その言葉と共に光が放たれる。孝治はすかさず光の進行方向に黒い球体を作り出して光を吸い込んだ。そのまま孝治は矢を放つ。しかし、それは光に呑みこまれて消え去る。

孝治は弓を下ろし青年を睨みつけた。

青年の顔に浮かんでいるのは余裕の笑み。対する孝治の顔に浮かんでいるのは無表情。もし、周や光がこの場にいたなら気づいていただろうが、青年は気付かない。

「空中戦に君は向いていない。本当に、向いていない。空中戦は射撃と近接の混合戦闘。君の様な地上でこそ威力を発揮するような戦

い方では僕には勝てないよ」

「何様のつもりだ？　俺の戦い方をわかっていない穢れた純白の翼をもっている天使のくせに」

「ほう」

青年の目が微かに細まる。孝治は逆に笑みを浮かべた。

「図星か？　国連特殊部隊直属特殊機動部隊（ファントム）。まさか、本当に実在しているとはな。巷では正体不明の敵と呼ばれているみたいだが（ファントム）」

「その名前を知っているとはね。どうやって？　僕は未だに一言もそのことについては詳しく話していないつもりだけど？」

「裏事情に詳しい友達がいてな。そいつから話はいろいろ聞いている。国連特殊部隊直属直周機動部隊（ファントム）を。特に、国連特殊部隊直属直周機動部隊（ファントム）の隊長についてはな」

「はるほど」

孝治は弓を構える。対する青年は砲撃槍を構えた。

「さすがは国連だ。『ＧＦ』にすら勘づかれることなくここまで事を運ぶとは。さすがの周も情報不足でお前達まで予測できなかったみたいだが」

「周？　ああ、第７６移動隊隊長にして君達の指揮官か。確かに、彼は見事だと言うしかないかな。僕と駿が考えた作戦がことごとく失敗しているのだから。まあ、最初の啖呵には驚いたけど。この学

園都市が学生の街？　ふざけるんじゃないよ。子供は大人の言うとおりに暮らしていればいい」

「周は親を失っているからな。大人の言うことなんて聞く気はないだろう」

「なるほどね。でも、だからこそ、僕達が動かないとダメなんだよね」

その笑みに孝治は青年を睨みつける。

青年はそれを見てどこか愉快に笑みを浮かべ、そして、両腕を開いた。

「世界は支配されるべきなんだよ。僕達の様な天上の存在に。そのための兵力を僕は呼び出している。この意味がわかるかな？」

「世界間大戦を起こすつもりか？」

「そんなものじゃないよ。全ての世界を破壊し、そして、創生の道を歩む。それこそが人類に残された唯一の生きる術なんだよ」

青年の言葉はそれが正しいかのように笑みを浮かべていた。まるで、その行為が至高の行為だとでも言うかのような言葉。

それは別の意味で捉えるなら一種の滅びだ。だが、孝治は感じている。本気だと言うことを。

そんなことを世間に行ってもただの冗談か頭のおかしい人物にしか聞こえないだろう。かつて起きた世界間大戦の時にはたった一人の

男、もちろん、今なお現存する、によって情勢をひっくり返したりもした。

その記憶があるからこそ、世界間大戦は最近起きていなかった。

「世界は壊さなければならない。ここだけは駿とは意見の違うポイントなんだけどね」

「なるほど。海道椿姫に連なる考えか」

「正解。って、あれ？　僕はそんなことを言った？」

「勘だ。今回の首謀者は海道駿。なら、海道椿姫もそれなりの地位を持っているのではないかという推測だ」

その言葉に青年は納得したように頷いた。

「なるほど。その考えなら確かにありだ。だけど、それだけじゃないよね？」

「あまりにも露骨すぎだ。隠す気はないのだろ？」

その言葉と共に孝治の目が細まる。それを見た青年は満面の笑みを浮かべた。

「もちろん」

それは、まるでこれから遊ぶおもちゃに対して言うかのような言葉。

その笑みを見た孝治は片手で運命を鞘から抜き放つ。

それにはさすがの青年も焦ったのか顔を引き締める。

「ようやく君の本気が来るんだね。でも、わかっている？　僕の火力の前に君の砲撃は」

「俺の魔術の前に、お前の攻撃は届かない」

孝治が使う魔術は闇属性。対する青年が使う魔術は光属性。その二つのはとても面白い相性がある。

本来、一歩的に強い属性というのは存在しない。例外として氷属性や天空属性が上げられるが、どちらも優位に立つという意味ではなく、邪魔されることなく発動出来るだけであり、強いというわけじゃない。

だが、光と闇の属性は違う。闇属性が一歩的に強いのだ。

そもそも、光属性のカテゴリーは、文字通り光を使った魔術。ほとんどが熱量を伴った攻撃であり、炎属性の上位魔術とも言われている。対する闇属性はそのポテンシャルのほとんどを吸収に費やしている。九州と放出。反射というのは無理だが、吸収しやすいもの、例えば光のようなものは日常的にあらゆる物体が吸収して色を出しているため、その効果があるからか闇属性は光属性にめっぽう強い。

代わりに、闇属性の使い手、特に、属性翼にまで辿りつけるまで極め若手は孝治一人しか存在していないが。

「闇は嫌いなんだよね。光、特に純白の光というのが僕は大好物なんだ。それは君達にも通じるものじゃないかな？　白いということは正しいということを表し、黒いということは悪いということを表

す。白は正義であり、黒は悪。白は昼で黒は夜」

「悪いが、俺が好きなのは黒だ」

「なるほどね。根本的から僕の敵だったのか。だったら、手加減しなくていいかな？　僕は君みたいな人種は本当に滅んでいいと思っているから」

「奇遇だな」

孝治が弓に運命を矢の代わりとして構えた。

「お前みたいな人を選ぶ奴は、殺したいほど憎んでいる」

そして、運命が放たれた。だが、運命の刃は放たれた光によって弾かれる。

「だったら、手加減しないよ」

その言葉と共に青年の周囲に光の球体が集まった。それを見る孝治の顔は険しい。

だが、孝治は逃げることなくその手に運命を呼び出してまた構えた。

「愚かだね、君は。君は薄々気づいているんじゃないかな？　僕の正体に気づいているよね？　なのにどうして抗おうとするのかな？　君と僕では生きていた年期が違うし実力は、あまり大差はないか。だけど、僕の方が圧倒的に上だ。大人しく降参するなら、痛めつけることなく殺すことを約束するよ」

「愚か、か。すでに知っている」

孝治は自嘲気味に笑みを浮かべた。

孝治にとって、その言葉はこの世界に飛び込んでから何度も言われた言葉だ。孝治自身にではないが、孝治の家族に言われたことは多々ある言葉。

だが、孝治は違うと感じていた。

家族に言わせた原因は孝治自身なのだから。

「人は愚かだ。完璧な人間など存在しない」

「僕達とは異なるね。僕達は完璧を目指す存在だよ」

「だが、それが人だ。人は自分が愚かだと本当に理解出来た時、強くなることが出来る」

孝治はそう信じている。人という存在がどこまで自分自身についてわかるか。その時にこそ、人は強くなれると信じている。

「俺は愚か者だ。親不孝者だ。だがな、俺はこの道を後悔しない。親を、弟を、妹を助けることを誇りに思っている。自分が愚かだと何度も気づいている。愚かでなければこの道には進まない」

「愚かが強さとでも言うのか？」

「その通りだ。だから、舐めるな。完璧だけを追求するお前達にはわからないかもしれない。人間を、舐めるな！」

その言葉と共に運命が放たれる。対する青年は一斉に光を放った。

闇と光。

その二つがぶつかり合い爆発を起こした。

それに青年が怪訝そうに目を細める。

「爆発だと？」

運命と光の魔術がぶつかれば運命が弾かれるか光の魔術が消されるかのどちらかだ。これは、まるで、光がレアスキルを使ってレーヴァテインを放った時に似ている。

それに気づくと共に青年の背中を悪寒が走り抜けた。

「汚れた翼を持つ糞野郎」

爆煙が晴れた先にあるのは、大量の運命と空中に作り出した弓。

「懺悔はすんだか？　鳥もどき」

その言葉と共に大量の運命が一斉に放たれた。

第百九十三話　幻影秘薬

放たれる矢。オレはそれを避けながら斬りかかってきた男の刃をレヴァンティンで受け流して返した刃で斬りつける。

すでに敵の数は少なくなってはいるが、一番の問題は援護射撃のように矢を振らせる茜。他の援護射撃を行う面々を倒そうにも距離がありすぎて術式展開より早く矢が到達する。

それを避けている最中に斬りかかってくるため魔術の展開が出来ない。

ただ、良かったと思える点が茜がオレしか狙っていないことか。

「海道椿姫！！　茜に何をした！？」

「いいですね。本当にいいですね。あんなに懐いていた兄をここまで殺そうとするなんて。本当に、産んで良かった」

「くっ、オレ達は、お前の道具なんかじゃないぞ！」

お袋に斬りかかりたくても茜の矢によって阻まれる。由姫も都もメグも夢も相手の攻撃を食い止めるのに精一杯だ。

オレは小さく息を吐いてレヴァンティンを握りしめる。

「レヴァンティン、やれるか？」

『大丈夫です。後は、マスターの覚悟だけ』

「いつでもあるさ」

狙撃手や砲撃手の位置を確認する。隠れてはいるが、いる場所は基本的に逃げ道が少ないところ。これなら大丈夫だ。

「レヴァンティンモード？」

その言葉と共にオレは前に踏み出した。それを合わせるように茜が微かに弓をズラして矢を放つが、その矢は刃が弾く。

オレが持つ刃ではなく空中に浮遊する一本の矢によって。

対するオレは魔鉄製のナックルで包んだ拳を振るった。ナックルは相手が受け止めようと構えた剣を砕き、相手の体に突き刺さり吹き飛ばす。

「なっ、５０％魔鉄を砕くだと！？」

近くにいたローブの男が声を漏らすがオレは気にすることなくその顔面に拳を叩き込んだ。

「こっちは７５％魔鉄だ」

さらに地面を蹴って接敵する。時折、というか、頻繁に飛来する矢は空中に浮かぶ刃が弾き、オレは数少ないローブの集団を殴りつけるのに動き回る。

一誠のゴーレム集団は由姫や都達に任せればいいから、今はともかくローブの集団を倒さないと。

「させると思っていますか？」

その言葉と共に背後から槍が迫る。普通なら避けられない間合い。

だが、オレは拳を振った。

槍がわき腹を微かに斬り裂き、その勢いで体が回転し、最高以上の速度を出した拳がお袋を殴り飛ばす。

白百合流や八陣流をしていたらこういうことが出来るのだから怖い。

「よくも、殴りましたね。いいでしょう」

お袋が笑みを浮かべる。オレはレヴァンティンが帰ってくるのを感じながら足に力を込める。

「海道周を狙いなさい！」

その言葉と共に援護射撃が飛来する。矢が、たった一本だけ。それを四本に分かれたレヴァンティンがそれを打ち払う。

オレはニヤリと笑みを浮かべて身構えた。

「悪いな。援護射撃をしてくれる狙撃手（スナイパー）及び砲撃手（ガンナー）は倒させてもらったぜ」

ちょっぴりかっこよく言うために狙撃手や砲撃手を外国読みで言わさせてもらった。まあ、あまり変わらないけどな。

「どうやって」

「レヴァンティンモード?は自立式の攻撃武器なんだ。四本に分かれたレヴァンティンがオレの魔力を使って攻撃する」

レヴァンティンモード?からレヴァンティンモード?への変形は極めて強力だが、レヴァンティンモード?なんて一対一じゃないと使えない。

オレは拳を握りしめて身構える。

「さて、これからは一対一だ。だから、覚悟しろ」

「あなたは剣を日常的に使う。自分の槍がある私には勝てませんよ」

「だったら、殴り倒して聞いてやるよ。どうやれば茜を元に戻せるかをよ!」

オレは地面を蹴る。四つのレヴァンティンの刃を引き連れてオレはお袋に向かって駆け出す。

どうして茜が攻撃してくるのかがわからない。その理由さえわかれば対処の仕方は色々とあると思う。

オレは拳を握りしめ、横から迫った刃を拳で弾いていた。

「茜!」

オレは刃を振った人物の名前を叫ぶ。そこには剣を持つ茜の姿。その顔は蒼白。そして、視線が安定していない。手足は震えてもいる。まるで、クスリをやっていたかのような感じ。

オレは頭の中でとあるピースが当てはまるのを感じた。
茜の振り下ろす刃を回避しながらオレは身構える。
「ナイトメアか」
オレはお袋を睨みつけた。お袋は愉快そうに笑みを浮かべている。
「よくわかりましたね」
「自分の娘を薬漬けにしたのか？」
「自分の道具に何をしようが勝手ですよ。茜こそ、被験体としては最高の素材。一つだけあるとするなら、あなたを求めて動いてしまうところでしょうか」
その言葉と共に茜が斬りかかってくる。速度は無く、完全な素人だが、お袋も同時に攻撃を仕掛けてくるため対処が難しい。
オレは二人の武器を後ろに弾きながらレヴァンティンをモード?から通常の剣に戻した。
「茜の狙いは核晶か」
「でしょうね。自分の核晶を求めていると考えた方がいいでしょう。ですから」
茜が動く。お袋も動く。どちらかに対処すればどちらかにやられる。かと言って、茜を攻撃するわけにはいかない。

ファンタズマゴリアの展開は間に合わない。この距離でファンタズマゴリアを展開してもやられるだけ。

最高の策は一つだけ。幻想空間（ファンタズマゴリア）の場合は副作用が大きすぎる。だったらあれをするしかない。

オレは茜の刃の軌道を見る。そして、お袋の槍の軌道を見た。二つが完全に交錯するポイントを作り出すしかない。

微かに身を引く。そして、レヴァンティンをモード?である双剣に変えた。

左に握る刃を動かし、受け流すようにレヴァンティンを当て、右に握る刃は茜の持つ剣を軽く弾き、軌道を逸らす。

茜の剣とお袋の槍はぶつかり合い、動きを止めた。そこにレヴァンティンモード?を力任せに振り上げた。

「なっ」

お袋が驚く声と共に剣と槍は同時に空に舞い、二人の手から武器が離れる。

すかさずレヴァンティンモード?から通常の剣形態であるレヴァンティンモード?に戻してオレはお袋の体を蹴りつける。

そのまま茜の手を取ろうとして、茜が苦しそうな表情でオレに手を伸ばしていた。

その表情にあるのは葛藤。

オレが嫌な予感と共にその場から跳び退くと同時にいくつもの炎や風の槍が突き刺さった。

「茜！　オレだ、周だ！」

「お兄、ちゃん？」

その言葉は苦しそうで、そして、楽しそうでもあった。

「逃げ、て」

茜のそばで剣が跳ねる。茜はその剣を掴み、弓に変えた。

放たれた矢をレヴァンティンで弾いて後ろに下がる。

「抑え、られない。早く、逃げて」

チラッとお袋がいる方向を見るが、そこにお袋の姿はない。逃げられたか。

後方では未だに戦っている。夢が負傷したのか動きが変わっているが。

「誰が逃げるかよ」

オレはレヴァンティンを構える。

「駄目。お兄ちゃん、じゃ、勝てない。幻影の、秘薬、には」

「幻影秘薬？」

聞いたことのない名前にオレはレヴァンティンに語りかける。だが、レヴァンティンは答えない。いや、怒りを出している。その幻影秘薬に対しての怒りを。

「ナイトメアは、悪夢。一度、解き放てば、誰も、お兄ちゃんも、勝てない」

『マスター。幻影秘薬（ナイトメア）から茜さんを解き放ちたいのであれば今すぐ殺してください』

「レヴァンティン？」

オレは動揺する。殺すことなんて出来ないのに。

『幻影秘薬（ナイトメア）が未だに現存していることに驚いていますが、それが本物ならマスターでは話になりません。マスターが数十人くらいにならなければ』

「どういうことだ？」

『幻影秘薬（ナイトメア）は傀儡のクスリ。薬漬けにされれば、死体を復活させるようなことにならない限り、助けることは出来ません』

「そんなことが」

『これは事実です！』

レヴァンティンの声が落ちそうになった意識を呼び戻す。

『今の今までわかりませんでしたが、幻影秘薬とはよく言ったものです。マスター、茜さんを助けたいなら』

「なあ、レヴァンティン。オレの数十人分ってのは魔力なのか？」

『確かにそうですが、マスター？』

オレはレヴァンティンを握りしめる。こんな賭けはしたくない。だけど、するしか方法がない。

「レヴァンティン、術式を頼むぞ。茜、核晶を変えるぞ！」

「お兄ちゃん？」

「本当のオレにオレは賭ける。それでも無理ならオレは、お前を」

「うん。殺して」

茜が自分に魔術陣を展開する。それと同時に魔術陣を作り出した。それは核晶を取り出す魔術。

あるべき場所に核晶を戻すための魔術。

「お兄ちゃん、信じている、から」

「ああ。信じてくれ。オレは、必ずお前を救ってみせるから！」

第百九十三話　幻影秘薬（後書き）

よくよく考えてみると、まだまだ戦いは真ん中のような気が。

第百九十四話　エスペランサ攻防戦　後編（前書き）

視点がかなり変わりますが、地の文から頑張って推測してください。

第百九十四話　エスペランサ攻防戦　後編

いくつもの銀閃が煌めく。その光と共にローブの人達が何人も倒れていく。

銀閃の煌めきと共にいくつもの煌めきが続く。

紫電一閃からの紫電逆閃。そして、無常の太刀から無名の太刀に続き、鬼払い。

たったそれだけで周囲にいた２０にも及ぶ集団が倒れた。そのまま音姫は地面を蹴り、光輝を鞘に戻す。

「南側は私が担当するから他の方角をお願いね！」

音姫の叫びは甲板で戦っているリヴァイバーにも聞こえていた。七葉は必死にリヴァイバーの体を動かして放たれる魔術を回避する。

リヴァイバーに装着されているファランクス装備は対人に考えられた装備で対魔術装甲と地上を走るためのローラーがついた装備だ。

七葉はペダルとレバーを上手く動かしながらエネルギーバルカンからエネルギー弾をバラまいていく。

「街中だったら生身の方が強いのにー！」

その叫びと共に被弾を表す赤い光が点灯する。七葉は被弾箇所をみながら叫んだ。

「肩が削れたくらいで一々知らせないでよ！」

「怒り狂っているわね」

完全にオープンにされている通信を聞いて琴美は小さく溜め息をついた。琴美はエスペランサの東側をリマと一緒に担当している。

リマのアストラルソティスはアルティメイト装備だが、ファランクス装備とあまり変わらない。変わるとするならローラーがついていない点だろう。

琴美の前では華麗なステップで避けているアストラルソティスの姿がある。

アストラルソティスが頑張っているからか琴美のアルケミストはあまり動いておらず攻撃に専念出来ている。

「それにしても、これが音界エースの動きなのね」

その言葉に対してリマは笑みを浮かべて返す。

「ルーイの動きはもっとすごいですよ」

『私が言いたいのはそんな重い装備で三次元機動が出来ることに驚いているのよ』

アストラルソティスという音界でもトップクラスの性能とエネルギー体を使っているからか、アストラルソティスの回避の仕方はありえない。琴美は画面の中でリマに向かって溜め息をついていた。

リマは軽くステップをして両手に持つエネルギーバルカンをバラまく。

「ともかく、今はソードウルフが出る時間を稼がないと」

『そうだね』

その言葉はエスペランサの北側をたった一人で守るルーイからだった。

ルーイのアストラルルーラもアルティメイト装備ではあるが、アストラルルーラの動きはアストラルソティスよりも遥かに三次元的でありかつ高速だった。

両手に持つエネルギーバルカンを上手くバラまいて牽制しながら一方的に攻撃されるのを防ぎ、相手が防御に回れば猛攻で叩き潰している。

まさに鬼神のごとき働き。もっとも、それを可能としているのはアストラルルーラのエネルギー源と専用武器の存在ではあるが。

「ソードウルフの攻撃は高威力かつ広範囲。戦場に立てば有利に立てる」

『音姫さんやメリルが頑張っているからだけどね』

鈴が開いた通信から苦笑気味に答える。鈴はイグジストアストラルを使って上空からひたすら射撃を叩き込んでいた。

「そうじゃなかったら私なんて何も出来ないもの」

『イグジストアストラルは十分に強力よ。私なんて一番古い機体なんだから』

『私のおさがりは駄目ですか？』

『駄目じゃない。アストラルブレイズは十分高性能なんだけど、アルティメイト装備が若干合ってないのよ！』

そう叫ぶルナのアストラルブレイズは確かにアルティメイト装備がちゃんと装着されていなかった。むしろ、アルティメイト装備がアストラルブレイズの動きによって揺れている。

いつ剥がれるかわからないのでアストラルブレイズと一緒に西側を守っている俊也や委員長は気が気でない。

「花子さん、後ろに下がっていてください」

「うん。回復なら任せてね」

俊也はフィンブルドとシンクロしたままタイクーン、アーガイル、グレイブに指示を飛ばして西側にあるカタパルトをいつでも使える状況にしていた。

だが、俊也は微かに目を細める。

「動きが変わった？」

『どういうことよ！？』

声を拾ったルナが俊也に尋ねる。

「攻撃が散発的になったというか、少し薄くなったというか」

『みんな、気をつけて！　イージスが八機、こっちに向かっている！』

そして、上空のイグジストアストラルから鈴の声が響き渡った。それにルナは怪訝そうに眉をひそめる。

イージスと言えば日本政府が作り出した防御用の機体。もし、それが機動すれば攻撃は苦しくなる。だけど、

「イージスはプログラムを流して止めたんじゃないの？」

『解除プログラムぐらい用意しているはずだ！　戦力が足りない。せめて、エスペランサさえ放棄出来れば』

『ソードウルフ、発進するから！』

その言葉と共にカタパルトからソードウルフが放たれた。

ソードウルフはすぐに変形して二本足で着地すると背中の対艦剣を引き抜き目の前に現れたイージスに向かって振るった。だが、イージスはシールドを展開して対艦剣を受け止める。

「硬い！　さすがはイージスだね」

シールドの隙間から放たれるエネルギー弾をソードウルフは回避する。そこにアストラルブレイズが飛び込む。

「硬いなら」

シールドの隙間に腕を差し込み、無理やりシールドを開閉させた。
そして、向けられた銃口をアルティメイト装備で塞ぐ。

この場合に引き金を引けば爆発するためイージスは引き金を引けない。本来なら後ろに下がるべきなのだが、イージスは後ろに下がらなかった。

だから、アストラルブレイズはさらに踏み込む。

「一度気絶していて！」

その言葉と共に握りしめられたアストラルブレイズの拳がイージスのコクピットがあるであろう部分に突き刺さった。

破壊することなくコクピットにいるパイロットを気絶させるような威力。その威力にイージスは崩れ落ちる。

アストラルブレイズはアルティメイト装備を盾にしながら後ろに下がる。

「うわっ、さすがはルナだね。フュリアスの戦闘ならこの場で一番かな？」

『茶化さないで。まだ、戦闘は終わっていないから』

アルティメイト装備に任せて後ろに下がるがアルティメイト装備はそれほどエネルギー弾に強いわけではなく、アストラルブレイズの

アルティメイト装備はどんどん欠けていく。

「一斉に撃つから後ろに下がって！」

アストラルブレイズから注意を引こうと前に踏み出したルーイのアストラルルーラに対し、鈴は叫びながらイージスの群れを同時にロックオンした。

そして、背中の砲を全て放つ。

イグジストアストラルから放たれたエネルギー弾はイージスの群れを包み込む。だが、イージスが構えたシールドによって全てのエネルギー弾は弾かれていた。

「リリーナ！」

『わかってる！』

鈴の叫びにリリーナは新たな武器を換装した。ソードウルフが腰に構えるのはグラビティカノン。

巨大な砲身にいくつもの杭。そして、ソードウルフに繋げられたエネルギー補給用のパイプ。

グラビティカノンが持つ全ての杭が周囲に突き刺さり、そして、弾かれる。

『って、グラビティカノン！？』

鈴は別の武器を想像していたのかかなり驚いていた。リリーナはそ

れに笑みを浮かべて返す。

「大丈夫だよ」

その言葉と共にソードウルフの体が風によって固定された。

「だから、吹き飛べ！」

そして、グラビティカノンが放たれる。放たれたグラビティカノンのエネルギー弾はシールドを構えるイージスに突き刺さり、イージスを包み込む巨大な爆発と化した。もちろん、イージスは崩れ落ちる。

リリーナはコクピットの中でガッツポーズを取る。

「よし。殺った」

『今の言葉、僕には別の意味に聞こえたが』

『大丈夫。私も聞こえましたから』

二人の呆れたような言葉が耳に入るがリリーナは気にしない。

「それより、和樹の脱出は」

『大丈夫。今、収納したから』

ソードウルフが振り返ると、そこにはコクピットを閉じだしたリヴァイバーの姿があった。七葉が和樹を回収したようだ。

俊也は委員長の手を取るのを見届けたルーイは小さく頷く。

「フュリアス部隊は次の場所に移る。全員、僕に続け！」

アストラルルーラが飛び立つと共にアストラルソティス、アストラルブレイズが後を追う。それをフィンブルドの力で飛ぶ委員長をお姫様抱っこした俊也が追いかけ地上をリヴァイバーとアルケミストが追いかける。最後は地上を走るソードウルフと空を飛ぶイグジストアストラル。

次に向かう場所は決まっている。激しく戦い合うエクスカリバーの場所に向かって。

第百九十四話　エスペランサ攻防戦　後編（後書き）

音姫は最後の方で別行動しています。

第百九十五話　赤い悲劇（前書き）

ベリエ達の話です。完全な補足話。

第百九十五話　赤い悲劇

ベリエは小さく息を吐く。目の前にあるのは焼き尽くされた場所。そこを見てベリエはホッとしたように息を吐いた。

「無事か！？」

悠聖が駆け寄ってくる。冬華も一緒だ。そんな二人を見たベリエは力が抜けたのかその場に座り込んだ。

二人がベリエの横にしゃがみ込む。

「大丈夫、だから。さすがに、緊張したかな」

ベリエはそう笑いながらゆっくり立ち上がる。だが、その足もふらついて立ち上がった冬華に倒れ込んだ。

「休んでいなさい」

「ううん。私だけ休憩しているわけにはいかないから。それに、リーリエ・セルフィナを倒したことをアリエとお姉様に伝えないと」

「つか、リーリエ・セルフィナと何かあったのか？」

悠聖の質問にベリエは一瞬だけ考えた。そして、頷く。

「うん。私達の仇。死んだとは聞いていたけど生きていたから、私達はリーリエ・セルフィナをこの手で倒そうって決めた」

「仇？　親でも殺されたのかしら？」

冬華の何気ない一言にベリエは頷いた。

「うん。リーリエ・セルフィナは」

「エレノア・スカートレット及びベリエ・アトラス、アリエ・アトラスの両親を殺した」

その言葉にベリエが目を見開いて振り返る。そこにいたのは顔半分が焼け爛れたリーリエ・セルフィナの姿があった。

化粧のほとんどは消え去り、顔半分には年齢相応の表情が戻っている。だが、ベリエが驚いているのはそこではなかった。

ベリエがリーリエ・セルフィナに放った最後の技。あれは全くメジャーな技ではなく、むしろ、マイナーの技ではあるが、瞬発的な威力ではやり方によって最強と言われる魔術でもあった。

「糞餓鬼を殺すつもりがなかったから殺さなかった恩を忘れてこんな仕打ちをするなんて、本当に糞餓鬼ね」

「どうして、生きてるの？」

「全天の祝福を避けられたことに関する疑問？　それなら簡単よ。私も全天の祝福を仕込んでいただけ」

全天の祝福。

一番使われるのは日本にある五円玉だ。五円玉に宿るご縁という運

を凝縮することで魔法に近い奇跡の魔術を発動する魔術。他にも大事なものなら何でもいいが、その中では五円玉が持ち運び安さで一番である。

それを最大限まで使用した場合、その魔術の威力は大陸を半分に割れると言われている。

ベリエが使ったのは凝縮に凝縮を重ねた五円玉。というか、とある日本で有名な神社の参拝客が投げる五円玉の運を全て奪って凝縮したのがあの時転がった五円玉なのだ。人が聞けば怒るだろうが。

その力は極めて凶悪で、緊急用に用意していたリーリエ・セルフィナの全天の祝福を超えるものだった。だが、逃げられた。

「同じ手は二度とくらわない。さあ、覚悟しなさい」

「悠聖、冬華」

ベリエがナイフを抜く。そして、武器を構えた二人の前に出るように踏み出した。

「先に言って」

「ベリエ？」

冬華が微かに目を細めて尋ねる。

「相手はあのリーリエ・セルフィナよ。あなただけじゃ」

「リーリエ・セルフィナに二人は勝てない」

ベリエの言葉に冬華は黙る。事実だからだ。

リーリエ・セルフィナの能力の前では悠聖の精霊も冬華の力も通じない。実際に、冬華は戦闘中何度もリーリエ・セルフィナの能力を止めようとしていた。だけど、一度も成功していないのだ。

だから、冬華は黙る以外に無かった。

「私は大丈夫。もうすぐでお姉様やアリエも来るから。私達三人揃えば負けはない」

「ベリエ、あなた」

「わかった」

悠聖が呆れたように溜め息をつく。その溜め息にベリエは苦笑した。

「ありがとう」

「礼は全てが終わったら聞く。ったく、何でこんなに過去との因縁を決着させようとする奴がいるのだか。冬華、行くぞ」

「ベリエ」

「私は大丈夫。だから、先に言って」

ベリエの言葉に冬華は黙る。そして、小さく頷いた。

「やられたら許さないから」

「冬華も」

その言葉を交わして悠聖と冬華が走り出す。

リーリエ・セルフィナは二人の方向を見ることなくベリエに向かって一歩を踏み出した。

「いいのかしら？　お仲間を行かせて」

「リーリエ・セルフィナ」

ベリエがナイフを構える。リーリエ・セルフィナの能力の前にはこんなものは意味がないとわかっている。わかっていてもベリエは構える以外の行動は取らなかっただろう。

リーリエ・セルフィナは顔半分で笑みを浮かべ、顔半分で苦痛を浮かべている。

「糞餓鬼風情が大人を傷つけて。駿さんからは誰も殺すなと言われていますが、糞餓鬼だけは別」

リーリエ・セルフィナが拳を握りしめる。ベリエもナイフを握りしめた。

「「殺す」」

二人の言葉が重なり、二人の間にナイフが放たれた。

目を開けた先にある光景を表すなら赤。真っ赤な炎。真っ赤な衣装。真っ赤な鮮血。

目を開いた先で見た光景。この時に悲鳴を出さなかったのは僥倖かもしれない。

衝撃的で印象的。だけど、ここは戦いが絶えない魔界。いつ襲われるかわからないと覚悟していた。そう、使用人の娘でもあったベリエですら。

ベリエはゆっくり立ち上がる。そして、周囲を見渡して探す。妹のアリエとエレノアを。

二人はすぐに見つかった。ベリエが近づくとどちらも息はある。息はあるのだがベリエは近くの光景を直視出来なかった。

そこにあったのはバラバラにされたエレノアの父親と母親。最初、その光景を見たベリエは胃の中にあるのを吐いていた。

二人の鮮血はエレノアとアリエの二人も真っ赤に染めている。

ベリエは二人を担ぎ上げた。

ベリエも魔界の住人であるため力は強い。すぐに廊下に出て、そこで出会った。この光景を作り上げたリーリエ・セルフィナに。

その頃のリーリエ・セルフィナは普通に若く、直視出来るものであ

ったが、ベリエは睨みつけていた。

「あなたが、だんなさまたちを」

ベリエが覚えたばかりの言葉を使って尋ねる。

エレノアの両親は旦那様達であり、エレノアは仕えるべき相手。そう、両親から聞かされていた。

「可愛いわね。ここで解体したいくらい」

リーリエ・セルフィナが笑みを浮かべる。

ベリエはとっさにナイフを抜き放つが、そのナイフは簡単にリーリエ・セルフィナが投げたナイフによって弾かれていた。

「でも、駄目。駿さんから言われているの。幼子だけは生き残らせるようにって。だから、生き残らせてあげる。この家から出ることが出来たらだけど」

すでに屋敷の大半は火の手が回っている。だからこその言葉。リーリエ・セルフィナはそのまま姿を消した。

ベリエはすぐに二人を担ぎ直す。

幸いにも、ここから出口までそれほど遠くなく、ベリエの体力でも何とかドアの手前までやって来ることが出来た。だが、目の前に広がっている光景に目を見開いてしまう。

そこには崩れた柱が道を塞いでいた。もちろん、激しく燃え盛って

いる。

それを見たベリエは座り込み、そして、涙を流す。

幼い頭でもわかることはあった。私達はもう、死ぬのだと。

「諦めるのか？　諦めたら、終わりだ」

その言葉と共に柱が吹き飛ぶ。

その人物を見たベリエの顔は一瞬だけ嬉しさに染まり、そして、すぐに絶句していた。

何故なら、そこにはベリエの父親が両腕を失った状態でいたからだ。顔は蒼白であり、切断面からは血が流れているが、そんなものを気にしないという風に立っていた。

「進め。前に進め」

その言葉と共に出口のドアが切断される。そこから姿を現したのは漆黒の服に身を包んだ時雨の姿。

「無事、じゃなさそうだな」

「相手が悪かった。だが、守れたと言っていいだろう」

時雨の言葉に応え、振り返る父親の姿。その表情は今にも倒れそうだったが、満面の笑みだった。

「泣くなベリエ。強くなれ。もっと強く。誰かに師事してもらい、

諦めずに強くなれ。そして、守るのだ。私が出来なかったことを」

「アトラス、お前も来い！」

ベリエは時雨に抱きかかえられながら時雨の口から出た言葉を聞いた。だが、父親は屋敷の中に歩いていく。

その背中にベリエは声をかけた。絶対に戻って来ないとわかっていても、ベリエはこの言葉をかけずにはいられなかった。

「行ってらっしゃい」

その言葉に父親の歩みが止まる。

「行ってらっしゃい！」

ベリエは叫んだ。泣きながら叫んだ。そして、父親が振り返る。

「行ってくる」

その顔は笑みがあり、涙があった。

肩に感じる痛みが意識を戻す。

一体、どれくらいの間、意識を失っていたかはわからないが、生きているのは確かなようだ。

ベリエは足に力を加えてリーリエ・セルフィナに向かって駆け出した。

リーリエ・セルフィナは面倒であるかのようにベリエを見る。

「いい加減、死ね！　糞餓鬼風情が、諦めろ！」

リーリエ・セルフィナが放つナイフが飛来する。ベリエはそれを避けてナイフを掴んだ。

「諦めない。絶対に諦めないから！」

その言葉と共にベリエがナイフを投げつけた。だが、リーリエ・セルフィナはそれを簡単に避け、ベリエが笑みを浮かべているのに気づいた。それと共に振り返り、空を見上げる。

そこには『炎熱蝶々』を広げ、杖を向けるエレノアの姿があった。

「焼き尽くせ」

その言葉が響き渡ると同時に炎の塊がリーリエ・セルフィナを狙う。リーリエ・セルフィナはとっさに跳び退いて、左からはベリエが、右からはアリエが迫っているのを理解した。

「あんただけは、絶対に倒すから！」

ベリエはそう叫び、剣を手に取った。

第百九十五話　赤い悲劇（後書き）

実はこの作品で一番気に入っているキャラはベリエです。

第百九十六話　真の姿（前書き）

周の真の姿、というより最後のレアスキルの真の姿です。真の姿の能力はチート、っぽい欠陥品です。その話はまた後で。

第百九十六話　真の姿

核晶。

それは生物が魔力を使う際に貯めておける結晶。大きさは大小様々であり、大きければ大きいほど魔力を貯めておけるかというとそうではない。

核晶を研究するのは極めて難しいため正確なデータは存在していないが、基本的には核晶の大きさと貯蓄量は比例しない。もちろん、比例する人もいる。

例えば、今、オレの目の前にある茜の核晶もそうだろう。茜の核晶はオレが知っている中でも大きく、他人のオレがあそこまで魔術を使えるのにも納得出来る手のひらサイズだった。

対するオレの核晶は小さい。小指の先ほどの小ささ。怖いくらいに小さい。

「オレの、だよな？」

「うん。お父さんはそう言っていたけど」

困惑した表情のまま核晶を受け取る。小指の先ほどしかない核晶を手に取り、オレはその核晶を自分の中に入れた。そして、気づく。

茜が現れた時に感じた奇妙な違和感のことを。核晶が体に馴染む。

これが、オレの本当の核晶だとわかる。

茜も同じようで幸せそうに微笑んでいた。何か和むな。

『和んでいるところすみませんが、後ろを見てもらえますか？』

レヴァンティンの声にオレは振り返る。振り返った先には視界の端で光る何かを見つけた。

オレはまた振り返る。だが、やはり視界の端で何かが映るだけ。振り返った先にいる茜は信じられないような目でオレを見ていた。

『間違えました。後ろではなくマスターの背中を見てください』

その言葉にオレは首だけ動かして振り返る。そこには、光があった。

信じられないし表現も出来ないが、そこには光の翼があった。

オレはレアスキルを使っていないし、こんなオーロラみたいに綺麗な光の翼は見たことがない。

「これは一体」

「お兄ちゃん、早く」

茜の苦しそうな言葉。オレはハッとして茜を見て、そして、茜を抱きしめた。

「お兄ちゃん？」

「大丈夫だ。オレに任せろ」

今、使えるのは背中の翼と幻想空間（ファンタズマゴリア）と金色の力。頭の中で勝手に解が組み上がる。でも、そんな解はすでに出来ている。

オレは背中の翼に金色の力を流し込んだ。たちまち翼が金色かつ大きくなり、オレと茜を包み込む。次にするのは幻想空間（ファンタズマゴリア）。

幻想空間（ファンタズマゴリア）で伸ばす能力は精神感応だ。オレは茜と額を合わせた瞬間、世界が変わった。

自分が浮遊している感覚と共に周囲を見渡すと、そこにはどす黒いもやのような何かがあった。そして、それが茜を包み込もうとしている。

「茜！」

すかさずその中に飛び込もうとするがオレの体は黒いもやによって弾かれる。

すぐさま自分の使える装備を確認。全くない。使える魔術。ストックしていた魔術の反応がない。魔術の詠唱。そんな時間があるなら翼の力で飛び込め。

すかさず背中の翼を操り茜に向かって飛び込む。

使い方なんて知らない。だけど、この翼の力はわかる。これは選ばれた者の証。くだらない。そんなものじゃない。これは、

「未来を切り開く、意志の翼だ！」

翼で体を包み込み、まるで弾丸のように茜に向かって突き進んだ。

道を塞ぐ黒いもやは翼に当たるや否や翼に吸い込まれて消えていく。
その度に体の中にある魔力が膨れ上がるのがわかった。

オレはそのまま茜に近づいて茜の体を翼で包み込む。すると、茜を包み込もうとしていた黒いもやが翼に吸い込まれた。

「お兄ちゃん！」

茜がオレに抱きついてくる。オレは優しく茜を抱きしめた。

「お帰り」

「ただいま。ただいま、お兄ちゃん」

兄妹の再開シーンではあるが、よくよく周囲を見渡すと黒いもやが一斉に襲いかかってきて翼に吸い込まれ、魔力として消えていく。

それを考えるとかなり汚いシーンだなと思ってしまう。

「どうかしたの？　お兄ちゃん」

「何もない。茜、核晶の調子はどうだ？」

「懐かしいかな。これだけの魔力があれば何だって出来る気がする」

そう言いながら満面の笑みを浮かべる茜にオレはそうか、としか言葉を返すことが出来なかった。

オレがその核晶を使っていた時もそんなに自信満々になることは出来なかった。

「うーんと、うわっ。魔術がストックされてる」

「なるほど。ストックは核晶依存なのか」

魔術のストックに関してはどこにストックされるかでいろいろ議論されていたからな。そう考えると新たな研究テーマの一つとして出来るか。

オレは納得したように頷きそうになってすぐさま首を横に振った。

オレはそんなためにここに来たわけじゃない。

「他に何かないか？」

「全く。お兄ちゃんの核晶は全く合わなかったから大変だったけど、自分の核晶はやっぱりいいなって」

「そういうものなのか？」

「お兄ちゃんはわからないと思うけど、自分の核晶ってやっぱりいいものだよ。何というか、ホッとする」

確かにそれには賛成だ。自分の核晶が戻ってきた時は確かにそれに近い感情はあった。感じている暇は無かったが。

オレは頷いて周囲を見渡す。いつの間にか黒いもやはかなり少なくなっていた。少なくなっているだけで無くなってはいないがここまで少なかったなら大丈夫だろう。

「そう言えば、茜は親父達に何か飲まされたのか」

「うん。白い粉。それをずっと飲まされてた。禁断症状が出るくらいに」

「かなりマズいよな」

ナイトメアは中毒になりにくい薬だったはずだ。いや、ナイトメアと幻影秘薬（ナイトメア）は別種のものなのか？

「お母さんが言うには、最強になるための薬だって言ってた。幻のように消えたりするんだって」

すごく心当たりがある。つまり、あれは幻影秘薬（ナイトメア）によって出来たものなのか。それだったらかなり厄介だな。

幻想空間（ファンタズマゴリア）にしか破れないならはっきり言って、大軍で来られたら勝ち目はない。それに、幻想空間（ファンタズマゴリア）自体もデメリットが無いわけじゃない。

実際に、幻想空間（ファンタズマゴリア）を使った後は一部の能力が著しく減少する。例えば、治癒の幻想空間（ファンタズマゴリア）を使えば通常での治癒が弱くなる。

「もしかして、この黒いもやがって、ないし」

いつの間にか黒いもやは消え去り、代わりにファンシーな空間が出来上がっていた。説明するなら文字通りファンシー。

まあ、ぬいぐるみとかたくさんある茜らしい空間ということだ。

「なるほど。ここって茜の心象風景か」

「なるほどじゃないから」

納得したオレの頭に茜のチョップが当てられる。威力はあまり無く、オレは苦笑しながら茜を見ていた。

「また、戦いが終わって退院したら、こんな部屋にすればいいじゃないか」

「そうだね。じゃあ、出ようよ」

オレは頷いて幻想空間（ファンタズマゴリア）を解除する。それと同時に世界が戻った。

ちょうど前にあるのは茜の顔、は変わらない。だが、周囲の風景は元に戻っている。

倒れ伏すローブの人達と必死に戦う由姫や都達。そして、数を増したゴーレム集団。

「神隠し（トリックオラトラップ）って本当にむちゃくちゃだよな」

オレが感心したように呟くと茜が呆れたように溜め息をついた。

「お兄ちゃん、戦闘中だよ」

「悪い悪い。じゃ、援軍にでも行くか」

「そうだね」

茜が持っていた弓から剣に変える。よくよく思うと、これって隼丸なんだよな。

「お兄ちゃん」

「何だ？」

オレがレヴァンティンを握りしめると後ろから茜の声がかかる。

「雷王具現化か風王具現化のどちらがいい？」

「我が妹ながら突拍子もないことを言うよな。無理だろ？」

「そうかな？　じゃ、雷王具現化で」

その瞬間、空中に魔術陣が出来上がり、そして、ゴーレム集団にのみ雷の嵐が降り注いだ。

あまりのことにオレはポカンと固まってしまう。一番、固まっているのは近接していた由姫だろう。目の前でゴーレムが雷に打たれて黒こげになったからだ。

「なあ、茜。今、何をした？」

オレは未だに展開されている雷王具現化を見上げながら茜に尋ねた。

「雷王具現化の限定発動。やれば出来るもんだね」

雷王具現化は範囲内無差別攻撃のはずなんだが。

「具現化って難しいって聞いていたけど案外簡単だよね」

未だにオレは具現化の一つも使えてないのですが。

「やっぱり魔術って気持ちいいね。次は半分くらいの力で撃とうかな」

「全力じゃないのかよ!?」

そこは言うしかない。というか、ツッコミ自体を二回待ったのだ。三回目はいいだろう。

茜は不思議そうに首を傾げ、

「息を吸う感覚で」

全力には程遠い。

オレは改めて茜が天才だと理解した。音姉や孝治も天才の中の天才だと思っていたが、茜はそれを超える天才。

どうりで親父や慧海達がどうにかしようとするわけだ。

「ともかく、この場をどうにかするぞ」

新たに現れるゴーレムの集団。それに向けてレヴァンティンを構える。

「うん」

茜もオレの横に並んで剣形態の隼丸を構える。

「まずはここを抜けて中央に向かう。ついて来いよ」

「うん」

オレと茜は同時に地面を蹴った。

第百九十七話　対抗術式

リーリエ・セルフィナのナイフが何もいない空間に放たれる。だが、そのナイフは軌道を変え、隣から迫っていたベリエに向かって動いた。

ベリエはとっさに手に持つナイフでナイフを弾くが、視線の先にいるリーリエ・セルフィナはすでにベリエにナイフの先を向けている。ナイフを弾いた状況ではまず回避出来ないであろう機動。

ベリエはすかさず目の前に魔術陣を展開した。それは風属性の魔術。強烈な風が、ベリエに向かって吹き荒れる。

前に進んでいたベリエの体が一機に遅くなり、むしろ、後ろに下がり、リーリエ・セルフィナが繰り出したナイフを避けていた。

「危ないよ！」

アリエがすかさずベリエに声を上げるが、ベリエは気にすることなく地面を踏みしめて横に跳ぶ。

それと同時にリーリエ・セルフィナがベリエがいた場所にナイフを突き出していた。

「また、避けられた」

「ベリエちゃん！」

「アリエは援護をお願い。リーリエ・セルフィナは直接攻撃しなけ

れば襲いかかってこないから」

その言葉にリーリエ・セルフィナの眉がピクリと動いた。

「術式展開、雷神槍」

ベリエが身構え、腰を落としながら術式を展開する。魔術陣がベリエを包み込み、ベリエの体から紫電が迸る。

「なるほど。あなたの師は海道時雨ですか」

「刹那もよ」

刹那も海道時雨に師事を受けたのだから、師は海道時雨にはなる。

海道時雨の雷属性は当時は独創的かつ使い道のなかった属性をたった一人で一線級かつ使い道のあるものに変えた。

雷属性自体は医療の現場でよく使われていたものの、戦闘には不向きとされていたものだ。

その雷属性の使い手は数少なく、名が上がる人となればもっと少なくなる。

雷属性最強の術者である海道時雨と『雷帝』の名前を持つ刹那。

有名なのはこの二人だろう。この二人に共通する項目はただ一つ。

他は戦い方から武器まで違うのにたった一つだけ、彼らしかしないものがある。

体の帯電化だ。

雷を纏うということは失敗すれば死ぬことと同じ。コントロールに失敗すれば死ぬ。それは数多の術者が辿った運命。

「天才」

リーリエ・セルフィナの口からその言葉が漏れる。だが、ベリエは首を横に振った。

「私は天才なんかじゃない。死に物狂いで覚えただけ。だから、使えるのはこの雷神槍のみ」

雷神槍でもあらゆる属性でトップクラスの難しさではあるが。

「時雨さんからはリーリエ・セルフィナの弱点を聞いている」

その言葉にリーリエ・セルフィナは眉をひそめた。ベリエはクスッと笑みを浮かべながらリーリエ・セルフィナを向きつつアリエとエレノアに話しかける。

「お姉様、アリエ、悪いけど、このベリエ・アトラス。前に出るから」

その言葉と共にベリエは駆け出した。リーリエ・セルフィナはナイフを捨てて杖に持ち帰る。

ベリエもナイフを捨てて剣に持ち替えた。

ベリエの剣とリーリエ・セルフィナの杖がぶつかり合う。リーリエ・

セルフィナの顔に浮かんでいるのは怒りに染まった顔。それを見たベリエは笑みを浮かべた。

「リーリエ・セルフィナの弱点その1、空間制御は電磁の乱れがあれば上手く作用しない！」

「くっ」

リーリエ・セルフィナがベリエを強く押して弾き飛ばす。だが、そこにエレノアが炎の槍を叩き込んだ。

リーリエ・セルフィナの体が爆炎に包まれ、そして、消える。

「ありがとうございます」

そして、リーリエ・セルフィナはエレノアの近くまで移動していた。エレノアは目を見開きつつ振り返り、リーリエ・セルフィナにベリエが激突する。

「弱点その2、リーリエ・セルフィナが視認出来ない加速による攻撃では空間制御におけるカウンター転移は発動しない！」

ベリエの膝は完全にリーリエ・セルフィナの顎に入っていた。ベリエはそのままリーリエ・セルフィナを蹴りつけて宙返りをしてエレノアの腕の中に収まる。

エレノアはどこか困惑気にベリエを見ているがベリエは見当たらない。

「お姉様、ありがとうございます」

「ベリエ、大丈夫？」

「大丈夫です。リーリエ・セルフィナを倒すまで、私は倒れません」

そして、ベリエは空中に作り出した足場を蹴った。そのままリーリエ・セルフィナに向けて剣を向ける。

「雷神槍、解放！　千破万雷！」

その言葉と共にベリエの体を紫電が迸り、加速した。その加速はリーリエ・セルフィナという磁石に引かれるようにベリエの体を引きつける。

そして、ベリエとリーリエ・セルフィナが激突し、そのまま地面に激突した。

破壊されない地面だからか威力はかなり低いが、ベリエとリーリエ・セルフィナの体は何回か跳ねて地面を転がった。

雷属性下級魔術である雷神槍は体を帯電させる雷化能力と解放時に自動的に雷属性上級魔術である千破万雷に変化する。雷神槍自体使う人がいないのでまずお目にかかれないが。

千破万雷は使い手が使えば文字通り千を破る万の雷を放てる（雷王具現化に近い何か）が、雷神槍からそこまで出せるわけではなく、帯電させた体を相手の磁力に引き寄せて体当たりする攻撃となる。

もちろん、威力はとても高いが、放った本人にもダメージが高いという両刃の剣の技。

ベリエはゆっくり起き上がろうと腕に力を入れて体を起こす。だが、腕から力が抜けてベリエは顔から地面にぶつかった。

「ベリエちゃん！」

すかさずアリエがベリエに駆け寄って治癒魔術を放つ。駆け寄ってからアリエは初めて気づいた。

ベリエの体の至る所に火傷のような傷が出来ているのを。

「ベリエ！」

エレノアも降りてきてベリエに近づきそれに気づく。

「あなたは、もしかして」

「ははっ、バレちゃいました？」

ベリエが笑いながらゆっくり体を起こす。

ベリエは雷神槍を完全に使えるわけじゃない。雷神槍を長く使えば死ぬ可能性が高いだけだった。ベリエが雷神槍しか使えない理由。雷神槍以外を使えば死んでしまうから。

「リーリエ・セルフィナを倒すために死に物狂いで覚えた術式。リーリエ・セルフィナに対する対抗術式は成功」

「効いたわ」

その言葉にベリエの体がビクッとなる。エレノアとアリエの二人は振り返った。

そこにはベリエが渾身の力で放った千破万雷を受けてなお立ち上がるリーリエ・セルフィナの姿がある。

エレノアもアリエもわかっている。自分達の力ではリーリエ・セルフィナを倒すことは到底不可能であるということを。

ベリエはただそれだけのために死に物狂いに覚えたのだから。

「まさか、雷神槍から千破万雷を受けるなんて。懐かしいわ。あなた達の父親にされて以来のダメージだわ」

エレノアは微かに目を細める。そこにはリーリエ・セルフィナの体を魔術陣が包み込んでいる。目に見えないほどの薄い魔術陣が。

おそらく、ベリエやアリエでは見えていないくらいの魔術陣。

「雷属性が苦手なんて昔からわかっていた。だから、私だって対抗術式は考えていたのよ」

その言葉と共にリーリエ・セルフィナの周囲に紫電が迸る。

雷神槍ではない。雷神槍の上位互換である天雷槍。雷神槍よりも遥かに協力な魔術をリーリエ・セルフィナは使っている。

刹那しか使わない天雷槍を。

「来なさい。ミューズ」

リーリエ・セルフィナの言葉に一人の大男が現れた。その姿を見たエレノアは思わず正式な名前を口にだす。

「雷属性の最上級精霊『ミューズレアル』」

『いかにも。元『炎帝』。今でも『炎帝』を名乗る力はあるかな？
エレノア・スカートレット』

エレノアは杖を構える。最大級の魔術を放つ準備は出来ているが、リーリエ・セルフィナには効かない。

「今度は私達の番よ」

そう言ってリーリエ・セルフィナは笑みを浮かべた。

第百九十八話　運命の担い手ＶＳ光明神

一斉に放たれた運命が青年を直撃する。孝治は小さく息を吐いて弓を下ろした。

運命の本来の力を使っていないとは言え、これだけ当てればさすがの相手も無事ではないだろうという確信があったからだ。

孝治は戻ってきた運命を掴み、弓を虚空に戻す。

だが、倒していないという確信はあった。

果たして、爆煙の中から出て来たのは純白の翼。

「ようやく姿を現したか、鳥もどき」

爆煙が晴れ、そこに現れたのは純白の服に身を包んだ青年の姿だった。だが、青年の顔は怒りで歪んでいる。

「人間風情が、この私に泥を塗るか！？」

「口調が変わっているな」

孝治はわかっていたかのように口にする。

純白の服に純白の翼。それは、天界の住人となりえる資格を持った存在。天界は魔界と比べて翼を持つものが多い。ただ、その翼が純白であるのは希少だ。

純白の翼は神に仕える存在とされ、とある翼を除いて至高の存在とされている。

「天界の犬が何の用だ？　ここはお前の世界ではないぞ」

「勘違いをしているな。地上の民。私達は空の民には及ばないものの、天空の民として地上の民を管理する使命がある」

「使命？　人界は家畜の集まりとでも？」

「地上の民としては察しがいい。惜しむらくは、貴様が忌み嫌われる黒の翼を持つためか」

「くだらん」

孝治は一言で切り捨てた。孝治に言わせれば純白よりも真っ赤な炎の翼、おそらく『炎熱蝶々』、が一番だと答えるだろう。それに、自分の属性翼も気に入っている。

孝治は運命の先を青年に向ける。

「俺はこの翼に誇りを持っている。何物にも代え難い誇りをな。忌み嫌われる黒だとしても」

「誇りだけは一人前か。もうこの姿を見せた以上、名乗らないと駄目だな」

「光明神アーク・レーベ」

その名前を呼んだ瞬間、青年がピクリと動いた。孝治は自信を持っ

て頷く。

「やはりか。天界の天王の配下にして天界の純白の翼を持つ中で強い五人衆の一人」

「神と言って欲しいな。私はこの名に誇りを持っているのでね」

「五人衆の中でも光明神であるアーク・レーベは違う。文字通りの光属性のスペシャリスト。本当の天界最強の光属性の使い手」

孝治の言葉に青年、アーク・レーベは嬉しそうに笑みを浮かべた。

「嬉しいな。私のような存在が地上の民に知られているなんて」

「個人的に知っているだけだ。確信したのは運命の一斉射撃を受け止められた時だが」

運命の一撃は極めて重く、普通ならば一撃で落ちるものだが、一斉射撃をアーク・レーベは受け止めた。

孝治はその瞬間に相手の名前を理解したのだ。

「天界の住人とは思っていたが、アーク・レーベだったとは」

孝治の顔に笑みが浮かんだ。そして、運命を構える。

「光明神と戦えるとは嬉しいさ」

「ほう。私も地上の民で闇属性に秀でた術者でもあるお前と戦えるのは嬉しい。だが、殺すには惜しいな」

その言葉と共に孝治はアーク・レーベに向かって飛翔する。アーク・レーベはとっさに光の槍を大量に放った。

さすがの孝治もその技にはどうしようもないのか避けるか闇属性魔術で受け止めるしかない。

孝治が運命を握りしめ、そして、光の槍を払う。

「私の槍に貫かれ、消え去るのがお前の運命だ」

アーク・レーベが話した言葉。だが、次の瞬間にはアーク・レーベの表情が変わる。対する孝治の顔には笑みが浮かんでいた。

アーク・レーベが口にした運命という何気ない言葉に孝治は運命を振り上げる。

「エネルギー、ロード」

その瞬間、運命の柄の一部が動き、コアに圧縮した魔力を注入した。

孝治の持つ運命はかなり珍しい機能を持つ。レヴァンティンのようなコアだけの存在ではないのにコアと刃以外を自由にカスタマイズ出来るのだ。

だから、孝治は運命に施した。

運命の柄にエネルギーバッテリーを組み込み、エネルギーバッテリーの魔力全てを運命の力を使う際に使用するように。

条件を満たした運命が光を放つ。

「光明神、失言だな」

対孝治戦時に注意する言葉。それは運命という言葉。その言葉を発した瞬間に、運命の持つ最大の能力が発動する。

「【運命を切り開け】」

孝治の運命が光を放つ。孝治の言葉はそれが秩序であるかのように周囲に染み渡った。

運命の持つ最大級の能力。それが、運命の逆転。運命の言葉がついたセリフを未来と見なし、その運命を反転させるような事象を世界に書き込む能力。

もし、孝治を「戦場で死ぬ運命」と言ったなら、その状況では絶対に死なない。いくら斬られても魔術が直撃しても死なない。味方が言っても意味はないが、敵が言えば力を発揮する能力。

孝治は普通に強いが、その運命の能力は桁違いにおかしいものだった。

孝治が前に進む。すると、アーク・レーベが放つ光の槍は全て孝治を避けるように放たれていた。もちろん、アーク・レーベは孝治を殺すつもりで放っている。

だが、世界に刻まれた事象の強制力は極めて強力であり、いくら光明神のアーク・レーベですらそれを跳ね退けるのは不可能であった。

アーク・レーベは怒りで顔を歪ませる。

「地上の民の分際で、天空の民と同じ領域に達するつもりか？」

「俺達に大きな差はない。あるのはただ一つ」

アーク・レーベの持つ砲撃槍が孝治によって空高く弾かれる。そして、振り上げられた運命がアーク・レーベに向かって振り下ろされた。

「住んでいる場所だ」

だが、運命は阻まれる。薄い光の膜によって。

「光明結界（アーク・レーベ）か」

孝治は小さく呟いて後ろに下がった。

光明結界（アーク・レーベ）。

光明神であるアーク・レーベがアーク・レーベという名前であるためにつけられた結界。

簡単に説明するなら、光属性と相性の悪い全てを防ぐ結界だ。

例え運命の力があっても孝治が反転させた運命は光の槍に貫かれること。根本的な魔術から相性の悪い孝治の攻撃が光明結界（アーク・レーベ）を通り抜けることはない。

「全く、冷や冷やさせる」

孝治がアーク・レーベに気づいたのも光明結界（アーク・レーベ）のためだ。運命を受け止めた薄い膜を孝治は見逃さなかっただけである。

ただ、対処は難しい。

ここでアーク・レーベが口を滑らせたなら光明結界（アーク・レーベ）を切れるが、アーク・レーベはそんな間違いは起こさないだろう。

「国連特殊部隊直属特殊機動部隊（ファントム）かつ光明神か。どうやってそんな芸当を？」

孝治は疑問に思っていたことを口にする。口にしながらも頭の中ではどうやって光明結界（アーク・レーベ）を破るか必死に考えていた。

「私の言葉は神にも等しき言葉。地上の民が無条件で話を聞くのは当たり前だろう？」

「俺が知る国連とはかなり違って腐ったみたいだな。まあ、いい。だが、隊長というのはおかしな役職だ。もしかして、国連特殊部隊直属特殊機動部隊（ファントム）の隊員は全て天界の」

「天界では技術の高い施設はある。だが、最大火力に関しては地上の民の方が上だ。私達は決して驕らない。例え名ばかりの役職があっても、軍には手を抜かない」

そう言いながらもアーク・レーベは孝治に向かって笑みを浮かべている。完全に自分が優位だと確信している笑みだ。実際にそうであるため孝治もどうすればいいか悩んでいる。

アーク・レーベの攻撃は孝治が魔力を切らすまで当たらない。対する孝治の攻撃は光明結界（アーク・レーベ）がある以上当たらない。

特に、孝治は未だに神剣であるリバースゼロを使っていない。下手に大きな攻撃をしたところでリバースゼロに吸収されたなら運命を使った光属性の攻撃を孝治は可能にするかもしれないという感覚がアーク・レーベにはある。

つまりは完全な膠着状態。

運命の担い手と光明神はお互いを睨みつけたまま動きを完全に止めている。

第百九十九話　白銀乱舞

対艦剣がリーゼツヴァイの対艦剣とぶつかり火花を散らす。すかさず一歩後ろに下がって振り下ろされた対艦剣を避け、リーゼアインを蹴り飛ばす。

僕はモニターに映るリーゼフィアを見ていた。リーゼフィアはリーゼアインやリーゼツヴァイと違い全く動いていない。

さらにはリーゼアインもリーゼツヴァイもリーゼフィアを守るように動いている。だから、戦闘が長期化していてもエクスカリバーに目立った外傷はない、が、僕はチラッとエクスカリバーの状態を見る。

エクスカリバー右足膝関節部分に異常。

その状態を見ながら僕はエクスカリバーを後ろに下がらせた。

リーゼフィアがあるのはちょうどダークエルフを収納している倉庫の近く。近づきたくても強制的に突破出来なければダークエルフまで辿り着けない。

それに、リーゼフィアがあそこにあることを考えると、ダークエルフはもしかしたらリーゼフィアのパイロットに見られているかもしれない。

「八方塞がり、というわけじゃないんだけど」

この日のために作り出したエクスカリバーの装備はある。ただ、限

定的かつ換装すれば射撃が出来ない近接戦闘装備。

それを使うべきか使わないべきか。

この場だけはどうするか悩んでしまう。リーゼアインもリーゼツヴァイも積極的に攻撃してこないため、性能の把握は出来ていないが。

「仕方ないか」

僕はエクスカリバーの武装を換装する。持っていた対艦剣は戻して追加装甲をエクスカリバーの全身装着。これにより、エクスカリバーの体は一周りも二周りも大きくなった。

さらに、エクスカリバーの腰には鞘に収まって小さめの対艦刀がある。

主な技の一つとして居合いを取り入れた二撃必殺スタイル。

ダークエルフが使えない時のための装備だ。

腰を落とし、柄を握りしめる。リーゼアインもリーゼツヴァイも身構えた。

フュリアスによる居合いは長さの関係上不可能だ。だからこその特注対艦刀。

僕は小さく息を吸い、そして、前に向かって駆け出した。

エクスカリバーの体が前にいるリーゼアインに迫り、腰にある対艦刀を一閃する。だが、対艦はリーゼアインの対艦剣とぶつかり合い、

空高くまで弾き飛ばされた。

その姿を見ながら、僕は出力を最大まで上げる。

脚の追加装甲にあるブースターが火を噴いてエクスカリバーの体が回転した。そして、蹴りがリーゼアインの体をくの字に折り曲げながら吹き飛ばす。

初撃は抜刀で二撃は加速蹴り。僕はこれを抜剣斬りと呼んでいる。脚の追加装甲にある刃が相手の装甲に食い込みながら蹴り飛ばすため普通の威力とは桁が違う威力が出る。

僕は振り返りながらリーゼツヴァイが振り下ろした対艦剣を腕の追加装甲で受け止めた。そして、追加装甲をパージしながら後ろに下がる。

外れた追加装甲はリーゼツヴァイの前を塞ぎ僕はエクスカリバーをさらに後ろに下がらせた。

エネルギーライフルを取り出してリーゼツヴァイに向ける。狙うのはリーゼツヴァイの腕。

だけど、その瞬間に僕は嫌な気配が背中を駆け回るのがわかった。体が勝手にその嫌な気配から逃げるためにエクスカリバーを後ろに下がらせる。それと共にエクスカリバーがいた場所にエネルギー弾が通り過ぎた。

飛んできた方向を見るより早く、リーゼツヴァイがエネルギーライフルに近いものを取り出す。

三連エネルギーライフルだ。引き金一回でエネルギー弾を三発放つものだが、対艦剣でエネルギー弾自体を打ち払える相手や、ギリギリで回避する相手にはかなり有効な武器。

僕は小さく息を吐いてエネルギーシールドを掴む。

「ようやく、リーゼフィアが動き出したね。少し遅くないかな？」

僕は小さく呟きながらも感覚を研ぎ澄ませる。

ダークエルフと違ってエクスカリバーの精神感応は集中しないと上手く作用しない。もちろん、操作によって十分にカバーは可能だけど、相手が強い場合は精神感応を最大限まで使用した方がいい。

本当なら、無意識でも精神感応を発動できて魔術による付与効果も可能なダークエルフが一番、相手のエースとの戦いに有効ではあるが。

それにしても、あのタイミングでリーゼフィアが動き出すなんて。

『これがあいつを殺した力か』

その言葉に精神感応が完全に途切れる。その瞬間にリーゼツヴァイが三連エネルギーライフルの引き金を引き、三連発のエネルギー弾が飛んできていた。

とっさにエネルギーシールドでエネルギー弾を受け止める。

『憎いな。本当に憎いな。その力、世界最高峰の機体、その強さは本当に憎い』

「真柴隼人」

『父親を呼び捨てか？』

「子供を捨てた父親になんて呼び捨て以外には何もないよ」

その声は懐かしく、聞きたくない声の一つ。

あの日、真柴、結城家との戦いで倒した相手の片割れで僕の父親。

そして、世界で一番殺したい相手。

『口だけは達者になったか。昔は弱かったのに』

「僕を昔と一緒にしないで。今の僕は昔とは違う。何が正しくて何が正しくないも自分で決められる」

『人殺しの子供。殺しをしすぎて感覚が麻痺をしたか？　『ＧＦ』こそが世界を滅ぼす毒だ』

その言葉に僕は集中する。再度精神感応を強化してエクスカリバーの体を把握する。

やっぱり、膝関節に無理が来ているみたいだ。エクスカリバーは空中を得意とする分、地上や市街地での戦いはそれほど強くない。

『世界は破壊すれば破壊するほど滅びから遠ざかる。それが世界の心理だ』

「破壊をすれば何も残らない。それはただ単に自分達の手で世界を

破壊しているだけだ！」

『本当の意味での滅びを知らないからの言葉だな』

その言葉はまるで僕を嘲笑うかのような声音。

『世界の滅びは人類、いや、生物の消滅だ。そのようなことが許されていいのか？　いや、許されない。だから、滅びを先送りすればいい』

「未来に押し付けて何になる！？　そんなことのために世界を壊すのか！？」

『違うな。破壊は抗争を呼び、抗争は戦争となり、戦争は技術力を飛躍的に伸ばす。世界を救うためには技術力が必要なのだ。海道周が持つ技術力ではない』

「どういうこと？」

僕は純粋に尋ねていた。

それは、驚異的な開発力を持つ周さんが考えたのではなく、元から持っているかのような言葉。だから、僕は尋ねていた。

『エクスカリバーは本来、来年に開発された機体だった』

「えっ？」

『海道周の持つ開発力は未来の技術を完全に呼び出す力。世界はそれによって飛躍的に滅びが近づいた。この意味がわかるな？』

つまり、周さんがいたことによって世界は滅びに近づいているということ。周さんが持つ、未来の技術によって。

『『赤のクリスマス』は文明を破壊するために行ったこと。だが、海道周は技術を提供し、『赤のクリスマス』の意味を無意味とした。だから、破壊しなければならない。世界を救うために』

「滅びの原因が僕達にあるの？」

『そうだ』

その言葉に僕は考える。今まで見ていた周さんの活躍を。

誰も犠牲にしないために戦った魔界の貴族派及び狭間の鬼との戦い。

アル・アジフさんを救うために、僕の過去を断ち切るために、鈴を助けるために戦った真柴と結城両家との戦い。

他にも、第７６移動隊としてたくさんの戦いを見ていた。そのどれもが周さんは必死に戦っていた。誰も犠牲にしないように。

例え、無関係な人が無くなっても自分のせいにし、自分が傷ついても守ることを優先する。そんな周さんを僕は見ていた。

世界について悩み、考え、自分なりの答えを出す。それは僕には到底真似出来ないこと。

例え、未来の技術を知っていても、中学生になった周さんは必死に未来について考えていた。そんな姿を僕は見ていた。だから、きっ

ぱり答えてやる。

「違う」

しっかりとした口調で、ちゃんとした言葉で。

その言葉と共に僕はエクスカリバーを一気に加速させた。

リーゼツヴァイが三連エネルギーライフルの引き金を引いた瞬間、エクスカリバーを変形させてエネルギー弾を回避する。すかさず加速してリーゼツヴァイに近づく。

ここからはタイミングと動き方。上手く動いてリーゼフィアの位置を動かす。

エクスカリバーを再度変形させる。戦闘機から人型へ。膝への負担の高さは無視して僕は対艦剣を取り出した。

リーゼツヴァイも対艦剣を取り出して打ち合わせる。

地面を踏みしめる。失敗すれば負けるだろう。

足のスラスターを展開する。精神感応による全操作。

体を回転する。リーゼフィアが放ったエネルギー弾を回避しながら。

そのまま全力の蹴りをリーゼツヴァイの体に叩き込んだ。だけど、リーゼツヴァイはギリギリで蹴りを腕で受け止めている。

「ぶっ飛べ！」

出力を最大限にまでしてメインブースターに点火。加速したエクスカリバーの体はそのままリーゼツヴァイを近くの建物に叩きつけた。

建物のシャッターがひしゃげ、そこから漆黒の鎧を身にまとうフュリアスの姿があった。

リーゼツヴァイをそのまま背負い投げ、リーゼフィアに飛ばす。すかさず僕はエクスカリバーを変形させてエクスカリバーのコクピットから漆黒のフュリアスであるダークエルフに向かってパワードスーツのアシストを受けつつ駆ける。

ダークエルフは完全な精神感応式。コクピットに収納されながら僕はダークエルフを起動させた。

ダークエルフ外部にあるカメラの一つが相手の姿を捉える。

「周さんはそんなんじゃない。だから、僕は、戦う。周さんの道を共に歩むために！」

出力を上げてエクスカリバーとは全く違う操作のダークエルフで地面を駆ける。狙いはリーゼフィアただ一機。

「全てに、過去の全てに決着をつける！」

そして、僕は対艦剣を取り出した。

第二百話　逆転の布石（前書き）

ついに二百話目です。というか、いつ終われるのかわかりません。
せめて、１１月中には終わりたいですけど。

第二百話　逆転の布石

「焼き尽くせ！」

その言葉と共に炎の塊がミューズレアルに向かって放たれる。だが、ミューズレアルは腕を軽く振るだけで炎の塊の軌道を大きく変えた。

「磁場の変更」

エレノアは小さく呟きながらミューズレアルを見下ろす。ミューズレアルは笑みを浮かべたままエレノアを見上げていた。

『それが本気ではあるまい。『炎帝』の本気を見せてもらいたいな』

「そう簡単にはいかないけど」

エレノアは杖を構えながら魔術陣をいくつも展開する。ミューズレアルが動かないのはミューズレアルの周囲に魔術陣による浮遊機雷を浮かせているからだ。

浮遊機雷自体はインフェルノボムと似たようなものだが、威力や実用性の観点から考えて遥かに強力なものになっている。

『だが、魔術の練度は見事だ。タイクーンと並ぶであろう』

「敵に褒められても嬉しくはないけどあなたが精霊だから純粋に嬉しいとは思う。どうしてリーリエ・セルフィナと契約出来たの？あなたは気高き精霊のはずなのに」

『そうだな。正確には契約したわけではない』

「えっ？」

エレノアが小さく声を漏らす。その言葉にミューズレアルは笑みを浮かべた。

『我はただ、強き者と戦いたいだけ。そして、真の契約者と契約したいだけ。リーリエ・セルフィナは契約したと思い込んでいるようではあるが』

「つまり、私があなたを倒せば味方になるかもしれない、ということ？」

この学園都市には三人の最上級精霊を従える術者がいる。だから、エレノアはそう推測した。

だったら、手加減してはいられない。地上では大事なエレノアの妹達が戦っているのだから。

「ちょっと、本気を出そうかな？」

『ちょっと？　何か勘違いを』

「勘違いじゃないよ。ちょっと本気をね」

そう言いながらウインクするエレノアの背中には『炎熱蝶々』、ではなく、『炎熱蝶々』のような何かによって描かれた何かの術式による巨大な翼が広がっていた。

ミューズレアルの目が見開かれる。
精霊でなくてもわかる膨大な魔力。しかも、それが全て発動したのではなく召喚されたものであることも。
『まさか、それは』
「今まではその威力の高さから使って来なかった。私の前の『炎帝』を一撃で倒した私のトラウマに起因する神代の魔法。これを受けてなお、あなたは耐えられる？」
その言葉と共にミューズレアルに向かって炎が叩きつけられた。
「雷神槍！」
紫電を身にまとい突撃するベリエ。だが、その突撃を同じように紫電を纏うリーリエ・セルフィナは簡単に避けていた。
ベリエは小さく舌打ちをしながら雷神槍から千破万雷に切り換える。だが、千破万雷は簡単にリーリエ・セルフィナに受け止められた。
「遅いわね」
その言葉と共にベリエの体が浮かび上がるような感覚を感じ、そのまま勢いよく叩きつけられた。その最中にポケットに収められたナイフが周囲に飛び散る。

地面を転がるベリエに向かってリーリエ・セルフィナが雷を放つ。
だが、それはアリエによって弾かれた。

「ベリエちゃん、大丈夫？」

「やっぱり、天雷槍相手に、雷神槍は、キツいかな」

自分の体を傷つける雷神槍しか使えないベリエにとって、上位の存在である天雷槍を使えるリーリエ・セルフィナと戦う手段は無いに等しい。

ベリエはゆっくり立ち上がりながらリーリエ・セルフィナを睨みつける。リーリエ・セルフィナは笑みを浮かべてベリエを見下ろしている。

「身の程を知りなさい。私は雷の精霊を操る精霊術者。あなたのように弱くはありません」

「弱い、か。小手先の技じゃ戦えないか」

ベリエはナイフを取り出し、無造作に地面に突き立てた。

リーリエ・セルフィナは訝しむように目を細め、そして、落下する。

「なっ」

「捉えた」

ベリエがすかさず術式を展開する。傍らにいるアリエも術式を展開

する。

それは姉妹が最も得意とする最高峰の結界魔術である術式凍結結界。

そもそも、結界術は発動点を中心とした半球体の空間であるのが普通だが（四角いものもあり、共通するのは中に捕らえられた人は形を把握することが出来ない）これはリーリエ・セルフィナを中心とした球体の術式凍結結界だった。

「私達の鎖は絶対に解けない。だから、あなたを捕らえた！」

千破万雷によって突撃した際に天雷槍のリーリエ・セルフィナに受け止められ、飛び散ったナイフによって形勢されたいくつもの術式。

それらがベリエとアリエの手によって形成されている。

「ベリエちゃん、援護するから」

「お願い」

ベリエは雷神槍を纏う。その体からは煙が出ているがベリエは気にしない。気にしていられない。

ベリエは小さく息を吐き、そして、リーリエ・セルフィナに向けて一直線に突っ込んだ。

対するリーリエ・セルフィナは地面に這いつくばったまま目を見開いてベリエを見ている。

「千破万雷！」

まるで発火したように赤い煌めきが輝き、千破万雷を放つベリエはリーリエ・セルフィナと真っ正面から激突した。

背中に受ける衝撃。それを感じながら亜紗は鞘に収めていた七天失星を振り返りながら振り抜いていた。

斬撃の衝撃が誰もいない空間を穿つ。

亜紗は小さく痛みで顔をしかめながらその場から飛び退いた。

「避けられたか」

その言葉と共に緑色の服を着た男が加速する。亜紗は風をまとい敵の動きを予測する。

男の加速は亜紗が知る中では二番目に早い加速だった。だからこそ、亜紗の動きは一歩遅れる。

七天失星の腹で蹴りを受け止める。だが、勢いを殺すことはできずそのまま吹き飛ばされた。

亜紗が吹き飛ばされながらも男は動いている。加速して拳を入れようとしている。

だから、七天失星を鞘に収め、亜紗は自分の中でリミットを完全に

はずした。

オーバードライブ。

一瞬にして体内にある全ての生体兵器としてのパーツを最大限まで加速させる。その加速による感覚が動きを捉える。男は上手く周囲の地形を利用して動いている。

亜紗が捉えられたのは動きだけ。その動きを先読みして亜紗は動く。七天失星の柄を握り締めて足を踏み込み、鞘から抜き放つ。

男は目を細め、さらに加速する。

亜紗が狙ったのは地面を走りながら拳を振る男に対して。対する男は亜紗に跳びかかっている。

だから、亜紗は七天失星を放した。七天失星は男の足元を通り過ぎ、亜紗はその手に新たな刀を呼び出している。その刀の名は、

「矛神だと!?」

男の拳は亜紗の体に突き刺さる。だが、亜紗は体勢を崩されながらも矛神を振り切る。狙いは、男の腕。

亜紗は矛神を振り下ろした。

レヴァンティンの刃がゴーレムに突き刺さる。そして、そのままレヴァンティンを振り回した。

周囲のゴーレムを殴り飛ばして刃に喰らいついたゴーレムを蹴り飛ばした。

「３８体目！　つか、何体出せるんだよ！」

「９９体目！　１００体目！　いつの間に撃破数を数えることになっているんですか！？」

オレの言葉に由姫が別の疑問で返してくる。オレはレヴァンティンを振り回しながら小さく舌打ちをする。

一誠のゴーレム生成能力は言うほど高いものじゃない。むしろ、低いくらいなのかもしれない。だが、作り続けているからかどんどんゴーレムの強さは強くなっている。

「さあな。なんとなく」

「なんとなくに私達を巻きこまないでください」

「撃破数を数えているのは由姫さんだけなんですけどね」

呆れたような声と共にフォトンランサーの連射がゴーレムの群れに突き刺さりその大半を消し飛ばす。威力は低いが相手の数が多い時に都の魔術は本当に頼りになる。

その穴を開けた群れにオレとメグは同時に跳び込んだ。お互いの持つレヴァンティンと炎獄の御槍を当たらないように振り回しゴーレ

ムを蹴散らしていく。

「お兄ちゃん、下がって！」

その言葉が響き渡ると同時にオレとメグは跳び退いた。それと共にオレ達の後ろから紫電を身に纏う矢が放たれる。

雷王具現化圧縮形態射出型。

ふざけた技だが広域の雷王具現化を一点に集めて圧縮させ射出する技。ちなみに、茜しかできない。茜は射出に関しては素人なので夢が狙いを付けたのだが、放たれた矢によって出来あがった爆発の後には無傷の一誠がいた。

「えーっと、お兄ちゃん、どうやって倒すの？」

「オレに聞くな。つか、無尽蔵かよ」

オレの言葉と共にさらに大量のゴーレムが現れる。絶対絶命ほどじゃないけれど、ここを乗り越えられなければどうしようもない。

オレは小さく息を吐いてレヴァンティンを構えた。

『それにしても、よくもまあ、ここまで神隠し（トリックオアトラップ）を使用できますよね』

「どういうことだ？」

『神剣の情報があるデータベースをくまなく調べたのですが、神隠し（トリックオアトラップ）自体は奇術のような真似事しかできないものです。まあ、前所有者である善知鳥慧海は違ったようですが』

確かにそうだ。元々は妖精が使っていたとされる神剣。並みの人間が使ったとしてもそんな効力はまずあり得ない。

つか、妖精なんて天界にしか存在しないぞ。

「妖精は天界にしか存在しない？」

もしかして、一誠は天界の妖精族の一人？　いや、妖精族というより、妖精族に連なる最も高貴な身分の一つであるあれか。

「そうか、エルフか」

「エルフですか？」

「由姫さんはしっかり座学を学びましょうね。エルフとは天界に住む極少数の魔術民族のことです。膨大な魔力を生まれた時から持っており、一時はエルフを争って天界で戦争が起きるほどでした。大きな戦争で言えば１６年前の」

「とりあえず、座学で教えた以上のことを語るのは止めような」

都の言葉にオレは呆れたように声を出す。エルフに関しては普通じゃ習わないからメグも夢も心当たりがないのだろう。

エルフの魔力は無尽蔵とされ、種族的には妖精族に分類されるから、神隠し（トリックオアトラップ）をここまで操るのは納得がいく。

「そうか。エルフなら、あの戦い方が出来るな。由姫、メグ。あれをするぞ」

「あれ、をするんですか？」

「マジ？」

二人が本当に嫌そうな顔になる。それに対してオレは笑みを浮かべてレヴァンティンを構える。

「逆転の布石だ。ここで成功させて、とっととここを抜くぞ」

「わかった。兄さん、行きますよ」

その言葉と共にメグの前にいくつもの重力場が展開される。メグは小さくため息をついて魔術陣を展開した。

「どうなってもしらないからね！？」

その言葉と共に炎獄の御槍の穂先を重力場のちょうど真ん中に向ける。それと共に炎獄の御槍の上を魔術陣が駆け抜けた。加速術式だ。その上にオレは跳び乗った。

「アクセラレレート、スタート！」

メグの言葉と共にオレの体が加速する。別名、人間砲台。これを使ったのはあの日以来だが、その時の話は割愛させてもらおう。あれだけは語りたくもないし思い出したくもない。

オレの体が加速し、そして、ゴーレムの群れに向かって一直線に飛ぶ。それはむちゃくちゃな加速であり、一瞬でゴーレムの群れを貫いた。

「ようやく捉えたぜ」

目の前にいる一誠に向かってオレは笑みを浮かべる。一誠はその手に身につける指輪をオレに向けて、レヴァンティンの力が作用した。

周囲にいたあらゆるゴーレムが形を失い崩れ、指輪の能力は発動しない。

「少しの間、眠っておけ！！」

そして、オレの拳が一誠の体に突き刺さった。

第二百話　逆転の布石（後書き）

作中にあった人間砲台の話は短編集で書ければ書く予定です。

第二百一話　形勢逆転

目を見開く。口をポカンと開けたまま固まってしまう。突き出した拳は完全に静止し、前方の光景を見つめていた。

何故なら、そこには壁に激突してぐったりとしているアリエの姿があったから。ベリエは千破万雷でリーリエ・セルフィナを攻撃したはずなのに。

一部発火した火に気づくことなくベリエはアリエを見つめ、服装の一部が斬り取られた。

「火をつけたままだと危ないわよ」

その言葉は背後から。アリエがいた場所からベリエの耳に聞こえていた。

「リーリエ、セルフィナ」

「そうよ。惜しかったわね。さすがの術式凍結結界の中だと、私でもやられていた。だけど、結界なんて一部でも綻びが出来たなら簡単に壊れるでしょ？」

リーリエ・セルフィナが笑みを浮かべながら天雷槍を身にまとう。

「さあ、あなたも壊れなさい」

そして、ベリエの体にリーリエ・セルフィナが激突した。

ベリエの体は簡単に吹き飛び壁に激突する。体中の骨が砕ける感覚と共にベリエは地面に叩きつけられた。

戦闘服や戦闘用のデバイスを身につけていなければ確実に死んでいたであろう衝撃。ベリエは体の痛みを堪えながら治癒魔術を展開しつつ起き上がる。

治癒魔術によって強制的に繋げたものの、折れた部分は灼熱の痛みを上げ、体中の筋肉がもう動けないと悲鳴を上げる。

「まだ壊れないの？」

リーリエ・セルフィナの驚くような言葉。

リーリエ・セルフィナの突撃はベリエの千破万雷よりも威力は高く、例えどんな相手でも動けなくする威力はあった。だが、ベリエは立ち上がる。

「負けられ、ない、から」

「自分の実力をわかっている？　雷神槍は使えてもそれ以外のことは普通のレベル。二人でようやく一人前」

「そんなけと、わかっている」

ベリエはナイフを抜き放つ。そんな動作だけでも体は悲鳴を上げて痛みを全身に散らばらせる。

だが、ベリエは我慢する。泣きたくても、叫びたくても、倒れたくても、今を我慢する。

リーリエ・セルフィナを倒せるチャンスは今しかないから。

「アリエと一緒で一人前。そんなこと、第７６移動隊の中にいたら、当たり前よ。私は未熟者。周やメグみたいな才能は無ければ、孝治や音姫みたいな天才でもない」

痛みはマシになってきた。ベリエは自分に言い聞かせる。

「お姉様やリースみたいに強力な術式も、楓や光みたいな強力な武器も、悠聖や悠人みたいな強力な絆も何もない」

そんなことは自分が一番わかっている。一番、わかっている。

「由姫や亜紗みたいに極めたわけでも、都やアル・アジフみたいに覚悟を決めたわけでもない。だけど、だけど、私は、周のライバルになるって決めた。あんたを倒すって決めた。だから、負けられない」

「普通なら失神するほどの痛みの中、よく堪えますね」

「血反吐ならいくらでも吐いた。私の雷神槍は私自身を焼く。だから、これが私の雷神槍！」

ベリエはナイフをリーリエ・セルフィナに向かって投げつける。それは紫電を纏い、刹那で加速し、刹那より早く駆け抜けた。

リーリエ・セルフィナがいない空間を。

「天雷槍の私に雷神槍は効きませんよ」

リーリエ・セルフィナはベリエを回り込むように背後から仕掛ける。
ベリエはそれを感じて、笑みを浮かべた。

「穿て」

そして、ベリエの言葉と共に体に纏う紫電から放たれた雷の槍がリーリエ・セルフィナを貫いた。

矛神の刃が弾かれる。亜紗の手からは矛神が吹っ飛び、振り下ろした手を強制的に上げられた亜紗の顔は驚愕に染まっていた。

黒い服を着た男は笑みを浮かべている。

「やはり、神威に対し、神権は強いか」

亜紗はすかさず七天失星を掴もうと手を伸ばし、上から叩き潰された。

亜紗の肺から空気が漏れ、亜紗はほんの一瞬だけ息が出来なくなる。

「捉えたぞ。生体兵器の女」

亜紗は亜紗の上に乗っている男を睨みつける。だが、そんなもので男がそこから動くわけがない。むしろ、そんな表情の亜紗の顔に男は笑みを浮かべる。

「そそるな。本当に、怒っているお前は美しい。そうだな。今からお前を犯してやろう」

その言葉に一瞬、ほんの一瞬だけ亜紗の思考が止まり、そして、意味を理解する。

「前からか？　後ろからか？　それともたくさんの人にか？　お前に選ばせてやる」

亜紗は必死に抜け出そうと体を動かすが、亜紗の体はピクリとも動いていない。

今の亜紗の心の中にあるのは恐怖だけ。犯されることに対する恐怖だけ。

必死に手を伸ばす。七天失星とは３ｍほどの距離があるが、亜紗は少しでも前に行こうと手を伸ばす。だが、体は動かない。

「後ろか？　後ろがいいのか？　いいだろう。この場でお前を」

「ぶち抜け！」

その言葉と共に灼熱の拳が男を捉え、男を亜紗の上から殴り飛ばした。

亜紗はすかさず七天失星を手に取り構える。

「誰だ！」

男の怒鳴り声。それにその人物は答えた。

「名山俊也。精霊使いだよ」

その言葉と共に俊也の周囲に四体の精霊が顕現する。それを見た男の顔が引きつっていた。

亜紗はそれを見て訝しむように目を細める。

男の弱点は服装によって長所と短所が大幅に違うこと。それを上手く突ければ戦いは易くなる。

だが、それを抜きにして男は俊也の登場に驚きすぎている。

「どうして、ここに」

「どうして？　作戦だからかな。亜紗さん、先に向かってください。ここは僕が食い止めます」

『わかった。みんなは？』

「先に」

スケッチブックを取り出した亜紗に俊也は頷く。亜紗はその頷きに頷きで返して地面を蹴った。

俊也は小さく息を吐いて身構える。

「お久しぶりですね。あの時以来ですか？」

「精霊使いの餓鬼。貴様は真柴昭三の飼い犬だろうが！？」

「昔の話ですよ。本当に、昔の。今の僕は『ＧＦ』ですから」

「裏切り者」

その言葉に俊也は笑みで返す。そして、男に向かって指を向けた。

「みんな、こいつを倒すよ！」

一誠の体から力が抜ける。それと同時に周囲にいたゴーレムが全て消え去った。それを見ながらオレは小さく息を吐く。

まさか、神隠し（トリックオアトラップ）をここまで使用するとは思わなかった。

「一誠、お前はどうして」

「お前達にはわからないさ。家族を人質に取られた俺達のことなんてな」

「家族を人質？　それって」

一誠がオレの肩に手を置いてゆっくり立ち上がり、そして、背中を近くの壁に当てて寄りかかった。

「お前はまだ気づいていない。海道椿姫が考えている作戦のことを。

海道駿の切り札を含め、一瞬にして形勢逆転が起きるレベルだ」

「だが、お前の推測は違うんだろ？」

「相変わらず、何でも出来る天才はイラつくな。ああ、そうだ。だが、大筋は変わっていない。今もそういう風に進行している」

もし、一誠の言っていることが本当なら、それはそれでややこしい事態だ。今の状況をひっくり返された今の手札で敵を抑えることは出来ない。

援軍さえ来たなら話は変わるが。

「海道周、お前はどうする？」

「最悪、避難している人達だけは守るさ。体育祭最終日が出来なくても」

「なっ、お前はバカか！？　こんな事態になって体育祭最終日だと？　上や親が黙って」

「宣言したはずだ。ここはオレ達の学園都市だって」

日本政府でも、『ＧＦ』でも、国連でも、『ＥＳ』でもない。学園都市は学園都市の中にいる生徒達のもの。だから、とやかく言わせない。

オレ達がオレ達の手によって作り上げるのだから。

「この話は学園自治政府も了承している」

「最初から決めていたということか。なるほどな。だが、現実は甘くはないぞ」

「そんなことはわかっているさ。わかっているからこそ、オレ達は戦うんだ」

レヴァンティンを握り締める。握り締めてオレは鞘にレヴァンティンを戻した。

「一誠、お前は戦わないのか？」

「俺は」

一誠は俯いたまま動かなくなる。考えているのだろう。オレは小さく息を吐いて歩き出した。

「全員動けるな」

周囲を見渡しても全員が頷いている。茜が若干疲れているくらいか。

オレは作戦を確認する。まだ、致命的な遅れは出ていない。だから、まだ、大丈夫のはずだ。

「これから学園都市中央に向かう。目標はただ一つ、海道駿を食い止めるぞ」

第二百二話　大きな流れ（前書き）

二人ほどほとんど出ていない、というか、戦闘始まってから一人は名前すら出してないような気がしますが、楓と光の二人の活躍の場はもう少し後になります。ちなみに、この話は二人とは関係ありません。忘れ去られているであろうと考えたので。

第二百二話　大きな流れ

「化け物ね」

ベリエは小さく呻いた。そこには雷の槍が胸に突き刺さったまま拳を突き出すリーリエ・セルフィナの姿。壁に叩きつけられたベリエの口から血が吐き出される。

「惜しかったですね。本当に、後少しでした。後少しで私は負けていましたよ」

リーリエ・セルフィナが自らの胸に突き刺さった雷の槍を引き抜く。

「天雷槍による防御が一瞬でも遅れていたなら負けていました。本当に」

リーリエ・セルフィナが笑みを浮かべたままベリエに近づく。もう、ベリエが戦う力はない。

体が傷つくことなんて関係なく使った雷神槍や千破万雷によってベリエの体はほとんどがボロボロだった。生きているのが不思議なくらいの状態。だが、目は死んでいない。未だに闘志を燃やしている。

「どうして、そんな目を？　餓鬼は大人しく大人の指図を受けていればこんなことには」

「あんたには、わからないわよ。私達には、守らないといけないものがあるんだから！」

それはシェルターの一つ。時折聞こえる爆発や振動にシェルターに逃げ延びた人達が身を寄せ合っている。

その中を駆け回るのは『ＧＦ』であり学園自治政府の人達であった。

その中にエクシダ・フバルの姿はある。

「戦いが大きくなっているようだな」

その言葉に隣に控えていたアルトがピクリと動く。

思った以上に人員を必要としたため、第一特務の面々も走り回っていた。怪我人の治癒や事情を説明するために。

「行かないのか？」

エクシダ・フバルの言葉に首を横に振る。

「私は、エクシダ・フバル氏を守ることが命令です」

だが、アルトの顔に浮かんでいるのは苦渋。本当は行きたいと思っている。

「『ＧＦ』の仕事は民間人を守ることではないのか？」

「それは」

アルトは床を見つめる。

民間人を守るのと同じようにエクシダ・フバルも守らなければならないと思っている。だから、アルトは行くことが出来ない。

どうすればいいかアルトにはわからない。もし、周やエリオットなら簡単に動くだろう。周は最高を目指し、エリオットは最善を目指すから。

「お兄ちゃんは、守ってくれないの？」

その言葉にアルトは顔を上げた。すぐ近くに血まみれの服を着た幼い女の子の姿がある。

「こら、未来！　お兄さん達だって大事なことがあるのよ」

隣にいる母親らしき人物が女の子を抱きかかえる。アルトはその女の子に見覚えがあった。周がシェルターに連れてきた女の子だ。

あの時の周は傷が回復しているものの血だらけであり、ちょうど近くにいたアルトは周が出るのは不可能だと思っていた。だが、周は向かった。

学園都市を守るために。

「君の名前は」

アルトは女の子に近づき、頭を撫でながら名前を尋ねた。女の子は嬉しそうに答える。

「みき！」

「そっかみきちゃんか」

アルトはその言葉に笑みを浮かべて頷いた。

「君は、周が命がけで助けた子だね」

「うん。お兄ちゃんは助けてくれたよ。お兄ちゃんは、助けてくれないの？」

その言葉にアルトは黙ってしまう。シェルター内にいる誰もがこの会話を聞いていた。アルトは良くも悪くも有名人だから。

アルトは俯く。自分に力がある。力があるけどやらなければならないこともある。アルトにとってそれは苦渋の決断。何を守ればいいのかを決めなければいけない。

「周はいいな」

アルトは笑みを浮かべながら周の名前を呟く。

こんな状況で頭に浮かんだのは周だった。周ならどうするかを考えてしまう。そして、周ならどのような未来を考えるかも。

「お兄ちゃん？」

「未来、いい加減にしなさい。お兄さんにも仕事があるのよ」

期待されているわけじゃない。女の子は今を終わらせたいだけ。だ

から、尋ねている。多分、シェルターにいる大半がそう思っているだろう。そう考えると、アルトは迷っている自分が馬鹿馬鹿しくなってきていた。

今、このシェルターにいるのは学園都市体育祭を楽しもうと来た人達なのだから。

「そうだね。じゃ、約束するよ」

アルトは小指を差し出す。

アルトの言葉に女の子の母親は驚いたようにアルトを見ている。

「これから僕はみんなを守りに行く。だから、大人しくお母さんと一緒にいててね」

「うん」

そして、合わさる小指。それを感じたアルトはゆっくり起き上がった。

その顔にもう迷いはない。

「エクシダ・フバル氏、僕は行きます」

「行ってこい。未来を作るのは私みたいな老いぼれの大人ではない。お前達だ」

「はい」

アルトは歩き出す。それに同調するように一人、また一人と『ＧＦ』の隊員が立ち上がる。その誰もが怪我をしていたが、動ける人は立ち上がっていく。

全員、アルトと女の子の会話を聞いていた人だ。

「アルト？」

そんな中、シェルターの中にリコの声が響き渡る。アルトはその声に振り向いて口を開いた。

「僕は行くよ。だから、エクシダ・フバル氏を」

「そうじゃない。あたし達が行くのは賛成。第一特務の面々も準備を終えたから、あたしはエクシダ・フバル氏に聞きに来ただけ。あたしがいいたいのは怪我人を連れて行く気？」

その言葉に立ち上がろうとしていた怪我人が立ち上がるのを止める。その動作を見たリコは小さく溜め息をついた。

まるで、戦うなとは言ってないと言いたいように。

「アルト、あたしがシェルター内の指揮を執る。今から出す指示は一つだけ。怪我人以外は出撃。学園都市を自らの手で守りたい者は部隊間で連携を取ること。そして、第一特務を中心とした戦いにしない」

「どうしてだい？　僕達を中心にすれば」

「周ちゃんが言ってたよね？　学園都市は学生の領域だって。あた

しの言いたいことがわかる？」

「僕達は、手伝うだけ」

「そう。あたしは周ちゃんを信じる。周ちゃんの信じる学園都市の姿を信じる。だから、あたしはシェルターにいるから、みんなをお願い」

リコの言葉にアルトは頷いた。

本当ならリコは真っ先に飛び出して親友と共に戦いたいはずだ。だが、リコはそれを我慢している。学園都市という存在が学園都市内の学生達の場所であるから。

ここで大人が介入すれば学園都市は学生達の街では無くなる。今まで『ＧＦ』や学園自治政府が頑張ってきた努力が無駄になる。

だから、リコはアルトに託した。約束をしたアルトに。

「リコ、任せて。シェルターは任せたから」

「お任せあれ」

この時、大きな流れの一つが動き出した。それは、シェルター内で起きた小さな約束から始まったこと。

アルトは歩き出す。約束を守るために。

「アルト・シュヴッサー。約束を守るために出撃する！」

ベリエはナイフを構える。だが、ナイフを持つ手は震えていた。

「学園都市は、私達の街だから」

「呆れた。もう、いいかしら。さあ、死になさい」

そして、リーリエ・セルフィナが雷の槍を放つ。ベリエはそれをナイフで払おうとして吹き飛ばされた。

地面を転がりながらもベリエは握り締めたナイフを手放さない。そして、ベリエは壁にぶつかり止まった。

本当なら倒たままでいるだろう。そうじゃないのは、気合い、という以外に何もないかもしれない。目は若干虚ろになりながらもベリエは立ち上がる。

「死ねない。私は、守る、から」

「そう。なら、焼き尽くしてあげる。天雷槍！」

天雷槍を纏ったリーリエ・セルフィナが地面を駆ける。その速度にベリエはついて行くことが出来ず呆然と前を見つめ、

漆黒がベリエの視界を塞いだ。

目は開いているし色も識別出来ている。光がないというより漆黒の色をしているだけだ。それが、前を塞いでいる。塞いで、リーリエ・

セルフィナの突撃を簡単に受け止めていた。

「無事、みたいだな」

漆黒の服をした誰かが顔だけ振り返る。その顔を見たベリエは目を見開いた。

「時雨、師匠？」

漆黒のマントと漆黒の戦闘服。そして、手には紫電を纏う刃の小さめな斧。

世界最強の雷属性術者である海道時雨がそこにいた。

「久しぶりだな。リーリエ・セルフィナ」

「何故、あなたが。あなたが入ってくるのはもっと遅いはずでは」

「そうだな。オレもそう思っていた。だが、ちょっとだけ予定が変わってな。だから、オレ一人で入らせてもらった」

リーリエ・セルフィナに斧を構える時雨。リーリエ・セルフィナの額には汗が浮かんでいる。

「ミョルニル、発動」

そして、時雨は世界最強の身体強化術式を発動させた。

第二百二話　大きな流れ（後書き）

これからは今まで活躍していたベリエに代わって時雨がリーリエ・セルフィナと戦います。ついでにアルトも戦場に参加します。

第二百三話　雷光の覇者（前書き）

時雨回です。というか、今まで時雨はそれほど強く書いていませんでしたが、実際はかなり強いです。世界ランクで言うなら三桁には入ります。

第二百三話　雷光の覇者

身体強化魔術術式『ミョルニル』。

神経の伝達速度を最大限まで加速させてつつ無意識の内に体にかけられているリミッターを解除することが出来る。

簡単にいうなら、あらゆる筋肉の動きを人間が最大まで稼働出来る範囲内で伸縮自由にする術式。もちろん、その性能は桁違いだ。

ミョルニル自体は海道時雨しか使えない。唯一中級以上を使用可能な雷属性を極めた時雨しか使えないと言っていい。

雷神槍の速度は標準的な収束砲は約時速２００ｋｍ程度で、天雷槍はそれより早い時速２５０ｋｍほど。対するミョルニルは時速４００ｋｍまで計測されている。

普通なら反応出来るのがおかしな速度だ。それを悟られることなく戦う時雨の強さは世界でも五指に入る。

弱点はあるものの、その弱点をものともしない強さに憧れる人は少なくない。

その当の本人は地面を踏みしめる。そして、手に持つ斧を振り切った。だが、そこにリーリエ・セルフィナの姿はない。

リーリエ・セルフィナの姿は時雨の背後。そのままリーリエ・セルフィナはナイフを突き出して、空を切った。

リーリエ・セルフィナが前を見ると、少し離れた位置には地面を滑りながら止まっている時雨の姿がある。

斧を振り切ったまま前に走ったのだ。それによって背後からの攻撃を避けた。周ならば別の回避方法になるだろうが、これはこれで時雨らしいという回避の仕方だ。

時雨の速度はデバイスや武器の携帯がないなら最速と言ってもよく、その純粋な速さの前では天雷槍ですら霞む。

「あなたは仕事が忙しいのでは？」

「相変わらず、感情によって口調が変わるのだな」

時雨はそう言いながら自らの斧の石突部分にある蓋を開けてエネルギーバッテリーを入れる。その数三つ。入れ終わった時雨は蓋を閉じた。

「今日、明日のために仕事はかなり終わらせた。『ＧＦ』総長と言っても、孫の勇士をみたいからな。だが、予定が変わったのも事実だ」

「確かに言っていましたね。一体、何の予定が」

「天界の勢力が動き出している気配がある」

その言葉にリーリエ・セルフィナは信じられないというように首を横に振る。

人界には第一特務という存在や、単身で天界に乗り込んで制圧可能

な慧海の存在がある。なのに、天界が動くということはむしろ、魔界への侵攻準備ではないかと思ってしまう。

「ご冗談を」

「今まで戦場を見渡していたから気づいたが、学園都市の建物や地面に組まれた術式があるため、莫大な戦果を出せるであろう二人がまだ動いていない。休んでいる」

「それが何か？」

その二人に関してはリーリエ・セルフィナも気づいていた。戦闘に参加すれば派手な魔術によって一瞬で位置を把握かのな二人。

海道駿も警戒している二人だ。

「リーリエ。お前は何も聞いていないのか？　第三者の勢力について」

「私は何も聞いていないわ。むしろ、初耳。今の私の役目は白川悠聖を止めること。駿さんも危険だと判断している」

「オレに勝てるとでも？」

二人の間に火花が散る。比喩ではなく事実だ。実際に放電によってお互いの紫電がぶつかり合って火花を散らしている。

「勝つしかないわ」

そして、リーリエ・セルフィナが地面を蹴った瞬間、リーリエ・セ

ルフィナの腹部に時雨が持つ斧が食い込んでいた。時雨はそのまま近くの壁にリーリエ・セルフィナを叩きつける。

「ランス」

時雨はただそれだけを発する。それだけで、時雨の持つ斧は形を変え、槍となった。ただし、ハルバートという方が近いかもしれない。斧の刃が小さいためそういう風には見えないが。

そして、その手に持つ槍をリーリエ・セルフィナに向かって投げつけた。リーリエ・セルフィナは横に転がって避けるが転がった時点で時雨は槍を掴み取っている。

「アックス」

槍から斧に変わる。そして、その斧に紫電が纏わりついた。

「紫電一閃」

白百合流の紫電一閃とは違う。あちらは紫電のような高速の一閃だ。この紫電一閃は、紫電を纏う一閃。

まるで周が放つ破魔雷閃のごとく紫電の刃が受け止めようとリーリエ・セルフィナが構えたナイフを簡単に砕いて突き刺さり、振り抜かれる。

リーリエ・セルフィナは体力をごっそり持って行かれながらその手に取り出したナイフを投げつけようとして、その腕を取られる。

「相変わらず弱点は変わっていないな」

「くっ」

その手を払い、リーリエ・セルフィナは瞬間移動（ショートジャンプ）によって時雨と距離を取る。

「あなたに言われたくありませんわ。その反則的な加速と反応速度。雷属性の攻撃の威力」

「これでも第一特務の隊員だ。訓練はしている」

「だからこそ、私はあなたが嫌いなのよ！」

リーリエ・セルフィナが時雨に向かって飛びかかる。時雨は斧を構え、視界からリーリエ・セルフィナの姿が消えた。すかさず前に飛び出して振り抜かれた剣を避ける。着地しつつ振り返るがそこにリーリエ・セルフィナの姿はない。

時雨は微かに目を細めながらその場に前のめりに倒れ込むように動いた。そして、体を捻りながら後ろで振り抜かれた剣を避ける。そして、ちょうどそこにいたリーリエ・セルフィナに斧を叩きつけた。

リーリエ・セルフィナはまともに斧を食らって吹き飛ばされる。

「何故」

二連続転移による攻撃。時雨の攻撃速度では空間を制御する時間が足りないためそれを使ってのだが、完全な死角からの攻撃を時雨は全て避けていた。

普通ならありえない。周や悠人のような存在を除いて。

「天雷槍を使っているならわかるだろ。磁力だ。体中から放出される磁力を上手く作用させる。誰かが近づけば磁力は引き寄せられるか反発されるか。天雷槍よりミョルニルの方が速い以上、後から攻撃した方が得だからな」

完全にリーリエ・セルフィナを狙った動き。そこに時雨の思惑通りに動いたリーリエ・セルフィナを時雨は叩いただけ。

言うのは簡単だが行うのは難しい。

それに、例え時雨であっても雷属性や身体強化以外に関しては魔力量を除いて一般人クラスしかない。だから、攻撃を当てればいいと思っていたリーリエ・セルフィナは見事に策に嵌っていた。

「バカにして。あなたはいつもバカにして。上からの言葉は嫌いなのよ。それに、私はまだ奥の手は使っていない」

「奇遇だな。オレもだ」

時雨が斧を構える。リーリエ・セルフィナはナイフを取り出した。

「あなたが私より速いなら、動けないようにすればいいだけ」

その言葉と共に慧海の周囲に大量のナイフが出現した。それは逃げ場が無いくらいの大量のナイフ。

リーリエ・セルフィナは笑みを浮かべる。笑みを浮かべて指をパチンと鳴らした瞬間、全てのナイフが時雨に向かって放たれていた。

回避出来るような攻撃ではないし、回避するような距離でもない。

ナイフが加速し、時雨がいた空間を貫いた。そう、時雨が、いた、空間を。

リーリエ・セルフィナが目を見開きながら振り返る。そこには斧を振り上げた時雨の姿。そして、紫電一閃がリーリエ・セルフィナを呑み込んだ。

「上手く奥の手が使えたな。さて、ベリエ」

「はい？」

アリエの治癒を行っていたベリエが声を返す。

「シェルターに向かえ」

「わかっています、時雨師匠。私も無茶をするつもりはありませんから」

「それでいい」

すでにベリエの体はボロボロだ。これ以上戦ったならただの足手まといにしかならない。それくらいはベリエも理解している。

だから、時雨は歩き出した。

「後は任せろ」

「お願い、します」

時雨は斧を肩に担ぐ。そして、歩きながら空を見上げた。

「これからが本番だぞ、周。頑張れ」

第二百四話　ダークエルフ

対艦剣が火花を散らす。握り締めた、じゃなくて、握り締める感覚のある対艦剣がリーゼフィアを吹き飛ばした。

僕は対艦剣を握っていない方の拳を握り締める。

空を自由に飛べないということはあっても、エクスカリバーよりも地上を動くことに関してはダークエルフの方が遥かにいい。

リーゼフィアがエネルギー弾を放ってくるけどダークエルフの追加装甲であるリアクティブアーマーが受け止めてくれる。

「リアクティブアーマーは最大許容値の８％。まだまだ大丈夫」

対艦剣を握り締めてリーゼフィアに斬りかかる。リーゼフィアは素早くブースターを起動させて対艦剣を避けた。だけど、僕は素早く対艦剣を投げつける。

リーゼフィアは対艦剣で僕が投げた対艦剣を弾き、僕は前に駆けた。

対艦刀を取り出して柄を握り締め、居合い斬りのように対艦刀を振り抜いた。宙を舞う対艦剣を握り締める漆黒の腕。

ＡＥＢＡの腕が対艦刀によって斬り飛ばされるのはありえない。だけど、現実にはそうなっている。

ＡＥＢＡは斬撃に対して強いがＡＥＷＣと違って絶対の抵抗性を持っているわけじゃない。対艦刀に最大限まで許容量一杯にエネルギ

ーを込めた場合、ＡＥＢＡを斬り裂くことが出来る。ただ、許容量一杯なんて普通は出来ない。

だから、僕の握る対艦刀はリアクティブアーマーのエネルギーを利用していた。リアクティブアーマーに繋がった線。これをバイパスとして対艦刀にエネルギーを許容量一杯まで溜め込んだのだ。

振り抜いた対艦刀が火花を散らす。たった一回限りの攻撃だが、リーゼフィアを牽制するには十分な攻撃だった。

リーゼフィアが距離を取る。僕は対艦刀を投げ捨てて対艦剣を掴んだ。

「もう諦めろ！　あなた達の負けだ！」

『何を言う！？　未だにリーゼアインもリーゼツヴァイも動ける』

だが、リーゼアインもリーゼツヴァイも動く気配がない。例え動けたとしてもリアクティブアーマーの前には通常の攻撃は効かない。

僕は前に踏み出した。そして、対艦剣を握り締め、リーゼフィアに向けて振り上げようとした瞬間、嫌な予感が体に駆け巡った。

すぐさま動作を中断してその場から跳び退く。そして、リーゼフィアがいた場所にエネルギー弾が突き刺さった。

ただのエネルギー弾じゃない。突き刺さったエネルギー弾が炸裂する。

『ちぇ、外れたか。まっ、いっか。隼人さん、無事ですか？』

その言葉と共に新たな純白のコートを着た機体が現れる。その背中には漆黒の翼に見立てたブースター。それが二機。

それに、この声は聞き覚えがある。

「この声、周さんのクラスメートの」

『おうよ』

頷きの声。新たに現れた機体をどう言えばいいかわらない。今まではリーゼアイン、リーゼツヴァイ、リーゼフィアだったが、新しい機体は今までとは少し違う。

『まあ、お前には恨みもないけどよ、ちょっとばかし静かにしていてくれ。俺達は戦うことに喜びを見いだしているわけじゃないからな』

「そんなことに応じるとでも？」

『困ったな。そんな時代遅れの機体でこの新リーゼアインに勝とうなんて考えるなんて』

『一応、あのダークエルフは第三世代がベースだけど性能は普通に現役だからね。中身もカリカリにいじっているけどね』

『そんなことを言うなって』

どうやら新しく現れた二機はリーゼアインとリーゼツヴァイ。そこに倒れているのも同じ名前だけど、新しく来たのが最新機というわ

けか。それに、この二人は僕の動きをＦＢＳで見ているはずだ。隠しギミックの一部も含めて。

こちらの手は一部わかっているだろうけど、相手の手は全く分からない。はっきり言って少し困る事態だ。

『とりあえず、戦おうぜ。フュリアス同士の真剣勝負。お前の機体がエクスカリバーじゃないのが残念だけど、俺達は本気で戦いたかったんだよ。実戦をな』

「迷惑なんだけどな。わかった」

僕は対艦剣を身構える。そして、リーゼフィアを守るリーゼアインとリーゼツヴァイを睨みつける。数の差はこちらが不利。本当ならルーイくらいは援軍として欲しいけど、今の状況じゃ難しいだろう。だから、一人で戦わないといけない。

せめて、鈴かリリーナがいてくれれば。

「行くよ」

僕は地面を蹴る。リーゼアインは対艦剣を、リーゼツヴァイはエネルギーライフルを構えた。基本的な分け方だ。でも、ダークエルフのリアクティブアーマーならどんな攻撃も無意味。

地面をかける。そのまま対艦剣を投げつけた。リーゼアインはその対艦剣を撃ち払い、リーゼツヴァイがエネルギー弾を放って来る。エネルギー弾はリアクティブアーマーで受け止め、すかさず対艦刀を取り出し振り切った。

対艦刀は対艦剣によって受け止められる。だけど、その瞬間に足についているスラスターを利用してリーゼアインの腹部を蹴りつけた。だが、その蹴りはリーゼツヴァイの腕によって受け止められる。

ブースターを噴射しつつ体を捻りスラスターと出力を全開にして僕はリーゼツヴァイの頭部を蹴りつけた。その瞬間には対艦剣が迫っているけど、落ちてきた対艦剣を掴み、寸前で受け止める。

二体の動きが止まった瞬間、僕は二体を蹴り飛ばして大きく距離を取った。

傍から見ていたら確実におかしな動きをしているだろうなとは思う。リアクティブアーマーを使ったエネルギーによるスラスターはメインブースターに匹敵する出力を出せるためこんなおかしな三次元攻撃が可能なのだ。本来なら抜刀斬りまで持っていきたいものだけど、そこはリアクティブアーマーの弱点によって使用できない。

対艦刀を戻し、対艦剣を構える。

『なんつう機動だよ。あんな動きを出来るのは本当にフュリアスか？』

『最大出力はこっちの方が上のはずなんだけどね。やっぱりあのリアクティブアーマーかな？　健さんはどう思う？』

『どう考えてもそうだろ。真人も同じ意見のくせに』

「通信内容が漏れてるけど？」

ここまで話を漏らしていいのかと不思議に思ってしまう。普通は通

信は一種の暗号をかけて共通通信を除いて専用の通信機にしか届かないようにしている。もちろん、その分数も膨大になるけど戦力上は必要だ。なのに、普通に通信がダダ漏れだ。

『うおっ、共通通信で話しかけちゃってるぜ』

『気づいてなかったの！？』

「普通は気づくよね！？」

思わずリーゼツヴァイのパイロットと一緒に怒鳴ってしまう。僕は小さく息を吐いて対艦剣を構え直した。

「とりあえず、無力化させてもらうよ。二人の実力は大体わかったから」

『ふざけたこと抜かしてんじゃねえぞ！　俺達はまだ実力の半分も出していないんだからな』

『それ、負けフラグだよね』

地面を踏みしめ地面を駆ける。ダークエルフの地上の反応はエクスカリバーを遥かに超える。だからこそ、学園都市を守るためにはこのダークエルフが一番合っている。

対艦剣を握り締めて地面を踏み出し、嫌な予感が体全体を覆い尽くした。すかさず飛び退きながらリアクティブアーマーの出力を最大限まで上げる。ほんの少しだけ棺桶状態になるけどこの感覚が正しいならこれが一番だろう。

そして、轟音と衝撃、そして、爆発がダークエルフを包み込んだ。

リアクティブアーマーの許容値の限界ギリギリ近くまで数値が跳ね上がる。だが、リアクティブアーマーの最大状態は何とか耐えきってくれた。

衝撃が収まり、視界が開く。攻撃が飛んできた方角を見たそこには肩に二つの砲塔、腰にも砲塔がつき、そして、背中にはイグジストアストラルを彷彿とさせるような翼が広がっていた。そんな姿をするフュリアスはトリコロールの装甲をしている。

僕は新たに現れたフュリアスを睨みつける。

『虫が湧いているな』

そして、響いたのは老人の声。

『天上の神の降臨だ。跪くがいい』

「天上の神？　神を名乗ってお前は何様のつもりだ!?」

対艦剣をトリコロールのフュリアスに向ける。フュリアスはこちらを一瞥して腰の砲の先を腕で支えながらこちらに向けた。

『地上を這いつくばる虫けらは、黙って言うことを聞いているがいい』

意味がわからない。あのフュリアスは、いったい何？

第二百四話　ダークエルフ（後書き）

最後に出てきたトリコロール（ガンダムみたいな配色）の機体ですが、一度名前を出しています。
一応、ここからは戦いは佳境。海道駿を追う周に動きだしたアルト達。さらには謎の勢力まで。戦いは次第に範囲を増して規模も増えて行きます。

ところで、いつになったら地下に潜れるのだろうか。

第二百五話　介入者

「っつ！」

「はうっ」

思わず足を止めてしまう。ちょうどオレの背後を走っていた夢がオレにぶつかる。だけど、オレは夢を気にすることなく空を見上げていた。

「兄さん？」

「お兄ちゃん？」

由姫と茜の心配する声。でも、今のオレにはその声はほとんど聞こえていない。

「開く」

オレは自分の感覚を感じながら拳を握り締める。

魔力粒子の流れがおかしいのだ。今まで漂っていた魔力粒子が一点に集まっている。その動きはゲートが開く時に酷似していた。

「楓、中村、音姉、頼むぞ」

作戦通りに上手く行って欲しい。でも、相手の動きが少し予想外な部分がある。今のオレはみんなが上手く戦って生き残ってくれることを祈るだけ。

だから、オレは走り出す。自分のやるべきことをするために。

「っつ！」

思わず足を止めてしまう。隣を走っていた冬華とフェンリルも同じように足を止めた。

「悠聖？」

「悪い。何か、嫌な感じがするんだ」

「嫌な感じ？」

冬華が不思議そうに首を傾げた。冬華にはわからないのだろう。だけど、オレの感覚にはしっかりと嫌な感じが残っている。

嫌な感じというより空気が嫌な臭いになっていると言うべきか。きな臭い雰囲気というのが正しいかもしれない。

周が一番警戒している現在戦っている勢力以外の介入かもしれない。

「フェンリルはどう？」

フェンリルは首を横に振る。気づいているのはオレだけか。

「悠聖だけじゃないよ。私も、嫌な予感がするから」

隣にいる優月が空を見上げながら言う。というか、いつの間に優月が隣に現れた？　まあ、気にしていたら終わらないか。

オレは小さく溜め息をついて手に持つセイバー・ルカの剣を握り締めた。

「急ごう。早く戦いを終わらせないと大変なことになる気がするんだ」

「それには同感よ。それにしても」

冬華が後ろを振り向く。振り向いた方角はベリエがリーリエ・セルフィナと戦っている方角。

何だかんだ言って冬華は心配なのだ。ベリエのことが。

オレは軽く苦笑して冬華の頭を撫でた。

「今はオレ達に出来ることをしよう。みんな頑張っているんだからさ」

「そうね。向かいましょう。学園都市の中央に」

アーク・レーベが動きを止める。孝治は運命を構えたまま静かにア

ーク・レーベの動向を見つめて。そして、アーク・レーベが軽く肩をすくめる。

「時間か」

「時間？」

孝治の疑問にアーク・レーベは頷く。

「仕上げの時間だ。本当なら決着を着けたいところだが、私にもやるべきことがあってな」

その言葉を聞いた孝治の胸中に嫌な予感が渦巻く。

今回の作戦に置ける光の役目を聞いていたからだ。聞いていなかったらこの嫌な予感は無かったかもしれない。

「貴様ら、軍を差し向けたか」

「正解だ。この学園都市を制圧すれば、我々は大きなアドバンテージを得る。もちろん、殺しはしないさ。『ＧＦ』の評議会の一人、エクシダ・フバル。『ＧＦ』総長の孫、海道周に『赤のクリスマス』どニューヨークを消し去った張本人である海道駿。さらには魔王の娘までいる」

「大虐殺を起こさないだけマシだとでも言いたげだな」

「感謝して欲しいな。私が天神や他の五星神を相手に全力で反対したからこうなっている。私達は天空の民。地上の民は守るべき存在だ」

孝治はほんの少しだけ安心したように息を吐く。

なりふり構わず来られたなら孝治達には為す術が無かっただろう。それこそ、全てのシェルターを守らないといけない。だが、アーク・レーベは人質と言った。それだけで戦いは楽になる。

「なら、大丈夫だ。今の俺はここでお前を止めるだけ」

「光明結界（アーク・レーベ）を抜けるとでも？　それこそが浅はかな考えというものだな」

確かに孝治の攻撃では光明結界（アーク・レーベ）を抜くことは出来ない。孝治は構えていた運命を下ろした。

「正しい考えだ」

「どうかな？」

孝治は笑みを浮かべ、そして、身を翻した。同じタイミングでアーク・レーベも身を翻す。

二人は向かう。お互いのやるべきことをするために。

「リース！　無事か！？」

「大丈夫」

浩平の怒鳴り声に平然としたリースの声が返ってくる。それに浩平は安心しながら振り抜かれた剣をギリギリで避けてゼロ距離でフレ

ヴァングをぶっ放した。

フレヴァングが直撃したローブの男が吹き飛ぶと同時に両手から光の刃を作り出したリースが一気に駆け抜けて周囲の敵を薙ぎ倒した。

「浩平は？」

「俺が無敵なことはわかりきったことだろ？　にしても、戦場がだいぶ移っているみたいだな」

戦いはだんだん学園都市中央に向かっているそのことは戦いが起きている地域を視界の隅に置いていたからこそわかること。

浩平の言葉にリースは頷いた。

「最終目的地は学園都市中央」

「だよな。だけどさ、一部だけ別の場所に向かっていないか？」

浩平の言葉にリースは周囲を見渡す。周囲を見渡して、そして、頷いた。

「私もそう思う」

「今気づいたのかよ。何というか、一部の航空戦力が二ヶ所に集まっているんだよな。一体どういうことだ？」

「ともかく、今は私達も向かわないと」

リースがそう言い、浩平の手を掴んで歩き出した瞬間、エネルギー

の塊が二人の前を通り過ぎた。いや、エネルギーの塊が振り下ろされたのだ。

浩平とリースの二人は顔を見合わせて飛び上がる。二人が向くのは攻撃が来た方角。そこには、両肩に砲塔と、両腰にエネルギーの刃を作り出す砲塔を握ったトリコロールのフュリアス。

それを見たリースは目を見開いていた。

「ストライクバースト」

「ストライクバースト？　何だそりゃ？」

浩平はリースに尋ねる。リースは信じられないようにストライクバーストと言ったフュリアスを見つめていた。

「イグジストアストラル、マテリアルライザーと同時期に作られたフュリアス。遠近両方に戦える高火力のオールラウンダー。どうして、ここに」

『誰かいると思えば煩い蠅か』

急に聞こえてきた声に浩平とリースの二人は身構えた。

『天上の神の前で飛び交うではない！』

そして、ストライクバーストの砲門が二人を狙う。

「させるか！」

僕はすかさずナイフを取り出してトリコロールのフュリアスに向かって投げつけた。ナイフは砲塔に当たり、フュリアスの体勢を崩すと同時に肩の砲門から巨大なエネルギー弾が放たれる。

何とか浩平とリースは守れた。でも、相手のフュリアスはありえないくらい硬い。まるで、イグジストアストラルと戦っているようだ。

天上の神ということは天界の機体だと思うけど、まさかここまでとは。

「エネルギー弾全般は効かないし、対艦剣も無理」

僕は近くに転がっている折れた対艦剣を見る。トリコロールのフュリアスに斬りかかったが対艦剣が折れたのだ。まるで、ＡＥＷＣとＡＥＢＡを同時に合わせたようなイグジストアストラルみたいな装甲。

「イグジストアストラルと同時期に作られた機体？」

肩の砲が放たれるけど、僕はステップで簡単に回避する。斬りかかってきたリーゼアインの対艦剣を対艦剣で受け止めて弾き飛ばし、飛んできたエネルギー弾を撃ち落とす。

キツいというより辛いというべきか。せめて、あのトリコロールのフュリアスさえ倒すことが出来たなら。

『まだ抗うか。それもまたいいだろう。我が力の前にひれ伏すがいい！』

全部で四つの砲門が光を放った瞬間、僕はエネルギーシールドを取り出していた。そして、エネルギーシールドをトリコロールのフュリアスに向かって投げつける。

放たれたエネルギー弾がエネルギーシールドに当たり、エネルギーシールドが爆発する。その瞬間、僕は前に駆け出していた。

煙に隠れるようにトリコロールのフュリアスまで一気に近づき武装を取り出す。

防御力の高い相手に使うための武器。フュリアス専用杭撃ち機。別名、シールドブレイカー。

出力を最大、ブースターを最大限まで解放してトリコロールのフュリアスに肉薄する。飛んでくる攻撃は全てリアクティブアーマーが受け止めてくれる。

僕はシールドブレイカーをトリコロールのフュリアスに当てた。そして、杭を放つ。

最大限まで加速された杭はトリコロールのフュリアスの体をくの字に折り曲げる。

「これで」

どうだ、と言おうとした。だが、嫌な予感が駆け抜ける。トリコロールのフュリアスはまだ動けると感覚が警鐘を鳴らしている。

僕はとっさに逆ブーストをかけた。それと同時にトリコロールのフュリアスからエネルギーの刃が放たれる。エネルギーの刃は肩のリアクティブアーマーにぶつかり、リアクティブアーマーを砕いて虚空に散った。

その部分のリアクティブアーマーをパージする。

『虫けらごときが天上の神たる我に刃向かうか。いいだろう。時は満ちた』

その瞬間、学園都市の上空の二点から巨大な円形の門が出来上がる。ゲートだ。ゲートが出来上がっている。

『さあ、地上の民の求めに応じ、我ら天上の神と天空の民は助けに来た。我は悪を貫く剣なり』

「天王マクシミリアン」

その宣言を聞いて僕はようやく相手の正体がわかった。

天界の王であるマクシミリアンだ。まさか、フュリアスに乗ってくるなんて。

「お前は何がしたい！？　天界の軍を呼べば全面戦争に」

『正義は我らにある。悪を討つのが天界の使命』

「させない」

リーゼアインとリーゼツヴァイの位置を気にしながら対艦剣を取り出して構える。

「あなたは僕が止めてみせる！！」

第二百六話　天界との戦い（前書き）

久しぶりにあのキャラが

第二百六話　天界との戦い

「ようやくやな」

ゲートが開くのを確認して光は笑みを浮かべながら頷く。ゲートの大きさは光が知る中で最大。

まさか、相手が自由にゲートを開けるとは光は思っていなかったが、ここまでなると事実なのだろう。

光は小さく息を吐いてレーヴァテインを握り締める。

レヴァンティンと同じエネルギーを利用するレーヴァテイン。それが作られた時は光も詳しくは知らない。ただ、レヴァンティンと違うのとコピーしたレーヴァテインが爆発する特性があること。

この二つくらい。光が知っているレーヴァテインの姿はそれくらい。

「やっぱ、周の言う通りやな。ゲートが開く位置は周の言う通り。しかも、この位置は攻撃範囲」

扉がゆっくり開く。それに応じるように光は小さく息を吸い、そして、魔術陣を展開する。

「大きな花火、行くで！」

そして、ゲートに向かって大量の同じレーヴァテインが展開される。ゲートから現れるのは翼を持つ軍勢。それが大量に向かってレーヴァテインのコピーが放たれる。

「本気の本気。ゲートからこっち側に何人たりともいかせへん！！」

「始まったか」

先に開いた学園都市の東側に出来たゲート。そこから現れた天界の軍勢に対して大量のレーヴァテインが放たれるのがこの場から見える。西側のゲートは未だに準備は出来ていないのか軍勢は出ていない。

「周様、もしかして、最初からわかっていました？」

隣で距離を固定して浮かんでいる都が空を見上げながら尋ねてくる。オレは小さく頷いた。

「可能性としてはあったからな。天界だとはわからなかったけど。天界である可能性を思いついたのはほんの少し前だけど」

天界じゃなくどこかの傭兵部隊だと思っていた。だから、遠距離から射撃によって撃破可能か、絶対に負けることのない面々を配置していた。

本当に、そのメンバーで良かった。

「さすがだよね。私なんて全然ついていけてないし」

「メグさんだけじゃありません。私もです」

「まあ、中村も楓も火力がありすぎて街中では使えないからな」

ちなみにこれは事実だ。基本的に小さな部隊の迎撃には使えるが、乱戦となればかなり辛い。

二人の一番の得意分野は大軍に対する先制攻撃。もちろん、中村はまだ近接が出来ないわけじゃないので使えるが、楓は威力が高すぎる。

「ともかく、今は中央にさっさと向かおう。早く地下に潜らないと、親父はどこまで進んでいるかわからないから」

「大丈夫、だと、思う。一度、データとして、見たことがあるけど」

「そうなのか？」

オレはその言葉に振り向いてしまった。それにより、都が距離を固定していた場所が動き、都も動く。

結果、都が由姫に正面衝突して吹き飛ばされる。

由姫は受け身を取って怪我は無かったが、周囲にいるみんなの視線が痛い。

「あー、悪かった」

「悪いで済んだら警察はいりませんからね。それより、夢さん、どういうことですか？」

「えっとね、今から、レヴァンティンに送信、するね」

夢がデバイスを取り出して配線を繋いでくる。すぐさまオレは送られてきたそれを立体映像として呼び出す。

『なるほどなるほど。マスター、ほんの少しだけ待ってください』

一瞬だけ立体映像が消えたかと思うと今度は立体映像がさらに高度になって現れた。さっきまで平面図のようなものが立体模型になっている。

相変わらずレヴァンティンはハイスペックだ。

「隔壁は常に閉じていると見ていいな」

「兄さん、ここ、パズルですね」

「侵入者を防ぐというより諦めさせるための装置かな？」

「メグの意見、に、賛成」

「そうともとれますね」

「さすがのお父さんも難しいんじゃないかな？」

オレなら絶対嫌になって帰りたくなるだろうな。だけど、どうしてこんなデータを夢が持っているのだろうか。

そう思った瞬間、オレの頭の中に一誠の姿が浮かんだ。

多分、ついさっき夢に送られたのだろうな。

「助かる。みんな、急ぐぞ。ここまでわかったなら対処のしようはある。だから、必ず守りきるぞ」

オレ達は走り出す。それと同時に西側のゲートが開き出すのがわかった。それを見ながらオレは小さく呟く。

「頼んだぞ、楓」

「ようやく、かな」

屋根の上に座り込んでいた楓がゆっくり腰を上げる。そして、服についた埃を払った。

その手にあるカグラを握り締め、開き出したゲートに向かってカグラの先を向ける。

「ブラッククレクイエム、準備をお願い」

楓の言葉と共にブラッククレクイエムが現れ、楓の隣を浮遊する。

今回の楓の仕事は一つだけ。新しく現れた敵を学園都市内で暴れさすなということだった。

楓自身、自分の火力の高さはわかっている。

「エレノアも頑張っているし、私も頑張らないとね」

狙いをつける。カグラの先をゲートの中心に向ける。それと同時にゲートから何かの姿が現れる。大きさは、巨大。

「竜種？　でも」

楓が魔術陣を展開する。おそらく、周がこの場にいたなら確実に言葉を失っているだろう。

カグラの穂先にある魔術陣。それは収束系の魔術陣だが、楓の背後にもいくつもの魔術陣が出来上がっていた。

その数八つ。その全てが膨大な魔力を収束している。狙いはただ一つ。ゲートから現れる巨大な竜のような存在。

竜ではなく蛇なのだが、楓はそれ以上気にすることなくカグラを握り締める。

「穿て」

そして、収束砲が一斉に放たれる。放たれた収束砲はゲートから現れた蛇を貫き消し去った。だが、ゲートからはまだまだ様々な天界版魔物、略して天魔が現れている。そのどれもが大きく、楓にとっては獲物だった。

楓の収束砲は光と違って面よりも点の火力が高い。そのため、相手が大きければ大きいほど大きな威力を出すことが出来る。

だから、楓は笑みを浮かべてゲートを睨みつけた。

「これ以上一歩も、学園都市には入れさせないから」

剣閃が閃く。その閃きは周囲にいた天魔を一瞬にして斬り裂いた。
天魔は基本的に翼を持つ存在だ。妖精族もいればペガサスやユニコーンのような存在もいる。まあ、ユニコーンのように翼を持たない種はいるが、神聖性の高い存在は天魔に属されやすい。
そんな存在が一本の刀の閃きによって周囲に血の雨を降らしている。
その人物は刀を鞘に収めた。

「ふぅ、弟くんの言うことは正しかったな」

光輝ではなく本物の真剣を用いる音姫は静かに腰を落とす。
目の前にあるのはゲート。そう、ここにもゲートが繋がっていたのだ。白百合音姫という第７６移動隊が切れる最大のカードをゲートから現れる天魔を倒すために音姫をはここにいる。
本当は、周は別の存在が来ると思ったのだが、来たのは天魔だった。
音姫は天魔や魔物には容赦はしない。もちろん、言葉が通じる相手なら容赦はするが、言葉が通じない場合は慈悲もなく殺す。

それが世界では常識だ。もちろん、天界や魔界でも通じている。

「天界の侵攻。天界は世界大戦でも起こすつもりかな？」

現れたペガサスを一閃で斬り捨てて、続いて現れたキマイラを翻した刃で両断する。軽く後ろに下がりながら真剣を一閃させ妖精族の首を飛ばした。

そして、血に塗れた真剣を放り捨てて光輝を鞘から引き抜く。

「あなた達は何がしたいの？」

音姫の質問に新たに現れた天使のような純白の翼を持つ男は槍を構えて突っ込んできた。

音姫は小さく溜め息をつくと槍を払い、斬り捨てる。飛び散るのは赤い血。

やはり、人と同じ赤い血。

「本当は戦いたくないんだけどな」

音姫が光輝を構える。ゲートから新たな敵が出て来る気配はない。どうやらあまりの音姫の強さに誰もが前に出ることを拒否しているのだろう。

問答無用で斬りかかって来る相手を見ていればわかる。天界は本気で学園都市を制圧するつもりだと。制圧されたならどうなるかは音姫にだって想像がつく。

音姫は小さく息を吸って光輝を構える。

「これ以上来るならちょっとだけ本気を出すよ。うん、ちょっとだけ」

その言葉と共に光輝の刃が光を受けて輝いた。

第二百七話　暴走

最大限までブーストを吹かしたアストラルブレイズの体が背中を向けて地面を滑るように移動する。それと共に空から砲撃が放たれた。

ルナは絶妙なコントロールで全てを回避しながら体勢を立て直す。

音界ではまず戦うことのないフュリアス対人との戦いをルナは全力で戦っている。ちなみに、すでにアストラルブレイズのアルティメイト装備は剥がれ落ち、通常の装甲で戦っている。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ。尋常なく辛いわね。アルティメイト装備が剥がれたのが痛いか」

その言葉と共にアストラルブレイズは弾かれたようにその場から飛び退いた。ちょうど、アストラルブレイズがいた場所に砲撃魔術が突き刺さる。

ルナはアストラルブレイズを振り向かせ、手に持つエネルギーライフルの先を空中に浮遊して杖を構える二人に向けた瞬間、二人をエネルギー弾が直撃して吹き飛ばした。

『ルナ！　あなたはアルティメイト装備ではないのですから無理しないように！』

通信機から流れる言葉にルナは首をすくめた。アストラルブレイズの前にはアルティメイト装備のアストラルソティスの姿があった。

「やっぱり実戦って難しいよね」

『何を今更。それにルナ。あなたはどこに向かうつもりですか？』

その言葉と共にアストラルソティスが動き、エネルギーライフルからエネルギー弾を放った。

建物の影から現れた人物をエネルギー弾が吹き飛ばす。

「ほら、ルーイや鈴が制圧したから私は悠人の下に」

『戦いはまだ続いています。ゲートが開き、天界の軍勢まで来ています。それでもですか？』

「うっ」

ルナは言葉に詰まってしまう。実際にそうなのだ。ルーイを中心とした第７６移動隊フュリアス部隊は目的地の制圧に成功。今はイグジストアストラルの大火力と合流した亜紗の力で防衛に回っている。

その中で対魔術装甲でもあるアルティメイト装備を失ったアストラルブレイズは遊撃をするためにアストラルソティスと動いていた。

「でも、悠人はリーゼアインとリーゼツヴァイと戦っている。一人だと絶対に辛いから、だから」

『だったら、一言伝えてから行きなさい。私からみんなに伝えておきますから』

「お姉ちゃん」

『ただし、必ず戻ってくること。約束出来ないなら行かせませんよ』

「大丈夫」

ルナは笑みを浮かべてアストラルブレイズの拳を胸の前で握り締めた。

「私は魔界で一番戦場を経験しているパイロットよ。それくらいいつものことだから」

アストラルブレイズが背中のブースターを開く。そして、悠人がいる方角に向かってルナは出力を上げた。

メイン、サブ問わず全速力で悠人のいる方角に飛び、そして、見つける。

建物に散っている巨大なエネルギー弾とそれを回避するダークエルフ。そして、純白のコートを着た黒いフュリアスが二機に、伝説のトリコロールのフュリアス。

「肩に砲門二つ。腰に砲門二つ。バックブースターは翼。これって、悠人！」

『ルナ！』

ルナのモニターに必死の形相をした悠人の顔が映る。その間にもダークエルフは必死に攻撃を避けている。

「あの機体はストライクバースト！　イグジストアストラルとマテリアルライザーと同時期に造られた機体！　だから、逃げて！」

『だから、逃げて！』

ルナの言葉と共にトリコロールのフュリアス、ストライクバーストの攻撃がリアクティブアーマーの一つを吹き飛ばす。

どうりでこちらの攻撃が効かないわけだよね。

「ストライクバーストの弱点は！？」

『イグジストアストラルがマテリアルライザーじゃないと太刀打ち出来ない！　だから』

「でも」

ストライクバーストのエネルギー弾をかいくぐりシールドブレイカーを取り出す。だけど、シールドブレイカーはリーゼアインとリーゼツヴァイの射撃によって簡単に破壊された。

シールドブレイカーを手放しながらストライクバーストの攻撃をギリギリで避けていく。

「負けるわけにはいかないんだ！」

ストライクバーストに攻撃しようにもリーゼアインとリーゼツヴァイの二機がかなり強い。並みの機体な振り向き撃ちでどうにかなる

が、あの二人は普通の操作では勝てない。
せめて、ストライクバーストさえいなければ。または、もう一機いれば。

『ああ、もう！　だったら！』

その瞬間、視界の隅に誰かが入ってきたと思ったらリーゼアインの体にアストラルブレイズのドロップキックが食い込み吹き飛ばしていた。そして、すぐさま対艦剣を取り出してリーゼツヴァイに攻撃を仕掛ける。

リーゼツヴァイも対艦剣を取り出してアストラルブレイズの対艦剣を受け止めた。

『あわっ、急に何？』

『悠人はストライクバーストと戦って！　雑魚は私が片付ける』

『いってえな。仕返しだ！』

リーゼアインがアストラルブレイズに向かってあろうことかドロップキックを放っていた。普通はそんなことをしないのだがリーゼアインはした。

多分、悠人なら一瞬固まっただろうがアストラルブレイズの動きは迅速だった。

リーゼアインのドロップキックを掴み、そのままリーゼツヴァイに叩きつけて吹き飛ばす。そして、二人に向かってエネルギー弾を放

った。

エネルギー弾はリーゼアインのＡＥＷＣから除かせたＡＥＢＡの右足を貫いて吹き飛ばす。

『健さん！　よくも！』

リーゼツヴァイがすぐさま起き上がり対艦剣を掴んで斬りかかる。アストラルブレイズはそれを対艦剣で受け止めた。

『新たな虫が湧いたか』

僕はバスターライフルをストライクバーストに向ける。ストライクバーストから聞こえるマクシミリアンの声はどこか楽しそうだった。確かに、フュリアスパイロットとして言うならルナの戦い方は最も実戦型だ。ＦＢＳだと力を発揮しきれないけど、何でもありの実戦なら本当に何でもする。

あらゆる状況下でとっさにあらゆる戦いが可能なのはルナくらいだろう。

「そんな機体を持っていながらあなたはどうして戦う！？　戦うことにしか何かを見いだすことが出来ないのか！？」

だから、僕は尋ねた。イグジストアストラルやマテリアルライザーと同時期の機体ということはそれだけで滅びに対する強力な力だと思う。だけど、マクシミリアンにその気はない。

『そうか。ならば、過去、いや、未来の話をしてやろう。近く将来、

我ら天上の地を含む全ての大地が滅びる。その時の最後の戦いは我ら天空の民が戦った戦いだ。もちろん、負けた。我は考えたのだ。どうすれば世界を救えるか、と』

「それがどこに繋がる!?　人界を侵略する理由には」

『知れたことよ。我ら天空の民は地上の民の求めに応じて動いた。そして、地上の地の支配を得ることを条件に』

「えっ？」

それって、つまり、

『世界は気高き天空の民、ひいてはこの天上の神たる我、マクシミリアンの名の下に戦うのだ。そして、世界を救った暁には恒久平和の実現を許そう』

「その間にたくさんの戦いが起きたとしても？」

『我らが正義だ』

その言葉で僕は理解する。マクシミリアンとは相容れないということを。

「わかったよ」

『ほう、わかって』

「わかったから、黙れ」

その言葉にマクシミリアンは口を閉じた。僕はシールドブレイカーを取り出して身構える。

「お前を殺す。ここで、必ず」

目の前にいるリーゼツヴァイが崩れ落ちる。ルナは小さく溜め息をついてアストラルブレイズの持つ対艦剣を戻した。

「悠人は」

ルナが振り返る。そこにはストライクバーストを押すダークエルフの姿があった。シールドブレイカーを使ってひたすらストライクバーストに強力な打撃を与えている。

イグジストアストラルに存在する衝撃までダメージを受けるわけがないということを使っているのだろう。装甲はイグジストアストラルほど強くはない。だが、シールドブレイカーですらダメージは与えられていない。

「リーゼアインとリーゼツヴァイは倒したし、後は」

その時、何かが視界の隅に映った。そこに見えるのは砲門。フュリアス専用のスナイパーライフル。

しかも、スナイパーライフル内でエネルギーを溜めるため一発ごとに砲身を交換しなければならないタイプだ。リアクティブアーマー

くらい吹き飛ばす。

だから、ルナは走っていた。悠人の下に向かって。

勝てる。

だんだん動きが鈍くなっているストライクバーストの動きを見ながら僕は確信した。

シールドブレイカーはすでに三つ目。五つ用意していたから全然大丈夫だ。対するストライクバーストはいつの間にか地上に落ちている。

肩から放たれるエネルギー弾を回避して僕はシールドブレイカーをストライクバーストに叩きつけた。

ストライクバーストの体が浮き上がり、吹き飛ばす。

『これが、地上、いや、世界最強のパイロット。ストライクバーストにここまで』

マクシミリアンがどこか悔しさを滲ませて呟く。例え相手がストライクバーストでも僕は負ける気はしない。

マテリアルライザーぐらいじゃないかな？　あれはフュリアスの動きじゃないし。

「僕は負けない。僕は、僕達はみんなと一緒に世界を救うんだ！
一番にはならない！　みんなと、人界、音界、魔界、天界のみんなと一緒に」

シールドブレイカーを構える。後一撃でストライクバーストは倒せる。だから、僕は無視した。感じ始めた嫌な予感を。

「これで終わりだ！！」

『我は天上の神マクシミリアン！　ただでは、負けん！』

ストライクバーストも腰の砲門からエネルギーの刃を作り出し振り下ろす。エネルギーの刃は左腕のリアクティブアーマーを削ぎ落とし、シールドブレイカーがストライクバーストの胸に当てられる。

僕がシールドブレイカーの引き金を引こうとした瞬間、突き飛ばされた。誰に？　アストラルブレイズに。

その時、アストラルブレイズが僕を見ていた。すぐに通信を開こうとして、

アストラルブレイズの腹部が消え去った。

アストラルブレイズの上半身と下半身が分かれ、行き場を無くしたエネルギーが魔力粒子に変わって消え去っていく。

コクピット部分は跡形もなく消え去っていた。

「ああっ」

攻撃が飛んできた方向を向く。そこにいるのはスナイパーライフルを構えるリーゼフィアの姿。

「ああっ」

心がどす黒い何かに覆われていく。もう、自分を止められない。

「うあああぁぁぁぁぁぁあああっ！！」

そして、僕の意識は闇に呑まれた。

「っつ！」

「はぅ」

オレが急に立ち止まったことで夢がって、またやっちゃった。そんなことは後回しにして今は違うことだ。

「どうかしましたか？」

都が不思議そうに首を傾げている。首を傾げているのは一人だけ。都を除いて全員がオレの向いた方角を見ていた。都もそちらを振り向き絶句する。

何故なら、そこには巨大な魔力の翼が出来上がっていたからだ。本

当に巨大な魔力の翼が。

「一体、何が起きているんですか？」

都の疑問にオレは答えることができなかった。

第二百七話　暴走（後書き）

ルナというキャラは第一章で死ぬ予定だったのですが途中から出すことを忘れていたのでこういうことに。とあるラノベのあとがきを読んで一度は考えたのですがこのようなストーリーとなりました。ルナを失った悠人に起きた異変。それは第一章から描写を隠していた悠人の力に関係しています。

第二百八話　到着

魔力が渦巻いている。ゲートを造るために動いていた魔力粒子の流れが今までとは違う動きをしている。それをオレは感じていた。

全ての魔力粒子が翼に流れ込んでいるのだ。つまり、あの翼はオレのレアスキルと同等のもの。

一体誰が。

その時、レヴァンティンが震えた。オレはとっさにレヴァンティンを耳に近づける。

『周、聞こえるか？』

聞こえてきたのは浩平の声だ。

「浩平か？　お前、今、どこにいる？」

『そんなことより、お前の場所から光の翼は見えているよな？』

「当たり前だ。何があった？」

『信じられない話だが、ダークエルフから光の翼が出ている』

「ダークエルフから？」

オレは眉をひそめた。

ダークエルフの基本設計はアルが行ったけど、システム関連は新しく一緒に開発した。精神感応を従来よりも高めてマテリアルライザー並みにしたのだ。

だから、『天空の羽衣』すら再現するマテリアルライザー並みということはあの翼もダークエルフが出したとは納得出来る。

ただ、中に乗っている悠人が心配だ。

「悠人は？」

『暴走してる。敵味方見境なく攻撃だ。一応、リースが引きつけているから何とかなっているが、こっちは敵の救助に忙しいんだよ』

ということはリーゼアインとリーゼツヴァイの救助か。だが、ダークエルフのリアクティブアーマーは魔術ですら砕けない。

対抗出来るのはイグジストアストラルくらいか。

「わかった。一度通信を切るぞ」

オレは小さく息を吐いてレヴァンティンを下ろした。近くにいる全員がオレを見ている。

今の位置から考えて目的地はすぐそこだろう。

「全員、速度を上げて中央に乗り込むぞ。事情は走りながら説明する」

その言葉と共にオレ達は走り出した。何も聞かずについて来てくれ

るのは本当にありがとう。

「あの翼、お兄ちゃんのと同じだよね？」

心配そうな表情をした茜が振り返りながら尋ねてくる。もちろん、視線の先にあるのは巨大な魔力の翼。

茜には能力を最大限まで使ったからわかるのだろう。

「おそらくな。あのまま魔力が収束していったら魔力が暴走して爆発が起きる可能性がある。そんなことをさせるわけにはいかないからな」

「魔力の暴走ですか？　兄さん、一体何が」

「あの魔力量から考えて学園都市が簡単に吹き飛びますよね、周様」

断章の力を最大限まで使った場合、同じような翼が出来る都は知っている。抑えきれない量の魔力が収束した場合、その爆発は一定範囲の全てを吹き飛ばすということを。

そして、その爆発は大きければ大きいほど比例して大きくなる。

「ああ。あの大きさから考えて、関東は消滅するな。世界は混乱、ってレベルじゃないな」

そんなことが起きたなら文字通り災厄で『赤のクリスマス』以上のことが起きる。もちろん、オレも死ぬ。

「止めるにはイグジストアストラルが必要だ。マテリアルライザー

はむしろ危険だからな」

「ちょっと待った。イグジストアストラルを使うのはいいとして、イグジストアストラルの中には音界の姫様がいるよね？　どうするつもり？」

「問題がそれなんだよな」

メリルは現在学園都市を守るための歌姫による術式を歌っている。イグジストアストラルにしたのは撃破される心配がないためだが、暴走した悠人との戦いなら確実に衝撃によって気絶する可能性が高い。そうなれば、最悪の事態になった場合は学園都市を守れない。

孝治も悠聖も浩平も必死に動いている。オレ達もすぐに到着しないと。

『話は聞いたよ』

すると、レヴァンティンから音姉の声が漏れてきた。オレはレヴァンティンを顔に近づける。

『もしもの時のために術式は共有しているから何とかなると思う』

「何とかって、音姉は今ゲートから出て来る相手を倒しているんだろ？　そんなの、どうやったら」

『今、何が大事なのか考えて』

音姉の言葉にオレは黙った。

絶対的に戦力が足りなさすぎる。出来れば後五部隊いればどうにかなるのに。

『弟くん！』

「オレは」

どうすればいい。どうすれば、音姉を守りながら戦える？　今、あの場所に近いのは誰だ？　誰が一体、音姉を守れる？

オレは走りながら奥歯を噛み締める。

どうすれば、いい？

『ったく、海道周。お前は相変わらず俺達を蚊帳の外か？』

その言葉からレヴァンティンの声が聞こえる。オレはハッとして顔を上げた。

『いい加減、第７６移動隊以外の部隊を使おうぜ。お前は宣言したじゃないか。学園都市は学生の街だってな』

「紅くん」

音姫の言葉に紅は笑みを浮かべた。そして、紅は手のひらに炎を作り出して天魔の群れに投げつけた。

灼熱の炎が天魔の群れを呑み込み焼き尽くす。

「お前達だけで守ってんじゃねえぞ。俺達だって学園都市の『ＧＦ』なんだぜ」

『紅』

周の声はどこか嬉しさを含んでいた。その声を聞いた紅はより一層笑みを浮かべる。

「お前は俺の能力が信じられないのか？」

『お前の性格は信じられないな』

「おいおい。まあ、任せろや」

紅が音姫に通信を返す。それと同時にアレックスとロドリゲスが紅の隣に着地した。

ゲートからは未だに天魔が吐き出されている。

『音姫、メリルからはオレが話す。だから、頼んだ』

「うん」

音姫が光輝を鞘に戻して髪を括っていたリボンを解く。

「アレックス、ロドリゲス、これから全ての音姫さんの攻撃を弾き、あいつらを倒すぞ。一回も邪魔をさせるな」

「全ては世のため男のため」

「我らがチーム“ゲイ”ボルグ。これより殲滅行動に入ります」

「オレはゲイじゃねぇ！！」

紅の叫びと共に三人は同時に天魔の群れに飛びかかった。

オレは軽く笑みを浮かべながらレヴァンティンを下ろす。

「周君、嬉しそう」

「そりゃな。予定はかなり狂っているけど、今の状況なら十分に挽回可能だ。このまま中央に」

そう言いながら道を曲がると、そこにはローブの集団の姿があった。

どうやら待ち構えていたらしい。向こう側では戦闘が起きている以上、ここが相手の最終防衛線か。

オレはレヴァンティンを握り締める。

「ここを突破すれば到着だ。このまま全力で」

「全員突撃！」

その言葉にオレ達は固まった。そして、ローブの集団も固まっている。何故なら、それを言ったのはシェルターにいるはずのリコだったからだ。そのリコが学園都市の『ＧＦ』部隊を引き連れてローブの集団に突撃していた。

リコが加速と減速を上手く使い、ローブの集団に突入して掻き乱したところに部隊が突撃する。

虚を突いた攻撃だがいい作戦だ。

「周ちゃん！　ここは私が食い止めるから！」

ローブの集団と戦いながらリコは声を上げる。その言葉にオレ達は頷いた。

「行くぞ」

そのままレヴァンティンを握り締めて乱戦の中を突撃する。何故か、オレ達を進む道は道が開いていたが。

さっさと向かってさっさと地下に突入する。そして、親父を止めないと。

壁に叩きつけられる。その感覚が俊也の中では数秒遅れて感じられた。そして、俊也は前のめりに倒れる。

『俊也！　ぐっ』

黒の服の男の拳はフィンブルドを捉えて壁に叩きつける。すでにアーガイルもタイクーンもグレイブも壁に叩きつけられて動きを止めていた。

フィンブルドはゆっくり起き上がる。

『化け物、かよ』

「誉め言葉だな。精霊にそう言われるとは思わなかった」

男はゆっくり俊也に向かって歩み寄る。俊也はゆっくり体を起こすがもう戦えるような状態ではない。それは俊也達の精霊にも共通すること。

男は笑みを浮かべて俊也に手を伸ばす。

「終わりだ」

そのまま首を絞めて殺そうと男が考えた瞬間、何かが迫って来ているのに気づき、男はとっさに後ろに下がった。

それと同時に男が立っていた場所に半透明の壁が突き刺さる。

「誰だ！？」

「『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』を見たことがないのかな？　だったら、これでわかるよね」

その言葉と共に半透明の壁の前に薄い膜で全身を纏ったアルトの姿があった。アルトは『鋼鉄処女（アブソリュート）』を纏って笑みを浮かべている。

「貴様は」

「悪いけど、介入させてもらうよ」

アルトは槍を構える。

「あなたが悪名名高い自称ガウェインさんだね」

「知っているのか。なら、何故介入する？　力を知っているのだろ？」

その言葉にアルトは肩をすくめた。そして、『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』に『鋼鉄処女（アブソリュート）』を展開したまま槍を薄い膜が包み込む。

あの日、由姫にアルトが負けてから必死に特訓した自分のレアスキルの使い方。

『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』と『鋼鉄処女（アブソリュート）』と『狂乱騎士（バーサーカー）』を同時に展開する究極の混合レアスキル。

「僕はただ、あなたが最硬の防御力を持つことに疑問を持っているだけだよ」

七天失星の刃がイグジストアストラルの砲撃をかいくぐってきたローブの男を斬り裂いた。そして、飛んできた魔術を弾く。

イグジストアストラルやソードウルフがいるとはいえ、戦略的には向こうが上だということは亜紗はわかっていた。

今、亜紗がすることは一つだけ。周が来るまでこの場を守りきること。

アル・アジフや悠聖もこちらに向かっているのはわかる。今は亜紗のすぐ後ろにある地下への入り口を守りきることだ。

亜紗は小さく息を吸い込んで七天失星を構える。

ローブの集団はイグジストアストラルやソードウルフの砲撃をかいくぐってやって来る。その数はだんだん多くなってきた。アストラルソティスやアストラルルーラがいるとは言え、数が絶対的に足りない。

亜紗が軽く息を抜いた瞬間、ちょうど亜紗の後ろから誰かが現れた。ローブの女だ。その手に持つナイフをそのまま真っ直ぐ亜紗に向かって突き、ナイフが空を待った。

「気を抜くではない！」

声を上げた人物はローブの女の側頭部を蹴り飛ばして亜紗の隣に着地する。

『遅い』

亜紗は不満そうな顔で亜紗の隣で魔術書アル・アジフを開くアル・アジフに向かって抗議する。

アル・アジフは苦笑しながらいくつもの魔術を砲撃をかいくぐってくる相手に向かって放った。爆発が相手を吹き飛ばす。

「そう言うではない。説得に時間がかかっての」

その言葉と共に砲撃を行っているアストラルルーラやアストラルソティスにソードウルフを守るようにエネルギーシールドを全開にしたイージスが到着していた。

アル・アジフが今まで戦列にあまり参加しなかったのはイージスを戦場に連れて来るため。

「それに、我の魔力はほぼ残っておる。心配しなくても今から本気でいくぞ」

『それなら安心。アル・アジフさんの本気なら本当に心強いから』

その文字と共に亜紗は笑みを浮かべる。

「着々と集まっているようだな」

その声は上から聞こえてきた。その声に二人が見上げると、そこには悠聖と冬華の二人が降りてきていた。そして、地面に着地する。

「後は周隊長達か？　オレより遅いなんて後で何か奢って」

「誰が遅いって？」

その言葉に全員が振り返った。そこには笑みを浮かべた周の姿がある。

「さあ、第三、いや、第四段階を始めるぜ！」

第二百九話　リベンジマッチ

目の前に広がるのはリーゼフィアに向かって突撃する光の翼を生やしたダークエルフ。その姿は天使のように神々しいわけではなく、悪魔に取り憑かれたかのような突撃だった。

その様子をスコープ越しに見つめていた浩平が小さく溜め息をつく。

「この距離から無理かよ」

浩平がいるのはダークエルフから１００ｍと離れていない建物の屋上。フュリアスの弱点でもあるエネルギー機関をここから狙えないか試しているのだが到底無理なようだ。

一番の問題は胸部と背部にあるリアクティブアーマー。リアクティブアーマーの前ではフレヴァングですら収束砲でないと貫けない。そして、それを使えば悠人は十中八九死ぬ。

「リース、そっちはどうだ？」

『無理』

すぐさま即答が返ってくると同時に光の剣がリアクティブアーマーに当たって砕け散るのが見えた。

リースの攻撃ですらリアクティブアーマーは破壊出来ない。かくなる上は、

「天王マクシミリアンに話しかけるしかないか。ストライクバース

トの火力なら何とかなるだろうし」

「ようやく見つけたぞ」

その言葉に浩平は振り返った。そこには雨霰（セントリア）ですらかき消した槍使いの男。今回は一人のようだ。

浩平は振り返りながらフレヴァングを構える。

「暇人なんだな。俺を捜すなんて」

「個人的な用事だ。もちろん、すぐに終わらせる。お前を殺すことでな！」

男が地面を駆け出した。そのまま手に持つ槍を突いてくる。最速で最速の突きを放つ。使い方としては十分に有効であり、避けるのは難しい。

だから、浩平は素直にフレヴァングを突き出した。フレヴァングと槍がぶつかった瞬間に浩平は体を捻り、上手く懐に入り込む。

そして、フレヴァングの銃床を男の顔面に叩きつけた。男は数歩後ろに下がって顔を押さえながら浩平を睨みつける。

「貴様！」

「そう怒るなよ。こっちだって急いでいるんだからさ」

その言葉と共に浩平の周囲にいくつもの銃が現れる。大小様々な形をしているが、共通しているのは浩平が操っているということ。

男は笑みを浮かべながら槍を構える。

「学習しないのだな」

「学習？　あいにく、俺はバカだからな。俺が出来るのは射撃と竜言語魔法だけ。でも、それだけでいい。俺はバカだから、一つのことに関しては極められる」

その言葉と共にフレヴァングから弾が放たれた。壁を跳ね返って迫る弾丸を男は槍で弾き、弾丸は地面に叩きつけられる。

その事実に男は驚いたように目を見開いていた。

「ちょっとは減衰するけど、これくらいなら大丈夫だな」

「何をした!?」

男の言葉に浩平は笑みを浮かべて答える。

「シェルバレット。外殻弾だっけな、日本語だと。魔力の弾丸の上から魔力の殻を被せる。その分魔力を消費するし、一撃が大きくなるから誘導は難しくなる。だけど、効果は抜群だろ？」

男は浩平を睨みつける。男の持つ槍は相手の魔力を感知して打ち消すもの。相殺というのが正しいかもしれない。

だが、シェルバレットの場合は弾丸を包む殻が打ち消されるだけで中の弾丸は打ち消されない。それが浩平の考えた対策の一つだ。

「舐めるな、小僧」

「小僧を舐めるな、大人。俺達はお前達の思い通りに行かないものなんだぜ」

「ならば、力で抑えつければいいだけの話だ！」

男が加速する。槍を握り締め、浩平との距離を詰める。浩平はフレヴァングを握り締めながら周囲に浮かぶ銃から弾丸を放った。

四方八方から弾丸が男を狙う。対する男は槍を振るった。飛んでくる弾丸を正確に、かつ的確に叩き落として距離を詰める。

浩平はそれがわかっているためフレヴァングの引き金を引く。

実力者が相手の場合は話にならないくらい直線射撃は当たらない。当たらないからこそ普通は不意打ちか狙撃を行う。

男はフレヴァングから放たれた弾丸を槍で打ち払おうとして、その場から吹き飛ばされた。

「なっ」

驚きながらも弾丸を気にしながら上手く着地する男。

浩平はニヤリと笑みを浮かべた。

「どうだ。新開発の弾丸、ブラストバレットは」

「ブラスト？　そうか、この槍に反応して」

「違うな。せっかくだから説明してやるよ。ブラストバレットは二重の殻に包まれている。その内一つが傷つけられたなら傷つけられた方向に爆発が襲いかかるっていう弾丸だ」

つまり、男が吹き飛ばされたのは槍によって一番外の殻を消して、二番目の殻を傷つけたから。だから、浩平は無傷で存在している。

「シェルバレットとブラストバレット。お前はこの弾丸の嵐から耐えきることが出来るかな？」

「悪いが、遊びに付き合っている暇はない！」

男が地面を蹴る。浩平が晒した手札はかなり強力だ。シェルバレットとブラストバレット。その二つがあれば確かに男を封殺が可能だろう。

だが、それはブラストバレットについて話していなければだ。話したということは技の能力を教えたということ。それだけでかなりのデメリットでもある。

男は地面を蹴る。対する浩平はフレヴァングの引き金を引いた。そして、弾丸がフレヴァングの銃口から放たれる。

男はとっさに弾丸を回避して浩平に迫る。対する浩平は周囲の銃からシェルバレットを放った。

男はすぐさま槍を使ってシェルバレットを受け流し、浩平に向かって一歩を踏み出す。

それに浩平は笑みを浮かべた。

「フルバースト！」

男に向かって浩平が全弾発射する。男はニヤリと笑みを浮かべて槍を振り回した。

浩平がフルバーストによって放った全ての男を狙った弾丸が槍によって消え去る。だが、そんなことは浩平も承知している。

だから、浩平は笑みを浮かべたままフレヴァングを向けた。

男はその笑みに少し驚きながらも前に踏み出して、背中にシェルバレットが直撃した。

「なっ」

男の体勢が崩れた瞬間に浩平はフレヴァングの引き金を引く。男はとっさに槍で払い、爆風によって吹き飛ばされた。

「何を」

「誰がシェルバレットをリフレクト出来ないって言った？　フレヴァングから最初に放った弾丸はシェルバレット。お前は勘違いしてブラストバレットだと思ったみたいだよな？」

フレヴァングから放たれたシェルバレットは建物にぶつかって跳ね返った。もちろん、シェルバレットの跳ね返りを予測していた浩平は直接当たるような軌道に乗せなかったのだ。

そして、フルバーストの際に狙ったのは男にダメージを与えることではなく跳ね返ったシェルバレットに気づかせないため。そして、跳ね返ったシェルバレットの軌道を変えるため。

「シェルバレットすら予測出来るというのか！？」

「言ったろ。俺はバカだって。俺が極めたのは射撃。狙撃手（スナイパー）の中なら負けない自信はあるぜ」

男は歯噛みする。シェルバレットにブラストバレットは厄介だし、シェルバレットとブラストバレットの見分けがつけれない。

さらにはシェルバレットを避けても通常射撃で軌道を変えてやってくる。

男は槍を構えた。そして、地面を蹴る。

浩平はとっさに引き金を引いて、

男が距離を無視して浩平の隣まで滑り込んでいた。

浩平の視界には足から血を吹き出している男の姿。必死に痛みを堪えて浩平に向かって槍を振るっている。

決死の覚悟による瞬間移動（ショートジャンプ）。男は全力で槍を振り切った。だが、手応えはない。

何故なら、浩平が槍に当たってすらいないのにフレヴァングを手放して吹き飛んでいるからだ。

男は気づく。ブラストバレットの特性を思い出して。

「オーバードライブ！」

浩平は笑みを浮かべながら自分のデバイスを握り締めて叫んでいた。

「オーバードライブ！」

対する男も叫ぶ。だが、男は足を怪我している。有利か不利か言えば完全に不利。

浩平はその手にフレヴァングを呼び戻す。そして、着地しながらしっかりと男に狙いを定めた。

「フルバースト！」

浩平が使える全ての銃口が男に向かって射撃を行う。男は槍を握り締め、弾丸を消し去ろう振り切り、そして、槍が砕け散った。

「何故だーっ！！」

男の体が弾丸の雨に呑み込まれる。

浩平は小さく息を吐いてフレヴァングを下ろした。

「そりゃ、どんなものにも最大許容量があるだろ？　そういうことだ」

そして、浩平は腰を下ろす。それと同時に浩平の上を何かが通り過ぎた。振り返ってみればそこにはイグジストアストラルの姿がある。

「さてと」

浩平は小さく息を吐くとダークエルフに向かってフレヴァングを構えた。

「リアクティブアーマーを早く剥がしてくれよ。そうしたら、一撃で機能停止にしてやるからよ」

第二百十話　それぞれの戦場に

「第四段階？」

オレが自信満々に言った言葉に悠人が意味が分からないという風に首を傾げる。まあ、第四段階自体ついさっき決めたことなんだけどな。

「その前に、フュリアス部隊は全機悠人の場所に向かえ。あの光の翼の原因はダークエルフだ」

『何だって！？』

ルーイの驚愕の言葉よりも早く、イグジストアストラルは悠人がいる方角に向かっていた。その後をソードウルフが続く。

「メリルは悠人を助けるために歌姫の力を頼む。音姉が術式を引き継いでいるはずだ」

『わかりました』

『ちょっと待て。僕の耳には聞き捨てならない言葉が聞こえたんだが』

オレは軽く肩をすくめてアルティメイト装備のアストラルルーラを見る。

「だから、あの翼の原因は悠人の乗るダークエルフだって」

『つまり、悠人は空の民ということか？』

「空の民？」

オレは首を傾げた。そんな単語は聞いたことがない。

『どうりでメリルが惹かれるわけだ。だが、この場はどうする？僕達はここの防衛をしているのだぞ？』

周囲を見渡せば集団がこちらに向かおうとこちらの様子を窺っている。

確かに、イグジストアストラルとソードウルフがいない今、オレ達でどうにかしないといけない。イージスが四機ほどいてくれるのが幸いか。

「ルーイもリマも鈴とリリーナを追ってくれ。ここはオレ達が食い止める」

『だが』

「大丈夫だよ」

その言葉と共に茜が弓を、隼丸を構えた。そして、魔術を圧縮して矢と成し弦を引き絞り放つ。

放たれた矢は稲妻のごとく空を裂き、爆発した。爆発しながら周囲に紫電を撒き散らす。

オレ達は開いた口が塞がらなかった。

「私の、価値、無し？」

同じ弓を使う夢が呆れたように言う。確かに、こんなことが出来たら戦場の弓兵の価値は全て茜に奪われるだろう。

アルが呆れたように溜め息をついていたからおそらくアルでも無理なのだろう。

「だから、大丈夫」

『人界とは不思議なものだな』

「茜しか出来ないと思うぞ」

普通、弓の矢は魔力によって作られるものだ。魔術の術式に矢に転換する術式を加えて魔術自体を矢にするなんて普通はしない。出来ないわけじゃないけど。

雷王具現化の限定発動とかいう非常識なものを見せられていても非常識さが高い。

『なるほど。わかった。僕とリマは向かおう。だから、後は頼んだ』

「任せろ」

アストラルルーラとアストラルソティスの二機が空を飛翔して悠人のところに向かう。イグジストアストラルにソードウルフ、アストラルルーラとアストラルソティスがいれば絶対に大丈夫だろう。

問題はこっちだよな。

誰が地下に潜るか。決まっているのはオレ。今までの話から考えて未だにシリーズは存在していないから予定通り由姫とアルに亜紗、メグを連れて行くのがいいけど、茜が合流したからな。

どうするべきか。

「何を考えておる」

アルが呆れたようにオレに向かって言うと、そのまま茜の背中を押してオレの所に移動させた。

「我の代わりに行くがよい。我はここを守るぞ」

「そういうことだな。周隊長、行けよ。ここはオレ達に任せてな」

悠聖の言葉と共に悠聖の精霊達が姿を現す。後は俊也が合流すれば布陣としては盤石なんだけどな。

オレは小さく笑みを浮かべて頷いた。

「ああ。なら、第四段階の作戦を説明するぜ。地上の指揮は悠聖。地下に行くのはオレ、茜、由姫、亜紗、メグの五人。だから」

オレは手を上げた。悠聖も手を上げる。

「後は頼んだ」

「任せろ」

オレ達は手を高く鳴らした。

「学園都市を守ってくれ」

「ああ。お前は自分の過去を断ち切れ」

「ああ」

ミューズレアルその身に宿す紫電を纏い加速する。だが、それを追いかけるのは紫電より早い炎の龍。

エレノアは荒い息をしながらもその手にある杖で必死に炎の龍を操っていた。

エレノアの持つ元『炎帝』としての力。神代に使われていたとされる現代では唯一無二の固有魔術、いや、魔法という表現が正しいかもしれない。

「ヘーリオス！　食らい尽くして！」

ミューズレアルは必死に飛翔するがエレノアの操る炎の龍、ヘーレオスの方が早い。だから、ミューズレアルは向きを変えた。ヘーレオスの口を避けてエレノアに直接攻撃する。

エレノアは微かに目を細めて魔術陣を展開する。

「パエトーン！」

その魔術陣から現れたのは炎を纏った馬だった。その突撃は雷光の速度であるかのようにミューズレアルに狙いを付ける。だが、ミューズレアルはそれを大きく後ろに下がることで回避した。

エレノアは疲労の濃い顔を一度横に振りしっかり杖を握り締める。

『人としては惜しいな。その魔術式、これ以上魔術が発展したとしても辿りつくことの出来ない境地であろう。だが、疲労は激しいはずだ』

「そうかも、ね。でも、私は諦めていないよ。ここであなたを倒すことに」

『なるほど。それにしても、ヘーレオスにパエトーンか、もう一段階の進化があると考えていいのかな？』

その言葉にエレノアは微かに眉をひそめてミューズレアルに向かってパエトーンを放つ。ミューズレアルは浮かび上がって回避するがそこにヘーレオスが突撃した。

ミューズレアルはとっさに術式を展開すると同時にヘーレオスの動く方向が変わる。

「くっ、術式解除！」

その言葉と共にヘーリオスとパエトーンは姿を消した。エレノアは荒い息のままミューズレアルを睨みつけている。対するミューズレ

アルは余裕の表情をしていた。

『さすがに我も焦ったが、ここまでか。もう、限界であろう？』

ミューズレアルの言葉は的を得ていた。ヘーリオスとパエトーン。どちらもある意味炎の化身の召喚術なのだ。それを長時間操っていれば簡単に魔力は枯渇し動けなくなる。それをエレノアは必死にこらえていた。

だが、それももう限界。

『無理をするな。我は』

「無理なんかじゃない」

エレノアは杖を構える。

「私は昔、大事な人を殺そうとした。大切な人を殺そうとした。自分達の宿願のために。だけど、私は殺せなかった。宿願は違った結果しか生み出さなかったから。でも、そんな私をあの人は許してくれた。同じ目的を持っていながら方法が違っただけだって言ってくれた。私は、何の役にも立たなかった。ただ、あの人の大切な知り合いを奪っただけ。それからも、ずっと、私は弱かった。だから、引かない！」

その気迫にミューズレアルは微かに目を細める。

「ここで引いたら、もう、私は私で無くなる。だから、私はここに宣言する！」

その瞬間、ミューズレアルを囲むように魔術陣が展開された。それは完全にミューズレアルを逃さないという意志を持った究極クラスの結界魔術も兼ねていた。それがわかっているからこそ、ミューズレアルは真正面からエレノアの魔術を受け止めよう覚悟を決める。

エレノアは術式を紡ぐ。

「我が名において命ずる！」

思い出すのはあの時の感覚。強くなろうと必死に努力をしたあの時のこと。

「全ての光の元凶である存在よ」

そのフレーズを聞いた瞬間ミューズレアルの体に電撃が流れたかのような感覚が貫いた。

ミューズレアルという最上級の存在だからこそ知っているとある過去の魔術。そのフレーズと同じだったから。

「この地に現れ、その始まりの炎の力を我が力と為せ！！」

ヘーリオスとパエトーンの額が術式から現れミューズレアルを囲むように動いた。それはまるで球体を作り出すかのようにミューズレアルを囲む。

その時点でミューズレアルは諦めていた。この魔術に抗う力はないのだから。

『炎獄の証を持たぬものがこの魔術を使うとはな』

その言葉はどこか懐かしさを含んでいる。それにエレノア気づかない。

「その名は！！」

『太陽を司る名の始まりの力』

エレノアの言葉に呼応するようにミューズレアルが口を開く。

「オリジン！！」

そして、学園都市上空にミューズレアルが張り巡らせていた結界を一瞬にして呑み込むような巨大な太陽が出来上がった。

「くっ！？」

『これは』

急に空に出来あがった巨大な太陽。それをみた俊也は思わず顔を逸らしてしまった。フィンブルドは驚きの声を上げている。

その光は周囲を視認できないほどの状況にしている。おそらく、この場でまともに動けるのはフュリアスくらいだろう。

『俊也、チャンスだ』

「フィンブルド？」

目が見えないまま俊也は尋ねた。

『ミューズレアルの召喚儀式に入れ！』

「急に何を言っているの？」

俊也はわけがわからずフィンブルドに尋ねた。今、アルトが相手を必死に抑えているがだんだん押されてる。アルトは防御に関しては強いのだが、攻撃に関してはあまり強いものじゃない。

対する相手は俊也の目か見て最強にしか思えない。視認できない速さ。ありえない攻撃力と防御力。そんなものを相手にしていてアルトが抑えられるわけがない。

『つべこべ言わず従え！　今の状況をひっくり返したいなら早く！』

「わ、わかっ」

「そこか！」

その言葉と共に俊也は衝撃によって吹き飛ばされた。おそらく、声から推測されたのだろうと俊也は考え声を上げないように頑張って堪えた。

目の痛みを堪えて開けてみると、ようやく色が世界に戻っていた。だが、アルトは目を完全にやられたのか動けないし、対する相手は俊也を睨みつけている。

死ぬ。

俊也の体が縮みあがった。それほどまでに相手との差は開いている。

「俊也君!?」

そんな中、響く声。それに俊也は振り返っていた。そこにいるのは複数の魔術陣を展開している委員長の姿。

「逃げて!」

俊也は声を上げる。だが、それより早く黒い服の男が委員長の背後に立っていた。その気配を感じた委員長が振り向く。

「お前から殺してやろう」

そして、男の拳が振り上げられた。

俊也は走る。だが、間に合わない。距離は絶望的であり不可能。だけど、俊也は動く。必死にそして、諦めたくないから。

『助けたいか?』

諦めたくない!

だから、とっさに頭の中に響いた声に俊也は答えていた。普通なら別の解答をしていただろうが今の俊也のそんな余裕はないし、その声が響いた瞬間に俊也の体感速度が著しく遅くなっていることにすら気づいていなかった。

『何故？』

何故？　そんなの決まっている！

だから、俊也は、必死だから叫んだ。

「大切な人、守りたいんだ！」

その瞬間、世界がさらに加速した。その加速は時間すらも置いて行くかのような加速であり、男の拳から委員長を助けるには十分すぎる時間を作り上げていた。

俊也が委員長を抱え後ろに下がる。それと同時に委員長がいたところを拳が駆け抜けた。

「なっ！？」

男の顔に浮かんでいるのは驚きの顔。

俊也は委員長の体を抱きしめたまま男を睨みつける。

「手は出させない。お前の相手は、この僕だ！！」

『へっ、土壇場で決めやがったか』

俊也の耳に聞こえるフィンブルドの声。男は微かに怒りで顔を歪めて拳を握りしめる。それと同時に男の服装が変わった。

黒から緑に。そして、加速する。だが、その加速は俊也にとって遅

く感じていた。

俊也は委員長を抱えたまま後ろに下がる。

「俊也君？」

委員長は驚いたような、嬉しいような声を上げるが俊也は男を睨みつけたままだ。男も俊也を睨みつけている。

「貴様、新たな精霊を召喚したのか！？」

その言葉に俊也っ振り返った。そこにはフィンブルドの横に並ぶ大男の姿が目に入った。

何回かまばたきした後に俊也は尋ねる。

「誰？」

『我が名はミューズレアル。新たなマスターの望みによって参上した雷の最上級精霊だ』

第二百十話　それぞれの戦場に（後書き）

エレノアの最大魔術の名前は最初アポロンでした。ヘーリオスとパエトーンの名前も同じギリシャ神話から。ただ、この作品及び自分が書いているシリーズの作品にはやはり“オリジン”という名前は必要なものだと考えているので炎獄の御槍を出したついでにその名前を出すことに。

どうして“オリジン”という名前なのかを語れるのはいつになるかわかりませんが。

第二百十一話　第一階層（前書き）

茜が強すぎるように思えますが、上には上がいます。主に、エレノアと楓。

第二百十一話　第一階層

「にしても」

オレは周囲を見渡しながら呟く。オレ達が走っているのは地下を走る通路。その通路の隔壁や様々なパズルはすでに解かれており、オレ達はただ突き進むだけでよかった。

「ここまで地下通路が広いとはな」

オレ達が走っている地下通路は横幅が２０ｍほどで高さが１０ｍほどだろうか。普通に戦闘が可能かつ、地味に壁を使った戦闘がやりにくい大きさだ。形はもちろん半円形。

ほとんど一直線だが時折障害物があるため一方的な攻撃は難しい。そもそも敵の姿が見当たらない。

『でも、地下通路ってこんな感じじゃない？』

「私は半円形になっているのに驚きますが」

「由姫って時々すごいよね」

メグの言葉は完全に誉めてないよな。

「でも、トンネルならこんなかんじゃないかな？　テレビで見たトンネルは基本半円だよね、お兄ちゃん」

「半円形の方が上からの圧力が分散するからな。四角だったら真ん

中に支柱が立つことになるからな」

「なるほど。納得しました」

いや、それくらいわかろうぜ。

オレが小さく溜め息をつこうとした瞬間、嫌な予感が駆け抜けた。方角は前から。すかさず展開する魔術陣をストックから選ばずに魔術陣を展開して防御魔術を完成させる。

それと共に空を切り裂いて飛翔する矢が作り出した障壁魔術に突き刺さった。すかさずその障壁魔術を蹴倒してレヴァンティンを握り締める。

「レヴァンティンモード？！」

杖の形となったレヴァンティンを握り締め、オレはいくつもの魔術を並列に展開しつつ矢に転換して放った。

もちろん、茜のようなありえないやり方ではなく、最下級クラスのものを矢として放つやり方だから失敗はない。

放った矢が空を裂いて魔術が飛んできた場所を切り裂いた。だが、新たに魔術が放たれる。

「どういうことですか？」

すかさずオレの前に由姫が躍り出て栄光によって魔術を打ち払った。

レヴァンティンをモード？から通常の剣であるモード？に変えなが

らオレと亜紗は阿吽の呼吸で地面を蹴る。

オレ達が前に出ると同時に放たれる魔術の量は増えだした。それを微かに笑みを浮かべながらオレは見て、滑り込むように射出点の下をくぐり抜けた。

「15秒耐えてくれ！」

すかさず術式を展開。ほぼ至近距離で回避を繰り返している亜紗を見ながらオレ達の間に展開されている術式を打ち消す。

数は八つ。自動迎撃魔術なんて初めて見たけど、打ち消すのは難しくない。

術式の完成と共にオレは振り返りながらストックしていたら雷属性中級魔術ライトニングボルトを放つ。

ライトニングボルトは向かってきていた矢を消し炭にして術式に傷をつけた。

「これで大丈夫だな」

『きっちり15秒だね』

亜紗が嬉しそうにスケッチブックを見せてくる。オレは別に狙ったわけじゃないんだけどな。

術式の解析にはさすがに手間取ったし、解析した後に罠があるとわかっていたから解析しながらライトニングボルトをストックしたし。

「兄さん、大丈夫ですか？」

「大丈夫大丈夫。由姫は心配性だな」

「普通は心配するわよ。でも、無事で良かった。よく、あの中を走り抜けれたよね？」

まあ、確かにあの術式は厄介だ。闇雲に突っ込んでもオレなら蜂の巣にされていただろう。

「あの自動迎撃魔術は一番前にいる相手を狙っていたんだ。だから、オレは亜紗と一緒に前に出た。正確には亜紗の方が先に出たけど」

「すごいですね。というか、亜紗さんと精神感応で会話出来るなんて羨ましいです」

『会話していないけど？』

亜紗が不思議そうに首を傾げてスケッチブックを見る。それを見た由姫は愕然としてその場に崩れ落ちた。

今の会話に何が起きたんだ。

「さっすがお兄ちゃん達だね。私なんて術式圧縮している最中だったのに」

茜はテヘッと下を出して圧縮していた魔術、魔術陣を見る限り炎属性の上級魔術、をストックする。

矢のストックが可能ということはかなりむちゃくちゃな攻撃が可能

だよな？

「由姫、起きて。この場でいじけていたら周に愛想を尽かされるよ」

「いじけてませんし、以心伝心羨ましいなと思っているわけではありませんし、兄さんが私に愛想を尽かすことなんてないとわかっていますから。ですよね？」

『周さんはきっと愛想を尽かさないよ。私が断言する』

ここってオレが答えるとこだよな？

「ほら」

「そんな顔で言われても。ともかく、周、先に向かわなくていいの？」

「向かうさ」

オレは小さく息を吐いてレヴァンティンを鞘に収める。そして、一歩を踏み出そうとして、嫌な予感でこめかみがピクピク動いた。

踏み出したら大変なことになると体が訴えている。

「兄さん、どうかしましたか？」

そして、オレの顔を覗き込むように由姫が前に出て、術式が発動する。

「伏せて！」

その言葉は後ろから。オレは由姫を抱き寄せながらその場に伏せた。
亜紗とメグの二人も伏せている。

そして、オレ達の上を灼熱の矢が駆け抜けた。

すかさずファンタズマゴリアを展開する。展開と同時に爆発と爆風がファンタズマゴリアに襲いかかりオレ達の後方に受け流されていく。

「うーん、ちょっと威力が足りないかな?」

「ねえ、周。周の妹って何者?」

「天才通り越した何か」

どう考えても天才という言葉に当てはまらない。茜を天才とするなら音姉で凡才クラスだろう。つまり、オレが一般人クラス。

もう、桁が違いすぎる。

「とりあえず、術式は破壊したよ?」

「助かるけど、とっさに何を放った?」

「イグニスブラスト」

炎属性上級魔術の中で収束系に入る高威力の技なんだけどな。

「兄さん、私って、才能ありますか?」

『私も才能がないような気がしてきた』

これが本物の天才かよ。

オレは小さく溜め息をついて歩き出す。

「ともかく、先に向かおうぜ。オレ達がやらないといけないことは親父を食い止めることだろ？」

「その前にこの二人をどうにかした方がいいんじゃないかな？」

「由姫姉も亜紗さんもどうしてへこんでいるのかな？」

オレはいつの間に人選を間違えたんだ？

結局、二人が元気を取り戻す間に約１０分ほどかかってしまった。おかげで顔が真っ赤になっている。対する二人は本当に嬉しそうでオレ達の前を走っている。

オレは一番後ろを走りながらレヴァンティンが立体構造を出した地下通路を見ていた。

地下通路は全部で四つの階層に分かれているが、一番下の階層はダミーの階層で、目的地へは三番目の階層を通らないといけない。

今いるのはまだ一番目の階層だ。

「お兄ちゃん、お父さんは今頃どこかな？」

「多分、第三階層だな」

いつの間にかオレの隣を茜は走っていた。

オレは第三階層の図を茜に見えるように操作しつつ第一階層の図を拡大する。

「由姫、亜紗。その道を右に曲がってくれ」

「はい」

由姫の言葉と共にオレ達は右を曲がり、足を止めた。

そこにいたのは両腕にナックルを身につけた中学生くらいの女の子。

その女の子が下へ続く階段を背に立っている。

「あなたは」

「ここからは誰も通さない、と言いたいところだけど、里宮本家八陣八叉流の人以外は通って」

「どういうことだ？」

オレはレヴァンティンの柄を握り締めて尋ねた。

女の子は淡く微笑を浮かべる。

「最後の願い、かな」

「最後？」

「そう。私達シリーズはあなた達と違って長く動くように造られていない。だから、もうすぐ限界が近いの。時間にして後三日くらい。そのためだけに私は造られた。だから、最後くらい願いを叶えさせて」

女の子が身構える。オレは小さく息を吐いてレヴァンティンから手を離した。

「由姫、頼めるな」

「兄さん、私は手加減出来ませんよ」

「それでいい。むしろ、手加減はするな。最速で倒して最速で追いかけて来い」

オレの言葉に由姫が頷くのがわかる。女の子はオレに向かって頭を下げた。

「通るぞ」

オレ達は地面を蹴る。そして、階段を全速力で駆け降りる。次は第二階層。第二階層には中央に大きな部屋がある。おそらくそこで何人かは待ち構えているだろう。

オレは拳を握り締めて第二階層に突入した。

第二百十二話　全ての思い

感覚が速い。

俊也はそう考えていた。体には紫電がまとわりつき、緑の服をした男の動きがよく見えていた。

加速した時の速さは文字通り神速と言ってもいい。背後に回り込みながら俊也を守っている委員長に攻撃を仕掛けようとする。だけど、俊也はそれをさせない。

男の動きより速く俊也は動いて男の体に拳を叩き込んだ。男はそのまま吹き飛んで、服装を途中で黒色に変えながら転がる。そのまま近くの建物に激突した。

「俊也君、すごいね」

『全部ミューズのおかげだよ。あいつ、精霊としては破格の能力を持っているからな』

俊也とは離れた位置には委員長とフィンブルドの姿があった。他の三体の精霊は傷が深いため姿を隠して休んでいる。

委員長はその言葉に首を傾げながらフィンブルドを見る。

「破格の能力？」

『まあな。例えば、海道時雨のミョルニル。あれは俺の風の加護よりも速く行動が出来る。それは何故か。簡単だ。ミョルニルは体内

の神経伝達を常時最高速度を可能とするんだ。速度はほぼ雷と同じ。その速度で思考し、行動が出来る。問題点を上げるなら最高速度は使っていない時と同じだ。まあ、だから、海道時雨はミョルニルと同時に天雷槍を運用しているんだけどな。だが、ミューズは違う。ミューズの能力はミョルニルと同じ帯電化と、雷纏った加速。しかも、その速度は雷と同じ速度を出せる。この意味がわかるな』

フィンブルドの言葉に委員長は頷く。

それほど特異な存在と契約出来た俊也は何者かという考えもあるが、委員長は高鳴る胸の鼓動がその考えを一瞬でかき消していた。

俊也はただ、委員長を守るためにミューズレアルと契約をした。そのことが純粋に嬉しいのだ。

「この、糞餓鬼が！」

男が立ち上がり俊也に向かって突撃する。だが、男の前に『狂乱騎士（バーサーカー）』を槍に纏うアルトが立ち塞がった。

アルトは『鋼鉄処女（アブソリュート）』を展開したまま小さく息を吸い込む。

「貫け」

「そこをどけ！！」

男が加速する。その真っ正面からアルトは槍を全力で突いた。

黒い服に『狂乱騎士（バーサーカー）』の槍が激突する。全力の魔力を込めた槍は黒い服によって弾かれ、男の体は微かに体勢を崩した。

「解放しろ！　『狂乱騎士（バーサーカー）』！」

その瞬間にアルトは叫ぶ。すると、槍を纏っていた膜が一瞬にして解け、男の体を狙うように細い槍となって放たれた。

男はすかさず黒色から緑色に服装を変えて、俊也の膝が男の顔面に激突していた。

何が起きたか理解出来ていない男の体に『狂乱騎士（バーサーカー）』による槍が貫くはずだった。

だが、男の服装は緑色から白色となり槍が全て外れる。

「貴様ら、殺す。泣いて謝っても許さない。この場で殺してやる」

「させないよ。あなたみたいな人間はここで倒させてもらうから」

「同感だね。あなたの力は確かに凄い。だけど、その力は僕達に向けるものじゃない。僕達に向けるなら、容赦なく殺すよ」

俊也とアルトの二人は身構える。

俊也は新たな仲間であるミューズレアルと共に、アルトは由姫に負けてから必死に鍛えた力と共に。

男は怒りで顔が歪んでいる。そして、地面を蹴った。

服はいつの間にか白色から白と青、言うならば空の色に変わっている。

「僕が前にでる」

アルトは『鋼鉄処女（アブソリュート）』を展開したまま前に出た。その槍には再度『狂乱騎士（バーサーカー）』が纏わりついている。

対する男は拳を握り締めて飛び上がった。そして、アルトを叩き潰そうと拳を振りかぶる。

「わかっていればどうということはない！」

『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』を複数展開しながら『鋼鉄処女（アブソリュート）』も展開。そして、『狂乱騎士（バーサーカー）』の槍を握り締める。

「なら、潰れろ」

そして、男の拳が振り下ろされ、一瞬にして『鋼鉄騎士（マテリアルナイト）』が砕かれ、『鋼鉄処女（アブソリュート）』に大きなひびが入った。

アルトは後ろに下がりながら槍を振るう。だが、そこに男の姿は無かった。男はいつの間にかアルトの後ろに移動している。

「させない！」

すかさず俊也が男に突撃する。男はそれを見ながら拳を振るった。『鋼鉄処女（アブソリュート）』は砕け散り、アルトは振り返りながら槍でガードしようとする。そこに俊也は入り込んだ。

俊也は紫電を体に纏い、その拳を男に打ちつけて、紫電が霧散した。

「やはりな」

男が笑みを浮かべて拳を振るう。男の拳は後ろに下がろうとした俊也を捉え、アルトに向かって殴り飛ばした。その速度は高速。

受け止めたアルトごと二人は吹き飛ばされ壁に激突する。

「ハハハッ、フハハハハッ。さすがだ。さすがこの力。精霊の力などこの服の前では塵にも等しい。やはり、この力が最高の力なのだ。さて」

男が振り返る。そこには委員長とフィンブルドの姿がある。

フィンブルドは委員長の前まで出て身構えた。

「あの糞餓鬼はお前のことが大事だったみたいだな。ならば、ここで先に殺してやろう」

男が一歩を踏み出す。委員長は一歩後ろに下がった。男はさらに一歩踏み出す。委員長はまた後ろに下がる。

だが、このままいたちごっこは続かない。

男が一歩踏み出した瞬間、男は加速した。フィンブルドで捉えられる加速。

フィンブルドはその見に風を纏い全力の加速による蹴りを男に叩きつけた。だが、蹴りが男に当たった瞬間、風は霧散しフィンブルドの体から力が抜ける。

「非力だな」

男の拳がフィンブルドを捉え、吹き飛ばした。

フィンブルドは背中から壁に叩きつけられる。

『その服、魔力を吸い込むのか！？』

体を起こそうとフィンブルドは力を込めるが上手く力が入らずその場に崩れ落ちる。対する男は笑みを浮かべて頷いた。

「正解だ。あらゆる魔力の力、そう、特に精霊の力は糧となる。さて」

男が笑みを浮かべて委員長を見る。委員長は小さな悲鳴を上げて後ろに下がった。だが、その背中に壁が当たる。

もう、逃げ場はない。

「どうやって殺されたい？　もう、お前を守るものはいない。お前の好きに殺してやる」

「助けて」

委員長は恐怖で目を瞑り震える唇で言葉を紡ぐ。

「助けて、俊也君」

その時、誰かが立ち上がる音がした。その音に振り返った男は目を見開く。

そこには、頭から血を流しながら、体から血を流しながらも立ち上がる俊也の姿があった。その目はまだ死んでいない。

「糞餓鬼に何が出来る？　満身創痍のお前に何が」

俊也は前に踏み出す。その足取りは不安定で今にも倒れそうだが男を睨みつける視線は揺らいでいない。

男は顔を怒りで歪めて叫ぶ。

「なら、この女から殺してやるよ！」

全速力で振り返り、全速力で拳を振るう。それだけで満身創痍の俊也は助けることが出来ず、ただの治療兵でしかない委員長を殺すことが出来るはずだった。

だが、そこに委員長の姿はなく、そこにいたのは小さな炎の竜。

男の拳が炎の竜を散らす。

「どこに行きやがった！」

「俊也君！　お願い！」

委員長の声は空から。

男が振り向いた先にはこちらも満身創痍のエレノアが委員長を抱えている姿だった。

俊也が地面を蹴る。
男は笑みを浮かべて拳を振りかぶる。
相手は精霊召喚師。この力は負けないと自信満々に宣言出来る。だから、男は拳を振りかぶる。
対する俊也は満身創痍。ミューズレアルの力を使っているが、最大限までは使えない。でも、たった一つだけ使える最大の力がある。
紫電を最大まで纏い、最大まで加速して男に向かって走る。
それは、ミューズレアルだからこそ出来る最大級の技。
「千破万雷!!」
そして、一つの稲妻と化した俊也は男とぶつかり合う。魔力が吸い取られるのは一瞬。吸い込む量より向かってくる魔力が多いため一種にして男の体に俊也は激突した。
男の体が壁に叩きつけられる。だが、俊也は速度を一切緩めなかった。壊れない建物にひたすら叩きつけられ男。
『今だ、解放しろ』
心の中から聞こえるミューズレアルの声に俊也は力の全てを出し切る。
「くらえーっ!!」

最大の出力で全ての雷を放ちきる。

目も眩むばかりの光が消え去ったそこには服を黒こげにした男の姿があった。

その姿を見た俊也の体から力が抜ける。だが、その場に倒れることは無かった。膝をついた俊也の体を委員長が抱き締める。

俊也の顔の位置はちょうど委員長の胸くらい。

「花子さん？」

「バカ」

委員長が俊也を抱き締める。

「こんなにボロボロになって」

俊也の体が魔術によっと治癒される。俊也が顔を上げると、そこには涙を流す委員長の顔があった。だから、俊也は笑みを浮かべる。

「良かった。無事で」

「良くないよ。良くないよ。俊也君が死んだら私は」

「死なないよ」

俊也が委員長の背中に手を回す。そして、優しく抱き締めた。

「死なない。僕にはみんながいるから、みんなが、いるから。だか

ら、ずっとそばにいてください。僕のそばに」

「はい」

そんな様子を満身創痍のエレノアとアルトは見ていた。二人の顔に浮かんでいるのは笑み。

「一件落着かな」

「そうだね」

二人が言葉を交わす。だが、その声は小さく、二人にだけ聞こえるような言葉。ただ二人は抱き合う二人を静かに祝福していた。

第二百十二話　全ての思い（後書き）

ついに服の色を変える男との戦いが決着。第一章でも出てきたこの男は多分、第四章でも出ます。（笑）覚えていたらですが。

第二百十三話　地下の戦い

由姫の拳がシリーズ０１の拳とぶつかり合う。力はほぼ互角。ほぼ互角だが技術という面では遥かに由姫が勝っていた。

「どうしてあなたは自由に動かないんですか？」

由姫の拳がシリーズ０１の拳を打ち払い、刹那の間にステップした由姫が拳を叩き込む。

拳はシリーズ０１の体に直撃して壁に叩きつけた。

シリーズ０１は崩れ落ちながらも必死に起き上がる。

「あなたには分からない。あなた達には分からない。戦う目的で造られて、使い捨てにされる私達の気持ちなんて」

シリーズ０１が動く。ほんの数ステップで由姫との距離を詰めて由姫に拳を振るう。だが、由姫はそれをいとも簡単に避けた。そして、体が回転する。

シリーズ０１は嫌な予感を覚えて後ろに下がる。その予感は正しく、シリーズ０１がいた場所に由姫の拳が唸りを上げて通り過ぎた。

「わかりませんよ！」

さらに由姫は踏み出す。それに対してシリーズ０１はカウンターの要領で拳を振るい、簡単に受け流された。

「でも、兄さんや亜紗さんは懸命に生きています！　戦いだけじゃない日常を！」

踏み込んだ由姫の体はシリーズ０１の懐に入り込む。シリーズ０１はとっさに後ろに下がろうとするが、背中に壁がぶつかった。

しまったと思うより早く、由姫の拳がシリーズ０１の顎を打ち抜く。

「戦いだけじゃありません。それに、兄さんと一緒なら必ず助けられます。だって、兄さんは天才ですから」

「無理よ。私達はただこの時のために生まれて死んでいくのだから。０２も０３も死ぬ。だったら、私だけ生きていくなんて出来ない」

シリーズ０１の拳がほぼゼロ距離で振るわれる。由姫はその拳を回避することが出来ずまともに直撃して吹き飛ばされた。

すぐさま体勢を戻してシリーズ０１を睨みつける。

「だったら、みんなを助ければいいんですよね。兄さんなら必ずみんなを助けます。だから、こういう無駄な戦いは止めて」

「無駄なんかじゃない」

シリーズ０１は身構える。

「無駄なんかじゃない。私はあなたと戦いたい。駿様にお願いしたの。あなたと、白百合由姫と戦わせて欲しいって。本来なら防衛ラインは第二階層なのに私はここにいる。あなたに勝って、私の存在意義を証明してみせる」

「どうして私と戦いたいのですか？　私よりも強い人なんていくらでも」

「あの時のリベンジマッチ」

由姫はすぐにあの時がいつなのかがわかった。狭間市において由姫はシリーズ０１をカウンターで吹き飛ばしたのだ。

あの時以来、シリーズ０１は由姫に勝ちたいと思った。

「私達シリーズの中で私、０１と０２の二人は戦うことだけをプログラミングされていた。でも、私はあなたと戦いたい。だから、本気を出して。私も本気を」

「わかりました」

その瞬間、由姫の足下がミシッと音を立ててひび割れた。

音姫によって未だに保護されているはずの地面にひびが入った。それは事情を知る者にとっては驚愕に値するもの。シリーズ０１も驚いている。

海道駿は最初、隔壁を吹き飛ばして向かおうとしたが、海道駿ですら術式を破壊することが出来ず断念したのを知っているからだ。

それなのに、由姫の足下にはひびが入っている。

「オーバードライブ。タイムは１５秒です」

由姫がシリーズ０１を睨みつける。シリーズ０１は一歩前に踏み出して、懐に由姫を入れていた。白百合流と里宮本家八陣八叉流に重力魔術を組み合わせた由姫のみの走破術。

我流走破『地走走破』。

そのまま手のひらがシリーズ０１に押しつけられ、シリーズ０１の体が壁に叩きつけられる。

里宮本家八陣八叉流とは少し違う白百合流を組み入れた体術だ。

我流鎧通し『天破絶掌』。

壁に叩きつけられバウンドしたシリーズ０１の体に肘がのめり込みまた壁に叩きつける。そして、再度バウンドした体を今度は逆の肘が回転しながら体に叩きつけられた。

我流破砕『乱舞無破』。

今度は地面をシリーズ０１はバウンドするが、由姫はそれを逃さない。地走走破で加速しながら下から上に打ち上げるように膝がシリーズ０１のちょうど鳩尾に食い込み打ち上げる。

我流走破打破『天地空破』。

打ち上げられたシリーズ０１の体は天井をバウンドし落下する。そこには拳を握りしめた由姫の姿があった。その拳には重力球が纏わり、落ちて来るのを待っている。

そして、タイミングよく由姫はステップをした。

我流重力破『綺羅朱雀・改』。
強烈な一撃がシリーズ０１を壁に叩きつける。シリーズ０１の体は壁に食い込み動かなくなった。
それと共に由姫の体にかかっていたオーバードライブが解除される。
完全に意識を失ったシリーズ０１に向かって由姫は語りかけた。
「これが私の『終わり無き乱舞（エンドレスワルツ）』です。今は眠っていてください。私はバカなのであなたを助けることが出来ませんが、兄さんなら必ず解答を見つけてくれます。ですから、今だけはお休みなさい」
シリーズ０１に向かって由姫は礼をする。そして、階下の階段に向かって飛び降りた。
次の目的地は第二階層の敵の防衛ライン。

「由姫姉、大丈夫かな？」
茜が背後を振り返りながら尋ねる。オレはその言葉に振り返ることなくレヴァンティンを鞘から抜き放って迫ってきていた収束砲を打ち払った。
単発式の収束砲だからこそ出来る芸当だ。照射式の収束砲ならレヴ

ァンティンの力で打ち消すしかない。まあ、そんなのを発動しようと思えばチャージしないと駄目だが。

茜は威力というものを無視して攻撃するからオレが前に出てどうにかしないと。

「由姫なら大丈夫だ。つか、埒が明かないな」

レヴァンティンを握りしめて向かってくる攻撃を打ち払いながら呟く。どうやら防衛ラインが近いからか敵の攻撃がどんどん熾烈になっている。

亜紗もメグも魔術に対しては弱い。一応、亜紗はいくらか強い部分もあるが、七天失星は魔術を打ち払いような頑丈さはない。

「私が一発撃つ？」

「お前が撃ったら人死にが出るだろ。そもそも、一発撃つにしてもチャージする時間が」

「雷王具現化か風王具現化、光王具現化のどれがいい？」

「人の話を聞けよ」

レヴァンティンで連続で放たれた魔術を全て打ち払う。オレは小さく溜め息をついてレヴァンティンを握りしめた。

「レヴァンティン、ちょっとだけ任せていいか？」

『はぁ。どうせ止めたって行きますよね。わかりました。自由にや

っちゃってください。私がサポートしますから』

「オーケー。レヴァンティン、モード？」

そして、オレは地面を蹴った。

レヴァンティンの刃全てを置いてけぼりにして最大の加速で前に進む。

それに反応した相手がさらに攻撃を過激なものとするが、オレは気にすることなく前に進む。反応するのはオレの体の中にある勘だけ。

嫌な気配、死に直結するような嫌な攻撃は全て回避し、回避出来ないものは身につけているナックルで打ち払う。右に左にステップを取り、拳を握りしめて振り回す。

時には滑ったり飛んだり攻撃が当たらないようにあらゆる行動オプションを利用する。背後を通り過ぎた行動は全て自律して動くレヴァンティンが危険なものだけを打ち払ってくれるから安心出来る。

見えた。

物陰に隠れながらこちらに向かって魔術を放つ数が八人と、こちらを睨みつける両手に刀を持った少年に簡易の杖を握りしめる少女の計十人。

オレはストックしていた魔術をいくつも展開する。一瞬にして１０にも及ぶ魔術を一気に放った。そのおかげで弾幕が多少緩み、オレは防衛ラインに飛び込んだ。

「待っていたよ！」

二本の刀を持つ少年が歓喜の笑みを浮かべて飛びかかってくる。オレはとっさにストックしていた魔術を展開した。ストックしていた全て同じ魔術を。

「なっ」

さすがの少年もそれに驚いたのか立ち止まる。オレは笑みを浮かべて左手を上げて目を瞑った瞬間、光が目蓋の下の瞳を焼いた。

オレが発動した魔術は全て目眩まし用の光属性の魔術。殺傷力は全くないが、敵の行動をほぼ１００％止めれるため使い勝手はいい。

オレは目を瞑ったまま魔力粒子の動きから頭の中で地図を作り動き出す。

至近距離から魔術もあれば拳の一閃もあるし、瞬間で収束砲を放つこともする。右に左に魔術を放ち、オレは目を開けた。

そこにはがむしゃらに刀を振り回す少年の姿がある。

光で視界を失った以上、音を立てないようにしているのはさすがだが、味方に当たりそうになっているのは危険だな。

「振り回すのは止めたらどうだ？　坊や」

「海道周！！　まともに勝負しろ！！」

「やだね」

オレは意地悪い笑みを浮かべて答える。それと同時にオレの周囲にレヴァンティンの刃が戻り、オレはモード?から通常のレヴァンティンに戻した。

そこに亜紗達がやって来る。

『大成功?』

「ああ、大成功だ。まあ、さすがにシリーズの二人とは戦えなかったけど」

あまりに時間が短すぎた。少年一人ならどうにかなったかもしれないが、少女の方はすでに杖を構えてオレを睨みつけている。

魔術のレベルはオレよりも上だろう。

「さてと、この二人をさっさと倒して」

「はぁ」

オレの背中がメグの溜め息と共に押される。オレはそれに驚きながら振り返った。

メグは笑みを浮かべながら炎獄の御槍で道の先を示している。

「先に行って。ここは私と亜紗さんの二人でどうにかするから」

『そういうこと。海道駿との決着は周さんと茜の二人ですべき。それ以外の決着は認めない』

「あのな、あの子はどう考えても魔術師だ。相手をするなら魔術師同士で戦わないと危険だ。それに、茜なら負けない」

確かにそういう気持ちはある。オレと茜の二人で全てに決着をつけたい。だけど、そうしたい気持ちはあってもそれは最善の策とは言えない。

予定を大幅に変更しているのだから。

「だから、ここは予定通り」

「だったら、私がいれば大丈夫ですよね」

「由姫!?」

オレは驚いて振り返っていた。確かに、弾幕のおかげで前には中々進めなかったけど、まさか、由姫が合流するなんて。

由姫はオレに向かって笑みを浮かべる。

「兄さんは兄さんの仕事をしてください。私は私の仕事をしますから」

『同感。周さんは周さんのやるべきことがある。だから、進んで』

「私は決着をつけた。だから、周は周の過去と決着をつけて」

由姫、亜紗、メグの三人が言ってくれる。その言葉にオレは笑みを浮かべて振り返った。

茜はすでに準備万端だからか弓形態の隼丸を構えている。

「茜、準備はいいな」

「いつでも」

オレ達は笑みを浮かべ合い、そして、地面を蹴った。

第二百十四話　最大火力（前書き）

身内の不幸や精神的に不安定な時期がありほんの少しだけ休めていましたが、休めたので更新を再開します。おそらく、十一月の内に終わることはできませんが、十二月の初めには第二章は完結出来るはずです。

第二百十四話　最大火力

レーヴァテインの数がぶれる。

巨大な光の翼の出現以降、光はレーヴァテインのコピーの数を上手く制御出来なくなっていた。

多く作る訳じゃない。だけど、いつの間にか数が少なくなっている。コントロールがあまり変わっていないという点だけが僥倖かもしれないが。

光は苦悶の表情を浮かべながらレーヴァテインを一気に展開していた全てを放った。今までで倒し逃した全ての天魔をレーヴァテインのコピーが貫き爆発する。

光はさらにレーヴァテインをコピーする。さっき放った分を補うように。

「コピーの生成が安定せえへんな。あの翼に魔力が吸い込まれているみたいやわ」

小さく呟きながら光はすかさずレーヴァテインを放つ。ゲートから出て来る敵の数はだんだん増えており、このままあの光の翼が増えていけば辛くなるのは明白だった。

だが、光は諦めない。レーヴァテインをゲートに向けたままレーヴァテインのコピーをゲートに向かって放つ。

「絶対に地表には行かせない。学園都市にあんたらみたいな奴らは

入ってきたらあかんから。やから、消し飛べ！！」

レーヴァテインが一気に放たれる。その数は今までより苛烈に、そして、強力になっていた。

「ブラックレクイエム、討ち漏らした敵をお願い！」

楓の言葉と共にブラックレクイエムが自動で魔術陣を展開し、光を射撃する。それにより、楓が放つ八つの光線から逃れた天魔を貫いていく。だが、数に差がありすぎる。

楓は一撃の高さは高いが相手の数が多ければ多いほど討ち漏らしが多くなる。さらには、巨大な光の翼によってかなり弱体化している。

楓は額を流れる汗を袖で拭う。

「準備は出来ているのに、準備は出来ているのにチャージをする時間が」

楓は呟きながら砲撃を行う。だが、だんだん討ち漏らしが多くなっていく。

「バレット、セット！」

楓の言葉と共にいくつもの光弾が討ち漏らした天魔に向かって放たれ貫いた。だが、その間にも天魔は大量にやってくる。

楓はカグラを握りしめる。

このままじゃマズいのは楓も分かっている。巨大な光の翼がなければ負けないとは思うのだが。

いつもなら誰かがチャージの時間を稼ぐ分、こういう状況には弱い。

「せめて、ルネがいたら」

楓の砲撃が天魔を穿つ。だが、その砲撃をかいくぐる霧が密集したかのような天魔の姿があった。その姿を見て楓は唇を噛み締める。

天魔の中でもかなり特殊なファントムミストという天魔だ。個体数が少ないというのもあるが、特殊なのはその特性。

熱量に関する攻撃を受け付けないのだ。つまり、炎、光、雷、闇属性はほぼ全く効かなくなる。一応、斬撃のような斬る攻撃は受け付ける。ただ、炎と光は確実にダメージを受けない。

つまり、楓は光属性の砲撃を得意とするため対ファントムミストには接近戦しか出来ないのだ。

「こういう時にルネがいてくれたら」

「呼んだ？」

その瞬間、ファントムミストの体が何かによって両断された。

楓は声のした方向を振り向く。そこには、デバイスをつけた手袋を

しているショートカットの女の子の姿があった。

「やあ、君ともあろう神剣使いがここまで押されるなんて珍しくない？」

「うるさい。私だってあの翼さえ無ければ圧倒出来たんだから」

そう言いながら楓は砲撃を放つ。ルネはそれを笑みを浮かべながら見ており、そして、魔術陣を展開した。

「『神楽乱舞・崩落打破』のチャージは？」

「準備は出来た。だから、３０秒お願いできる？」

「任されました。リュリエル・カグラに変わってこの私、ヤクモ・ベガルタが相手になるよ」

ルネが魔術陣を展開する。展開した魔術陣がさらに魔術陣に重ねられいくつもの魔術陣が重なり合っていく。さらに、重なり合った魔術陣はさらに規模を広げ、大きく、そして、分厚く展開された。

その魔術陣が展開できたことを確認して楓は砲撃を止める。それと同時に雪崩のごとく天魔が侵攻を開始する。

だが、その瞬間に魔術陣は発動した。

「結界術八雲式第八星雲。式名『ベガルタ』」

ルネの言葉と共に魔術陣が魔術を発動させる。だが、天魔はそんなことを気にせず侵攻し、

溶けて消え去った。

視力の高い人物なら見えるかもしれないゲートを取り巻く魔術陣。ルネの発動した魔術はゲートを囲む結界術式だった。だが、結界術式とは少し違う結界術でもある。

それを知っているのは数少ないが、その能力を知っているのはルネの上司でもあるアルエル・ロワソと楓に冬華の三人。

「ルネ、チャージを開始するから」

「いいよ」

ルネがさらに術式を展開する。

ルネの術式の展開の仕方は独特だった。その手に取りだした筆を握り締め、空中に走らせる。それと共にそれをなぞるように魔術陣が浮かび上がり効力を発揮する。だが、描くのは筆だけではない。時には筆を握っていない手や足を動かして複数の魔術陣を展開する。もちろん、通常の魔力を使った魔術陣の展開も同時並行して行っていく。

複数の魔術陣を同時に組み合わせることで大きな力を発揮させることのできる技能。それは個人の所有するレアスキルとでも言うかのような難易度を誇り、その威力は絶大。ルネはそれをいとも簡単に成し遂げていた。

その近くで楓がカグラを構えている。

「我が名、木村楓の名において、神剣カグラに命じる」

その瞬間、カグラの穂先を中心に魔術陣が展開された。その魔術陣は大きく、そして、八つの円が回りながら中心にある魔術陣である円を囲んでいる。

その全ての円の中心では魔力の収束が始まっていた。

「世界を清めし神楽の力、今この地において顕現せよ。存在は粒子に、敵は灰燼に、世界を清め、世界の崩落を進めし存在を打破する力を」

詠唱が続く間にだんだん収束する魔力の塊は大きくなっていく。その大きさは次第に広く、そして、視界を埋め尽くすほどになっていた。

「星の力を今ここに、原初の力を今ここに、始まりの力を今ここに、神の力を今ここに！」

カグラの穂先が震えだす。これ以上の収束は不可能であるという合図。それをカグラは示している。

楓は叫んだ。

「神剣解放！　『神楽乱舞・崩落打破』！！」

その瞬間、光が視界を埋め尽くした。九つの光がほんの刹那の間に光を包み込む。

楓の持つ最大にして最強の神剣解放攻撃。神剣であるカグラしかで

きない最大の砲撃奥義でもあった。

カグラから蒸気が噴き出す。カグラ内部にある熱を外に逃がしているのだ。楓は小さく息を吐いて空を見上げた。

そこにはゲートの姿はない。『神楽乱舞・崩落打破』の光がゲートごと天魔を消し去ったのだ。そこにはファントムミストもいたであろうが、光の奔流の前では消し去られたらしい。

楓は未だに現れている光の翼の方を向く。そこには四肢をもがれたリーゼフィアとリアクティブアーマーを付けた対艦刀を握り締めるダークエルフ。そして、ようやく到着したイグジストアストラルの姿があった。

「楓？」

その方向を向いている楓にルネは声をかける。

「私は見届けるよ。全ての選択を。それが、カグラを持った運命だから」

「楓、何を言っているの？」

楓の言葉にルネが首をかしげる。対する楓は少しだけ笑みを浮かべた。

「何でもない。ただの独り言だから」

『ひと、ごろし、め』

声が聞こえる。声が聞こえるけど意味がわからない。一体何を言っているのかわからない。僕の耳がおかしくなったのか相手の口がおかしくなったのか。

そんなことはどうでもいい。本当にどうでもいい。

ただ、こいつを殺せばいい。四肢は千切った。精神感応がないのは残念だ。もし、あったなら今頃悲鳴で綺麗な声を聞かせてくれていただろうに。

『ははおや、も、ちちおや、も、ころすの、か』

殺す。殺してやる。殺して殺して殺し尽くしてやる。お前らが生きていいことなんてない。

「死ね」

持っていた対艦刀を振り下ろそうとする。だが、その対艦刀は根元から折れていた。

いつ折れた？　関係ない。折れたということは敵が来たということだ。敵が来たということは戦えるということだ。殺せる。もっと、もっと殺せる。

振り返った。振り返ってその先を見る。そこには、背中が翼のように展開している蒼鉛色のフュリアスがいた。

イグジストアストラル。最も硬いフュリアス。

『悠人』

声が聞こえる。でも、意味がわからない。だから、殺そう。誰が乗っているかわからない。だから、殺そう。

『返事をして！　悠人！』

「うらぁっ！！」

対艦剣を取り出して振り下ろす。だけど、イグジストアストラルは簡単に避けた。

『悠人！　私だよ！　鈴だよ！　お願いだから、返事をして！！』

「殺す。殺す。殺して、殺して、殺してやる」

口から声が漏れる。殺せばいい。全て殺せばいい。そうすれば、そうすれば、

きっと、ルナは寂しくないから。

第二百十四話　最大火力（後書き）

残る戦いは五つ。光のゲート攻防戦。中央の広場における防衛戦。地下におけるシリーズとの戦い。悠人との戦い。そして、周達の戦いです。予定では後、１５くらいになると思います。そこまでのお付き合いを。

それと、ルネの武装ですが、彼女の戦い方はとても面白いものになっています。後々書く時には凄まじい戦いになるんじゃないかなと。

第二百十五話　空の民（前書き）

第一章第百四十話で出した、悠人がみんなに見せた姿。それは光の翼です。

第二百十五話　空の民

「悠人！！」

鈴が叫びを上げる。だが、その叫びはむなしく対艦剣がイグジストアストラルの体を吹き飛ばした。

イグジストアストラルが地面に打ち付けられ、コクピットに乗っている二人の息が一瞬だけ止まる。だが、その間にも悠人は止まっていない。そのまま対艦剣を振り上げて斬りかかってくる。

鈴はとっさに全てのブースターを展開してその場から飛び退いた。

『逃がさない』

唐突に聞こえる悠人の声。その瞬間、ダークエルフの左の甲からワイヤーが放たれた。ワイヤーはイグジストアストラルの足に巻きつく。

鈴はとっさに出力を全かにしてそのワイヤーを振り切ろうとした。だが、引っ張られる。そして、叩きつけられた。

「っつ、悠人」

すかさず機体を起こすが、目の前に迫っていた対艦剣がイグジストアストラルを直撃し、その場に倒す。すると、ダークエルフはイグジストアストラルの上に馬乗りになってスラッシュナイフを取り出し、振り下ろす。

イグジストアストラルの装甲は壊れないが、衝撃を緩和することしかできない。イグジストアストラルのコクピットを断続的に衝撃が襲う。

「悠人」

「鈴、周囲のモニターを、自由に使って、いいですか？」

「大丈夫、だと思うけど、使い方は、わかる？」

「はい」

衝撃で言葉を途切れ途切れにしながらも二人は言葉を交わす。

後部座席に座るメリルは小さく息を吐いて周囲の装置を起動させていく。

イグジストアストラルは複座式であり、前部座席がイグジストアストラルの操作全般、後部座席がイグジストアストラルの各種センサー及び、後部カメラを見ることが出来る。

メリルは嫌な予感と共に全てのモニターを開いて周囲の様子を見る。

ルナの機体、アストラルブレイズの姿が見当たらないのだ。先にここに向かったはずであり、ルナの実戦における操作技術はかなり高い。だから、負けることはないとメリルは思っている。なのに、その姿がなかった。

見かける様子は、リーゼアインとリーゼツヴァイのコクピットがリースによって開かれ、中にいたパイロット二人に光の剣を突きつけ

ている様子。四肢をもがれたリーゼフィア。そして、コクピットに当たる部分がちょうどない二つに分かれたアストラルブレイズ。

それを見た瞬間、メリルは息をするのを忘れていた。あのアストラルブレイズはどう見てもルナの機体。その機体がコクピット部分を吹き飛ばされている。

つまり、ルナは戦死した。

メリルの瞳から涙が流れる。止めようとしてもどんどん流れて行く。止めることが出来ない。何故なら、それは幼馴染の、親友の死だから。

「メリル？　メリル！？」

異変に気付いた鈴が通信を切りながらメリルに向かって大きな声を出す。その時になってメリルはようやく息をすることが出来た。

酸素を要求する肺に大きく息を吸って吐くことで供給しながらメリルは落ちつこうと必死に堪える。だけど、堪えることが出来ない。涙が、流れる。

「今は戦場だから！　落ちついて！」

「でも」

「でもじゃない！　落ちつかないと、次に死ぬのはメリルなんだから」

「どうして」

鈴にはまだこのことは言っていないはずだった。だが、それでも鈴はわかっていた。ルナが死んだということを。

「ただの理由で悠人が暴れるわけがない。それは私達が特に知っていることでしょ？　それに、先に向かったはずのルナの姿がないということは」

メリルは俯いた。今まで実戦に出たことがないからこそ、死、というものを見た瞬間にパニックになってしまったのだ。対する鈴はフユリアスとの戦いでは人を殺すことがある。悠人みたいに四肢を破壊して戦闘不能にできる技術は鈴にはないからだ。だから、ある意味鈴は感覚が麻痺していると言ってもいい。

「それよりも、今は悠人を救わないと。このままだと、魔力が集中しすぎて爆発する」

『そのことについてだが、一つだけ案がある』

通信を切っているはずの通信機から浩平の声が流れる。その時になってようやく二人は今まで断続的に襲いかかっていた衝撃がないことに気づいていた。すぐに鈴は通信を開き、周を見渡す。

そこには、対艦剣をぶつけ合うソードウルフの姿があった。

『悠人！　目を覚ましてよ！』

リリーナの悲痛な声が響く。少し離れた場所ではアストラルルーラとアストラルソティスの二機が分かれたアストラルブレイズの傍で立っていた。

『ダークエルフのエネルギー機関。そこに直接、弾を叩き込む。そして、機能停止にする。今はそれしかない』

「でも、どうやって機能停止に？　リアクティブアーマーがある以上、ダークエルフには」

『だから、そのリアクティブアーマーを破壊する作業をお前らにやってほしいんだ』

「問題は、リアクティブアーマー以外のもう一つあります」

鈴の背後から聞こえる冷静になったメリルの声。メリルは一度深呼吸をして小さく頷いた。

「それは、悠人が空の民だということです」

「空の民？　それって、何？」

『確か、大昔に世界を支配していたとされる存在だな。空の民＝神という解釈が一番正しいように思えた奇術だったと思う』

「よく知っていますね」

メリルの声は驚きを含んでいた。

『竜言語の本に書いてあった』

地味にバカにされているとは気づかずに浩平が誇らしげに返す。それにメリルは少しだけ苦笑して口を開いた。

「空の民というのは解釈はそれで正しいと思います。ですが、空の民には第六の感覚があります」

「それって、第六感のこと？　勘とかそんな感じの」

聴覚、嗅覚、味覚、視覚、触覚以外にあるとされるもう一つの感覚。それが第六感だ。

その存在は完全には確定されてはいない。だが、勘という部分はそこからされているとされ、実在しているかわからないが、その存在は信じられている。

「はい。空の民はそれが第六の感覚となった種族です。特徴は魔力によって形成され、微弱な魔力を吸収する光の翼。もう一つが、危機に瀕した時に起きる予感。その予感の的中率は１００％とされ、空の民を殺すには慢心を誘うしかないとも言われています」

『なるほど。確かに悠人の化け物じみた回避能力を考えると的を得ているな』

「おそらく、悠人はあなたの射撃を完全に読むでしょう。ですから、私が合図を送ります。そのタイミングでお願いできますか？」

『任せとけ。俺を何だと思っている』

「変態さんです」

メリルは苦笑しながら答えた。そして、小さく息を吸い込み通信を開く。

「ルーイ、リマ、聞こえますか？」

『メリル』

スピーカーから聞こえてきた声は泣いているルーイの声だった。メリルはその声を聞いて泣きそうになりながらも必死に堪えて唇を動かす。

「今すぐダークエルフのリアクティブアーマーを破壊してください」

『メリル。あなたは悲しくないのですか？　ルナが』

「誹謗中傷は後でいくらでも受け付けます。血の通っていない冷血鬼と罵ってくださって結構です。でｓが、今は悠人のリアクティブアーマーを破壊してください」

『何故』

ルーイからの戸惑いの声。それにメリルは唇をかみしめて堪える。堪えなければ泣いてしまう。幼馴染でも、そんな姿は見せたくない。何故なら、

メリルは音界の代表だから。

「命令です」

その言葉と共にメリルは通信を切った。

「メリル」

「大丈夫です。罵られる覚悟はできています。いつでも、それこそ、二人が離れて行っても我慢できます。でも、悠人を、大切な人をもう一人失うのは我慢できません。ですから」

「メリル、命令して。今の私はメリルの剣だよ。イグジストアストラルという、アストラルシリーズの最高峰の存在。だから」

「だから、悠人を、救ってください」

その言葉に鈴は頷いた。覚悟を決めた。

今まで、イグジストアストラルは前線に立ったことが少なかった。それは、鈴というパイロットが元々は後部座席に乗ることを想定していたからで、射撃は出来ても近距離での戦闘は全然だったからだ。だから、鈴は覚悟を決めた。

そして、出力を最大にしたまま加速する。

「リリーナ、どいて！！」

その言葉に反応したソードウルフが後ろに飛び退く。だが、ダークエルフは違った。ダークエルフは真正面からイグジストアストラルを受け止める。

「悠人、あの時、あなたが私を救ってくれたように、今度は私達があなたを救う。だから、待っていて！！」

第二百十五話　空の民（後書き）

空の民の説明を見て、「あれ？　もう一人当てはまるような」と思っていただけましたか？　思っていないと言う方がいたなら、本当にごめんなさい。

第二百十六話　最終地点

「ここ、だよな」

オレは足を止め、目の前にあるものを見上げた。そこにあるのは閉じた巨大な扉。普通に手で押して空くような大きさではないが。

「そうだと思うけど」

隣にいる茜が不安そうに口にする。今まで、全ての隔壁やトラップは解除されていた。だが、ここの扉だけは閉まったままなのだ。もしかしたら罠かもしれないが、今のオレには奥の手は三つ残している。だから、大丈夫だろう。

オレは息を吸い込んで、そして、手のひらを扉に当てた。その横に茜が手のひらを当てる。

「お兄ちゃん、一緒に押そうよ」

「そうだな。ここからはオレ達の最後の戦いだ」

あの日から、いや、あの日よりももっと前、オレと茜が産まれ、能力の差が歴然とした瞬間から始まったことだ。

オレは海道家の中で役立たず、不良品等々、様々なことを言われた。対する茜は神童やら天才やら、ともかく凄かった。オレの凄さはまやかしだったし、自分の力なんてちっぽけなものだった。でも、オレは今までの人生を後悔していない。

「お兄ちゃん、この戦いが終わったら、一緒に暮さない？」

「白百合家に来るってことか？」

「うん。今まではずっと病院だったから、音姉や由姫姉にかけていた迷惑をどうにかしたいなって」

「あのな、オレも由姫も音姉もお前に迷惑をかけられたなんて思っていないんだよ。むしろ、迷惑をかけたのはオレの方だった。ずっと、借りっぱなしだったもんな」

ずっと、あの日からずっと、オレは茜の核晶を借りていた。茜の力を自分の力に見せて、天才の力を自分のものだと見せていた。多分、オレは子供だったんだろう。ずっと、子供だった。

強くならないとまた捨てられるとでも思っていたのかもしれない。自分の力がなくなったらみんなが離れていくかもしれないと思ったのかもしれない。

「だから、この戦いを終わらせて、親父にたくさん、それこそ一日中文句を言ってやろうぜ。親父はただ、世界を救いたいだけなんだ。だから、オレは親父の考えを真っ向から否定させてもらう」

「受け入れないんだ」

「誰が好んで犠牲を出す戦いをするかよ。犠牲なんて出さない。みんなを守ってこそオレだ。守れなかったからな。狭間市でも」

あの時、オレは千春を救うことが出来なかった。全てはオレがやられたから。だから、今度こそ、この戦いだけは、第７６移動隊のみ

んなを守りたい。音界からきているメリルやルーイ達も大丈夫のはずだ。だから、オレ達はここで親父を止める。

そして、戦いを終わらせるんだ。必死に地上で戦っている都やアル達を助けるために。

「お兄ちゃんらしいね。お兄ちゃんは私を見捨てなかった」

「当たり前だろ。妹なんだから」

「違うよ。お兄ちゃんは私のせいで散々言われていたんだよ。お父さんやお母さんから愛情すらもらっていなかった。だから、お兄ちゃんは私を恨んでもいいはずなのに、私を怨まずに、むしろ、助けてくれた。多分、その時から、産まれたときからお兄ちゃんという考えが出来ていたんじゃないかなと私は思うの。どうかな？」

「確かに一理あるな。だったら、お前に感謝しないとな」

多分、茜が生まれなかったら今のオレは無かったから。

「だから、ありがとう」

「私も、ありがとう」

そして、オレ達は同時に扉を押した。扉は何の抵抗もなく開き、そして、姿を現した。

中央にある巨大な装置。そこにある巨大な透明の筒。そこには一本の棒があった。その棒は光っている。そこに書かれている文字は、

「『悠遠の翼と成りし力』。やはり、この地にあったか」

親父が装置の前に立って見上げている。そして、オレ達の方を振り返った。

「早かったな。もう少し時間がかかると思っていたが」

「悪いな。優秀な仲間がいるんでね。親父、もうあんたは終わりだ。すでに学園都市は動き出している。オレ達だけじゃない。学園都市の『ＧＦ』全てが動いているんだ。もうすぐ学園都市の地上部分は制圧できるだろうな」

「そんなことはわかっている。元々、地上は捨て駒にするつもりだったからな。私の目的はただ一つ。この存在を世に知らしめるため」

そう言いながら親父は装置の方を指さす。オレはレヴァンティンの柄に手を置いた。

「それにはオレも同感だ。だけど、それがお前の目的では」

「だから、対話をしようではないか」

親父が笑みを浮かべる。その瞬間、オレは親父が最後にしようとしていることに気付いた。その可能性を完全に考えていなかった。親父がやろうとしていること、それは、

学園都市の中核ともいえるこの装置を世に知らしめ、世界の滅びについて世界に知らしめること。

オレが出したのと同じ作戦か。

「どちらが正義かと聞かれれば、自分達が正義だ。勝った方が正義だ。だが、戦いだけではそれは正義とはいえない。だから、味方を増やせばいい。この世界は民主主義。みんなの言葉があることによって世界は動く。ならば、味方につけようではないか。その相手として、お前は相応しい」

「お兄ちゃん」

茜がオレの手を握り締める。不安なのだろう。でも、大丈夫だというようにオレは茜の手を握り返した。

多分、この様子は全世界に中継されているかもしれない。学園都市だけかもしれない。でも、オレはその方が都合がいい。

「そうだな。わかった。海道駿。対話による相対。その条件を呑んでやる。そして、オレが先に話させてもらうぜ。親父はオレの主張が終わった後だ」

その言葉に親父は微かに驚いた。普通、こういうものは後から話した方が有利だからだ。だが、今回は違う。後から話して有利なんて考えない方がいい。

「いいだろう」

「後悔するなよ、その言葉。どうせ、全世界に繋げているんだろ？」

「察しがいいな」

それでいい。それで、全ての部隊は揃った。

今からやるのは世界に対する喧嘩。

「先に一言いってやる。世界は本当に滅ぶのか？」

その言葉に親父は完全な呆けた顔になっていた。当り前だろう。今から話そうとしているのは世界に対する世界の滅びについての対話。おそらく、親父の後ろには国連がついているに違いない。だから、全世界に発信なんて真似が出来るのだろう。

国連はそれを武器として使おうとしている。『ＧＦ』はその事実を知っていたということを追求しようとしているのだ。それを黙っていたということは後ろめたさがあったということ。だから、国連は親父を使って世界に認知させようとしている。まあ、学園都市内では認めているんだけどな。

「何を」

「だから、何の根拠があって世界が滅ぶのかな、と思ってさ。まあ、確かに、『ＧＦ』内では世界が滅ぶ、っていう話はあるんだ。狭間市における魔界の事件や真柴・結城両家による事件も、世界が滅ぶことを前提としている。だから、それはどうして滅ぶとわかっているんだ？」

「それは」

親父が完全に言葉に詰まった。多分、逆のことをされたならオレだって言葉に詰まっただろう。それほどまでにそこまで信じられているかわからない。

まあ、みんなの言葉を信じないわけじゃない。今回の目的の最大の問題はちゃんとした証拠がないのだ。あるのは記憶のみ。もし、世界が滅びる証拠、いや、あるにはあるが、それを提示してしんじられるような証拠があるかどうか。

はっきり言うなら無理だ。

「世界はいつ滅ぶ？　世界はどうして滅ぶ？　世界はどうやって滅ぶ？」

オレはいくつも疑問を投げかける。全てに答えられたとしてもまだ挽回できる質問だ。

「それは」

親父はまた言葉に詰まる。確かに親父達が考えた作戦は正しい。それを上手く戦えば苦戦は必須だっただろう。だから、オレは純粋な疑問をぶつける。

「オレだって世界が滅ぶと聞かされて何とかしなくちゃと思うさ。だけどな、世界が滅ぶと知っていても、オレの疑問を答えることのできる人物はここにはいない。違うか？」

「くっ」

「何も答えられないのに世界が滅ぶなんて『ＧＦ』が言えると思うか？　親父達は『ＧＦ』が隠している。隠して世界を滅ぼそうとしていると思っているがオレは違うな。不確定な要素だから隠しているんだ」

「だが、それは確実にやってくる！　それを知らせないのは」

「大地震はいつかやってくる。だから、今の内から備えておけ。お前の言いたいことはそういうことだろ？」

オレは笑みを浮かべて答える。確実にやってくるのは自信も同じだ。南海地震、東南海地震など一定周期で回ってきている。つまり、それこそこの周期でやってくるから備えておけということと同じだ。

違うのは規模の大きさ。

地震なら、その地域から逃げだせばいい。だが、滅びは違う。どこに逃げ出しても死ぬのだから混乱するのは当たり前。無用な混乱を起こした犯人となるだろう。

「だが、お前は世界が滅びると言うことを認めたはずだ！　それは学園都市にいる誰もが答えるだろう！」

「そうだな」

オレはすんなり親父の言葉を認める。だから、認めた上でこう言ってやる。

「さすがに、人界、音界、魔界、精霊界で同じような話があったなら認めるしかないだろう。ただ、根拠がない。それぞれの勢力が動く以上、これは大事だ。だから、オレは認めている。でも、そういう疑問を持っているのは事実だ。世界は滅びはしない。そう断言出来ればどれだけいいことだろうな。だから、今、この映像を見ている全員に尋ねたい。世界をどうしたいのか」

オレは尋ねる。世界に向かって。

「滅びという未来が可能性の一つとしてある。それはたくさんの証言から信じるしかない。何なら、承認を連れてきてもいい。だから、みんなに尋ねたい。世界をどうしたい？　今まで無用な混乱を避けるために事実を隠していた『ＧＦ』を断罪するか？　世界が滅ぶから滅ぶまで自由に過ごすか？　世界が滅ぶなんて信じないか？　それとも、戦うか？」

オレはレヴァンティンを鞘から引き抜く。

「オレは戦う。そもそも、この学園都市はオレ達学生の街だ。お前達なんてお呼びじゃないんだよ」

「全てを決めるのはやはり力か？」

「力があるものが全てを引っ張る。世の中の真理だろ。親父の考えは『ＧＦ』を壊して新たな秩序の下、世界を救うこと。オレの考えは今の大勢のまま、全ての世界と強調すること」

茜がオレから手を離し、隼丸を握り締める。

「どちらかが正しいなんて決めない。こんなところで決めても意味がないからな。だから、オレはオレのやることをする。第７６移動隊隊長として、学園都市を混乱させ、多数のけが人を出し、『ＧＦ』の業務を妨害した組織の頂点である海道駿を現行犯で捕まえる。ただ、それだけだ」

そして、オレは地面を蹴った。

第二百十七話　生体兵器

白刃が煌めく。由姫はそれをギリギリで受け流して後ろに下がった。
それと同時に白刃が由姫のいた場所を通り過ぎる。

「避けてばっかりじゃ、面白くないよ！」

シリーズ０２の攻撃は熾烈にして苛烈。由姫ですら防戦に回らないと厳しい状況でもあった。

由姫が後ろに下がった瞬間、シリーズ０２が前に飛び出す。だが、その瞬間に亜紗が入り込んでいた。

シリーズ０２の刀と七天失星がぶつかり合う。

「お姉さんが、同じ生体兵器だよね？」

その言葉に亜紗が小さく頷いて力任せに吹き飛ばす。シリーズ０２は笑みを浮かべながら着地した。

「二人共、下がって！」

二人が前に出ている間に詠唱をしていたメグはすかさず炎属性の収束魔術を放つ。だが、それは突如として展開された花びらのような何かによって受け止められた。

メグは微かに目を見開きながら次の魔術を、

「ご、ごめんなさい！」

その言葉と共に花びらがメグに向かって襲いかかった。メグはすかさず炎獄の御槍を握りしめて花びらを打ち払う。

「０３の花びらを打ち返した？　０３、あれは神剣だよ！」

シリーズ０２の言葉にシリーズ０３は微かに体を震わせてメグを見る。

その言葉の意味を理解したメグは炎獄の御槍を握りしめて前に出る。

「神剣、が必要ですよね。私が前に出ます」

「駄目です。メグさんの速度ではあの二刀流にやられます。ここは私が」

『由姫もキツいと思う。私は神剣があるから大丈夫』

「亜紗さんの神剣は使用回数かありますよね？　ここは私が」

「あのさ、お姉さん達」

シリーズ０２が少し呆れたように話しかける。その言葉に三人は振り向いた。すると、そこに見えるのは様々な形の花びら。

いや、花びらがメグ達の周囲を覆い尽くしている。

「バカだよね？」

その言葉と共に一斉に花びらがメグ達に襲いかかった。

だが、由姫は軽く笑みを浮かべている。

「どんな力かわかりませんが」

由姫の言葉と共に全ての花びらが地上に落下した。そのまま由姫は前に出る。対するシリーズ０２は前に踏み出して、吹き飛ばされた。

「なっ」

シリーズ０２は由姫の背後にいる亜紗を見る。そこには、亜紗が魔術陣を展開している姿だった。

由姫の神への重力（グラヴィタス）による重力制御によって花びらを落とし、前に飛び出した由姫を囮に亜紗が魔術を放つ。

見事な連携攻撃だった。それが見事にハマっている。

由姫はそのままシリーズ０３に向かって突撃する。シリーズ０３は慌てふためいてその手にいくつもの簡易杖を取り出していた。

由姫はさらに加速して拳の一撃を、

「こ、来ないでください！」

その瞬間、由姫は大量の魔術陣が瞬間で展開されるのを見ていた。どれもが強力な魔術。

すかさず重力魔術自体を自分に叩きつけて強制的に距離を取る。だが、目の前にいくつもの魔術が迫っていた。

重力魔術を使った防御を構築をしながらさらに自分に向かって重力魔術を叩きつける。そして、由姫の体をいくつもの魔術が貫いた。

「くっ」

体中を貫かれる感覚を受けながら由姫は後ろに下がる。

「由姫！」

後ろに下がった由姫にメグは駆け寄った。由姫の体は血だらけでありすでに戦えるような状況じゃない。

「よくやった！　０３！」

その隙に立ち直ったシリーズ０２がメグと由姫に斬りかかる。だが、それを亜紗が間に入り込んで刀を受け止めた。

メグはとっさに治癒魔術陣を展開するがそれほど得意じゃない治癒魔術では回復は遅い。

由姫はそれを止めるように手を出してシリーズ０３を睨みつける。

「な、なな、なんですか？　に、睨みつけないでください！？」

シリーズ０３は必死に魔術を展開する。だが、魔術は発動しない。

「やはり、ですか」

「由姫？」

「あの方、シリーズ０３は簡易杖一つにつき極めて強力な魔術が放てます。ただし、一回だけ」

その言葉にシリーズ０３はぴくりと体を震わせた。図星のようだ。

シリーズ０２はそんな様子を唇を噛み締めて見ている。正面にいる亜紗はそんな様子を冷静に見つめていた。

「対策さえわかればいくらでもやりようはあります。ですから」

由姫はメグを見つめた。その瞳に込めた意味を感じてメグは頷く。そして、メグは炎獄の御槍を握りしめた。

由姫はすでに満身創痍で戦える状況じゃない。だからこそ、由姫はメグに託したのだ。

「こ、来ないで、ください。ま、魔術を、放ち、ますよ」

シリーズ０３が簡易杖を構える。だが、その簡易杖は持ち替えていない。だからこそ、メグは前に踏み出した。

シリーズ０３が慌てて杖を放り投げる。だが、それより早く身体強化を最大限まで行ったメグがシリーズ０３の懐に入り込んでいた。

シリーズ０３が目を見開きながら簡易杖を取り出す。だが、遅い。すでにメグは炎獄の御槍を握りしめて振っていた。

炎獄の御槍がシリーズ０３の胴体に食い込みそのまま壁に叩きつける。シリーズ０３の手から簡易杖が落ちてそのままシリーズ０３は

崩れ落ちた。

メグはシリーズ０３に炎獄の御槍を突きつける。

「私の勝ち、だね」

「役立たずが」

負けたシリーズ０３に言葉を吐き捨てるシリーズ０２。その瞬間、亜紗は前に駆け出していた。そして、鞘から走らせる。

シリーズ０３も同時に駆け出し、そして、白刃が宙を舞った。

亜紗が抜いたのは矛神。上手く調節された矛神はシリーズ０３が持つ刀の一つを根元から斬り裂いたのだった。

それにシリーズ０３が動揺する。亜紗はすかさず矛神を手放して七天失星を鞘から走らせた。鞘から走らせた七天失星はシリーズ０３が持つ刀を打ち、半ばから折る。

「なっ」

今度こそシリーズ０３は言葉を失った。亜紗は七天失星をシリーズ０３に突きつける。

『降参して。あなたに勝ち目はない』

「何が違うんだ。何が、生体兵器として違う！？　僕はお前よりも完成された生体兵器だ！　なのに、何故！？」

『生体兵器として完成されていても、それは本来の強さじゃない。あなたは強さを履き違えている』

「履き違えている？　そんなはずはない。僕は」

「そうさ。０２。お前こそが最強の生体兵器だ」

突如として聞こえてきた言葉にその場にいた全員が振り向く。そこにはメガネをかけたやせ細った白衣の男とその背後には肉塊があった。

男は笑みを浮かべている。対するそれを見つめる亜紗の視線には驚愕の表情が浮かんでいた。

「久しぶりじゃないか。ＮＯ．１００２。いや、妖精（フェアリー）」

亜紗は口を開く。だが、そこからは声が出ない。

「そうか。そう言えば、お前から声を奪ったのは私だったな。あの時期、唯一の成功体でありながら反抗したお前から声を奪った。くっくっくっ。憎いか？　悔しいか？」

「あなたは誰ですか？」

由姫が血だらけの体に活を入れてゆっくり起き上がる。だが、誰が見ても戦闘出来るような状況ではなかった。

メグは一瞬だけシリーズ０３を向き、反抗する気が無いと感じ、由姫の隣にまで戻る。

「海道周なら知っているかもしれないな。生体兵器ではなく人間のカテゴリーにいながら生体兵器の部品が最も馴染んだ海道周を改造した者」

「あなたが、兄さんを」

「おや。君は白百合由姫か。白百合家の異端児。どうだ？　力が欲しいなら」

「私は兄さんと共にある。そんなまやかしの力に私は頼らない」

由姫がそう宣言すると男は軽く肩をすくめた。ついでに呆れたように溜め息をついている。

「そうか。なら、死んでいいよ」

その瞬間、肉塊が動いた。肉塊の内部から血のような何かを吹き出して触手が由姫に向かって放たれる。メグはとっさにその触手を払った。

炎獄の御槍を纏う炎が触手を焼き、人間の体が焼ける臭いが充満する。

「何？　この臭い」

そんな体験をしたことがないメグは気持ち悪いと感じながら周囲を見渡す。だが、臭いの発生源はあの肉塊からでしかない。

「炎の槍、か。確かにこいつには強いな。シリーズ０２。選べ。ここで死ぬか、生体兵器として最強の存在になるか」

「決まってる。最強の存在を！」

シリーズ０２はすかさず答えて亜紗の七天失星を払った。亜紗は後ろに跳ぶが、シリーズ０２は肉塊に向かって走り出す。

まるで、何をするかわかっているかのように。

「駄目。行っちゃ、駄目！！」

シリーズ０３の叫びが空間にこだまするとと同時に肉塊から出た触手がシリーズ０２を包み込み呑み込んだ。

「フハハハハッ。ついに、ついに完成したぞ。最強にして最高の生体兵器が」

「ただの肉塊だよね？」

メグが炎獄の御槍を構えながら尋ねる。

男はニヤリと笑みを浮かべてその場にいる四人を見つめた。

「ただの肉塊？　違うな。これは出来損ないのシリーズと０１、０２の体を使った究極の生体兵器だ」

「０１？　シリーズ０１に何をしたのですか？」

由姫が拳を握りしめる。それに男は気づいていない。

「取り込んだのさ。抵抗はされたが、ボロボロだったあいつに何か

出来るわけがない。失敗作だったからな。同じ力を与えたはずなのに」

「あなたは、あなたは人の命を何だと思っているのですか！？」

「実験道具。それ以外に何がある？」

その瞬間、由姫は地面を蹴っていた。全力で距離を詰め、拳を振り切る。だが、その拳は肉塊から伸びた触手によって受け止められていた。

由姫は目を見開く。

「さあ、最高傑作の前に消え去るがいい！」

その言葉と共に由姫に向かって大量の触手が放たれる。だが、それは通り過ぎた炎が一気に焼き尽くした。

「炎閃！」

メグが炎を纏い、迫り来る触手に向かって炎獄の御槍を振りながら由姫を回収。後ろに下がる。

だが、触手は絶え間なくメグ達に襲いかかる。

「手数が多い！」

「すみません。私が戦えないばかりに」

「違う。由姫のせいじゃない。多分、由姫とは相性が、きゃっ」

メグはとっさに炎を収束させて壁を作り上げる。だが、その壁を触手は通り抜け、二人の体を弾き飛ばした。

二人は仲良く壁に激突し、メグの手から炎獄の御槍が落ちる。

「さあ、死ね」

大量の触手が二人に向かって放たれる。二人は何も出来ない。死ぬ、と二人は思い、目を瞑った。

「させない」

その瞬間、誰の耳にも聞き覚えのない声が響いた。それと同時に触手が細切れになって落ちる。

「させない。そんなことはさせない」

そこにいるのは亜紗。亜紗が口を開いて男に向かって話している。

「あなたは私が、この手で倒す！」

第二百十八話　歌姫の祈り

イグジストアストラルの砲撃がダークエルフの体に直撃する。だが、それはリアクティブアーマーによってほぼ散らされ、ダメージはほとんど入っていない。

対するダークエルフは対艦剣を握りしめて振りかぶっている。イグジストアストラルは腕を交差して対艦剣を受け止めた。

「っく」

やって来る振動に鈴は小さく声を漏らした。その瞬間にメリルは背中の砲の一つを放った。だが、ダークエルフは軽く後ろに下がって対艦剣で払う。

反応速度がかなり速い上にリアクティブアーマーを破壊するのが至難の技。このままでは魔力が収束して爆発する方が早い。

「リアクティブアーマーさえ破壊出来れば！」

メリルはそうボヤくがダークエルフのリアクティブアーマーはなかなか破壊出来ていない。いくらソードウルフやアストラルルーラ、アストラルソティスが砲撃を加えてもリアクティブアーマーが剥がれないのだ。

「どうすれば」

鈴は背中の砲を一斉に撃ち込みながら小さく呟く。

どうすればダークエルフを止められる？　どうすれば、リアクティブアーマーを破壊出来る？

二人の頭の中にあるのはそれだった。

リアクティブアーマーを破壊出来なければダークエルフはほぼ無尽蔵の力があると言っていい。攻撃力も、防御力もリアクティブアーマーは極めて高い。

メリルは何かに突き動かされるように通信を開いていた。

「これで終わりじゃ！」

アル・アジフの言葉が響き渡る。それと共に一斉に放たれた魔術が突撃してきたローブの集団を吹き飛ばしていた。

アル・アジフは小さく息を吐いて魔術書アル・アジフを閉じる。

「ふむ、どうやら最後の攻撃だったようじゃな」

「そうみたいです。『ＧＦ』の通信を聞いている限り、敵集団は降参を始めたとか」

少し大きめの通信機にデバイスやらを繋げている委員長はアル・アジフの言葉に答えた。隣ではミューズレアルを従える俊也の姿がある。

「とりあえず、一段落したってことだな。つか、まだ終わっていない部分も多いし」

ホッとしたように息を吐きながら悠聖が空と地上に視線を移す。眩い光が二度ほど確認出来たが、二度目の弱い眩い光の後に片方のゲートが消え去っていたのだ。

もちろん、そんな芸当が出来るのは楓ただ一人でもある。

「アル・アジフ。お前は行かないのか？」

悠聖は地上の光に目を移しながら尋ねた。あの光はダークエルフが出している光。あのまま収束すればとある現象が起きて一面焼け野原になる。おそらく、一面では済まない規模になるだろう。

アル・アジフはゆっくり首を横に振った。

「我は信じているからの。助けに向かった者達を。我らが手助けに行くようなことではないぞ」

「なるほどね。まあ、あの面々ならな」

「そこまで呑気でいいのかしら？」

冬華が呆れたように尋ねる。それに悠聖は呆れたように答えた。

「お前の方が呑気だろ？」

冬華はフェンリルを枕に寝転がっている。というか、戦闘が終わっ

た瞬間にフェンリルに抱きついてこうなった。ちなみに、優月もフェンリルに抱きついている。

悠聖は小さく溜め息をついて空を見上げた。

「あっちのゲートは孝治が行くとして、オレらはここでずっと待機だな」

「僕一人が守っていてもいいよ」

「まあ、アルトさんがいれば何とかなると思うけど、悠聖君はそこまでゆっくりしていていいの？」

「アルト一人でどうやって疲労の高い俊也やボロボロのエレノアさんを守るんだよ」

悠聖は呆れたように視線を向ける。俊也は正直ヤバい。というか、委員長に肩を乗せて寝ている。本当なら戦場ではそんなことはしてはいけないのだが、ここに来た俊也を見た瞬間、そうは言っていられなかった。

身体中の筋肉が悲鳴を上げていたり、実は骨折していたり、本当にボロボロだったり。

委員長がいなかったらかなりマズかったに違いない。

「戦況はようやく傾いてきたところだ。途中で大きな変更があったけど、このまま現状を維持していくしかないな」

「なるほどの。ん？」

アル・アジフがデバイスを取り出す。そして、それを通信機に繋げた。

『我じゃ』

メリルは通信からアル・アジフの声が響いてホッとする。実は一度かけ間違えていたからだ。

「私です。メリルです」

『悠人はどうじゃ？』

「現在、ダークエルフのリアクティブアーマーを剥がす作業を行っていますが、リアクティブアーマーはどうやって装着していますか？」

一瞬の間。おそらく、アル・アジフは悠人の状態を聞きたいのだろう。だが、それは色々と状況に反している。だからこその一瞬の間。

『リアクティブアーマーは粒子結合じゃ。今から浩平に送るデータのポイントを撃てば理論上はリアクティブアーマーを剥がすことが出来る』

「理論上ですか？」

『リアクティブアーマー自体がすでにオーバードライブを起こしている場合は不可能じゃ。そして、それは理論上ではそうであって、現実では試したことがない』

もし、その情報が正しいならリアクティブアーマーを簡単、とはいかないが剥がすことが出来る。つまり、ダークエルフは強制的にFBDシステムを発動させられることになる。

あの機動力のために防御力を殺したフォルムに。

『悠人を頼む』

「わかりました」

メリルは通信を切った。ダークエルフはイグジストアストラルとぶつかり合っているが、イグジストアストラルが押されている。

メリルは再び通信を開く。次は浩平に。

「浩平さん、聞こえますか？」

「大丈夫だ。データは送られてきた」

スコープを覗きながら全てのポイントと地形を見ていた浩平は膝立ちになってフレヴァングを構えていた。その周囲には大量の銃がある。

「ポイントは全部で３５８。今までで一番多い数だな」

『そんなに』

あまりの数の多さにメリルが絶句する。だが、浩平はニヤリと笑みを浮かべた。

「大丈夫だぜ」

浩平はフレヴァングで狙いを定める。浩平が展開している銃の数は約１００。それをほぼ同時に、そして、的確に当てないといけない。チャンスはおそらく一度だろう。

だが、浩平は笑みを浮かべている。

「俺は外さない。だから、リアクティブアーマーが剥がれた後のダークエルフを食い止めておいてくれよ」

全ての銃で狙いをつける。撃つポイントは全て決まっている。

浩平は一度深呼吸をして息を吸い込み、そして、引き金を引いた。

音の暴風。

全ての銃口から弾丸が連射される姿はまさにそれに相応しい状況だった。

ダークエルフは浩平がいる場所を振り向く。だが、その瞬間には二十連射された弾丸がダークエルフに迫っていた。

ある弾丸は地面を跳ね、ある弾丸は壁を跳ね、ある弾丸はイグジストアストラルの体を跳ね、ある弾丸は放たれた弾丸とぶつかり合って跳ね、ある跳ねた弾丸は跳ねた弾丸とぶつかり合って跳ね返る。

その全てはダークエルフの細かな動きを修正して跳ね返っていた。

リアクティブアーマーのついている部分。ダークエルフの全身、前だけじゃない。後ろにも弾丸が狙いを定める。もう、反応する時間はない。

そして、弾丸が一斉にリアクティブアーマーを叩いた。

浩平は全ての銃を収納してフレヴァングを肩に担ぐ。そこには身動きをしないダークエルフの姿。そして、何かが落ちた。黒い装甲だ。リアクティブアーマーだ。それが落ちる。

見えるのは純白のダークエルフ。

「これなら」

浩平がガッツポーズをした瞬間、ダークエルフが動いた。両手にバスターライフルを構えて浩平に向けている。浩平はとっさにその場から飛び退きながら防御魔法を幾重にも展開した。

だが、両手のバスターライフルから放たれた光は防御魔法を砕き、浩平を吹き飛ばす。

直撃しなかったのが幸いか、浩平は何とか建物の影に着地した。

「浩平！？」

それを見ていたリースが慌てて駆け寄ってくる。浩平は大丈夫という風に手を上げようとして、痛みで顔をしかめた。

よく見てみると腕が折れている。

「あちゃ。やっちゃった」

「見せて」

リースが浩平の腕を取り、すかさず竜言語魔法書を開いて竜言語魔法を唱えた。竜言語魔法はあっという間に骨折を治す。

「撃てる？」

「ちょっとキツいな。魔法で治ったからって痛みで狙えるような状況じゃないし」

『浩平さん、大丈夫ですか？』

すると、通信機に繋いだままのデバイスから声が聞こえる。浩平はそれを手に取った。

「大丈夫だが、射撃は出来ない。悪い」

『いえ。大丈夫です』

浩平はその言葉にリースと顔を見合わせた。

『私がやります』

メリルが深呼吸をする。

これからやることはやったことのない領域だからだ。

音界というのは歌姫が共に歴史を歩んでいた世界。だからこそ、たくさんの歌姫としての戦い方が受け継がれている。その中にはいくつもの危険なものがあり、メリルはそれらを嫌っていた。

だが、その一つをメリルは使用する。

「鈴、ダークエルフを押さえてもらえますか？」

「了解」

鈴が出力を最大限まで上げてイグジストアストラルでダークエルフを押し倒そうとする。だが、ダークエルフはそれを軽々と避けてイグジストアストラルにバスターライフルを放ってきた。

鈴はとっさにそれを腕で弾いてダークエルフに手を伸ばす。

「捕まえた！？」

がっちり掴んだ手をイグジストアストラルは引っ張った。ダークエルフが体勢を崩し、その瞬間に背負い投げる。

ダークエルフの体が地面に叩きつけられ、イグジストアストラルはその上に乗った。

「メリル！」

「悠人、ごめんなさい。今からあなたの中に乗り込みます」

メリルの口から旋律が漏れる。それはまるで子守歌。何かの言語ではあるだろうが、その言語が同乗者の鈴にはわからない。

メリルはさらに歌う。高らかに、そして、清らかに。

それは全ての闇を晴らす強力な光だとでも言うかのようにメリルの歌は響き渡る。イグジストアストラルの中を。そして、イグジストアストラルの外を。そして、ダークエルフの中を。

その瞬間、世界が変わったように鈴は思えた。何故なら、今、メリルは立っているからだ。イグジストアストラルのコクピットじゃない。周囲にあるのは様々な扉。

「ここは」

「悠人の心の中です。この歌は『傀儡人形』と呼ばれる題目の歌。対象の心に入り込み心の形を変える歌です」

「歌姫にそんな力が」

「音界の歌姫だけでしょう。今の私達は完全に無防備です。ですから、今の内に私達は悠人を救わないと行けません。ただし」

メリルは周囲を見渡した。周囲にある扉の数は全部で約２０。まるで、拒絶するかのようなたくさんの扉。

「それには本物の扉を開く必要があります」

「つまり、この中のどれか」

「はい」

扉はほとんど同じだ。細部はほんの少しだけ違っているが、それはよく見ないとわからない。

鈴は小さく息を吐いて前に踏み出す。そして、小さく頷いた。

「メリルはわかった？」

「おそらくそうではないかと思っていますが」

「じゃ、一斉に指差そうよ。せーの」

鈴とメリルは同時に指差した。ある一点を。

そこに扉はない。変わりに、壁がある真っ白な壁が。

「悠人は下手だよね。本当に隠したいなら壁にしなくてもいいのに」

「それほどまでに悠人は隠したいのでしょう。鈴は私よりもたくさん悠人と一緒にいるのでわかっているのでは？」

「うん。悠人は私達を家族のように思ってくれている。アル・アジ

フさん、私、リリーナで一つの家族。だから、悠人はああなったんだと思う」

恋人というのはある意味家族と同じくらい大事な存在。そんな存在を失ったなら悠人が暴れてもおかしくはない。

二人は頷き合うと壁に向かって歩き、手を伸ばした。そして、世界が変わる。

現れた世界にあるのは部屋。中央にベッドがある部屋。そのベッドに悠人が腰掛けている。

「悠人」

鈴が悠人に声をかけた。悠人はビクッと体を震わせて鈴の方を振り向く。

「助けに来たよ」

「いらない」

鈴の言葉に悠人は首を横に振って拒絶した。

「もう、ルナはいない。いないんだよ。だからね、みんな殺せばいいんだ」

悠人がゆっくり立ち上がる。その手にあるのはエネルギーライフル。ただし、大きさは普通に人が使うサイズ。

「みんな殺せば、ルナは寂しくないよ。みんながいるんだから。みんなを殺したら、僕もすぐに向かうよ。みんなが一緒だったなら、

僕はそれで満足だから」

「あなたはそれで満足ですか？」

メリルが一歩前に踏み出した。悠人はそれに反応してエネルギーライフルの引き金を引く。

放たれたエネルギー弾はメリルの肩を貫いて鮮血を飛び散らせた。だが、メリルは足を止めない。さらに一歩を踏み出す。

「満足だよ」

「違います。あなたはただ、ルナがいなくなった事実から逃げ出しているだけです。それをして、あなたは救われるのですか？」

「救われるよ」

「いいえ。救われません。あなたが私や鈴を殺す度にあなたの心は壊れて行くでしょう。そんなことをルナが望むとでも」

「だったら、どうしたらいいんだよ！？」

悠人の叫びが周囲に響き渡った。

「ルナは死んだ。僕のせいで死んだ。どうしたらいいんだよ！？僕はどうしたら、ルナと再び会えるんだよ！？」

「ルナはもういません。あなたは会うことは出来ません」

「だったら、僕は、何をして生きていけばいいの？」

悠人はエネルギーライフルを落とし、ベッドに腰掛ける。

「ルナがいなくなったなら、僕は何をすればいいの？　何を守ればいいの？　何と戦えばいいの？　何を殺せばいいの？」

「悠人」

鈴が拳を握り締める。

悠人の心をルナが完全に占めていることに鈴はある意味諦めていた。でも、ルナがいなくなって目的を失った悠人にかける言葉がないのが悔しくて鈴は思わず涙を流してしまう。

そんな中、メリルは一歩を踏み出していた。

「何をすればいいの？　何に乗ればいいの？　メリル、命令してよ。僕に」

「大丈夫ですよ、悠人」

メリルがゆっくり悠人を抱き締める。

「もう、戦わなくていいんです。もう、戦わなくても。この戦いが終われば音界に来ませんか？」

「音界に？」

「はい。音界はここと違って静かで長閑です。ですから、ゆっくり休んでください。休んで、普通に暮らしてください。もう、あなた

が戦う必要はありません。ルナの故郷で」

「ルナの故郷に？　うん、そうだね」

悠人がゆっくり頷き、そして、まぶたを閉じる。その瞬間、世界が戻っていた。

鈴は数回瞬きをして周囲を見渡す。

ここはイグジストアストラルのコクピットの中。そして、ダークエルフから光の翼は消えている。

鈴はホッと息を吐いた。

「すみません」

息を吐いた瞬間にメリルからの声が聞こえる。

「勝手にあのようなことを言って」

「ううん。悠人はもう、戦わない方がいい。悠人には似合わないから。戦いなんて」

レバーを握り締め、鈴は答える。

強くなろうと鈴は思った。強くなって悠人の代わりになろうと。そうしたならきっと、

悠人は戦わなくて済むと思った。

第二百十八話　歌姫の祈り（後書き）

次回の悠人の活躍は第三章になります。

第二百十九話　妖精乱舞

放たれる触手に対して亜紗は魔術を発動し、風の刃で迎撃する。だが、相手の攻撃は手数が多く、一撃一撃が脆くてもそれを手数でカバーしている状況だった。さらには力が強く、速度もある。

まるで、吸収した二人の力を持っているかのように。

「あの時の、アリエル・ロワソの最高傑作が私の最高傑作によって追い詰められている。何て快感なんだ。何て爽快なんだ」

「それはあなたの力じゃない！」

亜紗が叫びながら触手を打ち払う。だが、触手はどんどん亜紗に向かって伸びていた。迎撃しながらも後ろに下がっている。

それを感じながら亜紗は必死に前に出ようと頑張っていた。片手に七天失星を、もう一方の手に普通の刀を握り締め、不慣れな二刀流で何とか対抗している。

だが、それですら押されている。

「おやおや。『剣の舞』を使っていないのですか？」

その言葉に亜紗は唇を噛み締めた。『剣の舞』は確かに強力だ。もし、妖精乱舞（フェアリー・ダンス）が無ければ使っていたに違いない。

だが、亜紗にとってこの相手は妖精乱舞（フェアリー・ダンス）でなければ倒せないかもしれないと思ったほどの強敵。

亜紗は後ろに下がった瞬間、いくつもの魔術陣を展開して風の刃をいくつも放った。だが、それは前を塞いだ触手によって本体までは届かない。

「無駄無駄無駄無駄無駄！　無駄で無駄で無駄だ！！　私の最高傑作の前ではあらゆる何もかもが届かない。生体兵器をベースに作れば幾らでも最強の兵隊が作れるというのに、あのアリエル・ロワソは生体兵器を開発を止めて」

「生体兵器は道具なんかじゃない」

亜紗が七天失星を握り締める。そして、その先を男に向けた。

「生体兵器は自分で考え自分で動く。あなた達のような考えている存在じゃない」

「改造されなければ力の無い哀れな子供に私達は力を恵んであげた。無用な子供達を有用な存在に昇華させた。それを非難するいわれはない」

「違う」

亜紗ははっきりと否定する。

「確かに、人は弱い人もいる。戦えないくらい弱い人もいる。だけど、それが人だから。たくさんの人はそういう存在だから。私のように戦いしか出来ない人もいれば、守りたいから戦っている人もいる。そんな人達を一括りに有用だ無用だなんてあなたに決める権利はない！」

「それはお前が強いからだ。弱い人は力を欲する。強くなるための手助けを」

「人としての尊厳を奪って何が手助け？　そんなもの、手助けでもなんでもない！　強くなるのに必要なのはただ一つ」

亜紗が向かってきた触手を斬り落とす。

「信念と根気。ただ、それだけ」

亜紗は地面を蹴った。大量の触手が亜紗に向かって放たれるが、亜紗は両手の刀を放り投げ、矛神の柄に手を乗せる。

一閃。

たったそれだけで十分だった。前を阻む触手ごと肉塊を真っ二つに切り裂く。亜紗はそのまま矛神を鞘に収め、落ちてきた七天失星と刀を受け止めた。

「あなたの最高傑作はもうない」

「それはどうかな？」

男が笑みを浮かべる。すると、二つに分けれた肉塊が一つになった。いや、分かれていたはずの部分が巻き戻しをされたかのようにくっついたのだ。そのまま肉塊は触手を放って来る。

亜紗は小さく舌打ちをして後ろに下がった。

「こいつを止められるものはもういない。だが、そのこのままでは埒が明かないな。０３」

男の言葉にシリーズ０３が体をびくっと震わせた。

「お前も一つになれ。そうすれば、もっと、もっと強い存在が出来上がる」

「い、いや」

「逆らうのか？　想像主に。愚かだな」

男が笑みを浮かべる。そして、男はシリーズ０３を指さした。

「さあ、喰らえ。そして、血肉とかせ。本当の意味で最強になるのだ！」

触手がシリーズ０３に向かって放たれる。ちょうどシリーズ０３の前に到達したメグが炎獄の御槍を構える。そして、向かってきた触手を焼き払う。だが、それだけ。続いて迫った触手がメグの体を捕え、殴り飛ばした。

その触手はそのままシリーズ０３に狙いを定めて、

根元から一気に切断された。

男が微かに驚きながら目を少しだけ見開いている。そこには、矛神を鞘から抜いた亜紗がいたからだ。三回しか使えない矛神の三回目を使った。つまり、もう、矛神は使えない。

「バカな真似を。その矛神で私を倒していれば、状況は変わっていたかもしれないのに」

「そうかもしれない。でも、私は周さんの近くで周さんを見ていた。だから、あなたは殺さない。殺さないけど」

亜紗は肉塊に視線を向ける。

あの肉塊は亜紗と同じ存在だ。同じ生体兵器。違いは助けてくれた人がいるかいないか。もしかしたら亜紗もあの一人になったかもしれない。

亜紗は周と出会ったから。亜紗の人生を大きく変える人物と出会えたから。

「あなた達は殺す。ううん。私の手で終わらせる」

「終わらせることが出来るのか？　お前の力ではそのようなことは出来ない。こいつにすら何も」

「知ってる？　神隠しという言葉を」

亜紗が刀を鞘に収める。そして、鞘ごと虚空に収めた。対する七天失星は鞘から引き抜かれたまま光と風を纏っている。

男は微かに眉をひそめる。それと同時に肉塊が触手を放った。

一閃。

矛神を振るよりももっと軽いような一閃。たったそれだけなのに亜

紗に迫っていた触手はほとんどが溶け、残った部分も細切れになっていた。

「何をした」

「神隠しというのは妖精が起こすもの。それを知ってる？」

「今、何をした！？」

男の言葉と共に触手が放たれ、斬り落とされる。

速いという次元ではなかった。亜紗はすでに七天失星を鞘に納めている。対する肉塊は半ばまで溶けていた。だが、すぐに再生する。再生はするが、男には亜紗が何をしたかわからなかった。

「何をしたのだ！？」

「幾らあなたが生体兵器として最強の存在を作ったとしても、人間には勝てない。その点ではアリエル・ロワソには感謝している」

亜紗は前にでる。肉塊はすかさず触手を放つが振られた七天失星が消し去っていく。

七天失星の刃は光輝を使っているかのように光り輝き、光輝と違って熱量を持っている。それは一瞬にして溶かすような熱量。

男はようやくその光についてわかった。七天失星に纏わりついている風に関しても。

「風王具現化と、光王具現化の限定展開」

「正解。だけど、それだけじゃない。見せてあげる。これが本当の生体兵器をというもの」

亜紗は息を吸い込んだ。そして、一言口にする。

「妖精乱舞（フェアリー・ダンス）」

その瞬間、亜紗の体が消えたように男から見えた。だが、それは間違っている。亜紗はそこに存在している。存在はしているのだが、男の視界には入っていないのだ。男は必死に周囲を見渡している。だが、男の視界のなかにはどこにも見当たらない。

妖精乱舞（フェアリー・ダンス）。

亜紗が持つ生体兵器としての特徴にして、最強の能力。風を得意とする亜紗が光王具現化を、剣に宿す超限定的ながら、使用できるのはこの能力があるからでもある。

能力はただ一つ。隠匿能力。

光の屈折に作用して目標から完全に姿を消すことのできる能力。しかも、それは複数の存在を複数の標的から見えないくすることもできる。それはいくら光属性のエキスパートでもわからないくらいの隠匿能力。

そこに亜紗の能力が合わさった場合、その凶悪性は計り知れない。

「ど、どこだ。どこにいる。どこに隠れている」

「隠れていないし逃げも隠れもしていない。ただ、あなた達には見えていないだけ。それが、神隠し」

亜紗は前に踏み出す。この能力を開発したアリエル・ロワソは何を思って妖精乱舞（フェアリー・ダンス）と名乗ったのかわからない。だけど、その名前は今の亜紗に相応しいものだった。

亜紗が地面を蹴る。その地面を蹴る音は響かない。響かないが、肉塊の体は半分が溶け去っていた。すぐに修復する体に抉りこまれる七天失星。

亜紗は静かに唱えた。

「光王具現化、解放」

その瞬間、突き刺さった七天失星を中心に光が肉塊から漏れ出し、その体が一瞬にして蒸発した。

亜紗は妖精乱舞（フェアリー・ダンス）をを終了して七天失星を鞘に収める。

「これで終わり」

「な、な、な、な」

男は今の状況が理解できないのか口をパクパク開いているだけだ。亜紗は小さく息を吐いて、そして、振り向いた。通路の奥を。

「亜紗さん、どうかしましたか？」

由姫が同じように視線を向けながら尋ねる。対する亜紗は何も答え

ない。いや、必死に通路の先を凝視している。何かを捉えようと。

そして、姿を現した。幻想種の一団が。

「あれは、くっ。亜紗さん、撤退しましょう」

「間に合わない。私一人だと撤退できるけど、今の由姫とメグは走れないしシリーズ０３にこの男もいる。撤退するには人が足りない。それに、周さんを助けに行かないと」

亜紗は七天失星を握り締めて前にでる。だが、幻想種の群れは、主にゲルナズムが大半だが、ほぼ全速力で向かってきている。このままじゃ危ないのは簡単にわかる。だけど、圧倒的に守るメンバーが少なすぎる。

亜紗は覚悟を決めて七天失星を握り締めた。そして、向かってくるゲルナズムに向かって構え、

亜紗の隣を光の矢が通り過ぎ、ゲルナズムに直撃して爆発した。その爆風は周囲のゲルナズムをも砕き、一団の動きを遅くする。

「大丈夫ですか？」

「助けに、来ました」

そこに颯爽と現れたのは都と夢の二人。二人は亜紗の後ろに立ってそれぞれの武器を構える。

「ちょっと多いですね」

「ちょっとじゃない」

「ちょっとですよ」

都は笑みを浮かべながらそう言って断章の杖の先を握り締めた。ちょうどそこは都の手が握り締めることが可能な大きさを有している。

「私も、ちょっと、本気を出しますから」

そして、都はそれを引き抜いた。断章から現れたのは一本のレイピア。振り返りながらそれを見た亜紗は思わず唖然としてしまう。

断章は杖として強力な能力を持っていたはずなのに、実は仕込み杖だなんて誰が思うだろうか。周ですら気づいていない。

都は笑みを浮かべながらそのレイピアを幻想種の群れに向けた。

「連綿と続く章を断ち切れ！」

その瞬間、レイピアを向けられていたゲルナズムが一瞬にして消え去った。まるで、そこにはいなかったかのように。

「では、行きましょう」

都の呑気な声に、亜紗は小さくため息をついて幻想種の群れに七天失星を構えた。

第二百二十話　親子対決

レヴァンティンが防御魔術に弾かれる。オレはその弾かれた勢いで体を回転させてレヴァンティンを防御魔術に叩きつけた。

防御魔術が粉々に砕け散り、オレの後方から放った茜の氷の矢が親父に迫る。

親父はとっさにストックしていた魔術を展開して氷の矢を全て払った。

「なるほど」

親父が小さく呟きながら後ろに下がる。オレはそれを追いかけようと一歩踏み出して、嫌な予感がして後ろに下がった。

親父が展開しかけていた魔術をストックする。

「厄介、ってレベルじゃないな。年季の差かよ」

負けないような実力の差があるわけじゃない。むしろ、戦い方という点ではオレ達が圧倒的に有利、のはずだった。だが、親父は上手く戦略的に魔術を放っている。

懸念があるとするなら、未だに最大で中級クラスの魔術しか使っていないということ。

『技では負けていませんよ』

「戦略で負けてはいるけどな」

レヴァンティンを握り締め前に駆け出す。それと同時茜が放った矢が親父を狙う。タイミングは完璧。だが、オレはとっさに後ろに下がった。

嫌な予感というレベルじゃない。これ以上前に進めば呑み込まれる。そう感じたからだ。

「ファンタズマゴリア！」

後ろに下がりながらファンタズマゴリアを展開する。それと同時に親父のちょうど前で大きな爆発が起きた。

オレはファンタズマゴリアを展開したままさらに後ろに下がる。

もし、ファンタズマゴリアを展開していなければ爆発に呑み込まれていただろう。

「お兄ちゃん！　大丈夫!?」

「大丈夫だ。っつ」

オレはさらに後ろに下がる。すると、オレがいた位置にいくつもの魔術が突き刺さり、親父が着地した。

後ろに下がった足に力を込め、一気に前に出る。レヴァンティンを握り締めて親父に向かって全力で振る。

「金色夜叉！」

金色の刃を親父に放つ。だが、それは幾重にも展開された防御魔術によって受け止められていた。

オレは金色夜叉を展開したまま目を見開き、そして、

親父の魔術が至近距離で炸裂した。

ダメージは少なく戦闘服によって防御が出来るくらい。だが、オレは大きく吹き飛ばされ、ちょうど茜がいる扉付近にまで下がってしまう。

距離を開けるということは対魔術師との戦いでは不利。それは普通の考えだ。茜はまだ魔術の展開自体に慣れていないため詠唱は遅い。つまり、

「避けてみろ」

親父の背後で大量の魔術陣が展開されていた。その数は約２０。防御魔術は不可能。障壁魔術もこの数なら砕け散る。ファンタズマゴリアは面で攻められたら負ける。

「レヴァンティン」

『準備出来ています』

「茜、魔術を使うなよ！」

オレはレヴァンティンを構えた。そして、魔術が一斉に放たれ、レヴァンティンが作り出した相殺の空間内に入った瞬間に消え去る。

だが、消し去った瞬間に体中の魔力が失ったような感覚に陥った。
オレは思わず片膝をついてしまう。

「全て相殺したのか？　まあ、いい。お前はもう戦えないだろう」

「誰が、っく」

立ち上がろうと力を込めるが足に上手く力が入らない。典型的な魔力の欠乏状態だ。少し休めば動けるようにはなるが、戦闘は出来ない。

レヴァンティンを握り締めて親父を睨みつける。親父は笑みを浮かべて魔術陣を展開する。

「私の勝ちだな」

「それはどうかな？」

その言葉と共に茜がオレより前に出る。その手には弓形態の隼丸が握られていた。

「お兄ちゃんは少し休んでいてね。準備、出来たから」

「準備？」

その言葉にオレは首を傾げる。対する茜はオレを振り返って笑みを浮かべていた。

「私だって戦えるんだよ」

「それはわかっているけど、茜には相手が悪すぎる。親父は世界最強の魔術師だ。その領分で魔術師のお前が勝てるわけが」

「違うよ。これは私の領分だから」

その言葉と共に茜の手に矢が現れる。その矢は魔力で出来た矢ではあるが、正確には魔術で出来た矢。

その矢を握る手にはいくつもの圧縮されて重なり合った魔術陣の姿があった。

「お父さん、魔術のストックは大丈夫？」

そして、強大な魔術を矢に変換した一撃が放たれる。

広域攻撃魔術ですら一点に収束この矢は難しい。だが、茜はそれを上級魔術で軽々と放っている。さすがにこれには唖然とするしかない。

一発じゃなくて複数を連射するなんてな。

対する親父は対抗するようにストックしている魔術を放つ。だが、一本の矢につき二発以上相殺するのに魔術を消費していた。

茜の矢は一撃一撃がとても重く、おそらく障壁魔術ごときでは防ぎきれない。ファンタズマゴリアなら可能かもしれないが、親父にはファンタズマゴリアはない。

放たれた矢は帯電する稲妻の矢。それを相殺するために親父は雷属

性上級魔術であるライトニングブラストと炎属性上級魔術であるインフェルノドライブを放つ。稲妻と炎の柱は帯電する稲妻の矢とぶつかりお互いを消し去った。

親父の額に汗が流れる。対する茜は涼しげだ。親父が気にしているのは茜にやられていることじゃない。ストックしている魔術が枯渇するかもしれないことを気にしている。

魔術師にとってストックしている魔術というのは生命線とも言える。ストックが無い魔術師なんてただの砲台だ。

オレは四肢に力を込める。入る。魔力の回復が著しく早いようにしか思えないが考えるのは後だ。

レヴァンティンを握り締め、いつでも親父に駆け出せるようにする。相殺は使えない。だから、避けきるしかない。出来るか？　いや、出来る。

「くっ」

茜が苦悶の表情を出す。おそらく矢の数がすくないのだろう。対する親父はストックしている魔術だけでなく、通常展開の魔術も使用している。

「どうした？　茜の余裕ぶった表情は可愛かったぞ」

「それはどうも！　だったら、最大最強の火力で放つね！！」

茜が矢に矢を合わせる。いや、合成させている。残った全ての矢を茜は合成させて親父に狙いを定めた。

オレは足に力を込める。オレの考えが正しければもうすぐだ。

「当たって！」

茜が矢を放った。対する親父はいくつもの魔術をぶつけようとストックしていた魔術を展開する。その最中に親父はオレを見た。

オレはまだ動いていない。親父が気にしているのはオレの突撃。ストックが少ないから焦っているのだろう。

茜が放った矢が相殺される。だが、茜は新たな矢を放っていた。親父はとっさにストックしていた四つの魔術を展開して、

オレは地面を蹴った。

親父が放った魔術が一瞬で矢を消し去る。茜が放ったのは普通の矢。普通の魔力で出来ただけの矢。

オレはレヴァンティンを握り締めて全力で地面を蹴る。親父はオレに向かって魔術陣を展開する。オレはその懐に飛び込むように地面を蹴って、親父がストックしていた魔術を放ってきた。

ほんの刹那の思考と共に、オレはその場に滑り込みながら振り返りつつレヴァンティンを振り上げていた。

「紫電一閃！」

手が痺れる。レヴァンティンで地面を強く叩いたからだ。それにより、オレの体は親父を飛び越えるように弾かれ、オレがいた場所を

炎属性魔術が通り過ぎた。

オレは地面を着地して親父に向かって拳を放とうとして、親父に勢いよく突き飛ばされた。

すかさず体勢を立て直し、親父に向かってレヴァンティンを構える。だが、親父の左胸から槍が突き出していた。

「使えない人ですね」

その言葉と共に親父の体をまるでゴミのように振り落とす。

「お母さん？　どうして？」

茜が信じられないという風に血の滴る槍を握り締めたお袋を見つめていた。オレはお袋に対してレヴァンティンを握り締める。

「今からが本番です。さあ、死になさい。二人共」

その言葉と共に何かの音がする。そちらを振り向いたそこには幻想種の群れがいた。大半はゲルナズムだが、エンシェントドラゴンの姿までである。

「この世界の礎となって」

第二百二十一話　ラストバトル

「礎ってどういうことだ？」

オレは迫り来る幻想種の群れをチラッと見ながらお袋に尋ねた。お袋は笑みを浮かべて槍を構えている。

「今からあれを爆発させる、ということですよ」

「爆発？」

お袋が指差した方角には悠遠の翼、でいいのかわからないが、ともかく棒がある。それを爆発させたならかなり危険だ。

どれくらい危険かを説明するなら、魔力の爆発での計算は最大出力が関係する。最大出力があればあるほど威力はだんだん上がっていく。もし、これが悠遠の翼なら爆発の規模は桁違いだ。

「そんなことをすれば世界を救うための力が」

オレはそこで言葉を止めた。お袋の目的はこの学園都市を焼け野原にすること。オレや親父はこれを使おうと考えたが、お袋は違う。世界を破壊するためならこれすらも使うはずだ。

「レヴァンティン、いけるな」

『大丈夫です。全然大丈夫です』

レヴァンティンを構え、そして、地面を蹴る。今はお袋を倒すことをしないと。だが、オレは嫌な予感を感じて後ろに下がった。それと同時にオレがいた場所に光の槍が突き刺さる。

「お兄ちゃん！　後ろに下がって！」

遅れてやってくる茜の声。それと嫌な予感を組み合わせてさらに後ろに下がった。

オレがいた場所に光の槍が突き刺さる。

「マズいな」

幻想種の中には見たことのない敵の姿がある。遠距離攻撃型の幻想種だ。幻想種として小柄ではあるが、遠距離攻撃が可能な分、堅いゲルナズムやエンシェントドラゴンと一緒になればかなりややこしい事態になる。

それにお袋もいる。隙を見せたらやられる。

「こういう時に正がいたらありがたいけどな」

「こういう時は僕の名前を呼んだ方がいいよ」

いつの間にか、本当にいつの間にかオレの背後には正がいた。

オレは笑みを浮かべて口を開く。

「助かる」

「どういたしまして。それで、僕はどうすればいい？　ここでは君がリーダーだ」

「そうだな。お袋を少しの間だけ止めてくれ。幻想種を先に倒す」

「了解したよ」

オレは幻想種達がいる扉に向かって走り出した。茜が展開した魔術の矢を隠れながら放ってはいるが、相手の数が多い。第四階層から現れた幻想種なのかもしれない。

術式をいくつも展開して幻想種に向かって放つ。もちろん、幻想種にダメージを与えることが出来そうな高火力の魔術ではないが、目的が違う。

魔術は幻想種の手前で炸裂して大きな光となる。オレはそれと同時に術式を展開。障壁魔術を幾重にも作り出した。

これで少しは時間が稼げるはずだ。

「茜、下がれ。これからとっておきの裏技を」

『マスター、その必要はありませんよ』

オレの言葉をレヴァンティンが塞ぐ。オレは少し驚いてレヴァンティンを見た。レヴァンティンに何か策があるというのだろうか。

『ここに私と隼丸が揃っている以上、マスターが危険を犯す必要はありませんから』

爆発。

休んでいたオレらを襲ったのはまさにそれだった。

すかさずオレの横に座っていたアルネウラと優月の手を握る。二人はすぐさま握り返してきたのですぐにシンクロを行った。

二人が体の中に入ってくる感覚と共に次にやるべきことが見えてくる。

オレ達を襲ったのは曲射された砲撃。しかも、空から。

オレは空を見上げる。そこにはいつの間にか航空艦の姿があった。その上には何機ものフュリアスの姿が見える。

「おいおい、どういうことだよ。あんな所から曲射による精密射撃なんて出来るわけがないだろ」

「悠聖、考えるのは後よ。フェンリル、あなたの力を私に貸して」

またまた放たれた射撃に対し、冬華はフェンリルから雪月花を抜きはなった。そして、向かって来た射撃を強制的に曲げる。だが、一発が限界。続いて放たれた射撃に冬華は大きく後ろに下がって避けた。

射撃が地面で弾け、冬華を吹き飛ばす。

「ちょっとだけ時間を稼いでくれ！」

オレはすかさず通信機にデバイスを繋げる。相手はこちらを狙っているみたいだが、こういう時には周の切り札を使えばいい。

周が作り出した史上最高のデバイス。デバイスという部類の中だと文句なしに最強クラスだろう。

「第７６移動隊臨時指揮官白川悠聖より学園都市内の『ＧＦ』全部隊に通達する。今現在より配布したデバイスの使用を許可する。各々が考えて使用し、学園都市を守れ！」

「配布したデバイス？」

リコは走っていた足を止めた。そんなデバイスは周から渡されていないからだ。だけど、話は聞いたような気はする。

最後の最後の最終手段であると。

周囲にいる学園都市の『ＧＦ』部隊員が新たなデバイスを取り出す。それはまるで宝石のようなただのコアのみの存在だった。そして、デバイスを使用する。

その瞬間、リコは何故最終手段なのかを理解した。何故なら、学園都市を覆い隠すように不思議な色をしたクリスタルのようなドームが作り上げられていたからだ。

それは、空にある航空艦からの射撃を全て受け止め散らしている。

「単一能力型のデバイス？　でも、それぞれを繋いで回路として巨大な防御魔術にするなんて」

デバイスのことをあまり詳しく知らないリコでさえわかる。それがどれだけありえないということなのかも。

デバイスの種類の一つである単一能力型のデバイスは強力な能力を持っている分、柔軟性は全くない。そのはずなのにデバイス同士でネットワークを繋げていた。

「天才」

リコの口からはただそれだけしか出なかった。

「えっ？」

レーヴァテインが不思議な色をした全天を覆うクリスタルによって阻まれた。

光はゲートに向けていたレーヴァテインを下ろす。

「これは一体」

「光、無事だったか」

空を見上げている光に孝治が声をかける。全速力で来たからか息は荒く汗をかいている。

「大丈夫やで。やけど、あれは何？」

光は空を覆うドーム状の何かに指差した。孝治はそれを一瞥してゆっくり頷く。

「幻想展開（ファンタズマゴリア）だ」

「ファンタズマゴリア？　それって海道の防御魔術やないん？」

「そうだな。だが、幻想展開と書いてファンタズマゴリアと呼ぶデバイスがあるんだ」

「ここはボケるところ？」

「怒るぞ」

孝治は小さく溜め息ついて空を見上げる。天魔は展開された幻想展開（ファンタズマゴリア）によって完全に進路を阻まれていた。

むしろ、何体かはゲートの方向に帰っている。

「周が作り出した最強のデバイスだ。本来なら個人、又は局所的に守るはずだった。それなのに、結果はこれだ」

孝治は空を見上げて笑みを浮かべる。

そこにあるのは周が作り上げた最高傑作。

「あいつは、昔から変わっていない。あいつは変わったと思っているが、根っこからは何も変わっていない。そう、あいつはただ、守りたいだけなんだ」

「数が多いですね」

向かってきたゲルナズムの頭部に都はレイピアとなった断章を突き刺した。断章はゲルナズムの甲羅を軽々と貫いている。そのまま甲羅を軽々と割り、上から落ちてきたゲルナズムを簡単に斬り裂いて後ろに下がった。

エンシェントドラゴンの口が赤く光るのを見て鞘を戻し、断章を杖に戻して構える。それと同時にエンシェントドラゴンが味方を巻き込むように炎を放ってきた。

だが、それは断章によって打ち消される。

打ち消された瞬間に亜紗が前に飛び出し、握り締めていた七天失星を振り抜いた。七天失星はゲルナズムを軽々と裂いて亜紗は次の目標に向かう。だが、数が多すぎる。

「見える、範囲に、クモが１２０。竜が６。蛇が８」

「ゲルナズムの数だけおかしくない？」

体力が戻ったメグは幻想種との戦いに戻っている。だが、いや、やはり数が違いすぎる。誰もが少しずつ後ろに下がりながら戦っている。

メグの持つ炎獄の御槍がゲルナズムに受け止められる。だが、メグはすかさずその手に炎を宿してゲルナズムの甲羅に拳を叩きつけた。

甲羅にひびが入り、受け止められていた炎獄の御槍がゲルナズムから離れる。メグはすかさずそこに炎獄の御槍を全力で突いた。

ゲルナズムの体に炎獄の御槍が突き刺さりゲルナズムを焼き尽くす。

「キリがないわよね。というか、いつになったら終わるの？」

「せめて、魔術師がもう一人いれば」

都の小さな呟き。それと同時に都の後方から紫電を纏う槍が頭上を通り過ぎ、ゲルナズム3体とエンシェントドラゴンを貫いていた。

都は振り返る。そこには幾つもの簡易杖を握り締めているシリーズ０３の姿があった。

「て、手伝います。た、助けてくれた、お、お礼に」

「茜、大丈夫か？」

オレは弓形態の隼丸を握っている。握っているというより茜の左手にオレの左手を重ねていると言った方がいい。

右手は隼丸に矢の代わりにレヴァンティンを使っているためその柄を握り締めている。

茜は小さく頷いた。

「大丈夫だよ。えへへっ」

茜が嬉しそうに笑みを浮かべる。すでに作り出した障壁魔術は残り一つ。もうすぐ障壁魔術は破られるだろう。

「お兄ちゃんの体って暖かいね」

「お前は痩せすぎじゃないか？　もう少し鍛えないと第７６移動隊は辛いぞ」

「大丈夫だよ。だって、みんながいるから」

オレ達は笑みを浮かべる。そして、しっかりとお互いの武器を握り締めた。

レヴァンティンと隼丸。その二つはお互いに共鳴機関がついているらしく、隼丸によってレヴァンティンを放てばその共鳴機関が力を発揮するらしい。

それによって魔力を込めれば込めるほど強力なものとなる、らしい。

らしいというのは詳しくないからだ。本当にそれが正しいかなんて知らない。だけど、レヴァンティンが嘘をつくとは思えない。

障壁魔術が砕け散る。まるで雪崩のように幻想種がやってくる。オレ達は同時に息を吐いた。

「お兄ちゃん」

「茜」

オレ達は頷き合い、そして、ありったけの魔術を叩き込んだレヴァンティンから手を放した。

その瞬間、オレ達は吹き飛ばされていた。茜を受け止めながらオレは尻餅をつく。

「った。何が起きたんだよ」

オレは痛みに顔をしかめて前を見る。そこには、ただの通路が広がっていた。

オレは思わず固まってしまう。だって、幻想種が一撃だぞ一撃。今まで苦労して倒していたのに一撃だなんて。

「対策を立ててきたオレは何なんだろうな」

「お兄ちゃん、どうかしたの？」

茜が上目遣いで見てくる。オレは小さく溜め息ついて立ち上がった。とりあえず、後方では戦闘がまだ続いている。

オレは小さく息を吐いて呆れたように呟く。

「回収に行くのが面倒だな」

オレは苦笑しながら放たれたレヴァンティンを取りに行くために走り出した。

第二百二十一話　ラストバトル（後書き）

後二話で戦いが終わります。ようやく終われます。長かった。

第二百二十二話　七天抜刀（前書き）

体育祭期間の話、最初５０話と言っていましたが、結局は１００以上になっていますね。一応、第二章を前中後で分ければ後編のはずなんですが。前編と中編が短過ぎましたかね？

第二百二十二話　七天抜刀

七天失星が鞘から走る。それと共に放たれた七天失星がゲルナズムの腹を斬り裂いた。

亜紗はすぐさま後ろに下がるがそこに別のゲルナズムが襲いかかる。しかし、ゲルナズムは飛来した炎の渦に呑み込まれ、一瞬にして消し炭となっていた。

シリーズ０３が援護射撃をしてくれるようになってから戦況はかなり傾いている。問題があるとするなら、

「連綿と続く章を断て！」

その言葉と共にエンシェントドラゴンから放たれた炎が断章によって打ち消された。だが、打ち消した瞬間には別のエンシェントドラゴンが都に向かって炎を放とうとしている。

それに巻き込まれるのが怖いのか、ゲルナズムは都には攻撃せず亜紗に向かって突撃している。

亜紗も疲労の色が濃いため従来の速度はない。だが、それは仕方のないことだろう。それでも亜紗は懸命に前に出ている。

由姫さえ動ける状況なら亜紗も休むことが出来るのだが、由姫もメグも怪我が酷く、特に由姫は座り込んだままだ。

一番疲労が軽いのは夢だろうが夢の火力ではゲルナズムをなかなか倒せない。

「硬い」

夢が弓を放ちながら小さくボヤいた。だが、ボヤいたところでどうなるわけがない。

亜紗はそう思いながらも地面を蹴る。七天失星をゲルナズムの腹に突き刺しながら右手で振り抜き、左手の刀でゲルナズムが放つ触手を受け流す。

すでに妖精乱舞（フェアリー・ダンス）は切っているし、『剣の舞』を使えるような状況ではない。それに、動ける時間がだんだん少なくなっている。

亜紗は唇を噛み締めて前に踏み出した。だが、真っ正面から何かが迫っている。

尻尾。

そう思った瞬間に亜紗の体は吹き飛ばされていた。左手に握る刀は砕け、七天失星は弾き飛ばされている。そのまま亜紗は壁に叩きつけられた。

「かはっ」

「亜紗さん！　連綿と続く章を断て」

肺から息が漏れそのまま地面に倒れ込む。都はすぐに亜紗に駆け寄りたかったがエンシェントドラゴンが完全に狙いをつけているため無理だ。

亜紗にゲルナズムと蛇のような何かが迫る。その左には大きな宝石のような結晶があり、時折そこが光って光の槍を放っていた場所だ。

「炎獄の御槍！」

すかさずメグが炎獄の御槍の炎を最大限にして走り出した。前を塞ぐゲルナズムを一振りで焼き尽くし、そのまま道を開けて、

蛇のような何かの額が光っているのがメグには見えた。すかさず横に跳ぼうとする。だが、放たれた光の槍がメグの太ももを貫いていた。

「あっ、がっ」

痛みのあまりメグは声を上げ、貫かれた場所を押さえる。だが、そこは完全に貫通しており骨すら消失していた。

近くにいたゲルナズムがメグにも迫る。その瞬間、何かが空を舞った。

メグに迫っていたゲルナズムが上から叩き潰される。一瞬にして甲羅がひしゃげ、中身が飛び散っていた。

「大丈夫ですか？」

甲羅を一発で軽々と砕いたのはもちろん由姫。由姫は拳についた血を払いながらメグに尋ねる。だが、メグは意識がないのか目を瞑って倒れていた。

おそらく、痛みのあまり気絶したのだろう。

由姫は息があることにホッとしたように息を吐いてゲルナズムの死体を蹴った。次に向かうのは亜紗の場所。メグがいる位置は比較的夢やシリーズ０３がいる場所に近い。だから、任せておけば少しの間は大丈夫。

だが、亜紗はそう行かない。すでにゲルナズムが攻撃しようと構えている。未だにやられていないのは亜紗が魔術を展開して迫ってきている触手を全て切り裂いているから。

「神への重力最大展開（グラヴィタス）」

由姫が拳を握り締める。そのまま拳に重力を乗せて近くに転がっていた七天失星の柄を掴んだ。

「亜紗さん！」

そして、亜紗に向かって投擲する。重力を纏った七天失星はゲルナズムの体すらも貫通し、亜紗のすぐ近くの壁に突き刺さった。

亜紗はとっさに七天失星の柄を握り締める。だが、その瞬間に蛇のような何かの額が光っていた。そして、光の槍が放たれる。

亜紗はそれを七天失星で弾き飛ばした瞬間、蛇のような何かの体がバラバラに吹き飛んだ。

一瞬だけ起きる静寂。亜紗は返す刃でゲルナズムの頭部を叩き割る。

そこに由姫が飛び込んだ。

肘打ちの一撃はゲルナズムを壁に叩きつけ昇天させ、拳の一撃は甲

羅を軽々と叩き割る。

亜紗はそれによって出来た道へ身を踊らせた。由姫も亜紗と一瞬に後ろに下がる。

「大丈夫ですか？」

「由姫こそ」

「私は大丈夫です」

途中、倒れているメグの体を由姫が抱え上げ、二人はみんなの下に戻った。若干一名、エンシェントドラゴンと戦っているが。

「メグ！」

夢が弓を収納してメグに駆け寄る。由姫はメグをゆっくり下ろして振り返った。

「後、４０、くらいですね？」

「由姫が来なかったら危なかった」

「私もそう思いました。ですが」

由姫は若干だが痛みで顔をしかめる。本来、由姫もメグも動いていいような状態ではなかった。だから、メグは足を貫かれた。

そして、由姫も限界が近い。おそらく、幾つかの箇所で骨にひびが入っているだろう。肋骨は折れているに違いない。普通なら痛みの

あまり動けない。だが、由姫はそれ以上の痛みを体験しているため動くことが出来る。

問題は、我慢は出来ても体は我慢出来ないというところか。

「私も制限時間は後少し。３分もない」

亜紗が七天失星を握り締める。

つまり、３分の間に幻想種をほとんど倒せなければ状況は一変する。都はまだまだ大丈夫かもしれないが、亜紗と由姫の二人が動けなくなる。

「では、最後の突撃と行きましょう。０３さん、援護お願いしまう」

「は、はい。だ、だけど、か、簡易杖が後八つしかあ、ありません」

「大丈夫です。それだけあれば」

亜紗は七天失星を握り締め、由姫は栄光を身につけた拳を握り締める。

単純計算で一人あたり約１５程度幻想種を倒せばいい。二人共、それくらいなら十分に体が持つ。

「行きます」

由姫の声と共に二人は走り出した。蛇のような何かが光の槍を放つが二人はそれを軽々と避けて後方から放たれた光の槍が蛇のような何かを貫きゲルナズムも貫通した。

由姫は拳を握り締め、ゲルナズムの触手をかいくぐり、ゲルナズムのお腹を勢いよく殴る。それによってゲルナズムの体が浮かび上がり、その場で宙返りをした由姫の蹴りが重力を纏ってゲルナズムの体をまるで弾丸のごとく蹴り飛ばした。

ゲルナズムの体は他のゲルナズムや蛇のような何かの体を巻き込み吹き飛んでいく。

その間に亜紗は敵陣深くまで飛び込んでいた。持ち前の高速ステップでゲルナズムの触手をかいくぐり、すれ違い様に七天失星で斬り裂いて走り抜ける。

気力を振り絞り、少し無茶をしながらも亜紗は駆けていた。

ゲルナズムのような幻想種なら由姫が倒せる。だが、エンシェントドラゴンは話が違う。周ですら戦えなかったエンシェントドラゴンを相手には七天失星の力が必要だと亜紗は考えていた。

七天失星の能力は亜紗以外誰も知らない。それは、亜紗が知っていながら教えていないから。

亜紗が七天失星を握り、エンシェントドラゴンに向かって飛びかかる。エンシェントドラゴンはそれに気づいて尻尾を振り、

抜き放たれた七天失星によって尻尾を輪切りにされた。

亜紗は器用にも自分が輪切りにしたその一つに足を乗せ、足場として蹴る。その時には七天失星は鞘に収められていた。

「七天」

亜紗は小さく呟く。その言葉とともに七天失星に魔力が集まるのがわかった。

「抜刀！」

振り抜かれた七天失星がエンシェントドラゴンの体を斬り裂く。

亜紗の腰より上に八つの傷を、腰より下に七つの傷をつけた。そのどれもが深く、致命傷。

断末魔の悲鳴を上げるエンシェントドラゴンの体を踏みしめ、めう一体のエンシェントドラゴンに飛びかかり、七天失星を振り下ろす。

七天失星はやはり、亜紗の腰より上に八つの傷を、腰より下に七つの傷を深くつけていた。

亜紗が着地すると同時二体の絶命したエンシェントドラゴンが地面に落ちる。

七天抜刀。

七転八倒と同じ呼び方のその技は、七回転がし八回倒す技。つまり、足に一撃で立てなくなるような七つの傷をつけ、胴体に致命傷となれる八つの傷をつける技。

亜紗は七天失星を鞘に収めた。その背後からゲルナズムが襲いかかる。

「連綿と続く章を断ち切れ！」

だが、そのゲルナズムは亜紗に攻撃が届くより早く都によって一瞬で消されていた。都が亜紗に駆け寄る。

「助かりました。ありがとうございます」

「戦いはまだ終わっていないから」

「分かっています」

都はその手にレイピアとなった断章を握り締めて振り返る。

すでに両手で数えられるくらいに数を減らした幻想種。それに向かって二人は駆け出した。

第二百二十二話　七天抜刀（後書き）

ようやくここまでやって来ました。次で戦いが終わります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6409p/

新たな未来を求めて

2011年11月30日09時49分発行